

目次

一	唱法華題目抄	しょうほつくだいもくしょう	0	0
二	立正安国論	りっしょうあんこくろん	0	1
三	立正安国論奥書	りっしょうあんこくろんおくがき	0	1
四	安国論御勘由来	あんこくろんごかんゆらい	0	1

一	守護国家論	しゅここつか	3	6
二	災難対治抄	さいなんたいじ	7	8
三	念仏者追放せしむる	ねんぶつしゅうほうせしむる	7	8
四	念仏無間地獄抄	ねんぶつむげんじこく	9	7
五	当世念仏者無間地獄事	たうせいねんぶつしゅうほうせしむる	1	0
六	題目弥陀名号勝劣事	だいまいみだなごうしょうれつ	1	1
七	法華浄土問答抄	ほっけしんごんしやうもんどう	1	1
八	法華真言勝劣事	ほっけしんごんしやうれつ	1	1
九	真言七重勝劣事	しんごんしちじゅうしょうれつ	1	2
一〇	真言天台勝劣事	しんごんてんだいしやうれつ	1	2
一一			1	3
一二			1	4
一三			1	5
一四			1	6
一五			1	7
一六			1	8
一七			1	9
一八			1	10
一九			1	11
二〇			1	12
二一			1	13
二二			1	14
二三			1	15
二四			1	16
二五			1	17
二六			1	18
二七			1	19
二八			1	20
二九			1	21
三〇			1	22
三一			1	23
三二			1	24
三三			1	25
三四			1	26
三五			1	27
三六			1	28
三七			1	29
三八			1	30
三九			1	31
四〇			1	32
四一			1	33
四二			1	34
四三			1	35
四四			1	36
四五			1	37
四六			1	38
四七			1	39
四八			1	40
四九			1	41
五〇			1	42
五一			1	43
五二			1	44
五三			1	45
五四			1	46
五五			1	47
五六			1	48
五七			1	49
五八			1	50
五九			1	51
六〇			1	52
六一			1	53
六二			1	54
六三			1	55
六四			1	56
六五			1	57
六六			1	58
六七			1	59
六八			1	60
六九			1	61
七〇			1	62
七一			1	63
七二			1	64
七三			1	65
七四			1	66
七五			1	67
七六			1	68
七七			1	69
七八			1	70
七九			1	71
八〇			1	72
八一			1	73
八二			1	74
八三			1	75
八四			1	76
八五			1	77
八六			1	78
八七			1	79
八八			1	80
八九			1	81
九〇			1	82
九一			1	83
九二			1	84
九三			1	85
九四			1	86
九五			1	87
九六			1	88
九七			1	89
九八			1	90
九九			1	91
一〇〇			1	92

一六	真言諸宗違目	しんこんしよしゅういもく	139P	
一七	真言見聞	しんこんけんもん	142P	P302
一八	蓮盛抄	れんじょうしやう	150P	
十九	八宗違目抄	はっしゅういもく	154P	
二〇	早勝問答	もんどう	161P	P341
二一	宿屋入道への御状	やどやにゆうどう	169P	
二二	北条時宗への御状	ほうじやう	169P	
二三	宿屋左衛門光則への御状	やどやさえもん	170P	
二四	平左衛門尉頼綱への御状	さへもんのかげのう	171P	
二五	北条弥原太への御状	ほうじやうやけんた	172P	
二六	建長寺道隆への御状	けんちやうじどうりゆう	173P	P367
二七	極楽寺良観への御状	ごくらくりやうかん	174P	P368
三八	行敏訴状御会通	そじやうえつう	180P	P389
三八	一昨日御書	ごしよ	183P	

三九	強仁狀御返事 ごへんじ	1	8	4	P	
四〇	開目抄上	1	8	6	P	P 3 8 8
四一	開目抄下 にらめつこごひやくさいにはむかんじんのほんぞんしょう	2	1	0	P	P 4 4 4
四二	如來滅後五百歲始 かんじんのほんぞんしょう 觀心本尊抄					2 3 8 P 5 0 5 P
四三	觀心本尊抄 送狀					
四四	撰時抄 せんじしょう	2	5	6	P	P 5 4 3
四五	報恩抄 ほうおん	2	9	3	P	P 6 2 5
四六	報恩抄 送文 ほうおん	3	3	0	P	
四七	法華取要抄 ほっけ	3	3	1	P	P 7 1 0
四八	四信五品抄 しもやま	3	3	8	P	P 7 2 6
四九	下山御消息 しもやま	3	4	3	P	P 7 3 9
五〇	本尊問答抄 ほんぞんもんどう	3	6	5	P	P 7 8 4
五一	諸宗問答抄 しよしゆもんどう	3	7	5	P	P 8 0 4
五二	一生成仏抄 しゅしんごしよ	3	8	3	P	P 8 2 2
五三	主師親御書 しゅししんごしよ					
五四	一代聖教大意 いちだいしようきようたいい	3	9	0	P	P 8 3 6
	建長七年 けんちやう					
	三十四歲御作					3 8 5 P

五五	十如 ^{じゆのぜ} 是 ^ぜ 事 ^じ	410P	P870	
五六	一念 ^{いちねん} 三千 ^{さんぜん} 理 ^り 事 ^じ	406P	P868	
五七	一念 ^{いちねん} 三千 ^{さんぜん} 法 ^{ぽう} 門 ^{もん}	412P	P882	
五八	十 ^{じゅう} 法 ^{ぽう} 界 ^{かい} 事 ^じ	元年 ^{がんねん}	38歳御作	417P
五九	爾 ^に 前 ^{ぜん} 二 ^に 乘 ^{じよう} 菩 ^ぼ 薩 ^{さつ} 不 ^ふ 作 ^{さつ} 仏 ^{ぶつ} 事 ^じ	424P	P908	
六〇	十 ^{じゅう} 法 ^{ぽう} 界 ^{かい} 明 ^{めい}	因果 ^{いんが} 抄 ^{しょう}	427P	
六一	教 ^{きよう} 機 ^ぎ 時 ^じ 国 ^{こく} 抄 ^{しょう}	438P	P938	
六二	顯 ^{けん} 謗 ^{ぼう} 法 ^{ぽう} 抄 ^{しょう}	443P		
六三	持 ^じ 妙 ^{めう} 法 ^{ぽう} 華 ^け 問 ^{もん} 答 ^{どう} 抄 ^{しょう}	461P	P986	
六四	木 ^{もく} 絵 ^え 二 ^に 像 ^{ざう} 開 ^{かい} 眼 ^{げん} 之 ^の 事 ^じ	468P		
六五	女 ^{にょ} 人 ^{にん} 成 ^{じやう} 仏 ^{ぶつ} 抄 ^{しょう}	470P		
六六	聖 ^{おろかもんどう} 愚 ^う 問 ^{もん} 答 ^{どう} 抄 ^{しょう} 上 ^{じやう}	474P	P1014	
六六	聖 ^{しやうくもんどうしやう} 愚 ^う 問 ^{もん} 答 ^{どう} 抄 ^{しょう} 下 ^げ	487P		
六七	如 ^{にょ} 說 ^{せつ} 修 ^{しゆ} 行 ^{ぎやう} 抄 ^{しょう}	501P	P1073	
六八	顯 ^{けん} 仏 ^{ぶつ} 未 ^み 來 ^{らい} 記 ^き	505P		
六九	当 ^{たう} 体 ^{たい} 義 ^ぎ 抄 ^{しょう}	510P		

七一	小乗 大乘分別抄	520 P	
七二	立正觀抄	527 P	P 1128
七三	立正觀抄送狀	534 P	
七四	顯立正意抄	536 P	
七五	上行菩薩 結要 付属口伝	538 P	
七六	法華初心 成仏抄	544 P	
七七	三世諸仏 總勘文教相 廃立	558 P	
七八	諫曉八幡抄	576 P	P 1232
七九	二乗作仏事	589 P	
八〇	小乗 小仏要文	595 P	
八一	日月の事	599 P	
八二	和漢王代記	602 P	
八七	一代五時繼図	658 P	P 1387

九三 御義口伝 おんぎくでん 708P P1479

九六 御講聞書目録 804P P1668

九七 御講聞書 807P

一〇〇 百六筒抄 854P

一一一 新尼御前 あまごぜん 904P P1879

二〇八 四条金吾殿御返事 しじょうぎんごごへんじ 1163P P2400

三〇六 南部六郎殿御書 ごしよ 1374P P2977

三七九 上野殿御消息 うえのとのしよそく 1526P P3406

一

唱法華題目抄 しょうほつくだいもくしょう
ぶんお

文応元年五月

三十九歳御作

於鎌倉名越 かまくらなごえ

有^あ人^よ予^よに問^いうて云^いく世^せ間^{けん}の道^{どう}俗^{ぞく}さ^せる法^ほ華^け經^{きやう}の文^{もん}義^ぎを弁^わへずとも一^い部^ぶ

卷^{まき}・四^よ要^{よう}品^{ぽん}自^じ我^が偈^ぎ一^い句^く等^{とう}を受^じ持^ぢし・或^{ある}は自^みらもよみかき若^もしは人^{ひと}をしてもよ

みかかせ・或^{ある}は我^{われ}とよみかかざれども經^{きやう}に向^{むか}ひ奉^{たてまつ}つがうし奉^{ほう}り合^あ掌^{しょう}礼^{らい}拜^{はい}をなし香^{かう}華^けを

供^く養^{やう}し・或^{ある}は上^{かみ}の如^{ごと}く行^いずる事^{こと}なき人^{ひと}も他^{ほか}の行^いずるを^を見^みてわづかに隨^ず喜^{いき}の心^{こころ}

を・をこし国^{くに}中^{にゅう}に此^この經^{きやう}の弘^{ひろ}ま^まれる事^{こと}を悦^{よろこ}ばん、是^{これ}体^{てい}の僅^{わず}か^かの事^{こと}によりて

世^せ間^{けん}の罪^{つみ}にも引^ひかれず彼^かの功^{こう}徳^{とく}に引^ひかれて小^{しょう}乘^{じやう}の初^{しよ}果^かの聖^{しょう}人^{にん}の度^た度^{たび}人^{にん}天^{てん}に

生^{しか}れて而^{しか}も惡^{あく}道^{どう}に墮^おち^ちざるがごとく常^{じやう}に人^{にん}天^{てん}の生^{しやう}をうけ終^{つい}に法^ほ華^け經^{きやう}を心^{こころ}得^とる

ものと成^{じやう}つて十^{じゅう}方^{ぽう}淨^{じやう}土^どにも往^{おう}生^{じやう}し又^{また}此^この土^どに於^{おい}ても即^{そく}身^{しん}成^{じやう}仏^{ぶつ}する事^{こと}有^あるべ

きや委^い細^{さい}に之^{これ}を聞^{きこ}かん、答^{こた}えて云^いくさ^させる文^{もん}義^ぎを弁^わえたる身^みにはあ^あらざれど

も法華經・涅槃經並に天台・妙樂の釈の心をもて推し量るにかりそめにも
法華經を信じて聊も謗を生ぜざらん人は余の惡にひかれて惡道に墮つべし
とはおぼえず、但し惡知識と申してわづかに權教を知れる人・智者の由をし
て法華經を我等が機に叶い難き由を和げ申さんを誠と思ひて法華經を隨喜せ
し心を打ち捨て余教へうつりはてて一生さて法華經へ歸り入らざらん人は
惡道に墮つべき事も有りなん、仰せに付いて疑はしき事侍り實にてや侍るら
ん法華經に説かれて侯とて智者の語らせ給いしは昔三千塵点劫の当初・
大通智勝仏と申す仏います其の仏の凡夫にていましける時十六人の王子をは
します、彼の父の王仏にならせ給ひて一代聖教を説き給いき十六人の王子
も亦出家して其の仏の御弟子とならせ給いけり、大通智勝仏・法華經を説き畢
らせ給いて定に入らせ給いしかば十六人の王子の沙弥其の前にしてかはるが
はる法華經を講じ給いけり、其の所説を聴聞せし人・幾千万といふ事をしら

ず当座とうざに悟さとをえし人は不退ふたいの位に入りこころにき、又法華經ほけきょうをおろかに心得こころる結縁けちえん
の衆そもあり其ひとびとの人人・当座中間とうざちゅうげんに不退ふたいの位に入らずして三千塵点劫さんぜんじんてんこくをへた
り、其その間又つぶさに六道ろくどう・四生ししように輪廻りんねし今日こんにち・釈迦如来しゃかにらいの法華經ほけきょうを説き給たまう
に不退ふたいの位に入る所謂いわゆる・舍利弗しゃりほつ・目連もくれん・迦葉かしよう・阿難等あなん是これなり猶猶信心なおなおしんじん薄うすき者
は当時とうじも覺さとらずして未来無數劫みらいむしゅこくを経べきか知らず我等われらも大通智勝だいつうちしやうぶつの十六人
の結縁けちえんの衆にも・あるらん此の結縁の衆をば天台てんだい・妙樂みやうらくは名字みやうじかんぎよう觀行みやうじかんぎようの位に
かなひたる人なりと定め給たまへり名字みやうじかんぎよう觀行みやうじかんぎようの位は一念三千いちねんさんぜんの義理ぎりを弁わきまへ十法
成乘じやうじやうの觀こらを擬よくよくし能義理よくよくを弁わきまえたる人なり一念隨喜いちねんずいき・五十展轉ごじゆつてんでんと申すも
天台てんだい・妙樂みやうらくの積しやくのごときは皆觀行五品の初隨喜みなかんぎようごほんの位と定め給たまへり博地はくじの
凡夫ほんぶの事にはあらず然しかるに我等われらは末代まつだいの一字いっく・一句等の結縁けちえんの衆いちぶんの義理ぎり
をも知らざらんは豈無量あにむりやうの世界せかいの塵点劫じんてんこくを経ざらんや是れ偏ひとえに理深解微りじんげみの
故に教いたは至いたつて深く機いたは實に浅あきがいたす処ところなり只弥陀みだの名号みやうごうを唱なえて

順次生に西方極樂世界に往生し西方極樂世界に永く不退の無生忍を得て
阿弥陀如来・觀音・勢至等の法華經を説き給わん時聞いて悟を得んには如か
じ然るに弥陀の本願は有智・無智・善人・惡人・持戒・破戒等をも摂ばず只
一念唱うれば臨終に必ず弥陀如来・本願の故に來迎し給ふ是を以て思うに此
の土にして法華經の結縁を捨て淨土に往生せんと・をもふは億千世界の慶点
を経ずして疾法華經を悟るがためなり法華經の根機にあたはざる人の此の
穢土にて法華經にいとまをいれて一向に念仏を申さざるは法華經の証は取り
難く極樂の業は定まらず中間になりて中中法華經をおろそかにする人にてや
おはしますらんと申し侍るは如何に、其の上只今承り候へば僅に法華經の
結縁計ならば三惡道に墮ちざる計にてこそ候へ六道の生死を出るにはあ
らず、念仏の法門はなにと義理を知らざれども弥陀の名号を唱え奉れば淨土
に往生する由を申すは遙かに法華經よりも弥陀の名号はいみじくこそ聞え

侍^{はべ}れ、答^{こた}えて云^いく誠^{まこと}に仰^{おほ}せめでたき上^{ちや}智^{おんもの}者の御^{おんもの}物語^{がたり}にも侍^{はべ}るなればさこそと
存^{ぞん}じ候^{こう}へども但^{ただ}し若^もし御^{おんもの}物語^{がたり}のごとく侍^{はべ}らばすこし不^ふ審^{しん}なる事^{こと}侍^{はべ}り、大^{だい}通^{つう}
けちえん
結^{むす}縁^{えん}の者をあらあらうちあてがい申^{まう}すには名^な字^じ觀^{くわん}行^{ぎやう}の者^{もの}とは釈^{しゃく}せられて侍^{はべ}れ
ども正^{ただ}しく名^な字^じ即^{みようじ}の位^ゐの者^{もの}と定められ侍^{はべ}る上^{うへ}退^{たい}大^{だい}取^{しゆ}小^{しょう}の者^{もの}とて法^ほ華^け經^{きやう}をすて
て權^{ごん}教^{きやう}にうつり後^{のち}には惡^{あく}道^{どう}に墮^おちたりと見^みえたる上^ま正^{ただ}しく法^ほ華^け經^{きやう}を誹^ひ謗^{ぼう}して
之^{これ}を捨^{すて}てし者^{もの}なり、設^{たと}え義^ぎ理^りを知^しるようなる者^{もの}なりとも謗^{ほう}法^{ぼう}の人^{ひと}にあらん上
は三千^{さんぜん}塵^{じん}点^{てん}無^む量^{りやう}塵^{じん}点^{てん}も経^{ふり}べく侍^{はべ}るか、五十^{じゅう}展^{てん}轉^{てん}一^{いち}念^{ねん}隨^{ずい}喜^きの人人^{ひとびと}を觀^{かん}行^{ぎやう}初^{しよ}隨^{ずい}喜^き
の位^ゐの者^{もの}と釈^{しゃく}せられたるは末^{まつ}代^{だい}の我^{われ}等^らが隨^{ずい}喜^き等は^は彼^かの隨^{ずい}喜^きの中^なには入^いる可^べか
らずと仰^{おほ}せ候^{こう}か、是^{これ}を天^{てん}台^{だい}・妙^{みよう}樂^{らく}・初^{しよ}隨^{ずい}喜^きの位^ゐと釈^{しゃく}せられたりと申^{もう}さるるほ
どにては又^{また}名^な字^じ即^{みようじ}と釈^{しゃく}せられて侍^{はべ}る釈^{しゃく}はすてらるべきか、所^{しよ}詮^{せん}仰^{おほ}せの御^{おん}義^ぎを
委^{くわ}く案^{あん}ずればをそれにては候^{こう}へども謗^{ほう}法^{ぼう}の一分^{いちぶん}にやあらんずらん其^{その}の故^{ゆゑ}は
ほけきよう われらまつだい
法^ほ華^け經^{きやう}を我^{われ}等^ら末^{まつ}代^{だい}の機^{かな}に叶^がい難^{がた}き由^{よし}を仰^{おほ}せ候^{こう}は末^{まつ}代^{だい}の一切^{いっさい}衆^{しゆ}生^{じやう}は穢^え土^どにして

ほけきよう
法華經を行じて詮無き事なりと仰せらるるにや、若しさやうに侍らば末代の
いっさいしゅじよう
一切衆生の中に此の御詞を聞きて既に法華經を信ずる者も打ち捨て未だ行
ぜざる者も行ぜんと思ふべからず隨喜の心も留め侍らば謗法の分にやあるべ
かるらん、若し謗法の者に一切衆生なるならば・いかに念仏を申させ給うと
も御往生は不定にこそ侍らんずらめ又弥陀の名号を唱へ極樂世界に往生を
とぐべきよしを仰せられ侍るは何なる經論を証拠として此の心はつき給いけ
るやらん正くつよき証文侯か若しなくば其の義たのもしからず、前に申し
候いつるがごとく法華經を信じ侍るはさせる解なけれども三惡道には墮
すべからず侯六道を出る事は一分のさとりなからん人は有り難く侍るか、
但し惡知識に値つて法華經隨喜の心を云いやぶられて侯はんは力及ばざるか
又仰せに付いて驚き覚え侍り其の故は法華經は末代の凡夫の機に叶い難き
由を智者申されしかばさかと思ひ侍る處に只今の仰せの如くならば弥陀の

名号みょうごうを唱となうとも法華經ほけきょうをいゐうとむるとがによりて往生おうじょうをも遂とげざる上
悪道あくどうに墮おつべきよし承うけたまわるはゆゆしき大事だいじにこそ侍はべれ、抑そもそも大通結縁だいとうけちえんの者は
謗法ほうぼうの故ゆえに六道ろくどうに回まわるも又名字即みょうじそくの浅位せんいの者なり又一念いちねん隨喜ずいき五十展ごじゅうてん転てんの者も
又名字みょうじかんぎようそく觀行即くわんぎょうそくの位ゐと申まをす釈しやくは何いずれの処ところに侯そうろうやらん委くわしく承たまわり侯そうらはばや、又義理ぎり
をも知らざる者わす僅ほけきかに法華經ほけきょうを信はべじ侍あくちしきるが惡智識あくちしきの教ほけきによて法華經ほけきを捨て
權教ごんきょうに移はかるより外ほかの世間せけんの惡業あくごうに引あかれては惡道あくどうに墮おつべからざる由もつ申さる
るは証しやうこ拠こあるか、又無智むちの者の念仏ねんぶつ申もつして往生おうじょうすると何いかに見みえてあるやらん
と申もつし給たまうこそよに事きあたらしく侍はべれ、雙觀經そうかんぎょう等の淨土じやうどの三部經さんぶきょう・善導ぜんどう和尚わじやう
等の經きやう釈しやくに明あきかに見みえて侍はべらん上うへはなにとか疑たまい給たまうべき、答こたえて曰いわく
大通結縁だいとうけちえんの者を退大取小たいだいしゆしょうの謗法ほうぼう・名字即みょうじそくの者と申まをすは私の義ぎにあらず
天台大師てんたいだいしの文句第三もんくの卷まきに云いく、法ほふを聞きいて未いまだ度たぜず而して世世せぜに相あい値あう
て今いまに声聞地しやうもんじに住すする者すなわ有かり即すなわち彼かの時の結縁けちえんの衆しやうなり」と釈しやくし給たまひて侍はべる

を、妙樂大師みょうらくだいしの疏記第三じよきに重ねて此の釈しゃくの心を述べ給たまいて云いわく、但ただ全く未だ品ほんに入らず、俱ともに結縁けちえんと名づくるが故ゆえに「文・文の心は大通結縁だいつうけちえんの者は名字即みょうじそくの者となり、又天台大師てんだいだいしの玄義げんぎの第六に大通結縁だいつうけちえんの者を釈しゃくして云いわく「若もしは信も若よしは謗よ因よつて倒よれ因よつて起きく喜根きこんを謗よずと雖いえども後要のちかならず度を得るが如ごとし」文・文の心は大通結縁だいつうけちえんの者の三千塵点さんぜんじんてんを経るは謗法ぼうぼうの者なり例せば勝意しょうい比丘びくが喜根菩薩きこんぼさつを謗よぜしが如ごとしと釈しよす五十展転ごじゆうてんでんの人は五品ごほんの初めしよの初随喜しよずいきの位と申しよす釈しよもあり、又初随喜しよずいきの位みょうじそくの先しよの名字即みょうじそくと申しよす釈しよもあり疏記第十じよきに云いわく「初はつえめに法会ほうえにして聞こく是れ初品しよほんなるべし第五十人は必ず随喜ずいきの位の初めに在る人なり」文・文の心は初会聞法しよえもんぼうの人は必ず初随喜しよずいきの位の内第五十人は初随喜しよずいきの位の先みょうじそくの名字即みょうじそくと申しよす釈しよなり。

其の上五種法師そごしゆほつしにも受持じゆじ・読しよ・誦しよ・書写しよしゃの四人は自行じぎようの人・大經だいきようの九人の先しよの四人は解無げなき者なり解説げせつは化他けた後の五人は解有ある人と証たし給たまへり、疏記じよき

第十に五種法師を釈するには「・或は全く未だ品に入らず」又云く「一向
未だ凡位に入らず」文・文の心は五種法師は觀行五品と釈すれども又五品
已前の名字即の位とも釈するなり、此等の釈の如くんば義理を知らざる名字即
の凡夫が隨喜等の功德も經文の一偈・一句・一念隨喜の者五十展轉等の内に
入るかと思え候、何に況や此の經を信ぜざる謗法の者の罪業は譬喩品に委く
とかれたり持經者を謗する罪は法師品にとかれたり、此の經を信ずる者の功德
は分別功德品隨喜功德品に説けり謗法と申すは違背の義なり隨喜と申すは
隨順の義なりさせる義理を知らざれども一念も貴き由申すは違背隨順の中
には何れにか取られ候べき、又末代無智の者のわづかの供養隨喜の功德は
經文には載せられざるか如何、其の上天台・妙樂の釈の心は他の人師あり
て法華經の乃至童子戲・一偈・一句五十展轉の者を爾前の諸經のごとく
上聖の行儀と釈せられたるをば謗法の者と定め給へり、然るに我が釈

をつくじきを作る時機を高く取りて末代造惡の凡夫を迷はし給わんは自語相違にあらず
ゆえに妙樂大師五十展轉の人を釈して云く「恐らくは人謬りて解せる者初心
くどく
の功德の大なる事を測らず而して功を上位に推り此の初心を蔑る故に今彼の
はか
行浅く功深き事を示して以て経力を顕わす」文・文の心は謬つて法華經を説
もち
かん人の此の経は利智精進・上根・上智の人のためといはん事を仏をそれ
りちしよじんじようこんじようち
げこんげちまつだいむち
て下根・下智・末代の無智の者のわづかに浅き隨喜の功德を四十余年の諸經
だいにんじようしよつくどくすく
の大人上聖の功德に勝れたる事を顕わさんとして五十展轉の隨喜は説かれ
すく
たり、故に天台の釈には外道・小乗・權大乘までたくらべ来て法華經の
ゆえてんだいげどうしようじようこんだいいじよう
さいかくどくすぐ
最下の功德が勝れたる由を釈せり、所以に阿竭多仙人は十二年が間恒河の水
とどぎとせんになつちたいかい
を耳に留め耆兔仙人は一日の中に大海の水をすいほす此くの如き得通の仙人
しようじようあこんきようさんけんせんい
は小乗・阿含經の三賢の浅位の一通もなき凡夫には百千万倍劣れり、
さんみようろくつうしようじようしやりほつもくれんけこんほうとうはんにな
三明六通を得たりし小乗の舍利弗・目連等は華嚴・方等・般若等の諸
しよ

大乘經の末斷三惑の一通もなき一偈・一句の凡夫には百千万倍劣れり華嚴

・方等・般若經を習い極めたる等覺の大菩薩は法華經を僅かに結縁をなせる

未斷三惑・無惡不造の末代の凡夫には百千万倍劣れる由釈の文顯然也、而る

を当世の念仏宗等の人・我が身の權教の機にて実經を信ぜざる者は方等・

般若の時の二乗のごとく自身をはずしめてあるべき処に敢えて其の義なし、

あまつさへ世間の道俗の中に僅かに觀音品自我偈などを讀み適父母孝養

なんどのために一日經等を書く事あればいゝさまたげて云く善導和尚は念仏

に法華經をまじうるを雜行と申し百の時は希に一二を得千の時は希に三五を

得ん乃至千中無一と仰せられたり、何に況や智慧第一の法然上人は法華經等

を行ずる者をば祖父の履・或は群賊等にたとへられたりなどいゝうとめ

侍るは是くの如く申す師も弟子も阿鼻の焰をや招かんずらんと申す。

問うて云く何なるすがた並に語を以てか法華經を世間にいゝうとむる者に

は侍るやよにおそろしくこそおぼえ候へ、はべ 答えて云く始めに智者の申され候
おんものがたり と御物語候いつるこそ法華經をいぬうとむる悪知識の語にて侍れ、あくちしき 末代に
ほけきよう うしな 法華經を失うべき者は心には一代聖教を知りたりと思いて而も心には権実
わきまえ 二經を弁へず身には三衣一鉢を帶し・或は阿練若に身をかくし・或は世間の
ちしや 人にいみじき智者と思はれて而も法華經をよくよく知る由を人に知られなん
せけん どうぞく として世間の道俗には三明六通の阿羅漢の如く貴ばれて法華經を失うべし
と見えて候。

問うて云く其の証拠如何、いわ そ しよつこいかん 答えて云く法華經勸持品に云く「諸の無智の人
あつく めり およ とうじよう 悪口罵詈等し及び刀杖を加うる者有らん我等皆当に忍ぶべし」文・妙樂大師
・此の文の心を釈して云く「初めの一行は通じて邪人を明す、即ち俗衆なり」
ざいけ ぞくなん ぞくじよ こんきよう びく 文・文の心は此の一行は在家の俗男・俗女が權教の比丘等にかたらはれて
かたき 敵をすべしとなり、いわ 經に云く「惡世の中の比丘は邪智にして心諂曲に未だ得

ざるを為得たりと謂い我慢の心充滿せん」文妙樂大師・此の文の心を釈し
て云く「次の一行は道門増上慢の者を明す」文・文の心は惡世末法の權教
の諸の比丘我れ法を得たりと慢じて法華經を行ずるものの敵となるべしとい
ふ事なり、經に云く「・或は阿練若に納衣にして空閑に在つて自ら眞の道を
行ずと謂いて人間を輕賤する者有らん利養に貪著するが故に白衣の与に法
を説き世に恭敬せらるる事六通の羅漢の如くならん是の人惡心を懷き常に
世俗の事を念い名を阿練若に仮りて好んで我等が過を出さん而も是くの如き
言を作さん此の諸の比丘等は利養を貪るを為つての故に外道の論義を説き
自ら此の經典を作りて世間の人を誑惑す名聞を求むるを為つての故に分別
して是の經を説くと、常に大衆の中に在りて我等を毀らんと欲するが故に
國王・大臣・婆羅門・居士及び余の比丘衆に向つて誹謗して我が惡を説いて
是れ邪見の人外道の論議を説くと謂わん」已上妙樂大師・此の文を釈して

云く「三に七行は僭聖増上慢の者を明す」文・經並に釈の心は惡世の中に
多くの比丘有つて身には三衣一鉢を帶し阿練若に居して行儀は大迦葉等の
三明六通の羅漢のごとく在家の諸人にあふがれて一言を吐けば如來の金言の
ごとくをもはれて法華經を行ずる人をいゝやぶらんがために國王・大臣等に
向ひ奉つて此の人は邪見の者なり法門は邪法なりなんといふとむるなり。
上の三人の中に第一の俗衆の毀よりも第二の邪智の比丘の毀は猶しのび
がたし又第二の比丘よりも第三の大衣の阿練若の僧は甚し、此の三人は当世
の權教を手本とする文字の法師並に諸經論の言語道斷の文を信ずる暗禪の
法師並に彼等を信ずる在俗等四十余年の諸經と法華經との權實の文義を弁へ
ざる故に、華嚴・方等・般若等の心仏衆生・即心是仏・即往十方西方等の
文と法華經の諸法實相即往十方西方の文と語の同じきを以て義理のかはれ
るを知らず・或は諸經の言語道斷・心行所滅の文を見て一代聖教には

如來によらいの實事じつじをば宣のべべられざりけりなんどの邪念じやねんをおこす、故ゆゑに惡鬼あくき此この三人
に入まつだいつて末代しよにんの諸人しよにんを損こくどじ国土こくどをも破やぶるなり故ゆゑに經文きやうもんに云いわく、「濁劫じよつこく惡世あくせの
中には多く諸もろもろの恐怖くふ有あつきそらん惡鬼あくきそ其その身みに入めりつて我きにくを罵ののしり毀辱きにくせん乃至ないし仏はつの
方便ほうべん隨宜ずいぎ所說しよせつの法ほうもんを知らず「文文ぶんぶんの心しんは濁惡世じよくあくせの時とき比丘びく我が信しんずる所の教けうは
仏はつの方便ほうべん隨宜ずいぎの法門ほうもんともしらずして權實ごんじつを弁わきまえへたる人しゆつたひ出來のすれば罵ののしり破はしな
んどすべし、是偏ひとえに惡鬼あくきの身みに入めりたるをしらずと云まつだいなり、されば末代まつだいの
愚人ぐにんの恐おそるべき事は刀杖とうじやう・虎狼ころう・十惡じじよくあく・五逆ごぎやく等らよりも三衣さんい一鉢いちぱつを帶おせる
暗禪あんぜんの比丘びくと並ごんきやうに權經ごんきやうの比丘びくを貴たつとしと見て實經じつきやうの人ひとをにくまん俗侶ぞくりよ等らなり。
故ゆゑに涅槃經ねはんぎやう二十二いわに云いく、「惡象あくざう等らに於おては心に恐怖くふする事こと無なかれ惡知識あくちしきに
於おては怖畏ふいの心しんを生もつぜよ何を以もつての故ゆゑに是惡象あくざう等らは唯能ただよく身みを壞やぶりて心しんを
破やぶること能あたわす惡知識あくちしきは二俱ふたつともに壞やぶるが故ゆゑに乃至ないし惡象あくざうの為ために殺ころされては三趣さんしゆに
至いたらず惡友あくゆうの為ために殺ころされては必ず三趣さんしゆに至いたらん」文このもん 此文このもんの心しんを章しやう 安大師あんだいし

のべ
宣べて云く「諸の悪象等は但是れ悪縁にして人に悪心を生ぜしむる事能わず
あくちしき かんさんさ びごう げんれいしよく
悪知識は甘談詐媚巧言令色もて人を牽いて悪を作さしむ悪を作すを以ての
ゆえ ぜんしん やぶ これ
故に人の善心を破る之を名づけて殺と為す即ち地獄に墮す」文、文の心は
あくちしき もう
悪知識と申すは甘くかたらひ詐り媚び言を巧にして愚癡の人の心を取つて
ぜんしん やぶ
善心を破るといふ事なり、総じて涅槃經の心は十悪・五逆の者よりも謗法
せんだい いまし
闡提のものをおそるべしと誡めたり闡提の人と申すは法華經・涅槃經を云い
うとむる者と見えたり、当世の念佛者等・法華經を知り極めたる由をいふに
いんねん ひゆ しゃく
因縁譬喩をもて釈しよくよく知る由を人にしられて然して後には此の經のい
みじき故に末代の機のおろかなる者及ばざる由をのべ強き弓重き鎧かひな
ゆえ まつだい
き人の用にたたざる由を申せば無智の道俗さもと思いて実には叶うまじき
こんきよう
権教に心移して僅かに法華經に結縁しぬるをも翻えし又人の法華經を行ず
ずいき
るをも随喜せざる故に師弟俱に謗法の者となる。

これに依つて謗法の衆生・国中に充滿して適仏事をいとなみ法華經を
供養し追善を修するにも念仏等を行ずる謗法の邪師の僧來て法華經は末代の
機に叶い難き由を示す、故に施主も其の説を實と信じてある間訪るる過去の
父母夫婦兄弟等は弥地獄の苦を増し孝子是不孝謗法の者となり聴聞の
諸人は邪法を随喜し惡魔の眷屬となる、日本国中の諸人は佛法を行ずるに
似て佛法を行ぜず適・佛法を知る智者は国の人に捨てられ守護の善神は法
味をなめざる故に威光を失ひ利生を止此の国をすて他方に去り給い、惡鬼は便
りを得て国中に入り替り大地を動かし惡風を興し一天を悩し五穀を損ず故に
飢渴出来し人の五根には鬼神入つて精氣を奪ふ是を疫病と名く一切の諸人
善心無く多分は惡道に墮つることひとへに惡知識の教を信ずる故なり、
仁王經に云く「諸の惡比丘多く名利を求め国王・太子・王子の前に於て自ら
破仏法の因縁・破国の因縁を説かん其の王別えずして此の語を信聴し横に

ほうせい 法制を作りて仏戒に依らず是れを破仏・破国の因縁と為す文、文の心は末法
もろもろあくびくくおもう 諸の悪比丘国王・大臣の御前にして国を安穩ならしむる様にして終に国を
ぶつぼう ひろ 損じ仏法を弘むる様にして還つて仏法を失うべし、国王・大臣此の由を深く知
し食さずして此の言を信受する故に国を破り仏教を失うと云う文なり。此の
にちがつ うしない 時・日月度を失ひ時節もたがひて夏はさむく冬はあたたかに秋は悪風吹き赤
にちがつ ぼうさく ききん えきびよう 大火・大風・彗星等をこり飢饉疫病等あらんと見えたり、国を損じ人を悪道
にをとす者は悪知識に過ぎたる事なきか。

いわ 問うて云く始めに智者の御物語とて申しつるは所詮後世の事の疑わしき
ゆえ ぜんあく もう 故に善悪を申して承らんとためなり、彼の義等は恐ろしき事にあるにこそ侍る
いちもんぶつう われら こと なれ一文不通の我等が如くなる者はいかにしてか法華經に信をとり候べき又
いかよう はべ 心ねをば何様に思い定め侍らん、答えて云く此の身の申す事をも一定とおぼ

は了義經なり、故に四十余年の諸經並に涅槃經を打ち捨てさせ給いて法華經を師匠と御憑み候へ法華經をば國王・父母・日月・大海・須弥山・天地の如くおぼしめせ、諸經をば閑白・大臣・公卿乃至万民・衆星・江河・諸山・草木等の如くおぼしめすべし、我等が身は末代造惡の愚者・鈍者・非法器の者、國王は臣下よりも人をたすくる人父母は他人よりも子をあはれむ者日月は衆星より暗を照らす者・法華經は機に叶わずんば況や余經は助け難しとおぼしめせ、又釈迦如来と阿弥陀如来・薬師如来・多宝仏・觀音・勢至・普賢・文殊等の一切の諸仏・菩薩は我等が慈悲の父母・此の仏菩薩の衆生を教化する慈悲の極理は唯法華經にのみとどまれりとおぼしめせ、諸經は惡人・愚者・鈍者・女人・根欠等の者を救ふ秘術をば未だ説き顯わさずとおぼしめせ法華經の一切經に勝れ候故は但此の事に侍り、而るを当世の學者・ほけきよう一切經に勝れたりと讃めて、而も末代の機に叶わずと申すを皆信

ずる事あにほうぼう豈は謗法たの人に侍らずや、只一口におぼしめし切らせ給たまい候へ所詮しよせん法華經ほけきようの文字もんじを破りさきなんとせんには法華經の心やぶるべからず、又世間の惡業あくごうに對して云いいうとむるとも人人用ゆべからず只相似ただあいにたる權經ごんきようの義理ぎりを以て云いいうとむるにこそ人はたばらかさるれとおぼしめすべし。

問いうて云く・或智者の申され候しは四十余年の諸經しよきようと八箇年の法華經ほけきようとは成仏じやうぶつの方こそ爾前は難行道なんぎやうどう・法華經は易行道いぎやうどうにて候へ、往生おうじやうの方にては同事どうじにして易行道に侍り法華經を書き讀みても十方の淨土阿彌陀仏の国へも生るべし觀經かんきやう等の諸經しよきようの付いて弥陀みだの名号みやうごうを唱えん人も往生おうじやうを遂ぐべし只機縁ただきえんの有無うむに随したがつて何をも争ふべからず、但し弥陀みだの名号みやうごうは人ごとに行じ易やすしと思おもひて日本国中に行じつけたる事なれば法華經等の余行よぎやうよりも易やすきにこそと申もつされしは如何いかん、答えて云く仰せの法門ほうもんはさも侍るらん又世間の人も多くは道理どうりと思おもひたりげに侍り但し身には此の義ふしんに不審ふしんあり、其の故は前さきに

申せしが如く末代の凡夫は智者と云うともたのみなし世こそりて上代の智者には及ぶべからざるが故に愚者と申すともいやしむべからず經論の証文顯然ならんには抑無量義經は法華經を説くが為の序分なり、然るに始め寂滅道場より今の常在靈山の無量義經に至るまで其の年月日数を委く計へ挙げれば四十余年なり、其の間の所説の經を挙るに華嚴・阿含・方等・般若なり所談の法門は三乘・五乘・所習の法門なり修行の時節を定むるにせんぜつぼさつりやうこつしゆぎやうは宣説菩薩歷劫修行と云ひ隨自意・隨他意を分つには是を隨他意と宣べよんじゆうねんしよきやうはちかねんしよせつことば四十余年の諸經と八箇年の所説との語同じく義替れる事を定めるには文辭一と雖ど義各異るととけり成仏の方は別にして往生の方は一つなるべしともおぼえず華嚴・方等・般若・究竟最上の大乘經・頓悟・漸悟の法門・みなみけんしんじつ皆未顕真實と説かれたり此の大部の諸經すら未顕真實なり何に況や淨土のさんぶきやうおうじよういくらくみけんしんじつそきやうぎやう三部經等の往生極樂ばかり未顕真實の内にもれんや其の上・經經ばかりを

出いだすのみにあらず既に年月日数を出いだすをや、然しかれば華嚴・方等・般若等の
彌陀往生已に未顕真実なる事疑い無し、觀經の彌陀往生に限あにつて豈
たるなんこ
多留難故の内に入らざらんや、若もし随意の法華經の往生極樂を随他意の
觀經の往生極樂に同じて易行道と定めて而も易行の中に取つても猶觀經の
念仏往生は易行なりと之これを立てられれば樞實雜亂の失大謗法たる上一滴水
漸漸に流れて大海となり一塵積つて須彌山となるが如く漸く樞經の人も
實經にすすまず實經の人も樞經におち樞經の人・次第に国中に充滿せ
ば法華經隨喜の心も留とどまり国中に王なきが如く人の神たましいを失うしなえるが如く法華・
真言の諸の山寺荒れて諸天善神・竜神等・一切の聖人国を捨てて去らば
惡鬼便りを得て乱れ入り惡風吹いて五穀も成らしめず疫病流行して人民を
や亡さんずらん、此の七八年が前までは諸行は永く往生すべからず善導和尚
の千中無一と定めさせ給いたる上選択には諸行を抛てよ行ずる者は群賊と

見えたりなんと放語を申し立てしが、又此の四五年の後は選択集の如く人を勧めん者は謗法の罪によつて師檀共に無間地獄に墮つべしと經に見えたりと申す法門出来したりげに有りしを、始めは念仏者こそりて不思議の思いをなす上念仏を申す者無間地獄に墮つべしと申す悪人外道ありなんどののしり候しが念仏者・無間地獄に墮つべしと申す語に智慧つきて各選択集を委く披見する程にげにも謗法の書とや見なしけん千中無一の悪義を留めて諸行往生の由を念仏者毎に之を立つ、然りと雖も唯口にのみゆるして心中は猶本の千中無一の思いなり在家の愚人は内心の謗法なるをばしらずして諸行往生の口にばかされて念仏者は法華經をば謗ぜざりけるを法華經を謗ずる由を聖道門の人の申されしは僻事なりと思へるにや、一向諸行は千中無一と申す人よりも謗法の心はまさりて候なり失なき由を人に知らせしかねんぶつばか、ねんぶつばかりも念仏計りを亦弘めんとたばかるなり偏に天魔の計りごとなり。

問うて云く天台宗の中の人の立つる事あり天台大師爾前と法華と相對して
にぜん きたら には約部四十余年の部と法華經の部と相對して爾前
にぜん きたら には約部四十余年の部と法華經の部と相對して爾前
は○なり法華は妙なりと之を立つ二には約教・教に○妙を立て華嚴・方等・
はんによ はんによ はんによ はんによ はんによ はんによ はんによ はんによ はんによ はんによ
般若等の円頓速疾の法門をば妙と歎じ華嚴・方等・般若等の三乘歴別の
しゆぎよう ほうもん ぜんさんきよう ほうもん ぜんさんきよう ほうもん ぜんさんきよう ほうもん ぜんさんきよう
修行の法門をば前三教と名づけて○なりと嫌へり円頓速疾の方をば嫌わず
ほけきよう いちみ ほうもん ほうもん ほうもん ほうもん ほうもん ほうもん ほうもん ほうもん ほうもん
法華經に同じて一味の法門とせりと申すは如何、答えて云く此の事は不審に
もする事侍るらん然る可しと・をばゆ天台・妙樂より已来今に論有る事に
はべ てんだい しかべ てんだい みようらく いらい あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり
侍り天台の三大部六十卷総じて五大部の章疏の中にも約教の時は爾前の円
を嫌ふ文無し、只約部の時ばかり爾前の円を押ふさねて嫌へり、日本に二義
あり園城寺には智証大師の釈より起つて爾前の円を嫌ふと云い山門には嫌は
ずと云う互に文釈 あり俱に料簡あり然れども今に事ゆかず、但し予が流の
ふしん たがい もんしゃく とも りようけん しか てんだいしきよう たまた すじめ
義には不審晴れておぼえ候、其の故は天台大師四教を立て給うに四の筋目あ

り、一には爾前の經に四教を立つ二には法華經と爾前と相對して爾前の円を
法華の円に同じて前三教を嫌う事あり、三には爾前の円をば別教に撰して
前三教と嫌ひ法華の円をば純円と立つ四には爾前の円をば法華に同ずれど
も但法華經の二妙の中の相待妙に同じて絶待妙には同ぜず、此の四の道理
を相對して六十卷をかんがうれば狐疑の氷解けたり一一の証文は且つは秘
し且つは繁き故に之を載せず、又法華經の本門にしては爾前の円と迹門の円
と・を嫌う事不審なき者なり、爾前の円をば別教に撰して約教の時は前三
為の後一為妙と云うなり此の時は爾前の円は無量義經の歴劫修行の内に入
りぬ、又伝教大師の註釈の中に爾前の八教を挙げて四十余年・未顕真実
の内に入れ・或は前三教をば迂回と立て爾前の円をば直道と云い無量義經を
ば大直道と云う委細に見る可し。

問うて云く法華經を信ぜん人は本尊並に行儀並に常の所行は何にてか候べ

き、答えて云く第一に本尊は法華經八卷・一卷・一品・或は題目を書いて本尊
と定む可しと法師品並に神力品に見えたり、又たへたらん人は釈迦如来・
多宝仏を書いても造つても法華經の左右に之を立て奉るべし、又たへたらん
は十方の諸仏普賢菩薩等をもつくりかきたてまつるべし、行儀は本尊の御前
にして必ず坐立行なるべし道場を出でては行住坐臥をえらぶべからず、
常の所行は題目を南無妙法蓮華經と唱うべし、たへたらん人は一偈・一句
をも読み奉る可し助縁には南無釈迦牟尼仏・多宝仏・十方諸仏・一切の諸
菩薩・二乗・天人・竜神・八部等心に随うべし愚者多き世となれば一念三千
の觀を先とせず其の志あらん人は必ず習學して之を觀ずべし。
問うて云く只題目計を唱うる功德如何、答えて云く釈迦如来・法華經をと
かんとおぼしめして世に出で・ましまししかども四十余年の程は法華經の
御名を秘しおぼしめして御年三十の比より七十余に至るまで法華經の方便を

まうけ七十二にして始めて題目を呼び出させ給へば諸經の題目に是を比ぶべ
からず、其の上法華經の肝心たる方便・寿量の一念三千・久遠実成の法門
は妙法の二字におさまれり、天台大師・玄義十卷を造り給う第一の卷には略
して妙法蓮華經の五字の意を宣べ給う、第二の卷より七の卷に至るまでは又
広く妙の一字を宣べ八の卷より九の卷に至るまでは法蓮華の三字を釈し第十
の卷には經の一字を宣べ給へり、經の一字に華嚴・阿含・方等・般若・涅槃經
を収めたり妙法の二字は玄義の心は百界・千如・心仏衆生の法門なり止觀
十卷の心は一念三千・百界・千如・三千世間・心仏衆生・三無差別と立て
給う、一切の諸仏菩薩・十界の因果十方の草木・瓦礫等・妙法の二字にあら
ずと云う事なし、華嚴・阿含等の四十余年の經經・小乘經の題目には
大乘經の功德を収めず又大乘經にも往生を説く經の題目には成仏の
功德をおさめず又王にては有れども王中の王にて無き經も有り仏も又經に

随したがつて他た仏ぶつの功徳くどくをおさめず平等びやうどういしゆ意趣いしゆをもつて他た仏ぶつ・自じ仏ぶつと・をなじといひ
・或あるは法身平等ほっしんびやうどうをもて自じ仏ぶつ他た仏ぶつ同じといふ、実には一いっ仏さいぶつに一切くどく仏ぶつの功徳くどくをお
さめず今法華經ほけきやうは四十余年よんじゅうよねんの諸經しよきやうを一經おさに収めて十方世界じつぱうせかいの三身円満さんじんえんまんの諸經しよぶつ
をあつめて釈迦しやか一ふんじん仏しよぶつの分身しよぶつの諸佛だんと談ゆえずる故ゆえに一いっ仏さいぶつ・一切くどく仏ぶつにして妙法みやうほうの二
字しよぶつに諸佛しよぶつ皆みな収おさまり、故ゆえに妙法蓮華經みやうほうれんげきやうの五字ごじを唱となうる功徳莫大くどくばくだいなり諸佛しよぶつ・
諸經しよきやうの題目だいもくは法華經ほけきやうの所開しよかいなり妙法みやうほうは能開もつかいなりとしりて法華經ほけきやうの題目だいもくを
唱となうべし。

問いうて云いわく此この法門ほうもんを承うけたまわつて又智者ちしやに尋たずね申し候もうえば法華經ほけきやうのいみじき事
は左右さうに及およばず候ただ但し器量きりやうならん人は唯我ただが身計ばかりは然しかべ、末代まつだいの凡夫ぼんぶ
に向むかつてただちに機にをも知らず爾前にぜんの教いを云いうとめ法華經ほけきやうを行もうぜよと申もうす
はとしごろの念仏ねんぶつなどをば打ち捨て又法華經ほけきやうには未だ功いまも入れず有あにも無
にもつかぬようにてあらんずらん、又機ほけきやうも知らず法華經ほけきやうを説たまかせ給たまはば信たず

る者は左右に及ばず若し謗ずる者あらば定めて地獄に墮ち候はんずらん、其の
上仏も四十余年の間・法華經を説き給はざる事は若但讚仏乗・衆生没在苦
の故なりと在世の機すら猶然なり何に況や末代の凡夫をや、されば譬喩品に
は「仏・舍利弗に告げて言わく無智の人の中に此の經を説くことなかれ」云
云此等の道理を申すは如何が候べき、答えて云く智者の御物語と仰せ承り候
へば所詮末代の凡夫には機をかがみて説け左右なく説いて人に謗ぜさする事
なかれとこそ候なれ、彼人さやうに申され候はば御返事候べきやうは抑
若但讚仏乗・乃至無智人中等の文を出し給はば又一經の内に凡有所見・
我深敬汝等等と説いて不輕菩薩の杖木瓦石をもつて・うちはられさせ給いし
をば顧みさせ給はざりしは如何と申させ給へ。

問うて云く一經の内に相違の候なる事こそよに得心がたく侍ればくわしく
承り候はん、答えて云く方便品等には機をかがみて此の經を説くべしと見え

不輕品には謗ずとも唯強いて之を説くべしと見え侍り一經の前後水火の如し、
然るを天台大師会して云く「本已に善有るは釈迦小を以て之を將護し本未だ
善有らざるは不輕大を以て之を強毒す」文・文の心は本と善根ありて今生の
内に得解すべき者の為には直に法華經を説くべし、然るに其の中に猶聞いて
謗すべき機あらば暫く權經をもてこしらえて後に法華經を説くべし、本と大
の善根もなく今も法華經を信ずべからずなにとなくとも惡道に墮ちぬべき
故に但押して法華經を説いて之を謗ぜしめて逆縁ともなせと會する文なり、
此の釈の如きは末代には善無き者は多く善有る者は少し故に惡道に墮ちんこ
と疑い無し、同くは法華經を強いて説き聞かせて毒鼓の縁と成す可きか然ら
ば法華經を説いて謗縁を結ぶべき時節なる事争い無き者をや、法華經の方便
品に五千の上慢あり略開三顯一を聞いて広開三顯一の時・仏の御力をもて
座をたたしめ給ふ後に涅槃經並に四依の辺にして今生に悟を得せしめ給う

と、諸法無行經に喜根菩薩・勝意比丘に向つて大乘の法門を強いて説ききか
せて謗ぜさせしと、此の二の相違をば天台大師会して云く「如来は悲を以て
の故に發遣し喜根は慈を以ての故に強説す」文・文の心は仏は悲の故に後の
たのしみをば闇いて当時・法華經を謗じて地獄にをちて苦にあつべきを悲
み給いて座をたたしめ給いき、譬えば母の子に病あると知れども当時の苦を
悲んで左右なく灸を加へざるが如し、喜根菩薩は慈の故に当時の苦をばかへ
りみず後の樂を思いて強いて之を説き聞かしむ、譬えば父は慈の故に子に病
あるを見て当時の苦をかへりみず後を思ふ故に灸を加うるが如し、又仏在世
には仏・法華經を秘し給いしかば四十余年の間等覺不退の菩薩名をしらず、
其の上寿命品は法華經八箇年の内にも名を秘し給いて最後にきかしめ給いき
末代の凡夫には左右なく如何がきかしむべきとおぼゆる處を妙樂大師釈し
て云く「仏世は当機の故に簡ぶ末代は結縁の故に聞かしむ」と釈し給へり文

の心は仏在世には仏一期の間多くの人不退の位にのぼりぬべき故に法華經の名義を出して謗ぜしめず機をこしらへて之を説く仏滅後には当機の衆は少く結縁の衆多きが故に多分に就いて左右なく法華經を説くべしと云う釈なり是体の多くの品あり又末代の師は多くは機を知らざらんには強いて但実經を説くべきかされば天台大師の釈に云く、「等しく是れ見ざれば但大を説くに咎無し」文・文の心は機をも知らざれば大を説くに失なしと云う文なり又時の機を見て説法する方もあり皆國中の諸人・權經を信じて実經を謗し強に用いざれば彈呵の心をもて説くべきか時に依つて用否あるべし。

問うて云く唐土の人師の中に一分一向に權大乘に留つて実經に入らざる者はいかなる故か候、答えて云く仏世に出でまして先ず四十余年の權大乘・小乗の經を説き後には法華經を説いて言わく、「若以小乗化・乃至於一人・我則墮慳貪・此事為不可」文・文の心は仏但爾前の經許りを説

いて法華經を説き給はずば仏慳貪の失ありと説かれたり、後に属累品にいた
りて仏右の御手をのべて三たび諫めをなして三千大千世界の外・八方・四百
万億那由佗の国土の諸菩薩の頂をなでて未来には必ず法華經を説くべし、
若し機たへずば余の深法の四十余年の經を説いて機をこしらへて法華經を説
くべしと見えたり、後に涅槃經に重ねて此の事を説いて仏滅後に四依の菩薩
ありて法を説くに又法の四依あり実經をついに弘めずんば天魔とするべきよ
しを説かれたり故に如来の滅後・後の五百年・九百年の間に得出で給いし竜樹
菩薩・天親菩薩等 如来の聖教を弘め給うに天親菩薩は先に小乗の説
一切有部の人・俱舍論を造つて阿含十二年の經の心を宣べて一向に大乘の
義理を明さず次に十地論・撰大乘論・釈論等を造つて四十余年の権大乘
の心を宣べ後に仏性論・法華論等を造りて粗実大乘の義を宣べたり竜樹
菩薩亦然なり天台大師・唐土の大師として一代を分つに大小・権実顯然なり

余の人師は僅かに義理を説けども分明ならず又証文たしかならず但し末の
論師並に訳者・唐土の人師の中に大小をば分つて大にをいて権実を分たず
・或は語には分つといへども心は権大乘のをもむきを出でず此等是不退諸
菩薩・其数如恒沙・亦復不能知とおぼえて候なり。

疑つて云く唐土の人師の中に慈恩大師は十一面觀音の化身牙より光を放つ、
善導和尚は弥陀の化身口より仏をいだすこの外の人師通を現じ徳をほどこし
三昧を発得する人・世に多しなんぞ権実二經を弁へて法華經を詮とせざるや、
答えて云く阿闍多仙人外道は十二年の間・耳の中に恒河の水をとどむ婆藪
仙人は自在天となりて三目を現ず、唐土の道士の中にも張階は霧をいだし
鸞巴は雲をはく第六天の魔王は仏滅後に比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・
阿羅漢・辟支仏の形を現じて四十余年の經を説くべしと見えたり通力をもて
智者愚者をばしるべからざるか、唯仏の遺言の如く一向に権經を弘めて実經

をつめに弘めざる人師は権経に宿習ありて実経に入らざらん者は或は魔にた
ぼらかされて通を現げんずるか、但し法門ただ ほうもんをもて邪正じゃしょうをただすべし利根りこんと通力つうりきと
にはよるべからず。

ぶんおうがなんん

文応元年太歳庚申五月二十八日

にちれんかおう

日蓮花押

かまくらなごえ おい おわ

鎌倉名越に於て書き畢んぬ

りつしょうあんこくろん

二 立正安国論

ぶんおうがなんん

文応元年七月

三十九歳御作

与北条時頼書

於鎌倉

17P

りよきやく

旅客来りて嘆いて曰く

近年より

近日に至るまで

天変地天・

飢饉疫癘・

遍く

てんか

ちじょう

はびこぎゅうばちまた

たおれ

がいこつみち

あ

まね

ともがらすで

たいはん

こ

大半に超え悲まざるの族敢て一人も無し、

然る間・

或は利剣即是の文を専に

ある

りけん

こ

もつばら

さいどきようしゅ

みな

とな

ある

しゅうびようしつじょ

ある

衆病悉除の願を持ちて

たも

とうほうによらい

ある

りけん

こ

文を専に

して西土教主の名を唱え・

或は

衆病

悉除

の願を持ちて

たも

とうほうによらい

ある

りけん

こ

文を専に

誦し、・或は病即消滅・

不老不死の詞を仰いで

法華真実の妙文を

崇め・

或

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

は七難即滅・七福即生の句を信じて百座百講の儀を調え有るは秘密真言の經
に因て五瓶の水を灑ぎ有るは坐禪入定の儀を全して空觀の月を澄し、若く
は七鬼神の号を書して千門に押し若くは五大力の形を圖して万戸に懸け若く
は天神地祇を拜して四角四堺の祭祀を企て若くは万民百姓を哀んで国主・
国宰の徳政を行う、然りと雖も唯肝胆を摧くのみにして弥飢疫に逼られ
乞客目に溢れ死人眼に満てり、臥せる屍を觀と為し並べる戸を橋と
作す、觀れば夫れ二離壁を合せ五緯珠を連ぬ三宝も世に在し百王未だ窮まら
ざるに此の世早く衰え其の法何ぞ廢れたる是れ何なる禍に依り是れ何なる
誤りに由るや。

主人の曰く独り此の事を愁いて胸臆に憤す客来つて共に嘆く屢談話を
致さん、夫れ出家して道に入る者は法に依つて仏を期するなり而るに今神術
も協わす仏威も験しなし、具に当世の体を觀るに愚にして後生の疑を發す、

しか
すなわ えんぶ あお うらみの ほうざい ふし うらおもい
然れば則ち円覆を仰いで恨を呑み方載に俯して慮を深くす、倩ら微管を傾
いささかきょうもん ひらき よみなまさにそむき こころ
け聊か経文を披きたるに世皆正に背き・人悉く悪に帰す、故に善神は国を捨
あいさ しょうにん
てて相去り聖人は所を辞して還りたまわず、是れを以て魔来り鬼来り災起り
なんおこ のたま
難起る言わずんばある可からず恐れずんばある可からず。

いわ てんか わざわい くにじゅう なん よひと なげ
客の曰く天下の災・国中の難・余独り嘆くのみに非ず衆皆悲む、今
らんしつ
蘭室に入つて初めて芳詞を承る に神聖去り辞し災難並び起るとは何れの経
い
に出でたるや其の証拠を聞かん。

いわ そ はんた そ
主人の曰く其の文繁多にして其の証弘博なり。

こんこうみょうきよう いわ
金光明経に云く「其の国土に於て此の経有り」と雖も未だ嘗て流布せしめ

しゃり
ず捨離の心を生じて聴聞せん事を樂わす亦供養し尊重し讚歎せず四部の衆

じきよう
・持經の人を見て亦復た尊重し乃至供養すること能わず、遂に我れ等及び余

けんぞくむりよう しょうん
の眷属無量の諸天をして此の甚深の妙法を聞くことを得ざらしめ甘露の味に

背きそむ正法しょうほうの流を失うしない威光いこう及びおよ勢力有あること無なからしむ、惡趣あくしゆを増長ぞうちようし人天にんてん
を損減そんめつし生死しょうじの河に墜おちて涅槃ねはんの路に乖そむかん、世尊せそん・我等われら四王なら並びに諸もろもろの
眷属けんぞく及びおよ葉叉やしや等斯かくの如ごとき事を見て其その国土こくどを捨てて擁護おうごの心無こころなけん、但ただ
我等われらのみ是この王を捨棄しゃきするに非あらず必ず無量むりようの国土こくどを守護しゆごする諸天善神しよてんぜんじん有あらん
も皆悉みなことごとく捨去しやこせん、既に捨離しやりし已おわりりなば其その国当まさに種種しゆじゆの災禍さいか有あつて国位こくいを
喪失そうしつすべし、一切いっさいの人衆にんしゆう皆善心みなぜんしん無なく唯繫縛ただけいばく殺害さつがい瞋諍しんじやうのみ有あつて互たがいに相讒あいざん諂てんし
枉まげげて辜無つみきに及およばん、疫病えきび流行りゆうし彗星すいせい数しばしばば出いで兩日りやうじつ並び現げんじ薄蝕はくしよく恒こう
無なく黑白こくびやくの二虹にこう不祥ふしやうの相を表あらわし星流ほしながれ地動ちどうき井の内に声おこを發はつし暴雨ぼうう・惡風あくふう
・時節じせつに依よらず常に飢饉ききんに遭あつて苗實なえみ成ならず、多く他方たほうの怨賊おんぞく有あつて国内こくないを
侵掠しんりやくし人民じんみん諸の苦惱くるもうを受け土地所樂とちしやらくの処有ところあること無なけん」已上。
大集經だいしつきやうに云いく、「仏法ぶつぽう實じつに隱没おんもつせば鬚髮しゆほつ爪皆長そうみなく諸法しよほうも亦忘失またもうしつせん、当そのの時
虚空こくうの中に大なる声有あつて地を震いつ一切皆遍いっさいみなあまねくく動うごかんこと猶水上輪なの如ごとくな

らん城壁じょうへき破れ落ち下り屋宇おくう悉く・れ圻やぶれけ樹林じゆりんの根・枝・葉・華・葉・葉・葉・
藥つ尽きただじういてんん唯淨居天を除いて欲界よつかいの一切いつさいしよ処の七味・三精氣しようけそんげん損減して余あり有るこ
と無げだつけん、解脱もろもろぜんろんそのの諸いつさいつの善論しよしよ當の時一切けか尽ききしよん、所生しよしよの華菓の味きしよい希少きしよにして
亦またうまか美からず、諸有しようの井泉池せいせんち・一切いつさいことごと尽く枯涸こくし土地とち悉く鹹鹵かんろし裂てきれつして丘澗きゆうかんと
成らん、諸山しよざん皆みな燃しょうねんして天竜雨てんりゆうあめを降みようけさず苗稼みなからも皆枯死みなし生みなずる者皆死みなし
尽つき余草更よそうに生ふぜず、土みなこんあんを雨にちがつらし皆昏闇げんに日月しほうも明みなを現しほうぜず四方しほう皆亢旱みなして
数しばしば諸惡瑞しよあくずいを現げんじ、十不ふぜん善業ごうの道・貪とん・瞋じん・癡ちばい倍增ぞうして衆生しゆじよう父母ふぼに於にける
之これを觀みること・鹿しようの如ごとくならん、衆生しゆじよう及びおよ壽命じゆみよう・色力いろちから・威樂いらく減にんてんじ人天にんてんの樂
を遠離おんりし皆悉みなく惡道ごうだうに墮だせん、是かくくの如ごとき不善業ふぜんごうの惡王あくおう・惡比丘あくびく我が正法しやうほうを
毀壞きえし天人てんにんの道そんめつを損減しよてんぜんじんし、諸天善神王しよてんぜんじんの衆生しゆじようを悲愍ひみんする者・此じよくあくの濁惡じよくあくの国
を棄すてて皆悉みなく余方まさに向まわん・已上まさ。

仁王經にんのうきやうに云いく、「国土こくど乱みだれん時は先きじんず鬼神きじん乱みだる鬼神きじん乱みだるるが故ゆえに万民ばんみん乱みだる賊ぞく

来つて国を却かし百姓亡喪し臣・君・太子・王子・百官共に是非を生ぜん、
天地怪異し二十八宿・星道・日月時を失い度を失い多く賊起ること有らん
と、亦云く、「我今五眼をもつて明に三世を見るに一切の国王は皆過去の世に
五百の仏に侍えるに由つて帝王主と為ることを得たり、是を為つて一切の
聖人羅漢而も為に彼の国土の中に来生して大利益を作さん、若し王の福尽き
ん時は一切の聖人皆為に捨て去らん、若し一切の聖人去らん時は七難必ず
起らん」已上。

薬師経に云く「若し刹帝利・灌頂王等の災難起らん時所謂人衆疾疫の難
・他国侵逼の難・自界叛逆の難・星宿变怪の難・日月薄蝕の難・非時風雨
の難・過時不雨の難あらん」已上。

仁王経に云く「大王吾が今化する所の百億の須弥・百億の日月・一一の
須弥に四天下有り、其の南閻浮提に十六の大国五百の中国十千の小国有り

其の国土の中に七つの畏る可き難有り一切の国王是を難と為すが故に、云何なるを難と為す日月度を失ひ・時節返逆し・或は赤日出で・黒日出で・二三四五の日出で・或は日蝕して光無く・或は日輪一重・二三四五重輪現するを一の難と為すなり、二十八宿度を失ひ金星・彗星・輪星・鬼星・火星・水星・風星・星・南斗・北斗・五鎮の大星・一切の国主星・三公星・百官星・是くの如き諸星・各各・変現するを二の難と為すなり、大火国を焼き万姓焼尽せん・或は鬼火・竜火・天火・山神火・人火・樹木火・賊火あらん是くの如く変怪するを三の難と為すなり、大水百姓を・没し時節返逆して・冬雨ふり・夏雪ふり・冬時に雷電霹し・六月に氷霜雹を雨らし・赤水・黒水・青水を雨らし・土山・石山を雨らし沙礫石を雨らす江河逆に流れ山を浮べ石を流す是の如く変ずる時を四の難と為すなり、大風・万姓を吹殺し国土・山河・樹木・

一時に滅没し、非時の大風・黒風・赤風・青風・天風・地風・火風・水風あらん是くの如く変ずるを五の難と為すなり、天地・国土・亢陽し炎火洞燃として・百草亢旱し・五穀登らず・土地赫燃と万姓滅尽せん是くの如く変ずる時を六の難と為すなり、四方の賊来つて国を侵し内外の賊起り、かぞく・すいぞく・ふうぞく・きぞくひやくせいこうらんとうひようこうおこ火賊・水賊・風賊・鬼賊ありて百姓荒乱し・刀兵劫起らん・是くの如くむあやし怪する時を七の難と為すなり「大集経に云く「若し国王有つて無量世に於て施戒慧を修すとも我が法の滅せんを見て捨てて擁護せずんば是くの如く種ゆる所の無量の善根悉く皆滅失して其の国当に三の不祥の事有るべし、一には穀貴・二には兵革・三には疫病なり、一切の善神悉く之を捨離せば其の王教令すとも人随従せず常に隣国の侵する所と為らん、暴火横に起り悪風雨多く暴水増長して人民を吹・し内外の親戚其れ共に謀叛せん、其の王久しからずして当に重病に遇い寿終の後・大地獄の中に生ずべし、乃至

王ことの如ごとく夫人ふじん・太子たいし・大臣だいじん・城主じょうしゅ・柱師じゅうしゅ・ぐんしゅ・郡守さいかん・宰官またまたも亦復かくた是ことの如ごとくならん」已上。

そ
夫れ四經の文朗かなり万人誰か疑わん、而るに盲瞽の輩迷惑の人妄に邪説を信じて正教を弁えず、故に天下世上・諸仏・衆經に於て捨離の心を生じて擁護の志無し、仍て善神聖人國を捨て所を去る、是を以て惡鬼外道災を成し難を致す。

きやくいろ な
客色を作して曰く後漢の明帝は金人の夢を悟つて白馬の教を得、上宮太子じょうぐうたいし・もりや
は守屋の逆を誅して寺塔の構を成す、爾しより来た上一人より下万民に至るまで仏像を崇め經卷を專にす、然れば則ち叡山・南都・園城・東寺・四海・一州・五畿・七道・仏經は星の如く羅なり堂宇雲の如く布けり、子の族すなわ じゅうとう
は則ち驚頭の月を觀じ鶴勒の流は亦鷄足の風を伝う、誰か一代の教を徧しさんぼう あと はい いわん も そ
三宝の跡を廃すと謂んや若し其の証有らば委しく其の故を聞かん。

主人さと諭いわして曰いく仏閣いらか薨きを連ね経藏きようぞう軒のきを並べ僧ちくは竹葦ことの如ごとく侶りふは稻麻とうまに似

たり崇重すうちゆう年ふ旧そん尊貴き・日に新あらたなり、但ただし法師ほうしは諂曲てんこくにして人倫じんりんを迷惑めいわくし

王臣おうしんは不覺ふかくにして邪正じゃせいを弁べんずること無し、仁王にんのう經きように云いく、諸もろの惡比丘あくびく多おほく名利みょうり

を求め國王こくおう・太子たいし・王子みこの前に於おいて自みづから破は仏法ぶつぽうの因緣いんねん・破國はくにの因緣いんねんを説はかん、

其その王別わきまえずして此ことの語ことばを信聽しんちょうし横よこに法制しほうを作せいつて仏戒ぶつがいに依よらず是これを破は仏

・破國はくにの因緣いんねんと為なす・已上。

涅槃經ねはんぎように云いく、菩薩ぼさつ惡象あくぞう等に於おいては心こころに恐怖くふすること無なかれ惡知識あくちしきに於おいて

は怖畏ふいの心こころを生おこぜよ・惡象あくぞうの為ために殺ころされては三趣さんしゆに至いたらず惡友あくゆうの為ために殺ころされ

ては必かならずず三趣さんしゆに至いたる・已上。

法華經ほけきように云いく、惡世あくせの中の比丘びくは邪智じゃちにして心諂曲てんこくに未いまだ得えざるを為なれ得

たりと謂おもひ我慢がまんの心こころ充満じゆうまんせん、・或あるは阿練若あれんにやに納衣のうえにして空閑くうげんに在あり自みづから真

の道みちを行おはずと謂おもひて人間にんげんを輕賤きようせんする者もの有あらん、利養りように貪とん著じゃくするが故ゆゑに白衣びやくえ

の与めに法を説いて世に恭敬せらるること六通の羅漢の如くならん、乃至常
に大衆の中に在つて我等を毀らんと欲するが故に国王・大臣婆羅門・居士
及び余の比丘衆に向つて誹謗して我が惡を説いて是れ邪見の人外道の論議を
説くと謂わん、濁劫惡世の中には多く諸の恐怖有らん惡鬼其の身に入つて我
を罵詈し毀辱せん、濁世の惡比丘は仏の方便隨宜所説の法を知らず惡口して
顰蹙し数数擯出せられん」已上。

涅槃經に云く「我れ涅槃の後・無量百歳四道の聖人悉く復た涅槃せん、
正法滅して後・像法の中に於て当に比丘有るべし、持律に似像して少く經を
読誦し飲食を貪嗜して其の身を長養し袈裟を著すと雖も猶獵師の細めに視て
徐に行くが如く猫の鼠を伺うが如し、常に是の言を唱えん我羅漢を得たりと
外には賢善を現し内には貪嫉を懷く誑法を受けたる婆羅門等の如し、實には
沙門に非ずして沙門の像を現じ邪見熾盛にして正法を誹謗せん」已上。

文に就いて世を見るに誠に以て然なり悪侶を誡めずんば豈善事を成さんや。

客猶憤りて曰く、明王は天地に因つて化を成し聖人は是非を察して世

を治む、世上の僧侶は天下の帰する所なり、悪侶に於ては明王信ず可からず

聖人に非ずんば賢哲仰ぐ可からず、今賢聖の尊重せるを以て則ち竜象の輕

からざるを知らぬ、何ぞ妄言を吐いて強ちに誹謗を成し誰人を以て惡比丘と

謂うや委細に聞かんと欲す。

主人の曰く、後鳥羽院の御宇に法然と云ふもの有り、選択集を作る即ち一代

の聖教を破しく十方の衆生を迷わす、其の選択に云く道綽・綽・綽・綽・

聖道・淨土の二門を立て、聖道を捨てて正しく淨土に歸するの文、初に聖道門

とは之に就いて二有り乃至之に準じ之を思ふに心に密大及び実大をも存す

べし、然れば則ち今の真言・信心・天台・華嚴・三論・法相・地論・撰論・

此等の八家の意正しく此に在るなり、曇鸞法師往生論の注に云く謹んで

りゅうじゅぼさつ

じゅうじゅう びばしや

いわ ぼさつ あびばつち

竜樹菩薩の十住 毘婆沙を案ずるに云く菩薩阿毘跋致を求むるに二種の道有

なんぎようどう

なんぎようどう

すなわ こ しゅうどうもん

り一には難行道一には易行道なり、此の中難行道とは即ち是れ聖道門なり

いぎようどう

すなわ こ

じゅうどもん

がくしゃ

すべか

易行道とは即ち是れ浄土門なり、浄土宗の学者先ず須らく此の旨を知るべし

たとい

しゅうどうもん

いえども

じゅうどもん

おい そ

こころざし

設い先より聖道門を学ぶ人なりと雖も若し浄土門に於て其の志 有らん者

すべか

す

じゅうど

いわ ぜんどうわじょうしゅうざう

は須らく聖道を棄てて浄土に帰すべし又云く善導和尚正雑の二行を立て

ぞうぎよう

しゅうぎよう

だいいち

どくじゅぞうぎよう

かみ

かんきよう

雑行を捨てて正行に帰するの文、第一に読誦雑行とは上の觀經等の

おうじよう

いげ

しゅうじよう

けんみつ

しききよう

おい

じゅじ

往生浄土の經を除いて已外・大小乗・顯密の諸經に於て受持・読・

ず

こころとくへんじゅぞうぎよう

なす

らいはいぞうぎよう

かみ

みだ

らいはい

誦するを悉く読誦雑行と名く、第三に礼拝雑行とは上の弥陀を礼拝するを

いげいつさい

しよぶつ

ぼさつ おみ もろもろせてん

おい

らいはい

きようけい

ことごと

除いて已外一切の諸仏・菩薩等及び諸の世天等に於て礼拝し恭敬するを悉く

らいはいぞうぎよう

なす

ひそか いわ

すべから

せん

しゅう

あに

礼拝雑行と名く、私に云く此の文を見るに須く雑を捨てて専を修すべし豈

ひやくそくひやくしゅう

せんしゅうしゅうぎよう

せんちゅうむいつ

ぞうしゅうぞうぎよう

しゅう

百即 百生の専修 正行を捨てて堅く千中無一の雑修 雑行を執せんや

ぎようじやよ

これ しりよう

いわ ていげんにゆうぞうろく

はんにやきよう

行者能く之を思量せよ、又云く貞元入蔵録の中に始め大般若經六百卷より

ほうじようじゆきよう

法常住經に終るまで顯密の大乗經総じて六百三十七部二千八百八十三卷

なり、皆須く読誦大乘の一句に撰すべし、みなすべからどくじゆだいじよう 当に知るべしまさ 隨他ずいたの前には暫くしばら

じようさん

定散の門を開くと雖も隨自いえど ずいじの後には還て定散の門を閉ず、一たび開いて以後いご

じようさん

永く閉じざるは唯ただ是れ念仏ねんぶつの一門なりと、又云く念仏いわ ねんぶつの行者ぎようじゃ必ず三心を具足ぐそく

す

可きの文、觀無量壽經に云く

どうきよう

同經の疏に云く問うて曰く若し解行いわ もの不同ふどう・邪雜じゃざつの人等有つて外邪異見げじゃ いけんの難なん

を

防がん・或は行くこと一分二分にして群賊等喚廻ぐんぞく よびかえすとは即ち別解すなわ べっかい・別行べつぎよう・

あつけん

惡見ひとどうの人等に喩う、私ひそかに云く又此いっさいの中に一切べっかいの別解べつかい・別行べつぎよう・異学いがく・異見いけん等と

言

うは是れ聖道門しやうだうもんを指す已上、又最後結句さいごけつこの文に云く「夫れ速すみやかに生死しやうじを離

れんと欲せば二種の勝法しやうほうの中に且く聖道門しやうだうもんをお閣あきて選んで浄土門じやうどもんに入れ、

じようどもん

浄土門じやうどもんに入らんと欲せば正雜しやうざつ二行にぎやうの中に且く諸しばらの雜行ざぎようを抛なげうちて選んで応に

しやうざつ

正行しやうぎやうに歸すべし」已上。

正行に歸すべし」已上。

之に就いて之を見るに曇鸞・道綽・善導の謬釈を引いて聖道・淨土・
難行・易行の旨を建て法華・真言惣じて一代の大乗六百三十七部二千八百
八十三卷・一切の諸仏・菩薩及び諸の世天等を以て皆聖道・難行・雜行等
に摂して、或は捨て、或は閉じ、或は閣き、或は抛つ此の四字を以て多く
一切を迷わし、剩え三国の聖僧十方の仏弟を以て皆群賊と号し併せて罵詈
せしむ、近くは所依の淨土の三部經の唯除五逆誹謗正法の誓文に背き、遠く
は一代五時の肝心たる法華經の第二の「若し人信ぜずして此の經を毀謗せば
乃至其の人命終つて阿鼻獄に入らん」の誠文に迷う者なり、是に於て代末代
に及び人聖人に非ず各冥衢に容つて並びに直道を忘る悲いかな瞳瞭をた
ず痛いかな徒に邪信を催す、故に上國王より下土民に至るまで皆經は淨土三
部の外に經無く仏は弥陀の三尊の外に仏無しと謂えり。
仍つて伝教・義真・慈覺・智証等、或は万里の波濤を涉つて渡せし所の

聖教・或は一朝の山川を廻りて崇むる所の仏像若しくは高山の巔に華界
を建てて以て安置し若しくは深谷の底に蓮宮を起てて以て崇重す、釈迦・
薬師の光を並ぶるや威を現当に施し虚空地藏の化を成すや益を生後に被らし
む、故に国王は郡郷を寄せて以て灯燭を明にし地頭は田園を充てて以て供養
に備う。

而るを法然の選択に依つて則ち教主を忘れて西土の仏馱を貴び付属を
抛つて東方の如来を闇き唯四卷・三部の教典を專にして空しく一代五時の
妙典を抛つ是を以て弥陀の堂に非ざれば皆供仏の志を止め念仏の者に
非ざれば早く施僧の懷いを忘る、故に仏閣零落して瓦松の煙老い僧房荒廃し
て庭草の露深し、然りと雖も各護惜の心を捨てて並びに建立の思を廃す、
是を以て住持の聖僧行いて帰らず守護の善神去つて来ること無し、是れ偏に
法然の選択に依るなり、悲しいかな数十年の間・百千万の人・魔縁に蕩かさ

れて多くぶつきょう仏教に迷えり、傍ぼうを好んで正を忘る善神怒ぜんじんを為なさざらんや円を捨てて偏へんを好む悪鬼便あつきたよりりを得うざらんや、如しかず彼の万祈ばんきを修しゅうせんよりは此のいっきよう一凶を禁いぜんには。

客殊ことに色を作なして曰いわく、我が本師釈迦文浄土ほんししやかもん じょうどの三部經さんぶきようを説きたまいて以来、と曇鸞法師どんらんほっしは四論の講説こうせつを捨てて一向いっこうに浄土じょうどに歸し、道綽どうしゆく禪師ぜんは涅槃ねはんの広業こうぎきようをお閣ひとえきて偏さいほうに西方ひろの行ひろを弘ひろめ、善導ぜんどう和尚わじょうは雜行ぞうぎきようを抛なげうつて專修せんしゅうを立て、慧心えしん僧都そうずは諸經しよききようの要文ようぶんを集めて念仏ねんぶつの一行いっくわうを宗しゆとす、弥陀みだを貴重きちようすること誠てんだいにもっしか以おうじようて然そなり又往生いくばくの人其れ幾なかんずくばくぞや、就な中法然なかつぽうねん聖人しやうにんは幼少しうしやうにして天台てんだい山さんに昇のぼり十七じふしちにして六十卷わたくに涉なり並びに八宗はつしゅうを究きわめ具つぶに大意だいたいを得えたり、其その外いっさい一切ききようの經論きようろん・七遍反覆はんぷくし章疏しやうしよ伝記でんき究きめ看みざることなく智ちは日月にちがつに齊ひとしくせんし徳とくは先師せんしに越しかえたり、然いりと雖いも猶出離なの趣おもむきに迷ねいて涅槃ねはんの旨わきまを弁わえず、ゆえ故あまねに・く觀み悉ことごとく鑑かんみ深おもんばかく思しよきい遠なげうく慮もつり遂ねんぶつに諸經ししゅうを抛なげうちて専もつら念仏ねんぶつを修しゅうす、

其の上一夢の靈応を蒙り四裔の親疎に弘む、故に・或は勢至の化身と号し・或
は善導の再誕と仰ぐ、然れば則ち十方の貴賤頭を低れ一朝の男女歩を運
ぶ、爾しより來た春秋推移り星霜相積れり、而るに忝くも釈尊の教を疎
にして恣に弥陀の文を譏る何ぞ近年の災を以て聖代の時に課せ強ちに先師を
毀り更に聖人を罵るや、毛を吹いて疵を求め皮を剪つて血を出す昔より今
に至るまで此くの如き悪言未だ見ず惶る可く慎む可し、罪業至つて重し科条
争か遁れん対座猶以て恐れ有り杖に携われて則ち歸らんと欲す。
主人咲み止めて曰く辛きことを夢の葉に習い臭きことを溷廁に忘る善言を
聞いて悪言と思ひ謗者を指して聖人と謂ひ正師を疑つて悪侶に擬す、其の
迷誠に深く其の罪浅からず、事の起りを聞け委しく其の趣を談ぜん、釈尊
説法の内一代五時の間に先後を立てて権実を弁ず、而るに曇鸞道綽善導既に
権に就いて実を忘れ先に依つて後を捨つ未だ仏教の淵底を探らざる者なり、

就中法然なかなずくほうねんは其その流くを酌いむと雖いえども其その源みなもとを知らず、所以ゆえんは何いかん大乘だいじょうきよう經の六百
三十七部二千八百八十三卷並ならびに一切いっさいの諸しよ仏ぶつ・菩薩ぼさつ及び諸もろもろの世天等せてんを以もつて
捨しや閉へい閣かく拋ほうの字じを置いて一切いっさい衆生しゆじようの心こころを薄はくんず、是これ偏ひとえに私曲しきよくの詞ことばを展のべて
全ぶきようく仏經ぶつぎようの説しやうを見みず、妄語もうごの至あつくり惡口とがの科言あつくつても比無あつくし責とがめても余あつくり有あつくり
人みなそ皆もつ其もつの妄語もうごを信しんじ悉ことごとく彼せんちやくの選とつ択とつを貴ゆえぶ、故ゆえに淨土じようどの三經あがめを崇しゆきめて衆經しゆきようを
拋なげうち極樂ごくらくの一あ仏おを仰あいで諸しよ仏ぶつを忘しやうる、誠こに是しよれ諸しよ仏ぶつ・諸經しよきようの怨敵おんてき聖僧せいそう衆人しうじん
の讎しやうてき敵てきなり、此じやの邪教じやく廣はつく八荒はつこに弘ひろまり周あまねく十方じゆっぽうに遍へんす、抑そも近年きんねんの災難さいなん
を以もつて往代なんを難あなずるの由あな強こちに之これを恐おそる、聊いさか先例せんれいを引ひいて汝なんじが迷まを悟さとす
可べし、止觀しかん第二だいにに史記しきを引ひいて云いく、「周しうの末はつに被髮ひはつ・袒身たんしん・礼度れいどに依よらざる
者しや有あり」弘決くけつの第二だいにに此しやの文ぶんを釈しゃくするに左伝さでんを引ひいて曰いく、「初め平王へいおうの東とうに
遷うつりしに伊川いせんに髮かを被かにする者しやの野おに於おて祭まつるを見る、識者しきしやの曰いく、百年ひゃくねんに
及および其その礼れい先せんず亡なびぬ」と、爰こゝに知しんぬ徵あ前まへに顯あられ災わざわい後ごに致いたることを、

又阮藉げんせきが逸才いつさいなりしに蓬頭散帶ほうとうさんたいす後に公卿くぎようの子孫しそん皆みな之をに教をいて奴苟相辱どこうあいはずかしむる者をを方まさに自然じねんに達いたすと云いい節兢持せんせつこうじする者をを呼よんで田舎いなかと為なす是これを司馬氏しばしの滅なする相と為なす已上。

又慈覺大師じかくだいしの入唐巡礼記にゅうとうじゆんれいきを案いずるに云いく、「唐とうの武宗皇帝ぶそうこうてい・会昌元年えしやうがんねん勅しして章敬寺しょうけいじの鏡きやうぞうほつし霜法師しやうほうしをして諸寺しよに於おいて弥陀念仏みだねんぶつの教をを伝え令しむ寺毎てらごとに三日さんじつ巡輪じゆんりんすること絶えず、同二年回鶻国かいこつこくの軍兵ぐんびやう等唐とうの堺を侵す、同三年河北かほくの

節度使せつどし忽たちち乱らんを起おこす、其その後大蕃国だいばんこく更またた命ことを拒こばみ回鶻国かいこつこく重かさねて地を奪うふ、
凡およそ兵乱ひやうらん秦項しんかうの代しろに同じく災火邑里さいかゆりの際おこに起おこる、何いかに況いわんや武宗大ぶそうおおいに仏法ぶつぽうを破はし多く寺塔じとうを滅おさむす乱らんを撥あつて遂もつに以もつて事有ことあり」取意已上

此これを以もつて之これを惟おもうに法然ほうねんは後鳥羽院ごとばいんの御宇ぎやう・建仁年中けんじんの者ものなり、彼の院いんの御事おんこと既に眼前がんぜんに在あり、然しかれば則すなわち大唐だいたうに例れいを残わし吾わが朝あしたに証あを顯あらわす、汝なんじ疑なうこと莫なかれ汝怪なんじむあやしむこと莫なかれ唯須ただすべからく凶なを捨てて善よに歸かへし源みなもとを塞ふさぎ根ねを

たつ
截べし。

客聊いささかか和わぎて日いわく未いまだ淵底えんでいを究きわめざるに数しばしば其その趣そを知る但ただし華洛からくより柳營りゅうえいに至いたるまで釈門しゃくもんに枢すうけん在ぶつり仏家ぶつに棟梁とうりょう在しり、然しかるに未いまだ勘狀かんじょうを進まいらせず上奏じょうそうに及およばず汝賤身なんじいやしみを以もつて輒たやすく莠言ゆうげんを吐そく其その義余そり有そり其その理謂いわれ無なし。

主人しゅじんの曰いわく、予少量な為なりと雖いえども忝かたじけなくも大乘だいじょうを学まなぶ蒼蠅驥尾そうようきびに附ふして万里ばんりを渡わたり碧蘿松頭へきらしやうとうに懸かりて千尋せんじんを延のぶ、弟子一仏でしの子と生うまれて諸經しよきやうの王に事ことつ、何ぞ仏法の衰微すいびを見て心情しんじやうの哀惜あいせきを起おこさざらんや。

其その上涅槃經ねはんぎやうに云いわく「若もし善比丘ぜんびくあつて法はふを壊やぶる者ものを見て置いて呵責かしやくし驅遣くけんし拳処こんしよせずんば当まさに知るべし是この人は仏法ぶつぽうの中の怨あだなり、若もし能よく驅遣くけんし呵責かしやくし拳処こんしよせば是これ我が弟子真でしの声聞しやうもんなり」と、余善比丘ぜんびくの身み為ならずと雖いえどもぶつぽうちゅうおん「仏法中怨の」の責のを遁たれんが為ために唯大綱ただたいこうを撮とつて粗一端ほぼを示しす。

其の上いぬ去げんる元仁年中に延曆・興福の兩寺より度たび度たび奏聞そうもんを經へ・勅宣御教書ちよくせんみきようしよ
を申もう下くだして、法然ほうねんの選せん招ちやくの印いん板ばんを大講堂だいこうどうに取り上げ三世さんぜの仏恩ぶつおんを報ほうぜんが
為ために之これを燒失ほうねんせしむ、法然ほうねんの墓所ぼしよに於おいては感神院かんじんいんの犬神人つのみそうに仰おおせ付けて破却はきやく
せしむ其その門弟もんてい・隆觀りゅうかん・聖光せいこう・成覺じやうかく・薩生さつしやう等は遠国えんごくに配流はいりるせらる、其その後ご
未いまだ御勸氣かんきを許ゆるされず豈未あにいまだ勸狀かんじやうを進まいらせずと云いわんや。

客則すなわち和いわぎて曰いく、經くだを下くだし僧ぼうを謗ぼうすること一人ひとりには論がたじ難がたし、然しかれども

大乗だいじやうきよ經六百三十七部二千八百八十三卷並ならびに一切いっさいの諸しよ仏ぶつ・菩薩ぼさつ及および諸もろの

世天等せてんを以もつて捨しや閉へい閣かく拋ほうの四字のに載そす其その詞ことば勿も論ろんなり、其その文けん顯げん然ねんなり、此この

瑕瑾かきんを守そつて其そのの誹謗ひぼうを成せいせども迷まうて言ことうか覺さとりて語かたるか、賢愚けんぐ弁べんぜず是ぜ非ひ

定がため難たし、但ただし災難さいなんの起おこりは選せん招ちやくに因よるの由ゆ、其その詞ことばを盛さかんに弥いよ其その旨しを

談だんず、所詮しよせん天下泰平てんがたいへい・国土安穩こくどあんのんは君臣くんしんの樂ねがう所ど土民みんの思おもう所しなり、夫それ国こは

法よに依よつて昌さかえ法よは人ひとに因よつて貴とし国亡こくおとび人滅ひとめせば仏あがを誰たれか崇べむ可べき法ほを誰たれ

か信ず可きや、先ず国家を祈りて須く仏法を立つべし若し災を消し難を止む
るの術有らば聞かんと欲す。

主人の曰く、余は是れ頑愚にして敢て賢を存せず唯經文に就いて聊か所存

を述べん、抑も治術の旨内外の間其の文幾多ぞや具に挙ぐ可きこと難し、

但し仏道に入つて数ば愚案を廻すに謗法の人を禁めて正道の侶を重んぜば

國中安穩にして天下泰平ならん。

即ち涅槃經に云く、「仏の言く唯だ一人を除いて余の一切に施さば皆讚歎す

可し、純陀問うて言く云何なるをか名けて唯除一人と為す、仏の言く此の經

の中に説く所の如きは破戒なり、純陀復た言く、我今未だ解せず唯願くば

之を説きたまえ、仏純陀に語つて言く、破戒とは謂く一闍提なり其の余の

在所一切に布施すれば皆讚歎すべく大果法を獲ん、純陀復た問いたてまつる、

一闍提とは其の義何ん、仏言わく、純陀若し比丘及び比丘尼・優婆塞・優婆夷

有つてそ惡の言を發し正法を誹謗し是の重業を造つて永く改悔せず心に懺悔無らん、是くの如き等の人を名けて一闍提の道に趣向すと為す、若し四重を犯し五逆罪を作り自ら定めて是くの如き重事を犯すと知れども而も心に初めより怖畏懺悔無く肯て發露せず彼の正法に於て永く護惜建立の心無く毀皆輕賤して言に過咎多からん、是くの如き等の人を亦た一闍提の道に趣向すと名く、唯此くの如き一闍提の輩を除いて其の余に施さば一切讚歎せん」と。

又云く「我れ往昔を念うに閻浮提に於て大国の王と作れり名を仙予と曰いき、大乘經典を愛念し敬重し其の心純善に・惡嫉・有ること無し、善男子我爾の時に於て心に大乘を重んず婆羅門の方等を誹謗するを聞き聞き已つて即時に其の命根を斷ず、善男子是の因縁を以て是より已來地獄に墮せず」と、又云く「如來昔國王と為りて菩薩の道を行ぜし時爾所の婆羅門の命を斷絶す」

と、又云く「殺に三有り謂く下中上なり、下とは蟻子乃至一切の畜生なり

唯だ菩薩の示現生の者を除く、下殺の因縁を以て地獄・畜生・餓鬼に墮して

具に下の苦を受く、何を以ての故に是の諸の畜生に微善根有り是の故に殺す

者は具に罪報を受く、中殺とは凡夫の人より阿那含に至るまでは是を名けて中

と爲す、是の業因を以て地獄・畜生・餓鬼に墮して具に中の苦を受く上・殺

とは父母乃至阿羅漢・辟支仏・畢定の菩薩なり阿鼻大地獄の中に墮す、

善男子若し能く一闍提を殺すこと有らん者は則ち此の三種の殺の中に墮せず、

善男子彼の諸の婆羅門等は一切皆は一闍提なり」已上。

仁王經に云く「仏波斯匿王に告げたまわく是の故に諸の国王に付属して

比丘・比丘尼に付属せず何を以ての故に王のごとき威力無ければなり」已上。

涅槃經に云く「今無上の正法を以て諸王大臣宰相及び四部の衆に付属す、

正法を毀る者をば大臣四部の衆当に苦治すべし」と。

又云く「仏の言く、迦葉能く正法を護持する因縁を以ての故に是の金剛身
を成就することを得たり善男子正法を護持せん者は五戒を受けず威儀を
修せず応に刀劍・弓箭・鉾槊を持すべし」と、又云く「若し五戒を受持せん
者有らば名けて大乘の人と為す事を得ず、五戒を受けざれども正法を護
るを為て乃ち大乘と名く、正法を護る者は当に刀劍器仗を執持すべし刀杖を
持すと雖も我是等を説きて名けて持戒と曰わん」と。

又云く「善男子過去の世に此の拘尸那城に於て仏の世に出でたまふこと有
りき歡喜増益如来と号したてまつる、仏涅槃の後正法世に住すること無量億
歳なり余の四十年・仏法の末、爾の時に一の持戒の比丘有り名を覺徳と曰う、
爾の時に多く破戒の比丘有り是の説を作すを聞きて皆惡心を生じ刀杖を執持
し是の法師を逼む、是の時の国王名けて有徳と曰う是の事を聞き已つて護法
の爲の故に即便ち説法者の所に往至して是の破戒の諸の惡比丘と極めて共に

せんとう 戦闘す、爾の時に説法者厄害を免ることを得たり王爾の時に於て身に刀劍鋒槩
の瘡を被り体に完き処は芥子の如き許りも無し、爾の時に覺徳尋いで王を
讃めて言く、善きかな善きかな王今真に是れ正法を護る者なり当來の世に此
の身当に無量の法器と為るべし、王是の時に於て法を聞くことを得已つて心
大に歡喜し尋いで即ち命終して阿 仏の國に生ず而も彼の仏の為に第一の
弟子と作る、其の王の將 從・人民・眷屬・戰闘有りし者・歡喜有りし者
一切菩提の心を退せず 命終して悉く阿 仏の國に生ず、覺徳比丘却つて
後壽終つて亦阿 仏の國に往生することを得て彼の仏の為に聲聞 衆中の
第二の弟子と作る、若し正法尽きんと欲すること有らん時当に是くの如く
受持し擁護すべし、迦葉爾の時の王とは即ち我が身是なり、説法の比丘は迦葉
仏是なり、迦葉正法を護る者は是くの如き等の無量の果報を得ん、是の因縁
を以て我今日に於て種種の相を得て以て自ら莊嚴し法身不可壞の身を成す、

仏迦葉菩薩に告げたまわく、是の故に法を護らん優婆塞等は心に刀杖を執持して擁護することは是くの如くなるべし、善男子我涅槃の後濁惡の世に国土荒亂し互に相抄掠し人民飢餓せん、爾の時に多く飢餓の爲の故に発心出家するもの有らん是くの如き人を名けて禿人と爲す、是の禿人の輩正法を護持するを見て駟逐して出さしめ若くは殺し若くは害せん、是の故に我今持戒の人諸の白衣の刀杖を持つ者に依つて以て伴侶と爲すことを聴す、刀杖を持すと雖も我是等を説いて名けて持戒と曰わん、刀杖を持すと雖も命を断ずべからず」と。

法華經に云く「若し人信ぜずして此の經を毀謗せば即ち一切世間の仏種を断ぜん、乃至其の人命終して阿鼻獄に入らん」已上。

夫れ經文顯然なり私の詞何ぞ加えん、凡そ法華經の如くんば大乘經典を謗する者は無量の五逆に勝れたり、故に阿鼻大城に墮して永く出る期無け

ん、涅槃經の如くんば設い五逆の供を許すとも謗法の施を許さず、蟻子を殺す者は必ず三惡道に落つ、謗法を禁ずる者は不退の位に登る、所謂覺徳とは是れ迦葉仏なり、有徳とは則ち釈迦文なり。

法華・涅槃の經教は一代五時の肝心なり其の禁・實に重し誰か歸仰せざらんや、而るに謗法の族・正道を忘るの人・剩え法然の選択に依つて彌よ愚癡の盲瞽を増す、是を以て・或は彼の遺体を忍びて木画の像に露し・或は其の妄説を信じて莠言を模に彫り之を海内に弘め之を外に翫ぶ、仰ぐ所は則ち其の家風施す所は則ち其の門弟なり、然る間・或は釈迦の手指を切つて弥陀の印相に結び・或は東方如来の鴈宇を改めて西土教主の鵝王を居え、或は四百余回の如法經を止めて西方淨土の三部經と成し・或は天台大師の講を停めて善導講と為す、此くの如き群類其れ誠に尽くし難し是破仏に非ずや是・破法に非ずや是・破僧に非ずや、此の邪義則ち選択に依る

なり。

嗟呼悲しいかな、如来誠諦の禁言に背くこと、哀なるかな愚侶迷惑の語

に随うこと、早く天下の静謐を思わば須く國中の謗法を断つべし。

客の曰く、若し謗法の輩を断じ若し仏禁の違を絶せんには彼の經文の

如く斬罪に行う可きか、若し然らば殺害相加つて罪業何んが為んや。

則ち大集經に云く、「頭を剃り袈裟を著せば持戒及び毀戒をも、天人彼を

供養す可し、則ち我を供養するに為りぬ、是れ我が子なり若し彼を打する

事有れば則ち我が子を打つに為りぬ、若し彼を罵辱せば則ち我を毀辱するに

為りぬ、料理知んぬ善惡を論ぜず是非を択ぶこと無く僧侶為らんに於ては供養

を展ぶ可し、何ぞ其の子を打辱して忝くも其の父を悲哀せしめん、彼の竹杖

の目連尊者を害せしや永く無間の底に沈み、提婆達多の蓮華比丘尼を殺せし

や久しく阿鼻の焰に咽ぶ、先証斯れ明かなり後昆最も恐あり、謗法を誡む

るには似たれども既に禁言を破る此の事信じ難し如何が意得んや。

主人の云く、客明に經文を見て猶斯の言を成す心の及ばざるか理の通ぜざ

るか、全く仏子を禁むるには非ず唯偏に謗法を惡むなり、夫れ釈迦の以前佛教

は其の罪を斬ると雖も能忍の以後經説は則ち其の施を止む、然れば則ち四海

万邦一切の四衆其の惡に施さず皆此の善に歸せば何なる難か並び起り何なる

災か競い来らん。

客則ち席を避け襟を刷いて曰く、仏教斯く区にして旨趣窮め難く不審多端

にして理非明ならず、但し法然聖人の選択現在なり諸仏・諸經・諸菩薩・

諸天等を以て捨閉閣抛と載す、其の文顯然なり、茲れに因つて聖人國を去り

善神所を捨てて天下飢渴し世上疫病すと、今主人広く經文を引いて明かに

理非を示す、故に妄執既に翻えり耳目数朗かなり、所詮国土泰平・天下安穩

は一人より万民に至るまで好む所なり樂う所なり、早く一闡提の施を止め永

く衆僧尼しゅうそうにの供を致しぶつがい仏海の白浪はくろうを収めおさ法山の緑林ほうざんを截らば世きは義農ぎのうの世と成り国は唐虞とうくの国と為らん、然しかして後法水ほつすいの浅深せんじんを斟酌しんしゃくし仏家の棟梁ぶつけを崇重とうりようせん。

主人悦しゅじんよろこんで曰いわく、鳩化はとけして鷹たかと為り雀すずめ変はまぐりじて蛤なと為る、悦なんじしきかな汝

蘭室らんしつの友に交りて麻畝まほの性と成る、誠そに其の難なんを顧かえりみて専もつぱら此の言を信ぜば

風和やわらぎ浪静かなみしずかにして不日ふじつに豊年ほうねんならん、但ただし人の心は時に随したがつて移り物の

性は境よに依よつて改まる、譬たとえば猶水中の月の波に動き陳前じんぜんの軍の剣に靡なびくくが

ごとし、汝当座なんじとうざに信いえどずと雖も後定めて永く忘れん、若もし先こくどず国土を安んじて

現当げんとうを祈らんと欲ほつせば速すみやかに情慮じょうるを回めぐらしで対治いそいでたいじを加えよ、

所以ゆえんは何ん、葉師經やくしの七難ひちなんの内五難なんたちまち忽なんなに起り二難猶残いれり、所以い他国侵逼いの難なん

・自界叛逆じかいほんぎやくの難なんなり、大集經だいしつきようの三災さんさいの内二災あらわ早く顕あらわれ一災未だ起いまらず所以いわゆる

兵革ひよくかくの災なり、金光明經こんこうみようきようの内の種種しゅじゆの災禍さいか一一起おこると雖も他方の怨賊国内いえどたほうおんぞくこくない

を侵掠する此の災未だ露れず此の難未だ来らず、仁王經の七難の内六難今
盛にして一難未だ現ぜず所以四方の賊来つて国を侵すの難なり加之国土乱
れん時は先ず鬼神乱る鬼神乱るが故に万民乱ると、今・此の文に就いて
具さに事の情を案ずるに百鬼早く乱れ万民多く亡ぶ先難是れ明かなり後災
何ぞ疑わん若し残る所の難惡法の科に依つて並び起り競い来らば其の時何ん
が為んや、帝王は国家を基として天下を治め人臣は田園を領して世上を保つ、
而るに他方の賊来つて其の国を侵逼し自界叛逆して其の地を掠領せば豈驚
かざらんや豈騒がざらんや、国を失い家を滅せば何れの所にか世を遁れん汝
須く一身の安堵を思わば先ず四表の静謐をらん者か、就中人の世に在るや
各後生を恐る、是を以て・或は邪教を信じ・或は謗法を貴ぶ各是非に迷うこ
とを惡むと雖も而も猶佛法に帰することを哀しむ、何ぞ同じく信心の力を
もつて妄りに邪義の詞を崇めんや、若し執心翻らず亦曲意猶存せば早く有為

の郷さとを辞じして必ず無間むげんの獄ごくに墮おちなん、所以ゆえんは何いかん、大集經に云く「若もし國王こくおう有ありつて無量世むりょうせに於おいて施戒慧せかいえを修しゅうすとも我が法の滅めつせんを見て捨てて擁護おうごせずんば是かくの如ごとく種くさゆる所の無量むりょうの善根ぜんこん悉ことごとく皆滅失みなめつしつし、乃至其ないしその王おう久くしからずして当まさに重病じゅうびょうに遇じゅうじゅうい寿じゅうじく終だいじくの後ご大地獄だいじくに生なずべし王おうの如ごとく夫人ふじん・太子たいし・大臣だいじん・城主じょうしゅ・柱師ちゅうし・郡主ぐんしゅ・宰官さいかんも亦復またまた是かくの如ごとくならん」と。
仁王經に云く「人・仏教ぶつぎょうを壊やぶらば復またた孝子こうし無なくく六親不和ろくしんふわにして天竜てんりゅうも祐たすけず疾疫惡鬼しつえきあくき日ひに來きつて侵害しんがいし災怪首尾さいげしゅびし連禍縱横れんかじゅうおうし死じして地獄じごく・餓鬼がき・畜生ちくしょうに入いらん、若もし出でて人ひとと為ならば兵奴ひょうぬの果報かほうならん、響ひびきの如ごとく影かげの如ごとく人の夜書よがくに火ひは滅めつすれども字そんは存ぞんするが如ごとく、三界さんがいの果報かほうも亦復またまた是かくの如ごとく」と。

法華經の第二に云く「若もし人信しんぜずして此この經きやうを毀謗きぼうせば乃至其ないしその人ひと命終みょうじゅうして阿鼻獄あびごくに入いらんと、同第七の卷不輕品ふぎように云く「千劫阿鼻地獄せんごうあびごくに於おいて大苦惱くのおう

を受く」と、涅槃經に云く、善友を遠離し正法を聞かず惡法に住せば是の因縁の故に沈没して阿鼻地獄に在つて、受くる所の身形・縱横八万四千由延ならん」と。

広く衆經を披きたるに専ら謗法を重んず、悲いかな皆正法の門を出でて

深く邪法の獄に入る、愚なるかな各惡教の綱に懸つて鎖に、謗教の綱に

纏る、此の朦霧の迷彼の盛焰の底に沈む豈愁えざらんや豈苦まざらんや、汝

早く信仰の寸心を改めて速に実乗の一善に歸せよ、然れば則ち三界は皆仏国

なり仏国其れ衰んや十方は悉く宝土なり宝土何ぞ壞れんや、国に衰微無く

土に破壊無んば身は是れ安全・心は是れ禅定ならん、此の詞此の言信ず可

く崇む可し。

客の曰く、今生後生誰か慎まざらん誰か和わざらん、此の經文を披いて

具に仏語を承るに誹法の科至つて重く毀法の罪・誠に深し、我一仏を信じ

て諸仏しよぶつを抛なげち三部經さんぶきやうを仰あおいで諸經しよきやうを閣おきしは、是これ私曲しきよくの思おもひに非あらず則すなわち先達せんだつの詞ことばに随したがひしなり、十方じゆつぱうの諸人しよにんも亦復またまた是この如ごとくなるべし、今の世よには性心しやうしんを勞わずらわらいしようには阿鼻あびだに墮おせんこと文明あきらかに理詳つまびらかなり疑うべからず、弥いよ貴公きこうの慈誨じかを仰あおぎ益愚客ぎきやくの癡心ちしんを開ひらけり、速すみに對治めくらを回まわして早たいへいく泰平たいへいを致いたし先せず生前せいぜんを安やすして更ほつこに没後たすを扶たけん、唯我ただが信あずるのみに非あらず又他の誤あやまりをいましも誠まことめんのみ。

三 立正安國論奥書

文応元年ぶんおうがんねん太歲庚申これ之かんがを勘しょうかう正嘉しやうかより之これを始め文応元年ぶんおうがんねんに勘かんがえ畢おわる。

去いぬる正嘉元年しやうかがんねん太歲丁巳ひのとも八月二十三日いぬい戌亥こくの尅だいじしんの大地震だいじしんを見て之これを勘かんがう、

其その後文応元年ぶんおうがんねん太歲庚申七月十六日もつやどやを以もつて宿屋・禪門ぜんもんに付さいみして故最明寺入道殿さいみやうじにゆうどう

に奉たてまれり、其その後文永元年ぶんえいがんねん太歲甲子七月五日きのえね大明星だいみやうじやうの時いよいよ弥いよいよ此この災こんげんの根源こんげんを

知る、文応元年ぶんおうがんねん太歲庚申より文永五年ぶんえい太歲戊辰ぶんえい後の正月十八日いたに至いたるまで九ヶ年を

へ さいほう もうこ よ
經て西方大蒙古国自り我が朝を襲う可きの由牒狀之を渡す、又同六年重ね
ちようじようこれ わた すで かんもん
て牒狀之を渡す、既に勘文之に叶う、之に準じて之を思うに未来亦然る可き
か、此の書は徴有る文なり是れ偏に日蓮が力に非ず法華經の真文の感応の
いた
至す所か。

ぶんえい
文永六年太歳己巳十二月八日之を写す。

四 安国論御勘由来

しょうかがんねん ひのとも
正嘉元年丁巳八月廿三日戌亥の時・前代に超え大に地振す、同二年戊午八月
たいふう
一日大風・同三年己未大飢饉・正元元年己未大疫病同二年庚申四季に亘つて大疫
ばんみんすで たいはん こ
已まず万民既に大半に超えて死を招き了んぬ、而る間国主之に驚き内外典に
おお
仰せ付けて種種の御祈 有り、爾りと雖も一分の験も無く還つて飢疫等を
しゅじゅ きとう しかり いえど いちぶん しるし なく かえ
ぞうちよう
増長す。

にちれんせけん ほほいつさいきよう かんが
日蓮世間の体を見て粗一切経を勘うるに御祈請験無く還つて凶惡を
きしょうしるしなく かえ きようあく

増長するの由道理・文証之を得了んぬ、終に止むこと無く勘文一通を造り
作して其の名を立正安国論と号す、文応元年申庚七月十六日時屋戸野入道に付
けて古最明寺入道殿に奏進申し了んぬ此れ偏に国土の恩を報ぜんが為なり、
其勘文の意は日本国・天神七代・地神五代

百王百代人王第卅代欽明天皇の御宇に始めて百済国より仏法此の国に渡り
桓武天皇の御宇に至つて其の中間五十余代・二百六十余年なり、其の間・
一切経並びに六宗之れ有りと雖も天台・真言の二宗未だ之れ有らず、桓武の
御宇に山階寺の行表僧正の御弟子に最澄と云う小僧有り師と号す、已前に渡
る所の六宗並に禅宗之を極むと雖も未だ我が意に叶わず、聖武天皇の御宇
に大唐の鑒真和尚渡す所の天台の章疏四十余年を経て已後始めて最澄之を
披見し粗仏法の玄旨を覺り了んぬ、最澄・天長地久の為に延暦四年叡山を
建立す桓武皇帝之を崇め天子本命の道場と号し六宗の御帰依を捨て一向に

てんだいえんしゅう きふく
天台円宗に帰伏し給う。

えんりやく
同延暦十三年に長岡の京を遷して平安城を建つ、同延暦廿一年正月十

たかおでら おい なんと ななだいじ ろくしゅう
九日高雄寺に於て南都・七大寺の六宗の・碩学・勤操・長耀等の十四人を

しょうぶ けつだん ろくしゅう めいしゅう もんどう およ
召し合せ勝負を決談す、六宗の明匠・一問答にも及ばず口を閉ずること鼻

ごと けごんしゅう ほうそうしゅう さんろん
の如し華嚴宗の五教・法相宗の三時・三論宗の二藏・三時の所立を破し

あわ じしゅう あら みなほうぼう な
了んぬ但自宗を破らるるのみに非ず皆謗法の者為ることを知る、同じき廿九

こうていちよくせん くだ これ なじ しやひょう
日皇帝勅宣を下して之を詰る、十四人謝表を作つて皇帝に捧げ奉る、其の

こうてい えいざん ごき え こうし ふほ こ れいみん おうい
後代代の皇帝叡山の御帰依は孝子の父母に仕うるに超え黎民の王威を恐るる

すぐ あるおんとき せんみょう ささ あるおんとき もっ しよ
に勝れり、・或御時は宣明を捧げ、或御時は非を以て理に処す等云云、殊に

せいわたんのう えいざん えりよう わじょう ほうい よ ていおう
清和天皇は叡山の惠亮和尚の法威に依つて位に即き帝王の外祖父・

くじょううじょうしゅう せいじょう えいざん ささ みなもと うしやうぐん せいわ まつよう かまくら
九条右丞相は誓状を叡山に捧げ、源の右將軍は清和の末葉なり鎌倉の

ごせいばいぜひ えいざん いはい てんめい あ
御成敗是非を論ぜず叡山に違背す天命恐れ有る者か。

然るに後鳥羽院の御宇・建仁年中に法然・大日とて二人の増上慢の者有り

あつきそ

悪鬼其の身に入つて國中の上下を誑惑し代を挙げて念仏者と成り人毎に

ぜんしゅう

おもむ

禅宗に趣く、存の外に山門の御帰依浅薄なり國中の法華・真言の学者棄て

おわ

ゆえ

えいざんしゅこ

てんしやうだいじん

しやうはちまんぐう

さんのお

ほつけ

しんこん

がくしやす

くにじゅうしゅこ

置かれ了んぬ、故に叡山守護の天照太神・正八幡宮・山王七社・國中守護

しやだいぜんじんほうみ

くら

いこう

うしな

こくど

おわ

あつきたより

悪鬼便り

を

の諸大善神法味を わずして威光を失い国土を捨て去り了んぬ、

さいなん

いた

けつきたこく

やぶ

べ

せんそうかんが

所なり、

又其の後

そ

又其の後

を

得て災難を致し結句他国より此の国を破る可き先相勘うる所なり、

ぶんえいがんねん

きのえね

すいせいとうほう

い

よこうだいたい

こくど

こ

此れ又世始ま

りてより

已来無き所

の凶

瑞なり内外典の学者も其の凶瑞の根源を知らず、

りてより

このかた

きようずい

ないげてん

がくしや

そ

きようずい

こんげん

を知らず、

予弥よ

悲歎を増長す、

而るに勘文を捧げて已後九ケ年を経て今年後の正月

いよいよ

ひたん

そつちやう

しか

かんもん

ささ

いご

へ

今年後の正月

大蒙古国

の国書を見るに

日蓮が勘文に相叶うこと宛かも符契の如し、

仏記し

だいもうこくこく

にちれん

かんもん

あいかな

あた

ふけい

ごと

しる

大蒙古国

の国書を見るに

日蓮が勘文に相叶うこと宛かも符契の如し、

仏記し

て云く「我が滅度の後・一百余年を経て阿育大王出世し我が舍利を弘めん」

いわ

めつど

へ

あそかだいおうしゅつせ

しやり

ひろ

と、

周の第四昭王

の御宇・

大史蘇由

が記に云く、

と、

周の第四昭王

の御宇・

大史蘇由

が記に云く、

一千年の外声教此の土に被ら

と、

周の第四昭王

の御宇・

大史蘇由

が記に云く、

一千年の外声教此の土に被ら

しめん」と、聖徳太子の記に云く「我が滅度の後二百余年を経て山城の国に

平安城を立つ可し」と、天台大師の記に云く「我が滅後二百余年の已後東国

に生れて我が正法を弘めん」等云云、皆果して記文の如し。

日蓮正嘉の大地震同じく大風同じく飢饉・正元元年の大疫等を見て記して

云く他国より此の国を破る可き先相なりと、自讃に似たりと雖も若し此の国土

を毀壊せば復た仏法の破滅疑い無き者なり。

而るに当世の高僧等謗法の者と同意の者なり復た自宗の玄底を知らざる者

なり、定めて勅宣御教書を給いて此の凶惡を祈請するか、仏神弥よ瞋恚を

作し国土を破壊せん事疑い無き者なり。

日蓮復之を対治するの方之を知る叡山を除いて日本国には但一人なり、臂え

ば日月の二つ無きが如く聖人肩を並べざるが故なり、若し此の事妄言ならば

日蓮が持つ所の法華經守護の十羅刹の治罰之を蒙らん、但偏に國の爲・法の

為・人の為にして身の為に之を申さず、復禪門に對面を遂ぐ故に之を告ぐ
これもち
之を用いざれば定めて後悔有る可し、
きようきようきんげん
恐恐謹言。

ぶんえい
文永五年太歳戊辰四月五日

ほうがんごぼう
法鑒御房 日蓮花押

あんこくろん
安国論別状

りっしょうあんこくろん
立正安国論の正本、
ときどの
富木殿に候、かきて給ひ候はん、ときどのか、又。五

月廿六日
にちれんかおう
日蓮花押

しゅごこつか
六 守護国家論 正元元年 三十八歳御作 36P

そ おも
夫れ以んみれば偶 十方微塵の三惡の身を脱れて希に閻浮日本の爪上の

またえんぶにちいき
生を受け亦閻浮日域・爪上の生を捨てて十方微塵・三惡の身を受けんこと

し か
疑い無き者なり、然るに生を捨てて惡趣に墮つるの縁・一に非ず・或妻子・

眷属けんぞくの哀憐いれんに依り・或は殺生ころせう・惡逆あくぎやくの重業じゆうごうに依り・或は国主こくしゆと成つて民衆みんしゆうの歎なげきを知らざるに依り・或は法の邪正じゃせいを知らざるに依り・或は惡師あくしを信ずるに依る、此の中に於ても世間の善惡ぜんあくは眼前がんぜんに在り愚人ぐにんも之を弁わきまうべし・佛法ぶつぽうの邪正じゃせい・師の善惡ぜんあくに於ては証果しょうかの聖人しょうにん・尚之なおこれを知らず況や末代の凡夫ほんぶに於て
おや。

しかのみならず仏・日・西山に隠れ余光・東域を照してより已来・四依しえの慧灯えとうは日に滅じ三蔵さんざうの法流ほうりゆうは月に濁る実教じつきやうに迷える論師ろんしは真理しんりの月に雲を
副そえ権經こんきやうに執する訳者は実經の珠たまを砕きて權教の石と成す、何に況や震旦いわんやの
人師にんしの宗義しゆうぎ其の誤り無からんや何に況や日本辺土まつがくの末学まがく誤りは多く實は少
き者か、随したがつて其の教を学する人数にんずうは

竜鱗りゅうりんよりも多く得道とくどうの者は鱗角りんかくよりも希まれなり、・或は權教こんきやうに依るが故に・或
は時機不相応じきふそうおうの教に依るが故に・或は凡聖ぼんせいの教を弁わきまえざるが故に・或は權實こんじつ

二教を弁えざるが故に・或は権經を實教と謂うに依るが故に・或は位の高下を知らざるが故に、凡夫の習い仏法に就て生死の業を増すこと其の縁・一に非ず。

中 昔・邪智の上有つて末代の愚人の爲に一切の宗義を破して 選択集

一卷を造る、名を鸞・綽・導の三師に倣つて一代を二門に分ち實教を録して

権經に入れ法華・真言の直道を閉じて淨土三部の隘路を開く、亦淨土三部の

義にも順ぜずして権實の謗法を成し永く四聖の種を断じて阿鼻の底に沈む

可き僻見なり、而るに世人之に順うこと譬えば大風の小樹の枝を吹くが

如く門弟此の人を重んずること天衆の帝釈を敬うに似たり。

此の惡義を破らんが爲に亦多くの書有り所謂・淨土決義鈔・彈選択・

摧邪輪等なり、此の書を造る人・皆碩德の名一天に弥ると雖も恐くは未だ

選択集 謗法の根源を顕わさず故に還つて惡法の流布を増す、譬えば盛なる

旱ばつしょうつの時に小雨しょうつを降せば草木そうもく 弥いよいよ 枯れ兵者つわものを打つ刻に弱兵じやくへいを先んずれば
強敵こうてき倍力ばいりきを得るが如しごと。

予此なげの事を歎く間・一卷の書を造つて 選択集せんちやくしゅう 謗法ほうぼうの縁起えんぎを顕あらわし名づけ
守護しゆご国家論こくがろんと号す、願わくば一切いっさいの道俗どうぞく一時いちじの世事せじを止めて永劫えいこくの善苗よきなえを
種えよ、今経論きやうろんを以て邪正じやせいを直す信謗しんぼうは仏説ぶつせつに任せ敢て自義じぎを存ぞんする事無ことなか
れ。

分ちて七門なと為す、一には如来にょらいの 経教きやうきやう に於て権実二教こんじつを定むることを
明あかし、二には正像末しやうざうまつの興廢こうはいを明あかし、三には 選択集せんちやくしゅう の謗法ほうぼうの縁起えんぎを明あかし、四
には謗法ほうぼうの者を対治たいじすべき証文しやうもんを出すことを明あかし、五には善知識ぜんちしき並に真実しんじつの
法あには値がたい難がたきことを明あかし、六には法華ほっけ・涅槃ねはんに依る行者ぎやうじやの用心ようじんを明あかし、七
には問したに随したがつて答したつることを明あかす。

大文だいぶんの第一だいいちに如来にょらいの 経教きやうきやう に於て権実二教こんじつを定むることを明あかすとは此これに

おい 於て四有り、一には大部の經の次第を出して流類を撰することを明し、二には諸經の浅深を明し、三には大小乗を定むることを明し、四には且らく權を捨てて實に就くべきことを明す。

第一に大部の經の次第を出して流類を撰することを明さば、問うて云く仏
・ 最初に何なる經を説きたまうや、答えて云く華嚴經なり、問うて云く其の
証如何、答えて云く六十華嚴經の離世間淨眼品に云く「是の如く我聞く一時
・ 仏・摩竭提國・寂滅道場に在つて始めて正覺を成ず」と、法華經の序品
に放光瑞の時・弥勒菩薩・十方世界の諸仏の五時の次第を見る時・
文殊師利菩薩に問うて云く、「又諸仏聖主師子の經典の微妙第一なることを
演説し給うに其の聲清淨に柔軟の音を出して諸の菩薩を教え給うこと無数
億万なることを觀る」亦方便品に仏、自ら初成道の時を説いて云く「我始め
道場に坐し樹を觀じ・亦經行す、乃至・爾の時に諸の梵王及び諸天帝釈・

護世四天王及び大自在天並に余の諸の天衆・眷属百千万・恭敬合掌し礼して我に転法輪を請ずと」此等の説は法華經に華嚴經の時を指す文なり、故に華嚴經の第一に云く毘沙門天王略月天子略日天子略釈提桓因略大梵略摩醯首羅等略已上。

涅槃經に華嚴經の時を説いて云く「既に成道し已つて梵天勸請すらく唯願わくば如来当に衆生の為に広く甘露の門を開き給うべし、乃至・梵王復言く世尊・一切衆生に凡そ三種有り所謂・利根・中根・鈍根なり利根は能く受く唯願わくば為に説き給え、仏言く梵王諦に聴け我今当に一切衆生の為に甘露の門を開くべし」亦三十三に華嚴經の時を説いて云く「十二部經・修多羅の中の微細の義を我先に已に諸の菩薩の為に説くが如し」。

此くの如き等の文は皆諸仏・世に出で給いて一切經の初めには必ず華嚴經を説き給ひし証文なり。

問うて云く無量義經に云く「初めに四諦を説き、乃至・次に方等十二部經・摩訶般若・華嚴海空を説く」此くの如き文は般若經の後に華嚴經を説くとすういいかん
相違如何、答えて云く浅深の次第なるか・或は後分の華嚴經なるか、法華經ほうべん
の方便品に一代の次第浅深を列ねて云く「余乗有ること無し若は二若は三」と此の意なり。

問うて云く華嚴經の次に何の經を説き給うや、答えて云く阿含經を説き給うなり、問うて云く何を以て之を知るや、答えて云く法華經の序品に華嚴經の次の經を説いて云く「若し人・苦に遭うて老病死を厭うには為に涅槃を説く」ほうべん
方便品に云く「即・波羅奈に趣き、乃至・五比丘の為に説く」涅槃經に華嚴經の次の經を定めて云く「即・波羅奈国に於て正法輪を轉じて中道を宣説す」これら
此等の經文は華嚴經より後に阿含經を説くなり。

問うて云く阿含經の後に何の經を説き給うや、答えて云く方等經なり、問

うて云く何を以てのを知るや、答えて云く無量義經に云く「初に四諦を説き
乃至・次に方等十二部經を説く」涅槃經に云く「修多羅より方等を出す」

問うて云く方等とは天竺の語・此には大乘と云う華嚴・般若・法華・

涅槃等は皆方等なり何ぞ独り方等部に限り方等の名を立つるや、答えて云く

實には華嚴・般若・法華等皆方等なり然りと雖も今方等部に於て別して方等

の名を立つることは私の義に非ず無量義經・涅槃經の文に顯然たり、阿含の

証果は一向小乘なり次に大乘を説く方等より已後皆大乘と云うと雖も

大乘の始なるが故に初に従つて方等部を方等と云うなり、例せば十八界の十

半は色なりと雖も初に従つて色境の名を立つるが如し。

問うて云く方等部の諸經の後に何の經を説き給うや、答えて云く般若經

なり、問うて云く何を以て之を知るや答えて云く涅槃經に云く「方等より般若

を出す」

問うて云く般若經の後には何の經を説き給うや、答えて云く無量義經なり、

問うて云く何を以て之を知るや答えて云く仁王經に云く「二十九年中」

無量義經に云く「四十余年」問うて云く無量義經には般若經の後に華嚴經を

列ね涅槃經には般若經の後に涅槃經を列ぬ、今の所立の次第は般若經の後

に無量義經を列ぬる相違如何、答えて云く涅槃經第十四の文を見るに涅槃經

已前の諸經を列ねて涅槃經に対して勝劣を論じ而も法華經を挙げず、第九

の卷に於て法華經は涅槃經より已前なりと之を定め給う、法華經の序品を見

るに無量義經は法華經の序文なり、無量義經には般若の次に華嚴經を列ぬれ

ども華嚴經を初時に遣れば般若經の後は無量義經なり。

問うて云く無量義經の後に何の經を説き給うや、答えて云く法華經を説き

給うなり、問うて云く何を以て之を知るや、答えて云く法華經の序文に云く

「諸の菩薩の為に大乘經の無量義經・菩薩法・仏所護念と名ずくるを説き

たま
給う、仏・此の経を説き已つて結跏趺坐し無量義処三昧に入る」

問うて云く法華経の後に何の経を説き給うや、答えて云く普賢経を説き給う

なり、問うて云く何を以て之を知るや、答えて云く普賢経に云く「卻て後・

三月・我当に般涅槃すべし、乃至・如来昔・耆闍崛山及び余の住处に於て

すでに広く一実の道を分別し今も此の処に於てす」

問うて云く普賢経の後に何の経を説き給うや、答えて云く涅槃経を説き給う

なり、問うて云く何を以て之を知るや、答えて云く普賢経に云く「卻て後・

三月・我当に般涅槃すべし」涅槃経三十に云く「如来何が故ぞ二月に涅槃し

給うや、亦・如来は初生・出家・成道・転法輪皆八日を以てす何ぞ仏の

涅槃独り十五日なるやと云う」と大部の経・大概是くの如し此より已外諸の

大小乗経は次第不定なり、或は阿含経より已後に華嚴経を説き法華経よ

り已後に方等・般若を説く皆義類を以て之を収めて一処に置くべし。

第二に諸經の浅深を明さば、無量義經に云く「初に四諦を説き次に方等十

二部經・摩訶般若・華嚴海空を説き菩薩の歴劫修行を宣説す」亦云く

「四十余年には未だ真実を顯わさず」又云く「無量義經は尊く過上無し」此等

の文の如くんば四十余年の諸經は無量義經に劣ること疑い無き者なり。

問うて云く密嚴經に云く「一切經の中に勝れたり」大雲經に云く「諸經

の轉輪聖王なり」金光明經に云く「諸經の中の王なり」と此等の文を見

るに諸大乘經の常の習なり何ぞ一文を瞻て無量義經は四十余年の諸經に

勝ると云うや、答えて云く教主釈尊若し諸經に於て互に勝劣を説かずん

ば・大小乗の差別・権実の不同有るべからず、若し實に差別無きに互に

差別浅深等を説かば諍論の根源・惡業・起罪の因縁なり、爾前の諸經の第一

は縁に随つて不定なり・或は小乗の諸經に對して第一と・或は報身の寿を

説くに諸經の第一なり・或は俗諦・真諦・中諦等を説くに第一なりと一切

の第一に非ず、今の無量義經の如きは四十余年の諸經に對して第一なり。

問うて云く法華經と無量義經と何れが勝れたるや、答えて云く法華經勝れ

たり、問うて云く何を以て之を知るや、答えて云く無量義經には未だ二乗作仏

と久遠実成とを明さず故に法華經に嫌われて今說の中に入るなり。

問うて云く法華經と涅槃經と何れが勝れたるや、答えて云く法華經勝る

なり、問うて云く何を以て之を知るや、答えて云く涅槃經に自ら如法華中等

と説き更無所作と云う、法華經に當説を指して難信難解と云わざるが故なり。

問うて云く涅槃經の文を見るに涅槃經已前をば皆邪見なりと云う如何、答

えて云く法華經は如来出世の本懷なる故に「今者已満足・今正是其時・

然善男子・我実成仏已来」等と説く、但し諸經の勝劣に於ては仏、自ら「我

所說經典無量千萬億」なりと挙げ了つて「已說・今說・當說」等と説く時、

多宝仏・地より涌現して皆是真実と定め分身の諸仏は舌相を梵天に付け給う

かく
是くの如く諸経と法華經との勝劣を定め了んぬ、此の外・釈迦一仏の所説
なれば先後の諸経に対して法華經の勝劣を論すべきに非ざるなり、故に
ねはんぎよう
涅槃經に諸経を嫌う中に法華經を入れず法華經は諸経に勝る由・之を
あら
顯わす故なり、但し邪見の文に至つては法華經を覺知せざる一類の人・涅槃經
を聞いて悟を得る故に迦葉童子・自身並に所引を指して涅槃經より已前を
じゃけん
邪見等と云うなり經の勝劣を論ずるには非ず。

第三に大小乗を定むることを明さば、問うて云く大小乗の差別如何、
答えて云く常途の説の如くんば阿含部の諸経は小乗なり華嚴・方等・般若
・法華・涅槃等は大乘なり、或は六界を明すは小乗・十界を明すは
だいじよう
大乘なり、其の外・法華經に対して実義を論ずる時・法華經より外の
よんじゆうねん
四十余年の諸大乘經は皆小乗にして法華經は大乘なり。

問うて云く諸宗に亘て我所拠の經を實大乘と謂い余宗所拠の經を權大乘

と云うこと常の習いなり末学に於ては是非定め難し、未だ聞知せず法華經に
對して諸大乘經を小乗と称する証文如何、答えて云く宗宗の立義互に
是非を論ず就中末法に於て世間出世に就て非を先とし是を後とす自らは非を
知らず愚者の歎くべき所なり、但し且く我等が智を以て四十余年の現文を觀る
に此の言を破する文無ければ人の是非を信用すべからざるなり、其の上・
法華經に對して諸大乘經を小乗と称することは自答を存すべきに非ず、
法華經の方便品に云く、「仏は自ら大乘に住し給えり、乃至・自ら無上道
大乘平等の法を証しき若し小乗を以て化すること乃至一人に於てせば我
即ち慳貪に墮せん、此の事は為て不可なり」此の文の意は法華經より外の諸經
を皆小乗と説けるなり、亦寿量品に云く、「小法を樂う」と此等の文は法華經
より外の四十余年の諸經を皆小乗と説けるなり、天台・妙樂の釈に於て
四十余年の諸經を小乗なりと釈すとも他師之を許すべからず故に但經文

を出すなり。

第四に且らくしほ權教ごんきょうをさしお閣じつきよういて実經じつきように就つくことを明あかさば、問いうて云いく証文しょうもん如何いかん、答こたえて云いく十じゅうの証文しょうもん有あり法華經ほけきように云いく「但ただ大乘經典だいじようきやうてんを受持じゆじすることねがつないしよきよういちげを樂がて乃至余經いの一偈いちげをも受うけはざれは涅槃經ねはんぎように云いく、了義經りようぎきように依よつて不ふ了義經りようぎきように依よらはざれ、是こ二法華經ほけきように云いく、此この經きやうは持たち難がたし若もし暫しばくも持もつ者ものは我われ即すなち歡喜かんきす諸しよ仏ぶつも亦また然しかなり是かくの如ごとき人ひとは諸しよ仏ぶつの歎ほめたもう所こなり、是すなれ則すなち勇猛ゆうもつなり是これ則すなち精進しやうじんなり是これを戒たも持ずち頭陀ずだを行なずる者なと名なく、末代まつだいに於おいて四十余年よんじゅうよねんの持戒じかい無なし、三涅槃經さんねはんぎように云いく、乘かんに緩かんなる者ものに於おいては乃すなち名なけて緩かんと為なす戒緩かいかんの者ものに於おいては名なけて緩かんと為なさず菩薩摩訶薩ぼさつまかさとつ・此だいじようの大乗だいじように於おいて心こころ懈慢けいまんせずなば是これを奉戒ぶかいと名なづく正法しやうほうを護まもらんが為ために大乘だいじようの水みづを以もつて而しかも自みら澡浴さくす是かくの故ゆゑに菩薩ぼさつ・破戒はかいを現げんずと雖いえども名なづけて緩かんと為なさず」此この文ぶんは法華經ほけきようの戒かいを流通りゆうつうする文ぶんなり是こ四法華經しほけきよう第四だいじに云いく「妙法華經みやうほけきよう・乃至ないし・皆是かいぜしんじつ真實じつじつ」の

証 明なり法華經第八普賢菩薩の誓に云く「如来の滅後に於て閻浮提の内に
広く流布せしめて断絶せざらしめん」法華經第七に云く「我が滅度の後・
後の五百歳の中に閻浮提に於て断絶せしむること無けん」釈迦如来の誓なり
法華經第四に多宝並に十方諸仏来集の意趣を説いて云く「法をして久しく
住せしめんが故に此に来至し給えり」是八法華經第七に法華經を行ずる者の
住处を説いて云く「如来の滅後に於て応に一心に受持・読・誦・解説・書写
して説の如く修行すべし所在の国土に乃至・若は経巻所住の処若は園の
中に於ても若は林の中に於ても若は樹の下に於ても若は僧坊に於ても若は
白衣の舎にても若は殿堂に在つても若は山谷曠野にても是の中に皆塔を起て
供養すべし所以は何ん当に知るべし是の処は即ち是れ道場なり諸仏此に
於て阿耨多羅三藐三菩提を得給う」是九法華經の流通たる涅槃經の第九に云く
「我涅槃の後正法未だ滅せず余の八十年・爾時に是の経閻浮提に於て当に広

く流布すべし是の時当に諸の悪比丘有るべし是の經を抄 掠して分つて多分
と作し能く正法の色香美味を滅す是の諸の悪人復是の如き經典を讀誦すと
雖も如来深密の要義を滅除して世間莊嚴の文を安置し無義の語を飾り前を抄
て後に著け後を抄て前に著け前後を中に著け中を前後に著けん当に知るべし
是の如き諸の悪比丘は是・魔の伴侶なり、乃至・譬えば牧牛女の多く水を
乳に加うるが如く諸の悪比丘も亦復是の如し雜るに世語を以てし錯りて是の
經を定む多くの衆生をして正説・正写・正取・尊重・讚歎・供養・恭敬
することを得ざらしむ是の悪比丘は利養の爲の故に是の經を広宣流布するこ
と能わず分流すべき所少く言うに足らず彼の牧牛の貧窮の女人展轉して乳を
売るに乃至糜と成して乳味無きが如し、是の 大乘經典・大涅槃經も亦復
是の如く展轉薄淡にして気味有ること無し気味無しと雖も猶余經に勝る是れ
一千倍なること彼の乳味の諸の苦味に於て千倍勝る

とな 為すが如し何を以ての故に是の大乗經典・大涅槃經は声聞の經に於て
さいじょうしゆな 最上首為り」是十。

問うて云く不了義經を捨てて了義經に就くとは、大円覚修多羅了義經・
だいぶつちやうによらいみついいんしゅうしやうりやうぎきやうかく こと しゃだいいじやうきやう みなりやうぎきやう えやう
大仏頂如来密因修証了義經是の如き諸大乘經は皆了義經なり依用と
な べ 為す可きや、答えて云く了義・不了義は所対に随つて不同なり二乗・菩薩等
しよせつ ふりやうぎ いちだい ぶつせつみなりやうぎ ぶつせつ おい しやうじやうきやう
の所説の不了義に対すれば一代の仏説皆了義なり仏説に就て小乗經は
ふりやうぎ だいじやうきやう りやうぎ だいじやう おい よんじゆうねん しよきやう ふりやうぎきやう
不了義・大乘經は了義なり大乘に就て又四十余年の諸經は不了義經・
ほつけ ねはん だいにちきやう りやうぎきやう しか えんかく だいぶつちやう しよきやう
法華・涅槃・大日經等は了義經なり而るに円覺・大仏頂等の諸經は
しやうじやうおも りやうじやうぎきやう ふりやうぎきやう けききやう こと りやうぎ
小乗及び歴劫修行の不了義經に対すれば了義經なり法華經の如き了義
は非ざるなり。

問うて云く華嚴・法相・三論等の天台・真言より已外の諸宗の高祖・各
そ えびやう きやうぎやう よ そ きやうぎやう じんぎ きわ おも こ しか
其の依憑の經經に依つて其の經經の深義を極めたりと欲えり是れ爾る

可^べしや如何^{いかに}、答^{こた}えて云^いく華嚴宗^{けこんしゅう}の如^{ごと}きは華嚴經^{けこんきやう}に依^よつて諸經^{しよきやう}を判^けじて華嚴經^{けこんきやう}の方便^{ほうべん}と為^なすなり、法相宗^{ほうそうしゅう}の如^{ごと}きは阿含^{あこん}・般若等^{はんんにや}を卑^{いや}しめ華嚴^{けこん}・法華^{ほつけ}・涅槃^{ねはん}もつじんみつを以^{もつ}て深密經^{しんみつ}に同じ同じく中道教^{ちゅうだうしやう}と立つると雖^{いえど}も亦^{また}法華^{ほつけ}・涅槃^{ねはん}は一類^{いちるい}の一乗^{いっしやう}を説^{ゆえ}くが故^{ゆゑ}に不^ふ了義經^{りやうぎきやう}なり深密經^{しんみつ}には五性各別^{かくべつ}を論^{ろん}ずるが故^{ゆゑ}に了義經^{りやうぎきやう}と立つるなり、三論宗^{さんろんしゅう}の如^{ごと}きは二藏^{にざう}を立てて一代^{いちだい}を撰^{せん}し大乘^{だいじやう}に於^{おい}て淺深^{せんじん}を論^{ろん}ぜずしか^{しか}はんにやきやうもつえびやうな^な、此等^{これら}の諸宗^{しよしゅう}の高祖^{かうそ}・多分^{たぶん}は四依^{しえ}の菩薩^{ぼさつ}なるか定^{じやう}めて所存^{しよぞん}有^あらん是^ぜ非^ひに及^{およ}ばず。

然^{しか}りと雖^{いえど}も自身^{じしん}の疑^{うたがい}を晴^{はら}らさんが為^{ため}に且^{しば}らく人師^{にんし}の異解^{いげ}を闇^{さしお}いて諸宗^{しよしゅう}の依憑^{えびやう}の経經^{きやうきやう}を開^{ひら}き見るに華嚴經^{けこんきやう}は旧訳^{くやく}は五十^ご・六十^{ろく}・新訳^{しんやく}は八十^{はち}・四十^し・其^その中に法華^{ほつけ}・涅槃^{ねはん}の如^{ごと}く一代^{いちだい}聖教^{しやうきやう}を集^{あつ}めて方便^{ほうべん}と為^なすの文^{ぶん}無し、四乗^{ししやう}を説^いくと雖^{いえど}も其^その中^{ちゅう}の仏乘^{ぶつじやう}に於^{おい}て十界互具^{じゅうかいこく}・久遠実成^{くおんじつじやう}を説^いかず但^{ただ}し人師^{にんし}に於^{おい}ては五教^{しきやう}を立てて先^{しよきやう}の四教^{しよきやう}に諸經^{しよきやう}を収^{おさ}めて華嚴經^{けこんきやう}の方便^{ほうべん}と為^なす、法相宗^{ほうそうしゅう}

の如きは三時教を立つる時・法華等を以て深密經に同ずと雖も深密經五卷を開き見るに全く法華等を以て中道の内に入れず。

三論宗の如きは二藏を立つる時・菩薩藏に於て華嚴・法華等を収め般若經に同ずと雖も新古の般若經を開き見るに全く般若を以て法華・涅槃に同ずるの文無し華嚴は頓教・法華は漸教等とは人師の意樂にして仏説に非ざるなり。

法華經の如きは序分・無量義經に慥に四十余年の年限を挙げ華嚴・方等・般若等の大部の諸經の題名を呼んで未顯真實と定め正宗の法華經に至つて一代の勝劣を定むる時・我が所説の經典・無量千萬億・已説・今説・當説の金言を吐いて、而も其の中に於て此の法華經は最も難信難解なりと説き給ふ時・多宝仏・地より湧出し妙法蓮華經皆是真實と証誠し分身の諸仏・十方より悉く一処に集つて舌を梵天に付け給ふ。

今・此の義を以て余推察を加うるに唐土・日本に渡れる所の五千・七千余
巻の諸經・以外の天竺・竜宮・四王・天・過去の七仏等の諸經並に阿難の
未結集の經・十方世界の塵に同ずる諸經の勝劣・浅深・難易・掌中に
在り無量千万億の中に豈釈迦如来の所説の諸經を漏らす可けんや已説・今説
・当説の年限に入らざる諸經之れ有るべきや願わくば末代の諸人且らく
諸宗の高祖の弱文無義を閣きて釈迦・多宝・十方諸仏の強文有義を信ず
べし、何に況や諸宗の末学・偏執を先と為し末代の愚者人師を本と為して
經論を抛つ者に依憑すべきや、故に法華の流通たる雙林最後の涅槃經に仏・
迦葉童子菩薩に遺言して言く「法に依つて人に依らざれ義に依つて語に依ら
ざれ智に依つて識に依らざれ了義經に依つて不了義經に依らざれ」と云云。
予世間を見聞するに自宗の人師を以て三昧発得智慧第一と称すれども無徳
の凡夫として実經に依つて法門を信ぜしめず不了義の觀經等を以て時機

相^{そう}心^{おう}の教^{きやう}と称^{しょう}し了^{りやう}義^ぎの法^ほ華^け・涅槃^{ねはん}を闇^{さし}いて譏^ぎつて理^り深^{じん}解^げ微^みの失^{とが}を付^{つけ}け如^に来^{らい}の
遺^{ゆい}言^{ごん}に背^{そむ}いて「人^{ひと}に依^よつて法^ほに依^よらざれ・語^{ことば}に依^よつて義^ぎに依^よらざれ・識^しに
依^よつて智^ちに依^よらざれ・不^ふ了^{りやう}義^ぎ經^{きやう}に依^よつて了^{りやう}義^ぎ經^{きやう}に依^よらざれ」と談^{だん}ずるに非^{あら}ず
や、請^こい願^{こころあ}わくば心^{しん}有^{いう}らん人^{ひと}は思^し惟^{ゆい}を加^くえよ如^に来^{らい}の入^に滅^{めつ}は既^{すで}に二^に千^に二^に百^に余^にの
星^{せい}霜^{そう}を送^もれり文^{もん}殊^{じゆ}・迦^か葉^{しょう}・阿^あ難^{なん}・經^{けつ}を結^{けつ}集^{じゆう}して已^い後^ご・四^し依^えの菩^ぼ薩^{さつ}重^{かさ}ねて出^し世^せ
し論^{ろん}を造^{つく}り經^{きやう}の意^いを申^{まを}ぶ末^{まつ}の論^{ろん}師^しに至^{いた}つて漸^{よう}く誤^{あや}り出^し来^{まつ}す亦^{また}訳^{やく}者^{しや}に於^{おい}ても
梵^{ぼん}漢^{かん}未^み達^{だつ}の者^{もの}・權^{けん}教^{きやう}宿^{しゆく}習^{じやく}の人^{ひと}有^あつて実^{じつ}の經^{きやう}論^{ろん}の義^ぎを曲^{まが}げて權^{けん}の經^{きやう}論^{ろん}の義^ぎ
を存^{ぞん}せり、之^{これ}に就^おて亦^{また}唐^{たう}土^どの人^{ひと}師^し・過^か去^この權^{けん}教^{きやう}の宿^{しゆく}習^{じやく}の故^{ゆゑ}に權^{けん}の經^{きやう}論^{ろん}心^{しん}
に叶^{かな}う間^{かん}・実^{じつ}經^{きやう}の義^ぎを用^{もち}いず・或^{ある}は少^{はく}し白^{はく}義^ぎに違^{ちが}つ文^{ぶん}有^あれば理^りを曲^{まが}げて会^え通^{つう}
を構^もえ以^{もつ}て自^じ身^{しん}の義^ぎに叶^{かな}わしむ、設^{たと}い後^ごに道^{どう}理^りと念^{おも}つと雖^{いえど}も・或^{ある}は名^み利^りに
依^より・或^{ある}は檀^{だん}那^なの歸^き依^えに依^よつて權^{けん}宗^{しゆう}を捨^{すて}て実^{じつ}宗^{しゆう}に入^いらず、世^せ間^{けん}の道^{どう}俗^{そく}亦^{また}
無^む智^ちの故^{ゆゑ}に理^り非^ひを弁^わえず但^た・人^{ひと}に依^よつて法^ほに依^よらず設^{たと}い惡^{あく}法^{ほう}たりと雖^{いえど}も多^た人^{にん}

の邪義じやぎに随したがつて一人の実説じつせつに依よらず、而しかるに衆生しゆじやうの機き多くは流転るてんに随したがつて設たといい出離しゆつりを求むとも亦また多分たぶん

は権教ごんきやうに依よる、但恨うちむらくは惡業あくいふの身・善に付け惡に付け生死しやうじを離がたれ難がたきのみ、然しかりと雖いえども今の世の一切いつさいの凡夫ぼんぷ設たといひ今生こんじやうを損いへどすと雖いえども上に出いだす所の涅槃ねはん經第九の文に依よつて且しばらく法華・涅槃を信ねはんぜよ其の故そのゆゑは世間の浅事せんじすら展転てんでん多き時は虚は多く實は少し況いわんやぶつぽうの深義じんぎに於おいてをや、如來にやらいの滅後めつご二千年の間・仏法ぶつぽうに邪義じやぎを副そえ來り万に一にも正義せいぎ無なきか一代いちだいの聖教しやうきやう多分たぶんは誤あやまり有あるか、所以ゆゑんに心地觀經しんじかんきやうの法爾無漏ほうにむろの種子しゆし・正法華經ほけきやうの属累ぞくるゐの經末きやうまつ・婆沙論ばしやろんの一十六字・撰論じやうろんの識しの八九・法華論ほつけろんと妙法華經みやうほけきやうとの相違そくい・涅槃論ねはんの法華煩惱ほつけぼんのう所汚ほうそうしゆうの文法相宗じやうしやうむしやうの定性じやうぶつ無性じやうろんの不成ほけきやう・撰論じやうろんの法華經ほけきやうの一稱南無なむの別時意趣べつじいしゆ・此等これらは皆訳者人師みなやくしやにんしの誤あやまりなり、此の外またよんじゆうよねんに亦四十余年きやうぎやうの經經きやうぎやうに於おいて多あやまくの誤あり有あるか設たといひ法華・涅槃ねはんに於おいて誤あやまり有あるも誤あやまり無あやまり

よんじゅうねん 四十余年の諸経しよきようを捨てて法華ほっけ・涅槃ねはんに随したがう可べし其その証しやう・上うへに出い了わんぬ況いや
あやま あ 誤り有る諸経しよきように於おいて信心しんじんを致いたす者しやうじ・生死しやうじを離るべきや。

大文の第二に正像末に就しやうざうまつて仏法の興廢有こうはいあることを明すとは、之に就おいて二有
り、一には爾前四十余年の内の諸経にぜんよんじゅうねんと浄土しよきようの三部經じようどと末法まつぽうに於おいて久住くじゅう・
ふくじゅう 不久住を明す、二には法華ほっけ・涅槃ねはんと浄土じようどの三部經さんぶきよう並に諸経しよきようとの久住くじゅう・不久住
を明す。

第一に爾前四十余年の内の諸経だいいち にぜんよんじゅうねんと浄土しよきようの三部經じようどと末法まつぽうに於おいて久住くじゅう・不久住ふくじゅう
を明すとは、問いうて云いく如來にょらいの教法だいしやうは大小せんじん・浅深しやうせん・勝劣しやうれつを論ろんぜず但ただ時機じきに
依よつて之これを行なせば定さだめて利益有りやくあるべきなり、然しかるに賢劫けんごう・大術だいじゆつ・大集等だいしつの
諸経しよきようを見るに仏滅後ぶつめつ・二千余年いこ已後ぶつぽうみなは仏法皆滅ぶつぽうみなして但ただ・教のみ有あつて行証ぎやうしやう
有るべからず、随したがつて伝でん教大師ぎやうだいしの末法灯明記まつぽうとうみやうきを開ひらくに我延曆二十年えんりやく辛巳かのとみ一
千七百五十歳えんりやく（一説なり）延曆二十年より已後亦四百五十余歳なり既に末法に

入れり、たといきようほう設たい教法い有りと雖も、い行証えい無ぶけん、然るに於てはぶ仏法ぶつを行おずる者・
万が一も得道とくどう有り難がたきか、然るにし雙觀經そうかんきやうの「とうらい当来とうらいの世・きやうだうめつじん經道滅尽きやうだうめつじんせんに我
じひあいかん慈悲哀愍もつひとを以て特とくり此の經を留とどめ止住とせんこと百歳ももならん其れ衆生しゆじやうの斯の經
に値あうこと有らん者は意しやがの所願しに随したがつて皆得道みなとくどうす可べし」等の文を見るに釈迦しやか
如来にらい一代いちだいの聖教しやうきやう皆滅尽みなめつじんの後・唯特ただひとり雙觀教そうかんきやうの念仏ねんぶつのみを留とどめて衆生しゆじやうを利
益やくす可べしと見みえ了あんぬ。

此の意趣いしゆに依よつて粗淨土家ほぼじやうどの諸師しよしの釈かんを勸かづるに其の意無そきに非あらず、道綽どうしゆく
禪師ぜんは「ごんまつぼつ当今末法ごんまつぼつは是れ五濁惡世ごじよくあくせなり唯淨土ただじやうどの一門ひとのみ通入とすべき路みちなり」
と書かし、善導ぜんどう和尚わじやうは「さんぼう万年に三寶滅さんぼうして此の經のみ住すること百年ひゃくねんなり」と
宣のたまへ、慈恩大師じおんだいしは「まつぼつ末法万年まつぼつに余經よきやうにんぎた悉みく滅みし弥陀みだの一教いちぎやう利物偏りもつひとえに増まさん」と
定さだめ、日本にほんの叡山えいざんの先德せんとく慧心えしん僧都そうずは一代いちだい聖教しやうきやうの要文ようぶんを集あめて末代まつだいの指南しなん
を教おしゆる往生おうじやうしやう要集ようしゆの序いに云いく「そ夫れ往生おうじやうしやう極樂きらくの教行きやうぎやうは濁世じよく末代まつだいの目足めそくな

り道俗貴賤誰か歸せざる者あらん但し顯密の教法は其の文一に非ず事理の
業因其の行惟れ多し利智精進の人は未だ難しと為す予が如き頑魯の者豈敢て
せんや乃至・次下に云く「就中念仏の数は多く末代經道滅尽の後の濁惡
の衆生を利する計りなり」と、總じて諸宗の学者も此の旨を存す可し殊に
天台一宗の学者誰か此の義に背く可けんや如何、答えて云く爾前四十余年の
經經は各時機に随つて而も興廢有るが故に多分は淨土の三部經より已前に
滅尽有る可きか、諸經に於ては多く三乘現身の得道を説く故に末代に於て
は現身得道の者之少きなり十方の往生淨土は多くは末代の機に蒙らしむ、
之に就て西方極樂は娑婆隣近なるが故に最下の淨土なるが故に日輪東に出で
西に没するが故に諸經に多く之を勧む、随つて淨土の祖師のみ独り此の義を
勧むるのみに非ず天台・妙樂等も亦爾前の經に依るの日は且らく此の筋あ
り、亦独り人師のみに非ず竜樹・天親も此の意有り、是れ一義なり、亦仁王經

等の如きは浄土の三部經より尚久く末法万年の後・八千年住す可しとなり、
故に爾前の諸經に於ては一定すべからず。

第二に法華・涅槃と浄土の三部經との久住・不久住とを明さば、問うて
云く法華・涅槃と浄土の三部經と何れが先に滅すべきや、答えて云く法華・
涅槃より已前に浄土の三部經は滅す可きなり、問うて云く何を以て之を知る
や、答えて云く無量義經に四十余年の大部の諸經を挙げ了つて未顕眞実と云
う故に雙觀經等の「特り此の經を留む」の言は皆・方便なり虚妄なり、華嚴
・方等・般若・觀經等の速疾歴劫の往生成仏は無量義經の実義を以て
之を檢うるに無量無辺不可思議阿僧祇劫を過ぐれども終に無上菩提を成ずる
ことを得ず、乃至・險き逕を行くに留難多きが故にと云う經なり、往生
成仏俱に別時意趣なり、大集・雙觀經等の住滅の先後は皆隨宜の一説なり、
法華經に來らざる已前は彼の外道の説に同じ、譬えば江河の大海に趣かず民臣

の大王だいおうに随したがわざるが如ごとし、身を苦しめ行を作すとも法華ほっけ・涅槃ねはんに至いたらずんば
いちぶんりやくなくの利益りやくなく無く有因無果ゆういんむかの外道げどうなり、在世滅後ざいせめつごと俱ともに教有しゅうそつて人無なくく・行有なつ
て証無しよきなり諸木しよは枯からると雖いえども松柏しやうはくは萎しほまず衆草しゅうそうは散しると雖いえども鞠竹かわらけは変
ぜず法華經ほけきようも亦復またまたかく是ごとくの如ごとし釈尊しゃくそんの三說さんせつ・多宝たほうの証しやうみやう明しよぶつ・諸仏ぜつそうの舌相ひとえ偏ひとえに
りようほうくじゅう
令法久住りようほうくじゅうに在あるが故ゆゑなり。

問いうて云いく諸經滅尽しよきようめつじんの後特ひとり法華經ほけきようのみ留とどる可べき証文しやうもん如何いかに、答こたえて云いく
法華經ほけきようの法師品ほうしほんに釈尊しゃくそん自みづから流通りつどうせしめて云いく「我が所說しよせつの經典きやうてん無量千萬億むりやうせんまん
すでととまさ
已いに説とき今説いまき當あたに説とかん而しかも其その中に於おいて此この法華經ほけきよう最もも為なれ難信難解なんしんなんげな
り」と云云、文の意いちだいは一代五十年いこんとうの已い今當いまの三說さんせつに於おいて最第一さいだいいちの經きやうなり、
はちまんしやうきよう
八万聖教はちまんしやうきようの中に殊ことに未來みらいに留とどめんと欲として説とき給たまえるなり、故ゆゑに次の品しんに
たほうによらい
多宝如來たほうにょらいは地ゆじゆつより涌出ふんじんし分身しよぶつの諸佛じゆつぽうは十方じつぱうより一處いつしよに來集らいじゆつし釈迦如來しゃかにょらいは
しよぶつ おんつかい
諸佛しよぶつを御使おんつかいとして八方な・四百万億那由他せかいの世界じゆうまんに充滿ほさつせる菩薩にじよう・二乘にじよう・

にんてん

はちぶ

たほうによらい

じゅつぽう

しよぶつ

ゆじゅつらいじゅう

いしゅ

ひとえ

人天・八部等を責めて多宝如来並に十方の諸仏・涌出来集の意趣は偏に
りようほうくじゅう

令法久住の為なり、各三説の諸經滅尽の後・慥に未来五濁難信の世界に於て
しよきようめつじん

ひろ

せいこん

しよきようめつじん

たしかみらいこじよくなんしん

せかい

おい

おひ

おひ

此の經を弘めんとの誓言を立てよと云える時に二万の菩薩・八十万億那由陀
ほさつ

せいじよう

いわ

しんみよう

わし

むじようとう

おし

せかい

せかい

せかい

せかい

の菩薩・各誓状を立てて云く「我身命を愛せず但無上道を惜む」と、千世界
みじん

ぼさつ

もんじゅ

みな

いわ

われら

めつこ

おい

ないし

まさ

な

な

な

の微塵の菩薩・文殊等皆誓つて云く「我等・仏の滅後に於て、乃至・当に広
ぼさつ

もんじゅ

みな

いわ

われら

めつこ

おい

ないし

まさ

な

な

な

な

く此の經を説くべし」と云云、其の後・仏十喩を挙げ給う、其の第一の喩は
せんるこつか

もつ

よんじゅうよねん

しよきよう

たと

ほけきよう

もつ

たいかい

そ

だいいち

たとえ

た

た

川流江河を以て四十余年の諸經に譬え法華經を以て大海に誓う、末代濁惡
むざんむき

むざんむき

し

しみ

せんるこつか

か

い

い

えど

ほけきよう

たいかい

たいかい

たいかい

の無慚無愧の大早・の時・四味の川流江河は渴ると雖も法華經の大海は減少
むざんむき

むざんむき

し

しみ

せんるこつか

か

い

い

えど

ほけきよう

たいかい

たいかい

たいかい

せず等と説き了つて、次下に正しく説いて云く「我滅度の後・後の五百歳の
と

と

おわ

つぎしも

まさ

い

い

めつこ

めつこ

このごひやくさい

このごひやくさい

このごひやくさい

このごひやくさい

中に広宣流布し閻浮提に於て断絶せしむること無けん」と定め了んぬ。
こうせんるふ

えんぶだい

おい

だんぜつ

めつこ

めつこ

めつこ

めつこ

めつこ

めつこ

めつこ

めつこ

めつこ

倩文の次第を案ずるに我滅度後の次の後の字は四十余年の諸經滅尽の後
しだい

めつこ

めつこ

めつこ

めつこ

めつこ

めつこ

めつこ

めつこ

めつこ

めつこ

めつこ

めつこ

の後の字なり、故に法華經の流通たる涅槃經に云く「応に無上の佛法を以て
ゆえ

ほけきよう

るつう

ねはんぎよう

い

い

い

い

い

い

い

い

い

諸の菩薩に付すべし諸の菩薩は善能く問答するを以てなり是くの如き法宝は
則ち久住することを得・無量千世にも増益熾盛にして衆生を利安すべし」已
上此の如き等の文は法華・涅槃は無量百歳にも絶ゆ可からざる經なり、此の
義を知らざる世間の学者・大集権門の五五百歳の文を以て此の經に同じ浄土
の三部經より已前に滅尽す可しと存ずる立義は一經の先後起尽を忘れたるな
り。

問うて云く上に挙ぐる所の曇鸞・道綽・善導・慧心等の諸師は皆法華・
真言等の諸經に於て末代不相応の釈を作る之に依つて源空並に所化の弟子・
法華・真言等を以て雜行と立て難行道と疎み、行者をば群賊・惡衆・惡見
の人等と罵り、或は祖父が履に類しの語・或は絃歌等にも劣ると云うの語
其の意趣を尋ぬれば偏に時機不相応の義を存するが故なり、此等の人師の釈
をば如何に之を会すべきや、答えて云く釈迦如来一代五十年の説教・一仏の

金言に於て権実二教を分ち権經を捨てて実經に入らしむる仏語顯然たり、
此に於て若但讚仏乘・衆生没在苦の道理を恐れ且らく四十二年の権經を
説くと雖も若以小乗化・乃至於一人・我則墮慳貪の失を脱れんが為に入
大乘為本の義を存し本意を遂げ法華經を説き給う。

然るに涅槃經に至つて我滅度せば必ず四依を出して権実二教を弘通せしめ
んと約束し了んぬ、故に竜樹菩薩は如来の滅後八百年に出世して十住
毘婆沙等の権論を造りて華嚴・方等・般若等の意を宣べ大論を造りて若法華
の差別を分ち、天親菩薩は如来の滅後九百年に出世して俱舍論を造りて
小乗の意を宣べ唯識論を造りて方等部の意を宣べ最後に仏性論を造りて
法華・涅槃の意を宣べ了教不了教を分ちて敢て仏の遺言に違わず、末の
論師並に訳者の時に至つては一向に権經に執するが故に実經を会して権經
に入れ権実雜亂の失・出来せり、亦人師の時に至つては各依憑の經を以て本

と為すが故に余経を以て権経と為す是より弥仏意に背く。

而るに浄土の三師に於ては鸞・綽の二師は十住毘婆沙論に依つて難易・

聖浄の二道を立つ若し本論に違して法華真言等を以て難易の内に入れば信用

に及ばじ、随つて浄土論註並に安樂集を見るに多分は本論の意に違わず、

善導和尚は亦浄土の三部経に依つて弥陀称名等の一行一願の往生を立つる

時・梁・陳・隋・唐の四代の撰論師総じて一代聖教を以て別時意趣と定

む、善導和尚の存念に違するが故に撰論師を破する時・彼の人を群賊等に誓

う順次生の功德を賊するが故に其の所行を難行と称することは必ず万行

を以て往生の素懷を遂ぐる故に此の人を責むる時に千中無一と嫌えり、是の

故に善導和尚も雑行の言の中に敢えて法華・真言等を入れず。

日本国の源信僧都は亦叡山第十八代の座主・慈慧大師の御弟子なり多くの

書を造れることは皆法華を弘めんが為なり、而るに往生要集を造る意は

爾前四十余年の諸經に於て往生・成仏の二義有り成仏の難行に對して
往生易行の義を存し往生の業の中に於て菩提心觀念の念仏を以て最上と
爲す、故に大文第十の問答料簡の中・第七の諸行勝劣門に於ては念仏を
以て最勝と爲し次下に爾前最勝の念仏を以て法華經の一念信解の功德に對
して勝劣を判ずる時・一念信解の功德は念仏三昧より勝るる百千万倍なり
と定め給えり、當に知るべし往生要集の意は爾前最上の念仏を以て法華
最下の功德に對して人をして法華經に入らしめんが爲に造る所の書なり、
故に往生要集の後に一乘要決を造つて自身の内証を述ぶる時・法華經を
以て本意と爲すなり。

而るに源空並に所化の衆・此の義を知らざるが故に法華・真言を以て三師
並に源信所破の難聖雜並に往生要集の序の顯密の中に入れて三師並に源信
を法華・真言の謗法の人と爲す、其の上・日本國の一切の道俗を化して法華

・真言しんごんに於おいて時機じき不相ふそう応おうの旨むねを習ならわしめ在家ざいけ・出家しゅつけの諸人しよにんに於おいて法華ほつけ・真言しんごんの結縁けちえんを留とどむ豈あに仏しるの記たまし給たまう所の「惡世あくせ中びくじやちしんてんごく比丘邪智びくじやちしんてんごく心諂曲しんてんごく」の人あらに非あらずや、
亦則またすなわち一切世間の仏種いっさいせけん ぶつしゆを断とがずの失まぬらを免べる可べけんや。

其の上その・山門さんもん・寺門じもん・東寺とうじ・天台並てんだいに日本国中にほんこくじゅうに法華ほつけ・真言しんごんを習ならう諸人しよにんを

群賊ぐんぞく・惡衆あくしゅう・惡見あつけんの人等ひととうに誓ひとううる源空げんくうが重罪じゅうざい何れの劫いづれにか其その苦果くかを経き尽きようじん

す可べきや、法華經ほけきようの法師品ほうししほんに持經者じきようを罵のしる罪つみを説いわいて云いく「若もし惡人あくにん有あつて

不善ふぜんの心こころを以もつて一劫いつこくの中に於おいて現げんに仏前ぶつぜんに於おいて常じょうに仏ぶつを毀罵きめせん其その罪つみなお尚なほ

輕かるし若もし人ひと・一つひとつの惡言あくげんを以もつて在家ざいけ・出家しゅつけの法華經ほけきようを讀誦どくじゆする者ものを毀きせん

其その罪つみ甚はなはだだ重おもし」經文きやうもん一人ひとりの持者じしやを罵のしる罪つみすら尚なほ是こゝくの如ごとし況いはんやや書しよを造つくり

日本国にほんこくの諸人しよにんに罵のしらしむる罪つみをや、何いかに況いはんやや此こゝの經きやうもんを千中せんちゆう無む一いつと定さだめて法華經ほけきよう

を行おこなうる人ひとに疑うたがいを生おこぜしむる罪つみをや、何いかに況いはんやや此こゝの經きやうもんを捨すてて觀經等かんきやうとうの

權經ごんきやうに遷うつちらしむる謗法ほうぼうの罪つみをや、願ねがわくば一切いっさいの源空げんくうが所化しよけの四衆ししゆう頓とんに

せんちやくしゅう 選択集の邪法を捨てて忽に法華經に遷り今度阿鼻の災を脱れよ。

問うて云く正しく源空が法華經を誹謗する証文如何、答えて云く法華經の

第二に云く「若し人信ぜずして斯の經を毀謗せば則一切世間の仏種を断ぜん」

經文 不信の相貌は人をして法華經を捨てしむればなり、故に天親菩薩の

仏性論の第一に此の文を釈して云く「若し大乘に憎背する者・此は是れ

一闡提の因なり衆生をして此の法を捨てしむるを為の故に」論文謗法の相貌

は此の法を捨てしむるが故なり、選択集は人をして法華經を捨てしむる書

に非ずや閣拋の二字は仏性論の憎背の二字に非ずや、亦法華經誹謗の相貌

は四十余年の諸經の如く小善成仏を以て別時意趣と定むる等なり。

故に天台の釈に云く「若し小善成仏を信ぜずんば則世間の仏種を断ずる

なり」妙樂重ねて此の義を宣べて云く「此の經は遍く六道の仏種を開す若し

此の經を謗せば義・断に当るなり」釈迦・多宝・十方の諸仏・天親・天台・

みょうらく 妙樂の意の如くんば源空は謗法の者なり所詮選択集の意は人をして法華・
しんこん 真言を捨てしめんと定めて書き了んぬ謗法の義疑い無き者なり。

大文の第三に選択集謗法の縁起を出さば、問うて云く何れの証拠を以て

げんくう 源空を謗法の者と称するや、答えて云く選択集の現文を見るに一代聖教

を以て二つに分つ一には聖道・難行・難行・二には浄土・易行・正行な

り、其の中に聖・難・雑と云うは華嚴・阿含・方等・般若・法華・涅槃・

大日経等なり浄・易・正とは浄土の三部経の称名念佛等なり取意聖・難・

雑の失を判ずるには末代の凡夫之を行ぜば百の時に希に一二を得・千の時に

希に三五を得ん・或は千が中に一も無し・或は群賊・惡衆・邪見・惡見・

邪雑の人等と定むるなり、浄・易・正の得を判ずるには末代の凡夫之を行ぜ

ば十は即十生し百は即百生せん等なり謗法の邪義是なり。

問うて云く一代聖教を聖道・浄土・難行・易行・正行・雑行と分ち

其の中に難・聖・雜を以て時機不相応と称すること源空一人の新義に非ず
曇鸞・道綽・善導の三師の義なり、此亦此等の大師の私の案に非ず其の源
は竜樹菩薩の十住毘婆沙論より出でたり、若し源空を謗法の者と称せば
竜樹菩薩並に三師を謗法の者と称するに非ずや、答えて云く竜樹菩薩並に
三師の意は法華已前の四十余年の経經に於て難易等の義を存す、而るに源空
より已来竜樹並に三師の難行等の語を借りて法華・真言等を以て難・雜等
の内に入れぬ、所化の弟子・師の失を知らずして此の邪義を以て正義と存じ
此の国に流布せしむるが故に国中の万民悉く法華・真言に於て時機不相応の
想を作す、其の上世間を貧る天台・真言の学者世の情に随わんが為に法華・
真言に於て時機不相応の悪言を吐いて選択集の邪義を扶け、一旦の欲心に
依つて釈迦・多宝並に十方諸仏の御評定の「令法久住・於閻浮提広宣流布」
の誠言を壊り一切衆生をして三世十方の諸仏の舌を切る罪を得せしむ、

二門を分つと雖も我私に法華・真言等の実大・密大を以て四十余年の権大乘
に同じて聖道門と称す「準之思之」の四字是なり、此の意に依るが故に亦曇鸞
の難易の二道を引く時亦私に法華・真言を以て難行道の中に入れ善導和尚の
正雜二行を分つ時も亦私に法華・真言を以て雜行の内に入る総じて
選択集の十六段に亘つて無量の謗法を作す根源は偏に此の四字より起る
誤れるかな畏しきかな。

爰に源空の門弟・師の邪義を救つて云く諸宗の常の習い設い經論の証文
無しと雖も義類の同じきを聚めて一処に置く而も選択集の意は法華・真言
等を集めて雜行の内に入れ正行に対して之を捨つ偏に經の法体を嫌うに
非ず但風勢無き末代の衆生を常没の凡夫と定め此の機に易行の法を撰ぶ時
・称名の念仏を以て其の機に当て易行の法を以て諸教に勝ると立つ権実
浅深の勝劣を詮ずるに非ず、雜行と云うも嫌つて雜と云うに非ず雜と云う

は不純ふじゆんを雜そと云もろもろきようろんう其の上諸しよしの經論並に諸師しよしも此の意無あらきに非ゆえず故えいざんに叡山えいざんの先德せんとくの往生おうじようようしゆう要集ひとえの意偏こに是の義こなり。

所以ゆえんに往生おうじようようしゆう要集ついでの序いに云けんみつく「顯密きようぼうの教法そは其の文あら一じりに非ごういんず事理じりの業因ごういん

其その行こ惟りちれ多し利智りち精進しやうじんの人いまは未がただ難せしと為ごとず予が如きき頑魯がんろの者あに豈あえて敢てせん

や是かくの故ゆえに念仏ねんぶつの一門よに依よる」と云よ云よ、此えしんせんの序ほつの意けは慧心えしん先德せんも法華ほつ・真言しんごん

等さを破あらするに非ひとえず但偏われに我等が頑魯らんろの者あらの機きに當あつて法華ほつ・真言しんごんは聞かき難かく行か

じ難がきが故ゆえに我身がしん鈍根どんこんなるが故あらなり敢あえてて法体ほつたいを嫌きらうに非あらず、其その上序ねんぶつより

已い外げ正宗しやうしゆうに至いたるまで十門じゆもん有あり大文だいぶん第八だいぱちの門もんに述いべて云いく「今念仏ねんぶつを勸すすむる

ことこ是しれ余あの種しゆじゆ種の妙行めうぎやうを遮しやするに非あらず只是ただこれ男女なんよ・貴賤きせん・行住ぎやうじゆう坐臥ざがを簡えらば

ず時处じしよしよえん諸縁しよえんを論これぜず之しゆを修しゆするに難なんからず乃ない至し・臨終りんじゆうには往生おうじようを願がん求ぐする

に其その便宣びんせんを得ねんぶつること念仏しには如しかず」已上これら此等これらの文げんくうを見るせんに源空げんくうの選せん択ちやく集しゆ

と源信げんしんの往生おうじようようしゆう要集いと一卷ふどう・三卷いの不同い有えいどりと雖いち代いちだい聖教しやうきやうの中いには易行いぎやう

を撰まんで末代まつだいの愚人ぐにんを救すくわんと欲ほする意趣いしゆは但ただ同じ事ことなり、源空上人げんくうしやうにん・法華ほつけ

・真言しんごんを難行なんぎやうと立てて惡道あくどうに墮だせば慧心先徳えしんせんとくも亦また此この失しつを免まぬるべからず

如何いかん、答こたえて云いく汝なんじ・師しの謗法ほうぼうの失しつを救すくわんが為ために事ことを源信げんしんの往生おうじやう要集ようしゅうに

寄よせて謗法ほうぼうの上に弥いよいよ重罪じゆうざいを招まねく者ものなり其そのの故ゆえは釈迦しやくかに如来にらい五十年ごじゅうねんの説教せつきやうに

總くわじて先さき四十二年しじゅうにねんの意いを無量義經むりやうぎきやうに定さだめて云いく、險けん逕ぎやうを行いくるに留難るなん多おほき

故ゆえに」と無量義經むりやうぎきやうの已後いごを定さだめて云いく、大直道だいきどうを行いくるに留難るなん無なきが故ゆえに」と

仏みづか、自ら難易なんい・勝劣しょうれつの二道にどうを分わちたまえり、仏ぶつより外等覺とうかく已下まつだい末代まつだいの凡師ぼんしに

至いたるまで自義じぎを以もつて難易なんいの二道にどうを分わち此この義ぎに背そむく者ものは外道魔王げどうまおうの説せつに同じ

きか、随したがつて四依しえの居士じゆじ・竜樹菩薩りゅうじゆぼさつの十住じゅうじゆ毘婆沙論びばしゃろんには法華ほつけ已前いぜんに於おいて

難易なんいの二道にどうを分わち取あて四十余年あえてよんじゅうよねん已後いごの經きやうに於おいて難行なんぎやうの義ぎを存ぞんぜず、其その上

若もし修しゆうし易やすきを以もつて易行いぎやうと定さだめば法華經ほつけきやうの五十展轉ごじじゆてんでんの行ぎやうは称名念仏しょうみょうねんぶつより行

じ易やすきこと百千万億倍せんまんなり、若もし亦勝またを以もつて易行いぎやうと定さだめば分別功德品ぶんべつくどくに爾前にぜん

はらみつ

念仏三昧

難易・勝劣と云い行浅功深

難行なんぎょうの中の極難行なんぎょう

少れつ

其の上悪人・愚人を扶くこと亦教の浅深に依る阿含十二年の戒門

華嚴・方等・般若雙觀經等の諸經

す
と
雖も
猶戒門

二乗・無性の闡提に於て誠勸

ほうぼう
之謗法の者を撰するのみ

豈觀經
あにかんきよう

にじょう
の二乗は但

法華・涅槃等に限れり、四十余年の經に依る人師は彼の經の機と取る此の人は未だ教相を知らざる故なり。

但し往生要集は一往序分を見る時は法華・真言等を以て顯密の内に入れ
て殆ど末代の機に叶わずと書すと雖も文に入つて委細に一部三卷の始末を見
るに、第十の問答料簡の下に正しく諸行の勝劣を定むる時・觀仏三昧・
般舟三昧・十住毘婆沙論・寶積・大集等の爾前の經論を引いて一切の
万行に対して念仏三昧を以て王三昧と立て了んぬ、最後に一つの問答有り
にぜん ぜんじょう ねんぶつさんまい もつ ほけきょう いちねんしんげ
爾前の禪定・念仏三昧を以て法華經の一念信解に對するに百千万億倍劣ると
定む、復問を通ずる時念仏三昧を万行に勝ると云うは爾前の当分なりと云
云、当に知るべし慧心の意は往生要集を造つて末代の愚機を調べて法華經
に入れんが為なり、例せば仏の四十余年の經を以て権機を調え法華經に入れ
給うが如し。

ゆえ さいご いちじょうようけつ
故に最後に一乗要決を造る其の序に云く「諸宗の権實は古来の諍いなり
とも きょうろん よつ ぜ ひ しめう
俱に經論に拠て互いに是非を執す、余・皆・方便の歳冬十月病中に歎いて
いわ ぶつぽう いえど ぶつじ りよう も つい むなしゆ こうかいなん
云く仏法に遇つと雖も仏意を了せず若し終に手を空うせば後悔何ぞ追わん、
ここ きょうろん もんぎ けんてつ しょうじよ ある ある みすか ししやく
爰に經論の文義・賢哲の章疏・或は人をして尋ねしめ・或は自ら思忖し全
く じしゆ たしゆう へんとう もつば ごんちじつち しんおう つい いちじよう
自宗・他宗の偏党を捨つる時・専ら権智実智の深奥を深ぐるに終に一乗は
しんじつ ほんじつ ほうべん すで ごんじよう もつ
真實の理・五乗は方便の説を得る者なり、既に今生の蒙を開く何ぞ夕死の
うらみ ひとえ えしん ほんい あらわ じしゆうたしゆう へんとう
恨を残さんや」已上此の序の意は偏に慧心の本意を顯すなり、自宗他宗の偏党
を捨つるの時浄土の法門を捨てざらんや一乗は真實の理と得る時専ら法華經
に依るに非ずや、源信僧都は永觀二年甲申の冬十一月往生要集を造り寛弘
ひのえうま いちじょうようけつ つくそ ちゅうげん
二年丙午の冬十月の比・一乗要決を作る其の中間二十余年なり權を先にし
實を後にする宛も仏の如く亦竜樹・天親・天台等の如し、汝往生要集を
たより ほうほう とが ほう ほう そ ぎるい ぎるい
便りとして師の謗法の失を救わんと欲すれども敢えて其の義類に似ず義類の

同じきを以て一処に聚むとならば何等の義類同なるや、華嚴經の如きは二乘
界を隔つるが故に十界互具無し方等・般若の諸經は亦十界互具を許さず
觀經等の往生極樂も亦方便の往生なり成仏往生俱に法華經の如き往生
に非ず皆別時意趣の往生成仏なり。

其の上源信僧都の意は四威儀に行じ易き故に念仏を以て易行と云い四威儀

に行じ難きが故に法華を以て難行と称せば天台・妙樂の釈を破する人なり

所以に妙樂大師の末代の鈍者無智の者等の法華經を行ずるに普賢菩薩並に

多宝・十方の諸仏を見奉るを易行と定めて云く「散心に法華を誦し禪三昧に

入らず坐立行・一心に法華の文字を念ぜよ」已上此の釈の意趣は末代の愚者

を撰せんが為なり散心とは定心に対する語なり誦法華とは八卷・一卷・一

字・一句一偈・題目一心一念隨喜の者五十展轉等なり坐立行とは四威儀を

嫌わざるなり一心とは定の一心に非ず理の一心に非ず散心の中の一心なり念

ほつけもんじ
法華文字とは此の経は諸經の文字に似ず一字を誦すと雖も八万宝蔵の文字を
いっさいしよぶつ
含み一切諸仏の功德を納むるなり天台大師玄義の八に云く「手に巻を執らざ
れども常に是の経を読み口に言声・無けれどもく衆典を誦し仏・説法せざ
れども恒に梵音を聞き心に思惟せざれども普く法界を照す」已上此の文の意は
ほけきよう
手に法華經一部八巻を執らざれども是の経を信ずる人は昼夜十二時の持經者
なり口に読經の声を出さざれども法華經を信ずる者は日日・時時・念念に
いっさいきよう
一切經を読む者なり。

いづつめつ
仏の入滅は既に二千余年を経たり然りと雖も法華經を信ずる者の許に仏の
おんじよう
音声を留めて時時・刻刻・念念に我死せざる由を聞かしむ心に一念三千を觀
ぜざれどもく十方法界を照す者なり此等の徳は偏に法華經を行ずる者に
そな
備わるなり、是の故に法華經を信ずる者は設い臨終の時・心に仏を念ぜず口
じゆ
に經を誦せず道場に入らざれども心無くして法界を照し音無くして一切經
どうじよう

を誦し卷軸を取らずして法華經八卷を拳る徳之有り是れ豈權教の念仏者の
臨終正念を期して・十念の念仏を唱えんと欲する者に・百千万倍勝るる
易行に非ずや、故に天台大師文句の十に云く「都て諸教に勝るるが故に隨喜
功德品と云う」妙樂大師の法華經は諸經より淺機を取る而るを人師此の義
を弁えざる故に法華經の機を深く取る事を破して云く「恐らくは人謬つて解
する者初心の功德の大なることを測らずして
功を上位に推り此の初心を蔑る故に今彼の行は淺く功は深きことを示して
以て經力を顯す」已上以顯經力の釈の意趣は法華經は觀經等の權經に勝れ
たるが故に行は淺く功は深し淺機を摂むる故なり、若し慧心の先徳・法華經
を以て念仏より難行と定め愚者頑魯の者を摂せずと云わば恐らくは逆路
伽耶陀の罪を招かざらんや、恐人謬解の内に入らざらんや。

総じて天台・妙樂の三大部の本末の意には華經は諸經に漏れたる愚者・

悪人・女人・常没闡提等を撰し給う他師・仏意を覚らざる故に法華經を
諸經に同じ・或は地住の機を取り・或は凡夫に於ても別時意趣の義を存す、
此等の邪義を破して人天四惡を以て法華經の機と定む、種類相對を以て過去
の善惡を收む人天に生ずる人豈過去の五戒・十善無からんや等と定め了ん
ぬ、若し慧心此の義に背かば豈天台宗を知れる人ならんや、而るを源空深く
此の義に迷うが故に往生要集に於て僻見を起し自ら失ち他をも誤る者
なり、適宿善有つて実教に入りながら一切衆生を化して權教に還らし
め剩え実教を破せしむ豈惡師に非ずや、彼の久遠下種・大通結縁の者の
如き五百・三千の塵劫を経るが如きは法華の大教を捨てて爾前の權小に遷る
が故に後に權經を捨てて六道を回りぬ不輕輕毀の衆は千劫阿鼻地獄に墮つ、
權師を信じ実經を弘むる者に誹謗を作したるが故なり。

而るに源空我が身唯実經を捨てて權經に入るのみに非ず人を勧めて実經

を捨ててごんきよう権經ごんきんに入らしめ亦また権人ごんじんをして実經じつきように入らしめず 剩あまつさええ実經じつきようの行者ぎようじやを罵ののしるるの罪つみえい永劫いつくにも浮なんび難なんからんか。

問いわうて云いく十住じゅうじゅう毘婆沙論びばしやろんは一代いちだいの通論つうろんなり難易なんいの二道にどうの内に何なんぞ法華ほつけ・

真言しんごん・涅槃ねはんを入れざるや、答いえて云いく一代いちだいの諸大乘しよだいじようきよう經おに於けて華嚴經けごんきようの如ごとき

は初頓しよとん後分ごぶん有り初頓しよとんの華嚴けごんは二乘にじようの成じよう・不成ふじようを論わぜず方等部ほうとうぶの諸經しよきようには一向いっこう

に二乘にじよう・無性むしよう闡提せんたいの成じよう仏ぶつを斥きはんん般若部はんの諸經しよきようも之これに同じおなじ總しよじて四十余年よんじゅうよねんの

諸大乘しよだいじようきよう經きの意いは法華ほつ・涅槃ねはん・大日經だい等の如ごとくには二乘にじよう・無性むしようの成じよう仏ぶつを

許ゆるさず、此等これらを以もつて之これを・うるに爾前にぜん・法華ほつの相違そういは水火すいかの如ごとし滅後めつこの論師ろんし

・竜樹りゅうじゆ・天親てんじんも亦また俱ともに千部せんの論師ろんしなり所造しよぞうの論ろんに通別つうべつの二論に有あり通論つうろんに於おて

も亦また二有ふたり四十余年よんじゅうよねんの通論つうろんと一代いちだい五十年ごじゅうねんの通論つうろんとなり、其その差別さべつを分わかつに

決定性けつじようの二乘にじよう・無性むしよう闡提せんたいの成じよう・不成ふじようを以もつて論ろんの權實ごんじつを定さだむるなり、而しかるに

大論だいろんは竜樹りゅうじゆ菩薩ぼさつの造ぞう・羅什らし三藏じゆさんざうの訳やくなり此このの論ろんにも亦また二乘にじよう作さ作さ仏ぶつを許ゆるさず之これを

もつ
以て知んぬ法華已前の諸大乘經の意を申べたる論なることを。

問うて云く十住毘婆沙論の何処に二乗作仏を許さざるの文出でたるや、

答えて云く十住毘婆沙論の第五に云く「若し声聞地及び辟支仏地に墮する

是を菩薩の死と名く則ち一切の利を失す若し地獄に墮すとも是の如き畏れを

生ぜじ若し二乗地に墮すれば則ち大怖畏と為す地獄の中に墮すとも畢竟して

仏に至ることを得・若し二乗地に墮すれば畢竟して仏道を遮す」已上此の文

二乗作仏を許さず宛も淨名等の「於仏法中以如敗種」の文の如し。

問うて云く大論は般若經に依つて二乗作仏を許さず法華經に依つて二乗

作仏を許すの文如何、答えて云く大論の一百に云く「問うて云く更に何の法

か甚深にして般若に勝れたる者あれば而も般若を以て阿難に屬累し余經を

以て菩薩に屬累するや、答えて云く般若波羅蜜は秘密の法に非ず而るに法華

等の諸經は阿羅漢の受決作仏を説く所以に大菩薩能く受けて持用す譬えば大

やくし 薬師の能く毒を以て薬と為すが如し」と、亦九十三に云く「阿羅漢の成仏は
ろんぎ るんし 論義者の知る所に非ず唯仏のみ能く了し給う」已上此等の文を以て之を思う
ろんし るんじつ こんじつ こんじつ こんじつ こんじつ こんじつ こんじつ こんじつ こんじつ こんじつ
に論師の権実は宛も仏の権実の如し而るを権経に依る人師猥りに法華等を
もっ かんきよう こんせつ ほっけ ねはん じようどさんぶきよう
以て觀經等の権説に同じ法華・涅槃等の義を仮りて淨土三部經の徳と作し
けつじよう にじよう むしろう せんだい じようぼつ おうじよう ゆる こんじつぞうらん とがまぬか がた
決定性の二乗・無性の闡提・常没の往生を許す権實雜亂の失脱れ難し、例
げてん じゆしや ないてん めす げてん かざ こと ほうぼつ とがまぬか がた
せば外典の儒者・内典を賊みて外典を莊るが如し謗法の失免れ難きか仏、
みずか こんじつ たま そ けつじよう にじよう むしろう じよう・ふじようこれ
自ら権實を分ち給う其の詮を探るに決定性の二乗・無性有情の成・不成是な
り、而るに此の義を弁えざる訳者・爾前の經経を訳する時・二乗の作仏・
むしろう じようぶつ ゆる やくしや にぜん きようじよう けつじよう にじよう さぶつ むしろう
無性の成仏を許す此の義を知る訳者は爾前の經を訳する時・二乗の作仏無性
じようぶつ ゆる よ ぶつ さい にんし またにぜん さい けつじよう
の成仏を許さず、之に依つて仏意を覺らざる人師も亦爾前の經に於て決定
むしろう じようぶつ ほっけ にぜん なる ある にぜん
性・無性の成仏を明すと見て法華と爾前と同じき思いを作し・或は爾前の經
おい けつじよう むしろう きら 此の義を以て了義經と為し法華・涅槃を
に於て決定無性を嫌う文を見・此の義を以て了義經と為し法華・涅槃を

もつふりようぎようなぶついでつごんじつまいこれらあやま
以て不了義經と為す共に仏意を覓らず権実二經に迷えり、此等の誤りを出さ
げんくうあらてんじくろんしやくしやもろこしにんしいた
ば但源空一人に限るのみに非ず天竺の論師並に訳者より唐土の人師に至るま
そ
で其の義有り、所謂地論師・撰論師の一代の別時意趣・善導・懷感の法華經
の
一称南無仏の別時意趣・此等は皆権実を弁えざるが故に出来る所の誤り
なり、論を造る菩薩・經を訳する三蔵・三昧發得の人師猶以て是くの如し況
まつだいほんしおい
や末代の凡師に於てをや。

問うて云く汝末学の身として何ぞ論師並に訳者人師を破するや、答えて
いわなんじまつかくなんろんしやくしやにんしは
云く敢えて此の難を致すこと勿れ撰論師並に善導等の釈は権実二教を弁えず
みだりほけきようもつべつじいしゆゆえてんだいみょうらくすいかな
して猥りに法華經を以て別時意趣と立つ故に天台・妙樂の釈と水火を作す間
しばにんしそういさしおきようろんぜひかんが
・且らく人師の相違を閣いて經論に付て是非をうる時・権実の二教は仏説
より出でたり天親・竜樹重ねて之を定む、此の義に順ずる人師をば且らく
これあおにんししばこれもちあえてじぎもつぜひ
之を仰ぎ此の義に順ぜざる人師をば且らく之を用いず敢て自義を以て是非を

定むるに非ず但相違を出す計りなり。

大文の第四に謗法の者を対治すべき証文を出さば、此れに二有り、一には
ぶつぼう もつ こくおう だいじん ししゅう ふぞく
仏法を以て国王・大臣並に四衆に付属することを明し、二には正しく謗法の
おおち お たいじ べ しようもん
人・王地に処るをば対治す可き証文を明す、第一に仏法を以て国王・大臣並
ししゅう ふぞく
に四衆に付属することを明さば、仁王經に云く、仏・波斯匿王に告わく、乃至
こ ゆえ もろもろこくおう ふぞく びく びくに きよじんによ ふぞく
・是の故に諸の国王に付属して比丘・比丘尼・清信男・清信女に付属せず何
もつ ゆえ いりよく
を以ての故に王の威力無きが故に、乃至・此の經の三宝をば諸の国王・四部
でし ふぞく だいしつきよう
の弟子に付属す、已上大集經二十八に云く、若し国王有つて我が法の滅せん
ことを見て捨てて擁護せずんば無量世に於て施戒慧を修すとも悉く皆滅失し
その くに ぶしよう ないし みようじゅう だいじこく
其の国に三種の不祥の事を出さん、乃至・命終して大地獄に生ぜん、已上
にんのうきよう
仁王經の文の如くならば仏法を以て先ず国王に付属し次に四衆に及ぼす王
位に居る君・国を治むる臣は仏法を以て先と為し国を治む可きなり、大集經

の文の如くならば王臣等・仏道の為に無量劫の間・頭目等の施を施し八万の
戒行を持ち無量の仏法を学ぶと雖も国に流布する所の法の邪正を直さざれば
国中に大風・旱・大雨の三災起りて万民を逃脱せしめ王臣定めて三惡に
墮せん、又雙林最後の涅槃經の第三に云く、「今正法を以て諸王・大臣・宰相
・比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷に付属す、乃至・法を護らざる者をば禿居士
と名く」又云く「善男子・正法を護持せん者は五戒を受けず威儀を修せずし
て心に刀劍・弓箭・鉞槊を持つべし」又云く「五戒を受けざれども正法を
護るを為て乃ち大乘と名く正法を護る者は心に刀劍・器械を執持すべし」
云云四十余年の内にも梵網等の戒の如くならば国王・大臣の諸人等も一切
刀杖・弓箭・矛斧鬪戰の具を畜つることを得ず、若し此を畜つる者は定め
て現身に国王の位・比丘・比丘尼の位を失い後生は三惡道の中に墮つ可しと
定め了んぬ。

而るに今の世は道俗を扱はず弓・箭・刀・杖を帶せり梵網經の文の如くなら
ば必ず三惡道に墮せんこと疑無き者なり、涅槃經の文無くんば如何にして
か之を救はん亦涅槃經の先後の文の如くならば弓・箭・刀・杖を帶して惡法の
比丘を治し正法の比丘を守護せん者は先世の四重五逆を滅して必ず無上道を
証せんと定め給う。

亦金光明經の第六に云く「若し人有つて其の國土に於て此の經有りとい
えども未だ嘗て流布せず捨離の心を生じ聽聞せんことを樂わず亦供養し尊重
し讚歎せず四部の衆の持經の人を見て亦復尊重し乃至供養すること能わず、
遂に我等及び余の眷屬・無量の諸天をして此の甚深の妙法を聞くことを得ざ
らしめん甘露の味に背き正法の流れを失い威光及び勢力有ること無く
惡趣を増長し人天を損減し生死の河に墜ちて涅槃の路に乖かん世尊・我等
四王並に諸の眷屬及び葉叉等斯くの如き事を見て其の國土を捨てて擁護の

心無からん但我等のみ是の王を捨棄するに非ず亦無量の国土を守護する諸大
善神有らんも皆悉く捨去せん既に捨離し已りなば其の国当に種種の災禍有つ
て国位を喪失すべし一切の人衆皆善心無けん唯繫縛殺害瞋諍のみ有つて
互に相讒諂し枉げて辜無きに及ばん、疫病流行し彗星数数出で兩日並び
現じ薄蝕恒無く黒白の二虹不祥の相を表わし星流れ地動き井の内に声を發
し暴雨惡風時節に依らず常に飢饉に遭いて苗実も成らず多く他方の怨賊有つ
て国内を侵掠し人民諸の苦悩を受け土地所樂の処有る事無けん」已上。

此の經文を見るに世間の安穩を祈るとも而も国に三災起らば惡法流布する
故なりと知る可し而るに当世は随分国土の安穩を祈ると雖も去る正嘉元年に
は大地・大に動じ同二年に大雨大風苗実を失えり定めて国を喪うの惡法此の
国に有るかと勘うるなり、選択集の・或る段に云く「第一に読誦雜行とは
上の觀經等の往生淨土の經を除いて已外・大小・顯密の諸經に於て受持

・読・誦する悉く読誦雜行と名く」と書き了つて次に書いて云く「次に二行
とくしつ
の得失を判ぜば法華・真言等の雜行は失・淨土の三部經は得なり」次下に
ぜんどうわじょう
善導和尚の往生礼讃の十即十生・百即百生・千中無一の文を書き載せ
て云く「私に云く此の文を見るに弥よ雜を捨てて專を修すべし豈百即百生
いわ ひそか いわ
の專修 正行 を捨てて堅く千中無一の雜修 雜行を執せんや行者能く之を
せんしゅうじょうぎよう
思量せよ」已上、此等の文を見るに世間の道俗豈諸經を信ず可けんや、次下
しりよう
に亦書して法華經等の雜行と念仏の正行と勝劣難易を定めて云く「一に
また ほけきよう ぞうぎよう ねんぶつ しやうれつ ない
は勝劣の義・二には難易の義なり初に勝劣の義とは念仏は是れ勝・余行は
しょうれつ
是れ劣なり次に難易の義とは念仏は修し易く諸行は修し難し」と、亦次下
こ
に法華・真言等の失を定めて云く「故に知んぬ諸行は機に非ず時を失う念仏
ほっけ しんごん とが いわ ゆえ
往生のみ機に当り時を得たり」亦次下に法華・真言等の雜行の門を閉じて
おうじょう
云く「随他の前には暫らく定散の門を開くと雖も随自の後には還つて定散
いわ ずいた
云く「随他の前には暫らく定散の門を開くと雖も随自の後には還つて定散
じようさん

の門を閉ずひとたび一度開て以後いご永く閉じざるは唯ただ・是れ念仏ねんぶつの一門なり」已上最後さいご
の述懐じゅっかいに云く「夫れ速すみやかに生死しじふを離れんと欲せば二種の勝法しょうぼうの中に且しばらく
しようどうもん さしお
聖道門じょうどうもんを閣さしおいて撰せんんで浄土門じょうどもんに入れ浄土門じょうどもんに入らんと欲せば正雜しょうざう二行の中
しは もるもろぞうぎよう なげう まさ しょうぎよう
に且しばらく諸もろの雜行ぞうぎようを抛なげうつて撰せんんで応まさに正行しょうぎように歸すべし」已上門弟もんでい此の書を
伝えて日本にほん六十余州じゅうまんに充滿するが故に門人もんじん・世間無智せけんむちの者に語かたつて云く
「上人しょうにんは智慧第一ちえ だいいちの身と為もつて此の書つくを造り真実しんじつの義と定め法華ほっけ・真言しんごんの門を
閉じて後に開くなくの文なげう無く抛なげうつて後に還かえりて取るの文無し」等と立つる間世間せけんの
どうぞく 二つへ
道俗どうぞく一同いつぱに頭こを傾け其の義そを訪う者には仮字かなじを以て選択もつ せんちやくの意を宣べ・或は
ほうねんしょうにん ものがたり する ほうけ ほんごん おい なん ある こそ
法然上人ほうねんしょうにんの物語ものがたりを書しるす間ま・法華ほうけ・真言しんごんに於て難なんを付けて・或は去年ある ことの曆こぞ・
そふ くつ たと ある ほうけきよう かんげん かく こと あくしよ くにじゅう
祖父そふの履くつに譬たとえ・或は法華經ほうけきようを読むは管絃かんげんより劣ると是かくくの如ごとき惡書あくしよ・國中くにじゅう
に充滿じゅうまんするが故ゆえに法華ほうけ・真言しんごん等国いえどに在りと雖も聴聞ちやうもんせんことを樂ねがわわず偶たま々また
行ずる人有りと雖も尊重いえど そんちようを生ぜず一向念仏いっこうねんぶつ者ほけきよう・法華經けちえんの結縁なを作すをば

往生おうじょうの障さわりと成ると云う故ゆえに捨離しゃりの意を生ず、此ゆえの故ゆえに諸天しよてん・妙法みょうほうを聞くこ
とを得ずほうみ法味なを嘗めざれば威光いこう勢力せりよく有ること無ししてんのう四天王けんぞく並に眷属けんぞく・此の国を
捨て日本にほん国守護こくしゆごの善神ぜんじん捨離しゃりし已るが故ゆえに、正嘉元年しよがかんねんに大地だいち大に震おおいい同二年に
春の大雨だいう苗を失うしない夏の大旱かんばつに草木そうもくを枯からし秋の大風たいふうに菓実かじつを失うしない飢渴けかち忽たちまちに起
りて万民ばんみんを逃脫とうだつせしむること金光明經こんこうみょうきやうの文ことの如ごとし豈あに選せん集ぢやくしゆうの失とがに非あらずや、
仏語ぶつご虚むなしからざる故ゆえに惡法あくほうの流布るふ有すり既に国こくに三災さんさい起れり而しかも此あくぎの惡義あくぎを
対治たいじせずんば仏しよせつの所說しよせつの三惡さんあくを脱べがる可べけんや、而しかるに近年きんねんより予しんみやう「我身命しんみやう
を愛むじやうせず但無上道むじやうだうを惜おしむ」の文みを瞻せんる間せつせんじやうたい・雪山常啼せつせんじやうたいの心こしやうを起おこし命いのちを大乘だいじやうの
流布るふに替いえ強言きやうげんを吐いいて云いく選せん集ぢやくしゆうを信おじて後世ごしやうを願のぞわん人ひとは無間地獄むげんじごくに
墮おつ可べしと、爾時そのときに法然上人ほうねんしやうにんの門弟もんてい選せん集ぢやくしゆうに於おて上いに出いす所あの惡義あくぎを隱かくし
・或あるは諸行往生しよぎやうおうじやうを立て・或あるは選せん集ぢやくしゆうに於おて法華ほつけ・真言しんこんを破やぶらざる由よしを
稱しょうし、・或あるは在俗ざいぞくに於おて選せん集ぢやくしゆうの邪義じゃぎを知らしめざる為ために妄語もうごを構かまえて云いく

にちれん ねんぶつ かな
日蓮は念仏を称うる人は三惡道に墮せんと云つと。

問うて云く法然上人の門弟・諸行往生を立つるに失有りや否や、答えて

云く法然上人の門弟と称し諸行往生を立つるは逆路伽耶陀の者なり当世も

またしよぶようおうじよう

亦諸行往生の義を立つ而も内心には一向に念仏往生の義を存し外には

しよぶようふぼう よし

諸行不謗の由を聞かしむるなり、抑此の義を立つる者は選択集の法華・

しんこん おい とが

真言等に於て失を付け捨閑閣抛・群賊邪見・惡見・邪・雜人・千中無一等の

ことば

語を見ざるや否や。

第二に正しく謗法人の王地に処るを対治す可き証文を出さば、涅槃經第三

に云く「懈怠にして戒を破し正法を毀る者をば王者・大臣・四部の衆心に

くじ せそん ぜんなんし こ

苦治すべし善男子是の諸の國王及び四部の衆は當に罪有るべきや不や・不な

り・世尊・善男子是の諸の國王及び四部の衆は尚、罪有ること無し」と、又

第十二に云く「我往昔を念うに閻浮提に於て大國の王と作り名を仙予と曰い

えんぶだい

第十二に云く「我往昔を念うに閻浮提に於て大國の王と作り名を仙予と曰い

き大乗經典だいじょうきょうてんを愛念あいねんし敬重けいじゆうし其その心純善じゆんぜんにして麁惡嫉妬慳そあくしつとおしま・有あること無なかりき、乃至善男子我爾なにしぜんなんしの時に於おいて心に大乘だいじょうを重おもんず婆羅門ばらもんの方等ほうとうを誹謗ひぼうするを聞き・聞おわき已おつて即時そくじに其その命根みょうこんを断きちき善男子是ぜんなんしこの因縁いんねんを以もつて是より已來地獄このかたじごくに墮だせず」已上。

問いうて云いく梵網經ぼんもうきようの文を見るに比丘等びくの四衆ししゆうを誹謗ひぼうするは波羅夷罪はらいざいなりしかげんくうに源空げんくうが謗法の失ほうぼうを顕とがわすは豈阿鼻あにあびの業あに非あらずや、答いえて曰いく涅槃經ねはんきようの文いに云いく「迦葉菩薩かしょうぼさつ・世尊せそんに言もつさく如来何にょらいいかんが故まさぞ彼当あに阿鼻地獄あびじごくに墮だすべしと記しするや、善男子ぜんなんし・善星比丘ぜんしやうびくは多く眷属けんぞく有みなり皆善星みなぜんしやうは是これ阿羅漢あらかんなり是れ道果どうかを得おつと謂おもえり我あ・彼あくじやが惡邪やぶの心ほを壞やぶらんと欲ほするが故ゆえに彼ぜんしやうの善星ぜんしやうは放逸ほういつを以もつての故ゆえに地獄じごくに墮だせりと記しす」已上此の文ほういつに放逸ほういつとは謗法ほうぼうの名なり源空げんくうも亦また彼の善星ぜんしやうの如ごとく謗法ほうぼうを以もつての故ゆえに無間むげんに墮だすべし所化しよけの衆じやう此ぎの邪義じやぎを知らざるが故ゆえに源空げんくうを以もつて一切智人いっさいと号あし・或あるは勢至菩薩せいしほさつ・或あるは善導ぜんどうの

化身なりと云う彼が悪邪の心を壊らんが為の故に謗法の根源を顕わす梵網經
の説は謗法の者の外の四衆なり仏誡めて云く「謗法の人を見て其の失を顕わ
さざれば仏弟子に非ず」と、故に涅槃經に云く「我涅槃の後其の方面に随い持戒
比丘有つて威儀具足し正法を護持せば法を壊ぶる者を見て即ち能く驅遣し
呵責し徴治せよ当に知るべし是人は福を得んこと無量にして称計す可から
ず」亦云く「若し善比丘あつて法を壊る者を見て呵責し驅遣し挙処せずんば
当に知るべし是の人は仏法の中の怨なり若し能く驅遣し呵責し挙処せば是我
弟子真の声聞なり」已上。

予仏弟子の一分に入らんが為に此の書を造り謗法の失を顕わし世間に流布
す願わくば十方の仏陀此の書に於て力を副え大惡法の流布を止め一切衆生
の謗法を救わしめたまえ。

大文の第五に善知識並に眞實の法に値い難きことを明さば之に付いて三有

り、一には受け難き人身値い難き仏法なることを明し、二には受け難き人身を受け値い難き仏法に値うと雖も悪知識に値うが故に三悪道に墮するを明し、三には正く末代凡夫の爲の善知識を明す。

第一に受け難き人身値い難き仏法なることを明さば、涅槃經三十三に云く

「爾の時に世尊・地の少土を取つて之を爪上に置き迦葉に告げて言く、是の

土多きや十方世界の地土多きや、迦葉菩薩・仏に白して言く、世尊・爪上

の土は十方所有の土に比べず善男子・人有り身を捨てて還つて人身を得・

三悪の身を捨てて人身を受くることを得・諸根完く具して中国に生れ正信

を具足して能く道を修習し道を修習し已つて能く正道を修し正道を修

し已つて能く解脱を得・解脱を得已つて能く涅槃に入るは爪上の土の如く、

人身を捨て已つて三悪の身を得・三悪の身を捨てて三悪の身を得・諸根具せ

ずして辺地に生じ邪倒の信を信じ邪道を修習し解脱常樂の涅槃を得ざるは

十方界じゅうぽうかいの所有しやうの地土ちどの如ごとし」已上經文此の文は多く法門ほうもんを集めて一具と為せり人身じんしん
を捨てて還かえつて人身じんしんを受くるは爪上そうじやうの土の如ごとし人身じんしんを捨てて三惡道さんあくどうに墮おちるは
十方じゅうぽうの土の如ごとし三惡さんあくの身みを捨てて人身じんしんを受くるは爪上そうじやうの土の如ごとく三惡さんあくの身
を捨てて三惡さんあくの身みを得るは十方じゅうぽうの土の如ごとし人身じんしんを受くるは十方じゅうぽうの土の如ごとく
人身じんしんを受けて六根ろくこん欠かけざるは爪上そうじやうの土の如ごとし人身じんしんを受けて六根ろくこんを欠かけざれど
も辺地へんちに生なずるは十方じゅうぽうの土の如ごとく中国ちゆうごくに生なずるは爪上そうじやうの土の如ごとく中国ちゆうごくに
生なずるは十方じゅうぽうの土の如ごとく仏法ぶつぽうに値あうは爪上そうじやうの土の如ごとく、又云いわく「一闍提いつせんたいと
作さらず善根ぜんこんを断たんぜず是かくの如ごとき等の涅槃ねはんの經典きやうてんを信しんずるは爪上そうじやうの土の如ごとく
乃至ないし・一闍提いつせんたいと作りて諸もろもろの善根ぜんこんを断たんじ是この經を信しんぜざる者は十方界じゅうぽうかい所有しやうの
地土ちどの如ごとし」已上經文此の文の如ごとくんば法華ほつけ・涅槃ねはんを信しんぜずして一闍提いつせんたいと作るは
十方じゅうぽうの土の如ごとく法華ほつけ・涅槃ねはんを信しんずるは爪上そうじやうの土の如ごとく・此の經文きやうもんを見て
いよいよかんるい
弥や感かん涙なみ押おえ難がたし今いま・日本国にほんこくの諸人しよにんを見聞けんもんするに多分たぶんは權教ごんきやうを行なず設たい身口しんく

は実教を行ずと雖も心には亦權教を存ず。

故に天台大師摩訶止觀の五に云く、「其の癡鈍なる者は毒氣深く入つて本心

を失う故に既に其れ信ぜざれば則ち手に入らず、乃至・大罪聚の人なり、乃至

・設い世を厭う者も下劣の乗を翫び枝葉に攀付し狗・作務に狎れ猴を

敬うて帝釈と為し瓦礫を崇んで是れ明珠なりとす此黒闇の人豈道を論ず

可けんや」已上、源空並に所化の衆深く三毒の酒に酔うて大通結縁の本心を

失う法華・涅槃に於て不信の思を作し一闡提と作り觀經等の下劣の乗に依て

方便称名の瓦礫を翫び法然房の猴を敬うて智慧第一の帝釈と思ひ法華

・涅槃の如意珠を捨てて如来の聖教を徧するは權実二教を弁えざるが故な

り。

故に弘決の第一に云く、「此の円頓を聞いて崇重せざる者は良に近代大乘

を習う者の雜濫に由るが故なり」大乘に於て權実二經を弁えざるを雜濫と云

うなり、故に末代に於て法華經を信ずる者は爪上の土の如く法華經を信ぜず

して權教に墮落する者は十方の微塵の如し、故に妙樂歎いて云く「像末は

情澆く信心寡薄にして円頓の教・法蔵に溢れ函に満れども暫くも思惟せず

便ち瞑目に至る徒に生じ徒に死す一に何ぞ痛しきや」已上此の釈は偏に妙樂

大師・權者たるの間・遠く日本国の当代を鑒みて記し置く所の未來記なり。

問うて云く法然上人の門弟の内にも一切經蔵を安置し法華經を行ずる者

有り何ぞ皆謗法の者と称せんや、答えて云く一切經を開き見て法華經を読み

難行道の由を称し選択集の惡義を扶けんが為なり經論を開くに付て弥

謗法を増すこと例せば善星の十二部經・提婆達多が六万蔵の如し智者の由を

称するは自身を重くし惡法を扶けんが為なり。

第二に受け難き人身を受け値い難き仏法に値うと雖も惡知識に値うが故に

三惡道に墮することを明さば仏藏經に云く「大莊嚴仏の滅後に五比丘あり一

人は正道を知つて多億の人を度し四人は邪見に住す此四人命終の後阿鼻
地獄に墮つ仰ぎ伏し伏に臥し左脇に臥し右脇に臥すこと各九百万億歳なり、
乃至・若し在家・出家の此の人に親近せしもの並に諸の檀越凡そ六百四万億
の人あり此の四師と俱に生じ俱に死して大地獄に在つて諸の燒煮を受く大劫
若し尽くれば是の四悪人及び六百四万億の人・此の阿鼻地獄より他方の
大地獄の中に転生す已上涅槃經三十三に云く爾時に城中に一の尼乾有
名を苦得と曰う、乃至・善星・苦得に問う答えて曰く我食吐鬼の身を得・
善星諦に聴け、乃至・爾の時に善星即ち我所に還つて是の如き言を作す世尊
・苦得尼乾は命終の後に三十三天に生ぜんと、乃至・爾時に如来即ち迦葉
と善星の所に往き給う善星比丘遙に我来るを見・見已つて即ち悪邪の心を
生ず悪心を以ての故に生身に陥ち入つて阿鼻地獄に墮す已上善星比丘は
仏の菩薩たりし時の子なり仏に随い奉り出家して十二部經を受け欲界の煩惱

を壊りやぶ四禪定ぜんじょうを獲得かくとくせり然りと雖もいえど悪知識あくちしきたる苦得外道くとくげどうに値あい仏法ぶつぽうの正義せいぎを信ぜざる

に依よつて出家しゅつけの受戒じゅかい・十二部經くどくの功德うしなを失しい生身しょうしんに阿鼻地獄あびじごくに墮だす苦岸等くがんの四比丘びくに親近しんこんせし六百四万億どろくせんちやくしゅうの人は四師しと俱ともに十方じゅうつぱうの大阿鼻地獄あびじごくを経るなり、今の世どうぞくの道俗せんちやくしゅうは選択集とつとを責ゆえぶが故げんくうに源空えいぞうの影像はいを拜はいして一切經難行いっさいきょうなんぎょうの邪義じゃぎを読む例せば尼乾にけんの所化しよけの弟子でしが尼乾にけんの遺骨いこつを礼さんして三惡道さんあくどうに墮だせしが如ごとく願くわんわくば今の世どうぞくの道俗せんちやくしゅう選択集とつとの邪正じゃせいを知しつて後に供養恭敬くようきやうけいを致いたせ爾しからずんば定めて後悔こうかい有あらん。

故ゆえに涅槃經ねはんぎょうに云いく「菩薩摩訶薩ぼさつまかさとく惡象等あくぞうに於おいて心に怖畏ふいすること無くなく惡知識あくちしきに於おいては怖畏ふいの心を生おこぜよ何を以もつての故ゆえに是この惡象等あくぞうは唯ただ能よく身を壊やぶりて心を壊やぶる能よわらず惡知識あくちしきは二俱ともに壊やぶる故ゆえに、是この惡象等あくぞうは唯ただ一身たを壊やぶり惡知識あくちしきは無量むりようの善身無量むりようの善心ぜんしんを壊やぶる是この惡象等あくぞうは唯ただ能よく不淨ふじようの臭くさき身を破壊はす

悪知識は能く淨身及び淨心を壞る是の悪象等は能く肉身を壞り悪知識は
法身を壞る悪象の為に殺されては三趣に至らず悪友の為に殺されては必ず
三趣に至る是の悪象等は但身の怨と爲り悪知識は善法の怨と爲らん是の故に
菩薩常に當に諸の悪知識を遠離すべし」已上。

請い願わくば今の世の道俗設い此の書を邪義と思つと雖も且らく此の念を
抛つて十住毘婆沙論を開き其の難行の内に法華經の不入入をがえ
選択集の準之思之の四字を案じて後には是非を致せ謬つて悪知識を信じ邪法
を習い此の生を空うすること莫れ。

第三に正しく末代の凡夫の爲の善知識を明さば、問うて云く善財童子は五
十余の善知識に値いき其の中に普賢・文殊・觀音・弥勒等有り常啼・班足・
妙莊嚴・阿闍世等は曇無竭・普明・耆婆・二子夫人に値い奉りて生死を離れ
たり此等は皆大聖なり仏・世を去つて後はその如きの師を得ること難しとなす

滅後めつごに於おいて亦また竜樹りゆうじゆ・天親てんじんも去くりぬ南岳なんがく・天台てんだいにも値あわず如何いかんが生しょう死じを離はなる
可べきや、答こたえて云いく末代まつだいに於おいて真実しんじつの善知識ぜんちしき有あり所謂い法華ほつけ・涅槃ねはん是これなり、問
うて云いく人ひとを以もつて善知識ぜんちしきと為なすは常ならの習なりなり法ほつを以もつて知識ちしきと為なすに証しやう有あり
や、答こたえて云いく人ひとを以もつて知識ちしきと為なすは常ならの習なりなり然しかりと雖いえども末代まつだいに於おいて真
の知識ちしき無なければ法ほつを以もつて知識ちしきと為なすに多おほくの証しやう有あり、摩訶止觀まかしかんに云いく「・或ある
は知識ちしきに從したがひ・或あるは經卷きやうかんに從したがひ上に説いく所ところの一実いちじつの菩提ぼだいを聞きく」已上いじやう此このの文
の意いは經卷きやうかんを以もつて善知識ぜんちしきと為なす、法華經ほつけきやうに云いく「若もし法華經ほつけきやうを閻浮提えんぶだいに行いじ
受持じゆじすること有あらん者まさは応まさに此このの念ねんを作なすべし皆みな是これ普賢ふげん威神いしんの力ちからなり」已
上いじやう此このの文ぶんの意いは末代まつだいの凡夫ぼんぷ法華經ほつけきやうを信しんずるは普賢ふげんの善知識ぜんちしきの力ちからなり、又また云いく
「若もし是この法華經ほつけきやうを受持じゆじし読誦どくじゆし正憶念おくねんし修習しゆじゆし書寫しよしやすること有あらん者まさは
當まさに知しるべし是この人は即すなわち釈迦牟尼しやくかむに仏ぶつを見みるなり仏ぶつ、口くちより此このの經典きやうてんを聞きく
が如ごとし當まさに知しるべし是この人は釈迦牟尼しやくかむに仏ぶつを供養くやうするなり」已上いじやう此このの文ぶんを見みるに

ほけきよう すなわ しゃかむにぶつ ほけきよう
法華經は即ち釈迦牟尼仏なり法華經を信ぜざる人の前には釈迦牟尼仏入滅を
取り此の經を信ずる者の前には滅後為りと雖も仏の在世なり。

又云く「若し我成仏して滅度の後十方の国土に於て法華經を説く処有ら
ところ

ば我が塔 廟是の經を聴かんが為の故に其の前に涌現し為に証 明を為さん」

已上此の文の意は我等・法華の名号を唱えて多宝如来本願の故に必ず来りた
ゆえ

まう、又云く「諸仏の十方世界に在つて法を説くを尽く還し一処に集めたま
いっしょ

う」已上釈迦・多宝・十方の諸仏・普賢菩薩等は我等が善知識なり若し此の
われら ぜんちしき も

義に依らば我等は亦宿善・善財・常啼・班足等にも勝れたり彼は権經の
よ またしゆくぜん ぜんさい じょうたい はんそく すぐ こんきよう

知識に値い我等は実經の知識に値えはなり彼は権經の菩薩に値い我等は
われら じつきよう ちしき あ われら

実經の仏・菩薩に値い奉ればなり。

涅槃經に云く「法に依つて人に依らざれ智に依つて識に依らざれ」已上依法
ねはんぎよう いわ よ よ えほう

と云うは法華・涅槃の常住の法なり不依人とは法華・涅槃に依らざる人な
ほっけ ねはん じょうじゅう ふえ ほっけ ねはん よ

りたとい設いいい仏・菩薩ぼさつ為なりと雖いえども法華・涅槃ねはんに依よらざる仏・菩薩ぼさつは善知識ぜんちしきに非あらず
況いや法華・涅槃ねはんに依よらざる論師ろんし・訳者やくしゃ・人師にんしに於おてをや、依智えちとは仏に依よる
不依識ふえしきとは等覺とうかく已下いかなり、今の世の世間の道俗せけん どうぞく・源空げんくうの謗法ほうほうの失とがを隠かくさんが
為ために徳を天下てんがに挙あげて権化ごんげなりと称しょうす依用えようすべからず、外道げどうは五通ごつうを得よて能よく
山を傾つけ海を竭くつすとも神通じんつう無あき阿含經あこんきやうの凡夫ほんぶに及およばず羅漢らかんを得ろくつう・六通ろくつうを現げんず
る二乗にじようは華嚴けこん・方等ほうとう・般若はんの凡夫ほんぶに及およばず華嚴けこん・方等ほうとう・般若はんの等覺とうかくの菩薩ぼさつも
法華經ほけきやうの名字みやうじ・觀行かんぎやうの凡夫ほんぶに及およばず設たいじんつうちえ神通智慧いえど ごんきやう有ぜんちしきりと雖いえども權教ごんきやうの善知識ぜんちしき
をば用わうべからず、我等常没われらじようぼつの一闡提いつせんたいの凡夫ほんぶ法華經ほけきやうを信ほぜんと欲ほするは仏性ぶつじやう
を顯あらわさんが為せんびやうの先表せんびやうなり。

故ゆえに妙樂大師みやうらくだいしの云いわく「内薰ないくんに非あらざるよりは何なんぞ能よく悟さとを生さとりぜん故ゆえに知しんぬ
悟さとを生さとりずる力は真如しんによに在ゆえり故ゆえに冥薰みやうくんを以もつ外護げごと為なすなり」已上ほけきやう法華經ほけきやうより
外の四十余年よんじゆうよねんの諸經しよきやうには十界互具じゅつかいこく無じゅつかいこくし十界互具じゅつかいこくを説ないしんかざれば内心ぶつの仏界ぶつを知

らず内心の仏界を知らざれば外の諸仏も顕われず故に四十余年の権行の者は
仏を見ず設い仏を見ると雖も他仏を見るなり、二乗は自仏を見ざるが故に
成仏無し爾前の菩薩も亦自身の十界互具を見ざれば二乗界の成仏を見ず
故に衆生無辺誓願度の願も満足せず故に菩薩も仏を見ず凡夫も亦十界互具を
知らざるが故に自身の仏界も顕われず、故に阿弥陀如来の来迎も無く諸仏如来
の加護も無し譬えば盲人の自身の影を見ざるが如し。

今法華經に至つて九界の仏界を開くが故に四十余年の菩薩・二乗・六凡始
めて自身の仏界を見る此の時・此の人の前に始めて仏・菩薩・二乗立ち給う
此の時に二乗・菩薩始めて成仏し凡夫も始めて往生す、此の故に在世滅後
の一切衆生の誠の善知識は法華經是なり、常途の天台宗の学者は爾前に
於て当分の得道を許せども自義に於ては猶当分の得道を許さず然りと雖も此
の書に於ては其の義を尽くさず略して之を記すれば追つて之を記すべし。

だいぶん 大文の第六に法華・涅槃に依る行者の用心を明さば、一代教門の勝劣・
せんじん 浅深・難易等に於ては先の段に既に之を出す、此の一段に於ては一向に後世
おも おも まっだいじょうぼつ 没の五逆謗法一闡提等の愚人の為に之を注す、略して三有り、
さいけ 一には在家の諸人正法を護持するを以て生死を離れ惡法を持つに依つて
さんあくどう 三惡道に墮す可きことを明し、二には但法華經の名字計りを唱えて三惡道を
さんあくどう 離る可きことを明し、三には涅槃經は法華經の爲の流通と成ることを明す。
だいいち 第一に在家の諸人正法を護持するを以て生死を離れ惡法を持つに依つて
さんあくどう 三惡道に墮す可きことを明さば、涅槃經第三に云く「仏・迦葉に告わく能く
しょうほう 正法を護持するの因縁を以ての故に是の金剛身を成就することを得たり」
またいわ と亦云く「時に國王有り名を有徳と曰う、乃至・法を護らんが爲の故に、乃至
こ はかい 是の破戒の諸の惡比丘と極めて共に戰鬪す、乃至・王是の時に於て法を聞
えおわ くことを得已つて心大に歡喜し尋で即ち命終して阿・仏の國に生ず」已上此

の文の如くならば在家の諸人別の智行無しと雖も謗法の者を対治する功德に依つて生死を離る可きなり。

問うて云く在家の諸人、仏法を護持す可き様如何、答えて云く涅槃經に云く「若し衆生有つて財物に貪著せば我当に財を施し然して後に是の大涅槃經を以て之を勧め讀ましむべし、乃至・先に愛語を以て其の意に隨い然る後に漸く当に是の大乗大涅槃經を以て之を勧めて讀ましむべし若し凡庶の者には當に威勢を以て之に逼りて讀ましむべし若し・慢の者には我當に其れがために僕使と作り其の意に隨順し其れをして歡喜せしめ然して後に復當に大涅槃を以て之を教導すべし、若し大乗經を誹謗する者有らば當に勢力を以て之を推きて伏せしめ既に摧伏し已つて然して後に勧めて大涅槃を讀ましむべし、若し大乗經を愛樂する者有らば我、躬ら當に往いて恭敬し供養し尊重し讚歎すべし」已上。

問うて云く今の世の道俗偏に選択集に執して法華・涅槃に於ては自身
不相応の念を作すの間・護惜建立の心無く偶邪義の由を称する人有れば
念仏誹謗の者と称して悪名を天下に雨らす斯れ等は如何、答えて云く自答を
存す可きに非ず仏、自ら此の事を記して云く、仁王經に云く「大王我が滅度
の後・未来世の中の四部の弟子諸の小国の王・太子・王子乃ち是れ三宝を
住持して護る者転更に三宝を滅破せんこと師子の身中の虫の自ら師子を食う
が如くならん外道には非ざるなり多く我仏法を壊り大罪過を得ん正法衰薄
し民に正行無く漸く悪を為すを以て其の寿日に減じて百歳に至らん人、仏法
を壊りて復孝子無く六親不和にして天神も祐けず疾疫惡鬼日に來りて侵害し
災怪首尾し連禍縦横して地獄・餓鬼・畜生に入らん」亦次下に云く「大王
未来世の中の諸の小国の王四部の弟子自ら此の罪を作らん破国の因縁、乃至
諸の惡比丘多く名利を求め國王・太子・王子の前に於て自ら破仏法の因縁

・破国はこく いんねんの因縁いんねんを説せかん其その王別わきまえずして此この語ことばを信聴しんちようし、乃至ないし・其そのの時に
當あつて正法しょうほう將まさに滅めせんこと久くしからず」已上。

余せんちやくしゆう 選択集せんちやくしゆう を見るに敢あえてて此この文ぶんの未来記みらいきに違たがわず、 選択集せんちやくしゆう は法華ほっけ・真言しんごん
等しょうほうの正法しょうほうを定さだめて雜行ぞうぎよう・難行なんぎようと云いい末代まつだいの我等われらに於おては時機じき相応そうおうせず之これを
行しぎようずる者は千せんが中ちゆうに一いつも無なく仏ぶつ、還かえつて法華ほっけ等を説いくと雖いえども法華ほっけ・真言しんごんの
諸行しよぎようの門もんを閉ねんじて念仏ねんぶつの一門いつもんを開まく末代まつだいに於おて之これを行しぎようずる者を群賊等ぐんぞくと定さだめ
とつ世しよの一切いっさいの道俗どうぞくに此この書しよを信しんぜしめ此この義ぎを以もつて如来にょらいの金言きんげんと思おもえり、此
ゆえ せけん とうぞく ぶつぼうこんりゆう なく ほうけ しんごん しょうほう ほうすいたちま かわ
の故ゆえに世間せけんの道俗どうぞくに仏法ぶつぽう建立こんりゆうの意い無なく法華ほうけ・真言しんごんの正法しょうほうの法水ほつすい忽たちちに竭かわき
天人てんにん減少さんあくして三惡日さんあくに増長ぞうちようする偏ひとえに選択集せんちやくしゆうの惡法あくほうに催つながされて起おこる所の邪見じゃけん
なり、此この經文きようもんを伝記しんして「我滅度後めつど」と云いえるは正法しょうほうの末八十年まつぱう像法ぞうほうの
末八十年まつぱう末法まつぱうの末八十年まつぱうなり 選択集せんちやくしゆうの出る時は像法ぞうほうの末・末法まつぱうの始まつぱうなれば
八百年はつぱんの内うちなり 仁王經にんのうきようの記しるする所の時節じせつに當あれり、 諸もろの小國王こくおうの王わうとは

にほんこく 日本国の王なり中下品の善は粟散王是なり「如師子身中虫」とは仏弟子の
げんくうこれ 源空是なり諸悪比丘とは所化の衆是なり「説破仏法因縁・破国因縁」とは上
あく に挙る所の選択集の語是なり「其王不別信聴此語」とは今の世の道俗邪義
わきま を弁えずして猥りに之を信するなり。

こ 請い願わくば道俗法の邪正を分別して其の後正法に就て後生を願え今度
じんしん 人身を失い三惡道に墮して後に後悔すとも何ぞ及ばん。

ほけきよう 第二に但法華經の題目計りを唱えて三惡道を離る可きことを明さば、法華經
いわ 第五に云く「文殊師利是の法華經は無量の國中に於て乃至名字をも聞くこ
とを得べからず」第八に云く「汝等但能く法華名を受持する者を擁護する福
はか 量る可らず」提婆品に云く「妙法華經の提婆品を聞いて淨心に信敬して疑惑
を生ぜざらん者は地獄・餓鬼・畜生に墮ちず」大般涅槃經名字功德品に云く
「若し善男子・善女人有つて是の經の名を聞いて惡趣に生ずと云わば是の

ことえありあ

処 有ること無けん

涅槃經は法華經の流通たるが故に引けるなり。

問うて云く但法華の題目を聞くと雖も解心無くば如何にして三惡趣を脱れ

んや、答えて云く法華經流布の國に生れて此の經の題名を聞き信を生ずるは

宿善の深厚なるに依れり設い今生は惡人無智なりと雖も必ず過去の宿善

有るが故に此の經の名を聞いて信を致す者なるが故に惡道に墮せず。

問うて云く過去の宿善とは如何、答えて云く法華經の第二に云く「若し此

の經法を信受すること有らん者は是の人は已に曾て過去の仏を見たてまつり

恭敬し供養し亦此の法を聞けるなり」法師品に云く「又如來滅度の後若し人

有つて妙法華經の乃至・一偈・一句を聞いて一念も隨喜せん者は、乃至・當に

知るべし是の諸人等已に曾て十萬億の仏を供養せしなり」流通たる涅槃經に

云く「若し衆生有つて毘連河沙等の諸仏に於て菩提心を發し乃ち能く是の

惡世に於て是の如き經典を受持して誹謗を生ぜず善男子若し能く一恒沙等の

諸仏・世尊に於て菩提心を發すること有つて然る後に乃ち能く惡世の中に於て
是の法を謗せず是の典を愛敬せん」經文。

此等の文の如くんば設い先に解心無くとも此の法華經を聞いて謗ぜざるは

大善の所生なり、夫れ三惡の生を受くること大地微塵より多く人間の生を受

くるは爪上の土より少し、乃至四十余年の諸經に値うことは大地微塵より

も多く法華・涅槃に値うことは爪上の土より少し上に挙ぐる所の涅槃經の三

十三の文を見るに設い一字・一句なりと雖も此の經を信ずる者は宿縁多幸な

り。

問うて云く設い法華經を信ずと雖も惡縁に随わば何ぞ三惡道に墮せざらん

や、答えて云く解心無き者權教の惡知識に遇うて實教を退せば惡師を信ず

る失に依つて必ず三惡道に墮す可きなり、彼の不輕・輕毀の衆は權人なり

大通結縁の者の三千塵點を経しは法華經を退して權教に遷りしが故なり、

ほけきよう 法華經を信ずる輩は法華經の信を捨てて權人に随わんより外は世間の惡業に
おほ ほうけ くだく およ 於ては法華の功德に及ばざる故に三惡道に墮つ可からざるなり。

問うて云く日本国は法華・涅槃有縁の地なりや否や、答えて云く法華經第

八に云く「如来の滅後に於て閻浮提の内に広く流布せしめ断絶せざらしむ」

七の卷に云く「広宣流布して閻浮提に於て断絶せしむること無けん」涅槃經

第九に云く「此の大乘經典 大涅槃經も亦復是の如し南方の諸の菩薩の為の

故に当に広く流布すべし」經文三千世界広しと雖も仏、自ら法華・涅槃を以て

南方流布の処と定む、南方の諸国の中に於ては日本国は殊に法華經の流布

す可き処なり。

問うて云く其の証如何、答えて云く肇公の法華翻經の後記に云く羅什三蔵

・須利耶蘇摩三蔵に値い奉りて法華經を授かる時の語に云く「仏日西山に隱

れ遺耀東北を照す茲の典東北の諸国に有縁なり汝慎んで伝弘せよ」上東北と

は日本なり西南の天竺より東北の日本を指すなり、故に慧心の一乗要決に
云く「日本一州円機純一なり朝野遠近同じく一乘に帰し緇素貴賤悉く成仏
を期す」已上願わくば日本国の道俗選択集の久習を捨てて法華・涅槃の現文
に依り肇公慧心の日本記を待みて法華修行の安心を企てよ。
問うて云く法華經修行の者何の浄土を期す可きや、答えて云く法華經二十
八品の肝心たる寿量品に云く「我常に此の娑婆世界に在り」亦云く「我常に
此処に住し」亦云く「我が此土は安穩」文此の文の如くんば本地久成の円仏
は此の世界に在り此の土を捨てて何の土を願う可きや、故に法華經修行の者
の所住の処を浄土と思う可し何ぞ煩しく他処を求めんや、故に神力品に
云く「若は經卷所住の処・若は園中に於ても若は林中に於ても若は樹下に
於ても若は僧坊に於ても若は白衣舎にても若は殿堂に在つても若は山谷曠野
にても、乃至・当に知るべし是の処は即ち是道場なり」涅槃經に云く

「善男子是の大涅槃微妙の經典流布せらるる処は当に知るべし其の地は
即ち是れ金剛なり此の中の諸人も亦金剛の如し」已上法華・涅槃を信ずる
行者は余処に求む可きに非ず此の經を信ずる人の所在の処は即ち淨土なり。
問うて云く華嚴・方等・般若・阿含・觀經等の諸經を見るに兜率・西方
・十方の淨土を勧む其の上・法華經の文を見るに亦兜率・西方・十方の
淨土を勧む何ぞ此等の文に違して但此の瓦礫荊棘の穢土を勧むるや、答えて
云く爾前の淨土は久遠実成の釈迦如来の所現の淨土にして實には皆穢土な
り、法華經は亦方便壽量の二品なり壽量品に至つて實の淨土を定むる時・
此の土は即ち淨土と定め了んぬ、但し兜率・安養・十方の難に至つては爾前
の名目を改めずして此の土に於て兜率安養等の名を付く、例せば此の經に
三乘の名有りと雖も三乘有らざるが如し、不須更指觀經等也」の釈の意是な
り、法華經に結縁無き衆生の当世西方淨土を願うは瓦礫の土を樂う者なり、

ほけきよう
法華經を信ぜ

ざる衆生しゅじょうは誠に分添ぶんぞんの浄土じやうど無き者なり。

第三に涅槃經は法華經流通ねはんきようの爲に之を説き給うことを明さば、問うて云く

こうたく ほうろんほつし どうじよう えいかん せきとく ほけきよう もつ

光宅こうたくの法雲法師並に道場の慧觀等の碩徳は法華經を以て第四時の經と定め

むじよう じゆくそみ てんだいちしゃだいし ほつけ ねはんどうみ いえど またくんじゅう

無常むじようの熟蘇味と立つ、天台智者大師は法華・涅槃同味と立つと雖も亦・拾の

義そんを存す二師共に権化なり互に德行を具せり何を正として我等の迷心を晴

らす可きや、答えて曰く設い論師訳者た爲りと雖もい仏教に違ごんじつしてたが権實二教を判

ぜずんば且しばらく疑うたがを加べう可いし何に況や唐土の人師たる天台・南岳・光宅・

慧觀・智儼・嘉祥・善導等のお釈に於てをや、設たい末代の学者がくしや爲りと雖もい依法

不依人の義を存し本經・本論に違たがわずんば信用を加べう可いし。

問うて云く涅槃經ねはんきようの第十四卷を開きたるに五十年の諸大乘經しよだいじやうきようを挙あげ

前四味に譬え涅槃經を以て醍醐味に譬う諸大乘經は涅槃經より劣ること

ぜんしみ たと ねはんきよう もつ だいごみ たと しよだいじやうきよう ねはんきよう

ぜんしめ たと ねはんきよう もつ だいごみ たと しよだいじやうきよう ねはんきよう

ぜんしめ たと ねはんきよう もつ だいごみ たと しよだいじやうきよう ねはんきよう

ぜんしめ たと ねはんきよう もつ だいごみ たと しよだいじやうきよう ねはんきよう

ぜんしめ たと ねはんきよう もつ だいごみ たと しよだいじやうきよう ねはんきよう

ひやくせんまんばい
百千万倍なりと定め了んぬ、其の上迦葉童子の領解に云く「我今日より始て
せいけん
正見を得たり此よりの前は我等悉く邪見の人と名く」と此の文の意は涅槃經
いぜん ほっけ いっさい しゅうてん みなじゃけん
已前の法華等の一切の衆典を皆邪見と云うなり、当に知るべし法華經は邪見
の經にして未だ正見の仏性を明らめず、故に天親菩薩の涅槃論に諸經と涅槃
しょうれつ
と勝劣を定むる時・法華經を以て般若經に同じて同じく第四時に撰したり
あにせいけん ねはんぎょう もっじゃけん ほけきょう るつつ せ いわ ほけきょう
豈正見の涅槃經を以て邪見の法華經の流通と爲んや如何、答て云く法華經の
げんぶん
現文を見るに仏の本懷残すこと無し、方便品に云く「今正しく是れ其時なり」
じゅりょうばん いわ みずからこ な ほうべん いわ まさ こ そのとき
壽量品に云く「毎に自らは是の念を作す何を以てか衆生をして無上道に入る
ことを得・速かに仏身を成就することを得せしめん」と神力品に云く「要を
もっこれ によらい いっさい しょう ないし みな おい せんじけんせつ
以て之を言えは如来の一切の所有の法、乃至・皆此の經に於て宣示顯説す」
これら げんぶん しゃかによらい ないしょう みな つ たま そ たほう
已上此等の現文は釈迦如来の内証は皆此の經に尽くし給う其の上・多宝並に
じゅつぽう しょうらいじゅう おい しゃかによらい いこんとう ことば ほけきょう こと
十方の諸仏來集の庭に於て釈迦如来の已今當の語を証し法華經に如く經無

しと定め^{おわ}了^しんぬ、而^{しか}に多^た宝^{ほう}諸^{しよ}仏^{ぶつ}・本^{ほん}土^どに還^{かえ}るの^の後^ごに但^{しか}釈^{かい}迦^ち一^{いち}仏^{ぶつ}のみ異^い変^{へん}を
存^{かえ}じて還^{ねはんぎよう}つて涅槃^{ねはんぎよう}經^{きやう}を説^{ほけきやう}いて法^{ほけきやう}華^{きやう}經^{きやう}を卑^{いやし}まば誰^{だれ}人^{ひと}か之^{これ}を信^{しん}ぜん、深^{ふか}く此^この義^ぎ
を存^{した}ぜよ、随^{ねはんぎよう}つて涅槃^{ねはんぎよう}經^{きやう}の第^{だい}九^くを^を見^みるに法^{ほけきやう}華^{きやう}經^{きやう}を流^る通^{つう}して説^いいて云^いく「是^この
經^{きやう}・世^よに出^いること彼^かの菓^か実^{じつ}の一切^{いっさい}を利^り益^{やく}し安^{あん}樂^{らく}する所^{ところ}多^たきが如^{ごと}く能^よく衆^{しゆ}生^{じやう}を
して仏^{ぶつ}性^{しやう}を見^みわさしむ法^{ほつ}華^けの中^{ちゆう}の八^{はち}千^{せん}の聲^{しやう}聞^{もん}の記^きを授^くかるを得^えて大^{だい}果^か実^{じつ}
を成^{じやう}ずるが如^{ごと}く秋^{しゆ}收^{しゆ}冬^{とう}藏^{ざう}して更^{しや}に所^{しよ}作^さ無^むきが如^{ごと}し」と。

此^この文^{ぶん}の如^{ごと}くんば法^{ほけきやう}華^{きやう}經^{きやう}邪^{あに}見^{けん}ならば涅槃^{ねはんぎよう}經^{きやう}も豈^{あに}に邪^{じゃ}見^{けん}に非^{あら}ずや、法^{ほけきやう}華^{きやう}經^{きやう}は
大^{だい}収^{しゆう}・涅^{ねはんぎよう}槃^{ばん}經^{きやう}は拾^{くん}なりと見^{けん}え了^{おわ}んぬ、涅槃^{ねはんぎよう}經^{きやう}は自^{みず}ら法^{ほけきやう}華^{きやう}經^{きやう}より劣^{りやう}るの
由^{よし}を称^{しやう}す法^{ほけきやう}華^{きやう}經^{きやう}の当^{とう}説^{せつ}の文^{ぶん}敢^{あえて}て相^{そう}違^い無^むし、但^{ただ}し迦^か葉^{しやう}の領^{りやう}解^げ並^{へい}に第^{だい}十^{じゆう}四^しの文^{ぶん}は
法^{ほけきやう}華^{きやう}經^{きやう}を下^あす文^{ぶん}に非^{あら}ず迦^か葉^{しやう}の自^じ身^{しん}並^{へい}に所^{しよ}化^けの衆^{しゆ}・今^{こん}始^しめて法^{ほけきやう}華^{きやう}經^{きやう}の所^{しよ}説^{せつ}の
じやうじゆうぶつしやう くおんじつじやう さと ゆえ
常^{じやう}住^{じゆう} 仏^{ぶつ}性^{しやう}・久^く遠^{おん}実^{じつ}成^{じやう}を覚^さる故^こに我^{われ}が身^みを指^さして此^こより已^い前^{ぜん}は邪^{じゃ}見^{けん}なりと
云^いう、法^{ほけきやう}華^{きやう}經^{きやう}已^い前^{ぜん}の無^む量^{りやう}義^ぎ經^{きやう}に嫌^{きら}わ^るる諸^{しよ}經^{きやう}を涅槃^{ねはんぎよう}經^{きやう}に重^{かさ}ねて之^{これ}を挙^あげて嫌^{きら}

うなり法華經を嫌うには非ざるなり、亦涅槃論に至つては此等の論は書付く
るが如く天親菩薩の造・菩提流支の訳なり經文に違すること之多し涅槃論も
亦本經に違す当に知るべし訳者の誤りなり信用に及ばず。

問うて云く先の教に漏れたる者を後の教に之を承け取つて得道せしむるを
流通と称せば阿含經は華嚴經の流通と成る可きや、乃至法華經は前四味の流通
と成る可きや如何、答えて曰く前四味の諸經は菩薩・人天等の得道を許すと
雖も決定性の二乗・無性闡提の成仏を許さず、其の上仏意を探りて実を
以て之をうるに亦菩薩・人天等の得道も無し十界互具を説かざるが故に
久遠実成無きが故に、問うて云く証文如何、答えて云く法華經方便品に云く
「若し小乗を以て化すること乃至一人に於てせば我則ち慳貪に墮せん此の
事は為て不可なり」已上此の文の意は今選択集の邪義を破せんが為に余事を
以て詮と為す故に爾前得道の有無の実義は之を出さず追つて之をうべし、

但し四十余年の諸経は実に凡夫の得道無きが故に法華経は爾前の流通と為らず法華経に於て十界互具・久遠実成を顕わし了んぬ故に涅槃経は法華経の爲に流通と成るなり。

大文の第七に問に随つて答つとは、若し末代の愚人上の六門に依つて万が

一も法華経を信ぜば権宗の諸人・或は自惑に依り・或は偏執に依つて

法華経の行者を破せんが爲に多く四十余年並に涅槃等の諸経を引いて之を

難ぜん、而るに権教を信ずる人は之多く・或は威勢に依り・或は世間の資縁

に依り人の意に随つて世路を亘らんが爲に・或は権教には学者多く実教に

は智者少し是非に就て万が一も実教を信ずる者有るべからず、是の故に此の

一段を撰んで権人の邪難を防がん。

問うて云く諸宗の学者難じて云く「華嚴経は報身如来の所説・七処・八会

・皆、頓極頓証の法門なり、法華経は応身如来の所説・教主既に優劣有り、

所説しよせつの法門ほうもんに於おいて何なんぞ浅深せんじん無なからん随したがつて对告衆たいこうしゅうも法慧ほうえ・功德林くどく・金剛幢こんこう等
なり永にじようく二乗まじを雜まじえず、法華經ほけきやうは舍利弗等しやりほつを以もつて对告衆たいこうしゅうと為なす、法相宗ほうそうしゅう
の如ごときは解深密經げじんみつを以もつて依憑えびようと為なし難なんを加いえて云いわく「解深密經げじんみつは文殊もんじゆ・觀音かんのん
等を以もつて对告衆たいこうしゅうと為なす勝義生菩薩しょうぎしやうぼさつの領解りやうげには一代いちだいを有あ・空・中と詮せんす其その
中ちゆうの中ちゆうとは華嚴けこん・法華ほつ・涅槃ねはん・深密等じんみつなり法華經ほけきやうの信解品しんげの五時りやうげの領解りやうげは四
大声聞しやうもんなり菩薩ぼさつと声聞しやうもんと勝劣しやうれつ天地てんちなり、淨土宗じやうどの如ごときは道理どうりを立てて云いわく
「我等われらは法華等ほつの諸經しよきやうを誹謗ひぼうするに非あらず彼等かれらの諸經しよきやうは正ただには大人だいにんの為かたわら傍かたわらに
は凡夫ほんぶの為ためにす断惑証理だんなくしやうり・理深りじんの教まっだいにして末代われらこれの我等われら之これを行まずるに千人ちゆうの中
に一人ひとりも彼の機きに当あたらず在家ざいけの諸人しよにん多た分ぶんは文字もんじを見みず亦また華嚴けこん・法相等ほうそうの名なを
聞いかず況いや其そのの義ぎを知らんや、淨土宗じやうどの意いは我等われら凡夫ほんぶは但ただ口くちに任ませて六字ろくじの
名号みやうごうを称しょうすれば現在げんざいに阿弥陀如来あみだにらい二十五にじふごの菩薩等ぼさつを遣つかわし身みに影かげの随したがう如ごとく
百重千重ひやくじゆうせんじゆうに行者ぎやうじやを围绕いにようして之これを守り給たまう、故ゆえに現世げんせには七難即滅ひちなんそくめつ・七福即生ひちふくそくしやう

し乃至臨終ないしりんじゆうの時は必ず来迎有らいごうつて観音かんのんの蓮台れんだいに乗じ須臾しゆゆの間に浄土じやうどに至り業しに随したがつて蓮華れんげ開ほけ法華經ほけきやうを聞きいて実相じつそうを覺さとる何なんぞ煩わづらいしく穢土えどに於おいて余行よぎやうを行いじて何いすれの詮あか有ある但万ばんじ事を抛なげつて一向いっこうに名号みやうごうを称めせよ」と云云、禅宗等ぜんしゆうの人云いわく、「一代いちだい聖教しやうきやうは月を指す指・天地日月等も汝等なんじらが妄心もうしんより出いでたりじゆつぼう・じやうど・しゆうしん・えいぞう・しやくажじゆつぼう・ぶつだ・なんじ・かくしん・しよへん・もんじ・十方の浄土も執心しゆうしんの影像えいざうなり釈迦しやくか十方の仏陀ぶつだは汝が覺心かくしんの所変・文字もんじに執しゆうする者は株くを守る愚人ぐにんなり我が達磨大師だるまだいしは文字もんじを立てず方便ほうべんを仮いらず一代いちだい聖教しやうきやうの外がに仏迦葉かしやうに印いんして此の法を伝ほけ法華經等ほけきやうは未いまだ眞実しんじつを宣のべず」已上。

此等これらの諸宗しよしゆうの難なん一あらに非なんず如何いかにぞ法華經ほけきやうの信心しんじんを壊やぶらざる可べしや、答いて云わく法華經ほけきやうの行者ぎやうじやは心中しんちゆうに「四十余年よんじゆうよねん已い今当こんたう皆是かいぜしんじつ眞実・依法えほう不依人ふえ」等の文ぶんを存しかし而も外ことばに語ことばに之これを出いださず難なんに随これて之を問きふべし抑そもそも所立しゆりゆうの宗義しゆうぎは何いすれの經きやうに依よるや、彼、經を引ひかば引ひくに随したがつて亦また之を尋たずねよ、一代いちだい五十年の間の

説の中に法華經より先か後か同時なるか亦先後不定なるかと、若し先と答へば未顕眞実の文を以て之を責めよ敢えて彼の經の説相を尋ぬること勿れ、後と答へば當説の文を以て之を責めよ、同時と答へば今説の文を以て之を責めよ、不定と答へば不定の經は大部の經に非ず一時一会の説にして亦物の数に非ず其の上、不定の教と雖も三説を出でず、設い百千万の義を立つと雖も四十余年の文を載せて虚妄と称せざるより外は用うべからず、仏の遺言に不依不了義經と云うが故なり。

亦智儼・嘉祥・慈恩・善導等を引いて徳を立て難ずと雖も法華・涅槃に違する人師に於ては用うべからず依法不依人の金言を抑ぐが故なり。

亦法華經を信ぜん愚者の為に二種の信心を立つ、一には仏に就て信を立て

二には經に就て信を立つ、仏に就て信を立つとは權宗の學者来り難じて云わん善導和尚は三昧発得の人師・本地弥陀の化身なり慈恩大師は十一面觀音の

けしんまたひつたん 化身亦筆端より舍利を雨らす此等の諸人は皆彼彼の経に依つて皆証有り
なん なんじ 何ぞ汝彼の経に依らず亦彼の師の義を用いざるや、答えて云く汝聞け一切
ごんしゅう 大師先德並に舍利弗・目連・普賢・文殊・觀音乃至阿弥陀・葉師・
しゃかによらい 釈迦如来・我等並に十方の諸人の前に集まりて説いて法華経は汝等が機に
かな なんぶつ 叶わず念仏等の権經の行を修して往生を遂げ後に法華経を覺ると云わん
かく ごと 是の如き説を聞くと雖も敢えて用う可からず、其の故は四十余年の諸の経に
ほけきよう 法華経の名字を呼ばず何れの処にか機の堪不堪を論ぜん、法華経に於ては
しゃか たほう 釈迦・多宝・十方諸仏一処に集りて撰定して云く法をして久住せしむ如来の
めつこ 滅後に於て閻浮提の内に広く流布せしめ断絶せざらしむ、此の外に今・仏
しゅつたい 出来して法華経を末代不相応と定めば既に法華経に違す知んぬ此の仏は
ねはんぎよう 涅槃經に出す所の滅後の魔・仏なり之を信用す可からず、其の已下の菩薩・
しようもん 声聞・比丘等は亦言論するに及ばず此等是不審無し涅槃經に記する所の滅後

の魔まの所しよ變へんの菩薩ぼさつ等らなり、其そのの故ゆえは法華經ほけきやうの座ざは三千大千世界さんぜんだいせんせかいの外が四百萬億よひやくまん阿僧祇あそぎの世界せかいなり其そのの中に充滿じゆうまんせる菩薩ぼさつ・二乘にじやう・人天にんてん・八部等はちぶ皆みな如來にらいのごうちよく告こくど勅ほけきやうを蒙もむり各各所在しよざいの国土こくどに法華經ほけきやうを弘ひろむ可べきの由これ之を願ねがひぬ、善導等ぜんどうもごんしや若もし權者ごんしやならば何なんぞ竜樹りゆうじゆ・天親等てんじんの如ごとく權教ごんきやうを弘ひろめて後ほけきやうに法華經ほけきやうを弘ひろめざるや法華經ほけきやうの告ごうちよく勅ほけきやうの数かずに入いらざるや何なんぞ仏ぶつの如ごとく權教ごんきやうを弘ひろめて後ほけきやうに法華經ほけきやうを弘ひろめざるや、若もし此こゝの義ぎ無なくんば設たいい仏ぶつ為なりと雖いえども之これを信べず可べからず今は法華經ほけきやうの中ちゆうの仏ぶつを信ゆえず故ゆえに仏ぶつに就おいて信おを立たつと云いふなり。

問いうて云いふ釈迦如來しやくかにらいの所説しよせつを他た仏ぶつ之これを証しるするを實説じつせつと稱なせば何なんぞ阿彌陀經あみだを信いぜざるや、答いえて云いふ阿彌陀經あみだに於おいては法華經ほけきやうの如ごとき証しやうみやう明無めいむきが故ゆえに之これを信いぜず、問いうて云いふ阿彌陀經あみだを見るしやくかにらいに釈迦如來しよせつの一日七日いちにちしちにちの念仏ねんぶつを六方しよぶつの諸仏しよぶつ舌ぜつを出だし三千さんぜんを覆おほつて之これを証しやうみやう明めいせり何なんぞ証しやうみやう明無めいむしと云いふや、答いえて云いふ阿彌陀經あみだに於おいては全ぜんく法華經ほけきやうの如ごとき証しやうみやう明無めいむく但しか釈迦一仏しやくかいちぶつ、舍利弗しゃりふ

に向つて説いて言く我、一人阿弥陀經を説くのみに非ず六方の諸仏舌を出し
さんぜん おお あみだ
三千を覆うて阿弥陀經を説くと云う此等は釈迦一仏の説なり敢えて諸仏来り
たまわず、此等の權文は四十余年の間は教主も權仏の始覺の仏なり、仏、權
なるが故に所説も亦權なり故に四十余年の權仏の説は之を信ず可からず、今
ほっけ ねはん くおんじつじょう えんぶつ じゅつかいごく
の法華・涅槃は久遠実成の円仏の実説なり十界互具の実言なり亦多宝・
じゅつほう しょうぶつ これ しょうみょう たま ゆえ これ
十方の諸仏来りて之を証明し給う故に之を信ずべし阿弥陀經の説は
むりようぎきょう みけんしんじつ ことは やぶ おわん しゃかいちぶつ ことは しょうぶつ しょうみょう
無量義經の末顯真實の語に壞れ了ぬ全く釈迦一仏の語にして諸仏の証明
には非ざるなり。

二に經に就て信を立つとは、無量義經に四十余年の諸經を挙げて末顯真實
ねはんぎょう いわ にょらい こもう
と云う、涅槃經に云く如来は虚妄の言無しと雖も若し衆生・虚妄の説に因つ
て法利を得と知れば宜しきに随つて方便して則ち為に之を説き給う又云く
りようぎきょう よ ぶりようぎきょう よ かく こと
了義經に依つて不了義經に依らざれ已上是の如きの文一に非ず皆四十余年

の自説の諸経を虚妄・方便・不了義・魔説と称す是れ皆人をして其の経を捨てて法華・涅槃に入らしめんが為なり、而るに何の恃み有つて妄語の経を留めて行儀を企て得道を期するや、今権教の情執を捨て偏に実経を信ず故に經に就て信を立つと云うなり。

問うて云く善導和尚も人に就て信を立て行に就て信を立つ何の差別有らんや、答えて云く彼は阿弥陀經等の三部に依つて之を立て一代の經に於て了義不了義經を分たずして之を立て、故に法華・涅槃の義に対して之を難ずる時は其の義壞れ了んぬ。守護国家論

七 災難対治抄 正元二年 三十九歳御作 78P

国土に大地震・非時の大風・大飢饉・大疫病・大兵乱等の種種の災難の起る根源を知りて対治を加う可きの勸文。

金光明經に云く「若し人王有りて其の国土に於て此の經有りと雖も未だ

かつてるふ　　捨てり
嘗て流布せず捨離の心を生じて聴聞せんことを樂わす亦供養し尊重し讚歎
よんぶのしゅう　　じきよう　　またまたそんちよう　　ないしくよう　　あた
せず四部の衆の持經の人を見て亦復尊重し乃至供養すること能わす遂に我等
およ　　けんぞくむりよう　　しよてん　　じんじん　　みようほう　　かんろ
及び余の眷属無量の諸天をして此の甚深の妙法を聞くことを得ず甘露の味に
そむ　　しやうほう　　うしな　　いこう　　およ　　せいりよくあ　　あくしゆ　　ぞうちよう　　にんてん
背き正法の流を失い威光及び勢力有ること無らしむ悪趣を増長し人天を
そんめつ　　しやうじ　　お　　ねはん　　そむ　　せそん　　われらしおう　　もろもろけんぞく
損減し生死の河に墜ちて涅槃の路に背かん、世尊・我等四王並に諸の眷属
およ　　やしや　　か　　こと　　そ　　こくど　　おつ　　こころな　　われらこ
及び藥叉等斯くの如き事を見て其の国土を捨てて擁護の心無けん但我等是の
しやき　　あ　　むりよう　　こくど　　しゅこ　　しよてんぜんじん　　みなことごと
王を捨棄するのみに非ず亦無量の国土を守護する諸天善神有らんも皆悉く
しやこ　　す　　しやり　　おわ　　そ　　まさ　　しゅじゆ　　さいか　　こくい　　そうしつ
捨去せん既に捨離し已れば其の国に當に種種の災禍有つて国位を喪失すべし、
いっさい　　にんしゅうみなぜんしん　　ただけいばく　　さつがい　　しんじよう　　たがい　　あいざんでんし　　まげ
一切の人衆皆善心無けん唯繫縛・殺害・瞋諍のみ有つて互に相讒諂し枉げ
つみ　　およ　　えきびようりゆうこう　　すいせいしばし　　りようじつなら　　げん　　はくしよくつねな
て辜無きに及ばん、疫病流行し彗星数ば出で兩日並び現じ薄蝕恒無く
こくびやく　　ふしやう　　ほしなが　　ちうこ　　ちうじつなら　　げん　　はくしよくつねな
黒白の二虹不祥の相を表わし星流れ地動き井の内に声を発し暴雨・悪風・
じせつ　　よ　　ききん　　あ　　みようじつ　　たほう　　おんぞく　　こくない
時節に依らず常に飢饉に遭い苗実も成らず多く他方の怨賊有つて国内を

しんりやく じんみんもろくのもう
侵略し人民諸の苦悩を受け土地に所樂の処有ること無けん」と。

だいしつきよう いわ も
大集經に云く「若し国王有つて我が法の滅せんを見て擁護せずんば無量世

おい せかいえ しゅう
に於て施戒慧を修すとも悉く皆滅失して其の国の中に三種の不祥の事を出さ

ないしみようじゅう
ん、乃至命終して大地獄に生ぜん」と。

にんのうきよう いわ だいおう こくどみだ
仁王經に云く「大王・国土乱れん時は先ず鬼神乱る鬼神乱るが故に万民

みだ
乱ると、亦云く大王・我今五眼をもつて明に三世を見るに一切の国王は皆

かこぜ
過去世に五百の仏に侍うるに由つて帝王主と爲ることを得たり、是をもつて

いっさい しょうにんらんかんしか ため こくど
一切の聖人羅漢而も爲に彼の国土の中に來生して大利益を作さん若し王の

つ いっさい しょうにんみな
福尽きん時は一切の聖人皆捨て去ることを為さん若し一切の聖人去らん時

ひちなん おこ
は七難必ず起る」と。

にんのうきよう いわ だいおうわれ
仁王經に云く「大王吾今化する所の百億の須弥・百億の日月・一一の須弥

してんげ そ えんぶだい たいこく ちゅうこく ちがつ
に四天下有り其の南閻浮提に十六の大国五百の中国十千の小国有り其の

國土の中に七つの畏る可き難有り一切の國王是の難の爲の故に、云何なるを難
 と爲す日月度を失い時節返逆し・或は赤日出で黒日出で二三四五の日出づ
 ・或は日蝕して光無く・或は日輪一重二三四五重輪現するを一の難と爲すな
 り、二十八宿度を失い金星・彗星・輪星・鬼星・火星・水星・風星・星・
 南斗・北斗・五鎮の五星・一切の國主星・三公星・百宦星・是くの如き諸星
 ・各各・變現するを二の難と爲すなり、大火・國を焼き百姓焼尽し・或は
 鬼火・竜火・天火・山神火・人火・樹木火・賊火・是くの如く變怪するを三
 の難と爲すなり、大水・百姓を漂没して時節返逆し冬・雨ふり夏・雪ふり
 冬・時に雷電霹靂し六月に冰霜雹を雨らし赤水・黒水・青水を雨らし・
 土山・石山を雨らし沙礫石を雨らし江河逆まに流れ山を浮かべ石を流す是く
 の如く變ずる時を四の難と爲すなり、大風・百姓を吹殺し國土の山河・樹木
 ・一時に滅没して非時の大風・黒風・赤風・青風・天風・地風・火風・水風

・是^{かく}くの如^{ごと}く變^なずる時^{とき}を五^{なん}の難^なと為^なすなり、天地^{てんち}・国^{こく}土^ど亢^{こう}陽^{よう}し炎^{えん}火^か洞^{どう}然^{ぜん}とし
ひやくそうこうかん　ここくみの　とち　かくねん　ばんしやうめつじん　かく　ごと　な
て百草^{ひやくそう}亢^{こう}旱^{かん}し五^ご穀^{こく}登^{とう}らず土^ど地^ち赫^{かく}然^{ぜん}として万^{ばん}姓^{しやう}滅^{めつ}尽^{じん}せん是^{かく}くの如^{ごと}く變^なずる時^{とき}
を六^{なん}の難^なと為^なすなり、四方^{しほう}の賊^{ぞく}来^きりて国^{こく}を侵^しし内^{ない}外^げの賊^{ぞく}起^きり
かぞく・すいぞく・ふうぞく・きぞく　ひやくせいこうらん　とうひやうこうき　かく　ごと　むあやし
火^か賊^{ぞく}・水^{すい}賊^{ぞく}・風^{ふう}賊^{ぞく}・鬼^き賊^{ぞく}あつて百^{ひやく}姓^{しやう}荒^{かう}乱^{らん}し刀^{とう}兵^{ひやう}劫^{けつ}起^きせん是^{かく}くの如^{ごと}く怪^{むあやし}す
る時^{とき}を七^{なん}の難^なと為^なすなり」と。

法^ほ華^け經^{きやう}に云^いく、「百^{ひやく}由^{ゆう}旬^{じゆん}の内^{うち}をして諸^{もろ}の衰^{さい}患^{わん}無^むからしめん」と。

涅槃^{ねはん}經^{きやう}に云^いく、「是^この大^{だい}涅槃^{ねはん}微^み妙^{みやう}の經^{きやう}典^{てん}・流^る布^ふせらるる処^{ところ}は当^{まさ}に知^しるべし

其^その地^ちは即^{すなわ}ち是^これ金^{こん}剛^{かう}なり是^この中^{ちゆう}の諸^{しよ}人^{にん}亦^{また}金^{こん}剛^{かう}の如^{ごと}し」と。

仁^{にん}王^{わう}經^{きやう}に云^いく、「是^この經^{きやう}は常^{じやう}に千^{せん}の光^{くわう}明^{めい}を放^{はな}ちて千^{せん}里^りの内^{うち}をして七^{しち}難^{なん}起^{おこ}ら

ざらしむと、又^{また}云^いく諸^{もろ}の惡^{あく}比^ひ丘^{きやう}多^たく名^な利^りを求^{もと}め国^{こく}王^{わう}・太^{たい}子^し・王^{わう}子^しの前^{まへ}に於^{おい}て

自^みら破^は仏^{ぶつ}法^{ぽう}の因^{いん}縁^{ねん}・破^は国^{こく}の因^{いん}縁^{ねん}を説^そく其^その王^{わう}別^{わか}えずして此^この語^ごを信^{しん}聴^{ちやう}し

横^{よこ}に法^{ぽう}制^{せい}を作り仏^{ぶつ}戒^{かい}に依^よらず是^{これ}を破^は仏^{ぶつ}・破^は国^{こく}の因^{いん}縁^{ねん}と為^なす」と。

今之これをかんが勘うるに法華經ほけきやうに云いわく「百由旬ひやくゆじゆんの内諸衰患ないしよすいげんなからしむ」と仁王經にんのうきやう

に云いわく「千里せんりの内に七難ひちなん不起おこらしむ」と、涅槃經ねはんきやうに云いわく「当まさに知るべし其その

地すなわは即こち是これ金剛こんかう、是この中の諸人しよにん亦また金剛こんかうの如ごとし」と文。

疑うたがつて云いわく今・此の国土こくどに種種しゆじゆの災難さいなん起おこることを見聞けんもんするに所謂いわゆる建長八

年よ八月いた自だいり正元二年じやげん二月ふたつきに至いたるまで大地震だいじしん非時ひじの大風たいふう・大飢饉ききん・大疫病えきびやう等

種種しゆじゆの災難さいなん連連れんれんとして今に絶えず大體国土だいたいこくどの人数にんずう尽つくく可べきに似たり、之に依よつ

て種種しゆじゆの祈請きしやうを致いたす人之多いしと雖しるも其の驗しるし無なきか、正直捨方便しやうじきしやほうべん・多宝たほうの

証しやう明みやう・諸仏出舌しよぶつしゆつぜの法華經ほけきやうの文ひやくゆじゆんの令百由旬内りやうひやくゆじゆん・雙林最後そうりんさいごの遺言ゆいごんの涅槃經ねはんきやうの

其地金剛そちこんかうの文にんのうきやう、仁王經にんのうきやうの千里せんりの内に七難ひちなん不起おこらしむの文みなこもつ皆虚妄しやだいじやうきやうに似たり如何いかん。

答こたえて云いわく今愚案ぐあんを以もつて之これを勘かんがうるに上に挙あぐる所の諸大乘經しよだいじやうきやう・国土こくどに

在しり而しかも祈請きしやうと成なりらずして災難さいなん起おこることは少し其の故有そのゆゑあるか、所謂いわゆる金光明經こんくわうみやうきやう

に云いわく其の国土こくどに於おいて此の經有いりと雖いも未いまだ嘗たつて流布るふせず捨離しやりの心を生しじ

て聴聞せんことを樂わす我等四王皆悉く捨て去り其の国当に種種の災禍有るべし、大集經に云く「若し国王有つて我が法の滅せんを見て捨てて擁護せざれば其の国内三種の不祥を出さん」と、仁王經に云く「仏戒に依らざる是を破仏・破国の因縁と爲す若し一切の聖人去る時は七難必ず起らん」已上、此等の文を以て之を勸うるに法華經等の諸大乘經・國中に在りと雖も一切の四衆捨離の心を生じて聴聞し供養するの志を起さざる故に國中の守護の善神・一切の聖人・此の国を捨て去り守護の善神聖人等・無きが故に出来る所の災難なり。

問うて曰く國中の諸人・諸大乘經に於て捨離の心を生じて供養する志を生ぜざる事は何の故より之起るや。

答えて曰く仁王經に曰く「諸の惡比丘多く名利を求め国王・太子・王子の前に於て自ら破仏法の因縁・破国の因縁を説かん其の王別えずして此の語を

しんちよう よこしまほうせい
信聴し横に法制を作りて仏戒に依らず」と、法華經に云く「惡世の中の比丘

は邪智にして心諂曲に未だ得ざるをこれ得たりと謂い我慢の心充滿せん是の

人惡心を懷き國王・大臣・婆羅門・居士及び余の諸の比丘に向つて誹謗して

我が惡を説いて是れ邪見の人・外道の論議を説くと謂わん惡鬼其の身に入る」

等と云云。

此等の文を以て之を思うに諸の惡比丘國中に充滿して破國・破佛法の

因縁を説く國王並に國中の四衆弁えずして信聴を加うるが故に諸大乘經

に於て捨離の心を生ずるなり。

問うて曰く諸の惡比丘等・國中に充滿して破國・破仏戒等の因縁を説く

ことは仏弟子の中に出來す可きか外道の中に出來す可きか。

答えて曰く仁王經に云く「三宝を護る者にして轉た更に三宝を滅し破らん

こと師子の身中の虫の自ら師子を食うが如し外道には非ず」文。

此の文の如くんばぶつでし仏弟子の中に於て破国・破仏法の者出来す可きか、問う
て曰く諸の惡比丘・正法を壞るに相似の法を以て之を破らんか当に亦惡法を
以て之を破るべしとせんか、答えて曰く小乗を以て權大乘を破し權大乘
を以て實大乘を破し師弟共に謗法破国の因縁を知らざるが故に破仏戒・破国
の因縁を成して三惡道に墮するなり。

問うて曰く其の証拠如何、答えて曰く法華經に云く仏の方便・隨宜所説の
法を知らずして惡口して顰蹙し数数擯出せられんと。

涅槃經に云く我涅槃の後当に百千無量の衆生有つて誹謗して是の大涅槃を
信ぜざるべし三乗の人も亦復是くの如く無上の大涅槃經を憎惡せん已上。

勝意比丘の喜根菩薩を謗じて三惡道に墮ちし尼思仏等の不輕菩薩を打つて
阿鼻の災を招くも皆大小・權實を弁えざるより之起れり十惡・五逆は愚者
皆罪為ることを知る故に輒く破国・破仏法の因縁を成ぜず、故に仁王經に

云く「其の王別えずして此の語を信聴す」と、涅槃經に云く「若し四重を犯し五逆罪を作り自ら定めて是くの如き重事を犯すと知り而も心に初より怖畏・懺悔無くして肯て発露せず」已上。

此くの如き等の文は謗法の者は自他共に子細を知らざる故に重罪を成して國を破し仏法を破するなり。

問うて曰く若爾らば此の国土に於て權教を以て人の意を取り實教を失う者之有るか如何、答えて曰く爾なり、問うて曰く其の証拠如何、答えて曰く法然上人所造等の選択集是れなり今其の文を出して上の經文に合せ其の失を露顯せしめん若し対治を加えば国土を安穩ならしむ可きか、選択集に云く「道綽禪師・聖道・淨土の二門を立て聖道を捨てて正しく淨土に歸するの文初に聖道門とは之に就て二有り一には大乘二には小乘なり大乘の中に就いて顯密・權實等の不同有りと雖も今・此の集の意は唯顯大及び

権大ごんだいを存ぞんす故ゆえに歴劫迂回りやっこうの行うえに当ある之これに準じゆんじて之これを思おもうに密大みつだい及および実大じつだいを存ぞんすべし、然しかれば則すなわち今真言しんこん・仏心ぶつしん・天台てんだい・華嚴けこん・三論さんろん・法相ほつそう・地論ちろん・撰論じゅうろんこれらはははつはけこ此等の八家の意正こしく此れに在あるなり、曇鸞法師どんらんほふしの往生論おうじゅうろんの注あううに云いく「謹つつしんで竜樹菩薩りゅうじゅぼさつの十住毘婆沙じゅうじゅうびばしやを案あずるに云いく菩薩ぼさつ・阿毘跋致あびばつちを求もとむるに二種の道有なんぎようどうり一いには難行道なんぎようどう二にには易行道いぎようどうなり、此の中に難行道なんぎようどうとは即すなわち是れ聖道門しやうどうもんなり易行道いぎようどうとは即すなわち是れ淨土宗じやうどの學者先がくしやず須すべからく此の旨むねを知しるべし設たい先いず聖道門しやうどうもんを學まなぶ人ひとと雖いえども若もし淨土門じやうどもんに於おいて其の志し有あらん者は須すべからく聖道しやうどうを棄すて淨土じやうどに歸かへすべし」文、又云いく「善導ぜんどう和尚わうじやうしやう正せい雜ざ二行にぎやうを立て雜行そくぎやうを捨すてて正行しやうぎやうに歸かへするの文、第一だいいちに読誦どくじゆぞうぎやう雜行そくぎやうとは上の觀經等かみかんきやうの往生淨土おうじやうじゆどの經を除いいて已外いげ・大小乘だいしやうじやう・顯密けんみつの諸經しよきやうに於おいて受持じゆじ・讀よ誦じゆするを悉ことごとく読誦どくじゆぞうぎやう雜行そくぎやうと名なく、第三だいさんに礼拝らいはい雜行そくぎやうとは上の弥陀みだを礼拝らいはいするを除いいて已外いげ一切諸余いげいつさいしよの仏・菩薩等ぼさつおほ及び諸もろの世天等もろもろせてんに於おいて礼拝恭敬らいはいきやうけいするを悉ことごとく

礼拝雑行と名く」
らいはいそうぎよう なす

ひそか いわ

私に云く此の文を見るに須く雑を捨てて専を修すべし豈百即百生の
すべから しゅう

せんしゅうしようぎよう

せんちゅうむいつ

そうしゅうそうぎよう

あにひやくそくひやくしろう

百生の

専修 正行 を捨てて堅く千中無一の雑修 雑行を執せんや行者能く之を
しゅう せいぎょう けんちゅうむいつの ざっしゅう ざっぎょう せつせんや ぎょうじやよ これ

しりよう

思量せよと。

いわ じようげんにゆうぞうろく

はんにやきよう

ほうじようじゅうぎよう

いた

又云く貞元入蔵録の中・始め大般若經六百卷より 法常住經 に終るま
けんみつ だいじようきよう

で顕密の大乗 經総じて六百三十七部二千八百八十三卷なり皆須く読誦大乘
けんみつ だいじようきよう

みなすべからどくじゆだいじよう

の一句に撰すべし当に知るべし隨他の前には暫く定散の門を開くと雖も隨自
いっく せんすべし とうに知るべし ずいた

の一句に撰すべし

まさ

ずいた

しばら

じようぎん

いえど ずいじ

の後は還つて定散の門を閉づ一たび開きて以後永く閉じざるは唯是れ念仏
の かに じようぎん

の後は還つて定散の門を閉づ

と

一たび開きて以後永く閉じざるは

いこ

ただこ ねんぶつ

の一門なり文、又最後結句の文に云く「夫れ速に生死を離れんと欲せば二種
の しょうほう

の勝法の中に且く聖道門を閣て選んで浄土門に入れ浄土門に入らんと欲せ
しょうほう

しばら

さしおき

すみやかしようじ

はつ

二種の

ば正雑二行の中に且く諸の雑行を抛て選んで正行に歸すべし、」已上
しょうざうにぎよう

せんぢやくしゅう

せんぢやくしゅう

なげう

しょうざう

しょうざう

しょうざう

已上の

選択集の文なり。

せんぢやくしゅう

今之をるに日本國中の上下万人深く法然上人を信じて此の書を**ぶ**故に

無智の道俗此の書の中の捨閉閣拋等の字を見て浄土の三部經・阿弥陀仏より

外は諸經・諸仏・菩薩・諸天善神等に於て捨閉閣拋等の思を作し彼の仏經等

に於て供養受持等の志を起さず還つて捨離の心を生ず故に古の諸大師等の

建立せし所の鎮護國家の道場零落せしむと雖も護惜建立の心無し護惜

建立の心無きが故に亦誦誦供養の音絶え守護の善神も法味を嘗めざるが故に

國を捨てて去り四依の聖人も来らざるなり、偏に金光明・仁王等の一切の

聖人去る時は七難必ず起らん我等四王皆悉く捨去せん既に捨離し已れば其の

國當に種種の災禍有るべしの文に当れり豈諸惡比丘多く名利を求め、惡世の

中の比丘は邪智にして心諂曲の人に非ずや。

疑つて云く國土に於て選択集を流布せしむるに依つて災難起ると云わ

ば此の書無き已前は國中に於て災難無かりしか、答えて曰く彼の時も亦災難

有り云く五常を破り仏法を失いし者之有りしが故なり所謂周の宇文・元嵩等
是なり、難じて曰く今の世の災難五常を破りしが故に之起ると云わば何ぞ必
ずしも 選択集 流布の失に依らんや、答えて曰く仁王經に云く「大王・未
來の世の中に諸の小王・四部の弟子諸の惡比丘横に法制を作りて仏戒に依
らず亦復佛像の形・仏塔の形を造作することを聽さず七難必ず起らん」と、
金光明經に云く、供養し尊重し讚歎せず其の国に當に種種の災禍有るべし」
涅槃經に云く「無上の大涅槃經を憎惡す」等と云云、豈弥陀より外の諸仏・
諸經等を供養し禮拜し讚歎するを悉く雜行と名くると云うに當らざらんや、
難じて云く仏法已前国に於て災難有るは何ぞ謗法の者の故ならんや、答えて
云く仏法已前に五常を以て国を治むるは遠く仏誓を以て国を治むるなり礼義
を破るは仏の出したまえる五戒を破るなり、問うて云く其の証拠如何、答え
て曰く 金光明經に云く、一切世間の所有る善論は皆此の經に因ると、法華經

に云く「若し俗間の經書・治世の語言・資生の業等を説かんと皆正法に順ず」と普賢經に云く「正法をもつて國を治め人民を邪枉せず是れを第三懺悔を修すと名く」と、涅槃經に云く「一切世間の外道の經書は皆是れ仏説なりげどう外道の説に非ず」と、止觀に云く「若し深く世法を識れば即ち是れ佛法なり」と、弘決に云く「礼樂前に駢せて真道後に啓く」と、広釈に云く「仏三人を遣して且く震旦を化す五常以て五戒の方を開く昔は太宰・孔子に問うて云くさんこう・ごてい三皇・五帝は是れ聖人なるか孔子答えて云く聖人に非ず又問う夫子是れ聖人なるか亦答う非なり又問う若し爾らば誰か聖人なる、答えて云く吾聞く西方に聖有り釈迦と号く」文。

此等の文を以て之を勘うるに仏法已前の三皇・五帝は五常を以て國を治むかのけつ夏の桀・殷の紂・周の幽等の礼義を破りて國を喪すは遠く仏誓の持破に当れり。

うたがい 疑つて云く若し爾らば法華・真言等の諸大乘經を信ずる者は何ぞ此の

難に値えるや、答えて曰く「金光明經に云く「枉げて辜無きに及ばん」と、

法華經に云く「横に其の殃に羅る」等と云云、此等の文を以て之を推するに

法華真言等を行ずる者も未だ位深からず信心薄く口に誦すれども其の義を知

らず一向名利の爲に之を誦す先生の謗法の失未だ尽きず外に法華等を行じて

内に選択の心を存す此の災難の根源等を知らざる者は此の難を免れ難きか。

疑つて云く若し爾らば何ぞ選択集を信ずる謗法者の中に此の難に値わ

ざる者之有りや、答えて曰く業力不定なり順現業は法華經に云く此の人現世

に白癩の病乃至諸の悪重病を得んと、仁王經に云く「人・仏教を壞らば

復孝子無く六親不和にして天神祐けず疾疫惡鬼日に來りて侵害し災怪首尾し

連禍せん」と、涅槃經に云く「若し是の經典を信ぜざる者有らば若し臨終

の時・或は荒乱に値い刀兵競い起り帝王の暴虐・怨家の讎隙に侵逼せられ

ん「已上、順次生業は法華經に云く、若し人信ぜずして此の經を毀謗せば其の人命終して阿鼻獄に入らん」と、仁王經に云く「人・仏教を壞らば死して地獄・餓鬼・畜生に入らん」已上、順後業等は之を略す。

問うて曰く如何にして速かに此の災難を留む可きや、答えて曰く速に謗法の者を治す可し若し爾らずんば無尽の祈請有りと雖も災難を留む可からざるなり、問うて曰く如何が対治す可き、答えて曰く治方亦經に之有り涅槃經に曰く仏言く唯一人を除いて余の一切に施せ正法を誹謗して是の重業を造る唯此くの如き一闡提の輩を除いて其の余の者に施さば一切讚嘆すべし已上、

此の文の如んば施を留めて対治す可しと見えたり此の外にも亦治方是れ多く具に出すに暇あらず、問うて曰く謗法の者に於て供養を留め苦治を加うるは罪有りや不や、答えて曰く涅槃經に云く、今無上の正法を以て諸王・大臣・宰相・比丘・比丘尼に付属す正法を毀る者は王者・大臣・四部の衆當に苦治すべ

し尚罪有ること無けん已上。なかつみあ

問うて曰く汝僧形を以て比丘の失を顕すは罪業に非ずや、いわ なんじそつじょう もつ びく とが あらわ 答えて曰く

涅槃經に云く「若し善比丘あつて法を壞る者を見て置いて呵責し駈遣し挙処ねはんぎょう いわ も ぜんびく やぶ かしやく くれん こじよ

せざれば当に知るべし是の人は仏法の中の怨なり若し能く駈遣し呵責し挙処まさ まさ こ でし しやうもん ぶつほう あだ も よ くれん かしやく こじよ

せば是れ我が弟子真の声聞なり」已上、予此の文を見るが故に仏法中怨のこ まぬか ため けんもん はば ほつねんしやうにん しよけ あ びだいじやう

責を免れんが為に見聞を憚からずして法然上人並に所化の衆等の阿鼻大城お べ よし しやう どうり と どうぞく えしん

に墮つ可き由を称す、此の道理を聞き解く道俗の中に少少は廻心の者有りお べ よし しやう どうり と どうぞく えしん

若し一度高覽を経ん人は上に挙ぐる所の如く之を行ぜずんば大集經の文のも ひとたびこうらん へ あ こと これ だいしつきやう

若し国王有つて我が法の滅せんを見て捨てて擁護せざれば無量世に於ても こくおう せかいえ しゆう ことこと みなめつしつ そ ぶしやう いだ ないし

施戒慧を修すとも悉く皆滅失して其の国の内に三種の不祥を出さん乃至みようじゆう だいじこく きもん がた 仁のうきやう いわ も

命終して大地獄に生ぜんとの記文を免かれ難きか、仁王經に云く「若し王みようじゆう だいじこく きもん がた 仁のうきやう いわ も

の福尽きん時は七難必ず起らんと、此の文に云く、無量世に於て施戒慧を修すつ ひちなん おこ いわ むりやうせ おい せかいえ しゆう

とも悉く皆滅失す」等と云云、此の文を見るに且く万事を闇いて先ず此の災難さいなんの起る由を勘かんう可べきか若もし爾しからざれば弥いよいよまたかさ亦重さいなんねて災難起る可べきか、愚勘おろかは是かくくの如ごとし取捨しゅしゃは人の意に任まかす。

八 念佛者追放せしむる宣旨御教書五篇に集列しゅうれつする勘文状かんもんじょう

正元元年 三十八歳御作 86P

夫れ以みれば仏法流布の砌みぎりには天下静謐てんがせいひつなり神明仰崇しんみょうきょうそうの界には国土豊饒こくどぶにようなり、之に依よつて月氏がつしより日域にちいきに覃およんで君王じんみんより人民いたに至るまで此の義改しかむること無なき職として然しかり。

爰こゝに後鳥羽院ごとばいんの御宇ぎように源空法師げんくうほっしと云いう者ものあり道俗どうぞくを欺あざむくが故ゆゑに専修せんしゅうを興おこしけんみつて顕密けんみつの教理きようりを破はし男女なんよを誑たぶらかすが故ゆゑに邪義じゃぎを構かまえて仏神ぶつしんの威光いこうを滅いし常しじゅうに四衆いざなを誘いつて云いく、浄土三部じようどの外しじゅうきようは衆經しゆきやうを棄置きちすべし唱名しやうみやう一行いっけいの外おは余行よきやうを廃退はいたいすべし矧いんや神祇冥道しんぎみやうどうの恭敬きやうけいに於おておや況いんや孝養報恩いの事善じぜんに於おて

おや之これを信ぜざる者は本願ほんがんを疑うたがいうなりと、爰ここに頑愚がんぐの類たぐいは甚深じんじんの妙典みょうてんを
輕慢きようまんし無智むちの族やからは神明しんみようの威徳いとくを蔑如べつじよす、就なかんずく中止觀遮那しかんしゃなの学窓がくそうに臨のぞむ者は
出離しゆつりを抑おさゆる癡人ちじんなり三論さんろん・法相ほつそうの稽古けいこを励はげむ者は菩提ぼだいを塞ふさぐ証人しやうにんなりと云。
云。

之よに依ぶつつて仏法日ぶつぽうに衰おとろえ迷執めいしゅう・月に増しす然かる間なん・南都北嶺なんとほくりようの明德めいとく・奏聞そうもん
を経て天聰てんちように達するの刻きざみ・源空げんくうが過咎遁かぐのがれ難がたきの間遠流おんるの宣せんを蒙こうむり配所はいしよ
の境おもむおわに赴そき畢もんんぬ、其そのの後門徒猶勅命もんとなのおちよくめいを憚はばからずして、弥いよいよ專修せんしゅうを興おこするこ
と殆ほとんど先代せんだいに超こえたり違勅いちよくの至ゆえり責かさめても余かり有あり故ゆえに重かねて專修せんしゅうを停廢ていはいし
源空げんくうの門徒もんを流罪るざいすべきの由りんげんしきり・綸言頻かんとうに下ごる又關東ごけちの御下知ちよくせん・勅宣あいそに相添
う。

門葉等もんようは遁のがるべきの術うしなを失あるい・或さんりんは山林るろうに流浪あるし・或えんこくは遠国とういんに逃隱しかす、爾しか
てより華夷かい・称名しょうみようを抛なげうちて男女なんよ・正説せいせつに歸しする者かなり然しるに又近來きんらい先規せんきを

わきま
弁えざるの輩やからぶつしん、仏神を崇めざるの類たぐい再び専修せんしゅうの行を企て猶邪惡を増すこと
はなはだ
甚し。

にちれん ふしょう
日蓮不肖なりと雖も且は天下の安寧を思うが為且は仏法の繁昌を致さんが
ため ながら せんけん ことば せんぜつ しょうみょう
為に強ちに先賢の語を宣説し 称名の行を停廃せんと欲し又愚懷の勸文を添
すこぶ じゃにん まんどう
え頗る邪人の慢幢を倒さんとす、 勸注の文繁くして見難し知り易からしめん
ため しょう
が為に要を取り諸を省き略して五篇を列め、 委細の旨は広本に在くのみ。

そつじょう
奏 状 篇 詮を取りて之を注す委くは広本に在り

なんと そつじょう いわ
南都の奏 状に云く。

一、 謗人謗法の事

げんくう けんみつ しょうしゅう
右源空・顕密の諸宗を軽んずること土の如く沙の如く智行の高位を蔑ろに
すること ぎ こと しょう こと じさん
すること 蟻の如く 螻の如し、 常に自讃して曰く 広く一代 聖教を見て知れる
は我なり 能く 八宗の精微を解する者は我なり 我諸 行を捨つ 況や余人に於て

おやと、愚癡ぐちの道俗だうぞく之これを仰あおぐこと仏ほとけの如ごとく弟子でしの偏へん執しゅう遥うはるに其その師こに超こえ檀那だんなの邪見じゃけん弥いよいよ本説ほんせつに倍いってんし一天いつてん四海しかい漸ようく以もつて 事ことの奇特きとくを聞きこくに驚おどろかずんば有ある可べからず其その中殊ことに法華ほつけの修行しゆぎようを以もつて専修せんしゅうの讐敵しゅうてきとなす、或あるは此この經きやうを読む者は皆地獄みなじごくに墮だすと云いい・或あるは其その行ぎやうを修しゆせん者は永しやうじく生死とどに留とどまると云いい・或あるは僅わずかに仏道ぶつどうの結縁けちえんを許ゆるし・或あるは都すべて浄土じやうどの正因しやういんを嫌きらう、然しかる間かん・本八軸ほんはちしゆ十軸じゆの文ぶんを誦じゆし千部万部せんぶばんぶの功こうを積つめる者ものも永もつく以もつて廃退はいたいし剩あまつさえ前非ぜんびを悔くゆ、捨すつる所ところの本行ほんぎやうの宿習しゆくじゆつは実じつに深くく企くつる所ところの念仏ねんぶつの薰習くんじゆつは未いまだ積つまず中途ちゆうとに天あを仰あいで歎息たんそくする者もの多おほし、此この外ほか般若はんにや・華嚴けごんの帰依きえ真言しんごん・止觀しかんの結縁けちえん十じゆの八九み皆棄置きちす之これを略りやくす。

一、靈神れいしんを蔑如べつじよする事

右・我あしたが朝あしたは本こ是しんこくれ神国ひやくおうなり百王びやうえい・彼うの苗裔しがいそを承かけて四海しかい其その加護かごを仰あぐ、而しかに専修せんしゅうの輩やから永しんみく神明しんみを別わえず權化ごんげ・実類じつるいを論ろんぜず宗廟そうびやう・祖社そしや

を恐れず若し神明を憑まば魔界に墮すと云云。

実類の鬼神に於ては置いて論ぜざるか権化の垂迹に至つては既に是れ大聖

なり、上代の高僧皆以て帰伏す行教和尚・宇佐の宮に参るに釈迦三尊の影月

の如くに顕れ仲算大徳・熊野山に詣ぬるに飛滝千仞の水・簾の如くに巻く、

凡そ行基・護命・増利・聖宝・空海・最澄・円珍等は皆神社に於て新に靈異

を感じ是くの若きは源空に及ばざるの人か又魔界に墮つ可きの類か之を略す。

山門の奏状に云く。

一、一向専修の党類神明に向背する不当の事。

右・我が朝は神国なり神道を敬うを以て国の勤めと為す謹んで百神の本

を討めるに諸仏の迹に非ること無し、所謂伊勢大神宮・八幡・加茂・日吉・

春日等は皆是れ釈迦・薬師・弥陀・観音等の示現なり各宿習の地をトめ

専ら有縁の儀を調う乃至其の内証に随いて彼の法施を資け念誦読経神に

依つて事異なり世を挙げて信を取り人毎に益を被る、而るに今専修の徒・事を念仏に寄せて永く神明を敬うこと無し、既に国の礼を失い仍神を無するの咎あり、当に知るべし有勢の神祇定めて降伏の眸を回らして睨みたまわん之を略す。

一、一向専修和漢の例・快からざる事

右・慈覚大師の入唐巡礼記を按ずるに云く唐の武宗皇帝・会昌元年章敬寺の鏡霜法師に勅令して諸寺に於て弥陀念仏の教を伝え寺毎に三日巡輪して絶えず同じく二年・廻鶻国の軍兵等・唐の界を侵す同じく三年河北の節度使・忽ち乱を起す其の後大蕃国更に命を拒む廻鶻国重ねて地を奪いぬ、凡そ兵乱秦項の代に同じく災火邑里の際に起る何に況や武宗大に仏法を破し多く寺塔を滅す撥乱すること能わずして逐に以て事有り已上取意、是れ則ち恣に浄土の一門を信じて護国の諸教を仰がざるに依つてなり而るに吾朝

一向專修を弘通してより以来・国衰微に属し俗多く艱難す已上之を略す、又云く
音の哀樂を以て国の盛衰を知る詩の序に云く治世の音は安んじて以て楽しむ
其の政和げばなり乱世の音は怨んで以て怒る其の政・乖けばなり亡国の音は
哀んで以て思う其の民・困めばなりと云云、近代念仏の曲を聞くに理世撫民
の音に背き已に哀慟の響を成す是れ亡国の音なる可し 是四、已上奏状。

山門の奏状詮を取る此の如し。

又大和の莊の法印俊範・宝地房の法印宗源・同坊の永尊賢者並に僧都と云う
源空が門徒を対治せんが為に各各子細を述べ其の文・広本に在り、又諸宗の
明德面に書を作りて選択集を破し專修を対治する書籍世に伝う。

宣旨篇

南都北嶺の訴状に依つて專修を対治し行者を流罪す可きの由度度の宣旨
の内・今は少を載せ多を省く委くは広本に在り。

永尊えいそん賢者けんじゃの状じやうに云いく彈選だんせん択たく等じやう上送じやうそうせられて後ご・山上さんじやうに披露ひろす彈選だんせん択たくに
於おいては人毎ひとごとに之これを翫もてあそび顯選けんせん択たくは諸人しよにん之これを謗ほうず法然ほうねん上人しやうにんの墓所ぼしよは感神院かんじんいんの
つめそ
犬神人いぬかみに仰おほけて之これを破は卻やくせしめ畢おわぬ其その後奏聞そうもんに及さいんで裁許さいきよを蒙こり畢おわぬ、
七月しちがつの月上旬はうしやうじに法勝寺ほふしやうじの御八講ぎやうの次山門さんもんより南都なんとに触いれて云いく清水寺きよみずでら祇園ぎおんの辺
南都山門なんとさんもんの末寺まつじたるの処ところに専修せんしゆの輩身やからを容そうれし草菴そうあんに於おいては悉ことごとく破は卻やくせし
め畢おわぬ其その身みに於おいては使し庁ちやうに仰おほけて之これを搦からめ取らるるの間あい・礼讃れいさんの聲こゑ・
黒衣こくゐの色いろ・京洛きやうりやくの中に都すべもつとど畢おわぬ、張本ちやうほん三人流罪さんりゆうざいに定めらると
雖いえども逐電ちくでんの間いま・未はいだ配所はいしよに向むかはず山門さんもん今いまに訴もつえ申もうし候こうなり。

此この十一日じふいちにちの僉議せんぎに云いく法然房ほうねんぼう所造しよぞうの選せん択ちやくは謗法ほうぽうの書しよなり天下てんがに之これを止とどめ
置おく可べからず仍よつて在ざい在所ざいしよの所持しよじ並そに其いんの印板いんぱんを大講堂だいこうどうに取り上げ三さん世ぜの
仏恩ぶつおんを報ほうぜんが為ために焼失しやうしつすべきの由そうもん・奏聞そうもん仕しり候こうい畢おわぬ重かさねて仰おほせ下くだされ
候こうか、恐きやう恐きやう。

嘉禄三年十月十五日

専修念仏の張本 成覚法師讃岐の大手嶋に経回すと云云実否分明ならず

慥に 知を加えらる可きの由・山門の人人申す相尋ね申さしめ給う可きの由

殿下の御気色候う所なり仍つて執達件の如し。

嘉禄三年十月二十日

参議範輔在

り判

修理権亮殿

関東より宣旨の御返事

隆寛律師の事、右大弁宰相家の御奉書披露候い畢んぬ、件の律師去る七月

の比・下向せしむ鎌倉近辺に経回すると雖も京都の制符に任せ念仏者を追放

せらるるの間奥州の方へ流浪せしめ畢んぬ云云、早く在所を尋ね搜して仰せ

下さるるの旨に任せ対馬の嶋に追遣可きなり、此の旨を以て言上せしむ可き

の状かまくら鎌倉殿の仰おおせに依よつて執達しつたつくだん件の如ごとし。

嘉禄三年十月十五日

武蔵守在り判

さがみのかみ

相模守在り判

掃部助殿

修理亮殿

專修念仏せんしゅうねんぶつの事、停廢ていはいの宣下重せんげちようじよう 疊ひその上偷なおりかに尚興行なおりこうぎようするの条・更に公家くげ

の知ししめす所しよにあらず偏ひとえに有司ゆうしの怠慢たいまんたり早く先符せんぶに任まかせて禁遏きんあつせらる可べし、

其の上衆徒ししゆとの蜂起ほうきに於おいては宜よろしく制止せいしを加えしめ給たまうべし天氣てんきに依よつて言上ごんじよう

件の如くだんごとし、信盛のぶもり・頓首とんしゅき恐惶きようこう謹言

嘉禄三年六月二十九日

左衛門権佐信盛奉

進上てんだいざす 天台座主大僧正御房政所そうじようこほうまんどころ

右弁官下す

延暦寺

早く僧の隆寛・幸西・空阿弥陀仏の度縁を取り進すべき事の書・権大納言
源朝臣雅親・勅を宣奉するに件の隆寛等の坐せらるること配流宜く彼の
寺に仰せて度縁を取り進せしむ可し、者れば宜く承知して宣に依つて之を行
うべし違失ある可からず。

嘉禄三年七月六日

左太史小槻宿禰在り判

左少弁藤原朝臣在り判

大政官の符・五畿内の諸国司まさに宜く専修念仏の興行を停廃し早く
隆寛・幸西・空阿弥陀仏等の遺弟の留まる処に禁法を犯す所の輩を捉え搦
むべきの事。

弘仁聖代の格条・眼に在り左大臣・勅を宣奉し宜く五畿・七道に課せて
興行の道を停廃し違犯の身を捉え搦むべし、者れば諸国司宜く承知して宣に
依つて之を行え符・到らば奉行を致せ。

嘉禄三年七月十七日

修理右宮城使正四位下行右中弁藤原朝臣

修理東大寺大仏長官正五位下左大史兼備前権介小槻宿禰

専修念仏興行の輩停止す可きの由五畿・七道に宣下せられ候い畢んぬ、

且つは御存知有る可く候、者れば綸言此の如し之を悉にせよ、頼隆・

誠恐頓首謹言。

嘉禄三年七月十三日

右中弁頼隆在り判

進上 天台座主大僧正御房政所

隆寛・対馬の国に改めらる可きの由宣下せられ畢んぬ、其の由御下知有る

可きの旨仰せ下さる所に候なり此の趣を以て申し入れしめ給う可きの状・

件の如し。

右中弁頼隆在り判

中納言律師御房

りゆうかんりっしせんしゅう ちようほん
隆寛律師專修の張本たるに依つて山門より訴え申すの間、陸奥に配流せられ畢んぬるに衆徒尚申す旨有り仍つて配所を改めて対馬の嶋に追い遣らる可きなり、当時東国の辺に経回すと云云不日に彼の島に追い遣らる可きの由関東に申さる可し、者れば殿下の御氣色に依つて執達件の如し。

かるく
嘉禄三年九月二十六日

さんぎ
参議在り判

しゅりこんのすけ
修理権亮殿

せんしゅうねんぶつ
專修念仏の事、京畿七道に仰せて永く停止せらる可きの由先日宣下せられ候い畢んぬ、而るに諸国に尚其の聞え有りと云云、宣旨の状を守りて沙汰致す可きの由・地頭守護所等に仰付けらる可きの由・山門訴え申し候・御下知有る可く候、此の旨を以て沙汰申さしめ給う可きの由・殿下の御氣色候所なり、仍つて執達件の如し。

かるく
嘉禄三年十月十日

さんぎ
参議在り判

武蔵守殿
むさしのかみ

嵯峨に下されし院宣
さが いんせん

近頃破戒不善の輩嚴禁に拘わらず猶專修念仏を企つるの由其の聞え有り、
しかせんしほうげん やからげんきん かなか なおせんしゅうねんぶつ くわた
而るに先師法眼存日の時・清涼寺の辺に多く以て止住すと云云、遺跡を相繼
ぎて若し同意有らば彼の寺の執務縦い相承の理を帶すとも免許の義有る可か
も どうい しつむたと そうじよう めんきよ あべ
らざるなり、早く此の旨を存して禁止せしめ給う可し院宣此くの如し仍つて
しつたつくだんごと せいのめをぞんじて さんし たま べ いんせんか ことよ
執達件の如し。

建保七年二月四日
けんぽ けんね

按察使在り判
あぜち

治部卿律師御房
じぶきょうりっしごぼう

謹んで請う院宣一紙
つし こう いんせん

右当寺四至の内に破戒不善の專修念仏の輩法に任せて制止ある可く候更
もつ あべ はかいふぜん せんしゅうねんぶつ やから まか せいし
に以て芳心有る可からず候、若し猶寺家の力に拘わらずんば事の由を申し上
もつ なお かか よし もう

ぐ可く候、謹んで請くる所件の如し。

建保七年閏二月四日

権律師良暁

左弁官下す 綱所

まさに諸寺の執務人に下知して専修念仏の輩を糾断せしむべき事。

右左大臣勅を宣奉す、専修念仏の行は諸宗衰微の基なり、仍つて去る建永

二年の春・嚴制五箇条の裁許を以てせる官符の施行先に畢んぬ、傾く者は進

んでは憲章を恐れず退いては仏勅を憚からず・或は梵宇を占め・或は聚落

に交わる破戒の沙門党を道場に結んで偏に今按の佯を以てす仏号を唱えん

が為に妄りに邪音を作し將に蕩して人心を放逸にせんとす、見聞満座の処に

は賢善の形を現すと雖も寂寞破の夕には流俗の睡りに異ならず是れ則ち発

心の修善に非ず濫行の奸謀を企つるなり豈仏陀の元意僧徒の所行と謂わん

や。

宜しく有司に仰せて慥に糾断せしむべし若し猶違犯の者は罪科の趣き一に
先符に同じ但し道心修行の人をして以て仏法違越の者に濫ぜしむること莫れ
更に弥陀の教説を忽せにするに非ず只釈氏の法文を全からしめんとなり、兼て
は又諸寺執務の人五保監行の輩聞知して言わずんば与同罪會つて寛宥せざ
れ、者れば宜しく承知して宣旨に依つて之を行ふべし。

建保七年閏二月八日

太史小槻宿禰在り判

謹んで請く 綱所

宣旨一通載せらるるはまさに諸寺の執務人に下知して専修念仏の輩を糾断
せしむべき事。右宣旨の状に任せ諸寺に告げ触る可きの状謹んで請くる所
件の如し。

建保七年閏二月二十二日之を行ふ。

頃年以來無慚の徒・不法の侶・如如の戒行を守らず処処の嚴制を恐れず

ほしいまねんぶつ　べつしゅう
恣に念仏の別宗を建て猥りに衆僧の勤学を謗ず、しかのみならず内には
もうしゅう
妄執を凝らして仏意に乖き外には哀音を引いて人心を蕩かす遠近併ら専修
の一行に帰し緇素殆んど顕密の両教を褊す仏法の衰滅而も斯に由る自由の
かんあく
奸悪・誠に禁じても余り有り。

これ　も　つきようがほつし　おい　ほんげん　たす　おんる
是を以て教雅法師に於ては本源を温ねて遠流し此の外・同行の余党等慥か
そ　ていど　ていはい　ことごとそ　らくよう　ついきやく　ただ　ある
に其の行を帝土の中に停廃し悉く其の身を洛陽の外に追　卻せよ但し・或は
じぎよう　ある　けた　ため　しんせんねんによほうしぎよう　やから　おい
自行の為・或は化他の為に至心専念如法修行の輩に於ては制の限りに
あ　在らず。

てんぶく
天福二年六月晦日

ふじわらちゅうなごんこんべんたてまつ
藤原中納言権弁奉る

てんぶく
天福二年文暦と改む四條院の御宇後堀河院の太子なり、
むさし　にゅうどう
武蔵前司入道殿の御時。

ぎおん　しつこう　おお
祇園の執行に仰せ付けらるる山門の下知状。

たいしゅう　せんぎ　いわ　せんしゅうねんぶつ　てんが　はんじょう　こ　すなわ　きんねんさんもんぶさた
大衆の僉議に云く専修念仏者天下に繁昌す是れ則ち近年山門無沙汰の

いた
致す所なり、くだん 件の族は八宗はつしゅう 仏法の怨敵おんてき なり円頓行者えんどんぎょうじや の順魔じゆんま なり、先ず京都きょうと
おうへん 往返たぐい の類・在家ざいけしやう 称名おひ の所に於ては例に任せまか 犬神人つのめそう に仰せておほ 宜しく停止よろ せし
むべし云云、者れば大衆たいしゅう 僉議せんぎ の旨斯くむねか の如し早く先例せんれい に任せまか 犬神人等つのめそう に仰せ
含めて専修念仏者せんしゅうねんぶつ を停止ていし せしめ給う可し云云、恐恐きょうきょう 謹言きんげん。

延応二年五月十四日
公文勾当審賢

四条院の御宇武蔵前司殿の御時。
謹上 祇園の執行法眼御房

お 逐つて申す、去る夜・大衆たいしゅう 僉議せんぎ して先ず此の異名いみよう に於て殊に犬神人おひ に付けて
これ 之を責む可きの由仰せ含めぬ仍よ つて実名これ 之を獻ず、専修念仏せんしゅうねんぶつ の張本ちやうほん の事・
ゆいぶつ 唯仏・鏡仏・智願・定真・円真・正阿弥陀仏・名阿弥陀仏・善慧・道弁・
しんによ 真如堂狼藉ろつぜき の張本ちやうほん なり已上、唐橋油小路並に八条大御堂六波羅からはしのあぶらこうじ の総門そうもん の向
いの堂・已上・当時興行とうじこうぎやう の所なり。

延暦寺 別院 雲居寺 早く一向専修の悪行を禁断す可き事

右頃年けいねん以来、愚蒙ぐもうの結党けつどう・の会衆かいしゅうを名けて専修せんしゅうと曰いい、閭てんりよに旁あまねし心

に一分いちぶんの慧解えげ無く口くちに衆罪しゅうざいの悪言あくげんを吐はき言ことを一念いちねん十声じゅうしの悲願ひがんに寄あせて敢あて

三毒さんどく五蓋ごがいの重悪じゅうあくを憚はばからず盲暝もうみょうの輩やから是非ぜひを弁わきまたず唯情ただに順もずるを以もて多おく

愚誨ぐかいに信伏しんぷく、持戒修善じかいしゅうぜんの人を笑わらつて之これを雜行ぞうぎょうと号なづし鎮国護王ちんこくごおうの教しゆを謗そり

之これを魔業まぎようと称しょうす諸善しよぜんを擯棄ひんきし衆惡しゅうあくを選せん択ちやくし罪つみを山岳さんかくに積ほうみ報ないりを泥梨にりに

招まねく毒氣どつき深く入いつて禁なじても改ひとえむること無なく偏よくらくに欲樂たしなを嗜みずかんで自みら止とむこと

能あたわず、猶蒼蠅なうそうようの唾つばきの爲ために黏ねさるるが如ごとく、何なんぞ狂狗きやうくの雷いかずちを逐おつて走るに

異ほしならん、恣しままに三寸さんすんの舌しゆじようを振がんもくいて衆生しゆじようの眼目がんもくを抜き五尺ごせきの身を養やしなわんが

爲ために諸仏しよぶつの肝心かんじんを滅めつす、併しかしながただぶつばうえんまに只ただ仏法ぶつぽうの怨魔えんまと爲なり専もつら緇門しもんの妖怪ようかいと謂おもつ可可し。

是これを以もて邪師じゃし存生ぞんしの昔むかしは永えいく罪条ざいじように沈めみ、滅後めつごの今いまは亦屍骨またしこつを刎はねそる其その

徒じゆうれん・住蓮あんらくと安樂あんらくとは死げんやを原野たまに賜じようい成覚さつじようと薩生さつじようとは刑おんるを遠流こおむに蒙かりぬ此この

現罰げんばちを以もて其その後報ほうを察さす可べし、方まさに今且かつは釈尊しゃくそんの遺法まもを護まもらんが爲かつ且かつは

衆生の塗炭を救わんが為に宜く諸国の末寺・莊園・神人・寄人等に仰せて
重ねて彼の邪法を禁断すべし縦い片時と雖も彼の凶類を寄宿せしむ可からず
縦い一言と雖も其の邪説を聴受す可からず、若し又山門所部の内に専修
興行の輩有らば永く重科に処して寛宥有ること勿れ、者れば三千衆徒の僉議
に依つて仰す所・件の如し。

延応二年

山門申状

近来二つの妖怪有り人の耳目を驚かす所謂達磨の邪法と念仏の哀音とな
り。

顕密の法門に属せず王臣の祈請を致さず誠に端拱にして世を蔑り暗証にし
て人を軽んず小生の浅識を崇めて見性成仏の仁と為し耆年の宿老を笑う
て螻蟻の類に擬す論談を致さざれば才の長短を表さず決拭に交らざれ

ば智の賢愚を測らず、唯牆壁に向うて独り道を得たりと謂い三依纔に紆い七慢専ら盛なり長く舒卷を抛つ附仏法の外道吾が朝に既に出現す、妖怪の至り慎まずんばあるべからず何ぞ強ちに亡国流浪の僧を撰んで伽藍伝持の主と為さんや。

御式目に云く右大將家以後代代の將軍並に二位殿の御時に於ての事一向に御沙汰を改ること無きか、追加の状に云く嘉祿元年より仁治に至るまで御成敗の事正嘉二年二月十日評定、右自今以後に於ては三代の將軍並に二位家の御成敗に準じて御沙汰を改むるに及ばずと云云。

念仏停廢の事、宣旨御教書の趣き南都北嶺の状粗此くの如し、日蓮・弱為りと雖も勅宣並に御下知の旨を守りて偏に南北明哲の賢懷を述べ猶此の義を棄置せらるるに非ずんば綸言徳政を故らる可きか將た御下知を仰せらるる可きか、称名念仏の行者又賞翫せらるると雖も既に違勅の者なり関東の

ごかんきいま めんきよ ことむ なん ほしいままかんとつ きんじゆう くわだ なかんずくむさし
御勘気未だ御免許をも蒙らず何ぞ恣に 関東の近住を企てんや、就 中武蔵前
ごけち
司殿の御下知に至りては三代の將軍並に二位家の御沙汰に準じて御沙汰を改
あべ
むること有る可からずと云云。

しか ねんぶつ いすれ いせい よ せんじ そむ あら ごけち けいべつ
然るに今、念仏者何の威勢に依つてか宣旨に背くのみに非ず御下知を輕蔑
かさ しょうみょうねんぶつ せんしゅう けつこう
して重ねて 称名 念仏の専修を結構せん人に依つて事異なりと云う此の謂在
なん ほしいままかいじゅうおう きようかい いた
るか、何ぞ恣に 華夷縦横の経回を致さんや。

かんもん ねんぶつ ついほうせんじみきようじよ
勘文篇 念仏者追放宣旨御教書の事

九 念仏無間地獄抄 けんちよう
建長七年 三十四歳御作 97P

ねんぶつ むげんじこく ごついん ほけきよう じようぶつとくどう じきろ じようど
念仏は無間地獄の業因なり法華経は成仏得道の直路なり早く浄土宗を捨て
ほけきよう たも しょうじ ぼだい べ ほけきよう ひゆほん いわ もしひと
法華経を持ち生死を離れ菩提を得可き事・法華経第二譬喩品に云く「若人信
ぜずして此の経を毀謗せば、即ち一切世間の仏種を断ぜん、其の人命終し
あびこく いっこう ぐそく つ またうま かく こと てんでん
て阿鼻獄に入らん、一劫を具足して劫尽きなば更生れん、是くの如く展転し

て無數劫に至らんむしゅこう いた「云云此の文の如くんば方便の念仏を信じて真実の法華を
信ぜざらん者は無間地獄に墮つ可きなり念仏者云く我等が機は法華經に及ば
ざる間・信ぜざる計りなり毀謗する事はなし何の科に地獄に墮つ可きか、
ほつけしゅういわ 法華宗云く信ぜざる条は承伏なるか、次に毀謗と云うは即不信なり信は道の
みなもとくどく 源 功德の母と云へり菩薩の五十二位には十信を本と爲し十信の位には
信心を始と爲し諸の惡業煩惱は不信を本と爲す云云、然ば譬喩品の十四誹謗
も不信を以て体と爲せり今の念仏門は不信と云い誹謗と云い争か入阿鼻獄の
句を遁れんや、其の上浄土宗には現在の父たる教主 釈尊を捨て他人たる
あみだぶつ 阿弥陀仏を信ずる故に五逆罪の咎に依つて必ず無間・大城に墮つ可きなり、
經に今・此の三界は皆是我有なりと説き給うは主君の義なり其の中の衆生
悉く是れ吾子と云うは父子の義なり而るに今・此の処は諸の患難多し、
ただわれひとりよ 唯我一人能く救護を爲すと説き給うは師匠の義なり而して釈尊付屬の文に此

法華經をば付属有在と云云何れの機か漏る可き誰人か信ぜざらんや、而るに
浄土宗は主師親たる教主釈尊の付属に背き他人たる西方極樂世界の阿弥陀
如来を憑む故に主に背けり八逆罪の凶徒なり違勅の咎遁れ難し即ち朝敵な
り争か咎無けんや、次に父の釈尊を捨つる故に五逆罪の者なり豈無間地獄に
墮ちざる可けんや、次に師匠の釈尊に背く故に七逆罪の人なり争か惡道に
墮ちざらんや此の如く教主釈尊は娑婆世界の衆生には主師親の三徳を備て
大恩の仏にて御坐す此の仏を捨て他方の仏を信じ弥陀薬師・大日等を憑み
奉る人は二十逆罪の咎に依つて惡道に墮つ可きなり、浄土の三部經とは
釈尊一代五時の説教の内第三方等部の内より出でたり、此の四卷・三部の
經は全く釈尊の本意に非ず三世諸仏出世の本懷にも非ず唯暫く衆生誘引の
方便なり譬えば塔をくむに足代をゆふが如し念仏は足代なり法華は宝塔なり
法華を説給までの方便なり法華の塔を説給て後は念仏の足代をば切り捨べき

なり、然るに法華經を説き給つて後念仏に執著するは塔をくみ立て後足代
に著して塔を用ざる人の如し豈違背の咎無からんや、然れば法華の序分・
無量義經には四十余年未顕真実と説給て念仏の法門を打破り給う、正宗
法華經には正直捨方便・但説無上道と宣べ給て念仏三昧を捨て給う之に依て
阿弥陀經の対告衆長老・舍利弗尊者・阿弥陀經を打捨て法華經に歸伏して
華光如來と成り畢んぬ、四十八願付属の阿難尊者も浄土の三部經を抛て法華經
を受持して山海慧自在通王仏と成り畢んぬ、阿弥陀經の長老舍利弗は千二百
の羅漢の中に智慧第一の上首の大声聞・閻浮提第一の大智者なり肩を並ぶ
る人なし、阿難尊者は多聞第一の極聖・釈尊一代の説法を空に誦せし広学
の智人なり、かかる極位の大阿羅漢すら尚往生成仏の望を遂げず仏在世の
祖師此くの如し祖師の跡を踏む可くば三部經を抛ちて法華經を信じ無上菩提
を成ず可き者なり仏の滅後に於ては祖師先徳多しと雖も大唐楊州の善導和尚

にまさる人なし唐土第一の高祖なり云云、始は楊州の明勝と云える聖人を

師と為して法華經を習たりしが道綽禪師に値つて浄土宗に移り法華經を捨て

念仏者と成れり一代聖教に於て聖道・浄土の二門を立てたり法華經等の諸

大乘經をば聖道門と名く自力の行と嫌えり聖道門を修行して成仏を願

わん人は百人にまれに一人・二人千人にまれに三人五人得道する者や有んず

らん乃至千人に一人も得道なき事も有るべし觀經等の三部經を浄土門と名け

此の浄土門を修行して他力本願を憑んで往生を願わん者は十即十生・

百即百生とて十人は十人百人は百人決定往生す可しとすすめたり、

觀無量壽經を所依と為して四卷の疏を作る玄義分・序分義・定善義・散善義

是なり、其の外・法事讚上下・般舟讚・往生礼讚・觀念法門經此等を九帖の

疏と名けたり、善導念仏し給へば口より仏の出給うと云つて称名念仏一遍

を作すに三体づつ口より出給けりと伝へたり、毎日の所作には阿弥陀經六十

卷・念仏・十万遍是を欠く事なし、諸の戒品を持つて一戒も破らず三依は身の皮の如く脱ぐ事なく鉢は両眼の如く身を離さず精進潔斎す女人を見ずして一期生不眠三十年なりと自歎す、凡そ善導の行儀法則を云へば酒肉五辛を制止して口に齧まず手に取らず未来の諸の比丘も是くの如く行ずべしと定めたり、一度酒を飲み肉を食い五辛等を食い念仏申さん者は三百万劫が間地獄に墮す可しと禁しめたり、善導が行儀法則は本律の制に過ぎたり、法然房が起請文にも書載たり、一天四海善導和尚を以て善知識と仰ぎ貴賤上下皆悉く念仏者と成れり・但し一代聖教の大王・三世諸仏の本懐たる法華の文には若し法を聞くこと有らん者は無二不成仏と説き給へり、善導は法華經を行ぜん者は千人に一人も得道の者有る可からずと定む何れの説に付く可きか、無量義經には念仏をば未顕真実とて実に非ずと言ふ法華經には正直捨方便・但説無上道とて正直に念仏の觀經を捨て無上道の法華經を持つ可しと言ふ

此の両説水火なり何れの辺に付く可きや善導が言を信じて法華經を捨つ可き
か法華經を信じて善導の義を捨つ可きか如何、夫れ一切衆生・皆成仏道の
法華經、一たび法華經を聞かば決定して菩提を成ぜんの妙典善導が一言に
破れて千中無一虚妄の法と成り、無得道教と云はれ平等大慧の巨益は虚妄と
成り多宝如来の皆是真實の証明の御言妄語と成るか十方諸仏の上至梵天
の広長舌も破られ給ぬ、三世諸仏の大怨敵と爲り十方如来成仏の種子を
失う大謗法の科甚重し大罪報の至り無間・大城の業因なり、之に依つて
忽に物狂いにや成けん所居の寺の前の柳の木に登りて自ら頸をくくりて身を
投げ死し畢んぬ邪法のたたり踵を回さず冥罰爰に見たり、最後臨終の言
に云く此の身厭う可し諸苦に責められ暫くも休息無しと即ち所居の寺の前の
柳の木に登り西に向い願つて日く仏の威神以て我を取り觀音・勢至來つて又
我を扶けたまえと唱え畢つて青柳の上より身を投げて自絶す云云、三月十七

いわ

日くびをくくりて飛たりける程にくくり縄や切れけん柳の枝や折れけん大

かんばつ

かたつち

こしほね

うちおり

旱魃の堅土の上に落て腰骨を打折て、二十四日に至るまで七日七夜の間・

もんぜつびやくち

おわ

いた

これほど

こうそ

おうじよう

悶絶壁地しておめきさけびて死し畢んぬ、さればにや是程の高祖をば往生の

人の内には入れざるらんと覚ゆ此事全く余宗の誹謗に非ず法華宗の妄語にも

あら ぜんどうわじようじひつ

るいじゅでん

よしゅう

ひほう

あら

ほつけしゅう

もうご

非ず善導和尚自筆の類聚伝の文なり云云、而も流を酌む者は其の源を忘れ

ず法を行ずる者は其の師の跡を踏む可し

あと

べ

じょうどもん

あと

くば臨終の時善導が如く自害有る可きか、念仏者として頸をくくらずんば師

りんじゅう

ぜんどう

ごと

じがいあ

べ

ねんぶつ

あと

に背く咎有る可きか如何。

そむ とがあ

べ

いかん

にほんこく

ほうねんしようにんにじょうど

こうそ

いつさいきよう

ならいきわ

てんだい

日本国には法然上人浄土宗の高祖なり十七歳にして一切経を習極め天台

六十巻に渡り、

はつしゅう

けんがく

いちだいしろうきよう

たいい

てんが

八宗を兼学して一代聖教の大意を得たりとのしり、天下

むそう

ちしやさんもんたいいち

がくしゅう

云云、

しか

てんま

そ

こうがく

無雙の智者山門第一の学匠なり云云、然るに天魔や其の身に入にけん広学

たもん

ちえ

むなし ししゅう

ちようじよう

てんだいしゅう

うちす

はつしゅう

ねんぶつ

多聞の智慧も空く諸宗の頂上たる天台宗を打捨て八宗の外なる念仏者の

法師ほつしと成なりりにけり大臣だいじん・公卿くぎようの身を捨て民ひやくせい百姓ひやくせいと成なりるが如ごとし、選せん択たく集しゅうと
申もうす文ぶんを作つくつて一代いちだい五時ごときの聖教しょうきようを難破なんはし念仏ねんぶつ往生おうじようの一門いちもんを立てたり、仏説ぶつせつ
法滅ほうめつ尽じん經きやうに云いく五濁ごじよく惡世あくせには魔道まどう興こう盛せいし魔沙門しゃもんと作つくつて我が道を壞えらん乱らんし
惡人あくにん轉てんた海中かいちゆうの沙いさの如ごとく善人ぜんにん甚はなはだだ少すくくして若もしは一人ひとり若もしは二人ふたりならん云云
即すなわち法然ほうねん房是ぼうしなりと山門さんもんの狀じやうどに書かかれたり、我が淨土じやうど宗しゅうの專修せんしゅうの一行いっけうをば
五種ごしゆの正行しょうきようと定め權實ごんじつ・顯密けんみつの諸大乘しよだいじようをば五種ごしゆの雜行ざうきようと簡かんて淨土じやうど門もんの
正行しょうきようをば善導ぜんどうの如ごとく決定けつじよう往生おうじようと勸すすめたり、觀經かんきよう等の淨土じやうどの三部經さんぶきようの外ぐわい・
一代顯密いちだいけんみつの諸大乘しよだいじよう經きやう・大般若經だいはんぎきやうを始はなと為なして終はつじようり法常ほつじよう住經じゆうききやうに至いたるまで
貞元じやうげん錄りくに載のする所の六百三十七部みみな・二千八百八十三卷せんちゆうむいつは皆是せんちゆうむいつ千中無一せんちゆうむいつの
徒物いたずらものなり永とくく得道とくどう有ある可べからず、難行なんぎきよう・聖道門しょうどうもんをば門もんを閉しじ之これを抛なげうち
之これを閤あき之これを捨て・淨土門じやうどもんに入る可べしと勸すすめたり、一天いつてんの貴賤きせん首くしを傾しかいけ四海しかい
の道俗どうぞく掌たなこころを合せ・或あるは勢至せいしの化身けしんと号あし・或あるは善導ぜんどうの再誕さいたんと仰あおぎ一天いつてん四海しはい

になびかぬ木草なし、智慧は日月の如く世間を照して肩を並ぶる人なし名徳

は一天に充ちて善導に超え曇鸞・道綽にも勝れたり貴賤・上下・皆選択集

を以て仏法の明鏡なりと思ひ道俗・男女悉く法然房を以て生身の弥陀と

仰ぐ、然りと雖も恭敬供養する者は愚癡迷惑の在俗の人・帰依渴仰する人は

無智放逸の邪見の輩なり、権者に於ては之を用いず賢哲又之に随うこと無し。

然る間・斗賀尾の明慧房は天下無雙の智人・広学多聞の明匠なり、摧邪輪

三巻を造つて選択の邪義を破し、三井寺の長吏・実胤大僧正は希代の学者

・名譽の才人なり浄土決疑集三巻を作つて専修の悪行を難じ、比叡山の

住侶・仏頂房・隆真法橋は天下無雙の学匠・山門探題の棟梁なり彈選択

上下を造つて法然房が邪義を責む、しかのみならず南都・山門・三井より

度々奏聞を経て法然が選択の邪義亡国の基為るの旨訴え申すに依つて人王八

十三代・土御門院の御宇・承元元年二月上旬に専修念仏の張本たる安楽

・住蓮等を捕縛え忽ちに頭を刎ねられ畢んぬ、法然房源空は遠流の重科に沈み畢んぬ、其の時・摂政左大臣家実と申すは近衛殿の御事なり此の事は皇代記に見えたり誰か之を疑わん。

しかのみならず法然房死去の後も又重ねて山門より訴え申すに依つて人皇

八十五代・後堀河院の御宇嘉禄三年京都六箇所の本所より法然房が選択集

・並に印版を責め出して大講堂の庭に取り上げて三千の大衆会合し三世の

仏恩を報じ奉るなりとて之れを焼失せしめ法然房が墓所をば犬神人に仰せ付

けて之れを掘り出して鴨河に流され畢んぬ。

宣旨・院宣・関白殿下の御教書を五畿・七道に成し下されて、六十六箇国

に念仏の行者・一日片時も之れを置く可からず対馬の島に追い遣る可きの旨

諸国の国司に仰せ付けられ畢んぬ、此等の次第・両六波羅の注進状・関東

相模守の請文等明鏡なる者なり。

嘉禄三年七月五日に山門に下さるる宣旨に云く。

せんしゅうねんぶつ

専修念仏の行は諸宗衰微の基なり、茲に因つて代代の御門・頻に嚴旨を

こと きんあつ

降され殊に禁遏を加うる所なり、而るを頃年又興行を構へ山門訴え申さしむ

せんぶ まか

るの間・先符に任せて仰せ下さること先に畢んぬ、其の上且は仏法の陵夷

かつ しゅうと

を禁ぜんが為・且は衆徒の鬱訴を優に依つて其の根本と謂つを以て隆寛・

じょうかく くうあみだぶつ

成覚・空阿弥陀仏等其の身を遠流に処せしむ可きの由・不日に宣下せらるる

よとう おい

所なり、余党に於ては其の在所を尋ね搜して帝土を追却す可きなり、此の上

しゅうそ やすん

は早く愁訴を慰じて蜂起を停止す可きの旨・時刻を回さず御下知有る可く候、

ていればりんげん

者綸言此の如し頼隆・誠恐・頓首謹言。

七月五日酉刻

しんじょうてんだいざす

進上天台座主大僧正御房政所同七月十三日山門に下さるる宣旨に云く。

せんしゅうねんぶつこうぎよう

専修念仏興行の輩を停止す可きの由・五畿・七道に宣下せられ畢んぬ、

うちゅうべんよりたか
右中弁頼隆奉わる

せんもん

せんじ

せんげ

おわ

且御存知有る可く候^{ごぞんじあ}。綸言^{りんげん}此^{こと}の如^{これ}く之^{つまびらか}を悉^{よりたか}にす。頼隆^{らいりゅう}・誠恐^{せいきよう}・頓首^{とんしゅ}謹言^{きんげん}。

七月十三日

右中弁頼隆奉^{うちゅうべんよりたか}わる

進上天台座主大僧正御房政所殿下御教書

しんじょうてんだいざす そうつじょうこほうまんどころでんかみきようしよ

せんしゅうねんぶつ

専修念仏の事、

五畿・七道に仰せて永く停止せらる可きの由・先日宣下せ

おほ

ていし

べ

せんじつせんげ

た

られ候い畢んぬ、

おわ

しか

しよこく

なおよそ

べ

せんじ

せんじん

せんじん

せんじん

せんじん

せんじん

せんじん

せんじん

致す可きの由・

じとうしゅごしよ

おほ

おほ

おほ

おほ

おほ

おほ

おほ

おほ

おほ

おほ

おほ

おほ

おほ

おほ

おほ

おほ

御存知有る可く候、

ごぞんじあ

むね

もつ

さた

もう

べ

たま

べ

べ

べ

べ

べ

べ

べ

べ

べ

べ

候所

なり、

よつ

しつ

たつ

くだん

こと

候し。

候し。

候し。

候し。

候し。

候し。

候し。

候し。

候し。

候し。

候し。

嘉禄三年十月十日

参議範輔在り判

武蔵守殿

永尊賢者の状に云く、

えいそんけんじや

いわ

いわ

いわ

いわ

いわ

いわ

いわ

いわ

いわ

いわ

いわ

いわ

いわ

いわ

いわ

は謗法の書なり天下之を止め置く可からず、

ほうほう

てんがこれ

とど

べ

べ

べ

べ

べ

べ

べ

べ

べ

べ

べ

べ

べ

べ

べ

を大講堂に取り上げて三世の仏恩を報ぜんが為に之を焼失せしめ畢んぬ、又
云く法然上人の墓所をば感神院の犬神人に仰せ付けて破却せしめ畢んぬ。

嘉禄三年十月十五日・隆真法橋申して云く専修念仏は亡国の本為る可き

旨文理之有りと。

山門より雲居寺に送る状に云く、邪師源空・存生の間には永く罪条に沈

み滅後の今は且死骨を刎ねられ、其の邪類・住蓮・安樂・死を原野に賜い

成覚・薩生は刑を遠流に蒙る殆ど此の現罰を以て其の後・報を察す可し云

云。

嗚呼世法の方を云えば違勅の者と成り帝王の勅勘を蒙り今に御赦免の天氣

之れ無し心有る臣下万民・誰人が彼の宗に於て布施供養を展ぶ可きや、仏法

の方を云えば正法誹謗の罪人爲り無間地獄の業類なり何れの輩か念仏門に

於て恭敬礼拝を致す可きや、庶幾くば末代今の浄土宗・仏在世の祖師・

舍利弗・阿難等の如く浄土宗を抛つて法華經を持ち菩提の素懷を遂ぐ可き者か。

日蓮 花押

一〇 当世念仏者無間地獄事

104P

安房の国・長狭郡・東条花房の郷・蓮華寺に於て浄円房

に對して日蓮阿闍梨之を註るす、文永元年甲子九月二十二日。

問うて曰く当世の念仏者無間地獄と云う事其の故如何、答えて云く法然の

選択に就いて云うなり、問うて云く其の選択の意如何、答えて曰く後鳥羽院

の治・天下建仁年中に日本国に一の彗星出でたり名けて源空・法然と

曰う選択一卷を記して六十余紙に及べり、科段を十六に分つ第一段の意は

道綽禪師の安樂集に依つて聖道・浄土の名目を立つ、其の聖道門とは

浄土の三部經等を除いて自余の大小乗の一切經殊には朝家帰依の大日經

・法華經仁王經・金光明經等の顯密の諸大乘經の名目阿弥陀仏より
いげ しょうぶつ ぼさつ ちやうけこ きえ しんこん はつしやう みやうもくこれ あ しょうどうもん
已外の諸仏・菩薩・朝家御帰依の真言等の八宗の名目之を挙げて聖道門と
なす しょうしやうしやうぶつししやうしやう しやうざう き あ いえど まつほう
名く、此の諸經諸仏諸宗は正像の機に値うと雖も末法に入つて之を行ぜん
者は一人も生死を離る可からずと云云、又曇鸞法師の往生論註に依つて難易
の二行を立つ第二段の意は善導和尚の五部九卷の書に依つて正雜二行を立
つ、其の雜行とは道綽の聖道門の料簡の如し、又此の雜行は末法に入つ
ては往生を得る者の千中に一も無きなり、下の十四段には・或は聖道・
なんぎやう ぞうぎやう ぜんこんずいたいうじやうくどく なんぶつ もつ ぜんこん
難行・雜行をば小善根随他意有上功德等と名け念仏等を以ては大善根
ずいじいむじやうくどく なんぶつ ねんぶつ まつだい ほんぶこ もつ
随自意無上功德等と名けて、念仏に対して末代の凡夫此れを捨てよ此の門を
閉じよ之を閣けよ之を抛てよ等の四字を以て之を制止す、而て日本国中の無智
の道俗を始めて大風に草木の従うが如く皆此の義に随つて忽に法華・真言等
ずいき とど こんりやう はい し か ひとこと ひらがた ねんじゆ もつ みだ
に隨喜の意を止め建立の思を廃す、而る間人毎に平形の念珠を以て弥陀の

みょうごう とな ある まいにち
名号を唱え・或は毎日三万遍・六万遍・十万遍四十八万遍・百萬遍等・唱
る間・又他の善根も無く念仏堂を造ること稲麻竹葦の如く、結句は法華真言
ちしゃ
等の智者とおぼしき人人も皆・或は帰依を受けんが為に・或は往生極樂の
ため みなほんしゅう
為に皆本宗を捨てて念仏者と成り・或は本宗にして念仏の法門を仰げるな
り。

いわ にほんこくじゅう ししゅう ひとびと
今云く日本国中の四衆の人人は形は異り替ると雖も意根は皆一法を行じて
ことごときほう おうじょう ごす ぶつほうはんじょう
悉く西方の往生を期す、仏法繁昌の国と見えたる処に一の大きな疑を
おこ なんぶつしゅう きつぎょう あお べ ちしゃ なんぶつしゅう だんな な
発する事は念仏宗の龜鏡と仰ぐ可き智者達念仏宗の大檀那と為る大名・小
なら うとく たぶん りんじゅう こと
名並びに有徳の者多分は臨終思ふ如くならざるの由之を聞き之を見る、而る
ぜんどう わじょうじゅつそくじゅつしゅう
に善導和尚十即十生と定め十遍乃至一生の間念仏者は一人も漏れず往生
と べ
を遂ぐ可しと見えたり人の臨終と善導の釈とは水火なり。

ここ なんぶつ え いわ おうじょう
爰に念仏者会して云く往生に四つ有り、一には意念往生・般舟三昧經に

出でたり、二には正念往生・阿弥陀經に出でたり、三には無記往生群疑論に出でたり、四には狂乱往生觀經の下品下生に出でたり、詰つて曰く此の中の意・正の二は且く之を置く無記往生は何れの經論に依つて懷感禪師・これを書けるや、經論に之無くば信用取り難し、第四の狂乱往生とは引証は觀經の下品下生の文なり、第一に惡人臨終の時妙法を覺れる善知識に値つて覺る所の諸法実相を説かして之を聞く者正念存し難く十惡・五逆具諸不善の苦に逼め被れて覺ることを得ざれば善知識実相の初門と為る故に稱名して阿弥陀仏を念ぜよと云うに音を揚げて唱え了んぬ、此れは苦痛に堪え難くして正念を失う狂乱の者に非るか狂乱の者争か十念を唱う可き、例せば正念往生の所撰なり全く狂乱の往生には例す可からず、而るに汝等が本師と仰ぐ所の善導和尚は此の文を受けて轉教口称とは云えどもきようらんおうじよう
狂乱往生とは云わず、其の上汝等が昼夜十二時に祈る所の願文に云く願く

は弟子等 でし みようじゅう 命終 てんどう の時に臨んで心顛倒せず心錯乱せず心 しつねん 失念せず身心 しんしん 諸の しんしん 苦痛無く身心 かいらく 快樂・禪定に入るが如し等云云、此の中に錯乱とは狂乱 きやうらん しか じゅうあく 十悪・五逆を作らざる当世の念仏の上人達・並に大檀那等の臨終 りんじゅう の あくそう 悪瘡等の諸の悪重病並に臨終の狂乱は意を得ざる事なり、而るに善導和尚 ぜんどうわしやう の じゅうそくじゅうしやう 十即十生と定め又・定得往生等の釈の如きは疑無きの処に十人に おうじやう 九人往生すと雖も一人往生せざれば猶不審發る可し、何に況や念仏宗の ちやうじやな 長者為る善慧・隆觀・聖光・薩生南無・真光等皆惡瘡等の重病を受けて りんじゅう 臨終に狂乱して死するの由之を聞き又之を知る、其の已下の念仏者の臨終 きやうらんそ の狂乱其の数を知らず、善導和尚の定むる所の十即十生は闕けて嫌える せんちゅうむいつ 所の千中無一と成んぬ、千中無一と定められし法華・真言の行者は粗ば臨終 しやうねん の正念なる由之を聞けり、念仏の法門に於ては正像末の中には末法に殊に るふべ 流布す可し、利根・鈍根・善人・惡人・持戒・破戒等の中には鈍根惡人破戒

等殊ことに往生おうじょうす可べしと見えたり、故ゆえに道どう 綽しやく 禪師ぜんしは唯有ゆい 淨土じやうど 一門いちもんと書かれ、
善導ぜんどう和尚わじやうは十即じゆつそく 十生じゆしやうと定め往生要集おうじやうようしゆくには濁世末代じよくせまつだいの目足もくそくと云えり、念仏ねんぶつ
は時機じき已すでに叶あえり行ぎやうぜん者しや・空くうしかる可べからざるの処ところに是かくくの如ごときの相違さういは
大なる疑うたがひなり、若もし之これに依よつて本願ほんがんを疑うたがわば仏説ぶつせつを疑うたがうに成なりぬ進退しんたい
惟これ谷きれり此うたがひの疑もつを以ねんぶつしゆうて念仏宗ねんぶつしゆうの先達せんだつ並びに聖道しやうどうの先達せんだつに之これを尋もとるに一人
として答こうる人ひと之これ無し、念仏者ねんぶつ救きうつて云いく、汝なんじは法然上人ほうなんしやうにんの捨しや 閉へい 閣かく 抛ほうの
四字はうぼうを謗法ぼうぼうと過なむるか汝なんじが小智せうちの及およばざる所ところなり、故ゆえに上人しやうにん・此この四字しやうを
私ひそかに之これを書かくくと思おもへるか、源曇鸞げんどんらん・道綽だうしやく・善導ぜんどうの三師さんしの釈しやくより之これを出だしたり、
三師さんしの釈しやく・又私ひそかに非あらず、源淨土げんじやうどの三部經さんぶきやう 竜樹菩薩りゆうじゆぼさつの十住じゆうじゆう 毘婆沙論びばしやろんより出で
ず、雙觀經そうかんきやうの上卷じやうに云いく設たい我われ仏ほとけを得え乃ない至し十念等じゆんねんどうと云云、第十九の願いに
云いく設たい我われ仏ほとけを得え諸もろの功德くつどくを修しゆめ菩提心ぼだいしんを發おこす等おと云云、下卷じやうに云いく乃ない至し
一念等いちねんどうと云云、第十八の願成就じやうじゆの文ぶんなり、又下卷じやうに云いく「其その上じやう・輩者はいしや○

一向専念・輩者。一向専念其下輩者。一向専念」と云云、此れは十九願成就の文なり、觀無量壽經に云く、「仏阿難に告ぐ汝好く是の語を持て是の語を持つ者は即ち是れ無量壽仏の名を持つ」と等と云云、阿彌陀經に云く小善根を以てす可からず乃至一日七日等と云云、先ず雙觀經の意は念仏往生諸行往生と説けども一向専念と云つて諸行往生を捨て了んぬ、故に彌勒の付属には一向に念仏を付属したんぬ、觀無量壽經の十六觀も上の十五の觀は諸行往生、下輩一觀の三品は念仏往生なり、仏阿難尊者に念仏を付属するは諸行を捨つる意なり、阿彌陀經には雙觀經の諸行觀無量壽經の前十五觀を束ねて、小善根と名け往生を得ざるの法と定め畢んぬ、雙觀經の念仏をば無上功德と名けて彌勒に付属し、觀經・念仏をば芬陀利華と名けて阿難に付属し、阿彌陀經の念仏をば大善根と名けて舍利弗に付属す、終の付属は一經の肝心を付属するなり又一經の名を付属するなり、三部經には諸の善根

多しいへどと雖も其の中に念仏ねんぶつ最なり、故に題目には無量寿經・觀無量寿經・

阿彌陀經等と云えり、あみだ 釈摩訶衍論・法華論等の論を以て之れを勘かんうるに

一切經の初には必ず南無なむの二字有り、梵本を以て之を言わば三部經の題目に

は南無之れ有り、雙觀經の修諸の二字に念仏より外の八万聖教べ残る可

らず、觀無量寿經の三福九品等の読誦大乘の一句に一切經残る可からず、

阿彌陀經の念仏の大善根ぜんこんに対する小善根の語に法華經等漏る可きや、總じて

浄土の三部經の意は行者の意樂に随わんが為に暫く諸行あを挙ぐと雖も、再

び念仏ねんぶつに対する時は諸行の門を閉じて捨閉閣抛する事顯然なり、例せば

法華經を説かんが為に無量義經を説くの時に四十余年の經を捨てて法華の門

を開くが如し、りゆうじゆ 竜樹菩薩十住毘婆沙論を造つて一代聖教いまだいしやうきやうを難易の二道に

分てり、難行道とは三部經の外の諸行しやぎやうなり易行道とは念仏ねんぶつなり、經論きやうろん此く

の如く分明ふんみやうなりと雖も震旦の人師此の義を知らず唯善導一師のみ此の義を

ほつとく 発得せり、所以に雙觀經の三輩を觀念法門に書いて云く、一切衆生根性不同にして上中下有り其の根性に随つて仏皆無量寿仏の名を專念することを勧む」等云云、此の文の意は發菩提心修諸功德等の諸行は他力本願の念仏に値わざりし以前に修する事よと有りけるを忽に之を捨てよと云うとも行者もちべ用ゆ可からず故に暫く諸行を許すなり、實には念仏を離れて諸行を以て往生を遂ぐる者之無しと書きしなり、觀無量寿經の仏告阿難等の文を善導の疏の四に之れを受けて曰く、「上來に定散兩門を説くと雖も仏の本願に望めば意・衆生の一向に専ら阿弥陀の名を称するに在り」云云、定散とは八万の権実・顯密の諸經を尽して之を摂して念仏に對して之れを捨つるなり、善導の法事讚に阿弥陀經の大小善根の故を釈して云く、「極樂は無為涅槃界なり隨縁の雜善恐らくは生じ難し故に如来要法を選んで教えて弥陀專修を念ぜしむ」等と云云、諸師の中に三部經の意を得たる人は但導一人のみ、如来の

さんぶきよう 三部經に於ては是くの如く有れども正法・像法の時は根機猶利根の故に
しよぎようおうじよう 諸行往生の機も之有りけるか。

しか きこんおとろ まつぼう 然るに機根衰えて末法と成る間・諸行の機漸く失い念仏の機と成れり、更

あみだによらい ぜんどうわじよう に阿弥陀如来・善導和尚と生れて震旦に此の義を顕し、和尚日本に生れて初

えいざん しゆぎよう は叡山に入つて修行し後には叡山を出でて一向に専修念仏して三部經の意

あらわしたまい なんじしやへいかくほう を顕し給いしなり、汝捨閉閣抛の四字を謗法と咎むる事未だ導和尚の釈並び

さんぶきよう うかが いぬ か こと じごく に三部經の文を窺わざるか、狗の雷を齧むが如く地獄の業を増す汝知らずん

じよつどう ば浄土家の智者に問え。

ふしん いわ かみ しよりゆう もつ ほうねん 不審して云く上の所立の義を以て法然の捨閉閣抛の謗言を救うか実に浄土

さんし りゆうじゆ ぼさつ ぶつせつ さんぶきよう の三師並に竜樹菩薩・仏説により此の三部經の文を開くに念仏に對して

しよぎよう ほう な ぼほきようもん きようもん 諸行を傍と為す事粗經文に之見えたり、經文に嫌われし程の諸行念仏に

これ きら べ あら ふしん ところ 對して之を嫌わんこと過む可きに非ず、但不審なる處は雙觀經の念仏已外

の諸行觀無量壽經しよぎょうかんむりようじゆきようの念仏ねんぶつ以外の定散じようさん・阿弥陀經あみだの念仏ねんぶつの外の小善根ぜんこんの中に
法華・涅槃ほっけ ねはん・大日經だいにちきよう等の極大乘經ごくだいじようきようを入れ念仏ねんぶつに對して不往生おつじようの善根ぜんこんぞと
仏きらの嫌きらわせ給たまいけるを竜樹菩薩りゆうじゆぼさつさんし三師並ほうねんこれに法然きら之を嫌いすれわば何とがの失有しつらん但
三部經さんぶきようの小善根ぜんこん等の句くに法華・涅槃ほっけ ねはん・大日經だいにちきよう等は入べる可べしとも覺おほえざれば
三師並さんしに法然ほうねんの釈もちを用もちいざるなり、無量義經むりようぎきようの如ごときは四十余年よんじゅうよねん・末顯真實みけんしんじつと
説ほっけはちかねんいて法華八箇年いぜんを除いぜんきて以前四十二年だいししじうに説ごんじつく所の大小しよきよう・權實しよきようの諸經しよきようは一
字みけんしんじつ一点ことばも末顯真實もの語べに漏おほる可べしとも覺おほえず、しかのみならず四十二年しよきようの間
に説あこんく所の阿含ほうとつ・方等はんにや・般若けこん・華嚴みようもくこれの名目すで之を出だいししだせり、既に大小しよきようの諸經しよきよう
を出じようめつむじようして生滅無常もろもろしじようきようを説あこんける諸の小乘經せつを阿含せつの句せつに撰せつし、三せつにして無差別さべつ
の法門ほうもんを説しよだいじようきようける諸大乘經けこんかいくうを華嚴海空せつの句せつに撰せつし、十八空等しよを説しよける諸
大乘經だいじようきようを般若はんにやの句せつに撰だんかし、彈呵しよだいじようきようの意せつを説しよだいじようきようける諸大乘經ほうとつを方等せつの句せつに撰せつす、
是かくくの如ごとく年限ねんげんを指だいもくし經の題目あを挙げむりようぎきよう無量義經よに依ほけきようつて法華經しよきように對しよきようして諸經しよきよう

を嫌きらい・嫌きらえる所の諸經しよきように依よれる諸宗しよしゆうを下くだすこと天台大師てんだいだいしの私ひそかに非あらず、汝等なんじらが浄土じようどの三部經さんぶきようの中には念仏ねんぶつに対して諸行しよぎようを嫌きらう文ぶんは之これ有ありとも嫌きらわるるしよぎよう じようど さんぶきよう ほか

諸行しよぎようは浄土じようどの三部經さんぶきようよりの外ほかの五十年しよきようの諸經しよきようなりと云いふ現文げんぶんは之これ無なし、又また無量義經むりようぎきようの如ごとく阿含あこん・方等ほうとう・般若はんや・華嚴等けこんをも挙げあげず誰たれか知る三部經さんぶきようにはもろもろしようにきよう じやうじゆうききよう しよきよう

諸の小乘しよのせう經並きやうに歴劫りやうじゆう修行しよきようの諸經等しよきようの諸行しよきようを仏ぶつ・小善根せうぜんこんと名なけ給たまうと云いふ事をこと、左右さうなく無なく念仏ねんぶつよりの外ほかの諸行しよきようを小善等しよぜんと云いえるを法華ほっけ・涅槃等ねはんのいちだい 一代いちだいの教きやうなりと打うちち定じやうめて捨しや閉へい閣かく拋たうの四字しよじを置おきては仏意ぶつゐにや乖そむくらんとふしん 不審ふしんする計はかりなり、例れいせば王わうの所従しよじゆうには諸人しよにんの中諸国しよこくの中の凡下等ほんげ一人も残ざんる可べからず民しんが所従しよじゆうには諸人しよにん諸国しよこくの主しゆは入いる可べからざるが如ごとし、誠じやうに浄土じようどの三部經等さんぶきようが一代超過いちだいちゆうかの經きやうならば五十年しよきようの諸經しよきようを嫌きらうも其その謂いれ之これ有ありなんさんぶきよう

三部經さんぶきようの文ぶんより事起いつて一代いちだいを撰せんす可べしとは見みえず、但いち機き・一縁いちえんの小事しよじなり何なんぞ一代いちだいを撰せんして之これを嫌きらわん、三師並さんしに法然ほつねん此この義ぎを弁わえずして諸行しよぎようの中

に法華・涅槃並に一代を撰して末代に於て之を行ぜん者は千中無一と定むる
は近くは依經に背き遠くは仏意に違う者なり、但し竜樹の十住毘婆沙論の
難行の中に法華・真言等を入ると云うは論文に分明に之有りや、設い論文
に之有りと慥なる經文之無くば不審の内なり、竜樹菩薩は権大乘の
論師爲りし時の論なるか、又訳者の入れたるかと思得可し、其の故は仏は
無量義經に四十余年は難行道・無量義經は易行道と定め給う事・金口の
明鏡なり、竜樹菩薩・仏の記文に當つて出世して諸經の意を演ぶ豈仏説な
る難易の二道を破つて私に難易の二道を立てんや、随つて十住毘婆沙論の
一部始中終を開くに全く法華經を難行の中に入れたる文之無く只華嚴經の
十地を釈するに第二地に至り畢つて宣べず、又此の論に諸經の歷劫修行の
旨を挙ぐるに菩薩難行道に墮し二乘地に墮して永不成仏の思を成す由・見え
たり法華已前の論なる事疑無し、竜樹菩薩の意を知らずして此の論の難行

の中に法華・眞言を入れたりと料簡するか、浄土の三師に於ては書釈を見るに難行・雜行・聖道の中に法華經を入れたる意・粗之有り、然りと雖も法然が如き放言の事之無し、しかのみならず仏法を弘めん輩は教機時国教法流布の前後をむ可きか。

如來在世に前の四十余年には大小を説くと雖も説時至らざるの故に本懷を演べ給わず、機有りと雖も時無ければ大法を説き給わず、靈山八年の間・誰か円機ならざる時も来る故に本懷を演べたもうに権機移つて実機と成る、法華經の流通並に涅槃經には実教を前とし権教を後とす可きの由見えたり、在世には実を隠して権を前にす滅後には実を前として権を後と為す可き道理顯然なり、然りと雖も天竺国には正法一千年の間は外道有り、一向小乗の国有り、又一向大乘の国有り、又大・小兼学の国有り、漢土に佛法渡つても又天竺の如し、日本国に於ては外道も無く小乗の機も無く唯大乘の機のみ

有り、大乘に於ても法華よりの外の機無し、但し仏法・日本に渡り始めし時
・暫く小乗の三宗権大乘の三宗を弘むと雖も桓武の御宇に伝教大師の
御時六宗・情を破つて天台宗と成りぬ、俱舎成実・律の三宗の学者も彼の
教の如く七賢三道を経て見思を断じ二乗と成らんとは思わず、只彼の宗を習
つて大乘の初門と爲し彼の極を得んとは思わず、権大乘の三宗を習える者
も五性各別等の宗義を捨てて一念三千・五輪等の妙觀を窺う、大小・権実
を知らざる在家の檀那等も一向に法華・真言の学者の教に随つて之を供養す
る間・日本一洲は印度震旦には似ず一向純円の機なり、恐くは靈山八年の機
の如し、之を以て之を思うに浄土の三師は震旦・権大乘の機に超えじ、法然
に於ては純円の機純円の教・純円の国を知らず、権大乘の一分爲る觀經
等の念仏、権実をも弁えざる震旦の三師の釈之を以て此の国に流布せしめ実機
に権法を授け、純円の国を権教の国と成し醍醐を嘗むる者に蘇味を与うる

の失誠に甚だ多し。
とが はなはだ

一一 題目弥陀名号 勝劣事

111P

南無妙法蓮華經と申す事は唱えがたく南無阿弥陀仏・南無薬師如来など
なむ みょうほうれんげきょう もう とな なむ あみだぶつ なむ やくしにょらい
申す事は唱えやすく又文字の数の程も大旨は同けれども功德の勝劣は遙に替
もう とな もんじ ぐどく しやうれつ はるか
りて候なり、天竺の習ひ仏出世の前には二天三仙の名号を唱えて天を願ひけ
てんじく なら しゆつせ みやうごう とな
るに仏世に出させ給いては仏の御名を唱ふ、然るに仏の名号を二天三仙の
いだ たまい みな しか みやうごう
名号に対すれば天の名は瓦礫のごとし仏の名号は金銀如意宝珠等のごとし、
みやうごう がりやく によいほうじゆ
又諸仏の名号は題目の妙法蓮華經に対すれば瓦礫と如意宝珠の如くに侍る
しよぶつ みやうごう だいまく みやうほうれんげきょう がりやく によいほうじゆ こと はべ
なり、然るを仏教の中の大小・権実をも弁へざる人師などが仏教を知り
しか ぶつきやう だいしやう ごんじつ わきまえ にんし ぶつきやう
がほにして仏の名号を外道等に対して如意宝珠に譬へたる經文を見又
みまうごう げどう によいほうじゆ たと きやうもん
法華經の題目を如意宝珠に譬へたる經文と喩の同きをもつて念仏と法華經
ほけきやう だいまく によいほうじゆ たと きやうもん ねんぶつ ほけきやう
とは同じ事と思へるなり、同じ事と思う故に又世間に貴と思う人の只弥陀の
ゆえ せけん とう ただみだ

名号みょうごう計とを唱となうるに随したがつて・皆人みな一期いちごの間・一日に六万遍・十万遍じゅうまんなんと申
せども法華經ほけきょうの題目だいもくをば一期いちごに一遍いつべんも唱となへず、或あるは世間せけんに智者ちしやと思はれたる
ひとひとびとちしや人人外ちしやには智者ちしや氣きにて内うちにはぶつきよう仏教ぶつぎようを弁わきまえへざるが故ゆえに念仏ねんぶつと法華經ほけきょうとは只ただ一ひとな
りなむ南無阿弥陀仏なむあみだぶつと唱となうれば法華經ほけきょうを一部いっくよむにて侍るはべなんと申しあへり是は
一代いちだいの諸經しよきようの中に一句一字いっくもなき事なり、設たとひ大師先徳だいしせんの釈しゃくの中より出たり
とも且かつは觀心かんじんの釈ひらかつか且かつはあて事かなんど心得こころえべし、法華經ほけきょうの題目だいもくは過去かこに
十萬億じゅうまんの生身しやうしんの仏あに値たてまひ奉くどくつて功德くどくを成就じやうじゆする人初めて妙法蓮華經みやうほうれんげきようの
五字ごじの名を聞き始めて信いたを致いたすなり、諸仏しよぶつの名号みやうごうは外道げどう・諸天しよてん・二乗菩薩にじようぼさつの
名号みやうごうにあはすれば瓦礫がりがくと如意宝珠にょいほうじゆの如ごとくなれども法華經ほけきょうの題目だいもくに対すれば又
瓦礫がりがくと如意宝珠にょいほうじゆとの如ごとし、当世とうせの学者がくしやは法華經ほけきょうの題目だいもくと諸仏しよぶつの名号みやうごうとを功德くどく
ひとしと思ひ又同じ事と思へるは瓦礫がりがくと如意宝珠にょいほうじゆとを同じと思ひ一と思ふが
如ごとし、止觀しかんの五いに云く「設たといい世いとを厭うう者も下劣げれつの乗もてあそを翫しやうび枝葉はんばに攀いぬ付し狗

作務に狎れ・猴を敬いて帝釈と為し瓦礫を崇めて是・明珠なりとす此の
黒闇の人豈道を論ず可けんや」等云云、文の心は設ひ世をいとひて出家遁世
して山林に身をかくし名利名聞をたちて一向後世を祈る人人も法華經の
大乘をば修行せずして權教下劣の乗につきたる名号等を唱うるを瓦礫を
明珠などと思いたる僻人に譬へ闇き惡道に行くべき者と書れて侍るなり、
弘決の一には妙樂大師・善住天子經をかたらせ給いて法華經の心を顯はし
て云く「法を聞いて謗を生じ地獄に墮するは恒沙の仏を供養する者に勝る等」
云云、法華經の名を聞いてそしる罪は阿弥陀仏・釈迦仏・藥師仏等の恒河沙
の仏を供養し名号を唱うるにも過ぎたりされば当世の念佛者の念佛を六万遍
乃至十万遍申すなんと云へども彼にては終に生死をはなるべからず、法華經
を聞くをば千中無一・雜行・未有一人得者など名けて・或は抛よ・或は
門を閉じよなどと申す謗法こそ設ひ無間・大城に墮るとも後に必生死は離れ

侍らんずれ、同くは今生に信をなしたらば・いかによく候なん。

問う世間の念仏者などの申す様は此身にて法華經などを破する事は

争か候べき念仏を申すもとくとく極樂世界に参りて法華經をさとらんが為な

り、又・或は云く法華經は不淨の身にては叶ひがたし恐れもあり念仏は不淨

をも嫌はねばこそ申し候へなんと申すはいかん、答えて云く此の四五年度の程

は世間の有智・無智を嫌はず此の義をば・さなんめりと思ひて過る程に日蓮

一代聖教をあらあら引き見るにいまだ此の二義の文を勘へ出さず・詮ずる

ところ近来の念仏者並に有智の明匠とおぼしき人人の臨終の思ふやうにな

らざるは是・大謗法の故なり、人ごとに念仏申して浄土に生れて法華經をさ

とらんと申す故に穢土にして法華經を行ずる者をあざむき又・行ずる者もす

てて念仏を申す心は出来るなりと覺ゆ・謗法の根本此の義より出たり、法華經

こそ此の穢土より浄土に生ずる正因にては侍れ念仏等は未顕真實の故に浄土

の直因ちよくいんにはあらず、然るに浄土じょうどの正因しょういんをば極樂ごくらくにして後に修行しゆぎやうすべき物と思ひ極樂ごくらくの直因ちよくいんにあらざる念仏ねんぶつをば浄土じょうどの正因しょういんと思ふ事僻案びやくあんなり、浄土門じょうどもんは春沙いんしを田まに蒔まいて秋米てんげつを求め天月てんげつをすてて水に月を求るに似たり人の心にかなかなほけきほけきうしなうしなだいじだいじつつ叶かないて法華經ほけきやうを失ふ大術だいじゆつ此の義にはすぎず、次に不浄念仏ふじやうねんぶつの事一切念仏者いつさいねんぶつの師とする善導ぜんどう和尚わじやう・法然上人ほうねんしやうにんは他事たじにはいわれなき事多けれども此の事をいてはよくよく禁めいましられたり、善導ぜんどうの觀念法門經かんのんぽうもんに云く酒肉五辛しゆにくごしんを手に取らざれ口にかまざれ手にとり口にもかみて念仏ねんぶつを申さば手と口に惡瘡あくそう付くべしと禁めいまし法然上人ほうねんしやうにんは起請きしやうを書いて云く、酒肉五辛しゆにくごしんを服して念仏ねんぶつ申さば予が門弟もんていにあらずと云云、不浄ふじやうにして念仏ねんぶつを申すべしとは当世とうせの念仏者ねんぶつの大妄語もうごなり。

問いうて云く善導ぜんどう和尚わじやう・法然上人ほうねんしやうにんの釈しやくを引くは彼の釈しやくを用るや否や、答こたえて云く、しからず念仏者ねんぶつの師したる故ゆゑに彼がことば己おのれが祖師そしに相違さういするが故ゆゑに彼

の祖師そし いましの禁めをもて彼を禁るなり、例せば世間の沙汰の彼が語の彼の文書に
相違するを責るが如し、問うて云く善導和尚・法然上人には何事の失あれば
用いざるや、答えて云く仏の御遺言には我が滅度の後には四依の論師たりと
いへども法華經にたがはば用うべからずと涅槃經に返す返す禁め置かせ給い
て侍るに法華經には我が滅度の後・末法に諸經失せて後・殊に法華經流布す
べき由・一所二所ならずあまたの所に説かれて侍り、随つて天台・妙樂・
伝教・安然等の義に此事分明なり、然るに善導・法然・法華經の方便の一分
たる四十余年の内の末顯眞實の觀經等に依つて仏も説かせ給はぬ我が依經の
読誦大乘の内に法華經をまげ入れて還つて我が經の名号に對して読誦大乘
の一句をすつる時・法華經を抛てよ・門を閉じよ・千中無一なんと書いて
侍る僻人をば眼あらん人は是をば用うべしやいなや。

疑つて云く善導和尚は三昧發得の大師・本地・阿弥陀仏の化身・口より

けぶつ 化仏を出せり、法然上人は本地・大勢至菩薩の化身既に日本国に生れては
ねんぶつ ひろ 念仏を弘めて頭より光を現ぜり争か此等を僻人と申さんや、又善導和尚・
ほうねんしょうにん ほうねんしょうにん 法然上人は汝が見る程の法華経並に一切経をば見給はざらんや定めて
そのゆえ 其の故是あらんか、答えて云く汝が難ずる処をば世間の人人定めて道理と
思はんか、是偏に法華経並に天台・妙楽等の実経・実義を述べ給へる文義
を捨て善導・法然等の謗法の者にたばらかされて年久くなりぬるが故に思は
する処なり、先ず通力ある者を信ぜば外道天魔を信ずべきか・或る外道は
たいかい すいほ 大海を吸干し・或る外道は恒河を十二年まで耳に湛えたり第六天の魔王は三
ぐそく 十二相を具足して仏身を現ず、阿難尊者・猶魔と仏とを弁へず善導・法然が
つうりき 通力いみじしというとも天魔・外道には勝れず、其の上・仏の最後の禁しめ
に通を本とすべからずと見えたり、次に善導・法然は一切経並に法華経をば
おのれよりも見たりなんどの疑ひ是れ又謗法の人のためには・さもと思ひ

ぬべし、然りといへども如来の滅後には先の人は多分賢きに似て後の人は

おもむね

大旨は・はかなきに似たれども又先の世の人の世に賢き名を取りて・はかな

きもあり、外典にも三皇・五帝・老子・孔子の五経等を学びて賢き名を取

れる人も後の人に・くつがへされたる例是れ多きか、内典にも又かくの如し、

ぶつぼう 仏法・漢土に渡りて五百年の間は明匠・国に充滿せしかども光宅の法雲

どうじよう 道場の慧観等には過ぎざりき、

これら 此等の人人は名を天下に流し智水を国中にそそぎしかども天台智者大師と申

せし末の人・彼の義どもの僻事なる由を立て申せしかば初には用ひず、後に

は信用を加えし時・始めて五百年の間の人師の義どもは僻事と見えしなり、

にほんこく 日本国にも仏法渡りて二百余年の間は異義まちまちにして何れを正義とも知

らざりし程に伝教大師と申す人に破られて前二百年の間の私義は破られしな

り、其の時の人人も当時の人の申す様に争か前前の人は一切経並に法華経を

ば見ざるべき、定めて様こそあるらめなんと申しあひたりしかども叶はず
経文に違ひたりし義どもなれば終に破れて止みにき、当時も又かくの如し此
の五十余年が間は善導の千中無一・法然が捨閉閣抛の四字等は権者の釈なれ
ばゆへこそあらんと思ひてひら信じに信じたりし程に日蓮が法華經の・或は
あくせまつぼう 悪世末法時・或は於後末世・或は令法久住等の文を引きむかへて相違をせむ
る時・我が師の私義破れて疑いあへるなり、詮ずるところ後・五百歳の
経文の誠なるべきかの故に念仏者の念仏をもて法華經を失ひつるが還つて
法華經の弘まらせ給うべきかと覺ゆ、但し御用心の御為に申す世間の悪人は
魚鳥鹿等を殺して世路を渡る、此等は罪なれども佛法を失ふ縁とはならず懺悔
をなさざれば三惡道にいたる、又魚鳥鹿等を殺して売買をなして善根を修す
る事もあり、此等は世間には悪と思はれて遠く善となる事もあり、仏教をも
つて仏教を失ふこそ失ふ人も失ふとも思はず只善を修すると打ち思つて又そ

ばの人あくやうも善おと打ち思しゅつつてある程に思はざる外に惡道に墮たいつる事の出来候な
り、当世とうせには念仏者ねんぶつなんどの日蓮にちれんに責め落されて我が身は謗法ほうぼうの者なりけり
と思おもう者も是あり、聖道しょうどうの人人ひとびとの御中おんちゆうにこそ実の謗法ほうぼうの人人ひとびとは侍はべれ彼の人人ひとびと
の仰おほせらるる事は法華經ほけきやうを毀そしりる念仏者ねんぶつも不思議ふしぎなり念仏者ねんぶつを毀そしりる日蓮にちれんも
奇怪きかいなり、念仏ねんぶつと法華ほつけとは一体の物なり、されば法華經ほけきやうを読むこそ念仏ねんぶつを申もう
よ念仏ねんぶつ申すこそ法華經ほけきやうを読むにては侍はべれと思おもう事に候なりと、かくの如ごとく仰おほせ
らるる人人ひとびと・聖道しょうどうの中にあまた・をしますと聞きこゆ、随したがつて檀那だんなも此の義を
存にちれんじて日蓮並ねんぶつに念仏者ねんぶつをおこがましげに思おもへるなり、先日蓮にちれんが是れ程の事を
しらぬと思おもへるははかなし。

仏法ぶつぽう・漢土かんどに渡り初めし事は後漢ごかんの永平わたなり渡りとはどまる事は唐とうの
玄宗皇帝げんそうてうてい・開元十八年なり、渡わたれるところの經・律・論・五千四十八卷・訳者やくしゃ
一百七十六人其その經經きやうぎやうの中に南無阿弥陀仏なむあみだぶつは即南無妙法蓮華經そくなむみょうほうれんげきやうなりと申もう
す

經は一卷・一品もおはしまさざる事なり、其の上阿弥陀仏の名を仏・説き出
し給う事は始め華嚴より終り般若經に至るまで四十二年が間に所所に説かれ
たり、但し阿含經をば除く一代聽聞の者は是を知れり、妙法蓮華經と申す事
は仏の御年七十二成道より已来四十二年と申せしに靈山にましまして
無量義処三昧に入り給ひし時、文殊・弥勒の問答に過去の日月燈明仏の例を
引いて我・燈明仏を見る乃至法華經を説かんと欲すと先例を引きたりし時こ
そ南閻浮提の衆生は法華經の御名をば聞き初めたりしか、三の巻の心ならば
阿弥陀仏等の十六の仏は昔大通智勝仏の御時・十六の王子として法華經を習
つて後に正覺をならせ給へりと見えたり、弥陀仏等も凡夫にてをはしませし
時は妙法蓮華經の五字を習つてこそ仏にはならせ給ひて侍れ、全く南無
阿弥陀仏と申して正覺をならせ給ひたりとは見えず、妙法蓮華經は能開な
り南無阿弥陀仏は所開なり、能開所開を弁へずして南無阿弥陀仏こそ南無

妙法蓮華經みょうほうれんげきょうよと物知りものしりがほに申し侍もうはべるなり、日蓮幼少にちれんようしょうの時・習ならいそこなひ
の天台宗てんだいしゅう・真言宗しんこんしゅうに教しんへられて此の義を存ぞんじて数十年の間ありしなり、
是これ存外ぞんがいの僻案びやくあんなり但し人師にんしの釈しゃくの中に一体と見えたる釈はべどもあまた侍はべる、
彼は觀心の釈かんじんか・或あるは仏の所証しよしょうの法門ほうもんにつけて述わきまたるを今の人わきま弁えんへずして
全体ぜんたい・一なりと思おもいて人を僻人びやくにんに思おもうなり、御けい迹せきあるべきなり、念仏ねんぶつと
法華經ほけきょうと一つならば仏の念仏説ねんぶつかせ給たまひし觀經等かんきようこそ如来出世にょらいしゅつせの本懷ほんかいにては
侍はべらめ、彼をば本懷ほんかいとも・をばしめさずして法華經ほけきょうを出世しゅつせの本懷ほんかいと説たまかせ給たまう
は念仏ねんぶつと一体ならざる事明白そなり、其の上多くの真言宗しんこんしゅう・天台宗てんだいしゅうの人人ひとびとに
値あい奉たてまつりて候あえて時・此の事を申しければ、されば僻案びやくあんにて侍はべりけりと申もうす人
是れ多し、敢あえてて証文しょうもんに經文きようもんを書いて進そつちぜず候あはん限りは御用あひ有あるべから
ず、是こそ謗法ほうぼうとなる根本こんぽんにて侍はべれ、あなかしこ・あなかしこ。

日蓮

花押かおう

一一一 法華淨土問答抄

117P

理即 りそく

名字即 みょうじそく

觀行即 かんぎょうそく

三諦の名を聞く さんたい

五品を明す ごほん

八十八使の見惑を断ず けんわく

八十一品の思惑を断ず しわく

九品の塵沙を断ず じんじゃ

四十一品の無明を断ず むみょう

一品の無明を断ず むみょう

中品戒行世善等 ちゅうほんかいぎょう

穢土 えど

理即 りそく

穢土 えど

報土 ほうど

相似即 そうじそく

分真即 ぶんしんそく

究竟即 くきょうそく

法華宗立六即 ほっけしゅうそく

淨土下品 じょうどげほん

浄土宗の所立 じやうどしゆう しよりゆう

名字即 みやうじそく

観行即 かんぎやうそく

相似即 そうじそく

報土 ほうど

分真即 ぶんしんそく

究竟即 くきやうそく

究竟即 くきやうそく

弁成の立、我が身叶い難きが故に且く聖道の行を捨閉し閣抛し浄土に歸し浄土に往生して法華を聞いて無生を悟ることを得べきなり。

日蓮難じて云く、我が身叶い難ければ穢土に於て法華経等・教主釈尊等

を捨閉し閣抛し浄土に至つて之を悟る可し等云、何れの経文に依つて此く

の如き義を立つるや、又天台宗の報土は分真即・究竟即・浄土宗の報土は

名字即乃至究竟即等とは何れの経・論釈に出でたるや、又穢土に於ては

法華経等・教主釈尊等を捨閉し閣抛し浄土に至つて法華経を悟る可しとは

いすれ きのうもん
何れの經文に出でたるや。

べんじよう

弁成の立に、余の法華等の諸行等を捨閉し閣抛して念仏を用ゆる文は

かんきよう いわ

觀經に云く「仏・阿難に告ぐ汝好く是の語を持て是の語を持つ者は即ち

こ むりようじゆぶつ

是れ無量寿仏の名を持つて文、淨土に往生して法華を聞くと云う事は文に云く

かんぜおん

「觀世音・大勢至・大悲の音声を以て其れが為に広く諸法実相・除滅罪法

を説く、聞き已つて歡喜し時に応じて即・菩提の心を發す」文、余は繁き

ゆえ しばらこれ

故に且く之を置く。

にちれんなん

又日蓮難じて云く、觀無量寿經は如来成道四十余年の内なり法華經は後

はちかねん

八箇年の説なり如何んが已説の觀經に兼ねて未説の法華經の名を載せて捨閉

かくほう

閣抛の可説と為す可きや、随つて「仏告阿難」等の文に至つては只弥陀念仏

かんじん

を勧進する文なり未だ法華經を捨閉し閣抛することを聞かず、何に況や

むりようぎきよう

無量義經に法華經を説かんが為に先ず四十余年の已説の經經を挙げて未顯

眞實しんじつと定め畢おわんぬ、豈あに未み顯けん眞實しんじつの觀經かんきょうの内に已い顯けん眞實しんじつの法華經ほけきょうを挙あげて捨て
ないしこれなげう乃な至す之きを抛なてと為べす可べきや、又い云わく「久もくしく此つとの要すみを黙もくして務つとめて速すみかに説
かず」等云云、既すでに教主きやうしやくそん・釈尊よんじゆうよねん・四十余年の間法華の名字を説かず何ぞ已説
かんきょう ねんぶつ 法華經ほけきょうの念仏ねんぶつに対して此の法華經を抛なたんや、次つぎに「下品下生・諸法實相・
除滅罪法等」云云、夫それ法華經已前の實相其の数・一に非あらず先げず外道の内の
ちようそう じつそう 長爪の實相・内道の内の小乘しょうじやうないしにぜん・乃至爾前の四教皆所詮の理は實相なり、何ぞ
いせつ かんきょう 必かならずずしも已説の觀經に載する所の實相のみ法華經に同じと意得べきや、今度このたび
たしか しょうもん 慥しやうもんなる証文を出して法然上人の無間の苦を救わるべきか。

又べんじやう弁成の立に、觀經は已説の經なりと雖いえども未來を面とする故に未來の
しゆじやう みらい あ 衆生は未來に有る所の經卷・之を讀誦して淨土に往生すべし、既に法華等
しよきやう みらいあるふ ゆえ こ 諸經・未來流布の故に之を讀誦して往生すべきか、其の法華を捨そ閉閣抛ほつ
かんきょう ぶりやうじゆぶつ し 觀經の持無量壽仏の文に依よつて法然ほうねん是かくの如ごとく行たま給たまうか、觀經の持

むりようじゆぶつ
無量寿仏の文の上に諸善を説き一向に無量寿仏を勸持せる故に申せしめ候、
じつそう
実相に於いても多く有りと云う難、彼は浄土の故に此の難来るべからず、
ほうねんしょうにんしょうどう
ほうねんしょうにんしょうどう
法然上人聖道の行機堪え難き故に未来流布の法華を捨閉閣抛す、故に是れ
じひ しん
慈悲の至進なれば此の慈悲を以て浄土に往生し全く地獄に墮すべからざる
か。

にちれんなん
日蓮難じて云く、觀經を已説の經なりと云云、已説に於ては承伏か、觀經
いま ほけきよう
の時未だ法華經を説かずと雖も未来を鑒みて捨閉閣抛すべしと法然上人は
こころうたま
意得給うか云云、仏・未来を鑒みて已説の經に未来の經を載せて之を制止す
と云わば已説の小乗經に未説の大乗經を載せて之を制止すべきか、又
いせつ ごんだいじようきよう
已説の權大乘經に未説の實大乘經を載せて未来流布の法華經を制止せば、
ゆえ
何が故に仏・爾前經に於て法華の名を載せざる由、之を説きたまうや。

ほうねんしょうにんじひ
法然上人慈悲の事、慈悲の故に法華經と教主釈尊とを抛つなりと云わば

所詮上に出す所の証文は未だ分明ならず慥なる証文を出して法然上人の
極苦を救わる可きか、上の六品の諸行往生を下の三品の念仏に対して諸行
を捨つ豈法華を捨つるに非ずや等云云、観無量寿經の上六品の諸行は法華
已前の諸行なり、設い下の三品の念仏に対して上六品の諸行・之を抛つと
も但法華經は諸行に入らず何ぞ之を闇かんや、又法華の意は爾前の諸行と
觀經の念仏と共に之を捨て畢りて如來出世の本懷を遂げ給うなり、日蓮管見
を以て一代聖教並びに法華經の文を勘うるに未だ之を見ず、法華經の名を
挙げて・或は之を抛ち・或は其の門を閉ずる等と云う事を、若し爾らば法然
上人の憑む所の弥陀本願の誓文並びに法華經の入阿鼻獄の釈尊の誠文・如
何ぞ之を免る可けんや、法然上人・無間獄に墮せば所化の弟子並びに諸檀那
等共に阿鼻大城に墮ちんか、今度分明なる証文を出して法然上人の阿鼻
の災を消さる可し云云。

文永九年太歲壬申正月十七日

日蓮 かおう 花押

弁成 べんじょう 花押 かおう

一三 法華真言勝劣事

120P

とうじ こうぼうだいしきうかい しよりゆう いわ ほけきょう なおけこんきょう おと
東寺の弘法大師空海の所立に云く法華經は猶華嚴經に劣れり何に況や
だいにちきよう じかくだいし えんにん ちしやうだいし えんちん あんねんわじやう

大日經等に於いてをやと云云、慈覺大師・円仁・智証大師・円珍・安然和尚

等の云く法華經の理は大日經に同じ印と真言との事に於ては是れ猶劣れるな

りと云云 其の所釈は余 空海は大日經・菩提心論等に依つて十住心を立てて

顯密の勝劣を判ず、 其の 其の中に第六に他縁大乘・心は法相宗・第七に覺心

不生心は三論宗・第八に如実一道心は天台宗・第九に極無自性心は華嚴宗

・第十に秘密莊嚴心は真言宗なり、此の所立の次第は浅き従り深きに至る、

其の証文は大日經の住心品と菩提心論とに出づと云えり、然るに出す所の

大日經の住心品を見て他縁大乘・覺心不生・極無自性を尋ぬるに名目は

きようもん

經文これあに之しか有り、然りと雖も他縁・覺心かくしん・極無自性の三句ほつそうを法相・三論・華嚴けこん

に配する名目みょうもくは之これな無し、其の上覺心不生かくしんふじょうと極無自性との中間ちゆうげんに如実一道によじついちどう

もんぎ

文義共に之これな無し、但し此の品の初に「云何いかなるか菩提ぼだい謂く如実に自心じしんを知る」

これあ

等の文之これあ有り、此の文を取つて此の二句の中間ちゆうげんに置いて天台宗と名づけ

けこんしゅう

華嚴宗に劣るの由、之これを存す、住心品じゅうしんぽんに於ては全く文義共に之これな無し、有文有義ゆうもんうぎ

むもんうぎ

・無文有義の二句を虧かく信用しんように及ばず、菩提心論ぼだいしんろんの文に於ても法華・華嚴の

しようにつすべこれ

勝劣都て之を見ざる上、此の論は竜猛菩薩の論と云う事じように上古より諍論じようろん之れ

じようろん

有り、此の諍論じようろん絶えざる已前に龜鏡きつきように立つる事は堅義けんぎの法そむに背く、其の上

ぜんむい

善無畏・金剛智等こんこうち評定ひようじよう有つて大日經の疏じよ・義釈ぎしゃくを作れり一行阿闍梨あじゃりの執筆しつぴつ

じよぎしゃく

なり、此の疏義釈じよぎしゃくの中に諸宗の勝劣しよしゆうを判ずるに法華經と大日經とは広略こうりやく

おわ

の異なりと定め畢おわんぬ、空海の徳貴とあとしと雖も争いえどか先師いかでの義せんしに背く可きやと云

なんこ

う、難なんこ此れ強こし此れ安然あんねんの難なんなり、之に依つて空海の門人之を陳よずるに旁かたがた

ちんとうこれあ 陳答之有り・或は守護經・或は六波羅蜜經・或は楞伽經・或は金剛頂經等
に見ゆと・多く会通すれども總じて難勢を免れず、然りと雖も東寺の末学等
だいし 大師の高徳を恐るるの間・強ちに会通を加えんとすれども結句会通の術計
これなくもんどう 之無く問答の法に背いて伝教大師最澄は弘法大師の弟子なりと云云、又
しゅつろん 宗論の甲乙等 旁論する事之有りと云云。

にちれん 日蓮案じて云く、華嚴宗の杜順・智嚴・法蔵等・法華經の始見今見の文に
つ 就いて法華・華嚴・齊等の義之を存す、其の後澄觀始今の文に依つて齊等の
義を存すること祖師に違せず、其の上一往の弁を加えて法華と華嚴と齊等な
りと云えり、但し華嚴は法華經より先なり、華嚴經の時・仏最初に法慧功德
林等の大菩薩に対して出世の本懷之を遂ぐ、然れども二乗並に下賤の凡夫等
こんき みじゆく ゆえ 根機未熟の故に之を用いず、阿含・方等・般若等の調熟に依つて還つて
けこんきよう 華嚴經に入らしむ、此れを今見の法華經と名づく、大陣を破るに余殘・堅か

らざる等の如し、然れば実に華嚴經・法華經に勝れたり等と云云、本朝に於
て勤操等に値いて此の義を習學す後に天台・真言を學すと雖も旧執改まらざ
るが故に此の義を存するか、何に況や華嚴經・法華經に勝るの由は陳隋より
已前・南三・北七・皆此の義を存す、天台已後も又諸宗此の義を存せり但だ
弘法一人に非ざるか、但し澄觀・始見今見の文に依つて華嚴經は法華經より
勝ると料簡する才覺に於ては天台智者大師・涅槃經の「是經出世乃至
如法華中」等の文に依つて法華・涅槃齊等の義を存するのみに非ず、又勝劣
の義を存するは此の才覺を學びて此の義を存するか此の義若し僻案ならば
空海の義も又僻見なる可きなり、天台・真言の書に云く法華經と大日經と
は広略の異なり、略とは法華經なり、大日經と齊等の理なりと雖も印・
真言之を略する故なり、広とは大日經なり、極理を説くのみに非ず印・真言
をも説く故なり、又法華經と大日經とに同劣の二義有り、謂く・理同事劣な

り、又二義有り一には大日經は五時の撰なり是れ与の義なり、一には大日經は五時の撰に非ず是れ奪の義なり、又云く法華經は譬えば裸形の猛者の如し大日經は甲冑を帶せる猛者なり等と云云、又云く印・真言無きは其の仏を知る可からず等と云云。

日蓮不審して云く、何を以て之を知る、理は法華經と大日經と齊等なりと云う事を、答えて云く疏と義釈並に慈覺・智証等の所釈に依るなり。

求めて云く此等の三蔵大師等は又何を以て之を知るや・理は齊等の義なり

と、答えて云く三蔵大師等をば疑う可からず等と云云、難じて云く、此の

義・論義の法に非ざる上、仏の遺言に違背す慥に經文を出す可し、若し

經文無くんば義分無かる可し如何、答う威儀形色經・瑜祇經・觀智儀軌等な

り、文は口伝す可し、問うて云く法華經に印・真言を略すとは仏よりか經家

よりか訳者よりか、答えて云く・或は仏と云い・或は經家と云い・或は訳者

と云うなり、不審して云く仏より真言・印を略して法華經と大日經と
理同事勝の義之有りと いわば此の事何れの經文ぞや、文証の所出を知らず
が意の浮言ならば之を用ゆ可からず、若し經家・訳者より之を略すといわば
我意の浮言ならば之を用ゆ可からず、若し經家・訳者より之を略すといわば
仏説に於ては何ぞ理同事勝の釈を作る可きや、法華經と大日經とは全躰齊な
り能く能く子細を尋ぬ可きなり。

ひそかにちれんいわ 私に日蓮云く、威儀形色經・瑜祇經等の文の如くば仏説に於ては法華經に

印・真言有るか、若し爾らば經家・訳者之を略せるが、六波羅蜜經の如きは

經家之を略す、旧訳の仁王經の如きは訳者之を略せるか、若し爾らば天台・

真言の理同事異の釈は經家並に訳者の時より法華經・大日經の勝劣なり、

全く仏説の勝劣に非ず此れ天台・真言の極なり、天台宗の義勢才覚の爲に

此の義を難ず、天台・真言の僻見此くの如し、東寺所立の義勢は且く之を

置く僻見眼前の故なり、抑天台・真言宗の所立・理同事勝に二難有り、

一には法華經と大日經と理同の義其の文全く之無し、法華經と大日經と
先後如何、既に義釈に二經の前後之を定め畢つて法華經は先き大日經は後な
りと云へり、若し爾らば大日經は法華經の重説なる流通なり、一法を兩度
之を説くが故なり若し所立の如くば法華經の理を重ねて之を説くを大日經
と云う、然れば則ち法華經と大日經と敵論の時は大日經の理之を奪つて
法華經に付く可し、但し大日經の得分は但・印真言計りなり、印契は身業・
真言は口業なり身口のみにして意無くば印・真言有る可からず、手口等を奪
つて法華經に付けなば手無くして印を結び口無くして真言を誦せば虚空に印
・真言を誦結す可きか如何、裸形の猛者と甲冑を帶せる猛者との譬の事、
裸形の猛者の進んで大陣を破ると甲冑を帶せる猛者の退いて一陣をも破らざ
るとは何れが勝るや、又猛者は法華經なり甲冑は大日經なり、猛者無く
んば甲冑何の詮か之有らん此れは理同の義を難ずるなり、次に事勝の義を難

せば法華經には印・真言無く大日經には印・真言之有りと云云、印契真言の
有無に付て二經の勝劣を定むるに大日經に印・真言有つて法華經に之無き
故に劣ると云わば、阿含經には世界建立賢聖の地位是れ分明なり、大日經
には之無し、彼の經に有る事が此の經に無きを以て勝劣を判ぜば大日經は
阿含經より劣るか、雙觀經等には四十八願是れ分明なり大日經に之無し、
般若經には十八空是れ分明なり大日經には之無し、此等の諸經に劣ると
云う可きか、又印・真言無くんば仏を知る可からず等と云云、今反詰して云く
理無くんば仏有る可からず、仏無くんば印契真言一切徒然と成るべし。
彼難じて云く、賢聖並に四十八願等をば印・真言に對す可からず等と云云、
今反詰して云く最上の印真言之無くば法華經は大日經等よりも劣るか、
若し爾らば法華經には二乗作仏・久遠実成・之有り大日經には之無し印
真言と二乗作仏久遠実成とを對論せば天地雲泥なり、諸經に印真言を簡わ

ざるに大日經に之を説いて何の詮か有る可きや、一乗若し灰断の執を改めず
んば印・真言も無用なり、一代の聖教に皆二乗を永不成仏と簡い随つて
大日經にも之を隔つ、皆成仏までこそ無からめ三分が二之を捨て百分が六
十余分得道せずんば仏の大悲何かせん、凡そ理の三千之有つて成仏すと云う
上には何の不足か有る可き成仏に於てはなる仏・中風の覺者は之有る可
らず、之を以て案ずるに印・真言は規模無きか、又諸經には始成正覺の旨
を談じて三身相即の無始の古仏を顕さず、本無今有の失有れば大日如来は
有名無実なり、寿量品に此の旨を顕す釈尊は天の一月諸仏・菩薩は万水に
浮べる影なりと見えたり、委細の旨は且く之を置く。

又印・真言無くんば祈有る可からずと云云、是れ又以ての外の僻見なり、
過去・現在の諸仏・法華經を離れて成仏す可からず法華經を以て正覺を成
じ給う、法華經の行者を捨て給わば諸仏還つて凡夫と成り給うべし恩を知ら

ざる故なり、又未来の諸仏の中の二乗も法華經を離れては永く枯木敗種なり、
今は再生の華果なり、他經の行者と相論を為す時は華光如来・光明如来等
は何れの方に付く可きや、華嚴經等の諸經の仏・菩薩・人天乃至四惡趣等の
衆は皆法華經に於て一念三千・久遠実成の説を聞いて正覺を成ず可し何れ
の方に付く可きや、真言宗等と外道並に小乗・權大乘の行者等と敵対
相論を為すの時は甲乙知り難し、法華經の行者に對する時は竜と虎と師子と
兎との鬭いの如く諍論分絶えたる者なり、慧亮腦を破りし時・次第位に即き
そうおうかじ 相應加持する時・真濟の惡靈伏せらるる等是なり、一向・真言の行者は
ほけきよう 法華經の行者に劣れる証拠是なり、問うて云く義釈の意は法華經・大日經
に二乗作仏・久遠実成を明かすや如何、答えて云く共に之を明かす、義釈
に云く「此の經の心の実相は彼の經の諸法実相なり」と云云、又云く「本初
は是れ寿量の義なり」等と云云。

問うて云く華嚴宗の義に云く華嚴經には二乗作仏・久遠実成之を明かす、
天台宗は之を許さず、宗論は且く之を置く人師を捨てて本經を存せば
華嚴經に於ては二乗作仏・久遠実成の相似の文之有りと雖も實には之無し、
之を以て之を思うに義釈には大日經に於て二乗作仏・久遠実成を存すと
雖も實には之無きか如何、答えて云く華嚴經の如く相似の文之有りと雖も
實義之無きか、私に云く二乗作仏無くば四弘誓願満足す可からず、四弘誓願
満たずんば又別願も満す可からず、總別の二願満せずんば衆生の成仏も有
り難きか能く能く意得可し云云。問うて云く大日經の疏に云く大日如来は
無始無終なり遙に五百塵点に勝れたりと如何、答う毘盧遮那の無始無終なる
事・華嚴・淨名・般若等の諸大乘經に之を説く独り大日經のみに非ず、
問うて云く若し爾らば五百塵点は際限有れば有始有終なり無始無終は際限無
し、然れば則ち法華經は諸經に破せらるるか如何、答えて云く他宗の人は此

の義を存す天台一家に於て此の難を会通する者有り難きか、今大日經並に諸
大乗經の無始無終は法身の無始無終なり三身の無始無終に非ず、法華經の
五百塵点は諸大乘經の破せざる伽耶の始成之を破りたる五百塵点なり、
大日經等の諸大乘經には全く此の義無し、宝塔の涌現・地涌の涌出・弥勒
の疑・寿量品の初の三誠四請・弥勒菩薩領解の文に「仏・希有の法を説き
たもう昔より未だ曾つて聞かざる所なり」等の文是なり、大日經六卷並に供養
法の卷金剛頂經・蘇悉地經等の諸の真言部の經の中に未だ三止四請・
三誠四請・二乗の劫国名号・難信難解等の文を見ず。
問うて云く五乗の真言如何、答う未だ二乗の真言を知らず四諦・十二因縁
の梵語のみ有るなり、又法身平等に会すること有らんや。
問うて云く慈覚・智証等理同事勝の義を存す争か此等の大師等に過ぎんや、
答えて云く人を以て人を難ずるは仏の誠なり何ぞ汝仏の制誠に違背するや但

きようもん もつしうれつ
經文を以て勝劣の義を存す可し、難じて云く末学の身として祖師の言に背
かば之を難ぜざらんや、答う末学の祖師に違する之を難ぜば何ぞ智証・慈覺
てんだい みようらく
の天台・妙樂に違するを何ぞ之を難ぜざるや、問うて云く相違如何、答えて
いわ てんだいみようらく
云く天台妙樂の意は已今当の三説の中に法華經に勝れたる經之れ有る可から
ず、若し法華經に勝れたる經之有りといわば一宗の宗義之を壞る可きの由
これ そんな も だいにちきよう ほけきよう まさ てんだい みようらく
之を存す、若し大日經・法華經に勝るといわば天台・妙樂の宗義忽に破る
可きをや。

問うて云く天台・妙樂の已今当の宗義証拠經文に有りや、答えて云く之れ
ほけきよう ほうしほん いわ
有り法華經・法師品に云く「我が所説の經典は無量千万億已に説き今説き
まさ
当に説かん而も其の中に於て此の法華經最も為れ難信難解なり」等と云云、
きようもん
此の經文の如くんば五十余年の釈迦所説の一切經の内には法華經は最第一
なり、難じて云く真言師の云く法華經は釈迦所説の一切經の中に第一なり、

だいにちきよう だいにちにやらいしよせつ

大日経は大日如来所説の経なりと、

答えて云く釈迦如来より外に

大日如来

えんぶだい

おい

じようどう

だいにちきよう

閻浮提に於て八相成道して大日経を説けるかは一、

六波羅蜜經に云く過去

ろくはらみつきよう

げんざい

しゃかむにぶつ

しよせつ

しよきよう

・現在並に釈迦牟尼仏の所説の諸経を分ちて五藏と為し其の中の第五の

だらにぞう

しんこん

しよせつ

しゃかにやらい

しよせつ

あら

な

そ

きようもん

陀羅尼藏は真言なりと真言の経・釈迦如来の所説に非ずといわば・経文に

違す是二、

「我所説經典」等の文は

釈迦如来の

正直捨方便の

説なり

大日如来

だいにちにやらい

の証

明分身の

諸仏広長舌相の

経文なり

是三、

五仏の

章尽く

諸仏皆

法華經

を第一なりと説き給う

是四、

「要を以て之を言わば

如来の

一切の

所有の

法乃至

ないし

皆此の

經に於て

宣示顯説す」等と云云、

此の

經文の

如くならば

法華經は

釈迦

所説の

諸經の

第一なるのみに非ず、

大日如来・

十方無量諸仏の

諸經の中に

法華經第一なり、

此の外一仏・

二仏の

所説の

諸經の中に

法華經に勝れたるの

經之有りと云わば

信用す可からず

是五、

大日経等の諸の真言経の中に法華經に勝れたる由の經文之れ無し是六、

大日如来

大日如来

大日如来

大日如来

大日如来

大日如来

大日如来

大日如来

より外の天竺・震旦日本国の論師・人師の中に天台大師より外の人師の所釈の中に一念三千の名目之無し、若し一念三千を立てざれば性惡の義之無し性惡の義之無くんば仏・菩薩の普現色身・不動愛染等の降伏の形・十界の曼荼羅・三十七尊等・本無今有の外道の法に同じきかは七。

問うて云く七義の中に一一の難勢之有り然りと雖も六義は且く之を置く第七の義如何、華嚴の澄觀・真言の一行等皆性惡の義を存す何ぞ諸宗に此の義無しと云うや、答えて云く華嚴の澄觀・真言の一行は天台所立の義を盗んで自宗の義と成すか、此の事余処に勘えたるが如し、問うて云く天台大師の玄義の三に云く「法華は衆經を總括す乃至舌口中に爛る人情を以て彼の大虚を局ること莫れ」等と云云、釈籤の三に云く「法華宗極の旨を了せずして声聞に記する事相のみ華嚴・般若の融通無礙なるに如かずと謂う諫曉すれども止まず舌の爛れんこと何ぞ疑わん、乃至已今当の妙茲に於て固く迷

えり舌爛ただれて止まざるは猶なおこ為なれ華報かほうなり謗法ほうほうの罪苦長劫ざいくちやうこくに流るゝ等と云云、
若もし天台てんだい・妙樂みょうらくの釈実しやくじつならば南三なんさん・北七ほくひち並に華嚴けこん・法相ほっそう・三論さんろん・東寺とうじの弘法こうぼう
等・舌爛ただれんこと何の疑うたがい有らんや、乃至苦流長劫ないしくりゆうちやうこくの者なるか、是は且しばく之を
置く慈覺じかく・智証ちしよう等の親まのあたり此の宗義しゆぎを承うけたる者・法華經ほけきやうは大日經だいにちきやうより劣の義
存そんす可べし、若もし其の義そならば此の人人ひとびとの「舌爛ぜつらん口中苦流長劫くちゆうちやうこく」は如何いかん、答こたえ
て云いく此の義いは最上さいじやうの難なんの義ぎなり口伝くでんに存ぞんり云云。
ぶんえいがんねんきのえね
文永元年甲子七月二十九日之を記す。
これしる

日蓮にちれん

一四 真言七重勝劣事しんごん しやうれつ

文永七年 四十九歳御作 与とき富木常忍じやうにん

128P

一 法華ほっけ・大日二經だいにちの七重勝劣しやうれつの事。

一 戸那しな・扶桑ふそうの人師にんし・一代いちだい聖教しやうきやうを判はずるの事。

鎮護国家の三部の事。
ちんこくか
だいいり さんぼう

内裏に三宝有り内典の三部に当るの事。
ないてん
てんだいしゅう

天台宗に帰伏する人人の四句の事。
きふく
ひとびと

今經の位を人に配するの事。
こんきょう

三塔の事。

日本国仏神の座席の事。
にほんこくぶっしん
ざせき

法華・大日二經の七重勝劣の事。
ほっけ だいにち
しゅうれつ

已今当第一
いこんとうだいいち
ほんもんだいいち
本門第一

法華經第一
ほけきようだいいち

「薬王今汝に告ぐ・諸經の中に於いて最も其の上に在り」
やくおう なんじ
しよきよう

迹門第二
しやくもん

涅槃經第二 「是經出世」
ねはんぎょう
しゅつせ

むりようぎきよう
無量義經第三 「次に方等十二部經・摩訶般若・華嚴海空を説く・眞實甚深

・眞實甚深」
しんじつじんじん

けこんきよう
華嚴經第四

はんによきよう
般若經第五

そしつちきよう
蘇悉地經第六 上に云く「三部の中に於て此の經を王と爲す、中に云く

「猶成就せずんば當に此の法を作す」
なおいよういふ まさ

べし決定として成就せん、所謂乞食・精勤・念誦・大

きようけい
恭敬・巡八聖跡・禮拜行道なり、或は復大

はんによきよう
般若經七遍・或は一百遍を轉読す、下に云く「三時に常

だいじようはんによ
に大乘般若等の經を讀め」

だいにちきよう
大日經第七 三國に未だ弘通せざる法門なり。

しな ふそう にんしいちだいしきよう
尸那・扶桑の人師一代聖教を判ずるの事

華嚴經第一
けこんきようだいいち

ねはんぎよう

涅槃經第二
ねはんぎよう

こうたく

もつ

人光宅を以て長と為す。
な

ほけきよう

法華經第三
ほけきよう

はんにゃきようだいいち

般若經第一
ほけきようだいいち

法華經第一
ほけきようだいいち

法華經第一
ほけきようだいいち

ねはんぎよう

涅槃經第二
ねはんぎよう

けこんきよう

華嚴經第三
けこんきよう

じんみつ

深密經第一
じんみつ

ほけきよう

法華經第二
ほけきよう

はんにゃきよう

般若經第三
はんにゃきよう

けこんきようだいいち

華嚴經第一
けこんきようだいいち

南北の義

晋・齊等

さいとう

五百余年・三百六十余

きちぞう

吉蔵の義

りようだい

梁代の人なり。

なんがく

おんでし

南岳の御弟子なり。

てんだいちしゃだいし

天台智者大師の御義

ちんずい

陳隋二代の人なり。

みょうぶく

妙樂等之を用う。

これ

げんじよう

玄奘の義

とう

唐の始め太宗の御宇の人なり。

ぎよう

の御宇の人なり。

ほけきよう
法華經第二

ほうぞう
法蔵・澄観等の義
とう
唐の半ば則天皇后の

ぎよう
御宇の人なり。

ねはんぎよう

涅槃經第三

だいにちきようだいいち

大日經第一

ほけきよう

法華經第二

しよきよう

諸經第三

ほけきようだいいち

法華經第一

ねはんぎよう

涅槃經第二

ひえいざんえんりやく

代の人、比叡山延暦寺なり。

しよきよう

諸經第三

だいにちきようだいいち

大日經第一

けこんきよう

華嚴經第二

こうほう

弘法の義

人王五十二代嵯峨・淳和二代の人、東寺・高野

さが
嵯峨・淳和二代の人、東寺・高野

ぜんむい
善無畏・不空等の義
とう
唐の末・玄宗の御宇の人なり。

等なり。

ほけきよう

法華經第三

だいにちきようだいいち

大日經第一

ほけきよう

法華經第二

えいざんこうどうそうじいん

三代、叡山講堂総持院なり。

しきよう

諸經第三

ちんごこつか

鎮護国家の三部の事

ほけきよう

法華經

みつこんきよう

密嚴經

あらた ほつけじ

改めて法華寺を立つ、

にんのうきよう

仁王經

ほけきよう

法華經・

浄名經

聖徳太子

人王三十四代推古天皇の御宇、四天王寺に

脇士に両部の大日なり。

中央に法華經・

不空三蔵

大曆に法華寺に之を置く、

大曆二年護摩寺を

感覺の義

善無畏を以て師と為す、

仁明・文徳・清和の

智証之に同ず、園城寺なり。

之を置くこれ摂津せつの国・難波郡・仏法最初なになぐん

勝鬘經しょうまん

の寺なり。

法華經ほけきよう

金光明經こんこうみょうきよう

傳教大師でんぎようだいし

人王五十代桓武天皇かんむてんのうの御宇ぎよう、比叡山ひえいざん延暦寺えんりやく止觀しかん

院に之を置くこれ、年分得度者一人は

仁王經にんのうきよう

遮那業一人は止觀業なり。

大日經だいにちきよう

金剛頂經こんこう

慈覺大師じかくだいし

人王五十四代仁明天皇じんみやうてんのうの御宇ぎよう、比叡山東塔ひえいざんの西

總持院に之を置かるそうじいん、御本尊は大日ごほんぞん

蘇悉地經そしつちきよう

如來にょらい、金蘇きんその二疏じよ十四卷安置あんちせらる。

内裏だいりに三宝有さんぼうり内典ないてんの三部に当るの事。

神璽しんじ 国の手驗しるしなり。

宝剣

国敵を禦^{ふせ}ぐ財なり、平家の乱の時に海に入りて見えず。

内侍所

天照太神影を浮かべ給^{たま}う神鏡と云う、左馬頭^{めず}頼茂に打たれて

焼失^{しょうしつ}す。

天台宗に帰伏^{きふく}する人人の四句の事

一に身心俱^{しんしんとも}に移る

三論^{さんろん}の嘉祥大師^{かじょうだいし}

華嚴^{けこん}の澄觀法師^{ちようかんほつし}

真言^{しんごん}の善無畏^{ぜんむい}・不空^{ふくう}

二に心移りて身移らず

華嚴^{けこん}の法蔵^{ほうぞう}

法相^{ほっそう}の慈恩^{じおん}

慈覺^{じかく}

三に身移りて心移らず

智証大師^{ちしょうだいし}

弘法大師^{こうぼうだいし}

四に身心俱^{しんしんとも}に移らず

今經こんきやうの位を人に配するの事

征夷將軍せいゐしやうぐん

鎌倉殿かまくら

無量義經むりやうぎきやう

摂政せつしやう

涅槃經ねはんぎやう

院

迹門しやくもん十四品

天子てんし

本門ほんもん十四品

三塔の事

中堂ちゆうだう

伝教大師でんぎやうだいしの御建立ごんりゆう

止觀しかん・遮那しゃなの二業を置く、

御本尊ごほんぞんは藥師如來やくしにょらい

なり、延曆えんりやく年中の御建立ごんりゆう・王城の

丑寅に當る、

桓武天皇かんむてんのうの御崇重すうちやう、

天子本命てんしほんめいの

道場どうじやうと云つ。

止觀しかん

本院

天竺てんじく

には靈鷲山りやうじゆうせん

と云い震旦しんたん

には天台山てんだいと云い

扶桑ふそう

には比叡山ひえいざんと云つ、

三國伝灯

の仏法此に極まれり。

講堂 慈覺大師の建立 總持院 鎮護國家の道場と云う、御本尊は大日

如来なり、承和年中の建立、止觀院の西

に真言の三部を置き是を東塔と云うな

り、伝教の御弟子第三の座主なり。

西塔

釈迦堂 宝幢院 円澄の建立

伝教の御弟子なり。

觀音堂 横川 慈覺の建立

楞嚴院

日本国仏神の座席の事

問う吾が朝には何れの仏を以て一の座と為し何れの法を以て一の座と為し

何れの僧を以て一の座と為すや、答う觀世音菩薩を以て一の座と為し真言の

法を以て一の座と為し東寺の僧を以て一の座と為すなり。

問う日本には人王三十代に仏法渡り始めて後は山寺種種なりと雖も延暦寺

を以て天子本命の道場と定め鎮護国家の道場と定む、然して日本最初の

本尊釈迦を一の座と為す然らずんば延暦寺の薬師を以て一の座と為すか、又

代代の帝王起請を書いて山の弟子とならんと定め給ふ故に法華經を以て法の

一の座と為し延暦寺の僧を以て一の座と為す可し、何ぞ仏を本尊とせず菩薩

を以て諸仏の一の座と為すや、答う尤も然る可しと雖も慈覺の御時叡山は真言

になる東寺は弘法の真言を建立す故に共に真言師なり、共に真言師なるが

故に東寺を本として真言を崇む真言を崇むる故に觀音を以て本尊とす真言に

は菩薩をば仏にまされりと談ずるなり、故に内裏に毎年正月八日の内道場の

法・行わる東寺の一の長者を召して行わる若し一の長者暇有らざれば一の

長者行つべし三までは及ばす可からず云云、故に仏には觀音・法には真言・

僧には東寺法師なり、比叡山をば鬼門の方とて之を下す譬えば武士の如しと云うて崇めざるなり故に日本国は亡国とならんとするなり。

問う神の次第如何、答う天照太神を一の座と為し八幡大菩薩を第二の座と為す是より已下の神は三千二百三十二社なり。

一五 真言天台勝劣事

文永七年四十九歳御作

134P

問う何なる経論に依つて真言宗を立つるや、答う大日経・金剛頂経・

蘇悉地経並びに菩提心論此の三経一論に依つて真言宗を立つるなり、問う

大日経と法華経と何れか勝れたるや、答う法華経は・或は七重・或いは八重

の勝なり大日経は七八重の劣なり、難じて云く驚いて云く古より今に至る

まで法華より真言劣ると云う義都て之無し之に依つて弘法大師は十住心を

立てて法華は真言より三重の劣と釈し給へり覺鑊は法華は真言の履取に

及ばずと釈せり打ち任せては密教勝れ顕教劣るなりと世挙つて此を許す七

重の劣と云う義は甚珍しき者をや、答う真言は七重の劣と云う事珍しき義なりと驚かるるは理なり、所以に法師品に云く、「已に説き今説き当に説かんしかそ、而も其の中に於て此の法華經は最も為れ難信難解なり」云云、又云く、「諸經の中に於て最も其の上に在り」云云、此の文の心は法華は一切經の中に勝れたり此其の一、次に無量義經に云く、「次に方等十二部經摩訶般若・華嚴海空を説く」云云、又云く、「真實甚深甚深甚深なり」云云、此の文の心は無量義經は諸經の中に勝れて甚深の中にも猶甚深なり然れども法華の序分にして機もいまだなましき故に正説の法華には劣るなり此其二、次に涅槃の九に云く、「是の經の世に出ずるは彼の果実の利益する所多く一切を安樂ならしむるが如く能く衆生をして仏性を見せしむ、法華の中の八千の聲聞記を得授するが如く大果実を成じ秋收冬蔵して更に所作無きが如し」云云、簸の一に云く、「一家の義意謂く二部同味なれども然も涅槃尚劣る」云云、此の文の心

は涅槃經も醍醐味・法華經も醍醐味同じ醍醐味なれども涅槃經は尚劣るなり
法華經は勝れたりと云へり、涅槃經は既に法華の序分の無量義經よりも劣り
醍醐味なるが故に華嚴經には勝たり此其三、次に華嚴經は最初頓説なるが故に
般若には勝れ涅槃經の醍醐味にはり此其四、次に蘇悉地經に云く「猶成ぜざら
ん者は・或は復大般若經を転読すること七遍云云、此の文の心は大般若經
は華嚴經には劣り蘇悉地經には勝ると見えたり此其五、次に蘇悉地經に云く
「三部の中に於て此の經を王と爲す云云、此の文の心は蘇悉地經は大般若經
には劣り大日經・金剛頂經には勝ると見えたり此其六、此の義を以て
大日經は法華經より七重の劣とは申すなり法華の本門に望むれば八重の劣と
も申すなり。

次に弘法大師の十住心を立てて法華は三重劣ると云う事は安然の教時義
と云う文に十住心の立様を破して云く五つの失有り謂く一には大日經の

義釈に違する失・二には金剛頂經に違する失・三には守護經に違する失・
四には菩提心論に違する失・五には衆師に違する失なり、此の五つの失を陳
ずる事無くしてつまり給へり、然る間法華は真言より三重の劣と釈し給へる
が大なる僻事なり謗法に成りぬと覺ゆ、次に覺鑊の法華は真言の履取に及ば
ずと舍利講の式に書かれたるは舌に任せたる言なり証拠無き故に専ら謗法な
る可し、次に世を挙げて密教勝れ顯教劣ると此を許すと云う事は偏に弘法
を信じて法を信ぜざるなり、所以に弘法をば安然和尚五失有りと云うて用い
ざる時は世間の人は何様に密教勝ると思ふ可き抑密教勝れ顯教劣るとは
何れの經に説きたるや是又証拠無き事を世を挙げて申すなり、猶難じて云く
大日經等は是中央大日法身無始無終の如来法界宮・或は色究竟天他化自在天
にして菩薩の為に真言を説き給へり法華は釈迦心身靈山にして二乗の為に
説き給へり・或は釈迦は大日の化身なりとも云へり、成道の時は大日の印可

を蒙て・字の觀を教えられ後夜に仏になるなり大日如来だにもましまさずば
争か釈迦仏も仏に成り給うべき此等の道理を以て案ずるに法華より真言勝れ
たる事は云うに及ばざるなり、答て云く依法不依人の故にい恥やうにも經説
のやうに依る可きなり、大日經は釈迦の大日となつて説き給へる經なり故に
金光明と最勝王經との第一には中央釈迦牟尼と云へり又金剛頂經の第一
にも中央釈迦牟尼仏と云へり大日と釈迦とは一つ中央の仏なるが故に大日經
をば釈迦の説とも云うべし大日の説とも云うべし、又毘盧遮那と云うは天竺
の語大日と云うは此の土の語なり釈迦牟尼を毘盧遮那と名づくと云う時は
大日は釈迦の異名なり加之旧訳の經に盧舍那と云うをば新訳の經には
毘盧遮那と云う然る間・新訳の經の毘盧遮那法身と云うは旧訳の經の盧舍那
他受用身なり、故に大日法身と云うは法華經の自受用報身にも及ばず況や
法華經の法身如来にはまして及ぶ可からず法華經の自受用身と法身とは真言

には分・絶えて知らざるなり法報不分二三莫弁と天台宗にもきはるるなり、
随つて華嚴經の新訳には・或は釈迦と称づけ・或は毘盧遮那と称くと説
けり故に大日は只是釈迦の異名なりなにしに別の仏とは意得可きや、次に法身
の説法と云う事何れの經の説ぞや弘法大師の二教論には楞伽經に依つて法身
の説法を立て給へり、其の楞伽經と云うは釈迦の説にして未顕真實の権教
なり法華經の自受用身に及ばざれば法身の説法とはいへどもいみじくもなし
此の上に法は定んで説かず報は二義に通ずるの二身の有るをば一向知らざる
なり、故に大日法身の説法と云うは定んで法華の他受用身に当るなり、次に
大日無始無終と云う事既に「我昔道場に坐して四魔を降伏す」とも宣べ又「四
魔を降伏し六趣を解脱し一切智智の明を満足す」等云云、此等の文は大日は
始て四魔を降伏して始て仏に成るとこそ見えたれ全く無始の仏とは見えず、
又仏に成りて何程を経ると説かざる事は権經の故なり実經にこそ五百塵点

等をも説きたれ、次に法界宮とは色究竟天か又何れの処ぞや色究竟天・或は
他化自在天は法華宗には別教の仏の説処と云つていみじからぬ事に申すなり
又菩薩の為に説くとも高名もなし例せば華嚴經は一向菩薩の爲なれども尚
法華の方便とこそ云はるれ、只仏出世の本意は仏に成り難き二乗の仏に成る
を一大事とし給へりされば大論には二乗の仏に成るを密教と云ひ二乗作仏を
説かざるを顯教と云へり、此の趣ならば真言の三部經は二乗作仏の旨無きが
故に還つて顯教と云ひ法華は二乗作仏を旨とする故に密教と云つ可きなり、
随つて諸仏秘密の蔵と説けば子細なし世間の人密教勝ると云うはいかやうに
意得たるや但し「若し顯教に於て修行する者は久く三大無數劫を経」等と
云えるは既に三大無數劫と云う故に是三蔵四阿含經を指して顯教と云いて
權大乘までは云わず況や法華實大乘までは都て云わざるなり。

次に釈迦は大日の化身 字を教えられてこそ仏には成りたれと云う事此は

偏に六波羅蜜經の説なり、彼の經一部十卷は是れ釈迦の説なり大日の説には
あらこ みけんしんじつ ごんきよう したが じようどう さんぞう きようしゆ
非ず是れ未顕眞実の權教なり随つて成道の相も三蔵教の教主の相なり六年
くぎよう
苦行の後の儀式なるをや、彼の經説の五味を天台は盗み取つて己が宗に立つ
きようせつ てんだい
ると云う無実を云い付けらるるは弘法大師の大なる僻事なり、所以に天台は
いがごと ゆえん てんだい
ねはんぎよう よ たま ろくはらみつぎよう よ いわ てんだいしきよ
涅槃經に依つて立て給へり全く六波羅蜜經には依らず況んや天台死去の後百
じようげん わた てんだい たま ふじつ とがごうぼう
九十年あつて貞元四年に渡る經なり何として天台は見給うべき不実の過弘法
だいし およ きようせつ みなみけんしんじつ これ もつ ほけきよう
大師にあり、凡そ彼の經説は皆未顕眞実なり之を以て法華經を下さん事甚
なおなん いわ いかん しんこん まや そんぎよう
だ荒量なり、猶難じて云く如何に云うとも印・眞言・三摩耶尊形を説く事は
だいにちきよう ほけきよう これなくじりぐみつ しんこん
大日經程法華經には之無く事理俱密の談は眞言ひとりすぐれたり、其の上
しんこん さんぶきよう しゃ かいちだい しようぞく あら こうぼうだいし ほうやく
眞言の三部經は釈迦一代五時の撰属に非ずされば弘法大師の宝鑰には
しゃくまかえんろん しようご ほつけ むみよう へんいき けろん しゃく たま ここを
釈摩訶衍論を証拠として法華は無明の辺域・戲論の法と釈し給へり・爰を
もつ ほつけ しんこんまさ もつ およ いんそうそんぎよう こ ごんきよう
以て法華劣り眞言勝ると申すなり、答う凡そ印相尊形は是れ權經の説にし

て実教じつぎょうの談たに非あらず設たい之これを説くとも権実ごんじつ大小だいしやうの差別さべつ浅深せんじん有るべし、所以ゆえんに
阿含經等あこんぎやうにも印相いんそう有るが故ゆえに必ず法華ほつけに印相いんそう尊形そんぎやうを説くことを得ずして之これを
説かざるに非あらず説くまじければ是これを説かぬにこそ有あれれ法華ほつけは只ただ三世さんぜ十方じゆつぽうの仏
の本意ほんいを説いて其形けいがとあるかうある

とは云べう可べからず、例せば世界せかい建立こんりゆうの相を説かねばとて法華ほつけは俱舍ぐしやより劣る
とは云べう可べからざるが如ごとし、次に事理じり俱密ぐみつの事・法華ほつけは理秘密りひみつ・真言しんこんは事理じり
俱密ぐみつなれば勝まさるとは何いずれれの經に説けるや抑そも法華ほつけの理秘密りひみつとは何いかよう様の事ぞや、
法華ほつけの理とは迹門しやくもん・開權顯實かいこんけんじつの理そか其の理しんごんは真言しんごんには分絶ぶんぜつえて知らざる理な
り、法華ほつけの事とは又久遠実成くおんじつじやうの事なり此の事又真言しんごんになし真言しんごんに云いう所の
事理じりは未開會みかいえの權教ごんぎやうの事理じりなり何なんぞ法華ほつけに勝まさる可べきや、次に一代五時いちだいごじの撰属しやうぞく
に非あらずと云いう事こ是あらそいれ往古とうこより諍しやうなり唐決とうけつには四教しきやう有るが故ゆえに方等部ほうとうぶに撰せつす
と云いへり、教時義きやうじぎには一切智智いっさい・一味いちみの開會かいえを説くが故ゆえに法華ほつけの撰せつと云いへり、

二義の中に方等の撰と云うは吉き義なり、所以に一切智智・一味の文を以て
法華の撰と云う事甚だいはれなし彼は法開会の文にして全く人開会なし
争か法華の撰と云わるべき、法開会の文は方等・般若にも盛んに談ずれども
法華に等き事なし彼の大日經の始終を見るに四教の旨具にあり尤も方等の撰
と云う可し、所以に開權顯実の旨有らざれば法華と云うまじ一向小乘三蔵
の義無ければ阿含の部とも云う可からず、般若畢竟空を説かねば般若部とも
云う可からず、大小四教の旨を説くが故に方等部と云わずんば何れの部とか
云わん、又一代五時を離れて外に仏法有りと云う可からず若し有らば二仏
並出の失あらん、又其の法を釈迦統領の国土にきたして弘む可からず、次
に弘法大師釈摩訶衍論を証拠と為て法華を無明の辺域戲論の法と云う事はれ
以ての外的事なり、釈摩訶衍論は竜樹菩薩の造なり、是は釈迦如来の御弟子
なり争か弟子の論を以て師の一代第一と仰せられし法華經を押下して戲論の

法等と云う可きや、而も論に其の明文無く随つて彼の論の法門は別教の法門なりこんぎよう権經ほうもんの法門はつもんなり是これえんきよう円教およに及ばず又実教じつきように非ず何いかにしてか法華ほうけを下す可べき、其の上彼の論に幾いくばくの經をか引くらんされども法華經ほけきようを引く事は都すべてこれな之ごんろん無しごんろん権論の故なり、地体弘法大師ちたいこうほうだいしの華嚴けこんより法華ほっけを下されたるは遙ぶつにふつにいはくいひ違しんじいたる心地なり、用もちゆべからず用もちゆべからず。

日蓮

一六 真言諸宗違目しんげんしよしむつともく

文永九年五月五十一歳御作ぶんえい

139P

与富木常忍ときじようにん

土木殿等の人人御中ひとびとおんちゆう

日蓮

空おほに読み覚えおほよ老人等らうじんは具つぶさに聞き奉たてまれ早早に御免ごめんを蒙こうむらざる事は之これをあざむ欺べく可べからず定めて天之これを抑おさめるか、藤河入道にゅうどうを以もつて之これを知しれ去年流罪こぞるざい有あらば今年横死おうしに値あう可べからざるか彼を以もつて之これを惟おもうに愚者ぐしゃは用もちいざる

事なり、日蓮にちれんが御免ごめんを蒙こうむらんと欲ほするの事を色いろに出いだす弟子でしは不孝ふこうの者なり、敢あえてて後生ごしょうを扶たすく可べからず、各各此この旨むねを知れ。

真言宗しんこんしゅうは天竺てんじくより之これ無し開元げんむいの始さんぞうに善無畏こんこう三蔵ちさんぞう・金剛智こんこう三蔵さんぞう・不空ふくう三蔵さんぞう等

・天台大師てんだいだいし已証いししょうの一念いちねん三千さんぜんの法門ほうもんを盗だんで大日經だいにちぎょうに入はいれて之これを立て真言宗しんこんしゅう

と号けす、華嚴宗けこんしゅうは則そくてん天皇后てんこうこうの御宇ぎょうに之これを始はむ、澄觀ちやうかん等天台てんだいの十乘じゅうしやうの觀法くわんぽうを盗

んで華嚴經けこんきやうに入はいれて之これを立て華嚴宗けこんしゅうと号けす、法相ほっそう・三論さんろんは言げんつに足じらず、禪宗ぜんしゅう

は梁だるの世まだに達磨大師だつま楞伽經らうかきやう等もつを以だいてす大乘だいじやうの空いちばんの一分いちぶんなり、其その学者がくしや等大慢だいまん

を成きやうして教外別伝きやうべつでん等しやうと称いっさいし一切經いっさいきやうを蔑如べつじよす天魔てんまの所為しよゐなり、淨土宗じやうどししゅうは善導ぜんどう

等・觀經くわんきやう等かんきやうを見みて一分いちぶんの慈悲じひを起おこし撰地せんち二論にろんの人師にんしに向むかつて一向專修いっこうせんしゅうの義

を立て畢おわんぬ、日本にほんの法然ほうねん之これをあやまれり天台てんだい・真言宗しんこん等もつを以もつて雜行ざうぎやうに入はいれ

末代不相応まつだいふそうおうの思おもひを為なして國中おおくわくを誑惑さうかくして長夜まよひに迷まよわしむ、之これを明めいめし導師どうし

は但日蓮にちれん一人ひとりなるのみ。

涅槃經に云く「若し善比丘法を壞る者を見て置いて呵嘖し驅遣し拳処せず
んば当に知るべし是の人は佛法の中の怨なり」等云云、漢頂章 安大師云く
「佛法を壞乱するは佛法の中の怨なり慈無くして詐り親しむは即ち是れ彼が
怨なり彼が為に惡を除くは即ち是れ彼が親なり」等云云、法然が捨閉閣拋・
禅家等が教外別伝・若し仏意に叶わずんば日蓮は日本国の人の為には賢父な
り聖親なり導師なり、之を言わざれば一切衆生の為に「無慈詐親即是彼怨」
の重禍脱れ難し、日蓮既に日本国の王臣等の為には「為彼除惡即是彼親」に
當り此の国既に三逆罪を犯す天豈之を罰せざらんや、涅槃經に云く「爾の
時に世尊・地の少しの土を取つて之を抓の上に置いて迦葉に告げて言わく
是の土多きや十方世界の地土多きや、迦葉菩薩・仏に白して言さく世尊抓の
上の土は十方所有の土の比ならざるなり○四重禁を犯し五逆罪を作つて○
一闡提と作つて諸の善根を断じ是の經を信ぜざるものは十方界所有の地土の

如し○五逆罪を作らず○一闡提と作らず善根を断ぜず是くの如き等の涅槃經
典を信ずるは抓の上の土の如し」等云云、經文の如くんば当世・日本国は
十方の地土の如く日蓮は抓の上の土の如し。

法華經に云く「諸の無智の人有つて惡口罵詈」等云云、法滅尽經に云く「吾

般泥の後・五逆濁世に魔道興盛なり魔沙門と作つて吾が道を壊乱す○

惡人轉た多くして海中の沙の如し劫尽きんとする時・日月轉た短く善者甚

だ少くして若しは一若しは二人」等云云、又云く「衆魔の比丘・命終の後

・精神当に無択地獄に墮つべし」等云云、今道隆が一党・良觀が一党・聖

一が一党・日本国の一切の四衆等は是の經文に当るなり、法華經に云く「佞使

い劫焼に乾れたる草を担い負いて中に入つて焼けざらんも亦未だ難しとせず

我が滅度の後に若し此の經を持つて一人の爲にも説かん是れ則ち為れ難し」

等云云、日蓮は此の經文に当れり、「諸の無智の人有つて惡口罵詈等し及び

とうじよう

刀杖を加うる者あらん」等云云、仏陀記して云く後の五百歳に法華經の行者
有つて諸の無智の者の為に必ず悪口罵詈・刀杖瓦礫・流罪・死罪せられん等
云云、日蓮無くば釈迦・多宝・十方の諸仏の未来記は当に大妄語なるべきな
り。

うたがい

疑つて云く汝当世の諸人に勝ることは一分爾る可し真言・華嚴・三論・

ほつそ

がんそ まさ

あに まんかまん

あに かにんぼう

これ なんじ

法相等の元祖に勝るとは豈に慢過慢の者に非ずや過人法とは是なり汝必ず

むげん だいじよう

お べ

ゆえ しゆりようこんきよう

いわ

たと

ぐつにんみだ

ていおう

無間・大城に墮つ可し、故に首楞嚴經に説いて云く譬えば窮人妄りに帝王

と号して自ら誅滅を取るが如し

こと いわ

またほうおう

なん みだ

ぬす

いんち

ざれば果紆曲を招かん」等云云、涅槃經み云く云何なる比丘か過人法に墮する

いまだ

しやもん

まね

いかに

またほうおう

いかに

いかに

だ

○未だ四沙門果を得ず云何んぞ当に諸の世間の人をして我は已に得たりと

謂わしむべき」等云云、

いかに

いかに

いかに

いかに

いかに

いかに

いかに

父の如く」又云く「此の經は○諸經の中の主なり最も為れ第一なり能く是の

こと

いかに

いかに

いかに

いかに

いかに

いかに

いかに

父の如く」又云く「此の經は○諸經の中の主なり最も為れ第一なり能く是の

こと

いかに

いかに

いかに

いかに

いかに

いかに

いかに

父の如く」又云く「此の經は○諸經の中の主なり最も為れ第一なり能く是の

きようてん じゆじ 經典を受持すること有らん者は亦復是くの如し一切衆生の中に於て亦為れ
だいいち 第一なり」等云云、伝教大師の秀句に云く「天台法華宗の諸宗に勝れたる
しよしゆう は所宗の經に拠るが故なり自讃毀他ならず庶くは有智の君子經を尋ねて宗を
定めよ」等云云、星の中に勝れたる月・星月の中に勝れたるは日輪なり、小国
だいじん たいこく の大臣は大国の無官より下る傍例なり、外道の五通を得るより仏弟子の小乗
さんけん の三賢の者の未だ一通を得ざるは天地猶勝る、法華經の外の諸經の大菩薩は
ほつけ みようじそく 法華の名字即の凡夫より下れり何ぞ汝始めて之を驚かんや教に依つて人の
しやうれつ 勝劣を定む先ず經の勝劣を知らずんば何ぞ人の高下を論ぜんや。
いわ なんじほけきよう 問つて云く汝法華經の行者為らば何ぞ天汝を守護せざるや、答えて云く
ほけきよう 法華經に云く「惡鬼其の身に入る」等云云、首楞嚴經に云く「修羅王有り世界
しゆうじ 執持して能く梵王及び天の帝釈四天と權を請う此の阿修羅は變化に因つて
てんしゆ 有り天趣の所持なり」等云云。

能く大梵天王・帝釈・四天と戦う大阿修羅王有りて禪宗・念仏宗・
律宗等の棟梁の心中に付け入って次第に国主国中に遷り入って賢人を
失う、是くの如き大悪は梵釈も猶防ぎ難きか何に況んや日本守護の小神をや
但地涌千界の大菩薩・釈迦・多宝・諸仏の御加護に非ざれば叶い難きか、日月
は四天の明鏡なり諸天定めて日蓮を知りたまうか日月は十方世界の明鏡な
り諸仏も定めて日蓮を知りたまうか、一分も之を疑う可からず、但し先業
未だ尽きざるなり日蓮流罪に当れば教主釈尊衣を以て之を覆いたまわんか、
去年九月十二日の夜中には虎口を脱れたるか「必ず心の固きに仮りて神の守
り即ち強し」等とは是なり、汝等努努疑うこと勿れ決定して疑い有る
可からざる者なり、
恐恐謹言。

五月五日

日蓮

花押

此の書を以て諸人に触れ示して恨を残すこと勿れ。

土木殿

一七 真言見聞

ぶんえい

文永九年七月五十一歳御作 与三位房日行

142P

しんこんぼうこく

しょうもんいか

きようろん い

ほっけひぼうしうほうこうはい

問う真言亡国とは証文何なる 経論に出ずるや、答う法華誹謗正法向背の

ほうこく

しょうもんこれなく

いかに信ず可きや、

ほうぼう

もちろん

故なり、問う亡国の証文之無くば云何に信ず可きや、答う謗法の段は勿論な

も ほうぼう

ほうこくだてくうたがい

い無し、凡そ謗法とは謗仏・謗僧なり三宝

ほうぶつ

ほうそう

さんぼう

るか若し謗法ならば亡国墮獄疑い無し、

こ ねはんぎよう

い無し、

ここをもつほけきよう

ほうぶつ

ほうそう

さんぼう

一体なる故なり是れ涅槃經の文なり、爰を以て法華經には「即ち一切世間の

ぶつしゆ

すなわ いっさいせけん

ねはんぎよう

すなわ

いっさいせけん

いさい

仏種を断ず」と説く是を即ち一闡提と名づく涅槃經の一と十と十一とを委細

べ

これ すなわ

いっせんたい

ねはんぎよう

せつしょう

ちゅうとう

ないし

に見る可きなり、罪に軽重有れば獄に浅深を構えたり、殺生・偷盜等乃至

さんぜんせかい

しゅじよう

さつがい

とうかつこくじよう

だいじこく

一大三千世界の衆生を殺害すれども等活黒繩等の上七大地獄の因として

むげん

お

すべ

あび

こつじん

きようろん

こぎやく

いんが

無間に墮つることは都て無し、阿鼻の業因は経論の掟は五逆・七逆・因果

はつむ

しょうほうひぼう

ただ こぎやく

むげん

お

いえど

撥無・正法誹謗の者なり、但し五逆の中に一逆を犯す者は無間に墮つと雖も

一中劫を経て罪を尽して浮ぶ、一戒をも犯さず道心堅固にして後世を願うといえど、ほつけそむむげんおてんでんむしゅこう雖も法華に背きぬれば無間に堕ちて展転無數劫と見えたり、然れば即ち謗法むりようごぎやくすこれもつこつかてんがまさたいへいは無量の五逆に過ぎたり、是を以て国家を祈らんに天下將に泰平なるべしや、しよほうげんりようしじようきゅうひようらんかんとうそよういこくしゅ諸法は現量に如かず承久の兵乱の時・関東には其の用意もなし国主として調伏を企て四十一人の貴僧に仰せて十五壇の秘法を行はる、其の中に守護經の法を紫宸殿にして御室始めて行わる七日に滿ぜし日・京方負け畢んぬほつこくげんじようあらわずかこんじようしようちけんきようじゃほうよあくどう亡国の現証に非ずや、是は僅に今生の小事なり權教・邪法に依つて惡道に墮ちん事浅・かるべし。

問う權教邪宗の証文は如何既に真言教の大日覺王の秘法は即身成仏の奥蔵なり、故に上下一同に是の法に歸し天下悉く大法を仰ぐ海内を静め天下を治むる事偏に真言の力なり、權教・邪法と云う事如何、答う權教と云う事・四教含蔵帶方便の説なる經文顯然なり、然れば四味の諸教に同じて久遠

を隠しかく二乗にじょうを隔へだつ況いわんや尽形寿じんぎようじゆの戒等を述ぶれば小乗しょうじょう権教ごんきやうなる事疑無うたがい
し、爰ここを以もつて遣唐とうの疑問ぎもんに禅林寺ぜんりんじの広修こうしゆ・国清寺こくせいじの維ゆいの決けつ判ばん分明ふんみやうに方等部ほうとうぶ
の撰せんと云うなり、疑うたがいつて云いわく經文きやうもんの權教ごんきやうは且しばく之これを置おく唐決とうけつの事は天台てんだい
の先德せんたく・円珍大師えんちんだいし之これを破はす、大日經だいにちきやうの指歸ほつけに「法華ほっけすら尚なお及およばず況いはんやや自余じよの
教きやうをや」云云、既すでに祖師そしの所判しよはんなり誰そむか之これに背そむく可べきや、決けつに云いわく「道理前どうり
の如ごとし」依法えほう不依人ふえの意いなり但ただし此ちの釈しやくを智証ちしやうの釈しやくと云うつ事不審ふしんなり、其そのの故ゆえ
は授決集じゆけつしゆの下したに云いわく「若もし法華ほっけ・華嚴けこん・涅槃ねはん
等の經に望こめば是しやうれ摂引門しやういんもん」と云うへり、広修維こうしゆいを破はする時は法華尚ほっけなお及およば
ずと書しき授決集じゆけつしゆには是これ摂引門しやういんもんと云うつて二義相違そふいせり指歸ちしやうが円珍えんちんの作しやくなら
ば授決集じゆけつしゆは智証ちしやうの釈しやくに非あらず、授決集じゆけつしゆが実じつならば指歸ちしやうは智証ちしやうの釈しやくに非あらじ、今
・此この事を案あんずるに授決集じゆけつしゆが智証ちしやうの釈しやくと云うつ事天下てんがの人皆みな之これを知る上うへ、公家くげ
の日記にっきにも之これを載のせたり指歸ちしやうは人多おほく之これを知らず公家くげの日記にっきにも之これ無し、此

を以つて彼を思うに後の人作つて智証の釈と号するが能く能く尋ぬ可き事なり、授決集は正しき智証の自筆なり、密家に四句の五蔵を設けて十住心を立て論を引き伝を三國に寄せ家家の日記と号し我が宗を嚴るとも皆是れ妄語くおく胸臆の浮言にして莊嚴己義の法門なり、所詮法華經は大日經より三重の劣戲論の法にして釈尊は無明纏縛の仏と云う事・慥なる如來の金言經文を尋ぬ可し、証文無くんば何と云うとも法華誹謗の罪過を免れず此の事・当家の肝心なり返す返す忘失する事勿れ、何れの宗にも正法誹謗の失之有り討論の時は但此の一段に在り仏法は自他宗・異ると雖も翫ぶ本意は道俗貴賤共に離苦得樂現當二世の爲なり、謗法に成り伏して惡道に墮つ可くば文殊の智慧・富樓那の弁説一分も無益なり無間に墮つる程の邪法の行人にて國家を祈せんに將た善事を成す可きや、顯密對判の釈は且らく之を置く華嚴に法華劣ると云う事能く能く思惟す可きなり、華嚴經の十二に云く四十華嚴なり「又彼の

所修の一切功德六分の一常に王に属す。是くの如く修及び造を障る不善所有の罪業六分の一還つて王に属す。文、六波羅蜜經の六に云く、「若し王の境内に殺を犯す者有れば其の王便ち第六分の罪を獲ん偷盜・邪行及び妄語も亦復是くの如し何を以ての故に若しは法も非法も王為れ根本なれば罪に於いても福に於いても第六の一分は皆王に属するなり」云云、最勝王經に云く「悪人を愛敬し善人を治罰するに由るが故に他方の怨賊来り国人喪乱に遭わん」等云云、大集經に云く「若し復諸の刹利国王諸の非法を作し世尊の聲聞の弟子を悩亂し若しは以て毀罵し刀杖もて打斫し及び衣鉢種種の資具を奪い若しは他の給施に留難を作す者有らば、我等彼をして自然に卒に他方の怨敵を起さしめ及び自の国土にも亦兵起・疫病・饑饉・非時風雨・鬭諍言訟せしめ又其の王久しからずして復当に己が国を亡失すべからしむ」云云、大三界義に云く「爾の時に諸人共に聚りて衆の内に一の有徳の人を立て名け

て田主と爲して各所収の物六分の一を以て以て田主に貢輸す一人を以て主と爲し政法を以て之を治む、茲に因つて以後・刹利種を立て大衆欽仰して恩率土に流る復・大三末多王と名ずく、已上俱舍に依り之を出すなり。

顯密の事、無量義經十功德品に云く「第四功德の下」「深く諸仏秘密の法に入り演説す可き所違無く失爲し」と、抑大日の三部を密説と云ひ法華經を顯教

と云う事金言の所出を知らず、所詮眞言を密と云うは是の密は隱密の密なるか微密の密なるか、物を秘するに二種有り一には金銀等を蔵に籠むるは微密

なり、二には疵・片輪等を隠すは隱密なり、然れば即ち眞言を密と云うは隱密なり其の故は始成と説く故に長寿を隠し二乗を隔つる故に記小無し、此の二は教法の心髓・文義の綱骨なり、微密の密は法華なり、然れば即ち文に云く

四の卷法師品に云く「藥王此の經は是れ諸仏秘要の蔵なり」云云、五の卷安樂行品に云く「文殊師利・此の法華經は諸仏如来秘密の蔵なり諸經の中

に於て最も其の上^そに在り」云云、寿量品に云く、「如来秘密神通之力」云云、
如来神力品に云く、「如来・一切秘要之藏」云云、しかのみならず真言の高祖
りゅうじゅほさつ ほけきよう ひみつ にじようさぶつあ ゆえ しゃく
竜樹菩薩・法華經を秘密と名づく二乗作仏有るが故にと釈せり、次に二乗
さぶつ ひみつ しんこん すなわ ひみつ あら ゆえん いか だいにちきよう
作仏無きを秘密とせずば真言は即ち秘密の法に非ず、所以は何ん大日經に
いわ 云く、「仏不思議真言相道の法を説いて一切の声聞・縁覺を共にせず亦世尊
あまね いっさいしゅじよう ため さら 二乗を隔つる事前四味の諸教に同
普く一切衆生の爲にするに非ず」云云、二乗を隔つる事前四味の諸教に同
じ、随つて唐決には方等部の撰と判ず經文には四教含藏と見えたり、大論第
百卷に云く第九十品を釈す「問うて曰く更に何れの法か甚深にして般若に勝れ
たる者有つて般若を以て阿難に囑累し而も余の經をば菩薩に囑累するや、答
えて曰く般若波羅蜜は秘密の法に非ず而も法華等の諸經に阿羅漢の受決作仏
いわ はんにやはらみつ ひみつ あら しか ほっけ しよきよう あらかん じゅけつさぶつ
を説いて大菩薩能く受用す譬えば大藥師の能く毒を以て藥と為すが如し」等
ほさつよ じゅよう たと やくし よ もつ な ごと
云云、玄義の六に云く「譬えば良医の能く毒を變じて藥と為すが如く二乗の
げんぎ たと りようい よ な ごと にじよう

根敗反た復すること能わず之を名づけて毒と為す今經に記を得るは即ち是れ
毒を変じて藥と為す、故に論に云く余經は秘密に非ずとは法華を秘密と為せ
ばなり、復本地の所説有り諸經に無き所・後に在つて當に広く明すべし」云
云、籤の六に云く、「第四に引証の中論に云く等と言つは大論の文証なり秘密
と言つは八經の中の秘密には非ず但是れ前に未だ説かざる所を秘と為し開し
已れば外無きを密と為す」文、文句の八に云く「方等・般若に実相の蔵を説
くと雖も亦未だ五乗の作仏を説かず亦未だ発迹顕本せず頓漸の諸經は皆
未だ融会せず故に名づけて秘と為す」文、記の八に云く「大論に云く法華は
是れ秘密諸の菩薩に付すと、今の下の文の如きは下方を召すに尚本眷属を待
つ驗けし余は未だ堪えざることを」云云、秀句の下に竜女の成仏を釈して
「身口密なり」と云えり云云、此等の經論釈は分明に法華經を諸仏は最第一
と説き秘密教と定め給へるを經論に文証も無き妄語を吐き法華を顕教と名

づけて之を下し之を謗ず豈大謗法に非ずや。

そもそも

抑も唐朝の善無畏・金剛智等・法華經と大日經の両經に理同事勝の

積を作るは

梵華兩國共に勝劣か、法華經も天竺には十六里の宝蔵に有れば

無量の事有れども

流沙・葱嶺等の險難・五万八千里・十万里の路次容易な

らざる間・枝葉をば之を略せり、此等は併ながら訳者の意樂に随つて広を好

み略を惡む人も有り略を好み広を惡む人も有り、然れば即ち玄奘は広を好ん

で四十卷の般若經を六百卷と成し、羅什三蔵は略を好んで千卷の大論を百卷

に縮めたり、印契・真言の勝ると云う事はを以て弁え難し、羅什所訳の

法華經には是を宗とせず不空三蔵の法華の儀軌には印・真言之有り、仁王經

も羅什の所訳には印・真言之無し不空所訳の經には之を副えたり知んぬ是れ

訳者の意樂なりと、其の上法華經には「為説実相印」と説いて合掌の印之有

り、譬喩品には「我が此の法印世間を利益せんと欲するが為の故に説く」云

云、此等の文如何只広略の異なるか、又舌相の言語皆是れ真言なり、法華經
には「治生の産業は皆実相と相違背せず」と宣べ、亦「是れ前仏經中に説く
所なり」と説く此等は如何、真言こそ有名無実の真言未顕真実の権教なれば
成仏得道跡形も無く始成を談じて久遠無ければ性徳本有の仏性も無し、
三乗が仏の出世を感じるに三人に二人を捨て三十人に二十人を除く、
皆令入仏道この仏の本願満足す可からず十界互具は思いもよらずまして非情
の上の色心の因果争か説く可きや。

然らば陳隋二代の天台大師が法華經の文を解りて印契の上に立て給へる
十界互具・百界千如・一念三千を善無畏は盗み取つて我が宗の骨目とせり、
彼の三蔵は唐の第七玄宗皇帝の開元四年に来る如来入滅より一千六百六十四
年か、開皇十七年より百二十余年なり何ぞ百二十余年已前に天台の立て給へ
る一念三千の法門を盗み取つて我が物とするや、而るに己が依經たる大日經

には衆生の中に機を簡ひ前四味の諸經に同じて二乗を簡へり、まして草木
成仏は思いもよらずされば理を云う時は盗人なり、又印契真言何れの經にか
これを簡える若し爾れば大日經にを説くとも規模ならず、一代に簡われ諸經
に捨てられたる二乗作仏は法華に限れり、二乗は無量無辺劫の間・千二百余尊
の印契真言を行ずとも法華經に値わずんば成仏す可からず、印は手の用・
真言は口の用なり其の主が成仏せざれば口と手と別に成仏す可きや、一代
に超過し三説に秀でたる二乗の事をば物とせず事に依る時は印真言を尊む者
・劣謂勝見の外道なり。

無量義經説法品に云く「四十余年・末顯真實」文、一の卷に云く「世尊は
法久くして後要ず当に眞實を説きたもうべし」文、又云く「一大事の因縁の故に
世に出現したもう」文、四の卷に云く「藥王今汝に告ぐ我が所説の諸經あ
り而も此の經の中に於て法華最も第一なり」文、又云く「已に説き今説き當に

説かん」文、宝塔品に云く「我仏道を為つて無量の土に於て始より今に至る
まで広く諸經を説く而も其の中に於て此の經第一なり」文、安樂行品に云く
「此の法華經は是れ諸の如来第一の説なり諸經の中に於て最も為甚深なり」
文、又云く「此の法華經は諸仏如来秘密の蔵なり諸經の中に於て最も其の上
に在り」文、藥王品に云く「此の法華經も亦復是くの如し諸經の中に於て
最も為其の上なり」文、又云く「此の經も亦復是くの如し諸經の中に於て
最も為其の尊なり」文、又云く「此の經も亦復是の如し諸經の中の王なり」
文、又云く「此の經も亦復是の如し一切の如来の所説若しは菩薩の所説若し
は声聞の所説諸の經法の中に最為第一なり」等云云、玄の十に云く「又・
已今当の説に最も為難信難解前經は是れ已説なり」文、秀句の下に云く
「謹んで案ずるに法華經・法師品の偈に云く藥王今汝に告ぐ我が所説の諸經
あり而も此の經の中に於て法華最も第一なり」文、又云く「当に知るべし已説

は四時の経なり「文、文句の八に云く、今法華は法を論ずれば」云云、記の八に云く「鋒に当る」云云、秀句の下に云く「明かに知んぬ他宗所依の経は是れ王中の王ならず」云云、釈迦・多宝・十方の諸仏・天台・妙楽・伝教等は法華経は眞実・華嚴経は方便なり、「未だ眞実を顕さず正直に方便を捨てて余経の一偈をも受けざれ」「若し人信ぜずして乃至其の人・命終して阿鼻獄に入らん」と云云。

弘法大師は「法華は戲論・華嚴は眞実なり」と云云、何れを用う可きや、宝鑰に云く「此くの如き乗乗は自乗に名を得れども後に望めば戲論と作る」文、又云く「謗人謗法は定めて阿鼻獄に墮せん」文、記の五に云く「故に

じつそつ 実相の外は皆戲論と名づく「文、梵網經の疏に云く「第十に謗三宝戒亦是
ばうぼさつかい 謗菩薩戒と云い・或は邪見と云う謗は是れ乖背の名なり 是れ解・理に
かな 称わらず言は実に当らずして異解して説く者を皆名づけて謗と為すなり」文、
玄の三に云く「文証無き者は悉く是れ邪偽・彼の外道に同じ」文、弘の十に
いわ 云く「今の人・他の所引の經論を信じて謂いて憑み有りと為して宗の源を
たず 尋ねず謬誤何ぞ甚しき」文、守護章上の中に云く「若し所説の經論明文有
らば権実・大小・偏円・半満を簡択す可し」文、玄の三に云く「広く經論
を引いて己義を莊嚴す」文。

抑弘法の法華經は眞言より三重の劣・戲論の法にして尚華嚴にも劣ると

云う事大日經六卷に供養法の卷を加えて七卷・三十一品・或は三十六品には
いすれ 何れの品何れの卷に見えたるや、しかのみならず蘇悉地經三十四品・金剛
ちようきよう 頂經三卷・三品・或は一巻に全く見えざる所なり、又大日經並びに三部の

秘經ひきようには何いすれれの巻何いすれれの品じゆつにか十界互具之有いりや都すべて無なきなり、法華經ほけきようには事理共じりに有あるなり、所謂久遠実成いわゆるくおんじつじようは事ことなり二乗作仏にじようさぶつは理ことなり、善無畏等ぜんむいの理同事勝りどうじしやうは臆說おくせつなり信用しんようす可べからざる者ものなり。

凡およそ真言しんこんの誤あやまり多おほき中

- 一、十住じゆうじゆう心ほっけに第八法華はつぽうけ・第九華嚴けくおん・第十真言しんこん云云何いすれれの經論きやうろんに出いでたるや。
- 一、善無畏ぜんむいの四句ごほうと弘法こうぼうの十住じゆうじゆう心がんぜんいもくと眼前違目なんなり何なんぞ師弟敵對していするや。
- 一、五藏ごそうを立つる時とき・六波羅蜜經ろくはらみつきようの陀羅尼藏だらにぞうを何なんぞ必ず我が家の真言しんこんと云いうや。

- 一、震旦しんたんの人師にんし争あらつて醍醐だいごを盗ぬすむと云いう年紀何ねんきなんぞ相違そういするや、其そのの故ゆえは開皇かいこう十七年しちねんより唐たうの徳宗とくそうの貞元じやうげん四年戊辰ぼつしんの歳さいに至いたるまで百九十二年ひやくきゅうにじふにねんなり何なんぞ天台入滅てんたいにゆうめつ百九十二年ひやくきゅうにじふにねんの後に渡わたれる六波羅蜜經ろくはらみつきようの醍醐だいごを盗ぬすみ給たまう可べきや顯然けんねんの違目いもくなり、若もし爾しかれば謗人謗法ぼうじんぼうぼう定墮阿鼻獄だあびごくといいふは自責じせきなるや。

一、弘法の心經の秘鍵の五分に何ぞ法華を撰するや能く能く尋ぬ可き事なり。
真言七重難。

一、真言は法華經より外に大日如來の所説なり云云、若し爾れば大日の出世
成道説法利生は釈尊より前か後か如何、対機説法の仏は八相作仏す父母は
誰れぞ名字は如何に娑婆世界の仏と云はば世に二仏無く国に二主無きは
聖教の通判なり、涅槃經の三十五の巻を見る可きなり、若し他土の仏なり
と云はば何ぞ我が主師親の釈尊を蔑にして他方・疎縁の仏を崇むるや不忠
なり不孝なり逆路伽耶陀なり、若し一体と云はば何ぞ別仏と云うや若し別仏
ならば何ぞ我が重恩の仏を捨つるや、唐堯は老い衰へたる母を敬ひ虞舜は
頑なる父を崇む是二、六波羅蜜經に云く所謂過去無量・伽沙の諸仏・世尊
の所説の正法・我今亦当に是の如き説を作すべし所謂八万四千の諸の妙法
蘊なり。而も阿難陀等の諸大弟子をして一たび耳に聞いて皆悉く憶持せしむ

云云、此の中の陀羅尼藏を弘法我が真言と云える若し爾れば此の陀羅尼藏は
釈迦の説に非ざるか此の説に違す是二、凡そ法華經は無量千万億の已説・今説
・当説に最も第一なり、諸仏の所説菩薩の所説声聞の所説に此の經第一なり
諸仏の中に大日漏る可きや、法華經は正直無上道の説・大日等の諸仏長舌
を梵天に付けて眞実と示し給う是三、威儀形色經に「身相黄金色にして常に
満月輪に遊び定慧智拳の印法華經を証誠す」と、又五仏章の仏も法華經第一
と見えたり是四、「要を以て之を云わば如来の一切所有の法乃至皆此の經に
於て宣示顯説す」云云、此等の經文は釈迦所説の諸經の中に第一なるのみ
に非ず三世の諸仏の所説の中に第一なり此の外一仏・二仏の所説の經の中に
法華經に勝れたる經有りと云はば用ゆ可からず法華經は三世不壞の經なる故
なり是五、又大日經等の諸經の中に法華經に勝る經文之無し是六、釈尊
御入滅より已後天竺の論師二十四人の付法藏其の外大権の垂迹震旦の人師

なんざん ほとひち
南三・北七の十師三論・法相の先師の中に天台宗より外に十界互具・
ひやつかいせんによ
百界千如・一念三千と談ずる人之無し、若し一念三千を立てざれば性惡の
これな しょうあく
義之無し性惡の義無くば仏・菩薩の普現色身真言兩界の漫荼羅五百七百の
しょうそん ほんむこんぬ げどう
諸尊は本無今有の外道の法に同ぜんか、若し十界互具・百界・千如を立てば
ほんきよういずれ じゅつかいかいじよう むねこれ
本經何れの經にか十界皆成の旨之を説けるや、天台円宗見聞の後・邪智
そうこん ため ほうもん
莊嚴の為に盗み取れる法門なり、才芸を誦し浮言を吐くには依る可からず正
きようもんきんげん たす
しき經文金言を尋ぬ可きなり是七。

ねはんぎよう
涅槃經の三十五に云く「我処処の經の中に於て説いて言く一人出世すれば
やく こんど てんりんおう
多人利益す一国土の中に一の轉輪王あり一世界の中に二仏出世すといわば
こ ことわりあ だいろん
是の処有ること無し」文、大論の九に云く「十方恒河沙の三千大千世界を
いちぶつせかい な こ
名づけて一仏世界と為す是の中に更に余仏無し實には一りの釈迦牟尼仏なり」
いふ なく
文、記の一に云く「世には二仏無く国には二主無し一仏の境界には二の尊号

無し」文、持地論に云く「世に二仏無く国に二主無く一仏の境界に二の尊号無し」文。

七月日

日蓮 花押

一八 蓮盛抄

建長七年 三十四歳御作

150P

ぜんしゅういわ

ねはん

ぜんしゅういわ

せそん

ねんげ

かしょう

はがんびしょう

禅宗云く涅槃の時・世尊座に登り拈華して衆に示す迦葉・破顔微笑せり、

いわ

われ

しょうぼうげんぞう

ねはん

みょうしん

じっそうむそ

もんじ

仏の言く吾に正法眼蔵・涅槃の妙心・実相無相・微妙の法門有り文字を立

きょうげ

べつてん

まかかしよう

ふぞく

いかわ

いか

きょうもん

てず教外に別伝し摩訶迦葉に付属するのみと、問うて云く何なる経文ぞや、

ぜんしゅう

いかわ

だいぼんてんのうもんぶつけつききょう

いかわ

くだん

いすれ

禅宗答えて云く大梵天王問仏決疑經の文なり、問うて云く件の経何れの三蔵

ぜんしゅう

いかわ

かいげん

か

いかわ

いすれ

いすれ

いすれ

の訳ぞや貞元・開元の録の中に曾つて此の経無し如何、禅宗答えて云く此

ひきよう

ゆえ

ばか

てんじく

これ

わた

いかわ

いすれ

しょうにん

の経は秘経なり故に文計り天竺より之を渡す云云、問うて云く何れの聖人

いすれ

にんし

わた

あとかた

いにしえ

の

なかころ

何れの人師の代に渡りしぞや跡形無きなり此の文は上古の録に載せず中頃よ

これ

の

ぜんしゅう

こんげん

もつところ

の

ぎぶん

なり、

り之を載す此の事禅宗の根源なり尤も古録に載すべし知んぬ偽文なり、

ぜんしゅういわ ねはんぎょう
禪宗云く涅槃經の二に云く、我今所有の無上の正法悉く以て摩訶迦葉に付属
す「云云此の文如何、答えて云く無上の言は大乗に似たりと雖も是れ小乗
を指すなり外道の邪法に對すれば小乗をも正法といはん、例せば大法東漸
と云えるを妙樂大師解釋の中に、「通じて仏教を指す」と云いて大小・權実
をふさねて大法と云うなり云云、外道に對すれば小乗も大乘と云われ下臈
なれども分には殿と云はれ上臈と云はるるがごとし、涅槃經の三に云く
「若し法宝を以て阿難及び諸の比丘に付属せば久住を得じ何を以ての故に一切
の聲聞及び大迦葉は悉く當に無常なるべし彼の老人の他の寄物を受くるが
如し、是の故に心に無上の佛法を以て諸の菩薩に付属すべし諸の菩薩は善能
問答するを以て是くの如きの法宝則ち久住することを得・無量千世増益熾盛
にして衆生を利安せん彼の壮なる人の他の寄物を受くるが如し是の義を以て
の故に諸大菩薩乃ち能く問うのみ」云云、大小の付属其れ別なること分明

なり、同経の十に云く「汝等・文殊当に四衆の為に広く大法を説くべし今
・此の経法を以て汝に付属す乃至迦葉・阿難等も来らば復当に是くの如き
正法を付属すべし」云云故に知んぬ文殊迦葉に大法を付属すべしと云云、仏
より付属する処の法は小乘なり悟性論に云く「人心をさとする事あれば菩提
の道を得る故に仏と名づく」菩提に五あり何れの菩提ぞや得道又種種なり何れ
の道ぞや余経に明す所は大菩提にあらず又無上道にあらず経に云く四十余年
未顕真実」云云。

問うて云く法華は貴賤男女何れの菩提の道を得べきや、答えて云く「乃至
一偈に於ても皆成仏疑い無し」云云、又云く「正直に方便を捨て但無上道
を説く」云云、是に知んぬ無上菩提なり、須臾も之を聞いて即ち阿耨菩提を究竟
することを得るなり」此の菩提を得ん事須臾も此の法門を聞く功德なり、問
うて云く須臾とは三十須臾を一日一夜と云う「須臾聞之」の須臾は之を指す

か如何^{いかん}、答^{こた}う件の如^{ごと}し天台止觀^{てんだいしかん}の二に云^{いわ}く、「須臾^{しゅゆ}も廢^{はい}すること無^なかれ」云云、弘決^{くけつ}に云^{いわ}く、「暫^{しばら}くも廢^{はい}することを許^{ゆる}さざる故^{ゆえ}に須臾^{しゅゆ}と云^いう」故^{ゆえ}に須臾^{しゅゆ}は刹那^{せつな}なり。

問^{いわ}うて云^いく本分^{ほんぶん}の田地^{でんち}にもとづくを禪^{ぜん}の規模^{きも}とす、答^{こた}う本分^{ほんぶん}の田地^{でんち}とは何者^{なにもの}ぞや又何^{いすれ}れの經^{きやうけ}に出^いでたるぞや法華經^{ほけきやう}こそ人天^{にんてん}の福田^{ふくでん}なればむねと人天^{にんてん}を教化^{きやうけ}し給^{たま}ふ故^{ゆえ}に仏^{てんにんし}を天人師^{てんにんし}と号^{なづ}す此^この經^{きやうけ}を信^{しん}ずる者は己身^{こしん}の仏^{てんにんし}を見るのみならず過^{げん}・現^{げん}・末^{さんぜ}の三世^{さんぜ}の仏^{てんにんし}を見る事^じ・淨頗梨^{じやうはり}に向^むふに色像^{しきざう}を見るが如^{ごと}し、經^{きやうけ}に云^いく、「又^{また}淨明鏡^{じやうめいきやう}に悉^{ことごと}く諸^{しよ}の色像^{しきざう}を見るが如^{ごと}し」云云。

禪宗^{ぜんしゅう}云^いく是心即仏^{ぜしんそくぶつ}・即身是仏^{そくしんぜぶつ}と、答^{こた}えて云^いく經^{きやうけ}に云^いく、「心^こは是^これ第一^{だいいち}の

怨^{あだ}なり此^この怨^{あだ}・最^もも惡^{あく}と爲^なす此^この怨^{あだ}・能^よく人^{ひと}を縛^{はく}り送^{おく}つて閻羅^{えんら}の処^{ところ}に到^{いた}る汝^{なんじひと}独^{じこく}り地獄^{じこく}に焼^あかれて惡業^{あくごう}の爲^{ため}に養^さう所^{さうじ}の妻子^{さいし}兄弟^{きやうだい}等^{とう}・親屬^{しんぞく}も救^{すく}うこと能^{あた}わじ」云云、涅槃經^{ねはんぎやう}に云^いく、「願^{ねが}つて心^{こころ}の師^しと作^{つく}つて心^{こころ}を師^しとせざれ」云云、

愚癡無懺の心を以て即心即仏と立つ豈未得謂得・未証謂証の人に非ずや。

問う法華宗の意如何、答う經文に「具三十二相乃是眞實滅」云云、或は

「速成就仏身」云云、禪宗は理性の仏を尊んで己れ仏に均しと思ひ増上慢

に墮つ定めて是れ阿鼻の罪人なり、故に法華經に云く「増上慢の比丘は將に

大坑に墜ちんとす」禪宗云く毘盧の頂上を・むと、云く毘盧とは何者ぞや

若し周遍法界の法身ならば山川・大地も皆是れ毘盧の身土なり是れ理性の

毘盧なり、此の身土に於ては狗野干の類も之を・む禪宗の規模に非ず・若し

實に仏の頂を・まんか梵天も其の頂を見ずと云えり薄地争でか之を・む

可きや、夫れ仏は一切衆生に於いて主師親の徳有り若し恩徳広き慈父を・ま

んは不孝逆罪の大愚人・悪人なり、孔子の典籍尚以て此の輩を捨つ況んや

如来の正法をや豈此の邪類邪法を讃めて無量の重罪を獲んや云云、在世の

迦葉は頭頂礼敬と云う滅後の闇禪は頂上を・むと云う恐る可し。

ぜんしゅういわ 禅宗云く教外別伝・不立文字、答えて云く凡そ世に流布の教に三種を立つ、

一には儒教此れに二十七種あり、二には道教此れに二十五家あり、三には十

二分教天台宗には四教八教を立つるなり此等を教外と立つるか、

医師の法

には本道の外を外経師と云う人間の言には姓のつづかざるをば外戚と云う

ぶつきよう

きようろん

仏教には経論にはなれたるをば外道と云う、涅槃經に云く「若し仏の所説

に順わざる者有らば当に知るべし是の人は是れ魔の眷属なり」云云、九に云く

「法華已前は猶是れ外道の弟子なり」云云、禅宗云く仏祖不伝云云、答えて

云く然らば何ぞ西天の二十八祖東土の六祖を立つるや、付属摩訶迦葉の立義

已に破るるか自語相違は如何、禅宗云く向上の一路は先聖不伝云云、答う

爾らば今の禅宗も向上に於ては解了すべからず若し解らずんば禅に非ざる

か凡そ向上を歌つて以て慢に住し未だ妄心を治せずして見性に奢り機と

法と相乖くこと此の責尤も親し旁がた化儀を妨ぐ其の失転多し謂く教外と

号しあまつ刺きようけさえ教外を学び文筆を嗜みながら文字を立てず言と心と相応せず豈あに
天魔てんまの部類外道の弟子に非ずや、仏は文字に依つて衆生を度し給うなり、問
う其の証拠如何、答えて云く涅槃經の十五に云く、「願わくは諸の衆生悉く皆
出世の文字を受持せよ」文、像法決疑經に云く「文字に依るが故に衆生を度
し菩提を得と云云、若し文字を離れば何を以てか仏事とせん禅宗は言語を以て
人に示さざらんや若し示さずといはば南天竺の達磨は四卷の楞伽經に依つて
五卷の疏を作り慧可に伝うる時・我漢地を見るに但此の經のみあつて人を度
す可し汝此れに依つて世を度す可し云云、若し爾れば猥に教外別伝と号せん
や、次に不伝の言に至つては冷暖二途・唯自覺了と云つて文字に依るか其れ
も相伝の後の冷暖自知なり是を以て法華に云く「悪知識を捨て善友に親近せ
よ」文、止觀に云く「師に値わざれば邪慧日に増し生死月に甚し稠林に曲木
を曳くが如く出づる期有こと無けん」云云、凡そ世間の沙汰尚以て他人に談合

す況んや出世の深理寧ろ輒く自己を本分とせんや、故に経に云く「近きを見る可からざること人の睫の如く遠きを見る可からざること空中の鳥の跡の如し」云云、上根・上機の坐禅は且く之を置く当世の禅宗は瓮を蒙つて壁に向うが如し、経に云く「盲冥にして見る所無し大勢の仏及び断苦の法を求めず深く諸の邪見に入つて苦を以て苦を捨てんと欲す」云云、弘決に云く「世間の顯語尚識らず況んや中道の遠理をや円常の密教寧ろ当に識る可けんや」云云、当世の禅者皆是れ大邪見の輩なり、就中三惑未断の凡夫の語録を用いて四智円明の如来の言教を軽んずる返す返す過てる者か、疾の前に薬なし機の前に教なし等覺の菩薩すら尚教を用いき底下の愚人何ぞ経を信ぜざる云云、是を以て漢土に禅宗興ぜしかば其の国忽ちに亡びき本朝の滅す可き瑞相に闇証の禅師充滿す、止觀に云く「此れ則ち法滅の妖怪なり亦是れ時代の妖怪なり」云云。

ぜんしゅういわ ぼつけしゅう ふりゅうもんじ
禪宗云く法華宗は不立文字の義を破す何故ぞ仏は一字不説と説き給うや、

なんじりようがきよう
答う汝楞伽經の文を引くか本法自法の二義を知らざるか字ばずんば習うべ

そ
し其の上彼の經に於いては未顕真実と破られ畢んぬ何ぞ指南と為ん。

いわ ぞうほうけつきよう
問うて云く像法決疑經に云く「如来の一句の法を説きたもうを見ず」云云

いかん じようせばさつ ほけきよう
如何、答う是は常施菩薩の言なり法華經には「菩薩是の法を聞いて疑網皆已に

らん ちかんことこまたまさ さぶつ はちまん ぼさつ
除く千二百の羅漢悉く亦当に作仏すべし」と云つて八万の菩薩も千二百の羅漢

ことこみなれつぎ ちようもんずいき じようせば
も悉く皆列座し聴聞隨喜す、常施一人は見えず何れの説に依る可き法華の座

あ ぼさつ じようじゆ これな もう どうり
に挙ぐる菩薩の上首の中に常施の名之無し見えずと申すも道理なり、何に

いわんやつぎしも し か もろもろしめじようしゆつぼつあ
況や次下に「然るに諸の衆生出没有るを見て法を説いて人を度す」云云、

なん ふせつ いっく とど かせつ みようり うしな べ なんじ りつぎ びやつけん
何ぞ不説の一句を留めて可説の妙理を失う可き、汝が立義一大僻見なり

しゅうじよう あらた ほっけ きふく べ し か
執情を改めて法華に歸伏す可し、然らずんば豈無道心に非ずや。

記の九に云く「若し其れ未だ開せざれば法報は迹に非ず若し顕本し已れば
本迹各三なり」文句の九に云く「仏・三世に於て等しく三身有り諸教の中
に於て之を秘して伝えず」

法身如来

正因 仏性

仏

報身如来

衆生

了因 仏性

応身如来

縁因 仏性

衆生の 仏性

小乗 經には 仏性の有無を論ぜず。

有つて了因縁因無し。

華嚴・方等・般若・大日經等には衆生本より正因 仏性

法華經には本より三因 仏性有り。

文句の十に云く「正因 仏性」「法身の性なり」は本當に通互す、縁了 仏性
は種子本有なり今に適むるに非ざるなり」

今・此の三界は皆是れ我が有なり

主国王世尊

なり

法華經第二に云く

其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり

親父なり
導師なり

而も今・此の処は諸の患難多し

唯我一人のみ能く救護をなす

寿命品に云く

我も亦為世の父文

主 国王

報身如来

師

親

心身如来

法身如来

五百問論に云く「若し父の寿の遠を知らずして復父統の邦に迷わば徒らに才能と謂うとも全く人の子に非ず」又云く「但恐らくは才一國に当るとも父母の年を識らざらんや」

古今・仏道論衡道宣の作に云く「三皇已前は未だ文字有らず但其の母を識

つて其の父を識らず禽獸に同じなり」等云云、
慧遠法師周の武帝を詰る語なり

俱舍宗

成実宗

律宗

一向に釈尊を以て本尊と為す爾りと雖も但心身に限る。

華嚴宗

けこんしゅう

釈尊を以て本尊と為すと雖も法身は無始無終報身は有始

三論宗

さんろんしゅう

無終心身は有始有終なり。

むしゅうしんしゅう

法相宗

ほうそうしゅう

如來は釈迦の法身なり。

にょらい

一向に大日如來を以て本尊と為す二義有り

真言宗

しんごんしゅう

如來は釈迦の法身には非ず。

ただ

但し大日經には大日如來は釈迦牟尼仏なりと見えたり人師よりの僻見な

り。

浄土宗一向に阿彌陀如來を以て本尊と為す。

ほうけしゅう

ほか

法華宗より外の真言等の七宗並に浄土宗等は釈迦如來を以て父と為すこと

を知らず、例せば三皇已前の人・禽獸に同ずるが如し鳥の中に 鷦鷯鳥 も

ほうおうちゅう

鳳凰鳥も父を知らず獸の中には兎も師子も父を知らず、三皇以前は大王も小

ほうおうちゅう

民も共に其の父を知らず天台宗よりの外・真言等の諸宗の 大乘宗は師子と

そ

てんだいしゅう

しんごん

しよしゅう

だいじょう

しし

鳳凰ほうおうの如ごとく小乗しょうじょう宗しゅうは鷓鴣しやうりようと兔等ととの如ごとく共に父を知らざるなり。

華嚴宗けこんしゅうに十界互具じゅつかいごく・一念三千いちねんさんぜんを立つること澄觀ちやうかんの疏しよに之これ有あり。

真言宗しんこんしゅうに十界互具じゅつかいごく・一念三千いちねんさんぜんを立つること大日經だいにちきようの疏しよに之これを出いだす。

天台宗てんだいしゅうと同異どうい如何いかん、天台宗てんだいしゅう已前いぜんにも十界互具じゅつかいごく・一念三千いちねんさんぜんを立つるや、記

の三いに云わく「然しかるに衆しゅう衆しやくを攢あつむるに既すでに三乘さんじよう及び一乘いちじよう三一俱ともに性相しやうそう等の

十有ゆるりと許ゆるす何なんすれぞ六道ろくどうの十かたを語かたらざるや」三藏さんぞう等の法華經ほけきやうに依よる者いちねんさんぜん一念三千いの

名み目ようを立たてざるか。

問いつて云わく華嚴宗けこんしゅうは一念三千いちねんさんぜんの義もち用もちいるや后ぎの御宇ぎように之これを立たつ、答こえて云わく

澄觀ちやうかんの疏しよ三十三清涼國師いに云わく「止觀しかんの第五じようごに十法じようじよう成乘じやうじやうを明あす中の第二に

眞正しんしやう發ほつ菩提心ぼだいしん○釈しゃくして云わく然しかも此この經じようげの上下ほつしんの發心ふんりえんぱくの義は文理淵博ぶんりえんぱくにして

其その撮略さつりやくを見る故ゆえに取とつて之これを用もちい引ひいて之これを証しとす」と、二十九にに云わく

法華經ほけきやうに云わく唯ゆい仏いとふつとよとぶつと天台てんだい云わく。便すなわち三千世間さんぜんせけんを成なすと彼の宗こには此これ

を以つて実と為す。一家の意理として通ぜざる無し」文。

華嚴經に云く「覺林菩薩之を説くと、弘決には如来林菩薩と引く「心は工なる画師の種種

ごおん けこんきよう いわ ぼさつ ぐけつ によらい ぼさつ しゅじゅ

の五陰を画くが如く一切世間の中に法として造らざること無し心の如く仏も

またしが ごと じゅじよう しか およ しゅじよう こ さべつ も

亦爾なり仏の如く衆生も然なり心と仏と及び衆生と是の三差別無し若し人

さんぜいっさい りようち ぼつ まさ かく ごと もろもろによらい

三世一切の仏を了知せんと欲せば当に是くの如く観ずべし心は諸の如来を造

ると」

法華經に云く「なり仏の自説なり」所謂諸法とは如是相・如是性・如是体・

よげりき よげさ よげいん よげえん よげか よげほうによげほんまつきよう いわ

如是力・如是作・如是因・如是縁・如是果・如是報如是本末究竟等」又云く

ゆいいちだいじ いんねん もつ ゆえ しゅつげん しょぶつ せそん しゅじよう

「唯一大事の因縁を以ての故に世に出現したもう諸仏・世尊は衆生をして

ぶつちけん ぼんがく ほうしん みようほう

仏知見を開かしめんと欲す」蓮華三昧經に云く「本覺心法身常に妙法の

しんれんだい れんげさんまい いわ ほんがく ほうしん みようほう

心蓮台に住して本より来た三身の徳を具足し三十七尊「七尊なり」心城に住し

きみよう しんのうだいにちへんしょうそん しんずごうしゃ もろもろによらい ふもん

たまえるを歸命したてまつる心王大日遍照尊・心数恒沙・諸の如来も普門

塵数諸の三昧因果を遠離して法然として具す無辺の徳海・本より円満還つて
わがこころ じんじゅもろもろさんまいいんが おんり ほうねん とくかい えんまんかえ
我心の諸仏を頂礼す、 仏蔵經に云く「仏・一切衆生心中に皆如来有し
けゆかふざ

て結跏趺坐すと見そなわす」文。
問うて云く真言宗は一念三千を用いるや、 答えて云く大日經の義釈智不空
いわ しんこんしゅう いちねんさんぜん もち
一行に云くは伝教・弘法之を見ず智証之を渡す「此の經は是れ法王の秘宝なり
いわ でんぎょう こうぼうこれ ちしゅうこれ わた 此 ほうおう ひほう
妄りに卑賤の人に示さざれ釈迦出世して四十余年に舍利弗の慇懃なる三請に
みだ ひせん しゃかしゅつせ よんじゅうよねん しゃりほつ おんこん しゅう
因りて方に為に略して妙法蓮華の義を説きたまいしが如し、 今・此の本地の
まさ ため みょうほうれんげ と ほんち
身又是れ妙法蓮華最深の秘処なるが故に、 寿量品に云く常在 靈鷲山 及余
こ みょうほうれんげさいしん ひしよ ゆえ じゅりようぽん いわ じょうざいりようじゅつせん
諸住処乃至我浄土不毀而衆見焼尽と即ち此の宗の瑜伽の意ならくのみ又
しよじゅうしよないし じょうど すなわ ゆいが
補処の菩薩の慇懃の三請に因つて方に為に之を説けり」と、 又云く「又此の
ふしよ ぼさつ おんこん しゅう よ まさ ため これ いわ
經の宗は横に一切の仏教を統ぶ唯蘊無我にして世間の心を出で蘊の中に住す
よこしまいつさい ぶつぎょう す ゆいおんむ が せけん おん
と説くが如きは即ち諸部の小乗三蔵を撰す、 蘊の阿頼耶を觀じて自心の本
こと すなわ しよ しょうじょうさんぞう せつ おん あらや かん じしん

不生ふしようを覺さとると説ことくが如すなわきは即しよきようち諸經しよきようの八識・三性・無性むしようの義ぎを撰せつす、
極無自性ごくむじしようしん心と十縁生じゆうりよくしようの句ことを説ことくが如すなわきは即けこんち華嚴・般若はんによの種種しゆじゆの不思議ふしぎの
境きよう界かいを撰せつして皆みなそ其その中なに入る、如實にょじつちじしん知自心いっさいしゆちを一切種智いっさいしゆちと名なづくと説ことくが如すなわきは
是則すなわち仏性ぶつしよう「なり」一乘いちじよう「なり」如來秘藏にょらいひぞう「なり」皆みなそ其その中なに入る種種しゆじゆの聖言しやうげん
に於おいて其その精要しやうえうを統すべざること無し、毘盧遮那經びるしやなの疏じよ・傳でんぎよう・教こうほうこれ・弘法こうほうこれ之これを見る」
第七の下いわに云てんだいく天台てんだいの誦經じゆは是これ円頓えんどんの數息すそくなりと謂おもふ是これ此この意いなり」と。
大宋たうそうの高僧こうそう傳卷でんの第二十七の含光いわの伝でんに云いく「代宗たいそう光こうを重おもんずること含光いは
不空ふくうさんぞう三藏さんざうの弟子でしなり不空ふくうを見るが如ごとし勅委ちやくゑいして五台山ごたいざんに往ゆいて功德くどくを修しゆせしむ、
時に天台てんだいの宗學そうがく湛然たんねん「第六だいろくの師しなり」禪觀ぜんくわんを解げり了りようして深く智者ちしや「天台てんだいなり」の膏たうねん
腴たうねんを得えたりと、嘗たつて江淮かうわいの僧そう四十余人せりりようと清涼きやうかいの境界きやうかいに入る、湛然たんねん・光こうと
相見さいきでんぼうて西域さいよく傳法でんぼうの事ことを問いふ、光いの云いく一國いの僧そう空宗くうそうを体得たいとくする有ありと問いうて
智者ちしやの教法きやうほうに及いぶ梵僧い云いく曾かつて聞きく此じやせいの教くわん邪正じやせいを定ていめ偏円へんえんを曉しり止觀しかんを明あかし

て功第一たいいちと推す再三光に囑す・或は因縁ある いんねんあつて重ねて至らばいた ため為に唐を翻し
て梵なと為して附ふし来れ某それがし願くは受持じゅじせんと屢屢手を握つて叮囑ていしよくす、詳かに
するに其その南印土には多く竜樹の宗見を行ず故に此の流布を願うこと有るな
りと、菩提心義ぼだいの三に云く一行和上は元是れ天台一行三昧こ てんだい さんまいの禅師ぜんなり能く
てんだいえんまん
天台円満の宗趣を得たり故に凡そ説く所の文言義理動もすれば天台に合す、
不空三蔵の門人含光天竺ふくうさんぞう もんじん てんじくに歸るの日天竺の僧問わく伝え聞く彼の国に天台の
教有りと理致りち・須ゆ可くば翻訳ほんやくして此の方に将来せんや云云、此の三蔵の旨むね
も亦天台に合す、今・或る阿闍梨またてんだい がつの云く真言を学せんと欲せば先ず共に天台
を学せよと而して門人皆瞋しんじう もんじんみないかる「云云。

問うて云く華嚴經いわ けこんきように一念三千を明すや、答えて云く「心仏及衆生しんぶつぎゆうしゆじよう」等云
云、止觀しかんの一に云く「此の一念の心は縦ならず横ならず不可思議ふかしぎなり但己の
み爾しかるに非ず仏及び衆生も亦復是くの如し、華嚴に云く心と仏と及び衆生およ しゆじよう

と^こ是^さの三^さ差^{べつ}別^{べつ}無^なしと当^{まさ}に知^しるべし己^こ心^{しん}に一切^{いっさい}の法^{ほふ}を具^ぐすること^を「文^{ぶん}、弘^{くわう}の
一^{いっ}に云^いく、華^け嚴^{げん}の下^{した}は引^ひいて理^りの齊^{ひとし}きこと^をを証^{しやう}す、故^{ゆゑ}に華^け嚴^{げん}に初^{しよ}住^{じゆ}の心^{しん}を歎^{たん}じ
て云^いく心^{しん}の如^{ごと}く仏^{ぶつ}も亦^{また}爾^{しか}なり仏^{ぶつ}の如^{ごと}く衆^{しゆ}生^{じやう}も然^{しか}り心^{しん}と仏^{ぶつ}と及^{およ}び衆^{しゆ}生^{じやう}と是^この
三^さ差^{べつ}別^{べつ}無^なし諸^{しよ}仏^{ぶつ}は悉^{ことごと}く一切^{いっさい}は心^{しん}に従^{したが}つて転^{てん}ずと了^{りやう}知^ちしたまえり、若^もし能^よく是^{かく}く
の如^{ごと}く解^{かい}すれば彼^かの人^{にん}真^まに仏^{ぶつ}を見^みたてまつる、身^み亦^{また}是^これ心^{しん}に非^{あら}ず心^{しん}も亦^{また}是^これ
身^みに非^{あら}ず一切^{いっさい}の仏^{ぶつ}事^じを作^なすこと自^じ在^{ざい}にして未^み曾^{ぞう}有^うなり、人^も若^もし・三^{さん}世^ぜ一^{いっ}切^{さい}の
仏^{ぶつ}を知らんと欲^{もろ}求^{もろ}せば応^おに是^{かく}くの如^{ごと}き觀^{くわん}を作^なすべし心^{しん}諸^{しよ}の如^{ごと}来^{らい}を造^{ぞう}すと、若^もし
今^{こん}家^かの諸^{しよ}の円^{えん}文^{ぶん}の意^い無^なくんば彼^かの經^{きやう}の偈^げの旨^{むね}・理^りとして実^{じつ}に消^{しょう}し難^{なん}からん」
と。

三藏教

小乘の四阿含經

心生の六界

心具の六界を明さず。

大乘

通教

心生の六界

亦心具を明さず。

べつきよう
別教

しんご
心生の十界

しんぐ
心具の十界を明さず。

しぎ
思議の十界

にぜんけこん
爾前華嚴等の円

えんきよう
円教

ふしぎ
不思議の十界互具

ほっけ
法華の円

止の五に云く「華嚴に云く心は工なる画師の種種の五陰を造るが如く一切

せけん
世間の中に心より造らざること莫しと種種の五陰とは前の十法界の五陰の

ごと
如きなり」又云く「又十種の五陰一一に各十法を具す謂く如是相・性・体・

力・作・因・縁・果・報・本末究竟等なり」文、又云く「夫れ一心に十法界

を具す一法界に又十法界を具すれば百法界なり一界に三十種の世間を具すれ

ば百法界には即ち三千種の世間を具す此の三千一念の心に在り」文、弘の五

に云く「故に大師覺意三昧觀心食法及び誦經法小止觀等の諸の心觀の文に但

自他等の觀を以て三仮を推せり並びに未だ一念三千具足を云わず、乃至觀心

論の中に亦只三十六の問を以て四心を責むれども亦一念三千に涉らず、唯四
念処の中に略して觀心の十界を云うのみ、故に止觀に正しく觀法を明すに
至つて並びに三千を以て指南と為せり、乃ち是れ終窮究竟の極説なり、故に
序の中に説己心中所行法門と云う良に以有るなり請う尋ね読まん者心に異縁
無かれ、止の五に云く、此の十重の觀法は横豎に収束し微妙精巧なり初は則ち
境の眞偽を簡び中は則ち正助相添い後は則ち安忍無著なり、意円かに法巧み
に該括周備して初心に規矩し將に行者を送つて彼の薩雲に到らんとすなり
闇証の禪師誦文の法師の能く知る所に非ざるなり、蓋し如来積劫の懃求し
たまえる所・道場の妙悟したまえる所身子の三請する所・法譬の三たび説
く所・正しく茲に在るに由るか、弘の五に云く「四教の一十六門乃至八教
の一期の始終に遍せり今皆開顯して束ねて一乗に入れ遍く諸經を括りて
一実に備う、若し当分を者尚偏教の教主の知る所に非ず況んや復た世間闇証

の者をや。蓋し如来の下は称歎なり十法は既に是れ法華の所乗なり是の故に還つて法華の文を用いて歎ず迹の説に約せば即ち大通智勝仏の時を指して以て積劫と為し寂滅道場を以て妙悟と為す若し本門に約せば我本行菩薩道の時を指して以て積劫と為し本成仏の時を以て妙悟と為す、本・迹二門只是れ此の十法を求悟せるなり、身子等とは寂場にして説かんと欲するに物の機未だ宜からず其の苦に墮せん事を恐れて更に方便を施す四十余年種種に調熟し法華の会に至つて初めて略して権を開するに動執生疑して殷懃に三請す五千起去つて方に枝葉無し四一を点示して五仏の章を演べ上根の人に被るを名づけて法説と為し、中根は未だ解せざれば猶譬喩を・う下根は器劣にして復た因縁を待つ、仏意聯綿として茲の十法に在り、故に十法の文の末に皆大車に譬えたり今の文の憑る所意此に在り、惑者は未だ見ず尚華嚴を指す唯華嚴円頓の名を知つて而して彼の部の兼帶の説に

昧し、全く法華絶待の意を失つて妙教独頭の能を貶挫す、迹本の二文を驗し
て五時の説を・うれば円極謬らず何ぞ須らく疑を致すべけん是の故に結し
て正しく茲に在るかと言ふ、又云く「初に華嚴を引くことを者重ねて初に引
いて境相を示す文を牒す前に心造と云うは即ち是れ心具なり故に造の文を引
いて以て心具を証す、彼の經第十八の中に功德林菩薩の偈を説いて云うが如く
心は工なる画師の種種の五陰を造るが如く一切世界の中に法として造らざる
こと無し心の如く仏も亦爾なり仏の如く衆生も然なり心と仏と及び衆生と
是の三差別無し、若し人三世の一切の仏を知らんと欲求せば応に是くの如く
觀ずべし心は諸の如来を造ると今の文を解せずんば如何ぞ偈の心造一切三無
差別を消せん」文、諸宗の是非之を以て之を糾明す可きなり、
恐恐謹言。

二月十八日

日蓮 在御判

二〇 早勝問答

文永八年

161P

五十歳御作浄土宗問答。

問う六字のみようごう名号は善惡ぜんあくの中には何ぞや、答う一義に云く今問う所の善惡ぜんあくは

世出の中には何ぞや、一義に云く云う所の善惡ぜんあくを治定せば墮獄治定なるか、

一義に云くいわ名号みようごう惡と治定せば墮獄治定なるか、一義に云くいわ念仏ねんぶつ・無間むげん治定し

て其の上に善惡ぜんあくを尋ぬるか、一義に云く汝が依經は樞実しゆじつの中には何れぞや。

問う念仏ねんぶつ・無間むげんと云わば法華も無間なり、答う一義に云く法華無間とは自義じぎ

なるか經文きやうもんなるか、一義に云くいわ念仏ねんぶつ・無間むげんをば治定して法華無間と云うか、

一義に云くいわ祖師そしの謗法ほうぼうを治定して法華も無間むげんと云うか、一義に云く汝が云う

所の法華は超過ちやうかの法華か又弥陀成仏みだじやうぶつの法華か。

問うて云くいわ念仏ねんぶつ・無間むげんの証拠しやうこ二十八品の中には何れぞや、答う一義に云く

二十八品の中に証拠しやうこ有らば墮獄治定なるか、一義に云くいわ法華ほっけを誹謗ひぼうするを証拠しやうこ

とするなり、一義に云くいわ法華ほっけの文を尋ぬるは信じて問うか信ぜずして問うか、

一義に云く直に入阿鼻獄の文を出すなり、一義に云く妙法蓮華經其の証拠な

り、一義に云く弥陀の本誓に背く故なり、一義に云く弥陀の命を断つ故なり、

一義に云く有縁の釈尊に背く故なり念仏・無間は三世諸仏の配立なり。

問う止觀の念仏の事、答う一義に云く法然所立の念仏は墮獄治定して止觀

を問うか、一義に云く西方の念仏と一なるか異なるか、一義に云く止觀の念仏

は法華を誹謗するか、一義に云く彼に文段を問う可し、一義に云く止觀に依つ

て淨土宗を建立するか。

問う觀經は法華已後の事、答う一義に云く此の故に法華を謗するか、一義

に云く已前ならば無間は治定なるか、一義に云く汝が謗法は無間をば治定し

て問うか。

問う觀經と法華と同時なり、答う一義に云く同時なる故に法華を謗するか、

さては返つて觀經をも謗するなり。

問う先師の謗法は一往なり且くの字を置く故なり、答う一義に云く且く謗せよとは自義か経文か、一義に云く始終共に謗せば墮獄は治定なるか。

問う未顕眞実は往生に非ず成仏の方なり、答う一義に云く此の故に法華を謗するか、一義に云く余経は無得道と云う人は僻事か。

問う法華本・迹の阿弥陀をば如何、答う一義に云く法華の弥陀は法華経を謗せんと誓い給いしか、一義に云く法華の弥陀と三部経と同じきか異なるか、異ならば無間治定なるか。

問う一称南無仏と何んぞ称名を無益と云わんや、答う一義に云く此の故に法華を謗するか、一義に云く法華を信じて問うか信ぜずして問うか。

問う法華に「諸の如来に於て」「諸仏を恭敬す」と何ぞ弥陀を捨つるや、答う一義に云く此の故に法華を謗するか「大旨上の如し。」

問う「余の深法中に示教利喜す」と何ぞ余経を謗するや、答う一義に云く

此の故に法華を謗するや、一義に云く汝が誹謗は治定して問うか又自義か
経文か「大旨上の如し」。

問う普門品に觀世音の称名功德を挙ぐと見えたり何ぞ余の仏・菩薩を捨てんや、答う一義に云く此の故に法華を謗するか、一義に云く此の觀音は法華を謗するか、一義に云く此の品に依つて念仏を立つるか、私に云く彼が經文釈義を引かん時は先ず文段を一一問う可し、大段万事の間には誹謗の言を先とす可きなり、前の当家の義云云。

禪宗問答。

問う禪天魔の故如何、答う一義に云く仏經に依らざる故なり、一義に云く一代聖教を誹謗する故なり。

問う禪とは三世諸仏成道の始は坐禅し給へり如何、答う一義に云く汝が坐禅は仏の出世に背かば天魔治定なるか、又坐禅は大小の中には何れぞや、

一義に云く仏の端座六年は法華に無益と云うか。

問う禅法には仏説無益なり、答う一義に云く是自義なるか経文なるか、一義に云くやがて是が天魔の所為なり。

問う経文には「是法不可示」と如何、答う一義に云く此の文は法華無益と云う文なるか、一義に云く爾らば法華に依るか、一義に云く文段を以て責む可きなり。

問う竜女は坐禅の成仏なり其の故は経文に「深く禅定に入つて諸法に到達す」と説き給へり、知んぬ法華無益と云うことを、答う一義に云く此の義は自義なるか経文なるか、一義に云く若し法華の成仏ならば天魔治定なるか、一義に云く文殊海中の教化は論説妙法と宣べたり如何。

問う常に坐禅を好み深く禅定に入つて常に坐禅を責ぶとも説けり如何、答う一義に云く文段を以て責む可し、一義に云く此の文は法華無益と云う文な

るか、一義に云く此の文を以て禅宗を建立するか。

問う唯独り自のみ明了にして余人の見ざる所と云う故に禅宗ひとり真性を

見て余人は見ずと云うなり、答う一義に云く文段を以て責む可し經文を見る

べし、問う像法決疑經に云く「一字不説」と爾らば一代は末顕真実と聞きた

り真実は只迦葉一人教の外に別伝し給へり如何、答う此の文は仏説か若し仏説

ならば汝此の文に依る故に自語相違なり、一義に云く言う所の迦葉は何なる

經にて成仏するや、一義に云く言う所の經文は三説の中には何れぞや、一

義に云く楞伽經は仏説なるか。

問う三大部に觀心之有り何ぞ禅天魔と云うや、答う一義に云く汝は三大部

にて宗を立つるか、一義に云く三大部の觀心は汝が禅と同じきか、一義に

云く汝は天台を師とするか、一義に云く三大部の觀心は諸經を捨つるか。

問う雙非の禅の事如何、答う一義に云く一度は法華に依り一度は法華無益

なり、一義に云く二義共に天魔なり一義に云く此の義に背かん者は僻事なるか。

問う法華宗は妙法の道理を知るや、答う一義に云く汝は天魔を治定して問うか、一義に云く汝は法華を信じて問うか、一義に云く妙法を知つて問うか知らずして問うか、一義に云く汝が問う所の妙法は今經に付いて百二十の妙有り其の品品を問うか、一義に云く汝は此の妙法に依つて禅を建立するか。天台宗問答。

問う天台宗を無間という証拠如何、答う一義に云く法華を誹謗する故なり、一義に云く經文に背く故なり。

問う余經無益と云う事は・を判ずる一往の意なり再往の日は諸乘一仏乗と開会す何ぞ一往を執して再往の義を捨つるや、答う一義に云く今言う所の開会とは何れの教の開会ぞや、一義に云く今經に於て本・迹の十妙の下に各

二十の開会あり亦教行人理の四一開会の中には何れぞや、一義に云く能開所開
の中には何れぞや、一義に云く開会の後善悪無しと云うか、一義に云く天台宗
は法華を信ずるか、一義に云く開会の後諸宗を簡ばずと云わば天台大師僻事
なるか其の故は南三・北七云云 伝教大師は六宗と云云、一義に云く
天台宗は悪行をも致す可きか性悪不断と云うが故に自語相違なりと責む
可きなり、一義に云く開会の後に権実を立つる人は僻事なるか爾らば薬王の
十喻法師の三説超過云云、一義に云く此の故に開会の心を以て慈覚は法華を
謗ずるか、一義に云く汝は慈覚の弟子なるか爾らば謗法治定なるか。

問う善悪不二・邪正一如の故に強ちに善悪を云う可からず元意の重是なり、
答えて云く天台の出世は悪を息めんが為か又悪を増さんが為か、一義に
云く悪事を致せとは法華經二十八品の中には何れの処に見えたるや。

問う絶待妙の事、答う一義に云く先ず文段を問う可し、一義に云く何れの

教の絶待ぜったいぞや、一義に云く此の故に慈覚は法華を謗ほうずるか。

問う相待は一往絶待は再往と見えたり如何、答う自義なるか経文なるか、

一義に云く相待妙一往と云うは二十八品の中には何れに見えたるや、一義に

云く相待妙は法華に明すか余経に明すか若し法華に明さば法華は一往なる

か。

問う約教・約部の故に約部の日は一往爾前の円を嫌うなり、答う一義に

云く言う所の約教は天台の判釈の四種の約教の中には何れぞや、一義に

云く約部は落居の釈なるか、一義に云く約部を捨つ可きか、一義に云く約教

の時・爾前の円を嫌わば墮獄は治定なるか、一義に云く約教の辺にて今昔

円同じとは法華經二十八品の中何れぞや、一義に云く玄文の第一の施開廢の

三重の故に開会の後も余経を捨つると云う文をば知るか知らざるか。

山門流の真言宗問答

問う法華第一と云うは顕教の門なり真言に対すれば第一とは云う可からず、答う自義なるか経文なるか爰を以て慈覚大師を無間と申すなり、一義に云く真言に対して法華第一ならば亡国治定なるか、一義に云く真言は已今当中には何れぞや、若し外と云わば一機・一縁の一往にして秘密とは云わる可からざるなり。

問う法華と真言とは理同事勝の故に真言に対すれば戲論の法と云うか、答う一義に云くさてこそ汝は無間治定なれ、一義に云くさては慈覚は真言をも謗するなり其の故は理同の法華を謗する故なり。

問う伝教の本理大綱集の文を以て顕密同と云う事、答う一義に云く此の書は伝教の御作に非ざるなり、一義に云く此の書に依つて法華を慈覚は謗するか。東寺流の問答。

問う真言は釈尊の説と云う事其の証拠如何、答う若し真言釈尊の説なら

ば亡国は治定なるか、若し然なりと云わば弘法大師五蔵を立つる時・法華を
ろくはらみつきよう
六波羅蜜經の五蔵の第四般若波羅蜜蔵第五の陀羅尼蔵をば真言と建立し給へ
り如何。

問う真言宗を末顕真実とは言つべからず其の故は釈迦の説の外に建立す
る故なり如何、答えて云く若し釈尊の説教ならば亡国は治定なるか、一義
に云く六波羅蜜經は釈迦の説なるか大日の説なるか、若し釈迦の説ならば
末顕真実は治定なるか、他云く釈迦所説の顯教無益なりと。

尋ねて云く六波羅蜜經は顯教・密教の中には何れぞや、他云く六波羅蜜經
は雜部の真言なり我が家の三部は純説の真言なり、答う助証正証と云う事全
く弘法の所判に見えず若し弘法の義ならば墮獄は治定なるか、他云く真言は
速疾の教顯教は迂回歴劫の教なり云云、自ら云く自義なるか經文なるか、
他云く五秘密教に云く「若し顯教に於て修行する者は久しく三大無數劫を

經」と説け是れ其の証拠なり如何、答う、さて此の經は釈迦の説なるか大日
の説なるか若し釈迦の説ならば未顕眞實は治定なるか。

問う法華宗は何れの經に依つて仏の印契相好を造るや顕教には無し但眞言

の印を盗むと覺えたり如何、答う之に依つて法華を謗するか、一義に云く汝

盗むの義相違せば亡国は治定なるか、一義に云く汝法華宗の建立する所の

大段の妙法蓮華經をば本尊と落居して問うか、一義に云く釈尊を三部に依つ

て建立する故に驢牛の三身と下すか若し爾なりと云わば返つて汝は眞言を

誹謗する者なりと責む可し、一義に云く三世の諸仏の印契相好實に

妙法蓮華經に依つて具足するの義落居せば亡国は治定なるか、又盗人は治定

なるか、一義に云く竜女靈山に即身に印契相好具足し南方に成道を唱えし

は眞言に依つて建立するか若し爾なりと云わば直に經文を出せと責む可き

なり。

問う亡国の証拠如何、答う法華を誹謗する故なり云云、一義に云く三徳の
釈尊に背く故なり云云、一義に云く現世安穩・後生善処の妙法蓮華經に
背き奉る故に今生には亡國後生には無間と云うなり、一義に云く法華經第三
の劣とは經文なるか自義なるか若し爾らば亡國治定なるか。

他云く密教に對すれば第三の劣なり、答う一義に云く此の義經文なるか
自義なるか、一義に云く顯教の内に法華第一なる事落居するか、若し爾なり
と云はばさては弘法は僻事なり顯教の内にして法華を華嚴に對して第二・
真言に對して第三と云う故なり、一義に云く真言に對して第一ならば亡國は
治定なるか。

他云く印・真言を説かざるが故に第三の劣と云うなり、答う此の故に劣と
は經文なるか自義なるか、一義に云く若し法華に説かば亡國は治定なるか。
他云く大日・釈迦各別なり、答う一義に云く此の故に法華を謗するか、一

義に云く若し一仏ならば亡国は治定なるか、一義に云く各別なれば劣とは
経文なるか自義なるか。

他云く顕教は応身密教は法身の説なり此の故に法華は第三の劣なり、
自ら云く応身の説の故に法華劣とは経文なるか自義なるか、一義に云く法華
法身の説ならば亡国治定なるか、一義に云く真言は応身の説ならば亡国は治
定なるか。

他云く五智五仏の時は北方は釈迦中央は大日と見えたり如何、答う一義に
云く中央釈迦ならば亡国治定なるか、一義に云く北方釈迦と云う事は三部の
内に無し不空の義なり仏説に非ず。

他云く法華は穢土の説なり真言は三界の外の法界宮の説なり、答う一義に
云く真言は三界の内の説ならば亡国治定なるか義釈の文。

他云く顕教の内にて大日・釈迦一体と説くとも密教の内にては二仏各別

なり名は同じけれども義異なるなり如何、

答う此の故に亡国と云うなり、一義に云く此くの如く云う事直に經文を出す可きなり。

他云く童女は真言の成仏・法華には三密闕くる故なり、答う自義なるか經文なるか。

他云く經文なり、陀羅尼を得・不退転を得たりと云云、陀羅尼は三密の加持なり、答う、此の陀羅尼を真言と云うは自義なるか經文なるか、一義に云くさては弘法の僻事なり其の故は此の陀羅尼を戲論第三の劣と下すなり、一義に云く自語相違なり法華に印有る故なり。

他云く守護經の文に依れば釈迦は大日より三密の法門を習いて成仏するなり、答う此の故に法華を謗ずるか、一義に云く此の文は三説の内なるか外なるか、一義に云く此れに相違せば亡国は治定なるか。

他云く法華經には「合掌を以て敬心し具足の道は聞かんと欲す」と云へり
何ぞ印・真言を捨つるや、答う此の故に法華を謗ずるか、一義に云く自義な
るか経文なるか、一義に云く此の故に真言を捨てずとは経文なるか、一義
に云く此の文は真言を持つと云う文なるか、一義に文段を以て責む可し。
他云く弘法大師を無間と云うは経文なるか自義なるか、答う経文なり。
他云く二十八品の中には何れぞや、答う二十八品の中に有らば墮獄治定な
るか、他云く爾なり、答う法華を誹謗すること治定なるか若し爾らば経文を
出して責む可きなり

二一 宿屋入道への御状

文永五年八月 四十七歳御作 与宿屋光則 於鎌倉 169P

其の後は書・絶えて申さず不審極り無く候、抑去る正嘉元年丁巳八月二
十三日戌亥の刻の大地震、日蓮諸経を引いて之を勸えたるに念仏宗と禅宗

等とを御歸依有るが故に日本守護の諸大善神瞋恚を作して起す所の災なり、
若し此れを対治無くんば他国の為に此の国を破らる可きの由勘文一通之を撰
し正元二年庚申七月十六日御辺に付け奉つて故最明寺入道殿へ之を進覽す、
其の後九箇年を経て今年大蒙古国より牒状之有る由・風聞す等云云、
其の如くんば彼の国より此の国を責めん事必定なり、而るに日本国の中には日蓮
一人当に彼の西戎を調伏するの人たる可しと兼て之を知り論文に之を勘う、
君の為・国の為・神の為・仏の為・内奏を経らる可きか、委細の旨は見参を
遂げて申す可く候、
恐恐謹言。

文永五年八月二十一日

宿屋左衛門入道殿

日蓮 花押

北条時宗への御状

169P

謹つつしんで言ごん上じやうせしめ候、抑そもも正月十八日・西戎大蒙古国の牒ちやうじやう状とつらい到来す

と、日蓮にちれん先年しきやう諸經しよきやうの要文ようぶんを集め之これを勸かんえたること立正安国論りつしやうあんこくろんの如ごとく少しも

違たがわず普合ふごうしぬ、日蓮にちれんは聖人しやうにんの一分いちぶんに当れり未萌みぼうを知るが故なり、然しかる間重かさね

て此よしの由おどろを驚かし奉たてまつる急けんぎ建長寺・寿福寺・極樂寺・多宝寺・淨光明寺・

大仏殿等の御歸依ごきえを止めたまえ、然しからずんば重かさねて又四方より責め来る可べき

なり、速すみかに蒙古国もうちの人を調伏じやうぶくして我が国を安泰あんたいならしめ給え、彼じやうぶくを調伏

せられん事日蓮にちれんに非あらざれば叶かなう可べからざるなり、諫臣国かんしんに在れば則すなわち其の国

正まさしく争子家そうしに在れば則すなわち其の家直こっかし、国家の安危は政道の直否ちつぽうに在り仏法

の邪正じゃせいは經文きやうもんの明鏡めいきやうに依よる。

夫それ此の国は神国しんこくなり神は非礼うを稟りやうけたまわず天神七代・地神五代の神神

其の外諸天善神等しよてんぜんじんは一乘擁護いちじやうおごの神明しんみやうなり、然しかも法華經を以て食ほけきやうと為なし正直しやうじき

を以て力と為す、法華經に云く諸仏救世者・大神通に住して衆生しゆじやうを悦よろこばしめ

んが為もつての故ゆえに無量むりようの神力じんりきを現げんずと、一乗いちじよう棄捨きしやの国くにに於おいては豈善あにぜん神怒じんを成さざらんや、仁王にんのう經きように云いく、「一切いっさいの聖人しようにん去ひる時ひちなん七難しちなん必おこず起おこる」と、彼の吳王ごしよはことば伍子胥ごしよが詞ことばを捨わて吾が身みを亡なし・桀けつちゆう紂りゆうは竜比りゆうひを失うしつて国位こくいを喪ほろぼす、今いま・日本にほん国こく既に蒙古もうこ国こに奪あわれんとす豈歎あになげかざらんや豈驚あにおどろかざらんや、日蓮にちれんが申もうす事こと御用もちい無なくくんば定こうめて後悔こうかい之あ有べる可べし、日蓮にちれんは法華ほけきよう經きようの御使おんつかいなり經きんに云いく、「則すなわち如來にやらいの使如來にやらいの所遣しよけんとして如來にやらいの事ことを行をず」と、三世さんぜ諸しよ仏ぶつの事こととは法華ほけきよう經きんなり、此この由方かた方がへ之これを驚おどろかし奉たてまつ一ひと所に集あめて御評議ごへうぎ有あつて御報ごほうに予あずかる可べく候こう、所詮しよせんは万祈ばんきを抛なげつて諸宗しよしゆうを御前おんまえに召よし合あせあんちゆうちゆう仏法ぶつぽうの邪正じやせいを決けし給たまえ、澗底かんていの長松ちやうそう未いまだ知しらざるは良匠あやまの誤あやまり閻中えんちゆうの錦衣きんいを未いまだ見みざるは愚人ぐにんの失とがなり。

三國さんこく仏法ぶつぽうの分別ぶんべつに於おいては殿前でんぜんに在あり所謂いわゆる阿闍世あじゃせ・陳隋ちんずい・桓武かんむ是これなり、敢あえてて日蓮にちれんが私曲しきよくに非あらず只偏ただひとえに大忠いたを懷ゆえく故ゆえに身みの為ために之これを申もうさず神かみの為ため・君きみの為ため

・国の為一切衆生の為に言上せしむる所なり、
恐恐謹言。

文永五年ぶんえい辰十月十一日

にちれんかおう
日蓮花押

謹上 宿屋入道殿

二三 宿屋左衛門光則への御状

170P

先年勸えたるの書安国論に普合せるに就て言上せしめ候い畢んぬ、抑正

月十八日西戎大蒙古国より牒状到来すと、之を以て之を按ずるに日蓮は

聖人の一分に当り候か、然りと雖も未だ御尋に予らず候の間重ねて諫状を

捧ぐ、希くば御帰依の寺僧を停止せられ宜しく法華經に帰せしむべし、若し

然らずんば後悔何ぞ追わん、此の趣を以て十一所に申せしめ候なり定めて御

評議有る可く候か、偏に貴殿を仰ぎ奉る早く日蓮が本望を遂げしめ給え、十

一箇所と申すは平の左衛門尉殿に申せしむる所なり委悉申し度く候と雖も上

書分明なる間省略せしめ候、御気色を以て御披露庶幾せしむる所に候、

きようきようきんげん
恐恐 謹言。

ぶんえい
文永五年 辰戌 十月十一日

にちれん かおう
日蓮 花押

きんじよう やどやにゆうどう
謹上 宿屋入道殿

さえもんのじよう あみ
二四 平左衛門尉頼綱への御状

171P

もうこ ちようじようとうらい がつ こんじよう
蒙古国の 牒状 到来に就いて言上せしめ候い畢んぬ、抑 先年 日蓮

りっしやうあんこくろん

これ かんが

つ ごと

たが

ふごう

おわ

そもそも

にちれん

そじよう

もっしゅうろう

ひら

ほ

ここをもっかんぎ

そつけき

し か

かさ

訴状を以て愁鬱を發かんと欲す爰を以て諫旗を公前に飛ばし争戟を私後に立

つ、併ながら貴殿は一天の屋梁為り万民の手足為り争でか此の国滅亡の事を

なげ

つし

いってん

おくりような

ばんみん

な

いか

とが

すべから

ほうほう

歎かざらんや慎まざらんや、早く須く退治を加えて謗法の咎を制すべし。

そ

おもんみればいちじよう

みようほうれんげきよう

しよぶつしやうかく

ごくうり

しよてんぜんじん

もつ

夫れ以れば一乗・妙法蓮華經は諸仏正覚の極理・諸天善神の威食なり

これ しんじゆ

おい

なん

ひちなん

さんさいおこ

あまつさえ

え此の事を申す日蓮

にちれん

之を信受するに於ては何ぞ七難来り三災興らんや、

るざい

いか

にちがつ

せいしゆく

星宿罰を加えざらんや、

しやうとくたいし

もりや

をば流罪せらる争でか日月・星宿罰を加えざらんや、聖徳太子は守屋の悪を

倒して仏法を興し秀郷は將門を挫いて名を後代に留む、然らば法華經の強敵
為る御歸依の寺僧を退治して宜く善神の擁護を蒙るべき者なり、御式目を見
るに非擧を制止すること分明なり、争でか日蓮が愁訴に於ては御叙い無らん
豈御起請の文を破るに非ずや、此の趣を以て方方へ愚状を進らす、所謂鎌倉
殿・宿屋入道殿・建長寺・寿福寺・極樂寺・大仏殿・長樂寺・多宝寺・
淨光明寺・弥源太殿並びに此の状合せ十一箇所なり、各各御評議有つて速か
に御報に預るべく候、若し爾らば下和が璞磨いて玉と成り法王髻中の明珠
此の時に顯れんのみ、全く身の為に之を申さず、神の為・君の為・国の為・
一切衆生の為に言上せしむるの処なり件の如し、恐恐謹言。

文永五年戊辰十月十一日 日蓮 花押

平左衛門尉殿

二五 北条弥源太への御状

172P

去ぬる月、御来臨急ぎ急ぎ御帰宅本意無く存ぜしめ候い畢んぬ、抑蒙古

国の牒状到来の事上一人より下万民に至るまで驚動極り無し然りと雖も

何の故なること人未だ之れを知らず、日蓮兼ねて存知せしむるの間既に一論

を造つて之を進覽せり徴先達つて顚れ則ち災必ず後に来る、去ぬる正嘉元年

丁巳八月廿三日戌亥の刻の大地震是併ながら此の瑞に非ずや、法華經に云く

如是相と天台大師云く「蜘蛛下りて喜事来り・鵲鳴いて行人来る」と、易

に云く吉凶動に於て生ずと此等の本文豈替るべけんや、所詮諸宗の帰依を

止めて一乗妙經を信受せしむべきの由勘文を捧げ候、日本亡国の根源は

浄土・真言・禅宗・律宗の邪法悪法より起れり諸宗を召し合せ諸経勝劣

を分別せしめ給え、殊に貴殿は相模の守殿の同姓なり根本滅するに於ては

枝葉豈栄えんや、早く蒙古国を調伏し国土を安穩ならしめ給え、法華を謗ず

る者は三世諸仏の大怨敵なり、天照太神・八幡大菩薩等・此の国を放ち給う

故・大蒙古国より牒状来るか、自今已後各各生取と成り他国の奴と成る
可し、此の趣き方々へ之れを驚かし愚状を進ぜしめ候なり、恐恐謹言。

ぶんえい
文永五年辰十月十一日

日蓮
花押

謹上 弥源太入道殿

二六 建長寺道隆への御状

173P

そ ぶつかくのき ほうもんいえ いた ぶつぼう はんえい けんどく ちようか
夫れ仏閣軒を並べ法門屋に拒る仏法の繁栄は身毒支那に超過し僧宝の形儀
ろくつう らかん こと しか いえど いちだいしきよう おい いま しょうれつ せんじん
は六通の羅漢の如し、然りと雖も一代諸経に於て未だ勝劣・浅深を知らず
さな きんじゅう たちま さんとく しゃかによらい なげつ たほう ぼさつ
併がら禽獸に同じ忽ち三徳の釈迦如来を抛つて、他方の仏・菩薩を信ず是豈
ぎやくろがやだ あら ねんぶつ むげんじごく ぜんしゅう てんま しょうい しんこん
逆路伽耶陀の者に非ずや、念仏は無間地獄の業・禅宗は天魔の所為・真言は
ぼうごく あくほう りっしゅう ぞく もうせつ こし ちれんい ぶんおうがんねん かんが
亡国の悪法・律宗は国賊の妄説と云云、爰に日蓮去ぬる文応元年の比勘えた
るの書を立正安国論と名け宿屋入道を以て故最明寺殿に奉りぬ、此の書の
しよせん ねんぶつ しんこん あくほう ゆえ てんが さいなんしき あまつさえ
所詮は念仏・真言・禅・律等の悪法を信ずる故に天下に災難頻りに起り 剰
たこく え他国より此の国責めらる可きの由之を勘えたり、然るに去ぬる正月十八日
ちようじょうとうらい にちれん かんが たが ふじゅう しょうざん
牒状 到来すと日蓮が勘えたる所に少しも違わず普合せしむ、諸寺・諸山の
きとういりよく はたまたあくほう かまくら じょうげばんにんどうりゅうしようにん
祈 威力滅する故か将又悪法の故なるか鎌倉中の上下万人道隆 聖人をば仏

の如く之を仰ぎ良觀聖人をば羅漢の如く之れを尊む、其の外寿福寺・多宝寺・淨光明寺・長樂寺・大仏殿の長老等は「我慢の心充滿し、未だ得ざるを得たりと謂う」の増上慢の大惡人なり、何ぞ蒙古國の大兵を調伏せしむ可けんや、剩え日本國中の上下万人悉く生取と成る可く今世には國を亡し後世には必ず無間に墮せん、日蓮が申す事を御用い無くんば後悔之れ有る可し此の趣鎌倉殿・宿屋入道殿・平の左衛門の尉殿等へ之を進状せしめ候、一処に寄り集りて御評議有る可く候、敢て日蓮が私曲の義に非ず只經論の文に任す処なり、具には紙面に載せ難し併ながら対決の時を期す、書は言を尽さず言は心を尽さず、恐恐謹言。

文永五年辰十月十一日 日蓮 花押

進上 建長寺道隆証人侍者御中

二七 極樂寺良觀への御狀

174

さいじょうだいもうこくかんちよう

西戎大蒙古国簡牒の事に就て鎌倉殿其の外へ書状を進せしめ候、日蓮

いぬ ぶんおうがんねん かんが 立つしょうあんこくろん ごとく とうまつばか 去る文応元年の比勘え申せし立正安国論の如く毫末計りも之に相違せず候、

此の事如何、長老忍性速かに嘲哂の心を翻えし早く日蓮房に帰せしめ

たま も しか 給え、若し然らずんば人間を輕賤する者・白衣の与に法を説くの失脱れ難き

えほう ふえ によらい きんげん りようかんしようにん じゅうしよ ほけきよう か、依法不依人とは如来の金言なり、良觀聖人の住处を法華經に説て云く

ある あれんにや のうえ かつげん 阿練若に有り納衣にして空閑に在り」と、阿練若は無事と翻ず争か日蓮

ぎんそう じまつしよ そうい を譏奏するの条住处と相違せり併ながら三学に似たる矯賊の聖人なり、

せんしよ ぽんぽつじにようまな こんじよう ぞく らいせ だざい 僭聖増上慢にして今生は国賊・来世は那落到墮在せんこと必定なり、聊か

も 先非を悔いなば日蓮に歸す可し、此の趣き鎌倉殿を始め奉り建長寺等其の

ひろう しょうしよきよう しょうせんほんい と ほん かつ 外へ披露せしめ候、所詮本意を遂げんと欲せば対決に如かず、即ち三蔵浅近

もつ しょうしよきよう ほうけ とうか たいかい しょうれつ の法を以て諸經中王の法華に向うは江河と大海と華山と妙高との勝劣の

ごとく しょうしよきよう じようぶく ひほう ごぞんじあ にちれん ほんだいいち 如くならん、蒙古国調伏の秘法定めて御存知有る可く候か、日蓮は日本第一

の法華經の行者蒙古国退治の大将為り、於一切衆生中亦為第一」とは是なり、文言多端理を尽す能わず併ながら省略せしめ候、恐恐謹言。

文永五年辰十月十一日

日蓮花押 謹上

極樂寺長老良觀聖人・御所

二八 大仏殿別当への御状

174P

去る正月十八日西戎大蒙古国より牒状到来し候い畢んぬ、其の状に云く

大蒙古国皇帝日本国王に書を上る大道の行わるる其の義・たり信を構え睦を

修す其の理何ぞ異ならん乃至至元三年丙寅正月日と、右此の状の如くんば返

牒に依つて日本国を襲う可きの由分明なり、日蓮兼ねて勘え申せし

立正安国論に少しも相違せず急かに退治を加え給え、然れば日蓮を放て之を

叶う可からず、早く我慢を倒して日蓮に帰すべし、今生空しく過ぎなば後悔

何ぞ追わん委しく之を記すこと能わず、此の趣方方へ申せしめ候、一処に聚集

して御調伏有る可く候か。
じょうぶくあ

文永五年十月十一日
ぶんえい

日蓮花押 謹上 大仏殿別当御房
にちれんかおう きんじょう だいぶつでんべつとうごぼう

二九 寿福寺への御状 175P

風聞の如くんば蒙古国の簡牒・去る正月十八日慥に到来候い畢んぬ、然れ
こと もうこ かんちよう いぬ たしかとうらい おわ

ば先年日蓮が勸えし書の立正安国論の如く普合せしむ、恐くは日蓮は未萌を
にちれん かんが りっしょうあんころん こと ぶごう にちれん みぼう

知る者なるか、之を以て之を按ずるに念仏・真言・禅・律等の惡法・一天に
これ もっこれ あん ねんぶつ しんごん あくほう いってん

充滿して上下の師と為るの故に此の如き他国侵逼の難起れるなり、法華不信
じゅうまん じょうげ な ゆえ こと たこくしんびつ なん ほっけふしん

の失に依つて皆一同に後生は無間地獄に墮す可し早く邪見を翻し達磨の法
とが よ みな こしろう ぶげんじこく だ ベ じゃけん ひるがえり だるま

を捨てて一乗正法に帰せしむ可し、然る間方方へ披露せしめ候の処なり、
いちじょうしほうほう し か かたがた ひろう ところ

早一処に集りて御評議有る可く候、委くは対決の時を期す、恐恐謹言。
いっしょ あ くわし こす きょうきようきんげん

文永五年十月十一日
ぶんえい

日蓮花押 謹上 寿福寺侍司御中
にちれんかおう きんじょう おんちゆう

三〇 浄光明寺への御状

175P

だいもつこく 大蒙古国の皇帝日本国を奪う可きの由 牒状を渡す、此の事先年
りつしょうあんこくろん 立正安国論に勘え申せし如く少しも相違せしめず内内日本第一の勸賞に行わ
べ 立正安国論に勘え申せし如く少しも相違せしめず内内日本第一の勸賞に行わ
る可きかと存ぜしめ候の処 剩え御称歎に預らず候、是れ併ながら鎌倉中
じゃくそ 著・の類律宗・禅宗等が「向国王・大臣誹謗説我惡」の故なり、早く二百
なげう 五十戒を抛つて日蓮に歸して成仏を期す可し、若し然らずんば墮在無間の
こんげん 根源ならん、此の趣き方々へ披露せしめ候い畢んぬ、早く一処に集りて対決
と を遂げしめ給え日蓮・庶幾せしむる処なり、敢て諸宗を蔑如するに非ざる
ほつけ のみ、法華の大王戒に対して小乗 戒・豈相對に及ばんや、笑う可し笑
うべ 可し。

ぶんえい 文永五年十月十一日

にちれんかおう 日蓮花押

謹上 きんじょう 淨光明寺侍者御中 じようこうみょうじ おんちゆう

三一 多宝寺への御状 たほう

176P

にちれん

さいみょうじ

たてまつ

りつしょうあんこくろん

ひけん

みほう

日蓮・故最明寺殿に奉りたるの書・立正安国論御披見候か未萌を知つて

これ かんが とう

すで いぬ

もうこ

かんちようとうらい

なん おどろ

おどろ

之を勘え申す処なり、既に去る正月蒙古国の簡牒到来す何ぞ驚かざらんや、

ふしんせんまん

たと

にちれん

いえど かんが

あいた

おい なん

此の事不審千万なり縦い日蓮は悪しと雖も勘うる所の相当るに於ては何ぞ

もち

もち

もち

あ

べ

もち

もち

もち

用いざらんや、早く一所に集りて御評議有る可し、若し日蓮が申す事を御

もち

もち

もち

あ

べ

もち

もち

もち

用い無くんば今世には国を亡し後世は必ず無間・大城に墮す可し、此の旨

かたがた

これ

これ

あえて

にちれん

しきよく

あら

くわ

くわ

くわ

方方へ之を申せしめしなり敢て日蓮が私曲に非ず委しく御報に預る可く候、

言は心を尽さず書は言を尽さず併ながら省略せしめ候、

きようきようきんげん

ぶんえい

言は心を尽さず書は言を尽さず併ながら省略せしめ候、

五年十月十一日

にちれん

かおう

きんじょう

たほう

おんちゆう

おんちゆう

おんちゆう

日蓮 花押

謹上

多宝寺侍司御中

ちようくくじ

三二 長樂寺への御状

176P

もうこ

じようぶく

かつ

かたがた

ひろう

おわ

おわ

すで

にちれん

蒙古国調伏の事に就いて方方へ披露せしめ候い畢んぬ、既に日蓮

りつしょうあんこくろん
立正安国論に勘えたるが如く普合せしむ、早く邪法邪教を捨て実法実教に
帰す可し、若し御用い無くんば今生には国を亡し身を失い後生には必ず那落
に墮す可し、速かに一処に集りて談合を遂げ評議せしめ給え日蓮庶幾せしむ
る所なり、御報に依つて其の旨を存す可く候の処なり敢て諸宗を蔑如する
に非ず但此の国の安泰を存する計りなり、
恐れ謹言。

ぶんえい
文永五年十月十一日
にちれんかおう
日蓮花押

きんじょう
謹上
ちようらくじ
長樂寺侍司御中
おんちゆう

三三
弟子・檀那中への御状
177P

だいまうこく
大蒙古国の簡牒到来に就いて十一通の書状を以て方方へ申せしめ候、定め
にちれん
て日蓮が弟子・檀那・流罪・死罪一定ならん少しも之を驚くこと莫れ方方へ
ごうげんもう
の強言申すに及ばず是併ながら而強毒之の故なり、日蓮庶幾せしむる所に候、
ようじんあ
各各用心有る可し少しも妻子・眷属を憶うこと莫れ権威を恐るること莫れ、

このたびしうじ
今度生死の縛を切つて仏果を遂げしめ給え、鎌倉殿・宿屋入道・平の
さえもんじょう やげんた けんちょうじ
左衛門尉・弥源太・建長寺・寿福寺・極楽寺・多宝寺・浄光明寺・大仏殿・
ちようらくじ 已 上 よ
長樂寺十一箇所仍つて十一通の状を書して諫訴せしめ候い畢んぬ、定めて子細
あ べ にちれん
有る可し、日蓮が所に来りて書状等披見せしめ給え、恐恐謹言。

ぶんえい
文永五年辰十月十一日

にちれんかおう
日蓮花押

にちれん でし だんな
日蓮弟子・檀那中

とくいしょう
三四 問注得意抄

ぶんえい
文永六年五月 四十八歳御作

178P

じふじゅうに
与富木入道外二人

にき
土木入道殿

にちれん
日蓮

こんにち
今日召し合せ御問注の由承り候、各各御所念の如くならば三千年に一度花
このみ うどんげ あ
さき菓なる優曇華に値えるの身か、西王母の園の桃・九千年に三度之を得た
とうほう いちよじ なにこと し
る東方朔が心か一期の幸何事か之に如かん、御成敗の甲乙は且らく之を置く前

立つて鬱念うつねんを開発かいほつせんか、但し兼日御存知有りと雖も駿馬しゅんめにも鞭むちうつつの理之有これあり、今日きょうの御出仕・公庭に望んでの後は設たとい知音な為りと雖も傍輩ほうはいに向つて雑言とどを止めらる可し両方召し合せの時・御奉行人・訴陳の状之を讀むの尅何事きざみなことに付けても御奉行人の御尋ね無からんの外一言を出す可からざるか、設たとい敵人たといてきじん等惡口あつくを吐くと雖も各各当身の事一二度までは聞かざるが如くすべし、三度に及ぶの時・顔貌を變ぜず・言そげんを出さず・語を以て申す可し各各は一処いつしょの同輩ひそかなり私おいに於ては全く遺恨無きの由之を申さる可きか、又御供雑人等ぞうにんに能く禁よ止きんしを加え喧嘩けんかを出す可べからざるか、是かくくの如ごとき事書札に尽し難がたし心を以て御斟酌しんしゃく有る可べきか、此等これらの矯言きょうげんを出す事恐そんを存すと雖も仏經いえどと行者ぶきようと檀那だんなと三事相応そうおうして一事を成さんが為に愚言おろかを出す処いだなり、恐恐謹言きようきようきんげん。

五月九日

にちれんかおう
日蓮花押

三人御中

三五 行敏御返事 ごへんじ 文永八年七月 ぶんえい 五十歳御作 与浄土僧行敏 じょうど 179P

三六 行敏初度の難状 なん

179P

未だ見参に入らずと雖も事の次を以て申し承る いまだ いえど もつ もつ うけたまわる は常の習に候か、抑風
聞の如くんば所立の義尤も以て不審なり、法華の前に説ける一切の諸経は皆 ごと しよりゆつ もつともつ ふしん ほっけ いっさい しよきよう みな
是妄語にして出離の法に非ずと是一、大小の戒律は世間を誑惑して惡道に もうご しゅつり あら だいしやう せけん おおわく あくどう
墮せしむるの法と是二、念仏は無間地獄の業為と是三、禅宗は天魔の説若し だ ねんぶつ むげんじしよく たり ぜんしやう てんま も
依つて行ずる者は惡見を増長すと是四、事若し実ならば仏法の怨敵なり、
仍て対面を遂げて惡見を破らんと欲す、将又其の義無くんば争でか惡名を痛 よつ たいめん と あっけん ほ はたまたそ ぎな いか あくみやう
ませられざらんや、是非に付き委く示し賜わる可きなり、
恐恐謹言。 ぜ ひ くわし べ きやうきやうきんげん

七月八日 僧行敏花押 かおう

にちれんあじやりごほう
日蓮阿闍梨御房

三七 聖人御返事
しやうにんごへんじ

179P

条条御不審の事私の問答は事行き難く候か、然れば上奏を経られ仰せ下さ

るの趣に随つて是非を糾明せらる可く候か、此の如く仰せを蒙り候条尤も

しよき
庶幾する所に候、
きようきようきんげん
恐恐謹言。

七月十三日
にちれんかおう
日蓮花押

行敏御房御返事
ごほうごへんじ

三八 行敏訴状御会通
そしょう えつう
文永八年 五十歳御作 180P
ぶんえい

当世・日本第一の持戒の僧・良観聖人並びに法然上人の孫弟子念
とうせ にほんだいいち じかい りようかんしやうにんなら ほうねんしやうにん でし

阿弥陀仏・道阿弥陀仏等の諸聖人等日蓮を訴訟する状に云く早く日蓮を召し
あみだぶつ どうあみだぶつ しよしやうにん にちれん にちれん いわ にちれん

決せられて邪見を摧破し正義を興隆せんと欲する事云云、日蓮云く邪見を
じゃけん さいは せいぎ こうりゅう ぼ ぼ にちれん いわ じゃけん

さいは せいぎ せいぎ せいぎ せいぎ
摧破し正義を興隆せば一眼の龜の浮木の穴に入るならん、幸甚幸甚。

彼の状に云く右八万四千の教乃至一を是として諸を非とする理豈に然る

可けんや云云、道 綽禪師云く当今末法は是五濁惡世なり唯淨土の一門のみ有

つて路に通入す可し云云、善導和尚云く千中無一云云、法然上人云く捨閑閣拋

云云、念阿上人等の云く一を是とし諸を非とす謗法なり云云、本師三人の

聖人の御義に相違す豈に逆路伽耶陀の者に非ずや、将又忍性良觀聖人彼等

の立義に与力して此を正義と存せらるるか、又云く而るに日蓮偏えに法華一

部に執して諸余の大乗を誹謗す云云、無量義經に云く四十余年・末顯真實・

法華經に云く要當說真實と・又云く宣示顯說と・多宝仏証 明を加えて云く

皆是真實と十方の諸仏は舌相至梵天と云う云云、已今当の三説を非毀して

法華經一部を讚歎するは釈尊の金言なり諸仏の傍例なり敢て日蓮が自義に

非ず、其の上此の難は去る延曆・大同・弘仁の比・南都の徳一大師が伝教

だいし なん 大師を難破せし言なり、其の難已に破れて法華宗を建立し畢んぬ。

又云く所謂法華前説の諸経は皆是れ妄語なりと云云此又日蓮が私の言に

非ず、無量義経に云く未だ真実を顕さず妄語の異名なり法華経第二に云く寧ろ

虚妄有りや不なり云云、第六に云く此の良医虚妄の罪を説くや不や云云、

涅槃経に云く如来虚妄の言無しと雖も若し衆生虚妄の説に因ると知れば云

云、天台云く則ち為如来綺語の語云云、四十余年の経経を妄語と称するこ

と又日蓮が私の言に非ず、又云く念仏は無間の業と云云法華経第一に云く我

れ則ち慳貪に墮せん此の事為不可なり云云、第二に云く其の人命終して

阿鼻獄に入らん云云、大覺世尊但觀経・念仏等の四十余年の経経を説て

法華経を演説したまわずんば三惡道を脱れ難し云云、何に況や末代の凡夫・

一生の間・但自らも念仏の一行に留り他人をも進めずんば豈無間に墮せざら

んや、例せば民と子との王と親とに随わざるが如し、何に況や道・善導・

ほうねんしょうにん ねんぶつ しゅぎょう やからほけきょう みょうじ あ ねんぶつ
法然上人等念仏等を修行する 輩法華經の名字を挙げて念仏に対当して
しょうれつなんい みういちにんとくしや じゅつそくじゅつしょう ひやくそくひやくしょう せんちゅうむいつ
勝劣難易等を論じ未有一人得者・十即十生・百即百生・千中無一等と
おも わげん たいか まね いか ぜんしゅう てんまはじゅん
謂うは無間の大火を招かざらんや、又云く禪宗は天魔波旬の説と云云、此又
にちれん であら ひとびと いわ きょうげべつてん
日蓮が私の言に非ず彼の宗の人人の云く教外別伝と云云、仏の遺言に云く我
が經の外に正法有りといわば天魔の説なり云云、教外別伝の言豈此の科を
まぬか いわ だいしょう せけんおあわく きちょうべつてん あに とが
脱れんや、又云く大小の戒律は世間誑惑の法と云云、日蓮が云く小乗戒は
なこれ は そ がっし いわゆるいつしやうじょう
仏世すら猶之を破す其の上月氏国に三寺有り、所謂一向小乗の寺と一向
だいじょう だいしょうけんぎょう ひとつ ひとつ
大乘の寺と大小兼行の寺となり云云、一向小と一向大とは水火の如し将又
道路をも分隔せり、日本国に去る聖武皇帝と孝謙天皇との御宇に小乗の戒壇
こんりゅう こんりゅう かんむ ぎょう でんぎょうだいしこれ
を三所に建立せり、其の後桓武の御宇に伝教大師之を責め破りたまひぬ、
そ しょうじょう まつだい き こみょう ほんし そ じょうろん
其の詮は小乗戒は末代の機に当らずと云云、護命景深の本師等其の諍論に
負くるのみに非ず六宗の碩徳各退状を捧げ伝教大師に帰依し円頓の戒体を

伝受す云云、其の状今に朽ちず汝自ら開き見よ、而るを良観上人当世・
日本国の小乗は昔の科を存せずという、又云く年来の本尊弥陀・観音等の
像を火に入れ水に流す等云云、此の事慥なる証人を指し出し申す可し若し
証拠無くんば良観上人等自ら本尊を取り出して火に入れ水に流し科を日蓮
に負せんと欲するか委細は之を糾明せん時其の隠れ無らんか、但し御尋ね無
き間は其の重罪は良観上人等に譲り渡す、二百五十戒を破失せる因縁此の
大妄語に如かず無間・大城の人他処に求ること勿れ、又云く凶徒を室中に集
むと云云、法華経に云く・或は阿練若に有り等云云、妙樂云く東春云く
輔正記云く此等の経釈等を以て当世・日本国に引き向うるに汝等が挙る所
の建長寺・寿福寺・極樂寺・多宝寺・大仏殿・長樂寺・浄光明寺等の寺寺は
妙樂大師の指す所の第三最甚の悪所なり、東春に云く即ち是れ出家処に
一切の悪人を撰す云云、又云く両行は公処に向う等云云、又云く兵杖等云

云、涅槃經に云く天台云く章安云く妙樂云く法華經守護の爲の弓箭杖
は仏法の定れる法なり例せば國王守護の爲に刀杖を集むるが如し、但し
良觀上人等弘通する所の法・日蓮が難脱れ難きの間既に露顯せしむ可きか、
故に彼の邪義を隠さんが爲に諸國の守護地頭雜人等を相語らいて言く日蓮
並びに弟子等は阿彌陀仏を火に入れ水に流す汝等が大怨敵なりと云云、頸を
切れ所領を追い出せ等と勸進するが故に日蓮の身に疵を被り弟子等を殺害に
及ぶこと数百人なり、此れ偏に良觀・念阿・道阿等の上人の大妄語より出
たり心有らん人人は驚く可し怖る可し云云、毘瑠璃王は七万七千の諸の得道
の人を殺す、月氏國の大族王は卒都婆を滅毀し僧伽藍を廢すること凡そ一千
六百余処乃至大地震動して無間地獄に墮ちにき、毘盧釈迦王は釈種九千九百
九十万人を生け取りて並べ從えて殺戮す積屍莽の如く流血池を成す、
弗沙弥多羅王は四兵を興して五天を回らし僧侶を殺し寺塔を燒く、説賞迦王

は仏法を毀壞す、訖利多王は僧徒を斥逐し仏法を毀壞す、欽明・敏達・用明の三王の詔に曰く炳然として宜く仏法を斷ずべし云云、二臣自ら寺に詣で堂塔を斫倒し仏像を毀破し火を縱つて之を焼き所焼の仏像を取つて難波の堀江に棄て三尼を喚び出して其の法服を奪い並びに笞を加う云云、大唐の武宗は四千六百余処を滅失して僧尼還俗する者計うるに二十六万五百人なり、去る永保年中には山僧・園城寺を焼き払う云云、御願は十五所堂院は九十所・塔婆は四基・鐘樓は六宇・經藏は二十所神社は十三所・僧坊は八百余宇舎宅は三千余等云云、去る治承四年十二月二十二日・太政入道浄海・東大・興福の両寺を焼失して僧尼等を殺す、此等は仏記に云く此等の悪人は仏法の怨敵に非ず三明六通の羅漢の如き僧侶等が我が正法を滅失せん、所謂守護經に云く・涅槃經に云く。

日蓮

ぶんえい
文永八年九月 五十歳御作 与平左衛門尉頼綱

183P

一昨日見参に罷入候の条悦び入り候、抑人の世に在る誰か後世を思わざ

らん仏の出世は専ら衆生を救わんが為なり、爰に日蓮比丘と成りしより旁

法門を開き已に諸仏の本意を覚り早く出離の大要を得たり、其の要は

妙法蓮華経是なり、一乗の崇重・三国の繁昌の儀・眼前に流る誰か疑網

を貽さんや、而るに専ら正路に背いて偏に邪途を行ず然る間聖人国を捨て

善神瞋を成し七難並びに起つて四海閑かならず、方今世は悉く関東に歸し人

は皆士風を貴ぶ、就中日蓮生を此の土に得て豈吾が国を思わざらんや、仍つ

て立正安国論を造つて故最明寺入道殿の御時宿屋の入道を以て見参に入れ

畢んぬ、而るに近年の間、多日の程・犬戎浪を乱し夷敵国を伺う、先年勸え

申す所近日符合せしむる者なり、彼の太公が殷の国に入りしは西伯の礼に依り

張良が秦朝を量りしは漢王の誠を感じればなり、是れ皆時に當つて賞を得・

謀を帷帳いくちようの中に回めぐらし勝つことを千里の外に決せし者なり、夫れ末萌そみぼうを知る者者は六正の聖臣ほっけなり法華ひるを弘ひろむる者者は諸仏しよぶつの使者しなり、而しかるに日蓮にちれん忝かたじけなくも驚嶺じゆれい・鶴林かくりんの文を開あいて鵝王がおう・鳥瑟うひつの志しよざしを覚さとり剰あまつさええ将来かんがを勘かんえたるに粗符合ほぼすることを得たり先哲およに及およばずと雖も定んで後人まれには希まれなる可べき者なり、法を知り国を思しよざしふの志しよざし尤も賞せらる可べきの処ところ・邪法邪教じゃほうじやきようの輩やから・讒奏讒言さんそうさんげんするの間久しく大忠おちを懷しかいて而も未だ微望いまいを達せず、剰あまつさええ不快ふかいの見参まかに罷り入ること偏ひとえに難治なんの次第しだいを愁うれうる者なり、伏して惟おもみれば泰山おもんに昇あらずんば天の高きを知らず深谷しんこくに入らずんば地の厚きを知らず、仍よつて御存知ごぞんじの為ために立正安国論りっしやうあんこくろん一卷これ之を進覽かんがす、勘のえ載のする所の文は九牛の一毛いまいなり未だ微志を尽さざるのみ、抑貴辺そもそもきへんは当時とうじ・天下てんがの棟梁とうりやうなり何ぞ國中なんの良材を損やすんせんや、早く賢慮めくを回めぐらして須すべからく異敵を退やすんくべし世を安やすんじ国を安やすんずるを忠と為なし孝と為なす、是れ偏ひとえに身ための為これに之を述べず君の為いっさいしゆじよう仏の為いっさいしゆじよう神の為いっさいしゆじよう一切衆生の

ため
為に言上せしむる所なり、
恐 謹言。

ぶんえい
文永八年九月十二日
にちれんかおう
日蓮花押
きんじょう
謹上
さえもん
平左衛門殿

ごへんじ
三九 強仁状御返事
がねん
建治元年十二月
五十四歳御作

しんごん
与真言僧強仁
184P

しょうにん

かんじょう

とらうい

強仁上人十月二十五日の御勘状同十二月二十六日に到来す、此の事余も

うつそ

たちまち

じた

ぎょう

ひら

ほ

ただ

たん

年来鬱訴する所なり忽に返状を書いて自他の疑氷を釈かんと欲す、但し歎ず

いなか

おい

じやせい

じた

ぎょう

ひら

ほ

ただ

たん

るは田舎に於て邪正を決せば暗中に錦を服して遊行し澗底の長松・匠を知ら

ざるか、

かねて

又定めて

喧嘩

出来の

基なり、

貴坊

本意を

遂げんと

欲せば

公家

と関東とに奏聞を経て露点を申し下し是非を糾明せば上一人咲を含み下万民

かんとう

そうもん

へ

もう

くだ

ぜひ

きゅうめい

かみいちにん

を

含み

下

疑を散ぜんか、其の上大覚世尊は佛法を以て王臣に付属せり世・出世の邪正

うたがい

そ

だいかくせそん

ぶつぼう

もつ

おうしん

ふぞく

しゅつせ

じゃせい

を

散

を決断せんこと必ず公場なる可きなり、就中当時・我が朝の体為る二難を

さか

い

わゆる

じかい

ほんぎやく

なん

た

こく

しん

びつ

なん

盛んにす所謂自界叛逆難と他国侵逼難となり、此の大難を以て大蔵經に引き

い

わゆる

じかい

ほんぎやく

なん

た

こく

しん

びつ

なん

なん

盛んにす所謂自界叛逆難と他国侵逼難となり、此の大難を以て大蔵經に引き

い

わゆる

じかい

ほんぎやく

なん

た

こく

しん

びつ

なん

なん

向えて之を見るに定めて国家と仏法との中に大禍有るか、仍つて予正嘉文永
二箇年の大地震と大長星とに驚いて一切経を聞き見るに此の国の中に前代
未起の二難有る可し所謂自他叛逼の両難なり、是れ併ながら真言・禅門・念佛
・持斎等・権小の邪法を以て法華真実の正法を滅失する故に招き出す所の
大災なり、只今他国より我が国を逼む可き由・兼ねて之を知る故に身命を
仏神の宝前に捨棄して刀剣・武家の責を恐れず昼は国主に奏し夜は弟子等に
語る、然りと雖も真言・禅門・念佛者・律僧等・種種の誑言を構え重重の讒訴
を企つるが故に叙用せられざるの間処処に於て刀杖を加えられ兩度まで
御勘氣を蒙る剩え頭を刎ねんと擬する是の事なり、夫れ以れば月支漢土の
仏法の邪正は且らく之を置く大日本国・亡国と為る可き由来之を勘うるに
真言宗の元祖たる東寺の弘法・天台山第三の座主慈覚・此の両大師・法華經
と大日經との勝劣に迷惑し日本第一の聖人なる伝教大師の正義を隠没し

てより已来叡山の諸寺は慈覺の邪義に付き神護七大寺は弘法の僻見に随う
其れより已来王臣邪師を仰ぎ万民僻見に帰す、是くの如き諂曲既に久しく四
百余年を経歴し国漸く衰え王法も亦尽きんとす彼の月支の弗沙弥多羅王の
八万四千の寺塔を焚焼し無量仏子の頸を刎ねし、此の漢土の会昌天子の寺院
四千六百余所を滅失し九国の僧尼還俗せしめたる此等大悪人爲りと雖も我が
朝の大謗法には過ぎず、故に青天は眼を瞋らして我が国を睨み黄地は憤
を含んで動もすれば天・を發す、国主聖主に非れば謂れ之を知らず諸臣儒家
に非れば事之を勘えず、剩え此の災天を消さんが為に真言師を渴仰し大難を
卻けんが為に持斎等を供養す、譬えば火に薪を加え冰に水を増すが如く悪法
は弥貴まれ大難は益々来る只今・此の国滅亡せんとす。

予粗先ず此の子細を勘うるの間・身命を捨棄し国恩を報ぜんとす、而るに
愚人の習い遠きを尊び近きを蔑るか将又多人を信じて一人を捨つるかの故に

終に空しく年月を送る、今幸に強仁上人・御勘状を以て日蓮を曉諭す然る
可くは此の次でに天聴を驚かし奉つて決せん、誠に又・御勘文の体為非を
以て先と為し若し上人黙止して空しく一生を過せば定めて師檀共に泥梨の大
苦を招かん、一期の大慢を以て永劫の迷因を殖ること勿れ速速天奏を経て疾
疾対面を遂げ邪見を翻えし給え、書は言を尽さず言は心を尽さず悉悉
公場を期す、恐恐謹言。

十二月廿六日

日蓮

花押

強仁上人座下

四〇 開目抄上

文永九年（1172年）二月五十一歳御作 与門下一

同 於佐渡塚原 186P

夫れ一切衆生の尊敬すべき者三あり、所謂主師親これなり、又習学すべ
き物三あり、所謂儒外内これなり。

儒家には三皇・五帝・三王・此等を天尊と号す諸臣の頭目・万民の橋梁なり、三皇已前は父をしらず人皆禽獸に同ず五帝已後は父母を弁て孝をいたす、所謂重華はかたくなはしき父をうやまひ沛公は帝となつて大公を拝す、武王は西伯を木像に造り丁蘭は母の形をきざめり、此等は孝の手本なり、比干は殷の世の・ほろぶべきを見て・しみて帝をいさめ頭をはねらる、公胤といふし者は懿公の肝をとつて我が腹をさき肝を入れて死しぬ此等は忠の手本なり、尹寿は堯王の師・務成は舜王の師・太公望は文王の師・老子は孔子の師なり此等を四聖とがうす、天尊・頭をかたづけ万民・掌をあわす、此等の聖人に三墳・五典・三史等の三千余巻の書あり、其の所詮は三玄をいはず三玄とは一には有の玄・周公等此を立つ、二には無の玄・老子等・三には亦有亦無等・莊子が玄これなり、玄とは黒なり父母・末生・已前をたづぬれば、或は元氣よりして生じ、或は貴賤・苦樂・是非・得失等は皆自然等云

云。かくのごとく巧たくみに立つといえども・いまだ過去かこ・未来みらいを一分いちぶんもしらず玄
とは黒なり幽くろなりかるがゆへに玄くろという但げんざい現在げんざい計りしれるにたり、現在げんざいに
をひて仁義を制して身をまほり国を安んず此こゝに相違そういすれば族やからをほろぼし家を
亡ぼす等これらいう、此等けんせいの賢聖ひとびとの人人しょうにんは聖人せいじんなりといえども過去かこを・しらざるこ
と凡夫ぼんぷの背そを見ず・未来みらいを・かがみざること盲人めしいの前をみざるがごとし、但
現在げんざいに家を治め孝をいたし堅く五常ごじやうを行ずれば傍輩ほうはいも・うやまい名も国にき
こえ賢王もこれを召して・或あるは臣となし・或あるは師とたのみ・或あるは位をゆづり
天も来て守りつかう、所謂いわゆる周の武王には五老きたりつかえ後漢ごかんの光武には二
十八宿来つで二十八将となりし此なり、而しかりといえども過去かこ・未来みらいをしらざ
れば父母ふぼ・主君しゅくん・師匠ししやうの後世ごしやうをもたすけず不知恩ふちあんの者なり・まことの賢聖けんせいに
あらず。孔子こうしが此の土に賢聖けんせいなし西方さいほうに仏図ぶとという者あり此聖人しょうにんなりといふ
て外典を仏法の初門ぶつぽうとなせしこれなり、礼楽等を教て内典ないてんわたらば戒定慧かいじやうえを

しりやすからせんがため・王臣おうしんを教て尊卑をさだめ、父母ふぼを教て孝の高きを
しらしめ師匠ししょうを教て帰依きえをしらしむ、妙樂大師みょうらくだいし云く、「仏教ぶつきょうの流化実りゅうかじつに茲こゝに
頼たのる礼樂れいがく前に馳はせて真道しんどう後に啓ひらくく」等云云、天台てんだい云く、「金光明經こんこうみょうきやうに云く
一切世間所有いっさいせけんしやうの善論ぜんろん皆此みなの經に因よる、若もし深く世法せほうを識しれば即すなわち是これ仏法ぶつぽうな
り」等云云、止觀しかんに云く、「我れ三聖さんせいを遣つかわして彼の真丹しんたんを化くす」等云云、弘決くけつ
に云く、「清淨しょうじやう法行經しやうじやうに云く月光菩薩がっこうぼさつかしこ彼に顔回がんかいと稱しょうし光淨菩薩こうじやうぼさつかしこ彼に仲尼ちゆうにと
稱しょうし迦葉菩薩かしょうぼさつかしこ彼に老子らうしと稱しょうす天竺てんじくより此の震旦しんたんを指しして彼と為なす」等云云。
二には月氏がしの外道げどう・三目八譬はつびの摩醯首羅天まけいしゆら・毘紐天びぢゆう・此の二天にってんをば一切いっさい
衆生しゆじやうの尊父しゆふ・悲母ひも・又天尊しゆん・主君しゆくんと号なづす、迦毘羅かびら・樓僧ろうそうぎや・勒姿婆ろくしやば・此の
三人さんをば三仙さんせんとなづく、此等これらは仏前ぶつぜん八百年はつせん・已前いぜん已後いごの仙人せんじんなり、此の三仙さんせん
の所説しよせつを四韋陀しさいだと号なづす六万蔵むせんざうあり、乃至ないし・仏ぶつ・出世しゆつせに當あたつて六師外道ろくしげどう・此の
外經しやうてんを習伝しゆでんして五天竺てんじくの王わうの師しとなる支流しゆりう・九十五六等くじゅうごりくにもなれり、一一に

流流多くして我慢の瞳高きこと非想天にもすぎ執心の心の堅きこと金石に
も超えたり、其の見るの深きこと巧なるさま儒家には・にるべくもなし、或は
過去・二生・三生・乃至七生・八万劫を照見し又兼て未来・八万劫をしる、
其の所説の法門の極理・或は因中有果・或は因中無果・或は因中亦有
果・亦無果等云云、此れ外道の極理なり所謂善き外道は五戒・十善戒等を持
つて有漏の禅定を修し上・色・無色をきわめ上界を涅槃と立て屈歩虫のご
とく・せめのぼれども非想天より返つて三惡道に墮つ一人として天に留るも
のなし而れども天を極むる者は永くかへらずと・をもえり、各各・自師の義
をうけて堅く執するゆへに・或は冬寒に一日に三度・恒河に浴し・或は髪を
ぬき・或は巖に身をなげ・或は身を火にあぶり・或は五処をやく・或は
裸形・或は馬を多く殺せば福をう・或は草木をやき・或は一切の木を礼す、
此等の邪義其の数をしらず師を恭敬する事・諸天の帝釈をうやまい諸臣の

皇帝こうていを拝するがごとし、しかれども外道げどうの法・九十五種きゅうじゅうごしゆ・善惡ぜんあくにつけて一人も生死しょうじをはなれず善師ぜんしにつかへては二生・三生等に惡道あくどうに墮おち惡師あくしにつかへては順次生じゆんじしょうに惡道あくどうに墮おつ、外道げどうの所詮しよせんは内道ないどうに入る即最要そくなり・或外道あるげどう云く「千年已後いご・仏出世しゆつせす」等云云、或外道あるげどう云く「百年已後いご・仏出世しゆつせす」等云云、大涅槃經だいねはんきやうに云く「一切世間の外道の經書は皆是れ仏説にして外道の説に非ず」等云云、法華經ほけきやうに云く「衆に三毒有りと示し又邪見じやけんの相を現げんず我が弟子でしかく是くの如く方便ごうはんして衆生しゆじやうを度す」等云云。

三には大覺世尊だいかくせそんは、此一切衆生いっさいしゆじやうの大導師どうし・大眼目がんもく・大橋梁おほはしりやう・大船師せんなんく・大福田ふくでん等なり、外典げてん・外道の四聖ししやう・三仙さんせん其の名は聖なりといえども實には三惑さんかく未断みだんの凡夫ぼんぷ・其の名は賢かしこなりといえども實に因果いんがを弁わきまえざる事嬰兒えいじのごとし、彼を船として生死しょうじの大海たいかいをわたるべしや。彼を橋として六道ろくどうの巷ちまたこえがたし。我が大師だいしは變易へんにやく・猶なほを・わたり給たまへり。況や分段いわんやの生死しょうじをや元品がんほんの無明むみやう

こんほん
の根本猶をかたづけ給へり。況や見思枝葉の麁惑をや、此の仏陀は三十成道

より八十御入滅にいたるまで五十年が間・一代の聖教を説き給へり、一字

・一句・皆真言なり一文一偈・妄語にあらず外典・外道の中の聖賢の言すら

いうこと、あやまりなし事と心と相符へり況や仏陀は無量曠劫よりの不妄語

の人・されば一代・五十余年の説教は外典外道に対すれば大乘なり大人の

実語なるべし、初成道の始より泥の夕にいたるまで説くところの所説・皆

眞実なり。

但し仏教に入て五十余年の経経・八万法蔵を勘えたるに小乗あり

大乘あり権経あり実経あり顕教・密教・語・麁語・実語・妄語・正見

・邪見等の種種の差別あり、但し法華経計り教主釈尊の正言なり三世・

十方の諸仏の真言なり、大覺世尊は四十余年の年限を指して其の内の恒河の

諸経を未顕眞実・八年の法華は要当説眞実と定め給しかば多宝仏大地より

しゅつげん 出現して皆是眞実と証明す、分身の諸仏・来集して長舌を梵天に付く此
かくかく 赫赫たり明明たり。晴天の日よりも・あきらかに夜中の満月のごとし仰い
おも で信ぜよ伏して懷つべし。

ただ 但し此の經に二箇の大事あり俱舍宗・成実宗・律宗・法相宗・三論宗
けごんしゅう しんごんしゅう 等は名をもしらず華嚴宗と真言宗との二宗は偷に盗んで自宗の骨目とせり、
いちなんさんぜん 一念三千の法門は但法華經の本門・寿量品の文の底にしづめたり、竜樹・
てんじん 天親・知つてしかも・いまだ・ひろいいださず但我が天台智者のみこれを
いだけり。

いちねんさんぜん 一念三千は十界互具よりことはじまれり、法相と三論とは八界を立てて
じゅつかい 十界をしらず況や互具をしるべしや、俱舍・成実・禅宗等は阿含經によれ
ろっかい 六界を明らかに四界をしらず、「十方唯一仏」と云つて一方有仏だにも
あかさず、一切有情・悉有仏性とこそ・とかざらめ。一人の仏性猶ゆるさ

ず、而るを律宗・成実宗等の十方有仏・有仏性なんと申すは仏滅後の人師
等の大乘の義を自宗に盗み入れたるなるべし、例せば外典・外道等は仏前の
外道は執見あさし仏後の外道は仏教をききみて自宗の非をしり巧の心・
出現して仏教を盗み取り自宗に入れて邪見もつとも・ふかし、附仏教・
学仏法成等これなり、外典も又かくのごとし漢土に仏法いまだ・わたらざ
りし時の儒家・道家はいううとして嬰兒のごとく・はかなかりしが後漢・
已後に釈教わたりて対論の後・釈教やうやく流布する程に釈教の僧侶
・破戒のゆへに・或は還俗して家にかへり・或は俗に心をあはせ儒道の内に
釈教を盗み入れたり。止観の第五に云く「今世多く悪魔の比丘有つて、戒
を退き家に還り駈策を懼畏して更に道士に越濟す、復た名利を邀めて莊老を
誇談し、仏法の義を以て偷んで邪典に安き、高を押して下きに就け、尊を推い
て卑しきに入れ概して平等ならしむし」云云。弘に云く「比丘の身と作つて

ぶつぼう 仏法を破滅す。若しは戒を退き家に還るは、衛の元嵩等が如し、即ち在家の身^もを以て仏法を破壊す、此の人正教を偷^{ちゆうせつ}・して邪典に助添す、高きを押して等とは道士の心を以て二教の概と為し邪正をして等しからしむ。義是の理無し、曾^かつて仏法に入つて正を偷^{ぬすん}んで邪を助け八万・十二の高きを押して五千二篇の下きに就け用^もつて彼の典の邪鄙の教を釈するを推尊入卑と名く」等云云、此の釈を見るべし次上の心なり。

ぶつきよう

仏教又かくのごとし、後漢の永平に漢土に仏法わたりて、邪典やぶれて内典

ないてん

なんざん

いしゆう

らんぎく

ちんずい

ちしやだいし

立つ。内典に南三・北七の異執をこりて蘭菊なりしかども、陳隋の智者大師

にうちやぶられて仏法二び群類をすくう。其の後・法相宗・真言宗・天台

けこんしゆう

しゆつたい

これら

ほうそつしゆう

いっこう

てんだいしゆう

よりわたり華嚴宗又出来せり、此等の宗宗の中に法相宗は一向・天台宗に

ほうもんすいか

げんじようさんぞう

じおんだいし

いさい

てんだい

敵を成す宗・法門水火なり、しかれども玄奘三蔵・慈恩大師・委細に天台の

じしゆう

じゃけん

じしゆう

御釈を見ける程に自宗の邪見ひるがへるかのゆへに自宗をば・すてねども

其の心天台てんだいに帰伏きふくすと見へたり、華嚴宗けこんしゅうと真言宗しんごんしゅうとは本は権經こんきょう・権宗こんしゅうなり
善無畏三藏ぜんむいさんそう・金剛智三藏こんごうちさんそう・天台てんだいの一念三千いちねんさんぜんの義を盗みとつて自宗じしゅうの肝心かんじんとし
其の上に印しんこんと真言しんごんとを加ちようかて超過ちようかの心をををこす、其の子細しさいをしらぬ学者等がくしゃは
天竺てんじくより大日經だいにちきように一念三千いちねんさんぜんの法門ほうもんありけりと・うちをもつ、華嚴宗けこんしゅうは澄觀ちようかん
が時・華嚴經けこんきようの心如工画師しんによく えしの文に天台てんだいの一念三千いちねんさんぜんの法門ほうもんを偷ぬすみ入れたり、人
これをしらず。

日本にほん・我朝けごんには華嚴等ろくしゅうの六宗てんだい・天台しんごん・真言いぜん已前にわたりけり、華嚴けごん・三論さんろん
・法相ほっそう・諍論じようろん水火すいなりけり、伝教大師でんぎようだいし・此の国にいでて六宗ろくしゅうの邪見じゃけんをやぶ
るのみならず真言宗しんごんしゅうが天台てんだいの法華經ほけきようの理を盗み取じしゅうて自宗じしゅうの極とする事あらは
れ・をはんぬ、伝教大師でんぎようだいし・宗宗にんしの人師いしゅうの異執もつぱをすて専ら經文きようもんを前として
責めさせ給しかば六宗ろくしゅうの高徳こうとく・八人にんし・十二人いしゅう・十四人きふく・三百余人なんとうじ・並に弘法こうぼう
大師等だいしせめをとされて日本国にほんこく・一人もなく天台宗てんだいしゅうに帰伏きふくし南都なんとう・東寺とうじ・日本にほん

一州の山寺・皆叡山の末寺となりぬ、又漢土の諸宗の元祖の天台に帰伏して
謗法の失を・まぬかれたる事もあらはれぬ、又其の

後やうやく世をとろへ人の智あさく・なるほどに天台の深義は習うしないぬ、
他宗の執心は強盛になるほどにやうやく六宗・七宗に天台宗をとされて

・よわりゆくかの・ゆへに結句は六宗・七宗等にもをよばず、いうにかいな
き禅宗・浄土宗にをとされて始めは檀那やうやくかの邪宗にうつる、結句

は天台宗の碩徳と仰がる人人みな・をちゆきて彼の邪宗をたすく、さるほ
どに六宗・八宗の田畠・所領みなたをされ正法失せはてぬ天照太神・

正八幡・山王等・諸の守護の諸大善神も法味を・なめざるか国中を去り給う
かの故に悪鬼・使を得て国すでに破れなんとす。

此に予愚見をもつて前四十余年と後八年との相違をかんがへみるに、其の
相違多しといえども先ず世間の学者もゆるし、我が身にも・さもやとうちを

ばうる事は二乗作仏・久遠実成なるべし。法華經の現文を拝見するに、舍利弗
は華光如来・迦葉は光明如来・須菩提は名相如来・迦施延は閻浮那提金光
如来・目連は多摩羅跋耆檀香仏・富楼那は法明如来・阿難は
山海慧自在通王仏・羅喉羅は蹈七宝華如来・五百・七百は普明如来、学・無
学二千人は宝相如来・摩訶波闍波提比丘尼・耶輸多羅比丘尼等は、一切衆生
喜見如来・具足千万光相如来等なり、此等の人人は法華經を拝見したてまつ
るには尊きやうなれども、爾前の經經を披見の時^興はけをさむる事どもをほ
し。其の故は仏・世尊は実語の人なり故に聖人・大人と号す。外典・外道の
中の賢人・聖人・天仙など申すは実語につけたる名なるべし此等の人人に
勝れて第一なる故に世尊をば大人とは・申すぞかし、此の大人「唯一大事因縁
故・出現於世」となのらせ給いて「未だ真実を顕さず・世尊は法久しうして
後・要ず当に真実を説くべし・正直に方便を捨て」等云云、多宝仏・証明

を加え分身・舌を出す等は舍利弗が未来の華光如来・迦葉が光明如来等の説をば誰の人が疑網をなすべき。

而れども爾前の諸経も又仏陀の実語なり・大方広仏華嚴經に云く「如来の

知慧・大薬王樹は、唯二処に於て生長して利益を為作すこと能わず、所謂二乘

の無為広大の深坑に墮つると、及び善根を壊る非器の衆生は大邪見・貧愛の

水に溺るるとなり」等云云、此の經文の心は雪山に大樹あり無尽根となづく。

此を大薬王樹と号す、閻浮提の諸木の中の大王なり此の木の高さは十六万八

千由旬なり、一閻浮提の一切の草木は此の木の根ざし枝葉・華菓の次第に随つ

て華菓なるなるべし、此の木をば仏の仏性に譬へたり一切衆生をば一切の

草木にたとへ、但し此の大樹は火坑と水輪の中に生長せず、二乗の心中をば

火坑にたとへ一闍提人の心中をば水輪にたとえたり、此の二類は永く仏にな

るべからずと申す經文なり、大集經に云く「二種の人有り、必ず死して活

きず、畢竟ひつきやうして恩を知り恩を報ずること能あたわず。一には声聞しょうもん、二には縁覺えんかくなり、譬たとえば人有りて深坑じんこうに墜墮だつゐし、是この人自ら利し他を利すること能あたわざるが如ごとく、声聞しょうもん・縁覺えんかくも亦復またまた是この如ごとく、解脱げだつの坑に墜だして自ら利し及および他を利すること能あたわずし等云云、外典げてん三千余卷さんぜんの所詮しよせんに二つあり所謂いわゆる孝と忠となり忠も又孝の家よりいでたり、孝と申もうすは高なり天高けれども孝よりも高からず又孝とは厚なり地あつけれども孝よりは厚からず、聖賢せいけんの二類にるゐは孝の家よりいでたり何いかに況いや仏法いを学まなせん人・知恩報恩ちおんほうおんなかるべしや、仏弟子ぶつでしは必ず四恩しおんをしつて知恩報恩ちおんほうおんをいたすべし、其その上舎利弗しゃりほつ・迦葉等かしょうの二乗にじやうは二百五十戒さんぜん三千の威儀いぎ・持整じせいして味・淨・無漏むろの三静慮さんじやうりよ・阿含經あこんきやうをきわめ三界さんがいの見思けんじを尽つくせり。知恩報恩ちおんほうおんの人の手本てほんなるべし、然しかるを不知恩ふちおんの人なりと世尊せそん定め給たまふ、其そのの故ゆゑは父母ふぼの家を出いでて出家しゅっけの身となるは必ず父母ふぼを・すくはんがためなり、二乗にじやうは自身じしんは解脱げだつと・をもえども利他りたの行たかけぬ。設たといい

分分の利他ありといえども父母等を永不成仏の道に入るれば・かへりて
ふちおん
不知恩の者となる。

維摩經に云く「維摩詰、又文殊師利に問う、何等をか如來の種と為す、答

えて曰く一切塵勞の疇は如來の種と為る、五無間を以て具すと雖も、猶能く

此の大道意を發すと等云云・又云く「譬えば族姓の子・高原陸土には青蓮芙蓉

の衡華を生ぜず卑湿汚田に乃ち此の華を生ずるが如し」等云云、又云く「已

に阿羅漢を得て応真と為る者は終に復道意を起して仏法を具すること能わざ

るなり、根敗の土・其の五樂に於て複利すること能わざるが如し」等云云、

文の心は貪・瞋・癡等の三毒は仏の種となるべし殺父等の五逆罪は仏種とな

るべし高原の陸土には青蓮華生ずべし、二乗は仏になるべからず、いう心は

二乗の諸善と凡夫の惡と相對するに凡夫の惡は仏になるとも、二乗の善は仏

にならじとなり、諸の小乗經には惡をいましめ善をほむ、此の經には二乗

の善をそしり凡夫の悪をほめたり、かへつて仏經とも・をばへず外道の法門のやうなれども詮するところは二乗の永不成仏をつよく定めさせ給うにや、ほうとうだらにいわもんじゅしやりほつかたなおこじゅごと方等陀羅尼經に云く「文殊・舍利弗に語らく猶枯樹の如く更に華を生ずるやいなまたごとかえいなしゃくせきかえ折不還つて合つや不や。焦種芽を生ずるや不や。舍利弗の言く不なり、文殊の言く若し得べからずんば云何ぞにばだいき我に菩提の記を得るを問うて、心に歡喜を生ずるや」等云云、文の心は枯れたる木・華さかず山水・山にかへらず破れたる石あはず・いれる種をいず、にじょう二乗また・かくのごとし仏種をいれり等となん。

だいぼんはんにはきようだいぼんはんにはきよう諸の天子今未だ三菩提心を發さずんば心に發すべし、もししょうもん若し聲聞の正位に入れば是の人能く三菩提心を發さざるなり、何を以てのゆえしょうじためしょうきやくな故に生死の為に障隔を作す故」等云云、文の心は二乗は菩提心を・をこさざれば我隨喜せし諸天は菩提心を・をこせば我隨喜せん。しゅりようこんきよう首楞嚴經に云く

「五逆罪の人・是の首楞嚴三昧を聞いて阿耨菩提心を発せば、還つて仏と作るを得。世尊・漏尽の阿羅漢は猶破器の如く、永く是の三昧を受くるに堪忍せず」等云云。淨名經に云く「其れ汝に施す者は福田と名けず。汝を供養する者は三悪道に墮す」等云云。文の心は迦葉・舍利弗等の聖僧を供養せん人天等は必ず三悪道に墮つべしとなり、此等の聖僧は仏陀を除きたてまつりては人天の眼目・一切衆生の導師とこそ・をもひしに幾許の人天・大会の中にして・かう度度・仰せられしは本意なかりし事なり只詮するところは我が御弟子を安めころさんとや、此の外牛驢の二乳・瓦器・金器・螢火・日光等の無量の譬をとつて二乗を呵嘖せさせ給き、一言二言ならず一日・二日ならず一月・二月ならず一年・二年ならず一經二經ならず、四十余年が間・無量・無辺の經經に無量の大会の諸人に対して一言もゆるし給う事もなく・そしり給ひしかば世尊の不妄語なりと我もしる人もしる天もしる地もしる、一

人・二人ならず百千万人・三界の諸天・竜神・阿修羅・五天・四洲・六欲・色・無色・十方世界より雲集せる人天・二乗・大菩薩等皆これをしる又皆これをきく、各各・国国へ還りて娑婆世界の釈尊の説法を彼れ彼れの国国にして一にかたるに十方無辺の世界の一切衆生・一人もなく迦葉・舍利弗等は永不成仏の者・供養しては・あしかりぬべしと・しりぬ。

而るを後八年の法華經に忽ちに悔還して、二乗作仏すべしと仏陀とかせ給はんに、人天大会・信仰をなすべしや、用ゆべからざる上・先後の經經に疑綱をなし、五十余年の説教・皆虚妄の説となりなん、されば四十余年・未顕真実等の經文はあらませしか天変の仏陀と現じて後八年の經をばとかせ給うかと疑綱するところに・げにげに・しげに劫国・名号と申して二乗成仏の国をさだめ、劫をしるし、所化の弟子などを定めさせ給へば、教主釈尊の御語すでに一言になりぬ。自語相違と申すはこれなり。外道が仏陀を大妄語の者

と咲いしこと・これなり。人天大会にんてんたいえをさめて・ありし程に、爾その時に東方とうほう

・宝浄世界の多宝如来・高さ五百由旬・広さ二百五十由旬の大七宝塔ほうとうに乘じ

て教主 釈尊きようしゆしやくそんの人天にんてん・大会たいえに自語相違じごそういをせめられて・とのべ・かうのべ、さ

まざまに宣のべべさせ給たまいしかども、不審猶ふしんなおをはるべしとも・みへず・もてあつ

かいて・をはせし時・仏前ぶつぜんに大地より涌現ゆげんして虚空こくうにのぼり給たまつ、例せば暗夜

に満月まんげつの東山より出づるがごとし七宝しつぽうの塔・大虚おおぞらにかからせ給たまいて大地にも

・つかず大虚おおぞらにも付かせ給たまはず・天中てんちゆうに懸かりて宝塔ほうとうの中より梵音ぼんおんを出して

証しょう明みょうして云いく「爾その時に宝塔ほうとうの中より大音声おんじゆうを出して歎ほめて云いく、善よき哉

善よき哉かな・釈迦牟尼世尊しやくかむにせそん・能よく平等大慧びやうどうだいえ・教菩薩法きやうぼさつぽう・仏所護念ぶつしよごねんの妙法華經みやうほけきやうを

もつたいしもつゆたい・ためと・是かくの如ごとし是かくの如ごとし、釈迦牟尼世尊しやくかむにせそんの所説しよせつの

如ごときは皆みな是しんじつれ眞実しんじつなり」等云云、又云く「爾その時に世尊せそん・文殊師利等の無量むりやう

百千万億・旧住袈婆世界の菩薩・乃至人非人等・一切の衆の前に於て大神力

を現げんじたもう、こつちようぜつ 広長舌を出して上いたみ梵世に至らしめ一切いっさいの毛孔より乃至ないし

十方世界・衆の宝樹の下ししの師子の座の上かみの諸しよ仏も亦復またまたかく是ごとくの如く、こつちようぜつ 広長舌

を出し無量の光を放ちたもう、等云云、又云く、十方より来りたまえる諸もろもろの

分身の仏をして各本土ほんどに還かえらしめ、乃至多宝仏の塔も、還かえつて故もとの如ごとくし給たまう

べし、等云云、大覺世尊・初成道の時・諸しよ仏・十方に現げんじて釈尊しやくそんを慰諭いゆし

給たまう上・諸の大菩薩を遣つかわしき、般若經の御時は釈尊しやくそん・長舌を三千にをほひ

千仏・十方に現げんじ給たまい、金光明經には四方しほうの四仏現げんせり、阿弥陀經には六

方の諸しよ仏・舌を三千にをう、大集經には十方じゆつぽうの諸しよ仏・菩薩・大宝坊にあ

つまれり、此等これらを法華經に引合せて、かんがうるに黄石おうしやくと黄金と白雲と白山

と白冰はくひようと銀鏡と黒色と青色とをば翳眼えいがんの者・眇目みようもくの者・一眼の者・邪眼じゃがんの

者は・みたがへつべし、華嚴經には先後せんごの經なければ仏語相違ふつごそういなしなに・

つけてか大疑だいぎいで来べき、大集經・大品經・金光明經・阿弥陀經は諸しよ

小乗經の二乗を彈呵せんがために十方に淨土をとき凡夫・菩薩を欣慕せしめ二乗を、わずらはす、小乗經と諸大乘經と一分の相違あるゆえに、
・或いは・或は十方に仏現じ給ひ、・或は十方より大菩薩をつかはし・或はじゅつぽうせかい
十方世界にも此の經をとくよしをしめし、・或は十方より諸仏あつまり給う
・或は釈尊、舌を三千に・をほひ・或は諸仏の舌をいだす・よしをとかせ給う、此ひとえに諸小乗經の十方世界・唯一仏と・とかせ給ひしをも
ひを・やぶるなるべし、法華經のごとくに先後の諸大乘經と相違・出来し
て舍利弗等の諸の聲聞・大菩薩・人天等に將非魔作仏と・をものはれさせ給う
大事にはあらず、而るを華嚴・法相・三論・真言・念仏等の翳眼の輩・彼彼の經經と法華經とは同じと・うちをもへるは・つたなき眼なるべし。
但在世は四十余年をすて法華經につき候ものもや・ありけん、仏滅後に
此の經文を開見して信受せんこと・かたかるべし、先ず一つには爾前の

きようぎよう

経経は多言なり法華経は一言なり爾前の経経は多経なり此の経は一経な

かれがれ

きようぎよう

り彼のの経経は多年なり此の経は八年なり、仏は大妄語の人・永く信ずべ

ふしん

きようぎよう

からず不信の上に信を立てば爾前の経経は信ずる事もありなん法華経は永

にぜん

きようぎよう

く信ずべからず、当世も法華経をば皆信じたるやうなれども法華経にては・

とうせ

ほけきよう

なきなり、其の故は法華経と大日経と法華経と華嚴経と法華経と阿弥陀経と

そのゆえ

ほけきよう

だいにちきよう

ほけきよう

けこんきよう

ほけきよう

あみだ

一なるやうを・とく人をば悦んで帰依し別別なるなんと申す人をば用いずた

よろこ

きえ

もち

もち

もち

もち

もち

もち

もち

とい用ゆれども本意なき事と・をもへり。

もち

ほんい

もち

もち

もち

もち

もち

もち

もち

もち

もち

もち

もち

もち

にちれんいわ

にほん

ぶつぽう

ぶつぽう

ぶつぽう

ぶつぽう

ぶつぽう

ぶつぽう

ぶつぽう

ぶつぽう

ぶつぽう

ぶつぽう

ぶつぽう

ぶつぽう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

法華経をよめりと申すをば諸人これを用いず、但し法華経に云く「若し須弥

しよにん

もち

もち

もち

もち

もち

もち

もち

もち

もち

もち

と

たほう

たほう

たほう

たほう

たほう

たほう

たほう

たほう

たほう

たほう

たほう

たほう

たほう

たほう

を接つて他方の無数の仏土に擲置かんも亦未だ為難しとせず、乃至若し仏滅

なげお

またいま

またいま

またいま

またいま

またいま

またいま

またいま

またいま

またいま

またいま

あくせ

おい

おい

おい

おい

おい

おい

おい

おい

おい

おい

おい

おい

おい

おい

後に悪世中に於て能く此の経を説かん是れ則ち為難しし等云云、日蓮が強義

こ

すなわ

すなわ

すなわ

すなわ

すなわ

すなわ

すなわ

すなわ

すなわ

すなわ

きようもん

ふしん

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

・経文に普合せり法華経の流通たる涅槃経に末代濁世に謗法の者は十方の

ふしん

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

地のごとし正法の者は爪上の土のごとしと・とかれて侯は・いかんがし侯
べき、日本の諸人は爪上の土か日蓮は十方の土かよくよく思惟あるべし、
賢王の世には道理かつべしの世に非道・先をすべし、聖人の世に法華經の
実義顯るべし等と心うべし、此の法門は迹門と爾前と相對して爾前の強きや
うに・をばゆもし爾前つよるならば舍利弗等の諸の二乗は永不成仏の者なる
べし・いかんが・なげかせ給うらん。

二には教主釈尊は住劫・第九の減・人寿百歳の時・師子頰王には孫・
淨飯王には嫡子・童子悉達太子・一切義成就菩薩これなり、御年十九の御
出家・三十成道の世尊・始め寂滅道場にして実報華王の儀式を示現して十
玄・六相・法界・円融・頓極微妙の大法を説き給ひ十方の諸仏も顯現し一切
の菩薩も雲集せり、土といひ機といひ諸仏といひ始めといひ何事につけてか
大法を秘し給うべき、されば經文には顯現自在力・演說円満經等云云、一部

六十卷は一字一点もなく円満經なり、譬へば如意宝珠は一株も無量珠も共に

同じ。一株も万宝を尽して雨し万珠も万宝を尽すがごとし、華嚴經は一字も

万事も但同事なるべし、心仏及衆生の文は華嚴宗の肝心なるのみならず法相

・三論・真言・天台の肝要とこそ申し候へ、此等程いみじき御經に何事をか

隠すべき、なれども二乘闡提・不成仏と・とかれしは珠のきずと・みゆる上

三処まで始成正覺と・なのらせ給いて久遠実成の寿量品を説きかくさせ

給いき、珠の破れたると月に雲のかかれると日の蝕したるがごとし不思議な

りしことなり、阿含・方等・般若・大日經等は仏説なれば・いみじき事なれ

ども華嚴經にたいすれば・いうにかいなし、彼の經に秘せんこと此等の經經

にとかるべからず、されば雜阿含經に云く「初め成道」等云云、大集經に云く

「如来成道始め十六年」等云云、淨名經に云く「始め仏樹に坐して力め

て魔を降す」等云云、大日經に云く「我昔道湯に坐して」等云云、仁王般若經

に云く「二十九年」等云云。

此等は言うにたらず只耳目を・をどろかす事は無量義經・華嚴經の唯心

法界・方等・般若經の海印三昧・混同無二等の大法をかきあげて・或は未顕

眞実・或は歴劫修行等・下す程の御經に我先きに道場菩提樹の下に端坐

すること六年、阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たり」と初成道の華嚴經

の始成の文に同せられし不思議と打ち思うところ此は法華經の序分なれば

正宗の事をいはずも・あるべし、法華經の正宗・略開三・広開三の御時

・唯仏与仏・乃能究尽諸法実相等・世尊法久後等・正直捨方便・多宝仏・

迹門八品を指して皆是其实と証明せられしに何事をか隠すべきなれども

久遠寿量をば秘せさせ給いて我始め道場に坐し樹を觀じて亦經行す等云云、

最第一の大不思議なり、されば弥勒菩薩・涌出品に四十余年の未見今見の大

菩薩を仏・爾して乃ち之を教化して初めて道心を発さしむ等と・とかせ給い

しを疑^{うたがい}つて云^{いわ}く「如来太子^{にやらいたいしな}為^なりし時^{とき}・釈^{しゃく}の宮^{みや}を出^いでて伽耶城^{がや}を去^{はな}ること遠^{とほ}

からず道場^{どうじょう}に坐^まして阿耨多羅三藐三菩提^{あのかたらさんみやくさんぼだい}を成^{じやう}ずることを得^えたまえり、是^こより

已^{この}来^{かた}始^はめて四十余年^{よんじゅうよねん}を過^すぎたり世尊^{せそん}・云何^{なん}ぞ此^この少時^{しやうとき}に於^{おい}て大^{おほ}いに仏事^{ぶつじ}を

作^なしたまえる」等云云、教主^{きやうしゆしやくそん}釈尊^{しやくそん}此等^この疑^{うたがい}を晴^{はら}さんがために寿量品^{じゆりやうぼん}を・

と^なかんとして爾前^{にぜん}・迹門^{しやくもん}のききを挙^あげて云^{いわ}く「一切世間^{いっさいせけん}の天人^{てんにん}及び阿修羅^{あしゆら}は

皆^{みな}今の釈迦牟尼^{しやくかむに}・釈^{しゃく}氏の宮^{みや}を出^いでて伽耶城^{がや}を去^{はな}ること遠^{とほ}からず道場^{どうじょう}に坐^まし

て阿耨多羅三藐三菩提^{あのかたらさんみやくさんぼだい}を得^えたまえりと謂^{おも}えり」等と云云、正^{ただ}しく此^この疑^{うたがい}を

答^{こた}えて云^{いわ}く「然^{しか}るに善男子^{ぜんなんし}・我^{われ}実^{じつ}に成^{じやう}仏^{ぶつ}してより已^{この}来^{かた}無量無辺^{むりやうむへん}・百千万億^{せんまん}・

那由他劫^{なゆた}なり」等云云。

華嚴^{けごん}・乃至^{ないしは}般若^{はん}・大日經^{だいにちきやう}等は二乗^{にじやう}作^さ仏^{ぶつ}を隠^{かく}すのみならず、久遠^{くおん}実成^{じつじやう}を説^とき

かくさせ給^{たま}へり、此等^この經經^{きやうきやう}に二^{ふた}つの失^{とが}あり、一^{ひと}には、行布^{ぎふ}を存^{ぞん}するが故^{ゆゑ}に、

仍^なお未^{いま}だ權^{けん}を開^{ひら}せずとて迹門^{しやくもん}の一^{いち}念^{ねん}三千^{さんぜん}をかくせり、二^{ふた}には始成^{しじやう}を言^いうが

ゆえ ないま 故に尚未だ迹を發せずとて本門の久遠をかくせり、此等の二つの大法は一代
の綱骨・一切經の心髓なり、迹門方便品は一念三千・二乗作仏を説いて爾前
二種の失・一つを脱れたり、しかりと・いえどもいまだ發迹顯本せざれば・
まことの一念三千もあらはれず二乗作仏も定まらず、水中の月を見るがごと
し・根なし草の波の上に浮べるににたり、本門にいたりて始成正覺をやぶれ
ば四教の果をやぶる、四教の果をやぶれば四教の因やぶれぬ、爾前・迹門の
十界の因果を打ちやぶつて、本門の十界の因果をとき顯す、此即ち
本因・本果の法門なり、九界も無始の仏界に具し仏界も無始の九界に備りて
・眞の十界互具・百界千如・一念三千なるべし、かうて・かへり・みれば
華嚴經の台上十方・阿含經の小釈迦・方等・般若の金光明經の阿弥陀經の
大日經等の權仏等は・此の壽量の仏の天月しばらく影を大小の器にして浮
べ給つを・諸宗の学者等・近くは自宗に迷い遠くは法華經の壽量品をしら

ず水中の月に実の月の想いをなし・或は入つて取らんと・をもひ・或は縄を
つけて・つなぎとどめんとす、天台云く「天月を識らず但池月を觀ず」等
云云。

日蓮案じて云く二乗作仏すら猶爾前づよにをぼゆ。久遠実成は又になるべく

も・なき爾前づりなり、其の故は爾前・法華相對するに猶爾前こわき上・爾前

のみならず迹門十四品も一向に爾前に同ず、本門十四品も涌出・寿量の二

品を除いては皆始成を存せり、雙林最後の大般涅槃經・四十卷・其の外の法華

前後の諸大經に一字・一句もなく法身の無始・無終はとけども応身・報身

の顯本はとかれず、いかんが広博の爾前・本・迹・涅槃等の諸大乘經をば

すてて但涌出・寿量の二品には付くべき。

されば法相宗と申す宗は、西天の仏滅後・九百年に無著菩薩と申す大論師

有しき、夜は都率の内院にのぼり、弥勒菩薩に對面して・一代聖教の不審

をひらき・昼は阿輸舎国にして法相の法門を弘め給う。彼の御弟子は世親・護法・難陀・戒賢等の大論師なり。戒日大王・頭をかたづけ五天幢を倒して此れに帰依す、尸那国の玄奘三蔵・月氏にいたりて十七年、印度百三十余の国国を見きて、諸宗をばふりすて、此の宗を漢土にわたして、太宗皇帝と申す賢王にさづけ給い、肪・尚・光・基を弟子として大慈恩寺並に三百六十余箇国に弘め給う。日本国には人王三十七代・孝德天皇の御宇に道慈・道昭等ならいわたして山階寺にあがめ給へり、三国第一の宗なるべし、此の宗の云く始め華嚴經より終り法華・涅槃經にいたるまで無性有情と決定性の二乗は永く仏になるべからず、仏語に二言なし一度・永不成仏と定め給いぬる上は日月は地に落ち給うとも、大地は反覆すとも、永く変改有るべからず。されば法華經・涅槃經の中にも爾前の經經に嫌いし無性有情・決定性を正しくついさして成仏すとは・とかれず。まづ眼を閉じて案ぜよ。

法華經・涅槃經に決定性・無性有情・正く仏になるならば無著・世親ほど
 の大論師・玄奘・慈恩ほどの三蔵・人師これをみざるべしや、此をのせざる
 べしや、これを信じて伝えざるべしや、弥勒菩薩に聞いてたてまつるべしや、
 汝は法華經の文に依るやうなれども、天台・妙楽・伝教の僻見を信受し
 て其の見をもつて經文をみるゆえに爾前に法華經は水火なりと見るなり。
 華嚴宗と真言宗は法相・三論にはなるべくもなき超過の宗なり、二乗作仏・
 久遠実成は法華經に限らず華嚴經・大日經に分明なり、華嚴宗の杜順・
 智儼・法蔵・澄観・真言宗の善無畏・金剛智・不空等は天台・伝教には・
 なるべくもなき高位の人なり、其の上善無畏等は日如来より系みだれざる
 相承あり、此等の権化のいかにあやまりあるべき、随つて華嚴經には
 「・或は釈迦・仏道を成じ已つて不可思議劫を経るを見る」等云云、大日經
 には「我れは一切の本初なり」等云云、何ぞ但久遠実成・寿量品に限らん、

たと せいてい かわず たいかい やまかつ
譬へば井底の蝦が大海を見ず山左が洛中を・しらざるがごとし、汝但寿量

の一品を見て華嚴・大日經等の諸經をしらざるか、其の上月氏・尸那・新羅

くだら いくこう にじょうさぶつ くおんじつじょう ほけきよう
・百済等にも一向に二乗作仏・久遠実成は法華經に限るといふか。

はちかねん よんじゅうよねん きようぎよう
されば八箇年の經は四十余年の經經には相違せりということとも先判・後判

の中には後判につくべしということとも、猶爾前づりにこそをばうれ。又、但

さいせばか めつじ ろんし にんし おおく にぜん
在世計りならば・さも・あるべきに滅後に居せる論師・人師・多は爾前づり

にこそ侯へ、かう法華經は信じがたき上、世もやうやく末になれば聖賢はや

うやく・かくれ迷者はやうやく多し。世間の浅き事すら猶あやまりやすし。

いか しゅつせ じんぼうあやまり とくし そうびん なお だいしゅうじよう
何に況や出世の深法・なかるべしや、犢子・方広が聡敏なりし猶を大小乗

經にあやまてり、無垢 が利根なりし、権実・二教を弁えず、正法一千年

の内、在世も近く月氏の内なりし・すでにかくのごとし、況や尸那・日本等

は国もへだて音もかはれり。人の根も鈍なり寿命も日あさし貪・瞋・癡も

ばいぞう

倍增せり、仏世を去つてとし久し、仏経みなあやまれり、誰の智解か直かる

ねはんぎよう

べき、仏涅槃經に記して云く「末法には正法の者は爪上の土・謗法の者は

じゅつぽう

十方の土」とみへぬ、法滅尽經に云く「謗法の者は恒河沙・正法の者は一

しる たま

二の小石」と記しをき給う、千年・五百年に一人なんども正法の者ありがた

せけん つみ よ

からん、世間の罪に依つて惡道に墮る者は爪上の土・佛法によつて惡道に

おち じゅつぽう

墮る者は十方の土・俗よりも僧・女より尼多く惡道に墮つべし。

ここ にちれん

此に日蓮案じて云く、世すでに末代に入つて二百余年・辺土に生をうけ、

そ げせん

其の上下賤・其の上貧道の身なり。輪廻六趣の間・人天の大王と生れて、万民

たいふう

をなびかす事・大風の小木の枝を吹くがごとくせし時も仏にならず、大小乗

ぼさつ

經の外凡・内凡の大菩薩と修しあがり一劫・二劫・無量劫を経て菩薩の行を

ふたい

立て、すでに不退に入りぬべかりし時も・強盛の惡縁におとされて仏にもな

だいつうけちえん

らず、しらず大通結縁の第三類の在世をもれたるか久遠五百の退轉して今に

さんるい さいせ

あくえん

くおん

たいてん

来れるか、法華經を行ぜし程に世間の惡縁・王難・外道の難・小乗經の難
なんどは忍びし程に權大乘・実大乘經を極めたるやうなる道・綽・善導・
ほうねん
法然等がごとくなる惡魔の身に入りたる者・法華經をつよくほめあげ、機を
あながちに下し、「理深解微」と立て、「未有一人得者」、「千中無一等」とす
かししものに、無量生が間・恒河沙の度すかされて權經に墮ちぬ權教より
しようじょうきよう
小乗經に墮ちぬ外道・外典に墮ちぬ結句は惡道に墮ちけりと深く此れをし
れり、日本国に此れをしれる者は但日蓮一人なり。

これを一言も申出すならば父母・兄弟・師匠に国主の王難必ず来るべし、
いはずば・慈悲なきに・にたりと思惟するに法華經・涅槃經等に此の二辺を
合せ見るに・いはずば今生は事なくとも後生は必ず無間地獄に墮べし、いう
ならば三障四魔必ず競い起るべしと・しりぬ、二辺の中には・いうべし、王難
しゅつたい
等・出来の時は退轉すべくは一度に思ひ止るべしと、且くやすらいし程に

ほうとうぼん
宝塔品の六難九易なんくこれなり、我等程われらの小力の者・須弥山しゅみせんはなぐとも、我等程われらの無通むつうの者・乾草けんそうを負うて劫火ごうかには・やけずとも我等程われらの無智むちの者・恒沙ごうしゃのきようぎよう経経きようぎようをば・よみをぼうとも、法華経ほけきようは一句いっく一偈いちげも末代まつだいに持ちがたしと・とかるるは・これなるべし、今度このたび強盛ごうじようの菩提心ぼだいしんを・をこして退転たいてんせじと願しぬ。
すでに
既に二十余年が間・此の法門ほうもんを申すに日日・月月・年年に難なんかさなる、少の難なんは・かずしらず大事だいじの難なん・四度しどなり二度は・しばらく・をく王難なんすでに二度にをよぶ、今度このたびは・すでに我が身命しんみょうに及ぶ其の上弟子そのでしといひ檀耶たんやといひ・わづかの聴聞ちようもんの俗人しよくじんなんと来きつて重科じゆうかに行いはる謀反ぼうはんなんどの者のことし。

ほけきよう
法華経ほけきようの第四だいよに云く「而も此経しきは如来にょらいの現在げんざいにすら猶な怨嫉おんしつ多し、況や滅度いわんめつどの後のちをや」等云云、第二だいじに云く「経きようを誦誦どくじゆし書持しよじすること有らん者を見てきようせんぞうしつ輕賤けいせん憎嫉そうしつして結恨けつこんを懷いだかん」等云云、第五だいごに云く「一切世間いっさいせけん、怨多あだおほくして信

じ難し^{がた}」等云云、又云く「諸の無智の人の惡口罵詈する有らん」等、又云く
國王・大臣・婆羅門・居士に向つて誹謗し我が惡を説いて、是れ邪見の人
なりと謂わんと、又云く「数数擯出見れん」等云云、又云く「杖木瓦石も
これ之を打擲せん」等云云、涅槃經に云く「爾の時に多く無量の外道有つて、
和合して共に摩訶陀の王・阿闍世の所に往き、今は唯一の大惡人有り瞿曇沙門
なり、一切世間の惡人利養の爲の故に其の所に往集して眷屬と爲つて、能く
善を修せず、呪術の力の故に迦葉及び舍利弗・目・連を調伏す」等云云、
天台云く「何に況や未來をや。理化し難きに在るなり」等云云、妙樂云く
「障り未だ除かざる者を怨と爲し、聞くことを喜ばざる者を嫉と名く」等云
云。南三・北七の十師・漢土無量の學者・天台を怨敵とす、得一云く「咄い
かな智公・汝は是れ誰が弟子ぞ。三寸に足らざる舌根を以て、覆面舌の所説
を謗する」等云云、東春に云く「問う在世の時許多の怨嫉あり仏滅度の後此

經を説く時・何が故ぞ亦留難多きや、答えて云く俗に良薬口に苦しと云うが
如く、此經は五乗の異執を廢して一極の

玄宗を立つ、故に凡を斥け聖を呵し、大を排い小を破り天魔を銘づけて毒虫
と爲し、外道を説いて惡鬼と爲し、執小を貶して貧賤と爲し、菩薩を挫きて
新學と爲す、故に天魔は聞くを惡み、外道は耳に逆い二乗は驚怪し、菩薩は怯行
す、此くの如きの徒、悉く留雖を爲す多怨嫉の言、豈唐しからんや」等云云、
顯・或論に云く「僧統奏して曰く、西夏に鬼弁婆羅門有り。東土に巧言を吐
く禿頭沙門あり、此れ乃ち物類冥召して世間を誑惑す」等云云、論じて曰く
「昔齊朝の光統に聞き今は本朝の六統に見る、実なるかな法華に何況すつ
をや」等云云、秀句に云く「代を語れば則ち像の終り未の始め、地を尋ぬれ
ば則ち唐の東、羯の西・人を原ぬれば則ち五濁の生・鬭諍の時なり、經に
云く猶多怨嫉・況滅度後と。此の言、良に以有るなり」等云云。夫れ小兒に灸治

を加れば必ず母をあだむ。重病じゅうびょうの者に良薬りょうやくをあたうれば定んで口に苦しと

うれう、在世ざいせ猶なほをしかり、乃至ないし像末辺土をや、山に山をかさね波に波をたた

み難なんに難なんを加へ非に非をますべし、像法ぞうほうの中には天台一人・法華經てんだい・一切經ほけきょう

をよめり。南北これをあだみしかども、陳隋ちんずい・二代の聖主せいしゅ・眼前がんぜんに是非ぜひを明

めしかば敵てつついに尽きぬ、像の末に伝教一人・法華經でんぎょう・一切經ほけきょうを仏説ぶつせつのご

とく読み給たまへり、南都なんと・七大寺蜂起ななだいじほうきせしかども桓武かんむ・乃至ないし嵯峨等がの賢主けんしゅ・我

と明あきらめ給たまいしかば又事なし、今末法まっぽうの始め二百余年なり況滅度後きやうめつどごのしるし兆

に鬪争とうじょうの序ついでとなるべきゆへに非理ふぎを前として濁世じよくせのしるしに召合せられず

して流罪るざい乃至ないし寿にも・をよばんと・するなり、されば日蓮にちれんが法華經ほけきょうの智解

は天台てんだい・伝教でんぎょうには千万せんまんが一分も及ぶ事なけれども難なんを忍しのび慈悲じひのすぐれたる

事は・をそれをも・いだきぬべし、定んで天おんの御計いはいにもあづかるべしと存

ずれども、一分いちぶんのしるしもなし。いよいよ重科じゅうかに沈しずむ、還かえつて此の事を計り

みれば我が身の法華經の行者にあらざるか、又諸天・善神等の此の国をすて
て去り給えるか・かたがた疑はし、而るに法華經の第五の巻・勸持品の二十
行の偈は日蓮だにも此の国に生れずば・ほとをど世尊は大妄語の人・八十万
億那由佗の菩薩は提婆が虚誑罪にも堕ちぬべし、經に云く「諸の無智の人あ
つて・惡口罵詈し・刀杖瓦石を加う」等云云、今の世を見るに日蓮より外の
諸僧たれの人か法華經につけて諸人に惡口罵詈られ刀杖等を加えらるる者あ
る、日蓮なくば此の一偈の未來記は妄語となりぬ、「惡世の中の比丘は・邪智
にして心諂曲」又云く「白衣の与に法を説いて世に恭敬せらるること、六通
の羅漢の如し」此等の經文は今の世の念佛者・禅宗・律宗等の法師なくば
世尊は大妄語の人、常在大衆中・乃至向国王・大臣・婆羅門・居士等、
今の世の僧等・日蓮を譏奏して流罪せずば此の經文むなし、又云く
「数数見擯出」等云云、日蓮・法華經のゆへに度度ながされずば数数の二字

いかんがせん、此の二字は天台・伝教もいまだ・よみ給はず況や余人をや、
まっぽう
末法の始のしるし恐怖悪世中の金言の・あふゆへに但日蓮一人これをよめり、
せそん
例せば世尊が付法蔵經に記して云く「我が滅後・一百年に阿育大王という王
あるべし」摩耶經に云く「我が滅後・六百年に竜樹菩薩という人・南天竺に
出ずべし」大悲經に云く「我が滅後・六十年に末田地という者・地を竜宮に
つくべし」此れ等皆仏記のごとくなりき、しからずば誰か仏教を信受すべき、
しか
而るに仏・恐怖悪世・然後末世・末法滅時・後・五百歳なんと正妙の二本に
まさ
正しく時を定め給う、当世・法華の三類の強敵なくば誰か仏説を信受せん日蓮
なくば誰をか法華經の行者として仏語をたすけん、南三・北七・七大寺等・
なおようほう
猶像法の法華經の敵の内・何に況や当世の禅・律・念佛者等は脱るべしや、
きようもん
經文に我が身・普合せり御勘氣をかほれば・いよいよ悦びをますべし、例せ
しょうじよう
ば小乗の菩薩の末断惑なるが「願兼於業」と申して・つくりたくなき罪な

れども父母等の地獄に堕ちて大苦を・うつくるを見てかたのごとく其の業を造つて願つて地獄に堕ちて苦が同じ苦に代れるを悦びとするがごとし、此れも又かくのごとし当時の責はたうべくも・なけれども未来の悪道を脱すらんと・をもえば悦びなり。

但し世間の疑といふ、自心の疑と申し、いかでか天扶け給わざるらん、諸天等の守護神は仏前の御誓言あり法華經の行者には・さるになりともほけきよう法華經の行者とがうして早急に仏前の御誓言を・とげんとこそをばすべきに其の義なきは我が身・法華經の行者にあらざるか、此の疑は此の書の肝心・一期の大事なれば処処に・これをかく上疑を強くして答をかまつべし。

季札といひし者は心のやくそくを・たがへじと、王の重宝たる剣を徐君が塚にかく・王尹と云いし人は河の水を飲んで金の鷺目を水に入れ・公胤といひし人は腹をさいて主君の肝を入れる・此等は賢人なり恩をほうずるなるべし、

いわんやしゃりほつかしょう
況や舍利弗迦葉等の大聖は・二百五十戒三千の威儀・一もかけず見思を断じ
さんがい
三界を離れたる聖人なり、
よんじゅうよねん
梵帝・諸天の導師・一切衆生の眼目なり、
りょうやく
に四十余年が間・永不成仏と嫌いすてはてられて・ありしが法華經の不死の
良薬をなめて・種の生い、
いれるたね
破石の合い・枯木の華菓なんとならんとせるが
ごとく仏になるべしと許されて・いまだ八相をとえず・いかでか此の經の
じゅうおん
重恩をば・ほうぜざらん、
ちくじょう
若しほうぜらずば彼の賢人にも・をとりて不知恩
の畜生なるべし、
ちくじょう
毛宝が龜はあをの恩をわすれず昆明池の大魚は命の恩をほ
うぜんと明珠を夜中にささげたり、
みょうじゆ
畜生すら猶思をほうず何に況や大聖を
や、
あなんそんじや
阿難尊者は斛飯王の次男・羅喉羅尊者は淨飯王の孫なり、
こくはんのう
人中に家高
き上証果の身となつて成仏を・をさへられたりしに八年の靈山の席にて山
しやうか
海慧・蹈七宝華なんと如来の号をさづけられ給う、
たまた
若し法華經ましまさずば
・いかに・いえたかく大聖なりとも誰か恭敬したてまつるべき、
きやうけい
夏の桀・

いんのちゆう

殷いんの紂ちゆうと申もうすは万乗の主・土民どみんの帰依きえなり、しかれども政あしくして世をほ

ろぼせしかば今に・わるきものの手本てほんには桀けつちゆう・紂けつちゆうとこそ申せ、下賤げせんの

者・癩病けつちゆうの者も桀けつちゆう・紂けつちゆうのごとしと・いはれぬればのられたりと腹たつなり、千

二百・無量の声聞むりようは法華經しやうもんましまさずば誰か名をも・きくべきそ其の音こえをも

習ならうべき、一千の声聞しやうもん・一切經を結集けつじゆうせりとも見る人よもあらじ、まして

此等これらの人人ひとびとを絵像・木像にあらはして本尊ほんぞんと仰あおぐべしや、此これ偏へんに法華經ほけきやうの

御力おんちからによつて一切いっさいの羅漢らん・歸依きえせられさせ給たまうなるべし、諸もろもろの声聞しやうもん・法華ほつを

・はなれさせ給たまいなば魚の水をはなれ猿の木をはなれ小兒しやうにの乳をはなれ民の

王を・はなれたるが・ごとし、いかでか法華經ほけきやうの行者ぎやうじやをすて給たまうべき、諸もろもろの

声聞しやうもんは爾前にぜんの經經きやうぎやうにては肉眼にくげんの上に天眼てんげん・慧眼えげんをう。法華經ほけきやうにして法眼ほうげん・

仏眼ぶつげん備そなわれり。十方世界じゆつぽうせかいすら猶照見なおしやうけんし給たまうらん、何いかに況いわんや此しやの娑婆世界しゃばせかいの

中法華經ほけきやうの行者ぎやうじやを知見ちけんせられざるべしや、設にちれんい日蓮・惡人あくにんにて一言・二言・

一年・二年・一劫・二劫・乃至百千万億劫・此等の声聞を悪口・罵詈し奉り
刀杖を加えまいらする色なりとも法華經をだにも信仰したる行者ならばす
て給うべからず、譬へば幼稚の父母をのる父学これを・すつるや、梟鳥
が母を食う、母これをすてず・破鏡父をがいす父これにしたがふ、畜生すら猶
かくのごとし大聖・法華經の行者を捨つべしや、されば四大声聞の領解の
文に云く「我等今は真に是れ声聞なり仏道の声を以て一切をして聞かしむ
われら我等今は真に阿羅漢なり諸の世間天人・魔・梵に於て普く其の中に於て・
応に供養を受くべし、世尊は大恩まいます希有の事を以て憐愍教化して我等
を利益し給う、無量億劫にも、誰か能く報ずる者あらん。手足をもつて供給
し頭頂をもつて礼敬し一切をもつて供養すとも伴報ずること能わじ、若しは
以て頂戴し両肩に荷負して恒沙劫に於て心を尽して恭敬し又美膳・無量の
宝衣、及び諸の臥具・種種の湯藥を以てし、牛頭栴檀、及び諸の珍宝を以て

とうびよう 塔廟たてを起て宝衣たてを地に布かき斯ごとくの如ごとき等の事もつを以く用て供養くようすること恒沙劫じゆしゃに
於おいてすとも亦また報あずること能あたわじ」等云云。

諸もろの声聞しやうもん等は前ぜん四味しのみの経経きやうぎやうにいばくぞの呵嘖かしやくを蒙こおむり人天にんてん・大会たいえの中にし

て恥辱ちじやくがましき事・其その数かずをしらず、しかれば迦葉尊者かしやうそんじやの淳泣ていきゆうの音こえは三千さんぜんを

ひびかし、須菩提尊者しゆぼだいそんじやは亡然いちばつとして手の一鉢しちやくをすつ。舍利弗しゃりほつは餌食じきをはき

富楼那ふるなは画瓶がびやうに糞くそを入いると嫌きらわる。世尊せそん、鹿野苑ろくやおんにしては阿含经あこんきやうを讚歎さんたんし二

百五十戒ひやくしじふごを師しとせよなんと殷懃おんこんにほめさせ給たまいて、今又いまいつのまに我われが所説しよせつ

をばかうはそしらせ給たまうと一言いちごん・相違さういの失とがとも申しぬべし、例れいせば世尊せそん・

提婆達多だいばだつたを汝愚人なんじゆにん・人の唾つばきを食くうと罵詈めりせさせ給たましかば毒箭どくせんの胸むねに入るが

ごとく・をもひて・うらみて云いく「瞿曇くどん

は仏陀ぶつだにはあらず我われは斛飯王こくはんのうの嫡子あなんそんじや・阿難尊者あなんそんじやが兄くどん・瞿曇くどんが一類いちるいなり、いか

にあしき事ありとも内内きやうく・教訓きやうくすべし、此等程これらの人天にんてん・大会たいえに此程の大禍たいえを

現げんに向つて申もうすもの大人だいにん・仏陀ぶつだの中にあるべしや、されば先々は妻のかたき、
今きょうは一座のかたき、今日きょうよりは生生世世しょうじょうよに大怨敵おんてきとなるべし」と誓ちかいしぞか
し、此これをもつて思うに今諸の大声聞しやうもんは本と外道げどう・婆羅門ばらもんの家より出いでたり、
もろもろげどう　ちようじや
又諸の外道の長者しやうなりしかば諸王しよに帰依きえせられ諸檀那しよ邦にたつとまる、・或あるは
すじよう
種姓しゆじやう・高貴の人もあり・或あるは富福ふふく・充滿じゆうまんのやからもあり、而しかに彼彼の栄官えいくわん
等をうちすて慢心まんしんの瞳を倒して俗服を脱ぎ壊色の糞衣を身にまとひ白びやく・
きゆうせん
弓箭等くわんじやうをうちすてて一鉢いちぱつを手ににぎり貧人ひんじん・乞丐こうぎなんどの・ごとくして世尊せそん
たてまつふうう
につき奉り風雨を防ぐ宅もなく、身命しんみやうをつぐ衣食いしよく乏少なりし・ありさまなる
に五天しがい・四海みなげどう・皆外道の弟子でし・檀那だんななれば仏くわうすら九横の大難だいなんにあひ給たまふ、
いわゆるだいは
所謂提婆が大石をとばせし阿闍世王あじゃせの醉象を放ちし、阿耆多王あぎたわうの馬麦めみやく・婆羅門ばらもん
城のこんづ・せんしや婆羅門女ばらもんが鉢を腹にふせし、何いかに況いわんや所化しよけの弟子でしの
すなんもう　ばか
数難申す計りなし、無量の釈子は波瑠璃王に殺され千万の眷属は醉象にふま
むりよう　はるり　よろず　けんぞく

れ、華色比丘尼は提婆にがいせられ迦盧提尊者は馬糞にうづまれ、目・尊者

は竹杖にがいせらる、其の上六師同心して阿闍世・婆斯匿王等に讒奏して

云く「瞿曇は閻浮第一の大悪人なり、

彼がいたる処は三災・七難を前とす。大海の衆流をあつめ、大山の衆木を

あつめたるがごとし、瞿曇がところには衆惡をあつめたり、所謂迦葉・

舍利弗・目連・須菩提等なり、人身を受けたる者は忠孝を先とすべし、彼等

は瞿曇にすかされて父母の教訓をも用いず、家をいで王法の宣旨をも・そむ

いて山林にいたる、一国に跡をとどむべき者にはあらず、されば天には日月

・衆星・変をなす地には衆天さかんなりなんと・うつたう、堪べしとも・お

ぼえざりしに又うちそうわざわいと仏陀にもうちそい・がたくて・ありしな

り、人天大会の衆会の砌にて時時呵嘖の音をききしかば・いかにあるべしと

も・おぼへず只あわつる心のみなり、其の上大の大難の第一なりしは

じようみようきよう

浄名經の「其れ汝に施す者は福田と名けず汝を供養する者は三惡道に墮

す」と等云、文の心は仏・庵羅苑申すところに・をはせしに梵天・帝釈・日月

・四天・三界諸天・地神・竜神等・無數恒沙の大会の中にして云く須菩提等

の比丘等を供養せん天人は三惡道に墮つべし、此等をうちきく天人・此等の

声聞を供養すべしや、詮ずるところは仏の御言を用つて諸の二乗を殺害せ

させ給うかと思ゆ、心あらん人人は仏をも・うとみぬべし、されば此等の人人

は仏を供養したてまつりしついでに・こそ・わづかの身命をも扶けさせ給い

しか、されば事の心を案ずるに四十余年の経經のみとかれて、法華八箇年

の所説なくて、御入滅ならせ給いたらましかば、誰の人か此等の尊者をば供養

し奉るべき現身に餓鬼道にこそ・をはすべけれ。

而るに四十余年の経經をば東春の大日輪・寒氷を消滅するがごとく無量

の草露を大風の零落するがごとく一言一時に未顕真実と打ちけし、大風の黒

雲をまき大虚に満月の処するがごとく青天に日輪の懸り給うがごとく「世尊
は法久後、要当説眞実と照させ給いて、華光如来・光明如来等と舍利弗・迦葉
等を赫赫たる日輪・明明たる月輪のごとく鳳文にしるし、亀鏡に浮べられて
侯へばこそ如来滅後の人天の諸檀那等には仏陀のごとくは仰がれ給しか。水
すまば月・影を・をしむべからず風ふかば草木なびかざるべしや、法華經の
行者あるならば此等の聖者は大火の中をすぎても大石の中を・とをりてもと
ぶらはせ給うべし、迦葉の人定もことにこそ・よれ、いかにと・なりぬるぞ
いぶかしとも申すばかりなし、後・五百歳のあたらざるか「広宣流布」の妄語
となるべきか是が法華經の行者ならざるか、法華經を教内と下して別伝と
称する大妄語の者をまほり給うべきか、捨閉閣抛と定めて法華經の門をとぢ
よ巻をなげすてよと・ゑりて法華堂を失える者を守護し給うべきか、仏前の
誓いはありしかども濁世の・大難のはげしさ・をみて諸天地下り給わざるか、

にちがつ

日月・天にまします須弥山しゆみせんいまも・くづれず海潮も増減ぞうげんす四季も・かたのご

とく・たがはず・いかに・なりぬるやらんと大疑だいぎいよいよ・つもり候。

しよだいぼさつ

てんにん

にぜん

きようぎよう

又諸大菩薩・天人等のごときは爾前にぜんの経経きようぎようにして記別を・うるやうなれ

ども水中の月を取らんと、するがごとく影を体とおもうがごとく・いろいろかた

じつぎ

ごおん

せそんしよじようどう

ち・のみあつて実義もなし、又仏の御恩も深くて深からず、世尊初成道の時

せつきよう

ほうえぼさつ

くどく

ぼさつ

こんごう

ぼさつ

こんごう

はいまだ説教もなかりしに法慧菩薩・功德林菩薩・金剛幢菩薩・金剛蔵

ぼさつ

ぼさつ

じゆつぼう

しよぶつ

こくど

きようしゆしやくそん

きようしゆしやくそん

菩薩等なんと申せし六十余の大菩薩・十方の諸仏の国土より教主釈尊の

おんまえ

たまい

けんしゆぼさつ

げだつ

ぼさつ

ぼさつ

しよう

じゆうじゆう

じゆうじゆう

じゆうじゆう

御前に来り給いて賢首菩薩・解脱月等の菩薩の請にをもむいて十住・十行

えこう

じゆうち

ほうもん

と

たまい

これら

ぼさつ

しよせつ

ほうもん

しやくそん

しやくそん

しやくそん

・十回向・十地等の法門を説き給いき、此等の大菩薩の所説の法門は釈尊に

なら

じゆつぼうせかい

もろもろぼんてん

じゆうじゆう

じゆうじゆう

じゆうじゆう

じゆうじゆう

じゆうじゆう

習いたてまつるにあらず、十方世界の諸の梵天等も来つて法をとく又釈尊

に・

けこん

ぼさつ

てんりゆう

しやくそん

しやくそん

しやくそん

しやくそん

しやくそん

しやくそん

に・ならいたてまつらず、総じて華嚴会座の大菩薩・天竜等は釈尊以前に

ふしぎげだつ

まか

ぼさつ

しやくそん

かこ

いんい

おんでし

あ

あ

あ

あ

あ

不思議解脱に任せる大菩薩なり、釈尊の過去・因位の御弟子にや有るらん・

十方世界の先仏の御弟子にや有るらん、一代教主・始成の正覺の仏の弟子
にはあらず、阿含・方等・般若の時・四教を仏の説き給いし時こそ・やうや
く御弟子は出来して候へ、此も又・仏の自説なれども正説にはあらず、ゆへ
・いかんとなれば方等・般若の別・円三教は華嚴經の別・円・二教の義趣を
いはず、彼の別・円・二教は教主・釈尊の別・円・二教にはあらず、法慧等
の別・円二教なり、此等の大菩薩は人目には仏の御弟子かとは見ゆれども仏の
御師とも・いぬべし、世尊・彼の菩薩の所説を聴聞して智發して後・重ね
て方等・般若の別・円をとけり、色もかわらぬ華嚴經の別・円・二教なり、
されば此等の大菩薩は釈尊の師なり、華嚴經に此等の菩薩をかずへて善知識
ととかれしはこれなり、善知識と申すは一向・師にもあらず一向・弟子にも
あらずある事なり、蔵・通・二教は又・別・円の枝流なり別・円・二教をし
る人必ず蔵・通・二教をしるべし、人の師と申すは弟子のしらぬ事を教えた

るが師にては侯なり、例せば仏より前の一切の^{いつさい}人天・^{にんてん}外道は二天・三仙の^{でし}弟子なり、^{きゅうじゆじしゆ}九十五種まで流派したりしかども三仙の^い見を出でず、^{きようしゆしやくそん}教主釈尊もかれに^{なら}習い伝えて外道の^{げどう}弟子にて・ましませしが^{くぎよう}苦行・^{でし}樂行・十二年の時・^{たまひ}苦空・^{むじよう}無常・^{むが}無我の理をさと^り出してこそ外道の^{げどう}弟子の名をば離れさせ給いて無師智とはなのらせ給^{たまひ}いしか、又人天も^{にんてん}大師とは^{だいし}仰^{あほ}ぎまいらせしか、されば^{ぜんしみ}前四味の^{きようしゆしやくそん}間は^{ほうえぼさつ}教主釈尊・^{でし}法慧菩薩等の^{もんじゆ}御弟子なり、例せば^{しやくそん}文殊は^{もんじゆ}釈尊九代の^{おんし}御師と申すがごとし、^{もつ}つねは^{しよきよう}諸經に^{ふせつ}不説一字と・とかせ給^{たま}うも・これなり。

仏・御年・七十二の年・^{まかだこく}摩竭提国・^{りようじゆうせん}靈鷲山と申^{もつ}す山にして^{むりようぎきよう}無量義經を・とかせ給^{たまひ}いしに、^{よんじゆうよねん}四十余年の^{きようぎよう}經經をあげて、^そ杖葉をば其の中に^{よんじゆうよねん}おさめて^{よんじゆうよねん}四十余年・^{みけんしんじつ}未顕^{たま}真実と^た打消し給^{たま}うは^{よんじゆうよねん}此なり、^{しよだいぼさつ}此の時こそ^{しよてん}諸大菩薩・^{しよてん}諸天人等^{じつぎ}はあはてて^{じつぎ}実義を^{しやう}請せんとは申せしか、^{むりようぎきよう}無量義經にて^{じつぎ}実義と・をばしき事一

言ありしかども・いまだまことなし、譬へば月の出でんとして其の体東山に

かくれて光り西山に及べども諸人月体を見ざるがごとし、法華經・方便品の

りやくがいさんけんいつ

略開三顯一の時・仏略して一念三千・心中の本懷を宣べ給う、始の事なれ

ばほととぎすの初音をねをびれたる者の一音ききたるが・やうに月の山の半

を出でたれども薄雲の・をほへるが・ごとく・かそかなりしを舍利弗等・驚

いて諸天・竜神・大菩薩等をもよをして諸天・竜神等其の数恒沙の如し仏

を求むる諸の菩薩大数八万有り・又諸の万億国の転輪聖王の至れる合掌し

て敬心を以て具足の道を聞かんと欲す等とは請ぜしなり、文の心は四味・三

教・四十余年の間いまだ・きかざる法門うけ給はらんと請ぜしなり、この文

に具足の道を聞かんと欲すと申すは外教に云く「薩とは具足の義に名く」等

云云、無依無得大乘四論玄義記に云く「沙とは訳して六と云う胡法に六を

以て具足の義と為すなり」等云云。吉蔵の疏に云く「沙とは翻じて具足と為す」

等云云、天台の玄義の八に云く「薩とは梵語、此に妙と翻ずるなり」等云云、

ふほうぞう

付法蔵の第十三真言・華嚴・諸宗の元祖・本地は法雲自在王如来・迹に

りゅうもうぼさつ

竜猛菩薩・初他の大聖の大智度論千卷の肝心に云く「薩とは六なり」等云云、

みようほうれんげきよう

妙法蓮華經と申すは漢語なり、月支には薩達磨分陀利伽蘇多覽と申す、

ぜんむいさんぞう

善無畏三蔵の法華經の肝心真言に云く、曩謨三曼陀沒駄南阿暗惡薩縛勃陀枳攬

さきしゅびや

知娑乞菟毘耶見 曩三姿縛空性羅乞叉・相也薩哩達磨浮陀哩迦蘇駄覽經

じゃうんぱんこく

惹咤・発喜縛日羅固羅乞叉・護咤無願娑婆詞成就」

しんこん

此の真言は南天竺の鉄塔の中の法華經の肝心の真言なり、此の真言の中に

さつりだるま

薩哩達磨と申すは正法なり薩と申すは正なり正は妙なり妙は正なり正法華・

みようほうげこれ

妙法華是なり、又妙法蓮華經の上に南無の二字を・をけり南無妙法蓮華經

これなり、妙とは具足・六とは六度万行、

諸の菩薩の六度万行を具足するや

うを・きかんとをもう、具とは十界互具・足と申すは一界に十界あれば当位

を・きかんとをもう、具とは十界互具・足と申すは一界に十界あれば当位

に余界あり満足まんぞくの義なり、此の經一部八卷・二十八品・六万九千三百八十四

字・一一に皆妙みなの一字を備えて三十二相・八十種好しゅこうの仏陀ぶつだなり、十界じゅっかいに皆

己界こかいの仏界ぶつかいを顕あらわす妙樂みょうらく云く「尚なお仏果ぶつがを具ぐす、余果またしかも亦然またり」等云云、仏此これ

を答こたえて云く、「衆生しゅじようをして仏知見ぶつちけんを開ひらか令しめんと欲ほす」等云云、衆生しゅじようと申もうす

は舍利弗しゃりふつ・衆生しゅじようと申もうすは一闍提いつせんたい・衆生しゅじようと申もうすは九法界ほっかい・衆生しゅじよう無む辺へん誓願せいがん度ど・

此こに満足まんぞくす、「我本誓願ほんぜいを立つ一切いっさいの衆しゅをして我が如ごとく等としくして異なることこと

無なからしめんと欲ほす我が昔むかしの願ねんせし所ところの如ごとき今は已すでに満足まんぞくしぬ」等云云。

諸大菩薩しよだいぼさつ・諸天等しよてん・此この法門ほうもんをきひて領解りようげして云く「我等昔われらより 来数このかたしばしば

世尊せそんの説せつを聞ききたてまつれども未いまだ曾かつて是かくの如ごとき深妙しんめうの上法じやうほふを開ひらかず」等云

云、伝教大師でんぎやうだいし云く「我等昔われらより 来数このかたしばしば 世尊せそんの説せつを聞きく・と謂おもうは昔法華經ほけきやう

の前けこん・華嚴等だいはうの大法だいほふを説せつくを聞きけども・となり、未いまだ曾かつて是かくの如ごとき深妙しんめうの

上法じやうほふを開ひらかずと謂おもうは未いまだ法華經ほけきやうの唯一ただいち仏乘ぶつじようの教きやうを聞きかざるなり」等云云、

けこん ほうとう はんや じんみつ だいにち こうがしゃ しょうだいじょうきょう
華嚴・方等・般若・深密・大日等の恒河沙の諸大乘經はいまだ一代の肝心
いちねんさんぜん たいこう こつずい にじょうさぶつ くおんじつじょう
たる一念三千の大綱・骨髓たる二乗作仏・久遠実成等をいまだきかずと領解
せり。

四 開目抄下

210P

又、今よりこそ諸大菩薩も梵帝・日月・四天等も教主釈尊の御弟子にて
そつら ほうとうほん これら ぼさつ おんでし
は侯へ、されば宝塔品には、此等の大菩薩を仏・我が御弟子等と・をぼすゆ
かんぎょう いわ もろもうしやたいしゅう
へに諫曉して云く「諸の所大衆に告ぐ我が滅度の後、誰か能く此の經を護持
どくじゆ ぶつぜん おい みずか せいこん
し読誦する今・仏前に於て自ら誓言を説け」とは・したたかに仰せ下せしか、
しょうだいばさつ たと たいふう しょうじゆ こと
又諸大菩薩も「譬えば大風の小樹の枝を吹くが如し」等と吉祥草の大風に
したが
随い河水の大海へ引くがごとく仏には随いまいらせしか。

しか りょうぜん
而れども靈山日浅くして夢のごとく・うつつならずありしに証前の宝塔
きこ ほうとう じゅつぽう しょうぶつ らいじゅう みな ふんじん
の上に起後の宝塔あつて十方の諸仏・来集せる皆我が分身なりとなのらせ

たまい ほうとう 給い 宝塔は虚空に釈迦・多宝坐を並べ日月の青天に並 出せるが如し、人天
たいえ 大会は星をつらね分身の諸仏は大地の上宝樹の下の師子のゆかにまします、
けこんきよう 華嚴經の蓮華藏世界は十方・此土の報仏・各各に国国にして彼の界の仏・此
ふんじん 土に來つて分身となのらず此の界の仏・彼の界へゆかず但法慧等の大菩薩
の み互いに來会せり、大日經・金剛頂經等の八葉九学三十七尊等・大日
によらい 如来の化身とはみゆれども其の化身・三身円満の古仏にあらず、大品經の千
あみだ 仏・阿弥陀經の六方の諸仏いまだ來集の仏にあらず大集經の來集の仏・又
ふんじん 分身ならず、金光明經の四方の四仏は化身なり、總じて一切經の中に
かくしゅうかくぎよう 各修・各行の三身円満の諸仏を集めて我が分身とはとかれず、これ寿量品の
おんじよ 遠序なり、始成四十余年の釈尊が一劫・十劫等・已前の諸仏を集めて分身と
とかる・さすが平等意趣にもにず・をびただしくをどろかし、又始成の仏な
しよけ らば所化・十方に充滿すべからざれば分身の徳は備わりたりとも示現して

益なし、天台云く、分身既に多し当に知るべし成仏の久しきことを」等云云、
大会のをどろきし意をかかれたり。

其の上に地涌千界の大菩薩・大地より出来せり釈尊に第一の御弟子と・

をばしき普賢・文殊等にも・にるべくもなし、華嚴・方等・般若・法華經の

宝塔品に來集する大菩薩・大日經等の金剛薩・等の十六の大菩薩なども

此の菩薩に對當すればの群る中に帝釈の來り給うが如し、山人に月郷等

のまじはるにことならず、補処の弥勒すら猶迷惑せり何に況や其の已下をや、

此の千世界の大菩薩の中に四人の大聖まします所謂・上行・無邊行・

淨行・安立行なり、此の四人は虚空・靈山の諸菩薩等・眼もあはせ心

もをよばず、華嚴經の四菩薩・大日經の四菩薩・金剛頂經の十六大菩薩等

も此の菩薩に對すれば翳眼のものの日輪を見るが如く海人が皇帝に向い奉る

が如し、大公等の四聖の衆中にありしに・にたり商山の四皓が忠節に仕え

しにことならず、巍巍堂堂として尊高なり、釈迦・多宝・十方の分身を除いては一切衆生の善知識ともたのみ奉りぬべし、弥勒菩薩・心に念言すらく、
我は仏の太子の御時より三十成道・今の靈山まで四十二年が間・此の界の
菩薩・十方世界より来集せし諸大菩薩皆しりたり、又十方の淨穢土に・或
は御使い・或は我と遊戲して其の国国に大菩薩を見聞せり、此の大菩薩の
御師なんどは・いかなる仏にてや・あるらん、よも此の釈迦・多宝・十方の
分身の仏陀にはにるべくもなき仏にてこそ・をはすらめ、雨の猛を見て竜の
大なる事をしり華の大なるを見て池のふかきことは・しんぬべし、此等の大
菩薩の来る国・又誰と申す仏にあいたてまつり・いかなる大法をか習修し
給うらんと疑いし、あまりの不審さに音をも・いだすべくも・なければども
仏力にやありけん、弥勒菩薩疑つて云く「無量千万億の大衆の諸の菩薩
は昔より未だ曾て見ざる所なり是の諸の大威徳の精進に菩薩衆は誰か其の

ため

為に法を説いて教化して成就せる、誰に従つてか初めて発心し何れの仏法を

か称揚せる、世尊・我昔より来未だ曾つて是の事を見ず、願くは其の所従

の国土の名号を説きたまえ、我常に諸国に遊べども未だ曾つて是の事を見ず、

我れ此の衆の中に於て乃し一人をも識らず忽然に地より出でたり願くは其の

因縁を説きたまえ」等云云、天台云く「寂場より已降今座已往十方の大士

来会絶えず限る可からずと雖も我補処の智力を以つて悉く見悉く知る、而れ

ども此の衆に於て一人をも識らず然るに我れ十方に遊戲して諸仏に奉し

大衆に快く識知せらる」等云云、妙樂云く「智人は起を知る蛇は自ら蛇を

織る」等云云、経釈の心・分明なり詮ずるところは初成道より・このか

た此の土十方にて此等の菩薩を見たてまつらず・きかずと申すなり。

仏・此の疑を答えて云く「阿逸多・汝等昔より未だ見ざる所の者は我

是の袈婆世界に於て阿耨多羅三藐三菩提を得已つて是の諸の菩薩を教化し

じどう 示導して其の心を調伏して道の意を發こさしめたり」等、又云く「我伽耶城
ぼだいじゅげ おい 菩提樹下に於て坐して最正覺を成ずることを得て無上の法輪を轉じ爾して
すなわこれ きょうけ 乃ち之を教化して初めて道心を發さしむ今皆不退に任せり、乃至我久遠より
このかたこれら きょうけ 来是等の衆を教化せり」等云云、此に弥勒等の大菩薩大に疑いをもう、
けこんきょう 華嚴經の時・法慧等の無量の大菩薩あつまるいかなる人人なるらんと・をも
へば我が善知識なりとをほせられしかば、さもやと・うちをもひき、其の後
ぜんちしき びやくろち びやくろち の大宝坊・白鷺池等の来会の大菩薩も・しかのごとし、此の大菩薩は彼等に
はにるべくもなき・ふりたりげにまします定めて釈尊の御師匠かなんとおぼ
しきを令初發道心とて幼稚のものども・なりしを教化して弟子となせりなん
ど・をほせあれば・大なる疑なるべし、日本の聖徳太子は人王第三十二代
よつめいてんのう 用明天皇の御子なり、御年六歳の時・百濟・高麗・唐土より老人どもものわ
たりたりしを六歳の太子・我が弟子なりと・をほせありしかば彼の老人ども

がつしょう

又合掌がつしょうして我が師しなり等云云、不思議ふしぎなりし事ことなり、外典げてんに申もうす・或者ある道を

ゆけば路みちのほとりに年三十計ばかりなる・わかものが八十計ばかりなる老人らうじんを・とら

へて打ちけり、いかなる事ことと・たとえば此このの老翁らうは我が子こなりなんと申もうすと

・かたるにもにたり、されば弥勒菩薩等みろくぼさつ疑うたがいつて云く「世尊せそん・如来太子にやらいたいしな為り

し時とき・釈しゃくの宮みやを出いで伽耶城がやを去ること遠とほからずして道場どうじょうに坐まして

あのかたさんみやくさんぼだい じよう
阿耨多羅三藐三菩提あうたろさんみやくさんぼだいを成じようずることを得たま給たまえり、是このより已来この始めて四十余年よんじゅううねんを

過ぎたり、世尊せそん・云何なんぞ此このの少時おひに於おいて大いに仏事ぶつじを作なし給たまえりと等云云、一切いっさい

の菩薩ぼさつ始め華嚴經けこんきようより四十余年よんじゅううねん・会う会たいがいに疑うたがいをまうけて一切衆生いっさいしゆじようの疑網ぎもうをは

らす中に此このの疑うたがい・第一だいいちの疑うたがいなるべし、無量義經むりようぎきようの大莊嚴等そうごんの八万はちまんの大士

・四十余年よんじゅううねんと今との歴劫りやつこく・疾成しつじようの疑うたがいにも超過ちようかせり、觀無量壽經かんむりようじゆきように韋提希

夫人ふじんの阿闍世王あじゃせが提婆だいばにすかされて父の王をいましめ母を殺さんとせしが

耆婆月光ぎばがっこうに・をどされて母をはなちたりし時・仏しやうを請しょうじたてまつて・まづ

第一の間に云く、我れ宿し何の罪あつて此の惡子を生む世尊・復た何等の因縁有つて提婆達多と共に眷屬となり給う等云云、此の疑の中に、世尊復た何等の因縁有つて、等の疑は大なる大事なり、輪王は敵と共に生れず帝釈は鬼ともならず仏は無量劫の慈悲者なりいかに大怨と共にはまします還つて仏には・ましまさざるかと疑うなるべし、而れども仏答え給はず、されば觀經を讀誦せん人・法華經の提婆品へ入らずば・いたづらごととなるべし、大涅槃經に迦葉菩薩の三十六の問もこれには及ばず、されば仏・此の疑を晴させ給はずば一代の聖教は泡沫にどうじ一切衆生は疑網にかかるべし、壽量の一品の大切なるこれなり。

其の後・仏・壽量品を説いて云く、「一切世間の天人及び阿修羅は皆今の釈迦牟尼仏は釈氏の宮を出で伽耶城を去ること遠からず道場に坐してあのくたさんみやくさんぼだい阿耨多羅三藐三菩提を得給えりと謂えり」等云云、此の經文は始め寂滅道場

より終り法華經の安樂行品にいたるまでの一切の大菩薩等の所知をあげたる

なり、然るに善男子・我れ實に成仏してより已來・無量無辺百千万億那由它

劫なり、等云云、此の文は華嚴經の「三処の始成正覺」阿含經に云く、「初成」

淨名經の「始坐仏樹」大集經に云く、「始十六年」大日經の「我昔坐道場」

等・仁王經の「二十九年」無量義經の「我先道場」法華經の方位品に云く

「我始坐道場」等を一言に大虚妄なりと・やぶるもんなり。此の過去常顯る

る時・諸仏皆釈尊の分身なり爾前・迹門の時は諸仏・釈尊に肩を並べて

各修・各行の仏なり、かるがゆへに諸仏を本尊とする者・釈尊等を下す、今

華嚴の台上・方等・般若・大日經等の諸仏は皆釈尊の眷属なり、仏三十

成道の御時は大梵天王・第六天等の知行の袈婆世界を奪い取り給いき、今

爾前・迹門にして十方を淨土と・がうして此の土を穢土ととかれしを打ち

かへして此の土は本土なり十方の淨土は垂迹の穢土となる、仏は久遠の仏

なれば迹化^{しやつけ}・他方^{たほう}の大菩薩^{ぼさつ}も教主^{きょうしゅ}釈尊^{しゃくそん}の御弟子^{おんでし}なり、一切^{いっさい}經の中に此^{この}の
寿量品^{じゆりやうぼん}ましまさずば天に日月^{にちがつ}の・国に大王^{だいおう}

の・山河^{さんが}に珠^{たま}の・人に神^{たましい}のなからんが・ごとくして・あるべきを華嚴^{けこん}・
真言等^{しんごん}の權宗^{ごんしゅう}の智者^{ちしや}と・をばしき澄觀^{ちようかん}・嘉祥^{かじよう}・慈恩^{じおん}・弘法等^{こうぼう}の一往^{いちおう}・權宗^{ごんしゅう}
の人人^{ひとびと}・且^{かつ}は自の依經^{えきよう}を讚歎^{さんたん}せんために・或^{ある}は云く「華嚴經^{けこんきよう}の教主^{きょうしゅ}は報身^{ほうしん}・
法華經^{ほけきよう}は応身^{おうじん}」と・或^{ある}は云く「法華壽量品^{ほつけじゆりやうぼん}の仏は無明^{むみよう}の辺域^{へんいき}・大日經^{だいにちきよう}の
仏は明^{めい}の分位^{ぶんゐ}」等云云、雲は月をかくし・臣^{ごん}は賢人^{けんじん}をかくす人讚^{さん}すれば黃石^{おうしやく}
も玉^{たま}とみへ諛臣^{ゆしん}も賢人^{けんじん}かと・をばゆ、今濁世^{じよくせ}の学者等^{がくしや}・彼等^{かれら}の語義^{ごぎ}に隱^{かく}され
て壽量品^{じゆりやうぼん}の玉^{たま}を翫^{もてあそ}ばず、又天台宗^{てんだいしゅう}の人人^{ひとびと}もたほらかされて金石^{きんせき}・一同^{いどう}の
をもひを・なせる人人^{ひとびと}もあり、仏・久成^{くじよう}に・ましまさずば所化^{しよけ}の少^{すく}かるべき
事を弁^{わきま}つべきなり、月は影^{おしみ}を慳^{おしま}ざれども水^{みづ}なくば・うつるべからず、仏・
衆生^{しゆじよう}を化^{くわ}せんと・をばせども結縁^{けちえん}うすければ八相^{はつさう}を現^{げん}ぜず、例^{れい}せば諸^{もろ}の聲聞^{しやうもん}

が初地・初住には・のぼれども爾前にして自調自度なりしかば未来の八相を
ごするなるべし、しかれば教主釈尊始成ならば今・此の世外の梵帝・日月
・四天等は劫初より此の土を領すれども四十余年の仏弟子なり、靈山・八年
の法華結縁の衆今まいりの主君にをもひつかず久住の者にへだてらるるがこ
とし、今久遠実成あらはれぬれば東方の薬師如來の日光・月光・西方阿彌陀
如來の觀音・勢至・乃至十方世界の諸仏の御弟子大日・金剛頂等の兩部の
大日如來の御弟子の諸大菩薩・猶教主釈尊の御弟子なり、諸仏・釈迦如來
の分身たる上は諸仏の所化申すにをよばず何に況や此の土の劫初より・この
かたの日月・衆星等・教主釈尊の御弟子にあらずや。
而るも天台宗より外の諸宗は本尊にまどえり、俱舍・成実・律宗は三
十四心・断結成道の釈尊を本尊とせり、天尊の太子が迷惑して我が身は民
の子とをもうがごとし、華嚴宗・真言宗・三論宗・法相宗等の四宗は大乗

の宗なり、法相・三論は勝心身にたる仏を本尊とす天王の太子・我が父は
侍と・をもうがごとし、華嚴宗・真言宗は釈尊を下げて慮舎那の大口等
を本尊と定む天子たる父を下げて種姓もなき者の法王のごとくなるに・つけ
り、淨土宗は釈迦の分身の阿弥陀仏を有縁の仏とをもつて教主をすてたり、
禪宗は下賤の者・一分の徳あつて父母をさぐるがごとし、仏をさげ經を下す
此皆本尊に迷えり、例せば三皇已前に父をしらず人皆禽獸に同ぜしが如し、
寿命品をしらざる諸宗の者は畜に同じ不知恩の者なり、故に妙樂云く一代
教の中未だ曾て遠を顯さず、父母の寿知らずんばある可からず若し父の寿
の遠きを知らずんば復父統の邦に迷う、徒に才能と謂うとも全く人の子に
非ず等云云、妙樂大師は唐の末・天寶年中の者なり三論・華嚴・法相・真言
等の諸宗・並に依經を深くみ広く勘えて寿命品の仏をしらざる者は父統の
邦に迷える才能ある畜生とかけるなり、徒謂才能とは華嚴宗の法蔵・澄觀

・乃至・真言宗の善無畏三蔵等は才能の人師なれども子の父を知らざるがごとし、伝教大師は日本顕密の元祖・秀句に云く「他宗所依の経は一分仏母の義有りと雖も然も但愛のみ有つて蔵の義を闕く、天台法華宗は蔵愛の義を具す一切の賢聖・学・無学及び菩薩心を発せる者の父なり」等云云、真言・華嚴等の経経には種熱脱の三義・名字すら猶なし何に況や其の義をや、華嚴・真言経等の一生初地の即身成仏等は経は権経にして過去をかくせり、種をしらざる脱なれば超高が位にのぼり道鏡が王位に居せんとせしがごとし。

宗宗・互に程を争う予此をあらそはず但経に任すべし、法華経の種に依つて天親菩薩は種子無上を立てたり天台の一念三千これなり、華嚴経・乃至諸大乘経・大日経等の諸尊の種子・皆一念三千なり天台智者大師・一人・此の法門を得給えり、華嚴宗の澄観・此の義を盗んで華嚴経の心如工画師の文

のた神たましいとす、真言しんごん・大日經等には二乗作仏にじようさぶつ・久遠実成くおんじつじよう・一念三千いちねんさんぜんの法門ほうもん

これなし、善無畏三蔵ぜんむいさんぞう・震旦しんたんに来て後てんだい・天台てんだいの止觀しかんを見て智發だいにちきようし大日經だいにちきようの

じつそう

いつさいほんじよ

てんだい

いちねんさんぜん

しかん

しんごんしゅう

かんじん

心実相しんじつそう・我一切本初の文の神に天台てんだいの一念三千を盗み入れて真言宗しんごんしゅうの肝心かんじんと

そ

して其の上に印と真言しんごんとをかざり法華經ほけきようと大日經だいにちきようとの勝劣しょうれつを判ずる時とき・

りとうじしよう

理同事勝りどうじしようの釈をつくれり、両界まんだらの漫荼羅にじようさぶつの二乗作仏じゅうつかいごく・十界互具じゅうかいごは一定じつ・

だいにちきよう

おあわく

ゆえ

でんぎよう

だいいし

しんごん

すなわ

大日經だいにちきようにありや第一だいいちの誑惑おあわくなり、故に伝ゆえ教大師でんぎよう云く「新来しんごんの真言家しんごんは則ちすなわ

ひつじゆ

そつじよう

くとう

けこん

すなわ

きも

きも

えぞ

えぞ

筆受ひつじゆの相承そつじようを混みじ、旧到くとうの華嚴家けこんは則ちすなわ影響よういづつの規模きもを隠す等云云えぞ、俘囚えぞの

嶋とうなどに・わたて・ほのぼのというたは・われよみたりなんと申すは・

えそてい

えそてい

えそてい

えそてい

えそてい

えそてい

えそてい

えそてい

えそてい

えそていの者はさこそとをもつべし、漢土かんど・日本にほんの学者がくしゃ又かくのごとし、

りようしやうわじようい

しんごん

ぜんもん

けこん

さんろんないしも

ほつけ

ほつけ

ほつけ

ほつけ

良りよう和尚しやうわう云く「真言しんごん・禅門ぜんもん・華嚴けこん・三論さんろん乃至若し法華等ほつけに望めば是接引門はつしんもん」

等云云えんぐんぐん、善無畏三蔵ぜんむいさんぞうの閻魔えんまの責にあづからせ給しは此こゝの邪見じゃけんによる後に心を

・ひるがへし法華經ほけきように帰伏きふくしてこそ・このせめをば脱のがれさせ給たまいしか、其その後

善無畏・不空等・法華經を兩界の中央にをきて大王のごとくし胎藏の大日經
・金剛の金剛頂經をば左右の臣下のごとくせし・これなり、日本の弘法も
教相の時は華嚴宗に心をよせて法華經をば第八にをきしかども事相の時には
實慧・真雅・円澄・光定等の人人に伝え給いし時・兩界の中央に上のごとく
・をかれたり、例せば三論の嘉祥は法華玄十卷に法華經を第四時・会二破二
と定れども天台に歸伏して七年つかへ廢講散衆して身を肉橋となせり、法相
の慈恩は法苑林・七卷・十二卷に一乘方便・三乘真實等の妄言多し、しか
れども玄賛の第四には故亦兩存等と我が宗を不定になせり、言は兩方なれど
も心は天台に歸伏せり、華嚴の澄觀は華嚴の疏を造て華嚴・法華・相對して
法華を方便とかけるに似れども彼の宗之を以て実と為す此の宗の立義・理通
ぜざること無し等とかけるは悔い還すにあらずや、弘法も又かくのごとし、
龜鏡なければ我が面をみず敵なければ我が非をしらず、真言等の諸宗の學者

等・我が非をしらざりし程に伝でんぎようだいし教大師にあひたてまつて自宗の失をしるなるべし。

されば諸經しよきようの諸仏しよぶつ・菩薩ぼさつ・人天等は彼彼の經經きようきようにして仏にならせ給たまうやうなれども実には法華經ほけきようにして正覺しやうかくなり給たまへり釈迦諸仏の衆生無辺の總願みなは皆此の經にをいて満足まんぞくする今者已満足こんじゃいまんぞくの文これなり、予事の由よしを・をし計けいるに華嚴けこん・觀經かんきよう・大日經等だいにちきようをよみ修行しゆぎようする人をば・その經經きようきようの仏ぶつ・菩薩ぼさつ・天等てんとう・守護しゆいし給らん疑うたがいあるべからず、但し大日經だいにちきよう・觀經等かんきようをよむ行者ぎやうじや等・法華經の行者に敵対てきたいをなさば彼の行者ぎやうじやをすてて法華經の行者ぎやうじやを守護しゆいすべし、例せば孝子こうし・慈父じふの王敵おうてきとなれば父をすてて王にまいる孝の至りなり、仏法ぶつぽうも又かくのごとし、法華經の諸仏しよぶつ・菩薩ぼさつ・十羅刹じゆうらせつ・日蓮にちれんを守護しゆいし給たまう上・浄土宗じやうどしゆの六方の諸仏しよぶつ・二十五の菩薩ぼさつ・真言宗しんこんしゆの千二百等・七宗の諸尊しよそん・守護しゆいの善神ぜんじん・日蓮にちれんを守護しゆいし給たまうべし、例せば七宗の守護神しゆごしん・伝教大師でんぎようだいしをまほ

り給たまいしが如ごとしと・をもう、日蓮案にちれんじて云いわく法華經ほけきょうの二処三會の座にましましし、日月等にちがつの諸天しよてんは法華經ほけきょうの行者ぎようじや出来きせば磁石じしやくの鉄くろがねを吸くうがごとく月の水うづつに遷うつるがごとく須臾しゆゆに來きつて行者ぎようじやに代ふつぜんり仏前にちれんの御誓ほけきょうをはたさせ給ぎようじやべしとこそをばへ候にちれんにいままで日蓮にちれんをとぶらひ給たまはぬは日蓮にちれん・法華經ほけきょうの行者ぎようじやにあらざるか、されば重ねて經文きようもんを勸かんえて我が身みにあてて、身の失とがをしるべし。

疑うたがいて云いわく当世とうせの念仏宗ねんぶつしゆう・禅宗ぜんしゆう等をいかは何なる智眼ちがんをもつて法華經ほけきょうの敵人てきじん一切いっさい衆生しゆじゆうの悪知識あくちしきとはしるべきや、答こたえて云いわく私の言いを出いだすべからず

經釈きやうしゃくの明鏡めいきやうを出はつて謗法ほうぼうの醜面しゆうめんをそうかべ其その失とがをみせしめん生盲いきめくらは力を

よばず、法華經ほけきょうの第四宝塔品ほうとうぼんに云いわく、爾その時に多宝仏たほうぶつ・宝塔ほうとうの中に於おいて半座はんざを分しやち釈迦牟尼仏しゃかむにぶつに与よつ、爾その時に大衆たいしゆう二如來にょらいの七宝しつぽうの塔たの中の師子ししの座ざの上うに在いまして結跏趺坐けつかふざし給たまうを見みたてまつる、大音声おんじゆうを以もつて普あまねく四衆ししゆうに告こげ給たまわく、誰たれか能よく此この娑婆国土しゃばこくどに於おいて広ひろく妙法華經みようほけきょうを説まかん、今正いましく是これ

時なり、如来にょらい久しからずして当に涅槃まさはんに入るべし、仏・此の妙法華經を以てもつ付屬ふぞくして在ること有らしめんと欲すほ」等云、第一の勅宣なり。

又云く、「爾その時に世尊せそん重かさねて此の義を宣のべんと欲して偈げを説いて言いわく、

聖主世尊・久しく滅度めつどし給たまうと雖も宝塔の中に在いまして尚法の為に來り給たまえり、

諸人如何ぞ勤めて法に為むかざらん、又我が分身の無量の諸仏・恒沙等の如く

來れる法を聴かんと欲すほ 各妙なる土及び弟子衆・天人・竜神・諸の供養の

事を捨てて法をして久しく住せしめんが故に此に來至し給たまえり、譬たとえば大風

の小樹の枝を吹くが如し、是の方便を以て法をして久しく住せしむ、諸の

大衆に告ぐ我が滅度の後誰か能く此の經を護持し読誦せん今・仏前に於て

自ら誓言を説け、第二の鳳詔なり。

「多宝如来および我が身集むる所の化仏当に此の意を知るべし、諸の善男子

・各諦かに思惟せよ此れは為れ難き事なり、宜しく大願を發おこすべし、諸余

の經典數・恒沙の如し此等を説くと雖も未だ為れ難しとするに足らず、若し
須弥を接つて他方無數の仏土に擲げ置かんも亦未だ為れ難しとせず、若し仏滅
後・惡世の中に於て能く此の經を説かん是則ち為れ難し、仮使劫焼に乾れた
る草を担い負うて中に入つて焼けざらんも亦未だ為れ難しとせず、我が滅度
の後に若し此の經を持ちて一人の爲にも説かん是則ち為れ難し、諸の善男子
・我が滅後に於て誰か能く此の經を護持し読誦せん、今・仏前に於て自ら誓言
を説け」等云云、第三の諫勅なり、第四・第五の二箇の諫・曉・提婆品にあ
り下にかくべし。

此の經文の心は眼前なり青天に大日輪の懸がごとし白面に壓のあるに
たり、而れども生盲の者と邪眼の者と一眼のものと各謂自師の者・迦執家
の者はみがたし万難をすてて道心あらん者にしるしとどめてみせん、西王母
がそののもも・輪王出世の優曇華よりもあいがたく沛公が項羽と八年・漢土

をあらそいしよりとも頼朝と宗盛が七年・秋津嶋にたたかひしむねもり修羅と帝あきつしま釈と金翅鳥と
竜りゅうおう王と阿耨池に争えるも此あらずにはすぐべからずとしるべし、日本国に此の法にほんこく
あらわあらわ顯るること二度なり伝でんぎようだいし教大師と日蓮にちれんとなりとしれ、無眼のものは疑うたがいうべし
力及ぶべからず此の経文は日本・漢土月氏・竜宮・天上・十方世界の
いっさいいっさいきようきようしようれつしようれつしゃかしゃかたほうたほうじゅつぽうじゅつぽう
一切経の勝劣を釈迦・多宝・十方の仏・来集して定め給うなるべし。
問うて云くいわ華嚴経・方等経・般若経・深密経・楞伽経・大日経・涅槃経
等は九易の内か六難の内か、答えて云くいわ華嚴宗の杜順・智儼・法蔵・澄観等
の三蔵大師。読んで云くいわ華嚴経と法華経と六難の内・名は二経なれども所説
・乃至理これ同じ四門観別・見真諦同のごとし、法相の玄奘三蔵・慈恩大師
等・読んで云くいわ深密経と法華経とは同く唯識の法門にして第三時の教・六難
の内なりし三論の吉蔵等読んで云くいわ般若経と法華経とは名異体同・二経一
法なりぜんむいさんぞう善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵等・読んで云くいわ大日経と法華経

とは理^り同^{どう}じ、をな^{なん}じく六難^{なん}の内の経なり、日本^{にほん}の弘法^{こうぼう}・読^よんで云^いく「大日^{だい}経^{にちぎよう}は六難^{なん}・九易^{くい}の内^{ない}にあらず大日^{だい}経^{にちぎよう}は釈迦^{しゃか}所説^{しよせつ}の一切^{いっさい}経^{いきよう}の外^が・法身^{ほっしん}・大日^{だい}経^{にちぎよう}によ^にらい^{らい}の所説^{しよせつ}なり、又^{また}・或^{ある}る人^{ひと}云^いく「華嚴^{けこん}経^{ぎよう}は報身^{ほうしん}如來^{にょらい}の所説^{しよせつ}・六難^{なん}・九易^{くい}の内^{ない}にはあらずし、此^{この}四宗^{ししゆ}の元祖^{がんそ}等^らかやうに読^よみければ其^その流^{りう}れをくむ数千^{せん}の学^{がく}徒^と等^らも又^{また}此^{この}の見^みをい^いでず、日蓮^{にちれん}なげいて云^いく上^{かみ}の諸^{しよ}人^{にん}の義^ぎを左^さ右^うなく非^ひなりといはば当地^{しよにんおもて}の諸^{しよ}人^{にん}面^{めん}を向^むくべからず非^ひに非^ひをかさね結句^{けつこ}は國王^{こくおう}に讒奏^{ざんそう}して命^{めい}に及^{およ}ぶべし、但^{ただ}し我^{われ}等^らが慈父^{じふ}・雙林^{そうりん}最後^{さいご}の御遺言^{ゆいごん}に云^いく「法^よに依^よつて人^{ひと}に依^よらざれ」等^ら云^いふ、不依^{ふえ}人^{にん}等^らとは初依^{しよ}・二依^に・三依^{さんえ}・第四依^{しえ}・普賢^{ふげん}・文殊^{もんじゆ}等の等覺^{とうかく}の菩薩^{ぼさつ}が法門^{ほうもん}を説^{たま}き給^{たま}うとも經^{きやう}を手ににぎらざらんをば用^{もち}ゆべからず、「了義^{りやうぎ}經^{ぎよう}に依^よつて不^ふ了義^{りやうぎ}經^{ぎよう}に依^よらざれ」と定^{じやう}めて經^{きやう}の中^{なかつ}にも了義^{りやうぎ}・不^ふ了義^{りやうぎ}經^{ぎよう}を糾^{きゆう}明^{めい}して信受^{しんじゆ}すべきこそ候^{そうち}いぬれ、竜樹^{りゆうじゆ}菩薩^{ぼさつ}の十住^{じゆうじゆ}毘婆沙論^{びばしやもんろん}に云^いく「修多羅^{しゆたら}黑論^{くろろん}に依^よらずして修多羅^{しゆたら}白論^{はくろん}に依^よれ」等^ら云^いふ、天台大師^{てんだいだし}云^いく

「修多羅と合う者は録して之を用いよ文無く義無きは信受すべからず」等云云、伝教大師云く「仏説に依憑して口伝を信ずること其れ」等云云、円珍智証大師云く「文に依つて伝うべし」等云云、上にあぐるところの諸師の釈・皆一分・経論に依つて勝劣を弁うやうなれども皆自宗を堅く信受し先師の謬義をたださざるゆへに曲会私情の勝劣なり莊嚴己義の法門なり・仏滅後の犢子・方広・後漢已後の外典は仏法外の外道の見よりも三皇・五帝の儒書よりも邪見・強盛なり邪法・巧なり、華嚴・法相・真言等の人師・天台宗の正義を嫉ゆへに実經の文を会して權義に順ぜしむること強盛なり、しかれども道心あらん人・偏党をすて自他宗をあらそはず人をあなづる事なかれ。法華經に云く「已今当」等云云、妙樂云く「縦い經有つて諸經の王と云うとも已今当説最為第一と云わず」等云云、又云く「已今当の妙茲に於て固く迷う謗法の罪苦長劫に流る」等云云、此の經釈にをどろいて一切經・

並に人師にんしの疏釈じょを見るに狐疑こぎの氷こおりとけぬ今真言しんごんの愚者等ぐしゃ・印しんごん・真言のあるを
・たのみて真言宗しんごんしゅうは法華經ほけきょうにすぐれたりとをもひ慈覺大師等じかくだいしの真言勝しんごんすぐれたり
とをせられぬれば・なんど・をもえるは・いうにかいなき事甲斐なり。

密嚴經みつこんきょうに云くいわ十地華嚴等じゅうちげこんと大樹たいじゆと神通勝鬘じんつうしやうまんおよ及び余經よきやうと皆此みなの經よ從り出いで

たり、是かくの如ごときの密嚴經みつこんきょうは一切經いつさいきょうの中に勝すぐれたり・等云云だいうんきやう、大雲經たいうんきやうに云く

「是この經そくぜしきやうは即是諸經そくぜしきやうの轉輪聖王てんりんじやうおうなり何を以ての故もつに是ゆえの經典この中に衆生きやうてん

の実性ぶつじやう・仏性じやうじゆつ・常住ほうぞうの法藏せんぜつを宣說せんぜつする故なり・等云云ろくはらみつきやう、六波羅蜜經いに云く

「いわゆるかこむりよう所謂過去無量の諸仏しよぶつ・所說しよせつの正法しやうほう及び我今說われいまとく所の所謂八万四千の諸もろもろの

妙法みやうほう蘊おんなり、撰せんして五分なと為す一には索咀纜そたらん・二には毘奈耶びなや・三には阿毘

達磨だるま 四には般若波羅蜜はんにははらみつ・五には陀羅尼門だらにとなり此この五種ごしゆの藏ぞうをもつて有情うじやう

を教化きやうけす、若もし彼の有情契經調うじやうがいきやうじやうぶく伏対法般若はんにはやを受持じゆじすること能あたわす・或あるは復また

有情諸うじやうもろもろの惡業しじゆう・四重しじゆう・八重むげんつみほうとう・五無間罪方等經ほうを謗ほうする一闍提等いつせんたいの種種しゆじゆの重罪じゆうざい

を造るに銷滅して速疾に解脱し頓に涅槃を悟ることを得せしむ、而も彼が
ために諸の陀羅尼藏を説く、此の五の法藏譬えば乳・酪・生蘇・熟蘇及び妙な
る醍醐の如し、総持門とは譬えば醍醐の如し醍醐の味は乳・酪・蘇の中に
微妙第一にして能く諸の病を除き諸の有情をして身心安樂ならしむ、総持門
とは契経等の中に最も第一と為す能く重罪を除く、等云云、解深密經に云く
「爾の時に勝義生菩薩復仏に白して云く世尊・初め一時に於て波羅仙人
墮処施鹿林の中に在て唯声聞乗を發趣する者の為に四諦の相を以て正法輪
を轉じ給いき、是甚だ奇にして甚だ此れ希有なり一切世間の諸の天人等
・先より能く法の如く轉ずる者有ること無しと雖も、而も彼の時に於て轉じ
給う所の法輪は有上なり有容なり是れ未了義なり是れ諸の諍論安足の処所な
り、世尊在昔第二時の中に唯發趣して大乘を修する者の為に一切の法は
皆無自性なり無性無滅なり本来寂靜なり自性涅槃なるに依る隱密の相を以て

正法輪しょうほうりんを転たまじ給たまいき、更に甚はなはだだ奇きにして甚はなはだだ為けうれ希有いへどなりと雖も、彼の
時に於おいて転たまじ給たまう所の法輪ほうりん亦是これ有上うじょうなり容受なおいまする所有りやうぎり猶未なおいまだ了義りやうぎならず、
是これ諸もろもろの評論安足しよしよの処所せそんなり、世尊せそん今第三時おいの中に於あまねて普いっさいく一切乗ほつしゆを發趣ほつしゆす
る者の為ために一切いっさいの法みなむじせいは皆無自性むじょうむめつ・無生無滅ほんらいじやくせい・本来寂靜じしやうねはん・自性涅槃じしやうねはんにして
むじせい
無自性の性むじせいなるに依り顯けんりやう了の相もつしやうを以ほうりんて正法輪ほうりんを轉たまじ給たまう、第一だいいち甚はなはだだ奇に
して最も為もつともこれれ希有けうなり、今に世尊せそん轉たまじ給たまう所の法輪ほうりん・無上無容むじやうにして是れ真
の了義りやうぎなり諸もろもろの評論安息しよしよの処所あらに非あらず、等云云、大般若經はんによきやうに云く、「聽聞ちやうもんす
る所の世しゆつせ・出世しゆつせの法したがに随みなよつて皆能ほうべんく方便はんによじんして般若甚深えにゆうの理趣えにゆうに会入もろもろし諸の
造作ぞうさくする所の世間せけんの事業またはんも亦般若もつを以もつて法性ほつしやうに会入えにゆうし一事ほつしやうとして法性ほつしやうを
出いずる者を見ず、等云云、大日經だいじやう第一ひみつに云く、「秘密主だいじやう大乘行むえんあり無緣乘むえんの
心おこを發おこす法もつに我性無ゆえし何を以むかしかくての故ことに彼往昔しゆぎやう是ことの如しゆぎやうく修行しゆぎやうせし者の如ことく蘊おん
の阿頼耶あらやを觀察じしやうして自性幻じしやうの如ことしと知る、等云云、又云く、「秘密主ひみつ彼是かくの

ごとく無我を捨て心主自在にして自心の本不生を覺す」等云云、又云く「所謂空性は根境を離れ無相にして境界無く諸の戲論に越えて虚空に等同なり乃至極無自性」等云云、又云く「大日尊秘密主に告げて言く秘密主云何なるか菩提・謂く実の如く自心を知る」等云云、華嚴經に云く「一切世界の諸の群生声同乗を求めんと欲すること有ることし縁覺を求むる者転・復少し、大乘を求むる者甚だ希有なり大乘を求むる者猶為れ易く能く是の法を信ずる為れ甚だ難し、況や能く受持し・正憶念し・説の如く修行し眞實に解せんをや、若し三千大千界を以て頂戴すること一劫身動ぜざらんも彼の所作未だ為れ難からず是の法を信ずるは為れ甚だ難し、大千塵数の衆生の類に一劫諸の樂典を供養するも彼の功德未だ為れ勝れず是の法を信ずるは為れ殊勝なり、若し掌を以て十仏刹を持し虚空の中に於て住すること一劫なるも彼の所作未だ為れ難からず是の法を信ずるは為れ甚だ難し、十仏刹塵

の衆生の類に一劫諸の樂典を供養せんも彼の功德未だ勝れりと為さず是の法を信ずるは為れ殊勝なり、十仏刹塵の諸の如来を一劫恭敬して供養せん若し能く此の品を受持せん者の功德彼よりも最勝と為す」等云云、涅槃經に云く「是の諸の大乗方等經典復無量の功德を成就すと雖も是の經に比せんと欲するに喩を為すを得ざること百倍千倍百千万倍、乃至算數譬喩も及ぶこと能わざる所なり、善男子譬えば牛從り乳を出し乳從り酪を出し酪從り生蘇を出し生蘇從り熟蘇を出し熟蘇從り醍醐を出す醍醐は最上なり、若し服すること有る者は衆病皆除き所有の諸藥も悉く其の中に入るが如し、善男子仏も亦是くの如し仏從り十二部經を出し十二部經從り修多羅を出し修多羅從り方等經を出し方等經從り般若波羅蜜を出し般若波羅蜜從り大涅槃を出し猶醍醐の如し醍醐と言ふは仏性に喩う」等云云。

此等の經文を法華經の已今當・六難九易に相對すれば月に星をならべ九山

に須弥しゆみを合せたるにいたり、しかれども華嚴宗けこんしゅうの澄觀ちようかん・法相ほつそう・三論さんろん・真言等しんこん
の慈恩じおん・嘉祥かじょう・弘法等こうぼうの仏眼ぶつげんのごとくなる人・猶此なほの文にまどへり、何にいか
いわんやめくらめ況や盲眼のごとくなる当世とうせの学者等がくしゃ・勝劣しょうれつを弁わきまうべしや、黑白こくびやくのごとく・
あきらかに須弥しゆみ・芥子けしのごとくなる勝劣しょうれつなを・まどへり・いはんや虚空こくうのご
とくなる理に迷まよひざるべしや、教の浅深せんじんをしらざれば理の浅深せんじんを弁わきまうものな
し巻をへだて文前後すれば教門きようもんの色弁わきまえがたければ文を出して愚者を扶たすけん
とをもう、王に小王たいおう・大王いっさい・一切に少分むしょう・全分じようぶつ・五乳に全喻ぜんゆ・分喻ぶんゆを弁わきまうべ
し、六波羅蜜經は有情ろくはらみつきようの成仏じようぶつあつて無性の成仏むじようなし何に況いかや久遠実成いわんやくおんじつじようをあ
かさず、猶涅槃經なおねはんぎようの五味いかににをよばず何に況いや法華經の迹門しやくもん・本門ほんもんにたいすべ
しや、而るに日本しかの弘法大師にほん・此の經文きようもんにまどひ給たまいて法華經を第四ほけきようの
熟蘇味じゆくそみに入れ給たまえり、第五の總持門そうじもんの醍醐味だいごみすら涅槃經ねはんぎように及およばずいかにし給たまい
けるやらん、而るを震旦しんたんの人師争にんしつて醍醐だいごを盗ぬすむと天台等てんだいを盗ぬす人とかき給たまへ

り惜おしい哉かな古賢こけん醍醐だいごを嘗なめず等じと自歎じたんせられたり、此等これらはさてをく我が一門いちもんの者もののためにしるす他人たにんは信しんぜざれば逆縁ぎやくえんなるべし、一いつをなめて大海たいかいのしを・をしり一華いちけを見て春はるを推すいせよ、万里ばんりをわたて宋そうに入らずとも三箇年さんかんねんを経てへ靈山りやうぜんにいたらずとも竜樹りゆうじゆのごとく竜宮りゆうぐうに入らずとも無著菩薩むぢやくぼさつのごとく弥勒みろく菩薩ぼさつにあはずとも二所三會にしょさんかいに値あわずとも一代いちだいの勝劣しょうれつはこれをしれるなるべし、蛇じやは七日が内の洪水こうすいをしる竜りゆうの眷属けんぞくなるゆへ鳥は年中ねんぢゆうの吉凶きつきようをしれり過去かこに陰陽師おんようしなりしゆへ鳥はとゞ徳人とくじんにすぐれたり。

日蓮にちれんは諸經しよきやうの勝劣しょうれつをしること華嚴けごんの澄觀ちやうかん・三論さんろんの嘉祥かじやう・法相ほつそうの慈恩じおん・真言しんごんの弘法こうぼうにすぐれたり、天台てんだい・伝教でんぎやうの跡あとをししのぶゆへなり、彼の人人ひとびとは天台てんだい・伝教でんぎやうに帰かへせさせ給たまはずば謗法ぼうぼうの失脱しつだつれさせ給たまうべしや、当世とうせ・日本国にほんこくに第一だいいちに富ふめる者は日蓮にちれんなるべし命いのちは法華經ほけきやうにたてまつり名なをば後代ごだいに留とどべし、大海たいかいの主しゅとなれば諸もろの河神みな・皆みなしたがう須弥山しゆみせんの王わうに諸もろの山神さんじんしたがはざる

べしや、法華經の六難九易を弁うれば一切經よまざるにしたがうべし。

宝塔品の三箇の勅宣の上に提婆品に二箇の諫曉あり、提婆達多は一闍提

なり天王如来と記せらる、涅槃經四十卷の現証は此の品にあり、善星・

阿闍世等の無量の五逆・謗法の者の一をあげ頭をあげ万を・をさめ枝をした

がふ、一切の五逆・七逆・謗法・闍提・天王如来にあらはれ了んぬ毒藥變じ

て甘露となる衆味にすぐれたり、竜女が成仏此れ一人にはあらず一切の女人

の成仏をあらはす、法華已前の諸の小乗教には女人の成仏をゆるさず、

諸の大乗經には成仏・往生をゆるすやうなれども・或は改転の成仏にし

て一念三千の成仏にあらざれば有名無実の成仏往生なり、拳一例諸と申し

て竜女が成仏は末代の女人の成仏往生の道をふみあけたるなるべし、儒家

の孝養は今生にかかる未来の父母を扶けざれば外家の聖賢は有名無実なり、

外道は過未をしれども父母を扶くる道なし仏道こそ父母の後世を扶くれば

せいけん

聖賢の名はあるべけれ、しかれども法華經已前等の大小乗の經宗は自身

とくとうな

の得道猶かなひがたし何に況や父母をや但文のみあつて義なし、今法華經の

によんにじようぶつ

時こそ女人成仏の時・悲母の成仏も顕われ・達多の悪人成仏の時・慈父の

じようぶつ

あら

ほうしう

ないてん

こうきよう

おわ

成仏も顕われる、此の經は内典の孝經なり、一箇のいさめ了んぬ。

ほうしう

かんじほん

めいきよう

きようもん

已上五箇の鳳詔にをどろきて勸持品の弘經あり、明鏡の經文を出して

とうせ

ねんぶつ

なら

しよだんな

ほうぼう

にちれん

当世の禅・律・念仏者・並びに諸檀那の謗法をしらしめん、日蓮といふし者

こそ

うし

こ

こんばく

は去年九月十二日子丑の時に頸はねられぬ、此れは魂魄・佐土の国にいたり

かえるとし

うえん

でし

贈

畏

拍

て返年の二月・雪中にしるして有縁の弟子へをくればをそろしくて・をそろ

しからず・みんないかに・をぢぬらむ、此れは釈迦・多宝・十方の諸仏の

こ

しゃか

たほう

じゆつぼう

しよぶつ

みらいにほんこく・当世をうつし給う明鏡なりかたみともみるべし。

みらいにほんこく

とうせ

たま

めいきよう

畏

拍

未来日本国・当世をうつし給う明鏡なりかたみともみるべし。

かんじほん

いわ

ただ

うらおもい

ほとけめつど

くふあくせ

勸持品に云く「唯願くは慮したもつべからず仏滅度の後恐怖悪世の中に於

われらまさ

もろもろ

むち

めり

およ

て我等当に広く説くべし、諸の無智の人の悪口罵詈等し及び刀杖を加うる

者有らん我等皆当に忍ぶべし、惡世の中の比丘は邪智にして心諂曲に未だ得ざるを為れ得たりと謂い我慢の心充滿せん、・或阿練若に納衣にして空閑に在つて自ら眞の道を行ずと謂つて人間を輕賤する者有らん利養に貪著するが故に白衣の与に法を説いて世に恭敬せらるることを為ること六通の羅漢の如くならん、是の人惡心を懷き常に世俗の事を念い名を阿練若に仮て好んで我等が過を出さん、常に大衆の中に在つて我等を毀らんと欲するが故に國王・大臣・婆羅門・居士及び余の比丘衆に向つて誹謗して我が惡を説いて是れ邪見の人外道の論議を説くと謂わん、濁劫惡世の中には多く諸の恐怖有らん惡鬼其身に入つて我を罵詈毀辱せん、濁世の惡比丘は仏の方便隨宜の所説の法を知らず惡口し顰蹙し数数擯出せられん」等云云、記の八に云く「文に三初に一行は通じて邪人を明す即ち俗衆なり、次に一行は道門増上慢の者を明す、三に七行は僭聖

ぞうじょうまん

増上慢の者を明す、此の三の中に初は忍ぶ可し次の者は前に過ぎたり第三最

はなは

も甚だし後後の者は転識り難きを以ての故に」等云云、東春に智度法師云く

「初に有諸より下の五行は第一に一偈は三業の悪を忍ぶ是れ外悪の人なり次

あくせ

に悪世の下の一偈は是上慢出家の人なり第三に・或有阿練若より下の三偈は

そくぜしゅつけ

即是出家の処に一切の悪人を損す」等云云、又云く「常在大衆より下の両

行は公処に向つて法を毀り人を謗す」等云云、涅槃經の九に云く「善男子・

いっせんたい

一闍提有り羅漢の像を作して空処に住し方等大乘經典を誹謗せん諸の凡夫

おわ

人見已つて皆眞の阿羅漢是大菩薩なりと謂わん」等云云、又云く「爾の時には是の

えんぶ

經闍浮提に於て当に広く流布すべし、是の時に当に諸の惡比丘有つて是の經

を抄略し分ちて多分と作し能く正法の色香美味を滅すべし、是の諸の惡人

また

復是くの如き經典を誦誦すと雖も如来の深密の要義を滅除して世間の莊嚴の

もんしきむぎ

文飾無義の語を安置す前を抄して後に著け後を抄して前に著け前後を中に

著け中を前後に著く当に知るべし是くの如きの諸の惡比丘は是れ魔の伴侶なり等云云、六卷の般泥・經に云く「阿羅漢に似たる一闍提有つて惡業を行ず、一闍提に似たる阿羅漢あつて慈心を作さん羅漢に似たる一闍提有りとは是の諸の衆生方等を誹謗するなり、一闍提に似たる阿羅漢とは聲聞を毀せし廣く方等を説くなり衆生に語つて言く我れ汝等と俱に是れ菩薩なり所以は何ん一切皆如来の性有る故に然も彼の衆生一闍提なりと謂わん」等云云、涅槃經に云く「我涅槃の後乃至正法滅して後・像法の中に於て当に比丘有るべし持律に似像して少か
に經を讀誦し飲食を貪嗜し其の身を長養す、袈裟を服ると雖も猶獵師の細視徐行するが如く猫の鼠を伺うが如し、常に是の言を唱えん我羅漢を得たりと外には賢善を現わし内には貪嫉を懷かん唾法を受けたる婆羅門等の如し、実に沙門に非ずして沙門の像を現じ邪見熾盛にして正法を誹謗せん」等云云。

そ じゅうほう そうりん にちがつ ひたん
夫れ驚 峯・雙林の日月・毘湛・東春の明鏡に当世の諸宗並に国中の禪・
ねんぶつ しゅうめん
律念仏者が醜面を浮べたるに一分もくもりなし、妙法華經に云く「於
ぶつめつとく ふあくせ あんらくぎょうぼん いわ
仏滅度後恐怖惡世中」安樂行品に云く「於後惡世」又云く「於末世中」又云く
「おこまつせ ほうよくめつじ ぶんべつとく いわ あくせまつぼう やくおうぼん いわ
於後末世法欲滅時」分別功德品に云く「惡世末法時」藥王品に云く「後・
ほけきょう
五百歳」等云云、正法華經の勸説品に云く「然後末世」又云く「然後來末世」
てんぼんほけきょう いわ てんだい いわ ぞうぼう
等云云、添品法華經に云く等、天台の云く、像法の中の南三北七は法華經の怨敵
でんぎょう いわ ぞうぼう
なり、傳教の云く「像法の末・南都・六宗の学者は法華の怨敵なり」等云
かれら ふんみょう なんと ろくしゅう がくしゃ ほっけ おんてき にちがつ
云、彼等の時はいまだ分明ならず、此は教主釈尊・多宝仏・宝塔の中に日月
の並ぶがごとく十方分身の諸仏・樹下に星を列ねたりし中にして正法一千
ぞうほう
年・像法一千年・二千年すぎて末法の始に法華經の怨敵三類あるべしと八十
なゆた しよぼさつ こもう とうせ によういめつこ
万億那由佗の諸菩薩の定め給いし虚妄となるべしや、当世は如来滅後二千二
だいち ささ
百余年なり大地は・指ばはづるとも春は・花は・さかずとも三類の敵人・必

にほんこく

ず日本国にあるべし、さるにてはたれたれの人人か三類の内なるらん又誰人

ほけきよう

か法華經の行者なりとさされたるらんをばつかなし、彼の三類の怨敵に我等

ほけきよう

入りてやあるらん又法華經の行者の内にてやあるらんをばつかなし、周の第

しょうよう

四昭王の御宇二十四年甲寅・四月八日の夜中に天に五色の光氣・南北に

わた

亘りて昼のごとし、大地・六種に震動し雨ふらずして江河・井池の水まさり

いっさい

一切の草木に花さき菓なりたりけり不思議なりし事なり、昭王・大に驚き

たいし

大史・蘇由・占つて云く、「西方に聖人生れたり」昭王問て云く、「此の国い

かん

かん」答えて云く、「事なし一千年の後に彼の聖言此の国にわたつて衆生を利

すべし

すべし」彼のわづかの外典の一毫未断・見思の者・しかれども一千年のこと

をしる

をしる、はたして仏教・一千一十五年と申せし後漢の第二・明帝の永平十年

ひのとう

丁卯の年・仏法・漢土にわたる、此は似るべくもなき釈迦多宝十方分身の仏

おんまえ

の御前の諸菩薩の未来記なり、当世・日本国に三類の法華經の敵人なかるべ

しや、されば仏付法藏經等に記して云く、「我が滅後に正法 一千年が間・我が
正法を弘むべき人・二十四人次第に相續すべし」迦葉・阿難等はさてをきぬ
一百年の脇比丘・六百年の馬鳴・七百年の竜樹菩薩等・一分もたがはずで
に出で給いぬ、此の事いかながむなしかるべき此の事相違せば一經・皆相違
すべし、所謂舍利弗が未來の華光如來・迦葉の光明如來も皆妄語となるべし、
爾前返つて一定となつて永不成仏の諸声聞なり、犬野干をば供養すとも阿難
等をば供養すべからずとなん、いかながせん・いかながせん。

第一の有諸無智人と云うは經文の第二の惡世中比丘と第三の納衣の比丘の
大檀那と見へたり、随つて妙樂大師は「俗衆」等云云、東春に云く「公処
に向う」等云云、第二の法華經の怨敵は經に云く「惡世中の比丘は邪智にし
て心諂曲に未だ得ざるを為れ得たりと謂い我慢の心充滿せん」等云云、涅槃經
に云く「是の時に當に諸の惡比丘有るべし乃至是の諸の惡人復是くの如き

きうてん どくじゆ 經典を讀誦すと雖も如来深密の要義を滅除せん」等云云、止觀に
いわ も 云く「若し信無きは高く聖境に推して己が智分に非ずとす、若し智無きは
ぞうじようまん 増上慢を起し己れ仏に均しと謂う」等云云、道綽禪師が云く「二に理深解微
なるに由る」等云云、法然云く「諸行は機に非ず時を失う」等云云、記の十
に云く「恐くは人謬り解せん者初心の功德の大なることを識らずして功を上
ゆずり 位に推り此の初心を蔑にせん故に今彼の行浅く功深きことを示して以て經力
あらわ を顯す」等云云、伝教大師云く「正像稍過ぎ已て末法太はだ近きに有り
ほっけいちじよう 法華一乗の機今正しく是其の時なり何を以て知ることを得る安樂行品に
いわ まっせほうめつ 云く末世法滅の時なり」等云云、慧心の云く「日本一州円機純一なり」等云
どうしゃく 云、道綽と伝教と法然と慧心といづれ此を信ずべしや、彼の一切經に証文
こ なし此れは正しく法華經によれり、其の上・日本国・一同に叡山の大師は受戒
なん てんま の師なり何ぞ天魔のつける法然に心をよせ我が剃頭の師をなげすつるや、
ほうねん ほうねん

ほうねんちしゃ
法然智者ならば何ぞ此の釈を選^{せん}択^{ちやく}に載せて和会せざる人の理をかくせる者なり、第二の悪世中比丘と指さるるは法然等の無戒邪見の者なり、涅槃經に云く
「我れ等悉く邪見の人と名く」等云云、妙樂云く「自ら三教を指して皆邪見と名く」等云云、止觀に云く「大經に云く此よりの前は我等皆邪見の人と名くるなり、邪豈惡に非ずや」等云云、弘決に云く「邪は即ち是れ惡なり是の故に当に知るべし唯円を善と為す、復二意有り、一には順を以つて善と為し背を以つて惡と為す相待の意なり、著を以つて惡と為し達を以つて善と為す相待・絶待俱に須く惡を離るべし円に著する尚惡なり況や復余をや」等云云、外道の善惡は小乗經に對すれば皆惡道小乗の善道・乃至四味三教は法華經に對すれば皆邪惡但法華のみ正善なり、爾前の円は相待妙なり、絶待妙に對すれば猶惡なり前三教に擯すれば猶惡道なり、爾前のごとく彼の經の極理を行ずる猶惡道なり、況や觀經等の猶華嚴・般若經等に及ばざ

る小法を本として法華經を觀經に取り入れて還つて念仏に對して閣拋閉捨せ
るは法然並びに所化の弟子等檀那等は誹謗正法の者にあらずや、釈迦・多宝
・十方の諸仏は法をして久しく住せしめんが故に此に來至し給えり、法然並
に日本國の念佛者等は法華經は末法に念佛より前に滅尽すべしと豈三聖の
怨敵にあらずや。

第三は、法華經に云く、「或は阿練若に有り納衣にして空閑に在つて乃至
白衣の与に法を説いて世に恭敬せらるることを為ること六通の羅漢の如くな
らん」等云云、六卷の般泥經に云く、「羅漢に似たる一闍提有つて惡業を行
じ一闍提に似たる阿羅漢あつて慈心を作さん、羅漢に似たる一闍提有りとは
是諸の衆生の方等を誹謗するなり一闍提に似たる阿羅漢とは聲聞を毀訾し
て広く方等を説き衆生に語つて言く我汝等と俱に是れ菩薩なり所以は何ん
一切皆如來の性有るが故に然かも彼の衆生は一闍提と謂わん」等云云、涅槃經

に云く「我れ涅槃の後・像法の中に当に比丘有るべし持律に似像して少かに
經典を讀誦し飲食を貪嗜して其の身を長養せん袈裟を服ると雖も猶獵師の
細視徐行するが如く猫の鼠を伺うが如し、常に是の言を唱えん我羅漢を得た
りと外には賢善を現し内には貪嫉を懷く誑法を受けたる婆羅門等の如く實に
は沙門に非ずして沙門の像を現し邪見熾盛にして正法を誹謗せん」等云云、
妙樂云く「第三最も甚し後後の者轉識り難きを以つての故に」等云云、東春
云く「第三に・或有阿練若より下の三偈は即是出家の処に一切の惡人を撰す」
等云云、東春に「即是出家の処に一切の惡人を撰する」等とは当世・日本国
には何れの処ぞや、叡山か園城か東寺か南都か建仁寺か寿福寺か建長寺か
・よくよく・たづぬべし、延曆寺の出家の頭に甲冑をよろうをさすべきか、
園城寺の五分法身の膚に鎧杖を帶せるか、彼等は經文に納衣在空閑と指す
にはにず為世所恭敬如六通羅漢と人をもはず又轉難識故というべしや華洛に

は聖一等・鎌倉には良觀等りようかんにいたり、人をあだむことなかれ眼まなこあらば經文きやうもんに我が身をあわせよ、止觀しかんの第一だいいちに云く「止觀しかんの明静めいじやうなることは前代ぜんだい未だ聞かず」等云云、弘くの一いに云く「漢みんていの明帝夜夢めいていみし自より陳朝ちんてうにぶまで禪門ぜんもんにあすか まじわり いはつ でんじゆ予あすかり廁まじわりて衣鉢いふく伝授でんじゆする者」等云云、補注いに云く「衣鉢いふく伝授でんじゆとは達磨だるまを指す」等云云、止いの五いに云く「又一種なの禪人な・乃至盲跛なの師徒と二俱とに墮落だらくす」等云云、止いの七いに云く「九せの意世間もんじの文字ほつしの法師ほつしと共ならず、事相じさうの禪師ぜんしと共ならず、一種ぜんの禪師ただかんじんは唯觀心ただかんじんの一意あるのみ有り・或は浅く・或は偽いつわる余あるの九あるは全く此そ無し虚言そに非ず後賢眼けんがん有らん者まさは当に証知あすべきなり、弘くの七いに云く「文字もんじ法師ほつしとは内かんげに觀解くわんげ無なくして唯法相ただほつさうを構くう事相じさうの禪師ぜんしとは境智きやうちを閑ならわずもんじ鼻膈びかくに心を止む乃至根本ないしこんぽん有漏定うろうじやう等なり、一師いつし唯有觀心いっしゆい一意うかんじん等とは此しは且しばくひかく与なて論なを為す奪すなえば則かち觀解くわんげ俱ともに闕かく、世間せけんの禪人ひと偏ひとえに理觀なを尚なぶす既に教すを諳そんぜず觀そを以そつて經を消し八邪八風を数えて丈六の仏と為し五陰三毒を

合して名けて八邪と為し六入を用いて六通と為し四大を以つて四諦と為す、
此くの如く經を解するは偽の中の偽なり何ぞ浅くして論ず可けんや」等云云、
止觀の七に云く「昔 洛の禪師名河海に播き住するときは四方雲の如くに
仰ぎ去るときは阡陌群を成し隱隱轟轟亦何の利益か有る、 臨終に皆悔ゆ」
等云云、弘の七に云く「・洛の禪師とは 是相州に在り即ち齊魏の都する
所なり、大に仏法を興す禪祖の一・其の地を王化す、時人の意を譲りて其の
名を出さず洛は即ち洛陽なり」等云云、六卷の般泥 經に云く「究竟の処を
見ずとは彼の一闡提の輩の究竟の惡業を見ざるなり」等云云、妙樂云く「第
三最も甚だし轉識り難きが故に」等、無眼の者・一眼の者・邪見の者は末法
の始の三類を見るべからず一分の仏眼を得るもの此れをしるべし、向國王・
大臣・婆羅門・居士等云云、東春に云く「公処に向い法を毀り人を謗ず」等
云云、夫れ昔像法の末には護命・修円等・奏 状をささげて伝 教大師を讒奏

す、今末法の始には良觀・念阿等偽書を注して將軍家にささぐ・あに三類の怨敵にあらずや。

とうせ ねんぶつ てんだいほつけしゅう だんな こくおう だいじん ばらもん こじ
当世の念仏者等・天台法華宗の檀那の国王・大臣・婆羅門・居士等に向つて云く「法華経は理深我等は解微法は至つて深く機は至つて浅し」等と申しうとむるは高推聖境・非己智分の者にあらずや、禅宗の云く「法華経は月をさす指・禅宗は月なり月をえて指なにかせん、禅は仏の心・法華経は仏の言なり仏・法華経等の一切経をとかせ給いて後・最後に一ふさの華をもつて迦葉一人にさづく、其のしるしに仏の御袈裟を迦葉に付属し乃至付法蔵の二十八・六祖までに伝う」等云云、此等の大妄語國中を誑酔せしめてとしひさし、又天台・真言の高僧等名は其の家にえたれども我が宗にくらし、貪欲は深く公家・武家を・をそれて此の義を証伏し讚歎す、昔の多宝・分身の諸仏は法華経の令法久住を証明す、今天台宗の碩徳は理深解微を証伏せり、

かるがゆへに日本国に但法華經の名のみあつて得道の人・一人もなし、誰を
か法華經の行者とせん、寺塔を焼いて流罪せらるる僧侶は・かずをしらず、
公家・武家に諛う・てにくまるる高僧これ多し、此等を法華經の行者とい
べきか。

仏語むなしからざれば三類の怨敵すでに国中に充滿せり、金言のやぶるべ
きかのゆへに法華經の行者なし・いかがせん・いかがせん、抑たれやの人
か衆俗に悪口罵詈せらるる誰の僧か刀杖を加へらるる、誰の僧をか法華經の
ゆへに公家・武家に奏する・誰の僧か数数見擯出と度度ながさるる、日蓮よ
り外に日本国に取り出さんとするに人なし、日蓮は法華經の行者にあらず天
これを・すて給うゆへに、誰をか当世の法華經の行者として仏語を実語とせ
ん、仏と提婆とは身と影とのごとし生生にはなれず聖徳太子と守屋とは蓮華
の花華・同時なるがごとし、法華經の行者あらば必ず三類の怨敵あるべし、

三類は・すでにあり法華經の行者は誰なるらむ、求めて師とすべし一眼の龜の浮木に値うなるべし。

有る人云く当世の三類はほぼ有るにいたり、但し法華經の行者なし汝を法華經の行者といはんとすれば大なる相違あり、此の經に云く「天の諸の童子以て給使を為さん、刀杖も加えず、毒も害すること能わざらん」又云く「若し人惡罵すれば口則閉塞す」等、又云く「現世には安穩にして後・善処に生れん」等云云、又「頭破れて七分と作ること阿梨樹の杖の如くならん」又云く「亦現世に於て其の福報を得ん」等又云く「若し復是の經典を受持する者を見て其の過惡を出せば若しは實にもあれ若しは不實にもあれ此の人現世に白癩の病を得ん」等云云、答えて云く汝が疑い大に吉しついでに不審を晴さん、不輕品に云く「惡口罵詈」等、又云く「・或は杖木瓦石を以て之を打擲す」等云云、涅槃經に云く「若しは殺若しは害」等云云、法華經

に云く「しかも此の経は如来の現在すら猶怨嫉多し」等云云、仏は小指を提婆にやぶられ九横の大難に値い給う此は法華經の行者にあらざるや、不輕菩薩は一乗の行者といはれまじきか、目連は竹杖に殺さる法華經記の後なり、付法蔵の第十四の提婆菩薩・第二十五の師子尊者の二人は人に殺されぬ、此等は法華經の行者にはあらざるか、竺の道生は蘇山に流されぬ法道は火印を面にやいて江南にうつさる・此等は一乗の持者にあらざるか、外典の者なりしかども白居易北野の天神は遠流せらる賢人にあらざるか、事の心を案ずるに前生に法華經・誹謗の罪なきもの今生に法華經を行ずこれを世間の実によせある・或は罪なきをあだすれば忽に現罰あるか・修羅が帝釈を射る金翅鳥の阿耨池に入る等必ず返つて一時に損するがごとし、天台云く「今・我が疾苦は皆過去に由る今生の修福は報・将来に在り」等云云、心地觀經に曰く「過去の因を知らんと欲せば其の現在の果を見よ未来の果を知らんと欲せば

其の現在の因を見よ」等云云、不輕品に云く「其の罪畢已」等云云、不輕菩薩
は過去に法華經を謗じ給う罪・身に有るゆへに瓦石をかほるとみへたり、又
順次生に必ず地獄に墮つべき者は重罪を造るとも現罰なし一闡提人これな
り、涅槃經に云く「迦葉菩薩・仏に白して言く世尊・仏の所説の如く大涅槃
の光一切衆生の毛孔に入る」等云云、又云く「迦葉菩薩・仏に曰して言く世尊
云何んぞ未だ菩提の心を發さざる者・菩提の因を得ん」等云云、仏・此の問
を答えて云く「仏迦葉に告わく若し是の大涅槃經を聞くこと有つて我菩提心
を發すことを用いずと言つて正法を誹謗せん、是の人即時に夜夢の中に羅刹
の像を見て心中怖畏す羅刹語つて言く咄し善男子汝今若し菩提心を發さず
んば當に汝が命を断つべし是の人惶怖し寤め已つて即ち菩提の心を發す當に
是の人は是れ大菩薩なりと知るべし」等云云、いたうの大惡人ならざる者が正法
を誹謗すれば即時に夢みて・ひるがへる心生ず、又云く「枯木・石山」等、

又云く「い懃しゅうしゅう種かん甘雨らうに遇いうと雖えいも」等・又「み明よう珠じゆ淤お泥」等、又云く「い人の手
に創きずあるに毒藥とを捉とるが如ごとし」等、又云く「い大雨だいう空に住すぜず」等云云、此等
多くの譬たとえあり、詮せんずるところ上品じようばんの一闡いつせん提人だいじんになりぬれば順次じゆんじ生しょうに必ず
無間むげん獄ごくに墮おつべきゆへに現罰げんばちなし例せば夏かのの桀けつ・殷いんの紂ちゆうの世には天変てんべんなし
重科じゅうか有あて必ず世せほろぶべきゆへか、又守護神しゅごじん此国こをすつるゆへに現罰げんばちなきか
謗法ぼうぼうの世をば守護神しゅごじんすて去しより諸天しよてんまほるべからずかるがゆへに正法しやうぼうを行しずる
ものにしるしなし還かえつて大難だいなんに値あうべし金光明経こんこうみやうきやうに云く「善業ぜんごうを修しゆする者
は日日すいじつに衰滅すいめつす」等云云、惡国あくこく・惡時あくじこれなり具ぐさには立正安国論りつしやうあんこくろんにかんが
へたるがごとし。

詮せんずるところは天たもすて給たまへ諸難しよなんにもあえ身命しんみやうを期きとせん、身子しんしが六十劫ろくじやく
の菩薩ぼさつの行を退たせし乞眼きげんの婆羅門ばらもんの責たを堪たえざるゆへ、久遠大通くおんだいの者の三五
の塵ちりをふる惡知識あくちしきに値あうゆへなり、善ぜんに付け惡まけにつけ法華經ほふけきやうをすつるは地獄じごく

の業なるべし、大願を立てん日本国の位をゆづらむ、法華經をすてて觀經等

について後生をこせよ、父母の頸を刎ん念仏申さずば、なんどの種種の大難

・出来すとも智者に我義やぶられずば用いじとなり、其の外の大難・風の前

の塵なるべし、我日本の柱とならむ我日本の眼目とならむ我日本の大船とな

らむ等とちかいし願やぶるべからず。

疑つて云くいかにとして汝が流罪・死罪等を過去の宿習としらむ、答

えて云く銅鏡は色形を顯わす秦王・驗偽の鏡は現在の罪を顯わす仏法の鏡は

過去の業因を現ず、般泥經に云く「善男子過去に曾て無量の諸罪種種の

悪業を作るに是の諸の罪報は・或は輕易せられ・或は形状醜陋・衣服足

らず・飲食ソソ・財を求むるに利あらず貧賤の家邪見の家に生れ・或は王難

に遭い・及び余の種種の人間の苦報あらん現世に軽く受るは斯れ護法の功德

力に由るが故なり」云云、此の經文日蓮が身に宛も符契のごとし狐疑の氷と

けぬ千万の難も由なし――の句を我が身にあわせん、・或被輕易等云云、
法華經に云く「輕賤憎嫉」等云云・二十余年が間の輕慢せらる、・或は
形狀醜陋・又云く衣服不足は予が身なり飲食ソソは予が身なり求財不利は
予が身なり生貧賤家は予が身なり、・或遭王難等・此の經文疑うべしや、
法華經に云く「數數擯出せられん」此の經文に云く「種種」等云云、斯由
護法功德力故等とは摩訶止觀の第五に云く「散善微弱なるは動せしむること
能わず今止觀を修して健病 ぎれば生死の輪を動ず」等云云、又云く
「三障四魔紛然として競い起る」等云云我れ無始より・このかた惡王と生れ
て法華經の行者の衣食・田畠等を奪いとりせしこと・かずしらず、当世・
日本國の諸人の法華經の山寺をたうすがごとし、又法華經の行者の頸を刎
こと其の数をしらず此等の重罪はたせるもあり・いまだ・はたさざるも・あ
るらん、果すも余残いまだ・つきず生死を離るる時は必ず此の重罪をけしは

てて出離しゅつりすべし、功德くどくは浅軽せんけいなり此等これらの罪つみは深重じんじゆうなり、権經ごんきやうを行ぜしには
此この重罪じゆうざいいまだ・をこらず鉄くろがねを熱あさのみにいたう・きたわざればきず隠れてみえ
ず、度度たびたびせむれば・きずあらはる、麻子あさのみを・しばるに・つよくせめざれば油
少すくきがごとし、今にちれん日蓮じつれん・強盛じやうじやうに国土こくどの謗法ほうほうを責せむれば此この大難だいなの来るは
過去かこの重罪じゆうざいの今生こんじやうの護法ごほうに招き出だせるなるべし、鉄くろがねは火に値あわざれば
黒し火と合あいぬれば赤し木をもつて急はやきな流なをかけば波山なみのごとし睡ねむれる師子しし
に手をつくれば大おおに吼ほゆ。

涅槃經ねはんぎやうに曰いわく「譬たとえば貧女ひんによの如ごとし居家救護くごの者有あること無なくく加まうるに復病また
苦飢渴けかちに逼せめられて遊行乞丐じやうぎす、他の客舎きやくしゃに止とり一子いっしを寄生けいじやうす是この客舎きやくしゃの主
驅逐くちくして去らしむ、其その産うんで未いまだ久くしからず是この児こをけいほうして他国たこくに至いたら
んと欲そし、其その中路おちに於あくふうう遇あつて寒苦な並び至いたり多おほく蚊虻蜂ぶんぼうほうしや毒虫どくちゆうの
食くう所ところとなる、恒河じやうがに由ゆし兒こを抱かかいて渡わたる其その水漂ひやうしつ疾しかなれども而しかも放はなち捨す

てず是に於て母子遂に共俱に没しぬ、是くの如き女人慈念の功德 命終の後
梵天に生ず、文殊師利若し善男子有つて正法を護らんと欲せば彼の貧女の
恒河に在つて子を愛念するが為に身命を捨つるが如くせよ、善男子護法の
菩薩も亦是くの如くなるべし、寧ろ身命を捨てよ是くの如きの人解脱を求め
ずと雖も解脱自ら至ること彼の貧女の梵天を求めざれども梵天自ら至るが
如し、等云云、此の経文は章安大師・三障をもつて釈し給へり、それをみ
るべし、貧人とは法財のなきなり女人とは一分の慈ある者なり、客舎とは穢土
なり一子とは法華經の信心・了因の子なり舍主駈逐とは流罪せらる其の産し
て未だ久しからずとはいまだ信じて・ひさしからず、悪風とは流罪の勅宣な
り蚊虻等とは諸の無智の人有り悪口罵詈等なり母子共に没すとは終に法華經
の信心をやぶらずして頸を刎らるるなり、梵天とは仏界に生るるをいうなり
引業と申すは仏界までかはらず、日本漢土の万国の諸人を殺すとも五逆・謗法

なければ無間地獄には墮ちず、余の惡道にして多歳をふべし、色天に生るる
こと万戒を持てども万善を修すれども散善にては生れず、又梵天王となる事
・有漏の引業の上に慈悲を加えて生ずべし、今・此の貧女が子を念うゆへに
梵天に生る常の性相には相違せり、章安の二はあれども詮ずるところは子
を念う慈念より外の事なし、念を一境にする、定に似たり 專子を思う又慈悲
にも・にたり、かるがゆへに他事なけれども天に生るるか、又仏になる道は
華嚴の唯心法界・三論の八不・法相の唯識・真言の五輪親等も実には叶うべ
しともみへず、但天台の一念三千こそ仏になるべき道とみゆれ、此の一念三千
も我等一分の慧解もなし、而ども一代経經の中には此の経計り一念三千の
玉をいだけり、余経の理は玉に・にたる黄石なり沙をしぼるに油なし石女に
子のなきがごとし、諸経は智者・猶仏にならず此の経は愚人も仏因を種べし
ふくげだつ げだつ 我並びに我が弟子・諸難ありとも疑う心な
不求解脱・解脱自至等と云云、

くば自然に仏界にいたるべし、天の加護なき事を疑はざれ現世の安穩ならざる事をなげかざれ、我が弟子に朝夕教えしかども・疑いを・をこして皆すてけんつたなき者のならひは約束せし事を・まことの時は・わするるなるべし、妻子を不便と・をもうゆへ現身にわかれん事を・なげくらん、多生曠劫に・したしみし妻子には心とはなれしか仏道のために・はなれしか、いつも同じわかれなるべし、我法華經の信心をやぶらずして靈山にまいりて返てみちびけかし。

疑つて云く念仏者と禪宗等を無間と申すは諍つ心あり修羅道にや墮つべかるらむ、又法華經の安樂行品に云く「樂つて人及び經典の過を説かざれ亦諸余の法師を輕慢せざれ」等云云、汝此の經文に相違するゆへに天にすてられたるか、答て云く止觀に云く「夫れ仏に兩説あり一には撰・二には折・安樂行に不称長短」といふ如き是れ撰の義なり、大經に刀杖を執持し乃至

首を斬れという是れ折の義なり与奪・途を殊にすと雖も俱に利益せしむ」等
云云、弘決に云く「夫れ仏に両説あり等とは大經に刀杖を執持すとは第三
に云く正法を護る者は五戒を受けず威儀を修せず、乃至下の文仙予國王等の
文、又新医禁じて云く若し更に為すこと有れば当に其の首を断つべし是くの
如き等の文並びに是れ破法の人を折伏するなり一切の經論此の二を出でず」
等云云、文句に云く「問う大經には國王に親付し弓を持ち箭を帶し惡人を摧伏
せよと明す、此の經は豪勢を遠離し謙下慈善せよと剛柔頌いに乖く云何ぞ異
ならざらん、答う大經には偏に折伏を論ずれども一子地に住す何ぞ曾て
損受無からん、此の經には偏に損受を明せども頭破七分と云う折伏無きに
非ず各一端を挙げて時に適う而已」等云云、涅槃經の疏に云く「出家在家
法を護らんには其の元心の所為を取り事を棄て理を存して匡に大經を弘む
故に護持正法と言うは小節に拘わらず故に不修威儀と言うなり、昔の時は平

にして法弘ひろまる応まさに戒かいを持つべし杖しやうを持つこと勿なれ今の時は嶮けんにして法翳かく
応まさに杖しやうを持つべし戒かいを持つこと勿なれ、今昔こんじゃく俱ともに嶮けんならば俱ともに杖しやうを持つべし
今昔こんじゃく俱ともに平へいならば俱ともに戒かいを持つべし、取捨しゆしや宜よろきを得えて一向いっしやうにす可べからず」等
云云、汝なんじが不審ふしんをば世間せけんの学者がくしや・多分たぶん・道理どうりとをもつ、いかに諫かんぎ曉ようすれど
も日蓮にちれんが弟子でし等も此このをもひをすてず一闡いつせん提人だいじんの・ごとくなるゆへに先づ
天台てんだい・妙楽みやうりやく等の釈しやくをいだして・かれが邪難じやなんをふせぐ、夫それ摂受しやくじゆ・折伏しやくぶくと
申もうす法門ほつもんは水火すいかのごとし火は水をいとう水は火をにくむ、摂受しやくじゆの者は折伏しやくぶく
をわらう折伏しやくぶくの者は摂受しやくじゆをかなしむ、無智むち・悪人あくにんの国土こくどに充満じゆうまんの時は摂受しやくじゆ
を前まへとす安樂行品あんらくぎやうほんのごとし、邪智じやち・謗法ぼうほうの者の多き時は折伏しやくぶくを前まへとす
常不輕品じやうふぎやうほんのごとし、譬たとへば熱き時に寒水むすいを用もちい寒き時に火をこのむがごとし、
草木そうもくは日輪にちりんの眷属けんぞく・寒月かんげつに苦くるをう諸水しよすいは月輪しよくりんの所従しよじゆ・熱う時に本性うしなを失うし、
末法まつぽうに摂受しやくじゆ・折伏しやくぶくあるべし所謂いわゆる惡国はほう・破法はほうの兩国りやうこくあるべきゆへなり、

にほんこく とうせ
日本国の当世は悪国が破法の国かと・しるべし。

問うて云く 摂受の時・折伏を行ずると 折伏の時・摂受を行ずると 利益

あるべしや、答えて云く 涅槃經に云く、「迦葉菩薩・仏に白して言く 如来の法身

は金剛不壊なり 未だ所因を知ること 能わず云何、仏の言く 迦葉能く 正法を

護持する 因縁を以ての故に 是の金剛身を成就することを得たり、 迦葉我護持

正法の国縁にて 今是の金剛身 常住 不壊を成就することを得たり、 善男子

正法を護持する者は 五戒を受けず 威儀を修せず 心に 刀剣弓 箭を持つべし、

是くの如く種種に法を説くも 然も 故師子吼を作すこと 能わず 非法の悪人を

降伏すること 能わず、 是くの如き 比丘自利し 及び 衆生を利すること 能わず、

当に知るべし 是の輩は 懈怠懶惰なり 能く戒を持ち 淨行を守護すと 雖も 当に

知るべし 是の人は 能く為す所 無からん、 乃至時に 破戒の者有つて 是の語を聞

き 已つて 咸共に 瞋恚して 是の法師を害せん 是の説法の者 設い 復 命終 すとも

故持戒自利利他と名く」等云云、章安の云く「取捨宜きを得て一向にす可か
らず」等、天台云く「時に適う而已」等云云、譬へば秋の終りに種子を下し田畠
をかえさんに稲米をうるることかたし、建仁年中に法然・大日の二人・出来し
て念仏宗・禅宗を興行す、法然云く「法華経は末法に入つては
未有一人得者千中無一」等云云、大日云く「教外別伝」等云云、此の両義国土
に充滿せり、天台・真言の学者等・念仏・禅の檀那を・へつらいをづる事犬
の主にを・をふり・ねづみの猫を・をそるるがごとし、国王・將軍に・みや
つかひ破仏法の因縁・破国の因縁を能く説き能くかたるなり、天台・真言の
学者等今生には餓鬼道に墮ち後生には阿鼻を招くべし、設い山林にまじわつ
て一念三千の觀をこらすとも空閑にして三密の油をこぼさずとも時機をしら
ず摂折の二門を弁へずば・いかでか生死を離るべき。

問うて云く念仏者・禅宗等を責めて彼等に・あだまれたる・いかなる利益

があるや、答えて云く涅槃經に云く、「もし善比丘法を壞る者を見て置いて呵責かしやくし駈遣くけんし拳処こしよせずんば当に知るべし是の人は仏法の中の怨あたなり、若し能く駈遣くけんし呵責かしやくし拳処こしよせば是れ我が弟子眞の聲聞しょうもんなり」等云云、「仏法を壞乱するはぶつぼう
仏法中の怨あたなり慈無くして詐いつわり親しむは是れ彼が怨あたなり能く糾治きうぢせんは是れごほう
護法の聲聞眞の我が弟子なり彼が爲に惡を除くは即ち是れ彼が親よなり能くよ
呵責かしやくする者は是れ我が弟子駈遣くけんせざらん者は仏法中の怨あたなり」等云云。
そ 夫れ法華經の宝塔品を拜見はいけんするに釈迦・多宝・十方分身の諸仏の來集らいじゅうは
なに心ぞ「令法久住・故來至此」等云云、三仏の未來に法華經を弘ひろめて未來
の一切いっさいの仏子ぶつしにあたえんと・おぼしめす御心の中をすいするに父母ふぼの一子の
大苦おおに値あつを見るよりも強盛じやうじやうにこそみへたるを法然ほうねんいたはしと・もおもはで
末法まつぽうには法華經ほけきやうの門を堅く閉じて人を入れじとせき狂児をたばらかして宝を
すてさするやうに法華經ほけきやうを抛なげすてさせける心こそ無慚むざんに見へ候へ、我が父母ふぼを

人の殺さんに父母につげざるべしや、悪子の酔狂して父母を殺すをせいせざるべしや、悪人寺塔に火を放たんにせいせざるべしや、一子の重病を炙せざるべしや、日本の禅と念佛者とをみて制せざる者はかくのごとし「慈無くして詐り親しむは即ち是れ彼が怨なり」等云云。

日蓮は日本国の諸人にしうし父母なり一切天台宗の人は彼等が大怨敵なり「彼が為に悪を除くは即ち是れ彼が親」等云云、無道心の者生死をはなるる事はなきなり、教主釈尊の一切の外道に大悪人と罵詈せられさせ給い天台大師の南北並びに得一に三寸の舌もつて五尺の身をたつと伝教大師の南京の諸人に「最澄未だ唐都を見ず」等といはれさせ給いし皆法華經のゆへなればはぢならず愚人にほめられたるは第一のはぢなり、日蓮が御勘氣をかほれば天台・真言の法師等悦ばしくやをもつらん・かつはむざんなり・かつはきくわいなり、夫れ釈尊は娑婆に入り羅什は秦に入り伝教は尸那に入り

提婆だいば師子ししは身をすつやくおう薬王やくおうは臂ひじをやくじょうべう上宮じょうぐうは手の皮かわをはくしゃかぼさつ釈迦しゃか菩薩ぼさつは肉にくをうるぎょうぼう
樂法ぎやうぼうは骨こつを筆ふでとす、天台てんだいの云いわく「適時ちやくじ而已に」等ぶつぼう云云、仏法ぶつぽうは時ときによるべしにちれん日蓮にちれん
が流罪るざいは今生こんじやうの小苦せうこなれば・なげかしからず、後生ごしやうには大樂だいらくをつくべければ
大おおいに悦よろこばし。

四二 如来滅後にょらいめつご五百歳始ごひやくさいにはじめ観心本尊抄くわんじんほんぞんしやう（文永十年 五二歳御作）

本朝沙門 日蓮撰ほんちやうしやもん にちれん 238P

摩訶止観まかしかん第五に云く開合かいがふの異いなり

「そ夫れ一心いつしんに十法界じゅうぽうかいを具ぐす一法界いつぽうかいに又十法界じゅうぽうかいを具ぐすれば百法界ひゃくぽうかいなり一界いちがいに
三十種せうしんの世間よを具ぐすれば百法界ひゃくぽうかいに即三千種そくさんぜんの世間よを具ぐす、比ひの三千さんぜん・一念いちねんの
心こころに在あり若やし心無なんば而已やみなけに介爾けにも心有こころあれば即ち三千さんぜんを具ぐす乃至すなわ所以さんぜんに称なして
不可思議ふかしぎと為なす意い此こゝろに在あり」

問いうて云いく玄義げんぎに一念三千いちねんさんぜんの名目みやうもくを明あかすや、答こたえて曰いく妙樂みやうらく云いく明あか

さず、問うて曰く文句に一念三千の名目を明かすや、答えて曰く妙樂云く
明かさず、問うて曰く其の妙樂の釈如何、答えて曰く未だ一念三千と云わず
等云云、問うて曰く止觀の一二三四等一念三千の名目を明かすや、答えて
曰く之れ無し、問うて曰く其の証如何、答えて曰く妙樂云く「故に止觀に至
つて正しく觀法を明かす並び三千を以て指南と為す」等云云、疑つて曰く玄義
第二に云く「又一法界に九法界を具すれば百法界千如是」等云云、文句第一
に云く「一人に十法界を具すれば一界又十界なり十界各十如是あれば即ち
是れ一千」等云云、觀音玄に云く「十法界交互なれば即ち百法界有り千種の
性相・冥伏して心に在り現前せずと雖も宛然として具足す」等云云、問う
て曰く止觀の前の四に一念三千の名目を明かすや、答えて曰く妙樂云く明さ
ず、問うて曰く其の釈如何、答う弘決第五に云く「若し正觀に望めば全く未だ
行を論ぜず亦二十五法に歴て事に約して解を生ず方に能く正修の方便と

為^なすに堪^たえたり是^{かく}の故^{ゆえ}に前^{さき}の六^むをば皆^{みな}解^{かい}に属^{ぞく}す」等云云、又云^{いわ}く「故^{ゆえ}に止^し観^{かん}の正^{まさ}しく観^{かん}法^{ぽう}を明^{あきら}かすに至^{いた}つて並^{なら}びに三千^{さんぜん}を以^{もつ}て指南^{しなん}と為^なす乃^{すなわ}ち是^これ終^{しゆう}窮^{くわう}くきよう ごくせつ 究^{きう}竟^{けい}の極^{ごく}説^{せつ}なり故^{ゆえ}に序^{しよ}の中^{ちゆう}に「説^{せつ}己^こ心中^{しんちゆう}所^{しよ}行^{ぎやう}法^{ぽう}門^{もん}」と云^いう良^{まこと}に以^ゆ所有^{えあ}るなり請^こう尋^{たず}ね読^よまん者^{しや}心^{しん}に異^い縁^{えん}無^なれ」等云云、

夫^それ智^ち者^{しや}の弘^{こう}法^{ぽう}三十^{さんじゅう}年^{ねん}二十九^{じゅうきゅう}年^{ねん}の間^まは玄^{げん}文^{もん}等^{とう}の諸^{しよ}義^ぎを説^{せつ}いて五^ご時^じ・八^{はつ}教^{きやう}・百^{ひやう}界^{かい}千^{せん}如^{にょ}を明^{あきら}かし前^{さき}き五^ご百^{ひやく}余^よ年^{ねん}の間^まの諸^{しよ}非^ひを責^せめ並^{なら}びに天^{てん}竺^{じく}の論^{ろん}師^し未^まだ述^{じゆ}べざるを顕^{あらわ}す、章^{しやう}安^{あん}大^{だい}師^し云^いく「天^{てん}竺^{じく}の大^{だい}論^{ろん}尚^{しやう}其^きの類^{るい}に非^{あら}ず震^{しん}旦^{たん}の人^{にん}師^し何^{なん}ぞ勞^{わづら}わしく語^{かた}るに汲^{およ}ばん此^これ誇^{こやう}耀^{やう}に非^{あら}ず法^{ほつ}相^{そう}の然^{しか}らしむるのみ」等云云、墓^{はか}ないか^{てんだい}な天^{まつ}台^{たう}の末^け学^{がく}等^{とう}華^け嚴^{こん}・真^{しん}言^{ごん}の元^{がん}祖^その盜^{ぬす}人^{びと}に一^{いち}念^{ねん}三^{さん}千^{せん}の重^{じゆう}宝^{ぽう}を盜^{ぬす}み取^とられ^て還^{かへ}つて彼^{かれ}等^{とう}が門^{もん}家^かと成^なりぬ章^{しやう}安^{あん}大^{だい}師^し兼^{かね}ねて此^この事^じを知^しつて歎^{なげ}いて言^いく「斯^この言^{ごん}若^もし墜^おちなば将^{かな}来^し悲^ひむ可^べし」云云。

問^{もん}うて曰^いく百^{ひやう}界^{かい}千^{せん}如^{にょ}と一^{いち}念^{ねん}三^{さん}千^{せん}と差^さ別^{べつ}如^い何^{かん}、答^{こた}えて曰^いく百^{ひやう}界^{かい}千^{せん}如^{にょ}は有^う情^{じやう}

界に限り一念三千は情非情に亘る、不審して云く非情に十如是亘るならば草木
に心有こころあつて有情の如く成仏を為す可きや如何、答えて白く此の事難信難解な
天台の難信難解に二有り一には教門の難信難解・二には觀門の難信難解な
り、其の教門の難信難解とは一仏の所説に於て爾前の諸經には二乘闡提・
未來に永く成仏せず教主釈尊始めて正覺を成じ法華經迹本二門に來至し
給い彼の二説を壊る一仏二言水火なり誰人か之を信ぜん此れは教門の
難信難解なり、觀門の難信難解は百界千如・一念三千・非情の上の色心の二
法十如是なり、爾りといえども木画の二像に於ては外典内典共に之を許し
て本尊と為す其の義に於ては天台一家より出でたり、草木の上に色心の因果
を置かずんば木画の像を本尊に恃み奉ること無益なり、疑つて云く草木
国土の上の十如是の因果の二法は何れの文に出でたるや、答えて曰く止觀第
五に云く「国土世間亦十種の法を具す所以に惡国土・相・性・体・力」等と

云云、釈籤第六に云く「相は唯色に有り性は唯心に在り体・力・作・縁は義色心を兼ね因果は唯心・報は唯色にあり」等云云、金錍論に云く「乃ち是一草・一木・一礫・一塵・各一仏性・各一因果あり縁了を具足す」等云云。

問うて曰く出処既に之を聞く觀心の心如何、答えて曰く觀心とは我が己心を觀じて十法界を見る是を觀心と云うなり、譬えば他人の六根を見ると雖も未だ自面の六根を見ざれば自具の六根を知らず明鏡に向うの時始めて自具の六根を見るが如し、設い諸經の中に処処に六道並びに四聖を載すと雖も法華經並びに天台大師所述の摩訶止觀等の明鏡を見ざれば自具の十界・百界千如・一念三千を知らざるなり。

問うて云く法華經は何れの文ぞ天台の釈は如何、答えて曰く法華經第一方便品に云く、衆生をして仏知見を開かしめんと欲す」等云云是は九界所具の仏界なり、壽量品に云く「是くの如く我成仏してより已來甚大に久遠なり壽命

・無量阿僧祇劫・常住にして滅せず諸の善男子我本菩薩の道を行じて成ぜし所の寿命今猶未だ尽きず復上の数に倍せり」等云云此の經文は仏界所具の九界なり、經に云く「提婆達多乃至天王如来」等云云地獄所具の仏界なり、經に云く「一を藍婆と名け乃至汝等但能く法華の名を護持する者は福量るべからず」等云云、是れ餓鬼界所具の十界なり、經に云く「竜女乃至成正覺」等云云此れ畜生界所具の十界なり、經に云く「婆稚阿修羅王乃至一偈・一句を聞いて・阿耨多羅三藐三菩提を得べし」等云云修羅界所具の十界なり、經に云く「若し人・仏の爲の故に乃至皆已に仏道を成ず」等云云此れ人界所具の十界なり、經に云く「大梵天王乃至我等も亦是くの如く・必ず当に作仏することを得べし」等云云此れ天界所具の十界なり、經に云く「舍利弗乃至華光如来」等云云此れ声聞界所具の十界なり、經に云く「其の縁覺を求むる者・比丘・比丘尼乃至合掌を以て敬心し具足の道を聞かんと欲す」等云云、

此れ即ち縁覺界所具の十界なり、經に云く「地湧千界乃至真淨大法」等云云
此れ即ち菩薩所具の十界なり、經に云く「惑説己身或説他身」等云云即ち
仏界所具の十界なり。

問うて曰く自他面の六根共に之を見る彼此の十界に於ては未だ之を見ず

如何が之を信ぜん、答えて曰く法華經・法師品に云く「難信難解」宝塔品に云く

「六難九易」等云云、天台大師云く「一門悉く昔と反すれば難信難解なり」

章安大師云く「仏此れを將て大事と為す何ぞ解し易きことを得可けんや」等

云云、伝教大師云く「此の法華經は最も為れ難信難解なり隨自意の故に」等

云云、夫れ在世の正機は過去の宿習厚き上、教主釈尊・多宝仏・十方分身

の諸仏・地湧千界・文殊・弥勒等之を扶けて諫曉せしむるに猶信ぜざる者

之れ有り五千・席を去り人天移さる

況や正像をや何に況や末法の初をや汝之を信せば正法に非じ。

問うて曰く經文並に天台章 安等の解釈は疑網無し但し火を以て水と云い
墨を以て白しと云う設い仏説為りと雖も信を取り難し、今數は他面を見るに
但人界に限つて余界を見ず自面も亦復是くの如し如何が信心を立てんや、答
う數は他面を見るに・或時は喜び・或時は瞋り・或時は平に・或時は貪り
現じ・或時は癡現じ・或時は諂曲なり、瞋るは地獄・貪るは餓鬼・癡は
畜生・諂曲なるは修羅・喜ぶは天・平かなるは人なり他面の色法に於ては
六道共に之れ有り四聖は冥伏して現れざれども委細に之を尋ねば之れ有る
可し。

問うて白く六遣に於て分明ならずと雖も粗之を聞くに之を備うるに以た
り、四聖は全く見えざるは如何、答えて白く前には人界の六道之を疑う、然り
と雖も強いて之を言つて相似の言を出だせしなり四聖も又爾るに可きか試み
に道理を添加して万が一宣べん所以に世間の無常は眼前に有り豈人界に二乗

界無からんや、無顧の悪人も猶妻子を慈愛す菩薩界の一分なり、但仏界計り現
じ難し九界を具するを以て強いて之を信じ疑惑せしむること勿れ、法華經の
文に人界を説いて云く、衆生をして仏知見を開かしめんと欲す、涅槃經に云く
大乘を学する者は肉眼有りと雖も名けて仏眼と為す、等云云、末代の凡夫
出生して法華經を信ずるは人界に仏界を具足する故なり。

問うて曰く十界互具の仏語分明なり然りと雖も我等が劣心に仏法界を具す
ること信を取り難き者なり今時之を信ぜずば必ず一闡提と成らん願くば大
慈悲を起して之を信ぜしめ阿鼻の苦を救護したまえ。 答えて曰く汝既に
唯一大事因縁の經文を見開して之を信ぜざれば釈尊より已下四依の菩薩
並びに末代理即の我等如何が汝が不信を救護せんや、然りと雖も試みに之を
云わん仏に値いたてまつつて覺らざる者・阿難等の辺にして得道する者之れ
有ればなり、其れ機に二有り一には仏を見たてまつり法華にして得道す二に

は仏を見たてまつらざれども法華にて得道するなり、其の上仏教已前は漢土
の道士月支の外道・儒教・四韋陀等を以て經と為して正見に入る者之れ有
り、又利根の菩薩・凡夫等の華嚴・方等・般若等の諸大乘經聞きし縁を以
て大通久遠の下種をする者多々なり例せば独覺の飛花落葉の如し教外の得道
是なり、過去の下種結縁無き者の權小に執着する者は設い法華經に値い奉
れども小權の見を出でず、自見を以て正義と為るが故に通つて法華經を以て
或は小乘經に同じ・或は華嚴・大日經等に同じ・或は之を下す、此等の諸師
は儒家外道の賢聖より劣れる者なり、此等は且らく之を置く、十界互具之を
立つるは石中の花・木中の花信じ難けれども縁に値うて出生すれば之を信
ず人界所具の仏界は水中の火・火中の水最も甚だ信じ難し、然りと雖も竜火
は水より出で竜水は火より生ず心得られざれども現証有れば之を用ゆ、
既に人界の八界之を信ず、仏界何ぞ之を用いざらん堯舜等の聖人の如きは

ばんみん おい へんば にかい ぶっかい いちぶん ぶぎょうぼさつ しよけん おい ぶっしん
万民に於て偏頗無し人界の仏界の一分なり、不輕菩薩は所見の人に於て仏身
しつたたいし にかい ぶっしん じょう これら げんしやう もつ これ べ
を見る悉達太子は人界より仏身を成ず此等の現証を以て之を信ず可きなり。
問うて曰く教主釈尊はに之を秘す三惑已断の仏なり又十方世界の国主一切
此れより堅固さんなくみだん
ぼさつ にじやう になんてん しゅくん みゆき ぼんてん たいしやく はべ ししゅう
の菩薩・二乗・人天等の主君なり行の時は梵天左に在り帝釈右に侍り四衆
はちぶしりえ こんごう ささき みち はちまんほうぞう えんぜつ いっさいしゅじやう とくだつ
・八部後に従い金剛前に導びき八万法蔵を演説して一切衆生を得脱せし
む是くの如き仏陀何を以て我等凡夫の己心に住せしめんや、又迹門・爾前の
これ ぶつだ われらばんぶ こしん
意を以て之を論ずれば教主釈尊は始成正覺の仏なり、過去の因行を尋ね
きようしゅしやくそん しじやうしやうかく
もとむ ある のうせたいし ある じゆどうぼさつ ある しびおう ある さつ おうじ ある
求れば・或は能施太子・或は儒童菩薩・或は戸毘王・或は薩た王子・或は三
ぎ ある どうゆ じんごう むりやうあそぎこう ある しよほつしん ある さんぜんじんてん
祇・百劫、或は動喻塵劫或は無量阿僧祇劫・或は初発心時・或は三千塵点
等の間七万・五千・六千・七千等の仏を供養し劫を積み行満じて今の教主
きようしゅしやくそん
釈尊と成り給う、是くの如き因位の諸行は皆我等が己身所見の菩薩界の功德
しやくそん たま か ごと いんい しよぎやう みなわれら こしんしよけん ぼさつ くどく
か、果位を以て之を論ずれば教主釈尊は始成正覺の仏四十年の間四教の
もつ これ きようしゅしやくそん しじやうしやうかく しきやう

色身しきしんを示現じげんし爾前にぜん・迹門しやくもん・涅槃等ねはんを演説えんぜつして一切衆生いっさいしゅじょうを利益りやくし給うたま、所謂いわゆる
華藏の時けぞう・十万台上じゅうまんの虞舎那るしやな・阿含經あこんきやうの三十四心さんじゅうしししん・斷結成道じやうけつじやうだうの仏ほとけ・方等ほうとう・
般若はんの千仏等せんぶつどう、大日だいにち・金剛頂こんこうちやうの千二百余尊よそん、並びに迹門しやくもん・宝塔品ほうとうほんの四土色身しきしん、
涅槃經ねはんきやうの或は丈六じやうろくと見る或は小身大身せうしんだいしんと現げんじ或は虞舎那るしやなと見る或は身虚空こくうに
同じと見る四種の身ないし乃至八十御入滅舍利にゆうめつしやりを留とどめて正像末しやうざうまつを利益りやくし給うたま、本門ほんもん
を以て之こを疑うたがわば教主きやうしゅ・釈尊しやくそんは五百塵点じんでん已前いぜんの仏いんいなり因位いんいも又是かくくの如ごとし、
其れより已来このかた十方世界ふんじんに分身いちだいしやうきやうし一代えんぜつ・聖教じんじゆを演説しゅじやうして塵数きやうけの衆生しやくもんを教化きやうけし
給うたま、本門ほんもんの所化しよけを以て迹門しやくもんの所化しよけに比較ひきやうすれば一滄いつたいと大海たいかいと一塵いちじんと大山こうえんと
なり、本門ほんもんの一菩薩ぼさつを迹門しやくもん・十方世界ほうせの文殊觀音もんじゆかんのん等もんじゆかんのんに對向たいかうすれば猴猿こうえんを以て
帝釈たいしやくに比するに尚及なおおよばず、其の外そ十方世界じつほうせの斷惑証果だんなくしやうかの二乗にじやう並びに梵天ぼんてん・
帝釈たいしやく・日月にちがつ・四天してん・四輪王りんおう・乃至無間ないしむげん・大城だいじやうの大火等たいか此等みなは皆我いちねんが一念いちねん
十界じっかいか己身こしんの三千さんぜんか、仏説ぶつせつ為いたりと雖も之いえどこれを信べず可べからず。

此れを以て之を思うに爾前の諸経は実事なり実語なり、華嚴經に云く、究竟
して虚妄を離れ染無きこと虚空の如し」と仁王經に云く、源を窮め性を尽
して妙智存せり」金剛般若經に云く、清淨の善のみ有り」馬鳴菩薩の起信
論に云く、如来蔵の中に清淨の功德のみ有り」天親菩薩の唯識論に云く、請く
余の有漏と劣の無漏と種は金剛喻定が現在前する時極円明純淨の本識を
引く彼の依に非ざるが故に皆永く喜捨す」等云云、爾前の経經と法華經と
之を校量するに彼の経經は無数なり時説既に長し一仏二言彼に付く可し、
馬鳴菩薩は律法蔵第十一にして仏記に之れ有り天親は千部の論師・四依の大
士なり、天台大師は辺鄙の小僧にして一論をも宣べず誰か之を信ぜん、其の
上多を捨て小に付くとも法華經の文分明ならば少し恃怙有らんも法華經文に
何れの所にか十界互具・百界千如・一念三千の分明なる証文之れ有りや、随
つて經文を開拓するに、「断諸法中惡」等云云、天親菩薩の法華論・堅慧菩薩

の宝性論ほつしょうろんに十界互具じこ之れ無く漢土南北かんとの諸大人師しよだいになんし・日本七寺にほんの末師しよだいになんしの中にも此この義ぎ無し但天台一人てんだいの僻見びやっけんなり伝教一人でんぎやうの謬みやうでん伝でんなり、故に清涼国師せいりやうのいわ云く「天台の謬あやまりりなり」憲苑法師えおんほつしの云く「然るに天台は小乗しょうじやうを呼んで三蔵さんぞう教と為し其の名謬みやうらん濫するを以て」等云云、了洪りやうこうが云く「天台独り未だ華嚴けこんの意を尽さず」等云云、得一いつが云く「咄つたないかな智公汝ちこうなんじは是れ誰が弟子ぞ、三寸さんすんに足らざる舌根ぜつこんを以て覆面説ふめんの所説の教時を謗いず」等云云、弘法大師こうぼうだいしの云く「震旦しんたんの人師等にんし諍あらそつて醍醐だいごを盗んで各おのおの自宗じしゅうに名く」等云云、夫れ一念三千いちねんさんぜんの法門ほうもんは一代の樞実いちだいに名目みよもくを削り四依しえの諸論師しよろんし其の義を載せず漢土日域かんとにちいきの人師にんしも之これを用もちいず、如何これが之を信しんぜん。

答えて曰く此いの難なん最はなはだも甚はなはだし最はなはだも甚はなはだし但し諸經しよきやうと法華ほつけとの相違そういは經文きやうもんより事起ふんみやうつて分明みけんなり未顯いけんと已顯しやうみやうと証ぜつそう明にじやうと舌相じやうふと二乗じやうふの成不しじやうと始成くじやうと久成くじやうと等之これを顯あらわす、諸論師しよろんしの事、天台大師てんだいだいし云く「天親てんじん・竜樹りゆうじゆ・内鑑ないがん冷然れいねんたり外

には時の宜きに適い各 権に拠る所あり、而るに人師偏に解し学者苛も執し
遂に矢石を興し各一辺を保ちて大に聖道に乖けり」等云云、章安大師云く
「天竺の大論尚其の類に非ず真旦の人師何ぞ勞わしく語るに及ばん此れ誇耀
に非ず法相の然らしむるのみ」等云云、天親・竜樹・馬鳴・堅慧等は内鑑冷然
なり然りと雖も時未だ至らざるが故に之を宣べざるか、人師に於ては天台已前
は或は珠を含み或は一向に之を知らず已後の人師或は初に之を破して後に
歸伏する人有り或は一向用いざる者も之れ有り但し断諸法中惡の經文を
会す可きなり、彼は法華經に爾前の經文を載するなり往いて之を見るに
經文分明に十界互具之を説く所謂「欲令衆生開仏知見」等云云、天台此
の經文を承けて云く「若し衆生に仏の知見無んば何ぞ開を論ずる所あらん
当に知るべし仏の知見衆生に蘊在することを」云云、章安大師の云く「衆生
に若し仏の知見無くんば何ぞ開悟する所あらん若し貧女に蔵無んば何ぞ示す

所あらんや」等云云。

但したえがたかみきようしゆしやくそんだいなん
難がき所は上かの教主きうしゆしやくそんだいなん
釈尊等の大難なり、此の事を仏遮しええ会いして云く

「いこんとうさいいなんしんなんげつぎしも
已今当説最さいいなんしんなんげつぎしも為難信難解」と次下の六難九易是なり、天台大師云く、「二門・悉く

昔と反すれば、信かたげ難がく解がし難がし。銚ほこに当るの難事なり、章しようあんだいしいわ
安大師の云く、「仏

此これを將もつて大事だいじと為す。何ぞ解なんげし易やすきことを得うけけんや、伝でん教大師云く、「此

の法華経は最ほけきもつともこれなんしんなんげ
為難信難解なり。隋自意ずいじいゆええの故に」等云云。夫れ仏より滅後めつこ

に至るいた一千八百余年。三国に経歴きようりやく
して但三人のみ有つて始めて此の正法しようほうを

覚知かくせり。所謂いわゆるがつししやくそんしんたんちしやだいいしにちいき
釈尊・真旦の智者大師・日域の伝教此の三人は内典ないてん

の聖人しようじんなり、問うて曰く竜樹りゆうじゆてんじん
天親等は如何、答えて曰く此等の聖人は知

つて之を言これのたまひとざる仁なり、或は迹門しやくもんの一分之を宣いちぶんこれのべ
べて、本門ほんと觀心かんとを云わ

ず。或は機有きつて時無ききか或は機きと時と共に之れ無こきか、天台伝てんだいでんぎよういこ
教已後は之を

知る者多も多ちなり。二聖の智ちを用もちゆるが故なり所謂三論いわゆるさんろん
の嘉祥・南三・北七の

百余人・華嚴宗の宝蔵・清涼等・法相宗の玄奘三蔵・慈恩大師等・
真言宗の善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵等、律宗の道宣等、初には
叛逆を存し後には一向に帰伏せしなり。

但し初の大難を遮せば無量義經に云く、「譬えば国王と夫人と新たに王子を

生ぜん若は一日若は二日若は七日に至り若は一月若は二月若は七月に至り

若は一歳若は二歳若は七歳に至り復国事を領理すること能わずと雖も已に

臣民に宗敬せられ諸の大王の子以て伴侶と為らん、王及び夫人の愛心偏に

重くして常に与共に語らん所以は何ん稚小なるを以ての故にと云うが如く、

善男子是の持經者も亦復是くの如し、諸仏の国王と是の經の夫人と和合して

共に是の菩薩の子を生ず若し菩薩是の經を聞くことを得て若しは一句若しは

一偈若しは一転若しは二転若しは十若しは百若しは千若しは万若しは億万

恒河沙・無量無數転せば復真理の極を体すること能わずと雖も、乃至已に一切

の四衆・八部に宗仰せられ諸の大菩薩を以て眷属と為し乃至常に諸仏に護念せられ慈愛偏に覆われん新学なるを以ての故なり」等云云、普賢經に云く「此の大乗經典は諸仏の宝蔵十方三世の諸仏の眼目なり乃至三世の諸の如來を出生する種なり乃至汝大乗を行じて仏種を断ぜざれ」等云云、又云く「此の方等經は是れ諸仏の眼なり諸仏是に因つて五眼を具することを得・仏の三種の身は方等従り生ず是れ大法印にして涅槃海に印す此くの如き海中能く三者の仏の清淨身を生ず此の三種の身は人天の福田なり」等云云。

夫れ以れば・釈迦如來の一代・顯密・大小の二教・華嚴・真言等の諸宗の依經往いて之を勘うるに或は十方台葉・毘盧遮那仏・大集雲集の諸仏如來・般若染淨の千仏示現・大日・金剛頂等の千二百尊・但其の近因近果を演説して其の遠因果を顯さず、速疾頓成之を説けども三五の遠化を亡失し化導の始終跡を削りて見えず、華嚴經・大日經等は一往之を見るに

べちえん

さいおうこれ かんが ぞうつう

別円四蔵等に似たれども再往之を勘うれば蔵通二教に同じて未だ別円にも

および ほんぬ さんいんこ

及ばず本有の三因之れ無し何を以てか仏の種子を定めん、而るに新訳の訳者

かんど

てんだい いちねんさんぜん ほうもん けんもん

ある みずか しよじ

等漢土に來入するの日・天台の一念三千の法門を見聞して或は自ら所持の

きようぎよう

てんか

てんじく

じゆじ

これ しよう

てんだい

かくしや

じしゅう

経經に添加し或は天竺より受持するの由之を称す、天台の学者等或は自宗

に同ずるを悦び或は遠きを費んで近きを蔑みし・或は旧を捨てて新を取り

よろこ ある

たつと

さげす

ある

に同ずるを悦び或は遠きを費んで近きを蔑みし・或は旧を捨てて新を取り

魔心・愚心出來す、然りと雖も詮ずる所は一念三千の仏種に非ずんば有情の

ましん ぐしんしゅつたい

しか

いえど せん

いちねんさんぜん ぶつしゆ あら

うじよう

うじよう

成仏・木画二像の本尊は有名無実なり。

じようぶつ もくえ

ほんぞん

ゆうめいむじつ

問うて曰く上の大難未だ其の会通を開かず如何。

かみ だいなん

えつう

いかん

答えて曰く無量義經に云く「未だ六波羅蜜を修行する事を得ずと雖も

いわ むりようぎきよう

いわ

ろくはらみつ

しゆぎよう

いえど

六波羅蜜自然に在前す」等云云、法華經に云く「具足の道を聞かんと欲す」

ろくはらみつじねん ざいぜん

えつう

ほけきよう

いわ

ぐそく

等云云、涅槃經に云く「薩とは具足に名く」云云、竜樹菩薩云く「薩とは六

ねはんぎきよう

いわ

さつ

ぐそく

なす

云云、

りゆうじゆ ぼさついわ

さつ

薩とは六

なり」等云云、無依無得大乘四論・玄義記に云く「沙とは訳して六と云う胡法

むえむとくだいじよう

げんぎ

いわ

さ

こほう

には六を以て具足の義と為すなり「吉蔵疏に云く」沙とは翻じて具足と為す」
天台大師云く「薩とは梵語なり此には妙と翻ず」等云云、私に会通を加え
本文を黷が如し爾りと雖も文の心は釈尊の因行果徳の二法は妙法蓮華經
の五字に具足す我等此の五字を受持すれば自然に彼の因果の功徳を譲り与え
給う、四大声聞の領解に云く「無上宝聚・不求自得」云云、我等が己心の声聞
界なり、「我が如く等くして異なる事無し我が昔の所願の如き今は已に満足し
ぬ一切衆生を化して皆仏道に入らしむ」・妙覺の釈尊は我等が血肉なり
因果の功徳は骨髓に非ずや、宝塔品に云く「其れ能く此の經法を護る事有ら
ん者は則ち為れ我及び多宝を供養するなり、乃至亦復諸の来り給える化仏
の諸の世界を莊嚴し光飾し給う者を供養するなり」等云云、釈迦・多宝・
十方の諸仏は我が仏界なり其の跡を紹繼して其の功徳を受得す、須臾も之を
聞く・即ち阿耨多羅三藐三菩提を究竟するを得ん」とは是なり、寿量品に云く

「然るに我実に成仏してより已来、無量無辺百千万那由佗劫なり」等云云、我等
が己心の釈尊は五百塵点劫乃至所顯の三身にして無始の古仏なり、經に云く
「我本菩薩の道を行じて、成ぜし所の寿命、今猶未だ尽きず・復上の数に倍
せり」等云云、我等が己心の菩薩等なり、地涌千界の菩薩は己心の釈尊の眷属
なり、例せば大公・周公旦等は周武の臣下・成王幼稚の眷属・武内の大
臣は神功皇后の棟梁仁徳王子の臣下なるが如し、上行・無辺行・淨行・
安立行等は我等が己心の菩薩なり、妙薬大師云く「当に知るべし身土一念
の三千なり故に成道の時・此の本理に称うて一身一念法界に遍し」等云云。
夫れ始め寂滅道場・華蔵世界より沙羅林に終るまで五十余年の間・華蔵
・密蔵・三变・四見等の三土四土は皆成劫の上の無常の土に変化する所の
方便・実報・寂光・安養・淨瑠璃・密蔵等なり能変の教主涅槃に入りぬれ
ば所変の諸仏随つて滅尽す土も又以て是くの如し。

今本時の娑婆世界は三災を離れ四劫を出でたる常住の淨土なり仏既に
過去にも滅せず未来にも生ぜず所化以て同体なり此れ即ち己心の三千具足・
三種の世間なり迹門十四品には未だ之を説かず法華經の内に於ても時機未熟
の故なるか。

此の本門の肝心南無妙法蓮華經の五字に於ては仏猶文殊・藥王等にも之を
付属し給わず何に況や其の已外をや但地涌千界を召して八品を説いて之を
付属し給う、其の本尊の爲 体本師の娑婆の上に宝塔空に居し塔中の
妙法蓮華經の左右に釈迦牟尼仏・多宝仏・釈尊の脇土上行等の四菩薩・
文殊・弥勒等は四菩薩の眷属として末座に居し迹化他方の大小の諸菩薩は
万民の大地に処して雲閣月卿を見るが如く十方の諸仏は大地の上に処し給う
迹仏迹土を表する故なり、是くの如き本尊は在世五十余年に之れ無し八年の
間にも但八品に限る、正像二千年の間は小乗の釈尊は迦葉・阿難を脇土

とな ごんだいじょう と為し 權大乘並に涅槃・法華經の迹門等の釈尊は文殊・普賢等を以て脇士
な これら と為す此等の仏をば正像に造り画けども未だ壽量の仏有さず、末法に來入
して始めて此の仏像出現せしむ可きか。

問う しやうぞう 正像二千余年の間は四依の菩薩並びに人師等余仏・小乘・權大乘
にぜん しやくもん ・爾前・迹門の釈尊等の寺塔を建立すれども本門壽量品の本尊並びに四
ばさつ おつしんと 大菩薩をば三国の王臣俱に未だ之を崇重せざる由之を申す、比の事粗之を聞
いと いんど 雖も前代未聞の故に耳目を驚動し心意を迷惑す 請う重ねて之を説け
いさい これ 委細に之を聞かん。

答えて白く法華經一部八卷・二十八品・進んでは前四味・退いては涅槃經
いちだい しやくきやう 等の一代の諸經惣じて之を括るに但一經なり始め寂滅道場より終り
はん いた 般若經に至るまでは序分なり無量義經・法華經普賢經の十卷は正宗なり
ねはんきやう るつう 涅槃經等は流通分なり、正宗 十卷の中において亦序正流通有り無量義經並

に序品じよぼんは序文じよぶんなり、方便品ほうべんより分別功德品ぶんべつくとくの十九行の偈げに至るまで十五品半じようしゆうぶんは正宗分しやうしゆぶんなり、分別功德品ぶんべつくとくの現在の四信げんざいより普賢經ふげんに至るまでの十一品半ふつうと一卷は流通分りつちゆうなり。

又法華經ほけきやう等の十卷じつに於ても二經おの有り、各序正流通るちゆうを具ぐするなり、無量義經むりやうぎきやうと序品じよぼんは序分じよぶんなり方便品ほうべんより人記品にんきぼんに至るまでの八品いたは正宗分しやうしゆぶんなり、法師品ほっしぼんより安樂行品あんらくぎやうぼんに至るまでの五品ごぼんは流通分りつちゆうなり、其その教主きやうしゆを論ろんずれば始成しじやう・正覺しやうかくの仏ほんむこんぬ・本無今有ほんむこんぬの百界千如いこんとうを説ちやうかいて已今当ずいじいに超過なんしんなんげせる隨自意なんしんなんげ・難信難解なんしんなんげの正法しやうほうなり、過去かこの結縁けちえんを尋だいつちゆうれば大通十六だいつちゆうの時・仏果ぶつかの下種げしゆを下くだし進しんんでは華嚴經けこんきやう等の前四味ぜんしみを以なて助經だいつちゆうと為なして大通だいつちゆうの種子しゆしを覺知かくちせしむ、此これは仏ほんいの本意あらに非どくほつず但毒發等いちぶんの一分にじやうぼんぶなり、二乘凡夫等ぜんしみは前四味ぜんしみを縁なと為ぜんぜんし漸漸ほつに法華ほうけに來至らいしして種子しゆしを顕あらわし開顯とを遂きこれぐるの機き是ななり、又在世ざいせに於おいて始めて八品はつを聞にんてんく人天等ある・或いっくは一句一偈等いちげを聞げしゆて下種あるとし・或あるは熟あるし・或あるは脱あるし・或あるは

普賢・涅槃等に至り・或は正像末等に小権等を以て顔と爲して法華に入る
例せば在世の前三昧の者の如し。又本門十四品の一經に序正流通有り
涌出品の半品を序分と爲し寿命品と前後の二半と此れを正宗と爲す其の余
は流通分なり、其の教主を論ずれば始成正覺の釈尊に非ず所説の法門も亦
天地の如し十界久遠の上に国土世間既に顯われ一念三千殆んど竹膜を隔つ、
又迹門並びに前四昧・無量義經・涅槃經等の三説は悉く隨他意の易信易解・
本門は三説の外の難信難解・隨自意なり。

又本門に於て序正流通有り過去大通仏の法華經より乃至現在の華嚴經乃至
迹門十四品涅槃經等の一代五十余年の諸經・十方三世諸仏の微塵の經經
は皆寿命の序分なり一品二半よりの外は小乗教・邪教・未得道教・覆相
教と名く、其の機を論ずれば德薄垢重・幼稚・貧窮・孤露にして禽獸に同ず
るなり、爾前・迹門の円教尚仏因に非ず何に況や大日經等の諸小乘經を

や何に況や華嚴・真言等の七宗等の論師・人師の宗をや、与えて之を論ずれば前三教を出でず奪つて之を云えば蔵通に同ず、設い法は甚深と称すとも未だ種熟脱を論ぜず還つて灰断に同じ化の始終無しとは是なり、皆えは王女たりと雖も畜種を懷妊すれば其の子旃陀羅に劣れるが如し、此等は且く之を閣く迹門十四品の正宗の八品は二往之を見るに二乗を以て正と為し菩薩・凡夫を以て傍と為す、再往之を勸うれば凡夫・正像末を以て正と為す正像末の三時の中にも末法の始を以て正が中の正と為す、問うて曰く其の証如何ん、答えて曰く法師品に云く「而も此の経は如来の現在すら猶怨嫉多し況や滅度の後をや」宝塔品に云く「法をして久住せしむ乃至来れる所の化仏当に此の意を知るべし」等、勸持安樂等之を見る可し迹門是くの如し、本門を以て之を論ずれば一向に末法の初を以て正機と為す所謂一往之を見る時は久種を以て下種と為し大通前四味迹門を熟と為して本門に至つて等妙に登らしむ、

再往之を見れば迹門には似ず本門は序正流通俱に末法の始を以て経と為す、
在世の本門と末法の始は一同に純円なり但し彼は脱此れは種なり彼は一品二
半此れは但題目の五字なり。

問うて白く其の証文如何、答えて云く涌出品に云く「爾の時に他方の国土
の諸の来れる菩薩摩訶薩の八恒河沙の数に過ぎたる大衆の中に於て起立し
合掌し礼を作して仏に白して言さく、世尊若し我等に仏の滅後に於て
娑婆世界に在つて勤加精進して是の經典を護持し読誦し書写し供養せんこ
とを聴し給わば当に此の土に於て広く之を説きたてまつるべし、爾の時に仏
・諸の菩薩摩訶薩衆に告げ給わく止ね善男子・汝等が此の経を護持せんこと
を須いじし等云云、法師より已下五品の经文前後水火なり、宝塔品の末に云く
「大音声を以て普く四衆に告ぐ誰か能く此の娑婆国土に於て広く妙法華経を
説かんものなる」等云云、設い教主一仏為りと雖も之を奨勵し給わば薬王

等の大菩薩・梵帝・日月・四天等は之を重んず可き処に多宝仏・十方の諸仏客仏と為て之を諫曉し給う、諸の菩薩等は此の慇懃の付属を聞いて「我不愛身命」の誓言を立つ、此等は偏に仏意に叶わんが為なり、而るに須臾の間に仏語相違して過八恒沙の此の土の弘經を制止し給う進退惟れ谷まり凡智に及ばず、天台智者大師前三後三の六釈を作つて之を会し給えり、所詮迹化他方の大菩薩等に我が内証の寿量品を以て授与すべからず末法の初は謗法の国にして惡機なる故に之を止めて地湧千界の大菩薩を召して寿量品の肝心たる妙法蓮華經の五字を以て閻浮の衆生に授与せしめ給う、又迹化の大衆は釈尊初発心の弟子等に非ざる故なり、天台大師云く、是れ我が弟子なり応に我が故を弘むべし」妙樂云く、「子父の法を弘む世界の益有り」、輔正記に云く「法是れ久成の法なるを以ての故に久成の人に付す」等云云。

又弥勒菩薩疑請して云く經に云く「我等は復仏の髓宜の所説、仏所出の言

未だ曾て虚妄ならず、仏の所知は皆悉く通達し給えりと信ずと雖も、然も
諸の新発意の菩薩・仏の滅後に於て、若し是の語を聞かば、或は信受せず
して法を破する罪業の因縁を起さん。唯然り世尊、願わくは為に解説して我等
が疑を除き給え及び未來世の諸の善男子此の事を聞き已りならば、亦疑
を生ぜじと云云。文の意は寿量の法門は滅後の為に之を請ずるなり、寿量品
に云く「或は本心を失える・或は失わざる者あり。乃至、心を失わざる者
は比の良薬の色香、俱に好きを見て即便之を服するに病尽く・除癒ぬ」等
云云、久遠下種大通結縁乃至前四味迹門等の一切の菩薩・二乘人天等の本門
に於て得道する是なり、経に云く「余の心を失える者は其の父の来れるを見
て亦歡喜し、問訊して病を治せんことを求むと雖も、然も其の薬を与うるに
而も肯えて服せず、所以は何ん。毒氣深く入つて本心を失えるが故に此の好
き色香ある薬に於て美からずと謂えり。乃至、我今当に方便を設け此の薬を

服せしむべし、乃至是の好き良薬を今留めて此に在く汝取つて服す可し、
差じと憂うることを勿れ、是の教を作し已つて、復他国に至つて使を遣わして
還つて告ぐ、等云云、分別功德品に云く、「惡世末法の時」等云云。
問うて曰く此の經文の遣使還告は如何、答えて曰く四依なり四依に四類有
り、小乗の四依は多分は正法の前の五百年に出現す、大乘の四依は多分
は正法の後の五百年に出現す、三に迹門の四依は多分は像法一千年・少分
は末法の初なり、四に本門の四依は地涌千界末法の始に必ず出現す可し今の
遣使還告は地湧なり是好良薬とは寿量品の肝要たる名体宗用教の南無
妙法蓮華經是なり、此の良薬をば仏猶迹化に授与し給わず何に況や他方を
や。

神力品に云く、「爾の時に千世界微塵等の菩薩摩訶薩の地より涌出せる者皆
仏前に於て一心に合掌し尊顔を胆仰して仏に白して言さく世尊・我等・仏の

滅後・世尊分身の所在の国土・滅度の処に於て当に広く此の経を説くべし」
等云云、天台の云く「但下方の発誓のみを見たり」等云云、道暹云く「付属
とは此の経をば唯下方涌出の菩薩に付す何が故に爾る法是れ久成の法なるに
由るが故に久成の人に付す」等云云、夫れ文殊師利菩薩は東方金色世界の
不動仏の弟子観音は西方無量寿仏の弟子・薬王菩薩は日月淨明德仏の弟子
・普賢菩薩は宝威仏の弟子なり一往釈尊の行化を扶けん為に娑婆世界に來入
す又爾前・迹門の菩薩なり本法所持の人に非れば末法の弘法に足らざる者
か、経に云く「爾の時に世尊乃至一切の衆の前に大神力を現じ給う広長舌を
出して上梵世に至らしめ乃至十方世界衆の宝樹の下師子の座の上の諸仏
も亦復是くの如く広長舌を出し給う」等云云、夫れ顕密二道・一切の大小乗
經の中に釈迦諸仏・並び坐し舌相梵天に至る文之無し、阿弥陀經の広長舌相
三千を覆うは有名無実なり、般若經の舌相三千光を放つて般若を説きしも全

く証明に非ず、此は皆兼帶の故に久遠を覆相する故なり、是くの如く十神力を現じて地涌の菩薩に妙法の五字を囑累して云く、經に曰く「爾の時に仏・上行等の菩薩大衆に告げ給わく諸仏の神力は是くの如く無量無辺不可思議なり若し我れ是の神力を以て無量無辺百千万億阿僧祇劫に於て囑累の爲の故に此の經の功德を説くとも猶尽すこと能わじ要を以て之を言わば如来の一切の所有の法・如来の一切の自在の神力・如来の一切の秘要の蔵・如来の一切の甚深の事・皆此の經に於て宣示顯説す」等云云、天台云く「爾時・仏告上行より下は第三結要付属なり」云云、伝教云く「又神力品に云く以要言之・如来・一切所有之法・乃至宣示顯説經文明かに知んぬ果分の一切の所有の法・果分の一切の自在の神力・果分の一切の秘要の蔵・果分の一切の甚深の事・皆法華に於て宣示顯説するなり」等云云、此の十神力は妙法蓮華經の五字を以て上行・安立行・淨行・無辺行等の四大菩薩に

授与し給うなり前の五神力は在世の為後の五神力は滅後の為なり、爾りと
いへど、さいおうこれ、一向に滅後の為なり、故に次下の文に云く「仏滅度の
雖も再往之を論ずれば一向に滅後の為なり、故に次下の文に云く「仏滅度の
後に能く此の経を持たんを以ての故に諸仏皆歡喜して無量の神力を現じ給う」
等云云。

次下の嘱累品に云く「爾の時に釈迦牟尼仏・法座より起つて大神力を現じ
給う右の手を以て無量の菩薩摩訶薩の頂を摩で乃至今以て汝等に付属す」
等云云、地涌の菩薩を以て頭と為して迹化他力乃至・梵釈・四天等に此の
経を嘱累し給う・十方より来る諸の分身の仏各本土に還り給う乃至多宝仏の
塔還つて故の如くし給う可し等云云、薬王品已下乃至涅槃經等は地涌の菩薩
去り了つて迹化の衆他方の菩薩等の為に重ねて之を付属し給う 拾遺嘱是な
り。

疑つて云く正像二千年の間に地涌千界閻浮提に出現して此の経を流通

するや、答えて曰く爾らず、驚いて云く法華經並びに本門は仏の滅後を以て
本と爲して先ず地涌に之を授与す何ぞ正像に出現して此の經を弘通せざる
や、答えて云く宜べず、重ねて問うて云く如何、答う之を宣べず、又重ねて
問う如何、答えて曰く之を宣ふれば一切世間の諸人・威音王仏の末法の如く
又我が弟子の中にも粗之を説かば皆誹謗を爲す可し黙止せんのみ、求めて云く
説かずんば汝慳貪に墮せん、答えて曰く進退惟れ谷れり試みに粗之を説かん、
法師品に云く「況んや滅度の後をや」寿量品に云く「今留めて此に在く」
分別功德品に云く「惡世末法の時」藥王品に云く「後の五百歲閻浮提に於て
広宣流布せん」涅槃經に云く「譬えば七子あり父母平等ならざるに非ざれど
も然れども病者に於て心則ち偏に重きが如し」等云云、已前の明鏡を以て仏意
を推知するに仏の出世は靈山八年の諸人の爲に非ず正像末の人の爲なり、
又正像二千年の人の爲に非ず末法の始め予が如き者の爲なり、然れども病者

に於いてと云うは滅後・法華經誹謗の者を指すなり、「今留在此」とは
「於此好色香藥而謂不美」の者を指すなり。

地涌千界正像に出でざることは正法一千年の間は小乘・權大乘なり機

時共に之れ無く四依の居士小權を以て縁と為して在世の下種之を脱せしむ謗

多くして熟益を破る可き故に之を説かず例せば在世の前四味の機根の如し、

像法の中末に觀音・藥王・南岳・天台等と示現し出現して迹門を以て面と

為し本門を以て裏と為して百界千如・一念三千其の義を尽せり、但理具を論

じて事行の南無妙法蓮華經の五字並びに本門の本尊未だ広く之を行ぜず所詮

円機有つて円時無き故なり。

今末法の初小を以て大を打ち權を以て実を破し東西共に之を失し天地顛倒

せり迹化の四依は乱れて現前せず諸天其の国を棄て之を守護せず、此の時地

湧の菩薩始めて世に出現し但妙法蓮華經の五字を以て幼稚に服せしむ「因

謗墮惡必因得益」とは是なり、我が弟子之を推え地涌千界は教主釈尊の
初発心の弟子なり寂滅道場に來らず林・最後にも訪わず不孝の失之れ有
り迹門の十四品にも來らず本門の六品には座を立つ但人品の問に來還せり
是くの如き高貴の大菩薩・三仏に約束して之を受持す末法の初に出で給わざ
る可きか、当に知るべし此の四菩薩折伏を現する時は賢王と成つて愚王を
誠責し摂受を行ずる時は僧と成つて正法を弘持す。

問うて曰く仏の記文は云何答えて曰く「後の五百歳閻浮提に於て広宣流布
せん」と、天台大師記して云く「後の五百歳遠く妙道に沾おわん」妙薬記し
て云く「末法の初冥利無きにあらず」伝教大師云く「正像稍過ぎ已つて
末法太だ近きに有り」等云云、末法太有近の釈は我が時は正時に非ずと云う
意なり、伝教大師・日本にして末法の始を記して云く「代を語れば像の終り
末の初・地を尋れば唐の東・羯の西・人を原れば則ち五濁の生・鬪諍の時な

り經に云く猶多怨嫉・況滅度後と此の言良とに以有るなり」

此の釈に鬪諍の時と云云、今の自界叛逆・西海侵逼の二難を指すなり、此

の時地涌千界出現して本門の釈尊を脇士と為す一閻浮提第一の本尊此の国

に立つ可し月支震旦に未だ此の本尊有さず、日本国の上宮・四天王寺を建立

して未だ時来らざれば阿弥陀・他方を以て本尊と為す、聖武天皇・東大寺を

建立す、華嚴經の教主なり、未だ法華經の実義を顕さず、伝教大師粗法華經

の実義を顯示す然りと雖も時未だ来らざるの故に東方の鵝王を建立して本門

の四菩薩を顕わさず、所詮地涌千界の為に此れを譲り与え給う故なり、此の

菩薩・仏勅を蒙りて近く大地の下に在り正像に未だ出現せず末法にも又

出で来り給わずば大妄語の大士なり、三仏の未来記も亦泡沫に同じ。

此れを以て之を惟うに正像に無き大地震・大彗星等出来す、此等は金翅鳥

・修羅・竜神等の動変に非ず偏に四大菩薩を出現せしむ可き先兆なるか、

てんだいいわ
天台云く「雨の猛きを見て竜の大なるを知り花の盛なるを見て池の深きこと

を知る」等云云、妙樂云く「智人は起を知り蛇は自ら蛇を識る」等云云、天

晴れぬれば地明かなり法華を識る者は世法を得可きか。

いちねんさんぜん
一念三千を識らざる者には仏・大慈悲を起し五字の内に此の珠を裏み未代

幼稚の首に懸けさしめ給う、四大菩薩の此の人を守護し給わんこと大公・

周公の文王を撰扶し四皓が恵帝に侍奉せしに異ならざる者なり。

ぶんえい
文永十年卯月二十五日

にちれんこれ
日蓮之を註す

四三 観心本尊抄 送状

かんじんのほんぞんしょう
帷一つ・墨三長・筆五官給ひ候い了んぬ、観心の法門少少之を注して大

田殿・教信御房等に奉る、此の事日蓮身に当たる大事なり之を秘す、無二の

志を見ば之を開せらる可きか、此の書は難多く答少なし未聞の事なれば

人耳目を驚動す可きか、設い他見に及ぶとも三人四人座を並べて之を読むこ

と勿れ、なかに 仏滅後・二千二百二十余年未だ此の書の心有らず、二ころあ 国難を顧みず五
五百歳を期して之を演説す乞い願くば一見を歴來の輩は師弟共に靈山淨土
もう に詣でて三仏の顔貌を拝見したてまつらん、げんみようはいけん 恐恐謹言。きようきようきんげん

文永十年太齋卯月二十六日

日蓮 花押

富木殿御返事

四四 撰時抄

建治元年

五十四歳御作

256P

釈子 日蓮述ぶ

夫れ仏法を学せん法は必ず先づ時をならうべし、そ ぶつぽう 過去の大通智勝仏は出世
し給いて十小劫が間・一經も説き給はず經に云く一坐十小劫又云く「仏・時
の未だ至らざるを知り請を受けて默然として坐す」等云云、今の教主釈尊
は四十余年の程法華經を説き給はず經に云く「説く時未だ至らざるが故」と
云云、老子は母の胎に処して八十年、弥勒菩薩は兜率の内院に籠らせ給いて

五十六億七千萬歳をまち給うべし、彼の時鳥は春ををくり鶏鳥は暁をまつ

ちくしょう

畜生すらなをかくのごとし何に況や仏法を修行せんに時を糾ざるべしや、

じやくめつどうじよう

みぎり

じっぽう

しよぶつじげん

いっさい

ぼさつしゆうえ

たま

ほんたい

してん

寂滅道場の砌には十方の諸仏示現し一切の大菩薩集會し給ひ梵帝・四天は

衣をひるがへし竜神・八部は掌を合せ・凡夫・大根性の者は耳をそばだ

はちぶ

たなこころ

ほんぶ

こんじよう

はな

をそ

て生身得忍の諸菩薩・解脱月等請をなし給いしかども世尊は二乗作仏・

しやうしんとくにん

しよぼさつ

げだつがつ

しやう

たま

せそん

にじようさぶつ

久遠実成をば名字をかくし即身成仏・一念三千の肝心、其義を宣べ給はず、

くおんじつじよう

みやうじ

そくしんじようぶつ

いちねんさんぜん

かんじん

そのぎ

のべ

たま

此等は偏にこれ機は有りしかども時の来らざればのべさせ給はず經に云く説

これら

ひとえ

き

たま

い

わ

く

い

わ

く

く

く時未だ至らざる故」等云云、靈山會上の砌には閻浮第一の不孝の人たり

いま

いた

うんぬん

りようぜんえじよう

みぎり

えんぶだい

い

ち

ふ

こう

く

し阿闍世大王座につらなり、一代謗法の提婆達多には天王如来と名をさづけ

あじゃ

せだいおう

いちだいほうぼう

てんのうに

よらい

な

を

さ

づ

け

五障の竜女は蛇身をあらためずして仏になる、決定性の成仏は焦種の花

ごしやう

りゆうによ

じゃしん

けつじようしやう

じようぶつ

い

れる

た

ね

の

花

さき果なり久遠実成は百歳の叟・二十五の子となれるかとうたがふ、

さき

み

くおんじつじよう

おきな

の

叟

・

二

十

五

の

子となれるかとうたがふ、

いちねんさんぜん

そくぶつかい

ぶつかい

そく

だん

を

さ

ら

ば

此

の

經の一字は如意宝珠

一念三千は九界即仏界・仏界即九界と談ず、されば此の經の一字は如意宝珠

なりいづく一句は諸仏しよぶつの種子しゆしとなる此等これらは機きの熟不熟はさてをきぬ時の至いたれるゆへなり、經に云くいわ「今正こしく是れ其その時ときなり決定けつじようして大乘だいじようを説とかん」等云云。
問うて云くいわ機きにあらざるに大法だいほうを授けられれば愚人ぐにんは定めて誹謗ひぼうをなして悪道あくどうに墮おちるならば豈説あにく者の罪つみにあらずや、答えて云くいわ人路ひとみちをつくる路みちに迷まよいう者あり作る者の罪つみとなるべしや良医りようい・藥を病人きりにあたう病人嫌きらいて服せずして死せば良医りよういの失とがとなるか、尋ねて云くいわ法華經ほけきようの第二いに云く「無智むちの人の中に此の經を説くこと莫なれ」同第四いに云く「分布みだして妄みだりに人に授与じゆよすべからず」同第五いに云く「此の法華經ほけきようは諸仏しよぶつ如来にの秘密ひみつの藏ぞうなり、諸經しよきようの中に於おいて最も其その上に在あり長夜ちやうやに守護しゆごして妄みだりに宣説せんぜつせざれ」等云云、此等これらの經文きようもんは機きにあらずば説かざれというか、今反詰はんきつして云く不輕品ふぎように云く「而も是この言ごを作さく我深く汝等なんじらを敬うやもう等云云四衆しゆうの中に瞋恚しんにを生じ心不淨ふじようなる者有あり、悪口罵詈あくくめりして言いわく是この無智むちの比丘びく。又云く衆人しゆじん・或は杖ある木瓦石じようもくがしやくを以もつて之を

ちようちやく

打擲す^{うんぬん}等云云、勸持品に云く^{かんじほん}「諸の無智の人の悪口罵詈訾等し及び刀杖を^{おも}とつじよう

加うる者有らん^{うんぬん}」等云云、此等の経文は悪口罵詈訾乃至打擲すれどもととか^{きようもん}

れて候は説く人の失となりけるか、求めて云く^{とが}此の両説は水火なり・いかな^{りようせつ}

が心うべき答えて云く^{いわ}天台云く「時に適うのみ^{かな}」章安云く「取捨宜きを得て^{しやうあんいわ}

一向にすべからず^{いっこう}」等云云、釈の心は^{ある}或る時は謗じぬべきにはしばらくと^{ぼう}

かず^{ある}・或る時は謗ずとも強て説くべし^{ぼう}・或る時は一機は信ずべくとも万機謗^{ある}

べくばとくべからず^{ある}・或る時は万機一同に謗ずとも強て説くべし^き、初成道の^{しよじようどう}

時は法慧^{ほうえ}・功德林^{くどく}・金剛幢^{こんごう}・金剛蔵^{こんごう}・文殊^{もんじゆ}・普賢^{ふげん}・弥勒^{みろく}・解脱月等の大菩薩^{げだつがつ}

梵帝^{ほんたい}・四天等の凡夫^{してん}・大根性の者かずをしらず^{ほんぶ}、鹿野苑の苑には俱鄰等の五^{ろくやおん}

人^{かしよう}・迦葉等の二百五十人^{しやりほつ}・舍利弗等の二百五十人^{はちまん}・八万の諸天^{しよてん}、方等大会の^{ほうとうたいえ}

儀式には世尊^{せそん}の慈父^{じふ}の浄飯大王^{じやうばんたいおう}ねんごろに恋せさせ給いしかば^{たま}仏・宮に入ら

せ給いて^{たま}観仏三昧経をとかせ給い^{かんぶつさんまい}、悲母の御ために^{ひも}、利天に九十日が間^{とうりえん}

こも
籠^たらせ給^{たま}いしには摩^ま耶^や經^{きやう}をとかせ給^{たま}う、慈^じ父^ふ悲^ひ母^もなどにはいかなる秘^ひ法^{ほう}か惜^{おし}ませ給^{たま}うべきなれども法^ほ華^け經^{きやう}をば説^たかせ給^{たま}はずせんずるところ機^きにはよらず
時^{とき}いたらざれば・いかにもとかせ給^{たま}はぬにや。

問^{もん}うて云^いくいかなる時^{とき}にか小^{しょう}乘^{じやう}・權^{ごん}經^{きやう}をときいかなる時^{とき}にか法^ほ華^け經^{きやう}を説^と

くべきや、答^{こた}えて云^いく十^{じゅう}信^{しん}の菩^ぼ薩^{さつ}より等^{とう}覺^{かく}の大^{だい}土^どにいたるまで時^{とき}と機^きとをば

相^あ知^ちりがたき事^{こと}なり何^{いか}に況^いわんや我^{われ}等^らは凡^{ぼん}夫^ぶなり・いかにでか時^{とき}機^きをしるべき、求^{もと}

めて云^いくすこしも知^しる事^{こと}あるべからざるか、答^{こた}えて云^いく仏^{ぶつ}眼^{げん}をかつて時^{とき}機^きを

かんがへよ仏^{ぶつ}・日^{にち}を用^{もち}て国^{こく}土^どをてらせ、問^{もん}うて云^いく其^その心^{しん}如何^{いかん}、答^{こた}えて云^いく

大^{だい}集^{じつ}經^{きやう}に大^{だい}覺^{かく}世^せ尊^{そん}・月^{げつ}藏^{ざう}菩^ぼ薩^{さつ}に對^{たい}して未^み來^{らい}の時^{とき}を定^{さだ}め給^{たま}えり所^い謂^{いう}我^{われ}が滅^{めつ}度^どの

後^ごの五^ご百^{ひゃく}歲^{さい}の中^{ちゆう}には解^げ脱^{だつ}堅^{けん}固^こ・次^ぎの五^ご百^{ひゃく}年^{ねん}には禪^{ぜん}定^{じやう}堅^{けん}固^こ一^{いつ}千^{せん}・次^ぎの五^ご百^{ひゃく}年^{ねん}

には読^{どく}誦^{じゆ}多^た聞^{もん}堅^{けん}固^こ・次^ぎの五^ご百^{ひゃく}年^{ねん}には多^た造^{ぞう}塔^{たう}寺^じ堅^{けん}固^こ二^に千^{せん}・次^ぎの五^ご百^{ひゃく}年^{ねん}には

我^わ法^{ぼう}の中^{ちゆう}に於^{おい}て鬪^{とう}諍^{じやう}言^{ごん}訟^{しやう}して白^{びやく}法^{ぼう}隱^{いん}沒^{めつ}せん等^ら云^いふ、此^この五^ごの五^ご百^{ひゃく}歲^{さい}・二^に千^{せん}

五百余年に人人の料簡さまざまなり、漢土の道綽禪師が云く正像二千・四
箇の五百歳には小乗と大乘との白法盛なるべし末法に入つては彼等の
白法皆消滅して浄土の法門・念仏の白法を修行せん人計り生死をはなる
べし、日本国の法然が料簡して云く今・日本国に流布する法華經・華嚴經
並びに大日經諸の小乗經・天台・真言・律等の諸宗は大集經の記文の
正像二千年の白法なり末法に入つては彼等の白法は皆滅尽すべし設い行ず
る人ありとも一人も生死をはなるべからず、十住毘婆沙論と曇鸞法師の
難行道道綽の末有一人得者・善導の千中無一これなり、彼等の白法隱没の
次には浄土三部經・弥陀・称名の一行ばかり大白法として出現すべし、
此を行ぜん人人はいかなる悪人・愚人なりとも十即十生・百即百生唯
浄土の一門のみ有つて路に導入すべしとはこれなり、されば後世を願はん人
は叡山・東寺・園城・七大寺等の日本一州の諸寺・諸山の御歸依をとどめて

彼の寺山によせをける田畠郡郷をつばいとつて念仏堂につけば決定往生
南無阿弥陀仏とすすめければ我が朝一同に其の義になりて今に五十余年な
り、日蓮此等の悪義を難じやぶる事はことふり候いぬ、彼の大集經の白法
隱没の時は第五の五百歳当世なる事は疑ひなし、但し彼の白法隱没の次に
は法華經の肝心たる南無妙法蓮華經の大白法の一閻浮提の内八万の国あり
其の国に八万の王あり王王ごとに臣下並びに万民までも今・日本国に弥陀
称名を四衆の口口に唱うるがごとく広宣流布せさせ給うべきなり。

問うて云く其の証文如何、答えて云く法華經の第七に云く「我が滅度の後
後の五百歳の中に広宣流布して閻浮提に於て断絶せしむること無けん」等
云云、經文は大集經の白法隱没の次の時をとかせ給うに広宣流布と云云、
同第六の卷に云く「悪世末法の時能く是の經を持つ者」等云云又第五の卷に
云く、後の末世の法滅せんとする時と等又第四の卷に云く、而も此經は如来現在

にすら猶怨嫉多し況や滅度の後をや」又第五の巻に云く「一切世間怨多くし

て信じ難し」又第七の巻に第五の五百歳・鬪諍堅固の時を説いて云く「悪魔

・魔民諸の天竜・夜叉・鳩槃荼等其の便を得ん」大集經に云く「我が法の

中に於て鬪諍言訟せん」等云云、法華經の第五に云く「惡世の中の比丘」

又云く「・或は阿蘭若に有り」等云云又云く「惡鬼其身に入る」等云云、文

の心は第五の五百歳の時惡鬼の身に入る大僧等・国中に充滿せん其時に智人

・一人出現せん彼の惡鬼の入る大僧等時の王臣万民等を語て惡口罵詈・

杖木瓦礫・流罪・死罪に行はん時釈迦・多宝・十方の諸仏・地涌の大菩薩ら

に仰せつけ大菩薩は梵帝・日月・四天等に申しくだされ其の時・天変地天盛

なるべし、国主等其のいさめを用いずば鄰国にをほせつけて彼彼の国国の惡王

・惡比丘等をせめらるるならば前代未聞の大鬪諍一閻浮提に起るべし其の時

・日月所照の四天下の一切衆生、或は国を・をしみ・或は身を・をしむゆ

へに一切の仏・菩薩にいのりをかくともしるしなくば彼のにくみつる一の
小僧を信じて無量の大僧等八万の大王等、一切の万民皆頭を地につけ掌
を合せて一同に南無妙法蓮華經となうべし、例せば神力品の十神力の時・
十方世界の一切衆生一人もなく娑婆世界に向つて大音声をはなちて南無
釈迦牟尼仏・南無釈迦牟尼仏・南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經と一同に
さけびしがごとし。

問うて曰く經文は分明に候・天台・妙樂・伝教等の未来記の言はあり
や、答えて曰く汝が不審逆なり釈を引かん時こそ經論はいかにとは不審
せられたれ經文に分明ならば釈を尋ぬべからず、さて釈の文が經に相違せ
ば經をすてて釈につくべきか如何、彼云く道理至極せり、しかれども凡夫の習
・經は遠し釈は近し近き釈・分明ならばいますこし信心をますべし、今云く
汝が不審ねんごろなれば少少釈をいだすべし天台大師云く「後の五百歳遠く

みょうどう

妙道に沾うるわん」妙樂大師云く「末法の初め冥利無きにあらず」伝教大師云く

まつぼつのはじめ

みょうり

でんぎようだいし

「正像しょうぞう稍過ぎ已おわつて末法太まつぼつだ近きはきに有あり法華ほっけ一乗いちじようの機き今いま正ただしく是これ其そのの時とき

なり、何を以もつて知しることを得える、

安樂行品あんらくぎようほんに云いく末世法滅まつせほうめつの時ときなり」又云く

「代を語ことばれば則すなわち像の終り末の初め地を尋たずめれば唐とうの東かつ・羯かつの西たす・人を原たすぬ

れば五濁ごじよくの生とつじよう・鬪諍とうじようの時ときなり、經いに云いく猶多怨嫉ゆたおんしつ・況滅度後いと此いの言良まことに

ゆえあ

以い有うんぬんるなり」云云、夫それ釈尊しゃくそんの出世しゆつせは住劫第九にんじゆうの滅し・人壽百歲にんじゆうの時ときなり百

歲ちゆうげんざいと十歲との中間めつこ在世五十年滅後二千年と一万年まんねんとなり、其その中間ちゆうげんに法華經ほけきよう

の流布るふの時・二度あるべし所謂在世いの八年めつこ・滅後まつぼつには末法の始まつぼつの五百年なり、

而しかるにに天台みょうらく・妙樂でんぎよう・伝教等ざいせほけきようは進ちゆうげんんでは在世法華經ちゆうげんの時ときにも・もれさせ給たまいぬ、

しりぞ

退めつこまつぼついては滅後末法の時たまにも生ちゆうげんれさせ給たまはず中間ちゆうげんなる事たまをなげかせ給たまいて末法まつぼつ

の始たまをこひさせ給あしだせんう御筆しつたたいしなり、例あせば阿私陀仙人しつたたいしが悉達しつたたいし太子しつたたいしの生たまれさせ給たまい

しを見て悲いんで云いく現生げんせいには九十たいしにあまれり・太子じようどうの成道じようどうを見るべからず

しを見て悲いんで云いく現生げんせいには九十たいしにあまれり・太子じようどうの成道じようどうを見るべからず

しを見て悲いんで云いく現生げんせいには九十たいしにあまれり・太子じようどうの成道じようどうを見るべからず

しを見て悲いんで云いく現生げんせいには九十たいしにあまれり・太子じようどうの成道じようどうを見るべからず

しを見て悲いんで云いく現生げんせいには九十たいしにあまれり・太子じようどうの成道じようどうを見るべからず

しを見て悲いんで云いく現生げんせいには九十たいしにあまれり・太子じようどうの成道じようどうを見るべからず

しを見て悲いんで云いく現生げんせいには九十たいしにあまれり・太子じようどうの成道じようどうを見るべからず

後生には無色界に生れて五十年の説法の坐にもつらなるべからず正像末にも

生るべからずとなげきしがごとし、道心あらん人人は此を見ききて悦ばせ給

え正像一千年の大王よりも後世を・をもはん人人は末法の今の民にてこそあ

るべけれ此を信ぜざらんや、彼の天台の座主よりも南無妙法蓮華經と唱うる

癡人とはなるべし、梁の武帝の願に云く「寧ろ提婆達多となて無間地獄には

沈むとも鬱頭羅弗とはならじ」と云云。

問うて云く竜樹・天親等の論師の中に此の義ありや、答えて云く竜樹・

天親等は内心には存ぜさせ給うといえども言には此の義を宣べ給はず、求め

て云くいかなる故にか宣給ざるや、答えて云く多くの故あり一には彼の時に

も機なし二には時なし三には迹化なれば付嘱せられ給はず、求めて云く願く

は此の事よくよくきかんとをもう、答えて云く夫仏の滅後二月十六日よりは

正法の始なり迦葉尊者・仏の付嘱をうけて二十年、次に阿難尊者二十年・次

に商那和修二十年・次に優婆崛多二十年・次に提多迦二十年、已上一百年が
間は但小乗經の法門をのみ弘通して諸大乘經は名字もなし何に況や
法華經をひろむべしや、次には弥遮迦・仏陀難提・仏駄密多・脇比丘・富那奢
等の四五人、前の五百余年が間は大乗經の法門少少出来せしかどもとりた
てて弘通し給はず、但小乗經を面としてやみぬ、已上大集經の先五百年
解脱堅固の時なり、正法の後六百年已後一千年が前其の中間に馬鳴菩薩・
毘羅尊者・竜樹菩薩・提婆菩薩・羅・尊者・僧・難提・僧伽耶奢・鳩摩羅駄
・闍夜那・盤陀・摩奴羅・鶴勒夜那・師子等の十余人の人人始には外道の家
に入り次には小乗經をきわめ後には諸大乘經をもて諸小乗經をさん
ざんに破し失ひ給いき此等の大士等は諸大乘經をもつて諸小乗經をば破
せさせ給いしかども諸大乘經と法華經の勝劣をば分明にかかせ給はず、
設い勝劣をすこしかかせ給いたるやうなれども本・迹の十妙・二乗作仏・

くおんじつじょう　いこんとう　ひやつかいせんによ　いちねんさんぜん　かんよう　ほうもん　ふんみょう
久遠実成・已今当の妙・百界千如・一念三千の肝要の法門は分明ならず、

ある　ある　ある　ある
但・或は指をもつて月をさすがごとくし・或は文にあたりてひとはし計りか

たま　けどう　しじゅう　してい　おんこん　とくどう　うむ　いちばん　これら
かせ給いて化導の始終・師弟の遠近・得道の有無はすべて一分もみへず、此等

しょうほう　だいしききょう　ぜんじょうけんこ　しょうほう
は正法の後の五百年・大集経の禅定堅固の時にあたれり、正法一千年の

がっし　ぶつぽうじゅうまん　ある　ある　ある　こんききょう
後は月氏に仏法充滿せしかども・或は小をもて大を破し・或は権経をもつ

じつききょう　おんもつ　ぶつぽう　みだ　とくどう　ぶつぽう
て実経を隠没し仏法さまざまに乱れしかば得道の人やふやくすくなく仏法に

あくどう　おち　しょうほう　ぞうほう
つけて悪道に墮る者かずをしらず、正法一千年の後・像法に入つて一十五年

ぶつぽう　かんど　ぶつぽう　ぶつぽう　ぶつぽう
と申せしに仏法東に流れて漢土に入りనికి、像法の前五百年の内・始の一百

かんど　どうし　がっし　ぶつぽう　じゅうろん　ぶつぽう　たとい
余年が間は漢土の道士と月氏の仏法と諍論していまだ事さだまらず設い定ま

ぶつぽう　ぶつぽう　しか　ぶつぽう
りたりしかども仏法を信ずる人の心いまだふかからず、而るに仏法の中に

だいしょう　こんじつ　けんみつ　しょうききょう　うたがい
大小・権実・顕密をわかつならば聖教一同ならざる故・疑をこりてかへ

げてん
りて外典とともになう者もありぬべし、これらのをそれあるかのゆへに摩騰・

じくらん

竺蘭は自は知つて而も大小を分けず樞実をいはずしてやみぬ、其の後・魏・

晉・齊・宋・梁の五代が間・仏法の内に大小・樞実・顯密をあらそひし程に

いづれこそ道理ともしきこえずして上み一人より下も万民にいたるまで不審す

くなからず南三・北七と申して仏法十流にわかれぬ所謂南には三時・四時・

五時・北には五時・半滿・四宗・五宗・六宗、二宗の大乗一音等・各各義

を立て辺執水火なり、しかれども大綱は一同なり所謂一代聖教の中には

華嚴經第一・涅槃經第二・法華經第三なり法華經は阿含・般若・淨名・

思益等の經經に対すれば眞実なり了義經・正見なりしかりといへども

涅槃經に対すれば無常教・不了義經・邪見の經等云云、漢より四百余年の末

へ五百年に入つて陳隋二代に智と申す小僧一人あり後には天台智者大師と

号したてまつる、南北の邪義をやぶりて一代聖教の中には法華經第一・

涅槃經第二・華嚴經第三なり等云云、此れ像法の前・五百歳・大集經の

どくじゆたぶんけんこ
読誦多聞堅固の時にあひあたれり、
像法の後・五百歳は唐の始・太宗皇宗の

ぎよう げんじようさんそう がっし
御宇に玄奘三蔵・月支に入つて十九年が間、
百三十箇国の寺塔を見聞して多

ろんし あ
くの論師に値いたてまつりて八万聖教・十二部經の淵底を習いきわめしに

そ
其の中に二宗あり所謂法相宗・三論宗なり、此の二宗の中に法相・大乘は

みろく むちやく かいけんろんし かんど
遠くは弥勒・無著近くは戒賢論師に伝えて漢土にかへりて太宗皇帝にさづけ

たまた
させ給う、此の宗の心は仏教は機に随うべし一乗の機のためには三乗方便

いちじようしんじつ いわゆるほけきよう さんじよう ぎ
・一乗眞実なり所謂法華經等なり、三乗の機のためには三乗眞実・一乗

ほうべんいわるじんみつ しようまん こ
方便所謂深密經・勝鬘經等此れなり、天台智者等は此の旨を弁えず等云云、

しか たいそう けんおう とうじ いってん さんこう
而も太宗は賢王なり當時名を一天にひびかすのみならず三皇にもこえ五帝に

すぐ
も勝れたるよし四海にひびき漢土を手ににぎるのみならず高昌・高麗等の一

ないげ きわ けんおう だいいち ごきえ
千八百余国をなびかし内外を極めたる王ときこへし賢王の第一の御帰依の僧

てんだいしゅう がくしゃ かしら
なり、天台宗の学者の中にも頭をさしいだす人・一人もなし、而れば法華經

の実義じつぎすでに一國おんもつに隱没おんもつしぬ、同じき太宗たいそうの太子たいし・高宗こうそう・高麗こまの繼母けいぼ・
則そくてんこうこう天皇こうこう后きようの御宇ぎように法蔵法師ほうぞうほっしといふ者ものあり法相宗ほうそうしゅうに天台宗てんだいしゅうのをそわるとこ
ろを見て前に天台てんだいの御時おんときせめられし華嚴經けこんきようを取出いして一代いちだいの中には華嚴第一けこんだいいち
・法華第二ほっけ・涅槃第三ねはんと立てけり、太宗たいそう・第四代玄宗皇帝げんそうこうていの御宇ぎよう開元四年同
八年せいてんに西天いんど・印度いんどより善無畏三藏ぜんむいさんぞう・金剛智三藏こんこうちさんぞう・不空三藏ふくうさんぞう・大日經だいにちきよう・金剛
頂經ちようきよう・蘇悉地經そしつちきようを持たもて渡り真言宗しんこんしゅうを立つ、此の宗りつきの立義いに云く教に二種あ
り一には釈迦しゃかの顯教けんきよう所謂華嚴・法華等、二には大日の密教だいにち所謂大日經等な
り、法華經ほっけきようは顯教けんきようの第一だいいちなり此の經は大日の密教だいにちに對すれば極理ごくりは少し同
じけれども事相じそうの印契いんけいと真言しんこんとはたえてみへず三密相そうおう應おうせざれば不了義經等ふりようぎきよう
云云うんぬん、已上ほつそう法相けこん・華嚴しんこん・真言しんこんの三宗一同てんだいほつけしゅうに天台法華宗をやぶれども天台大師
程ちじんの智人ちじん・法華宗ほつけしゅうの中になかりけるかの間・内内はゆはれなき由は存てんだいだいしじけれ
ども天台てんだいのごとく公場こうじようにして論ろんぜられざりければ上國王かみこくおう・大臣だいじん・下一切いっさいの

じんみん

人民にいたるまで皆仏法に迷いて衆生の得道みなとどまりけり、此等は像法

の後の五百年の前二百余年が内なり、像法に入つて四百余年と申しけるに百済

いつさいきようなら

きようしゆしやくそん

そうほう

にほんこく

もつ

くだら

国より一切経並びに教主釈尊の木像・僧尼等日本国にわたる、漢土の梁の

かんど

末・陳の始にあひあたる、日本には神武天王よりは第三十代欽明天王の御宇

にほん

きんめい

ぎよう

なり、欽明の御子・用明の太子に上宮王子・仏法を弘通し給うのみならず

きんめい

ようめい

たいし

じようぐうおうじ

ぶつぼう

ぐつう

たま

並びに法華経・浄名経・勝鬘経を鎮護国家の法と定めさせ給いぬ、其の

な

ほけきよう

じようみやうきよう

しょうまん

ちんごこつか

たま

そ

後・人王第三十七代に孝徳天王の御宇に三論宗・成実宗を觀勒僧正・百濟

ぎよう

さんろんしゅう

じようじつ

かんろくそうじよう

くだら

国よりわたす、同御代に道昭法師・漢土より法相宗・俱舎宗をわたす、人王

ほつし

かんど

ほうそうしゅう

ぐしゃしゅう

第四十四代元正天王の御宇に天竺より大日経をわたして有りしかども而も

ぎよう

てんじく

だいにちきよう

しか

弘通せずして漢土へかへる此の僧をば善無畏三蔵という、人王第四十五代に

かんど

ぜんむいさんそう

りようべんそうじよう

聖武天皇の御宇に審祥大徳・新羅国より華嚴宗をわたして良弁僧正・聖武

しやうむてんのう

ぎよう

しんじやうだいとく

しらぎ

けごんしゅう

りようべんそうじよう

しやうむ

天王にさづけたてまつりて東大寺の大仏を立てさせ給えり同御代に大唐の

とうだいじ

だいぶつ

たま

だいとう

鑑真和尚・天台宗と律宗をわたす、其の中に律宗をば弘通し小乗の戒場
を東大寺に建立せしかども法華宗の事をば名字をも申し出させ給はずして
入滅し了んぬ、其後人王第五十代像法八百年に相当つて桓武天王の御宇に
最澄と申す小僧出来せり後には伝教大師と号したてまつる、始には三論
・法相・華嚴・俱舍・成実・律の六宗並びに禅宗等を行表僧正等に習
学せさせ給いし程に我と立て給える国昌寺・後には比叡山と号す、此にして
六宗の本経・本論と宗宗の人師の釈とを引き合せて御らむありしかば彼の
宗宗の人師の釈・所依の経論に相違せる事多き上僻見多多にして信受せん
人皆惡道に堕ちぬべしとかんがへさせ給う其の上法華經の実義は宗宗の人人
・我も得たり我も得たりと自讃ありしかども其の義なし、此れを申すならば
喧嘩出来すべしもだして申さずば仏誓にそむきなんとをもひわづらはせ給い
しかども終に仏の誠ををそれて桓武皇帝に奏し給いしかば帝・此の事を・を

どろかせ給いて六宗の碩学に召し合させ給う、彼の学者等始めは慢幢山のごとし悪心・毒蛇のやうなりしかども終に王の前にしてせめをとされて六宗・七寺一同に御弟子となりぬ、例せば漢土の南北の諸師・陳殿にして天台大師にせめおとされて御弟子となりしがごとし、此れはこれ円定・円慧計りなり其の上天台大師のいまだせめ給はざりし小乗の別受戒をせめをとし六宗の八大徳に梵網經の大乗・別受戒をさづけ給うのみならず法華經の円頓の別受戒を觀山に建立せしかば延暦円頓の別受戒は日本第一たるのみならず仏の滅後・一千八百余年が間身毒尸那一閻浮提にいまだなかりし靈山の大戒にほんこく・日本国に始まる、されば伝教大師は其の功を論ずれば竜樹・天親にもこえ天台・妙樂にも勝れてをはします聖人なり、されば日本国の当世の東寺・園城・七大寺・諸国の八宗・浄土・禅宗・律宗等の諸僧等誰人か伝教大師の円戒をそむくべき、かの漢土九国の諸僧等は円定・円慧は天台の弟子

ににたれども円頓えんどん一同の戒場は漢土かんとになければ戒にをいては弟子でしとならぬ者もありけん、この日本国は伝にほんこく教大師でんぎようだいしの御弟子おんでしにあらざる者は外道げどうなり悪人あくにんなり、而れども漢土かんと・日本の天台宗てんだいしゅうと真言しんごんの勝劣しょうれつは大師心中だいししんちゅうには存知せさせ給たまいけれども六宗ろくしゅうと天台宗てんだいしゅうのごとく公場こうじょうにして勝負しょうぶなかりけるゆへにや、伝でんぎようだいし教大師いご已後とうじには東寺おんじよう・七寺しよ・園城にほんの諸寺しよ日本一州一同に真言宗しんごんしゅうはてんだいしゅうすぐ天台宗かみいちにんに勝れたりと上一人より下万人にいたるまでをばしめしをもえり、しかれば天台法華宗てんだいほつけしゅうは伝でんぎようだいし教大師おんときの御時計おんとき計りにぞありける此の伝教でんぎようの御時おんときはぞうほう像法の末・大集經だいしつきようの多造塔寺堅固の時なり、いまだ於我法中わがほう・鬪諍言訟とうじようごんしやう・白法隱没びやくほうおんもつの時にはあたらす。

今末法まっほうに入つて二百余歳・大集經だいしつきようの於我法中おがほうちゅう・鬪諍言訟とうじようごんしやう・白法隱没びやくほうおんもつの時にあたれり仏語ぶつごまことならば定んで一閻浮提えんぶだいに鬪諍とうじよう起るべき時節じせつなり、伝かんどえ聞く漢土かんどは三百六十箇国・二百六十余州は・すでに蒙古国もうこに打ちやぶられ

ぬ華洛すでにやぶられて徽宗・欽宗の両帝・北蕃にいけどりにせられて韃靼たつたん
にして終ついにかくれさせ給たまいぬ、徽宗の孫・高宗皇帝は長安をせめをとされて
田舎の臨安行在府に落ちさせ給たまいて今に数年が間京を見ず、高麗こま六百余国も
新羅百濟等の諸国等も皆大蒙古国の皇帝に・せめられぬ、今の日本国の壱岐いき
対馬並びに九国のごとし鬭と争堅固の仏語地に墮おちず、あたかもこれ大海のし
をの時をたがへざるがごとし、是これをもつて案ずるに大集經の白法隱没の時
に次いで法華經の大白法の日本国並びに一閻浮提に広宣流布せん事も疑うたがう
べからざるか、彼の大集經は仏説の中の権大乘ぞかし、生死をはなるる道
には法華經の結縁なき者のためには未顕真實なれども六道・四生・三世の事
を記し給たまいけるは寸分もたがはざりけるにや、何いかに況いわんや法華經は釈尊・
要當說真實となのらせ給たまい多宝仏は真實なりと御判をそへ十方の諸仏は
広長舌を梵天につけて誠諦と指し示し、釈尊は重ねて無虚妄の舌を色究竟

に付けさせ給いて後・五百歳に一切の仏法の滅せん時・上行菩薩に
みょうほうれんげきょう 妙法蓮華經の五字をもたしめて謗法一闡提の白癩病の輩の良薬とせんと
ぼんたい 梵帝・日月・四天・竜神等に仰せつけられし金言虚妄なるべしや、大地は
はんぶく 反覆すとも高山は頽落すとも春の後に夏は来らずとも日は東へかへるとも月
は地に落つるとも此の事は一定なるべし、此の事一定ならば鬪諍堅固の時・
にほんこく 日本国の王臣と並びに万民等が仏の御使として南無妙法蓮華經を流布せん
とするを・或は罵詈訾し・或は悪口し・或は流罪し・或は打擲し弟子眷属等
しゅじゆ 種種の難にあわする人人いかでか安穩にては候べき、これをば愚癡の者は
じゅうそ 咒詛すともひぬべし、法華經をひろむる者は日本国の一切衆生の父母なり
しょうあんだいししいわ 章安大師云く「彼が為に悪を除くは即ち是れ彼が親なり」等云云、されば日蓮
は当帝の父母・念佛者・禅衆・真言師等が師範なり又主君なり、而るを上一人
より下万民にいたるまであだをなすをば日月いかで彼等が頂を照し給う

べき地神いかでか彼等かれらの足を戴いたき給たまうべき、提婆達多だいばだつたは仏を打ちたてまつり

しかば大地揺動だいちようどうして火災いでにき、檀弥羅王だんみらは師子尊者ししそんじやの頸を切りしかば右

の手・刀とともに落ちぬ、徽宗皇帝きそうこうていは法道ほうどうが面かおにかなやきをやきて江南にな

がせしかば半年が内にゑびすの手にかかり給たまいき、蒙古もうこのせめも又かくのご

とくなるべし、設たといい五天のつわものをあつめて鉄圀山てつちせんを城とせりともかなふ

べからず必ず日本国にほんこくの一切衆生いっさいしゅじよう・兵難なんに値あうべし、されば日蓮にちれんが法華經ほけきようの

行者ぎようじやにてあるなきかはこれにても見るべし、教主きようしゅ釈尊しやくそん記しるして云いわく末代惡世まつだいあくせ

に法華經ほけきようを弘通くつうするものを惡口罵詈あくくめり等せん人は我いつこつを一劫が間あだせん者の罪つみ

にも百千万億倍せんまんすぎたるべしと・とかせ給たまへり、而しかるを今の日本国にほんこくの国主こくしゅ・

万民等ばんみん・雅意にまかせて父母ふぼ・宿世すくせの敵かたきよりもいたくにくみ謀反さつがい・殺害さつがいの者

よりもつよくせめぬるは現身げんしんにも大地だいちわれて入り天雷てんらいも身をさかざるは不審ふしん

なり、日蓮にちれんが法華經ほけきようの行者ぎようじやにてあらざるか・もししからばを・をきになげか

し、今生には万人に・せめられて片時もやすからず後生には悪道に墮ん事あ
さましとも申すばかりなし、又日蓮・法華經の行者ならずばいかなる者の
一乗の持者にてはあるべきぞ、法然が法華經をなげすてよ善導が千中無一・
道綽が未有一人得者と申すが法華經の行者にて候か、又弘法大師の云く
法華經を行ずるは戲論なりとかかれたるが法華經の行者なるべきか、經文
には能持是經・能説此經なんどこそとかれて候へよくとくと申すはいかなる
ぞと申すに於諸經中最在其上と申して大日經・華嚴經・涅槃經・
般若經等に法華經はすぐれて候なりと申す者をこそ經文には法華經の行者
とはとかれて候へ、もし經文のごとくならば日本国に仏法わたて七百年、
伝教大師と日蓮とが外は一人も法華經の行者はなきぞかし、いかにいかに
とをもつところ、頭破作七分口則閉塞のなかりけるは道理にて候いけるなり、
此等は浅き罰なり但一人・二人等のことなり、日蓮は閻浮第一の法華經の

ぎようじや

行者なり此れをそしり此れをあだむ人を結構せん人は閻浮第一の大難にあう

べし、これは日本国をふりゆるがす正嘉の大地震一天を罰する文永の大彗星

等なり、此等をみよ仏滅後の後・佛法を行ずる者にあだをなすといへども今

のごとくの大難は一度もなきなり、南無妙法蓮華經と一切衆生にすすめた

る人・一人もなし、此の徳はたれか一天に眼を合せ四海に肩をならぶべきや。

疑つて云く設けい正法の時は仏の在世に對すれば根機劣なりとも像末に對

すれば最上の上機なり、いかでか正法の始に法華經をば用いざるべき・随つ

て馬鳴・竜樹・提婆・無著等も正法一千年の内にこそ出現せさせ給へ、

天親菩薩は千部の論師・法華論を造りて諸經の中第一の義を存す真諦三蔵の

相伝に云く月支に法華經を弘通せる家・五十余家・天親は其の一也と已上・

正法なり、像法に入つては天台大師・像法の半に漢土に出現して玄と文と

止との三十卷を造りて法華經の淵底を極めたり、像法の末に伝教大師・日本

しゆつげん
に出現して天台大師の円慧・円定の二法を我が朝に弘通せしむるのみなら
えんどん だいかい えいざん こんりゆう
ず円頓の大戒場を叡山に建立して日本一州皆同じく円戒の地になして上一人
ばんみん えんりやくじ
より下万民まで延暦寺を師範と仰がせ給う豈に像法の時・法華經の広宣流布
いわ によらい きようほう
にあらずや、答えて云く如来の教法は必ず機に随うという事は世間の学者の
ぶつきよう
存知なり、しかれども仏教はしからず・上根・上智の人のために必ず大法
ほけきよう
を説くならば初成道の時なんぞ法華經をとき給はざる正法の先五百年に
しよじようどう
だいじようきよう ぐつう
大乘經を弘通すべし、有縁の人に大法を説かせ給うならば淨飯大王・摩耶
うえん だいほう
ふじん かんぶつさんまい まや
夫人に觀仏三昧經・摩耶經をとくべからず、無縁の惡人謗法の者に秘法をあ
まや ひほう
たえずは覺徳比丘は無量の破戒の者に涅槃經をさづくべからず、不輕菩薩は
かくとくびく わりよう はかい ねはんぎよう
ひほう ししゅう ほけきよう ぐつう
誹謗の四衆に向つていかに法華經をば弘通せさせ給いしぞ、されば機に随つ
たま
て法を説くと申すは大なる僻見なり。
びやっけん

問うて云く竜樹・世親等は法華經の実義をば宣べ給わずや、答えて云く
いわ りゆうじゆ せじん ほけきよう じつぎ のべ たま
問うて云く竜樹・世親等は法華經の実義をば宣べ給わずや、答えて云く
いわ

宣^{のべ}べ給^{たま}はず、問^いうて云^いく何^いなる教^{くわう}をか宣^{のべ}べ給^{たま}いし、答^{こた}えて云^いく華^け嚴^{こん}・方^{ほう}等^{とう}・
般^{はん}若^{にや}・大^{だい}日^{にち}經^{きやう}等^{とう}の權^{ごん}大^{だい}乘^{じやう}・顯^{けん}密^{みつ}の諸^{しよ}經^{きやう}をのべさせ給^{たま}いて法^ほ華^け經^{きやう}の法^{ほう}門^{もん}をば
のべ
宣^{のべ}べさせ給^{たま}はず、問^いうて云^いく何^いをもつてこれをしるや答^{こた}えて云^いく竜^{りゆう}樹^{じゆ}菩^ぼ薩^{さつ}の
しよぞう
所^{しよ}造^{ぞう}の論^{ろん}・三十万偈^げ而^{しか}れども尽^{じん}して漢^{かん}土^ど・日^に本^{ほん}にわたらざれば其^その心^{しん}しり
たしといえども漢^{かん}土^どにわたれる十^{じゅう}住^{じゅう}毘^び婆^ば娑^{しゃ}論^{ろん}・中^{ちゆう}論^{ろん}・大^{だい}論^{ろん}等^{とう}をもつて天^{てん}竺^{じく}の
論^{ろん}をも比^ひ知^ちして此^これを知るなり。

疑^{うたが}つて云^いく天^{てん}竺^{じく}に残^{のこ}る論^{ろん}の中^{ちゆう}にわたれる論^{ろん}よりも勝^{すぐ}れたる論^{ろん}やあるらん、

答^{こた}えて云^いく竜^{りゆう}樹^{じゆ}菩^ぼ薩^{さつ}の事^じは私^{ひそ}に申^{もう}すべからず仏^{ぶつ}・記^しし給^{たま}う我^{われ}が滅^{めつ}後^ごに竜^{りゆう}樹^{じゆ}
菩^ぼ薩^{さつ}と申^{もう}す人^{ひと}・南^{なん}天^{てん}竺^{じく}に出^いずべし彼^かの人^{ひと}の所^{しよ}詮^{せん}は中^{ちゆう}論^{ろん}といふ論^{ろん}に有^あるべしと
仏^{ぶつ}記^きし給^{たま}う、随^{したが}つて竜^{りゆう}樹^{じゆ}菩^ぼ薩^{さつ}の流^{てん}天^{てん}竺^{じく}に七十家^{しちじゅうしちか}あり七十人^{しちじゅうしちにん}とも大^{だい}論^{ろん}師^しな
り、彼^かの七十家^{しちじゅうしちか}の人^{ひと}人^{ひと}は皆^{みな}中^{ちゆう}論^{ろん}を本^{ほん}とす中^{ちゆう}論^{ろん}四^し卷^{くわん}・二^に十^{じゅう}七^{しち}品^{ひん}の肝^{かん}心^{しん}は因^{いん}縁^{ねん}
所^{しよ}生^{しやう}法^{ぽう}の四^し句^{くう}の偈^げなり、此^この四^し句^{くう}の偈^げは華^け嚴^{こん}・般^{はん}若^{にや}等^{とう}の四^し教^{きやう}三^{さん}諦^{たい}の法^{ほう}門^{もん}なり

いまだ法華開会の三諦をば宣べ給はず。

疑つて云く汝がごとくに料簡せる人ありや、答えて云く天台云く「中

論を以て相比すること莫れ」又云く「天親・竜樹内鑒冷然して外は時の宜き

に適う」等云云、妙楽云く「破会を論ぜば未だ法華に若かざる故に」云云、

從義の云く「竜樹・天親未だ天台に若かず」云云、問うて云く唐の末に不空

三蔵一卷の論をわたす其の名を菩提心論となづく竜猛菩薩の造なり云云、

弘法大師云く「此の論は竜猛千部の中の第一肝心の論」と云云、答えて云く

此の論一部七丁あり竜猛の言ならぬ事処処に多し故に目錄にも・或は竜猛

・或は不空と両方にいまだ事定まらず、其の上此の論文は一代を括れる論に

もあらず荒量なる事此れ多し、先ず唯真言法中の肝心の文あやまりなり其の故

は文証・現証ある法華經の即身成仏をばなきになして文証も現証もあと

かたもなき真言經に即身成仏を立て候又唯という唯の一字は第一のあやまり

なり、事のていを見るに不空三蔵の私につくりて候を時の人にをもくせさせ
んがために事を竜猛によせたるか其の上不空三蔵は誤る事かずをほし所謂
法華經の觀智の儀軌に寿量品を阿弥陀仏とかける眼の前の大僻見陀羅尼品
を神力品の次にをける属累品を經末に下せる此等はいつかひなし、さるか
みれば天台の大乗戒を盗んで代宗皇帝に宣旨を申し五台山の五寺に立てた
り、而も又真言の教相には天台宗をすべしといえりかたがた誑惑の事ども
なり、他人の訳ならば用ゆる事もありなん此の人の訳せる經論は信ぜられず、
總じて月支より漢土に經論をわたす人・旧訳・新訳に一百八十六人なり羅什
三蔵一人を除いてはいづれの人人も・らざるはなし、其の中に不空三蔵は
殊に誤多き上誑惑の心顯なり、疑つて云く何をもつて知るぞや羅什三蔵
より外の人人はあやまりなりとは汝が禪宗・念仏・真言等の七宗を破るの
みならず漢土・日本にわたる一切の訳者を用いざるかいかん、答えて云く此

の事は余が第一の秘事なり委細には向つて問うべし、但しすこし申すべし
らじゅうさんぞう
羅什三蔵の云く我漢土の一切経を見るに皆梵語のごとくならずいかでか此の
あらわ
事を顕すべき、但し一の大願あり身を不浄になして妻を帯すべし舌計り清浄
ぶつぼう
になして仏法に妄語せじ我死なば必やくべし焼かん時舌焼けるならば我が経
もうご
をすてよと常に高座にしてとかせ給しなり、上一人より下万民にいたるまで
こうぎ
願じて云く願くは羅什三蔵より後に死せんと、終に死し給う後焼きたてまつ
いわ
りしかば不浄の身は皆灰となりぬ御舌計り火中に青蓮華生て其の上にある五
ふじょう
色の光明を放ちて夜は昼のごとく昼は日輪の御光をうばい給いき、さてこそ
こうみょう
一切の訳人の経経は軽くなりて羅什三蔵の訳し給える経経殊に法華経は
きょうぎょう
漢土にやすやすとひろまり給いしか。
たま
うたがい

疑つて云く羅什已前はしかるべし已後の善無畏不空・等は如何、答えて
いわ
云く已後なりとも訳者の舌の焼けるをば・ありけりとしるべしされば日本国
やくしゃ
にほんこく

ほうそうしゅう

でんぎやうだいし

たま

らじゅうさんぞう

に法相宗のはやりたりしを伝教大師責めさせ給いしには羅什三蔵は舌焼け

げんじやう

じおん

たま

かんむ

どうり

ず玄奘・慈恩は舌焼けぬとせめさせ給いしかば桓武天王は道理と・をばして

てんだいほうけしゅう

ねはんぎやう

天台法華宗へはうつらせ給いしなり、涅槃經の第三・第九等をみまいらすれ

ぶつぼう

がっし

たこく

あやまりしゅつたい

しゅじやう

とくどう

ば我が仏法は月支より他国へわたらん時、多くの謬誤出来して衆生の得道

ぶつぼう

がっし

たこく

みょうらくだいし

なら

しんたい

なん

うすかるべしととかれて候、されば妙樂大師は「並びに進退は人に在り何ぞ

むね

かかわ

ひとびと

ごしやう

聖旨に関らん」とこそあそばされて候へ、今の人人いかに經のままに後世を

きやうぎやう

とくどう

ねがうともあやまれる 經經のままにねがはば得道も・あるべからず、しか

きやうぎやう

とくどう

ればとて仏の御とがにはあらじとかかれて候、仏教を習ふ法には大小・権実

けんみつ

だいいち

だいじ

そうろう

・顕密はさてをくこれこそ第一の大事にては候らめ。

うたがい

いわ

しやうぼう

ろんし

ないしん

ほけきやう

じつぎ

けんみつ

しよきやう

疑つて云く正法一千年の論師の内心には法華經の実義の顕密の諸經に

ちやうか

しやうぼう

ろんし

ないしん

せんぜつ

こんだいじやうばか

超過してあるよしはしろしめしながら外には宣説せずして但権大乘計りを

のべ

たま

そ

ごしき

え候い

宣べさせ給うことはしかるべしとはをばへねども其の義はすこしきこえ候い

ぬ、像法ぞうぼう一千年の半なかばに天台智者大師出現てんだいちしやだいししゆつげんして題目だいもくの妙法蓮華經みょうほうれんげきやうの五字ごじを
玄義げんぎ十卷・一千枚にかきつくし、文句もんく十卷には始めによげ如是がもん我聞がもんより終りさらい作礼而去にこ
にいたるまで一字・一句いっくに因縁いんねん・約教やくきやう・本・迹・觀心かんじんの四の釈しやくをならべて又
一千枚に尽し給たまう已上玄義・文句もんくの二十卷には一切經いっさいきやうの心こころを江河かうかとして
法華經ほけきやうを大海たいかいにたとえ十方界じつぱうの佛法ぶつぽうの露つゆ・も漏もさず妙法蓮華經みょうほうれんげきやうの大海たいかいに
入れさせ給たまいぬ、其その上天竺てんじくの大論だいろんの諸義しよ・一点ももらさず漢土かんど・南北の十
師はの義破ぎはすべきをばこれをはし取るべきをば此これを用もちう、其その上止觀しかん十卷を
注いちだいして一代かんもんの觀門いちなんを一念いちねんにすべ十界じゆつかいの依正えしやうを三千さんぜんにつづめたり、此の書の文
体は遠すぐくは月支がっし・一千年の間の論師ろんしにも超え近くは尸那しな・五百年の大師にんしの釈しやく
にも勝すぐれたり、故ゆえに三論宗さんろんしゆうの吉藏大師きちぞうだいし・南北せんたつ二百余人ちやうじやの先達せんたつと長者ちやうじやらをす
すめて天台大師てんだいだいしの講經かうきやうを聞きこけと勸すすむる状いわに云く「千年の興こう五百の実復じつまたきやう今日けふに
在ないり乃至なんがく南岳えいしやうの叡聖てんだい・天台の明哲めいてつ・昔は三業住持じゆうじし今は二尊しやうけいに紹あに係けいす豈

止甘呂を震旦に灑ぐのみならん亦当に法鼓を天竺に震うべし、生知の妙悟魏

晉以来典籍風謡実に関連無し乃至禅衆一百余の僧と共に智者大師を奉請す

等云云、修南山の道宣律師・天台大師を讃歎して云く「法華を照了するこ

と高輝の幽谷に臨むが若く摩訶衍を説くこと長風の太虚に遊ぶに似たり仮令

文字の師・千羣万衆ありて彼の妙弁を数め尋ぬとも能く窮むる者無し、乃至

義月を指すに同じ乃至宗一極に帰す」云云、華嚴宗の法蔵大師・天台を讃し

て云く「思禅師智者等の如き神異に感通して迹登位に参わる靈山の聴法憶

い今に在り」等云云、真言宗の不空三蔵・含光法師等師弟共に真言宗をす

てて天台大師に帰伏する物語に云く高僧伝に云く「不空三蔵と親たり天竺に

遊びたるに彼に僧有り問うて曰く大唐に天台の迹教有り最も邪正を簡び偏円

を曉むるに堪えたり能く之を訳して將に此土に至らしむ可きや」等云云、此

の物語は含光が妙樂大師にかたり給しなり、妙樂大師・此の物語を聞い

て云く「豈中国に法を失いて之を四維に求むるに非ずや而も此方識ること
有る者少し魯人の如きのみ」等云云、身毒国の中に天台三十巻のごとくなる
大論あるならば南天の僧いかでか漢土の天台の釈をねがうべき、これあに像法
の中に法華經の実義顕れて南閩浮提に広宣流布するにあらずや、答えて云く
正法一千年・像法の前四百年・已上仏滅後・一千四百余年にいまだ論師の
弘通し給はざる一代超過の円定・円慧を漢土に弘通し給うのみならず其の声
月氏までもきこえぬ、法華經の広宣流布にはにたれどもいまだ円頓の戒壇を
立てられず小乗の威儀をもつて円の慧定に切りつけるはすこし便なきに
たり、例せば日輪の蝕するがごとし月輪のかけたるに似たり、何にいわうや
天台大師の御時は大集經の読誦多聞堅固の時にあひあていまだ広宣流布の
時にあらず。

問うて云く伝教大師は日本国の士なり桓武の御宇に出世して欽明より二百

余年が間の邪義をなんじやぶり天台大師の円慧・円定をせんじ給うのみならず、鑒真和尚の弘通せし日本小乗の三処の戒壇をなんじやぶり叡山に円頓だいじょうべつじゆかい こんりゅうの大乗別受戒を建立せり、此の大事は仏滅後・一千八百年が間の身毒・尸那ふそうないし えんぶだい だいいち ないしゅう りゅうじゆ てんだい あるいは扶桑乃至一閻浮提第一の奇事なり、内証は竜樹・天台等には・或は劣るにもや・或は同じくもやあるらん、仏法の人をすべて一法となせる事は竜樹てんじん なんがく てんだい すぐれて見えさせ給うなり、総じては如来にゆづめつ 御入滅の後・一千八百年が間・此の二人こそ法華經の行者にてはをはすれ、ゆえ しゅうく いわ 經に云く若し須弥を接つて他方無數の仏土に擲け置かんも故に秀句に云く「經に云く若し須弥を接つて他方無數の仏土に擲け置かんも亦未だこれ難しとせず乃至若し仏の滅度惡世の中に於て能く此の經を説かんすなわ かつ うんぬん 此經を釈して云く浅は易く深は難しとは釈迦の所判な是則ちこれ難し云云、此經を釈して云く浅は易く深は難しとは釈迦の所判なり浅を去て深に就くは丈夫の心なり天台大師は釈に信順し法華宗を助けてあさき さり ふかき じょうぶ てんだいだいし しんじゆん ほつけしゅう しんたん ふよう えいざん てんだい そうじょう ほつけしゅう にほん ぐつう うんぬん 震旦に敷揚し叡山の一家は天台に相承し法華宗を助けて日本に弘通す云云、

しゃく

釈の心は賢劫第九の減・人壽百歳の時より如来在世五十年滅後・一千八百余

ちゅうげん

年が中間に高さ十六万八千由旬・六百六十二万里の金山を有人五尺の小身の

ばんり

あるひと

かた

手をもつて方一寸・二寸等の瓦礫をにぎりて一丁二丁までなぐるがごとく

すずめ

てっちせん

ほけきよう

雀鳥のとぶよりもはやく鉄圀山の外へなぐる者はありとも法華經を仏のとか

たま

まっぼう

てんだいだいし

でんぎようだいし

せ給いしやうに説かん人は末法にはまれなるべし、天台大師・伝教大師こそ

ぶっせつ

そうじ

たま

てんじく

ろんし

仏説に相似してとかせ給いたる人にてをはすれとなり、天竺の論師はいまだ

ほけきよう

たま

かんど

てんだい

いぜん

ある

ある

法華經へゆきつき給はず漢土の天台已前の人師は・或はすぎ・或はたらず、

じおん

ほうぞう

ぜんむい

ひとびと

これら

でんぎよう

慈恩・法蔵・善無畏等は東を西といひる天を地と申せる人人なり、此等は伝教

だいし

じさん

いぬ

えんりやく

かんむこうていみゆき

大師の自讃にはあらず、去る延暦二十一年正月十九日高雄山に桓武皇帝行幸

ろくしゅうなだいじ

せきとく

ぜんぎ

しょうゆう

ほうき

ちようにん

けんぎよく

あんぶく

ごんそう

なりて六宗七大寺の碩徳たる善議・勝猷・奉基・寵忍・賢玉・安福・勤操

しゅえん

じこう

げんよう

さいこう

どうしやう

こうしやう

かんびん

じゅうゆうよ

さいちようほっし

さいちようほっし

・修円・慈誥・玄耀・歳光・道証・光証・觀敏等の十有余人、最澄法師と

しゅつろん

ある

ある

ある

およ

みな

召し合せられて宗論ありしに・或は一言に舌を巻いて二言三言に及ばず皆一

同に頭をかたづけ手をあざう、三論の二蔵・三時・三転法輪・法相の三時・
五性・華嚴宗の四教・五教・根本枝末・六相・十玄・皆大綱をやぶらる、例
せば大屋の棟梁のをれたるがごとし十大徳の慢幢も倒れにき、爾の時・天子
大に驚かせ給いて同二十九日に弘世・国道の両吏を勅使として重ねて七寺
六宗に仰せ下れしかば各各歸伏の状を載せて云く、「竊に天台の玄疏を見れば
総じて釈迦一代の教を括つて悉く其の趣を顯すに通ぜざる所無く独り諸宗に
逾え殊に一道を示す其の中の所説甚深の妙理なり七箇の大寺・六宗の学生昔
より未だ聞かざる所曾て未だ見ざる所なり三論・法相久年の諍い渙焉として
氷の如く釈け照然として既に明かに猶雲霧を披いて三光を見るがごとし聖徳
の弘化より以降今に二百余年の間講ずる所の經論其の数多く彼此理を争えど
も其の疑未だ解けず、而るに此の最妙の円宗未だ闡揚せず蓋し以て此の間
の羣生未だ円味に応わざるか、伏して惟れば聖朝久しく如来の付を受け深く

純円じゆんえんの機きを結び一妙ぎりの義理始めて乃すなわち興顯こうけんし六宗ろくしゅうの学者初めて至極しごくを悟る
此の界の含がんりゅう靈れい今より後ことごと悉みょうえんく妙円めうえんの船に載り早く彼岸ひがんに済わたる事を得ると謂いい
つべし、乃至善議等牽ないしぜんぎれて休運ひかに逢すなわい乃すなわち奇詞けみを閱けみす深期あに非あらざるよりは何なんぞ
聖世たに託たくせんや」等云云、彼の漢土かんどの嘉祥等かじょうは百余人をあつめて天台大師てんだいだいしを
聖人と定めたり、今日いまにほん本の七寺二百余人は伝でんぎようだいし教大師しようにんを聖人とがうしたてま
つる、仏の滅後めつご二千余年に及んで両国りようこくに聖人しようにん・二人出現しゅつげんせり其の上そ
天台大師てんだいだいしの末弘みぐの円頓大戒えんどんだいかいを叡山えいざんに建立こんりゆうし給たまう此これ豈あに像法ぞうぼうの末ほけきようこうせんに法華經ほけきようこうせん広宣くわんげん
流布るふするにあらずや、答いえて云いく迦葉かしょう・阿難等あなんの弘通くつうせざる大法だいほうを馬鳴めみょう・
竜樹りゅうじゆ・提婆天親等だいばてんじんの弘通くつうせる事前さきの難なんに顕あらわれたり、又竜樹りゅうじゆ・天親等てんじんの流布るふ
し残たまし給たまえる大法天台大師だいほうてんだいだいしの弘通くつうし給たまう事又難なんにあらはれぬ、又天台智者大師てんだいちしやだいし
の弘通くつうし給たまはざる円頓えんどんの大戒だいかいを伝でんぎようだいし教大師こんりゆうの建立こんりゆうせさせ給たまう事又顕然けんねんなり、
但ただし詮ふしんと不審ふしんなる事は仏は説き尽し給たまえども仏滅後ぶつめつに迦葉かしょう・阿難あなん・馬鳴めみょう・

りゆうじゆ　むちやく　てんじんないし　てんだい　でんぎよう
竜樹・無著・天親乃至・天台・伝教のいまだ弘通しましまさぬ最大の深密
しょうほうきようもん
の正法経文の面に現前なり、此の深法・今末法の始五五百歳に一閻浮提に
こうせんるふ　ふしんきわま
広宣流布すべきやの事不審極り無きなり。

問　ういかなる秘法ぞ先ず名をきき次に義をきかんとをもう此の事もし実事
じやくせん　ひほう
ならば釈尊の二度世に出現し給うか上行菩薩の重ねて涌出せるか・いそぎ
しやくせん　しゆつげん　たま　じようぎようぼさつ　かさ　ゆじゆつ
いそぎ慈悲をたれられよ、彼の玄奘三蔵は六生を経て月氏に入りて十九年・
ほつけいちじよう　ほうべん　しよつじよう　あこんきよう　しんじつ　へ　がっし
法華一乗は方便教・小乗・阿含経は真実教、不空三蔵は身毒に返りて
じゆりようほん　あみだぶつ　これら
寿量品を阿弥陀仏とかかれたり、此等は東を西という日を月とあやまてり身
を苦めてなにかせん・心に染てようなし、幸い我等末法に生れて一步をあゆ
まずして三祇をこゑ頭を虎にかわずして無見頂相をえん、答えて云く此の
ほうもん　もつ　さんぎ　えん　むけんちようそう　い　わ
法門を申さん事は経文に候へばやすかるべし但し此の法門には先ず三の大事
たいかい
あり大海は広けれども死骸をとどめず大地は厚けれども不孝の者をば載せず、
だいち　ふこう　の

ぶつぼう　　ごぎやく　　ふこう　　ただ　　ひぼういつせんだい　　じかい　　だいいち
仏法には五逆をたすけ不孝をばすくう但し誹謗一闡提の者持戒にして第一な
るをばゆるされず、此の三のわざはひとは所謂念仏宗と禅宗と真言宗とな
り、一には念仏宗は日本国に充滿して四衆の口あそびとす、二に禅宗は
さんね　いちばつ　　だいまん　　びく　　しかい　　じゅうまん　　いつてん
三衣一鉢の大慢の比丘の四海に充滿して一天の明導と・をもへり、三に
しんこんしゅう　　かれら
真言宗は又彼等の二宗にはにるべくもなし叡山・東寺・七寺・園城・或
かんしゅ　　ある　　おもむ　　ある　　ちようり　　ある　　けんぎよう　　ないじどころ　　みかがみじんかい
官主・或は御室・或は長吏・或は検校なりかの内侍所の神鏡燼灰となり
しかども大日如来の宝印を仏鏡とたのみ宝剣・西海に入りしかども五大尊を
もつて国敵を切らんと思へり、此等の堅固の信心は設い劫石はひすらぐとも
・かたぶくべしとはみへず大地は反覆すとも疑心をこりがたし、彼の
てんだいだいし　　たま
天台大師の南北をせめ給いし時も此の宗はいまだわたらず此の伝教大師の
ろくしゅう
六宗をしゑたげ給いし時ももれぬ、かたがたの強敵をまぬがれてかへつて
だいほう　　うしな　　そ　　でんぎようだいし　　おんでしじかくだいし
大法をかすめ失う、其の上传教大師の御弟子慈覚大師・此の宗をとりたてて

えいざん てんだいしゅう

叡山の天台宗をかすめをとして一向・真言宗になししかば此の人には誰の

人か敵をなすべき、かかる僻見のたよりをえて弘法大師の邪義をもとがむる

人もなし、安然和尚すこし弘法を難ぜんとせしかども只華嚴宗のところ計り

とがむるににてかへて法華經をば大日經に對して沈めはてぬ、ただ世間のた

て人の者のごとし。

問うて云く此の三宗の謬如何答えて云く浄土宗は齊の世に曇鸞法師と

申す者あり本は三論宗の人竜樹菩薩の十住毘婆娑論を見て難行道・易行道

を立てたり、道綽禪師という者あり唐の世の者本は涅槃經をかうじけるが

曇鸞法師が浄土につつまる筆を見て涅槃經をすてて浄土につつまる聖道・浄土二

門を立てたり、又道綽が弟子に善導という者あり雜行・正行を立つ、

日本国に末法に入つて二百余年・後鳥羽院の御宇に法然というものあり一切

の道俗をすすめて云く仏法は時機を本とす法華經・大日經・天台・真言等の

はつしゅう
八宗・九宗いちだい一代の大小・顕密けんみつ・権実等の諸宗等は上根・上智じょうちの正像二千
年の機きのためなり、末法まつぽうに入りてはいかに功こうをなして行ずるとも其その益ある
べからず、其その上・弥陀念仏にまじへて行ずるならば念仏も往生おうじょうすべからず
此れわたくしに申すにはあらず竜樹菩薩・曇鸞法師は難行道となづけ、
道綽どうしやくは未有一人得者ときらひ善導ぜんどうは千中無一とさだめたり、此等は他宗なれ
ば御不審ふしんも・あるべし、慧心えしん・先徳せんとくにすぎさせ給へる天台・真言しんごんの智者は末代
にをはすべきか彼の往生要集おうじょうようじゅうには顕密の教法は予が死生をはなるべき法に
はあらず、又三論さんろんの永観えいかんが十因等をみよされば法華・真言等しんごんをすて一向に
念仏ねんぶつせば十即じゆつ十生じゆつ・百即ひやく百生ひやくとすすめければ、叡山えいざん・東寺とうじ・園城おんじょう・七
寺等始めは諍論じょうろんするやうなれども、往生要集おうじょうようじゅうの序の詞・道理かとみへけ
れば顕真座主けんしんざす落ちさせ給いて法然ほうねんが弟子でしとなる、其その上たとい設ほうねん法然でしが弟子とな
らぬ人々も弥陀念仏みだねんぶつは他仏たぶつになるべくもなく口ずさみとし心よせにをもひけ

れば日本国・皆一同に法然房の弟子と見へけり、此の五十年が間・一天四海

・一人もなく法然が弟子となる法然が弟子となりぬれば日本国一人もなく

謗法の者となりぬ、譬へば千人の子が一同に一人の親を殺害せば千人共に五逆

の者なり一人阿鼻に堕ちなば余人堕ちざるべしや、結句は法然・流罪をあだ

みて悪霊となつて我並びに弟子等をとがせし国主山寺の僧等が身に入つて

・或は謀反を・をこし・或は悪事をなして皆関東にほろぼされぬ、わづかに

のこれる叡山・東寺等の諸僧は俗男・俗女にあなづらるること猿猴の人にわ

らはれ・俘囚が童子に蔑如せらるるがごとし、禅宗は又此の便を得て持斎

等となつて人の眼を迷かし・たつとげなる気色なれば・いかに・ひがほうも

んを・いぬくるへども失とも・をばへず、禅宗と申す宗は教外別伝と申して

釈尊の一切経の外に迦葉尊者にひそかにささやかせ給へり、されば禅宗を

しらずして一切経を習うものは、犬の雷をかむがごとし、猿の月の影をと

るににたり云云、此の故に日本国の中に不孝にして父母にすてられ無礼なる
故に、主君にかんどうせられ・あるいは若なる法師等の学文にもものうき遊女
のものぐるわしき本性に叶る邪法なるゆへに皆一同に持齋になりて国の百姓
をくらう蝗虫となれり、しかれば天は天眼をいからかし地神は身をふるう、
真言宗と申すは上の二のわざはひには・にるべくもなき大僻見なりあらあ
ら此れを申すべし、所謂大唐の玄宗皇帝の御宇に善無畏三蔵・金剛智三蔵・
不空三蔵、大日経・金剛頂経・蘇悉地経を月支よりわたす、此の三経の
説相分明なり其の極理を尋ぬれば会二破二の一乗其の相を論ずれば印と
真言と計りなり、尚華嚴・般若の三一相對の一乗にも及ばず天台宗の爾前
の別円程もなし但蔵通二教を面とするを善無畏三蔵をもはく此の経文をあら
わにいみ出す程ならば華嚴・法相にもをこつかれ天台宗にもわらはれなん
大事として月支よりは持ち来りぬ・さてもだせば本意にあらずとやをもひけ

ん、天台宗の中に一行禪師ぜんという僻人びやくにん一人ありこれをかたらひて漢土かんどの法門ほうもんをかたらせけり、一行阿闍梨あじゃりうちぬかれて三論さんろん・法相ほうそう・華嚴等けこんをあらあらかたるのみならず天台宗てんだいしゅうの立てられけるやうを申しければ善無畏ぜんむいをもはく天台宗てんだいしゅうは天竺てんじくにして聞きしにもなをうちすぐれてかさむべきやうもなかりければ善無畏ぜんむい一行をうちぬひて云いわく和僧かんどは漢土かんどにはござかしき者にてありけり、天台宗てんだいしゅうは神妙しんめうの宗なり今真言宗しんこんしゅうの天台宗てんだいしゅうにかさむところは印しんこんと真言ばかと計りなりといふければ一行さもやと・をもひければ善無畏ぜんむい三蔵さんざう一行にかたて云いわく、天台大師てんだいだいしの法華經ほけきょうに疏じょをつくらせ給たまへるごとく大日經だいにちきょうの疏じょをつくりて真言しんこんを弘通くつうせんとをもう汝なんじかきなんやと・いふければ一行いっが云いわくやすう候た、但ただしいかやうにかき候べきぞ天台宗てんだいしゅうはにくき宗しゅうなり諸宗しよしゅうは我も我烽わぼうあらそいをなせども一切いっさいに叶かなわざる事こと一あり、所謂い法華經わゆるほけきょうの序分じよぶんに無量義經むりやうぎきょうと申もうす經をもつて前四十余年よんじゅうよねんの經經きやうぎやうをば其その門を打ちふさぎ候いぬ、法華經ほけきょうの法師品ほうしほん・

じんりきぼん

きようぎよう

きようぎよう

こんせつ

神力品をもつて後の経経をば又ふせがせぬ肩をならぶ経経をば今説の文

だいにちきよう

をもつてせめ候大日経をば三説の中にはいづくにかをき候べきと問ひければ

そ

ぜんむいさんぞうおおい

たくらだいにちきよう

じゅうしんぼん

わりようぎきよう

爾の時に善無畏三蔵大に巧んで云く大日経に住心品という品あり無量義経

よんじゅうよねん

きようぎよう

きようぎよう

だいにちきよう

い

か

しよ

の四十余年の経経を打ちはらうがごとし、大日経の入漫陀羅已下の諸品は

かんど

ほけきよう

だいにちきよう

てんじく

いつきよう

漢土にては法華経・大日経とて二本なれども天竺にては一経のごとし、

しゃかぶつ

しゃりほつみるく

だいにちきよう

ほけきよう

しんこん

釈迦仏は舍利弗弥勒に向つて大日経を法華経となづけて印と真言とをすてて

ばか

ふじゅうさんぞうこ

てんだいだいしこ

だいにちによらい

但理計りをとけるを羅什三蔵此れをわたす天台大師此れをみる、大日如来は

ほけきよう

だいにちきよう

こんごうさつた

たまこ

だいにちきよう

法華経を大日経となづけて金剛薩に向つてとかせ給う此れを大日経とな

てんじく

づく我まのあたり天竺にしてこれを見る、されば汝がかくべきやうは大日経

ほけきよう

いちみ

なんじ

だいにちきよう

と法華経とをば水と乳とのやうに一味となすべし、もししからば大日経は

いこんとう

みなほけきよう

しんこん

已今当の三説をば皆法華経のごとくうちをとすべし、さて印と真言とは心法

いちねんさんぜん

そうこん

そうおう

ひほう

そうおう

の一念三千に莊嚴するならば三密相應の秘法なるべし、三密相應する程なら

ば天台宗は意密なり真言は甲なる將軍の甲鎧を帶して弓箭を横たへ太刀を腰にはけるがごとし、天台宗は意密計りなれば甲なる將軍の赤裸なるがごとくならんといふければ、一行阿闍梨は此のやうにかきけり、漢土三百六十箇国には此の事を知る人なかりけるかのあひだ始めには勝劣を諍論しけれども善無畏等は人がらは重し天台宗の人人は軽かりけり、又天台大師ほどの智ある者もなかりければ但日日に真言宗になりてさてやみにけり、年ひさしくなればいよいよ真言の誑惑の根ふかくかくれて候いけり、日本国の伝教大師・漢土にわたりて天台宗をわたり給うついでに真言宗をならべわたす、天台宗を日本の皇帝にさづけ真言宗を六宗の大徳にならばせ給う、但し六宗と天台宗の勝劣は入唐已前に定めさせ給う、入唐已後には円頓の戒場を立てう立てじの論の計りなかりけるかのあひだ敵多くしては戒場の事成りがたしとやをばしめしけん、又末法にせめさせんとやをばしけん皇帝の

御前おんまえにしても論ろんぜさせ給たまはず弟子等でしにもはかばかしくかたらせ給たまはず、但ただし
依憑集えびようと申もうす一巻の秘書あり七宗の人人ひとびとの天台てんだいに落ちたるやうをかかれて候
文なり、かの文の序に真言宗しんこんしゅうの誑惑おあわく一筆みへて候弘法大師こうぼうだいしは同じき延暦年
中に御入にゅうとう唐青竜寺の慧果けいかに値あい給たまいて真言宗しんこんしゅうをならはせ給たまへり、御帰朝きちようの
後いちだい・一代の勝劣しょうれつを判たまじ給たまいけるに第一真言だいいちしんこん・第二・華嚴けこん・第三法華ほっけとかかれ
て候、此の大師だいしは世間せけんの人人ひとびともつてのほかにか重おほずる人なり、但ただし仏法ぶつぽうの事は
申もうすにをそれあれどももつてのほかにあらき事どもはんべり、此の事をあら
あら・かんがへたるに漢土かんどにわたらせ給たまいては但真言しんこんの事相じそうの印しんこんばか・真言計しんこんり
習ならいつたえて其その義理ぎりをばくはしくもさはぐらせ給たまはざりけるほどに日本にほんに
わたりて後大おおいに世間せけんを見れば天台宗てんだいしゅうもつてのほかにかさみたりければ、我が
重しんこんしゅうずる真言宗しんこんしゅうひろめがたかりけるかのゆへに本日本国にほんこくにして習ならいたりし
華嚴宗けこんしゅうをとりいだして法華經ほけきようにまされるよしを申しけり、それも常けこんしゅうの華嚴宗

に申すやうに申すならば人信ずまじとやをばしめしけんすこしいろをかえて
此れは大日經だいにちきやうりゆうもうぼさつ 竜猛菩薩ぼだいしんろんぜんむいの菩提心論ぼだいしんろん善無畏等じつぎの実義じつぎなりと大妄語もうごをひきそへ
たりけれども天台宗てんだいしゅうの人人ひとびといたうとがめ申す事もうなし。

問うて云く弘法大師いわの十住心論じゅうじゅう・秘藏宝鑰ひぞうほうやく二教論いに云く「此くの如き

乗乗じようじようじ

自乗に名を得れども後に望めば戲論けろんと作す」又云く「無明むみようの辺域へんいきにし

て明あの分位ぶんゐに非ず」又云く「第四熟蘇味じゆくそみなり」又云く「震旦しんたんの人師にんし等あらし諍あらそつて醍醐だいご

を盗んで各自宗じしゅうに名く」等云云うんぬん、此等の釈しゃくの心如何いかに、答えて云く予此の釈いに

をどろいて一切經いっさいきやう並びに大日の三部經さんぶきやう等をひらきみるに華嚴經けこんきやうと大日經だいにちきやうと

に対すれば法華經ほけきやう戲論きろん・六波羅蜜經ろくはらみつきやうに対すれば盗人守護經ぬすびとしゆこに対すれば無明むみようの

辺域へんいきと申す經文きやうもんは一字・一句も候はず此の事はいとはかなき事なれども此の

三四百余年に日本國にほんこくのそこばくの智者ちしやどもの用いさせ給たまへば定めてゆへある

かともひぬべし、しばらくいとやすきひが事をあげて余事よじのはかなき事を

しらすべし、法華經ほけきょうを醍醐味だいごみと称しょうすることは陳隋ちんずいの代なり六波羅蜜經ろくはらみつぎきょうは唐とうの

はんにやさんぞうこ

半に般若三藏はん此れをわたす、六波羅蜜經ろくはらみつぎきょうの醍醐だいごは陳隋ちんずいの世には・わたりてあ

てんだいだいし

らばこそ天台大師てんだいだいしは真言しんごんの醍醐だいごをば盗ませ給たまはめ、傍例ぼうれいあり日本にほんの得一だいつが

いわ てんだいだいし

じんみつ

さんじきよう

さんずん

云く天台大師てんだいだいしは深密經じんみつの三時教さんじきようをやぶる三寸さんずんの舌をもつて五尺ごせきの身をたつべ

しとののしりしを伝でん教大師きょうだいし此れをただして云く深密經じんみつは唐とうの始げんじ玄奘くわんざうこれを

でんぎようだいしこ

いわ じんみつ

とう

げんじよう

わ

わたす天台てんだいは陳隋ちんずいに人・智者御入滅ちしや にゆうめつの後・数箇年しうこなんあつて深密經じんみつわたり、死

てんだい ちんずい

ちしや にゆうめつ

じんみつ

して已後いごにわたれる經をば・いかでか破り給たまうべきとせめさせ給たまいて候かしこいし

かば得一かばだいつはつまるのみならず舌八しよくはちにさけて死し候いぬ、これは彼かにはにるべ

いご

たま

かしこ

いぬ

か

は

に

くもなき悪口あくぐちなり、華嚴けごんの法蔵三論ほうぞうさんろんの嘉祥法相かじようほうそうの玄奘くわんざう・天台等てんだい・乃至南北ないしの

あつく

けごん

ほうぞうさんろん

かじようほうそう

げんじよう

諸師しよし・後漢ごかんより已下いかの三藏さんぞう・人師にんしを皆みなをさえて盗人ぬすびととかかれて候なり、其その

上又法華經ほけきょうを醍醐だいごと称しょうすることは天台等てんだいの私の言ごにはあらず、仏涅槃經ねはんぎきょうに

ほけきほけきようだいごを醍醐だいごととかせ給たまい天親菩薩てんじんぼさつは法華經ほけききょう・涅槃經ねはんぎきょうを醍醐だいごととかかれて候、

法華經ほけききょうを醍醐だいごととかせ給たまい天親菩薩てんじんぼさつは法華經ほけききょう・涅槃經ねはんぎきょうを醍醐だいごととかかれて候、

法華經ほけききょうを醍醐だいごととかせ給たまい天親菩薩てんじんぼさつは法華經ほけききょう・涅槃經ねはんぎきょうを醍醐だいごととかかれて候、

法華經ほけききょうを醍醐だいごととかせ給たまい天親菩薩てんじんぼさつは法華經ほけききょう・涅槃經ねはんぎきょうを醍醐だいごととかかれて候、

法華經ほけききょうを醍醐だいごととかせ給たまい天親菩薩てんじんぼさつは法華經ほけききょう・涅槃經ねはんぎきょうを醍醐だいごととかかれて候、

法華經ほけききょうを醍醐だいごととかせ給たまい天親菩薩てんじんぼさつは法華經ほけききょう・涅槃經ねはんぎきょうを醍醐だいごととかかれて候、

法華經ほけききょうを醍醐だいごととかせ給たまい天親菩薩てんじんぼさつは法華經ほけききょう・涅槃經ねはんぎきょうを醍醐だいごととかかれて候、

法華經ほけききょうを醍醐だいごととかせ給たまい天親菩薩てんじんぼさつは法華經ほけききょう・涅槃經ねはんぎきょうを醍醐だいごととかかれて候、

法華經ほけききょうを醍醐だいごととかせ給たまい天親菩薩てんじんぼさつは法華經ほけききょう・涅槃經ねはんぎきょうを醍醐だいごととかかれて候、

りゆうじゅぼさつ ほけきよう

竜樹菩薩は法華經を妙藥となづけさせ給う、されば法華經等を醍醐と申す人

ぬすびと

・盗人ならば釈迦・多宝・十方の諸仏・竜樹・天親等は盗人にてをはずべき

こうぼう

もんじん

ないしにほん

とうじ

しんごんし

いかん

じげん

こくびやく

か、弘法の門人等・乃至日本の東寺の真言師・如何に自眼の黒白はつたなく

わきまえ

して弁へずとも他の鏡をもつて自禍をしれ、此の外法華經を戲論の法とかか

だいにちきよう

こんごうちようきよう

きようもん

ほけきよう

けろん

たといかれがれ

ること大日經・金剛頂經等にたしかなる經文をいだされよ、設い彼彼

きようぎよう

ほけきよう

けろん

やくしや

あやま

の経經に法華經を戲論ととかれたりとも訳者の○る事もあるぞかしよくよ

きようぎよう

ほけきよう

けろん

こうし

やくしや

あやま

る事もあるぞかしよくよ

く思慮のあるべかりけるか、孔子は九思一言・周公旦は沐には三にぎり食

きようぎよう

ほけきよう

けろん

こうし

やくしや

あやま

る事もあるぞかしよくよ

には三はかれけり外書のはかなき世間の浅き事を習う人すら智人はかう候ぞ

きようぎよう

ほけきよう

けろん

こうし

やくしや

あやま

る事もあるぞかしよくよ

かし、いかにかかるあさましき事はありけるやらん、かかる僻見の末へなれ

きようぎよう

ほけきよう

けろん

こうし

やくしや

あやま

る事もあるぞかしよくよ

ば彼の伝法院の本願とがうする聖覚房が舍利講の式に云く「尊高なる者は不

きようぎよう

ほけきよう

けろん

こうし

やくしや

あやま

る事もあるぞかしよくよ

二摩訶衍の仏なり驢牛の三身は車を扶くこと能はず秘奥なる者は両部漫陀

きようぎよう

ほけきよう

けろん

こうし

やくしや

あやま

る事もあるぞかしよくよ

羅の教なり顕乗の四法は履を採るに堪へず」と云云、顕乗の四法と申すは法相

・三論・華嚴・法華の四人、驢牛の三身と申すは法華・華嚴・般若・深密經の教主の四仏、此等の仏僧は眞言師に對すれば聖覺弘法の牛飼・履物取者にもたらぬ程の事なりとかいて候、彼の月氏の大慢婆羅門は生知の博學顯密にどう二道胸にうかべ内外の典籍・掌ににぎる、されば王臣頭をかたづけ万人師範と仰ぐあまりの慢心に世間に尊崇する者は大自在天・婆藪天・那羅延天・大覺世尊此の四聖なり我が座の四足にせんと座の足につくりて坐して法門を申しけり、當時の眞言師が釈迦仏等の一切の仏をかきあつめて灌頂する時敷まんだらとするがごとし、禪宗の法師等が云く此の宗は仏の頂をふむ大法なりというがごとし、而るを賢愛論師と申せし小僧あり彼をただすベきよし申せしかども王臣万民これをもちゐず、結句は大慢が弟子等・檀那等に申しつけて無量の妄語をかまへて悪口打擲せしかども・すこしも命をしまずののしりしかば帝王・賢愛をにくみてつめさせんとし給いしほどにか

へりて大慢だいまんがせめられたりしかば、大王・天あおに仰おほぎ地に伏ふしてなげひての給たま
はく朕みづかはまのあたり此この事をきひて邪見じゃけんをはらしぬ先王せんわうはいかに此この者にた
ばらされて阿鼻あびじく地獄じごくにをはすらんと賢愛けんあい論師ろんしの御足ごそくにとりつきて悲涙ひなみせさせ
給たまいしかば、賢愛けんあいの御計ごけいいとして大慢だいまんを驢うまにのせて五竺ごしつに面おもてをさらし給たまいけ
ればいよいよ悪心あくしん盛さかんになりて現身げんしんに無間むげん地獄じごくに墮おちぬ、今の世しんごんの真言ぜんしんと禅宗ぜんしゅう
等ことは此これにかわれりや、漢土かんとの三階さんかい禅师ぜんしんの云いわく教主きょうしゅ釈尊しやくそんの法華ほけき経きょうは第一だいいち
第二階じふにかいの正像しょうざうの法門ほつもんなり末代まつだいのためには我がつくれる普經ふきやうなり法華ほけき経きょうを今いまの
世よに行いぜん者は十方じつぱうの大阿鼻だいあび地獄じごくに墮おつべし、末代まつだいの根機こんきにあたらざるゆへな
りと申もうして、六時らいじふの礼懺らいざん・四時さぜんの坐禅しやぜん・生身しやうしん仏ぶつのごとくなりしかば、人多おほく
尊でしみて弟子でし万余人よろいじんありしかどもわづかの小女こなの法華ほけき経きょうをよみしに・せめられ
て当坐こえには音うしなを失うしない後ごには大蛇だいじやになりてそこばくの檀那だんな弟子でし並びに小女こな処女こな
等らをのみ食くいしなり、今の善導ぜんどう・法然ほうねん等らが千中せんちゆう無む一の悪義あくぎもこれにて候まちなり、

此等の三大事は・すでに久くなり候へばいやしむべきにはあらねども申さば
信ずる人もやありなん、これよりも百千万億倍・信じがたき最大の悪事はん
べり、慈覚大師は伝教大師の第三の御弟子なり・しかれども上一人より下
万民にいたるまで伝教大師には勝れてをはします人なりとをもひり、此の人
真言宗と法華宗の実義を極めさせ給いて候が真言は法華経には勝れたりとか
かせ給へり、而るを叡山三千人の大衆・日本一州の学者等・一同の帰伏の義
なり、弘法の門人等は大師の法華経を華嚴経に劣るとかかせ給えるは、我が
かたながらも少し強きやうなれども、慈覚大師の釈をもつてをもつに真言宗
の法華経に勝れたることは一定なり、日本国にして真言宗を法華経に勝るる
と立つるをば叡山こそ強きかたきなりぬべかりつるに慈覚をもつて三千人の
口をふさぎなば真言宗はをもつごとし、されば東寺第一のかたうど慈覚大師
にはすぐべからず、例せば浄土宗・禅宗は余国にてはひろまるとも日本国

にしては延暦寺のゆるされなからんには無辺劫はふとも叶うまじかりしを
安然和尚と申す叡山第一の古徳・教時諍論と申す文に九宗の勝劣を立てら
れたるに第一真言宗・第二禅宗・第三天台法華宗・第四華嚴宗等云云、此
の大謬釈につひて禅宗は日本国に充滿して・すでに亡国とならんとはす
るなり法然が念仏宗のはやりて一国を失わんとする因縁は慧心の往生要集
の序よりはじまれり、師子の身の中の虫の師子を食うと仏の記し給うはまこ
となるかなや。

伝教大師は日本国にして十五年が間・天台・真言等を自見せさせ給う生知
の妙悟にて師なくしてさとらせ給いしかども、世間の不審をはらさんがため
に漢土に亘りて天台・真言の二宗を伝へ給いし時漢土の人人はやうやうの義
ありしかども我が心には法華は真言にすぐれたりと・をばしめししゆへに
真言宗の宗の名字をば削らせ給いて天台宗の止観・真言等かかせ給う、十

二年の年分得度の者二人を・をかせ給い、重ねて止観院に法華經・金光明經
にんのうきよう
 ・仁王經の三部を鎮護国家の三部と定めて宣旨を申し下し永代日本国の第一
しんじ
 の重宝・神璽・宝劍・内侍所とあがめさせ給いき、叡山第一の座主・義真和尚
ないじどころ
 ・第二の座主・円澄大師までは此の義相違なし、第三の慈覚大師・御入唐
ざす
 ・漢土にわたりて十年が間・顕密二道の勝劣を八箇の大徳にならひつたう、
えんちようだいし
 又天台宗の人人広修・惟・等にならばせ給いしかども心の内にをばしける
てんだいしゅう
 は真言宗は天台宗には勝れたりけり、我が師・伝教大師はいまだ此の事を
しんこんしゅう
 ばくはしく習せ給わざりけり漢土に久しくもわたらせ給わざりける故に此の
たまた
 法門はあらうち・をばしけるやと・をばして日本国に帰朝し叡山東塔止観
ほうもん
 院の西に総持院と申す大講堂を立て御本尊は金剛界の大日如来・此の御前に
そうじいん
 して大日經の善無畏の疏を本として金剛頂經の疏七卷・蘇悉地經の疏七卷
だいにちきよう
 ・已上十四卷をつくる、此の疏の肝心の釈に云く「教に二種有り一は顯示教
じよ
かんじん
いわ

おもえらさんじょう　謂く三乗教なり世俗と勝義と未だ円融せざる故に、二は秘密教謂く一乗教なり世俗と勝義と一体にして融する故に、秘密教の中に亦二種有り一には理秘密の教諸の華嚴・般若維摩法華・涅槃等なり但だ世俗と勝義との不二を説いて未だ真言密印の事を説かざる故に、二には事理俱密教謂く大日教・金剛頂經・蘇悉地經等なり亦世俗と勝義との不二を説き亦真言密印の事を説く故に、等云云、釈の心は法華經と真言の三部との勝劣を定めさせ給うに真言の三部經と法華とは所詮の理は同じく一念三千の法門なり、しかれども密印と真言等の事法は法華經かけてをはず法華經は理秘密・真言の三部經は事理俱密なれば天地雲泥なりとかかれたり、しかも此の筆は私の釈にはあらず善無畏三蔵の大日經の疏の心なりと・をばせどもなをなを二宗の勝劣不審にやありけん、はた又他人の疑いをさんぜんとやをばしけん、大師覺の伝に云く、大師二經の疏を造り功を成し已畢つて心中独り謂らく此の疏

仏意ぶつゐに通ずるや否や若しも仏意ぶつゐに通ぜざれば世に流伝るでんせじ仍よつて仏像ぶつぞうの前に
安置あんちし七日七夜深誠ぎょうきを翹企きしょうし祈請ごんしゅうを勤修きんしゅうす五日の五更ごこうに至いたつて夢ゆめみらく正午
に當にちりんつて日輪あおを仰もつぎ見弓これを以て之を射そる其の箭日輪にちりんに當にちりんつて日輪即にちりんそく転動くわんどうす夢
覺さめての後深ぶつゐく仏意ぶつゐに通達つうだつせりと悟ごしやうり後世に伝こしやうつべし等云云うんぬん、慈覺大師じかくだいしは
本朝ほんちやうにしては伝教でんぎやう・弘法こうぼうの両家を習ならいきわめ異朝いちやうにしては八大德並だいたくに南天
の宝月三蔵等さんぞうに十年が間最大事の秘法ひほうをきわめさせ給たまえる上二經じよの疏しよをつく
り了かさり重ほんぞんねて本尊きしやうに祈請ちえをなすに智慧ちえの矢やすでに中道ちゆうどうの日輪にちりんにあたりてうち
をどろかせ給たまい、歡喜かんきのあまりに仁明天王じんみやうに宣旨せんじを申もつしそへさせ給たまい天台てんだいの
座主ざすを真言しんごんの官主かんしゅとなし真言しんごんの鎮護国家ちんここくの三部さんぶとて今に四百余年せきがくが間・碩学せきがく
稻麻とうまのごとし渴仰竹葦かつかうちくゐに同じ、されば桓武かんむ・伝教でんぎやう等の日本国建立にほんこくこんりゆうの寺塔じとうは
一字いちじもなく真言しんごんの寺となりぬ公家くげも武家ぶけも一同しんごんしに真言師しんごんしを召しやうして師匠ししやうとあを
ぎ官くわんをなし寺てらをあづけ給たまふ、仏事ぶつじの木画もくえの開眼供養かいげんくやうは八宗はつしゆ一同だいにちぶつげんに大日仏眼だいにちぶつげんの

印・真言なり。

疑うたがいつて云いわく法華經ほけきょうを真言しんごんに勝まさると申もうす人は此この釈しやくをばいかがせん用もちうべ

きか又またすつべきか、答こたう仏ぶつの未み來らいを定さだめて云いわく、「法よに依よつて人ひとに依よらざれ」

竜樹菩薩りゅうじゅぼさつの云いわく、「修多羅しゆたらに依よれるは白びやくろん論ろんなり修多羅しゆたらに依よらざれば黒論くろろんなり」

天台てんたいの云いわく、「復修多羅またしゆたらと合あせば録ろくして之これを用もちゆ文ぶん無なく義ぎ無なきは信受しんじゆすべから

ず」伝教大師でんぎようだいし云いわく、「仏説ぶつせつに依憑えひようして口伝くでんを信しんずること莫なれ」等云うんぬん云、此等これらの

經論きやうろん釈しやくのごときんば夢むを本もとにはすべからずただついでにさして法華經ほけきやうと大日經だいにかきやう

との勝劣しやうれつを分ぶん明めいに説ときたらん經論きやうろんの文ぶんこそたいせちに候ただしはめ、但ただし印・真言しんごん

なくば木画もくえの像ざうの開眼かいげんの事こと・此これ又またをこの事ことなり真言しんごんのなかりし已前いぜんには

木画もくえの開眼かいげんはなかりしか、天竺てんじく・漢土かんど・日本にほんには真言宗しんごんしゆう已前いぜんの木画もくえの像ざうは

・或あるは行き・或あるは説法せつぽうし・或あるは御物語おんものがたりあり、印・真言しんごんをもて仏ぶつを供養くやうせしよ

り・このかた利生りしやうもかたがた失うせたるなり、此これは常じやうの論談ろんだんの義ぎなり、此この一

事にをひては但し日蓮は分明の証拠を余所に引くべからず慈覚大師の御釈を仰いで信じて候なり。

問うて云く何にと信ぜらるるや、答えて云く此の夢の根源は真言は法華經に勝ると造定めての御ゆめなり、此の夢吉夢ならば慈覚大師の合せさせ給うがごとく真言勝るべし、但日輪を射るとゆめにみたるは吉夢なりというべきか、内典五千・七千余卷外典三千余卷の中に日を射るとゆめに見て吉夢なる証拠をうけ給わるべし、少少此れより出し申さん阿闍世王は天より月落るとゆめにみて耆婆大臣に合せさせ給しかば大臣合せて云く仏の御入滅なり須拔多羅天より日落るとゆめにみる我とあわせて云く仏の御入滅なり、修羅は帝釈と合戦の時まづ日月をいたてまつる、夏の桀・殷の紂と申せし悪王は常に日をいて身をほろぼし国をやぶる、摩耶夫人は日ははらむとゆめにみてしつたたいし

悉達太子をうませ給う、かるがゆへに仏のわらわなをば日種という、日本国

と申すは天照太神の日天にてましますゆへなり、されば此のゆめは天照太神

・伝教大師・釈迦仏・法華經をいたてまつれる矢にてこそ二部の疏は候な

れ、日蓮は愚癡の者なれば經論もしらず但此の夢をもつて法華經に真言すぐ

れたりと申す人は今生には国をほろぼし家を失ひ後生にはあび地獄に入るべ

しとはしりて候、今現証あるべし日本国と蒙古との合戦に一切の真言師の

調伏を行ひ候へば日本かちて候ならば真言はいみじかりけりと・おもひ候な

ん、但し承久の合戦にそこばくの真言師のいのり候しが調伏せられ給し權

の大夫殿はかたせ給い、後鳥羽院は隠岐の国へ御子の天子は佐渡の嶋嶋へ

調伏しやりまいらせ候いぬ、結句は野干のなきの身にをうなるやうに

還著於本人の經文にすこしもたがはず叡山の三千人かまくらに・せめられて

一同にしたがいはてぬ、しかるに今はかまくらの世さかなるゆへに東寺・

天台・園城・七寺の真言師等と並びに自立をわすれたる法華宗の謗法の人人

・関東にをちくだりて頭をかたづけひざをかがめやうやうに武士の心をと
て、諸寺・諸山の別当となり長吏となりて王位を失いし悪法をとりいだして
ごくどのん
国土安穩といのれば、將軍家並びに所従の侍已下は国土の安穩なるべき事
なんめりとうちをもひて有るほどに法華經を失う大禍の僧どもを用いらるれ
ば国定めてほろびなん、亡国のかなしさ亡身のなげかしさに身命をすてて此
の事をあらわすべし、国主世を持つべきならばあやしと・おもひてたづぬべ
きところにただざんげんのことばのみ用いてやうやうのあだをなす、而るに
ほけきようしゅこ
法華經守護の梵天・帝釈・日月・四天地神等は古の謗法をば不思議とはをば
せども此れをしれる人なければ一子の悪事のごとくうちゆるして、いつわり
をろかなる時もあり又すこしつみしらする時もあり、今は謗法を用いたるだ
に不思議なるにまれまれ諫曉する人をかへりてあだをなす、一日・二日・一
月・二月・一年・二年ならず数年に及ぶ、彼の不輕菩薩の杖木の難に値いし

にも・すぐれ覺徳比丘の殺害に及びしにもこえたり、而る間・梵釈の二王・
にちがつ してん しゅうせい
日月・四天・衆星・地神等やうやうにいかり度度いさめらるれども・いよい
よあだをなすゆへに天の御計いとして隣国の聖人にをほせつけられて此れを
いましめ大鬼神を国に入れて人の心をたばらかし自界反逆せしむ、吉凶に
きざし
つけて瑞大なれば難多かるべきことわりにて仏滅後・二千二百三十余年が間
いまだいでざる大長星いまだふらざる大地しん出来せり、漢土・日本に智慧
さいのう
すぐれ才能いみじき聖人は度度ありしかどもいまだ日蓮ほど法華經のかたう
こくど
として国土に強敵多くまうけたる者なきなり、まづ眼前の事をもつて日蓮は
えんぶだい だいいち
閻浮提第一の者としるべし、仏法・日本にわたて七百余年一切経は五千・七
はつしゅう
千宗は八宗・十宗智人は稲麻のごとし弘通は竹葦ににたり、しかれども仏に
あみだぶつしよぶつ みよしゅう
は阿弥陀仏諸仏の名号には弥陀の名号ほどひろまりてをはするは候はず、
みよしゅう ぐつう
此の名号を弘通する人は慧心は往生要集をつくる日本国三分が一は一同の
えしん おうじょうしゅう
にほんこく

弥陀念仏者・永観は十因と往生講の式をつくる扶桑三分が二分は一同の念仏
者法然せんちやくをつくる本朝一同の念仏者、而れば今の弥陀の名号を唱う
る人人は一人が弟子にはあらず、此の念仏と申すは雙観經・觀經・阿弥陀
經の題名なり 権大乘經の題目の広宣流布するは実大乘經の題目の流布せ
んずる序にあらずや、心あらん人は此れをすひしぬべし、権經流布せば
実經流布すべし 権經の題目流布せば実經の題目も又流布すべし、欽明より
当帝にいたるまで七百余年いまだきかずいまだ見ず南無妙法蓮華經と唱えよ
と他人をすすめ我と唱えたる智人なし、日出でぬれば星かくる賢王来れば愚王
ほろぶ 実經流布せば権經のとどまり智人南無妙法蓮華經と唱えば愚人の
此れに随はんこと影と身と声と響とのごとくならん、日蓮は日本第一の
法華經の行者なる事あえて疑ひなし、これをもつてすいせよ漢土月支にも
一閻浮提の内にも肩をならぶる者は有るべからず。

問うて云く正嘉の大地しん文永の大彗星はいかなる事によつて出来せるや
答えて云く天台云く「智人は起を知り蛇は自ら蛇を識る」等云云、問て云く
心いかん、答えて云く上行菩薩の大地より出現し給いたりしをば弥勒菩薩
もんじゆしりほさつかんぜおんぼさつやくおうぼさつ
・文殊師利菩薩觀世音菩薩藥王菩薩等の四十一品の無明を断ぜし人人も元品
むみよう だん ぐにん じゆりようほん なむみようほうれんげきよう まつぼう るふ
の無明を断ぜざれば愚人といはれて寿量品の南無妙法蓮華經の末法に流布
せんずるゆへに、此の菩薩を召し出されたとはいらざりしという事なり、
問うて云く日本・漢土月支の中に此の事を知る人あるべしや、答えて云く見思
いわ にほん かんどがっし いだ
を断尽し四十一品の無明を尽せる大菩薩だにも此の事をしらせ給はずいかに
いわうや一毫の惑をも断ぜぬ者ども此の事を知るべきか、問うて云く智人
だんじん むみよう ぼさつ ぼさつ たま
なくば・いかでか此れを対治すべき例せば病の所起を知らぬ人の病人を治す
れば人必ず死す、此の災の根源を知らぬ人人がいのりをなさば国まさに亡び
ん事疑いなきか、あらあさましやあらあさましや、答えて云く蛇は七日が
うたがい

内だいの大雨きつきようをしり鳥は年中すなわの吉凶しよじゆうをしる此れ則ち大竜の所従又久学のゆへか、
日蓮にちれんは凡夫ほんぶなり、此の事をしるべからずといえども汝等なんじにほほこれをさとさ
ん、彼の周の平王の時・禿へいおうにして裸なる者出現しゅつげんせしを辛有しんゆうといぬし者うらな
つて云く百年いわが内に世ほろびん同じき幽王の時山川さんせんくづれ大地だいちふるひき白陽
と云う者勸かんえていはく十二年の内に大王事に値せ給うべし、今の大地震大長
星等こくおうは国王・日蓮にちれんをにくみて亡国の法たる禅宗ぜんしゆうと念佛者ねんぶつと真言師しんごんしをかたふど
せらるれば天いからせ給たまいていださせ給うところの災難さいなんなり。

問うて云くいわなにをもつてか此れを信ぜん、答えて云く最勝王経さいしやうおうきやうに云く
「悪人あくにんを愛敬あいぎやうし善人ぜんにんを治罰ちばつするに由るが故に星宿ゆえ及び風雨せいしゆくおよ皆時ふううみなを以て行わ
れず」等云云うんぬん、此の経文きやうもんのごときんば此国あくにんに悪人あくにんのあるを王臣おうしん此れを帰依きえ
という事うたがい疑うたがいいなし、又此の国ちじんに智人ちじんあり国主こくしゅ此れをにくみてあだすという
事も又疑うたがいいなし、又云く「三十三天の衆咸忿怒みなふんぬの心を生じ変怪流星へんげ墮おち二

の日俱ぐじ時いに出いて他方たほうの怨賊おんぞく来りて国人喪乱そうらんに遭あわん」等云云、すでに此の国
に天変てんべんあり地天ちようあり他国たこくより此これをせむ三十三天の御ごいかり有うこと又疑うたがい
なきか、仁王經にんのうきように云く、「諸もろの惡比丘あくびく多く名利みょうりを求め国王こくおう・太子たいし・王子みこの前に
於おいて自みずから破は仏法ぶつぽうの因縁いんねん・破国はこくの因縁いんねんを説く其王別わきまえずして信ことばじて此語ことばを聴く」
等云云、又云く、「日月度にちげつどを失うしない時節じせつ反逆はんぎやくし・或あるは赤日出せきじついで・或あるは黒日出こくじついで二
三四五の日出いで・或あるは日蝕にっしよくして光無なくく・或あるは日輪にちりん一重二重四五重輪こじゆりんげん現あらず」等
云云、文の心は惡比丘等あくびく・国に充満じゆうまんして国王こくおう・太子たいし・王子みこ等をたばらかして
破は仏法ぶつぽう・破国はこくの因縁いんねんをとかば其その国の王等いんねん・此の人こにたばらかされてをばす
やう、此の法ぶつぽうこそ持いんねん仏法いんねんの因縁いんねん持いんねん国の因縁いんねんとをもひ此の言ことを・をさめてをこ
なうならば日月にちがつに変たいふうあり大風たいふうと大雨たいうと大火たいか等出来しゅつたいし次そくには内賊もつと申しんるいして親類しんるい
より・大兵乱ひょうらんおこり我がかたうとしぬべき者をみな皆打うち失うしないて後たこくには他国たこく
・せめられて・或あるは自殺あるし・或あるはいけどりにせられて・或あるは降人あるとなるべし

こ 是れ偏に仏法をほろぼし国をほろぼす故なり、守護経に云く「彼の釈迦牟尼
ひとえ ぶつぽう
によらいしょう きようほう いっさい てんま げどうあくにん
如来所有の教法は一切の天魔・外道悪人五通の神仙皆乃至少分をも破壊せず
しか みようそう もろもろ しゃもんみなことときめつ
而るに此の名相の諸の悪沙門皆悉く毀滅して余り有ること無からしむ須弥山
たといさんぜんかい そうもく
を仮使三千界の中の草木を尽して薪と為し長時に焚焼すとも一毫も損する
こと無し若し劫火起りて火内従り生じ須臾も焼滅せんには灰燼をも余す無き
が如し」等云云、蓮華面經に云く「仏阿難に告わく譬えば師子の命終せん
ごと うんぬん れんげめんきよう いわ あなん つげたま たと しし みようじゆう
に若しは空若しは地若しは水若しは陸所有の衆生敢て師子の身の穴を食わず
も も しし みずか もろもろ みずか しし にく くら ごと あなん ぶつぽう
唯師子自ら諸の虫を生じて自ら師子の穴を食うが如し阿難我が之の仏法は余
よ やぶ あら こ わがほう もろもろあくびく あそぎこう
の能く壞るに非ず是れ我法の中の諸の悪比丘我が三大阿僧祇劫積行勤苦し集
むる所の仏法を破らん」等云云、經文の心は過去の迦葉仏釈迦如来の末法の
きり き たま しゃかによらい ぶつぽう
事を訖哩枳王にかたらせ給い釈迦如来の仏法をばいかなるものがうしなうべ
き、大族王の五天の堂舎を焼き払い十六大国の僧尼を殺せし漢土の武宗皇帝
だいぞくおう たいこく そうに かんど ぶそうこうてい

の九国の寺塔四千六百余所を消滅せしめ僧尼二十六万五百人を還俗せし等の
 ごとなる悪人等は釈迦の仏法をば失うべからず、三衣を身にまとひ一鉢を
 頸にかけ八万法蔵を胸にうかべ十二部經を口にずうせん僧侶が彼の仏法を
 失うべし、譬へば須弥山は金の山なり三千大千世界の草木をもつて四天六欲
 に充滿してつみこめて一年・二年百千万億年が間やくとも一分も損ずべから
 ず、而るを劫火をこらん時須弥の根より豆計りの火いでて須弥山をやくの
 みならず三千大千世界をやき失うべし、若し仏記のごとくならば十宗・八宗・
 内典の僧等が仏教の須弥山をば焼き払うべきにや、小乗の俱舎・成実・
 律僧等が大乗をそねむ胸の瞋恚は炎なり真言の善無畏・禅宗の三階等・浄土宗
 の善導等は仏教の師子の肉より出来せる蝗虫の比丘なり、伝教大師は三論
 ・法相・嚴等の日本の碩徳等を六虫とかかせ給へり、日蓮は真言・禅宗・
 浄土等の元祖を三虫となづく、又天台宗の慈覚・安然・慧心等は法華經

でんぎようだいし
傳教大師の師子の身の中の三虫なり。

これら ほうほう こんげん
此等の大謗法の根源をただす日蓮にあだをなせば天神もをしみ地祇もいか

らせ給いて災天も大に起るなり、されば心うべし一閻浮提第一の大事を申す

ゆへに最第一の瑞相此れをこれり、あわれなるかなや・なげかしきかなや

日本国の人皆無間・大城に墮ちむ事よ、悦しきかなや・樂かなや不肖の身

として今度心田に仏種をうえたる、いまにしもみよ大蒙古国・数万艘の兵船

をうかべて日本をせめば上一人より下万民にいたるまで一切の仏寺一切の神

寺をばなげすてて各各声をつるべて南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經と

唱え 掌 を合せてたすけ給え、日蓮の御房日蓮の御房とさけび候はんずるに

や、例せば月支のいう大族王は幻日王に 掌 をあはせ日本の宗盛はかぢわら

をうやまう、大慢のものは敵に随うという・このことわりなり、彼の輕毀大慢

の比丘等は始めには杖 木をととのへて不輕菩薩を打ちしかども後には 掌

をあはせて失とがをくゆ提婆達多だいただたは釈尊しゃくそんの御身おんみに血をいだししかども臨終りんじゆうの時
には南無なむと唱となえたりき、仏ほとけとだに申もうしたりしかば地獄じごくには墮おつべからざりし
を業なむふかくして但南無なむとのみとなへて仏ほとけとはいはず、今・日本国にほんこくの高僧等こうそうも
南無日蓮聖人なむにちれんしょうにんとなえんとすとも南無計りなむばかにてやあらんずらんふびんふび
ん。

外典げてんに曰いわく末萌みぼうをしるを聖人しょうにんという内典ないてんに云いわく三世さんぜを知るを聖人しょうにんという
余われに三度さんどのかうみようあり一いちには去いたし文応元年ぶんおうがんねん庚申こうしん七月しちがつ十六日じゅうろくにちに立正安国論りっしょうあんこくろん
を最明寺殿さいめいじでんに奏そうしたてまつりし時宿谷やどやの入道にゅうどうに向むかつて云いわく禅宗ぜんしゆうと念仏宗ねんぶつしゆうと
を失うしない給たまうべしと申もうさせ給たまへ此この事を御用もちいなきならば此この一門いちもんより事をこ
りて他国たこくに・せめられさせ給たまうべし、二にには去いたし文永八年ぶんえいはちねん九月くがつ十二日じふににち申まうの時
に平左衛門尉さへものじように向むかつて云いわく日蓮にちれんは日本国にほんこくの棟梁とうりようなり予われを失うしななうは日本国にほんこくの
柱はしらを倒たすなり、只今ただに自界じかい反逆はんぎやく難なんとてどしうちして他国たこく侵逼しんぷつ難なんとて此この国

の人人他国に打ち殺さるのみならず多くいけどりにせらるべし、けんちようじ建長寺・寿

福寺・極樂寺・大仏・長樂寺等の一切の念佛者・禅僧等が寺塔をばやきはら

いて彼等が頸をゆひのはまにて切らずば日本国必ずほろぶべしと申し候了ぬ、

第三には去年十一年四月八日左衛門尉に語つて云く、い王地に生れたれば身を

ば随えられたてまつるやうなりとも心をば随えられたてまつるべからず念佛

の無間獄禅の天魔の所為なる事は疑いなし、殊に真言宗が此の国土の大な

るわざはひにては候なり大蒙古を調伏せん事真言師には仰せ付けらるべから

ず若し大事を真言師・調伏するならばいよいよいそいで此の国ほろぶべしと

申せしかば頼綱問うて云くいつごろよせ候べき、予言く經文にはいつとはみ

へ候はねども天の御気色いかりすくなからず・きうに見へて候よも今生はす

ごし候はじと語りたりき、此の三つの大事は日蓮が申したるにはあらず只

偏に釈迦如来の御神・我身に入りかわせ給いけるにや我が身ながらも悦び

身にあまる法華經の一念三千と申す大事の法門はこれなり、經に云く所謂
諸法如是相と申すは何事ぞ十如是の始の相如是が第一の大事にて候へば仏は
世にいでさせ給う、智人は起をしる蛇みづから蛇をしるとはこれなり、衆流
あつまりて大海となる微塵つもりて須弥山となれり、日蓮が法華經を信じ始
めしは日本国には一・一微塵のごとし、法華經を二人・三人・十人・百千万
億人・唱え伝ふるほどならば妙覺の須弥山ともなり大涅槃の大海ともなるべ
し仏になる道は此れよりほかに又もとむる事なかれ。

問うて云く第二の文永八年九月十二日の御勘氣の時はいかにとして我をそ
んせば自他のいくさをこるべしとはしり給うや、答う大集經五十に云く「若
し復諸の刹利國王諸の非法を作し世尊の聲聞の弟子を悩亂し若しは以て毀罵
し刀杖をもて打斫し及び衣鉢種種の資具を奪い若しは他の給施に留難を
作す者有らば我等彼をして自然に卒に他方の怨敵を起さしめ及び自界の国土

にも亦兵起り飢疫飢饉非時の風雨・鬭諍言訟譏謗せしめ、又其の王をして
久しからずして復当に己れが国を亡失せしむべし」等云云、夫れ諸経に諸文
多しといえども此の経文は身にあたり時にのぞんで殊に尊くをばうるゆへ
に・これをせんしいだす、此の経文に我等とは梵王と帝釈と第六天の魔王
と日月と四天等の三界の一切の天竜等なり、此等の上主・仏前に詣して誓つ
て云く仏の滅後・正法・像法・末代の中に正法を行ぜん者を邪法の比丘等
が国主につたへば王に近きもの王に心よせなる者・我がたつとしとをもう
者のいうことなれば理不尽に是非を糾さず・彼の智人をさんざんとはちに
をよばせなんどせば、其の故ともなく其の国ににわかにな・大兵乱・出現し
後には他国に・せめらるべし其の国主もうせ其の国もほろびなんずととかれ
て候、いたひとかゆきとはこれなり、予が身には今生にはさせる失なし但国
をたすけんがため生国の恩をほうぜんと申せしを御用いながらんこそ本意に

あらざるに、あまさへ召し出して法華經の第五の巻を懷中せるをとりいだ

してさんざんとさいなみ、結句はこうちをわたしなんどせしかば申したりし

なり、日月天に処し給いながら日蓮が大難にあうを今度かわらせ給はずば一

つには日蓮が法華經の行者ならざるか忽に邪見をあらたむべし、若し日蓮・

法華經の行者ならば忽に国にしろしを見せ給へ若ししからずば今の日月等は

釈迦・多宝・十方の仏をたぶらかし奉る大妄語の人なり、提婆が虚誑罪・

俱伽利が大妄語にも百千万億倍すぎさせ給へる大妄語の天なりと声をあげて

申せしかば忽に出来る自界反逆難なり、されば国土いたくみだれば我身は

いうにかひなき凡夫なれども御經を持ちまいらせ候分齊は当世には日本

第一の大人なりと申すなり。

問うて云く慢煩惱は七慢・九慢・八慢あり汝が大慢は仏教に明すところ

の大慢にも百千万億倍すぐれたり、彼の徳光論師は弥勒菩薩を礼せず・大慢

婆羅門ばらもんは四聖ししょうを座とせり、大天ほんぶは凡夫あらかんにして阿羅漢むくろんしとなる無垢論師えんぶだいが五天
第一だいいちといゐし、此等これらは皆阿鼻みなあびに墮おちぬ無間むげんの罪人ざいにんなり汝なんじいかでか一閻浮提えんぶだい
第一だいいちの智人ちじんとなれる地獄じごくに墮おちざるべしやおそろしおそろし、答えて云く
汝なんじは七慢・九慢・八慢等をばしれりや大覺世尊だいかくせそんは三界第一さんがいだいいちとなのらせ給う
一切いっさいの外道げどうが云く只今天ただに罰せらるべし大地だいちわれて入りなんと、日本国にほんこくの七
寺・三百余人いわが云く最澄法師さいちようほつしは大天さいたんが蘇生うんぬんか鉄腹てつぷくが再誕さいたんか等云云うんぬん、而しかりとい
えども天も罰せずかへて左右さうを守護しゅごし地もわれず金剛こんごうのごとし、伝教大師でんぎようだいしは
叡山えいざんを立て一切衆生いっさいしゆじようの眼目がんもくとなる結句けつくな七大寺ななだいじは落ちて弟子でしとなり諸国しよこくは檀那だんな
となる、されば現げんに勝すぐれたるを勝すぐれたりという事は慢くどくににて大功徳くどくなりける
か、伝教大師でんぎようだいし云く「天台法華宗てんだいほつけしゆうの諸宗しよしゆうに勝すぐれたるは所依しよえの經きやうに拠よるが故ゆえに
自讃じざん毀他きたならず」等云云うんぬんほけきよう法華經第七いわに云く「衆山しゆざんの中に須弥山しゆみせんこれ第一だいいちなり
此ほけきようの法華經またまたも亦復またまたかくの如ごとし諸經しよきようの中に於おいて最もこれ其その上かみなり」等云云うんぬん、

此の經文は已説の華嚴・般若・大日經等、今説の無量義經、當説の涅槃經等の五千・七千月支竜宮・四王・天・利天日月の中の一一切經尽十方界の諸經は土山・黒山・小鉄圀山・大鉄圀山のごとし日本国にわたらせ給える法華經は須弥山のごとし。

又云く「能く是の經典を受持すること有らん者も、亦復是くの如し、一切

衆生の中に於て亦これ第一なり」等云云、此の經文をもつて案ずるに華嚴經

を持てる普賢菩薩・解脱月菩薩等・竜樹菩薩・馬鳴菩薩・法蔵大師・清涼

國師・則天皇后・審祥大徳・良弁僧正・聖武天皇・深密・般若經を持て

る勝義生菩薩・須菩提尊者・嘉祥大師・玄奘三蔵・太宗・高宗・觀勒・道

昭・孝徳天皇、真言宗の大日經を持てる金剛薩・竜猛菩薩・竜智菩薩・

印生王・善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵・玄宗・代宗・慧果・弘法大師

・慈覺大師、涅槃經を持てる迦葉童子菩薩・五十二類・曇無讖三蔵、光宅寺

ほううん なんざん ほくひち

の法雲南三・北七の十師等よりも末代悪世の凡夫の一戒も持たず一闡提のご

とくに人には思はれたれども、
経文のごとく已今当にすぐれて法華経より外

は仏になる道なしと強盛に信じて而も一分の解なからん人人は、
彼等の大聖

には百万億倍のまさりなりと申す経文なり、
彼の人人は・或は彼の経経

に且く人を入れて法華経へうつさんがためなる人もあり、
或は彼の経に著を

なして法華経へ入らぬ人もあり、
或は彼の経経に留逗のみならず彼の

経経を深く執するゆへに法華経を彼の経に劣るといふ人もあり、
されば今

法華経の行者は心うつべし、
譬えば「一切の川流江河の諸水の中に海これ第一

なるが如く法華経を持つ者も亦復是くの如し、
又衆星の中に月天子最もこれ

第一なるが如く法華経を持つ者も亦復是くの如し」等と御心えあるべし、
当世

・日本国の智人等は衆星のごとし日蓮は満月のごとし。

問うて云く古へかくのごとくいえる人ありや、
答えて云く伝教大師の云く

「^{まさ}当に知るべし^{たしゅうしよえ}他宗所依の經は^{いま}未だ^{さいだいいち}最爲第一ならず^そ其の能く經を持つ者も亦^{また}未だ^{いいち}第一ならず^{てんだいほつけしゅう}天台法華宗は所持の經^{しよじ}最爲第一なるが故に^{さいだいいちち}能く法華を持つ者^{ゆえ}も亦衆生の中に^{だいいち}第一なり、已に^{すで}仏説に^{ぶつせつ}拠る^よ豈自歎ならんや」等云云、^{あにじたん}夫れ麒麟^{きりん}の尾につけるだにの一日に千里を飛ぶといふ、^{せんり}転王に^{てんおう}隨える^{つか}劣夫の須臾に^{れつぷ}してんげ^{しゅゆ}四天下をめぐるといふをば難^{なん}ずべしや^{うたがい}疑うべしや、^{あにじたんならんや}豈自歎哉の釈は肝に^めいずるか若し^も爾らば^{しか}法華經を経のごとくに持つ人は^{ほけきよう}梵王にも・すぐれ帝釈に^{ぼんのう}もこえたり、^{しゅら}修羅を^{しゅみせん}隨へば須弥山をもになひぬべし竜をせめつかはば^{たいかい}大海を^{もくみほしぬべし}、^{でんぎようだいしいわ}伝教大師云く「^ほ讚むる者は福を^{あんみよう}安明に^{そし}積み^{つみ}謗る者は罪^{むげん}を^{うんぬん}無間に^{ほけきよう}聞く」等云云、^{いわ}法華經に云く「^{どくじゆ}經を^{しよじ}読誦し書持すること有らん者を^{きようせんぞうしつ}見て^{けつこん}輕賤憎嫉して^{いだ}結恨を懷かん乃至^{ないしそ}其の人^{みようじゅう}命終して^{あびこく}阿鼻獄に入らん」等^{うんぬん}云云、^{きようしゆしやくそん}教主^{きんげん}釈尊の金言まことならば^{たほうぶつ}多宝仏の証^{しやうみよう}明たがずば^{じつぽう}十方の諸仏の^{ぜつそういちじよう}ぜつそういちじよう舌相一定ならば^{にほんこく}今・日本国の一切の衆生無間地獄に墮ちん事^{うたがい}疑うべしや、

ほけきよう 法華經の八の巻に云く「若し後の世に於て是の經典を受持し誦誦せん者は
ないししよ むな 乃至諸願虚しからず、亦現世に於て其の福報を得ん」又云く「若し之を供養
さんたん し讃歎する」と有らん者は当に今世に於て現の果報を得べし」等云云、此の二
つの文の中に亦於現世・得其福報の八字・当於今世・得現果報の八字・已
またでんせにおいてまたそのふくほうをえん
上一六字の文むなしくして日蓮今生に大果報なくば如来の金言は提婆が虚言
にちれんこんじよう
に同じく多宝の証 明は俱伽利が妄語に異ならじ、謗法は一切衆生も阿鼻
たほう しょうみよう くぎやり もうて
じごく 地獄に墮つべからず、三世の諸仏もましまさざるか、されば我が弟子等心み
さんぜ しょうぶつ
ほけきよう に法華經のごとく身命もおしままず修行して此の度仏法を心みよ、南無
しんみよう
みようほうれんげきよう な む みようほうれんげきよう
妙法蓮華經・南無妙法蓮華經。

そもそも

ほけきよう

しんみよう

むじようどう

おし

ねはんぎよう

いわ

抑此の法華經の文に「我身命を愛せず但無上道を惜しむ」涅槃經に云く

たと 譬えば王使の善能談論して方便に巧なる命を他国に奉るに寧ろ身命を喪う
よくだんろん ほうべん たくみ めい たこく たてまつ むし しんみよう うしな

とも終に王所説の言教を匿さざるが如し智者も亦爾なり凡夫中に於て身命
ついで しょうせつ げんきよう かく こと ちしや またしか ほんぶ おい しんみよう

を惜おしまずかならず大乗方等如来の秘藏一切衆生に皆仏性有りと宣説せんぜつすべしと等云うんぬん云、いかやうな事のあるゆへに身命しんみょうをすつるまでにてあるやらん委細いさいにうけ給たまわり候そうらはん、答えて云いわく予が初心しよしんの時の存念ぞんねんは伝教・弘法・慈覚・智証等の勅宣ちよくせんを給たまいて漢土かんどにわたりし事の我不愛身命がふあいしんみょうにあたるか、玄奘げんじょうさんぞう かんど がっし 身命しんみょうをほろぼししこれ等か、雪山せつせん三蔵の漢土より月氏がっしに入りしに六生が間・臂ひをやきし事か、童子どうじの半偈はんげのために身をなげ、薬王菩薩やくおうぼさつの七万二千歳が間・雪せんさいをきやきし事か、なんどをもひしほどに経文きやうもんのごときんば此等これらにはあらず、経文きやうもんに我不愛身命がふあいしんみょうと申もうすは上に三類さんるいの敵人てきじんをあげて彼等あがのりせめ刀杖とうじょうに及んで身命しんみょうをうばうともみへたり、又涅槃經の文に寧喪身命等ねはんぎやうととかれて候は次下の経文きやうもんにいわく「一闍提有いつせんたいり羅漢らかんの像なを作し空処くうじょに住し方等經典ほうとうきやうてんを誹謗ひぼうす、諸の凡夫人もろもろばんぷ見已みあつて皆真みなの阿羅漢あらかん是れ大菩薩ぼさつなりと謂いわん」等云うんぬん云、彼の法華經の文に第三の敵人てきじんを説いて云いわく、或は阿蘭若あれんにやに納衣のうえにして空閑くうげんに在あつて乃至世に恭敬ないしくぎやう

せらるること六通ろくつうの羅漢らかんの如ごとき有らん」等云云、般泥洹經はんにげんに云く「羅漢らかんに似にたる一闡提いつせんたい有つて惡業あくぎょうを行ず」等云云、此等の經文きんぶんは正法しょうぼうの強敵きやうてきと申すはあくおう
惡王あくおう惡臣あくしんよりも外道魔王げどうまおうよりも破戒はかいの僧侶そうりよよりも、持戒有智じかいうちの大僧だいそうの中に大だい
謗法ぼうぼうの人あるべし、されば妙樂大師みょうらくだいしかいて云く「第三最も甚はなはだし後後の者は
轉識うたしり難がたきを以ての故なり」等云云、法華經ほけきやうの第五の卷くわんに云く「此の法華經ほけきやう
は諸仏しよぶつ如來にょらいの秘密ひみつの藏くらなり、諸經しよきやうの中に於て最も其の上そのうへに在り」等云云、此
の經文きんぶんに最在もつともそのかみにあり其上よんもんの四文あり、されば此の經文きんぶんのごときんば法華經ほけきやうを
一切經いつさいきやうの頂いただきにありと申すが法華經ほけきやうの行者ぎやうじやにてはあるべきか、而しかるを又國王こくおう
に尊重そんちやうせらるる人人ひとびとあまたありて、法華經ほけきやうにまさりてをきやうぎやうはする經經きんきんましきやうぎやうま
すと申す人にせめあひ候はん時もうち、かの人は王臣おうしんに御歸依ごきえあり法華經ほけきやうの行者ぎやうじやは
貧道ひんどうなるゆへに、国くにこそつてこれをいやししみ候はん時もうち、不輕菩薩ふきやうぼさつのごとく
賢愛論師けんあいろんしがごとく申しつもうしつをらば身命しんみやうに及ぶべし、此これが第一だいいちの大事だいじなるべし

とみへて候此の事は今の日蓮にちれんが身にあたれり、予が分齊ぶんざいとして弘法大師こうぼうだいし・

慈覚大師じかくだいし・善無畏三蔵ぜんむいさんぞう・金剛智三蔵こんこうちさんぞう・不空三蔵ふくうさんぞうなどを法華經ほけきようの強敵かうてきなり

きようもん

經文きやうもんまことならば無間地獄むげんじごくは疑うたがいなしなんと申もうすは裸形あかはだかにて大火たいかに入るは

やすし須弥しゆみを手にとて取投なげんはやすし大石たいしを負おうて大海たいかいをわたらんはやす

にほんこく

し日本国にほんこくにして此の法門ほうもんを立てんは大事だいじなるべし云云うんぬん。

りようぜんじようど

きようしゆじやくそんほうじようせかい

たほうぶつ

じつぼうふんじん

しよぶつ

じゆせんがい

靈山淨土の教主釈尊宝淨世界の多宝仏・十方分身の諸仏・地涌千界の

ぼさつ

ほんしやく

にちがつ

してん

みよう

冥にたま加し顯に助け給はずいちじ

一時一日も

安穩あんのん

菩薩等・梵釈・日月・四天等・冥にたま加し顯に助け給はずいちじ一時一日も安穩あんのん

なるべしや。

四五

報恩抄ほうおん

日蓮之を撰すにちれんこれ

293P

そろうこ

夫れ老狐は塚をあとにせず白龜はくきは毛宝もうほうが恩をほうず畜生ちくしやうすらかくのごとし

じんりん

いわうや人倫をや、されば古いにしえへの賢者けんじや予讓よじやうといぬし者は剣をのみて智伯ちはくが恩

にあてこう演と申せし臣下しんかは腹をさひて衛えいの懿公いこうが肝きもを入れたり、いかにい

わうや仏教ぶつぎょうをならはん者ふ父母・師匠ししやう国恩をわするべしや、此の大恩をほうぜ
んには必ずぶつぽう仏法をならひきはめ智者ちしやとならで叶かなうべきか、譬たとへば衆盲をみち
びかんには生盲いきめくらの身にては橋河きやうがをわたしがたし方風を弁わきまえざらん大舟は諸商しよ
を導きて宝山にいたるべしや、仏法ぶつぽうを習ならい極めんと・をもはば・いとまあら
ずば叶かなうべからず・いとまあらんと・をもはば父・母・師匠ししやう・国主等に随したがい
ては叶かなうべからず是非ぜひにつけて出離しゆつりの道をわきまへざらんほどは父母・師匠ししやう
・等の心に随したがうべからず、この義は諸人しよにんをもはく顯けんにもはづれ冥みようにも叶かなうま
じとをもう、しかれども外典げてんの孝経こうきやうにも父母・主君しゆくんに随したがはずして忠臣孝人な
るやうもみえたり、内典ないてんの仏經ぶきやうに云く「恩おんを棄すて無為むゐに入るは眞実報恩の者
なり」等云云、比干ひかんが王に随したがわずして賢人けんじんのなをとり悉達太子の淨飯大王に
背そむきて三界第一の孝となりしこれなり。かくのごとく存して父母・師等しだがわに随したがわ
ずして仏法ぶつぽうをうかがひし程に一代聖教いちだいしやうきやうをさとるべき明鏡十あり、所謂いわゆる

俱舎・成実・律宗・法相・三論・真言・華嚴・淨土・禪宗・天台法華宗なり此の十宗を明師として一切經の心をしるべし世間の學者等おもえり此の十の鏡はみな正直に仏道の道を照せりと小乗の三宗はしばらくこれを・をく民の消息の是非につけて他國へわたるに用なきがごとし、大乘の七鏡こそ生死の大海をわたりて淨土の岸につく大船なれば此を習いほどひて我がみも助け人をもみちびかんと・おもひて習ひみるほどに大乘の七宗いづれもいづれも自讃あり我が宗こそ一代の心はえたれえたれ等云云、所謂華嚴宗の杜順・智儼・法藏・澄觀等、法相宗の玄奘慈恩・智周・智昭等、三論宗の興皇・嘉祥等、真言宗の善無畏・金剛智・不空・弘法・慈覺・智証等、禪宗の達磨・慧可・慧能等、淨土宗の道綽・善導・懷感・源空等、此等の宗宗みな本經・本論によりて我も我も一切經をさとれり仏意をきはめたりと云云、彼の人人云く一切經の中には華嚴經第一なり法華經・大日經等は臣下のご

とし、真言宗の云く一切経の中には大日経第一なり余経は衆星のごとし、
禪宗が云く一切経の中には楞伽経第一なり乃至余宗かくのごとし、而も上
に挙ぐる諸師は世間の人人・各各おもえり諸天の帝釈をうやまひ衆星の
日月に随うがごとし我等凡夫はいづれの師師なりとも信するならば不足ある
べからず仰いでこそ信すべけれども日蓮が愚案はれがたし、世間をみるに各
各・我も我もといへども国主は但一人なり二人となれば国土おだやかならず
家に二の主あれば其の家必ずやぶる一切経も又かくのごとくや有るらん何の
経にてもをさせ一経こそ一切経の大王にてはをはずらめ、而るに十宗・七
宗まで各各・諍論して随はず国に七人・十人の大王ありて万民をだやかなら
じ・いかんがせんと疑うところに一の願を立つ我れ八宗・十宗に随はじ
天台大師の専ら経文を師として一代の勝劣をかんがへしがごとく一切経を
開きみるに涅槃経と申す経に云く「法に依つて人に依らざれ」等云云依法と

もう 申すは一切経・不依人と申すは仏を除き奉りて外の普賢菩薩・文殊師利菩薩
ないし 乃至上にあぐるところの諸の人師なり、此の経に又云く「了義経に依つて
ふりようぎよう 了 了義経に依らざれ」等云、此の経に指すところを了義経と申すは法華経・
ふりようぎよう 了 了義経と申すは華嚴経・大日経・涅槃経等の已今当の一切経なり、され
ば仏の遺言を信ずるならば専ら法華経を明鏡として一切経の心をばしるべ
きか。

したが 随つて法華経の文を開き奉れば「此の法華経は諸経の中に於て最も其の上
ほけきよう したま 在り」等云云此の経文のごとくば須弥山の頂に帝釈の居のごとく輪王
いただき いただき 頂に如意宝珠のあるのごとく衆木の頂に月のやどるのごとく諸仏の
いただき にくけい 頂に肉髻の住せるのごとく此の法華経は華嚴経・大日経・涅槃経等の
いっさいきよう ちちうじよう 一切経の頂上の如意宝珠なり。

されば専ら論師・人師をすてて經文に依るならば大日經・華嚴經等に
法華經の勝れ給えることは日輪の青天に出現せる時眼あきらかなる者の
天地を見るがごとく高下宛然なり、又大日經・華嚴經等の一切經をみるに
此の經文に相似の經文・一字・一点もなし、或は小乘經に對して勝劣
をとかれ・或は俗諦に對して真諦をとき・或は諸の空仮に對して中道をほめ
たり、譬へば小国の王が我が国の臣下に對して大王というがごとし、法華經
は諸王に對して大王等と云云、但涅槃經計りこそ法華經に相似の經文は候へ、
されば天台已前の南北の諸師は迷惑して法華經は涅槃經に劣と云云、されど
も専ら經文を開き見るには無量義經のごとく華嚴・阿含・方等・般若等の
四十余年の經經をあげて涅槃經に對して我がみ勝ると・とひて又法華經に
對する時は是の經の出世は乃至法華の中の八千の聲聞に記を授くることを
得て大菓實を成ずるが如き秋收冬藏して更に所作無きが如し等と云云、我

れと涅槃經ねはんぎょうは法華經ほけきょうには劣よるととける經文きょうもんなり、かう經文きょうもんは分明ぶんめいなれども南北なんぼくの大智だいちの諸人しよにんの迷まようて有りし經文きょうもんなれば末代まつだいの学者がくしや能よく眼まなこをとどむべし、此この經文きょうもんは但法華經ほけきょう・涅槃經ねはんぎょうの勝劣しょうれつのみならず十方世界じゅうほうせかいの一切いっさい經きょうの勝劣しょうれつをもしりぬべし、而しかるを經文きょうもんにこそ迷まようとも天台てんだい・妙樂みょうらく・伝教でんぎょうだいし大師だいしの御れうけんの後は眼まなこあらん人人ひとびとはしりぬべき事ぞかし、然しかれども天台宗てんだいしゅうの人たる慈覺じかく・智証ちしゅうすら猶此なほの經文きょうもんにくらし・いわうや余宗よしゅうの人人ひとびとをや。

・或あるる人疑うたがいつて云いわく漢土かんと・日本にほんにわたりたる經經きょうぎょうにこそ法華經ほけきょうに勝たる經きょうはをはせずとも月氏がつし・竜宮りゅうぐう・四王しおう・日月にちがつ・利天とりてん・都率天とそつなどには恒河沙こうがしゃの經經きょうぎょうましますなれば其中こちゆうに法華經ほけきょうに勝すぐれさせ給たまう御經ぎきょうやましますらん、答こたて云いわく一いっをもつて万まんを察ていこせよ庭戸ていこを出いでずして天下てんがをしるとはこれなり、癡人ちじんが疑うたがいつて云いわく我等われらは南天なんてんを見て東西北とうきふの三空さんくうを見ず彼の三方さんぱうの

空に此の日輪にちりんより別の日やましますらん、山を隔て煙の立つを見て火を見ざ

れば煙は一定なれども火にてやなかるらん・かくのごとくいはん者は一闡提いつせんたい

の人としるべし生盲いきめくらにことならず、法華經の法師品に釈迦如来金口の誠言を

もつて五十余年の一切經の勝劣を定めて云く、「我所説の經典は無量千万億

にして已に説き今説き當に説ん而も其の中に於て此法華經は最も為難信難解

なり」等云云、此の經文は但釈迦如来・一仏の説なりとも等覺已下は仰いで

信すべき上・多宝仏・東方より來りて眞実なりと証明し十方の諸仏集りて

釈迦仏と同等く広長舌を梵天に付け給て後・各各・国國へ還らせ給いぬ、

已今當の三字は五十年並びに十方三世の諸仏えの御經、一字一点ものこさず

引き載せて法華經に對して説せ給いて候を十方の諸仏・此座にして御判形を

加えさせ給い各各又自國に還らせ給いて我弟子等に向わせ給いて法華經に

勝れたる御經ありと説せ給はば其の所化の弟子等信用すべしや、又我は見ざ

れば月氏・竜宮・四天・日月等の宮殿の中に法華經に勝れさせ給いたる経や
・おはしますらんと疑いをなすはされば梵釈・日月・四天・竜王は
法華經の御座にはなかりけるか、若し日月等の諸天・法華經に勝れたる御經
まします汝はしらずと仰せあるならば大誑惑の日月なるべし、日蓮せめて
云く日月は虚空に住し給へども我等が大地に処するがごとくして墮落し給は
ざる事は上品の不妄語戒の力ぞかし、法華經に勝れたる御經ありと仰せある
大妄語あるならば恐らくはいまだ壞劫にいたらざるに大地の上にどうとおち
候はんか無間・大城の最下の堅鉄にあらずばとどまりがたからんか、大妄語
の人は須臾も空に処して四天下を廻り給うべからずとせめたてまつるべし、
而るを華嚴宗の澄觀等真言宗の善無畏・金剛智・不空・弘法・慈覺・智証
等の大智の三蔵大師等の華嚴經・大日經等は法華經に勝れたりと立て給わば
我等が分齊には及ばぬ事なれども大道理のをすところは豈諸仏の大怨敵にあ

らずや、提婆・瞿伽梨も・ものならず大天・大慢・外にもとむべからず、かの人人を信ずる輩はをそろしをそろし。

問て云く華嚴の澄觀・三論の嘉祥・法相の慈恩・真言の善無畏乃至・弘法・慈覺・智証等を仏の敵との給うか、答えて云く此大なる難なり仏法に入りて第一の大事なり愚眼をもつて經文を見るには法華經に勝れたる經ありといはん人は設いかなる人なりとも謗法は免れじと見えて候、而るを經文のごとく申すならば・いかでか此の諸人仏敵たらざるべき、若し又恐をなして指し申さずは一切經の勝劣むなしかるべし、又此人人を恐れて末の人人を仏敵といはんとすれば彼の宗宗の末の人人の云く法華經に大日經をまさりたりと申すは我れ私の計にはあらず祖師の御義なり戒行の持破・智慧の勝劣・身の上下はありとも所学の法門はたがふ事なしと申せば彼人人にとがなし、又日蓮此れを知らながら人人を恐れて申さずは寧喪身命・不匿教者の仏陀の

諫曉かんぎようもちを用いぬ者となりぬ、いかんがせん・いはんとすれば世間せけんをそろし止やめんと

すれば仏の諫曉かんぎようのがれがたし進退しんたい此に谷きわまれり、むべなるかなや、法華經ほけきようの文に

云くいわ「し而かも此經は如来の現在げんざいにすら猶怨嫉なのおんしつ多し況んや滅度めつどの後をや」又

云くいわ一切世間怨多くして信じ難がたし等云云、釈迦しやか仏を摩耶夫人まやふじんはらませ給たまいた

りければ第六天だいろくてんの魔王・摩耶夫人の御腹まやふじんをとをし見て我等が大怨敵おんてき法華經ほけきようと

申す利劍りけんをはらみたり事の成なりぜぬ先にいかにしてか失うしなうべき、第六天だいろくてんの魔王まおう

・大医と変じて浄飯王宮じやうはんおうぐうに入り御産安穩あんのおんの良薬りやうやくを持候もちそうろう大医ありとののし

りて毒どくを后きさきにまいらせつ、初生しよしやうの時は石をふらし乳に毒をまじへ城いを出で

させ給たまいしには黒き毒蛇どくへいと変じて道にふさがり乃至提婆瞿伽利波瑠璃王ないしだいばくぎやりはるり

阿闍世王あじゃせ等の悪人あくにんの身に入りて・或は大石あるをなげて仏の御身おんみより血をいだし

・或は釈子あるをころし・或は御弟子等おんでしを殺す、此等の大難これらは皆遠くは法華經ほけきようを

仏・世尊せそんに説かせまいらせじとたばかりし如来現在にょらいげんざい猶多怨嫉ゆたおんしつの大難だいなんぞかし、

此等は遠き難なり近き難には舍利弗・目連・諸大菩薩等も四十余年が間は
法華經の大怨敵の内ぞかし、況滅度後と申して未來の世には又此の大難より
も・すぐれてをそろしき大難あるべしととかれて候、仏だにも忍びがたかり
ける大難をば凡夫はいかでか忍ぶべきいわうや在世より大なる大難にてある
べかなり、いかなる大難か提婆が長三丈広一丈六尺の大石・阿闍世王の
醉象にはすぐべきとはおもへども彼にもすぐるべく候なれば小失なくとも
大難に度度値う人をこそ滅後の法華經の行者とはしり候はめ、付法蔵の人人
は四依の菩薩・仏の御使なり提婆菩薩は外道に殺され師子尊者は檀彌羅王に
頭を刎ねられ仏陀密多・竜樹菩薩等は赤幡を七年十二年さしとをす馬鳴
菩薩は金錢三億がかわりとなり如意論師は・おもひじにに死す。

此れ等は正法一千年の内なり、像法に入つて五百年・仏滅後・一千五百年
と申せし時漢土に一人の智人あり始は智・・後には智者大師とがうす、法華經

の義をありのままに弘通くつうせんと思ひ給しに天台てんだい已前の百千万の智者ちしやしなじな

に一代いちだいを判ぜしかども詮して十流となりぬ所謂いわゆる南三・北七なんざん ぼくひちなり十流ありしか

ども一流をもて最さいとせり、所謂いわゆる南三の中の第三の光宅寺こうたくの法雲法師ほううんほつしこれなり、

此の人は一代いちだいの仏教ぶつぎようを五にわかつ其その五の中に三経をえらびいだす、所謂いわゆる

華嚴經・涅槃經・法華經けこんぎよう ねはんぎよう ほけきようなり一切經いっさいきようの中には華嚴經第一・大王だいおうのごとし

涅槃經第二・撰政せんせい閑白くわんぱくのごとし第三法華經ほけきようは公卿等くぎようのごとし此れより已下いかは

万民ばんみんのごとし、此の人は本より智慧ちえかしこき上・慧觀えいかん・慧嚴えいげん・僧柔そうじゆう・慧次えいじな

んど申せし大智者ちしやより習ならひ伝え給るのみならず南北しやうしの諸師しよしの義をせめやぶり

山林さんりんにまじわりて法華經ほけきよう・涅槃經ねはんぎよう華嚴經けこんぎようの功こうをつもりし上・梁りやうの武帝ぶてい召よし出

して内裏だいりの内に寺を立て光宅寺こうたくとなづけて此この法師ほつしをあがめ給たまう、法華經ほけきようを

かうぜしかば天より花ふることさいせ在世てんかんのごとし、天鑒五年てんかんに大旱魃かんぱつありしかば

此この法雲法師ほううんほつしを請しょうじ奉たてまつりて法華經ほけきようを講こうぜさせまいらせしに藥草喻品やくそうゆほんの

其雨普等・四方俱下と申す二句を講ぜさせ給いし時・天より甘雨下たりしか
天子御感のあまりに現に僧正になしまいらせて諸天の帝釈につかえ万民
の国王を・をそるるがごとく我とつかへ給いし上・・或人夢く此人は過去の
灯明仏の時より法華経をかうぜる人なり、法華経の疏四巻あり此の疏に云く
「此経未だ碩然ならず」亦云く「異の方便」等云云、正く法華経はいまだ仏
理をきわめざる経と書かれて候、此の人の御義仏意に相ひ叶ひ給いければこ
そ天より花も下り雨もふり候けらめ、かかるいみじき事にて候しかば漢土の
人人さては法華経は華嚴経・涅槃経には劣にてこそあるなれと思ひし上・
新羅・百濟・高麗日本まで此の疏ひろまりて大体一同の義にて候しに法雲
法師御死去ありていくばくならざるに梁の末・陳の始に智法師と申す小僧
出来せり、南岳大師と申せし人の御弟子なりしかども師の義も不審にありけ
るかゆへに一切経蔵に入つて度々御らんありしに華嚴経・涅槃経・法華経

の三經に詮じいだし此の三經の中に殊に華嚴經を講じ給いき、別して礼文を造りて日に功をなし給いしかば世間の人も華嚴經を第一とおぼすかと見えしほどに法雲法師が一切經の中に華嚴第一・涅槃第二・法華第三と立てたるがあまりに不審なりける故にことに華嚴經を御らんありけるなり、かくて一切經の中に法華第一・涅槃第二・華嚴第三と見定めさせ給いてなげき給うやうは如來の聖教は漢土にわたれども人を利益することなしかへりて一切衆生を惡道に導びくこと人師の由れり、例せば國の長とある人東を西といひ天を地といひぬれば萬民は・かくのごとくに心うべし、後にいやしき者出來して汝等が西は東汝等が天は地なりといはば・もちうるることなき上・我が長の心に叶わんがために今の人をのりうちなんどすべしいかんがせんとはおぼせしかども・さてもだすべきにあらねば光宅寺の法雲法師は謗法によつて地獄に墮ちぬとののしられ給う、其の時南北の諸師

はちのごとく蜂起し・からすのごとく烏合せり、智法師をば頭をわるべき
か国を・をうべきかなんと申せし程に陳主此れをきこしめして南北の数人に
召し合せて我と列座してきかせ給いき、法雲法師が弟子等の慧栄・法歳・慧曠
・慧えこう なんと申せし僧正・僧都・已上の人人百余人なり各各悪口を先とし眉
をあげ眼をいからし手をあげ柏子をたたく、而れども智法師は末座に坐し
て色を変ぜず言をあやまらず威儀しづかにして諸僧の言を一一に牒をとり言ご
とにせめかえす、をしかへして難じて云く抑も法雲法師の御義に第一華嚴
・第二涅槃・第三法華と立させ給いける証文は何れの経ぞ慥かに明かなる
証文を出ださせ給えとせめしかば各各頭をうつぶせ色を失いて一言の返事
なし。

重ねてせめて云く無量義經に正しく次説方等十二部經・摩訶般若・華嚴
海空等云云、仏・我と華嚴經の名をよびあげて無量義經に対して未顕眞実と

打ち消し給うたま法華經ほけきように劣りて候・無量義經むりようぎきように華嚴經けこんきようはせめられて候ぬいかに
心えさせ給いてたま華嚴經けこんきようをば一代第一いちだいいだいとは候けるぞ各各・御師おんしの御かたうどせ
んと・をばさば此この經文きようもんをやぶりて此これに勝れたるすぐ經文きようもんを取り出だして
御師おんしの御義おんぎを助け給えとせめたり。

又涅槃經ねはんきようを法華經ほけきように勝ると候けるは・いかなる經文きようもんぞ涅槃經ねはんきようの第十四に
は華嚴けこん・阿含あこん・方等ほうとう・般若はんにやをあげて涅槃經ねはんきように対して勝劣しょうれつは説れて候へどもま
つたく法華經ほけきようと涅槃經ねはんきようとの勝劣しょうれつはみへず、次上つぎのかみの第九の卷に法華經ほけきようと涅槃經ねはんきよう
との勝劣しょうれつ分明しやうめいなり、所謂いわず經文きようもんに云く「是この經しゆつせの出世ないしほつは乃至法華しやうしゆうの中の八千
の聲聞しやうもん・記きを受くることを得て大菓実かじつを成ずるが如ごとき秋收しゆしゆ冬藏とうざうして更に
所作しよさ無きが如ごとし」等云云、經文明きようもんに諸經しよきようをば春夏しゆんかと説かせ給い涅槃經ねはんきようと
法華經ほけきようとをば菓実かじつの位とは説かれて候へども法華經ほけきようをば秋收しゆしゆ冬藏とうざうの大菓実かじつ
の位・涅槃經ねはんきようをば秋の末・冬の始くんじゆう拾の位と定め給いぬ、此の經文きようもん正まさく

ほけきよう 法華經には我が身劣ると承伏し給いぬ、法華經の文には已説・今説・当説と
もう 申して此の法華經は前と並との經經に勝れたるのみならず後に説かん
きようぎよう 經經にも勝るべしと仏定め給う、すでに教主釈尊かく定め給いぬれば疑
うべきにあらねども我が滅後はいかんと疑いおぼして東方宝淨世界の
たほうぶつ 多宝仏を証人に立て給いしかば多宝仏大地よりをどり出でて妙法華經・
かいぜしんじつ 皆是真實と証し十方分身の諸仏重ねてあつまらせ給い広長舌を大梵天に付
きようじゆしゃくそん け又教主釈尊も付け給う、然して後・多宝仏は宝淨世界えかへり十方の
しょうぶつ 諸仏各各本土にかへらせ給いて後・多宝分身の仏もおはせざらんに教主
しゃくそん 釈尊・涅槃經をといて法華經に勝ると仰せあらば御弟子等は信ぜさせ給うべ
しやとせめしかば日月の大明明の修羅の眼を照らすがかく漢王の劍の諸
しし 侯の頸にかかりしがごとく両眼をとぢ一頭を低れたり、天台大師の御氣色は
しし 師子王の狐兔の前に吼えたるがごとし鷹鷲の鳩雉をせめたるにたり、かく

のごとくありしかばさては法華經は華嚴經・涅槃經にも・すぐれてありけり
と震旦しんたん一國に流布るふするのみならず・かへりて五天竺てんじくまでも聞がへ月氏がつしだい大小の諸しよ
論も智者大師の御義には勝れず教主釈尊・兩度出現しゆつげんしますか仏教二
度あらはれぬとほめられ給たまいしなり。

其の後天台大師も御入滅にゆうめつなりぬ陳隋の世も代わりて唐の世となりぬ章安
大師も御入滅にゆうめつなりぬ、天台の仏法やうやく習ならい失せし程に唐の太宗の御宇に
玄奘三蔵といふし人・貞觀三年に始めて月氏がつしに入りて同十九年にかへりし
が月氏がつしの仏法尋ね尽くして法相宗と申す宗をわたす、此の宗は天台宗と水火
なり而るしかに天台の御覽なかりし深密經・瑜伽論・唯識論等をわたして法華經
は一切經には勝すぐれたれども深密には劣るという、而るしかを天台は御覽なかりし
かば天台の末学等は智慧の薄きかのゆへにさもやとおもつ、又太宗は賢王な
り玄奘の御帰依あさからず、いふべき事ありしかどもいつもの事なれば時の

威をおそれて申す人なし、法華經を打ちかへして三乘眞実・一乘方便・五性各別と申せし事は心うかりし事なり、天竺よりは・わたれども月氏の外道が漢土にわたれるか法華經は方便・深密經は眞実といゐしかば釈迦・多宝・十方の諸仏の誠言もかへりて虚くなり玄奘・慈恩こそ時の生身の仏にてはありしか。

其後則天皇后の御宇に天台大師に・せめられし華嚴經に又重ねて新訳の華嚴經わたりしかば、さきのいきどをりをはたさんがために新訳の華嚴をもつて天台に・せめられし旧訳の華嚴經を扶けて華嚴宗と申す宗を法蔵法師と申す人立てぬ、此の宗は華嚴經をば根本法輪法華經をば枝末法輪と申すなり、南北は一華嚴・二涅槃・三法華・天台大師は一法華・二涅槃・三華嚴・今の華嚴宗は一華嚴・二法華・三涅槃等云云。

其の後玄宗皇帝の御宇に天竺より善無畏三蔵は大日經・蘇悉地經をわた

す、金剛智三蔵は金剛頂經をわたす、又金剛智三蔵の弟子あり不空三蔵なり、此の三人は月氏の人・種姓も高貴なる上・人がらも漢土の僧ににず法門もなにとはしらず後漢より今にいたるまでなかりし印と真言という事をあひそいてゆゆしかりしかば天子かづべをかたづけ万民掌をあわす、此の人人の義にいわく華嚴・深密・般若・涅槃・法華經等の勝劣は顕教の内・釈迦如来にやらい

の説の分なり、今の大日經等はだいにちきよう大日法王の勅言なり彼の經經は民の万言・此經は天子の一言なり、華嚴經・涅槃經等はだいにちきよう大日經には梯を立ても及ばずほけきようばか但法華經計りこそ大日經には相似の經なれ、されども彼の經は釈迦如来の説民の正言・此の經は天子の正言なり言は似れども人から雲泥なり、譬へば濁水の月と清水の月のごとし月の影は同じけれども水に清濁ありなんと申しければ、此の由尋ね顕す人もなし諸宗皆落ち伏して真言宗にかたぶきぬ、

善無畏・金剛智・死去の後・不空三藏又月氏にかへりて菩提心論と申す論を
わたしいよいよ真言宗盛りなりけり、但し妙樂大師といふ人あり天台大師
よりは二百余年の後なれども智慧かしこき人にて天台の所釈を見明めてあり
しかば天台の釈の心は後にわたれる深密經・法相宗又始めて漢土に立てたる
華嚴宗・大日經・真言宗にも法華經は勝れさせ給いたりけるを、或は智の
をよばざるか・或は人に畏るるか・或は時の王威をおづるかの故にいはずり
けるか・かくてあるならば天台の正義すでに失なん、又陳隋已前の南北が邪義
にも勝れたりとおぼして三十卷の末文を造り給う所謂弘決・釈籤・疏記これ
なり、此の三十卷の文は本書の重なれるをけづり・よわきをたすくるのみな
らず天台大師の御時なかりしかば御責にものがれてあるやうなる法相宗と
華嚴宗と真言宗とを一時にとりひしがれたる書なり。

又日本国には人王第三十代欽明天皇の御宇十三年壬申十月十三日に百濟

国より一切経・釈迦仏の像をわたす、又用明天皇の御宇に聖徳太子仏法をよ
みはじめ和氣の妹子と申す臣下を漢土につかはして先生所持の一卷の法華經
をとりよせ給いて持經と定め、其の後人王第三十七代孝徳天王の御宇に
三論宗・華嚴宗・法相宗・俱舍宗成実宗わたる、人王第四十五代に聖武天
王の御宇に律宗わたる已上六宗なり、孝徳より人王五十代の桓武天皇にい
たるまでは十四代一百二十余年が間は天台・真言の二宗なし、桓武の御宇に
最澄と申す小僧あり山階寺の行表僧正の御弟子なり、法相宗を始めとし
て六宗を習いきわめぬ而れども仏法いまだ極めたりともおぼえざりしに
華嚴宗の法蔵法師が造りたる起信論の疏を見給うに天台大師の釈を引きのせ
たり此の疏こそ子細ありげなれ此の国に渡りたるか又いまだわたらざるかと
不審ありしほどに有人にとひしかば其の人の云く大唐の揚州竜興寺の僧鑒真
和尚は天台の末学道暹律師の弟子天宝の末に日本国にわたり給いて小乗の

戒を弘通せさせ給いしかども天台の御釈持来りながらひろめ給はず人王第
四十五代聖武天王の御宇なりとかたる、其の書を見んと申されしかば取り出
だして見せまいらせしかば一返御らんありて生死の醉をさましつ此の書をも
つて六宗の心を尋ねあきらめしかば一一に邪見なる事あらはれぬ、忽に願を
發て云く日本国の人皆・謗法の者の檀越たるが天下一定乱れなんずとおぼし
て六宗を難ぜられしかば七大寺・六宗の碩学蜂起して京中烏合し天下みな
さわぐ、七大寺・六宗の諸人等惡心強盛なり、而るを去ぬる延暦二十一年
正月十九日に天王高雄寺に行幸あつて七寺の碩徳十四人善議・勝猷・奉基・
寵忍・賢玉・安福・勤操・修円・慈誥・玄耀・歳光・道証・光証・觀敏等の
十有余人を召し合はす、華嚴・三論・法相等の人人・各各・我宗の元祖が義
にたがはず最澄上人は六宗の人人の所立・一一に牒を取りて本經・
本論・並に諸經諸論に指し合はせてせめしかば一言も答えず口をして鼻のこ

とくになりぬ、天皇をどろき給いて委細に御たづねありて重ねて勅宣を下し
て十四人をせめ給いしかば承伏の謝表を奉りたり、其書に云く「七箇の大
寺・六宗の学匠乃至初て至極を悟る」等云云又云く「聖徳の弘化より以降
今に二百余年の間、講ずる所の経論其数多し、彼此理を争うて其の疑未だ
解けず而も此の最妙の円宗猶未だ闡揚せず」等云云、又云く「三論法相・久
年の諍渙焉として氷の如く解け照然として既に明かに猶雲霧を披いて三光
を見るがごとし」云云、最澄和尚十四人が義を判じて云く「各一軸を講ずる
に法鼓を深壑に振い實主三乗の路に徘徊し義旗を高峰に飛す長幼三有の結を
摧破して猶未だ歴劫の轍を改めず白牛を門外に混ず、豈善く初発の位に昇り
阿茶を宅内に悟らんや」等云云、弘世真綱二人の臣下云く「靈山の妙法を南岳
に聞き総持の妙悟を天台に闢く一乗の権滞を慨き三諦の末頭を悲しむ」等云
云、又十四人の云く「善議等牽れて休運に逢て乃ち奇詞を閲す深期に非るよ

りは何ぞ聖世に託せんや」等云云、此の十四人は華嚴宗の法蔵・審祥・
三論宗の嘉祥・觀勒・法相宗の慈恩・道昭・律宗の道宣・鑒真等の漢土・
日本元祖等の法門瓶はかはれども水は一なり、而るに十四人彼の邪義をすて
て伝教の法華經に歸伏しぬる上は誰の末代の人か華嚴・般若・深密經等は
法華經に超過せりと申すべきや、小乗の三宗は又彼の人人の所学なり大乘
の三宗破れぬる上は沙汰のかぎりにあらず、而るを今に子細を知らざる者
六宗はいまだ破られずと・をもへり、譬へば盲目が天の日月を見ず聾人が
雷の音をきかざるゆへに天には日月なし空に声なしとをもつがごとし。

真言宗と申すは日本・人王第四十四代と申せし元正天皇の御宇に善無畏
三蔵・大日經をわたして弘通せずして漢土へかへる、又玄・等大日經の義釈
十四卷をわたす又東大寺の得清大徳わたす、此等を伝教大師御らんありてあ
りしかども大日經・法華經の勝劣いかんがとおぼしけるほどにかたがた

不審ありし故に去る延暦二十三年七月御入唐西明寺の道邃和尚・仏滝寺の
行滿等に値い奉りて止観円頓の大戒を伝受し靈感寺の順暁和尚に値い奉り
て真言を相伝し同延暦二十四年六月に帰朝して桓武天王に御対面・宣旨を
下して六宗の学生に止観・真言を習はしめ同七大寺にをかれぬ、真言・止観
の二宗の勝劣は漢土に多く子細あれども又大日経の義釈には理同事勝とか
きたれども伝教大師は善無畏三蔵のあやまりなり、大日経は法華経には劣
りたりと知しめして八宗とはせさせ給はず真言宗の名をけづりて法華宗の
内に入れ七宗となし大日経をば法華天台宗の傍依経となして華嚴・大品・
般若涅槃等の例とせり、而れども大事の円頓の大乗別受戒の大戒壇を我が国
に立う立じの諍論がわづらはしきに依りてや真言・天台の二宗の勝劣は
弟子にも分明にをしえ給わざりけるか、但依憑集と申す文に正しく真言宗
は法華天台宗の正義を偷みとりて大日経に入れて理同とせり、されば彼の

宗は天台宗に落ちたる宗なり、いわうや不空三蔵は善無畏・金剛智入滅の
後・月氏に入りてありしに竜智菩薩に値い奉りし時・月氏には仏意をあきら
めたる論釈なし、漢土に天台という人の釈こそ邪正をえらび偏円をあきらめ
たる文にては候なれ、あなかしこ・あなかしこ・月氏へ渡し給えとねんごろ
にあつらへし事を不空の弟子含光といふし者が妙樂大師にかたれるを記の十
の末に引き載せられて候をこの依憑集に取り載せて候、法華經に大日經は劣
るとしろしめす事伝 教大師の御心顯然なり、されば釈迦如来・天台大師・
妙樂大師・伝教大師の御心は一同に大日經等の一切經の中には法華經は
すぐれたりという事は分明なり、又真言宗の元祖という竜樹菩薩の御心も
かくのごとし、大智度論を能く能く尋ぬるならば此の事分明なるべきを不空
があやまれる菩提心論に皆人ばかされて此の事に迷惑せるか。

又石淵の勤操僧正の御弟子に空海と云う人あり後には弘法大師とがうす、

い
えんりやく
去ぬる延暦二十三年五月十二日に御入唐、漢土にわたりては金剛智・善無畏
さんぞう
の両三蔵の第三の御弟子慧果和尚といぬし人に両界を伝受し大同二年十月二
きちようへいぜい
十二日に御帰朝平城天王の御宇なり、桓武天王は御ほうぎよ平城天王に見参
もち
し御用いありて御帰依・他にことなりしかども平城ほどもなく嵯峨に世をと
たまい
られさせ給いしかば弘法ひき入れてありし程に伝教大師は嵯峨天王の弘仁十
こつぼう
三年六月四日御入滅、同じき弘仁十四年より弘法大師・王の御師となり
こつめつ
しんこんしゅう
真言宗を立てて東寺を給真言和尚とがうし此より八宗始る、一代の勝劣
とつじ
を判じて云く第一真言・大日経第二・華嚴第三は法華・涅槃等云云、法華経
いわ
は阿含・方等・般若等に対すれば真実の経なれども華嚴経・大日経に望むれ
あこん
ば戲論の法なり教主釈尊は仏なれども大日如来に向うれば無明の辺域と
けろん
申して皇帝と俘囚との如し、天台大師は盗人なり真言の醍醐を盗んで法華経
もう
を醍醐というなんどかかれしかば法華経はいみじと・をもへども弘法大師に
だいこ
ほけきよう

あひぬれば物のかずにもあらず、天竺てんじくの外道げどうはさて置きぬ漢土かんどの南北ほけきようが法華經ほけきよう
は涅槃經ねはんきように対すれば邪見じやけんの經けいといふしにも・すぐれ華嚴宗けこんしゆうが法華經ほけきようは華嚴經けこんきよう
に対すれば枝末教しまつと申せしにもこへたり、例ば彼の月氏がっしの大慢婆羅門だいまんばらもんが大
自在天じざいてん・那羅延天ならえん・婆藪天ばそ・教主きようしゆしやくそん・釈尊しやくそんの四人こうぎを高座こうざの足につくりて其の上そ
にのぼつて邪法じゃほうを弘ひろめしがごとし、伝教大師でんぎようだいし御存生ごんしようならば一言いだは出されべ
かりける事なり、又義真ぎしん・円澄えんちよう・慈覺じかく・智証ちしよう等もいかに御不審ふしんはなかりける
やらん天下第一てんがだいの大凶しんこんなり、慈覺大師じかくだいしは去ぬる承和五年じようわに御入唐にゆうとう・漢土かんどにし
て十年が間てんだい・天台しんこん・真言しんこんの二宗をならう、法華ほつけ・大日經だいにちきようの勝劣しやうれつを習ならいしに
法全げんじよう・元政等しんこんしの八人の真言師ほけきようには法華經だいにちきようと大日經りどうじしようは理同事勝等しやう云云、
天台宗てんだいしゆうの志遠しおん・広修こうしゆう・維ゆいけん等ならに習だいにちきよういしには大日經ほうとうぶは方等部しやうの撰等しやう云云、
同じき承和十三年九月十日に御帰朝きちよう・嘉祥元年六月十四日に宣旨下せんじくだる、法華ほつけ・
大日經等だいにちきようの勝劣しやうれつは漢土かんどにしてしりがたかりけるかのゆへに金剛頂經こんごうちやうきようの疏じよ

七卷蘇悉地經そしつちきようの疏じよ七卷已上十四卷此疏じよの心は大日經・金剛頂經・蘇悉地經
の義ほけきようと法華經さんぶきようの義ほけきようは其その所詮しよせんの理りは一同なれども事相じそうの印しんこんと真言しんこんとは真言しんこんの
三部經さんぶきようすぐれたりと云云、此これは偏ひとえに善無畏ぜんむい・金剛智こんこうち・不空ふくうの造つくりたる
大日經だいにちきようの疏じよの心のごとし、然しかれども我が心に猶なお不審ふしんやのこりけん又心にはと
けてんけれども人の不審ふしんをはらさんとやおぼしけん、此この十四卷の疏じよを御本尊
の御前おんまえにさしをきて御祈請きしやうありき・かくは造つくりて候へども仏意計ぶつゐいばかりがたし
大日だいにちの三部さんぶやすぐれたる法華經ほけきようの三部さんぶやまされると御祈念きねん有ありしかば五日と
申もうす五更ごこうに忽たちまちに夢想むそうあり、青天だいにちりんに大日輪だいにちりんかかり給たまへり矢をもてこれを射けれ
ば矢飛んで天てんにのぼり日輪にちりんの中に立ちぬ日輪動転にちりんして・すでに地に落んとす
とをもひてうちさめぬ、悦よろこんで云いわく我吉夢われきむあり法華經ほけきように真言勝しんこんすぐれたりと造つくり
つるふみは仏意ぶつゐに叶かないけりと悦よろこばせ給たまいて宣旨せんじを申し下くだして日本国にほんこくに弘通くわうつうあ
り、而しかも宣旨せんじの心に云いわく、遂すなはに知んぬ天台てんだいの止觀しかんと真言しんこんの法義ほふぎとは理冥あに符え

り」等と云云、祈請のごときんば大日経に法華経は劣なるやうなり、宣旨を
申し下すには法華経と大日経とは同じ等云云。

智証大師は本朝にしては義真和尚・円澄大師・別当・慈覚等の弟子なり、

顕密の二道は大体此の国にして学し給いけり天台・真言の二宗の勝劣の御

不審に漢土へは渡り給けるか、去仁寿二年に御入唐漢土にしては真言宗は

法全・元政等にならばせ給い大体・大日経と法華経とは理同事勝・慈覚の

義のごとし、天台宗は良・和尚にならひ給い真言・天台の勝劣・大日経は

華嚴・法華等には及ばず等云云、七年が間・漢土に経て去る貞観元年五月十

七日に御帰朝、大日経の旨歸に云く「法華尚及ばず況や自余の教をや」等云

云、此釈は法華経は大日経には劣る等云云、又授決集に云く「真言・禪門

乃至若し華嚴・法華・涅槃等の経に望むれば是れ摂引門」等云云、普賢経の

記・論の記に云く同じ等云云、貞観八年丙戌四月廿九日壬申・勅宣を

申し下して云く、聞くならく真言・止観・両教の宗同じく醍醐と号し俱に深秘と称す」等云云、又六月三日の勅宣に云く、「先師既に両業を開いて以て我が道と為す代代の座主相承して兼ね伝えざることを莫し在後の輩豈旧迹に乖かんなや、聞くならく山上の僧等専ら先師の義に違いて偏執の心を成ず殆んど余風を扇揚し旧業を興隆するを顧みざるに似たり、凡そ厥の師資の道一を闕きても不可なり伝弘の勤め寧ろ兼備せざらんや、今より以後宜く両教に通達するの人を以て延暦寺の座主と為し立てて恒例と為すべし」ニ云云。

されば慈覚・智証の二人は伝教・義真の御弟子、漢土にわたりては又天台・真言の明師に値いて有りしかども二宗の勝劣は思い定めざりけるか・或は真言すぐれ・或は法華すぐれ・或は理同事勝等云云、宣旨を申し下すには二宗の勝劣を論ぜん人は違勅の者といましめられたり、此れ等は皆自語相違といふぬべし他宗の人はよも用いじとみえて候、但二宗齊等とは先師・伝教

だいし おんぎ せんじ の
大師の御義と宣旨に引き載せられたり、抑も伝教大師いづれの書にかかれ
て候ぞや此の事よくよく尋ぬべし、慈覚・智証と日蓮とが伝教大師の御事を
ふしんもう
不審申すは親に値うての年あらずひ日天に値い奉りての目くらべにては候へ
ども慈覚・智証の御かたふどをせさせ給はん人人は分明なる証文をかまへ
させ給うべし、詮ずるところは信をとらんがためなり、玄奘三蔵は月氏の
ばしゃるん
婆沙論を見たりし人ぞかし天竺にわたらざりし宝法師に・せめられにき、法
護三蔵は印度の法華経をば見たれども囑累の先後をば漢土の人みねども
まもさんぞう
といひしぞかし、設い慈覚・伝教大師に値い奉りて習い伝えたりとも智証・
ぎしんわじょう
義真和尚に口決せりといふとも伝教・義真の正文に相違せばあに不審を加え
ざらん、伝教大師の依憑集と申す文は大師第一の秘書なり、彼の書の序に云く
「新来の真言家は則ち筆授の相承を泯し旧到の華嚴家は則ち影響の軌範を
かく じんくう さんろんしゅう だんか くつち しようしん よい おお じゃくう ほつそう
隠し、沈空の三論宗は彈訶の屈恥を忘れて称心の酔を覆う、著有の法相は

撲揚ほくようの歸依きえを非なし青竜せいりゅうの判經はんぎようを撥はらう等、乃至ないし謹つつしんで依憑集えひようの一巻あるを著あらわして
同我どうがの後哲こうてつに贈おこる某それの時興おこること日本にほん第五十二葉ごじゅうに・弘仁こうにんの七ひのえさる・丙申ひのえさるの歳としな
りニ云つぎしも、次しうしゅうぎ下いの正宗てんじくに云だいとうてんだいく、天竺てんじくの名僧きようしやく大唐天台きようしやくの教迹じやせい最えらも邪正じやせいを簡えらぶ
に堪たえたりと聞かつういて渴仰かつうして訪問あにちゆうくすニ云つぎしもく、次いぎ下わに云あにちゆうくく、「豈うしな中国あにちゆうくに法うしなを失うしなつ
て之これを四維しゐに求あらむるに非しずや而まかも此まの方に識しること有ある者あ少ろじんし魯人ろじんの如ごとき
のみと等ほつそう云さんろんく、此けこんの書しんこんは法相しんこん・三論しんこん・華嚴しんこん・真言しんこんの四宗しんこんをせめて候文しかなり、天台てんだい
・真言しんこんの二宗いちみ同一味いならば・いかでかせめ候しかべき、而ふくうも不空ふくう三藏さんざう等をば魯人ろじん
のごとしなんとろじんかかあつくれて候ぜんむい、善無畏ぜんむい・金剛智こんごうち・不空ふくうの真言宗しんごんしゅういみじくば・い
かでか魯人ろじんと惡口あつくあるべき、又天竺てんじくの真言しんこんが天台宗てんだいしゅうに同じきも又勝すぐれたるな
らば天竺てんじくの名僧ふくういかでか不空ふくうにあつらへ中国ちゆうぐくに正法しやうほうなしとはいてんぎようだいしうべき、そ
れはいかにもじかくあちしうれ慈覺じかく・智証ちしうの二人ふたには言でんぎようだいしは伝おんでし教大師おんでしの御弟子おんでしとはなおんでしのらせ給
ども心おんでしは御弟子おんでしにあらず、其そのの故ゆえは此そのの書いに云いく、「謹えひようで依憑集えひよう一巻あるを著あらわし

て同我どうがの後哲こうてつに贈る」等云云、同我どうがの二字は真言宗しんこんしゅうは天台宗てんだいしゅうに劣るとなら
ひてこそ同我どうがにてはあるべけれ我わと申し下さるる宣旨せんじに云く「専もっぱら先師せんしの義ぎ
に違い偏執へんしゅうの心を成す」等云云、又云く「凡およそ厥師資そのししの道一みちを闕かいても不可ふか
なり」等云云、此の宣旨せんじのごとくならば慈覚じかく・智証ちしょうこそ専もっぱら先師せんしにそむく人
にては候へ、かうせめ候もをそれにては候へども此これをせめずば大日経だいにちきょう・
法華経ほけきょうの勝劣しょうれつやぶれなんと存じていのちをまとにかくてせめ候なり、此の二
人の人人ひとびとの弘法大師こうぼうだいしの邪義じゃぎをせめ候はざりけるは最も道理どうりにて候いけるなり、
されば糧米ろうまいをつくし人をわづらはして漢土かんどへわたらせ給たまはんよりは本師ほんし・
伝教大師でんぎょうだいしの御義おんぎを・よくよく・つくさせ給たまうべかりけるにや、されば叡山えいざんの
仏法ぶつぽうは但ただだ伝教大師でんぎょうだいし・義真和尚ぎしんわじょう・円澄大師えんちようだいしの三代計ばかりにてやありけん、
天台座主てんだいざすすでに真言しんこんの座主ざすにうつりぬ名と所領しりょうとは天台山てんだいそ其そのの主しゅは真言師しんこんしな
り、されば慈覚大師じかくだいし・智証大師ちしょうだいしは已今当いこんとうの經文きやうもんをやぶらせ給たまう人なり、已今当いこんとう

の經文をやぶらせ給うは・あに釈迦・多宝・十方の諸仏の怨敵にあらずや、
弘法大師こそ第一の謗法の人とおもつに、これはそれにはにるべくもなき僻事
なり、其の故は水火天地なる事は僻事なれども人用ゆる事なければ其の僻事
成ずる事なし、弘法大師の御義はあまり僻事なれば弟子等も用ゆる事なし
事相計りは其の門家なれども其の教相の法門は弘法の義いにくきゆへに
善無畏・金剛智・不空慈覺・智証の義にてあるなり、慈覺・智証の義こそ真言
と天台とは理同なりなれど申せば皆人さもやとをもつ、かうをもつゆへに事勝
の印と真言とにつひて天台宗の人人・画像・木像の開眼の仏事を・ねらはん
がために日本一同に真言宗におちて天台宗は一人もなきなり、例せば法師
と尼と黒と青とは・まがひぬべければ眼くらき人はあやまつぞかし、僧と男
と白と赤とは目くらき人も迷わず、いわうや眼あきらかなる者をや、慈覺
・智証の義は法師と尼と黒と青とがごとくなるゆへに智人も迷い愚人もあや

まり候て此の四百余年が間は叡山・園城・東寺・奈良・五畿・七道・日本一
州・皆謗法の者となりぬ。

抑も法華經の第五に「文殊師利此の法華經は諸仏如来の秘密の藏なり諸經

の中に於て最も其の上に在り」云云、此の經文のごとくならば法華經は

大日經等の衆經の頂上に住し給う正法なり、さるにては善無畏・金剛智

・不空・弘法・慈覺・智証等は此の經文をばいかんが会通せさせ給うべき、

法華經の第七に云く「能く是の經典を受持すること有らん者も亦復是くの

如し一切衆生の中に於て亦為第一なり」等云云、此の經文のごとくならば

法華經の行者は川流江河の中の大海・衆山の中の須弥山・衆星の中の月天

・衆明の中の大日天、轉輪王・帝釈・諸王の中の大梵王なり、伝教大師の

秀句と申す書に云く「此の經も亦復是くの如し乃至諸の經法の中に最も為

第一なり能く是の經典を受持すること有らん者も亦復是くの如し一切衆生

の中に於て亦為第一なり」已上經文なりと引き入れさせ給いて次下に云く
「天台法華玄に云く」等云云、已上玄文とかかせ給いて上の心を釈して云く
「当に知るべし他宗所依の經は未だ最も為れ第一ならず其の能く經を持つ者
も亦未だ第一ならず、天台法華宗所持の法華經は最も為れ第一なる故に能く
法華を持つ者も亦衆生の中の第一なり已に仏説に拠る豈自歎ならん哉」等云
云、次下に譲る釈に云く「委曲の依憑具さに別卷に有るなり」等云云、依憑
集に云く「今吾が天台大師・法華經を説き法華經を釈すること群に特秀し唐
に独歩す明に知んぬ如来の使なり讚る者は福を安明に積み謗る者は罪を
無間に開く」等云云、法華經・天台・妙樂・伝教の經釈の心の如くなら
ば今・日本国には法華經の行者は一人もなきぞかし、月氏には教主釈尊・
宝塔品にして一切の仏をあつめさせ給て大地の上に居せしめ大日如来計り
宝塔の中の南の下座にすへ奉りて教主釈尊は北の上座につかせ給う、此の

だいにちにやらい だいにちきよう たいぞう だいにち こんごうちようきよう こんごう だいにち しゅくん
大日如来は大日經の胎藏界の大日・金剛頂經の金剛界の大日の主君なり、
だいにちにやらい ろうじゅつ たほうぶつ きようしゅしやくそん たま
両部の大日如来を郎從等と定めたる多宝仏の上座に教主釈尊居せさせ給う
こ すなわ ほけきよう ぎようじゃ てんじく かんど てんだいだいし
此れ即ち法華經の行者なり天竺かくのごとし、漢土には陳帝の時・天台大師
・南北にせめかちて現身に大師となる「群に特 秀し唐に独歩す」というこれ
にほんこく でんぎようだいらくしゅう にほん だいいち こんぼんだいし
なり、日本国には伝 教大師六宗にせめかちて日本の始第一の根本大師とな
たま がっし かんど にほん ばか いっさいしゅじよう またこれだい
り給う月氏・漢土・日本に但三人計りこそ於一切衆生中亦為第一にては候
へ、されば秀句に云く「浅きは易く深きは難しとは釈迦の所判なり浅きを去
つて深きに就くは丈夫の心なり天台大師は釈迦に信順して法華宗を助けて
しんたん ふよう えいざん てんだいだいし しゃか しんじゆん ほつけしゅう にほん ぐつう
震旦に敷揚し叡山の一家は天台に相承して法華宗を助けて日本に弘通す」等
ぶつめつ ほうけきよう ぎようじゃ かんど にほん
云云、仏滅後・一千八百余年が間に法華經の行者漢土に一人・日本に一人已
しゃくそん たてまつ
上二人釈尊を加へ奉りて已上三人なり。

げてん いわ しょうにん ひとたびい けんじん ひとたびい
外典に云く聖人は一千年に一 出で賢人は五百年に一 出づ、黄河は渭
けいい

ながれをわけて五百年には半・河すみ千年には共に清むと申すは一定にて候
けり、然るに日本国は叡山計りに伝教大師の御時・法華經の行者ましまし
けり、義真・円澄は第一第二の座主なり第一の義真計り伝教大師にたり、
第二の円澄は半は伝教の御弟子・半は弘法の弟子なり、第三の慈覚大師
は始めは伝教大師の御弟子にたり、御年四十にて漢土にわたりてより名は
伝教の御弟其の跡をばつがせ給えども法門は全く御弟子にはあらず、而れど
も円頓の戒計りは又御弟子にたり蝙蝠鳥のごとし鳥にもあらず・ねずみに
もあらず梟鳥禽・破鏡獣のごとし、法華經の父を食らい持者の母をかめる
なり日をいとゆめにみしこれなり、されば死去の後は墓なくてやみぬ、智証
の門家・園城寺と慈覚の門家・叡山と修羅と惡竜と合戦ひまなし園城寺をや
き叡山をやく、智証大師の本尊の慈氏菩薩もやけぬ慈覚大師の本尊・大講堂
もやけぬ現身に無間地獄をかんぜり、但中堂計りのこれり、弘法大師も又跡

なし弘法大師の云く東大寺の受戒せざらん者をば東寺の長者とすべからず等
御いましめの状あり、しかれども寛平法王は仁和寺を建立して東寺の法師
をうつして我寺には叡山の円頓戒を持ざらん者をば住せしむべからずと宣旨
分明なり、されば今の東寺の法師は鑒真が弟子にもあらず弘法の弟子にもあ
らず戒は伝教の御弟子なり又伝教の御弟子にもあらず伝教の法華經を破失
す、去る承和二年三月二十一日に死去ありしかば公家より遺体をば・ほうぶ
らせ給う、其の後誑惑の弟子等集りて御入定と云云、或はかみをそりてま
いらするぞといふ・或は三鉢をかんどより・なげたりといふ・或は日輪夜中
に出でたりといふ・或は現身に大日如来となりたりといひ・或は伝教大師に
十八道を・をしへまいらせ給うといふて、師の徳をあげて智慧にかへ我が師
の邪義を扶けて王臣を誑惑するなり、又高野山に本寺伝法院といいし二の寺
あり本寺は弘法のたてたる大塔・大日如来なり、伝法院と申すは正覺房の立

てし金剛界の大日なり、此の本末の二寺昼夜に合戦あり例せば叡山・園城のごとし、誑惑のつもりて日本に二の禍の出現せるか、糞を集めて梅檀となせども焼く時は但糞の香なり大妄語を集めて仏とがうすとも但無間・大城なり、尼が塔は数年が間・利生広大なりしかども馬鳴菩薩の礼をうけて忽にくづれぬ、鬼弁婆羅門がとばりは多年・人をたばらかせしかども阿縛沙菩薩に・せめられてやぶれぬ、留外道は石となつて八百年・陳那菩薩に・せめられて水となりぬ、道士は漢土をたばらかすこと数百年・摩騰・竺蘭に・せめられて仙経もやけぬ、趙高が国をとりし王莽が位をうばいしがごとく法華經の位をとて大日經の所領とせり、法王すでに国に失せぬ人王あに安穩ならんや、日本国は慈覺・智証・弘法の流なり一人として謗法ならざる人はなし。

但し事の心を案ずるに大莊嚴仏の末・一切明王仏の末法のごとし、威音王仏

まづほう
の末法には改悔ありしすら猶千劫・阿鼻地獄に墮つ、いかにいわうや日本国
しんこんし
の真言師・禪宗・念佛者等は一分の廻心なし如是展転至無數劫疑なきもの
ぜんしゅう
か、かかる謗法の国なれば天もすてぬ天すつればふるき守護の善神も・ほこ
ほうほう
らをやひて寂光の都へかへり給いぬ、但日蓮計り留り居て告げ示せば国主こ
じゃくこう
れをあだみ数百人の民に・或は罵詈・或は悪口・或は杖木・或は刀剣・或
ある
は宅宅ごとにせき・或は家家ごとにをう、それになはねば我と手をくだし
ある
て二度まで流罪あり、去ぬる文永八年九月の十二日に頸を切らんとす、
るざい
さいしゅうおうきよう
最勝王経に云く「悪人を愛敬し善人を治罰するに由るが故に他方の怨賊来
い
あくにん
つて国人喪乱に遭う」等云云、大集経に云く「若しは復諸の刹利国王有つて
そうらん
あ
もるもろひほう
諸の非法を作して世尊の声聞の弟子を悩乱し、若しは以て毀罵し刀杖をも
な
せそん
しょうもん
でし
のうらん
も
もつ
きめ
とうじよう
ちようしやく
つて打斫し及び衣鉢種種の資具を奪い、若しは他の給施せんに留難を作さ
い
はつしゆじゆ
しぐ
も
きゆうせ
るなん
な
われら
ば我等彼れをして自然に他方の怨敵を卒起せしめん及び自らの国土も亦兵起
じねん
たほう
おんてき
およ
みずか
こくど
また

り病疫・飢饉し非時の風雨・鬭諍言訟せしめん、又其の王をして久しからず
して復当に己が国を亡失せしめん」等云云、此等の經文のときは日蓮こ
の国になくば仏は大妄語の人・阿鼻地獄はいかで脱給うべき、去ぬる文永八
年九月十二日に平の左衛門並びに数百人に向て云く日蓮は日本国のはしらな
り日蓮を失うほどならば日本国のはしらを・たをすになりぬ等云云、此の
經文に智人を国主等若は悪僧等がざんげんにより若は諸人の悪口によつて失
にあつるならば、にはかに・いくさをこり又大風吹き他国よりせめらるべし
等云云、去ぬる文永九年二月のどしいくさ同じき十一年の四月の大風・同じ
き十月に大蒙古の来りしは偏に日蓮がゆへにあらずや、いわうや前よりこれ
をかながへたり誰の人が疑うべき、弘法・慈覚・智証の国に年久し其の
上禅宗と念佛宗とのわざわい・あいをこりて逆風に大波をこり大地震のか
さなれるがごとし、さればやふやく国をとろう太政入道が国をおさへ承久

に王位つきはてて世・東にうつりしかども但国中のみだれにて他国のせめは
なかりき、彼は謗法の者はあれども又天台の正法も・すこし有り、其の上さ
さへ顕わす智人なし・かるがゆへになのめなりき、譬へば師子のねぶれるは
手をつけざれば・ほへず迅流は櫓をささへざれば波たかからず盗人はとめざ
ればいからず火は薪を加えざればさかんならず、謗法はあれどもあらわす人
なければ王法もしばらくはたえず国もをだやかなるにいたり、例せば日本国
に仏法わたりはじめて候いしに始はなに事もなかりしかども守屋・仏をやき
僧をいましめ堂塔をやきしかば天より火の雨ふり国にはうさうをこり兵乱つ
づきがごとし、此れはそれにはにるべくもなし、謗法の人人も国に充滿せ
り、日蓮が大義も強くせめかかる修羅と帝釈と仏と魔王との合戦にもをとる
べからず、金光明經に云く、「時に鄰国の怨敵是くの如き念を興さん当に四
兵を具して彼の国土を壊るべし」等云云、又云く、時に王見已つて即四兵を嚴い

て彼の国に発向し討罰を為んと欲す我等爾の時に当に眷属無量無辺の薬叉諸
神と各形を隠して為に護助を作し彼の怨敵をして自然に降伏せしむべし」等
云云、最勝王經の文又かくのごとし、大集經云云・仁王經云云、此等の
經文のごときんば正法を行ずるものを国主あだみ邪法を行ずる者のかたう
どせば大梵天王・帝釈・日月・四天等・隣国の賢王の身に入りかわりて其の
国をせむべしとみゆ、例せば訖利多王を雪山下王のせめ大族王を幻日王の失い
しがごとし、訖利多王と大族王とは月氏の仏法を失いし王ぞかし、漢土にも
仏法をほろぼしし王みな賢王に・せめられぬ、これは彼にはにるべくもなし
仏法のかたうどなるようにて仏法を失なう法師を扶くと見えて正法の行者
を失うゆへに愚者はすべてしらず智者なんども常の智人はしりがたし、天も
下劣の天人は知らずもやあるらん、されば漢土・月氏のいにしへのみだれよ
りも大きなるべし。

ほうめつじんきよう

法滅尽經に云く「吾般泥はつないおんの後・

ごぎやくじよくせ

五逆濁世に

まどうこうじよう

魔道興盛し

魔沙門と作つて

わ
吾が道を壊乱せん、

えらん
ないしあくにんうたあお

乃至悪人転多く

かいちゆう

海中の沙の如く

いさい
ぜんしやはなはだ

善者甚だ少して若し

は一若しは二も云云、

ねはんぎよう

涅槃經に云く「

いは
かく

是くの如き等の

こと
ねはんぎよう

涅槃經典を信ずるもの

そうじよう

は爪上の土の如く乃至是の經を信ぜざるものは

こと
ないしこ

十方界の

じゅうぼうかい

所有の

しよう

地土の如し

ちど

こと

等云云、此の經文は時に当りて貴とく予が肝に染みぬ、

きようもん

当世・

とうせ

日本国には我

にほんこく

も法華經を信じたり信じたり、

しよにん

諸人の語のごとき

ことば

んば一人も

ほうぼう

謗法の者なし、

此の經文には末法に謗法の者・

きようもん

十方の地土・

じゅうぼう

正法の者

しよほう

爪上の土等云云、

そうじよう

經文と世間とは水火なり、

きようもん

世間の人云く

せけん

日本国には

にほんこく

日蓮一人計り

にちれん

謗法の者等

ばか
ほうぼう

云云、又經文には大地より多からんと云云、

きようもん

法滅尽經には

ほうめつじんきよう

善者二人、

ぜんしや

涅槃經

ねはんぎよう

には信者爪上土等云云、

きようもん

經文のごとく

ならは

日本国は

にほんこく

但日蓮一人こそ

にちれん

爪上

そうじよう

土二人にては候へ、

されば

心あらん

人人は

きようもん

經文をか

用ゆ

べき

世間をか

用ゆ

べき。

問て云く涅槃經の文には涅槃經の行者は爪上の土等云云、汝が義には
法華經等云云如何、答えて云く涅槃經に云く「法華の中の如し」等云云、
妙樂大師云く「大經自ら法華を指して極と為す」等云云、大經と申すは
涅槃經なり涅槃經には法華經を極と指て候なり、而るを涅槃宗の人の涅槃經
を法華經に勝ると申せしは主を所従といふ下郎を上郎といふし人なり、
涅槃經をよむと申すは法華經をよむを申すなり、譬へば賢人は国主を重んず
る者をば我をさぐれども悦ぶなり、涅槃經は法華經を下て我をほむる人をば
あながちに敵とにくませ給う、此の例をもつて知るべし華嚴經・觀經・
大日經等をよむ人も法華經を劣とよむは彼れ彼れの經經の心にはそむくべ
し、此れをもつて知るべし法華經をよむ人の此の經をば信ずるようなれども
諸經にても得道なるとおもふは此の經をよまぬ人なり、例せば嘉祥大師は
法華玄と申す文十卷造りて法華經をほめしかども妙樂かれをせめて云く「毀

その
其の中に在り何んぞ弘讃と成さん」等云云、法華經をやぶる人なり・されば
かじよう
嘉祥は落ちて天台につかひて法華經をよまず我れ經をよむならば惡道まぬか
てんだい
れがたしとして七年まで身を橋とし給いき、慈恩大師は玄賛と申して法華經を
たまい
ほむる文十卷あり伝教大師せめて云く「法華經を讃むると雖も還て法華の心
でんぎようだいし
を死す」等云云、此等をもつておもつに法華經をよみ讃歎する人人の中に
これら
むげんじこく
無間地獄は多く有るなり、嘉祥・慈恩すでに一乗誹謗の人ぞかし、弘法・慈覚
あ
ちしよう
・智証あに法華經蔑如の人にあらずや、嘉祥大師のごとく講を廃し衆を散じ
ほけきようべつじよ
て身を橋となせしも猶已前の法華經誹謗の罪やきへざるらん、例せば不輕輕毀
なおいぜん
の衆は不輕菩薩に信伏随従せしかども重罪いまだ・のこりて千劫阿鼻に
ふぎようぼさつ
墮ちぬ、されば弘法・慈覚・智証等は設い・ひるがへす心ありとも尚法華經
ちうほう
をよむならば重罪きへがたし・いわうや・ひるがへる心なし、又法華經を
じふひい
うしな しんこんきよう
失い真言教を昼夜に行い朝暮に伝法せしをや、世親菩薩・馬鳴菩薩は小をも
ちようぼ
せじんぼさつ
めみようぼさつ

つて大を破せる罪をば舌を切らんとこそせさせ給いしか、世親菩薩は仏説なれども阿含經をば・たわふれにも舌の上にをかじとちかひ、馬鳴菩薩は懺悔のために起信論をつくりて小乗をやぶり給き、嘉祥大師は天台大師を請じ奉りて百余人の智者の前にして五体を地になげ遍身にあせをながし紅のなんだをながして今よりは弟子を見し法華經をかうぜじ弟子の面をまほり法華經をよみたてまつれば我力の此の經を知るにいたりとて・天台よりも高僧老僧にておはせしがわざと人のみるときをひまいらせて河をこへかうざにちかづきて・せなかにのせまいらせて高座にのぼせたてまつり結句御臨終の後には隋の皇帝にまいらせて小児が母にをくれたるがごとくに足ずりをして・なき給いしなり、嘉祥大師の法華玄を見るにいたう法華經を謗じたる疏にはあらず但法華經と諸大乘經とは門は浅深あれども心は一と・かきてこそ候へ此れが謗法の根本にて候か。

華嚴けこんの澄ちようかん 觀しんこんも真言ぜんむいの善無畏だいにちきようも大日經ほけきようと法華經ほけきようとは理は一とこそかかれて

候へ、嘉祥大師かじようだいしとがあらば善無畏ぜんむいさんぞう三蔵のがれも脱だつがたしされば善無畏ぜんむいさんぞう三蔵のがれは中天ちてんの

國主こくしゅなり位たをすてて他國たこくにいたり殊勝しゆしょう・招提しやうだいの二人ふたりにあひて法華經ほけきようをうけ

百千ひゃくせんの石いしの塔たつを立てしかば法華經ほけきようの行者ぎやうじやとこそみへしか、しかれども大日經だいにちきよう

を習ならいしより・このかた法華經ほけきようを大日經だいにちきように劣せうるとやおもひけん、始ははいたう

其その義ぎもなかりけるが漢土かんとにわたりて玄宗皇帝げんそうこうていの師しとなりぬ、天台宗てんだいしゆうをそね

み思おもう心こころつき給たまいけるかのゆへに、忽たちまちに頓死とんしして二人ふたりの獄卒ごくそつに鉄てつの縄なわ・七

すぢつけられて閻魔王宮えんまおうきゆうにいたりぬ、命いのちいまだ・つきずと・いゐてかへされ

しに法華經ほけきようを謗ぼうずるとやおもひけん真言しんこんの觀念かんのん・印しん・真言等しんこんをば・なげ

すてて法華經ほけきようの今此三界こんしさんがいの文ぶんを唱となえて縄なわも切れかへされ給たまいぬ、又雨あめのいの

りをおほせつけられたりしに忽たちまちに雨ふりは下くだたりしかども大風たいふう吹ふきて國くにをやぶる、

結句けっく死しし給たまいてありしには弟子等でし集ありて臨終りんじゆういみじきやうをほめしかども

無間・大城に墮ちにき、問うて云く何をもつてかこれをする、答えて云く彼の伝を見るに云く、「今畏の遺形を觀るに漸く加縮小し黒皮隱隱として骨其露なり」等云云、彼の弟子等は死後に地獄の相の顯われたるをしらずして徳をあぐなどをもへども・かきあらはせる筆は畏が失をかけり、死してありければ身やふやくつづまり・ちひさく皮はくろし骨あらはなり等云云、人死して後・色の黒きは地獄の業と定むる事は仏陀の金言ぞかし、善無畏三蔵の地獄の業はなに事ぞ幼少にして位をすてぬ第一の道心なり、月氏・五十余箇國を修行せり慈悲の余りに漢土にわたれり、天竺・震旦・日本一閻浮提の内に真言を伝へ鈴をふる此の人の徳にあらずや、いかにして地獄に墮ちけると後生をおもはん人人は御尋ねあるべし。

又金剛智三蔵は南天竺の大王の太子なり、金剛頂經を漢土にわたす其の德善無畏のごとし、又互いに師となれり、而るに金剛智三蔵勅宣によて雨の

祈りありしかば七日が中に雨下る天子大に悦ばせ給うほどに忽に大風吹き来
る、王臣等けうさめ給いき使をつけて追はせ給いしかども・とかうのべて留り
しなり、結句は姫宮の御死去ありしに、いのりをなすべしとて御身の代に殿
上の二女七歳になりしを薪につみこめて焼き殺せし事こそ無慚にはおぼゆ
れ、而れども姫宮もいきかへり給はず不空三蔵は金剛智と月支より御ともせ
り、此等の事を不審とやおもひけん畏と智と入滅の後・月氏に還りて竜智に
値い奉り真言を習いなをし天台宗に帰伏してありしが心計りは帰えれども身
はかへる事なし、雨の御いのりうけ給わりたりしが三日と申すに雨下る、
天子悦ばせ給いて我れと御布施ひかせ給う、須臾ありしかば大風落ち下りて
内裏をも吹きやぶり雲閣月卿の宿所一所も・あるべしともみへざりしかば
天子大に驚きて宣旨なりて風をとどめよと仰せ下さる且らくありては又吹き
又吹きせしほどに数日が間やむことなし、結句は使をつけて追うてこそ風も

やみてありしか、此の三人の悪風は漢土・日本の一切の真言師の大風なり。

さにてあるやらん去ぬる文永十一年四月十二日の大風は阿弥陀堂の加賀

法印・東寺第一の智者の雨のいのりに吹きたりし逆風なり、善無畏・金剛智

・不空の悪法をすこしもたがへず伝えたりけるか・心にくし・心にくし。

弘法大師は去ぬる天長元年の二月大旱魃のありしに先には守敏・祈雨して

七日が内に雨を下す但京中にふりて田舎にそそがず、次に弘法承取て一七日

に雨気なし二七日に雲なし三七日と申せしに天子より和氣の真綱を使者とし

て御幣を神泉苑にまいらせたりしかば天雨下事三日、此れをば弘法大師並に

弟子等・此の雨をうばひとり我が雨として今に四百余年・弘法の雨という、

慈覚大師の夢に日輪をいしと弘法大師の大妄語に云く弘仁九年の春・大疫を

いのりしかば夜中に大日輪出現せりと云云、成劫より已来・住劫の第九の

減・已上二十九劫が間に日輪夜中に出でしという事なし、慈覚大師は夢に日輪

をいるという内典五千・七千・外典三千余巻に日輪をいるとゆめにみるは吉
夢という事有りやいなや、修羅は帝釈をあだみて日天をいたてまつる其の矢
かへりて我が眼にたつ、殷の紂王は日天を的にいて身を亡す、日本の神武天皇
の御時・度美長と五瀬命と合戦ありしに命の手に矢たつ、命の云く我はこ
れ日天の子孫なり日に向い奉りて弓をひくゆへに日天のせめをかをほれりと
云云、阿闍世王は邪見をひるがえして仏に歸しまいらせて内裏に返りて・ぎ
よしなりしが、おどろいて諸臣に向て云く日輪・天より地に落つとゆめに
みる諸臣の云く仏の御入滅か云云、須跋陀羅がゆめ又かくのごとし、我国は
殊にいむべきゆめなり神をば天照という国をば日本という、又教主釈尊を
ば日種と申す摩耶夫人日をはらむとゆめにみて・まうけ給える太子なり、
慈覚大師は大日如来を叡山に立て釈迦仏をすて真言の三部経をあがめて
法華経の三部の敵となせしゆへに此の夢出現せり。

例せば漢土の善導が始は密州の明勝といゐし者に値うて法華經をよみたり
しが後には道綽に値うて法華經をすて觀經に依りて疏をつくり法華經をば
千中無一・念仏をば十即十生・百即百生と定めて此の義を成せんがた
めに阿弥陀仏の御前にして祈誓をなす、仏意に叶うやいなや毎夜夢の中に常
に一りの僧有りて来て指授すと云云、乃至一經法の如くせよ乃至觀念法門
に一りの僧有りて来て指授すと云云、乃至一經法の如くせよ乃至觀念法門
經等云云、法華經には「若し法を聞く者有れば一として成仏せざる無し」
と善導は「千の中に一も無し」等云云、法華經と善導とは水火なり善導は觀經
をば十即十生・百即百生・無量義經に云く、觀經は未だ眞實を顯さず
等云云、無量義經と楊柳房とは天地なり此れを阿弥陀仏の僧と成りて來つて
汝が疏は眞なりと証し給わんは・あに眞事ならんや、抑阿弥陀は法華經の
座に來りて舌をば出だし給はざりけるか、觀音・勢至は法華經の座にはな
りけるか、此れをもつて・をもへ慈覺大師の御夢は・わざわひなり。

問うて云く弘法大師の心經の秘鍵に云く「時に弘仁九年の春天下大疫す、
爰に皇帝自ら黄金を筆端に染め紺紙を爪掌に握りて般若心經一卷を書写し
奉り給う予、講読の撰に範りて經旨の宗を綴る未だ結願の詞を吐かざるに蘇
生の族途にイずむ、夜変じて而も日光赫赫たり是れ愚身の戒徳に非ず金輪御
信力の所為なり、但し神舎に詣でん輩は此の秘鍵を誦し奉れ、昔予鷲峰説法
の筵に陪して親り其の深文を聞きたてまつる豈其の義に達せざら
んや」等云云、又孔雀經の音義に云く「弘法大師歸朝の後真言宗を立てんと
欲し諸宗を朝廷に群集す即身成仏の義を疑う、大師智拳の印を結びて南方
に向うに面門俄に開いて金色の毘盧遮那と成り即便本体に還歸す、入我我入
の事・即身頓証の疑い此の日釈然たり、然るに真言瑜伽の宗・秘密曼荼羅
の道・彼の時より建立しぬ、又云く「此の時に諸宗の学徒大師に歸して始
めて真言を得て請益し習学す三論の道昌・法相の源仁・華嚴の道雄・天台

の円澄等皆其の類なり、弘法大師の伝に云く、帰朝泛舟の日、発願して云く
我が所学の教法若し感応の地有らば此三鉢其の処に到るべし仍て日本の方
に向て三鉢を抛げ上ぐ遙かに飛んで雲に入る十月に帰朝す」云云、又云く
「高野山の下に入定の所を占む乃至彼の海上の三鉢今新たに此に在り」等
云云、此の大師の徳無量なり其の両三を示すかくのごとくの大徳あり・いか
んが此の人を信ぜずしてかへりて阿鼻地獄に墮といはんや、答えて云く予も
仰いで信じ奉る事かくのごとし但古の人人も不可思議の徳ありしかども仏法
の邪正は其にはよらず、外道が・或は恒河を耳に十二年留め・或は大海をす
ひほし・或は日月を手ににぎり・或は釈子を牛羊となしなんどせしかども・
いよいよ大慢を・をこして生死の業とこそなりしか、此れをば天台云く「名利
を邀め見愛を増す」とこそ釈せられて候へ、光宅が忽に雨を下し須臾に花を
さかせしをも妙樂は「感応此の如くなれども猶理に称わず」とこそかかれて

候へ、されば天台大師てんだいだいしの法華經ほけきょうをよみて「須臾しゆゆゆに甘雨かんうを下せ」伝教大師でんきやうだいしの三日が内に甘露かんろの雨あめをふらしておはせしも其それをもつて仏意ぶつゐに叶かなうとはをほせられず、弘法大師こうぼうだいしいかなる徳とくましますとも法華經ほけきょうを戲論けろんの法と定め釈迦しゃか仏ぶつを無明むみやうの辺域へんいきとかかせ給たまへる御ふでは智慧ちえかしこからん人は用もちゆべからず、いかにいわうや上うへにあげられて候徳とくどもは不審ふしんある事なり、「弘仁九年こうにんの春天下大疫てんがだいえき」等云云、春は九十日・何いずれの月・何いずれの日ぞ是一、又弘仁九年こうにんには大疫だいえきありけるか是二、又「夜変やへんじて日光赫赫かくかくたり」と云云、此の事第一だいいちの大事だいじなり弘仁九年こうにんは嵯峨天皇さがてんのうの御宇ぎやうなり左史右史さしうしの記のに載せたりや是三、設たとひい載せたりとも信じがたき事なり成劫じやうこく二十劫・住劫九劫・已上二十九劫が間にいまだ無き天変てんへんなり、夜中にちりんに日輪しゆつげんの出現いけんせる事如何にやらいちだい又如來しやうきやう一代之聖教しやうきやうにもみへず未來みらいに夜中にちりんに日輪しゆつげん出ずべしとは三皇さんこう・五帝ごていの三墳さんぶん・五典ごていにも載のせず仏經ぶきやうのごときんば壞劫えこうにこそ二の日・三の日乃至ないし・七の日は出ずべしとは見えなれどもか

れは昼のことぞかし夜日出現しゅつげんせば東西北の三方は如何いかに、設たい内外の典に記せずとも現げんに弘仁こうにん九年の春何れの月何れの日何れの夜の何れの時に日出いずると
いう公家くげ・諸家しよ・叡山えいざん等の日記にっきあるならばすこし信ずるへんもや、次ぎ下に
「昔予鷲峰説法の筵じゅぶせつぼうに陪まのあたそして親まのあたそり其の深文を聞く」等云云、此の筆を人に信
ぜさせしめんがためにかまへ出だす大妄語もうごか、されば靈山りやうぜんにして法華ほつけは戲論けろん
・大日経だいにちきようは眞実しんじつと仏との説き給けるを阿難あなん・文殊もんじゆがあやまりて妙法華経みやうほけきやうをば眞実しんじつ
とかけるかいかん、いうにかいなき姪女はかい・破戒はっしの法師等ほつしが歌をよみて雨ふらす雨あめ
を三七日まで下ふらさざりし人はかかる徳あるべしや是四くじやく、孔雀経くじやくの音義いわに云く
「大師智拳だいしちけんの印を結んで南方なんぼうに向うに面門めんもん俄にわかに開いて金色きんしきの毘盧遮那びるしゃなと成
る」等云云、此れ又何れの王何れの年時いすれぞ漢土かんどには建元を初とし日本にほんには大
宝を初として緇素しその日記にっき大事だいじには必ず年号のあるが、これほどの大事だいじにいか
でか王も臣も年号も日時もなきや、又次ぎに云く「三論さんろんの道昌どうしやう・法相ほつそうの源仁げんじん

・華嚴の道雄・天台の円澄」等云云、抑も円澄は寂光大師・天台第二の座主なり、其の時何ぞ第一の座主・義真根本の伝教大師をば召さざりけるや、
円澄は天台第二の座主伝教大師の御弟子なれども又弘法大師の弟子なり、
弟子を召さんよりは三論・法相・華嚴よりは天台の伝教・義真の二人を召す
べかりけるか、而も此の日記に云く「真言瑜伽の宗・秘密曼荼羅彼の時より
して建立す」等云云、此の筆は伝教・義真の御存生かとみゆ、弘法は平城
天皇・大同二年より弘仁十三年までは盛に真言をひろめし人なり、其の時は
此の二人現におはします又義真は天長十年までおはせしかば其の時まで弘法
の真言は・ひろまらざりけるか・かたがた不審あり、孔雀經の疏は弘法の弟子
・真済が自記なり信じがたし、又邪見者が公家・諸家・円澄の記をひかるべ
きか、又道昌・源仁・道雄の記を尋ぬべし、「面門俄かに開いて金色の
毘盧遮那と成る」等云云、面門とは口なり口の開けたりけるか眉間開くとか

かんとしけるが^{あやま}りて面門とかけるか、ばう書をつくるゆへにかかるあやま
りあるか、「大師智拳^{だいしちけん}の印を結んで南方^{なんぼう}に向うに面門^{にわ}俄かに開いて金色の
毘盧遮那^{びるしゃな}と成る」等云云、涅槃經の五に云く、「迦葉・仏に白して言さく世尊^{せそん}
・我今^こ是の四種の人に依らず何を以ての故に瞿師羅經の中の如き仏・瞿師羅
が為^{ため}に説きたまわく若し天魔梵破壊せんと欲するが為^{ため}に變じて仏の像と為^なり
三十二相・八十種好^{しちじうぐそく}を具足し莊嚴し円光一尋面部円満なること猶月の盛明な
るが如く眉間の毫相白きこと珂雪に踰え乃至左の脇より水を出し右の脇より
火を出す」等云云、又六の卷に云く、「仏迦葉に告げたまわく我般涅槃して乃至^{ないし}
後^こ是の魔波旬漸く当に我が正法^{しょうぼう}を沮壞す乃至化して阿羅漢の身及仏の色身^{しきしん}と
作り魔王此の有漏の形を以て無漏の身と作り我が正法^{しょうぼう}を壞らん」等云云、
弘法大師は法華經を華嚴經・大日經に対して戲論等云云、而も仏身を現^{げん}ず
此れ涅槃經には魔有漏の形をもつて仏となつて我が正法^{しょうぼう}をやぶらんと記^{しる}し

たま ねはんぎよう しょうほう ほけきよう
給う、涅槃經の正法は法華經なり故に經の次ぎ下の文に云く「すで久く已に成仏
す、又云く「法華の中の如し」等云云、釈迦・多宝・十方の諸仏は一切經
に對して、法華經は眞實大日經等の一切經は不眞實と等云云、弘法大師はぶつしん仏身
を現じて華嚴經・大日經に對して、法華經は戲論」等云云、ぶつせつ仏説まことなら
ば弘法は天魔にあらずや、又三鈷の事殊に不審なり漢土の人の日本に來りて
ほりいだすとも信じがたし、已前に人をや・つかわして・うずみけん、いわ
うや弘法は日本の人・かかるおつらんそ誑乱其の数多し此等をもつてぶつゐ仏意に叶う人の
証拠とはしりがたし。

されば此の眞言・禪宗・念仏等やうやくかさなり來る程に人王八十二代・
尊成・隱岐の法皇・権の太夫殿を失わんと年ごろはげませ給いけるゆへに
大王たる国主なれば・なにとなくともしし師子王の兔を伏するがごとく、たか鷹の雉
を取るやうにこそあるべかりし上・叡山・東寺・園城・奈良・七大寺・

てんしょうだいじん
天照太神・加茂・春日等に数年が間・或は調伏・或は神に申させ給いしに
かもち かすが
二日三日だにもささへかねて佐渡国・阿波国・隠岐国等にながし失て終にか
さど おき
くれさせ給いぬ、調伏の上首御室は但東寺をかへらるるのみならず眼のご
たまひ じょうぶく じょうしゅおむろ とうじ まなこ
とくあひせさせ給いし第一の天童・勢多伽が頸切られたりしかば調伏のしる
げんちやくおほんにん せいたか
し還著於本人のゆへとこそ見へて候へ、これは・わづかの事なり此の後定ん
にほんこく しよ ばんみん かくくさ
で日本国の諸臣万民一人もなく乾草を積みて火を放つがごとく大山のくづれ
て谷をうむるがごとく我が国・他国に・せめらるる事出来すべし、此の事
にほんこく にちれん ばか たこく しゅつたい
日本国の中に但日蓮一人計りしれり、いみだすならば殷の紂王の比干が胸
をさきしがごとく夏の桀王の竜蓬が頸を切りしがごとく檀弥羅王の師子尊者
かのけつ けつうぼう だんみら ししそんじや
が頸を刎ねしがごとく竺の道生が流されしがごとく法道三蔵のかなやきを・
は
やかれしがごとくならんずらんとは・かねて知りしかども法華経には「我
しんみょう
身命を愛せず、但無上道を惜しむ」ととかれ涅槃経には「寧身命を喪うと
むじょうどう おし ねはんぎょう むしろしんみょう うしな

も教を匿かくさざれ」といさめ給たまえり、今度命をおしむならばいつの世にか仏に
なるべき、又何いかなる世にか父母・師匠ししやうをも・すくひ奉たてまつるべきとひとへにをも
ひ切りて申し始めしかば案にたがはず・或あるは所をおひ・或あるはのり・或あるはうた
れ・或あるは疵きずをかうふるほどに去いぬる弘長元年辛酉五月十二日に御勘氣をか
うふりて伊豆の国・伊東にながされぬ、又同じき弘長三年癸亥二月二十二
日にゆりぬ。

其その後 弥菩提いよいよぼだい心強盛じやうじやうにして申せばいよいよ大難だいなんかさなる事大風たいふうに大波の
起おこるがごとし、昔の不輕菩薩の杖木ぶきやうぼさつ じやうもくのせめも我身わがみにつみしられたり覺徳比丘
が歡喜かんき仏の末の大難だいなんも此これには及およばじと・をばゆ、日本六十六箇国・嶋二の
中に一日片時かたとき いずれも何れの所にすむべきやうもなし、古は二百五十戒たもを持もちて忍辱にんにく
なる事・羅云らうんのごとくなる持戒じかいの聖人しやうにんも富樓那のごとくなる智者ちしやも日蓮にちれんに
値あいぬれば惡口あつくをはく正直しやうじきにして魏徵ぎちやう・忠仁公のごとくなる賢者等けんじやも日蓮にちれんを

見ては理をまげて非とをこなう、いわうや世間の常の人人は犬のさるをみたるがごとく獵師が鹿をこめたるにいたり、日本国の中に一人として故こそあるらめという人なし道理なり、人ごとに念仏を申す人に向うごとに念仏は無間に墮つるといふゆへに、人ごとに真言を尊む真言は国をほろぼす悪法といふ、
国主は禅宗を尊む日蓮は天魔の所為といふゆへに我と招けるわざわざひなれば・人ののるをも・とがめず・とがむとても一人ならず、打つをもいたまず本より存ぜしがゆへに・かう・いよいよ身もをしまず力にまかせて・せめしかば禅僧数百人・念仏者・数千・人・真言師・百千人・或は奉行につき・或はきり人につき・或はきり女房につき・或は後家尼御前等について無尽のざんげんをなせし程に最後には天下第一の大事・日本国を失わんと咒そする法師なり、故最明寺殿・極楽寺殿を無間地獄に墮ちたりと申す法師なり御尋ねあるまでもなし但須臾に頸をめせ弟子等をば又頸を切り・或は遠国につかはし

・或は籠あるに入れよと尼ろうござんた御前達ちいからせ給たまいしかばそのまま行われけり。

去いぬる文永八年辛かのとひつじ 未九月十二日の夜は相模さがみの国たつの口にて切らるべか

りしが、いかにしてやありけん其その夜はのびて依智えちというところへつきぬ、

又十三日の夜はゆりたりと・どどめきしが又いかにやありけん・さ佐渡どの国ま

でゆく、今日きょう切るあす切るといひしほどに四箇年けっくというに結句いは去ぬる文永

十一年太歳甲戌きのえいぬ二月十四日に・ゆりて同じき三月二十六日に鎌倉かまくらへ入り同じ

き四月八日平さえもんの左衛門さえもんの尉に見参してやうやうの事もつ申したりし中に今年もつこは

蒙古は一定よすべしと申しぬ、同じき五月の十二日にかまくらをいでて此の

山に入れり、これはひとへに父母ふぼの恩ししょう師匠ししょうの恩・三宝さんぼうの恩・国恩をほうぜん

がために身をやぶり命をすつれども破われざればさでこそ候へ、又賢人けんじんの習ならい

三度国をいさむるに用もちいずば山林さんりんにまじわれといふことは定まるれいなり、

此の功徳くどくは定めて上三宝さんぼう・下梵天ぼんてん・帝釈たいしゃく・日月にちがつまでもしろしめしぬらん、

父母も故道善房の聖靈も扶かり給うらん、但疑い念うことあり目連尊者
は扶けんと・おもいしかども母の青提女は餓鬼道に墜ちぬ、大覺世尊の御子
なれども善星比丘は阿鼻地獄へ墜ちぬ、これは力のまま・すくはんと・をば
せども自業自得果のへんはすくひがたし、故道善房はいたう弟子なれば日蓮
をばにくしとはをばせざりけるらめどもきわめて臆病なりし上・清澄をはな
れじと執せし人なり、地頭景信がおそろしさといふ・提婆・瞿伽利にことな
らぬ円智・実成が上と下とに居てをどせしをあなたがちにをそれていとをしと
をもうとしごろの弟子等をだにもすてられし人なれば後生はいかんがと疑わ
し、但一の冥加には景信と円智・実成とが・さきにゆきしこそ一のたすかり
とは・をもへども彼等は法華經十羅刹のせめをかほりてはやく失ぬ、後にす
こし信ぜられてありしは・いさかひの後のちぎりきなり、ひるのともしびな
にかせん其の上いかなる事あれども子・弟子などという者は不便なる者ぞか

し、力なき人にもあらざりしが・さどの国までゆきしに一度もとぶらはれざりし事は法華經ほけきょうを信じたるにはあらぬぞかし・それにつけても・あさましければ彼の

人の御死去しきよときくには火にも入り水にも沈み・はしりたちても・ゆひて御は

かをも・たたいて經をも一卷読誦じやくじゆせんとこそおもへども賢人けんじんのならひ心には

遁世とんせいとは・おもはねども人は遁世とんせいとこそおもうらん・ゆへもなく・はしり

出いずるならば末へも・とをらずと人おもひぬべし、されば・いかにおもひた

てまつれども・まいるべきにあらず、但し各各一人は日蓮にちれんが幼少ようしょうの師匠ししょうにて

・おはします、勤操僧正ごんそうそうじょう・行表ぎやうひょう僧正そうじょうの伝教大師でんぎょうだいしの御師おんしたりしがかへりて

御弟子おんでしとならせ給たまいしがごとし、日蓮にちれんが景信かげのぶにあだまれて清澄山せいじやうざんを出いでしに

かくしおきてしのび出いでられたりしは天下第一てんがだいいちの法華經ほけきょうの奉公ほうこうなり後生ごしょうは

疑うたがいおぼすべからず。

問うて云く法華經一部八卷・二十八品の中に何物が肝心なるや、答えて
云く華嚴經の肝心は大方広仏華嚴經・阿含經の肝心は仏說中阿含經・大集經
の肝心は大方等・大集經・般若經の肝心は摩訶般若波羅蜜經・雙觀經の
肝心は仏說無量壽經・觀經の肝心は仏說觀無量壽經・阿彌陀經の肝心は
仏說阿彌陀經・涅槃經の肝心は大般涅槃經かくのごとくは一切經は皆
如是我聞の上の題目其の經の肝心なり、大は大につけ小は小につけて題目を
もつて肝心とす、大日經・金剛頂經・蘇悉地經等亦復かくのごとし、仏も
又かくのごとし大日如來・日月燈明仏・燃燈仏・大通仏・雲雷音王仏是等の
仏も又名の内に其の仏の種種の徳をそなへたり、今の法華經も亦もつてかく
のごとし、如是我聞の上の妙法蓮華經の五字は即一部八卷の肝心、亦復
一切經の肝心一切の諸仏・菩薩・二乘・天人・修羅・竜神等の頂上の
正法なり、問うて云く南無妙法蓮華經と心もしらぬ者の唱うると南無大方

広け仏こんき華よう嚴と經なと心さいもしらぬ者とうの唱せんうると齊く等どくなりや浅さ深くの功さ徳べつ差せ別りせりや、答こたえて云いく浅せん深じん等らあり、疑うて云いく其その心い如何かん、答こたえて云いく小こ河がは露つゆと涓たまりみずと井みぞと渠みと江えとをおさ収さむれども大お河がをおさめず大お河がは露つゆ乃至ないし小こ河がをおささめず大お海かいをおさめず、阿あ含み經だは井だ江だ等だ露だ涓だをだをださめたる小こ河がのごとし、方ほう等とう經きやう・阿あ弥み陀だ經だ・大だい日に經きやう・華け嚴こん經きやう等らは小こ河がをおさむる大だい河がなり、法ほ華け經きやうは露る涓けん・たまりみず涓けん・井せい・江こう・小ろ河けん・大てん河ん・天いつ雨さい等いの一切いの水すいを一いてきももらさぬ大だい海かいなり、譬たとえば身あの熱つぎ者きものの大かん寒すい水すいの辺へにいねつれば・すずしく小こ水すいの辺へに臥ふぬれば苦くきがごとし、五ご逆ぎやく謗ぼう法ぽうの大だいきなる一いつ闍せん提だい人にん・阿あ含こん・華け嚴こん・觀かん經きやう・大だい日に經きやう等らの小こ水すいの辺へにては大だい罪ざいの大だい熱ねつさんじがたし、法ほ華け經きやうの大だい雪せつ山せんの上うへに臥ふぬれば五ご逆ぎやく・誹ひ謗ぼう・一いつ闍せん提だい等らの大だい熱ねつ忽たちに散さんずべし・されば愚ぐ者しやは必かならずず法ほ華け經きやうを信しんずべし、各かく各かく經きやうの題だい目もくは易やすき事じ同どうじといへども愚ぐ者しやと智ち者しやとの唱となうる功く徳どくは天地てんち雲うん泥でいなり、譬たとへば大だい綱こうは大力たうりきも切きりがたし小こ力りきなれども小こ刀たうをもつて

たやすくこれをきる、譬へば堅石をば鈍刀をもては大力も破がたし、利剣

をもては小力も破りぬべし、譬へば薬はしらねども服すれば病やみぬ食は服

すれども病やまず、譬へば仙薬は命をのべ凡薬は病をいやせども命をのべず。

疑つて云く二十八品の中に何か肝心ぞや、答えて云く・或は云く品品皆

事に随いて肝心なり、・或は云く方便品・寿量品肝心なり、・或は云く方便品

肝心なり、・或は云く寿量品肝心なり、・或は云く開示悟入肝心なり、・或は

云く実相肝心なり。

問うて云く汝が心如何答う南無妙法蓮華経肝心なり、其の証如何・阿難

・文殊等如是我聞等云云、問うて云く心如何、答えて云く阿難と文殊とは八

年が間・此の法華経の無量の義を一句・一偈・一字も残さず聴聞してありし

が仏の滅後に結集の時九百九十九人の阿羅漢が筆を染めてありしに先づはじ

めに妙法蓮華経とかかせ給いて如是我聞と唱えさせ給いしは妙法蓮華経の

五ご字は一部八卷・二十八品の肝かん心じんにあらずや、されば過去かこの燈明とうみ仏ぶつの時より
法華經ほけきようを講こうぜし光宅寺こうたくの法雲法師ほううんほっしは「如是によぜとは將まさに所聞しょもんを伝えんとす前題に
一部あを挙あぐるなり」等云云、靈山りやうぜんにまのあたり・きこしめしてありし天台大師てんだいだいし
は「如是によぜとは所聞しょもんの法体ほつたいなり」等云云章安大師しょうあんだいしの云いわく記者しゃく釈しゃくして曰いわく「蓋けだし
序王じやおうとは經の玄意を叙じよし玄意は文心を述じゆつす」等云云、此の釈に文心とは題目だいもく
は法華經ほけきようの心なり妙樂大師みょうらくだいし云く「一代いちだいの教法きようほうを収おさむること法華の文心より
出でず」等云云、天竺てんじくは七十箇国なり總名は月氏国がっし・日本にほんは六十箇国・總名は
日本国月氏にほんこくがっしの名の内に七十箇国乃至人畜ないしじんちく・珍宝ちんぼうみなあり、日本にほんと申もうす名の内
に六十六箇国あり、出羽おつしゅうの羽も奥州おうしゅうの金も乃至国の珍宝ちんぼう・人畜じんちく乃至寺塔じとうも
神社じんじゃもみな日本にほんと申もうす二字の名の内に摂おさまれり、天眼てんげんをもつては日本にほんと申もうす二
字を見て六十六国乃至人畜等ないしじんちくをみるべし法眼ほうげんをもつては人畜等じんちくの此こゝに死し
彼かしこに生るをもみるべし譬たとへば人の声をきいて体をしり跡あとをみて大小だいしやうをしる

はちす

蓮をみて池の大小を計り雨をみて竜の分齊をかんがう、これはみな一切

の有ることわりなり、阿含經の題目には大旨一切はあるやうなれども但小釈迦

・一仏のみありて他仏なし、華嚴經・觀經・大日經等には又一切有るやう

なれども二乗を仏になすやうと久遠実成の釈迦仏いまず、例せば華さいて

菓ならず雷なつて雨ふらず鼓あつて音なし眼あつて物をみず女人あつて

子をうまず人あつて命なし又神なし、大日の真言・薬師の真言・阿弥陀の

真言・觀音の真言等又かくのごとし、彼の經經にしては大王・須弥山日月

・良薬・如意珠・利剣等のやうなれども法華經の題目に対すれば雲泥の

勝劣なるのみならず皆各各当体の自用を失ふ、例せば衆星の光の一の日輪

にうばはれ諸の鉄の一の磁石に値うて利性のつき大剣の小火に値て用を失

ない牛乳・驢乳等の師子王の乳に値うて水となり衆狐が術・一犬に値うて

失い、狗犬が小虎に値うて色を变ずるがごとし、南無妙法蓮華經と申せば

なむあみだぶつ 南無阿弥陀仏の用も 南無大日真言の用も 観世音菩薩の用も 一切の諸仏・諸經
しよぼさつ しゃなこことみようほうれんげきよう 諸菩薩の用皆悉く 妙法蓮華經の用に失なはる、彼の經經は妙法蓮華經
の用を借ずば皆いたづらのものなるべし 当時眼前のことはりなり、日蓮が
なむみようほうれんげきよう ひろ 南無妙法蓮華經と弘むれば 南無阿弥陀仏の用は月のかくるがごとく 塩のひる
がごとく 秋冬の草のかるるがごとく 氷の日天にとくるがごとく なりゆくを
みよ。

問うて云く 此の法実にいみじくばなど 迦葉・阿難・竜樹・馬鳴・無著・
てんじん なんがく てんたい みようらく でんぎよう ぜんどう なむあみだぶつ かんど
天親・南岳・天台・妙楽・伝教等は 善導が 南無阿弥陀仏とす すすめ 漢土に
くつう 弘通せしがごとく、慧心・永観・法然が 日本国を 皆阿弥陀仏になしたるがこ
とく・すすめ 給はざりけるやらん、答えて云く 此の難は 古の難なり 今はじめ
たるには あらず、馬鳴・竜樹・菩薩等は 仏の滅後・六百年・七百年等の 大論師
なり、此の人人・世にいでて 大乘經を 弘通せしかば 諸諸の小乗の者 疑

つて云く迦葉・阿難等は仏の滅後・二十年・四十年住寿し給いて正法をひろ
め給いしは如来一代の肝心をこそ弘通し給いしか、而るに此の人人は但苦・
空・無常・無我の法門をこそ詮とし給いしに今馬鳴・竜樹等かしこしといふ
とも迦葉・阿難等にはすぐべからず是一、迦葉は仏にあひまいらせて解をえ
たる人なり、此の人人は仏にあひたてまつらず是二、外道は常樂我淨と立て
しを仏・世に出でさせ給いて苦・空・無常・無我と説かせ給いき、此のもの
どもは常樂我淨といへり、されば仏も御入滅なり又迦葉等もかくれさせ給い
ぬれば第六天の魔王が此のものが身に入りかはりて仏法をやぶり外道の
法となさんとするなり、されば仏法のあだをば頭をわれ頸をきれ命をたて食
を止めよ国を追へと諸の小乗の人人申せしかども馬鳴・竜樹等は但・一二
人なり昼夜に悪口の声をきき朝暮に杖木をかうふりしなり、而れども此の二
人は仏の御使ぞかし、正く摩耶經には六百年に馬鳴出で七百年に竜樹出で

んと説かれて候、其の上楞伽經等にも記せられたり又付法藏經には申すにを
よばず、されども諸の小乗のものどもは用いず但めくらぜめにせめしなり、
如来現在猶多怨嫉・況滅度後の經文は此の時にあたりて少しつみしられけ
り、提婆菩薩の外道にころされ師子尊者の頸をきられし此の事をもつておも
ひやらせ給へ。

又仏滅後・一千五百余年にあたりて月氏よりは東に漢土といふ国あり陳隋
の代に天台大師出世す、此の人の云く如来の聖教に大あり小あり顕あり密
あり権あり実あり、迦葉・阿難等是一向に小を弘め馬鳴・竜樹・無著・天親
等は権大乘を弘めて実大乘の法華經をば・或は但指をさして義をかくし
・或は經の面をのべて始中終をのべず、・或は迹門をのべて本門をあらはさ
ず、・或は本・迹あつて觀心なしといひしかば、南三・北七の十流が末数千
万人・時をつくり・どつとわらふ、世の末になるまに不思議の法師も出現

せり、時にあたりて我等を偏執する者はありとも後漢の永平十年丁卯の歳より今陳隋にいたるまでの三蔵・人師・二百六十余人をものもしらずと申す上ほうほうの者なり悪道に墜つるといふ者出来せり、あまりの・ものくるはしさに法華經を持て来り給へる羅什三蔵をも・ものしらぬ者と申すなり、漢土はさてもをけ月氏の大論師竜樹・天親等の数百人の四依の菩薩もいまだ実義をのべ給はずといふなり、此をころしたらん人は鷹をころしたるものなり鬼をころすにもすぐべしとののしりき、又妙樂大師の時・月氏より法相真言わたり漢土に華嚴宗の始まりたりしを・とかくせめしかばこれも又さはぎしなり。
日本国には伝教大師が仏滅後・一千八百年にあたりていでさせ給い天台の御釈を見て欽明より已来二百六十余年が間の六宗をせめ給いしかば在世の外道・漢土の道士・日本に出現せりと謗ぜし上仏滅後・一千八百年が間・月氏・漢土・日本になかりし円頓の大戒を立てんというのみならず、西国の

観音寺の戒壇・東国下野の小野寺の戒壇中国大和の国・東大寺の戒壇は同く
小乗 臭 糞の戒なり瓦石のごとし、其を持つ法師等は野干・猿猴等のごとし
とありしかばあら不思議や法師ににたる大蝗虫国に出現せり仏教の苗一時
にうせなん、殷の紂・夏の桀・法師となりて日本に生まれたり、後周の宇文
・唐の武宗・二たび世に出現せり仏法も但今失せぬべし国もほろびなんと
大乗・小乗の二類の法師出現せば修羅と帝釈と頂羽と高祖と一國に並べ
るなるべしと、諸人手をたたき舌をふるふ、在世には仏と提婆が二の戒壇あ
りてそこばくの人人死にき、されば他宗にはそむくべし我が師・天台大師の
立て給はざる円頓の戒壇を立つべしという不思議さよ・あらおそろし・おそ
ろしと・ののしりあえりき、されども經文分明にありしかば叡山の大乗戒
壇すでに立てさせ給いぬ、されば内証は同じけれども法の流布は迦葉・阿難
よりも馬鳴・竜樹等はすぐれ馬鳴等よりも天台はすぐれ天台よりも伝教は

こ 超えさせ給いたり、世末になれば人の智はあさく、仏教はふかくなる事なり、
たまい
例せば輕病は凡藥・重病には仙藥・弱人には強きかたうど有りて扶くるこ
じゅうびょう
れなり。

問うて云く天台・伝教の弘通し給わざる正法ありや、答えて云く有り・求
いわ てんだい でんぎよう ぐつう たま しようほう

めて云く何物ぞや、答えて云く三あり、末法のために仏留め置き給う迦葉・
いわ なにもの まつぼう

阿難等馬鳴・竜樹等天台・伝教等の弘通せさせ給はざる正法なり、求めて
あなん めみよう りゆうじゆ てんだい でんぎよう ぐつう たま しようほう

云く其の形貌如何、答えて云く一には日本乃至一閻浮提一同に本門の教主
いわ そ ぎようみようい かん いわ にほんないし えんぶだい ほんもん きようしゆ

釈尊を本尊とすべし、所謂宝塔の内の釈迦・多宝外の諸仏・並に上行等の
しゃくそん ほんぞん いわゆるほうとう しゃか たほうほか しようぎよう

四菩薩脇士となるべし、二には本門の戒壇、三には日本乃至・漢土・月氏・
ぼさつきようじ ほんもん かいだん にほんないし かんど がっし

一閻浮提に人ごとに有智・無智をきらはず一同に他事をすてて南無
えんぶだい うち むち たじ なむ

妙法蓮華經と唱うべし、此の事いまだひろまらず一閻浮提の内に仏滅後・二
みようほうれんげきよう とな えんぶだい ぶつめつ

千二百二十五年が間・一人も唱えず日蓮一人南無妙法蓮華經・南無
とな にちれん なむ みようほうれんげきよう なむ

みょうほうれんげきよう

妙法蓮華經等と声もをしまず唱となうるなり、例せば風に随したがつて波の大小あり

たきぎ

薪によつて火の高下こうげあり池に随したがつて蓮の大小あり雨の大小は竜による根

みなもとと

ふかければ枝しげし源遠ければ流ながしというこれなり、周の代の七百年は

文王の礼孝による秦の世ほどもなし始皇の左道によるなり、日蓮にちれんが慈悲じひ曠大

なむみょうほうれんげきよう

ならば南無妙法蓮華經は万年の外未來までもながるべし、日本国にほんこくの一切衆生

もつもく

の盲目をひらける功德あり、無間地獄むげんじごくの道をふさぎぬ、此の功德は伝くどく教天台でんぎようてんだい

うづつじゆかしよう

にも超へ竜樹迦葉にも・すぐれたり、極樂百年ごくらくの修行しゆぎようは穢土えどの一日の功德くどく

およ

に及ばず、正像一千年しやうざうの弘通くつうは末法まつぽうの一時いちじに劣るか、是れひとへに日蓮にちれんが智

のみのみ

のかしこきにはあらず時のしからしむる耳、春は花さき秋は菓このみなる夏はあた

たかに冬はつめたし時のしからしむるに有らずや。

めつど

「我滅度めつどの後・後の五百歳ごのこひゃくさいの中に広宣流布こうせんるふして閻浮提えんぶだいに於て断絶だんぜつして惡魔あくま

まみん

・魔民・諸の天竜・夜叉・鳩槃荼等もろもろてんりゆう やしゃ くはんだ そに其の便たよりりを得せしむること無けん」

等云云、此の經文若しむなしくなるならば舍利弗は華光如来とならじ迦葉
尊そんじや者は光明こうみょう如来によらいとならじ目もっけんは多摩羅跋耨檀香たまらばせんたんこうぶつ仏とならじ阿難あなんは
さんかいえじざいつうおうぶつ
山海慧自在通王まかはじや仏とならじ摩訶波闍波提はだいびく比丘尼は一切衆生喜見いつさいしゅじょうきけん仏とならじ
やしゆだらびくにくそくせんまんこうそう
耶輸陀羅比丘尼は具足千万光相きんぜんじん仏とならじ、三千塵点も戲論となり五百塵点
も妄語もうごとなりて恐らくは教主きようしゅ釈尊しやくそんは無間地獄むげんじごくに墮ち多宝たぼう仏は阿鼻あびの炎にむ
せび十方じゅうほうの諸仏しよぶつは八大地獄だいじごくを栖すみかとし一切いっさいの菩薩ぼさつは一百三十六の苦をうくべ
し・いかでかその義候そべき、其の義なくば日本国にほんこくは一同なむみょうほうれんげきようの南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきよう
り、されば花は根にかへり真味は土にとどまる、此の功德くどくは故道善房たうぜんぼうの聖靈しょうりよう
の御身おんみにあつまるべし、南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきよう・南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきよう。

建治二年太歲丙子七月二十一日
ひのえね

之これを記しるす甲州波木井郷身延山はきりより安房あわの国・東条とうじょうの郡・清澄山・淨顯房ほう・
義成房ほうの許もとに奉送す

四六 報恩抄送文

330P

御状給り候畢ぬ、親疎おわん しんそと無く法門ほうもんと申すは心に入れぬ人にはいはぬ事にて

候ぞ御心得候へ、御本尊ごほんぞん図して進候まいらせそうろう・此の法華經は仏の在世ざいせよりも仏の

滅後めつご・正法しょうぼうよりも像法ぞうぼう・像法よりも末法の初まつぼうのはじめには次第しだいに怨敵強くなるべき

由よしをだにも御心へあるならば日本国に是より外ほけきょうに法華經の行者ぎようじやなし・これを

皆人存じ候ぬべし、道善御房どうぜんごぼうの御死去しきよの由いぬ・去る月粗承ほぼづけたまわり候、自身じしん早早と

参上し此の御房をも・やがてつかはすべきにて候しが自身じしんは内心ないしんは存ぜずと

いへども人目には遁世とんせいのやうに見えて候へばなにとなく此の山いを出でず候、

此の御房ごぼうは又内内もつ・人の申し候しは宗論しゅうろんやあらんずらんと申せしゆへに

十方じゅうつぱうにわかつて經論きょうろん等を尋ねしゆへに国国の寺寺へ人をあまたつかはして候

に此の御房ごぼうはするがの国へ・つかはして当時とうじこそ来て候へ、又此の文は随分ずいぶん

大事だいじの大事だいじどもをかきて候ぞ詮なからん人人ひとびとにきかせなばあしかりぬべく候、

又たとい設たいさなくともあまたになり候はば・ほかさまにもきこえ候なば御ため又
このため安穩あんのんならず候はんか、御まへと義成房ごほうと二人・此の御房ごほうをよみてと
して膏かきがもりの頂いたにて二三遍又・故道善御房の御はかにて一遍いっぺんよませさせ
給たまいては此の御房にあづけさせ給たまいてつねに御聴聞候へ、たびたびになり候
ならば心づかせ給たまう事候なむ、恐恐謹言。

七月二十六日

日蓮 花押

清澄御房

四七 法華取要抄 文永十一年五月

五十三歳御作 与富木常忍 於身延 331P

扶桑沙門日蓮之を述べ

夫れそ以おもんれば月支・西天せいてんより漢土かんと・日本にほんに渡来する所の經論きょうろん・五千・七千余
巻なり、其中の諸經論の勝劣しょうれつ・浅深せんじん・難易なんい・先後せんご・自見まかに任せて之これを弁わきまう

ことは其の分に及ばず、人に随い宗に依つて之を知る者は其の義紛紜す、
所謂華嚴宗の云く「一切經の中に此の經第一」と、法相宗の云く「一切經
の中に深密經第一」と、三論宗の云く「一切經の中に般若經第一」と、真言宗
の云く「一切經の中に大日の三部經第一」と、禪宗の云く「或は云く、教
内には楞伽經第一」と、或は云く、首楞嚴經第一」と、或は云く、教外別伝
の宗なり」と、淨土宗の云く「一切經の中に淨土の三部經末法に入りては
機教相應して第一なり」と、俱舍宗・成実宗・律宗云く「四阿含並に律論
は仏説なり華嚴經・法華經等は仏説に非ず外道の經なり」。或は云く、或は
云く、而に彼れ彼れ宗宗の元祖等・杜順・智儼・法蔵・澄觀・玄奘・慈恩
・嘉祥・道朗・善無畏・金剛智・不空・道宣・鑒真・曇鸞・道綽・善導・
達磨・慧可等なり、此等の三蔵大師等は皆聖人なり賢人なり智は日月に齊く
徳は四海に弥れり、其の上各各に經・律・論に依り更互に証拠有り随つて王臣

國を傾け土民之を仰ぐ末世の偏學設い是非を加うとも人信用を致さじ、爾りと雖も宝山に來り登つて瓦石を採取し梅檀に歩み入つて伊蘭を懷き取らば悔恨有らん、故に万人の謗りを捨て猥りに取捨を加う我が門弟委細に之を尋討せよ。

夫れ諸宗の大師等・或は旧訳の經論を見て新訳の聖典を見ず・或は新訳の經論を見て旧訳を捨置き・或は自宗の曲に執著して己義に隨い愚見を注し止めて後代に之を加添す、株杭に驚き騒ぎて兎獸を尋ね求め智円扇に発し仰いで天月を見る非を捨て理を取るは智人なり、今末の論師・本の人師の邪義を捨て置いて専ら本經・本論を引き見るに五十余年の諸經の中に法華經第四法師品の中の已今當の三字最も第一なり、諸の論師・諸の人師定めて此經文を見けるか、然りと雖も・或は相似の經文に狂い・或は本師の邪會に執し・或は王臣等の帰依を恐るるか、所謂金光明經の「是諸經之王」

密蔵經の「一切經中勝」六波羅蜜經の「總持第一」大日經の「云何菩提」華嚴經の「能信是經・最為難」般若經の「會入法性・不見一事」大智度論の「般若波羅蜜最第一」涅槃論の「今者涅槃理」等なり、此等の諸文は法華經の已今當の三字に相似せる文なり然りと雖も・或は梵帝・四天等の諸經に對當すれば是れ諸經の王なり・或は小乘經に相對すれば諸經の中の王なり・或は華嚴・勝鬘等の經に相對すれば一切經の中に勝れたり全く五十余年の大小・權實・顯密の諸經に相對して是れ諸經の王の大王なるに非ず所詮所對を見て經經の勝劣を弁すべきなり、強敵を臥伏するに始て大力を知見する是なり、其の上諸經の勝劣は釈尊一仏の淺深なり全く多宝分身の助言を加うるに非ず私説を以て公事に混ざる事勿れ、諸經は・或は二乘凡夫に對揚して小乘經を演説し、・或は文殊・解脫月・金剛薩等の弘伝の菩薩に對向して全く地涌千界の上行等には非ず、今法華經と諸經とを相對する

に一代に超過すること二十種之有り、其の中最要二有り所謂三五の二法なり

三とは三千塵点劫なり諸経は・或は釈尊の因位を明すること・或は三祇・

或は動逾塵劫・或は無量劫なり、梵王云く此の土には二十九劫より已来知行

の主なり第六天・帝釈・四天王等も以て是くの如し、釈尊と梵王等と始め

て知行の先後之を諍論す爾りと雖も一指を挙げて之を降伏してより已来梵天

・頭を傾け魔王掌を合せ三界の衆生をして釈尊に帰伏せしむる是なり、

又諸仏の因位と釈尊の因位と之を糾明するに諸仏の因位は・或は三祇・或

は五劫等なり釈尊の因位は既に三千塵点劫より已来娑婆世界の一切衆生の

結縁の大士なり、此の世界の六道の一切衆生は他土の他の菩薩に有縁の者一

人も之無し、法華經に云く「爾の時に法を聞く者は各諸仏の所に在り」等云

云、天台云く「西方は仏・別に縁異り故に子父の義成せず」等云、妙樂云く

「弥陀・釈迦二仏既に殊なり況や宿昔の縁別にして化導同じからざるをや結縁

は生の如く成熟は養の如し生養縁異れば父子成ぜず」等云、当世・日本国
の一切衆生弥陀の来迎を待つは譬えば牛の子に馬の乳を含め瓦の鏡に天月を
浮ぶるが如し、又果位を以て之を論ずれば諸仏如来・或は十劫・百劫・千劫
已来の過去の仏なり、教主釈尊は既に五百塵点劫より已来妙覺果滿の仏な
り大日如来・阿弥陀如来・薬師如来等の尽十方の諸仏は我等が本師教主
釈尊の所従等なり、天月の万水に浮ぶ是なり、華嚴經の十方台上的毘盧遮那
・大日經・金剛頂經・両界の大日如来は宝塔品の多宝如来の左右の脇土な
り、例せば世の王の両臣の如し此の多宝仏も寿量品の教主釈尊の所従な
り、此の土の我等衆生は五百塵点劫より已来教主釈尊の愛子なり不孝の失
に依つて今に覺知せずと雖も他方の衆生には似る可からず、有縁の仏と結縁
の衆生とは譬えば天月の清水に浮ぶが如く無縁の仏と衆生とは譬えば聾者
の雷の声を聞き盲者の日月に向うが如し、而るに・或る人師は釈尊を下して

だいにちによらい ぎょうすう 大日如来を仰崇し・或る人師は世尊は無縁なり阿弥陀は有縁なり・或る
にんし いわ しょうじょう 人師の云く小乗の釈尊と・或は華嚴經の釈尊と・或は法華經迹門の
しゃくそん これら しょうしなら だんな しゃくそん 釈尊と此等の諸師並びに檀那等釈尊を忘れて諸仏を取ることは例せば
あじゃせたいし びんばしやら しゃくそん そむ だいはだつた 阿闍世太子の頻婆沙羅王を殺し釈尊に背いて提婆達多に付きしが如し、二月
しゃくそん にゅうめつ ないし 十五日は釈尊御入滅の日乃至十二月十五日も三界慈父の御遠忌なり、善導
ほうねん ようかん だいはだつた たぶらかされ あみだぶつ 法然・永觀等の提婆達多に誑されて阿弥陀仏の日と定め畢んぬ、四月八日
せそん やくし おわ じふ きじつ たぶつ 是世尊御誕生の日なり薬師・仏に取り畢んぬ、我が慈父の忌日を他仏に替る
こつよう いかん じゆりようばん いわ またこ 是孝養の者なるか如何、寿量品に云く「我も亦為れ世の父狂子を治する為の
ゆえ てんだいだしいわ 本此の仏に従つて初めて道心を発す亦此の仏
故に」等云云、天台大師云く「本此の仏に従つて初めて道心を発す亦此の仏
に從つて不退地に住す乃至猶百川の海に潮すべきが如く縁に牽かれて応生す
またまたかく こと ること亦復是くの如し」等云云。

問うて云く法華經は誰人の為に之を説くや、答えて曰く方便品より人記品
いわ ほけきよう だれびと ため これ 問うて云く法華經は誰人の為に之を説くや、答えて曰く方便品より人記品
い わ ほうべん にんきほん

に至るまでの八品に二意有り上より下に向て次第に之を読めば第一は菩薩第
二は二乗・第三は凡夫なり、安樂行より勸持・提婆・宝塔・法師と逆次に之を
読めば滅後の衆生を以て本と為す在世の衆生は傍なり滅後を以て之を論ず
れば正法一千年・像法一千年は傍なり、末法を以て正と為す末法の中には
日蓮を以て正と為すなり、問うて曰く其の証拠如何、答えて曰く況滅度後の
文是なり、疑つて云く日蓮を正と為す正文如何、答えて云く「諸の無智の
人有つて・悪口罵詈等し・及び刀杖を加うる者」等云云、問うて曰く自讃は
如何、答えて曰く喜び身に余るが故に堪え難くして自讃するなり、問うて
曰く本門の心如何、答えて曰く本門に於て二の心有り一には涌出品の
略開近顕遠は前四味並に迹門の諸衆をして脱せしめんが為なり、二には
涌出品の動執生疑より一半並びに寿量品・分別功德品の半品已上一品二半
を略開近顕遠と名く一向に滅後の為なり、問うて曰く略開近顕遠の心如何、

答えて曰く文殊・弥勒等の諸大菩薩・梵天・帝釈・日月・衆星・竜王等
初成道の時より般若經に至る已来は一人も釈尊の御弟子に非ず此等の菩薩
・天人は初成道の時・仏未だ説法したまわざる已前に不思議解脱に住して我
と別円二教を演説す釈尊其の後に阿含・方等・般若を宣説し給う然りと雖も
全く此等の諸人の得分に非ず、既に別円二教を知りぬれば蔵通をも又知れり
勝は劣を兼ねる是なり委細に之を論ぜば・或は釈尊の師匠なるか善知識とは
是なり釈尊に随うに非ず、法華經の迹門の八品に來至して始めて未聞の法
を聞いて此等の人人は弟子と成りぬ舍利弗・目連等は鹿苑より已來初發心の
弟子なり、然りと雖も権法のみを許せり、今法華經に來至して実法を授与し
法華經本門の略開近顯遠に來至して華嚴よりの大菩薩・二乗・大梵天・
帝釈・日月・四天・竜王等は位・妙覺に隣り又妙覺の位に入るなり、
若し爾れば今・我等天に向つて之を見れば生身の妙覺の仏本位に居して

衆生しゆじやうを利益りやくする是これなり。

問いうて曰いわく誰人だれびとの爲ために広開こうかい近顯こんけん遠のんの壽量品じゆりやうぼんを演說えんぜつするや、答こえて曰いわく

じゆりやうぼん

壽量品じゆりやうぼんの一品二半いつぽんにはんは始はじより終はつに至いたるまで正まさく滅後めつご衆生しゆじやうの爲ためなり滅後めつごの中に

まつぼう

は末法まつぼう今時の日蓮等にちれんが爲ためなり、疑うたがつて云いく此この法門前代ほうもんぜんだいに未だ之これを聞きかず

きやうもん

經文きやうもんに之これ有りや、答こえて曰いわく予が智前賢ちぜんけんに超こえず設たい經文きやうもんを引ひくと雖いえども

誰人だれびとか之これを信べんぜん卽てい和が啼泣ていきやう・伍子胥ごししよが悲傷これ是なり、然しかりと雖いえども略開りやくかい近顯こんけん遠のん

・動執どうしつ生疑しやうぎの文ぶんに云いく、然しかも諸もろの新發意しんはつちの菩薩ぼさつ・仏の滅後めつごに於おいて若もし是この語ことば

を聞きかば・或あるは信受しんじゆせずして法はを破やぶする罪業ざいごうの因縁いんねんを起おこさん」等云云、文の

心しんは壽量品じゆりやうぼんを説まかずんば末代まつだいの凡夫ぼんぶ皆惡道みなあくどうに墮だせん等なり、壽量品じゆりやうぼんに云いく

「是かくの好りやうき良藥ややくを今留こんとどめて此こに在あく」等云云、文の心しんは上かは過去かこの事ことを説まく

に似にたる様ようなれども此この文ぶんを以もて之これを案あずるに滅後めつごを以もて本もとと爲なす先せんず

先例せんれいを引ひくなり、分別ぶんべつ功德品くどくひんに云いく、「惡世末法あくせまつぼうの時とき」等云云、神力品じんりきひんに云いく

- 722 -

「ほとけめつど仏滅度の後に能く是の經を持たんを以つての故に諸仏皆歡喜して無量の神力むりようじんりきを現じ給う」等云云、藥王品に云く、我が滅度の後・後の五百歳の中に広宣流布こうせんるふして閻浮提に於て断絶せしむること無けん」等云云、又云く「此の經は則ちすなわ為れ閻浮提の人の病の良藥なり」等云云、涅槃經に云く「譬えば七子の如しごと父母平等ならざるに非ざれども然も病者に於て心則ち偏に重し」等云云、七子の中の第一第二は一闍提謗法の衆生なり諸病の中には法華經を謗ずるが第一の重病なり、諸藥の中には南無妙法蓮華經は第一の良藥なり、此のえんぶだい一闍浮提は縦じゅうにっ広七千由善那八万の国之れ有り正像二千年の間未だ広宣流布せざるに法華經当世に當つて流布せしめずんばしゃくそん釈尊は大妄語の仏・多宝仏のしょうみょう証明は泡沫に同じく十方分身の仏の助舌も芭蕉の如くならん。うたがい疑つて云く多宝の証明・十方の助舌・地涌の涌出此等は誰人の為ぞや、答えて曰く世間の情に云く在世の為と、日蓮云く舍利弗・目等は現在

を以て之を論ずれば智慧第一・神通第一の大聖なり、過去を以て之を論ずれば金竜陀仏・青竜陀仏なり、未来を以て之を論ずれば華光如来、靈山を以て之を論ずれば三惑頓尽の大菩薩、本を以て之を論ずれば内秘外現の古菩薩なり、文殊・弥勒等の大菩薩は過去の古仏・現在の応生なり、梵帝・日月・四天等は初成已前の大聖なり、其上・前四味・四教一言に之を覚りぬ仏の在世には一人に於ても無智の者之れ無し誰人の疑を晴さんが為に多宝仏の証明を借り諸仏舌を出し地涌の菩薩を召さんや方方以て謂れ無き事なり、経文に随つて「況滅度後・令法久住」等云云、此等の経文を以て之を案ずるに偏に我等が為なり、随つて天台大師当世を指して云く「後の五百歳遠く妙道に沾わん」伝教大師当世を記して云く「正像稍過ぎ已つて末法太だ近きに有り」等云云、「末法太有近」の五字は我が世は法華經流布の世に非ずと云う釈なり。

問うて云く如来滅後二千余年・竜樹・天親・天台・伝教の残したまえる
所の秘法は何物ぞや、答えて云く本門の本尊と戒壇と題目の五字となり、問
うて曰く正像等に何ぞ弘通せざるや、答えて曰く正像に之を弘通せば小乗
・権大乘・迹門の法門一時に滅尽す可きなり、問うて曰く仏法を滅尽する
の法何ぞ之を弘通せんや、答えて曰く末法に於ては大小・権実・顕密共に教
のみ有つて得道無し一閻浮提皆謗法と為り畢んぬ、逆縁の為には但
妙法蓮華經の五字に限る、例せば不輕品の如し我が門弟は順縁なり日本国は
逆縁なり、疑つて云く何ぞ広略を捨て要を取るや、答えて曰く玄奘三蔵
は略を捨てて広を好み四十巻の大品經を六百巻と成す羅什三蔵は広を捨て略
を好む千巻の大論を百巻と成せり、日蓮は広略を捨てて肝要を好む所謂
上行菩薩所伝の妙法蓮華經の五字なり、九包淵が馬を相するの法は玄黄を
略して駿逸を取る支道林が經を講ずるには細料を捨てて元意を取る等云云、

仏既に宝塔に入つて二仏座を並べ分身来集し地涌を召し出し肝要を取つて
末代に当てて五字を授与せんこと当世異義有る可からず。

疑つて云く今世に此の法を流布せば先相之れ有りや、答えて曰く法華經

に「如是相乃至本末究竟等」云云、天台云く「蜘蛛掛りて喜び事来たり 鵲

鳴いて客人来る小事猶以て是くの如し何に況や大事をや」取意、問うて曰く

若し爾れば其の相之れ有りや、答えて曰く去ぬる正嘉年中の大地震・文永の

大彗星其より已後今に種種の大なる天変・地天此等は此先相なり、仁王經の

七難・二十九難・無量の難、金光明經・大集經・守護經・藥師經等の諸經

に挙ぐる所の諸難皆之有り但し無き所は二三四五の日出る大難なり、而るを

今年佐渡の国の土民は口口に云う今年正月廿三日の申の時西の方に二の日

出現す・或は云く三の日出現す等云云、二月五日には東方に明星二つ並び

出ず其の中間は三寸計り等云云、此の大難は日本国先代にも未だ之有らざる

か、最勝王經の王法正論品に云く、「變化の流星墮ち二の日俱時に出で他方が、怨賊来つて国人喪乱に遭う」等云云、首楞嚴經に云く、「或は二の日を見し・或は兩つの月を見す」等、藥師經に云く、「日月薄蝕の難」等云云、金光明經に云く、「彗星數ば出で兩つの日並び現じ薄蝕恒無し」大集經に云く、「仏法実に見せつば乃至日月明を現ぜず」仁王經に云く、「日月度を失ひ時節返逆し・或は赤日出で黒日出で二三四五の日出ず・或は日蝕して光無く・或は日輪一重二三四五重輪現ぜん」等云云、此の日月等の難は七難二十九難無量の諸難の中に第一の大惡難なり、問うて曰く此等の大中小の諸難は何に因つて之を起すや、答えて曰く「最勝王經に曰く非法を行ずる者は見て當に愛敬を生じ善法を行ずる人に於て苦楚して治罰す」等云云、法華經に云く涅槃經に云く金光明經に云く「惡人を愛敬し善人を治罰するに由るが故に星宿及び風雨皆時を以て行われず」等云云、大集經に云く「仏法実

におんもつ隱没し乃至是ないしかくくの如ごとき不善業ふぜんごうの惡王あくおう・惡比丘あくびく我が正法しょうほうを毀壞きえす」等、
仁王經にんのうきように云いわく「聖人しょうにん去る時七難ひちなん必ず起る」等、又云いわく「法あらに非あらず律あらに非あらず比丘びく
けいばくを繫縛くくすること獄囚ごくくの法の如ごとくす爾その時に當あたつて法滅ほうめつせんこと久くしからず」
等、又云いわく「諸もろもろの惡比丘あくびく多く名利みょうりを求め國王こくおう・太子たいし・王子みこの前に於おいて自みずから
はぶつぼう破いはねん仏法の因縁いんねん・破國いはねんの因縁いんねんを説そかん其その王わき別わきまえずして此ことばの語しんちようを信聽しんちようせん」
等云云、此等これらの明鏡めいきようを贖もつて當時とうじの日本國にほんこくを引き向むかうるに天地てんちを浮うぶること
あたかふけいふけいごと宛も符契まなこの如ごとし眼有もんでいらん我が門弟これは之まきを見よ、當まさに知るべし此あくびくの國あくびくに惡比丘あくびく
等有てんしつて天子みこ・王子しょうぐん・將軍等しやうぐんに向むかつて讒訴ざんそを企くわだて聖人しょうにんを失うしなふ世なり、問うう
て曰いわく弗舍密多羅王ほつしやみつたらおう・會昌天子えしやうてんし・守屋等もりやは月支がつし・真旦しんたん・日本にほんの仏法ぶつぼうを滅失めつしつし
だいばぼさつ提婆菩薩ししそんじや・師子尊者等さつがいを殺害そのときなんす其だいなんの時何いぞ此いの大難いだを出いささるや、答こたえて
いわく災難さいなんは人したがに随だつて大小だいしやうあ有べる可しし正像しょうぞう二千年の間惡王あくおう・惡比丘あくびく等は・或ある
げどうは外道もちを用あるい・或どうしは道士かたを語あるらい・或あるは邪神あを信ぶつぼうずめつしつ仏法めつしつを滅失めつしつすること大あな

るに似たれども其の科尚浅きか、今当世の惡王・惡比丘の佛法を滅失するは
小を以て大を打ち権を以て実を失う人心を削て身を失わず寺塔を焼き尽さず
して自然に之を喪す其の失前代に超過せるなり、我が門弟之を見て法華經を
信用せよ目を瞋らして鏡に向え、天瞋るは人に失有ればなり、二の日並び出
るは一国に二の國王並ぶ相なり、王と王との鬭諍なり、星の日月を犯すは臣
王を犯す相なり、日と日と競い出るは四天下一同の諍論なり、明星並び出る
は太子と太子との諍論なり、是くの如く国土乱れて後に上行等の聖人
出現し本門の三つの法門之を建立し一四天・四海一同に妙法蓮華經の広宣
流布疑い無からん者か。

文永十一年五月

在御判

建治三年四月十日 五十六歳御作 与富木常忍

338p

せいふひとゆい
青鳧一結送り給ひ候い了んぬ。

今来の学者一同の御存知に云く「在世滅後異なりと雖も法華を修行するに
は必ず三学を具す一を欠いても成ぜず」云云。

余又年来此の義を存する処一代聖教は且らく之を置く法華經に入つて此
の義を見聞するに序正の二段は且らく之を置く流通の一段は末法の明鏡尤も
依用と為すべし、而して流通に於て二有り一には所謂迹門の中の法師等の
五品・二には所謂本門の中の分別功德の半品より經を終るまで十一品半なり、
此の十一品半と五品と合せて十六品半此の中に末法に入つて法華を修行する
相貌分明なり是に尚事行かずんば普賢經・涅槃經等を引き来りて之れを
糾明せんに其の隠れ無きか、其の中の分別功德品の四信と五品とは法華を
修行するの要・在世・滅後の龜鏡なり。

けいけい 荊谿の云く「一念信解とは即ち是れ本門立行の首なり」と云云、其の中に
げんざい 現在の四信の初の一念佛解と滅後の五品の第一の初随喜と此の二処は一同に
ひやっかいせんによ ひやっかいせんによ いちねんさんぜん ほうきようじゅつぼうさんぜ しょうぶつ
百界千如・一念三千の宝篋十方三世の諸仏の出る門なり、天台・妙樂の
ふたり 二の聖賢此の二処の位を定むるに三の釈有り所謂・或は相似・十信・鉄輪
の位・或は勸行五品の初品の位・未断見思・或は名字即の位なり、止觀に
そ ふじよう え いわ ぶつ い 難 機 に 赴 きて 異 説 す 此 を 借 っ て 開 解 せ ば
其の不定を会して云く「仏意知り難し機に赴きて異説す此を借つて開解せば
なん わずらわ ねんころあらそ 何ぞ劣しく苦に諍わん」云云等。

予が意に云く、三釈の中名字即は經文に叶つか滅後の五品の初の一品を説
いて云く「而も毀眚せずして随喜の心を起す」と若し此の文相似の五品に渡
らば而不毀眚の言は便ならざるか、就中寿量品の失心不失心等は皆名字即
なり、涅槃經に「若信若不信乃至熙連」とあり之を勘えよ、又一念佛解の四
字の中の信の一字は四信の初めに居し解の一字は後に奪わるる故なり、若し

爾しからば無解むげうしん有信いは四信しの初位しに當る經に第二信にを説いいて云わく「略解りやくげごんしゆ言趣ごんしゆ」と云云、記きの九くに云いく「唯ただ初信しを除けく初はは解無げなきが故ゆえに」随したがつて次下つぎしもの随喜品ずいきに至かみつて上しよずいきの初随喜かを重これねて之ふんみようを分ふん明みにす五十人しよずいき是皆展轉劣みなてんでんなり、第五十人しよずいきに至いつて二の釈有いり一には謂いく第五十人しよずいきは初随喜しよずいきの内しよずいきなり二には謂いく第五十人しよずいきは初随喜しよずいきの外しよずいきなりと云いうは名字みようじそく即すなり、教い弥いよ実いなれば位い弥いよ下いれりと云いう釈しよは此しの意いなり、四味三教しよりみさんきようも円教えんきようは機きを撰せつし爾前にぜんの円教えんきようよりえんきようも法華經ほけきようは機きを撰せつし迹門しやくもんよりほんもんも本門ほんもんは機きを尽きすなり教い弥い実位い弥い下いの六字心とどを留とどめて案べず可べし。

問まう末法まつぽうに入いつて初心しよしんの行者ぎようじや必きず円えんの三字さんを具ぐするや不いや、答いえて曰いく此しの義大事だたる故ゆえに經文きようもんを勘かんえ出でして貴辺きへんに送付いす、所謂い五品ごほんの初二三品にには仏正ましく戒定かいじようの二法にを制止せいしして一向いに慧いちぶんの一分いに限かる慧又かんがえ勘かんざれば信もつを以もつて慧みに代みえ・信ふしんの一字いを詮なと為なす、不信ふしんは一闡提い謗法せんたいほうぼうの因い・信いは慧いの因い・名字みようじそく即す

の位なり、天台云く「若し相似の益は隔生すれども忘れず名字勸行の益は隔生すれば即ち忘る・或は忘れざるも有り忘るる者も若し知識に値えば宿善還つて生ず若し悪友に値えば則ち本心を失う」云云、恐らくは中古の天台宗の慈覺・智証の両大師も天台・伝教の善知識に違背して心・無畏・不空等の悪友に遷れり、末代の学者慧心の往生要集の序に誑惑せられて法華の本心を失ひ弥陀の権門に入る退大取小の者なり、過去を以て之を推するに未来無量劫を経て三惡道に処せん若し悪友に値えば即ち本心を失うとは是なり。

問うて曰く其の証如何答えて曰く止觀第六に云く「前教に其の位を高うする所以は方便の説なればなり円教の位下きは眞実の説なればなり」弘決に云く「前教と云うより下は正く權實を判ず教弥よ実なれば位弥よ下く教弥よ權なれば位弥よ高き故に」と、又記の九に云く「位を判ずることをいわば觀境弥よ深く実位弥よ下きを顯す」と云云、他宗は且らく之を置く天台一門

の学者等何ぞ実位弥下の釈を闇いて慧心僧都の筆を用ゆるや、畏・智・空と
覺証との事は追つて之を習え大事なり大事なり一閻浮提第一の大事なり心有

らん人は聞いて後に我を外め。

問うて云く末代初心の行者何物をか制止するや、答えて曰く檀戒等の五度

を制止して一向に南無妙法蓮華經と称せしむるを一念信解初隨喜の氣分と

為すなり是れ則ち此の經の本意なり、疑つて云く此の義未だ見聞せず心を

驚かし耳を迷わす明かに証文を引て請う苦に之を示せ、答えて云く經に

云く「須く我が為に復た塔寺を起て及び僧坊を作り四事を以て衆僧を供養す

ることをもちいざれ」此の經文明かに初心の行者に檀戒等の五度を制止す

る文なり、疑つて云く汝が引く所の經文は但寺塔と衆僧と計りを制止し

て未だ諸の戒等に及ばざるか、答えて曰く初を挙げて後を略す、問て曰く何

を以て之を知らん、答えて曰く次下の第四品の經文に云く「況や復人有つて

能く是の経を持ちて兼ねて布施持戒等を行ぜんをや」云云、きようもんぶんみよう 經文分明に初

二三品の人には檀戒等の五度を制止し第四品に至つて始めて之を許す後に

許すを以て知んぬ初に制する事を、問うて曰くきようもんいちおうそうじ 經文一往相似たり將た又疏釈

有りや、答えて曰く汝が尋ぬる所の釈とは月氏四依の論か將た又漢土・日本

の法師の書か本を捨て末を尋ね体を離れて影を求め源を忘れて流を貴ぶ分明

なるきようもん 經文を闇いて論釈を請い尋ぬ本經に相違する末釈有らば本經を捨て

て末釈に付く可きか然りと雖も好みに隨て之を示さん、文句の九に云く「初心

は縁に紛動せられて正業を修するを妨げんことを畏る直ちに専ら此の経を持

つ即ち上供養なり事を廃して理を存するは所益弘多なり」と、此の釈に縁と

云うは五度なり初心の者兼ねて五度を行ずれば正業の信を妨ぐるなり、譬え

ば小船に財を積んで海を渡るに財と俱に没するが如し、直專持此經と云うは

一經に亘るに非ず専ら題目を持つて余文を雜えず尚一經の誦誦だも許さず

何に況や五度をや、「廢事存理」と云うは戒等の事を捨てて題目の理を専らにす云云、所益弘多とは初心の者諸行と題目と並び行ずれば所益全く失うと云云。

文句に云く、「問う若爾らば經を持つは即ち是れ第一義の戒なり何が故ぞ復能く戒を持つ者と言うや、答う此は初品を明かす後を以て難を作すべからず」等云云、当世の学者・此の釈を見ずして末代の愚人を以て南岳・天台の二聖に同ず誤りの中の誤りなり、妙樂重ねて之を明して云く、問う若し爾らば若し事の塔及び色身の骨を須いず亦須く事の戒を持つべからざるべし乃至事の僧を供養することを須いざるや」等云云、伝教大師の云く、「二百五十戒忽に捨て畢んぬ」唯教大師一人に限るに非ず鑒眞の弟子・如宝・道忠並びに七大寺等一同に捨て了んぬ、又教大師・未來を誡めて云く、「末法の中に持戒の者有らば是れ怪異なり市に虎有るが如し此れ誰か信ず可き」云云。

問う汝何ぞ一念三千の觀門を勸進せず唯題目許りを唱えしむるや、答えて
日く日本の二字に六十六国の人畜財を損尽して一も残さず月氏の兩字に豈七
十ヶ国無からんや、妙樂の云く「略して經題を挙ぐるに玄に一部を収む」
又云く「略して界如を挙ぐるに具さに三千を損す、文殊師利菩薩・阿難尊者
・三會八年の間の仏語之を挙げて妙法蓮華經と題し次下に領解して云く
「如是我聞」と云云。

問う其の義を知らざる人唯南無妙法蓮華經と唱つるに解義の功德を具する
や否や、答う小兒乳を含むに其の味を知らざれども自然に身を益す耆婆が妙
藥誰か弁えて之を服せん水心無けれども火を消し火物を焼く豈覺有らんや
竜樹・天台皆此の意なり重ねて示す可し。

問う何が故ぞ題目に万法を含むや、答う章安の云く「蓋し序王とは經の玄意
を叙す玄意は文の心を述す文の心は迹本に過ぎたるは莫し」妙樂の云く「法華

の文心を出して諸教の所以を弁ず」云云、濁水心無けれども月を得て自ら清
めり草木雨を得豈覺有つて花さくならんや妙法蓮華經の五字は經文に非ず
其の義に非ず唯一部の意なるのみ、初心の行者其の心を知らざれども而も
之を行ずるに自然に意に當るなり。

問う汝が弟子一分の解無くして但一口に南無妙法蓮華經と称する其の位
如何、答う此の人は但四味三教の極位並びに爾前の円人に超過するのみに
非ず將た又真言等の諸宗の元祖・畏・嚴・恩・蔵・宣・摩・導等に勝出す
ること百万億倍なり、請う國中の諸人・我が末弟等を軽ずる事勿れ進んで
過去を尋ねれば八十萬億劫に供養せし大菩薩なり豈熙連一恒の者に非ずや
退いて未來を論ずれば八十年の布施に超過して五十の功德を備う可し天子の
襁褓に纏れ大竜の始めて生ずるが如し蔑如すること勿れ蔑如すること勿れ、
妙樂の云く「若し悩乱する者は頭七分に破れ供養すること有る者は福十号

に過ぐ^すと、優陀延王は寶頭盧尊者を蔑如して七年の内に身を喪失し相州は
にちれん^{うだえんおう}るざい^{びんずるそんじや}
日蓮を流罪して百日の内に兵乱に遇えり、經に云く「若し復是の經典を受持^{べつじよ}
する者を見て其の過惡を出さん若は實にもあれ若は不實にもあれ此の人現世^{そうしつ}
に白癩の病を得ん乃至諸惡重病あるべし」又云く「当に世世に眼無かる^{そうしゆう}
べし」等云云、明心と円智とは現に白癩を得・道阿弥は無眼の者と成りぬ、
國中の疫病は頭破七分なり罰を以て徳を推するに我が門人等は福過十号疑^{えきびよう}
い無き者なり。^{ずはしちぶん}

夫れ人王三十代欽明の御宇に始めて仏法渡りし以来桓武の御宇に至るまで^そ
二十代二百余年の間六宗有りと雖も仏法未だ定らず、爰に延暦年中に一り^{きんめい}
の聖人有つて此の國に出現せり所謂伝教大師是なり、此の人先きより弘通^{ぎよう}
する六宗を糾明し七寺を弟子と為して終に叡山を建てて本寺と為し諸寺を^{ろくしゆう}
取つて末寺と為す、日本の仏法唯一門なり王法も二に非ず法定まり國清めり^{まっじ}
^な
^{にほん}
^{ぶつぽうただいちもん}
^{あら}

其の功を論ぜば源已今当の文より出でたり其の後弘法・慈覚・智証の三
大師事を漢土に寄せて大日の三部は法華經に勝ると謂い剩さえ教大師の削ず
る所の真言宗の宗の一字之を副えて八宗と云云、三人・一同に勅宣を申し
下して日本に弘通し寺毎に法華經の義を破る是偏に已今当の文を破らんと
為して釈迦・多宝・十方の諸仏の大怨敵と成りぬ、然して後・仏法漸く廢れ
王法次第に衰え天照太神・正八幡等の久住の守護神は力を失い梵帝・四天
は国を去つて已に亡国と成らんとす情有らん人誰か傷み嗟かざらんや、所詮
三大師の邪法の興る所は所謂東寺と叡山の総持院と園城寺との三所なり禁止
せずんば国土の滅亡と衆生の惡道と疑い無き者が予粗此の旨を勘え国主に
示すと雖も敢て叙用無し悲む可し悲む可し。

四九

下山御消息

建治三年六月 五十六歳御代作 与下山兵庫光基

343P

例時に於ては尤も阿弥陀經を讀まる可きか等云云此の事は仰せ候はぬ已前
より親父の代官といひ私の計と申し此の四五年が間は退轉無し、例時には
阿弥陀經を讀み奉り候しが去年の春の末へ夏の始めより阿弥陀經を止めて
一向に法華經の内・自我偈誦し候又同くば一部を讀み奉らむとはげみ候こ
れ又偏に現当の御祈の爲なり、但し阿弥陀經・念仏を止めて候事は此れ日比
・日本国に聞へさせ給う日蓮聖人去る文永十一年の夏の比同じき甲州飯野・
御牧・波木井の郷の内身延の嶺と申す深山に御隠居せさせ給ひ候へば、さる
べき人人・御法門承わる可きの由候へども御制止ありて入れられずおぼろげ
の強縁ならではかなひがたく候しに有人見參の候と申し候しかば信じまいら
せ候はんれうには参り候はず、ものの様をも見候はんために閑所より忍びて
参り御庵室の後に隠れ人人の御不審に付きてあらあら御法門とかせ給ひ候
き。

法華經と大日經・華嚴・般若・深密・楞伽・阿弥陀經等の經經の勝劣
・浅深等を先として説き給いしを承り候へば法華經と阿弥陀經等の勝劣は一
重二重のみならず天地雲泥に候けり、譬ば帝釈と猿猴と鳳凰と烏鵲と大山
と微塵と日月と螢炬等の高下勝劣なり、彼彼の經文と法華經とを引き合せ
てたくらべさせ給いしかば愚人も弁えつ可し白白なり赤赤なり、されば此の
法門は大体人も知れり始めておどろくべきにあらず又仏法を修行する法は必
ず經經の大小・権実・顯密を弁うべき上よくよく時を知り機を鑑みて申す
べき事なり、而るに当世・日本国は人毎に阿みだ經並に弥陀の名号等を本と
して法華經を忽諸し奉る世間に智者と仰がる人人・我も我も時機を知れり
知れりと存ぜられげに候へども小善を持て大善を打ち奉り權經を以て実經
を失ふとがは小善還つて大惡となる藥變じて毒となる親族還つて怨敵と成る
が如し難治の次第なり、又仏法には賢なる様なる人なれども時に依り機に依り

国に依り^よ先後^{せんご}の弘通^{くつう}に依る^よ事を并^{わきまえ}へざれば身心^{しんしん}を苦めて修行^{しゆぎやう}すれども験^{しるし}なき事なり、設い^{たと}一向^{いつこう}に小乘^{しょうじやう}流布^{るふ}の国には大乘^{だいじやう}をば弘通^{くつう}する事はあれども一向^{いつこう}大乘^{だいじやう}の国には小乘^{しょうじやう}經^{きやう}をあながちにいむ事なり・しめてこれを弘通^{くつう}すれば国もわづらひ人も惡道^{あくどう}まぬかれがたし、又初心^{しよしん}の人には二法^{にぽう}を並べて修行^{しゆぎやう}せしむる事をゆるさず月氏^{がっし}の習^{なら}いには一向^{いつこう}小乘^{しょうじやう}の寺の者は王路^{わうろ}を行かず一向^{いつこう}大乘^{だいじやう}の僧は左右^{さう}の路をふむ事なし井の水・河の水・同じく飲む事なし何に況^{いか}や一房^{いっぼう}に栖^すみなんや、されば法華^{ほけきやう}經^{しよしん}に初心^{いつこう}の一向^{いつこう}大乘^{だいじやう}の寺を仏説^とき給^{たま}うに「但^だ大乘^{だいじやう}經典^{きやうてん}を受持^{じゆじ}せんことを樂^{ねが}つて、乃至^{ないし}余經^{よきやう}の一偈^{いちげ}をも受けざれ」又云^いく「又^{また}声聞^{しょうもん}を求むる比丘^{びく}・比丘尼^{びくに}・優婆塞^{うばそく}・優婆夷^{うはい}に親近^{しんこん}せざれ」又云^いく、亦問訊^{またもんじん}せざれ」等云云、設い^た親父^{たい}たれども一向^{いつこう}小乘^{しょうじやう}の寺に住する比丘^{びく}・比丘尼^{びくに}をば一向^{いつこう}大乘^{だいじやう}の寺の子息^{しそく}これを礼拝^{らいはい}せず親近^{しんこん}せず何に況^{いか}や其法^{いっわんや}を修行^{しゆぎやう}せんや大小兼行^{だいしょうけんぎやう}の寺は後心^{ぼさつ}の菩薩^{ぼさつ}なり。

今・日本国は最初に仏法渡りて候し比・大小雜行にて候しが人王四十五

しょうむてんのう ぎょう とう

代聖武天皇の御宇に唐の揚州竜興寺の鑑真和尚と申せし人漢土より我が朝に

ほけきょう てんだいしゅう わた たまい

法華經・天台宗を渡し給いて有りしが円機未熟とやおぼしけんの法門をば

こしん おさ

己心に収めて口にも出だし給はず、大唐の終南山の豐徳寺の道宣律師の小乗

にほんこく こんりゅう こ ひとえ ほつけしゅう るふ ほうべん だいじょう

戒を日本国の三所に建立せり此れ偏に法華宗の流布すべき方便なり、大乘

しゅつげん

出現の後には肩を並べて行ぜよとにはあらず例せば儒家の本師たる孔子・

ろうし

老子等の三聖は仏の御使として漢土に遣されて内典の初門に礼樂の文を諸人

に教えたりき、止觀に經を引いて云く「我三聖を遣して彼の震旦を化す」等

云云、妙樂大師云く「礼樂前に馳せ真道後に啓く」と云云、仏は大乗の初門

に且らく小乗 戒を説き給いしかども時すぎぬれば禁めて云く涅槃經に云く

に且らく小乗 戒を説き給いしかども時すぎぬれば禁めて云く涅槃經に云く

に且らく小乗 戒を説き給いしかども時すぎぬれば禁めて云く涅槃經に云く

に且らく小乗 戒を説き給いしかども時すぎぬれば禁めて云く涅槃經に云く

に且らく小乗 戒を説き給いしかども時すぎぬれば禁めて云く涅槃經に云く

に且らく小乗 戒を説き給いしかども時すぎぬれば禁めて云く涅槃經に云く

に且らく小乗 戒を説き給いしかども時すぎぬれば禁めて云く涅槃經に云く

に且らく小乗 戒を説き給いしかども時すぎぬれば禁めて云く涅槃經に云く

に且らく小乗 戒を説き給いしかども時すぎぬれば禁めて云く涅槃經に云く

に且らく小乗 戒を説き給いしかども時すぎぬれば禁めて云く涅槃經に云く

に且らく小乗 戒を説き給いしかども時すぎぬれば禁めて云く涅槃經に云く

せり始めには華嚴・三論・法相・俱舍・成実・律の六宗を習い極め給うの
みならず、達磨宗の淵底を探り究め給ひ剩へいまだ日本国に弘通せざる天台
・真言の二宗をも尋ね顕わして浅深勝劣を心中に究竟し給へり、去延暦
二十一年正月十九日に桓武皇帝・高雄山に行幸なり給ひ、南都・七大師の
長者・善議・勤操等の十四人を教大師に召し合せて六宗と法華宗との勝劣
を糾明せられしに六宗の碩学宗宗毎に我宗は一代超過の由各各に立て申さ
れしかども教大師の一言に万事破れ畢んぬ、其の後皇帝重ねて口宣す和氣弘世
を御使として諫責せられしかば七大寺・六宗の碩学一同に謝表を奉り畢ん
ぬ、一十四人の表に云く、「此界の含靈而今而後悉く妙円の船に載り早く彼岸
に済ることを得」云云、教大師云く、「二百五十戒忽ちに捨て畢んぬ」云云、
又云く、「正像稍過ぎ已つて末法太だ近きに有り」又云く、「一乗の家には都て
権を用いず」又云く、「穢食を以て宝器に置くこと無し」又云く、「仏世の大

羅漢已に此の呵嘖を被むれり滅後の小蚊虻何ぞ此れに随わざらん」云云、此れ
又私の責めにはあらず法華經には「正直に方便を捨て但無上道を説く」云云
涅槃經には「邪見の人」等云云、邪見方便と申すは華嚴・大日經・般若經
・阿弥陀經等の四十余年の經經なり、捨とは天台の云く「廢るなり」又云く
「謗とは背くなり」正直の初心の行者の法華經を修行する法は上に挙ぐる
ところの經經・宗宗を抛つて一向に法華經を行ずるが眞の正直の行者に
ては候なり、而るを初心の行者深位の菩薩の様に彼彼の經經と法華經とを
並べて行ずれば不正直の者となる、世間の法にも賢人は二君に仕へず貞女は
両夫に嫁がずと申す是なり、又私に異議を申すべきにあらず。
如来は未來を鑑みさせ給いて我が滅後・正法一千年・像法一千年・末法一
万年が間我が法門を弘通すべき人人並に經經を一一にきりあてられて候、
而るに此を背く人・世に出来せば設い智者賢王なりとも用うべからず、所謂

我が滅後の次の日より正法五百年の間は一向小乗經を弘通すべし迦葉
・阿難乃至・富那奢等の十余人なり、後の五百年には権大乘經の内華嚴・
方等深密・般若・大日經・觀經・阿彌陀經等を弥勒菩薩・文殊師利菩薩・
馬鳴菩薩・竜樹菩薩無著菩薩・天親菩薩等の四依の大菩薩等の大論師弘通す
べしと云云、此れ等の大論師は法華經の深義を知し食さざるにあらざ然而
法華經流布の時も来らざる上釈尊よりも仰せ付けられざる大法なれば心には
存じて口に宣べ給はず・或時は粗口に轉る様なれども実義をば一向に隠して
演べ給はず、像法一千年の内に入りぬれば月氏の仏法漸く漢土・日本に渡り
来る世尊眼前に藥王菩薩等の迹化他方の大菩薩に法華經の半分・迹門十四品
を譲り給う、これは又地涌の大菩薩末法の初めに出現せさせ給いて本門
寿命品の肝心たる南無妙法蓮華經の五字を一閻浮提の一切衆生に唱えさせ
給うべき先序のためなり、所謂迹門弘通の衆は南岳・天台・妙樂・伝教等

これ
是なり、今の時は世すでに上行菩薩等の御出現の時剋に相当れり、而るに
くがん もつ
余愚眼を以てこれを見るに先相すでにあらはれたるか、而るに諸宗所依の
けこん だいにち
華嚴・大日・阿みだ経等は其の流布の時を論ずれば正法一千年の内・後の五
ないしぞうほう
百年乃至像法の始めの諍論の経経なり、而るに人師等経経の浅深勝劣
めいわく
等に迷惑するのみならず仏の譲り状をもわすれ時機をも勘へず猥りに宗宗を
かま
構え像末の行となせり、例せば白田に種を下だして玄冬に穀をもとめ下弦に
まんげつ
満月を期し夜中に日輪を尋ぬる如し、何に況や律宗なんと申す宗は一向
しょうじょう
小乗なり月氏には正法一千年の前の五百年の小法又日本国にては像法の
なごころ ほけきょう てんだいしゅう るふ
中比・法華経・天台宗の流布すべき前に且らく機を調養せむがためなり、
例せば日出でんとて明星前に立ち雨下らむとて雲先おこるが如し、日出雨下
い ひいであめふり
て後の星雲はなにかせん而るに今は時過ぬ又末法に入りて之を修行せば
じゅうぎょう
重病に輕葉を授け大石を小船に載するが如し修行せば身は苦く暇は入りて

しるし
はな
驗なく華のみ開きて菓（このみ）なからん、故に教大師・像法の末に出現（しゅつげん）して法華經（ほけきょう）の迹門（しやくもん）の戒定慧（かいじょうえ）の三が内（うち）・其の中（そのうち）・円頓（えんどん）の戒壇（かいだん）を叡山（えいざん）に建立（こんりゅう）し給（たま）ひし時二百五十戒忽（たちまち）に捨て畢（お）わぬ、随（したが）つて又鑑真（かんじん）の末の南都（なんと）・七佛寺（しちふじ）の一十四人（いちじゅうにん）・三百余人（さんひやくにん）も加判（かはん）して大乘（だいじょう）の人となり一國（こく）挙（こ）つて小律儀（りつぎ）を捨て畢（お）わぬ、其の授戒（じゅかい）の書（しよ）を見る可（べ）し分明（ぶんめい）なり。

しか
じやち
而（しか）るを今邪智（じやち）の持齋（じさい）の法師（ほっし）等昔（むかし）し捨てし小乗經（しょうじょうきょう）を取り出して一戒（いつかい）もたもたため名計（なけい）りなる二百五十戒（ふたひゃこご）の法師（ほっし）原有（もと）つて公家（くげ）・武家（ぶけ）を誑惑（おどろ）して國師（こくし）とののしる剩（あまつさえ）がまん我慢（おこ）を發（だ）して大乘戒（だいじょうかい）の人（ひと）を破戒（はかい）・無戒（むかい）とあなづる、例（れい）せば狗犬（くけん）が師子（しし）を吠（えんこう）え猿猴（えんこう）が帝（たい）釈（しゃく）をあなづるが如（ごと）し、今の律宗（りつしゅう）の法師（ほっし）原（もと）は世間（せけん）の人人（ひとびと）には持戒実語（じかいじつご）の者の様（よう）には見（み）ゆれども其（そ）の実（じつ）を論（ろん）ぜば天下（てんか）第一（だいいち）の大不實（ふじつ）の者（もの）なり、其（その）の故（ゆゑ）は彼等（かれら）が本文（ほんぶん）とする四分律（じふりつりつ）・十誦律（じゅうじゆりつ）等の文（ぶん）は大小乘（だいしょうじょう）の中には一向小乘（いっこうしょうじょう）・小乘（しょうじょう）の中（うち）にも最下（さいか）の小律（しょうりつ）なり、在世（ざいせ）には十二年（じふにねん）の後（のち）・方等（ほうとう）

大乘 へうつる程の且くのやすめ言・滅後には正法の前の五百年は一向
小乗の寺なり此れ亦一向大乘の寺の毀謗となさんがためなり、されば
日本国には像法半に鑑真和尚大乘の手習とし給う教大師・彼の宗を破し給い
て人をば天台宗へとりことし宗をば失うべしといへども後に事の由を知らし
めんがために我が大乘の弟子を遣してたすけをき給う、而るに今の学者等は
此の由を知らずして六宗は本より破れずして有りとおもへり墓無し墓無し、
又一類の者等天台の才学を以て見れば我が律宗は幼弱なる故に漸漸に
梵網經 へうつり結句は法華經の大戒を我が小律に盗み入れて還つて円頓の
行者を破戒・無戒と咲へば、国主は当時の形貌の貴げなる気色にたばらか
され給いて天台宗の寺に寄せたる田畠等を奪い取つて彼等にあたへ万民は又
一向大乘の寺の帰依を抛ちて彼の寺にうつる、手づから火をつけざれども
日本一国の大乘の寺を焼き失ひ抜目鳥にあらざれども一切衆生の眼を抜

きぬ仏の記し給ふ阿羅漢に似たる闡提是なり、涅槃經に云く「我涅槃の後・
無量百歳に四道の聖人も悉く復涅槃せん正法滅して後・像法の中に於いて
當に比丘有るべし、持律に似像し少く經を讀誦し飲食を貪嗜して其の身を
長養せん、乃至袈裟を服すと雖も猶獵師の細視徐行するが如く猫の鼠を伺う
が如く外には賢善を現し内には貪嫉を懷き唾法を受けたる婆羅門等の如く実
に沙門に非ずして沙門の像を現し邪見熾盛にして正法を誹謗せん」等云云、
此の經文に世尊未來を記し置き給う。抑 釈尊は我等がためには賢父たる
上明師なり聖主なり、一身に三徳を備へ給へる仏の仏眼を以て未來惡世を
鑑み給いて記し置き給う記文に云く「我涅槃の後・無量百歳」云云仏滅後・
二千年已後と見へぬ、又「四道の聖人悉く復涅槃せん」云云、付法藏の二十
四人を指すか、「正法滅後」等云云像末の世と聞えたり、「當に比丘有るべし
持律に似像し」等云云今

まっぽう 末法の代に比丘びくの似像じぞうを撰いび出いださば日本国にほんこくには誰たれの人ひとをか引き出して大覺だいかく
せそん 世尊もうちをば不妄語たてまつの人とし奉たてまつるべき、俗男ぞくなん・俗女ぞくじよ・比丘尼びくにをば此こゝの經文きやうもんに載のた
る事なし但比丘計びくばかりなり比丘びくは日本国にほんこくに数かずを知らず、然しかるに其その中に三衣一鉢さんねいちぱつ
を身に帶おせねば似像じぞうと定めがたし唯持齋ただじさいの法師計ほっしばかり相似あいたり一切いっさいの持齋じさいの中に
は次下つぎしもの文ぶんに持律じりつととけり律宗りつしゅうより外ほかは又脱ぬぬが、次下つぎしもの文ぶんに「少し經きやうもんを誦とくじゆ誦
す」云云相州鎌倉そうしゅうかまくらの極樂寺ごくらくの良觀房りやうかんぼうにあらずば誰たれを指さし出だし經文きやうもんをたす
け奉たてまつるべき、次下つぎしもの文ぶんに「猶獵師なおりしうしの細視しやうし徐行じやうかうするが如ごとく猫ねずみの鼠うかがを伺うかがうが如ごとく
外けんぜんには賢善けんぜんを現あらわし内うちには貪嫉とんしつを懷いだく」等云云両火房りやうかうぼうにあらずば誰たれをか三衣一鉢さんねいちぱつ
の獵師りやうし伺猫きねとして仏説ぶつせつを信べず可べし、哀かなれなるかな當時とうじの俗男ぞくなん・俗女ぞくじよ・比丘尼びくに
等檀那だんな等が山の鹿ねずみ・家の鼠ねずみとなりて獵師りやうし・猫ねずみに似にたる両火房りやうかうぼうに伺うかがわれ・たば
らかされて今生こんじやうには守護国土しゆごこくどの天照太神てんしやうだいじん・正八幡等しやうはちまんにすてられ他国たこくの兵軍
にやぶられて猫ねずみの鼠ねずみを捺おさえ取るが如ごとく獵師りやうしの鹿いころすを射死ごとが如ごとし、俗男ぞくなん・武士等ぶし

は射伏・切伏られ俗女は捺え取られて他国へおもむかん王昭君・楊貴妃が如くになりて後生には無間・大城に一人もなく趣くべし。

而るを余・此の事を見る故に彼が檀那等が大悪心をおそれず強盛にせむる

故に両火房・内内諸方に讒言を企てて余が口を塞がんとはげみしなり、又經

に云く「汝を供養する者は三惡道に墮つ」等云云、在世の阿羅漢を供養せし

人尚三惡道まぬかれがたし、何に況や滅後の誑惑の小律の法師原をや、小戒

の大科をばこれを以て知んぬ可し、或は又驢乳にも譬えたり還つて糞とな

る、或は狗犬にも譬えたり大乘の人の糞を食す、或は猴・或はは瓦礫

と云云、然れば時を弁へず機をしらずして小乗戒を持たば大乘の障とな

る、破れば又必ず惡果を招く其の上今の人人小律の者どもは大乘戒を小乗

戒に盗み入れ驢乳は牛乳を入れて大乘の人をあざむく、大偷盗の者大謗法

の者其のとがを論ずれば提婆達多も肩を並べがたく瞿伽利尊者が足も及ばざ

る閻浮第一の大悪人なり帰依せん国土安穩なるべしや、余・此の事を見るに
自身だにも弁へなばさでこそあるべきに日本国に智者とおぼしき人人・一人
も知らず国すでにやぶれなんとす、其の上仏の諫曉を重んずる上一分の慈悲
に・もよをされて国に代りて身命を捨て申せども国主等彼にたばらかされて
用ゆる人・一人もなし譬へば熱鉄に冷水を投げ睡眠の師子に手を触るが如し、
爰に両火房と申す法師あり身には三衣を皮の如くはなつ事なし、一鉢は両眼
をまほるが如し二百五十戒堅く持ち三千の威儀をととのへたり、世間の無智
の道俗国主よりはじめて万民にいたるまで地蔵尊者の伽羅陀山より出現せる
か迦葉尊者の靈山より下来するかと疑ふ、余・法華經の第五の卷の勸持品
を拝見したてまつれば末代に入りて法華經の大怨敵三類あるべし其の第三の
強敵は此の者かと思畢んぬ、便宜あらば國敵をせめて彼れが大慢を倒して佛法
の威験をあらはさんと思う處に両火房常に高座にして歎いて云く、「日本國の

僧尼には二百五十戒・五百戒・男女には五戒・八齋戒等を一同に持たせんと

おもつに、日蓮にちれんが此の願の障りさわりとなる」と云云、余案じて云く「現証に付

て事を切らんと思つ処ところに、彼常に雨を心に任せて下す由披露あり、古へも又雨

を以て得失をあらはす例たとへこれ多し、所謂伝いわゆるでんぎようだいし教大師と護命ごみようと守敏しゅびんと弘法こうぼうと等

なり、此に両火房上より祈雨の御いのりを仰せ付けられたり」と云云、此に

両火房祈雨あり去る文永八年六月十八日より二十四日なり、此に使を極樂寺

へ遣す年来の御歎なげきこれなり「七日が間に若一雨も下らば御弟子となりて二

百五十戒具さに持たんに、念仏ねんぶつ・無間地獄むげんじごくと申す事ことひがよみなりけりと申す

べし余だにも帰伏きふくし奉らば我弟子等をはじめて日本国大体かたぶき候なん」

と云云、七日が間に三度の使をつかはす、然れどもいかながしたりけむ一雨

も下らざるの上、頽風たいふう・風ふう・旋風ひようふう・暴風等の八風・十二時にやむ事なし

剩あまつさえ一雨も下らず風もやむ事なし、されば此の事は何事ぞ和泉式

部と云いし色好み・能因法師と申せし無戒の者・此は彼の両火房がいむところの三十一文字ぞかし、彼の月氏の大盜賊南・無仏と称せしかば天頭を得たり、彼の両火房並に諸僧等の二百五十戒・真言・法華の小法・大法の数百人の仏法の靈驗いかなれば姪女等の誑言・大盜人が称仏には劣らんとあやしき事なり、此れを以て彼等が大科をばしらるべきにさはなくして還つて讒言をもちぬらるるは実とはおぼへず所詮日本国・亡国となるべき期来るか、又祈雨の事はたとひ雨下らせりとも雨の形貌を以て祈る者の賢不賢を知る事あり雨・種種なり・或は天雨・或は竜雨・或は修羅雨・或は雨・或は甘雨・或は雷雨等あり、今の祈雨は都て一雨も下らざる上二七日が間前よりはるかに超過せる大旱魃・大惡風・十二時に止む事なし、両火房真の人ならば忽に邪見をもひるがへし跡をも山林にかくすべきに其の義なくして面を弟子・檀那等にさらす上 剽 讒言を企て日蓮が頸をきらせまいらせんと申し

上・あづかる人の国まで状を申し下して種をたたとする大悪人なり、而る
を無智の檀那等は恃怙して現世には国をやぶり後生には無間地獄に墮ちなん
事の不便さよ、起世経に云く「諸の衆生有りて放逸を為し清浄の行を汚す
故に天雨を下さず」又云く「不如法あり慳貪・嫉妬・邪見・顛倒なる故に天
雨師姪乱・五には国王理をもつて治めず雨師瞋る故に雨ふらず」云云、此等
の経文の龜鏡をもて両火房が身に指し当て見よ少くもりなからん、一に
は名は持戒とき・こゆれども実には放逸なるか二には慳貪なるか三には嫉妬
なるか四には邪見なるか五には姪乱なるか此の五にはすぐべからず、又此の
経は両火房一人には限るべからず昔をかがみ今をもしれ、弘法大師の祈雨の
時二七日の間・一雨も下らざりしもあやしき事なり、而るを誑惑の心強盛な
りし人なれば天子の御祈雨の雨を盗み取て我が雨と云云、善無畏三蔵・

金剛智三藏・不空三藏の祈雨の時も小雨は下たりしかども三師共に大風連連と吹いて勅使をつけてをはれしあさましさと、天台大師・伝教大師の須臾と三日が間に帝たいしやくあめ 釈雨を下らして小風も吹かざりしもたとくぞおぼゆるおぼゆる。

法華經に云く「・或は阿練若に納衣にして空閑に在りて、乃至利養に貪著

するが故に白衣の与に法を説いて世に恭敬せらるること六通の羅漢の如きも

の有らん」又云く「常に大衆の中に在て我等を毀らんと欲するが故に国王

大臣婆羅門・居士及び余の比丘衆に向つて誹謗して我が惡を説き乃至惡鬼

其の身に入つて我を罵詈毀辱せん、又云く「濁世の惡比丘は仏の方便隨宜所説

の法を知らずして惡口して顰蹙し数数擯出せられん」等云云、涅槃經に云く

「一闍提有つて羅漢の像を作し空処に住し方等大乘經典を誹謗す諸の凡夫

人見已つて皆眞の阿羅漢是れ大菩薩なりと謂えり」等云云、今予法華經と

涅槃經との仏鏡をもつて当時の日本国を浮べて其影をみるに誰の僧か国主に
ろくつう らかん こと しか ほけきよう ぎようじや ざんげん
六通の羅漢の如くたとまれて而も法華經の行者を讒言して頸をきらせんとせ
し、又いづれの僧か万民に大菩薩とあをがれたる、誰の智者か法華經の故に
たびたびしよしよ でし るさい さいこ
度處處を追はれ頸をきられ弟子を殺され兩度まで流罪せられて最後に頸に
および 眼無く耳無きの人は除く 眼有り耳有らん人は經文を見聞せ
よ、今の人人は人毎とに經文を我もよむ我も信じたりといふ只にくむところ
は日蓮計なり 經文を信するならば慥にのせたる強敵を取出して 經文を信じ
てよむしるしとせよ、若し爾らずんば經文の如く読誦する日蓮をいかれるは
經文をいかれるにあらずや仏の使をかるしむるなり、今の代の両火房が
法華經の第三の強敵とならずば釈尊は大妄語の仏・多宝・十方の諸仏は
不実の証 明なり、又經文まことならば御帰依の国主は現在には守護の善神
にすてられ国は他の有となり後生には阿鼻地獄疑なし、而るに彼等が大惡法

を尊とつとまるる故ゆえに理り不ふ尽じんの政道しゅつたい出来こくしゆす彼の国主びやっけんの僻見すいの心を推すいするに日蓮にちれんは
阿弥陀あみだ仏ぶつの怨敵おんてき・父母ふぼの建立こんりゆうの堂塔どうとうの讎しゅうてき敵たといなれば仮令か政道しやうだうをまげたりとも
仏意ぶつゐには背そむかじ天神てんじんもゆるし給たまうべしと・をもはるるか、はかなしはかなし
委細いさいにかたるべけれどこも此しやうじれは小事せうじなれば申もうさず心こころ有あらん者お推おして知しんぬべ
し上に書あぐ挙あぐるより雲泥うんでい大事だいじなる日本にほん第一だいいちの大科だいか此この国しゅつたいに出来しゅつたいして年久しんくくなる
間ま、此この国既すでに梵釈ぼんしゃく・日月にちがつ・四天してん・大王だいう等の諸天しよてんにも捨してられ守護しゆごの諸大しやだい
善神ぜんじんも還かえつて大怨敵おんてきとなり法華ほけき經きやう守護しゆごの梵帝ぼんたい等りんこく鄰国しやうにんの聖人おほに仰おほせ付けて
日本国にほんこくを治罰ちばつし仏前ぶつぜんの誓状せいじやうを遂とげんとおぼしめす事あり。

(三五二頁)

夫それ正像しやうざうの古いにしへへは世濁世じよくぜに入いるといへども始めなりしかば国土こくどさしも乱みだれ
ず聖賢せいけんも間間しゆつげん出現しゆつげんし福德おふしんの王臣おうしんも絶えざりしかば政道しやうだうも曲る事ばんみんなし万民ばんみんも直
かりし故ゆえに小科せうこを対治たいじせんがために三皇さんかう・五帝ごてい・三王さんわう・三聖さんせい等しゆつげん出現しゆつげんして墳典ふんてん
を作りて代いを治いす、世よしばらく治おさりたりしかども漸漸ぜんぜんにすへになるませいけんまに聖賢せいけん

も出現しゆつげんせず福徳の人もすくなければ三災は多大さんさいにして七難ひちなん・先代せんだいに超過ちようかせしかば外典がてんおよ及びがたし、其の時治そのときを代えて内典ないてんを用いて世を治いす随したがつて世しばらくはおさまるされども又世末になるままに人の悪は日日に増長ぞうちようし政道は月月に衰減すいげんするかの故に又三災さんさい・七難ひちなん先よりいよいよ増長ぞうちようして小乗しょうじよう戒等の力しるし驗なかりしかば其の時治そのときをかへて小乗しょうじようの戒等を止めて大乘だいじようを用もちゆ、大乘又叶かなわねば法華經の円頓の大戒壇えんどん だいかいだんを叡山えいざんに建立こんりゆうして代を治めたり、所謂いわゆるでんぎようだいし伝教大師にほん・日本三所の小乗しょうじよう戒並に華嚴三論けこんさんろん・法相の三大乗戒ほつそうを破失だいじようかいせし是はしつなり、此これの大師だいしは六宗ろくしゆうをせめ落させ給たまうのみならず禅宗ぜんしゆうをも習ならい極め剩あまつさに日本にほんにいまだひろまらざりし法華宗ほつけしゆう・真言宗しんごんしゆうをも勘かんえ出して勝劣しょうれつ鏡をかけ顕密けんみつのさべつくくびやく差別さべつ黑白くくびやくなり、然しかれども世間せけんの疑うたがいを散じがたかりしかば去いぬる延暦年中えんりやくに御入唐漢土にゆうとうかんどの人人も他事たじには賢かしこかりしかども法華經ほけききよう・大日經だいにちききよう・天台真言てんだいしんごんの二宗しいうれつの勝劣せんじん・浅深せんじんは分明ふんみきように知らせ給たまはざりしかば、御歸朝きちようの後・本の御存知ごぞんじ

の如く妙樂大師の記の十の不空三蔵の改悔の言を含光がかたりしを引き載せ
て天台勝れ真言劣なる明証を依憑集に定め給う剩え真言宗の宗の一字を削り
給う、其の故は善無畏・金剛智・不空の三人・一行阿闍梨をたばらかして本
はなき大日経に天台の己証の一念三千の法門を盗み入れて人の珍宝を我が有
とせる大誑惑の者なりと心得給へり、例せば澄観法師が天台大師の十法
成乗の觀法を華嚴に盗み入れて還つて天台宗を末教と下せしが如しと
御存知あて宗の一字を削りて叡山は唯七宗たるべしと云云、而るを弘法大師
と申し天下第一の自讃毀他の大妄語の人、教大師御入滅の後対論なくして
公家をかすめたてまつりて八宗と申し立てぬ、然れども本師の跡を紹繼す
る人人は叡山は唯七宗にてこそあるべきに教大師の第三の弟子・慈覺大師と
叡山第一の座主・義真和尚の末弟子・智証大師と此の二人は漢土に渡り給い
し時・日本国にて一国の大事と諍論せし事なれば天台・真言の碩学等に値い

たま 給う毎に勝劣・浅深を尋ね給う、然るに其の時の明匠等も・或は真言宗
すぐ 勝れ・或は天台宗勝れ・或は二宗齊等し・或は理同事異といへども俱に慥
しょうもん の証文をば出さず、二宗の学者等併しながら胸臆の言なり然るに慈覚大師は
きわ 学極めずして帰朝して疏十四卷を作れり所謂金剛頂經の疏七卷・蘇悉地經
じょ の疏七卷なり此の疏の体たらくは法華經と大日經の三部經とは理は同く事は
異なり等云云、此の疏の心は大日經の疏と義釈との心を出すがなを不審あき
らめがたかりけるかの故に本尊の御前に疏を指し置て此の疏仏意に叶へりや
いなやと祈せいせし処に夢に日輪を射ると云云、うちをどろきて吉夢なり
しんごんすぐ 真言勝れたる事疑なしと・おもひて宣旨を申し下す日本国に弘通せんとし
たま 給いしがほどなく疫病やみて四ヶ月と申せしかば跡もなくうせ給いぬ、而る
ちしょうだいし に智証大師は慈覚の御為にも御弟子なりしかば、遺言に任せて宣旨を申し
くだ 下し給う所謂真言・法華齊等なり譬ば鳥の二の翼・人の両目の如し又叡山も
たま 給う所謂真言・法華齊等なり譬ば鳥の二の翼・人の両目の如し又叡山も

はつしゅう

八宗なるべしと云云、此の兩人は身は叡山の雲の上に臥すといへども心は

とうじ

東寺里中の塵にまじはる本師の遺跡を紹繼する様にて還つて聖人の正義を

こつしよ

忽諸し給へり、法華經の於諸經中最在其上の上の字をうちかへして

だいにちきよう

大日經の下に置き先づ大師の怨敵となるのみならず存外に釈迦・多宝・

じゅつほうふんじん

十方分身・大日如来等の諸仏の讎敵となり給う、されば慈覺大師の夢に日輪

を射ると見しは是なり仏法の大科此れよりはじまる日本国・亡国となるべき

先兆なり、棟梁たる法華經既に大日經の椽杔となりぬ、王法も下剋上して

とうりよう

王位も臣下に随うべかりしを其のとき又一類の学者有りて堅く此の法門を諍論

しんか

せし上・座主も両方を兼ねて事いまだきれざりしかば世も忽にほろびず有り

げてる

けるか、例せば外典に云く「大国には諍臣七人・中国には五人・小国には

じょうろん

三人諍論すれば仮令政道に謬誤出来すれども国破れず乃至家に諫子あれ

たとい

ば不義におちず」と申すが如し仏家も又是くの如し、天台・真言の勝劣・浅深

もう

は不義におちず」と申すが如し仏家も又是くの如し、天台・真言の勝劣・浅深

事きれざりしかば少少の災難は出来せしかども青天にも捨てられず黄地にも
犯されず一国の内の事にてありし程に人王七十七代・後白河の法皇の御宇に
当りて天台座主明雲・伝教大師の止観院の法華經の三部を捨てて慈覚大師の
總持院の大日經の三部に付き給う、天台山は名計りにて真言の山になり
法華經の所領は大日經の地となる天台と真言と座主と大衆と敵対あるべき
序なり、国又王と臣と諍論して王は臣に随うべき序なり一國乱れて他國に破
らるべき序なり、然れば明雲は義仲に殺されて院も清盛にしたがひられ給う、
然れども公家も叡山も共に此の故としらずして世静ならずする程に災難
次第に増長して人王八十二代隱岐の法皇の御宇に至つて一災起れば二災起
と申して禅宗・念仏宗起り合ひぬ、善導房は法華經は末代には千中無一と
かき、法然は捨閉閣抛と云云、禅宗は法華經を失はんがために教外別伝・
不立文字とののしる、此の三の大悪法鼻を並べて一國に出現せしが故に此の

国すでに梵釈・一天・日月・四王に捨てられ奉り守護の善神も還つて大怨敵
とならせ給う然れば相伝の所従に責随えられて主上・上皇共に夷島に放た
れ給ひ御返りなくしてむなしき島の塵となり給う詮ずる所は実經の所領を
奪い取りて權經たる真言の知行となせし上・日本国の万民等・禅宗・
念仏宗の悪法を用いし故に天下第一・先代未聞の下剋上出来せり而るに
相州は謗法の人ならぬ上・文武きはめ尽せし人なれば天許し国主となす随つ
て世且く静なりき、然而又先に王法を失いし真言漸く関東に落ち下る存外に
崇重せらるる故に鎌倉又還つて大謗法一闡提の官僧・禅僧・念仏僧の檀那と
成りて新寺を建立して旧寺を捨つる故に天神は眼を瞋らして此の国を睨め
地神は憤を含めて身を震ふ長星は一天に覆ひ地震は四海を動かす余此等の
災天に驚いて粗内典五千・七千・外典三千等を引き見るに先代にも希なる
天変地天なり、然而儒者の家には記せざれば知る事なし仏法は自迷なればこ

ころへず此の災天は常の政道の相違と世間の謬誤より出来せるにあらず定め
て仏法より事起るかおこと勘へなしぬ、先ず大地震に付て去る正嘉元年に書を一
巻注したりしを故最明寺の入道殿に奉る御尋ねもなく御用いもなかりしかば
国主の御用いなき法師なればあやまちたりとも科あらじとやおもひけん念仏
者並に檀那等又さるべき人人も同意したるとぞ聞へし夜中に日蓮が小庵に数
千人押し寄せて殺害せんとせしかども・いかんがしたりけん其の夜の害もま
ぬかれぬ、然れども心を合せたる事なれば寄せたる者も科なくて大事の政道
を破る日蓮が未だ生きたる不思議なりとて伊豆の国へ流しぬ、されば人のあ
まりに・にくきには我がほろぶべきとがをも・かへりみざるか御式目をも破
らるるか御起請文を見るに梵釈・四天・天照太神・正八幡等を書きのせた
てまつる、余存外の法門を申さば子細を弁えられずば日本国の御帰依の僧等
に召し合せられて其れになを事ゆかずば漢土・月氏までも尋ねらるべし、其れ

に叶かなわらずしさいば子細しさいありなんとて且しばらくまたるべし、子細しさいも弁わきまえぬ人ひと人が身みのほろ
ぶべきを指さしをきて大事おだいじの起請きしょうを破やぶらるる事心ことこころへられず。 三五五頁

自讃じさんには似にたれども本文まかに任まかせて申もうす余おれは日本国にほんこくの人ひと人ひとには上あは天子てんしより
下したは万民ばんみんにいたるまで三さんの故ゆゑあり、一いちには父母ふぼなり二にには師匠ししやうなり三さんには主君しゅくん
の御使おんつかいなり、經きやうに云いく、即如来そくによらいの使つかいなり」と又云いく、眼目がんもくなり」と又云いく、日月にちがつ
なり」と章安大師しやうあんだいしの云いく、彼かが為ために惡わるを除のぞくは則すなわち是これが親おやなり」と等云し云、而しか
に謗法ほうぼう一闍提いつせんたい・国敵こくてきの法師原ほっしが讒言ざんげんを用もちいて其義きぎを弁わえず左右さうなく大事だいじたる
政道せいだうを曲まげらるるは・わざとわざはひをまねかるるか墓はかな無はかなし墓はかな無はかなし、然しかるに
事ことしづまりぬれば科とがなき事は恥はづかしきかの故ゆゑにほどなく召返めがへされしかども故ゆゑ
最明寺さいみやうじの入道にゅうだう殿どのも又早またくかくれさせ給たまいぬ、当御時おんときに成なりて・或あるは身みに疵きずを
かふり・或あるは弟子でしを殺ころされ・或あるは所所ところところを追おれ・或あるはやどをせめしかば一日いちにち
片時かたときも地上ちじやうに栖すむべき便たよりりなし、是こゝに付けても仏ぶつは一切世間いっさいせけん・多怨難信たおんなんしんと

と
説き置き給う諸の菩薩は我不愛身命但惜無上道と誓へり、加刀杖瓦石

とつじようがしやく
さくさくけんひんひんすい
まか
るざい
ほけきよう

数数見擯出の文に任せて流罪せられ刀のさきにかかりなば法華經一部よみま

いらせたるにこそと・おもひきりてわざと不輕菩薩の如く覺徳比丘の様に

りゆうじゆぼさつ
だいばぼさつ
ぶつだ
ししそんじや
ごと
いよいよつじよう
もう
かくとくびく

竜樹菩薩・提婆菩薩・仏陀密多・師子尊者の如く弥強盛に申しはる、今度

ほけきよう
おんてき
きようもん
ごと
ふほ
ししよう
ちようてき
すくせ
このたび

・法華經の大怨敵を見て經文の如く父母・師匠・朝敵・宿世の敵の如く散

散に責るならば定めて万人もいかり国主も讒言を収て流罪し頸にも及ばんず

らん、其時・仏前にして誓状せし梵釈・日月四天の願をもはたさせたま

そのとき
ぶつぜん
せいじよう
ほんしゃく
にちがつしてん

つり法華經の行者をあだまんものを須臾ものがさじと起請せしを身にあてて

ほけきよう
きようじにや
しゆゆ

心みん、釈尊・多宝・十方分身の諸仏の・或は共に宿し・或は衣を覆はれ

ある
しゆじ
しゃくそん
たほう
じゆつぼうぶんじん
しよぶつ
ある
むか
ある
おお

・或は守護せんとねんごろに説かせ給いしをも実か虚言かと知つて信心をも

そうちよう
たいてん
たまい
まこと
そいつに
しんじん

増長せんと退転なくはげみし程に案にたがはず去る文永八年九月十二日に

すべいちぶん
とが
るざい
いぬ
ぶんえい
おんる

都て一分の科もなくして佐土の国へ流罪せらる、外には遠流と聞えしかども

内には頸を切ると定めぬ余又兼て此の事を推せし故に弟子に向つて云く我が
願既に遂め悦び身に余れり人身は受けがたくして破れやすし、過去遠遠劫よ
り由なき事には失いしかども法華經のために命をすてたる事はなし、我頸を
刎られて師子尊者が絶えたる跡を継ぎ天台・伝教の功にも超へ付法蔵の二十
五人に一を加えて二十六人となり不輕菩薩の行にも越えて釈迦・多宝・十方
の諸仏にいかがせんとなげかせまいらせんと思ひし故に言をもおしまふ已前
にありし事後に有るべき事の様を平の金吾に申し含めぬ此の語しげければ
委細にはかかず。

抑も日本国の主となりて万事を心に任せ給へり何事も両方を召し合せて
こそ勝負を決し御成敗をなす人のいかなれば日蓮一人に限つて諸僧等に召合
せずして大科に行わるるらん是れ偏にただ事にあらずたとひ日蓮は大科の者
なりとも国は安穩なるべからず、御式目を見るに五十一箇条を立てて終りに

起請文を書載せたり、第一・第二は神事・仏事乃至五十一等云云、神事・仏事の肝要たる法華經を手ににぎれる者を讒人等に召合せられずして彼等が申すままに頸に及ぶ然れば他事の中にも此の起請文に相違する政道は有るらめども此れは第一の大事なり、日蓮がにくさに国をかへ身を失はんとせらるるか魯の哀公が忘事の第一なる事を記せらるるには移宅に妻をわすると云云、孔子の云く身をわする者あり国主と成りて政道を曲ぐるなり是云云、将又国主は此の事を委細には知らせ給はざるか、いかに知らせ給はずとのべらるるとも法華經の大怨敵と成給いぬる重科は脱るべしや、多宝・十方の諸仏の御前にして教主釈尊の申す口として末代当世の事を説かせ給いしかば諸の菩薩記して云く「悪鬼其の身に入つて我を罵詈毀辱せん、乃至数数擯出せられん」等云云、又四仏釈尊の所説の最勝王經に云く「悪人を愛敬し善人を治罰するに由るが故に、乃至他方の怨賊来つて国人喪乱に遭わん」等云云、たと

いにちれん
い蓮をば輕賤せさせ給うとも教主 釈尊の金言・多宝・十方の諸仏の
しょうみょう むなし
証 明は空かるべからず一切の真言師・禪宗・念佛者等の謗法の惡比丘をば
ごきえ
前より御歸依ありしかども其の大科を知らせ給はねば少し天も許し善神もす
てざりけるにや、而るを日蓮が出現して一切の人を恐れず身命を捨てて指
もう かしこげ こくしゅ
し申さば賢なる国主ならば子細を聞き給うべきに聞きもせず用いられざるだ
ふしぎ
にも不思議なるに剩へ頸に及ばむとせし事は存外の次第なり、然れば大惡人
もち だいかしゅうほう
を用いる大科正法の大善人を耻辱する大罪・二惡・鼻を並べて此の国に
しゅつげん たとえ しゅら きょうけい にってん
出現せり、譬ば修羅を恭敬し日天を射奉るが如し故に前代未聞の大事・此
おこ
の国に起るなり、是又先例なきにあらず夏の桀王は竜蓬が頭を刎ね殷の紂
ひかん
王は比干が胸をさき二世王は李斯を殺し優陀延王は寶頭盧尊者を蔑如し
だんみら ししそんじゃ
檀弥羅王は師子尊者の頸をきる武王は慧遠法師と諍論し憲宗王は白居易を
おんる きそうこうてい ほうどうさんぞう かお かなやき
遠流し徽宗皇帝は法道三蔵の面に火印をさす、此等は皆諫暁を用いざるのみ
これら みなかんぎょう もち

ならず還かえつて怨を成せし人人現世ひとびとげんせには国を亡し身を失ひ後生うしないごしょうには惡道あくどうに墮おつ
是れ又人をあなづり讒言ざんげんを納いれて理を尽さざりし故なり、而しかに去いぬる文永十
一年二月に佐土の国より召返されて同四月の八日に平金吾たいめんに對面して有りし
時・理不尽りふじんの御勘氣ごかんきの由委細いさいに申し含めぬ、又恨うらむらくは此の国すでに他国たこく
に破われん事のあさましさと歎なげき申せしかば金吾わが云いわく何いつのころの比か大蒙古もうこは寄
せ候きこうべきと問いしかば経文きやうもんには分明ふんみように年月ねんげつを指したる事はなけれども天の
御氣色みけしきを拝見はいけんし奉たてまつるに以ての外に此の国を睨にらみさせ給たまうか今年は一定寄せぬ
と覺おぼふ若もし寄するならば一人も面を向う者あるべからず此れ又天の責なり、
日蓮にちれんをばわ和の殿殿原原が用いぬ者なれば力及およばず、穴賢あなかしこあなかしこ・真言師等しんごんしに
調じようぶく伏行ふくわせ給たまうべからず若もし行いわするほどならいよいよ悪かるべき由申付け
てさて歸りてありしに上下じやうげ共に先の如く用いさりげに有ある上・本より存知せ
り国恩を報ぜんがために三度までは諫曉かんぎやうすべし用いずば山林さんりんに身を隠さんと

・おもひしなり、又上古の本文にも三度のいさめ用いずば去れといふ本文に
まかせて且く山中に罷り入りぬ、其の上は国主の用い給はざらん其れ已下
に法門申して何かせん申したりとも国もたすかるまじ人も又仏になるべしと
もおぼへず。

又念仏・無間地獄・阿弥陀経を読むべからずと申す事も私の言にはあらず、

そ夫れ弥陀念仏と申すは源と釈迦如来の五十余年の説法の内・前四十余年の内

の阿弥陀経等の三部経より出来せり、然れども如来の金言なれば定めて眞実

にてこそあるらめと信ずる処に後八年の法華経の序分たる無量義経に仏・

法華経を説かせ給はんために先づ四十余年の経経並に年紀等を具に数へあ

げて未顕眞実・乃至・終不得成・無上菩提と若干の経経並に法門を唯一言

に打ち消し給う事譬えば大水の小火をけし大風の衆の草木の露を落すが如し、

然後に正宗の法華経の第一巻に至つて世尊法久後・要当説眞実又云く

しょうじきしゃほうべん　たんせつむじょうどう　と　たま　たと　やみよ　しゅつげん　だいとう
正捨方便・但説無上道と説き給う譬へば闇夜に大月輪の出現し大塔立て
あしる　こ　し　し　じ　じ　じ　き　い　わ　さん　がい　みな　こ
後足代を切り捨つるが如し、然　実義を定めて云く、「今・此の三界は皆是れ
我が有なり其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり而も今・此の処は諸の患難
ただわれひとり　よ　く　こ　な　またきようちよく　いえど　しか　しんじゅ　ないし
多し唯我一人のみ能く救護を為す、復　教詔　すと雖も而も信受せず、乃至経
どくじゅ　を　読誦し書き持つこと有らん者を見て　きようせんぞうしつ　しか　けつこん　いだ　そ
人命終　して阿鼻獄に入らん」等云云、経文の次第普通の性相の法には似
みようじゅう　あび　ごく　きようもん　しだい　しょうそう
ず常には五逆・七逆の罪人こそ阿鼻地獄とは定めて候に此れはさにては候は
ざいせめつこ　いっさいしゅじょう　あ　み　だ　よんじゅうよねん　きようぎょう　しゅう　ほけきよう
ず在世滅後の一切衆生・阿弥陀経等の四十余年の経経を堅く執して法華経
へうつらざらんとたとひ法華経へ入るとも本執を捨てずして彼彼の経経を
ほけきよう　しゅぎよう　きようぎよう　ほけきよう　すく　かれがれ　きようぎよう
法華経に並て修行せん人と又自執の経経を法華経に勝れたりといはん人と
ほけきよう　ごと　しゅぎよう　ほけきよう　ぎようじや　ちじよく　こ　しよにん
法華経を法の如く修行すとも法華経の行者を恥辱せん者と此れ等の諸人を
こにんみようじゅうにゆうあび　く　たま　い　し　なり、此の事はただ釈迦一仏
指しつめて其人命終入阿鼻獄と定めさせ給いしなり、

の仰あおなりとも、外道げどうにあらずば疑うたがいうべきにてはあらねども已い今当こんとうの諸經しよきようの
説とくに色をかへて重き事をあらはさんがために宝淨世界ほうじょうせかいの多宝如来たほうにょらいは自みずからはる
ばる来給たまいて証人しやかにょらいとならせ給う、釈迦如来だいにちきようの先判あみだたる大日經・阿弥陀經・
念仏等ねんぶつを堅く執しゆうして後の法華經ほけきようへ入らざらむ人人ひとびとは入阿鼻獄にゆうあびごくは一定なりと
証しやう明みやうし、又阿弥陀仏等あみだぶつの十方じゆうぼうの諸仏しよぶつは各各の国国りやうぜんこくを捨てて靈山虚空会りやうぜんこくに
詣もつて給たまい宝樹下じゆげに坐こして広長舌こひちやうぜつを出ほんでんし大梵天たまたに付け給うこと無量無辺むりやうむへんの虹の
虚空こくうに立ちたらんが如ごとし、心は四十余年よんじゆうふねんの中の觀經・阿弥陀經・悲華經等ひけきように
法藏比丘ほうざうびくの諸菩薩しよぼさつ・四十八願等おこを發はつして凡夫ぼんぶを九品の淨土じやうどへ来迎らいいつせんと説く
事は且しく法華經しはらほけきよう已前いぜんのやすめ言まことなり、實まことには彼れ彼れの經經きやうきようの文ぶんの如ごとく
十方西方じゆうほうさいほうへの来迎らいいつはあるべからず實まこととおもふことなかれ釈迦仏しやかぶつの今説とき
給たまうが如ごとし實まことには釈迦しやか・多宝たほう・十方じゆうぼうの諸仏しよぶつ寿命品じゆりやうほんの肝要かんようたる南無なむ
妙法蓮華經みやうほうれんげきようの五字ごじを信ぜしめんが為ためなりと出たまし給う広長舌こひちやうぜつなり、我等われらと

釈迦仏しゃかぶつとは同じ程の仏なり釈迦仏しゃかぶつは天月てんげつの如し我等われらは水中の影の月なり
釈迦仏しゃかぶつの本土ほんどは実まことには娑婆世界しゃばせかいなり天月てんげつ動き給たまはずば我等われらもうつるべからず
此の土に居住して法華經ほけきょうの行者ぎようじやを守護しゆごせん事・臣下しんかが主上あおを仰たてまつぎ奉らんが
如く父母ふぼの一子を愛するが如くならんと出し給たまう舌なり、其の時阿弥陀仏あみだぶつの
一二の弟子でし・觀音かんのん・勢至せいし等は阿弥陀仏あみだぶつの塩梅あんばいなり雙翼つばさなり左右さうの臣さうなり両目
の如しごと、然而極樂世界しかしてこくらくせかいよりはるばると御供たてまつし奉りたりしが無量義經むりようぎきょうの時・仏
の阿弥陀經あみだ等の四十八願等みけんしんじつは未顕真実ないしほけきょう・乃至法華經あみだにて一名阿弥陀あみだと名を
げて此等これらの法門ほうもんは眞実しんじつならずと説き給たまいしかば実まこととも覺おぼへざりしに阿弥陀あみだぶつ仏
正まさく来りて合点がてんし給たまいしをうち見てさては我等われらが念仏者等ねんぶつを九品の淨土じゅうどへ
来迎らいごうの蓮台れんだいと合掌がっしょうの印むなとは虚なしかりけりと聞定めてさては我等われらも本土ほんどに還かえり
て何かせんとて八万二万の菩薩ぼさつのうちに入り・或あるは觀音品かんのんに遊あそば娑婆世界しゃばせかいと
申もうして此の土の法華經ほけきょうの行者ぎようじやを守護しゆごせんとねんごろに申せしかば、日本国にほんこくよ

り近き一閻浮提の内・南方・補陀落山と申す小所を釈迦仏より給いて宿所と定め給ふ、阿弥陀仏は左右の臣下たる観音・勢至に捨てられて西方世界へは還り給はず此の世界に留りて法華經の行者を守護せんとありしかば此の世界の内・欲界第四の兜率天・弥勒菩薩の所領の内・四十九院の一院を給いて阿弥陀院と額を打つておはするとこそうけ給はれ、其の上阿弥陀院には仏・舍利弗に対して凡夫の往生すべき様を説き給ふ、舍利弗・舍利弗・又舍利弗と二十余処までいくばくもなき經によび給いしはかまびすしかりし事ぞかし、然れども四紙の一巻が内すべて舍利弗等の諸声聞の往生成仏を許さず法華經に來りてこそ始て華光如來・光明如來とは記せられ給いしか一閻浮提第一の大智者たる舍利弗すら浄土の三部經にて往生成仏の跡をけづる、まして末代の牛羊の如くなる男女・彼の彼の經經にて生死を離れなんや、此の由を弁へざる末代の学者等並に法華經を修行する初心の人人かたじけなく

阿あ弥み陀だ經ぎょうを讀よみ念ねん仏ぶつを申もうして・或あるは法ほけ華き經ぎょうに鼻はなを並ならべ、・或あるは後ごに此これを讀よみ
て法ほけ華き經ぎょうの肝かん心じんとし功く徳とくを阿あ弥み陀だ經ぎょう等らにあつらへて西さい方ほうへ回え向こうし往おう生じやうせんと
思おもふは譬たとへば飛と竜りゆうが驢ろ馬ばを乗の物ぶつとし師し子しが野や干かんをたのみたるか將はたまた又に日にち輪りん出しゅつ現げん
の後の衆しゆ星せいの光かう大だい雨うの盛さかんなり、時ときの小せう露ろなり、故ゆえに教だい大だい師し云いく、「白びやく牛ぎうを賜たまう朝あした
には三さん車しやを用もちいず、家け業ぎやうを得える夕ゆふに何なんぞ除じよ糞ふんを須もちいん、故ゆえに經きやうに云いく、「正しやう直じき
に方便ほうべんを捨むじて但ただ無む上じやう道どうを説いく、又い云いく、「日い出ででぬれば星せい隱いんれ巧かうを見みて拙ちよを知し
る」と云いふ、法ほけ華き經ぎょう出しゅつ現げんの後ごは已い今こん当どうの諸しよ經きやうの捨しよてらるる事ことは勿もち論ろんなりた
とひ修しゆ行ぎやうすとも法ほけ華き經ぎょうの所しよ從じゆうにてこそあるべきに今こんの日本にほん国こくの人人ひと道どう綽ちやくが
未み有いう一人いちにん得とく者しや・善ぜん導どうが千せん中ちゆう無む一いつ・慧え心しんが往おう生じやう要いよう集じつの序しよ・永えい觀くわんが十じゆ因いん・法ほう然ねん
が捨しや閉へい閣かく拋ほう等らを堅けんく信しんじて・或あるは法ほけ華き經ぎょうを拋なげちて一向いっかうに念ねん仏ぶつを申もうす者ものもあり、
・或あるは念ねん仏ぶつを本ほんとして助ほけけに法ほけ華き經ぎょうを持もつ者ものもあり・或あるは弥み陀だ念ねん仏ぶつと法ほけ華き經ぎょう
とを鼻はなを並ならべて左さ右うに念ねんじて二に行ぎやうと行ぎやうずる者ものもあり・或あるは念ねん仏ぶつと法ほけ華き經ぎょうと一いつ

法の二名なりと思いて行ずる者もあり、此等^こは皆教主^{みなきようしゅ}釈尊^{しゃくそん}の御屋敷の内^みに居^こして師主^{ししゅ}をば指し置き奉^{たてまつ}りて阿弥陀堂^{あみただう}を釈迦如来^{しゃかにょらい}の御所領^{しよりよう}の内に国毎^{くにごと}に郷毎^{さとごと}に家家毎^{かかごと}に並べ立て・或^{ある}は一万・二万・或^{ある}は七万返・或^{ある}は一生の間・一向^{いっこう}に修行^{しゅぎやう}して主師親^{しゅししん}をわすれたるだに不思議^{ふしぎ}なるに、剩^{あまつぎ}へ親父^{おや}たる教主^{きやうしゅ}釈尊^{しゃくそん}の御誕生^{せいごにやうめつ}後入滅^{りやうじつ}の両日^{りやうじつ}を奪^{うば}い取りて、十五日^{あみだぶつ}は阿弥陀仏^{あみたぶつ}の日・八日^{やくし}は薬師^{やくし}・仏の日等云云、一仏誕入^{いちぶつ}の両日^{りやうじつ}を東西二仏^{どういふ}の死生^{じせう}の日となせり是豈^{あに}に不孝^{ふこう}の者にあらずや逆路七逆^{ぎやくろ}の者にあらずや、人毎^{ひとごと}に此^この重科^{じゅうか}有りてしかも人毎^{ひとごと}に我が身^みは科^かなしとおもへり無慚無愧^{むざんむき}の一闍提人^{いつせんたい}なり、法華經^{ほけきやう}の第二^{だいに}の卷^{くわん}に主と親と師との三大事^{だいじ}を説き給^{たま}へり一經^{いつきやう}の肝心^{かんじん}ぞかし、其^その經文^{きやうもん}に云く「今^{いま}・此^この三界^{さんがい}は皆是^{みなこ}れ我有^{われ}なり其中^{そのちゆう}の衆生^{しゆじやう}は悉^{ことごと}く是^これ吾^わが子^こなり、而^{しか}も今^{いま}・此^この処^{ところ}は諸^{もろもろ}の患難^{げなん}多^{おほ}し唯我一人^{ただわれひとり}のみ能^よく救護^{くご}を為^なす」等云云、又此^{また}の經^{きやう}に背^{そむ}く者^{もの}を文^{ぶん}に説^{いわ}いて云く「復^{また}教詔^{きやうぢやく}す^{いえど}と雖^{しか}も而^{しんじゆ}も信受^{しんじゆ}せず、乃至^な其^その人^{ひと}命終^{みやうじゆう}

して阿鼻獄あびごくに入らん」等云、されば念佛ねんぶつ者が本師ほんしの導公ごちゆうしゆじようは其中衆生の外か
ただわれひとりきようもん唯我一人の経文を破りて千中無一せんちゆうむいつといいし故に現身げんしんに狂人と成りて楊柳やなぎに登
りて身を投げ堅土かたつちに落ちて死にかねて十四日より二十七日まで十四日が間
てんどう顛倒狂死し畢んぬ、又真言宗しんこんしゆうの元祖善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵等は
親父かを兼ねたる教主きようしゆしやくそん釈尊・法王ほうおうを立下たてくだして大日他仏だいにちたぶつをあがめし故に善無畏
さんぞう三蔵は閻魔王えんまおうのせめにあづかるのみならず又無間地獄むげんじごくに堕ちぬ、汝等なんじ・此の
事疑うたがいあらば眼前がんぜんに閻魔堂えんまの画を見よ、金剛智こんごうち・不空ふくうの事はしげればかか
ず、又禅宗ぜんしゆうの三階信行ぜん禪師ぜんは法華經等ほけきようの一代いちだいしいうきよう聖教せいぎようをば別教べつぎようと下だす我が
作なれる経をば普經ふきようと崇重すうちようせし故に四依しえの居士こじの如くなりしかども法華經ほけきようの
持者じしやの優婆夷うぱいに・せめられてこえを失ひ現身うしなひげんしんに大蛇だいじやとなり数十人の弟子でしを
呑み食のくちう。

今・日本國にほんこくの人人ひとびとはたとひ法華經ほけきようを持ち釈尊しゃくそんを釈尊しゃくそんと崇重すうちようし奉たてまつるとも

真言宗・禪宗・念仏者をあがむるならば無間地獄はまぬがたし、何に
しんごんしゅう ぜんしゅう ねんぶつ いかに
況や三宗の者共を日月の如く渴仰し我が身にも念仏を事とせむ者をや心あら
いわんや にちがつ こと かつしゅう ねんぶつ わざ
ひとびと ねんぶつ あみだ 師君・宿世の敵よりもいむべきものな
ん人人は念仏・阿弥陀経等をば父母・師君・宿世の敵よりもいむべきものな
り、例せば逆臣が旗をば官兵は指す事なし寒食の祭には火をいむぞかし、さ
れば古への論師・天親菩薩は小乗経を舌の上に置かじと誓ひ、賢者たりし
いにしえ ろんし てんじんぼさつ しょうじょうきょう けんじゃ
吉蔵大師は法華経をだに読み給はず、此等のもと小乗経を以て大乘経を
きちぞうだいし ほけきょう もってんだいだいし もっ だいじょうきょう
破失し法華経を以て天台大師を毀謗し奉りし謗法の重罪を消滅せんがため
はしつ ほけきょう もってんだいだいし たてまつ ほうぼう じゅうざい しょうめつ
なり、今・日本国の人人は一人もなく不輕輕毀の如く苦岸勝意等の如く一国
にほんこく ひとびと ふぎょうきょうき こと ぐがんしょうい こと
万人・皆無間地獄に墮つべき人人ぞかし、仏の涅槃経に記して末法には
ばんにん みなむげんじごく お ひとびと ねはんきょう する まっぼう
ほけきょうひぼう だいちみじん たまい 給いし是なり、而に今
ほけきょう ぎょうじやしゆつげん べんにん みなほけきょう どくじゆ しかるに
法華経の行者出現せば一国万人・皆法華経の読誦を止めて吉蔵大師の
てんだいだいし したが こと にくきょう ふぎょうきょうき かえ ふぎょうぼさつ しんぶく
天台大師に随うが如く身を肉橋となし不輕輕毀の還つて不輕菩薩に信伏

ずいじゅう

随從せしが如く仕つるとも、一日・二日・一月・二月・一年二年・一生二生

が間には法華經誹謗の重罪は尚なをし滅しがたかるべきに其の義はなくして

とうせ ひとびと ししゅうとも

当世の人人は四衆俱に一慢をおこせり、所謂念仏者は法華經を捨てて念仏を

もう にちれん ほけきよう

申す日蓮は法華經を持といへども念仏を持たず我等は念仏を持ち法華經をも

たも いっさい

信ず戒をも持ち一切の善を行ず等云云、此等は野兎が跡を隠し金鳥が頭を

ろじん こうし

穴に入れ、魯人が孔子をあなづり善星が仏を・をどせしにことならず鹿馬迷

たかはと

いやすく鷹鳩変じがたき者なり、墓無し墓無し、當時は予が古へ申せし事の

ようや あう ゆえ しんちゅう

漸く合かの故に心中には如何せんとは思ふらめども年来あまりに法にすぎて

あつく

そしり悪口せし事が忽に翻がたくて信ずる由をせず、而も蒙古はつよりゆ

いかん むねもり よしとも

く、如何せんと宗盛・義朝が様になげくなり、あはれ人は心はあるべきもの

こうし

かな孔子は九思一言・周公旦は浴する時は三度にぎり食する時は三度吐給う

けんじん

賢人は此の如く用意をなすなり世間の法にも・はふにすぎば・あやしめとい

ふぞかし、国を治する人なんどが人の申せばとて委細にも尋ねずして左右な
く科に行はれしは・あはれくやしかるらんに夏の桀王が湯王に責められ呉王
が越王に生けどりにせられし時は賢者の諫暁を用いざりし事を悔ひ阿闍世王
が悪瘡身に出て他国に襲はれし時は提婆を眼に見じ耳に聞かじと誓い、乃至
宗盛がいくさにまけ義経に生けどられて鎌倉に下されて面をさらせし時は
東大寺を焼き払はせ山王の御輿を射奉りし事を歎きしなり、今の世も又一分
もたがふべからず日蓮を賤み諸僧を貴び給う故に自然に法華経の強敵となり
給う事を弁へず、政道に背きて行はるる間・梵釈・日月・四天・竜王等の
大怨敵となり給う、法華経守護の釈迦・多宝・十方分身の諸仏・地涌千界・
迹化他方・二聖・二天・十羅刹女・鬼子母神・他国の賢王の身に入り代りて
国主を罰し国をほろぼさんとするを知らず、真の天のせめにてだにも・ある
ならばたとひ鉄圀山を日本国に引回し須弥山を蓋として十方世界の四天王

を集めて波際に立て並べてふせがするとも法華經の敵となり教主釈尊より

大事なる行者ぎょうじやを法華經の第五の巻を以て日蓮が頭こうべを打ち十卷共に引き散し

て散散にふみたりし大禍は現当二世にのがれがたくこそ候はんずらめ日本にほん

守護の天照太神・正八幡等もいかでかかかる国をばたすけ給うべきいそぎ

いそぎ治罰を加えて自みづから科を脱がれんとこそはげみ給うらめをそく科とがに行う

間・日本国の諸神ども四天大王にいましめられてやあるらん知り難き事なり

教大師云く「竊に以れば菩薩は国の宝なること法華經に載せ大乘の利他は

摩訶衍の説なり弥天の七難は大乗經に非ずんば何を以てか除くことを為ん、

未然の大災は菩薩僧に非ずんば豈冥滅することを得んや」等云云、而るを今

大蒙古国を調伏する公家・武家の日記を見るに・或は五大尊・或は七仏薬師

・或は仏眼・或は金輪等云云、此れ等の小法は大災を消すべしや還著於本人

と成りて国忽に亡びなんとす、或は日吉の社にして法華の護摩を行うといへ

ども不空三蔵ふくうさんぞうがあやまれる法を本として行きう間祈きとうの儀にあらず、又今の高僧こうそう等は・或あるは東寺とうじの真言しんこん・或あるは天台てんだいの真言しんこんなり東寺は弘法大師・天台は慈覚じかく・智証ちしようなり、此の三人は上に申もうすが如ごとく大謗法ほうぼうの人人ひとびとなり、其れより已外いげの諸僧しよそう等は・或あるは東大寺とうだいじの戒壇かいだんの小乗しょうじょうの者なり、叡山えいざんの円頓戒えんどんは又慈覚じかくの謗法ほうぼうに曲まがげられぬ彼の円頓戒えんどんも迹門しやくもんの大戒だいかいなれば今の時の機きにあらず旁かたがたかな叶かたがたかなうべき事にはあらず、只今国土ただやぶれなん後悔こうかいさきにたたじ不便ふびん不便ふびんと語かたり給たまいに千萬せんまんが一を書き付けて参らせ候。

但ただし身も下賤げせんに生れ心も愚おろかに候へば此の事は道理どうりかとは承うけたまわり候へども国主こくしゅも御用もちいなきかの故ゆえに鎌倉かまくらにては如何いかにが候ふしんけん不審おほに覚え候、返す返すも愚意おろかに存じ候はこれ程の国の大事だいじをば・いかに御尋たずねもなくして兩度の御勘氣ごかんきには行はれけるやらんと聞食きこしめしほどかせ給たまはぬ人人ひとびとの・或あるは道理どうりとも・或あるは僻事ひがごととも仰おほせあるべき事とは覚え候はず、又此の身に阿弥陀經あみだを読み

候はぬも併しかしなら御為父母の為にて候、只理不尽に読むべき由を仰せを蒙り候は
ば其の時重そのときかさねて申すべく候、いかにも聞食きこしめさずしてうしろの推義すいぎをなさん人
の仰せをばたとひ身は随したがう様に候えども心は一向に用いまいらせ候まじ、又
恐れにて候へども兼ねてつみしらせまいらせ候、此の御房は唯一人おはしま
す若しやの御事の候はん時は御後悔や候はんずらん世間の人人の用いねばと
は一旦いったんのをろかの事なり上の御用あらん時は誰人か用いざるべきや、其の時
は又用いたりとも何かせん人を信じて法を信ぜず、又世間の人人の思いて候
は親には子は是非に随したがうべしと君臣・師弟も此くの如しと此れ等は外典をも
弁わえず内典をも知らぬ人人の邪推なり外典の孝経には子父・臣君争あらそうべき段
もあり、内典には恩を棄て無為に入るは真実に恩を報ずる者なりと仏定め給い
ぬ、悉達太子は閻浮第一の孝子なり父の王の命を背きてこそ父母をば引導し
給たまいしか、比干が親父紂王を諫曉かんぎようして胸をほられてこそ賢人の名をば流せし

か、賤^{いやしたま}み給^{たま}うとも小法師^{ほつし}が諫^{かんぎよう}曉^たを用^{たま}ひ給^{たま}はずば現^{げん}当^{とう}の御^な歎^{なげ}きなるべし、此^これは親^{ため}の為^{ため}に読^よみまいらせ候^あはぬ阿^あ弥^み陀^だ經^{きやう}にて候^{きやう}へば・いかにも当^{とう}時^じは叶^{かな}うべしとはおぼへ候^{きやう}はず、恐^{きやう}恐^{きやう}申^し上^うげ候^{もつ}。

建^{けん}治^ち三^{さん}年^{ねん}六^{りく}月^{げつ} 僧^{そう} 日^{にち}永^{えい}

下^{しも}山^{やま}兵^{へい}庫^こ五^ご郎^{らう}殿^{でん}御^ご返^{へん}事^じ

五〇

本^{ほん}尊^{ぞん}問^{もん}答^{どう}抄^{しやう}

弘^{こう}安^{あん}元^{げん}年^{ねん}九^く月^{げつ}

五^ご十^{じゅう}七^{しち}歳^{さい}御^ご作^{さく} 与^よ淨^{じやう}顯^{けん}房^{ぼう}日^{にち}仲^{ちゆう}

365P

問^{もん}うて云^いく末^{まつ}代^{だい}惡^{あく}世^せの凡^{ぼん}夫^ぶは何^{なに}物^{もの}を以^もて本^{ほん}尊^{ぞん}と定^{ぢやう}むべきや、答^{こた}えて云^いく法^ほ華^け經^{きやう}の題^{だい}目^{もく}を以^もて本^{ほん}尊^{ぞん}とすべし、問^{もん}うて云^いく何^いれ^いの經^{きやう}文^{もん}何^いれ^いの人^{にん}師^しの釈^{しやく}に
出^いでたるや、答^{こた}う法^ほ華^け經^{きやう}の第^{だい}四^し法^ほ師^し品^{ひん}に云^いく「藥^{やく}王^{おう}在^{ざい}在^{ざい}處^{じょ}處^{じょ}に若^もしは説^とき
若^もしは読^よみ若^もしは誦^{じゆ}し若^もしは書^もき若^もしは經^{きやう}卷^{かん}所^{しよ}住^{じゆう}の處^{ところ}には皆^{みな}心^{しん}に七^{しち}宝^{ぼう}の塔^{たつ}
を起^{たて}て極^きめて高^{かう}広^{かう}嚴^{いん}飾^{じき}なら令^しむべし復^{また}舍^{しや}利^りを安^{あん}んずることを須^もい^ちじ所以^{ゆえん}は

いか
何ん此の中には已に如来の全身有す」等云云、涅槃經の第四如来性品に云く

「また 復次に迦葉諸仏の師とする所は所謂法なり是の故に如来恭敬供養す法常な

るを以ての故に諸仏も亦常なり」云云、天台大師の法華三昧に云く、「道場の

中に於て好き高座を敷き法華經一部を安置し亦必ずしも形像舍利並びに余の

經典を安くべからず唯法華經一部を置け」等云云。

疑つて云く天台大師の摩訶止觀の第二の四種三昧の御本尊は阿彌陀仏な

り、不空三蔵の法華經の觀智の儀軌は釈迦・多宝を以て法華經の本尊とせり、

汝何ぞ此等の義に相違するや、答えて云く是れ私の義にあらず上に出だすと

ころの經文並びに天台大師の御釈なり、但し摩訶止觀の四種三昧の本尊は

阿彌陀仏とは彼は常坐・常行・非行・非坐の三種の本尊は阿彌陀仏なり、

文殊問經・般舟三昧經・請觀音經等による、是れ爾前の諸經の内・未顕

眞實の經なり、半行半坐三昧には二あり、一には方等經の七仏・八菩薩等を

本尊とす彼の經による、二には法華經の釈迦・多宝等を引き奉れども法華三昧を以て案ずるに法華經を本尊とすべし、不空三蔵の法華儀軌は宝塔品の文によれり、此れは法華經の教主を本尊とす法華經の正意にはあらず、上に挙ぐる所の本尊は釈迦・多宝・十方の諸仏の御本尊法華經の行者の正意なり。問うて云く日本国に十宗あり所謂俱舍・成実・律・法相・三論・華嚴・真言・浄土・禅・法華宗なり、此の宗は皆本尊まちまちなり所謂俱舍・成実・律の三宗は劣応身の小釈迦なり、法相・三論の二宗は大釈迦仏を本尊とす華嚴宗は台上のるさな報身の釈迦如来、真言宗は大日如来、浄土宗は阿弥陀仏、禅宗にも釈迦を用いたり、何ぞ天台宗に独り法華經を本尊とするや、答う彼等は仏を本尊とするに是は經を本尊とす其の義あるべし、問う其の義如何仏と經といづれか勝れたるや、答えて云く本尊とは勝れたるを用ふべし、例せば儒家には三皇・五帝を用いて本尊とするが如く仏家にも又釈迦

を以て本尊とすべし。

問うて云く然らば汝云何ぞ釈迦を以て本尊とせずして法華經の題目を本尊

とするや、答う上に挙ぐるところの經釈を見給へ私の義にはあらず釈尊と

天台とは法華經を本尊と定め給へり、末代今の日蓮も仏と天台との如く法華經

を以て本尊とするなり、其の故は法華經は釈尊の父母・諸仏の眼目なり釈迦

大日・総じて十方の諸仏は法華經より出生し給へり故に今能生を以て

本尊とするなり、問う其証拠如何、答う普賢經に云く「此の大乗經典は諸仏

の宝蔵なり十方三世の諸仏の眼目なり三世の諸の如來を出生する種なり」

等云云、又云く「此の方等經は是れ諸仏の眼なり諸仏は是に因つて五眼を具す

ることを得たまえり仏の三種の身は方等より生ず是れ大法印にして涅槃海を

印す此くの如き海中より能く三種の仏の清淨の身を生ず此の三種の身は

人天の福田応供の中の最なり」等云云、此等の經文仏は所生法華經は能生

仏は身なり法華經は神なり、然れば則ち木像・画像の開眼供養は唯法華經にかざるべし而るに今木画の二像をまうけて大日仏眼の印と真言とを以て開眼供養をなすはもとも逆なり。

問うて云く法華經を本尊とすると大日如来を本尊とするといづれか勝るや、

答う弘法大師・慈覚大師・智証大師の御義の如くならば大日如来はすぐれ

法華經は劣るなり、問う其の義如何、答う弘法大師の秘藏宝鑰十住心に云く

「第八法華・第九華嚴・第十大日經」等云云是は浅きより深きに入る、慈覚

大師の金剛頂經の疏・蘇悉地經の疏・智証大師の大日經の旨歸等に云く

「大日經第一・法華經第二」等云云、問う汝が意如何、答う釈迦如来・多宝仏

・総じて十方の諸仏の御評定に云く已今当の一切經の中に法華最為第一な

り云云、問う今・日本国中の天台・真言等の諸僧並びに王臣万民疑つて

云く日蓮法師めは弘法・慈覚・智証大師等に勝るべきか如何、答う日蓮反詰

して云く弘法・慈覚・智証大師等は釈迦・多宝・十方の諸仏に勝るべきか是
一、今日の國王より民までも教主釈尊の御子なり釈尊の最後の御遺言に
云く「法に依つて人に依らざれ」等云云、法華最第一と申すは法に依るなり、
然るに三大師等に勝るべしやとの給ふ諸僧・王臣・万民乃至所従牛馬等にい
たるまで不孝の子にあらずや是二、問う弘法大師は法華經を見給はずや、答
う弘法大師も一切經を読み給へり、其の中に法華經・華嚴經・大日經の浅深
・勝劣を読み給うに法華經を讀給う様に云く文殊師利・此の法華經は諸仏
如来秘密の蔵なり諸經の中に於て最も其の下に在り、又読み給う様に云く
薬王今汝に告ぐ我が所説の諸經あり而も此の經の中に於て法華最第三云云、
又慈覚・智証大師の読み給う様に云く諸經の中に於て最も其の中に在り又
最為第二等云云、釈迦如来・多宝仏・大日如来・一切の諸仏・法華經を
一切經に相對して説いての給はく法華最第一、又説いて云く法華最も其の上

に在り云云、所詮釈迦十方の諸仏と慈覺・弘法等の三大師といづれを本とすべきや、但し事を日蓮によせて釈迦十方の諸仏には永く背きて三大師を本とすべきか如何。

問う弘法大師は讃岐の国の人勤操僧正の弟子なり、三論・法相の六宗を極む、去る延暦二十三年五月桓武天皇の勅宣を帯びて漢土に入り順宗皇帝の勅に依りて青竜寺に入りて慧果和尚に真言の大法を相承し給へり慧果和尚は大日如来よりは七代になり給う人はかはれども法門はをなじ譬えば瓶の水を猶瓶につつすがごとし、大日如来と金剛薩・竜猛・竜智・金剛智・不空・慧果・弘法との瓶は異なれども所伝の智水は同じ真言なり此の大師・彼の真言を習いて三千の波涛をわたりて日本国に付き給うに平城・嵯峨・淳和の三帝にさづけ奉る、去る弘仁十四年正月十九日に東寺を建立すべき勅を給いて真言の秘法を弘通し給う然らば五畿・七道・六十六箇国・二の

島にいたるまでも鈴をとり杵をにぎる人たれがこの末流にあらざるや。

又慈覺大師は下野の国の人・広智菩薩の弟子なり、大同三年御歳十五にし

て伝教大師の御弟子となりて叡山に登りて十五年の間六宗を習い法華・

真言の二宗を習い伝え承和五年御入唐・漢土の会昌天子の御宇なり、法全・

元政・義真・法月・宗叡・志遠等の天台・真言の碩学に値い奉りて顕密の

二道を習い極め給う、其の上殊に真言の秘教は十年の間功を尽し給う大日如来

よりは九代なり嘉祥元年仁明天皇の御師なり、仁寿・斉衡に金剛頂經・

蘇悉地經の二經の疏を造り叡山に総持院を建立して第三の座主となり給う

天台の真言これよりはじまる。

又智証大師は讃岐の国の人天長四年御年十四・叡山に登り義真和尚の

御弟子となり給う、日本国にては義真・慈覺・円澄・別当等の諸徳に八宗

を習い伝え去る仁寿元年に文徳天皇の勅を給いて漢土に入り宣宗皇帝の大

中年中に法全良せんりようしゅう和尚等の諸大師しよだいしに七年の間顯密けんみつの二教習ならい極め給たまいて

去いぬる天安二年に御歸朝きちよう・文德ぶんとく・清和等せいわの皇帝こうていの御師おんしなり、何れも現げんの為当そのの

為月ごとの如く日の如く代代の明主ごと・時時じじの臣民しんみん・信仰余しんこうり有り歸依きえ怠り無し

故ゆえに愚癡ぐちの一切偏いつさいひとえに信ずるばかりなり誠に法に依よつて人に依よらざれの金言きんげんを

背そむかざるの外は争いかでか仏によらずして弘法等こうぼうの人によるべきや、所詮しよせん其の心

如何いかに、答そう夫れ教主きようしゅ釈尊しゃくそんの御入滅にゆうめつ一千年の間月氏がっしに仏法の弘通ぶつぽうせし次第ぐつうは

先五百年は小乗しよくしやう後の五百年は大乗だいじよう・小大ごんじつ・權実あらそいの諍けんみつはありしかども顯密けんみつ

の定めはかすかなりき、像法ぞうぼうに入りて十五年と申せしに漢土かんどに仏法渡ぶつぽうる始はつ

儒道じゆどうと釈教しゃくきやうと諍論じようろんして定めがたかりきされども仏法ぶつぽうやうやく弘通くつうせしかば

小大ごんじつ・權実じようろんの諍論じようろんできたる、されどもいたくの相違そういもなかりしに、漢土かんどに

仏法渡ぶつぽうりて六百年・玄宗皇帝げんそうこうていの御宇ぎよう・善無畏ぜんむい・金剛智こんこうち・不空ふくうの三三蔵さんぞう・月氏がっし

より入り給たまいて後真言宗しんこんしゆうを立てしかば、華嚴けこん・法華等ほっけの諸宗しよしゆうは以ての外もつに

くだされき上かみいちにんよ一人自り下万民ばんみんに至るまで真言しんこんには法華經ほけきょうは雲泥うんでいなりと思ひしなり、其その後・徳宗皇帝とくそうこうていの御宇ぎょうに妙樂大師みょうらくだいしと申もうす人真言しんこんは法華經ほけきょうにあながちに・をとりたりとおぼしめししかども、いたく立てる事もなかりしかば法華ほっけ
・真言しんこんの勝劣しょうれつを弁わける人なし。

にほんこく

日本国は人王きんめい三十代欽明おんときの御時く・百済国ぶつぽうより仏法わた始めて渡りたりしかども

始は神と仏との諍論じょうろんこわくして三十余年はすぎにき、三十四代推古天皇すいこてんのうの

ぎょう しょうとくたいし

御宇に聖徳太子始めて仏法ぶつぽうを弘通ぐつうし給たまう慧観えいかん觀勒くわんろくの二ふたの上人しょうにん百済国よりわた

さんろんしゅう

ひろ

りて三論宗さんろんしゅうを弘め、孝徳ぎょうとくの御宇に道昭だうしやう・禅宗ぜんしゅうをわたす文武ぶんぶの御宇に新羅国しらぎ

ほうそうしゅう

の智鳳ちほう・法相宗ほうさうしゅうをわたす第四十四代元正天皇げんむいさんそうの御宇に善無畏だいにちきやう三蔵さんざう・大日經たいにちきやう

しかるにひろ

をわたす然而弘まらず、聖武しょうむの御宇に審祥しんじやう大徳だいとく・朗弁ろうべん僧正そうじやう等らう・華嚴宗けこんしゅうをわ

こうけんてんのう

たす人王こうけんてんのう四十六代孝謙天皇ぎょうけんの御宇に唐代たうの鑒真がんじん和尚わじやう・律宗りつしゅうと法華經ほけきやうをわたす

ほっけ

ひろ

律をばひろめ法華ほっけをば弘めず、第五十代桓武天皇かんむてんのうの御宇ぎやうに延暦えんりやく二十三年七月

でんぎようだいしちよくせん
傳教大師勅宣を給いて漢土に渡り妙樂大師の御弟子・道邃・行滿に値い
たてまつ ほうけしゅう ていえ
奉りて法華宗の定慧を伝え道宣律師に菩薩戒を伝え順 暁和尚と申せし人に
しんこん なら
真言の秘教を習い伝えて日本国に歸り給いて、真言・法華の勝劣は漢土の師
のおしへに依りては定め難しと思食しければ・ここに於て大日經と法華經と
彼の釈と此の釈とを引き並べて勝劣を判じ給いしに大日經は法華經に劣り
たるのみならず大日經の疏は天台の心を取りて我が宗に入れたりけりと勘え
給へり。
たま

そ
其の後弘法大師・真言經を下されける事を遺恨とや思食しけむ真言宗を立
てんとたばかりて法華經は大日經に劣るのみならず華嚴經に劣れりと云云、
あはれ慈覺・智証・叡山・園城にこの義をゆるさずば弘法大師の僻見は
にほんこく
日本国にひろまらざらまし、彼の両大師・華嚴・法華の勝劣をばゆるさねど
ほっけ しんこん しょうれつ
法華・真言の勝劣をば永く弘法大師に同心せしかば存外に本の傳教大師の

大怨敵おんてきとなる、其その後日本にほん國の諸碩德しよせきとく等各智慧ちえ高く有あるなれども彼の三大師だいし

にこえざれば今四百余年の間・日本にほん一同に真言しんごんは法華經ほけきように勝すぐれけりと定め

畢おわんぬ・たまたま天台宗てんだいしゅうを習ひとびとへる人人も真言しんごんは法華ほっけに及およばざるの由存すくぜども

天台の座主てんだい・御室等ざす おむろの高貴におそれて申もうす事なし・あるは又そ其の義をもわき

まへぬかのゆへにからくして同の義をいへば一向いっこう・真言師しんごんしはさる事おもひも

よらずとわらふなり。

然しからば日本にほん國中に數十万じゅうまんの寺社あり皆真言宗みなしんごんしゅうなりたまたま法華宗ほっけしゅうを並なぶと

も真言しんごんは主ことの如ほっけく法華しよじゅうは所従ことの如もくなり若けんがくしくは兼学しんちゅうの人しんちゅうも心中しんちゅうは一同に

真言しんごんなり、座主ざす長吏ちやうり・檢校けんぎよう・別当べつとう・一向いっこうに真言しんごんたるうへ上に好むところ下みな皆

したがふ事なれば一人ももれず真言師しんごんしなり、されば日本にほん國・或あるは口あるには

法華經ほけきよう最第一さいだいいちとはよめども心は最第二ほけきよう・最第三さいだいいちなり・或あるは身口意しんくい共に最第二ほけきよう

三そなり、三業相応そうおうして最第一さいだいいちと読める法華經ほけきようの行者ぎやうじやは四百余年が間・一人も

なしまして能持此經の行者はあるべしとおおぼへず、如来現在・猶多怨嫉・
きようめつごに しゅじよう かみいちにん ばんみん けききよう おんてき
況滅度後の衆生は上二人より下万民にいたるまで法華經の大怨敵なり。

然るに日蓮は東海道十五箇国の内第十二に相当する安房の国長狹の郡・東条

の郷・片海の海人が子なり、生年十二同じき郷の内・清澄寺と申す山にまか

り登り住しき、遠国なるうへ寺とはなづけて候へども修学の人なし然而随分

諸国を修行して学問し候いしほどに我が身は不肖なり人はおしへず十宗の元

起勝劣たやすくわきまへがたきところに、たまたま仏・菩薩に祈請して一切

の經論を勘て十宗に合せたるに俱舍宗は浅近なれども一分は小乗經に相

当するに似たり、成実宗は大小兼雜して謬あり律宗は本は小乗・中比

は權大乘・今は一向に大乘宗とおもへり又伝教大師の律宗あり別に習う

事なり、法相宗は源權大乘經の中の浅近の法門にてありけるが次第に増長

して權実と並び結局は彼の宗宗を打ち破らんと存ぜり譬えば日本国の將軍・

將門・純友等のごとし下に居て上を破る、三論宗も又権大乘の空の一分なり此れも我は実大乘とおもへり、華嚴宗は又権大乘と云ひながら余宗にまされり譬えば摂政関白のごとし然而法華經を敵となして立てる宗なる故に臣下の身を以て大王に順ぜんとするがごとし、浄土宗と申すも権大乘の一分なれども善導・法然がたばかりかしくこくして諸經をば上げ觀經をば下し正像の機をば上げ末法の機をば下して末法の機に相叶える念仏を取り出して機を以て經を打ち一代の聖教を失いて念仏の一門を立てたり譬えば心かしくくして身は卑しき者が身を上げて心はかなきものを敬いて賢人をうしなふがごとし、禪宗と申すは一代聖教の外に眞実の法有りと云云譬えばをやを殺して子を用い主を殺せる所従のしかも其の位につけるがごとし、眞言宗と申すは一向に大妄語にて候が深く其の根源をかくして候へば浅機の人あらはしがたし一向に誑惑せられて数年を経て候先ず天竺に眞言宗と申す宗なし

然れども有りしかと云云、其その証拠しょうこを尋たずね可べきなり所詮しよせん大日經だいにちきようここにわたれり
法華經ほけきように引き向そけて其しようれつの勝劣しょうれつを見候ところ処だいにちきように大日經ほけきようは法華經ほけきようより七重下劣ぜれつの經しょうこ
なり証拠しょうこ彼の經・此の經に分ぶん明みようなり此こゝに之これを引ひかずしかるを・或あるは云いわく法華經ほけきよう
に三重しゆくんの主君ある・或あるは二重しゆくんの主君あるなりと云云もつ以もつての外ほかの大僻見びやくけんなり、譬たとえば
劉聰りゆうそうが下劣げれつの身として愍帝びんていに馬の口をとらせ超あ高たかが民の身として横よこに帝位しゐに
つきしがごとし又彼の天竺てんじくの大慢婆羅門だいまんばらもんが釈尊しゃくそんを床として坐せしがごとし
漢土かんどにも知る人なく日本にほんにもあやしめずして・すでに四百余年をおくれり。
是かくの如ごとく仏法ぶつぽうの邪正じゃせい乱れしかば王法おうほうも漸ようく尽つきぬ結句けつこは此の国たこく・他国たこくに
やぶられて亡国ぼつこくとなるべきなり、此の事にちれんひと日蓮にちれんひと獨かんがり勘かんえ知しれる故ゆゑに仏法ぶつぽうのため
王法おうほうのため諸經しよきようの要文ようぶんを集めて一卷の書を造る仍よつて故最明寺入道殿さいみようじにゅうどうだんに
奉たてまつり立正安國論しやうあんこくろんと名なけき、其その書しよにくはしく申もうしたれども愚人ぐにんは知しり難がたし、
所詮しよせん現証げんしやうを引ひいて申もうすべし抑そも人王八十二代隱岐おきの法王ほうおうと申もうす王おわし有ましき

い 去ぬる 承久 三年太歳 辛巳 五月十五日伊賀太郎判官光末を打捕まします鎌倉の
よしとき 義時をうち給はむとの門出なり、やがて五畿・七道の兵を召して相州
かまくら 鎌倉の権の太夫義時を打ち給はんとし給うところに還りて義時にまけ給いぬ、
けっく 結句我が身は隠岐の国にながされ太子二人は佐渡の国・阿波の国にながされ
たま 給う公卿七人は忽に頸をはねられてき、これは・いかにとしてまけ給いける
こくおう ぞ国王の身として民の如くなる義時を打ち給はんは鷹の雉をとり猫の鼠を
は 食むにてこそあるべけれこれは猫のねずみにくらはれ鷹の雉にとられたるや
うなり、しかのみならず調伏力を尽せり所謂天台の座主・慈円僧正・真言
ちようじや の長者・仁和寺の御室・園城寺の長吏・総じて七大寺・十五大寺・智慧
かいぎよう 戒行は日月の如く、秘法は弘法・慈覚等の三大師の心中の深密の大法・十
ひほう 五壇の秘法なり、五月十九日より六月の十四日にいたるまであせをながしな
さいご づきをくだきて行いき最後には御室・紫宸殿にして日本国にわたりていまだ

三度までも行はぬ大法・六月八日始めて之を行つ程に・同じき十四日に関東
の兵軍・宇治勢多をおしわたして洛陽に打ち入りて三院を生け取り奉りて
九重に火を放ちて一時に焼失す、三院をば三国へ流罪し奉りぬ又公卿七人は
忽に頸をきる、しかのみならず御室の御所に押し入りて最愛の弟子の小児
勢多伽と申せしをせめいだして終に頸をきりにき御室思いに堪えずして死に
給い畢んぬ母も死す童も死す、すべて此のいのりをたのみし人いく千万とい
ふ事をしらず死にきたまたまいきたるもかひなし、御室祈りを始め給いし六
月八日より同じき十四日までなかをかぞふれば七日に満じける日なり、此の
十五壇の法と申すは一字金輪・四天王・不動大威徳・転法輪・如意輪・愛染
王・仏眼六字・金剛童子・尊星王・太元守護経等の大法なり此の法の詮は
国敵王敵となる者を降伏して命を召し取りて其の魂を密厳浄土へつかはすと
云う法なり、其の行者の人人も又軽からず天台の座主・慈円東寺御室三井の

じやうじやう

そつじやう

なら

ぎやうじや

常住院の僧正等の四十一人並びに伴僧等三百余人なり云云、法と云ひ行者

と云ひ又代も上代なりいかにとしてまけ給いけるぞたとひかつ事こそなくと

そくじ

も即時にまけおはりて・かかるはぢにあひたりける事、いかなるゆへといふ

こくしゆ

事を余人いまだしらず、国主として民を討たん事・鷹の鳥をとらんがごとし

たか

・たとひまけ給うとも一年・二年十年二十年もささうべきぞかし五月十五日

たま

におこりて六月十四日にまけ給いぬわづかに三十余日なり、権の大夫殿は此

たま

たゆうどの

の事を兼てしらねば祈もなしかまへもなし。

かね

きとう

しかるににちれん

然而日蓮小智を以て勘えたるに其の故あり所謂彼の真言の邪法の故なり

もつ かんが

そのゆえ

いわゆる

しんこん

じゃほう

ひがごと

僻事は一人なれども万国のわづらひなり一人として行ずとも一国・二国やぶ

れぬべし況や三百余人をや国主とともに法華經の大怨敵となりぬいかでかほ

いわんや

こくしゆ

ほけきやう

おんてき

ろびざらん、かかる大悪法としをへてやうやく関東におち下りて諸堂の別当

だいくほう

かんとう

しよ

べつとう

供僧となり連連と行えり本より辺域の武士なれば教法の邪正をば知らずただ

へんいき

ぶし

きやうほう

じゃせい

さんぼう

三宝をばあがむべき事とばかり思ふゆへに自然としてこれを用いきたりてや

うやく年数を経る程に今他国のせめをかうふりて此の国すでにほろびなんと

かんとう

す、関東八箇国のみならず叡山・東寺・園城・七寺等の座主・別当・皆関東

の御はからひとなりぬるゆへに隠岐の法皇のごとく大悪法の檀那と成定まり

たまひ

給いぬるなり、国主となる事は大小皆・梵王・帝釈・日月・四天の御計い

ほけきよう

なり、法華経の怨敵となり定まり給はば忽に治罰すべきよしを誓い給へり、

したが

随つて人王八十一代安徳天皇に太政入道の一門与力して兵衛佐頼朝を調伏

えいざん

せんがために、叡山を氏寺と定め山王を氏神とたのみしかども安徳は西海に

沈み明雲は義仲に殺さる一門・皆一時にほろび畢んぬ、第二度なり今度は第

三度にあたるなり。

にちれん

日蓮がいさめを御用いなくて真言の悪法を以て大蒙古を調伏せられれば日本国

かえ じようぶく

還つて調伏せられなむ還著於本人と説けりと申すなり、然らば則ち罰を以て

りしょう
利生を思うに法華經にすぎたる仏になる大道はなかるべきなり現世の祈は
ひょうえのすけ
兵衛佐殿・法華經を讀誦する現証なり。

此の道理を存ぜる事は父母と師匠との御恩なれば父母は・すでに過去し
どうり
給い畢んぬ、故道善御房は師匠にて・おはしまししかども法華經の故に地頭
たまい おわ
におそれ給いて心中には不便とおぼしつらめども外にはかたきのやうにく
たまい
み給いぬ、後にはすこし信じ給いたるやうにきこへしかども臨終にはいかに
じごく
やおはしけむおぼつかなし地獄まではよもおはせじ又生死をはなる事はあ
ちゅう
るべしとおおぼへず中有にやただよひましますらむとなげかし、貴辺は地頭
ほう
のいかりし時・義城房とともに清澄寺を出でておはせし人なれば何となくと
ほけきよう
もこれを法華經の御奉公とおぼしめして生死をはなれさせ給うべし。

此の御本尊は世尊説きおかせ給いて後二千二百三十余年が間・一閻浮提の
ごほんぞん せそんと たまい
内にいまだひろめたる人候はず、漢土の天台日本の伝教ほぼしろしめしてい
かんど てんだいにほん でんぎよう

ささかひろめさせ給はず当時こそひろまらせ給うべき時にあたりて候へ経に
は上行・無辺行等こそ出でてひろめさせ給うべしと見へて候へどもいまだ
見へさせ給はず、日蓮は其の人に候はねどもほばこころえて候へば地涌の菩薩
の出でさせ給うまでの口ずさみにあらあら申して況滅度後のほこさきに当り
候なり、願わくは此の功德を以て父母と師匠と一切衆生に回向し奉らんと
祈請仕り候、其の旨をしらせまいらせむがために御不審を書きおくりまいら
せ候に他事をすてて此の御本尊の御前にして一向に後世をものらせ給ひ候
へ、又これより申さんと存じ候、いかにも御房たちはからい申させ給へ。

日蓮 花押

五一 諸宗問答抄

建長七年 三十四歳御作与三位房日行 375P

問うて云く抑法華宗の法門は天台・妙楽・伝教等の御釈をば御用い候

や如何、いかな 答て云く最も此の御釈共を明鏡めいきようの助証として立て申す法門ほうもんにて候、
問て云く何を明鏡めいきようとして立てられ候ぞや彼の御釈共には爾前にぜん権教ごんきやうを簡えらび捨
てらる事候はず、随つて初後したが仏慧ぶつて・円頓えんどん・或はある・義齊ぎさいとも・或はある此妙彼妙・
妙義殊なること無しとも釈せられて華嚴けこんと法華ほっけとの仏慧同じぶつて・
こと無しと釈せられ候、通教つうきやう・別教べつきやうの仏慧も法華ほっけと同じと見えて候何を
もつひとえほつけずぐ以て偏に法華勝れたりとは仰せられ候や意得ず候如何、答て云く天台の御釈
を引かれ候は定て天台宗てんだいしゅうにて御坐候らん、然るに天台の御釈には教道しかに・証道てんだい
とて二筋を以て六十巻を造られて候、教道は即教相そくきやうそうの法門ほうもんにて候証道は即
内証ないしやうの悟の方にて候、只今引れ候釈の文共は教証の二道にどうの中には何れの文と
御得意候て引かれ候ぞや、若し教門きやうもんの御釈にて候わば教相きやうそうには三種の教相
を立て爾前にぜん・法華を釈して勝劣しょうれつを判ぜられ候、先づ三種の教相と申すは何に
て候ぞやと之を尋ぬ可し、若し三種の教相と申すは一には根性こんじやうの融不融ゆうふゆうの

相・二には化導けどうの始終しじゆう不始終ふしじゆうの相・三には師弟していの遠近おんこん不遠近ふおんこんの相なりと答へばさては只ただ今引かれ候・御釈いすれは何れの教相きようそうの下にて引かれ候やと尋ぬたず可べきなり、若もし根性こんじようの融不融ゆうふゆうの下にて釈しゃくせらると答へば又押し返して問う可べし根性こんじよう融不融ゆうふゆうの下には約教やつきよう・約部やつきようとて二の法門ほうもんあり何れぞと尋ぬたず可べし、若もし約教やつきようの下と答へば又問う可べし約教やつきよう・約部やつきように付いて与奪よだつの二の釈候ただ只今の釈は与の釈なるか奪の釈なるかと之これを尋ね可べし、若もし約教やつきよう・約部よだつをも与奪よだつをも弁わえずと云わばさてはさては天台宗てんだいしゆうの法門ほうもんは堅固けんこに無沙汰ぶさたにて候けり、尤も天台もつとてんだい法華ほうけの法門ほうもんは教相きようそうを以て諸仏もつしよぶつの御本意ごほんいを宣のたまはれたり若もし教相きようそうに闇くらくして法華ほうもんの法門ほうもんを云ん者は雖讚すいさん法華經還死法華心すいさんほうけきやうげんしほうけとて法華ほうけの心を殺すと云う事に候、其の上そ「若もし余経よきやうを弘ひろむるに教相きようそうを明あきらめざるも義おいに於て傷やぶること無し若もし法華ほうけを弘ひろむるに教相きようそうを明あかさざれば文義もんぎ闕かくること有り」と釈しゃくせられて殊更ことさら教相きようそうを本として天台てんだいの法門ほうもんは建立こんりゆうせられ候、仰おほせられ候如く次第しだいも

無く偏円へんえんをも簡えらばず邪正じゃせいも選えらばず法門ほうもん申もうさん者をしんじゆば信受しんじゆせざれと天台てんだい堅けんく誠まこと
しめられ候なり、是程これほどに知食しろうしめさず候けるに中々てんだい天台てんだいの御釈ぎしやくを引かれ候事
浅あさましきおんこと、せき御事ぎぎなりと責せむ可べきなり、但ただし天台てんだいの教相きやうそうを三種さんしゆに立てらるる中に
根性こんじやうの融不融ゆうふゆうの相の下にて相待妙そつたいみやう・絶待妙ぜつたいみやうとて二妙にめうを立て候、相待妙そつたいみやうの
下にて又約教やくきやう・約部の法門ほうもんを釈しやくして仏教ぶつぎやうの勝劣しやうれつを判はぜられて候、約教やくきやうの
時いちだいは一代いだいの教を蔵通ぞうつう・別円べつえんの四教しきやうに分わかつて之に付しやうれついて勝劣しやうれつを判はずる時は前ぜんさん三
為いそ後ご・一為妙いちみやうとは判はぜられて蔵通別ぞうつうの三教さんきやうをば教そきやうと嫌きらひ後の一教いちきやうをば
妙法みやうほふと選取せんしゆせられ候へども此の時もなほ爾前にぜんこんきやう權教ごんきやうの当分とうぶんの得道とくどうを許ゆるし且かつく
華嚴等けこんの仏慧ぶつてと法華ほつけの仏慧ぶつてとを等ひとしから令しめて只今ただの初後ぶつて仏慧ぶつて・円頓えんどん・義齊等ぎさい
の与よの釈しやくを作しられ候なり、然しかりと雖いえども約部やくぶの時いちだいは一代いだいの教を五時わくに分わかつて五
味けこんに配けし華嚴部あこん・阿含部ほうとうぶ・方等部はんによぶ・般若部ほつけ・法華部ぜんしみいと立てられ前四味ぜんしみい為そ
後ご・一為妙いちみやうと判はじて奪だつの釈しやくを作しられ候なり、然しかれば奪だつの釈しやくに云いく

「さいにんそにんにぐはんか　じゅうかへんせつぐみょうそにん
細人　人・二俱犯過・從過辺説俱名　人」と、此釈の意は華嚴部にも別円

二教を説かれて候へば円の方は仏慧と云わるるなり、方等部にも蔵通・別円

の四教を説れたれば円の方は又仏慧なり般若部にも通別円の後三教を説いて

候へば其れも円の方は仏慧なり、然りと雖も華嚴は別教と申すえせ物をつれ

て説れたる間わるき物つれたる仏慧なりとて簡わるるなり方等部の円も

前三教のえせ物をつれたる仏慧なり般若部の円も前二のえせ物をつれたる

仏慧なり、然る間仏慧の名は同と雖も過の辺に従つて・と云われてわるき

円教の仏慧と下され候なり、之に依て四教にても真實の勝劣を判ずる時は

一往は三蔵を名て小乗と為し再往は三教を名て小乗と為すと釈して一往

の時は二百五十戒等の阿含三蔵教の法門を總じて小乗の法と簡い捨てらる

れども、再往の釈の時は三蔵教と大乘と云いつる通教と別教との三教皆

小乗の法と本朝の智証大師も法華論の記と申す文を作つて判釈せられて

候なり。

次に絶待妙と申すは開会の法門にて候なり、此の時は爾前權教とて嫌ひ
捨らるる所の教を皆法華の大海におさめ入るるなり、随つて法華の大海に入
りぬれば爾前の權教とて嫌わるる者無きなり、皆法華の大海の不可思議の徳
として南無妙法蓮華經と云う一味にたたきなしつる間・念仏・戒・真言・禪
とて別の名言を呼び出す可き道理無きなり、随つて釈に云く「諸水入海・同
一鹹味・諸智入如実智・失本名字」等と釈して本の名字を一言も呼び
顯す可らずと釈せられて候なり、世間の人天台宗は開会の後は相待妙の時
斥い捨てられし所の前四味の諸經の名言を唱うるも又諸仏・諸菩薩の名言
を唱うるも皆是法華の妙体にて有るなり大海に入らざる程こそ各別の思なり
けれ大海に入つて後に見れば日来よしわるしと嫌ひ用ひけるは大僻見にて有
りけり、嫌はるる諸流も用ひらるる冷水も源はただ大海より出でたる一水

にて有りけり、然れば何の水と呼びたりとてもただ大海の一水に於て別別の
名言をよびたるにてこそあれ、各別各別の物と思つてよぶにこそ科はあれ只
大海の一水と思つて何れをも心に任せて有縁に従つて唱え持つに苦しかる
べからずとて念仏をも真言をも何れをも心に任せて持ち唱つるなり。

今云う此の義は与えて云う時はさも有る可きかと覺れども奪つて云う時は
随分墮地獄の義にて有るなり、其の故は縦ひ一人此くの如く意得何れをも持ち
唱るとても万人・此の心根を得ざる時は只例の偏見・偏情にて持ち唱えれば
一人成仏するとも万人は皆地獄に墮す可き邪見の惡義なり、爾前に立てる所
の法門の名言と其の法門の内に談ずる所の道理の所詮とは皆是・偏見・偏情
によりて入邪見稠林・若有若無等の權教なり、然れば此等の名言を以て
持ち唱へ此等の所詮の理を觀ずれば偏に心得たるも心得ざるも皆大地獄に
墮つべし、心得たりとて唱へ持ちたらん者は牛蹄に大海を納めたる者の如し

是びやっけん僻見なんの者なり、何ぞ二惡道を免がれん又心得こころえざる者の唱へ持たんは本迷惑めいわく
の者なれば邪見じゃけん權教こんきょうの執心しゅうしんによつて無間むげん・大城だいじょうに入らん事うたがい疑うたがいい無き者な
り、開會かいえの後も教そきようとて嫌きらい捨てし惡法あくほうをば名言みよごんをも其その所詮しよせんの極理ごくりをも唱
へ持つて交ゆべからずと見えて候弘決くけつに云く、「相待ざったい・絶待ぜったい俱ともに須すく惡を離る
べし円じやくに著なする尚惡いわんやまたなり況や復余じやくをや」云云、文の心は相待妙そつたいみようの時も絶待妙ぜったいみよう
の時も俱ともに須すく惡法あくほうをば離るべし円じやくに著なする尚惡いわんやまたし況や復余じやくの法をやと云う
文なり、円まんと云うは満足まんぞくの義なり余と云うは闕減けつげんの義なり、円教えんきようの十界平等じゅうかいびやうどう
に成仏じやうぶつする法をすら著じやくしたる方を惡ぞと嫌きらふ、況や復十界平等いわんやまたじゅうかいびやうどうに成仏じやうぶつせ
ざるの惡法あくほうの闕かけたるを以て執もつ著しゅうをなして朝夕ちやうせき・受持じゆじ・読誦どくじゆ・解説げせつ・書写しよしゃせ
んをや、設たとひ爾前にぜんの円えんを今の法華ほっけに開會かいえし入るるとも爾前にぜんの円えんは法華ほっけの一味いちみ
となる事こと無し、法華ほっけの体内たいいに開會かいえし入れられても体内たいいの權えんと云われて実とは
云わざるなり、体内たいいの權えんを体外たいがいに取出して且しばら於おいちぶつじやうぶんべつ一仏乘いっふつじやうぶんべつ分別說しふべつ三する時・權

に於て円の名を付て三乗の中の円教と云われたるなり、之に依りて古へも
金杖の譬を以て三乗にあてて沙汰する事あり、譬へば金の杖を三に打をり
て一づつ三乗の機根に与へて何れも皆金なり然れば何ぞ同じ金に於て差別の
思をなして勝劣を判ぜんやと談合したり、此はうち聞く所はさもやと覺えた
れども悪く學者の得心たるなり、今云う此の義は譬へば法華の体内の権の
金杖を仏・三根にあてて体外に三度うちふり給へる其の影を機根が見付ずし
て皆眞実の思を成して己が見に任せたるなり、其の眞実には金杖を打折て三
になしたる事が有らばこそ今の譬は合譬とはならめ、仏は権の金杖を折ら
ずして三度ふり給へるを機根ありて三に成りたりと執著し得心たる返す返
す不得心の大邪見なり大邪見なり、三度振りたるも法華の体内の権の功德を
体外の三根に配して三度振りたるにてこそ有れ、全く妙体不思議の円実を振
りたる事無きなり、然れば体外の影の三乗を体内の本の権の本体へ開会し入

るれば本の体内の権と云われて全く体内の円とは成らざるなり、此の心を以て
たいげ ごんじつ ほうもん こころえわきま
体内体外の権実の法門をば得意弁ふべき者なり。

次に禅宗の法門は・或は教外別伝・不立文字と云ひ・或は仏祖不伝と云ひ
ぜんしゅう ほうもん ある きようげべつでん ふりゆうもんじ ある ぶつそふでん

修多羅の教は月をさす指の如しとも云ひ・或は即身成仏とも云つて文字をも
しゆたら ぶつそ よ きようほう じゆ ある そくしんじようぶつ

立てず仏祖にも依らず教法をも修学せず画像・木像をも信用せずと云うな
はんきつ いわ ぶつそふでん きやうがく しゅうがく しんよう

り、反詰して云く仏祖不伝にて候はば何ぞ月氏の二十八祖東土の六祖とて相伝
はんきつ いわ ぶつそふでん なん がっし とうど そうでん

せられ候や、其の上・迦葉尊者は何ぞ一枝の花房を釈尊より授けられ微笑し
そ かしやうそんじや なん はなぶさ しやくそん びしやう

て心の一法を靈山にして伝えたりとは自称するや、又祖師無用ならば何ぞ
りようばん じやう しょう りやうばん せしむよう なん

達磨大師を本尊とするや、又修多羅の法無用ならば何ぞ朝夕の所作に真言
だるまいし ほんぞん しゆたら むよう なん ちやうせき しよさ しんこん

陀羅尼をよみつるぞや、首楞嚴經・金剛經・円覚經等を・或は談し・或は
だらに しゆりやうごんきやう こんごう えんかく ある ある

読誦するや、又仏・菩薩を信用せずんば何ぞ南無三宝と行住坐臥に唱うるや
どくじゆ ぼさつ しんよう なん なむさんぼう きやうじゆうざが とな

と責む可きなり、次に聞き知らざる言を以て種種申し狂はば云う可し、凡そ機
せ べ もっ しじゆもつ べ およ き

には上中下の三根あり随つて法門も三根に与へて説事なり、禅宗の法門に
も理致・機関・向上として三根に配て法門を示され候なり、御辺は某が機
をば三根の中には何れと得意て聞知せざる法門を仰せられ候ぞや、又理致の
分か機関の分か向上の分に候かと責む可きなり、理致と云うは下根に道理を
云いきかせて禅の法門を知らする名目なり、機関とは中根には何なるか本来
の面目と問へば庭前の柏樹子など答えたる様の言づかひをして禅法を示す
様なり、向上と云うは上根の者の事なり此の機は祖師よりも伝えず仏より
も伝えず我として禅の法門を悟る機なり、迦葉靈山微笑の花に依て心の一法
を得たりと云う時には是れ尚中根の機なり、所詮禅の法門と云う事は迦葉一枝
の花房を得しより已来出来せる法門なり、抑も伝えし時の花房は木の花か
草の花か五色の中には何様なる色の花ぞや又花の葉は何重の葉ぞや委細に
之を尋ぬ可きなり、此の花をありのままに云い出したる禅宗有らば実に心の

一法をも一分得たる者と知る可きなり、設ひ得たりとは存知すとも眞實の仏意には叶う可からず如何となれば法華經を信ぜざるが故なり、此の心は法華經の方便品の末長行に委く見えたり委は引て拝見し奉る可きなり、次に禅の法門何としても物に著する所を離れよと教えたる法門にて有るなり、さと云へば其れも情なりかうと云うも其れも情なりとあなた・こなたへ・すべりとどまらぬ法門にて候なり、夫れを責む可き様は他人の情に著したらん計りをば沙汰して己が情量に著し封ぜらる所をば知らざるなり、云うべき様は御辺は人の情計りをば責むれども御辺情を情と執したる情をばなど離れ得ぬぞと反詰すべきなり、凡そ法として三世諸仏の説きのこしたる法は無きなり汝仏祖不伝と云つて仏祖よりも伝えずとなのらばさては禅法は天魔の伝うる所の法門なり如何、然る間汝断常の二見を出でず無間地獄に墮せん事疑無しと云つて何度もかれが云う言にてややもすれば己がつまる語なり、されど

も非ひがくしょう学匠は理につまらずと云つて他人の道理をも自身の道理をも聞き知らざる間あんしょう暗証の者とは云うなり、都て理におれざるなり譬たとえば行く水にかずくが如ごとし。

次に即身即仏とは即身即仏なる道理を立てよと責む可し其の道理を立てずして無理に唯即身即仏と云わば例の天魔の義なりと責む可し但即身即仏と云う名目みょうもくを聞くに天台法華宗の即身成仏の名目つかひを盗み取て禅宗の家につかふと覚えたり、然れば法華に立つる様なる即身即仏なるか如何とせめよ、若し其の義無く押して名目をつかはばつかはるる語は無障礙しょうげの法なり譬たとえば民の身として国王と名乗ん者の如くなり如何に国王と云うとも言には障り無し己が舌の和かなるままに云うとも其の身は即土民の卑いやしく嫌われたる身なり、又瓦礫を玉と云う者の如し石瓦を玉と云いたりとも會て石は玉にならず、汝が云う所の即身即仏の名目も此くの如く有名無実なり不便なり

不便なり。
ふびん

次に不立文字ふりゆうもんじと云う所詮文字しよせんもんじと云う事は何なるものと得心こころえか此くの如く立てられ候や、文字もんじは是一切衆生の心法の顯あらわれたる質すがたなりされば人のかける物をもつそ以て其の人の心根を知つて相する事あり、凡そ心と色法とは不二の法にて有る間かきたる物を以て其の人の貧福をも相するなり、然れば文字もんじは是一切衆生いっさいしゅじょうの色心不二しきしんふにの質すがたなり汝若し文字もんじを立てざれば汝が色心しきしんをも立つ可からず汝六根ろっこんを離れて禅の法門一句答へよと責む可きなり、さてと云うもかうと云うも有と無との二見をば離れず無と云わば無の見なりとせめよと云わば有の見なりとせめよ、何れも何れも叶かなわざる事なり。

次に修多羅しゆたらの教は月をさす指の如しと云うは月を見て後は徒者いたずらものと云う義なるか若其義もしにて候わば御辺の親も徒者と云う義か又師匠ししやうは弟子でしの為ために徒者か又大地は徒者か又天は徒者か、如何いかんとなれば父母ふぼは御辺しゅつしやうを出生するまで

の用にてこそあれ御辺を出生しゅつじょうして後はなにかせん、人の師は物を習ならい取るまでこそ用なれ習ならい取つて後は無用むようなり、夫れ天は雨露うろを下すまでこそあれ雨ふりて後は天無用むようなり大地は草木そうもくを出生しゅつじょうせんが為なり草木そうもくを出生しゅつじょうして後は大地無用だいちむようなりと云わん者の如ごとし、是これを世俗せぞくの者の譬たとえに喉過ぬればあつさわすれ病愈いえぬれば医師くすしをわすると云うらん譬たとえに少も違わず相似そうじたり、所詮しよせん修多羅しゆたらと云うも文字もんじなり文字は是れ三世諸仏さんぜしよぶつの氣命いのちなりと天台釈てんだいしゃくし給へり、天台は震旦しんたん・禅宗ぜんしゅうの祖師そしの中に入れたり、何ぞ祖師なんそしの言を嫌きらはん其の上・御辺およの色心しきしんなり凡そ一切衆生いっさいしゆじょうの三世不斷さんぜふだんの色心しきしんなり、何ぞ汝本来の面目めんもくを捨て不立文字ふりゆうもんじと云うや、是れ昔こし移宅わたまししけるに我が妻を忘れたる者の如ごとし、眞実しんじつの禅法をば何としてか知るべき哀なる禅の法門ほうもんかなと責せむ可べし。

次に華嚴けげん・法相ほうそう・三論さんろん・俱舍くしゃ・成実じやうじつ・律宗りつしゅう等の六宗ろくしゅうの法門ほうもんいかに花をさかせても申しやすく返事すべき方は能よくよく能よくよくいはせて後・南都なんとの歸伏きふく状ただを唯讀ただみ

きかす可^べきなり、既に六宗の祖師が歸伏の状をかきて桓武天皇に奏^{そう}し奉^{たてまつ}る、
仍^{よつ}て彼歸伏状を山門に納^{おさ}められぬ其外内裏にも記^しせられたり諸道の家家にも
記^しし留^{とど}めて今にあり、其より已来・華嚴宗等の六宗の法門・末法の今に至^{いた}る
まで一度も頭をさし出^{いだ}さず何ぞ唯^{ただ}今・事新しく捨^なれたる所の權教・無得道
の法にをいて真実の思をなし此^かくの如^{ごと}く仰^{おお}せられ候^{こころえ}ぞや心得られずとせむべ
し。

次に真言宗の法門は先ず真言三部經は大日如來の説か釈迦如來の説かと
尋^{たず}ね定めて釈迦の説と言はば釈尊・五十年の説教にをいて已今当の三説を
分別せられたり、其の中に大日經等の三部は何れの分にをさまり候^{これ}ぞと之を
尋^{たず}ぬ可^べし、三説の中にはいづくにこそおさまりたりと云はば例の法門にてた
やすかるべき問答なり、若法華と同時の説なり義理も法華と同じと云はば法華
は是純円一実の教にて會て方便を交へて説く事なし、大日經等は四教を含有

したる経なり何ぞ時も同じ義理も同じと云わんや謬りなりとせめよ、次に
大日如来の説法と云はば大日如来の父母と生ぜし所と死せし所を委く沙汰し
問うべし、一句一偈も大日の父母なし説所なし生死の所なし有名無実の大日
如来なり然る間殊に法門せめやすかるべきなり若法門の所詮の理を云はば
教主の有無を定めて説教の得不得をば極む可き事なり、設ひ至極の理密・
事密を沙汰すとも訳者に虚妄有り法華の極理を盗み取て事密真言とか立てら
れてあるやらん不審なり、之に依りて法の所談は教主の有無に随て沙汰有る
可きなりと責む可きなり、次に大日如来は法身と云はば法華よりは未顕真実
と嫌ひ捨てられたる爾前権教にも法身如来と説たり何ぞ不思議なるべきやと
云う可きなり、若無始無終の由を云て・いみじき由を立て申さば必大日如来
に限らず我等・一切衆生・螻蟻等に至るまでみな無始無終の色心なり、
衆生に於て有始有終と思ふは外道の僻見なり汝外道に同ず如何と云う可き

なり。

次に念仏ねんぶつは是こ淨土宗じよつどしゆづう所用しよんぎようの義ぎなり、此れ又また權教ごんきようの中なかの權教ごんきようなり譬たとえば夢ゆめの中なかの夢ゆめの如ごとし有ゆう名無実めいむじつにして其その実無じつきなり一切いっさい衆生しゆじやう願がんて所詮しよせんなし、然しかれ
ば云いう所しよの仏ぶつも有う為無常むじやうの阿彌陀あみた仏ぶつなり何なんぞ常住じやうじゆう不滅ふめつの道理どうりにしかんや、
されば本朝ほんちやうの根本こんぽんだい大師だいしの御釈いわに云いく、有う為いの報ほう仏ぶつは夢中ごんかの權果むさ無作さんじんの三身さんじんは
覺前かくぜんの實じつ仏ぶつと釈しゃくして阿彌陀あみた仏ぶつ等の有う為無常むじやうの仏ぶつをば大おおいにいましめ捨ててをか
れ候すでなり、既に憑たのむ所の阿彌陀あみた仏ぶつ有名無実うめいむじつにして名なのみ有そつて其その体たいなから
んには往生おつじやうす可べき道理どうりをば委くわく須彌しゆみ山の如ごとく高たかいく立たて大海たいかいの如ごとくに深く云いと
も何いずれの所詮しよせん有あるべきや又また經論きやうろんに正めいき明文ぶんども有あると云いはば明文めいぶんありとも未み顕けん
眞實しんじつの文ぶんなり、淨土じよつどの三部さんぶ經きやうに限けらず華嚴けごん經きやう等とうより初いずれて何なんの經きやう・教きやう・論ろん・釋しやくに
か成じやう仏ぶつの明文めいぶん無ならんや、然しかれども權教ごんきようの明文めいぶんなる時ときは汝等なんじが所執しよしゆの拙つたき
にてこそあれ經論きやうろんに無なき僻事ひがことなり、何いずれれも法門ほうもんの道理どうりを宣のべべ嚴かざり依經えきやうを立て

たりとも夢中の権果にて無用の義に成る可きなり返す返す。

五二 一生成仏抄

けんちよう

建長七年 三十四歳御作

ときじょうにん
与富木常忍

383P

そ 夫れ無始の生死を留めて此の度決

たびけつじよう

むじようぼだい

定して無上菩提を証せんと思はばすべか

らく衆生本有の妙理を觀ずべし、衆生本有の妙理とは・妙法蓮華經是なり

しゅじようほんぬ みようり

しゅじようほんぬ

みようり

みようほうれんげきようこれ

ゆえ 故に妙法蓮華經と唱へたてまつれば

みようほうれんげきよう

しゅじようほんぬ

みようり

衆生本有の妙理を觀ずるにてあるなり、

もんり

もんじそくじつそう

じつそうそくみようほう

ただしよせんいつしんほつかい

むね

文理真正の經王なれば文字即実相なり実相即妙法なり唯所詮一心法界の旨を

と 説き顯すを妙法と名く故に此の經を諸仏の智慧とは云うなり、

あらわ みようほう なづ ゆえ

しよぶつ ちえ

いつしんほつかい むね

とは十界三千の依正色心・非情草木・虚空刹土いづれも除かず・ちりも残ら

じっかいさんぜん

えしようしきしん

ひじようそうもく

こくうせつど

のぞ

ず一念の心に収めて此の一念の心・法界に○満するを指して万法とは云うな

いちねん

おさ

いちねん

ほつかい

へんまん

り、此の理を覺知するを一心法界とも云うなるべし、但し妙法蓮華經と唱へ持

かくち

いつしんほつかい

ただ

みようほうれんげきよう

たも

つと云うとも若し己心の外に法ありと思はば全く妙法にあらず○法なり、

も

こしん

ほか

みようほう

そほう

そほう こんきよう
○法は今經にあらず今經にあらざれば方便なり権門なり、方便権門の教ならば成仏の直道にあらず成仏の直道にあらざれば多生曠劫の修行を経て成仏すべきにあらざる故に一生成仏叶いがたし、故に妙法と唱へ蓮華と読まん時は我が一念を指して妙法蓮華經と名くるぞと深く信心を發すべきなり。

すべ
都て一代八万の聖教三世十方の諸仏・菩薩も我が心の外に有りとはいゆめゆめ思ふべからず、然れば仏教を習ふといへども心性を觀ぜざれば全く生死を離るる事なきなり、若し心外に道を求めて万行万善を修せんは譬えば貧窮の人日夜に隣の財を計へたれども半銭の得分もなきが如し、然れば天台の釈の中には若し心を觀ぜざれば重罪滅せずとて若し心を觀ぜざれば無量の苦行となると判ぜり、故にかくの如き人をば佛法を學して外道となると恥しめられたり、愛を以て止觀には雖學佛教・還同外見と釈せり、然る間・仏

の名を唱へ経巻きょうかんをよみ華をちらし香をひねるまでも皆我みなが一念いちねんに納めたる
功德善根くどくぜんこんなりと信心しんじんを取るべきなり、之に依よつて浄名經じやうみぢぎやうきやうの中には諸仏しよぶつの
解脱げだつを衆生しゆじやうの心行しんぎやうに求めば衆生しゆじやう即菩提しよじそくねはんなり生死しやうじそく即涅槃ねはんなりと明あかせり、又
衆生しゆじやうの心けがるれば土どもけがれ心清ければ土も清しとて浄土じやうどと云ひ穢土えどと云
うも土どに二の隔へだてなし只我等ただわれらが心の善惡ぜんなくによると見えたり、衆生しゆじやうと云うも仏
と云うも亦また此こゝの如ごとし迷まよう時は衆生しゆじやうと名け悟る時をば仏と名けたり、譬たとえば
閻鏡あんきやうも磨あきぬれば玉と見ゆるが如ごとし、只今ただも一念無明いちねんむみやうの迷心めいしんは磨かざる鏡な
り是これを磨かば必ず法性真如ほつしやうしんによの明鏡みやうきやうと成るべし、深く信心しんじんを發おこして日夜朝暮ちやうぼ
に又懈おこたらず磨くべし何様いかやうにしてか磨くべき只南無妙法蓮華經ただなむみやうほうれんげきやうと唱へたてまつ
るを是これをみかくとは云うなり。

そもそも

抑妙おしぎとは何と云う心ぞや只我ただが一念いちねんの心・不思議ふしぎなる處ところを妙とは云うな
り不思議ふしぎとは心も及およばず語ことばも及およばずと云う事なり、然しかれば・すなはち起おこると

ころの一念の心を尋ね見れば有りと云はんとすれば色も質もなし又無しと云
はんとすれば様様に心起る有と思ふべきに非ず無と思ふべきにも非ず、有無
の二の語も及ばず有無の二の心も及ばず有無に非ずして而も有無に〇して
中道一実の妙体にして不思議なるを妙とは名くるなり、此の妙なる心を名
けて法とも云うなり、此の法門の不思議をあらはすに譬を事法にかたどりて
蓮華と名く、一心を妙と知りぬれば亦転じて余心をも妙法と知る処を妙経
とは云うなり、然ればすなはち善惡に付いて起り起る処の念心の当体を指し
て是れ妙法の体と説き宣べたる経王なれば成仏の直道とは云うなり、此の旨
を深く信じて妙法蓮華經と唱へば一生成仏更に疑あるべからず、故に經文
には「我が滅度の後に於て・応に斯の經を受持すべし是の人仏道に於て決定
して疑有る事無けん」とのべたり、努努不審をなすべからず六賢六賢、
一生成仏の信心南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經。

五三

しゅしんごしよ
主師親御書

けんちよう
建長七年

三十四歳御作

385P

しやかぶつ われら ため
釈迦仏は我等が為には主なり師なり親なり一人してすくひ護ると説き給へ

あみだぶつ われら ため
り、阿弥陀仏は我等が為には主ならず親ならず師ならず、然れば天台大師

これ しゃく いわ
是を釈して曰く「西方は仏・別にして縁異なり仏・別なるが故に隠顕の義成

こと ゆえ
ぜず縁異なるが故に子父の義成ぜず、又此の経の首末に全く此の旨無し眼を

せんさく
閉じて穿鑿せよ」と実なるかな釈迦仏は中天竺の浄飯大王の太子として十九

い たまい だんとくせん もう こも
の御年家を出で給いて檀特山と申す山に籠らせ給ひ、高峯に登つては妻木を

しんこく
とり深谷に下つては水を結び難行苦行して御年三十と申せしに仏にならせ

たまい いちだいしやうきよう と たまい うわべ けごん あごん ほうとう はんにや しゅじゆ
給いて一代聖教を説き給いしに、上には華嚴・阿含・方等・般若等の種種

きやうきよう
の経経を説かせ給へども内心には法華経を説かばやとおぼしめされしかど

しゅじよう きこん
も衆生の機根まちまちにして一種ならざる間・仏の御心をば説き給はで人の

心に随したがひ万の経を説たまき給たまへり、此かくの如ごとく四十二年が程は心苦しく思食おほしめしかども今法華經に至いたつて我が願すで既に満足まんぞくしぬ我が如ごとくに衆生しゅじやうを仏になさんと説たまき給たまへり、久遠くおんより已来このかた・或は鹿あるとなり・或は熊あるとなり・或時は鬼神きじんの爲ために食たまれ給たまへり、此かくの如ごとき功德くどくをば法華經を信しじたらん衆生しゅじやうは是れ眞仏子とて是実の我が子なり此の功德を此の人に与へんと説たまき給たまへり、是れ程に思食おほしめしたる親の釈迦しやかぶつ仏をばないがしろに思ひなして唯ゆい以いい一大事と説たまき給たまへる法華經を信しぜざらん人は争いかでか仏になるべきや能よく能よく心を留とどめて案あずべし。

二の卷いわに云もく「若し人信ぜずして此の経を毀謗せば則ち一切世間の仏種ぶつしゆを断ないず乃至余經の一偈いちげをも受けざれ」と文の心は仏にならん為ためには唯法華經ただほけきやうをじゆじ受持じゆじせん事を願よきやうつて余經の一偈いちげ・一句をも受けざれと、三の卷に云いわく「飢国けこくより来たちまつて忽ち大王だいおうの膳いぬやかんに遇こつが如し」と文の心は飢えたる国より来たちまつて忽いぬやかんに大王の膳いぬやかんにあへり心は犬野干の心を致いたすとも迦葉かしやう・目連等もくれんの小乗しょうじやうの心

をば起さざれ破れたる石は合うとも枯木に花はさくとも二乗は仏になるべからずと仰せられしかば須菩提は茫然として手の一鉢をなげ迦葉は涕泣の声大千界を響すと申して歎き悲みしが今法華經に至つて迦葉尊者は光明如来の記を授かりしかば目連・須菩提・摩訶迦旃延等は是を見て我等も定めて仏になるべし飢えたる国より来つて忽に大王の膳にあへるが如しと喜びし文なり、我等衆生・無始曠劫より已来妙法蓮華經の如意宝珠を片時も相離れざれども無明の酒にたばらかされて衣の裏にかけたりとしらずして少きを得て足りぬと思ひぬ、南無妙法蓮華經とだに唱え奉りたらましかば速に仏に成るべかりし衆生どもの五戒・十善等のわずかなる戒を以て・或は天に生れて大梵天・帝釈の身と成つていみじき事と思ひ・或時は人に生れて諸の国王・大臣・公卿・殿上人等の身と成つて是れ程のたのしみなしと思ひ少きを得て足りぬと思ひ悦びあへり、是を仏は夢の中のさかへ・まぼろしのたのしみな

り唯ただ法華經ほけきょうを持ちたも奉たてまつり速すみに仏ぶつになるべしと説とき給たまへり、又四の巻いに云いく、而しかも

此の經は如來にょらいの現在げんざいすら猶な怨嫉おんしつ多し況いや滅度めつどの後ごをや」云云。

釈迦しやくばつ仏ぶつは師子ししき類りゆう王おうの孫そん・淨飯王じやうはんには嫡子じやくせんなり十善じゆぜんの位ゐをすて五天竺てんじく第一だいいち

なりし美女あしゆたら耶輸多羅女あしゆたらをふりすてて十九の御年しゆつけ出家つとして勤たまいめ行いひ給たまいしかば

三十の御年じやうどう・成道ましまし御坐おんすがたして三十二相しゆごう・八十種好おんすがたの御形みゆきにて御幸みゆきなる時は

大梵天王だいぼんてんのう・帝釈たいしやく左右さうに立ち多聞たもん・持国等してんのうの四天王せんごい・先後せんごい圍繞いうゐせり、法とを説とき

給たまふ御時おんときは四弁しへん・八音はつおんの説法せつぽうは祇園精舎ぎおんしやうじやに満みち三智五眼さんちごがんの徳とくは四海しかいにしけ

り、然しかれば何いずれれの人ひとか仏ぶつを惡にくむべきなれども尚な怨嫉おんしつするもの多し、まして滅度めつど

の後ご・一毫いちごうの煩惱ぼんのうをも断だんぜず少しの罪つみをも弁わきまえざらん法華經ほけきょうの行者ぎやうじやを惡にくみ

嫉ねたむ者多おほからん事は雲霞うんかの如ごとくならん見えたり、然しかれば則すなわち末代まつだい惡世あくせに此

の經を有ありのままに説せく人ひとには敵多せけんからんと説いかれて候ひとびとに世間よこの人人ひと・我も

持たもちたり我も讀たてまつみ奉たてまつり行いじ候ひとびとに敵そごなきは仏ぶつの虚言そごか法華經ほけきょうの実じつならざるか、

又実の御経ならば当世の人人・経をよみまいらせ候は虚よみか実の行者にて

・はなきか如何能く能く心得べき事なり明むべき物なり、四の巻に多宝如来

しゃかむにぶつ

は釈迦牟尼仏御年三十にして仏に成り給ふに、初には華嚴経と申す経を十方

けおう

華王のみぎりにして別円頓大の法輪・法慧・垢徳林・金剛幢・金剛蔵の四

ぼさつ

菩薩に対して三七日の間説き給いしにも来り給はず、其の二乗の機根叶はざ

ようらくさいなん

りしかば瓔珞細の衣をぬぎすて弊垢膩の衣を著・波羅奈国・鹿野苑に趣

いて十二年の間・生滅四諦の

ほうもん

法門を説き給ひしに阿若俱鄰等の五人証果し八万の諸天は無生忍を得たり、

ちゅうげん

次に欲色二界の中間大宝坊の儀式・浄名の御室には三万二千の牀を立て

はんによ

般若・白鷺池の辺・十六会の儀式・染浄虚融の旨をのべ給いしにも来り給は

ほけきよう

ず、法華経にも一の巻乃至四の巻・人記品までも来り給はず宝塔品に至つて

初めて来り給へり。

しゃかぶつ 釈迦仏・先四十余年の経を我と虚事と仰せられしかば人用うる事なく

ほけきよう 法華經を眞実なりと説かせ給へども仏と云うは無虚妄の人とて永く虚言し

たま 給はずと聞きしに一日ならず二日ならず一月ならず二月ならず一年・二年な

よんじゅうよねん らず四十余年の程まで虚言したり仰せられしかば又此の経を實と説き給うも

そらごと 虚言にやあらんずらんと不審なししかば此の不審釈迦仏一人しては舍利弗を

はじめ事はれがたかりしに此の多宝仏・宝浄世界よりはるばると来らせ給いて

ほけきよう 法華經は皆是れ眞実なりと証 明し給いしに先の四十余年の経を虚言と仰せ

そらごと らるる事実の虚言に定まるなり、又法華經より外の一切経を空に浮べて文・

文・句句・阿難尊者の如く覺り富樓那の弁舌の如くに説くとも其れを難事と

せず、又須弥山と申す山は十六万八千由旬の金山にて候を他方世界へつづて

になぐる者ありとも難事には候はじ、仏の滅度の後・当世・末代・惡世に

ほけきよう 法華經を有りのままに能く説かん是を難しとすと説かせ給へり、五天竺・第一

ほけきよう 法華經を有りのままに能く説かん是を難しとすと説かせ給へり、五天竺・第一

の大力なりし提婆達多も長三丈五尺・広一丈二尺の石をこそ仏になげかけて
候いしか又漢土第一の大力・楚の項羽と申せし人も九石入の釜に水滴ち候い
しをこそひさげ候いしか其れに是は須弥山をばなぐる者は有りともし此の経を
説の如く読み奉らん人は有りがたしと説かれて候に人ごとに此の経をよみ書
き説き候、経文を虚言に成して当世の人人を皆法華經の行者と思ふべきか
能く能く御心得有るべき事なり、五の卷提婆品に云く「若し善男子善女人有
りて妙法華經の提婆達多品を聞いて淨心に信敬して疑惑を生ぜざらん者は
地獄・餓鬼・畜生に墮せずして十方の仏前に生ぜん」と、此の品には二つ
の大事あり一には提婆達多と申すは阿難尊者には兄・斛飯王には嫡子・師子
頰王には孫・仏にはいとこにて有りしが仏は一閻浮提第一の道心者にてまし
まししに怨をなして我は又閻浮提第一の邪見放逸の者とならんと誓つて万の
悪人を語いて仏に怨をなして三逆罪を作つて現身に大地破れて無間・大城に

墮ちて候いしを天王如来と申す記を授けらるる品にて候、然れば善男子と
申すは男此の経を信じまひらせて聴聞するならば提婆達多程の悪人だにも仏
になる、まして末代の人とはたとひ重罪なりとも多分は十悪をすぎずまして
深く持ち奉る人・仏にならざるべきや、一には娑竭羅竜王のむすめ竜女と
申すは八歳のくちなは仏に成りたる品にて候此の事めづらしく貴き事にて候、
其の故は華嚴経には「女人は地獄の使なり能く仏種子を断ず外面は菩薩に
似て内心は夜叉の如し」と、文の心は女人は地獄の使・よく仏の種をたつ外
面は菩薩に似たれども内心は夜叉の如しと云へり、又云く「一度女人を見る
者はよく眼の功德を失ふ設ひ大蛇をば見るとも女人を見るべからず」と云い、
又有る経には「所有の三千界の男子の諸の煩惱を合せ集めて一人の女人の
業障と為す」と三千大千世界にあらゆる男子の諸の煩惱を取り集めて女人・
一人の罪とすと云へり、・或経には「三世の諸仏の眼は脱て大地に墮つとも

よにん

女人は仏に成るべからず」と説き給へり、此の品の意は人畜をいはば畜生た

りゆうによ

る竜女だにも仏に成れりまして我等は形のごとく人間の果報なり、彼の果報

いかに

にはまされり争か仏にならざるべきやと思食すべきなり。

さんあくどう

中にも三惡道におちずと説かれて候其の地獄と申すは八寒八熱乃至八

だいじごく

とうかつじごく

たす

えんぶだい

ゆじゅん

大地獄の中に初め浅き等活地獄を尋ねれば此の一閻浮提の下一千由旬なり、

そのさいにん たがい

りようし

其の中の罪人は互に常に害心をいだけりもしたまたま相見れば獵師が鹿にあ

こと

くろがね

もつ たがい

けつにくみなつ

ただ

へるが如し各各鉄の爪を以て互につかみ・さく・血肉皆尽きて唯残つて骨

ある ごくそつ

もつ こつべ

いた

みな

のみあり・或は獄卒棒を以て頭よりあなうらに至るまで皆打ちくだく身も

わ

なおいさい

しやうねつ

もつ

たと

破れくだけで猶沙の如し、焦熱など申すは譬えん・かたなき苦なり鉄城

しほう

四方に回つて門を閉じたれば力士も開きがたく猛火高くのぼつて金翅のつば

さもかけるべからず、

がき

もつ

そ

じゆうしよ

二あり一には地の下五

ひやくじゅん

えんまおうきゆう

にんてん

そ

しゅじゅ

百由旬の閻魔王宮にあり、二には人天の中にもまじはれり其の相種種なり

・或は腹は大海の如くのんどは鍼の如くなれば明けても暮れても食すともあ
くべからず、まして五百生・七百生 なんと飲食の名をだにもきかず・或
は己が頭をくだきて脳を食するもあり・或は一夜に五人の子を生んで夜の内
に食するもあり、万葉林に結び取らんとすれば悉く剣の林となり万水・大海
に流入りぬ飲んとすれば猛火となる如何にしてか此の苦をまぬがるべき、次
に畜生道と申すは其の住所に二あり根本は大海に住す枝末は人天に雜れり短
き物は長き物にのまれ小き物は大なる物に食はれ互に相食んでしばらくもや
すむ事なし、・或は鳥 獸と生れ・或は牛馬と成つても重き物をおほせられ西
へ行かんと思へば東へやられ東へ行かんとすれば西へやらる山野に多くある
水と草をのみ思いて余は知るところなし、然るに善男子・善女人・此の法華經
を持ち南無妙法蓮華經と唱え奉らば此の三罪を脱るべしと説き給へり何事か
是にしかな・たのもしきかな・たのもしきかな、又五の巻に云く「我れ

だいじょうきよう ひら
大乘經を闡いて苦の衆生を度脱す」と心は・われ大乘の教をひらいてと
もう ほけきよう もう
申すは法華經を申す苦の衆生とは何ぞや地獄の衆生にもあらず餓鬼道の
しゅじよう ただによん
衆生にもあらず只女人を指して苦の衆生と名けたり、五障三従と申して三
つしたがふ事有つて五つの障りあり童女我女人の身を受けて女人の苦をつみ
しれり然れば余をば知るべからず女人を導かんと誓へり、南無妙法蓮華經・
なむみょうほうれんげきよう
南無妙法蓮華經。

にちれん かおう
日蓮 花押

いちだいしじょうきようたいい
五四 一代聖教大意

しょうか
正嘉二年二月 三十七歳御作

390P

しきよう さんぞう つうきよう べつきよう えんきよう
四教は一には三藏教・二には通教・三には別教・四には円教なり。

さんぞう あこんきよう 二にひ
始に三藏とは阿含經の意なり・此の經の意は六道より外を明さず但し
ろくどう にんてん いんが どうり ただ しじょうほう じゅつかい
六道修人天の内の因果の道理を明す、但し正報は十界を明すなり地・餓・

畜・修・人天・声聞・緣覺・菩薩・仏なり依報が六にて有れば六界と申す

なり、此の教の意は六道より外を明さざれば三界より外に浄土と申す生処あ

りと言わず又三世に仏は次第・次第に出世すとは云へども横に十方に並べて

仏有りと云わず、三蔵とは一には経蔵亦云二には律蔵亦云三には論蔵亦云慧蔵なり

但し経・律・論の定戒慧・戒定慧・慧定戒と云う事あるなり、戒蔵とは五戒

・八戒・十善戒・二百五十戒・五百戒なり・定蔵とは味禪定名浄禪・無漏

禪なり慧蔵とは苦・空・無常・無我の智慧なり、戒定慧の勝劣と云うは但上

の戒計りを持つ者は三界の内の欲界の人天に生を受くる凡夫なり、但し上の

定計りを修する人は戒を持たざれども定の力に依つ

て上の戒を具するなり、此の定の内に味禪・浄禪は三界の内・色無色界へ生

ず無漏禪は声聞・緣覺と成つて見思を断じ尽し灰身滅智するなり、慧は又苦

・空・無常・無我と我が色心を観ずれば上の戒・定を自然に具足して声聞・

縁覚えんかくとも成るなり、故ゆえに戒より定は勝すぐれ定より慧は勝すぐれたり、而しかれども此の
三蔵教さんざうの意いは戒が本体にてあるなり、されば阿含經あこんきやうを總結する遺教經ゆいきやうきやうには
戒を説けるなり、此の教の意いは依報えほうには六界ろっかい・正報しょうほうには十界じゅうかいを明せども
而も依報えほうに随したがつて六界を明す經と名くるなり、又正報しょうほうに十界を明せども縁覚えんかく
・菩薩ぼさつ・仏も声聞しょうもんの悟に過ぎざれば但声聞教しょうもんとも申す、されば仏も菩薩も
縁覚えんかくも灰身滅智けしんめつちする教なり、声聞しょうもんに付いて七賢七聖の位あり、六道は凡夫ぼんぷ
り。

一に五停心

三賢さんけん

二に別想念處ねんじよ

外凡

三に總想念處ねんじよ

七賢 智と言とう事なり

一に・法

四善根ぜんこん

二に頂法

内凡

三に忍法

四に世第一法

此の七賢の位は六道ろくどうの凡夫ぼんぷより賢かしこく生死しやうじを厭いとひ煩惱ぼんのうを具しながら煩惱ぼんのうを發おこさざる賢人けんじんなり、例せば外典げてんの許由巢父きようそうふが如ごとし。

一に数息息を数えて散乱を治す
すそく

二に不淨身の不淨を觀じて貪欲を治す
ふじよう ふじよう かん とんよく じ

三に慈悲慈悲を觀じて嫉妬を治す
じひじひ かん しつと じ

四に因縁十二因縁を觀じて愚癡を治す
いんねん いんねん かん ぐち じ

五に界方便 地水火風空識の六界を觀じて障道を治す又は念仏と
ほうべん すいか ろっかい かん しやうどう じ ねんぶつ

云う

一に身 外道は身を淨と言ひ仏は不淨と説き給う
げどう げどう さんがい ふじよう と たま

別想念処 二に受 外道は三界を樂と言ひ仏は苦と説き給う
ねんじよ げどう さんがい と たま

三に心

外道は心を常と言ひ仏は無常と説き給う

四に法

外道は一切衆生に我有りと云い仏は無我と説き給う

げどう

外道は常心樂受我法淨身仏は苦・不淨・無常・無我と説く総想念処とは先の

ふじょう

むじょう

むが

ふじょう

むじょう

むが

なんほう

ちえ

ぼんのう

たきぎ

苦・不淨・無常・無我を調練して觀するなり

法は智慧の火・煩惱の薪を蒸

ゆえ

せば煙の立つなり故に・法と云う、頂法は山の頂に登つて四方を見るに雲

こと

せけん

せけん

いんが

どうり

くわし

くら

ことな

たと

無きが如し、世間出世間の因果の道理を委く知つて闇き事無きに譬えたるな

お

り、始め五停心より此の頂法に至るまで退位と申して惡縁に値へば惡道に

お

しか

せんこん

いた

なち

もつ

あくえん

あ

あくどう

墮つ而れども此の頂法の善根は失せずと習うなり、忍法は此の位に入る人は

あくどう

お

だいいち

いた

けんじん

しやうにん

べ

永く惡道に墮ちず、世第一法は此の位に至る賢人なり但今聖人と成る可きな

り。

一に見道

二

随信行

鈍根

随法行

利根

正と言つ事なり

信解

鈍根

七聖三

三

見得

利根

二に修道

身証

利鈍に亘る

阿羅漢

二

慧解脱鈍根

三に無學道

俱解脱利根

見・思の煩惱ぼんのうを斷ずる者を聖と云う、此の聖人しょうにんに三道あり、見道とは見思けんじの

内の見惑けんわくを斷じつ尽くす、此の見惑けんわくをつ尽くす人ひとをば初果しょかの聖者せいじゃと申もうす、此の人ひと

は欲界よっかいの人天にんてんには生るれども永く地・餓・畜・修しゅうの四惡趣しあくしゆには墮おちず、天台てんだい

云く「見惑けんわくを破るやぶが故ゆゑに四惡趣しあくしゆを離る」文、此の人ひとは未だ思惑しわくを斷だんぜず

貪・瞋・癡有ちん・じん・ちり、身に貪欲とんよくある故ゆゑに妻つまを帶おす、而しかれども他人たにんの妻つまを犯したさず、瞋恚しんに

あれども物を殺さず、鋤すきを以もつて地ちをすけば虫自然じねんに四寸さ去る、愚癡ぐちなる故ゆゑに

我が身しよか・初果せいじゃの聖者せいじゃと知らず、婆娑論ばしやろんに云く「初果しょかの聖者せいじゃは妻つまを八十一度ひとたび・

一夜に犯すと」てんだい取意天台の解釈に云く「初果地を耕すに虫四寸を離るるは道共どうく

の力なり」と、第四果の聖者・阿羅漢せいじゃ あらかんを無学と云ひ亦または不生ふしょうと云う、永く見思393頁けんじ

を断じ尽して三界六道に此の生の尽きて後生のちしょうすべからず見思けんじの煩惱ぼんのう無きが故

なり、又此の教の意は三界六道より外に処ところを明あかさざれば生処有りと知らず

・身に煩惱ぼんのう有りとも知らず又生因なく但灰身滅智けしんめつちと申して身も心もうせ虚空こくう

の如く成るべしと習う、法華經にあらざば永く仏になるべからずと云うは

二乘是なり、此の教の修行の時節は声聞は三生鈍根六十劫利根又一類の

最上利根の声聞一生の内に阿羅漢の位に登る事あり、縁覺は四生鈍根百劫

利根菩薩は一向凡夫にて見思を断ぜず而も四弘誓願を発し六度万行を修し三

僧祇・百大劫を経て三藏教の仏と成る仏と成る時始めて見思を断尽するなり、

見惑とは一には身見みけんと云う二には辺見へんけん常見じょうけんと云う三には邪見じゃけんと云う四には見取見けんけん勝見しょうけん

と云う五には戒禁取見かいぎんけん計道見けいどうけんと云うなり見惑は八十八有れども此の五が根本にて

有るなり、思惑とは一には貪・二には瞋・三には癡・四には慢なり思惑は八十一有れども此の四が根本にて有るなり、此の法門は阿含經四十卷・婆沙論二百卷・正理論・顯宗論・俱舍論に具に明せり、別して俱舍宗と申す宗有り又諸の大乗に此の法門少少明す事あり・謂く方等部の經・涅槃經等なり但し華嚴・般若・法華には此の法門無し。

次に通教とは大乘の始なり又戒定慧の三学あり、此の教の意のおきて大旨は六道を出でず少分利根なる菩薩六道より外に推し出すことあり、聲聞・緣覺・菩薩共に一の法門を習い見思を三人共に断じ而も聲聞・緣覺・灰身滅智の意に入る者もあり入らざる者もあり、此の教に十地あり。

一 乾慧地

三賢

二 性地

四善根

賢人

三 八人地

見道位聖人

四 見地

見惑けんわくを断たず
初果しょかの聖人しょうにん

十地 じゅうち

五 薄地

六 離欲地

思惑を断ず しわく

七 已弁地

阿羅漢 見思を断じ尽す あらかん けんじ

八 辟支仏

地習氣を尽す ひやくしぶつ しゅうけ

九 菩薩地

誓つて習を扶けて生ずるなり ぼさつ たす

十 仏地 見思を断じ尽す けんじ

此通教の法門は別して一經に限らず方等經・般若經・心經・觀經・

阿彌陀經・雙觀經・金剛般若等の經に散在せり、此通教の修行の時節は

動踰塵劫を経て仏に成ると習うなり、又一類の疾く成ると云う辺もあり・已

上・上の藏通二教には六道の凡夫本より仏性ありとも談ぜず始めて修すれば

声聞・緣覺・菩薩・仏と・おもひおもひに成ると談ずる教なり。

次に別教又戒定慧の三学を談ず此の教は但菩薩計りにて声聞・緣覺を

まじ 雑えず、菩薩戒とは三聚淨戒なり五戒・八戒・十善戒・二百五十戒・五百

ぼんもうきよう

戒 梵網の五十八の戒・瓔珞の十無尽戒・華嚴の十戒・涅槃經の自行の五支

ごだ

だいろん

ようらく

むじん

けこん

ねはんぎよう

じぎよう

じぎよう

せつりつぎかい

戒・護佗の十戒・大論の十戒・是等は皆菩薩の三聚淨戒の内・摂律儀戒な

せつぜんほうかい

はちまん

ほうもん

せつ

にようやくうじよう

じゅじようかい

しぐせいがん

り、摂善法戒とは八万四千の法門を摂す、饒益有情戒とは四弘誓願なり定と

かんれんくんじゅう

ぜんじよう

ほうもん

じゅつかい

ほうもん

は觀練熏修の四種の禪定なり慧とは心生十界の法門なり、五十二位を立つ

じゅっしん

じゅうじゅう

えこう

じゅちとうかく

五十二位とは一に十信・二に十住・三に十行・四に十回向・五に十地等覺

みようかく

一位妙覺二位なり、已上。

じゅっしん

十信 退位 凡夫菩薩未だ見思を断ぜず

じゅうじゅう

ふたい

五十二位 十住 不退位五十二位

じゅうち

えこうけんじ

だん

ぼさつ

ぼさつ

ぼさつ

十行 十回向見思・塵沙を断ぜる菩薩

じゅうち

むみよう

だん

ぼさつ

十地 無明を断ぜる菩薩

とうかく

等覺

妙覺みょうかく 無明を断じ尽せる仏なり

此の教は大乗なり戒定慧を明す・戒は前の蔵通二教に似ず尽未来際の戒・

金剛宝戒なり、此の教の菩薩は三悪道を恐しとせず二乗道を恐る地・餓・畜

等の三悪道は仏の種子を断ぜず二乗の道は仏の種子を断ずればなり、大莊嚴

論に云く「恒に地獄に処すと雖も大菩提を障えず若し自利の心を起さば是れ

大菩提の障なり」と、此の教の習は眞の悪道とは三無爲の火なり眞の惡人

とは二乗を云うなり、されば惡を造るとも二乗の戒をば持たじと談ず、故に

大般若經に云く「若し菩薩設い恒河沙劫に妙なる五欲を受くるとも菩薩戒に

於ては猶犯と名けずと若し一念二乗の心を起さば即ち名けて犯と爲す」文、

此の文に妙なる五欲とは色・声・香・味・触の五欲なり・色欲とは青黛・

珂雪・白齒等声欲とは絲竹管絃・香欲とは沈檀芳薰・味欲とは猪鹿等の味・

触欲とは膚等なり、此に恒河沙劫に著すれども菩薩戒は破れず一念の二乗

の心を起すに菩薩戒は破ると云える文なり、太賢の古迹に云く「貪に汚さるると雖も大心尽きざるをもつて無余の犯無し起せども無犯と名く」文、二乗戒に趣くを菩薩の破戒とは申すなり華嚴・般若・方等総じて爾前の經にはあながちに二乗をきらうなり定慧此れを略す、梵網經に云く戒をば謂いて大地と爲し定をば謂いて室宅と爲す智慧は爲灯明なり」文、此の菩薩戒は人・畜・黃門・二形の四種を嫌わず但一種の菩薩戒を授く、此の教の意は五十二位を一一の位に多俱低劫を経て衆生界を尽して仏に成るべし一人として一生に仏に成る者無し、又一行を以て仏に成る事無し一切行を積んで仏と成る微塵を積んで須弥山と成すが如し、華嚴・方等・般若・梵網・瓔珞等の經に此のむねふんみょう旨分明なり、但し二乗界の此の戒を受くる事を嫌ふ、妙樂の釈に云く「あまねくほつけいぜんく法華已前の諸經を尋ぬるに實に二乗作仏の文無し」文。

次に円教とは此の円教に二有り・一には爾前の円・二には法華・涅槃の

円なり、爾前の円に五十二位・又戒定慧あり、爾前の円とは華嚴經の法界唯心

の法門文に云く、「初発心の時便ち正覺を成ずと」又云く、「円満修多羅」文、

淨名經に云く、「無我無造にして受者無けれども善惡の業敗亡せず」文、

般若經に云く、「初発心より即ち道場に坐す」文、觀經に云く、「韋提希・時

に應じて即ち無生法忍を得」文、梵網經に云く、衆生・仏戒を受くれば位大覺

に同じ即ち諸仏の位に入り真に是れ諸仏の子なり」文、此は皆爾前の円の証文

なり、此の教の意は又五十二位を明す名は別教の五十二位の如し但し義は

かはれり、其の故は五十二位が互に具して浅深も無く勝劣も無し、凡夫も位

を経ずとも仏にもなり又往生するなり、煩惱も断ぜざれども仏に成る障り

無く一善一戒を以ても仏に成る少少開会の法門を説く処もあり、所謂

淨名經には凡夫を会し煩惱惡法も皆会す但し二乗を会せず、般若經の中

には二乗の所学の法門をば開会して二乗の人と惡人をば開会せず、觀經等の

經に凡夫一毫の煩惱をも断ぜず往生すと説くは皆爾前の円教の意なり、
法華經の円經は後に至つて書く可し已上四教。

次に五時、五時とは一には華嚴經 結經 梵網經 別円二教を説く、二には

阿含 結經 遺教經 但三藏教の小乗の法門を説く、三には方等經・宝積經

・觀經等の説時を知らざる 権大乘經 なり 結經 瓔珞經、但し藏通・別円の

四教を皆説く、四には般若經 結經 仁王經 通教・別教・円教の後三教を

説く三藏教を説かず、華嚴經は三七日の間の説・阿含經は十二年の説・方等

・般若は三十年の説、已上華嚴より般若に至る四十二年なり、山門の義には

方等は説時定まらず説処定まらず般若經三十年と申す、寺門の義には方等十

六年・般若十四年と申す、秘藏の大事の義には方等・般若は説時三十年・

但し方等は前・般若は後と申すなり、仏は十九出家・三十成道と定むる事は

大論に見えたり、一代聖教五十年と申す事は涅槃經に見えたり、法華經已前

四十二年と申す事は無量義經に見えたり、法華經八箇年と申す事は涅槃經の

五十年の文と無量義經の四十二年の文の間を勘うれば八箇年なり、已上十九

しめつけ

じょうどう

てんほうりん

にゆうめつ

べ

これら

出家・三十成道・五十年の転法輪八十入滅と定む可し、此等の四十二年の

せつきよう

みなほけきよう

ほうべん

そのゆえ

わりようぎきよう

いわ

どうじよう

説教は皆法華經の汲引の方便なり、其の故は無量義經に云く、「我先に道場

ぼだいじゆげ

あのかたらさんみやくさんぼだい

じよう

菩提樹下に端坐すること六年阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たり。

ほうべん

もつ

よんじゅうよねん

いま

しんじつ

あらわ

したいと

あこんききよう

方便力を以てす、四十余年には未だ真実を顕さず初に四諦を説き阿含經なり次

ほうとう

ま

けこんかいこう

に方等十二部經・摩訶般若・華嚴海空を説く文。

ひそかいわ

しだい

けこん

あこん

ほうとう

はんにや

ほっけ

ねはん

私に云く説の次第に順ずれば華嚴・阿含・方等・般若・法華・涅槃なり、

ほうもん

せんじん

しだい

つら

あこん

ほうとう

はんにや

けこん

ねはん

ほっけ

つら

法門の浅深の次第を列ぬれば阿含・方等・般若・華嚴・涅槃・法華と列ぬべ

し、されば法華經・涅槃經には爾くの如く見えたり華嚴宗と申す宗は智嚴法師

ほけききよう

ねはんききよう

か

こと

けこんしきう

もう

ちこんほっし

・法蔵法師・澄觀法師等の入師・華嚴經に依つて立てたり、俱舍宗・成実

ほうぞうほっし

ちようかんほっし

にんし

けこんききよう

よ

ぐしやしきう

じようじつ

宗・律宗は宝法師・光法師・道宣等の入師・阿含經に依つて立てたり、

りつしきう

ほっし

ほっし

どうせん

にんし

あこんききよう

よ

宗・律宗は宝法師・光法師・道宣等の入師・阿含經に依つて立てたり、

ほうそうしゅう 法相宗と申す宗は玄奘三蔵・慈恩法師等・方等部の内に上生經・下生經・
じょうぶつ 成仏經・解深密經瑜伽論・唯識論等の經論に依つて立てたり、三論宗と
もう 申す宗は般若經・百論・中論・十二門論・大論等の經論に依つて吉蔵大師
たまた 立て給へり、華嚴宗と申すは華嚴と法華・涅槃は同じく円教と立つ余は皆劣
べ と云うなる可し、法相宗には解深密經と華嚴・般若・法華・涅槃は同じ程の
さんろんしゅう 經と云う、三論宗とは般若經と華嚴・法華・涅槃は同じ程の經なり、但し
ほっそう えきようもろしようにきよう 法相の依經諸の小乗經は劣なりと立つ、此等は皆法華已前の諸經に依つ
にぜん て立てたる宗なり、爾前の円を極として立てたる宗どもなり、宗宗の人人の
あらそい 争は有れども經經に依つて勝劣を判ぜん時はいかにも法華經は勝れたる
きようぎよう よ べきなり、人師の釈を以て勝劣を論ずる事無し。
にんし もっしやうれつ ことな

ほけきよう もう 五には法華經と申すは開經には無量義經一卷法華經八卷結經には普賢經一
かみ しきよう きようろん あ 卷上の四教・四時の經論を書き挙ぐる事は此の法華經を知らん為なり、
ほけきよう けつきよう ふげん

法華經の習ほけきようとしてならいは前の諸經しよきようを習ならわずしては永く心を得ること莫なきなり、
爾前にぜんの諸經しよきようは一經いつきやう一經いつきやうを習ならうに又余經よきようを沙汰さたせざれども苦くしからず、故ゆえに
天台てんだいの御釈いわに云く「若もし余經よきようを弘ひろむるには教相きやうそうを明あかさざれども義ぎに於おいて傷む
こと無し若もし法華ほっけを弘ひろむるには教相きやうそうを明あかさずんば文義もんぎ闕かくること有り」文、
法華經ほけきように云く「種種しゆじゆの道を示すと雖も其れ實には仏乘ぶつじやうの爲ためなり」文、種種しゆじゆ
道どうと申もうすは爾前にぜん一切いっさいの諸經しよきようなり仏乘ぶつじやうの爲ためとは法華經ほけきようの爲ために一切いっさいの經を説く
と申もうす文なり。

問しよきようう諸經しよきようの如ごときは・或あるは菩薩ぼさつの爲ため・或あるは人天にんてんの爲ため・或あるは声聞しやうもん・緣覺えんかくの爲ため
機きたがに随したがつて法門ほうもんもかわり益えきもかわる此この經は何いかなる人の爲ためぞや、答たう此この經
は相伝そうつでんに有あらざれば知がたり難しよせんし所詮しよせん惡人あくにん・善人ぜんにん・有智うち・無智むち・有戒むかい・無戒むかい・男
子しよ・女子こしよ・四趣しちふ・八部はちふ総じゆつじて十界じゆつかいの衆生しゆじやうの爲ためなり、所謂いわゆる惡人あくにんは提婆達多だいばだつた・
妙莊嚴王みやうそうこん・阿闍世王あじゃせ・善人ぜんにんは韋提希等いだいけの人天にんてんの人・有智うちは舍利弗しやりほつ・無智むちは

須利槃特・有戒は声聞・菩薩・無戒は竜畜なり女人は竜女なり、總じて

十界の衆生・円の一法を覚るなり此の事を知らざる学者・法華經は我等

凡夫の爲には有らずと申す仏意恐れ有り、此の經に云く「一切の菩薩の

阿耨多羅三藐三菩提は皆此の經に属せり」文、此の文の菩薩とは九界の衆生

・善人・悪人・女人・男子・三藏教の声聞・縁覺・菩薩・通教の三乗・

別教の菩薩爾前の円教の菩薩皆此の經の力に有らざれば仏に成るまじと

申す文なり、又此の經に云く「藥王多く人有りて在家・出家の菩薩の道を行

ぜんに若し是の法華經を見聞し読誦し書持し供養することを得ること能わ

んば当に知るべし是の人は未だ善く菩薩の道を行ぜず、若し是の經典を聞く

ことを得ること有らば乃ち能く菩薩の道を行ずるなり」と文、此の文は顯然

に權教の菩薩の三祇・百劫・動踰塵劫・無量阿僧祇劫の間の六度万行・四弘

誓願は此の經に至らざれば菩薩の行には有らず善根を修したるにも有らずと

せいがん

云う文なり、又菩薩の行無ければ仏にも成らざる事も顯然なり。

天台・妙樂の末代の凡夫を勧進する文、文句に云く「好堅・地に処して牙

すでに百圀せり頻伽に在つて声衆鳥に勝れたり」文、此の文は法華經の

五十展轉の第五十の功德を釈する文なり、仏苦に校量を説き給うに権教の

多劫の修行又大聖の功德よりも此の經の須臾・結縁の愚人の隨喜の功德百

千万億勝れたる事經に見えつれば此の意を大師譬を以て顯し給えり、好堅

樹と申す木は一日に百圀にて高くをう、頻伽と申す鳥は幼だも諸の大小の

鳥の聲に勝れたり、権教の修行の久きに諸の草木の遅く生長するを譬へ、

法華の行の速に仏に成る事を一日に百圀なるに譬へ、権教の大小の聖人を

ば諸鳥に譬へ法華の凡夫のはかなきをの聲の衆鳥に勝るるに譬う、

妙樂大師重ねて釈して云く「恐らくば人謬りて解せる者初心の功德の大なる

ことを測らずして功を上位に推り此の初心を蔑る故に今彼の行浅く功深きこ

とを示して以て経力を顕す「文、末代の愚者は法華経は深理にしていみじけれども我等が下機に叶わずと言つて法を挙げ機を下して退する者を釈する文なり。

又妙樂大師末代に此の法の捨てられん事を歎いて云く「此の円頓を聞きてすつちよう

崇重 せざる者は良に近代に大乘を習える者の雑濫するに由るが故なり、況や

像末に情澆く信心寡薄に円頓の教・法蔵に溢れ函に盈れども暫くも思惟せず

便ち目を瞑ぐに至る・徒に生じ徒に死す一に何ぞ痛ましきや有る人云く聞い

て行ぜずんば汝に於て何ぞ預らん此れは未だ深く久遠の益を知らず、

善住天子経の如き文殊・舍利弗に告ぐ法を聞き謗を生じて地獄に墮つるは

恒沙の仏を供養する者に勝れたり地獄に墮つと雖も地獄より出でて還つて法

を聞くことを得ると、此れは仏を供し法を聞かざる者を以て校量と為り聞

いて謗を生ずる尚遠種と為す況や聞いて思惟し勤めて修習せんをや」と、

又云く「一句も神に染めれば咸く彼岸を資く思惟修習永く舟航に用いたり
随喜見聞恒に主伴と為る、若は取・若は捨・耳に経て縁と成り・或は順・或
は違・終に斯れに因つて脱すと」文、私に云く若取・若捨・或順・或
違の文は肝に銘ずるなり。

法華翻經の後記に云く釈僧肇記「什羅什三藏なり姚興王に對して曰く予昔

天竺国に在りし時・

あまね

く五竺に遊びて大乘を尋討し大師須梨耶蘇摩に従つて

理味を餐受するに頂を摩でて此の経を属累して言く、仏・日西に隠れ遺光

東北を照らす茲の典東北諸国に有縁なり汝慎んで伝弘せよ」と文、私に云く

天竺よりは此の日本は東北の州なり慧心の一乗要決に云く「日本一州・円機

純熟・朝野遠近・同じく一乗に歸し緇素貴賤悉く成仏を期す・唯一師等

あつて若し信受せず権とや為ん実とや為ん権為らば責む可し」浄名に云く

「衆の魔事を覺知して其行に随わず善力方便を以て意に随つて度すと実為ら

ば憐む可しあわれべ「此經に云くいわ」当来世とうらいせの惡人あくにんは仏説ぶつせつの一乗いちじょうを聞いて迷惑めいわくして信受しんじゆせず法を破はして惡道に墮おつ文。

妙法蓮華經みょうほうれんげきょう

妙は天台玄義てんだいげんぎに云くいわ

「言う所の妙とは妙は不可思議ふかしぎに名なくる

なり」と、又云くいわ「秘密ひみつの奧藏おくそうを發ひらく之これを稱しょうして妙なと為す」と、又云くいわ「妙

さいしやう

とは最勝しゆたら・修多羅かんろ・甘露かんろの門ゆえなり故に妙なと言いなり」と、法げんぎは玄義いわに云く「言

う所の法とは十界じゆつかい・十如じんじつ・權實けんじつの法しやうぎなり、又云くいわ「權實けんじつの正軌しやうぎを示す故に

号ゆえして法なと為なす」と、蓮華れんげは玄義げんぎに云く「蓮華れんげとは權實けんじつの法たに譬たとするなり、

又云くいわ「久遠くおんの本果こんぐわを指さす之これを喩たとするに蓮れんを以もつて不二ふじの円道えんどうに會あはす之これを譬たとするに華はなを以もつてす」文、經きやうは又云くいわ「声仏ぶつじ事を為なす之これを稱しょうして經きやうと為なす」文、

私ひそに云くいわ法華ほつかけいぜん以前の諸經しよきやうに小乘しやうじやうは心生しんじやうすれば六界ろくがい・心滅しんめつすれば四界しじやうなり、

通教つうきやう以もつて是この如ごとし、爾前にぜんの別円べつえんの二教ふたきやうは心生しんじやうの十界じゆつかいなり小乘しやうじやうの意いは

六道ろくどう・四生ししやうの苦樂くらくは衆生しゆじやうの心しんより生なずと習ならなりされば心滅しんめつすれば六道ろくどうの

因果は無きなり、大乘の心より十界を生ず、華嚴經に云く、「心は工なる画師
の如く種種の五陰を造る一切世界の中に法として造らざること無し」文、造
種種五陰とは十界の五陰なり仏界をも心法をも造ると習う心が過去・現在・
未来の十方の仏と顕ると習うなり、華嚴經に云く、若し人三世一切の仏を了知
せんと欲せば当に是くの如く觀すべし心は諸の如来を造ると「法華已前の經
のおきては上品の十悪は地獄の引業・中品の十悪は餓鬼の引業・下品の
十悪は畜生の引業・五常は修羅の引業・三歸・五戒は人の引業・三歸・
十善は六欲天の引業なり、有漏の坐禅は色界・無色界の引業・五戒・八戒・
十戒・十善戒・二百五十戒・五百戒の上に苦・空・無常・無我の觀は声聞
・緣覺の引業・五戒・八戒乃至三聚淨戒の上に六度四弘の菩提心を發すは
菩薩なり仏界の引業なり、藏通二教には仏性の沙汰なし但菩薩の發心を仏性
と云う、別円二教には衆生に仏性を論ず但し別教の意は二乘に仏性を論

ぜず、爾前の円教は別教に附して二乗の仏性の沙汰無し此等は皆法なり、
今の妙法とは此等の十界を互に具すと説く時・妙法と申す、十界互具と
申す事は十界の内に一界に余の九界を具し十界互に具すれば百法界なり、
玄の二に云く、「又一法界に九法界を具すれば即ち百法界有り」文、法華經と
は別の事無し十界の因果は爾前の經に明す今は十界の因果互具をおきてた
る計りなり、爾前の經意は菩薩をば仏に成るべし声聞は仏に成るまじなん
ど説けば菩薩は悦び声聞はなげき人天等は・おもひもかけずなんとある經も
あり、・或は二乗は見思を断じて六道を出でんと念ひ菩薩は・わざと煩惱を
断ぜず六道に生れて衆生を利益せんと念ふ、・或は菩薩の頓悟成仏を見・
・或は菩薩の多俱低劫の修行を見・或は凡夫往生の旨を説けば菩薩・声聞
の爲には有らずと見て人の不成仏は我が不成仏、人の成仏は我が成仏・
凡夫の往生は我が往生・聖人の見思断は我等凡夫の見思断とも知らず四十

二年をば過ぎしなり。

然るに今經にして十界互具を談ずる時・声聞の自調自度の身に菩薩界を

具すれば六度万行も修せず多俱低劫も経ぬ声聞が諸の菩薩のからくして修

したりし無量無辺の難行道が声聞に具する間・をもはざる外に声聞が菩薩

と云われ人をせむる獄卒・慳貪なる凡夫も亦菩薩と云はる、仏も又因位に居し

て菩薩界に摂せられ妙覺ながら等覺なり、藥草喻品に声聞を説いて云く、汝

等が所行は是れ菩薩の道なり」と、又我等六度をも行ぜざるが六度満足の菩薩

なる文・經に云く「未だ六波羅蜜を修行することを得ずと雖も六波羅蜜自然

に在前しな」と、我等一戒をも受けざるが持戒の者と云わるる文・經に云く

「是則ち勇猛なり是則ち精進なり是を戒を持ち頭陀を行ずる者と名く」文。

問うて云く諸經にも悪人が仏に成る華嚴經の調達じゆきの授記・普超經の闍王

の授記・大集經の婆藪天子の授記・又女人が仏に成る胎經の釈女の成仏・

ちくしょう

畜生が仏に成る阿含經の鵠雀の授記・二乗が仏に成る方等だらに經・

しゅりようじんぎやう

首楞嚴經等なり、菩薩の成仏は華嚴經等・具縛の凡夫の往生は觀經の

げぶんげしょう

にょにん

そうかんきやう

これら

下品下生等・女人の女身を転ずるは雙觀經の四十八願の中の三十五の願此等

ほけきやう

にじやう

りゆうによ

だいばほさつ

じゆき

いかん

ちようか

しよきやう

なら

たとい

は法華經の二乗・童女・提婆菩薩の授記に何なるかわりめかある、又設いか

ほけきやう

にじやう

りゆうによ

だいばほさつ

じゆき

いかん

ちようか

しよきやう

なら

たとい

わりめはありとも諸經にても成仏はうたがひなし如何、答つ予の習い伝う

ところ

ほうもん

あらわ

ほけきやう

しよきやう

ちようか

しよきやう

なら

たとい

しよきやう

る処の法門・此の答に顯るべし此の答に法華經の諸經に超過し又諸經の

じやうぶつ

ゆるゆる

ひぞう

ゆえ

あらわ

しる

しる

しる

しる

しる

成仏を許し許さぬは聞うべし秘藏の故に顯露に書さず。

いわ

みようほう

いちねんさんぜん

いかに

てんだいだいし

ほうもん

さと

ほうもん

さと

ほうもん

問うて曰く妙法を一念三千と言う事如何、答う天台大師・此の法門を覺り

たま

げんぎ

もんく

かくいさんまい

しかん

じようみようじよ

ねんじよ

ねんじよ

ねんじよ

ねんじよ

給うて後・玄義十卷・文句十卷・覺意三昧・小止觀・淨名疏・四念処・

しだいぜんもん

ほうもん

と

たまい

いねんさんぜん

いねんさんぜん

いねんさんぜん

いねんさんぜん

いねんさんぜん

いねんさんぜん

次第禪門等の多くの法門を説き給いしかども此の一念三千をば談義し給はず、

じゆっかい

ひやっかい・せんによ

ほうもん

ほうもん

おはしませしなり、

御年五十七の夏

御年五十七の夏

御年五十七の夏

御年五十七の夏

御年五十七の夏

但十界・百界・千如の法門ばかりにて・おはしませしなり、御年五十七の夏

ころけいしゆう

もう

ところ

おんでし

しやうあんだいし

もう

と

と

と

と

四月の比荊州の玉泉寺と申す処にて御弟子・章安大師と申す人に説ききか

せ給^{たま}いし止観^{しかん}十卷あり、上の四帖^{じよう}に猶^{なお}をしみ給^{たま}いて但^{そく}六即^{ししゆざんまい}・四種^{ばかり}三昧等^{さんまい}・計^{ばかり}
の法門^{ほうもん}にてありしに五の巻より十境^{じやう}・十乗^{じゆ}を立てて一念三千^{いちねんさんぜん}の法門^{ほうもん}を書き
給^{たま}へり、此^これを妙樂大師末代^{みやうらくだいしまつだい}の人に勸進^{かんじん}して言^{いわ}く、並に三千^{さんぜん}を以て指南^{もつしなん}と為す
。請^{こう}うらくは尋ね読まん者^{たず}心に異縁^{いえん}無かれ、文、六十卷・三千丁^{さんぜん}の多くの法門^{ほうもん}
も由無し但此^{よしな}の初の二三行^{こころうべ}を意得可きなり、止観^{しかん}の五に云く、「夫れ一心^{いっしん}に十
法界^{ほっかい}を具す一法界^{ほっかい}に又十法界^{ほっかい}を具すれば百法界^{ほっかい}なり一界^{ほっかい}に三十種の世間^{せけん}を
具すれば百法界^{ほっかい}には即ち三千種の世間^{せけん}を具す此の三千一念^{さんぜんいちねん}の心に在り、文、
妙樂承^{みやうらく}け釈^{しゃく}して云く、「当に知るべし身土一念^{しんどいちねん}の三千なり故に成道^{じやうだう}の時・此
の本理^{かなつ}に称て一身一念法界^{いちねんほっかい}に、ねし、文、日本の伝教大師比叡山建立^{あま}の時
・根本中堂^{こんほんちゆうどう}の地を引き給^{たま}いし時・地中より舌八つある鑰^{かぎ}を引き出したり、此
の鑰^{かぎ}を以て入唐^{もつにゆうとう}の時に天台大師より第七代妙樂大師^{みやうらくだいし}の御弟子道邃^{おんでし}和尙^{すいわじやう}
値^あい奉^{たてまつ}りて天台^{てんだい}の法門^{ほうもん}を伝へ給^{たま}いし時、天機秀発^きの人たりし間道邃^{どうすい}和尙^{わじやう}

悦んで天台の造り給へる十五の経蔵を開き見せしめ給いしに十四を開いて一
の蔵を開かず、其時伝 教大師云く師此の一蔵を開き給えと請い給いしに遼
和尙云く「此の一蔵は開く可き鑰無し天台大師自ら出世して開き給う可し」
と云云其の時伝 教大師・日本より隨身の鑰を以て開き給いしに此の経蔵開
けたりしかば経蔵の内より光室に満ちたりき、其の光の本を尋ねれば此の
一念三千の文より光を放ちたりしなりありがたき事なり、其の時遼和尙は返
つて伝 教大師を礼拝し給いき、天台大師の後身と云云、依つて天台の経蔵
の所釈は遺り無く日本に亘りしなり、天台大師の御自筆の観音經・章安大師
の自筆の止観・今比叡山の根本中堂に収めたり。

一 自性 自力 迦毘羅外道

四性計 二 他性 他力 楼僧伽外道

三 共性 共力 勒娑婆外道

四 無因性 無因力 自然外道 じねんげどう

外道に三人あり、一には仏法外の外道げどう ぶつぽうほか げどう九十五種きゅうじゅうごしゆの外道げどう二に附ふ仏法成ぶつぽうの外道げどう

しょうじょう

小乘

三には学仏法の外道ぶつぽう げどう大乘だいじょうの外道げどうなり。今の法華經は自力も定めて自力にじりき

じゅつかい いっさいしゆじょう

あらず十界の一切衆生を具する自なる故に我が身に本より自の仏界・一切ぶつがい いっさい

しゅじょう

衆生の他の仏界我が身に具せり、されば今・仏に成るに新仏にあらず又他力ぶつがい たりき

も定めて他力に非ず他仏も我等凡夫の自具なるが故に又他仏が我等が如く自たりき

げんどう

に現同するなり、共と無因は略す。

ほけきょう いぜん

法華經已前の諸經は十界互具を明さざれば仏に成らんと願うには必ず九界しよきょう じゅつかいごく あか

を厭いとう九界を仏界に具せざるが故なり、されば必ず惡を滅し煩惱ぼんのうを断じて仏ぶつがい

には成ると談だんず凡夫ぼんぷの身を仏に具ぐすと云わざるが故ゆえに、されば人天惡人の身にんてんあくにん

うしな

を失うしないて仏に成ると申もつす、此これをば妙樂大師は厭離断九の仏と名なずくされば

にぜん

爾前の經の人人は仏の九界の形を現げんずるをば但た仏の不思議ふしぎの神變と思ひ仏の

身に九界が本よりありて現げんずるとは言いわず、されば実を以てさぐり給たまうに

ほけきよう いぜん

法華經已前には但權者の仏のみ有つて実の凡夫が仏に成りたりける事は無き

ほんのう

なり、煩惱を断じ九界を厭いとうて仏に成らんと願うは實には九界を離れたる仏

ゆえ

おうじよう

無き故に往生したる実の凡夫も無し、人界を離れたる菩薩界も無き故に但

ほけきよう

にぜん

じゅうかい

しよけ

のうけ

あくにん

ぜんにん

法華經の仏の爾前にして十界の形を現して所化とも能化とも悪人とも善人と

げどう

のたま

あくにん

ぜんにん

げどう

ほんぶ

ほうべん

も外道とも言われしなり、実の悪人・善人・外道・凡夫は方便の權を行じて

しんじつ

真實の教とうち思いなしてすぎし程に法華經に來つて方便にてありけり、実

けんじむみよう

だん

おうじよう

かくち

には見思無明も断ぜざりけり往生もせざりけりなんと覺知するなり、

いちねんさんぜん

くわし

しる

べ

一念三千は別に委く書す可し。

此の經には二妙あり釈に云く「此の經は唯二妙を論ず」と一には相待妙二

には絶待妙なり、相待妙の意は前の四時の一代聖教に法華經を對して

ぜったいみよう

そうたいみよう

こころ

いちだいしゅうきよう

ほけきよう

爾前と之を嫌ひ、爾前をば當分と言ひ法華を跨節と申す、絶待妙の意は

にぜん

これ

にぜん

とうぶん

ほっけ

かせつ

もう

ぜったいみよう

こころ

爾前と之を嫌ひ、爾前をば當分と言ひ法華を跨節と申す、絶待妙の意は

いちだいしゅうきよう

すなわ ほけきよう

かいえ

ほけきよう

しよかい

一代 聖教 は即ち法華經なりと開會す、又法華經に二事あり一には所開・二

もうかい

かいじこにゆう

ある

かいじようぶつ

には能開なり開示悟入の文・或は皆已成仏道等の文、一部・八卷・二十八品

もうかい

かいじこにゆう

ある

かいじようぶつ

・六万九千三百八十四字・一一の字の下に皆妙の文字あるべしこれ能開の妙

ほけきよう

ほけきよう

なら

だん

にぜん

りやく

なり、此の法華經は知らずして習い談ずる者は但爾前の經の利益なり、

あこんきようかいえ

いわ

我が此の九部の法は衆生に隨順して説く大乘

しじよう

ずいじゆん

だいじよう

阿含經開會の文は經に云く、我が此の九部の法は衆生に隨順して説く大乘

あこんきようかいえ

いわ

我が此の九部の法は衆生に隨順して説く大乘

しじよう

ずいじゆん

だいじよう

に入るに為本なり」と云云、華嚴經・開會の文は一切世間・天人及び阿修羅

みなおも

いほん

けこんきよう

かいえ

いっさいせけん

てんにんおよ

あしゆら

は皆謂えり今の釈迦牟尼仏等の文、般若經開會の文は安樂行品の十八空の

かんきよう

おうじようあんらく

かいえ

ここ

おい

みようじゆつ

あんらくきようほん

あんらくきようほん

文、觀經等の往生安樂・開會の文は「此に於て命終し

すなわ

あんらくせかい

おうじようあんらく

かいえ

ここ

おい

みようじゆつ

あんらくきようほん

あんらくきようほん

て即ち安樂世界に往く」等の文、散善開會の文は「一たび南無仏と称せし皆

すで

ぶつどう

いっさいしじようかいえ

さんぜんかいえ

なむ

ふつ

みな

已に仏道を成じき」の文、一切衆生開會の文は「今・此の三界は皆是れ我が

そ

しじよう

いっさいしじようかいえ

さんぜんかいえ

なむ

ふつ

みな

みな

有なり其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり」、外典開會の文は「若し俗間

きようしよ

ちせい

しせい

いっさいしじようかいえ

わ

みな

しじよう

ほつ

とそつ

かいえ

經書治世語言資生の業等を説かんと皆正法に順ぜん」文、兜率開會の文・

人天にんてんしかい所開會の文しげきゆへにいださず。

此この經を意得いじやくざる人は經の文に此の經を讀んで人天にんてんに生ずと説く文を見

・或あるは兜率とそつ・利とくりなんどにいたる文を見・或あるは安養あんように生ずる文を見て穢土えどに

於おいて法華經を行ぜば經はいみじけれども行者不退ぎやうじゃふたいの地にいた至らざれば穢土えどにし

て流轉るてんし久しく五十六億七千萬歳のせんまん晨あかつきを期し・或あるは人畜等じんちくに生れて隔生きやくす

る間・自みづからの苦しみ限り無しなんと云云

・或あるは自力じりきの修行しゆぎやうなり難行道なんぎやうどうなり等云云、此これは恐らくは爾前にぜん・法華の二

途を知らずして自みづから癡闇ちあんに迷まようのみに非あらず一切衆生の仏眼いっさいしゆじやうぶつげんを閉ふざる人なり、

兜率とそつを勧めたる事すすは小乗經しやうじやうきやうに多し少しは大乗經だいじやうきやうにも勧めたり西方さいほうを勧め

たる事は大乗經だいじやうきやうに多し此等これらは皆所開みなしかいの文なり、法華經の意ほけきやうは兜率とそつに即そくして

十方じゆつぱう仏土中・西方さいほうに即じゆつぱうして十方じゆつぱう仏土中・人天にんてんに即じゆつぱうして十方じゆつぱう仏土中と云云、

法華經は惡人あくにんに対しては十界じゆつかいの惡を説くは惡人・五眼あくにんを具しなんとすれば

悪人あくにんのきわまりを救い、女人にょにんに即して十界じゅつかいを談だんずれば十界じゅつかい皆女人みなにょにんなる事をことな談だんず、何いかにも法華円実ほっけえんじつの菩提心ぼだいしんを發おこさん人は迷まよひの九界くじうへ業力ごうりきに引かるる事無ことなきなり。

此こころの意たまひを存たまいじ給たまひいけるやらん法然上人ほうねんしやうにんも一向念仏いっこうねんぶつの行者ぎやうじやながら選せん択ちやくと申もうす文もんには難行なんぎやう難行道なんぎやうどうには法華經ほけきやう・大日經だいにちきやう等をたば除とこかれたる処ところもありくわし委えしんく見おつじやうよ又慧心えしんの往生要集おつじやうようしゅうにも法華經ほけきやうを除ほけきやうきたり、たとい法然上人ほうねんしやうにん・慧心えしん・法華經ほけきやうを難行なんぎやう・難行道なんぎやうどうとして末代まつだいの機きに叶かなわずと書たまき給たまうとも日蓮にちれんは全いくもちゆべからず、一代いちだい聖教しやうきやうのおきてに違たがい三世さんぜ十方じゆつぽうの仏陀ぶつだの誠言せいげんに違いする故ゆえにいわうやそのぎなし、而しかるに後しやうそくの人の消息ほけきやうに法華經なんぎやうどう・難行道なんぎやうどう・經じやうどはいみじけれども末代まつだいの機きに叶かなわず謗そしらばこそ罪つみにてもあらめ、淨土じやうどに至いたつて法華經ほけきやうをさと覺さるべしと云云にちれん、日蓮にちれんが心いは何いにも此この事はおほひが事ことと覺おほゆるなりかう申もうすもひが事ことにや有よらん、能よく能よく智人ちじんに習ならべべ可べし。

しょうか
正嘉二年二月十四日 日蓮撰 にちれん

五五 十如是事 じゆのぜ 正嘉二年 三十七歳御作 しょうか 410P

我が身が三身即一の本覺の如來にてありける事を今經に説いて云く
によぜそう によぜしよう によぜたい によぜりき によぜさ によぜいん によぜえん によぜか
如是相・如是性・如是体・如是力・如是作・如因・如是縁・如是果・
によぜほう によぜほんまつきよう
如是報・如是本末究竟等文、初めに如是相とは我が身の色形に顕れたる相
を云うなり是を応身如來とも又は解脱とも又は仮諦とも云うなり、次に
い これ おうじんによらい げだつ けたい
如是性とは我が心性を云うなり是を報身如來とも又は般若とも又は空諦と
によぜしよう しんしょう
も云うなり、三に如是体とは我が此の身体なり是を法身如來とも又は中道
い によぜたい しんたい これ ほつしんによらい ちゅうどう
とも法性とも寂滅とも云うなり、されば此の三如是を三身如來とは云うな
ほつしよう じゃくめつ さんによぜ さんじんによらい
り此の三如是が三身如來にて・おはしましけるを・よそに思ひへだてつるが
さんによぜ さんじんによらい
はや我が身の上にてありけるなり、かく知りぬるを法華經をさとれる人とは
ほうけきよう
申すなり此の三如是を本として是よりのこりの七つの如是はいでて十如是
もう さんによぜ ほん これ によぜ じゆのぜ

とは成りたるなり、此の十如是が百界にも千如にも三千世間にも成りたるなり、かくの如く多くの法門と成りて八万法蔵と云はるれどもすべて只一つの三諦の法にて三諦より外には法門なき事なり、其の故は百界と云うは仮諦なり千如と云うは空諦なり三千と云うは中諦なり空と仮と中とを三諦と云う事なれば百界・千如・三千世間まで多くの法門と成りたりと云へども唯一つの三諦にてある事なり、されば始の三如是の三諦と終の七如是の三諦とはただ一つの三諦にて始と終と我が一身の中の理にて唯一物にて唯一つの三諦にて始と終と我が一身の中の理にて唯一物にて不可思議なりければ本と末とは究竟して等しとは説き給へるなり、是をによぜほんまつつきようとう 始の三如是を本とし終の七如是如是本末究竟等とは申したるなり、 始の三如是を本とし終の七如是を末として十の如是にてあるは我が身の中の三諦にてあるなり、此の三諦を三身如来とも云へば我が心身より外には善悪に付けてかみすぢ計りの法もなき物をされば我が身が頓て三身即一の本覺の如来にてはありける事なり、

是これをよそに思しうを衆生しゅじやうとも迷まよいとも凡夫ぼんぷとも云いうなり、是これを我が身の上と
知しりぬるを如来にょらいとも覺さとりとも聖人しょうにんとも智者ちしやとも云いうなり、かう解あきらり明あきらかに
觀かんずれば此の身頓やがて今生こんじやうの中に本覺ほんがくの如来にょらいを顯あらはして即身成仏そくしんじやうぶつとはいは
るるなり、譬たとえば春夏しゅんか・田たを作り植うへつれば秋冬しゅうとうは蔵くらに収おさめて心のままに
用ことうるが如ごとし春より秋をまつ程は久しき様なれども一年の内に待ち得るが
如ごとく此の覺さとりに入いつて仏を顯あらはす程は久しき様なれども一生の内に顯あらはして我
が身さんじんそくいが三身即一の仏となりぬるなり。

此の道に入いぬる人にも上中下じやうちゆうげの三根はあれども同じく一生の内に顯あらはす
なり、上根じやうこんの人は聞きく所ところにて覺さとを極きめて顯あらはす、中根ちゆうこんの人は若もしは一日いちにち・若もし
は一月いちげつ・若もしは一年に顯あらはすなり、下根げこんの人はのびゆく所ところなくてつま詰まりぬれ
ば一生の内に限りたる事なれば臨終りんじゆうの時に至いたりて諸もろもろのみえつる夢も覺さとり
てう現つつになりぬるが如ごとく只今ただまでみ見つる所の生死妄想しやうじもうそうの邪思ひがおもひがめの

ことわり

理はあと形もなくなりて本覺のうつつの覺にかへりて法界をみれば皆

じやうじやう

寂光の極樂にて日来賤と思ひし我が此の身が三身即一の本覺の如來にてあ

るべきなり、秋のいねには早と中と晩との三のいね有れども一年が内に収

むるが如く、此れも上中下の差別ある人なれども同じく一生の内に諸仏如來

いつたいふじ

と一体不二に思い合せてあるべき事なり。

みようほうれんげきよう

妙法蓮華經の体のいみじくおはしますは何様なる体にて・おはしますぞ

たすいだ

と尋ね出してみれば我が心性の八葉の白蓮華にてありける事なり、されば

たいしきよう

我が身の体性を妙法蓮華經とは申しける事なれば經の名にてはあらずし

たい

て・はや我が身の体にてありけると知りぬれば我が身頓て法華經にて法華經

たい

は我が身の体をよび顯し給いける仏の御言にてこそありければやがて我が

さんじんそくい

身三身即一の本覺の如來にてあるものなり、かく覺ぬれば無始より已來今ま

で思いならわしし・ひが思いの妄想は昨日の夢を思いやるが如く・あとかた

もなく成りぬる事なり、是これを信じて一遍も南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと申せば法華經ほけきょうさとりさとりによほうによほうたてまつ

を覺て如法に一部をよみ奉たてまつるにてあるなり、十遍は十部・百遍は百部じゅっぺんによせつしゆぎょう

・千遍は千部を如法によみ奉たてまつるにてあるべきなり、かく信ずるを如説修行

の人とは申すなり、南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょう

五六 一念三千理事いちねんさんぜん

正嘉二年三十七歳御作

406P

十二因縁圖、問う流転いんねんの十二因縁いんねんとは何等ぞや答う一には無明・俱舍むみょうに云くいわ

「宿惑しゆくわくの位は無明むみょうなり」文、無明とは昔愛欲の煩惱ぼんのう起りしを云うなり、男はいかり

父に瞋いかりを成して母に愛を起す、女は母に瞋を成して父に愛を起すなり俱舍くしゃの

第九に見えたり、二には行・俱舍ぐしゃに云くいわ宿の諸業むかししよを行と名くなずと文、昔の造業ぞうぎょう

を行とは云うなり業に二有り一には牽引の業なり我等われらが正まさしく生を受く可べき業

を云うなり、二には円満えんまんの業なり余の一切いっさいの造業ぞうぎょうなり所謂足いわずを折り手を切る

先業せんごうを云うなり是は円満えんまんの業なり、三には識・俱舍ぐしゃに云く「識まさしとは正まさしく生を

結する蘊おんなり」文、正まさく母の腹の中に入る時の五蘊おんなり、五蘊おんとは色・受・

想・行・識なり亦五陰とも云うなり、四には名色・俱舍くしゃに云く「六処の前は

みようしき

名色なり」文、五には六処・俱舍くしゃに云く「眼等の根を生ずるより三和の前は

六処なり」文、六処とは眼・耳鼻・舌・身・意の六根出来ろっこんしゅったいするを云うなり、

六には触そく・俱舍くしゃに云く「三受の因の異なるに於て未だ了知せざるを触なすと名く」

文、火は熱しとも知らず水は寒しとも知らず刀は人を切る物とも知らざる時

なり、七には受・俱舍くしゃに云く「婬愛いんあいの前に在るは受なり」文、寒熱かんねつを知つて

未だ婬欲いんよくを發おこさざる時なり、八には愛・俱舍くしゃに云く「資具しぐと婬とを貪むさぼるは愛

なり」文、女人を愛して婬欲いんよく等を發おこすを云うなり、九には取・俱舍くしゃに云く

「諸の境界もろもろきようかいを得ためんが為あまねくに

馳求なすするを取と名く」文、今世あに有る時世間せけんを営たにんみて他人の物を貪むさぼり取る時

を云うなり、十には有・俱舍くしゃに云く「有は謂いわく正まさしく能よく当有とううの果を牽ひく業

を造る「文、未来又此くの如く生を受く可き業を造るを有とは云うなり、十
一には生・俱舎に云く「当の有を結するを生と名く」文、未来に正く生を受
けて母の腹に入る時を云うなり、十二には老死・俱舎に云く「当の受に至る
までは老死なり」文、生老死を受くるを老死憂悲苦恼とは云うなり。

問う十二因縁を三世兩重に分別する方如何、答う無明と行とは過去の二因

なり識と名色と六人と触と受とは現在の五果なり愛と取と有とは現在の三因

なり生と老死とは未来の兩果なり、私の略頌に云く過去の二因無明行現在の

五果識名色六入触受現在の三因愛取有未来の兩果生老死と、問う十二因縁流轉の

次第如何、答う無明は行に縁たり行は識に縁たり識は名色に縁たり名色は

六入に縁たり六入は触に縁たり触は受に縁たり受は愛に縁たり愛は取に縁た

り取は有に縁たり有は生に縁たり生は老死憂悲苦恼に縁たり是れ其の生死海

に流轉する方なり此くの如くして凡夫とは成るなり、問う還滅の十二因縁の

様如何答いかんつ無明滅すれば則ち行滅ぎようめつす行滅すれば則ち識滅しきめつす識滅すれば則ち

名色滅みやうしきめつす名色滅みやうしきめつすれば則ち六入滅にゆうめつす六入滅にゆうめつすれば則ち触滅しよくめつす触滅しよくめつす

ば則ち受滅すなわす受滅じゆめつすれば則ち愛滅すなわす愛滅あいめつすれば則ち取滅すなわす取滅しゆめつすれば則ち

有滅ゆうめつす有滅ゆうめつすれば則ち生滅すなわす生滅しやうめつすれば則ち老死憂悲苦惱滅すなわす是れ其この

還滅げんめつの様なり仏は還かえつて煩惱ぼんのうを失うつて行く方なり私ひそかに云く中有ちゆうの人には十二

因縁具いんねんつぶさに之無し又天上てんじやうにも具つぶさには之無く又無色界むしつかいにも具つぶさには之無し。

一念三千理事いちねんさんぜん 十如是じゆのぜとは如是相にやぜそうは身なり可し玄二に云く相以て外に擲る覽て別つ文、如是性にやぜしやう

は心なり玄二に云く性以て内に擲る自分文、如是体にやぜたいは身と心となり玄二に云く主質を文、

如是力にやぜりきは身と心となり止に云く力は堪文如是作にやぜさは身と心となり止に云く建立文、如是因にやぜいんは

心なり止に云く因とは果を招くを文、如是縁にやぜえん止いに云く縁は縁業を助くるに由る文、如是果にやぜか止いに云く果は

剋獲こくを果と為す文、如是報にやぜほう因にやを報と曰い文、如是本末究竟等にやぜほんまつくきやう為し後の報を末と為す文、三

種世間せけんとは五陰世間ごおんせけんに五陰世間せけんと名くるなり文、衆生世間しゆじやうせけんるを得る故に衆生世間しゆじやうせけんと名く

種世間せけんとは五陰世間ごおんせけんに五陰世間せけんと名くるなり文、衆生世間しゆじやうせけんるを得る故に衆生世間しゆじやうせけんと名く

種世間せけんとは五陰世間ごおんせけんに五陰世間せけんと名くるなり文、衆生世間しゆじやうせけんるを得る故に衆生世間しゆじやうせけんと名く

種世間せけんとは五陰世間ごおんせけんに五陰世間せけんと名くるなり文、衆生世間しゆじやうせけんるを得る故に衆生世間しゆじやうせけんと名く

種世間せけんとは五陰世間ごおんせけんに五陰世間せけんと名くるなり文、衆生世間しゆじやうせけんるを得る故に衆生世間しゆじやうせけんと名く

種世間せけんとは五陰世間ごおんせけんに五陰世間せけんと名くるなり文、衆生世間しゆじやうせけんるを得る故に衆生世間しゆじやうせけんと名く

種世間せけんとは五陰世間ごおんせけんに五陰世間せけんと名くるなり文、衆生世間しゆじやうせけんるを得る故に衆生世間しゆじやうせけんと名く

種世間せけんとは五陰世間ごおんせけんに五陰世間せけんと名くるなり文、衆生世間しゆじやうせけんるを得る故に衆生世間しゆじやうせけんと名く

種世間せけんとは五陰世間ごおんせけんに五陰世間せけんと名くるなり文、衆生世間しゆじやうせけんるを得る故に衆生世間しゆじやうせけんと名く

種世間せけんとは五陰世間ごおんせけんに五陰世間せけんと名くるなり文、衆生世間しゆじやうせけんるを得る故に衆生世間しゆじやうせけんと名く

種世間せけんとは五陰世間ごおんせけんに五陰世間せけんと名くるなり文、衆生世間しゆじやうせけんるを得る故に衆生世間しゆじやうせけんと名く

種世間せけんとは五陰世間ごおんせけんに五陰世間せけんと名くるなり文、衆生世間しゆじやうせけんるを得る故に衆生世間しゆじやうせけんと名く

種世間せけんとは五陰世間ごおんせけんに五陰世間せけんと名くるなり文、衆生世間しゆじやうせけんるを得る故に衆生世間しゆじやうせけんと名く

種世間せけんとは五陰世間ごおんせけんに五陰世間せけんと名くるなり文、衆生世間しゆじやうせけんるを得る故に衆生世間しゆじやうせけんと名く

るなり文、国土世間こくどせけんじて国土世間こくどせけんと称す文、五陰ごおんとは新訳しんやくには五蘊おんと云うなり陰と

は聚集じゅしゅうの義なり一に色陰・五色これ是なり・二に受陰・領納りょうのう是なり・三に相陰

・俱舍くしゃに云く想は像を取るを体なと為すと文・四に行陰・造作ぞうさく是行なり・五に

識陰・了別こ是れ識なり止の五に婆沙を引いて云く識・先ず了別いし次に受は

領納りょうのうし・相は相貌そうみょうを取り・行は違徒いじゅうを起し・色は行に由よつて感ずと。

百界・千如・三千世間の事、十界互具即百界と成るなり、地獄じごく十如是五陰

世間せけん是国土世間こくどせけん下赤鉄しやくてつ、餓鬼がき十如是五陰世間ごおんせけん十如是国土世間こくどせけん地下ちか畜生ちくしやう十如是五陰世間ごおんせけん

十如是国土世間こくどせけん水陸空修羅しゆら十如是五陰世間ごおんせけん十如是国土世間こくどせけん海畔かいはん底、人間にやうもん十如是、五陰世間ごおんせけん

十如是国土世間こくどせけん弥み四州、天てん十如是五陰世間ごおんせけん十如是国土世間こくどせけん十如是宮殿しやうもん声聞しやうもん十如是五陰世間ごおんせけん

十如是国土世間こくどせけん同居土、縁覺えんかく十如是五陰世間ごおんせけん十如是国土世間こくどせけん同居土、菩薩ぼさつ十如是五陰

世間せけん十如是国土世間こくどせけん方便ほうべん実報じつぽう、仏ぶつ十如是五陰世間ごおんせけん十如是国土世間こくどせけん寂光土。

止觀しがんの五に云く、「心縁がと合すれば則ち三種世間さんしゆ・三千の性相しやうそう皆・心より

起るおこ「文、弘ぐの五いに云いく」故ゆえに止しかん觀まさに正かんぼうしく觀法かんぼうを明いたすに至いたつて並ならびに三千さんぜんを以もつて指南しなんと為なす、乃すなわち是しゆれ終窮しゆくきやう究竟きやうきやうの極說きよくなり故ゆえに序せつこしんちゆうしよぎやうの中に說せつこしんちゆうしよぎやう己心中しこしんちゆうしよぎやう所行しよの法門ほうもんと云まことゆえあう良こうに以たす有たするなり、請こつう尋たすねて讀いまん者心いえんに異緣いえん無いかれ「文、又云いく

「妙境いちねんさんぜんの一い念あか三千なんを明いっさいさずんば如何なんぞ一いっさいに一切いっさいを撰しる可べけん、三千さんぜんは一念いちねんの無明むみやうを出いでず是かくの故ゆえに唯苦ただ因苦く果かのみ有いり「文、又云いく「一切いっさいの諸しよ業じゆつかい十界ひやつかい・百界ひやつかい・千如せんによ・三千さんぜん世間せけんを出いでざるなり「文、籤せんの二いに云いく「飯いは

即すなわち衆生しゆじやう・實すなわは即すなわち五陰ごおん及および国土こくど・即すなわち三世間せけんなり千せんの法みは皆みな三ゆえなり故ゆえに三千さんぜん有いり「文、弘ぐの五いに云いく「一念いちねんの心こころに於おて十界じゆつかいに約おさせざれば事ことを収おさむる

こと 从あまね三諦さんたいに約させざれば理あまねを撰あまねること周あまねからず十如じゆつかいを語かたらざれば因果いんが備そなわらず三世間せけん無えしやうつんば依正えしやうつ尽ききず「文、記いの一いに云いく「若さんぜん三千さんぜんに非あらざれば撰しゆじやう

ること・从も若もし円心あらに非あらざれば三千さんぜんを撰せつせず「文、玄いの二いに云いく「但衆生しゆじやう

法はは太はなだ広ぶつぽうく仏法はなは太はなだ高おし初学なんに於なて難すなわと為やすし心なは則すなわち易やすしと為なす「文、弘ぐ

の五に云く「初に華嚴を引くことは心の工なる画師の如く種種の五陰を造る
一切世界の中に法として造らざること無し、心の如く仏も亦爾なり仏の如く
衆生も然なり心仏及び衆生是の三差別無し若し人三世一切の仏を求め知ら
んと欲せば当に是くの如く観ずべし心は諸の如来を造る」と、金論に云く
「実相は必ず諸法・諸法は必ず十如・十如は必ず十界・十界は必ず身土な
り」

三身釈の事、先ず法身とは大師大經を引いて一切の世諦は若し如来に於て
は即ち是第一義諦なり衆生顛倒して仏法に非ずと謂えり」と釈せり、然れば
則ち自他・依正・魔界・仏界・染淨・因果は異なれども悉く皆諸仏の法身に
背く事に非ざれば善星比丘が不信なりしも楞伽王の信心に同じく般若蜜外道
が意の邪見なりしも須達長者が正見に異らず、即ち知んぬ此の法身の本は
衆生の当体なり、十方諸仏の行願は実に法身を証するなり、次に報身とは

だいし いわ 大師の云く、「法如如の智如如真実の道に乘じ来つて妙覺を成ず智如の理に
かな 称う理に従つて如と名け智に従つて来と名く即ち報身如来なり盧舎那と名け
ここ 此には淨滿と翻ず」と釈せり、此れは如如法性の智・如如真実の道に乘じて
みようかくきよう 妙覺究竟の理智・法界と冥合したる時・理を如と名く智は来なり。

五七 一念三千法門

いちねんさんぜんほうもん

正嘉二年 三十七歳御作 412P

ほけきよう よきよう 法華經の余經に勝れたる事何事ぞ此の經に一心三觀・一念三千と云う事あ

なにごと いっしんさんかん いちねんさんぜん

り、薬王菩薩・漢土に出世して天台大師と云われ此の法門を覺り給いしかど
やくおうぼさつ かんど しゅつせ てんだいだいし ほうもん さと たまい

も先ず玄義十卷・文句十卷・覺意三昧・小止觀・淨名疏・四念処・次第
げんぎ もんく かくいさんまい しかん じようみようじょ ねんじょ しだい

禅門等の多くの法門を説きしかども此の一念三千の法門をば談じ給はず
ぜんもん ほうもん と いちねんさんぜん ほうもん たま

百界・千如の法門計りなり、御年五十七の夏四月の比・荊州玉泉寺と申す処
ひゃつかい・せんによ ほうもんばか ころ けいしゅうぎよくせんじ もう ところ

にて御弟子章安大師に教え給ふ止觀と申す文十卷あり、上四帖に猶秘し給い
おんでししょうあんだいし たま しかん もう なお たまい

て但六即四種三昧等計りなり、五の卷に至つて十境・十乘・一念三千の法門
そくししゅざんまい ばか いた 十乗 いちねんさんぜん ほうもん

を立て夫れ一心に具す等と云云是より二百年後に妙樂大師釈して云く「そ いっしん ぐ まさ」
知るべし身土一念の三千なり故に成道の時・此の本理に称て一身一念法界に
へん しんどういちねん さんぜん ゆえ じょうどう いちねんほっかい
遍し」と云云、此の一念三千・一心三觀の法門は法華經の一の卷の十如是よ
いねんさんぜん いっしんさんかん ほうもん ほけきょう いっしんさんかん もう よしゅう
り起れり、文の心は百界・千如・三千世間云云、さて一心三觀と申すは余宗
によぜ によぜ ひがごと さんぜんせけん さんぜんせけん とうだい なんがく おんぎ
は如是とあそばす是れ僻事にて二義かけたり天台・南岳の御義を知らざる故
なり、されば当宗には天台の所釈の如く三遍読に功德まさる、第一に是相如
てんだい しよしゃく ごと よむ くだく だいいち
と相性体力以下の十を如と云ふ如と云うは空の義なるが故に十法界皆空諦な
と けい ちから じゆ ほうかいみなくうたい
り是を読み觀ずる時は我が身即・報身如来なり八万四千又は般若とも申す、
これ によぜそうこ そく ほうしんにらい はちまん はんや もう
第二に如是相是れ我が身の色形顯れたる相なり是れ皆仮なり相性体力以下の
第二に如是相是れ我が身の色形顯れたる相なり是れ皆仮なり相性体力以下の
十なれば十法界皆仮諦と申して仮の義なり是を読み觀ずる時は我が身即・
ほうかいみなけたい もう によぜ これ 読み觀ずる時は我が身即・
あうじんにらい げだつ もう によぜ ちゅうどう もう
応身如来なり又は解脱とも申す、第三に相如是と云うは中道と申して仏の
ほうしん ちゅうどう
法身の形なり是を読み觀ずる時は我が身即・法身如来なり又は中道とも
ほうしん ちゅうどう

ほつしょう 法性とも涅槃とも寂滅とも申す、此の三を法報応の三身とも空仮中の三諦
ほつしん とも法身・般若・解脱の三徳とも申す此の三身如来全く外になし我が身即・
さんとくきよう さんとくきよう 三徳究竟の体にて三身即一身の本覚の仏なり、是をしるを如来とも聖人とも
悟とも云う知らざるを凡夫とも衆生とも迷とも申す。

じゅつかい 十界の衆生・各互に十界を具足す合すれば百界なり百界に各各十如を
く 具すれば千如なり、此の千如是に衆生世間・国土世間・五陰世間を具すれば
さんぜん 三千なり、百界と顯れたる色相は皆総て仮の義なれば仮諦の一なり千如は總
て空の義なれば空諦の一なり三千世間は総じて法身の義なれば中道の一な
り、法門多しと雖も但三諦なり此の三諦を三身如来とも三徳究竟とも申すな
り始の三如是は本覚の如来なり、終の七如是と一体にして無二無別なれば
ほんまつくきよう 本末究竟等とは申すなり、本と申すは仏性・末と申すは末顯の仏・九界の名
くきよう なり究竟等と申すは妙覺究竟の如来と理即の凡夫なる我等と差別無きを究竟

等^{びょうどうだいえ}とも平等大慧の法華經^{ほけきょう}とも申^{もう}すなり、始^{はじめ}の三^{さん}如^{にょぜ}是^は本覺^{ほんがく}の如來^{にょらい}なり本覺^{ほんがく}の如來^{にょらい}を悟^{さと}り出し給^{たま}へる妙覺^{みょうかく}の仏^{ぶつ}なれば我等^{われら}は妙覺^{みょうかく}の父母^{ふぼ}なり仏^{ぶつ}は我等^{われら}が所生^{しよしょう}の子^こなり、止^{とど}の一^{いつ}に云^いく、「止^{とど}は則^{すなわち}仏^{ぶつ}の母^{はは}・觀^{くわん}は即^{すなわち}仏^{ぶつ}の父^{ちち}なり」と云云、譬^{たと}えば人^{ひと}十人あらんずるが面面^{めんめん}に藏藏^{ざうざう}に宝^{たから}をつみ我が藏^{ざう}に宝^{たから}のある事^{こと}を知らずかつへ死^ししこごへ死^しす、・或^{ある}は一人・此^{こゝ}の中^{うち}にかしこき人^{ひと}ありて悟^{さと}り出^いすがごとし九人^{くじん}は終^{つい}に知らず、然^{しか}るに・或^{ある}は教^{おし}えられて食^くし・或^{ある}はくくめられて食^くするが如^{ごと}し、弘^{くわん}の一^{いつ}の止觀^{しがん}の二字^{ふたご}は正^{ただ}しく聞^{もん}体^{たい}を示^{しめ}す聞^{もん}かざる者^{もの}は本末究竟^{ほんまつくきやう}等^{いたず}も徒^たらか、子^こなれども親^{おや}にまさる事^{こと}多^{おほ}し重華^{ちやうか}はかたくなはしき父^{ちち}を敬^{うやまつ}いて賢^{けんじん}人の名^なを得^えたり、沛公^{はいこう}は帝王^{ていおう}と成^なつて後^{あと}も其^その父^{ちち}を拜^{まつ}す其^その敬^{うやまつ}われし父^{ちち}をば全く王^{わう}といはず敬^{うやまつ}いし子^こをば王^{わう}と仰^{おほ}ぐが如^{ごと}し、其^それ仏^{ぶつ}は子^こなれども賢^{かしこ}くましまして悟^{さと}り出し給^{たま}へり、凡^{ぼんぷ}夫^ふは親^{おや}なれども愚癡^{ぐち}にして未^{いま}だ悟^{さと}らず委^{くわ}しき義^ぎを知らざる人^{ひと}・毘盧^{びる}の頂上^{ちやうじやう}をふむなんと悪口^{あくぐち}す大^{おほ}なる僻事^{ひがこと}なり。

いっしんさんかん
一心三觀に付いて次第の三觀・不次第の三觀と云う事あり委く申すに及ば
ず候、此の三觀を心得すまし成就したる處を華嚴經に三界唯一心と云云、
天台は諸水入海とのぶ、仏と我等と総て一切衆生・理性一にて・へだてなき
を平等大慧と云うなり、平等と書いてはおしなべてと読む、此の一心三觀・
一念三千の法門・諸經にたえて之無し法華經に遇わざれば争か成仏す可き
や、余經には六界八界より十界を明せどもさらに具を明かさず、法華經は念念
に一心三觀・一念三千の謂を觀ずれば我が身本覺の如来なること悟り出され
無明の雲晴れて法性の月明かに妄想の夢醒て本覺の月輪いさぎよく父母
所生の肉身・煩惱具縛の身・即本有常住の如来となるべし、此を即身成仏
とも煩惱即菩提とも生死即涅槃とも申す、此の時法界を照し見れば悉く中道
の一理にて仏も衆生も一なり、されば天台の所釈に、「一色一香中道に非ざる
こと無し」と釈し給へり、此の時は十方世界皆寂光淨土にて何れの處をか

弥陀みだやくし薬師等じょうどの浄土じょうどとは云わん、是これを以もつて法華經ほけきょうに「是この法ほうは法位ほういに住すして世間せけんの相常住じょうじゅうなり」と説とき給たまふさては經きやうをよまずとも心地しんじの觀念かんねん計はかりにて成じやうぶつ仏ぶつす可べきかと思おもいたれば一念いちねん三千さんぜんの觀念かんねんも一心いつしん三觀さんかんの觀法かんぼうも妙法蓮華經みやうほうれんげきやうの五字ごじに納おされり、妙法蓮華經みやうほうれんげきやうの五字ごじは又我等われらが一心いつしんに納おさりて候あきけり、天台てんだいの所しよ釈しゃくに「此みやうほうれんげきやうの妙法蓮華經ほんちじんは本地甚深おうぞうさんぜの奥藏にらい三世しやうとくの如來しやうとくの証得しやうとくしたもう所しよなり」と釈しゃくしたり、さて此みやうほうれんげきやうの妙法蓮華經とを唱となうる時しんちゆう心中ほんがくの本覺あらわの仏われら顯あらわる我等われらが身みと心こころをば藏たに譬たとへ妙たの一字ひとを印たに譬たとへたり、天台てんだいの御ご釈しやくに「秘密ひみつの奥藏おうぞうをひらく之これを稱しょうして妙なと為なす・權實こんじつの正軌しやうきを示ゆえす故ゆえに号なして法なと為なす、久遠くおんの本ほん果くわを指こす之これを喻たとうるに蓮れんを以もつてす、不二ふつじの円道えんどうに會えす之これを譬たとうるに華くわを以もつてす、声仏ぶつじ事を為なす之これを稱しょうして經きやうと為なす」と釈しゃく給たまう、又「妙ふとは不可思議ふかしぎの法ほうを褒美ほうびするなり又妙じゆつとは十界じゆつかい・十如じゆじゆ・權實こんじつの法ほうなり」と云云、經きやうの題目だいもくを唱となうると觀念かんねんと一ひとなる事こと心得こころえがたしと愚癡ぐちの人は思おもひ給たまふべし、されども天台てんだい

止の二に而於説黙と云へり、説とは経・黙とは観念なり、又四教義の一に云く

「但功の唐捐ならざるのみに非ず亦能く理に契うの要なるをや」と云云、

てんだいだいし

もう

やくおうぼさつ

だいいし

せつに

かんに

しゃく

たま

てんだい

天台大師と申すは薬王菩薩なり此の大師の説而観而と釈し給ふ元より天台の

しよしゃく

いんねん

やつきよう

かんじん

所釈に因縁・約教・本・迹・観心の四種の御釈あり四種の重を知らずして

ひと

いっこう

いっこうかんじん

おもて

ほけきよう

ほつび

一しなを見たる人・一向本・迹をむねとし一向観心を面とす、法華経に法譬

いんねん

いた

しよぶつしゆつせ

ほんかい

いっさいしゆじよう

じようぶつ

因縁と云う事あり法説の段に至つて諸仏出世の本懐・一切衆生・成仏の

じきどう

いっさいしゆじよう

じきしだいじよう

いんねん

たまい

し

直道と定む、我のみならず一切衆生・直至道場の因縁なりと定め給いしは

だいもく

てんだい

え

いちじよう

と

題目なり、されば天台玄の「衆善の小行を会して広大の一乗に帰す」と

もう

たま

たといしゃくそん

ほんかい

のべ

広大と申すは残らず引導し給うを申すなり、仮使釈尊一人本懐と宣べ給うと

とうかく

あお

べ

いわんやしよぶつしゆつせ

ほんかい

ぜんしゆう

かんじん

も等覚以下は仰いで此の経を信ず可し況や諸仏出世の本懐なり、禅宗は観心

ほんかい

あお

いちねんさんぜん

いっしんさんかん

かんじん

を本懐と仰ぐとあれども其は四種の一面なり、一念三千・一心三觀等の觀心

ばか

ほけきよう

かんじん

だいもく

じゆのぜ

ところ

だいもく

計りが法華経の肝心なるべくば題目に十如是を置くべき処に題目に

妙法蓮華經と置かれたる上は子細に及ばず、又当世の禪宗は教外別伝と云い給うかと思へば又捨られたる円覚經等の文を引かるる上は実經の文に於て御綺に及ぶべからず候、智者は読誦に觀念をも並ぶべし愚者は題目計りを唱ふとも此の理に會う可し、此の妙法蓮華經とは我等が心性・総じては一切衆生の心性八葉の白蓮華の名なり是を教え給ふ仏の御詞なり、無始より以来・我が身中の心性に迷て生死を流転せし身今・此の經に値ひ奉つて三身即一の本覺の如來を唱うるに踴れて現世に其内証成仏するを即身成仏と申す、死すれば光を放つ是れ外用の成仏と申す

來世得作仏とは是なり、略拳經題・玄収一部とて一遍は一部云云、妙法蓮華經と唱うる時心性の如來踴る耳にふれし類は無量阿僧祇劫の罪を滅す一念も隨喜する時即身成仏す縦ひ信ぜざれども種と成り熟と成り必ず之に依て成仏す、妙樂大師の云く「若は取・若は捨・耳に經て縁と成る、或

いは順・或いは違終いに斯れに因つて脱す」と云云、日蓮云く若取・若捨

・或順・或違の文肝に銘ずる詞なり法華經に若有聞法者等と説れたるは

是か、既に聞く者と説れたり觀念計りにて成仏すべくば若有觀法者と説かる

べし、只天台の御料簡に十如是と云うは十界なり此の十界は一念より事起

り十界の衆生は出来たりけり、此の十如是と云は妙法蓮華經にて有けり此

の娑婆世界は耳根得道の国なり以前に申す如く当知身土と云云、一切衆生の

身に百界・千如・三千世間を納むる謂を明が故に是を耳に触るる一切衆生

は功德を得る衆生なり、一切衆生と申すは草木・瓦礫も一切衆生の内なる

か、有情、抑草木は何ぞ金論に云く「一草一木・一礫一塵・各一仏性・

各一因果・具足緣了」と等と云云、法師品の始に云く無量の諸天・竜王・夜叉

・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩羅伽・人と非人と及び比丘・比丘尼、

妙法蓮華經の一偈・一句を聞いて乃至一念も随喜せん者は我皆

あのかたさんみやくさんぼだい
阿耨多羅三藐三菩提の記を与え授く」と云云、非人とは総じて人界の外一切
有情界とて心あるものなり況や人界をや、法華經の行者は如説修行せば必
ず一生の中に一人も残らず成仏す可し、譬えば春夏田を作るに早晚あれども
一年の中には必ず之を納む、法華の行者も上中下根あれども必ず一生の中に
証得す、玄の一に云く、「上中下根皆記を与う」と云云、觀心計りにて成仏
せんと思ふ人は一方かけたる人なり、況や教外別伝の坐禅をや、法師品に云く
「薬王多く人有て在家・出家の菩薩の道を行ぜんに若し是の法華經を見聞し
読誦し書持し供養すること得ること能わずんば当に知るべし是の人は未だ善
く菩薩の道を行ぜず、若し是の經典を聞くこと得ること有らば乃ち能善菩薩
の道を行ずるなり」と云云、觀心計りにて成仏すべくんば争か見聞読誦と云
わんや、此の經は専ら聞を以て本と為す凡此の經は惡人・女人・二乘・闍提
を簡ばず故に皆成仏道とも云ひ又平等大慧とも云う、善惡不二・邪正一如

と聞く処ところにやがて内証ないしょう成仏じやうぶつす故ゆゑに即身成仏そくしんじやうぶつと申し一生しやうに証得じやうとくするが故ゆゑに
一生妙覺みやうかくと云ふ、義を知らざる人なれども唱ふれば唯仏ゆゐぶつと仏ぶつと悦よろこび給たまふ我われ即そく
歡喜かんき・諸仏しよぶつ亦然しかん云云、百千合しよぶつやくねんせたる藥も口くちにのまざれば病愈いえず蔵ざうに宝ほうを持
ども開く事をしらずしてかつへ懷たもに藥たもを持ても飲まん事をしらずして死する
が如ごとし、如意宝珠にょいほうじゆと云う玉たまは五百弟子品でしの此この經きやうの徳とくも又また此この如ごとし、觀心かんじん
を並ならべて読めば申もうすに及およばず觀念かんねんせずと雖いへども始もとに申もうしつることく所謂諸法いわゆるしよほう
によぜそう
如是相如云云と読む時は如ごとは空くうの義ぎなれば我が身みの先業せんごうにうくる所の相性体そくご
力ちから其その具ぐする所の八十八使はちじやくはちの見惑けんわく・八十一品はちじやくいちの思惑しわく・其その空くうは報身ほうしん如来にょらいなり、
所謂諸法いわゆるしよほう如是相云云とよめば是これ飯いの義ぎなれば我が此この身先業せんごうに依よつて受け
たる相性体力云云其その具ぐしたる塵沙じんじやの惑ごつ悉ことごとくく即身そくしん心身しん如来にょらいなり、所謂諸法いわゆるしよほう如是
と読む時は是これ中道ちゆうだうの義ぎに順したがじて業ごふに依よつて受くる所の相性等云云、其に
隨したがいたる無明むみやう皆退みなしりぞいて即身法身そくしんほうしんの如来にょらいと心を開く、此この十如是じゆのぜ・三轉さんてんによま

るる事・三身即一身・一身即三身の義なり三に分るれども一なり一に定まれども三なり。

五八 十法界事 元年 三十八歳御作 417P

二乗三界を出でざれば即ち十法界の数量を失う云云、問う十界互具を知らざらん者六道流転の分段の生死を出離して變易の土に生ず可きや、答う二乗は既に見思を断じ三界の生因無し底に由つてか界内の土に生る事を得ん是の故に二乗永く六道に生ぜず、故に玄の第二に云く「夫れ變易に生るに則ち三種有り三蔵の二乗・通教の三乗・別教の三十心」已上此の如き等の人は皆通惑を断じ變易の土に生ずることを得て界内分段の不浄の国土に生ぜず。難じて云く小乗の教は但是れ心生の六道を談じて是れ心具の六界を談ずるに非ず、是の故に二乗は六界を顕さず心具を談ぜず云何ぞ但六界の見思を断じて六道を出ず可きや、故に寿量品に云える一切世間・天人・阿修羅とは

爾前・迹門・両教の二乗・三教の菩薩並に五時の円人を皆天人・修羅と云う
にぜん しゃくもん にじよう ぼさつ えんじん みなてんにん しゅら
豈に未断見思の人と云うに非ずや、答う十界互具とは法華の淵底此の宗の冲微
あに みだんけんじ あら じゅつかいごく ほっけ えんでい ちゅうび
なり四十余年の諸経の中には之を秘して伝えず、但し四十余年の諸の經教
よんじゆうねん しよきよう これ ただ よんじゆうねん もろもろきようぎよう
の中に無数の凡夫見思を断じて無漏の果を得能く二種の涅槃の無為を証し
じんじゅ ぼさつ ほんぶけんじ むろ よ ねはん むい
塵数の菩薩・通別の惑を断じ頓に二種の生死の縛を超ゆ、無量義經の中に
よんじゆうねん しよきよう あ みけんしんじつ いえど しか なおにぜん さんじよう
四十余年の諸経を挙げて未顕真実と説くと雖も而も猶爾前・三乗の益を
ゆる ほっけ おい しようじきしやほうべん いえど なおけんしよぼさつじゅきさぶつ
許す、法華の中に於て正直捨方便と説くと雖も尚見諸菩薩授記作仏と説く
か こと にぜん おい とつぶん ゆる あら ただ にぜん しよきよう
此くの如き等の文爾前の説に於て当分の益を許すに非ずや、但し爾前の諸経
に二事を説かず謂く実の円仏無く又久遠実成を説かず故に等覺の菩薩に至る
こんじよう しゆう えんぶつなく くおんじつじよう ゆえ とうかく ぼさつ いた
まで近成を執する思い有り此の一边に於て天人と同じく能迷の門を挙げ生死
ぼんのう いちじ だんね ゆえ ただみけんしんじつ ろっかい
煩惱・一時に断壊することを証せず故に唯未顕真実と説けり、六界の互具を
あか 明さざるが故に出ず可からずとは此の難甚だ不可なり、六界互具せば即ち
ゆえ べ なんはなはだ ふか ろっかい すなわ

十界互具す可し何となれば権果の心生とは六凡の差別なり心生を觀ずるに
何ぞ四聖の高下無からんや。

第三重の難に云く所立の義誠に道理有るに似たり委く一代聖教の前後を
うるに法華本門並に觀心の智慧を起さざれば円仏と成らず、故に実の凡夫
にして権果だも得ず所以に彼の外道五天竺に出でて四顛倒を立つ、如來出世
して四顛倒を破せんが為に苦・空等を説く此れ則ち外道の迷情を破せんが為
なり、是の故に外道の我見を破して無我に住するは火を捨てて以て水に隨う
が如し堅く無我を執して見思を斷じ六道を出ずると謂えり、此れ迷の根本な
り故に色心俱滅の見到に住す大集等の經經に斷常の二見と説くは是れなり、
例せば有漏外道の自らは得道すと念えども無漏智に望むれば未だ三界を出で
ざるが如し、仏教に値わずして三界を出ずるといわば是の處有ること無し
小乗の二乗も亦復是くの如し、鹿苑施小の時外道の我を離れて無我の見到

住す此の情を改めずして四十余年草庵に止宿するの思い暫くも離るる時無し、
又大乗の菩薩に於て心生の十界を談ずと雖も而も心具の十界を論ぜず、又
・或る時は九界の色心を断尽して仏界の一理に進む是の故に自ら念わく三惑
を断尽して変易の生を離れ寂光に生るべしと、然るに九界を滅すれば是れ
則ち断見なり進んで仏界に昇れば即ち常見と為す九界の色心の常住を滅す
と欲うは豈に九法界に迷惑するに非ずや、又妙楽大師の云く「但し心を観ず
と言わば則ち理に称わず文、此の釈の意は小乗の觀心は小乗の理に称わ
ざるのみ、又天台の文句第九に云く「七方便並に究竟の滅に非ず」已上、此の
釈は是れ爾前の前三教の菩薩も実には不成仏と云えるなり、但し未顕真実
と説くと雖も三乗の得道を許し正直捨方便と説くと雖も而も
見諸菩薩授記作仏と云うは、天台宗に於て三種の教相有り第二の化導の始終
の時過去の世に於て法華結縁の輩有り爾前の中に於て且らく法華の為に

さんじょうとつぶん とくどう 三乗 当分の得道を許す所謂種熟脱の中の熟益の位なり是は尚迹門の説なり、
ほんもんかんじん 本門 觀心の時は是れ実義に非ず一往許すのみ、其の実義を論ずれば如来
くおん 久遠の本に迷い一念三千を知らざれば永く六道の流転を出ず可からず、故に
まよい いちねんさんぜん 釈に云く、「円乗の外を名けて外道と為す」文、又「諸善男子・樂於小法・
えんじょう 徳薄垢重者」と説く若し爾れば経釈共に道理必然なり、答う執難有りと
とくはくじゅう 徳薄垢重者」と説く若し爾れば経釈共に道理必然なり、答う執難有りと
いんどそ ふか 雖も其の義不可なり、所以は如来の説教は機に備りて虚からず是を以て頓等
しきよう の四教蔵等の四教八機の為に設くる所にして得益無きに非ず、故に無量義経
しきよう には、是の故に衆生の得道差別あり」と説く、誠に知んぬ、終に無上菩提を成ず
かく ゆえ しゅじょう とくどうさへつ 是の故に衆生の得道差別あり」と説く、誠に知んぬ、終に無上菩提を成ず
いんど ことを得ず」と説くと雖も而も三法・四果の益無きに非ず、但是れ速疾頓成
りやつこう うえ と歴劫迂回との異なるのみ、是れ一向に得道無きに非ざるなり、是の故に・或
さんみょうろうくつ は三明六通も有り・或は普現色身の菩薩も有り縦い一心三觀を修して以て
さんなく 同体の三惑を断ぜずとも既に析智を以て見思を断ず何ぞ二十五有を出でざら

ん、是かくの故ゆえに解げ釈しゃくに云いく「も若し衆しゆ生じやうに遇あつて小しやう乘じやうを修しゆせしめば我すなわ則けんち慳どん貪んに墮だせん此この事ふ不可かなりとして祇ただ二十五有いを出だす」已上まさ、当まさに知るべし此この事ふ不可かと説いくと雖いえども而しかも出し界しゆ有つかいり但是これ不思議ふしぎの空くうを觀くわんぜざるが故ゆえに不思議ふしぎの空くう智ちを顯あらわさずと雖いえども何なんぞ小くう分げの空くう解げを起おこさざらん、若もし空くう智ちを以もつて見けん思じを断だんぜずと云いわば開しやう善もんの無む声しやう聞もんの義ぎに同おなずるに非あらずや、況いや今いの經わんは正しやう直じ捨じや権けん・純じゆん円えん一いち実じつの説せつなり諸もろの爾もろ前もろの聲しやう聞もんの得とく益やくを拏あげて「諸しよ漏ろ已すでに尽つきて復また煩ぼん惱のう無むし」と説とき又と「実あらに阿あ羅ら漢かんを得え・此この法ぽうを信しんぜず是この処こ有ありること無むし」と云いい又と「三百ひやく由じゆ旬じゆんを過すぎて一け城さを化け作さす」と説とく、若もし諸もろの聲しやう聞もん全ぜんく凡ぼん夫ぶに同おなぜば五百ひやく由じゆ旬じゆん一いっ歩ぽも行くく可べからず。

又い云わく「自みら所得しやくの功く徳とくに於おて滅めつ度どの想しやうを生なじて当まさに涅槃ねはんに入いるべし、我われ余あ国こくに於おて作さ仏ぶつして更いに異い名み有あらん是この人にん滅めつ度どの想しやうを生なじて涅槃ねはんに入いると雖いえども而しかも彼かの土ちに於おて仏ぶつの智ち慧えを求もとめて是この經きやうを聞きこくことを得えん」已上まさ、此この

文既に証果の羅漢・法華の座に來らずして無余涅槃に入り方便土に生じて
法華を説くを聞くと見えたり、若し爾らば既に方便土に生じて何んぞ見思を
断ぜざらん是の故に天台・妙樂も「彼土得聞」と釈す、又爾前の菩薩に於て
始めて我が身を見我が所説を聞いて即ち皆信受し如来慧に入りనికి」と説
く、故に知んぬ爾前の諸の菩薩三惑を断除して仏慧に入ること、故に解釈
に云く「初後の仏慧円頓の義齊し」已上。

・或は云く、故に始終を挙ぐるに意・仏慧に在りと若し此等の説相・經・釈
共に非義ならば正直捨權の説・唯以一大事の文・妙法華經・皆是眞実の
証・誠皆以て無益なり皆是眞実の言は豈一部八卷に亘るに非ずや、釈迦・多宝
・十方分身の舌相・至梵天の神力・三世諸仏の誠諦・不虛の証・誠・空く
泡沫に同ぜん、但し小乗の断常の二見に至つては且く大乘に對して小乗
を以て外道に同ず小益無きに非ざるなり、又七方便並に究竟の滅に非ざるの

釈・或は復但し心を觀ずと言わば則ち理に稱わずとは又是れ円実の大益に對
して七方便の益を下して並に非究竟滅・即不称理と釈するなり。

第四重の難に云く法華本門の觀心の意を以て一代聖教を按ずるに菴羅果
を取つて掌中に捧ぐるが如し、所以は何ん迹門の大教起れば爾前の大教亡

じ・本門の大教起れば迹門・爾前亡じ・觀心の教起れば本・迹爾前共に亡
ず此れは是れ如来所説の聖教・從浅至深して次第に迷を轉ずるなり、然れ

ども如来の説は一人の爲にせず此の大道を説きて迷情除かざれば生死出で
難し、若し爾前の中に八教有りとは頓は則ち華嚴・漸は則ち三昧・秘密と

不定とは前四味に亘る・蔵は則ち阿含・方等に亘る・通は是れ方等・般若・
円・別は是れ則ち前四味の中に鹿苑の説を除く、此くの如く八機各各不同な

れば教説も亦異なり四教の教主亦是れ不同なれば当教の機根余仏を知らず、
故に解釈に云く「各各仏独り其の前に在すと見る」已上。

人天にんてんの五戒ごかい・十善じゅうぜん・二乗にじょうの四諦したい・十二はつ・菩薩ぼさつの六度ろくど・三祇さんぎ・百劫ひゃくかく・或はある動逾塵劫どうゆじんこく・或はある無量阿僧祇劫むりょうあそぎこく・円教えんきょうの菩薩ぼさつの初発心時しよほつしん・便成びんじやうしやうかく正覺しやうかく・明かあきらに知んぬ機根きこん別なるが故ゆえに説教せつきやう亦別なり、教別なるが故ゆえに行も亦別なり行別なるが故ゆえに得果も別なり此れ即ち各別の得益とくやくにして不同なり。

然るに今法華方便品に「衆生しゆじやうをして仏知見ぶつちけんを開かしめんと欲す」と説き

給う爾の時八機並に悪趣あくしゆの衆生しゆじやう悉く皆同じく釈迦如来しやくかにらういと成り互に五眼ごがんを具し

一界じゆつかいに十界じゆつかいを具し十界じゆつかいに百界ひゃくかいを具せり、是の時こ・爾前にぜんの諸経しよきやうを思惟しゆいするに

諸経しよきやうの諸仏しよぶつは自界じじやうの二乗にじやうを二乗にじやうも又菩薩界ぼさつを具せず三界さんがいの人天にんてんの如きは

成仏じやうぶつの望絶のぞみえて二乗にじやう・菩薩ぼさつの断惑だんわく即ち是れ自身じしんの断惑だんわくなりと知らず、二乗さんじやう

四乗しじやうの智慧ちえは四悪趣しあくしゆを脱るるに似たりと雖も互に界界へだいを隔つ而も皆是れ一みなこ体

なり、昔の経は二乗にじやうは但自界けんじの見思だんじよを断除ろつかいすると思つて六界けんじの見思けんじを断ずる

ことを知らず菩薩ぼさつも亦是くまたかくの如し自界さんなくの三惑だんじんを断尽ほせんと欲すと雖も六界いえど

二乗にじようの三惑さんかくを断きずることを知らず、真実しんじつに証しめする時は一衆生しゆじようそく即十衆生しゆじよう・十衆生しゆじようそく即一衆生しゆじようなり、若し六界ろっかいの見思けんじを断きぜざれば二乗にじようの見思けんじを断きず可べからず是かくくの如ごとく説くと雖も迹門いえどは但九界しやくもんの情を改め十界互具あらたを明じゆっす故に即ち円仏えんぶつと成るなり、爾前にぜんとうばん当分の益きりを嫌うこと無きが故に「三界ゆえの諸漏さんがい已に尽きひやくじゆんす三百ひやく由旬じゆんを過ぎて始めて我身わがみを見る」と説けり又爾前にぜんにゆうめつ入滅にじようの二乗にじようは實には見思けんじを断きぜず故に六界ろっかいを出いでずと雖も迹門いえどは二乗にじよう作仏しやくもんが本懷ほんかいなり故に「彼の土こに於いて是の経きやうを聞くことを得」と説く、既に「彼の土こに聞くことを得」と云ゆえう故に知んぬ爾前にぜんの諸經しよきやうには方便土ほうべん無し故に實には實報並じつほうに常寂光じやうじやくかうも無し、菩薩ぼさつの成仏じやうぶつを明ゆえす故に実報じつほう・寂光じやくかうを仮立けりゆうす然れども菩薩ぼさつに二乗にじようを具くす二乗にじよう成仏じやうぶつせずんば菩薩ぼさつも成仏じやうぶつす可べからざるなり、衆生しゆじよう無辺誓願度むへんせいがんども満みたせず二乗にじようの沈空尽滅じんくうは即ち是れ菩薩ぼさつの沈空尽滅じんくうなり凡夫六道ぼんぶろくどうを出いでざれば二乗にじようも六道ろくどうを出べず可べからず、尚下劣なおげれつの方便土ほうべんを明あかさず況や勝いわんれたる実報じつほう・

寂光を明さんや、じゃつこう 實に見思を断ぜば何ぞ方便を明さざらん菩薩實に実報・あか 寂光に至らば何ぞ方便土に至ること無らん、じゃつこう 但断無明と云うが故に仮りに
じつぽう じつぽう じつぽう じつぽう じつぽう じつぽう じつぽう じつぽう じつぽう じつぽう
実報・寂光を立つと雖も而も上の二土無きが故に同居の中に於て影現の実報
じつぽう じつぽう じつぽう じつぽう じつぽう じつぽう じつぽう じつぽう じつぽう じつぽう
・寂光を仮立す、じゃつこう 然るに此の三百由旬は實には三界を出ずること無し迹門
けりゆう しか ひやくゆじゆん さんがい い じゃくもん
には但是れ始覺の十界互具を説きて未だ必ず本覺本有の十界互具を明さず
こ しかく じゅつかいごく と いま ほんがくほんぬ じゅつかいごく あか
ゆえ しょけ たいしゆうのうけ えんぶつみなこ こととしかく じつぽう じつぽう じつぽう じつぽう
故に所化の大衆能化の円仏皆是れ悉く始覺なり、なん まぬら 若し爾らば本無今有の失
何ぞ免ることを得んや、なん まぬら 当に知るべし四教の四仏則ち円仏と成るは且く
じゃくもん しょだん かく ゆえ むし ほんぶつ じきよう すなわ えんぶつ しばら
迹門の所談なり是の故に無始の本仏を知らず、じゃくもん 故に無始無終の義欠けて具足
むし しきしんじようじゆう ぎ な ただ こ ほつゐ むし むしゆう ぐそく
せず又無始・色心常住の義無し但し是の法は法位に住すと説くことは未来
じようじゆう こ か こ あら ほんぬ じゅつかいごく あらわ ほんぬ
常住にして是れ過去常に非ざるなり、じようじゆう 本有の十界互具を顕さざれば本有の
だいじようぼさつ ゆえ じやくもん にじよう いま けんじ だん じゃくもん
大乘菩薩界無きなり、だいじようぼさつ 故に知んぬ迹門の二乗は未だ見思を断ぜず迹門の
ぼさつ いま むみよう だん ろくどう ほんぶ ほんぬ ろっかい ゆうめいむじつ
菩薩は未だ無明を断ぜず六道の凡夫は本有の六界に住せざれば有名無実なり。

故に涌出品に至つて爾前・迹門の断無明の菩薩を「五十小劫・半日の如し
と謂えり」と説く是れ則ち寿命品の久遠円仏の非長非短・不二の義に迷う
が故なり、爾前・迹門の断惑とは外道の有漏断の退すれば起るが如し未だ
久遠を知らざるを以て惑者の本と為すなり、故に四十一品断の弥勒・本門立
行の發起・影響・当機・結縁の地涌千界の衆を知らず、既に一分の無始の無明
を断じて十界の一分の無始の法性を得れば何ぞ等覺の菩薩を知らざらん、
設い等覺の菩薩を知らざるも争でか当機・結縁の衆を知らざらん乃ち不識一
人の文は最も未断三惑の故か、是を以て本門に至つては則ち爾前・迹門に
於て随他意の釈を加え又天人・修羅に摂し「貪著五欲・妄見網中・為凡夫
顛倒」と説き、釈の文には「我坐道場不得・一法」と云う蔵通両仏の見思断
も別円二仏の無明断も並に皆見思無明を断ぜず故に随他意と云う、所化の
衆生三惑を断ずと謂えるは是れ実の断に非ず答の文に開善の無声聞の義に

同ずとは汝も亦光宅の有聲聞の義に同ずるか、天台は有無共に破し給うなり、開善は爾前に於て無聲聞を判じ光宅は法華に於て有聲聞を判ず故に有無共に難有り、天台は「爾前には則ち有り今經には則ち無し所化の執情には則ち有り長者の見には則ち無し」此くの如きの破文皆是れ爾前・迹門相對の釈にて有無共に今の難には非ざるなり、「但し七方便並に究竟の滅に非ず又但し心を觀ずと云わば則ち理に稱わず」との釈は円益に対し当分の益を下して、並非究竟滅・即不称理」と云うなりと云うは金論には偏に清淨の真如を指す尚小の真を失えり仏性安んぞ在らん」と云う釈をば云何が会す可き、但し此の尚失小眞の釈は常には出だす可からず最も秘藏す可し、但し「妙法蓮華經皆是眞実」の文を以て迹門に於て爾前の得道を許すが故に爾前得道の義有りと云うは此れは是れ迹門を爾前に対して眞実と説くか、而も未だ久遠実成を顯さず是れ則ち彼の未顯眞実の分域なり所以に無量義經

に大莊嚴等の菩薩の四十余年の得益を挙ぐるを仏の答えたもうに未顕眞実の
言を以てす、又涌出品の中に弥勒疑つて云く「如来太子為りし時釈の宮を
出でて伽耶城を去ること遠からず、乃至四十余年を過ぐ」已上仏答えて云く
「一切世間の天人及び阿修羅は皆今の釈迦牟尼仏は釈氏の宮を出で伽耶城を
去ること遠からずして三菩提を得たりと謂えり我実に成仏してより以来」已
上、我実成仏とは寿量品已前を未顕眞実と云うに非ずや是の故に記の九に
云く「昔七方便より誠諦に至るまでは七方便の権と言うは且く昔の権に寄す
も若し果門に対すれば権実俱に是れ随他意なり」已上、此の釈は明かに知んぬ
迹門をも尚随他意と云うなり、寿量品の皆実不虚を天台釈して云く「円頓
の衆生に約すれば迹本二門に於て一実一虚なり」已上、記の九に云く「故に
知んぬ迹の実は本に於て猶虚なり」已上、迹門既に虚なること論に及ぶ可
らず但し皆是眞実とは若し本門に望むれば迹は是れ虚なりと雖も一座の内に

於て虚実を論ず故に本・迹両門俱に真実と言ふなり、例せば迹門法説の時の
譬説因縁の二周も此の一座に於て聞知せざること無し故に名けて顕と為すが
如し、記の九に云く「若し方便教は二門俱に虚なり因門開し竟りて果門に望
むれば則ち一実一虚なり本門顕れ竟れば則ち二種俱に実なり」已上、此の
釈の意は本門未だ顕れざる以前は本門に對すれば尚迹門を以て名けて虚と
為す若し本門顕れ已りぬれば迹門の仏因は即ち本門の仏果なるが故に天月水
月本有の法と成りて本・迹俱に三世常住と顯るるなり、一切衆生の始覺を
名けて迹門の円因と言ひ一切衆生の本覺を名けて本門の円果と為す修一円
因感一円果とは是なり、是くの如く法門を談ずるの時迹門・爾前は若し本門
顯れずんば六道を出でず何ぞ九界を出でんや。

五九

爾前二乗菩薩不作仏事

正元元年三十八歳御作 424P

問うて云く二乗永不成仏の教に菩薩の作仏を許す可きや、答えて云く

りようがきよう

楞伽經第二に云く「大慧何者か無性乗なる、謂く一闍提なり・大慧・一闍提

ねはん

とは涅槃の性無し何を以ての故に解脱の中に於て信心を生ぜず涅槃に入らず、

だいえいつせんだい

大慧一闍提とは二種あり何等をか二と為す一には一切の善根を梵焼す、二に

いっさいしゅじょう

は一切衆生を憐愍して一切衆生界を尽さんとの願を作す大慧・云何が一切

ぜんこん ほんしろう

の善根を梵焼する謂く菩薩蔵を謗じて是くの如きの言を作す、彼の修多羅・

びに げだつ

毘尼・解脱の説に随順するに非ず諸の善根を捨つと是の故に涅槃を得ず、

だいえ しゅじょう

大慧・衆生を憐愍して衆生界を尽さんとの願を作す者は菩薩と為す、

だいえ ぼさつ

大慧菩薩は方便して願を作す若し諸の衆生の涅槃に入らざる者あらば我も亦

ねはん

涅槃に入らずと是の故に菩薩摩訶薩涅槃に入らず、大慧・是を二種の一闍提

ねはん

無涅槃性と名く是の義を以ての故に決定して一闍提の行を取る、大慧菩薩・

もう

仏に白して言く世尊此の二種の一闍提何等の一闍提か常に涅槃に入らざる、

だいえ

仏、大慧に告げたまわく菩薩摩訶薩の一闍提は常に涅槃に入らず何を以ての

故に能よ善いっさいく一切諸法本来涅槃ねはんなりと知るを以て是の故に涅槃ねはんに入らず一切の善根ぜんこんを捨せんつる闡提えんたいには非あらず、何を以ての故に大慧彼れ一切の善根ぜんこんを捨せんつる闡提えんたいは若もし諸仏しよぶつ・善知識等ぜんちしきに値あいたてまつれば菩提心ぼだいしんを發おこし諸の善根ぜんこんを生じてすなわねはん便ち涅槃を証す、等と云云、此の經文に「若もし諸の衆生涅槃ねはんに入らざれば我またねはんも亦涅槃に入らじ」等云云。

前四味の諸經に二乗作仏を許さず之を以て之を思うに四味諸經の四教の菩薩も作仏有がたり難むじょうきか、華嚴經に云く「衆生界尽しじゅうきざれば我が願またつも亦尽またつきず」等と云云、一切の菩薩必いっさいず四弘誓願しぐせいがんを發おこす可べし其の中の衆生無しじゅうむ辺誓願へんせいがん度の願がた之を滿みせざれば無上菩提誓願證むじょうぼだいせいがんの願がた又成またじ難がたし、之を以て之を案ずるにこれ四十余年の文二乗に限らば菩薩の願又成がたじ難がたきか。

問うて云く二乗成仏之無むければ菩薩ぼさつの成じょう仏ぶつも之無これき正しやうもん証文如何、答いっさいえて云く涅槃經三十六に云く「仏性は是れ衆生しじゅうに有ありと信いふずと雖も必いっさいず一切

に皆悉く之有らず是の故に名けて信不具足と為す」と三十六本三十二、此の文

の如くんば先四味の諸菩薩は皆一闡提の人なり二乗作仏を許さず二乗の作仏

を成ぜざるのみに非ず、将又菩薩の作仏も之を許さざる者なり、之を以て之を

思うに四十余年の文二乗作仏を許さずんば菩薩の成仏も又之無きなり、

一乗要決の中に云く、「涅槃經三十六に云く仏性は是れ衆生に有りと信ずと

雖も必ず一切皆悉く之有らず是の故に名けて信不具足と為すと三十六本三十二、

第三十一に説く一切衆生及び一闡提到悉く仏性有りと信ずるを菩薩の十法

の中の第一の信心具足と名くと、三十六本第三十、一切衆生悉有仏性を明すは

是れ少分に非ず、若し猶堅く少分の一切なりと執せば唯經に違するのみに

非ず亦信不具なり何に因つてか樂つて一闡提と作るや此れに由つて全分の

有性を許すべし理亦一切の成仏を許すべし。○」

慈恩の心經玄賛に云く、「大悲の辺に約すれば常に闡提と為る大智の辺に約

すれば亦また當まさに作さ仏ぶつすべし、宝公ほうこうの云いわく大悲闡提だいひせんたいは是これ前經ぜんきようの所説しよせつなり前説しよせつを
以もつて後説ごせつを難なんず可べからざるなり諸師しよしの釈意だいと大途だいと之こに同じ「文、金こんべい」の註いに云いく
「境いは謂いわく四諦しだいなり百界三千さんぜんの生死しようじは即すなわち苦くなり此この生死しようじ即すなわち是これ涅槃ねはんなり
と達しゅじようするを衆生しゅじよう無む邊へん誓願せいがん度どと名なく百界三千さんぜんに三惑さんなくを具足ぐそくす此この煩惱ぼんのう即すなわち是これ
菩提ぼだいなりと達しゅじようするを煩惱ぼんのう無む邊へん誓願せいがん断だんと名なく生死しようじ即すなわち涅槃ねはんと円えんの仏性ぶつしやうを証しやうするは
即すなわち仏道ぶつどう無む上じやう誓願せいがん成せいなり、惑わく即すなわち菩提ぼだいにして般若はん若にやに非あらざることを無なければ即すなわち
法門ほふもん無む尽じん誓願せいがん知ちなり、惑わく智ち無な二になれば生く仏しゅ体ゆい同しんじ苦集くしゆ唯心ゆいしんなれば四弘しく融攝ゆうしやうす
一そくい即さ一切いっさいなりとは斯この言徴ことしるし有し「文、慈覺大師じかくだいしの速証じやくしやう仏位集いに云いく「第一だいいちに
唯ただ今經こんきやうの力用りきよう仏ぶつの下化げ衆生しゅじようの願みだを満みす故ゆゑに世いに出いでて之これを説いく所謂い諸佛しよふつの
因位いんい・四弘しくの願りしやう・利生断惑りしやうだんなく・知法作仏さぶつなり然しかるに因円果満かまんなれば後ごの三さんの願みだ
は満みず、利生りしやうの一願い甚はなはだだ満みじ難がたしと為なす彼の華嚴けこんの力ちく十界じゆっかい皆みな仏道ぶつどうを成じやうずる
こと能あたわす阿含あこん・方等ほうとう・般若はん若にやも亦また爾しかなり後番ごばんの五味ごみ・皆かい成じやう仏道ぶつどうの本懷ほんかいなる事

能わ^{あた}ず、今・此の妙経は十界皆成仏道なること分明なり彼の達多・無間^{むげん}に墮^だするに天王仏の記を授け竜女成仏し十羅刹女も仏道を悟り阿修羅も^{あしゅら}じようぶつ そうき にんてん にじよう ぼさつ ぶつどう 經に云く我成仏の総記を受け人天・二乗・三教の菩薩・円妙の仏道に入る、

が昔の所願の如きは今者已に満足しぬ一切衆生を化して皆仏道に入らしむと云云、衆生界尽きざるが故に未だ仏道に入らざる衆生有りと雖も然れども^{いえどしか}じゅつかい じようぶつ ただこんきよう ゆえ いま ぶつどう しゅじよう 十界皆成仏すること唯今經の力に在り故に利生の本懷なり」と云云。

又云く「第一に妙經の大意を明さば諸仏は唯一大事の因縁を以ての故に^{ゆえ}いわ だいいち みようきよう たいい あか しよぶつ ゆいいちだいじ いんねん もつ ゆえ 世に出現し一切衆生悉有仏性と説き聞法・觀行・皆當に作仏すべし、抑^{おさへ}しゅつげん いっさいしゅじようしつうぶつしよう と もんぼう かんぎよう みなまさ さぶつ 仏何の因縁を以て十界の衆生悉く三因仏性有りと説きたもうや、天親菩薩^{てんじんぼさつ}ぶつしろうんえんぎ だいいち いわ によらいごしゅ ごしゅ くのく の仏性論縁起分の第一に云く如来五種の過失を除き五種の功德を生ずるがため^{ため}ゆえ いっさいしゅじよう しつうぶつしよう と いわ いくごしゅ 五種の過失とは一には下^{した}為に故に一切衆生・悉有仏性と説きたもう已上謂く五種の過失とは一には下^{した}れっしん 劣心・二には高慢心・三には虚妄執・四には真法を謗じ・五には我執を起す^{おこす}こもうしゅ ぼう がしゅ

なり、五種の功德とは一には正勤・二には恭敬・三には般若・四には闍那
・五には大悲なり、生ずること無しと疑うが故に大菩提心を発すこと能わ
ざるを下劣心と名け、我に性有つて能く菩提心を発すと謂えるを高慢と名け、
一切の法無我の中に於て有我の執を作すを虚妄執と名け一切諸法の清淨
の智慧功德を違謗するを謗真法と名け意唯己を存して一切衆生を憐むことを
欲せざるを起我執と名く此の五に翻対して定めて性有りと知りて菩提心を
発す」と。

日蓮 花押

六〇 十法界明 因果抄

文応元年五月三十九歳御作沙門 日蓮撰 427P

八十華嚴經六十九に云く「普賢道に入ることを得て十法界を了知す」と、
法華經第六に云く「地獄声・畜生声・餓鬼声・阿修羅声比丘声・比丘尼声人
道天声天道声聞声辟支仏声・菩薩声・仏声」と已上十法界名 目なり。

第一に地獄界とは観仏三昧經に云く「五逆罪を造り因果を撥無し大衆を

誹謗し四重禁を犯し虚く信施を食するの者・此の中に墮す」と獄なり、正法

念經に云く「殺盜・淫欲・飲酒・妄語の者・此の中に墮す」と獄なり、正法

念經に云く「昔酒を以て人に与えて酔わしめ已つて調戲して之を翫び彼を

して羞恥せしむるの者・此の中に墮す」と獄なり、正法念經に云く「殺生

・偷盜・邪淫の者・此の中に墮す」と獄なり、涅槃經に云く「殺に三種有り謂く

下中上なり。下とは蟻子乃至一切の畜生乃至下殺の因縁を以て地獄に墮し

乃至具に下の苦を受く」文。

問うて云く十惡・五逆等を造りて地獄に墮するは世間の道俗皆之を知れり

謗法に依つて地獄に墮するは未だ其の相貌を知らざる如何、答えて云く堅慧

菩薩の造・勒那摩提の訳・究竟一乘宝性論に云く「樂て小法を行じて法

及び法師を謗じ。如来の教を識らずして説くこと修多羅に背いて是真實義と

言う「文、此の文の如くんば小乗を信じて真実義と云い大乘を知らざるは
是れ謗法なり、天親菩薩の説・真諦三蔵の訳・仏性論に云く「若し大乘に
憎背するは此はは一闡提の因なり衆生をして此の法を捨てしむるを為ての
故に」文、此の文の如くんば大小流布の世に一向に小乗を弘め自身も大乘
に背き人に於ても大乘を捨てしむる是を謗法と云うなり、天台大師の梵網經
の疏に云く「謗は是れ乖背の名・て是れ解・理に称わず言實に当らず異解
して説く者を皆名けて謗と為すなり己が宗に背くが故に罪を得」文、法華經
の譬喩品に云く「若し人信ぜずして此の經を毀謗せば則ち一切世間の仏種を
断ぜん乃至其の人命終して阿鼻獄に入らん」文、此の文の意は小乗の
三賢已前・大乘の十信已前・末代の凡夫の十惡・五逆・不孝父母・女人等
を嫌わず此等法華經の名字を聞いて・或題名を唱え一字・一句・四句・一品
・一卷・八卷等を受持し誦誦し乃至亦上の如く行ぜん人を随喜し讚歎する人

は法華經ほけきようよりの外いちだい、一代しやうきようの聖教しやうきようを深く習ならい義理ぎりに達だいし堅しやうじようく大小乗だいしやうじようの戒けいを
持ともてる大菩薩ほさつの如ごとき者ものより勝すぐれて往生おうじやうじやうぶつ成仏とを遂べぐ可べしと説とくくを信しんぜずして
還かえつて法華經ほけきようは地住じじゆう已上ほさつの菩薩ぼさつの為ある・或あるは上根じやうこん・上智じやうちの凡夫ぼんぶの為ためにして愚人ぐにん
悪人あくにん・女人にょにん末代まっだいの凡夫ぼんぶ等の為ためには非あらずと言のたまわん者は即すなわち一切衆生いっさいしゆじやうの成仏じやうぶつの
種しゆを断あびこくじて阿鼻獄あびこくに入る可べしと説ねはんぎようける文いなり、涅槃經ねはんぎように云いく、仏しやうほうの正法しやうほうに於おいて
永こしやくこんりゆうく護惜ごしやくこんりゆう建立こころなの心無なし、文こころ、此こころの文こころの意いは此こころの大涅槃經だいねはんぎようの大法世間だいほうせけんに滅尽めつじん
せんを惜おしまざる者は即すなわち是これ誹謗ひぼうの者ものなり、天台大師法華經てんだいだいしほけきようの怨敵おんてきを定てんめて
云いく、「聞いく事を喜おんばざる者を怨なと為なす」文ほうほう、謗法ほうほうは多種だいしなり大小流布だいしやうるの国ふに
生いれて一向いっかうに小乘じやうじやうの法がくを学がくして身みを治だいめ大乘だいじやうに遷うつちらざるは是これ謗法ほうほうなり、
亦また華嚴けわごん・方等ほうとう・般若等はんんにやの諸大乘しよだいじやうきよう經しよきようを習ほけきようえる人も諸經しよきようと法華經ほけきようと等同ほけきようの思まを
作なし人ひとをして等同ほけきようの義ぎを学ほけきようばしめ法華經ほうほうに遷うつちらざるは是これ謗法ほうほうなり、亦また偶またまたま
円機えんき有ある人ひとの法華經ほけきようを学ほけきようぶをも我むさほが法ために付なんじけて世利ためを貪なんじるが為きに汝きが機きは

法華經に當らざる由を稱して此の經を捨て權經に遷らしむるは是れ大謗法なり、此くの如き等は皆地獄の業なり人間に生ずること過去の五戒は強く三惡道の業因は弱きが故に人間に生ずるなり、亦當世の人も五逆を作る者は少く十惡は盛に之を犯す亦偶後世を願う人の十惡を犯さずして善人の如くなるも自然に愚癡の失に依つて身口は善く意は惡しき師を信ず、但我のみ此の邪法を信ずるに非ず國を知行する人・人民を聳て我が邪法に同ぜしめ妻子・眷屬・所從の人を以て亦聳め從え我が行を行ぜしむ、故に正法を行ぜしむる人に於て結縁を作さず亦民・所從等に於ても隨喜の心を至さしめず、故に自他共に謗法の者と成りて修善止惡の如き人も自然に阿鼻地獄の業を招くと末法に於て多分之れ有るか。

阿難尊者は淨飯王の甥・斛飯王の太子・提婆達多の舍弟・釈迦如來の從子なり、如來に仕え奉つて二十年覺意三昧を得て一代聖教を覺れり、仏入滅

の後・阿闍世王・阿難を帰依し奉る、仏の滅後四十年の此阿難尊者一の竹林
の中に至るに一りの比丘有り一の法句の偈を誦して云く「若し人生じて百歳
なりとも水の潦涸を見ずんば生じて一日にして之を覩見することを得るに
如かず」已上、阿難此の偈を聞き比丘に語つて云く此れ仏説に非ず汝修行
す可らず爾時に比丘阿難に問うて云く仏説は如何、阿難答えて云く若人生じ
て百歳なりとも生滅の法を解せずんば生じて一日にして之を解了すること
得んには如かず已上此の文仏説なり、汝が唱うる所の偈は此の文を謬りたる
なり、爾の時に比丘・此の偈を得て本師の比丘に語る、本師の云く我汝に教
うる所の偈は眞の仏説なり阿難が唱うる所の偈は仏説に非ず阿難年老衰して
言錯謬多し信ず可らず、此の比丘亦阿難の偈を捨てて本の謬りたる偈を唱う
阿難又竹林に入りて之を聞くに我が教うる所の偈に非ず重ねて之を語るに
比丘信用せざりき等云云、仏の滅後四十年にさえ既に謬り出来せり何に況ん

や仏の滅後既に二千余年を過ぎたり、
仏法天竺より唐土に至り唐土より日本
に至る論師三蔵・人師等伝来せり定めて謬り無き法は万が一なるか、
何に
況や当世の学者偏執を先と為して我慢を挿み火を水と諍い之を糾さず偶
仏
の教の如く教を宣ぶる学者をも之を信用せず故に謗法ならざる者は万が一
るか。

第二に餓鬼道とは正法念經に云く、「昔財を貪りて屠殺せるの者・此の報
を受く」と、亦云く「丈夫自ら美食をい妻子に与えず・或は婦人自ら食し
て夫子に与えざるは此の報を受く」と、亦云く「名利を貪るが為に不淨説法
する者・此の報を受く」と、亦云く「昔酒をに水を加うる者・此の報を
受く」と、亦云く「若し人勞して少物を得たるを誑惑して之を取り用いけ
る者・此の報を受く」と、亦云く「昔行路人の病苦ありて疲極せるに其の売
を欺き取り直を与うること薄少なりし者・此の報を受く」と、又云く「昔刑獄

をつかさどり
を典主・人の飲食を取りし者・此の報を受く」と、亦云く「昔陰涼樹を
伐り及び衆僧の園林を伐りし者・此の報を受く」と文、法華經に云く「若し
人信ぜずして此の經を毀謗せば。常に地獄に処すること園觀に遊ぶが如く余
の惡道に在ること己が舍宅の如し」文、慳貪・偷盜等の罪に依つて餓鬼道に
墮することは世人知り易し、慳貪等無き諸の善人も謗法に依り亦謗法の人に
親近し自然に其の義を信ずるに依つて餓鬼道に墮することは智者に非ざれば
之を知らず能く能く恐る可きか。

第三に畜生道とは愚癡無慙にして徒に信施の他物を受けて之を償わざる者
・此の報を受くるなり、法華經に云く「若し人信ぜずして此の經を毀謗せば
。當に畜生に墮すべし」文已上三惡道なり。

第四に修羅道とは止觀の一に云く「若し其の心念念に常に彼に勝らんこと
を欲し耐えざれば人を下し他を輕しめ己を珍ぶこと鵄の高く飛びて下視が

如^{ごと}し而^{しか}も外には仁・義・礼・智・信を掲^あげて下品^{げほん}の善心^{ぜんしん}を起^おし阿修羅^{あしゅら}の道を行^{おこな}ずるなり」文。

第五に人道とは報恩^{ほうおん}經に云^いく、「三帰五戒^{ごかい}は人に生^なる」文。

第六に天道とは二有^{じゅうげん}り、欲天^{たも}には十善^{じゅうぜん}を持^もちて生^なれ色無^{しきてん}色天^{げじ}には下地^{げじ}は・苦障^{そくしょう}・上地^{じょうち}は静妙^{じょうみょう}離^ちの六行^{りくこう}觀^{くわん}を以^もて生^なずるなり。

問^いうて云^いく六道^{ろくどう}の生因^なは是^{かくのごと}くの如^{ごと}し抑^お同時^{どうじ}に五戒^{ごかい}を持^もちて人界^{にんかい}の生を受^うくるに何^{なん}ぞ生^{いき}盲^{めくら}・聾^{りよう}・聾^{おんあ}・盲^{ぎる}・陋^{れんびやく}・背^{はいる}偻^{びんぐ}・貧窮^{びんぐ}・多病^{たも}・瞋恚^{しんに}等^{むりよう}無量^{むりよう}の差別^{さべつ}有^なりや、答^いえて云^いく大論^{だいろん}に云^いく、「若^{もし}は衆生^{しゅじよう}の眼^{まなこ}を破^{やぶ}り若^{もし}は衆生^{しゅじよう}の眼^{まなこ}を屈^くり若^{もし}は正見^{せいけん}の眼^{まなこ}を破^{やぶ}り罪福^{ざいふく}無^なしと言^いわん是^この人死^しして地獄^{じごく}に墮^だし罪畢^{つみおわ}つて人^なと為^なり生^なれて従^より盲^{めくら}なり、若^{もし}は復^{また}仏塔^{ぶつとう}の中^{ちゅう}の火珠^{くわしゅ}及^{およ}び諸^{もろ}の灯明^{とうめい}を盗^{ぬす}む是^{かくのごと}くの如^{ごと}き等^{しゆじゆ}の種種^{しんしん}の先世^{せんぜ}の業^{ごふ}・因縁^{いんねん}をもて眼^{まなこ}を失^{うしな}ふなり。聾^{つんぼ}とは是^これせんぜいんねんきようくんしかしんにつみもつゆえ

先世^{せんぜ}の因縁^{いんねん}師父^{しふ}の教訓^{きょうくん}を受けず行^しぜず而^{しか}も反^{はん}つて瞋恚^{しんに}す是^この罪^{つみ}を以^もての故^{ゆえ}に

つんば 聾となる、復次に衆生の耳を截り若は衆生の耳を破り若は仏塔僧塔諸の
ぜんにん 善人・福田の中の 椎・鈴・貝及び鼓を盗む故に此の罪を得るなり、先世に
き 彼の舌を截り・或は其の口を塞ぎ・或は惡藥を与えて語ることを得ざらしめ、
ある 或は師の教・父母の教勅を聞き其の語を断つ。世に生れて人と為り啞に
して言うこと能わず。先世に他の坐禅を破り坐禅の舍を破り諸の咒術を
もつ 以て人を咒して瞋らし鬪諍し姪欲せしむ今世に諸の結使厚重なること婆羅門
その 其の稻田を失い其の婦復死して即時に狂発し裸形にして走りしが如くなら
ん、先世に仏・阿羅漢・辟支仏の食及び父母所親の食を奪えば仏世に値うと
いえど 雖も猶故飢渴す罪の重きを以ての故なり、先世に好んで鞭杖・拷掠・閉繫
をしゅじゅ を行じ種種に悩すが故に今世の病を得るなり。先世に他の身を破り其の頭を
きそ 截り其の手足を斬り種種の身分を破り・或は仏像を壊り仏像の鼻及び諸の
けんせい 賢聖の形像を毀り・或は父母の形像を破る是の罪を以ての故に形を受くる

多く具足せず、復次に不善法の報身を受くること醜陋なり」文、法華經に云く

「若し人信ぜずして此の經を毀謗せば。若し人と為ることを得ては諸根闇鈍

にして盲・聾・背偃ならん。口の氣常に臭く鬼魅に著せられん貧窮下賤にし

て人に使われ多病瘠瘦にして依怙する所無く。若は他の叛逆し抄劫し竊盜

せん是くの如き等の罪横に其の殃に羅らん」文。

又八の卷に云く「若し復是の經典を受持する者を見て其の過惡を出さん

若は實にもあれ若は不實にもあれ此の人は現世に白癩の病を得ん若し之を

輕笑すること有らん者は当に世世に牙齒疎欠・醜き屑・平める鼻・

手脚繚戾し眼目角に身体臭穢にして惡瘡・膿血・水腹・短氣諸の惡

重病あるべし」文、問うて云く何なる業を修する者が六道に生じて其の中

の王と成るや、答えて云く大乘の菩薩戒を持して之を破る者は色界の梵王・

欲界の魔王・帝釈・四輪王・禽獸王・閻魔王等と成るなり、心地觀經に

云く「諸王の受くる所の諸の福樂は往昔會つて三の淨戒を持し戒德薰修し
て招き感ずる所・人天の妙果王の身を獲。中品に菩薩戒を受持すれば福徳
自在の轉輪王として心の所作に随つて尽く皆成じ無量の人天悉く遵奉す、下
の上品に持すれば大鬼王として一切の非人咸く率伏す戒品を受持して欠犯す
と雖も戒の勝るるに由るが故に王と爲ることを得・下の中品に持すれば
禽獸の王として一切の飛走皆歸伏す清淨の戒に於て欠犯有るも戒の勝るる
に由るが故に王と爲ることを得、下の下品に持すれば魔王として地獄の中
に処して常に自在なり禁戒を毀り惡道に生ずと雖も戒の勝るるに由るが故に
王と爲る事を得。若し如来の戒を受けざる事有れば終に野干の身をも得るこ
と能わず何に況んや能く人天の中の最勝の快樂を感じて王位に居せん」文、
安然和尚の広釈に云く「菩薩の大戒は持して法王と成り犯して世王と成る
而も戒の失せざること譬えば金銀を器と成すに用ゆるに貴く器を破りて用い

ざるも而も宝は失せざるが如し」亦云く「無量寿觀に云く劫初より已来八万
の王有つて其の父を殺害すと此則ち菩薩戒を受けて国王と作ると雖も今・殺
の戒を犯して皆地獄に墮れども犯戒の力も王と作るなり」大仏頂經に云く
「発心の菩薩罪を犯せども暫く天神・地祇と作る」と、大随求に云く「天帝
命尽きて忽ち驢の腹に入れども随求の力に由つて還つて天上に生ず」と、
尊勝に云く「善住天子・死後七返畜生の身に墮すべきを尊勝の力に由つ
て還つて天の報を得たり」と、昔国王有り千車をもて水を運び仏塔の焼くる
を救う自ら心を起して阿修羅王と作る、昔・梁の武帝五百の袈裟を須弥山
の五百の羅漢に施す、誌公云く「往五百に施すに一りの衆を欠けり罪を犯し
て暫く人王と作る即ち武帝是なり、昔国王有つて民を治むること等からず今
天王と作れども大鬼王と為る、即ち東南西の三天王是なり拘留孫の末に菩薩
と成りて發誓し現に北方毘沙門と作る是なり」云云、此等の文を以て之を思

うに小乗戒しやうじゆを持して破る者は六道ろくどうの民と作り大乘戒だいじやうかいを破する者は六道ろくどうの王と成り持じする者は仏と成る是これなり。

第七に声聞道しやうもんとは此の界いんがの因果をば阿含あこん・小乗しやうじやう・十二年の經に分ぶん明みやうにこれ之を明せり、諸大乘しよだいじやうきやう經に於おいても大に對せんが為ために亦之をば明せり、声聞しやうもんに於おいて四種有うばそくり一には優婆塞ぞくなん・俗男こかいなり五戒ごかいを持し苦・空・無常むじやう・無我むがの觀かんを修しゆし自調自度じちやうじどの心強あえてくして敢て化他けたの意こころ無く見思けんじを断尽だんじんして阿羅漢あらかんと成る此かくの如ごとくする時自然じねんに髪そを剃みずかるに自ら落つ、二には優婆夷うばい・俗女ぞくじよなり五戒ごかいを持し髪そを剃みずかるに自ら落つること男ことの如し三には比丘僧びくなり二百五十戒具足戒具足なりを持して苦・空・無常むじやう・無我むがの觀かんを修しゆし見思けんじを断じて阿羅漢あらかんと成る此かくの如ごとくするの時・髪そを剃みずからざれども生ぜず、四に比丘尼びくになり五百戒じを持す余は比丘びくの如ごとし、一代諸經いちだいしよきやうに列座れつざせる舍利弗しゃりほつ・目連等もくれんの如ごとき声聞しやうもん是これなり永ろくどうく六道ろくどうに生ぜず亦また仏ぼつ・菩薩ぼさつとも成らず灰身滅智けしんめつちし決定けつじやうして仏に成らざるなり、

小乗戒の根本たる尽形寿の戒は一度依身を壞れば永く戒の功德無し、上品
を持すれば二乗と成り中下を持すれば人天に生じて民と為る之を破れば
三惡道に墮して罪人と成るなり、安然和尚の広釈に云く、「三善は世戒なり因
生して果を感じ業尽きて惡に墮す譬えば楊葉の秋至れば金に似れども秋去れ
ば地に落つるが如し、二乗の小戒は持する時は果拙く破る時は永く捨つ譬え
ば瓦器の完くして用うるに卑しく若し破れば永く失するが如し」文。

第八に緣覺道とは二有り一には部行獨覺・仏前に在りて聲聞の如く小乗
の法を習い小乗の戒を持し見思を斷じて永不成仏の者と成る、二には鱗喻
獨覺・無仏の世に在りて飛花落葉を見て苦・空・無常・無我の觀を作し見思
を斷じて永不成仏の身と成る戒も亦聲聞の如し此の聲聞・緣覺を二乗とは
云うなり。

第九に菩薩界とは六道の凡夫の中に於て自身を輕んじ他人を重んじ惡を

以て己に向け善を以て他に与えんと念う者有り、仏・此の人の為に諸の大乗經に於て菩薩戒を説きたまえり、此の菩薩戒に於て三有り一には摂善法戒・所謂八万四千の法門を習い尽さんと願す、二には饒益有情戒・一切衆生を度しての後に自ら成仏せんと欲する是なり、三には摂律儀戒一切の諸戒を尽く持せんと欲する是なり、華嚴經の心を演ぶる梵網經に云く「仏の諸の仏子に告げて云く十重の波羅提木叉有り若し菩薩戒を受けて此の戒を誦せざる者は菩薩に非ず仏の種子に非ず我も亦是くの如く誦す一切の菩薩は已に學し一切の菩薩は當に學し一切の菩薩は今學す」文、菩薩と言ふは二乗を除いて一切の有情なり、小乗の如きは戒に随つて異なるなり、菩薩戒は爾らず一切の有心に必ず十重禁等を受く一戒を持するを一分の菩薩と云い具に十分を受くるを具足の菩薩と名く、故に瓔珞經に云く「一分の戒を受くることあれば一分の菩薩と名け乃至二分・三分・四分・十分なるを具足の受戒と云

う」文。

問うて云く二乗を除くの文如何、答えて云く梵網經に菩薩戒を受くる者を

列ねて云く「若し仏戒を受くる者は國王・王子・百官・宰相・比丘・比丘尼

・十八梵天・六欲天子・庶民・黃門・姪男・姪女・奴婢・八部・鬼神・金剛

神・畜生・乃至變化人にもあれ但法師の語を解するは尽く戒を受得すれば

皆第一清淨の者と名く」文、此の中に於て二乗無きなり、方等部の結經た

る瓔珞經にも亦二乗無し、問うて云く二乗所持の不殺生戒と菩薩所持の

不殺生戒と差別如何、答えて云く所持の戒の名は同じと雖も持する様並に心

念永く異なるなり、故に戒の功德も亦淺深あり、問うて云く異なる様如何、答

えて云く二乗の不殺生戒は永く六道に還らんと思はず故に化導の心無し亦仏

菩薩と成らんと思わず但灰身滅智の思を成すなり、譬えば木を焼き灰と為し

ての後に一塵も無きが如し故に此の戒をば瓦器に譬う破れて後用うることを無

きが故なり、菩薩は爾らず饒益有情戒を發して此の戒を持するが故に機を見
て五逆・十惡を造り同く犯せども此の戒は破れず還つて彌彌戒体を全くす、
故に瓔珞經に云く「犯すこと有れども失せず未來際を尽くす」文、故に此の
戒をば金銀の器に譬う完くして持する時も破する時も永く失せざるが故なり、
問うて云く此の戒を持する人は幾劫を経てか成仏するや、答えて云く瓔珞經
に云く「未だ住前に上らざる。若は一劫二劫三劫乃至十劫を経て初住の位の
中に入ることを得」文、文の意は凡夫に於て此の戒を持するを信位の菩薩と
云う、然りと雖も一劫二劫乃至十劫の間は六道に沈輪し十劫を経て不退の位
に入り永く六道の苦を受けざるを不退の菩薩と云う未だ仏に成らず還つて
六道に入れども苦無きなり。

第十に仏界とは菩薩の位に於て四弘誓願を發すを以て戒と為す三僧祇の間
・六度万行を修し見思・塵沙・無明の三惑を断尽して仏と成る、故に心地

観經に云く「三僧企耶大劫の中に具に百千の諸の苦行を修し功德円満にし
て法界に遍く十地究竟して三身を証す」文、因位に於て諸の戒を持ち仏果の
位に至つて仏身を莊嚴す三十二相・八十種好は即ち是の戒の功德の感ずる所
なり、但し仏果の位に至れば戒体失す譬えば華の果と成つて華の形無きが
如し、故に天台の梵網經の疏に云く「仏果に至つて乃ち廢す」文、問うて
云く梵網經等の大乘戒は現身に七逆を造れると並に決定性の二乗とを許す
や、答えて云く梵網經に云く「若し戒を受けんと欲する時は師・問い言うべ
し汝現身に七逆の罪を作らざるやと、菩薩の法師は七逆の人の与に現身に戒
を受けしむることを得ず」文、此の文の如くんば七逆の人は現身に受戒を許さ
ず、大般若經に云く「若し菩薩設い恒河沙劫に妙の五欲を受くるとも菩薩戒
に於ては猶犯と名けず若し一念二乗の心を起さば即ち名けて犯と為す」文、
大莊嚴論に云く「恒に地獄に処すと雖も大菩提を障ず若し自利の心を起さば

これれ大菩提の障なり、文、此等の文の如くんば六凡に於ては菩薩戒を授け二乗
に於ては制止を加うる者なり、二乗戒を嫌うは二乗所持の五戒・八戒・十戒
・十善戒・二百五十戒等を嫌うに非ず彼の戒は菩薩も持す可し但二乗の心念
を嫌うなり、夫れ以みれば持戒は父母・師僧・国王・主君の一切衆生・三宝
の恩を報ぜんが為なり、父母は養育の恩深し一切衆生は互に相助くる恩重し
国王は正法を以て世を治むれば自他安穩なり、此に依つて善を修すれば恩・
重し主君も亦彼の恩を蒙りて父母・妻子・眷属・所従・牛馬等を養う、設い
爾らずと雖も一身を顧る等の恩・是重し師は亦邪道を閉じ正道に趣かしむる
等の恩・是深し仏恩は言うに及ばす是くの如く無量の恩分之有り、而るに二乗
は此等の報恩皆欠けたり故に一念も二乗の心を起すは十悪・五逆に過ぎたり
一念も菩薩の心を起すは一切諸仏の後心の功德を起せるなり、已上四十余年
の間の大小乗の戒なり、法華經の戒と言うは二有り、一には相待妙の戒二

ぜつたいみょう
には絶待妙の戒なり、先ず相待妙の戒とは四十余年の大小乗の戒と法華經
の戒と相對して爾前を戒と云い法華經を妙戒と云うて諸經の戒をば未顕
眞實の戒・歷劫修行の戒・決定性の二乗戒と嫌うなり、法華經の戒は眞實
の戒・速疾頓成の戒・二乗の成仏を嫌わざる戒等を相對して妙を論ずる
を相對妙の戒と云うなり。

問うて云く梵網經に云く「衆生・仏戒を受くれば即ち諸仏の位に入る位
大覺に同じ已に實に是諸仏の子なり」文。

華嚴經に云く「初發心の時便ち正覺を成ず」文、大品經に云く「初發心の
時即ち道場に坐す」文、此等の文の如くんば四十余年の大乗戒に於て法華經
の如く速疾頓成の戒有り何ぞ但歷劫修行の戒なりと云うや、答えて云く
此れに於て二義有り一義に云く四十余年の間に於て歷劫修行の戒と速疾
頓成の戒と有り法華經に於ては但一つの速疾頓成の戒のみ有り、其の中に

おい よんじゅうよねん
於て四十余年の間の歴劫修行の戒に於ては法華經の戒に劣ると雖も
いへど
よんじゅうよねん
四十余年の間の速疾頓成の戒に於ては法華經の戒に同じ、故に上に出す所の
いだ
しゅじよう
衆生・仏戒を受れば即ち諸仏の位に入る等の文は法華經の須臾聞之・即得
そくとく
くきよう
究竟の文に之同じ、但し無量義經に四十余年の經を挙げて歴劫修行等と云
りやっこうしゅぎよう
えるは四十余年の内の歴劫修行の戒計りを嫌うなり速疾頓成の戒をば嫌わ
きら
ざるなり、一義に云く四十余年の間の戒は一向に歴劫修行の戒・法華經の
いっこう りやっこうしゅぎよう
戒は速疾頓成の戒なり、但し上に出す所の四十余年の諸經の速疾頓成の戒
そくしつとんじよう
に於ては凡夫地より速疾頓成するに非ず凡夫地より無量の行を成じて無量劫
むりようこつ
を經・最後に於て凡夫地より即身成仏す、故に最後に從えて速疾頓成とは
そくしつとんじよう
説くなり、委悉に之を論ぜば歴劫修行の所撰なり、故に無量義經には總て
ゆえ むりようぎきよう
よんじゅうよねん
四十余年の經を挙げて仏・無量義經の速疾頓成に對して宣説菩薩・歴劫
りやっこう
修行と嫌いたまえり、大莊嚴菩薩の此の義を承けて領解して云く「無量無辺
むりようむへん

ふかしぎあそぎこうすく
不可思議阿僧祇劫を過れども終に無上菩提を成ずることを得ず、何を以ての
ゆえ ぼだい じきどう
故に菩提の大直道を知らざるが故に險逕を行くに留難多きが故に、乃至大
じきどう
直道を行くに留難無きが故に」文、若し四十余年の間に無量義經・法華經の
こと そくしつとんじょう
如く速疾頓成の戒之れ有れば仏猥りに四十余年の実義を隠し給うの失之れ有
り云云、二義の中に後の義を作る者は存知の義なり、相待妙の戒是なり、次
ぜつたいみょう
に絶待妙の戒とは法華經に於ては別の戒無し、爾前の戒即ち法華經の戒なり
そのゆえ にぜん にんてん ようよう
其の故は爾前の人天の楊葉戒・小乘・阿含經の二乗の瓦器戒・華嚴・方等
はんにや かんきよう りやつこうぼさつ こんごんかい ぎようじゃ ほけきよう いた たがい わえ
・般若・觀經等の歷劫菩薩の金銀戒の行者・法華經に至つて互に和会して
一同と成る、所以に人天の楊葉戒の人は二乗の瓦器・菩薩の金銀戒を具し菩薩
こんごんかい にんてん ようよう にじよう がき ぐ もつ こんごんかい さんあくどう
の金銀戒に人天の楊葉二乗の瓦器を具す余は以て知んぬ可し、三惡道の人は
げんしん おい
現身に於て戒無し過去に於て人天に生れし時人天の楊葉・二乗の瓦器菩薩の
こんごんかい たも さんあくどう だ しか いえど そ くだくいま これあ
金銀戒を持ち退して三惡道に墮す、然りと雖も其の功德未だ失せず之有り

さんあくどう 三惡道の人・法華經に入る時其の戒之を起す故に三惡道にも亦十界を具す、
ゆえにぜん 故に爾前の十界の人・法華經に來至すれば皆持戒なり、故に法華經に云く
これ 是を持戒と名く「文、安然和尚の広釈に云く「法華に云く能く法華を説く
これ 是を持戒と名く「文、爾前經の如く師に随つて、戒を持せず但此の經を信ず
すなわ じかい じかい 爾前の經には十界互具を明さず故に菩薩無量劫を経て
しゅぎよう 修行すれども二乘・人天等の余戒の功德無く但一界の功德を成ず故に一界の
くどく 功德を以て成仏を遂げず、故に一界の功德も亦成ぜず、爾前の人・法華經に
すなわ じかい 至りぬれば余界の功德を一界に具す、故に爾前の經即ち法華經なり法華經
すなわ じかい 即ち爾前の經なり、法華經は爾前の經を離れず爾前の經は法華經を離れず
これ 是を妙法と言う、此の覺り起りて後は行者・阿含・小乘經を読むとも
すなわ いたし 即ち一切の大乗經を誦誦し法華經を読む人なり、故に法華經に云く「声聞
けつりよう の法を決了すれば是諸經の王なり」文、阿含經即ち法華經と云う文なり、

「いちぶつじよう　おい　ぶんべつ
一仏乘に於て分別して三と説く」文、華嚴・方等・般若即ち法華經と云う
文なり、「もし　ぞうかん　きようしよ　ちせい　ごげん　しせい
若し俗間の經書・治世の語言・資生の業等を説かんと皆正法に順
ず」文、一切の外道・老子・孔子等の經は即ち法華經と云ふ文なり、梵網經
等の權大乘の戒と法華經の戒とに多くの差別有り、一には彼の戒は二乗七逆
の者を許さず二には戒の功德に仏果を具せず三には彼は歷劫修行の戒なり
かくのごと　ほげきよう　おい　にじよう　ゆる
是くの如き等の多くの失有り、法華經に於ては二乗七逆の者を許す上・博地
の凡夫・一生の中に仏位に入り妙覺至つて因果の功德を具するなり。
ほんぶ　みようかくいた　いんが　くどく　ぐ

正元二年庚申四月二十一日

六一　教機時国抄　きようきじこくじよう

弘長二年二月十日　四十一歳御作　438P　こうちやう

日蓮　にちれん
花押　かおう

本朝沙門日蓮之を註す
ほんちやうしやもんにちれんこれ　しる

一に教とは釈迦如来所説の一切の經・律・論・五千四十八卷・四百八十帙
しやかによらいしよせつ　いっさい
ちつ

・天竺に流布すること一千年・仏の滅後・一千一十五年に當つて震旦国に
仏經渡る、後漢の孝明皇帝永平十年丁卯より唐の玄宗皇帝・開元十八年庚午
に至る六百六十四歳の間に一切經渡り畢んぬ、此の一切の經・律・論の中に
小乗・大乘・權經・實經・顯經・密經あり此等を弁うべし、此の名目
は論師・人師よりも出でず仏說より起る十方世界の一切衆生一人も無く
之を用うべし之を用いざる者は外道と知るべきなり、阿含經を小乗と説く
事は方等・般若・法華・涅槃等の諸大乘經より出でたり、法華經には一向
に小乗を説きて法華經を説かざれば仏慳貪に墮すべしと説きたもう、涅槃經
には一向に小乗經を用いて仏を無常なりと云わん人は舌口中に爛るべしと
云云。

二に機とは仏教を弘むる人は必ず機根を知るべし舍利弗尊者は金師に不淨
觀を教え浣衣の者には数息觀を教うる間九十日を経て所化の弟子佛法を一分

も覺らずして還つて邪見を起し一闡提と成り畢んぬ、仏は金師に数息觀を教
え浣衣の者に不淨觀を教えたもう故に須臾の間に覺ることを得たり、智慧第一
の舍利弗すら尚機を知らず何に況や末代の凡師機を知り難し但し機を知らざ
る凡師は所化の弟子に一向に法華經を教うべし、問うて云く無智の人の中に
して此の經を説くこと莫れとの文は如何、答えて云く機を知るは智人の説法
する事なり又謗法の者に向つては一向に法華經を説くべし毒鼓の縁と成さん
が為なり、例せば不輕菩薩の如し亦智者と成る可き機と知らば必ず先ず小乘
を教え次に權大乘を教え後に實大乘を教う可し、愚者と知らば必ず先ず
實大乘を教う可し信謗共に下種と為ればなり。

三に時とは仏教を弘めん人は必ず時を知るべし、譬えば農人の秋冬・田
を作るに種と地と人の功勞とは違わざれども一分も益無く還つて損す一段
を作る者は少損なり、一町二町等の者は大損なり、春夏耕作すれば上中下

に随したがつて皆分分に益有るが如ごとし、仏法ぶつぽうも亦復是くのこと、時を知らずして法ほけきを弘ひろめば益無き上還かえつて惡道に墮だするなり、仏出世しゅつせしたもうて必ず法華經ほけきようを説とかんと欲ほするに縦たとい機有れども時・無きが故に四十余年には此の經を説ときたまわず故に經に云く「説時未だ至らざるが故なり」等と云云、仏の滅後めつごの次の日より正法しょうぽう一千年は持戒じかいの者は多く破戒はかいの者は少し正法しょうぽう一千年の次の日より像法ぞうぽう一千年は破戒はかいの者は多く無戒むかいの者は少し、像法ぞうぽう一千年の次の日より末法まつぽう一万年は破戒はかいの者は少く無戒むかいの者は多し、正法しょうぽうには破戒はかい・無戒むかいを捨てて持戒じかいの者を供養くようすべし像法ぞうぽうには無戒むかいを捨てて破戒はかいの者を供養くようすべし、末法まつぽうには無戒むかいの者を供養くようすること仏の如くすべし但し法華經ほけきようを謗ぼうぜん者をば正像末しょうざうまつの三時に亘わたりて持戒じかいの者をも無戒むかいの者をも破戒はかいの者をも共に供養くようすべからず、供養くようせば必ず国に三災・七難起り供養くようせし者も必ず無間むげん・大城だいじように墮だすべきなり、法華經ほけきようの行者ぎやうじやの權經こんきようを謗ぼうずるは主君しゅくん・親おや・師しの所従しよじゆつ・子息しそく・

でし 弟子等を罰するが如し、 権經の行者の法華經を謗するは所従・子息・弟子

等の主君・親・師を罰するが如し、又当世は末法に入つて二百一十余年なり、

権經・念仏等の時か法華經の時か能く能く時刻を勘うべきなり。

四に国とは仏教は必ず国に依つて之を弘むべし国には寒国・熱国・貧国・

富国・中国・辺国・大国・小国・一向偷盜国・一向殺生国・一向不孝国

等之有り、又一向小乗の国・一向大乘の国・大小兼学の国も之有り、而

に日本国は一向に小乗の国か一向に大乘の国か大小兼学の国なるか能く

之を勘うべし。

五に教法流布の先後とは未だ仏法渡らざる国には未だ仏法を聴かざる者あ

り既に仏法渡れる国には仏法を信ずる者あり必ず先に弘まれる法を知つて後

の法を弘むべし先に小乗・権大乘弘らば後に必ず実大乘を弘むべし先に

実大乘弘らば後に小乗・権大乘を弘むべからず、瓦礫を捨てて金珠を取

るべし金珠こんじゆを捨てて瓦礫がりがくを取るなこと勿なれ。

已上の此の五義を知つて仏法ぶつぽうを弘ひろめば日本にほんの国師こくしと成る可べきか所以ゆえんに

法華經ほけきやうは一切經いっさいきやうの中の第一だいいちの經王きやうわうなりと知るは是これ教こを知る者たなり、但ただし

光宅こうたくの法雲ほううん・道場どうじやうの慧觀えいかん等は涅槃經ねはんぎやうは法華經ほけきやうに勝すぐれたりと、清涼山せいりやうの澄觀ちやうかん

・高野こうやの弘法こうぼう等は華嚴經けこんきやう・大日經だいにちきやう等は法華經ほけきやうに勝すぐれたりと、嘉祥寺かじやうの吉藏きちざう・

慈恩寺じあんの基法師きほふし等は般若はんにな・深密等じんみつの二經ふたきやうは法華經ほけきやうに勝すぐれたりと云いう、天台山てんだい

の智者大師ちしやだいし只一人ひとりのみ一切經いっさいきやうの中に法華經ほけきやうを勝すぐれたりと立つるのみに非あらず

法華經ほけきやうに勝すぐれたる經き之これ有ありと云いわん者を諫かんぎやう曉やせよ止やまずんば現世げんせに舌口くちゆう中ちゆう

に爛ただれ後生ごしやうは阿鼻地獄あびじこくに墮だすべし等と云いふ、此等これらの相違そついを能よく能よく之これを弁わきまえ

たる者は教しを知しれる者こなり、当世とうせの千万せんまんの学者等がくしや一一いっに之まよに迷まよえるか、若もし

爾しからば教しを知しれる者こ之これ少すこきか教しを知しれる者こ之これ無なければ法華經ほけきやうを讀よむ者し

之これ無なし法華經ほけきやうを讀よむ者し之これ無なければ国師こくしとなる者し無なきなり、国師こくしとなる者し

無ければ國中の諸人・一切經の大・小・権・実・顯・密の差別に迷うて一人に於ても生死を離るる者之れ無く、結句は謗法の者と成り法に依つて阿鼻地獄に墮する者は大地の微塵よりも多く法に依つて生死を離るる者は爪上の土よりも少し、恐る可し恐る可し、日本国の一切衆生は桓武皇帝より已來四百余年一向に法華經の機なり、例せば靈山八箇年の純円の機爲るが如し大師安然和尚慧心等の記に之有り是れ機を知れるなり、而るに当世の学者の云く日本国は一向に称名念仏の機なり等と云云、例せば舍利弗の機に迷うて所化の衆を一闡提と成せしが如し。

日本国の当世は如来の滅後二千二百一十余年後・五百歳に當つて妙法蓮華經広宣流布の時刻なり是れ時を知れるなり、而るに日本国の当世の学者・或は法華經を抛ちて一向に称名念仏を行じ・或は小乗の戒律を教えて叡山の大僧を蔑り・或は教外を立てて法華の正法を輕しむ此等は時に

迷える者か、例せば勝意比丘が喜根菩薩を謗じ徳光論師が弥勒菩薩を蔑りて
阿鼻の大苦を招きしが如し、日本国は一向に法華經の国なり例せば舍衛国の
一向に大乘なりしが如し、又天竺には一向に小乗の国一向に大乘の国・
大小兼学の国も之有り、日本国は一向大乘の国なり大乘の中にも法華經の
国為る可きなり瑜伽論肇公の記聖徳太子伝教是れ国を知れる者なり、而るに当世の学者
日本国の衆生に向つて一向に小乗の戒律を授け一向に念佛者等と成すは
「譬えば宝器に穢食を入れたるが如し」等云云の守護章に在り、日本国には欽明
天皇の御宇に仏法百済国より渡り始めしより桓武天皇に至るまで二百
四十余年の間・此の国に小乗・権大乘のみ弘まり法華經有りと雖も其の義
未だ顕れず、例せば震旦国に法華經渡つて三百余年の間・法華經有りと雖も
其の義未だ顕れざりしが如し、桓武天皇の御宇に伝教大師有して小乗・
権大乘の義を破して法華經の実義を顕せしより已来又異義無く純一に法華經

を信ず、たとひいけん設い華嚴・般若・深密・阿含・大小の六宗を学する者も法華經を
もつしよせんな以て所詮と為す、況や天台・真言の学者をや何に況や在家の無智の者をや、
例せば崑崙山に石無く蓬萊山に毒無きが如し、建仁より已来今に五十余年の
間・大日・仏陀・禅宗を弘め、法然・隆寛・浄土宗を興し実大乘を破し
て権宗に付き一切經を捨てて教外を立つ、譬えば珠を捨てて石を取り地を
離れて空に登るが如し此は教法流布の先後を知らざる者なり。

仏誡めて云く、いまし惡象に値うとも惡知識に値わざれと等と云云、法華經の勸持品
に後の五百歳二千余年に當つて法華經の敵人・三類有る可しと記し置きたま
えり当世は後・五百歳に當れり、日蓮・仏語の実否を勘うるに三類の敵人之有
り之を隱さば法華經の行者に非ず之を顕さば身命定めて喪わんか、法華經
第四に云く、いわ而も此の經は如来の現在にすら猶怨嫉多し況や滅度の後をや
等と云云、同じく第五に云く、いわ一切世間怨多くして信じ難し」と、又云く、「我

身命しんみょうを愛せず但無上道むじょうどうを惜むおしと、同第六いに云く「自ら身命しんみょうを惜まずおしと云云、涅槃經第九ねはんぎょうに云く「譬たとえば王使おうしの善能談論よくだんろんし方便ほうべんに巧みなる命たこくを他國たこくに奉うけ寧ろ身命しんみょうを喪うしなつとも終ついに王しよせつの所説げんきようの言教かくを匿かくさざるが如ごとし、智者ちしやも亦爾またしかなり凡夫ばんぷの中に於おいて身命しんみょうを惜まずして要かならずだいじようほうとう必せんぜつ大乘方等せんぜつを宣説せんぜつすべし」と云云、章安大師しやうあんだいししやく釈いして云く「寧喪身命にやうそうしんみやうふのくきやう不匿教ふたつじやくとは身は輕さんるいく法てきじんは重あらわし身を死しんみやうして法ひるを弘ひろめよ」等と云云、此等これらの本文ほんぶんを見れば三類さんるいの敵人てきじんを顯あらわさずんば法華經ほけきやうの行者ぎやうじやに非あらず之これを顯あらわすは法華經ほけきやうの行者ぎやうじやなり、而れども必しんみやうず身命しんみやうを喪うしなわんか、例れいせば師子尊者ししそんじや・提婆菩薩等だいばぼさつの如ごとくならん云云。

二月十日

にちれん
日蓮 花押

六二 顯謗法抄
けんぼうぼう

弘長二年 四十一歳御作 443P
ほんちやうしやもん
本朝沙門

にちれん
日蓮撰

第一に八大地獄の因果を明し、第二に無間地獄の因果の輕重を明し、第三に問答料簡を明し、第四に行者弘經の用心を明す。

第一に八大地獄の因果を明さば、第一に等活地獄とは此の閻浮提の地の

下・一千由旬にあり此の地獄は縱広齊等にして一万由旬なり、此の中の罪人

はたがいに害心をいだく若たまたま相見れば犬ととのあえるがごとし、各

鉄の爪をもて互につかみさく血肉既に尽きぬれば唯骨のみあり、或は獄卒

手に鉄杖を取つて頭より足にいたるまで皆打くだく身体くだけて沙のごと

し、或は利刀をもつて分分に肉をさく然れども又よみがへり・よみがへりす

るなり此の地獄の寿命は人間の昼夜五十年をもつて第一四王・天の一日一夜

として四王・天の天人の寿命五百歳なり、四王・天の五百歳を此れ等活地獄

の一日一夜として其の寿命五百歳なり、此の地獄の業因をいはば・ものの命

をたつもの此の地獄に墮つ螻蟻蚊等の小虫を殺せる者も懺悔なければ必ず

此の地獄じごくに墮おつべし、譬たとへばはりなれども水の上にをけば沈まざることなき
が如ごとし、又懺悔ざんげすれども懺悔ざんげの後に重ねて此の罪つみを作れば後の懺悔ざんげには此の罪つみ
きえがたし、譬たとへばぬすみをして獄ごくに入りぬるもののしばらく経て後に御免みゆるし
を蒙こゝろりて獄ごくを出ずれども又重ねて盗ぬすみをして獄ごくに入りぬれば出ゆるされがたき
が如ごとし、されば当世とうせの日本国にほんこくの人は上一人より下万民ばんみんに至まで此の地獄じごくをま
ぬがるる人は一人もありがたかるべし、何いかに持戒じかいのをばへをとれる持律じりつの僧
たりとも蟻虱ありしらみなんどを殺さず蚊あぶをあやまたざるべきか、況いはんや其外山野の
鳥鹿ちようろうく・江海の魚鱗うみうしを日日に殺すものをや、何いかに況いはんや牛馬人等を殺す者をや。
第二に黒繩地獄こくじようじごくとは等活地獄とうかつじごくの下にあり縦じゆう広かうは等活地獄とうかつじごくの如ごとし、獄卒ごくそつ・
罪人ざいにんをとらえて熱鉄の地にふせて熱鉄の繩をもつて身にすみうつて熱鉄の斧おの
をもつて繩したに随したがつてきり・さきけづる又鋸のこぎりを以てひく又左右さうに大なる鉄くろがね
の山あり山の上に鉄くろがねの幢はたほこを立て鉄くろがねの繩をはり罪人ざいにんに鉄くろがねの山を・をを

せて繩の上よりわたす繩より落ちてくだけ・或鉄あるくろがねのかなえに墮だし入れて・
にらる此の苦は上かみの等活地獄とうかつじごくの苦よりも十倍なり、人間のにんげん一百歳は第二の
とうりてん
利天りてんの一日一夜なり其の寿そ一千歳せんさいなり此の天の寿せんさい一千歳を一日一夜として
此の第二の地獄じごくの寿命じゅみょう一千歳せんさいなり、殺生せつしょうの上に偷盗ちゆうとうとて・ぬすみをかさね
たるもの此の地獄じごくにをつ、当世とうせの偷盗ちゆうとうのもの・ものをぬすむ上・物の主を殺
すもの此の地獄じごくに墮おつべし。

第三に衆合地獄じうごくとは黒繩地獄こくじようじごくの下にあり縦広じゆうかうは上かみの如ごとし多くの鉄くろがねの山
二つづつに相向さうかうへり、牛頭ごず・馬頭めず等の獄卒手ごくそつてに棒を取つて罪人ざいにんを駈かりて山の
間に入らしむ、此の時・両の山迫り来て合せ押す身体しんたいくだけて血流れて地に
みつ、又種種しゆじゆの苦あり、人間のにんげん二百歳を第三の夜・摩天まてんの一日一夜として此
の天の寿とし二千歳せんさいなり此の天の寿を一日一夜として此の地獄じごくの寿命じゅみょう二千歳せんさいな
り、殺生せつしょう・偷盗ちゆうとうの罪の上に邪淫じゃいんとて他人たにんのつまを犯す者・此の地獄じごくの中に

墮おつべし、而しかるに当世とうせの僧・尼・士・女・多分たぶんは此この罪つみを犯ことす殊ことに僧にこの罪つみ多しし、士女しにょは各各互たがいにまほり又人目ひとめをつつまざる故ゆえに此この罪つみを・をかさず僧しんは一人ある故ゆえに姪欲いんよくとぼしきところに若もし有身みこもれば父ただされ・あらはれぬべきゆへに独ひとりある女人にょにんを・をかさず、もしや・かくなると他人たにんの妻をうかがひ・ふかく・かくれんとをもうなり、当世とうせのほか・たうとげなる僧の中にこと此この罪つみ又多またくあるらんと・をぼゆ、されば多分たぶんは当世とうせ・たうとげなる僧此この地獄じごくに墮おつべし。

第四きようかんじごくに叫きよう喚地獄じごくとは衆合しゆごうの下にあり縦じゆう広前くわうぜんに同じ獄卒ごくそつ惡あく声こゑ出して弓きゆう箭せんをもつて罪人ざいにんをいる、又鉄くろがねの棒もを以もつて頭こゝろを打うつて熱鉄ねつてつの地ちをはしらしむ、
・或あるは熱鉄ねつてつのいりだなにうちかへし・うちかへし此この罪人ざいにんをあぶる、・或あるは口くちを開ひらてわける銅どうのゆを入いるれば五臟ござうやけて下したより直ただちに出いず、寿命じゆみようをいはば人間にんげんの四百歳しひやくさいを第四よんの都率天とそつの一日一夜いちにちとす、又都率天とそつの四千歳せんさいなり都率天とそつ

せんさい

の四千歳の寿を一日一夜として此の地獄の寿命四千歳なり、此の地獄の業因

をいはば・殺生偷盗・邪淫の上に飲酒とて酒のむもの此の地獄に墮つべし、

とうせ びく びくに うばそく うばい ししゅう お

当世の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の四衆の大酒なる者・此の地獄の苦

まめか だいろん とが まんもつきょう さかずき

免れがたきか、大論には酒に三十六の失をいだし梵網經には酒盃をすすめる

ひやくしやう たま にんし

者五百生に手なき身と生ると・とかせ給う人師の釈にはみみずていの者と

・なるとみへたり、況や酒をうりて人にあたえたる者をや何に況や酒に水を

入れてうるものをや・当世の在家の人人この地獄の苦まぬがれがたし。

きようかんじく

第五に大叫喚地獄とは叫喚の下にあり縦広前に同し、其の苦の相は上の

じく もろもろ

四の地獄の諸の苦に十倍して重くこれをうく、寿命の長短を云わば人間の

けらくてん

八百歳は第五の化樂天の一日一夜なり此の天の寿八千歳なり此の天の八千歳

を一日一夜として此の地獄の寿命八千歳なり、殺生・偷盗・邪淫・飲酒の

じゆんぱい

重罪の上に妄語とてそらごとせる者・此の地獄に墮つべし、当世の諸人は

もうい

じく お

とうせ

しよにん

たといけんじん
設い賢人・上人しやうにんなど・いはるる人人も妄語もうごせざる時はありとも妄語もうごをせざる日はあるべからず、設い日はありとも月はあるべからず設い月たといはありとも年はあるべからず設い年たといはありとも一期生いちぎせい・妄語もうごせざる者はあるべからず、若しもしからば当世とうせの諸人しよにん・一人もこの地獄じごくをまぬがれがたきか。

第六しやうなつじごくに焦熱地獄きやうかねじごくとは大叫喚地獄きやうかんじごくの下にあり縦広じゆうかう前にをなじ、此の地獄じごくに種種しゆじゆの苦あり若し此の地獄じごくの豆計りばかの火を閻浮提えんぶだいにをけらんに一時いちじにやけ尽きつなん況や罪人いわんやざいにんの身やわらかのなることわたのごとくなるをや、此の地獄じごくの人は前の五つの地獄じごくの火を見る事・雪の如しごと、譬へば人間たどの火の薪たきぎの火よりも鉄銅の火の熱きが如しごと、寿命じゆみようの長短ちやうたんは人間にんげんの千六百歳を第六の他化天たけてんの一日一夜として此の天の寿千六百歳なり此の天の千六百歳を一日一夜として此の地獄じごくの寿命じゆみよう一千六百歳なり、業因いづいんを云わば殺生せつしよう・偷盜ちゆうとう・邪淫じゃいん・飲酒おんじゆ・妄語もうごの上・邪見じゃけんとて因果いんがなしという者・此の中に墮おつべし、邪見じゃけんとは有人あるひとの

云く人飢えて死ぬれば天に生るべし等と云云、総じて因果をしらぬ者を邪見と申すなり世間の法には慈悲なき者を邪見の者という、当世の人人・此の地獄を免れがたきか。

第七に大焦熱地獄とは焦熱の下にあり縦広前の如し、前の六つの地獄の一切の諸苦に十倍して重く受るなり、其の寿命は半中劫なり、業因を云わば殺生・偷盜・邪淫・飲酒・妄語・邪見の上に淨戒の比丘尼を・をかせるもの此の中に墮つべし、又比丘・酒をもつて不邪淫戒を持てる婦女をたばらし・或は財物をあたへて犯せるもの此の中に墮つべし、当世の僧の中に多く此の重罪あるなり、大悲經の文に末代には士女は多くは天に生じ僧尼は多くは地獄に墮つべしととかれたるはこれていの事が、心あらん人人は・はづべし・はづべし。

総じて上の七大地獄の業因は諸經論をもつて勘え当世・日本国の四衆にあ

て見るに此の七大地獄をはなるべき人を見ず又きかず、涅槃經に云く末代に
入りて人間に生ぜん者は爪上の土の如し三惡道に墮つるものは十方世界の
微塵の如しと説かれたり、若爾らば我等が父母・兄弟等の死ぬる人は皆上の
七大地獄にこそ墮ち給いては候らめあさましともいふばかりなし、竜と蛇と
鬼神と仏・菩薩・聖人をば未だ見ずただをとにのみ・これをきく当世に上の
七大地獄の業を造らざるものをば未だ見ず又・をとにも・きかず、而るに我
が身よりはじめて一切衆生・七大地獄に墮つべしと・をもえる者・一人もな
し、設い言には墮つべきよしを・さえづれども心には墮つべしとも・をもわ
ず、又僧尼・士女・地獄の業をば犯すとは・をもえども・或は地藏菩薩等の
菩薩を信じ・或は阿弥陀仏等の仏を恃み・或は種種の善根を修したる者もあ
り、皆をもはく我はかかる善根をもてれば・なんと・うちをもひて地獄をも
をぢず、或は宗宗を習へる人人は各各の智分をたのみて又地獄の因を・をぢ

ず、而るに仏菩薩を信じたるも愛子・夫婦などをあいし父母・主君などをうやまうには雲泥なり、仏・菩薩等をば・かろくをもえるなり、されば当世の人人の仏・菩薩を恃めれば宗宗を學したれば地獄の苦はまぬがれなんなんど・をもえるは僻案にや心あらん人人はよくよくはかりをもうべきか。

第八に大阿鼻地獄とは又は無間地獄と申すなり欲界の最底・大焦熱地獄の下にあり此の地獄は縦広八万由旬なり、外に七重の鉄の城あり地獄の極苦は且く之を略す前の七大地獄並びに別処の一切の諸苦を以て一分として大阿鼻地獄の苦一千倍勝れたり、此の地獄の罪人は大焦熱地獄の罪人を見る事・他化自在天の樂みの如し、此の地獄の香のくさを人かくならは四天下・欲界・六天の天人皆ししなん、されども出山・没山と申す山・此の地獄の臭き氣を・をさへて人間へ来らせざるなり、故に此の世界の者死せずと見へぬ、若し仏・此の地獄の苦を具に説かせ給はば人聴いて血をはいて死すべき故に

くわしく仏説き給はずとみへたり、此の無間地獄の寿命の長短は一中劫なり一中劫と申すは此の人寿無量歳なりしが百年に一寿を減じ又百年に一寿を減ずるほどに人寿十歳の時に減ずるを一減と申す、又十歳より百年に一寿を増し又百年に一寿を増する程に八万歳に増するを一増と申す、此の一増一減の程を小劫として二十の増減を一中劫とは申すなり、此の地獄に墮ちたる者これ程久しく無間地獄に住して大苦をうくるなり、業因を云わば五逆罪を造る人・此の地獄に墮つべし、五逆罪と申すは一に殺父・二に殺母・三に殺阿羅漢・四に出仏身血・五に破和合僧なり、今の世には仏ましまさず・しかれば出仏身血あるべからず、和合僧なければ破和合僧なし、阿羅漢なければ殺阿羅漢これなし、但殺父・殺母の罪のみありぬべし、しかれども王法のいましめきびしくあるゆへに此の罪・をかしがたし、若爾らば当世には阿鼻地獄に墮つべき人すくなし但し相似の五逆罪これあり木画の仏像・堂塔等をやき

・かの仏像等の寄進の所をうばいとり率兜婆等をきりやき智人を殺しなど
するもの多し、此等は大阿鼻地獄の十六の別処に墮つべし、されば当世の衆生
十六の別処に墮つるもの多きか又謗法の者この地獄に墮つべし。

第二に無間地獄の因果の輕重を明さば、問うて云く五逆罪より外の罪によ

りて無間地獄に墮んことあるべしや、答えて云く誹謗正法の重罪なり、問

うて云く証文如何、答えて云く法華經第二に云く「若し人信ぜずして此の經

を毀謗せば乃至其の人命終して阿鼻獄に入らん」等と云云、此の文に謗法

は阿鼻地獄の業と見へたり、問うて云く五逆と謗法と罪の輕重如何、答て

云く大品經に云く「舍利弗・仏に白して言く世尊五逆罪と破法罪と相似する

や、仏・舍利弗に告わく相似と言つべからず所以は何ん若し般若波羅蜜を破れ

ば即ち十方諸仏の一切智一切種智を破るに為んぬ、仏宝を破るが故に法宝を

破るが故に僧宝を破るが故に三宝を破るが故に即ち世間の正見を破す世間の

せいけん 正見を破れば。○ 則ち無量無辺阿僧祇の罪を得るなり。無量無辺阿僧祇の罪を得
すなわ むりようむへん あ そ ぎ つみ
おわ 已つて則ち無量無辺阿僧祇の憂苦を受けるなり。文又云く、「破法の業・因縁集
すなわ むりようむへん あ そ ぎ ゆうく いわ はほう いんねん
るが故に無量百千万億歳大地獄の中に墮つ、此の破法人の輩一大地獄より一
ゆえ むりよう せんまん だいじこく はほう やから だいじこく
だいじこく いた も こうかおこ たほう だいじこく いた かくのごと じゅうほう
大地獄に至る若し劫火起る時は他方の大地獄の中に至る、是くの如く十方に
あまね ぐして彼の間に劫火起る故に彼より死し破法の業・因縁未だ尽きざるが
ゆえ こ だいじこく かんらい ぼほうの業・因縁未だ尽きざるが
故に是の間の大地獄の中に還来す」等と云云、法華經第七に云く、「四衆の中
しんに に瞋恚を生じ心不浄なる者有り悪口罵詈して言く是れ無智の比丘と、・或は
じようもくがしゃく もっ こ あつくめり いわ こ むち びく ある
杖木瓦石を以て之れを打擲す乃至千劫阿鼻地獄に於て大苦悩を受く」等と
ちようちやく ないしせんこう あびじこく おい くのうち
云云、此の經文の心は法華經の行者を悪口し及び杖を以て打擲せるもの
きようもん ほけきよう ぎようじゃ あつく およ もっ ちようちやく
其の後に懺悔せりといえども罪いまだ滅せずして千劫阿鼻地獄に墮ちたりと
そ ぜんげ づみ せんこう あびじこく お
見えぬ、懺悔せる謗法の罪すら五逆罪に千倍せり況や懺悔せざらん謗法にを
ぜんげ ほうほう つみ こぎやくさい いわんや ぜんげ ほうほう
いては阿鼻地獄を出ずる期かたかるべし、故に法華經第二に云く、「經を誦誦
あびじこく い ゆえ ほけきよう いわ どくじゆ

し書持しよじすること有らん者を見て輕賤きやうせん憎嫉そうしつして結恨けつこんを懷いだかん乃至ないし其の人命終みようじゆうして阿鼻獄あびごくに入り一劫いつこくを具足ぐそくして劫尽つきなば更生またうまれん、是かくくの如ごとく展轉てんでんして無數劫むしゆこくに至らん等と云云。

第三に問答料簡もんどうりやうけんを明あかさば問うて云く五逆罪ごぎやくざいと謗法罪ぼうぼうざいとの輕重けいちゆうはしんぬ

謗法ぼうぼうの相貌そうみやう如何いかん、答えて云く天台智者大師てんだいちしやだいしの梵網經ぼんもつぎやうの疏じよに云く謗そむくとは背そむくな

り等と云云、法そむに背そむくが謗法ぼうぼうにてはあるか天親てんじんの仏性論ぶつしやうろんに云く若もし憎そむは背そむく

なり等と云云、この文の心しんは正法しやうぽうを人に捨てさせるが謗法ぼうぼうにてあるなり、問

うて云く委細いさいに相貌そうみやうをしらんとをもうあらあら・しめすべし、答えて云く

涅槃經ねはんぎやう第五に云く、若もし人有にやうじんりて如來むじやうは無常むじやうなりと言いわん云何なんぞ是この人舌墮落だらく

せざらん等云云、此の文の心しんは仏むじやうを無常むじやうといはん人は舌墮落だらくすべしと云云、

問うて云く諸しよの小乘經しやうじやうぎやうに仏むじやうを無常むじやうと説しやけかるる上又所化しやけの衆みなむじやう皆無常みなむじやうと談だんじき

若爾もししからば仏しよけ・並しやけに所化しやけの衆だらくの舌墮落だらくすべしや、答えて云く小乘經しやうじやうぎやうの仏しよけを

しやうじようきやう

小乗經しやうじようきやうのむじやう人が無常ととき談だんずるは舌ただれざるか、大乘經だいじようきやうに向つて仏を

むじやう

無常と談じしやうじようきやう小乗經しやうじようきやうに對して大乘經だいじようきやうを破するが舌は墮落するか、此れをも

つて・をもうに・をのれが依經えきやうには隨つかえども依經えきやうよりすぐれたる經を破する

はほう

は破法となるか、若爾もししからば設たといい觀經かんきやう・華嚴經けこんきやう等のこんだいじようきやう權大乘經こんだいじようきやうのひとびと人人しよえ・所依の

經の文の如く修行すともかの經にすぐれたる

經經きやうきやうに隨したがはず又すぐれざる

よし

由を談ぜば謗法ほうほうとなるべきか、されば觀經かんきやう等の經の如く法をえたりとも觀經かんきやう

等を破せる經の出来したらん時其の經に隨したがわずば破法となるべきか、

しやうじようきやう

小乗經しやうじようきやうを以てなぞらえて心うべし。

問いわつて云く雙觀經そうかんきやう等に乃至十念ないし・即得往生そくとくおうじようなんととかれて候が彼のけう

の教こへんの如く十念しうねん申して往生おうじようすべきを後の經を以て申しやぶらば謗法ほうほうにては候

まじきか、答えて云く仏いわ・觀經かんきやう等のよんじゅうねん四十余年の經經きやうきやうを束みけんて未顕真実みけんしんじつと説か

せ給たまいぬれば此の經文きやうもんに隨したがつて乃至十念そくとくおうじよう・即得往生そくとくおうじよう等は實には往生おうじようしがた

しと申す此の經文なくば謗法となるべし、問うて云く・或人云く無量義經の
四十余年・未顕眞実の文はあえて四十余年の一切の經經並に文・句句を
皆未顕眞実と説き給にはあらず、但四十余年の經經に処処に決定性の二乗
を永不成仏ときらはせ給い釈迦如来を始成正覺と説き給しを其の言ばかりを
さして未顕眞実とは申すなりあえて余事にはあらず、而るをみだりに四十余年
の文を見て觀經等の凡夫のために九品往生なんぞを説きたるを妄りに往生
はなき事なりなんと押し申すあにをそろしき謗法の者にあらずやなんと申す
はいかに、答えて云く此の料簡は東土の得一が料簡に似たり、得一が云く
未顕眞実とは決定性の二乗を仏・爾前の經にして永不成仏ととかれしを未顕
眞実とは嫌はるるなり前四味の一切には亘るべからずと申しき、伝教大師は
前四味に亘りて文・句句に未顕眞実と立て給いき、さればこの料簡は古の
謗法者の料簡に似たり、但し且く汝等が料簡に随て尋ね明らめん、問う

法華已前に二乗作仏を嫌いけるを今未顕眞実というとならば先ず決定性の
二乗を仏の永不成仏と説かせ給し処の經文ばかりは未顕眞実の仏の妄語な
りと承伏せさせ給うか、さては仏の妄語は勿論なり若し爾らば妄語の人の
申すことは有無共に用いぬ事にてあるぞかし、決定性の二乗・永不成仏の語
ばかり妄語となり若し余の菩薩・凡夫の往生・成仏等は実語となるべきな
らば信用しがたき事なり、譬へば東方を西方と妄語し申さん人は西方を東方
と申すべし二乗を永不成仏と説く仏は余の菩薩の成仏をゆるすも又妄語にあ
らずや、五乗は但一仏性なり二乗の仏性をかくし菩薩・凡夫の仏性をあら
はすは返つて菩薩・凡夫の仏性をかくすなり。

有人云く四十余年・未顕眞実とは成仏の道ばかり未顕眞実なり往生等は
未顕眞実にはあらず、又難じて云く四十余年が間の説の成仏を未顕眞実と
承伏せさせ給はば雙觀經に云う不取正覺成仏已來凡歷十劫等の文は未顕

眞実と承伏せさせ給うか、若し爾らば四十余年の経経にして法蔵比丘の
阿弥陀仏になり給はずば法蔵比丘の成仏すでに妄語なり、若し成仏妄語な
らば何の仏か行者を迎え給うべきや、又かれ此の難を通して云ん四十余年が
間は成仏はなし阿弥陀仏は今の成仏にはあらず過去の成仏なり等と云云、
今難じて云く今日の四十余年の経経にして実の凡夫の成仏を許されずば
過去遠遠劫の四十余年の権経にても成仏叶いがたきか、三世の諸仏の説法
の儀式皆同きが故なり、或は云く不得疾成・無上菩提ととかるれば
四十余年の経経にては疾くこそ仏にはならねども遅く
劫を経てはなるか、難じて云く次下の大莊嚴菩薩等の領解に云く「不可思議
無量無辺阿僧祇劫を過るとも終に無上菩提を成ずることを得ず」等と云云、
此の文の如くならば劫を経ても爾前の経計りにては成仏はかたきか。

有は云う華嚴宗の料簡に云く四十余年の内には華嚴経計りは入るべから

ず、華嚴經にすでに往生成仏・此ありなんぞ華嚴經を行じて往生成仏を

とげざらん、答えて云く四十余年の内に華嚴經入るべからずとは華嚴宗の大師

の義なり、無量義經には正く四十余年の内に華嚴海空と名目を呼び出して

四十余年の内にかずへ入れられたり、大師を本とせば仏に背くになりぬ。

問うて云く法華經をはなれて往生成仏をとげずば仏世に出させ給ては但

法華經計をこそ説き給はめ、なんぞわづらはしく四十余年の經經を説かせ

給うや、答えて云く此の難は仏、自ら答え給えり、若し但仏乘を讃せば衆生

苦に没在して法を破して信ぜざるが故に三惡道に墜ちなん、等の經文これな

り、問うて云くいかなれば爾前の經をば衆生謗せざるや、答えて云く爾前の

經經は万差なれども束ねて此れを論ずれば隨他意と申して衆生の心をとか

れてはんべり故に違する事なし、譬へば水に石を・なぐるに・あらそうこと

なきがごとし又しなじなの説教はんべれども九界の衆生の心を出でず衆生

の心は皆善につけ悪につけて迷を本とするゆへに仏にはならざるか、問うて
いいわしめしめじようぼうう云く衆生謗すべきゆへに仏・最初に法華經をとき給はずして四十余年の後に
ほほけききよう法華經をとき給はば汝なんぞ当世に權經をば・とかずして左右なく法華經
をといて人に謗をなさせて惡道に墮すや、答えて云く仏在世には仏・菩提樹
の下に坐し給いて機をかがみ給うに當時・法華經を説くならば衆生謗して
あくどどうお惡道に墮ちぬべし、四十余年すぎて後にとかば謗せずして初住不退・乃至
みようかくく妙覺にのぼりぬべしと知見し・ましましき、末代濁世には當機にして初住
の位に入るべき人は万に一人もありがたかるべし、又能化の人も仏にあらざ
れば機をかがみん事もこれかたし、
されば逆縁・順縁のために先ず法華經を説くべしと仏ゆるし給へり、但し又
滅後なりとも當機衆になりぬべきものには先ず權教をとく事も・あるべし、
又悲を先とする人は先ず權經をとく釈迦仏のごとし慈を先とする人は先ず

じつきよう

実經をとくべし不輕菩薩のごとし、又末代の凡夫はなにとなくとも惡道を

まぬか

免れんことはかたかるべし同じく惡道に墮るならば法華經を謗ぜさせて墮す

せけん つみ

ならば世間の罪をもて墮ちたるには・にるべからず、聞法生謗・墮於地獄・

しょうおくよう じうしやぶししや

勝於供養・恒沙仏者等の文のごとし、此の文の心は法華經をはうじて地獄に

お しゃかぶつ あみだぶつ

墮ちたるは釈迦仏・阿弥陀仏等の恒河沙の仏を供養し歸依渴仰する功德には

ひやくせんまんばい

百千万倍すぎたりととかれたり。

問うて云く上の義のごとくならば華嚴・法相・三論・真言・淨土等の祖師

ほうほう だ

はみな謗法に墮すべきか、華嚴宗には華嚴經は法華經には雲泥超過せり法相

さんろん

・三論もてかくのごとし、真言宗には日本国に一の流あり東寺の真言は

ほけきよう けこんきよう

法華經は華嚴經にをとれり何に況や大日經にをいてをや、天台の真言には

だいにちきよう ほけきよう

大日經と法華經とは理は齊等なり印真言等は超過せりと云云、此等は皆惡道

お いわ

に墮つべしや、答えて云く宗をたて經經の勝劣を判ずるに二の義あり、一

は似破・二は能破なり一に似破とは他の義は吉とをもえども此をはすかの
正義を分明にあらはさんがためか、一二に能破とは実に他人の義の勝れたるを
ば弁えずして迷うて我が義すぐれたりとをもひて心中よりこれを破するを
ば能破という・されば彼の宗宗の祖師に似破・能破の二の義あるべし、心中
には法華経は諸経に勝れたりと思えども且く違して法華経の義を顕さんとを
もひてこれをはする事あり、提婆達多・阿闍世王・諸の外道が仏のかたきと
なりて仏徳を顕し後には仏に歸せしがごとし、又実の凡夫が仏のかたきとな
りて惡道に墮つる事これ多し、されば諸宗の祖師の中に回心の筆をかかずば
謗法の者惡道に墮ちたりとするべし、三論の嘉祥・華嚴の澄觀・法相の慈恩
・東寺の弘法等は回心の筆これあるか、よくよく尋ねならうべし。

問うて云くまことに今度生死をはなれんと・をもはんに・なにものをか・
いとひなにものをか願うべきや、答う諸の經文には女人等をいとうべしとみ

へたれどもそつりんさいこ雙林最後の涅槃經に云く「菩薩是の身に無量の過患具足充滿すと
見るといえど雖も涅槃經を受持せんと欲するを為ての故にねはんぎょう猶好く將護してじゆじ乏少なら
しめず、菩薩惡象等に於ては心に恐怖すること無れ惡知識に於ては怖畏の心
を生ぜよ、何を以ての故に是れ惡象等は唯能く身を壞りて心を壞る事能わず、
惡知識は二俱に壞るが故に、惡象の若きは唯一身を壞る惡知識は無量の身・
無量の善心を壞る、惡象の為に殺されては三趣に至らず惡友の為に殺されて
は三趣に至る」等と云云此の經文の心は後世を願はん人は一切の惡縁を恐る
べし一切の惡縁よりは惡知識を・をそるべしとみえたり。

されば大莊嚴仏の末の四の比丘は自ら惡法を行じて十方の大阿鼻地獄を経
るのみならず、六百億人の檀那等をも十方の地獄に墮しぬ、
跋陀が教に随つて九百九十九人の指をきり結句・母・並に仏をがいせんとぎ
す、善星比丘は仏の御子・十二部經を受持し四禪定をえ欲界の結を断じた

りしかども苦得外道の法を習うて生身に阿鼻地獄に堕ちぬ、提婆が六万蔵・
八万蔵を暗じたりしかども外道の五法を行じて現に無間に堕ちにき、阿闍世
王の父を殺し母を害せんと擬せし大象を放つて仏をうしないたてまつらんと
せしも悪師・提婆が教なり、俱伽利比丘が舍利弗・目連をそしりて生身に
阿鼻に堕せし、大族王の五竺の仏法僧をほろぼせし、大族王の舎弟は
加弥羅国の王となりて健駄羅国の率都婆・寺塔・一千六百所をうしなひし、
金耳国王の仏法をほろぼせし、波瑠璃王の九千九十万の人をころして血な
がれて池をなせし、設賞迦王の仏法を滅し菩提樹をきり根をほりし、後周の
宇文王の四千六百余所の寺院を失ひ二十六万六百余の僧尼を還俗せしめし、
此等は皆悪師を信じ悪鬼其の身に入りし故なり。

問うて云く天竺・震旦は外道が仏法をほろぼし小乗が大乗をやぶるとみ
えたり、此の日本国もしかるべきか、答えて云く月支・戸那には外道あり

小乗しょうじょう あり此この日本国にほんこくには外道げどうなし 小乗しょうじょうの者なし、紀典博士等これあれども
も仏法ぶつぽうの敵となるものこれなし、小乗しょうじょうの三宗これあれども彼宗しやうじを用もちて生死しやうじ
をはなれんと・をもはず但ただ大乘だいじやうを心こころうる才覚さいかくとをもえり、但ただ此この国には
大乘だいじやうのみこれあり人人ひとびと皆みなをもえらく彼の宗宗しやうじにして生死しやうじをはなるべし
とをもう故ゆえにあらそいも多くいできたり、又檀那だんなの歸依きえも多くあるゆへに利養りやう
の心もふかし。

第四よに行者ぎやうじや・仏法ぶつぽうを弘ひろむる用心ようじんを明あかさば、夫それ仏法ぶつぽうをひろめんと・をもは
んものは必ず五義ごぎを存しんして正法しょうぽうをひろむべし、五義ごぎとは一いちには教きやう・二にには機き
・三さんには時とき・四よには国こく・五ごには仏法ぶつぽう流布りゅうふの前後ぜんごなり、第一だいいちに教きやうとは如来にょらい一代いちだい
五十年ごっしやうの説教だいしやうは大小ごんじつ・権實けんみつ・顯密けんみつの差別さべつあり、華嚴宗けこんしゆつには五教いちだいを立て一代いちだい
を・をさめ其その中には華嚴けこん・法華ほつけを最勝さいしやうとし華嚴けこん・法華ほつけの中に華嚴經けこんきやうを以もつて
第一だいいちとす、南三なんさん・北七ほくひち並ならに華嚴宗けこんしゆつの祖師そし日本国にほんこくの東寺とうじの弘法大師こうぼうだいし・此この義ぎな

り、法相宗は三時に一代を・をさめ其の中に深密法華經を一代の聖教にす
 ぐれたりとす、深密・法華の中・法華經は了義經の中の不了義經・深密經は
 了義經の中の了義經なり、三論宗に又二藏・三時を立つ三時の中の第三
 中道教とは般若・法華なり、般若・法華の中には般若最第一なり、真言宗
 には日本国に一の流あり東寺流は弘法大師十住心を立て第八法華・第九
 華嚴・第十真言・法華經は大日經に劣るのみならず猶華嚴經に下るなり、
 天台の真言は慈覺大師等大日經と法華經とは広略の異法華經は理秘密・
 大日經は事理俱密なり、淨土宗には聖道・淨土・難行・易行雜行・
 正行を立てたり淨土の三部經より外の法華經等の一切經は難行・聖道・
 雜行なり、禪宗には一の流あり一流は一切經・一切の宗の深義は禪宗な
 り一流は如来一代の聖教は皆言説・如来の口輪の方便なり禪師は如来の
 意密言説にをよばず教外の別伝なり、俱舍宗・成実宗・律宗は小乘宗な

りてんじく天竺・震旦しんたんには小乗しょうじょう宗の者だいじょう大乘を破はする事これ多し日本国にほんこくには其その義なし。

問いわうて云く諸宗しよしゅうの異義いぎ区まちまちなり――に其その謂いわれありて得道とくどうをなすべきか又
諸宗しよしゅう皆謗法みなほうぼうとなりて一宗ぱか計せいぎり正義せいぎとなるべきか、答いえて云く異論いろん相違そういありと
いえども皆得道みなとくどうなるか、仏の滅後めつご四百年しひゃくねんにあたりて健駄羅國けんだらかの迦か式しき色迦王しきしか・
仏法ぶつぽうを貴とうとみ一夏いちげ・僧きようを供ぶつぽうし仏法ぶつぽうをといしに――の僧いぎ・異義いぎ多し此この王ふしん不審ふしんし
て云く仏説いは定ぶつせつて一つならんと終ついに脇尊者きやうそんじやに問いう、尊者そんじや答いて云く金杖こんじやうを折あつ
て種種しゆじゆの物ものにつくるに形かたちは別べつなれども金杖こんじやうは一ひとなり形かたちの異ことなるをば諍あうとい
へども金こがねたる事ことをあらそはず、門ふ門どう不同ふどうなればいりかどをば諍あえども入理あは
一ひとなり等とと云云、又求那跋摩くなぱつまいわ云く諸論しよろん各異端いたんなれども修行しゆぎやうの理ことは二無へんしし偏執しゆ
に是非ぜひ有ありとも達者だいじゃは違諍いじやう無なし等と云云、又五百羅漢らかんの真因しんいん各異ことなれども同
く聖理せいりをえたり、大論だいろんの四悉檀ししつたんの中ちゆうの対治悉檀たいじしつたん・撰論じやうろんの四意趣しいうその中ちゆうの衆生しゆじやう

意樂意趣・此等は此の善を嫌い此の善をほむ、檀戒進等一一にそしり一一に

ほむる皆得道なる、此等を以てこれを思うに護法・清弁のあらそい智光・

戒賢の空中・南三・北七の頓漸・不定・一時・二時・三時・四時・五時・四

宗・五宗・六宗・天台の五時・華嚴の五教・真言教の東寺・天台の諍・

浄土宗の聖道・浄土・禅宗の教外・教内、入門は差別せりということとも実理

に入る事は但一なるべきか。

難じて云く華嚴の五教・法相・三論の三時・禅宗の教外・浄土宗の難行

・易行・南三・北七の五時等・門はことなりと・いへども入理・一にして皆

仏意に叶い謗法とならずといはば謗法という事あるべからざるか謗法とは法

に背くという事なり法に背くと申すは小乗は小乗経に背き大乘は

大乘経に背く法に背かばあに謗法とならざらん謗法とならばなんぞ苦果を

まねかざらん、此の道理にそむくこれひとつ、大般若経に云く「般若を謗す

る者は十方の大阿鼻地獄に墮つべし」法華經に云く「若し人信ぜずして乃至其の人命終して阿鼻獄に入らん」と涅槃經に云く「世に難治の病三あり一には四重・二には五逆・三には謗大乘なり」此等の經文あにむなしかるべき、此等は証文なり、されば無垢論師・大慢婆羅門・熙連禪師・嵩靈法師等は正法を謗じて現身に大阿鼻地獄に墮ち舌口中に爛れたりこれは現証なり、天親菩薩は小乗の論を作つて諸大乘經・をはしき、後に無著菩薩に對して此の罪を懺悔せんがために舌を切らんとくい給いき、謗法もし罪とならずんばいかんが千部の論師懺悔をいたすべき、闡提とは天竺の語此には不信と翻す不信とは一切衆生悉有仏性を信ぜざるは闡提の人と見へたり。

不信とは謗法の者なり恒河の七種の衆生の第一は一闡提・謗法常没の者なり、第二は五逆・謗法常没等の者なりあに謗法を・をそれざらん、答えて

云く謗法とは只由なく仏法を謗ずるを謗法といふか我が宗をたてんがために
余法を謗ずるは謗法にあらざるか、撰論の四意趣の中の衆生意樂意趣とは
仮令人ありて一生の間・一善をも修せず但悪を作る者あり而るに小縁にあい
て何れの善にてもあれ一善を修せんと申す・これは随喜讚歎すべし、又善人
あり一生の間ただ一善を修す而るを他の善え・うつさんがためにそのぜんを
そしる、一事の中に於て・或は呵し・或は讃すというこれなり、大論の四悉檀
の中の対治悉檀又これをなじ、浄名經の彈呵と申すは阿含經の時ほめし法
をそしるなり、此等を以てをもふに・或は衆生多く小乗の機あれば大乘
を謗りて小乗經に信心をまし・或は衆生多く大乘の機なれば小乗をそ
しりて大乘經に信心をあつくす・或は衆生・弥陀仏に縁あれば諸仏をそ
しりて弥陀に信心をまさしめ、或は衆生多く地蔵に縁あれば諸菩薩をそ
りて地蔵をほむ、或は衆生多く華嚴經に縁あれば諸經をそしりて華嚴經を

ほむ、・或は衆生・大般若經に縁あれば諸經をそしりて大般若經をほむ、

・或は衆生・法華經・或は衆生

だいにちきよう

大日經等同く心うべし、機を見て・或は讃め・或は毀る共に謗法とならず

しか

而るを機をしらざる者みだりに・或は讃め・或は皆るは謗法となるべきか、

例せば華嚴宗・三論・法相・天台・真言・禪・淨土等の諸師の諸經をはして

我が宗を立つるは謗法とならざるか。

難じて云く宗を立てんに諸經・諸宗を破し仏・菩薩を讃むるに仏・菩薩

を破し他の善根を修せしめんがために・この善根をはする・くるしからずば

阿含等の諸の・小乘經に華嚴經等の諸大乘經をはしたる文ありや、華嚴經

に法華・大日經等の諸大乘經をはしたる文これありや、答えて云く阿含・

小乘經に諸大乘經をはしたる文はなけれども華嚴經には一乘大乘・

一乘をあけて二乘大乘をはし涅槃經には諸大乘經をあけて涅槃經に対し

てこれをはす、密嚴經には一切經中王ととき無量義經には四十余年・未顕
眞実ととかれ阿弥陀經には念仏に對して諸經を小善根ととかる、これらの例
一にあらず故に又彼の經經による人師皆此の義を存せり、此等をもつて思
うに宗を立つる方は我が宗に對して諸經を破るはくるしからざるか、難じて
いわく華嚴經には小乘・大乘・一乘とあげ密嚴經には一切經中王ととか
れ涅槃經には是諸大乘とあげ阿弥陀經には念仏に對して諸經を小善根とは
とかれたれども無量義經のごとく四十余年と年限を指して其の間の大部の
諸經・阿含・方等・般若・華嚴等の名をよびあげて勝劣をとける事これな
し、涅槃經の是諸大乘の文計りこそ雙林最後の經として是諸大乘ととかれ
たれば涅槃經には一切經は嫌はるかと・をばうれども是諸大乘經と挙げて
次ぎ下に諸大乘經を列ねたるに十二部・修多羅・方等・般若等とあげたり
むりようぎきょう 法華經をば載せず、但し無量義經に挙ぐるところは四十余年の阿含
無量義經・法華經をば載せず、但し無量義經に挙ぐるところは四十余年の阿含

・方等・般若・華嚴經をあげたり、いまだ法華經・涅槃經の勝劣はみへず

密嚴に一切經中王とはあげたれども一切經をあぐる中に華嚴・勝鬘等の

しよきよう

諸經の名をあげて一切經中王ととく故に法華經等とはみへず、阿弥陀經の

ぜんこん

じせつ

ぜんこん

そうみよう

ゆえ

ほけきよう

あみだ

小善根は時節もなし善根の相貌もみへず、たれかする小乗經を小善根と

にんてん

ぜんこん

ぜんこん

かんきよう

そうかんきよう

しよせつ

しよぜん

いか又人天の善根を小善根といつか又觀經・雙觀經の所説の諸善を小

ぜんこん

善根といつかいまだ一代を念仏に對して小善根といとはきこえず。

ぜんこん

いちだい

ねんぶつ

ぜんこん

だいにちきよう

ろくはらみつきよう

もろもろ

又大日經・六波羅蜜經等の諸の秘教の中にも一代の一切經を嫌うてその

ただ

むりようぎきようばか

よんじゅうよねん

しよきよう

經をほめたる文はなし、但し無量義經計りこそ前四十年の諸經を嫌い

ほけきよういつきよう

いせつ

よんじゅうよねん

こんせつ

むりようぎきよう

とつせつ

みらい

法華經一經に限りて已説の四十余年・今説の無量義經・當説の未来にとくべ

ねはんぎよう

きら

ほけきようばか

しゃかによらい

かこ

げんざい

みらい

さんぜ

き涅槃經を嫌うて法華經計りをほめたり、釈迦如来・過去・現在・未来の三世

しよぶつ

たまひ

いっさいきよう

と

たま

ほけきようだいichi

の諸仏世にいで給いて各各一切經を説き給うにいづれの仏も法華經第一な

ふじよう

いなか

ひやくせい

ろつじゅう

り、例せば上郎・下郎不定なり田舎にしては百姓・郎従等は侍を上郎とい

ふ、洛陽らくようにして源平等げんどうとう已下いかを下郎げらうといふ三家を上郎じやうといふ、又主を王わうといはば百姓ひやくせいも宅中の王わうなり地頭じとう・領家等も又・村・郷・郡・国の王わうなり・しかれども大王だいうわうにはあらず、小乗經しょうじやうきやうには無為涅槃むいねはんの理りが王わうなり小乗しょうじやうの戒定等かいじやうに對して智慧ちえは王わうなり、諸大乘經しよだいじやうきやうには中道ちゆうどうの理りが王わうなり又華嚴經けこんきやうは円融えんゆう相即そうそくの王・般若經はんになきやうは空理くうりの王・大集經だいしつきやうは守護正法しゆごしやうほうの王・藥師經やくしは藥師如來やくしにらひの別願べつがんを説く經の中の王・雙觀經そうかんきやうは阿彌陀仏あみだぶつの四十八願を説く經の中の王・大日經だいにちきやうは印真言しんじんを説く經の中の王・一代いちだい・一切經いっさいきやうの王にはあらず、法華經ほけきやうは真諦しんたい・俗諦ぞくたい・空仮中印真言くうけちゆう しんじん・無為の理むい・十二大願じふにだいがん・四十八願しふじふはちがい・一切諸經いっさいしよきやうの所説しよせつの所詮しよせんの法門ほうもんの大王だいうわうなり、これ教をしれる者しなり而しかるを善無畏ぜんむい・金剛智こんごうち・不空ふくう・法藏ほうぞう・澄觀ちやうかん・慈恩じおん・嘉祥かじやう・南三なんざん・北七ほくひち・曇鸞どんらん・道綽どうしゆく・善導ぜんどう・達磨だるま等の我が所立しよりゆうの依經えきやうを一代第一いちだいいちちといえるは教をしらざる者たなり、但し一切いっさいの法師にんしの中には天台智者大師てんだいちしやだいし一人教をしれる人なり、曇鸞どんらん・道綽どうしゆく等の聖道しやうどう・

浄土・難行・易行・正行・雜行は源と十住毘婆沙論に依る彼本論に
難行の内に法華・真言等を入ると謂は僻案なり、論主の心と論の始中終
をしらざる失あり慈恩が深密經の三時に一代を・をさめたる事、又本經の三
時に一切經の損らざる事をしらざる失あり、法蔵・澄觀等が五教に一代を
・をさむる中に法華經・華嚴經を円教と立て又華嚴經は法華經に勝れたりと
をもえるは所依の華嚴經に二乗作仏・久遠実成をあかさざるに記小久成あり
とをもひ華嚴よりも超過の法華經を我經に劣ると謂うは僻見なり、三論の
嘉祥の二蔵等又法華經に般若經すぐれたりとをもう事は僻案なり、善無畏
等が大日經は法華經に勝れたりという法華經の心をしらざるのみならず
大日經をもしらざる者なり。

問て云く此等皆謗法ならば惡道に墮ちたるか如何、答て云く謗法に上中下
雜の謗法あり慈恩・嘉祥・澄觀等が謗法は上中の謗法か其上自身も謗法とし

れるかの間・悔還くいかえす筆これあるか、又他師たしをはするに二あり能破のうは似破しはこれな

り教はまさりとしれども是非ぜひをあらはさんがために法をはす・これは似破しはな

り、能破のうはとは実にまされる経を劣とをもつてこれをはす・これは悪能破のうはなり、

又現げんに・をとれるをはす・これ善能破のうはなり、但し脇尊者そんじやの金杖こんじやうの譬たとえは

しようにきよう

小乗経しやうじやうきやうは多しといえども同じ苦・空・無常むじやう・無我むがの理なり、諸人しよにん同く此の

はちぶ

義を存じて十八部・二十部相ひ諍論じやうろんあれども但門あらそいの諍あらそいにて理の諍あらそいにはあ

ゆえ

らず故に共に謗法ほうぽうとならず、外道げどうが小乗経しやうじやうきやうを破はするは外道の理は常住じやうじやうな

しようにきよう

り小乗経しやうじやうきやうの理は無常むじやうなり空なり故に外道げどうが小乗経しやうじやうきやうをはするは謗法ほうぽうとな

だいじやうきやう

る、大乘経だいじやうきやうの理は中道ちやうだうなり小乗経しやうじやうきやうは空なり小乗経しやうじやうきやうの者が大乘経だいじやうきやうを

ほうぽう

はするは謗法ほうぽうとなる大乘経だいじやうきやうの者が小乗経しやうじやうきやうを・はするは破法はほうとならず、諸

だいじやうきやう

大乘経だいじやうきやうの中の理は未開会みかいえの理いまだ記小久成くじやうこれなし法華経ほけきやうの理は開会かいえの

くじやう

理・記小久成くじやうこれあり、諸大乘経しよだいじやうきやうの者が法華経ほけきやうを・はするは謗法ほうぽうとなるべ

し法華經ほけきょうの者の諸大乗しよだいじようきょう經を謗ほうするは謗法ほうぼうとなるべからず、大日經だいにちきょう・真言宗しんごんしゅうは未開會みかいえ・記小久成くじようなくば法華經ほけきょう已前いぜんなり開會かいえ・記小久成くじようを許ゆるさば涅槃經ねはんきょうとをなじ、但ただし善無畏三藏ぜんむいさんぞう・金剛智こんこうち・不空ふくう・一行等しやうあくの性惡しょうあくの法門ほうもん・一念三千いちねんさんぜんのほうもん　てんだいちしや　ほうもん　法門ほうもんは天台智者てんだいちしやの法門ほうもんをぬすめるか、若もし爾しからば善無畏等ぜんむいの謗法ほうぼうは似破じはか又また雜謗法ほうぼうか五百羅漢らかんの真因しやうじやうは小乘しやうじやう十二因緣いんねんの事むみやうなり無明行等むみやうを緣じとして空理くうりに入いると見みへたり、門もんは諍あらそえども謗法ほうぼうとならず撰論じやうろんの四意趣いしゆ・大論だいろんの四悉檀ししつたん等らは無著菩薩むぢやくぼさつ・竜樹菩薩滅後りゆうじゆぼさつめつごの論師ろんしとして法華經ほけきょうを以もて一切經いっさいきやうの心こころをえて四悉四意趣等いしゆもちを用もちいて爾前にぜんの經經きやうきやうの意いを判はずるなり未開會みかいえの四意趣いしゆ・四悉檀ししつたんと開會かいえの四意趣いしゆ・四悉檀ししつたんを同どうぜば、あに謗法ほうぼうにあらずや此等これらをよくよくしるは教けうをしるる者ものなり、四句しごあり一いちに信而不解しんにふげ・二にに解而不信げにふしん・三にに亦信亦解やくしんやくげ・四にに非信・非解ひしん・ひげ、問もんうて云いく信しん而不解にふげの者ものは謗法ほうぼうなるか答こたえて云いく法華經ほけきょうに云いく、「信しんを以もつて入いることを得え」等らと云いふ、涅槃經ねはんきょうの九くに云いく難なん

じて云く涅槃經三十六に云く我契經の中に於て説く二種の人有り仏法僧を
謗ずと、一には不信にして瞋恚の心あるが故に二には信ずと雖も義を解せざ
るが故に善男子若し人信心あつて智慧有ること無き是の人は則ち能く無明を
増長す若し智慧有つて信心あること無き是の人は則ち能く邪見を増長す
善男子・不信の人は瞋恚の心あるが故に説いて仏法僧宝有ること無しと言わ
ん、信者は慧無く顛倒して義を解するが故に法を聞く者をして仏法僧を謗ぜ
しむ等と云云、此の二人の中には信じて解せざる者を謗法と説く如何、答え
て云く此の信而不解の者は涅槃經の三十六に恒河の七種の衆生の第二の者を
説くなり、此の第二の者は涅槃經の一切衆生悉有仏性の説を聞いて之を信
ずと雖も又不信の者なり。

問うて云く如何ぞ信ずと雖も不信なるや、答えて云く一切衆生悉有仏性
の説を聞きて之を信ずと雖も又心を爾前の經に寄する一類の衆生をば無

ぶつしょう
仏性の者と云うなり此れ信而不信の者なり問うて云く証文如何、答えて
いわ じやうが
云く恒河第二の衆生を説いて云く經に云く「是くの如き大涅槃經を聞くこと
しんじん
を得て信心を生ず是を名けて出と為す」と又云く「仏性は是れ衆生に有り
いへど
と信ずと雖も必ずしも一切皆悉く之有らず是の故に名けて信不具足と為す」
いっさいみなことこれあ
文此の文の如くんば口には涅槃を信ずと雖も心に爾前の義を存する者なり又
ねはん
此の第二の人を説いて云く「信ずる者にして慧無く顛倒して義を解するが
ゆえ
故に」等と云云、顛倒解義とは実經の文を得て権經の義を覚る者なり。
じつきやう
問うて云く信而不解得・道の文如何、答えて云く涅槃經の三十二に云く
いわ しんにふげ
「是れ菩提の因は復無量なりと雖も若し信心を説けば已に摂尽す」文九に云く
こ ぼだい またむりやう
「此の經を聞き已つて悉く皆菩提の因縁と作る法声光明毛孔に入る者は必
まさ おのくたらんみやくさんぼだい
定して当に阿耨多羅三藐三菩提を得べし」等と云云、法華經に云く「信を以
て入ることを得」等と云云、問うて云く解而不信の者は如何、答う恒河の第一
いわ げにふしん
いかん
だいいち

の者なり、問うて云く証文如何、答えて云く涅槃經の三十六に第一を説て云く
「人有りて是の大涅槃經の如来常住無有变易常樂我淨を聞くとともに終に
畢竟して於涅槃の一切衆生悉有仏性に入らざるは一闡提の人なり方等經
を謗じ五逆罪を作り四重禁を犯すとも必ず当に菩提の道を成ずることを
得べし須陀の人・斯陀含の人・阿那含の人・阿羅漢の人・辟支仏等必ず
當に阿○菩提を成ずることを得べし是の語を聞き已つて不信の心を生ず」等
と云云。

問うて云く此の文不信とは見えたり解而不信とは見えず如何、答えて云く
第一の結文に云く「若し智慧有つて信心有ること無き是の人は則ち能く邪見
を増長す」文。

六三 持妙法華問答抄 弘長三年 四十二歳御作 461P

抑も希に人身をうけ適ま仏法をきけり、然るに法に浅深あり人に高下あ

りいかと云へり何なる法しゆぎようを修行しゆぎようしてか速すみやに仏ぶつになり候まうべき願ねがくは其その道みちを聞きかん
と思おもふ、答こたえて云いく家い家に尊勝そんしょうあり国くに国くにに高貴こうきあり皆みな其そのの君きみを貴たつとみ其その親おやを
崇あがむといへども豈あに国王こくおうにまさるべきや、爰こゝに知しんぬ大小だいしやう・権實こんじつは家い家の諍あらそひ
なれども一いち代だい聖教しやうきやうの中なには法華ほつけ独ひとり勝すぐれたり、是これ頓証とんしやう菩提ぼだいの指南しなん・直じき至し
道場どうじやうの車輪くるわなり、疑うたがつて云いく人師にんしは經論きやうろんの心こころを得えて釈しやくを作つくる者ものなり然しから
ば則すなわち宗宗しゆしの人師にんし・面めん面めん・各各きやくきやくに教門きやうもんをしつらい釈しやくを作つくり義ぎを立て証得しやうとく
菩提ぼだいと志しす何なんぞ虚むなしかるべきや、然しかるに法華ほつけ独ひとり勝まさると候まうはば心しんせばくこ
そ覺おほえ候まうへ、答こたえて云いく法華ほつけ独ひとりいみじと申もうすが心しんせばく候まうはば釈しやく尊程そんじやう心しんせ
ばそき人ひとは世よに候まうはじ何なんぞ誤あやりの甚はなはしきや、且しく一經いつきやう・一いつ流りゆうの釈しやくを引ひいて
其その迷まよをさまよとらせん、無量むりやう義經ぎきやうに云いく「種しゆじゆ種しゆじゆに
法とを説しゆじゆき種しゆじゆ種しゆじゆに法ほつへんを説とくこと方ほう便べん力りきを以もつてす四十よんじゆ余う年ねん未いだ真しん實じつを顯あらわさず」云
云、此この文ぶんを聞きいて大莊嚴だいしやうげん等らの八はち万まん人にんの菩薩ぼさつ・一いつ同どうに「無量むりやう無む辺へん不ふ可か思し議ぎ・

阿僧祇劫あそぎこうを過すぐるとも終ついに無上菩提むじょうぼだいを成じょうずることを得えず」と領解りょうげし給たまへり、
此の文の心は華嚴けこん・阿含あこん・方等ほうとう・般若はんやの四十余年よんじゅうねんの經に付いていかに念仏ねんぶつを
申もうしぜんしゅう禅宗ぜんしゅうを持もちちてたも仏道を願ねがひ無量無辺むりょうむへん不可思議ふかしぎ・阿僧祇劫あそぎこうを過すぐるとも無上
菩提ぼだいを成じょうずる事を得えじと云いへり、しかのみならず方便品ほうべんには「世尊せそんは法久く
して後要のちかならずまさ當に眞實しんじつを説ときたもつべし」ととき、又唯有一乘法ゆいいういちじょう・無二亦無三
と説ときて此の經ばかりまことなりと云いひ、又二の卷には「唯我一人ただわれひとりのみ能よく
救護くごを為なす」と教ねがへ「但樂だいじょういて大乘經典だいじょうきぎょうを受持じゅじして乃至余經ないしよきょうの一偈いちげをも受
けず」と説とき給たまへり、文の心はただわれ一人して・よくすくひ・まもる事を
なす、法華經ほけきょうをうけたもたん事をねがひて余經よきょうの一偈いちげをもうけざれと見えた
り、又云いわく「若し人信もぜずして此の經を毀謗きぼうせば則ち一切世間の仏種ぶつしゅを断だんぜ
ん乃至其の人命終ないしそして阿鼻獄あびごくに入らん」と云云、此の文の心は若し人・此
の經を信ぜずして此の經にそむかば則ち一切世間の仏のたねを・たつものな

り・その人は命をはらば無間地獄に入るべしと説き給へり、此等の文をうけて天台は將非魔作仏の詞正く此の文によれりと判じ給へり、唯人師の釈計り

を憑みて仏説によらずば何ぞ仏法

と云う名を付くべきや言語道断の次第なり、之に依つて智証大師は經に大小

なく理に偏円なしと云つて一切・人によらば仏説無用なりと釈し給へり、天台

は「若し深く所以有り復修多羅と合せるをば録して之を用ゆ無文無義は信受

す可からず」と判じ給へり、又云く「文証無きは悉く是れ邪の謂い」とも云

へり、いかが心得べきや。

問うて云く人師の釈はさも候べし爾前の諸經に此の經第一とも説き諸經

の王とも宣べたり若し爾らば仏説なりとも用うべからず候か如何、答えて

云く設い此の經第一とも諸經の王とも申し候へ皆是れ權教なり其の語によ

るべからず、之に依つて仏は「了義經によりて不了義經によらざれ」と説き

妙樂大師は「縦い経有りて諸経の王と云うとも已今当説最爲第一と云わざれば兼但对帶其の義知んぬ可し」と釈し給へり、此の釈の心は設ひ経ありて諸経の王とは云うとも前に説きつる経にも後に説かんずる経にも此の経はまされりと云はずば方便の経としれと云う釈なり、されば爾前の経の習として今説く経より後に又経を説くべき由を云はざるなり、唯法華経計りこそ最後

の極説なるが故に已今当の中に此の経独り勝れたりと説かれて候へ、されば釈には「唯法華に至つて前教の意を説いて今教の意を顕す」と申して法華経にて如来の本意も教化の儀式も定りたりと見えたり、之に依つて天台は「如来成道四十余年末だ眞実を顕さず法華始めて眞実を顕す」と云へり、此の文の心は如来世に出でさせ給いて四十余年が間は眞実の法をば顕さず法華経に始めて仏になる実の道を顕し給へりと釈し給へり。

問うて云く已今当の中に法華経勝れたりと云う事はさも候べし、但し有人師

の云く四十余年・未顕真実と云うは法華經にて仏になる声聞の爲なり爾前の
得益の菩薩の爲には未顕真実と云うべからずと云う義をばいかか心得候べき
や、答えて云く法華經は二乗の爲なり菩薩の爲にあらず、されば未顕真実と
云う事二乗に限る可しと云うは徳一大師の義か此れは法相宗の人なり、此の
事を伝教大師破し給うに、「現在の食者は偽章数巻を作りて、法を謗じ人を
謗ず何ぞ地獄に墮せざらんや」と破し給ひしかば徳一は其の語に責められて
舌八にさけてうせ給いき、未顕真実とは二乗の爲なりと云はば最も理を得た
り、其の故は如来布教の元旨は元より二乗の爲なり一代の化儀・三周の善巧
・併ら二乗を正意とし給へり、されば華嚴經には地獄の衆生は仏になると
も二乗は仏になるべからずと嫌い、方等には高峯に蓮の生ざるように二乗は
仏の種をいりたりと云はれ、般若には五逆罪の者は仏になるべし二乗は叶う
べからずと捨てらる、かかるあさましき捨者の仏になるを以て如来の本意と

し法華經の規模とす、之に依つて天台の云く「華嚴大品も之を治すること能わ
ず唯法華のみ有りて能く無学をして還つて善根を生じ仏道を成ずることを得
せしむ所以に妙と称す、又闡提は心有り猶作仏す可し二乗は智を滅す心生ず
べ可からず法華能く治す復稱して妙と為す」と云云、此の文の心は委く申すに
および誠に知んぬ華嚴・方等・大品等の法薬も二乗の重病をばいやさず又
三惡道の罪人をも菩薩ぞと爾前の經にはゆるせども二乗をばゆるさず、之に
依つて妙樂大師は「余趣を實に會すること諸經に・或は有れども二乗は全
く無し故に菩薩に合して二乗に対し難きに從つて説く」と釈し給えり、しか
のみならず二乗の作仏は一切衆生の成仏を踰すと天台は判じ給へり、修羅
が大海を渡らんをば是れ難しとやせん、嬰兒の力士を投ん何ぞたやすしとせ
ん、然らば則ち仏性の種あるものは仏になるべしと爾前にも説けども未だ
焦種の者作仏すべしとは説かず、かかる重病をたやすく・いやすは独り

法華の良薬なり、只須く汝仏にならんと思はば慢のはたほこをたをし忿り
の杖をすてて偏に一乘に帰すべし、名聞名利は今生のかざり我慢偏執は
後生のほだしなり、嗚呼恥づべし恥づべし恐るべし恐るべし。

問うて云く一を以て万を察する事なればあらあら法華のいわれを聞くに
耳目始めて明かなり、但し法華経をば・いかように心得候てか速に菩提の岸
に到るべきや、伝え聞く一念三千の大虚には慧日くもる事なく一心三觀の広池
には智水にこる事なき人こそ其の修行に堪えたる機にて候なれ、然るに南都
の修學に臂をくだく事なかりしかば瑜伽唯識にもくらし北嶺の學文に眼を
さらさざりしかば止觀玄義にも迷へり、天台・法相の兩宗はほとぎを蒙りて
壁に向へるが如し、されば法華の機には既にもれて候にこそ何んがし候べき、
答えて云く利智精進にして觀法修行するのみ法華の機ぞと云つて無智の人
を妨ぐるは当世の學者の所行なり是れ還つて愚癡邪見の至りなり、一切衆生

・皆成仏道の教なれば上根・上機は觀念・觀法も然るべし下根・下機は唯
信心肝要なり、されば經には「淨心に信敬して疑惑を生ぜざらん者は地獄・
餓鬼・畜生に墮ちずして十方の仏前に生ぜん」と説き給へり、いかにも信
じて次の生の仏前を期すべきなり、譬えば高き岸の下に人ありて登ることあ
たはざらんに又岸の上に人ありて繩をおろして此の繩にとりつかば我れ岸の
上に引き登さんと云はんに引く人の力を疑い繩の弱からん事をあやぶみて
手を納めて是をとらざらんが如し争か岸の上に登る事をつべき、若し其の詞
に随ひて手をのべ是をとらへ
ば即ち登る事をうべし、唯我一人・能為救護の仏の御力を疑い以信得入の
法華經の教への繩をあやぶみて決定無有疑の妙法を唱へ奉らざらんは力
及ばず菩提の岸に登る事難かるべし、不信の者は墮在泥梨の根元なり、され
ば經には「疑を生じて信ぜざらん者は則ち當に惡道に墮つべし」と説かれ

たり、受けがたき人身じんしんをつけ値あいがたき仏法ぶつぽうにあひて争いかでか虚むなしくて候あべきぞ、
同じく信しんを取るならば又また大小だいしやう・権実ごんじつのある中に諸仏しよぶつ出生しゆつの本意ほんい・衆生しゆじやう
成仏じやうぶつの直道じきだうの一乗いちじやうをこそ信しんずべけれ、持とつ処ところの御經ぎきやうの諸經しよきやうに勝すぐれてまし
ませば能よく持もつ人も亦また諸人しよじんにまされり、爰ここをを以もつて經きやうに云いく「能よく是この經きやうを持
つ者は一切衆生いっさいしゆじやうの中に於おいて亦また爲これだ第一だいなり」と説とき給たまへり大聖たいせいの金言きんげん疑うたがひな
し、然しかるに人ひと・此この理りをしらず見みずして名聞みやうもん・狐疑こぎ・偏執へんしゆつを致いたせるは墮獄だごく
の基ただなり、只願ただくは經きやうを持もち名なを十方じゆつぱうの仏陀ぶつだの願海がんかいに流ながし譽ほまれを三世さんぜの菩薩ぼさつ
の慈天ほだいに施しかすべし、然しかれば法華經ほけきやうを持もち奉たてまつる人は天竜てんりゆう・八部はちぶ・諸大菩薩しよだいぼさつを以もつ
て我けんそくが眷屬けんそくとする者ものなり、しかのみならず因身いんしんの肉団にくだんに果滿かまんの仏眼ぶつげんを備うへ有う為い
の凡膚ほんぶに無む為いの聖衣せいゐを著ちやくぬれば三途さんずに恐おそれなく八難はなんに憚はばかりりなし、七方便しちはんべんの山
の頂いただきに登のぼりて九法界くくはかいの雲うんを払はき無垢地むくちの園えんに花開はなひらくけ法性ほふしやうの空そらに月明あきちかなら
ん、是人ぜにん於のう仏道ぶつだう・決けつ定じやう無有うたが疑いの文憑たのみあり唯我一人ゆいがいちにん・能のう爲いく救護くごの説うたが疑い
ひ

なし、一念信解の功德は五波羅蜜の行に越へ五十展転の随喜は八十年の布施
に勝れたり、頓証菩提の教は遙に群典に秀で顕本遠寿の説は永く諸乘に絶
えたり、爰を以て八歳の竜女は大海より来つて經力を刹那に示し本化の
上行は大地より涌出して仏寿を久遠に顕す言語道断の經王心行所滅の
妙法なり、然るに此の理をいるかせにして余經にひとしむるは謗法の至り
大罪の至極なり、譬を取るに物なし、仏の神変にても何ぞ是を説き尽きん菩薩
の智力にても争か是を量るべき、されば譬喩品に云く「若し其の罪を説かば
劫を窮むとも尽きず」と云へり文の心は法華經を一度もそむける人の罪をば
劫を窮むとも説き尽し難しと見えたり、然る間三世の諸仏の化導にももれ恒沙
の如来の法門にも捨てられ冥きより冥きに入つて阿鼻大城の苦患争か免れん
誰か心あらん人・長劫の悲みを恐れざらんや、爰を以て經に云く「經を誦誦
し書持すること有らん者を見て輕賤憎嫉して結恨を懷かん其の人命終して

あびこく

阿鼻獄に入らん」と云云、文の心は法華經をよみたもたん者を見てかるしめ

ほけきょう

・いやしみ・にくみ・そねみ・うらみをむすばん其の人は命をはりて阿鼻

そ

あび

だいじょう

大城に入らんと云へり、大聖の金言誰か是を恐れざらんや正直捨方便の

たいせい

きんげん

これ

しやうじきしやほうべん

めいぶんあにこれ

うたが

明文豈是を疑うべきや、然るに人皆經文に背き世悉く法理に迷へり汝

みなきやうもん

そむ

ことごと

まよい

なんじ

なん あくゆう

何ぞ悪友の教へに随はんや、されば邪師の法を信じ受くる者を名けて毒を飲

したが

じゃし

これ

つし

これ

つし

これ

む者なりと天台は釈し給へり汝能く是を慎むべし是を慎むべし。

てんだい

しゃく

たま

なんじよ

これ

つし

これ

つし

つらつらせけん

倩らせ間を見るに法をば貴しと申せども其の人をば万人是を惡む汝能く

とあと

そ

ばんにん

これ

にくむ

なんじよ

これ

よ 能く法の源

みなもと

まよい

い

い

つし

これ

これ

これ

能く法の源に迷へり何にと云うに一切の草木は地より出生せり、是を以

い

い

い

い

い

い

い

い

い

て思うに一切の仏法も又人によりて弘まるべし之に依つて天台は仏世すら猶

い

い

い

い

い

い

い

い

い

人を以て法を顕はす末代いづくんぞ法は貴けれども人は賤しと云はんやとこ

い

い

い

い

い

い

い

い

い

そ釈して御坐候へ、されば持たる法だに第一ならば持つ人随つて第一なる

い

い

い

い

い

い

い

い

い

べし、然らば則ち其の人を毀るは其の法を毀るなり其の子を賤しむるは

い

い

い

い

い

い

い

い

い

べし、然らば則ち其の人を毀るは其の法を毀るなり其の子を賤しむるは

い

い

い

い

い

い

い

い

い

べし、然らば則ち其の人を毀るは其の法を毀るなり其の子を賤しむるは

い

い

い

い

い

い

い

い

い

べし、然らば則ち其の人を毀るは其の法を毀るなり其の子を賤しむるは

い

い

い

い

い

い

い

い

い

べし、然らば則ち其の人を毀るは其の法を毀るなり其の子を賤しむるは

い

い

い

い

い

い

い

い

い

すなわ^そ即ち其の親を賤しむなり、爰^{こゝ}に知んぬ当世^{とうせ}の人は詞^{ことば}と心と総てあはず孝経^{こくぎょう}を以て其^その親を打つが如^{ごと}し豈^{あに}冥^{しょう}の照覽^{しょうらん}恥^{はず}かしからざらんや地獄^{じごく}の苦み恐るべし恐るべし慎^{つつし}むべし慎^{つつし}むべし、上根^{じやうこん}に望めても卑下^{ひげ}すべからず下根^{げこん}を捨てざるは本懷^{ほんかい}なり、下根^{げこん}に望めても慢^{きやうまん}ならざれ上根^{じやうこん}ももる事あり心をいたさざるが故^{ゆゑ}に凡^{およ}そ其の里ゆかしけれども道たえ縁なきには通ふ心もをろそかに其^その人恋しけれども憑^{たの}めず契^{ちぎ}らぬには待つ思もなをざりなるやうに彼の月卿雲閣に勝れたる靈山浄土の行きやすきにも未^{いま}だゆかず我^が即是父^{そくぜふ}の柔^{にゅうなん}の御すがた見奉^{たてまつ}るべきをも未^{たてまつ}だ見奉^{たてまつ}らず、是^これ誠に袂^{たもと}をくだし胸をこがす歎^{なげき}ならざらんや、暮行空^{くれゆくそら}の雲の色・有明方^{ありあけがた}の月の光までも心をもよほす思なり、事にふれをりに付けても後世^{ごせう}を心につけ花の春雪の朝^{あした}も是^{これ}を思ひ風さはぎ村雲まよふ夕にも忘る隙^{ひま}なかれ、出^いずる息は入る息をまたず何^{いか}なる時節^{じせつ}ありてか毎自作^{さげねん}是念^{ひがん}の悲願^{ひがん}を忘れ何^{いか}なる月日ありてか無^む一不成^{いつふじやうぶつ}仏の御経を持たざ

らん、昨日きのうが今日こんにちになり去年こぞの今年ことしとなる事も是れ期こしする処ところの余命よめいにはあら
ざるをや、総すて過すぎにし方をかぞへて年の積つみるをば知るといへども今行末けいまつに
をいて一日かたとき片時かたときも誰か命の数に入るべき、臨終りんじゅう已すでに今にありとは知りながら
我慢偏執がまんへんしゅう・名聞利養みょうもんりやうに著じゃくして妙法みょうほうを唱となへ奉たてまつらざらん事は志こころざしの程無下ちやうむげに
かひなし、さこそは皆みな成仏道の御法かいじょうぶつどうとは云いいながら此の人争いかでか仏道ぶつどうに・も
のうからざるべき、色なき人の袖そでにはそぞろに月のやどる事かは、又命已すでに
一念いちねんにすぎざれば仏は一念いちねん随喜ずいぎの功德くどくと説とき給たまへり、若もし是れ二念三念ごすを期こす
と云いはば平等大慧びやうどうだいえの本誓頓ほんげいとんき教一乘皆いっしやうがいじやう成仏の法とは云はるべからず、流布るふの
時は末世まうし・法滅ほうめつに及び機きは五逆ごぎやく・謗法ぼうほうをも納おさめたり、故ゆえに頓証菩提とんしょうぼだいの心にお
きてられて狐疑執こぎしゅうじやく著じゃけんの邪見じゃけんに身を任まかする事なかれ、生涯しやうが幾いくばくならず思おもへば
一夜いちやのかりの宿を忘れて幾いくばくの名利みょうりをか得うん、又得うたりとも是れ夢この中の栄
へ珍めづしからぬ楽たのしみなり、只先世ただせんぜの業因ごういんに任まかせて営むかむべし世間せけんの無常むじやうをさとら

ん事は眼に遮り耳にみてり、雲とやなり雨とやなりけん昔の人は只名をのみ
きく、露とや消え煙とや登りけん今の友も又みえず、我れいつまでか三笠の
雲と思ふべき春の花の風に随ひ秋の紅葉の時雨に染まる、是れ皆ながらへぬ
世の中のためしなれば法華経には「世皆牢固ならざること水沫泡焰の如し」
とすすめたり「以何令衆生得入無上道」の御心のそこ順縁逆縁の御ことの
は已に本懷なれば暫くも持つ者も又本意にかないぬ又本意に叶はば仏の恩を
報ずるなり、悲母深重の経文心安ければ唯我一人の御苦みもかつかつやす
み給うらん、釈迦一仏の悦び給うのみならず諸仏出世の本懷なれば十方三世
の諸仏も悦び給うべし「我即歡喜・諸仏亦然」と説かれたれば仏悦び給うの
みならず神も即ち随喜し給うなるべし、伝教大師是を講じ給いしかば八幡大
菩薩は紫の袈裟を布施し、空也上人是を読み給いしかば松尾の大明神は寒
風をふせがせ給う、されば「七難即滅・七福即生」と祈らんにも此の御経第一

なり現世安穩と見えなければなり、他国侵逼の難・自界叛逆の難の御祈にも

此の妙典に過ぎたるはなし、令百由旬内無諸衰患と説かれたればなり。

然るに当世の御祈はさかさまなり先代流布の権教なり末代流布の最上

真実の秘法にあらざるなり、譬えば去年の暦を用ゐる鳥を鵲につかはんが如し

是れ偏に権教の邪師を貴んで未だ実教の明師に値わせ給はざる故なり、惜い

かな文武の卞和があら玉何くにか納めけん、嬉しいかな釈尊出世の髻の中の

明珠今度我身に得たる事よ、十方諸仏の証誠として・いるがせならず、

さこそは、一切世間・多怨難信」と知りながら争か一分の疑心を残して決定

無有疑の仏にならざらんや、過去遠遠の苦みは徒らにのみこそ・うけこし

か、などが暫く不変常住の妙因をうへざらん未来永永の樂みはかつかつ心

を養ふともしゐてあながちに電光朝露の名利をば貪るべからず、「三界無安・

猶如火宅」は如来の教へ「所以諸法・如幻如化」は菩薩の詞なり、寂光の

都ならずは何くも皆苦なるべし本覺の栖を離れて何事か樂みなるべき、願く
は、現世安穩・後生善處の妙法を持つのみこそ只今生の名聞・後世の弄引
なるべけれ須く心を一にして南無妙法蓮華經と我も唱へ他をも勸んのみこそ
今生人界の思出なるべき、南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經。

日蓮 花押

六四 木絵二像開眼之事

文永元年 四十三歳御作 468P

仏に三十二相有す皆色法なり、最下の千輻輪より終り無見頂相に至るまで
の三十一相は可見有対色なれば書きつべし作りつべし 梵音声の一相は
不可見無対色なれば書く可らず作る可らず、仏滅後は木画の二像あり是れ三
十一相にして梵音声 かけたり故に仏に非ず又心法かけたり、生身の仏と木画
の二像を対するに天地雲泥なり、何ぞ涅槃の後分には生身の仏と滅後の木画
の二像と功德斉等なりといふや又大瓔珞經には木画の二像は生身の仏にはを

とれりととけり、木画の二像の仏の前に経を置けば三十二相具足するなり、

但心なければ三十二相を具すれども必ず仏にあらざる人天も三十二相あるがゆ

へに、木絵の三十一相の前に五戒経を置けば此の仏は輪王とひとし、十善論

と云うを置けば帝釈とひとし、出欲論と云うを置けば梵王とひとし全く仏

にあらざる又木絵二像の前に阿含経を置けば声聞とひとし、方等・般若の一時

一会の共般若を置けば縁覚とひとし、華嚴・方等・般若の別円を置けば菩薩

とひとし全く仏に非らず、大日経・金剛頂経・蘇悉地経等の仏眼・大日の

印真言は名は仏眼・大日といへども其の義は仏眼・大日に非ず、例せば仏も

華嚴経は円仏には非ず名にはよらず三十一相の仏の前に法華経を置きたてま

つれば必ず純円の仏なり云云、故に普賢経に法華経の仏を説て云く「仏の三

種の身は方等より生ず」文、是の方等は方等部の方等に非ず法華を方等とい

ふなり、又云く、此の大乗経は是れ諸仏の眼なり諸仏是に因つて五眼を具す

ることを得る」等云云、法華經の文字は仏の梵音声の不可見無対色を
かけんうたいしき
可見有対色のかたちと・あらはしめれば顕形の二色となれるなり、滅せる
ぼんおんじよう
梵音声 かへつて形をあらはして文字と成つて衆生を利益するなり、人の声
いだ
を出すに二つあり、一には自身は存ぜざれども人をたぶらかさむがために声
をいだす是は隨他意の聲、自身の思を声にあらはす事ありされば意が声とあ
らはる意は心法・声は色法・心より色をあらはす、又声を聞いて心を知る色
法が心法を顯すなり、色心不二なるがゆへに而二とあらはれて仏の御意あら
はれて法華の文字となれり、文字變じて又仏の御意となる、されば法華經を
よませ給はむ人は文字と思食事なかれすなわち仏の御意なり、故に天台の釈
に云く「請を受けて説く時は只是れ教の意を説く教の意は是れ仏意仏意
に云く「請を受けて説く時は只是れ教の意を説く教の意は是れ仏意仏意
即是れ仏智なり・仏智至て深し是故に三止四請す、此の如き艱難あり余經に
比するに余經は則易し」文此の釈の中に仏意と申すは色法を・をさへて心法

といふ釈なり、法華經を心法とさだめて三十一相の木絵の像に印すれば木絵
二像の全体・生身の仏なり、草木成仏といへるは是なり、故に天台は
「一色一香無非中道」と云云、妙樂是をうけて釈に「然るに亦俱に色香中道
を許せども無情仏性は耳を惑わし心を驚かす」云云、華嚴の澄觀が天台の
一念三千をぬすみて華嚴にさしいれ法華・華嚴ともに一念三千なり、但し華嚴
は頓頓・さきなれば法華は漸頓のちなれば華嚴は根本さをしめれば法華は
枝葉等といふて我理をえたりとおもへる意・山の如し・然りと雖も一念三千
の肝心・草木成仏を知らざる事を妙樂のわらひ給へる事なり、今の天台の
学者等我一念三千を得たりと思ふ、然りと雖も法華をもつて・或は華嚴に同
じ・或は大日經に同ず其の義を論ずるに澄觀の見を出でず善無畏不空に同
ず、詮を以て之を謂わば今の木絵二像を真言師を以て之を供養すれば実仏に
非ずして權仏なり權仏にも非ず形は仏に似たれども意は本の非情の草木なり、

又本の非情の草木にも非ず魔なり鬼なり、真言師が邪義・印真言と成つて木絵
二像の意と成れるゆへに例せば人の思變じて石と成り俱留と黄夫石が如し、
法華を心得たる人・木絵二像を開眼供養せざれば家に主のなきに盗人が入り
人の死するに其の身に鬼神入るが如し、今真言を以て日本の仏を供養すれば
鬼入つて人の命をうばふ鬼をば奪命者といふ魔入つて功德をうばふ魔をば奪
功德者といふ、鬼をあがむるゆへに今生には国をほろぼす魔をたとむゆへに
後生には無間獄に墮す、人死すれば魂去り其の身に鬼神入り替つて子孫を亡
ぼす、餓鬼といふは我をくらふといふ是なり、智者あつて法華經を讚歎して
骨の魂となせば死人の身は人身・心は法身・生身得忍といへる法門是なり、
華嚴・方等・般若の円をさとれる智者は死人の骨を生身得忍と成す、涅槃經
に身は人身なりと雖も心は仏心に同ずといへるは是なり、生身得忍の現証
は純陀なり、法華を悟れる智者・死骨を供養せば生身即法身・是を即身とい

ふ、さりぬる魂を取り返して死骨に入れて彼の魂を変えて仏意と成す成仏
是なり、即身の二字は色法・成仏の二字は心法・死人の色心を変えて無始の
妙境・妙智と成す是れ則ち即身成仏なり、故に法華經に云く「所謂諸法
如是相 死人の身如是性 同く心如是体 同く色心等云云、又云く「深く罪福の相に達し
てく十方を照したまう微妙の淨き法身・相を具せること三十二」等云云、
上の二句は生身得忍・下の二句は即身成仏・即身成仏の手本は竜女是な
り生身得忍の手本は純陀是なり。

六五 女人成仏抄 文永二年四十四歳御作 470P

提婆品に云く「仏告諸比丘未来世中乃至蓮華化生」等云云、此の提婆品に

二箇の諫曉あり所謂達多の弘經釈尊の成道を明し又文殊の通經・竜女の

作仏を説く、されば此の品を長安宮に一品切り留めて二十七品を世に流布す

る間・秦の代より梁の代に至るまで七代の間の王は二十七品の經を講讀す、

其の後満法師と云いし人・此の品法華經になき由を読み出され候いて後・長
安城より尋ね出し今は二十八品にて弘まらせ給う、さて此の品に淨心信敬の
人のことを云うに一には三惡道に墮せず二には十方の仏前に生ぜん三には
所生の処には常に此の經を聞かん四には若し人天の中に生ぜば勝妙の樂
を受けん五には若し仏前に在らば蓮華より化生せんとなり、然るに一切衆生
は法性真如の都を迷い出でて妄想顛倒の里に入りしより已來身口意の三業
になすところ善根は少く惡業は多し、されば經文には一人・一日の中に八億
四千念あり念念の中に作す所皆是れ三途の業なり等云云、我等衆生三界二十
五有の・ちまたに輪回せし事鳥の林に移るが如く死しては生じ生じては死し
車の場に回るが如く始め終りもなく死し生ずる惡業深重の衆生なり、爰を
以て心地觀經に云く「有情輪回して六道に生ずること猶車輪の始終無きが
如く・或は父母と為り男女と為り生生世世互いに恩有り」等云云、法華經二

の巻に云く「三界は安きこと無し猶火宅の如く衆苦充滿せり」云云、涅槃經
二十二に云く「菩薩摩訶薩諸の衆生を觀するに色香味触の因縁の爲の故に昔
無量無數劫より以來常に苦惱を受く、一一の衆生一劫の中に積る所の身の骨
は王舎城の毘富羅山の如く飲む所の乳汁は四海の水の如く身より出す所の
血は四海の水より多く父母・兄弟・妻子・眷屬の命終に涕泣して出す所の
目淚は四大海の水より多し、地の草木を尽くして四寸の籌と爲して以て父母
を数うるに亦尽くすこと能わじ、無量劫より已來・或地獄・畜生・餓鬼に
在つて受くる所の行苦稱計す可からず亦一切衆生の骸骨をや」云云、
是くの如くいたづらに命を捨るところの骸骨は毘富羅山よりも多し恩愛あは
れみの涙は四大海の水よりも多けれども仏法の爲には一骨をもなげず、一句
一偈を聴聞して一滴の涙をも・おとさぬゆへに三界の籠樊を出でずして二十

有のちまたに流転する衆生にて候なり、然る間如何として三界を離るべきと
申すに仏法修行の功力に依つて無明のやみはれて法性真如の覺を開くべく
候、さては仏法は何なるをか修行して生死を離るべきぞと申すに但一乗・
妙法にて有るべく候、されば慧心僧都・七箇日・加茂に參籠して出離生死は
何なる教にてか候べきと祈請申され候いしに明神御託宣に云く、釈迦の説教
は一乗に留まり諸仏の成道は妙法に在り菩薩の六度は蓮華に在り二乗の
得道は此の經に在り、云云、普賢經に云く、此の大乗經典は諸仏の宝蔵な
り十方三世の諸仏の眼目なり三世の諸の如来を出生する種なり、云云、此
の經より外はすべて成仏の期有るべからず候上殊更女人成仏の事は此の經
より外は更にゆるされず、結句爾前の經にては、をびただしく嫌はれたり、
されば華嚴經に云く、女人は地獄の使なり能く仏の種子を断ず外面は菩薩に
似て内心は夜叉の如し、云云、銀色女經に云く、三世の諸仏の眼は大地に墮落

すとも法界ほっかいの諸もろの女人にょにんは永く成仏じょうぶつの期無ごなし「云ある、或は又女人にょにんには五障ごしょう三
従つみの罪深もつしと申そす、其れは内典ないてんには五障ごしょうを明あかし外典げてんには三従そを教えたり、其の
三従おきなとは少くしては父母ふぼに従ひ盛さかんにしては夫おとこに従ひ老いては子に従ひ一期いちよく
身を心に任せまかず、されば栄啓期えいけいきが三樂を歌ひし中にも女人にょにんと生れざるを以て
一樂とす、天台大師云く「他經たきよう
には但菩薩ぼさつに記して二乗に記せず但男に記して女に記せず」とて全く余經よきように
は女人にょにんの授記じゅきこれなしと釈しゃくせり、其上釈迦しゃか・多宝の二仏塔中たつちゅうに並坐し給ひし
時・文殊もんじゅ・妙法みょうほつを弘ひろめん為に海中かいちゅうに入り給いて・仏前ぶつぜんに帰り参り給いしか
ば宝浄世界の多宝仏の御弟子おんでし・智積菩薩ちしゃくぼさつは竜女りゅうにょ成仏じょうぶつを難じて云く「我釈迦しゃか
如来にょらいを見たてまつれば無量劫むりようこつに於て難行苦行し功を積み・徳を累かさね・菩薩ぼさつの
道を求むること未だ曾いまつて止息したまわず、三千大千世界さんぜんだいせんせかいを觀みるに乃至芥子ないしけし
の如ごとき許ばかりも是れ菩薩の身命しんみょうを捨てたもう処ところに非あらざることに有ること無し、

しゅじょう

衆生の為の故なり」等云、所謂智積・文殊・再三問答いたし給う間は八万

ぼさつ

の菩薩・万二千の声聞等何れも耳をすまして御聴聞計りにて一口の御助言

およ

に及ばず、然るに智慧第一の舍利弗・文殊の事をば難ずる事なし多くの故を

りゆうによ

以て童女を難ぜらる所以に女人は垢穢にして是れ法器に非ずと小乗 権教

なん

の意を以て難ぜられ候いしかば文殊が童女成仏の有無の現証は今・仏前に

なん

して見え候べしと仰せられ候いしに、案にたがはず八歳の童女蛇身をあらた

ぶつぜん

めずして仏前に参詣し価直三千大千世界と説かれて候・如意宝珠を仏に奉り

よここ

しに、仏悦んで是を請取り給いしかば此の時智積菩薩も舍利弗も不審を開き

によんにじょうぶつ

女人成仏の路をふみわけ候、されば女人成仏の手本是より起つて候・委細

きょうもんこれ

は五の巻の經文之を読む可く候、伝教大師の秀句に云く「能化の童女歴劫

なく

の行無く所化の衆生も歴劫の行無し能化所化俱に歴劫無し妙法経力・

そくしんじょうぶつ

即身成仏す」天台の疏に云く「智積は別教に執して疑いを為し童女は円

を明^{あか}して疑^{うたがい}いを釈^とく身子^{しんし}は三蔵^{さんぞう}の権^{ごん}を挾^{はさん}んで難^{なん}ず童女^{りゆうによ}は一実^{いちじつ}を以^{もつ}て疑^{うたがい}い
を除^{りゆうおう}く海竜^{わいりゆう}王經^{おうきやう}に云^いく、童女^{りゆうによ}作^さ仏^{ぶつ}し国土^{こくど}を光明^{くわうみやう}国^{こく}と号^{ごう}し名^なをば無垢^{むこ}証^{しやう}如来^{にやらい}
と号^{ごう}す云云^{ふんふん}、法華^{ほつけい}已^い前^{ぜん}の諸經^{しよきやう}の如^{ごと}きは縦^{たと}い人中^{にんちゆう}・天上^{てんじやう}の女人^{にょにん}なりといふ
とも成^{じやうぶつ}仏^{ぶつ}の思絶^{しだつ}たるべし、然^{しか}るに童女^{りゆうによ}・畜生^{ちくしやう}道の衆生^{しゆじやう}として戒緩^{かいかん}の姿^さを
改^{あらた}めずして即身成^{そくしんじやうぶつ}仏^{ぶつ}せし事は不思議^{ふしぎ}なり、是^{これ}を始^はとして釈尊^{しやくそん}の姨母^{おほ}・摩訶^{まか}
波闍^{はじや}波提^{はだい}比丘尼^{びくに}等^ら・勸持^{かんぢ}品^{ぽん}にして一切衆生^{いつさいしゆじやう}喜見^{きけん}如来^{にやらい}と授記^{じゆき}を被^{こおむ}り・羅^{らい}羅^{らい}の
母^{はは}・耶輸陀羅^{やしゆたら}女^{によ}も眷屬^{けんぞく}の比丘尼^{びくに}と共に具足^{ぐそく}せんまんこうそつにやらい
たる十羅刹^{じゆうしやくせつ}女^{によ}も成^{じやうぶつ}仏^{ぶつ}す、然^{しか}れば尚殊^{なおこと}に女性^{しんじゆう}の御信^{みしん}仰^{かう}あるべき御經^{みきやう}にて候^{もと}、抑^{おさ}
此^この經^{きやう}の一文^{いつぶん}一句^{いっく}を讀^{よみ}み一字^{いちじ}一点^{いってん}を寫^なく尚出離^{なをしゆつりしやうじ}生死^{しんじ}・証大菩提^{しやうだい}の因^{いん}なり、然^{しか}れ
ば彼の字^{けちえん}に結縁^{けつえん}せし者^な・尚炎魔^{なえんま}の庁^{ちやう}より歸^{かへ}され六十四^{ろくじゆう}字^じを寫^しし人^{ひと}は其^その父^ふを
天上^{てんじやう}へ送^{おく}る、何^{いか}に況^{いわんや}阿鼻^{あび}の依正^{えしやう}は極聖^{ごくしやうの}の自心^{じしん}に処^{しよ}し地獄^{じごく}・天宮^{てんきゆう}皆^{みな}是^これ
果地^{かぢ}の如^{にやらい}來^きなり、毘盧^{びる}の身土^{しんと}は凡下^{ぼんげ}の一念^{いちねん}を逾^{こえ}ず遮那^{しゃな}の覺体^{かくたい}も衆生^{しゆじやう}の迷妄^{めいもう}を

い
出でず妙文は靈山淨土に増し六万九千の露点は紫磨金の輝光を副え給うべ
こと かこしよりうよう
し、殊に過去聖靈は御存生の時より御信心他に異なる御事なりしかば今日
講經の功力に依つて仏前に生を受け仏果菩提の勝因に登り給うべし云云、
なむみょうほうれんげきよう なむみょうほうれんげきよう
南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。

六六 聖愚問答抄上 上文永二年 四十四歳御作 474P
おろかもんどう ぶんえい

そ
夫れ生を受けしより死を免れざる理りは賢き御門より卑き民に至るまで人
ことには是を知るといへども實に是を大事とし是を歎く者千万人に一人も有が
たし、無常の現起するを見ては疎きをば恐れ親きをば歎くといへども先立つ
ははかなく留るは・かしこきやうに思いて昨日は彼のわざ今日は此の事とて
いたす せけん
徒らに世間の五慾にほだされて白駒のかけ過ぎやすく羊の歩み近づく事をし
らずして空しく衣食の獄につながれ徒らに名利の穴にをち三途の旧里に歸り
ろくどう むな いしよく ごく
六道のちまたに輪回せん事心有らん人誰か歎かざらん誰か悲しまざらん。
りんね いたす みようり なげ

あゝあ 嗚呼・老少不定は娑婆の習ひ会者定離は浮世のことはりなれば始めて驚く

べきにあらねども正嘉の初め世を早うせし人のありさまを見るに・或は幼き

子をふりすて・或は老いたる親を留めをき、いまだ壮年の齡にて黄泉の旅に

趣く心の中さこそ悲しかるらめ行くもかなしみ留るもかなしむ、彼楚王が神

女に伴いし情を一片の朝の雲に残し劉氏が仙客に値し思いを七世の後胤に

慰む予か如き者底に縁つて愁いを休めん、かかる山左のいやしき心なれば身

には思のなかれかしと云いけん人の古事さへ思い出でられて末の代のわすれ

がたみにもとて難波のもしほ草をかきあつめ水くきのあとを形の如くしるし

をくなり。

悲しいかな痛しいかな我等無始より已来無明の酒に酔て六道・四生に輪回

して・或時は焦熱大焦熱の炎にむせび・或時は紅蓮・大紅蓮の氷にとぢら

れ・或時は餓鬼飢渴の悲みに値いて五百年の間飲食の名をも聞かず、或時

ちくじょう

は畜生・残害の苦みをつけて小さきは大きなに・のまれ短きは長きにまか
る是を残害の苦と云う・或時は修羅・鬪争の苦をつけ・或時は人間に生れ
て八苦をうく生・老・病・死・愛別離苦・怨憎会苦・求不得苦・五盛陰苦等
なり・或時は天上に生れて五衰をうく、此くの如く三界の間を車輪のごとく
回り父子の中にも親の親たる子の子たる事をさとらず夫婦の会遇るも会遇た
る事をしらず、迷へる事は羊目に等しく暗き事は狼眼に同じ、我を生たる母
の由来をもしらず生を受けたる我が身も死の終りをしらず、嗚呼受け難き人界
の生をうけ値い難き如来の聖教に値い奉れり一眼の亀の浮木の穴にあへる
がごとし、今度若し生死のきづなをきらず三界の籠檻を出でざらん事かなし
かるべしかなしかるべし。

爰に・或る智人來りて示して云く汝が歎く所実に爾なり此くの如く無常の
ことはりを思い知り善心を発す者は鱗角よりも希なり、此のことはりを覺ら

ずして悪心あくしんを發おこす者は牛毛なんじよりも多し、汝なんじ早く生死しやうじを離はれ菩提心ぼだいしんを發おこさんと
思はば吾最第一さいだいいちの法はふを知しれり 志こころ あらば汝なんじが為ために之これを説といて聞きかしめん、
其そののときぐにん 其の時愚人座ひころげてんより起たつて 掌てのひら を合あせて云いく我われは日來外典ひきろげてんを學がく風月ふうげつに心こころをよ
せていまだ仏教ぶつぎやうと云いふ事を委細いさいにしらず願ねがくば上人しやうにん・我われが為ために是これを説とき
たま 其の時上人そのときしやうにんの云いく汝耳なんじを伶倫りしゆが耳みみに寄よせ目を離朱まなこが眼まなこにかつて心こころを
しづめて我が教きやうをきけ汝なんじが為ために之これを説とかん夫それ仏教ぶつぎやうは八万はちまんの聖教しやうぎやう多おほけれ
ども諸宗しよしやうの父母ふぼたる事こと・戒律かいりつにはしかずされば天竺てんじくには世親馬鳴等せじんめみやうの薩さつ
唐土もろこしには慧曠えいこう・道宣どうせんと云いひし人ひと是これを重おもんず、我われが朝あしたには人皇じんわう四十五代しよじふごだい・
聖武天皇しやうむてんのうの御宇ぎやうに鑒真和尚かんじんわじやう此この宗しゆと天台宗てんだいしやうと両宗りやうしゆを渡わたして東大寺とうだいじの戒壇かいだん之これを
立つ爾しかしより已來このかた當世とうせいに至いたるまで崇重すうちやう年ふ旧そんきり尊貴そんき・日ひに新あらたなり、就な中極樂なかんじやく
寺しやうの良觀りやうかん上人かみいちにんは上かみ一人ひとりより下げ万民ばんみんに至いたるまで生身しやうしんの如來にやらいと是これを仰あおぎ奉たてまつる彼
の行儀ぎやうぎを見るみるに実もつに以もつて爾しかなり、飯嶋はんじまの津つにて六浦むつの関米せきまいを取とつては諸国しよこくの

道を作り七道に木戸をかまへて人別の錢を取つては諸河に橋を渡す慈悲は
如来に齊しく德行は先達に越えたり、汝早く生死を離れんと思はば五戒・
二百五十戒を持ち慈悲をふかくして物の命を殺さずして良觀上人の如く道
を作り橋を渡せ是れ第一の法なり、汝持たんや否や。

愚人弥掌を合せて云く能く能く持ち奉らんと思ふ具に我が為に是を
説き給へ抑五戒・二百五十戒と云う事は我等未だ存知せず委細に是を示し
給へ、智人云く汝は無下に愚かなり五戒・二百五十戒と云う事をば孩児も
是をしる然れども汝が為に之を説かん、五戒とは一には不殺生戒二には不
偷盜戒三には不妄語戒四には不邪淫戒五には不飲酒戒是なり、二百五十戒の
事は多き間之を略す、其の時に愚人礼拝恭敬して云く我今日より深く此の法
を持ち奉るべし。

爰に予が年来の知音・・或所に隱居せる居士一人あり予が愁歎を訪わん

為に來れるが始には往事渺茫として夢に似たる事をかたり終には行末の冥冥
として弁え難き事を談ず鬱を散し思をのべて後予に問うて云く抑人の世に
有る誰か後生を思はざらん、貴辺何なる仏法をか持ちて出離をねがひ又亡者
の後世をも訪ひ給つや、予答えて云く一日・或る上人來つて我が為に五戒・
二百五十戒を授け給へり実に以て心肝にそみて貴し、我深く良觀上人の
如く及ばぬ身にもわるき道を作り深き河には橋をわたさんと思へるなり、
其の時居士示して云く汝が道心貴きに似て愚かなり、今談ずる処の法は浅
ましき小乗の法なり、されば仏は則ち八種の喩を設け文殊は又十七種の
差別を宣べたり・或は螢火日光の喩を取り・或は水精・瑠璃の喩あり爰を
以て三国の大師も其の破文一に非ず、次に行者の尊重の事必ず人の敬ふに
依つて法の貴きにあらず・されば仏は依法不依人と定め給へり、我伝え聞
上古の持律の聖者の振舞は殺を言い収を言うには知淨の語有り行雲廻雪に

は死屍ししの想なを作しす而しかるに今の律僧りつそうの振舞ふるまいを見るに布絹ふけん・財宝ざいほうをたくはへ利銭りせん・借請しゃくしょうを業わざとす教行きょうぎょう既に相違そういせり誰これか是しんじゆを信受しんじゆせん、次に道みちを作り橋わたを渡わたす事かえ還かえつて人の歎なげきなり、飯嶋いひじまの津つにて六浦りくほの関米かんまいを取る諸人しよにんの歎なげき是これ多おほくし諸国しよこく七道しちどうの木戸きど・是も旅人たびのわづらい只此ただの事ことに在り眼前がんぜんの事ことなり汝なんじ見みざるや否いなや。

愚人ぐにん色なを作なして云いわく汝なんじが智分ちぶんをもつて上人しやうにんを謗たてまつし奉たてまつり其そのの法はふを誹ひる事こと謂いわれ無なし知しつて云いわうか愚おろかにして云いわうかおそろしおそろし、其そのの時とき居士こじ笑わらつて云いわく嗚呼ああおろかなりおろかなり彼の宗しゆの僻見びやくけんをあらあら申もうすべし、抑教おほもに大小だいしやう有あり宗しゆに権実こんじつを分わかてり鹿苑ろくおん施小せしやうの昔けじやうは化城けじやうの戸こぼそに導しんくといへども驚おどろき開頭かいとうの筵うしには其そのの得益とくやく更に之これ無なし、其そのの時とき愚人ふにん茫然ぼうぜんとして居士こじに問とうて云いわく文証もんしやう・現証げんしやう実じつに以もつて然しかなり・さて何いかなる法はふを持もつてか生死しやうじを離はなれ速すみに成仏じやうぶつせんや、居士こじ示しして云いわく我さいぞくれ在俗ざいぞくの身みなれども深く仏道ぶつどうを修行しゆぎやうし

て幼少より多くの人師の語を聞き粗経教をも聞き見るに末代我等が如く

なる無悪不造のためには念仏往生の教にしくはなし、されば慧心の僧都は

「夫れ往生極楽の教行は濁世末代の目足なり」と云ひ法然上人は諸經の

要文を集めて一向専修の念仏を弘め給ふ中にも弥陀の本願は諸仏超過の

崇重なり始め無三悪趣の願より終り得三法忍の願に至るまでいづれも悲願

目出けれども第十八の願殊に我等が為に殊勝なり、又十悪・五逆をもきら

はず一念・多念をもえらばずされば上一人より下万民に至るまで此の宗をも

てなし給う事他に異なり又往生の人それ幾ぞや。

其の時愚人の云く実に小を恥じて大を慕ひ浅を去て深に就は仏教の理の

みに非ず世間にも是れ法なり我早く彼の宗にうつらんと思ふ委細に彼の旨を

語り給へ、彼の仏の悲願の中に五逆・十悪をも簡ばずと云へる五逆とは何等

ぞや十悪とは如何、智人の云く五逆とは父を殺し母を殺し阿羅漢を殺し仏身

の血を出し和合僧を破す是を五逆と云うなり、十悪とは身に三・口に四・意
に三なり身に三とは・殺・盜・婬・口に四とは妄語・綺語・惡口・兩舌・意
に三とは貪・瞋・癡是を十惡と云うなり、愚人云く我今解しぬ今日よりは
たりきおうじょう たのみ か くにん いわ もつ ほかさかん
他力往生に憑を懸くべきなり、爰に愚人又云く以ての外盛に・いみじき密
宗の行人あり是も予が歎きを訪わんが為に來臨して始には狂言綺語のことは
りを示し終には顯密二宗の法門を談じて予に問うて云く抑汝は何なる仏法
をか修行し何なる經論をか読誦し奉るや、
予答えて云く我一日・或る居士の教に依つて浄土の三部經を読み奉り西方
極樂の教主に憑を深く懸くるなり、行者の云く仏教に二種有り一には
顯教二には密教なり顯教の極理は密教の初門にも及ばずと云云、汝が
執心の法を聞けば釈迦の顯教なり我が所持の法は大日覺王の秘法なり、実
に三界の火宅を恐れ寂光の宝台を願はば須く顯教を捨てて密教につくべ

し。

愚人驚いて云く我いまだ顯密二道と云う事を聞かず何なるを顯教と云ひ

何なるを密教と云へるや、行者の云く予は是れ頑愚にして敢て賢を存ぜず

然りと雖も今一二の文を挙げて汝が矇昧を挑げん、顯教とは舍利弗等の請

に依つて応身如來の説き給う諸教なり密教とは自受法樂の為に法身大日

如來の金剛薩を所化として説き給う処の大日經等の三部なり、愚人の云く

実に以て然なり先非を・ひるがへして賢き教に付き奉らんとするなり。

又爰に萍のごとく諸州を回り蓬のごとく県県に転ずる非人のそれとも知

らず来り門の柱に寄り立ちて含笑語る事なし、あやしみをなして是を問うに

始めには云う事なし後に強て問を立つる時・彼が云く月蒼蒼として風忙忙た

りと、形質常に異に言語又通ぜず其の至極を尋れば当世の禅法是なり、予彼

の人の有様を見其の言語を聞きて仏道の良因を問う時、非人の云く修多羅の

教は月をさす指・教網は是れ言語にとどこほる妄事なり我が心の本分におち
つかんと出立法は其の名を禅と云うなり、愚人云く願くは我聞んと思ふ、非
人の云く実に其の志深くば壁に向い坐禅して本心の月を澄ましめよ爰を
以て西天には二十八祖系乱れず東土には六祖の相伝明白なり、汝是を悟らず
して教網にかかる不便不便、是心即仏・即心是仏なれば此の身の外に更に何に
か仏あらんや。

愚人此の語を聞いてつくづく諸法を觀じ閑かに義理を案じて云く仏教
万差にして理非明らめ難し宜なるかな常啼は東に請い善財は南に求め藥王は
臂を焼き樂法は皮を剥ぐ善知識實に値い難し、或は教内と談じ、或は教外
と云う此のことはりを思うに未だ淵底を究めず、法水に臨む者は深淵の思い
を懷き人師を見る族は薄氷の心を成せり、爰を以て金言には依法不依人と定
め又爪上土の譬あり若し仏法の真偽をしる人あらば尋ねて師とすべし求め

て崇^そべし、夫^それ人界^{にんかい}に生を受くるを天上^{てんじょう}の糸にたとへ仏法^{ぶつぽう}の視聴^{しきやう}は浮木^{うきぎ}の穴
の類^{たぐい}せり、身を軽くして法を重んずべしと思^{おも}うに依^よつて衆山^{しゆざん}に攀^{よじ}歎^{なげ}きに引
れて諸寺^{しよ}を回る足に任^{まか}せて一つの巖窟^{いた}に至るに後には青山^が峨^が峨として松風・
常樂^{じやうらく}我浄^{がじやう}を奏^{そう}し前には碧水^{へきすい}湯湯として岸うつ波・四徳^{はらみつ}波羅蜜^を響^{ひび}かす深谷^{しんこく}
に開敷^{かいふ}せる花も中道^{ちゆうどう}実相^{じつそう}の色を顕^{あらわ}し広野^{ひろの}に綻^{ほころ}ぶ梅も界如^{かいによさんぜん}三千の薰^{かあり}を添^そふ
言語^{ごんご}道断^{どうだん}・心行^{しんぎやう}所滅^{しよめつ}せり謂^いつ可^べし商山^{しやうざん}の四皓^{しこう}の所居^{しよき}とも又知らず古仏^{ぶきやう}経行
の迹^{あと}なるか、景雲^{あした}朝に立ち靈光^{ゆづ}夕べに現^{げん}ず嗚呼^{ああ}心を以て計^{もつ}るべからず詞^{ことば}を
以て宣^{もつ}ぶべからず、予此^{みぎり}の砌に沈吟^{しんぎん}と

さまよひ彷徨^{ほろろ}とたちもとをり徙倚^{しゐ}とたたずむ、此処^{ここ}に忽然^{こつぜん}として一の聖人^{しやうにん}
坐^{いま}す其^その行儀^{ぎやうぎ}を拝^{ほつ}すれば法華^{ほつ}読誦^{とくじゆ}の声深く心肝^{しんかん}に染^そみて閑^{かんそう}の戸^うほそを伺^{うかが}へ
ば玄義^{げんぎ}の牀^{ゆか}に臂^{ひじ}をくだす、爰^{こゝ}に聖人^{しやうにん}予^しが求法^{きうぽう}の志^しを酌^{くみ}知^{しり}て詞^{ことば}を和^{やわ}げ予^よに
問^いうて云^いく汝^{なんじ}なにに依^よつて此^{こゝ}の深山^{みやま}の窟^{いわや}に至^{いた}れるや、予答^{こたへ}えて云^いく生をか

ろくして法をおもくする者なり、聖人問て云く其の行法如何、予答えて云く
本より我は俗塵に交りて未だ出離を弁えず、適善知識に値て始には律・次
には念仏・真言並に禅此等を聞くといへども未だ真偽を弁えず、聖人云く汝
が詞を聞くに実に以て然なり身をかるくして法をおもくするは先聖の教へ
予が存ずるところなり、抑上は非想の雲の上・下は那落の底までも生を受
けて死をまぬかるる者やはある、然れば外典のいやしきをしえにも朝に紅顔
有つて世路に誇るとも夕には白骨と爲つて郊原に朽ちぬと云へり、雲上に交
つて雲のびんづらあざやかに廻雪たもとを・ひるがへすとも其の樂みをおも
へば夢の中の夢なり、山のふもと蓬がもとはつゐの栖なり玉の台・錦の
帳も後世の道にはなにかせん、小野の小町・衣通姫が花の姿も無常の風に散
り・攀・張良が武芸に達せしも獄卒の杖をかなしむ、されば心ありし古人
の云くあはれなり鳥べの山の夕煙をくる人としてとまるべきかは、末のつゆ本

のしづくや世の中の・をくれさきたつためしなるらん、先亡後滅の理り始め
おとろ
て驚くべきにあらず願ふても願ふべきは仏道求めても求むべきは經教な
きようぎよう
り、抑汝が云うところの法門をきけば・或は小乗・・或は大乗・位の
そもそもなんじ
こうげ しば くれ かせ あくどう
高下は且らく之を置く還つて惡道の業たるべし。

ここ ぐにんおどろ いわ によらいちだい しょうきよう
爰に愚人驚いて云く如來一代の聖教はいづれも衆生を利せんが為なり、

始め七処・八会の筵より終り跋提河の儀式まで何れか釈尊の所説ならざる
えん ばつだいが いずれ しゃくそん しょせつ
たと いちぶん しょうれつ なん あくどう しょうにんいわ によらいちだい
設ひ一分の勝劣をば判ずとも何ぞ惡道の因と云べきや、聖人云く如來一代

しょうきよう
の聖教に権有り実有り大有り小有り又顯密二道相分ち其の品一に非ず、
けんみつにどう そ さんがい きようしゆしやくそん あら

すべからそ だいと なんじ まよい そ さんがい きようしゆしやくそん
須く其の大途を示して汝が迷を悟らしめん、夫れ三界の教主釈尊は十九

歳にして伽耶城を出て檀特山に籠りて難行苦行し三十成道の刻に三惑頓に
がや だんとくせん こも なんぎようくぎよう じょうどう きざみ さんなくとみ

破し無明の暗夜爰に明しかば須く本願に任せて一乗・妙法蓮華經を宣ふべ
は むみよう 二こ あか すべからほんがん まか いちじよう みようほうれんげきよう の

しといへども機縁万差にして其の機仏乘に堪えず、然れば四十余年に所被の
きえん 二こ そ きぶつじよう た しか よんじゅうよねん

機縁きえんを調ととへて後八箇年はちかねんに至いたつて出世しゅつせの本懐ほんかいたる妙法蓮華經みょうほうれんげきやうを説とき給たまへり、
然しかれば仏の御年七十二歳ごねん にじふにさいにして序分じよぶん・無量義經むりやうぎきやうに説とき定めて云いわく、「我先いはきに
どうじようばだいじゆ
道場菩提樹の下に端坐すること六年にして阿耨多羅三藐三菩提あのかたらさんみやくさんぼだいを成じようずること
を得たり、仏眼ぶつげんを以もつて一切いっさいの諸法しよほうを觀かんずるに宣說せんぜつす可べからず、所以ゆえんは何ん
諸の衆生の性慾ふどう不同なるを知れり性慾ふどう不同なれば種種しゆじゆに法を説く種種しゆじゆに法を
説くこと方便ほうべんの力を以もつてす四十余年よんじゆうよねんには未いまだ眞實しんじつを顯あらわさず」文、此の文の
意は仏の御年三十にして寂滅じやくめつ道場菩提樹の下に坐して仏眼ぶつげんを以もつて一切衆生いっさいしゆじよう
の心根しんこんを御覽ごらんずるに衆生しゆじよう成仏じきぶつの直道ちきどうたる法華經ほけきやうをば説くべからず、是これを
以もつて空拳くうけんを挙あげて嬰兒みどりこをすかすが如ごとく様様のたばかりを以もつて四十余年よんじゆうよねんが間は
いまだ眞實しんじつを顯あらわさずと年紀ねんきをさして青天にちりんに日輪いの出で暗夜やみよに満月まんげつのかかる
が如ごとく説き定めさせ給たまへり、此の文を見て何なんぞ同しんじんじ信心しんじんを以もつて仏の虚事そらごとと説
かるる法華已前の權教ほつけいぜん ごんきやう しゆうじやくに執著しよくして、めずらしからぬ三界さんがいの故宅に歸るべき

や、されば法華經の一の卷方便品に云く「正直に方便を捨て但無上道を説く」
文、此の文の意は前四十二年の經經汝が語るところの念仏・真言・禪・律
を正直に捨てよとなり、此の文明白なる上重ねていましめて第二の卷譬喩品
に云く「但樂つて大乘經典を受持し乃至余經の一偈をも受けざれ」文、此
の文の意は年紀かれこれ煩はし所詮法華經より自余の經をば一偈をも受くべ
からずとなり、然るに八宗の異義蘭菊に道俗形ちを異にすれども一同に
法華經をば崇むる由を云う、されば此等の文をばいかが弁へたる正直に捨て
よと云つて余經の一偈をも禁むるに・或は念仏・或は真言・或は禪・或は律
・是れ余經にあらずや、今・此の妙法蓮華經とは諸仏出世の本意・衆生
成仏の直道なり、されば釈尊は付属を宣べ多宝は証明を遂げ諸仏は舌相
を梵天に付けて皆是真實と宣べ給へり、此の經は一字も諸仏の本懷・一点も
多生の助なり一言一語も虚妄あるべからず此の經の禁を用いざる者は諸仏の

舌をきり賢聖をあざむく人に非ずや其の罪実に怖るべし、されば二の巻に云く

「若し人信ぜずして此の経を毀謗せば則ち一切世間の仏種を断ず」文、此の

文の意は若人此経の一偈・一句をも背かん人は過去・現在・未来三世十方

の仏を殺さん罪と定む、経教の鏡をもつて当世にあてみるに法華経をそむ

かぬ人は実に以て有りがたし、事の心を案ずるに不信の人・尚無間を免れず

況や念仏の祖師・法然上人は法華経をもつて念仏に対して抛てよと云云、五

千・七千の経教に何れの処にか法華経を抛てよと云う文ありや、三昧発得

の行者生身の弥陀仏とあがむる善導和尚・五種の雑行を立てて法華経をば

千中無一とて千人持つとも一人も仏になるべからずと立てたり、经文には

若有聞法者無一不成仏と談じて此の経を聞けば十界の依正・皆仏道を成ず

と見えたり、爰を以て五逆の調達は天王如来の記に予り非器五障の竜女

も南方に頓覚成道を唱ふ況や復の六即を立てて機を漏らす事なし、善導

の言と法華經の文と實に以て天地雲泥せり何れに付くべきや就中其の道理を
思うに諸仏衆經の怨敵聖僧衆人の讎敵なり、經文の如くならば争か無間
を免るべきや。

爰に愚人色を作して云く汝賤き身を以て恣に莠言を吐く悟つて言つか迷
つて言つか理非弁え難し、忝なくも善導和尚は弥陀善逝の応化・或は勢至
菩薩の化身と云へり、法然上人も亦然なり善導の後身といへり、上古の先達
たる上・行徳秀發し解了・底を極めたり何ぞ惡道に墮ち給うと云うや、聖人
云く汝が言然なり予も仰いで信を取ること此くの如し但し仏法は強ちに人の
貴賤には依るべからず只經文を先きとすべし身の賤をもつて其の法を輕んず
る事なかれ、有人樂生惡死・有人樂死惡生の十二字を唱へし毘摩大國の狐は
帝釈の師と崇められ諸行無常等の十六字を談ぜし鬼神は雪山童子に貴まる
是れ必ず狐と鬼神との貴きに非ず只法を重んずる故なり、されば我等が慈父

・教主 釈尊・雙林最後の御遺言・涅槃經の第六には依法不依人として普賢・
文殊等の等覺已還の大薩・法門を説き給ふとも經文を手に把らずば用ゐざ
れとなり、天台大師の云く「修多羅と合する者は録して之を用いよ文無く義無
きは信受す可からず」文、釈の意は經文に明ならんを用いよ文証無から
んをば捨てよとなり、伝教大師の云く「仏説に依憑して口伝を信ずること
莫れ」文、前の釈と同意なり、竜樹菩薩の云く「修多羅白論に依つて修多羅
黒論に依らざれ」と文、意は經の中にも法華已前の權教をすてて此の經につ
けよとなり、經文にも論文に
も法華に対して諸余の經典を捨てよと云う事分明なり、然るに開元の録に
挙る所の五千・七千の經卷に法華經を捨てよ乃至抛てよと嫌ふことも又
雜行に擯して之を捨てよと云う經文も全く無し・されば慥の經文を勸へ
出して善導・法然の無間の苦を救はるべし、今世の念仏の行者・俗男・俗女

・經文に違するのみならず又師の教にも背けり、五種の雜行とて念仏申さん人のすべき日記・善導の釈之れ有り、其の雜行とは選択に云く「第一に読誦雜行とは上の觀經等の往生淨土の經を除いて已外・大小乘・顯密の諸經に於て受持・讀・誦するを悉く読誦雜行と名く乃至第三に礼拝雜行とは上の弥陀を礼拝するを除いて已外一切諸余の仏菩薩等及諸の世天に於て礼拝恭敬するを悉く礼拝雜行と名く、第四に称名雜行とは上の弥陀の名号を称するを除いて已外自余の一切仏菩薩等及諸の世天等の名号を稱するを悉く称名雜行と名く、第五に讚歎供養雜行とは上の弥陀を除いて已外一切諸余の仏菩薩等及諸の世天等に於て讚歎し供養するを悉く讚歎供養雜行と名く」文。

此の釈の意は第一の読誦雜行とは念仏申さん道俗男女読むべき經あり読むまじき經ありと定めたり、読むまじき經は法華經・仁王經・藥師經・大集經

・般若心經・転女成仏經・北斗壽命經ことさらうち任せて諸人読まるる八
巻の中の觀音經此等の諸經を一句一偈も読むならばたとひ念仏を志す
行者なりとも雜行に摂せられて往生す可からず云云・予愚眼を以て世を見
るに設ひ念仏申す人なれども此の經經を読む人は多く師弟敵対して七逆罪
となりぬ。

又第三の礼拝雜行とは念仏の行者は弥陀三尊より外は上に挙ぐる所の
諸仏菩薩・諸天善神を礼するをば礼拝雜行と名け又之を禁ず、然るを日本は
神国として伊奘諾伊奘册の尊・此の国を作り天照大神垂迹御坐して
御裳濯河の流れ久しくして今にたえず豈此の国に生を受けて此の邪義を用ゆ
べきや、又普天の下に生れて三光の恩を蒙りながら誠に日月・星宿を破する
事尤も恐れ有り。

又第四の称名雜行とは念仏申さん人は唱うべき仏菩薩の名あり唱えまじ

きほさつ仏菩薩の名あり、唱となうべき仏・菩薩の名とは弥陀みださんそん三尊みようじうの名号、唱となうまじき

仏菩薩ぼさつの名号みようじうとは釈迦しゃか・薬師やくし・大日等だいにちの諸仏しよぶつ、地藏じぞう・普賢ふげん・文殊もんじゆ・日月星にちがつ、

二所と三嶋と熊野と羽黒と天照大神と八幡大菩薩はちまんだいぼさつと此等これらの名を一いつべん遍も唱となえん

人は念仏ねんぶつを十萬遍じゆまん・百萬遍もつ申したりとも此の仏菩薩ぼさつ・日月神等にちがつの名を唱となうる

過とがに依よつて無間むげんにはおつとも往生おうじようすべからずと云云、我世間せけんを見るに念仏ねんぶつを

申もうす人も此等これらの諸仏菩薩しよぶつぼさつ・諸天善神しよてんぜんじんの名を唱となうる故ゆえに是れ又師の教せむに背そむけり。

第五の讚歎供養雜行さんたんくようぞうぎようとは念仏申ねんぶつもうさん人は供養くようすべき仏は弥陀みださんそん三尊くようを供養くようせ

ん外ほかは上あに挙あぐる所の仏菩薩ぼさつ・諸天善神しよてんぜんじんに香華かうげのすこしをも供養くようせん人は

念仏ねんぶつの功は貴とうとけれども此の過とがに依よつて雜行ぞうぎように損せつすと是これをきらふ、然しかるに世

を見るに社壇もつに詣もつては幣帛へいはくを捧ささげ堂舎のぞに臨らいみては礼拝らいはいを致いたす是れ又師の教こ

に背そむけり、汝なんじも若し不審ふしんならば選せん択ちやくを見そよ其の文明白ぜんどうわじようなり、又善導ぜんどう和尚わじようの

観念かんねん法門ほうもん經けいに云く、「酒肉五辛誓しゆにくごしんつて発願ほつがんして手とに捉とらざれ口かに喫もまざれ若し

此の語に違せば即ち身口俱に惡瘡を著けんと願ぜよ」文、此の文の意は念仏
申さん男女・尼法師は酒を飲まざれ魚鳥をも食わざれ其の外にらひる等の五
つのからく・くさき物を食わざれ是を持たざる念仏者は今生には惡瘡身に
出で後生には無間に墮すべしと云云、然るに念仏申す男女・尼法師此の誠を
かへりみず恣に酒をのみ魚鳥を食ふ事・劍を飲む譬にあらずや。
爰に愚人の云く誠に是れ此の法門を聞くに念仏の法門實に往生すと雖も
其の行儀修行し難し況や彼の憑む所の經論は皆以て權説なり往生す可から
ざるの条分明なり、但眞言を破する事は其の謂れ無し夫れ大日經とは大日
覺王の秘法なり大日如来より系も乱れず善無畏・不空之を伝え弘法大師は
日本に両界の曼陀羅を弘め、尊高二十七尊・秘奥なるものなり然るに顯教の
極理は尚密教の初門にも及ばず爰を以て後唐院は法華尚及ばず況や自余の教
をやと釈し給へり此の事如何が心うべきや。

しょうにん

聖人示して云く予も始は大日に憑を懸けて密宗に志を寄す然れども彼

の宗の最底を見るに其の立義も亦謗法なり汝が云う所の高野の大師は嵯峨

天皇の御宇の人師なり、然るに皇帝より仏法の浅深を判釈すべき由の宣旨を

給いて十住心論十卷之を造る、此の書広博なる間要を取つて三卷に之を縮

め其の名を秘蔵宝鑰と号す始異生羝羊心より終秘密莊嚴心に至るまで十に

分別し、第八法華・第九華嚴・第十真言と立てて法華は華嚴にも劣れば

大日経には三重の劣と判じて此くの如きの乗乗は自乗に仏の名を得れども

後に望めば戲論と作ると書いて法華経を狂言綺語と云い釈尊をば無明に迷

へる仏と下せり、仍て伝法院建立せし弘法の弟子正覚房は法華経は大日経

のはきものとり及ばず・釈迦仏は大日如来の牛飼にも足らずと書けり、汝

心を静めて聞け一代五千・七千の経教・外典三千余巻にも法華経は戲論三

重の劣・華嚴経にも劣り釈尊は無明に迷へる仏にて大日如来の牛飼にも足

重の劣・華嚴経にも劣り釈尊は無明に迷へる仏にて大日如来の牛飼にも足

重の劣・華嚴経にも劣り釈尊は無明に迷へる仏にて大日如来の牛飼にも足

重の劣・華嚴経にも劣り釈尊は無明に迷へる仏にて大日如来の牛飼にも足

重の劣・華嚴経にも劣り釈尊は無明に迷へる仏にて大日如来の牛飼にも足

重の劣・華嚴経にも劣り釈尊は無明に迷へる仏にて大日如来の牛飼にも足

重の劣・華嚴経にも劣り釈尊は無明に迷へる仏にて大日如来の牛飼にも足

重の劣・華嚴経にも劣り釈尊は無明に迷へる仏にて大日如来の牛飼にも足

重の劣・華嚴経にも劣り釈尊は無明に迷へる仏にて大日如来の牛飼にも足

重の劣・華嚴経にも劣り釈尊は無明に迷へる仏にて大日如来の牛飼にも足

重の劣・華嚴経にも劣り釈尊は無明に迷へる仏にて大日如来の牛飼にも足

重の劣・華嚴経にも劣り釈尊は無明に迷へる仏にて大日如来の牛飼にも足

らずと云う慥なる文ありや、設ひさる文有りと云うとも能く能く思案あるベ
きか。

経教きようぎようは西天せいてんより東土とうどにおよぼすぼす時・訳者の意樂やくしや いぎように随したがつて経論きようろんの文不定ふじような
り、さて後秦こうしんの羅什三蔵らじゅうさんぞうは我漢土かんどの仏法ぶつぽうを見るに多く梵本ぼんほんに違ちがへり我が訳す
る所の経若もし誤あやまりなくば我死ふじようして後・身は不浄ふじようなれば焼くると云えども舌
計ばかり焼やけざらんと常に説法せつぽうし給たまいしに焼き奉たてまつる時・御身おんみは皆骨みなとなるといへ
ども御舌計ばかりは青蓮華せいれんげの上に光明こうみようを放はなつて日輪にちりんを映奪えいざつし給たまいき有り難がたき事な
り、さてこそ殊更ことさら・彼の三蔵所訳さんぞうしよやくの法華経ほけきようは唐土もうこしにやすやすと弘ひろまらせ給たまい
しか、然しかれば延暦寺えんりやくじの根本大師こんぽんだいし・諸宗しよしゆうを責め給たまいしには法華ほつげを訳する三蔵さんぞうは
舌の焼やけざる験しるしあり汝等なんじが依経えきようは皆誤みなあやまりれりと破はし給たまふは是これなり、涅槃経ねはんぎよう
にも我が仏法ぶつぽうは他国たこくへ移うつらん時誤あやまり多かるべしと説とき給たまへば経文きようもんに設たとひ
ほけきよう
法華経ほけきはいたずら事・釈尊しゃくそんをば無明むみように迷まよへる仏ぶつなりとありとも權教こんきよう・

じつきよう

だいじよう

しようじよう

せつじ ぜんこ

やくしやよ

よ たず

いわゆるろうし

こうし

実教・大乘・小乗

説時の前後・訳者能く能く尋ぬべし、

所謂老子・孔子

は九思一言・三思一言・周公旦は食するに三度吐き沐するに三度にぎる外典

なおかくのごと

いわんやないてん

じんぎ

もく

きようろん

のあさき猶是くの如し況や内典の深義を習はん人をや、其の上此の義・経論

なほかくのごと

いわんやないてん

じんぎ

もく

きようろん

に迹形もなし人を毀り法を謗じては悪道に墮つべしとは弘法大師の釈なり必

じしく

おち

うたがい

ほうじ

あくどう

お

こうほうだいし

じしく

ず地獄に墮んこと疑い無き者なり。

じしく

おち

うたがい

ほうじ

あくどう

お

こうほうだいし

じしく

爰に愚人・茫然とほれ忽然となげひて良久しうして云く此の大師は内外の

こころ

ぐにん

ぼうぜん

こころねん

やや

いわ

だいし

ないげ

明鏡・衆人の導師たり德行世に勝れ名誉普く聞えて・或は唐土より三鉢を

めいきよう

しゅうじん

どうし

とくぎよう

すぐ

めいよあまね

ある

もろこし

さんこ

八万余里の海上をなぐるに即日本に至り・或は心経の旨をつづるに蘇生の

はちまん

そくにほん

ある

しんきよう

むね

すいじやく

あお

族・途にイむ、然れば此の人ただ人にあらず大聖権化の垂迹なり仰いで信

やから

みち

たたず

しか

しやうにんいわ

ただ

ぶつどう

りひ

を取らんにはしかじ、聖人云く予も始めは然なり但し仏道に入つて理非を

かんが

ぶつぼう

じゃせい

とくすうじさい

しか

ただ

ぶつどう

えほう

ふえ

勘へ見るに仏法の邪正は必ず得通自在にはよらず是を以て仏は依法不依人と

かんが

ぶつぼう

じゃせい

とくすうじさい

しか

ただ

ぶつどう

えほう

ふえ

定め給へり前に示すが如し、彼の阿伽陀仙は恒河を片耳にただへて十二年・

たま

こと

あかだ

じうが

じうが

じうが

じうが

じうが

じうが

耆^{ぎと}兔^と仙^{せん}は一日^{いちにち}の中に大海^{たいかい}をすひほす張^{ちやう}階^{かい}は霧^きを吐^はき樂^{らく}巴^ぱは雲^{うん}を吐^はく然^{しか}れども
未^{いま}だ仏^{ぶつ}法^{ぽう}の是^ぜ非^ひを知らず因果^{いんが}の道理^{どうり}をも弁^わかまへず、異^{いち}朝^{ちやう}の法^{ぽう}雲^{うん}法師^{ふし}は講^{こう}經^{きやう}勤^{きん}修^{しゆ}
の砌^{みぎり}に須^{しゆ}臾^ゆに天^{てん}華^けをふらせしかども妙^{みやう}樂^{らく}大師^{だいし}は感^{かん}応^{おう}斯^{しか}くの如^{ごと}きも猶^{なほ}理^りに
称^{かな}わらずとていまだ仏^{ぶつ}法^{ぽう}をばしらずと破^はし給^{たま}う、夫^それ此^{この}の法^{ほけ}華^{きやう}經^{きやう}と申^{もう}すは已^い今^{こん}当^{とう}
の三^{さん}說^{せつ}を嫌^{きら}つて已^い前^{ぜん}の經^{きやう}をば未^み顕^{けん}真^{しん}實^{じつ}と打^{うち}破^{やぶ}り肩^{かた}を並^{なら}ぶる經^{きやう}をば今^{こん}說^{せつ}の文^{ぶん}を
以^{もつ}てせめ已^い後^ごの經^{きやう}をば当^{とう}說^{せつ}の文^{ぶん}を以^{もつ}て破^{やぶ}る實^{じつ}に三^{さん}說^{せつ}第^{だい}一^{いち}の經^{きやう}なり、第^{だい}四^しの卷^{くわん}
に云^{いわ}く「藥^{やく}王^{おう}今^{なん}汝^にに告^こぐ我^{われ}所^{しよ}說^{せつ}の經^{きやう}典^{てん}而^{しか}も此^{この}の經^{きやう}の中^{ちゆう}に於^{おい}て法^{ほつ}華^け最^{さい}第^{だい}一^{いち}
なり」文^{ぶん}、此^{この}の文^{ぶん}の意^いは靈^{りやう}山^{さん}会^{かい}上^{じやう}に藥^{やく}王^{おう}菩^ぼ薩^{さつ}と申^{まを}せし菩^ぼ薩^{さつ}に仏^{ぶつ}・告^こげて云^{いわ}く
始^け・華^{こん}嚴^{げん}より終^{しゆう}・涅槃^{ねはん}經^{きやう}に至^{いた}るまで無^む量^{りやう}無^む辺^{へん}の經^{きやう}・恒^{かう}河^が沙^{しゃ}等^{とう}の數^{かず}多^{おほ}し其^その中^{ちゆう}
には今^{いま}の法^{ほけ}華^{きやう}經^{きやう}最^{さい}第^{だい}一^{いち}と說^{せつ}かれたり、然^{しか}るを弘^{かう}法^{ぽう}大^{だい}師^しは一^{いつ}の字^じを三^{さん}と読^よまれ
たり、同^{どう}卷^{くわん}に云^{いわ}く、我^{われ}仏^{ぶつ}道^{だう}の爲^{ため}に無^む量^{りやう}の土^どに於^{おい}て始^{いた}より今^{いま}に至^{いた}るまで広^{ひろ}く諸^{しよ}經^{きやう}
を説^{しか}く而^そも其^{その}の中^{ちゆう}に於^{おい}て此^{この}の經^{きやう}第^{だい}一^{いち}なり」と、此^{この}の文^{ぶん}の意^いは又^{また}釈^{しゃく}尊^{そん}無^む量^{りやう}の国^{こく}土^ど

にして・或は名字を替え・或は年紀を不同になし種種の形を現して説く所の
諸經の中には此の法華經を第一と定められたり、同じ第五卷には最在其上
と宣べて大日經・金剛頂等の無量の經の頂に此の經は有るべしと説かれ
たるを弘法大師は最在其下と謂へり、釈尊と弘法と法華經と宝鑰とは実に
以て相違せり釈尊を捨て奉つて弘法に付くべきか、又弘法を捨てて釈尊に
付奉るべきか、又經文に背いて人師の言に随ふべきか人師の言を捨てて金言
を仰ぐべきか用捨・心に有るべし、又第七の卷藥王品に十喩を挙げて教を歎ず
るに第一は水の譬なり江河を諸經に譬へ大海を法華に譬へたり、然るを
大日經は勝れたり法華は劣れりと云う人は即大海は小河よりもすくなしと云
わん人なり、然るに今の世の人は海の諸河に勝る事をば知るといへども法華經
の第一なる事をば弁へず、第二は山の譬なり衆山を諸經に譬へ須弥山を
法華に譬へたり須弥山は上下十六万八千由旬の山なり何れの山か肩を並ぶべ

き法華經を大日經に劣ると云う人は富士山は須弥山より大なりと云わん人なり、第三は星月の譬なり諸經を星に譬へ法華經を月に譬ふ月と星とは何れ勝りたりと思へるや、乃至次下には此の經も亦復是くの如し一切の如来の所説若しは菩薩の所説若しは声聞の所説諸の經法の中に最も為れ第一とて此の法華經は只釈尊一代の第一と説き給うのみにあらず大日及び藥師・阿弥陀等の諸仏・普賢・文殊等の菩薩の一切の所説・諸經の中に此の法華經第一と説けり、されば若し此の經に勝りたりと云う經有らば外道天魔の説と知るべきなり、其の上・大日如来と云うは久遠実成の教主釈尊・四十二年・和光同塵して其の機に応ずる時・三身即一の如来暫く毘盧遮那と示せり、是の故に開顯実相の前には釈迦の応化と見えたり、爰を以て普賢經には釈迦牟尼仏を毘盧遮那遍一切処と名け其の仏の住处を常寂光と名くと説けり、今法華經は十界互具・一念三千・三諦即是・四土不二と談ず其の上に

いちだいしうきよう　こつずい　にじようさぶつ　くおんじつじよう　こんきよう
一代 聖教の骨髓たる二乗作仏・久遠実成は今經に限れり、汝語る所の
だいにちきよう　こんごうちよう　ひきよう　これら　だいじ　ぜんむいふくう　これら
大日經・金剛頂等の三部の秘經に此等の大事ありや善無畏不空等此等の
だいじ　ほうもん　おの　がんもく　ほんきよう　ほんろん
大事の法門を盗み取つて己が經の眼目とせり本經・本論には迹形もなき誑惑
なり急ぎ急ぎ是を改むべし。

そもそだいにちきよう

しきようがんぞう

じんぎようじゆ

もろこし

にんし

てんだいしよりゆう

抑 大日經とは四教含藏して尽形寿戒等を明せり唐土の人師は天台所立

ほうとうぶ

こんきよう

なんじ

どうしん　ほうとうぶ　しきようがんぞう　じんぎようじゆ　もろこし　にんし　てんだいしよりゆう
第三時方等部の經なりと定めたる權教なりあさまし・あさまし、汝實に
いねん　じゆつかい　えしよう　さんぜん　みようほうれんげきよう　いちだい　かんもん
道心あらば急いで先非を悔ゆべし夫れ以れば此の妙法蓮華經は一代の觀門を
一念にすべ十界の依正を三千につづめたり。

六六 聖愚問答抄下 487P

こゝ　ぐにんいさかやわら　いわ　きようもん　めいきよう　ぎりよ　およ　ただ

爰に愚人聊か和いで云く經文は明鏡なり疑慮をいたすに及ばず但し

ほけきよう

ひい　いちだい

かか

きようもん　とど

法華經は三説に秀で一代に超ゆるといへども言説に拘はらず經文に留まらざ

われら

ほんぶん

およ

ほうけん

ごんこ

る我等が心の本分の禅の一法にはしくべからず凡そ万法を弘遣して言語の

およびざる処ところを禅法とは名けたり、されば跋提河ばつたいがの辺り沙羅林しゃらりんの下にして釈尊しゃくそん

・金棺より御足を出し拈華微笑ねんげびしょうして此の法門ほうもんを迦葉かしょうに付属ふぞくありしより已来このかた・

てんじく

天竺二十八祖みだ・系乱もろこしれず唐土しだいには六祖次第ぐつうに弘通だるませり、達磨せいてんは西天せいてんにしては

とうど

二十八祖の終・東土とうどにしては六祖の始なり相伝そうでんをうしなはず教網きょうわうに滞とどこるべか

ここをもつ

だいぼんてんのうもんぶつつけぎよう

いわ

しょうほうげんぞう

ねはんみょうしんじつそう

らず、爰ここを以て大梵天王問仏決疑經だいぼんてんのうもんぶつつけぎように云く、「吾に正法眼蔵しょうほうげんぞうの涅槃妙心ねはんみょうしん実相じつそう

むそうみみよう

きようげ

もんじ

まかかしよう

ふぞく

かしよう

無相微妙むそうみみようの法門ほうもん有り教外きようげに別に云う文字もんじを立てず摩訶迦葉まかかしように付属ふぞくすこと迦葉かしよう

きようげ

もんじ

すべしゆたら

きようぎよう

に此の禅の一法きようげをば教外きようげに伝ふと見えたり、都て修多羅すべしゆたらの經教きようぎようは月をさす

きようげ

もんじ

すべしゆたら

きようぎよう

指・月を見て後は指何かはせん心の本分ほんぶん禅の一理ほんぶんを知つて後は仏教ぶつぎように心を留とど

きようげ

もんじ

すべしゆたら

きようぎよう

むべしや、されば古人いわの云く十二部經じふにぶきようは総て是れ閑文字もんじと云云、仍よつて此の

えの

ひけん

もつ

しか

けいえ

けいえ

宗の六祖えの慧能えのの壇經だんきんを披見ひけんするに実もつに以て然しかなり、言下げんごに契会けいえして後は教は

いかん

しようにん

いわ

なんじ

ほうもん

どうり

何かせん此の理いかん如何いかにが弁わきまえんや、聖人しようにん示して云く汝なんじ先ず法門ほうもんを置いて道理どうり

そもそも

いちだい

だいと

うかが

えんでい

きわ

いさ

を案ぜよ、抑我一代いさの大途だいとを伺うかがわす十宗じしうの淵底えんていを究めずして国いさを諫め人を

教ふべきか、汝なんじが談だんずる所の禪は我最前に習ならい極きわめて其その至極しごくを見るに甚はなはだ
だもつ以ひがごとて僻事ひがごとなり、禪に三種あり所謂いわゆるにょらい如来禪と教禪と祖師禪そしとなり、汝なんじが言いう
所の祖師禪等そしの一端これ之を示さん聞きこいて其その旨むねを知もれ若し教を離れて之を伝これう
といわば教を離れて理なく理を離れて教無し理全く教・教全く理と云う道理どうり
汝なんじ之を知らざるや拈華微笑ねんげびしょうして迦葉かしように付属ふぞくし給たまうと云こうも是れ教なり不立ふりゆう
文字もんじと云そくう四字も即教なり文字もんじなり此の事・和漢わかん兩國に事ふ旧りぬ今いへば事
新あらたきに似たれども一兩の文を勸かんえて汝なんじが迷まよを払はらはしめん、補註十一に云いわく
又復またも若し言説ごんごに滞とどこると謂いわば且しばらく娑婆世界しゃばせかいには何を將もつて仏事ぶつじと為なるや、禪
徒あに豈言説あにをもつて人に示さざらんや、文字もんじを離れて解脱げだつの義を談だんずること無
し豈あにに聞かざらんや乃ない至次しつぎぎ下しもに云いわく豈あにに達磨西来だるまして直指人心じんしん・見性けんしょう
成仏じやうぶつすと而しかるに華嚴等けこんの諸大乘しよだいじやうきやう經に此の事無ことなからんや、嗚呼ああ世人何なんぞ其それ
愚おろかなるや汝なんじ等当まさに仏の所説しよせつを信しよぶつずべし諸仏如来しよぶつにょらいは言虚妄無みことこもし、此の文の

意は若し教文にとどこほり言説にかかはるとて教の外に修行すといはば此の
娑婆国にはさて如何がして仏事善根を作すべき、さように云うところの禅人
も人に教ゆる時は言を以て云はざるべしや其の上仏道の解了を云う時文字を
離れて義なし、又達磨西より来つて直に人心を指して仏なりと云う是程の理
は華嚴・大集・大般若等の法華已前の権大乘經にも在在處處に之を談ぜり
是をいみじき事とせんは無下に云いがひなき事なり嗚呼今世の人何ぞ甚ひ
がめるや只中道実相の理に契当せる妙覺果滿の如来誠諦の言を信すべきな
り又妙樂大師の弘決の一に此の理を釈して云く「世人・教を蔑にして理觀
を尙ぶは誤れるかな」と、此の文の意は今の世の人人は觀心
觀法を先として經教を尋ね学ばず還つて教をあなづり經をかるしむる是れ
誤れりと云う文なり、其の上當世の禅人・自宗に迷へり、続高僧伝を披見
するに習禅の初祖達磨大師の伝に云く教に藉つて宗を悟ると、如来一代の

しよきよう
聖教の道理を習学し法門の旨・宗宗の沙汰を知るべきなり、又達磨の弟子
・六祖の第二祖慧可の伝に云く達磨禪師四巻の楞伽を以て可に授けて云く我
漢の地を觀るに唯此の經のみ有り仁者依行せば自ら世を度する事を得ん」と、
此の文の意は達磨大師天竺より唐土に来て四巻の楞伽經をもつて慧可に授
けて云く我此の國を見るに是の經殊に勝れたり汝持ち修行して仏に成れと
なり、此等の祖師既に經文を前とす若し之に依つて經に依ると云はば大乘
か小乗か權教か實教か能く能く弁ふべし、或は經を用いるには禪宗も
楞伽經・首楞嚴經・金剛般若經等による是れ皆法華已前の權教・覆藏の説
なり、只諸經に是心即仏・即心是仏等の理の方を説ける一兩の文と句とに迷
いて大小・權實・顯露・覆藏をも尋ねず、只不二を立てて而二を知らず
謂己均仏の大慢を成せり、彼の月氏の大慢が迹をつぎ此の尸那の三階禪師が
古風を追う然りと雖も大慢は生ながら無間に入り三階は死して大蛇と成りぬ

・をそろしをそろし、しやくそん 釈尊は三世了達の解了・朗かに妙覺果滿の智月潔く
して未来を鑒みらいみたまいかんが像法決疑經に記して云く「諸の惡比丘・或は禪を修す
る有つて經論に依らず自ら己見を逐つて非を以て是と為し是邪是正と分別す
ること能わずあたくあまねくどうぞく道俗に向つて是くの如き言を作さく我能く是を知り我能く
是を見ると当に知るべし此の人は速かに我法を滅す」と、此の文の意は諸
惡比丘あつて禪を信仰して經論をも尋ねず邪見を本として法門の是非をば
弁えずして而も男女・尼法師等に向つて我よく法門を知れり人はしらずと云
つて此の禪を弘むべし、当に知るべし此の人は我が正法を滅すべしとなり、
此の文をもつて当世を見るに宛も符契の如し汝慎むべし汝畏るべし、先に
談ずる所の天竺に二十八祖有つて此の法門を口伝すと云う事其の証拠何に
出でたるやい仏法を相伝する人・二十四人・或は二十三人と見えたり、然るを
二十八祖と立つる事・所出の翻譯何にかある全く見えざるところなり、此の

付法蔵の人の事・私に書くべきにあらず如來の記文分明なり、其の付法蔵伝
に云く「復比丘有り名けて師子と曰う 寶國に於て大に仏事を作す、時に彼
の國王をば彌羅掘と名け邪見熾盛にして心に敬信無く 寶國に於て塔寺を
毀壞し衆僧を殺害す、即ち利劍を以て用いて師子を斬る頸の中血無く唯乳の
み流出す法を相付する人はに於て便ち絶えん」此の文の意は仏・我が入涅槃
の後に我が法を相伝する人・二十四人あるべし其の中に最後・弘通の人に當
るをば師子比丘と云わん、 寶國と云う國にて我が法を弘むべし彼の國の王
をば檀彌羅王と云うべし邪見放逸にして佛法を信ぜず衆僧を敬はず堂塔を破
り失ひ劍をもつて諸僧の頸を切るべし即師子比丘の頸をきらん時に頸の中に
血無く只乳のみ出ずべし、是の時に佛法を相伝せん人絶ゆべしと定められた
り、案の如く仏の御言違わず師子尊者・頸をきられ給う事實に以て爾なり、
王のかいな共につれて落ち畢んぬ、二十八祖を立つる事甚以て僻見なり禅

の僻事ひがことはより興おこなるべし、今慧能えのが壇經に二十八祖を立つる事は達磨だるまを高祖こうそと定むる時し師子だるまと達磨との年紀遥かなる間・三人の禅師ぜんを私ひそかに作り入れててんじく天竺より来れる付法蔵ふほうぞう・系乱みだれずと云うて人に重んぜさせん為の僻事ひがことなり此の事じ異朝いにして事ふ旧りぬ、補註の十一に云く、今家は二十三祖を承用す豈あに有らんや、若しも二十八祖を立つるは未だ所出いまだしよしゆつの翻訳ほんやくを見ざるなり、近來更に石に刻み版に鏤め七仏二十八祖を図状し各一偈を以て伝授相付すること有りああなんそはなはたしきしやこあらた嗚呼仮託何ぞ其れ甚だしきや識者力有らば宜しく斯の弊を革むべし是も二十八祖を立て石にきざみ版にちりばめて伝うる事甚だ以て誤れり此の事を知る人あらば此の誤あやまりをあらためなをせとなり、祖師禅そし甚だ僻事ひがことなる事是にあり先に引く所の大梵天王問仏決疑經の文を教外別伝の証拠に汝之を引く既に自語相違せり、其の上此の経は説相せつそう權教こんきようなり又開元貞元の再度の目錄にも全く載せず是録外の経なる上・權教と見えたり、然れば世間の学者しかせけんがくしや

用ゐざるところなり証拠しやうことするにたらず。

そもそも

抑おさ今の法華經ほけきやうを説かるる時・益やくをうる輩やから・迹門しやくもん界如三千の時・敗種ばいしゆの

にじよう

ぶつしゆ

きざ

二乗・仏種を萌す四十二年の間は永不成仏と嫌はれて在在處處しやしよの集会しゆうえにして

めりひぼう

こえ

罵詈誹謗の音をのみ聞き人天大会に思いうとまれて既に飢え死ぬべかりし

ひとびと

人人も今の經に來つて舍利弗は華光如來・目連は多摩羅跋旃檀香如來・阿難

は山海慧自在通王仏・羅羅は七宝華如來五百の羅漢は普明如來・二千の

しやうもん

ほつそふにやらい

きべつ

あすか

聲聞は宝相如來の記に

ける・

顯本遠寿の日は微塵数の菩薩増道損生して位

だいかく

とな

大覺に鄰る、されば天台大師の釈を披見するに他經には菩薩は仏になると云

つて二乗の得道は永く之れ無し、善人は仏になると云つて悪人の成仏を明さ

ず男子は仏になると説いて女人は地獄の使と定む人天は仏になると云つて畜

類は仏になるといはず、然るを今の經は是等が皆仏になると説くたのもしき

かな末代濁世に生を受くといへども提婆が如くに五逆をも造らず三逆をも犯

まつだいじよくせ

だいば

こと

ごきやく

さず、しか而るに提婆だいば猶な天王てんわう如来にょらいの記きを得たり況いや犯わさざる我等われらが身をみをや、八
歳しやうの童女どうにょ既に蛇身じやしんを改めずして南方なんぽうに妙果めうくわを証す況いや人界にんがいに生を受けたる
女人にょにんをや、只得ただ難がたきは人身じんしん値あい難がたきは正法しやうほうなり汝なんじ早く邪ひるがえりを翻ひるがえりえし正しやうに付
き凡みよを転じて聖じやうを証せんと思はば念仏ねんぶつ・真言しんごん・禅ぜん・律りつを捨てて此この一乗いちじやう
妙典みよてんを受持じゆじすべし、若もし爾しからば妄染もうぜんの塵穢じんえを払はらつて清淨しやうじやうの覺体かくたいを証せん事
疑うたがなかるべし。

こここに愚人ぐにん云いく今しやう聖人しやうにんの教誡ちやうもんを聴聞ひこするに日來ちうまいの矇昧ちまち忽とに開てんけぬ天真しんはつめい發明てんしん
とも云いつべし理非りひ顯然けんねんなれば誰おほか信仰おほせざらんや、但ただし世上せじやうを見るに上一人かみいちにん
より下万民ばんみんに至るまで念仏ねんぶつ・真言しんごん・禅ぜん・律りつを深く信受しんじゆし御座おほすさる前まへには
こくどこくどに生を受けながら争いかでか王命わうめいを背そむかんや、其その上うへ・我われが親おやと云いい祖そと云いい
かたがたねんぶつ
旁はう念仏ねんぶつ等の法理はうりを信じて他界たがいの雲うんに交あり畢おほんぬ、又日本にほんには上下じやうげの人数にんずう・
幾いくばくか有ある、然しかりと雖いえども權教ごんきやう・權宗ごんしゆの者は多く此この法門はうもんを信しんずる人は未いまだ

其の名をも聞かず、仍て善処・悪処をいはず邪法・正法を簡はず内典五千・
七千の多きも外典三千余巻の広きも只主君の命に随ひ父母の義に叶うが肝心
なり、されば教主 釈尊は天竺にして孝養報恩の理を説き孔子は大唐にして
忠功孝高の道を示す師の恩を報ずる人は肉をさき身をなぐ主の恩をしる人は
弘演は腹をさき予譲は剣をのむ親の恩を思いし
人は丁蘭は木をきざみ伯瑜は杖になく、儒・外・内・道は異なりといへども
報恩謝徳の教は替る事なし然れば主師親のいまだ信ぜざる法理を我始めて信
ぜん事既に違背の過に沈みなん法門の道理は経文明白なれば疑網都て尽きぬ
後生を願はずば来世・苦に沈むべし進退惟谷れり我如何がせんや、聖人云く
汝此の理を知りながら猶是の語をなす理の通ぜざるか意の及ばざるか我
釈尊の遺法をまなび仏法に肩を入れしより已来知恩をもて最とし報恩をもて
前とす世に四恩あり之を知るを人倫となづけ知らざるを畜生とす、予父母の

後世ごしやうを助け国家こっかの恩徳おんとくを報おげんと思おもうが故ゆゑに身命しんみやうを捨すつる事あえて敢たじて他事たじにあら
ず唯知恩ただちおんを旨むねとする計はかりなり、先なんじず汝目なんじをふさぎ心を静しずめて道理どうりを思おもへ我は
善道ぜんだうを知りながら親おやと主しゅとの悪道あくだうにかからんを諫いさめざらんや、又愚心ぐしんの狂くるひ
酔よつて毒どくを服ふくせんを我知りながら是これをいましめざらんや、其その如ごとく法門ほうもんの道理どうり
を存ぞんじて火・血・刀の苦くるを知りながら争いかでか恩おんを蒙こむる人ひとの悪道あくだうにおちん事を
歎なげかざらんや、身みをもなげ命いのちをも捨すつべし諫いさめても・あきたらず歎なげきても限
りなし、今世まなこに眼がんを合あする苦くるみ猶なほ是これを悲かなむ況いはんやや悠悠めいどたる冥途めいどの悲あにみ豈いかに痛いたま
ざらんや恐おそれても恐おそるべきは後世ごしやう慎つつしみても慎つつしむべきは来世らいせなり、而しかるを是ぜ非ひ
を論ろんぜず親おやの命いのちに随したがひ邪正じやせいを簡えらばず主おほの仰おほせに順したがはんと云いふ事こと愚癡ぐちの前まえには
忠孝ちゆうかうに似にたれども賢人けんじんの意いには不忠不孝ふちゆうふかう是すに過あやまるべからず。

されば教主きやうしゆしやくそん釈尊てんりんじやうおうは転輪聖王てんりんじやうおうの末師子しし・頼王きやうおうの孫そん・浄飯王じやうはんの嫡子てきしとして
五天竺てんじくの大王だいうたるべしといへども生死無常しやうじむじやうの理りをさとしり出離解脫しゆつりげだつの道みちを願ねがつ

て世を厭いとひ給しかば浄飯大王是を歎なげき四方に四季の色を顯あらわして太子の御意を
留とどめ奉たてまつらんと巧たくらみ給たまふ、先づ東には霞たなびくたえまより・かりがねこしぢ
に歸もとり　の梅の香・玉簾たまだれの中にかよひ・でうでうたる花の色・ももさへづり
の鶯うぐいす・春の氣色を顯はせり、南には泉の色白しろたへにしてかの玉川の卯の華
信太の森のほととぎす夏のすがたを顯はせり、西には紅葉もみじ・常葉ときわに交ればさ
ながら錦をおり交まじえ荻おぎふく風・閑のどかにして松の嵐ものすこし過ぎにし夏のな
ごりには沢辺にみゆる螢の光・あまつ空なる星かと誤あやまり・松虫・鈴虫の声
声・涙を催せり、北には枯野からの色いつしかものうく池の汀なぎさにつららみて谷の
小川も・をとさびぬ、かかるありさまを造みこころつて御意をなくさめ給たまうのみなら
ず四門に五百人づつの兵を置いて守護しゆごし給たまいしかども終ついに太子の御年十九と
申せし二月八日の夜半の比・車匿しゃのくを召して金泥駒こんじくに鞍置くらかせ伽耶城がやを出て
檀特山だんどくせんに入り十二年高山こうざんに薪たきぎをとり深谷しんこくに水を結なんぎんで難行なんぎよう苦行くぎようし給たまひ三十

成道じやうどうの妙果めうくわを感得かんとくして三界さんがいの独尊いちだい・一代きやうしゆの教主きやうしゆと成つて父母ふぼを救ひ群生ぐんしやうを導きたまい給たまいしをばさて不孝ふこうの人と申もうすべきか、仏ぶつを不孝ふこうの人と云いいしはきゆうじゆうしゆ九十五種げどうの外道ふぼなり父母めいの命そむに背むいて無為むいにかえ入り還ふつて父母ふぼを導くは孝てほんの手本しやうこなる事・仏そ其の証拠しやうこなるべし、彼の淨藏じやうざう・淨眼じやうがんは父の妙莊嚴王みやうそういん・外道げどうの法じやくに著ぶつぽうして仏法そむに背たまいしかども二人たいしの太子たいしは父の命めいに背そむいて雲雷音王うんらいおんのうぶつの御弟子おんでしとなり終ついに父を導しやうじゆいて沙羅樹王しやらじゆ仏ふつと申もうす仏になし申もうされけるは不孝ふこうの人と云うべきか、經文きやうもんには棄恩入無為むい・眞實報恩者しんじつほうおんと説こんじやういて今生こんじやうの恩愛おんあいをば皆みなすててぶつぽう仏法ぶつぽうの實の道こに入る是れ實に恩をしゆくんしれる人なりと見えたり、又主君しゆくんの恩の深き事なんじ汝なんじよりも能くしれり汝なんじ若もし知恩ちおんの望のぞみあらば深く諫め強いさいて奏そうせよ非道ひだうにも主命しだがに随したがはんと云う事・佞臣ないしんの至ふちゆうり不忠きわまの極きんりなり、殷いんの紂王しゆうわうは惡王あくわう・比干ひかんは忠臣まつりごとなり政事理まつりごとに違ちがいしを見て強しいて諫いさめしかば即比干そくひかんは胸を割さかる紂王しゆうわうは比干死ひかんして後・周の王に

打たれぬ、今の世までも比干は忠臣といはれ紂王は悪王といはる、夏の桀王を諫めし竜蓬は頭をきられぬ・されども桀王は悪王・竜蓬は忠臣とぞ云う主君を三度諫むるに用ゐずば山林に交れとこそ教へたれ何ぞ其の非を見ながら黙せんと云うや、古の賢人・世を遁れて山林に交りし先蹤を集めて聊か汝が愚耳に聞かしめん、殷の代の太公望は溪と云う谷に隠る、周の代の伯夷・叔齊は首陽山と云う山に籠る、秦の綺里季は商洛山に入り漢の嚴光は孤亭に居し、晋の介子綏は縣上山に隠れぬ、此等をば不忠と云うべきか愚かなり汝忠を存ぜば諫むべし孝を思はば言つべきなり。

先ず汝権教・権宗の人は多く此の宗の人は少し何ぞ多を捨て少に付くと云う事必ず多きが尊くして少きが卑きにあらず、賢善の人は希に愚悪の者は多し麒麟鸞鳳は禽獸の奇秀なり然れども是は甚だ少し牛羊・烏鴿は畜鳥の拙卑なりされども是は転多し、必ず多きが・たつとくして少きがいやく

ば麒麟きりんをすてて牛羊ぎゅうようをとり鸞鳳らんほうを閣さしおいて烏鴿うこをとるべきか、摩尼まに・金剛こんこうは金石れいいの靈異ことなり、此の宝は乏しく瓦礫がりやく・土石いたすらものは徒物たりやくの至り是は又巨多こたなり、汝なんじが言ことの如くならば玉などをば捨てて瓦礫がりやくを用ゆべきか・はかなし・はかなし、聖君まれは希まれにして千年に一たび出いで賢佐は五百年に一たび顕あらわる摩尼まには空しく名のみ聞く麟鳳きほう誰か実を見たるや世間出世せけんしゅつせ・善き者は乏しく悪き者は多き事・眼前がんぜんなり、然しかれば何ぞ強あながちに少きを・おろかにして多きを詮とするや土沙は多けれども米穀は希まれなり木皮は充滿じゅうまんすれども布絹は些少さしょうなり、汝只正理なんじただを以て前とすべし別して人の多きを以て本とすることなかれ。

爰ここに愚人席をさり袂たもとをかいつくりいて云く誠に聖教しょうきょうの理をきくに人身じんしんは得難えがたく天上てんじょうの絲筋いとすじの海底の針に貫けるよりも希まれに仏法は聞き難くして一眼うきぎの浮木に遇うよりも難がたし、今既に得難がたき人界に生をうけ値あい難がたき仏教ぶつぎょうを見聞けんもんしつ今生こんじょうを・もだしては又何れの世にか生死しやうじを離れ菩提ぼだいを証すべき、

夫れ一劫受生の骨は山よりも高けれども仏法の為にはいまだ一骨をもすてず

多生恩愛の涙は海よりも深けれども尚後世の為には一滴をも落さず、拙きが

中に拙く愚かなるが中に愚かなり設ひ命をすて身をやぶるとも生を軽くして

仏道に入り父母の菩提を資け愚身が獄縛をも免るべし能く能く教を示し給へ。

抑 法華經を信ずる其の行相如何・五種の行の中には先ず何れの行をか

修すべき丁寧に尊教を聞かん事を願う、聖人示して云く汝蘭室の友に交つ

て麻畝の性と成る誠に禿樹禿に非ず春に遇つて栄え華さく枯草枯るに非ず夏

に入つて鮮かに注ふ、若し先非を悔いて正理に入らば湛寂の潭に遊泳して

無為の宮に優遊せん事 疑なかるべし、抑 仏法を弘通し群生を利益せんに

は先ず教機時国教法流布の前後を弁ふべきものなり、所以は時に正像末あり

法に大小乗あり修行に摂折あり摂受の時・折伏を行ずるも非なり

折伏の時・摂受を行ずるも失なり、然るに今世は摂受の時か折伏の時か

先づ是を知るべし、^{これ}撰受^{せんじゆ}の行は此の国に法華一純に弘まりて邪法・邪師一人も
なしといはん、此の時は山林に交つて観法を修し五種・六種乃至・十種等を
行すべきなり、折伏の時はかくの如くならず、^{つやぐく}經教のおきて蘭菊に諸宗の
おぎろ譽れを擅にし邪正・肩を並べ大小先を争はん時は万事を闇いて謗法
を責むべし是れ折伏の修行なり、此の旨を知らずして撰折途に違はば得道
は思もよらず惡道に墮つべしと云う事・法華・涅槃に定め置き天台・妙樂の
解釈にも分明なり是れ仏法修行の大事なるべし、^{げしやく}譬ば文武兩道を以て天下
を治るに武を先とすべき時もあり文を旨とすべき時もあり、^{ふんみよう}天下無為にして
国土静かならん時は文を先とすべし東夷・南蛮・西戎・北狄・蜂起して野心
をさしはさまんには武を先とすべきなり、^{こくど}文武のよき事計りを心えて時をも
しらず万邦・安堵の思をなして世間無為ならん時甲冑をよろひ兵杖をもた
ん事も非なり、^{ばんぽう}又王敵起らん時戦場にて武具をば闇いて筆硯を提ん事も亦
^{あんど}
^{せけんむい}
^{かつちゆう}
^{さしお}
^{ひっけん}
^{ひっさげ}
^{また}

時に相そう応おうせず 撰しょう受じゆ・折しゃく伏ぶくの法ほう門もんも亦また是かくの如ごとし 正しょう法ほうのみ弘ひろまつて邪じゃ法ほう・
邪じゃ師し無なからん時は深しん谷こくにも入いり閑かん静じやうにも居こして読どく誦じゆ・書しよ写しゃをもし觀かん念ねん工くわん夫ふを
も凝こすべし、是これ天てん下がの静じやうなる時ひつ筆けん硯もちを用もちゆるが如ごとし 權ごん宗しゆう・謗ほう法ほう国こくにあらん
時は諸しよ事じを闇さしお 謗ほう法ほうを責せむべし 是これ合ごう戰せんの場ばうに兵へい 杖じやうを用もちゆるが如ごとし、然しかれ
ば章しやう 安あん大だい師し・涅槃ねはんの疏じよに釈しゃくして云いく「昔いは時じ平へいかにして法ひふ弘ひろまる 応まさに戒けいを
持じすべし 杖じやうを持もちすること勿なかれ 今いまは時じ嶮さかしくして法か弱じやくる 應まさに杖じやうを持もちすべし 戒けいを
持じすること勿なかれ 今いま昔こ俱くに嶮さかしくば俱ともに杖じやうを持もちすべし 今いま昔こ俱くに平へいかならば
應まさに俱ともに戒けいを持もちすべし、取しゆ捨じや宜ぎきを得いて一いつ向かうにす可べからずと此しの釈しゃくの意い分ぶん 明めい
なり、昔いは世せもすなをに人ひともたたくして邪じゃ法ほう邪じゃ義ぎ・無なかりき、されば威い儀ぎ
をただし穩おん便べんに行業ごうを積つんで杖じやうをもつて人ひとを責せめず邪じゃ法ほうをとがむる事こと無なかり
き、今いまの世せは濁じやく世せなり人ひとの情じやうもひがみゆがんで權ごん教きやう謗ほう法ほうのみ多おほければ正しょう法ほう
弘ひろまりがたし此この時ときは読どく誦じゆ・書しよ写しゃの修しゆ行ぎやうも觀かん念ねん・工くわん夫ふ・修しゆ練れんも無む用ようなり、

ただしゃくぶく

只折伏を行じて力あらば威勢を以て謗法をくだき又法門を以ても邪義を責め

よとなり、取捨其旨を得て一向に執する事なかれと書けり、今の世を見るに

しょうほう

ひろ

ひる 国か邪法の興盛する国か勸ふべし、

かんが

然るを浄土宗の法然

しょうほう

ねんぶつ

は念仏に対して法華経を捨閉閣抛とよみ善導は法華経を雑行と名け剩へ

ぜんどう

せんちゅうむいつ

あまつさ

千中無一とて千人信ずとも一人得道の者あるべからずと書けり、真言宗の

とくどう

しんこんしゅう

こうぼう

ほけきょう

けこん

だいになちきょう

弘法は法華経を華嚴にも劣り大日経には三重の劣と書き戲論の法と定めた

しょうかくぼう

ほけきょう

だいになちきょう

およ

り、正覚房は法華経は大日経のはきものとりにも及ばずと云ひ釈尊をば

だいにちにやらい

ぜんしゅう

ほけきょう

たんたる・つばき・月

をさす指・教綱なんと下す、小乗律等は法華経は邪教・天魔の所説と名け

しょうじゅう

ほけきょう

てんま

たり、此等豈謗法にあらずや責めても猶あまりあり禁めても亦たらず。

これらあにほうぼう

なほ

いまし

また

くにないわ

にほん

愚人云く日本六十余州・人替り法異りといへども・或は念仏者・或は

ある

ある

しんこんし

ある

ある

或は禪・或は律・誠に一人として謗法ならざる人はなし、然り

ほうぼう

しんこんし

真言師・或は禪・或は律・誠に一人として謗法ならざる人はなし、然り

と雖も人の上沙汰してなにかせん只我が心中に深く信受して人の誤りをば
余所の事にせんと思ふ、聖人示して云く汝言う所実にしかなり我も其の義
を存ぜし処に經文には・或は不惜身命とも・或は寧喪身命とも説く、何
故にかやうには説かるやと存ずるに只人をはばかりず經文のままに法理を
弘通せば謗法の者多からん世には必ず三類の敵人有つて命にも及ぶべしと見
えたり、其の仏法の違目を見ながら我もせめず国主にも訴へずば教へに
背いて仏弟子にはあらずと説かれたり、涅槃經第三に云く「若し善比丘あつ
て法を壞らん者を見て置いて呵責し駈遣し拳処せずんば当に知るべし是の人
は仏法の中の怨なり、若し能く駈遣し呵責し拳処せば是れ我が弟子眞の聲聞
なり」と、此の文の意は仏の正法を弘めん者・經教の義を悪く説かんと聞
き見ながら我もせめず我が身及ばずば国主に申し上げても是を対治せずば
仏法の中の敵なり、若し經文の如くに人をもはばかりず我もせめ国主にも

申さん人は仏弟子にして眞の僧なりと説かれて候、されば仏法中怨の責を
まぬか免れんとてかやうに諸人に悪まるれども命を釈尊と法華經に奉り慈悲を一切
しゅじよう衆生に与へて謗法を責むるを心えぬ人は口をすくめ眼を瞋らす、汝實に
ごしよう後世を恐れば身を輕しめ法を重んぜよ是を以て章安大師云く「寧ろ身命を
うしな喪ふとも教を匿さざれとは身は輕く法は重し身を死して法を弘めよ」と、此
の文の意は身命をば・ほろぼすとも正法をかくさざれ、其の故は身はかる
く法はおもし身をばころすとも法をば弘めよとなり、悲いかな生者必滅の習
なれば設ひ長寿を得たりとも終には無常をのがるべからず、今世は百年の
うちそと内外の程を思へば夢の中の夢なり、非想の八万歳末だ無常を免れず・利の一
千年も猶退没の風に破らる、況や人間・閻浮の習は露よりも・あやうく芭蕉
よりももろく泡沫よりもあだなり、水中に宿る月のあるかなきかの如く草葉
にをく露のをくれ・さきだつ身なり、若し此の道理を得ば後世を一大事とせ

よ歡喜かんき仏の末の世の覺德比丘・正法しょうぼうを弘ひろめしに無量むりようの破戒はかい此この行者ぎようじゃを怨あたみ
て責せめしかば有徳国王・正法しょうぼうを守る故ゆえに謗法ぼうぼうを責せめて終ついに命終みょうじゆうして阿あ・仏ぶつ
の国に生れて彼の仏の第一だいいちの弟子でしとなる、大乘だいじようを重おもんじて五百人の婆羅門ばらもんの
謗法ぼうぼうを誡いましめし仙予国王せんよこくおうは不退ふたいの位に登る、憑たのみしいかな正法しょうぼうの僧を重おもんじて
邪惡じゃあくの侶を誡いましむる人かくの如ごとくの徳あり、されば今の世に摂受しやうじゆを行ぜん人は
謗人ぼうじんと俱ともに惡道あくどうに墮おちん事うたがい疑うたがい無なし、南岳大師なんがくだいしの四安樂行あんらくぎように云いわく若もし菩薩ぼさつ
有あつて惡人を將護しょうごし治罰ちばつすること能あたわず乃至ないしそ其の人命終みょうじゆうして諸惡人しよあくにんと俱ともに
地獄じごくに墮だせん」と、此の文の意は若もし仏法ぶつぽうを行なずる人有あつて謗法ぼうぼうの惡人を治罰ちばつ
せずして觀念かんねん思惟しゆいを専もつぱらにして邪正權實じゃせいこんじつをも簡えらばず詐いつわつて慈悲じひの姿げんを現げんぜん
人は諸もろもろの惡人と俱ともに惡道あくどうに墮おつべしと云う文なり、今真言しんこん・念仏ねんぶつ・禪ぜん・律りつの
謗人ぼうじんをたださずいつはつて慈悲じひを現げんずる人・此の文の如ごとくなるべし。

愛あいに愚人ぐにん意を竊ひそかにし言ことを頭いにして云いわく誠まことに君きみを諫いさめて家まさを正ただしくする事こと

先賢せんけんの教へ本文に明白なり外典げてん此この如ごとし内典ないてん是に違ちがうべからず、悪を見て
いましめず謗ぼうを知つてせめずば經文きやうもんに背そむき祖師そしに違たがいせん其その禁いましめ殊ことに重おもし
今いまより信心しんじんを至いたすべし、但ただし此經しききやうを修行しゆぎやうし奉たてまつらん事かな叶かないがたし若もし其その最要
あらば証拠しやうこを聞きかんと思おもふ、聖人しやうにん示いして云いく今汝なんじの道意だういを見るに鄭重ていちやう・
慇懃いんぎんなり、所謂いわゆるしよぶつ 諦得道じやうたいとくどうの最要ただこは只是みは妙法蓮華經みやうほうれんげきやうの五字ごじなり、檀王だんおう
の宝位ひやうゐを退りき童女りやうにょが蛇身じやしんを改あらためしも只此ただの五字ごじの致いたす所そこなり、夫それ以おもんれば今
の経じゆじは受持じゆじの多少いちげをば一偈いつく・一句いっくと宣のべ修行しゆぎやうの時じこく刻いをば一念いちなん隨喜ずいきと定じやうめた
り、凡およそ八万法藏はちまんほうざうの広ひろきも一部八卷いちぶはつけんの多ただこきも只是ごじの五字ごじを説ごかんためなり、
靈山りやうぜんの雲じゆんの上じやうほう・鷲峯じゆふの霞じやうの中に釈尊しゃくそん要じやうを結むすび地涌付属じゆふぞくを得えることありしも
法体ほつたいは何事なにことぞ只此ただの要法やうほうに在てんり、天台てんだい・妙樂みやうらくの六千張ろくせんぢやうの疏しよ・玉たまを連つぬるも
道邃行滿どうずいの数軸しうじくの釈しやく・金かねを並ならぶるも併ひしながら此この義趣ぎしゆを出いでず、誠しやうじに生死しやうじ
を恐れ涅槃ねはんを欣ねがい信心しんじんを運かつて渴仰かつかうを至せんめつさば遷滅無常むじやうは昨日けふの夢ぼだい・菩提ぼだいの覺悟かくご

きょう
は今日のうつつなるべし、ただな只南無妙法蓮華經とだにも唱へ奉らば滅せぬ罪つみや
あるべき来らぬ福あや有るべき、しんじつ眞実なり甚深じんじんなり是これを信受しんじゆすべし。

くになたなころ

愚人ぐん掌てを合せ膝を折つていわ云く貴命肝に染み教訓意を動ぜり然りしかと雖もいえど

ことわり

上能兼下の理ことわりなれば広きは狭きを括り多は少を兼ね、然るしか処ところに五字は少く

なんくどくさいとう

文言は多し首題は狭く八軸は広し如何なんぞ功德くどく齊等さいとうならんや、聖人しやうにん云く汝愚なんじあろか

しゆみ

なり捨少取多の執・須弥しゆみよりも高く輕狭重広の情・溟海めいかいよりも深し、今の文

さき

の初後は必ず多きが尊く少きが卑いやしきにあらざる事・前に示すが如し、爰ここに

か

又小が大を兼ね、一が多まさに勝ると云う事これ之を談ぜん彼の尼拘類樹にくるじゆの実は芥子けし

・三分が一のせいなりされども五百輻の車を隠す徳あり是小が大を含めるに

によいほうじゆ

あらずや、又如意宝珠は一あれども万宝を雨ふらして欠かく處ところ之れ無し是れ又少が

か

多を兼ねたるにあらずや、世間せけんのことわざにも一は万が母といへり此等これらの道理どうり

しよせんじつそ

を知らずや、所詮実相の理の背契はいけいを論ぜよ強ちに多少あながを執しゆうする事なかれ、汝なんじ

いた
至つて愚かなり今一の譬を仮らん、夫れ妙法蓮華經とは一切衆生の仏性
なり仏性とは法性なり法性とは菩提なり、所謂釈迦・多宝・十方の諸仏
・上行・無辺行等・普賢・文殊・舍利弗・目連等、大梵天王・釈提桓因・
日月・明星・北斗・七星・二十八宿・無量の諸星・天衆・地類・竜神・
八部・人天・大会・閻魔法王・上は非想の雲の上・下は那落の炎の底まで
所有一切衆生の備うる所の仏性を妙法蓮華經とは名くるなり、されば一遍
此の首題を唱へ奉れば一切衆生の仏性が皆よばれて爰に集まる時・我が身
の法性の法報応の三身ともに・ひかれて顕れ出ずる是を成仏とは申すなり、
例せば籠の内にある鳥の鳴く時空を飛ぶ衆鳥の同時に集まる是を見て籠の
内の鳥も出でんとするが如し。

こゝに
爰に愚人云く首題の功德・妙法の義趣・今聞く所詳かなり但し此の旨趣
まさしく経文に是をのせたりや如何、聖人云く其の理詳かならん上は文を尋ぬ

るに及およばざるしかか然しかれども請しやうに随したがつて之これを示ほさん法華經第八陀羅尼品ほけきやうだらにほんに云いく
「汝等なんじ但よ能ほく法華の名を受持じゆじせん者を擁護おうえせん福量はかるべからず」此の文の意
は仏・鬼子母神・十羅刹女の法華經の行者きしもじんじゆうらせつによほけきやうぎやうじやを守らんと誓たまい給ほうを讃ほむるとし
て汝等なんじ・法華の首題ほつけを持つ人を守るべしと誓そふ、其の功德くどくは三世了達さんぜの仏の
智慧ちえも尚なお及およびがたしと説おかれたり、仏智の及およばぬ事何かあるべきなれども法華
の題名受持だいいじじゆじの功德くどくばかりは是これを知らずと宣のべべたり、法華一部ほつけの功德くどくは只妙法
等の五字ごじの内に籠こもれり、一部八卷・文文たごとに二十八品・生起たかはれども首
題ごじの五字は同等たとえなり、譬にほんば日本の二字の中に六十余州・島二つ入らぬ国やあ
るべき籠こもらぬ郡やあるべき、飛鳥とよべば空をかける者と知り走獸もつといへば
地をはしる者と心いうる一切名いっさいの大切なる事蓋けだし以もつて是かくの如ごとし、天台は名詮
自性じしやう・句詮差別さべつとも名者大綱たいこうとも判わずる此の謂いれなり、又名は物をめす徳あ
り物は名に応ほずる用あり法華題名ほつけだいいの功德くどくも亦また以かて此ごとくの如ごとし。

ぐにんいわ しょうにん

愚人云く聖人の言の如くば実に首題の功莫大なり但し知ると知らざるとの

ふどう

不同あり、我は弓箭に携り兵杖をむねとして未だ仏法の真味を知らず若し

しか

然れば得る所の功德何ぞ其れ深からんや、聖人云く円頓の教理は初後全く不

二にして

初位に後位の徳あり一行・一切行にして功德備わらざるは之れ無し

も

若し汝が言の如くば功德を知つて植えずんば上は等覺より下は名字に至るま

とくやく

得益更にあるべからず、今の経は唯仏与仏と談ずるが故なり、譬喩品に云く

「なんじしやりほつなお

汝舍利弗尚此の経に於ては信を以て入ることを得たり況や余の声聞をや」

文の心は大智・舍利弗も法華経には信を以て入る其の智分の力にはあらず

いわんやじよ

況や自余の声聞をやとなり、されば法華経に来て信ぜしかば永不成仏の名

を削りて

華光如来となり嬰兒に乳をふくむるに其の味をしらずといへども

自然に其の身を生長す、

医師が病者に薬を与うるに病者薬の根源をしらずと

いへども服すれば

任運と病愈ゆ若し薬の源をしらずと云つて医師の与ふる薬

を服せずば其の病愈ゆべしや薬を知るも知らざるも服すれば病の愈ゆる事
もつこ
以て是れ同じ、既に仏を良医と号し法を良薬に譬へ衆生を病人に譬ふされ
によらいちだい きようほうとうしわこう みようほう りようやく
ば如来一代の教法を擣 和合して妙法 一粒の良薬に丸ぜり豈知るも知らざ
るも服せん者・煩惱の病愈えざるべしや病者は薬をもしらず病をも弁へずと
わきまえ
いへども服すれば必ず愈ゆ、行者も亦然なり法理をもしらず煩惱をもしらず
ぎようじや またしか
といへども只信ずれば見思・塵沙・無明の三惑の病を同時に断じて実報・
ただ けんじ じんじや むみよう さんなく どうじ じつぽう
寂光の台にのぼり本有三身の膚を磨かん事 疑いあるべからず、されば
じゃうこう うてな ほんぬさんじん はだえ うたがい
でんぎようだいしいわ のうけ しよけとも りやつこうなく みようほう そくしんじよつぶつ
伝教大師云く「能化所化俱に歴劫無く妙法経の力即身成仏す」と法華経
ほけきよう
の法理を教へん師匠も又習はん弟子も久しからずして法華経の力をもつて
ししよう でし ほけきよう
俱に仏になるべしと云う文なり、天台大師も法華経に付いて玄義・文句・止観
てんだいだいし ほけきよう げんぎ もんく しかん
の三十卷の釈を造り給う、妙楽大師は又釈籤・疏記・輔行の三十卷の末文
つか たま みようらくだいし しやくせん じよき ふぎよう
をかさ ほんしゃく てんだい
を重ねて判釈す、天台六十卷とは是なり、玄義には名体宗用教の五重玄を
てんだい これ げんぎ こじゅうげん

こんりゅう 建立して妙法蓮華經の五字の機能を判釈す、五重玄を釈する中の宗の釈に
いわ 云く「綱維を提ぐるに目として動かざること無く衣の一角を牽くに縷として
来らざる無きが如し」と、意は此の妙法蓮華經を信仰し奉る一行に功德とし
て来らざる事なく善根として動かざることなし、譬ば網の目無量なれども一つ
たいこう の大綱を引くに動かざる目もなく衣の糸筋巨多なれども一角を取るに糸筋と
して来らざることなきが如しと云う義なり、さて文句には如是我聞より
さらにこ 作礼而去まで文文・句句に因縁・約教・本・迹・觀心の四種の釈を設けた
り、次に止觀には妙解の上に立てる所の觀不思議境の一念三千是れ本覺の立
行・本具の理心なり、今爰に委しくせず、悦ばしいかな生を五濁惡世に受く
といへども一乗の真文を見聞する事を得たり、
熙連恒沙の善根を致せる者・
此の經にあい奉つて信を取ると見えたり、
汝今一念隨喜の信を致す
かんがいそうおうかんのうどうこうたがい
函蓋相應感應道交疑い無し。

愚人頭ぐにんこうべを低たれ手を挙あげて云いわく我われ今いまよりは一実いちじつの経王じゆじを受持さんがいし三界さんがいの独尊どくそん
を本師ほんしとして今身こんじんよ自ぶつしんり仏身いたに至いたるまで此しんじんあえての信心たいてん敢たて退転た無ごぎやくけん、設たひ五逆ごぎやくの
雲厚うんこうくとも乞だいふ提婆達多だいたが成仏じやうぶつを続じゆうぎ十悪じゅうあくの波なみあらくとも願のぞくは王子覆講おうじ
の結縁けちえんに同おなじからん、聖人しやうにん云いく人の心こころは水の器けにしたがふが如ごとく物の性しやうは月
の波なみに動うごくに似にたり、故ゆえに汝当座なんじとうざは信しんずといふとも後日ごにちは必かならずず翻ひるがえりへさん
魔来まきり鬼来きるとも騷乱そうらんする事ことなかれ、夫それ天魔てんまは仏法ぶつぽうをにくむ外道げどうは内道ないどうを
きらふ、されば猪いのの金山きんざんを摺すり衆流しゅうりゆうの海うみに入り薪たきぎの火ひを盛さかんになし風の求羅ぐら
をますが如ごとくせば豈あに好き事ことにあらずや。

六七 如説修行抄 501P

夫それ以おもんみれば末法流布まつぽうるふの時とき・生なまを此この土どに受うけ此この経きやうを信しんぜん人ひとは如来にやらい
の在世ざいせより猶多怨嫉ゆたおんしつの難なん甚はなはだしかるべしと見みえて候まちなり、其そのの故ゆえは在ざい世せは能化のうけ
の主しゅは仏ぶつなり弟子でし又大菩薩阿羅漢ぼさつあらかんなり、人天にんてん・四衆ししゆう・八部はちぶ・人非人等にんびにんなりと

いへども調機調養して法華經を聞かしめ給ふ猶怨嫉多し、何に況んや末法今の時は教機時刻当来すといへども其の師を尋ねれば凡師なり、弟子又鬪諍堅固・白法隱没・三毒強盛の悪人等なり、故に善師をば遠離し惡師には親近す、其の上眞実の法華經の如説修行の行者の師弟檀那とならんには三類の敵人決定せり、されば此の經を聴聞し始めん日より思い定むべし況滅度後の大難の三類甚しかるべしと、然るに我が弟子等の中にも兼て聴聞せしかども大小の難来る時は今始めて驚き肝をけして信心を破りぬ、兼て申さざりけるか經文を先として猶多怨嫉・況滅度後・況滅度後と朝夕教へし事は是なり予が・或は所を・をわれ・或は疵を蒙り・・或は兩度の御勘氣を蒙りて遠國に流罪せらるるを見聞くとも今始めて驚くべきにあらざる物をや。

問うて云く如説修行の行者は現世安穩なるべし何が故ぞ三類の強敵盛んならんや、答えて云く釈尊は法華經の御為に今度九横の大難に値ひ給ふ、過去

の不輕菩薩は法華經の故に杖木瓦石を蒙り竺の道生は蘇山に流され法道三蔵
は面に火印をあてられ師子尊者は頭をはねられ天台大師は南三・北七にあだ
まれ伝教大師は六宗にくまれ給へり、此等の仏菩薩・大聖等は法華經の
行者として而も大難にあひ給へり、此れ等の人人を如説修行の人と云わず
んばいづくにか如説修行の人を尋ねん、然るに今の世は鬪諍堅固・白法
隠没なる上・惡国・惡王・惡臣・惡民のみ有りて正法を背きて邪法・邪師を
崇重すれば国土に惡鬼乱れ入りて三災・七難盛に起れり、かかる時刻に日蓮
仏勅を蒙りて此の土に生れけるこそ時の不祥なれ、法王の宣旨背きがたけれ
ば經文に任せて樞実二教のいくさを起し忍辱の鎧を着て妙教の剣を提げ一
部八卷の肝心・妙法五字の旗を指上て未顕真實の弓をはり正直捨權の箭を
はげて大白牛車に打乗つて權門をかつぱと破り・かしこへおしかけここへお
しよせ念仏・真言・禅・律等の八宗・十宗の敵人をせむるに・或はにげ・或

はひきしりぞき・或は生取られし者は我が弟子となる、・或はせめ返し・せめ
をとしすれどもかたきは多勢なり法王の一人は無勢なり今に至るまで軍やむ
事なし、法華折伏・破権門理の金言なれば終に権教権門の輩を一人もなく
せめをとして法王の家人となし天下万民諸乗一仏乗と成つて妙法独り
はんじよう
繁昌せん時、万民一同に南無妙法蓮華經と唱え奉らば吹く風枝をならさず
あめつちくれ
雨壤を砕かず、代は義農の世となりて今生には不祥の災難を払ひ長生の術
を得、人法共に不老不死の理・顕れん時を各各御覽ぜよ現世安穩の証文
うたがい
疑い有る可からざる者なり。

問うて云く如説修行の行者と申さんは何様に信ずるを申し候べきや、答
いて云く当世・日本国中の諸人・一同に如説修行の人と申し候は諸乗
いちぶつじよう
一仏乗と開会しぬれば何れの法も皆法華經にして勝劣・浅深ある事なし、
ねんぶつ
念仏を申すも真言を持つも禅を修行するも総じて一切の諸經並びに仏・

菩薩ぼさつの御名みなを持ちて唱なるも皆みな法華經ほけきょうなりと信しんずるが如に説よ修行しゆぎやうの人とは云いわれ

候たなり等云云、予いが云いく然しからず所詮しよせん仏法ぶつぽうを修行しゆぎやうせんには人の言いを用もちう可べからず

只ただ仰あいで仏の金言きんげんをまほるべきなり我等われらが本師ほんし・釈迦しやか如来にょらいは初しよ成道じやうどうの始はより

法華ほっけを説いかんと思食おほしめしかども衆生しゆじやうの機根きこん未熟みじやくなりしかば先こず權教ごんきやうたる方便ほうべん

を四十余年よんじゅうよねんが間説ときて後に真実しんじつたる法華經ほけきやうを説いかせ給たまいしなり、此この經の序分じよぶん

・無量義經むりやうぎきやうにして權實ごんじつのはうじを指さて方便真実ほうべんしんじつを分け給たまへり、所謂い以方便力ほうべんりき

・四十余年よんじゅうよねん・未顯真実みけんしんじつ是なり、大莊嚴等そうごんの八万はちまんの大士だいし・施權かいこん・開權かいこん・廢權等はいこんとう

のいはれを心得こころえ分け給たまいて領解りやうげして言いく法華經ほけきやう已前いぜんの歷劫りやくこつ修行等しゆぎやうの諸經しよきやうは

終不得成しゆふとくじやう・無上菩提むじやうぼだいと申しきり給たまひぬ、然しかして後しやうじゆう・正宗ほっけの法華いたに至いたつて世尊せそん

・法久後ほうくご・要當説真実やうとうせつしんじつと説たまき給たまいしを始めとして無二やくむ亦無三ほつべん除ちよ仏方便説ふつべん

正しやう捨方便しやうじふべん乃至不受余經ないしふじゆよきやう一偈いちげと禁いましめ給たまへり、是いより已後いごは唯ゆい有一いち仏乘ぶつじやうの

妙法みやうほうのみ一切衆生いっさいしゆじやうを仏になす大法だいほうにて法華經ほけきやうより外ほかの諸經しよきやうは一分いちぶんの得益とくやくも

・あるまじきに末法の今の学者何れも如来の説教なれば皆得道あるべしと思
いて・或は真言・或は念仏・或は禅宗・三論・法相・俱舍・成実・律等の
諸宗諸經を取取に信ずるなり、是くの如き人をば若人失信毀謗・此經即斷
一切世間・仏種・乃至・其人命終・入阿鼻獄と定め給へり、此等のをきて
の明鏡を本として一分もたがえず唯一乘法と信ずるを如説修行の人とは
仏は定めさせ給へり。

難じて云く左様に方便権教たる諸經諸仏を信ずるを法華經と云はばこそ、
只一經に限りて經文の如く五種の修行をこらし安樂行品の如く修行せん
は如説修行の者とは云われ候まじきか如何、答えて云く凡仏法を修行せん
者は撰折二門を知る可きなり一切の經論此の二を出でざるなり、されば国
中の諸学者等・仏法をあらあら學すと云へども時刻相應の道をしらず四節・
四季・取取に替れり、夏は熱く冬はつめたく春は花さき秋は菓なる春種子を

下して秋菓このみを取るべし秋種子しゆしを下して春菓このみを取らんに豈あに取らる可べけんや、
極寒の時は厚き衣は用なり極熱の夏はなにかせん、涼風は夏の用なり冬はな
にかせん、仏法ぶつぽうも亦復またまた是かくの如ごとし小乗しょうじょうの流布るふして得益とくやくあるべき時もあり、
権大乘こんだいじょうの流布るふして得益とくやくあるべき時もあり、実教じつきょうの流布るふして仏果ぶつかを得べき時
もあり、然しかるに正像しょうざう二千年は小乗しょうじょう・権大乘こんだいじょうの流布るふの時なり、末法まつぽうの始め
の五百年には純円一実じゆんえんいちじつの法華經ほけきょうのみ広宣流布こうせんるふの時なり、此の時このときは鬪争堅固
・白法びやくほう隱没の時と定めて権実こんじつ雜乱ざらんの砌みぎりなり、敵有ある時は刀杖弓とうじょうきうせん箭せんを持つ
可べし敵無いき時は弓きゆう箭兵つせんひやうじょう杖何じやういかにかせん、今の時は権教こんきやう即実教じつきやうの敵と成るな
り、一乗流布いちじょうるふの時は権教こんきやう有つて敵と成りてまぎらはしくば実教じつきやうより之これを
責せむ可べし、是これを撰折しやうしやく二門にもんの中には法華經ほけきやうの折伏しやくぶくとは申もうすなり、天台てんだい云いく
「法華折伏ほつしやくぶく・破権門理はこんもんり」とまことに故あるかな、然しかるに撰受しやうじゆたる四安樂あんらくの
修行しゆぎやうを今の時行しゆしずるならば冬種子しゆしを下して春菓このみを求める者にあらずや、鶏とりの

曉に鳴くは用なり宵に鳴くは物怪なり、よい もつけ 権実雜乱の時・法華經の御敵を責め
ずして山林に閉じ籠りさんりん こも 摂受を修行せんは豈法華經修行の時を失う物怪にあ
らずや、されば末法今の時・法華經の折伏の修行をば誰か經文の如く行じ
たまたま 給へしぞ、誰人にも坐せ諸經は無得道墮地獄の根源法華經独り成仏の法
なりと音も惜まずよばはり給いて諸宗の人法・共に折伏して御覽ぜよ三類
いっぺき の強敵来らん事疑い無し。

我等が本師・釈迦如来は在世八年の間折伏し給ひ天台大師は三十余年
でんぎようだいし 伝教大師は二十余年今日蓮は二十余年の間・権理を破す其の間の大難数を知
らず、仏の九横の難に及ぶか及ばざるは知らず、恐らくは天台・伝教も法華經
の故に日蓮が如く大難に値い給いし事なし、彼は只惡口怨嫉計りなり、是は
両度の御勘氣遠国に流罪せられ竜口の頸の座頭の疵等其の外惡口せられ弟子
等を流罪せられ籠に入れられ檀那の所領を取られ御内を出だされし、是等の

だいなん りゆうじゆ てんだい でんぎよう いかで およ たま
大難には竜樹・天台・伝教も争か及び給うべき、されば如説修行の法華經
ぎようじゃ さんるい かくてき
の行者には三類の強敵打ち定んで有る可しと知り給へ、されば釈尊御入滅
の後二千余年が間に如説修行の行者は釈尊・天台・伝教の三人はさてを
き候ぬ、末法に入つては日蓮並びに弟子・檀那等是なり、我等を如説修行の
者といはずば釈尊・天台・伝教等の三人も如説修行の人なるべからず、
だいば くぎやり ぜんしやう こうぼう じかく ちしやう ぜんどう ほうねん りようかんぼう すなわ
提婆・瞿伽利・善星・弘法・慈覚・智証・善導・法然・良觀房等は即ち
ほけきやう ぎようじゃ
法華經の行者と云はれ、釈尊・天台・伝教・日蓮並びに弟子・檀那は念仏
しんこん ぎようじゃ
・真言・禅・律等の行者なるべし、法華經は方便權教と云はれ念仏等の
じよきやう かえ ほけきやう
諸經は還つて法華經となるべきが、東は西となり西は東となるとも大地は持
つ所の草木共に飛び上りて天となり天の日月・星宿は共に落ち下りて地とな
るためしはありとも・いかでか此の理あるべき。
ことわり

あわれ
哀なるかな今・日本国の万民日蓮並びに弟子・檀那等が三類の強敵に責め
にほんこく ばんみんにちれんなら でし だんな さんるい かくてき

られ大苦に値^あうを見て悦^{よろこ}んで笑ふとも昨日は人の上・今日は身の上なれば
にちれんなら^{にちれんなら}に弟子・檀那共^{だんな}に霜露^{そうろ}の命の日影を待つ計^{はか}りぞかし、只今^{ただ}・仏果^{ぶつが}に
かな^{かな}じゃつこう^{じゃつこう}ほんど^{ほんど}叶^{かな}いて寂光の本土に居住して自受法樂せん時、汝等^{なんじ}が阿鼻大城の底に沈み
て大苦に値^あわん時・我等^{われら}何計無慚と思はんずらん、汝等^{なんじ}何計うらやましく
思はんずらん、一期^{いちご}を過^すぐる事程も無ければ・いかに強敵重なるともゆめゆ
め退する心なけれ恐るる心なけれ、縦^{たと}ひ頸をば鋸^{のこぎり}にて引き切り・どうをば
ひしほこを以^{もつ}てつつき足にはほだしを打^{うち}つて・きりを以^{もつ}てもむとも、命のか
よはんほどは南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經と唱えて唱へ死に死するなら
ば釈迦^{しゃか}・多宝^{たほう}・十方^{じゅうぽう}の諸仏靈山会上^{しよぶつりようぜん}にして御契約なれば須臾^{しゆゆ}の程に飛び来
りて手をと^かり肩に引懸^{りようぜん}けて靈山へ・はしり給^{たま}はば二聖・二天十羅刹女は受持^{じゆじ}
の者を擁護^{おうご}し諸天善神^{しよてんぜんじん}は天蓋^{てんがい}を指し幡^{わね}を上げて我等^{われら}を守護^{しゆご}して慥^{たしか}かに寂光
の宝刹^{ほうせつ}へ送り給^{たま}うべきなり、あらうれしや・あらうれしや。

ぶんえい
文永十年癸酉五月日 日蓮在御判 にちれん

人々御中へ おんちゅう
此の書御身を離さず常に御覽有る可く候 お

六八 顕仏未来記 けんぶつみらいき しゃもん にちれん
沙門 日蓮 之を勸う これ かんが 505P

法華經の第七に云く、我が滅度の後・後の五百歳の中に閻浮提に広宣流布 ほけきょう

して断絶せしむること無けん」等云云、予一たびは歎いて云く仏滅後既に二 だんぜつ

千二百二十余年を隔つ何なる罪業に依つて仏の在世に生れず正法の四依像法 へだ いか さいごう よ

の中の天台・伝教等にも値わざるやと、亦一たびは喜んで云く何なる幸あつ てんだい でんぎょう

て後・五百歳に生れて此の真文を拝見することぞや、在世も無益なり前四味 さいせ むやく ぜんしみ

の人は未だ法華經を聞かず正像も又由し無し南三・北七並びに華嚴・真言等 いま ほけきょう しょうざう

の学者は法華經を信ぜず、天台大師云く「後の五百歳遠く妙道に沾おわん」 がくしゃ ほけきょう てんだいだいしいわ このごひやくさい みようどう うる

等云云広宣流布の時を指すか、伝教大師云く「正像稍過ぎ已つて末法太だ こうせんる ふ でんぎょうだいしいわ しょうぞうややす おわ まっぼうはなは

近きに有り」等云云末法の始を願樂するの言なり、時代を以て果報を論ずれ まっほう かんぎょう がんぎょう じだい もっ かほう

ば竜樹・天親に超過し天台・伝教にも勝るなり。

問うて云く後・五百歳は汝一人に限らず何ぞ殊に之を喜悦せしむるや、答

えて云く法華經の第四に云く「如来の現在にすら猶怨嫉多し況や滅度の後を

や」文、天台大師云く「何に況や未来をや理化し難きに在り」文、妙樂大師云く

「理在難化とは此の理を明すことは意・衆生の化し難きを知らしむるに在

り」文、智度法師云く「俗に良藥口に苦しと言うが如く此の經は五乗の異執

を廢して一極の玄宗を立つ故に凡を斥ぞけ聖を呵し大を排し小を破る乃至

此くの如きの徒悉く留難を為す」等云云、伝教大師云く「代を語れば則ち

像の終り末の始・地を尋れば唐の東・羯の西・人を原れば則ち五濁の生・

鬪争の時なり、經に云く猶多怨嫉・況滅度後と此の言良に以有るなり」等云

云、此の伝教大師の筆跡は其の時に當るに似たれども意は當時を指すなり

正像稍過ぎ已つて末法太だ近きに有りの釈は心有るかな、經に云く「惡魔・

魔民・諸天竜・夜叉・鳩槃荼等其の便りを得ん」云云、言う所の等とは此の經に又云わく「若は夜叉・若は羅刹・若は餓鬼・若は富單那・若は吉遮・若は毘陀羅・若は馱・若は烏摩勒伽・若は阿跋摩羅・若は夜叉吉遮・若は人吉遮等云云、此の文の如きは先生に四味三教・乃至外道人天等の法を持得して今生に惡魔・諸天・諸人等の身を受けたる者が円実の行者を見聞して留難を至すべき由を説くなり。

疑つて云く正像の二時を末法に相對するに時と機と共に正像は殊に勝るなり何ぞ其の時機を捨てて偏に當時を指すや、答えて云く仏意測り難し予未だ之を得ず試みに一義を案じ小乘經を以て之を勘うるに正法千年は教行証の三つ具さに之を備う像法千年には教行のみ有つて証無し末法には教のみ有つて行証無し等云云、法華經を以て之を探るに正法千年に三事を具するは在世に於て法華經に結縁する者か、其の後正法に生れて小乘の

きようぎよう 修行を以て縁と為し 小乗の証を得るなり、 像法に於ては在世の結縁微薄
ゆえ 小乗に於て証すること無く此の人権大乘を以て縁と為して十方の
じようど 浄土に生ず、 末法に於ては大小の益共に之無し、 小乗には教のみ有つて
ぎようしう 行証無し大乘には修行のみ有つて冥顕の証之無し、 其の上正像の時の
しよりゆう 所立の権小の二宗漸漸末法に入て執心 弥 強盛にして小を以て大を打ち
もつ 権を以て実を破り国土に大体謗法の者充滿するなり、 仏教に依つて惡道に
だ 墮する者は大地微塵よりも多く正法を行じて仏道を得る者は爪上の土より
も少きなり、 此の時に當つて諸天善神其の国を捨離し但邪天・邪鬼等有つて
おうしん 王臣・比丘・比丘尼等の身心に入住 し法華經の行者を罵詈毀辱せしむべき
しかり 時なり、爾りと雖も仏の滅後に於て四味三教等の邪執を捨て実大乘の法華經
しよてんぜんじんなら に帰せば諸天善神並びに地涌千界等の菩薩・法華の行者を守護せん此の人は
しゆこ 守護の力を得て本門の本尊・妙法蓮華經の五字を以て閻浮堤に広宣流布せし

めんか、例せば威音王仏の像法の時・不輕菩薩・我深敬等の二十四字を以て
彼の土に広宣流布し一国の杖木等の大難を招きしが如し、彼の二十四字と此
の五字と其の語殊なりと雖も其の意是れ同じ彼の像法の末と是の末法の初と
全く同じ彼の不輕菩薩は初隨喜の人・日蓮は名字の凡夫なり。

疑つて云く何を以て之を知る汝を末法の初の法華經の行者なりと為す

と云うことを、答えて云く法華經に云く「況んや滅度の後をや」又云く

「諸の無智の人有つて惡口罵詈等し及び刀杖を加うる者あらん」又云く

「数数擯出せられん」又云く「一切世間怨多くして信じ難し」又云く「杖木瓦石

をもつて之を打擲す」又云く「惡魔・魔民・諸天竜・夜叉・鳩槃荼等其の

便りを得ん」等云云、此の明鏡に付いて仏語を信ぜしめんが為に、日本國中

の王臣四衆の面目に引き向えたるに・予よりの外には一人も之無し、時を論

ずれば末法の初め一定なり、然る間若し日蓮無くんば仏語は虚妄と成らん、難

じて云く汝は大慢の法師にして大天に過ぎ四禪比丘にも超えたり如何、答え

て云く汝日蓮を蔑如するの重罪・又提婆達多に過ぎ無垢論師にも超えたり、

我が言は大慢に似たれども仏記を扶け如来の実語を顕さんが為なり、然りと

雖も日本国中に日蓮を除いては誰人を取り出して法華經の行者と為さん汝

日蓮を謗らんとして仏記を虚妄にす豈大悪人に非ずや。

疑つて云く如来の未来記汝に相当れり、但し五天竺並びに漢土等にも

法華經の行者之有るか如何、答えて云く四天下の中に全く二の日無し四海の

内豈両主有らんや、疑つて云く何を以て汝之を知る、答えて云く月は西よ

り出でて東を照し日は東より出でて西を照す仏法も又以て是くの如し正像に

は西より東に向い末法には東より西に往く、妙樂大師の云く「豈中国に法

を失いて之を四維に求むるに非ずや」等云云、天竺に仏法無き証文なり漢土

に於て高宗皇帝の時北狄東京を領して今に一百五十余年・仏法王法共に尽き

了んぬ、漢土の大蔵の中にしょうじょうきよう小乗經いっこうこは一向之れ無く大乗經だいじょうきようは多分たぶん之を失す、
日本より寂にほん照等じゃくしょう少少之を渡す然りと雖もいえど傳持でんじの人無ればなほほくせき猶木石の衣鉢いはつを
帶持たいじせるが如し、故に遵式ゆえ じゆんしきの云く、「始西より伝なほう猶月の生ずるが如しこと今復東
より返る猶日の昇るが如し」等云云、此等の釈これらの如くんば天竺漢土てんじくかんどに於ておい仏法ぶつぽう
を失せること勿論なり、問うて云く月氏がつし・漢土かんどに於ておい仏法無きことは之を知
れり、東西北の三洲に仏法無き事は何を以て之を知る、答えて云く法華經いわ ほけきようの
第八に云く「如来の滅後に於て閻浮提えんぶだいの内に広く流布せしめて断絶せざらし
めん」等云云、内の字は三洲を嫌きらう文なり、問うて曰く仏記ぶつ き既に此くことの如し汝
が未来記如何、答えて曰く仏記い わ ぶつ きに順じて之を勘かんうるに既に後・五百歳の始に
相当あいあたれりぶつぽう仏法必ず東土とうどの日本にほんより出づべきなり、其の前相必ず正像しょうざうに超過ちようかせ
る天変地天之れ有るか、所謂い わ ゆる仏生の時・転法輪の時・入涅槃の時・吉瑞凶瑞きようずい
共に前後に絶えたる大瑞だいずいなり、仏は此れ聖人しょうにんの本なり經經きようきようの文を見るに仏

の御誕生の時は五色の光氣四方に遍くして夜も昼の如し仏御入滅の時には十
二の白虹・南北に亘り大日輪光り無くして闇夜の如くなりし、其の後正像二
千年の間・内外の聖人・生滅有れども此の大瑞には如かず、而るに去ぬる
正嘉年中

より今年に至るまで・或は大地震・或は大天変・宛かも仏陀の生滅の時
の如し、当に知るべし仏の如き聖人生れたまわんか、大虚に亘つて大慧星
出づ誰の王臣を以て之に対せん、当瑞大地を傾動して三たび振裂す何れの聖賢
を以て之に課せん、当に知るべし通途世間の吉凶の大瑞には非ざるべし惟れ
偏に此の大法興廢の大瑞なり、天台云く雨の猛きを見て竜の大なるを知り華
の盛なるを見て池の深きを知る」等云云、妙樂の云く「智人は起を知り蛇は
自ら蛇を識る」等云云、日蓮此の道理を存して既に二十一年なり、日来の災
・月来の難・此の両三年の間の事既に死罪に及ばんとす今年・今月万が一も

脱がたがれ難しんき身命みんなり、世うたの人疑がいい有あらば委細いさいの事は弟子でしに之これを問え、幸な
るかな一生いっしやうの内に無始むしの謗法ほうほうを消滅しょうめつせんことを悦よろこばしいかな未だ見聞けんもんせざる
教きやう主しゆ釈尊しやくそんに侍つかえ奉たてまつらんことよ、願こくしゆくは我われを損こくしゆずる国主こくしゆ等をば最初さいしよに之これを導みちびか
ん、我われを扶たすくる弟子でし等をば釈尊しやくそんに之これを申もうさん、我われを生ふめる父母ふぼ等らには未だ死
せざる已前いぜんに此だいぜんの大善だいぜんを進ためん、但ただし今・夢この如ごとく宝塔品ほうとうぼんの心こころを得えたり、此
の経いに云いく、若もし須弥しゆみを接とつて他方たほうの無数むすうの仏土ぶつちに擲なげ置おかんも亦また未だ為難かたし
とせず乃至ないし若もし仏めつこの滅後めつごに惡世あくせの中に於おいて能よく此この経きやうを説しやうかん是これ則すなち為
難かたし」等云云、伝でん教大師きやうだいし云いく、「浅やきは易やすく深かたきは難かたしとは釈迦しやかの所判しよはんなり浅
きを去ほつつて深しんきに就つくは丈夫じやうぶの心こころなり、天台大師てんだいは釈迦しやかに信順しんじゆんし法華宗ほつけしゆを助
けて震旦しんたんに敷揚ふようし叡山えいざんの一家いっけは天台てんだいに相承そうじやうし法華宗ほつけしゆを助ほつけて日本にほんに弘通くわうつうす」
等云云、安州にちれんの日蓮にちれんは恐おそくは三師さんしに相承そうじやうし法華宗ほつけしゆを助まつて末法まつぽうに流通りつづす三に
一を加えて三国四師さんこくししと号なす、南無妙法蓮華經なむみようほうれんげきやう・南無妙法蓮華經なむみようほうれんげきやう。

ぶんえい
文永十年太歳癸酉後・五月十一日 桑門日蓮之を記す
にちれんこれ

六九 当体義抄 日蓮之を勘う 510P
とうたいぎしょう にちれんこれ かんが

問う妙法蓮華經とは其の体何物ぞや、答う十界の依正即ち妙法蓮華經の
みょうほうれんげきょう そ なにもの じゅつかい えしやうすなわ みょうほうれんげきょう

当体なり、問う若爾れば我等が如き一切衆生も妙法の全体なりと云わる可き
とうたい しか われら こと いっさいしゅじょう みょうほう ぜんたい

か、答う勿論なり經に云く「所謂諸法乃至本末究竟等」云云、妙樂大師釈し
もちろん いわ 所謂諸法乃至本末究竟等 云云、 みょうらくだいししゃく

て云く「實相は必ず諸法・諸法は必ず十如・十如は必ず十界・十界は必ず
いわ じっそう しょうぼう しょうぼう じゅつかい じゅつかい

身土」と云云、天台云く「十如十界三千の諸法は今經の正体なるのみ」云
しんど てんだいいわ じゅつかいさんぜん しょうぼう こんきやう

云、南岳大師云く「云何なるを名けて妙法蓮華經と為すや答う妙とは衆生
なんぐくだいしいわ いか みょうほうれんげきやう な しゅじやう

妙なるが故に法とは即ち是れ衆生法なるが故に」云云、又天台釈して云く
ゆえ すなわ 此 しゅじやう ゆえ てんだいしゃく いわ

「衆生法妙」と云云。
しゅじやう

問う一切衆生の当体即妙法の全体ならば地獄乃至九界の業因・業果も皆
いっさいしゅじやう とうたいそくみょうほう ぜんたい じごくないし じやういん じやうか みな

是れ妙法の体なるや、答う法性の妙理に染淨の二法有り染法は熏じて迷
こ みょうほう ほっしやう みやうり せんじやう くん まよい

と成り淨法は熏くんじて悟と成る悟は即ち仏界ぶつがいなり迷は即ち衆生しゆじやうなり、此の迷悟めいご
の二法二なりと雖も然も法性真如いえどしか ほつしやうしんによの一理なり、譬たとえば水精すいしやうの玉の日輪にちりんに向
えば火を取り月輪に向えば水を取る玉の体一なれども縁に隨そて其の功同じか
らざるが如ごとし、真如しんによの妙理みやうりも亦復是くまたまたかくのごとの如ごとし一妙真如しんによの理なりと雖も惡縁いえどあくえんに
遇まよえば迷まいと成り善縁ぜんえんに遇まよえば悟と成る悟は即ち法性すなわ ほつしやうなり迷は即ち無明すなわ むみやうなり、
譬たとえば人夢ひとゆめに種種しゆじゆの善惡ぜんあくの業を見夢さ覺めて後に之を思これえば我が一心いっしんに見る所
の夢なるが如ごとし、一心いっしんは法性真如ほつしやうしんによの一理なり夢の善惡ぜんあくは迷悟めいごの無明法性むみやうほつしやうな
り、是くかくのごとの如ごとく意得れば惡迷あくめいの無明むみやうを捨て善悟ぜんごの法性ほつしやうを本なと為なす可べきなり、
大円覺えんかく・修多羅しゆたら・了義經りやうぎきやうに云く一切諸いっさいもろもろしゆじやうの衆生むしの無始むみやうの幻無明みなもろもろにやらいは皆諸みなもろもろにやらいの如來ほつしやう
の円覺えんかくの心よ従こり建立こんりやうす「云云、天台大師てんだいだいしの止觀しかんに云く、無明むみやう癡惑ちかく本こ是れ法性ほつしやう
なり癡迷ちめいを以もつての故ゆえに法性ほつしやう變なじて無明むみやうと作なる」云云、妙樂大師みやうらくだいしの釈いに云く
「理性りしやう體無むし全むみやうく無明むみやうに依よる無明體無むみやうし全むみやうく法性ほつしやうに依よる」云云、無明むみやうは所斷むみやう

の迷・法性は所証の理なり何ぞ体一なりと云うやと云える不審をば此等の
文義を以て意得可きなり、大論九十五の夢の譬・天台一家の玉の譬・誠に
面白く思ふなり、正く無明法性其の体一なりと云う証拠は法華經に云く、是の
法は法位に住して世間の相常住なりと云云、大論に云く、「明と無明と異無く
別無し是くの如く知るをば是を中道と名く」と云云、但真如の妙理に染淨の
二法有りと云う事証文之れ多しと雖も華嚴經に云く、「心仏及衆生是三無
差別」の文と法華經の諸法實相の文とは過ぐ可からざるなり南岳大師の云く
「心体に染淨の二法を具足して而も異相無く一味平等なり」と云云、又明鏡
の譬・眞実に一一なり委くは大乗止觀の釈の如し又能き釈には籤の六に
云く、「三千理に在れば同じく無明と名け三千果成すれば咸く常樂と稱す三千
改むること無ければ無明即明・三千並に常なれば俱体俱用なり」と文、此の釈
分明なり。

問う一切衆生・皆悉く妙法蓮華經の当体ならば我等が如き愚癡闇鈍の凡夫も即ち妙法の当体なりや、答う当世の諸人之れ多しと雖も二人を出でず謂ゆる權教の人実教の人なり而も權教方便の念仏等を信ずる人は妙法蓮華の当体と云わる可からず実教の法華經を信ずる人は即ち当体の蓮華・真如の妙体・是なり涅槃經に云く「一切衆生大乘を信ずる故に大乘の衆生と名く」文、南岳大師の四安樂行に云く「大強精進經に云く衆生と如来と同共一法身にして清淨妙無比なるを妙法華經と称す」文、又云く「法華經を修行するは此の一心一學に衆果普く備わる一時に具足して次第入に非ず亦蓮華の一華に衆果を一時に具足するが如し是を一乗の衆生の義と名く」文、又云く「二乗・声聞及び鈍根の菩薩は方便道の中の次第修學なり利根の菩薩は正直に方便を捨て次第行を修せず若し法華三昧を証すれば衆果悉く具足す是を一乗の衆生と名く」文、南岳の釈の意は次第行の三字をば当世の学者

は別教なりと料簡す、然るに此の釈の意は法華の因果具足の道に對して方便
道を次第行と云う故に爾前の円・爾前の諸大乘經並びに頓漸大小の諸經
なり証拠は無量義經に云く「次に方等十二部經・摩訶般若・華嚴海空を説い
て菩薩の歴劫修行を宣説す」文、利根の菩薩は正直に方便を捨てて次第行
を修せず若し法華經を証する時は衆果悉く具足す是を一乘の衆生と名くる
なり此等の文の意を案ずるに三乘・五乘・七方便・九法界・四味三教・一切
の凡聖等をば大乘の衆生妙法蓮華の当体とは名く可からざるなり、設い仏
なりと雖も權教の仏をば仏界の名言を付く可からず權教の三身は未だ無常
を免れざる故に何に況や其の余の界界の名言をや、故に正像二千年の國王
・大臣よりも末法の非人は尊貴なりと釈するも此の意なり、南岳釈して云く
「一切衆生法身の蔵を具足して仏と一にして異り有ること無し」、是の故に
法華經に云く「父母・所生・清淨・常眼・耳・鼻・舌・身・意亦復如是」

文、又云く、問うて云く、仏何れの經の中に眼等の諸根を説いて名けて如来と爲
や、答えて云く、大強精進經の中に衆生と如来と同じく共に一法身にして
清淨妙無比なるを妙法蓮華經と稱す。文、他經に有りと雖も下文顯れ已れ
ば通じて引用することを得るなり、大強精進經の同共の二字に習い相伝す
るなり、法華經に同共して信ずる者は、妙經の体なり、不同共の念仏者等は既に
仏性法身如来に背くが故に、妙經の体に非ざるなり、所詮妙法蓮華の当体と
は法華經を信ずる日蓮が弟子・檀那等の父母所生の肉身是なり、正直に方便
を捨て但法華經を信じ南無妙法蓮華經と唱うる人は煩惱・業・苦の三道・
法身・般若・解脱の三徳と轉じて三觀・三諦即一心に顯われ其の人の所住の
處は常寂光土なり、能居・所居・身土・色心・俱体俱用・無作三身の本門
寿量の当体蓮華の仏とは日蓮が弟子・檀那等の中の事なり、是れ即ち法華の
当体自在神力の顯わす所の功能なり、敢て之を疑う可からず、之を疑う可か

かくのこと
是くの如く解する者は誰とか諍うことを為さんや」云云、此の釈の意は至理

は名無し聖人・理を觀じて万物に名を付くる時・因果俱時・不思議の一法

これ有り之を名けて妙法蓮華と為す此の妙法蓮華の一法に十界三千の諸法を

具足して闕減無し之を修行する者は仏因・仏果同時に之を得るなり、聖人

・此の法を師と為して修行覺道し給えば妙因・妙果・俱時に感得し給うが

故に妙覺果滿の如來と成り給いしなり、故に伝教大師云く「一心の妙法蓮華

とは因華・果台・俱時に增長す三周各各当体・譬喻有り、總じて一經に皆

当体・譬喻あり別して七譬・三平等・十無上の法門有りて皆当体蓮華有るな

り、此の理を詮ずる教を名けて妙法蓮華經と為す」云云、妙樂大師の云く

「須く七譬を以て各蓮華權実の義に対すべし。何者蓮華は只是れ為実施權・

開權顯実七譬皆然なり」文、又劫初に華草有り聖人・理を見て号して蓮華と

名く此の華草・因果俱時なること妙法蓮華に似たり故に此の華草同じく蓮華

と名くるなり水中に生ずる赤蓮華・白蓮華等の蓮華是なり、譬喩の蓮華とは此の華草の蓮華なり此の華草を以て難解の妙法蓮華を顕す天台大師の妙法は解し難し譬を仮りて顕れ易しと釈するは是の意なり。

問う劫初より已来何人か当体の蓮華を証得せしや、答う釈尊・五百塵点劫の当初此の妙法の当体蓮華を証得して世世番番に成道を唱え能証・所証の本理を顕し給えり、今日又・中天竺・摩訶陀国に出世して此の蓮華を顕わさんと欲すに機無く時無し故に一法の蓮華に於て三の華草を分別し三乗の権法を施し擬宣誘引せしこと四十余年なり、此の間は衆生の根性万差なれば種種の華草を施し設けて終に妙法蓮華を施したまわざる故に、無量義經に云く「我先に道場菩提樹下乃至四十余年未だ真実を顕さず」文、法華經に至つて四味三教の方便の権教・小乘・種種の華草を捨てて唯一の妙法蓮華を説き三の華草を開して一の妙法蓮華を顕す時、四味三教の権人に初住の蓮華

を授けしより始めて開近顯遠の蓮華に至つて二住・三住・乃至・十住・
等覺・妙覺の極果の蓮華を得るなり。

問う法華經は何れの品何れの文にか正しく當体・譬喩の蓮華を説き分けた

るや、答う若し三周の聲聞に約して之を論ぜば方便の一品は皆是當体蓮華を

説けるなり、譬喩品・化城喩品には譬喩蓮華を説きしなり、但方便品にも

譬喩蓮華無きに非ず余品にも當体蓮華無きに非ざるなり、問う若し爾らば

正しく當体蓮華を説きし文は何れぞや答う方便品の諸法実相の文是なり、問う

何を以て此の文が當体蓮華なりと云う事を知ることを得るや、答う天台・

妙樂今の文を引て今經の体を釈せし故なり、又伝教大師釈して云く「問う

法華經は何を以て体と為すや、答う諸法実相を以て体と為す」文、此の積分明

なり」に此の文の名を妙法蓮華と曰う義なり、又現証は宝塔品の三身是れ現証なり、或

は涌出の菩薩竜女の即身成仏是なり、地涌の菩薩を現証と為す事は經文

に如蓮華在水と云う故なり、菩薩の当体と聞たり竜女を証拠と為す事は
靈鷲山に詣で千葉の蓮華の大いさ車輪の如くなるに坐しと説きたまう故な
り、又妙音・観音の三十三・四身なり是をば解釈には法華三昧の不思議・
自在の業を証得するに非ざるよりは安ぞ能く此の三十三身を現せんと云云、
・或は「世間相常住」文、此等は皆当世の学者の勘文なり、然りと雖も日蓮
は方便品の文と神力品の如来・一切所有之法等の文となり、此の文をば
天台大師も之を引いて今經の五重玄を釈せしなり、殊更此の一文正しき証文
なり。

問う次上に引く所の文証・現証・殊勝なり何ぞ神力の一文に執するや、
答う此の一文は深意有る故に殊更に吉なり、問う其の深意如何、答う此の文
は釈尊・本眷属地涌の菩薩に結要の五字の当体を付属すと説きたまえる文
なる故なり、久遠実成の釈迦如来は我が昔の所願の如き今は已に満足す、

いっさいしゅじょう

一切衆生を化して皆仏道に入ら令むとて御願已に満足し、如来の滅後・後・

五百歳中・広宣流布の付属を説かんが為地涌の菩薩を召し出し本門の

当体蓮華を要を以て付属し給える文なれば釈尊出世の本懐・道場所得の

秘法末法の我等が現当二世を成就する当体蓮華の誠証は此の文なり、故に

末法今時に於て如来の御使より外に当体蓮華の証文を知つて出す人

有る可からざるなり眞実以て秘文なり眞実以て大事なり眞実以て尊きなり、

南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經具足の道を聞かんと欲す云云、是なり、問う当流の

法門の意は諸宗の人來つて当体蓮華の証文を問はん時は法華經何れの文を

出す可きや、答う二十八品の始に妙法蓮華經と題す此の文を出す可きなり、

問う何を以て品品の題目は当体蓮華なりと云う事を知ることを得るや、故は

天台大師・今經の首題を釈する時・蓮華とは譬喩を挙ぐると云つて譬喩蓮華

と釈し給える者をや、答う題目の蓮華は当体・譬喩を合説す天台の今の釈は

譬喩ひゆの辺しやくを釈しやくする時の釈しやくなり、
玄文げんもん第一の本・迹あとの六譬むくは此この意いなり同じく

第七とうたいは当体しやくの辺しやくを釈しやくするなり、
故ゆえに天台てんだいは題目だいもくの蓮華れんげを以もつて当体とうたい・譬喩ひゆの

両りよう説せつを釈しやくする故ゆえに失無とがし、問もつう何を以だいもくて題目れんげの蓮華とうたいは当体ひゆ・譬喩ひゆ合説くわせつすと云

う事じを知ることを得えんや、南岳なんがく大師だいしも妙法蓮華經みょうほうれんげきやうの五字ごじを釈しやくする時とき「妙とは

衆生しゆじやう妙なるに故ゆえに法ほふとは衆生しゆじやう法なる故ゆえに蓮華れんげとは是これ譬喩ひゆを借かるなり」文、

南岳なんがく・天台てんだいの釈しやく既に譬喩蓮華ひゆれんげなりと釈しやくし給たまう如何いかん、答なんがくう南岳てんだいの釈しやくも天台てんだいの

釈しやくの如ごとし云云、但とうたい当体ひゆ・譬喩合説くわせつすと云う事じ經文きやうもん分ぶん明めいならずと雖いえども南岳なんがく・

天台てんだい既に天親てんじん・竜樹りゆうじゆの論ろんに依よつてて合説くわせつの意いを判釈はんしやくせり、所謂いわゆる法華論ほつけろんに云いく

「妙法蓮華みょうほうれんげとは二種の義ぎ有あり一いちには出水すいすいの義ぎ、乃至ないし泥水でいすいを出でるをば諸もろの聲聞しやうもん

・如來にょらい大衆だいしゆの中ちゆうに入いつて坐ざし諸もろの菩薩ぼさつの如ごとく蓮華れんげの上じやうに坐ざして如來にょらい・無上むじやう

智慧ちえ・清淨しやうじやうの境界きやうがいを説きくを聞きこいて如來にょらいの密藏みつざうを証たするを喩ゆえうるが故ゆえに・二

に華開けかいとは諸もろの衆生しゆじやう・大乘だいじやうの中ちゆうに於おいて其心怯弱こうじやくにして信しんを生おたずること能あたわ

ず故に如来の淨妙法身を開示して信心を生ぜしめんが故なり」文、諸の菩薩
の諸の字は法華已前の大小の諸菩薩・法華經に來つて仏の蓮華を得ると云う
事・法華論の文分明なり、故に知ぬ菩薩處入とは方便なり、天台此の論
の文を釈して云く今論の意を解せば若し衆生をして淨妙法身を見せしむと
言わば此れ妙因の開發するを以つて蓮華と爲るなり、若し如来大衆に入る
に蓮華の上に坐すと言わば此は妙報の国土を以て蓮華と爲るなり、又天台が
当体・譬喩合説する様を委細に釈し給う時大集經の我今・仏の蓮華を敬礼
すと云う文と法華論の今の文とを引証して釈して云く「若し大集に依れば行
法の因果を蓮華と爲す菩薩上に処すれば即ち是れ因の華なり仏の蓮華を礼す
れば即ち是れ果の華なり、若し法華論に依れば依報の国土を以て蓮華と爲す
復菩薩・蓮華の行を修するに由つて報・蓮華の国土を得・当に知るべし依正
因果悉く是れ蓮華の法なり、何ぞ譬をもつて顯すことをもちいん鈍人の法性

の蓮華れんげを解げせざる為ゆゑの故ゆゑに世よの華はなを挙あげて譬たとえと為なす亦また何いずれの妨たがひげかあるべき」
文ぶん、又また云いく若もし蓮華れんげに非いかんば何よに由よつて遍あまねくく上じやう来じゆの諸しよ法ほつを喩たとええん法ほつ譬び雙ならべ
弁べんずる故ゆゑに妙みよ法ほう蓮華れんげと称しやうするなり、次つぎに竜りゆう樹じゆ菩ぼ薩さつの大だい論ろんに云いく「蓮華れんげとは
ほつびなら
法ほつ譬び並ならびに挙あぐるなり」文ぶん、伝でん教ぎやう大師だいしが天てん親じん・竜りゆう樹じゆの二に論ろんの文ぶんを釈しゃくして云いく
「論ろんの文ぶん但みよ妙ほう法ほう蓮華れんげと名なくるに二に種しゆの義ぎあり唯ただ蓮華れんげに二に種しゆの義ぎ有ありと謂おもう
には非あらず、凡およそ法ほう喩ゆとは相あい似にたるを好なしと為なす若もし相あい似にずんば何もつを以もつて
か他がを解げせしめん、是かくの故ゆゑに釈しゃく論ろんに法ほう喩ゆ並ならび挙あぐ一心いつしんの妙みよ法ほう蓮華れんげは因いん華が・
果か台だい・俱ぐ時じに増ぞう長ちやうす此この義ぎ解げし難がたし喩たとえを仮かれば解げし易やすし此この理り教ぎやうを詮せんずる
を名なけて妙みよ法ほう蓮華れんげと為なす」文ぶん、此こ等らの論ろん文ぶん釈しゃく義ぎ分ぶん明めいなり文ぶんに在あつて見る
可べし包ほう蔵ざうせざるが故ゆゑに合ごう説せつの義ぎ・極ごく成じやうせり、凡およそ法ほう華け經きやうの意いは譬ひ喩ゆ即そく法ほう体たい・
法ほう体たい即そく譬ひ喩ゆなり、故ゆゑに伝でん教ぎやう大師だいし釈しゃくして云いく「今こん經きやうは譬ひ喩ゆ多おほしと雖いへども大だい喩ゆは
是これ七しち喩ゆなり此この七しち喩ゆは即すなわち法ほう体たい法ほう体たいは即すなわち譬ひ喩ゆなり、故ゆゑに譬ひ喩ゆの外ほかに法ほう体たい

無く法体の外に譬喩無し、但し法体とは法性の理体なり譬喩とは即ち妙法
の事相の体なり事相即理体なり理体即事相なり故に法譬一体とは云うなり、
是を以て論文山家の釈に皆蓮華を釈するには法譬並べ挙ぐ、等云云、釈の意
分明なる故重ねて云わず。

門う如來の在世に誰か当体の蓮華を証得せるや、答う四味三教の時は三乘

・五乘・七方便・九法界・帶權の円の菩薩並びに教主乃至法華迹門の教主

総じて本門壽量の教主を除くの外は本門の当体蓮華の名をも聞かず何に

況んや証得せんをや、開三顯一の無上菩提の蓮華尚四十余年には之を顯さず、

故に無量義經に終不得成・無上菩提とて迹門開三顯一の蓮華は爾前に之を説

かずと云うなり、何に況んや開近顯遠・本地難思・境智冥合・本有無作の

当体蓮華をば迹化弥勒等之を知る可きや、問う何を以て爾前の円の菩薩・

迹門の円の菩薩は本門の当体蓮華を証得せずと云う事を知ることを得ん、

答う爾前の円の菩薩は迹門の蓮華を知らず迹門の円の菩薩は本門の蓮華を
知らざるなり、天台云く「權教の補処は迹化の衆を知らず迹化の衆は本化の
衆を知らず」文、伝教大師云く「是直道なりと雖も大直道ならず」云云、或
は云く「未だ菩提の大直道を知らざるが故に」云云此の意なり、爾前・迹門
の菩薩は一分断惑証理の義分有りと雖も本門に對するの時は当分の断惑にし
て跨節の断惑に非ず未断惑と云わるるなり、然れば菩薩处处得入と釈すれど
も二乗を嫌うの時一往得入の名を与つるなり、故に爾前・迹門の大菩薩が
仏の蓮華を證得する事は本門の時なり真実の断惑は寿量の一品を聞きし時
なり、天台大師涌出品の五十小劫・仏の神力の故に諸の大衆をして半日の
如しと謂わしむの文を釈して云く「解者は短に即して長・五十小劫と見る惑者
は長に即して短・半日の如しと謂えり」文、妙樂之を受けて釈して云く
「菩薩已に無明を破す之を称して解と為す大衆仍お賢位に居す之を名けて惑

と為す^な「文、釈^{しゃく}の意分^{ふんみよう}明^{めい}なり爾前^{にぜん}・迹門^{しゃくもん}の菩薩^{ぼさつ}は惑者^{わくしゃ}なり地涌^{じゆ}の菩薩^{ぼさつ}のみ
ひとり解者^{げしゃ}なりと云う事なり、然^{しか}るに当世天台宗^{とうせてんだいしゅう}の人の中に本・迹^{どうい}の同異^{どうい}を論
ずる時異り無しと云つて此の文を料簡^{りようけん}するに解者^{げしゃ}の中に迹化^{しゃつけ}の衆入りたりと
云うは大なる僻見^{びゃっけん}なり經の文釈^{しゃく}の義分^{ふんみよう}明^{めい}なり何ぞ横計^{なん}を為す可^なけんや、文
の如^{ごと}きは地涌^{じゆ}の菩薩^{ぼさつ}・五十小劫の間如来^{にやらい}を称揚^{しょうよう}するを靈山迹化^{りようぜんしゃつけ}の衆は半日
の如^{ごと}く謂^{おも}えりと説^とき給^{たま}えるを天台^{てんだい}は解者^{げしゃ}惑者^{わくしゃ}を出^{いだ}して迹化^{しゃつけ}の衆^{わくしゃ}は惑者^{ゆえ}の故^{ゆえ}に
半日と思^こえり是れ即^{すなわ}ち僻見^{びゃっけん}なり、地涌^{じゆ}の菩薩^{ぼさつ}は解者^{げしゃ}の故^{ゆえ}に五十小劫と見る
是れ即^こち正見^{せいけん}なりと釈^{しゃく}し給^{たま}えるなり、妙樂^{みょうらく}之^{これ}を受け^みて無明^{むみよう}を破^はする菩薩^{ぼさつ}は
解者^{げしゃ}なり未^{いま}だ無明^{むみよう}を破^はせざる菩薩^{ぼさつ}は惑者^{わくしゃ}なりと釈^{しゃく}し給^{たま}いし事文^{しやもん}に在^あつて分明^{ぶんみよう}
なり、迹化^{しゃつけ}の菩薩^{ぼさつ}なりとも住上^{しやうじやう}の菩薩^{ぼさつ}は已^{すで}に無明^{むみよう}を破^はする菩薩^{ぼさつ}なりと云わん
学者^{がくしゃ}は無得道^{とくたう}の諸經^{しよきやう}を有得道^{とくたう}と習^{なら}いし故^ななり、爾前^{にぜん}・迹門^{しゃくもん}の当分^{とうぶん}に妙覺^{みょうかく}の
位有^{いゑど}りと雖^{ほんもんじゆりよう}も本門^{ほんもん}寿量^{じゆりよう}の真仏^{まんとく}に望^むむる時は惑者^{わくしゃ}仍^なお賢位^{けんゐ}に居^ゐると云^いわるる者

なりこんきよう權教さんじんいまの三身未だ無常むじようを免れざる故は夢中の虚仏こぶつなるが故なり、爾前にぜんと
迹化しやつけの衆いままとは未だ本門ほんもんに至らざる時は未断惑みだんなくの者と云われ彼かしこに至る時正まさしく
初住しじゆうに叶かなうなり、妙楽みょうらくの釈いわに云く、「開迹顯本かいしやくけんほん皆初住みなしじゆうに入る」文、仍賢位なおけんい
に居すの釈これ之を思がっ合すべし、爾前迹化にぜんしやつけの衆は惑者未だ無明を破せざる仏・
菩薩ぼさつなりと云う事真實しんじつなり真實しんじつなり、故ゆえに知ぬ本門ほんもん寿量じゆうりようの説顯あらわれての後は
靈山りやうぜん一会の衆皆悉しゆうみなことごとくく当体蓮華しやうとくを証得しやうとくせしなり、二乗・闡提・定性・女人にじよう せんたい じやうしやう によんに
・惡人等も本仏ほんぶつの蓮華れんげを証得しやうとくするなり、伝教大師でんぎやうだいし一大事の蓮華れんげを釈しゃくして云く
「法華の肝心ほっけ一大事かんじんいちだいじの因縁いんねんは蓮華れんげの所顯しよけんなり、一とは一実相じつそうなり大とは性広博じやうくわく
なり事とは法性ほっしやうの事なり一究竟事くきやうじは円の理教・智行、円の身・若・達ちきやうなり
一乘・三乘・定性・不定性・内道・外道・阿闍・阿顛・皆悉みなことごとくく一切智地いちじち
に到る是この一大事いちだいじ佛の知見ちけんを開示かいじし悟入ごにゆうして一切成仏いっさいじやうぶつす」女人によんに・闡提せんたい・
定性・二乗等の極惡人靈山じやうしやう にじよう にくあく りやうぜん おいに於て当体蓮華とうたいれんげ しやうとくを証得しやうとくするを云うなり。

問う末法今時誰れ人か当体蓮華を証得せるや、答う当世の体を見るに大
阿鼻地獄の当体を証得する人之れ多しと雖も仏の蓮華を証得せるの人之れ
無し其の故は無得道の権教方便を信仰して法華の当体眞実の蓮華を毀謗する
故なり、仏説いて云く「若し人信ぜずして此の経を毀謗せば則ち一切世間の
仏種を断ぜん乃至其の人命終して阿鼻獄に入らん」文、天台云く「此の経
はく六道の仏種を開く若此の経を謗せば義・断ずるに当るなり」文、日蓮
云く此の経は是れ十界の仏種に通ず若し此の経を謗せば義是れ十界の仏種
を断ずるに当る是の人無間に於て決定して墮在す何ぞ出ずる期を得んや、
然るに日蓮が一門は正直に権教の邪法・邪師の邪義を捨てて正直に正法
・正師の正義を信ずる故に当体蓮華を証得して常寂光の当体の妙理を顕す
事は本門寿量の教主の金言を信じて南無妙法蓮華經と唱うるが故なり、問
う南岳・天台・伝教等の大師・法華經に依つて一乘円宗の教法を弘通し

たま 給うと雖も未だ南無妙法蓮華經と唱えたまわざるは如何、若し爾らば此の
だいし 大師等は未だ当体蓮華を知らず又証得したまわずと云うべきや、答う南岳
だいし 大師は觀音の化身・天台大師は藥王の化身なり等云云、若し爾らば靈山に
おい 於て本門壽量の説を聞きし時は之を証得すと雖も在生の時は妙法流布の時
あら 非ず、故に妙法の名字を替えて止觀と号し一念三・千一心三觀を修し給い
しなり、但し此等の大師等も南無妙法蓮華經と唱うる事を自行眞實の内証
とおほしめ と思食されしなり、南岳大師の法華懺法に云く、南無妙法蓮華經と文、天台大師
の云く「南無平等大慧一乘・妙法蓮華經」文、又云く「稽首妙法蓮華經」
云云、又、歸命妙法蓮華經と云云、伝教大師の最後臨終の十生願の記に云く
「南無妙法蓮華經」云云、問う文証分明なり何ぞ是くの如く弘通したまわ
ざるや、答う此れに於て二意有り一には時の至らざるが故に二には付属に
あら 非ざるが故なり、凡そ妙法の五字は末法流布の大白法なり地涌千界の大士

の付属なり是の故に南岳・天台・伝教等は内に鑑みて末法の導師に之を譲り
て弘通し給わざりしなり。

七〇 当体義抄送状 519P

問う当体の蓮華解し難し故に譬喩を仮りて之を顕すとは経文に証拠有る
か、答う経に云く「世間の法に染まらざること蓮華の水に在るが如し地より
而も涌出す」云云、地涌の菩薩の当体蓮華なり、譬喩は知るべし以上後日に
之を改め書すべし、此の法門は妙経所詮の理にして釈迦如来の御本懷地涌
の大地に付属せる末法に弘通せん経の肝心なり、国主信心あらん後始めて
之を申す可き秘蔵の法門なり、日蓮最蓮房に伝え畢んぬ。

日蓮 花押

七一 小乗 大乘分別抄

文永十年 五十二歳御作 与富木常忍 520P

夫れ小大定めなし一寸の物を一尺の物に対しては小と云い五尺の男に對し
ては六尺七尺の男を大の男と云う、外道の法に對しては一切の大小の仏教
を皆大乘と云う大法東漸通指仏教以為大法等と釈する是なり、
ても鹿苑十二年の説・四阿含經等の一切の小乘經をば諸大乘經に對して
と云う華嚴の大乘經に其餘樂小法と申す文あり、天台大師はこの小法と
いうは常の小乘經にはあらず十地の大法に對して十住十行・十回向の
大法を下して小法と名くと釈し給へり、又法華經第一の卷方便品に若以
小乗化乃至於一人と申す文あり天台・妙樂は阿含經を小乘と云うのみに
あらず華嚴經の別教・方等・般若の通別の大乗をも小乘と定め給う、又
玄義の第一に會小歸大・是漸頓混合と申す釈をば智証大師は初め華嚴經より
終り般若經にいたるまで四教八教の權教諸大乘經を漸頓と釈す混合とは

はつきよう

え

えんきよう

がつ

ほけきよう

じゆりようぼん

八教を会して一大円教に合すとこそことはられて候へ、

又法華經の寿量品

ぎようお

とくはつくじゅう

もう

てんだいだいし

きようもん

に樂於小法・徳薄垢重者と申す文あり、

天台大師は此經文に小法と云うは

しょうじようきよう

しやだじようきよう

くおんじつじよう

けこんきよう

小乗經にもあらず又諸大乘經にもあらず久遠実成を説かざる華嚴經の

ないし

ほうとう

はんによ

ほけきよう

しやくもん

えんどん

だいほう

しょうじよう

円・乃至・方等・般若・法華經の迹門十四品の円頓の大法まで小乗の法な

けこんきよう

しやだじようきよう

きようしゅ

ほっしん

ほうしん

びるしやな

るしやな

り、又華嚴經等の諸大乘經の教主の法身・報身・毘盧遮那・盧舍那・大日

によらい

しやくたま

ねはんきよう

だいにちきよう

いっさい

如来等をも小仏なりと釈し給ふ、此の心ならば涅槃經・大日經等の一切の

だいしよう

こんじつ

けんみつ

しよきよう

みなしやうじようきようはつじゅう

くしやしゅう

大小・権実・顕密の諸經は皆小乗經八宗の中には俱舍宗・成実宗・

りつしゅう

しょうじよう

けこんしゅう

ほうそしゅう

さんろんしゅう

しんこんしゅう

しよ

律宗を小乗と云うのみならず華嚴宗・法相宗・三論宗・真言宗等の諸

だいじよう

しょうじよう

ただてんだい

ばか

じつだじよう

かれがれ

だいじよう

大乘宗を小乗宗として唯天台の一宗計り実大乘宗なるべし、彼彼の大乗

しょうえ

きようきよう

にじようさぶつ

くおんじつじよう

たま

宗の所依の經經には絶えて二乗作仏・久遠実成の最大の法をとかせ給は

ず、

たと

譬えば一尺二尺の石を持つ者をば大力といはず一丈二丈の石を持つを大

力と云うが如し、

けこんきよう

ほっかい

えんゆう

はんによきよう

こんどう

華嚴經の法界・円融四十一位・般若經の混同無二・十八空

乾慧地等の十地・瓔珞經の五十二位・仁王經の五十一位・藥師經の十二の大願・雙觀經の四十八願・大日經の真言・印契等此等はこれら小乘經しょうじょうに對すればだいほうひほう大法秘法なり、法華經の二乗作仏・久遠実成に對すればしょうじょう小乘の法なり、一尺二尺を一丈二丈に對するが如し、又二乗作仏・久遠実成は法華經の肝用にして諸經に對すれば奇たりと云へども法華經の中にてはいまだ奇妙ならずしきょう一念三千と申す法門こそ奇が中の奇・妙が中の妙にて華嚴・大日經等に分絶いちねんさんぜんたるのみならず、八宗の祖師の中にも真言等の七宗の人師・名をだにもしらず天竺の大論師竜樹菩薩・天親菩薩は内には珠を含み外には書きあらはしてんじく給はざりし法門なり、雨衆が三徳・米育が六句の先仏の教を盗みとれる様にたま華嚴宗の澄觀・真言宗の善無畏等けこんしゅう是天台大師の一念三千の法門を盗み取つて我が所依の經の心仏及衆生の文の心とし心実相と申す文の神とせるなり、かくのごとく盗み取つて我が宗の規模となせるが又還つて天台宗を下ししよえ

華嚴宗・真言宗には劣れる法なりと申す、此等の大師は世間の盗人にはあら

ねども仏法の盗人なるべし、此等をよくよく尋ね明むべし。

又世間の天台宗の学者並びに諸宗の人人の云く法華経は但二乗作仏・

久遠実成計りなり等云云、今反詰して云く汝等が承伏に付いて但二乗作仏

と久遠実成計り法華経にかぎつて諸経になくば此れなりとも豈奇が中の奇

にあらずや、二乗作仏・諸経になくば仏の御弟子・頭陀第一の迦葉・智慧

第一の舍利弗・神通第一の目連等の十大弟子千二百の羅漢・万二千の声聞・

無数億の二乗界・過去遠遠劫より未来無数劫にいたるまで法華経に値いたて

まつらずば永く色心俱に滅して永不成仏の者となるべし豈大なる失にあらず

や、又二乗界・仏にならずば迦葉等を供養せし梵天・帝釈・四衆・八部・

比丘・比丘尼等の二界・八番の衆はいかんがあるべき、又久遠実成が此の経

に限らずんば三世の諸仏・無常遷滅の法に墮しなん、譬えば天に諸星ありと

も日月にちがつましまさずんば・いかんがせん地に草木そうもくありとも大地だいちなくばいかんが
せん、是は汝なんじが承伏しょうふくに付いての義なり実をもつて勘かんへ申もうさば二乗にじよう作さ仏ぶつなき
ならば九界しゅじようの衆生しゅじよう・仏になるべからず、法華經ほけきようの心は法爾ほうにのことはりとして
一切衆生いつさいしゅじように十界じゅつかいを具足ぐそくせり、譬たとえば人・一人は必ず四大もつを以てつくれり一
大おほかけなば人にあらじ、一切衆生いつさいしゅじようのみならず十界じゅつかいの依正えしやうの二法ふ非情ひじようの草木そうもく
一微塵みじんにいたるまで皆みな十界じゅつかいを具足ぐそくせり、二乗界にじよう・仏ぶつにならずば余界よかいの中ちゆう
二乗界にじようも仏になるべからず又余界よかいの中ちゆうの二乗界にじよう仏ぶつにならずば余界よかいの八界はんげ仏ぶつに
なるべからず、譬たとえば父母ふぼとともに持たもちたる者きやうだい兄弟きやうだい九人きやうだいあらんか二人ふにんは凡下ほんげの
者と定められば余の七人も必ず凡下ほんげの者となるべし、仏と經とは父母ふぼの如ごとし
九界しゅじようの衆生しゅじようは実子しやうもんなり声聞えんかく・縁覺えんかくの二人ふにん・永不成ようふじ仏ぶつの者となるならば菩薩ぼさつ
・六凡ろくふんの七人しちにんあに得道とくどうをゆるさるべきや、今・此この三界さんがいは皆みな是我これわがが有そなり其その
中ちゆうの衆生しゅじようは悉ことごとく是吾子わがこなり乃至唯我一人ないしただわれひとりのみ能よく救護くごを為なすの文をもつて知

るべし、又菩薩と申すは必ず四弘誓願をおこす第一衆生無辺誓願度の願・成就せずば第四の無上菩提誓願証の願も成就すべからず、前四味の諸經にては菩薩・凡夫は仏になるべし二乗は永く仏になるべからず等云云、而るをかしこげなる菩薩もはかなげなる六凡も共に思へり我等・仏になるべし二乗は仏にならざれば・かしこくして彼の道には入ざりけると思ふ、二乗はなげきをいたき此の道には入るまじかりし者をと恐れかなしみしが今法華經にして二乗を仏になし給へる時二乗・仏になるのみならずかの九界の成仏をも・ときあらはし給へり、諸の菩薩・此の法門を聞いて思はく我等が思ひは・はかなかりけり爾前の經經にして二乗・仏にならずば我等もなるまじかりける者なり、二乗を永不成仏と説き給ふは二乗一人計りなげくべきにあらざりけり我等も同じなげきにてありけりと心うるなり。

又寿量品の久遠実成が爾前の經經になき事を以て思ふに爾前には久遠

じつじょう

実成なきのみならず仏は天下第一の大妄語の人なるべし、爾前の大乗第一

けこんきよう

だいにちきよう

しょうかく

どうじょう

たる華嚴經・大日經等に始めて正覺を成じ我昔道場に坐す等云云、真実

じんじんしょうじきしやほうべん

むりようぎきよう

ほけきよう

しゃくもん

どうじょう

甚深正捨方便の無量義經と法華經の迹門には我先に道場にして・我始め

どうじょう

道場に坐すと説れたり、此等の經文は寿量品の然るに我実に成仏してよ

このかたむりようむへん

これら

きようもん

じゆりようばん

しか

じようぶつ

り已来無量無辺なりの文より思い見ればあに大妄語にあらずや、仏の一身す

もつて

ろこん

しよほう

まんげつ

大冰の上

でに大妄語の身なり一身に備えたる六根の諸法あに実なるべきや、大冰の上

しよ

しよ

わ

べし

や

満月

は

実

に

体

あり

に造れる諸舎は春をむかへては破れざるべしや水中の満月は実に体ありや、

にぜん

じようぶつおつじよう

こと

にぜん

じよぶつおつじよう

じよぶつ

にぜん

じよぶつ

にぜん

にぜん

にぜん

爾前の成仏往生等は水中の星月の如し爾前の成仏往生等は体に随ふ影の

こと

ほんもんじゆりようばん

をもつて

見れば

寿量品の

智慧を

はなれて

は

諸經は

跨節

の

如し、本門寿量品をもつて見れば寿量品の智慧をはなれては諸經は跨節

とうぶん

とくどう

ゆつめいむじつ

てんだいだいし

天台大師

此の

法門を

道場

にして

独り

覺知し

の

当分の得道共に有名無実なり、天台大師・此の法門を道場にして独り覺知し

げんぎ

もんく

しかん

止観十卷等

かきつけ

給うに

諸經に

二乗作

仏・

久遠

の

の

玄義十卷・文句十卷・止観十卷等かきつけ給うに諸經に二乗作仏・久遠

じつじょう

よし

書きを

き給ふ、

是は

南北の

十師が

教相に

迷つて

三時・

の

の

実成絶えてなき由を書きをき給ふ、是は南北の十師が教相に迷つて三時・

四時・五時・四宗・五宗・六宗・一音・半滿・三教・四教等を立てて教の
せんじんしょうれつ まよい これら
浅深勝劣に迷いし此等の非義を破らんが為にまず眼前たる二乗作仏・久遠
じつじょう
実成をもつて諸經の勝劣を定め給いしなり、然りと云つて余界の得道をゆ
しよきよう しょうれつ たまい
るすにはあらず、其の後華嚴宗の五教・法相宗の三時真言宗の顯密五藏
けこんしゅう ほうそうしゅう しんこんしゅう けんみつ
十住 心義釈の四句等は南三・北七の十師の義よりも尚 れる教相なり。
じゅうじゅう ぎしやく なんざん ほくひち なおあやま きようそう
此等是他師の事なればさてをきぬ又自宗の学者が天台・妙樂・伝教大師
これら たし
の御釈に迷つて爾前の經經には二乗作仏・久遠実成計りこそ無けれども
まよい にぜん きようぎよう にじょうさぶつ くおんじつじょうばか
よかい とくどう
余界の得道は有りなんと申す人人・一人・二人ならず日本国に弘まれり、他宗
ひとびと いよいよてんだいしゅう うしな これら がくしや たと とんば ちちゅう
の人人是に便を得て弥 天台宗を失ふ此等の学者は譬えば野馬の蜘蛛の網に
かわけ
かかり渴る鹿の陽炎をおふよりも・はかなし例せば頼朝の右大將家は泰衡を
ため よしつね
討たんが為に泰衡を誑して義經を討たせ、太政入道清盛は源氏を喪して世を
ため へいまのすけたたまさ よしとち
とらんが為に我が伯父平馬介忠正を切る義朝はたばらかされて慈父為義を切

るが如し、此等は墓なき人人のためしなり、天台大師・法華經より外の經經
には二乗作仏・久遠実成は絶えてなしなんど釈し給へば菩薩の作仏凡夫の
往生はあるなんめりとうち思いて我等は二乗にもあらざれば爾前の經經に
ても得道なるべし此の念い心中にさしはさめり、其の中にも觀經の九品
往生はねがひやすき事なれば法華經をばなげすて念仏申して淨土に生れて
觀音・勢至・阿弥陀仏に値いたてまつて成仏を遂ぐべし云云、当世の天台宗
の人人を始として諸宗の學者皆此くの如し実義をもつて申さば一切衆生の
成仏のみならず六道を出で十方の淨土に往生する事はかならず法華經の力
なり、例せば日本国の人・唐土の内裏に入らん事は必ず日本の国王の勅定に
よるべきが如し穢土を離れて淨土に入る事は必ず法華經の力なるべし、例せ
ば民の女・乃至閨白・大臣の女に至るまで大王の種を下せば其の産る子王
となりぬ、大王の女なれども臣下の種を懷妊せば其の子王とならざるが如し、

じゅつぽう じょうてん
十方の浄土に生るる者は三乘 人天・畜生等までも皆王の種姓と成つて生る
みな
べし皆仏となるべきが故なり、阿含経は民の女の民を夫とし華嚴・方等・
はんにや
般若等は臣の女の臣を夫とせるが如し、又華嚴経・方等・般若・大日経等
えんきよう ぼさつ だいおう むすめ しんか
の円教の菩薩等は大王の女の臣下を夫とせるが如し、皆浄土に生るべき法
にはあらず、又華嚴・阿含・方等・般若等の経経の間に六道を出づる人あ
り是は彼彼の経経の力には非ず過去に法華経の種を殖えたりし人現在に
ほけきよう
法華経を待たずして機すすむ故に爾前の経経を縁として過去の法華経の種
ほつとく じょうぶつおうじよう
を発得して成仏往生をとぐるなり、例せば縁覚の無仏世にして飛花落葉を
かん どうかく ぼだい じゅういん ぼんてん
観じて独覺の菩提を証し孝養父母の者の梵天に生るるが如し飛花落葉孝養
ふ ぼ どうかく ぼんてん じゅういん
父母等は独覺と梵天との修因にはあらねどもかれを縁として過去の修因を
引きおこし彼の天に生じ独覺の菩提を証す、而るに尚過去に小乗の三賢四
ぜんこん ぜんじよう じゅう
善根にも入らず有漏の禅定をも修せざる者は月を觀じ花を詠じ孝養父母の善

を修しゆすれども独ど覺かくともならず色天しきてんにも生なぜず、過去かこに法華經ほけきやうの種うゑを殖うゑざる人
は華嚴經けこんきやうの席はべに侍はべりしかども初地しよじ・初住しよじゆうにものぼらず、鹿苑説教ろくおんせつきやうの砌みぎりにて
も見思けんじをも断だんぜず觀經等かんきやうにても九品の往生おうじやうをもとげず、但だい大小だいしやうの賢位けんいのみ
に入いつて聖位しやういにはのぼらずして法華經ほけきやうに來きつて始めて仏種ぶつしゆを心田しんでんに下くだして一
生しよじに初地しよじゆう・初住しよじゆう等に登のぼる者ものもあり、又涅槃ねはんの座ざへさがり乃至滅後未來ないしめつごみらいまでゆ
く人もあり、過去かこに法華經ほけきやうの種うゑを殖うゑたる人人ひとびとは結縁けちえんの厚薄こうはくに随したがつて華嚴經けこんきやうを
縁えんとして初地しよじ・初住しよじゆうに登のぼる人もあり、阿含經あこんきやうを縁えんとして見思けんじを断きじて二乗にじやうと
成なる者ものもあり、觀經等かんきやうの九品の行業かうぎやうを縁えんとして往生おうじやうする者ものもあり、方等ほうとう・
般若はんも此これをもつて知しんぬべし、此等これらは彼彼かれかれの經經きやうきやうの力ちからにはあらず偏ひろえに
法華經ほけきやうの力ちからなり譬たとえば民たみの女むすめに王わうの種くたを下くだせるを人ひとしらずして民たみの子こと思おもひ
大臣等だいじんの女むすめに王わうの種くたを下くだせるを人ひとしらずして臣下しんかの子こと思おもへども大王だいおうより
これたすを尋たずぬれば皆王種みなおうしゆとなるべし、爾前にぜんにして界外いたへ至いたる人ひとを法華經ほけきやうより之これを

尋ぬれば皆法華經の得道なるべし、又過去に法華經の種を殖えたる人の根鈍
にして爾前の經經に発得せざる人人は法華經にいたりて得道なる、是は爾前
の經經をばめのととしてきさき腹の太子・王子と云うが如くなるべし、又
仏の滅後にも正法一千年が間は在世の如くこそなければ過去に法華經の種
を殖えて法華・涅槃經にて覺りをとぐる者もありぬ現在・在世にて種を下せ
る人人も是多し。

又滅後なれども現に法華經ましませば外道の法より小乗經にうつり
小乗經より權大乘にうつり權大乘より法華經にうつる人人数をしらず、
竜樹菩薩・無著菩薩・世親論師等是なり、像法一千年には正法のほどこそ
無けれども又過去・現在に法華經の種を殖えたる人人も少少之有り、而るを
漸漸に仏法澆薄になる程に宗宗も偏執・石の如くかたく我慢山の如く高し、
像法の末に成りぬれば仏法によつて諍論・興盛して仏法の合戦ひまなし、

世間の罪せけん つみよりも仏法の失ぶつぼう とがに依よつて無間地獄むげんじごくに墮おつる者・数をしらず。

今は又末法まつぼうに入いつて二百余歳・過去かこ・現在げんざいに法華經ほけきょうの種を殖はえたりし人ひと人ひと

もやうやくつきはてぬ、又種をうへたる人ひと人は少少あるらめども世間のせけん大惡人あくにん

しゅっしょう

・出生ほうぼうの謗法の者数をしらず国こくに充満じゅうまんせり、譬たとえば大火たいかの中の小水たいすい・大水

たいかい

の中の小火たいかい・大海だいかいの中の水みづ・大地だいちの中の金かねなんどの如ごとく惡業あくごうとのみなりぬ、

かこ ぜんごう

又過去かこの善業ぜんごうもなきが如ごとく現在げんざいの善業ぜんごうもしるしなし、・或あるは弥陀みだのみょうごう名号なごうをも

ほけきょう

つて人を狂くるはし法華經ほけきょうをすてしむれば背上そむ向下的むかひしたのとがあり、・或あるは禪宗ぜんしゅうを立た

きょうげ しょう ぶつきょう

てて教外きょうがいと稱しょうし仏教ぶつぎょうをば眞まことの法はふにあらずと蔑べつじよ如ごとく増上慢ぞうじょうまんを起おこし、・或あるは

ほつそつ さんろん けこんしゅう

法相ほつそつ・三論さんろん・華嚴宗けこんしゅうを立てて法華經ほけきょうを下くだし、・或あるは眞言宗しんごんしゅう・大日宗だいにちと稱しょうして

ほけきょう しゃかによらい けんきょう

法華經ほけきょうは釈迦しゃかによらい如來けんきょうの顯教けんきょうにして眞言宗しんごんしゅうに及およばず等云おん、而しかるに自然じねんに法門ほうもん

まよい

に迷まよう者ものもあり、・或あるは師師ししに依よつて迷まよう者ものもあり、・或あるは元祖がんそ・論師ろんし・人師にんし

まよい

の迷法まよひを年久しんじつしく眞實しんじつの法はふぞと伝つたへ来る者ものもあり、・或あるは惡鬼あくぎ天魔てんまの身みに入い

七二 立正觀抄

ぶんえい 文永十一年 五十三歳御作 ほうつけしかんどうい 法華止觀同異決 にちれん 日蓮撰 527P

とうせてんだい きようほう とうせてんだい
当世天台の教法を習学するの輩多く觀心修行を費んで法華本・迹二門
を捨つと見えたり、今問う抑觀心修行と言うは天台大師の摩訶止觀の
せつこしんちゆうしよぎようほうもん いっしんさんかん いちねんさんぜん
説己心中所行法門の一心三觀・一念三千の觀に依るか、將又・世流布の達磨
の禪觀に依るか、若し達磨の禪觀に依るといわば教禪は末顯真實妄語方便の
ほけきよう 禪觀なり法華經妙禪の時には正直捨方便と捨てらるる禪なり、祖師達磨禪は
きようげべつてん てんま 教外別伝の天魔禪なり、共に是れ無得道妄語の禪なり仍て之を用ゆ可からず、
も てんだい 若し天台の止觀一心三觀に依るとならば止觀一部の廢立・天台の本意に背く
べ 可からざるなり、若し止觀修行の觀心に依るとならば法華經に背く可からず
しかん 止觀一部は法華經に依つて建立す一心三觀の修行は妙法の不可得なるを
かんとか 感得せんが為なり、故に知んぬ法華經を捨てて但だ觀を正とするの輩は大

ほうぼう じゃけんてんま しょうい
謗法大邪見天魔の所為なることを、其の故は天台の一心三觀とは法華經に依つ
さんまいかいほう
て三昧開發するを己心証得の止觀とは云う故なり。

問う 天台大師止觀一部並びに一念三千・一心三・觀己心証得の妙觀は
てんだいだいししかん なら いちねんさんぜん いっしん こしんしょうとく みようかん

併しながら法華經に依ると云う証拠如何、答う予反詰して云く法華經に依ら
しか ほうききよう よ しょうこ いかん いわ ほうききよう よ

ずと見えたる証文如何、人之を出して云く、此の止觀は天台智者己心中所行
しょうもん いかん これ いた いわ しかん てんだいちしやこしんちゅうしよぎよう

の法門を説く・或は又故に止觀に至つて正く觀法を明かす並に三千を以て
ほうもん ある ゆえ しかん いた まさし かんぼう あきら さんぜん もつ

指南と為す乃ち是れ終窮究竟の極説なり故に序の中に説己心中所行法門と云
しなん な すなわこ しゅうくきよう ゆえ せつこしんちゅうしよぎようほうもん

えり良に以有るなり」文、難じて云く此の文は全く法華經に依らずと云う文
まことゆえあ なん いわ ほうききよう よ

に非ず既に説己心中所行の法門と云うが故なり天台の所行の法門は法華經
あら すで せつこしんちゅうしよぎよう ほうもん てんだい しよぎよう ほうもん ほうききよう

なるが故に此の意は法華經に依ると見えたる証文なり但し他宗に対するの時
ゆえ ほうききよう よ しょうもん ただ たしゅう

は問答大綱を存す可きなり、所謂云う可し若し天台の止觀・法華經に依らず
もんどうたいこう そん べ いわゆる べ も てんだい しかん ほうききよう よ

といわば速かに捨つ可きなりと、其の故は天台大師兼ねて約束して云く
すみや べ そのゆえ てんだいだいしか やくそく いわ

「修多羅と合せば録して之を用いよ文無く義無きは信受す可からず」云云、
伝教大師の云く「仏説に依憑して口伝を信ずること莫れ」文、竜樹の大論
に云く「修多羅に依るは白論なり修多羅に依らざるは黒論なり」文、教主
釈尊云く「依法不依人」文、天台は法華經に依り竜樹を高祖にしながら經文
に違し我が言を翻じて外道邪見の法に依つて止觀一部を釈する事全く有る
べからざるなり、問う正しく止觀は法華經に依ると見えたる文之有りや、答
う余りに多きが故に少少之を出さん止觀に云く「漸と不定とは置いて論ぜず
今經に依つて更に円頓を明かさん」文、弘決に云く「法華經の旨を攢て不思議
・十乘・十境・待絶・滅絶・寂照の行を成ず」文、止觀大意に云く「今家
の教門は竜樹を以て始祖と為す慧文は但内觀を列ねて視聽するのみ南岳・
天台に及んで復法華三昧陀羅尼を發するに因つて義門を開拓して觀法周備す、
○若し法華を釈するには弥弥須く權實本・迹を曉了すべし方に行を立つ

可し此の經独り妙と稱することを得・方に此に依つて以て觀意を立つ可し、
五方便及び十乘軌行と言ふは即ち円頓止觀全く法華に依る円頓止觀は即ち
法華三昧の異名なるのみ、文、文句の記に云く、「觀と經と合すれば他の宝を
数うるに非ず方に知んぬ止觀一部は是れ法華三昧の筌なり若し斯の意を得
れば方に經旨に會う」云云、唐土の人師・行滿の釈せる学天台宗法門大意に
云く「摩訶止觀一部の大意は法華三昧の異名を出でず經に依つて觀を修す」
文、此等の文証分明なり、誰か之を論ぜん、問う天台四種の釈を作るの時觀心
の釈に至つて本・迹の釈を捨つと見えたり、又法華經は漸機のために之を説き
止觀は直達機の為に之を説くと如何、答う漸機の為に説けば劣り頓機の為に
説けば勝るとならば今の天台宗の意は華嚴・真言等の經は法華經に勝れたり
と云う可きや、今の天台宗の浅さは真言は事理俱密の教なる故に法華經に
勝れたりと謂えり、故に止觀は法華に勝ると云えるも道理なり道理なり。

次に觀心の釈の時・本・迹を捨てと云う難は法華經何れの文人師の釈を本
と爲して仏教を捨てよと見えたるや設い天台の釈なりとも釈尊の金言に
背き法華經に背かば全く之を用ゆ可からざるなり、依法不依人の故に竜樹・
天台・伝教元よりの御約束なるが故なり、其上天台の釈の意は迹の大教起れ
ば爾前の大教亡じ本の大教興れば迹の大教亡じ觀心の釈の大教興れば本の大教亡
じと釈するは本体の本法をば妙法不思議の一法に取り定めての上に修行を
立つるの時、今像法の修行は觀心修行を詮と爲るに迹を尋ねれば迹・広し
本を尋ねれば本・高うして極む可からず、故に末學機に叶い難し但己心の
妙法を觀ぜよと云う釈なり、然りと雖も妙法を捨てよとは釈せざるなり
若し妙法を捨てば何物を己心と爲して觀ず可きや、如意宝珠を捨て瓦石を取
つて宝と爲す可きか、悲しいかな当世天台宗の學者は念仏・真言・禪宗等
に同意するが故に天台の教釈を習い失つて法華經に背き大謗法の罪を得るな

り、もしかん止観を法華經に勝ると云わば種種しゅじゆの過わざわい之有これあり止観しかんは天台てんだいの道場どうじよう所得こしやうの己証こしやうなり、法華經は釈尊しゃくそんの道場どうじよう所得だいほうの大法だいほうなり一しやくそん釈尊みやうかまくまは妙覺果滿みやうかくかまんの仏てんだいなり天台は住前未証なれば名字みやうじ・觀行かんぎやう・相似そうじには過すぐ可べからず四十二重しじふにじゆうの劣ほつなり一ほつ法華は釈尊しゃくそん乃至諸仏出世しよぶつしゆつせの本懷ほんかいなり止観しかんは天台てんだい出世しゆつせの己証こしやうなり是こしやう三はつ法華經は多宝の証たほう明あり来集らいじゆの分身ふんじんは広長舌こうちやうぜつを大梵天ぼんてんに付く皆是真實かいぜしんじつのびやくほう大白法はくはふなり是四止観しかんは天台てんだいの説法せつぽうなり是かくの如かくき等の種種しゅじゆの相違そうい之有これあれども仍なお之これを略するなり、又一つの問答もんどうに云いく所被しよひの機き・上機じやうきなる故ゆえに勝ると云まさわば実を捨てて權を取てんだいいわ「教い彌い權いなれば位い彌い高いし」と釈しゃく給たまう故しよひなり所被きの機き下劣きげれつなる故ゆえに劣ると云わば權を捨てて実を取てんだいい、天台の釈いは教い彌い實いなれば位い彌い下いしと云う故なり、然而しかるにして止観しかんは上機じやうきの為ために之これを説ほつき法華は下機きの為ために之これを説くと云わば止観しかんは法華ほつに劣おとれる故ゆえに機きを高く説とくと聞ほつえたり実あにさもや有あるらん、天台大師てんだいだいしは靈山りやうぜんの聽衆ちやうしゆとして如來出世にやらいしゆつせ

の本懷ほんかいを宣のべたもつと雖いえども時いた至いたらざるが故ゆえに妙法みょうほうの名字みょうじを替かへて止觀しがんと号なづす
迹化しやつけの衆しゅうなるが故ゆえに本化ほんげの付属ふぞくを弘ひろめ給たまわらず正直しやうじきの妙法みょうほうを止觀しがんと説ときまぎ
らかす故ゆえに有あのままの妙法みょうほうならざれば帶權たいこんの法はふに似にたり、故ゆえに知しんぬ天台てんだい
くつう 弘通しよけの所化きの機ざいせたいこんは在世えんき帶權ごの円機えんきの如ごとし、本化ほんげ弘通くつうの所化しよけの機きは法華ほつけ本門ほんもんの
直機きなり、止觀しかん法華ほつは全ぜんく体同な尚人師おにんしの釈もつを以もつて仏説ぶつせつに同どうずる失とが甚はなはだ重おもなり、
何いかに況いや止觀いは法華い經わんに勝しかんと云ほけききやうと云まさふ邪義じゃぎを申もうし出いだすは但こ是ほんれ本化げの弘經くきやうと
しやつけ 迹化くつうの弘通ぞうほうと像法まづほうと末法しやくもんの付属ふぞくと本門ほんもんの付属ふぞくとを末法まづほうの行者ぎやうじやに云い
あら 顯あらわさせん為ぶつてんの仏天おんの御計はからいなり、爰こゝに知しんぬ当世とう天台てんだい宗しゅうの中に此この義ぎを云
う人そは祖師そし・天台てんだいの為ためには不知恩ふちおんの人ひとなり豈あに其その過とがを免まぬかかや、夫それ天台てんだい大師だいし
は昔靈山りやうぜんに在やくては藥王やくおうと名なけ今漢土かんどに在てんだいては天台てんだいと名なけ日本にほん国こくの中にては
伝教でんぎやうと名なく三世さんぜの弘通くつう俱ともに妙法みょうほうと名なく、是かくの如ごとく法華ほけきやう經きやうを弘通くつうし給たまう人
は在世ざいせの釈尊しやくそんより外そは三國さんこくに其その名なを聞かかず有かたり難おく御坐あします大師だいしを其その

まつがくそ

末学其の教釈を悪く習うて失無き天台に失を懸けたてまつる豈大罪に非ずや。

今問う天台の本意は何法ぞや碩学等の云く「一心三觀是なり」今云く一実

円満の一心三觀とは誠に甚深なるに似たれども尚以て行者修行の方法なり

三觀とは因の義なるが故なり慈覺大師の釈に云く「三觀とは法體を得せしめ

んが為の修觀なり」云云、伝教大師云く「今・止觀修行とは法華の妙果を

成ぜんが為なり」云云、故に知んぬ一心三觀とは果地・果徳の法門を成ぜん

が為の能觀の心なることを何に況や三觀とは言説に出でたる法なる故に如来

の果地・果徳の妙法に對すれば可思議の三觀なり。

問う一心三觀に勝れたる法とは何なる法ぞや、答う此の事誠に一大事の法門

なり唯仏与仏の境界なるが故に我等が言説に出す可からざるが故に是を申す

可らざるなり、是を以て經文には「我が法は妙にして思い難し言を以て宣ぶ

べからず」云云妙覺果満の仏すら尚不可説・不思議の法と説き給う何に況や

とうかく ぼさつ い かないし ほんぶ
等覺の菩薩已下乃至凡夫をや、問う名字を聞かずんば何を以て勝法有りとか
ることを得んや、答う天台已証の法とは是なり、当世の学者は血脈相承を
なら うしな ゆえ これ
習い失う故に之を知らざるなり故に相構え相構えて秘す可く秘す可き法門な
り、然りと雖も汝が志 神妙なれば其の名を出すなり一言の法是なり伝教
だいし いっしんさんかん
大師の一心三觀一言に伝うと書き給う是なり、問う未だ其の法体を聞かず
いかん しょうせん
如何、答う所詮一言とは妙法是なり、問う何を以て妙法は一心三觀に勝れ
たりと云う事を知ることを得るや、答う妙法は所詮の功德なり三觀は行者
かんもん
の觀門なる故なり此の妙法を伝説いて言く「道場所得法我法妙難思是法非
しりょうふか
思量不可以言宣」云云、天台の云く「妙は不可思議言語道斷・心行所滅なり
じゅうかい
法は十界十如・因果不二の法なり」と、三諦と云うも三觀と云うも三千と云
ふしぎ
うも共に不思議法とは云えども天台の已証天台の御思慮の及ぶ所の法門なり、
みょうほう しょうぶつ
此の妙法は諸仏の師なり今の經文の如くならば久遠実成の妙覺極果の仏

の境界きょうかいにして爾前にぜん・迹門しやくもんの教主諸仏きょうしゅしよぶつ・菩薩ぼさつの境界きょうかいに非あらず經に唯仏ゆいぶつ与よ仏ぶつ乃能究尽ないのうくじんとは迹門しやくもんの界如三千かいによさんぜんの法門ほうもんをば迹門しやくもんの仏ぶつが当分究竟とうぶんくきやうの辺を説けるなり、本地難思ほんちなんしの境智きやうちの妙法みやうほうは迹仏しやくぶつ等の思慮しりょに及およばず何いかに況いわんや菩薩ぼさつ・凡夫ぼんぶをや、止觀しかんの二字をば觀名仏知ぶつち・止名仏見ぶつけんと釈しやくすれども迹門しやくもんの仏智ぶつち・仏見ぶつけんにして妙覺極果みやうかくくつかの知見ちけんには非あらざるなり、其の故そのゆえは止觀しかんは天台てんだい己証こしやうの界如三千かいによさんぜん三諦三觀さんたいさんかんを正なと為なす迹門しやくもんの正意これ是なり、故ゆえに知しやくぶつんぬ迹仏ちけんの知見ちけんなりと云う事を但止觀しかんに絶待不思議ぜつたいふしぎの妙觀みやうかんを明あきらかすと云えども只一念三千ただいちねんさんぜんの妙觀みやうかんに且しばらく与ぜつたいふしぎて絶待不思議ぜつたいふしぎと名けるなり。

問う天台大師真実てんだいだいしんじつに此の一言みやうほうの妙法しやうとくを証得しやうとくしたまわざるや、答う内証ないしやう爾しからざるなり、外用がいように於おいては之これを弘通くわつうしたまわざるなり、所謂内証いわゆるないしやうの辺をば祕ひして外用がいようには三觀さんかんと号ごうして一念三千いちねんさんぜんの法門ほうもんを示現じげんし給たまうなり、問う何が故なぞ知り乍ながら弘通くわつうし給たまわざるや、答う時至いたらざるが故ゆえに付屬ふぞくに非あらざるが故ゆえに迹化しやつけ

なるが故なり、問う天台此の一言の妙法を証得し給える証拠之有りや、答
う此の事天台一家の祕事なり世に流布せる学者之を知らず灌頂玄旨の血脈
とて天台大師自筆の血脈一紙之有り、天台御入滅の後は石塔の中に之有り
伝教大師御入唐の時八舌の鑰を以て之を開き道邃和尚より伝受し給う血脈
とは是なり、此の書に云く、「一言の妙旨一教の玄義」文、伝教大師の血脈
に云く「夫れ一言の妙法とは両眼を開いて五塵の境を見る時は随縁真如な
るべし両眼を閉じて無念に住する時は不變真如なるべし、故に此の一言を聞
くに万法茲に達し一代の修多羅一言に含す」文、此の両大師の血脈の如くな
らば天台大師の血脈相承の最要の法は妙法の一言なり、一心三觀とは所詮
妙法を成就せん為の修行の方法なり、三觀は因の義妙法は果の義なり但
因の処に果有り果の処に因有り因果俱時の妙法を觀するが故に是くの如き
功能を得るなり、爰に知んぬ天台至極の法門は法華本・迹未分の処に無念の

止観しかんを立てて最祕さいひの大法だいほうとすと云える邪義じゃぎ大なる僻見びやっけんなりと云う事を四依しえ
弘經くきようの大薩さつたは既に仏經ぶつぎように依つて諸論しよを造る天台てんだい何ぞ仏説ぶつせつに背そむいて無念むねんの
止観しかんを立てたまわんや、若し此もの止観しかん・法華經ほけきように依らずといわば天台てんだいの止観しかん
教外別伝きようげべつでんの達磨だるまの天魔てんまの邪法じゃほうに同ぜん都て然る可からず哀れなり哀れなり。
伝でん教大師ぎようだいしの云いく「国主こくしゆの制せいに非あらざれば以て遵行じゆんぎようする無く法王ほうおうの教ぎやうに
非あらざれば以て信受しんじゆすること無けん」と文、又云いく「四依論しえを造るに権有けんり実
有さんじようり三乗さんじよう旨むねを述ぶるに三有さんり一有いり、所以ゆえんに天台智者てんだいちしやは三乗さんじようの旨むねに順じゆんじて
四教しきようの階かいを定め一実いちじつの教ぎやうに依つて一仏乘いちぶつじようを建つ、六度ろくどに別有べつり、戒度かいど何なんぞ同
じからん受法じゆほう同じからず威儀いぎ豈あに同じからんや、是かくのゆえの故ゆえに天台てんだいの伝法でんほうは深く四依しえ
に依より亦また仏經ぶつぎように順したがう「文、本朝ほんちようの天台宗てんだいしゆうの法門ほうもんは伝教大師でんぎようだいしより之これを始はじむ
若もし天台てんだいの止観しかん・法華經ほけきように依らずと云わば日本にほんに於おいては伝教でんぎようの高祖こうそに背そむき
漢土かんとに於おいては天台てんだいに背そむく兩大師だいいしの伝法でんほう既に法華經ほけきように依よる豈あに其まつがくの末学まつがく之これに違ちがせ

んや、違^いするを以^{もつ}て知^しんぬ当^{とう}世^せの天台^{てんだい}家の人人^{ひとびと}其^その名^なを天台^{てんだい}山^{さん}に借^かると雖^{いえど}も
所^{しよ}学^{がく}の法^{ほう}門^{もん}は達^だ磨^まの僻^{びや}見^{けん}と善^{ぜん}無^む畏^いの妄^{もう}語^ごとに依^よると云^いう事^{こと}、天台^{てんだい}・伝^{でん}教^{ぎょう}の
解^げ釈^{しやく}の如^{ごと}くんば己^こ心^{しん}中^{ちゆう}の秘^ひ法^{ほう}は但^み法^{ほう}の一^い言^{ごん}に限^かるなり、然^{しか}而^る当^{とう}世^せの天台^{てんだい}宗^{しゆう}
の学^{がく}者^{しや}は天台^{てんだい}の石^{けち}塔^{みやく}の血^ち脈^{みやく}を秘^うし失^{しな}う故^{ゆえ}に天台^{てんだい}の血^{けち}脈^{みやく}相^{そう}承^{じゆう}の秘^ひ法^{ほう}を
習^うい失^{しな}いて我^いと一^{いつ}心^{しん}三^{さん}觀^{かん}の血^{けち}脈^{みやく}とて我^が意^いに任^ませて書^かを造^{つく}り錦^{きん}の袋^{ふくろ}に入^いれて
頸^{けい}に懸^かけ箱^{はこ}の底^{そこ}に埋^ためて高^{たか}直^なに売^ゆる故^{ゆえ}に邪^じ義^ぎ国^{こく}中^{ちゆう}に流^る布^ふして天台^{てんだい}の仏^{ぶつ}法^{ぽう}破^は失^{しつ}
するなり、天台^{てんだい}の本^{ほん}意^いを失^うい釈^{しやく}尊^{そん}の妙^{みょう}法^{ほう}を下^さす是^これ偏^{へん}えに達^だ磨^まの教^{きょう}訓^{くん}
善^{ぜん}無^む畏^いの勧^{すめ}なり、故^{ゆえ}に止^し觀^{かん}をも知^しらず一^{いつ}心^{しん}三^{さん}觀^{かん}・一^{いつ}心^{しん}三^{さん}諦^{たい}をも知^しらず
一^{いち}念^{ねん}三^{さん}千^{せん}の觀^{くわん}をも知^しらず本^{ほん}・迹^{しやく}二^に門^{もん}をも知^しらず相^{さう}待^{たい}
・絶^{ぜつ}待^{たい}の二^に妙^{めう}をも知^しらず法^ほ華^けの妙^{みょう}觀^{くわん}をも知^しらず教^{きょう}相^{さう}をも知^しらず權^{こん}実^{じつ}をも知^しらず四^し教^{きょう}・八^{はつ}教^{きょう}をも知^しらず五^ご時^じ・五^ご味^みの施^せ化^けをも知^しらず、教^{きょう}・機^き・時^じ・国^{こく}・
相^{さう}応^{おう}の義^ぎは申^{もう}すに及^{およ}ばず実^{じつ}教^{きょう}にも似^にず權^{こん}教^{きょう}にも似^にざるなり道^{どう}理^りなり道^{どう}理^りなり

り。

天台・伝教の所伝は法華經は禪・真言より劣れりと習う故に達磨の邪義・

真言の妄語と打ち成つて權教にも似ず実教にも似ず二途に摂せざるなり、

故に大謗法罪顕れて止觀は法華經に勝ると云う邪義を申し出して過無き天台

に失を懸けたてまつる故に高祖に背く不孝の者・法華經に背く大謗法罪の者

と成るなり。

夫れ天台の觀法を尋ぬれば大蘇道場に於て三昧開發せしより已來目を開い

て妙法を思えば隨緣真如なり目を閉じて妙法を思えば不變真如なり此の兩

種の真如は只一言の妙法に有り我妙法を唱うる時・万法茲に達し一代の

修多羅一言に含す、所詮迹門を尋ぬれば迹広く本門を尋ねぬれば本高し如か

じ己心の妙法を觀ぜんにはと思食されしなり、当世の学者・此の意を得ざる

が故に天台已証の妙法を習い失いて止觀は法華經に勝り禪宗は止觀に勝れ

たりと思ほいて法華經ほけきようを捨てて止觀しかんに付き止觀しかんを捨てて禪宗ぜんしゅうに付くなり、禪宗ぜんしゅうの一門いちもん云く松かかに藤懸からる松枯かられ藤枯かられて後いかん如何上いかんらずして一枝いちなんと云える
天魔てんまの語ことばを深く信しんずる故ゆゑなり、修多羅しゆたらの教主きようしゆは松ことの如ごとく其その教法きようほうは藤ふの如ごとく各じやうろんに諍論いえんすと雖いへども仏にやうめつも入滅きやうほうして教法いとくの威徳こくも無なし愛こくに知しんぬ修多羅しゆたら
の仏教ぶつぎやうは月づきを指さす指さなり禅ぜんの一法いっぽうのみ独妙どくみやうなり之これを觀かんずれば見性得達けんしやうとくだつする
なりと云いふ大謗法ほうぼうの天魔てんまの所為しゆいを信しんずる故ゆゑなり、然而しかるに法華經ほけきようの仏じゆみやうむりやうは壽命無量
常住じやうじやうぶめつ不滅ふめつの仏ぜんじやうなり、禪宗ぜんしゅうは滅度めつどの仏ゆゑと見るが故ゆゑに外道げどうの無なの見けんなり、
是法住法位世間相ぜっぽうじゆつせけん常住じやうじやうの金言きんげんに背そむく僻見びやくけんなり、禅ぜんは法華經ほけきようの方便無得道ほうべん とくどうの
禅ぜんなるを真実しんじつじやうじやう常住じやうじやう法ほつと云いふが故ゆゑに外道げどうの常見じやうけんなり、若もし与よえて之これを言のたまわば
仏ほうべんさんぞうの方便三蔵ぶんざいの分齊ぶんさいなり若もし奪はつて之これを言のたまわば但外道げどうの邪法じやほうなり与よは当分とうぶんの
義ぎ・奪はつて法華ほつの義ぎなり法華ほつの奪はつて之これを以もつての故ゆゑに禅ぜんは天魔てんま・外道げどうの法ほつと云いふ
なり、問もんう禅ぜんを天魔てんまの法ほつと云いふ証拠しやうこ如何いかん、答こたう前前さきさきに申もうすが如ごとし。

七三 立正觀抄送狀

ぶんえい
文永十二年二月 五十四歳御作 与最蓮房日淨 534P

このたび おんつかい
今度の御使い誠に御志の程顕れ候い畢んぬ又種種の御志慥に給候い畢んぬ。

そもそもうけたま

抑承わり候、当世の天台宗等止觀は法華經に勝れ禅宗は止觀に勝る、

かんじん

又觀心の大教興る時は本・迹の大教を捨つと云う事先ず天台一宗に於て流流

かくべつ

各別なりと雖も慧心檀那の両流を出でず候なり、慧心流の義に云く止觀の一

なす

部は本・迹二門に亘るなり謂く止觀の六に云く「觀は仏知と名く止は仏見と

なす

名く念念の中に於て止觀現前す乃至三乗の近執を除く」文、弘決の五に云く

すで

「十法既に是れ法華の所乗なり是の故に還つて法華の文を用いて歎ず、若し

しゃくせつ

迹説に約せば即ち大通智勝仏の時を指して以て積劫と為し寂滅道場を

もつ

以て妙悟と為す、若し本門に約せば我本行菩薩道の時を指して以て積劫と

為し本成仏の時を以て妙悟と為す本・迹二門只是此の十法を求悟す「文、始
の一文は本門に限ると見えたり次の文は正しく本・迹に亘ると見えたり、止観
は本・迹に亘ると云う事文証此に依るなりと云えり、次に檀那流には止観は
迹門に限ると云う証拠は弘決の三に云く、「還つて教味を借つて以て妙円を
顯す。故に知んぬ一部の文共に円成の開権妙觀を成ずるを」文、此の文に依ら
ば止觀は法華の迹門に限ると云う事文に在りて分明なり兩流の異義替れど
も共に本・迹を出でず当世の天台宗何くより相承して止觀は法華經に勝る
と云うや、但し予が所存は止觀法華の勝劣は天地雲泥なり。

若し与えて此を論ぜば止觀は法華迹門の分齊に似たり、其の故は天台大師
の己証とは十徳の中の第一は自解仏乘第九は玄悟法華円意なり、靈応伝の第
四に云く、「法華の行を受けて二七日境界す」文、止觀の一に云く、「此の止觀
は天台智者己心中に行ずる所の法門を説く」文、弘決の五に云く、「故に止觀

まさ かにぼう
に正しく観法を明すに至つて並びに三千を以て指南と為す。故に序の中に
いわ こしんちゆう ほうもん
云く己心中に行ずる所の法門を説く。文、己心所行の法とは一念三千・
いっしんさんかん さんたいさんかん
一心三觀なり三諦三觀の名義は瓔珞・仁王の二經に有りと雖も一心三觀・
いちねんさんぜん こしんしぎよう ほうもん しゃくもん じつそう
一念三千等の己心所行の法門をば迹門十如実相の文を依文として釈成し
たまひ おわ
給い畢んぬ。

ここ しかん しゃくもん ぶんざい
爰に知んぬ止觀一部は迹門の分齊に似たりと云う事を若し奪つて之を論ぜ
にぜんごんだいじよう そくべきよう ぶんざい そのゆえ てんだいこじよう しかん どうじよう
ば爾前権大乘・即別教の分齊なり其の故は天台己証の止觀とは道場所得の
みようこ いわゆるてんだいだいし だいそ ぶんげんどうじよう おい さんまいかいほつ もつ
妙悟なり所謂天台大師・大蘇の普賢道場に於て三昧開發し証を以て師に白す
いわ ほつけ ほうべんだらに れいおうでん いわ ちぎ
師の曰く法華の前方便陀羅尼なりと靈応伝の第四に云く「智・師に代つて
金字經を講ず一心具足万行の処に至つて・疑有り思・為に釈して曰く汝
うたがい すなわだいぼんしだい いま ほつけえんどん わね
が疑う所は此乃ち大品次第の意なるのみ未だ是法華円頓の旨にあらざるな
り」文、講ずる所の經既に権大乘經なり又次第と云えり故に別教なり、開發
こう すで ごんだいじようきよう しだい ゆえ べつきよう かいほつ

せし陀羅尼だらに又法華ほっけ前方便ほうべんと云えり故ゆえに知んぬ爾前にぜんたいこん帶權べつきょうの經・別教ぶんざいの分齊ぶんざいなり
と云う事を・己証こしやうすで既に前方便ほうべんの陀羅尼だらになり止觀しかんとは己心中こしんちゆうしよぎよう所行しやうもんの法門ほうもんを説く
と云うが故ゆえに、明かあきらに知んぬ法華ほっけの迹門しやくもんに及およばずと云う事を何いかに況いわんやや本門ほんもんを
や、若もし此の意を得ば檀那だんな流りゅうの義ぎ尤も吉きちなり此等これらの趣もつを以もつて止觀しかんは法華ほっけに勝まさる
と申もうす邪義じゃぎをば問答もんどう有ある可いさいく候むねか、委細いさいの旨むねは別べつに一巻書まいき進まいらせ候まいなり、
又日蓮相承にちれんそうじやうの法門ほうもん血脈けつみく慥たしかに之これを註たてまつし奉きようきようきんげんる、恐恐きようきよう謹言きんげん
ぶんえい きのと

文永十二乙亥二月二十八日

日蓮 花押

最蓮房御返事

七四 顯立正意抄

ぶんえい

文永十一年十二月

五十三歳御作

536P

日蓮去る正嘉元年しやうかがんねん太歳丁巳ひのとこ八月二十三

日蓮

日蓮

日蓮

日蓮

日蓮

日蓮

立正安国論りつしやうあんこくろんに云く「薬師經やくしの七難ひちなんの内五難なんごなん忽たちまちに起おこつて二難なんに猶なほ残のこれり所以ゆえん

立正安国論

立正安国論

立正安国論

立正安国論

立正安国論

他国侵逼たこくしんびつの難なん・自界叛逆じかいほんぎやくの難なんなり、大集經だいしつきやうの三災さんさいの内二災なんに早く顯あらわれ一災いまだ未いまだだ

他国侵逼

他国侵逼

他国侵逼

他国侵逼

他国侵逼

おこ
起らず、所以兵革の災なり、金光明經の内の種種の災過一一起ると雖も他方
おんぞくこくない しんりやく
の怨賊国内を侵掠する此の災未だ露われず此の難未だ来らず、仁王經の七難
なん さかん
の内六難今盛にして一難未だ現ぜず所以四方より賊来つて国を侵すの難なり、
しかのみならず国土乱れん時は先ず鬼神乱る鬼神乱る故に万民乱ると、今
・此の文に就て具さに事の情を案ずるに百鬼早く乱れ万民多く亡びぬ先難
こ こつさいなん うたが も
是れ明なり後災何ぞ疑わん若し残る所の難・悪法の科に依つて並び起り競い
そのとき
来らば其の時何為や、帝王は国家を基として天下を治む、人臣は田園を領し
せじょう
て世上を保つ、而るに他方より賊来つて此の国を侵逼し自界叛逆して此の地
りやくりょう
を掠 領せば豈驚かざらんや豈騒がざらんや、国を失い家を滅せば何れの所
のが
にか世を遁れん」等云云已上 立正安国論の言なり。
いまにちれんかさ しる
今日蓮重ねて記して云く大覺世尊記して云く 苦得外道七日有つて死す可し
じきどき
死して後食吐鬼に生れん苦得外道の言く七日の内には死す可からず我羅漢を

得て餓鬼道に生れじと」等云云、瞻婆城の長者の婦懷妊す六師外道の云く「女子を生まん」仏記して云く「男子を生まん」等云云、仏記して云く「卻て後三月あつて我当に般涅槃すべし」等云云、一切の外道云く「是れ妄語なり」等云云、仏の記の如く二月十五日に般涅槃し給う、法華經の第二に云く「舍利弗汝未來世に於て無量無辺不可思議劫を過て乃至當に作仏するを得べし号をば華光如来と曰わん」等云云、又第三の卷に云く「我が此の弟子摩訶迦葉未來世に於て當に三百万億に奉觀することを得べし乃至最後身に於て仏と成ることを得ん名をば光明如来と曰わん」等云云、又第四の卷に云く「又如来滅度の後に若し人有つて妙法華經の乃至一偈・一句を聞いて一念も隨喜せん者には我亦阿耨多羅三藐三菩提の記を与え授く」等云云、此等の經文は仏・未來世の事を記し給う、上に挙ぐる所の苦得外道等の三事・符合せずんば誰か仏語を信ぜん・設い多宝仏証明を加え分身の諸仏長舌を梵天に付

くとも信用し難きか、今亦以て是くの如し設い日蓮富楼那の弁を得て目連の
通を現げんずとも勘かんうる所・当らずんば誰か之を信ぜん、去ぬる文永五年に蒙古
国の牒状渡来する所をば朝に賢人有らば之を怪む可し、設い其れを信ぜ
ずとも去る文永八年九月十二日御勘氣を蒙りしの時・吐く所の強言次の年二
月十一日に符合せしむ、情有らん者は之を信ず可し何に況や今年既に彼の国
災兵の上二箇国を奪い取る設い木石為りと雖も設い禽獸為りと雖も感ず可く
驚く可きに偏えに只事に非ず天魔の国に入つて醉えるが如く狂えるが如く
歎く可し哀む可し恐る可し厭う可し、又立正安国論に云く「若し執心翻え
らずして亦曲意猶存せば早く有為の郷を辞して必ず無間の獄に墮せん」等云
云、今・符合するを以て未来を案ずるに日本国の上下・万人阿鼻大城に墮ち
んこと大地を的と為すが如し、此等は且らく之を置く日蓮が弟子等又此の
大難脱れ難きか彼の不輕輕毀の衆は現身に信伏随従の四字を加れども猶先謗

の強きに依つて先ず阿鼻大城に墮して千劫を經歷して大苦悩を受く、
今日蓮が弟子等も亦是くの如し・或は信じ・或は伏し・或は随い・或は従う
但だ名のみ之を仮りて心中に染まざる信心薄き者は設い千劫をば経ずとも
・或は一無間・或は二無間乃至十百無間・疑無からん者か是を免れんと
欲せば各・薬王・楽法の如く臂を焼き皮を剥ぎ雪山国王等の如く身を投げ心
を仕えよ、若し爾らずんば五体を地に投げ・身に汗を流せ、若し爾らずんば
珍宝を以て仏前に積み若し爾らずんば奴婢と爲つて持者に奉えよ若し爾らず
んば・等云云、四悉檀を以て時に適うのみ、我弟子等の中にも信心薄淡き者
は臨終の時阿鼻獄の相を現ず可し其の時・我を恨む可からず等云云。

文永十一年太歲甲戌十二月十五日 日蓮之を記す

七五 上行菩薩 結要付属口伝

建治元年 五十四歳御作 於身延 538P

妙法蓮華經見宝塔品第十一「爾の時に仏前に七宝の塔有り」と云云、又云く
「即時に釈迦牟尼仏神通力を以て諸の大衆を接して皆虚空に在たもう、大
音声を以て普く四衆に告げたまわく誰か能く此の娑婆国土に於て広く
妙法華經を説かん今正く是れ時なり如来久しからずして当に涅槃に入るべし
仏・此の妙法華經を以て付屬して在ること有らしめんと欲す」云云、又云く
「諸余の教典数恒沙の如し」と云云、又云く「諸の大衆に告ぐ我滅度の後
に誰か能く斯の經を護持し読誦せん今・仏前に於て自ら誓言を説け」と又云く
「此の經は持ち難し若し暫くも持つ者は我即ち歡喜す諸仏も亦然なり是の如
きの人は諸仏の歎め給う所なり」と云云、妙法蓮華經勸持品第十三「爾時
藥王菩薩摩訶薩及び大樂説菩薩摩訶薩二万の菩薩眷屬と俱に皆仏前に於て
是の誓言を作さく唯・願くば世尊以て慮したもうべからず我等・仏の滅後に
於て当に此の經典を奉持し読誦し説きたてまつるべし、後の惡世の衆生は

ぜんこんつた
善根転た少くして増上慢多く利供養を貪り不善根を増し解脱を遠離せん教化
すべきこと難しと雖も我等当に大忍力を起して此の經を誦誦し持説し書写し
種種に供養して身命を惜まざるべし、爾の時に衆中の五百の阿羅漢の授記
を得たる者・仏に白して言さく世尊・我れ等亦自ら誓願すらく異の国土に
於て広く此の經を説かんと、復学無学の八千人の授記を得たる者有り座從り
起て合掌し仏に向いたてまつりて是誓言を作さく世尊・我等亦当に他の国土
に於て広く此の經を説きたてまつるべし・所以は何ん是の娑婆国の中は人・
へいあく 弊惡多く増上慢を懷き功德淺薄に瞋濁諂曲にして心不実なるが故に」と云
云、又云く「爾の時に世尊・八十万億那由佗の諸の菩薩摩訶薩を視す是の
諸の菩薩は皆是阿惟越致なり、即時に諸の菩薩俱に同く声を發して偈を説い
て言さく、唯願くは慮したもうべからず仏の滅度の後・恐怖惡世の中に於て
我等当に広く説くべし諸の無智の人の惡口罵詈等し及び刀杖を加うる者有ら

ん我等皆當に忍ぶべし、惡世の中の比丘は邪智にして心諂曲に未だ得ざるを
これ得たりと謂い我慢の心充滿せん、或は阿練若に納衣にして空閑に在り
自ら眞の道を行ずと謂いて人間を輕賤する者有らん、利養に貪著するが
故に白衣の与に法を説いて世に恭敬せらるること六通の羅漢の如くならん
是の人惡心を懷き常に世俗の事を念い名を阿練若に仮りて好んで我等の過を
出ださん、濁世の惡比丘は仏の方便・隨宜所説の法を知らずして惡口して
顰蹙し数数擯出せられん」と云云。

文句の八に云く「初めに一行は通じて邪人を明す即ち俗衆なり、次に一行
は道門増上慢の者を明す、三に七行は僭聖増上慢の者を明す、故に此の三
の中初めは忍ぶ可し次は前に過ぐ第三は最も甚し」と云云。

涌出品に云く「爾の時に他方の国土の諸の來れる菩薩摩訶薩八恒河沙の数
過ぎたり、大衆の中に於て起立し合掌し礼を作して仏に白して言く、

世尊若し我等に仏の滅後に於て此の娑婆世界に在つて勤加精進し是の經典を護持し読誦し書寫し供養せんことを聴したまわば当に此の土に於て廣く之を説きたてまつるべし、爾の時に仏諸の菩薩摩訶薩衆に告く止みね善男子汝等が此の經を護持せんことを須いじ所以は何ん我が娑婆世界に自ら六万恒河沙等の菩薩摩訶薩有り、一一の菩薩各六万恒河沙の眷屬有り是の諸人等能く我が滅後に於て護持し読誦し廣く此の經を説かん」と云云五卷畢。

屬累品に云く「爾の時に釈迦牟尼仏法座從り起つて大神力を現じたもう右の手を以て無量の菩薩摩訶薩の頂を摩でて是の言を作したまわく我無量百千万億・阿僧祇劫に於て是の得難き阿耨多羅三藐三菩提の法を修習せり今以て汝等に付屬す汝等當に一心に此の法を流布して廣く増益せしむべし、是くの如く三たび諸の菩薩摩訶薩の頂を摩でて是の言を作したまわく我無量百千万億・阿僧祇劫に於て是の得難き阿耨多羅三藐三菩提の法を修習

せり今^{もつ}以て汝^{なんじ}等に付^ふ属^{ぞく}す、汝^{なんじ}等当^{まさ}に受持^{じゆじ}読誦^{どくじゆ}し広^のく此^{この}の法^{ほふ}を宣^{のたま}べて一切^{いっさい}衆生^{しゆじやう}をして普^{あまね}く聞知^{もんち}することを得^えせしむべし所以^{ゆえん}は何^{いか}ん如来^{にょらい}は大慈^{じひ}悲有^ひつて諸^{もろもろ}の慳^{けんりん}なく亦^{また}畏^{おそ}る所^{なく}無^よく能^{しゆじやう}く衆生^{しゆじやう}に仏^{ぶつ}の智慧^{ちえ}・如来^{にょらい}の智慧^{ちえ}・自然^{じねん}の智慧^{ちえ}を与^よう如来^{にょらい}は一切^{いっさい}衆生^{しゆじやう}の大施^{だいせしゆ}主^{ぬし}なり汝^{なんじ}等亦^{また}随^{したが}つて如来^{にょらい}の法^{ほふ}を学^{まな}ぶべし慳^{けんりん}を生^なずること勿^{なか}れ」と云^いふ。

文句^{もんく}の九^くに云^いふ品^{ひん}下^{くだ}「如来^{にょらい}之^{これ}を止^{とど}めたもうに凡^{およ}そ三義^{さんぎ}有^あり、汝^{なんじ}等各^{なんじ}各^ごに自^{みづか}ら己^{おの}が任^も有^あり若^もし此^{この}の土^どに住^りせば彼^かの利益^{りやく}を廃^{はい}せん、又^{また}他^た方^{ほう}は此^し土^ど結縁^{けつえん}の事^{こと}浅^{せん}し・宣授^{せんじゆ}せんと欲^ほすと雖^いも必^きず巨益^{きよやく}無^なからん又^{また}若^もし之^{これ}を許^{ゆる}さば則^{すな}ち下^{くだ}を召^めすことを得^えず下^{もと}若^もし来^きらずんば迹^{あと}を破^はすることを得^えず遠^{えん}を顕^{あらわ}すことを得^えず是^{これ}を三義^{さんぎ}もつて如来^{にょらい}之^{これ}を止^{とど}めたもうと為^なす、下^{した}方^{ほう}を召^めして来^きらしむるに亦^{また}三義^{さんぎ}有^あり是^これ我^{われ}が弟子^{でし}なり我^{われ}が法^{ほふ}を弘^{ひろ}むべし縁深^{じんこ}広^くなるを以^{もつ}て能^よく此^{この}の土^どに遍^{へん}じて益^{やく}し分^{ぶん}身^{しん}の土^どに遍^{へん}して益^{やく}し他^た方^{ほう}の土^どに遍^{へん}して益^{やく}す、又^{また}開^{かい}近^{こん}顕^{けん}遠^{えん}するこ

とを得是かくのゆえの故に彼を止めて下を召すなり」と云云。

記に云く、「問う諸の仏・菩薩は共に未熟みじゆくを熟す何の彼此有らん分身散影ふんじんさんようし

て普く十方に遍す而るを己任及び廃彼はいひと言うや、答う諸の仏・菩薩は實に

彼此無し但機きに在無有むしほうにり無始法爾ゆえなり故に第二の義を以て初の義を顕あらわして

結縁事けちえん浅と云う、初め此の仏・菩薩に従つて結縁けちえんし還つて此の仏・菩薩に

於て成就おひす」と云云、又云く、「子父の法を弘ひろむるに世界の益有せかいり」と云云、

記の八に云く、「因藥王やくおうとは本藥王に託し茲ここに因せて余に告ぐ此れ流通りつうの初な

り先に八万の大士に告ぐとは、大論だいろんに云く法華ほっけは是秘密ひみつなれば諸の菩薩もろもろに付

すと、下の文に下方を召すが如ごときは尚本眷属なほ けんぞくを待つ 驗あけられし余は未だ堪たえず」

云云、問う何が故たほうぞ他方とどを止めて本眷属けんぞくを召すや、答う私の義有ある可べからず靈山りようぜん

の聴衆ちようしゆう天台たいたいの所判しよはんに任まかす可べし、疏じよに云く、「涌出ゆじゆつに三と為す一には他方たほうの

菩薩ぼさつ弘經きやうきやうを請しやうす・二には如來許にやらいゆるしたまわす・三には下方の涌出ゆじゆつなり、他方たほうの

菩薩は通經の福の大なることを聞いて咸く願を發し此の土に住して弘宣んと欲するが故に請ず、之が為に如來之を止めたもう」等と云云。

結要付属の事

初に称 歎付属・爾時仏告 猶不能尽

結要勸持四 一二に結要付属以要言之 宣示顯說

三に正勸付属是故汝等起塔供養

四に釈勸付属所以者何而般涅槃

疏の十に云く「爾時仏告 上行の下は是れ第三に結要付属なり」と云云、又

云く「結要に四句有り、一切法とは一切皆是れ仏法なり此は一切皆妙名を結

するなり一切力とは通達無礙にして八自在を具す此れは妙用を結するなり

一切秘藏とは一切処に遍して皆是れ実相なり・此れは妙体を結するなり一切

深事とは因果は是れ深事なり此は妙宗を結するなり、皆於此經宣示顯說とは

総じて一經いっきようを結する唯ただ四しならくのみ其その枢柄すうへいを撮とつて之これを授与じゅよす」と云云、記
に云く「結要有四句とは本・迹二門に各宗用有り二門の体は兩処殊ことならず」
と云云輔正記に云く付属ふぞくとは此の經は唯ただ下方涌出ゆじゆつの菩薩ぼさつに付す何を以ての
故に爾る法是れ久成くじようの法なるに由るが故に久成くじようの人に付す云云。

一 正く付属ふぞく

初に付属ふぞくに三 一 如来にょらいの付属ふぞく 二 付属ふぞくを釈しゃくす

三 付属ふぞくを誡いましむ余じんぼうの深法じんぼう

の中の下なり

属累品の文段に二有り

二 菩薩ぼさつの領受

三 事畢て唱散す

次に時衆かんきの歡喜 説是語時しよの下三行余

第一の五百歳 解脱堅固げだつけんこ

第二の五百年

ぜんじょうけんこ
禪定堅固

だいしつきよう

大集經の五箇五百年とは

第三の五百年

どくじゆたぶんけんこ
読誦多聞堅固

第四の五百年

たぞうとうじけんこ
多造塔寺堅固

第五の五百年

とうじょうけんこ
鬪諍堅固

そ ほとけめつど

夫れ仏滅度の後二月十六日より正法なり、迦葉仏の付屬を請け次に阿難

尊者・次に商那和修・次に優婆

うばきくた

多・次に提多迦此の五人各各二十年にして

尊者・次に商那和修・次に優婆 多・次に提多迦此の五人各各二十年にして

一百年なり、其の間は但

そ

小乗經

の法門のみ弘通して諸大乗經は名字もな

いかに況や法華經をや、次に弥遮迦・仏陀難陀・仏駄密多・脇比丘・富那奢

等

の五人は五百年の間・大乘の法門少少出来すと雖も取立てて弘通せず但

小乗經を正と為す已上大集經の前の五百年解脱堅固に当れり、正法の後

の五百年には馬鳴・竜樹乃至師子等の十余人の人人始には外道の家に入り次

には小乗經を極め後には諸大乘經を以て散散に小乗經等を破失しき、

しか
然りと雖もいへど 権大乘ごんだいじょう と法華經ほけきょう との勝劣しょうれつ 未だ分明ふんみょう ならず浅深せんじん を書かせ給たまいしか
ども本・迹へうもん の十妙・二乗作仏にじょうさぶつ ・久遠実成くおんじつじょう ・已今当等いこんとう ・百界千如ひゃつかいせんによ ・一念三千いちねんさんぜん
の法門ほうもん をば名をも書き給たまわらず此大集經だいしつきょう の禅定堅固ぜんじょうけんこ に当れり、次に像法ぞうほう に入
つては天竺てんじく は皆権実みなごんじつ 雜乱じこく して地獄だ に墮する者数百人ありき、像法ぞうほう に入つて一
百余年の間は漢土かんど の道士どうし と月氏がっし の仏法ぶつぽう と諍論じょうろん 未だ事定らざる故ゆえ に仏法ぶつぽう を信ず
る心未だ深いま からずまして権実ごんじつ を分わか くる事なし、摩騰竺法蘭まつじくほうらん は自は知りて而も
大小だいしう を分わか たず権実ごんじつ までは思いもよらず、其そ の後・魏・晋・宋・齊・梁の五代
の間漸ようや く仏法ぶつぽう の中に大小だいしう ・権実ごんじつ ・顕密けんみつ を諍あらそ いし程いすれ に何れをも道理どうり と聞えず
南三なんさん ・北七ほくひち の十流が ・我意が に仏法ぶつぽう を弘ひろ む、爾しか れども大おお に分わか つに一切經いっさいきやう の中には
一け には華嚴けこん ・二ね には涅槃ねはん ・三ほ には法華ほっけ と云云、爾しか れども像法ぞうほう の始の四百年に
當てん つて天台大師震旦しんたん に出しゆつげん 現し して南北じやぎ の邪義じやぎ ・一これ 一は 之を 破おわ し畢おわ んぬ、此
大集經だいしつきょう の多聞堅固たもんけんこ の時に当れり、像法ぞうほう の後の五百年には三論さんろん ・法相ほつそう ・乃至ないし ・

真言等を各三蔵将来す、像法に入つて四百余年あつて日本国へ百済国より
一切経並に釈尊の木像僧尼等を渡す梁の末・陳の始めに相当る日本国には
神武天皇より第三十代欽明天皇の御宇なり、像法の後の五百年に三論・法相
等の六宗面々の異義あり爾れども各邪義なり、像法八百年に相当つて伝教
大師・日本に出でて彼の六宗の義を皆責め伏せ給えりと云云、伝教已後に
は東寺・園城寺等の諸寺日本一同に云く、「真言宗は天台宗に勝れたり」と
云云、此大集経の多造塔寺堅固の時なり今末法に入つて仏滅後・二千二百二
十余年に当りて聖人出世す是は大集経の鬪諍言訟白法隱没の時なり云
云、夫れ釈迦の御出世は住劫第九の滅・人寿百歳の時なり百歳と十歳との
中間は在世は五十年・滅後は正像二千年と末法一万年となり、其の中間に
法華經流布の時二度之れ有る可し、所謂在世の八年・滅後には末法の始の五
百年なり。

そ 夫れ仏ぶつ法ぽうを学まなぶる法ぽうには必ず時ときを知る可べきなり過去かこの大だい通つう智ち勝しょう仏ぶつは出世しゅつせし
給たまいて十じゅう小せう劫けつが間いち偈げも之これを説せつかず經きやうに云いく、「一坐いっ十じゅう小せう劫けつ」と云云、又云く
「仏・時とき未いだ至いたらずと知ししめして請しょうを受け默もく然ねんとして坐ざしたまえり」と、今
の教主きやうしゅ釈しやく尊そんも四十余年よんじゅうよねんの間まは法ほ華け經きやうを説せつきたまわす經きやうに云いく、説せつ時じ未いだ至いたら
ざるが故ゆゑなり」等云云、老子らうしは母ははの胎たに処しよして八十年はちじゅうねん・彌勒みらく菩ぼ薩さつは兜率とそつの内うち
院いんにして五十六億七千万歳せんまんを待まちたもう仏ぶつ法ぽうを修しゆ行ぎやうする人ひと人びと時ときを知らざらん
や、爾しからば末まつ法ぽうの始はじめには純じゆん円えん一いち実じつの流る布ふとは知らざれども經きやう文もんに任まかするに
「我めつが滅めつ度どの後ご・後ごの五ご百ひやく歳さいの中ちゆうに閻えん浮ぶ提だいに広こう宣せん流る布ふして断だん絶ぜつせしむること
無なけん」と云云、誠もつに以もつて分ぶん明みやうなり。

七六 法華初心成仏抄

建治三年 五十六歳御作 与岡宮妙法尼 544P

問うて云く八宗・九宗・十宗の中に何か釈迦仏の立て給へる宗なるや、答
えて云く法華宗は釈迦所立の宗なり其の故は已説・今説・当説の中には
法華経第一なりと説き給う是れ釈迦仏の立て給う処の御語なり、故に法華経
をば仏立宗と云い又は法華宗と云う又天台宗とも云うなり、故に伝教大師
の釈に云く天台所釈の法華の宗は釈迦世尊所立の宗と云へり、法華より外の
經には全く已今当の文なきなり已説とは法華より已前の四十余年の諸經を云
う今説とは無量義經を云う当説とは涅槃經を云う此の三説の外に法華経計り
成仏する宗なりと仏定め給へり、余宗は仏涅槃し給いて後・或は菩薩・或は
人師達の建立する宗なり仏の御定を背きて菩薩・人師の立てたる宗を用ゆべ
きか菩薩・人師の語を背きて仏の立て給へる宗を用ゆべきか又何れをも思ひ

思いに我が心に任せて 志 あらん経法を

持つべきかと思う 処に仏是を兼て知し召して末法濁悪の世に真実の道心あ

らん人人の持つべき経を定め給へり、経に云く「法に依つて人に依らざれ・

義に依つて語に依らざれ知に依つて識に依らざれ・了義経に依つて

ふりようぎきよう 不了義経に依らざれ」文、此の文の心は菩薩・人師の言には依るべからず仏

の御定を用いよ華嚴・阿含・方等・般若経等の真言・禅宗・念仏等の法に

は依らざれ了義経を持つべし了義経と云うは法華経を持つべしと云う文な

り。

問うて云く今・日本国を見るに当時五濁の障重く闘諍堅固にして瞋恚の

心猛く嫉妬の思い甚しかかる国かかる時には何れの経をか弘むべきや、答

えて云く法華経を弘むべき国なり、其の故は法華経に云く「閻浮提の内に広

く流布せしめて断絶せざらしめん」等云云、瑜伽論には丑寅の隅に大乘・

妙法蓮華經みょうほうれんげきょうの流布るふすべき小国しょうこくありと見えた

り、安然和尚あんねんわじょう云く「我が日本国にほんこく」等云云、天竺てんじくよりは丑寅うしとらの角すみに此この日本国にほんこく

は当るなり、又慧心僧都えしんそうずの一乗要決いちじょうようけつに云く、日本にほん一州円機えんきじゆんいつ純じゆん一にして朝野遠近おんこん

同く一乗いちじょうに帰し緇素貴賤しそきせん悉ことごとく成仏じやうぶつを期せん、云云、此の文の心は日本国にほんこくは

京鎌倉・筑紫・鎮西ちくしみちをく・遠きも近きも法華一乗ほつけいちじょうの機きのみ有りて上も下

も貴も賤も持戒じかいも破戒はかいも男も女も皆みなおしなべて法華經ほけきょうにて成仏じやうぶつすべき国なり

と云う文なり、譬たとえば崑崙山こんろんに石なく蓬萊山ほうらいさんに毒なきが如く日本国にほんこくは純に

法華經ほけきょうの国なり、而しかに法華經ほけきょうは元よりめでたき御經なれば誰か信ぜざると

語ことばには云うて而しかも昼夜朝暮ちやうばに弥陀念仏みだねんぶつを申す人は薬はめでたしとほめて

朝夕ちやうせき毒を服する者の如ごとし、或あるは念仏ねんぶつも法華經ほけきょうも一なりと云はん人は石も玉

も上じやうろう臍げろうも下臍げろうも毒も薬も一なりと云わん者の如ごとし、其その上法華經ほけきょうを怨あだみ嫉ねたみ

悪にくみ毀そしりり輕かろしめ賤やからむ族のみ多し、經に云く「一切世間・多怨難信たおんなんしん」又云く

「如來現在・猶多怨嫉・況滅度後」の經文少しも違はず当れり、されば
傳教大師の釈に云く「代を語れば則ち像の終り末の初め地を尋ぬれば唐の
東・羯の西・人を原めれば則ち五濁の生・鬪諍の時なり經に云く猶多怨嫉・
況滅度後と此の言良に以有るなり」と、此等の文釈をもつて知るべし、日本國
に法華經より外の真言・禪・律宗・念仏宗等の經教 山山寺寺朝野遠近に
弘まるといへども正く國に相應して仏の御本意に相叶ひ生死を離るべき法に
はあらざるなり。

問うて云く華嚴宗には五教を立て余の一切の經は劣れり華嚴經は勝ると云
ひ、真言宗には十住 心を立て余の一切經は顯經なれば劣るなり真言宗
は密教なれば勝れたりと云う、禪宗には余の一切經をば教内と簡いて教外
別傳・不立文字と立て壁に向いて悟れば禪宗独り勝れたりと云う、淨土宗
には正雜二行を立て法華經等の一切經をば捨閉閣抛し雜行と簡ひ淨土の

さんぶきよう 三部經を機に叶ひめでたき 正行なりと云う、各各・我慢を立て互に偏執を
な いずれ 作す何れか釈迦仏の御本意なるや、答えて云く宗宗各別に我が經こそすくれ
よきよう たれ余經は劣れりと云いて我が宗・吉と云う事は唯是れ人師の言にて仏説に
あらず、但し法華經計りこそ仏五味の譬を説きて五時の教に当て此の經の
勝れたる由を説き、或は又已今当の三説の中に仏になる道は法華經に及ぶ經
なしと云う事は正しき仏の金言なり、然るに我が經は法華經に勝れたり我が
宗は法華宗に勝れたりと云はん人は下臈が上臈を凡下と下し相伝の従者が主
に敵対して我が下人なりと云わんが如し何ぞ大罪に行なはれざらんや、法華經
より余經を下す事は人師の言にあらず 經文分明なり、譬えば国王の万人に
すぐ 勝れたりと名乗り侍の凡下を下臈と云わんに何の禍があるべきや、此の經は
こ 是れ仏の御本意なり天台・妙樂の正意なり。

問うて云く釈迦一期の説法は皆衆生のためなり衆生の根性万差なれば

せつぽう しゆじゆ いずれ みなとくどう

説法も種種なり何れも皆得道なるを本意とす、然れば我が有縁の経は人の為に

は無縁なり人の有縁の経は我が為には無縁なり故に余経の念仏によりて得道

なるべき者の為には観経等はめでたし法華経等は無用なり、法華によりて

成仏得道なるべき者の為には余経は無用なり法華経はめでたし、四十余年・

未顕真実と説くも雖示種種道・其実為仏乗と云うも正直捨方便・但説

無上道と云うも法華得道の機の前の事なりと云う事・世こそつてあはれ然る

べき道理かななんと思へり如何心うべきや、若し爾らば大乘・小乗の差別

もなく権教・実教の不同もなきなり何れをか仏の本意と説き何れをか成仏

の法と説き給えるや甚・だいぶかし・いぶかし、答えて云く凡そ仏の出世

は始めより妙法を説かんと所思食ししかども

衆生の機縁万差にしてととのをらざりしかば三七日の間思惟し四十余年の程

・こしらへおおせて最後に此の妙法を説き給う、故に「若し但仏乗を讃せ

せつぽう しゆじゆ いずれ みなとくどう

は無縁なり人の有縁の経は我が為には無縁なり故に余経の念仏によりて得道

なるべき者の為には観経等はめでたし法華経等は無用なり、法華によりて

成仏得道なるべき者の為には余経は無用なり法華経はめでたし、四十余年・

未顕真実と説くも雖示種種道・其実為仏乗と云うも正直捨方便・但説

無上道と云うも法華得道の機の前の事なりと云う事・世こそつてあはれ然る

べき道理かななんと思へり如何心うべきや、若し爾らば大乘・小乗の差別

もなく権教・実教の不同もなきなり何れをか仏の本意と説き何れをか成仏

の法と説き給えるや甚・だいぶかし・いぶかし、答えて云く凡そ仏の出世

は始めより妙法を説かんと所思食ししかども

ば衆生しゅじょう苦くに没在ぼつざいし是この法はふを信しんずること能あたわす、法はふを破はして信しんぜざるが故ゆえに
三惡道さんあくどうに墜おちん」と説とき「世尊せそんの法はふは久くくして後かな要まさらず当しんじつに真と實とを説ときたま
うべし」とも云いへり、此この文ぶんの意いは始はめより此この仏乘ぶつじょうを説ふかんと思おもひ食くしし
かども仏法ぶつぽうの氣分けぶんもなき衆生しゅじょうは信しんぜずして定じやうめて謗そしりを至きさん、故ゆえに機きをひ
としなに誘とへ給たまうほどに初はつめに華嚴けごん・阿含あこん・方等ほうとう・般若はんにや等の經きやうを四十余年よんじゅうよねんの
間まとき最さい後に法華經ほけきやうをと給たまう時とき、四十余年よんじゅうよねんの座席ざせきにありし身子しんし・目連もくれん等ら
万二千まんにせんの聲聞しやうもん・文殊もんじゆ・弥勒みろく等の八万はちまんの菩薩ぼさつ・万億りんのうの輪王りんおう等ら・梵王ぼんのう・帝釈たいしやく等ら
の無量むりやうの天人てんにん各爾前にぜんに聞ききし処ところの法はふをば如來にやらいの無量むりやうの知見ちけんを失うしなえりと云いふ、
法華經ほけきやうを聞きいては無上むじやうの宝聚求ほつじゆめざるに自みづから得えたりと悦よろこび給たまふ、されば「我等われら
昔むかしより來きた此この世尊しかたしはしの説せを聞ききたてまつるに未いまだ曾かつて是かくの如ごとき深妙しんめうの上うへ
法はふを聞きかず」とも、「仏希有けうの法はふを説とき給たまう昔むかしより未いまだ曾かつて聞きかざる所ところなり」
とも説とき給たまう、此等これらの文ぶんの心こころは四十余年よんじゅうよねんの程そこばく若干せつぽうの説法ちやうもんを聴聞ちやうもんせしかども

法華經ほけきようの様なる法をば総てきかず又仏つゐも終に説かせ給はずと法華經ほけきようを讃ほめたる
文なり四十二年の聴こんきようと今經こんきようの聴とをばわけたくらぶべからず、然しかるに今經こんきよう
をそれ法華經得道の人の為ためにして爾前得道の者の為ためには無用なりと云う事大
なる誤あやまりなり、をのづから四十二年の經の内には一機いちき・一縁いちえんの為ためにしつらう
ところ ほうべん たといえんむえん さた ほけきよう にぜん きようぎよう
処ところの方便なれば設たい有縁無縁の沙汰さたはありとも法華經は爾前の經縁きようぎようの座に
して得益とくやくしつる機きどもを押おしふさねて一純ひとこのに調えて説き給たまいし間・有縁無縁うえんむえんの
沙汰さたあるべからざるなり、悲かなしいかな大小だいしやう・權実ごんじつみだりがわしく仏ほんかいの本懷ほんかいを
失うしないて爾前得道の者の為ためには法華經無用なりと云へる事よくよくを能よくよく能よくよく慎よくよくむべし・
恐おそるべし、古いにしえの徳一大師だいいしと云いいし人・此の義を人にも教へ我が心にも存ぞんして
・さて法華經ほけきようを読み給たまいしを伝でん教大師きやうだいし・此の人を破はし給たまふ言ことに「法華經ほけきようを
讃さんすと雖いえども還かえつて法華の心を死ころす」と責め給たまいしかば徳一大師だいいしは舌八だいいしにさけ
て失せ給たまひき。

問うて云く天台の釈の中に菩薩處處得入と云う文は法華經は但二乗の爲に
して菩薩の爲ならず菩薩は爾前の經の中にして也得道なると見えたり若し
爾らば末顕真實も正直捨方便等も總じて法華經八卷の内皆以て二乗の爲にし
て菩薩は一人も有るまじきと意うべきか如何、答えて云く法華經は但二乗の
爲にして菩薩の爲ならずと云う事は天台より已前・唐土に南三・北七と申し
て十人の学匠の義なり、天台は其の義を破し失て今は弘まらず若し菩薩なし
と云はば菩薩是の法を聞いて疑網皆已に除くと云える豈是れ菩薩の得益なし
と云わんや、それに尚鈍根の菩薩は二乗とつれて得益あれども利根の菩薩は
爾前の經にて得益すと云はば「利根・鈍根等しく法雨を雨す」と説き「一切
の菩薩の阿耨多羅三藐三菩提は皆此經に属せり」と説くは何に、此等の文の
心は利根にてもあれ鈍根にてもあれ持戒にてもあれ破戒にてもあれ貴もあれ
賤もあれ一切の菩薩・凡夫・二乗は法華經にて成仏得道なるべしと云う文な

るをや、又法華得益の菩薩は皆鈍根なりと云はば普賢・文殊・弥勒・薬王等
はちまん ぼさつ どんこん みなどんこん
の八万の菩薩をば鈍根なりと云うべきか、其の外に爾前の経にて得道する利根
ぼさつ いかよう ぼさつ そもそもにぜん ぼさつ とくどう
の菩薩と云うは何様なる菩薩ぞや、抑爾前に菩薩の得道と云うは法華經の
ごとく とくどう
如き得道にて候か、其ならば法華經の得道にて爾前の得分にあらず、又法華經
より外の得道ならば已今当の中には何れぞや、いかさまにも法華經ならぬ得道
は とうぶん とくどう しんじつ とくどう ゆえ むりようぎきよう
は自分の得道にて眞実の得道にあらず、故に無量義經には「是の故に衆生の
得道差別せり」と云い又「終に無上菩提を成ずることを得じ」と云へり、文
の心は爾前の経經には得道の差別を説くと云へども終に無上菩提の法華經
の得道はなしとこそ仏は説き給いて候へ。

問うて云く當時は釈尊入滅の後・今に二千二百三十余年なり、一切經の
いすれ とうじ しゃくそんにゆうめつ いっさいきよう
中に何の経が時に相應して弘まり利生も有るべきや大集經の五箇の五百歳の
中 第五の五百歳に當時はあたれり、其の第五の五百歳をば鬪諍堅固・
いすれ とうじ ひる りじよう あ だいしつきよう とうじようけんこ

びやくほうおんもつ

白法隱没と云つて人の心たけく腹あしく貪欲・瞋恚・強盛なれば軍合戦の

さかん

み盛にして仏法の中に先き先き弘りし所の真言・禪宗・念仏持戒等の白法

おんもつ

は隱没すべしと仏説き給へり、第一の五百歳・第二の五百歳・第三の五百歳

・第四の五百歳を見るに成仏の道こそ未顕真実なれ世間の事法は仏の御言

一分も違はず是を以て之を思うに當時の鬪諍堅固・白法隱没の金言も違う

事あらじ、若爾らば末法には何の法も得益あるべからず何れの仏・菩薩も利生

あるべからずと見えたり如何、さてもだして何の仏菩薩にもつかへ奉らず何の

法をも行ぜず憑む方なくして候べきか、後世をば如何が思い定め候べきや、

答えて云く末法當時は久遠実成の釈迦仏上行菩薩・無辺行菩薩等の弘めさ

せ給うべき法華經二十八品の肝心たる南無妙法蓮華經の七字計り此の国に

弘まりて利生得益もあり上行菩薩の御利生盛んなるべき時なり、其の故は

經文明白なり道心堅固にして志あらん人は委く是を尋ね聞くべきなり。

経文明白なり道心堅固にして志あらん人は委く是を尋ね聞くべきなり。

経文明白なり道心堅固にして志あらん人は委く是を尋ね聞くべきなり。

経文明白なり道心堅固にして志あらん人は委く是を尋ね聞くべきなり。

経文明白なり道心堅固にして志あらん人は委く是を尋ね聞くべきなり。

経文明白なり道心堅固にして志あらん人は委く是を尋ね聞くべきなり。

経文明白なり道心堅固にして志あらん人は委く是を尋ね聞くべきなり。

経文明白なり道心堅固にして志あらん人は委く是を尋ね聞くべきなり。

経文明白なり道心堅固にして志あらん人は委く是を尋ね聞くべきなり。

経文明白なり道心堅固にして志あらん人は委く是を尋ね聞くべきなり。

経文明白なり道心堅固にして志あらん人は委く是を尋ね聞くべきなり。

経文明白なり道心堅固にして志あらん人は委く是を尋ね聞くべきなり。

経文明白なり道心堅固にして志あらん人は委く是を尋ね聞くべきなり。

じようとしゆう ひとびとまうぼうまんねん よきようことと

浄土宗の人人末法万年には余経悉く滅し弥陀一教のみと云ひ又当今末法は

こ こじよく あくせただじようど

是れ五濁の悪世唯浄土の一門のみ有て通入す可き路なりと云つて虚言して

だいしつきよう

いわ ひけ

すべこのもん

そ

大集経に云くと引ども彼の経に都て此文なし、其の上あるべき様もなし仏の

ざいせ みことば

とうこんまうぼうこじよく

あくせ

じようど

いちもん

在世の御言に当今末法五濁の悪世には但浄土の一門のみ入るべき道なりとは

と たま

どうりけんねん

ほんきよう

とうらい

きようどうめつじん

ひと

説き給うべからざる道理顯然なり本経には「当来の世経道滅尽し特り此の

と と

経を留めて止住する事百歳ならん」と説けり、末法一万年の百歳

とは全く見えず、然るに平等覚経・大阿弥陀経を見るに仏滅後・一千年の後

の百歳とこそ意えられたれ、然るに善導が惑へる釈をば尤も道理と人皆思へ

り是は諸僻案の者なり、但し心あらん人は世間のことはりをもつて推察せよ、

かんばつ

たいかい

せけん

これと

大旱魃のあらん時は大海が先にひるべきか小河が先にひるべきか仏是を説き

たま

ほけきよう

たいかい

かんきよう

あみだ

給うには法華経は大海なり観経・阿弥陀経等は小河なり、されば念仏等の小

びやくほう

きようもん

と

たま

だいしつきよう

大集経の五箇

の五百歳の中の第五の五百歳・白法隱没と云と雙觀經に經道滅尽と云とは
但一つ心なり、されば末法には始めより雙觀經等の經道滅尽すと聞えたり
經道滅尽と云は經の利生の滅すと云う事なり、色の經卷有るにはよるべか
らず、されば當時は經道滅尽の時に至つて二百歳に余れり、此の時は但法華經
のみ利生得益あるべし。

されば此經を受持して南無妙法蓮華經と唱え奉るべしと見えたり藥王品に
は「後の五百歳の中に閻浮提に広宣流布して断絶せしむることなけん」と説き
給ひ、天台大師は「後の五百歳遠く妙道に沾ん」と釈し、妙樂大師は
「且らく大經の流行す可き時に拠る」と釈して後の五百歳の間に法華經弘ま
りて其の後は閻浮提の内に絶え失せる事有るべからずと見えたり、安樂行品
に云く、後の末世の法滅せんと欲せん時に於て斯の經典を受持し誦誦せん者」
文神力品に云く「爾の時に仏・上行等の菩薩大衆に告げたまわく屬累の為

の故に此の經の功德を説くとも猶尽すこと能わじ、要を以て之を云わば如来
の一切の所有の法・如来の一切の自在の神力如来の一切の秘要の蔵・如来の
一切の甚深の事・皆此經に於て宣示顯説す」と云云、此等の文の心は釈尊
入滅の後第五の五百歳と説くも来世と云うも濁悪世と説くも正像二千年
過ぎて末法の始二百余歳の今時は唯法華經計り弘まるべしと云う文なり、
其の故は人既にひがみ法も実にするしなく仏神の威験もましまさず今生後生
の祈りも叶はず、かからん時はたよりを得て天魔・波旬乱れ入り国土常に飢渴
して天下も疫癘し他国侵逼難自界叛逆難とて我が国に軍合戦常にありて、後
には他国より兵どもをそひ来りて此の国を責むべしと見えたり、此くの如き
鬭争堅固の時は余經の白法は験し失せて法華經の大良薬を以て此の大難
をば治すべしと見えたり。

法華經を以て国土を祈らば上一人より下万民に至るまで悉く悦び榮へ給う

べき鎮護国家の大白法なり、但し阿闍世王・阿育大王は始めは悪王なりしか
ども耆婆大臣の語を用ひ夜叉尊者を信じ給いて後にこそ賢王の名をば留め
給いしか、南三・北七を捨てて知法師を用ひ給いし陳主・六宗の碩徳を捨
てて最澄法師を用ひ給いし桓武天皇は今に賢王の名を留め給へり、知法師
と云うは後には天台大師と号し奉る最澄法師は後には伝教大師と云う是な
り、今の国主も又是くの如し現世安穩・後生善処なるべき此の大白法を信じ
て国土に弘め給はば万国に其の身を仰がれ後代に賢人の名を留め給うべし、
知らず又無辺行菩薩の化身にてやましますらん、又妙法の五字を弘め給はん
智者をば・いかに賤くとも上行菩薩の化身か又釈迦如来の御使かと思うべ
し、又薬王菩薩・薬上菩薩・観音勢至の菩薩は正像二千年の御使なり此等
の菩薩達の御番は早過たれば上古の様に利生有るまじきなり、されば当世の
祈を御覽ぜよ一切叶はざる者なり、末法今の世の番衆は上行・無辺行等に

てをはしますなり此等を能能明らめ信じてこそ法の驗も仏・菩薩の利生も
有るべしとは見えなれ、譬えばよき火打とよき石のかどと・よきほくちと此
の三寄り合いて火を用ゆるなり、祈も又是くの如しよき師とよき檀那とよき
法と此の三寄り合いて祈を成就し国土の大難をも払ふべき者なり、よき師と
は指したる世間の失無くして聊のへつらうことなく小欲知足にして慈悲有ら
ん僧の經文に任せて法華經を読み持ちて人をも勧めて持たせん僧をば仏は
一切の僧の中に吉第一の法師なりと讃められたり、吉檀那とは貴人にも・よ
らず賤人をも・にくまず上にもよらず下をもいやしますまず一切・人をば用いず
して一切經の中に法華經を持たん人をば一切の人の中に吉人なりと仏は説
給へり吉法とは此の法華經を最為第一の法と説かれたり、已説の經の中にも
今説の經の中にも当説の經の中にも此の經第一と見えて候へば吉法なり、
禅宗・真言宗等の經法は第二・第三なり殊に取り分けて申せば真言の法は

第七重の劣なり、然るに日本国には第二・第三・乃至・第七重の劣の法をもつて御祈きとう あれども未だ其の証拠をみず、最上第一の妙法をもつて御祈きとう あるべきか、是を正直捨方便・但説無上道・唯此一事実と云へり誰か疑をなすべきや。

問うて云く無智の人來りて生死を離るべき道を問わん時は何れの經の意をかく説くべき仏如何が教へ給へるや、答えて云く法華經を説くべきなり所以に法師品に云く「若し人有つて何等の衆生か未來世に於て當に作仏することを得べきと問わば応に示すべし、是の諸人等・未來世に於て必ず作仏することを得ん」と云云、安樂行品に云く「難問する所有らば小乗の法を以て答えず但大乘を以て而も為に解説せよ」云云、此等の文の心は何なる衆生か仏になるべきと問わば法華經を受持し奉らん人必ず仏になるべしと答うべきなり是れ仏の御本意なり、之に付て不審あり衆生の根性区にして念仏を聞か

んと願ふ人もあり法華經を聞かんと願ふ人もあり、念仏を聞かんと願ふ人に
法華經を説いて聞かせんは何の得益かあるべき、又念仏を聞かんが為に請じ
たらん時にも強て法華經を説くべきか、仏の説法も機に随いて得益有るをこ
そ本意とし給うらんと不審する人あらば云うべし、元より末法の世には無智
の人に機に叶ひ叶はざるを顧みず但強いて法華經の五字の名号を説いて持た
すべきなり、其の故は釈迦仏・昔不輕菩薩と云はれて法華經を弘め給ひしに
は男女・尼・法師がおしなべて用ひざりき、或は罵られ毀られ・或は打れ追
はれ一しなならず、或は怨まれ嫉まれ給ひしかども少しもなくして
強いて法華經を説き給ひし故に今の釈迦仏となり給ひしなり、不輕菩薩を罵り
まいらせし人は口もゆがまず打ち奉りしかいなもすくまず、付法蔵の師子尊者
も外道に殺されぬ、又法道三蔵も火印を面にあてられて江南に流され給ひし
ぞかし、まして末法にかひなき僧の法華經を弘めんにはかかる難あるべしと

経文に正く見えたり、されば人是用ひず機に叶はずと云へども強いて
法華經の五字の題名を聞かすべきなり、是ならでは仏になる道はなきが故な
り、又・或人不審して云く、機に叶はざる法華經を強いて説いて謗ぜさせて
・惡道に人を墮さんよりは、機に叶へる念仏を説いて・発心せしむべし、利益
もなく謗ぜさせて返つて地獄に墮さんは法華經の行者にもあらず邪見の人に
てこそ有るらめと不審せば、云うべし経文には何体にもあれ末法には強いて
法華經を説くべしと仏の説き給へるをばさていかが心うべく候や、釈迦仏・
不輕菩薩・天台・妙樂・伝教等はさて邪見の人外道にて・おはしまし候べ
きか、又惡道にも墮ちず三界の生を離れたる二乗と云う者をば仏のの給はく
と・いぬやかん・設ひ犬野干の心をば発すとも二乗の心をもつべからず五逆・十惡を作りて
地獄には墮つとも二乗の心をば・もつべからずなれどと禁められしぞかし、
惡道におちざる程の利益は争でか有るべきなれども其れをば仏の御本意とも

思し食さず地獄じごくには墮おつるとも仏になる法華經ほけきょうを耳にふれぬれば是これを種とし
て必ず仏になるなり、されば天台てんだい・妙樂みょうらくも此の心を以て強もついて法華經ほけきょうを説く
べしとは釈しゃくし給たまへり譬たとえば、人の地に依りて倒れたる者の返つて地をおさへ
て起たつが如ごとし、地獄じごくには墮おつれども疾とく浮んで仏になるなり、当世とうせの人・何と
なくとも法華經ほけきょうに背く失とがに依りて地獄じごくに墮おちん事疑うたがいいなき故に、とてもか
くても法華經ほけきょうを強しいて説き聞かすべし、信ぜん人は仏になるべし謗ぼうぜん者は
毒鼓どくこの縁となつて仏になるべきなり、何いかにとしても仏の種は法華經ほけきょうより外に
なきなり、權教こんきょうをもつて仏になる由だにあらば、なにしにか仏は強しいて法華經ほけきょう
を説いて謗ぼうずるも信ずるも利益あるべしと説き我不愛身命がふあいしんみょうとは仰おおせらるべき
や、よくよく此等これらを道心どうしんましまさん人は御心得ごころえあるべきなり。

問うて云く無智むちの人も法華經ほけきょうを信じたらば即身成仏そくしんじょうぶつすべきか、又何いずれれの
浄土じょうどに往生おうじょうすべきぞや、答えて云く法華經ほけきょうを持つにおいては深く法華經ほけきょうの心

を知り止観しかんの坐禅ざぜんをし一念三千・十境・十乗の観法かんぼうをこらさん人は実に
そくしんじょうぶつ さとり
即身成仏し解とを開く事も・あるべし、其の外そに法華經ほけきょうの心をもしらず無智むち
にしてひら信心しんじんの人は浄土じょうどに必ず生うまべしと見えたり、されば生十方じゅうぽう仏前ぶつぜんと
と 説あるき・或は即往安樂世界そくおうあんらくせかいと説ときき、是この法華經ほけきょうを信ずる者の往生おうじょうすと云う
めいぶん 明文めいぶんなり、之に付いて不審ふしんあり其の故は我が身は一にして十方じゅうぽうの仏前ぶつぜんに生る
べしと云う事心得こころえられず、何れにてもあれ一方いっぽうに限るべし正まさに何れの方をか
信じて往生おつじょうすべきや、答えて云く一方いっほうにさだめずして十方じゅうぽうと説くは最もい
はれあるなり、所以ゆえんに法華經ほけきょうを信ずる人の一期終いちごる時には十方世界じゅうぽうせかいの中に
ほけきょう 法華經ほけきょうを説かん仏のみもとに生るべきなり、余けごんの華嚴阿含あこん・方等ほうとう・般若經はんによきょうを
説く浄土じょうどへは生るべからず、浄土十方じゅうとうに多くして声聞しょうもんの法を説く浄土じょうどもあ
ひやくしぶつ 辟支仏ひやくしぶつの法を説く浄土じょうどもあり・或あるは菩薩ぼさつの法を説く浄土じょうどもあり、法華經ほけきょうを
信ずる者は此等これらの浄土じょうどには一向生いっこうれずして法華經ほけきょうを説き給たまう浄土じょうどへ直ちに

おうじよう

往生して座席に列りて法華經を聴聞してやがてに仏になるべきなり、然る

に今世にして法華經は機に叶はずと云いうとめて西方淨土にて法華經をさと

るべしと云はん者は阿弥陀の淨土にても法華經

をさとるべからず十方の淨土にも生るべからず、法華經に背く咎重きが故に

永く地獄に墮つべしと見えたり、其人命終入阿鼻獄と云へる是なり。

問うて云く即往安樂世界・阿弥陀仏と云云、此の文の心は法華經を受持し

奉らん女人は阿弥陀仏の淨土に生るべしと説き給えり念仏を申しても阿弥陀

の淨土に生るべしと云ふ、淨土既に同じ念仏も法華經も等と心え候べきか

如何、答えて云く觀經は權教なり法華經は實教なり全く等しかるべからず

其の故は仏世に出でさせ給いて四十余年の間・多くの法を説き給いしかども

二乗と悪人と女人とをば簡ひ・はてられて成仏すべしとは一言も仰せられざ

りしに此の經にこそ敗種の二乗も三逆の調達も五障の女人も仏になるとは

と
説き給たまい候まいつれ、其その旨むね經文きやうもんに見えたり、華嚴經けこんきやうには「女人にょにんは地獄じごくの使つかなり
仏しゆしの種子しゆしを断はず外面ぼさつは菩薩にに似にて内心ないしんは夜叉やしやの如ごとし」と云へり、銀色女經こんじきにききやうに
は三世さんぜの諸仏しよぶつの眼まなこは抜はけて大地だいちに落おつるとも法界ほうかいの女人にょにんは永とこく仏にになるべか
らずと見えたり、又經いわに云く「女人にょにんは大鬼神きじんなり能よく一切いっさいの人を喰くう」と、
竜樹菩薩りゆうじゆぼさつの大論だいろんには一度女人ひとたびにょにんを見れば永とこく地獄じごくの業を結むすぶと見えたり・され
ば實じつにてやありけん善導ぜんどう和尚わうしやうは謗法ぼうぽうなれども女人にょにんをみずして一期生いちよこと云はれ
たり、又業平なりひらが歌うたにも律むくろをいて・あれたるやどのうれたきは・かりにも鬼おにの
・すだくなりけりと云いうも女人にょにんをば鬼おにとよめるにこそ侍はべれ、又女人にょにんには五障ごしやう
三従たいしやくと云いう事有あるが故ゆゑに罪深つみしと見えたり、五障ごしやうとは一ひとには梵天王ぼんてん・二ふたには
帝釈たいしやく・三さんには魔王まおう・四よには転輪聖王てんりんじやうおう・五ごには仏ににならずと見えたり、又三
従にょにんとは女人にょにんは幼き時は親おやに従したがいて心こころに任せず、人ひととなりては男おとこに従したがいて心こころに
まかせず、年としよりぬれば子こに従したがいて心こころにまかせず加様かように幼き時わらわより老耄らうもうに至いたる

まで三人に従て心にまかせず思ふ事をもいはず見たき事をもみず聴問したき
事をもきかず是これを三従とは説くなり、されば榮啓期えいけいきが三樂を立てたるにも女人にょにん
の身と生れざるを一の樂みといへり、加様に内典ないてん・外典げてんにも嫌きらはれたる女人にょにん
の身なれども此の經を読まねどもかかねども身と口と意とにうけ持ちて殊ことに
口なむに南無妙法蓮華經と唱へ奉る女人は在世ざいせの竜女りゆうによ・曇弥きようどんみ・耶輸陀羅女やしゆたらによ
ごとく
如くにやすやすと仏になるべしと云う經文きようもんなり、又安樂世界と云うは一切いっさいの
浄土じやうどをば皆安樂と説くなり、又阿彌陀と云うも觀經の阿彌陀にはあらず、所以ゆえん
に觀經の阿彌陀かんきよう仏は法藏比丘ほうぞうびくの阿彌陀あみた・四十八願の主十劫成道の仏なり、
法華經にも迹門しやくもんの阿彌陀あみたは大通智勝だいつうちしやうぶつ仏の十六王子の中の第九の阿彌陀あみたにて
法華經大願の主の仏なり、本門の阿彌陀ほんもんあみたは釈迦分身しやくかふんじんの阿彌陀あみたなり随つて釈に
も「須すべからく更に觀經等かんきようを指すべからざるなり」と釈しやくし給たまえり。

問うて云く經に難解難入と云へり世間せけんの人・此の文を引いて法華經は機きに

叶はずと申し候は道理と覚え候は如何、答えて云く謂れなき事なり其の故は
此の經を能も心えぬ人の云う事なり、法華より已前の經は解り難く入り難し
法華の座に來りては解り易く入り易しと云う事なり、されば妙樂大師の御釈
に云く「法華已前は不了義なるが故に故に難解と云う即ち今の教には咸く皆
實に入るを指す故に易知と云う」文、此の文の心は法華より已前經にては機
つたなくして解り難く入り難し、今の經に來りては機賢く成りて解り易く入
り易しと釈し給へり、其の上難解難入と説かれたる經が機に叶はずば先念仏
を捨てさせ給うべきなり、其の故は雙觀經に「難きが中の難き此の難に過ぎ
たるは無し」と説き阿弥陀經には難信の法と云へり、文の心は此の經を受け
持たん事は難きが中の難きなり此れに過ぎたる難きはなし難信の法なりと見
えたり。

問うて云く經文に「四十余年未だ眞實を顕さず」と云い、又「無量無辺

ふかしぎ・阿僧祇劫を過るとも終に無上菩提を成ずることを得じ」と云へり、

此の文は何体の事にて候や、答えて云く此の文の心は釈迦仏・一期五十年の

説法の中に始めの華嚴經にも眞実をとかず中の方等・般若にも眞実をとかず、

此の故に禅宗・念仏・戒等を行ずる人は無量無辺劫をば過ぐとも仏にならじ

と云う文なり、仏四十二年の歳月を経て後・法華經を説き給ふ文には「世尊

の法は久くして後に要らず当に眞実を説き給うべし」と仰せられしかば、

舍利弗等の千二百の羅漢・万二千の声聞・弥勒等の八万人の菩薩・梵王・

帝釈等の万億の天人・阿閼世王等の無量無辺の国王・仏の御言を領解する文

には「我等昔より来 数世尊の説を聞きたてまつるに未だ曾つて是くの如

き深妙の上法を聞かず」と云つて、我等・仏に離れ奉らずして四十二年若干

の説法を聴聞しつれども・いまだ是くの如き貴き法華經をばきかずと云へ

る、此等の明文をば・いかが心えて世間の人は法華經と余經と等しく思ひ

あまつさき

剩へ機に叶はねば闇の夜の錦・こそこの曆なんと云ひて、

たまたま

適持つ人を見ては

いやしかる

にく

ねた

に

く

め

なん

とする

是れ

併ら

謗法なり

争か

往生

成仏

も・あるべきや、必ず無間地獄に墮つべき者と見えたり。

問うて云く

凡そ

仏法を

能く

心得て

仏意に

叶へる

人を

ば世間

に是を

重んじ

一切是を

責む、

然るに

当世

法華經を

持つ

人人を

ば世

こそ

ぞつて

惡み

嫉み

輕しめ

賤み・

或は

所を追

ひ出し、

或は

流罪し

供養を

なす

までは

思い

も

よらず

怨敵の

様に

にくまる

は、

いか

さまに

も心

わろく

して

仏意

にもか

かな

はず

ひが

さまに

法を

心得

たる

なる

べし、

經文

には

如何

が説

きた

るや、

答えて

云く

經文

の如く

ならば

末法

の法華

經の

行者

は人

に惡

まる

る程

に持

つを

実の

大乘

の僧

とす、

又經を

弘めて

人を

利益

する

法師

なり、

人

に吉

と思

はれ

人の

心に

隨

いて

貴し

思はれ

ん僧

をば

法華

經の

かた

き世

間の

惡知

識

なり

と思

うべ

し、

此

の人

を經

文には

獵師

の目

を細

め

に

して

鹿

を

ね

ら

ひ

猫

の

爪

を

隠

して

鼠

を

ね

ら

ふ

が

如

く

に

し

て在家の俗男・俗女の檀那をへつらい・いつわりたばらかすべしと説き給へ
り、其の上勸持品には法華經の敵人三類を挙げられたるに、一には在家の俗男
・俗女なり此の俗男・俗女は法華經の行者を憎み罵り打ちはりきり殺し所を
追ひ出だし・或は上へ讒奏して遠流しなさけなくあだむ者なり、二には出家
の人なり此の人は慢心高くして内心には物も知らざれども智者げにもてなし
て世間の人に学匠と思はれて法華經の行者を見ては怨み嫉み輕しめ、賤み
犬野干よりも・わろきようを人に云いいうとめ法華經をば我、一人心得たりと
思う者なり、三には阿練若の僧なり此の僧は極めて貴き相を形に顯し三衣一鉢
を帶して山林の閑かなる所に籠り居て在世の羅漢の如く諸人に貴まれ仏の
如く万人に仰がれて法華經を説の如くに読み持ち奉らん僧を見ては憎み嫉ん
で云く大愚癡の者大邪見の者なり総て慈悲なき者・外道の法を説くなど云
わん、上一人より仰いで信を取らせ給はば其の已下万人も仏の如くに供養を

なすべし、法華經を説の如くよみ持たん人は必ず此の三類の敵人に怨まるべきなりと仏説き給へり。

問うて云く仏の名号を持つ様に法華經の名号を取り分けて持つべき証拠ありや如何、答えて云く經に云く「仏諸の羅刹女に告げたまわく善き哉

善き哉汝等但能く法華の名を受持する者を擁護せん福量る可からず」と云云

此の文の意は十羅刹の法華の名を持つ人を護らんと誓言を立て給うを大覺

世尊讃めて言く善き哉善き哉汝等南無妙法蓮華經と受け持たん人を守らん

功德いくら程とも計りがたく・めでたき功德なり神妙なりと仰せられたる文

なり、是れ我等衆生の行住坐臥に南無妙法蓮華經と唱ふべしと云う文なり。

凡そ妙法蓮華經とは我等衆生の仏性と梵王・帝釈等の仏性と舍利弗・

目連等の仏性と文殊・弥勒等の仏性と三世の諸仏の解の妙法と一体不二な

る理を妙法蓮華經と名けたるなり、故に一度妙法蓮華經と唱うれば一切の

仏・一切の法・一切の菩薩・一切の声聞・一切の梵王・帝釈閼魔法王・
にちがつ しゅうせい てんじん
日月・衆星・天神・地神・乃至・地獄・餓鬼・畜生・修羅人天一切衆生の
しんちゅう ぶっしょう ただ こえ よ あらわ たてまつくどく わりようむへん
心中の仏性を唯一音に喚び顕し奉る功德・無量無辺なり、我が己心の
みようほうれんげきよう ほんぞん たてまつ こしんちゅう ぶっしょう な む みようほうれんげきよう
妙法蓮華經を本尊とあがめ奉りて我が己心中の仏性南無妙法蓮華經とよび
よばれて顕れ給う處を仏とは云うなり、譬えば籠の中の鳥なけば空とぶ鳥の
あらわ たま ところ たと かこ
よばれて集まるが如し、空とぶ鳥の集まれば籠の中の鳥も出でんとするが如し
みようほう ぶっしょう
口に妙法をよび奉れば我が身の仏性もよばれて必ず顕れ給ふ、梵王・帝釈
ぶっしょう われら たま
の仏性はよばれて我等を守り給ふ、仏・菩薩の仏性はよばれて悦び給ふ、
よるこ たま
されば「若し暫くも持つ者は我れ則ち歡喜す諸仏も亦然なり」と説き給うは
も し しば ひ すなわ かんき しよぶつ またしか と たま
此の心なり、されば三世の諸仏も妙法蓮華經の五字を以て仏に成り給いしな
さんぜ しよぶつ しゅっせ ほんかいいつさいしゅじょう かいじょうぶつどう みようほう
り三世の諸仏の出世の本懷一切衆生・皆成仏道の妙法と云うは是なり。
これら おもむ よ よ こころえ がまんへんしゅう なむ
是等の趣きを能く能く心得て仏になる道には我慢偏執の心なく南無

妙法蓮華經と唱へ奉るべき者なり。日蓮在御判

七七 三世諸仏總勘文教相廃立

弘安二年十月 五十八歳御作日蓮之を撰す 558P

夫れ一代聖教とは総べて五十年の説教なり是を一切經とは言ふなり、

此れを分ちて一と爲す一には化他・二には自行なり、一には化他の經とは

法華經より前の四十二年の間説き給える諸の經教なり此れをば權教と云い

亦は方便と名く、此れは四教の中には三藏教・通教・別教の三教なり五時

の中には華嚴・阿含・方等・般若なり法華より前の四時の經教なり、又

十界の中には前の九法界なり又夢と寤との中には夢中の善惡なり又夢をば

權と云い寤をば実と云ふなり、是の故に夢は仮に有つて体性無し故に名けて

權と云ふなり、寤は常住にして不變の心の体なるが故に此れを名けて実と

爲す、故に四十二年の諸の經教は生死の夢の中の善惡の事を説く故に權教

と云う夢中の衆生を誘引し驚覺して法華經の寤と成さんと思食しての支度
方便の經教なり故に權教と言ふ、斯れに由つて文字の讀みを糾して心得
可きなり、故に權をば權と讀む權なる事の手本には夢を以て本と爲す又實を
ば實と讀む實事の手本は寤なり、故に生死の夢は權にして性体無ければ權な
る事の手本なり故に妄想と云ふ、本覺の寤は實にして生滅を離れたる心な
れば眞實の手本なり故に實相と云ふ、是を以て權實の二字を糾して一代聖教
の化他の權と自行の實との差別を知る可きなり、故に四教の中には前の三教
と五時の中には前の四時と十法界の中には前の九法界は同じく皆夢中の善惡
の事を説くなり故に權教と云ふ、此の教相をば無量義經に四十余年・未顕
眞實と説き給う已上、未顕眞實の諸經は夢中の權教なり故に釈籤に云く
「性・殊なること無しと雖も必ず幻に藉りて幻の機と幻の感と幻の応と幻の
赴とを發す・能応と所化と並びに權實に非ず」已上、此れ皆夢幻の中の方

の教なり性雖無殊等とは夢見る心性しんしよと寤うつの時の心性とは只一ただの心性にして總
て異なること無しと雖も夢の中の虚事そらごとと寤うつの時の実事じつじと二事一の心法なるを以
て見ると思うも我が心なりと云う釈なり、故に止觀に云く、「前の三教の四弘しぐ
のう・能も所も混す已上、四弘とは衆生の無辺なるを度せんと誓願せいがんし煩惱ぼんのうの無辺
なるを断ぜんと誓願せいがんし・法門ほうもんの無尽なるを知らんと誓願せいがんし無上菩提むじょうぼだいを証せん
と誓願せいがんす此を四弘と云う、能とは如来なり所とは衆生なり此の四弘は能の仏
も所の衆生も前三教は皆夢中の是非なりと釈しゃくし給えるなり、然れば法華以前ほつけいぜん
の四十二年の間の説教たる諸經は末顯真實の權教なり方便なり、法華に取
寄る可き方便なるが故に真實には非ず、此れは仏、自ら四十二年の間説き集
め給たまいて後に、今法華經を説かんと欲して先ず序分の開經の無量義經の時・
仏、自ら勘文かんもんし給える教相なれば人の語も入る可からず不審ふしんをも生す可べ
らず、故に玄義に云く、「九界を權と為し仏界を實と為す」已上、九法界の權は

四十二年の説教なりせつきょう 仏法界の実ぶつぽうかいは八箇年はちかねんの説・法華經ほけきょう是なり、故ゆえに法華經ほけきょうをば仏乘ぶつじょうと云う九界しゅうじの生死しょうじは夢の理いなればごんきやう權教いと云いぶつがい 仏界じようじゅうの常住うつつは寤うつつの理いなればじつきやう實教ゆえと云う、故ゆえに五十年ごじゅうねんの説教せつきやう・一代いちだいの聖教しやうきやう一切いっさいの諸經しよきやうは化他けたの四十二年ごんきやうの權教じぎやうと自行はちかねんの八箇年じつきやうの實教じつきやうと合あして五十年ごじゅうねんなればごんきやう權じつきやうと實じつきやうとの二もんじの文字もんじを以て鏡かに懸くけて陰無もりなし。

故ゆえに三藏經さんざうを修行しゆぎやうすること三僧祇だいごう・百大劫へを歴へて終りにに仏にに成ならんと思おもえば我が身みより火ひを出でして灰身にゆづめつ入滅にゆづめつとて灰はと成なつて失うせるなり、通教つうきやうを修行しゆぎやうすること七阿僧祇あそぎ・百大劫だいごうを満みててに仏にに成ならんと思おもえば前こゝの如ごとく同様に灰身にゆづめつ入滅あとかたして跡形なくも無なく失うせぬるなり、別教べつきやうを修行しゆぎやうすること二十二大阿僧祇あそぎ・百千万劫せんまんを盡つくして終りにに仏にに成なりぬと思おもえば生死しやうじの夢しやうじの中の權教ごんきやうの成じやうぶつ仏じやうぶつなればほんがく本覺うつつの寤ほけきやうの法華經ほけきやうの時ときには別教べつきやうには實じつぶつ 仏無じつぶつし夢中むちゆうの果ゆえなり故ゆえに別教べつきやうの教道けうだうには實じつの仏無むしと云いうなり、別教べつきやうの証道しやうじには初地しよじに始めて一分いちぶんの無明むみやう

を断じて一分の中道の理を顕し始めて之を見れば別教は隔歴不融の教と
知つて円教に移り入つて円人と成り已つて別教には留まらざるなり上中下
三根の不同有るが故に初地・二地・三地・乃至・等覺までも円人と成る故に
別教の面に仏無きなり、故に有教無人と云ふなり、故に守護国界章に云く
「有為の報仏は夢中の権果修行の仏無作の三身は覺前の実仏なり觀心の仏」又云く
「權教の三身は未だ無常を免れず修行の仏實教の三身は俱体俱用なりの觀心の仏」
此の釈を能く能く意得可きなり、權教は難行苦行して適仏に成りぬと思
えば夢中の權の仏なれば本覺の寤の時には実仏無きなり、極果の仏無ければ
有教無人なり況や教法実ならんや之を取つて修行せんは聖教に迷えるな
り、此の前三教には仏に成らざる証拠を説き置き給いて末代の衆生に慧解
を開かしむるなり九界の衆生は一念の無明の眠の中に於て生死の夢に溺れて
本覺の寤を忘れ夢の是非に執して冥きより冥きに入る、是の故に如来は我等

が生死しじうじの夢の中なかつての入いつて

てんどう しゅじょう

顛倒てんどうの衆生しゅじょうに同じて夢中の語ことばを以て夢中の衆生しゅじょうを誘さひ夢中の善惡ぜんあくの差別さべつの

事を説ぜんぜんいて漸漸ゆういんに誘引たまし給たまうに、夢中の善惡ぜんあくの事重ちようじよう 疊むりようして様様に無量無辺むへん

なれば先ぜんじず善事ぜんじに付じようちゆうげいて上中下を立つ三乗さんじようの法これ是これなり、三三九品さんじようなり、此かく

ごと

おわ

じようじようぼん

こんぼん

じようちゆうげ

じようちゆうげ

の如ごとく説おわき已おわつて後に又上じようじようぼん・上品こんぼんの根本善こんぼんを立て上中下じようちゆうげ・三三九品の善じようちゆうげと云

みなごと

う、皆悉みなごとく九界生死しじうじの夢の中の善惡ぜんあくの是非ぜひなり今是これをば総じやけんじて邪見外道げどうと

な

為なす記提要の意、此の上に又上じようじようぼん・上品ぜんしんの善心ほんがくは本覺うつつの寤うつつの理ゆえなれば此これを善うつつの本ほんしんと

と

云とうと説とき聞もんちかせ給もんちし時に夢中の善惡ぜんあくの悟この力を以ての故ぶつせつに寤いの本心うつつの実相ほんしん

の理とを始めて聞知もんちせられし事こなり、是この時に仏説ぶつせついて言いわく夢と寤うつつとの二は

そらごと

虚事じつじと実事じつじとの二の事なれども心法ただは只ただ一なり、眠あの縁あに値あいぬれば夢なり

眠去りぬれば寤うつつの心なり心法ただは只ただ一なりと開會かいえせらるべき下地げじを造つくり置おかれ

ほうべん

し方便ほうべんなりの中道此れは別教の理かくのゆえ是いまの故じゅつかいごくに未えんゆうだ十界互具そうそく・円融相即あらわを顯あらわさざれば成仏じようぶつの人

無し故に三蔵教より別教に至るまで四十二年の間の八教は皆悉く方便・夢
中の善悪なり、只暫く之を用いて衆生を誘引し給う支度方便なり此の權教
の中にも分分に皆悉く方便と眞実と有りて權實の法闕けざるなり、四教一
に各四門有つて差別有ること無し語も只同じ語なり文字も異なること無し
斯れに由つて語に迷いて權實の差別を分別せざる時を仏法滅すと云う是の
方便の教は唯穢土に有つて總じて淨土には無きなり法華經に云く「十方の仏
土の中には唯一乗の法のみ有つて二無く亦三も無し仏の方便の説をば除く」
已上、故に知んぬ十方の仏土に無き方便の教を取つて往生の行と爲し十方
の淨土に有る一乗の法をば之を嫌いて取らずして成仏す可き道理有る可し
や否や一代の教主釈迦如来・一切經を説き勘文し給いて言く三世の諸仏同
様に一つ語一つ心に勘文し給える説法の儀式なれば我も是くの如く一言も
違わざる説教の次第なり云云、方便品に云く、三世の諸仏の説法の儀式の如く

我も今亦是くの如く無分別の法を説く「已上、無分別の法とは一乗の妙法
なり善惡を簡ぶこと無く草木・樹林・山河・大地にも一微塵の中にも互に各
十法界の法を具足す我が心の妙法蓮華經の一乗は十方の淨土に周して
闕くること無し十方の淨土の依報・正報の功德莊嚴は我が心の中に有つて
片時も離ること無き三身即一の本覺の如來にて是の外には法無し此の一法
計り十方の淨土に有りて余法有ること無し故に無分別法と云う是なり、此の
一乗・妙法の行をば取らずして全く淨土には無き方便の教を取つて成仏の
行と為さんは迷いの中の迷いなり、我仏に成りて後に穢土に立ち還りて
穢土の衆生を仏法界に入らしめんが為に次第に誘引して方便の教を説くを
化他の教とは云うなり、故に權教と言ひ又方便とも云う化他の法門の有様
大体略を存して斯くの如し。

二に自行の法とは是れ法華經八箇年の説なり、是の經は寤の本心を説き

たま 給う唯衆生の思い習わせる夢中の心地なるが故に夢中の言語を借りて寤の
ほんしん 本心を訓る故に語は夢中の言語なれども意は寤の本心を訓ゆ法華經の文と
おしう ゆえ ことば こんご うつつ ほんしん おし ほけきよう
釈との意此くの如し、之を明め知らずんば經の文と釈の文とに必ず迷う可き
なり、但し此の化他の夢中の法門も寤の本心に備われる徳用の法門なれば夢
ただ けた ほうもん うつつ ほんしん そな ほうもん
中の教を取つて寤の心に摂むるが故に四十二年の夢中の化他方便の法門も
みようほうれんげきよう うつつ おさ ゆえ けた ほうべん ほうもん
妙法蓮華經の寤の心に摂まりて心の外には法無きなり此れを法華經の開會
とは云うなり、譬えば衆流を大海に納むるが如きなり仏の心法妙・衆生の心
たと しゅうる たいかい おさ こと じゅうじよう
法妙と此の二妙を取つて己心に摂むるが故に心の外に法無きなり己心と心性
こしん おさ ゆえ こん ほんがく さんじんによらい これ によぜそう によらい
と心体との三は己身の本覺の三身如来なり是を經に説いて云く「如是相 如来
によぜしう によらい によぜたい によらい こそ によぜ こん ほんがく によらい
如是性 如来 如是体 如来」此れを三如是と云う、此の三如是の本覺の如来は
じゅつぽう じゅつぽう じゅつぽう じゅつぽう じゅつぽう じゅつぽう じゅつぽう じゅつぽう
十方 法界を身体と為し 十方 法界を心性と為し 十方 法界を相好と為す是の故
ほんがくさんじんによらい ほんがくさんじんによらい ほんがくさんじんによらい ほんがくさんじんによらい
に我が身は本覺三身如来の身体なり、法界に周 して一仏の徳用なれば一切
ほつかい しゅうへん いちぶつ いっさい

の法は皆是みな仏法ぶつぽうなりと説たまひ給いひし時そ其ざの座席せきに列つらりし諸もろの四衆ししゅう・八部はちぶ・畜生ちくしょう

・外道等一人も漏もれず皆みな悉ことごとく妄想もうそうの僻目僻思ひがめひがおもひ・立所に散止して本覺の寤ほんがくに

還かえつて皆みな仏道ぶつどうを成じやうず、仏は寤うつつの人の如ごとく衆生しゆじやうは夢見る人の如ごとし故ゆゑに生死しやうじの

虚夢こむを醒さまして本覺の寤ほんがくに還うつつるを即身成仏そくしんじやうぶつとも平等大慧びやうどうだいゑとも無分別法ぶんべつとも

皆かい成じやうぶつどう仏道ぶつどうとも云ただう只一つの法門ほうもんなり、十方の仏土じゆつぽうは区まちまちに分いれたりと雖も通

じて法は一乘いちじやうなり方便無ほうべんきが故ゆゑに無分別法ぶんべつなり、十界の衆生じゆつかいは品品しゆじやうに異いり

と雖も実相いゑどの理は一なるが故ゆゑに無分別ぶんべつなり百界千如ひやつかいせんによ・三千世間の法門殊さんぜんせけんなり

と雖も十界互具いゑどするが故ゆゑに無分別ぶんべつなり、夢と寤と虚と実と各別異かくべつなりと雖も

一心いつしんの中の法ゆゑなるが故ゆゑに無分別ぶんべつなり、過去かこと未来みらいと現在げんざいとは三なりと雖も一念いゑど

の心中しんちゆうの理いなれば無分別ぶんべつなり、一切經いつさいきやうの語ことばは夢中の語ことばとは譬たとえば扇と樹

との如ごとし法華經ほけきやうの寤うつつの心を顯あらわす言こととは譬たとえば月と風との如ごとし、故ゆゑに本覺ほんがくの寤うつつ

の心の月輪むみやうの光てらは無明じつそつはんにやの闇を照ちゑし実相般若もつそうの智慧ちりの風は妄想ちりの塵ちりを払ゆゑう故ゆゑに

夢の語の扇と樹とを以て寤の心の月と風とを知らしむ是の故に夢の余波を
散じて寤の本心に帰せしむるなり、故に止觀に云く、「月・重山に隠るれば扇
を挙げて之に類し風大虚に息みぬれば樹を動かして之を訓ゆるが如し」文、
弘決に云く、「真常性の月・煩惱の山に隠る煩惱一に非ず故に名けて重と為す
円音教の風は化を息めて寂に歸す寂理無礙なること猶大虚の如し四依の弘教
は扇と樹との如し乃至月と風とを知らしむるなり已上、夢中の煩惱の雲・
重疊せること山の如く其の数八万四千の塵勞にて心性本覺の月輪を隠す扇
と樹との如くなる經論の文字言語の教を以て月と風との如くなる本覺の理を
覺知せしむる聖教なり故に文と語とは扇と樹との如し」文、上釈は一往の
釈とて実義に非ざるなり月の如くなる妙法の心性の月輪と風の如くなる我が
心の般若の慧解とを訓え知らしむるを妙法蓮華經と名く、故に釈籤に云く
「声色の近名を尋ねて無相の極理に至る」と已上、声色の近名とは扇と樹と

の如くなる夢中の一切経論の言説なり無相の極理とは月と風との如くなる
寤の我が身の心性の寂光の極樂なり、此の極樂とは十方法界の正報の有情
と十方法界の依報の国土と和合して一体・三身即一なり、四土不二にして
法身の一仏なり十界を身と為すは法身なり十界を心と為すは報身なり十界
を形と為すは応身なり十界の外に仏無し仏の外に十界無くして依正不二な
り身土不二なり一仏の身体なるを以て寂光土と云う是の故に無相の極理とは
云うなり、生滅無常の相を離れたるが故に無相と云うなり法性の淵底玄宗
の極地なり故に極理と云う、此の無相の極理なる寂光の極樂は一切有情の
心性の中に有つて清淨無漏なり之を名けて妙法の心蓮台とは云うなり
是の故に心外無別法と云う此れを一切法は皆是仏法なりと通達解了すとは云
うなり、生と死と二つの理は生死の夢の理なり妄想なり顛倒なり本覺の寤
を以て我が心性を糾せば生ず可き始めも無きが故に死す可き終りも無し既に

生死しやうじを離はなれたる心法しんぽうに非あらずや、劫火こつかにも焼やけず水災すいさいにも朽くちず劍刀けんたうにも切きられず弓きう箭せんにも射やられず芥子けしの中なかに入るれども芥子けしも広ひろからず心法しんぽうも縮ちぢまらずこくう虚空こくうの中なかに満みつれども虚空こくうも広ひろからず心法しんぽうも狭せまからず善ぜんに背そむくを惡あくと云いい惡あくに背そむくを善ぜんと云いう、故ゆえに心こころの外ほかに善ぜん無なく惡あく無なし此こころの善ぜんと惡あくとを離はなるるを無記むきと云いうなり、善惡無記ぜんあくむき 此こころの外ほかには心無こころなく心こころの外ほかには法無はふきなり故ゆえに善惡ぜんあくもじやうえ淨穢じやうえも凡夫ぼんぷ・聖人しやうにんも天地てんちも大小だいしやうも東西とうしも南北なんぼくも四維しじも上下じやうげも言語ごんごとうだん道斷だうだんししんぎ心行しんぎ所滅しよめつす心こころに分別ぶんべつして思おもひ言いひ顯あらわす言語ごんごなれば心こころの外ほかには分別ぶんべつも無分別むぶんべつも無なし、言いと云いうは心こころの思おもひを響ひびかして声こゑを顯あらわすを云いうなり凡夫ぼんぷは我われが心こころに迷まようて知しらず覺さらざるなり、仏ほとけは之これを悟さとり顯あらわして神通じんつうと名なくるなり神通じんつうとは神かみの一切いっさいの法はふに通とおじて礙ぎ無なきなり、此こころの自在じざいの神通じんつうは一切いっさいの有情うじやうの心こころにて有あるなり故ゆえに狐狸こくども分ぶん分に通とおを現げんずること皆みな・心こころの神かみの分ぶん分の悟さとなり此こころの心こころの一ひと法はふより國土世間こくどせけんも出しゅ来たいする事ことなり、一いち代だい聖教しやうきやうとは此こころの事ことを説ときたるなり

此これを八はち萬まん四し千せんの法ほう藏ざうとは云いうなり是これ皆みな悉ことごとく一人の身み中ちゆうの法ほう門もんにて有あるなり、然しかれば八はち萬まん四し千せんの法ほう藏ざうは我わ身み一人の日記き文もん書しよなり、此この八はち萬まん法ほう藏ざうを我わが心しん中ちゆうに孕はらみ持もち懷いだき持もちたり我わが身み中ちゆうの心しんを以もつて仏ぶつと法ほうと淨じやう土どとを我わが身みより外ぐわいに思おもひ願がんい求もとむるを迷まよいとは云いうなり此この心しんが善ぜん惡あくの緣えんに値あつて善ぜん惡あくの法ほうをば造つくり出でせるなり、華け嚴こん經ぎやうに云いく、「心しんは工たくみなる画え師しの種しゆ種じゆの五ご陰いんを造つくるが如ごとく一切いっさい世せ間けんの中ちゆうに法ほうとして造つくらざること無なし心しんの如ごとく仏ぶつも亦また爾しかなり仏ぶつの如ごとく衆しゆ生じやうも然しかなり三さん界がい唯ただ一いつ心しんなり心しんの外ぐわいに別べつの法ほう無なし心しん仏ぶつ及および衆しゆ生じやう是この三さん差さ別べつ無なし」已む上じやう、無む量りやう義ぎ經ぎやうに云いく、「無む相さう・不ふ相さうの一いつ法ほうより無む量りやう義ぎを出生しゆつす」已む上じやう、無む相さう・不ふ相さうの一いつ法ほうとは一切いっさい衆しゆ生じやうの一いち念ねんの心しん是これなり、文もん句くに釈しゃくして云いく「生しやう滅めつ無む常じやうの相さう無なきが故ゆゑに無む相さうと云いうなり二に乘じやうの有いう余ねはん・無む余ねはんの二ふたつの涅槃ねはんの相さうを離はなるが故ゆゑに不ふ相さうと云いうなり」云いふ云いふ、心しんの不思議ふしぎを以もつて經きやう論ろんの詮ねん要やうと為なすなり、此この心しんを悟にり知しるを名なけて如に來らいと云いう之これを悟にり知しつて後じゆつは十じゆつ界かいは我わが

身なり我が心なり我が形なり本覺の如来は我が身心なるが故なり之を知らざる時を名けて無明と為す無明は明かなること無しと読むなり、我が心の有様を明かに覺らざるなり、之を悟り知る時を名けて法性と云う、故に無明とほつしよう
あきら さと いっしん いみよう
法性とは一心の異名なり、名と言とは二なりと雖も心は只一つ心なり斯れによ
むみよう べ
由つて無明をば断ず可からざるなり夢の心の無明なるを断ぜば寤の心を失うべ
ゆえ えんきよう いちごう
可きが故に総じて円教の意は一毫の惑をも断ぜず故に一切の法は皆是れ仏法なりと云うなり、法華經に云く、如是相本覺の応 身如来 如是性本覺の報 身如来
によぜたい ほっしんによらい によぜそう おうじんによらい によぜしよう ほうしんによらい
如是体本覺の法 身如来、此の三如是 によぜ
より後の七如是 出生 して合して十如是と成れるなり、此の十如是は十法界なり、此の十法界は一人の心より出で八万四千の法門と成るなり、一人を手本として一切衆生 平等なること是くの如し、三世の諸仏の總勸文にして御判
いっさいしゅじょうびようどう かくのごと さんぜ しよぶつ かんもん
慥かに印たる正本の文書なり仏の御判とは実相の一印なり印とは判の異名な
たしか おし ぶんしよ じっそう いみよう

り、余の一切の経には実相の印無ければ正本の文書に非ず全く実の仏無し実
の仏無きが故に夢中の文書なり浄土に無きが故なり、十法界は十なれども
十如是一なり譬えば水中の月は無量なりと雖も虚空の月は一なるが如し、
九法界の十如是は夢中の十如是なるが故に水中の月の如し仏法界の十如是は
本覺の寤の十如是なれば虚空の月の如し、是の故に仏界の一つの十如是顕れ
ぬれば九法界の十如是の水中の月の如きも一も闕減無く同時に皆顕れて体と
用と一具にして一体の仏と成る、十法界を互に具足し平等なる十界の衆生
なれば虚空の本月も水中の末月も一人の身中に具足して闕くること無し故に
十如是は本末究竟して等しく差別無し、本とは衆生の十如是なり末とは諸仏
の十如是なり諸仏は衆生の一念の心より顕れ給えば衆生は是れ本なり諸仏
は是れ末なり、然るを經に云く、今・此の三界は皆是我が有なり其の中の衆生
は悉く是吾が子なり」と已上、仏成道の後に化他の為の故に迹の成道を唱え

て生死しょうじの夢中ちゅうちゅうにして本覺ほんかくの寤とを説たまき給たまうなり、智慧ちえを父たに譬たとえ愚癡ぐちを子こに
譬たとえて是かくの如ごとく説たまき給たまえるなり、衆生しゅじやうは本覺ほんかくの十如じゆのぜ是なりと雖いえども一念いちねんの
無明眠りむみようの如ごとく心こころを覆おほうて生死しょうじの夢ゆめに入はいつて本覺ほんかくの理りを忘わすれ髮筋かみすじを切きる程ほどに
過去かこ・現在げんざい・未來みらいの三世さんぜの虚夢こむを見るなり、仏ぶつは寤うつつの人の如ごとくなれば生死しょうじの
夢ゆめに入はいつて衆生しゅじやうを驚おどろかし給たまえる智慧ちえは夢ゆめの中ちゅうにて父母ふぼの如ごとく夢ゆめの中ちゅうなる
我等われらは子息しそくの如ごとくなり、此この道理どうりを以もつて悉是しつぜ吾子こと言たまひ給たまうなり、此この理りを
思おもひ解とけば諸仏しよぶつと我等われらとは本ほんの故ゆゑにも父子ふしなり末ゆゑの故ゆゑにも父子ふしなり父子ふしの天てん
性ほんまつこは本末ほんまつこ是れ同じこ、斯これに由よつて己心こしんと仏心ぶつしんとは異ちがならずと觀かんずるが故ゆゑに生死しょうじ
の夢ゆめを覺さまして本覺ほんかくの寤とに還かへるを即身成仏そくしんじやうぶつと云いふなり、即身成仏そくしんじやうぶつは今
我われが身かみの上うへの天性ちんたい地體ちたいなり煩わづらいも無なく障さわりも無なき衆生しゅじやうの運命しゆんめいなり果報かほうなり
冥加みやうがなり、夫それ以もつては夢ゆめの時ときの心こころを迷まよひに譬たとえ寤との時ときの心こころを悟さとるに譬たとえ之これを
以もつて一代いちだい聖教しょうきやうを覺悟かくごするに跡形あとかたも無なき虚夢こむを見て心こころを苦くるしめ汗水あせみずと成なつて

おどろ

驚きぬれば我身も家も臥所も一所にて異らず夢の虚と寤の実との二事を目

にも見・心にも思えども所は只一所なり身も只一身にて二の虚と実との事有

り之を以て知んぬ可し、九界の生死の夢見る我が心も仏界常住の寤の心も

異ならず九界生死の夢見る所が仏界常住の寤の所にて変らず心法も替らず

在所も差わざれども夢は皆虚事なり寤は皆実事なり止観に云く「昔莊周と

云うもの有り夢に胡蝶と成つて一百年を経たり苦は多く樂は少く汗水と成つ

て驚きぬれば胡蝶にも成らず百年をも経ず苦も無く樂も無く皆虚事なり皆

妄想なり」取意、弘決に云く「無明は夢の蝶の如く三千は百年の如し一念実

無きは猶蝶に非ざるが如く三千も亦無きこと年を積むに非るが如し」已上、

此の釈は即身成仏の証拠なり夢に蝶と成る時も莊周は異ならず寤に蝶と

成らずと思う時も別の莊周無し、我が身を生死の凡夫なりと思う時は夢に蝶

と成るが如く僻目僻思なり、我が身は本覺の如来なりと思う時は本の莊周

なるが如しこと即身成仏そくしんじょうぶつなり、蝶ちょうの身を以て成仏じょうぶつすと云うに非あらざるなり蝶ちょうと
思おもうは虚事そらごとなれば成仏じょうぶつの言ことは無なし沙汰さたの外ほかの事なり、無明むみょうは夢ちようの蝶ちょうの如ごとし
と判わずれば我等われらが僻ひが思おもは猶昨日なの夢むの如ごとく性体無なき妄想もうそうなり誰たれの人ひとか虚夢こむの
生死しょうじを信受しんじゆして疑うたがを常住じようじゆう涅槃ねはんの仏性ぶつじように生なぜんや、止観しかんに云いく、無明むみょうの癡惑ちわく
本もとよりは是これ法性ほっしようなり癡迷ちめいを以ての故ゆゑに法性ほっしよう變へじて無明むみょうと作り諸もろもろの顛倒てんどうの善ぜん
不善等ふぜんを起おこす寒来りて水を結むすべば變へじて堅けん氷ひようと作なるが如ごとく又眠来りて心こころを變へ
ずれば種種しきじゆの夢あ有あるが如ごとし今当まさに諸もろもろの顛倒てんどうは即すなわち是これ法性ほっしようなり一ひとならず異ちがなら
ずと体てんすべし、顛倒てんどう起滅きめつすること旋火輪せんかりんの如ごとしと雖いえども顛倒てんどうの起滅きめつを信しんぜずし
て唯ただ此この心こころ但ただ是これ法性ほっしようなりと信しんず、起おこは是これ法性ほっしようの起おこ・滅めつは是これ法性ほっしようの滅めつ
なり其それを体てんするに實じつには起滅きめつせざるを妄みだりに起滅きめつすと謂おもへり只妄想ただもうそうを指さす
に悉ことごとく是これ法性ほっしようなり、法性ほっしようを以て法性ほっしように繋かけ法性ほっしようを以て法性ほっしようを念おもはず常じように
是これ法性ほっしようなり法性ほっしようならざる時とき無なし「已上かくのこと、是この如ごとく法性ほっしようならざる時ときの隙ひま

も無き理の法性に夢の蝶の如く無明に於て実有の思を生じて之に迷うなり、止觀の九に云く「譬えば眠の法・心を覆うて一念の中に無量世の事を夢みるが如し乃至寂滅真如に何の次位か有らん、乃至一切衆生即大涅槃なり復滅す可からず何の次位・高下・大小有らんや、不生不生にして不可説なれども因縁有るが故に亦説くことを得可し十因縁の法生の為に因と作る虚空に画き方便して樹を種るが如し一切の位を説くのみ」已上、十法界の依報正報は法身の仏・一体・三身の徳なりと知つて一切の法は皆是れ仏法なりと通達し解了する是を名字即と為す名字即の位より即身成仏す故に円頓の教には次位の次第無し・故に玄義に云く「末代の学者多く經論の方便の断伏を執して諍鬭す水の性の冷かなるが如きも飲まずんば安んぞ知らん」已上、天台の判に云く「次位の綱目は仁王・瓔珞に依り断伏の高下は大品智論に依る」已上、仁王・瓔珞・大品・大智度論是の經論は皆法華已前の八教の經論なり、

権教ごんきょうの行むりょうは無量劫むりょうじつを経て昇進しやうじんする次位しだいなれば位の次第しだいを説ほつけり今法華ほつけは
八教はつきょうに超こえたる円ごなれば速疾頓そくしつとんじやう成じやうにして心しんと仏ぶつと衆生しゆじやうと此この三さんは我が一念いちねん
の心中しんちゆうに撰おさめて心の外がいに無しと觀げずれば下根げこんの行者ぎやうじやすら尚なほ一生いっせいの中に妙覺みやうかく
の位ゐに入る・一と多そうそくと相即いっさいすれば一位いっさいに一切みなこの位ぐそく皆是ゆえれ具足ぐそくせり故ゆえに一生いっせいに
入げるなり、下根げこんすら是かくの如いし況わんや中根ちゆうこんの者いかをや何いに況わんや上根じやうこんをや実相じつそうの外
に更に別べちの法じつそう無し実相じつそうには次第しだい無ゆえきが故ゆえに位い無し、總いじて一代いちだいの聖教しやうきやうは一
人の法しゆじやうなれば我が身の本体よを能よく知べる可これし之いを悟まよるを仏いと云い之まよに迷まよう
は衆生しゆじやうなり此これは華嚴經けこんきやうの文ぶんの意いなり、弘決ぐけつの六むに云いく「此この身みの中に
具つさに天地てんちに倣ならうことを知しる頭かうの円まかなるは天かたどに象かたどり足あしの方かたどなるは地しに
象かたどると知しり身みの内うちの空種うつろなるは即すなわち是これ虚空こくうなり腹はらの温ぬかなるは春夏しゆんかに
法そむとり背そむの剛こわきは秋冬しゆうとうに法のつとり四体しは四時しに法のつとり大節だいせつの十二じふには十二月じふにに
法のつとり小節せうせつの三百六十さんぱくろくじゅうは三百六十日さんぱくろくじゅうにちに法のつとり、鼻はなの息いきの出入しゆつしゆは山沢溪谷さんざくせきこくの中

の風に法とり口の息の出入は虚空こくうの中の風に法とり眼まなこは日月いちがつに法とり開閉は
昼夜のつに法とり髪は星辰せいしんに法とり眉は北斗のつに法とり脈は江河こうかに法とり骨は玉石
に法とり皮肉は地土ちどに法とり毛は叢林のつに法とり、五臓は天あに在つては五星に
法とり地あに在つては五岳のつに法とり陰陽いんように在つては五行のつに法とり世あに在つては
五常ごじように法とり内あに在つては五神のつに法とり行しゆうを修するには五徳のつに法とり罪つみを
治おさむるには五刑おもえらに法とる謂く墨ぎ・ひ・宮たいへき・大辟此の五刑は人を様様に之を偏ましむ
領おもえらには五官おもえらと為す五官は下の第八の巻に博物誌を引くが如し謂く苟萌等なり、
天に昇つては五雲いと日い化して五竜なと為る、心を朱雀なと為し腎を玄武なと為し
肝を青竜なと為し肺を白虎なと為し脾を勾陳こうちんと為す又云く「五音・五明・六藝
・皆此れより起る亦復当に内治おこの法を識しるべし覚心内かくしんに大王だいおうと為つては百重
の内に居り出いでては則ち五官すなわに侍衛じえいせ為る、肺をば司馬なと為し肝をば司徒なと
為し脾をば司空なと為し四支なをば民子なと為し、左をば司命なと為し右をば司録しよくと

為し人命を主司す、乃至臍をば太一君等と為すと禪門の中に広く其の相を明
す。已上、人身の本体委く検すれば是くの如し、然るに此の金剛不壞の身を以
て生滅無常の身なりと思ふ。僻思は譬えば莊周が夢の蝶の如しと釈し給え
るなり、五行とは地水火風空なり五大種とも五蘊とも五戒とも五常とも五方
とも五智とも五時とも云う、只一物・経經の異説なり内典・外典名目の
異名なり、今經に之を開して一切衆生の心中の五仏性五智の如來の種子
と説けり是則ち妙法蓮華經の五字なり、此の五字を以て人身の体を造るなり
本有常住なり本覺の如來なり是を十如是と云う此を唯仏与仏・乃能究竟と云
う、不退の菩薩と極果の二乗と少分も知らざる法門なり然るを円頓の凡夫は
初心より之を知る故に即身成仏するなり金剛不壞の体なり、是を以て明かに
知んぬ可し天崩れば我が身も崩る可し地裂けば我が身も裂く可し地水火風滅
亡せば我が身も亦滅亡すべし、然るに此の五大種は過去・現在・未來の三世

は替かわると雖いえども五大種は替かわること無し、正しょう法ほうと像ぞう法ほうと末まつ法ほうとの三さん時じ殊ことなりと

雖いえども五大種は是これ一にして盛せい衰すい転てん變へん無むし、藥やく草そう喻ゆ品ほんの疏じょには円えん教きょうの理だいは大地ち

なり円えん頓どんの教こうは空くうの雨うなり亦また三さん蔵ざう教きょう・通つう教きょう・別べつ教きょうの三さん教きょうは三さん草そうと二に木もくとな

り、其そのの故ゆえは此この草そう木もくは円えん理りの大地だいより生なじて円えん教きょうの空くうの雨うに養やわれて五ご乘じょう

の草そう木もくは榮えうれども天てん地ちに依よつて我わ榮ええたりと思し知ちらざるに由よるが故ゆえに三さん教きょう

の人にん天てん・二に乘じょう・菩ぼ薩さつをば草そう木もくに譬たとえて不知ふち恩おんと説えかれたり、故ゆえに草そう木もくの名なを

得ほつ・今け法ほ華けに始はめて五ご乘じょうの草そう木もくは円えん理りの母ぼと円えん教きょうの父ふとを知しるなり、一いつ地ちの

所じょ生しょうなれば母ぼの恩おんを知しるが如ごとく一いち雨うの所じょ潤にんなれば父ふの恩おんを知しるが如ごとく、

藥やく草そう喻ゆ品ほんの意い是かくの如ごとくなり。

釈しゃ迦か如に来らい・五ご百ひゃく塵じん点てん劫こつの当その初かみ凡ほん夫ぶにて御お坐わしせし時とき・我わが身みは地すい水か火くわ風ふう空くうな

りしと知しめして即さ座ざに悟さとを開ひらき給たまいき、後のちに化け他たの為ために世し世じ番ばん番ばんに出し世じ成じょう道どう

しし在し在し処じょ処じょに八は相さう作さく仏ぶつし王おう宮きうに誕た生しょうし樹じゅ下げに成じょう道どうして始はめて仏ぶつに成じょうる様ようを

衆生に見知らしめ四十余年に方便教を儲け衆生を誘引す、其の後方便の諸の經教を捨てて正直の妙法蓮華經の五智の如来の種子の理を説き顯して其の中に四十二年の方便の諸經を丸かし納れて一仏乗と丸し人・一の法と名く一人が上の法なり、多人の綺えざる正しき文書を造つて慥かな御判の印あり三世諸仏の手継ぎの文書を釈迦仏より相伝せられし時に三千三百万億那由佗の国土の上の虚空の中に満ち塞がれる若干の菩薩達の頂を摩で尽して時を指して末法近來の我等衆生の為に慥かに此の由を説き聞かせて仏の譲状を以て末代の衆生に慥かに授与す可しと慇懃に三度まで同じ御語に説き給いしかば若干の菩薩達・各数を尽してを曲げ頭を低れ三度まで同じ言に各・我も劣らじと事請を申し給いしかば仏・心安く思食して本覺の都に還えり給う、三世の諸仏の説法の儀式・作法には只同じ御言に時を指したる末代の譲状なれば只一向に後・五百歳を指して此の妙法蓮華經を以て

成仏じょうぶつす可べき時ときなりと讓ゆずり状じょうの面おもてに載のせられたる手継しゅでぎ証文しょうもんなり。

安樂行品あんらくぎょうぽんには末法まつぽうに入いつて近來このころ・初心しよしんの凡夫ぼんぶ・法華經ほけきやうを修行しゆぎやうして成仏じょうぶつす

可べき様やうを説とき置おかれしなり、身みも安樂行あんらくぎやうなり口くちも安樂行あんらくぎやうなり意いも安樂行あんらくぎやうな

り自行じぎやうの三業さんごふも誓願せいがん安樂あんらくの化他けたの行ぎやうも同じく後の末世おのに於おて法の滅めつせんと

欲ほする時ときと云云いふ、此こは近來きんらいの時ときなり已上いじやう四所ししよに有あり藥王品やくおうぽんには二所に説とかれ

勸發品かんぱつぽんには三所に説とかれたり、皆近來みなきんらいを指ゆずして讓ゆずり置おかれたる正ただしき文書ぶんしよを

用もちいずして凡夫ぼんぶの言ことに付き愚癡ぐちの心こころに任まかせて三世諸仏さんぜしよぶつの讓ゆずり状じょうに背そむき奉たてまつり永

く仏法ぶつぽうに背そむかば三世さんぜの諸仏しよぶつ・何いかに本意ほんい無なく口惜くちおししく心憂こころなげく歎なげき悲かなしみ思食おほしめす

らん、涅槃經ねはんぎやうに云いく「法よに依よつて人ひとに依よらざれ」と云云いふ、痛いたましいかな悲かなし

いかな末代まつだいの学者がくしや・仏法ぶつぽうを習學しゆがくして還かえつて仏法ぶつぽうを滅めつす、弘決くけつに之これを悲かなしんで

曰いく「此この円頓えんどんを聞きいて崇重すうちゆうせざることは良よに近代まこときんだい大乘だいじやうを習ならう者の雜濫ぞうらんに

由よるが故ゆゑなり況いはんやや像末情いざうしつ澆しんじんく信心しんじん寡薄くわはく・円頓えんどんの教けう・法藏ほうぞうに溢あふれ函はこに盈みつれど

も暫くも思惟せず便ち目を瞑ぐに至る徒らに生し徒らに死す一に何ぞ痛まし
き哉「已上、同四に云く、然も円頓の教は本と凡夫に被むらしむ若し凡を益す
るに擬せずんば仏・何ぞ自ら法性の土に住して法性の身を以て諸の菩薩の
為に此の円頓を説かずして何ぞ諸の法身の菩薩の与に凡身を示し此の三界に
現じ給うことを須いんや、乃至一心凡に在れば即ち修習す可し「已上、
所詮己心と仏身と一なりと観ずれば速かに仏に成るなり、故に弘決に又云く
「一切の諸仏己心は仏心と異ならずと観し給うに由るが故に仏に成ることを
得る」と已上、此れを觀心と云う實に己心と仏心と一心なりと悟れば臨終を
礙わる可き惡業も有らず生死に留まる可き妄念も有らず、一切の法は皆是れ
仏法なりと知りぬれば教訓す可き善知識も入る可らず思うと思ひ言うと言ひ
為すと為し儀いと儀う行住坐臥の四威儀の所作は皆仏の御心と和合して一
体なれば過も無く障りも無き自在の身と成る此れを自行と云う、此くの如く

自在なる自行の行を捨て跡形も有らざる無明妄想なる僻思の心に住して三世の諸仏の教訓に背き奉れば冥きより冥きに入り永く仏法に背くこと悲しむ可く悲しむ可し、

只今打ち返えし思い直し悟り返さば即身成仏は我が身の外には無しと知りぬ、我が心の鏡と仏の心の鏡とは只一鏡なりと雖も我等は裏に向つて我が性の理を見ず故に無明と云う、如来は面に向つて我が性の理を見たまえり故に明と無明とは其の体只一なり鏡は一の鏡なりと雖も向い様に依つて明昧の差別有り鏡に裏有りと雖も面の障りと成らず只向い様に依つて得失の二つ有り相即融通して一法の二義なり、化他の法門は鏡の裏に向うが如く自行の観心は鏡の面に向うが如し化他の時の鏡も自行の時の鏡も我が心性の鏡は只一にして替ること無し鏡を即身に譬え面に向うをば成仏に譬え裏に向うをば衆生に譬う鏡に裏有るをば性悪を断ぜざるに譬え裏に向う時・面の徳無き

をば化他けたの功德くどくに譬たとうるなり衆生しゅじょうの仏性ぶつじょうの顕あらわれざるに譬たとうるなり、自行じぎょうと化他けたとは得失とくしつの力用りきようなり玄義げんぎの一いちに云いわく「薩婆あるはしつた悉達ひい・祖王そおうの弓きうを彎ひて満みるを名なけて力りきと為なす七しちつの鉄鼓てつこを中なり一いつつの鉄圀てつがん山せんを貫とぬき地ちを洞とし水輪すいりんに徹とる如ごときを名なけて用ようと為なす自行の力用りきなり諸もろもろの方便ほうへん教きやうは力用りきようの微弱じやくじやくなること凡夫ぼんぷの弓きう・箭せんの如ごとし何なにとなれば昔むかしの縁えんは化他けたの二智にちを稟うけて理りを照てらすこと遍あまねからず信しんを生なずること深ふかからず疑うたがいを除のくこと尽きさず化他けた、今の縁えんは自行じぎょうの二智にちを稟うけて仏ぶつの境界きやうがいを極きわめ法界ほっかいの信しんを起おこし円妙えんめうの道だうを増こん根本こんぽんの惑ごを断へんじ变易へんにやくの生なを損そす、但ただ生身じやうしん及び生身しやうしん得忍とくにんの兩種りやうしゆの菩薩ぼさつ俱ともに益やくするのみに非あらず法身ほっしんと法身ほっしんの後心ごしんとの兩種りやうしゆの菩薩ぼさつも亦また以もて俱ともに益やくす化の功広大りになぐじんに利潤弘深けだこなる蓋けだし茲この經の力用りきようなり已上自行じぎょう・自行じぎょうと化他けたとの力用りきよう劣分しやうれつぶん明みなること勿論もちろんなり能よく能よく之これを見みよ一代いちだい聖教しやうきやうを鏡きやうに懸かたる教相きやうさうなり、極仏境界ききやうがいとは十如是じゆしの法門ほうもんなり十界じゆかいに互たがいに具足ぐそくして十界じゆかい・十

如の因果・権実の二智・二境は我が身の中に有つて一人も漏るること無しと
通達し解了し仏語を悟り極むるなり起法界信とは十法界を体と為し十法界を
心と為し十法界を形と為したまえりと本覺の如來は我が身の中に有りけりと
信ず増円妙道とは自行と化他との二は相即円融の法なれば珠と光と宝との
三徳は只一の珠の徳なるが如し片時も相離れず佛法に不足無し一生の中に仏
に成るべしと慶喜の念を増すなり、断根本惑とは一念無明の眠を覺まして本覺
の寤に還れば生死も涅槃も俱に昨日の夢の如く跡形も無きなり、損變易生
とは同居土の極樂と方便土の極樂と実報土の極樂との三土に往生せる人彼の
土にて菩薩の道を修行して仏に成らんと欲するの間・因は移り果は易りて
次第に進み昇り劫數を経て成仏の遠きを待つを變易の生死と云うなり、下
位を捨つるを死と云い上位に進むをば生と云う是くの如く變易する生死は
淨土の苦惱にて有るなり、爰に凡夫の我等が此の穢土に於て法華を修行すれ

ば十界互具・法界一如なれば浄土の菩薩の變易の生は損し仏道の行は増して
變易の生死を一生の中に促めて仏道を成ず故に生身及び生身得忍の兩種の
菩薩・増道損生するなり、法身の菩薩とは生身を捨てて実報土に居するな
り、後心の菩薩とは等覺の菩薩なり但し迹門には生身及び生身得忍の菩薩
を利益するなり本門には法身と後身との菩薩を利益す但し今は迹門を開して
本門に摂めて一の妙法と成す故に凡夫の我等穢土の修行の行の力を以て
浄土の十地等覺の菩薩を利益する行なるが故に化の功広大なり徳用、利潤弘深
とは徳用円頓の行者は自行と化他と一法をも漏さず一念に具足して横に十方
法界に遍するが故に弘きなり豎には三世に亘つて法性の淵底を極むるが故に
深きなり、此の經の自行の力用此くの如し化他の諸經は自行を具せざれば鳥
の片翼を以て空を飛ばざるが如し故に成仏の人も無し今法華經は自行化他の
二行を開会して不足無きが故に鳥の二翼を以て飛ぶに障り無きが如く成仏

とどこお 滞り無し、薬王品には十喩を以て自行と化他との力用の勝劣を判ぜり第一の
たとえ 譬に云く諸経は諸水の如く法華は大海の如し云云取意、実に自行の法華経
たいかい 的大海には化他の諸経の衆水を入ること昼夜に絶えず入ると雖も増ぜず
ふかしぎ 減ぜず不可思議の徳用を顕す、諸経の衆水は片時の程も法華経の大海を
じぎよう 納るること無し自行と化他との勝劣是くの如し一を以て諸を例せよ、上来の
ひゆ みな 譬喩は皆仏の所説なり人の語を入れず此の旨を意得れば一代聖教鏡に懸け
くも て陰り無し此の文釈を見て誰の人か迷惑せんや、三世の諸仏の總勘文なり敢て
人 人の会釈を引き入る可からず三世諸仏の出世の本懐なり一切衆生成仏の
じきどう 直道なり、四十二年の化他の経を以て立る所の宗宗は華嚴・真言・達磨・浄土
ほうそう 法相・三論・律宗・俱舍・成実等の諸宗なり此等は皆悉く法華より已前
はつきよう の八教の中の教なり皆是方便なり兼・但・対・帯の方便誘引なり、三世諸仏
せつきよう の説教の次第なり此の次第を糾して法門を談ず若し次第に違わば仏法に

あら
非ざるなり、一代教主の釈迦如来も三世諸仏の説教の次第を糾して一字も

違わす我も亦是くの如しとて・経に云く「三世諸仏の説法の儀式の如く我も

今亦是くの如く無分別の法を説く」已上、若し之に違えば永く三世の諸仏の本意

に背く他宗の祖師各・我が宗を立て法華宗と争うことりの中のり迷いの

中の迷いなり。

徴佗学の決に之を破して云く山王院凡そ八万法蔵其の行相を統ぶるに四教

を出でず頭辺に示すが如し蔵通・別円は即ち声聞・縁覚・菩薩仏乘なり

真言・禅門・華嚴・三論・唯識・律業・成俱の二論等の能所の教理争でか此

の四を過ぎん若し過ぐると言わば豈外邪に非ずや若し出でずと言わば便ち他

の所期を問い得よの果なり、然して後に答に随つて極理を推ね徴めよ我が四教

の行相を以て並べ検えて決定せよ彼の所期の果に於て若し我と違わば随つて

即ち之を詰めよ、且く華嚴の如きは五教に各各に修因向果有り初・中・後の

行一ならず一教一果是れ所期なるべし若し蔵通・別円の因と果とに非ざれば
是れ仏教ならざるのみ、三種の法輪・三時の教等・中に就て定む可し汝何者
を以てか所期の乗と為るや若し仏乗なりと言わば未だ成仏の觀行を見ず
若し菩薩と言わば此れ亦即離の中道の異なるなり、汝正しく何れを取るや
設し離の辺を取らば果として成ず可き無し如し即是を要せば仏に例して之を
難ぜよ謬つて真言を誦すとも三觀一心の妙趣を会せずんば恐くは別人に同じ
て妙理を証せし所以に他の所期の極を逐うて理に準じて我が宗の徴べし、因明の
道理は外道と対す多くは小乗及び別教に在り若し法華・華嚴・涅槃等の
經に望むれば接引門なり権りに機に對して設けたり終に以て引進するなり邪
小の徒をして会して真理に至らしむるなり所以に論ずる時は四依擊目の
志を存して之を執着すること莫れ又須らく他の義を將つて自義に對檢して
隨つて是非を決すべし執して之を怨むこと莫れ円旨至つて少きのみ、先徳大師の

所判しよはん是かくの如ごとし、諸宗しよしゆうの所立鏡しよりゆうに懸かけて陰くもり無なし末代まつだいの学者がくしや何なんぞ之これを見みずし
て妄みだりに教門きやうもんを判きやうもんぜんや大綱たいこうの三教さんきやうを能よく能よく学べす可べし、頓とんと漸ぜんと円えんとは三
教こなり是いちだいしきやうれ一代い聖教せんきやうの總さんたいの三諦さんたいなり頓とん・漸ぜんの二は四十二年しにじふにねんの説えんきやうなり円教えんきやうの
一はは八箇年はちかねんの説はちかねんなり合あして五十年ごじゅうねんなり此この外ほかに法無いし何いかに由よつてか之これに迷まよわ
ん、衆生しゆじやうに有ある時ときには此これを三諦さんたいと云いい仏果ぶつを成じやうずる時ときには此これを三身さんじんと云
う一物いみの異名いみなり之これを説とき顯あらわすを一代いちだい聖教しきやうと云いい之これを開かい会えして只ただ一の總さんたい
三諦さんたいと成じやうずる時ときに成じやう仏ぶつす此こを開かい会えと云いい此こを自行じぎやうと云いう、又他宗たしゆうしよりゆう所立しよりゆうの宗しよ
宗しよは此この總さんたいの三諦さんたいを分別ぶんべつして八はと為なす各各かくかくに宗しよを立たつるに依よつて円満えんまんの理りを
闕かいて成じやう仏ぶつの理り無なし是かくのゆえの故ゆえに余宗よしゆうには実じつの仏無なきなり故ゆえに之これを嫌きらう意いは不足ふそく
なりと嫌きらうなり、円教えんきやうを取とつて一切諸法いっさいしよほうを觀かんずること円融えんゆう・円満えんまんして十五夜じふごや
の月ごとの如ふそくく不足まんぞく無なく満足くきやうし究竟ぜんあくすれば善惡ぜんあくをも嫌きらわず折節おりふしをも撰せんばず静處じやうじよを
も求めず人品えんじんをも扱えらばず一切諸法いっさいしよほうは皆みな是これ仏法ぶつぽうなりと知しりぬれば諸法しよほうを通達つうだつ

す即ち非道を行うとも仏道を成ずるが故なり、天地水火風は是れ五智の如来

なり一切衆生の身心の中に住在して片時も離るること無きが故に世間と

出世と和合して心中に有つて心外には全く別の法無きなり故に之を聞く時立

所に速かに仏果を成ずること滞り無き道理至極なり、總の三諦とは譬えば珠

と光と宝との如し此の三徳有るに由つて如意宝珠と云う故に總の三諦に譬う

も若し亦珠の三徳を別別に取り放さば何の用にも叶う可からず隔別の方便教の

宗宗も亦是くの如し珠をば法身に譬え光をば報身に譬え宝をば応身に譬う此

の總の三徳を分別して宗を立つるを不足と嫌うなり之を丸じて一と為すを總

の三諦と云う、此の總の三諦は三身即一の本覺の如来なり又寂光をば鏡に

譬え同居と方便と実報の三土をば鏡に遷る像に譬う四土も一土なり三身も

一仏なり今は此の三身と四土と和合して仏の一体の徳なるを寂光の仏と云う

寂光の仏を以て円教の仏と為し円教の仏を以て寤の実仏と為す余の三土

の仏は夢中の権仏なり、此れは三世の諸仏の只同じ語に勘文し給える総の
教相なれば人の語も入らず会釈も有らず若し之に違わば三世の諸仏に背き
奉る大罪の人なり天魔・外道なり永く仏法に背くが故に之を秘藏して他人に
は見せざれ若し秘藏せずして妄りに之を披露せば仏法に証理無く二世に冥加
無からん謗ずる人出来せば三世の諸仏に背くが故に二人乍ら俱に惡道に墮ん
と識るが故に之を誡むるなり、能く能く秘藏して深く此の理を証し三世の諸仏
の御本意に相叶い二聖二天・十羅刹の擁護を蒙むり滞り無く上・上品の
寂光の往生を遂げ須臾の間に九界生死の夢の中に還り來つて身を十方世界
の国土に遍じ心を一切有情の身中に入れて内よりは勧発し外よりは引導し
内外相応し因縁和合して自在神通の慈悲の力を施し広く衆生を利益すること
滞り有る可からず。

三世の諸仏は此れを一大事の因縁と思食して世間に出現し給えり一とは

中道なり
法華なり大とは華嚴なり事とは方等・般若なり已上一代の總の三諦なり、之を悟り

知る時・仏果を成ずるが故に出世の本懷成仏の直道なり因とは一切衆生の

身中に總の三諦有つて常住・不變なり此れを總じて因と云うなり縁とは三因

ぶつしゅう

仏性は有りと雖も善知識の縁に値わざれば悟らず知らず顕れず善知識の縁に

あ

値えは必ず顕るるが故に縁と云うなり、然るに今・此の一と大と事と因と縁

との五事^{わごう}和合して値^あい難^{がた}き善知識の縁に値^あいて五仏性を顯^{あらわ}さんこと何の滞^{とどお}り

か有らんや春の時来りて風雨の縁に値^あいぬれば無心の草木も皆悉く萌^{もつ}え

しゅつしゅう

出生^{はなさ}して華敷き栄えて世に値^あう気色なり秋の時に至りて月光の縁に値^あいぬ

れば草木皆悉く実成熟して一切の有情を養育し寿命を續き長養し終^{つい}に

じょうぶつ

成仏の徳用を顯^{あらわ}す之を疑^{うたが}い之を信ぜざる人有^ある可しや無心の草木すら猶^{なほ}以

て是^{かく}の如^{いか}し何に況^{いわん}や人倫^{じんりん}に於^{おい}てをや、我等^{われら}は迷^{まよ}い凡^{ぼん}夫^ぶなりと雖も一分の心

も有り解も有り善惡も分別し折節を思知る然るに宿縁に催されて生を仏法^{ぶつぽう}

るふ　こくど
流布の国土に受けたる善知識の縁に値いなば因果を分別して成仏す可き身を
以て善知識に値うと雖も猶草木にも劣つて身中の三因仏性を顕さずして黙止
せる謂れ有る可きや、此の度必ず必ず生死の夢を覚まし本覺の寤に還つて
生死の繼を切る可し今より已後は夢中の法門を心に懸く可からざるなり、
三世の諸仏と一心と和合して妙法蓮華經を修行し障り無く開悟す可し自行
と化他との二教の差別は鏡に懸けて陰り無し、三世の諸仏の勘文是くの如し
秘す可し秘す可し。

弘安二年己卯十月　日

日蓮　花押

七八　諫曉八幡抄　576P

夫れ馬は一歳二歳の時は設いつがいのび・まるすねに・すねほそく・うで
のびて候へども病あるべしとも見えず、而れども七八歳なんどになりて身も
こへ血ふとく上かち下をくれ候へば小船に大石をつめるがごとく小き木に大

なる菓このみのなれるがごとく多くのやまい出来しゅったいして人の用にもあわず力もよわ
く寿いのちもみじかし、天神等てんじんも又かくのごとし成劫じやうくわつの始には先生せんしやうの果報かほういみじ
き衆生しゆじやう生れ来る上・人の惡も候はねば身の光もあざやかに心もいさぎよく
日月のごとくあざやかに師子象ししのいさみをなして候いし程に成劫じやうくわつやうやくす
ぎて住劫になるままに前の天神等てんじんは年かさなりて下旬の月のごとし今生こんじやう来
れる天神てんじんは果報衰減かほうすいげんし下劣げれつの衆生しゆじやう多分は出来しゅつたいす、然しかる間いつてん・一天さんさいに三災やう
やくをこり四海しかいに七難粗出現ひちなんほろしゆつげんせしかば一切衆生始めて苦と樂とを・をもい
知る。

此の時・仏出現しゆつげんし給たまひいて仏教ぶつぎやうと申もつす薬を天と人と神とにあたへ給たまひいしか
ば燈ともしびに油をそへ老人ろうじんに杖をあたへたるがごとく天神等てんじん還かえつて威光いこうをまし
勢せいりよく力を増長ぞうちやうせし事・成劫じやうくわつのごとし仏教ぶつぎやうに又五味のあぢわひ分れたり在世ざいせ
の衆生しゆじやうは成劫じやうくわつほどこそなかりしかども果報かほういたう・をとろへぬ衆生しゆじやうなれば

五味の中に何の味をもなめて威光勢力をもまし候き、いこうせいりよく 仏滅度の後正像二千

年過て末法になりぬれば本のも神も阿修羅大竜等も年もかさなりて身もつ

かれ心もよはくなり又今生来る天人・修羅等は・或は小果報・或は悪天人

等なり、小乗・権大乘等の乳・酪・生蘇・熟蘇味を服すれども老人に食

をあたへ高人に麦飯等を奉るがごとし、而るを当世此を弁えざる学人等古に

ならいて日本国の一切の諸神等の御前にして阿含經方等・般若・華嚴・

大日經等を法樂し俱舎・成実・律・法相・三論華嚴・浄土・禅等の僧を

護持の僧とし給える唯老人に食を与へ小兒に強飯をくくめるがごとし、

何に況や今の小乗經と小乗宗と大乘經と大乘宗とは古の小大乘の

經宗にはあらず、天竺より仏法漢土へわたりし時小大の經經は金言に私

言まじはれり、宗宗は又天竺・漢土の論師・人師・或は小を大とあらそい・或

は大を小という・或は小に大をかきまじへ・或は大に小を入れ・或は先きの

經を後とあらそい・或は後を先とし・或は先を後につけ・或は顯經を密經
といひ密經を顯經という譬へば乳に水を入れ薬に毒を加うるがごとし、
涅槃經に仏・未來を記して云く「爾の時に諸の賊・醍醐を以ての故に之に加
うるに水を以てす・水を以てする事多きが故に乳 酪醍醐一切俱に失す」等云
云、阿含・小乘經は乳味のごとし方等・大集經・阿弥陀經・深密經・
楞伽經・大日經等は酪味のごとし、般若經等は生蘇味の如く華嚴經等は
熟蘇味の如く法華・涅槃經等は醍醐味の如し、設い小乘經の乳味なりとも
仏説の如くならば争でか一分の薬とならざるべき、況や諸の大乗經をや
何に況や法華經をや。

然るに月氏より漢土に經を渡せる訳人は一百八十七人なり其の中に羅什
三蔵一人を除きて前後の一百八十六人は純乳に水を加へ薬に毒を入たる人
なり、此の理を弁へざる一切の大師・末学等設い一切經を讀誦し十二分經を

胸に浮べたる様なりともし生死を離る事かたし又現在に一分のしるしある様な
りとも天地の知る程の祈とは成る可からず魔王・魔民等守護を加えて法に驗
の有様なりともし終には其の身も檀那も安穩なる可からず譬ば旧医の薬に毒を
雑へて・さしをけるを旧医の弟子等・或は盗み取り・或は自然に取りて人
の病を治せんが如し・いかでか安穩なるべき、当世日本国の真言等の七宗並
に浄土・禅宗等の諸学者等、弘法・慈覚・智証等の法華經最第一の醍醐に
法華第二・第三等の私の水を入れたるを知らず仏説の如くならば・いかでか
一切俱失の大科を脱れん、大日經は法華經よ
り劣る事七重なり而るを弘法等・顛倒して大日經最第一と定めて日本国に
弘通せるは法華經一分の乳に大日經七分の水を入れたるなり水にも非ず乳に
も非ず大日經にも非ず法華經にも非ず而も法華經に似て大日經に似たり
大覺世尊此の事を涅槃經に記して云く「我が滅後に於て正法將に滅尽せんと

欲^ほす爾^その時に多く悪を行ずる比丘有^{ひく}らん、乃至^{ないし}牧牛女の如^{ごと}く乳を売るに多利
を貪^ほらんと欲^{もつ}するを為^{ゆえ}ての故に二分の水を加う、乃至^{ないし}此の乳・水多し、爾^その
時に是^この経閻浮提に於^{おい}て当^{まさ}に広く流布すべし、是^この時に当^{まさ}に諸^{もろもろ}の悪比丘有^{ひく}て
是^この経を鈔^{とり}・略^なし分^{たぶん}て多分と作^なし能^よく正法^{しょうほう}の色香美味を滅^{しきこうのみ}すべし、是^この諸^{もろもろ}の
悪人復^{あくにん}是^{かく}の如^{ごと}き經典^{きょうてん}を読誦^{どくじゆ}すと雖^{いえど}も如来^{にょらい}の深密^{じんみつ}の要義^{ようぎ}を滅除^{めつじよ}せん、乃至^{ないし}前^{ぜん}
を鈔^{とり}て後に著^つけ後を鈔^{とり}て前に著^つけ前後^{ぜんご}を中に著^つけ中を前後^{ぜんご}に著^つけん当^{まさ}に知る
べし是^{かく}の如^{ごと}きの諸^{もろもろ}の悪比丘^{あくびく}は是^これ魔^まの伴侶^{はんりよ}なり」等云云。

今・日本国を案^{にほんこく}ずるに代始^{すで}まりて已^{すで}に久^{ふる}しく成^{しゆご}りぬ旧^{きう}き守護^{ぜんじん}の善神^{ぜんじん}は定め
て福^つも尽^{つく}き寿^{しう}も減^{いこうせいりよく}じ威光勢^{いこうせいりよく}力^{ちから}も衰^{おとろ}えぬらん、仏法^{ぶつぽう}の味^{あじ}をなめてこそ威光勢^{いこうせいりよく}力^{ちから}
も増^{ぞうちよう}長^{ちやう}すべきに仏法^{ぶつぽう}の味^{あじ}は皆^{みな}たがひぬ齡^{よわい}はたけぬ争^{いか}でか国の災^{わざ}を払い氏子^{しゆこ}
をも守護^{しゆこ}すべき、其^その上^{はうほう}謗法^{ぼうほう}の国^{くに}にて候^{まち}を氏神^{しん}なればとて大科^{だいか}をいましめず
して守護^{しゆこ}し候^{まち}へば仏前^{ぶつぜん}の起請^{きしやう}を毀^{そしり}る神^{たましい}なり、しかれども氏子^{しん}なれば愛子^{いとが}の失^{うしな}

のやうに・すてずして守護し給いぬる程に法華經の行者をあだむ国主人等を対治を加えずして守護する失に依りて梵釈等のためには八幡等は罰せられ給いぬるか此事は一大事なり秘すべし秘すべし、有る經の中に仏・此の世界と他方の世界との梵釈・日月・四天・竜神等を集めて我が正像末の持戒・破戒・無戒等の弟子等を第六天の魔王・悪鬼神等が人王・人民等の身に入りて悩乱せんを見乍ら聞き乍ら治罰せずして須臾もすこすならば必ず梵釈等の使をして四天王に仰せつけて治罰を加うべし、若し氏神・治罰を加えずば梵釈・四天等も守護神に治罰を加うべし梵釈又かくのごとし、梵釈等は必ず此の世界の梵釈・日月・四天等を治罰すべし、若し然らずんば三世の諸仏の出世に漏れ永く梵釈等の位を失いて無間・大城に沈むべしと釈迦・多宝・十方の諸仏の御前にして起請を書き置れたり。

今之を案ずるに日本小国の王となり神となり給うは小乗には三賢の菩薩

・大乗だいじようには十信じゆっしん・法華ほっけには名字五品の菩薩みようじごほんぼさつなり、何なる氏神いかむじん有りて無尽むじんの
功德くどくを修しゆうすとも法華經ほけきようの名字みょうじを聞きこかず一念三千いちねんさんぜんの觀法かんぼうを守護しゆごせずんば退位でんぎようの
菩薩ぼさつと成なりて永むげんく無間だいじよう・大城だいじように沈おみ候べし、故ゆえに扶桑記ふそうに云いく「又また傳でん教大師ぎょうだいし
はちまんだいぼさつ おんため じんぐうじ おい みずか ほけきよう こう すなわ おわり
・八幡大菩薩はちまんだいぼさつの奉おんため為じんぐうじに神宮寺おいに於おて、自みずから法華經ほけきようを講こうず、乃すなわち聞きこき竟おわりて大神おわり
託宣たくせんすらく我ほうせい法音ほうせいを聞きこかずして久さいねんしく歳年へを歴わじようる幸ちくうい和尚せいきように値遇せいきようして正教せいきようを
聞きこくことを得かたり兼かねて我がたかねめに種種しゆじゆの功德くどくを修しゆす至誠ずいき隨喜なんす何なんぞ徳とくを謝あす
るに足からん、兼かねて我が所持しよじの法衣ほうえ有すなわりと即たち託宣たくせんの主みずか・自ほうてんら宝殿ほうてんを開ひらいて手
ら紫けさの袈裟けさ一さつ紫ささの衣わじよう一さつを捧ささげ和尚わじように奉ささ上ささす大悲力ゆえの故ゆえに幸のうじゆに納受のうじゆを垂たれ
給たまえと、是この時に禰宜ねぎ・祝等はふりとう各お歎異いして云いく元來かくのこと是かの如かくのこときの奇事きことを見みず聞きこか
ざるかな、此ほどの大神施たし給たまう所そのときの法衣ほうえ今さん山王院さんのういんに在あるなり」云云、今い謂わく八幡はちまん
は人王第十六代てんのう・応神天皇そのときなり其ふきようの時ときは仏經ぶきよう無なかりしかば此こに袈裟衣けさ有あるべ
からず、人王第三十代きんめいてんのう欽明天皇きんめいてんのうの治三十二年あらわに神たと顯まいれ給たまい其それより已このかた來こう弘仁こうにん

五年までは禰宜・祝等次第に宝殿を守護す、何の王の時・此の袈裟を納めけると意へし而して禰宜等云く元来見ず聞かず等云云、此の大菩薩いかにしてか此の袈裟衣は持ち給いけるぞ不思議なり不思議なり。

又欽明より已来弘仁五年に至るまでは王は二十二代・仏法は二百六十余年

なり、其の間に三論・成実・法相・俱舍・華嚴・律宗・禅宗等の六宗・

七宗・日本国に渡りて八幡大菩薩の御前にして経を講ずる人人・其の数を知らず、又法華経を讀誦する人も争でか無からん、又八幡大菩薩の御宝殿の傍に

は神宮寺と号して法華経等の一切経を講ずる堂・大師より已前にはあり、

其の時定めて仏法を聴聞し給いぬらん何ぞ今始めて我法音を聞かずして久し

く年歳を歴る等と託宣し給ふべきや、幾くの人人か法華経一切経を講じ給い

けるに何ぞ此の御袈裟衣をば進らせ給はざりけるやらん、当に知るべし

伝教大師已前は法華経の文字のみ読みけれども其の義はいまだ顕れざりける

- 1241 -

か、去いぬる延曆二十年十一月中旬の比・伝教大師比叡山にして南都・
ななだいじろくしゅうせきとく
七大寺の六宗の碩徳十余人を奉請して法華經を講じ給いに、弘世・真綱等
の二人の臣下此の法門を聴聞してなげいて云く「一乗の権滞を慨き三諦の
みけん
未顕を悲しむ」又云く「長幼三有の結を摧破し猶未だ歴劫の轍を改めず」等
云云、其の後延曆二十一年正月十九日に高雄寺に主上・行幸ならせ給いて
ろくしゅうせきとくでんぎようだいし
六宗の碩徳と伝教大師とを召し合はせられて宗の勝劣を聞し食ししに南都
の十四人皆口を閉ぢて鼻のごとくす、後に重ねて怠状を捧げたり、其の状に
いわみなぐけこのかた
云く「聖徳の弘化より以降た今に二百余年の間講ずる所の經論其の数多し、
こ
彼れ此れ理を争い其の疑未だ解けず而も比の最妙の円宗猶未だ闡揚せず」
等云云、比れをもつて思うに伝教大師已前には法華經の御心いまだ顕れざり
けるか、八幡大菩薩の見ず聞かずと御託宣有りけるは指なり指なり白あきらなり
はちまんだいばさつ
白あきらなり。

法華經第四に云く、「我が滅度の後に能く竊に一人の爲にも法華經を説かん、
当に知るべし是の人は則ち如来の使なり乃至如来則ち衣を以て之れを覆い
給うべし」等云云、
当来の弥勒仏は法華經を説き給ふべきゆへに釈迦仏は大
迦葉尊者を御使として衣を送り給ふ、又伝教大師は仏の御使として法華經
を説き給ふゆへに八幡大菩薩を使として衣を送り給うか、又此の大菩薩は
伝教大師已前には加水の法華經を服してをはしましけれども先生の善根に
依つて大王と生れ給いぬ、其の善根の余慶・神と顯れて此の国を守護し給い
けるほどに今は先生の福の余慶も尽きぬ、正法の味も失せぬ謗法の者等・
国中に充滿して年久しけれども日本国の衆生に久く仰がれてなじみせし
大科あれども捨てがたくをばしめし老人の不幸の子を捨てざるが如くして天
のせめに合い給いぬるか、又此の袈裟は法華經最第一と説かんこそ・かけ
まいらせ給うべきに伝教大師の後は第一の座主・義真和尚・法華最第一の人

なればかけさせ給う事其の謂あり、第二の座主円澄大師は伝教大師の
御弟子なれども又弘法大師の弟子なり・すこし謗法にいたり、此の袈裟の人
には有らず、第三の座主・円仁慈覚大師は名は伝教大師の御弟子なれども心
は弘法大師の弟子・大日経第一・法華経第二の人なり、此の袈裟は一向にか
けがたし、設いかけたりとも法華経の行者にはあらず、其の上又当世の天台
座主は一向・真言の座主なり、又当世の八幡の別当は・或は園城寺の長吏・或
は東寺の末流なり、此れ等は遠くは釈迦・多宝・十方の諸仏の大怨敵・近
くは伝教大師の讐敵なり、譬へば提婆達多が大覺世尊の御袈裟をかけたる
がごとし、又獵師が仏衣を被て師子の皮をはぎしがごとし、当世叡山の座主
は伝教大師の八幡大菩薩より給て候し御袈裟をかけて法華経の所領を奪ひ
取りて真言の領となせり、譬へば阿闍世王の提婆達多を師とせしがごとし。
而るを大菩薩の此の袈裟をはぎかへし給わざるは第一の大科なり、此の大

菩薩は法華經の御座にして行者を守護すべき由の起請をかきながら数年が間
・法華經の大怨敵を治罰せざる事不思議なる上、たまたま法華經の行者の
出現せるを來りて守護こそなさざらめ、我が前にして、国主等の怨する事・
犬の猿をかみ蛇の蝦をのみ鷹の雉を師子王の兎を殺すがごとくするを一度も
いましめず、設いしましむるやうなれども、いつわりをろかなるゆへに梵釈
・日月・四天等のせめを八幡大菩薩かほり給いぬるにや、例せば欽明天皇・
敏達天皇・用明天皇已上三代の大王・物部大連・守屋等がすすめに依りて
宣旨を下して金銅の釈尊を焼き奉り堂に火を放ち僧尼をせめしかば天より火
くだり内裏をやく、其の上・日本国の万民とがなくて悪瘡をやみ死ぬること
大半に過ぎぬ、結句三代の大王・二人の大臣・其の外多くの王子・公卿等・
・或は悪瘡・或は合戦にほろび給いしがごとし、其の時・日本国の百八十の
神の栖給いし宝殿皆焼け失せぬ釈迦仏に敵する者を守護し給いし大科なり、

又園城寺は叡山えいざん已前いぜんの寺なれども智証大師ちしょうだいしの真言しんごんを伝えて今に長吏ちやうりとがうす
叡山えいざんの末寺まつじたる事疑うたがいいなし、而しかるに山門さんもんの得分わかたる大乘だいじやうの戒壇かいだんを奪うばい取り
て園城寺おんじやうじに立てて叡山えいざんに随したがわじと云云たと、譬たとへば小臣だいおが大王だいおうに敵たいし子が親おやに不
幸ふしなるがごとし、かかる悪逆あくぎやくの寺を新羅しらぎ大明神だいみやうじんみだれがわしく守護しゆごするゆ
へに度度たびたび・山門さんもんに宝殿ほうでんを焼る、此のごとし、今八幡大菩薩はちまんたいぼさつは法華經ほけきやうの大怨敵おんてき
を守護しゆごして天火てんかに焼かれ給たまいぬるか、例せば秦の始皇だいまんの先祖せんぞ・襄王じやおうと申せし
王・神となりて始皇等しゆじを守護しゆごし給たまいし程に秦の始皇だいまん大慢だいまんをなして三皇さんかう・五帝ごてい
の墳典ふんでんをやき三聖さんせいの孝經等かうきやうを失うしないしかば沛公はいこうと申す人剣じんをもつて大蛇だいじゃを切り
死ころぬ秦皇しんの氏神これ是そなり、其の後秦こうしんの代しろほどなくほろび候いぬ此これも又かくの
ごとし、安芸の国いせだいじんかういつく島の大明神だいみやうじんは平家へいけの氏神へいけなり平家へいけを・をとがごらせし失
に伊勢太神宮いせだいじんぐう・八幡等はちまんに神かみうちに打ち失そわれて其の後平家へいけほどなくほろび候
いぬ此これも又かくのごとし。

法華經の第四に云く、仏滅度の後能く其の義を解せんは是れ諸の天人・世間の眼なり」等云云、日蓮が法華經の肝心たる題目を日本国に弘通し候は諸天・世間の眼にあらずや、眼には五あり所謂・肉眼・天眼・慧眼・法眼・仏眼なり、此の五眼は法華經より出生せさせ給う故に普賢經に云く「此の方等經は是れ諸仏の眼なり諸仏是れに因て五眼を具する事を得給う」等云云、此の方等經と申すは法華經を申すなり、又此の經に云く「人天の福田・応供の中の最なり」等云云、此等の經文のごとくば妙法蓮華經は人天の眼・二乗・菩薩の眼諸仏の御眼なり、而るに法華經の行者を怨む人は人天の眼をくじる者なり、其の人を罰せざる守護神は一切の人天の眼をくじる者を結構し給う神なり、而るに弘法・慈覺・智証等は正しく書を作りて法華經を無明の辺域にして明の分位に非ず後に望れば戲論と作る力者に及ばず履者とりたらずとかきつけて四百余年、日本国の上一人より下万民にいたるまで法華經

をあなづらせ一切衆生の眼をくじる者を守護し給うはあに八幡大菩薩の
結構にあらずや、去ぬる弘長と又去ぬる文永八年九月の十二日に日蓮一分の
失なくして南無妙法蓮華經と申す大科に国主のはからいとして八幡大菩薩の
御前にひきはらせて一国の謗法の者どもにわらわせ給いしはあに八幡大菩薩
の大科にあらずや、其のいましめと・をばしきは・ただどしうちばかりなり、
日本国の賢王たりし上・第一・第二の御神なれば八幡に勝れたる神はよもを
はせじ、又偏頗はよも有らじとは・をもへども一切經並に法華經のをきての
ごときんば・この神は大科の神なり、日本六十六箇国二つの島一万一千三十
七の寺の仏は皆・或は画像・或は木像・或は真言已前の寺もあり・或は
已後の寺もあり、此等の仏は皆法華經より出生せり、法華經をもつて眼と
すべし、所謂「此の方等經は是れ諸仏の眼なり」等云云、妙樂云く「然も
此の經は常住 仏性を以て咽喉と為し一乗の妙行を以て眼目と為し再生敗

種を以て心腑しんぶと為し顯本遠寿を以て其の命と為す等云云、而るを日本國にほんこくの
習ならい真言師しんごんしにもかぎらず諸宗しよしゆう一同に仏眼ぶつげんの印をもつて開眼かいげんし大日だいにちの真言しんごんをも
つて五智ごちを具すと云云此等は法華經ほけきようにして仏になれる衆生しゆじようを真言しんごんの權經こんきように
て供養くようすれば還かえつて仏を死ころし眼まなこをくじり壽命じゆみゆうを断ち喉のんどをさきなんどする
人ひとなり、提婆だいばが教主きようしゆしやくそん釈尊あじやせの身より血を出し阿闍世王あじやせの彼の人を師として
現罰げんばちに値あいしにいかでか・をとり候べき、八幡大菩薩はちまんたいぼさつは応神天皇てんのう・小國しよくこくの王
なり阿闍世王あじやせは摩竭大國まかつたいこくの大王なり天と人と王と民との勝劣しやうれつなり、而れども
阿闍世王あじやせ・猶釈迦仏なおしやくかぶつに敵をなして惡瘡身あくそうに付き給たまいぬ、八幡大菩薩はちまんたいぼさついかでか
其その科のがを脱のがるべき、去ぬる文永十一年ぶんえいに大蒙古もうこよりよせて日本國にほんこくの兵を多く
ほろぼすのみならず八幡はちまんの宮殿すでにやかれぬ、其の時何ぞ彼の國の兵を罰
し給たまはざるや、まさに知るべし彼の國の大王は此の國の神に勝すぐれたる事あき
らけし、襄王じゃおうと申せし神は漢土かんどの第一だいいちの神なれども沛公はいこうが利劔たましいに切られ給たまい

ぬ。

此れをもつてをもつべしこ道鏡法師・称徳天皇の心よせと成りて国王こくおうと成らんとせし時清丸・八幡大菩薩に祈請せし時八幡の御託宣に云く「夫れ神にきよまる はちまんだいぼさつ きしやう はちまん たくせん いわだいしようないし おお すくな すなわまさ大小好悪有り乃至彼は衆く我は寡し邪は強く正は弱し乃ち当に仏力の加護をこうちよ しやうりゆう まさ仰て為めに皇緒を紹隆すべし」等云、当に知るべし八幡大菩薩は正法をしゆい たまい力として王法を守護し給いけるなり、叡山・東寺等の真言の邪法をもつて権たゆうどの じゆうぶくの大夫殿を調伏せし程に権の大夫殿はかたせ給い隠岐の法皇はまけさせ給いげんちやくおほんにんこぬ還著於本人此れなり。

今又日本国・一万一千三十七の寺並に三千一百三十二社の神は国家安穩のにほんこくために・あがめられて候、而るに其の寺寺の別当等・其の社社の神主等はみな・あがむるところの本尊と神との御心に相違せり、彼れ彼れの仏と神ほんぞんとは其の身異体なれども其の心同心に法華經の守護神なり、別当と社主等はそ

・或は眞言師・或は念仏者・或は禪僧・或は律僧なり皆一同に八幡等の御か
たきなり、謗法不孝の者を守護し給いて正法の者を・或は流罪・或は死罪等
に行なわするゆへに天のせめを被り給いぬるなり、我が弟子等の内・謗法の
余慶有る者の思いていわく此の御房は八幡をかたきとすと云云、これいまだ
道理有りて法の成就せぬには本尊をせむるという事を存知せざる者の思いな
り付法蔵經と申す經に大迦葉尊者の因縁を説いて云く「時に摩竭国に婆羅門
有り尼俱律陀と名づく過去の世に於て久しく勝業を修し、多く財宝に饒かに
して巨富無量なり摩竭王に比するに千倍勝れりと為す、財宝饒かなりと雖も
子息有る事無し自ら念わく老朽して死の時將に至らんとす庫蔵の諸物委付す
る所無し、其の舎の側に於て樹林神有り彼の婆羅門子を求むるが為の故に即ち
往て祈請す年歳を経歴すれども微応無し、時に尼俱律陀大に瞋忿を生じて
樹神に語て曰く、我汝に事てより来已に年歳を経れども都て一の福応を垂る

るを見ず今当に七日至心に汝に事うべし、若し復驗無ければ必ず相焼剪せ
ん、樹神聞き已て甚だ愁怖を懷き四天王に向つて具さに斯の事を陳ぶ、是
に於て四王往て帝釈に白す・帝釈閻浮提の内を觀察するに・福德の人の彼
の子と為るに堪ゆる無し即ち梵王に詣で広く上の事を宣ぶ、爾の時に梵王・
天眼を以て觀見するに梵天の當に命終に臨む有り而て之に告げて曰く汝
若し神を降さば宜しく當に彼の閻浮提界の婆羅門の家に生ずべし、梵天對て
曰く婆羅門の法惡邪見多し我今其子と為る事能ざるなり、梵王復言く彼の
婆羅門大威徳有り閻浮提の人往て生ずるに堪ゆる莫し汝必ず彼に生ぜば吾れ
相護りて終に汝をして邪見に入らしめざらん、梵天曰く諾・敬て聖教を
承けん、是に於て帝釈・即樹神に向つて斯の如き事を説く樹神歡喜して尋て
其の家に詣で婆羅門に語らく汝今復恨を我れに起す事なかれ卻て後七日當に
卿が願を満すべし、七日に至て已に婦身む事有るを覚え十月を満足して一男

児を生めり乃至今の迦葉是なり云云、「時に応じて尼俱律陀大に瞋忿を生ず」
等云云、常のごときんば氏神に向いて大瞋恚を生ぜん者は今生には身をほろ
ぼし後世には惡道に墮つべし然りと雖も尼俱律陀長者・氏神に向て大惡口大
瞋恚を生じて大願を成就し賢子をまうけ給いぬ、当に知るべし瞋恚は善惡に
通ずる者なり。

いまにちれん いけんちよう

今日蓮は去ぬる 建長五年癸丑四月二十八日より今年弘安三年太歲庚辰十二月

にいたるまで二十八年が間又他事なし、只妙法蓮華經の七字五字を日本國の

いっさいしゅじよう

一切衆生の口に入れんとはげむ計りなり、此れ即母の赤子の口に乳を入れん

とはげむ慈悲なり此れ又時の当らざるにあらず已に伝記の五五百歳に当れり、

てんだい でんぎよう おんとき

天台・伝教の御時は時いまだ来らざりしかども一分の機ある故に少分流布せ

り、何に況や今は已に時いたりぬ設とひ機なくして水火をなすともいかでか

くつう ただふぎよう

弘通せざらむ、只不輕のごとく大難には値うとも流布せん事疑なかるべき

に真言・禪・念仏等の讒奏に依りて無智の国主等・留難をなす此を対治すべ
き氏神八幡大菩薩・彼等の大科を治せざるゆへに日蓮の氏神を諫曉するは
道理に背くべしや、尼俱律陀長者が樹神をいさむるに・異ならず、蘇悉地經
に云く「本尊を治罰する事鬼魅を治するが如し」等云云、文の心は經文のご
とく所願を成ぜんがために数年が間・法を修行するに成就せざれば本尊を
・或はしばり・或は打ちなんどせよととかれて候、相應和尚の不動明王をし
ばりけるは此の經文を見たりけるか、此は他事にはにるべからず日本国の
一切の善人は・或は戒を持ち・或は布施を行じ・或は父母等の孝養のために
寺塔を建立し・或は成仏得道の為に妻子をやしなうべき財を止めて諸僧に
供養をなし候に、諸僧謗法の者たるゆへに謀反の者を知ずしてやどしたるが
ごとく不孝の者に契をなせるがごとく今生には災難を招き後生も惡道に
墮ち候べきを扶けんとする身なり而るを日本国の守護の善神等・彼等にくみ

して正法しょうほうの敵となるゆへに此をせむるは経文きょうもんのごとし道理どうりに任せたり、我
が弟子等でしが愚案ぐあんにをもわく我が師は法華經を弘通こうつうし給うとてひろまらざる上
・大難だいにんの来れるは真言しんごんは国をほろぼす念仏ねんぶつは無間地獄むげんじごく・禅ぜんは天魔てんまの所為しよゐ・
律僧りつそうは国賊こくぞくとの給うゆへなり、例せば道理どうり有る問注もんちゅうに悪口あくぐちのまじわれるがこ
ととし云云にちれん、日蓮我が弟子に反詰はんきつして云く汝若し爾らば我が問を答えよ一切いっさい
の真言師しんごんし・一切いっさいの念仏者ねんぶつ・一切いっさいの禅宗等ぜんしゅうに向て南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと唱え給え
と勸進かんじんせば彼等の云く我が弘法大師は法華經こうぼうだいしと釈迦しゃかとを戲論けろん無明むみょうの辺域へんいき・
力者りきや・はき物ものとりに及およばずと・かかせ給たまいて候、物の用にあわぬ法華經ほけきょうを誦誦どくじゆ
せんよりも其その口に我が小呪せうそを一反も見つべし一切いっさいの在家ざいけの者の云く善導ぜんどう
和尚わじょうは法華經ほけきょうをば千中無一せんちゅうむいつ・法然上人ほうねんしやうにんは捨閉閣しゃへいかく・道綽どうしゆく・道綽ぜん・
未有一人得者みういちにんとくしやと定めさせ給たまへり汝なんじがすすむる南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうは我が念仏ねんぶつの
障さわりなり我等われら設たい惡をつくるともよも唱となえじ一切いっさいの禅宗ぜんしゅうの云く我が宗きやうは教外きやうげ

べつでん もつ いっさいきよう
別伝と申して一切經の外に伝へたる最上の法門なり一切經は指のごとし禪
は月のごとし天台等の愚人は指をまほつて月を亡いたり法華經は指なり禪は
月なり月を見て後は指は何のせんか有るべきななど申す、かくのごとく申さ
ん時はいかにとしてか南無妙法蓮華經の良藥をば彼れ等が口には入るべき
仏は且らく阿含經を説き給いて後・彼の行者を法華經へ入れんと・たばかり
給いしに一切の聲聞等・只阿含經に著して法華經へ入らざりしをば・いかや
うにか・たばからせ給いし、此をば仏説いて云く「設ひ五逆罪は造るとも五逆
の者をば供養すとも罪は仏の種とはなるとも彼れ等が善根は仏種とならじ」
とこそ説かせ給しか、小乗・大乘はかわれども同じく仏説なり大が小を
破して小を大となすと大を破して法華經に入ると大小は異なれども法華經へ
入れんと思う 志 は是一つなり、されば無量義經に大を破して云く未顕真實
と法華經に云く「此の事は為て不可なり」等云云、仏、自ら云く「我世に出で

て華嚴・般若等を説きて法華經をとかずして入涅槃せば愛子に財を・をしみ
病者に良藥をあたへずして死にたるがごとし仏、自ら地獄に墮つべし」と云
云、不可と申すは地獄の名なり況や法華經の後・爾前の經に著して法華經へ
うつらざる者は大王に民の従がはざるがごとし親に子の見へざるがごとし、
たといほけきよう
設い法華經を破せざれども爾前の經經をほむるは法華經をそしるに当たれ
り妙樂云く、「若し昔を称歎せば豈に今を毀るに非ずや」文、又云く「発心
せんと欲すと雖も偏円を簡ばず誓の境を解らざれば未來法を聞くと何ぞ
能く謗を免れん」等云云、真言の善無畏・金剛智・不空・弘法・慈覺・智証
等は設とい法華經を大日經に相對して勝劣を論ぜずして大日經を弘通すと
も滅後に生まれたる三蔵・人師なれば謗法はよも免れ候はじ、何に況や善無畏
等の三三蔵は法華經は略説・大日經は広説と同じて而かも法華經の行者を
大日經えすかし入れ、弘法等の三大師は法華經の名をかきあげて戲論なんだ

かかれて候大科を明らめずして此の四百余年一切衆生を皆謗法の者となせ
り、例せば大莊嚴仏の末の四比丘が六百万億那由佗の人を皆無間地獄に墮せ
ると、師子音王仏の末の勝意比丘が無量無辺の持戒の比丘・比丘尼うばそく
うばいを皆阿鼻大城に導きしと、今の三大師の教化に随いて日本国四十九億
九万四千八百二十八人・或は云く日本紀に行基の人数に云く男女四十五億
八万九千六百五十九人云云の一切衆生又四十九億等の人人四百余年に死して
無間地獄に墮ちぬれば其の後他方世界よりは生れて又死して無間地獄に墮ち
ぬ、かくのごとく墮つる者は大地微塵よりも多し此れ皆三大師の科ぞかし、
此れを日蓮此に大に見ながらいつわりをろかにして申さずば俱に墮地獄の者
となつて一分の科なき身が十方の大阿鼻獄を経めぐるべしいかでか身命を
すててよばわらざるべき涅槃經に云く「一切衆生異の苦を受くるは悉く是
如来一人の苦なり」等云云、日蓮云く一切衆生の同一苦は悉く是日蓮一人の

苦と申すべし。

平城天皇の御字に八幡の御託宣に云く、「我は是れ日本の鎮守八幡大菩薩なり百王を守護せん誓願あり」等云云、今云く人王八十一・二代隱岐の法皇・三・四・五の諸王已に破られ畢んぬ残の二十余代・今捨て畢んぬ、已に此の願破るるがごとし、日蓮料簡して云く百王を守護せんというは正直の王・百人を守護せんと誓い給う、八幡の御誓願に云く「正直の人の頂を以て栖と為し、諂曲の人の心を以て亭ず」等云云、夫れ月は清水に影をやどす濁水にすむ事なし、王と申すは妄語の人・右大將家・権の大夫殿は妄語の人の正直の頂八幡大菩薩の栖む百皇の内なり、正直に二あり一には世間の正直王と申すは天人地の三を串くを王と名づく、天・人・地の三は横なりたつてんは縦なり、王と申すは黃帝・中央の名なり、天の主・人の主・地の主を王と申す、隱岐の法皇は名は國王・身は妄語の人なり横人なり、権の大夫殿は

名は臣下・身は大王・不妄語の人・八幡大菩薩の願い給う頂きなり、二に
は出世の正直と申すは爾前・七宗等の経論釈は妄語・法華経・天台宗は
正直の経釈なり、本地は不妄語の経の釈迦仏迹には不妄語の八幡大菩薩な
り、八葉は八幡・中台は教主釈尊なり、四月八日・寅の日に生まれ八十
を経て二月十五日申の日に隠れさせ給う、豈に教主の日本国に生まれ給うに
有らずや、大隅の正八幡宮の石の文に云く、「昔し靈鷲山に在つて妙法華経
を説き今正宮の中に在て大菩薩と示現す」等云云、法華経に云く、「今此三界
等云云、又「常に靈鷲山に在り」等云云、遠くは三千大千世界の一切衆生
は釈迦如来の子なり、近くは日本国・四十九億九万四千八百二十八人は
八幡大菩薩の子なり、今日本国の一切衆生は八幡をたのみ奉るやうにもてな
し釈迦仏をすて奉るは影をうやまつて体をあなづり子に向いて親をのるがこ
とし、本地は釈迦如来にして月氏国に出でて正直捨方便の法華経を説き給い、

すいじゃく にほんこく

垂迹は日本国に生れては正直の頂きにすみ給う、諸の権化の人人の本地

ほけきよう

じつそく

すいじゃく

むりよう

いわゆるはくらそんじゃ

さんぜ

は法華經の一実相なれども垂迹の門は無量なり、所謂跋俱羅尊者は三世に

ふさつしうかい

おうくつまら

せつしよう

しゃりほつ

げどう

かくのごと

不殺生戒を示し鶯崛摩羅は生生に殺生を示す、舍利弗は外道となり是くの如

ふどう

ほんぶ

ほつとく

じようぶつ

けた

く門門不同なる事は本凡夫にて有りし時の初發得道の始を成仏の後・化他門

い たま

とくどう

みようくだいしいわ

も

に出で給う時・我が得道の門を示すなり、妙樂大師云く「若し本に従て説か

またこ

おいよ

かくのゆえ

また

ば亦是れ昔殺等の悪の中に於て能く出離するが故なり是の故に迹中に亦殺を

りた

な

はちまんだいぼさつ

ほんちがっし

もうこ

ほけきよう

以て利他の法門と為す、等云云、今八幡大菩薩は本地は月支の妄語の法華經

にほんこく

しょうじき

けんじん

いただき

きようじや

を迹に日本国にして正直の二字となして賢人の頂きにやどらんと云云、

も

しか

ぼさつ

ほうでん

たま

ほけきよう

きようじや

若し爾らば此の大菩薩は宝殿をやきて天にのぼり給うとも法華經の行者

にほんこく

あ

そ

す

たま

ほけきよう

きようじや

日本国に有るならば其の所に栖み給うべし。

ほけきよう

いわしよてん

ゆえしか

これえいまも

きようもん

法華經の第五に云く諸天昼夜に常に法の為の故に而も之を衛護す、經文の

ごと

なむみょうほうれんげきよう

もう

ほんてんたいしやく

にちがつ

してん

如くんば南無妙法蓮華經と申す人をば大梵天・帝釈・日月・四天等昼夜に

守護すべしと見えたり、又第六の巻に云く、「或は己身を説き・或は他身を説き・或は己身を示し・或は他身を示し・或は己事を示し・或は他事を示す」
文觀音尚三十三身を現じ妙音又三十四身を現じ給ふ教主 釈尊何ぞ八幡大菩薩と現じ給はざらんや天台云く、即是れ形を十界に垂れて種種の像を作す等云云。天竺国をば月氏国と申すは仏の出現し給うべき名なり、扶桑国をば日本国と申すに聖人出で給わざらむ、月は西より東に向へり月氏の仏法の東へ流るべき相なり、日は東より出づ日本の仏法の月氏へかへるべき瑞相なり、月は光あきらかならず在世は但八年なり、日は光明・月に勝れり五五百歳の長き闇を照すべき瑞相なり、仏は法華經謗法の者を治し給はず在世には無きゆへに、末法には一乗の強敵充滿すべし不輕菩薩の利益此れなり、各各・我が弟子等はげませ給へはげませ給へ。

弘安三年太歳庚辰十二月日

日蓮 花押

七九 二乗作仏事 589P

爾前得道の旨たる文、經に云く見諸菩薩等云云、又云く始見我身等、此等の文の如きは菩薩初地・初住に叶う事有ると見えたるなり、故に見諸菩薩の文の下には而我等不預斯事と・又始見の文の下には除先修習等云云、此れは爾前に二乗作仏無しと見たる文なり。

問う顕露定教には二乗作仏を許すや顕露不定教には之を許すか秘密には之を許すか爾前の円には二乗作仏を許すや別教には之を許すか、答う所詮は重重的の問答有りと雖も皆之を許さざるなり、所詮は二乗界の作仏を許さずんば菩薩界の作仏も許さざるか衆生無辺誓願度の願の闕くるが故なり、釈は菩薩の得道と見たる經文を消する許りなり、所詮華・方・般若の円の菩薩も初住に登らず又凡夫二乗は勿論なり化一切衆生・皆令入仏道の文の下にて此の事は意得可きなり。

問う円の菩薩ぼさつに向つては二乗作仏にじようさぶつを説くか、答う説かざるなり
未會みそう向人説如此事こうじんせつによしじの釈あきらに明かなり。

問う華嚴經けこんきようの三無差別さんむさべつの文は十界互具じゅつかいこくの正証なりや、答う次下の經つぎしもに云く
によらい ちえ やくおう ただ

如来智慧の大藥王樹は唯二所を除きて生長することを得ず所謂いわゆるしやうもん声聞えんかくと

なり等云云二乗作仏にじようさぶつを許さずと云う事分ふんみよう明なり、若し爾らば本文は十界互具じゅつかいこく

と見えたれども実には二乗作仏無ければ十界互具じゅつかいこくを許さざるか、其の上爾前にぜん

の經は法華經を以て定む可し既に除先修習等云云と云う華嚴は二乗作仏無ほけきよう

しと云う事分ふんみよう明なり方等ほうとう・般若はんやも又以て此くかの如し。

惣じて爾前の円にぜんに意得可き様・二有り、一には阿難結集あなんけつじゅうの已前いぜんに仏は一音そつ

に必ず別円べつえん二教の義を含ませ一一の音に必ず四教三教しきようを含ませ給えるなり、たま

故に純円じゆんえんの円は爾前經にぜんきようには無きなり故に円と云えども今の法華ほつけに対すれば別

に撰せんすと云うなり、籤せんの十に又一一の位に皆普賢行布みなふげんの二門ゆえ有り故に知んぬ

兼ねて円門を用いて別に撰すと釈するなり此の意にて爾前に得道無しと云う
なり、二には阿難結集の時・多羅葉に注す一段は純別・一段は純円に書け
るなり方等・般若も此くの如し、此の時は爾前の純円に書ける処は粗法華
に似たり、住中多明円融之相等と釈するは此の意なり。

てんだいちしゃだいし

どうり

たまい

ゆえ

たし

けごん

そつ

にぜん

の経を

こころえ

心得しには・たがい給えるなり、此の二の法門をば如何として天台大師は

ほうもん

いかん

てんだいだいし

こころえたま

心得給いしぞとさぐれば法華經の信解品等を以て一一の文字別円の菩薩及び

しんげ

もんじべつえん

ぼさつあよ

しきよう

四教・三教なりけりとは心得給いしなり、又此の智慧を得るの後にて彼等の

こころえたま

かれら

經に向つて見る時は一向に別・一向に円等と見えたる処あり、阿難結集の

いっじう

いっじう

ところ

あなんけつじゅう

後のしはざなりけりと見給えるなり、天台一宗の学者の中に此の道理を得ざ

てんだい

がくしゃ

どうり

の

にぜん

ほっけ

しじゅうどう

ゆえ

いっしょ

えんきよう

を見て

るは爾前の円と法華の円と始終同の義を思ふ故に一処のみの円教の経を見て

じゅんえん

ゆえ

おい

おうじょうじょうぶつ

ぎり

一卷・二卷等に純円の義を存する故に彼の經等に於て往生成仏の義理を

ゆる ひとびとこ

許す人人是れ多きなり、華嚴・方等・般若・觀經等の本文に於て阿難・円教

の巻を書くの日に即身成仏云云即得往生等とあるを見て一生乃至順次生に

おうじようじようぶつ

と

往生成仏を遂げんと思いたり、阿難結集已前の仏口より出す所の説教に

て意を案ずれば即身成仏即得往生の裏に歴劫修行・永不往生の心含め

りやつこうしゆぎよう

おうじよう

り、句の三に云く撰論を引いて云く了義經・依文判義等と云う意なり、爾前

の經を文の如く判ぜば仏意に乖く可しと云う事は是なり、記の三に云く法華

いぜん ふりようぎ

已前は不了義なる故と云えり此の心を釈せるなり、籤の十に云く「唯此の法華

のみ前教の意を説き今經の意を顯す」と釈の意は是なり。

抑他師と天台との意の殊なる様は如何と云うに他師は一一の經經に向

つて彼の經經の意を得たりと謂へり、天台大師は法華經に仏四十余年の

經經を説き給へる意をもつて諸經を釈する故に阿難尊者の書きし所の

諸經の本文にたがひたる様なれども仏意に相叶いたるなり、且らく觀經の疏

しよきよう

しよきよう

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

の如き經説には見えざれども一字に於て四教を釈す、本文は一処は別教・
一処は円教・一処は通教に似たり、釈の四教に亘るは法華の意を以て仏意
を知りたもう故なり、阿難尊者の結集する經にては一処は純別一処は純円
に書き別円を一字に含する義をば法華にて書きけり、法華にして爾前の經の
意を知らしむるなり、若し爾らば一代聖教は反覆すと雖も法華經無くんば
一字も諸經の意を知るべからざるなり、又法華經を讀誦する行者も此の意を
知らずんば法華經を讀むにては有る可からず、爾前の經は深經なればと云つ
て淺經の意をば顯さず淺經なればと云つて又深義を含まざるにも非ず、
法華經の意は一一の文字は皆爾前の意を顯し法華經の意をも顯す故に一字を
讀めば一切經を讀むなり一字を讀まざるは一切經を讀まざるなり、若し爾ら
ば法華經無き国には諸經有りと雖も得道は難かる可し、滅後に一切經を讀
む可き様は華嚴經にも必ず法華經を列ねて彼の經の意を顯し觀經にも必ず

ほけきよう
法華經を列ねて其の意を顯すべし諸經も又以て此くの如し、而るに月支の末
ろんしおよ
の論師及び震旦の大師此の意を弁えず一經を講して各・我得たりと謂い又
ちようかしきよう
超過諸經の謂いを成せるは會て一經の意を得ざるのみに非ず謗法の罪に
だ
墮するか。

てんじく
問う天竺の論師震旦の大師の中に天台の如く阿難結集已前の仏口の諸經
か
を此くの如く意得たる論師・大師之有るか、答う無著菩薩の撰論には四意趣
しききよう
を以て諸經を釈し、竜樹菩薩の大論には四悉檀を以て一代を得たり、此れ
ほほ
等は粗此の意を釈すとは見えなれども天台の如く分明には見えず、天親菩薩
ほつけるん
の法華論も又以て此くの如し、震旦国に於ては天台以前の五百年の間には一向
ぎな
に此の義無し、玄の三に云く、天竺の大論尚其の類に非ず云云、籤の三に云く
しよつじよ
「一家の章疏は理に附し教に憑り凡そ立つる所の義他人の其の所弘に随い
ひとえ
偏に己が典を讃するに同じからず、若し法華を弘むるに偏に讃せば尚失なり
も
ほつけ
ひろ
ひとえ
なおとが

況や復余をや」文、何となれば既に開権顕実と云う何ぞ一向に権を毀る可き
や、華嚴經の心仏及衆生・是三無差別の文は華嚴の人師・此の文に於て
一心覺不覺の三義を立つるは、源と起信論の名目を借りて此の文を釈するな
り、南岳大師は妙法の二字を釈するに此の文を借りて三法妙の義を存せり、
天台智者大師は之を依用す此に於て天台宗の人は華嚴・法華同等の義を存す
るか、又澄觀・心仏及衆生の文に於て一心覺不覺の義を存するのみに非ず
性惡の義を存して云く、澄觀の釈に「彼の宗には此れを謂つて実と為す此
の宗の立義・理通ぜざる無し」等云云、此等の法門許す可きや否や、答えて
云く弘の一に云く「若し今家の諸の円文の意無くんば彼の經の偈の旨理實に
消し難し」同じく五に云く「今文を解せずんば如何ぞ心造一切三無差別を消
解せん」文、記の七に云く忽ち都て未だ性惡の名を聞かずと云えり、此等の
文の如くんば天台の意を得ずんば彼の經の偈の意・知り難きか、又震旦の人師

の中には天台の外には性惡の名目あらざりけるか、又法華經に非ずんば
いちねんさんぜん ほうもん だん
一念三千の法門・談ずべからざるか、天台已後の華嚴の末師並びに眞言宗の
しょうあく じしゅう えきよう なたんじく
人性惡を以て自宗の依經の詮と為すは天竺より伝わりたりけるか祖師より伝
わるか、又天台の名目を偷んで自宗の内証と為すと云へるか、能く能く
これけん べ
之を驗す可し。

問う性惡の名目は天台一家に限る可し諸宗には之無し、若し性惡を立
てずんば九界の因果を如何が仏界の上に現ぜん、答う義例に云く性惡若断等
云云、問う円頓止觀の証拠と一念三千の証拠に華嚴經の心仏及衆生是三無
さべつ えんどんしかん しょうこ いちねんさんぜん しょうこ けこんきよう しんぶつぎゅうしゅじよう さんむ
差別の文を引くは彼の經に円頓止觀及び一念三千を説くというか、答えて
いわ てんだいしゅう にぜん ほっけ ほん 問う六十卷の
云く天台宗の人の中には爾前の円と法華の円と同一の義を存す、問う六十卷の
中に前三教の文を引いて円の義を釈せるは文を借ると心得、爾前の円の文を
引いて法華の円の義を釈するをば借らずと存ぜんや、若し爾らば三種の止觀
ほっけ しゃく しゃく ほん しかん

の証文しやうもんに爾前にぜんの諸経しよきやうを引く中に円頓止觀えんどんしかんの証拠しやうこに華嚴けこんの菩薩ぼさつ於生死等しやうじの文を引けるをば、妙樂釈みよらくしやくして云く「還かえつて教味しやくを借あて以て妙円みようえんを顯あらわす」とは此の文は諸經しよきやうの円の文を借ると釈するに非ずや、若し爾らば心仏及衆生の文を一念三千いちねんさんぜんの証拠しやうこに引く事は之を借れるにて有るべし、答こたへつ当世とうせの天台宗てんだいしやうは華嚴宗けこんしやうの見を出でざる事を云うか、華嚴宗の意は法華ほつけと華嚴けこんとに於て同勝どうしやうの二義ふたぎを存ぞんず、同は法華ほつけ・華嚴けこんの所詮しよせんの法門ほふもん之同じとす、勝には二義あり、古の華嚴宗けこんしやうは教主きやうしゆと対菩薩衆等たひぼさつしやうの勝かちの義を談だんず、近代きんだいの華嚴宗けこんしやうは華嚴けこんと法華ほつけとに於て同勝どうしやうの二義有りと云云、其の勝かちに於て又二義あり、迹門しやくもんは華嚴けこんと同勝どうしやうの二義あり華嚴けこんの円えんと法華ほつけ迹門しやくもんの相待妙そつたいみやうの円えんとは同なり彼の円えんも判はんず・此の円えんも判はんの故なり、籤せんの二に云く「故に須すべらく二妙を以て三法を妙めいならしむべし故に諸味しよみの中に円融えんゆう有りと雖も全く二妙無し」私志記ししきに云く「昔の八の中の円えんは今の相待きやうたいの円えんと同じ」と云へり是は同なり記の四に云く「法界ほふかい

を以て之を論ずれば華嚴に非ざる無し仏慧を以て之を論ずれば法華に非ざる
無し」云云、又云く「応に知るべし華嚴の尽未来際は即ち此の經の常在靈山
なり」云云、此等の釈は爾前の円と法華の相待妙とを同ずる釈なり、迹門
ぜったいかいえの絶待開会は永く爾前の円と異なり、籤の十に云く「此の法華經は開権顯実
かいしゃくけんぼん
・開迹顯本の此の両意は永く余經に異なり」と云えり、記の四に云く「若し
ぶつて
仏慧を以て法華と為さば即」等と云云、此の釈は仏慧を明すは爾前・法華に
わたくはいえただほつて
亘り開会は唯法華に限ると見えたり是は勝なり、爾前の無得道なる事は分明
そのゆえ
なり其の故は二妙を以て一法に妙ならしむるなり、既に爾前の円には絶待の
か しゅじょう
一妙を闕く衆生も妙の仏と成る可からざる故に籤の三に云く妙變為の釈
これ
是なり、華嚴の円變じて別と成ると云う意なり。

ほんもん
本門は相待・絶待の二妙俱に爾前に分無し又迹門にも之無し、爾前迹門
こと
は異なれども二乗は見思を断じ菩薩は無明を断ずと申すことは一往之を許し
にじょう けんじ ぼさつ むみょう とう いちおうこれ ゆる

て再往さいおうは之これを許ゆるさず、本門ほんもん寿量品じゆりやうばんの意いは爾前にぜん・迹門しゃくもんに於おいて一向いつこうに三乘さんじやう俱ともに

三惑さんかくを断だんぜずと意得いこころうべ可べきなり、此この道理どうりを弁わえざるの間ま・天台てんだいの学者がくしやは爾前にぜん

・法華ほっけの一往同いちおうの釈しやくを見て永異えいの釈しやくを忘れ結句けっく名なは天台てんだい宗しゆうにて其その義分ぎぶんは

華嚴宗けこんしゆうに墮おちたり、華嚴宗けこんしゆうに墮おちるが故ゆえに方等ほうとう・般若はんにかの円えんに墮おちぬ、結句けっくは

善導等ぜんどうの釈しやくの見みを出いでず、結句けっく・後ごには謗法ぼうぼうの法然ほうねんに同じおなて師子身中ししの虫むしの

自みずかししくらを食くうが如ごとし文ぶん、仁王經の下のにだいおう大王だいおう我が滅度めつどの後ご未來世みらいせの中に四部しの弟子でし

・諸もろの小国しやうこくの王わう・太子たいし・王子みこ乃すなわち是これれ三宝さんぼうを住持じゅうじし護まもれる者もの・転うたた更さらに三宝さんぼう

を滅破はすること師子身中ししの虫むしの自みずかししくらを食くうが如ごとし、外道げどうには非あらず多く我われ

が仏法ぶつぽうを壊やぶりて大罪過だいざいかを得えん二云せん、籤せんの十じゅうに云いく、始はめ住前じゆうぜんより登のぼり住すまに至いたる

このかた全こく是これれ円えんの義ぎ・第二住だいじより次の第七住しちだいに至いたる文相次第ぶんさうじだいして又別べちの

義ぎに似にたり、七住しちじうの中に於おいて又また一多相即自在そつそくじざいを弁べんず、次の行向地ぎやうかうじ又是これ次第しだい

差別さべつの義ぎなり、又また一一いちいちの位みに皆普賢行布みなふげんの二門にもん有あり故ゆえに知しんぬ兼かねて円門えんもんを用もちい

て別に撰せんずることを」

八〇

小乗しょうじょう 小仏要文しょうぶん

595P

華嚴けごん

阿含あこん

大いにちきよう

大日經

しんこんしゅう

真言宗

かんきよう

觀經等

じようどしゅう

淨土宗

ほうとう

方等

じんみつ

深密經等

ほうそうしゅう

法相宗

しょうじょう

小乗

はんにや

般若

りようがきよう

楞伽經

ぜんしゅう

禪宗

むりようききよう

無量義經

ほけきようしゃくもん

法華經迹門十四品・

ほんもんやくおうほんいか

下の六品並びに普賢・

ねはんきよう

涅槃經等

おうじん

応身

おうじん

劣応身

勝心身 おうじん

小仏

報身 ほうしん

華嚴經るさな仏 けこんきょう

だいにちきょう

大日經等びるさな仏

なら

並びに迹門涅槃經等の仏 しゃくもんねはんきょう

阿逸・汝当に知るべし是の諸の大菩薩 なんじまさ

序出二三云。

無數劫より・このかた仏の智慧を修習す、悉く是れ我が所化なり大道心

を發さしむ此等は是れ我が子なり是の世界に依止せり、玄の七に云く「六

に本説法妙とは經に言く此等我所化・令發大道心・今皆住不退と我所化

とは正く是れ説法して大道心を發さしむるは小説に簡非するなり、此れ

本時の説を指して迹説を簡非するなり迹説・多種なれども若し涅槃に依

れば」等云云、華嚴經の寂滅是なり始成正覺。

しやくぶつ 迹仏。増一阿含經の十に云く、「仏・摩竭国に在し道樹の下にして爾時に世尊

とくたういま 得道未だ久からず」浄名經に云く、「始め仏樹に坐して力て魔を降す」

だいしつきよう 大集經に云く、「如来成道始めて十六年なり」大日經に云く、「我昔道場

に坐し四魔を降伏す」仁王般若經に云く、「大覺世尊先ず我が爲に二十九

年、無量義經に云く、「我先に道場菩提樹下に端坐する事六年乃至四十余年、

法華經の方便品に云く、「我始め道場に坐し樹を觀じ亦經行し三七日の中

に於て是くの如き事を思惟す」籤の七に云く、「大乘の融通過ぎたること

無し」華嚴經の初に云く、「菩提道場にして始めて正覺を成ず、故に知ん

ぬ大小識成皆近なり」壽量品に云く、「爾時に世尊諸の菩薩の三たび請じ

て止まざるを知ろしめして之に告げて言たまわく汝等諦かに聴け如来の

秘密神通の力を・一切世間の天人及び阿修羅は皆今の釈迦牟尼仏は釈氏の

宮を出でて伽耶城を去ること遠からず道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提

を得たりと謂^{おも}えり、然^{しか}るに善男子・我^{われ}実に成^{じようぶつ}仏してより已^{この}来無量無^む辺百
千^{せん}万^{まん}億^{いふ}那^な由^ゆ佉^た劫^{くわつ}なり」等云云、文^{もん}句^くの九^くに云^いく、「仏^{ぶつ}・三^{さん}世^ぜに於^おいて等^{さん}く三^{さん}身^{しん}
有^{しよきよう}り諸^{しよ}教^{きやう}の中^{ちゆう}に於^おいて之^{これ}を秘^ひして伝^{でん}えず・故^{ゆえ}に一切^{いっさい}世^{せい}間^{けん}の天^{てん}人^{にん}・修^{しゆ}羅^らは
今^{いま}の仏^{ぶつ}は是^こに始^はまると謂^{おも}えるなり、此^{さんじん}の三^{さん}身^{しん}を得^える故^{ゆえ}に近^{しん}に執^{しゆ}して遠^{えん}を疑^{うたが}
う」寿^{じゆりよう}量^{りやう}品^{ひん}に云^いく、「諸^{しよ}の善^{ぜん}男^{なん}子^し・如^に来^{らい}は諸^{しよ}の衆^{しゆ}生^{じやう}のねが小^{せう}法^{ぽう}を樂^{らく}えとくはつる徳^{とく}薄^{はく}垢^く重^{じゆう}
の者^{もの}を視^みては是^この人の為^{ため}に我^{われ}少^{せう}くして出^{しゆ}家^けし阿^あ耨^の多^た羅^ら三^{さん}藐^{みやく}三^{さん}菩^{みやく}提^{だい}を得^えたり
と説^しく、然^{しか}るに我^{われ}実^{じつ}に成^{じようぶつ}仏してより已^{この}来久^{きう}遠^{えん}なること斯^かくもの若^もし」文^{もん}句^く
の九^くに云^いく、「一^{いつ}日^{にち}○二^に現^{げん}在^{ざい}○三^{さん}約^{やく}修^{しゆ}行^{ぎやう}○四^し・果^{くわ}門^{もん}に約^{やく}せば近^{こん}成^{じやう}のく小^{せう}を聞^{きこ}か
んと樂^{ねが}う者^{もの}は釈^{しやく}氏^しの宮^{きやう}を出^いで始^はめて菩^ぼ提^{だい}を得^えたりとし長^{ちやう}大^{だい}久^{きう}遠^{えん}の道^{だう}を聞^{きこ}か
ん事^{こと}を樂^{らく}欲^{よく}せず故^{ゆえ}に樂^{らく}小^{せう}と云^いう」此^{これ}等^らの小^{せう}心^{しん}は今^{いま}日^{にち}に始^はまるに非^{あら}ず若^もし先^{せん}
に大^{だい}を樂^{ねが}わば仏^{ぶつ}即^{すなわ}ち始^{しじやう}成^{じやう}を説^しかず始^{しじやう}成^{じやう}を説^しくことみなは皆^{みな}小^{せう}法^{ぽう}を樂^{ねが}う者^{もの}の為^{ため}の
み、又^{また}云^いく「諸^{しよ}の衆^{しゆ}生^{じやう}・小^{せう}法^{ぽう}を樂^{ねが}う者^{もの}とは所^{しよ}見^{けん}の機^きなり」華^け嚴^{えん}に云^いく

「たいしゅうしょうじょう 大衆 清淨 なりと雖も其の余の樂小法の者は・或は疑悔を生じ長夜に
すいのう 衰悩せん此れを愍むが故に黙す」偈に云く「其の余の久く行ぜざるは智慧
いま 未だ明了ならず識に依つて智に依らず聞き已つて憂悔を生じ彼將に惡道に
お 墮ちんとす此れを念うが故に説かず」と、彼の經を案ずるに声聞・二乗
無し但不久行の者を指して樂小法の人と為すのみ、師の云く「樂小は
しょうじょう 小乗 の人に非ざるなり乃ち是れ近説を樂う者を小と為すのみ」文句の九
に云く「徳薄とは縁了の二善功用微劣なれば下の文に諸子幼稚と云うな
くじゅう り垢重とは見思未だ除かざるなり」記の九に云く「徳薄垢重とは其の人
いま 未だ実教の二因有らざる故なり下の文に諸子幼稚と云うは下の医子の譬
の文を指す尚未だ円を聞くに堪えず況んや遠を聞かんをや、見思未除とは
しばらたとえ 且く譬の中の幼稚の言を消す定めて未だ遠を知らず」玄の一に云く「厚
ぜんこん 善根を殖えて此の頓説を感じず」文、籤の一に云く「一往は総じて別円を

以て厚と為す」五百問論に云く、「一經の中に本門を以て主と為す」云云、
又云く「一代教の中に未だ曾て遠を顕さず父母の寿は知らずんばあるべからず始めて此の中に於いて方に遠本を顕す、乃至但恐る才一國に當るも父母

の年を知らざれば失う所・小と謂うも辱むる所至つて大なり、若し父の寿の遠きを知らざれば復父統の邦に迷う徒に才能と謂うも全く人の子に非ず」文句の九に云く「菩薩に三種有り下方と他方と旧住となり」玄義の七に云く「若し迹因を執して本因と為さば斯れ迹を知らず亦本を識らざるなり天月を識らずして但池月を觀るが如し。〇、弘迹顯本せば即ち本地の因妙を知る影を撥つて天を指すが如し云何ぞ益に臨んで漢を仰がざる鳴呼聾駭なんすれぞ道を論ぜんや」又云く「若し迹果を執して本果と為す者は斯れ迹を知らず亦本を識らざるなり、本より迹を垂るるは月の水に現ず

るが如く迹を払うて本を顕すは影を撥うて天を指すが如し、当に始成の果
を撥けば皆是れ迹果なるべく久成の果を指すは是れ本果なり」又云く「諸
土は悉く迹土なり一には今・仏の所栖の故に二には前後修立の故に三に
は中間所払の故に若し是れ本土は今・仏の所栖に非ず、今・仏の所栖は
即ち迹土なり、若し是れ本土は一土一切土にして前後修立なるべからず
浅深不同なり。迹を執して本と為す者は此れ迹を知らず亦本を識らざる
なり、今迹を払うて本を指すときは本時所栖の四土は是れ本国土妙なり」

蔵因 三祇百劫菩薩 未断見思

通因 動喻塵劫菩薩 見思断

迹仏

別因 無量劫菩薩 十一品断無明

円因 四十一品断無明

劣応 蔵「草座」三十四心断結成道

迹仏果 ぶつ か

勝心

通

「天衣」三十四心見思・塵沙断の仏 けんじ じんじゃ

果

報身 ほうしん

別「蓮華座」十一品断無明の仏 れんげ むみょう

法身 ほっしん

円「虚空座」四十二品断無明の仏 こくう むみょう

八一

日月の事 にちがつ

599P

誓耶后

麻利支天女 まりしてん

大日天 だいにち

乗轝車

九曜

毘誓耶后

七曜

大月天 がってん

乗鷲

二十八宿

十二宮

金光明經に云く「日の天子乃以び月天是の經典を聞き精氣充実す」 こんこうみょうきょう いわ てんし がってん こ きょうてん せい き

さいしょうおうきよう

最勝王經に云く「日出でて光を放ち無垢炎清淨なり此の經王の力に由て

りゆうきしてん

流暉四天を遶る」仁王經に云く「日月度を失い」等、大集經に云く「日月

げん

明を現ぜず四方皆亢旱す是の如き不善業惡王・惡比丘我が正法を毀壞す」

にんのうきよう

仁王經に云く「非法非律にして比丘を繫縛すること獄囚の法の如くす」法華經

いわ

に云く「色力乃び智惠此等皆減少す」華嚴經に云く大集經に云く。

段食・法食・喜食・禅悦食。

いっさいしゅじょう

三力、一切衆生力・法力・自身功德力。

じしんくどく

戒光 清淨也

日光 定光 定也

えこう

惠光 也

にんてん

人天 三学

しょうじょう

小乘 三学

だいじょう

大乘

三学

ごんだいじょう

権大乘

三学

じつだいじょう

実大乘

三学

じゅんえん

純円

三学

ほっしん

法身光

はんにゃ

般若光

げだつ

解脱光

此天は初地・或は十廻向なり

じゅつしん

十信

じゅうじゅう

十住

十行

十廻向

十地

等

妙

しょじさんなく

初地三惑断

しょじゅうさんなく

初住三惑断

北辰

たいしやく

梵帝釈

にちがつ

日月

してん

四天等

しゅうせい

衆星

いしよく

衣食

壽命 じゅみょう

肉眼 にくげん

天眼 てんげん

一切いっさいの四天下してんげの衆生しゅじょうの眼目がんもく

惠眼

法眼 ほうげん

仏眼 ぶつげん

有あらに非ひず地を離はなるが故ゆえに、空くうに非ひず有うを照てすが故ゆえに有あ、辺へんに非ひずして中ちゆうに
処しよするが故ゆえに、而しかも空くう・空くうに処しよするが故ゆえに、而しかも有う・有うを養やううが故ゆえに、来きら
ずして北きたに至いたるが故ゆえに、而しかも来きりて南なんに来きるが故ゆえに、一いつならず四州ししゅうを照てすが
故ゆえに、異いならず一いつ日にちなるが故ゆえに、断たならず常じようなるが故ゆえに、常じようならず一いつ処しよに住す
せざるが故ゆえに。

記きの三さんに云いく部方等ほうとうと雖いえども義ぎは円極えんごくなる故ゆえに・故ゆえに今これ之これを引ひく、

八二 和漢王代記 602p

伏羲

小昊

三皇 さんこう

神農

三墳・五典 さんぶん

黃帝 こうてい

五帝 帝

堯王 ぎょうおう

男九人女一人

舜王 しゅんおう

夏 殷

第一文王 だいいち

第二武王 周公旦 しゅうこうたん

第三成王

第四昭王の御宇二十四年甲寅に当る五色の光氣南北に亘る大史・蘇由之を占

う四月八日は仏の御誕生なり

ちゅうげん

中間七十九年なり

第五穆王ばくおうの五十二年壬申みずのえさるに当る二月十五日御入滅にゆうめつ 十二の虹南北わたに亘る

大史たいし扈多これ之を占うう

三十七有り・或あるは八

一儒教じゅきょう 五常ごじょう 文武等なり

周 三教

二道教にどう 仙教「孔丘がんかい」「顔回がんかい」

三釈教しゃっきょう 一代五十余年「老子らうし」

始皇

儒教じゅきょう

秦 次生皇 三教

道教

釈教しゃっきょう

前漢 十四代

漢

又周仏の滅後一千一十五年に当るなりの第四の昭王二十四年より後漢の第二光武いたに至る一千

一十五年に当るなり

後漢光武皇帝永平十年丁卯 ごかん こうてい ひのとう

一千一十五年に当て摩騰迦竺法蘭の二人の聖人四十二生經 あたひ まとう かじくほうらん しやうにん

小乘經 しょうじょうきやうじゅうじゅう

十住

斷結經 きつぎやうだいにじょうきやう 大乘經 だいじょうきやう を

以て白馬に負せて漢土に渡す はくば かんど わた

魏

雙觀經 そうかんきやうわた 渡る

西晉

正法華經十卷 ほけきやう わた 渡る

法護三蔵 まもさんぞう 亘す

妙法華經 みやうほけきやうわた 渡る

七卷・或は八卷 ある

羅什三蔵 らじゅうさんぞう 亘す

晉

三論宗 さんろんしゅうわた 渡る

後秦 こうしん

阿弥陀經 あみだ わた 亘る

華嚴經 けこんきやうわた 亘る

觀經 かんきやうわた 亘る

大涅槃經 だいはんきやうわた 亘る

宋

六^七宗

齊

梁

ず
」

末

三時・四時・五時^一 五時^二 一音^三 半滿^四 三教^五 四宗^六 五宗^六

なんざん ほくひち
南三・北七「江南なり」の十師「江北なり」

どんらん ほっしじょうどしゅう
曇鸞法師浄土宗を立つ

ぜんしゅうわた

禅宗渡る 達摩大師なり

だいし

じょうろんわた
摂論亘る 南北

ちろんわた

地論亘る 南北

べつじいしゅう

別時意趣の法門出来す

ほうもんしゅうたい

なんがくだいしまた

南岳大師亦恵思禅師と云う「観音の化身なり道宣の感通伝に出

ぜん

かんのん

けしん

どうせん

始

ろっこん
六根淨の人日本にほんの淨宮太子たいし是なり

てんだいだいし
天台大師の御師おんしなり

にほん
日本にほんに伝でん教大師ぎょうだいしと生る

またちしや
亦智者いしやと云い

てんだいだいし
天台大師

また
亦智い・と云い

また
亦徳安いと云い

此おんときの御時・南三なんざん・北七ほくひち並びに前五百余年ななひゃくごねんの人師にんし・三蔵さんぞう・所立しよりゆう

の十師じゅうしの義ぎを破はし始めて五時ごとき・八教はつぎょう・三觀さんかん・六即ろくそく・十境じゅうきやう・十

乗じやうを立て小釈迦せうしやかと号す、進しんでは天竺てんじくの論師ろんしにも超え退こては震旦しんたん

の人師にんしに勝まさるなり、玄義げんぎの三さんに云いく故ゆえに章安しょうあん大師だいしの云いく「天竺てんじく

の大論だいろん尚なほ其そのの類るいに非あらず震旦しんたんの人師にんし何なんぞ劣わすしく語かたるに及およばん

此これ誇耀こやうに非あらず法相ほつそうの然しかるのみ又智証ちしやう大師だいし授決集じゆけつしゆう也云いく「天台てんだい

隋

陳

世に出で仏意快く暢ぶ豈万教再び世間に演るに非ずや」

笈多と崛多の両三蔵添品法華經を渡す

道綽善導此の世に在り

華嚴宗

後漢の世自り唐の神武皇帝の開元十八年庚申に至る六百六十四

載に渡す所の經・律・論・五千四十八卷

訳者百七十六人なり妙樂は是の世の人なり

法相宗は玄奘三蔵西天自り之を渡す

真言宗は善無畏三蔵・金剛智三蔵之を渡す

法相宗 真言宗の二宗は天台之を見ず妙樂大師之を見て

天台宗に対当して勝劣を論ず又日本国の伝教慈覚・智証

之を諍う

てんだい げんぎ 天台の玄義の十に南北の十師を破して云く「但聖意幽隱にして教法 弥
 がた ぜんだい しよし ある ほぼ 難し、前代の諸師・或は粗名匠に承け・或は思い袖 衿より出ず 阡陌縦横
 いえど いずれ これ なりと雖も孰か是なるを知ること莫し、然るに義雙立せず理兩存すること
 も 無し若し深く所以有り復修多羅と合する者は録して而て之を用ゆ文無く
 ぎな 義無きは信受すべからず」籤の十に云く、「一として全く是なること無きを
 ゆえ 以ての故に一一に難破す」玄の三に云く「輕慢止まざれば舌口中に爛る」
 いわ いわ 又云く「法華は衆經を總括す」籤の三に云く「已法華已前華阿方般等の
 いっさいきよう むりようぎきよう 一切經今無量義經なり当涅槃經等の法華已後の一切經なりの妙茲に於て
 まよい ただ 固く迷えば舌爛れて止まざるも猶華報と為す謗法の罪苦長劫に流る」南
 けこんしゆう ほうぞう ちようかん しんこんしゆう 三北七に華嚴宗の法蔵・澄觀・真言宗の弘法等は法華經よりも華嚴經を
 まさ 勝るとするなり、又三論の嘉祥は法華經よりも般若經を勝るとす、又法相

の慈恩等は法華經よりも深密經を勝るとす、又真言宗の善無畏三蔵・

金剛智三蔵・不空三蔵等は法華經よりも大日經を勝るとするなり、此等

の宗宗の相違如何相違如何。

授決集に云く円 珍智 証大師

文は大經に出でたり人の之を会する無し、光・盲の前に在れども他に於て

は無用なり、仏分明に五味の喩を説き五時の教に喩えたもう云云、訳あり

てより來講者・路に溢るれども未だ會て五味を談ずるの義を解せず己が胸臆

に任せて趣爾嚙語す何ぞ象に触る衆盲の者に異らんや、天台世に出で仏意快

く暢ぶ豈に万教再び世間に演るに非ずや、南北の講匠經論を釈する者・各教

時を立つれども百にして一も是なること無し只教部の前後頓漸權實大小の

妙・寛狹・進否に迷うに縁りてなり・大教の網を張りて法界の海を亘し

人天の魚を済て涅槃の岸に置く斯くの如くするすら其の遺漏を恐る況や諸師

の輩羅の一目なり何れの時か其の鳥を得ん、若し万蔵を暗ずと雖も此の理趣を会せざれば年を終るまで他の宝を計りて自ら半銭の分無く虚しく諍論を益し長水に水を添うのみ。

授決集に法相宗の慈恩大師を破して云く、五性宗に云く未熟未熟の文也と云うは、応に不熟と云うべし、○今謂く汎く法華を講ずるには須く此の義を以て正と為すべし若し爾らずんば經を破し論を破し罪五逆に過ぎたり基公を除きて外は人の彼の不熟の義を伝つる無し、○若し強て之を執せば公私十方の信施消し難し消し難し若し消せずんば何ぞ三途を免れん爾を供養せん者は三惡道に墮せん謗法の罪報は法華般若の諸大乘經に一切明かに説けり智者披く可し、○爾これを信受す可し無間を招く莫れ。

授決集 円珍真言の諸宗を徴して云う

真言・禅門・華嚴・三論・唯識・律業・成俱の二論等、○若し法華・涅槃

等の經に望むれば是れ撰引門なり文、又云く大底他は多く三教在り円の旨
いたつ 至て少きのみ弘法大師の二教論に喩して日く今斯の經文に依るに仏五味を以
て五蔵に配当す、総持を醍醐と称し四味を四蔵に譬う震旦の人師等諍つて醍醐
を盗み各自宗に名く。

一 姐多覽「乳」 經

二 毘那耶「酪」 律 小乘

三 阿毘達磨「生」 論

四 般若「熟」 はら蜜蔵 「文珠」 大乘

五 惣持「醍醐」 だらに蔵 「金剛蔵」

一 姐多覽「乳」

二 毘那耶「酪」

三 阿毘達磨「生」

弘法大師・此の經に

依つて五蔵を立つ

華

方

四般若はら蜜「熟」

般

法華

涅槃

五だら尼蔵「醍醐」

大日の三部經

二教論に云く加以ず 釈教 東夏に漸し微自り著に至り漢明を始めと為し周
文を後と為す、其の中間 翻伝する所皆是れ 顯教なり玄宗代宗の時・金智広
智の日・密教 鬱として起り盛に秘趣を談ず、新薬日に浅くして旧痼未だ除か
ず楞伽の如きに至つては法仏説法の文智度性身妙色なり句 憶に馳せ而も文
を会して自宗を驅り而も義を取る惜いかな古賢醍醐を嘗めず

日本 にほん

神代十二代

天神 てんじん 七代

地神 五代

人代百王 ひゃくおう

第一神武天皇 だいいち てんのう

第十四仲哀

第十五神功皇后 しんこうこうい

第十六応神天皇 てんのう

第三十欽明天皇 きんめいてんのう

之を略す これ

八幡大神の父なり はちまんだい

八幡大菩薩の母なり はちまんだいぼさつ

今の八幡大菩薩なり はちまんだいぼさつ 略

歴記に云く いわ 欽明天皇の治天下十三年己申歳冬十月一 てんが

日百濟国聖明王自り くだら 仏像經等始めて日本国に送 せいめいおうよ ぶつぞう にほんこく

る

第三十一敏達天皇 びんたつてんのう

厩戸王子 おうじ 四天王寺を造る してんのう

第三十二用明ようめい

聖徳太子しょうとくたいしは用明ようめいの御子也

上宮じょうぐう太子守屋たいしもりやを切り四十九院しじゅうくにんを立つ南岳大師なんがくだいしの

後身かんのみなり救世觀音すいじやくの垂迹すいじやくなり

第三十三崇峻すしゅん

第三十四推胡すいこ女帝

第三十五舒明

第三十六皇極すいこく女帝

第三十七孝徳

第三十八斉明せいめい女帝

第三十九天智

第四十天武

第四十一持統

第四十二文武

第四十三元明

第四十四元正

ろくしゅう

六宗

じょうじつ

成実宗

ほうそうしゅう

法相宗

さんろんしゅう

三論宗

けこんしゅう

華嚴宗

またぜんしゅう

亦禪宗有り並びに一切経有り

なら
いっさいきよう

しやうむてんのうとうだいじ

聖武天皇東大寺の大仏を造る

だいぶつ

きんめいよ

欽明自聖武に至るまで

しやうむ

いた

二百四十余年なり、

よんじゅうよねん

震旦国自り

しんたん
よ

しやうむ
第四十五聖武

鑑真和尚渡り律宗を亘す、次に天台宗の玄文止等

を渡す、又東大寺の小乗戒壇を立つ

第四十六孝謙こうけん

聖武の女

第四十七淡路

廃帝

第四十八称徳

孝謙又即位也

第四十九光仁

桓武の父なり

欽明きんめい自り二百六十余年に及ぶ

第五十 桓武かんむ えんりやく

延暦三年に奈良の都自り長岡の京に遷り、延暦十三年長岡

の京自り平の京に遷る、延暦二十五年御崩・去延暦四年叡山

を立つ最澄伝教大師 えんりやくなり延暦二十年叡山八講を始め南京の十人を請ず、

延暦二十一年の正月十九日高雄に於て南京の十四人と最澄と

宗論あり、同二十九日六宗の十四人謝表を桓武聖王に奉る、

延暦二十三年入宋同二十四年御帰朝、此の時始めて伝教大師

・天台宗を立て四十余年の文を以て六宗を破り始めて法華の
実義之を顕し、欽明自り二百余年の邪義之を改む、又六宗の
碩徳たる勤操・徳円・長耀等の十四人・桓武皇帝に謝表を
奉りて邪見を翻す。弘法大師空海は延暦二十三年御入宋・
大同元年御帰朝、伝教大師は山階寺の行表 僧正の御弟子・
弘法大師は石淵の勤操 僧正の御弟子なり。

第五十一平城

第五十二嵯峨弘仁十三年六月四日伝教大師御入滅同十一日「慈覚大師」

戒壇を立つ。

第五十三淳和

衆

秀句に云く「法華經を賛すと雖も還つて法華の心を死す」文。

選択集に云く法然造捨閉閣抛、善導礼讃に云く「十即十生・百即

ひやくしやう

百生「又云く、百の時に希に一二を得千の時に希に三五を得」又云く

「千中無一」道綽の安樂集に云く大集月蔵經を引く我が末法の時の中の億億の衆生

行を起し道に臨むも未だ一人の得る者有らず、当今末法は是五濁の悪世なり

ただじやうど

唯浄土の一門のみ有りて通入す可きの路なり」恵心の往生要集に云く

「利智精進の人は未だ難しと為さず予が如き頑魯の者豈敢てせんや」

こんほんだいし

根本大師

でんぎやうだいし

伝教大師

山家

てんだい

天台の後身なり

守護章に「正像稍過ぎ已つて末法太だ近きに有り法華一乗の機今正に是れ

其の時なり」又云く「一乗の家には都て用いざれ小乗・權大乘但し開し已つて助

道に用いたるを除く」

もち

道に用いたるを除く」

いちだい

八三 一代五時図

ぶんおつがんねん 文応元年三十九歳御作

612P

於總州

大論に云く十九出家三十成道と

権大乘

華嚴經

「三七日」

華嚴宗

戒

定

智儼

杜順

法蔵

「二七日」

小乗

俱舍宗

戒定慧

澄観

阿含

「十二年」

成実宗

戒定慧

律宗

戒定慧

鑒真和尚

大集經

深密經

法相宗

玄奘

戒定慧

楞伽經
りようがきよう

禪宗
ぜんしゅう

慈恩
じおん

權大乘
ごんだいじよう

觀經
かんきよう

方等
ほうとう

雙觀經
そうかんきよう

淨土宗
じょうどしゅう

阿弥陀經
あみた

善導
ぜんどう

三十年

金剛頂經
こんごうちようきよう

真言宗
しんごんしゅう

戒定慧
かいじょうえ

大日經
だいにちきよう

蘇悉地經
そしつちきよう

百論「提婆菩薩造」
だいばぼさつ

權大乘
ごんだいじよう

中論「竜樹菩薩造」
りゅうじゅぼさつ

般若
はんによ

十二門論
だいろん

三論宗
さんろんしゅう

戒定慧
かいじょうえ

大論
だいろん

同

嘉祥寺
かじょう

吉藏大師
きちぞうだいし

無量義經に云く「方便力を以て四十余年には未だ眞實を顕さず、又云く

むりようむへんふかしぎあそぎこう　すぐ
無量無辺不可思議阿僧祇劫を過れども終に無上菩提を成ずることを得ず所以

いは　ぼだい　じきどう　ゆえ　けんぎよう　るなん　ゆえ
は何ん菩提の大直道を知らざるが故に險逕を行くに留難多きが故に」と、又

い　じきどう　るなん　ゆえ
云く「大直道を行くに留難無きが故に」と。

ほけきよう　はちかねん　ほつけしゅう
法華經「八箇年」　法華宗

てんだいしゅう　かいじゅうえ
天台宗　戒定慧

せそん　ほうひさ　まさ　しんじつ　と　たま　しゅじゅ
「世尊は法久しくして後かならず當に真実を説き給うべし、種種の道を示す

い　え　そ　ぶつじよう　しうじき　ほうべん　むじようどう
と雖も其れ実には仏乗の為なり、正直に方便を捨てて但無上道を説く、今

さんがい　みなこ　そ　しゅじよう　ごうご　しか
・此の三界は皆是れ我が有なり其の中の衆生は悉く是れ我が子なり而も今・

ところ　もろもろげんなん　ただわれひとり　よ　く　こ　な　またきようちよく　い　え　ど　しか
此の処は諸の患難多し唯我一人のみ能く救護を為す復教詔すと雖も而も

しんじゅ　も　きほう
信受せず、若し人信ぜずして此の經を毀謗

す　な　わ　い　っ　さい　せ　けん　ぶ　つ　し　ゅ　だ　ん　そ　み　やう　じ　ゆう　あ　び　ご　く　あ　び　ご　く　ま　さ
せば則ち一切世間の仏種を断ぜん。其の人命終して阿鼻獄に入らん。○將に

な　の　う　ら　ん　あ　ら　舎利弗の巻　み　やう　ほ　け　き　やう　み　な　こ　し　ん　じ　つ　多宝証
魔の仏と作りて我が心を悩乱するに非ずや疑二の巻、妙法華經。○皆是れ真實明文に

よ　よ
法に依つて人に依らざれ

涅槃經六に出ず

法四依

義に依つて語に依らざれ

智に依つて識に依らざれ

了義經に依つて不了義經に依ら

ざれ

一日一夜

涅槃經

五品

天台

等

八十入滅

初依

六根

菩薩等

人四依

第二依

初地已上

竜樹

菩薩等

第三依

第四依

等覺菩薩

天竺

十四五六卷

じゆうじゆうびしゃもんろん
十住毘婆沙論に云く

りゆうじゆぼさつ らじゆうさんぞう
竜樹 菩薩造羅 什三藏訳

なんぎようどう
難行道

たと
譬えば陸路を歩行せば苦なれども

ふたい
不退地

いぎようどう
易行道

すなわ
水道を船に乗れば則ち楽なるが如し

ぼさつ あみだぶつ
十仏・百三十余菩薩並に阿弥陀仏等

どんらんほつし
曇鸞法師「齊世」本三論宗の人なり浄土論註二巻をつく

どうしゆくぜん
道 綽禪師「唐世」善導の師なり安樂集二巻をつく

あんらくしゆく
安樂集に云く「大集月蔵經に云く我が末法の時の中の億億の衆生起行

しゆく
修道すとも未だ一人も得る者有らじ

とつこんまつほう
当今末法は是れ五濁の悪世なり唯浄土の一門のみ有つて通入すべき路なり」

と

とう
唐世

ぜんどう げんぎ
善導 玄義一卷・序分義一卷・定善義一卷・散善義一卷・観念法門一卷・

往生礼讃おうじょうれいさん 一卷・般舟讃はんじゆ 一卷・法事讃ほうじさん 上下已上九卷 隱岐院おきの

御宇建仁年中今に五十余年なり

法然ほうねん 源空げんくう

せんちやくしゅう

選択集 一卷

未だ一人も得る者有らず千の中に一も無し

じようどさんぶきよう

浄土三部經を除くの外法華經等の一切阿弥陀仏を除く一切の仏・菩薩ぼさつ

一切いっさいの神祇等じんぎ

なんぎよう

難行

聖道しょうどう

雑行ざうぎよう

天台法華宗等八宗を捨閉し閣抛す

いぎよう

易行

浄土じようど

正行しょうぎよう

阿弥陀仏は十即十生・百即百生

六百三十七部二千八百八十三卷

しゃへいかくほう
捨閉閣拋

そうかんきょう　いわ　たといわれほとけ
雙觀經に云く「設い我仏を得んに十方の衆生至心に信樂し我が国に生

れんと欲し乃至十念して若し生ぜずんば正覺を取らじ唯五逆と誹謗正法と

を除く」と、道綽の未有一人得者、善導の千中無一・法然の捨閉閣拋・此等

は豈謗法に非ずや、法華經第二譬喻品に云く「若し人信ぜずして此の經を毀謗

せば則ち一切世間の仏種を断ぜん・或は復顰蹙して而も疑惑を懷かん汝

當に此の人の罪報を説くを聴くべし若しは仏の在世若しは滅度の後に其れ

斯の經典を誹謗すること有らん經を讀誦し書持すること有らん者を見て

輕賤憎嫉して而も結恨を懷かん此の人の罪報汝今復聴け其の人命終して

阿鼻獄に入らん一劫を具足して劫尽きなば更生れん是くの如く展転して

無數劫に至らん地獄從り出ては當に畜生に墮つべし」涅槃經第十に云く「問

一闍提とは其の義云何、仏云く純陀若し比丘及び比丘尼・優婆塞・優婆夷

有つて・惡の言を發し正法を誹謗し是の重業を造りて永く改悔せず心に
慚愧無からん是くの如き等の人を名けて一闡提の道に趣向すと為す、若し四重
を犯して五逆罪を作り自ら定めて是くの如き重事を犯すと知つて而も心に初
より怖畏慚愧無く肯て發露せず彼の正法に於て永く護惜建立の心無く毀皆
輕賤して言過咎多からん、是くの如き等の人も亦一闡提の道に趣向すと名く、
若し復説いて仏法衆無しと云わん是くの如き等の人も亦一闡提の道に趣向す
と名く、唯此くの如き一闡提の輩を除きて其の余に施さば一切讚歎すべし」と。

上品は地獄に墮つ
中品は餓鬼に墮つ
下品は畜生に墮つ

一 殺生
二 偷盜
三 邪淫

下殺は螻蟻蚊
中殺は凡夫人及び前三果の聖人
上殺は阿羅漢・辟支仏・菩薩父母

十悪 じゅうあく

四重 しじゅう

僧

四 妄語 もうご

五 綺語 きご

六 惡言 あくげん

七 兩舌

殺生 せつしょう

偷盜 ちゅうとう

五逆 ごぎやく

邪淫 じゃいん

妄語 もうご

八貪

九瞋

十癡

一 殺父 しふ

二 殺母 しも

三 殺阿羅漢 あらかん

四 出仏身血 すいぶつしんけつ

五 破和合僧 はわごうそう

養父母 ふぼ

凡夫上人 ぼんぷしやうにん

木画像等 もくえ

四人已上凡夫 ぼんぷ

此等は皆一業引一生なり故に一度惡道に墮すれば還つて二度惡道に墮せず、
謗法は一業引多生なれば一度三宝を破すれば度度惡道に墮する是なり、伝教
大師の守護章に云く、「不正義の一切学人は信受すべからず所以は何ん其の師
の墮する所弟子も亦墮ち檀那も亦墮つ金口の明説何ぞ慎まざるべけんや慎ま
ざるべけんや」と。

第一弟子 第一弟子 第一弟子 第一弟子 第一弟子 第一弟子 第一弟子 第一弟子 第一弟子 第一弟子
「長樂寺多念」 隆觀 「南無房一切鎌倉の人人」

第一 第一 第一 第一 第一 第一 第一 第一 第一 第一
「こさか」 善慧房 「当院洛中一切諸人」

法然 法然 法然 法然 法然 法然 法然 法然 法然 法然
第一聖光 「筑紫九国一切諸人」

一条覺明 一条覺明 一条覺明 一条覺明 一条覺明 一条覺明 一条覺明 一条覺明 一条覺明 一条覺明
今の道阿弥等

成覺 成覺 成覺 成覺 成覺 成覺 成覺 成覺 成覺 成覺
一念 一念 一念 一念 一念 一念 一念 一念 一念 一念

法本 法本 法本 法本 法本 法本 法本 法本 法本 法本
一念 一念 一念 一念 一念 一念 一念 一念 一念 一念

已上弟子八十余人

ないしにほんこく いっさいねんぶつ
乃至日本国^の一切^{いっさい}念佛者^{ねんぶつ}並に檀那^{だんな}等、又一切^{いっさい}の天台・真言^{しんこん}等の諸宗^{しよしゆう}の人人^{ひとびと}
又法然^{ほうねん}が智分^{ちぶん}を出^いでず各各^そ其の宗^{しゆ}を習^しえども心^{こころ}は皆^{みな}一同^{いっとう}に念佛者^{ねんぶつ}なり、法華^{ほふけ}經^{きやう}
を讀^よめども真言^{しんこん}を行^しずれども皆助業^{みな}となし念佛^{ねんぶつ}を以^{もつ}て正業^{しやうぎやう}と為^なす謗法^{ほうぼう}の失^{とが}
脱^{のが}るべからず。

八四 一代五時圖 618P

竜樹菩薩造いわ

大論^{だいろん}に云^いく十九出家^{じゆつけしやう}淨飯王^{じやうはんわう}の太子^{たいし} 三十成道^{じやうどう}悉達^{しつたつ}太子^{たいし}

こんだいじやう

権大乘

杜順法師^{とじゆんほふし}

六十卷

智儼法師^{ちこんほふし}

華嚴經^{けこんきやう}

華嚴宗^{けこんしゆう}

八十卷

法蔵大師^{ほうぞうだいし}

三七日

澄觀法師^{ちやうかんほふし}

増一阿含經^{あこんきやう}

世親菩薩^{せじんぼさつ}

しょうじょうきょう

小乗經

あこんきょう

阿含經

あこんきょう
中阿含經

あこんきょう

長阿含經

あこんきょう

雜阿含經

十二年

くしゃしゅう
俱舍宗

げんじょうさんぞう
玄奘三蔵

じょうじつ

成実宗

りっしゅう

律宗

迦梨跋摩

どうせんりっし

道宣律師

二百五十戒

僧

しょうじょう

小乗戒

五百戒

尼

ごかい
五戒

男女
なんよ

八齋戒

男女
なんよ

ゆいがひゃく
瑜伽論

みろくぼさつ
弥勒菩薩造

深密經 五卷

唯識論 ゆいしきろん

世親菩薩造 せじんぼさつ

法相宗 ほうそうしゅう

玄奘 げんじょう

三蔵 さんぞう

慈恩 じおん

大師 だいし

大集經 だいしつきょう

雙卷經

曇鸞 どんらん

法師 ほっし

淨土三部經 じょうどさんぶきょう

觀經 かんきょう

道綽 どうしゆく

禪師 ぜんし

阿彌陀經 あみだ

淨土宗 じょうどしゅう

善導 ぜんどう

和尚 わじょう

法然房
ほうねんぼう

三蔵
さんぞう

権大乘
ごんだいじょう

金剛智三蔵
こんごうちさんぞう

方等部
ほうとうぶ

三蔵
さんぞう

和尚
わじょう

大師
だいし

大日經
だいにちきょう

七卷

金剛頂經
こんごうちょうきょう

三卷

蘇悉地經
そしつちきょう

三卷

真言宗
しんごんしゅう

善無畏
ぜんむい

不空
ふくう

慧果
けいか

弘法
こうぼう

慈覺
じかく

大師 だいし

大師 だいし

三十年

大師 だいし

智証 ちしょう

達摩

禪宗 ぜんしゅう

慧可 えか

僧

道信

求忍

楞伽經 りょうがきょう

四卷

十卷

百論

提婆菩薩造 だいばぼさつ

中論

龍樹菩薩造 りゅうじゅぼさつ

権大乘 こんだいじょう

慧能 えの

般若 はんによ

十二門論

同

三論宗 さんろんしゅう

興皇 こうこう

四十卷

大智度論 だいちどろん

同

嘉祥大師 かじょうだいし

無量義經 むりょうぎきょう

七十二歳

吉蔵 きちぞう

四十余年 よんじゅうよねん

には未だ眞実を顕さず、

方便の力を以て

四十余年には未だ眞実

を顕さず、

無量無辺不可思議・阿僧祇劫を過れども終に無上菩提を成ずる

を顕さず、

阿僧祇劫を過れども終に無上菩提を成ずる

ことを得ず、

所以は何ん菩提の大直道を知らざるが故に

大直道を行くは留難無きが故に。

留難

多きが故に、

大直道を行くは留難無きが故に。

実大乘 じつだいじょう

顕露宗 けんろしゅう

法華經 ほけきょう

最秘密宗 ひみつ

八箇年

はちかねん

仏立宗

ぶつりゆうしゅう

法華宗

ほっけしゅう

天台宗

世尊は法久しくして後に要当に真実を説き給うべし正直に方便を捨て

せそん ほうひさ

むじょうどう

まさ

しんじつ

と

たま

ぶつじょう

しやうじき

ほうべん

て但無上道を説く種種の道を示すと雖も其れ実には仏乗の爲なり、今此

さんがい みなこ

しゆじゆ

そ

しゆじょう

ことごとこ

わ

しか

いえど

の三界は皆是れ我が有なり其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり而も今・

ところ

もろもろげんなん

ただ

よ

くこ

な

またきようちよく

いえど

此の処は諸の患難多し唯我れ一人のみ能く救護を爲す復教詔すと雖も

しか

しんじゆ

も

きほう

いっさいせけん

ぶつしゆ

い

い

い

而も信受せず、若し人信ぜずして此の経を毀謗せば則一切世間の仏種を

だん

ある

またひんしゆく

ぎわく

いだ

なんじまさ

ざいほう

ざいほう

きようてん

ひほう

い

断ぜん、或は復蹙して疑惑を懷かん汝当に此の人の罪報を説くこと

ある

またひんしゆく

ぎわく

いだ

なんじまさ

ざいほう

きようてん

ひほう

い

を聴くべし若しは仏の在世若しは滅度の後其れ斯の如き經典を誹謗する

も

ざいせも

めつど

そ

こと

きようてん

ひほう

い

こと有らん経を讀誦し書持する有らん者を見て輕賤憎嫉し而も結恨を懷か

ざいほう

なんじ

また

そ

みようじゅう

あびこく

い

い

くそく

ん此の人の罪報を汝今復聴け其の人命終して阿鼻獄に入らん一劫を具足

して劫つ尽つきなば更生かくのことじ是てんでんの如むしゅこうく展いた転こして無おい数おわ劫おわに至おわらん此おいに於おわて死おわし已おわつて更に隣もうしん身そを受けん其その形めつど・長大ぜんによんにして五百ひやくじゆん由ため旬ほけきようならん、若ないしいうくし是ぜんなんしの善ぜんなんし男子ぜんなんし・善ぜんなんし女人ぜんなんし・我めつどが滅めつど度の後よに能ひそかく竊ひそかに一人ための爲ほけきようにも法ないしいうく華ぜんなんし經ぜんなんしの乃ぜんなんし至ぜんなんし一句ぜんなんしを説ぜんなんしか
ん当まさに知まさるべし是この人は則こ・如こ來この使こなり如こ來この所こ遣ことして如こ來この事こを行こずるなり、藥やく王おう若やくし惡あく人有こつて不ふ善ぜんの心こを以こて一い劫こうの中こに於こて現げんに仏ぶつ前に
於おいて常こに仏きめを毀きめ罵そせん其その罪つみなおかる尚もしひと輕あくげんし若やく人なんじ・一あくげんの惡やく言なんじを以ざいけて在しゅつけ家しゅつけ・出しゅつけ家しゅつけの
法ほけきよう華どくじゆ經どくじゆを讀きし誦そする者きしを毀きし皆そせば其つみはなはだの罪つみはなはだ甚やくだ重なんじし藥やく王おう今なんじ汝なんじに告きよつてんむりようせんまんぐ我しよせつが所しよせつ説しよせつ
の諸しよきようしか經しよきようしか而しよきようしかも此しよきようしかの經しよきようしかの中しよきようしかに於おいて法ほつ華ほつ最だいも第一だいなり我しよせつが所しよせつ説しよせつの經きよつてんむりようせんまん典きよつてんむりようせんまん無きよつてんむりようせんまん量きよつてんむりようせんまん千きよつてんむりようせんまん万きよつてんむりようせんまん
億すでにして已とに説とき今と説とき当まさに説まさかん而しかも其その中おいに於おいて此ほけきようもつともこれの法ほけきようもつともこれ華ほけきようもつともこれ經ほけきようもつともこれ最ほけきようもつともこれも為ほけきようもつともこれ
難なん信しん難なん解なんなり若もし法ほつ師しんに親しん近こんせば速すみかに菩ぼ薩さつの道ぼさつを得ぼさつん是この師ずいじゆんに隨ずい順じゆんし
て学がくせば恒こつ沙しやの仏たてまつを見たてまつ上たてまつることを得そん、爾その時ほつに宝ほう塔とうの中ほうとうより大おんじよう音おんじよう聲おんじようを
出ほして歎のたまめて言よきかなよきかなしやわく善かむにせ哉そんよ善びようどうだいえきようぼさつぼうぶつしよこねん哉びようどうだいえきようぼさつぼうぶつしよこねん釈びようどうだいえきようぼさつぼうぶつしよこねん迦びようどうだいえきようぼさつぼうぶつしよこねん牟びようどうだいえきようぼさつぼうぶつしよこねん尼びようどうだいえきようぼさつぼうぶつしよこねん世びようどうだいえきようぼさつぼうぶつしよこねん尊びようどうだいえきようぼさつぼうぶつしよこねん能びようどうだいえきようぼさつぼうぶつしよこねんく平びようどうだいえきようぼさつぼうぶつしよこねん等びようどうだいえきようぼさつぼうぶつしよこねん大びようどうだいえきようぼさつぼうぶつしよこねん慧びようどうだいえきようぼさつぼうぶつしよこねん教びようどうだいえきようぼさつぼうぶつしよこねん菩びようどうだいえきようぼさつぼうぶつしよこねん薩びようどうだいえきようぼさつぼうぶつしよこねん法びようどうだいえきようぼさつぼうぶつしよこねん仏びようどうだいえきようぼさつぼうぶつしよこねん所びようどうだいえきようぼさつぼうぶつしよこねん護びようどうだいえきようぼさつぼうぶつしよこねん念びようどうだいえきようぼさつぼうぶつしよこねん

の妙法華經を以て大衆の為に説き給う是の如し是の如し釈迦牟尼世尊の
所説の如きは皆是れ眞実なり・諸余の經典数恒沙の如し此等を説くと
雖も未だ難しと爲すに足らず若し須弥を接つて他方無數の仏土に擲げ置か
んも亦未だ難しと爲さず若し仏の滅度に惡世の中に於て能く此の經を説か
ん是れ則ち難しと爲す、諸の無智の人の惡口罵詈等し及び刀杖を加うる
者有らん我等皆當に忍ぶべし惡世の中の比丘は邪智にして心諂曲に未だ得
ざるを爲れ得たりと謂い我慢の心充滿せん・或は阿練若に納衣にして空閑
に在つて自ら眞の道を行ずと謂いて人間を輕賤する者有らん利養に貪著
するが故に白衣の与に法を説いて世に恭敬せらるること六通の羅漢の如く
ならん常に大衆の中に在つて我等を毀らんと欲する故に國王・大臣・
婆羅門・居士及び余の比丘衆に向つて誹謗して我が惡を説いて是れ邪見の
人外道の論議を説くと謂わん・濁劫惡世の中には多く諸の恐怖有らん惡鬼

其身に入つて我を罵詈めりし毀辱きにくせん・濁世じよくせの惡比丘あくびくは仏ぼつの方ほう便べん隨ずい宜ぎ所說しよせつの法
を知らず惡口あつくして 蹙しよし數數しばしば擯出ひんすいせられん、大神力じんりきを現あらわし 広長舌こうちやうぜつを出だし
て上梵世じやうぼんに至いたらしむ諸仏しよぶつも亦復また是またの如ごとく広長舌こうちやうぜつを出だし給たまふ。

依報不依人

文殊・普賢・觀音・地藏・等竜樹菩薩・
善無畏・弘法・慈覺・法藏・嘉祥・善導等

なり

一日一夜
涅槃經

八十入滅

依義不依語
依智不依識
依了義經
不依不了義經

法華經
觀經等

大日經等
深密經等
華嚴經等
般若經等

八五 一代五時鷄圖 いちだい 623P

壽命三百年 じゅみょう

羅什訳 らかしやく

百論 ほうろん 法雲自在王如來 ほううんじざい にょらい 觀自在王如來 くわんじざい にょらい

千卷 ぶつめつ 仏滅後六七八

大論に云く十九出家三十成道 だいろん いわ しゅっけ じゅうじゅう

三十万卷 じゅうまん 竜樹菩薩 りゅうじゅぼさつ

第十一馬鳴菩薩の御弟子付法蔵の第十

三

大悲方便論 だいひほうべん 十万卷 じゅうまん 猛

大心論 だいにしん 十万卷 じゅうまん

大無畏論 だいにぶい 十万卷 じゅうまん

実大乘 じつだいじょう

権大乗
こんだいじょう

華嚴經
けこんきょう

二七日
三七日

華嚴宗
けこんしゅう

立五教摂尽一代
しゅうごじんいちだい

杜順和尚
とじゆんわじょう

智儼法師
ちこんぽうし

法蔵大師
ほうぞうだいし

香象大師
かうじやうだいし

賢首法師
けんしゅぽうし

華嚴和尚
けこんわじょう

結經梵網經
けつきようばんもつきよう

大乘戒之を出
だいじようかいこれいだし

定

小乘
しやうじやう

十二年

長阿含
あこん

俱舍經
くしやしきう

阿含經
あこんきょう

增一阿含
あこん

成実宗
じやうじつ

雜阿含
あこん

律宗
りつしゅう

結經遺教經
けつきようゆいききょう

小乘戒之を出
しやうじやうこれいだし

大乘
だいじやう

或云法華已前
あるほっけいぜん

菩薩筆 ぼさつ

造

方等部 ほうとうぶ

權大乘 ごんだいじょう

三蔵 さんぞう

大師 だいし

楞伽經 りょうがきょう

禪宗 ぜんしゅう

達磨大師 だるまだいし

・或説時不定 あるせつじふじょう
・或十六年 ある

・或八箇年 あるはちかねん

・或云法華已後 あるほつけいご
深密經 じんみつ

五卷

瑜伽論 ゆいが

世親菩薩 せじんぼさつ

弥勒菩薩説 みろくぼさつ
一百卷 むちやく
無著

唯識論 ゆいしきろん

有相宗 ゆうそう
法相宗 ほつそうしゅう

三時を立て一代を撰 いちだい
盡 しゅうじん
三十頌

玄奘 げんじょう

六經十一論

慈恩 じおん

瓔珞經 ようらく

結經 けつぎょう

・ある
或は大円覚經

・ある
或は首楞嚴經

・ある
或は諸法無行經

・ある
或は金剛般若經

・ある
或は云く一切經

・ある
或は云く教外別伝

一卷七枚

菩提心論

・ある
或云竜樹造

・ある
或云不空造

大日經 「七卷」

善無畏三蔵

金剛頂經 「三卷」

真言宗 眞言密二道を

分ち五蔵を立て・ある
或は十住心を立つ

蘇悉地經 「三卷」

金剛智三蔵

・ある
不空三蔵一行阿闍梨

・ある
或は云く方等部

・或は云く華嚴部ある いわ けこん

・或は云く般若部ある いわ はんにやぶ

・或は云く法華部ある いわ ほっけ

・或は云く涅槃部ある いわ ねはん

・或は一代諸經の外ある いちだいしよきよう

雙觀經そつかんきよう

觀經かんきよう

淨土宗じようどしゆ

曇鸞法師どんらんほっし

道綽禪師どうしやくぜん

善導和尚ぜんだうわじよう

惠感禪師ぜん

小康法師ほっし

法照

阿彌陀經あみだ

難行なんぎよう

易行いぎよう

聖道しやうだう

三十年

・あるいは
或は云く二十二年

・あるいは
或は云く十四年

だいぼんはんにや
大品般若

こうさんはんにや
光讚般若

こんこうはんにや
金剛般若

はんにや
天王問般若

まかはんにや
摩訶般若

じょうど
浄土

ぞうぎよう
雑行

しやうぎよう
正行

しよぎよう
諸行

ねんぶつ
念仏

百論

中論

りゆうじゆばさつ
竜樹菩薩造

同

般若經 はんじゃきょう

仁王般若 にんのうはんじゃ

「結經」 けつきょう

十二門論 同

大論 だいろん

同

・或は四論宗という ある

淨影

三論宗 さんろんしゅう

興皇 こうこう

・或は法性宗と云う ある ほっしゅう

嘉祥寺の吉蔵大師 かじょう きちぞうだいし

・或は無相宗と云う ある むそう

道朗

三時を立て一代を摂尽す、
或は二蔵を立て いちだい しゅうじん ある

・或は三轉法輪を立つ ある てんぽうりん

華嚴三七日阿含十二年方等・般若三十年已上 けこん あこん ほうとう はんじゃ

四十二年なり

法界性論に四十二年 ほっかい

無量義經に云く方便力を以ての故に四十余年には未だ眞實を顕さず、又 むりょうぎきょう いわ ほうべん ゆえ よんじゅうよねん いま しんじつ あらわ

云く無量無辺不可思議・阿僧祇劫を過るも終に無上菩提を成ずるを得ず、
所以は何ん菩提の大直道を知らず險逕を行くに留難多きが故に、又云く
大直道を行けば留難無きが故に。

諸宗依憑宗

世尊法久後・要當說眞実

仏立宗

廢也・或は前三教と云い・或は前四教

前四味と云うなり、・或は先の三教の円教

天台宗

に撰尽するを云う。

法華宗

正直捨方便・但說無上道

法華經

秘密宗

四時・七教・五時・八教

顯露彰灼宗

雖示種種道・其実為仏乘

唯一仏乘

普賢經

結經

將非魔作仏・惱乱我心耶

叡山戒壇

久默此要。不務速說

華嚴經・大日經・深密經・楞伽經・小品經・般若經等

無量義經

涅槃經等

「我が所説の經典は無量千万億にして已に説き今説き當に説かん而も
其の中に於て此の法華經最も為難信難解なり」、記の六に云く「縦い經有
つて諸經の王と云うとも已今當説最為第一と云わず、兼但对帶其の義知
んぬべし」、玄の三に云く「舌口中に爛る」、籤の三に云く「已今當の妙
此に於て固く迷えば舌爛れて止まざるは猶華報と為す謗法の罪苦長劫に
流る」、又云く「諫曉止まず」

法四依第六卷 人四依

結經

像法決疑經 「一日一夜」

依法不依人

依義不依語

涅槃經

仏智

八十御入滅 にゆうめつ

經經 きやうきやう

七十九・八十・八十一
八十二・百五・百二十

依了義經不依不了義經 りようぎきようふえふりようぎきよう

二天

魔修羅天 まじゆらてん

毘紐天 びぢゆうてん

主

天尊 せそん
世尊

法王 ほうおう
國王

人王

天王

天竺 てんじく

帝釈天 たいしゃくてん

第六天 だいろくてん

大梵天 ぼんてん

師子頰王 ししきやうおう
淨飯王 じやうはんわう

震旦 しんたん
三皇 さんこう

八虐に違す い

菩薩等識 ぼさつ
依智不依識 えちふえしき
法華經 ほけきやう

爾前の にぜん

釈尊 しゃくそん

師

師匠 ししょう

七逆に違いす

涅槃疏云 ねはんじゆん 章安釈 しょうあん

一体の仏主師親しししんと作る

五逆に違いす

親

八親 はっしん
六親 ろくしん

三仙

外道師 げどう

六師 げてん

外典師 げてん

四聖 ししやう

五帝

三王等 さんおうとう

日本国 にほんこく

神武天皇 てんのう

迦毘羅 かびら

樓僧伽

勒沙婆

尹喜 むせい

務成

老

呂望

周公旦 しゅうこうたん

孔子 こうし

顔回 がんかい

理性の子 りしやう

結縁の子 けちえん

世尊 せそん

三界特尊 さんがい

二十五有

今此三界・皆是我有

其中衆生・悉是吾子

而今此処・多諸患難

唯我一人能為救護

文句の五に云く一切
衆生等しく仏性有り
仏性同じきが故に等し
く是れ子なり

亦此の仏に従つて不退の地に住す

玄の六に云く本此の仏に従つて初めて道心を発し

文句の六に云く、旧は西方の無量寿仏を以て長者に合す今は之を用いず、西方

は仏・別に縁異り仏別なる故に隠顕の義成ぜず縁異なる故に子父の義成ぜず又

此の経の首末全く此の旨無し眼を閉し穿鑿せよ、舎那の著脱近く尚知らず

弥陀は遠きに在り何ぞ嘗て変換せん」云云、記の六に云く、「西方等とは弥陀

・釈迦しゃかの二仏ふつ既に殊ことなり豈あに弥陀みだをして珍玩ちんがんの服を隠かくさしめ乃すなわち釈迦しゃかをして
弊垢へいくの衣ちやくを著おせ使つかめん状じやう、釈迦しゃ珍服ちんぷくの隠かくす可べき無なくく弥陀みだ唯ただ勝妙しょうみやうの形かたちなるに
当あたる、況いはんや宿昔むかしの縁別けんべつに化導けどう同じからざるをや、結縁けちえんは生ことの如ごとく成就じやうじゆは養かの
如ごとく生養せいやうの縁異ふしれば父子ふし成なぜず、珍弊ちんべい途みちを分わち著かく脱殊だつじゆに隔へだたる消経しょうきやう・事闕かけ
て調ちやうじゆく 熟そむの義乖ぎぐわいく当部ぶんぶの文永ぶんえいく斯この旨無むねし、舍那しゃな著かく脱等だつどうとは舍那しゃなの動どうぜずし
て

而しかも往まよくに迷みだう、弥陀みだの著ちやく 弊へいは諸經しよきやうに文無むし、若もし平等びやうどう意趣いしゆを論ろんぜば
彼此かれこれ奚いずくんかつて自みづから矜ほこらん、縦たとい他たを我われが身みとするも還かえつて我われが化けを成なす我他われ
の像さうを立たつれば乃すなわち他の縁えんを助たすく人ひと之これを見みざれば化縁けえん便すなわち乱みだる、故ゆえに知しんぬ
夫けちえんの結縁けつえんとは並おっしんに心身しんしんに約やくすることを我昔わかつ曾かつて二万億等にんなんと云いうが如ごとく、況いはんや
十六王子じゆうおうじ始よ縦いたり今いまに至いたつて機感きかん相成さうじやうし任運にんうんに分解ぶんかいす、是かくのゆえの故ゆえに彼みだの弥陀みだを以もつ
て此この変換へんかんと為なす可べからず」

種熟 とうほううえん
東方有縁

第一阿 仏 だいいちあしゆくぶつ

脱

大通の太子 だいつう たいし

種熟 さいほううえん
西方有縁

十六王子 じゅうろくおうじ

第九阿弥陀仏 あみだぶつ

沙弥 さいいよ

脱

種熟 しゃばせかい
娑婆世界

第十六釈迦牟尼仏 じふろくしやくかむにぶつ

脱

記の九に云く「初・此の仏菩薩に従つて結縁し還た此の仏菩薩に於て成熟

す、玄の六に云く「仏尚自ら分段に入つて仏事を施作す有縁の者何ぞ来らざ

るを得ん譬えば百川の海に潮す応須が如し縁に牽れて応生すること亦復

是くの如し、又云く「本此の仏に従つて初めて道心を発し亦此の仏に従つて

主 師 親 主 師 親 主 師 親

ふたい
不退地に住す

ほんぞん
本尊
おうじんしゃかによらい
劣応身釈迦如来

るしゃなほうしん
盧舍那報身

おうじん
勝應身に当る

しゃかによらい
釈迦如来

おうじん
勝應身に当る

しゃかによらい
釈迦如来

たいぞう
胎蔵界

だいにちによらい
大日如来

こんごう
金剛界

ほうしん
報身

てんだい
天台は応身

あみだぶつ
阿弥陀仏

ぐしゃしゅう

俱舎宗

じょうじつ
戒実宗

りしゅう
律宗

けこんしゅう
華嚴宗の本尊

ほうそつしゅう
法相宗の本尊

さんろんしゅう
三論宗の本尊

しんこんしゅう
真言宗の本尊

しゅうれつ
劣應勝劣

じょうどしゅう
浄土宗の本尊

善導等ぜんどうは報身ほうしん

五百問論いわに云く「若もし父の寿の遠とほきを知らず復父統またふとうの邦くにに迷まよわば徒いたに才能ざいのうと

謂おもうとも全おく人の子に非あらず、三皇さんこう已い前は父を知らず人皆禽獸みなきんじゅうに同おなじ」

華嚴けこんのるさな真言しんごんの大日等だいにちは皆此みなの仏ぶつの眷属けんぞくたり

くおんじつじょうじしゅう

久遠実成 実修 実証の仏

てんだいしゅう ごほんぞん

天台宗の御本尊

しきかによらい

釈迦如来

おうじん

有始有終うしゅうしゅう

始成しじょうの三身さんじん

ほうしん

有始無終うしむしゅう

真言しんごんの大日等だいにち

ほうしん

無始無終むしむしゅう

おうじん

無始無終むしむしゅう

久成くじょうの三身さんじん

ほうしん

無始無終むしむしゅう

法身 ほつしん

華嚴宗・真言宗の無始無終の三身を立つるは天台の名目を盗み取つて自の依經に入れしなり。

八六 釈迦一代五時繼圖 633P

大論に云く十九出家・三十成道・八十入滅文、此の論は竜樹菩薩の造・

壽命三百年・三十万偈の論師なり、付法蔵の第十三仏滅後七百年の人なり。

説処は中天竺摩竭提国の寂滅道場菩提樹下・七処八会
偈立実報土・別・円の二教を説く

三七日の説なり「三七日は法華の説二七日は華嚴の説」

華嚴經

兼と名く

権大乘なり乳味と名く頓大の機のために説く

頓教と名く「亦秘密教有り亦不定教有り」擬宜と名く

結経は梵網経なり

馬鳴菩薩

起信論を造る

天竺

天親菩薩

十地論を造る

竜樹菩薩

十住毘婆沙論を造る

華嚴宗祖師

杜順和尚

法蔵大師

漢土

智蔵法師

澄観法師

此の華嚴教けこんといふは所謂いわゆる仏摩訶陀国寂滅まかだこくじゃくめつ道場菩提樹下どうじょうぼだいじゆげにして始めて正覺しょうかくを
成じたまいし時・七処八会おひに於て法惠ほうえ・功德林くどく・金剛幢こんじやう・金剛蔵こんじうの四菩薩ぼさつに
加して頓大とんだいの根性こんじやうの為に因陀羅網いんだら・無障礙土げんの相を現じ別円べつえんの両教・住
行向地ぎやうこうじの功德くどく・法界唯心ほっかいゆいしんの理を説き給う所謂華嚴経なり、此の経には四十一

位を明すいわ謂くい十住・十行・十廻向・十地・仏果なり、此の經には新古の二
訳有り六十華嚴は旧訳なり八十華嚴は新訳なり、梵網經を以て華嚴の結經
と爲す、此の華嚴は化儀は頓部化法は別円なり、成道の最初に此の教を説き
給うたま譬えたとば日出でて先づ高山を照すが如し厚殖善根は斯の頓説を感ず、頓説
本と小の爲にせず彼の初分に於ては永く声聞無し後分には即ち有り復た坐に
在りと雖もい聾えいどの如くつんぼの如し、經文に云く「即ち傍人を遣わして急に追うて
將に還さんとす乃至悶絶して地にたまる」云云。

説処は波羅奈国鹿野苑・同居土の説

但三蔵教を説く・但なすと名く

十二年小乗を説く・酪味らくみと名く

三乗の根性の爲に説く・漸教ぜんきようと名く「亦秘密教有り亦不定教

阿含經
有」

誘引ゆういんと名なく

けつきよう

結経けつきようは遣教経しんぎょうなり

俱舍宗くしゃしゅう・成実宗じょうじつ・律宗りつしゅう

此この阿含あこんは是こ小乗しょうじよう教ぎょうなり、仏ぶつ・成道じやうどう五十七日ごじちにちを経て梵王ぼんのうの請しょうに赴おもむき波羅奈

国こくの鹿野苑ろくやえんに於おいて陳如等ちんによの五人ごにんの爲ために三藏教さんざうの四諦しだいの法論ほつろんを説とき給たまう、謂おもく

四阿含等あこんのしょうじようぎよう小乗經しょうじようぎようを説とくなり、増一阿含あこんには人天にんてんの因果いんがを明あかし、長阿含あこんに

は邪見じゃけんを破はし、中阿含あこんには真寂じんぎの深義あかを明あこんし、雜阿含あこんには禪定ぜんじようを明あこんす、遣教しんぎょう

經を以もつて結經けつきようと爲なす、化儀けぎは漸ぜんの部ぶの初めけほう化法さんざうは三藏教さんざうなり、三乗さんじようの根性こんじよう

の爲ために此この阿含教あこんを説とく經きんの次第しだいに依よれば日にちの次に幽谷ゆうこくを照てらすが如ごとし、浅行せんぎょう

を偏ひとえに明あきせば当分とうぶんに漸ぜんを解さんざうもとる三藏本大さんざうもとの爲ためならず座ざに在ありと雖いへども多おほ婆和ばわ

す、經きんに云いく「將まさに其その子こを誘引ゆういんせんと欲ほつべんして方便ほうべんを説とく密ひそかに二人ふにんの形色しきうしき

憔悴しょうすいせる威徳いとく無なき者ものを遣つかわす」云云。

- 1341 -

説処せつしよは欲色二界ちゆうげんの中間ちゆうげん大宝坊同居土の説なり

蔵通・別円の四教しきようを説く

十六年の説なりみいでら三井寺の義説時不定なりせんもん山門の義ごんたいじようしようそみ権大乘生蘇味

対と名なすく

四教しきようの機きの為ために説く漸教ぜんきようと名なすく亦秘密教またひみつ有り亦不定教またふじよう有り

弾訶だんかと名なすく

結經けつきようは瓔珞經ようらくなり

方等部ほうとうぶ

深密經じんみつ法相宗ほうそうしゆう玄奘げんじよう三蔵慈恩大師さんざうじおんだいし

楞伽經りようがきよう禅宗ぜんしゆう達磨だるま曇鸞法師どんらんほつし

觀經かんきよう道綽どうしゆく綽ぜん法師

雙觀經そうかんきよう淨土宗じゆつだいしゆう祖師そし善導ぜんどう和尚わじよう

阿弥陀經あみた法然上人ほうねんしやうにん

大日經 だいにちきよう

善無畏三藏 ぜんむいさんぞう

金剛頂經 こんごうちょうきよう

真言宗 しんごんしゅう

祖師 そし 金剛智三藏 こんごうちさんぞう

蘇悉地經 そしつちきよう

不空三藏 ふくうさんぞう

此の方等教は謂く鹿苑の後般若の前四教の機に對し處處に四教の法を説いて

唯だ二乗を彈呵し菩薩を稱揚す、所謂密嚴經・厚嚴經・思益經・方等經・

楞伽經・淨名經等なり、瓔珞經を以て結經と為す、化儀は漸部の中・化法

は四教なり、説教の次第に依れば日の次ぎに平地を照すが如し影万水に臨み

器の方円を逐い波の動靜に随つて一仏土を示すに淨穢不同ならしめ一身を

示現するに巨細各異なり、一音の説法・類に随つて各解なり、恐畏し歡喜し

厭離し斷疑す神力不共の故に見に淨穢有り聞に褒貶有り嗅に胆藷と不胆藷と

有り華に著身と不著身と有り淨名方等の如し、經文に云く「是を過ぎて

已後、心相体信じて入出難り無し」文。

せつしよ　じゅうほう　びやくろち
説処は鷺峯山・白鷺池等の四処十六会・同居土の説なり

こんだいじょう
権大乘なり

なす
帯と名く

じゆくそみ　なす
熟蘇味と名く

みいでら
十四年の説なり「三井寺の義」三十年の説「山門の義」

ぜん　なす　またひみつ　またふじょう
漸と名く「亦秘密教有り亦不定教有り」

なす
淘汰と名く

けつきょう　にんのつきょう
結経は仁王経なり　已上四十二年なり

百論

さんろんしゅう　そし　かじょうだいし
中論　三論宗　祖師　吉祥大師

きちぞうだいし
十二門論　吉蔵大師

はんによきよう　とう　げんじょうさんぞう　しよやくこ　しんやく
此の大般若経は唐の玄奘三蔵の所訳是れ新訳なり、此の経は一部六百巻・

はんによぶ
般若部

二百六十五品・六十億四十万字・一万

六百三十八紙なり、此の般若経は方等の後・法華の前四処十六会の中に於て

後三教の機のために広く諸部の般若を説く、所謂光讚般若経・文殊問般若経

・金剛般若経・能断金剛般若経・大品般若経・小品般若経・放光般若経・

天王問般若経・大般若経等なり、仁王般若経を以て結経と為す、唯だ化儀

は漸教の後・化法は通別円なり、此の般若経の時も二乗の念処道品は皆

是れ摩訶衍と説いて亦身子・須菩提をして菩薩の為に般若を転教せしむ。

玄義に云く「大人は其の光用を蒙り嬰兒は其の精明を喪う夜遊の者は伏匿

し作務の者は興盛す」故に文に云く、但菩薩の為に其の实事を説いて我が為に

此の真要を説かず、三人俱に学すと雖も二乗は証を取る具に大品等の如し」

経文に云く「爾の時に窮子即ち教勅を受けて衆物を領知し乃至而も一を

取するの意無し」云云。

仏・自ら四十余年の諸經を破し給う事、無量義經說法品に云く「我先に

どうじようばだいじゆげ

道場菩提樹下に端座すること六年にして阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを

ぶつげん

いつさい

しよほう

み

せんぜつ

あのかたらさんみやくさんぼだい

得たり仏眼を以て一切の諸法を觀るに宣說すべからず所以は如何諸の衆生の

しよくふどう

しよくふどう

しゆじゆ

と

しゆじゆ

性欲不同なることを知れり性欲不同なれば種種に法を説き種種に法を説く

ほうべん

よんじゆうねん

いま

しんじつ

あら

い

ことは方便力を以てす四十余年には未だ眞實を顕わさず」云云、又云く「文辞

い

い

でんぎようだいし

むりようぎきよう

い

い

は一なりと雖も義は各異なり」云云、伝教大師の無量義經の注釈に云く

い

い

でんぎようだいし

むりようぎきよう

い

い

「性欲不同なれば種種に法を説くとは是れ能被の教を挙ぐるなり釈迦一代

よんじゆうねん

しよせつ

しきようおよ

はつきよう

い

けこん

ろくおん

あこん

四十余年の所説の教略して四教及び八教あり所謂樹王の華嚴・鹿苑の阿含・

ほうとう

じゆうほう

はん

えんぜついちじよう

だいし

ぼさつ

りやうこうしゆきよう

坊中の方等・鷲峯等の般若・演說一乘・大小の菩薩の歷劫修行・小乘

さんぞう

の三蔵教・

だいじよう

つうきよう

だいじよう

べつきよう

だいじよう

えんきよう

とんきよう

ぜんきよう

ふじよう

ひみつ

大乘の通教・大乘の別教・大乘の円教・頓教・漸教・不定教・秘密

かくのこと

ぜんしみ

ふどう

かくのゆえ

しゆじゆ

せつぼう

な

教是くの如き等の前四味各各不同なり是の故に名けて種種の説法と為す」云

云、又云く「但随他の五種性等門外の方便・差別の権教・帶権の一乗を説いて未だ随自一仏乘等・露地の真実・平等の直道・捨権の一乗を顕わさずかくのゆえ是の故に説いて方便力を以て四十余年未だ真実を顕さずと言う」と云云、無量義經に云く「若し衆生有つて是の經を聞くことを得ば則ち為れ大利なりゆえん所以は如何若し能く修行すれば必ず疾く無上菩提を成ずることを得ればなり、其れ衆生有つて聞くことを得ざる者は当に知るべし是等は為れ大利を失えるなり、無量無辺不可思議阿僧祇劫を過ぐれども終に無上菩提を成ずることを得ず所以は如何菩提の大直道を知らざる故に險逕を行くに留難多きが故に」云云、注釈に云く「疾く無上菩提を成ずることを得ずとは未だ直道一乗の海路を解せず未だ純円六度の固船に乗らず未だ実相方便の順風を得ずかくのゆえ是の故に横道の三乗嶮路の歩行留難多き処・懃苦妄想夢裏の大河なり是の故に説いて疾く無上菩提を成ずることを得ずと言うなり」云云、秀句の

下に云く「法華經を讃むと雖も還つて法華の心を死す」云云、無量義經に云く
次に方等十二部經・摩訶般若・華嚴海空を説いて菩薩の歷劫修行を宣説
せしかども「云云、伝教大師秀句の下巻に云く「謹しみて無量義經を案ずる
に云く方等十二部經とは法相宗所依の經なり摩訶般若とは三論宗の所依の
經なり華嚴海空とは即ち華嚴宗の所依の經なり但歷劫修行を説いて未だ大
直道を知らず」云云、天台大師玄義の五に云く「成道より以來四十余年未だ
眞實を顯わさず法華に始めて眞實を顯わす」相伝に云く仏の年七十二歳にし
て法華經を説くと云云、慧心僧都の一乗要決の下に云く「仏既に説いて言く
法華眞實なり前は未だ眞實を顯わさず何ぞ強ちに仏教に背いて法華の怨嫉と
爲るや」云云、記の八に云く「略して經題を挙げて玄に一部を収む故に
仏欲以此妙法等と云うなり」釈籤一に云く「次に經題を釈す初めには妙法
の兩字は通じて本・迹を詮す蓮華の兩字は通じて本・迹を譬う」

せつしよ　りようぜんこくう
説処は靈山虚空の二処三会実報土の説

じつだいじょう

実大乘

はちかねん

八箇年の説

かいえ

みょうてん

又開会の妙典とも純円一実の説とも一円機きの説とも云う

だいごみ

醍醐味

えんきよう

円教

とんぷじょう

ひみつ

頓不定と秘密無し

けつきよう

ふげん

結経は普賢經

ぶつりゅうしゅう

仏立宗

ほっけしゅう

てんだいしゅう

じよほん

いた

十品

一に靈山会

序品より

法師品に至る

十品

こくう

二に虚空会

ほうとうほん

じんりきほん

いた

十一品

りようぜん

三に靈山会

ぞくろい

かんぼつほん

いた

七品

ほけきよう
法華經

本・迹の両門

序品より十四品は迹門なり

開権顕実と名く

涌出品より十四品は本門なり

開近顕遠と名く

此の法華經は第五時の教なり、無量義經を開經と為し觀普賢經を結經と為す、

化儀は會漸歸頓・會三歸一・化法は純円なり、般若の後・雙林の前・純ら一

の円機に對して眞實を説くなり、日光普ねく照すに土圭の測影縮ならず盈な

らざるが如し低頭挙手・皆仏道を成ず汝は實に我が子・我は實に汝が父・

唯だ如来の滅後を以て之を滅度す、此の第五時の教は是れ日中にして四時に

非ず是醍醐にして四味に非ず是れ定にして不定に非ず是れ顕露にして秘密に

非ず三乗・五乗・七方便・九法界を會して一仏乘に入らしむ所以に迹門に

は二乗初住の位に叶て無生忍を得・成仏の記を受く八歳の竜女は男子に變

成して即身に無垢の成道を唱う、本門には二世の弟子増道損生の益を得・

凡そ三周四説不可思議なり方便品に云く「世尊の法久くして後要ず當に眞實

を説くべし」又云く「未だ曾て説ざる所以は説時未だ至らざるが故なり今
まさしく是れ其の時なり決定して大乘を説かん」云云、又云く「乃至一偈に於て
も皆成仏すること疑無し十方仏土の中・唯一乗の法のみ有つて二も無く
亦三も無し仏の方便の説を除く」又云く「諸仏世に出る唯此の一事のみ実な
り余の二は則ち真に非ず、普賢經の記に云く「故に正説に云く唯此の一事の
み實にして余の二は則ち真に非ずと斯れに多義有り、一には非頓非漸の妙法
を指して一事實と爲し而頓而漸を余二の權と爲す、二には三教の仮名を呼び
て非真と爲し一円の実理を指して一実と爲す、三には四味を以て非真と爲し
醍醐を以て一実と爲す」と、方便品に云く「終に小乗を以て衆生を濟度せ
ず」云云、又云く「若小乗を以て化すること乃至一人に於てもせば我則ち慳貪
に墮せん此の事不可と爲す」又云く「正直に方便を捨てて但だ無上道を説く」
と、玄の九に云く「廢三顯一とは此れ正しく教を廢す其の情を破すと雖も若し

教を廃せざれば樹想還つて生ず教を執して惑を生ず是の故に教を廃す正直に
ほうべん ほうべん ほうべん ほうべん ほうべん ほうべん ほうべん ほうべん ほうべん ほうべん
方便を捨てて但だ無上道を説く十方仏土の中唯だ一乗の法のみ有り二も
なくまた 無く亦三も無し「云云、玄義の一に云く「華落は権を廃するを譬え蓮成は実
を立するを譬う」文に云く「正直に方便を捨てて但だ無上道を説く」云云、
伝教大師の顕戒論に云く「白牛を賜う朝には三車を用いず家業を得る夕べ
には何ぞ除糞を用いん」故に経に云く「正直に方便を捨てて但だ無上道を説
く」と、方便品に云く「我が昔の所願の如く今已に満足す」云云。
げんぎ げんぎ げんぎ げんぎ げんぎ げんぎ げんぎ げんぎ げんぎ げんぎ
玄義の十に云く「即ち方便の一乗を廃して唯だ円実の一乗なり故に云く
我本と誓願するが如き今已に満足す」方便品に云く「当来世の悪人仏一乗を
説き給うを聞いて迷惑して信受せず法を破して惡道に墮せん」と云云、又云く
「法を聞き歡喜し讃めて乃至一言を發す則ち為れ已に一切三世の仏を供養す
るなり」譬喩品に云く「今・此の三界は皆是れ我が有なり其の中の衆生は

悉く是れ我が子なり而も今・此の処は諸の患難多し唯我一人のみ能く救護を
為す」云云、文句の六に云く「旧は西方の無量寿仏を以て、以て長者に合す
今之を用いず西方の仏・別に縁・異なり仏・別なり故に隠顕の義・成ぜず縁
異なるが故に子父の義・成ぜず又此の經の首末全く此の旨無し閉眼穿鑿せ
よ、疏記の六に云く「弥陀・釈迦二仏既に殊なり況や宿昔の縁・別に化導同
じからざるをや結縁は生の如く成熟は養の如し生養の縁異なれば父子成ぜ
ず珍幣途を分ち著脱殊に隔たる消経事闕け調熟義乖く当部の文・永く
斯の旨無し」云云、又云く「往昔は大小の両縁俱に釈迦に在りとし今は
尊特垢衣俱に弥陀に在りとせば更に笑う可きことを成ず」云云、涅槃經の疏
の一に云く「無救無護無所宗仰とは此れは無主の苦を釈す貧窮孤露・一旦
遠離・無上世尊とは此れは無親の苦を釈す設有疑惑・当復問誰とは此は無師
の苦を釈す」云云、涅槃經の四に云く「我又閻浮提の中に示現し疫病劫起多

く衆生有^{しゅじやう}つて病に悩む所と為^せんに去^さつて医薬を施^{ほどこ}し然^{しか}して後に為^{ため}に微妙^{みみょう}の法
を説^{それ}いて其をして無^{むじやう}上菩提に安住せしむ^{いだ}云云、涅槃經の一に云く「我等今
より救護有^{くごあ}ること無^{なく}く宗仰^{しゆじやう}する所無^{なく}く貧窮孤露なり、一旦無^{いつたんむじやう}上世尊に遠離^{おんり}し
たてまつらば設^{たといぎわく}い疑惑有^まりといえども当に復た誰にか問うべし^{また}」同二に云く
「主無^{なく}く親無^{ほろほ}ければ家を亡^{ほろほ}し国を亡^{ほろほ}す」又云く「一体の仏を主師親と作す^な」
譬喩品に云く「一切衆生・皆是吾が子なり」云云、壽量品に云く「我常に
此の娑婆世界に在^{しやばせかい}つて説法教化す亦余処の百千万億那由佉阿僧祇の国に於^{おい}て
も衆生を導利す^{しゆじやう}」云云、大論に云く「十万恒河沙等の三千の国土を名けて
一仏国土と為^こす是の中に更に余仏無し實に一りの釈迦仏のみなり」云云、
壽量品に云く「我も亦為^{またこ}れ世の父諸の苦患を救^{もろもろくかん}う者なり」云云、宝塔品に云く
「能^よく来世に於^{らいせ}て此の經を読み持たんは是^これ眞の仏子なり」云云、譬喩品に云く
「若^もし人あつて信ぜずして此の經を毀謗せば則^{すなわ}ち一切世間の仏種を断^{ぶつしゆ}ず其の

人命終みょうじゅう して阿鼻獄あびごくに入り一劫いつこうを具足ぐそくして劫尽つきて更に生かくじ是かくの如ことく展轉てんでん
して無數劫むしゅこうに至らんいた又云いわく「但だいじょうきよてん大乘經典だいじょうきよてんを受持じゆじすることを樂ねがつて乃至余經ないしよきやう
の一偈いちげをも受けざれ」妙樂大師みょうらくだいしの五百問論いに云いわく「況や彼の華嚴けこんは但福を以
て比ゆえす此の經の法を以て之を比するに同じからず、故に云く乃至不受余經一偈
と人之これを思いたすわず徒らに引く何んの益あらん」玄義げんぎの五に云く「究竟くきやうの大乗だいじやうは
華嚴・大集・小品・法華・涅槃みょうらくに過ぐる無し」妙樂みょうらくの釈籤しゃくせんの十に云く「請こ
有眼いしつの者委悉これに之を尋ねて法華ほつげは漸ぜん円・華嚴けこんの頓極とんごくに及およばずと云うこと勿なけれれ
當まさに知るべし法華ほつげは部に約するときは則すなわち尚華嚴なほけこん・般若はんを破はし教に約すると
きは則すなわち尚別教なほべつきやうの後心を破はす」譬喩品ひゆほんに云く「初め仏の所説しよせつを聞いて心中しんちゆう
大いに驚疑きやうぎす將に魔・仏と作なつて我が心を悩乱のうらんするに非あらずや」宝塔品ほうとうほんに云く
「爾その時に宝塔ほうとうの中より大音声おんじやうを出いして歎ほめて言いわく善哉善哉釈迦牟尼世尊よきかなよきかなしやかむにせそん
能よく平等大慧教菩薩法びやうどうだいえきやうぼさつぼうぶつしよごねん所護念みやうほうれんげきやうの妙法蓮華經みやうほうれんげきやうを以て大衆たいしゆうの為ために説たまき給たまうこ

とかくのこと是かくのことくの如しかむにせし是かくのことくの如しかむにせし釈迦牟尼世尊しよせんしよせつ所説ごとの如みなこきは皆しんじつ是れ真しんじつ實じつなり」又云いわく
「釈迦牟尼しよかむにぶつ仏ぶつ・快こく是この法華經ほけきようを説とき給たまえ我こ是の經こを聴きこかんが為ゆえの故ゆえに
而しかも此こに來らい至しせり」と云い云わ、又云い云わく、「大音聲おんじようを以おまねて普ししゆうく四衆ししゆうに告こぐ誰よか能よく
此しやばこくどの娑婆國土おひに於おひて広みようほけきようく妙法華經みようほけきようを説みようほけきようかん今まさ正こしく是これ時になり如來にやらい久くしから
ずして当まさに涅槃ねはんに入たまり給たまうべし仏ぶつ・此みようほけきようの妙法華經みようほけきようを以ふぞくて付屬ふぞくして在あること有あり
らしめんと欲ほす」法師品ほうしほんに云いく、「藥王やくおう若もし人有なんらつて何等しじようの衆生しじようか未來世みらいせに
於おひて当まさに作仏さぶつするこをう得うべしと問まわば心こに示しすべし、是この諸人等しよにん・未來世みらいせ
に於おひて必さぶつず作仏さぶつするこをう得うべしと何を以ゆえての故げんなんしに善男子ぜんなんし・善女人ぜんによにん・法華經ほけきようの
乃至ないし一句いっくに於おひて受持じゆじし読誦どくじゆせん」云云ほうとうほん、宝塔品ほうとうほんに云いく、「諸余しよよの經典きようてん數恒沙じゆじやの
如ことくならん、此等これらを説いくと雖いえども未いまだ難がたしと為なるに足もらず若もし仏めつこあくせの滅後惡世めつこあくせの
中おひに於よて能よく此この經こを説すなわく是則がたち難なしと為なすと」提婆品だいばに云いく、「仏諸もろもろの比丘びく
に告たまげ給みらいせわく未來世もの中に若ぜんなんしし善男子ぜんなんし善女人ぜんによにん有あつて妙法華經みようほけきようの提婆達多品だいばだつたを

聞いて淨心に信敬して疑惑を生ぜざらん者は地獄・餓鬼・畜生に墮ちずし
て十方の仏前に生ぜん、所生の処には常に此の經を聞き若し人天の中に生
れば勝妙の樂を受け若し仏前に在らば蓮華より化生せん」又云く「當時の
衆会皆竜女の忽然の間に變じて男子と成つて菩薩の行を具して即ち南方無垢
世界に往き宝蓮華に坐して等正覺を成じ三十二相・八十種好あつて普く
十方一切衆生の為に妙法を演説するを見る」又云く「爾の時に娑婆世界の
菩薩・声聞・天竜・八部・人と非人と皆遙かに彼の竜女の成仏して普く
時の会の人天の為に法を説くを見て心大いに歡喜し悉く遙かに敬礼す」分別
功德品に云く、阿逸多是の善男子・善女人は我が為に復た塔寺を起て及び僧坊
を作り四事を以て衆僧に供養することを須いず、所以は如何是の善男子・
善女人是の經典を受持し読誦する者は已に塔を起て僧坊を造立し衆僧を
供養すと為す、則ち為れ仏舍利を以て七宝の塔を起て高広漸小にして梵天に

いた
至る」と云云、神力品に云く、「仏滅度の後に能く是の經を持たんを以ての
ゆえ しょうぶつみなかんき
故に諸仏皆歡喜す」云云、又云く、「我が滅度の後に於て心に斯の經を受持す
べし是の人・仏道に於て決定して疑有ること無けん」云云、藥王品に云く
「よ こ きやうてん じゆじ
能く是の經典を受持すること有らん者も亦復是くの如し一切衆生の中に
おい まただいいち な ふげん いわ ぼんのう だん
於て亦第一と為す」云云、普賢經に云く、「煩惱を断ぜず五欲を離れず三昧に
入らざれども但誦持するが故に」云云、又云く、「其れ大乘方等經典を誦誦
する有らば当に知るべし此の人は仏の功德を具して諸惡永く滅して仏慧より
生ずるなり」云云、一經の始めの如是我聞を釈する文句の一に云く、「如是と
は所聞の法体を拳ぐ」と則ち妙法蓮華經是なり。

一日一夜の説

こんだいじやう

權大乘

ねはんぎやう

涅槃經

せつしよ ばつだいが

説処は跋提河の辺

じょうじゅうしきよう
常住 四教を説く

だいごみ
同醍醐味

けつきよう ぞうほうけつききよう
結経は像法決疑経

ねはんぎよう
此の涅槃経は一日一夜の説三蔵教・通教・別教・円教を明す、亦是醍醐味

なす
とも名く、釈尊拘尸那城・力士生地・阿利羅跋提河・沙羅雙樹の間に於て二

しんちよう
月十五日の晨朝・面門より種種の光を放ち給う十二由旬の内十方の大衆を

ねはんぎよう と たま すなわ
集めて涅槃経を説き給う即ち三十六の涅槃経旧訳の四十の涅槃経なり、

ぞうほうけつききよう けつきよう な くんじゅうきよう またふりつけんじよう
像法決疑経を以て結経と為す、亦拾教と名け亦扶律顕常と云う、化儀は

ぜんぶ けほう しきよう ほっけ なおみげ やから
漸部・化法は四教なり法華の時猶未解の輩有り更に後番五味を以て余残の機

ちようじゆく たま ねはん しきよう ぶっしよう しゅうしゅうとうぞう こと
を調熟し給う、涅槃の時・四教の機同く・仏性を見る秋收冬蔵の如し、唯

き とも じょうじゅう ゆえ ほっけ だいごみ な およ いちおう
四機有り俱に常住を知る故に法華と合して同醍醐味と為すなり、凡そ一往

か こと いえど きえん したが じせつ ちようたんぶどう ある けこん
此くの如く配立すと雖も万差の機縁に随つて時節の長短不同なり、或は華嚴

の時長は涅槃の時に至る阿含・方等・般若も亦爾なり云云、涅槃經の六に「法に依て人に依らざれ義に依つて語に依らざれ智に依つて識に依らざれ了義經に依つて不了義經に依らざれ」と云云、又「亦如来隨宜の方便所説の法の中に執着を生ぜざる是を了義と名く不了義とは經の中に一切焼然なり一切無常なり一切皆苦なり一切皆空なり一切無我なりと説くが如し是を不了義と名く何を以ての故に是くの如きの義を了すること能わざるを以ての故に諸の衆生をして阿鼻獄に墮せしむ」云云、十七の卷に云く「如来は虚妄の言無しと雖も若し衆生の虚妄の説に因つて。」「文、又云く「虚妄の法則ち是れ罪と為す是の罪を以ての故に地獄に墮す」云云。

一、小乗の戒を破する事

涅槃經の三の卷に云く「仏迦葉に告げ給わく能く正法を護持する因縁を以ての故に是の金剛身を成就することを得・迦葉我往昔に於て護法の因縁を以

て今是の金剛身を成就することを得て常住にして壞せず、善男子正法を護持する者は五戒を受けず威儀を修せず心に刀劍・弓箭・鉞槊を持して持戒清淨の比丘を守護すべし」云云、同十七に云く、「仏性を見るが故に大涅槃を得・是を菩薩の清淨の持戒にして世間の戒には非ずと名く」と云云、又云く、「是の經を受持して戒を毀る者は則ち是れ衆生の大悪知識なり我が弟子に非ず是れ魔の眷属なり」云云、法師品に云く、「若し是の深經聲聞の法を決了する是れ諸經の王なることを聞いて」云云、安樂行品に云く、「又聲聞を求むる比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷に親近せざれ亦問訊せざれ若しは坊中に於ても若しは經行の処若しは講堂の中に在ても共に住止せざれ」云云、傳教大師の顯戒論の中に云く、貧人の食は是れ輪王の毒なるが如し、故に二乗の者の持戒精進は即ち菩薩の破戒懶惰なり故に心に親近すべからず、来らばために法を説け親使・利養・恭敬をわざれ」と云云、秀句の下に云く、「小乗

の持戒は則ち菩薩の煩惱なり」云云、宝塔品に云く、此の經は持ち難し若し暫く
も持つ者は我則ち歡喜す諸仏も亦然なり、是の如きの人は諸仏の歎め給う所
なり是則ち勇猛なり是則ち精進なり是を戒を持ち頭陀を行ずる者と名く、
則ち疾く無上の仏道を得と為す能く来世に於て此の經を読み持たんは是眞の
仏子なり」云云、竜樹菩薩の大論に云く、「自法愛染の故に他人の法を毀皆す
持戒の行人と雖も地獄の苦を脱れず」云云、涅槃經の十二に云く「仏迦葉に
告げ給わく若し菩薩有つて破戒の因縁を以て則ち能く人をして大乘經典を
受持し愛樂せしむることを知つて又能く其れをして經卷を讀誦し通利し書寫
し広く人の為に説いて阿耨多羅三藐三菩提を退轉せざらしめんと、是くの如
き為の故に故さらに戒を破ることを得」云云、安然の広釈に云く「能く法華經
を説く是を持戒と名く律儀を持すと雖も善法を損せざれば猶木石の衣鉢を
帶持せるが如し」云云、弘決の四に大論の十九を引いて云く「諸の比丘・仏

に問いたてまつる阿蘭若の比丘死しぬ今何の処にか生ずる・仏の言く阿鼻獄に生ず諸の比丘大いに驚く、坐禅持戒するに便ち爾るを至すや仏答えて言く多聞・持戒・禅未だ漏尽の法を得ず」云云、伝教大師云く「今より已後声聞の利益を受けず菩薩は二百五十戒を捨て畢んぬ」云云、涅槃經の四に云く「我涅槃の後・無量百歳に四道の聖人も悉く復涅槃せん正法滅して後・像法の中に於て当に比丘有べし貌持律に像て少しく経を誦誦し飲食を貪嗜し其の身を長養し袈裟を服すと雖も猶獵師の如く細めに視て徐かに行くこと猫の鼠を伺うが如し、常に是の言を唱う我羅漢を得たりと、諸の病苦多く糞穢に眠臥す・外には賢善を現し内には貪嫉を懷く啞法を受けたる婆羅門等の如し、実に沙門に非ずして沙門の像を現し邪見熾盛にして正法を誹謗し及び甚深秘密の教を壊り各自意に随つて反つて経律を説く」云云、同九に云く「善男子・一闍提有り羅漢の像を作り空処に住して方等大乗經典を誹謗す諸の凡夫

人・見已つて皆眞の阿羅漢なり是れ大菩薩摩訶薩なりと謂えり」

一、善導和尚自害の事

類聚伝に云く「導・此の身諸苦に逼迫せられて情偽反易し暫くも休息する

こと無し、乃ち所居の寺の前の柳樹に登つて西に向て願つて云く仏の威神

驟以て我を摂し観音・勢至も亦来て我を助け給え、此の心をして正念を失

わざらしめ驚怖を起さず弥陀の法の中に於て以て退墮を生ぜざらんと願し

畢つて其の樹の上に極り身を投じて自ら絶えぬ」

一、仏自害・断食・身根不具を禁ずる事

涅槃の七に云く「若し説いて言えること有らん常に一の脚を翹げて寂と

して言わず淵に投じて火に赴き自ら高巖より墜ち嶮難を避けず毒を服し食を

断じ灰土の上に臥し自ら手足を縛つて衆生を殺害せん、方道・咒術・

旃陀羅の子・無根・二根及び不定根・身根不具ならん、是くの如き等の事・

によらいことしめつけ

如来悉く出家して道を為すことを聴し給うといわば是を魔説と名く」云云、

ねはんぎよう

涅槃經の六に云く「大乘を学する者は肉眼有りと雖も名けて仏眼と為す耳鼻

またかくのごと

五根も例して亦是くの如し」云云、像法決疑經に云く、諸の悪比丘我が意を解せ

おのしよけん

ず己が所見を執して十二部經を宣説し文に随つて義を取り決定の説と作さ

まざ

ん、当に知るべし此の人は三世の諸仏の怨なり速かに我が法を滅せん」云云、

ねはんぎよう

涅槃經の十四に云く「如来・世尊は方便有り無常を常と説き・常を無常と

と

説き・樂を説いて苦と為し・苦を説いて樂と為し不淨を淨と説き・淨を不淨

と

と説き・我を無我と説き・無我を我と説き・非衆生に於て説いて衆生と

な

為し・実の衆生に於て非衆生と説き・非物を物と説き・物を非物と説き・

と

非実を實と説き・實を非実と説き・非境を境と説き・境を非境と説き・非生

と

を生と説き・生を非生と説き・乃至無明を明と説き・明を無明と説き・非色

と

を色と説き・色を非色と説き・非道を道と説き・道を非道と説く」云云。

浄土宗の阿弥陀

父は月浄転輪王鼓音声陀羅尼經の説なり
誓願は執持名号往生極樂

正覺は十劫已來なり

父は大通智勝仏なり

法華宗の阿弥陀

誓願は常樂の説是妙法蓮華經なり

正覺は三千塵点劫なり

藥王品に云く、「若し女人有つて是の經典を聞いて説の如く修行せば此に於て命終して即ち安樂世界阿弥陀仏大菩薩衆の圍繞せる住処に往き蓮華の中宝坐の上に生ず」云云、疏記の十に云く、「若し女人有つて等とは此の中只是の經を聞くことを得、説の如く修行すと云う即ち浄土の因更に觀經等を指すことを須いざるなり、問う如何が修行する答う既に如説修行と云う即ち經に依て行を立つ具さに分別功德品の中直ちに此の土を觀するに四土具足する

が如し故に此の仏身即三身なり」云云、「自在所慾生」云云、方便品に云く
「舍利弗・如来但一仏乗を以ての故に衆生の為に法を説く余乗の若しは二
若しは三有ること無し」云云、安樂行品に云く、「無量の國中に於て乃至名字
を聞くことを得可からず」陀羅尼品に云く、「汝等但能く法華の名を受持せし
者を擁護せんすら福量る可からず」釈籤の一に云く、名は即ち是体・文字解脱
なり」又云く、「次に経題を釈す初めには妙法の兩字は通じて本・迹を詮す
蓮華の兩字は通じて本・迹を誓う」疏記の一に云く、「妙法の唱は唯だ正宗
のみに非ず二十八品俱に妙法と名くが故に、故に品品の内に咸く体等を具し
句句の下に通じて妙名を結す」云云、藥王品に云く、「若し復人有つて七宝を
以て三千大千世界に満てて仏及び大菩薩・辟支仏・阿羅漢に供養せん是の人
の得る所の功德此の法華經の乃至一四句偈を受持する其の福最も多きに如か
ず」又云く、「能く是の經典を受持すること有らん者も亦復是くの如し一切

衆生の中に於て亦為れ第一なり」又云く「此の経は能く一切衆生を救う者なり此の経は能く一切衆生をして諸の苦悩を離れしむ此の経は能く大いに一切衆生を饒益して其の願を充滿す」と勸発品に云く「若し復是の經典を受持する者を見て其の過惡を出さば若しは実・若しは不実にもあれ此の人は現世に白癩の病を得ん、若し之を輕笑すること有らん者は当に世世に牙齒疎き欠け醜膚平鼻・手脚繚戾し眼目角・身体臭穢にして惡瘡・血・水腹・短氣・諸の惡重病あるべし、是の故に普賢若し是の經典を受持する者を見ては當に起つて遠く迎えて當に仏を敬うが如くすべし」涅槃經の十三に云く「我爾の時に於て思惟し坐禅し無量歳を経れども亦如来出世の大乗經の名有ることを聞かず」文句の五に云く「所以は經に出でたり人の語を信ずること勿れ」同三に云く「たとい百千種の師あつて一の師・百千種の説を作すとも是れ權ならざるは無し、如来の所説有る尚復是れ權なり況や復人師

をや、寧ろ權に非ざることを得んや前に出す所の如きは悉く皆權なり」

一、念佛者謗法罪を作事 法然の選択に云く「道綽禪師・聖道・淨土の

二門を立て聖道を捨てて正しく淨土に歸するの文、初めに聖道門と云うは

之に就いて二有り、乃至之に准じて之を思うに応に密大及実大を存すべし、

然れば則ち今真言・仏心・天台・華嚴・三論・法相・地論・撰論此等の家の

意正しく此に在り、淨土宗の學者先ず須らく此の旨を知るべし、設い先ず

聖道門を学するの人なりと雖も若し淨土門に於て其の志有らん者は須ら

く聖道を棄てて淨土に皈すべし、善導和尚・正雜二行を立て雜行を捨てて

正行に皈するの文、第一に読誦雜行と云うは上の觀經等の往生淨土の經

を除いて已外・大小乘・顯密の諸經に於て受持し読誦するを悉く読誦

雜行と名く、乃至・第三に礼拝雜行と云うは上の弥陀を礼拝するを除いて

已外・自余一切諸余の仏菩薩等及び諸の世天等に於て礼拝し恭敬するを悉く

礼拝らいはい雜行ぞうぎょうと名け、第四しやうみよつぞうぎょうに称名かみ 雜行みだとは上の弥陀みだの名号みよつごうを称するしやうを除いて
已外いげ自余じよいっさい一切いっさいの仏菩薩等ぼさつ及び諸およの世天等もろもろの名号みよつごうを称するしやうを悉くことごとく称名かみ 雜行みだ
と名け、第五さんたんくようぞうぎょうに讚歎供養さんたん 雜行みだと云うは上の弥陀みだを除いて已外いげ一切諸余いっさいしよの仏
菩薩ぼさつ及び諸もろもろの世天等おひに於て讚歎さんたん 供養くようするを悉くことごとく讚歎供養さんたんくようぞうぎょう 雜行みだと名く、乃至
此の文を見るに 弥須いよいよらく雜さを捨てて專しゆうを修すべし、豈百即あにひやくそくひやくしやう 百生せんしゆうの專修せんしゆう
の正行しやうぎやうを捨てて堅く千中無一の雜修せんちゆうむいつ 雜行ぞうじゆうぞうぎやうを執しゆうせんや、又云く貞元入藏錄じやうげんにゆうぞうろく
の中に始め大般若經はんにや六百卷より終り 法常住經ほつじやうじゆうきやうに至るまで顯密けんみつの大乗經だいじようきやう
惣すべて六百三十七部・二千八百八十三卷なり皆須みなすべからく誦誦大乗の句に撰せつすべ
し夫れ速すみやかに生死しやうじを離れんと欲せば二種の勝法しやうほうの中且しらく聖道門じやうだうもんを闔さしおいて
選んで淨土門じやうどもんに入れ淨土門じやうどもんに入らんと欲せば正雜しやうざう二行の中に且しらく諸の
雜行ぞうぎやうを抛なげうつて選んで正行しやうぎやうに皈きすべし、云云、大論だいろんに云く、自法愛染あいぜんの故に
他人たにんの法きしを毀きす持戒じかいの行人いえどと雖も地獄じごくの苦まぬかを脱はれず、云云、法華經ほけきやうに云く

「とうらいせ当来世あくにんの惡人はいぢじょう仏の一乘とを説き給たまつを聞いて迷惑めいわくして信受しんじゆせず法はを破はして
あくどう惡道に墮だせん」又云いわく、「法はを破はして信ぜざるが故ゆゑに三惡道さんあくどうに墜おちなん」雙觀經
いわに云く、「設たといわれほとけい我わ仏を得るも十方衆生じゆつぽうしゆじやうの至心しんぎやうに信樂しんぎやうして我が国こくに生ぜんと
ないし欲ほして乃至十念じふにんせんに若もし生ぜずんば正覺しやうかくを取らじ唯五逆ただごぎやくと誹謗ひぼう正法しやうぽうを除
ひゆほんく、譬喻品いわに云く、「若もし人あつて信ぜずして此の經きやうを毀謗きぼうするときは則すなわち
いっさいせけん一切世間のぶつしゆ佛種ごにんみやうじゆうを斷ことず其人命終あびごくして阿鼻獄いっこうに入り一劫ぐそくを具足きよくして劫盡つきて更
かくのことに生なぜん是これの如ごとく展轉てんでんして無数劫むしゆこくに至いたらん」文句もんくに云く、「今經こんきやうに小善しやうぜん成仏じやうぶつ
あきらを明あきらかす此この緣因えんいんを取とつて佛種ぶつしゆと為なす、若もし小善しやうぜん成仏じやうぶつを信ぜずんば則すなわち
いっさいせけん一切世間のぶつしゆ佛種ごにんみやうじゆうを斷ことずるなり」云云。

一、真言師謗法罪しんごんしほうぼうつみを作つくる事

ひぞうほうやく秘藏宝鑰いわの上に云くじゆうじやく十住心じゆうしんとは、

一 異生羝羊心ていよう 凡夫惡人ほんぶあくにん

二 愚童持齋心ぐどうじさい 凡夫善人ほんぶぜんにん

三 嬰童無畏心 外道げどう

四 唯蘊無我心むが 声聞しょうもん

五 拔業因種心えんかく 緣覺 六 他緣大乘心だいじょう 法相宗ほうそうしゅう

七 覺心不生心かくしんふしゅう 三論宗さんろんしゅう 八 如實一道心によじついちどうしん 法華宗ほっけしゅう

九 極無自性心ごくむじしやうしん 華嚴宗けこんしゅう 十 秘密莊嚴心ひみつそうこん 真言宗しんこんしゅう

又云く「他緣以後は大乗の心なり 大乘において前の二は菩薩乘・後の二は

仏乘なり此くの如きの乗乗は自乗には仏の名を得れども後に望むれば戲論

と作る「云云、又云く「人を謗じ法を謗ずれば定めて阿鼻獄に墮ちて更に

出ずる期無し、世人斯の義を知らずして舌に任せて輒すく談じて深害を顧み

ず寧ろ日夜に十惡・五逆を作るべしとも一言一語も人法を謗ず可からず」云

云、大日經に云く「仏不思議の真言相道の法を説くに一切の声聞・緣覺を

共にせず亦普く一切衆生の爲にするに非ず」法華經の二に云く「汝等若し

能く此の語を信受せば一切皆當に仏道を成ずることを得べし是の乗微妙にし

しょうじょうだいいち
て清淨 第一なり」云云、又云く「此の法華經は是れ諸の如来第一の説・諸
説の中に於て最も甚深為り」又云く「此の法華經は諸仏如来の秘密の蔵・諸經
の中に於て最も其の上に在り」六波羅蜜經に五蔵五味を説く、私に云く此の
經は天台御入滅已後百余年に天竺より漢土に來れり爾れば見ざる經の醍醐を
盜むと書くは謬失なり弘法の二教論の下に云く「喩して曰く今斯の經文に
依らば仏五味を以て五蔵に配當し惣持を醍醐と稱し四味を四蔵に譬え給えり、
振旦の人師等醍醐を争い盜んで各自宗に名く若し斯の經を鑒みば則ち掩耳の
智割割を待たじ」云云、又云く「毘盧遮那經の疏に順ぜば阿字を釈す」云云、
私に云く毘盧遮那經疏供養法の卷は竜樹入滅已後八百年の造疏なり、而る
に菩提心論に此の事を引き載せたり故に知んぬ菩提心論は竜樹の釈に非るな
り又云く「唯真言法の中にのみ即身成仏するが故に是三摩地の法を説く諸教
の中に於て闕いて書せず」云云。

一、真言は別仏の説に非る事

だいにちきよう

大日経の一の巻の五仏は中央は大日如来と説く同五巻の五仏は中央は

だいにちによらい

びるしやな

毘盧遮那と説く第一の巻の五仏は中央は釈迦牟尼仏と説く、文句の九に云く

ふげん

普賢観は法華を結成す文に云く釈迦牟尼仏を毘盧遮那と名くと、乃ち是れ異名

なり別体なるに非ざるなり、安然の教時義に云く「真言宗の本地毘盧遮那

すなわてんだいしゅう

即ち天台宗の妙法蓮華経・最深密処同仏なり、智証大師の授決集に云く

「真言・禅門・華嚴・三論・唯識・律宗・成俱の二論等は若し法華・涅槃経

等の経に望むれば是れ摂引の門なり」云云、金剛頂経に云く「婆伽梵釈迦

牟尼如来・一切平等に善く通達するが故に一切方を平等に觀察して四方に

坐し給う不動如来・宝生如来・觀自在王如来不空成就如来」云云、大日経

普通真言蔵品の四に云く「時に釈迦牟尼世尊宝处三昧に入つて自心及び眷属

の真言を説き給う」文、大日経の第二に云く「我昔道場に坐して四魔を降伏

しんこん

と

たま

だいにちきよう

い

い

い

い

い

い

し大勤勇の声を以て衆生の怖畏を除く、是の時梵天等心喜共に称説す此れに
由つて諸の世間号して大勤勇と名く我本不生を覚る云云、前唐院金剛頂經
の疏に云く「成仏已来甚大久遠なり未だ所經の劫数を説かざる所以は經に
於て各傍正の義有り故に彼の法華の久遠の成仏も亦是れ此の經の毘盧遮那仏
と異解す可からず」云云、仏法伝来の次第に云く「大師智拳・印を結びて南方
に向かう面門俄かに開けて金色の毘盧遮那と成り即便ち本体に還歸す」云云、
涅槃經の七の卷に仏迦葉に告げ給わく「我般涅槃して七百歳の後是の摩波旬
漸く当に我が正法を壊乱すべし、乃至化して阿羅漢の身及び仏の色身と作ら
ん魔王此の有漏の形を以て無漏の身と作りて我が正法を壊らん」云云。

一、禪宗謗罪を作す事

円覚經に云く「修多羅の教は月を標す指の如し」文方便品に云く「・或は
修多羅を説く衆生に随順して説く大乘に入るに為れ本なり」梵天王

もんぶつつけぎきょう　問仏決疑經に云く「梵天・靈山會上に至つて金色の沙羅華を以て仏に献り仏
群生の為に法を説き給へと請す世尊坐に登り華を拈して衆に示して青蓮の目
を瞬す天人百万悉く皆措くこと罔し独り金色の頭陀破顔微笑す、世尊の言く
吾に正法眼蔵・涅槃妙心・実相微妙の法門有り文字を立てず教外別伝・
摩訶迦葉に付属す」云云、是は中天竺なり仏の御入滅は北天竺拘尸那城なり、
涅槃經の一に云く「爾の時に閻浮提の中の比丘・比丘尼一切皆集る唯尊者
摩訶迦葉・阿難の二衆を除く」同經の三に云く「若し法宝を以て阿難及び諸の
比丘に付属し給う久住することを得ず何を以ての故に一切声聞及大迦葉は
悉く当に無常なるべし彼の老人の他の寄物を受くるが如し、是の故に無上の
仏法を以て諸の菩薩に付属すべし」云云、像法決疑經に云く「諸の悪比丘・或
は禅を修すること有るも經論に依らず、自ら己見を逐つて非を以て是と為し
是れ邪是れ正を分別すること能わず、遍く道俗に向つて是くの如き言を作さ

ん我能^よく是^{これ}を知り我能^よく是^{これ}を見ると、当^{まさ}に知るべし此^この人は速^{すみ}かに我^{われ}が法^{ほふ}を滅^{めつ}せん乃至^{ないし}地獄^{じごく}に入^いること猶^{なほ}箭^やを射^やるが如^{ごと}し」云云、弘決^{くけつ}一^{いち}の下^{した}に云^いく「世人多^さく坐^ざ禅^{ぜん}安心^{あんしん}を以^{もつ}て名^なけて発^{はつ}心^{しん}と為^なす、此^この人^{ひと}都^すて未^すだ所^{しよ}縁^{えん}の境^{きやう}を識^しらず所^{しよ}期^きの果^{くわ}無^むければ全^{ぜん}く上^{じやう}求^{きう}無^むし大^{だい}悲^ひを識^しらざれば全^{ぜん}く下^げ化^け無^むし、是^{かく}の故^{ゆゑ}に発^{はつ}心^{しん}は大^{だい}悲^ひより起^{おこ}るなり」云云、天^{てん}台^{だい}の止^し観^{かん}の五^ごに云^いく「又一^{また}種^{しゆ}の禅^{ぜん}人^{じん}他^たの根^{こん}性^{じやう}に達^{たつ}せずして純^{もつぱ}ら乳^{にゅう}藥^{やく}を教^{きやう}ゆ体^{たい}心^{しん}踏^{たう}心^{しん}・和^わ融^{じやう}覺^{かく}・覓^み若^{じやく}しは泯^{みん}若^{じやく}しは了^{りやう}斯^しれ一^{いつ}轍^{てつ}の意^いなり障^{しやう}難^{なん}万^{まん}途^と紛^{ふん}然^{ぜん}として識^しらず纔^{ひそ}かに異^い相^{しやう}を見^みて即^{すなわ}ち是^これ道^{だう}と判^{はん}ずみずか^{みずか} ほうき^{ほうき} あら^{あら} また^{また} しよう^{しよう} 自ら^{みづか} 法器^{ほうき}に非^{あら}ず復^{また}他^たに匠^{しよう}たるを闕^かく盲^{もう}跛^はの師^し徒^と二^に俱^{とも}に墮^だ落^{らく}す瞽^こ蹶^{けつ}の夜^や遊^{ゆう}はなはだ^{はなはだ} じん^{じん} めん^{めん} 甚^べだ憐^{れん}愍^{みん}す可^べし」云云、

弘決^{くけつ}の一^{いち}に云^いく「世^{せい}人^{じん}・教^{きやう}を蔑^{ないが}に^{しろ}し理^り観^{かん}を尚^{あや}ぶ者^ま れるかな^{あやま} れるかな^{あやま}」
方便^{ほうべん}品^{ひん}に云^いく「諸^{しよ}法^{ほう}実^{じつ}相^{しやう}・所^{しよ}謂^い諸^{しよ}法^{ほう}・如^に是^よ相^{しやう}・如^に是^よ性^{じやう}・如^に是^よ体^{たい}・如^に是^よ力^{りき}乃^{ない}至^し・
・如^に是^よ本^{ほん}末^{まつ}究^{きう}竟^{きやう}等^{とう}」云云、
妙^{みやう}樂^{らく}大^{だい}師^しの金^{こん} 論^{ろん}に云^いく「実^{じつ}相^{しやう}は必^{ひつ}ず諸^{しよ}法^{ほう}・諸^{しよ}法^{ほう}

は必ず十如・十如は必ず十界・十界は必ず身土なり」云云、疏記の十に云く「直ちに此の土を觀するに四土具足す故に此の仏身即ち三身なり」云云。

一、權実証拠の事

玄義の二に云く「則ち百法界・千如是有り束ねて五差と為す一に惡・二に

善・三に二乘・四に菩薩・五に仏なり、判じて二法と為す前の四は是れ權法

・後の一は是れ実法と云云、釈籤の二に云く「九界を權と為し仏界を實と為す」

云云、秀句の下に云く「定性と不定性は位の高下に依り成仏と不成仏は

經の權實に依る」文句の九に云く「漸頓の益は虚なり」云云、記の九に云く

「權を稟けて界を出るを名けて虚出と為す」云云、玄義の九に云く「化他の因果

は仏菩提を致すこと能わず是の故に取て並べ用いず化他の權實も亦他をして

極に至らしむること能わず亦取る応らず」云云、止觀の三に云く「權の權は

實の權に非ず實の權と成ることを得可し權の實は實の實に非ず實の實と成る

ことを得べからず」云云。

一、権実分別の事

一に玄義げんぎの一に云く、「蓮れんの爲ための故ゆえに華・実じつの爲ために権ごんを施ほどこすを譬たとう、権は
すなわこ
即すなわち是れ苗文めいぶんに云く種種しゅじゆの道みちを示いすと雖いえども其れ実じつには仏乗ぶつじやうの爲ためなり」云云、
二に又云く、「華敷けふは権ごんを開ひらくるを譬たとう蓮現れんげんは実じつを顯あらわすを譬たとう権実ごんじつ共に稻いねなり
文いに云く方便ほうべんの門かどを開ひらいて真実しんじつの相さうを示いす」云云、三に又云く、華落けらくは権ごんを廢はいす
るを譬たとう蓮成れんじやうは実じつを立たつるを譬たとう実獨じつひとりり真米しんまいなり文いに云く正直しやうじきに方便ほうべんを捨すて
て但無上むじやうの道みちを説しく」云云、釈籤しゃくせんの一に云く、「開廢かいはい俱い時ときなり開ひらの時とき已すでに廢はいす
るが故ゆゑなり」云云、又云く、「開ひらの時とき即すなわち廢はいす」又云く、「既すでに実じつを識しり已おれば
永とこく権ごんを用もちいず」云云。

一、破三顯一の事

方便品ほうべんに云く、「一仏乘いちぶつじやうに於おて分別ぶんべつして三と説しく」云云、玄義げんぎの九に云く、「廢

三顯実^{けんじつ}」又云^{いわ}く「施権^{ほうけん}」方便品^{ほうべん}に云^{いわ}く「二も無く亦三も無し仏^{ほとけ}の方便説^{ほうべんせつ}を除^{のぞく}く」云云涅槃經^{ねはんぎょう}の二十三^{にじゅうさん}に云^{いわ}く「實^{じつ}には三乘^{さんじょう}無し顛倒心^{てんどうしん}の故^{ゆゑ}に三乘^{さんじょう}有りと云^いう、一実^{いちじつ}の道^{みち}は眞實^{しんじつ}にして虚^{きよ}ならず顛倒心^{てんどうしん}の故^{ゆゑ}に一実^{いちじつ}無しと云^いう」云云、方便品^{ほうべん}に云^いわく「尚^{なほ}二乘^{にじょう}無し何^{いか}に況^{いわんや}や三有^{さん}らんや」云云。

一、入如来慧^{にょらい}の事

法華經^{ほけきょう}に云^いわく「是^この諸^{もろもろ}の衆生^{しゆじょう}世世^よより已来^{このかた}常に我が化^けを受^うく此^この諸^{もろもろ}の衆生^{しゆじょう}始めて我が身^みを見て我が所説^{しよせつ}を聞^きいて即^{すなわ}ち皆信^{みなしん}受^{じゆ}して如来^{にょらい}の慧^えに入る先^{より}より修習^{しゆじゆ}して小乘^{しょうじょう}を学^{まな}ぶ者を除^{のぞ}く」云云、文句^{もんく}の九^くに云^いわく「根利^{こんり}にして徳厚^{とくこう}く世世^{このかた}已来^よ常に大化^{だいけ}を受け始めて我が身^みを見て即^{すなわ}ち華嚴^{けごん}を稟^{りやう}けて如来^{にょらい}慧^えに入る菓熟^{このみ}して零^おち易^{やす}し」云云、釈籤^{しゃくせん}の十^{じゅう}に云^いわく「当^{まさ}に知るべし法華^{ほつけ}は部に約^{すなわ}するときは則^{すなわ}ち華嚴^{けごん}・般若^{はんぎや}を破^はす」云云。

一、余深法中^{よじん}の事

ぞくるい
囑累品に云く「若し衆生有て信受せざらん者には当に如来の余の深法の中に於て示教利喜すべし」文句の七に云く「示教利喜・示は即ち示転・教は即ち勧転・利喜は即ち証転なり」、玄義の六に云く「余とは方便を帶するなり」とは中道を明すなり方便を帶して中道を明すは即ち別教なり」云云、又云く「但為に実を弘むるに而も衆生信ぜず須らく実の為に權を施すべし」釈籤の六に云く「有深復余とは即ち別教の法なり入地を深と名け地前を余と名く」云云、文句の十に云く「汝能く余深の法を以て仏慧を助申せば即ち善巧に仏の恩を報ず」云云、疏記の十に云く「以偏助円は則ち此の意なり此の經の上下・一切皆然なり人を見ずして三乗有りと謂うは謬れり」云云。

一、三種教相の事

玄義に「教相を三と為す一に根性の融不融の相・二に化導の始終不始終の相・三に師弟の遠近不遠近の相」云云、釈籤の一に云く「前の兩意は迹門

に約し後の一意は本門に約す」云云、寂滅道場を以て元始と為す方便以下の五品の意なり。

第一、根性融「法華」不融「爾前」の相

華嚴・阿含・方等・般若・法華・各得道有り種熟脱を論ぜず、釈籤の一

に云く、「又今文の諸義は凡そ一一の科皆先ず四教に約して以て麗妙を判ずる

ときは則ち前三を麗と為し後・一を妙と為す次に五味に約して以て麗妙を判

ずるときは則ち前四味を麗と為し醍醐を妙と為す、全く上下の文意を推求せ

ずして直ちに一語を指して法華は華嚴より劣れりと謂えるは幾許のりぞや

りぞや」云云。

華嚴は一麗一妙

相待妙

麗妙を判ず

阿含は単麗

無妙

方等は三麗一妙

相待妙

麗妙を判ず

般はん若にやは二そ麁そ一一妙妙

相待そうたい妙みょう

麁そ妙みょうを判はんず

法ほっ華けは二二妙妙有有り

相待そうたい妙みょうは

麁そ妙みょうを判はんず

絶ぜつ待たい妙みょうは

麁そを開あして妙みょうを顕あらわす

釈しゃく籤せんの十じゅうに云いく、唯ただ法ほっ華けに至いたつて前ぜん教ぎょうの意いを説せついて今こん教ぎょうの意いを顕あらわす、玄げん義ぎ

の二にに云いく、此この妙みょう・彼かの妙みょう・妙みょうの義ぎ殊ことなること無なし、約やく教ぎょう 相そう待たい前ぜん三さんを麁そと為なし後ご

・一いを妙みょうと為なす但ただ方ほう便べんを帶たすると方ほう便べんを帶たせざるを以もて異なと為なすのみ、云い云えん、

約やく部ぶ・相そう・前ぜん四し昧まいを麁そと為なし醍たい醐ごを妙みょうと為なす同どう十じゅうに云いく、初はつ後ごの仏ぶつ慧えい・円えん頓どんの義ぎ齋さいし、一いち往おうの釈しゃく、文もん句くの五ご

に云いく、今こんの如ごとく始しの如ごとく今こんの如ごとく二に無なく異い無なし、云い云えん、弘くわ決けつの五ごに云いく

「惑わく者しや未まいだ見みず尚なほ華け嚴げんを指さす唯ただ華け嚴げん円えん頓どんの名なを知しつて彼かの部ぶの兼けん帶たいの説せつに昧まい

し全ぜんく法ほっ華け絶ぜつ待たいの意いを失うしなう、云い云えん、釈しゃく籤せんの二にに云いく、故ゆえに諸しよ昧まいの中ちゆう・円えん融ゆう有ゆう

りいと雖えいも全ぜんく二に妙みょう無なし、と同どう三さんに云いく、若もし但しき四し教ぎょうの中ちゆうの円えんを判はんじて之これを名な

けて妙みょうと為なす諸しよ經ぎやうに皆みな是かくの如ごときの円えんの義ぎ有なんり何なんぞ妙みょうと称せうせざる故ゆえに復また更まに

部に約し味に約して方に今經の教も円部も円なることを顯わすべし、若し教に約せざれば則ち教の妙を知らず若し味に約せざれば則ち部の妙を知らず、爾前の相待妙とは前三を蔵通別處と為し後・一円を妙と為す」云云、法華の相待妙とは前四味華嚴・阿含・方等・般若を處と為し醍醐を妙と為す三千塵点大通を以て元始と為す。

第二、化導始・中間終・靈山の初住不始終の相 化城喻品の意なり

種熟脱を論ず種は大通なり熟は中間乃至今日の四味なり脱は今の法華なり玄の一に云く「異とは余教は當機益物にして如来施化の意を説かず此の經は仏の教を設け給う元始巧みに衆生の為に頓・漸・不定・顯・密の種子を作す

を明す」云云、釈籤の一に云く「漸及び不定に寄すと雖も余教を以て種と為さず故に巧為と云う」止觀の三に云く「若し初業に常を知るを作さずんば三蔵

の帰戒羯磨悉く成就せず」と、弘決の三に云く「今日の声聞・禁戒を具することは良に久遠の初業に常を聞くに由る若し昔聞かずんば小尚具せず況や復大をや」云云、弘決の三に云く「若し全く未だ曾て大乘の常を聞かずんば既に小果無し誰か禁戒の具・不具を論ぜんや」云云、又云く「羯磨不成と言うは所謂久遠必ず大無んば則ち小乗の乗る法を成ぜざらしめん本無きを以ての故に諸行成ぜざること樹の根無ければ華果を成ぜざるが如し、時機未だ熟せずんば権に小の名を立つ汝等の行ずる所是れ菩薩の道、始めて記を得てまさだいにんはず方に大人と名くるに非ず」釈籤の一に云く「法譬二周得益の徒は往日結縁の輩に非ること莫し」云云。

五百塵点久遠を以て元始と為す寿量品の意なり

五百塵点靈山の間

第三に師弟の遠近不遠近の相

種熟脱を論ず

種は久遠熟は過去脱は近く世世番番の成道今日の法華なり

玄義の一に云く「又衆經に咸く云く道樹に師の実智始めて満じ道樹を起て

始めて権智を施す今の經は師の権実・道樹の前に在て久久に已に満すと明か

す、諸經に明かす二乗の弟子は実智に入ることを得ず亦権智を施すこと能わ

ず、今の經に明かす弟子の入実は甚だ久し、亦先より解して権を行ず、又

衆經は尚道樹の前の師と弟子との近近の権実を論ぜず況や復た遠遠をや、

今の經は道樹の前の権実長遠なることを明かす補処世界を数うるに知らず

況や其の塵数をや」經に云く「昔未だ曾て説ざる所今皆當に聞くことを

得べし慇懃に称讃すること良に所以有るなり、當に知るべし此の經は諸經

に異なることを」釈籤の一に云く「二乗猶小果に住す故に不入と云う豈に能く

他を化せんや、故に権を施さず、次に今經を明かす満願等の如き先に已に実

に入る説法第一なり、故に先より解して権を行ずることを「弘の七に云く、過去
に種を下すは現在に重ねて聞いて成熟の益を得、未だ曾て種を下さざるは
現在に種を成じ未来に方に益す故に三世の益皆法輪に因る」と藥草喩品に云く
「汝等が所行は是れ菩薩の道なり漸漸に修學して悉く當に成仏すべし」
云云、記の一に云く、「一時・一説・一念の中・三世・九世・種熟脱の三あり」
弟子品に云く、「諸の比丘諦かに聴け仏子所行の道善く方便を學ぶが故に思議
することを得可からず衆の小法を樂つて而して大智を畏るることを知る、
是の故に諸の菩薩・声聞・緣覺と作る無數の方便を以て諸の衆生の類を化
す」云云、又云く、「内に菩薩の行を秘し外に是れ声聞なることを現す小欲に
して生死を厭えども實には自ら仏土を淨む、衆に三毒有ることを示し又邪見
の相を現す我が弟子是くの如く方便して衆生を度す」云云、方便品に云く
「大乗に入る為れ本なり」云云、分別功德品に云く、「願わくば我未來に於て

ちよつじゅ
長寿を以て衆生を度せん「云云、玄義の七に云く、但本極の法身・微妙深遠
なり仏若し説かずんば弥勒尚暗し何に況や下地をや何に況や凡夫をや」云云、
でんぎようだいし
伝教大師の秀句の下に云く、「浅は易し深は難し釈迦の所判なり浅を去つて
ふかき
深に就くは丈夫の心なり天台大師は釈迦に信順して法華宗を助けて震旦に
ふよう えいざん
敷揚し叡山の一家は天台に相承して法華宗を助けて日本に弘通す」云云、又
いわ つつし ほけきよう ほうしほん げ いわ やくおう なんじ
云く「謹みて法華経・法師品の偈を案ずるに云く薬王今汝に告ぐ我が所説の
しよきようしか
諸経而も此の経の中に於て法華最も第一なり經文当に知るべし斯の法華経は
しよきよう
諸経の中の最為第一なり」と、釈迦世尊宗を立つるの言は法華を極と為す金口
の校 量なり深く信受す可きか。

八七 一代五時継図 658P

だいろん いわ
大論に云く百卷竜樹菩薩の造如来滅
ねはんぎよう
涅槃經に云く八十入滅
しゅつげ
大論に云く後七百年出世の人なり十九出家・三十成道・八十涅槃
あこんぎようまた
阿含經亦此の説有り云云、

兼せつしよ 説処てんじくは中天竺寂滅じやくめつ道場どうじやう菩提樹下ぼだいじゆげ

權大乘こんだいじやう

別教べつきやう

六十卷くやくぶつだ 旧訳きうやく仏陀跋多羅三蔵ぶつださんぞうの訳

三七日

八十卷しんやく 新訳実叉難陀三蔵なんださんぞうの訳

華嚴經けこんきやう

円教えんきやう

四十卷

乳味にゅうみ

結經けつきやうは梵網經ぼんもうきやう

他受用報身如來たじゆゆうほうしんにょらい

旧訳くやくの説

教主きやうしゆ

毘盧遮那如來びるしやなにょらい

新訳しんやくの説

所居しよつこの土けりゆうじつは仮立実報土かりたじつぽうど又は蓮華藏世界れんげぞうせかいと云う

愚法二乗經ぐほうにじやう

一に小乗教しやうじやう

一切いっさいの小乗經しやうじやうきやうを撰せんす

空

二に大乘始教

ほうとうぶ
方等部の經を撰す

けこんしゅう
華嚴宗五教を立つ

ふくく
不空

だいじよう
三に大乘終教

はんによ
般若・涅槃經を撰す

さんじよう
三乗の中の絶言の理を説く

とんきよう
四に頓教

いっさいきよう
一切經中の頓悟成仏の旨を撰す

べつきよういちじよう
別教一乗

えんきよう
五に円教

けこん
華嚴・法華を撰す

めみようぼさつ
馬鳴菩薩

起信論を造る

りゆうじゆぼさつ
竜樹菩薩

じゆうじゆうびしゃもんろん
十住毘婆沙論を造る

てんじんぼさつ
天親菩薩

じゆうちろん
十地論を造る

とじゆんわじよう
杜順和尚

もんじゆ
終南山の住文殊の化身云云

てんじく
天竺

智儼法師 ちこんほつし

至相寺の住

唐土 もろこし

法蔵大師 ほうぞうだいし

京兆涼山大華寺の住「又賢首大師と云い

又康蔵大師と云う」
だいし

祖師 そし

澄観法師 ちようかんほつし

「清涼山大華寺の住又清涼国師と云う」
せいりよう

審祥大和尚 しんじよう わじよう

「大安寺の住新羅国の人」日本最初伝
だいあんじ しらぎ にほんさいしよ

慈訓小僧都 そうつず

明哲律師 りっし

東大寺の本願 とうだいじ ほんがん

日本 にほん

良弁僧正 りようべんそうじよう

東大寺の本願 とうだいじ ほんがん

等定大僧都 とうていそうづ

道雄僧都 どうゆうそうづ

海印寺の住

一向小乗 いっこうしょうじよう

波羅奈国・鹿野園 はらな ろくやおん

一に

増一阿含 あこん

人天の因果を明す にんてん いんが

十二年説

二に

中阿含 あごん

真寂の深義を明す じんぎ

阿含經 あごんきよう

酪味 らくみ

四阿含經 あごんきよう

三に

雜阿含 あごん

諸の禪定を明す もろもろぜんじよう

但三藏教 さんぞう

四に

長阿含 あごん

諸の外道を破す もろもろげどう は

結經は遺教經 けつきよう ゆいきようきよう

有部顯宗六百頌 うぶ

天竺の人なり てんじく

俱舍論 くしゃ

俱舍論「三十卷・三乘法を明かす」 くしゃ さんじよう あり

世親菩薩の造如来滅後九 せじんぼさつ によらいめつこ

百年の人なり

新訳 しんやく

經部密宗十萬頌・

天親菩薩てんじんぼさつの

造天竺てんじく

には婆藪畔豆と云うなり

玄奘三蔵げんじょうさんそう

旧訳くやく

光法師ほっし

宝法師ほっし

唐土もろこし

神泰

円暉

祖師そし

恵暉

道麟

善報

日本にほん

伝灯満位の勝貴「延暦廿五年えんりやく法相宗ほつそうしゅうに付す私ひそかに云いわく

余抄に云う延暦十二年官付云云えんりやく

訶梨跋摩三蔵・天竺さんぞうの人てんじく此ここに師子鎧ししよろいと云う

成実宗じょうじつ

成実論十六卷「二十七賢聖けんせいの位を明す二百二品」

如来滅後九百年にょらいめつご

羅什三蔵らじゅつさんぞう

唐土もろこし

僧叡

祖師そし

智蔵・開善寺の僧ちぞう

日本にほん

伝灯満位の賢融えんりやく延暦二十五年三論さんろんしゅう宗東大寺僧に付す余抄に

いわ えんりやく
云く延暦 十三年云云

りっしゅう

によらいじょうどう

律宗

によらいじょうどう

如来成道五年の後律を説く、

僧祇律之これを説く、

・或は十二年の後須

提によつて戒律を制す四分律之これを説く

一 曇無徳部

二 薩婆多部
あるば

五部を明あきいかす

三 弥沙塞部

四 婆廬富羅部

五 迦葉遺部
かしょう

五篇七聚を立つ

一には波羅夷

二には僧残

一には波羅夷篇

三には偷蘭遮

二には僧伽婆尸沙篇

四には波逸提

三には波逸提篇

五には波羅提提舍尼はらだい

四には波羅提提舍尼篇はらだい

六には突吉羅

五には突吉羅篇

七には惡說

多三藏さんぞう

天竺てんじく

ぶつめつごさん

天竺

仏滅後三百年

祖師そし

道宣律師どうせんりっし

唐土もうこし

弟子鑒真和尚でしがんじんわじょう

日本にほん

鑒真和尚は唐土の人なり、東大寺戒壇院を立てし人なり。
がんじんわじょう もろこし とうだいじ

り。

藏通・別円ぞうつう べつえん

十六年說時不定せつじふじょう

対

方等部ほうとうぶ

権大乘こんだいじょう

生蘇味 しょうそみ

結經は瓔珞經 けつきょう ようらく

解深密經 げじんみつ

又有相宗と云う ゆうそう

ほうそうしめう

法相宗

瑜伽論百卷弥勒說無著筆 ゆいが みろく むちやく

唯識論 ゆいしきろん

「惣じては一切經に依り別し そう いっさいきょう よ

ては六經十一部に依る」 よ

三時教を立つ さんじきょう

有初 又有相教とも云う ゆうそう

空昔 又無相教とも云う むそう

中今 又中道教とも云う ちゆうてう

如来滅後九百年に出づ にょらいめつご

弥勒菩薩 みろくぼさつ

無著菩薩 むちやくぼさつ

世親菩薩 せじんぼさつ

護法菩薩 ごほうぼさつ

天竺 てんじく

祖そ師し

戒賢かいけん論師ろんし

摩訶まか陀だ国こくの大だい那な爛らん陀だ寺じのの人ひと

法ほっし師し

尚ほっし法し師し

光ほっし法し師し

基ほっし法し師し

弟でし子し四し人にん

玄奘げんじょう三藏さんざう

慈恩じおん大だい師し

智周ちしゅう法ほっし師し

智鳳

義淵

空晴

真喜

善議ぜんぎ

勤操ごんそう

日にほん本ぽん

唐もろこし土こ

観經一卷

・良耶舎の訳

宋の代

雙觀經二卷

康僧鎧の訳

魏の代

浄土宗

阿弥陀經一卷

鳩摩羅什の訳

後秦代

浄土論一卷 天親菩薩の造 菩提流支三蔵の訳 天竺の人なり

天竺

菩提流支三蔵

曇鸞法師

難行・易行を立てて一切の經論を撰す

るなり

道綽禪師

聖道・浄土の二門を立てて一切の經論

を撰するなり

祖師 唐土

善導和尚

正雜の二行を立てて一切の經論を撰す

るなり

懷感禪師

群疑論を造つて一代の聖教を判ずる

なり

小康法師 ほっし

已上、五人唐土の人なり もろこし

日本 にほん

法然上人 ほうねんしやうにん

選択集「一卷」 せんちゃくしゅう

「捨閉閣抛入開入販」 しゃへいかくほう

禅宗 ぜんしゅう

如来禅 にょらい

楞伽經 りやうがきやう

・金剛般若經等に依る、

又は教禅とも云う

祖師禅 そし

教外別伝・

不立文字云云 ふりゆうもんじ

西天の二十八祖 さいてん

別紙に之有り これあ

菩提達磨禪師 ぼだいだるまぜん

天竺の人なり てんじく

祖師 そし

惠可禪師 ぜん

僧

東土六祖 とうど

道信

弘忍

真言宗 しんこんしゅう

胎藏界 たいぞう

七百余尊 よそん

惠能

金剛界 こんきょう

五百余尊 よそん

大日經「六卷卅一品」善無畏三蔵の訳「開元四年中天竺の人なり」
だいにちきょう

供養法の巻を加えて七卷なり、一卷・五品
くやう

金剛頂經「三卷・一品」金剛智三蔵の訳「開元八年南天竺の人なり」
こんぎょうちやうきやう

蘇悉地經「三卷卅四品」善無畏三蔵の訳
そしつちきやう

菩提心論「一卷七丁」竜猛菩薩の造不空の訳・或は不空の造
ぼだいしんろん

大日如来 だいにちにょらい

金剛薩捶 こんぎょう

天竺 てんじく

竜猛菩薩 りゅうもうぼさつ

竜智 りゅうち
已上天竺の人なり てんじく

祖そ
師し

日に
本ほん

唐もろこし
土こし

善ぜん無む畏い三さん蔵ぞう

金こん剛ごう智ち

不ふ空くう

惠くわい果くわ

弘こう法ぼう

又くわいかい
空くわいかい海かいと云うう

真しん雅が

源げん仁じん

聖せい宝ぼう

淳じゅん祐ゆう

元げん杲こう

仁に海かい

成じやう尊そん

義範

範俊

五藏

一に毘多覽藏「乳味經藏」阿難の結集

二に毘奈耶藏「酪味律藏」優婆利

三に阿毘達磨藏「生蘇味論藏」迦旃延

四に般若波羅蜜多藏「熟蘇味文殊」華嚴・方等

・般若・法華・涅槃經を撰するなり

五に陀羅尼藏「醍醐味・金剛藏」大日經・

金剛頂經・蘇悉地經を撰す

弘法大師・義立

悪人」

一異生羴羊住心「凡夫

二愚童持齋住心「凡夫

善人ぜんにん

じゅうじゅう

十住心

三婴童無畏住心げどう

四唯蘊無我住心しやうもん 声聞

五拔業因種住心えんかく 緣覺

理趣般若經はんにやきよう「一卷」惣そうじて八部の般若有はちぶり 六他緣大乘住心はんにや

「法相宗」
ほうそうしゅう

大品般若四十卷だいぽんはんにや 羅什三蔵の訳わ 旧訳くやく 七覺心不生住心かくしんふじよう 三論宗さんろんしゅう

大般若經はんにやきよう「六百卷」玄奘三蔵の訳げんじようさんざう「新訳」しんやく 八如実一道住心にょじついちどう

「法華宗」
ほっけしゅう

般若部
はんにやぶ

通別円
つうべつえん

帶

九極無自性住心むじせい「華嚴宗」
ひみつそうつしん 十秘密莊嚴住心しんこんしゅう 真言宗

権大乘
こんだいじよう

十四年の説・或は三十年の説ある

熟蘇味じゆくそみ

結経は仁王経けつきよう にんのうきよう

百論「二卷」提婆菩薩の造だいばぼさつ

中論「四卷」竜樹菩薩の造りゅうじゆぼさつ

三論宗さんろんしゅう

十二門論「一卷」竜樹菩薩の造りゅうじゆぼさつ

大論を加えて四論宗とも云うだいろん

二蔵

一に声聞蔵しやうもん

二に菩薩蔵ぼさつくそ

三転法論

一に根本法論こんぽん

二に枝末法論しまつ

三に摂末歸本法論きほん

文殊もんじゆ

馬鳴めみよう

竜樹りゅうじゆ

祖そ師し

天竺てんじく

唐土もろこし

日本にほん

提婆だいば

竜智

清弁しょうべん

智光ちこう

羅什らじゅう

道朗

法朗

吉蔵きちぞう

「亦また嘉祥大師かじようだいしと云いう嘉祥寺かじようじの僧そうなり」
観勒かんろく僧正そうじよう

百濟くだら国の人なり

恵灌

高麗こま国の人なり

善議ぜんぎ

勤操ごんそう

妙法蓮華經

羅什三蔵の訳

正法華經

法護三蔵の訳

添品法華經

闍那笈多の訳

薩吽分陀梨法華

新訳

八箇年の説

実大乘

法華經

醍醐味

純円の説

結経は普賢經

曇無蜜多の訳 「宋代」

法華宗

仏立宗

四教五時を立てて一代教を撰す

天台宗

依憑宗 えびよう

華嚴 けごん
寅時

阿含 あこん
卯時

方等 ほうとう
辰時

般若 はんには
巳時

法華 ほっけ
午時

一に三蔵教 さんざう

諸部小乗の實有の所説を撰す しよ しようじよう しよせつ せつ

二に通教 つうきよう

諸部の如幻即空の旨を撰す しよ そく むね せつ

三に別教 べつきよう

諸部の大乘並びに歴劫行の所説を撰す しよ だいじようなら りゃくこう せつ

四に円教 えんきよう

諸部の大乘經の速疾頓成の所説を撰す しよ だいじようきよう そくしつとんじよう せつ

大覺世尊 だいかくせそん

天竺 てんじく

竜樹菩薩 りゆうじゆぼさつ

祖師 そし

天台大師 てんだいだいし

唐土 もろこし

章安大師 しょうあんだいし

妙樂大師 みょうらくだいし

日本 にほん

伝教大師 でんぎょうだいし

一日一夜の説

涅槃經 ねはんぎょう

醍醐味 だいごみ

涅槃經

結經 けつきょう

は像法決疑經 ぞうぼうけつぎきょう

涅槃宗の祖師 ねはんそうのそし

一 虎丘の岌法師 こっし

南三

二 愛法師 あいほっし

三 法雲法師 ほううんほっし 「光宅寺の僧なり」 こうたく

北七

一 北地師

二 菩提流支師 ぼだいりし

三 光統法師 こうずほっし

四 護身の法師 まもほっし

五 耆闍の法師 ほっし

六 北地の禪師 ぜん

七 北地の禪師 ぜん

法華の外は小乗の事

じゆりようほんに云く小法を樂う徳薄垢重の者は人の為に我少きより出家して

あのかたさんみやくさんぼだい
阿耨多羅三藐三菩提を得たりと説く云云。

もんく

いわ しじよう と

文句九に云く始成を説きたもうことは皆小法を樂える者と為すのみ云云。

じよき

いわ ただ

こんじよう

ねが

な

樂小の者と為すは

けこん

とんぶ

しよみ

諸味の中の

疏記に云く但し近成を樂う者・樂小の者と為すは華嚴の頓部・諸味の中の

円なり文。

てんじんぼさつ

ほつけろん

いわ いちおうさんぞう

天親菩薩の法華論に云く一往三蔵を名けて

しようじよう

な

と為し

さいおう

再往は

三教を名け

てんじんぼさつ 法華論に云く一往三蔵を名けて小乗と為し再往は三教を名け

しようじよう

な

て小乗と為す文。

もんく

いわ

ねが

しようじよう

あら

人に非ざるなり、

すなわこれ

乃ち

近説を樂う

乃ち近説を樂う

もんく 文句の九に云く小を樂う者は小乗の人に非ざるなり、乃ち近説を樂う

者

な

と為すのみ文。

者

じよき

いわ

ぎようしようぼう

疏記の九に云く樂小法とは久近を以て相望して小と為す文。

しゆうく

いわ

ほとけめつど

秀句の下に云く

仏滅度の後の六七百年の

きようしゆうろんしゆう

經宗論宗

九百年の中の法相の一

秀句の下に云く

仏滅度の後の六七百年の

經宗論宗

九百年の中の法相の一

秀句の下に云く

仏滅度の後の六七百年の

經宗論宗

宗は歴劫修行を説いて衆生を引摂す是の故に未顕真実なり云云。

伝教大師の依憑集に云く新來の真言家は則ち筆受の相承を泯し旧到の

華嚴家は則ち影響の規模を隠し空の三論宗は彈呵の屈耻を忘れて称心の

心酔を覆し、著有の法相宗は僕陽の帰依を非して青竜の判經を撥す云云。

秀句の下に云く誠に願くは一乘の君子仏説に依憑して口伝を信ずること

莫れ、仰いで誠文を信じて偽会を信ずること莫れ、天台所釈の法華宗は諸宗

に勝る寧ろ所伝を空うせんや、又云く謹みて無量義經を案ずるに云く次に方等

十二部經・摩訶般若・華嚴海空を説いて菩薩の歴劫修行を宣説す已上大唐の

伝に云く方等十二部經とは法相宗の所依の經なり、摩訶般若とは三論宗の

所依の經なり、華嚴海空とは華嚴宗の所依の經なり俱に歴劫修行を説いて

未だ大直道を知らず文。

妙樂大師の弘決の九に云く法華以前は猶是れ外道の弟子なり文。

伝でん教ぎょう大師だいしの守護しゆご章しやうの上に云いく妙みやう法ほつの外ほか更に一句いっくの經きやう無し文。

智証ちしやう大師だいし授決じゆけつ集しゆの上に云いく經きやうに大小だいしやう無なくく理りに偏円へんえん無なからん一切いっさい・人に

依よらば仏説ぶつせつ無用むようならん、若もし然しからずんば文ぶんに拠よつて伝でんつ可べし己おのが父ちちは國王こくおうに勝まさる

と執しゆすること莫なれ、又他またに劣なると謂おもつこと莫なれ、然しかも家け家の尊勝そんしやう・国くに国くにの高

貴たいしやう 大小だいしやう各おの分ぶん齊さい有あり、土つちを以もつて金きんと為なせば家け家に之これ有あり金きんを以もつて金きんと為なせば

有あ無な処こを異いにす、久成くじやうの本ほん・開權かいこんの妙みやく・法華ほつけ独ひとり妙みやくに独ひとり勝まさる、強しいて抑おさえ

て之これを喪そうし仏説ぶつせつを哽塞こうそくす如來にやらいを咎とがむ合あし伝でん者を非なすること莫なれ、又云いく国くに国くに

とは五味ごみ、家け家けとは四教しきやう八教はつきやうなり文。

天台てんたいの玄義げんぎの十じゆに云いく若もし余教よきやうを弘ひろむるには教相きやうそうを明あかさざれども義ぎに於おいて

傷やむこと無し、法華ほつけを弘ひろむるには教相きやうそうを明あかさざれば文義もんぎ闕かくること有り、但

聖意ゆういん幽隱きやういんにして教法きやうほつ弥難いよいよがたし前代ぜんだいの諸師しよし・或あるは名匠めいじやうに祖承そじやうし・或あるは思おもひ

袖しゆうきん衿きんより出でず阡陌せんひやく縱横じやうかうなりと雖いえども孰いずれか是これなることを知しること莫なし、然しかる

に義雙なりび立たず理兩ふたつながら存ぞんする無し、若もし深く所以ゆえん有りて復修多羅またしゆたらと合がっする者は録ろくして之これを用もちゆ文無なくく義無ぎなきは信受しんじゆす可べからずと。

一、開会かいえの事

寿命品じゆりようぽんに云いわく諸もろもろの経方よに依よつて好き薬草しきこうみみなことぐそくの色香美味皆悉しきこうみみなことぐそくく具足きそくするを求め

て擣とつしわわううと擣とつしわわううと合あす文。

文句もんくの九いに云いわく経方すなわとは即すなわち十二部經しふにぶきやうなり薬草すなわは即すなわち教しよせんの所詮はちまんの八万はちまんの

法門ほふもんなり、香美味かうみみとは戒定慧かいじやうえなり、空觀くうかんは擣つくが如ごとく仮觀けかんはふるうが如ごとく中觀ちゆうかん

は合がっするが如ごとし文。

大經だいきやうに云いわく衆流海しゅうるうみに入りて同一かんみゆえ鹹味かんみ故ゆゑに海味かいみと云いう文。玄げんの三さんに云いく

諸水しよすい・海かいに入いれば同一かんみ鹹味かんみなり、諸智しよち・如実智じつちに入いれば本ほんの名字みょうじを失うしなすと文。

一、是諸經之王ししよきやうのわうと云いう事

信解品しんげに云いく並ならびに親族しんしゆく・国王こくおう・大臣だいじんを会えす。

もんく 文句の六に云く國王とは一切漸頓の諸経なり。

じよき 疏記の六に云く諸の小王を廃して唯一の王を立つ是の故に法華を王中の王

と名く文。

一、法華已前の説を権と云う事

げんぎ 玄義の三に云く涅槃の聖行品に云く追つて衆経を分別す故に具に四種の四諦を説くなり、徳王品に追つて衆経を泯す文。

しゃくせん 釈籤の三に云く涅槃に追と言つは退なり劫つて更に前の諸味を分別す、泯とは合会なり法華より已前の諸経皆泯す此の意は則ち法華の部に順ずるなり文。

ぐ 弘の三に云く彼の經の四教皆常住を知る故に本意は円に在りと文。玄義

いわ 四に云く法華の意を得る者は涅槃に於て次第の五行を用いざるなり文。

一、常好坐禅と云う事

安楽行品に云く亦師と同ずることを樂わす常に坐禅を好む文。普賢經に云く専ら大乘を誦し三昧に入らず文、又云く其の大乘經典を讀誦するもの有らば諸惡永く滅して仏惠より生ずるなり文。

一、天台宗阿弥陀の事

弘決の二に云く諸經の讚する所多く弥陀に在り故に西方を以て一准と爲す文、私に云く此の釈・文殊説・文殊問の兩經に依るなり、常坐三昧の下。

止觀の二に云く弥陀を唱うるは即ち是れ十方の仏を唱うる功德と等し但専ら弥陀を以て法門の主と爲す、要を挙げて之を言わば歩歩・声声・念念・唯阿弥陀仏に在り文、私に云く此の釈般舟三昧經に依るなり常行三昧の下口説の下。

又云く意に止觀を論ぜば西方阿弥陀仏を念ず此れを去ること十萬億仏刹と

文、此の釈般舟三昧の經の文に依るなり 常行三昧の下。

又云く陀羅尼咒を誦し三宝十仏を請じ摩訶祖持陀羅尼を思惟せよ文、此の

釈は方等陀羅尼經に依る半行半坐の三昧の下。

又云く三宝・七仏・釈尊・弥陀・三陀羅尼・二菩薩・聖衆を礼せよ、此

の釈は諸經に依る非行・非坐三昧の下。

玄義の九に云く諸行は傍の実相を以て躰と為し体行俱に麁なり文、又

云く諸經の方法に依る常行等の行は傍を以て體と為す体行俱に麁なり文。

已上四十余年の經釈

止觀の二に云く別に一卷有り法華三昧と名く是れ天台大師の著す所なり、

世に流伝して行者之を宗ぶ、此れ則ち説を兼ね復別に論ぜざるなり文。

法華三昧に云く道場の中に於て好き高座を敷き法華經一部を安置し亦未だ

必ず形像・舍利並に余の經典を安ずることを須いず唯法華經を置け文。

止観しかんの二にに云いく意いの止観しかんとは普賢觀ふげんに云いく専もつら大乘だいじようを誦じゆして三昧さんまいに入いらず
日夜六時ふんべつに六根ろっこんの罪つみを懺さんす、安樂行品あんらくぎようほんに云いく諸法しよほうに於おいて行なく亦また不
分別ぶんべつを行いぜざれ文。

法華經ほけきように云いく乃至余經ないしよきようの一偈いちげをも受けざれ文。

又云いく復舍利またしやりを安やすんずることを須もちいず文。

一、天台念仏の事てんだいねんぶつ

止観しかんの六にに云いく見思けんじの惑即わくすなわち是これ仏法界ぶつぽうかいなりと覺さとして法身ほっしんを破やぶせざるを
念仏ねんぶつと名なくと文。

止観しかん二にに云いく意止観しかんとは普賢觀ふげんに云いく専もつら大乘だいじようを誦じゆし三昧さんまいに入いらず日夜六
時ろっこんに六根つみの罪さんを懺あんらくぎようほんす安樂行品いに云いく諸法しよほうに於おいて行なく亦また不分別ぶんべつを行いぜ
ざれ。

秀句しゆくの下にに云いく能化のうけの童女りゆうにょ歷劫りやくの行無し所化しよけの衆生しゆじようも亦また歷劫りやく無し文。

一、法華成仏の人数の事

二の卷舎利弗は華光如来・三の卷迦葉は光明如来・須菩提は名相如来・
迦旃延は閻浮那提金光如来・目連は多摩羅跋旃檀香如来・四の卷富楼那は
ほうみようにらい ちんによ
法明如来・陳如等の千二百は普明如来・阿難は山海慧自在通王仏羅 羅は
どうしつほうげにらい だいばだった てんのうにらい まかはじゃはだいびくに いっさいしゅじょう
蹈七宝華如来・五の卷提婆達多は天王如来・摩訶波闍波堤比丘尼は一切衆生
きけんぶつ やしゅたらによ ぐそくせんまんこうそうにらい しゃからりゅうおう むすめ りゅうによ
・喜見仏・耶輸陀羅女は具足千万光相如来・娑竭羅竜王の女の八歳の竜女
によらい 正法華經 だいば いわ とうじ しゅつえみなりゅうによ こつねん
は無照光如来の説なり提婆品に云く当時の衆会皆竜女を見る忽然の間に變じて
男子と成て菩薩の行を具して即ち南方無垢世界に往き宝蓮華に坐して等正覺
を成じ三十二相・八十種好普ねく十方一切衆生の為に妙法を演説す文。
又云く爾の時に娑婆世界の菩薩・声聞・天竜・八部・人と非人と皆遙か
に彼の竜女の成仏して普ねく時の会の人天の為に法を説くを見て心大いに
歡喜して遙かに敬礼す文。

一、四十余年の諸の経論に女人を嫌う事

華嚴經に云く女人は地獄の使なり能く仏の種子を断つ外面は菩薩に以て
内心は夜叉の如しと文。

又云く一び女人を見れば能く眼の功德を失う縦い大蛇を見ると雖も女人を
見る可からずと文。

銀色女經に云く三世の諸仏の眼は大地に墮落すとも法界の諸の女人は永
く成仏の期無らんと文。

華嚴經に云く女人を見れば眼大地に墮落す何に況や犯すこと一度せば
三惡道に墮つ文。

十二仏名經に云く仮使法界に遍する大悲の諸菩薩も彼の女人の極業の障を
降伏すること能わず文。

大論に云く女人を見ること一度なるすら永く輪廻の業を結ぶ、何に況や犯

すこと一度せば定んで無間獄に墮すと文。

往生礼讃に云く女人と及び根欠と二乗種とは生せず文。

大論に云く女人は悪の根本なり一たび犯せば五百生彼の所生の処六趣の

中に輪廻すと文。

華嚴經に云く女人は大魔王能く一切の人を食す現在には纏縛と作り後生は

怨敵と為る文。

一、真言を用いざる事

伝教大師の依憑集の序に云く新來の真言家は則ち筆受の相承を泯す文。

安然の教時義の第二に云く問う天台宗の遣唐の決義に云く此の大盧遮那經

は天台五時の中に於て第三時方等部の撰なり彼の經の中に四乗を説くを以て

の故に云云、此の義云何ん答う彼の決義に云く伝え聞く疏二十卷有り但未だ

披見せず云云、此は是れ未だ經意を知らざる誤判なり、何なれば天台第三時

の方等教は四教相對して大を以て小を斥い円を以て偏を彈ず、今日經は
おうぐしうへんち しきようそつたい だいにちきよう
応供正遍知・衆生の樂に隨つて四乗の法及び八部法を説きたもう是は一切智
いちみ いちみ しめじよう したが およ はちぶ と
智一味云云、若し爾らば法華と同じと謂う可し何に方等彈斥の教に撰するや
文。

広修維の唐決に云く問う大毘盧遮那一部七卷・薄伽梵・如来加持広大
こうしゅうゆいけん とうけつ いわ びるしやな ばかほん によらいかじ
金剛法界宮に住して一切の持金剛者の為に之を演説す、大唐の中天竺国の三蔵
こんごうほつかい いっさい こんごう ため これ えんぜつ だいたう てんじくこく さんぞう
・輸婆迦羅・唐には言う善無畏と訳す、今疑う如来の所説始め華嚴より終
ゆばから とう ぜんむい うたがい によらい しょせつ けごん
り涅槃に至るまで五時四教の為に統撰せざる所無し、今・此の毘盧遮那經を
ねはん いた しきよう ため とうせつ びるしやな
以て何の部・何の時・何の教にか之を撰せん又法華の前説とや為さん当に
いずれ いずれ いずれ これ せつ ほつけ な まさ
法華の後説とや為さん此の義云何、答う謹みて經文を尋ぬるに方等部に属す
ほつけ しょうもん えんかく こうむ いかん 答う つつし きようもん たず ほうとうぶ
声聞・縁覺に被らしむるが故に不空羂索・大宝積・大集・大方等・金光明
しゅうもん えんかく こうむ ゆえ ふくうけんさく だいほうしゃく だいしつ ほうとう こんごうみよう
・維摩・楞伽・思益等の經と同味なり、四教・四仏
ゆいま りようが しゃく どうみ しきよう 四教・四仏

・四土を具す今毘盧遮那經法界宮に於て説くことを顯す、乃ち是れ法身寂光土なり勝に従つて名を受くるなり前後詳明す可し云云。

一、法華と諸經との勝劣の事

ほつけ　しよきよう
ほけきようだいいち

法華經第一

ほんもんだいいち
已今当第一なり、藥王今汝に告ぐ諸經の中に於て最も其の上に在り又云く我が所説の諸經此の經の中に於て法華最第一なり云云

迹門 第二

ねはんぎよう
涅槃經第二

しゆつせ
是經出世

むりようぎよう
無量義經第三「次に方等十二部經を説く」

けこんきよう
華嚴經第四

はんによきよう
般若經第五

そしつちきよう
蘇悉地經第六ざれば・或は復大般若經を転読すること七遍・或は一百遍せよ

だいじきよう
大日經第七　三國に未だ弘通せざる法門なり

一、鎮護国家の三部の事

ほけきよう
法華經

みつこんきよう
密嚴經

ほけきよう
法華經

にんのうきよう

仁王經

ほけきよう

法華經

じようみようきよう

浄名經

しようまん

勝鬘經

ほけきよう

法華經

こんこうみようきよう

金光明經

にんのうきよう

仁王經

ふくうさんぞうだいれき
不空三蔵大曆に法華寺に之を置く

とう
唐の大曆二年に護摩寺を改めて法華寺を立て中央に

きようじ
脇士に両部の大日なり

だいにか
脇士に両部の大日なり

すいこ
人王三十四代推古天王の御宇聖徳太子

してんのう
人王三十四代推古天王の御宇聖徳太子

これ
四天王寺に之を置く摂津国・難波郡

せつ
四天王寺に之を置く摂津国・難波郡

ぶつぽうさいしよ

仏法最初の寺なり

かんむてんのう
人王五十代桓武天皇の御宇伝教大師

ぎようでんぎようだいし
人王五十代桓武天皇の御宇伝教大師

ひえいざんえんりやくじしかん

これ
比叡山延暦寺止観院に之を置かる

とくとしや

しやな
年分得度者二人 一人は遮那業

しかん
一人は止観業

ぎよう
五十四代仁明天王の御宇

だいにちきよう

大日經

金剛頂經 こんごうちうきやう

慈覺大師比叡山東塔の西惣持院に之を置かる じかくだいしひえいざん

蘇悉地經 そしつちきやう

御本尊は大日如來金蘇二疏十四卷之を安置せらる ごほんぞん だいにちによらいきんそ じよ これ あんち

一、悲華經の五百の大願等の事並びに示現等 ひけきやう なら じげん

第一百一十三願に云く我來世穢惡土の中に於て當に作仏することを得べし だいいち いらいせえあくど おい まさ さぶつ う

則ち十方淨土の擯出の衆生を集めて我當に之を度すべしと文。 すなわ じゅつぽうじやうど ひんずい しゅじやう まさ これ どの

第一百十四願に云く我無始より來かた積集せる諸の大善根一分我が身に だいいち むし この しゃくしゅう もろもろ ぜんこんいちぶん

留めず悉く衆生に施さんと文。 とどめ じふにふしやう ほうじん

第一百十五願に云く十法界の諸の衆生無始より來かた造作する所の極重五 だいいち じふごかい もろもろしゅじやうむし この ぞうさく

無間等の諸罪合して我が一人の罪と為す大地獄等に入つて大悲代つて苦を受 むげん しょい つみ な だいじごく だいひ

けんと文。

悲華經に云く我が滅度の後末法の中に於て大明神と現じて広く衆生を度 ひけきやう いわ めつど まつぽう おい だいまようじん げん しゅじやう

せんと文。

涅槃經の二に云く爾の時に如来・棺の中より手を出して阿難を招き密かに
言く汝悲泣すること勿れ我還つて復閻浮に生じて大明神と現じて広く衆生
を度せんと文。

又云く汝等悲泣すること莫れ遂に瞻部州に到つて衆生を度せんが為の
故に大明神と示現せんと文。

悲華經に云く第五百願に我来世穢惡土の中に於て大明神と現じて当に
衆生を度すべし文。

大隅正八幡の石の銘に云く昔靈鷲山に在つて妙法華經を説く衆生を度
せんが為の故に大菩薩と示現すと文。

行教和尚の夢の記に云く阿弥陀三尊

延暦二十三年甲申春、伝教大師渡海の願を遂げんが為に筑前宇佐の
神宮寺に向つて自ら法華經を講ず、即ち託宣して云く我此の法音を聞かずし

て久しく歳年さいねんを歴へたり幸わじょうに和尚ちくうに値遇せいぎようして正教せいぎようを聞きくことを得えて至誠しじきに随喜ずいきす何ぞ徳なんを謝あやまするに足らん苟いやしくも我わがが所持しよじの法衣ほうえ有あり即すなわち託宣たくせんの主斎さい殿でんを開ひらいて手に紫むらの袈裟けさ一いつを捧ささげて和尚わじょうに上たてまつる、大悲力だいひりきの故ゆゑに幸ゆゑに納受のうじゆを垂たれたまへ、是この時禰宜ねぎ・祝等はふりとう各各これ之を随喜ずいきす元來か此ことくの如ごときの奇事きじ見みず聞きかざるかなと、彼の施ほどこす所の法衣ほうえは山王院さんのういんに在あり文。

元慶元年がんねん丁酉十一月十三日ごんだいぐうじ權大宮司藤原実元ふじわらさねもとむすめ女こ七歳にして託宣たくせんして云いわく我日本国にほんこくを持ちて大明神だいまうじんと示現じげんす本軀こは是れ釈迦しゃか如来なり。

延喜二年四月二日二歳計りの小児に託宣して云く我無量劫自り以来度し
難き衆生を教化す未度の衆生の為に此の中に在つて大菩薩と示現すと文。

一、北野の天神法華經に歸して真言等を用いざる事

天神てんじんの託宣たくせんに云いく吾円宗えんしゅうの法門ほうもんに於おいて未いまだ心に飽あかず仍よつて遠忌追善おんきついぜんに
 あたりすべからみつだんあらたほっけ
 当あたて須すく密壇みつだんを改あらためて法華八講ほっけを修しゅうすべきなり、所以ゆえんに曼陀羅供まんだらくを改あらためて法華ほっけ

八講を始め吉祥院の八講と号す是なり、彼の院は北野天神の御旧跡なり。

一、賀茂大明神法華を信ずる事

一条院の御時代記に之有り

恵心の僧都加茂社に七箇日参籠して出離生死の道は何れの経にか付く可き
と祈誠有れば、示現して云く釈迦の説教は一乘に留り諸仏の成道は妙法
に在り菩薩の六度は蓮華に在り二乗の作仏は此の経に在り文。

伝教大師加茂大明神に参詣して法華経を講ず甲冑をぬいで自ら布施し
給い畢んぬ。

・不死は是れ常・此の経を聞いて常樂の解を得文。

涅槃經の十三に云く是の諸の大乗方等經典は復無量の功德を成就すと
雖も是の経に比せんと欲す喩と為ることを得ず百倍千倍百千万億倍乃至算数

譬喻も及ぶこと能わざる所なり、善男子譬えば牛より乳を出し乳より酪を出し酪より生蘇を出し生蘇より熟蘇を出し熟蘇より醍醐を出し醍醐最上なり、若し服すること有る者は衆病皆除く所有の諸藥悉く其の中に入るが如し、善男子・仏も亦是くの如し仏より十二部經を出生し十二部經より修多羅を出し修多羅より方等經を出し方等より般若波羅蜜を出し般若波羅蜜より大涅槃を出す猶醍醐の如し、醍醐と言うは仏性を喩う仏性とは即ち是れ如来なり文。

一、金剛峯寺建立修業緣記に云く、吾入定の間・知足天に往いて慈尊御前に参仕すること五十六億七千余歳の後慈尊下生の時必ず随從して吾が旧跡を見る可し此の峯・等閑にすること勿れと文。

一、弘決に云く若し衆生・生死を出でず仏乘を慕わずと知らば魔・是の人に於て猶親想を生ずと文。

五百問論に云く大千界塵数の仏を殺すは其の罪尚輕し、此の經を毀謗すれば罪彼より多し永く地獄に入つて出期有ること無からん、読誦の者を毀眚する亦復是くの如し文。

一、広宣流布す可き法華の事

傳教大師の守護章に云く正像稍過ぎ已つて末法太だ近きに有り法華一乘の機今正しく是れ其の時なり何を以て知ることを得ん安樂行品に云く末世法滅時と文。

秀句の下に云く代を語れば則ち像の終り末の初め地を尋ぬれば唐の東・羯の西・人を原ぬれば則ち五濁の生鬭争の時なり、經に云く如来の現在すら猶怨嫉多し況や滅度の後をや、此の言良に所以有るなり文。

道暹和尚の輔正記に云く法華の教興れば權教即ち廃す日出れば星隱れ功なるを見て拙を知る文。

ほけきょう 法華經の安樂行品に云く一切世間怨多くして信じ難し文。

やくおうほん 薬王品に云く我滅度の後・後の五百歳の中・閻浮提に広宣流布して断絶せ

しむること無けん文。

かんぼつぽん 勧発品に云く我今神通力を以ての故に是の經を守護して如来滅後閻浮提の

内に於て広く流布せしめて断絶せざらしめんと文。

もんく 文句の一に云く但当時大利益を獲るのみに非ず後・五百歳遠く妙道に沾わ

んと文。

いちじょうようけつ 一乗要決に云く日本一州・円機純一・朝野遠近・同く一乗に歸し緇素

きせんこととじょうぶつ 貴賤悉く成仏を期す、安然の広釈に云く彼の天竺国には外道有つて仏道を

信ぜず亦小乗有つて大乘を許さず、其の大唐国には道法有つて仏法を許さ

ず亦小乗有つて大乘を許さず、我が日本国には皆大乘を信じて一人とし

て成仏を願わざること有ること無し、瑜伽論に云く東方に小国有つて唯

大乘だいじようの機きのみ有りあに豈あに我が国あらに非ずや文。

一、不謗人法ふぼうにんぽうの事

安樂行品あんらくぎようほんに云いわく人おほ及びきようてん經典きんぎんの過あやまりを説とくくことを樂ねがわざれ亦また諸余しよよの法師ほっしを

輕慢きようまんせざれ文。

止觀しこんの十じゆに云いわく夫それ仏説ぶつせつに両説りやうせつあり一しやうに撰せん・二にに折しゃく・安樂行あんらくぎようの長短ちやうたんを
稱とぜざるが如ごときは是これ撰せんの義ぎなり、大經だいぎようの刀杖とうじやうを執持しゅうじし乃至ないし首くびを斬きるる是これ折
の義ぎなり、与よ奪途だつみちを殊ことにすと雖いえども俱ともに利益りやくせしむ文。

弘決くけつの十じゆに云いわく夫それ仏法ぶつぽう兩説りやうせつ等だいぎようは大經だいぎようの執持しゅうじ刀杖とうじやう等いは第三だいさんに云いわく善男子ぜんなんし
正法しやうぽうを護持ごじする者ごかい五戒ごがいを受けず威儀いぎを修しゅうせず乃至ないし下の文こくおは仙預國王せんよこくわう等の文ふみなり

文句もんくの八はちに云いわく大經だいぎようには偏ひとえに折伏しゃくぶくを論ろんじ一子地なんに住かつす何しやうじゆぞ曾そて撰受しやうじゆ無なか
らん、此この經きやうには偏ひとえに撰受しやうじゆを明めいせども頭こつへ七分しちぶんに破やぶる折伏しゃくぶく無なきに非あらず、各各かくかく

一端を挙げて時に適うのみ文。

顯戒論の中に云く論じて曰く持品の上位は四行を用いず安樂の下位は必ず

四行を修す摩訶薩の言定んで上下に通ずと文。

文句の八に云く持品は八万の大士忍力成ずる者・此の土に弘經す新得記の

者は他土に弘經す安樂行の一品文。

疏記の八に云く持品は即ち是れ惡世の方軌・安樂行は即ち是れ始行の方軌

なり故に住忍辱地等と云う、安樂行品に云く他人及び經典の過を説かざれ、

他人の好惡長短を説かざれと文。

一、念仏の一切衆生の往生せざる事六 道輪廻の事

善導和尚の玄義分に云く問うて曰く未審定散の二善出でて何れの文に在

る今既に教備つて虚しからず何れの機か受くることを得る、答えて曰く解す

るに二義有り一には謗法と無信八難及び非人と此等は受けざるなり斯れ乃ち

朽林頑石生潤の期有る可からず此等の衆生は必ず受化の義無し、斯れを除
いて已外は一心に信樂して求めて往生を願ずれば上み一形を尽しも十念
を収む仏の願力に乗じて皆往かざると云うこと莫し文。

往生礼讃に云く女人と及び根欠と二乗種とは生ぜずと文。

一、八難処の事

弘決の四に云く北州と及び三惡に長寿天と並びに世智弁聰と仏前仏後と・
諸根不具を加う、是を八難と為すと文。

善導の遺言に云く我・毎日阿弥陀經六十卷・念仏六万返・懈怠無く三衣は
身の皮の如く瓶鉢は両眼の如く諸の禁戒を持ち一戒をも犯さず未来の弟子
も亦然り、設い念仏すと雖も戒を持たざる者は往生即ち得難し、譬えば小舟
に大石を載せ大惡風に向つて去るが如し、設い本願の船有りと雖も破戒の大
石重きが故に岸に就くこと万が一なり文。

観念法門經に云く酒肉五辛誓つて発願して手に捉らざれ口に喫らわざれ
若し此の語に違せば即ち身口俱に惡瘡著かんと願せよ文。

法然上人の起請文に云く酒肉五辛を服して念仏を申さば予が門弟に非ずと
文。

観念法門經に云く戒を持ちて西方弥陀を思念せよと文。

無量壽經に云く三心を具する者は必ず彼の国に生ずと文。

善導の釈に云く若し一心も少ければ即ち生ずることを得ずと明らかに知んぬ
一少は是れ更に不可なることを、茲に因つて極樂に生ぜんと欲するの人は
全く三心を具足す可きなり。

月藏經に云く我が末法の時の中の億億の衆生行を起し行を修すとも未だ
一人も得る者有らず、当今は末法なり現に是れ五濁惡世なり唯淨土の一門の
み有つて通入す可きの路なり文。

遺教經に云く淨戒を持つ者は販売貿易し田宅を安置し人民奴婢畜生を畜養することを得ざれ一切の種植及び諸の財宝・皆當に遠離すること火坑を避るが如くすべし草木を斬伐し墾土掘地することを得ざれ文。

善導和尚の所釈の觀念法門經の酒肉五辛を禁ずる事の依經をいわば、無量

壽經一に依り二卷十六觀經二に依り一卷・四紙の阿弥陀經三に依り一卷般舟

三昧四に依り十往生經五に依り一卷淨土三昧經六に依る一卷

雙觀經の下に云く無智の人の中にして此の經を説かざれ文。

一、觀經と法華經との説時各別の事

善導和尚の疏の四に云く仏・彼の經を説きたまいし時・処別時別・教別対

機別・利益別なり又彼の經を説きたもう時は即ち觀經・弥陀經等を説き給う

時に非ず文。

阿弥陀經に云く況や三惡道無し文、無三惡と説くと雖も修羅・人天之れ有

り。

四十八願の第一に云く三惡趣無もし設もし我れ仏を得んに國に地獄・餓鬼・畜生有らば正覺を取らじ。

第二の願に云く三惡道に更えず極樂に於て又死す可しと云う設もし我れ仏を得るも十方の無量不可思議の諸三惡道には正覺を取らじ文。

第三十五の願に云く聞名転女人往生せざる事設もし我れ仏を得んに十方の無量不可思議の諸仏の世界に其れ女人有て我が名号を聞いて歡喜信樂して菩提心を發して女身を厭惡せん寿終の後復女像と為らば正覺を取らじ文。

一、黒衣並びに平念珠地獄に墮つ可き事

法鼓經に云く黒衣の謗法なる必ず地獄に墮す文。

勢至經に云く平形の念珠を以ゆる者は此れは是れ外道の弟子なり我が弟子に非ずあらず仏子我が遺弟必ず円形の念珠を用ゆ可し次第を超越する者は妄語の罪

に因よつて必ず地獄じごくに墮だせん文。

一、天台てんだいの念仏ねんぶつの事

一 大意たいい

一 常坐さんまい三昧一

もんじゅもんじゅ
文 殊説経文 殊問經に依る

二 釈名

一 発大心

二 本尊は阿彌陀はんじゅ
常行三昧一般舟

さんまい
三 昧經に依る

三 鉢相

二 修大行しゅくだいぎょう

四種三昧ししゅざんまい

三 本尊は別有
半行半坐三昧一

ほうとうほけきよう
方等經法華經に依る

しかん
止觀十章者 四 撰法えつほう

五略者

三 感大果

四 本尊は觀音
非行・非坐三昧一

説經・説善・説惡・説無記

へんえん
五 偏円

四 裂大網

ししゅざんまい
右四種三昧

ついで
の次では先段に之を注す

六 方便 ほうべん

五 歸大処

七 正観 しょうくわん

八 果報 かほう

九 起教 きぎょう

十 指帰 しきき

止観しかんの七いに云いく若もし四種三昧ししゆざんまい修習しゆしゆの方便ほうべんは通じて上に説ごくが如ごとし、唯ただ

法華懺法ほつげせんぼうのみ別して六時五悔げに約かして重ねて方便ほうべんを作なす今五悔げに就ついて其その

位相を明す文。

弘決くけつの七いに云いく四種三昧ししゆざんまいは通じて二十五法もを用いて通ほうべんの方便なと為もす、若もし

法華ほつげを行ほずるには別いして五悔げを加よう余行よぎように通せぜず文。

第七の正修止観せいしゆしうしかんとは止いの五いに云いく前しの六重しゆたらは修多羅よに依よつて以みて妙解みようげを開

き今は妙解みようげに依よつて以して正行しょうぎようを立つ文。

十疑うたがいの第四よに云いわく釈迦大師しゃかだいし一代いちだいの説法せっぽう處處しよしよの聖教しょうきように唯衆生ただしゆじよう心を專もつにし
て偏ひとえに阿弥陀あみた仏ぶつを念なじて西方極樂世界さいほうごくらくせかいに生すぜんことを求めよと勸すすめたまえり
文。

七疑うたがいに云いわく又聞きこく西国さいこくの伝でんに云いわく三さんりの菩薩ぼさつ有あり一いつを無著むぢやくと名なけ二にを
世親せじんと名なけ三さんを獅子覺ししかくと名なく文。

八疑うたがいに云いわく雜集論ざしやくろんに云いわく若もし安樂国土あんらくこくどに生すぜんと願すなわわば即おち往生おうじようを得える
等文。

一、天台御臨終の事

止觀しかんの一いつに云いわく安禪あんぜんとして化くわす位五品ごぼんに居こす文。

弘決くけつの一いつに云いわく安禪あんぜんとして化くわす位五品ごぼんに居こす等とは此これ臨終りんじゆうの行位ぎやうゐを出いだす
なり、禪定ぜんじようを出いでずして端坐たんざして滅めつを取るとる故ゆゑに安禪あんぜんとして化くわすと云いう文、又

云いく法華ほつけと觀無量壽むりようじゆうの二部ふたふの經題きやうだいを唱となえしむ文、又云いく香湯かうとうを索もとめて口くちを

漱^{すす}ぎ竟^{おわ}つて十如^{ふしゅう}・四不生^{ほつかい}・十法界^{しきやう}・四教^{さんかん}・三觀^{はけ}・四悉^{しだい}・四諦^{さいご}・十二緣を説く
に一一の法門^{ほうもん}・一切の法を撰^{せん}す、吾今最後に觀を策まし玄を談^{だん}ず最後善寂な
り。跏趺^{かふ}して三宝^{さんぼう}の名を唱^{とな}えて三昧^{さんまい}に入るが如^{ごと}し即^{すなわ}ち其の年十一月二十四日
未^{ひつじ}の時・端坐して滅に入りたもう文。

又云^{いわ}く大師生存に常に兜率に生ぜん事を願^{とそつ}う 臨終^{りんじゅう}に乃^{すなわ}ち觀音来迎すと云
う、当^{まさ}に知るべし物に軌^{のつ}とり機^きに随^{したが}い縁に順じて化を設^{もつ}く一准^{いちじゆん}なる可^べからざ
ることを文、又云^{いわ}く汝善根を種^うつるに嬾^{もの}くして他の功德を問^{くどく}う盲^{めくら}の乳を問^{つまず}
い蹴^{つまず}きたる者の路を訪^{こと}うが如^{ごと}し実を告^つげて何の益かあらん文。

選^{せん}択^{ちやく}集^{くしゅう}の上に云^{いわ}く願^{さいほう}くは西方の行者各其の意樂に随^{ぎやうじや}い・或^そは法華を讀誦^{いぎやう}
して以^{ある}て往生の業と為^{けこん}し、或^{ある}は華嚴を讀誦^{どくじゆ}し以^{ある}て往生の業と為^{おうじやう}し・或^{ある}は
遮^{しや}那^な教主及^{おほ}び諸尊^{しよそん}の法等を受^あ持^{じゆじ}し讀誦^{どくじゆ}して往生の業と為^{おうじやう}し・或^{ある}は般若^{はん}若^{にや}・
方^{ほう}等^{とう}及^{おほ}び涅槃經等を解説^{げせつ}し書^{しよ}写^{しや}して以^{ある}て往生の業と為^{おうじやう}す是^なれ則^こち淨土宗^{すなわ}じようとしゆう

かんむりようじゆきよう

觀無量壽經の意なり文。

又云く問うて曰く爾前經の中何ぞ法華を撰するや、答えて曰く今言う所の

撰とは権実偏円等の義を論ずるに非ず、読誦大乘の言は普く前後の大乗
しよきよう

諸經に通ず文。

かんむりようじゆきよう
觀無量壽經に云く爾の時に王舎大城に一りの太子有す阿闍世と名く、
ちようだつあくゆう

調達悪友の教に随順して父の王の頻婆沙羅を収執して幽閉して七重の室
内に置く文。

ほけきよう
法華經の序品に云く韋提希の子阿闍世王・若千百千の眷属と俱なり文。

えしん
恵心の往生要集の上に云く夫れ往生極樂の教行は濁世末代の目足なり

どうぞくきせん
道俗貴賤誰か帰せざらん、但顯密の教法其の文一に非ず事理の業因其の行

こ
惟れ多し利智精進の人は未だ難と為さず、予が如き頑魯の者・豈敢てせんや、

かくのゆえ
是の故に念仏の一門に依つて聊か經論の要文を集め之を披らき之を修するに

覺り易く行じ易し文。
さとやす

恵心往生要集を破し二十三年已後に一乗要決を作る、一乗要決の上に
云く諸乗の権実は古来の諍なり俱に經論に拠つて互に是非を執す、余
寛弘丙午の歳冬十月病中に歎じて曰く仏法に遇うと雖も未だ仏意を了せず
若し終に手を空うせば後悔何ぞ追ばん、爰に經論の文義賢哲の章疏・或は
人をして尋ねしめ・或は自ら思忖す、全く自宗他宗の偏党を捨てて専ら權智
実智の深奥を探るに遂に一乗は真實の理・五乗は方便の説なることを得る者
なり、既に今生の蒙を開く何ぞ夕死の恨を遺さん文。

一、念仏は末代に流布す可き事
ねんぶつ まつだい るふ

雙觀經の下に云く当來の世に經道滅尽せんに我慈悲を以て哀愍して特に
そつかんきよう いわ とつうい きふうでつめつじん じひ あい かん

此の經を留めて止住すること百歳ならん、其れ衆生有つて斯の經に値う者は
しよ かん したが みな べ
意の所願に随つて皆得度す可し文。

おつじょうれいさん　往生礼讃に云く万年に三宝滅して此の経住すること百年、爾その時に聞いて
いちねん　一念もせば皆当に往生を得べし文。

じおんだいし　慈恩大師の西方要決に云く末法万年に余経悉く滅して弥陀みだの一經いつきのみと
文。

ほうべん　方便品に云く深く虚妄の法に著して堅く受けて捨つ可からず是かくの如き人
度し難がたしと文。

ほうべん　堅惠菩薩の宝性論に云く過去謗法の障り不了義しゆつじやくに執しゆつじやく　著すと文。
ほうべん　方便品に云く若し余仏に遇わば此の法中に於て便ち決了することを得んと
文。

な　玄の七に云く南岳師の云く初依を余仏と名く無明未だ破せず之を名けて余
な　と為す、能く如来秘密の蔵を知つて深く円理を覺さとす之を名けて仏と為す文。
ねはんぎようじよ　涅槃經疏十一に云く人正法を得るが故に聖人と云うと文。

ぞうほうけつぎよう
像法決疑經に云く常施菩薩・初成道より乃至涅槃其の中間に於て如来の
いっく
一句の法を説くを見ず、然るに諸の衆生は出没・説法度人有りと見ると
文。

さんまい
二十五三昧・二十五有の略頌に曰く四州・四惡趣・六欲並びに梵世・四禪

・四無色・無想・五那含文。

一、漢土・南北の十師・天台大師に歸伏する事

国清百録の第四に云く千年と復五百と復実に今日に在り南岳の叡聖天台の

明哲昔は三業を住持し今は二尊に紹繼す豈止だ甘露を振旦に灑ぐのみならん

亦当に法鼓を天竺に振うべし、生知妙悟なり魏晉より以来典籍風謡實に連類

無し云云、乃至禪衆一百余僧と共に智者大師を請し奉る。
頼川の人なり、後則ち南荊

州華容県に遷居す。

一、伝教大師の一期略記に云く

桓武天皇の御宇、延暦廿一年壬午正月十九日伝教大師最澄高尾寺に於て、六宗と諍い責め破り畢ぬ。仍つて勅宣を下され帰伏の状を召さる、六宗の碩学共に帰伏の状を奉りて云く漢明の年

・教・震旦に被り礪島の代に訓本朝に及ぼす、聖徳の皇子は靈山の聖衆

にして衡岳の後身なり経を西隣に請い道を東域に弘む、智者・禪師は亦共に

靈山に侍し迹を台岳に降し同く法華三昧を悟り以て諸仏の妙旨を演ぶる者な

り、竊に天台の玄疏を見れば釈迦一代の教を惣括して悉く其の趣を顕わし処

として通ぜざること無し独り諸宗に逾え殊に一道を示す、其の中の所説の

甚深の妙理・七箇の大寺・六宗の学匠昔未だ聞かざる所曾て未だ見ざる所

三論・法相の久年の諍い渙焉として氷の如く釈け昭然として既に明かなり

雲霧を披いて三光を見るが猶し、聖徳の弘化より以降今に二百余年の間・講ず

る所の經論其の数惟れ多し彼此理を争つて其の疑未だ解けず、此の最妙の

円宗猶未だ闡揚せず、蓋し以れば此の間の群生未だ円味に応ぜざるか、伏し

て惟れば聖朝久しく如来の付嘱を受け深く純円の機を結ぶ一妙の義理始めて

乃ち興顯す、六宗の学衆初めて至極を悟る、謂つべし此の界の含靈
而今而後悉く妙円の船に載つて早く彼岸に済ることを得と、如来の成道
四十余年の後乃ち法華を説いて悉く三乗の侶をして共に一乗の車に駕せし
むるが猶し、善議等慶躍の至りに堪えず敢て表を奉つて陳謝以て聞す云云。
秀句の下に云く当に知るべし已説の四時の經今説の無量義經・当説の
涅槃經は易信易解なることを随他意の故に、此の法華經は最も為れ難信難解
なり随自意の故に、随自意の説は随他意に勝る、但し無量義を随他意と云う
は未合の一辺を指す余部の随他意に同じからざるなり文。

文句の八に云く已とは大品以上の漸頓の諸説なり今とは同一の座席謂く
無量義經なり当とは謂く涅槃なり、大品等の漸頓は皆方便を帶すれば信を取
ること易しと為す今無量義は一より無量を生ずれども無量未だ一に還らず是
亦信じ易し、今の法華は法を論ずれば一切の差別融通して一法に歸す人を論

ずれば則ち師弟の本・迹俱に皆久遠なり、二門悉く昔と反すれば信じ難く
解し難し、鋒に当る難事をば法華已に説く涅槃は後に在れば則ち信ず可きこ
と易し、秘要の蔵とは隠して説かざるを秘と爲し一切を惣括するを要と爲す
真如実相の包蘊せるを蔵と爲す、
不可分布とは法妙にして信じ難し深智には授く可し無智は罪を益す故に妄り
に説く可らず、昔より已来未だ曾て顕説せずとは三蔵の中に於ては二乗の作仏
を説かず、亦師弟の本・迹を明かさず、方等・般若には実相の蔵を説くと
雖も亦未だ五乗の作仏を説かず、亦未だ発迹顕本せず頓漸の諸経皆未だ融会
せず故に名けて秘と爲す、此の經には具に昔秘する所の法を説く即ち是れ秘密
蔵を開するに亦即ち是れ秘密蔵なり、此くの如きの秘蔵は未だ曾て顕説せず、
如来在世猶多怨嫉といわば四十余年には即ち説くことを得ず今説かんと欲す
と雖も而も五千尋いで即ち座を退く仏世すら尚爾り、何に況や未来をや理化

し難きに在り。

楞伽經に云く我得道の夜より涅槃の夜に至るまで一字をも説かず文。

止觀の五に云く是の故に二夜一字を説かずと文、又云く仏二法に因つて此く

の如きの説を作したもう縁自法と及び本住の法を謂う、自法とは彼の如來の

得る所我も亦之を得文、又云く文字を離るるとは仮名を離るるなり文。

法華に云く但仮の名字を以て衆生を引導したもう文。

玄義の五に云く惠能く惑を破し理を顯す理は惑を破すこと能わず、理若し

惑を破せば一切衆生・悉く理性を具す何が故ぞ破せざる、若し此の惠を得れ

ば則ち能く惑を破す故に智を用つて乗体と為す文。

弘の五に云く何の密語に依つて此くの如き説を作したもう、仏の言く二の

密語に依る・謂く自証法・及び本住法なり、然るに一代の施化・豈權智被物

の教無からんや、但此の二に約して未だ曾て説有らざる故に不説と云うのみ

文。^{せん} 籤の一に云く三に廃迹とは後の如く前の如し文を引く中・初に諸仏の
下同を引く・為度の下正しく廃迹を明す、廃し已れば迹無し故に皆実と云つ、
実は只是れ本権は只是れ迹若し同異を弁ぜば広く第七の巻の如し文、籤の一
に云く捨は只だ是れ廃・故に知んぬ開と廃は名異跡同なることを文。

止の六に云く和光同塵は結縁の始め八相成道は以て其の終りを論ずと文。
弘の六に云く和光の下・身を現ずるを釈するなり四住の塵に同じ処処に縁
を結び浄土の因を作し利物の始めと為す、衆生機熟して八相成道す身を見
・法を聞き終に実益に至る文。

天照大神の託宣に云く

往昔勤修して仏道を成じ求願円満遍照尊・閻浮に在つては王位を護り
衆生を度せんが為に天照神。

さんろんしゅう

三論宗の始めて日本に渡りしは三十四代推古の御宇治す十年 壬戌の十月

くだら

・百済の僧・觀勒之を渡す、日本記の太子の伝を見るに異義無し、但し三十

七代との事は

流布の始めなり、天台宗・律宗の渡れる事は天平勝宝六年

きのえねおま

甲午二月十六日丁未・乃至四月に京に入り東大寺に入る天台止觀等云云、

しよ

諸伝之に同じ、人王第四十六代孝謙天皇の御宇なり聖武は義謬りなり書き直

すべ

可きか、戒壇は以て前に同じ、大日經の日本に渡れる事は弘法の遺告に云く

くだん

「件の經王は大日本国高市郡久米道場の東塔の下に在り」云云、此れ又

げんじょうてんのう

元政天皇の御宇なり、法華經の渡り始めし事は人王第三十四代推古の四年な

り、太子・

惠慈法師に謂つて曰く「法華經の中に此の句落字」と云云、太子

かんど

使を漢土に遣わし已前の法華經・此の国に有るか、惟れ知んぬ欽明の御宇に渡

る所の經の中に

法華經有るなり、但し自ら御不審有る大事は所謂日本記に云く

「きんめいてんのう

欽明天皇十三年壬申冬十月十三日辛酉百済国聖明王始めて金銅釈迦像一

軀を献ず」等云云、善光寺流記に云く「阿弥陀並びに観音・勢至・欽明天皇
の御宇治天下十三年壬申十月十三日辛酉・百済国の明王・件の仏・菩薩・
頂戴」と云云、相違欲「已下欠」八九十宗判名の事 692P

拙度宗

華嚴宗

迷經宗

俱舍宗

半字宗

真言宗

范宗

下劣宗

法華宗

仏立宗

成実宗

驢牛和合乳宗

律宗

驢乳宗

禅宗

趙高宗 殺二世王

法相宗

逆路宗

浄土宗

梟鳥宗 禽
破鏡宗 獸

不孝宗

背上向下宗

三論宗 さんろんしゅう

捨本附末宗

九〇 五行御書 ごしよ

不殺生戒 ふさつしやうかい

肝臟

不飲酒戒 おんじゆ

不妄語戒 もうご

脾臟 ひ

眼根 がんこん

舌根 ぜっこん

身根

酢味

苦味

甘味

東方 とうほう

南方 なんぽう

中央

木

青色

火

赤色

土

黄色

春

夏

土用

青雲

赤雲

黄雲

魂

神

意

歳星

惑星

鎮星

不偷盜戒 ちゅうとう

肺臟

不邪淫戒 ふじやいんかい

鼻根

耳根

辛味

味

西方

西方

北方

金

白色

水

黒色

秋

冬

白雲

黒雲

魄

志

大白星

辰星

九一 浄土九品の事

695P

難行易行・聖道浄土・雑行正行・諸行念仏、

法然房の料簡は諸行と念仏と相對なり、

二義、一には勝劣・一には難易 廃立

くなり

一に諸行しよぎようを廢して念仏ねんぶつに歸せんが為ために而しかも諸行しよぎようを説

助正
二に念仏ねんぶつを助成せんが為ために而しかも諸行しよぎようを説くなり

傍正

三に念仏ねんぶつ諸行しよぎようの二門に約して各三品を立てんが
為ために而しかも諸行しよぎようを説くなり

若ぜんどう善導ぜんどうに依らば初を以て正と為すのみ
讀誦大乘どくじゆだいじよう

至誠心深心廻向發願心なり

上品上生じようばん

三種さんしゆの心こころを發はつして即すなわち往生おうじようす
復また三種さんしゆの衆生しゆじよう有あり当まさに往生おうじようを得うべし

六念

施戒僧法仏

一には慈心にして殺さず諸もろもろの戒行かいぎようを具ぐす

じょうほん
上品

天

二には大乘方等經典を讀誦す

三には六念を修行す

法然の料簡に云く

けこんきようほうとう
華嚴經・方等經・般若經・法華經・涅槃經・大日經・深密經・

りようこんきよう
楞嚴經等の一切の大乗經は讀誦

だいじよういっくしやうじん
大乘の一句に撰尽す

だいいち
解第一義

じょうほん
上品中生

ぎしゅげだいいちおいほうねんりようけんいわ
善く義趣を解し第一義に於て一法然の料簡に云く一華嚴の唯心・

ほっかいほつそう
法界法相の唯識・三論の八

しんこんごそうじやうしんでんだい
不・真言の五相成身天台の一念三千・皆解第一義の一句に撰尽す

じょうほん
上品下生

法然ほうねんの料簡りょうけん一深信いんがの因果じゅつかいに十界いんがの因果しょうじんを撰しん尽じんす

中品ちゅうぽん上生

中品ちゅうぽん上生

五戒ごかい・八戒ないししよ乃至諸戒しょうじんを撰しん尽じんす

あごんきよう ぐしゃ じようじつ りっしゅう

四阿含經・俱舍・成実・律宗は此の二品に撰しん尽じんす

中品ちゅうぽん

中品ちゅうぽん中生

中品

中品ちゅうぽん中生

八齋戒

じゆきよう

儒教じゆきよう道教は此の一品に撰しん尽じんす

中品ちゅうぽん下生

中品ちゅうぽん下生

孝養父母こうようふぼの行ぎやうなり仁慈

げてんさんぜん

外典三千余卷

ろうし

老子經

こつぎよう

孝經

下品げぽん上生

觀經かんきよう

此こくの如ごときの愚人ぐにん多く衆惡しゅうあくを造るも十念おうじんせば往生おうじようす

下品げぽん中生

或あるは衆生しゆじよう有あて五戒ごかい・八戒およ及び具足戒ぐそくを毀犯くゐはんす、此こくの

こと 如きの愚人は僧祇物を偷み現前僧

げほん 下品

物を盗む不浄に法を説いて懺愧有ること無し

げぶんげしやう 下品下生は五逆重罪の者なり而かも能く逆罪を除滅するは余行に

た 堪えざる所なり、唯念仏の力

よ のみ能く重罪を滅するに堪る有り、故に極悪最下の人の為に

し 而かも極善最上の説を説く等云云

げぶんげしやう 下品下生 五逆罪の人・十念往生

いわ 撰択に云く「念仏三昧は重罪すら消滅す何に況や輕罪

よぎやう をや余行は然らず・或は輕を滅し

ある て重を滅せざる有り、或は一を消して二を消せざる有

り」等云云

しゃへいかくほう 捨閉閣拋

法華經等の一切經 ほけきょう いっさいきょう

釈迦仏等の一切諸仏 しゃかぶつ いっさいしよぶつ

てんだいしゅう はつしゅう

天台宗等の八宗・九宗の世天等 てんたいしゅう はつしゅう きゅうしゅう せてん

じょうどさんぶきよう

浄土三部經・阿弥陀仏よりの外なり あみたぶつ

あんらくしゅう

安樂集に

いま

未だ一人も得る者有らず唯浄土の一門のみ有て通入の路なるべし ただひとりも うちもん

おうじょうれいさん

往生礼讃に云く いわ

せんちゅうむいつじゅうそくじゅうしゅう ひやくそくひやくしゅう

千中無一十即十生・百即百生

ちやうちくじなむ

長樂寺南無

一弟子 でし

隆寛 りゅうかん

多念 たねん

故嵯峨法皇の御師 さがほこう おんし

一弟子 でし

小坂 こさか

道観 だうくわん

建仁年中 けんじん

一弟子 でし

善恵 ぜんゑ

聖光 せいこう
故打宮入道修観 にゅうどういしゅうかん

後鳥羽院御宇

極樂寺殿の御師

源空

法蓮
法本

法然房
顯真座主

覚明

八人の碩徳

一条
道阿弥

嵯峨

聖心
成覚

一念

法本

頼顯僧上の御師

蘭城寺の長吏

破す、
隨機の諸行皆往生を為すべし等云云
公胤大式僧上 浄土決疑集三卷を造て法然房の撰択集を

故宝地房法印証真の弟子

上野清井者

定真堅者

彈撰択二卷を造る隨機諸行往生

下輩げはい下三品

値悪人あくにん

証義者

宗源法印そうげんほういん

証眞の嫡弟 竹中法師ほっし

隆眞法印ほういん

大和の莊やまと

俊鏤法印ほういん

相生

善人ぜんにん

三塔の総学頭

小乗凡夫しょうじょうぼんぶ

三千人の大衆さんぜん たいしゅう

中輩

五人探題たんだい 聖覺しょうかく

中三品

貞雲

竜証

値小

華嚴宗けこんしゅう

とがのをの

值大

明恵房ぼう

推邪輪さいじやりん

三卷を造る隨機諸行往生きしよぎようおうじよう

大乘凡夫だいじようほんぶ

深密經に依るじんみつ

上輩

法相宗ほうそうしゆう

三時教をもて

一代を撰

尽し返て

深密經を以て

妙智經を以て

ほけきよう

法華經を下す

三論宗さんろんしゆう

二藏三時をもて

一代を撰

尽し返て

妙智經を以て

妙智經を以て

ほけきよう

法華經を下す

上三

華嚴宗けこんしゆう

五教をもて

一代を撰

尽し返て

華嚴經を以て

法華

經を以て

法華

を下す

だいじよう

大乘五宗

真言宗しんこんしゆう

五藏をもて

一代を撰

尽し返て

大日經等を

以て

法華經を下す

ほけきよう

以て法華經を下す

てんだいしゆう

天台宗

四教五時をもて

一代を撰

尽す

法華經を下す

あと

県の額を州に打ち牛跡を大海に入る

伝教大師・此の義を許すや不いなや

夫れ三時の教は勝義の領解りようげ一部の聞は義生の機宜き猶三部を闕かく何ぞ

一代を撰せんせん、華嚴けごん

云く・三論云く真言等しんごん云

九二 御義口伝目錄 701P

南無妙法蓮華經

七〇八

卷上

序品じよぼん七箇の大事だいじ

七〇九

第一 如是我聞によせがもんの事

七〇九

第二 阿若・陳如あにやちんによの事

七〇〇

第三 阿闍世王あじゃせの事

七〇〇

第四 仏所護念ぶつしよごねんの事

七〇一

第五 下至阿鼻地獄げしあびじごくの事

七二二

第六 導師何故の事

七二二

第七 天鼓自然鳴の事

七二三

方便品八箇の大事

七二三

第一 方便品の事

七二三

第二 諸仏智慧甚深無量其智慧門の事

七二四

第三 唯以一大事因縁の事

七二六

第四 五濁の事

七二七

第五 比丘・比丘尼有懷増上慢優婆塞我慢優婆夷不信の事

七二八

第六 如我等無異如我昔所願の事

七二〇

第七 於諸菩薩中正直捨方便の事

七二〇

第八 當來世惡人聞仏説一乘迷惑不信受破法墮惡道の事

七二一

譬喻品九箇の大事

七二二

第一 譬喻品の事

七二二

第二 即起合掌の事

七二二

第三	身意泰然快得安穩 あんのん の事	七二二
第四	得仏 ぶつ 法分の事	七二三
第五	而 い 自 ち 廻 く 転 さ の事	七二三
第六	一時 いちじ 俱 く 作 さ の事	七二三
第七	以 ひ 譬 ゆ 喻 とく 得解 とくげ の事	七二四
第八	唯 ゆい 有 いう 一 いち 門 もん の事	七二四
第九	今 こん 此 し 三 さん 界 がい 等 が の事	七二四
信解 しんげ 品 だい 六 いち 箇 し の大事 だいじ	七二五	
第一	信解 しんげ 品 だい の事	七二五
第二	捨 また 父 ちち 逃 にげ 逝 はな の事	七二六
第三	加 か 復 ふ 窮 きゆう 困 こん の事	七二六
第四	心 しん 懷 かい 悔 け 恨 こん の事	七二六
第五	無 む 上 じやう 宝 ほう 聚 じゆ 不 ふ 求 く 自 じ 得 とく の事	七二七
第六	世 せ 尊 そん 大恩 だいじん の事	七二七
藥草 やくそう 喻 ゆ 品 ぽん 五 ご 箇 こ の大事 だいじ	七二八	
第一	藥草 やくそう 喻 ゆ 品 ぽん の事	七二八

第二 此の品述じゆつじよう 成段しやうだんの事 七二九

第三 雖一はう地所おうち生一し雨所う潤等しんせけんの事 七二九

第四 破有は法王ほうおう出現しゆげん世間せけんの事 七二九

第五 我觀一切普皆平等無有彼此愛憎之心我無貪著亦無限礙の事

七三〇

授記じゆき品四箇だいじの大事だいじ 七三〇

第一 授記じゆきの事 七三〇

第二 迦葉かじや光明こうみうの事 七三二

第三 捨是身己しやぜしんいの事 七三一

第四 宿世すくせい因緣いんねん吾今當說とつせつの事 七三一

化城けじやう喻品ゆほん七箇だいじの大事だいじ 七三二

第一 化城けじやうの事 七三二

第二 大通智勝だいつちしやうぶつ仏ぶつの事 七三二

第三 諸母しよも涕泣ていじくの事 七三三

第四 其祖ごそ轉輪てんりん聖王しやうおうの事 七三三

第五 十六王子じゆわうしの事 七三三

- 第六 即滅化城の事 そくめつけじょう 七三四
- 第七 皆共至宝処の事 みなほうしよ 七三四
- 五百弟子品三箇の大事 たいいち 七三四
- 第一 衣裏の事 えり 七三四
- 第二 醉酒而臥の事 しんしんかんき 七三四
- 第三 身心遍歡喜の事 しんしんだいじ 七三五
- 人記品二箇の大事 にんきほん 七三五
- 第一 學無學の事 がくむがく 七三五
- 第二 海慧自在通王仏の事 さんかいえじざいつうおうぶつ 七三五
- 法師品十六箇の大事 ほうしほん 七三六
- 第一 法師の事 だいいち 七三六
- 第二 成就大願愍衆生故生於惡世広演此經の事 じょうじゆ しもじよう あくせ 七三六
- 第三 如來所遣行如來事の事 によらいしよけん によらい 七三六
- 第四 与如來共宿の事 によらい 七三六
- 第五 是法華經藏深固幽遠無人能到の事 ぜほけきようぞうじんごゆうおんむにんのうとう 七三六

七三七

第六

聞もん法ほう信しん受じゆ隨ずい順じゆん不逆ふぎやくの事

七三七

第七

衣え座ざ室しつの事

七三七

第八

欲よく捨しゃ諸しよ懈け怠たい心しん當たう聽てい此經しきやうの事

七三七

第九

不聞もん法ほう華わ經きやう去こ仏ぶつ智ち甚はなはだ遠えんの事

七三八

第十

若も說しやく此經しきやう時とき有ある人ひと惡あく口くち罵ののし加か刀とう杖じやう瓦が石しやく念ねん仏ぶつ故こ心しん忍にんの事

七三八

第十一

及し清きやう信しん士し女にょ供く養やう於お法ほつ師しの事

七三八

第十二

若も人ひと欲と加か惡あく刀とう杖じやう及が瓦が石しやく則すなはち遣えん變か化か人へん為か之か作ま衛まも護もの事

七三八

第十三

若しん親こん近ほつ法ほつ師し速そく得とく菩ぼ薩さつ道だうの事

七三八

第十四

隨ずい順じゆん是ぜ師し學がくの事

七三八

第十五

師しと學がくとの事

七三九

第十六

得とく見けん恒こう沙しゃ仏ぶつの事

七三九

宝塔ほうとう品ぽん甘かん箇この事

七三九

第一

宝塔ほうとうの事

七三九

第二 有七宝しっぽうの事

七三九

第三 四面しめんみな皆出おんじょうの事

七四〇

第四 出大音ほうとつじゅう声さいくうちゅうの事

七四〇

第五 見大宝塔ちゅうとうぶつ住こ在空中たほうの事

七四〇

第六 国名宝じゅうほうこくど淨彼中有よきかな仏号ほけきやう日多宝たほうの事

七四〇

第七 於十方じゅうほうじゅう国土有しやうみやう説・法華經よきかな処我之塔とつびやう廟為聽是經故ゆげん涌現其前為

作証 明讚言善哉の事

七四〇

第八 南西北方四惟上下じやうげの事

七四一

第九 各齋宝華ほうげ滿掬だじやうの事

七四一

第十 如却関鑰開大城門だいじやうの事

七四一

第十一 撰諸大衆しんたい皆在みな虚空こくうの事

七四二

第十二 譬如大風吹小樹枝しゆじゆえの事

七四二

第十三 若有能持にやくうのうじ則持しきよなんじ持ふじん身しんの事

七四二

第十四 此經難持しきよなんじの事

七四二

第十五 我則歡喜かんきしよ諸仏ぶつまた亦然またの事

七四二

第十六	讀持此經の事	七四三
第十七	是真仏子の事	七四三
第十八	是諸天人・世間之眼の事	七四三
第十九	能須臾説の事	七四三
第二十	此經難持の事	七四三
提婆達多品八箇の大事	七四四	
第一	提婆達多の事	七四四
第二	若不違我当為宣説の事	七四四
第三	採菓汲水拾薪設食の事	七四四
第四	情存妙法故身心無懈倦の事	七四五
第五	我於海中唯常宣説の事	七四五
第六	年始八歳の事	七四五
第七	言論未訖の事	七四六
第八	有一宝珠の事	七四七
勸持品十三箇の大事	七四七	
第一	勸持の事	七四七

第二	不惜身命 おしんみょう の事	七四七
第三	心不実故 ふじつ の事	七四八
第四	敬順 ぶつじ 仏意 い の事	七四八
第五	作師 し 子 し 吼 く の事	七四八
第六	如法 しゆぎ 修行 ぎやう の事	七四八
第七	有諸 しゆむ 無智 ち 人の事	七四八
第八	惡世 あくせ 中 ちゆう 比丘 ひく の事	七四九
第九	・或有 ある 阿練 あれんにや 若 きやうてん の事	七四九
第十	自作此經典 きやうてん の事	七四九
第十一	為斯 なんじ 所輕言汝等皆是 みな 仏の事	七四九
第十二	惡鬼 あうき 入其身 み の事	七四九
第十三	但惜 たんしやく 無上道 むじやうどう の事	七四九
安樂行 あんらくぎやう 品 ぼん 五箇 ご の大事 だいじ	七五〇	
第一 だいいち	安樂行 あんらくぎやう 品 ぼん の事	七五〇
第二	一切 いっさい 法空 ほうくう の事	七五〇
第三	有所難問 なんもん 不以 しやうじやう 小乘 しょうじやう 法答等 ほふたう の事	七五〇

第四 無有怖畏ふい加刀かとう杖等じょうの事 七五〇

第五 有人あるひと來欲なん難問者なんもん諸天しよてん昼夜等しやてんの事

七五〇

涌出品ゆじゅつぽん一箇だいじの大事 七五〇

第一 唱導だいだい之師しの事 七五一

卷下

壽量品じゆりやうぼん廿七箇だいじの大事 七五二

第一 南無妙法蓮華經なむみよほうれんげきやうにやらいじゆりやうぼん如來壽量品第十六の事

七五二

第二 如來秘密神通にやらいひみつじんつう之力ちからの事 七五二

第三 我實成がじつじやう已來いらい無量むりやう無邊等むへんの事 七五三

第四 如來如實知見にやらいによじつちけんさんがい三界さんがい之相しやう無有生むじやう死じの事

七五三

第五 若わ仏久住くじゆう於世ぜ薄德こんびんぐげせん之人とんじゆく不種善根ぜんこん貧窮びんぐげ下賤せん貪著とんじゆく五欲ごよく入於憶想

妄見網中わうけんむしうの事 七五四

第六 飲他毒藥くたどくやく藥發悶やくはつもん乱宛らんわん轉てん于地ちの事 七五四

第七 或失本心・或不失者之事 七五五

第八 擣・和合与子令服之事 七五五

第九 毒氣深入失本心故之事 七五五

第十 是好良藥今留在此汝可取服勿憂不差之事

七五六

第十一 自我得仏來之事 七五六

第十二 為度衆生故方便現涅槃之事 七五六

第十三 常住此說法之事 七五六

第十四 時・我及衆僧俱出靈鷲山之事 七五六

第十五 衆生見劫尽○而衆見烧尽之事

第十六 我亦為世父之事 七五七

第十七 放逸著五欲墮於惡道中之事 七五八

第十八 行道不行道之事 七五八

第十九 每自作是念之事 七五八

第二十 得入無上道等之事 七五九

第二十一 自我偈之事 七五九

七五七

第廿二 自我偈始終の事

七五九

第廿三 久遠の事

七五九

第廿四 此の寿命品の所化の国土と修行との事

七五九

第廿五 建立御本尊等の事

七六〇

第廿六 寿命品の対告衆の事

七六〇

第廿七 無作三身の事

七六〇

分別功德品三箇の大事

七六〇

第一 其有衆生聞仏寿命長遠如是乃至能生一念信解所得功德

無有限量の事

七六〇

第二 是則能信受如是諸人等頂受此經典の事

七六一

第三 仏子住此地則是仏受用の事七六一

隨喜品二箇の大事

七六一

第一 妙法蓮華經隨喜功德の事 七六一

第二 口氣無・穢優鉢華之香常從其口出の事

七六一

法師功德品ほつしくどく四箇の大事だいじ 七六二

第一だいいち 法師功德の事 七六二

第二 六根ろっこん清淨しやうじやうの事 七六一

第三 又如じやうみやうきやう淨明鏡じやうめいきやうの事 七六三

第四 是人持此經安住希有地けうの事 七六三

常不輕品じやうふきやうぼん三十箇の大事だいじ 七六三

第一だいいち 常不輕ふきやうの事 七六三

第二 得大勢菩薩たいせいぼさつの事 七六四

第三 威音王いおんの事 七六四

第四 凡有所見ぼんぬしやけんの事 七六四

第五 我深敬汝等不敢輕慢がじんきやうなんじ所以者何きやうまんゆえん汝等なんじ皆行菩薩道みなぼさつ當得作仏さぶつの事 七六四

事七六四

第六 但行ないし禮拜らいはいの事 七六四

第七 乃至遠見ふじやうの事 七六四

第八 心不淨ふじやう者むちびの事 七六五

第九 言是無智比丘むちびの事 七六五

第十 聞其所說しよせつみなしんぶくすいじゆう皆信しめうちゆうせうほうこころな伏ふく隨從しゆいじゆうの事 七六五

第十一 於四衆ふきようほさう中ちゆう說せつ法ぽう心しん無む所しよ畏おその事こと七六五

第十二 常不輕菩薩ふきようぼさつ豈いかでか異ちが人ひと乎や則すなはち我身わがみ是この事

七六六

もんほう

第十三 常不ちやうふ值たつ仏ぶつ不ふ聞もん法ぽう不ふ見けん僧そうの事こと七六六

第十四 畢つみ是また罪ざい已また復また遇ぐ常ちやう不ふ輕きやう菩薩ぼさつの事

七六六

にょらいめつこ

第十五 於にょらいめつこ如來滅後等にょらいめつこの事 七六六

第十六 此品ふきようぼさつの時の不輕菩薩ふきようぼさつの体たいの事

七六七

ふきようぼさつ らいはいじゆうしよ

第十七 不輕菩薩ふきようぼさつの礼らい拜はい住じゆう処しよの事 六七

第十八 開示かいし悟に入に礼らい拜はい住じゆう処しよの事 七六七

第十九 每みづか自作ぜん是ねん念んの文ぶん礼らい拜はい住じゆう処しよの事

七六七

がほんぎふじひひつたつたつ

第二十 我本行菩薩道がほんぎふじひひつたつたつの文ぶん礼らい拜はい住じゆう処しよの事

七六八

第卅一	生老病死礼拝住処の事	七六八
第卅二	法性礼拝住処の事	七六八
第卅三	無明礼拝住処の事	七六八
第卅四	蓮華の二字礼拝住処の事	七六八
第卅五	実報土礼拝住処の事	七六九
第卅六	慈悲の二字礼拝住処の事	七六九
第卅七	礼拝住処分真即の事	七六九
第卅八	究竟即礼拝住処の事	七六九
第卅九	法界礼拝住処の事	七六九
第卅十	礼拝住処忍辱地の事	七七〇
神力品八箇の大事	七七〇	
第一	妙法蓮華經如来神力の事	七七〇
第二	出広長舌の事	七七〇
第三	十方世界衆宝樹下師子座上の事	七七一
第四	満百千歳の事	七七一
第五	地皆六種震動其中衆生。衆宝樹下の事	

七七一

第六

娑婆是中有仏名釈迦牟尼仏の事七七二

第七

斯人行世間能滅衆生闇の事 七七二

第八

畢竟住一乘。是人於仏道決定無有疑の事

七七二

囑累品三箇の大事

だいじ

七七二

第一

從法座起の事

七七二

第二

如來是一切衆生之大施主の事七七二

第三

如世尊勅當具奉行之事 七七二

藥王品六箇の大事

だいじ

七七三

第一

不如受持此法華經乃至一四句偈の事

七七三

第二

十喻の事 七七三

第三

離一切苦一切病痛能解一切生死之縛の事

七七三

第四

火不能燒水不能漂の事 七七三

第五 諸余怨敵皆悉摧滅の事 七七四
第六 若人有病得聞是經病即消滅不老不死の事

妙音品三箇の大事 七七四
第七四

第一 妙音菩薩の事 七七四

第二 肉髻白毫の事 七七四

第三 八万四千七宝鉢の事 七七五

普門品五箇の大事 七七五

第一 無尽意菩薩の事 七七五

第二 觀音妙の事 七七六

第三 念念勿生疑の事 七七六

第四 二求兩願の事 七七六

第五 三十三身利益の事 七七七

陀羅尼品六箇の大事 七七七

第一 陀羅尼の事 七七七

第二 安爾曼爾の事 七七七

第三	鬼子母神の事	七七八
第四	受持法華名者福不可量の事	七七八
第五	皇諦女の事	七七八
第六	五番神呪の事	七七八
嚴王品三箇の大事		七七九
第一	妙莊嚴王の事	七七九
第二	浮木孔の事	七七九
第三	当品邪見即正の事	七七九
普賢品六箇の大事		七八〇
第一	普賢菩薩の事	七八〇
第二	若法華經行闍浮提の事	七八〇
第三	八万四千天女の事	七八〇
第四	是人命終為千仏授手の事	七八〇
第五	闍浮提内広令流布の事	七八一
第六	此人不久当詣道場の事	七八一
無量義經六箇の大事		七八三

第一無量義經德行品第一の事 だいいちむりょうぎきょうとくぎよう だいいち

七八三

第二量の字の事

七八四

第三義の字の事

七八四

第四処の一字の事 むりよう

七八四

第五無量義処の事 むりよう

七八四

第六無量義処の事 むりよう

七八五

普賢經五箇の大事 ふげん だいいち

七八五

第一普賢經の事 だいいちふげん

七八五

第二不断煩惱不離五欲の事 ふだんぼんのう

七八五

第三六念の事 おんぎくでん

七八五

九三 御義口伝 708P

南無妙法蓮華經 なむみょうほうれんげきょう

御義口伝に云く南無とは梵語なり此には歸命と云う、人法之れ有り人とは おんぎくでん いわ なむ ぼんご ここ きみょう こ

釈尊に歸命し奉るなり法とは法華經に歸命し奉るなり又歸と云うは迹門 しゃくそん きみょう たてまつ ほけきよう きみょう たてまつ しゃくもん

ふへんしんによ
不變真如の理に歸するなり命とは本門隨緣真如の智に命くなり歸命とは南無
みょうほうれんげきょうこれ
妙法蓮華經是なり、釈に云く隨緣不變・一念寂照と、又歸とは我等が色法
なり命とは我等が心法なり色心不二なるを一極と云うなり、釈に云く一極に
歸せしむ故に仏乗と云うと、又云く南無妙法蓮華經の南無とは梵語・
みょうほうれんげきょう かんこ
妙法蓮華經は漢語なり梵漢共時に南無妙法蓮華經と云うなり、又云く梵語
さだるま ふんだりきや そたらん
には薩達磨・芬陀梨伽・蘇多覽と云う此には妙法蓮華經と云うなり、薩は妙
なり、達磨は法なり、芬陀梨伽は蓮華なり蘇多覽は經なり、九字は九尊の仏
だるま ふんだりきや れんげ そたらん
体なり九界即仏界の表示なり、妙とは法性なり法とは無明なり無明法性一
そくぶつかい ほつしやう
体なるを妙法と云うなり蓮華とは因果の二法なり是又因果一体なり經とは
みょうほう いんが
いっさいしゅじやう ごんごおんじやう
一切衆生の言語音声を經と云うなり、釈に云く声仏事を為す之を名けて經
な ある さんぜじやうつ
と為すと、或は三世常恒なるを經と云うなり、法界は妙法なり法界は蓮華
ほっかい れんげ はちやう
なり法界は經なり蓮華とは八葉九尊の仏体なり能く能く之を思う可し已上。

伝云序品七箇の大事 じよほん だいじ

方便品八箇の大事 ほうべん だいじ

譬喩品九箇の大事 ひゆほん だいじ

信解品六箇の大事 しんげ だいじ

藥草喩品五箇の大事授記品四箇の大事 やくそうゆほん だいじ じゆき だいじ

化城喩品七箇の大事 けじょうゆほん だいじ

五百品三箇の大事 ごうとうほん だいじ

人記品二箇の大事 にんきほん だいじ

法師品十六箇の大事 ほうしほん だいじ

宝塔品二十箇の大事 ほうとうほん だいじ

提婆品八箇の大事 だいば だいじ

勸持品十三箇の大事 かんじほん だいじ 安樂行品五箇の大事涌出品一箇の大事 あんらくぎょうほん だいじ ゆうしゅつぽん だいじ

壽量品二十七箇の大事分別功德品三箇の大事隨喜品二箇の大事 じゆりょうほん だいじ ぶんべつくどく だいじ ずいぎ だいじ

法師功德品四箇の大事不輕品三十箇の大事神力品八箇の大事 ほっしくとく だいじ ぶけい だいじ じんりきほん だいじ

囑累品三箇の大事藥王品六箇の大事妙音品三箇の大事 ぞくろい だいじ やくおうほん だいじ せうおん だいじ

普門品五箇の大事陀羅尼品六箇の大事嚴王品三箇の大事 ふもんほん だいじ だらいにほん だいじ だんおう だいじ

普賢品六箇の大事無量義經六箇の大事普賢經五箇の大事 ふげん だいじ むりょうぎきょう だいじ ぶげん だいじ

已上二百三十一箇条也此の外に別伝之有り具さに之を記し訖ぬ。
べつでんこれあ つぶ これ しる

御義口伝卷上
おんぎくでん

序品七箇の大事 じよぼん

第一如是我聞の事 だいいちによぜがもん 文句の一に云く如是とは所聞の法体を挙ぐ我聞とは能持 もんく いわによぜ しょもん ほつたい あ のうじ

の人なり記の一に云く故に始と末と一經を所聞の体と為す。 いわ ゆえ いっきよう しょもん な

御義口伝に云く所聞の同は名字即なり法体とは南無妙法蓮華經なり能持 おんぎくでん いわ しょもん みようじそく ほつたい な むみようほうれんげきよう のうじ

とは能の字之を思う可し、次に記の一の故始末一經の釈は始とは序品なり これ べ こしまつ いっきよう じよぼん

末とは普賢品なり法体とは心と云う事なり法とは諸法なり語法の心と云 ふげん ほつたい しょほう ことば

う事なり諸法の心とは妙法蓮華經なり、伝教云く法華經を讃むると雖も しよほう みようほうれんげきよう でんぎよういわ ほけきよう ほ いえど

還つて法華の心を死すと、死の字に心を留めて之を案ず可し不信の人は かえ ほつけ ころ とど これ べ ふしん

如是我聞の聞には非ず法華經の行者は如是の体を聞く人と云う可きなり、 によぜがもん あら ほけきよう ぎようじや こ べ

爰を以て文句の一に云く「如是とは信順の辞なり信は則ち所聞の理會し ここを もんく いわによぜ しんじゆん すなわ しょもん え

順は則ち師資の道成ず」と、所詮日蓮等の類を以つて如是我聞と云う したがう すなわ じよう しよせん にちれん たぐい によぜがもん

べきなり云云。

第二阿若 陳如の事 疏の一に云く・陳如は姓なり此には火器と翻ず婆羅門

種なり其の先火に事こつ此れに従て族に命く、火に二義有り照なり暁な

り照は則ち聞生ぜず焼は則ち物生ぜず・此には不生を以て姓と為す。

御義口伝に云く火とは法性の智火なり、火の二義とは一の照は隨縁真如

の智なり一の焼は不變真如の理なり照焼の二字は本・迹二門なり、さて

火の能作としては照焼の二徳を具うる南無妙法蓮華經なり、今日蓮等の

類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは生死の闇を照し晴して涅槃の智火明了

なり生死即涅槃と開覺するを照則闇不生とは云うなり、煩惱の薪を焼い

て菩提の慧火現前するなり煩惱即菩提と開發するを焼別物不生とは云う

なり、爰を以て之を案ずるに陳如は我等・法華經の行者の煩惱即菩提・

生死即涅槃を顯したり云云。

第三阿闍世王の事 文句の一に云く阿闍世王とは未生怨と名く、又云く大經

に云く阿闍世世とは末生怨と名く又云く大經に云く阿闍を不生と名く世とは怨と名く。

御義口伝に云く日本国の一切衆生は阿闍世王なり既に諸仏の父を殺し法華經の母を害するなり、無量義經に云く諸仏の国王と是の經の夫人と和合して共に是の菩薩の子を生む、謗法の人・今は母の胎内に処しながら法華の怨敵たり豈末生怨に非ずや、其の上・日本国当世は三類の強敵なり世者名怨の四字に心を留めて之を案ず可し。

日蓮等の類い此の重罪を脱れたり謗法の人人・法華經を信じ釈尊に歸し奉らば何ぞ已前の殺父殺母の重罪滅せざらんや、但し父母なりとも法華經不信の者ならば殺害す可きか、其の故は權教の愛を成す母・方便眞實を明めざる父をば殺害す可しと見えたり、仍て文句の二に云く「觀解は食愛の母・無明の父・此れを害する故に逆と称す逆即順なり非道を行じ

て仏道に通達す」と、観解とは末法・当今は題目の観解なる可し子として
父母を殺害するは逆なり、然りと雖も法華經不信の父母を殺しては順とな
るなり愛を以て逆即是順と釈せり、今日蓮等の類いは阿闍世王なり其の故
は南無妙法蓮華經の劍を取つて食愛・無明の父位を害して教主釈尊の
如く仏身を感得するなり、貧愛の母とは勸持品三類の中第一の俗衆なり
無明の父とは第二・第三の僧なり云云。

第四仏所護念の事 文句の三に云く仏所護念とは無量義処は是れ仏の証得し
給う所是の故に如来の護念し給う所なり、下の文に仏自住大乘と云えり
開示せんと欲すと雖も衆生の根鈍なれば久しく斯の要を黙して務て速か
に説き給わず故に護念と云う記の三に云く昔未だ説かず故に之を名けて護
と為す法に約し機に約して皆護念する故に乃至機仍お未だ発せず隠して説
かず故に護念と言う、乃至末説を以ての故に護し未暢を以ての故に念ず、

久默くもくと言いうは昔いより今いまに至いたるなり斯し要等ようとうの意こ之を思おもうて知しる可べし。

御義口伝おんぎくでんに云いく此この護念ごねんの体たいに於おては本・迹お二門首題にもんしゅだいの五字ごじなり、此この

護念ごねんに於おて七種しちしゆの護念ごねん之れ有あり一ひとには時に約やくし二ふたには機きに約やくし三さんには人に

約やくし四よには本・迹おに約やくし五ごには色心しきしんに約やくし六ろくには法体ほふたいに約やくし七しちには信心しんじんに

約やくするなり云云いまたちれん、今日蓮等こんにんの類たぐいは護念ごねんの体たいを弘ひろむるなり、一ひとに時に約やくす

るとは仏ぼつ・法華經ほふけきやうを四十余年よんじゅううねんの間未いまだ時いた至いたらざるが故ゆゑに護念ごねんし給たまうなり、

二ふたに機きに約やくするとは破法不信はほうふしん故墜こつ於お三惡道さんあくどうの故ゆゑに前四十余年よんじゅううねんの間未いまだ

之これを説しかざるなり、三さんに人に約やくするとは舍利弗しゃりほつに對たいして説しかんが為ためなり、

四よに本・迹おに約やくするとは護ごを以もて本ほんと為なし念ねんを以もて迹あとと為なす、五ごに色心しきしんに

約やくするとは護ごを以もて色しきと為なし念ねんを以もて心しんと為なす、六ろくに法体ほふたいに約やくするとは

法体ほふたいとは本有常住ほんぬじやうじやうなり一切衆生いっさいしゆじやうの慈悲心じひしん是これなり、七しちに信心しんじんに約やくするとは

信心しんじんを以もて護念ごねんの本ほんと為なすなり、所詮日蓮等しよせん にちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむ みやうほうれんげきやうと

とな たてまつ しかしなが ごねん
唱え奉るは 併 ら護念の体を開くなり、護とは仏見なり、念とは仏知な

り此の知見の二字本・迹両門なり仏知を妙と云うなり仏見を法と云うなり

此の知見の体を修行するを蓮華と云うなり、因果の体なり因果の言語は

経なり 加之 法華經の行者をば三世の諸仏護念し給うなり、普賢品に云く

一者為諸仏護念と護念とは妙法蓮華經なり諸仏の法華經の行者を護念し

たもうは妙法蓮華經を護念したもうなり機法一同護念一体なり、記の三

の釈に約法約機・皆護念故と云うは此の意なり、又文句の三に云く

「仏所護念とは前の地動瑞を決定するなり地動は六番破惑を表するなり、

妙法蓮華經を受持する者は六番破惑疑い無きなり」神力品に云く「於我

滅度後・応受持斯經・是人於仏道決定無有疑」仏自住大乘とは是なり、

又た一義に仏の衆生を護念したもう事は護とは唯我一人能為救護・念と

は毎自作是念是なり、普賢品に至つて一者為諸仏護念と説くなり、日蓮は

生年三十二より南無妙法蓮華經を護念するなり。

第五下至阿鼻地獄の事

おんぎくでん いわ じゅつかいかいじょう
御義口伝に云く十界皆成の文なり提婆が成仏・此の文にて分明なり、
ほうとうぼん だいば じょうぶつ
宝塔品の次に提婆が成仏を説く事は二箇の諫曉の分なり、提婆は此の文
じょうぶつ びやくこう
の時成仏せり此の至の字は白毫の行く事なり白毫の光明は南無
みょうほうれんげきょう
妙法蓮華經なり、上至阿迦尼咤天は空諦・下至阿鼻地獄は仮諦・白毫の
ちゅうだうぶつ じゅつかいどうじ じょうぶつ おうぶつ
光は中道なり、之に依つて十界同時の成仏なり天王仏とは宝号を送るま
でなり、去て依正二報の成仏の時は此の品の下至阿鼻地獄の文は依報の
じょうぶつ と だいば だつた てんのうによらい しょうほう じょうぶつ
成仏を説き提婆達多の天王如来は正報の成仏を説く依報正報共に妙法
じょうぶつ いまにちれん たく しょうりょう
の成仏なり、今日蓮等の類い聖靈を訪う時・法華經を讀誦し南無
みょうほうれんげきょう とな たてまつ だいもく むげん そくしんじょうぶつ
妙法蓮華經と唱え奉る時・題目の光無間に至りて即身成仏せしむ、廻向
こ おこ ほうけふしん だざいむげん だいもく
の文此れより事起るなり、法華不信の人は墮在無間なれども、題目の光を

以て孝子法華の行者として訪わんに豈此の義に替わる可しや、されば
下至阿鼻地獄の文は仏・光を放ちて提婆を成仏せしめんが為なりと日蓮
推知し奉るなり。

第六導師何故の事 疏に云く良に以みれば説法入定して能く人を導く既に

導師と称す。

御義口伝に云く此の導師は釈尊の御事なり、説法とは無量義經・入定

とは無量義經三昧に入りたもう事なり、所詮導師に於て二あり惡の導師善

の導師之れ有るなり、惡の導師とは法然・弘法・慈覺・智証等なり善の

導師とは天台・伝教等是なり、末法に入つては今日蓮等の類いは善の導師

なり、説法とは南無妙法蓮華經・入定とは法華受持の決定心に入る事

なり能導於人の能の字に心を留めて之を案ず可し涌出品の唱導之師と同じ

事なり、所詮日本国の一切衆生を導かんが為に説法する人はなり云云。

第七天鼓自然鳴の事 疏に云く天鼓自然鳴は無間・自説を表するなり。

御義口伝に云く此の文は此土・他土の瑞同じきことを頌して長出せり、

無間・自説とは釈迦如来・妙法蓮華經を無間・自説し給うなり、今日蓮

等の類いは無間・自説なり念仏・無間・禅天魔・真言亡国・律国賊と喚ぶ

事は無間・自説なり三類の強敵来る事は此の故なり、天鼓とは南無

妙法蓮華經なり自然とは無障礙なり鳴とは唱うる所の音声なり、一義に

一切衆生の語言音声を自在に出すは無間・自説なり自説とは獄卒の罪人

を呵責する音・餓鬼飢饉の音声等・一切衆生の貪・瞋・癡の三毒の念念

等を自説とは云うなり此の音声の体とは南無妙法蓮華經なり、本・迹兩

門妙法蓮華經の五字は天鼓なり天とは第一義天なり自説とは自受用の説法

なり、記の三に云く無間・自説を表するとは方便の初に三昧より起つて

舍利弗に告げ広く歎じ略して歎ず、此土他土言に寄せ言を絶す若は境若は

智此乃ち一經すなわいつきようの根本五時の要津こんぽんなり此の事輕からずと、此釈に一經いつきようの根源こんげん五字ごじの要津ようしんとは南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげき是なり云云。

方便品八箇の大事ほうべん

713P

第一方便品の事だいいちほうべん 文句の三に云く方とは秘もんくなり便とは妙まさなり妙に方に達する

すなわ

に即ち是真の秘ないえりなり、內衣裏の無価の珠たまを点ずるに王の頂上ちやうじやうの唯一ただ珠有る

なく

と二無なくく別無し、客作かくさの人を指すに是長者ちやうじゃの子にして亦二無なくく別無し、

ごと

此の如きの言は是秘なんし是妙ことなり、經の唯我知是相じゅうぼう・十方やくねん仏亦然ふしゆせつ・止止不須説ふしゆせつ

なんし

・我法妙難思ことの如し故に秘ゆえを以て方を釈しゃくし妙を以て便を釈しゃくす正まさしく是これ今いま

ゆえ

の品の意ほうべんなり故に方便品ほうべんと言いうなり記の三に云く第三に秘妙いに約しゃくして釈しゃくす

ゆえ

るとは妙を以ての故そくに即そくなり円を以て即そくと為なし三を不即なと為なす故ゆえに更に不

そく

即そくに對して以て即しゃくを釈しゃくす。

おんぎくでん

御義口伝いに云く此の釈しゃくの中に一珠えりじゆとは衣裏珠そくちやうじやうしゆ・即頂上珠いなり、客作かくさの人

と長者の子と全く不同之無し、所詮謗法不信の人は体外の権にして法用

能通の二種の方便なり爰を以て無二無別に非るなり、今日蓮等の類南無

妙法蓮華經と唱え奉るは是秘妙方便にして体内なり故に妙法蓮華經と題

して次に方便品と云えり、妙樂の記の三の釈に本疏の即是真秘の即を

以円為即と消釈せり、即は円なれば法華經の別名なり即とは凡夫即極・

諸法実相の仏なり、円とは一念三千なり即と円と言は替れども妙の別名な

り、一切衆生実相の仏なれば妙なり不思議なり謗法の人今之を知らざる

故に之を秘と云う、又云く法界三千を秘妙とは云うなり秘とはきびしきな

り三千羅列なり是より外に不思議之無し、大謗法の人たりと云うとも

妙法蓮華經を受持し奉る所を妙法蓮華經方便品とは云うなり今末法に入

つて正しく日蓮等の類の事なり、妙法蓮華經の体内に爾前の入法を入る

を妙法蓮華經方便品とは云うなり、是を即身成仏とも如是本末究竟等と

も説く、又方便とは十界の事なり又は無明なり妙法蓮華經は十界の
頂上なり又は法性なり煩惱即菩提・生死即涅槃是なり、以円為即とは
一念三千なり妙と即とは同じ物なり一字の一念三千と云う事は円と妙とを
云うなり円とは諸法実相なり、円とは釈に云く円を円融・円満に名くと
円融は迹門・円満は本門なり又は止観の二法なり又は我等が色心の二法
なり一字の一念三千とは慧心流の秘蔵なり、口は一念なり員は三千なり
一念三千とは不思議と云う事なり、此の妙は前三教に未だ之を説かず故に
秘と云うなり、故に知ぬ南無妙法蓮華經は一心の方便なり妙法蓮華經は
九識なり十界は八識已下なり心を留めて之を案ず可し、方とは即十方・
十方は即十界なり便とは不思議と云う事なり云云。

第二諸仏智慧甚深無量其智慧門の事 文句の三に云く先ず実を歎じ次に権を
歎ず、実とは諸仏の智慧なり三種の化他の権実に非ず故に諸仏と云う自行

の実を顯す故に智慧と云う、此の智慧の体即ち一心の三智なり、甚深無量
とは即ち称歎の辞なり仏の実智の豎に如理の底に徹することを明す故に
甚深と云う、横に法界の辺を窮む故に無量と云う無量甚深にして豎に高く
横に広し、譬えば根深ければ則ち条茂く源遠ければ則ち流長きが如し実智
既に然り権智例して爾り云云、其智慧門は即ち是れ権智を歎ずるなり蓋し
是れ自行の道前の方便進趣の力有り故に名けて門と為す、門より入つて道
中に到る道中を實と称し道前を權と謂うなり、難解難入とは權を歎ずるの
辞なり不謀にして了し無方の大用あり、七種の方便測度すること能わず
十住に始めて解す十地を入と為す初と後とを挙ぐ中間の難示難悟は知る
可し、而るに別して声聞・緣覺の所不能知を挙ぐすることは執重きが故に別
して之を破するのみ、記の三に云く豎高横広とは中に於て法譬合あり此れ
を以て後を例す、今實を釈するに既に周く横豎を窮めたり下に權を釈する

に理深極なるべし、下に当に權を釈すべし予め其の相を述す故に云云と
註す、其智慧門とは其とは乃ち前の実果の因智を指す若し智慧即門ならば
門は是れ權なり若し智慧の門ならば智即ち果なり、蓋し是等とは此の中に
すべからじゆうち
須く十地を以て道前と為し妙覺を道中と為し証後を道後と為すべし、故に

知んぬ文の意は因の位に在りと。

御義口伝に云く此の本末の意分明なり、中に豎に高く横に広しとは豎は
本門なり横は迹門なり、根とは草木なり草木は上へ登る此れは迹門の意
なり、源とは本門なり源は水なり水は下へくだる此れは本門の意なり、
条茂とは迹門十四品なり流長とは本門十四品なり智慧とは一心の三智な
り門とは此の智慧に入る処の能入の門なり三智の体とは南無妙法蓮華經
なり門とは信心の事なり、愛を以て第二の巻に以信得入と云う入と門とは
之れ同じきなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るを智慧とは

云うなり、譬喩品に云く「唯有一門」と門に於て有門・空門・亦有亦空門

・非有非空門あるなり、有門は生なり空門は死なり亦有亦空門は生死一念

なり非有非空門は生に非ず死に非ず有門は題目の文字なり空門は此の五字

に方法を具足して一方にとどこうらざる義なり、亦有亦空門は五字に具足

する本・迹なり非有非空門は一部の意なり、此の内証は法華已前の二乗

の智慧の及ばざる所なり、文句の三に云く「七種の方便測度すること能わ

ず」と、今日蓮等の類いは此の智慧に得入するなり、仍て偈頌に

除諸菩薩衆信力堅固者と云うは我等行者の事を説くなり云云。

第三唯以一大事因縁の事 文句の四に云く一は即ち一実相なり五に非ず三に

非ず七に非ず九に非ず故に一と言うなり、其の性広博にして五三七九より

博し故に名けて大と為す、諸仏出世の儀式なり故に名けて事と為す、衆生

に此の機有つて仏を感じ故に名けて因と為す、仏機を承けて而も応ず故に

名けて縁となす、是を出世の本意と為す。

御義口伝に云く一とは法華經なり大とは華嚴なり事とは中間の三昧なり、

法華已前にも三諦あれども碎けたる珠は宝に非ざるが如し云云、又云く一

とは妙なり大とは法なり事とは蓮なり因とは華なり縁とは経なり云云、又

云く我等が頭は妙なり喉は法なり胸は蓮なり胎は華なり足は経なり此の

五尺の身妙法蓮華經の五字なり、此の大事を釈迦如来四十余年の間隱密

したもうなり今經の時説き出したもう此の大事を説かんが為に仏は出世

したもう我等が一身の妙法五字なりと開仏知見する時即身成仏するなり、

開とは信心の異名なり信心を以て妙法を唱え奉らば聽て開仏知見するな

り、然る間信心を開く時南無妙法蓮華經と示すを示仏知見と云うなり、

示す時に靈山浄土の住处と悟り即身成仏と悟るを悟仏知見と云うなり、

悟る当体・直至道場なるを入仏知見と云うなり、然る間信心の開仏知見

を以て正意とせり、入にゅうぶつちけん仏知見の入の字は迹門しやくもんの意は実相じつそうの理内に歸入きにゅうするを入と云うなり本門ほんもんの意は理即本覺りそくほんかくと入るなり、今日蓮等いまにちれんの類たぐい南無なむ妙法蓮華經みょうほうれんげきょうと唱となえ奉たてまつる程の者は宝塔ほうとうに入るなり云云、又云いわく開かい仏知見ぶつちけんの仏しよくとは九界所具ぶつがいの仏界ちけんなり知見みょうほうとは妙法の二字止觀しかんの二字寂じやく照しよくの二徳じやくしよく生死しよくの二法しきしんいんがなり色心因果しきしんいんがなり、所詮知見しよせんちけんとは妙法みょうほうなり九界所具しよくの仏心ぶつしんをほけききょう法華經の知見ちけんにて開く事なり、爰ここをを以て之これを思うに仏とは九界の衆生しよくじよくの事なり、此の開覺かいかく顯あらわれて今身こんじんより仏身ぶつしんに至るまで持つや否いなやと示しす処ところが妙法みょうほうを示しす示じ仏知見ぶつちけんと云うなり、師弟感応していかんのうして受け取る時にやがとうむい如我等無異にやがとうむいと悟ごるを悟ご仏知見ぶつちけんと云うなり、悟ごつて見れば法界三千ほつかいさんぜんの己ここ己ここの当体とうたい法華經ほけききょうなり此の内証ないしよくに入るを入にゅうぶつちけん仏知見ぶつちけんと云うなり秘へす可べし云云、又云いわく四し仏知見ぶつちけんとは八相ちふつちけんなり開かいとは生の相しよくなり入にゅうぶつちけんとは死の相しよくなり中間ちゆうげんの示悟しよくは六相ろくしよくなり下天託胎等じふつちけんは示し仏知見ぶつちけんなり出家降魔しよく成道じよく轉法輪等じよくは悟ご仏知見ぶつちけんなり、權教こんききょう

の意は生死しやうじを遠離おんりする教なるが故ゆえに四仏知見しふつちけんに非あらざるなり、今經の時生死しやうじ
の二法は一心いつしんの妙用有無みやうゆうの二道にどうは本覺ほんがくの真徳まいたくと開覺かいかくするを四仏知見しふつちけんと云
うなり、四仏知見しふつちけんを以て三世さんぜの諸仏しよぶつは一大事いちだいじと思召しめし世に出現しゆつげんしたもう
なり、此の開仏知見かいふつちけんの法華經ほふきやうを法然ほうねんは捨閉閣しゃへいかく抛ほうと云い弘法大師こうぼうだいしは第三いの劣
戲論けろんの法とののしれり、五仏道同ぶつどうの舌をきる者に非あらずや、慈覺大師じかくだいし・智証ちしやう
等は惡子に劍を与えて我が親おやの頭こゝをきらする者に非あらずや云云、又云く一
とは中諦ちゆうたゐ・大とは空諦くうたゐ・事とは仮諦けたいなり此の円融えんゆうの三諦さんたいは何物なにものぞ所謂いわゆる
南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやう是なり、此の五字日蓮出世ごじにちれんしゆつせの本懷ほんかいなり之これを名けて事なと為す、
日本にほんの一切いっさい衆生しゆじやうの中に日蓮にちれんが弟子でし・檀那だんなと成る人は
衆生有此機感しゆじやうしきかん故名為因よきみやういんの人なり、夫それが為ために法華經ほふきやうの極理ごくりを弘ひろめたるは
承機而応しやうきにおう故名な為緣みよふいえんに非あらずや、因げしゆは下種げしゆなり緣しゆくえんは三五しゆくえんの宿緣しゆくえんに歸するなり、
事いちねんさんぜんの一念いちねん三千にちれんは、日蓮だいにが身に當りての大事だいじなり、一とは一念いちねん・大とは三千さんぜん

なり此の三千ときたるは事の因縁なり事とは衆生世間・因とは五陰世間

・縁とは国土世間なり、国土世間の縁とは南閻浮提は妙法蓮華經を弘む

べき本縁の国なり、經に云く「閻浮提内広令流布使不断絶」是なり云云。

第四五濁の事 文句の四に云く劫濁は別の体無し劫は是長時・刹那は是短時

なり、衆生濁は別の体無し見慢果報を攬る煩惱濁は五鈍使を指て体と為し

見濁は五利使を指て体と為し命濁は連持色心を指して体と為す。

御義口伝に云く日蓮等の類いは此の五濁を離るるなり、我此土安穩なれば

劫濁に非ず実相無作の仏身なれば衆生濁に非ず・煩惱即菩提・生死即涅槃

の妙旨なれば煩惱濁に非ず・五百塵点劫より無始本有の身なれば命濁に

非ざるなり、正直捨方便・但説無上道の行者なれば見濁に非るなり、

所詮南無妙法蓮華經を境として起る所の五濁なれば、日本国の一切衆生

五濁の正意なり、されば文句四に云く「相とは四濁増劇にして此の時に聚在

せり瞋^{しんに}恚^い増劇^{しんげき}にして刀兵^{とうひやう}起り貪欲^{とんよく}増劇^{しんげき}にして飢餓^{きが}起り愚癡^{ぐち}増劇^{しんげき}にして疾疫^{しつえき}
起り三災^{さんさい}起るが故^{ゆえ}に煩惱^{ぼんのう}倍^{ますます}隆^{しよ}んに諸見^{しよ}転^{うた}た熾^{さか}なり「經^{きやう}に如来^{にょらい}現在^{げんざい}
猶多^{ゆた}怨嫉^{おんしつ}・況滅^{きやうめつ}度後^{どご}と云^いう是^{これ}なり、法華^{ほけ}經^{きやう}不信^{ふしん}の者^{もの}を以^{もつ}て五濁^{ごじよく}障重^{しやうじゆう}の者^{もの}
とす經^{きやう}に云^いく、以^{もつ}て五濁^{ごじよく}惡世^{あくせ}但樂^{ぎやうちやくしよ}著^{しよ}諸欲^{しよじよく}如是^{にやぜ}等衆^{しゆじゆう}生終^{ふぐ}不^ぶ求^{ぶつ}仏道^{ぶつどう}「云云^{ふつどう}、仏道^{ぶつどう}
とは法華^{ほけ}經^{きやう}の別名^{ほつてん}なり天台^{てんだい}云^いく、「仏道^{ぶつどう}とは別^{べつ}して今^{こん}經^{きやう}を指^さす」と。
第五^{びく}比丘^{びく}丘尼^{きうに}有懷^{ぞうじやうまん}増上^{うば}慢^{そく}優婆塞^{がまん}我慢^{うばい}優婆夷^{ふしん}不信^{ふしん}の事^{こと} 文句^{もんく}の四^しに云^いく
上慢^{じやうまん}と我慢^{がまん}と不信^{ふしん}と四衆^{ししじゆう}通^{つう}じて有^あり、但^{ただ}し出家^{しゆつ}の二衆^{にじゆう}は多く道^{だう}を修^{しゆ}し禅^{ぜん}
を得^えて謬^{あやまつ}て聖果^{おほ}と謂^いひ偏^{ひとえ}に上慢^{じやうまん}を起^{おこ}す、在俗^{ざいぞく}は矜高^{けいかう}にして多く我慢^{がまん}を起^{おこ}
す女人^{にょにん}は智浅^{ちせん}くして多く邪僻^{じゃへき}を生^みず自^{みず}ら其^その過^かを見^みずとは三失心^{さんしつしん}を覆^{おほ}う、
疵^{きず}を蔵^かくし徳^{とく}を揚^あげて自^{みず}ら省^{かえり}る事^{こと}能^{あた}わざるは是^これ無慙^{むざん}の人^{ひと}なり、若^もし
自^{みず}ら過^かを見^みれば是^これ有羞^{うしゆう}の僧^{しやう}なり記^きの四^しに云^いく疵^{きず}を蔵^かくす等^らとは三失^{さんしつ}を
積^{しやく}するなり疵^{きず}を蔵^かくし徳^{とく}を揚^あぐは上慢^{じやうまん}を積^{しやく}す、自^{みず}ら省^{かえり}る事^{こと}能^{あた}わざるは

がまん 我慢を積す、無慙の人とは不信を積す、若し自ら過を見るは此の三失無し
いまだ果を証せずと雖も且らく有羞と名く。

おんぎくでん 御義口伝に云く此本末の積の意は五千の上慢を積するなり委くは本末を
見る可きなり、比丘・比丘尼の二人は出家なり共に増上慢と名く疵を蔵く
し徳を揚ぐるを以て本とせり、優婆塞は男なり我慢を以て本とせり優婆夷
は女人なり無慙を以て本とせり、此の四衆は今・日本国に盛んなり経には
其数有五千と有れども日本国に四十九億九万四千八百廿八人と見えたり、
在世には五千人・仏の座を立てり今末法にては日本国の一切衆生悉く日蓮
が所座を立てり、比丘比丘尼増上慢とは道隆・良観等に非ずや又鎌倉中
の比丘尼等に非ずや、優婆塞とは最明寺優婆夷とは上下の女人に非ずや
敢て我が過を知る可からざるなり、今日蓮等の類いを誹謗して悪名を立
つ豈不自見其過の者に非ずや大謗法の罪人なり法華の御座を立つ事疑無

き者なり、然りと雖も日蓮に値う事は併ら礼仏而退の義なり此の礼仏而退
は輕賤の義なり全く信解の礼退に非ざるなり此等の衆は於戒有欠漏の者
なり、文句の四に云く、「於戒有欠漏とは律義失有るをば欠と名け定共道共
とがあ失有るをば漏と名く」と此の五千の上慢とは我等所具の五住の煩惱なり、
いまほけきょうあ たてまつじまんそくほつかい れいぶつにたい
今法華經に値い奉る時慢即法界と開きて礼仏而退するを仏威徳故去と云う
なり、仏とは我等所具の仏界なり威徳とは南無妙法蓮華經なり、故去と
は而去不去の意なり普賢品の作礼而去之を思ふ可きなり、又云く五千の退
座と云う事・法華の意は不退座なり其の故は諸法実相略開三顯一の開悟
なり、さて其の時は我慢増上慢とは慢即法界と開きて本有の慢機なり、
其数有五千とは我等が五住の煩惱なり若し又五住の煩惱無しと云うは法華
の意を失いたり、五住の煩惱有り乍ら本有常住ぞと云う時其数有五千と
説くなり、断惑に取り合わず其の儘本有妙法の五住と見れば不自見其過

と云うなり、さて於戒有欠漏とは小乗 權教の対治 衆病の戒法にては無
きなり是名持戒の妙法なり故に欠漏の当体其の儘是名持戒の体なり、然る
に欠漏を其の儘本有と談ずる故に護惜其瑕疵とは説くなり、元より一乗
の妙戒なれば一塵含法界一念遍十方する故に是小智已出と云うなり、糟糠
とは塵塵法法・本覺の三身なり故にすくなき福德の当体も本覺無作の覺体
なり、不堪受是法とは略開の諸法実相の法体を聞きて其の儘開悟するなり
さて身子尊者鈍根のために分別解説したまえと請う広開三の法門をば不堪
受是法と説く、さて法華の実義に歸りて見れば妙法の法体は更に能受所
受を忘るるなり不思議の妙法なり、本法の重を悟りて見る故に此衆無枝葉
と云うなり、かかる内証は純一実相・実相外更無別法なれば唯有諸貞実
なり所詮貞実とは色心を妙法と開く事なり、今日蓮等の類い南無
妙法蓮華經と唱え奉る處を唯有諸貞実と説くなり、諸とは諸法実相の仏

なり諸は十界なり貞実は十界の色心を妙法と云うなり今經に限る故に
唯と云うなり、五千の上慢の外全く法華經之れ無し五千の慢人とは我等
が五大なり五大即妙法蓮華經なり、五千の上慢は元品の無明なり故に
礼仏而退なり此れは九識八識六識と下る分なり流轉門の談道なり、仏威徳
故去とは還滅門なり然らば威徳とは南無妙法蓮華經なり本迷本悟の全体
なり能く能く之を案ず可し云云。

第六如我等無異如我昔所願の事 疏に云く因を挙げて信を勧むと。

御義口伝に云く我とは釈尊・我実成仏久遠の仏なり此の本門の釈尊は
我等衆生の事なり、如我の我は十如是の末の七如是なり九界の衆生は始
の三如是なり我等衆生は親なり仏は子なり父子一体にして本末究竟等な
り、此の我等を寿量品に無作の三身と説きたるなり、今日蓮等の類
南無妙法蓮華經と唱うる者はなり、爰を以て之を思うに釈尊の惣別の二

願とは我等衆生の為に立てたもう処の願なり、此の故に南無妙法蓮華經
と唱え奉りて日本国の一切衆生を我が成仏せしめんと云う所の願併ら
如我昔所願なり、終に引導して己身と和合するを今者已満足と意得可きな
り、此の今者已満足の已の字すでにと読むなり何の処を指して已にとは
説けるや、凡そ所釈の心は諸法実相の文を指して已にとは云えり、爾
と雖も当家の立義としては南無妙法蓮華經を指して今者已満足と説かれ
たりと意得可きなり、されば此の如我等無異の文肝要なり、如我昔所願は
本因妙如我等無異は本果妙なり妙覺の釈尊は我等が血肉なり因果の
功德骨髓に非ずや、釈には拳因勸信と拳因は即ち本果なり、今日蓮が唱う
る所の南無妙法蓮華經は末法一万年の衆生まで成仏せしむるなり、豈
今者已満足に非ずや、已とは建長五年四月廿八日に初めて唱え出す処の
題目を指して已と意得可きなり、妙法の大良薬を以て一切衆生の無明の

大病を治せん事うたがい疑い無きなり此れを思い遣る時まんぞくんば満足なり満足とは
成仏じょうぶつと云う事なり、釈いわに云く、円えんゆうは円融えんまん・円満とんに名け頓とんごくは頓極頓足なすに名く
と之これを思へう可べし云云。

第七しよ於諸菩薩しよぼさつ中正しようじきしやほうべん捨方便もんくの事 文句もんくの四いに云く於諸菩薩しよぼさつ中の下の三句は
正まさしく実あらわを顯あらわすなり、五乗こは是れ曲たにして直ただちに非あらず通別へんぼうは偏傍へんぼうにして正に
非あらず今皆彼の偏曲いまみなを捨てて但正直しようじきの一道しようじきを説くなり。と。

御義口伝おんぎくでんに云く此の菩薩いとは九界ぼさつの第九こに居ぼさつしたる菩薩いっさいししじようなり又一切衆生いっさいししじようを
菩薩ぼさつと云うなり今日蓮等いまにちれんの類たぐいなり、又諸天善神等しよてんぜんじん迄こも是れ菩薩ぼさつなり正直しようじき
とは煩惱ぼんのう即菩提しようじそく・生死しようじそく涅槃ねはんなり、さて一道ひろとは南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきなり今
末法まつぽうにして正直しようじきの一道ひろを弘ひろむる者は日蓮等にちれんの類たぐいに非あらずや。

第八当来世惡人聞仏説とうらいせあくにん ぶつせつついちじようめいわく一乘迷惑不信受破法墮惡道しんじゆはほうだあくどうの事

御義口伝おんぎくでんに云く当来世とうらいせとは末法まつぽうなり惡人あくにんとは法然ほうねん・弘法こうぼう・慈覺じかく・智証ちしやう等な

り、仏とは日蓮等の類いなり一乗とは妙法蓮華經なり不信の故に三惡道に墮す可きなり。

譬喩品九箇の大事

第一譬喩品の事 文句の五に云く譬とは比況なり喩とは曉訓なり大悲息まず

巧智無辺なれば更に樹を動かして風を訓え扇を挙げて月を喩すと。

御義口伝に云く大悲とは母の子を思ふ慈悲の如し今日蓮等の慈悲なり、

章安云く彼の為に惡を除くは即是れ彼の親と、巧智とは南無妙法蓮華經

なり諸宗無得道の立義なり巧於難問答の意なり更とは在世に次で滅後の

事と意得可きなり、樹を動すとは煩惱なり風を訓るとは即菩提なり扇を

挙ぐとは生死なり月を喩すとは即涅槃なり、今日蓮等の類い南無

妙法蓮華經と唱え奉る時大白牛車に乗じて直至道場するなり、記の五に

云く「樹と扇と風と月とは唯円教の理なり」と又云く「法説の実相は何ぞ

隠れ何ぞ顕あらわれんや長風や息むこと摩なく空月くうげつ常に懸かれり」と此釈これ之を思おもう可べし、
隠おんとは死なり顕けんとは生なり長風やとは我等われらが息なり空月くうげつとは心月しんなり法華ほっけの
生死しやうじとは三世常恒さんぜじやうこうにして隠顯おんけん之無なし我等われらが息風しきふうとは吐とく処ところの言語ごんごなり是
南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうなり、一心法界いつしんほっかいの覺月かくげつ常住じやうじゆうにして懸かれり是これを指さして唯ただ
円教えんきやうの理りと釈しゃくせり円えんとは法界ほっかいなり教きやうとは三千羅列さんぜんなり理りとは実相じつそうの一理
なり云云。

第二即起合掌がつしやうの事 文句もんくの五ごに云いく外義じやうぎを敍しよするとは即起合掌がつしやうは身の領解りやうげ
と名なく昔こんじつは権実こんじつ二にと為なす 掌たなこころの合あわざるが如ごとし、今は権即実こんそくじつと解とる二にの
掌たなこころの合あするが如ごとし、向仏ぶつじんとは昔ふつじんは権・仏因ぶつじんに非あらず実・仏果ぶつかに非あらず今
権即実ごんそくじつと解げして大円因じやういんを成じやうず因いんは必ず果おもむに趣おもむく故ゆゑに合掌がつしやう向仏むうぶつと言いうと。
御義口伝おんぎくでんに云いく合掌がつしやうとは法華經ほけきやうの異名いみやうなり向仏むうぶつとは法華經ほけきやうに値あい奉たてまつると
云いふなり合掌がつしやうは色法しきしんなり向仏むうぶつは心法しんぽうなり、色心しきしんの二法ふたぽうを妙法みやうほうと開悟かいごする

を歡喜踊躍かんきゆやくと説くなり、合掌がつしょうに於て又二の意之れ有り合とは妙なり掌たなこころ

とは法なり、又云く合とは妙法蓮華經なり掌たなこころとは廿八品なり、又云く

合とは仏界なり掌ぶつがいとは九界なり九界は權・仏界は実なり、妙樂大師の

云く「九界を權と爲し仏界を實と爲す」と十界悉く合掌の二字に納まつ

て森羅三千の諸法は合掌に非ざることを莫きなり、惣じて三種の法華の

合掌之れ有り今の妙法蓮華經は三種の法華未分なり、爾りと雖も先ず

顯說法華を正意と爲すなり、之に依つて伝教大師は於二仏乗とは根本法華

の教なり。妙法の外更に一句の余經無しと、向仏とは二文文皆金色の仏

体と向い奉る事なり合掌の二字に法界を尽したるなり、地獄餓鬼の己己

の当体其の外三千の諸法其の儘合掌向仏なり而る間法界悉く舍利弗なり

舍利弗とは法華經なり、舎とは空諦利とは仮諦弗とは中道なり円融三諦

の妙法なり舍利弗とは梵語此には身子と云う身子とは十界の色心なり身

とは十界じゅうかいの色法子しきぶしとは十界じゅうかいの心法しんぽうなり、今日蓮等けふにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきよう

と唱となえ奉たてまつる者は悉ことごとく舍利弗しゃりほつなり、舍利弗しゃりほつは即釈迦そくしゃか如来にょらい・釈迦如来しゃかにょらいは即そく

法華經ほけきよう・法華經ほけきようは即我等そくわれらが色心しきしんの二法にぽうなり、仍よつ身子しんし此この品の時間じかん此法音こふせい

と領解りようげせり、聞きことは名字みょうじ即法音そくほうせいとは諸法しよほうの音おんなり諸法しよほうの音おんとは妙法みょうほうなり、

爰こゝをを以もて文句もんくに釈しゃくする時長風じちようや息いむこと摩なしと長風ほっかいとは法界おんじようの音声おんじようなり、

此この音声おんじようを信解品しんげに以いて仏道いふどう声令しやうれい一切いっさい聞きこと云いえり一切いっさいとは法界ほっかいの衆生しゆじようの事

なり此この音声おんじようとは南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようなり。

第三云いく身意しんたい泰然ぜん快得かいとく安穩あんゑんの事 文句もんくの五ごに云いく從仏じゆふつは是これ身の喜きを結むすする

なり聞法もんぽうは此これ口の喜きを結むすするなり断諸疑悔だんしよぎげとは是これ意いの喜きを結むすすと。

御義口伝おんぎくでんに云いく身意しんたい泰然ぜんとは煩惱ぼんのう即菩提そくぼだい・生死しやうじ即涅槃そくねはんなり、身しんとは生死しやうじ即

涅槃ねはんなり意いとは煩惱ぼんのう即菩提そくぼだいなり從仏じゆふつとは日蓮にちれんに從したがう類たぐい等の事ことなり口の富とみ

とは南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようなり意いの喜きとは無明むみようの惑障わくしょう無なき故ゆゑなり、爰こゝをを以もて之これを

思いつしんさんかんうに此の文は一心三觀・一念三千我等いちねんさんぜんわれらが即身成仏そくしんじょうぶつなり方便ほうべんの教は泰然
に非あらず安穩あんのんに非あらざるなり行於陝けんぎようたるなんこ逕多留難故の教なり。

第四得仏法分の事

御義口伝おんぎくでんに云いわく仏法ぶつぽうの分とは初住しよじゆういちばん一分の中道ちゆうどうを云うなり、迹門しゃくもんしよじゆうほんもん初住本門
二住いちねんさんぜん已上ほうもんと云う事は此の分の字そのゆえより起おこるなり、所詮しよせん此の分の一字は
一念三千いねんさんぜんの法門ほうもんなり其の故は地獄じごくは地相じさうの分そのゆえで仏実ぶつじつを証しんじつし乃至二千なにしの諸法しよほう
己こ己この当体とうたいの分ぶつで仏果ぶつを証ぶつしたるなり真実しんじつの我等われらが即身成仏そくしんじょうぶつなり、今日きよう
連等たぐいの類なむ南無妙法蓮華經なみょうほうれんげきようと叫おこうる分ぶつで仏果ぶつを証ぶつしたるなり、分とは權教ごんきよう
は無得道とくどう・法華經ほけきようは成仏じようぶつと分わかつと意御可べきなり、又云く分とは本門ほんもんじゆりようほん壽量品しよじつ
の意なり己こ己こ本分ほんぶんの分なり、惣そうじて迹門しゃくもんしよじゆう初住分証しよじゆうぶんしんじつと云うは教相きようさうなり真実しんじつ
は初住分証しよじゆうぶんしんじつの処ところにて一經いっぎやうは極きくりたるなり。

第五而自廻轉いの事 記いの五ごに云く・或あるは大論だいろんの如ごとし經きやうに而自廻轉いと云うは

身子しんしの得記を聞きて法性自然ほつしやうじねんにして転てんじ因果依正自他いんがえしやうじたことごと悉しつく転てんずるを表あらわす
と。

御義口伝おんぎくでんに云いく草木成仏そうもくじやうぶつの証文しょうもんに而自廻轉じやうくわんの文ぶんを出いすなり是れ一念三千いちねんさんぜん
えしやう
の依正体一の成仏じやうぶつを説き極きめたるなり、草木成仏そうもくじやうぶつの証人しやうにんとは日蓮等にちれんの
たぐ
類るいい南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつるを指さすなり、廻轉くわんてんとは題目だいもくの五字ごじなり自
われらぎやうじや
とは我等行者われらぎやうじやの事なり記の五の釈能しやくよくく能よくく之これを思おもうべし云云。

第六一時俱作いちじぐさの事

御義口伝おんぎくでんに云いく一時いちじとは末法まつぽうの一時いちじなり俱作ぐさとは南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうなり俱
ひつきやう
とは畢竟住ひつきやう一乘いちじやうなり、今日蓮等けふにれんの類るいい所作しよさには題目だいもくの五字ごじなり余行よぎやうを交まじえ
ざるなり、又云いく十界じゆつかいの語言ごげんは一返だいまくの題目ぐさを俱作ぐさしたり、是れ豈あに感應かんおんに非あらず
や。

第七以譬喻得解ひゆとくげの事

止觀しかんの五いに云いく智ちとは譬たとえに因よるに斯この意徵しるし有ありと。

御義口伝に云く此の文を以て鏡像円融の三諦の事を伝うるなり、惣じて鏡
像の譬とは自浮自影の鏡の事なり此の鏡とは一心の鏡なり、惣じて鏡に
付て重重的の相伝之有り所詮鏡の能徳とは万像を浮ぶるを本とせり妙法華
華經の五字は万像を浮べて一法も残る物之れ無し、又云く鏡に於て五鏡
之れ有り妙の鏡には法界の不思議を浮べ法の鏡には法界の体を浮べ蓮の鏡
には法界の果を浮べ・華の鏡には法界の因を浮べ・經の鏡には万法の言語
を浮べたり、又云く妙の鏡には華嚴を浮べ・法の鏡には阿含を浮べ・蓮の
鏡には方等を浮べ・華の鏡には般若を浮べ・經の鏡には法華を浮ぶるなり、
順逆次第して意得可きなり、我等衆生の五体五輪妙法蓮華經と浮び出で
たる間宝塔品を以て鏡と習うなり、信謗の浮び様能く能く之を案ず可し
自浮自影の鏡とは南無妙法蓮華經是なり云云。

第八唯有一門の事 文句の五に云く唯有一門とは上の以種種法門宣示於仏道

に譬^{たと}う、門に又二あり宅門^{たくもん}と車門となり宅とは生死^{しやうじ}なり門とは出^いずる要路なり、此は方便教^{ほうべん}の詮なり車とは大乘^{だいじやう}の法なり門とは円教^{えんきやう}の詮たりと。
御義口伝に云く一門^{いちもん}とは法華經^{ほけきやう}の信心^{しんじん}なり車とは法華經^{ほけきやう}なり牛とは南無^{なむ}妙法蓮華經^{みよほうれんげきやう}なり宅とは煩惱^{ぼんのう}なり自身^{じしん}法性^{ほふしやう}の大地^{だいち}を生死^{しやうじ}・生死^{しやうじ}と転ぐり行くなり云云。

第九今此三界^{こんしさんがい}等の事^{もんく} 文句^{もんく}の五に云く次に今此三界^{こんしさんがい}より下・第二に一行半は上^{かみ}の所見^{しよけん}諸衆生^{しよけんしよじゆじよつしよつさうびやうししよしよつじや}為生老病死之所^{しやう}燒煮^{しやう}を頌^{しやう}して第二の所見^{しよけん}・火の譬^{たとえ}を合^{がつ}す、唯我一人^{わがひとり}より下・第三に半偈^{はんげ}は上の仏見^{ぶつけん}此已^し便作^{べんさ}是念^{しやう}と頌^{しやう}し、驚入^{きやうにゆう}火宅を合^{がつ}するなりと。

御義口伝に云く此の文は一念三千^{いちねんさんぜん}の文なり一念三千^{いちねんさんぜん}の法門^{ほうもん}は迹門^{しゃくもん}には生陰二千^{せけん}の世間^{あか}を明^{ほんもん}し本門^{こくどせけん}には国土世間^{こくどせけん}を明^{ほんもん}すなり、又云く今此三界^{こんしさんがい}の文は国土世間^{こくどせけん}なり其中衆生^{こちゆうしよじやう}の文は五陰世間^{ごおんせけん}なり而今此処^{ここ}多諸患難^{しよげんなんただわれひとり}唯我一人^{わがひとり}の

文は衆生世間なり、又云く今此三界は法身如来なり其中衆生悉是吾子は報身如来なり而今此処等は応身如来なり。

信解品六箇の大事

第一信解品の事 記の六に云く正法華には信 樂品と名く其の義通ずと雖も

樂は解に及ばず今は領解を明かす何を以てか樂と云わんや。

御義口伝に云く法華一部廿八品の題号の中に信解の題号此の品に之れ有り、

一念三千も信の一字より起り三世の諸仏の成道も信の一字より起るなり、

此の信の字元品の無明を切る利剣なり其の故は信は無疑 曰信とて疑惑を

断破する利剣なり解とは智慧の異名なり信は価の如く解は宝の如し三世の

諸仏の智慧をかうは信の一字なり智慧とは南無妙法蓮華經なり、信は智慧

の因にして名字即なり信の外に解無く解の外に信無し信の一字を以て妙覺

の種子と定めたり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と信受領納する故に

むじょうほうじゆふくじとく
無上宝聚不求自得の大宝珠を得るなり信は智慧の種なり不信は墮獄の因なり、又云く信は不变真如の理なり其の故は信は知一切法皆是仏法と体達して実相の一理と信ずるなり解は随縁真如なり自受用智を云うなり、文句の九に云く疑い無きを信と曰い明了なるを解と曰うと、文句の六に云く中根の人譬喩を説くを聞きて、初めて疑惑を破して大乘の見道に入る故に名けて信と為す進んで大乘の修道に入る故に名けて解と為す、記の六に云く大を以て之に望むるに乃ち両手を分ちて以て二道に属す疑を破するが故に信なり進んで入るを解と名く、信は二道に通じ解は唯修に在り故に修道を解と名くと云うと。

第二捨父逃逝の事 文句の六に云く、捨父逃逝とは大を退するを捨と為しむみょうみずか おお
無明自ら覆つを逃と曰い生死に趣向するを逝と為すと。

おんぎくでん いわ
御義口伝に云く父に於て三之れ有り法華經・釈尊・日蓮是なり、法華經

は一切衆生の父なり此の父に背く故に流転の凡夫となる、釈尊は一切衆生の父なり此の仏に背く故に備さに諸道を輪ぐるなり、今日蓮は日本国の一切衆生の父なり、章安大師の云く「彼が為に悪を除く即ち是れ彼が親なり」と、退大の大師は南無妙法蓮華経なり無明とは疑惑謗法なり、自ら覆うとは法然・弘法・慈覚・智証・道隆・良観等の悪比丘・謗法の失を恣ままに覆いかくすなり。

第三加復窮困の事 文句の六に云く、出要の術を得ざるを又窮と為し、八苦の火に焼かるるが故に困と為すと。

御義口伝に云く出要とは南無妙法蓮華経なり術とは信心なり、今日蓮等の類い窮困を免離する事は法華経を受持し奉るが故なり、又云く妙法に値い奉る時は八苦の煩惱の火自受用報身の智火と開覚するなり云云。

第四心懷悔恨の事 文句の六に云く悔を父に約し恨を子に約すと、記の六に

云く父にも悔恨あり、子にも悔恨ありと。

御義口伝に云く日本国の一切衆生は子の如く日蓮は父の如し、法華不信の失に依つて無間・大城に墮ちて返つて日蓮を恨みん、又日蓮も声も惜まず法華を捨つ可からずと云うべきものを靈山にて悔ること之れ有る可きか、文句の六に云く「心懷悔恨とは昔・勤に教詔せず訓うることも無くして逃逝せしむることを致すことを悔い子の恩義を惟わずして我を疎んじ他に親しむるを恨む」と。

第五無上宝聚不求自得の事

御義口伝に云く無上に重重の子細あり、外道の法に対すれば三蔵教は無上外道の法は有上なり又三蔵教は有上・通教は無上・通教は有上別教は無上・別教は有上・円教は無上、又爾前の円は有上・法華の円は無上・又迹門の円は有上・本門の円は無上、又迹門十三品は有上方便品は無上

・又本門十三品は有上・一品二半は無上、又天台大師所弘の止観は無上・
玄文二部は有上なり、今日蓮等の類いの心は無上とは南無妙法蓮華經・
無上の中の極無上なり、此の妙法を指して無上・宝聚と説き給うなり、
宝聚とは三世の諸仏の万行万善の諸波羅蜜の宝を聚めたる南無
妙法蓮華經なり、此の無上宝聚を辛勞も無く行功も無く一言に受取る信心
なり不求自得とは是れなり、自の字は十界なり十界各各得るなり
諸法実相是なり、然る間・此の文・妙覺の釈尊・我等衆生の骨肉なり
能く能く之を案ず可し云云。

第六世尊大恩の事

御義口伝に云く世尊とは釈尊・大恩とは南無妙法蓮華經なり、
恩を報ぜんと思わば法華經を受持す可き者なり是れ即ち釈尊の御恩を奉
じ奉るなり、大恩を題目と云う事は次下に以稀有事と説く、稀有の事とは

題目なり、此の大恩の妙法蓮華經を四十余年の間秘し給いて後八箇年に
大恩を開き給うなり、文句の一に云く「法王運を啓く」と運とは大恩の
妙法蓮華經なり云云、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉りて日本国
の一切

しゅじょう

衆生を助けんと思うは豈世尊の大恩に非ずや、章安大師十種の恩を挙げ

たりしなり第一には慈悲逗物の恩・第二には最初下種の恩・第三には

ちゅうげんずいちく

中間随逐の恩・第四には隱德示拙の恩・第五には鹿苑施小の恩・第六に

ちしょう

は耻小慕大の恩・第七には領地家業の恩・第八には父子決定の恩・第九

には快得安穩の恩・第十には還用利多の恩なり此の十恩即ち衣座室の三軌

なりと云云、記の六に云く「宿萌稍割けて尚未だ敷栄せず長遠の恩

何に由りてか報ず可き」と、又云く「注家は但物として施を天地に答えず

子として生を父母に謝せず感報斯に亡するを以てなり、と云えり、輔正記

の六に云く「物は施を天地に答えずとは謂く物は天地に由て生ずと雖も
而も天地の沢を報ずと云わず子も亦之の如し」と、記の六に云く「況や復只
だ我をして報亡せしむるに縁る斯の恩報じきをや」と、輔正記に云く
「只縁令我報亡とは意に云く只如来の声聞をして等しく亡報の理を得せ
しむるに縁るなり理は謂く一大涅槃なり」と。
御義口伝に云く此くの如く重重の所釈之れ有りと雖も所詮南無
妙法蓮華經の下種なり下種の故に如影隨形し給うなり、今日蓮も此くの
如きなり妙法蓮華經を日本国の一切衆生等に与え授くる豈釈尊の十恩に
非ずや、十恩は即ち衣座室の三軌なりとは第一・第二・第三は大慈為室の
御恩なり第四・第五第六第七は柔和忍辱衣の恩なり第八第九第十は諸法
空為座の恩なり、第六の耻小慕大の恩を記の六に云く「故に頓の後に於て
便ち小化を垂れ弾斥淘汰し槌砧鍛鍊す」と。

やくそうゆほん
薬草喻品五箇の大事

だいいちやくそうゆほん
第一薬草喻品の事

記の七に云く無始の性徳は地の如く大乘の心を発する

は種の如し二乗の心を発するは草木の芽茎の如し今初住に入るは同じく

ぶつじよう げきじよう じよう
仏乗の芽茎等を成ずるが如しと。

おんぎくでん ほつけ
御義口伝に云く法華の心を信ずるは種なり諸法実相の内証に入れば仏果

を成ずるなり、薬とは九界の衆生の心法なり其の故は権教の心は毒草な

り法華に値いぬれば三毒の煩惱の心地を三身果満の種なりと開覚するを薬

とは云うなり、今日蓮等の類い妙法の薬を煩惱の草に受くるなり煩惱即

菩提・生死即涅槃と覺らしむるを喻とは云うなり、釈に云く「喻とは曉訓

なり」と薬草喻とは我等行者の事なり。

じゆつじよう
第二此の品述 成段の事

おんぎくでん かしよう
御義口伝に云く述とは迦葉なり成とは釈尊なり、述 成の二字は迦葉・

しゃくそんいつち

釈尊一致する義なり、所詮述は所化の領解、成は仏の印加なり、今日蓮

等の類い南無妙法蓮華經と領するは述なり日蓮が賛嘆するは成なり我等

そくしんじょうぶつ

が即身成仏を説き極めたる品なり、述成一致符契するは述成不二の

そくしんじょうぶつ

即身成仏なり此の述成は法界三千の皆成仏道の述成なり。

すいいちじそししょうしゅういちゆしよにん

第三雖一地所生一雨所潤等の事

おんぎくでん

御義口伝に云く随縁不變の起る所の文なり、妙樂大師云く「随縁不變の

ほくせき

説は大教より出で木石無心の言は小宗より生ず」と、此の大教とは一經

すいいちじそししょう

の惣体に非ず此の雖一地所生等の十七字を指すなり、一地所生一雨所潤は

しよそつもく

無差別譬・而諸草木各有差別は有差別譬なり無差別譬の故に妙なり有差

べつひ

別譬の故に法なり云云、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは有差

いまにちれん

なむみょうほうれんげきよう

うしや

うしや

を置くなり廿八品は有差別なり、妙法の五字は無差別なり、一地とは迹門

みょうほう

ごじむしや

しゃくもん

だいちいちう

の大地一雨とは本門の義天・一地とは従因至果・一雨とは従果向因、末法

ほんもん

しか

いちう

じゅうかこういん

まつぼう

に至つていた従果向因じゆうかこういんの一雨いちうを弘通くつうするなり

一雨いちうとは題目だいもくに余行よぎようを交えまじざるなり、序品じよほんの時は雨大法雨ほううと説き此の品の

時いちうは一雨所潤いちうしよにんと説けり一雨所潤じよほんは序品の雨大法雨ほううを重ねて仏・説き給うな

り、一地いちぢとは五字ごじの中の經の一字なり一雨いちうとは五字ごじの中の妙の一字なり

法蓮華ほうれんげの三字は三千万法・中にも草木そうもくなり三乗さんじよう・五乗ごじよう・七方便ほうべん・九法界ほっかい

なり云云。

第四破有法王出現世間の事はうほうおうしゆつげんせけん

御義口伝おんぎくでんに云く有とは謗法ほうぼうの者なり破しやくとは折伏しゃくふくなり法王ほうおうとは法華經ほけきようの

行者ぎようじやなり世間せけんとは日本国にほんこくなり、又云く破は空・有は仮かり・法王ほうおうは中道ちゆうだうなり、

されば此の文をば釈迦如来しゃかにょらいの種子しゆしと伝うるなり惣そつじて三世さんぜの諸仏しよぶつの出世しゆつせは

此の文に依るよなり、有とは三界さんがい廿五有さんごなり破しやくとは有執しよくしやくを破するなり法王ほうおうと

は十界じゆっかいの衆生しゆじようの心法しんぽうなり王わうとは心法しんぽうを云うなり諸法実相しよほうじつそうと開くを破有はう

ほうおう
法王とは云うなり、いまにちれん今日蓮等の類たぐい南無妙法蓮華經と唱え奉るは謗法ほうぼうの
有執しやを断じて釈迦法王と成ると云う事なり、破有はうの二字を以て釈迦如来しやかにらいの
種子しゆしとは云うなり、又云く有と云うは我等われらが煩惱生死ぼんのうしうじなり此の煩惱生死ぼんのうしうじを
捨てて別に菩提涅槃ぼだいねはん有りと云うは權教權門ごんきようごんもんの心なり、今經の心は煩惱生死ぼんのうしうじ
を其の儘置いて菩提涅槃ぼだいねはんと開く所を破と云うなり、有とは煩惱ぼんのう・破とは
なむみよほうれんげきよう
南無妙法蓮華經なり有は所破しよはなり破は能破のうはなり能破のうは・所破共しよはに実相じつそうの一
理なり、序品じよぼんの時は尽諸有結じんしうけつと説き此の品には破有法王はうほうおうと説き譬喩品ひゆぼんの時
は皆是我有と宣べたり云云。かいぜがう

第五我觀一切・普皆平等・無有彼此・愛憎之心・我無貪著・亦無限礙の事
がかんいつさい ふかいびようどう ひし あいぞうしん とんじやく やくもげんぎ
おんぎくでん
御義口伝に云く此の六句の文は五識なり我觀一切・普皆平等とは九識なり
ひし あいぞうしん がかんいつさい ふかいびようどう とんじやく
無有彼此とは八識なり愛憎之心とは七識なり我無貪著とは六識なり
やくもげんぎ われらしゆじよう かんぼう だいたい いまにちれん たぐ
亦無限礙とは五識なり我等衆生の觀法の大体なり、今日蓮等の類い南無

みょうほうれんげきよう
妙法蓮華經と唱え奉る者は豈我觀一切・普皆平等の九識の修行に非ずや
しか
爾らば無有彼此に非ずや愛憎之心に非ずや我無貪著に非ずや亦無限礙に
非ずや。

授記品四箇の大事

第一授記の事

文句の七に云く授とは是れ与の義なりと。

おんぎくでん いわ
御義口伝に云く記とは南無妙法蓮華經なり授とは日本国の一切衆生なり

ふしん
不信の者には授けざるなり又之を受けざるなり、今日蓮等の類い南無

みょうほうれんげきよう
妙法蓮華經の記を受くるなり、又云く授記とは法界の授記なり地獄の授記

あくごう
は悪因なれば悪業の授記を罪人に授くるなり余は之に准じて知る可きなり、

あれ
生の記有れば必ず死す死の記あれば又生ず三世常恒の授記なり、所詮中

しやうもん
根の四大声聞とは我等が生老病死の四相なり、迦葉は生の相・迦旃延は

老の相・日連は病の相・須菩提は死の相なり、法華に來つて生老病死の

四相を四大声聞しやうもんと顯あらわしたり是れ即ち八相作仏さぶつなり、諸法実相しよほうじつそうの振舞ふるまいなりと記さすを授たまくるなり妙法みやうほうの授記じゆきなるが故に法界ほっかいの授記じゆきなり、蓮華れんげの授記じゆきなるが故に法界ほっかい清淨じゆきなり經の授記じゆきなるが故に衆生しゆじやうの語言ごげん音声おんじやうは三世常恒さんぜじやうてうの授記じゆきなり、唯一言ただに授記しるすべき南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうなり云云。

第二迦葉光明の事

御義口伝おんぎくでんに云く光明いわ こうみやうとは一切衆生いっさいしゆじやうの相好そうごうなり光とは地獄じこくの灯燃とうねん猛火みやうか此れすなわ ほんがくじじゆゆう
即ち本覺自受用の智火ないしぶつかこなり乃至仏果いまにちれん之れ同じ、今日蓮等たぐの類なむ南無なむ妙法蓮華經みやうほうれんげきやうの光明こうみやうを謗法ほうほうの闇冥あんみやうの中に指し出だす此れ即ち迦葉かしょうの光明こうみやうによらい、迦葉かしょうは頭陀ずだを本ずだとす頭陀ここは爰とそうに抖とそうと云うなり、今末法まつぽうに入つよぎやうて余行とそうを抖もつぱして、専ら南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうと修しゆうするは此經難持行頭陀しきやうなんじぎやうすだしや者是これなり云云。

第三捨是身已の事

御義口伝に云く此の文段より捨不捨の起りなり転捨にして永捨に非ず転捨
は本門なり永捨は迹門なり此の身を捨るは煩惱即菩提・生死即涅槃の旨
に背くなり云云、所詮日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは捨是身已
なり不惜身命の故なり云云、又云く此の身を捨すと読む時は法界に五大
を捨すなり捨つる処の義に非ず、是の身を捨てて仏に成ると云うは権門
の意なりかかる執情を捨つるを捨是身已と説くなり、此の文は一念三千
の法門なり捨是身已とは還歸本理・一念三千の意なり、妙樂大師の当知
身土・一念三千・故成道時・称此本理・一心一念・遍於法界と釈するは
此の意なり云云。

第四宿世因縁吾今当説の事

御義口伝に云く宿世の因縁とは三千塵点の昔の事なり下根の為に宿世の
因縁を説かんと云う事なり、因縁とは因は種なり縁は昔に歸る義なりもと

づくくんと訓くぜり、大通結縁だいとうけつえんの下種げしゆにもとづくくと云いう事を因縁いんねんと云いうなり、
いまにちれん
今日蓮等の類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつるは過去かこの因いんにもとづきたり、
ここを
爰こゝを以もつて妙樂大師みょうらくだいしの云いく「故ゆゑに知しんぬ

末代一時聞まっだいいちじくことを待まちて聞きき已おわつて信しんを生おず・事須すべからく宿種しゆくしゆなるべし」と、宿

だいしつう

げしゆ

なむみょうほうれんげきやう

げしゆ

とは大通の往時いんねんなり絶はんもんとは下種ほんもんの南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうなり此じんてんの下種げしゆにもとず
くを因縁いんねんと云いうなり、本門ほんもんの意いは五百塵点じふごじんてんの下種げしゆにもとずくべきなり真実しんじつ
みょうほう
妙法みょうほうの因いんに縁えんくを成仏もつずと云いうなり。

けじようゆほん

だいじ

化城喻品七箇の大事

732P

第一化城の事

だいいちけじよう

御義口伝おんぎくでんに云いく化いとは色法しきしんなり城しきしんとは心法しきしんなり、此しの色心しきしんの二法ふたぽうを無常むじようと

ごんぎよう

ほけきよう

むじよう

じようじゆう

けじようそくほうしよ

説しよくは権教ごんぎようの心しんなり法華經ほけきやうの意いは無常むじようを常住じようじゆうと説しよくなり化城けじよう即宝处そくほうしよなり、
しよせんいまにちれん
所詮しよせん今日蓮等の類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつる者は色心しきしん妙法みょうほうと開ひらく

けじょうそくほうしよ
を化城即宝処と云うなり、
じゅつかいみなけじょう
十界皆化城・十界各各宝処なり化城は九界な
ほうしよ
り宝処は仏界なり、
けじょう
化城を去つて宝処に至ると云うは五百由旬の間なり此
ひやくゆじゆん
の五百由旬とは見思・塵沙・無明なり、
けんじ
此の煩惱の五百由旬を妙法の
じんじや
五字と開くを
ごじ

けじょうそくほうしよ
化城即宝処と云うなり、
けじょうそくほうしよ
化城即宝処とは即の一字は南無妙法蓮華經なり
ねんねん
念念の化城念念の宝処なり、
ほうしよ
我等が色心の二法を無常と説くは権教なり
ごんきやう
じようじゆう
常住と説くは法華經なり無常と執する
ほけきやう
執情を滅するを即滅化城と云う
そくめつけじょう
なり、
けじょう
化城は皮肉・宝処は骨なり
ほうしよ
色心の二法を妙法と開覚するを
みやうほう
けじょうそくほうしよ
化城即宝処の実体と云うなり、
むじようじようじゆう
実体とは無常常住・俱時相即・隨縁不變
ぐじそうそく
いちねんじやくしやう
・一念寂照なり
いちねん
一念とは南無妙法蓮華經・無疑
なむみやうほうれんげきやう
日信の一念なり
うたがいわっしん
即の
いちねん
字心を留めて之を思ふ可し云云。
とど
これ
べ

第二大通智勝仏の事

おんぎくでん いわ だいっつう 大通は心王なり智勝は心数なり大通は迹門智勝は本門なり
だいっつう ちしゅう しまにちれん 今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者
だいっつう だいまく とな ちしゅう 法華經の行者の智は権宗の大智よ
は大通なり題目を唱うるは智勝なり、
ひやくせんまんばいすぐ ちしゅう ころうべ
りも百千万倍勝れたる所を智勝と心得可きなり、大は色法通は心法なり
われら しゅうじ だいっつう 此の生死の身心に振舞う起念を智勝とは云
我等が生死を大通と云うなり、
ここを これ な むみょうほうれんげきょう とな たてまつぎょうじや だいっつう ちしゅう
うなり、爰を以て之を思うに南無妙法蓮華經と唱え奉る行者は大通智勝
じゅうろくおうじ われら しんず
仏なり十六王子とは我等が心数なり云云。

第三諸母涕泣の事

おんぎくでん いわ しよも 御義口伝に云く諸母とは諸は十六人の母と云う事なり、実義には母とは
がんぼん むみょう おこ わくしやう しよも 元品の無明なり此の無明より起る惑障を諸母とも云うなり、流転の時は
むみょう げんめつ むみょう 無明の母とつれて出で還滅の時は無明の母を殺すなり、無明の母とは念仏
しんこん ひとびと にずいそうし ほうじん 然りと雖も終に
・ 禅・ 真言等の人人なり而随送之とは謗人を指すなり、

法華經ほけきょうの広宣流布こうせんるふ顕あらわれて天下一てんが同どうに法華經ほけきょうの行者ぎょうじやと成なる可べきなり
「随ずい至し道場どうじやう還えん欲よく親しん近こん」是これなり。

第四其祖こ轉輪聖王てんりんじやうおうの事

御義口伝おんぎくでんに云いく本地身ほんちの仏ぶつとは此文このもんを習ならうなり、祖はつとは法界ほっかいの異名いみやうなり
此これは方便品ほうべんの相性体しやうせいの三さん如是にやぜを祖はつと云いうなり、此この三さん如是にやぜより外ぐわいに
轉輪聖王てんりんじやうおう之これ無なきなり轉輪しやうりんとは生住異滅しやうじゆいめつなり聖王しやうおうとは心法しんぽうなり、此この三さん
によよぜ 三さん世ぜの諸仏しよぶつの父母ふぼなり、今日蓮等いまにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつる
者さんは三さん世ぜの諸仏しよぶつの父母ふぼにして其祖こ轉輪聖王てんりんじやうおう

なり、金銀銅鉄きんぎんとは金きんは生しやう・銀ぎんは白骨はくこつにして死しなり銅どうは老らうの相しやう・鉄てつは病びやうな
り此これ即すなわち開示悟入かいじこにゆうの四仏しぶつ知見ちけんなり、三さん世ぜ常恒じやうこうに生しやうじ死しやうじとめぐるを
轉輪聖王てんりんじやうおうと云いうなり、此この轉輪聖王てんりんじやうおう出現しゆげんの時の輪宝りんぼうとは我等われらが吐はく所の
言語音声ごんごおんじやうなり此この音声おんじやうの輪宝りんぼうとは南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうなり爰ここをを以もつて平等大慧びやうどうだいえ

とは云うなり。

第五十六王子の事

おんぎくでん いわ
御義口伝に云く十とは十界なり六とは六根なり王とは心王なり子とは心数
なり此れ即ち実相の一理の大通の子なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經
とな たてまつ
と唱え奉る者は十六王子なり八方作仏とは我等が八苦の煩惱即菩提と開く
なり云云。

第六即滅化城の事

おんぎくでん いわ
御義口伝に云く我等が滅する当体は化城なり、此の滅を滅と見れば化城な
り不滅の滅と知見するを宝処とは云うなり、是を寿量品にしては而実不
滅度とは説くなり、滅と云う見を滅するを滅と云うなり三権即一実の法門
之を思ふ可し、或は即滅化城とは謗法の寺塔を滅する事なり、今日蓮等
の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は化城即宝処なり我等が居住の山谷

こうやみなかいじょうじゃつにうつ
曠野 皆皆常寂光 の宝処なり云云。

第七皆共至宝処の事

おんぎくでん いわ みな じゅつかい
御義口伝に云く皆とは十界なり共とは如我等無異なり至とは極果の住処
ほうしよ りようぜん にちれん たく なむ みようほうれんげきよう とな たてまつ
なり宝処とは靈山なり、日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は一
みなきようしほうしよ にちれん ほうしよ いた べ
同に皆共至宝処なり、共の一字は日蓮に共する時は宝処に至る可し不共な
らば阿鼻大城に墮つ可し云云。

五百弟子品三箇の大事

第一衣裏の事

おんぎくでん いわ ほうしゆ えり か
御義口伝に云く此の品には無価の宝珠を衣裏に繫くる事を説くなり、所詮
にちれん たく なむ みようほうれんげきよう とな たてまつ いちじよう みようほう ちほう しんじゆ
日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は一乗・妙法の智宝を信受す
るなり信心を以て衣裏にかくと云うなり。

第二醉酒而臥の事

御義口伝に云く酒とは無明なり無明は謗法なり臥とは謗法の家に生る事
なり、三千塵点の当初に悪縁の酒を呑みて五道六道に酔い廻りて今謗法の
家に臥したり、酔とは不信なり覺とは信なり、今日蓮等の類い南無
妙法蓮華經と唱え奉る時無明の酒醒めたり、又云く酒に重重之れ有り權教
は酒・法華經は醒めたり、本・迹相對する時
迹門は酒なり始覺の故なり本門は醒めたり本覺の故なり、又本・迹二門
は酒なり南無妙法蓮華經は醒めたり酒と醒むるとは相離れざるなり、酒
は無明なり醒むるは法性なり法は酒なり妙は醒めたり妙法と唱うれば
無明法性体一なり、止の一に云く無明塵勞即是菩提と。

第三身心遍歡喜の事

御義口伝に云く身とは生死即涅槃なり心とは煩惱即菩提なり、遍とは
十界同時なり歡喜とは法界同時の歡喜なり、此の歡喜の内には三世諸仏

の歡喜かんき納おさまるなり、今日いまにちれん蓮等の類たぐい南無妙法蓮華經なむほうれんげきょうと唱となえ奉たてまれば我則かんき歡喜
とてしやくそんかんき釈尊歡喜たまし給たまうなり、歡喜かんきとは善惡ぜんあく共に歡喜かんきなり十界じゅうかいどうじ同時じゆつかいどうじなり深これく
之これを思おもふ可べし云云。

人記品二箇の大事にんきほん だいじ

第一学無学の事だいいちがくむがく

御義口伝おんぎくでん いわに云く学とは無智むちなり無学とは有智うちなり、今日いまにちれん蓮等の類たぐい南無
妙法蓮華經みょうほうれんげきょうと唱となえ奉たてまつは学無学がくむがくの人に如我等無異にやがとうむいの記さすを授あづくるに非あらずや、
色法は無学なり心法は学なり又心法は無学なり色法は学なり学無学がくむがくの人と
は日本国にほんこくの一切衆生いっさいしゆじやうなり、智者愚者ちしやぐしやをしなべて南無妙法蓮華經なむほうれんげきょうの記とを説とき
て而強毒ぬこうどくし之するなり。

第二山海慧自在通王仏の事さんかいえじざいつうおうぶつ

御義口伝おんぎくでん いわに云く山とは煩惱即菩提そくぼだいなり海とは生死即涅槃しやうじそくねはんなり慧しやうじそくねはんとは我等われらが

吐く所の言語なり自在とは無障礙なり通王とは十界互具・百界千如・
一念三千なり、又云く山とは迹門の意なり海とは本門の意なり慧とは妙法
の五字なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は
山海慧自在通王仏なり全く外に非ざるなり我等行者の外に阿難之れ無きな
り、阿難とは歡喜なり一念三千の開覺なり云云。

法師品十六箇の大事

第一法師の事

御義口伝に云く法とは諸法なり師とは諸法が直ちに師と成るなり森羅三千
の諸法が直ちに師と成り弟子となるべきなり、今日蓮等の類い南無
妙法蓮華經と唱え奉る者は法師の中の大法師なり、諸法実相の開覺顯れ
て見れば地獄の灯燃猛火乃至仏果に至る迄悉く具足して一念三千の法師な
り、又云く法とは題目師とは日蓮等の類いなり。

第二成就大願愍衆生故生於惡世広演此經の事

おんぎくでん いわ 御義口伝に云く大願とは法華弘通なり愍衆生故とは日本国の一切衆生なり生於惡世の人とは日蓮等の類いなり広とは南閻浮提なり此經とは題目なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者なり。

第三如来所遣行如来事の事

おんぎくでん いわ 御義口伝に云く法華の行者は如来の使に來れり、如来とは釈迦如来事とは南無妙法蓮華經なり如来とは十界三千の衆生の事なり今日蓮等の類い、南無妙法蓮華經と唱え奉るは眞實の御使なり云云。

第四与如来共宿の事

おんぎくでん いわ 御義口伝に云く法華の行者は男女共に如来なり煩惱即菩提・生死即涅槃なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は与如来共宿の者なり、傳大士の釈に云く「朝朝 仏と共に起き夕夕仏と共に臥し時時に成道し

時時に顯本す」と云云。

第五是法華經藏深固幽遠無人能到の事

おんぎくでん ぜほけきようぞうじんごゆうおんむにんのうとう

御義口伝に云く是法華經藏とは題目なり深固とは本門なり幽遠とは迹門

むにんのうとう

ほうぼう

いまにちれん

たく

なむ みようほうれんげきよう

とな

たてまつ

なり無人能到とは謗法なり、

今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る

むにんのうとう

あら

者は無人能到の者に非ざるなり云云。

もんぼうしんじゆずいじゆん

第六聞法信受隨順不逆の事

おんぎくでん

いわ

みよつじそく

御義口伝に云く聞とは名字即なり法とは題目なり信受とは受持なり隨順

おんぎくでん

みよつじそく

いまにちれん

たく

なむ みようほうれんげきよう

不逆とは本・迹二門に隨順するなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と

とな

たてまつ

唱え奉る者の事なり。

えざしつ

第七衣座室の事

おんぎくでん

いわ

えざしつ

ほうぼうおう

さんじん

くうけちゆう

さんたいしんくい

御義口伝に云く衣座室とは法報応の三身なり空仮中の三諦身口意の三業な

いまにちれん

たく

なむ みようほうれんげきよう

とな

たてまつ

り、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は此の三軌を一念に成就

するなり、衣とは柔和忍辱にんにくの衣当著忍辱にんにくよろいこれ鎧是なり座とは不惜おしんみよう身命しゅぎようの修行

なれば空座に居こするなり室とは慈悲じひに住して弘ひろむる故なり母の子を思うが

如くなり、豈一念に三軌を具足ぐそくするに非あらずや。

よくしゃしよ けたい おうとうちようしきよう

第八欲捨諸懈怠ほうべん きようぎよう 应当聽此經の事 御義口伝に云く諸の懈怠とは四十余年の

方便の 經教なり悉く皆懈怠ことごとみなけたいの經なり此經とは題目なり、今日蓮等の類いまにちれん たぐ

南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようと唱え奉るは是れ即ち精進とな たてまつ こなり

应当聽此經おうとうちようしきようは是なり、

心まさ にちれんに日蓮に此の經を聞くべしと云えり云云。

第九不聞法華經去仏智甚遠の事 もんぼう はなはだ

御義口伝に云く不聞とは謗法なり成仏の智を遠ざかるべきなり、今日蓮 おんぎくでん いわ ほうぼう じょうぶつ いまにちれん
等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は仏智開悟の者にして成仏の近き たぐ なむ みょうほうれんげきょう とな たてまつ かいご じょうぶつ
故なり。

第十若説此經時有人惡口罵加刀杖瓦石念仏故忍の事 あるひとあつく とうじょうがしゃくねんぶつ

御義口伝に云く此經とは題目なり惡口とは口業なり加刀杖は身業なり此 おんぎくでん いわ だいもく あつく くごう とうじょう しんごう
の身口の二業は意業より起るなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と しんく いごう おこ いまにちれん たぐ なむ みょうほうれんげきょう
とな とな たてまつ 唱え奉る者は仏勅を念ずるが故に忍忍とは云うなり。 ぶつちよく ゆえ

第十一及清信士女供養於法師の事 しにょくよう ほっし

御義口伝に云く士女とは男女なり法師とは日蓮等の類いなり清信とは おんぎくでん いわ しにょ なんよ ほっし にちれん たぐ
法華經に信心の者なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者はな ほけきょう しんじん いまにちれん たぐ なむ みょうほうれんげきょう とな たてまつ これ
り云云、此れ諸天善神等男女と顕れて法華經の行者を供養す可しと云う こ してんぜんじん なんよ あらわ ほけきょう ぎょうじや くよう べ

きようもん
経文なり。

第十二若人欲加惡刀 杖及瓦石則遣變化人為之作衛護の事
にやくにん とうじよう がしやく へんか こ

おんぎくでん いわ へんか
御義口伝に云く變化人とは竜口守護の八幡大菩薩なり、今日蓮等の類い
なむ みようほうれんげきよう とな たてまつ しゆこ べ きようもん
南無妙法蓮華經と唱え奉る者を守護す可しと云う 経文なり。

第十三若親近法師速得菩薩道の事
しんこんほっし ぼさつ

おんぎくでん いわ しんこん
御義口伝に云く親近とは信受の異名なり法師とは日蓮等の類いなり菩薩と
ぶっか げじ いまにちれん たぐ なむ みようほうれんげきよう とな たてまつ
は仏果を得る下地なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者の
事なり。

第十四随順是師学の事
ずいじゆん

おんぎくでん いわ にちれん
御義口伝に云く是師とは日蓮等の類いなり学とは南無妙法蓮華經なり
ずいじゆん しんじゆ
随順とは信受なり云云。

第十五師と学との事

おんぎくでん いわ にちれん
御義口伝に云く日蓮等の類いの南無妙法蓮華経は学者の一念三千なり師
も学も共に法界三千の師学なり。
ほっかいさんぜん

第十六得見恒沙仏の事

おんぎくでん いわ けんほうとう
御義口伝に云く見恒沙仏とは見宝塔と云う事なり、恒沙仏とは多宝の事な
たほう
り多宝の多とは法界なり宝とは一念三千の開悟なり法界を多宝仏と見るを
けんほうとう
見恒沙仏と云うなり、故に法師品の次に宝塔品は来るなり解行証の法師の
けんほうとう
乗物は宝塔なり云云、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉るは妙解
けんほうとう
妙行妙証の不思議の解・不思議の行・不思議の証得なり真実一念三千の
けんほうとう
開悟なり云云、此の恒沙と云うは悪を滅し善を生ずる河なり、恒沙仏とは
けんほうとう
一一文文皆金色の仏体なり見の字之を思う可し仏見と云う事なり、随順
けんほうとう
とは仏知見なり得見の見の字と見宝塔の見とは依正の二報なり得見恒沙の
けんほうとう
見は正報なり見宝塔の見は依報なり云云。

ほうとうほん
宝塔品甘箇の大事

739P

だいいちほうとう

第一宝塔の事

もんく

文句の八に云く前仏已に居し今・仏・並に座す当仏も亦然なりと。
すでこ

おんぎくでん

いわ

すでこ

ごおん

わごう

ごおんわごう

ほうとう

またしか

御義口伝に云く宝とは五陰なり塔とは和合なり五陰和合を以て宝塔と云う

ごおんわごう

みようほう

ごじ

これ

なり、此の五陰和合とは妙法の五字なりと見る是を見とは云うなり、今日蓮

ごおんわごう

みようほう

ごじ

これ

等

たぐ

なむみようほうれんげきよう

とな

たてまつ

けんほうとう

けんほうとう

等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者は見宝塔なり。

第二有七宝の事

しつぽう

第二有七宝の事

おんぎくでん

いわ

しつぽう

しつぽう

聞・信・戒・定・進・捨・慙なり、

又云く

頭上の

しつぽう

ぎようじゃ

七穴なり、

今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉るは有七宝の行者な

いまにちれん

たぐ

なむ

みようほうれんげきよう

とな

たてまつ

しつぽう

ぎようじゃ

り云云。

第三四面皆出の事

しめんかいすい

しめんかいすい

しめんかいすい

しめんかいすい

しめんかいすい

しめんかいすい

しめんかいすい

しめんかいすい

しめんかいすい

しめんかいすい

しめんかいすい

しめんかいすい

しめんかいすい

しめんかいすい

しめんかいすい

しめんかいすい

しめんかいすい

しめんかいすい

もんく
文句の八に云くいわ四面出香しめんすいこうとは四諦したいの道風四徳の香を吹くなり。御義口伝おんぎくでん

に云くいわ四面おもてとは生老病死しょうろうびようしなり四相を以て我等われらが一身の塔そうこんを莊嚴するなり、

われらしょうろうびようしが生老病死なむみょうほうれんげきように南無妙法蓮華經となみょうほうれんげきようと唱え奉るは併しかしながら四徳の香を吹くな

り、南無なむとは樂波羅蜜はらみつ・妙法みょうほうとは我波羅蜜はらみつ・蓮華れんげとは淨波羅蜜はらみつ・經とは

常波羅蜜はらみつなり。

第四出大音声の事

御義口伝おんぎくでんに云く我等衆生の朝夕吐く所の言語ごんごなり、大音声おんじようとは權教ごんきようは

小音声おんじよう・法華經ほけきようは大音声おんじようなり廿八品は小音声おんじようだいもく題目は大音声おんじようなり、惣そうじ

て大音声おんじようとは大は法界ほっかいなり法界の衆生の言語ごんごを妙法みょうほうの音声おんじようと沙汰さたする

を大音声おんじようとは云うなり、今日蓮等の類いまにちれん南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようと唱え奉るは大

音声おんじようなり、又云く大とは空諦くうたい・音声おんじようとは仮諦けたいなり出とは中道ちゅうどうなり云云。

第五見大宝塔住在空中の事

おんぎくでん いわ ほうとう われら じゅうざいくつちゅう
御義口伝に云く見大宝塔とは我等が一身なり住在空中とは我等衆生終に
滅に帰する事なり、いまにちれん 今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉りて信心に
住する処が住在空中なり虚空会に住するなり。

第六国名宝浄彼中有仏号曰多宝の事

おんぎくでん いわ ほうじょうせかい われら たいない しょうほうじつそう
御義口伝に云く宝浄世界とは我等が母の胎内なり、有仏とは諸法実相の仏
なり爰を以て多宝仏と云うなり、胎内とは煩惱を云うなり煩惱の淤泥の中
に真如の仏あり我等衆生の事なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と
唱え奉るを当体蓮華の仏と云うなり云云。

第七於十方国土有説・法華經処我之塔 廟為聴是經故涌現其前為作証 明讃 言善哉の事

おんぎくでん いわ じゅうぽう じゅうかい ほけきょう われらしゅじょうるてん いんねん
御義口伝に云く十方とは十界なり法華經とは我等衆生流轉の十二因縁な
り仍て言語の音声を指すなり善哉とは善惡不二・邪正一如なり、今日蓮

等の類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと唱となえ奉たてまつる処ところを多宝涌現たほうゆげんと云いうなり。

第八南西北方四惟上下じゅうげの事

御義口伝おんぎくでんに云いく四方四惟しほう上下合じょうげして十方じゅうほうなり即すなわち十界じゅうかいなり、十界じゅうかいの衆生しゅじょう共さんどくに三毒この光こ之れ有これり是びやくうを白毫びやくうと云いうなり一心中道いつしんちゅうどうの智慧ちえなり、今日蓮いまにちれん等の類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと唱となえ奉たてまつるは十界じゅうかい同時どうじの光指くわしなり諸法実相しよほうじつそうの光明こつみょうなるが故ゆゑなり。

第九各齎宝華滿掬みづの事

御義口伝おんぎくでんに云いく宝華ほうげとは合掌がっしょう一念三千いちねんさんぜんの所表しよひょうなり各ごととは十界じゅうかいなり滿みづの一ひと字じを一念三千いちねんさんぜんと心得こころえ可べし、今日蓮いまにちれん等の類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと唱となえ奉たてまつるは仏ぼつに宝華ほうげを奉たてまつるなり宝華即宝珠ほうげそくほうしゅなり宝珠即一念三千ほうしゅそくいちねんさんぜんなり合掌がっしょう以敬心欲聞いぎしんよくもん具足道くそくこれ是これなり云云。

第十如却閑鑰開大城門けんやくだいじょうの事 補註けんやくだいじょうの四いに云いく此の開塔見仏けだは蓋けだし所表あ有あるな

り、何となれば即ち開塔は即開権なり見仏は即顕実なり是れ亦前を証し復
將さに後を起さんとするのみ、如却関鑰とは却是除なり障除こり機動くこ
とを表す謂く法身の大士惑を破し理を顕し道を増し生を損するなりと。
御義口伝に云く関鑰とは謗法なり無明なり開とは我等が成仏なり大城門
とは我等が色心の二法なり大城とは色法なり門とは口なり、今日蓮等の
類い南無妙法蓮華經と唱え奉る時無明の惑障却けて己心の釈迦・多宝住
するなり、関鑰とは無明なり開とは法性なり鑰とは妙の一字なり天台の
云く「秘密の奥蔵を發らく之を称して妙と為す」と、妙の一字を以て鑰と
心得可きなり、此の經文は謗法不信の関鑰を却けて己心の仏を開くと云
う事なり開仏知見之を思ふ可し云云。

第十一撰諸大衆皆在虛空の事

おんぎくでん いわ たいしゅう ちようしゅう みな こくう
御義口伝に云く大衆とは聴衆なり皆在虛空とは我等が死の相なり、
いまにちれん たく なむ みようほうれんげきよう となたてまつ しやうじそくねはん かいかく
今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは生死即涅槃と開覺するを皆
こくう
在虛空と説くなり生死即涅槃と被撰するなり、大地は色法なり虛空は心法
しきしんぷに こころうへ こくう じゃっこう
なり色心不二と心得可きなり虛空とは寂光土なり、又云く虛空とは蓮華
なり經とは大地なり妙法は天なり虛空とは中なり一切衆生の内菩薩蓮華
だいち みようほうれんげきよう こくう いっさいしゆじよう ぼさつれんげ
に座するなり、此れを妙法蓮華經と説かれたり、經に云く「若在仏前
れんげしやう
蓮華化生」と。

第十二譬如大風吹小樹枝の事

おんぎくでん いわ げじゆ しやうりよう ひによたいふう
御義口伝に云く此の偈頌の如清凉池と譬如大風と燃大炬火とは三身なり、
そ ひによたいふう だいちく こじ すいしやうじゆえ しゃくぶくもん いまにちれん
其の中に譬如大風とは題目の五字なり吹小樹枝とは折伏門なり、今日蓮
たく なむ みようほうれんげきよう となたてまつ たいふう こく
等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは大風の吹くが如くなり。

第十三若有能持則持仏身の事にやくうのうじ ぶつしん

御義口伝に云くおんぎくでん いわ法華經ほけきようを持ち奉るとは我が身たてまつ仏身ぶつしんと持つなり、則の一字は生仏不二なりかみ のうじ上の能持の持は凡夫ほんぶなり持つ体は妙法みょうほうの五字ごじなりぶつしん仏身を持つと云うは一文みな文皆金色りそく仏体の故なり、さて仏身ぶつしんを持つとは我が身の外に仏無しと持つを云うなり、理即りそくの凡夫ほんぶと究竟くきようそく即の仏と二無きなりそく即の字は即故初後不二の故なり云云。

第十四此經難持の事しきようなんじ

御義口伝に云くおんぎくでん いわ此の法華經ほけきようを持つ者は難なんに遇あわんと心得こころえて持つなり、されば即為疾得無上そくいしつとくむじょうぶつどう仏道の成じょうぶつ仏は今日蓮等いまにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようと唱え奉るとな たてまつ是なり云云。これ

第十五我則歡喜諸仏亦然の事かんきしよぶつまた

御義口伝に云くおんぎくでん いわ我とは心王しんのうなり諸仏しよぶつとは心数しんずなり法華經ほけきようを持ち奉る時は

心王しんのう・心数しんず同時にどうじ歡喜かんきするなり、又また云いく我わとは凡夫ほんぶなり諸仏しよぶつとは三世さんぜ諸仏しよぶつなり、今日蓮等いまにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと唱となえて歡喜かんきする是これなり云云。

第十六讀持此經の事

御義口伝おんぎくでんに云いく五種ごしゆの修行しゆぎやうの讀誦どくじゆと受持じゆじとの二行にぎやうなり、今日蓮等いまにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつるは讀よなり此の經を持つは持もなり此經とは題目だいもくの五字ごじなり云云。

第十七是真仏子の事

御義口伝おんぎくでんに云いく法華經ほけきやうの行者ぎやうじやは真しやに釈迦しか法王かほうおうの御子みこなり、然しかる間王位まんのうゐを繼つぐ可べきなり悉しつ是ぜ吾子ごしの子こと是真ぜしんぶつし仏子ぶつしの子こと能よく能よく心得こころえが合あつ可べきなり、今日蓮等いまにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつる者はしや釈迦しか法王かほうおうの御子みこなり。

第十八是諸天人・世間之眼の事

御義口伝おんぎくでんに云いく世間せけんとは日本国にほんこくなり眼まなことは仏知見ぶつちけんなり法華經ほけきやうは諸天しよてん・世間せけん

の眼目なり、がんもく 眼とは南無妙法蓮華經なり是諸天人・世間之眼又云く是
まなこ 諸仏眼目云云、此の眼をくじる者は禪・念仏・真言宗等なり眼等とは
まなこ 目を閉づるなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは諸天・世間
まなこ の眼に非ずや云云。

第十九能須臾說の事

御義口伝に云く能の一字之を思う可し説とは南無妙法蓮華經なり、今日蓮
おんぎくでん いわ 等の類いは能須臾說の行者なり云云。
たぐ しゅゆ ぎょうじや

第二十此經難持の事

御義口伝に云く此の經文にて三学俱伝するなり、虚空不動戒・虚空不動定
おんぎくでん いわ きょうもん さんがくでん 虚空不動慧・三学俱に伝うるを名けて妙法と曰うと、戒とは色法なり
こくうふどうえ さんがく 定とは心法なり慧とは色心二法の振舞なり、俱の字は南無妙法蓮華經の
しきしん ふるまい 一念三千なり伝とは末法万年を指すなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經
いちねんさんぜん まっぼうまんねん いまにちれん たぐ なむみょうほうれんげきよう

とな たてまつこんぎよう とくどう ほけきよう しんじつ しゆぎよう
と唱え奉り 権教は無得道・法華經は眞実と修行する是は戒なり防非止惡
の義なり、持つ所の行者・決定無有疑の仏体と定む是は定なり、三世の
諸仏の智慧を一返の題目に受持する是は慧なり、此の三字は皮肉骨・三身
・三諦・三軌・三智等なり。

提婆達多品八箇の大事

第一 提婆達多の事 文句の八に云く本地は清涼にして迹に天熱を示す
と。

おんぎくでん いわ だいば ほんち もんじゆ ほんちしよりよう
御義口伝に云く提婆とは本地は文殊なり、本地清涼と云うなり迹には提婆
と云うなり天熱を示す是なり、清凉は水なり此れは生死即涅槃なり天熱
は火なり是は煩惱即菩提なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る
に煩惱即菩提・生死即涅槃なり、提婆は妙法蓮華經の別名なり過去の時
に阿私仙人なり阿私仙人とは妙法の異名なり阿とは無の義なり私無きの

法とは妙法なり、文句の八に云く無私法を以て衆生に灑ぐと云えり阿私あし仙人せんじんとは法界三千の別名なり故に私無きなり一念三千之を思う可し云云。

第二 若不違我当為宣説の事

御義口伝に云く妙法蓮華經を宣説する事を汝は我に違わずして宣説すべしと云う事なり、若の字は汝なり、天台の云く「法を受けて奉行す」と、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は日蓮に違わずして宣説す可きなり阿私仙人とは南無妙法蓮華經なり云云。

第三採菓汲水拾薪設食の事

御義口伝に云く採菓とは癡煩惱なり汲水とは貪煩惱なり拾薪とは瞋煩惱なり設食とは慢煩惱なり、此の下に八種の給仕之れ有り此の外に妙法蓮華經の伝受之れ無きなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは即ち千歳給仕なり是れ即ち一念三千なり貪・瞋・癡慢を対治するなり。

第四 情存妙法故身心無懈倦の事

おんぎくでん いわ しんしん しきしん みようほう
御義口伝に云く身心の二字色心妙法と伝受するなり、日蓮等の類い南無
みようほうれんげきよう とな たてまつ そくしんじようぶつ しんしんむけん いちねんさんぜん
妙法蓮華經と唱え奉りて即身成仏す身心無倦とは一念三千なり云云。

第五 我於海中唯常宣説の事

おんぎくでん いわ もんじゅ
御義口伝に云く我とは文殊なり海とは生死の海なり唯とは唯一乗法な
じようじゅう せつぽう みようほうれんげきよう ほっかい ごんごおんじよう いまにちれん
り常とは常住 此説法なり妙法蓮華經とは法界の言語音声なり、今日蓮
たぐ なむ みようほうれんげきよう とな たてまつこれ しようじ そくしんによ たいかい
等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る是なり、生死の海即真如の大海なり
ほっかい ちえ もんじゅ
我とは法界の智慧なり文殊なり云云。

第六 年始八歳の事

おんぎくでん いわ だいば じこく りゆうによ ぶっかい
御義口伝に云く八歳とは八巻なり提婆は地獄界なり竜女は仏界なり然る
じゅっかいこく ひやっかいせんによ いちねんさんぜん いわ ほけきよう
間十界互具・百界千如・一念三千なり、又云く八歳とは法華經八巻なり
われら ほんのう そう ほけきよう じようぶつ こころうへ
我等八苦の煩惱なり、惣じて法華經の成仏は八歳なりと心得可し八苦即

八卷なり八苦八卷即八歳の竜女と顕るるなり一義に云く、八歳の事はたまをひらくと読むなり、歳とは竜女の一心なり八とは三千なり三千とは法華の八巻なり、仍つて八歳とは開仏知見の所表なり智慧利根より能至菩提まで法華に歸入するなり、此の中に心念口演とは口業なり志意和雅とは意業なり悉能受持深入禪定とは身業なり三業即三徳なれば三諦法性なり、又云く心念とは一念なり口演とは三千なり悉能受持とは竜女法華經受持の文なり、歳とは如意宝珠なり妙法なり八とは色心を妙法と開くなり。

第七 言論未訖の事

御義口伝に云く此の文は無明即法性の明文なり、其の故は智積難問の言未だ訖らざるに竜女三行半の偈を以て答うるなり、難問の意は別教の意なり無明なり竜女の答は円教の意なり法性なり、智積は元品の無明なり

りゆうによ ほつしよう によん よつ むみよう そく ほつしようほつしよう そく むみよう
竜女は法性の女人なり仍て無明に即する法性法性に即する無明なり、
いまにちれん たぐ な む みようほうれんげきよう と な たてまつ
今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは

言論未訖なり、時とは上の事の末末の事の始なり時とは無明法性同時の
むみようほつしようどうじ

時なり南無妙法蓮華經と唱え奉る時なり、智積菩薩を元品の無明と云う
な む みようほうれんげきよう と な たてまつ ちしゃくぼさつ がんぼん むみよう

事は不信此女の不信の二字なり不信とは疑惑なり疑惑を根本無明と云うな
ふしん ふしん ふしん ぎわく ぎわく こんぼん むみよう

りゆうによ ほつしよう がせんだいじよう りゆうによ

り、竜女を法性と云う事は我闍大乘教の文なり竜女とは竜は父なり女

は八歳の娘なり竜女の二字は父子同時の成仏なり、其の故は時竜王女の
じやうにょ ふしどうじ じやうぶつ そのゆえ りゆうおう

文是なり既に竜王の女と云う間竜王は父なり女とは八歳の子なり、さ
これ すで りゆうおう むすめ りゆうおう

れば女の成仏は此の品にあり父の竜の成仏は序品に之れ在り、有八竜王
じやうぶつ じよぶつ じよぼん こ りゆうおう

の文是なり、然りと雖も父子同時の成仏なり序品は一經の序なる故なり、
これ しか いえど ふしどうじ じやうぶつ じよぼん いっきよう

又聞成菩提とは竜女が智積を責めたる言なりされば唯我が成仏をば仏
ぼだい りゆうによ ちしゃく ただ じやうぶつ

ごぞんじ ぼだいゆいぶつ ぼだいゆいぶつ
御存知あるべしとて又聞成菩提唯仏当証知と云えり苦の衆生とは別して
しゆじよう

によん

女人の事なり、此の三行半の偈は一念三千の法門

へんしょうおじゅつぽう

なり遍照於十方とは十界なり、殊には此の八歳の竜女の成仏は帝王持經

てんのう

ちじんごだい

の先祖たり、人王の始は神武天皇なり神武天皇は地神五代の第五の

うがやぶきあえすのみこと

鵜萱葺不合尊の御子なり此の葺不合尊は豊玉姫の子なり此の豊玉姫は

しゃからりゅうおう

りゅうによ

ほけきょう ぎようじゃ

沙竭羅竜王の女なり八歳の竜女の姉なり、然る間先祖法華經の行者な

じんじんじんじん

だいば

いってん

むみょうぼんのう

り甚深甚深云云、されば此の提婆の一品は一天の腰刀なり無明煩惱の敵を

しやうじ

ひほう

およ

切り生死愛着の繩を切る秘法なり、漢高三尺の劍も一字の智劍に及ばざる

しやうじぼんのう

だいば

あらわ

なり妙の一字の智劍を以て生死煩惱の繩を切るなり、提婆は火炎を顯し

りゅうによ

だいじゃ

もんじゅ

あらわ

よ

ふどうみようおう

そんぎよう

くでん

竜女は大蛇を示し文殊は智劍を顯すなり仍つて不動明王の尊形と口伝せ

だいば

われら

ぼんのうそくほだい

あらわ

りゅうによ

しやうじそくねはん

あらわ

り、提婆は我等が煩惱即菩提を顯すなり、竜女は生死即涅槃を顯すなり、

もんじゅ

こく

みようこく

ぼんのうしやうじくそく

のうけ

文殊をば此には妙徳と翻するなり煩惱生死具足して当品の能化なり。

ほうしゅ

もんく

いわ

たま

第八 有一宝珠の事 文句の八に云く一とは珠を献じて円解を得ることを表

すと。

御義口伝に云く一とは妙法蓮華經なり宝とは妙法の用なり珠とは妙法の

体なり、妙の故に心法なり法の故に色法なり色法は珠なり心法は宝なり

妙法とは色心不二なり、一念三千を所表して竜女宝珠を奉るなり、釈に

表得円解と云うは一念三千なり、竜女が手に持てる時は性得の宝珠なり

仏受け取り給う時は修得の宝珠なり、中に有るは修性不二なり、甚疾

とは頓極・頓速・頓証の法門なり即為疾得無上仏道なり、神力とは神は

心法なり力とは色法なり觀我成仏とは舍利弗竜女が成仏と思うが僻事

なり、我が成仏ぞと觀ぜよと責めたるなり、觀に六則觀之れ有り爰元の

觀は名字即の觀と心得可きなり、其の故は南無妙法蓮華經と聞ける處を

一念坐道場成仏不虛也と云えり、變成男子とは竜女も本地南無

妙法蓮華經なり其の意經文に分明なり。

かんじほん
勸持品十三箇の大事

747P

だいいち かんじ
第一 勸持の事

おんぎくでん いわ
御義口伝に云く勸とは化他持とは自行なり南無妙法蓮華経は自行化他に
わた いまにちれん たぐ なむ みようほうれんげきよう すす
亘るなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経を勧めて持たしむるなり。

おしんみよう
第二 不惜身命の事

おんぎくでん いわ
御義口伝に云く身とは色法命とは心法なり事理の不惜身命之れ有り、法華
ぎようじや でんばた
の行者田畠等を奪わるは理の不惜身命なり命根を断たるを事の不惜
しんみよう いまにちれん たぐ なむ みようほうれんげきよう とな たてまつ
身命と云うなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者は事理共
に値うなり。

ふじつ
第三 心不実故の事

おんぎくでん いわ
御義口伝に云く心不実故とは法華最第一の经文を第三と読み最為其上の

経文きようもんを最さい為い其下きげと読よみて法華經ほけきようの一いち念ねん三さん千せんを華嚴けこん・大日等だいにちに之これ有ありと
法華ほっけの即身成仏そくしんじようぶつを大日經だいにちきように取り入いるは此等これらは皆みな・心不実故ふじつなり、今日蓮いまにちれん
等の類たぐい南無妙法蓮華經なむみようほうれんげきようと唱となえ奉たてまつる者は心実こころじつなるべし云云。

第四 敬順仏意の事ぶつゐ

御義口伝おんぎくでんに云いわく法華經ほけきように順ぶつゐずるは敬順仏意ぶつゐなり意いとは南無妙法蓮華經なむみようほうれんげきよう是これなり、
今日蓮等いまにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみようほうれんげきようと唱となえ奉たてまつるは敬順仏意ぶつゐの意いなり。

第五 作師子吼の事ししく

御義口伝おんぎくでんに云いわく師子吼ししくとは仏の説せつなり説法せつぽうとは法華別ほっけしては南無
妙法蓮華經みようほうれんげきようなり、師しとは師匠授ししやうずくる所の妙法子みようぼうしとは弟子受でしくる所の妙法みようほう
吼していとは師弟共とに唱となうる所の音声おんじようなり作まとはおこすと読よむなり、末法まっぽうにし
て南無妙法蓮華經なむみようほうれんげきようを作なすなり。

第六 如法修行の事しゆきよう

おんぎくでん いわ 御義口伝に云く如法修行の人とは天台・妙楽・伝教等なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは如法修行なり云云。
たぐ なむ みようほうれんげきよう となたてまつ しゆぎよう

第七 有諸無智人の事

おんぎくでん いわ 御義口伝に云く一文不通の大俗なり悪口罵詈等分明なり日本国の俗を諸と云うなり。
おんぎくでん いわ いちもんふつう あつくめり ふんみよう にほんこく しょ

第八惡世中比丘の事

おんぎくでん いわ 御義口伝に云く惡世中比丘の惡世とは末法なり比丘とは謗法たる弘法等是なり、法華の正智を捨て權教の邪智を本とせり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は正智の中の大正智なり。
おんぎくでん いわ あくせ びく あくせ まつぽう びく ほうぼう こうぼう これ ほっけ しんぎよう じゃち いまにちれん たぐ なむ みようほうれんげきよう となたてまつ

第九・或有阿練若の事

おんぎくでん いわ 御義口伝に云く第三の比丘なり良觀等なり如上六通羅漢の人と思うなり。
おんぎくでん いわ びく りようかん ろくつうらん

第十自作此經典の事

おんぎくでん いわ ほけきよう
御義口伝に云く法華經を所作して読むと謗す可しと云う經文なり。

第十一為斯所輕言汝等皆是仏の事

おんぎくでん いわ ほつけ
御義口伝に云く法華雜の行者を蔑づり生仏と云うべしと云う經文なり、
是は輕心を以て誇るなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者
を云う可きなり。

第十二惡鬼入其身の事

おんぎくでん いわ あつき
御義口伝に云く惡鬼とは法然・弘法等是なり入其身とは國王・大臣・万民
等の事なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るを怨むべしと云
う事なり、鬼とは命を奪う者にして奪功德者と云うなり、法華經は三世諸仏
の命根なり此の經は一切菩薩の功德を納めたる御經なり。

第十三但信無上道の事

おんぎくでん いわ むじょうどう
御義口伝云く無上道とは南無妙法蓮華經是れなり、今日蓮等の類い南無

妙法蓮華經を惜しむ事は命根よりも惜しき事なり、之に依つて結ぶ処に
仏自知我心と説かれたり法華經の行者の心中をば教主釈尊の御存知
有る可きなり、仏とは釈尊我心とは今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と
唱え奉る者なり。

安樂行品五箇の大事

第一 安樂行品の事

御義口伝に云く妙法蓮華經を安樂に行ぜむ事末法に於て今日蓮等の類い
の修行は妙法蓮華經を修行するに難来るを以て安樂と意得可きなり。

第二 一切法空の事

御義口伝に云く此下に於て十八空之有り十八空の体とは南無妙法蓮華經
是なり十八空は何れも妙法の事なり。

第三 有所難問不以小乘法答等の事

おんぎくでん いわ たいじ ごんきよう
御義口伝に云く対治の時は権教を以て会通す可からず。

いっさいしゅち なむ みようほうれんげきよう
一切種智とは南無妙法蓮華經なり一切は万物なり種智は万物の種なり
みようほうれんげきようこれ
妙法蓮華經是なり、又云く一切種智とは我等が一心なり一心とは万法の
惣体なり之を思ふ可し。

第四 無有怖畏加刀杖等の事

おんぎくでん いわ しゃつけ ぼさつ とうじよう なんこ あ べ
御義口伝に云く迹化の菩薩に刀杖の難之れ有る可からずと云う經文なり、
かんじほん まつぼうほつけ きようじや とうじよう さくさくけんひんすい
勸持品は末法法華の行者に及加刀杖者数数見擯出と此の品には之無し、
まつぼう しゃくぶく しゅぎよう
彼は末法の折伏の修行此の品は像法損受の修行なるが故なり云云。

第五 有人来欲難問者諸天昼夜等の事

おんぎくでん いわ まつぼう おい ほつけ しょうんしゅご あ べ
御義口伝に云く末法に於て法華を行ずる者をば諸天守護之有る可し常為法
なむ みようほうれんげきようこれ
故の法とは南無妙法蓮華經是なり。

涌出品一箇の大事

第一 唱導之師の事

御義口伝に云く涌出の一品は悉く本化の菩薩の事なり、本化の菩薩の所作
としては南無妙法蓮華經なり此れを唱と云うなり導とは日本国の一切
衆生を靈山淨土へ引導する事なり、末法の導師とは本化に限ると云うを
師と云うなり、此の四大菩薩の事を釈する時、疏の九を受けて輔正記の九
に云く「經に四導師有りとは今四徳を表す上行は我を表し無辺行は常を
表し淨行は淨を表し安立行は樂を表す、有る時には一人に此の四義を
具す二死の表に出づるを上行と名け断常の際を踰ゆるを無辺行と稱し
五住の垢累を越ゆる故に淨行と名け道樹にして徳円かなり故に安立行
と曰うなり」と今日蓮等の類南無妙法蓮華經と唱え奉る者は皆地涌の流類
なり、又云く火は物を焼くを以て行とし水は物を淨むるを以て行とし風は
塵垢を払うを以て行とし大地は草木を長ずるを以て行とするなり四菩薩の

りやくこれ
利益是なり、四菩薩の行は不同なりと雖も、俱に妙法蓮華經の修行なり、
此の四菩薩は下方に住する故に釈に「法性之淵底玄宗之極地」と云えり、
下方を以て住处とす下方とは真理なり、輔正記に云く、「下方とは生公の
云く住して理に在るなり」と云云、此の理の住处より顕れ出づるを事と
云うなり、又云く千草万木・地涌の菩薩に非ずと云う事なし、されば地涌
の菩薩を本化と云えり本とは過去久遠五百塵点よりの利益として無始無終
の利益なり、此の菩薩は本法所持の人なり本法とは南無妙法蓮華經なり、
此の題目は必ず地涌の所持の物にして迹化の菩薩の所持に非ず、此の本法
の体より用を出して止觀と弘め一念三千と云う、惣じて大師人師の所釈
も此の妙法の用を弘め給うなり、此の本法を受持するは信の一字なり、
元品の無明を対治する利劍は信の一字なり無疑 曰信の釈之を思ふ可し云
云。

御義口伝巻上

弘安元年 戊寅 正月一日

執筆

九五

御義口伝 巻下

日蓮所立自寿量品至開結二經

752P

寿量品廿七箇の大事

第一 南無妙法蓮華經如來寿量品第十六の事 文句の九に云く如來とは

十方三世の諸仏二仏三仏本仏迹仏の通号なり別しては本地三仏の別号な

り、寿量とは詮量なり、十方三世二仏三仏の諸仏の功德を詮量す故に

寿量品と云うと。

御義口伝に云く此の品の題目は日蓮が身に当る大事なり神力品の付属是な

り、如來とは釈尊惣じては十方三世の諸仏なり別しては本地無作の三身

なり、今日蓮等の類いの意は惣じては如來とは一切衆生なり別しては日蓮

- 1570 -

の弟子・檀那なり、されば無作の三身とは末法の法華經の行者なり無作
の三身の宝号を南無妙法蓮華經と云うなり、壽量品の事の三大事とは是な
り、六即の配立の時は此の品の如来は理即の凡夫なり頭に南無妙法蓮華經
を頂戴し奉る時名字即なり、其の故は始めて聞く所の題目なるが故なり
聞き奉りて修行するは觀行即なり此の觀行即とは事の一念三千の本尊を
觀ずるなり、さて惑障を伏するを相似即と云うなり化他に出づるを分真即
と

云うなり無作の三身の仏なりと究竟したるを究竟即の仏とは云うなり、
惣じて伏惑を以て壽量品の極とせず唯凡夫の当体・本有の儘を此の品の
極理と心得可きなり、無作の三身の所作は何物ぞと云う時南無妙法蓮華經
なり云云。

第二如来秘密神通之力の事

御義口伝に云く無作三身の依文なり、此の文に於て重重の相伝之有り、神通
之力とは我等衆生の作作発発と振る舞う處を神通と云うなり獄卒の罪人
を苛責する音も皆神通乃力生住異滅の森羅三千の当体悉く神通之力の体
なり、今日蓮等の類いの意は即身成仏と開覚するを如来秘密神通之力と
は云うなり、成仏するより外の神通と秘密とは之れ無きなり、此の無作
の三身をば一字を以て得たり所謂信の一字なり、仍つて経に云く「我等当
信受仏語」と信受の二字に意を留む可きなり。

第三我実成仏已来無量無辺等の事会

御義口伝に云く我実とは釈尊の久遠実成道なりと云う事を説かれたり、
然りと雖も当品の意は我とは法界の衆生なり十界己己を指して我と云う
なり、実とは無作三身の仏なりと定めたり此れを實と云うなり成とは
能成所成なり成は開く義なり法界無作の三身の仏なりと開きたり、仏と

は此れを覺知するを云うなり已とは過去なり来とは未來なり已來の言の中に現在には有るなり、我実と成けたる仏にして已も来も無道なり無辺なり、百界千如・一念三千と説かれたり、百千の二字は百は百界千は千如なり此れ即ち事の一念三千なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は寿量品の本主なり、惣じては迹化の菩薩此の品に手をつけいろうべきに非ざる者なり、彼は迹 表本裏・此れは本面迹裏・然りと雖も而も当品は末法の要法に非ざるか其の故は此の品は在世の脱益なり題目の五字計り当今の下種なり、然れば在世は脱益滅後は下種なり仍て下種を以て末法の詮と為す云云。

第四如来如実知見三界之相無有生死的事

御義口伝に云く如来とは三界の衆生なり此の衆生を寿量品の眼開けてみれば十界本有と実の如く知見せり・三界之相とは生老病死なり本有の

生死しやうじとみれば無有しやうじ生死しやうじなり生死しやうじ無ければ退出しやうじも無し唯ただ生死しやうじ無きに非あらざるなり、生死しやうじを見て厭離おんりするを迷まよいと云いい始しか覺かくと云いうなりさて本有ほんぬの生死しやうじと知見ちけんするを悟いと云いい本覺ほんかくと云いうなり、今日いま蓮等にちれんの類たぐい南無なむ妙法蓮華經みようれんげきやうと唱となえ奉たてまつる時本有ほんぬの生死しやうじ本有しやうじの退出しやうじと開覺かいかくするなり、又い云わく無も有も生も死も若退も若出も在世も滅後めつごも悉ことごとく皆本有みなほんぬ常住じやうじゆうの振舞ふるまいなり無とは法界同時ほっかいどうじに妙法蓮華經みようれんげきやうの振舞ふるまいより外は無きなり有とは地獄じごくは地獄じごくの有ままじゆうの儘かい十界本有ほんぬの妙法みようれんげきやうの全体ぜんたいなり、生とは妙法みようれんげきやうの生なれば隨縁ずいえんなり死とは寿量じゆうりやうの死しなれば法界同時ほっかいどうじに責如せきになり若退じやくえの故ゆゑに滅後めつごなり若出じやくしゅつの故ゆゑに在世ざいせいなり、されば無死退滅むしだいめつは空くうなり有生おうじん出在しゅつざいは仮かりなり如来にょらい如実にょじつは中道ちゆうだうなり、無死退滅むしだいめつは無作むさの報身ほうしんなり有生おうじん出在しゅつざいは無作むさの応身おうじんなり如来如実にょらいにょじつは無作むさの法身ほふしんなり、此この三身さんじんは我が一身いつしんなり、一身いつしん即三身そくさんじん名為秘みとは是これなり、三身さんじん即一身さんじん名為密みつも此この意いなり、然しからば無作むさの三身さんじんの当体とうたいの

蓮華の仏とは日蓮が弟子・檀那等なり南無妙法蓮華經の宝号を持ち奉る
故なり云云。

第五 若仏久住於世薄徳之人不種善根貧窮下賤貪著五欲入於憶想妄見網中の
事

御義口伝に云く此の經文は仏世に久住したまわば薄徳の人は善根を殖ゆ
可からず然る間妄見網中与説かれたり、所詮此の薄徳とは在世に漏れたる
衆生今滅後日本国に生れたり、所謂念仏・禅・真言等の謗法なり、不種
善根とは善根は題目なり不種とは未だ持たざる者なり、憶想とは捨閑閣抛
第三の劣等此くの如きの憶想なり、妄とは權教妄語の經教なり見は邪見
なり法華最第一の一を第三と見るが邪見なり、網中とは謗法不信の家なり、
今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者はかかる妄見の經網中の家
を離れたる者なり云云。

第六 飲他毒藥藥發悶乱宛轉于地の事

御義口伝に云く他とは念仏・禅・真言の謗法の比丘なり、毒藥とは權教
ほうへん ほうけ りようやく あら ゆえ もんらん
方便なり法華の良藥に非ず故に悶乱するなり悶とはいきたゆるなり、
じゆりようほん
寿命品の命なきが故に悶乱するなり宛轉于地とは阿鼻地獄へ入るなり云
しよ
云。諸子飲毒の事は釈に云く「邪師の法を信受するを名けて飲毒と為す」
しよ ほうぼう
と、諸子とは謗法なり飲毒とは弥陀大日等の權法なり、今日蓮等の類い
なむみようほうれんげきよう とな たてまつ
南無妙法蓮華經と唱え奉るは毒を飲まざるなり。

第七・或矢本心・或不失者の事

御義口伝に云く本心を失うとは謗法なり本心とは下種なり不失とは法華經
おんぎくでん いわ ほんしん うしな ほうぼう ほんしん げしゅ
の行者なり失とは本有る物を失う事なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經
ぎようじゃ とが あ うしな いまにちれん たく なむみようほうれんげきよう
と唱え奉るは本心を失わざるなり云云
とな たてまつ ほんしん
と唱え奉るは本心を失わざるなり云云
とうし わごう

第八擣 符和合与子令服の事

御義口伝に云く此の経文は空仮中の三諦戒定慧の三学なり、色香美味の良薬なり擣は空諦なり、は仮諦なり和合は中道なり与は投与なり子は法華の行者なり服すると云うは受持の義なり、是を此大良薬色香美味皆悉具足と説かれたり、皆悉の二字万行方善・諸波羅蜜を具足したる大良薬たる南無妙法蓮華経なり、色香等とは一色一香・無非中道にして草木成仏なり、されば題目の五字に一法として具足せずと云う事なし若し服する者は速除苦惱なり、されば妙法の大良薬を服するは貪・瞋・癡の三毒の煩惱の病患を除くなり、法華の行者南無妙法蓮華経と唱え奉る者は謗法の供養を受けざるは貪欲の病を除くなり、法華の行者は罵詈せらるれども忍辱を行ずるは脹意の病を除くなり、法華経の行者は是人於仏道決定無有疑と成仏を知るは愚痴の煩惱を治するなり、されば大良薬は末法の成仏の甘露なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉るは

大良藥りょうやくの本主ほんしゅなり。

第九毒氣どっけ深入ほんしん矢本ほんしん心故しんこの事

御義おんぎ口伝くでんに云いく毒氣どっけ深入ほんしんとは權教こんきょう謗法ぼうほうの執情しゅうじょう深く入りたる者なり、之に依よつて法華ほっけの大良藥りょうやくを信受しんじゆせざるなり服せしむると雖いえども吐き出だすは而謂とな不美たてまつとてむまからずと云いう者なり、今日蓮等いまにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつるは而謂あら不美たてまつの者に非あらざるなり。

第十是好良藥ぜこうりょうやく今留こんる在此こゝ汝可取服もつうふさい勿憂むつうふさい不差ちさの事

御義おんぎ口伝くでんに云いく是好良藥ぜこうりょうやくとは・或あるは經教きやうきやう・或あるは舍利しゃりなりさて末法まつほうにては南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうなり、好さとは三世諸仏さんぜしよぶつの好み物だいもくは題目ごじの五字ごじなり、今留とどとは末法まつほうなり此こゝとは一閻浮提えんぶだいの中には日本國にほんこくなり、汝なんじとは末法まつほうの一切衆生いっさいしゆじやうなり取とは法華經ほっけきやうを受持じゆじする時の儀式ぎしきなり、服はくするとは唱となえ奉たてまつる事なり服するより無作むさの三身さんじんなり始成正覺しじやうしやうかくの病患げんいゆ差さるなり、今日蓮等いまにちれんの類たぐい南無

みようほうれんげきよう とな たてまつこれ
妙法蓮華經と唱え奉る是なり。

第十一 自我得仏來の事

おんぎくでん いわ いっくさんじん なら
御義口伝に云く一句三身の習いの文と云うなり、自とは九界なり我とは
ぶっかい じゅっかい ほんぬむさ さんじん
仏界なり此の十界は本有無作の三身にして来る仏なりと云えり、自も我
も得たる仏來れり十界本有の明文なり、我は法身・仏は報身・來は応身
なり此の三身・無始無終の古仏にして自得なり、無上宝聚不求自得之を思
うべし、然らば即ち顕本遠寿の説は永く諸教に絶えたり、今日蓮等の
たく なむ みようほうれんげきよう とな たてまつ
類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは自我得仏來の行者なり云云。

第十二 為度衆生故方便現涅槃の事

おんぎくでん いわ ねはんぎよう ほけきよう
御義口伝に云く涅槃經は法華經より出でたりと云う經文なり、
すで
既に方便と

説かれたり云云。

第十三 常住此説法の事

おんぎくでん いわ じょうじゅう
御義口伝に云く常住とは法華經の行者の住処なり、此とは娑婆世界な
せんごくこうや
り山谷曠野を指して此とは説き給う、説法とは一切衆生の語言の音声が
ほんぬ じじゅうち せっぽう
本有の自受用智の説法なり、末法に入つて説法とは南無妙法蓮華經なり
いまにちれん たく せっぽうこれ
今日蓮等の類いの説法是なり。

第十四 時・我及衆僧俱出靈鷲山の事

御義口伝に云くおんぎくでん いわ靈山りやうぜん一会儼然未散げんねんの文なり、時とは感応末法の時なり我
とは釈尊しゃくそん及とは菩薩ぼさつ聖衆しやうしゆを衆僧しゆしやうと説かれたり俱とは十界じゆかいなり靈鷲山りやうじゆせん
とは寂光土じやくかうなり、時に我も及も衆僧しゆしやうも俱に靈鷲山りやうじゆせんに出ずるなり秘す可べし
秘す可べし、本門事ほんもんの一念三千いちねんさんぜんの明文めいぶんなり御本尊ごほんぞんは此の文を顕あらわし出だし給たまふ
なり、されば俱とは不變真如ふへんしんによの理なり出とは隨緣真如ずいえんしんによの智なり俱とは一念いちねん
なり出とは三千さんぜんなり云云。

又云く時とは本時娑婆世界しやばせかいの時なり下は十界宛然じゆつかいおんねんの曼陀羅まんだらを顕あらわす文なり、
其の故そのゆえは時とは末法第五時まつぽうの時なり、我とは釈尊しゃくそん及は菩薩衆僧ぼさつしゆしやうは二乗俱にじやう
とは六道むくどなり・出とは靈山りやうぜん淨土じやうどに列出いだするなり靈山りやうぜんとは御本尊ごほんぞん並びに
日蓮等にちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみよほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつる者の住所を説くなり云云。

第十五 衆生見劫尽しゆじやう而衆見燒尽しやうじんの事

御義口伝に云く本門壽量ほんもんじゆりやうの一念三千いちねんさんぜんを頌じゆする文なり、大火所燒時たいかとは実義じつぎ

には煩惱ぼんのうの大火たいかなり、我し此土安穩あんのんとは国土世間こくどせけんなり、衆生所遊樂しゅじょうとは衆生世間しゅじょうせけんなり、宝樹多華菓けかとは五陰世間ごおんせけんなり是れ即ち一念三千いちねんさんぜんを分明ぶんみょうに説かれたり、又云く上の件かみくだんの文は十界じゅつかいなり大火たいかとは地獄界じごくなり天鼓てんくとは畜生ちくしやうなり人と天てんとは人天にんてんの二界にがいなり、天と

人と常に充滿じゆうまんするなり、雨曼陀羅華まんだらけとは声聞界しやうもんなり園林えんかくとは縁覺界えんかくなり菩薩界ぼさつとは及の一字ぶつがいなり仏界ぶつがいとは散仏さんぶつなり修羅しゆらと餓鬼界がきとは憂怖諸苦惱しよくによぜ如是いへど悉充滿じゆうまんの句せつに撰せんするなり、此等これらを是諸罪衆生しよざいしゅじやうと説かれたり、然りしかと雖も此いへどの寿量品じゆりやうぼんの説顯あらわれては、則みな皆見我身みなみけみとて一念三千いちねんさんぜんなり、今日蓮いまにちれん等の類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつる者これ是なり云云。

第十六 我亦為世父またいせの事

御義口伝おんぎくでんに云く我いわとは釈尊しやくそん一切衆生いっさいしゅじやうの父ちちなり主師親しゅししんに於おいて仏ぶつに約やくし經に約やくす、仏ぶつに約やくすとは迹門しやくもんの仏ぶつの三德さんとくは今此三界こんしさんがいの文これ是なり、本門ほんもんの仏ぶつの

主師親しゅししんの三德さんとくは主さんの德とくは我わ此こ土安穩しどあんのんの文ぶんなり師しの德とくは常説法教化せつぽうきょうけの文ぶんなり

親おやの德とくは此この我わ亦また為な世父せふの文ぶん是これなり、妙樂大師みょうらくだいしは寿量品じゆりょうぼんの文ぶんを知らざる

者ものは不知恩ふちおんの畜生ちくしょうと釈しゃくし給たまえり經きやうに約しよすれば、諸經しよきやう中王ちゆうわうは主しゅの德とくなり能なり

救一切衆生いっさいしゅじやうは師しの德とくなり又如大梵天王だいぼんてんのう一切衆生いっさいしゅじやう之父ちちの文ぶんは父ちちの德とくなり、

今日蓮等こんにんの類るい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつる者ものは一切衆生いっさいしゅじやうの父ちちなり無間むげん

地獄じじくの苦くるを救すくう故ゆゑなり云云いふ、涅槃經ねはんきやうに云いく

「一切衆生いっさいしゅじやうの異ことの苦くるを受うくるは悉ことごとく是これれ如來にょらい一人ひとりの苦くる」と云云いふ、日蓮にちれんが

云いく一切衆生いっさいしゅじやうの異ことの苦くるを受うくるは悉ことごとく是これれ日蓮にちれん一人ひとりの苦くるなるべし。

第十七 放逸ほういつ著五欲墮だ於惡道中おあくちゆうの事

御義口伝おんぎくでんに云いく放逸ほういつとは謗法ぼうぼうの名ななり入阿鼻獄にゆうあびごく疑うたがひ無なき者ものなり、今日蓮等こんにん

の類るい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつる者ものは此この經文きやうもんを免離めんりせり云云いふ。

第十八 行道ぎやうだう不ふ行道ぎやうだうの事

おんぎくでん いわ じゅつかい しゅじょう
御義口伝に云く十界の衆生の事を説くなり行道は四聖不行道は六道なり、又云く行道は修羅・人天不行道は三悪道なり、所詮末法に入つては法華の行者は行道なり謗法の者は不行道なり、道とは法華経なり、天台云く「仏道とは別して今の経を指す」と、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉るは行道なり唱えざるは不行道なり云云。

第十九 每自作是念の事

おんぎくでん いわ さんぜ
御義口伝に云く每とは三世なり自とは別しては釈尊惣じては十界なり、是念とは無作本有の南無妙法蓮華経の一念なり、作とは此の作は有作の作に非ず無作本有の作なり云云、広く十界本有に約して云わば自とは万法己己の当体なり、是念とは地獄の呵責の音其の外一切衆生の念念皆是れ自受用報身の智なり是を念とは云うなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る念は大慈悲の念なり云云。

第二十 得入無上道等の事 とくくにゅうむじやうだう等の事

御義口伝に云く無上道とはおんぎくでん いわ むじやうだう 寿量品の無作の三身なり此の外に成就じゅうじゆ ぶつしん 仏身こ 之れ無し、今日蓮等の類いまにちれん たく 南無妙法蓮華經なむ みやうほうれんげきやう と唱え奉る者は成就とな たてまつ じゅうじゆ ぶつしん うたがい 仏身疑無きなり云云。

第廿一 自我偈の事 じがげ

御義口伝に云く自とは九界なり我とは仏身おんぎくでん いわ なり偈とはことわるなり本有ぶつしん ことわり ほんぬ とことわりたる偈頌げしゆ なり深く之を案ず可し、偈様とは南無妙法蓮華經なむ みやうほうれんげきやう なり云云。

第廿二 自我偈始終の事 じがげ しじゆう

御義口伝に云く自とは始なり速成就おんぎくでん いわ 仏身の身は終りなり始終そくじやうじゆう ぶつしん 自身なり中の文字は受用もんじ じゆよう なり、仍よ つて自我偈は自受用身じがげ じじゆゆうしん なり法界を自身ほっかい じしん と開き法界ほっかい 自受用身なれば自我偈に非ずと云う事なし、自受用身じがげ じじゆゆうしん とは一念三千ほしいまにうけもちいるみ いちねんさんぜん

なり、伝でんぎよう教くわう云いく「一念三千即・自受用身・自受用身とは尊形そんぎようを出でたる
仏と・出尊形そんぎよう仏とは無作むさの三身さんじんと云う事なり」云云、今日蓮等いまにちれんの類たぐい
南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつる者これ是なり云云。

第廿三 久遠くおんの事

御義口伝おんぎくでんに云いく此しの品しんの所詮しよせんは久遠くおん実成じつじやうなり久遠くおんとははたらかさずつ
ろわずもとの儘ままと云いう義ぎなり、無作むさの三身さんじんなれば初めて成こぜず是れ働かざ
るなり、卅二相・八十種しゆじゆう好くそくを具足こせず是れ繕つくろわざるなり本有常住ほんぬじやうじゆうの仏な
れば本の儘ままなり是これを久遠くおんと云いうなり、久遠くおんとは南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうなり実成じつじやう
無作むさと開けたるなり云云。

第廿四 此この寿量品じゆりやうひんの所化しよけの国土こくどと修行しゆぎやうとの事

御義口伝おんぎくでんに云いく当品流布るふの国土こくどとは日本国にほんこくなり惣そうじては南閻浮提えんぶだいなり、
所化しよけとは日本国にほんこくの一切衆生いつさいしゆじやうなり修行しゆぎやうとは無うたが疑い曰い信しんの信心しんじんの事なり、授与じゆよ

の人とは本化地涌の菩薩なり云云。
ほんげじゆ ぼさつ

第廿五建立御本尊等の事 こんりゆうごほんぞん

御義口伝に云く此の本尊の依文とは如来秘密神通之力の文なり、戒定慧の
おんぎくでん いわ ほんぞん によらいひみつじんつう かいじようえ

三学は寿量品の事の三大秘法是れなり、日蓮慥に靈山に於て面受口決
じゆりようぼん ひほうこ にちれんたしか りようぜん おい ぐけつ

せしなり、本尊とは法華經の行者の一身の当体なり云云
ほんぞん ほけきよう ぎようじや とうたい

第廿六寿量品の対告衆の事 じゆりようぼん たいこうしゆ

御義口伝に云く經文は弥勒菩薩なり、然りと雖も滅後を本とする故に
おんぎくでん いわ きようもん みろくぼさつ しか いえど めつご ゆえ

日本国の一切衆生なり、中にも日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る
にほんこく いっさいしゆじやう うちん にちれん たぐ な む みようほうれんげきよう となたてまつ

者是なり、弥勒とは末法法華の行者の事なり、弥勒をば慈氏と云う法華
これ みろく まつぽうほっけ ぎようじや みろく じし ほっけ

の行者を指すなり、章安大師云く「為彼除惡即是彼親」と是れ豈弥勒菩薩
ぎようじや しやうあんだいしいわ そくぜ こ あにみろくぼさつ

に非ずや云云
あら

第廿七無作三身の事 む ささんじん

種子尊形三摩耶 しゆしそんぎよう まや

おんぎくでん いわ そんぎよう
御義口伝に云く尊形とは十界本有の形像なり三摩耶とは十界所持の物
なり種子しゆしとは信の一字なり、所謂南無妙法蓮華經改めざるを云うなり三
摩耶まやとは合掌がっしょうなり秘す可し秘す可し云云。

分別功德品三箇の大事だいじ

第一其有衆生聞仏寿命長遠如是乃至能生一念信解所得功德無有限量の事
御義口伝に云く一念信解の信の一字は一切智慧を受得する所の因種なり、
信の一字は名字即の位なり仍よつて信の一字は最後品の無明を切る利剣なり、
信の一字は寿量品の理顯本を信ずるなり解とは事顯本を解するなり此の
事理の顯本を一念に信解するなり、一念とは無作本有の一念なり、此くの
如く信解する人の功德は限量有る事有る可からざるなり、信の処に解あ
り解の処に信あり然りと雖も信を以て成仏を決定するなり、今日蓮等
の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者はなり云云。

第二是則能信受如是諸人等頂受此經典の事

おんぎくでん いわ ほけきょう こうべ
御義口伝に云く法華經を頭に頂くと云う明文なり、如是諸人等の文は
いっさいしゅじょう わた
広く一切衆生に亘るなり、然らば三世十方の諸仏は妙法蓮華經を頂き
じょうぶつ たま よ かみ じゅうようほん だいまく みょうほうれんげきょう
受けて成仏し給う、仍つて上の寿量品の題目を妙法蓮華經と題して次に
によらい
如來と題したり秘す可し云云、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る
は此の故なり云云。

第三仏子住此地則是仏受用の事

おんぎくでん いわ
御義口伝に云く此の文を自受用の明文と云えり、此地とは無作の三身の
えじ ぶっし ほっけ ぎようじや ぶっし ほさつ ほっけ ぎようじや ほさつ
依地なり仏子とは法華の行者なり仏子は菩薩なり法華の行者は菩薩なり
しんげ いまにちれん たく な むみょうほうれんげきょう とな たてまつ みょうほう
住とは信解の義なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は妙法
の地に住するなり仏の受用の身なり深く之を案ず可し云云。

随喜品二箇の大事

第一妙法蓮華經隨喜功德の事

御義口伝に云く随とは事理に随順するを云うなり喜とは自他共に喜ぶ事なり、事とは五百塵点の事顕本に随順するなり理とは理顕本に随うなり所詮寿命品の内証に随順するを随とは云うなり、然るに自他共に智慧と慈悲と有るを喜とは云うなり所詮今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る時必ず無作三身の仏に成るを喜とは云うなり、然る間随とは法に約し喜とは人に約するなり、人とは五百塵点の古仏たる釈尊法とは寿命品の南無妙法蓮華經なり、是に随い喜ぶを随喜とは云うなり惣じて随とは信の異名なり云云、唯信心の事を隋と云うなりされば二卷には随順此經非己智分と説かれたり云云。

第二口氣無 優鉢華之香常徒其口出の事

御義口伝に云く口氣とは題目なり、無稼とは弥陀等の權教方便無得道

の教を交えざるなり、優鉢華之香とは 法華經なり、末法の今は題目なり、
方便品に如優量鍬華の事を一念三千と云えり之を案ず可し、常とは三世
常住なり其口とは法華の行者の口なり出とは南無妙法蓮華經なり、
今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは 常従其口出なり云云。

法師功德品四箇の大事

第一法師功德の事

御義口伝に云く法師とは五種法師なり功德とは六根清淨の果報なり、
所詮今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は六根清淨なり、され
ば妙法蓮華經の法の師と成つて大なる徳有るなり、功は幸と云う事なり
又は惡を滅するを功と云い善を生ずるを徳と云うなり、功德とは即身成仏
なり又六根清淨なり、法華經の説文の如く修行するを六根清淨と得意
可きなり云云。

第二六根 清淨の事

おんぎくでん いわ まなこ
御義口伝に云く 眼の功德とは法華不信の者は無間に墮在し信ずる者は
じょうぶつ
成仏なりと見るを以て眼の功德とするなり、法華經を持ち奉る処に眼
まなこ
の八百の功德を得るなり、眼とは法華經なり此の大乗經典は諸仏の眼目
いまにちれん たぐ な む みょうほうれんげきょう と な たてまつ
と、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は眼の功德を得るなり
まなこ
云云、耳・鼻・舌・身・意又又此くの如きなり云云。

第三又如 淨明鏡の事

おんぎくでん いわ ほけきょう
御義口伝に云く法華經に鏡の譬を説く事此の明文なり、六根清淨の人
るりみょうきょう こと さんぜんせかい
は瑠璃明鏡の如く三千世界を見ると云う經文なり、今日蓮等の類い南無
みょうほうれんげきょう と な たてまつ めいきょう
妙法蓮華經と唱え奉る者は明鏡に万像を浮ぶるが如く知見するなり、此
めいきょう
の明鏡とは法華經なり別しては宝塔品なり、又は我が一心の明鏡なり、
しよせんるり めいきょう
所詮瑠璃と明鏡との二の譬を説かれたり身根清淨の下なり、色心不二
たとえ
しよじょう

なれば何れも清淨しよつじやうの徳分なり淨とは不淨ふじやうに対して淨と云うなり明とは無明むみやうに対して明と説くなり、鏡とは一心いっしんなり淨は仮諦けたい・明は空諦くうたい・鏡は中道ちゆうだうなり悉見けんしよ諸色像しきぞうの悉は十界じゆかいなり、所詮しよせん沖明鏡めいきやうとは色心しきしんの二法、妙法蓮華經みやうほうれんげきやうの体なり淨明鏡じやうみやうきやうとは信心しんじんなり云云、又三千太子世界さんぜんせかいを見するとは三世間せけんの事なり。

第四是人持此經安住希有地けうの事

御義口伝おんぎくでんに云く是人いわとは日本国にほんこくの一切衆生いっさいしゆじやうの中には法華ほつけの行者ぎやうじやなり希有けう地ちとは寿量品じゆりやうぼんの事理じりの顯本けんぽんを指すなり、是これを又分別品ぶんべつには「仏説希有法ぶつせつけう」と説かれたり別しては南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうなり、今日蓮等いまにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經みやうほうれんげきやうと唱え奉る者となたてまつの希有けうの地ちとは末法弘通まつぽうぐつうの明鏡めいきやうたる本尊ほんぞんなり、惣じては此の品の六根清淨ろくこんしやうじやうの功德くどくは十信相似即じゆっしんそうじそくなり对告衆たいごうしゆの常精進しやうじん菩薩ぼさつは十信じゆっしんの第三信と云えり、然りしかと雜まも末法まつぽうに於ては法華經ほけきやうの行者ぎやうじやを

指して常精進菩薩と心得可きなり此の經の持者は是則精進の故なり。

じょうふぎようぼん

常不輕品三十箇の大事

だいじ

763P

だいいち ふぎよう

第一常不輕の事

おんぎくでん

御義口伝に云く常の字は三世の不輕の事なり、不輕とは一切衆生の内証

さんぜ ふぎよう

ふぎよう

いっさいしゅじょう

ないしやう

しよく さんいんぶつしやう

ぶつしやう

ほつしやう

ほつしやう

みやうほつれんげきやう

所具の三因仏性を指すなり仏性とは法性なり法性とは妙法蓮華經なり

云云。

たいせいぼさつ

第二得大勢菩薩の事

おんぎくでん

御義口伝に云く得とは心身なり大とは法身なり勢とは報身なり、又得とは

おうじん

ほつしん

ほうしん

けたい

ちゆうどう

くうたい

えんゆう

さんたいさんじん

仮諦なり大とは中道なり勢とは空諦なり円融の三諦三身なり。

いあん

第三威音王の事

おんぎくでん

御義口伝に云く威とは色法なり音とは心法なり王とは色心不二を王と云う

しきしんふに

なり、末法まつぽうに入つて南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱え奉る是れ併いおんら威音王いおんなり云云、

そのゆえ

其の故は音とは一切いっさい權教こんきやうの題目等だいもくなり威とは首題ごじの五字ごじなり王とは法華ほうけ

ぎやうじや

の行者ぎやうじやなり云云、法華ほうけの題目だいもくは獅子ししの吼こゆるが如ごとく余經よきやうは余獸よきやうの音この如ごとく

しよきやう

なり諸經しよきやう中王ちゆうわうの故に王と云うなり、今日蓮等いまいにちれんの類たぐいい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱

いおんおうぶつ

え奉る威音王いおんおうぶつ仏ぶつなり云云。

しよけん

第四凡有所見しよけんの事

おんぎくでん

御義口伝おんぎくでんに云く今日いま日本ほんこくの一切いっさい衆生しゆじやうを法華經ほけきやうの題目だいもくの機きなりと知見ちけんするな

り云云。

がじんきやう

第五我深敬汝等がじんきやう不敢きやうまん輕慢きやうまん所以者何汝等みな皆行菩薩道ぼさつ当得さぶつ作仏さぶつの事

おんぎくでん

御義口伝おんぎくでんに云く此の廿四字みやうほうと妙法みやうほうの五字ごじは替かわれども其の意こは之れ同じ廿

ほけきやう

四字は略法華經ほけきやうなり。

第六但行礼拜だにれいはいの事

おんぎくでん
御義口伝に云く礼拝とは合掌なり合掌とは法華經なり此れ即ち一念三千
なり、故に不専読誦經典但行礼拝と云うなり。

第七乃至遠見の事

おんぎくでん
御義口伝に云く上の凡有所見の見は内証所具の仏性を見るなり、此れは
理なり遠見の見は四衆と云う間事なり仍つて上は心法を見る今は色法を見
る色法は本門の開悟四一開会なり、心法を見るは迹門の意又四一開会なり、
遠の一字は寿量品の久遠なり故に故往礼拝といえり云云。

第八心不浄者の事

おんぎくでん
御義口伝に云く謗法の者は色心二法共に不浄なり、先ず心法不浄の文は今
・此の心不浄者なり、又身不浄の文は譬喩品に「身常臭処垢穢不浄」と云
えり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は色心共に清浄な
り、身浄は法師功德品に云く「若持法華經其身甚清浄」の文なり、心浄

とは提婆品だいばに云く「淨心信敬じょうしん」と云云、淨とは法華經ほけきょうの信心しんじんなり不淨ふじょうとは謗法ほうぼうなり云云。

第九言是無智比丘むちびくの事

御義口伝おんぎくでんに云く此の文は法華經ほけきょうの明文めいぶんなり、上慢じょうまんの四衆ししゅう不輕菩薩ふぎようぼさつを無智むちの比丘びくと罵詈まっぼうせり、凡有所見しよけんの菩薩ぼさつを無智むちと云う事は第六天だいろくてんの魔王まおうの所為まゐなり、末法まつぼうに入まっぼうつて日蓮等にちれんの類たぐいい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと唱え奉る者は無智むちの比丘びくと謗うぜられん事經文きやうもんの明鏡めいきやうなり、無智むちを以て法華經ほけきょうの機きと定めたり。

第十聞其所説皆信伏みなしんぶくすいじゆう隨從じゆじゆうの事

御義口伝おんぎくでんに云く聞みとは名字みやつしそく即すなはちなり所詮しよせんは而強毒にこつどくし之の題目だいもくなり、皆みなとは上慢じょうまんの四衆ししゅう等らなり信しんとは無疑うたがい日信にっしんなり伏ふとは法華ほつけに歸伏きふくするなり隨じゆとは心しんを法華經ほけきょうに移すなり從じゆとは身を此この經きやうに移すなり、所詮しよせん今日蓮等けふれんの類たぐいい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと唱え奉る行者ぎやうじやは末法まつぼうの不輕菩薩ふぎようぼさつなり。

第十一於四衆中說法心無所畏の事

おんぎくでん ししゅう にほんこく
御義口伝に云く四衆とは日本国の中の一切衆生なり説法とは南無
みょうほうれんげきょう しんむしよい いまにちれん
妙法蓮華經なり、心無所畏とは今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と呼ばわ
る所の折伏なり云云。
しゃくぶく

第十二常不輕菩薩豈異人乎則我身是の事

おんぎくでん かこ ふぎようぼさつ こ
御義口伝に云く過去の不輕菩薩は今日の釈尊なり、釈尊は寿命品の教主
じゆりようほん きようしゅ
なり寿命品の教主とは我等・法華經の行者なり、さては我等が事なり
いまにちれん たくい ふぎよう
今日蓮等の類いは不輕なり云云。

第十三常不值仏不聞法不見僧の事

おんぎくでん ふぎようぼさつ さんぼう はいけん
御義口伝に云く此の文は不輕菩薩を輕賤するが故に三宝を拝見せざる事二
じこく だ くのう まつぼう にちれん たくい
百億劫地獄に堕ちて大苦惱を受くと云えり、今末法に入つて日蓮等の類
な む みょうほうれんげきょう かしこ す せんこう
い南無妙法蓮華經と唱え奉る者を輕賤せん事は彼に過ぎたり、彼は千劫

此れは至無数劫なり末法の仏とは凡夫なり凡夫僧なり、法とは題目なり僧とは我等行者なり、仏とも云われ又凡夫僧とも云わるるなり、深覺・円理名之為仏の故なり円理とは法華經なり云云。

第十四畢是罪已復遇常不輕菩薩の事

おんぎくでん 御義口伝に云く若し法華誹謗の失を改めて信伏随従する共浅く有りてはむげん 無間に墮つ可きなり、先謗強きが故に依るなり千劫無間地獄に墮ちて後に出づる期有つて又日蓮に値う可きなり復遇日蓮なるべし。

第十五於如来滅後等の事

おんぎくでん 御義口伝に云く不輕菩薩の修行は此の如くなり仏の滅後に五種に妙法蓮華經を修行すべしと見えたり、正しく是故より下廿五字は末法日蓮等の類いの事なるべし、既に是の故にとおさえて於如来滅後と説かれたり流通の品なる故なり、惣じては流通とは未来当今の為なり、法華經一部

いちおう さいせ
は一往は在世の為なり再往は末法当今の為なり、其の故は妙法蓮華經の
ごじ さんぜ しょうぶつ
五字は三世の諸仏共に許して未来滅後の者の為なり、品品の法門は題目の
みょうほう まっぼう
用なり体の妙法末法の用たらば何ぞ用の品品別ならむや、此の法門秘す
てんだい
可し秘す可し、天台の「綱維を提ぐるに目として動かざること無きが如し」
みょうらくだいし
等と釈する此の意なり、妙樂大師は「略して経題を挙ぐるに玄に一部を
おさ
収む」と、此等を心得ざる者は末法の弘通に足らざる者なり。

第十六此品の時の不輕菩薩の体の事

おんぎくでん
御義口伝に云く不輕菩薩とは十界の衆生なり、三世常住の礼拝の行を
ぶぎょうぼさつ
立つるなり吐く所の語言は妙法の音声なり、獄卒が杖を取つて罪人を呵責
ごんこ みょうほう おんじょう
するが体の礼拝なり敢えて輕慢せざるなり、罪人・我を責め成すと思え
きょうまん
ば不輕菩薩を呵責するなり折伏の行是なり。
ふぎょうぼさつ かしゃく
ふぎょうぼさつ しやくぶく
ふぎょうぼさつ くれ

第十七不輕菩薩の礼拝住处の事之に付て十四箇所の礼拝住处の事之有り

おんぎくでん
御義口伝に云く礼拝の住処じゅうしょとは多宝塔中の礼拝なり、其そのの故は塔婆とうばとは
五大ほっかいの所成なり五大とは地水火風空なり此れを多宝たほうの塔とも云うなり、
法界ほっかい広しと雖も此の五大には過ぎざるなり故に塔中の礼拝と相伝そうでんするな
り秘す可し秘す可し云云。

第十八開示悟入礼拝住処じゅうしょの事

おんぎくでん
御義口伝に云く開示悟入かいじこにゅうの四仏知見しぶつちけんを住処じゅうしょとするなり、然る間方便品ほうべんの
此の文を礼拝の住処じゅうしょと云うなり此れは内に不輕ふぎょうの解を懷いだくと釈せり、解
とは正因しょういん 仏性ぶつしょうを具足ぐそくすと釈するなり開佛知見かいぶつちけんとは此の仏性ぶつしょうを開かしめん
とて仏は出現しゅつげんし給うなり。

第十九每自作是念の文礼拝住処じゅうしょの事

おんぎくでん
御義口伝に云く毎の字は三世さんぜなり念いつさいしゆじょうとは一切衆生の仏性ぶつしょうを念じ給いしな
り、仍よつて速成就じょうじゆぶっしん 仏身みなと皆当作さぶつ 仏とは同じき事なり仍よつて此の一文を相伝そうでん

せり、天台大師は「開三顯一。開近顯遠」と釈せり秘す可し秘す可し云云。

第二十我本行菩薩道の文礼拝住処の事

おんぎくでん がほんぎようばさつどう
御義口伝に云く我とは本因妙の時を指すなり、本行菩薩道の文は不輕菩薩 ほんぎようばさつどう
なり此れを礼拝の住処と指すなり。

第廿一生老病死礼拝住処の事

おんぎくでん しやうらうびやうし
御義口伝に云く一切衆生生老病死を厭離せず無常遷滅の当体に迷うに依 おんり
つて後世菩提を覚知せざるなり、此を示す時煩惱即菩提生死即涅槃と教う ごしやうばだい
る当体を礼拝と云うなり、左右の両の手を開く時は煩惱生死上慢不輕各別 とつたい
なり、礼拝する時両の手を合するは煩惱即菩提生死即涅槃なり、上慢の ほんのうそくばだいしやうじそくねはん
四衆の所具の仏性も不輕所具の仏性も一種の妙法なりと礼拝するなり ししゅう
云云。

第廿二法性礼拝住処の事

おんぎくでん　ふぎようぼさつほつしやうしんによ　さんいんぶつしやうな　むみようほうれんげきよう
御義口伝に云く不輕菩薩法性真如の三因仏性南無妙法蓮華經の廿四字に
足立て無明の上慢じやうまんの四衆ししゆうを拜するは蘊在衆生の仏性を礼拝するなり云
云。

第廿三無明礼拝住処の事　さんむ　じゆうしよ

おんぎくでん　じた　きやくい　じやうまん　ししゆう　ふぎよう
御義口伝に云く自他の隔意を立て彼は上慢の四衆我は不輕と云う、不輕
は善人上慢ぜんにんじやうまんは悪人と善惡ぜんあくを立つるは無明なり、此に立つて礼拝の行を成
す時善惡不二・邪正一如ぜんあくふに　じやしやういちによの南無妙法蓮華經と礼拝するなり云云。

第廿四蓮華の二字礼拝住処の事　れんげ　じゆうしよ

おんぎくでん　れんげ　いんが
御義口伝に云く蓮華とは因果の二法なり、惡因あれば惡果を感じ善因あれ
ば善果を感じず内証ないしやうには汝等三因さんいんぶつしやう仏性の善因あり、事に顕あらわす時は善果と成
つて皆当作みな　さぶつ仏す可しと礼拝はいし給うなり云云。

第廿五実報土礼拝住処の事　じつぽうど　じゆうしよ

御義口伝に云く実報土は豎の時は菩薩の住処なり、仍つて不輕菩薩の住処
を實報土と定めて此にて礼拝行を立て給う間實報土は礼拝の住処なり云
云。

第廿六慈悲の二字礼拝住処の事

御義口伝に云く不輕礼拝の行は皆当作仏と教うる故に慈悲なり、既に杖木
瓦石を以て打擲すれども而強毒之するは慈悲より起れり、仏心とは大慈悲
心是なりと説かれたれば礼拝の住処は慈悲なり云云。

第廿七礼拝住処分真即の事

御義口伝に云く菩薩は分真即の位と定むるなり、此の位に立つて理即の
凡夫を礼拝するなり之に依つて理即の凡夫なる間・此の授記を受けずして
無智の比丘と謗じたり云云。

第廿八究竟即礼拝住処の事

御義口伝に云く凡有所見の見は仏知見なり、
御義口伝に云く凡有所見の見は仏知見なり、
仏知見を以て上慢の四衆を
礼拝する間究竟即を礼拝の住处と定むるなり云云。

第廿九法界礼拝住処の事

御義口伝に云く法界に立て礼拝するなり法界とは広きに非ず狭きに非ず
惣じて法とは諸法なり界とは境界なり、地獄界乃至仏界各各界を法る間
不輕菩薩は不輕菩薩の界に法り上慢の四衆は四衆の界に法るなり、仍て
法界が法界を礼拝するなり自他不二の礼拝なり、其の故は不輕菩薩の四衆
を礼拝すれば上慢の四衆所具の仏性又不輕菩薩を礼拝するなり、鏡に向
つて礼拝を成す時浮べる影又我を礼拝するなり云云。

第卅礼拝住处忍辱地の事

御義口伝に云く既に上慢の四衆罵詈瞋恚を成して虚妄の授記と謗ずと云
えども不生瞋恚と説く間忍辱地に住して礼拝の行を立つるなり云云、初の

一の住処じゆうしよは世流布るふの学者がくしや知れり後の十三箇所は当世とうせの学者がくしや知らざる事なり云云。已上十四箇条の礼拝の住処じゆうしよなり云云。

神力品八箇の大事じんりきほん だいじ

第一妙法蓮華經如来神力の事だいいちみようほうれんげきようによらいじんりき

もんく 文句の十に云く神は不測ふしきに名け力は幹用かんゆうに名く不測ふしきは即ち天然の体深く

幹用かんゆうは則ち轉變の力大なり、此の中・深法じんぼうを付属ふぞくせんが為に十種の大力を

現げんず故に神力品じんりきほんと名くと。

おんぎくでん 御義口伝に云く 此の妙法建華經は釈尊しゃくそんの妙法みようほうには非ざるなり既に此の

品の時上行菩薩じようぎようぼさつに付属ふぞくし給う故なり、惣じて妙法蓮華經みようほうれんげきようを上行菩薩じようぎようぼさつに

付属ふぞくし給う事は宝塔品ほうとうほんの時事起り・寿量品じゆりようほんの時事顕れ・神力属累じんりきぞくるいの時事

おわ 竟るなり、如来によらいとは上の寿量品じゆりようほんの如来によらいなり神力とは十種の神力じんりきなり所謂いわゆる

妙法蓮華經の五字は神と力となり、神力とは上の寿量品じゆりようほんの時の如来秘密にょらいひみつ

神通じんつう之力の文と同じきなり、今日蓮等いまにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようと唱え奉るとな たてまつ
所だいもくの題目なり此の十種の神力じんりきは在世滅後ざいせめつごに亘わたるなり然りと雖も十種共いえどに
滅後めつごに限ると心得こころづ可きなり、又云く妙法蓮華經みょうほうれんげきよう如来と神との力の品と
心得こころづ可きなり云云、如来によらいとは一切衆生いつさいしゅじようなり寿量品じゆりようばんの如し、仍よつて釈にも
如来によらいとは上に釈しゃくし畢おわぬと云えり此の神とは山王七社等さんのおなり此の旨むね之を案これず
可べきなり云云。

第二出広長舌にいつぢやうぜつの事

御義口伝おんぎくでんに云く広いとは迹門しやくもん・長ちやうとは本門ほんもん・舌しやうとは中道ちゆうどう法性ほつしやうなり十法界ほつかがい
妙法みょうほうの功德くどくなれば広と云うなり豎たてに高ければ長と云うなり・広さんとは三千
重点このかたより已来みょうほうの妙法・長しんとは五百塵点じんてんこのかた已来みょうほうの妙法・同じく広長舌にいつぢやうぜつなり云
云。

第三十方世界衆宝樹じゆつぱうせかいしゅうほうじゆげし下師子座上しの事

おんぎくでん いわ じゅつぽう
御義口伝に云く十方とは十界なり此の下に於て草木成仏分明なり、師子
ししょう
とは師は師匠子は弟子なり座上とは寂光土なり十界即本有の寂光たる
こくど
国土なり云云。

第四満百千歳の事

おんぎくでん いわ ほっかい
御義口伝に云く満とは法界なり百は百界なり千は千如なり一念三千を満百
せんさい
千歳と説くなり云云、一時も一念も満百千歳にして十種の神力を現ずるな
じんりき
り十種の神力とは十界の神力なり、十界の各各の神力は一種の南無
みようほうれんげきよう
妙法蓮華経なり云云。

第五地皆六種震動其中衆生。衆宝樹下の事

おんぎくでん いわ こくどせけん
御義口伝に云く地とは国土世間なり其中衆生とは衆生世間なり衆宝樹下
ごおんせけん いちねんさんぜんぶんみよう
とは五陰世間なり一念三千分明なり云云。

第六袈婆是中有仏名釈迦牟尼仏の事

御義口伝に云く本化弘通の妙法蓮華經の大忍辱の力を以て弘通するを娑婆
と云うなり、忍辱は寂光土なり此の忍辱の心を釈迦牟尼仏と云えり娑婆と
は堪忍世界と云うなり云云。

第七新人行世間能滅衆生闇の事

御義口伝に云く斯人とは上行菩薩なり世間とは大日本国なり衆生闇とは
謗法の大重病なり、能滅の件は南無妙法蓮華經なり今日蓮等の類い是な
り云云。

第八畢 竟住一乘。是人於仏道決定無有疑の事

おんぎくでん いわ ひつきよう
御義口伝に云く畢 竟とは広宣流布なり住一乗とは南無妙法蓮華經の一法
に住す可きなり是人とは名字即の凡夫なり仏道とは究竟即なり 疑とは
こんぼんぎわく むみよう
根本疑惑の無明を指すなり、 末法当今は此の經を受持する 一行計りにして
じようぶつ べ
成仏す可しと定むるなり云云。

囑累品三箇の大事

第一從法座起の事

おんぎくでん いわ たつちゆう
御義口伝に云く起とは塔中の座を起ちて塔外の儀式なり三摩の付嘱有る
なり、三摩の付嘱とは身口意三業三諦三觀と付嘱し給う事なり云云。

第二如来是一切衆生之大施主の事

おんぎくでん いわ にようらい
御義口伝に云く如来とは本法不思議の如来なれば此の法華經の行者を指
す可きなり、 大施主の施とは末法当今流布の南無妙法蓮華經主とは

上行菩薩じょうぎようぼさつの事と心得こころう可きなり、然しかりと雖いえども当品しやくもんは迹門ふぞく付嘱しやくの品なり
上行菩薩じょうぎようぼさつを首くびとして付属ふぞくし給たまう間ま上行菩薩じょうぎようぼさつの御本意ごほんいと見たるなり云云。

第三如世尊勅当具奉行の事

御義口伝おんぎくでんに云く諸いわの菩薩等もろもろぼさつの誓言せいごんの文なり、諸天善神菩薩等しよてんぜんじんぼさつを日蓮等にちれんの
類たぐい諫曉かんぎようするは此の文に依よるなり云云。

薬王品六箇の大事

773P

第一不如受持此法華經乃至一四句偈の事

御義口伝おんぎくでんに云く法華經ほけきようとは一經いっきよう廿八品なり一四句偈くげとは題目だいもくの五字ごじと心得こころう
可べきなり云云。

第二十喻の事

御義口伝おんぎくでんに云く十喻じゅうゆとは十界じゅうかいなり、此の山の下に地獄界じごくを含めり、川流せんる
江河かうが餓鬼がき・畜生ちくしやうを撰せんせり・日月にちがつの下に修羅しゆらを収おさめたり帝釈梵天たいしやくぼんでんは天界てんかいなり

り・凡^{ほんぶ}夫人^{ふじん}とは人間^{にんげん}なり、声聞^{しょうもん}とは四向四果の阿羅漢^{あらかん}なり・縁覺^{えんかく}とは辟支^{ひやくし}仏^{ぶつ}中^{ちゅう}と説^{とく}かれたり、菩薩^{ぼさつ}は菩薩^{ぼさつ}為^{ため}第一^{だいいち}と云^いえり仏界^{ぶつがい}は如^{ごと}仏^{ぶつ}為^{ため}諸法王^{しよほう}と見えたり、此^この十界^{じゅうがい}を十喻^{じゅうゆ}と挙^あげて教相^{きょうそう}を分別^{ぶんべつ}してさて妙法蓮華經^{みょうほうれんげきょう}の於^おいちふつじょう
一^{いち}仏乘^{ぶつべつ}より分別^{ぶんべつ}説^{とく}三^{さん}する時^{とき}此^こくの如^{ごと}く挙^あげたり、仍^よつて一念三千^{いちねんさんぜん}の法門^{ほうもん}なり一念三千^{いちねんさんぜん}は拔苦与樂^{はくこよらく}なり。

第三離一切苦一切病痛能解一切生死之縛の事

御義口伝^{おんぎくでん}に云^いく法華^{ほっけ}の心^{こころ}は煩惱^{ぼんのう}即^{すなわ}菩提^{ぼだい}・生死^{しじう}即^{すなわ}涅槃^{ねはん}なり離解^{りげ}の二字^{ふたご}は此^この説相^{せつそう}に背^{そむ}くなり然^{しか}るに離^りの字^じをば明^{めい}とよむなり、本門^{ほんもん}寿量^{じゆりやう}の慧眼^{えげん}開^{ひら}けて見^みれば本来^{ほんね}本有^{ほんゆう}の病痛^{びんく}苦惱^{くなん}なりと明^{あき}らめたり仍^よつて自受用報身^{じじゆうほうしん}の智慧^{ちえ}なり、解^げとは我等^{われら}が生^{しょう}死^じは今^{いま}始^はめたる生死^{しじう}に非^{あら}ず本来^{ほんね}本有^{ほんゆう}の生死^{しじう}なり、始覺^{しかく}の思縛^{しはく}解^げくるなり云云、離解^{りげ}の二字^{ふたご}は南無妙法蓮華經^{なむみょうほうれんげきょう}なり云云。

第四火不能烧水不能漂の事

御義口伝に云く火とは阿鼻の炎なり水とは紅蓮の氷なり、今日蓮等の類い
なむみょうほうれんげきょうとな たてまつ
南無妙法蓮華經と唱え奉る者は此くの如くなるべし云云。

第五諸余怨敵皆悉摧滅の事

御義口伝に云く怨敵とは念仏・禅・真言等の謗法の人なり摧滅とは法華
しゃくぶく はごんもんり いまにちれん とな たてまつこれ
折伏・破権門理なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る是なり
云云。

第六若人有病得聞是經病即消滅不老不死の事

文句の十に云く此に觀解を須ゆべしと。

御義口伝に云く若人とは上仏果より下地獄の罪人まで之を撰す可きなり、
病とは三毒の煩惱仏・菩薩に於ても亦之れ有るなり、不老は釈尊不死は
地涌の類たり、是は滅後当今の衆生の為に説かれたり、然らば病とは謗法
なり、此の經を受持し奉る者は病即消滅疑無きなり、今日蓮等の類い

南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようと唱となえ奉たてまつる者これ是これなり云云。

妙音品三箇の大事みようおん だいじ

第一妙音菩薩の事だいいちみようおんぼさつ

御義口伝おんぎくでんに云いわく妙音菩薩みようおんぼさつとは十界じゅうかいの衆生しゅじようなり、妙みよとは不思議ふしぎなり音おんとは一切衆生の吐く所の語言ごげんおんじよう音声みようほうが妙法の音声おんじようなり三世常住さんぜじようじゅうの妙音みようおんなり、所用しやうがに随したがつて諸事しよじを弁べんずるは慈悲じひなり是これを菩薩ぼさつと云いふなり、又云いわく妙音みようおんとは今日蓮等の類いまにちれんい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようと唱となえ奉たてまつる事は末法まつぽう当今とうこんの不思議ふしぎの音声おんじようなり、其そのの故ゆゑは煩惱ぼんのう即菩提そくぼだい・生死しやうじ即涅槃そくねはんの妙音みようおんなり云云。

第二肉髻白毫の事にくけいびやくかう

御義口伝おんぎくでんに云いわく此このの二ふたの相好そごうは孝順師長ほけきやうより起たれり法華經たてまつを持ち奉たてまつるを以もつて一切いっさいの孝養こやうの最頂さいていとせり、又

云く此の白毫びやくこうとは父の姪なり肉髻にくけいとは母の姪なり赤白二せきびやく・今經こんきように来つて
肉髻にくけい白毫びやくこうの二相ふたさうと顕あらわれたり、又云く肉髻にくけいは随縁真如ずいえんしんによの智ちなり白毫びやくこうは不變ふへん
真如しんによの理りなり、今日蓮等いまにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようと唱となえ奉たてまつるは此等これらの相好そうこう
を具足ぐそくするなり、我等われらが生なまの始はじは赤色肉髻にくけいなり死後の白骨びやくこは白毫相びやくこうなり、
生の始はじの赤色あかいろは随縁真如ずいえんしんによの智死後の白骨ふへんしんによは不變真如ふへんしんによの理りなり秘へす可べし秘へす
可べし云云。

第三八万四千七宝鉢しつぽうの事こと

御義口伝おんぎくでんに云く此の文は妙音菩薩みょうおんぼさつ雲雷音王うんらいおんのうに奉たてまつる所の供養くようの鉢はちなり、
今日蓮等いまにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようと唱となえ奉たてまつる者は八万四千の鉢はちまんを三世さんぜの諸仏しよぶつ
に供養くようし奉たてまつるなり、八万四千はちまんとは我等われらが八万四千の塵勞じんろうなり南無なむ
妙法蓮華經みょうほうれんげきようと唱となえ奉たてまつる處ところにて八万四千の法門はうもんと顕あらわるるなり、法華經ほけきようの文字もんじ
は開結二經かいけつにきようを合あはしては八万四千はちまんなり、又云く八いとは八苦はちくなり四しとは

生老病死なり七宝とは頭上の七穴なり鉢とは智器なり妙法の智水を受持
するを以て鉢とは心得可きなり云云。

普門品五箇の大事

775P

第一無尽意菩薩の事

御義口伝に云く無尽意とは円融の三諦なり、無とは空諦尽とは仮諦意とは
中道なり、觀世音とは觀は空諦世は仮諦音は中道なり、妙法蓮華經とは
妙とは空諦法蓮華は仮諦經とは中道なり、三諦法性の妙理を三諦の觀世音
と三諦の無尽意に對して説き給うなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經
と唱え奉る者は末法の無尽意なり、所詮無とは我等が死の相なり尽とは
我等が生との相なり意とは我等が命根なり、然る間・一切の法門・境智冥
合等の法門意の一字に之を摂入す此の意とは中道法性なり法性とは
南無妙法蓮華經なり、仍つて意の五字なり我等が胎内の五位の中には第

五番の形なり、其の故は第五番の姿は五輪なり五輪即ち妙法等の五字なり、此の五字又意の字なり仏意とは妙法の五字なり此の事別に之無し、仏の意とは法華經なり是を壽量品にして是好良藥とて三世の諸仏の好も良藥と説かれたり森羅三千の諸法は意の一字には過ぎざるなり、此の仏の意を信ずるを信心とは申すなりされば心は有分別なり俱に妙法の全体なり云云。

第二觀音妙の事

御義口伝に云く妙法の梵語は薩達摩と云うなり、薩とは妙と翻ず此の薩の字は觀音の種子なり仍て觀音・法華眼目異名と釈せり、今末法に入つて日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る事は觀音の利益より天地雲泥せり、所詮觀とは円觀なり世とは不思議なり音とは仏機なり觀とは法界の異名なり既に円觀なるが故なり、諸法実相の觀世音なれば地獄・餓鬼・

畜生等の境界を不思議世界と知見するなり、音とは諸法実相なれば衆生
として実相の仏に非ずと云う事なし、寿命品の時は十界本有と説いて無作
の三身なり、観音既に法華經を頂受せり然らば此の經受持の行者は觀世音
の利益より勝れたり云云。

第三念念勿生疑の事

御義口伝に云く念念とは一の念は六凡なり一の念は四聖なり六凡四聖の
利益を施すなり疑心を生ずること勿れ云云、又云く念念とは前念後念な
り、又云く妙法を念ずるに疑を生ず可からず云云、又三世常住の念念
なり之に依つて上の文に是故衆生念と、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經
と唱え奉りて念念勿生疑の信心に住す可きなり煩惱即菩提・生死即涅槃
疑有る可からざるなり云云。

第四二求兩願の事

御義口伝おんぎくでんに云くい二求とは求男求女なり、求女とは世間の果報求男とは出世しゅつせ
の果報かほう仍なほつて現世安穩げんせあんゑんは求女の徳なり後生善処ごしょうぜんじょは求男の徳なり、求女は
竜女りゆうにょが成仏生死即涅槃じやうぶつしやうじそくねはんを顕あらわすなり求男は提婆だいばが成仏煩惱即菩提じやうぶつぼんのうそくぼだいを顕あらわす
なり我等われらが即身成仏そくしんじやうぶつを顕あらわすなり、今日蓮等の類けふにちれん南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱え
奉る行者たてまつぎやうじやは求男求女を満足まんぞくして父母ふぼの成仏決定じやうぶつけつじやうするなり云云。

第五三十三身利益の事さんじんりやく

御義口伝おんぎくでんに云くい三十とは三千の法門ほうもんなり、三身とは三諦さんたいの法門ほうもんなり云云、
又云くい卅三身さんじんとは十界じゅつかいに三身さんじんづつ具ぐすれば十界じゅつかいには三十・本の三身さんじんを加
うれば卅三身さんじんなり、所詮しよせん三とは三業さんごふなり十とは十界じゅつかいなり三とは三毒さんどくなり
身とは一切衆生いっさいしゆじやうの身なり、今日蓮等の類けふにちれん南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱え奉る者
は卅三身さんじんの利益りやくなり云云。

第一陀羅尼の事

御義口伝に云く陀羅尼とは南無妙法蓮華經なり、其の故は陀羅尼は諸仏の密語なり題目の五字三世の諸仏の秘密の密語なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは陀羅尼を弘通するなり捨惡持善の故なり云云。

第二安爾曼爾の事

御義口伝に云く安爾とは止なり・曼爾とは觀なり、此の安爾・曼爾より止觀の二法を釈し出せり、仍つて此の咒は藥王菩薩の咒なり藥王菩薩は天台の本地なり、安爾は我等が心法なり妙なり曼爾は我等が色法なり法なり色心妙法と呪する時は即身成仏なり云云。

第三鬼子母神の事

御義口伝に云く鬼とは父なり子とは十羅刹女なり母とは伽利帝母なり、逆次に次第する時は神とは九識なり母とは八識へ出づる無明なり子とは七識

六識なり鬼とは五識なり、流轉門の時は悪鬼なり還滅門の時は善鬼なり、
仍つて十界互具・百界・千如の一念三千を鬼子母神十羅刹女と云うなり、
三宝荒神とは十羅刹女の事なり所謂飢渴神貪欲神障碍神なり、今法華經の
行者は三毒即三徳と転ずる故に三宝荒神に非ざるなり荒神とは法華不信
の人なり法華經の行者の前にては守護神なり云云。

第四受持法華名者福不可量之事

御義口伝に云く法華の名と云うは題目なり、者と云うは日本国は一切衆生
の中には法華經の行者なり、又云く者の字は男女の中には別して女人を
讃めたり女人を指して者と云うなり、十羅刹女は別して女人を本とせり例
せば竜女が度脱苦衆生とて女人を苦の衆生と云うが如し藥王品の是
經典者の者と同じ事なり云云。

第五皐諦女の事

おんぎくでん いわ こうだいによ ほんち もんじゅぼさつ ところ
 御義口伝に云く 皐諦女は本地は文殊菩薩なり、山海何かなる 処にても
 ほけきょう きょうじや しゅこ べ きょうもん いちぜん こうだいによ いちぜん
 法華經の行者を守護す可しと云う 經文なり、九悪一善とて 皐諦女をば一善
 と定めたり、 十悪の煩惱の時は偷盗に 皐諦女は当れり 逆次に次第するな
 り云云。

第六五番神呪の事 じんしゆ

御義口伝に云く五番神呪とは我等が一身なり、妙とは十羅刹女なり法とは
 持国天王なり蓮とは増長天王なり華とは広目天王なり經とは毘沙門天王
 なり、此の妙法の五字は五番神呪なり、五番神呪は我等が一身なり、
 十羅刹女の呪は妙の一字を十九句に並べたり經文には寧上・我頭上の文
 は是れなり、持国天は法の一字を九句に並べたり經文には四十二億と云え
 り、四とは生老病死・十とは十界・一とは迷悟なり、持国は依報の名な
 り法は十界なり、増長天は蓮の一字を十三句に並べたり經文には「亦

皆みな隨喜ずいき」と云えり隨喜の言は仏界に約せり、広目天は華の一字を四十三句に並べたり經文には「於諸衆生多所饒益」と云えり、毘沙門天は經の一字を六句に並べたり經文には「持是經者」等の文是なり云云。

嚴王品三箇の大事

第一妙莊嚴王の事 文句の十に云く妙莊嚴とは妙法功德をもつて諸根を莊嚴するなりと。

御義口伝に云く妙とは妙法の功德なり、諸根とは六根なり此の妙法の功德を以て六根を莊嚴す可き名なり、所詮妙とは空諦なり莊嚴とは仮諦なり王とは中道なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は悉く妙莊嚴王なり云云。

第二浮木孔の事

御義口伝に云く孔とは小孔大孔の二之れ有り、小孔とは四十余年の經教

なり大孔とは法華經の題目なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え
奉るは大孔なり、一切衆生は一眼の龜なり梅檀の浮木とは法華經なり、
生死の大海に南無妙法蓮華經の大孔ある浮木は法華經に之在り云云。

第三当品邪見即正の事

御義口伝に云く嚴王の邪見二人の教化に依り功德を得て邪を改めて正とせ
り、止の一に辺邪皆中正と云う是なり、今・日本国の一切衆生は邪見に
して嚴王なり、日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は二人の如し
終に畢竟住一乘して邪見即正なる可し云云。

普賢品六箇の大事

第一普賢菩薩の事 文句の十に云く勸発とは恋法の辞なりと。

御義口伝に云く勸発とは勸は化他・発は自行なり、普とは諸法実相迹門

の不變真如ふへんしんによの理なり、賢ちえとは智慧の義なり本門ほんもんの隨緣真如ずいえんしんによの智なり、然しかる
間經末きようまつに來つて本・迹二門を恋法たまし給たまえり、所詮しよせん今日蓮等の類たぐい南無なむ
妙法蓮華經みようほうれんげきようと唱となえ奉たてまつる者は普賢菩薩ふげんぼさつの守護しゆごなり云云。

第二若法華經行閻浮提的事 ほけきよう えんぶだい

御義口伝おんぎくでんに云く此この法華經ほけきようを閻浮提えんぶだいに行ずることは普賢菩薩ふげんぼさつの威神いしんの力に
依よるなり、此の經の広宣流布こうせんるふすることは普賢菩薩ふげんぼさつの守護しゆごなるべきなり云云。

第三八万四千天女の事 はちまん

御義口伝おんぎくでんに云く八万四千はちまんの塵勞門じんろうなり、是これ即すなわち煩惱即菩提ぼんのうそくぼだい・生死即涅槃しやうじそくねはん
なり七宝しつぼうの冠かんむりとは頭上の七穴ななけつなり、今日蓮等の類けふい南無妙法蓮華經なむみようほうれんげきようと
唱となえ奉たてまつる者は是これなり云云。

第四是人命終為千仏授手の事 みようじゆう

御義口伝おんぎくでんに云く法華不信ほつけふしんの人は命終みようじゆうの時地獄じごくに墮在だざいす可べし、經いに云く

「にやくにんふしん きほう 若人にやくにんふしん不信毀謗・此經即斷・一切世間・しきようそくだん いっさいせけん 仏種其人命終・ぶつしゆごにんみようじゆう 入阿鼻獄」と、
ほけきよう ぎようじや 法華經の行者は命終して成仏みようじゆうす可し是人命終みようじゆう為千仏授手の文これ是なり、
ほうもん 千仏とは千如の法門なり謗法の人は獄卒來迎し法華經の行者は千仏來迎らいごう
たま し給うべし、今日蓮等の類いまにちれんい南無妙法蓮華經と唱え奉る者は千仏の來迎らいごう
うたがい 疑 無き者なり云云。

第五閻浮提内広令流布の事

おんぎくでん いわ 御義口伝に云く此の内の字は東西北の三方を嫌きらえる文なり、るふ 広令流布とは
ほけきよう えんぶだいばか 法華經は南閻浮提計りに流布るふす可しと云う經文きようもんなり、此の内の字これ之を案
べ ず可し、今日蓮等の類いまにちれんい南無妙法蓮華經と唱え奉る者は深く之これを思おもう可べき
なり云云。

第六此人不久当詣道場の事

おんぎくでん いわ 御義口伝に云く此人とは法華經の行者なり、ほけきよう ぎようじや 法華經を持ち奉る處ほけきよう たも たてまつところを當詣とうけい

道場どうじょうと云いうなり此こを去さつて彼かに行くには非あらざるなり、道場どうじょうとは十界じゅっかいの衆生しゅじょうの住处じゅうしよを云いうなり、今日蓮等いまにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつる者の住处じゅうしよは山谷曠野さんやこうやみなじやう皆寂光土こなり此これを道場どうじょうと云いうなり、此因無易故云直至じきしの釈これ之をを思べう可べし、此の品の時最上第一さいじやうだいいちの相伝そうでんあり、釈尊八箇年しゃくそんはちかねんの法華經ほけきやうを八字とどに留まつめて末代まつだいの衆生しゅじやうに譲ゆずり給たまうなり八字とは当起遠迎当如敬仏そのの文なり、此の文までにて經は終るなり当の字は未來みらいなり当起遠迎とは必ず仏ごとの如ほけきやうくに法華經ぎやうじやの行者うやもを敬べう可べしと云いう經文きやうもんなり、法師品ほうしほんには於此きやうかん經卷敬視如仏と云いえり、八年の御說法せつぽうの口開きは南無妙法蓮華經方便品なむみょうほうれんげきやうほうべんの諸仏智慧終りしよぶつちえは当起遠迎当如敬仏の八字なり、但此の八字を以て法華一ほつち部の要路とせりされば文句もんくの十に云いく、「当起遠迎当如敬仏よりは其その信者の功德くどくを結むすぶことを述じゆつす」と、法華一部は信の一字を以て本とせり云云。尋たずねて云いく今の法華經ほけきやうに於おいて序品じよほんには首はじめに如の字を置き終りの普賢品ふげんに

は去の字を置く羅什三蔵の心地何なる表事の法門ぞや、答て云く今の經の
法体は実相と久遠との二義を以て正体と為すなり始の如の字は実相を表し
終りの去の字は久遠を表するなり、其の故は実相は理なり久遠は事なり理
は空の義なり空は如の義なり之に依て如をば理空に相配するなり、釈に
云く「如は不具に名く即ち空の義なり」と久遠は事なり其の故は本門寿量
の心は事円の三千を以て正意と為すなり、去は久遠に当るなり去は開の義
如は合の義なり開は分別の心なり合は無分別の意なり、此の開合を生仏に
配当する時は合は仏界開は衆生なり、序品の始に如の字を顯したるは生
仏不二の義なり、迹門は不二の分なり不變真如なる故なり、此の如是我聞
の如をば不變真如の如と習うなり、空仮中の三諦には如は空・是は中・我
聞は仮諦・迹門は空を面と為す故に不二の上の而となり、然る間而二の
義を顯す時・同聞衆を別に列ぬるなり、さて本門の終りの去は隨緣真如に

して而じにの分なり仇つて去の字を置くなり、作礼而去さらいにこの去は随縁真如ずいえんしんによと
約束やくそくするなり、本門ほんもんは而じにの上の不二ふじなり而二不二ふじに・常同常別・古今こうに法爾
の釈これ之を思べう可し、此の去の字は彼の五千起去の去と習ならうなり、其の故は
五千とは五住の煩惱ぼんのうと相伝そうでんする間五住の煩惱ぼんのうが己心こしんの仏を礼して去いぬると云
う義なり、如去の二字は生死しやうじの二法なり、伝教でんぎょう云く「去は無来之如来無によらい
去之円去」等と云云。如の字は一切法是心の義・去の字は心は一切法いっさいの義
なり、一切法是心は迹門しやくもんの不变真如ふへんしんによなり心は一切法いっさいは本門ほんもんの随縁真如ずいえんしんによな
り、然しかる間・法界ほっかいを一心いっしんに縮むるは如の義なり法界ほっかいに開くは去の義なり
三諦三觀の口決相承くけつそうじやうと意同いわじ云云。一義に云く如は実なり去は相なり実
は心王相しんのうは心数しんずなり、又諸法しよほうは去なり実相じつそうは如なり今經こんきやう一部の始終しじゆう
諸法実相しよほうじつそうの四字に習ならうとは是これなり、釈いわに云く「今經こんきやうは何を以て体と為なる
や諸法実相しよほうじつそうを以て体と為なす」と、今一重立ち入つて日蓮にちれんが修行しゆぎやうに配当せ

ば如とは如説修行の如なり・其の故は結要五字の付属を宣べ給う時・
宝塔品に事起り声徹下方し近令有在・遠令有在と云うて有在の二字を以て
本化・迹化の付属を宣ぶるなり仍つて本門の密序と習うなり、さて二仏・
並座・分身の諸仏集まつて是好良葉の妙法蓮華經を説き顯し釈尊十種の
神力を現じて四句に結び上行菩薩に付属し給う英の付属とは妙法の首題
なり惣別の付属塔中塔外之を思う可し、之に依つて涌出寿量に事顯れ
神力属累に事竟るなり、此の妙法等の五字を末法・白法隱没の時
上行菩薩・御出世有つて五種の修行の中には四種を略して但受持の一行
にして成仏す可しと經文に親り之れ有り、夫れば神力品に云く「於我滅度
後・応受持斯經・是人於仏道・決定無有疑」云云此の文明白なり、仍つ
て此の文をば仏の廻向の文と習うなり、然る問此の經を受持し奉る心地は
如説修行の如なり此の如の心地に妙法等の五字を受持し奉り南無

みょうほうれんげきょう とな たてま たちま むみょうほんのう ことごと
妙法蓮華經と唱え奉れば忽ち無明煩惱の病を悉く去つて妙覺極果の膚を
瑩く事を顯す故にさて去の字を終りに結ぶなり、仍つて上に受持仏語と説
けり煩惱惡覺の魔王も諸法実相の光に照されて一心一念・遍於法界と觀達
せらる、然る間還つて己心の仏を礼す故に作礼而去とは説き給うなり、
かれがれさんぜん また これ べ べ べ べ ただ べ べ べ べ
彼彼三千互遍亦爾の釈之を思う可し秘す可し秘す可し唯受一人の相承な
り、口外す可からず然らば此の去の字は不去而去の去と相伝するを以て
至極と為すなり云云。

無量義經六箇の大事

第一無量義經德行品第一の事

おんぎくでん いわ むりょう かんじん
御義口伝に云く無量義の三字を本・迹・觀心に配する事、初の無の字は
迹門なり其の故は理円を面とし不變真如の旨を談ず、迹門は無常の摂属
なり常住を談ぜず但し「是法住法位世間相常住」と明かせども是れは

理常住じょうじゅうにして事常住じょうじゅうに非ず理常住じょうじゅうの相を談だんずるなり、空は無の義なり但ただし此の無は断無の無に非ず相即そうそくの上の空なる処ところを無と云い空と云うなり、円の上にて是これを沙汰するなり、本門の事常住じょうじゅう無作の三身さんじんに対して迹門しやくもんを無常と云うなり、守護章しゆごには有為ういの報仏は夢中の権果無作の三身さんじんは覺前かくぜんの実仏と云云、今日蓮等の類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと唱となえ奉たてまつる者は無作むさの三身覺前さんじんかくぜんの実仏じつぶつなり云云。

第二量の字の事

御義口伝おんぎくでんに云く量いわの字を本門ほんもんに配当する事は量とは権撰はかりおさむるの義なり、本門ほんもんの心は無作三身むささんじんを談だんず此の無作三身むささんじんとは仏の上ばかりにて之これを云わず、森羅万法じじゆゆうしんを自受用身じたいけんしゅうの自体顕照けんしょうと談だんずる故に迹門しやくもんにして不變真如ふへんしんによの理円あきら明ところかす処あらたを改めずして己おのが当体無作三身とうたいむささんじんと沙汰さたするが本門事円三千ほんもんじえんさんぜんの意なり、是れ即ち桜梅桃李すなわの己己ここの当体を改めずして無作三身むささんじんと開見かいけんすれば

こすなわ
是れ即ち量の義なり、
いまにちれん
今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は
むささんじん
無作三身の本主なり云云。

第三義の字の事

おんぎくでん いわ
御義口伝に云く義とは觀心なり、
そのゆえ
其の故は文は教相義は觀心なり所説の
もんじ しんじ さた
文字を心地に沙汰するを義と云うなり、
なかんずくむりよう
就中無量義は一法より無量の義
しゅつしよう
を出生すと談ず、
のうしよう
能生は義所生は無量なり
むりよう
是は無量義經の能生所生
ほけきよう むりようぎきよう
なり、法華經と無量義經とを相對する能所に非ざるなり
あら
無相・不相名為
じつそう
実相の理より万法を開出すと云う、
みなもと
源が実相なる故に觀心と云うなり、
かごと むりよう
此くの如く無量義の三字を迹門・
しやくもん
本門觀心に配当する事は法華の妙法等
むりよう
の題と今の無量義の題と一体不二の序正なりと相承の心を相伝せむが為
そつじよう
なり。

第四処の一字の事

御義口伝おんぎくでん いわに云く処ところの一字は法華經ほけきようなり、三藏教さんぞうと通教つうきようとは無むの字せつに撰せんし
別教べつきようは量りやうの字せつに撰せんし円教えんきようは義ぎの字せつに撰せんするなり、此この爾前にぜんの四教しきようを所生しよしやう
と定めさて序分じよぶんの此この經きやうを能生のうしやうと定めたり、能生のうしやうを且しかく処ところと云いい所生しよしやうを
無量義むりやうぎと定めたり、仍よつて權教ごんきように相對そうたいして無量義むりやうぎ処ところを沙汰さたするなり云云。

第五無量義処の事

御義口伝おんぎくでん いわに云く法華經ほけきよう八卷は処ところなり無量義經むりやうぎきやうは無量義むりやうぎなり、無量義むりやうぎは三諦さんたい
三觀さんくわん三身さんじん三乘さんじやう三業さんごふなり法華經ほけきように於お一いち仏乘ぶつじやう分別說ぶんべつ三さんと説とくいて法華ほつの為けの
序分じよぶんと成なるなり、爰こゝをを以もつて隔別きやくべつの三諦さんたいは無得道とくどつ円融えんゆうの三諦さんたいは得道とくどつと定とくむる
故ゆゑに四十余年よんじゅうよねん・未顕真実みけんしんじつと破はし給たまえり云云。

第六無量義処の事

御義口伝おんぎくでん いわに云く無量義むりやうぎ処ところとは一念三千いちねんさんぜんなり、十界各各無量じゆつかい じゆつがい むりやうに義ぎ処ところたり、
此この当体とうたい其その儘実相ままじつそうの一理いちりより外ほかは之これれ無なきを諸法実相しよほうじつそうと説とくかれたり、

其その爲ための序ゆえなる故ゆえに一念三千いちねんさんぜんの序ゆえとして無量義むりょうぎ処ちと云いなり、処ちは一念いちねん無量義むりょうぎは三千さんぜんなり、我等衆生われらしゅじょうちゆうせき朝夕吐く所の言語ごんごも依正二法えしやう共に無量むりょうに義ぎ処ちりたり、此これを妙法蓮華經みょうほうれんげきやうとは云いなり然しかる間法華ほつけの爲ための序じよぶん分開經ふくわいきやうなり云云。

普賢經五箇の大事ふげん だいじ

第一普賢經だいいちふげんの事 題号だいごうに云いく仏説觀普賢菩薩行法經ぶつせつ ふげんぼさつと云云。

御義口伝おんぎくでんに云いく此この法華經ほけきやうは十界互具じゅつかいごくさんぜんぐそく三千具足の法体ほつたいなれば三千十界さんぜんじゅつかい悉ことごとく普賢ふげんなり、法界ほつかい一法いつぽうとして漏もる義ぎ之これ無なし故ゆえに普賢ふげんなり、妙法みょうぽうの十界蓮華じゅつかいれんげの十界じゅつかいなれば依正えしやうの二法にぽう悉ことごとく法華經ほけきやうなりと結おさし納めたる經きやうなれば此この普賢經ふげんを結經けつきやうとは云いなり、然しからば十界じゅつかいを妙法蓮華經みょうほうれんげきやうと結むすし合あせたり云云。

第二不斷煩惱不離五欲ふだんぼんのうの事

おんぎくでん いわ 御義口伝に云く此の文は煩惱即菩提・生死即涅槃を説かれたり、法華の
ぎようじゃ とんよく とんよく 行者は貪欲は貪欲のまま瞋恚は瞋恚のまま愚癡は愚癡のまま普賢菩薩の
いんげん 行法なりと心得可きなり云云。

第三六念の事 ねんぶつ 念仏 ねんぶつ 念法 ねんぶつ 念僧 ねんぶつ 念戒 ねんぶつ 念施 ねんぶつ 念天

おんぎくでん いわ 御義口伝に云く念仏とは唯我一人の導師なり、念法とは滅後は題目の五字
いっさいしきじょう なり念僧とは末法にては凡夫僧なり、念戒とは是名持戒なり、念施とは
だいまく 一切衆生に題目を授与するなり、念天とは諸天昼夜常為法故而衛護之の意
まいぼう なり、末法当今の行者の上なり之を思う可きなり云云。

第四一切業障海皆從妄想生若欲懺悔者端坐思実相衆罪如霜露慧日能消除の事 いっさいしきじょう ちふ 業障 ちふ 皆從妄想生 ちふ 若欲懺悔者 ちふ 端坐思実相 ちふ 衆罪 ちふ 如霜露 ちふ 慧日 ちふ 能消除

おんぎくでん いわ 御義口伝に云く衆罪とは六根に於て業障降り下る事は霜露の如し、然り
いへど えにち と雖も慧日を以て能く消除すと云えり、慧日とは末法当今日蓮所弘の南無

妙法蓮華經なり、

慧日とは仏に約し法に約するなり、

釈尊をば慧日大聖

尊と申すなり法華經を又如日天子能除諸闇と説かれたり、

日月光明等と説かれたり。

第五正法治国不邪枉人民の事

御義口伝に云く末法の正法とは南無妙法蓮華經なり、

此の五字は一切

衆生をたばらかさぬ秘法なり、

正法を天下一同に信仰せば此の国安穩な

らむ、されば玄義に云く「若し此の法に依れば即ち天下泰平」と、此の法

とは法華經なり法華經を信仰せば天下安全たらむ事疑有る可からざるな

已上二百三十一箇条の大事

廿八品に一文充の大事

合せて廿八箇条の大事秘す可し云云

序品

十界也 じゅうかい

始覺 しかく

於無漏実相 むろじっそう

心已得通達 とくすう

妙法 みょうほう

不變 ふへん

隨緣 ずいえん

此の文・我が心本より覺なりと始めて覺 さと

るを成仏と云うなり所謂南無 じょうぶつ いわゆる なむ

妙法蓮華經と始めて覺る題目なり。 みょうほうれんげきょう さと だいもく

方便品 ほうべん

真諦 しんたい

俗諦 ぞくたい

是法住法位 ぜほうじゆうほうい

世間相常住 せけんじやうじゆう

迹門 しゆじやう

本門 ほんもん

此の文衆生の心は本来仏なりと説くを常住じやうじゆうと云うなり万法元より覺さとの体なり。

譬喻品 ひゆほん

受持人 大白牛車 だいびやくこしや

乘此宝乘 だいもく

題目

極果ノ処也

此の文は自身じしんの仏乗ぶつじやうを悟つて自身じしんの宮殿に入るなり所謂南無妙法蓮華經と唱え奉るは自身じしんの宮殿に入るなり。

信解品 しんげ

一念三千 いちねんさんぜん

無上宝珠 むじやうほうしゆ

不求自得 ふぐじとく

題目 だいもく

此の文は無始色心本是理性妙境・妙智なれば己心より外に実相を求む可
らず所謂南無妙法蓮華經は不求自得なり。

藥草喩品

さんぜ だいもく いっさいしゅじょう

三世題目一切衆生

又諸仏子 専心仏道 常行慈悲自知作仏
此の文は当來の成仏顯然なり 所謂南無妙法蓮華經なり。

授記品

じゅつかいじ さんぜじょうじゅう

十界実相仏 三世常住 煩惱即菩提・生死即涅槃

於諸仏所常修梵行於無量劫奉持仏法

一切業障

此の文に常と云い無量劫と云う即ち本有所具の妙法なり 所謂南無

妙法蓮華經なり。

化城喩品

三千塵点

觀彼久遠くおん なが 猶如今日

在世ざいせ

此の文は元初の一念いちねん 法界ほっかいより外ほかに更に六道ろくどう四聖ししやうとて有ある可べからざるなり
所謂いづゆる南無妙法蓮華經なむ みようれんげきやうは三世さんぜ一念いちねんなり今日けふとは末法まつぽうを指さして今日けふと云いうなり。

五百品

日本にほん国こく一切衆生いっさいしゆじやう

貧人ひんじん

題目御本尊だいもく ごほんそん

見此珠

心法色法

煩惱ぼんのう即菩提そくぼだい・生死しやうじ即涅槃そくねはん

其心大歡喜かんき

信心しんじんノカタチ

此の文は始めて我心わがこころ本来の仏ぶつなりと知るを即ち大歡喜かんきと名なく所謂いづゆる南無妙法蓮華經みようれんげきやうは歡喜かんきの中なかにの大歡喜だいかんきなり。

人記品

一部

題目

安住あんじゆ於お仏道ぶつどう

以求むじ無上道むじやうどう

広略

要

此の文は本来相即の三身の妙理を初めて覚知するを求無上道とは云うなり
所謂南無妙法蓮華經なり。

法師品
ほうしほん

寂光
じやくくわう

当知如是人 自在所欲生
たうぢにょぜ じざい

此の文は我等が一念の妄心の外に仏心無し九界の生死が真如なれば即ち
自在なり所謂南無妙法蓮華經と唱え奉る即ち自在なり。

宝塔品
ほうとうほん

受持也
じゆぢ

則為疾得
しつとく

無上仏道
むじやうぶつどう

凡夫即極也
ほんぶそく

此の文は持者即ち円頓の妙戒なれば等妙二覚一念開悟なれば疾得と云う
なり所謂南無妙法蓮華經と唱え奉るは疾得なり。

提婆品
たいは

忽然之間 变成男子
こつねん

此の文の心は三惑の全体三諦と悟るを變と説くなり所謂南無妙法蓮華經と
となたてまつわくそくさんとかく
唱え奉るは三惑即三徳なり。
かんじほん

勸持品

色法心法

がふあいしんみふうたんじやくむじようどう
我不愛身命但惜無上道

此の文は色心幻化四大五陰元より惡習なり然るに本覺真如は常住なり
いわゆるなむみようほうれんげきよう
所謂南無妙法蓮華經なり。
あんらくきようほん

安樂行品

いっさいしよほう
一切諸法空無所有無有常住亦無起滅
じようじゅうやくむ

此の文は元より常住の妙法なる故に六道の生滅本来不生と談ず故に起
いわゆるなむみようほうれんげきよう
滅無し所謂南無妙法蓮華經本来無起滅なり二云。

涌出品

しよじん
昼夜常精進 為求仏道故
ぶつどう

此の文は一念に億劫の辛勞を尽せば本来無作の三身念念に起るなり所謂
いちねん
いわゆる

南無妙法蓮華經は精進行なり。
なむ みょうほうれんげきよう しやうじん

寿命品
じゆりやうぼん

如來如實知見三界之相無有生
にょらいによじつちけんさんがい
じやうじ
しやうじ

此の文は万法を無作の三身と見るを如實知見と云う無作の覺體なれば何に
むさ さんじん
によじつちけん
むさ かくたい
い

依つて生死有りとなわんか。
よ しょうじ

分別功德品
ぶんべつくどく

持此一心福 願求無上道
いっしん
がんぐむじやうどう

此の文は一切の万行万善但一心本覺の三身を顯さんが為なり、善惡一如
いっさい まんぎやうばんぜん
いっしんほんかく さんじん
あらわ
ぜんあく
い

なれば一心福とは云うなり所謂南無妙法蓮華經は一心福なり。
いっしん
い

隨喜功德品
ずいきくどく

言此經深妙 千万劫難遇
せんまん
なん

此の文は、一切即妙法なれば一心の源底を顯す事甚妙無外なり所謂南無
いっさいそくみやうほう
いっしん
あらわ
はなはだ
い

妙法蓮華經不思議なり。
みょうほうれんげきようふしぎ

法師功德品
ほっしきとく

静 散

入禅出禅者 聞香悉能知
ぜんしや

不變死 随縁生 十界
ふへん ずいえん じゅつかい

此の文は一心静なる時は入禅、一心散乱する時は出禅、静散即本覺と知る
いっしん
を悉く知るとは云うなり所謂南無妙法蓮華經は入禅出禅なり云云。
ことごと

不輕品
ふぎよう

応当一心広説此經世世値仏疾成仏道
いっしん
しつじょうぶつどう

此の文は法界皆本来三諦一心に具わる事を顕せば己心の念念・仏に値う事
ほっかいみな さんたいいっしん
あらわ
を即ち世世値仏と云うなり所謂南無妙法蓮華經是なり。
すなわ
いわゆるなむみょうほうれんげきようこれ

神力品
じんりきほん

断破元品無明 がんぼんむみょう

是人於仏道 ぜにんのうぶつどう

決定無有疑 けつじやうむうぎ

十如是 じゆのぜ

此の文は十界各各本有本覺の十如是なれば地獄も仏界も一如なれば成仏 けつじやう
決定するなり所謂南無妙法蓮華經の受持なり云云。

囑累品 じゆつかい

信如来知慧者当演說此法華經 にょらい せんぜつ ほけきやう

此の文は釈迦如来の悟の如く一切衆生の悟と不同有ること無し故に如来 しやかにょらい いっさいしゆじやう ふどうあ ゆえ
の智慧を信ずるは即ち妙法なり所謂南無妙法蓮華經の智慧なり云云。 すなわ みやうほう いわゆるなむみやうほうれんげきやう ちえ

藥王品 やくおうぼん

是真精進是名真法供養如来 しんしんしん せきしんしん かんねんおこた

此の文は色香中道の觀念懈ること無し是を即ち真法供養如来と名くるな しきにうちうどう かんねんおこた これ すなわ くやうにょらい なす
所謂南無妙法蓮華經唯一乘の故に真法なり世間も出世も純一実相な いわゆるなむみやうほうれんげきやうゆい いちじやう ゆえ せけん しゆっせ じっそう

り云云。

みようおん

妙音品

くおん

じゃつこう

久遠

寂光土

さんまい

身不動揺而入三昧

すなわ くおん

此の文は即ち久遠を悟るを身不動揺と云うなり惑障を尽くさずして寂光

わくしょう じゃつこう

さんまい

に入るを三昧とは云うなり所謂南無妙法蓮華經の三昧なり云云。

いわゆるな むみょうほうれんげきょう

さんまい

ふもんぼん

普門品

福智

しゆじょう

むりょう

慈眼視衆生福聚海無量

ほっかい

えしやうみょうほう

ゆえ

びやうでう

じひ

えしやう

むりょう

此の文は法界の依正妙法なる故に平等一子の慈悲なり依正福智共に無量

いわゆるな むみょうほうれんげきょう

なり所謂南無妙法蓮華經福智の二法なり云云。

だらにぼん

陀羅尼品

未来顕 みらい

修行是經者 しゆぎようぜきようしや

令得安穩 あんのん

現在顕 げんざい

此の文は五種妙行を修すれば悟の道に入つて嶮路に入らざるなり此れは
安穩と云う事なり、所謂南無妙法蓮華經即安穩なり云云。

嚴王品

宿福深厚生値仏法 じんこつしやうちふつぽう

此の文は一句妙法に結縁すれば億劫にも失せずして大乘無価の宝珠を研
き顕すを生値仏法と云うなり所謂南無妙法蓮華經の仏法なり。

勧発品 かんぱつぽん

是人命終為千仏授手令不恐怖不墮惡趣 みようじゆう くらふ だあくしゆ

此の文は妙法を悟れば分段の身即常寂光と顕るるを命終と云うなり千

仏とは千如・御手とは千如・具足なり故に不墮惡趣なり所謂南無妙法蓮華經の御手なり。

じょうほん べつでん

已上品品別伝畢

一廿八品悉南無妙法蓮華經の事

疏の十に云く惣じて一經を結するに唯四のみ其の枢柄を撮つて之を授与すと。

御義口伝に云く一經とは本・迹二十八品なり唯四とは名用体宗の四なり
枢柄とは唯題目の五字なり授与とは上行菩薩に授与するなり之とは
妙法蓮華經なり云云、此の積分明なり今日蓮等の弘通の南無妙法蓮華經
は体なり心なり廿八品は用なり廿八品は助行なり題目は正行なり正行
に助行を攝す可きなり云云。

むりょうぎきょう

一 無量義經の事

おんぎくでん いわ みようほうつ じよぶん ぶりようぎきよう
御義口伝に云く妙法の序分・無量義経なれば十界悉く妙法蓮華經の序分
なり。

一 序品 じよぼん

おんぎくでん いわ によげがもん
御義口伝に云く如是我聞の四字を能く能く心得れば一經無量の義は知ら
れ易きなり やす じゆっ かいごくさんぜんぐそく
十界互具三千具足の妙と聞くなり此の所聞は妙法蓮華と聞く
故に妙法の法界互具にして三千 ゆえ みようほうつ ほっかいごく 清淨なり此の四字を以て一經の始終に
亘るなり わた 廿八品の文文・句句の義理我が身の上の法門と聞くを如是我聞と
は云うなり、 そ 其の聞物は南無妙法蓮華經なり なむ みようほうれんげきよう されば皆成仏道と云うなり
此の皆成の二字は十界三千に亘る可きなり かいじよう じゆっ かいさんぜん わた 妙法の皆成なるが故なり又
仏とは我が一心なり いっしん 是れ又十界三千の心心なり、道とは能通に名くる なす
故に十界の心心に通ずるなり此の時皆成仏道と顕るるなり ゆえ じゆっ かい かいじようぶつどう あちわ 皆成仏道の法
は南無妙法蓮華經なり。 なむ みようほうれんげきよう

方便品 ほうべん

御義口伝に云く此の品には十如是を説く此の十如是とは十界なり此の方便
おんぎくでん いわ
とは十界三千なり。じゅうかいさんぜん 既に妙法蓮華經を頂く故に十方仏土中唯一乘
すて みょうほうれんげきょう いただき ゆえ じゅうぼう いういちじょう
法なり妙法の方便蓮華の方便なれば秘妙なり清淨なり妙法の五字は九
みょうほう ほうべんれんげ ほうべん しょうじょう みょうほう ごじ
識方便は八識已下なり九識は悟なり八識已下は迷なり、妙法蓮華經方便
ほうべん いか まよい みょうほうれんげきょうほうべん あり
品と題したれば迷悟不二なり森羅三千の諸法此の妙法蓮華經方便に非ず
めいご しんらさんぜん しょほう みょうほうれんげきょうほうべん
と云う事無きなり品は義類同なり、義とは三千なり類とは互具なり同と
ことな ぎるい さんぜん たくい
は一念なり此の一念三千を指して品と云うなり此の一念三千を三仏合点し
いちねん いちねんさんぜん いちねんさんぜん がてん
給えり仍つて品品に題せり南無妙法蓮華經の信の一念より三千具足と聞
たまよ な む みょうほうれんげきょう いちねん さんぜんぐそく
えたり云云。

譬喩品 ひゆほん

御義口伝に云く此の品の大白牛車とは「無明癡惑本是法性」の明闇一体
おんぎくでん いわ だいびやくこしゃ むみょうちわく ほつしょう みょうあん

の義なり、即ち三千具足の一乗をかけたる車なれば明闇一体にして
三千具足の義を顕すなり、法界に満したれども一法なるを一乗と云う
なり、此の一乗とは諸乗具足の一乗なり諸法具足の一法なり故に一の
白牛なり又白牛は一なりといえども無量の白牛なり一切衆生の体大白牛車
なるが故なり、然らば妙法の大白牛車に妙法の十界三千の衆生乗じた
り蓮華の大白牛車なれば十界三千の衆生も蓮華にして清浄なり南無
妙法蓮華經の法体此くの如し。

信解品

御義口伝に云く此の信解は中根の四大声聞の領解に限るに非ず妙法の
信解なるが故に十界三千の信解なり、蓮華の信解なるが故に十界三千の
清浄の信解なり此の信解の体とは南無妙法蓮華經是なり云云。

葉草喻品

おんぎくでん いわ みようほう
御義口伝に云く妙法の薬草なれば十界三千の毒草・蓮華の薬草なれば本
来 清浄 なり、 清浄 なれば仏なり此の仏の説法とは南無妙法蓮華経なり
云云、されば此の品には種相体性の種の字に種類種・相体種の二の開会
之れ有り、 相對種とは三毒即三徳なり種類種とは始の種の字は十界三千
なり、 類とは互具なり下の種の字は南無妙法蓮華経なり種類種なり、
十界三千の草木各各なれども只南無妙法蓮華経の一種なり、 毒草の毒も
なきなり 清浄 の草木にして薬草なり云云。

授記品

おんぎくでん いわ じゅうかい とつたい ごんこ みようほうれんげ じゆき
御義口伝に云く十界已已の当体の言語は妙法蓮華の授記なれば 清浄 の
授記なり、 清浄 の授記なれば十界三千の仏なり、 爰を以て仏南無
妙法蓮華経と授記するなり云云。

化城喻品

おんぎくでん いわ みようほう
御義口伝に云く妙法の化城なれば十界同時の無常なり、蓮華の化城なれば十界三千の開落なり、常住無常俱に妙法蓮華經の全体なり、化城宝処は生死本有なり生死本有の体とは南無妙法蓮華經なり、釈に云く「起は是れ法性の起滅は是れ法性の滅」と。

五百品

おんぎくでん いわ でしじゆきさぶつ げんぶん
御義口伝に云く此の品には五百弟子授記作仏すと現文に見えたり、然りと
いえど みようほう じゆつかいさんぜんみな でし れんげ でし
雖も妙法の五百なれば十界三千皆五百の弟子なり、蓮華の弟子なれば又
しようじよう しょうせんじゆつかいさんぜんなむ みようほうれんげきよう でし あら
清浄なり、所詮十界三千南無妙法蓮華經の弟子に非ずと云う事なし此
の經の授記是なり云云。

人記品

おんぎくでん いわ がくむがく せいじゃ じようぶつ
御義口伝に云く此の品には学無学の聖者来つて成仏するなり、既に妙法
ちようだい がくむがく じゆつかいこくさんぜんぐそく がくむがく みようほう がくむがく
頂戴の学無学なれば十界互具三千具足の学無学なり妙法の学無学なるが

ゆえ 故に不思議の十界に煩惱未だ尽くさざるなり蓮華の学無学なれば十界
さんぜんししょうじょう 三千 清浄の開落なり、此の学無学何物ぞや学とは法なり無学とは妙なり
いわゆるなむみょうほうれんげきょう 所謂南無妙法蓮華経なり云云。

法師品

おんぎくでん 御義口伝に云く妙法の法師なれば十界皆妙法受持の一句一偈の法師な
れんげ 蓮華の法師なれば十界三千 清浄の法師なり、十界衆生の色法は能持
の 人なり十界の心性は所持の法なり、仍つて色心共に法師にして自行化他
あらわ を顕すなり所謂南無妙法蓮華経の法師なるが故なり云云。

宝塔品

おんぎくでん 御義口伝に云く此の宝塔は宝浄世界より涌现するなり、其の宝浄世界の仏
とは事相の義をば且らく之を置く、証道観心の時は母の胎内是なり故に
ふほ 父母は宝塔造作の番匠なり、宝塔とは我等が五輪・五大なり然るに託胎

の胎を宝淨世界と云う故に出胎する處を涌現と云うなり、凡そ衆生の
涌現は地輪より出現するなり故に従地湧出と云うなり、妙法の宝淨世界
なれば十界の衆生の胎内は皆是れ宝淨世界なり、蓮華の宝淨なれば十界
の胎内悉く無垢清淨の世界なり、妙法の地輪なれば十界に亘るなり蓮華
の地なれば清淨地なり、妙法の宝淨なれば我等が身体は清淨の宝塔な
り妙法蓮華の涌出なれば十界の出胎の産門本来清淨の宝塔なり、法界
の塔婆にして十法界即塔婆なり妙法の二仏なれば十界三千・皆境智の二
仏なり、妙法的一座には三千の心性皆以て二尊の所座なり妙法蓮華二仏
一座なれば不思議なり清淨なり、妙法蓮華の見なれば十界の衆生・三千
の群類・皆自身の塔婆を見るなり、十界の不同なれども己が身を見るは
三千具足の塔を見るなり己の心を見るは三千具足の仏を見るなり、分身と
は父母より相續する分身の意なり、迷う時は流転の分身なり悟る時は果

中の分身なり、さて分身の起る処を習うには地獄を習うなり、かかる宝塔
も妙法蓮華經の五字より外は之れ無きなり妙法蓮華經を見れば宝塔即
一切衆生一切衆生即南無妙法蓮華經の全体なり云云。

提婆品

御義口伝に云く此の品には釈尊の本師・提婆達多の成仏と文殊師利・
教化の竜女成仏とを説くなり、是れ又妙法蓮華經の提婆竜女なれば
十界三千皆調達竜女なり、法界の衆生の逆の辺は調達なり法界の貪欲
・瞋恚・愚癡の方は悉く竜女なり、調達は修徳の逆罪・一切衆生は
性徳の逆罪なり一切衆生は性徳の天王如来調達は修徳の天王如来な
り、竜女は修徳の竜女・一切衆生は性徳の竜女なり、所詮釈尊も文殊
も提婆も竜女も一つ種の妙法蓮華經の功能なれば本来成仏なり、仍つて
南無妙法蓮華經と唱え奉る時は十界同時に成仏するなり、是を

みょうほうれんげきよう　だいはだつた
妙法蓮華經の提婆達多と云うなり、
と云う事なし、
童女が一身も本来成仏にして南無妙法蓮華經の当体なり
云云。

勸持品

おんぎくでん　いわ　おば　やしゆ　きべつ　じゆつかいどうじ　じゆき　みょうほう
御義口伝に云く此の品の姨母・耶輸の記　は十界同時の授記なり妙法の
おば　みょうほう　やしゆ
姨母・妙法の耶輸なる故なり、
こ　すなわ　かんじ　るつう　しんしよしよじ　じゆつかい　しゆじよう　しんしよ　しよじ
是れ即ち勸持の流通なり、
おば　やしゆ　によにん　じようぶつ　よめず
姨母耶輸は女人の成仏なり二万の居士は男子の流通なり此の文・陰陽一
体にして南無妙法蓮華經の当体なり云云。

安樂行品

おんぎくでん　いわ　みょうほう　あんらくぎよう　じゆつかいさんぜんこととあんらくぎよう
御義口伝に云く妙法の安樂行なれば十界三千悉く安樂行なり、
とうたい　しんくいせいがんこととあんらくぎよう　れんげ　あんらくぎよう　さんぜんじゆつかい
の当体なり身口意誓願悉く安樂行なり、
蓮華の安樂行なれば三千十界

しょうじょう　しゅぎょう　しょうほうじつそう　あんらくぎょう　あら
清淨の修行なり、諸法実相なれば安樂行に非ざること莫し、本門の意
じゅつかい　しきしん　ほんぬ　しんじつ　あんらくぎょう　あんらくぎょう
は十界の色心本来本有として眞実の安樂行なり、安樂行の体とは所謂
じょうぎようしよでん　なむみょうほうれんげきようこれ　りょうぜんじょうと　あんらく　ぎょうけい　べ
上行所伝の南無妙法蓮華經是なり云云、靈山淨土に安樂に行詣す可き
なり云云。

涌出品

おんぎくでん　いわ　しゃくもんるつつ　ほんもん　じよぶん　ゆえ
御義口伝に云く此の品は迹門流通の後・本門開顯の序分なり、故に先ず
ほんちむさく　さんじん　あらわ　ため　しゃくそんしよぐ　ぼさつ　ほんちほんげ　でし
本地無作の三身を顕さんが為に釈尊所具の菩薩なるが故本地本化の弟子
め　こ　みょうほう　じゅつかい　だいち　みょうほう　ゆじゅつ
を召すなり、是れ又妙法の從地なれば十界の大地なり、妙法の涌出な
れは十界皆涌出なり、十界妙法の菩薩なれば皆饒益有情界の慈悲深重
じゅつかいみなゆじゅつ　じゅつかいみょうほう　ぼさつ　みなようやくつつじょう　じひじんじゅう
の大地なり、蓮華の大地なれば十界の大地も十界涌出の菩薩も本来清淨
しよせんごどう　れんげ　だいち　じゅつかい　だいち　じゅつかいゆじゅつ　ぼさつ　しよじょう
なり、所詮悟道に約する時は從地とは十界の衆生の大種の所生なり、涌出
じゅつかい　しゅじょう　しゅつたい　ぼさつ　じゅつかい　しゅじょう　ほんぬ　じひ
とは十界の衆生の出胎の相なり菩薩とは十界の衆生の本有の慈悲な

り、此の菩薩ぼさつに本法の妙法蓮華經みょうほうれんげきょうを付屬ふぞくせんが為ために從地涌出じゆいだするなり、日蓮にちれん等の類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと唱となえ奉たてまつる者は從地涌出じゆの菩薩ぼさつなり外に求むること莫なかれ云云。

じゆりようぼん

壽量品

御義口伝おんぎくでんに云く壽量品じゆりようぼんとは十界じゅつかいの衆生しゆじようの本命ほんめいなり、此の品を本門ほんもんと云う事は本に入る門と云う事なり、凡夫ぼんぶの血肉けつにくの色心しきしんを本有ほんぬと談だんずるが故ゆえに本門ほんもんとは云うなり、此の重いたに至らざるを始覺しかくと云い迹門しゃくもんと云うなり、是これを悟ほんがくるを本覺いと云い本門ほんもんと云うなり、所謂南無妙法蓮華經いわゆるなむみょうほうれんげきょうは一切衆生いっさいしゆじようの本有ほんぬの在処ここなり爰ここをを以て經に我実成仏がじつじようぶつ已来いらいとは云うなり云云。

ぶんべつ

分別品

御義口伝おんぎくでんに云く此の品は上かみの品の時本地無作ほんちむさくの三身如来さんじんによらいの寿を聞く故ゆえに今品かみにして上かみの無作むさの三身さんじんを信解しんげするなり、其の功德そくどくを分別ぶんべつするなり功德くどくと

は十界じゅうかい己この当体とうたいの三毒さんどくの煩惱ぼんのうを此この品しんの時とき其まの儘まま妙法みょうほうの功德くどくなりと
分別ぶんべつするなり、其その功德くどくとは本有ほんぬの南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやう是これなり云云。

隨喜品

御義口伝おんぎくでんに云いく妙法みょうほうの功德くどくを隨喜ずいきする事を説とくなり、五十展転ごじゅうてんでんとは五と
は妙法みょうほうの五字ごじなり十とは十界じゅうかいの衆生しゅじやうなり展転てんでんとは一念三千いちねんさんぜんなり、教相きやうそう
の時は第五十人の隨喜ずいきの功德くどくを校きやうりやう量りやうせり五十人とは一切衆生の事なり、
妙法みょうほうの五十人妙法蓮華經みょうほうれんげきやうを展転てんでんするが故なり、所謂南無妙法蓮華經いわゆるなむみょうほうれんげきやうを
展転てんでんするなり云云。

法師功德品

御義口伝おんぎくでんに云いく無作むさの三身さんじんも如来にやらいの寿も分別功德ぶんべつくどくも隨喜ずいきも我が身の上の事
なり、然しからば父母ふぼ所生しよしやうの六根ろっこんは清淨しやうじやうにして自在じざい無碍むがいなり妙法みょうほうの六根ろっこん
れば十界三千じゅうかいさんぜんの六根ろっこん皆みな清淨しやうじやうなり、蓮華所具れんげしよくの六根ろっこんなれば全ふじやうく不淨ふじやうに

あら
非ざるなり、此の六根にて南無妙法蓮華經と見開覺知する時は本来本有
ろつこんしょうじょう
の六根 清淨 なり云云。

一 不輕品

おんぎくでん いわ ぼさつ らいはい
御義口伝に云く此の菩薩の礼拝の行とは一切衆生の事なり、自他一念の
らいはい ふ ぼ かばく みようほうれんげきよう らいはい
礼拝なり父母果縛の肉身を妙法蓮華經と礼拝するなり、仏性も仏身も
しゅじょう とうたい しきしん らいはい
衆生の当体の色心なれば直ちに礼拝を行ずるなり、仍つて皆当作仏の四
な む みようほうれんげきよう しゅし よ
字は南無妙法蓮華經の種子に依るなり。

一 神力品

おんぎくでん いわ じんりき げん じょうぎようぼさつ みようほうれんげきよう ごじ ふぞく
御義口伝に云く十種の神力を現じて上行菩薩に妙法蓮華經の五字を付属
たま じんりき じゅつかいさんぜん しゅじょう じんりき ほんぶ さんぜ
し給う此の神力とは十界三千の衆生の神力なり、凡夫は体の神力・三世
しよぶつ じんりき
の諸仏は用の神力なり神とは心法力とは色法なり力は法神は妙なり妙法
じんりき じゅつ かいことごとじんりき れんげ じんりき じゅつ かいしょうじょう じんりき
の神力なれば十界悉く神力なり、蓮華の神力なれば十界 清淨 の神力な

り、惣そうじて三世さんぜの諸仏しよぶつの神力じんりきは此この品しよぶつに尽ことごとくせり、釈尊しゃくそん出世しゆつせの神力じんりきの本意ほんいも此この品しよぶつの神力じんりきなり、所謂いわゆる妙法蓮華經みようれんげきようの神力じんりきなり、十界じゆつかいかい皆成じようと談だんずるより外ほかの諸仏しよぶつの神力じんりきは之これ有ある可べからず、一切いっさいの法門ほうもん神力じんりきに非あらずと云うう事じなし云云。

一 囑累品
ぞくるい

御義口伝おんぎくでんに云いく此この品しよぶつには摩項付属まちやうふぞくを説ときて此この妙法みようほうを滅後めつごに留とどめ給たまうなり、是これ又また妙法みようほうの付属ふぞくなれば十界じゆつかい三千さんぜん皆付属みなふぞくの菩薩ぼさつなり、又三摩またする事は能化所具のうけしよぐの三觀三身さんかんさんじんの御手みてを以もつて所化しよけの頭上みようじゆに明珠みゆじゆを譲ゆずり与あたへたる心こころなり、凡およそ頂上ちやうじやうの明珠みようじゆは覺悟知見かくごちけんなり、頂上みようじゆの明珠みようじゆとは南無なむ妙法蓮華經みようれんげきよう是こなり云云。

やくおうほん
薬王品

おんぎくでん いわ 御義口伝に云く此の品はやくおうぼさつ
しよせん しょうひ 所詮焼身焼臂とは焼は照の義なり照は智慧の義なり智能く煩惱の身生死の
ひじ 臂を焼くなり、天台大師も本地薬王菩薩なり、能説に約する時は釈迦なり
しゅじよう じゅうびよう しょうじよ 衆生の重病を消除する方は薬王・薬師如来なり又利物の方にて薬王と
やくし 云う自悟の方にては薬師と云う、此の薬王・薬師出世の時は天台大師なり
やくおう めつこ 薬王も滅後に弘通し薬師如来も像法暫時の利益有情なり、時を以て身体を
ほうもん ひろ たま 法門を弘め給う、其の一念三千とは所謂南無妙法蓮華経是なり云云。
あらわ 顕し名を以て義を顕す事を仏顕し給うなり、薬王菩薩は止観の一念三千の
あらわ 法門を弘め給う、其の一念三千とは所謂南無妙法蓮華経是なり云云。

みようおん
妙音品

おんぎくでん いわ 御義口伝に云く此の菩薩は法華弘通の菩薩なり故に卅四身を現じて
じゅつかいこく あらわ 十界互具を顕し給い利益説法するなり、是れ又妙法の妙音なれば十界の
あらわ 十界互具を顕し給い利益説法するなり、是れ又妙法の妙音なれば十界の

おんじょう みなみょうおん
音声は皆妙音なり、又十界悉く卅四身の所現の妙音なり、又蓮華の妙音
なれば十界三千の音声皆無染清浄なり、されば慈覺大師をば妙音の
出世と習うなり之に依つて唐決の時・引声妙音をば伝え給えり何故有り
てか法華を誹謗して大日經等に劣りたりと云うや云云、所謂法界の音声
・南無妙法蓮華經の音声に非ずと云う事なし云云。

觀音品

おんぎくでん いは
御義口伝に云く此の品は甚深の秘品なり息災延命の品なり当途王經と名く、
されば此の品に就て職位法門を繼ぐぞと習うなり、天台も三大部の外に
觀音玄という疏を作り章安大師は兩卷の疏を作り給えり能く能くの秘品
なり、觀音・法華・眼目異名と云いて觀音即ち法華の体なり所謂南無
妙法蓮華經の体なり云云。

陀羅尼品

御義口伝に云く此の品は二聖・二天王・十羅刹女・陀羅尼を説きて持経者を擁護し給うなり、所詮妙法・陀羅尼の真言なれば十界の語言音声皆陀羅尼なり、されば伝教大師の云く、妙法の真言は他経に説かず普賢常護は他経に説かず、陀羅尼とは南無妙法蓮華經の用なり、此の五字の中に妙の一字より陀羅尼を説き出すなり云云。

嚴王品

御義口伝に云く此の品は二子の教化に依つて父の妙莊嚴王邪見を翻し正見に住して沙羅樹王仏と成るなり、沙羅樹王とは梵語なり此には熾盛光と云う、一切衆生は皆是れ熾盛光より出生したる一切衆生なり、此の故に十界衆生の父なり、法華の心にては自受用智なり忽然火起焚燒舍宅とは是なり、煩惱の一念の火起りて迷悟不二の舍宅を燒くなり邪見とは是なり、

此の邪見じゃけんを邪見じゃけん即正てらと照てらしたる南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうの智慧ちえなり所謂いわゆる六凡ろくどうは父ふなり四聖ししようは子こなり四聖ししようは正見せいけん六凡ろくどうは邪見じゃけん故ゆゑに六道ろくどうの衆生しゅじやうは皆是みなこれ我が父母ふぼとは是これなり云云。

勸発品かんぱつぽん

御義口伝おんぎくでんに云いく此の品は再演法華さいえんほっけなり本・迹二門ごくりの極理しごく此の品に至極しごくするなり、慈覺大師じかくだいし云いく十界じゅうかいの衆生しゅじやうは發心はつしん修行しゆぎやうと釈しゃくし給たまうは此の品の事なり、所詮しよせん此の品と序品じよぽんとは生死しじふじの二法じふじなり序品じよぽんは我等衆生われらしゅじやうの生ななり此の品は一切衆生いっさいしゅじやうの死しなり生死しじふじ一念いちなんなるを妙法蓮華經みょうほうれんげきやうと云いうなり品品ひんひんに於おいて初の題号だいごうは生の方・終の方は死の方なり、此の

法華經ほけきやうは生死しじふじ・生死しじふじと轉めくりたり、生の故ゆゑに始はじめに如是我聞によぜがもんと置く如は生の義ぎなり死の故ゆゑに終りに作礼而去さらいにこと結むすしたり、去は死の義なり作礼の言は生死しじふじの間に成なしと成なす処ところの我等衆生われらしゅじやうの所作しよさなり、此の所作しよさとは妙法蓮華經みょうほうれんげきやうな

り、礼とは不乱ふらんの義なり法界妙法なれば不乱なり、天台大師てんだいだいしの云く「体の字は礼に訓くんず礼は法なり各々其その親を親とし各々其その子を子とす出世しゅつせの法ほつ体たいも亦復是またかくのごとの如し」と、体とは妙法蓮華經みょうほうれんげきようの事なり先づ体玄義げんぎを釈しゃくするなり、体とは十界じゅうかいの異体なり是これを法華經ほけきようの体とせり此等これらを作礼而去さらいにことは説かれたり、法界ほっかいの千草万木地獄・餓鬼等何がき いすれの界も諸法実相しよほうじつそうの作礼に非あらずという事ことなし是れ即ち普賢菩薩ふげんぼさつなり、普とは法界ほっかい・賢とは作礼而去さらいにこなり此れ即ち妙法蓮華經すなわ みょうほうれんげきようなり、爰こころを以て品品の初めにも五字ごじを題し終りにも五字ごじを以て結し前後中間南無妙法蓮華經ぜんごちゆうげん なむ みょうほうれんげきようの七字なり、末法弘通まつぽうくつうの要法唯此この一段に之れ有あるなり、此等これらの心を失うしなうて要法ようぽうに結ばずんば末法弘通まつぽうくつうの法には不足ふそくの者なり剩あまつさにちれんえ日蓮にちれんが弟子でし・檀那だんな別べつの才覚さいかくむやく無益みやくなり、妙樂みょうらくの釈いわに云く「子父ひろの法せかいを弘ひろむ世界せかいの益えき有り」と、子とは地涌じゆの菩薩ぼさつなり父とは釈尊しゃくそんなり世界せかいとは日本国にほんこくなり益えきとは成仏じやうぶつなり

法とは南無妙法蓮華經なり、今又以て此くの如し父とは日蓮なり子とは
にちれん でし だんな せかい にほんこく
日蓮が弟子・檀那なり世界とは日本国なり益とは受持成仏なり法とは
じようぎようしよでん だいもく

上行 所伝の題目なり

おんぎくでん

御義口伝卷下

こうあんがねんつちのえとら

弘安元年 戊寅 正月一日

しつぷつ にっこう
執筆 日興

御講聞書

九六 御講聞書目録

804p

已上九十ヶ条

一、妙法蓮華經序品第一の事 八〇

一、本因・本果の事 八〇九
にぜん とくどう
爾前無得道の事 八〇九
じよぼん
序品の事 八〇九

七

一、妙法

八〇八

一、品と云う事 八〇九
によぜがもん
品と云う事 八〇九

一、蓮華

八〇八

一、如是我聞の事 八一〇
によぜがもん
如是我聞の事 八一〇

一、如是この二字 八一〇

一、耆闍崛山ぎしゃくつせんの事 八一

一、与大比丘衆びくの事 八二

一、爾時・世尊せそんの事 八三

一、淨飯王摩耶夫人成仏証文じょうばん まやふじんじょうぶつしやうもんの

事八一三

一、方便品ほうべんの事 八三

一、仏所成就第一希有難解之法ぶつしよじょうじゆ だいいち けうなん

唯仏与仏の事八一四

一、十如是じの事 八五

一、自証無上道大乘平等法の事むじょうどうだいじょうびやうどう

八一五

一、我始坐道場觀樹亦經行またの事八

一六

一、今・我喜無畏の事 八六

一、我聞是法音疑網皆已除ほうせいぎもうかいの事八一

六

一、以本願故說三乘法ほんがん さんじやうの事 八

一七

一、有大長者ちやうじやの事 八八

一、多有田宅の事 八九

一、等一大車の事 八二〇

一、其車高広たかくひろの事 八二〇

一、是朽故宅属于一人ぞくうの事 八二

○

一、諸鬼神等揚声大叫の事 八

二、

一、乘此宝乘直至道場の事 八

二、

一、若人^{にやくにんふしんきぼう}不信毀謗此經則断一切世間^{いっさいせけん}

・仏種^{ぶつしゆ}の事八二二

一、捨惡知識親近善友の事 八二

三、

一、無上宝聚不求自得の事 八二

四、

一、葉草喻品の事 八二四

一、現世安穩・後生善処の事 八

二五

一、皆悉到於一切智地の事 八二

五

一、此の一切智地の四字八二六

一、根茎枝葉の事 八二

七

一、枯槁衆生の事 八

二七

一、等雨法雨の事 八二

七

一、如從飢国来忽遇大王・の事八二

八

一、大通智勝だいづうちしょうぶつ仏ぶつ。不得ふとく成じょう仏道ぶつどうの事

八二九

一、貧人ひんじん見此珠其心大歡喜かんきの事八三

〇

一、如甘露かんろけんかん見灌かんの事 八三一

一、若有惡人以不善心等ふぜんしんの事 八三

二

一、如是によぜ如是この事 八三二

一、是真ぜしんぶつし仏子住淳善地じゆんぜんちの事 八三

二

一、非口所宣非心所測そくの事 八三

三

一、不染せん世間法よれんげざいすい如蓮華れんげ在水すい從地而ゆじゆつ

涌出ゆじゆつの事八三三

一、願みらいえんぜつ仏為未來演說令開解かいげの事八三

四

一、譬如良医智慧聰達ちえの事 八三

四

一、一念いちねんしんげ信解しんげの事 八三五

一、見もんぼうしんじゆ仏聞法信受教誨けうかいの事 八三

五

一、若復有人またあるひと以七宝しつぽう滿是人所得其福

最多しよたの事八三五

一、妙音菩薩の事 八三六 みょうおんぼさつ

一、爾時無尽意菩薩の事 八三六 むじんいぼさつ

一、觀音妙智力の事 八三六 かんのんみょうち

一、自在之業の事 八三六 じざい

一、妙法蓮華經陀羅尼の事 八 みょうほうれんげきょう だらに

三六

一、六万八千人の事 八三七

一、妙莊嚴王の事 八三七 みょうそうじんの

一、華嚴・大日觀經等の凡夫の得道 けこん だいにちかんきょう ほんぶ とくどう

の事八三七

一、題目の五字を以て下種の証文 だいもく ごじ げしゅ しょうもん

と為す可き事八三七 な べ

一、題目の五字末法に限り持つ可き だいもく ごじまつぼう

の事八三八

一、天台云く是我弟子応弘我法の事 てんだいいわ これわがでし おうぐがほう

八三八

一、色心を心法と云う事 八三八 しきしん

一、無作の応身我等凡夫也と云う事 むさ おうじんわれらほんぶ

八三八

一、諸河無鹹の事 八三八 しよ

一、妙樂大師の釈に末法之初冥利 みょうらくだいし まつぼう みようり

不無の釈の事 八三九 しやく

一、爾前經瓦礫国の事 八三九 にぜんきょうがりやく

一、無明惡酒の事 八三九 むみょう

一、日蓮己証の事 八四〇 にちれんこしやう

一、釈尊の持言秘法の事八四〇 しゃくそん ひほう

一、日蓮門家大事の事 八四〇 にちれんもんかだいじ

一、日蓮が弟子臆病にては叶う可か にちれん でしおくびやう かなべ

らざる事八四〇

一、妙法蓮華經の五字を眼と云う みやうほうれんげきやう ごじ

事 八四〇

一、法華經の行者に水火の行者の ほけきやう ぎよつじや すいか ぎやうじや

事 八四一

一、女人と妙と釈尊と一体の事八 にょにん しゃくそん

四一

一、置不呵責の文の事 八四二 かしゃく

一、異念無く靈山淨土へ参る可き ななく りやうぜんじやうど

事 八四二

一、不可失本心の事 八四二 ふか ほんしん

一、天台大師を魔王障礙せし事八四 てんだいだいし まおうしやうげ

三

一、法華經極理の事 八四四 ほけきやうごくり

一、妙法蓮華經五字の蔵の事 八 みやうほうれんげきやうごじ

四四

一、我等衆生の成仏は打かためた われらしゆじやう じやうぶつ

る成仏と云う証文の事八四五 じやうぶつ しやうもん

一、爾前・法華の能くらべの事 八 にぜん ほつけ よ

四五

一、授職の法体の事

八四五

一、四弘誓願応報如理と云う事

八四六

一、末代讓状の事

八四五

六

一、本有止観と云う事

八四五

一、本来の四弘の事

八四六

一、入末法四弘誓願の事

八四五

右日向記の目録は、現行板本の目録に脱せる「如是我聞の事」及び「法華經

の行者に水火の行者の事」の二条を加え、新曾本に明かに「已上九十ヶ条」

とあるに合せて、新たに作製せり。現行板本に八十八箇条とあるは誤なり、

但し巻頭の「総」は新曾本にも数えず、故に本目録にも記載せず。なお同一

箇条にして、別条に御講示ある場合、即ち「等雨法雨の事」「根茎枝葉の事」

等は、新曾本も現行板本も、共に一条に数うるを以て、本目録も亦た其れに

従えり。

已上四行の附記は全く日宗社本に依る、編者。

自二弘安元年三月十九日一連連御講至二同三年五月二十八日一也仍

テ記シレ之畢

日向 記之

およ ほけきよう もう いっさいしゅじよう かいじようぶつどう ようほう だいかくせそん

凡そ法華經と申すは一切衆生・皆成仏道の要法なり、されば大覺世尊は

せつじみしこ たまい べ じせつ たまい

説時未至故と説かせ給いて説く可き時節を待たせ給いき、例せば郭公の春を

けいちよう

おくり鶏鳥の暁を待ちて鳴くが如くなり、此れ即ち時を待つ故なり、されば

ねはんぎよう いわ ほしし まつぼう なむ みようほうれんげきよう

涅槃經に云く以知時故名大法師と説かれたり、今末法は南無妙法蓮華經の七

ひろ りしやうとくやく

字を弘めて利生得益あるべき時な

だいもく よ じ まじ ひがこと

り、されば此の題目には余事を交えれば僻事なるべし、此の妙法の大曼荼羅を

たも とな たてまつ よ みようほう ちようじよう

身に持ち心に念じ口に唱え奉るべき時なり、之に依つて一部二十八品の頂上

なむ みようほうれんげきようじよぼんだいいち

に南無妙法蓮華經序品第一と題したり。

一妙法蓮華經序品第一の事玄旨伝に云く、一切經の惣要とは謂く

妙法蓮華經の五字なり、又云く、一行一切行恒修二此三味一文、云う所の三

味とは即ち法華の有相無相の二行なり、此の道理を以て法華經を讀誦せん

行者は即ち法具の一心三觀なり云云、此の釈に一切經と云うは近くは華嚴

・阿含・方等・般若等なり、遠くは大通仏より已來の諸經なり、本門の意は

壽量品を除いて其の外は一切經なり、惣要とは天には日月・地には大王・

人には神・眼目の如くなりと云う意を以つて釈せり、此れ即ち妙法蓮華經

の枝葉なり、一行とは妙法の一行に一切行を納めたり、法具とは題目の五字

に万法を具足すと云う・事なり、然る間・三世十方の諸仏も上行菩薩等も

大梵天王

・帝釈・四王・十羅刹女・天照太神・八幡大菩薩・山王二十一社・其の外

・日本国中の小神・大神等・此の經の行者を守護すべしと・法華經の第五卷

に分明ぶんみょうに説かれたり、影と・身と・音と・響ひびきとの如ごとし、法華經二十八品は影ことの如ことく響ひびきの如ごとし、題目の五字は体の如ことく音ことの如ことくなり、題目だいもくを唱となえ奉たてまつる音とは十方世界にとずかずと云う所なし、我等われらが小音なれども、題目だいもくの大音に入いれて唱となえ奉たてまつる間、一大三千界さんぜんかいにいたらざる所なし、譬たとえば小音なれども貝ばいに入れて吹く時・遠く響ひびきくが如ごとく、手の音は・わずかなれども鼓を打つに遠く響ひびきくが如ごとし、一念三千の大事の法門是なり、かかる目出度き御經にて渡わたらせ給たまえるを、謗そしる人何ぞ無間に墮だ在ざいせざらんや、法然ほうねん・弘法等の大悪知識あくちしき是なり。

一妙法みょうほう

の二字は一切衆生の色心の二法なり、一代説教の中に法の字

の上に妙の字を置きたる經は一經いっきもなし、涅槃經の題目だいもくにも大涅槃經だいねはんきょうと云い

て大の字あれども妙の字なし、但し大は只是ただこれ妙と云えり然しかれども大と妙と

は不同なり、同じ大なれども華嚴經けこんきょうの大方広仏華嚴經けこんきょうと云える題号の大と、

涅槃經の大と天地雲泥なり、華嚴經の大は無得道の大なり。涅槃經の大は法華

同醍醐味の大なり、然れども然涅槃尚劣と云う時は法華經には劣れり、此の

事は涅槃經に分明に法華經に劣ると説かれたり、涅槃經に云く如下法華中八

千声聞得レ受二記べつ一成中大果舞上如三秋収冬蔵更無二所作二云云此の

文分明に我と法華經に劣れりと説かせ給えり。

一蓮華 とは本因・本果なり、此の本因・本果と云うは一念三千なり、

本有の因・本有の果なり、今始めたる因果に非ざるなり、五百塵点の法門と

は此の事を説かれたり、本因の因と云うは下種の題目なり、本果の果とは成仏

なり、因と云うは信心領納の事なり、此の經を持ち奉る時を本因とす其の本

因のまま成仏なりと云うを本果とは云うなり、日蓮が弟子・檀那の肝要は本

果より本因を宗とするなり、本因なくしては本果有る可からず、仍て本因と

は慧の因にして名字即の位なり、本果は果にして究竟即の位なり、究竟即と

は九識本覺ほんかく いみようの異名なり、九識本法の都ともとは法華ほっけの行者ぎようじゃの住所じゆりきほんなり、神力品に

云く若しいわもは山谷曠野等せんごくこうやと説けり即ち是れ道場どうじょうと見えたり豈法華あにほっけの行者ぎようじゃの住

所は生処とくどう・得道てんほうりん・転法輪ねはん・入涅槃しよぶつの諸仏しよぶつの四処どうじょうの道場どうじょうに非ずや。

一本因ほんいん・ほんが・本果ほんがの事 法界ほっかい悉く常住ことごとじようじゅう不滅ふめつの為ていたらく体を云うなり、されば

妙樂大師みようらくだいし・此の事を釈しゃくする時とき・弘決くけつに云く当七知身土しんどういちねんさんぜん一念三千じようどう・故成道時

称二此本理二身いちねん一念遍二ほっかい於法界一云云、此の积分ふんみよう明に本因ほんいん・ほんが・本果しやくを釈したり、

身と云うは一切衆生いっさいしじうじようなり、土と云うは此の一切衆生いっさいしじうじようの住処じゅうじよなり一念とは此

の衆生しじうじようの念念ねんねんの作業じやくぎなり、故成道時じようどうじ称二此本理一ほんいん・ほんがとは本因ほんいん・ほんが・本果じようどうの成道じようどうな

り、本理ほんいん・ほんがと本因ほんいん・ほんが・本果ほんがとは同じ事なり法界ほっかいとは五大なり、所詮法華經しよせんほけきようを持ち

奉る行者たてまつぎようじやは若在仏前蓮華化生ぶつぜんれんげけしじようなれば称此本理しやうしの成道じようどうなり、本理ほんがに称うとは

妙法蓮華經みようほうれんげきようの本理かなに称うと云う事なり、法華經ほけきようの本理かなに叶うとは此の經を

持ち奉るを云うなり、若有能持則持たも たてまつ持身にやくうのうじとは是なり。

一爾前無得道の事 にぜん とくどう

此の法門は蓮華の二字より起れり、其の故は蓮華の ほうもん れんげ

二字を以て云うなり、三世の諸仏の成道を唱うるは蓮華の二字より出でたり、 さんぜ しょぶつ とな れんげ

権教に於て蓮華の沙汰無し若しありと云うとも有名無実の蓮華なるべし、 こんきよう おい れんげ さた も ゆうめいむじつ れんげ

三世の諸仏の本時の下種を指して華と名け、此の下種の華によつて成仏の蓮 さんぜ しょぶつ げしゆ じようぶつ

を取る、妙法蓮華即ち下種なり、下種即ち南無妙法蓮華經なり、華は本因・ みようほうれんげすなわ げしゆすなわ な むみようほうれんげきよう

蓮は本果なれば華の本国を不信謗法の人豈具足せんや、經に云く若人不信毀謗 ふしんほうぼう あにぐそく いわ にやくにんふしん きほう

此經則斷一切世間・仏種云云、此の蓮華に迷う故に十界具足無し、十界具足 いっさいせけん ぶつしゆ れんげ まよい ゆえ じゅつかいぐそく じゅつかいぐそく

せざれば一念三千跡形無きなり、一切の法門は蓮華の二字より起れり、一代 いちねんさんぜんあとかた いっさい ほうもん れんげ いちだい

説教に於て無得道と云うも蓮華の二字より起れり深く之を案ず可し。 せつきよう おい とくどう れんげ これ べ

一序品の事 じよほん 此の事は、教主釈尊・法華經を説き給わんとて先ず瑞相 きようしゆしやくそん ほけきよう と たま ずいそう

の顯れたる事を云うなり、今末法に入つて南無妙法蓮華經の顯われ給うべき あらわ まつぼう な むみようほうれんげきよう あら たま

瑞相は彼には百千万倍勝るべきなり、其の故は雨は竜の大小により蓮華は ずいそう かしこ ひやくせんまんばいまさ そのゆえ だいしやう れんげ

池の浅深せんじんに随したがつて其の色不同ふどうなるが如ごとくなるべし。

一品と云う事 品とは、釈に云く義類同と云えり、此の法華經は三仏寄合

い給たまいて定判し給えり、三仏とは釈迦・多宝・分身是なり、此の三仏・評定

してのたまわく一切衆生・皆成仏道は法華經に限りて有りと、皆是眞実の

証明・舌相梵天の誠証・要當說眞実の金言・此等を義類同して題したる

品の字なり、天竺には跋渠と云う此には品と云えり、釈迦・多宝・分身の三

仏の御口を以て指し合せ同音に定判し給える我等衆生の成仏なり、譬えば

鳥の卵の内より卵をつつく時・母又同じくつつきあくるに・同じき所をつつ

きあくるが如し、是れ即ち念慮の感応する故なり、今法華經の成仏も此くの

如くなり、三世諸仏の同音に同時に定め給える成仏なり、故に經に云く從仏口

生如從仏等云云。

一如是我聞の事

仰に云く如と云うは衆生の如と仏の如と一如にして無

二如なり、然りと雖も九界と仏界と分れたるを是と云うなり、如は如を不具
に名く即ち空の義なりと釈して少しも・ことならざるを云うなり、所詮法華經
の意は煩惱即菩提・生死即涅槃・生仏不二・迷悟一体といえり、是を如とは
云うなり、されば如は実相・是は諸法なり、又如は心法・是は色法・如は寂
・是は照なり、如は一念・是は三千なり、今經の心は文文・句句・一念三千
の法門なり、惣じて如是我聞の四字より外は今經の体全く無きなり 如と妙
とは同じ事・是とは法と又同じ事なり、法華經と釈尊と我等との三・全く
不同無く・如我等無異なるを如と云うなり、仏は悟り・凡夫は迷なりと云う
を是とは云うなり、我聞と云うは、我は阿難なり、聞とは耳の主と釈せり、
聞とは名字即なり、如是の二字は妙法なり、阿難を始めて靈山一会の聴衆
・同時に妙法蓮華經の五字を聴聞せり仍つて我も聞くと云えり、されば相伝
の点には如は是なりきと我れ聞くといいり、所詮末法当今には南無

みょうほうれんげきょう

こころ

しんによほつしやう

てんだいだいし

妙法蓮華經を我も聞く^{こころ}と心得べきなり、我は真如法性の我なり、天台大師

は同聞衆と判ぜり同じ事を聞く衆と云うなり、同とは妙法蓮華經なり、聞は

そくしんじやうぶつ

ほけきやう

即身成仏・法華經に限ると聞くなり云云。

一如^こ是の二字　を約教^{やつきやう}の下に釈^{しゃく}する時・文句^{もんく}の一に又一時^{いちじ}に四箭^{しせん}を接し

て地に墮^だせしめざるも未^{いま}だ敢て捷^{あえて}しと称せず、鈍驢^{どんろ}に策^{むちう}つて跋^{はべつ}を駟^なる尚^{なお}し

一をも得ず何^{いか}に況^{いわんや}や四をや云云、記の一に云く、大經^{だいきやう}に云く迦葉菩薩^{かしやうぼさつ}

問^{いわ}うて云く云何^{いかなるか}か智者^{ちしや}・念念^{ねんねん}の滅を觀^{かん}ずと、仏の言^{いわ}く譬^{たと}えば四人^{みな}皆射術^やを

善^{いっしょ}し滿^{みつ}つて一処^{いつしょ}に在^ありて・各一方^{いっぽう}を射^やるに念言^{ねんげん}すらく・我等^{われら}は四^やの箭^や・俱^{とも}に

射^とて俱^{とも}に墮^だせんと、復^{また}人有^ありて念^{ねん}ずらく・其^その未^{いま}だ墮^だせざるに及^{いた}んで我^{われ}れ

能^よく一時^{いちじ}に手を以^{もつ}て接取^{しやうしつき}せんというが如^{ごと}し、仏の言^{いわ}く、捷疾鬼^{しやうしつき}は復^{また}是^この人^{ひと}よ

りも速^かなり是^{かくの}くの如^{ごと}く、飛行鬼^{ひきやうき}・四天王日月神^{してんのうにちがつ}・堅疾天^{けんしつてん}は展轉^{てんでん}して箭^やよりも

疾^{むじやう}し、無常^{むじやう}は此^これに過^すぎたりと、此の本末^{ほんまつ}の意^いは他師^{たし}・此の經^{きやう}の如^{ごと}是^にに付^つて

釈を設くと云えども・更に法蓮華の理に深く叶わざるなり、一二だも義理を
尽さざるなり況や因縁をや、何に況や約教・觀心の四をやと破し給えり、
所詮法華經は速疾頓成を以て本とす、我等衆生の無常のはやき事は捷疾鬼
よりもはやし、爰を以て出する息は入る息を待たず、此の經の如是は爾前の
諸經の如是に勝れて超八の如是なり、超八醍醐の如是とは速疾頓成の故な
り、妙樂大師云く若し超八の如是に非ずんば、安ぞ此の經の所聞と為さん
と云云。

一耆闍崛山の事

仰に云く耆闍崛山とは靈鷲山なり、靈とは三世の諸仏の

心法なり必ず此の山に仏法を留め給う、鷲とは鳥なり此の山の南に當つて詩

だ戸陀林あり死人を捨つる所なり、鷲此の屍を取り食うて、此の山に住む

なり、さて靈鷲山とは云うなり、所詮今の經の心は迷悟一体と談ず、靈と

云うは法華經なり、三世の諸仏の心法にして悟なり、鷲と云う卯は畜生にし

て迷なり、迷悟不二と聞く中道即法性の山なり、耆闍崛山中と云うは迷悟

不二・三諦一諦・中道第一義空の内証なり、されば法華經を行ずる日蓮等

が弟子・檀那の住所はいかなる山野なりとも靈鷲山なり行者遠釈迦如来に

非ずや、日本国は耆闍崛山・日蓮等の類は釈迦如来なるべし、惣じて一乘

南無妙法蓮華經を修行せん所は・いかなる所なりとも常寂光の都・

靈鷲山なるべし、此の耆闍崛山中とは煩惱の山なり、仏菩薩等は菩提の果

なり・煩惱の山の中にして法華經を三世の諸仏説き給えり、諸仏は法性の

依地・衆生は無明の依地なり、此の山を寿命品にしては本有の靈山と説か

れたり、本有の靈山とは此の娑婆世界なり、中にも日本国なり、法華經の本

国土妙・娑婆世界なり、本門寿命品の未曾有の大曼荼羅建立の在所なり云

云、瑜伽論に云く東方に小国有り、其の中唯大乘の種姓のみ有り、大乘の

種姓とは法華經なり法華經を下種として成仏すべしと云う事なり、所謂南無

みょうほうれんげきょう
妙法蓮華經なり小国しょうこくとは日本国にほんこくなり云云。

一与大比丘衆びくの事

仰いわに云く文句もんくの一に云く釈論しゃくろんに明す、大とは亦または多

と言またい亦是勝またと言またう、

遍あまねくく内外ないげの經書きょうしょを知る故ゆえに多と言またう、又数一万・二千

に至いたる故ゆえに多と言またう、

今明あかさく大道あ有るが故ゆえに・大用あ有るが故ゆえに・大知あ有る

が故ゆえに・故ゆえに大と言またう、勝すくとは道勝すくれ・風勝すくれ・知勝まさる、故ゆえに勝と言またう、多

とは道多く・用多く・知多し故ゆえに多と言またう、又云く含容がんよう一心いっしん・一切心いっさいなり、

故ゆえに多と名なくるなり、記の一に云く一心一切心いっしんいっさいと言またうは心境俱ともに心にして各

一切いっさいを撰せんず、一切三千いっさいさんぜんを出でざるが故ゆえなり、具つぶさに止觀しの第五の文ごの如ごとし、若もし

円心えんに非あらざれば三千さんぜんを撰せんず、故ゆえに三千惣別くつげちゆう威いく空仮中くうかちゆうなり、一文す既に爾しかな

り他みなこは皆此みなこれに准みせよ、此の本末ほんまつの心は心境義しんじやうぎの一念三千いちねんさんぜんを釈しゃくするなり、止觀しかん

の第五の文とは夫一心具十法界しんぐほつかい乃至不可思議境ふかしぎの文を指すなり、心境義しんじやうぎの

一念三千いちねんさんぜんとは此の与大比丘和びくが大字しやくより釈しゃくし出だせり、大多勝さんたいの三字・三諦

さんかん

・三觀なり、円頓行者起念の当体・三諦三觀にして大多勝なり、此の釈に惣

と云うは一心の事なり、別とは三千なり、一文とは大の一字なり、今末法に

ほけきよう

ぎようじゃ

にちれん

たぐい

まさ

しゆぎよう

ほけきよう

入つては法華經の行者・日蓮等の類、正しく大多勝の修行なり、法華經の

ぎようじゃ

しやかにらい

たてまつ

ことことだいにん

ため

たてまつ

まんだら

行者は釈迦如来を始め奉りて悉く大人の為に敬い奉るなり誠に以て大曼荼羅

びく

ほんもん

いちねんさんぜん

なむみようほうれんげきよう

びく

の同共の比丘衆なり、本門の事の一念三千・南無妙法蓮華經・大多勝の比丘

衆なり、文・文・句句・六万九千三百八十四字の字ごとに大多勝なり、人法一

そくしんじようぶつ

体にして即身成仏なり、されば釈に云く大は是れ空の義・多は是れ仮の義・

こ

勝は是れ中の義と、一人の上にも大多勝の三義・分明に具足す、大とは迹門

ほんもん

だいまく

ほけきよう

ほんぞん

ふんみよう

ぐそく

しやくもん

多とは本門・勝とは題目なり、法華經の本尊を大多勝の大曼荼羅と云う

こ

あに

びく

あら

二界・八番の雜衆悉く法華の会座の大

なり、是れ豈与大比丘衆に非ずや、

まんだら

曼荼羅なり、法華經の行者は二法の情を捨てて唯妙法と信ずるを大という

ほけきよう

ぎようじゃ

ただみようほう

しよきよう

なり、此の題目の一心に一切心を含容するを多と云うなり、諸經・諸人に勝れ

だいまく

いっしん

いっさい

がんよう

しよきよう

しよにん

なり、此の題目の一心に一切心を含容するを多と云うなり、諸經・諸人に勝れ

たるが故に勝と云うなり、一切心に法界を尽す一心とは法華經の信心なり、
信心即一念三千なり云云。

一爾時・世尊の事

仰に云く世尊とは釈迦如來・所詮世尊とは孝養の人

を云うなり、其の故は不孝の人をば世尊とは云わず教主・釈尊こそ世尊の本

にては御座候え、父・浄飯王・母摩耶夫人を成道せしめ給うなり、されど

今經の座には父母御座さざれば方便土へ法華經をば送らせ給うなり、彼土得

聞とは是なり、但し法華經の心は十方仏土中・唯一乘法なり切利夫に母

摩耶夫人生じ給えり、仰利天に即したる寂光土なり、方便土に即したる寂光土

なり、四土一念・皆常寂光なれば、何れも法華經の説処なり、虚空会の時

の説・法華に岩切利天もるべきや寂光土の説・法華に遠方便土もるべきや、

何れも法華經の説所なれば同聞衆の人数なり云云。

一・浄飯王座耶夫人成仏証文の事

仰に云く方便品に云く我始坐道場

・觀樹また亦經行の文是なり、又壽量品じゆりようほんに云く、然我実成仏がじつじようぶつ已來の文是なり、
教主きようしゆしやくそん釈尊じようとうの成道の時・淨飯王じようばんも摩耶まやも得道とくどうするなり、本・迹二門とくどうの得道
の文これ是なり云云、此の文日蓮にちれんが己心こしんの大事だいじなり、我始われと我実われとの文能よく能よく
之を案べず可べし、其の故そのゆえは爾前經にぜんきようの心は父子各別ふしかくべつの談道ふしかくべつなり、然しかる開成仏じようぶつ之れ
無し、今の經の時・父子ふしの天性ふしを定め父子一体ふしと談ふぜり・父母ふぼの成仏じようぶつ即ち子
の成仏じようぶつなり、子の成仏じようぶつ・即ち父母すなわの成仏ふぼなり、釈尊じやくそんの我始坐道場がじつじようぶつの時・
淨飯王じようばん・摩耶夫人まやふじんも同時に成道じようぶつなり、釈尊じやくそんの我実成仏がじつじようぶつの時・淨飯王・
摩耶夫人まやふじん同時どうじなり始本共どうじに同時じようぶつの成道じようぶつなり、此の法門ほうもんは天台てんだい・伝教等でんぎようを除
いて知る人・一人も之れ有こる可あからず、末法まつぽうに入まつて日蓮等にちれんの類たぐい・堅く秘す
可べき法門ほうもんなり、譬たとえば蓮華れんげの華果けかの相離あいはなせざるが如ごとくなり、然しかれば法華經ほけきようの
行者ぎようじやは男女なんよ悉ことごとく世尊せそんに非あらずや、藥王品やくおうほんに云く於一切衆生いっさいしゆじよう中亦また為第一文これだい、
此これ即ち世尊すなわの經文せそんに非きようもんずや、是真ぜしん仏子ぶつしなれば法王ほうおうの子にして世尊せそん第一だいいちに

あらずや。

一方ほうへん便品の事

妙法蓮華經みょうほうれんげきょうの五字ごじとは名体宗用教ごじゅうげんぎの五重玄義ごじゅうげんぎなり、されば

止観しかん

に十章しやくを釈しやくせり此の十章すなわ即ち妙法蓮華經みょうほうれんげきょうの能釈みよなり、

夫れとは釈名そは名

玄義げんぎ

なり、体相撰法えつほうの二は体玄義げんぎなり、

偏円へんえんの一は教玄義げんぎなり、方便ほうべん・正観しやく

・果報かほう

の三は宗玄義げんぎなり、起教ききょうの一は用玄義げんぎなり、始たいいの大意たいいの章しやくと終の旨歸しき

との二をば之これを除く、此の意は止観しかん一部しよせんの所詮たいいは大意しきと旨歸しきとに納れり無明即むみょうそく

明たいいの大意たいいなる故なり、無明むみょうとも即明そくとも分別ぶんべつせざるが旨歸しきなり、

今妙法蓮華經みょうほうれんげきょうの五重玄義ごじゅうげんぎを修行しゆぎし奉たてまれば・煩惱即菩提ぼんのうそくぼだい・生死即涅槃しやうじそくねはんの開悟かいこ

を得るなり、大意たいいと旨歸しきとは法華ほつけの信心しんじんの事なるべし、以信得入いしんとくにゆう・非己智分ちふん

とは是これなり、我等衆生われらしゆじやうの色心しきしんの二法みょうほうは妙法みょうほうの二字むししきしんなり無始色心ほんぜりしやう・本是理性

・妙境みやうち・妙智かいかくと開覺たいいするを大意たいいと云うなり、大は色法の徳・意は心法の徳な

り大の字は形くんに訓ぜり、今日蓮等の類いまにちれん・南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと唱え奉る男女とな・

貴賤・等の色心本有の妙境・妙智なり、父母果縛の肉身の外に別に三十二相
・八十種好の相好之れ無し即身成仏是なり、然る間・大の一字に法界を悉く
収むるが故に法華經を大乘と云うなり、一切の仏・菩薩・聖衆・人畜・
地獄等の衆生・の智慧を具足し給うが故に・仏意と云うなり、大乘と云う
も同じ事なり是れ即ち妙法蓮華經の具徳なり、されば九界の衆生の意を以
て仏の意とす、一切經の心を以て法華經の意とす、於一仏乘分別説三とは
是なり、かかる目出度き法華經を謗じ奉る事・三世の諸仏の御舌を切るに非ず
や、然るに此の妙法蓮華經の具徳をば仏の智慧にてもはかりがたく何に況や
菩薩の智力に及ぶ可けんや、之に依つて大聖塔中・偶の相伝に云く、一家の
本意は只一言を以て本と為す云云、此の一言とは寂照不二の一言なり・或
は本末究竟等の一言とも云うなり、眞実の義には南無妙法蓮華經の一言なり、
本とは凡夫なり、末とは仏なり、究竟とは生仏一如なり、生仏一如の如の体

いはゆるなむみょうほうれんげきよつこれ
は所謂南無妙法蓮華經是なり云云。

一 仏所成就第一希有難解之法唯仏と仏の事

仰に云く仏とは釈尊の御事

なり、成就とは法華經なり、第一は爾前の不第一に對し・希有は爾前の不希有

に對し・難解之法は爾前の不難解に對したり、此の仏と申すは諸法実相なれ

ば十界の衆生を仏とは云うなり、十界の衆生の語言音声成就にして

法華經なり、三世の諸仏の出世の本懷の妙法にして、優曇華の妙文なれば

第一希有なり、九界の智慧は及ばざれば難解の法なり、成就とは我等衆生

の煩惱即菩提・生死即涅槃の事なり、權教の意は終に不成仏なれば成就に

は非ず、迹門には二乗成仏顕れたり、是れ即ち成就なり、是を仏所成就

とは説かれたり、されば唯仏とは釈迦・与仏とは多宝なり、多宝涌現なけれ

ば与仏とは云いがたし、然りと雖も終には出現あるべき故に・与仏を多宝と

いうなり、所詮日蓮等の類いの心は・唯仏は釈尊・与仏は日蓮等の類いの事

なるべし、其そのの故ゆえは唯ただ仏ゆいの唯かさを重ねて譬ひ喩ゆ品ほんには唯ただ我われ一人ひとりと説せけり、与よ仏ふつの

二字ふたごを重ねて、方便ほうべん品の末いたに至いたつて若よ遇ぶつ余すなわ仏ふつと説せけり、釈しやくには深ほく円えん理りを覚さと

るは、之これを名なけて仏ふつと為なすと釈しやくせり、是これ即すなわち与よ仏ふつと云いふは法ほ華け經きやうの行ぎやう者じや

なんよ

男女なんによの事ことなり、唯ただ我われ一人ひとりの釈しやく尊そんに与よし上たてる仏ふつなり、此この二ふた仏ふつ寄より合あひて、

ないのうくじん

乃すなわ能よ究きう尽じんする所しよの諸しよ法ほつ実じつ相さうの法ほつ体たいなり、されば十じゆ如のぜ是ぜと云いふは十じゆ界かいなり、

じゆつかいそくじゆのぜ

十じゆ界かい即すなわち十じゆ如のぜ是ぜは即すなわち法ほ華け經きやうの異い名みやうなり云云。

一い十じゆ如のぜ是ぜの事こと 仰いに云いく此この十じゆ如のぜ是ぜは法ほ華け經きやうの眼がん目もく・一い切いつ經さいの惣そう要ようた

り、されば此この十じゆ如のぜ是ぜを開かい覺かくしめれば語ご法ぽうに於おいて迷め悟い無なく、実じつ相さうに於おいて染せん淨じやう

無なし、之これに依よつて天てん台だい大だい師しは止し觀くわんの十じゆ章しやうも此この十じゆ如のぜ是ぜはより釈しやく出しやくせり、然しか

間かん・十じゆ如のぜ是ぜに過あやままる法ほつ門もん更さらに以もつて之これ無なし、爰こを以もつて和わ尚じやう授じゆけて云いく十じゆ大だい章しやう

は是これ全ぜんく十じゆ如のぜ是ぜ・若もし大たい意いを覚さとる時とき・性じやう如のぜ是ぜの意いを以もつて下かの玄げん如のぜの図ずを

ぶんべつ

分ぶん別べつす可べし、十じゆ如のぜ是ぜは十じゆ大だい章しやうに習ならふ事ことは性じやう如のぜ是ぜは大たい意い・和に如のぜ是ぜは釈しやく名な・体たい如のぜ是ぜ

は体相・力如によぜ是えつほうは摂法・作如によぜ是へんえんは偏円・縁如によぜ是によぜは方使・因如によぜ是によぜは正觀・果報かほう
如定かほうは果報・本末究竟如ほんまつくきょうによぜ是しきは旨歸なり、此の中に起教ききょうの章は化他利物果上化
用と云うなり云云。

むじようどうだいじようびようどう

一自証無上道大乘平等法の事

仰いわに云く末法まつほうとうこん當今おいに於て大乘平等法の

を証せる事・日蓮等の類にちれんに限りたぐりされば此の經文きようもんは教主大覺世尊きようしゅだいかくせそん・

ほけきようごくり

法華經の極理を証して番番に出世しゅつせし給たまいて説き給うなり、所詮しよせん此の自証と云

じよじやうどう

うは三十成道の時を指すなり、其の故は教主釈尊きようしゆしやくそんは十九出家しゅつけ・三十成道じよじやうどう

なり、然しかる間・自証無上道等文むじようどう、所詮しよせん此の品の心は十界じゆつかいかいじよう皆成むねの旨を明せり、

しか

然れば自証と云うは十界じゆつかいを諸法実相しよほうじつそつの一仏いちぶつぞと説かれたり、地獄じごくも餓鬼がきも

ことごとむじようだいじよう

悉く無上大乗みようほうの妙法を証得したるなり、自は十界じゆつかいを指したり、恣ほしいままに

証すと云う事なり、權教こんきようは不平等ふびうどうの經なり、法華經は平等法びようどうの經なり、

いまにちれん

今日蓮等の類たくいは真實自証無上道しんじつむじようどう・大乘平等法だいいじようびようどうの行者ぎやうじやなり、所謂南無いわゆるなむ

妙法蓮華經の大乗平等の広宣流布の時なり云云。

一我始坐道場觀樹亦經行の事

仰に云く、此の文は教主 釈尊・三十

成道の時を説き給えり、觀樹の樹と云うは十二因縁の事なり、所詮十二因縁

を觀じて經行すと説き給えり、十二因縁は法界の異名なり又法華經の異名な

り、其の故は樹木は枝葉華菓あり是れ即ち生住異滅の四相なり、大覺世尊・

十二因縁の流轉を觀じ・經行し給えり、所詮末法当今も一切衆生・法華經を

謗じて流轉す可きを觀じて日本国を日蓮經行して南無妙法蓮華經と弘通する

・又又此の如くなり、法華の行者は悉く道場に坐したる人なり云云。

一今・我喜無畏の事 仰に云く此の文は權教を説き畢らせ給いて法華經

を説かせ給う時なれば喜びておそれなしと觀じ給えり、其の故は爾前の間は

一切衆生を畏れ給えり、若し法華經を説かずして空しくやあらんずらんと思

召して畏れ深くありと云う文なり、さて今は恐るべき事なく時節・來つて説

く間・畏れなしと喜び給えり、今日蓮等の類も是くの如く日蓮も三十二まで
は畏れありき、若しや此の南無妙法蓮華經を弘めずして・あらんずらんと
畏れありき、今は即ち此の恐れ無く既に末法當時・南無妙法蓮華經の七字を
日本国に弘むる間恐れなし、終には一閻浮提に広宣流布せん事一定なるべし
云云。

一我聞是法音疑網皆已除の事

仰に云く法音とは南無妙法蓮華經なり、

疑網とは最後品の無明を云うなり、此の經を持ち奉れば悉く除くと説かれた
り、此の文は舍利弗が三重の無明・一時俱尽する事を領解せり、今日日本の
一切衆生・法華經の法音を聞くと云えども未だ能く信ぜず豈疑網皆已に除か
んや、除かざれば入阿鼻獄は疑無きなり、疑の字は元品の無明の事なり
此の疑を断つを信とは云うなり、釈に云く無疑曰信と云えり身子は此の
疑無き故に華光仏と成れり、今日蓮等の類は題目の法音を信受する故に

疑網ぎもう更に無し、如我等無異によがとうむいとて釈迦しゃか同等の仏にやすやすとならん事疑無うたがいき

なり、疑網ぎもうと云うは色心しきしんの二法あに有る惑障わくしょうなり、疑は心法うたがにあり・網は色法うたが

にあり、此の經たもを持ち奉り信たてまつずれば色心しきしんの二法こつうふ共に悉く除くと云う事なり、

此の皆かいい已の已の字は身子尊者しんしそんじや・広開三顯こうかいさんけんいつ一を指して已とは云うなり、今は領解りようげ

の文段なり、身子しんし・妙法実相みょうほうじつそうの理を聴聞ちようもんして心懷大歡喜しんかい かんきせしなり、所詮しよせん

舍利弗尊者程しやりほつそんじやの智者ちしや・法華經ほけきようへ來つて華光仏となり、疑網ぎもうを断除だんじよせり、何にいか

況いわんや末法當時まつほうとうじの權人謗法ごんじんぼうぼうの人人ひとびと・此の經に値あわずんば成仏じようぶつあらんや云云。

一以本願故說三乘法ほんがん さんじようふの事 仰いに云く此の經文きようもんは身子尊者しんしそんじや・成道じようどうの国・

離垢世界せかいにて三乗さんじようふの法あくせは惡世あらには非しかず、然りと雖も身子本願いえど しんしほんがんの故ゆえに説くと云

えり、其の本願ほんがんと云うは身子菩薩しんしぼさつの行を立てしに乞眼ばらもんの婆羅門まなこに眼を決まなこじら

れて、其の時そのとき・菩薩ぼさつの行を退轉たいてんしたり、此の菩薩ぼさつの行を百劫もなこ立てけるに、六

十劫そなして今四十劫そたらざりき、此の時・乞眼まなこに眼を決まなこじられて其の時・

菩薩ぼさつの行を退して願成じょうぶつ仏・日・開三乘法の願を立てたるなり、上品淨土・
不須かいぜん開漸さんじょうなれば三乗の法を説く事は更に以てあるまじけれども以本願故の
故ゆえにて三乗さんじょうの法を説くなり、此の行は禅多羅仏の所にして立つるなり、此の
事は身子しんしが六住退とて大なる沙汰さたなり、重重ぎせいこの義勢之れ在り輒たやすく心得こころえがた難きの
事なり、・或あるは欲怖地前の意、・或あるは権者退ごんしゃ云云、所詮は六住退とは六根・六道
に菩薩の行を取られたりと云う事なり、之を以て之を思これうに末法まつぼうとうこん当今・法華經ほけきょう
を修行しぎょうせんには、必ず身子しんしが退轉たいてんの如くなるべし、所詮身子しよせんしんしが眼を取らる
るは菩薩の智慧の行を取らるるなり、今日蓮等の類い・南無妙法蓮華經の眼まなこ
を持ち奉たてまつるに謗法ほうぼうの諸人しよにんに障觀さわりせらるる・宝眼を抉り取らるるに非ずや、
所詮しよせん彼の乞眼ばらもんの婆羅門・眼を乞いしは身子しんしが菩薩の行を退轉たいてんせしめんが為ために
乞ふいて踏ふみつぶして捨てたり、全く菩薩の供養くぐやうの方を本として眼をば乞まなこわざ
りしなり、只ただ退轉たいてんせしめん為なり、身子しんしは一念菩薩の行を立てて・かかる

事に値^あえり、向^{こう}後は菩^ぼ薩^{さつ}の行^{ぎょう}をば立^たつ可^べからず二^に乗^{じょう}の行^{ぎょう}を立^たつ可^べしと云^いつて
後悔^{こうかい}せし故^{ゆえ}に成^{じょう}仏^{ぶつ}の日^{にち}・説^{せつ}三^{さん}乘^{じょう}法^{ぽう}するなり、所^{しよ}詮^{せん}乞^き眼^{がん}婆^ば羅^ら門^{もん}の責^たを堪^たえざ
るが故^{ゆえ}なり、法^ほ華^け經^{きやう}の行^{ぎやう}者^{じや}・三^{さん}類^{るい}の強^{きやう}敵^{てき}を堪^{かん}忍^{にん}して妙^{みやう}法^{ぽう}の信^{しん}心^{じん}を捨^すつ可^べか
らざる見^{しん}り信^{しん}心^{じん}を以^もて眼^{まなこ}とせり云^いふ。

一^ち有^{やう}大^{たい}長^{じやう}者^{じや}の事^じ

仰^いに云^いく此^ちの長^{じやう}者^{じや}に於^おいて天^{てん}台^{だい}大^{だい}師^し・三^{さん}の長^{じやう}者^{じや}を

釈^{しやく}し給^{たま}えり、一^せには世^せ間^{けん}の長^{じやう}者^{じや}・二^しには出^{しゅ}世^{つせ}の長^{じやう}者^{じや}・三^{かん}には觀^{かん}心^{じん}の長^{じやう}者^{じや}

是^{これ}なり、此^しの中^{ちゆう}に出^{しゅ}世^{つせ}觀^{かん}心^{じん}の長^{じやう}者^{じや}を以^もて、此^ちの品^{ひん}の長^{じやう}者^{じや}とせり、長^{じやう}者^{じや}とは

釈^{しやく}迦^か如^{にょ}來^{らい}の事^じなり、觀^{かん}心^{じん}の長^{じやう}者^{じや}の時^{とき}は一^い切^{しやく}衆^{しゆ}生^{じやう}なり、所^{しよ}詮^{せん}法^{ぽう}華^け經^{きやう}の行^{ぎやう}者^{じや}は

男^{なん}女^{にょ}共^{きよ}に長^{じやう}者^{じや}なり、文^{もん}句^くの五^ごに委^{くわ}しく釈^{しやく}せり、

末^{まつ}法^{ぽう}当^{たう}今^{こん}の長^{じやう}者^{じや}と申^{もう}すは日^{にち}蓮^{れん}等^{たう}の類^{るい}・南^な無^む妙^{みやう}法^{ぽう}蓮^{れん}華^け經^{きやう}と唱^{とな}え奉^{たてまつ}る者^{もの}なり、

されば三^{さん}の長^{じやう}者^{じや}を釈^{しやく}する時^{とき}、文^{もん}句^く五^ごに云^いく、二^にに位^い号^{ごう}を採^たするに三^{さん}と爲^なす、

一^せは世^せ間^{けん}の長^{じやう}者^{じや}・二^しは出^{しゅ}世^{つせ}の長^{じやう}者^{じや}・三^{かん}は觀^{かん}心^{じん}の長^{じやう}者^{じや}なり、世^せに十^{じふ}德^{とく}を備^{そな}へ、

一には姓貴・二には位高・三には大富・四には威猛・五には智深・六には
年耆・七には行淨・八には礼備・九には上歎・十には下歸なり云云、又云く、
出世の長者は、仏は三世の真如實際の中より生ず、功成り、道著われて、十
号極り無し、法財万徳、悉く皆具に満せり、十力雄猛にして、魔を降し外を
制す、一心の三智通達せずと云うこと無し、早く正覺を成じて、久遠なるこ
と斯くの如し、三業智に随つて、運動して矢無し、仏の威儀を具して、心大
なること海の如し、十方の種覺・共に称譽する所なり、七種の方便・而も来
つて依止す、是を出世の仏大長者と名く、三に觀心とは、觀心の智実相より
出で生じて仏家にあり、種性真正なり、三惑起らず、未だ眞を發さずと縮も
是れ如来の衣を着れば、寂滅忍と称す、三諦に一切の功徳を含蔵す、正觀の
慧・愛見を降伏す、中道双べ照して權実並に明なり、久く善根を積みて・能く
此の觀を修す、此の觀七方便の上に出でたり、此の觀・心性を觀ずるを上定

と名^なくれば、即^{すなわ}ち三業過無^{りやくえん}し、歴縁^{りやくえん}対境^{とが}するに成儀失無^よし、能^よく此^こくの如^{ごと}く

観^こず、是^これ深信解^{しんげ}の相諸^{しよぶつみなかんき}仏皆歡喜^{たんび}して持法の者を歎美^{たんび}したもつ、天竜^{てんりゅう}・四部

・^{きようけい}きようけい

恭敬^{きやうけい}供養^{くやう}す、下の文に云^いく、仏子^{ぶつしこ}是^{すなわ}の地に住^{すなわ}すれば、即^{すなわ}ち是^これ仏受用^{じゆよう}し給^{たま}い、

經行^{およ}し及び坐臥^{ざが}し給^{たま}わんと、既^すに此^{しやう}の人を称^なして仏^なと為^なす、出田^{かんじん}觀心^{ちやうじや}の長者^{ちやうじや}

と名^なけざらんやと此^{ふんみよう}の積分^{かんじん}明^{ちやうじや}に觀心^{かんじん}の長者^{ちやうじや}に十德^{じゆく}を具足^{しやく}すと釈^いせり、所^い謂^わ

引証^{いんしやう}の文^{ぶん}に、

分別^{ぶんべつ}功德品^{くどくひん}の則^{じゆ}是^{すなわ}仏受用^{じゆよう}の文^{ぶん}を引^きけり、經文^{きやうもん}には仏子^{ぶつし}住^す此地^こ

とあり、此^この字^じを是^{すなわ}の字^じにうつせり、經行若坐臥^{ざが}の若^{にやく}を及^{ぎやう}の字^じにかえたり、

又^{また}法帥品^{ほふしやうひん}の文^{ぶん}を引^きけり、所詮^{しよせん}仏子^{ぶつし}とは法華經^{ほふけきやう}の行者^{ぎやうじや}なり、此地^ことは実相^{じつそう}の大地^{だいち}

なり、經行若坐臥^{ざが}とは法華經^{ほふけきやう}の行者^{ぎやうじや}の四威儀^{いぎ}の所作^{しよさ}の振舞^{ふるまい}、悉^{ことごと}く仏^{ふるまい}の振舞^{ふるまい}な

り、我等^{われら}衆生^{しゆじやう}の振舞^{ふるまい}の当体^{とうたい}、仏^{ふるまい}の振舞^{ふるまい}なり、此^この当体^{とうたい}のふるまいこそ長者^{ちやうじや}

なれ、仍^よつて觀心^{かんじん}の長者^{ちやうじや}は我等^{われら}凡夫^{ぼんぶ}なり、然^{しか}るに末法^{まつぽう}当今^{とうこん}の法華經^{ほふけきやう}の行者^{ぎやうじや}

より外^{かんじん}に、觀心^{ちやうじや}の長者^{ちやうじや}無^いきなり、今日^{いま}蓮等^{にちん}の類^{たぐ}い南無妙法蓮華經^{なむみよほうれんげきやう}と唱^{とな}え奉^{たてまつ}る

者、無上宝緊不求自得の長者に非ずや、既称此人為仏の六字に心を留めて案ずべきなり云云。

一多有田宅の事 仰に云く田宅とは、長者の財宝なり、所詮田と云うは

命なり、宅とは身なり、文句の五に田宅をば身命と釈せり、田は米なり、米

は命をつぐ、宅は身をやどす是は家なり、身命の二を安穩にするより外に財

宝は無きなり、法門に約すれば田は定・宅は慧なり、仍つて定は田地の如し、

慧は万法の如し、我等一心の田地より諸法の万法は起れり、法華一部方寸知

るべしと釈して八年の法華も一心が三千と開きたるなり、所詮田は定なれば

妙の徳、宅は慧の徳なれば法の徳、又は本・迹同門なり、止観の二法なり、

教主釈尊本・迹両門の田宅を以つて一切衆生を助け給えり、田宅は我等

衆生の色心の二法なり、法華經に低い奉りて、南無妙法蓮華經と唱え奉る

時・煩惱即菩提・生死即涅槃と体達するなり、山扁多有田宅の長者に非ずや、

多有と云う心は心法に具足する心数なり、色法に具足する所作なり、然らば
多有田宅の文は一念三千の法門なり、其の故は一念は定なり、三千は慧なり、
既に釈に云く、田宅は別譬なり、田は能く命を養う、禪定の般若を資するに
譬う、宅は身を栖ます可し、実境の智の所託と為るに誓う云云、此の釈分明
なり、田宅は身命なり、身命は即ち南無妙法蓮華経なり、此の題目を持ち
奉る者は宝多有田宅の長者に非ずや、今末法に入つて日蓮等の類・多有田
宅の本主として如説修行の行者なり云云。

一 等一大車の事
仰に云く此の大車とは直至道場の太白牛車にして其の

疾きこと風の如し、所詮南無妙法蓮華経を等一大車と云うなり、等と云うは

諸法実相なり、一とは唯一乘法なり、大とは大乘なり、車とは一念三千

なり、仍つて釈には等の字を子等車等と釈せり、子等の等と如我等無異の等

とは同なり、車等の等は平等大慧の等なり、今日蓮等の類い・南無妙法蓮華経

とな たてまつ
と唱え奉る者は男女・貴賤共に無上宝聚・不求自得の金言を持つ者なり、
ちしゃぐしゃ
智者愚者をきらわず共に即身成仏なり云云、疏の五に云く一に等子二に等車
・子等しきを以ての故に則ち心等し、一切衆生等しく仏性有るに譬う、仏性
同じきが故に等しく是れ子なり、第二に車等とは法等しきを以ての故に仏法
に非ざることに無し、一切法皆摩訶えんなるに誓う、摩訶えん同じきが故に等
しく是れ大車なり、而して各賜と言ふは各々本習に随う、四諦六度無量の諸法
・各各旧習に於て眞實を開示す、旧習同じからず故に各と言ふ、皆摩訶えん
なり故に大車と言ふ云云。

一其車高広の事 仰に云く此の車は南無妙法蓮華經なり、即ち我等衆生
の体なり、法華一部の總体なり、高広とは仏知見なり、されば此の車を方便
品の時は諸仏智慧と説き其の智慧を甚深無量と称歎せり、歎の言には甚深
無量とほめたり、爰には其車と説いて高広とほめたり、されば文句の五に云く

其車高広の下は如来によらいの知見深遠ちけんしんえんなるに譬たとう、横よこに法界しほかいの辺際へんがいに周あまねく・堅さんに三諦さんたいの源底げんていに徹すす故ゆゑに高広たうかうと言うなりと、所詮しよせん此この如来によらいとは一切衆生いつさいしゆじやうの事なり
既すでに諸法実相しよほうじつそうの仏ぶつなるが故なり、知見ちけんとは色心しきしんの二法ふたぽうなり知は心法・見は色
法なり、色心しきしん二法ふたぽうを高広たうかうと云えり、高広たうかう即本すく・迹二門こなり此れ即すなわち南無なむ
妙法蓮華經みよほうれんげきやうなり云云。

一是朽故宅属干一人の事 仰いに云く此の文をば文句もんくの五ごに云く出火しゆの由よしを明
す文、此の宅さんとは三界さんがいの火宅くわたくなり、火と云うは煩惱ぼんのうの火なり、此の火と宅と
をば属ぞく于一人ひとりとて釈迦しやかい一仏いちぶつの御利益りやくなり、弥陀みだ・薬師やくし・大日だい等の諸仏しよぶつの救護くご
に非あらず、教主きやうしゆ釈尊しやくそん一仏いちぶつの御化導けどうなり、唯我一人ただわれひとり・能為救護のういくごとは是これなり、此
の属ぞく于一人ひとりの文を重かさねて、五卷提婆品だいはに説いいて云く觀さん三千大千世界さんぜんだいせんせかい一乃至ないし
無なし有下如芥子けし許非是菩薩捨二身命しんみようつしよ一处上為二衆生しゆじやう一故文、妙樂大師みよらくだいし・此
の属于一人ひとりの經文きやうもんを釈しやくする時・記きの五ごに云く、咸いく長者ちやうじやに歸かへりす・一一番・

いっさいみなし

一切皆然なりと判ぜり、既に咸歸長者と釈して、法界に有りである一切衆生

の受くる苦悩をば、釈尊一人の長者に帰すと釈せり、一色一香一切皆然な

りとは、法界の千草万木・飛華落葉の爲体、是れ皆無常遷滅の質と見て仏道

に歸するも、属于一人の利益なり、此の利益の本源は南無妙法蓮華經の内証

に引入れしめんが爲なり、所詮末法に入つて属于一人の利益は日蓮が身に当

りたり、日本国の一切衆生の受くる苦悩は、悉く日蓮一人が属于一人なり、

教主釈尊は唯我一人・能爲救護、日蓮は一人能爲救護に云云、文句の五に

云く、是朽故宅属于一人の下、第二に一偈有り、失火の由を明す、三界は是れ

仏の化応の処発心已来誓つて度脱せんと願う、故に属于一人と云うと、此の

釈に発心已来誓願度脱の文、豈日蓮の身に非ずや云云。

一諸鬼神等揚声 大叫の事 仰に云く諸鬼神等と云うは親類部類等を

鬼神と云うなり、我等衆生死したる時・妻子・眷属あつまりて悲歎するを

よつしやうだいきやう

揚声 大叫とは云うなり、文句の五に云く諸鬼神等の下・第四に一行半は被

焼の相を明す、・或云く親屬を鬼神と為し・哭泣を揚声と為すと。

いちじやう

じきしやうじやう

一乗 此宝棄直至道場の事

仰に云く此の經文は我等衆生の煩惱即

ぼだい しやうじそく

そのゆえ もんく

きやうもん われらしめじやう

ぼんのうそく

菩提・生死即捏槃を明せり、

其の故は文句の五に云く、

此の因易ること無き

ゆえ じきし

じきし

此の、

釈の心は

爾前の心は

煩惱を捨てて

生死を厭うて別

に菩提捏槃を求めたり、

ぼだい

法華經の意は煩惱即菩提・生死即捏槃と云えり、

直

と即とは同じ事なり、

所詮日蓮等の・

類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者の、

住処即寂光土と心得可きなり、

然れば此の実乗に乗じて、

じゆうしよそくじやうじゆふ

じゆふ

然れば此の

実乗に乗じて、

忽ちに妙覺極果

の位に至るを

直至道場とは云うなり、

直至と云う文の意は、

きわ

此の直の一字は、地獄即寂光・

餓鬼即寂光土なり、

法華經の行者

の住処、

山谷曠野なりとも、

直至道場なり、

道場とは究竟の

寂光なり、

仍つ

て乗此宝乗の上の乗は法華の行者、

ほつけ

此の品の意にては中根の四大声聞なり、

しやうもん

揚声 大叫とは云うなり、文句の五に云く諸鬼神等の下・第四に一行半は被

焼の相を明す、・或云く親屬を鬼神と為し・哭泣を揚声と為すと。

いちじやう

じきしやうじやう

一乗 此宝棄直至道場の事

仰に云く此の經文は我等衆生の煩惱即

菩提・生死即捏槃を明せり、

其の故は文句の五に云く、

此の因易ること無き

ゆえ じきし

じきし

此の、

釈の心は

爾前の心は

煩惱を捨てて

生死を厭うて別

に菩提捏槃を求めたり、

ぼだい

法華經の意は煩惱即菩提・生死即捏槃と云えり、

直

と即とは同じ事なり、

所詮日蓮等の・

類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者の、

住処即寂光土と心得可きなり、

然れば此の実乗に乗じて、

じゆうしよそくじやうじゆふ

じゆふ

然れば此の

実乗に乗じて、

忽ちに妙覺極果

の位に至るを

直至道場とは云うなり、

直至と云う文の意は、

きわ

此の直の一字は、地獄即寂光・

餓鬼即寂光土なり、

法華經の行者

の住処、

山谷曠野なりとも、

直至道場なり、

道場とは究竟の

寂光なり、

仍つ

て乗此宝乗の上の乗は法華の行者、

ほつけ

此の品の意にては中根の四大声聞なり、

しやうもん

惣そうじて一切衆生の事なり、今末法いままつぽう

に入いつては日蓮等の類たぐいなり、宝乗の乗の字はだいびやくこしや大白牛車の妙法蓮華經なり、

然しかれば上の乗は能乗・下の乗は所乗なり、宝乗は蓮華れんげなり、釈迦しゃか・多宝たほう等の

諸仏しよぶつも、此の宝乗に乘たまじ給たまえり、此これを提婆品に重ねて説く時・若在ぶつぜん仏前

蓮華化生と云云、釈迦しゃか・多宝たほうの二仏は我等われらが己心こしんなり、此の己心の法華經に

値あい奉たてまつて成仏じやうぶつするを顯あらわさんとして釈迦しゃか・多宝たほう・二仏びふつ・並座びやうざして乗此宝乗

・直至道場じきしじやうじやうを顯あらわし給たまえり、此の乗とは車なり、車は蓮華れんげなり、此の蓮華の

上の妙法みやうぽうは、我等われらが生死しやうじの二法・二仏じきしなり、直至の至こは此れより彼へいたる

の至いたるには非あらず住処じゆしよ即寂光そくじやうと云うつを至いたとは云うつなり、此の宝乗の宝は七宝しちぽう

の大車しちぽうすなわなり、七宝即ち頭上の七穴すなわ まつぽう・七穴即ち末法の要法ようぽう・南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやう

是これなり、此の題目だいもくの五字ごじ、我等衆生の為われらしゆじやう ためには、三途の河にては船となり、

紅蓮地獄くれんじごくにては寒さをのぞき、焦熱地獄しやうねつじごくにては涼風となり、死出の山にては

達華となり、渴せる時は水となり・飢えたる時は食となり・裸かなる時は衣
となり、妻となり、子となり、眷属となり、家となり、無窮の応用を施して
一切衆生を利益し給うなり、直至道場とは是なり、仍つて此の身を取りも
直さず寂光土に居るを直至道場とは云うなり、直の字心を留めて之を案ず
可し云云。

にやくにんぶしん きぼつ

一若人不信毀謗此經則新一切世間・仏種の事

仰に云く此の經文の意は

しやうぜんじやうぶつ

小善成仏を信ぜずんば一切世間の仏種を断ずと云う事なり、文句の五に

いわ

云く、今經に小善成仏を明す、此れは縁因を取つて仏種と為す、若し小善

じやうぶつ

の成仏を信ぜずんば、即と一切世間の仏種を断ずるなり文、爾前經の心は

しやうぜんじやうぶつ

小善成仏を明さざるなり、法華經の意は一・華・一香の小善も法華經に帰

だいぜん

すれば大善となる、縦い法界に充滿せる大善なりとも此の經に値わずんば

ぜんこん

善根とはならず、譬えば諸河の水・大海に入りぬれば鹹の味となる、入らざ

れば本の水なり、法界ほつかいの善根ぜんこんも、法華經ほけきようへ歸入きにゆうせざれば善根ぜんこんとはならざるなり、されば釈いわに云く、断いつさいぶつしゆ一切仏種じようみようとは淨名じようみようには煩惱ぼんのうを以て如来にょらいの種なと為す、此こ境界きようかいしよく性しよくを取るなり、此の釈しやくの心しんは淨名經じようみようきようの心しんならば我等衆生われらしゆじようの一いち日一夜なに作なす所の罪業ざいごう・八億四千の念慮ねんりよを起おこす、余經よきようの意みなは皆三途ごういんの業因ごういんと説はくなり、法華經ほけきようの意みなは、此の業因ごういん・即すなわち仏ぶつぞと明あせり、されば煩惱ぼんのうを以て如来にょらいの種子しゆしとすと云うは此の義ぎなり、此の淨名經じようみようきようの文まは、正ただしく文在爾前にぜん・義在法華ほつけの意いなり、此の境界きようかいしよく性しよくと云うは、末師釈しやくする時とき、能生煩惱のうしよくぼんのう・名境界きようかいしよく性しよくと判はぜり、我等衆生われらしゆじようの眼耳等げんにの六根ろくこんに妄執むじゆを起おこすなり、是これを境界きようかいしよく性しよくと云うなり、權教ごんきようの意いは此の念慮ねんりよを捨てよと説はけり、法華經ほけきようの心しんは、此の境界きようかいしよく性しよくの外がに、三因さんいんぶつしよく仏性ぶつしよくの種子しゆしなし、是れ則すなわち三身円満さんじんえんまんの仏果ぶつかとなるべき種性しんじようなりと説はけり、此の種性しんじようを、權教ごんきようを信しんずる人ひとは之これを知らず此の經きんを謗そしるが故ゆゑに、凡夫ぼんぷ即極すなわの義ぎをも知らず、故ゆゑに

一切世間の仏種を断ずるなり、されば六道の衆生も三因仏性を具足して、
終に三身円満の尊容を顕す可き所に、此の経を謗するが故に、六道の仏種を
も断ずるなり、されば妙樂大師云く、此の経は遍く六道の仏種を開す、若し
此の経を謗するは、義・断に当るなりと、所詮日蓮が意は一切の言は十界を
さす、此の経を謗するは十界の仏種を断ずるなり、されば、誹謗の二字を大論
に云く、口に謗るを誹と云い、心に背くを謗と云うと、仍つて色心三業に経て、
法華経を謗じ奉る人は入阿鼻獄疑い無きなり、所謂弘法・慈覚・智証・善導
・法然・達磨等の大謗法の者なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え
奉る、豈二世の諸仏の仏種を継ぐ者に非ずや云云。

一捨悪知識親近善友の事

仰に云く悪知識とは在世にては善星・瞿伽利

・提婆等是なり、善友とは迦葉・舍利弗・阿難・目連等是なり、末法当今に

於て悪智識と云うは法然・弘法・慈覚・智証等の権人謗法の人人なり、善智識

と申すは日蓮等の類の事なり、惣じて知識に於て重重之れ有り、外護の知識
・同行の知識・実相の知識是なり、所詮実相の知識とは所謂南無妙法蓮華經
是なり、知識とは形をしり、心をしるを云うなり、是れ即ち色心の二法なり、
謗法の色心を捨てて法華經の妙境・妙智の色心を顯すべきなり、悪友は謗法
の人人なり、善友は日蓮等の類いなり。

一無上宝聚不求自得の事 仰に云く、此の無上宝聚に於て一には釈尊の

因行・果徳の万行・万善の骨髓を宝聚と云うなり、二には妙法蓮華經の事

なり、不求とは中根の四大声聞は此くの如き宝聚を任運自在と得たり此実我

子我実其父の故なり、総じては一切衆生の事なり、自得と云うは自は十界

の事なり、此れは自我得仏來の自と同じ事なり、得も又同じ事なり末法に入

つては自得とは日蓮等の類いなり、自とは法華經の行者、得とは題目なり、

得の一字には師弟を含みたり、与うると得るとの義を含めり、不求とは仏法

に入るには修行・覺道の辛勞あり、釈迦如来は往来娑婆八千反の御辛勞にし

て求め給う功德なり、さて今の釈迦牟尼仏と成り給えり、法華經の行者は求

めずして此の功德を受得せり仍て自得とは説かれたり、此の自の字は一念な

り得は三千なり、又自は三千・得は一念なり、又た自は自なり得は他なり、

総じて自得の二字に法界を尽くせり、所詮此の妙法蓮華經を自より得たり、

自とは釈尊なり、釈尊は即ち我が一心なり、一心の釈迦より受得し奉る

南無妙法蓮華經なり、日蓮も生年三十二にして自得し奉る題目なり云云。

一藥草喻品の事 仰に云く藥とは是好良藥の南無妙法蓮華經なり、

妙法を頂上にいただきたる草なれば、藥に非ずと云う事なし、草は中根の

声聞なれども、惣じては一切衆生なり、譬えば土器に藥をかけたるが如し、

我等衆生・父母果縛の肉身に南無妙法蓮華經の藥をかけたり、煩惱即菩提

・生死即涅槃は是なり云云、此の分を教うるを喻とは申すなり、釈に云く、喻

とは曉訓なりと、提婆・竜女の畜生・人間も、天帝・羅漢・菩薩等も、悉く

藥草の仏に非ずと云う事なし、末法当今の法華の行者の日蓮等の類い、藥草

にして日本国の一切衆生の藥王なり云云。

一現世安穩・後生善処の事 仰に云く所詮此の妙法蓮華經を聴聞し奉る

を現世安穩とも後生善処とも云えり、既に上に聞是法已と説けり聞は名字即

の凡夫なり妙法を聞き奉る所にて即身成仏と聞くなり、若有能持即持仏身

とは是なり、聞く故に持ち奉るの故に三類の強敵来る来るを以て現世安穩の

記文顯れたり、法華の行者なる事疑無きなり、法華の行者はかかる大難

に値うべしと見えたり、大難に値うを以て後生善処の成仏は決定せり是れ

豈現世にして安穩なるに非ずや、後生善処は提婆品に分明に説けり、所詮

現世安穩とは法華經を信じ奉れば三途八難の苦をはなれ善惡上下の人までも

皆教主 釈尊・同等の仏果を得て自身本覺の如来なりと顯す、自身の当体・

みょうほうれんげきょう
妙法蓮華經の藥草なれば現世安穩なり、げんせあんのん 爰を開くを後生善処と云うなり、ここを ちしやうぜんしよ
みょうほうれんげきょう
妙法蓮華經と云うは妙法の藥草なり、みょうほう 所詮現世安穩は色法・後生善処は心しよせんげんせあんのん ちしやうぜんしよ
法なり、じゅうかい しきしん 十界の色心・妙法と開覺するを現世安穩・後生善処とは云うなり、げんせあんのん ちしやうぜんしよ
しよせんほけきょう
所詮法華經を弘むるを以て現世安穩・後生善処と申すなり云云。げんせあんのん ちしやうぜんしよ
かいしつ
一皆悉到於一切智地の事 いっさいちち 仰に云く一切智地と云うは法華經なり、ほけきょう 譬えは
さんぜんだいせんせかい
三千大千世界の土地・草木・人畜等・皆大地に備りたるが如くなり、とち そつもく じんちく みなだいち そなわ ごと はちまんほうぞう
・十二部經・悉く法華に歸入せしむるなり、じふにぶ ことごとほつ きにゅう 皆悉の二字をば善人も悪人も迷
も悟も一切衆生の惡業も善業も其の外藥師・大日・弥陀並びに地藏・觀音・いっさいしゆじょう あくごつ ぜんごつ そ やくし だいにち みだなら じぞう かのん
横に十方・豎に三世有りとある諸仏の具德・諸菩薩の行德・惣じて十界の
しゆじょう ぜんあく
衆生の善惡・業作等を皆悉と説けり、かいしつ 是を法華經に歸入せしむるを一切智地
ほけきょう もつ
の法華經と申すなり、もんく されば文句の七に云く皆悉到於一切智地とは、いわ かいしつ いっさいちち 地とは
じつそう
實相なり、くきょう 究竟して二に非ず故に一と名くるなり、あら ゆえ なず 其の性広博なり、そ ちうはく 故に名

けて切と為す、寂にして常照なり、故に名けて智と為す、無住の本より一切の法を立す、故に名けて地と為す、此れ円教の実説なり、凡そ所説有るは皆衆生をして此の智地に到らしむ云云、此の釈は一切智地の四字を委しく判ぜり、一をば究竟と云い切をば広博と釈し智をば寂而常照と云い地をば無住之本と判ぜり、然るに凡有所説は約教を指し・皆令衆生は機縁を納るるなり、十界の衆生を指して切と云い凡有所説を指して、究竟非二故名一也と云えり、一とは三千大千世界・十方世界を云うなり、其の上に人畜等あるは地なり、記の七に云く、切を衆に訓ずと文、仍て一切の二字に法界を尽せりなり、諸法は切なり真相は一なり、所詮・法界真相の妙体・照而常寂の理にして十界三千・一法性に非ずと云う事なし是を一と説くなり、さて三千の諸法の己己に本分なれば切の義なり、然らば一は妙・切は法なり、妙法の二字・一切の二字なり、無住之本は妙の徳・立一切法は法の徳なり、一切智地

とは南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきなり一切智地いっさいちち・即一念三千そくいちねんさんぜんなり、今末法まっぼうに入いつて一切いっさい智地ちちを弘通くわうちうするは日蓮等にちれんの類たぐい是これなり、然しかるに一いちとは一念いちねんなり切きとは三千さんぜんなり、一心いっしんより松まつよ桜おうよと起おこるは切きなり、是これは心法しんぽうに約やくする義ぎなり、色法しきぽうにては手足等しそとうは切きなり、一身いつしんなるは一切いっさいなり、所詮しよせん色心しきしんの二法にぽう・一切智地いっさいちちにして南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきなり云云。

一此の一切智地の四字

に法華經一部八卷文・句句くくを収おさめたり、此の

一切智地いっさいちちとは三諦さんたい・一諦いつたい・非三非一ひさんひいつなり、三智さんちに約やくすれば空智くうちなり、さては三諦さんたいとは云いい難がたし、然しかりと雖いえども三諦さんたい・一諦いつたいの中うちの空智くうちなり、されば三諦さんたいに於おいて三三九箇さんさんくわの三諦さんたいあり、先あきらず空諦くうたいにて三諦さんたいを云いう時は空諦くうたいと呼出くわいだすが仮諦けたい・空諦くうたいなるは空諦くうたいなり・不二ふにするは

中道ちゆうどうなり、三諦さんたい同どうじく此この如ごとく心得こころえ可べきなり、所詮しよせん此この一切智地いっさいちちをば九識くしち

法性ほっしやうと心得こころえ可べきなり、九識くしち法性ほっしやうをば、迷悟めいこ不二ふに・凡聖ぼんせい一如いごとなれば空くうと云いう

なり、無分別智光を空と云うなり、此の九識法性とは、いかなる所の法界を

指すや、法界とは十界なり、十界即諸法なり、此の語法の当体・本有の

妙法蓮華經なり、此の重に迷う衆生の為に、一仏現じて分別説三するは、

九識本法の都を立出ずるなり、さて終に本の九識に引入する、夫れを法華經

とは云うなり、一切智地とは是れなり、一切智地は我等衆生の心法なり心法

すなわ妙法なり一切智地とは是なり云云。

一根茎枝葉の事 仰に云く此の文をば釈には信戒定慧と云云、此の釈の

心は草木は此の根茎枝葉を以て増長と云うなり、仏法修行するも又斯くの

如し、所詮我等衆生・法華經を信じ奉るは根をつけたるが如し、法華經の文

の如く是名持戒の戒体を本として、正直捨方便・但説無上道の如くなるは戒

なり、法華經の文相にまかせて、法華三昧を修するは定なり、題目を唱え奉る

は慧なり、所謂法界悉く生住異滅するは信・己己本分は戒・三世不改なるは

定なり、あらわ 各各の徳義を顕したるは慧なり、こ 是れ即ち法界平等の根茎杖葉なり、こ 是れ即ち真如実相の振舞なり、すなわ しんにょじつそう ふるまい 所謂戒定慧の三学・妙法蓮華經なり、い わゆるかいじょうえ 此れを信ずるを根と云うなり、い わ 釈に云く三学俱に伝うるを名けて妙法と曰うと云。

一 根茎杖葉の事 こんきようしよう 仰に云く此れは我等が一身なり、い わ 根とは心法なり茎とは

我等が頭より足に至るまでなり、い た 枝とは手足なり、わ れ ら 葉とは毛なり、こ 此の四を

根茎杖葉と説けり、こ 法界三千此の四を具足せずと云う事なし、ほ っ か い さん ぜん 是れ即ち信

戒定慧の体にして実相一理の南無妙法蓮華經の体なり、い じ ょう え 法華不信の人は根茎

杖葉ありて増長あるべからず枯塙の衆生なるべし云云。ぞ う ち ち ょう

一 枯塙衆生の事 こ こ う し ゅ じ ょう 仰に云く、い わ 法華經を持ち奉る者は、ほ け き ょう た も た て ま つ 枯塙の衆生に非ざる

なり、す で 既に法華經の種子を受持し奉るが故なり、ほ け き ょう し ゅ し 謗法不信の人は下種無き

故に枯塙の衆生なり、ゆ え こ こ う し ゅ じ ょう されば、み づ け ら け だ い し 妙樂大師の云く、い わ 余教を以て種と為さず文。よ き ょう な

一等雨法雨の事

仰に云く等とは平等の事なり、善人・悪人、二乗・

闡提、正早・邪見等の者にも、妙法の雨を惜まず平等にふらすと云う事な

り、されば法の雨を雨すと云う時は、大覺世尊ふらしてに成り給えり、さて、

の雨ふりてとよむ時は、本より実相平等の法雨は、常住本有の雨なれば、

今始めてふるべきに非ず、されば、諸法実相を、譬喩品の時は風月に譬えた

り、妙樂大師は何ぞ隠れ何ぞ顯れんと釈せり、実相の法雨は三世常恒にし

て、隱顯更に無きなり、所詮、等の字はひとしくとよむ時は、釈迦如来の平等

の慈悲なり、さて、ひとしきとよむ時は、平等大慧の妙法蓮華經なり、ひと

しく法の雨をふらすとは、能弘につけたり、ひとしき法の雨ふり、にりと読

む時は、所弘の法なり、所詮法と云うは、十界の語法なり、雨とは十界の言語

・音声の振舞なり、ふるとは自在にして地獄は洞燃猛火、乃至仏界の上の

所作音声を、等雨法雨とは説けり、此の等雨法雨は法体の南無妙法蓮華經

なり、今末法まつぽうに入つて、日蓮等の類たぐいの弘通くつうする題目だいもくは、等雨法雨ほううの法体ほつたいな

り、此この法雨ほうう・地獄じごくの衆生しゅじやう・餓鬼がき・畜生ちくしやう等らに至るいたまで同時どうじにふりたる法雨ほうう

なり、日本国にほんこくの一切衆生いつさいしゅじやうの爲ために付属ふぞくし給たまう法雨ほううは題目だいもくの五字ごじなり、所謂いわゆる日蓮

こんりゅう 日本こほんぞんの一切衆生なむみやうほうれんげきやうの爲ために付属ふぞくし給たまう法雨ほううは題目だいもくの五字ごじなり、所謂いわゆる日蓮

建立こんりゅうの御本尊ごほんぞん・南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやう是なり云云、方便品ほうべんには本末究竟等ほんまつくきやうと云え

り、譬喩品ひゆほんには等一大事いちだいじと云えり、此の等の字かを重ねて説あかれたり、或は

如我等無異にやがとうむいと云えり、此の等の字ほうとうほんは宝塔品にやぜによぜの如是如是しよせんと同じなり、所詮等と

は南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうなり、法雨ほううをふらすとは今身こんじんより仏身ぶつしんに至るまで打いたつや否

やと云じゆじう受持じゆじの言語ごんごなり云云。

一等雨法雨ほううの事 仰いに云わく此の時みやうほうじつそうは妙法実相ほううの法雨じゆつかいさんぜんは十界三千・下は

地獄じごく・上は非想非非想よこしまじゆつぽうまで横さんぜに十方わた・豎みやうほうに三世くどくに亘わたつて妙法の功德みやうほうをふる

を等とは云いうなり、さてふるとは一切衆生いつさいしゅじやうの色心しきしん・妙法蓮華經みやうほうれんげきやうと三世常住さんぜじやうじゆう

ふるなり云云、一義いに云わく、此の妙法みやうほうの雨みは九識本法ほつたいの法体ほつたいなり、然しかるに

一仏現前して説き出す所の妙法なれば、法の雨をふらすと云うなり、其の故

は、ふらすと云うは・上より下へふるを云うなり、「のつて従果向因の義なり、

仏に約すれば、第十の仏見より九界へふらす、法体にては・ふる処も・ふら

す処も、真如の一理なり識分にては八識

へふり下りたるなり、然らば今日蓮等の類い南無妙法蓮華經を日本国の一切

衆生の頂上にふらすを法の雨をふらすと云うなり云云。

一如従飢国来忽遇大王膳の事 仰に云く此の文は中根の四大声聞・法華に來

れる事、譬えばうえたる国より來りて大王のそなえに値うが如くの歡喜なり

と云えり、然らば此の文の如くならば法華已前の人は餓鬼界の衆生なり、

既に飢国來と説けり、大王膳とは醍醐味なり、中根の声聞・法華に來つて

一乘醍醐の法味を得て忽に法王の位に備りたり、忽の字は爾前の迂廻道の機

に対して忽と云うなり、速疾頓成の義を忽と云うなり、仮令外用

の八相を唱^{とな}うる事は所化^{しよけ}をして仏道に進めんが為なり、所詮^{しよせん}末法に入つては
ほうぼう ひとびと 謗法の人人は餓鬼界の衆生なり、此の經に値^あい奉^{たてまつ}り・南無妙法蓮華經に
あく たてまつ 値^あい奉^{たてまつ}る事は併^{しかしながだいおう}ら大王膳たり、忽遇^{こつぐ}の遇^{かんよう}の字肝要たり、釈^{いわ}に云く、成仏^{じようぶつ}の難^{がた}き
には非^{あら}ず、此の經に値^あうをかたしとすと云えり、不輕品に云く復遇常不輕と
云云、嚴王品に云く生値^{いわ}仏法云云、大王の膳に値^あいたり、最も以て南無
みようほうれんげきよう 妙法蓮華經を信受し奉^{たてまつ}る可きなり、此の經文の如くならば法華より外^{ほか}の
いっさいしじゅう 一切衆生はいかに高貴の人なりとも餓鬼道の衆生なり、十羅刹女は餓鬼界^{がき}
らせつ 羅刹なれども法華經を受持し奉^{たてまつ}る故に餓鬼に即^{そく}する一念三千なり、法華へ
来らずんば何^{いずれ}れも餓鬼飢餓の苦みなるべし、所詮^{しよせん}必ず中根の聲聞領解の言に
わがみ 我身を餓鬼に類^{たぐい}する事は餓鬼は法界に食ありと云えども食する事を得ざるな
り、諸法実相の一味の醍醐の妙法あれども終に開覺に能えざる間・四十余年
しよほうじつそう いちみ 食にうえたり云云、一義に云く序品方便より諸法実相の甘露顯れて南無
いわ 食にうえたり云云、一義に云く序品方便より諸法実相の甘露顯れて南無

みょうほうれんげきょう

こうりやく

妙法蓮華經あれども広略二重の譬説段まで悟らざるは餓鬼がきの満満とある食

事をくらわざるが如しごと、所詮しよせん日本国にほんこくの一切衆生いっさいしゆじようは餓鬼界がきの衆生しゆじようなり、大王だいおう

いわるるなむみょうほうれんげきょうこれ

膳とは所謂南無妙法蓮華經是なり、遇の字には人法を納めたり、のつて未に

によけしゆ

如飢須教食と云えり、うえたるとも大王のをしえを待ちて醍醐だいごを食するが如しごと

と云えり、今南無妙法蓮華經有れどもなむみょうほうれんげきょうあれ・今身より仏身に至るまでの受持じゆじをう

じようぶつこあ

けずんば成仏は之れ有るべからず、教とは爾前無得道にぜんとくどう・法華成仏の事なり、

ほけきよう

此の教をうけずんば法華經を讀誦すとも大王の位に登る事だいおう・之れ有る可べから

だいごだいもく

ず醍醐は題目の五字なり云云。

だいづうちしやうぶつ

一大通智勝仏十劫坐道場仏法不現前不得成仏道の事どうじやうぶつぽう 仰に云く此經文きやうもんは

いっさいしゆじよう

一切衆生の本法流轉を説かれたり、されば釈にも出世しゆっせい以前と判ぜり、此は大通だいづう

しゆつせ

仏出世し給えども十小劫の間たま・一經も説給わずと云う經文きやうもんなり、仍て仏法ぶつぽう

げんぜん

も現前せざる故に不得成仏と云えり、されども釈を見るに出世しゆっせい以前と云う時

は、此の經文きようもんは何なる事いかぞ此は本法の重を説かれたり、一仏出世いちぶつしゅつせすれば流轉るてん門となる、一仏も出世いちぶつしゅつせ無き時は、本法不思議ふしぎの体なり、迷悟めいごもなく、生仏せいぶつもなく、成仏じやうぶつもなく、不成仏じやうぶつもなきなり、仍よつて不得ふとく成仏道じやうぶつだうと云えり、抑そもそもも本法と申もうすは水があつくなり、火がつめたくならば流轉門るてんなるべし、水はいつもつめたく、火はいつもあつく、地獄じごくは何も火焰ほのお・餓鬼がきはいつも飢渴けかち・其の外そ・万法ここ己己の当位・当位の儘ままなるを本法の体と云うなり、此の重を説とき顯あらわしたる經文きようもんなり、此の本法の重は法華經ほけきやうなり、權教ごんきやうは流轉るてんなり、此の流轉るてんの衆生しゆじやうを本法の重に引入いんにゆうせられんとての仏の出世しゅつせなり、其その本法と云うは此の經なり、所詮しよせん此の經文本法とは大通智勝だいつうちしやうぶつと云うは我等衆生の色心しきしんなり、十劫じゆつかいと云うは十界じゆつかいなり、坐道場じやうだうじやうと云うは十界の住所そのま其の儘道場じゆじやうじやうなり、道場じやうだうじやうなれば寂光土じやくかうどなり、法界寂光土ほつかいじやくかうどにして、十界の衆生じゆじやう悉く諸法実相しよじやうじつじやうの仏なれば一仏現いちぶつげんずべきに非あらず、迷まよの衆生しゆじやう無ければ説く可べき法も無し、仍よつ

て仏法ぶつぽう不現前げんぜんと云えり、不得ふとく成仏じやうぶつ道とは始覺しかく本覺ほんかくの成仏じやうぶつと云う事も無し、

本法ふしぎ不思議の体にして万法ほんぬ本有ほんぬなり、之れに依よつて釈しやくには出世しゆつせい以前いぜんと判ぜり、

然しからば、其その本法の体とは、所詮しよせん南無妙法蓮華經なむみよほうれんげきやうなり、此の本法の内証ないしやうに

いんにゆう

引入いんにゆうせんが為ために、住は四十余年誘引よんじゆうよねんゆういんし、終に第五時の本法を説き給えり、今

まっぼう

末法に入つて上行じやうぎやうしよでん所伝の本法の南無妙法蓮華經を弘め奉る、日蓮・世間に

しゆつせ

出世すと云えども、三十二歳までは、此の題目を唱え出さざるは、仏法不現前ぶつぽう げんぜん

なり、此の妙法蓮華經を弘めて、終には本法の内証ないしやうに引入するなり日蓮・

あにだいつうちしやうぶつ

あら

にほんこく

いつさいしゆじやう

どうじやう

じゆつかいそのまま

豈大通智勝仏に非ずや、日本国の一切衆生こそ十劫坐道場とて十界其の儘

・本法の南無妙法蓮華經へ引入するなり、所詮信心を出だして南無

みよほうれんげきやう

とな

たてまつべ

妙法蓮華經と唱え奉る可き者なり云云。

ひんじん

一貧人見此珠其心大歡喜の事 仰に云く此珠とは一乘無価の宝珠なり、

ひんじん

げこん

しやうもん

そつ

いつさいしゆじやう

しよせんまっぼう

貧人とは下根の声聞なり、惣じて一切衆生なり、所詮末法に入つて此珠と

は南無妙法蓮華經なり、貧人とは日本国^{にほんこく}の一切衆生^{いっさいしゅじょう}なり、此の題目^{だいもく}を唱^{とな}え奉^{たてまつ}る者は心大歡喜^{かんき}せり、されば見宝塔^{けんほうとう}と云^いつ見^みと此珠^{たま}とは同じ事^{こと}なり所詮^{しよせん}此珠^{たま}とは我等衆生^{われらしゅじょう}の一心^{いっしん}なり、一念三千^{いちねんさんぜん}なり此の經に値^あい奉^{たてまつ}る時^{とき}、一念三千^{いちねんさんぜん}と開^{ひら}くを珠^{たま}を見るとは云^いふなり、此の珠^{たま}は廣^{ひろ}く一切衆生^{いっさいしゅじょう}の心法^{しんぽう}なり此の珠^{たま}は体中^{たいちゆう}にある財用^{さいよう}なり、一心^{いっしん}に三千具足^{さんぜんぐそく}の財^{さい}を具足^{ぐそく}せり、此の珠^{たま}を方便品^{ほうべん}にして諸法実相^{しよほうじつそう}と説^とき、譬喩品^{ひゆほん}にては大白牛車^{だいびやくこしや}・三草二木^{ひやくゆじゆん}・五百由旬^{いやくゆじゆん}の宝塔^{ほうとう}、共に皆^{みな}一珠^{みようほうれんげきよう}の妙法蓮華經^{ほうしゆ}の宝珠^{ほうしゆ}なり、此の經文^{きやうもん}色心^{しきしん}の実相^{じつそう}歡喜^{かんき}を説^とけり・見此珠^{たま}の^の見^みは色法^{しきぽう}なり、其心大^{おほ}と云^いふは心法^{しんぽう}なり、色心^{しきしん}共に歡喜^{かんき}なれば大歡喜^{かんき}と云^いふなり、所詮^{しよせん}此珠^{たま}と云^いふは我等衆生^{しゅじょう}の心法^{しんぽう}なり、仍^よつて一念三千^{いちねんさんぜん}の宝珠^{ほうしゆ}なり、所謂^{いわゆる}妙法蓮華經^{みようほうれんげきよう}なり、今末代^{まただい}に入^いつて此の珠^{たま}を顕^{あらわ}す事は日蓮等^{にちれん}の類^{たぐ}いなり、所謂^{いわゆる}未曾有^{みそう}の大曼荼羅^{まんだら}こそ正^{ただ}しく一念三千^{いちねんさんぜん}の宝珠^{ほうしゆ}なれ、見^みの字^じは日本国^{にほんこく}の一切衆生^{いっさいしゅじょう}、廣^{ひろ}くは一閻浮提^{えんぶだい}の衆生^{しゅじょう}なり、然^{しか}りと雖^{いえど}も其心大歡喜^{かんき}と云^いふ時は、

にちれん

日蓮が弟子・檀那等の信者をさすなり、所詮煩惱即菩提・生死即涅槃と体達

する、其心大歡喜なり、されば、我等衆生・五百塵点の下種の珠を失いて、

ろくどう

りんね

ひんじん

さんぜんじんでん

げしゆ

たま

うしな

しよ

五道・六道に輪廻し・貧人となる、近くは三千塵点の下種を捨てて備輪諸道

せり、之れに依つて貧人と成る、今・此の珠を釈尊に値い奉りて見付け得て

ごと

ひんじん

たま

しゃくそん

あ

たてまつ

みようほうれんげきよう

本の如く取り得たり、此の故に心大歡喜せり、末法当今に於いて妙法蓮華經

ほうしゆ

じゆじ

たてまつ

こしん

じゆつかいごく

ひやつかいせんによ

いちねんさんぜん

ほうしゆ

の宝珠を受持し奉りて、己心を見るに、十界互具・百界千如・一念三千の宝珠

ふんみよう

ぐそく

こ

しかしながまつぼう

ようぼう

だいもく

を分明に具足せり、是れ併ら末法の要法たる題目なり云云。

一如甘露見灌の事

かんろけんかん

仰に云く甘露とは

いわ

かんろ

てんじよう

かんろ

なり、されば妙樂

大師云く実相常住は甘露の如し是れ不死の藥云云、此の釈の心は諸法実相

ほつたい

じつそつじようじゆう

かんろ

ごと

こ

は甘露の如し是れ不死の藥と云えり、

しやく

しよほうじつそつ

の法体をば甘露に譬えたり、甘露は不死の藥と云えり、所詮妙とは不死の藥

なり、此の心は不死とは法界を指すなり、其の故は森羅三千の万法を不思議

たん

しやうじゆういめつ

ほつかい

そのゆえ

しんらさんぜん

ふしぎ

と歎じたり、

生住異滅の当位当位・三世常恒なるを不死と云う、本法の徳

として水はくだりつめたく火はのぼりあつし、此れを妙と云う、此れ即ち
不思議なり、此の重を不死とは云うなり、甘露と妙とは同じ事なり、然らば法界
の儘に闇いて妙法なりと説くを本法とも甘露とも云えり、火は水にきゆる本
法にして不死なり、十界己己の当位当位の振舞・常住本有なるを甘露とも
妙法とも不思議とも本法とも止観とも云えり、所詮末法に入つて甘露とは
南無妙法蓮華経なり、見灌とは受持の一行なり云云。
一若有惡人以不善心等の事 仰に云く惡人とは在世にては提婆瞿伽利等
なり、不善心とは惡心を以て仏を罵詈し奉る事を説くなり、滅後には惡人と
は弘法・慈覺・智証・善導・法然等是なり、不善心とは謗言なり此の謗言を
書寫したる十住心等 選択集等の謗法の書どもなり、さて末法に入て善人
とは日蓮等の類いなり善心とは法華弘通の信心なり所謂南無妙法蓮華経是な
り云云。

一如にょぜ是こ是この事

仰いわに云いく釈いわに云いく法相ほつそうの是ことに如こんじようし根性こんじようの是ことに如こんじようするな

り文ほんそう、法相ほつそうの是ほんそうに如しよほうじつそうすとは諸法実相しよほうじつそうを重かさねて如にょぜ是にょぜと説こんじようかれたり、根性こんじようの是ことに

如しよかいすとは、九法界ほつかいを説しかかれたり、然しかれば機法き共に釈迦しゃ如来かにらいの所説しよせつの如ことく眞実しんじつ

なりと証しやうみやう明たまし給たまえり、始にょぜの如にょぜ是にょぜは教かいえ一開会かいえなり次にょぜの如にょぜ是にょぜは人かいえ・一開会かいえなり、

権教こんきやうの意しよほうは諸法しよほうを妄法しやくべつときらいし隔きやくべつ別不融べつふじうの教こんじようなり、根性こんじように於おいては性欲しやうよく

不同ふどうなれば種種しじじゆに説法せつぽうし給たまえり、仍よつて人も成仏じやうぶつせず、今の經しよほうじつそうの心しよほうじつそうは諸法実相しよほうじつそう

の御經じゆつかいびんぐたうなれば十界平等じふかいびんどうに授さずくる所の妙法みやうほうなり、根性こんじようは不同ふどうなれども同じ

く如にょぜしやう是にょぜしやう性の一性しよせんなり、所詮しよせん今末法まつぽうに入まつぽうつての如法相ほつそう是ほつそうは塔中相承たつちゆうそうじやうの本尊ほんぞんな

り如根性こんじよう是也しよせんと云じゆつかいおんねんうは十界宛然じゆつかいおんねんの尊像ほつそうなり法相ほつそうは南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうなり、

根性こんじようは日本国にほんこくの一切衆生いっさいしゆじやう広えんぶだいくは一閻浮提しゆじやうの衆生しゆじやうなり云云。

一是眞仏子ぜしんぶつし住淳善地まづほんとうこんの事 仰いわに云いく末法まつぽう当今あひに於しゃて釈迦しゃ如来かにらいの眞実しんじつの御

子と云ほけきやううは法華經ぎやうじやの行者そのゆえなり、其かみの故らいせは上の文らいせに能らいせ於らいせ來世讀持此經らいせと説らいせけり

来世とは末法なり、読むと云うは法華經の如説修行の行者なり、弘法・慈覺
・智証・善導・法然等讀みて云く第三の劣・戲論の法・捨閉閣拋・理同事勝
等と読むは謗法にして三仏の御舌を切るに非ずや何に況や持たんをや、伝教
大師云く法華經を讀むると雖も還つて法華の心を死すとは是なり、今日蓮等
の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る人は、読持此經の人なり、豈是真仏子に非ず
や淳善地は寂光土に非ずや、是真仏子の子の字は十界の衆生なり、所詮此
の子の字は法華經の行者に限る、悉是吾子の子は孝不孝を分別せざる子なり、
我等皆似仏子の子は中根の声聞仏子に似たりと説かれたり、為治狂子故の子
は、久遠の下種を忘れたれば物にくるう子なり、仍つて釈尊の御子にも物に
くるう子もあり、不孝の子もあり、孝養の子もあり、所謂法華經の行者眞実
の釈尊の御子なりと、釈迦・多宝分身三千三百万億那由他の世界に充滿せ
る諸仏の御前にして孝不孝の子を定めをき給えり、父の業をつぐを以て子と

せり、三世の諸仏の業とは南無妙法蓮華經是なり、法師品に行如來事と説けり云云、法華經は母なり、釈尊は父なり我等衆生は子なり、無量義經に云く諸仏の國王と是の經の夫人と和合して共に是の菩薩の子を生み給う文、菩薩とは法華經の行者なり、法師品に云く在家・出家行菩薩道云云。

一非口所宣非心所測の事 仰に云く非口所宣は色法・非心所測は心法なり、色心の二法を以て大海にして教化したる衆生を宣測するに非ずと云えり、末に至つては広導諸群生と説かれたり云云。

一不染世間法如蓮華在水從地而涌出の事 仰に云く、世間法とは全く貪欲

等に染せられず、譬えば蓮華の水の中より生ずれども淤泥にそまざるが如し、此の蓮華と云うは地涌の菩薩に譬えたり、地とは法性の大地なり所詮法華經の行者は蓮華の泥水に染まざるが如し、但だ唯一大事の南無妙法蓮華經を弘通するを本とせり、世間の法とは國王・大臣より所領を給わり官位を給う

とも夫には染せられず、ほうほう 謗法の供養を受けざるを以て不染世間法とは云うな

り、しよせんれんげ 所詮蓮華は水をはなれて生長せず水とは南無妙法蓮華經是なり、ほんげ 本化の

菩薩は蓮華の如く過去久遠より已来本法所持の菩薩なり蓮華在水とは是なり、これ

しよせん 所詮此の水とは我等行者の信心なり、れんげ 蓮華は本因・本果の妙法なり信心の

水に妙法蓮華は生長せり、地とは我等衆生の心地なり涌出とは広宣流布の時

みようほうれんげ 一閻浮提の一切衆生法華經の行者となるべきを涌出とは云うなり云云。

えんぶだい 一願仏為未来演説令開解の事 仰に云く此の文は弥勒菩薩等末法当今の

ため 為に我從久遠來教化是等衆の言を演説令開解せしめ給えと請じ奉る經文な

り、しよう 此の請文に於ておひ 壽量品は顯れたり五百塵点の久遠の法門是なり、かいげ 開解

とは教主きようしゆしやくそん 釈尊の御内証に此の分を・をさえ給うを願くは開かしめ給え同じ

く一会の大衆の疑をたいしゆう 解かしめ給えと請するなり、かいげ 此の開解の語を

じゆりようほん 壽量品にして汝等当信解と誠め給えり、しんげ 若し開解し給わずんば大衆皆

なんじ 壽量品にして汝等当信解と誠め給えり、いまし 若し開解し給わずんば大衆皆

ほけきょう おい ぎわく
法華經に於て疑惑を生ず可しと見給えり、
疑を生ぜば三惡道に墮つべしと

すで みろくばさつもつ
既に弥勒菩薩申されたり、此の時

じゅりようほんあらわ
壽量品顯れずんば即当墮惡道すべきなり

じゅりようほん ほつもん
壽量品の法門大切なるは是なり、

これ
さて此の開解の開に於て二あり、

かいげ おい
迹門の

じょうほう じつそう
意は諸法を實相の一理と会したり、

え
さては諸法を實相と開きて見れば十界

ことごとみようほうじつそう
悉く妙法實相の一理なりと開くを開仏智見と説けり、

ほんもん
さて本門の意は十界

ほんぬ
本有と開いて始覺のきづなを解きたり、

しかく
此の重を開解と申されたり仍つて演説

えんぜつ
の二字は釈尊開解の両字は大衆なり、

えんぜつ
此の演説とは壽量品の久遠の事なり、

たいしゅう
終に釈尊壽量品を説かせ給いて一切大衆の疑惑を破り給えり云云。

たいしゅう
一譬如良医智慧聰達の事

ひによりようい ちえ そうだつ
仰に云く良医とは教主 釈尊智慧とは八万

きようしゅ しゃくそん ちえ
法蔵十二部經なり聰達とは三世了達なり

そうだつ さんぜ
藥とは妙法の良藥なり、

みようほう りようやく
さて

じゅりようほん
壽量品の意は十界本有と談ぜり

じゅつかいほんぬ
されば此の藥師とは一切衆生の事なり、

いっさいしゅじょう
智慧とは万法己己の自受用報身の

ふるまい
振舞なり聰達とは自在自在に振舞うを聰達

とは云うなり、所詮しよせん末法まつぽう当今の為の寿量品じゆりやうぽんなれば法華經ほけきやうの行者ぎやうじやの上の事なり、此の智慧ちえとは南無妙法蓮華經なむみよほうれんげきやうなり、聰達そうだつとは本有無作三身ほんぬむささんじんなりと云う事なり、元品の無明の大良藥りやうやくは南無妙法蓮華經なむみよほうれんげきやうなり、智ちとは一切衆生の力いっさいしゆじやうなり、慧えとは一切衆生の言語音声いっさいしゆじやうなり、故に偈頌けいじゆに云く我智力にやぜ如是慧光照無量むりやうと云えり云云。

一 一念信解いちねんしんげの事 仰いに云く此の經文きやうもんは一念三千いちねんさんぜんの宝珠ほうしゆを納めたる函おさなり

此これは現在げんざいの四信いちねんしんげの初はつしの一念信解めつこなり、さて滅後めつこの五品ごぽんの初はつしの十心具足しんぐ初隨喜しよずいき

品いちねんさんぜんも一念三千いちねんさんぜんの宝を積ほけきやうみたる函こつずいなり、法華經まつぽうの骨髓お髓ほけきやう・末法まいぽうに於おいて法華經ほけきやうの

行者ぎやうじやの修行しゆぎやうの相貌そつみやう分ぶん明みなり、所詮しよせん信しんと隨喜ずいきとは心同しんじなり隨喜ずいきするは信心しんじん

なり信心しんじんするは隨喜ずいきなり一念三千いちねんさんぜんの法門ほうもんは信心しんじん隨喜ずいきの函はこに納おさりたり、又此またの

函いとは所謂い南無妙法蓮華經なむみよほうれんげきやう是これなり又此またの函われらは我等いっしんが一心いっしんなり此またの一心いっしんは万法いっしん

の總體だいていなり總體だいていは題目ごじの五字ごじなり、一念三千いちねんさんぜんと云ことうが如ごとく一心三千いっしんさんぜんもあり釈

に云くいわ介爾けにも心有れば即ち三千を具すと、又宝函ほうかんとは我等われらが色心しきしんの二法なり。
本・迹両門・生死しやうじの二法・止觀しかんの二法なり所詮信心しよせんしんじんの函はこに入れたる南無妙法
蓮華經の函なり云云。

一見仏聞法信受教誨もんぼうしんじゆの事 仰に云く此の經文きやうもん いわは一念隨喜いちねんずいきの人は五十の功德くどく

を備そなうべし、然る間見仏聞法の功德くどくを具足ぐそくせり、此の五十展転こじゆてんでんの五十人の功德くどく

を隨喜功德品ずいきくどくには説かれたり、仍よつて世世・生生の間見仏聞法の功德くどくを備え

たり、所詮末法しよせんまつぼうに入つては仏を見るとは壽量品じゆりやうぼんの釈尊しゃくそん・法を聞くとなむは南無

妙法蓮華經みやうほうれんげきやうなり、教誨にちれんとは日蓮等の類たぐい教化きやうけする所の諸宗しよしゆつ無得道の教誡とくどうな

り、信受しんじゆするは法華經ほけきやうの行者ぎやうじやなり、所詮しよせん・壽量開顯じゆりやうの眼まなこの顯あらわれては、此の

見仏むさは無作さんじんの三身さんじんなり、開法ここは万法己己おんじやうの音声しんじゆなり、信受教範しんじゆは本有隨緣真如ほんぬずいえんしんによ

の振舞ふるまいなり、是れ即ち色心しきしんの二法なり、見聞けんもんとは色法しんじゆなり、信受しんじゆは信心しんじん領納りやうのう

なれば心法なり、所謂色心いわゆるしきしんの二法に備えたる南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうこれ是なり云云。

一若復有人以七宝またあるひと しっぱう

満是人所得其福最多の事

さんぜんたいせんせかい
て三千大千世界

満てて四聖をししゅう供養くよう

んよりは法華經の一偈を受持し奉らん

にはをとれりと説かれたり、

成栄の四の義を以て、

法華經の功徳を釈し給

に入つては題目だいもく

の五字即ち是

なり、
此

の妙法蓮華經の五字

の父母^{ふぼ}なり、

生養 しょうよう

成栄も亦復是くの如きな

り、
仍^{よう}

為す^なと^{しやく}積^くむ

さんぜじゅっぽう
二世十方

の諸仏しよぶつ

は、
妙法蓮華 みょうほうれんげ

経を以て父母とし給

ほけきょう
法華經

を
持つ
は
勝れすぐ

たり、七宝は世間

は滅に歸する仏・

菩薩羅漢

なり、さて
妙法みょうほう

の功徳はくどく一得永不失いつとくようふしつ

なり、此の故に勝れたり云々。

一 妙音菩薩の事 みょうおんぼさつ

とは、

じゅつかい
ごげんおんじょう

十界の語言音声

なり、
此

の
音声 悉く 慈悲

菩薩とは是れなり。

一爾時無尽意菩薩の事

仰に云く此の菩薩

くうけちゅう
は空仮中の三諦
さんたい

なり、意の一

字には一切の法門を摂得するなり意と云うは中道の事なり無は空諦なり尽とは仮諦なり、所謂意と云うは南無妙法蓮華經なり、一切諸經の意三世の諸仏の題目の五字なり所詮法華の行者は信心を以て意とせり云云。

一觀音妙智力の事 仰に云く妙とは不思議なり、智とは隨緣真如の智力

なり、森羅三千の自受用智なり、觀音は円觀なり、円觀とは一念三千なり、觀音

とは法華の異名なり、觀音と法華とは眼目の異名と釈する間・法華經の異名

なり、觀とは円觀・音は仏機なり、仍つて觀音の二字は人法一体なり、所謂

一心三觀・一念三千是なり云云。

一自在之業の事 仰に云く此の自在之業とは自受用報身の智力なり、

森羅三千の諸法作業をさして云うなり、其の所作のまま法華經の意は不思議

の自在之業なりと説けり、此の自在之業の本は南無妙法蓮華經是なり云云。

一妙法蓮華經陀羅尼の事 仰に云く妙法蓮華經陀羅尼とは正直捨方便

・但説無上道なり、たんせつむじょうどう 五字は体なり陀羅尼是用なり妙法の五字は我等が色心なり、ごじ 陀羅尼は色心の作用なり、だらに しきしん 所詮陀羅尼とは呪なり、しよせん だらに 妙法蓮華經を以てみょうほうれんげきよう 煩惱即菩提・生死即涅槃と呪いたるなり、ぼんのうそくぼだい しいうじそくねはん 日蓮等の類い南無妙法蓮華經をにちれん たく なむ みょうほうれんげきよう 受持するを以て呪とは云うなり、じゅじ 若有能持即持仏身とまじないたるなり、にやくうのうじ ぶつしん 釈いわ だらに に云く陀羅尼とは諸仏の密号と判ぜり、しよぶつ 所詮法華折伏・破權門理の義遮惡持しよせんほつつけしゃくぶく はごんもんり

善の義なり云云。

一六万八千人の事 仰に云く六とは六根なり、いっむばんぱちしうじん 万とは六根に具わる処のろっこん ところ

煩惱なり八とは八苦の煩惱なり千とは八苦に具足する煩惱なり、ぼんのう ぼんのう ぐそく ぼんのう 是れ即ちこ すなわ

法華經に値い奉りて六万八千の功德の法門と顯るるなり、ほけきよう あ たてまつ くだく ほうもん 所詮日蓮等の類いしよせん にちれん たく

南無妙法蓮華經と唱え奉る外に六万八千の功德の法門之れ無きなり云云。なむ みょうほうれんげきよう とな たてまつ くだく ほうもん こ

一妙莊嚴王の事 仰に云く邪見即正の手本なり、みょうそうこん いわ じゃけん てほん 所詮森羅三千の万法・しよせん しんらさんぜん

妙を以て莊嚴したる王なり妙とは称歎の語なり莊嚴とは色法なり王とは心みょうを以て そうこん

法なり諾法の色心を不思議とほめたり、然れば、妙莊嚴王の言・三千の諸法

・三諦法性の当位なり、所詮日蓮等の類南無妙法蓮華經を以て色心を莊嚴

したり、此の莊嚴とは別してかざり立てたるには非ず当位即妙の莊嚴なり、

煩悩即菩提・生死即涅槃是なり云云。

一華嚴・大日觀經等の凡夫の得道の事 仰に云く彼等の衆皆各各其の

經經の得道に似たれども眞實には法華の得道なり、所謂三五下種の輩なり

經に云く始見我身聞我所説文、妙樂大師云く脱は現に在りと雖も具に本種を

騰ぐと云えり本種と云うは南無妙法蓮華經是なり云云。

一題目の五字を以て下種の証文と為すべき事 仰に云く經に云く教無量

菩薩畢責住一乘文、妙樂大師の云く余教を以て程と為さず文、無量の菩薩

とは日本国の一切衆生を菩薩と開会して題目を教えたり、畢竟とは題目の

五字に畢竟するなり住一乗とは乘此宝乘直至道場是なり文、下種とはたね

を下すなり種子しゆしとは成仏じやうぶつの種の事なり

り、上の經文かみ きやうもんに教無量菩薩むりやうぼさつの教の一字は下種げしゆの証文しやうもんなり教とは題目だいもくを授くさす

る時の事なり、權教こんきやう無得道とくどう・法華得道ほつげとくどうと教うるを下種げしゆとは云うなり、末法まつぽうに

入つて此の經文きやうもんを出ださん人は有る可あべからざるなり慥たしかたつちゆうそうじやうに塔中相承たつちゆうそうじやうの秘文なり

り下種げしゆ しやうもんの証文秘す可し云云。

一題目の五字末法だいもく ごじまつぽうに限つて持つ可べきの事 仰いに云く經いに云く、惡世末法あくせまつぽう

時能持是經者文、此の經とは題目だいもくの五字ごじなり、能の一字に心を留めて之れをとど こ

案ずべし云云、末代惡世まつだいあくせ・日本國にほんこくの一切衆生いっさいしゆじやうに持てと云う經文きやうもんなり云云。

一天台云く是我弟子てんだいいわ これわがでし弘我法かうがほつの事 仰いに云く我が弟子でしとは上行菩薩じやうぎやうぼさつなり

我が法とは南無妙法蓮華經なむ みやうほうれんげきやうなり、權教こんきやう乃至始覺等ないししかくは隨他意ずいたいなれば他の法なり

り、さて此の題目だいもくの五字ごじは五百塵点じんでんより已來このかた、証得しやうとくし給える法体ほつたいなり故に我ゆえ

が法しやくと釈てんだいいわせり、天台云く此の妙法蓮華經みやうほうれんげきやうは本地甚深ほんちじんじんの奧藏おうぞうなり、三世さんぜの如來にょらい

の証得し給える所とは是れなり。

一色心を心法と云う事

仰に云く玄の十に云く請を受けて説く時只だ

是れ教の意を説く教意は是れ仏意なり仏意は即ち是れ仏智なり仏智至つて深

し是の故に三止四請す此くの如きの艱難・余經に比するに余經は則ち易し云

云、此の釈の意分明なり教意と仏意と仏智とは何れも同じ事なり、教は二十

八品なり意は題目の五字なり惣じて仏意とは法華經の異名なり、法華經を以

て一切經の心法とせり又題目の五字を以て一代説教・本・迹二門の神とせ

り、經に云く妙法蓮華經如来寿量品是なり、此の題目の五字を以て三世の

諸仏の命根とせりさて諸經の神法華經なりと云う証文は妙法蓮華經

方便品と題したる是なり云云。

一無作の応身我等凡夫也と云う事

仰に云く釈に云く凡夫も亦三身の本を

得たりと云云、此の本の字は応身の事なりされば本地無作本覺の体は無作の

おうじん 応身を以て本とせり仍つて我等凡夫なり、
おうじん 応身は物に応う身なり其の上
じゆりようほん じゆりようほん 題目を唱え出し奉るは真実に
おうじん 如来の慈悲なり云云。

一諸河無鹹の事

仰に云く此無鹹の事をば諸教無得道に譬えたり大海の

しをはゆきをば法華經の成仏得道に譬えたり、又諸經に一念三千の法門無

きは、諸河にうしをの味無きが如く死人の如し、法華經に一念三千の法門有る

はうしをの大海にあるが如く生きたる人の如し、法華經を浅く信ずるはあわ

のうしをの如し、深く信ずるは、海水の如し、あわはきえやすし、海水は消

えざるなり、如説修行最も以て大切なり、然りと雖も、諸經の大河の極深

なるも、大海のあわのしをの味をば具足せず、權教の仏は法華經の理即の凡夫

には百千万倍劣るなり云云。

一妙樂大師の釈に末法之初冥利不無の釈の事 仰に云く此の釈の心は

末法に於て冥の利益迹化の衆あるべしと云う事なり、此の釈は藥王品の此經

そくい えんぶだい
即為閻浮提人病之良藥 若人有病得聞是經病即消滅 不老不死云云、此の經文

の意を底に含めて釈せり、妙樂云く然るに後・五百は、且らく一往に従う、

まづぼうのはじめみょうり

末法の初冥利無きにあらず、且く大教の流行す可き時に拠る、故に五百と云

う文、仍つて本化の菩薩は顯の利益迹化は冥の利益なるべし云云。

にぜんきようがりやく

一爾前經瓦礫国の事 仰に云く法華經の第三に云く、如從飢國來忽遇大王

・と云云、六の卷に云く我此土安穩天人常充滿我淨土不毀云云、此の兩品の

文の意は權教は悉く瓦礫の旅の國なり、

あやまりて本國と思ひて都と思わん

まよい

事迷の故なり、一往四十二年住したる國なれば衆生・皆本國と思えり、本

國は此の法華經なり、

信解品に云く遇向本國と、三五の下種の所を指して本

國とも淨土とも大王・

とも云うなり、下種の心地即ち受持信解の國なり云云。

むみょう

一無明惡酒の事 仰に云く無明の惡酒に酔うと云う事は弘法・慈覺・

ちしやうほうねん

智証法然等の人人なり、無明の惡酒と云う証文は勸持品に云く、惡鬼入其身

是なり、惡鬼あつきと惡酒とは同じ事なり惡鬼あつきの鬼は第六天だいろくてんの魔王まおうの事なり惡酒とは無明むみょうなり無明即魔王むみょうそくまおう魔王即無明まおうそくむみょうなり、其身みみの身とは日本にほん國こくの謗法ほうぼうの一切いっさい衆生しゅじょうなり、入ると吞むとは同じ事なり、此この惡鬼あつき入る人は阿鼻あびに入る、さて法華經ほけきょうの行者ぎょうじやは入に仏知見ぶつちけん道故どうこと見えてみえて仏道ぶつどうに入る得入とくにゆうむじょうどう無上道むじょうどうとも説けり、相構あいかまええ相構あいかまええて無明むみょうの惡酒を恐るべきなり云云。

一日蓮已証の事

仰いに云いく壽量品じゆりやうばんの南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやう是れなり、地涌千界じゆせんがい

の出現しゅつげん末代まつだいの当世とうせの別付屬ふぞくの妙法蓮華經みょうほうれんげきやうの五字ごじを一閻浮提えんぶだいの一切衆生いっさいしゅじょうに取

次たまぎ給たまうべき仏勅使ぶつちやくの上行菩薩じやうぎやうぼさつなり云云、取次しやくそんとは取るとはしやくそん積尊しやくそんより

上行菩薩じやうぎやうぼさつの手てへ取り給たまうさて上行菩薩じやうぎやうぼさつ又末法まつぽう當今とうこんの衆生しゅじょうに取次しやくそんぎ給たまえり

是これを取次しやくそんぐとは云いうなり、広ひろくは末法まつぽう万年まんねんまでの取次しやくそんなり、是これを無令斷絶むりやうだんぜつと

は説いかれたり、又結要けつちやうの五字ごじとも申もうすなり云云、上行菩薩じやうぎやうぼさつ取次しやくそんの秘法ひほうは

所謂南無妙法蓮華經いなり云云。

一 釈尊しゃくそんの持言秘法ひほうの事

仰いわに云く持言の秘法の經文きやうもんとは寿量品じゆりやうぼんに

云く、每い自作さぜん是念ねんの文ぶん是これなり、每いの字じは三世さんぜ常住じやうじゆうなり、是念ねんの念ねんとは、わ

すれ給たまわらずして内証ないしやうに具足くそくし給たまえり故ゆゑに持言ひほうなり、秘法ひほうとは南無なむ

妙法蓮華經みやうほうれんげきやう是これなり秘べす可べし秘べす可べし云云。

一日蓮門家いちにれんもんかの大事だいじの事

仰いわに云く此もんかの門家だいじの大事ゆじゆつぼんは涌出品げんさんごさんの前ぜん三後さんご三さんの

釈ななり、此ほんげの釈しゃ無ふくんば本化ほんげ・迹化しゃつけの不同ふどう・像法ぞうほう付屬ふぞく・末法まつぽう付屬ふぞく・迹門しゃくもん・

本門ほんもん等の起尽きじん之こ有ある可べからず、既すでに止善男子ぜんなんしの止とどの一字いちじは日蓮門家いちれんもんかの大事だいじ

なり秘べす可べし秘べす可べし、總まじて止とどの一字いちじは正ただしく日蓮門家いちれんもんかの明鏡めいきやうの中ちゆうの明鏡めいきやう

なり口外くがいも詮無せんむし、上行菩薩じやうぎやうぼさつ等らうを除のぞいては總まじて余ほさつの菩薩ぼさつをば悉ことごとく止とどの一字いち

を以もて成敗せいばいせり云云。

一日蓮いちにれんが弟子でし臆病おくびやうにては叶かなう可べからざる事

仰いわに云く此もんどうの意いは問答もんどう對論たいろん

の時にぜんは爾前しゃくもん・迹門しゃくもんの釈尊しゃくそんをも用べう可べからざるなり、此これは臆病おくびやうにては釈尊しゃくそん

を用いまじきかなんと思ふべき故なり、もち 釈尊をさえ用う可からず何に況やしゃくそん いかに いわんや
其の以下の等覺の菩薩をやまして謗法の人人に於ておや、その とうかく ぼさつ ほうぼう ひとびと おい 所謂南無いわずる なむ
妙法蓮華經の大音声を出だして諸經・諸宗を対治すべし、みょうほうれんげきよう おんじよう しよきよう しよしゆう たいじ 巧於難問答其ぎようおうなんもんどう
心無所畏とは是なり云云。しんむしよい これ

一妙法蓮華經の五字を眼と云う事 仰に云く法華第四に云く、みようほうれんげきよう ごじ まなこ いわ ほっけ いわ 仏滅度後能ぶつめつどこ

解其義是諸天人・世間之眼と云云、此の經文の意は、しょうぎ せけん きようもん ばけきよう にんてん にじよう 法華經は人天・二乘・

菩薩・仏の眼目なり、此の眼目を弘むるは日蓮一人なり、ぼさつ がんもく ひろ にちれん まなこ 此の眼には五眼あ

り、所謂肉眼・天眼・慧眼・法眼・仏眼なり、いわゆるにくげん てんげん えげん ほうげん ぶつげん まなこ 此の眼をくじりて別に眼を

入れたる人あり、所謂弘法大師是なり、法華經の一念三千即身成仏諸仏の開眼いわゆるこうぼうだいしこれ ほけきよう いちねんさんぜんそくしんじようぶつしよぶつ かいげん

を止めて、真言經にありと云えり、とど しんごん こ 是れ豈法華經の眼を抽れる人に非ずや、あにほけきよう まなこ あら

又此の眼をまなことじふさぐ人あり所謂法然上人是れなり、いわゆるほうねんしやうにんこ しやへい もんじ 捨閉の閉の文字は、

閉眼の義に非ずや、へいがん あら 所詮能弘の人に約しては、日蓮等の類い世間之眼なり、しよせんのおく にちれん たく せけん しよぐ 所弘

の法に随つえば、此の大乗經典だいじょうぎょうてんは、是れ諸仏しよぶつの眼まなこなり、所詮しよせん眼の一字は
いちねんさんぜん ほうもん
一念三千の法門なり、六万九千三百八十四字を此の眼の一字に納おさめたり、此
まなこ
の眼の字あら顯あらわれて見れば煩惱即菩提ぼんのうそくぼだい・生死即涅槃しやうじそくねはんなり、今末法に入まっぼうつて、眼まなこ
とは所謂いわゆる未會有の大曼荼羅まんだらなり、此の御本尊ごほんぞんより外には眼目無きなり云云。
ほけきよう ぎようじや すいか ぎようじや
一法華經の行者に水火の行者の事 仰に云く總じて此の經を信じ奉る人に
すいか ふどう そのゆえ じつじや ぎようじや
水火の不同あり、其の故は火の如きの行者は多く水の如き行者はまれなり、
じつじや
火の如しとは此の經のいわれをききて火炎のもえ立つが如く貴く殊勝じゆしやうに思しい
て信しんずれども・やがて消失す、此れは当座とうざは大信心だいしんじんと見えたれども其の信心しんじん
の灯とうきゆる事やすしさて水の如きの行者ぎようじやと申もうすは水は昼夜不退ふたいに流るるなり
少しもやむ事なし、其の如く法華經を信しんずるを水の行者ぎようじやとは云うなり云云。
によにん
一女人と妙と釈尊しやくそんと一体の事 仰に云く女人は子しよを出生しゆっしやうす、此の出生しゆっしやうの
子又子を出生しゆっしやうす此くの如く展轉てんでんして無數の子を出生しゆっしやうせり、此の出生しゆっしやうの

子に善子もあり惡子もありたんこん端嚴美麗の子もあり・醜陋しゅうろうの子もあり長のひくき

子もあり大なる子もあり・男子もあり・女子もあり云云、所詮しよせん・妙の一字よ

り万法は出生しゅつしょうせり地獄じごくもあり・餓鬼がきもあり・乃至ないしぶつ仏界ぶつがいもあり・權教こんきやうもあり

じつきやう

・実教じつきやうもあり・善もあり惡もあり・諸法しよほうを出生しゅつしょうせり云云、又釈迦しゃかい一仏いちぶつの

おんみ

いっさい

ぼさつ

こととしゅつしょう

あみだ

やくし

だいにち

ことごと

御身おんみより一切いっさいの仏・菩薩等悉く出生しゅつしょうせり、阿弥陀あみだ・薬師やくし・大日等だいにちは悉く

しゃくそん

釈尊しゃくそんの一月より万水ばんすいに浮ぶ所の万影ばんえいなり、然らば女人にょにんと妙みよと釈尊しゃくそんとの三全

ふどう

みようくだいし

いわ

そくさんぜん

さんぜんそく

だいば

いわ

く不同ふどう無きなり、妙樂大師みようらくだいしの云く妙即三千・三千即法云云、提婆品だいばに云く有

さんぜんだいせんせかい

これ

二宝殊一価直二三千大千世界一是なり云云。

かしゃく

一置不呵責かしゃくの文の事 仰いわに云く此きようもんの經文きやうもんに於おいては日蓮等にちれんの類たぐいのおそる

もんじ

こ

も

もんじ

たと

とうざ

そ

べき文字もんじ一字之れ有り、若もし此この文字もんじを恐れざれば縦たとい当座とうざは事なしとも

みらいむげん

しか

むげんじごく

ごくそつ

そ

未来無間の業みらいむげんたるべし、然しからば無間地獄むげんじごくへ引き入る獄卒ごくそつなるべし夫それは置おの

これ

一字是なり云云、此の置の一字は獄卒ごくそつなるべし謗法不信ほうぼうふしんの失とがを見ながら聞き

ながら云わずして置かんは必ず無間地獄へ墮在す可し、仍つて置の一字・獄卒

あほうらせつ

・阿防羅刹なるべし尤も以て恐る可きは置の一字なり云云、所詮此の經文の

ごくそつ

内に獄卒の一字を恐るべきなり云云、此の獄卒の一字を深く之を思う可し、

にちれん

日蓮は此の字を恐る故に建長五年より今弘安年中まで在在所にて申しはり

ただひとえ

しなり只偏に此の獄卒を脱れんが為なり、法華經には若人不信とも生疑不信

とたま

者とも説き給えり、法華經の文文・句句をひらき涅槃經の文文・句句をひら

ほけきよう

きたりとも置いていわずんば叶う可からざるは此の置の一字より外に獄卒は

ごくそつ

無きなり云云。

なく りようぜんじようど

一異念無く靈山浄土へ参る可き事

ふしん

我が心なりとも不信の意出来せば忽に信心に住すべし、所詮不信の心をば師

しんじん

となすべからず信心の心を師匠とすべし浄信心敬に法華經を修行し奉るべ

のうじ

きなり、されば能持二是經一能説二此經一と説きて能の字を説かせ給えり

りようぜん

靈山ここにあり四土一念皆常寂光 とは是なり云云。

一不可失本心の事

仰に云く此の本心と云うは法華經の信心の事なり、失

もう ほうぼう

と申すは謗法の人にすかされて法華經を捨つる心の出来するを云うなり、さ

てんだいだしいわ

れば天台大師云く若し悪友に値えば則ち本心を失うと云云、此の釈に悪友と

ほうぼう

は謗法の人の事なり、本心とは法華經なり、法華經を本心と云う意は諸法実相

じゅつかい しゅじょう

の御經なれば十界の衆生の心法を法華經とは申すなり、而るに此の本心を

めいもう

引きかえて迷妄の法に着するが故に本心を失うなり、此の本心に於ては三五

げしゅ ほうもん

の下種の法門なり、若し善友に値う時んば失う所の本心を忽に見得するなり、

いわゆるかしよう

所謂迦葉・舍利弗等是なり、善友とは釈迦如来・悪友とは第六天の魔王・外道

ばらもんこれ

・婆羅門是なり、所詮末法に入つて本心とは日蓮弘通の南無妙法蓮華經是な

あくゆう

り、悪友とは法然・弘法・慈覚・智証等是なり、若し此の題目の本心を失せ

おい

んに於ては又三五塵点を経べきなり、但、如是展転至無數劫なるべし、失と

は無明の酒に酔いたる事なり仍て本心を失うと云うなり、此の酔をさますとは権教を捨てしむるを云うなり云云。

一天台大師を魔王障礙せし事

仰に云く此の事は随分の秘藏なり、其の故

は天台大師・一心三觀・一念三千の觀法を説き顯さんとし給いしかば父母

左右の膝に住して悩まし奉り障礙し給いしなり、是れ即ち第六天の魔王が父母

の形を現じて障礙せしなり、終に魔王に障礙せられ給わずして摩訶止觀の法門

起れり、何に況や今日蓮が弘むる南無妙法蓮華經は三世の諸仏の成道の師

・十方薩の得道の師匠たり、其の上正像二千年の仏法は爾前・迹門なれ

ば、魔王自身・障礙をなさずともなるべし、今末法の時は、所弘の法は、

法華經本門の事の一念三千の南無妙法蓮華經なり、能弘の導師は本化地涌の

大菩薩にてましますべし、然る間魔王自身下りて障礙せずんば叶う可からざ

るなり、仍つて自身下りたる事分明なり、所謂道隆・良觀最明寺等是なり、

然りと雖も諸天善神等は日蓮に力を合せ給う故に竜口までもかちぬ、其の外の大難をも脱れたり、今は魔王もこりてや候うらん、日蓮死去の後は残党ども軍を起すべきか、故に夫れも落居は叶う可からざるなり、其の故は第六天の魔王の眷属日本国に四十九億九万四千八百二十八人なりしが今は日蓮に降参したる事多分なり、経に云く悪鬼入其身とは是なり、此の合戦の起りも、所詮南無妙法蓮華経是なり、魔王に於て体の魔王・用の魔王あり、体の魔王とは法性同共の魔王なり、妙法の法是なり、用の魔王とは此れより出生する第六天の魔王なり、用の魔王は障礙をなす、然れども体用同共の諸法実相の一理なり、唯一門の智慧の門に入り、無明法性一体なるべきなり云云、いわゆるまかしかん、大事の法門是なり、法華経の一代説教に勝れたるは此の故なり、一念三千とは是なり、法華経第三に云く魔及魔民皆護仏法云云。

一法華経極理の事

仰に云く迹門には二乗作仏本門には久遠実成此を

さして極理ごくりと云うなり、但ただ是も未いまだ極理ごくりにたらず、迹門しゃくもんにして極理ごくりの文は
諸しよ仏ぶつ智慧ちえ甚深無量じんじんむりやうの文こ是れなり、其そのの故ゆえは此この文を受けて文句もんくの三さんに云く豎
に如理よこしまの底に徹し横よこしまに法界ほつかいの辺を窮きわむと釈しゃくせり、さて本門ほんもんの極理ごくりと云うは
如來秘密神通よらいひみつじんつう之力ちからの文これ是なり、
所詮しよせん日蓮にちれんが意いに云く法華經ほけきやうの極理ごくりとは南無妙法蓮華經なむみよほうれんげきやう是なり、一切いっさいの功德くどく
法門ほうもん・釈尊しゃくそんの因行果徳いんぎやうかどくの二法にぽう・三世十方さんぜじゆつぽうの諸仏しよぶつの修因感果しゆいんかんか・法華經ほけきやうの文
文・句句くどくの功德くどくを取り聚あつめて此この南無妙法蓮華經なむみよほうれんげきやうと成たまし給たまえり、爰こゝをを以て釈
に云く惣いじて一經そつ いっきやうを結いするに唯ただ四そのみ、其その枢柄すうへいを撮とつて之これを授じゆ与よす云云、
上行菩薩じやうぎやうぼさつに授じゆ与よし給たまう題目だいもくの外ほかに法華經ほけきやうの極理ごくりは無なきなり云云。
一妙法蓮華經みよほうれんげきやう五字ごじの蔵じの事 仰いに云く此この意いは妙法みよほうの五字ごじの中には
一いち念ねん三千さんぜんの宝珠ほうしゆあり五字ごじを蔵じと定てんむ、天台大師てんだいだいしげんぎ玄義げんぎの一いちに判いぜり、所謂い此この
妙法蓮華經みよほうれんげきやうは本地ほんち甚深じんじんの奥蔵おうぞうなり云云、法華經ほけきやうの第四だいよに云く是これ法華經ほつげきやう蔵

と云云、妙華嚴法阿含蓮方等華嚴若經涅槃、又云く妙涅槃法般若蓮方等華阿含經
・華嚴、已上妙法蓮華經の五字には十界三千の宝珠あり、三世の諸仏は此
の五字の蔵の中より・或は華嚴の宝を取り出だし・或は阿含・方等・般若の
宝を取り出だし種種説法し給えり、加之・論師・人師等の疏釈も悉く此の
五字の中より取り出だして一切衆生に与え給えり、此等は皆五字の中より取
り出だし給えども妙法蓮華經の袋をば持ち給わず、所詮五字は上行菩薩の
付属にして更に迹化の菩薩・諸論師いろはざる題目なり、仍つて上行所伝
の南無妙法蓮華經は蔵なり、金剛不壞の袋なり此の袋をそのまま日本国の
一切衆生には与え給えり、信心を以て此の財宝を受取るべきなり、今末法に
入つては日蓮等の類い受取る所の如意宝珠なり云云。
一我等衆生の成仏は打かためたる成仏と云う証文の事 仰に云く經に
云く無上宝聚不求自得の文是なり、我等凡夫即極とはたと打かためたる成仏

なりいわゆるふくじとく所謂不求自得する所の南無妙法蓮華經なればなり云云。

一爾前法華の能くらべの事にぜんほっけよ 仰に云く爾前の經にして十悪・五逆等の成仏じゅうあくごぎやくじょうぶつ

の能なし、今法華經に十界皆成・分明なり、爾前の經の無能と云う証文しやうもん

とは方便品に云く但似仮名字引導於衆生の文是なり、さて法華經は能と云うほうべんいわたんにみょうじしゅじやう

証文は諸法実相の文是なり、今末法に入つて第一の能たる南無妙法蓮華經しやうもんしよほうじつそうこれまっぽうだいいちなむみょうほうれんげきやう

是なり云云。

一授職の法体の事ほつたい 仰に云く此の文は唯仏与仏の秘文なり輒く云う可からざたやす

る法門なり、十界三千の諸法を一言を以て授職する所の秘文なり、其の文とほうもんじゅっかいさんぜんしよほうしよ

は神力品に云く皆於此經宣示顯説の文是なり、此の五字即十界同時に授職すじんりきぼんいわみなせんじけんせつこれこじそくじゅっかいどうじ

る所の秘文なり十界己己の当体・本有妙法蓮華經なりと授職したる秘文なじゅっかいこことうたいほんぬみょうほうれんげきやう

り云云。

一末代讓 状の事 仰に云く末代とは末法五百年なり、讓 状とは手繼のまつだいゆすりじやういわまつだいまつぼうゆすりじやうてつぎ

証文たる南無妙法蓮華經是なり此れを譲るに二義之れ有り、一には跡をゆ
ずり二には宝をゆずるなり、一に跡を譲ると云うは釈迦如来の跡を法華經の
行者にゆずり給えり、其の証文に云く如我等無異の文是なり、次に財宝を
ゆずると云うは釈尊の智慧戒徳を法華經の行者にゆずり給えり、其の証文
に云く無上宝聚不求自得の文是なりと云云、さて此の題目の五字は讓 状な
り云云。

一本有止觀と云う事 仰に云く本有の止觀と云うは大通を以て習うなり、
久遠実成道の仏と大通智勝仏と釈尊との三仏を次の如く仏法僧の三宝と
習うなり、此の故に大通は本有の止觀なれば即ち三世の諸仏の師範と定めた
り、仍つて大通仏を法と習う、此の法は妙法蓮華經是なり、仍つて証文に
云く大通智勝仏十劫坐道場の文是なり十劫は即ち十界なり云云。

一入末法四弘誓願の事

仰に云く四弘誓願をば一文に口伝せり、其の一文

とは所謂神力品に云く於我滅度後心受持斯經是人於仏道決定無有疑と云云、

きょうもん

ほけきょう

じよほん

しぐせいがん

ほうもん

と

此の經文は法華經の序品より始めて四弘誓願の法門を説き終りてさて

じようぎようぼさつ

みようほうれんげきょう

ふぞく

たま

みようほう

ごじ しぐせいがん

上行菩薩に妙法蓮華經を付属し給う時・妙法の五字に四弘誓願を結びて

けっく

たま

めつこ

まつほう

しゅじようむへんせいがん

衆生無辺誓願度と云う

結句に説かせ給えり滅後とは末法の始の五百年なり、衆生無辺誓願度と云う

は是人の人の字なり、

せいがん

じゆ

ほんげ

じようぎようぼさつ

せいがん

に入らん

と此れ即ち仏道の二字度脱なり、煩惱無辺なれども煩惱即菩提・生死即涅槃

こ

すなわ

ぶつどう

どだつ

ぼんのうむへん

ぼんのうそくほだい

しうじそくねはん

と体達す、仏道に入つては煩惱更になし受持斯經の所には法門無尽誓願知

ふんみよう

むじようほだいせいがん

ぜにんのうぶつどうけつじようむうぎ

ほうもんむじんせいがん

しぐ

分明なり無上菩提誓願証と云うは是人於仏道決定無有疑と定めたる四弘

せいがんふんみよう

きようしゆしやくそん

まつほう

しぐせいがん

じようぎようぼさつ

の四弘誓願も此の文なり深く之を思案す可し云云。

しぐせいがん

しぐせいがん

しぐせいがん

いわ

しゅじようむへんせいがん

おうじん

煩悩

一四弘誓願心報如理と云う事

仰に云く

衆生無辺誓願度は心身なり、

煩悩

無

無上菩提誓願証は理

無

無

法門無尽誓願知は智法身なり、

無上菩提誓願証は理

無

無

無

無

無

無

無

無

無

無

無

無

無

無

無

無

無

無

無

無

無

無

無

無

無

無

無

無

無

無

無

無

無

無

無

無

無

無

無

無

無

無

無

無

無

無

無

無

無

無

無

無

無

無

無

無

無

無

無

無

無

無

無

無

無

無

無

無

無

法身なり、ほつしん所詮誓願しよせんせいがんと云うは題目弘通だいもくくつうの誓願せいがんなり、ため釈に云く彼が為に惡を除

くは即ち是れ彼が親なりと是なり云云。すなわこ

一本来の四弘の事しぐ 仰に云く諸法の当体本来四弘なり、いわ其の故は衆生としよほう

云うは法界なり、ほっかい所詮法界に理智慈悲の三を具足せり、しよせんほっかい応報法の三身諸法じひの

自体なり、むさ無作の応身を以て衆生無辺誓願度と云うなり、おうじん無作の報身には智しゆじようむへんせいがんど

徳断徳の二徳を備えたり、ぼんのうむへんせいがん煩惱無辺誓願断を以て本有の断徳とは定めたり、ほんぬ

法門無尽誓願知を以て本有の智徳とす、ほうもんむじんせいがん無上菩提誓願証を以て無作の法身とむじようぼだいせいがん

云うなり、しよせんしぐせいがん所詮四弘誓願の中には衆生無辺誓願度を以て肝要とするなり、しゆじようむへんせいがんど

今日蓮等の類こんにちれんいは南無妙法蓮華經を以て衆生を度する此より外は所詮なきたぐ

なり、速成就そくじようじゆうぶつしん仏身是なり云云、なにもの所詮四弘誓願は一念三千なり、しよせんしぐせいがんさて四弘の弘いちねんさんぜん

とは何物ぞ、いわゆるじようぎきうしよでん所謂上行所伝の南無妙法蓮華經なり、なむみようほうれんげきよう釈に云く

四弘能所混すと云云、しぐのうじよみん此の釈は止觀に前三教を釈せり、しかん能と云うは如来なりぜんさんききう

所とは衆生なり能所各別するは権教の故なり、法華經の心は能所一体なり混
すと云うは権教の心は機法共に一同なれば能所混すと云うなりあえて能所一
同して成仏する所を混すと云うには非ざるなり、今末法に入つて法華經の
行者は四弘能所感応の即身成仏の四弘なり云云。

御講聞書 終

九八 四九院申状 848P

駿河の国蒲原の庄・四十九院の供僧等謹んで申す。

寺務・二位律師嚴譽の為に日興並に日持・承賢・賢秀等・所学の法華宗を
以て外道大邪教と称し往古の住坊並に田畠を奪い取り寺内を追ひ出さしむる
謂れ無き子細の事。

右釈迦一代教の中には天台を以て宗匠と為す、如来五十年の間は法華を以
て眞実と為す、是れ則ち諸仏の本懷なり抑亦多宝の証誠なり、上一人より下

ばんみん いた ばんみん
万民に至るまで帰敬年旧り渴仰日に新なり。

而るに嚴譽の状に云く、「四十九院の内日蓮が弟子等居住せしむるの由・其の聞え有り、彼の党類佛法を學し乍ら外道の教に同じ正見を改めて邪義の旨に住せしむ以ての外の次第なり、大衆等評定せしめ寺内に住せしむべからざるの由の所に候なり」云云。

茲に因つて日興等忽に年来の住坊を追ひ出され已に御祈便宜の學道を失う、法華の正義を以て外道の邪教と稱するは何の經・何れの論文ぞや、諸經多しと雖も未だ兩眼に触れず法華の中に諸經を破るの文之有りと雖も諸經の裏に法華を破るの文全く之無し、所詮已今当の三説を以て教法の方便を破推するは更に日蓮聖人の莠言に非ず皆是れ釈尊出世の金口なり。

爰に眞言及び諸宗の大師等大小乗の浅深を弁えず權實教の雜亂を知らず、或は勝を以て劣と稱し・或は權を以て実と号し意樹に任せて砂草を造

る、よつ おろか 仍て愚癡の輩・短才の族・やから きようぎよう 経経 顕然の正説を伺わず徒に師資相伝
の口決を信じ秘密の法力を行ずと雖も真実の験証無し、しんじつ 天地之が為に妖薬を
示し国土之が為に災難多し、さいなん 是れ併ら 仏法の邪正を糺さず僧侶の賢愚を撰
ばざる故なり、ぶつぼう 夫れ仏法は王法の崇尊に依つて威を増し王法は仏法の擁護に
依つて長久す、しょうぼう 正法を学ぶの僧を以て外道と称せらるるの条理豈然る可けん
や外道か外道に非ざるか早くごんよりっし 嚴誉律師と召し合わせられ真偽を糺されんと欲
す。

且去る文応年中・師匠日蓮聖人・いぬ ぶんおう 仏法の廃れたるを見・ししょうにちれんしょうにん 未来の災を鑒み
諸経の文を勘え一卷の書造るとしよきよう かんが 立正安國論、いこく 異国の来難果して以て符合し畢んぬ
未萌を知るを聖と謂つ可きか、みぼう 大覺世尊・靈山・虚空・二処・三会・二門・
八年の間三重の秘法を説き窮むと雖も仏滅後二千二百二十余年の間・ひほう 月氏の
迦葉・阿難・竜樹・天親等の大論師・漢土の天台・妙楽・日本の伝教大師

等内には之を知ると雖も外に之を伝えず第三の秘法今に残す所なり、是偏に
まっぼつとうじょう
末法鬪争の始・他国来難の刻・一閻浮提の中の大合戦起らんの時・国主此の
たこく なん えんぶ
法を用いて兵乱に勝つ可きの秘術なり、
ひょうらん きようもん
経文赫赫たり所説明明たり、彼れ
と云い此れと云い国の為・世の為・尤も尋ね聞し食さるべき者なり、仍て
かんじよう ろく ごんじようくだん
款状を勒して各言上件の如し。

承 賢

賢 秀

日 持

日興

弘安元年三月 日
こうあんがんねん

九 九 竜泉寺申状

弘安二年十月 五十八歳御代作
こうあん こうあん
8 4 9 P

駿河の国・富士下方滝泉寺の大衆・越後房日弁・下野房日秀等謹んで弁言
するが
たいしゅう ぼう ぼう べんこん

す。

当寺院主代・平左近入道行智・条条の自科を塞ぎ遮らんが為に不実の
濫訴を致す謂れ無き事。

そじよう

訴状に云く日秀・日弁・日蓮房の弟子と号し法華經より外の余經・或は

しんこん

真言の行人は皆以て今世後世叶う可からざるの由・之を申す云云取意。

此の条は日弁等の本師日蓮聖人・去る正嘉以来の大彗星大地動等を觀見し

いっさいきよう

一切經を勘えて云く当時・日本国の体たらく権小に執著し実經を失没せる

ぜんだい

の故に当に前代未有の二難を起すべし所謂自界叛逆難・他国侵逼難なり、仍て

かねて

治国の故を思い兼日彼の大災難を対治せらる可きの由、去る文応年中・一卷

りっしょうあんこくろん

の書を上表す立正安國論と号す勘え申す所皆以て符合す既に金口の未來記に

あたか

同じ宛も声と響との如し、外書に云く「未萌を知るは聖人なり」内典に云く

ちじん

「智人は起を知り蛇は自ら蛇を知る」云云、之を以て之を思うに本師は豈聖人

みずか

ほんし

しようにん

なるかなきようしやう巧匠内に在り国宝外に求む可からず、外書に云く「隣国に聖人有るは敵国の憂なり」云云、内経に云く「国に聖人有れば天必ず守護す」云云、外書に云く「世必ず聖智の君有り而して復賢明の臣有り」云云、此の本文を見るに聖人・国に在るは日本国の大喜にして蒙古国の大憂なり諸竜を驅かり催もよおして敵舟を海に沈め梵釈に仰せ付けて蒙王を召し取るべし、君既に賢人に在さば豈聖人を用いずして徒に他国の逼を憂えん。

抑大覺世尊・遙に末法鬪諍堅固の時を鑒かんがみ此くの如きの大難を対治す可だいにかくせそん はるか まつぼうとうじやうけんこきの秘術を説き置かせらるるの経文明明たり、然りと雖も如来の滅後二千二百二十余年の間・身毒・尸那・扶桑等・一閻浮提の内に未だ流布せず、随しえて四依の大士内に鑒かんがみて説かず天台伝教而も演のべず時未だ至らざるの故なり、法華經に云く「後の五百歳の中に閻浮提に広宣流布す」云云、天台大師云く「後・五百歳」妙樂云く「五五百歳」伝教大師云く「代を語れば則ち

像の終り末の初め地を尋ぬれば唐の東・羯の西・人を原ぬれば則五濁の生・
鬪諍の時」云云、東勝西負の明文なり。

法主聖人・時を知り国を知り法を知り機を知り君の為臣の為神の為仏の為
災難を対治せらる可きの由・勘え申すと雖も御信用無きの上・剩さえ謗法人
等の讒言に依つて聖人・頭に疵を負い左手を打ち折らるる上・兩度まで遠流
の責を蒙むり門弟等・所所に射殺され切り殺され毒害・刃傷・禁獄・流罪・
打擲・擯出・罵詈等の大難勝げて計う可からず、茲に因つて大日本国・皆
法華經の大怨敵と成り万民悉く一闡提の人と為るの故に天神・国を捨て地
神・
所を辞し天下静ならざるの由・粗伝承するの間其の仁に非ずと雖も愚案を顧
みず言上せしむる所なり、外經に云く、「奸人朝に在れば賢者進まず」云云、
内經に云く、「法を壊る者を見て責めざる者は仏法の中の怨なり」云云。

又風聞の如くんば高僧等を崛請して蒙古国を調伏す云云、其の状を見聞するに去る元暦・承久の両帝・叡山の座主・東寺・御室・七大寺・園城寺等・検校・長吏等の諸の真言師を請い向け内裏の紫宸殿にして咒咀し奉る故みなもとうしようくん
源 右將軍並に故平右虎牙の日記なり、此の法を修するの仁は敬つて之を行えば必ず身を滅し強いて之を持てば定めて主を失うなり、然れば則ち安德天皇は西海に沈没し叡山の明雲は流矢に当り後鳥羽法皇は夷島に放ち捨てられ
東寺・御室は自ら高山に死し北嶺の座主は改易の恥辱に値う、現罰・眼に遮り後賢之を畏る聖人山中の御悲みは是なり。

次に阿弥陀經を以て例時の勤と為す可きの由の事、夫れ以みれば花と月と水と火と時に依つて之を用ゆ必ずしも先例を追う可からず、仏法又
是くの如し時に随つて用捨す、其の上・汝等の執する所の四枚の阿弥陀經は
四十余年未顕真實の小經なり、一閻浮提第一の智者たる舍利弗尊者は多年の

問・此の經を讀誦するも終に成仏を遂げず然る後・彼の經を抛ち末に
法華經に至つて華光如来と爲る、況や末代惡世の愚人・南無阿彌陀仏の題目
計りを唱えて順次往生を遂ぐ可しや、故に仏之を誡めて言く法華經に云く、「正
直に方便を捨て但無上道を説く」と云云教主釈尊正しく阿彌陀經を抛ちた
まう云云又涅槃經に云く、「如来は虚妄の言無しと雖も若し衆生の虚妄の説に
因るを知れば」と云云、正しく弥陀念仏を以て虚妄と称する文なり、法華經
に云く「但樂て大乘經典を受持し乃至余經の一偈をも受けざれ」云云、
妙樂大師云く「況や彼の華嚴但以て称比せん此の經の法を以て之を化するに
同じからず故に乃至不受余經一偈と云う」云云、彼の華嚴經は寂滅道場の
説・法界唯心の法門なり、上本は十三世界微塵品中品は四十九万八千偈・下
本は十万偈四十八品今現に一切經藏を觀るに唯八十六十四十等の經なり、
其の外の方等・般若・大日經・金剛頂經等の諸の顯密・大乘經等を尚・

ほけきよう
法華經に對当し奉りて仏自ら・或は未顕真実と云い・或は留難多きが故に
ある
・或は門を閉じよ・或は抛て等云云、何に況や阿弥陀經をや、唯大山と蟻岳
こうげ
との高下・師子王と狐兔との力なり。すもう

今日秀等専ら彼等小經を抛ち専ら法華經を讀誦し法界に勸進して南無
なむ
みようほうれんげきよう
妙法蓮華經と唱え奉る豈殊忠に非ずや、此等の子細御不審を相貽さば高僧等
しさい ふしん のこ こうそう
を召され是非を決せらる可きか、仏法の優劣を糺明致す事は月氏・漢土日本
ぜひ ぶつぼう ゆうれつ がっし かんどにほん
の先例なり、今明時に當つて何ぞ三国の旧規に背かんや。そむ

訴狀に云く今月二十一日数多の人勢を催し弓箭を帶し院主分の御坊内に打
そじよう あまた たい
ち入り下野坊は乗馬相具し熱原の百姓・紀次郎男・点札を立て作毛を苅り取
じょうめあいぐ たてふた
り日秀の住房に取り入れ畢んぬ云云「取意」。

此の条・跡形も無き虚誕なり日秀等は損亡せられし行者なり不安堵の上は
あとかた こたん そんもう ぎようじゃ あんど
誰の人か日秀等の点札を叙用せしむ可き將た又 弱なる士民の族・日秀等
たてふた じようよう は おうにやく どみん やから

に雇い越されんや、然らば弓箭を帶し悪行を企つるに於ては行智云く近隣の
人人争つて弓箭を奪い取り其の身に召し取ると云うが如き子細を申さざるや、
矯飾の至り宜しく賢察に足るべし。

日秀・日弁等は当寺代代の住侶として行法の薰修を積み天長地久の御
祈を致すの処に行智は乍に当寺靈地の院主代に補し寺家・三河房頼円並
に少輔房・日禅・日秀・日弁等に行智より仰せて、法華經に於ては不信用の
法なり速に法華經の読誦を停止し一向に阿弥陀經を読み念仏を申す可きの由
の起請文を書けば安堵す可きの旨下知せしむるの間、頼円は下知に随つて起請
を書いて安堵せしむと雖も日禅等は起請を書かざるに依つて所職の住坊を奪
い取るの時・日禅は即ち離散せしめ畢んぬ、日秀・日弁は無頼の身たるに依
つて所縁を相憑み猶寺中に寄宿せしむるの間・此の四箇年の程・日秀等の所
職の住坊を奪い取り嚴重の御祈を打ち止むるの余り悪行猶以て飽き足らず

為に法華經行者の跡を削り謀案を構えて種種の不実を申し付くるの条・豈
在世の調達に非ずや。

凡そ行智の所行は法華三昧の供僧・和泉房蓮海を以て法華經を柿紙に作り
紺形を彫り堂舎の修治を為す、日弁に御書下を給い構え置く所の上葺構一万
・二千寸の内八千寸を之を私用せしむ、下方の政所代に勧め去る四月御神事
の最中に法華經信心の行人・四郎男を刃傷せしめ去る八月 弥四郎坊男の頸
を切らしむ、日秀等に頸を刎ぬる事を擬して此の中に書き入れ無智無才の盗人
・兵部房静印より過料を取り器量の仁と称して当寺の供僧に補せしめ、或は
寺内の百姓等を催し・鶉狩・狸殺・狼落の鹿を取りて別当の坊に於て之を食
らい・或は毒物を仏前の池に入れ若干の魚類を殺し村里に出して之を売る、
見聞の人・耳目を驚かさざるは莫し仏法破滅の基悲んで余り有り。

此くの如き不善の悪行・日日相積るの間・日秀等愁歎の余り依つて上聞

を驚かさんと欲す、行智条条の自科を塞が^{ふさ}が為^{ため}に種種^{しゅじゆ}の秘計を廻らし近隣^{おどろ}
の輩^{ともがら}を相語らい遮^{さえぎ}つて跡形^{あとがた}も無^なき不実^{ふじつ}を申し付け日秀等を損亡^{そんもう}せしめんと
擬^ねするの条言語道断^{どうだん}の次第^{しだい}なり、冥^{みよう}に付け願^{けん}に付け戒^{かい}めの御沙汰^{おさた}無^なからんや、
所詮^{ぶつぽう}仏法の権実沙汰^{ごんじつさた}の真偽^{えんぐい}・淵底^{きわ}を究めて御尋^{しゆご}ね有^あり且は誠^{じやうたい}諦^{きんげん}の金言^{まか}に任せ
且は式条^{めいぶん}の明文^{きんあつ}に准^{きんあつ}し禁遏^{きんあつ}を加えられ^はば守護^{しゆご}の善神^{ぜんじん}は変^かを消^けし擁護^{まも}の諸天^{しよてん}は
咲^さを含^こまん、然^{ぜん}れば則^{そく}ち不善^{ぜんあく}惡行^{あくぎやう}の院主代^{いんしゅだい}・行智^{かうい}を改易^{かいえき}せられ將^はた又本主^{ほんしゅ}此
の重科^{のう}を脱^{だつ}れ難^{なん}からん何^{なん}ぞ実相寺^{じつそうじ}に例^{れい}如^{じゆ}せん、誤^{あやまり} まらざるの道理^{どうり}に任^{まか}せて
日秀^{にっしゆ}・日弁^{にっぺん}等は安堵^{あんど}の御成敗^{ごせいばい}を蒙^{こうむ}むり堂舎^{どうしや}を修理^{しゆり}せしめ天長地久^{てんちやうぢきゆう}御祈^{ぎとう}の
忠勤^{ちゆきん}を抽^ぬんでんと欲^{よつ}す、仍^{なほ}て状^{じやう}を勒^{ろく}し披陳^{ひちん}言上^{ごんじやう}上^{じやう}件^{けん}の如^{ごと}し。

弘安二年十月 日

沙門 日秀日弁等上

一〇〇 百六箇抄

(血脈抄) 弘安三年

854P

与日興

五十九歳

ぐとう

具勝本種・正法の実義・本・迹勝劣正伝、本因妙の教手本門の大師・

にちれんつつし

日蓮謹んで之を結要す・

まんねんくごしやびよう

万年救護写瓶の弟子日異に之を授与す云云、脱

種合して一百六箇之れ在り、靈山浄土・多宝塔中・久遠実成・無上覚王・

そうじよう

直授相承本・迹勝劣の口決相伝譜、久遠名字より已来た本因・本果の主・

ほんちじじゅうほうしん

本地自受用報身の垂迹 上行菩薩の再誕・本門の大師日蓮註要す。

いちなんさんぜん

理の一念三千・一心三觀本・迹

さんぜしよぶつ

三世諸仏の出世成道の脱益寿量の

ざり さんぜん

義理の三千は釈迦諸仏の仏

みようほうれんげきよう

心と妙法蓮華經の理觀の一心とに蘊在せ

る理なり。

だいっつう

大通今日・法華本・迹

くおんみようじほんにんみよう

久遠名字本因妙を本として中間・

げしゆ

今日・下種する故に久成を本と為し中

な

問・今日の本・迹を俱に迹と為る者なり。

応いちだい仏一代の本・迹

を利ためせん為に無作三身・寂光淨土じやくこうじょうど從り三

久遠下種・靈山得脱・妙法みょうほう値遇ちぐうの衆生しゆじやう

眼三智をもつて九界ちけんを知見し迹を垂れ權を

施ほどこす後に説く妙經みょうきやうの故に今日の本

迹共に迹これと之を得る者なり。

迹門しゃくもん為理円いつちの一致の本・迹

松柏風波・万声一如・諸法しよほう実相じつそうの理

上の觀心かんじんは応仏の域を引かえた

る故に本・迹とは別れども唯理ただの上の

法相ほつそうなれば本・迹理觀みようぼうの妙法と

顯あらわす、迹化しゃっけは付屬ふぞく無きが故ゆえに之これを弘ひろめず。

心法そくしんじやうぶつ即身成仏の本・迹

中間ちゆうげん・今日も迹門しゃくもんは心法の成仏じやうぶつなれ

ば華嚴・阿含あこん・方等ほうとう・般若はんや・法華ほっけの安

劣り本は勝るる者なり。
まさ

心法妙法蓮華經の本・迹
みようほうれんげきよう

・性相凝然・釈迦口を閉ぢて身
しょうそうぎようねん しゃか

を説く本門に至つて顕
ほんもん いた

に実相は久遠垂迹の本門
じつそう くおんすいじゃく ほんもん

従困至果・中間今日の本・迹
しか ちゆうげん ちゆうげん しゃくもん
は中間・今日の迹門を因と

樂行品に至るまで円理に同ずるが故に迹は
いた ゆえ

山家云く一切諸法・従本已来・不生不滅
いわ いっさいしよほう このかた ふしようふめつ

子言を絶す云云、方便品には理具の十界互具
ほうべん じゅつかいごく

本理上の法相なれば久遠に対して之を見る
ほんりそう ほうそう くおん これ

なる故に色法に非るなり。
ゆえ あらざ

像法の修行は天台・伝教弘通の本・迹
そうほう しゆぎよう てんだい でんぎようくつう

為し本門修行を果と為るなり。
な ほんもんしゆぎよう な

本果の妙法蓮華經の本・迹
は劣るなり、寿量の脱益・

の觀心なり、我等が為

・像法相似・觀行解了の

の修行の如く末法に入つ

為には虚戲の行と成る可

能く能く之を問う可し。

今日の本果は從因至果なれば本の本果に

在世一段の一品二半は舍利弗等の声聞の為

には教相なり、情は迹劣本勝なり、又滅後

行益も以て是くのごと、南岳・天台・伝教

て修行せば帶權隔歴の行と成つて我等が

きなり、日蓮は一向本・天台は一向迹・

疏じよの九くに云いわく爾前にぜんみな皆虚にぜんみなにして実じつならず迹門しゃくもんは一虚いちじつ一実ほんもん・本門ほんもんは
皆実かいじつ不虚ふこ云云、爾前にぜん二種とがの失しの事こと・一ひとには存行布故しじよう仍未聞權ほんもんとて迹門しゃくもん
の理いちねんさんぜんの一念三千しやくもんほうべんを隠いせり、二ふたには言始成故しじよう尚未發迹ほんもんとて本門ほんもんの久遠くおんを
隠しやくもんほうべんせり迹門い方便品いちねんさんぜん一念三千にじようさぶつ・二乗作仏しやくもんを説しやくもんいて爾膳じやくもん・二種とがの失し一つ脱
がれたり、本門ほんもんに至いたりて迹門しやくもんの十界因果じゅうかいいんがを打破すなわる是即ほんいん本因ほんが・本果
の法門ほうもんなり、実いちねんさんぜんの一念三千あらわも顕にじようさぶつれず二乗作仏しやくもんも定さだらず云云、世間せけんの罪つみ
に依よつて惡道あくどうに墮おちん者は爪上そうじようの土つち・仏法ぶつぽうに依よつて惡道あくどうに墮おちん者は
十方じゅうほうの土つちの如ごとし、故ゆゑは信心しんじんの根本こんぽんは本勝迹劣余いちだいはちまんの信心しんじんは枝葉しやうなり。
余行よぎように渡わたる法華經ほけきようの本・迹
受うけて説ゆゑく所の教けうなるが故ゆゑに一

名字みょうじの妙法みようほうを下種げしゆして熱脱ねつだつせし

部八卷ないしいちだい乃至しだい一代五時しだい・次第梯しだいは

本・迹なり。

在世觀心法華經の本・迹

一品二半は在世一段の觀心なり

天台の本門なり、日蓮が為には教相

の迹門なり云云。

脱益の妙法の教主の本・迹

所説の正法は本門なり能説の

教主釈尊は迹門なり、法自ら弘まら

ず人・法を弘むる故に人法ともに尊

し。

脱益の今此三界の教主本・迹

天上・天下唯我独尊は迹身門・

密表寿量品の今此三界は即本身

門なり。

脱益像法時剋弘經の本・迹

天台の本・迹は俱に日蓮が迹門な

り時剋亦天地の不同之在り。
じこくまたてんち ふどう

脱益迹門 修行の本・迹
しゃくもん しゆぎよう

像法 一日の徳は勝れたるなるべし。
ぞうほう すく

脱益迹門 自解仏乗 修行の本・迹
しゃくもん じげぶつじよう しゆぎよう

就いて之を思惟す可し。
つ これ しゆい べ

脱の五大尊の本・迹

弥勒・薬王は迹なり。
みろく やくおう

正法 一千年の修行の徳より
しょうほう しゆぎよう

熱益は迹・脱益は本なり之に

他受用応仏は本・普賢・文殊・
たじゆう ぶつ ふげんもんじゆ

脱の真俗二諦の本・迹

てんだいだいしぐつう
天台大師弘通の本・迹前十四品は

脱の真俗二諦の本・迹
迹門に約し後十四品は本門に約す云云、

ぜほうじゅうほういせけんじょうじゅう
是法住法位世間相常住文。

前十四品悉く流通分の本・迹

によらい ないしやう じよほん
如来の内証は序品より滅後正像末の

為なり、藥王菩薩は像法

てんだいこれ
の主天台是なり、密表の法師品に云く

今此三界文。脱益理觀一致の本・迹

脱益理觀一致の本・迹

こと
本・迹殊なりと雖も不思議一と云うは今日

乃至中間の本・迹は本・迹と分別す

ほんにんみやう
れども本因妙を下種として説く所の本

・迹なれば迹の本は本に非ず云云。

脱益戒体の本・迹

にぜん しゃくもん
爾前・迹門・熱益の戒躰を迹とし脱益の

戒躰かいたいを本と為なるなり、迹門しやくもんの・或は爾前あるにぜん

戒まさに勝まさるるなり。

脱しやつの迹化七面しやつけの本・迹

迹を本と為なし本を迹と行なず

るなり。

脱しやつの迹化本尊しやつけほんぞんの本・迹

四品は本と云云、是は一部八

卷なり云云。

脱益守護神しゅごしんの本・迹

等は迹なり、本因妙ほんにんみょうの影ばんすいを万水

大小だいしょうの戒すぐに勝ほんもんれ本門ほんもんの・或は爾前あるにぜん・迹門しやくもんの

像法ぞうほうには理觀りくわんを本と用もちうるなり故ゆえに天台てんだいは

一部ほんぞんを本尊ほんぞんと定さだむるに前十四品は迹・後十

守護しゅごする所ほつけの法華ほっけは本・守番たてまつし奉たてまつる処ところの神

に浮うべたる事は治定と云云。

脱益山王の本・迹さんのお

久遠・中間くおん ちゆうげんに受くる処ところの法華ほっけは本・夫れそ

より守り来る所は垂迹すいじゃくなり、下種げしゅは本

因妙なり云云。

脱迹十羅刹女じゅうらせつによの本・迹

久遠・中間くおん ちゆうげん・今日の理事は本・中間ちゆうげん・

大通だいっつう・今日出世冥守しゅっせする処ところは垂迹すいじゃくなり

り、下種げしゅは前の如ごとし云云。

脱迹付属ふぞくの本・迹

脱益の迹化付属しゃつけふぞくは中間ちゆうげん・大通だいっつうを本とし今日

初任の終を迹とするなり、受くる

正法しょうぽうは本・持つ方は迹なり。

脱迹開会かいえの本・迹

大通だいっつうの初を開いと云い今日初任の終りを会と

云うなり、本は大通だいっつう・迹は初任しうにんなり

り、初頭しうとうを開と云い終合しうがを会と云う云云、案

位も理上の案位なり。

脱益成仏じょうぶつの本・迹

寿量品じゅりょうばんは本・応仏は迹なり、無作三身むささんじん

寂光土じやくくどに任して三眼・三智をもつて九界

を知見ちけんす云云。

脱迹三種教相きょうそうの本・迹

二種は迹・無開会かいえ・一種は本有ほんぬの開会かいえな

り、一種は開顯・二種は不開会かいえ・

所従者属しよじゆつの教相きょそうなり云云。

脱の五味所従しよじゆつの本・迹

天台・伝教でんぎやうの五味は横豎おうじゆともに所従しよじゆつな

り、五味は本・修行しゆぎやうの人は迹た

り、在世ざいせ以て此かくの如ごとし云云。

脱迹父子ふしの本・迹

応仏は本・迹しやくぶつは迹なり、子・父の法ひろを弘

むるに世界の益せかいありと云云。

脱迹しだい師弟の本・迹

を弘ひろむ可べし弘ひろむ可べし云云。

かんのう

脱益感応の本・迹

移すなり、衆生久遠しゅじょうくおんに仏の善巧ぜんぎょうを

蒙こむるとは是これなり。

脱益寂じゃくしやう照の本・迹

解げり了ようなり、理即りそくの凡夫ほんぶは無駄有用の本・迹

なり。

脱益随縁ずいえんふへん不变の本・迹

も不变ふへんも共に理の一段の本

迹なり。

在世ざいせと像法ぞうぼうと之同しんじ真如しんによの義理ぎりなり、随縁ずいえん

脱益九法妙の本・迹

三法妙に各三法妙を具ぐすれば九法妙なり、

義理ぎり共に上に同こじ是れ我が弟子でし心しんに我が法まさ

法中の心法妙より起る所の生仏おこ

二妙なり本・迹知るべし。

脱益八相・八苦習合の本・迹

八相は本・八苦は迹・同躰の権實是なり。こんじつこれ

脱益灌頂等の本・迹

灌頂かんちようとは至極しごくなり後世ごしやう・仏ぼさつ・菩薩かんちようの灌頂

は法華經なり、迹門しやくもんの灌頂かんちようは方便ほうべん読

誦じゆ・欲令衆生開仏知見よくりやうしゆじやうかいぶつちけんなり、本門ほんもんの灌頂かんちようは

壽量品誦じゆりやうぽんとくじゆ・然我実成仏已来がじつじやうぶついにらいなり。

脱益説所戒壇本・迹かいだん

靈山りやうぜんは本・天台てんだい山は迹・久遠くおんと末法まつぽうとは事行

の戒・事戒・理戒・今日と像法ぞうぽうと

は理の戒躰かいたいなり。

脱益三世三仏利の本・迹さんぜ

世世番番の教主きやうしゆは本・所化しよけの衆生しゆじやうは迹な

り、世世このかた已来常に我が化を

受け番番しゅつせに出世し師ともと俱ともに生ず。

脱益証しょうみょう明・多宝たほうぶつ仏塔の本・迹

妙法蓮華經みょうほうれんげきょう皆是かいぜしんじつ真實は本・多宝たほうぶつ仏は迹・

迹門しやくもん八品乃至本門之を指

すなり云云。

脱益序正流通るつうげんぶん現文の本・迹

經文きょうもん釈義しゃくぎの如ごとく理しの上じょうの正宗しやうしゆう流通序文るつうじよぶんな

れども本は勝すぐれ迹は劣

るなり、然しかるに迹は本無ほんむ今有こんぬなれば久遠くおんの迹

を脱として今日の本

を説くなり云云。

脱益しょうじゆ撰受せんじゆく折伏しゃくふくの本・迹

天台てんだいは撰受しょうじゆを本とし折伏しゃくふくを迹とす、

其の故は像法ぞうほうは在世ざいせの熟益じゆく冥利みょうりの

故なり福智具足ぐそくの故と云えり。

脱益二妙の本・迹

相待妙そうたいみょうは迹・絶待妙ぜったいみょうは本・妙法みょうほうの外に更

に一句いっくの余経よきょう無し云云、独一法界ひとつかいの故

に絶待ぜったいと名なくるの釈これ之を思べう可べし。

脱益十妙の本・迹

本果妙は本・九妙は迹なり在世ざいせと天台てんだいとは

機上きの理なり、仏ほんにんは本因妙ほんにんみょうを本と

為なし所化しよけは本果妙を本と思えり。

脱益六重しよせつ所説の本・迹

已今なを本と為なし余は迹なり本・迹殊ことなりと

雖いへども不思議ふしぎ一と云云、理具の

本・迹なれば一部とも俱に迹の上の本・迹なり。

脱益六即そくしよはん所判の本・迹

妙覺みょうかくは本・余は迹なり。

玄九いわに云く初じゅうじゅうの十住なを因と為し十行を果と

為^なす十行を因とし十廻向^{えこう}を果とし十

廻向^{えこう}を因とし十地^{じゅうち}を果とし十地^{じゅうち}を因と為^なし

等覺^{とうかく}を果とし等覺^{とうかく}を因とし妙覺^{みょうかく}を果

と為^なす云云。

脱益十不二門の本・迹

理^{ふへん}の上の不變^{ふへん}の不二にして事行の不二門に

は非^{あらひ}なるなり。

脱益十界互具^{じゅっかいごぐ}の本・迹

理具^{じゅっかいごぐ}の十界互具^{じゅっかいごぐ}にして事行の互具^{つぶさ}には

非^{あら}ざるなり、九界の理^{ぶっかい}を仏界の

理に押し入る方^{むみょうないし}ならでは脱せざるなり。

脱益十二因縁四諦^{いんねんしたい}の本・迹

經^{いわ}に云く無明乃至老死云云、苦集滅^{くしゅう}は迹な

り道諦^{どうたい}は本なり。脱益

三土の本・迹 報土^{ほうど}は本・同居・方便^{ほうべん}は迹な

り。

妙樂云く雖脱在現本・迹理上の一致なり心は寿量品も文は現量なれども

上行所伝の本因妙を唱え顕して後は只久遠の教相にて成仏肝要の觀心に

は非ずと云云。籤一に云く本中体等迹と殊ならず脱益の妙覺乃至觀行相似等の

妙法蓮華經は理に即して事を含む、然も本・迹一致に非ず破廢立本云云。

玄七に云く權實は智に約し教に約す 化他不定の時施す所の權實八教なり両所

殊ならず久遠の本・今日の脱益と両所なり。

籤七に云く理淺深無し故に不殊と曰う本因・本果の理を今日中間にも寿量

顯本の理に推し入れて顯すと釈するなり。

籤七に云く經に約すれば是れ本門と雖も既に是れ今世迹中の本名本門と為す故に

知んぬ、今日正く迹中利益に當る、乃至本成已後俱に中間と名く中間本を顯す

に利益を得る者尚迹益を成ず況や復今日をや文。

意は久遠本巢の迹を中間・今日の本と為す、又久遠名字の妙法の影を中間今

日に垂迹する故に下種に対して脱益寿量を迹と得たる証拠に釈する是なり。

疏の一に云く衆生久遠に仏の善巧を蒙る 久遠下種靈山得脱。

籤十に云く故に知んぬ今日の逗会は昔の成熟の機に赴くことを靈山下種・久遠得脱の益。記二に云く本時の自行は唯円と合す本時とは本周妙の時なり。化他は不定亦八教有り中間今日・化導の儀式なり。

玄七に云く迹の本は本に非ず今日の本果妙の事なり。

本の迹は迹に非ず本因妙の事なり。本・迹殊なりと雖も不思議一なり本因妙の外全く迹無きなり迹門は即ち顯本の後は本無今有の方便無得道なりと中島の証俊何にと問われし時、俊範法印答えて云く不思議一と求めて云く其の義如何、答えて云く文在迹門義在本門云云と、会して云く迹門既に益無し本門益有り本・迹勝劣不思議一と云云。

妙楽云く権実は理なり本・迹は事なり天台云く本・迹を二經と為すと云えり如来の本・迹は理上の法相なり日蓮の本・迹は事行の法相なり

以上・脱の上の本・迹勝劣口決畢んぬ

事の一念三千・一心三觀の本迹

釈迦三世の諸仏・声聞・

縁覺・人天の唱る方は迹なり、南無

くおん
久遠元初直行の本迹ほんしやく

本果妙は余行よぎように渡わたる故ゆえに本の上の

ただちとな
直に唱となうるなり。

くおんじつじよう
久遠実成直体ほんしやくの本迹

みようじ
名字童形の位しか、釈迦しやくは迹なり

くおん
は久遠くおんを移せり。

くおん
久遠本果成道じようどうの本迹ほんしやく

ほんもん
本門ただちなり直に唱となえ奉たてまつる我等われらは迹なり。

くおんじじゆゆうほうしん
久遠自受用報身ほんしやくの本迹

みようほうれんげきよう
妙法蓮華經は本なり。

みようじほんにんみよう
名字本因妙は本種ほんもんなれば本門なり、

くおんしやくそん
迹なり、久遠釈尊くしようの口唱いまにちれんを今日蓮

くおんみようじ
久遠名字しようほうの正法しゆしは本種子なり、

がほんぎようぼさつどうこれ
我本行菩薩道是なり、日蓮にちれんが修行しゆぎよう

みようじ
名字みようほうの妙法ところを持つ処じきたいは直躰の

男は本・女は迹・知り難がたき勝劣しやうれつ

なり。
能く能く伝流口決す可き者な

妙法蓮華經なれば事理俱勝の本なり

久成本門為事円の本迹

色法即身成仏の本迹

より已後・我等は色法の成仏なり不渡

色法妙法蓮華經の本迹

・物物・事事・本・迹を顕す者なり、

又今日の二十八品・品品の内の勝劣は通号は本なり勝なり・別号は

迹なり劣なり云云。

妙樂疏記九に云く故に知んぬ迹の実は本に於て猶虚なり、籤十に云く、

り上行所伝の妙法は名字本有の

日蓮並に弟子檀袖郡等は迹なり。

親の義なり父の義なり、涌出品

余行の妙法は本・我等は迹なり。

男子と成つて名字の大法を聞き己

今日は初成を以て元始と為しな

爾前・迹門にぜん しゃくもんは大通を以て元始と為しな 迹門しゃくもん

本門ほんもんは本因を以て元始と

為す本門此の釈は元始本・迹・遠近勝劣を判ずるなり、本果妙は然

がじつじようぶついらいなおしゃくもん 我実成仏已来猶迹門なり、迹の本は本に非ざるなり、本因妙は

がほんぎようぼさつどうしんじつ 我本行菩薩道真実の本門なり、本の迹は迹に非ず云云、我が内証の寿量品

は迹化も知らず云云、重位秘蔵の義なり本・迹と分別する上は勝劣は治

定なれども末代には知り難き故云云。

くおんじゆうかこういん 久遠従果向因の本迹ほんしゃく

本果妙は釈迦仏・本因妙は上行菩薩

くおん 久遠の妙法は果・今日の寿量品はじゅうりようほん

花なるが故に従果向因の本・迹と

云うなり。

本因妙法蓮華經の本迹みようほうれんげきようほんしやく

・唱となうる日蓮は迹にちれんなり、手本てほんには不

行儀ぎようぎ是なり云云。

不渡余行法華經の本迹ふどよぎようほけきようほんしやく

唱となうる釈迦しゃかは迹いなり、今日蓮いまにちれんが修しゅう

ざるなり。

下種げしゆの法華經教主ほけきようきようしゆの本迹ほんしやく

り、我等われらが内証ないしようの寿量品じゆりようぽんとは脱益

其その教主きようしゆは某それがしなり。

全く余行よぎように分わかたざりし妙法みようほうは本

輕菩薩ぼさつの二十四字これ是なり、又其その

義理ぎり上に同じ・直達じきたつの法華ほっけは本門ほんもん・

行くは久遠名字くおんみょうじの振舞ふるまいに芥爾けに計けいも違たがわ

自受用身じじゆゆうしんは本・上行じようぎよう日蓮にちれんは迹な

寿量じゆりようの文底ほんにんみようの本因妙ほんにんみようの事ことなり、

げしゆ　こんしさんがい
下種の今此三界の主の本迹

にちれんこれ
は日蓮是なり、久遠は本・今日

りしやう
の利生なり。

げしゆ　かんじん　ほんしゃく
下種得法観心の本迹

かんじん
等の得法観心は迹なり、分別功德

くおん　てんじやう　てんが　ゆいがどくそん
久遠元始の天上・天下・唯我独尊

さんぜじやうじゆう　にちれん　みやうじ
は迹なり、三世常住の日蓮は名字

くおんげしゆ
久遠下種の得法は本なり、今日中間

みやうじしよずいき　ごと
品の名字初随喜の文の如し云云。

げしゅじげぶつじよう
下種自解仏乗の本迹 ほんしやく

じげぶつじよう
る方は自解仏乗の本なり、聞き得て後

にちれん まさ
り日蓮は勝るなり云云。

まっぽうじこく ぐつう
末法時刻の弘通の本迹 ほんしやく

くおん しゃくそん しゅぎよう
迹とするなり、久遠の釈尊の修行

しやうれつ
る勝劣なり云云。

ほんもんしゅぎよう
本門修行の本迹 ほんしやく

まっぽう しゅぎよう
末法の修行は本門なり、又中間今日の仏 ちゆうげん

り。

みようじ みようほう じようぎようしよでん
名字の妙法を上行所伝と聞き得

じゅじ われら ゆえ でんぎよう
受持する我等は迹なり、故に伝教よ

ほんにんみよう
本因妙を本とし今日寿量の脱益を じゆりよう

いまにちれん しゅぎよう
と今日蓮の修行とは芥子計も違わざ けし たが

しやうぞう しゅぎよう しゃくもん
正像二千年の修行は迹門なり、

しゅぎよう にちれん しゅぎよう まさ
の修行より日蓮の修行は勝るる者な

ほんもん
本門五大尊の本迹

じょうぎよう

ぼさつ
上行等の四菩薩は迹なり。

にちれんほんもんぐつう

ほんしやく
日蓮本門弘通の本迹

り云云。

ほんげ

いっち
本化事行一致の本迹

ほんにんみよう

本因妙の外に並に迹とて別して之無

てほん

の手本の義なり云云。

みなるつう

ほんしやく
後十四品皆流通の本迹

いだ

いっしう
を召し出す事は一向に滅後末法利

みなめつこ

るつう
後の十四品皆滅後の流通分なり

くおん
久遠本果の自受用報身如来は本なり、

じじゆゆうほうしんによらい

ほんにんみよう

がほんぎようぼさつどう
本因妙は本なり我本行菩薩道は迹な

こと

いえど
本・迹殊なりと雖も不思議一云云、

しゆえ

しやく
し故に一と釈する者なり、

しんじつ

しやうれつ
真実の勝劣

しやくそん

ほんにんみよう
本果妙の釈尊・本因妙の上行菩薩

じようぎようぼさつ

益の為なり、

しか

にちれんしゆぎよう
然る間・日蓮修行の時は

下種戒体の本迹げしゅ ほんしやく

の戒躰かいたいは純一無雜だいかいの大戒なり。

如し云云。ごと

本化七面ほんげの本迹ほんしやく

は理觀てんだいを本とするなり、天台の本

決、我家の本書は事の上の本なり。

下種三種法華げしゅ ほんしやくの本迹ほんしやく

隱密法華・本門おんみつ ほんもんは根本法華・迹本文こんぽん ほんつけ

本化本尊ほんげ ほんぞんの本迹ほんしやく

爾前・迹門にぜん しやくもんの戒躰かいたいは権實ごんじつ雜乱、本門ほんもん

勝劣しょうれつ天地水火尚及かなおおよばず具つぶさに戒躰抄かいいたいの

末法まつぽうには事行ざいせを本とし在ぞうほう世と像法ざうほうとに

書は理の上の事なれば一向迹門いっこうしやくもんの七

二種は迹なり一種は本なり、迹門しやくもんは

底なむの南無妙法蓮華經なむ ほうれんげきょうは顯說法華けんせつ ぽうけなり。

七字じゅうかいは本なり・余じゅうかいの十界じゅうかいは迹なり、

諸經・諸宗中王の本尊万物下種の種子無上

の大曼陀羅なり。

下種守護神の本迹

守護し奉る所の題目は本・護る所の

神明は迹なり、諸仏救世者・現無量神

力云云。

下種山王神の本迹

久遠に受くる所の妙法は本・中間・

今日・未来までも守り来る所の山王明

神は即迹なり。

下種十羅刹女の本迹

此の義理上に同じ唯神明と十女を本

・迹に対する時・十羅刹女は本・神明

は迹なり。

本門付属の本迹

久遠名字の時・受る所の妙法は本・

じょうぎよう

上行等は迹なり、

久遠くおん元初の結要けつちよう付属ふぞくは

にちれん

日蓮にちれん今日けふ寿量じゆりようの付属ふぞくと同意どういなり云云。

ほんもんかいえ

ほんしやく

本門開会の本迹

くおん

久遠くおんの本会ほんかいを本ほんと為なす、今日けふ寿量じゆりようの

脱だつを迹しゆと為なるなり・

う文。

げしゆじようぶつ

下種げしゆ成仏じようぶつの本迹

ほんにんみよう

本因ほんにん妙みようは本ほん・自受用身じじゆゆうしんは迹しやくもん・成仏じようぶつ

は難がたきに非あらず此この経きやうを持つこと難なんけれ

ばなり云云。

げしゆ

下種げしゆ三種きようそう教相きやうそうの本迹

しやくもん

二種しやくもんは迹門しやくもん・一種いしゆもんは本門ほんもんなり、本門ほんもん

きようそう

きようそう

しゆくん

の教相きやうそうは教相きやうそうの主君しゆくんなり、二種にしゆは

だいもく

二十八品にじはちふしん・一種いしゆは題目だいもくなり、題目だいもくは観心かんじん

の上の教相なり。きようそう

五味主の中の主の本迹ほんしやく

なり、五味は即本門・修行は即迹そく

門なり。

本種師弟不變の本迹ほんしやく

は迹なり、三世常恒不變の約束なりやくそく

本種父子常住の本迹ほんしやく

常住の父子は今日蓮が修行に殊じゆじゆう

ならず、世間相常住是なり。せけん じようじゆうこれ

四土具足の本迹ぐそく

三土は迹・常寂光土は本なり、四土じようじゆうこれ

即常寂光・寂光即四土の浄土は唯本門じやうじゆうこれ

弘經の道場なり。くきよう どうじよう

日蓮が五味は横豎共に五味の修行にちれん おうじゆ しゆぎよう

久遠実成の自受用身は本・上行菩薩くおんじつじよう じじゆゆうしん じようぎようぼさつ

義理上と同じ、久遠の名字即の俗諦ぎり ぐおん みやうじそく ぞくたい

下種げしゅ感かん応のう日月にちがつの本迹ほんしやく

てんだい

わ

天台云く不識天月但觀池月云云。

下種げしゅ随緣ずいえん不變ふへんの本迹ほんしやく

り、本有ほんぬの迹・本有ほんぬの一念三千是なり、

り、随緣不變一念寂照の本・迹なり。

下種げしゅ九法妙の本迹ほんしやく

迹なり。

下種げしゅ人天の本迹ほんしやく

は迹なり。

下種げしゅ八相・八苦習合実勝の本迹ほんしやく

八苦は迹・種の八苦は本

下種げしゅの仏は天月・脱仏は池月なり。

体用同時の眞実・眞如・一口の首題なり

り、随緣不變一念寂照の本・迹なり。

久遠下種の妙法は本・已來の九法は

久遠下種の妙法は本なり、已來の人天

脱の八相は迹・種の八相は本・脱の

なり煩惱即菩提・生死即涅槃・常在此

ふめつ
不滅と云えり。

げしゅさいご
下種最後直授摩頂の本迹 ほんしやく

むじょう
最極無上の灌頂なり法は本 かんちよう

げしゅぐつうかいだん
下種弘通戒壇実勝の本迹 ほんしやく

寺本堂なり。

て院号なるべし云云

げしゅじやくしよう
下種寂照・実事・体用無上の本迹 ほんしやく

り人は迹・仏は本なり

げしゅさんぜ
下種三世・三仏実益の本迹 ほんしやく

くおんいちねん
久遠一念元初の妙法を受け頂く事は みようほう

人は迹なり。

ひほうこんりゆう
三箇の秘法建立の勝地は富士山本門 ほんもん

じようぎよう
(上行院は祖師堂云云弘通所は総じ

ほんがく
生仏一如の事の上の本覚の寂照な じやくしよう

云云。

にちれん
日蓮は下種の利益・三世・九世・ げしゅりやくさんぜ

種熟脱・本有一念の利益なり、天

の修行の利益なり。

下種証明・多宝仏塔の本迹

妙法蓮華経皆是眞実の本なり、久遠

多宝は迹なり。

下順序正流通・文底の本迹

と定め現文の勝劣、報仏と

り。

下種折撰二門の本迹

台云く若しは破若しは立皆是法華の意

久遠実成・無始無終・本法の

の本師は妙法なり、本有実成釈迦・

応仏と天台とは正宗一品二半を本門

日蓮とは流通を本と定む文底の勝劣な

日蓮は折伏を本とし撰受を迹と定む

ほつけしゃくぶく 法華折伏・破権門理とは是なり。

げしゆ 下種二妙実行の本迹

本と定む、然るに相待は迹・絶待

げしゆ 下種十妙実体の本迹

な 為すなり、是れ眞実の本因・本果の

なり。

げしゆ 下種六重具膳の本迹

を本と為るなり云云。

げしゆ 下種六即実去の本迹

そく 即の六即・案位の理即は開会の

にちれん 日蓮は脱の二妙を迹と為し種の二妙を

は本云云。

にちれん 日蓮は本因妙を本と為し、余を迹と

ほうもん 法門

にちれん 日蓮は脱の六重を迹と為し、種の六重

にちれん 日蓮は脱の六即を迹と為し種の三世一

みようかく 妙覚・開会の理即は本覚の極果を本と

為るなり。

下種十二因縁の本迹

為し、久遠報仏所説の十二因縁を本

と定むるなり。

日蓮は応仏所説の十二因縁を迹と

下種十不二門の本迹

日蓮が十不二門は事上極極の事理一跡

用の不二門なり。

下種十界互具の本迹

唱え奉る妙法・仏界は本・唱うる

我等九界は迹なり、妙覺より理即の凡

夫までなり、実の十界互具の勝劣とは

是なり。

下種境智俱実の本迹

脱の境智は迹・種の境智は本なり、

名字即の境智は境智俱に本・觀行即

の境智きょうちは境智俱きょうちともに迹あとなり云云。

意いは十界じゅうかいの仏性ぶつしょう只ただ一口ひとくちに呼び顯あらわすなり、本因ほんいん口唱くしょうの勝まさる南無なむ妙法蓮華經みょうほうれんげきょうなり、初心しんしん成仏抄じょうぶつしょうの如ごときなり、弘く一いっに云いく理造作りぞうさくに非あらざる故ゆえに天真てんしんと曰い証智えんみよう円明えんみようの故ゆえに独朗どくろうと云いう云云、久遠くおんの理りと今日けふの理りと理に浩作しか無し、然しかれも久遠くおんは事上じじょうの理りなり今日は理上りじょうの理りなり故ゆえに知んぬ本因妙ほんいんみょうの理りは勝すぐれ今日けふ日本果妙にっぽんくわくの理りは劣ひくるなり是理じりの本・迹あとなり是かくのゆえの故ゆえに独朗どくろうと云いうなり、又また云いく独一どくいつ法界ほっかいの故ゆえに絶待ぜつたいと名なく云いう。

天台てんだいは唯大綱ただたいこうを存ぞんして綱目きやうもくを事こととせず此この釈しやくの意いは大綱たいこうは本・綱目きやうもくは迹あとなり、天台てんだい・伝教でんぎょうの修行しゆぎやうは綱目きやうもく・日蓮にちれん日興にっく等の修行しゆぎやうは大綱たいこうなり云云・如来秘密神通にょらいひみつじんつう之力意得可じきりうへし是事理じじりの如来にょらいの本・迹あとなり、秘密ひみつの如来にょらいは理性りしやうの如来にょらいなり、我等われらなり、神通じんつうの如来にょらいは世尊よじんなり秘密ひみつは本地神通ほんちじんつう

は垂迹なり、世世以来常受我化・我本行菩薩道所成寿命今猶未盡復
倍上数云云。

本・迹勝劣其理甚遠なり、仏若し説かずんば弥勒尚暗し何に況や

下地をや何に況や凡夫をや、本仏本化乃能究尽云云、妙樂云く具騰本

種 本勝迹劣 故に但名に於て以て本・迹を分つ下種名字妙法事行の

勝劣なる所を判ずるなり本・迹は身に約し位に約す 久遠名字即の身

と位との判なり本従り迹を垂れ迹は本に依る迹は究責に非ず、玄の一

に開示悟入是れ迹の要なりと雖も若し顕本し已れば即ち本要と成るな

り、籤の一に若し迹中の事理乃至権実無くんば何ぞ能く長寿の本を

顕さん云云。

已上程の本・迹勝劣畢んぬ

右此の血脈は本・迹勝劣其の数一百六箇之を注す数量に就て表事有

り之を覚知すべし・釈迦諸仏出世の本懐・眞実眞実・唯為一大事の
秘密なり、然る間・万年救護の為に之を記し留む。

就中六人の清弟を定むる表事は先先に沙汰するが如し云云、但し直授
結要付属は一人なり、白蓮阿闍梨日興を以て惣貫首と為して日蓮が正義

悉く以て毛頭程も之を残さず悉く付属せしめ畢んぬ、上首己下並に末
弟等異論無く尽未来際に至るまで予が存日の如く日興嫡嫡付法の上人
を以て惣貫首と仰ぐ可き者なり。

又五人並に已下の諸僧等日本乃至一閻闍浮捏の外・万国に之を流布せし
むと雖も日興嫡嫡相承の皇茶羅を以て本堂の正本尊と為す可きなり
所以は何ん在世滅後殊なりと雉も付属の儀式之同じ曹えば四大六万の直弟
の大昔属有りと維も上行儀棒を以て結要の大導師と定むるが如し、今以
つて是くの如し六人以下数輩の弟子有りと維も日興を以て結要付属の大
將と定むる者なり。

又弘長配流の日も文永流罪の時も其の外語処の大難の折節も先陣をか
け日蓮に影の形に随うが如くせしなり誰か之を疑わんや、又延山地頭発心
の根元は日興教化の力用なり、遁世の事甲斐の国三牧は日興衆志の故なり。

又御本尊書写の事・予が顕し奉るが如くなるべし、若し日蓮御判と書か
ずんは天稗地砥もよも用い給わじ 上行・無辺行と持国と淨行・
安立行と毘沙門との間には若悩乱者・頭破七分・有供養者・福過十号と
之を害す可きなり、經中の明文等意に任す可きか。

又立つ浪・吹く風・万物に洗いて本・迹を分け勝劣を弁ず可きなり。

一〇一

本因妙抄

870p

法華本門宗血脈相承事

本因妙の行者日蓮之を

記す。

予が外用の師・伝教大師生歳四十二歳の御時・仏立寺天台山大和尚に値い奉
り義道を落居し生死一大事の秘法を決したもうの日、大唐の貞元二十一年太歳
乙酉五月三日・三大章疏を伝え各七面七重の口決を以て治定し給えり、所謂
玄義七面の決とは正釈五重列名に約して決したもう。

一に依名判義の一面・名とは法の分位に於いて施設す・体とは宰主を義と為

す・宗とは所作しよさの究竟くきようなり、受持本因しよさの所作しよさに由つて口唱本果くしやうの究竟くきようを得、
用とは証体本因しやうたいほんいん・ほんが・本果くの上の功能徳行のうとくきやうなり、教とは誠かいを義と為す誠かいとは本
の爲の迹し為れば迹は即ち有名無実無得道ゆうめいむじつ とくどうなるを実相じつそうの名題は本・迹同じけれ
ば本・迹一致いっちと思惟おもひす可き事を大に誠いましめんが為に三種さんしゆの教相きやうそうを起て種熟脱しゆじゆくたつの
論不ろんふ論ろんを立つる者なり、經文きやうもん解釋明白かいしつめいなり、此こくの如く文・句句くくの名・妙
正しんぎの深義しんぎ・本・迹勝劣しやうれつの本意ほんいを顕あらわし給たまう者なり、然しかりと雖も天台たいたい傳でん教ぎやうの御
弘通くわうつうは偏ひとえに理りの上うへの法相ほつそう・迹化しやつけ付属ふぞく・像法ざうほうの理位りゐ・觀行くわんぎやう五品ごほんの教主きやうしゆなれば迹
を表と為して衆を救い、本を隠して裏に用る者なり甚深じんみふ甚深秘じんみふす可し秘ひす可
し。

二に仏意ぶつゐ・機情きけい・二意ふたゐの一面ひとへ、仏意ぶつゐは觀行くわんぎやう・相似そうじを本と為し機情きけいは理即りそく・名字みやうじ
を本と為す、何れも体用たいゆうを離はなれず体用たいゆうは法華ほつけの心智しんぎに依つて一代いちだい五時ごじの次第しだい
浅深せんしんを開拓かいたくす、次に機情きけいとは大通結縁だいつくけちえんの衆の爲に四味しやうみの調養ちやうようを設け法華ほつけに來

入す、本・迹二門乃至文文・句句此の二意を以て分別す可き者なり。

三に四重浅深の一面、名の四重有り・一には名体無常の義・爾前の諸經・

しよしゅう

諸宗なり、二には体実名仮・迹門・始覺無常なり、三には名体俱実・本門

ほんがくじようじゅう

本覺常住なり、四には名体不思議是れ觀心直達の南無妙法蓮華經なり、湛然

の云く、

雖脱在現・具騰本種・云云次に体の四重とは一に三諦隔歴の体・

にぜんこんきよう

爾前權教なり、二に理性円融の体・迹門十四品なり、三に三千本有の体・

ほんもん

本門十四品なり、四に自性不思議の体・我が内証の壽量品事行の一念三千

なり、次に宗の四重とは一に因果異性の宗・方便權教なり、二に因果同性の

宗・是れ迹門なり、三に因果並常の宗・即ち本門なり、四に因果一念の宗

・文に云く「芥爾も心有れば即ち三千を具す」と、是れ即ち末法純円・

けつようふぞく

結要付属の妙法なり云云、次に用の四重とは一に神通幻化の用・今經已前

あきら

に明かす所の仏・菩薩・出仮利生の事、二に普賢色身の用・即ち一身の中に

けつようふぞく

結要付属の妙法なり云云、次に用の四重とは一に神通幻化の用・今經已前

に明かす所の仏・菩薩・出仮利生の事、二に普賢色身の用・即ち一身の中に

於て十界じゅうかいを具する事なり本・迹いちだい一代五時に亘わたる、三に無作常住むさじょうじゅうの用・証道
八相むさじざい有り無作自在むさじざいの事なり、四に一心いっしんの化用ある・或説ある己身等こしんなり、次に教の
四重しじゅうとは一には但頭隔理たんけんの教・權小ごんしょうなり、二には教即実理そくの教・迹門しゃくもんなり、
三には自性会中の教・応仏の本門ほんもんなり、四には一心法界いっしんほつかいの教・寿量品じゅうりょうほんの文の
底ほうもんの法門・自受用報身如來じじゅうゆうほうしんにょらいの眞實しんじつの本門・久遠一念くおんいちねんの南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょう・雖脱
在現具騰本種しよつれつこれの勝劣是なり。

第四に八重淺深の一面なり、名の八重とは一に名体永別なうへつの名・二に名体不離
の名・三に従体流出るしゆつの名・四に名体具足ぐそくの名・五に本分常住ほんぶんじょうじゅうの名・六に果
海妙性むそうふしぎの名・七に無相不思議の名・八に自性己己ここの名・乃至教知ないしる可し云云、
文に任まかせて思惟しゆいす可きなり。

第五に還住げんじゅう当文の一面、四八の淺深を以て本・迹勝劣しようれつを知る可し。

第六に但入己心たんにゅうこしんの一面、始め大法東漸だいほうぜんより第十の判教だんけうに至るまで文の生起さきを闡

おき一向いっこうに心理しんりの勝劣しょうれつに入れて正意じょういを成なず可いし、謂いく大法だいほうとは即すなはち行者ぎやうじゃの己心こしんの異名いみょうなり云云、釈しやくの意は文義ぶんぎの広博こうはくを離はなれて首題しゅだいの理りを專せんにすと釈しやくし給たまふなり。

第七しちに出離生死しゆつりしやうじの一面いちめん、心しんは一代いちだい応仏おうぶつの寿量品じゆりやうぼんを迹あとと為なし内証ないしやうの寿量品じゆりやうぼんを本ほんと為なし釈尊しやくそん久遠名字くゑんみょうじ即すなはち身みと位ゐとに約やくして南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱なえ奉ほうる是こゝろを出離生死しゆつりしやうじの一面いちめんと名なく、本ほん・迹約身約位しやくみしやくゐの釈しやく・之これを思おもふ可いき者ものなり已上いじやう。

玄文おん畢はる。

文句もんくの七面しちめんの決けつとは、一いちに依名いめいの一面いちめん・其そのの義上かみの如ごとし、二にに感応かんのうの一面いちめん・三時弘經ぎきやうに亘わたる可いし、爾前にぜん・迹門しやくもんの正像しょうざう二千年弘經ぎきやうの感応かんのうより本門ほんもん末法弘通まっぽうくつうの感応かんのうは眞實眞實勝しんじつしんじつるなり、三さんに四教しきやうの一面いちめん・四しに五時ごじの一面いちめん・五ごに本ほん・迹しやくの一面いちめん・六ろくに体用たいゆうの一面いちめん・七しちに入己心こしんの一面いちめん・悉ことごとく皆みな其そのの心前しんぜんに同おなじ、智威ちゐ大師だいしの伝でんには玄義げんぎ・文句もんくの両部りやうぶには爾前にぜん・迹門しやくもんに各三十重かくさんじゆうの浅深せんしんを以もつて口決くけつ

し給^{たま}えり、具には伝^{でん}教大師七面決の如し。

又摩訶止觀^{まかしかん}一部には十重顯觀を立てて是を通じ給^{たま}えり、一は待教立觀・爾前^{にぜん}

・本・迹の三教を破して不思議実理の妙法蓮華經の觀を立つ、文に云く円頓^{とん}

者初緣実相と云云、迹門を理具の一念三千と云う脱益の法華は本・迹共に迹^{じつそう}

なり、本門を事行の一念三千と云う下種の法華は独一の本門なり、是を不思議^{ほんもん}

実理の妙觀と申すなり、二に廃教立觀・心は権教並に迹執を捨て本門首^{みようかん}

題の理を取つて事行に用いよとなり、三に開教顯觀文に云く一切諸法本是仏法^{もつ}

三諦の理を具するを名けて仏法と為す云何んぞ教を除かん云云文意は觀行理^{ぶつぽう}

觀の一念三千を開して名字事行の一念三千を顯す、大師の深意・釈尊の慈悲^{いちねんさんぜん}

・上行所伝の秘曲・是なり、四に会教顯觀・教相の法華を捨てて觀心の^{じようぎようしよでん}

法華を信ぜよと、五に住不思議顯觀・文に云く理は造作に非ず故に天真と曰う^{ほつけ}

・証智円明なるが故に独朗と云う云云、釈の意は口唱首題の理に造作無し、^{えんみよう}

今日熟脱の本・迹二門を迹と為し久遠名字の本門を本と為す、信心強盛にし
ただよねんなく なむ みょうほうれんげきよう
て唯余念無く南無妙法蓮華經と唱え奉れば凡身即仏身なり、是を天真独朗の
そくしんじようぶつ なす
即身成仏と名く。

問うて曰く前代に此の法門を知れる人之有りや、答えて曰く之有り、求め
ぜんたい ほうもん これあ

て云く誰人ぞや、示して云く釈尊是なり、尋ねて云く仏を除き奉つて余
だれびと しゃくそんこれ

に之を知れる人師論師有りや、答えて曰く天台の云く天親竜樹・内鑒冷然
にんしろんし てんだい てんじんりゆうじゆ ないがんれいねん

・外適時宜」と、今日南無妙法蓮華經は南岳・天台・妙楽・伝教の
げちやくぎぎ なむ みょうほうれんげきよう なんがく てんだい みょうらくく でんぎよう

内鑒冷然・外適時宜なり、内鑒冷然・外適時宜の修行の日は本・迹一致
ないがんれいねん げちやくぎぎ ないがんれいねん げちやくぎぎ しゆぎよう いっち

なり、有智無智を嫌わず円頓者初縁実相の理は造作に非ざる故に天真と
うち むち きら とん じっそう そつさく てんしん

曰う・証智円明の故に独朗と曰うと云つて理位觀行に趣かしめ利益を為
い えんみょう どうくろう おもむ りやく

し末法の時を待つ者なり、故に天台云く「但當時大利益を獲るのみに非ず
まつぽう てんだい とうじ りやく

後・五百歳遠く妙道に霑う」と云云、天台・章安・妙楽・伝教等の大
みょうどう うるお てんだい しょうあん みょうらくく でんぎよう

聖は内証は本・迹勝劣・外用は本・迹一致なり、其の故は教相も觀心も相似觀行解了の大師・時機亦像法なり、付属は即妄授余人・御身も亦迹化の衆・觀音・妙音・文殊・藥王等の化身なり、今末法は本化の薩・上行等の出世の境・本門流宣の時尅なり、何ぞ理觀を用いて事行を修せざらんや、予が所存は内証・外用共に本・迹勝劣なり、若し本・迹一致と修行せば本門の付属を失う物怪なり。

本・迹の不同は処処に之を書す、然りと雖も宿習拙き者本・迹に迷倒せんか若し本・迹勝劣を知らずんば未来の惡道最も不便なり宿業を恥じず還つて予を恨む可きか、我が弟子等の中にも天台傳教の解了の理觀を出でず、本・迹に就て一往勝劣再往一致の謬義を存して自他を迷惑せしめんの条・宿習の然らしむる所か、閻浮提第一の秘事為りと雖も万年救護の為に之を記し留る者なり、我が未来に於て予が仏法を破らん為に一切衆生

の元品がんぽんの大石・大六天まおうの魔王・師子身中の蝗蟲いなむしと成つて名を日蓮にちれんに仮かりて
本・迹一致いっちと云う邪義じゃぎを申し出して多の衆生しゅじょうを当に惡道に引くべし、若
し道心どうしん有らん者は彼等かれらの邪師じゃしを捨てて宜く予が正義せいぎに随うべし、正義せいぎとは
本・迹勝劣しょうれつの深秘具騰本種じんみつの実理なり、日蓮にちれん一期の大事だいじなれば弟子等でしに
も朝な夕なに教え亦一期あしたの所造等しぞう悉く此の義なり、然りと雖も迹執いえどを
出あでず・或あるは輕見惑ある・或あるは蔑思惑ある・或あるは癡塵沙惑じんじや・或あるは迷まよい無明惑、故に日蓮にちれん
が立義りつぎを用いざるか、予が教相きやうそう・觀心かんじんは理即りそく・名字みょうじ・愚惡愚見おろかの爲なり。
日蓮にちれんは名字即みょうじそくの位・弟子檀那でしだんなは理即りそくの位なり、上行じやうぎ所伝結要付屬しよでんけつやうふぞくの行儀ぎやうぎ
は教觀判乘きやうくわんぱんじやう・皆名字即みなみょうじそく・五味の主の修行しゆぎやうなり、故に教相きやうそうの次第しだい要用ように依る
可ただたいこうし唯大綱そんを存する時は余は綱目を事とせず彼は綱目・此れは大綱・彼は
綱目の教相きやうそうの主・此れは大綱首題たいこうの主・恐くは日蓮にちれんの行儀ぎやうぎには天台伝教てんだいでんぎやう
も及ばず、何に況や他師たしの行儀ぎやうぎに於てをや、唯在世八箇年たださいせはちかねの儀式を移して

滅後末法の行儀と為す、然りと雖も仏は熟脱の教主某は下種の法主なり、
彼の一品二半は舍利弗等の為には觀心たり、我等・凡夫の為には教相た
り、理即・短妄の凡夫の為の觀心は余行に渡らざる南無妙法蓮華經是な
り、是くの如く深義を知らざる僻人・出来して予が立義は教相辺外と思
う可き者なり、此等は皆宿業の拙き修因感果の至極せるなるべし、彼の
天台大師には三千人の弟子ありて章安一人朗然なり、伝教大師は三千人
の衆徒を置く義真已後は其れ無きが如し、今以て此くの如し数輩の弟子有
りと雖も疑心無く正義を伝うる者は希にして一二の小石の如し秘す可き
の法門なり。

第六に住教顯觀七に住教非觀八に覆教顯觀九に住教用觀十に住觀用教此の
五重は上の五重の如し思惟す可し。

問うて云く本・迹雖殊不思議一・本・迹の教に於て別して不思議の觀理を

顕わす故に と云云、機情に約すれば本・迹に於て久近の異有る可し、是れ一往の浅義なり、内証に約して之を論ずれば勝劣有る可からず再往の深義は不思議一なり云云如何が意を得可けんや、答えて云く住教顕観は煩悩即菩提・住教非観は法性寂然・覆教顕観は名字判教・住教用観は不思議一・住観用教は以顕妙円と申す大事是なり、教観不思議・天然本性の処に独一法界の妙観を立つ是を不思議の本・迹勝劣と云う亦絶対不思議の内証・不可得・言語道断の勝劣は天台・妙楽・伝教の残す所我が家の秘密観心直達の勝劣なり、迹と云う名ありといえども有名無実・本無今有の迹門なり、実に不思議の妙法は唯寿量品に限る故に不思議一と釈するなり、迹門の妙法蓮華經の題号は本門に似ると雖も義理・天地を隔つ成仏亦水火の不同なり、久遠名字の妙法蓮華經の朽木書なる故を顕さんが為に一と釈するなり末学疑網を残すこと勿れ、日蓮・靈山会上

・多宝塔中たほうたつちゅうに於て親たりしやくそん釈尊より直授し奉る秘法なり、甚深甚深秘す可し秘す可し伝う可し伝う可し。

摩訶止觀まかしかん七面口決とは依名判義・附文元意・寂照一相・教行証きやうぎやうしやう・六九

二識・絶諸思慮しよ・出離生死しゆつりしやうじの一面已上、一切諸法いつさいしよほう・從本已来・不生不滅・

性相凝然しやうそんぎやうねん・釈迦閉口しやか・身子絶言しんし云云、是は迹門天台しやくもんでんだい・止觀の内証なり、

本門日蓮の止觀は釈迦は口を開き文殊は言語す迹門不思議・不可説・

本門不思議可説の証拠しやうこの釈是なり、亦三大部に於て一同十異・

四同六異之有これあり、伝教仏立寺より之を口決す、一同とは名同なり、十異とは

名同義異みやうどういぎ・所依異しよえ・觀心異かんじん・傍正異ばんしやう・用教異き・对機異けんぼんりい・顯本理異しゆぎやう・

相承異そうじやう・元旨異むね、四同とは名同・義同しよえ・所依・同所・顯同なり、六異とは釈

異・大綱綱目異たいこう・本末異ほんまつ・觀心異かんじん・教内外觀異きやうないげいかん・自行化他異じぎやうけた・是なり、今要

を以て之を言わば迹本觀心同名異義いぎなり始終しじゆう・本末共に修行ほんまつも覺道しゆぎやうも時機かくどうも

感応も皆勝劣なり。
かんろう みなしょうれつ

此の下・二十四番勝劣なり、彼の本門は我が迹門・彼の勝は此の劣彼の深義
しやうれつ ほんもん しやくもん じんぎ
は予が浅義・彼の深理は此の浅理・彼が極位は此の浅位・彼の極果は此の
しよしん かんじん きやうそう じゆつしやう
初心・彼の観心は此の教相・彼の台星の国に出生す・此れは日天の国に
しゆつせ やくおう じやうきやう きのり おろか
出世す・彼は薬王・此れは上行・彼は解了の機を利す・此れは愚悪の機を
ぐつう しょうじ ぶきやう のつじやう
益す・彼の弘通は台星所居の高嶺なり・此の弘経は日王・能住の高峰なり・
じやうき こん ほんぞん とうじやう
彼は上機に教え・此れは下機を訓ず・彼は一部を以て本尊と為し・此れは七
ほんぞん そうたい
字を本尊と為す・彼は相對開会を表と為し・此れは絶対開会を表と為す・彼
げしゆ き じつそつ
は熟脱此れは下種・彼は衆機の為に円頓者初縁実相と示し・此れは万機の為
なむ みやうほうれんげきやう すす おんしつ るざい とうくじゆ
に南無妙法蓮華經と勧む・彼は悪口怨嫉・此れは遠島流罪・彼は一部を誦誦
いえど
すと雖も二字を読まざること之在り・此れは文文句句・悉く之を読む・彼は
みやうほう いっしんさんかん なす もんく こうく
正直の妙法の名を替えて一心三觀と名く・有の儘の大法に非ざれば帶權の法

に似たり此れは信謗ひし彼此・決定けつじよう成菩提ぼだい・南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱えかく、彼は諸宗しよしゆうの謬義みゆうぎを粗書おほき顯あらわすと雖も未だ言說いえどせず此れは身命しんみやうを惜おしまず他師たしの邪義じゃぎを糺ただし三類さんるいの強敵かうてきを招まねく・彼は安樂普賢あんらくふげんの説相せつそうに依り此れは勸持かんじ不輕ふぎやうの行相ちちを用ゆ・彼は一部に勝劣しょうれつを立て・此れは一部を迹と伝う・彼は応仏じじゆゆうほうしんのいきをひかう・此れは寿量品じゆりやうほんの文底もちを用ゆ・彼は応仏昇進じじゆゆうほうしんの自受用報身じじゆゆうほうしんの一念三千一心三觀いちねんさんぜんいつしんさんかん・此れは久遠元初くおんの自受用報身無作本有じじゆゆうほうしんむさほんぬの妙法みやうほうを直に唱う。

此れ等の深意しやつけは迹化ふげんの衆・普賢もんじゆ・文殊かんのん・觀音やくおう・藥王等の大菩薩ぼさつにも付屬ふぞくせざる所の大事だいじなれば知らざる所の秘法ひほうなり況や凡師ほんしに於てをや。

若し末法まつぽうに於て本・迹一致いっちと修行しゆぎやうし所化等しゆぎやうに教ゆる者ならば我が身も五逆罪ごぎやくざいを造らずして無間むげんに墮だち其れに隨從ずいじゆうせんともがらも阿鼻あびに沈あびまん事疑うたがい無き者なり、此の書一見ひとひとの人人ふげんもんじゆは理普賢智もんじゆ文殊一言さつたの薩しやうじ・生死絶

断の際・定光覺悟の大菩薩なり、伝教云く「文殊の利劍は六輪に通じ十
二の生類を切断す、一刀を下して妙法万方に勅するに自然に由お三諦を
出だす見聞覺知に明なり」此の一言の三際を示すに一言に如かず、若し未
達の者も一頌を開くに題目三般三諦同じく通知せざること無し、生仏自ら一
現なる是を一言の妙旨一教の玄義と謂う云云、天台の云く「一言三諦・刹
那成道・半偈成道」と云云、伝教の云く「仏界の智は九界を境と為し九
界の智は仏界を境と為す境智互に冥薰して凡聖常恒なる是を刹那成道と
謂う、三道即三徳と解れば諸惡に真善なる是を半偈成道と名く」今
会釈して云く諸仏菩薩の定光三昧も凡聖一如の証道刹那半偈の成道も我
が家の勝劣修行の南無妙法蓮華經の一言に摂し尽す者なり、此の血脈
を列ぬる事は末代浅学の者の予が仮字の消息を蔑如し天台の漢字の止觀
を見て眼目を迷わし心意を驚動し・或は仮字を漢字と成し・或は止觀

明静・前代未聞の見到に耽り本・迹一致の思を成す、我が内証の寿量品を

知らずして止觀に同じ但自見の僻見を本として予が立義を破失して惡道に

墮つ可き故に天台三大章疏の奥伝に属す、天台伝教等の秘し給える正義

・生死一大事の秘伝を書き顯し奉る事は且は恐れ有り且は憚り有り、広宣

流布の日公亭に於て心に之を披覽し奉るべし、会通を加える事は且は広宣

流布の爲且は末代浅学の爲なり又天台伝教の釈等も予が眞実の本懷に非

ざるか、未来嬰兒の弟子等彼を本懷かと思つべきものか。

去る文永の免許の日・爾前・迹門の謗法を対治し本門の正義を立て被れ

ば不日に豐歲ならむと申せしかば聞く人毎に舌を振り耳を塞ぐ、其の時

方人一人も無く唯我と日蓮与我日興計りなり。

問うて云く寿量品文底の大事と云う秘法如何、答えて云く唯密の正法なり

秘す可し秘す可し一代応仏のいきをひかえたる方は理の上の法相なれば一部

共に理の一念三千迹いちねんさんぜんの上の本門ほんもん寿量じゆりやうぞと得意せしむる事を脱益だつえきの文の上と

申すなり、文の底とは久遠実成くおんじつじやうの名字みやうじの妙法みやうほうを余行よぎやうにわたさず直達じきたつの正觀

事行の一念三千いちねんさんぜんの南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやう是なり、権實こんじつは理にほん今日本にほん・迹理しりなり本・迹は

事くおん久遠本・迹事こんじつなり、亦権實こんじつは約智やくち約教やくきやう一いち代だい應おん仏本ぶつほん・迹本しやくほん・迹は約身やくみ約位やくゐ名な字じ身み久遠本きうゑん

・迹亦云く雖脱在現具騰本種しやくほんといへり、釈尊しやくそん久遠名字きうゑんみやうじ即の位の御身おんみの修行しゆぎやうを

末法まつぽう今時にちれん・日蓮にちれんが名字みやうじ即の身に移せり理は造作ぞうさくに非ず故に天真てんしんと日にち証智じやうち

円明えんみやうの故に独朗どくろふと云うの行儀ぎやうぎ本門立行ほんもんたつぎやうの血脈けちみやく之を注す秘す可し秘す可し。

又日文字もんじの口伝くでん・産湯うぶゆの口決くけつ・二箇だいしは両大師りやうだいしの玄旨ぐんしにあつ、本尊ほんぞん七箇しちかの

口伝くでんは七面の決に之を表す教化弘經きやうけきやうの七箇しちかの伝でんは弘通者くつしやうの大要たいやうなり、又此

の血脈けちみやく並に本尊ほんぞんの大事だいじは日蓮にちれん嫡嫡ちやくちやく座主ざす伝法でんぽうの書しよ・塔中相承たうちゆうそうじやうの稟承りやうじやう唯

授一人の血脈けちみやくなり、相構あいかまええ相構そうかまええ秘す可し秘す可し伝でんう可し、法華本門ほつけほんもん

宗血脈相承畢けちみやくそうじやうんぬ。

弘安五太歳壬午十月十一日

日蓮 在御判

一〇二 産湯相承事

日興之を記す

878

御名乗りの事、始めは是生・実名は蓮長と申し奉る後には日蓮と御名乗り

有る御事は悲母梅菊女の二類にて御座す云云法号妙蓮禅尼の御物語り御座す事には、

我に不思議の御夢想あり、清澄寺に通夜申したりし時汝が志真に神妙な

り一閻浮提第一の宝を与えんと思うなり、東条片海に三国の太夫と云う者あ

り是を夫と定めよと云云、其の歳の春・三月廿四日の夜なり正に今も覚え侍る

なり。

我父母に後れ奉りて已後詮方なく遊女の如くなりし時御身の父に嫁げり、

・或夜の靈夢に日く叡山の頂に腰をかけて近江の湖水を以て手を洗うて富

士の山より日輪の出でたもうを懷き奉ると思つて打ち驚いて後・月水留ると

夢物語りを申し侍れば、父の太夫我も不思議なる御夢想を蒙むるなり、虚空

蔵菩薩ぼさつ貌吉き兒を御肩おたまに立て給う、此の少人は我が為にはため上行じょうぎょう菩提薩ぼだいさつなり日ひの下の人たの為には生財摩訶薩まかさつ・なり、亦一切有情またいっさいうじょうの為には行く末三世さんぜ常恒じょうこうの大導師どうしなり、是これを汝なんじに与えんとしたもつと見て後御事懷妊おんことかいにんの由よしを聞くと語り相かたいたりき、さてこそ御事おんことは聖人しょうにんなれ。

又産生うぶなままるべき夜の夢に富士山の頂いただきに登つて十方じゅうほうを見るに明なる事掌たなごころの内を見るが如ごとし三世明白さんぜなり、梵天ぼんでん・帝釈たいしゃく・四天王等しよてんこととの諸天しよてん悉ことごとく来下らいげして本地自受用報身ほんちじじゆゆうほうしん如来にょらいの垂迹すいじゃく・上行菩薩じょうぎょうぼさつの御身おんみを凡夫地ぼんぶに謙下けんげし給たまう御誕生みだんは唯今ただなり、無熱池むねつちの主阿那婆達多竜だつたりゆうおう王八くどく・功德水くどくすいを応まさに汲み来に青蓮華せいれんげを一本荷そい来れり、其の蓮より清水を出して御身おんみを浴あゆみし進まいらせ侍りはべけり、其その余あまれる水みづをば四天下してんげに灑そそぐに其その潤うるおいを受くる人畜じんちく・草木そうもく・国土こくど世間せけん・悉ことごとく金色こんぎよくの光明こうみょうを放しほうち四方そうもくの草木花ひ発このみらき菓成くわじやうる。

男女座を並べて有れども煩惱無く淤泥の中より出れども塵泥に染まず、譬え

蓮華の泥より出でて泥に染まざるが如し、人天・竜畜・共に白き蓮を各手

に捧げて日に向つて今此三界・皆是我有・其中衆生・悉是吾子・唯我一人・

能為救護と唱え奉ると見て驚けば則聖人出生し給えり、每自作是念・以

何令衆生・得入無上道・速成就仏身と苦我・き給う。

我少し寐みし様なりし時・梵帝等の諸天一同・音に唱えて言く善哉善哉・

善日童子・末法教主釈迦仏と三度唱えて作礼して去し給うと寤に見聞きし

なりと慥に語り給いしを聞し食しさては某は日蓮なりとの給いしなり。

聖人重ねて曰う様は日蓮が弟子檀那等・悲母の物語りと思ふべからず

即ち金言なり其の故は予が修行は兼ねて母の靈夢にありけり・日蓮は富士山

自然の名号なり、富士は郡名なり実名をば大日蓮華山と云うなり、我中道

を修行する故に是くの如く国をば日本と云い神をば日神と申し仏の童名をば

日種太子たいしと申しもつ予が童名をば善日・仮名は是生・実名は即ち日蓮すなわにちれんなり。

久遠下種くおんげしゅの南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうの守護神しゆごしんは我國あまくだに天下り始めし国は出雲なり、

出雲に日の御崎と云う所あり、天照太神てんしやうだいじん始めて天下り給う故に日の御崎と

申すなり。

我が釈尊しゃくそん・法華經ほけきやうを説き顯し給あらわいしより已来十羅刹女このかたじゆうらせつによと号す、十羅刹じゅうらせつと

天照太神てんしやうだいじんと釈尊しゃくそんと日蓮にちれんとは一体の異名本地垂迹いみようほんちすいじやくの利益広大なり、日神と月

神とを合して文字もんじを訓くんずれば十なり、十羅刹じゅうらせつと申すは諸神しよを一体に束ね合たばせ

たる深義じんぎなり、日蓮にちれんの日は即日神そく・昼なり蓮は即月神そく・夜なり、月は水を縁

とす蓮は水より生ずる故なり、又是生とは日の下の人を生むと書けり。

日蓮にちれんは天上てんじやう・天下てんかの一切衆生いつさいしゆじやうの主君しゆくんなり父母ふぼなり師匠ししやうなり、今久遠下種くおんげしゅ

の寿命品じゆりやうぽんに云く「今此三界こんしさんがい・皆是我有かいぜがうしゆくん主君しゆくんの義なり其中衆生ごちゆうしゆじやう悉是吾子しつぜごし父母ふぼの義なり

而今此処・多諸患難しよげんなん国土草木こくどそうもく唯我一人能為救護ただわれひとりのういくごしやう師匠ししやうの義なり」と云えり、三世さんぜ

じょうじょう 常恒に日蓮は今此三界の主なり、日蓮は大恩以事希有・憐愍教化利益・我等
むりょう 無量億劫誰能報者なるべし。

もし 若し日蓮が現在の弟子並びに未来の弟子等の中に日文字を名乗の上の字に
置かずんば自然の法罰を蒙ると知るべし、予が一期の功德は日文字に留め置
くと御説法ありし儘・日興謹んで之を記し奉る。

しょうにん 聖人の言く此の相承は日蓮嫡嫡一人の口決・唯授一人の秘伝なり神妙
とど 神妙とのたまいて留め畢んぬ。

一〇三 善無畏三蔵抄 文永七年 四十九歳御作 881P

与義浄房浄顕房 於鎌倉

ほけきよう 法華経は一代聖教の肝心八万法蔵の依りどころなり、大日経・華嚴経・
はんにやきよう 般若経・深密経等の諸の顕密の諸経は震旦・月氏・竜宮天上十方世界の
こくど 国土の諸仏の説教恒沙塵数なり、大海を硯の水とし三千大千世界の草木を筆

としても書き尽しがたき 經經きやうきやうの中をも・或は此れを見・或は計り推するに
ほけきほけきよう さいだいさいだいいち
法華經は最第一におはします、而るを印度等の宗日域の間に仏意を窺はざる
ろんしろんし にんしにんし
論師・人師多くして・或は大日經は法華經に勝れたり、・或る人人は法華經
だいにちきだいにちきよう おと
は大日經に劣れるのみならず華嚴經にも及ばず、・或る人人は法華經は
ねはんねはんぎよう はんにやきはんにやきよう じんみつ
涅槃經・般若經・深密經等には劣る、・或る人人は辺辺あり互に勝劣ある
ゆえゆえ ある いくわいくわ き したが しやうれつ
故に、・或る人の云く機に随つて勝劣あり時機に叶へば勝れ叶はざれば劣る、
ある いわいわ とくだう
・或る人の云く有門より得道すべき機あれば空門をそしり有門をほむ余も
これ 是を以て知るべしなんと申す、其の時の人人の中に此の法門を申しやぶる人
なればおろかなる国王等深く是を信ぜさせ給ひ田畠等を寄進して徒党あま
たになりぬ、其の義久く旧ぬれば只正法なんめりと打ち思つて疑ふ事もな
く過ぎ行く程に末世に彼等が論師・人師より智慧賢き人出来して、彼等が持
つところの論師・人師の立義一一に・或は所依の經經に相違するやう・或

いちだいしょうきよう
は一代聖教いしまつせんじんの始末浅深等を弁わきまえへざる故に専ら經文を以て責め申す時、各各
宗宗がんとその元祖じやぎたすの邪義がた扶ゆえけ難うしなき故に陳し方を失あひ、或あるは疑うたがつて云く論師ろんし・人師
定きようろんめて經論しょうもんに証文しょうもんありぬらん我が智お及よばざれば扶たすけがたし、或あるは疑うたがつて
云く我が師は上古じようこの賢哲けんてつなり今・我等われらは末代まつだいの愚人ぐにんなりなんと思おもう故に有徳ゆうとく
高人をかたらひえて怨あだのみなすなり。

しかりといへども予自他じたの偏党へんとうをなげすて論師ろんし・人師にんしの料簡りようけんを閣さしおいて専ら
經文きようもんによるに法華經ほけきようは勝すぐれて第一だいいちにおはすと意得こころづて侍はべるなり、法華經ほけきように勝すぐれ
ておはする御經もうありと申もうす人出来候しゅつたいはば思食こべし、此これは相似そうじの經文きようもんを見
たがえて申もうすか又人の私ひそかに我と經文きようもんをつくりて事を仏説ぶつせつによせて候か、智慧ちえ
おろかなる者わきまえ弁わきまえへずして仏説ぶつせつと号するなんと思食おほしめすべし、慧能えのが壇經ぜんどう善導ぜんどう
が觀念かんねん法門ほうもん經天竺てんじく震旦しんたん日本国にほんこくに私ひそかに經を説ときをける邪師じゃしそ其の数多かずおほし、其の外
私ひそかに經文きようもんを作り經文きようもんに私の言を加へなんどせる人人は是れ多し、然しかりと雖いえども

愚者ぐしゃは是これを真まと思おもうなり、譬たとえば天てんに日月にちがつにすぎたる星ほし有りなんと申まをせば眼まなこ無なき者はさもやなんと思おもはんが如ごとし、我が師しよは上古じやうこの賢哲けんてつ汝なんじは末代まつだいの愚人ぐにんな
んと申もうす事をば愚おろかなる者はさもやと思おもうなり、此この不審ふしんは今いまに始はじりたるにあ
らず陳隋ちんずいの代よに智ほし・法師ほしと申まをせし小僧こそう一人はべ侍はべりき後のちには二代てんしの天子おんしの御師おんし・
天台智者大師たいていぢやだいしと号たてまつし奉たてまつる、此この人始はじいやりしかりし時かんど但漢土かんど五百余年さんぞうの三藏さんぞう・
人師にんしを破やぶるのみならず月氏がつし・一千年ろんしの論師ろんしをも破やぶせしかば南北ちじんの智人等ちじん・雲
の如ごとく起おこり東西けんてつの賢哲等星ごの如ごとく列つらなりて雨ごの如ごとく難なんを下くだし風ごの如ごとく此この義ぎを
破やぶりしかども終ついに論師ろんし・人師にんしの偏邪へんじやの義ぎを破やぶして天台てんだい一宗せいきの正義ぎぎを立てにき、
日域にちいきの桓武かんむの御宇ぎように最澄さいちようと申もうす小僧侍こそうはべりき後のちには伝でん教大師ぎやうだいしと号たてまつし奉たてまつる、
欽明きんめい已来このかたの二百余年もろもろにんしの諸の人師しよしゆつの諸宗しよしゆつを破やぶりしかは始はじは諸人しよにんいかりをなせし
かども後のちには一同おんでしに御弟子おんでしとなりにき、此等これらの人人ひとびとの難なんに我等われらが元祖がんそは四依しえ
の論師ろんし上古けんてつの賢哲なんじなり汝なんじは像末ぼんぶぐにんの凡夫愚人なんなりとこそ難なんじ侍はべりしか、正像末しやうぞうまつ

には依るべからず実經の文に依るべきぞ人には依るべからず専ら道理に依るべきか、外道仏を難じて云く「汝は成劫の末住劫の始の愚人なり我等が本師は先代の智者二天三仙是なり」なんと申せしかども終に九十五種の外道とこそ捨てられしか。

日蓮八宗を勘へたるに法相宗・華嚴宗・三論宗等は権經に依つて・或は実經に同じ・或は実經を下せり、是れ論師・人師より誤りぬと見えぬ、俱舎・成実は子細ある上律宗などは小乗最下の宗なり、人師より論師権大乘より実大乘經なれば真言宗・大日經等は未だ華嚴經等に及ばず何に況や涅槃・法華經等に及ぶべしや、而るに善無畏三蔵は華嚴・法華・大日經等の勝劣を判ずる時・理同事勝の謬釈を作りしより已来・或はおごりをなして法華經は華嚴經にも劣りなん何に況や真言經に及ぶべしや、或は云く印・真言のなき事は法華經に諍ふべからず、或は云く天台宗の祖師

多く真言宗を勝ると云い世間の思いも真言宗勝れたるなんめりと思へり、
にちれん 日蓮此の事を計るに人多く迷ふ事なれば委細にかんがへたるなり、粗余処に
注せり見るべし又志あらん人人は存生の時習い伝ふべし人の多くおもふ
にはおそるべからず、又時節の久近にも依るべからず専ら經文と道理とに
依るべし、浄土宗は曇鸞道綽善導より誤り多くして多くの人人を邪見に入
れけるを日本の法然是をうけ取つて人ごとに念仏を信ぜしむるのみならず
てんか 天下の諸宗を皆失はんとするを叡山三千の大衆南都興福寺東大寺の八宗よ
り是をせく故に代代の国王勅宣を下し將軍家より御教書をなしてせけども
とどまらず、弥弥繁昌して返つて主上・上皇・万民等にいたるまで皆信状せ
り。

而るに日蓮は安房の国・東条片海の石中の賤民が子なり威徳なく有徳のも
のにあらず、なににつけてか南都北嶺のとどめがたき天子の虎牙の制止に叶

はざる念仏ねんぶつをふせぐべきとは思へども經文きやうもんを龜鏡きつきやうと定め天台・伝教てんだい だんぎやうの指南しなんを手ににぎりて建長五年けんちやうより今年こんねん文永七年ぶんえいに至るまで十七年いたが間是これを責めたるに日本にほんの念仏ねんぶつ大體留たいりり了ぬ眼前がんぜんに是れ見えたり、又口くちにすてぬ人人ひとびとはあれども心計こころりは念仏ねんぶつは生死しやうじをはなるる道にはあらざりけると思ふ、禅宗ぜんしゆう以てかくのごとくは多くの如し一を以て万まんを知れ真言しんこん等の諸宗しよしゆうの誤りあやまをだに留めん事手ににぎりておぼゆるなり、況や当世とうせの高僧こうそう真言師しんこんし等は其その智牛馬ぎゆうばにもおとり螢火けいかの光にもしかず只死ただせるものきゆうせんの手に弓きう箭せんをゆひつけねごとするものに物をとふがごとし、手に印いんを結び口くちに真言しんこんは誦じゆすれども其その心中しんちゆうには義理ぎりを弁わきまうつる事なし、結句けつこ慢心まんしんは山の如く高く欲心よくしんは海よりも深し、是は皆みな自らみずか經論きやうろんの勝劣しやうれつに迷ふより事起そしり祖師あやまの誤りあやまをたださざるによるなり、所詮しよせん智者ちしやは八万法藏はちまんほうぞうをも習ふべし十二部經じふにぶきやうをも学すべし、末代まつだい濁惡世じよくあくの愚人ぐにんは念仏ねんぶつ等の難行なんぎやう・易行いぎやう等をば抛なげうつて一向いっこうに法華經ほけきやうの題目だいもくを南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうと唱となえ給たまうべし、日輪にちりん

とうほう 東方の空に出でさせ給へば南浮の空皆明かなり大光を備へ給へる故なり、螢火
いま こくど は未だ国土を照さず宝珠は懷 中に持ぬれば万物皆ふらさずと云う事なし、
がしやく 瓦石は財をふらさず念仏等は法華經の題目に対すれば瓦石と宝珠と螢火と日
光との如し。

われら まなこ 我等が昧き眼を以て螢火の光を得て物の色を弁ふべしや、 旁 凡夫の叶い

がたき法は念仏・真言等の 小乗 權教なり、又我が師釈迦如来は一代 聖教

ないしはちまんほうぞう

乃至八万法蔵の説者なり、此の娑婆無仏の世の最先に出でさせ給いて一切

しゅじよう 衆生の眼目を開き給ふ御仏なり、

東西十方の諸仏・菩薩も皆此の仏の教な

るべし、譬えば皇帝已前は人父をしらずして畜生の如し、堯王已前は四季

を弁へず牛馬の癡なるに同じかりき、

仏世に出でさせ給はざりしには比丘

比丘尼の二衆もなく只男女二人にて候いき、今比丘・比丘尼の真言師等大日

如来を御本尊と定めて釈迦如来を下し念仏者等が阿弥陀仏を一向に持つて

釈迦如来しゃかによらいを抛なげうてたるも教主釈尊きょうしゅしゃくそんの比丘びく・比丘尼びくになり元祖がんそが誤あやまりを伝え来るなるべし。

此しの釈迦如来しゃかによらいは三さんの故こましまして他た仏ぶつにかはらせ給たまひて娑婆世界しゃばせかいの一切いっさい

衆生しゅじょうの有縁うえんの仏ぶつとなり給たまふ、一ひとには此しの娑婆世界しゃばせかいの一切いっさい衆生しゅじょうの世尊せそんにて・

おはします、阿弥陀仏あみだぶつは此この国こくの大王だいおうにはあらず釈迦仏しゃかぶつは譬たとえば我が国の主

上うへのごとし先さきず此この国こくの大王だいおうを敬たつて後あとに他国たこくの王わうをば敬たふべし、天照太神てんしやうだいじん

・正八幡宮等しやうはちまんぐうは我が国の本主ほんしゅなり迹化しやつけの後神あろわと顕あれさせ給たまふ、此この神かみにそむ

く人ひと・此この国こくの主しゅとなるべからず、されば天照太神てんしやうだいじんをば鏡かがみにうつし奉たてまつりて

内侍所ないじどころと号なづす、八幡大菩薩はちまんだいぼさつに勅使ちうし有あつて物申ものまうしあはさせ給たまいき、大覺世尊だいかくせそんは

我等われらが尊主そんしゅなり先さきづ御本尊ごほんそんと定さだむべし、一ひとには釈迦如来しゃかによらいは娑婆世界しゃばせかいの一切いっさい

衆生しゅじょうの父母ふぼなり、先さきづ我が父母ふぼを孝こし後あとに他人たにんの父母ふぼには及およばすべし、例れいせ

ば周の武王しうのぶわうは父ちちの形かたちを木像もくざうに造つくつて車くるまにのせて戦いくさの大將だいしやうと定さだめて天感てんかんを蒙かこり

いのちゆう

殷の紂王をうつ、舜王は父の眼の盲たるをなげきて涙をながし手をもつて

のごひしかば本のごとく眼あきにけり、此の仏も又是くの如く我等衆生の

まなこ

眼をば開仏知見とは開き給いしか、いまだ他仏は開き給はず、三には此の仏

しゃばせかい

は娑婆世界の一切衆生の本師なり、此の仏は賢劫第九人寿百歳の時中天竺

じようばんだいおう

浄飯大王の御子十九にして出家し三十にして成道し五十余年が間・一代

じようぎやう

聖教を説き八十にして御入滅舍利を留めて一切衆生を正像末に救ひ

たま

給ふ、阿弥陀如来薬師・仏大日等は他土の仏にして此の世界の世尊にてはま

しまさず、此の娑婆世界は

十方世界の最下の処譬えば此の国土の中の獄

門の如し、

十方世界の中の十悪・五逆誹謗正法の重罪逆罪の者を諸仏

にょらいひんずい

如来擯出し給いしを釈迦如来此の土にあつめ給ふ、三悪並びに無間・大城に

おそ

堕ちて其の苦をつぐのひて人中天上には生れたれども其の罪の余残ありて

しやうほう

ややもすれば正法を謗し智者を罵り罪つくりやすし、例せば身子は阿羅漢な

れども瞋恚のけしきあり、畢陵は

見思を断ぜしかども慢心の形みゆ、難陀は婬欲を断じても女人に交る心あり、

煩惱を断じたれども余残あり何に況や凡夫にをいてをや、されば釈迦如来の

御名をば能忍と名けて此の土に入り給うに一切衆生の誹謗をとがめずよく

忍び給ふ故なり、此等の秘術は他仏のかけ給へるところなり、阿弥陀仏等の

諸仏・世尊悲願をおこさせ給いて心にははぢをおぼしめして還つて此の界に

かよひ四十八願十二大願などは起させ給ふなるべし、観世音等の他土の菩薩

も亦復是くの如し、仏には常平等の時は一切諸仏は差別なけれども常差別の

時は各各に十方世界に土をしめて有縁無縁を分ち給ふ、大通智勝仏の

十六王子十方に土をしめて一一に我が弟子を救ひ給ふ、其の中に釈迦如来は

此土に当り給ふ我等衆生も又生を娑婆世界に受けぬ、いかにも釈迦如来の

教化をばはなるべからず而りといへども人皆是を知らず委く尋ねあきらめば

ただわれひとりのういくこ
唯我一人能為救護と申して釈迦如来の御手を離るべからず、而れば此の土の
いっさいしゅじょう
一切衆生・生死を厭ひ御本尊を崇めんとおぼしめさば必ず先ず釈尊を木画
の像に顕わして御本尊と定めさせ給いて其の後力おはしまさば弥陀等の他仏
にも及ぶべし。

しかとうせ
然るを当世聖行なき此の土の人人の仏をつくりかかせ給うに先ず他仏をさ
きとするは其の仏の御本意にも釈迦如来の御本意にも叶ふべからざる上世間
の礼儀にもはづれて候、されば優填大王の赤梅檀いまだ他仏をば・きざませ
給はず、千塔王の画像も釈迦如来なり、而るを諸大乘經による人人・我が
所依の經經を諸經に勝れたりと思ふ故に教主釈尊をば次さまにし給ふ、
一切の真言師は大日經は諸經に勝れたりと思ふ故に此の經に詮とする大日
如来を我等が有縁の仏と思ひ念仏者等は觀經等を信ずる故に阿弥陀仏を娑婆
有縁の仏と思ふ、当世はことに善導・法然等が邪義を正義と思ひて浄土の

さんぶきよう

三部経を指南とする故に十造る寺は八九は阿弥陀仏を本尊とす、在家出家一

家十家百家千家にいたるまで持仏堂の仏は阿弥陀なり、其の外木画の像一家

に千仏万仏まします大旨は阿弥陀仏なり、而るに当世の智者とおぼしき人

是を見てわざはひとは思はずして我が意に相叶ふ故に只称美讃歎の心のみあ

り、只一向悪人にして因果の道理をも弁へず一仏をも持たざる者は還つて失

なきへんもありぬべし、我等が父母世尊は主師親の三徳を備えて一切の仏に

擯出せられたる我等を唯我一人能為救護とはげませ給ふ、其の恩大海よりも

深し其の恩大地よりも厚し其の恩虚空よりも広し、二つの眼をぬいて仏前に

空の星の数備ふとも身の皮を剥いで百千万天井にはるとも涙を悶伽の水とし

て千万億劫仏前に花を備ふとも身の肉血を無量劫仏前に山の如く積み大海の

如く湛ふとも此の仏の一分の御恩を報じ尽しがたし。

而るを当世の僻見の学者等設ひ八万法蔵を極め十二部経を誦んじ大小の

戒品かいぼんを堅たもく持たまち給たまふ智ち者しやなりとも此このの道理どうりに背そむかは惡道あくどうを免まぬるべからずと
思食おほしめすべし、例れいせば善無畏ぜんむい三藏さんぞうは真言宗しんこんしゅうの元祖がんそ烏菟奈国だいおうの大王だいう・仏種王ぶつしゆの
太子たいしなり、教主きようしゆしやくそん釈尊しやくそんは十九しゅうじゅうにして出家しゅっけし給たまいき此このの三藏さんぞうは十三さんじゅうにして位を
捨がて月氏めつし七十箇国ばんり九万里めくを歩き回めぐりて諸經しよきようしよ諸論しよしゅう諸宗しよしゅうを習ならひ伝てんへ北天竺てんじくこんぞく金粟
王わうの塔たつの下したにして天あに仰あぎ祈請きしやうを致いたし給たまえるに虚空こくうの中に大日如来だいにちにやらいを中央ちゆうわうと
して胎藏界たいざうの曼荼羅まんだら頭あれさせ給たまふ、慈悲じひの余あり此このの正法しやうほうを辺土へんに弘ひろめんと
思食おほしめして漢土かんとに入り給たまひ玄宗皇帝げんそうてういに秘法ひほうを授たけ奉たてまつかんばつ
しかば三日さんじつが内に天てんより雨あめふりしなり、此このの三藏さんぞうは千二百余尊よそんの種子しゆしんぎやう尊形そんぎやう三
摩耶まや一事いじもくもりなし、当世とうせの東寺等とうじの一切いっさいの真言宗しんこんしゅう一人ひとりも此このの御弟子おんでしに
非あらざるはなし、而しかるに此このの三藏さんぞう一時いっじに頓死とんしありき数多あまたの獄卒ごくそつ來きつて鉄繩てつじゆ七しちすぢ
懸かけたてまつり閻魔王宮えんまおうきやうに至いたる此このの事第一だいいちの不審ふしんなり、いかなる罪つみあつて此
の責あに値あひ給たまひけるやらん、今生こんじやうは十惡じゅうあくは有ありもやすらん五逆罪ごぎやくざいは造つくらず

過去かこを尋たずねれば大國たいこくの王たまとなり給たまふ事を勘かんうるに十善戒じゅうぜんかいを堅たもく持たもち五百の
仏陀ぶつだに仕たまへ給たまふなり何いすれの罪つみかあらん、其その上十三じゅうさんにして位しめつけを捨て出家たまいし給たまい
き閻浮えんぶだいいち第一ぼだいしんの菩提心ぼだいしんなるべし、過去かこ・現在げんざいの輕重けいちようの罪つみも滅そすらん其その上月がっし氏
に流布るふする所の經論きようろん諸宗しよしゆうを習ならい極きわめ給たまいしなり何つみの罪つみか消えざらん、又
真言しんごん密教みつぎょうは他ことに異なる法はふなるべし一印しんごん一真言しんごんなれども手に結び口くちに誦じゆすれば
三世さんぜの重罪じゅうざいも滅いせずと云いふことなし、無量むりよう俱低劫きだいきやくの間ま作る所の衆しゆの罪障ざいしやうも
此まんだらの曼荼羅まんだらを見れば一時いちじに皆消滅みなしやうめつすところ申し候もつへ、況しかや此さんぞうの三蔵さんぞうは千二百
余尊よそんの印しんごん・真言しんごんを諳しんごんに浮そくしんじやうぶつべ即身成仏かんどうきやうの觀道鏡かかに懸かんちやうり両部灌かんちやう頂おんときだいにちの御時おんときだいにち大日
覺王かくおうとなり給たまい、如何いかんにして閻魔えんまの責せきに豫たまり給たまいけるやらん、日蓮にちれんは顯密けんみつ
二道にどうの中に勝すぐれさせ給たまいて我等われら易しやうじと生死しやうじを離はなるべき教しやうじに入いらんと思おもひ候まうい
て真言しんごんの秘教ひぎやうをあらあら習ならひ此たずの事かんがを尋たずね勘かんうるに一人ひとりとして答こたをする人ひとな
し、此あくどうの人惡道まぬかを免まぬかれずば当世とうせの一切いっさいの真言しんごん並びに一印しんごん一真言しんごんの道俗どうぞく三惡道さんあくどう

の罪つみを免まぬるべきや。

日蓮にちれん此この事を委くわく勘かんうるに二つの失とが有あつて閻魔王えんまおうの責あずかに予たまり給たまへり、一つ

だいになきよう

ほけきよう

あらねはんぎよう

けこんぎよう

はんになきよう

およ

には大日だい経には法華ほけ経きに劣せうるのみに非あらず涅槃ねはん経ぎ・華嚴けこん経ぎ・般若はん経に等ぎにも及およば

ほけきよう

すく

ほうほう

とが

だいにちにやらい

ざる経きやうにて候こうを法華ほけ経きに勝かれたりとする謗法ぼうほうの失とがなり、二つには大日だい如來には

しゃくそん

ふんじん

しかだいにちにやらい

きようしゅしゃくそん

すく

びやつけん

釈尊しゃくそんの分身ふんじんなり而しかるを大日だい如來には教主きやうしゅ釈尊しゃくそんに勝かれたりと思おもひし僻見びやくけんなり、

ほうぼう

つみ

むりようこ

よそん

あくどう

まぬら

此この謗法ぼうほうの罪つみは無量劫むりようこの間かん・千二百余尊よそんの法ほふを行おこなずとも惡道あくどうを免まぬるべからず、

さんぞう

とがまぬか

ゆえ

しよそん

しんこん

しんこん

しんこん

しんこん

しんこん

しんこん

しんこん

しんこん

しんこん

此この三藏さんぞう此この失とが免まぬれ難がたき故ゆえに諸尊しよそんの印いん・真言しんごんを作つくせども叶かなはざりしかば

ほけきよう

ひゆほん

こんしさんがい

かいぜがうごちゆうしゆじようしつげごししこんししよ

しんこん

しんこん

しんこん

しんこん

しんこん

しんこん

しんこん

しんこん

法華ほふ經きやう第二ふた譬喻へいよ品の今こん此こ三界さんかい・皆是こゝ我われ有あ其その中ちゆう衆生しゆじやう悉しつ是こゝ吾われ子こ而しか今こん此こ處こゝ・多諸たしよ

げんなんただわれひとりのういくこ

患難わんなん唯ただ我われ一人ひとり能よ為な救護きうごの文ぶんを唱となへて鉄てつの繩じゆを免まぬれさせ給たまいき、而しかるに

ぜんむいいいこ

しんごんし

だいにちきよう

いつさいきよう

まさ

あら

ほけきよう

ちようか

ちようか

ちようか

ちようか

ちようか

善無畏ぜんむい已い後ごの真言師しんごんし等らは大日だい經には一切いっさい經きやうに勝かるるのみに非あらず法華ほふ經きやうに超過ちようか

せり、

ある

ほけきよう

けこんぎよう

けこんぎよう

けこんぎよう

けこんぎよう

けこんぎよう

けこんぎよう

けこんぎよう

けこんぎよう

けこんぎよう

けこんぎよう

けこんぎよう

けこんぎよう

けこんぎよう

或あるは法華ほふ經きやうは華嚴けこん經ぎにも劣せうるなんと申もうす人もあり此等こゝは人ひとは異ことなれど

そ

ほうほう

つみ

つみ

つみ

つみ

つみ

つみ

つみ

つみ

つみ

つみ

つみ

つみ

つみ

つみ

つみ

つみ

も其そのの謗法ぼうほうの罪つみは同じおなじきか、又また善無畏ぜんむい三藏さんぞう法華ほふ經きやうと大日だい經にと大事だいじとすべしと

深理じんりをば同たぜさせ給たまいしかども印しんこんと真言まごんとは法華經ほけきょうは大日經だいにちきょうに劣りけるとお
ぼせし僻見びやっけん計りばかなり、其その已後いごの真言師等しんごんしは大事だいじの理りをも法華經ほけきょうは劣れりと
思おもへり、印しんこん・真言まごんは又また申もうすに及およばず謗法ぼうほうの罪遥つみはるかにかさみたり、閻魔えんまの責せきにて
墮獄ごくの苦くるを延のぶべしとも見えず直ただちに阿鼻あびの炎えんをや招まねくらん、大日經だいにちきょうには本
一念三千いちねんさんぜんの深理じんりなし此この理りは法華經ほけきょうに限るべし、善無畏三藏天台大師ぜんむいさんぞうてんだいだいしの法華經ほけきょう
の深理じんりを讀いみ出ででさせ給たまいしを盗ぬすみ取とつて大日經だいにちきょうに入れ法華經ほけきょうの莊嚴そうごんとして
説とかれて候大日經だいにちきょうの印しんこん・真言まごんを彼の經きやけんの得とく分ぶんと思おもへり、理りも同どうじと申もうすは
僻見びやっけんなり真言しんごん・印契いんけいを得え分ぶんと思おもふも邪見じゃけんなり、譬たとえば人ひとの下人ろくごんの六根ろくこんは主しゅの
物ものなるべし而しかるを我われが財ずいと思おもふ故ゆゑに多おほくの失出とがいで來きる、此この譬たとえを似にて諸經しよきやう
を解とるべし劣る經きやうに説はつもんく法門ほつもんは勝すぐれたる經きやうの得とく分ぶんと成なるべきなり。

而しかるを日蓮にちれんは安房あわの国くに・東条とうじやうの郷清澄山きやうしやうじやうの住人ぢゆうじんなり、幼少ようしやうの時ときより虚空こくう
蔵菩薩ぼさつに願がんを立てて云いく日本第一にほんだいいちの智者ちしやとなし給たまへと云云、虚空蔵菩薩こくうぼさつ眼前がんぜん

に高僧こうそうとならせ給たまいて明星めいせいの如ごとくなる智慧ちえの宝珠ほうしゆを授けさせ給たまいき、其そのし
るしにや日本国にほんこくの八宗はっしゅう並びに禅宗ぜんしゅう・念仏宗ねんぶつしゅう等の大綱粗伺たいこうほほひ侍りぬ、殊ことには
けんちよう
建長五年の比より今文永七年に至るまで此の十六七年の間禅宗ぜんしゅうと念仏宗ねんぶつしゅうと
を難なんずる故に禅宗ぜんしゅう・念仏宗ねんぶつしゅうの学者蜂がくしやの如ごとく起り雲うんの如ごとく集る、是これをつむる
事一言二言には過ぎず結句けつこは天台てんだい・真言等しんごんの学者自宗がくしやじしゅうの廃立はいりゅうを習ならひ失うしないて我
が心こころと他宗たしゅうに同じ在家ざいけの信をなせる事なれば彼の邪見じゃけんの宗を扶たすけんが為ために
てんだい しんごん ねんぶつしゅう ぜんしゅう
天台・真言は念仏宗・禅宗に等しと料簡りょうけんしなして日蓮にちれんを破はするなり、此これ
は日蓮にちれんを破はする様なれども我と天台てんだい・真言等しんごんを失うしなふ者なるべし能よく能よく恥はず
べき事なり。

此この諸經しよきようしよ諸論しよしゅう諸宗しよしゅうの失とがを弁わきまつる事は虚空蔵菩薩こくうぼさつの御利生本師道善御房りしやうほんしどうぜんごぼうの
御恩ごおんなるべし。 龜魚きぎよすら恩を報ずる事あり何いかに況や人倫じんりんをや、此この恩を報ぜ
んが為ために清澄山せいじやうざんに於おいて仏法ぶつぽうを弘ひろめ道善御房どうぜんごぼうを導たてまつき奉らんと欲ほす、而しかに此この

人愚癡ぐちにおはする上念仏ねんぶつ者なり三惡道さんあくどうを免るべしとも見え、而も又日蓮にちれんが
教訓きょうくんを用ふべき人にあらず然れども文永元年十一月十四日西条華房ほうの僧坊そうぼうに
して見参けんさんに入りし時・彼の人の云く我智慧ちえなければ請用しょうようの望もなし、年老い
ていらへなければ念仏ねんぶつの名僧をも立てず世間せけんに弘まる事なれば唯南無ただなむ
阿弥陀仏あみだぶつと申す計りばかなり、又我が心より起こらざれども事の縁有つて阿弥陀仏あみだぶつ
を五体まで作り奉る是れ又過去の宿習しゆくじゅうなるべし、此の科とがに依つて地獄じごくに墮おつ
べきや等云云、爾時そのときに日蓮意にちれんに念はく別して中違たがひまいらす事こと無けれども
東条左衛門入道蓮智とうじょうさえもんにゅうちが事に依つて此の十余年の間は見奉らず但し中不和ふわな
るが如し、穩便おんびんの義を存じおだやかに申す事こそ礼儀なれとは思ひしかども
生死界しょうじの習ならひ老少不定ふじょうなり又二度見参けんさんの事難なんかるべし、此の人の兄道義房ぼう義
尚此の人に向つて無間地獄むげんじごくに墮おつべき人と申して有りしが臨終りんじゅう思りう様にもま
しまさざりけるやらん、此の人ゆえも又しかるべしと哀れに思ひし故に思ひ切つ

て強強に申したりき、阿弥陀仏を五体作り給へるは五度無間地獄に墮ち給ふ
べし其の故は正直捨方便の法華經に釈迦如来は我等が親父阿弥陀仏は伯父と
説かせ給ふ、我が伯父をば五体まで作り供養せさせ給いて親父をば一体も
造り給はざりけるは豈不孝の人に非ずや、中中山人海人などが東西をしら
ず一善をも修せざる者は還つて罪浅き者なるべし、当世の道心者が後世を願
ふとも法華經・釈迦仏をば打ち捨て阿弥陀仏念仏などを念念に捨て申さざ
るはいかがあるべかるらん、打ち見る処は善人とは見えたれども親を捨てて
他人につく失免るべしとは見えず、一向悪人はいまだ仏法に帰せず釈迦仏を
捨て奉る失も見えず縁有つて信ずる辺もや有らんずらん、善導・法然並びに
当世の学者等が邪義に就いて阿弥陀仏を本尊として一向に念仏を申す人人は
多生曠劫をふるとも此の邪見を翻へして釈迦仏・法華經に歸すべしとは見
えず、されば雙林最後の涅槃經に十惡・五逆よりも過ぎておそろしき者を出

ださせ給ふに謗法闡提と申して二百五十戒を持ち三衣一鉢を身に纏へる智者
共の中にこそ有るべしと見え侍れとこまごまと申して候いしかば此の人もこ
ころえすげに思いて・おはしき、傍座の人人もこころえすげにをもはれしか
ども其の後承りしに法華經を持たるの由承りしかば此の人邪見を翻し
給ふか善人に成り給いぬと悦び思ひ候処に又此の釈迦仏を造らせ給う事申す
計りなし、当座には強なる様に有りしかども法華經の文のままに説き候いし
かばかうおれさせ給へり、忠言耳に逆らい良薬口に苦しと申す事は是なり。
今既に日蓮・師の恩を報ず定めて仏神・納受し給はんか、各各此の由を
道善房に申し聞かせ給ふべし、仮令強言なれども人をたすくれば実語・語
なるべし、設ひ・語なれども人を損ずるは妄語・強言なり、当世・学匠等
の法門は語・実語と人人は思食したれども皆強言妄語なり、仏の本意たる
法華經に背く故なるべし、日蓮が念仏申す者は無間地獄に墮つべし禅宗・

真言宗も又謬の宗なりなんと申し候は強言とは思食すとも実語・語なる
べし、例せば此の道善御房の法華經を迎へ釈迦仏を造らせ給う事は日蓮が強言
より起る、日本国の一切衆生も亦復是くの如し、当世此の十余年已前は一向
念佛者にて候いしが十人が二人は一向に南無妙法蓮華經と唱へ二三人は兩
方になり、又一向念佛申す人も疑をなす故に心中に法華經を信じ又釈迦仏
を書き造り奉る、是れ亦日蓮が強言より起る、譬えば栴檀は伊蘭より生じ蓮華
は泥より出でたり而るに念佛は無間地獄に墮つると申せば当世牛馬の如くな
る智者どもが日蓮が法門を仮染にも毀るは糞犬が師子王をほへ癡猿が帝釈を
笑ふに似たり。

文永七年

日蓮

花押

義淨房淨顯房

一〇四 佐渡御勘気抄 さどごかんき

文永八年十月 ぶんえい 五十歳御作

891P

与円浄房 ぼう 於佐渡 さど

九月十二日に御勘気を蒙て今年十月十日佐渡の国へまかり候なり、本より

学文し候し事は仏教をきはめて仏になり恩ある人をも・たすけんと思ふ、仏

になる道は必ず身命をすつるほどの事ありてこそ仏にはなり候らめと・をし

はからる、既に経文のごとく悪口・罵詈・刀杖・瓦礫・数数見擯出と説か

れて・かかるめに値い候こそ法華経をよむにて候らめと、いよいよ信心もお

こり後生もたのもしく候、死して候はば必ず各各をもたすけたてまつるべし、

天竺に師子尊者と申せし人は檀弥羅王に頸をはねられ提婆菩薩は外道につき

ころさる、漢土に竺の道生と申せし人は蘇山と申す所へながさる、法道三蔵

は面にかなを・やかれて江南と申す所へながされき、是れ皆法華経のとき仏法

のゆへなり、日蓮は日本国・東夷・東条・安房の国・海辺の旃陀羅が子なり、
いたづらに・くちん身を法華經の御故に捨てまいらせん事あに石に金を・か
ふるにあらずや、各各なげかせ給うべからず、道善の御房にも・かう申しき
かせまいらせ給うべし、領家の尼御前へも御ふみと存じ候へども先かかる身
のふみなれば・なつかしやと・おぼさざるらんと申しぬると便宜あらば各各
おんものがたり 御物語り申させ給い候へ。

十月 日

日蓮花押

一〇五 義浄房御書

892P

御法門の事委しく承はり候い畢んぬ、法華經の功德と申すは唯仏与仏の
境界・十方分身の智恵も及ぶか及ばざるかの内証なり、されば天台大師も
妙の一字をば妙とは妙は不可思議と名くと釈し給いて候なるぞ前前御存知の
如し、然れども此の經に於て重重的の修行分れたり天台・妙楽・伝教等計り

しらせ給う法門なり、就中く伝教大師・天台の後身にて渡らせ給へども人の不審を晴さんとや思し食しけん大唐へ決をつかはし給ふ事多し、されば今經の所詮は十界互具・百界千如・一念三千と云ふ事こそゆゆしき大事にては候なれ、此の法門は摩訶止觀と申す文にしるされて侯、次に壽量品の法門は日蓮が身に取つてたのみあることぞかし、天台・伝教等も粗しらせ給へども言に出して宣べ給はず竜樹・天親等も亦是くの如し、壽量品の自我偈に云く「一心に仏を見たてまつらんと欲して自ら身命を惜します」云云、日蓮が己心の仏界を此の文に依つて顯はすなり、其の故は壽量品の事の一念三千の三大秘法を成就せる事・此の經文なり秘す可し秘す可し、叡山の大師・渡唐して此の文の点を相伝し給う処なり、一とは一道清淨の義心とは諸法なり、されば天台大師心の字を釈して云く「一月三星・心果清淨」云云、日蓮云く一とは妙なり心とは法なり欲とは蓮なり見とは華なり仏とは經なり、

此の五字を弘通せんには不自惜^{おししん}身命^{みよつこれ}是なり、一心に仏を見る心を一にして仏を見る^{いっしん}一心を見れば仏なり、無作^{むさ}の三身^{さんじん}の仏果^{ぶつか}を成就^{じょうじゆ}せん事は恐くは天台^{てんだい}・伝教^{でんぎよう}にも越へ竜樹^{りゆうじゆ}・迦葉^{かしよう}にも勝れたり、相構へ相構へて心の師とはなるとも心を師とすべからずと仏は記^{しる}し給ひしなり、法華經^{ほけきよう}の御為^{ため}に身をも捨て命をも惜しまざれと強情に申せしは是なり、南無妙法蓮華經^{なむみようほうれんげきよう}・南無妙法蓮華經^{みようほうれんげきよう}。

ぶんえい
文永十年五月二十八日

にちれんかおう
日蓮花押

ほうごへんじ
義浄房御返事

一〇六 清澄寺大衆中 建治二年正月 五十五歳御作 893p
きよすみでらたいしゆう

新春の慶賀^じ自他^た幸甚^{こうじん}幸甚^{こうじん}、去年来らず如何^い定めて子細^{しさい}有らんか、抑參詣^{そもそさんけい}を企て候わば伊勢公^{いせ}の御房^{ごぼう}に十住^{じゅうじゆう}心論^{しんろん}・秘蔵宝鑰^{ひぞうほうやく}二教論^{しんろん}等の真言^{しんごん}の疏^{じよ}を借用候へ、是くのごと如きは真言師蜂起^{しんごんしほうき}の故に之を申す、又止觀^{しかん}の第一第二御隨身^{だいいちだいじごしうしん}

候へ東春輔正記ふしよきなんどや候らん、円智房ぼうの御弟子おんでしに觀智房かんちぼうの持ちたもて候なる宗
要集ようしゅうかしたび候へ、そのみならずふみの候由も人人ひとびともう申し候いしなり早々に
返すべきのよし申もうさせ給たまへ、今年ことは殊ぶつぼうに仏法の邪正じゃせいたださるべき年か淨願の
御房義城房等ごぼうには申し給たまうべし、日蓮にちれんが度度殺害たびたびさがいせられんとし並びに二度ま
で流罪るざいせられ頸を刎はれんとせし事は別に世間の失せけんに候はず、生身しょうしんの虚空蔵
菩薩ぼさつより大智慧ちえを給たまわりし事ありき、日本第一にほんだいいちの智者ちしやとなし給へと申せし事
を不便ふびんと思し食しけん明星こくの如くなる大宝珠ほうしゆを給たまいて右の袖にうけとり候
いし故ゆえに一切経いっさいきようを見候いしかば八宗並びに一切経いっさいきようの勝劣粗是しょうれつほざこれを知りぬ、
其の上そ真言宗しんこんしゅうは法華経ほけきようを失うしなう宗なり、是は大事だいじなり先ず序分じよぶんに禅宗ぜんしゅうと
念仏宗ねんぶつしゅうの僻見びやくけんを責めて見んと思ふ、其の故は月氏そのゆえ・漢土がんとの仏法の邪正じゃせいは且ら
く之これを置く日本国にほんこくの法華経ほけきようの正義せいぎを失うしなうて一人もなく人の惡道あくどうに墮おつる事は
真言宗しんこんしゅうが影の身に随したがうがごとく山山・寺寺ほつけしゅうごとに法華宗しんこんしゅうに真言宗しんこんしゅうをあひそ

ひて如法の法華經に十八道をそへ懺法に阿弥陀經を加へ天台宗の学者の
灌頂をして真言宗を正とし法華經を傍とせし程に、真言經と申すは爾前
權教の内の華嚴・般若にも劣れるを慈覺・弘法これに迷惑して・或は法華經
に同じ・或は勝れたりなど申して、仏を開眼するにも仏眼大日の印・真言
をもつて開眼供養するゆへに日本国の木画の諸像皆無魂無眼の者となりぬ、
結句は天魔入り替つて檀那をほろぼす佛像となりぬ王法の尽きんとするこれ
なり、此の惡真言かまくらに來りて又日本國をほろぼさんとす。

其の上禅宗・浄土宗などと申すは又いうばかりなき僻見の者なり、
此れを申さば必ず日蓮が命と成るべしと存知せしかども虚空藏菩薩の御恩を
ほうぜんがために建長五年四月二十八日安房の國・東条の郷清澄寺道善の
房持仏堂の南面にして浄円房と申す者並びに少少の大衆に・これを申しは
じめて其の後二十余年が間退轉なく申す、或は所を追ひ出され・或は流罪

等、昔は聞く不輕菩薩の杖木等を今は見る日蓮が刀劍に当る事を、日本国の
うちむちじょうげばんにん いわ にちれんほっし いにしえろんし にんしだいしせんとか
有智・無智上下万人の云く日蓮法師は古の論師・人師大師先徳にすぐるべか
らずと、日蓮この不審をはらさんがために正嘉文永の大地震大長星を見て勘え
て云く我が朝に二つの大難あるべし所謂自界叛逆難・他国侵逼難なり、自界
は鎌倉に権の大夫殿御子孫どううち出来すべし、他国侵逼難は四方よりある
べし、其の中に西よりつよくせむべし、是れ偏に仏法が一国挙りて邪なる
ゆへに梵天帝釈の他国に仰せつけてせめらるるなるべし。

日蓮をだに用いぬ程ならば將門・純友・貞任・利仁・田村のやうなる將軍
百千万人ありとも叶ふべからず、これまことならずば真言と念佛等の僻見を
ば信ずべしと申しひろめ候いき、就中清澄山の大衆は日蓮を父母にも三宝
にもをもひをとさせ給はば今生には貧窮の乞者とならせ給ひ後生には無間
地獄に墮ちさせ給うべし故・いかなとなれば東条左衛門景信が悪人として清

澄のかいしし等をかりとり房房ぼうぼうの法師等ほっしを念仏者ねんぶつの所従しよじゆうにし・なんとせしに
にちれん

日蓮敵にちれんをなして領家ほけきようのかたうどとなり清澄ふたまた・二間の二箇とうじようの寺東条まさが方まさにつく

ならば日蓮にちれん・法華經ほけきようをすてんと、せいじやうの起請きしようをかいて日蓮にちれんが御本尊ごほんぞんの

手にゆいつけていのりて一年が内に両寺りやうじは東条とうじようが手をはなれ候いしなり、此

の事は虚空蔵菩薩こくう ぼさつもいかでかすてさせ給たまうべき、大衆たいしゆうも日蓮にちれんを心へずに・を

もはれん人人ひとびとは天にすてられ・たてまつらざるべしや、かう申せば愚癡ぐちの者

は我をのろうと申もうすべし後生ごしように無間地獄むげんじごくに墮おちんが不便ふびんなればなり。

領家の尼にごぜんは女人にょにんなり愚癡ぐちなれば人人ひとびとのいひをどせば・さこそとまし

まし候らめ、されども恩をしらぬ人となりて後生ごしように惡道あくどうに墮おちさせ給たまはん事

こそ不便ふびんに候へども又一ふつには日蓮にちれんが父母等ふぼに恩をかほらせたる人なれば・

いかにしても後生ごしようをたすけたてまつらんと・こそいのり候へ、法華經ほけきようと申もうす

御経べちは別の事べちも候はず我は過去五百塵点劫か こひやくじんでんこうより先の仏なり、又舍利弗等しゃりほつは未来みらい

に仏になるべしと、これを信ぜざらん者は無間地獄に墮つべし、我のみかう
申すにはあらず多宝仏も証明し十方の諸仏も舌をいだしてかう候、地涌
千界・文殊・観音・梵天・帝釈・日月・四天・十羅刹・法華經の行者を
守護し給はんと説かれたり、されば仏になる道は別のやうなし過去かこの事未来みらい
の事を申しあてて候がまことの法華經にては候なり。

日蓮はいまだ・つくしを見ずえぞしらず、一切經をもつて勘かんへて候へば・

すでに値あいぬ、もし・しからは各各不知恩の人なれば無間地獄に墮ち給うべ
しと申し候はたがひ候べきか、今はよし後をこらんぜよ日本国は当時のゆき
対馬のやうになり候はんずるなり、其の時安房の国にむこが寄せて責め候はん
時・日蓮房の申せし事の合うたりと申すは偏執へんしゆうの法師等が口すくめて無間
地獄に墮ちん事不便なり不便なり。

正月十一日

にちれんかおう
日蓮花押

あわ 安房の国清澄寺大衆中

このふみはさど殿と・すけあさり御房と虚空蔵の御前にして大衆ごとに・よ
みきかせ給へ。

一〇七 聖密房御書 建治三年 五十六歳御作 896P

大日経をば善無畏・不空・金剛智等の義に云く「大日経の理と法華経の
理とは同じ事なり但印と真言とが法華経は劣なり」と立てたり、良和尚・
広修・維 なんと申す人は大日経は華嚴経・法華経・涅槃経等には及ばず
但方等部の経なるべし、日本の弘法大師云く「法華経は猶華嚴経等に劣れり
まして大日経には及ぶべからず」等云云、又云く「法華経は釈迦の説・大日経
は大日如来の説・教主既にことなり・又釈迦如来は大日如来の御使として
顕教をとき給うこれは密教の初門なるべし」・或は云く「法華経の肝心たる
寿量品の仏は顕教の中にしては仏なれども密教に対すれば具縛の凡夫な

り」と云云。

にちれんかんが

日蓮にちれんかんが勸えて云く大日だいにちきよう経は新訳しんやくの経唐とうの玄宗皇帝げんそうこうていの御時おんとき開元四年かいげんしゅうねんに天竺てんじくの

ぜんむいさんぞう

善無畏三蔵もて来る、法華ほけきよう経は旧訳くやくの経・後秦こうしんの御宇ぎように羅什三蔵もて来る

そ ちゆうげん

其の中間ちゆうげん三百余年なり、法華ほけきよう経亘わたつて後百余年を経て天台智者大師てんだいちしやだいし・教門きようもんに

しきよう

は五時四教を立てて上五百余年の学者の教相がくしやをやぶり觀門きようもんには一念三千いちねんさんぜんの

ほうもん

法門ほうもんをさとりて始めて法華ほけきよう経の理を得たり、天台大師てんだいだいし已前の三論宗さんろんしゅう・已後の

ほうそつしゅう

法相宗ほつそつしゅうには八界を立て十界じゅうかいを論ぜず一念三千いちねんさんぜんの法門ほうもんをば立つべきやうなし、

けこんしゅう

華嚴宗けこんしゅうは天台てんだい・已前いぜんには南北しやしけこんきようの諸師しよし華嚴經ほけきようは法華經ほけきように勝れたりとは申しけれ

けこんしゅう

ども華嚴宗けこんしゅうの名は候はず、唐とうの代たいに高宗こうそうの後きさき・則そくてんこうてい天皇后てんこうていと申す人の御時おんとき・

ほうぞうほうし

法蔵法師ほうぞうほうし・澄觀ちようかんなんと申す人・華嚴宗けこんしゅうの名を立てたり、此の宗きようそうは教相きようそうに五

かんもん

教を立て觀門かんもんには十玄しちげん・六相ろくしやうなんと申す法門ほうもんなり、をびただしきやうに・み

ちようかん

へたりしかども澄觀ちようかんは天台てんだいをはするやうにてなを天台てんだいの一念三千いちねんさんぜんの法門ほうもんをか

りとりて我が経の心しん如工画師えしの文の心とす、これは華嚴宗けこんしゅうは天台てんだいに落ちたり
といふべきか又一念三千いちねんさんぜんの法門ほうもんを盗みとりたりといふべきか、澄観ちやうかんは持戒じかいの
人だいしよう・大小の戒を一塵いちじんをもやぶらざれども一念三千いちねんさんぜんの法門ほうもんをば・ぬすみとれり
・よくよく口伝くでんあるべし、真言宗しんこんしゅうの名は天竺てんじくにあり・やいなや大なる不審ふしんな
るべし、但真言経しんこんにてありけるを善無畏等ぜんむいの宗の名を漢土かんどにして付けたりけ
るか・よくよくしるべし、就中善無畏等なかんずくぜんむい・法華経ほけきょうと大日経だいにちきょうとの勝劣しょうれつをはん
ずるに理同事勝りどうじしやうの釈をばつくりて一念三千いちねんさんぜんの理は法華経ほけきょう・大日経だいにちきょうこれ同じな
んどいへども印しんごんと真言しんごんとが法華経ほけきょうには無ければ事法は大日経だいにちきょうに劣おとれり、事相じさう
かけぬれば事理俱密じりぐみつもなしと存ぜり、今・日本国にほんこく及び諸宗しよしゅうの学者等がくしや並びにこ
とに用もちゆべからざる天台宗てんだいしゅう共にこの義をゆるせり例せば諸宗しよしゅうの人人ひとびとをばそ
ねめども一同に弥陀みだの名をとなへて自宗じしゅうの本尊ほんぞんをすてたるがごとし天台宗てんだいしゅうの
人人ひとびとは一同に真言宗しんこんしゅうに落ちたる者なり。

にちれん

日蓮・理のゆくところを不審して云く善無畏三蔵の法華經と大日經とを理

は同じく事は勝れたりと立つるは天台大師の始めて立て給へる一念三千の理

だいにちきよう

を今大日經にとり入れて同じと自由に判ずる条ゆるさるべしや、例せば先に

人丸がほのぼのと・あかしのうらの・あさぎりに・しまかくれゆく・ふねを

しぞをもう・とよめるを、紀のしくばう源のしたがうなんどが判じて云く

みなもと

「此の歌はうたの父・うたの母」等云云、今の人・我うたよめりと申して・

もう

ほのぼのと乃至船をしぞをもうと一字をもたがへず・よみて我が才は人丸に

ないし

をとらずと申すをば人これを用ゆべしや、やまかつ海人なんどは用ゆる事も

もう

もち

あま

もち

ありなん、天台大師の始めて立て給へる一念三千の法門は仏の父・仏の母な

てんだいだいし

いちねんさんぜん

ほうもん

るべし、百年・已後の善無畏三蔵がこの法門をぬすみとりて大日經と法華經

いご

ぜんむいさんぞう

ほうもん

だいにちきよう

ほけきよう

とは理同なるべし、理同と申すは一念三千なりとかけるをば智慧かしこき人

りおなじ

りどう

もう

いちねんさんぜん

ちえ

は用ゆべしや、事勝と申すは印・真言なしなんど申すは天竺の大日經・

もち

じしやう

もう

しんごん

もう

てんじく

だいにちきよう

ほけきよう しやうれつ かんど ほけきよう だいにちきよう しやうれつ ふくうさんぞう ほけきよう ぎき
法華經の勝劣か漢土の法華經・大日經の勝劣か、不空三藏の法華經の儀軌
ほけきよう しんこん
には法華經に印・真言をそへて訳せり、 仁王經にも羅什の訳には印・真言な
ふくう にんのうきよう
し不空の訳の仁王經には印・真言これあり、 此等の天竺の經經には無量の
しんこん
事あれども月氏・漢土・国を・へだてて・とをく・ことごとく・もちて来が
ほけきよう
たければ經を略するなるべし、法華經には印・真言なけれども二乗作仏・
にじようさぶつ
劫国名号・久遠実成と申すきばの事あり、大日經等には印・真言はあれど
くわくくみうじう くおんじつじよう もつ だいにちきよう しんこん
も二乗作仏・久遠実成これなし、二乗作仏と印・真言とを並ぶるに天地の
にじようさぶつ くにじつじよう てんち
しやうれつ 勝劣なり、四十余年の經經には二乗は敗種の人と一字・二字ならず無量
よんじゆうよなん きようじう はいしゆ わりよう
むへん 無辺の經經に嫌はれ、法華經には・これを破して二乗作仏を宣べたり、い
きようぎよう きら ほけきよう は にじようさぶつ のへ
づれの經經にか印真言を嫌うことばあるや、その言なければ又大日經にも
きようぎよう しんこん きら だいにちきよう
其の名を嫌はず但印・真言をとけり、 印と申すは手の用なり手仏にならずは
そ きら しんこん もつ
手の印・仏になるべしや、真言と申すは口の用なり口仏にならずば口の真言
しんこん もつ しんこん

・仏になるべしや、二乗にじようの三業ほけきようは法華經あに値あいたてまつらずは無量劫むりようじゆう・千二百よそん尊そんの印しんこん・真言しんこんを行しんずとも仏になるべからず、勝すぐれたる二乗にじよう作さぶつ仏ぶつの事法じふほふをばとかずと申もうして劣おとれる印しんこん・真言しんこんをとける事法じふほふをば勝すぐれたりと申もうすは理りによぬすびとれば盗人ぬすびとなり事によれば劣れつ謂い勝見しやうけんの外道げどうなり、此この失とがによりて閻魔えんまの責せめをばかほりし人なり、後あとにくいかへして天台大師てんだいだいしを仰あおいで法華ほっけにうつりて惡道あくどうをば脱まぬかれしなり。

くおんじつじよう
久遠実成だいにちきようなんどは大日經たいにちきようにはをもひもよらず、久遠実成くおんじつじようは一切いっさいの仏ぶつの
ほんち 本地・譬たとへば大海たいかいは久遠実成くおんじつじよう・魚鳥ぎよくは千二百よそん尊そんなり、久遠実成くおんじつじようなくば千
二百よそん尊そんはうきくさの根なきがごとし夜の露つゆの日輪にちりんの出いでざる程ほどなるべし、
てんだいしゆう 天台宗ひとびとの人人わきまえこの事を弁わきまえへずして真言師しんごんしにたばらかされたり、真言師しんごんしは又
じしゆう 自宗あやまりの誤あやまりをしらず・いたづらに惡道あくどうの邪念じゃぎをつみをく、空海くわかい和尚わじやうは此この理り
わきまえ を弁わきまえへざる上華嚴宗けこんしゆうのすでにやぶられし邪義じゃぎを借りとりて法華經ほけきようは猶華嚴經なほけこんきよう

にをとれりと僻見^{びやくけん}せり、龜毛^{きもう}の長短^{ちやうたん}・兎角^{とかく}の有無^{うむ}・龜の甲には毛なしなん
ぞ長短^{ちやうたん}をあらそい兎の頭^{こづか}には角なし・なんの有無^{うむ}を論ぜん、理同^{りどう}と申す人^{もう}
いまだ閻魔^{えんま}のせめを脱れず、大日經^{だい にちきやう}に劣る華嚴經^{けこんきやう}に猶劣ると申す人^{もう}・謗法^{ほうほう}を
脱^{のが}るべしや、人は・かはれども其の謗法^{ほうほう}の義同じかるべし、弘法^{こうほう}の第一^{だいいち}の
御弟子^{おんでし}かきのもときの僧正^{そうじやう}・紺青鬼^{こんじやうき}となりし・これをもつてしるべし、空海^{くうかい}
悔改なくば惡道^{あくどう}疑^{うたがい}うべしとも・をばへず其の流^{りゅう}をうけたる人人^{ひとびと}又いかん。
問^{もん}うて云^いわく法師^{ほうし}一人・此の惡言^{あくげん}を^{はく}如何^{いかん}、答^{こた}えて云^いわく日蓮^{にちれん}は此の人人^{ひとびと}
を難^{なん}ずるにはあらず但不^{ふしん}審^{しん}する計^{はか}りなり、いかりをばせば・さでをはしませ、
外道^{げどう}の法門^{ほうもん}は一千年・八百年・五天にはびこりて輪王^{りんおう}より万民^{ばんみん}かうべをかた
ぶけたりしかども九十五種^{きゅうじふごしゆ}共に仏にやぶられたりき、撰論^{せんろん}師^しが邪義^{じゃぎ}・百余
年なりしもやぶれき、南北の三百余年の邪見^{じゃけん}もやぶれき、日本^{にほん}・二百六十余
年の六宗^{ろくしゆ}の義もやぶれき、其^その上此の事は伝教大師^{でんきやうだいし}の・或書^{ある}の中にやぶら

れて候を申すなり、日本国は大乘に五宗あり法相・三論・華嚴・真言・天台、
 小乗に三宗あり俱舎・成実・律宗なり、真言・華嚴・三論・法相は大乘
 よりいでたりといへども・くわしく論ずれば皆小乗なり、宗と申すは戒・
 定・慧の三学を備へたる物なり、其の中に定・慧をさてをきぬ、戒をもて大
 ・小のばうじをうちわかつものなり、東寺の真言
 ・法相・三論・華嚴等は戒壇なきゆへに東大寺に入りて小乗律宗の乳驢・
 臭糞の戒を持つ、戒を用つて論ぜば此等の宗は小乗の宗なるべし、比叡山
 には天台宗・真言宗の二宗・伝教大師習いつたへ給いたりしかども天台
 円頓の円定・円慧・円戒の戒壇立つべきよし申させ給いしゆへに天台宗に対
 しては真言宗の名あるべからずと・をばして天台法華宗の止観・真言とあそ
 ばして公家へまいらせ給いき、伝教より慈覚たまはらせ給いし誓戒の文には
 天台法華宗の止観・真言と正くのせられて真言宗の名をけづられたり、天台

ほつけしゅう ぶつりゅうしゅう もつ
法華宗は 仏立宗 と申して仏より立てられて候、 真言宗の真言は当分の宗・
ろんし にんし
論師・人師始めて宗の名をたてたり、 而るを事を大日如来・弥勒菩薩等によ
せたるなり、 仏御存知の御意は但法華經一宗なるべし 小乗 には二宗十八宗
ごぞんじ みこころ ほけきょう しやうじやう はつしゅう
二十宗候へども但所詮の理は無常の一理なり、 法相宗は唯心有境・大乘宗
むりやう しよせん ゆいしん ぶじやう ゆいしん だいじやう
・無量の宗ありとも所詮は唯心有境とだにいにはば但一宗なり三論宗は唯心無
むりやう しよせん ゆいしん
境無量の宗ありとも所詮・唯心無境ならば但一宗なり、 此れは大乗の空・有
いちぶん けこんしゅう しんこんしゅう たんちゅう だいじやう
の一分か、華嚴宗・真言宗あがらば但中・くだらば大乘の空・有なるべし、
きやうもん せつそう なおけこん はんによ およ ただ ひとびと
經文の説相は猶華嚴・般若にも及ばず但しよき人とおぼしき人人の多く信じ
たるあいだ、 下女を王のあいするにいたり、 大日經等は下女のごとし理は
たんちゅう ろんし にんし
但中にすぎず、 論師・人師は王のごとし人のあいするに由て・いばうがある
なるべし、上の問答等は當時は世すえになりて人の智浅く慢心高きゆへに用ゆ
もんどう とうじ まんしん もち
る事はなくとも、 聖人・賢人なんども出でたらん時は子細もやあらんずらん、
しやうにん けんじん しさい

不便ふびんにをもひまいらすれば目安めやすに注せり、御ひまにはならはせ給たまつべし。

これは大事だいじの法門ほうもんなり、こくうざう菩薩ぼさつにまいりてつねによみ奉らせ給たまう

べし。

聖密房ほうに之これを遣つかわす

日蓮にちれん花押かおう

一〇八 華果成就御書けかじょうじゆごしよ

弘安元年四月 五十七歳御作 900P

与淨顯房・義淨房 於身延ぼう

其その後のちに事もうちたへ申し承うけたまわらず候、さては建治の比・故道善房聖人

のために二札かきつかはし奉たてまつり候を嵩たかいが森もりにてよませ給たまいて候よし悦よろこび入いつ

て候、たとへば根ねふかきときんば枝葉しやうかれず、源みなもとに水あれば流ながかはかず、

火はたきぎ・かくればたへぬ、草木そうもくは大地だいちなくして生長する事あるべからず、

日蓮・法華經ほけきやうの行者ぎやうじやとなつて善惡ぜんあくにつけて日蓮房・日蓮房とにちれんぼううたはるる此この

御恩ごおんさながら故師匠道善房ししやうどうぜんぼうの故ゆえにあらずや、日蓮にちれんは草木そうもくの如ごとく師匠ししやうは大地だいちの

こと
如し、彼の地涌の菩薩の上首四人にてまします、一名上行乃至四名

あんりゆうぎようばさつ

安立行 菩薩云云、末法には上行・出世し給はば安立行 菩薩も出現せさ

たま

せ給うべきか、さればいねは華果成就すれども必ず米の精・大地にをさまる、

ゆえ

故にひつぢおひいでて二度華果成就するなり、日蓮が法華經を弘むる功德は

どうぜんぼう

必ず道善房の身に歸すべしあらたうとたうと、よき弟子をもつときんば師弟

ぶっか

・仏果にいたり・あしき弟子をたくはひぬれば師弟・地獄にをつといへり、

していそうい

師弟相違せばなに事も成べからず委くは又又申すべく候、常にかたりあわせ

しゅつししょうじ

て出離生死して同心に靈山浄土にてうなづきかたり給へ、經に云く「衆に

さんどくあ

三毒有ることを示し又邪見の相を現ず我が弟子是くの如く方便して衆生度

さきさきもつ

す」云云 前前申す如く御心得あるべく候、穴賢 穴賢

こうあながんねん

弘安元年戊寅卯月 日

にちれんかおう

日蓮花押

浄顯房

義浄房ぎじやうぼう

一〇九 別当御房御返事べつとうごへんじ

901P

聖密房ほうのふみに・くはしく・かきて候よりあいて・きかせ給たまい候へ、なに
事も二間清澄の事をば聖密房ほうに申しあわせさせ給たまうべく候か、世間せけんのりをし
りたる物に候へばかう申もうすに候、これへの所当なんどの事は・ゆめゆめをも
はず候、いくらほどの事に候べき、但なばかりにてこそ候はめ、又わせいつ
をの事をそれ入つて候、いくほどなき事に御心ぐるしく候らんと・かへりて
なげき入つて候へども・我が恩をば・しりたりけりと・しらせまつらんため
に候、大名を計るものは小耻にはぢずと申もうして、南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうの七字を
日本国にほんこくにひろめ震旦高麗しんたんこままでも及ぶべきよしの大願をはらみて其その願の満す
べきしるしにや、大蒙古国だいもうここくの牒状ちやうじやうしきりにありて此の国の人ごとの大なる
歎なげきとみへ候、日蓮にちれん又先きより・この事をかんがへたり閻浮第一えんぶだいいちの高名なり、

先きよりにくみぬるゆへにままこのかうみやうのやうに専心とは用い候はね
ども終ついに身のなげき極まり候時は辺執へんしゅうのものどもも一定とかへぬとみへて
候、これほどの大事だいじをはらみて候ものの少事をあながちに申し候もうべきか、
但し当時・日蓮心ざす事は生処にほんこくなり日本国よりも大切にをもひ候、例せば漢
王の沛郡を・をもくをばしめししがごとし・かれ生処にほんこくなるゆへなり、聖智が跡あと
の主となるをもつてしろしめせ、日本国にほんこくの山寺の主ともなるべし、日蓮は
閻浮第一えんぶだいいちの法華經ほけきようの行者ぎようじやなり・天のあたへ給たまつべきことわりなるべし。
米一斗・六升あはの米二升・やき米はふくろへ・そのみならず人人ひとびとの
御心おんこころざし申しつくしがたく候、これは・いたみをもひ候、これより後は心く
るしく・をばしめすべからず候、よく人人ひとびとにしめすべからず候、よく人人ひとびとに
もつたへさせ給たまい候へ。

乃時

べつとうごぼうごへんじ
別当御房御返事

一一〇 寂日房御書

弘安二年九月 五十八歳御作

902P

与寂日房日家 於身延

是^{これ}まで御^音をとづれかたかたじけなく候、夫^それ人身^{にんしん}をつくる事^受はまれなるな

り、已^{すで}にまれなる人身^{にんしん}をうけたり又あひがたきは仏法^稀・是^{これ}も又あへり、同

じ仏法^{ぶつぽう}の中にも法華經^{ほけきょう}の題目^{だいもく}にあひたてまつる結句題目^{けつくだいもく}の行者^{ぎやうじや}となれり、ま

ことにまことに過去^{かこ}十^{じゆ}万^{まん}億^{いふ}の諸^{しよ}仏^{ぶつ}を供養^{くやう}する者^{もの}なり。

日蓮^{にちれん}は日本^{にほん}第一^{だいいち}の法華經^{ほけきょう}の行者^{ぎやうじや}なり・すでに勸持品^{かんじほん}の二十行^{にじゅうぎやう}の偈^げの文^{ぶん}は

日本^{にほん}国^{こく}の中には日蓮^{にちれん}一人^{ひとり}よめり、八十^{はち}万^{まん}億^{いふ}那由他^{ないうた}の菩薩^{ぼさつ}は口^{くち}には宣^のたれども

修行^{しゆぎやう}したる人^{ひと}・一人^{ひとり}もなし、かかる不思議^{ふしぎ}の日蓮^{にちれん}をうみ出^いだせし父母^{ふぼ}は

日本^{にほん}国^{こく}の一切^{いっさい}衆生^{しゆじやう}の中には大果報^{かほう}の人^{ひと}なり、父母^{ふぼ}となり其^その子^ことなるも必ず

宿習^{しゆくじゆ}なり、若^もし日蓮^{にちれん}が法華經^{ほけきょう}・釈迦如来^{しゃかにらい}の御使^{おんつかい}ならば父母^{ふぼ}あに其^{その}の故^{ゆえ}な

らんや、例せば妙莊嚴王・淨徳夫人・淨蔵・淨眼の如し、釈迦・多宝の

二仏・日蓮が父母と變じ給うか、然らずんば八十万億の菩薩の生れかわり給う

か、又上行菩薩等の四菩薩の中の垂迹か不思議に覚え候、一切の物にわた

りて名の大切なるなり、さてこそ天台大師・五重玄義の初めに名玄義と釈し

たま
給へり。

にちれん

名乗

じげぶつじょう

い

斯様

きこ

日蓮となのである事自解仏乗とも云いつべし、かやうに申せば利口げに聞えた

れども道理のさすところさもやあらん、經に云く「日月の光明の能く諸の

ゆうみょう

こころ

せけん

よく

しゅじょう

と此の文の

幽冥を除くが如く斯の人・世間に行じて能く衆生の闇を滅す」と此の文の

心よくよく案じさせ給へ、斯人行世間の五の文字は上行菩薩・末法の始の

五百年に出現して南無妙法蓮華經の五字の光明をさしだして無明煩惱の闇

をてらすべしと云う事なり、日蓮は此の上行菩薩の御使として日本国の

いっさいしゅじょう

ほけきょう

受持

すす

これ

此の山にしてもをこた

一切衆生に法華經をうけたもてと勧めしは是なり、

らず候なり、今の経文きょうもんの次下つぎしもに説いて云く「我が滅度めつどの後のちに於て応に此の経を受持じゅじすべし是この人・仏道ぶつどうに於て決定けつじようして疑うたがい有あること無けん」と云云、かかる者の弟子でし・檀那だんなとならん人人ひとびとは宿縁しゆくえんふかしと思つて日蓮にちれんと同じく法華経を弘むべきなり、法華経の行者ほけきようといはれぬる事はや不祥ふしようなりまぬかれがたき身なり、彼かのはんかいちやうりやうまさかどすみともといはれたる者は名を惜をしむ故ゆえにはちを思ふ故ゆえに・ついに臆おそしたることはなし、同じ恥はちなれども今生こんじようのはちは・もののかずならず・ただ後生ごじようのはちこそ大切なれ、獄卒ごくそつ・だつえは懸衣翁奪衣婆が三途河そつずがわのはたにて・いしうをはがん時おほしめを思食ほけきようして法華経の道場どうじようへまいり給うべし、法華経は後生ごじようのはちをかくす衣なり、経に云く「裸者の衣を得たるが如しごと」云云。

此この御本尊ごほんぞんこそ冥途めいどのいしやうなれ・よくよく信じ給うべし、をとこの男はだへをかくさざる女あるべしや・子のさむさ寒をあわれまざるを親あるべし

や、しゃかぶつ 釈迦仏・ほけきょう 法華経はめとをやとの如くましまし候ぞ、にちれん 日蓮をたすけ給う
こんじょう 事・はじ 今生の恥をかくし給う人なり後生は又日蓮御身のはちをかくし申すべ
し、昨日は人の上・今日は我が身の上なり、花さけばこのみなり・よめの嫁
姑 しようとめになる事候ぞ、しんじん 信心をこたらずして南無妙法蓮華経と唱え給うべ
たびたび し、おんおとずれもう 度度の御音信申しつくしがたく候ぞ、此の事寂日房くわしくかたり給
へ。

九月十六日

にちれんかおう
日蓮花押

一一一 あまごぜんごへんじ 新尼御前御返事

ぶんえい 文永十二年二月 五十四歳御作

904P

あまのり一ふくろ送り給ひ畢んぬ、又大尼御前よりあまのり畏こまり入つ
て候、此の所をば身延の嶽と申す駿河の国は南にありたり彼の国の浮島が
はらの海ぎはより此の甲斐の国・波木井の郷・身延の嶺へは百余里に及ぶ、余

の道・千里せんりよりもわづらはし、富士河と申す日本第一もつ にほんだいいちのはやき河・北より南へ
流れたり、此の河は東西は高山こうざんなり谷深く左右さうは大石にして高き屏風を立て
並べたるがごとくなり、河の水は筒の中に強兵がうべいが矢を射出したるがごとし、
此の河の左右さうの岸をつたい・或は河を渡り・或時は河はやく石多ければ舟
破れて微塵わじんとなる、かかる所をすぎゆきて身延の嶺と申す大山あり、東は天子てんし
の嶺・南は鷹取りたかとりの嶺・西は七面の嶺・北は身延の嶺なり、高き屏風を四ついた
てたるがごとし、峯に上つてみれば草木森森たり谷に下つてたづぬれば大石
連連たり、大狼の音こえ・山に充満じゅうまんし 猴ましらのなき谷にひびき鹿のつまをこうる音
あはれしく蝉のひびきかまびすし、春の花は夏にさき秋の菓このみは冬になる、た
またま見るものはやまかつがたき木をひろうつすがた時時よりよりとぶらう人は昔なれ
し同朋ともどもなり、彼の商山しょうざんの四皓しこうが世を脱れし心ち竹林の七賢あとが跡を隠せし山も
かくやありけむ、峯に上つて・わかめやをいたると見候へば・さにてはなく

して・わらびのみ並び立ちたり、谷に下つてあまのりや・をいたると尋ぬれば、あやまりてや・みるらん・せりのみしげり・ふしたり、古郷の事はるかに思いわすれて候いつるに今・此のあまのりを見候いてよしなき心をもひいでて・うくつらし、かたうみいちはこみなとの磯のほとりにて昔見しあまのりなり、色形あぢわひもかはらず、など我が父母かはらせ給いけんとかちがへなる・うらめしさ・なみだをさへがたし。

此れは・さて・とどめ候いぬ、但大尼御前の御本尊の御事おほせつかはされて・おもひわづらひて候、其の故は此の御本尊は天竺より漢土へ渡り候し・あまたの三蔵漢土より月氏へ入り候いし人人の中にもしるしをかせ給はず、西域慈恩伝燈録等の書どもを開き見候へば五天竺の諸国の寺寺の本尊皆しるし尽して渡す、又漢土より日本に渡る聖人日域より漢土へ入る賢者等のしるされて候、寺寺の御本尊皆かんがへ尽し日本国最初の寺元興寺・四天王

寺等の無量の寺寺の日記、日本紀と申すふみより始めて多くの日記にのこりなく註して候へば其の寺寺の御本尊又かくれなし、其の中に此の本尊はあへてまします。

人疑つて云く経論になきかなければこそそこばくの賢者等は画像にかき

奉り木像にもつくりたてまつらざるらめと云云、而れども経文は眼前なり御

不審の人人は経文の有無をこそ尋ぬべけれ、前代につくりかかぬを難ぜんと

・をもうは僻案なり、例せば釈迦仏は悲母孝養のために利天に隠れさせ

給いたりしをば一閻浮提の一切の諸人しる事なし、但目蓮尊者一人此れをし

れり此れ又仏の御力なりと云云、仏法は眼前なれども機なければ顕れず時

たらざればひろまらざる事・法爾の道理なり、例せば大海の潮の時に随つて

増減し上天の月の上下にみちかくるがごとし。

今・此の御本尊は教主釈尊・五百塵点劫より心中にをさめさせ給いて世

しゅつげん
に出現せさせ給いても四十余年・其の後又法華經の中にも迹門はせず
たまい
ほうとうほん
宝塔品より事をこりて寿量品に説き顯し神力品・属累に事極りて候いしが、
と
せかい
金色世界の文殊師・利兜史多天宮の弥勒菩薩・補陀落山の觀世音・日月・淨
もんじゅ
とし た
おんでし
明・徳仏の御弟子の薬王菩薩等の諸大士・我も我もと望み給いしかども叶は
やくおうぼさつ
これら
ず、是等は智慧いみじく才学ある人人とは・ひびけども・いまだ法華經を学
ちえ
ひとびと
する日あさし学も始なり、末代の大難忍びがたかるべし、我五百塵点劫より
まつだい
だいなんしの
ごひやくじんでんこう
だいち
大地の底にかくしをきたる眞の弟子あり・此れにゆづるべしとて、上行菩薩
でし
こ
じようぎようぼさつ
ゆじゅつほん
等を涌出品に召し出させ給いて、法華經の本門の肝心たる妙法蓮華經の五字
いだい
ほけきよう
ほんもん
かんじん
みようほうれんげきよう
ごじ
をゆづらせ給いて、あなかしこ・あなかしこ・我が滅度の後・正法一千年・
たまい
めつど
しやうほう
ぞうほう
像法一千年に弘通すべからず、末法の始に謗法の法師一閻浮提に充滿して
ぐつう
まつぼう
ほうほう
ほっし
えんぶだい
じゆうまん
しよてん
諸天いかりをなし彗星は一天にわたらせ大地は大波のごとくをどらむ、大旱魃
すいせい
いつてん
だいち
かんばつ
たいか
たいすい
たいふう
えきびよう
ききん
ひようらん
むりよう
さいなんなら

り、一閻浮提の人人・各各・甲冑をきて弓杖を手ににぎらむ時、諸仏・諸菩薩・諸大善神等の御力の及ばせ給わざらん時、諸人皆死して無間地獄に墮ること雨のごとくしげからん時・此の五字の大曼荼羅を身に帯し心に存せば諸王は国を扶け万民は難を・のがれん、乃至後生の大火災を脱るべしと仏記しをかせ給いぬ、而るに日蓮上行菩薩にはあらねどもほば兼てこれをしれるは彼の菩薩の御計らいかと存じて此の二十余年が間此れを申す、此の法門弘通せんには如来現在猶多怨嫉・況滅度後・一切世間・多怨難信と申して第一のかたきは国主並びに郡郷等の地頭・領家・万民等なり、此れ又第二・第三の僧侶が・うつたへについて行者を・或は悪口し・或は罵詈し・或は刀杖等云云。

而るを安房の国・東条の郷は辺国なれども日本国の中心のごとし、其の故は天照太神・跡を垂れ給へり、昔は伊勢の国に跡を垂れさせ給いてこそあり

しかども、國王こくおうは八幡はちまん・加茂かも等を御歸依ごきえ深くありて天照太神てんしょうだいじんの御歸依ごきえ浅かりしかば、太神おおみかみ・隰いりおぼせし時とき・源右將軍うしろうぐんと申せし人ひと・御起請文きしょうぶんをもつてあをかの小大夫おおに仰せつけて頂戴ちやうだいし伊勢いせの外宮けいぐうにしのびをさめしかば太神おおみかみの御心に叶たまはせ給たまいけるかの故ゆゑに日本にほんを手ににぎる將軍しょうぐんとなり給たまいぬ、此の人このひととうじよう東条とうじようの郡ぐんを天照太神てんしょうだいじんの御栖すみと定めさせ給たまう、されば此の太神おおみかみは伊勢いせの国くににはをはしまさず安房あわの国くに・東条とうじようの郡ぐんにすませ給たまうか、例えば八幡大菩薩はちまんだいぼさつは昔むかしは西府さいふにをはせしかども、中比なかつひは山城やましろの国くに男山おとやまに移り給たまい、今は相州鎌倉そうしゅうがまくら鶴つるが岡おかに栖すみ給たまうこれも・かくのごとし。

日蓮にちれんは一閻浮提えんぶだいの内日本にほん国こく安房あわの国くに・東条とうじようの郡ぐんに始めて此この正法しょうぼうを弘通くわうつうし始めたり、随したがつて地頭敵じとうかたきとなる彼の者ものすでに半分ほろびて今半分あり、領家りやうけはいつわりをろかにて・或時あるは信じ・或時あるはやぶる不定ふじやうなりしが日蓮にちれんごかんきこおむ御勘氣ごかんきを蒙まかりし時ときすでに法華經ほけきやうをすて給たまいき、日蓮にちれん先よりけさんのついでこ

とに難信難解と申せしはこれなり、日蓮が重恩の人なれば扶けたてまつらん
ために此の御本尊をわたし奉るならば十羅刹定めて偏頗の法師と・をぼしめ
されなん、又経文のごとく不信の人に・わたしまいらせずば日蓮偏頗はなけ
れども尼御前我が身のとがをば・しらせ給はずしてつらみさせ給はんずらん、
此の由をば委細に助阿闍梨の文にかきて候ぞ召して尼御前の見参に入れさせ
給うべく候。

御事にをいては御一味なるやうなれども御信心は色あらわれて候、さどの
国と申し此の国と申し度度の御志ありてたゆむけしきはみへさせ給はねば
御本尊は・わたしまいらせて候なり、それも終にはいかながとをそれ思う事
・薄氷をふみ太刀に向うがごとし、くはしくは又又申すべく候、そのみな
らずかまくらにも御勘気の時千が九百九十九人は堕ちて候人人も・いまは
世間やわらぎ候かのゆへにくゆる人人も候と申すげに候へども此れはそれに

は似る^にべくもなくいかにもふびんには思いまいらせ候へども骨に肉をば・かへぬ事にて候へば法華經に相違せさせ給^{たま}い候はん事を叶^{かな}うまじき由いつまでも申し候べく候、^{きょうききょうきんげん}恐恐謹言。

二月十六日

にちれんかおう
日蓮花押

あまごぜんごへんじ
新尼御前御返事

あまごぜんごへんじ
一一二 大尼御前御返事

908P

ごくそつえんま王の長は十丁ばかり面はすをさし^{まなこ}眼は日月のごとく齒はまんぐわのねのやうにくぶしは大石のごとく^{だいち}大地は舟を海にうかべたるやうに・うごき・声はらいのごとく・はたはたとなりわたらむには・よも南無^{なむ}妙法蓮華經とは・をほせ候はじ、^{にちれん}日蓮が弟子^{でし}にも・をはせず・よくよく・内をしたためて・をほせをかほり候はん、^{そつち}なづきをわりみをせめて・いのりてみ候はん、^{そつち}たださきの・いのりと・をぼしめせ、これより後は・のちの事を

よくよく御かため候へ、
恐恐。きょうきょう

九月二十日

日蓮にちれん在御判

大尼御前御返事
あまごぜんごへんじ

一一三
種種御振舞御書
しゅじゅ ふるまいごしよ

けんちよう

建長二年五十五歳御作

与光日房
ぼう

於身延

909P

いぶんえい

去ぬる文永五年後の正月十八日・西戎・大蒙古国より日本国を・をそうべ

きよし 牒状ちようじようをわたす、

日蓮にちれんが去ぬる

文応元年ぶんおうがんねん

太歳庚申

に勘えたりし

立正安国論りっしやうあんこくろん

今すこしもたがわず符合しぬ、此の書は白樂天が樂府がふにも越へ仏の未来記みらいきに

もをとらず末代まつだいの不思議ふしぎなに事かこれにすぎん、

賢王けんおう・聖主せいしゅの御世ならば

にほんだいいち

日本第一の権状にもをこなわれ現身げんしんに大師号だいしも・あるべし定めて御たづねあ

りていくさの僉義せんぎをもいゐあわせ調伏じょうぶくなんども申しつけられぬらんと・をも

ひしに其その義なかりしかば其その年の末十月に十一通の状をかきて・かたがた

へをどろかし申す、もつ 国に賢人けんじんなんども・あるならば不思議なる事かな・これはひとへにただ事にはあらず、天照太神てんしょうだいじん・正八幡宮しょうはちまんぐうの此の僧について日本国にほんこくのたすかるべき事を御計らいのあるかと・をもわるべきに・さはなくて・或あるは使を悪口あくぐちし・或あるはあざむき・或あるはとりも入れず・或あるは返事もなし・或あるは返事をなせども上へも申さずこれひとへにただ事にはあらず、設たとい日蓮にちれんが身みの事なりとも国主こくしゅとなりまつり事をなさん人人ひとびとは取りつぎ申もうしたらんには政道の法はふぞかし、いわうや・この事は上の御大事だいじいできらむのみならず各各の身みにあたりて・をほいなるなげき出来しゅつたいすべき事ぞかし、而しかるを用もちうる事こそなくとも悪口あくぐちまではあまりなり、此これひとへに日本国にほんこくの上下万人じやうげばんにん・一人もなく法華經ほけきやうの強敵きやうてきとなりてとしひさしくなりぬれば大禍きじんのつもり大鬼神きじんの各各の身みに入る上へ蒙古国もうこの牒状ちやうじやうに正念しやうねんをぬかれてくるうなり、例せば段の紂王ひかん・比干ひかんといぬし者いさめをなせしかば用もちいずして胸をほり周の文武王にほろ

ばされぬ、吳王は伍子しよがいさめを用いず自害をせさせしかば越王勾踐の
手にかかる、これもかれがごとくなるべきかと・いよいよ・ふびんに・をば
へて名をもしまず命をもすてて強盛に申しはりしかば風・大なれば波・大
なり竜・大なれば雨たけきやうに・いよいよ・あだをなし・ますますにくみ
て御評定に僉議あり、頸をはぬべきか鎌倉を・をわるべきか弟子・檀那等を
ば所領あらん者は所領を召して頸を切れ・或はろうにてせめ・あるいは
遠流すべし等云云。

日蓮悦んで云く本より存知の旨なり、雪山童子は半偈のために身をなげ
常啼菩薩は身をうり善財童子は火に入り樂法梵士は皮をはぐ薬王菩薩は皆
をやく不輕菩薩は杖木をかうむり師子尊者は頭をはねられ提婆菩薩は外道
にころさる、此等はいかなりける時ぞやと勘うれば天台大師は「時に適うの
み」とかかれ章安大師は「取捨宜きを得て一向にすべからず」としるされ、

ほけきよう

法華經は一法なれども機にしたがひ時によりて其の行万差なるべし、仏記し

て云く「我が滅後・正像二千年すぎて末法の始に此の法華經の肝心題目の

こじばか

ひろ

しゅつたい

そのときあくおう

あくびく

だいちみじん

かんじんだいもく

五字計りを弘めんもの出来すべし、其の時惡王・惡比丘等・大地微塵より多

くして・或大乘・或は小乗等をもつて・

あるだいじよう

ある

きそはんほどに、此の題目の行者

だいもく

にせめられて在家の檀那等をかたらひて・或はのり・或はうち・或はろうに

入れ・或は所領を召し・

ある

しよりよう

ある

ある

ある

ある

ある

或は流罪・或は頸をはぬべし、などいふとも退転な

く・ひろむるほどならば・

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

あだをなすものは国主は・どし打ちをはじめ餓鬼

のごとく身をくらひ後には他国よりせめらるべし、これひとへに梵天・帝釈

・日月・四天等の法華經の敵なる国を他国より責めさせ給うなるべし」とと

にちがつ

してん

ほけきよう

たこく

たこく

たこく

たこく

たこく

かれて侯ぞ、各各・我が弟子となのらん人人は一人もをくしをもはるべから

ず、をやを・をもひ・めこを・をもひ所領をかへりみること・なかれ、無量劫

より・このかた・をやこのため所領のために命すてたる事は大地微塵よりも

しよりよう

しよりよう

しよりよう

しよりよう

しよりよう

しよりよう

しよりよう

しよりよう

しよりよう

しよりよう

しよりよう

しよりよう

しよりよう

しよりよう

しよりよう

しよりよう

しよりよう

しよりよう

しよりよう

しよりよう

しよりよう

しよりよう

しよりよう

しよりよう

しよりよう

しよりよう

しよりよう

しよりよう

しよりよう

しよりよう

しよりよう

しよりよう

しよりよう

しよりよう

しよりよう

しよりよう

しよりよう

しよりよう

しよりよう

しよりよう

しよりよう

しよりよう

しよりよう

しよりよう

しよりよう

しよりよう

しよりよう

しよりよう

しよりよう

しよりよう

しよりよう

しよりよう

しよりよう

しよりよう

・をほし、ほけきよう法華經のゆへには・いまだ一度もすてず、ひとたび法華經をばそこばく行
ぜしかども・かかる事しゅつたい出来せしかば退轉たいてんしてやみにき、たと譬えばゆをわかして
水に入れ火を切るにとげざるがごとし、各各思おもい切り給たまへ此の身をほけきよう法華經に
かうるは石に金をかへ糞に米をかうるなり。

ぶつめつ

仏滅後・二千二百二十余年が間・迦葉・阿難等・馬鳴・竜樹等・南岳・

てんだい

みょうらく妙樂・でんぎよう伝教等だにも・いまだひろめ給たまわぬ法華經の肝心・しよぶつ諸仏の

がんもく

眼目たる妙法蓮華經の五字・末法の始に一閻浮提にひろまらせ給たまうべき瑞相ずいそう

にちれん

に日蓮さきがけしたり、わたうども二陣三陣つづきて迦葉・阿難にも勝ぐれ

てんだい天台・でんぎよう伝教にもこへよかし、わづかの小島のぬしらがをどさんを・をぢては

えんまおう

閻魔王のせめをばいかんがすべき、仏の御使と・なのりながら・をくせんは

ひとびと

無下の人人なりと申しふくめぬ、さりし程に念仏者・持齋・真言師等・自身じしん

およの智は及ばず訴状も叶かなわざれば上郎・尼にごぜんたちに・

とりつきて種種にかまへ申す、故最明寺入道殿・極樂寺入道殿を無間地獄
に墮ちたりと申し建長寺・寿福寺・極樂寺・長樂寺・大仏寺等をやきはらへ
と申し道隆上人・良觀上人等を頸をはねよと申す、御評定になにとなく
とも日蓮が罪禍まぬかれがたし、但し上件の事・一定申すかと召し出てたづ
ねらるべしとて召し出だされぬ、奉行人の云く上のをほせ・かくのごとしと
申せしかば・上件の事・一言もたがはず申す、但し最明寺殿・極樂寺殿を地獄
という事は・そらごととなり、此の法門は最明寺殿・極樂寺穀・御存生の時よ
り申せし事なり。

詮ずるところ、上件の事どもは此の国を・をもひて申す事なれば世を安穩
にたもたんと・をばさば彼の法師ばらを召し合せて・きこしめせ、さなくし
て彼等にかわりて理不尽に失に行わるるはどならば国に後悔あるべし、日蓮
・御勘気をかほらば仏の御使を用いぬになるべし、梵天・帝釈・日月・四天

の御とがめありて遠流・死罪の後・百日一年・三年・七年が内に自界叛逆難
とて此の御一門どしうちはじめるべし、其の後は他国侵逼難とて四方より・
ことには西方よりせめられさせ給うべし、其の時後悔あるべしと平左衛門尉
に申し付けしかども太攻入道のくるひしやうに・すこしもはばかり事なく物
にくるう。

去文永八年太歳庚申辛 未九月十二日・御勘氣をかはる、其の時の御勘氣の
やうも常ならず法にすぎてみゆ、了行が謀反を・をこし大夫の律師が世をみ
ださんと・せしを・めしとられしにもこえたり、平左衛門尉・大将として数
百人の兵者にどうまるきせてゑぼうしかけて眼をいからし声をあらうす、
大体・事の心を案ずるに太政入道の世をとりながら国をやぶらんとせしに
たり、ただ事ともみへず、日蓮これを見てをもうやう日ごろ月ごろ・をもひ
まうけたりつる事はこれなり、さいわひなるかな法華經のために身をすてん

事よ、くさきかうべをはなたれば沙いさに金かねをかへ石いしに珠たまをあきなへるがごと
し、さて平左衛門尉さへものじようが一いちの郎従ろうじゆう・少輔房しやうぼうと申もうす者はしりよりて日蓮にちれんが懷かい中ちゆう
せる法華經ほけきやうの第五の巻を取り出しておもてを三度さいなみて・さんざんとう
ちちらす、又九巻の法華經ほけきやうを兵者つわものども打ちちらして・あるいは足にふみ・あ
るいは身にまとひ・あるいはいたじき・たたみ等・家の二三間にちらさぬ所
もなし、日蓮にちれん・大高声を放ちて申もうすあらをもしろや平左衛門尉さへものじようが・ものに
くるうを見よ、とのばら但今にほんこく・日本国の柱をたをすと・よばはりしかば上下万人じやうげばんにん
あわてて見えし、日蓮にちれんこそ御勘氣ごかんきをかほれば・をくして見ゆべかりしに・さ
はなくして・これはひがことなりとや・をもひけん、兵者つわものどものいろこそ・
へんじて見へしか、十日並ならびに十二日の間・真言宗しんごんしゆうの失とが・禅宗ぜんしゆう・念仏等ねんぶつ・
良觀りやうかんが雨ふらさぬ事・具つぶさに平左衛門尉さへものじように・いみきかせてありしに・或あるはど
つとわらひ・或あるはいかりなんと・せし事どもはしげければ・しるさず、せん

ずるところは六月十八日より七月四日まで良観りようかんが雨のいのりして日蓮にちれんに支へられてふらしかね・汗をながし・なんだのみ下くだして雨ふらざりし上・逆風ひまなくてありし事・三度まで・つかひをつかわして一丈のほりを・こへぬもの十丈・二十丈のほりを・こうべきか、いづみしきぶいろごのみの身にして八斎戒にせいせるうたをよみて雨をふらし、能因法師ほっしが破戒はかいの身として・うたをよみて天雨てんう

を下ふらせしに、いかに二百五十戒の人人ひとびと・百千人あつまりて七日二七日せめさせ給たまうに雨の下ふらざる上に大風たいふうは吹き候ぞ、これをもつて存ぜさせ給たまへ各の往生おうじょうは叶かなうまじきぞとせめられて良観りようかんがなきし事・人人ひとびとにつきて通せし事・二に申せしかば、平左衛門尉等さえものじょうかたうとし・かなへずして・つまりふしし事どもはしげければかず。

さては十二日の夜・武蔵守殿むさしのかみのあづかりにて夜半およに及び頸を切らんがため

かまくら

に鎌倉をいでしに・わかみやこうぢにうちいでて四方に兵のうちつつみて・

ありしかども、日蓮云く各各さわがせ給うなべちの事はなし、八幡大菩薩に

さいご　もう

最後に申すべき事ありとて馬よりさしをりて高声に申すやう、いかに八幡大

きよまる

菩薩はまことの神か和氣清丸が頸を刎られんとせし時は長一丈の月と顕われ

たまい

でんぎようだいし

ほけきよう

たまい

けさ

させ給い、伝教大師の法華經をかうぜさせ給いし時はむらさきの袈裟を御

ふせ

たまい

いまにちれん

にほんだいいち

ほけきよう

ぎようじや

そ

布施にさづけさせ給いき、今日蓮は日本第一の法華經の行者なり其の上・身

いちぶん

にほんこく

いっさいしゅじよう

ほけきよう

ほうじ

むげん

だいじよう

に一分のあやまちなし、日本国は一切衆生の法華經を謗じて無間・大城に

おつべきを・たすけんがために申す法門なり、又大蒙古国より・この国をせ

もう

ほうもん

だいもうこく

むるならば天照太神・正八幡とても安穩におはすべきか、其の上・釈迦仏

てんしゅうおおみかみ

しやうはちまん

あんのん

そ

しやかぶつ

・法華經を説き給いしかば多宝仏・十方の諸仏・菩薩あつまりて日と日と月

ほけきよう

と

たまい

たほうぶつ

じゅうぽう

しよぶつ

ほさつ

むりよう

と月と星と星と鏡と鏡とをならべたるがごとくなりし時、無量の諸天並びに

てんじく　かんど　にほんこく　ぜんじん　しようにん

天竺・漢土・日本国等の善神・聖人あつまりたりし時、各各・法華經の行者

てんじく　かんど　にほんこく　ぜんじん　しようにん

ほけきよう　ぎようじや

ほけきよう　ぎようじや

ほけきよう　ぎようじや

ほけきよう　ぎようじや

にをろかなるまじき由の誓状せいじょうまいらせよと・せめられしかば――に御誓状せいじょうを立てられしぞかし、さるにては日蓮にちれんが申すもうまでもなし・いそぎいそぎこそせいじょう誓状の宿願をとげさせ給たまうべきに・いかに此の処ところには・をちあわせ給たまはぬぞと・たかだかと申すもう、さて最後さいごには日蓮にちれん・今夜・頸切られて靈山淨土へ・まいりてあらん時はまづ天照太神てんしょうたいじん・正八幡しょうはちまんこそ起請きしょうを用いぬかみにて侯そうらいれとさしきりて教主きょうしゅ釈尊しやくそんに申し上げ候そうひはんずるぞいたしと・おぼさば・いそぎいそぎ御計らいあるべしとて又馬にのりぬ。

ゆいのはまに・うちいでて御りやうのまへに・いたりて又云いわくしばし・とのばら・これにつぐべき人ありとて、中務三郎左衛門尉さえものじようと申す者のもとへ熊王もうと申す童子どうじを・つかわしたりしかば・いそぎいでぬ、今夜頸切られへ・まかるなり、この数年が間・願いつる事これなり、此の娑婆世界しゃばせかいにして・きじとなりし時は・たかにつかまれ・ねずみとなりし時は・ねこにくらわれき、

・或^{ある}はめこのかたきに身を失^{うしな}いし事・大地微塵より多し、法華經の御ために
は一度^{ひとたび}だも失^{うしな}うことなし、されば日蓮貧道の身と生れて父母の孝養^{にちれんひんどう}・心にた
らず国の恩を報ずべき力なし、今度^{このたび}頸を法華經に奉^{ほけきよう}りて其の功德を父母に回向^{たてまつ}
せん其^そのあまりは弟子^{でし}・檀那^{だんな}等にはぶくべしと申せし事これなりと申せしか
ば、左衛門尉^{さえもんのじよう}・兄弟四人^{きようだい}・馬の口にとりつきて・こしこへたつの口にゆきぬ、
此^こにてぞ有らんずらんと・をもうところに案にたがはず兵士どもうちまはり
・さわぎしかば、左衛門尉申すやう只^{ただ}今なりとなく、日蓮申すやう不かくの^{にちれんもつ}
とのばらかな・これほどの悦び^{よろこ}をば・わらへかし、いかに・やくそくをば・
たがへらるるぞと申せし時、江のしまのかたより月のごとく・ひかりたる物
まりのやうにて辰巳のかたより戌亥^{いぬい}のかたへ・ひかりわたる、十二日の夜の
あけぐれ人の面も・みへざりしが物のひかり月よのやうにて人人^{ひとびと}の面もみな
みゆ、太刀取目くらみ・たふれ臥^ふし

兵共おぢ怖れ・けうさめて一町計りはせのき、・或は馬より・をりて・かしこまり・或は馬の上にて・うずくまれるもあり、日蓮申すやう・いかにとのばら・かかる大根ある召人にはとをのくぞ近く打ちよれや打ちよれやと・たかだかと・よばわれども・いそぎよる人もなし、さてよあけば・いかにいかに頸切べくはいそぎ切るべし夜明けなばみぐるしかりなんと・すすめしかども・とかくのへんじもなし。

はるか計りありて云くさがみのえちと申すところへ入らせ給へと申す、此れは道知る者なし・さきうちすべしと申せどもうつ人もなかりしかば・さてやすらうほどに・或如来の云く・それこそその道にて候へと申せしかば道にまかせてゆく、午の時計りにえちと申すところへ・ゆきつきたりしかば本間六郎左衛門がいへに入りぬ、さけとりよせて・もののふどもに・のませてありしかば各かへるとて・かうべをうなたれ手をあさへて申すやう、このほどは

・いかなる人にてや・をはすらん・我等がたのみて侯・阿弥陀仏をそしらせ
給うと・うけ給われば・にくみまいらせて侯いつるに・まのあたりをがみま
いらせ侯いつる事どもを見て侯へば・たうとさに・としごろ申しつる念仏は
すて侯いぬとて・ひうちぶくろよりすずとりいだして・すつる者あり、今は
念仏申さじと・せいじやうをたつる者もあり、六郎左衛門が郎従等・番をば
うけとりぬ、さえもんのじようも・かへりぬ。

其の日の戌の時計りにかまくらより上の御使とてたてぶみをもちて来ぬ、
頸切れという・かさねたる御使かと・もののふどもは・をもひてありし程に
六郎左衛門が代官右馬のじようと申す者・立ぶみもちて・はしり来りひざま
・つひて申す、今夜にて侯べし・あらあさましやと存じて侯いつるに・かか
る御悦びの御ふみ来りて侯、武蔵守殿は今日・卯の時にあたみの御ゆへ御出で
候へば・いそぎ・あやなき事もやと・まづこれへはしりまいりて侯と申す、

かまくらより御つかいは二時にはしりて候、今夜の内にあたみの御ゆへ・はしりまいるべしとて・まかりいでぬ、追状に云く此の人はとがなき人なり今しばらくありてゆ・るさせ給うべし・あやまちしては後悔あるべしと云云。

其の夜は十三日・兵士ども数十人・坊の辺り並びに大庭になみゐて侯いき、

九月十二百の夜なれば月・大に・はれてありしに夜中に大庭に立ち出でて月

に向ひ奉りてこ自我偈少少よみ奉り諸宗の勝劣・法華經の文あらあら申し

て抑今の月天は法華經の御座に列りますます名月天子ぞかし、宝塔品にし

て仏勅をうけ給い囑累品にして仏に頂をなでられまいらせ「世尊の勅の

如く当に具に奉行すべし」と誓状をたてし天ぞかし、仏前の譬は日蓮なく

ば虚くてこそをはすべけれ、今かかる事出来せばいそぎ悦びをなして法華經

の行者にも・かはり仏勅をも・はたして誓言のしるしをばとげさせ給うべ

し、いかに今しるしのなきは不思議に候ものかな、何なる事も国になくして

は鎌倉へもかへらんとも思はず、しるしこそなくとも・うれしがをにて澄渡^{わた}
らせ給^{たま}うはいかに、大集経^{だいしききやう}には「日月明^{にちがつ}を現^{げん}ぜず」ととかれ、仁王経^{にんのうきやう}には
「日月度^{にちげつど}を失^{うしな}う」とかかれ、最勝王経^{さいしょうおうきやう}には「三十三天各隕^{うらみ}恨を生ず」とこ
そ見え侍^{はべ}るに・いかに月天^{がつてん}いかに月天^{がつてん}とせめしかば、其^そのしるしにや天より
明星^{こと}の如^{ごと}くなる大星^{だいせい}下りて前の梅の木の杖に・かかりてありしかば・ものの
ふども皆^{みな}えんより・とびをり・或^{ある}は大庭にひれふし・或^{ある}は家のうしろへにげ
ぬ、やがて即^{すなわ}ち天かきくもりて大風吹き来りて江の島のなるとて空のひびく
芋大なるつづみを打つがごとし。

夜明^{よあけ}れば十四日卯の時に十郎入道^{じゅうろうにゅうだう}と申^{もつ}すもの来りて云^{いわ}く・昨日の夜の戌の
時計^{ばか}りにかうどのに大なるさわぎあり、陰陽師^{おんようし}を召して御うらなひ候^{そうち}へば申
せしは大^{おお}に国みだれ候^{おい}べし・此の御房御勘氣^{ごぼうごかんき}のゆへなり、いそぎいそぎ召し
かえさずんば世の中いかが候^{たま}べかるらんと申せば、ゆりさせ給^{たま}へ候^{そうろうもつ}と申す人

もあり、又百日の把に軍あるべしと申しつれば・それを待つべしとも申す、
依智えちにして二十余日・其の間鎌倉に・或は火をつくる事・七八度・或は人
をころす事ひまなし、讒言ざんげんの者共の云く日蓮にちれんが弟子共の火をつくるなりと、
さも・あるらんとて日蓮にちれんが弟子等を鎌倉かまくらに置くべからずとて二百六十余人し
るさる、皆遠島みなへ遣すべしろうにある弟子共をば頸をはねらるべしと聞ふ、
さる程に火をつくる等は持斎念仏じさいねんぶつ者が計事なり其の余はしげければかかず。
同十月十日に依智えちを立つて同十月二十八日に佐渡さどの国へ著ぬ、十一月一日
に六郎左衛門さえもんが家のうしろ塚原もうと申す山野の中に洛陽らくようの蓮台れんだい野のやうに死人しにん
を捨つる所に一間四面しめんなる堂の仏もなし、上はいたまあはず四壁はあばらに
雪ふりりて消ゆる事なし、かかる所にしきが打ちしき衰みのうちきて夜をあか
し日をくらす、夜は雪電雷電ゆきあられいなすまひまなし昼は日の光もささせ給たまはず心細かるべ
きすまゐなり、彼の李陵りりようが胡国ここくに入りて巖窟ほうくつに・せめられし法道三蔵ほうどうさんざうの徽宗きそう

こうてい
皇帝に・せめられて面かおにかなやきをさされて江南にはなたれしも只ただ今とおば
ゆ、あらうれしや檀王だんおうは阿私仙人あしせんじんに・せめられて法華經の功德くどくを得給たまいき、
ふぎようぼさつ じようまん びく
不輕菩薩は上慢の比丘等の杖にあたりて一乗いちじようの行者ぎようじゃといはれ給ふ、今日蓮いまにちれん
まつほう
は末法に生れて妙法蓮華經の五字を弘めて・かかるせめにあへり、仏滅度後
ごじ ひろ
・二千二百余年が間・恐らくは天台智者大師も一切世間・多怨難信の經文を
てんだいちしゃだいし いっさいせけん たおんなんしん きようもん
ば行たまじ給はず数数見擯出の明文めいぶんは但日蓮一人にちれんなり、一句一偈いっくいちげ・我皆与授記は
あのかたらさんみやくさんぼだい うたがい
我なり阿耨多羅三藐三菩提うたがいは疑うたがいいなし、相模守殿さがみのかみこそ善知識ぜんちしきよ平左衛門さえもんこ
だいばだった ねんぶつ くぎやりそんじゃ じさい
そ提婆達多だいばだったよ念仏ねんぶつ者は瞿伽利尊者くぎやりそんじゃ・持斎等じさいは善星比丘ぜんしやうびくなり、在世ざいせは今にあり
ざいせ
今は在世ざいせなり、法華經の肝心かんじんは諸法実相しよほうじつそうと・とかれて本末究竟等ほんまつくきようとのべられ
そうら これ
て候そうらは是なり、摩訶止觀まかしかん第五に云く「行解ぎようげ既に勤つとめぬれば三障さんしやう・四魔ふんぜん・紛然ふんぜん
きそ おこ
として競きそい起る「文、又云く「猪の金山しゆを摺すり衆流しゆりうの海に入り薪たきぎの火を熾さかんに
ぐら やく
し風の求羅ぐらを益やくすが如ごときのみ」等云云、釈しゃくの心は法華經を教のごとく機きに叶

ひ時に叶かなうて解行げぎようすれば七つの大事出来だいじしゅつたいす、其の中に天子魔てんじまとて第六天だいろくてんの魔王まおう・或あるは国主こくしゅ・或あるは父母ふぼ・或あるは妻子さいし・或あるは檀那だんな・或あるは惡人等あくにんについて・或あるは隨したがつて法華經ほけきようの行をさえ・或あるは達してさうべき事なり、何れいすれの經をも行ぜぶつぼうは佛法ぶつぽうを行ずるには分したが分に隨したがつて留難るなんあるべし、其の中に法華經ほけきようを行ずるには強盛じうじようにさうべし、法華經ほけきようを・をしへの如く時機じきに當つて行ずるには殊ことに難なんあるべん、故ゆえに弘決くけつの八に云く「若もし衆生しゆじよう・生死しじうじを出いでず仏乘ぶつじようを慕したわずと知れば魔こ・是この人に於おいて猶親なほの想を生なす」等云云、釈しゃくの心は人・善根ぜんこんを修しゆすれども念仏ねんぶつ・真言しんこん・禪・律等の行をなして法華經ほけきようを行ぜざれば魔王親まおうのおもひをなして人間にんげんにつきて其その人をもてなし供養くようす世間せけんの人に実の僧と思はせんが為なり、例せば国主こくしゅのたとむ僧をば諸人供養しよにんくようするが如し、されば国主等こくしゅのかたきにするは既すでに正法しやうぽうを行ずるにてあるなり、釈迦如来しゃかにょらいの御ためには提婆達多だいばだつたこそ第一だいいちの善知識ぜんちしきなれ、今の世間せけんを見るに人をよくなすものはかた

うどよりも強敵いっしきが人をば・よくなしけるなり、眼前がんぜんに見えたり此の鎌倉かまくらの御
一門いちもんの御繁昌はんじやうは義盛おきほうと隠岐法皇いんぎほうましまさずんば争いかでか日本にほんの主となり給たまうべ
き、されば此の人人ひとびとは此の御一門いちもんの御ためには第一だいいちのかたうどなり、日蓮にちれんが
仏だいいちにならん第一だいいちのかたうどは景信かげのぶ・法師ほっしには良観りようかん・道隆どうりゆう・道阿弥陀仏あみだぶつと平
左衛門尉さへもんじやう・守殿こうどのましまさずんば争いかでか法華經ほけきやうの行者ぎやうじやとはなるべきと悦ぶ。

かくて・すぐす程に庭には雪つもりて・人もかよはず堂にはあらし風より
外は・をとづるものなし、眼まなこには止観しかん・法華ほっけをさらし口には南無なむ
妙法蓮華經みようほうれんげきやうと唱へ夜は月星に向ひ奉りて諸宗たてまつの違目しよしゆうと法華經いもくの深義ほけきやうを談だんず
る程に年もかへりぬ、いづくも人の心のはかなさは佐渡さどの国の持斎じさい・念佛者ねんぶつ
の唯阿弥陀仏ただあみだぶつ・生喻房ほう・印性房ほう・慈道房等ほうの数百人より合いて僉議せんぎすと
承うけたまわるる、聞あみだぶつふる阿弥陀仏おんてきの大怨敵いっさいしじゆう・一切衆生あくちしきの悪知識にちれんぼうの日蓮房・此の国にな
がされたり・なにとなくとも此の国へ流されたる人の始終しじゆういけらるる事なし、

た
と
設ひいけらるるとも・かへる事なし、又打ちころしたりとも御とがめなし、
塚原と云う所に只一人ありいかにがうなりとも力つよくとも人なき処なれば
集りていころ・せかしと云うものもありけり、又なにとなくとも頸を切らる
べかりけるが守殿の御台所の御懷妊なれば・しばらく

きられず終には一定ときく、又云く六郎左衛門尉殿に申してきらずんば・は

からうべしと云う、多くの義の中に・これについて守護所に数百人集りぬ、

六郎左衛門尉云く上より殺しまうすまじき副状下りてあなづるべき流人には

あらず、あやまちあるならば重連が大なる失なるべし、それよりは只法門に

てせめよかしと云いければ念佛者等・・或は浄土の三部経・・或は止観・

・或は真言等を小法師等が頸にかけさせ・或はわきにはさませて正月十六日

にあつまる、佐渡の国のみならず越後・越中・出羽・奥州・信濃等の国国よ

り集れる法師等なれば塚原の堂の大庭・山野に数百人・六郎左衛門尉・兄弟

一家さならぬもの百姓ひやくせいの入道等にぎやうどうかずをしらず集りたり、念仏者ねんぶつは口口に悪口あくくをなし真言師しんごんしは面面に色を失ひ天台宗うしないてんだいしゅうぞ勝つべきよしを・ののしる、在家ざいけの者どもは聞ふる阿弥陀あみた仏のかたきよと・ののしり・さわぎ・ひびく事・震動しんどう雷電らいでんの如しごと、日蓮にちれんは暫らくしば・さはがせて後・各各しつまらせ給へたま・法門ほうもんの御ため為にこそ御渡りあるらめ悪口等あくくよしなしと申せしかば・六郎左衛門さえもんを始めて諸人しよにん然るべしとて悪口あくくせし念仏者ねんぶつをば・そくびをつきいだしぬ、さて止観しかん・真言しんごん・念仏ねんぶつの法門ほうもん一一にかれが申す様を・でつしあげて承伏しょうふくせさせては・ちやうとはつめつめ・一言二言にはすぎず、鎌倉かまくらの真言師しんごんし・禅宗ぜんしゅう・念仏者ねんぶつ・天台てんだいの者よりも・はかなきものどもなれば只思ただひやらせ給へたま、利剣りけんをもて・うりをきり大風たいふうの草をなびかすが如しごと、仏法ぶつぽうのおろかなる・のみならず・或あるは自語相違じごそういし・或あるは経をわすれて論と云ひ釈をわすれて論と云ふ、善導ぜんどうが柳より落こうち弘法大師こうぼうだいしの三鈷さんこを投だいにちによらいたる大日如来げんと現あらじたる等をば・或あるは妄語もうご・或ある

は物にくるへる処ところを一一にせめたるに、・或あるは悪口あくぐちし・或あるは口を閉ぢ・或あるは色を失うしなひ・或あるは念仏ねんぶつひが事なりけりと云うものもあり、・或あるは当座とうざに袈裟けさ・平念珠ねんじゆをすてて念仏申すまじきよし誓状せいじやうを立つる者もあり。

皆人立みなち歸る程に六郎左衛門尉さえものじやうも立ち歸る一家の者も返る、日蓮不思議にちれんふしぎ一

云はんと思ひて六郎左衛門尉を大庭よりよび返して云いわくいつか鎌倉へのぼり

給たまうべき、かれ答えて云いわく下人共に農せさせて七月の比と云云、日蓮云にちれんいわく弓箭きゆうせん

とる者は・を・をやけの御大事だいじにあひて所領しよりやうをも給たまわり供をこそ田畠でんぱたつくる

とは申せ、只今ただいくさのあらんずるに急ぎうちのぼり高名して所知しよちを給らぬ

か、さすがに和殿原はさがみの国には名ある侍ぞかし、田舎いなかにて田つくり・

いくさに・はづれたらんは恥はじなるべしと申せしかば・いかにや思ひけめあは

ててもものもいはず、念仏者持齋ねんぶつ じさい・在家ざいけの者どもも・なにと云う事ことぞやと恠あやし

む。

さて皆歸りしかば去年の十一月より勘えたる開目抄と申す文二卷造りたり、
頸切るるならば日蓮が不思議とどめんと思いて勘えたり、此の文の心は日蓮
によりて日本国の有無はあるべし、譬へば宅に柱なければ・たまたず人に魂
なければ死人なり、日蓮は日本の人の魂なり平左衛門既に日本の柱をたをし
ぬ、只今世乱れてそれともなく・ゆめの如くに妄語出来して此の御一門とし
うちして後には他国よりせめらるべし、例せば立正安国論に委しきが如し、
かやうに書き付けて中務三郎左衛門尉が使にとらせぬ、つきたる弟子等もあ
らぎかなと思へども力及ばざりげにてある程に、二月の十八日に島に船つく、
鎌倉に軍あり京にもあり・そのやう申す計りなし、六郎左衛門尉・其の夜に
はやふねをもつて一門相具してわたる日蓮にたな心を合せて・たすけさせ
給へ、去る正月十六日の御言いかによと此程疑い申しつるに・いくほどな
く三十日が内にあひ候いぬ、又蒙古も一定渡り候いなん、念仏・無間地獄

も一定にてぞ候はんずらん永く念仏申し候まじと申せしかば、いかに云うと
も相模守殿等の用ひ給はざらんには日本国の人用うまじ用ゐずば国必ず亡ぶ
べし、日蓮は幼若の者なれども法華經を弘むれば釈迦仏の御使ぞかし、わづ
かの天照太神・正八幡などと申すは此の国には重けれども梵釈・日月・
四天に対すれば小神ぞかし、されども此の神人などをあやまちぬれば只の
人を殺せるには七人半なんと申すぞかし、太政入道隠岐法皇等のほろび給い
しは是なり、此れはそれにはなるべくもなし教主釈尊の御使なれば
天照太神・正八幡宮も頭をかたづけ手を合せて地に伏し給うべき事なり、
法華經の行者をば梵釈・左右に侍り日月・前後を照し給ふ、かかる日蓮を
用いぬるともあしくうやまはば国亡ぶべし、何に況や数百人ににくませ二度
まで流しぬ、此の国の亡びん事疑いなるべけれども且く禁をなして国を
たすけ給へと日蓮がひかうればこそ今までは安穩にありつれども・はうに

過ぐれば罰あたりぬるなり、又此の度も用ひずば大蒙古国より打手を向けて
にほんこく
日本国ほろぼさるべし、ただ平左衛門尉が好むわざわひなり、和殿原とても
此の島とても安穩なるまじきなりと申せしかば、あさましげにて立歸りぬ、
さて在家の者ども申しけるは・此の御房は神通の人にてましますか・あらお
そろし・おそろし、今は念仏者をも・やしなひ持齋をも供養すまじ、念仏者
りようかん
・良觀が弟子の持齋等が云く此の御房は謀叛の内に入りたりけるか、さて
しばら
且くありて世間しつまる。

又念仏者集りて僉議す、かうてあらんには我等かつえしぬべし・いかにも
ねんぶつ
して此の法師を失はばや、既に国の者も大体つきぬ・いかんがせん、念仏者
ちようじゃ
の長者の唯阿弥陀仏・持齋の長者の性諭房・良觀が弟子の道觀等・鎌倉に
ただあみだぶつ
走り登りて武蔵守殿に申す、此の御房・島に侯ものならば堂塔一宇も侯べか
むさしのかみ
らず僧一人も侯まじ、阿弥陀仏をば・或は火に入れ・或は河にながす、夜も
あみだぶつ
あま
ある

ひるも高き山に登りて日月に向つて大音声おんじょうを放つて上を呪咀じゆつそし奉るたてまつ、其の
音声おんじょう一國に聞ふと申すもう、武蔵前司殿・是これをきき上へ申すまでも・あるまじ、
先ず國中のもの日蓮房にちれんぼうにつくならば・或あるは國をおひ・或あるはろうに入れよと私
の下知げちを下す、又下文下るかくの如ごとく三度其の間の事申さざるに心をもて
計りぬべし、或あるは其の前をとをれりと云うて・ろうに入れ・或あるは其の御房に
物をまいらせけりと云うて國をおひ・或あるは妻子をとる、かくの如ごとくして上へ
此の由よしを申もうされければ案に相違そういして去る文永十一年二月十四日の御赦免しゃめんの状
・同三月八日に島につきぬ、念佛者等ねんぶつ・僉議せんぎして云く此れ程の阿弥陀仏の御
敵・善導和尚ぜんどうわじょう・法然上人ほうねんしょうにんをのるほどの者が・たまたま御勘氣ごかんきを蒙りて此の島
に放されたるを御赦免しゃめんあるとていけて歸さんは心うき事なりと云うて、やう
やうの支度ありしかども何なる事いかにや有りけん、思はざるに順風吹き来りて
島をば・たちしかばあはいあしければ百日・五十日にもわたらず、順風には

三日なる所を須臾しゅゆの間に渡りぬ、越後のこう・信濃の善光寺の念仏者ねんぶつ・持齋じさい
・真言等しんこんは雲集うんしゅうして僉議せんぎす、島の法師原ほっしは今まで・いけてかへすは人かつた
いなり、一我等われらはいかにも生身しょうしんの阿弥陀仏あみだぶつの御前おんまえをば・とをすまじと僉議せんぎせ
しかども、又越後のこうより兵者つわものども・あまた日蓮にちれんにそひて善光寺をとをり
しかば力およ及ばず、三月十三日に島を立ちて同三月二十六日に鎌倉かまくらへ打ち入り
ぬ。

同四月八日平左衛門尉さえものじょうに見参しぬ、さきには・にるべくもなく威儀いぎを和やわ
げて・ただしくする上ある・・或る入道にゅうどうは念仏ねんぶつをとふ・・或る俗あるは真言しんこんをとふ・
・或る人あるは禅をとふ・平左衛門尉さえものじょうは爾前得道の有無うむをとふ・一一に経文きょうもんを引
いて申しぬ、平の左衛門尉さえものじょうは上の御使おんつかいの様に大蒙古国だいもうここくはいつか渡り候わたべき
と申すもう、日蓮答えて云いわく今年は一定なりそれにとつては日蓮にちれん已前いぜんより勘かんへ申す
をば御用もうひなし、譬たとえば病の起りを知らざる人の病を治せば弥いよいよ病は倍增ばいぞうす

べし、真言師しんごんしだにも調じょうぶく伏するならば弥いよよ此の国軍にまくべし・
六賢あなかしこあなかしこ六賢、

真言師・総じて当世とうせの法師等をもつて御祈り有るべからず・各各は仏法ぶつぽうをし

らせ給たまうておわさばこそ申もうすともしらせ給たまはめ、又何いかなる不思議ふしぎにやあるら

ん他事たじには・ことにして日蓮にちれんが申もうす事は御用もちいなし、後に思い合せさせ奉たてまつらん

が為ために申もうす隠岐法皇は天子なり権大夫殿は民ぞかし、子の親をあだまんをば

天照太神てんしょうだいじんうけ給たまいなんや、所従しよじゆうが主君を敵とせんをば正八幡しやうはちまんは御用もちいある

べしや、いかなりければ公家くげはまけ給たまいけるぞ、此これは偏ひとえに只事ただにはあらず

弘法大師こうぼうだいしの邪義じゃぎ・慈覚大師じかくだいし・智証大師ちしやうだいしの僻見びやくけんをまことと思えいて叡山えいざん・東寺とうじ・

園城寺おんじやうじの人人ひとびとの鎌倉かまくらをあだみ給たまいしかば還著げんちゃく於本人おほんにんとて其の失還とががえつて公家くげは

まけ給たまいぬ、武家ぶけは其の事知らずして調伏じやうぶくも行はざればかちぬ今又かくの

如ごとくなるべし、蝦夷ゑそは死生不知しじふしのもの安藤五郎いんがは因果どうりの道理わきまを弁わえて堂塔多どうとう

く造つくりし善人ぜんにんなり、いかにとして頸くをば・ゑそに・とられぬるぞ、是これをもつ

て思うに此の御房^{ごぼう}たちだに御祈^ごあらば入道^{にゅうどう}穀^く・事にあひ給^{たま}いぬと覚え^{おぼ}候^け、あ
なかしこ・あなかしこ・さ・いはざりけると・おほせ候^けなと・したたかに
申し付け^{もう}候^けいぬ。

さてかへりききしかば同四月十日より阿弥陀堂^{あみだどう}法印^{ほういん}に仰付^{おほせ}られて雨の御い
のりあり、此の法印^{ほういん}は東寺^{とうじ}第一^{だいいち}の智人^{ちじん}・をむろ等の御師^{おんし}・弘法大師^{こうぼうだいし}・慈覚大師^{じかくだいし}
・智証大師^{ちしょうだいし}の・真言^{しんごん}の秘法^{ひほう}を鏡^{かがみ}にかけ天台^{てんだい}・華嚴^{けごん}等の諸宗^{しよしゅう}を・みな胸^{むね}にうか
べたり、それに随^{したが}いて十日よりの祈雨^{きう}に十一日に大雨^{だいう}下りて風^{ふう}ふかず雨^{ふら}しつ
かにて一日一夜^{いちにちのよ}ふりしかば・守殿^{しゅでん}御感^{ごかん}のあまりに金三十両^{きんさんじゅうりやう}むまやうやうの御
ひきで物ありと・きこふ、鎌倉^{かまくら}中の上下^{じやうげ}・万人^{ばんにん}・手をたたき口^{くち}をすくめてわ
らうやうは日蓮^{にちれん}ひが法門^{ほうもん}申^{もう}して・すでに頸^{けい}をきられんとせしが・とかうして
ゆりたらば・さではなくして念仏^{ねんぶつ}・禅^{ぜん}をそしるのみならず、真言^{しんごん}の密教^{みつぎょう}なん
どをも・そしるゆへに・かかる法のしるしめでたしと・ののしりしかば、日蓮^{にちれん}

が弟子等けうさめて・これは御あら義と申せし程に・日蓮が申すやうはしば
しまて弘法大師の悪義まことにて国の御いのりとなるべくば隠岐法皇こそ・
いくさにかち給はめ、をむろ最愛の児せいたかも頸をきられざるらん、弘法
の法華經を華嚴經にをとれりとかける状は十住心論と申す文にあり、
寿量品の釈迦仏をば凡夫なりとするされたしる文は秘藏宝鑰に候、天台大師
をぬす人とかける状は二教論にあり、一乘法華經をとける仏をば真言師のは
きものとりにも及ばずとかける状は正覚房が舍利講の式にあり、かかる僻事
を申す人の弟子・阿弥陀堂の法印が日蓮にかつならば竜王は法華經のかたき
なり、梵釈・四王に・せめられなん子細ぞあらんずらんと申せば、弟子ども
のいはく・いかなる子細のあるべきぞとをこつきし程に、日蓮古く善無畏も
不空も雨のいのりに雨はふりたりしかども大風吹きてありけるとみゆ、弘法
は三七日すぎて雨をふらしたり、此等は雨ふらさぬがごとし、三七・二十一

日にふらぬ雨やあるべき設たといいふりたりとも・なんの不思議ふしぎがあるべき、天台てんだい
のごとく千観せんくわんなんのごとく一座いざなんど・こそたうとけれ、此これは一定やう
あるべしと・いゝもあはせず大風たいふう吹来る、大小だいしょうの舎宅しゃたく・堂塔どうとう・古木・御所等
を・或あるは天に吹きあるのぼせ・或は地に吹き入れ、そらには大なる光り物とび地
には棟梁どうりやうみだれたり、人人ひとびとをも・ふきころし牛馬ぎゅうばを・をくたふれぬ、悪風あくふうな
れども秋は時なれば・なをゆるすかたもあり此これは夏四月なり、其その上・
日本国にほんこくにはふかず但かんとつ関東・八箇国はつかんこくなり八箇国はつかんこくにも武蔵むさし・相模さがみの両国りやうこくなり
両国りやうこくの中には相州そうしゅうにつよくふく、相州そうしゅうにも・かまくら・かまくらにも御所
・若宮けんちやうじ・建長寺けんちやうじ・極楽寺ごくらくじ等につよくふけり、ただ事ともみへず・ひとへにこ
のいのりの・ゆへにやと・おぼへて・わらひ口すくめせし人人ひとびとも・けうさめ
てありし上・我でしが弟子でしどももあら不思議ふしぎやと舌をふるつ。

本よりこせし事なれば三度・国をいさめんに・もちゐずば国をさるべしと、
されば同五月十二日にかまくらを・いでて此の山に入る、同十月に大蒙古国
よせて壱岐・対馬の二箇国を打ち取らるるのみならず、太宰府もやぶられて
少弐入道・大友等ききにげににげ其の外の兵者ども其の事ともなく大体打た
れぬ、又今度よせくるならば・いかにも此の国よはよはと見ゆるなり、仁王経
には「聖人去る時は七難必ず起る」等云云、最勝王経に云く「悪人を愛敬
し善人を治罰するに由るが故に乃至他方の怨賊来りて国人喪乱に遇わん」等
云云、仏説まことならば此の国に一定悪人のあるを国主たつとませ給いて善人
をあだませ給うにや、大集経に云く「日月明を現ぜず四方皆亢旱す是くの如
く不善業の悪王・悪比丘我が正法を毀壞せん」云云、仁王経に云く「諸の
悪比丘多く名利を求め国王太子・王子の前に於て自ら破仏法の因縁・破国の
因縁を説く、其の王別えずして此の語を信聴せん是を破仏法・破国の因縁

と為す等云云、法華經に云く、「濁世の惡比丘」等云云、經文まことならば此

の國に一軍惡比丘のあるなり、夫れ宝山には曲林をきる大海には死骸をとど

めず、仏法の大海二乗の宝山には五逆の瓦礫・四重の濁水をば入るれども誹謗

の死骸と一闍提の曲林をば・をさめざるなり、されば仏法を習わん人・後世

をねがはん人は法華誹謗をおそるべし。

皆人をばするやうは・いかでか弘法・慈覺等をそしる人を用うべきと、他人

は・さてをきぬ安房の國の東西の人人は此の事を信すべき事なり、眼前の

現証ありいのもりの円頓房・清澄の西堯房・道義房かたうみの実智房等は年

とかりし僧ぞかし、此等の臨終はいかんがありけんと尋ぬべし、これらはさ

てをきぬ、円智房は清澄の大堂にして三箇年が間・一字三礼の法華經を我と

かきたてまつりて十巻を諳に・をばへ、五十年が間・一日一夜に二部づつよ

まれしぞかし、かれをば哲人は仏になるべしと云云、日蓮こそ念仏者よりも

道義房ほうと円智房ほうとは無間地獄むげんじごくの底そこにをつべしと申もうしたりしが此この人人ひとびとの御臨終りんじゆうはよく候いけるか・いかに、日蓮にちれんなくば此この人人ひとびとをば仏ほとけになりぬらんとこそおぼすべけれ、これをもつて・しろしめせ弘法こうぼう・慈覺じかく等はあさましき事どもはあれども弟子でしども隠かくせしかば公家くげにもしらせ給たまはず未みの代しろは・いよいよあをぐなり、あらはす人なくば未来永劫みらいえいこくまでも・さであるべし、拘留外道とどげどうは八百年ありて水となり、迦毘羅外道かびらげどうは一千年すぎてこそ其その失とがはあらわれしか。

夫それ人身じんしんをうくる事は五戒ごがいの力ちからによる、五戒ごがいを持たもてる者をば二十五にじふごの善神ぜんじんこれをまほる上同生同名じやうどうめいと申もうして二つの天生てんじやうれしより・このかた左右さうのかたに守護しゆごするゆへに失とがなくて鬼神きじんあだむことなし、しかるに此この国の無量むりやうの諸人しよにんなげきを・なすのみならず、ゆきつしまの両国りやうこくの人ひと・皆事みなにあひぬ太宰府たさいふ又また申もうすばかりなし、此この国はいかなるとがのあるやらん・しらまほしき事な

り、一人・二人こそ矢も・あるらめ・そこばくの人人いかん、これひとへに
法華經をさぐる弘法・慈覺・智証等の末の台空白師・善導・法然が末の弟子
等・達磨等の人人の末の者ども国中に充滿せり、故に梵釈・四天等の法華經
の座の誓状のごとく頭破作七分の失にあてらるるなり。

疑つて云く法華經の行者をあだむ者は頭破作七分ととかれて侯に・日蓮房
をそしれども頭もわれぬは日蓮房は法華經の行者にはあらざるかと申すは
道理なりと・をばへ侯はいかん、答えて云く日蓮を法華經の行者にてなしと
申さば法華經をなげすてよとかける法然等・無明の辺域としるせる弘法大師
・理同事勝と宣たる善無畏・意覺等が法華經の行者にてあるべきか、又頭破
作七分と申す事はいかなる事ぞ刀をもてきるやうにわるとしれるか、經文
には如阿梨樹枝とこそとかれたれ、人の頭に七滴あり七鬼神ありて一滴食へ
ば頭をいたむ三滴を食へば寿絶えんとす七滴皆食えば死するなり、今の世の

人人は皆頭阿梨樹の枝のごとくに・われたれども悪業ふかくして・しらざるなり、例せばてをおいたる人の・或は酒にゑい・或はねいりぬれば・をぼえざるが如し、又頭破作七分と申すは・或は心破作七分とも申して頂の皮の底にある骨のひびたふるなり、死ぬる時は・わるる事もあり、今の世の人人は去ぬる正嘉の大地震・文永の大彗星に皆頭われて候なり、其の頭のわれし時ぜひせひやみ・五臓の損ぜし時あかき腹をやみしなり、これは法華經の行者をそしりしゆへにあたりし罰とはしらずや。

されば鹿は味ある故に人に殺され亀は油ある故に命を害せらる女人はみめ形よければ嫉む者多し、国を治る者は他国の恐れあり財有る者は命危し法華經を持つ者は必ず成仏し候、故に第六天の魔王と申す三界の主此の經を持つ人をば強に嫉み候なり、此の魔王疫病の神の目にも見えずして人に付き候やうに古酒に人の酔い候如く国主父母・妻子に付きて法華經の行者を嫉むべしと

見えて侯、少しも違わざるは当時の世にて侯、日蓮は南無妙法蓮華經と唱う
る故に二十余年所を追はれ二度まで御勘氣を蒙り最後には此の山にこもる、
此の山の体たらくは西は七面の山・東は天子のたけ北は身延の山・南は鷹取
の山・四つの山高きこと天に付き・さがしきこと飛鳥もとびがたし、中に四
つの河あり所謂・富士河・早河・大白河・身延河なり、其の中に一町ばかり
はさま間の侯に庵室を結びて侯、昼は日をみず夜は月を拝せず冬は雪深く夏は草茂
り問う人希なれば道をふみわくることがたし、殊に今年は雪深くして人問う
ことなし命を期として法華經計りをたのみ奉り侯に御音信ありがたく侯、し
らず釈迦仏の御使か過去の父母の御使かと申すばかりなく侯、南無
妙法蓮華經・南無妙法蓮華經。

一一四

光日房御書

926P

去る文永八年太歳辛未九月のころより御勘氣をかほりて北国の海中佐渡

の嶋にはなたれたりしかば、なにとなく相州鎌倉そうしゅうかまくらに住しには生国なれば安房あわ

の国はこひしかりしかども我が国ながらも人の心もいかにとやむつびにくく

ありしかば、常にはかよう事もなくしてすぎしに御勘氣ごかんきの身となりて死罪しざいと

なるべかりしが、しばらく国の外にはなたれし上はをぼるげならではかまく

らへはかへるべからず、かへらずば又父母ふぼのはかを見る身となりがたしとを

もひつづけしかば、いまさらとびたつばかりくやしくてなどかかかる身とな

らざりし時・日にも月にも海もわたり山をもこえて父母ふぼのはかをもみ師匠ししょうの

ありやうをもとひをとづれざりけんとなげかしくて、彼の蘇武そぶが胡国ここくに入り

て十九年かりの南へとびけるをうらやみ、仲丸が日本にほんの朝使として・もろ

こしにわたりてありしがかへされずしてとしを経へしかば月の東に出いでたるを

みて、我が国みかさの山にも此の月は出いでさせ給たまいて故里の人も只ただ今月に向

いてながむらんと心をすましてけり、此これもかくをもひやりし時・我が国よ

り・或人^{ある}のびんにつけて衣をたびたりし時・彼の蘇武^{そぶ}がかりのあし此^これは現^{げん}
に衣ありにるべくもなく・心なぐさみて候^{にちれん}しに、日蓮^{にちれん}はさせる失^{とが}あるべしと
はをもはねども此の国のならひ念佛者と禅宗^{ぜんしゅう}と律宗^{りつしゅう}と真言宗^{しんこんしゅう}にすかされぬ
るゆへに法華經^{ほけきょう}をば上にはたうとむよしをふるまい心には入らざるゆへに、
日蓮^{にちれん}が法華經^{ほけきょう}を・いみじきよし申せば威音王仏^{いおんおうぶつ}の末の末法^{まつぼう}に不輕菩薩^{ふぎょうぼさつ}をにく
みしごとく上^{かみいちにん}一人より下万人^{ばんにん}にいたるまで名をも・きかじ・まして形をみる
事はをもひよらず、さればたとひ失^{とが}なくともかくなさるる上はゆるしがたし、
まして・いわうや日本^{にほん}の人の父母^{ふぼ}よりをもく日月^{にちがつ}よりもたかくたのみた
まへる念佛^{ねんぶつ}を無間の業^{むげん}と申し禅宗^{ぜんしゅう}は天魔^{てんま}の所為^{しよゐ}・真言^{しんこん}は亡国^{ぼつこく}の邪法^{じゃほう}念佛者^{ねんぶつ}・
禅宗^{ぜんしゅう}・律僧^{りつそう}等が寺をばやきはらひ念佛者^{ねんぶつ}どもが頸をはねらるべしと申す上、
故最明寺極樂寺^{さいみょうじごくらくじ}の両入道殿^{にふじうだう}を阿鼻地獄^{あびじこく}に墮^おち給^{たま}いたりと申すほどの大禍^{たふ}ある
身なり、此^これ程^{だいじ}の大事^{じようげ}を上下万人^{じようげばんにん}につけられぬる上は設^{たと}ひそらごととなりとも

此の世にはうかびがたし、いかにいわうやこれはみな朝夕ちようせきに申し昼夜もつに談ぜ
しうへ平左衛門尉等の数百人の奉行人ぶぎように申しきかせいかにとがに行わるとも
申しやむまじきよし・したたかにいゐきかせぬ、されば大海たいかいのそのちびき
の石はうかぶとも天よりふる雨は地にをちずとも日蓮にちれんはかまくらへは還かえるべ
からず、但しただ法華經のまことにおはしまし日月我をすて給たまはずばかり入り
て又父母ふぼのはかをもみるへんもありなんと心づよくをもひて梵天ぼんでん・帝釈たいしゃく・
日月にちがつ・四天してんはいかになり給たまいぬるやらん、天照太神てんしやうだいじん・正八幡宮しやうはちまんぐうは此の国に
をさせぬか、仏前ぶつぜんの御起請きしょうはむなしくて法華經の行者ほけきようをばすて給たまうか、もし
此の事かな叶なわらずば日蓮にちれんが身のなにともならん事はをしからず、各各現げんに教主きやうしゆ
釈尊しゃくそんと多宝如来たほうにょらいと十方じゆつぱうの諸仏しよぶつの御宝前ほうぜんにして誓状せいじやうを立て給たまいしが今日蓮いまにちれんを
守護しゆごせずして捨て給たまうならば正直捨方便しやうじきしやほうべんの法華經に大妄語もうごを加たまへ給たまへるか、
じゆつぱうさんぜ　しよぶつ　たてま　とが　だいばだつた　もうご　くぎやり
十方三世の諸仏をたばらかし奉たてまれる御失は提婆達多が大妄語にもこへ瞿伽利

尊そんじや者が虚誑罪こおうざいにもまされたり設たとひ大梵天ぼんてんとして色界しっかいの頂いただきに居こし千眼天せんがんてんといはれて須弥しゆみの頂いただきにおはすとも日蓮にちれんをすて給たまうならば阿鼻あびの炎にはたきぎとなり無間むげん・大城だいじやうにはいづるごおはせじ、此このの罪つみをそろしとおぼさばいそぎいそぎ国土こくどにしるしをいだし給たまえ、本国へかへし給たまへと高き山にのぼりて大音声おんじやうをはなちてさけびしかば、九月の十二日に御勘氣ごかんき十一月に謀反ぼうはんのもの・いできたり、かへる年の二月十一日に日本国にほんこくのかためたるべき大将どもよしなく打ちころされぬ、天のせめという事あらはなり、此これにやをどろかれけん弟子でしどもゆるされぬ。

而しかれどもいまだゆりざりしかば・いよいよ強盛じやうじやうに天に申せしかば頭こづかひの白からすき鳥からすとび来りぬ、彼の燕たいしのたむ太子たいしの馬鳥からすのれい日蔵しやうじやう上人にんの山がらす・かしらもしろく・なりにけり、我がかへるべき時やきぬらんながめし此これなりと申もうしもあへず、文永十一年二月十四日の御赦免状しやめん同三月八日に佐渡さどの国

につきぬ同十三日に国を立ちてまうらというつにをりて十四日はかのつにと
どまり、同じき十五日に越後の寺どまりのつにつくべきが大風にはなたれさ
いわひにふつかぢをすぎてかしはぎきにつきて、次の日はこうにつき中十二
をへて三月二十六日に鎌倉へ入りぬ、同じき四月八日に平左衛門尉に見参す、
本よりごせし事なれば日本国のほろびんを助けんがために三度いさめんに御
用いなくば山林にまじわるべきよし存ぜしゆへに同五月十二日に鎌倉をいで
ぬ。

但し本国にいたりて今一度父母のはかをもみんと・をもへどもにしきをき
て故郷へはかへれといふ事は内外のをきてなり、させる面目もなくして本国
へいたりなば不孝の者にてやあらんずらん、これほどのかたかりし事だにも
やぶれてかまくらへかへり入る身なれば又にしきをきるへんもやあらんずら
ん、其の時父母のはかをもみよかしとふかくおもうゆへにいまに生国へはい

たらねどもさすがこひしくて吹く風立つくもまでも東のかたと申せば庵をいでて身にふれ庭に立ちてみるなり、かかる事なれば故郷の人は設たといい心よせにおもはぬ物なれども我が国の人といへばなつかしくはなべるところに此の御ふみを給びて心もあらずして・いそぎいそぎひらきてみ候へばをとしの六月の八日にいや四郎にをくれてとかかれたり、御ふみもひらかざりつるまではうれしくてありつるが、今・此のことばをよみてこそなにしかくいそぎひらきけんうらしまが子のはこなれやあけてくやしきものかな、我が国の事はうくつらくあたりし人のすへまでもをろかならずをもうにことさら此の人は形も常の人にはすぎてみへうちをもひたるけしきもかたくなにもなしと見えしかども、さすが法華經ほけきょうのみざなればしらぬ人ひと人あまたありしかば言もかけずありしに、経はてさせ給たまいて皆人みなも立ちかへる、此の人も立ちかへりしが使を入れて申せしは安房あわの国のあまつと申もうすところの者にて候が、をさ

なくより御心ざしをもひまいらせて候上母にて候人もをろかならず申しなれ
なれしき申し事にて候へども・ひそかに申すべき事の候、さきざきまひりて
次第になれまいらせてこそ申し入るべきに候へどもゆみやとる人に・みやづ
かひてひま候はぬ上事きうになり候いぬる上はをそれをかへりみず申すこ
まごまときこえしかば、なにとなく生国の人なる上そのあたりの事ははばか
るべきにあらずとて入れたてまつりてこまごまとしかたゆくすへかたりて
のちには世間無常なりいつと申す事をしらず、其の上武士に身をまかせたる
身なり又ちかく申しかけられて候事のがれがたし、さるにては後生こそをそ
ろしく候へたすけさせ給へときこへしかば経文をひいて申しきかす、彼のな
げき申せしは父はさてをき候いぬ、やもめにて候は・わをさしおきて前に立
ち候はん事こそ不孝に・をばへ候へ、もしやの事候ならば御弟子に申しつた
へてたび候へとねんごろにあつらへ候いしが、そのたびは事ゆへなく候へけ

れども後にむなしくなる事のいできたりて候いけるにや、人間にんげんに生をうけた
人上下じょうげにつけてうれへなき人はなけれども時にあたり人人ひとびとにしたがひてな
げきしなじななり、譬たとへば病のならひは何の病も重しげくなりぬれば是にすぎた
る病なしとをもうがごとし、主のわかれをやのわかれ夫妻のわかれ・いづれ
か

おろかなるべきなれども主は又他の主もありぬべし、夫妻は又かはりぬれば
心をやすむる事もありなん、をやこのわかれこそ月日のへだつるまみにいよ
いよなげきふかかりぬべくみへ候へ、をやこのわかれにもをやはゆきて子は
とどまるは同じ無常むじょうなれどもことはりにもや、をひたるは・わはとどまりて
わきき子のさきにたつなさけなき事なれば神も仏もうらめしや、いかなれば
をやに子をかへさせ給たまいてさきにはたてさせ給たまはず・とどめをかせ給たまいてな
げかさせ給たまうらんと心うし、心なき畜生ちくしょうすら子のわかれしのびがたし、竹林

精舎しょうじやの金鳥こんちようはかひこのために身をやき鹿野苑ろくやおんの鹿は胎内たいないの子を・をしみて
王の前にまいれり、いかにいわうや心あらん人にをいてをや、されば王陵が
母は子のためになつきをくだき、神堯皇帝こうていの後は胎内たいないの太子たいしの御ために腹を
やぶらせ給いきたま、此等これらを・をもひつづけさせ給はんには火にも入り頭こづへをもわ
りて我が子の形をみるべきならばをしからずとこそおぼすらめと・おもひや
られてなみだもとどまらず。

又御消息しょうそくに云く人をもころしたりし者なればいかやうなるところにか生れ
て候らんをほせをかほり候はんと云云そ、夫れ針は水にしずむ雨は空にとどま
らず、蟻子ありを殺せる者は地獄じごくに入り死にかばねを切れる者は惡道あくどうをまぬかれ
ず、何いかに況や人身じんしんをうけたる者をころせる人をや、但し大石も海にうかぶ船
の力なり大火だいかも・きゆる事水の用にあらずや、小罪しょうざいなれども懺悔ざんげせざれば
惡道あくどうをまぬがれず、大逆なれども懺悔ざんげすれば罪つみきへぬ、所謂いわゆる粟をつみたり

し比丘は五百生が間牛となる、をつみし者は三惡道に墮ちにき、羅摩王・

拔提王・毘樓真王・那沙王・迦帝王・毘舍王・月光王・光明王・日光王

・愛王持多人王等の八万余人の諸王は皆父を殺して位につく、善知識にあは

ざれば罪きへずして阿鼻地獄に入りనికి、波羅奈城に惡人あり其の名をば

阿逸多という母をあひせしゆへに父を殺し妻とせり、父が師の阿羅漢ありて

教訓せしかば阿らかむを殺す、母又他の夫にとつぎしかば又母をも殺しつ、

具に三逆罪をつくりしかば隣里の人うとみしかば、一身たもちがたくして祇

・精舎にゆいて出家をもとめしに諸僧許さざりしかば惡心強盛にして多く

の僧坊をやきぬ、然れども釈尊に値い奉りて出家をゆるし給にき、北天竺に

城あり細石となづく彼の城に王あり竜印という、父を殺してありしかども後

に此れをおそれて彼の国をすてて仏にまいりたりしかば仏懺悔を許し給いき、

阿闍世王はひとりとなり三毒熾盛なり十惡ひまなし、其の上父をころし母を害

せんとし提婆達多だいばだつたを師として無量のむりようの仏弟子ぶつでしを殺しぬ、惡逆あくぎやくのつもりあきに二月十

五日にゆうめつの御入滅むげんじこくの日にあたりて無間地獄せんそうの先相あくそうしゆつしやうに七処あきに惡瘡あき出生しうしやうして玉体

しづかならず、大火だいかの身をやくがごとく熱湯あつたうをくみかくるがごとくなりしに

六大臣だいいじんまいりて六師外道げどうを召されて惡瘡いやを治すべきやう申しき、今の日本にほんこく国

の人人ひとびとの禪師ぜん・律師りっし・念仏者ねんぶつ・真言師等しんごんしを善知識ぜんちしきとたのみて蒙古国もうこを調伏じやうぶくし

後生ごしやうをたすからんとをもうがごとし、上提婆達多だいばだつたは阿闍世王あじやせの本師ほんしなり、外道げどう

の六万蔵ぶつぽう仏法の八万蔵はちまんをそらにして世間出世せけんしゆつせのあきらかなる事日月にちがつと明鏡めいきやうと

に向うがごとし、今の世てんだいしゆつの天台宗せきかくの碩学けんみつの顯密二道けんみつにどうを胸むねにつかべ一切いっさい経きやうを

そらんぜしがごとし、此これ等の人人ひとびと諸ともの大臣だいいじん阿闍世王あじやせを教訓きやうくんせしかば仏に

歸依きえし奉たてまつる事なかりし程に摩竭堤てんべんたびたびに天変度ちやんぷんたひたひ度かさなり地天ちやうしきりなる上大風たいふう

・大旱ききんばつ飢饉疫癘えきれいひまなき上他国たこくよりせめられて・すでにかうとみえしに

惡瘡あくそうすら身に出いししかば国土こくど一時いちじにほろびぬとみえし程に俄ふつぜんに仏前ぶつぜんにまいり

懺悔して罪きえしなり。
さんげ つみ

これらはさてをき候いぬ人のをやは悪人なれども子善人なればをやの罪ゆ
るす事あり、又子悪人なれども親善人なれば子の罪ゆるさる事あり、され
ば故弥いよいよ四郎殿は設い悪人なりともうめる母釈迦しゃかぶつ仏の御宝前ほうぜんにして昼夜なげ
きとぶらはば争か彼人うかばざるべき、いかにいわうや彼の人は法華經を信
じたりしかば・をやをみちびく身とぞなられて候らん、法華經を信ずる人は
かまへてかまへて法華經のかたきを・をそれさせ給へ、念仏者と持齋じさいと真言師しんごんし
と一切南無妙法蓮華經いっさいなむみょうほうれんげきよつと申さざらん者をば・いかに法華經をよむとも法華經
のかたきとしろしめすべし、かたきをしらねばかたきにたばらかされ候ぞ、
あはれあはれけさんに入りてくわしく申し候はばや、又これよりそれへわた
り候三位房佐度公等ほうにたびごとにこのふみをよませてきこしめすべし、又こ
の御文をば明慧房みょうえぼうにあづけさせ給うべし、なにとなく我が智慧ちえはたらぬ者が

・或はをこづき・或は此文をさいかくとしてそしり候なり、・或はよも此の
御房は弘法大師にはまさらじよも慈覚大師にはこへじなんと人くらべをし候
ぞかし、かく申す人をばものしらぬ者と・をばすべし。

建治二年太歳丙子三月

日

日蓮花押

甲州南部波木井の郷山中

一一五 光日上人御返事 弘安四年八月 六十歳御作 932P

法華經二の巻に云く「其の人命終して阿鼻獄に入らん」云云、阿鼻地獄

と申すは天竺の言唐土日本には無間と申す無間はひまなしかけり、一百三

十六の地獄の中に一百三十五はひま候、十二時の中にあつけれども又すずし

き事もありたへがたけれども又ゆるくなる時もあり、此の無間地獄と申すは

十二時に一時かた時も大苦ならざる事はなし故に無間地獄と申す、此の地獄

は此の我等が居て候大地の底二万由旬をすぎて最下の処なり、此れ世間の法

にもかろき物は上に重き物は下にあり、大地だいちの上には水あり地よりも水かろし、水の上には火あり水よりも火かろし、火の上に風あり火よりも風かろし、風の上に空あり風よりも空かろし、人をも此の四大を以て造れり悪人あくにんは風と火と先ず去り地と水と留とどまる故に人死して後重きは地獄じごくへ墮おつる相なり、善人ぜんにんは地と水と先ず去り風火留とどまる重き物は去りぬ軽き物は留とどまる故に輕し人天へ生まるる相なり、地獄じごくの相重きが中の重きは無間地獄むげんじごくの相なり、彼の無間地獄むげんじごくは縦横じゆうおう二万由旬ゆじゆんなり八方は八万由旬はちまんゆじゆんなり、彼の地獄じごくに墮おつる人人は一人の身大にして八万由旬はちまんゆじゆんなり多人も又此かくの如ごとし、身のやはらかなる事綿ことの如ごとし火のこわき事は大風たいふうの焼亡しょうぼうの如ごとし鉄くわがねの火の如ごとし、詮を取もつつて申さば我が身より火の出いずる事十三あり、二の火あり足より出いでて頂いたきをとる・又二の火あり頂いたきより出いでて足をとほる又二の火あり背より入そむりて胸より出いず又二の火あり胸より入そむりて背へ出そむず・又二の火あり左の脇より入そむりて右の脇へ出そむず

又二の火あり右の脇より入りて左の脇へ出ず亦一の火あり首より下に向いて雲の山を巻くが如くして下る、此の地獄の罪人の身は枯れたる草を焼くが如し東西南北に走れども逃去所なし、他の苦は且らく之を置く大火の一苦なり此の大地獄の大苦を仏委しく説き給うならば我等衆生聞いて皆死すべし故に仏委しくは説き給う事なしと見えて候。

今・日本国の四十五億八万九千六百五十八人の人人は皆此の地獄へ墮ちさせ給うべし、されども一人として墮つべしとはおぼさず、例せば此の弘安四年五月以前には日本の上下万人・一人も蒙古の責めにあふべしともおぼさざりしを日本国に只日蓮一人計りかかる事此の国に出来すべしとする、其の時にほんこくにほんこくにただにちれんにばか
・日本国の四十五億八万九千六百五十八人の一切衆生一人もなく他国に責められさせ給いて、其の大苦は譬へばほうろくと申す釜に水を入れてざつこと申す小魚をあまた入れて枯れたるしば木をたかむが如くなるべしと申せば、

あらおそろしいまいまし・打ちはれ所を追へ流せ殺せ信ぜん人人をば田はた
をとれ財を奪へ所領をめせと申せしかども、此の五月よりは大蒙古の責めに
値いてあきれ迷ふ程にさもやと思う人人も・あるやらん、にがにがしうして
せめたくはなけれども有る事なればあたりたりあたりたり、日蓮が申せし事
はあたりたりばけ物のもの申す様にこそ候めれ。

去る承久の合戦に隠岐の法皇の御前にして京の二位殿などと申せし何
もしらぬ女房等の集りて王を勧め奉り戦を起して義時に責められあはて給い
しが如し、今今御覽ぜよ法華經誹謗の科と云ひ日蓮をいやしみし罰と申し經
と仏と僧との三宝誹謗の大科によつて現生には此の国に修羅道を移し後生に
は無間地獄へ行き給うべし、此れ又偏に弘法・慈覚・智証等の三大師の
法華經誹謗の科と達磨善導律僧等の一乗誹謗の科と此れ等の人人を結構せさ
せ給う国主の科と、国を思ひ生處を忍びて兼て勤へ告げ示すを用いずして還つ

て怨^{あた}をなす大科^{だい}、先例^{せんれい}を思へば呉王夫差^{ごししよ}の伍子胥^{もち}が諫^{もん}を用いずして越王^{こっせん}・勾踐^{こうせん}にほろぼされ、殷^{いん}の紂王^{ちゆうわん}が比干^{ひかん}が言^{こと}をあなづりて周の武王^{ぶわう}に責められしが如^{ごと}し。

而^{しか}るに光日尼御前^{あまごぜん}はいかなる宿習^{しゆくじゆう}にて法華經^{ほけきやう}をば御信用^{ごしんよう}ありけるぞ、又^{いよいよ}故弥^こ四郎殿^{しろうでん}が信じて候しかば子の勸めか此の功德空^{くどくくう}しからざれば子と俱^{とも}に靈山淨土^{りやうぜんじやうど}へ参り合せ給わん事^{たま}疑^{うたがい}いなるべし、烏竜^{おりゆう}と云いし者は法華經^{ほけきやう}を謗^{ぼう}じて地獄^{じじく}に墮^おちたりしかども其^その子に遺竜^{いりゆう}と云いし者^{ほけきやう}・法華經^{ほけきやう}を書きて供養^{くやう}せしかば親仏^{しんぶつ}に成りぬ、又妙莊嚴王^{みょうしゆうげんわう}は惡王^{あくわう}なりしかども御子の淨蔵^{じやうざう}・淨眼^{じやうがん}に導^{みちび}かれて娑羅樹王^{しやらじゆわう}仏と成らせ給う、其の故は子の肉は母の肉母の骨は子の骨なり、松榮^{しょうえい}れば柏悦^{はくえつ}ぶ芝^しかるれば蘭^{らん}なく情無^{じやうむ}き草木^{そうもく}すら友の喜び友の歎^{なげ}き一つなり、何^{いか}に況^{いは}や親と子との契^{ちぎ}り胎内^{たいない}に宿^{むか}して九月^{くがつ}を経て生^へみ落^おし数年^{しうねん}まで養^{やしやう}ひき、彼^{かしこ}になはれ彼^{かしこ}にとぶらはれんと思^{おも}ひしに彼^{かしこ}をとぶらふうらめし

さ、彼如何いかんがあらんと思うところぐるしさ・いかにせん・いかにせん、子を
思こう金鳥こんちようは火の中に入りనికి、子を思おもひし貧女ひんによは恒河じやうがに沈みき、彼の金鳥こんちよう
は今の弥勒菩薩みろくぼさつなり彼の河に沈みし女人にょにんは大梵天王だいぼんてんのうと生まれ給たまえり、何いかに況
や今の光日上人しやうにんは子を思おもうあまりに法華經ほけきやうの行者ぎやうじやと成り給たまふ、母と子と
俱ともに靈山淨土りやうぜんじやうどへ参り給たまつべし、其そのの時御対面たいめんいかにうれしかるべきいかにう
れしかるべき、恐きやう恐きやう。

八月八日

にちれんかあう
日蓮花押

光日上人御返事くわうじつしやうじんごへんじ

一一六 光日尼御返事くわうじつにごへんじ

934P

なきなをながさせ給たまうにや、三つのつなは今生こんじやうに切れぬ五つのさわりは・
すではれぬらむ、心の月くもりなく身のあかきへはてぬ、即身そくしんの仏なりた
うとしたうとし、くはしく申もうすべく候へども・あまりふみを・をくかき候と

きにかきたりて候ぞ 恐恐 謹言。

九月十九日

にちれん
日蓮在御判

光日尼ごぜん御返事

一一七 四恩抄 弘長二年正月十六日 四十一歳御作 935P

与工藤左近尉吉隆 於

伊豆伊東

そもそも

抑此の流罪の身になりて候につけて二つの大事あり、一には大なる悦び

あり其の故は此の世界をば娑婆と名く娑婆と申すは忍と申す事なり故に仏を

ば能忍と名けたてまつる、此の娑婆世界の内に百億の須弥山百億の日月百億

の四州あり、其の中の中央の須弥山・日月四州に仏は世に出でまします、此

の日本国は其の仏の世に出でまします国よりは丑寅の角にあたりたる小島な

り、此の娑婆世界より外の十方の国土は皆浄土にて候へば人の心もやはらか

に賢聖をのり惡む事も候はず、此の国土は十方の淨土にすてはてられて候・
十惡・五逆・誹謗賢聖・不孝父母・不敬沙門等の科の衆生が三惡道に墮ち
て無量劫を経て還つて此の世界に生れて候が、先生の惡業の習氣失せずして
ややもすれば十惡・五逆を作り賢聖をのり父母に孝せず沙門をも敬はず候な
り、故に釈迦如来世に出でましませしかば・或は毒藥を食に雜て奉り・或は
刀杖・惡象・師子・惡牛・惡狗等の方便を以て害し奉らんとし・或は女人
を犯すと云い・或は卑賤の者・或は殺生の者と云い、或は行き合ひ奉る時
は面を覆つて眼に見奉らじとし、或は戸を閉じ窓を塞ぎ、或は国王・大臣
の諸人に向つては邪見の者なり高き人を罵者などと申せしなり、大集經
涅槃經等に見えたり、させる失も仏にはおはしまさざりしかども只此の國の
くせかたわとして惡業の衆生が生れ集りて候上、第六天の魔王が此の國の
衆生を他の淨土へ出さじとたばかりを成してかく事にふれてひがめる事をな

すなり、此のたばかりも詮する所は仏に法華經を説かせまいらせじ料と見え

て候、其の故は魔王の習として三惡道

の業を作る者をば悦び三善道の業を作る者をばなげく、又三善道の業を作る

者をばいたうなげかず三乘とならんとする者をばいたうなげく、又三乗と

なる者をばいたうなげかず仏となる業をなす者をば強になげき事にふれて障

をなす、法華經は一文一句なれども耳にふるる者は既に仏になるべきと思ひ

て、いたう第六天の魔王もなげき思ふ故に方便をまはして留難をなし經を信

ずる心をすてしめんとたばかり、而るに仏の在世の時は濁世なりといへども

五濁と始たりし上仏の御力をも恐れ人の貪・瞋・癡・邪見も強盛ならざり

し時だにも竹杖外道は神通第一の目連尊者を殺し、阿闍世王は惡象を放て

三界の独尊を・をどし奉り、提婆達多是証果の阿羅漢・蓮華

比丘尼を害し、瞿伽利尊者は智慧第一の舍利弗に惡名を立てき、何に況や世

漸く五濁の盛になりて候をや、況や世末代に入りて法華經をかりそめにも信

ぜん者の人にそねみねたまれん事はおびただしかるべきか、故に法華經に云く

「如来の現在にすら猶怨嫉多し況や滅度の後をや」と云云、始に此の文を見

候いし時はさしもやと思ひ候いしに今こそ仏の御言は違はざりけるものかな

と殊に身に當つて思ひ知れて候へ。

日蓮は身に戒行なく心に三毒を離れざれども此の御經を若しや我も信を取

り人にも縁を結ばしむるかと思つて随分世間の事おだやかならんと思いき、

世末になりて候へば妻子を帶して候比丘も人の帰依をうけ魚鳥を服する僧も

さてこそ候か、日蓮はさせる妻子をも帶せず魚鳥をも服せず只法華經を弘め

んとする失によりて妻子を帶せずして犯僧の名四海に満ち螻蟻をも殺さざれ

ども悪名一天に弥れり、恐くは在世に釈尊を諸の外道が毀り奉り

しに似たり、是れ偏に法華經を信ずることの余人よりも少し經文の如く信を

もむけたる故に悪鬼其の身に入つてそねみをなすかと・をばえ候へば是れ程
の卑賤・無智・無戒の者の二千余年已前に説かれて候法華經の文にのせられ
て留難に値うべしと伝記しをかれまいらせて候事のうれしさ申し尽くし難く
候、此の身に学文つかまつりし事やうやく二十四五年にまかりなるなり、
法華經を殊に信じまいらせ候いし事は・わづかに此の六七年よりこのかたな
り、又信じて候いしかども懈怠の身たる上・或は学文と云ひ・或は世間の事
にさえられて一日にわづかに一卷・一品題目計なり、去年の五月十二日より
今年正月十六日に至るまで二百四十余日の程は昼夜十二時に法華經を修行し
奉ると存じ候、其の故は法華經の故にかかる身となりて候へば行住坐臥に
法華經を読み行ずるにてこそ候へ、人間に生を受けて是れ程の悦びは何事か
候べき。

凡夫の習い我とはげみて菩提心を発して後生を願うといへども自ら思ひ出

し十二時の間に一時・二時こそははげみ候へ、是は思ひ出さぬにも御経をよ
み読まざるにも法華經を行ずるにて候か、無量劫の間・六道・四生を輪回し
候いけるには・或は謀叛をおこし強盜夜打等の罪にてこそ国主より禁をも
蒙り流罪・死罪にも行はれ候らめ、是は法華經を弘むるかと思つ心の強盛な
りしに依つて悪業の衆生に讒言せられて・かかる身になりて候へば定て後生
の勤にはなりなんと覚え候、是れ程の心ならぬ昼夜十二時の法華經の持經者
は末代には有がたくこそ候らめ、又止事なくめでたき事侍り無量劫の間六道
に回り候けるには多くの国主に生れ値ひ奉りて・或は寵愛の大臣・閑白等と
もなり候けん、若し爾らば国を給り財宝官祿の恩を蒙けるか法華經流布の
国主に値ひ奉り其の国にて法華經の御名を聞いて修行し是を行じて讒言を
蒙り流罪に行われまいらせて候国主には未だ値いまいらせ候はぬか、法華經
に云く「是の法華經は無量の國中に於て乃至名字をも聞くことを得べからず

何いかに況いわんや見ることを得て受持じゆじし読誦どくじゆせんをや」と云云、されば此ざんげんの讒言ざんげんの人・国主こくしゆこそ我が身には恩深き人にはをわしまし候らめ。

仏法ぶつぽうを習ならう身には必ず四恩を報すべきに候か、四恩とは心地觀經しんじかんきやうに云く一

には一切衆生の恩、一切衆生なくば衆生無辺誓願度の願を發し難し、又

悪人無くして菩薩に留難をなさずば・いかでか功德をば增長せしめ候べき、

二には父母の恩、六道に生を受くるに必ず父母あり、其の中に・或は殺盜・

惡律儀・謗法の家に生れぬれば我と其の科を犯さざれども其の業を成就す、

然るに今生の父母は我を生みて法華經を信ずる身となせり、梵天・帝釈・

四大天王・轉輪聖王の家に生まれて三界・四天をゆづられて人天・四衆に

恭敬せられんよりも恩重きは今の某が父母なるか、三には国王の恩、天の

三光に身をあたため地の五穀に神を養ふこと皆是れ国王の恩なり、其の上今度

・法華經を信じ今度生死を離るべき国主に値い奉れり、争か少分の怨に依つ

ておるかに思ひ奉るべきや、四には三宝の恩、釈迦如来無量劫の間菩薩の行を立て給ひし時一切の福德を集めて六十四分と成して功德を身に得給へり、其の一分をば我が身に用ひ給ふ、今六十三分をば此の世界に留め置きて五濁雜亂の時非法の盛ならん時・謗法の者・国に充滿せん時、無量の守護の善神も法味をなめずして威光勢力減ぜん時、日光りを失ひ天竜雨をくださず地神地味を減ぜん時、草木根茎枝葉華菓藥等の七味も失せん時、十善の国王も貪・瞋・癡をまし父母・六親に考せずしたしからざらん時、我が弟子無智・無戒にして髪ばかりを剃りて守護神にも捨てられて活命のはかりごとなからん比丘・比丘尼の命のささへとせんと誓ひ給へり、又果地の三分の功德二分をば我が身に用ひ給ひ、仏の寿命百二十まで世にましますべかりしが八十にして入滅し、残る所の四十年の寿命を留め置きて我等に与へ給ふ恩をば四大海の水を硯の水とし一切の

そうもく

いっさい

じゅつほうせかい
だいち

草木を焼て墨となして一切のけだものの毛を筆とし十方世界の大地を紙と定

めて注し置くとも争か仏の恩を報じ奉るべき、法の恩を申さば法は諸仏の師

しょうぶつ

とうと

いかに

よ

ぶつおん

たてまつ

もう

しょうぶつ

なり諸仏の貴き事は法に依る、されば仏恩を報ぜんと思はん人は法の恩を報

ずべし、次に僧の恩をいはば仏宝法宝は必ず僧によりて住す、譬えば薪なけ

なく

だいち

そうもく

ぶつほうほうほう

ぶつほう

た

たきぎ

れば火無く大地無ければ草木生ずべからず、仏法有りといへども僧有りて

しゅうでん

しゅうほう

ぞうほう

習伝へずんば正法・像法

二千年過ぎて末法へも伝はるべからず、故に大集経に云く五箇の五百歳の後

むち

むかい

しゃもん

とが

これ

ぶつほう

がた

さんほう

みな

し

か

に無智・無戒なる沙門を失ありと云つて是を悩すは此の人、仏法の大燈明を

滅せんと思えと説かれたり、然れば僧の恩を報じ難し、されば三宝の恩を報

たま

いにしえしようにん

せつせんどうじじょうたいぼさつやくおう

ふみょう

これら

みな

し

か

じ給うべし、古の聖人は雪山童子常啼菩薩藥王太子普明王等此等は皆我が

身を鬼のうちかひとなし身の血髓をうり臂をたき頭を捨て給いき、然るに

まつだい

ほんぶさんほう

こおむ

さんほう

ひじ

こつへ

たま

ぶつどう

じょう

末代の凡夫三宝の恩を蒙りて三宝の恩を報ぜず、いかにしてか仏道を成ぜん、

しか しんじ かんきよう ほんもうきよう
然るに心地観經梵網經等には仏法を學し円頓の戒を受けん人は必ず四恩を
報ずべしと見えたり、
某は愚癡の凡夫血肉の身なり三惑一分も断ぜず只
ほけきよう ゆえ めり きほう
法華經の故に罵詈毀謗せられて刀杖を加えられ流罪せられたるを以て大聖の
臂を焼き髓をくだき頭をはねられたるになぞらへんと思ふ、是れ一つの悦び
なり。

第二に大なる歎きと申すは、法華經第四に云く「もし惡人有つて不善の心
を以て一劫の中に於て現に仏前に於て常に仏を毀罵せん其の罪尚輕し、若し
人・一つの惡言を以て在家・出家の法華經を讀誦する者を毀訾せん其の罪
はなはだ
甚だ重し」等と云云、此等の經文を見るに信心を起し身より汗を流し兩眼
より涙を流すこと雨の如し我、一人・此の國に生れて多くの人をして一生の
業を造らしむることを歎く、彼の不輕菩薩を打擲せし人現身に改悔の心を
起せしだにも猶罪消え難くして千劫阿鼻地獄に墮ちぬ、今・我に怨を結べる

やから いま いちぶん
輩は未だ一分も悔る心もおこさず、是体の人の受くる業報を大集経に説いて云く、若し人あつて千万億の仏の所にして仏身より血を出さん意に於て如何・此の人の罪をうる事寧ろ多しとせんや否や、大梵王言さく若し人只一仏の身より血を出さん無間の罪尚多し、無量にして算をおきても数をしらず阿鼻大地獄の中に堕ちん、何に況や万億の仏身より血を出さん者を見んをや、終によく広く彼の人の罪業果報を説く事ある事なからん但し如来をば除き奉る、仏の言はく大梵王若し我が為に髪をそり袈裟をかけ片時も禁戒をうけず欠犯をうけん者をなやましのり杖をもつて打ちなんどする事有らば罪をうる事彼よりは多し」と。

弘長二年 壬戌 正月十六日

日蓮 花押

工藤左近尉殿

一一八 法華經題目抄 ほけきょうだいもく

根本大師門人 こんぽんだいしもんじん 日蓮撰 にちれん

文永三年一月六日四十五歳御作 ぶんえい 940P

南無妙法蓮華經 なむみょうほうれんげきょう

問うて云く法華經の意もしらず只南無妙法蓮華經と計り五字七字に限りて いわ ほけきょう ただな むみょうほうれんげきょう ばかり ごじ

一日一遍一月乃至一年十年一期生の間に只一遍なんど唱えても輕重の惡に引 いっぺん ないし いちよご ただいっぺん とな けいちよう

かれずして四惡趣におもむかずついに不退の位にいたるべしや、答えて云く しあくしゆ ふたい いわ

しかるべきなり、問うて云く火火といえども手にとらざればやけず水水とい いわ

えども口にのまざれば水のほしさもやまず、只南無妙法蓮華經と題目計りを ただな むみょうほうれんげきょう だいもくばかり

唱うとも義趣をまぬかれん事いがあるべかるらん、答えて云く獅子の筋を とな ぎしゆ いわ しし

琴の絃として一度奏すれば余の絃悉くきれ梅子のすき声をきけば口につたま いと ひとたび いとことごとく うめのみ

りうるをう世間の不思議すら是の如し況や法華經の不思議をや小乗の四諦 せけん ふしぎ かくのごと ほけきょう ふしぎ しょうじよう したい

の名計りをさやづる鸚鵡なを天に生ず三歸計りを持つ人・大魚の難をまぬか ばかり おうむ ばか なん

何にかに況や法華經の題目は八万ほけきょう 聖教の肝心一切諸仏の眼目なり汝等此れをいか
となしあくしゅ 唱えて四惡趣をはなるべからずと疑うか、正直捨方便の法華經には「信をうたがい
以つて入ることを得」と云い雙林最後の涅槃經には「是の菩提の因は復無量ねはんぎょう
なりと雖も若し信心を説けば即ち已に摂尽す」等云云いえども しんじん すなわ すで しやうじん

夫れ仏道に入る根本は信をもて本となす五十二位の中には十信の位にはそ ぶつどう こんぽん じゅっしん
信心初めなりたとひさととりなけれども信心あらん者は鈍根も正見の者なりたしんじん
とひさととりあるとも信心なき者は誹謗闡提の者なり善星比丘は二百五十戒をしんじん ひぼうせんたい ぜんしやうびく
持ち四禪定を得十二部經を諳にせし者・提婆達多是六万八万の宝蔵をおぼへたも ぜんじやう そら だいばだつた はちまん ほうぞう
十八変を現ぜしかども此等有解無信の者今に阿鼻大城にありと聞く、迦葉げん これら げな じゆき こおむ げこうによらい 二つみようによらい
舍利弗等は無解有信の者なり仏に授記を蒙りて華光如来・光明如来といはれしゃりほつ むげうしん じゆき こおむ げこうによらい 二つみようによらい
き・仏説いて云く「疑いを生じて信ぜざらん者は即ち当に惡道に墮つべし」ぶつせつ いわ うたがい すなわ まさ あくどう
等云云、此等有解無信の者を説き給う、而るに今の代に世間の学者の云くこれら げな と たま し か せけん がくしや いわ

ただしんじんばか
只信心計りにて解する心なく南無妙法蓮華經と唱うる計りにて争か悪信をま
ぬかるべき等云云、此の人人は經文の如くならば阿鼻大城まぬかれがたし、
さればさせる解りなくとも南無妙法蓮華經と唱うるならば惡道まぬかるべし
たとえれば蓮華は日に随つて回る蓮に心なし芭蕉は雷によりて増長す此の草に
耳なし、我等は蓮華と芭蕉の如く法華經の題目は日輪と雷との如し、犀の
生角を身に帯して水に入りぬれば水五尺身に近ずかず梅檀の一葉開きぬれば
四十由旬の伊蘭を変ず我等が悪業は伊蘭と水との如く法華經の題目は犀の
生角と梅檀の一葉の如し、金剛は堅固にして一切の物に破られずされども羊
の角と龜の甲に破らる尼俱類樹は大鳥にも枝おれざれどもかのまつげに巢く
うせうれう鳥にやぶらる、我等が悪業は金剛の如く尼俱類樹の如し法華經の
題目は羊の角のごとくせうれう鳥の如し琥珀は塵をとり磁石は鉄をすう
われらあくこう ちり くるがね こと ほけきよう だいまく こはく じしゃく こと
我等が悪業は塵と鉄の如く法華經の題目は琥珀と磁石の如し。

かくをもひて常に南無妙法蓮華經と唱うべし、法華經の第一の巻に云く
「無量無數劫にも是の法を聞かんこと亦難し」第五の巻に云く「是の法華經
は無量の國中に於て乃至名字を聞くことも得可からず」等云云法華經の御名
を聞く事はをぼろげにもありがたき事なり、されば須仙多仏多宝仏は世にい
でさせ給いたりしかども法華經の御名をだびも説き給わず釈迦如来は法華經
のために世にいでさせ給いたりしかども四十二年が間は名をひしてかたりい
ださせ給わず仏の御年七十二と申せし時はじめて妙法蓮華經となえいでさ
せ給いたりき、しかりといえども摩訶尸那日本の辺国の者は御名をもきかざ
りき一千余年すぎて三百五十余年に及びてこそに御名計りをば聞きたりし
か、さればこの經に値いたてまつる事をば三千年に一度華さく優曇華・無量
無辺劫に一度値うなる一眼の龜にもたとへたり、大地の上に針を立てて
大梵天王宮より芥子をなぐるに針のさきに芥子の・つらぬかれたるよりも

ほけきよう だいもく
法華經の題目に値う事はかたし、この須弥山に針を立てて・かの須弥山より
たいふう
大風のつよく吹く日・いとをわたさんに・いたりてはりの穴に・いとのおさき
ほけきよう だいもく たてまつ
の・いりたらんよりも法華經の題目に値い奉る事かたし、さればこの經の題目
たま
を・となえさせ給はんにはをぼしめすべし、生盲の始めて眼をあきて父母
等を・みんよりも・うれしく・強き・かたきに・とられたる者の・ゆるされ
さいし
て妻子を見るよりも・めずらしと・をぼすべし。

いわ だいもくばか とな しゅうもん
問うて云く題目計りを唱うる証文これありや、答えて云く妙法蓮華經の
いわ ぼっけ
第八に云く「法華の名を受持せん者・福量る可からず」正法華經に云く「若し
いわ じゆじ ほか べ
以の經を聞いて名号を宣持では特量可からず」添品法華經に云く「法華の名
じゆじ ほか べ
を受持せん者・福量る可からず」等云云、此等の文は題目計りを唱うる福齒
これら だいもくばか とな
計るべからずとみへぬ、一部・八卷・二十八品を受持読誦し隨喜護持等する
じゆじ ぞくじゆ ずいきこじ
は広なり、方便品・寿量品を受持し乃至護持するは略なり、但一四句偈乃至
ほうべん じゆりようばん じゆじ ないしこじ くらげ ないし

題目計りを唱えとななる者を護持するは要なり、
広略要の中には題目は要の

内なり。問うて云く妙法蓮華經の五字にはいくばくかの功德をかおさめたる

や、答えて云く大海は衆流を納めたり大地は有情非情を持てり如意宝珠は万

財を雨ふらし梵王は山界を領す妙法蓮華經の五字また是の如し一切の九界の

衆生並に仏界を納む、十界を納むれば亦十界の依報の国土を収む、先ず

妙法蓮華經の五字に一切の法を納むる事をいは

ば經の一字は諸經の中の王なり一切の諸經を納む、仏世に出でさせ給いて

五十余年の間八万聖教を説きをかせ給いき、仏は人壽・百歳の時・王申

の歳・二月十五日の夜半に御入滅あり、其の後四月八日より七月十五日に

至るまで一夏九旬の間・一千人の阿羅漢・結集堂にあつまりて一切經をか

きをかせ給いき、其の後正法一千年の間は五天竺に一切經ひろまらせ給い

しかども震旦国には渡らず、像法に入つて一十五年と申せしに後漢の孝明皇帝

・永平十年丁卯歲・仏教始めて渡つて唐の玄宗皇帝・開元十八年庚午の歲に
 至るまで渡れる訳者・一百七十六人・持ち来る經・律・論一千七十六部・五
 千四十八卷・四百八十帙・是れ皆法華經の經の一字の眷属の修多羅なり。
 先ず妙法蓮華經の以前・四十余年の間の經の中に大方仏華嚴經と申す經ま
 します。竜宮城には三本あり上本は十三世界微塵數の品・中本は四十九万
 八千八百偈・下本は十万偈四十八品・此の三本の外に震旦・日本には僅に八
 十卷・六十卷等あり、阿含・小乗經・方等・般若の諸大乘經等、大日經
 は梵本には阿ばら詞きやの五字計りを三千五百の偈をもつてむすべり、況や
 余の諸尊の種子・尊形三摩耶・其の數をしらず、而るに漢土には但わずかに
 六卷七卷なり、涅槃經には雙林最後の說・漢土には但四十卷是も梵本之れ多
 し、此等の諸經は皆釈迦如来の所説の法華經の眷属の修多羅なり、この外過去
 の七仏・千仏・遠遠劫の諸仏の所説・現在十万の諸仏の説經皆法華經の經の

一字の眷属なり、されば薬王品に仏・宿王華菩薩に對して云く「譬えば一切
せんるこうか しゅすい だいいち こと しゅうざん しゅみせんこ だいいち
の川流江河の諸水の中に海為れ第一なるが如く衆山の中に須弥山為れ第一・
しゅうせい がってんしもつともこれ だいいち みようらくだいいし いわ
衆星の中に月天子最も為れ第一」等云云、妙樂大師の釈に云く「已今当説
さいい だいいち じゅうつぼうほっかい いっさいきようおさ たと
最為第一」等云云、以の經の一字の中に十方法界の一切經納めたり、譬え
によいほうじゅ いっさい おさ こくう こと
ば如意宝珠の一切の財を納め虚空の万象を含めるが如し、經の一字は一代に
まさ ゆえ みようほうれんげ はちまんほうぞう ちようか ほけきよう いわ
勝る故に妙法蓮華の四字も又八万宝蔵に超過するなり、妙とは法華經に云く
ほうべん しょうじん しょうみつ おうぞう
「方便の門を開いて眞実の相を示す」、章安大師の釈に云く「秘密の奥蔵を
ひら これ しょう な みようらくだいいし いわ
発く之を称して妙と為す」、妙樂大師・此の文を受けて云く「発とは開なり」
等云云、妙と申す事は開と云う事なり世間に財を積める蔵に鑰なければ開く
ことかたし開かざれば蔵の内の財を見ず、華嚴經は仏説き給いたりしかども
経を開く鑰をば仏・彼の經に説き給わず、阿含・方等・般若・觀經等の
よんじゅうよねん ぶつせつ きようぎよう たま
四十余年も仏説き給いたりしかども彼の 經經の意をば開き給わず、門を開

じて・をかせ給^{たま}いたりしかば人・彼の経^{きようぎよう}経^{きようぎよう}をさとる者一人もなかりき、たとひ・さとれりとをもひしも僻^{びやっけん}見^{けん}にてありしなり、而^{しか}るに仏・法華^{ほけきよう}経^{きよう}を説^{しゆじよう}か^せ給^{たま}いて諸^{しよきよう}経^{きよう}の蔵^{ざう}を開^{ひら}かせ給^{たま}いき、此^この時に四十余年の九界の衆生^{しゆじよう}始^{はじ}めて^{しよきよう}

諸^{しよきよう}経^{きよう}の蔵^{ざう}

の内の財をば見^みしりたりなり譬^{たと}えば大地^{だいち}の上に人畜^{じんちく}・草木^{そうもく}等^らあれども日月^{にちがつ}の光^{まなこ}なければ眼^{まなこ}ある人も人畜^{じんちく}・草木^{そうもく}の色彩^{しよく}をしら^しらず、日月^{にちがつ}出^でて給^{たま}いてこそ始^{はじ}めてこれをば知^しる事^{こと}なれ、爾^{にぜん}前^{ぜん}の諸^{しよきよう}経^{きよう}は長夜^{ちやうや}の闇^{くら}の如^{ごと}く法華^{ほけきよう}経^{きよう}の本迹^{ほんしやく}二門^{にもん}はにちがつ^{こと}日月^{にちがつ}の如^{ごと}し、諸^{しよきよう}の菩薩^{ぼさつ}の二目^{にじよく}ある二乗^{にじよう}の眇^{みよう}目^{もく}なる凡^{ぼん}夫^ぶの盲^{もう}目^{もく}なる闍^{せん}提^{だい}の生^{いきめくら}盲^{もう}なる共^{にぜん}に爾^{にぜん}前^{ぜん}の経^{きよう}経^{きよう}にてはいろかたちをばわきまえずありし程^{ほど}に、法華^{ほけきよう}経^{きよう}の時^{とき}・迹門^{しやくもん}の月輪^{げつりん}始^{はじ}めて出^いで給^{たま}いし時^{とき}・菩薩^{ぼさつ}の両^{りやう}眼^{げん}先^{せん}にさと^{にじよう}り二乗^{にじよう}の眇^{みよう}目^{もく}次にさと^{ぼん}り凡^ふ夫^ぶの盲^{もう}目^{もく}次に開^{いきめくら}き生^{いつせん}盲^だの一^い闍^{せん}提^{だい}未^み来^{らい}に眼^{まなこ}の開^{ひら}くべき縁^{えん}を結^{むす}ぶ^{こと}は是^これ偏^{ひとえ}に妙^{めう}の一字^{いっし}の得^えなり。

しゃくもん

迹門十四品の一妙・本門十四品の一妙合わせて二妙、迹門の十妙合わせ

しゃくもん

て二十妙、迹門の三十妙・本門の三十妙合わせて六十妙、迹門の四十妙・

ほんもん

かんじん

本門の四十妙・觀心の四十妙合せて百二十重の妙なり六万九千三百八十四字

一一の字の下に一の妙あり総じて六万九千三百八十四の妙あり、妙とは天竺

てんじく

さつ

い かんど

には薩と云い漢土には妙と云う妙とは具の義なり具とは円満の義なり、法華經

ほけきょう

の一一の文字・一字一字に余の六万九千三百八十四字を納めたり、譬えば大海

もんじ

おさ

たと

たいかい

の一タイの水に一切の河の水を納め一の如意宝珠の芥子計りなるが一切の

いっさい

にょいほうじゆ

けし ばか

いっさい

如意宝珠の財を雨らすが如し、譬えば秋冬枯れたる草木の春夏の日に値うて

にょいほうじゆ

ふ

たと

しゅうとうから

そつもく

しゅんか

あ

枝葉・華菓・出来するが如し、爾前の秋冬の草木の如くなる九界の衆生・

しやう

けか

しゅったい

にぜん

しゅうとう

そつもく

しゅんか

しゅうじやう

ほけきょう

しゅんか

にちりん

ぼだいしん

じやうぶつ

法華經の妙の一字の春夏の日輪にあひたてまつりて菩提心の華さき成仏

おうじやう

このみ

りゅうじゆ ぼさつ

だいらん

いわ

たと

やくし

よ

て 薬

往生の菓なる、竜樹菩薩の大論に云く「譬えば大藥師の能く毒を以つて薬

な

いこ

だいらん

ほけきょう

しゃく

みやうらく

と為すが如し」云云、此の文は大論に法華經の妙の徳を釈する文なり、妙樂

だいし
大師の釈に云く「治し難きを能く治す所以に妙と称す」等云云、総じて、
じょうぶつ おうじょう
成仏往生のなりがたき者・四人あり第一には決定性の二乗・第二には
いっせんだい
一闍提人・第三には空心の者・第四には謗法の者なり、此等を法華經にをい
て仏になさせ給う故に法華經は妙と云うなり。

だいばだつた こくはんのう だいいち たいし じょうばん
提婆達多は斛飯王の第一の太子・淨飯王にはをひ・阿難尊者がこのかみ・
きようしゆしやくそん
教主釈尊にはいとこに当る・南閻浮提にかるかざる・人なり須陀比丘を師

しゆつけ あなんそんじゃ
として出家し阿難尊者に十八変をならひ外道の六万蔵・仏の八万蔵を胸にう

ほとん
かべ五法を行じて殆ど仏よりも尊きけしきなり、両頭をたてて破僧罪を犯さ

かいだん
んために象頭山に戒壇を築き仏弟子を招き取り、阿闍世太子をかたらいて云く

たいし
我は仏を殺して新仏となるべし太子は父の王を殺して新王となり給へ、阿闍

たいし
世太子・すでに父の王を殺せしかば提婆達多は又仏をうかがい大石をもちて

おんみ
仏の御身より血をいだし阿羅漢たる華色比丘尼を打ちころし五逆の内三逆を

つぶさにつくる、其の上そ ぐぎやりそんじや 伽梨尊者でしを弟子とし阿闍世王あじゃせを檀那だんなとたのみ五天竺てんじく
十六の大国たいこく・五百の中国等ちゆうこくの一逆・二逆・三逆等をつくれる者は皆提婆みなだいばが
一類いちるいにあらざる事これなし、譬たとえば大海たいかいの諸河しよをあつめ大山の草木そうもくをあつめ
たるがごとし、智慧ちえの者は舍利弗しやりほつにあつまり・神通じんつうの者は目連もくれんにしたがひ・
悪人あくにんは提婆だいばに・かたらいしなり、されば厚さ十六万八千由旬ゆじゆん・其の下に金剛こんごう
の風輪だいちある大地だいちすでにわれて生身しやうしんに無間むげん・大城だいじやうに墮おちにき、第一だいいちの弟子でしく
伽梨がりも又生身しやうしんに地獄じごくに入る施遮婆羅門ばらもん女も・おちにき・波瑠璃王はるりもをちぬ
善星ぜんしやうびく比丘びくもおちぬ、又此等これらの人人ひとひとの生身しやうしんに墮おちしをば五天竺てんじく・十六の大国たいこく
・五百の中国ちゆうこく・十千の小国しやうこくの人人ひとひとも皆これをみる、六欲・四戦中丁無争梵
字音釈だいろくてん・第六天まおうの魔王えんまほうおうも皆御覽みなありき、三千大千他界さんぜん・十方じゆつぱう
法界ほつかいの衆生しゆじやうも皆開みなきしなり、されば大地微塵だいちみじん劫じやくはすぐとも無間むげん・大城だいじやうを出
づべからず、劫石あびだいじやうはひすらぐとも阿鼻あびだいじやう大城の苦は・つきじとこそ思い合いた

りしに、法華經の提婆品にして教主釈尊の昔の師・天王如来と記し給う事

こそ不思議にをばゆれ、爾前の經經・実ならば法華經は大妄語・法華經実

ならば爾前の諸經は大虚誑罪なり、提婆が三逆を具に犯して其の外無量の

重罪を作りし天王如来となる、況や二逆・一逆等の諸の悪人の得道疑いな

き事譬えば大地をかへすに草木等のかへるがごとく堅石をわる者・草をわ

るが如し、故に此の經をば妙と云ふ。

女人をば内外典に是をそしり三皇・五帝の三墳・五典に諂曲の者と定む、

されば災は三女より起ると云へり国の亡び人の損ずる源は女人を本とす、

内典の中には初成道の大法たる華嚴經には「女人は地獄の使なり能く仏の

種子を断つ外面は菩薩に似て内心は夜叉の如し」と云い、雙林最後の大涅槃經

には「一切の江河必ず回曲有り一切の女人必ず諂曲有り」と、又云く「所有

三千界の男子の諸の煩惱・合集して一人の女人の業障と為る」等云云、大

華嚴經の文に「能く仏の種子を断つ」と説かれて侯は女人は仏になるべき種子をいれり、譬えば大旱魃の時・虚空の中に大雲をこり大雨を大地に下すに・かれたるが如くなる無量無辺の草木・花さき菓なる、然りと雖もいれる種はをひずして結句・雨しげければ・くちうするが如し、仏は大雲の如く・説教は大雨の如く・かれたるが如くなる草木を一切衆生に譬えたり、仏教の雨に潤い五戒・十善・禅定等の功德を修するは・花さき菓なるが如し、一雨・ふれどもいりたる種のをひずかへりて・くちうするは女人の仏教にあひて生死を・はなれずして・かへりて仏法を失ひ悪道に墮つるに譬ふべし、是を「能く仏の種子を断つ」とは申すなり、涅槃經の文に一切の江河のまがれるが如く女人も又まがれりと説かれたるは、水はやわらかなる物なれば石山ななどの・こわき物にさへちれて水のさき・ひるむゆへに・あれへ・これへ行くなり、女人も亦是くの如く女人の心をば水に譬えたり、心よわくして水の

如くなり、道理どうりと思う事も男のこわき心に値あいぬればせかれて・よしなき方
へをもむく、又水に氣きがくに・とどまらざるが如ごとし、女人にょにんは不信ふしんを体とする
ゆへに只ただ今さあるべしと見る事も又しばらくあれば・あらぬさまになるなり、
仏もうと申すは正直しょうじきを本とす故ゆえに・まがれる女人にょにんは仏になるべからず五障三従と
申もうして五つのさはり三つしたがつ事あり、されば銀色女經ぎんじきによきようには「三世の諸仏さんぜしよぶつ
まなこ だいち によにん によにん
の眼は大地に落つとも女人は仏になるべからず」、と説かれ大論だいろんには「清風
は・とると云えども女人にょにんの心はとりがたし」と云へり。

此かくの如く諸經しよきやうに嫌きはれたりし女人を文殊師利菩薩もんじゆしりぼさつの妙の一字を説とき給たまい
しかば忽たちまちに仏にりき、あまりに不審ふしんなりし故ゆえに宝淨世界の多宝仏たほうぶつの第一だいいちの
弟子でし智積菩薩しやくぼさつ、釈迦如来の御弟子の智慧第一舎利弗尊者ちえだいいちしやりほつそんじや、四十余年の大小乗だいしやうじやう
經きやうもんの經文をもつて竜女の仏になるまじき由よしを難なんぜしかども終ついに叶なはず仏に
たりにき、初成道しよじやうだうの「能く仏の種子しゆしを断そつ」「雙林最後そうりんさいごの「一切いっさいの江河こうか必ず回曲えくく

有り」の文も破れぬ、銀色女経・並に大論の亀鏡も空しくなりぬ智積・
舍利弗は舌を巻きて口を閉ぢ人天大会は歡喜せしあまりに掌を合せたり
き、是れ偏に妙の一字の徳たり、此の南閻浮提の内に二千五百の河あり一
に皆まがれり、南閻浮提の女人の心のまがれるが如し、但し娑婆耶と申す河
あり繩を引きはえたるが如くして直に西海に入る、法華經を信ずる女人亦復
是の如く直に西方浄土へ入るべし此れ妙の一字の徳なり、妙とは蘇生の義な
り蘇生と申すは蘇る義なり、譬えば黄鵠の子・死せるに鶴の母・子案となけ
ば死せる子・還つて活り、鳩鳥・水に入れば魚蚌悉く死す犀の角これに・ふ
るれば死せる者皆よみがえる如く爾前の経經にて仏種をいりて死せる二乗
・闍提・女人等・妙の一字を持ちぬれば・いれる仏種も還つて生ずるが如し、
天台云く、闍提は心有り猶作仏すべし二乗は智を威す心生ず可からず法華能く
治す復稱して妙と為すと、妙樂云く、「但大と云いて妙と名づけざるは一に

は有心は治し易く無心は治し難きを能く治す所以に妙と称す」等云云、
此等の文の心は大方広仏華嚴經・大集經・大品經・大涅槃等は題目に大の字
のみありて妙の字なし、但生る者を治して死せる者をば治せず、法華經は死
せる者をも治するが故に妙と云ふ釈なり、されば諸經にしては仏になる者も
仏になるべからず其の故は法華は仏になりがたき著すら尚仏になりぬ、なり
やすき者は云ふにや及ぶと云う道理立ちぬれば法華經をとかれて後は諸經に
をもむく一人も・あるべからず。

而るに正像二千年過ぎて末法に入つて当世の衆生の・成仏往生のとげが
たき事は・在世の二乘闡提等にも・百千万億倍すぎたる・衆生の觀經等の
四十余年の經經によりて生死をはなれんと思うは・はかなし・はかなし・
女人は在世・正像末総じて一切の諸仏の一切經の中に法華經を・はなれて
・仏になるべからず、靈山の聽衆道場開悟たる天台智者大師・定めて云く

「諸経しよきようは但男しるに記して女に記せず今経こんきようは皆記す」等云云。釈迦しゃかにらい如来・多宝たほうぶつ仏

・十方諸仏じゅうほうしよぶつの御前おんまえにして摩訶提国王おうしやじよう舎城うしろわしの良・鷲しうの山と申す所にて八箇年はちかねん

の間・説とき給たまひいし法華経ほけきようを智者大師ちしやだいしまのあたり聞こしめしりるに我五十余年いちだいししうきよう

の一代聖教きようぎようを説ときをく事は皆衆生利益みなしじゆうりやくのためなり、但し其ただその中に四十二年

の経経きようぎようには女人にょにん・仏になるべからずと説きたまひしなり、今法華経ほけきようにして

女人にょにん・仏に成ると・とくと・なのらせ給たまひいしを仏滅後ぶつめつ・一千五百余年に當つ

て鷲しうの山より東北とうほく・十方八千里じゅうほうせんりの山海せんりをへだてて摩訶まかしな尸那しなと申す国あり震旦しんたん

国これ是なり、此の国に仏おんつかいの御使いに出でさせ給ひ天台智者大師てんだいちしやだいしとなのりて女人にょにんは

法華経ほけきようを・はなれて仏になるべかるずと定めさせ給たまひいぬ。

尸那国しなより三千里さんぜんをへだてて東方とうほうに国あり日本国にほんこくとなづけたり、天台大師てんだいだいし・

御入滅にゆうめつ・二百余年と申せしに此の国に生れて伝教大師でんきようだいしとなのらせ給たまひいて

秀句しゅうくと申す書しうを造り給たまひいしに、能化のうけ・所化しよけ俱ともに歴劫りやっく無みし妙法みようほう経きんの力にて即身そくしん

に成仏す」と竜女が成仏を定め置き給いたり、而るに当世の女人は
即身成仏こそ・かたからめ往生極樂は法華を憑まば疑いなし、譬えば江河
の大海に入るよりもたやすく雨の空より落つるよりもはやくあるべき事なり、
而るに日本国の一切の女人は南無妙法蓮華經とは唱へずして女人の往生
成仏をとげざる雙觀・觀經等によりて弥陀の名号を一日に六万遍・十万
遍などとなうるは、仏の名号なれば巧なるには似たれども女人不成仏・
不往生の經によれるが故にいたずらに他の財を数えたる女人なり、これひと
えに悪知識にたばらかされたるなり、されば日本国の一切の女人の御かたき
は虎狼よりも山賊・海賊よりも父母の敵・とわり等よりも法華經をばをしえ
ずして念仏を・をしゆるこそ一切の女人のかたきなれ。

南無妙法蓮華經と一日に六万・十万・千万等も唱えて後に暇あらば時時
阿弥陀等の諸仏の名号をも口ずさみ・なるやうに申し給はんこそ法華經を信

ずる女人にては・あるべきに当世の女人は一期の間・弥陀の名号をば・しき
りに・となへ念仏の仏事をば・ひまなくをこなひ法華經をばつやつや唱へず
くよう・ある・ほけきよう・じきよう
供養せず・或はわづかに法華經を持經者に・よますれども念仏者をば
ふほ・きようだい
父母・兄弟なんどのやうに・をもひなし持經者をば所從眷屬よりもかるくを
もへり、かくして・しかも法華經を信ずる由を・なのるなり、抑も淨徳夫人
は二人の太子の出家を許して法華經をひろめさせ竜女は、我闍大乘教・度脱
しきよう
苦衆生とこそ誓ひしが全く他經計りを行じ・て比の經を行ぜじとは誓はず、
今にょにんの女人は偏ひとえに他經たきようを行じて法華經ほけきようを行ずる方をしらず、とくとく心を・ひ
るがへすべし・心を・ひるがへすべし、南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經
なむ みようほうれんげきよう

日蓮 花押
にちれん かおう

文永三年五月六日清澄寺に於て末の時書し畢んぬ。
ぶんえい きよすみでら おい

一一九 富木殿御消息
ときどの しようそく

文永六年六月 四十八歳御作
ぶんえい

949P

だいし
大師講の事今月明性房にて候が此月はさしあい候又余人の申せんと候人
そうら
侯はば申させ給えと候、貴辺より仰を蒙り候へ、御指合にて侯はば他処へ申す
べく候、恐々。

六月七日

にちれんかおう
日蓮花押

土木殿

一二〇 ときどのごへんじ
富木殿御返事

949P

しやよね
白米一ほかひ本斗六升たしかに給候、ときれうも侯はざりつるに悦び入り
なにじと
侯、何事も見参にて申すべく候。

乃時

かおう
花押

ときどの
富木殿

一二一 しやかぶつ
真間・釈迦仏御供養逐状

ぶんえい
文永七年九月 四十九歳御作

950P

釈迦^{しやくか}仏^{ぶつ}御造立^{おんこと}の御事^{むじ}、無始^{むし}曠劫^{くわうくわつ}よりいまだ顕^{あらわ}れましまさぬ己^こ心の一念^{いちねん}三千^{さんぜん}
の仏造^{ぶつ}り顕^{あらわ}しますか、はせまいりてをがみまいらせ候^{こう}わばや、「欲^{よく}令^{りやう}
しゅじようかいぶつちけんないし がじつじようぶついらい
衆生^{しゆじやう}開^{かい}仏^{ぶつ}知見^{ちけん}乃^な至^し然^{ぜん}我^{われ}実^{じつ}成^{じやう}仏^{ぶつ}已^い来^{らい}」は是^{これ}なり、但^{ただ}し仏^{ぶつ}の御開眼^{かいげん}の御事^{おんこと}はいそ
ぎいそぎ伊^いよ房^{ぼう}をもてはたしまいらさせさせ給^{たま}い候^{こう}へ、法華^{ほけ}經^{きやう}一^{いつ}部^ぶ御^み仏^{ぶつ}の御^ご六^{ろく}根^{こん}
によみ入れまいらせて生身^{しやうしん}の教主^{きやうしゆ}釈尊^{しゃくそん}になしまいらせてかへりて迎^{むか}い入^{いれ}
まいらせさせ給^{たま}へ、自身^{じしん}並^{なら}に子^こにあらずばいかんがと存^{ぞん}じ候^{こう}、御所領^{しよりやう}の堂^{どう}の
事等^{じやう}は大進^{おほしん}の阿闍梨^{あじやり}がききて候^{こう}、かへすがへすをがみ結縁^{けちえん}しまいらさせ候^{こう}べし、
いづぞや大黒^{たいくわく}を供養^{くやう}して候^{こう}いし其後^{そご}より世間^{せけん}なげかずしておはするか、此度^{こしど}
は大海^{たいかい}のしほの満^みつるがごとく月の満^みずるが如^{ごと}く福^{ふく}きたり命^{いのち}ながく後生^{ごしやう}は
靈山^{りやうせん}とおぼしめせ。

九月二十六日

にちれんかあう
日蓮花押

しんじやう ときどのこへんじ
進上 富木殿御返事

ぶんえい

文永八年九月 五十歳御作

さがみえち
於相模依智

950P

たま

上のせめさせ給うにこそ法華經を信じたる色もあらわれ候へ、月にかけて

うたがい

みち・しをはひてみつる事 疑なし此れも罰あり必ず徳あるべし・なにしに

か・なげかん。

とり

此の十二日酉の時・御勘気・武蔵守殿御あづかりにて十三日丑の時にかよ

すずめ

くらをいでて佐土の国へながされ候が、たうじはほん雀のえちと申すところ

もう

さえもののじょう

にえちの六郎左衛門尉殿の代官・右馬太郎と申す者あづかりて候が、いま四

もう

そひ

五日はあるべげに候、御嘆きはさる事に候へども・これには一定と本よりご

そうち

して候へば・なげかず候、いままで頸の切れぬこそ本意なく候へ、法華經の

そうち

ほけきょう

かこ

御ゆへに過去に頸を・うしないたらば・かかる少身のみにて候べきか、又

さくさくけんひんすい
数数見擯出ととかれて度度失にあたりて重罪をけしてこそ仏にもなり候はん
ずれば我と苦行をいたす事は心ゆへ
なり。

九月十四日

にちれんかおう
日蓮花押

土木殿御返事
ごへんじ

一二三 寺泊御書
ごしよ

文永八年十月 五十歳御作
ぶんえい ときじょうにん 951P

与富木常忍 於越後寺泊
ときじょうにん ちよつもん

がもくひとゆい おわん
鷺目一結給び了ぬ、心ざしあらん諸人は一処にあつまりて御聴聞あるべし。
いっしょ

今月十月なり十日相州愛京郡依智の郷を起つて武蔵の国久目河の宿に付き十
そうしゅう えち むさし

二日を経て越後の国寺泊の津に付きぬ、此れより大海を亘つて佐渡の国に至ら
へ たいかい わた さど いた

んと欲するに順風定まらず其の期を知らず、道の間の事心も及ぶこと莫く又
ほ そ

筆にも及ばず但暗に推し度る可し、又本より存知の上なれば始めて嘆く可き
およ お

に非あらざれば之これを止む。

法華經ほけきょうの第四いわに云く「而しかも此この經きやうは如來にやらいの現在げんざいすら猶な怨嫉おんしつ多おほし況いわんや滅度めつど

の後のちをや」第五いの卷まきに云く「一切いっさい世間せけん怨多あだおほくして信がたじ難がたし、」涅槃經ねはんきやうの三十

八いに云く「爾その時ときに一切いっさいの外道げどうの衆しゆ咸ことごとく是この言ごを作なさく。大王だいうわう今は唯一ただの大

悪人あくにん有り瞿曇沙門くどんしゃもんなり。一切いっさいの世間せけんの悪人あくにん利養りやうの爲ための故ゆゑに其その所ところに往ゆき集あり

而しかも眷属けんぞくと爲もつて善しゆを修しゆすること能あたわらず呪術力じゆじゆつの故ゆゑに迦葉かしょう及び舍利弗しゃりほつ・

目蓮等もっけんれんを調伏じようぶくす」云云、此この涅槃經ねはんきやうの文ぶんは一切いっさいの外道げどう我が本師ほんしたる二天三

仙しよせつの所説きやうてんの經典ぶつだを仏陀やぶたに毀やぶられて出いす所の惡言あくげんなり、法華經ほけきやうの文ぶんは仏あだを怨あだと

爲なす經文きやうもんには非あらず、天台てんだいの意いに云く「一切いっさいの聲聞しやうもん・緣覺えんかく並ひらに近こんじやう成じやうを樂ねがう

菩薩ぼさつ」等云云、聞きこかんと欲ほつせず信しんぜんと欲ほつせず其その機きに當あたらざるは言ごを出いし

て謗そしること莫なきも皆みな怨嫉おんしつの者ものと定おめ了わんぬ、在世ざいせを以もつこて滅後めつこを推いすに一切いっさい

諸宗しよしゆうの學者等がくしやは皆みな外道げどうの如ごとし、彼等かれらが云いふ一大惡人あくにんとは日蓮にちれんに當あたれり、一切いっさい

の悪人あくにん之に集まるとは日蓮にちれんが弟子等でし是これなり、彼の外道げどうは先仏せつきようるでんの説教流伝せつきようるでんの後あとこれあやま之を謬あやまつて後・仏あだを怨あだと為なせり、今諸宗しよしゆうの学者等がくしやも亦復またかくのこと是これの如ごとし、所詮しよせんぶつきよう
仏教ぶつぎように依よつて邪見じゃけんを起おこす目の転まずる者大山おほ転まずと欲ほつしゆうう、今八宗・十宗等多おほ
門ゆえの故ゆゑに諍論じようろんを至いたす、涅槃經ねはんぎようの第十八じふくみように贖命しよくみよう重宝ちゆうぼうと申もうす法門ほうもんあり、天台大師てんだいだいし
の料簡りようけんに云いく命いのちとは法華經ほけきようなり重宝ちゆうぼうとは涅槃經ねはんぎように説せつく所の前三教ぜんさんぎようなり、
但ただ涅槃經ねはんぎように説せつく所の円教えんぎようは如何いかん、此この法華經ほけきように説せつく所の仏性ぶつしやうじようじゆう常住かうじやうを重かさね
て之これを説せついて歸本きほんせしめ涅槃經ねはんぎようの円常えんじようを以もつて法華經ほけきように撰せんす、涅槃經ねはんぎようの得分とくぶんは
但前三教ぜんさんぎように限かぎる、天台てんだいの玄義げんぎの三さんに云いく「涅槃ねはんは贖命しよくみようの重宝ちゆうぼうなり重かさねて掌て
を抵たいつのみ」文ぶん、籤せんの三さんに云いく「今家けの引意だいきようは大經だいぎようの部ぶを指さして以もつて重宝ちゆうぼうと
為なす」等云云てんだいだいし、天台大師てんだいだいしの四念処ねんじよと申もうす文ぶんに法華經ほけきようの「雖示種種道すいじしゆじゆ」の文ぶんを
引ひいて先まづ四味しよみを又重宝しよきようと定おめ了わんぬ、若もし爾しからば法華經ほけきようの先後せんごの諸經しよきようは
法華經ほけきようの為ための重宝ちゆうぼうなり、世間せけんの学者がくしやの想おもに云いく此これは天台一宗てんだいの義ぎなり

諸宗は之を用いず等云云、日蓮之を案じて云く八宗・十宗等は皆仏滅後より之を起し論師・人師之を立つ滅後の宗を以て現在の経を計る可からず天台の所判は一切経に叶うに依つて一宗に属して之を弃つ可からず、諸宗の学者等自師の誤りを執する故に・或は事を機に寄せ・或は前師に譲り・或は賢王を語らい結句最後には悪心強盛にして鬪争を起し失無き者を之を損うて樂と為す、諸宗の中に真言宗殊に僻案を至す善無畏・金剛智等の想に云く一念三千は天台の極理一代の肝心なり顕密二道の詮たる可きの心地の三千は且く之を置く、此の外印と真言とは仏教の最要等云云、其の後真言師等事を此の義に寄せて印・真言無き経経をば之を下すこと外道の法の如し、或る義に云く大日経は釈迦如来の外の説なりと、或る義に云く教主釈尊第一の説なりと、

或る義には釈尊と現じて顕経を説き大日と現じて密経を説くと、

道理を得ずして無尽の僻見之を起す、譬えば乳の色を弁えざる者種種の邪推

を作せども本色に当らざるが如く又象の譬の如し、今汝等知る可し大日經

等は法華經已前ならば華嚴經等の如く已後ならば涅槃等の如し。

又天竺の法華經には印・真言有れども訳者之を略して羅什は妙法經と名づ

け、印・真言を加えて善無畏は大日經と名づくるか、譬えば正法華添品法華

・法華三昧・薩云分陀利等の如し、仏の滅後天竺に於いて此の詮を得たるは

竜樹菩薩、漢土に於いて始めて之を得たるは天台智者大師なり、真言宗の

善無畏等・華嚴宗の澄觀等・三論宗の嘉祥等・法相宗の慈恩等・名は自宗

に依れども其の心は天台宗に落ちたり其の門弟等・此の事を知らず如何ぞ

謗法の失を免れんや、或る人・日蓮を難じて云く機を知らずして議を立て

難に値うと、或る人云く勸持品の如きは深位の菩薩の義なり安樂行品に

違すと、或る人云く我も此の義を存すれども言わずと云云、或る人云く唯

きようもんばか
教門計りなりと、具に我之を存すと雖も卞和は足を切られ清丸は穢丸と云
う名を給うて死罪に及ばんと欲す時の人之を咲う、然りと雖も其の人未だ善き
名を流さず汝等が邪難も亦爾る可し。

かんじほん いわ もろもろむち あつくめり
勸持品に云く、「諸の無智の人有つて悪口罵詈し」等云云日蓮此の経文に当

なんじ なん きようもん およ とうじよう
れり汝等何ぞ此の経文に入らざる、「及び刀杖を加うる者」等云云、日蓮

きようもん なんじ なん きようもん
は此の経文を読み汝等何ぞ此の経文を読まざる「常に大衆の中に在つ

われら そし ほ こくおう だいじんばらもん こじ
て我等が過を毀らんと欲す」等云云、「国王・大臣婆羅門・居士に向つて」等

あつく ひんじゆく しはしばひんずい しはしば たびたび にちれんひんずい
云云、「悪口して顰蹙し数数擯出せられん」数数とは度度なり日蓮擯出衆度

るざい ほけきよう さんぜ せつぽう かこ ふぎよう かんじほん
流罪は二度なり、法華経は三世の説法の儀式なり、過去の不軽品は今の勸持品

かんじほん かこ ふぎよう みらい ふぎよう な ベ そのとき
今の勸持品は過去の不軽品なり、今の勸持品は未来は不軽品為る可し、其の時

にちれん すなわ ふぎようばさつ な ベ てんじく ゆじゆん
は日蓮は即ち不軽菩薩為る可し、一部八卷・二十八品天竺の御経は一由旬に

うけたま あ ベ かんど にほん
布くと承わる定めて数品有る可し、いま漢土・日本の二十八品は略の中の要

なり、正宗は之を置く流通に至つて宝塔品の三箇の勅宣は靈山虚空の
たいしゅう 二つむ かんじほん はちまん
大衆に被らしむ、勸持品の二万八万・八十万億等の大菩薩の御誓言は日蓮が
浅智には及ばず但し「恐怖悪世中」の經文は末法の始を指すなり、此の
「恐怖悪世中」の次下の安樂行品等に云く「於末世」等云云、同本異訳の正
ほけきょう いわ ねんごまつせ いわ 然後來末世、添品法華經に云く「恐怖悪世
法華經に云く、然後末世」又云く「然後來末世」、添品法華經に云く「恐怖悪世
中」等云云、時に当り当世三類の敵人は之れ有るに但八十万億那由他の諸菩薩
は一人も見えたまわず乾たる湖の満たず月の虧けて満ちざるが如し水清めば
月を浮かべ木を植うれば鳥棲む、日蓮は八十万億那由他の諸の菩薩の代官と
して之を申す彼の諸の菩薩の加被を請う者なり。
此の入道佐渡の国へ御共為す可きの由之を申す然る可き用途と云いかたが
わづらいあ ゆえ これ しためて申すに及ばず候人人に是くのこと
た煩有るの故に之を還す、御志 始めて申すに及ばず候人人に是くのこと
く申させ給え、但し図僧等のみ心に懸り候便宜の時早早之を聴かす可し、

あなかしこあなかしこ
六賢六賢。

十月二十二日 酉の時 とり

日蓮花押 にちれんかおう

一二四 富木入道殿御返事 ときにゆうどうごへんじ

ぶんえい 文永八年十一月五十歳御作

さど 於佐渡塚原 955P

此比は十一月の下旬なれば相州鎌倉に候し時の思には四節の転変は万国・
皆同じかるべしと存候し処に此北国佐渡の国に下著侯て後二月は寒風頻に吹
て霜雪更に降ざる時はあれども日の光をば見ることなし、八寒を現身に感ず、
人の心は禽獸きんじゆつに同じく主師親しゆししんを知らず何に況や仏法の邪正じゃせい・師の善悪ぜんあくは思も
よらざるをや、此等これらは且く之を置く。

去十月十日に付られ候し入道・寺泊より還し候し時法門ほうもんを書き遣わし候き
推量侯らむ、已すでに眼前がんぜんなり仏滅後・二千二百余年に月氏がっし・漢土かんど・日本にほん・一
閻浮提えんぶだいの内に天親てんじん・竜樹りゆうじゆ・内鑑ないがん冷然れいねん・外適げちやく時宜ときぎ云云、天台てんだい・伝教でんぎようは粗釈ほぼしゃくし

給へども之を弘め残せる一大事の秘法を此国に初めて之を弘む日蓮豈其の人に非ずや。

前相已に顕れぬ去正嘉の大地震前代未聞の大瑞なり神世十二人王九十代と
仏滅後・二千二百余年未曾有の大瑞なり神力品に云く正滅度の後に於て能く
是の経を持つが故に諸仏皆歡喜して無量の神力を現ず」等云云、「如来・
一切所有之法」云云、但此の大法弘まり給ならば爾前・迹門の経教は一分
も益なかるべし、伝教大師云く、「日出て星隠る」云云、遵式の記に云く
「末法の初西を照す」等云云、法已に顕れぬ、前和先代に超過せり日蓮粗
之を勘うるに是時の然らしむる故なり経に云く、「四導師有り一を上行と
名く」云云又云く「悪世末法時能持是経者」又云く「若接須弥擲置他方」云
云。

又貴辺に申付し高経の要文智論の要文五帖一处に取り集め被る可く候、其

ろんしゃく ようばん
外論釈の要文散在あるべからず侯、又小僧達談義あるべしと仰らるべく侯
るざい
流罪の事痛く歎せ給ふべからず、勸持品に云く不輕品に云く、命限り有り惜
むべ
可からず遂に願う可きは仏国也云云。
ぶんえい
文永八年十一月二十三日

にちれん
日蓮
かおう
花押

ぶんえい
文永八年十一月二十三日

と きに ゆうぐわう ごとへんじ
富木入道殿御返事

こぞう

小僧達少少還えし候此国為 体在所の有様御問い有る可く候筆端に載せ難く
ていたらくざいしよ

候。

さどごしや
一二五 佐渡御書

ぶんえい
文永九年三月五十一歳御作 与弟子檀那
でしだんな

956P

このもん

ときどの

さえもん

此文は富木殿のかた三郎左衛門殿大蔵たうのつじ十郎入道殿等さじき
にゆうぐわう

あまごぜん

の尼御前一一に見させ給べき人人の御中へなり、京鎌倉に軍に死る
おんちゆう

ひとびと

そつら

げてん

もんく

人人を書付けたび侯へ、外典抄文句のこ玄の四の本末勘文宣旨等これ
ほんまつかんもんせんじ

への人人もちてわたらせ給へ。^{ひとびと たま}

世間^{せけん}に人の恐るる者は火災の中と刀劍^{とうけん}の影と此身の死するとなるべし牛馬^{ぎゆうば}
猶身^{なほ}を惜む況や人身^{じんしん}をや瀬人猶命^{なほ}を惜む何に況や杜人^{おし}をや、仏説^{ぶつせつ}て云く「七宝^{しつぽう}
を以て三千大千世界に布き満るとも手の小指を以て仏経に供養せんには如か^し
ず」取意^{せつせんどうじ}、雪山童子の身をなげし樂法梵志^{ぎょうぼうほんじ}が身の皮をはぎし身命^{しんみょう}に過たる惜^{おし}
き者のなければ是^{これ}を布施^{ふせ}として仏法^{ぶつぽう}を習へば必仏となる身命^{しんみょう}を捨る人・他の
宝を仏法^{ぶつぽう}に惜べしや、又財宝を仏法^{ぶつぽう}におしまん物まさる身命^{しんみょう}を捨てきや、世間^{せけん}
の法にも重恩^{じゅうおん}をば命を捨て報ずるなるべし又主君^{しゅくん}の為^{ため}に命を捨る人はすくな
きやうなれども其数多し男子ははぢに命をすて女人^{にょにん}は男^{ため}の為^{ため}に命をすつ、魚
は命^{おし}を惜む故^{ゆえ}に池にすむに池の浅き事を嘆きて池の底に穴をほりてすむしか
れども魚にばかされて釣^{つり}をのむ鳥は木にすむ木のひきき事をおじて木の上枝
にすむしかれども魚にばかされて網にかかる、人も又是^{かくのこと}くの如^{せけん}し世間の浅き

事には身命しんみょうを失へども大事だいじの仏法ぶつぽうなどには捨る事難がたし故に仏になる人もなかるべし。

仏法ぶつぽうは摂受しやうじゆ・折伏しゃくぶく時によるべし譬たとえば世間の文武二道にどうの如ごとしされば昔の大聖は時によりて法を行ず・雪山童子せつせんどうじ・薩王子さつたみこは身を布施ふせとせば法を教へん菩薩ぼさつの行となるべしと責しかば身をすつ、肉をほしがらざる時身を捨つ可べきや紙なからん世には身の皮を紙とし筆なからん時は骨を筆とすべし、破戒はかい・むかいむかいを毀そしり持戒じかい・正法しやうぽうを用ん用には諸戒しよを堅く持べし儒教じゆきやう・道教を以て無戒じやうきやうを制止せいしせん日には道安法師・慧遠法師・法道三蔵等の如く王と論じて釈教を制せせんに小乗しやうじやう・大乘だいじやう・権経こんきやう・実経じつきやう・雜乱ざつらんして明珠みやうじゆ命を軽かうすべし、釈教しやうきやうの中に小乘しやうじやう・大乘だいじやう・権経こんきやう・実経じつきやう・雜乱ざつらんして明珠みやうじゆと瓦礫がりやくと牛驢うしうの二乳ふちを弁わへざる時は天台大師・伝教大師等の如く大小・確実・顕密けんみつを強盛きやうじやうに分別ぶんべつすべし、畜生ちくしやうの心は弱きをおどし強きをおそる当世とうせの学者等は畜生ちくしやうの如し智者の弱きをあなづり王法の邪をおそる諛臣ゆしんと申すは

これ
是なり強敵じやうてきを伏して始て力士をしる、悪王あくおうの正法しょうぼうを破るに邪法じゃほうの僧等そうどうが方人かとうどをなして智者ちしやを失はん時は師子王ししの如ごとくなる心をもてる者必ず仏になるべし例せば日蓮にちれんが如ごとし、これおこれるにはあらず正法しょうぼうを惜おしむ心の強盛じやうじやうなるべしおこれる者は必ず強敵じやうてきに値ておそるる心出来するなり例せば・修羅しゆらのおごり帝釈たいしゃくに・せめられて無熱池むねちの蓮の中に小身と成て隠れしが如ごとし正法しょうぼうは一字いっく一句なれども時機じきに叶かないぬれば必ず得道とくどうなるべし千経・万論を習学しゆがくすれども時機じきに相違そういすれば叶かなう可べからず。

宝治の合戦すでに二十六年今年二月十一日十七日又合戦あり外道げどう・悪人あくにんは如来にょらいの正法しょうぼうを破りがたし仏弟子等ぶつでし・必ず仏法ぶつぽうを破るべし師子身中の虫ししの獅子ししを食等云云、大果報かほうの人をば他の敵やぶりがたし親しみより破るべし、薬師やくし経きやうに云く「自界叛逆難じかいほんぎやくなん」と是なり、仁王経にんのうきやうに云く「聖人去る時七難必ず起おこらん」云云、金光明経こんくわうみやうきやうに云く「三十三天各瞋恨を生ずるは其の国王悪を縦ほしいま

にし治せざるに由る「等云云、日蓮は聖人にあらざれども法華經を説の如く
受持すれば聖人の如し又世間の作法兼て知るに由て注し置くことは違う
べからず現世に云をく言の違はざらんをもて後生の疑をなすべからず、日蓮
は此関東の御一門の棟梁なり・日月なり・亀鏡なり・眼目なり・日蓮捨て
去る時・七難必ず起るべしと去年九月十二日御勘氣を蒙りし時大音声を放て
よばはりし事これなるべしに六十日乃至百五十日に此事起るかは華報な
るべし実果の成ぜん時いかげなげかはしからんずらん、世間の愚者の思に
云く日蓮智者ならば何ぞ王難に値哉なんと申す日蓮來ての存知なり父母を
打子あり阿闍世王なり仏・阿羅漢を殺し血を出す者あり提婆達多是なり六臣
これをほめく伽利等これを悦ぶ、日蓮当世には此御一門の父位なり仏阿羅漢
の如し然を流罪し主従共に悦びぬるあはれに無慙なる者なり誘法の法師等が
自ら禍の既に頼るるを欺きしがかくなるを一旦は悦ぶなるべし後には彼等が

欺き目迎がいちもん一門に劣るべからず、例せば泰衡がせうとを討九郎判官を討て悦こころしが如し既にいちもん一門を亡もうす大鬼の此国に入なるべし法華經にいわ云く「悪鬼入其身あつき」
と是なり。

日蓮も又かくせめらるるも先業せんごうなきにあらず不輕品にいわ云く「其罪畢已」等
云云、不輕菩薩の無量の謗法の者に罵詈めり打ちやくせられしも先業せんごうの所感なる
べし何に況や日蓮今生には貧窮下賤びんぐげせんの者と生れ施陀羅が家より出たり心こそ
すこし法華經を信じたる様なれども身は人身じんしんに似て畜身なり魚鳥を混丸して
赤白二滯せきびやくとせり其中こちゆうに識神しきしんをやどす濁水に月のうつれるが如し糞囊ふんのうに金こがねを
つつめるなるべし、心は法華經を信ずる故に梵天ぼんてん・帝釈たいしゃくをも猶恐なほしと思はず
身は畜生の身なり色心不相応しきしんふそうおうの故に愚者のあなづる道理なり心も又身に対す
ればこそ月金にもたとふれ、又過去かこの謗法を案ずるに誰かしういしる勝意比丘しょういびくが魂
にもや大天が神にもや不輕ふぎよう輕毀るいの流類なるか失心の余残よざんなるか五千上慢じようまんの

眷属けんぞくなるか大通だいとう第三の余流にもやあるらん宿業はかりがたし鉄くろがねは炎打きたいてば
剣となる賢聖けんせいは罵詈めりして試みるなるべし、我今度の御勘氣このたびごかんきは世間の失一分も
なし偏ひとえに先業せんごうの重罪じゅうざいを今生こんじょうに消して後生の三悪ごしょうさんあくを脱まぬかれんずるなるべし、
はつないおんきはつないおんきよう
般泥垣經ばんにげんに云く、「当来とうらいの世か仮りに袈裟けさを被て我が法の中に於て出家学道おいしゅっけし
らんだけたい
懶惰懈怠らんだけたいにして此等の方等契經これらほうとうひほうを誹謗ひぼうすること有らん当に知るべし此等は皆
是今日の諸もろもろの異道の輩やからなり」等云云、此經文きようもんを見ん者自身じしんをはずべし今・
われらしゅっけ
我等が出家して袈裟けさをかけ懶惰懈怠らんだけたいなるは是仏在世ざいせの六師外道げどうが弟子でしなりと
しる
仏記たまし給へり、法然ほうねんが一類大日いちるいだいが一類念仏宗いちるいねんぶつしゅう・禅宗ぜんしゅうと号して法華經ほけきように捨閉しゃへい
かくほう
閣抛かくほうの四字そを副そへて制止せいしを加て權教こんきようの弥陀みだし稱名しょうみょう計りばかを取立きようげ教外別伝べつでんして
ほけきよう
法華經ほけきようを月をさす指只文字ただもんじをかぞふるなんと笑ふ者は六師まつりゆうが末流ぶつきようの仏教の
しゅつたい
中に出来しゅつたいせるなるべし、うれへなるかなや涅槃經ねはんぎように仏光明こうみょうを放て地の下一
じごく
百三十六地獄じごくを照し給たまうに罪人ざいにん・一人もなかるべし法華經ほけきようの寿量品じゆりようぽんにして皆みな

成仏じょうぶつせる故なり但しただ一闍提人いつせんたいと申て謗法ぼうぼうの者計り地獄守じごくに留とどられたりき彼等かれらがうみげて今の世にほんこくの日本国いつさいしゅじょうの一切衆生いっさいしゅじょうとなれるなり。

にちれん

かこ

しゅしすて

ぼうぼう

こんじょう

ねんぶつ

ねんぶつ

ねんぶつ

ほけきょう

ねんぶつ

日蓮にちれんも過去の種子かこ已に謗法しゅしすての者なれば今生ぼうぼうに念仏者こんじょうにて数年が間ねんぶつ・法華經ほけきょう

ぎようじゃ

みういちにんとくしやせんちゅうむいっ

みういちにんとくしやせんちゅうむいっ

みういちにんとくしやせんちゅうむいっ

みういちにんとくしやせんちゅうむいっ

みういちにんとくしやせんちゅうむいっ

みういちにんとくしやせんちゅうむいっ

みういちにんとくしやせんちゅうむいっ

みういちにんとくしやせんちゅうむいっ

みういちにんとくしやせんちゅうむいっ

みういちにんとくしやせんちゅうむいっ

の行者ぎようじゃを見ては未有一人得者千中無一等と笑しなり今謗法ぼうぼうの酔さめて見れば

酒に酔る者父位を打て悦しが酔さめて後歎しが如し欺けども甲斐なし此罪消つみ

がたし、何に況や過去の謗法いかの心中かこにそみけんをや經文きようもんを見候ぞうらへば鳥の黒

きも鷺の白きも先業せんごうのつよくそみけるなるべし外道は知らずして自然じねんと云い

今の人は謗法ぼうぼうを顕し扶けんとすれば我身わがみに謗法ぼうぼうなき由よしをもながちに陳答ちんとうして

法華經ほけきょうの門を閉よと法然ほうねんが書けるをとかくあらかひなんどす念仏者ねんぶつはさてを

きぬ天台てんだい・真言等しんごんの人人彼が方人をあながちにするなり、今年正月十六日十

七日に佐渡さどの国の念仏者等数百人印性房ねんぶつと申すは念仏者の棟梁とうりょうなり日蓮にちれんが

許もとに来て云く法然い上人ほうねんしやうにんは法華經ほけきょうを抛よとかかせ給には非ず一切衆生いっさいしゅじょうに念仏ねんぶつ

を申させ給いて候此の大功德に御往生 疑なしと書付て候を山僧等の流され
たる並に寺法師等・善哉善哉とほめ候をいかがこれを破し給と申しき鎌倉の
念仏者よりもはるかにはかなく候ぞ無慙とも申す計りなし。

いよいよ日蓮が先生今生先日の謗法おそろしかかりける者の弟子と成け

んかかる国に生れけんいかなるべしとも覚え、般泥垣經に云く「善男子

過去に無量の諸罪・種種の悪業を作らんには是の諸の罪報・或は輕易せられ

・或は形状醜陋衣服足らず飲食 疎・財を求めて利あらず貧賤の家及び

邪見の家に生れ・或は王難に遇う」等云云、又云く「及び余の種種の人間の

苦報現世に軽く受くるは斯れ護法の功德力に由る故なり」等云云、此經文は

日蓮が身なくば殆ど仏の妄語となりぬべし、一には・或被輕易二には・或

形状醜陋三には衣服不足四には飲食 疎五には求財不利・六には生貧賤家

・七には及邪見家・八には・或遭王難等云云、此八句は只日蓮が身に感ぜり、

高山こうざんに登る者は必ず下り我人われひとを輕かろしめば還かえりて我身人わがみに輕易きよういせられん形狀ぎようじやう
端嚴たんごんをそしれば醜陋しゆうろうの報えいを得人えぶくおんじきの衣服飲食えふくおんじきをうばへば必ず餓鬼がきとなる持戒じかい
尊貴そんきを笑へば貧賤ひんせんの家に生しやうほうず正法しやうほうの家をそしれば邪見じゃけんの家に生しやうほうず善戒ぜんかいを笑へ
ば国土こくどの民となり王難なんに遇ふ是は常の因果いんがの定れる法なり、日蓮にちれんは此因果いんがに
はあらず法華經ほけきやうの行者ぎやうじやを過去かこに輕易きよういせし故ゆえに法華經ほけきやうは月と月とを並べ星と星
とをつらね華山あゐるに華山くだしをかさね玉と玉とをつらねたるが如ごとくなる御經みらいを・或ある
は上げ・或あるは下くだして嘲弄ゆえせし故ゆえに此八種だいなんの大難あえに値るなり、此八種みらいは尽未來際みらい
が間あつま・一つつこそ現げんずべかりしを日蓮にちれんつよく法華經ほけきやうの敵てきを責るによて一時いちじに
聚あつまり起せるなり譬たとえば民の郷郡たうごんなどにあるにはいかなる利錢りせんを地頭等じとうにおほ
せたれどもいたくせめず年年ねんねんにのべゆく其所そのところを出る時に競起きやうきが如ごとし斯これ護法ごほふ
の功德力くどくに由る故なり等は是なり、法華經ほけきやうには「諸の無智むちの人もろもろ有あつり惡口罵詈あくくめり
等とうじやうがしやくし刀杖瓦石とうじやうがしやくを加うる乃至國王ないしこくおう・大臣だいじん・婆羅門ばらもん・居士こじに向つて乃至数数ないししばしば摸出もしゅしゅ

せられん^{ごくそつ}等云、獄卒^{ざいにん}が罪人を責ずば地獄^{じごく}を出る者かたかりなん当世^{とうせ}の王臣^{おうしん}なくば日蓮^{にちれん}が過去^{かこ}謗法^{ぼうぼう}の重罪^{じゅうざい}消し難^{がた}し日蓮^{にちれん}は過去^{かこ}の不軽^{ふぎよう}の如く当世^{とうせ}の人人^{ひとびと}は彼の輕毀^{きようき}の四衆^{ししゅう}の如し人は替れども因^{いん}はは一なり、父母^{ふぼ}を殺せる人異なれども同じ無間地獄^{むげんじごく}におついかなれば不輕^{ふぎよう}の因^{いん}を行じて日蓮^{にちれん}一人釈迦^{しやか}仏^{ぶつ}とならざるべき又彼諸人^{しよにん}は跋陀婆羅門^{ばつだばらもん}等と云はれざらんや但千劫阿鼻地獄^{せんごうあびじごく}にて責られん事こそ不快^{ふかい}にはおぼゆれ是^{これ}をいかんとすべき、彼輕毀^{きようき}の衆^{しゅう}は始^{はつ}は謗^{ぼう}ぜしかども後^ごには信伏^{しんぷく}随從^{ずいじゅう}せりき罪^{つみ}多分^{たぶん}は滅^{めつ}して少分^{しょうぶん}有^あしが父母^{ふぼ}千人殺^{ころ}したる程^{ほど}の大苦^{たいく}をうく当世^{とうせ}の諸人^{しよにん}は翻^{ひるがえり}す心^{こころ}なし譬喻^{ひゆぼん}品^{ひん}の如^{ごと}く無数^{むしう}劫^{けつ}をや経^{くわ}んずらん三五^{さんご}の塵点^{じんてん}をやおくらんずらん。

これはさてをきぬ日蓮^{にちれん}を信^{しん}ずるやうなりし者どもが日蓮^{にちれん}がかくなれば疑^{うたがい}を^ををこして法華^{ほけきよう}經^{きやう}をすつるのみならずかへりて日蓮^{にちれん}を教訓^{きやうくん}して我賢^{われけん}しと思^{おも}はん僻人^{びやくにん}等^{ねんぶつ}が念仏^{ねんぶつ}者^{もん}よりも久^あく阿鼻^{あびじごく}地獄^{じごく}にあらん事^{ふびん}不便^{ふびん}とも申^{もう}す計^{ばか}りなし、

修羅が仏は十八界我は十九界と云ひ外道が云く仏は一究竟道我は九十五究竟道と云いしが如く日蓮御房は師匠にておはせども余にこはし我等はやはらかに法華經を弘むべしと云んは螢火が日月をわらひ蟻塚が華山を下し井江が河海をあなづり烏鵲が鸞鳳をわらふなるべしわらふなるべし。

南無妙法蓮華經

文永九年太歲 壬申 三月二十日

日蓮 花押

日蓮弟子・檀那等御中

佐渡の国は紙侯はぬ上表面に申せば煩あり一人ももるれば恨ありぬべ

し此文を心ざしあらん人人は寄合て「御覽じ料簡侯て心なぐさませ

給へ、世間にまさる欺きだにも出来すれば劣る欺きは物ならず当時の

軍に死する人人実不実は置く幾か悲しかるらん、いざはの入道さかべ

の入道いかになりぬらんかはのべ山城得行寺殿等の事いかにと書付て

給べし、外典書の貞観政要すべて外典の物語八宗の相伝等此等がな
くしては消息もかかれ候はぬにかまへてかまへて給候べし。

一二六

富木殿御返事

文永6年4月51歳御作

於佐渡一の谷

962P

御返事

日蓮が臨終一分も疑無く頭を刎ねらるる時は殊に喜悦有るべし、

大賊に値うて大毒を宝珠に易ゆと思ふ可きか。

鷲目員数の如く給ひ候い畢んぬ御志申し送り難く候、法門の事先度四条

三郎左衛門尉殿に書持せしむ其の書能く能く御覧有る可し、粗経文を勘え見

るに日蓮・法華經の行者為る事疑無きか但し今に天の加護を蒙らざるは一

には諸天善神此の悪国を去る故か、二には善神法味を味わざる故に威光勢力

無きか、三には大悪鬼三類の心中に入り梵天・帝釈も力及ばざるか等、二

の証文道理追て進せしむ可く候、但生涯本より思い切て候今に翻返ること
無く共の上又遺恨無し諸の悪人は又善知識なり、撰受・折伏の二義仏説に
依る、敢て私曲に非ず万事靈山浄土を期す、恐恐謹言。

卯月十日

日蓮 花押

土木 殿

一二七 土木殿御返事

文永十年七月 五十二歳御作

963P

鷲目二貫給候い畢んぬ、太田殿と其れと二人の御心喜び候、伊与房は機量
物にて候ぞ今年留め候い畢んぬ、御勘気ゆりぬ事・御欺き候べからず候、当世
・日本国子細之れ有る可き由之を存ず定めて勘文の如く候べきか、設い日蓮
死生不定為りと雖も妙法蓮華經の五字の流布は疑い無き者か伝教大師は
御本意の円宗を日本に弘めんとす、但し定慧は存生に之を弘め円・或は死

後に之これを顯あらわす事法な為ゆえる故にに一重大難だいな之れ有あるか、仏滅後ぶつめつ・二千二百二十余年
今に寿量品じゆりやうぼんの仏と肝要かんようの五字ごじとは流布るふせず、当時果報とうじかほうを論とうじかほうずれば恐おそらくは
伝教でんぎよう・天台てんだいにも超こえ竜樹りゆうじゆ・天親てんじんにも勝すぐれたるか、文理ぶんり無なくくんば大慢だいまん豈あにに
過たんや、章安大師だいし・天台てんだいを褒ほめて云いく、「天竺てんじくの大論だいろん尚なお其その類たぐいに非あらず震旦しんたんの
人師にんし何なぞ劣わずらわしく語かたるに及およばん此これ誇耀こやうに非あらず法相ほっそうの然しからしむるのみ」等云云、
日蓮にちれん又復また是かくの如ごとし竜樹りゆうじゆ・天親てんじん等尚なお其その類たぐいに非あらず等云云、此これ誇耀こやうに非あらず
法相ほっそうの然しからしむるのみ、故ゆえに天台大師てんだいだいし日蓮にちれんを指いして云いく、「後の五百歳このごひゃくさい遠みく妙道みようどう
に結むすわん」等云云、伝教でんぎよう大師だいし当世とうせいを恋いいて云いく、「末法まつぽう太たはだ近ききに有あり」等
云云、幸さいいなるかな我が身み「数数見擯出さくさくけんひんずい」の文ぶんに当あたること悦よろこばしいかな悦よろこば
しいかな、諸人しよにんの御返事ごへんじに之これを申もうす故ゆえに委細いさい、恐きようきよう恐おそ。

七月六日

日蓮花押
にちれんかおう

土木殿御返事
ごへんじ

一二八 富木殿御書 ときどのごしよ

文永十一年五十三歳御作 ぶんえい

964P

けかち申もうすばかりなし米一合もうらずがししぬべし、此の御房ごぼうたちも
・みなかへして但一人侯べし、このよしを御房ごぼうたちにもかたりさせ
給たまへ。

十二日さかわ十三日たけのした十四日いくるまがへし十五日を・をみや十六
日なんぶ、十七日このところ・いまださだまらずといえども、たいしはこの
山中・心中しんちゅうに叶かないて侯そうらへば・しばらくは侯そうらはんずらむ、結句けっくは一人になりて
日本国に流浪にほんこく るろうすべきみにて侯、又たちとどまるみならば・けさんに入り侯べ
し、恐恐きょうきょう謹言きんげん。

十七日

日蓮にちれん 在御判

ときどの

一二九 土木殿御返事 ごへんじ

964P

仕候なり。

褒美ほうびに非ず、実に器量きりよう者なり。来年正月大進阿闍梨と越中に之を遣つかし去る

べく候、白小袖一つ給ひ候ひ畢おわんぬ、今年日本にほんこく国一同に飢渴の上、佐渡さどの国

には七月七日已下いかそら天より忽ちに石灰虫と申もうす虫と雨等にて一時に稻穀損いちじし。

其の上疫病えきびようしよしよ处处へんまんに遍満し、方方死難脱かたがたなんなんれ難なんきか、事事紙上に尽し難なんく候、

恐恐きょうきょう謹言。

十一月三日 日蓮にちれん在御判

一三〇 法華行者逢難事ほつけぎようじやなん

文永十一年正月 五十三歳御作与富木常忍ぶんえい ぶんえい

965P

河野辺殿等中

やまとあじやうりごばうおんちゆう
大和阿闍梨御房御中

いっさいでし
一切我弟子等中

三郎左衛門尉殿 さえもんのじょう

謹上 きんじょう

日蓮 にちれん

富木殿 ときどの

追て申す、もう 竜樹・天親は共に千部の論師なり、ろんし 但権大乘を申べて法華經ごんだいじょう

をば心に存して口に吐きたまわらず此に口、天台・伝教は之を宣べて本門の本尊のべ

と四菩薩ぼさつと戒壇かいだんと南無妙法蓮華經の五字なむみょうほうれんげきごじと之を残したもう、所詮一には仏しよせん

授与じゅよしたまわざるが故に、二には時機未熟じきの故なり、今既に時来れり四菩薩すで

出現しゅつげんしたまわんか日蓮此の事先ずにちれん

之を知りぬ、西王母せいおうぼの先相せんそうには青鳥せいちょう・客人の来相かんじやくには鵲か是なり、各各・

我が弟子でしたらん者は深く此の由よしを存ぜよ設い身命たといしんみょうに及ぶとも退轉たいてんすること

莫なれ。

富木・三郎左衛門の尉・河野辺・大和阿闍梨等・殿原・御房達各各互たがいに読よ

聞けまいらせさせ給え、かかる濁世には互につねに・いゝあわせてひまもな
く後世ねがわせ給い候へ。

法華經の第四に云く「如来の現在すら猶怨嫉多し況や滅度の後をや」等云

云、同第五に云く「一切世間怨多くして信じ難し」等云云、涅槃經の三十八

に云く「爾の時に外道に無量の人有り。心瞋恚を生ず」等云云、又云く「爾の

時に多く無量の外道有り和合して共に摩伽陀の王・阿闍世の前に往きぬ。今

は唯一大悪人有り瞿曇沙門なり王未だ檢校せず我等甚だ畏る、一切世間の

悪人利養の爲の故に其の所に往集して眷属と爲る乃至迦葉・舍利弗・目連

等云云如来現在猶多怨嫉の心是なり、得一大德天台智者大師を罵りして曰く

「智公汝は是れ誰が弟子ぞ三寸に足らざる舌根を以て覆面舌の所説の教時を

謗ず、又云く「豈是れ狂の人に不ずや」等云云、南都・七大寺の高徳等

・護命僧都・景信律師等三百余人・伝教大師を罵りして曰く「西夏に鬼弁

婆羅門有り東土に巧言を吐く禿頭沙門あり此れ乃ち物類冥 召して世間を
誑惑す」等云云、秀句に云く「浅きは易く深きは難しとは釈迦の所判なり浅
きを去つて深きに就くは丈夫の心なり、天台大師は釈迦に信順し法華宗を助
けて震旦に敷揚し、叡山の一家は天台に相承し法華宗を助けて日本に弘通す」
云云。

夫れ在世と滅後と正像二千年の間に法華經の行者・唯三人有り所謂仏と
天台・伝教となり、真言宗の善無畏・不空等・華嚴宗の杜順・智儼等・三論
・法相等の人師等は実經の文を会して権の義に順ぜしむる人人なり、竜樹
・天親等の論師は内に鑒みて外に発せざる論師なり、經の如く宣伝すること
正法の四依も天台・伝教には如かず、而るに伝記の如くんば末法に入つて
法華經の行者有る可し其の時の大難・在世に超過せんと云云、仏に九横の
大難有り所謂孫陀利の謗と金鏑と馬麦と琉璃の釈を殺すと乞食空鉢と旃遮女

の誘と調達ちようだつが山を謗すと寒風に衣を索もとむるとなり、其の上そ一切外道の讒奏上いっさいげどう ざんそうに引くが如ごとし記文の如きもん ごとくんば天台てんだい・伝教でんぎようも仏記ぶつぎに及およばず。

之を以て之を案ずるに末法の始に仏説の如く行者世に出現しゆつげんせんか、而しかる

に文永十年十二月七日・武蔵ぶんえいの前司殿より佐土の国へ下す状に云く自判之在むさしり。

佐渡さどの国の流人の僧日蓮弟子等を引率いんそつし悪行を巧むの由そ其の聞え有り所行の企てしよぎよう くだ甚はなはだだ以て奇怪きかいなり今より以後いご・彼僧に相い随したがわわん輩やからに於ては炳誠を加えしむ可べし、猶なお以て違犯いはんせしめば交名を注進ちゆしんせらる可べきの由の所に候しつたつくだん ごとなり、何て執達件しつたつくだん ごとの如し。

文永十年十二月七日

沙門觀惠上る

依智六郎左衛門尉等えち さいもんのじよう云云。

此の状に云く悪行を巧む等云云、外道げどうが云く瞿曇くどんは悪人あくにんなり等云云、又九横くおう

の難なん一一に之在り、所謂琉璃殺釈いわゆるりさつしゃくと乞食空鉢こつじきくうはつと寒風索衣さくいとは仏世ちようかに超過せる
大難だいななり、恐くは天台・伝てんだい教でんぎようも未だ此の難なんに値あいたまわず当まさに知るべし三人
に蓮にちれんを入れ四人と為して法華經ほけきようの行者ぎようじゃ・末法まっぽうに有るか、喜よろこばしい哉かなき況滅度後うめつとこ
の記文きもんに当れり悲かな哉国中の諸人阿鼻獄しよにんあびごくに入らんこと茂しげきを厭いとうて之これを子細しさい
に記さず心を以て之これを推すいせよ。

ぶんえい きのえいぬ
文永十一年甲戌正月十四日日蓮花押にちれんかおう

いっさい しょうにんこれ けんもん じこう
一切の諸人之を見聞し 志 有らん人人は互ひとびとに之たがいこれを語ことばれ。

一一一 富木殿御返事ときどのごへんじ 文永十二年五十四歳御作ぶんえい 968P

ときどのごへんじ
富木殿御返事

にちれん
日蓮

かたびら

帷 一領給ひ候い畢おわんぬ、夫れ仏弟子ぶつでしの中・比丘びく一人はんべり、飢饉ききんの世

に仏おんときの御時事おんときかけて候そつらいければ比丘袈裟びくけさをうて其そのあたいを仏に奉たてまつる、仏

其その由来ゆらいを問たまいい給たまいければ・しかじかとありのままに申もうしけり、仏いわ云く「袈裟けさ

はこれ三世さんぜの諸仏しよぶつ・解脱げだつの法衣ほうえなり、このあたひをば我報わうじがたし」と辞退
しまし申ししかば此この比丘びく申もうすは「この袈裟けさあたひをば・いかんがせん」と
申しければ、仏ぶつの云いく「汝悲母なんじ有りや不いや」答こえて云いく「有り」仏い云いく「此
袈裟けさをば汝母なんじに供養くようすべし」此この比丘びく・仏いに云いく「仏こは此れ三界さんがいの中第一だいいち
の特尊いつさいしゆじようなり一切衆生の眼目がんもくにてをはず、設たといじゆつぼうせかい
にしく袈裟けさなりとも能よく報たまじ給たまうべし、我が位むちは無智むちなる事牛のごとし羊よ
りもはかなしいかでか袈裟けさの信施しんせをほうぜん」と云云、仏返して告いげて云いく
「汝なんじが身をば誰か生なんじみしぞや汝なんじが母これを生む此この袈裟けさの恩報おんほうじぬべし」
等云云、此これは又齡よわい九旬しんみようにいたれる悲母ひもの愛子あいしに・これをまいらせさ給たまえる
我りようげんと両眼しんみようを誕にちんり身命しんみようを尽こころくせり、我が子の身として此このか帷かたびらの恩かたし
と・をばして・つかわせるか日蓮にちれん又はうじがたし、しかれども又返すべきに
あらず此この帷かたびらをきて日天にってんの御前おんまえにして此この子細しさいを申もうし上げば定めて釈梵

諸天しよてんしろしめすべし、帷かたびらは一なれども十方じゆつぽうの諸天しよてん此れをしり給たまうべし、露つゆ
を大海たいかいによせ土を大地だいちに加るがごとし生生に失せじ世世にくちざらむかし、
きようきようきんげん
恐恐 謹言。

二月五日

日蓮

花押 かおう

一三三 富木殿御書 ときどのごしよ

建治元年五十四歳御作 がんねん

969P

与富木常忍 ときじょうにん

妙法蓮華經の第二に云く みようほうれんげきよう

若し人信ぜずして此の經を毀謗し經を讀誦し いわも きぼう どくじゆ

書持すること有らん者を見て輕賤憎嫉して結恨を懷かん其人命終して しよじ きようせんぞうしつ けつこん いだ ごにんみようじゆう

阿鼻獄に入らん乃至是の如く展轉して無數劫に至らん第七に云く「千劫 あびごく ないしかくのごと てんでん むしゆこう いた いわ せんこう

阿鼻獄に於てす」第三に云く「三千塵点」第六に云く「五百塵点劫」等云云、 あびごく おい いわ さんぜんじん でん いわ ごひやくじん でんこう

涅槃經に云く「惡象の為に殺されては三惡に至らず惡友の為に殺されては必 いわ あくぞう ため さんあく いた あくゆう ため

ず三惡に至る」等云云、賢慧菩薩の法性論に云く「愚にして正法を信ぜず さんあく いた けんねぼさつ ほっしやう いわ おろか しやうほう

邪見及び 慢なるは過去の謗法の障りなり不了義に勒着して供養恭敬に
著し唯邪法を見て善知識に遠離して謗法者の小乗の法に樂著する是の如
き等の衆生に親近して大乘を信ぜず故に諸仏の法を謗ず、智者は怨家・蛇
・火毒因陀羅・霹靂・刀杖諸の惡獸・虎狼・師子等を畏るべからず、彼は但
能く命を断じて人をして畏るべき阿鼻獄に入らしむること能わず、畏るべき
は深法を謗ずると及び謗法の知識となり決定して人をして畏るべき阿鼻獄に
入らしむ、惡知識に近づきて惡心にして仏の血を出だし及び父母を殺害し
諸の聖人の命を断じ和合僧を破壊し及び諸の善根を断ずると雖も念を正法
に繋ぐるを以て能く彼の處を解脱せん、若し復余人有つて甚深の法を誹謗せ
ば彼の人無量劫にも解脱を得べからず、若し人衆生をして是の如きの法を
覺信せしめば彼は是我が父母亦是れ善知識なり、彼の人は是智者なり如来の
滅後に邪見顛倒を廻して正道に入らしむるを以ての故に三宝清淨の信・

菩提功徳の業なり」等云云、竜樹菩薩の菩提資糧論に云く、「五無間の業を説きたもう乃至許し未解の深法に於て執着を起せるは。彼の前の五無間等の罪緊に之を比するに百分にしても及ばず」云云。

未れ賢人は安きに居て危きを欺き佞人は危きに居て安きを欺く大火は小水を畏怖し大樹は小鳥に値いて枝を折らる智人は恐怖すべし大乘を謗ずる故に、天親菩薩は舌を切らんと云い馬鳴菩薩は頭を刎ねんと願ひ吉蔵大師は身を肉橋と為し玄奥三蔵は此れを靈地に占ひ不空三蔵は疑いを天竺に決し伝教大師は此れを異域に求む皆上に挙ぐる所は経論を守護する故か。

今・日本国の八宗並びに浄土・禅宗等の四衆上主上・上皇より下臣下万民に至るまで皆一人も無く弘法・慈覚・智証の三大師の末孫・檀越なり、円仁・慈覚大師云く「故に彼と異り」円珍・智証大師云く「華嚴・法華を大日経に望むれば戲論と為す」空海弘法大師云く「後に望むれば戲論と為す」

等と云云、此の三大師の意は法華經は已・今・当の譜經の中の第一なり然りと雖も大日經に相對すれば戲論の法なり等云云、此の義心有らん人信を取る可きや不や。

今・日本國の諸人・惡象・惡馬・惡牛・惡狗・毒蛇・惡刺・懸岸・險崖・暴水・惡人・惡國・惡城・惡舍・惡妻・惡子・惡所從等よりも此に超過し以て恐怖すべきこと百千万億倍なれば持戒・邪見の高僧等なり、問うて云く上に挙ぐる所の三大師を謗法と疑うか叡山第二の円澄寂光大師・別当光定大師・安慧大樂大師・慧亮和尚・安然和尚・淨觀僧都・檀那僧・正・慧心先德・此等の數百人、弘法の御弟子実慧・真濟・真雅等の數百人並びに八宗・十宗等の大師先德・日と日と・月と月と・星と星と・並びに出でたるが如し、既に四百余年を経歴するに此等の人人・一人として此の義を疑わず汝何なる智を以て之を難ずるや云云。

此等の意を以て之を案ずるに我が門家は夜は眠りを断ち昼は暇を止めて
之を案ぜよ一生空しく過して万歳悔ゆること勿れ、
恐恐謹言。

八月二十三日

日蓮花押

富木殿

驚目一結給ひ候畢んぬ、志有らん諸人は一处に踏集して御聴聞有るベ
きか。

一三三 御衣並単衣御書

建治元年

五十四歳御作

971P

御衣の布並びに御単衣給ひ候い畢んぬ鮮白比丘尼と申せし人は生れさせ
給いて御衣をたてまつりたりけり、生長するほどに次第にこの衣大になりけ
り、後に尼とならせ給いければ法衣となりけり、ついに法華經の座にして
記をさづかる一切衆生喜見如来これなり、又法華經を説く人は柔和忍辱衣
と申して必ず衣あるべし、物たねと申すもの一なれども植えぬれば多くな

り竜は小水を多雨となし人は小火を大火となす、衣かたびらは一なれども
法華經にまいらせ給いぬれば法華經の文字は六万九千三百八十四字・一字は
一仏なり、此の仏は再生敗種を心符とし顕本遠寿を其の寿とし常住 仏性
を咽喉とし一乗妙行を眼目とせる仏なり、応化非真仏と申して三十二相
・八十種好の仏よりも法華經の文字こそ真の仏にては・わたらせ給いて仏
在世に仏を信ぜし人は仏にならざる人もあり、仏の滅後に法華經を信ずる人
は無一不成仏如来の金言なり、この衣をつくりてかたびらをきそえて法華經
を

よみて候わば日蓮は無戒の比丘なり法華經は正直の金言なり、毒蛇の珠をは
き伊蘭の梅檀をいだすがごとし、
恐恐謹言。

九月二十八日御返事日蓮 花押

一三四 観心本尊得意抄

建治元年十一月 五十四歳御作 972P

驚目一貫文厚綿の白小袖一つ筆十管墨五丁給ひ畢んぬ。

身延山は知食如く冬は嵐はげしくふり積む雪は消えず極寒の処にて候間昼

夜の行法もはだうすにては堪え難く辛苦にて候に此の小袖を著ては思ひ有る

可からず候なり、商那和修は付法蔵の第三の聖人なり、此の因位を仏

説いて云く「乃往過去に病の比丘に衣を与うる故に生生世世に不思議自在の

衣を得たり、今の御小袖は彼に似たり此の功德は日蓮は之を知る可からず併

ながら釈迦仏に任せ奉り畢んぬ。

抑も今の御状に云く教信の御房観心本尊抄の未得等の文字に付て迹門

をよまじと疑心の候なる事不相伝の僻見にて候か、去る文永年中に此の書

の相伝は整足して貴辺に奉り候しが其の通りを以て御教訓有る可く候、所詮

在在処処に迹門を捨てよと書きて候事は今・我等が読む所の迹門にては候

はず、叡山天台宗の過時の迹を破し候なり、設け天台・伝教の如く法のま

まありとも今末法に至ては去年の暦の如し何に況や慈覚自ら已来大小・権実
に迷いて大謗法に同じきをや、然る間像法の時の利益も之無し増して末法に
於けるをや。

一 北方の能化難じて云く爾前の経をば末顕真実と捨て乍ら安国論には爾前
の経を引き文証とする事自語相違と不審の事前前申せし如し、総じて一代
聖教を大に分つて二と為す一には大綱二には綱目なり、初の大綱とは成仏
得道の教なり、成仏の教とは法華経なり、次に綱目とは法華已前の諸経な
り、彼の諸経等是不成仏の教なり、成仏得道の文言之を説くと雖も但名字
のみ有て其の実義は法華に之有り、伝教大師の決権実論に云く「権智の所作
は唯名のみ有て実義有ること無し」云云、但し権教に於ても成仏得道の外
は説相空しかる可からず法華の為の綱目なるが故に、所詮成仏の大綱を法華
に之を説き其の余の綱目は衆典に之を明す、法華の為の綱目なるが故に法華

の証文しょうもんに之これを引き用もちゆ可べきなり、其その上法華經ほけきょうにて実義じつぎ有ある可べきを爾前にぜんの經きょうにして名字計りみょうじばかののしる事こと全く法華ほっけの為ためなり、然しかる間ま尤もつも法華ほっけの証文しょうもんとなるべし。

問とう法華ほっけを大綱たいこうとする証如何いかに、答こたう天台てんだいは当まさに知るべし此この經きょうは唯ただ如来にょらいせつきよう たいこう
説教せつぎょうの大綱たいこうを論ろんじて綱目きようもくを委細いさいにせざるなりと、問とう爾前にぜんを綱目きようもくとする証如何いかに、答こたう妙樂みょうらくの云いく、「皮膚毛綵いふもうさいしゅう衆典しゅうてんに出在しゅざいせり」云云、問とう成仏じやうぶつは法華ほっけに限かぎると云いう証如何いかに、答こたう經きょうに云いく、「唯一乘ただいちじやうの法ほふのみ有あて二も無なく亦また三も無なし」文問にぜんう爾前にぜんは法華ほっけの為ためとの証如何いかに答こたう經きょうに云いく、「種種しゆじゆの道みちを示しすと雖いえども仏乘ぶつじやうの為ためなり」委細いさい申もうし度たく候いへどと雖いえども心地違例しんじして候程いへどに省略しゆりやうせしめ候、
恐恐きようきよう謹言きんげん。

十一月二十三日

日蓮にちれん

花押かおう

ときどのごへんじ
富木殿御返事

帥殿そつどのの物語ものがたりりしは下総しもふさに目連樹もくれんと云う木の候よし申し候し、其その木の根を

ほりて十両ばかり両方の切目には焼金やきがねを宛てて紙にあつくつつみて風ひかぬ

様にこしらへて大夫次郎たゆうが便宜びんぎに給ひ候べきよし御伝えあるべく候。 一三

しょうにんちさんぜじ
五 聖人知三世事

建治元年がねん 五十四歳御作 与富木常忍ときじょうにん

974P

しょうにんもつ 聖人と申すは委細いさいに三世を知るを聖人と云う、儒家じゅけの三皇・五帝並びに

三聖は仏説在を知つて過・末を知らず外道げどうは過去かこ八万・未来みらい八万を知る一分いちぶん

の聖人しょうにんなり、小乗しょうじょうの二乗は過去かこ・未来みらいの因果いんがを知る外道げどうに勝れたる聖人しょうにん

なり、小乗しょうじょうの菩薩ぼさつは過去かこ三僧祇菩薩ぼさつ、通教つうきょうの菩薩ぼさつは過去かこに動踰塵劫どうゆじんこうを経歴きようりやく

せり、別教べつきょうの菩薩ぼさつは一一の位の中に多俱低劫たぐていこうの過去かこを知る、法華經ほけきょうの迹門しやくもん

は過去かこの三千塵点劫さんぜんじんてんこうを演説えんぜつす一代超過いちだいちょうかこれ是なり、本門ほんもんは五百塵点劫ごひゃくじんてんこう・過去遠遠劫かこおんのんこう

をも之を演説し又未来無數劫の事をも宣伝し、之に依つて之を案ずるに委く
過未を知るは聖人の本なり、教主釈尊既に近くは去つて後三月の涅槃之を
知り遠くは後・五百歳・広宣流布疑い無き者か、若し爾れば近きを以て遠
きを推し現を以て当を知る如是相乃至本末究竟等是なり。

後五百歳には誰人を以て法華經の行者と之を知る可きや予は未だ我が智慧
を信ぜず然りと雖も自他の叛逆・伝道之を以て我が智を信ず敢て他人の為に
非ず又我が弟子等之を存知せよ日蓮は是れ法華經の行者なり不輕の跡を
紹繼するの故に輕毀する人は頭七分に破・信ずる者は福を安明に積まん、
問うて云く何ぞ汝を毀る人頭破七分無きや、答えて云く古昔の聖人は仏を
除いて已外之を毀る人・頭破但一人・二人なり今日蓮を毀皆する事は非一人

・二人に限る可らず日本一国・一同に同じく破るるなり、所謂正嘉の大地震
・文永の長星は誰か故ぞ日蓮は一閻浮提第一の聖人なり、上一人より下万民

に至るまで之を輕毀して刀杖を加え流罪に処するが故に梵と釈と日月・四天
と隣国に仰せ付けて之を逼責するなり、大集經に云く・仁王經に云く・
涅槃經に云く・法華經に云く・設い万祈を作すとも日蓮を用いずんば必ず此
の国今の壱岐・対馬の如くならん、我が弟子仰いで之を見よ此れ偏に日蓮が
貴尊なるに非ず法華經の御力の殊勝なるに依るなり、身を挙げれば慢ずと
想い身を下げば經を頗る松高ければ藤長く源深ければ流れ遠し、幸なるかな
楽しいかな穢土に於て喜樂を受くるは但日蓮一人なる而已。

一三六 富木尼御前御返事

建治二年 五十五歳御作 975p

驚目一貫並びにつつひとつ給い候い了んぬ・やはしる事は弓のちから・
くものゆくことはりうのちから、をとこのしわざはめのちからなり、いまと
きどののこれへ御わたりある事尼ごぜんの御力なり、けぶりをみれば火をみ
るあめをみればりうをみる、をとこをみればめをみる、今ときどのにけさん

つかまつれば尼^にござんをみたてまつると・をぼう、ときどのの御物がたり候
はこのは・わのなげきのなかにりんずうのよくをはせしと尼がよくあたりか
んびやうせし事のうれしさ・いつのよにわするべしともをばえずと・よろこ
ばれ候なり、なによりも・をぼつかなき事は御所^{ごしよ}勞なり、かまえてさもと三
年はじめのごとくに・きうじせさせ給^{たま}へ、病なき人も無常^{むじょう}まぬかれがたし但^{ただ}し
としのはてにはあらず、法華^{ほけきょう}經の行者^{ぎょうじ}なり非業の死にはあるべからずよも業
病にては候はじ、設^{たと}い業病なりとも法華^{ほけきょう}經の御力^{おんちから}たのもし、阿闍^{あじゃ}世王^{せせ}は法華^{ほけきょう}經
を持ち^{たも}て四十年の命をのべ陳臣^{ちんしん}は十五年の命をのべたり、尼^にござん又^{また}法華^{ほけきょう}經
の行者^{ぎょうじ}なり御信^{しんじん}心月のまさるがごとく・しをのみつがごとし、いかでか病も
失せ寿ものびざるべきと強盛にをばしめし身を持し心に物をなげかざれ、な
げき出^{いで}来る時はゆきつしまの事・だざひふの事・かまぐらの人人^{ひとびと}の天の樂・
のごとにありしが、当時^{とうじ}つくしへむかへばとどまる・めこゆくをとこ、はな

るときはかわをはぐがごとくかをと・かをとをとりあわせ目と目とをあわ
せてなげきしが、次第しだいにはなれてゆいのはま・いなぶらこしごえさかわはこ
ねさか一日・二日すぐるほどに、あゆみあゆみ・とをざかる・あゆみをかわ
も山もへだて雲もへだつれば・うちそうものはなみだなり・ともなうものは
なげきなり、いかにかなしかるらむ・かくなげかんほどに・もうこのつわも
のせめきたらば山か海もいけとりか・ふねの内か・かうらいかにて・うきめ
にあはん、これ・ひとへに失とがもなくて日本にほん国こくの一切衆生の父母ふぼとなる法華經ほけきょう
の行者日蓮ぎょうじにぢれんをゆへもなく・或あるはのり・或あるは打ち・或あるはこうじをわたし、もの
にくるいしが十羅刹じゅうしやくせつのせめをかほりてなれる事なり、又又これより百千万億
倍たへがたき事どもいで来るべし、不思議ふしぎを目の前に御らんあるぞかし、我
れ等は仏に疑うたがいいなしと・をばせば・なにのなげきか有あるべき、きさきにな
りてもなにかせん天に生れても・ようしなし、竜女りゅうにょがあとをつぎ摩訶波舍まか

波提比丘尼のれちにつらなるべし、あらうれし・あらうれし、南無妙法蓮華經

・南無妙法蓮華經と唱えさせ給へ、
恐恐 謹言。

三月二十七日日蓮 花押尼ごぜんへ

一三七 忘持經事 建治二年 五十五歳御作 与富木常忍 976p

忘れ給う所の御持經追て修行者に持たせ之を遣わす。

魯の哀公云く人好く忘る者有り移宅に乃ち其の妻を忘れたり云云、孔子云く

又好く忘ること此れより甚しき者有り桀紂の君は乃ち其の身を忘れたり

等云云、夫れ槃特尊者は名を忘る此れ閻浮第一の好く忘るる者なり今常忍

上人は持經を忘る日本第一の好く忘るるの仁か、大通結縁の輩は衣珠を忘

れ三千塵劫を経て貧路に踞し久遠下種の人は良薬を忘れ五百塵点を送りて

三途の嶮地に顛倒せり、今真言宗・念仏宗・禅宗・律宗等の学者等は仏陀

の本意を忘失し未来無數劫を経歴して阿鼻の火坑に沈淪せん、此れより第一

の好く忘るる者あり所謂今の世の天台宗の学者等と持経者等との日蓮を誹謗
し念仏者等を扶助する是れなり、親に背いて敵に付き刀を持ちて自を破る此
等は且く之を置く。

夫れ常啼菩薩は東に向つて般若を求め善財童子は南に向いて華嚴を得る
雪山の小児は半偈に身を投げ樂法梵志は一偈に皮を剥ぐ、此等は皆上聖大人
なり其の迹をうるに地・住に居し其の本を尋ねれば等妙なるのみ・身は
八熱に入つて火坑三昧を得・心は八寒に入つて清涼三昧を証し身心共に苦無
し、譬えば矢を放つて虚空を射・石を握つて水に投ずるが如し。

今常忍貴辺は末代の愚者にして見思未断の凡夫なり、身は俗に非ず道に
非ず禿居士心は善に非ず惡に非ず羝羊のみ、然りと雖も一人の悲母・堂に有
り朝に出て主君に詣で夕に入て私宅に返り営む所は悲母の為め存する所は孝
心のみ、而るに去月下旬の比・生死の理を示さんが為に黄泉の道に趣く

此に貴^き辺^{へん}と歎^{なげ}いて言^{いわ}く 齡^{よわ}既^いに九^{よわ}旬^{いす}に及^{およ}び子^こを留^{とど}めて親^{しだい}の去^しること次第^{だい}たりと
雖^{いえど}も情^{じやう}事^じの心^{こころ}を案^{あん}ずるに去^さつて後^ご来^{らい}る可^べからず何^{いすれ}れの月^{げつ}日^{にち}をか期^こせん二母^ふ国^{こく}
に無^なし今^{いま}より後^ご誰^{たれ}をか拝^べす可^べき、離^り別^{べつ}忍^{しの}び難^{がた}きの間^ま・舍^{しや}利^りを頸^{けい}に懸^かけ足^{あし}に任^{まか}せ
て大^{だい}道^{どう}に出^いで下^げ州^{しゅう}より甲^{かう}州^{しゅう}に至^{いた}る其^その中^{ちゆう}間^{げん}往^{せん}復^り千^{せん}里^りに及^{およ}ぶ国^{こく}・皆^{みな}飢^き饑^きし山^{さん}
野^やに盜^{ぞく}賊^{じやく}充^{まん}満^{まん}し宿^{しゆく}宿^{しゆく}粮^{りやう}米^{まい}乏^{ぼう}・少^{せう}なり我^わ身^み羸^{えい}弱^{じやく}・所^{しよ}従^{じゆう}亡^{わう}きが若^{もし}く牛^{ぎゆう}馬^ば合^あ期^きせ
ず峨^が峨^がたる大^{だい}山^{さん}重^{じゆう}重^{じゆう}として漫^{まん}漫^{まん}たる大^{だい}河^か多^た多^たなり高^{かう}山^{さん}に登^{のぼ}れば頭^{こつ}を天^{てん}に ち
幽^{ゆう}谷^{こく}へ下^{くだ}れば足^{あし}雲^{うん}を踏^ふむ鳥^{あらし}に非^{あら}れば渡^{わた}り難^{がた}く鹿^かに非^{あら}れば越^こえ難^{がた}し眼^{まな}眩^{くら}き足^{あし}
冷^こゆ、羅^ら什^じ三^{さん}蔵^{ざう}の葱^{そう}嶺^{れい}・役^{えん}の優^う婆^ば塞^{そく}の大^{だい}峰^{ほう}も只^{ただ}今^{いま}なりと云^いふ、然^{しか}る後^ご深^{じん}洞^{どう}に
尋^{たず}ね入^いりて一^{あん}菴^{しつ}室^{しつ}を見^みる法^{ほつ}華^け読^{とく}誦^{じゆ}の音^{おん}・青^{せい}天^{てん}に響^{ひび}き一^{いち}乘^{じやう}談^{だん}義^ぎの言^{ごん}山^{さん}中^{ちゆう}に聞^{きこ}
ゆ、案^{あん}内^{ない}を触^ふれて室^{しつ}に入^いり教^{きやう}主^{しゆ}釈^{しやく}尊^{そん}の御^ご宝^{ほう}前^{ぜん}に母^{はは}の骨^{こつ}を安^{あん}置^ちし五^ご臓^{ざう}を地^ちに
投^なげ合^あ掌^{しょう}して両^{りやう}眼^{げん}を開^{ひら}き尊^{そん}容^{よう}を拝^{はい}し歡^{かん}喜^き身^みに余^{あま}り心^{こころ}の苦^{くる}み忽^{たち}ち息^{いき}む、我^わが
頭^{こつ}は父^ふ母^ぼの頭^{こつ}・我^わが足^{あし}は父^ふ母^ぼの足^{あし}・我^わが十^{じゆ}指^しは父^ふ母^ぼの十^{じゆ}指^し・我^わが口^{くち}は父^ふ母^ぼ

の口なり、譬たとえば種子しゆしと菓子と身と影との如ごとし教主きやうしゆしやくそん釈尊じやうどうの成道じやうばんは淨飯・
摩耶まやの得道とくだう・吉占きつせんし師子しし・青提女しやうだいによ・目もつけんそんじや尊者どうじは同時じようぶつの成仏じやうぶつなり、是かくのことの如ごとく觀
ずる時むし無始ごうしやうの業障ごうしやう忽たちまちに消しんしよえ心性みやうれんたちまの妙蓮たまた忽しかちに開たまたき給しかうか然しかして後ずいぶんに隨分
仏事ぶつじを為なし事故なく無かえく還たまり給たまう云云、恐恐きやうきやうきんげん謹言。
富木入道殿にゆうどう

一三八

富木殿御返事

建治二年十萬五十五歲御作

978p

鷲目がもくひとゆいてんだいだいし一結天台大師の御宝前ほうぜんを莊嚴そうごんし侯そうらいたんぬ、經きやうてんに云いく「法華最第一ほつけさいだいいちなり」と、又云いく「能よく是この經典きやうてんを受持じゆじすること有またらん者またかくのことも亦復また是ごとの如いし一切いっさい衆生しゆじやうの中に於おいて亦またこれ第一だいいちなり」と、又云いく「其その福復また彼すれに過みぐ」妙樂みやうらく云いく
「若もし悩乱のうらんする者は頭かう七分しちぶんに破われ供養くやうすること有またらん者ふくじゆいは福十号ふくじゆいに過すぐ」
伝教大師でんきやうだいしも「讚者あんみやうは福を安明あんみやうに積ほうしやみ謗者つみは罪を無間むげんに開ひらく」等云云、記けの
十いに云いく「方便ほうべんの極位きよくいに居ばる菩薩ぼさつ猶尚なほ第五十人およに及およばず」等云云、華嚴經けこんきやうの

ほうえくどく だいにちきよう こんこう
法慧功德林大日經の金剛薩捶等
がんと ほうぞうぜんむい
尚法華經の博地に及ばず何に況や其の宗の
元祖等法藏善無畏等に於てをや、
おんことわがみ
是れは且く之を置く、
そつら
尼ごぜんの御所勞の
御事我身一身の上とをもひ候へば
ほけきよう ぎようじや
昼夜に天に申し候なり、
にちがつ
此の尼ごぜんは
法華經の行者をやしなう
たま
事灯に油をそへ木の根に土をかさぬるがごとし、
くは日月天共の命にかわり給へと申し候なり、
ほう もつ
又をもいわするる事もやと・
いよ房に申しつけて供そ、
たのもしと・をぼしめせ、
きようきよう
恐恐。

十一月二十九日

日蓮 花押

ときどのごへんじ
富木殿御返事

一三九 道場神守護事

建治二年十二月 五十五歳御作 979p

がもく
鷲目五貫文慥に送り給ひ候い了ぬ、
たしか
且つ知食すが如く此の所は里中を離れ
みやま
たる深山なり衣食乏少の間読經の声続き難く談義の勤め廃しつ可し、
いしよくぼうしやう
此の
たくせん じゆうらせつ
託宣は十羅刹の御計にて檀那の功を致さしむるか、
ばかり だんな こう
止觀の第八に云く「帝釈
しかん
帝釈

堂の小鬼敬い避くるが如し道場の神大なれば妄りに侵すること無し、又城の主剛ければ守る者も強し城の主・剛ければ守る者忙る、心は是れ身の主なり同名同生の天是れ能く人を守護す心固ければ則ち強し身の神尚爾なり況や道場の神をや弘決の第八に云く、常に人を護ると雖も必ず心の固きに仮りて神の守り則ち強し又云く、身の両肩の神尚常に人を護る況や道場の神をや云云、人所生の時より二神守護す所謂同生天同名天是を俱生神と云う華嚴經の文なり、文句の四に云く、賊南無仏と称して尚天頭を得たり況や賢者称せば十方の尊神敢て当らざらんや但精進せよ懈怠すること勿れ等云云、釈の意は月氏天を崇めて仏を用いざる国あり而るに寺を造り第六天の魔王を主とす頭は金を以てす大賊年来之を盗まんとして得ず有時・仏前に詣で物を盗んで法を聴く、仏説いて云く南無とは驚覺の義也盗人之を聞いて南無仏と称して天頭を得たり、之を糾明する処盗人上の如く之を申す一国・皆天

を捨てて仏に歸せり云云、彼を以て之を推するに設け科有る者も三宝を信ぜ
ば大難を脱れんか、而るに今示し給える託宣の状は兼て之を知る之を案ずる
に難を卻て福の来る先兆ならんのみ、妙法蓮華經の妙の一字は竜樹菩薩の
大論に釈して云く、「能く毒を変じて藥と為す」と云云、天台大師の云く、「今經
に記を得る即ち毒を変じて藥と為すなり」と云云、災来るとも變じて幸と為ら
ん何に況や十羅刹之を兼るをや、薪火を熾にし風・求羅を益すとは是なり、
言は紙上に尽し難し心を以て之を量れ、恐恐謹言。

十二月十三日

日蓮 花押

御返事

一四〇 常忍抄

建治三年十月

五十六歳御作

980p

御文粗拝見仕り候い了んぬ。

御状に云く常忍の云く記の九に云く、「権を稟けて界を出づるを名れて虚出と

為す」云云、了性房云く全く以て其の積無し云云、記の九に云く壽量品「無有虚
出より昔虚為実故に至るまでは為の字権を稟けて界を出づるを名けて虚出と為す
三乗は皆三界を出でずと云うこと無し人天は三途を出でんが為ならずと云う
こと無し並に名けて虚と為す」云云、文句の九に云く「虚より出でて而も実
に入らざる者有ること無し、故に知んぬ昔の虚は去実の為の故なり」と云云、
壽量品に云く「諸の善男子・如来諸の衆生小法を樂う徳薄垢重の者を見て
乃至以諸衆生乃至未會暫廢」云云、此の經の文を承けて、天台・妙樂は釈せ
しなり、此の經文は初成道の華嚴の別円より乃至法華經の迹門十四品を
・或は小法と云い・・或は徳薄垢重・・或は虚出等と説ける經文なり、若し
然らば華嚴經の華嚴宗・深密經の法相宗・般若經の三論宗・大日經の
眞言宗・觀經の淨土宗・楞伽經の禪宗等の諸經の諸宗は依經の如く
其の經を讀誦すとも三界を出でず三途を出でざる者なり何に況や・或は彼を

実と称し・或は勝る等云云、此の人人天に向つて唾を吐き地をんで忿を為す者か。

此の法門に於て如来滅後・月氏・一千五百余年・付法蔵の二十四人・竜樹・天親等知つて未だ此れを顕さず、漢土一千余年の余人も未だ之を知らず但天台・妙楽等粗之を演ぶ、然りと雖も未だ其の実義を顕さざるか、伝教大師以て是くの如し、今日蓮粗之を勸うるに法華經の此の文を重ねて涅槃經に演べて云く「若し三法に於て異の想を修する者は当に知るべし是の輩は清淨の三歸則ち依処無く所有の禁戒皆具足せず終に声聞・緣覺・菩薩の果を証することを得ず」等云云、此の經文は正しく法華經の寿量品を顯說せるなり寿量品は木に譬え爾前・迹門をば影に譬うる文なり、經文に又之有り、五時・八教・当分・跨節・大小の益は影の如し本門の法門は木の如し云云、又寿量品已前の在世の益は闇中の木の影なり過去に寿量品を聞きし者の事

なり等云云、又不信は謗法に非ずと申す事、又云く不信の者地獄に墮ちずとの事、五の巻に云く、「疑を生じて信ぜざらん者は則ち当に惡道に墮つべし」云云。

総じて御心へ候へ法華經と爾前と引き向えて勝劣・浅深を伴ずるに当分
跨節の事に三つの様有り日蓮が法門は第三の法門なり、世間に粗夢の如く一
二をば申せども第三をば申さず候、第三の法門は天台・妙樂・伝教も粗之を
示せども未だ事了えず所詮末法の今に譲り与えしなり、五五百歳は是なり、
但し此の法門の御論談は余は承らず候彼は広学多聞の者なりはばかりはばか
りみたみたと候いしかば此の方のまけなんども申しつけられなばいかんがし
候べき、但し彼の法師等が彼の釈を知り候はぬはさてをき候いぬ、六十巻に
なしなんと申すは天のせめなり謗法の科の法華經の御使に値うて顯れ候な
り、又此の沙汰の事を定めてゆへありて出来せり・かしまの大田次郎兵衛大

進房しんぼう又本院主ほんいんしゅもいかにとや申もうすぞよくよくきかせ給たまい候こへ、此これ等は經文きやうもんに子細しさいある事なり、法華經ほけきやうの行者ぎやうじやをば第六天だいろくてんの魔王まおうの必ず障ささうべきにて候、十境じじやうの中の魔境こ此これなり魔まの習ならいは善ぜんを障ささえて惡あくを造らしむるをば悦えつぶ事に候、強しいて惡あくを造らざる者をば力ちから及およばずして善ぜんを造らしむ又二乗にじやうの行をなす物をば・あながちに怨あたをなして善ぜんをすすむるなり、又菩薩ぼさつの行をなす物をば遮さえぎつて二乗にじやうの行をすすむ是後に純円じゆんえんの行を一向いっこうになす者をば兼別等けんべつとうに墮だすなり止觀しかんの八等を御らむあるべし。

又彼いが云いく止觀しかんの行者ぎやうじやは持戒等じかい云云、文句もんくの九には初二三ぎやうじやの行者じかいの持戒じかいをば此これをせいす經文きやうもん又分ぶん明みやうなり、止觀しかんに相違さういの事みやうらくは妙樂めうどくの問答もんどう之これ有り記きの九を見る可べし、初隨記しゆじに二有り利根りこんの行者ぎやうじやは持戒じかいを兼かねたり鈍根どんこんは持戒じかい之これを制止せいしす、又正像末しやうざうまつの不同ふどうもあり撰受しやうじゆしやくぶく折伏せつぷくの異いあり伝でん教大師きやうだいしの市の虎この事思しい合わすべし。

此れより後は下総しもふさにては御法門ほうもん候べからず了性思念をつめつる上は他人たにんと
御論候わばかへりてあさくなりなん、彼の了性と思念とは年来としこころ・日蓮にちれんをそし
るとうけ給たまわる、彼等程の蚊虻もんもうの者が日蓮程の師子王ししを聞かず見ずしてうは
のそらにそしる程のをこじんなり、天台法華宗てんだい ほうけしゅうの者ならば我なむは南無
妙法蓮華經みょうほうれんげきょうと唱となえて念仏ねんぶつなんと申もうす者をばあれはさる事なんと申もうすだにもき
くわいなるべきに其その義なき上・偶たまたまもう申もうす人をそしる・でう・あらふしぎふ
しぎ、大進房だいしんぼうが事さきざきかきつかわして候やうにつよづよとかき上申もうさせ
給たまい候へ、大進房だいしんぼうには十羅刹じゅうしやくせつのつかせ給たまいて引きかへしせさせ給たまうと・をば
へ候ぞ、又魔王まおうの使者しやななどがつきて候いけるが・はなれて候と・をばへ候
ぞ、悪鬼あくき入其身はよも・そら事にては候はじ、事事しじ重く候へども、此の使い
そぎ候へばよるかきて候ぞ、恐恐きょうきょう謹言。

十月一日

にちれんかおう
日蓮花押

一四一 始聞 仏乗義 ぶつじょう

建治四年二月 五十七歳御作

与 富木常忍 ときじょうにん

982p

青鳧七結下州より甲州に送らる其の御志悲母の第三年に相当る御孝養なり、
せいふ しかん ぜんだいみもん いかん ひも あいた じうよう

問う止観明静前代未聞の心如何、答う円頓止観なり、問う円頓止観の意何ん、
し かん ぜんだいみもん いかん えんどんしかん えんどんしかん いか

答う法華三昧の異名なり、問う法華三昧の心如何、答う夫れ末代の凡夫法華經
ほっけさんまい いみよう ほっけさんまい いかん そ まっだい ほんぶほけきよう

を修行する意に二有り一には就類種の開会二には相對種の開会なり、問う此
しぎよう じゅるいしゅ かいえ そうたい かいえ

の名は何より出るや、答う法華經第三藥草喻品に云く「種相体性の四字なり
ほけきよう やくそうゆほん いわ じゅるいしゅ そうたい

其の四字の中に第一の種の一字に二あり、一には就類種二には相對種なり」
だいいち じゅるいしゅ じゅるいしゅ そうたい

其の就類種とは釈に云く「凡そ心有る者は是れ正因の種なり随つて一句を聞
じゅるいしゅ およ こころあ こ しょういん した が いっく

くは是れ了因の種なり低頭挙手は是れ縁因の種なり」等云云、其の相對種と
こ りよういん ていずこしゅ こ えんいん 等云云 其の そうたい

は煩惱と業と苦との三道其の当体を押えて法身と般若と解脱と称する是なり、
ほんのう ぼんのう そ とうたい ほっしん はんにや げだつ しょう くれ

其の中に就類種の一法は宗は法華經に有りと雖も少分又爾前の經經にも通
じゅるいしゅ ほけきよう いえど にぜん きようぎよう

ず、妙樂云く、別経は唯就類の種有つて而も相對無し」と云云、此の釈の別教みょうらくくわと云うは本の別教べつきょうには非ず爾前の円あらにぜん・或は他師の円あるたしなり、又法華經の迹門ほけきょうしやくもんの中・供養舍利已下二十余行の法門くようしゃりいかよぎょうほうもんも大体就類種の開会だいたいじゅるいしめかいえなり、問う其の相對そそうたい種の心いかにん如何、答う止觀しかんに云く、云何なるか聞円もんえん法いかにんなる生死即法身しうじそくほっしん・煩惱即般若ぼんのうそくはんにや・結業即解脫そくげだつなりと聞くなり三の名有りと雖も而も三の体無し是れ一体こなりと雖も而も三の名を立つ是の三即ち一相すなわにして其れ實に異有あること無し、法身究竟ほっしんきうきようすれば般若も解脫も亦究竟な般若清淨はんにやしうじようなれば余亦清淨またしうじようなり解脫げだつ自在じざいなれば余亦自在またじざいなり一切の法を聞くこと亦是の如し皆仏法を具して減少またかくのごとみなぶつぼうする所無し是を聞円もんえんと名く、等云云、此の釈は即ち相對種の手法すなわなり其の意そ如何、答う生死しうじとは我等が苦果の依身われらくかなり所謂五陰いわゆるごおん・十二入じふににゅう・十八界じふはちがいなり煩惱ぼんのうとは見思けんじ・塵沙むみさ・無明むみょうの三惑さんかくなり結業ごぎやくとは五逆じゆうあく・十惡しじゆう・四重等しじゆうなり、法身ほっしんとは法身如來ほっしんにらい・般若はんにやとは報身如來ほうしんにらい・解脫げだつとは応身如來おうしんにらいなり我等衆生無始曠劫われらしじゆうむしこうこつよ

このかた
り已来此の三道を具足し今法華經に値つて三道即三徳となるなり。

難じて云く火より水出でず石より草生ぜず悪因・悪果を感じ善因善報を生

ずるは仏教の定れる習なり而るに我等其の根本を尋ね究むれば父母の精血・
しゃくばびやくにたいわこう

赤白 一一 和合して一身と為る悪の根本不浄の源なり、
な こんぼんふじよう みなもと
たいたいはい

これを洗うとも 清浄 なる可らず又此れ苦果の依身は其の根本を探り見れば貧
しょうじよう べか こ かくか そ こんぼん

・瞋・癡の三毒より出ずるなり、此の煩惱苦果の二道に依つて業を構う此の
さんどく い ほんのうくか にどう よ

業道即ち是れ結縛の法なり、譬えば籠に入れる鳥の如し如何ぞ此の三道を以
すなわ こ けつばく たと かこ なん

て三仏因と称するや、譬えば糞を集めて栴檀を造れども終に香しからざるが
ぶついでん しょう たと せんた つい

如し、答う汝が難大いに道理なり我此の事を弁えず但し付法蔵の第十三
ごと なんじ なん どうり わきま ただ ふほうぞう

天台大師の高祖・竜樹菩薩・妙法の妙の一字を釈して譬えば大薬師の能く
てんだいだいし こうそ りゆうじゆぼさつ みようほう しゃく たと やくし よ

毒を以て薬と為すが如し等云云、毒と云うは何物ぞ我等が煩惱・業・苦の三
な な ごと なにもの われら ほんのう

道なり薬とは何物ぞ法身・般若・解脱なり、能く毒を以て薬と為すとは何物
なにもの ほっしん はんによ げだつ よ なにもの

ぞ三道を變じて三徳と為すのみ、天台云く妙は不可思議と名づく等云云、又云く一心乃至不可思議境意此に在り等云云、即身成仏と申すは此れ是なり、近代の華嚴・真言等・此の義を盗み取りて我が物と為す大偷盗天下の盗人はなり。

問うて云く凡夫の位も此の秘法の心を知るべきや、答う私の答は詮無し竜樹菩薩の大論に云く九十三なり「今漏尽の阿羅漢還つて作仏すと云うは唯仏のみ能く知ろしめす、論議とは正しく其の事を論ず可し測り知ること能わす是の故に戲論すべからず若し仏を求め得る時乃ち能く了知す余人は信ずべく而も未だ知るべからず」等云云、此の釈は爾前の別教の十一品の断・無明円教の四十一品の断・無明の大菩薩普賢・文殊等も未だ法華經の意を知らず何に況や蔵通二教の三乗をや何に況や末代の凡夫をやと云う論文なり、之を以て案ずるに法華經の唯仏与仏・乃能究竟とは爾前の灰身滅智の二乗の煩惱

・業・苦の三道を押えて法身・般若・解脱と説くに二乗還つて作仏す菩薩・
凡夫も亦是くの如しと釈するなり、故に天台の云く二乗根敗す之を名けて毒
と為す今經に記を得る即ち是れ毒を変じて藥と為す、論に云く余經は秘密に
非ず法華は是れ秘密なり等云云、妙樂云く論に云くとは大論なりと云云、問
う是くの如し之を聞いて何の益有るや、答えて云く始めて法華經を聞くなり、
妙樂云く若し三道即是れ三徳と信ぜば尚能く二死の河を渡る況や三界をやと
云云、末代の凡夫此の法門を聞かば唯我一人のみ成仏するに非ず父母も又
即身成仏せん此れ第一の孝養なり病身為るの故に委細ならず又又申す可し。

建治四年太歳 戊寅 二月二十八日

にちれんかおう
日蓮花押

ときどの
富木殿

かえんじょうこう
可延定業書

一四二

夫れ病に二あり一には軽病二には重病・重病すら善医に値う急に対治

すれば命猶存す何に況や軽病をや、業にこあり一には定業二には不定業、定

業すら能く能く懺悔すれば必ず消滅す何に況や不定業をや、法華経第七に

云く「此の経は則為閻浮提の人の病の良薬なり」等云云、此の経文は法華経

の文なり、一代の聖教は皆如来の金言・無量劫より已来不妄語の言なり、

就中此の法華経は仏の正直捨方便と申して真実が中の真実なり、多宝・

証明を加え諸仏・舌相を添え給ういかでか・むなしかるべき、其の上最第一

の秘事はんべり此の経文は後・五百歳・二千五百余年の時女人の病あらんと

・とかれて侯文なり、阿闍世王は御年五十の二月十五日に大悪瘡・身に出来

せり、大医耆婆が力も及ばず三月七日必ず死して無間・大城に墮つべかりき、

五十余年が間の大楽一時に滅して一生の大苦・三七日にあつまれり、定業限

りありしかども仏・法華經をかさねて演説して涅槃經となづけて大王にあた
い給いしかば身の病・忽に平愈し心の重罪も一時に露と消えにき、仏滅後・
一千五百余年・陳臣と申す人ありき命知命にありと申して五十年に定まりて
侯いしが天台大師に伴いて十五年の命を宣べて六十五までをはしき、其の上
不輕菩薩は更増壽命ととかれて法華經を行じて定業をのべ給いき、彼等は皆
男子なり女人にはあらざれども法華經を行じて寿をのぶ、又陳臣は後・五百
歳にもあたらず冬の稻米・夏の菊花のごとし、当時の女人の法華經を行じて
定業を転ずることは秋の稻米冬の菊花誰か・をどろくべき。

されば日蓮悲母をいのりて侯しかば現身に病をいやすのみならず四箇年の
壽命をのべたり、今女人の御身として病を身にうけさせ給う・心みに法華經
の信心を立てて御らむあるべし、しかも善医あり中務三郎左衛門尉殿は法華經
の行者なり、命と申す物は一身第一の珍宝なり一日なりとも・これを延るな

らば千万両の金にもすぎたり、法華經の一代の聖教に超過していみじきと
申すは寿量品のゆへそかし、鬪浮第一の太子なれども短命なれば草よりもか
ろし、日輪のごとなる智者なれども天死にあれば生犬に劣る、早く心ざし
の財をかさねていそぎいそぎ御対治あるべし、此れよりも申すべけれども人
は申すによて吉事もあり又我が志のうすきかと・をもう者もあり人の心し
りがたき上先先に少々かかる事候、此の人は人の申せばすこそ心へずげに思
う人なり、なかなか申すはあしかりぬべし、但なかうどもなく・ひらなさけ
に又心もなくうちたのませ給え、去年の十月これに來りて候いしが御所勞の
事をよくよくなげき申せしなり、当大事のなければ・をどろかせ給わぬに
や、明年正月二月のころをひは必ずをこるべしと申せしかば・これにも・な
げきは入つて候。

富木殿も此の尼ごぜんをこそ杖柱とも恃たるになんと申して候いしなり

随分ずいぶんにわび候そうらいしぞ・きわめて・まけじたましの人にて我がかたの事をば
大事だいじと申もうす人なり、かへすがへす身の財をだに・をしませ給たまわば此の病治が
たかるべし、一日の命は三千界さんぜんかいの財にもすぎて候なり先ず御志ごしをみみへさ
せ給たまうべし、法華經ほけきょうの第七の巻に三千大千世界さんぜんせかいの財を供養するよりも手の一
指を焼きて仏・法華經ほけきょうに供養せよと・とかれて候そうらはこれなり、命は三千にも
すぎて候・而しかも齡よわいもいまだ・たけさせ給たまはず、而して法華經ほけきょうにあわせ給たまいぬ
一日もいきてをせば功德くどくつもるべし、あらをしの命や・をしの命や、御姓な
名並ならびに御年を我とかかせ給たまいて・わざと・つかわせ大日月天にちがつに申しあぐべ
し、いよどのもあながちになげき候そうらへば日月天にちがつに自我偈じがけをあて候そうらはんずるな
り、恐きょう恐うきょう。

日蓮花押にちれんかおう

尼ごへんじこぜん御返事

あまこぜん　じゅみょうちようおん
尼御前御寿命　長遠の由・天に申し候ぞ其の故御物語り候へ。
ふだんほけきよう
不断法華経来年三月の料の分銭三貫文米二斗送り給ひ畢んぬ。
おわ

十一月二十五日

にちれん
日蓮

在御判

富城殿御返事
ごへんじ

一四四　四菩薩造立抄
ぼさつ

弘安二年五月
こうあん

五十八歳御作

987p

白小袖一薄墨染衣一・同色の袈裟一帖・鷲目一貫文給ひ候、今に始めざる
けさ　がもく
御志言を以て宣べがたし何れの日を期してか対面を遂げ心中の朦朧を申し
のべ　いずれ　たいめん　と　しんちゅう　もうろう　もう
ひらかん
披や。

一御状に云く本門久成の教主釈尊を造り奉り脇士には久成地涌の四菩薩
いわ　ほんもんくじよう　きようしゆしやくそん　つく　たてまつきようじ　くじようじ　ゆ　ぼさつ
を造立し奉るべしと兼て聴聞仕り候いき、然れば聴聞の如くんば何の時か
たてまつ　かね　ちようもん　しか　ちようもん　ごと　いすれ

と云云、夫れ仏世を去らせ給いて二千余年に成りぬ、其の間・月氏・漢土・
にほんこく えんぶだい 日本国一閻浮提の内に仏法の流布する事・僧は稲麻のごとく法は竹葦の如し、
しか 然るにいまだ本門の教主 釈尊・並に本化の菩薩を造り奉りたる寺は一处も
無し三朝の間に未だ聞かず、日本国に数万の寺を建立せし人人も本門の
きようしゅきようじ 教主 脇士を造るべき事を知らず 上宮 太子 仏法最初の寺と号して四天王寺を
造立せしかども阿弥陀仏を本尊として脇士には観音等・四天王を造り副えた
り、伝 教大師・延暦寺を立て給うに中堂には東方の鸞王の相貌を造りて
ほんぞん 本尊として久成の教主・脇士をば建立し給はず、南京七大寺の中にも此の
事を未だ聞かず田舎の寺寺以て爾なり、かたがた不審なりし間・法華經の文
はいけん たてまつ を拝見し奉りしかば其の旨顕然なり、末法・鬪諍堅固の時にいたらずんば造
るべからざる旨分明なり、正像に出世せし論師・人師の造らざりしは仏の
いましめ 禁を重んずる故なり、若し正法・像法の中に久成の教主 釈尊並びに脇士

を造るならば夜中に日輪出で日中に月輪の出でたるが如くなるべし、末法に入つて始めの五百年に上行菩薩の出でさせ給いて造り給うべき故に正法・像法の四依の論師・人師は言にも出させ給はず、竜樹・天親こそ知らせ給いたりしかども口より外へ出させ給はず、天台智者大師も知らせ給いたりしかども迹化の菩薩の一分なれば一端は仰せ出させ給いたりしかども其の実義をば宣べ出させ給はず、但ねざめの枕に時鳥の一音を聞きしが如くにして夢のさめて止ぬるやうに弘め給い候ぬ、夫れより已外の人師はまして一言をも仰せ出し給う事なし、此等の論師・人師は靈山にして迹化の衆は末法に入らざらん正像二千年の論師・人師は本門久成の教主釈尊並に久成の脇土地涌上行等の四菩薩を影ほども申出すべからずと御禁ありし故ぞかし。

今末法に入れば尤も仏の金言の如くんば造るべき時なれば本仏本脇土造り奉るべき時なり、

當時は其の時に相当れば地涌の菩薩やがて出でさせ給はん

ずらん、先ず其れ程に四菩薩を建立し奉るべし尤も今は然るべき時なりと云
云、されば天台大師は後の五百歳遠く妙道に沾わんとしたひ、伝教大師は
正像稍過ぎ已て末法太だ近きに有り法華一乗の機今正に是れ其の時なりと
恋いさせ給う、日蓮は世間には日本第一の貧しき者なれども仏法を以て論ず
れば一閻浮提第一の富る者なり、是れ時の然らしむる故なりと思へば喜び身
にあまり感涙押へ難く教主釈尊の御恩報じ奉り難し、恐らくは付法蔵の人人
も日蓮には果報は劣らせ給いたり天台智者大師・伝教大師等も及び給うべか
らず最も四菩薩を建立すべき時なり云云、問うて云く四菩薩を造立すべき
証文之れ有りや、答えて云く涌出品に云く、「四の導師有り一をば上行と名
け二をば無辺行と名け三をば淨行と名け四をば安立行と名く」等云云、
問うて云く後・五百歳に限るといへる經文之れ有りや、答えて云く藥王品に
云く「我が滅度の後・後の五百歳の中に閻浮提に広宣流布して断絶せしむる

こと無けん」等云云。

一 御状に云く大田方の人人・一向に迹門に得道あるべからずと申され候由
・其の聞え候とは是以ての外の謬なり、御得意候へ本・迹二門の浅深・
勝劣・与奪・傍正は時と機とに依るべし、一代聖教を弘むべき時に三あり
機もつて爾なり、仏滅後・正法の始の五百年は一向・小乗後の五百年は
権大乘像法一千年は法華經の迹門等なり、末法の始には一向に本門なり一向
に本門の時なればとて迹門を捨つべきにあらず、法華經一部に於て前の十四
品を捨つべき經文之れ無し本・迹の所判は一代聖教を三重に配当する時・
爾前・迹門は正法・像法・或は末法は本門の弘まらせ給うべき時なり、今
の時は正には本門傍には迹門なり、迹門無得道と云つて迹門を捨てて一向
本門に心を入れさせ給う人人はいまだ日蓮が本意の法門を習はせ給はざるに
こそ以ての外の僻見なり、私ならざる法門を僻案せん人は偏に天魔波旬の

其の身に入り替りて人をして自身ともに無間・大城に墮つべきにて候つたなしつたなし、此の法門は年来貴辺に申し含めたる様に人人にも披露あるべき者なり総じて日蓮が弟子と云つて法華經を修行せん人人は日蓮が如くにし候へ、さだにも候はば釈迦・多宝・十方の分身・十羅刹も御守り候べし、其れさへ尚人人の御心中は量りがたし。

一日行房死去の事不便に候、是にて法華經の文読み進らせて南無妙法蓮華經と唱へ進らせ願くは日行を釈迦・多宝・十方の諸仏靈山へ迎へ取らせ給へと申し上げ候いぬ、身の所労いまだきらからしからず候間省略せしめ候、又又申す可く候、恐恐謹言。

弘安二年五月十七日

日蓮花押

一四五 富木殿女房尼御前御書

弘安二年十一月 五十八歳御作

990p

いよ房ぼうは学生になりて候ぞつねに法門ほうもんきかせ給たまへ。

はるかに見まいらせ候はねばをばつかなく候、たうじとてまたのしき事は
候はねどもむかしはことにわびしく候いし時よりやしなはれまいらせて候へ
ばことにをんをもくをもいまいらせ候、それについては・いのちはつるかめ
のごとくさいはいは月のまさりしをのみつがごとくこそ法華經ほけきょうにはいのり
まいらせ候へ、さてはえち後房ぼうしもつけ房ぼうと申もうす僧そうをいよどのにつけて候ぞ、
しばらくふびんにあたらせ給たまへとき殿たみには申もうさせ給たまへ。

十一月二十五日

日蓮花押にちれんかおう 富城殿女房にようぼう

あまこぜん
尼御前

一四六 諸經しよきょうと法華經ほけきょうと難易なんいの事

こつあん

弘安三年五月 五十九歳御作

991p

問うて云く法華經の第四法師品に云く難信難解と云云いかなる事ぞや、答えて云く此の經は仏説き給いて後二千余年にまかりなり候、月氏に一千二百余年漢土に二百余年を経て後に日本国に渡りて・すでに七百余年なり、仏滅後に此の法華經の此の句を読みたる人但三人なり、所謂月氏には竜樹菩薩の
大論に云く「譬えば大薬師の能く毒を以て薬と為すが如し」等云云、此れは
竜樹菩薩の難信難解の四字を読み給いしなり、漢土には天台智者大師と申せし人読んで云く「已今当説最も為れ難信難解」と云云、日本国には伝教大師
読んで云く「已説の四時の經今説の無量義經当説の涅槃經は易信易解なり
随他意の故に此の法華經は最も為れ難信難解なり随自意の故に」等云云、問
うて云く其の意如何、答て云く易信易解は随他意の故に難信難解は随自意の
故なり云云、弘法大師並びに日本国東寺の門人をもわく法華經は顯教の内の
難信難解にて密教に相對すれば易信易解なり云云、慈覚・智証並びに門家思

うよう法華經と大日經は俱に難信難解なり但し大日經と法華經と相對せば
ほけきよう だいにちきよう とも なんしんなんげ ただ だいにちきよう ほけきよう そうたい
法華經は難信難解大日經は最も為れ難信難解なり云云、此の二義は日本一同
ほけきよう なんしんなんげだいにちきよう もつともこれ なんしんなんげ にほん
なり、日蓮讀んで云く外道の經は易信易解・小乗經は難信難解 小乗經
いしんいげだいにちきよう なんしんなんげだいにちきよう いしんいげはんinyきよう なんしんなんげ
は易信易解大日經等は難信難解大日經等は易信易解般若經は難信難解なり
はんiny けこん けこん ねはん ねはん ほつけ しゃくもん ほんもん
・般若と・華嚴と・華嚴と涅槃と・涅槃と法華と・迹門と本門と・重重的
なんい
難易あり。

問うて云く此の義を知つて何の詮か有る答えて云く生死の長夜を照す大燈
いわ いたわ ちやう だいとう
・元品の無明を切る利剣は此の法門に過ぎざるか隨他意とは真言宗・華嚴宗
がんぽん むみよう りけん ほうもん す ずいたい しんこんしゅう けこんしゅう
等は隨他意の易信易解なり仏九界の衆生の意樂に隨つて説く所の經經を
ずいたい いしんいげ けんぶ おろか したが こと ぶっかい したが きようぎよう
隨他意という譬えば賢父が愚子に隨うが如し、仏・仏界に隨つて説く所の經
ずいじい たと せいふ おろか つか こと にちれん
を隨自意という、譬へば聖父が愚子を隨えたるが如きなり、日蓮此の義に付
だいにちきよう けこんぎよう ねはんぎよう かんが みなずいたい きようぎよう
て大日經・華嚴經・涅槃經等を勘え見候に皆隨他意の經經なり、問うて

いわ 云く其の随他意の証拠如何、答えて云く勝鬘經に云く「非法を聞くこと無き
 しゅじょう 衆生には人天の善根を以て之を成熟す声聞を求むる者には声聞乗を受け
 えんかく 縁覚を求むる者には、縁覚乗を受け大乘を求むる者には授くるに大乘を以
 てす」と云云、易信易解の心是なり、華嚴・大日・般若・涅槃等又是くの如
 し「爾の時に世尊・藥王菩薩に因せて八万の大士に告げたまわく藥王汝是の
 たいしゅう 大衆の中の無量の諸天・竜王・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦楼羅・緊那羅・
 まごら 摩羅伽・人と非人と及び比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の声聞を求むる者・
 ひやくしぶつ 辟支仏を求むる者・仏道を求むる者を見るや、是くの如き等類咸く仏前に
 おい 於て妙法華經の一偈・一句を聞いて一念も随喜する者には我皆記を与え授く
 まさ 當に阿・菩提を得べし」文、諸經の如くんば人は五戒・天は十善・梵は
 じひきしゃ 慈悲喜捨・魔王には一無遮・比丘の二百五十・比丘尼の五百戒・声聞の四諦
 えんかく 縁覚の十二因縁・菩薩の六度・譬へば水の器の方円に随い象の敵に随つて

力を出すいだすがごとし、法華經ほけきょうは爾しからず八部はちぶ・四衆ししゅう皆みな一同いどうに法華經ほけきょうを演説えんぜつす、譬たとへば定木の曲りを削り師子王ししの剛弱きらくを嫌きらわずして大力いたを出すいだすがごとし。

此めいきようの明鏡めいきようを以て一切經いっさいきようを見聞けんもんするに大日だいにちの三部じゅうど・浄土じょうどの三部等じゅうど隠れ無し、

而しかを・いかにやしけん弘法こうぼう・慈覺じかく・智証ちしょうの御義おんぎを本としける程に此の義

でおんもつに隱没にほんこくして日本国にほんこく四百余年たまたなり、珠たまをもつて石にかへ栴檀せんだを凡木せんだにうれり、

仏法ぶつぼうやうやく顛倒てんどうしければ世間せけんも又濁乱じよくらんせり、仏法ぶつぼうは体ぶつぼうのごとし世間せけんはか

のごとし体曲いちもんぶつれば影いななめなり、幸いなるは我が一門いちもん仏意ぶつに随したがつて自然じねんに薩般若さつぱんにや

海せけんに流入がくしやす、世間の学者がくしやの若こときは随他意ずいたいを信じて苦海くかいに沈いまんことなり、委細いさい

に旨むね又申もうす可きく候きう、恐恐きようきよう。

五月廿六日

日蓮花押にちれんかおう

一四七 富城入道殿御返事にちぎにうへんじ

弘安四年十月 六十歳御作こうあん

993p

与富木胤継 於身延

今月十四日の御札同じき十七日到来、又去ぬる後の七月十五日の御消息同
じて二十比到来せり、其の外度度の貴札を賜うと雖も老病為るの上又不食氣
に候間未だ返報を奉らず候条其の恐れ少からず候、何よりも去ぬる後の七月
御状の内に云く鎮西には大風吹き候て浦浦・島島に破損の船充滿の間乃至
京都には思円上人・又云く理豈然らんや等云云、此の事別して此の一門の
大事なり総じて日本国の凶事なり仍つて病を忍んで一端是れを申し候はん、
是偏に日蓮を失わんと為て無かるう事を造り出さん事兼て知る、其の故は
日本国の真言宗等の七宗・八宗の人人の本科今に始めざる事なり然りと
雖も且く一を挙げて万を知らしめ奉らん、去ぬる承久年中に隱岐の法皇義時
を失わしめんが為に調伏を山の座主・東寺・御室・七寺・園城に仰せ付け
られ、仍つて同じき三年の五月十五日鎌倉殿の御代官・伊賀太郎判官光末を
六波羅に於て失わしめ畢んぬ、然る間同じき十九日二十日鎌倉中に騒ぎて同

じき二十一日・山道・海道・北陸道の三道より十九万騎の兵者を指し登す、
同じき六月十三日其の夜の戌亥の時より青天俄に陰りて震動雷電して武士共
首の上に鳴り懸り鳴り懸りし上・車軸の如き雨は篠を立つるが如し、爰に十
九万騎の兵者等・遠き道は登りたり兵乱に米は尽きぬ馬は疲れたり在家の人
は皆隠れ失せぬ胄は雨に打たれて縣の如し、武士共・宇治勢多に打ち寄せて
見ければ常には三丁四丁の河なれども既に六丁・七丁・十丁に及ぶ、然る間
・一丈・二丈の大石は枯葉の如く浮び五丈・六丈の大木流れ塞がること間無
し、昔利綱・高綱等が渡せし時には似る可くも無し武士之を見て皆臆してこ
そ見えたりしが、然りと雖も今日を過ぎば皆・心を翻し堕ちぬ可し去る故に
馬筏を作りて之を渡す処・或は百騎・或は千騎・此くの如く皆我も我
もと度ると雖も・或は一丁・或は二丁三丁渡る様なりと雖も彼の岸に付く
者は一人も無し、然る間・緋綴・赤綴等の甲其の外弓・箭・兵・杖・白星の

かぶと

なほ

かななすき

もみじ

胄等の河中に流れ浮ぶ事は猶長月神無月の紅葉の吉野・立田の河に浮ぶが
如くなり、爰に叡山・東寺・七寺・園城寺等の高僧等之を聞くことを得て真言
の秘法・大法の験とこそ悦び給いける、内裏の紫宸殿には山の座主・東寺・
御室・五壇・十五壇の法を弥盛んに行われければ法皇の御叡感極り無く玉
の巖を地に付け大法師等の御足を御手にて摩給いしかば大臣・公卿等は庭の
上へ走り落ち五体を地に付け高僧等を敬い奉る。

又宇治勢田にむかへたる公卿・殿上人は胄を震い挙げて大音声を放つて

いわ よしとき しよじゆう えびす たしかうけたま

云く義時・所従の毛人等慥に承われ昔より今に至るまで王法に敵を作し奉る

者は何者が安穩なるや、
なにもん あんのん

狗犬が師子を吼えて其の腹破れざること無く修羅が

日月を射るに其の箭還つて其の眼に中らざること無し遠き例は且く之を置

く、
そ かい そ まなこ あた

近くは我が朝に代始まつて人王八十余代の間・大山の皇子・大石の小丸

を始と為て二十余人王法に敵を為し奉れども一人として素懷を遂げたる者な

もつ たてま な

そかい と

し皆みな頸くくを獄門ごくに懸かけられ骸かはねを山野さらに曝さらす関東かんとうの武士等ぶし・・或あるは源平ある・・或あるは
高家等先祖相伝そうでんの君を捨て奉たてまつり伊豆の国の民な為なる義時よしときが下知げちに随したがう故ゆえにかか
る災難さいなんは出来しゅつたいするなり、王法そむに背そむき奉たてまつり民げちの下知したに随したがう者ししは師子王やこが野狐かぶとに
乗せられて東西南北とうざいなんぼくに馳走するが如ごとし今生こんじょうの恥はじこ之れを何如さるとり、急ぎ急ぎ胃を
脱ゆづるぎ弓弦きうげんをはづして参参さんさんと招きける程に、何いかに有ありけん申酉しんうの時にも成りし
かば関東かんとうの武士等ぶし・河を馳はせ渡り勝ちかかりて責めし間京方の武者共一人も
無なくく山林さんりんに逃げ隠るるの間、四つの王をば四つの島へ放ちまいらせ又高僧こうそう・
御師おんし・御房達ごぼうは・或あるは住房ちじよくを追われ・或あるは恥辱ちじよくに値あい給たまいて今に六十年の間
いまだ・そのはぢをすすがずとこそ見え候に、今亦彼の僧侶そうりよの御弟子達御祈おんでし
承はられて候げに候あひだいつも事なれば秋風に纔わずかの水に敵船・賊船ぞくなん
どの破損仕りて候を大將軍生取しょうぐんたりなんと申し祈り成就じょうじゆの由よしを申し候げに
候なり、又蒙古もうこの大王だいおうの頸の参りて候かと問い給たまうべし、其の外はいかに申し

候とも御返事あるべからず御存知のためにあらあら申し候なり。

乃至此の一門の人人にも相触れ給ふべし又必ずしいぢの四郎が事は承り候

い畢んぬ、予既に六十に及び候へば天台大師の御恩報じ奉らんと仕り候あひ

だみぐるしげに候房をひきつくろい候ときに・さくれうにおろして候なり、

銭四貫をもちて一閻浮提第一の法華堂造りたりと靈山淨土に御参り候はん時

は申しあげさせ給うべし、恐恐。

十月二十二日

日蓮花押

一四八 治病 大小権実違目 富木入道殿御返事 日蓮 995p

さへもん殿の便宜の御かたびら給い了んぬ。

今度の人人のかたがたの御さいども佐衛門尉殿の御日記のごとく給い

了んぬと申させ給い候へ。

太田入道殿のかたがたのもの・ときどのの日記のごとく給い候了んぬ此
の法門のかたづらは佐衛門尉殿にかきて候、こわせ給いて御らむ有るべ
く候。

御消息に云く凡そ疫病 弥興 盛等と云云、夫れ人に二の病あり一には身

の病・所謂地大百一・水大百一・火大百一・風大百一・已上四百四病なり、

此の病は設い仏に有らざれども・之を治す所謂・治水・流水・耆婆・扁鵲等

が方薬此れを治するにゆいて愈えずという事なし、二には心の病所謂三毒

乃至八万四千の病なり、此の病は二天・三仙六師等も治し難し何に況や神農

・黄帝等の方薬及ぶべしや、又心の病重重に浅深勝劣分れたり、六道の凡夫

の三毒八万四千の心病は小仏・小乗・阿含經・俱舍・成実・律宗の論師

・人師此れを治するにゆいて愈えぬべし、但し此の小乗の者等・小乗を

本として・或は大乗を背き・或は心には背かざれども大乗の国に肩を並べ

なんどする其の国其の人に諸病起る、小乗等をもつて此れを治すれば諸病は増すとも治せらるる事なし、諸大乘經の行者をもつて此れを治すれば則ち平愈す、又華嚴經・深密經・般若經・大日經等の權大乘の人人・各各劣謂勝見を起して我が宗は・或は法華經と齊等・或は勝れたりなど申す人多く出来し・或は国王等此れを用いぬれば此れによつて三毒八万四千の病起る、返つて自の依經をもつて治すれどもいよいよ倍增す、設い法華經をもつて行うとも驗なし經は勝れたれども行者・僻見の者なる故なり。

法華經に又二經あり所謂迹門と本門となり本迹の相違は水火天地の違目なり、例せば爾前と法華經との違目よりも猶相違あり爾前と迹門とは相違ありといへども相似の辺も有りぬべし、所説に八教あり爾前の円と迹門の円は相似せり爾前の仏と迹門の仏は劣応・勝応・報身・法身異れども始成の辺は同じきぞかし、今本門と迹門とは教主已に久始のかわりめ百歳のをきな

と一歳の幼子のごとし、弟子又水火なり土の先後い**う**ばかりなし、而るを本迹を混合すれば水火を弁えざる者なり、而るを**仏**は分明に説き分け給いたれども仏の御入滅より今に二千余年が間三国並びに一閻浮提の内に分明に分けたる人なし、但漢土の天台日本の伝教此の二人計りこそ粗分け給いて候へども本門と迹門との大事に円戒いまだ分明ならず、詮ずる処は天台と伝教とは内には鑒み給うといへども一には時来らず二には機なし三には譲られ給はざる故なり、今末法に入りぬ地涌出現して弘通有るべき事なり、今末法に入つて本門のひろまらせ給うべきには小乗・権大・乗迹門の人人・設い科なくとも彼れ彼れの法にては驗有るべからず、譬へば春の薬は秋の薬とならず設いなれども春夏のごとくならず何に況や彼の小乗・権大乘・法華經の迹門の人人・或は大小・権実に迷える上・上代の国主彼れ彼れの經經に付きて寺を立て田畠を寄進せる故に彼の法を下せば申し延べがたき上・

依怙えこすでに失ゆえるかの故しんにに大瞋恚だうしんを起おこして・或あるは実経じつきようを謗ぼうじ・或あるは行者ぎようじやをあ
だむ国主こくしゆも又また一ひとには多人あたるにつき・或あるは上代じやうだいの国主こくしゆの宗重そうちゆうの法はふをあらため難がたき
故ある・或あるは自身じしんの愚癡ぐちの故ある・或あるは実教じつきようの行者ぎようじやを賤せんしむゆへ等の故ゆへ彼の訴人そご等
ことば
の語ごを・をさめて実教じつきようの行者ぎようじやをあだめば実教じつきようの守護神しゆごしんの梵釈ぼんしやく・日月にちがつ・
してん
四天等そ其の国を罰ゆえする故せんたいに先代未聞さんさいの三災ひちなんおこ・七難しちなん起るべし・所謂いわゆる去今年
去いぬる正嘉等しやうかの疫病等えきびようなり。

疑うたがひつて云いわく汝なんじが申もうすがごとくならば此この国法華經こくけふわきやうの行者ぎようじやをあだむ故ゆえに
善神ぜんじん此この国を治罰ちばつする等しよにんならば諸人しよにんの疫病えきびようなるべし何ぞ汝なんじが弟子等でし又やみ
死ぬるや、答こたへて云いわく汝なんじが不審最ふしんも其その謂有あるか但ただし一方いつぱうを知りて一方いつぱうを知
らざるか、善ぜんと惡あくとは無始むしよりの左右さうの法はふなり權教こんきやう並びに諸宗しよしゆうの心しんは善惡ぜんあく
は等覺とうかくに限かぎる若もし爾しかば等覺とうかくまでは互たがひに失有とがあるべし、法華宗ほつけしゆうの心しんは一念三千いちねんさんぜん・
性惡しやうあく性善しやうぜん・妙覺みやうかくの位みよに猶備なほそなわれり元品がんぽんの法性ほつしやうは梵天ぼんてん・帝釈等たいしやくと顯あらわれ

元品がんぽんの無明むみょうは第六天だいろくてんの魔王まおうと顕あらわれたり、善神ぜんしんは悪人あくにんをあだむ悪鬼あくきは善人ぜんにんをあだむ、末法まつぽうに入りぬれば自然じねんに悪鬼あくきは国中こくちゅうに充滿じゅうまんせり瓦石草木がしやくそうもくの並びなら滋しげきがごとし善鬼ぜんきは天下てんかに少し聖賢せいけんまれなる故ゆゑなり、此この疫病えきびようは念仏者ねんぶつ・真言師しんごんしぜんしゅうりつそう
・禅宗律僧等ぜんしゅうりつそうよりも日蓮にちれんが方にこそ多くやみ死ぬべきにて候か、いかにとし
て候やらん彼等かれらよりもすくなくやみすくなく死に候は不思議ふしぎに・をばへ候、
人のすくなき故か又御信心しんじんの強盛じやうせいなるか。

問いわうて云いく日本国にほんこくに此この疫病えきびよう先代せんだいに有ありや、答こたえて云いく日本国にほんこくは神武天皇てんのう
よりは十代にあたらせ給たまひし崇神天皇てんのうの御代みよに疫病えきびよう起おこりて日本国にほんこくやみ死ぬる
事半なかばにすぐ、王わ始めて天照太神等てんしやうだいじんの神を国こくに崇あがめ疫病えきびようやみぬ故ゆゑに崇
神天皇てんのうと申もうす、此これは仏法ぶつぽうのいまだわたらざりし時の事なり、人王第三十代
並びに一二の三代の国主並びに臣下等しんか疱瘡ほうそうと疫病えきびように御崩去等おのときなりき、其の時
は神にいのれども叶かなわざりき、去いぬる人王三十代・欽明天皇きんめいてんのうの御宇ぎように百済国くだら

より經・論・僧等をわたすのみならず金銅の教主釈尊を渡し奉る、蘇我の宿禰等崇むべしと申す物部の大連等の諸臣並びに万民等是一同に此の仏は崇むべからず若し崇むるならば必ず我が国の神・暎りをなして国やぶれなんと申す、王は両方弁まえがたくをはせしに三災・七難先代に超えて起り万民皆疫死す、大連等便りを得て奏問せしかば僧尼等をはじに及ぼすのみならず金銅の釈迦仏をすみを・をこして焼き奉る寺又同じ、爾の時に大連やみ死ぬ王も隠れさせ給い仏をあがめし蘇我の宿禰もやみぬ、大連が子・守屋の大臣云く此の仏をあがむる故に三代の国主すでに・やみかくれさせ給う我が父もやみ死ぬ、まさに知るべし仏をあがむる聖徳太子・馬子等はをやのかたき公の御かたきなりと申せしかば穴部の王子・宅部の王子等・並びに諸臣已下数千人・一同によりきして仏と堂等をやきはらうのみならず、合戦すでに起りぬ結句は守屋討たれ了んぬ、仏法渡りて三十五年が間・年年に三災・七難

えきびよう

疫病起りしが守屋馬子に討たるのみならず神もすでに仏にまけしかば災難

たちまち

忽に止み了んぬ、其の後の代代の三災・七難等は大体は仏法の内の乱れより

おこ

起るなり、而れども・或は一・人・二人・或は一国・二国・或は一類・二類

ある いっしょ

・或は一处・二処の事なれば神のたたりも有り謗法の故もあり民のなげきよ

りも起る。

しか

而るに此の三十余年の三災・七難等は一向に他事を雑えず日本・一同に

にちれん

日蓮をあだみて国・郡・郷・村・人ごとに上一人より下万民にいた

るまで前代未聞の大瞋恚を起せり、

しんに

けんじみだん

ほんぶ

がんほん

むみよう

こ

見思未断の凡夫の元品の無明を起す事此れ

始めなり、神と仏と法華經にいのり奉らばいよいよ増長すべし、

そうちよう

ただ

ほけきよう

但し法華經

ほんもん

ほけきよう

ぎようじや

たてまつけつく

しょうぶ

の本門をば法華經の行者につけて除き奉る結句は勝負を決せざらん外は此の

さいなん

なん

しかん

かんぼう

てんだいだいしと

たまひ

災難止み難かるべし、

さいなん

なん

しかん

かんぼう

てんだいだいしと

たまひ

止観の十境・十乗の觀法は天台大師説き給いて後・行

ずる人無し、妙樂・

みようらく

でんぎよう

おんとき

てきじん

傳教の御時少し行ずといへども敵人ゆわきゆへにさて

すぎぬ、止観しかんに三障四魔さんしょうしまと申もうすは権経ごんきょう

を行なずる行人ぎやうじんの障さわりにはあらず今日蓮けふにちれんが時具つぐさに起おこれり、又天台てんだい・伝教等でんぎようの

時の三障四魔さんしょうしまよりもいまひとしをまさりたり。一念三千いちねんさんぜんの観法かんぽうに二つあり一

には理・二には事なり天台・伝教等の御時おんときには理なり今は事なり観念かんにんすでに

勝まさる故ゆえに大難だいにん又色まさる、彼は迹門しやくもんの一念三千いちねんさんぜん・此これは本門ほんもんの一念三千いちねんさんぜんなり

天地てんちはるかに殊ことなりことなりと御臨終りんじゆうの御時おんときは御心あへ有あるべく候、恐きよう恐きよう

謹言きんげん。

六月二十六日

にちれんかおう
日蓮花押

一四九 金吾殿御返事ごへんじ

文永七年十一月 四十九歳御作 与大田金吾 999p
ぶんえい

止観しかんの五正月一日よりよみ候げんせあんのんいて現世安穩ごしょうぜんしよ・後生善処きしやうと祈請きしやう仕り候、便宜びんぎ

に給たまわり候本末ほんまつは失うせて候いしかどもこれにすりさせて候多く本入るべき

に申し候。

大師講に鵝目五連給候い了んぬ、此の大師講・三四年に始めて候が今年は第一にて候いつるに候。

抑此の法門の事・勘文の有無に依つて弘まるべきか弘まらざるか・去年

方に申して候いしかども・いなせの返事候はず候、今年十一月の比方方へ

申して候へば少少返事あるかたも候、をほかた人の心もやわらぎて・さもや

と・をぼしたりげに候、又上のけさんにも入りて候やらむ、これほどの僻事

申して候へば流・死の二罪の内は一定と存ぜしがいままでなにと申す事も候

はぬは不思議と・をぼへ候、いたれる道理にて候やらむ、又自界叛逆難の経文

も値べきにて候やらむ、山門なんども・いにしへにも百千万億倍すぎて動揺

とうけ給わり候、それならず子細ども候やらん震旦・高麗すでに禅門・念仏

になりて守護の善神の去るかの間彼の蒙古に聳い候いぬ、我が朝も又此の

邪法弘まりて天台法華宗を忽諸のゆへに山門安穩ならず師檀違叛の国と成り
候いぬれば十が八・九はいかんがと・みへ候、人身すでにうけぬ邪師又まぬ
がれぬ、法華經のゆへに流罪に及びぬ、今死罪に行われぬこそ本意ならず候
へ、あわれ・さる事の出来し候へかしと・こそはげみ候いて方に強言をか
きて挙げをき候なり、すでに年五十に及びぬ余命いくばくならず、いたづら
に曠野にすてん身を同じくは一乘法華のかたになげて雪山童子薬王菩薩の跡
をおひ仙予・有徳の名を後代に留めて法華・涅槃經に説き入れられまいらせ
んと願うところなり、南無妙法蓮華經。

十一月二十八日 日蓮花押

御返事

一五〇 転重輕受法門 文永八年十月

五十歳御作 与大田左衛門曾谷入道金原法橋 1000p

しゅりはんどく　もう
修利槃特と申すは兄弟二人なり、一人もありしかばすりはんどくと申すな

り、各各三人は又かくのごとし一人も来らせ給へば三人と存じ候なり。

ねはんぎよう

涅槃經に転重輕受と申す法門あり、先業の重き今生につぎずして未来に

じごく

地獄の苦を受くべきが今生にかかる重苦に値い候へば地獄の苦みぱつときへ

にんてん

て死に候へば人天・三乗・一乗の益をうる事の候、不輕菩薩の惡口罵詈

じようもくがりやく

られ杖木瓦礫をかほるもゆへなきにはあらず過去の誹謗正法のゆへかと・

つみひつち

みへて其罪畢已と説れて候は不輕菩薩の難に値うゆへに過去の罪の滅するか

とみへはんべりは一、又付法蔵の二十五人は仏をのぞきたてまつりては皆仏の

ふほうぞう

かねて記しをき給える権者なり、其の中に第十四の提婆菩薩は外道にころさ

しめ

れ第二十五師子尊者は檀弥栗王に頸を刎られ其の外仏陀密多・竜樹菩薩な

ししそんじゃ

んども多くの難にあへり、又難なくして王法に御帰依いみじくて法をひろめ

なん

たる人も候、これは世に惡国善国有り法に摂受折伏あるゆへかとみへはん

しやうじゆしゃくぶく

べる、正像猶かくのごとし中国又しかなり、これは辺土なり末法の始なり、
かかる事あるべしとは先にをもひさだめぬ期をこそまち候いつれ是二、この上
の法門はいにしえ申しをき候いきめづらしからず円教の六即の位に觀行即
と申すは所行如所言・所言如所行と云云、理即名字の人は円人なれども言
のみありて真なる事かたし、例せば外典の三墳・五典には読む人かずをしら
ず、かれがごとくに世を・をさめふれまう事千万が一つもかたしされば世の
をさまる事も又かたし、法華經は紙付に音をあげてよめども彼の經文のごと
くふれまう事かたく候か、譬喩品に云く「經を讀誦し書持すること有らん者
を見て輕賤憎嫉して結恨を懷かん」法師品に云く「如来現在すら猶怨嫉多し
況や滅度の後をや」勸持品に云く「刀杖を加え乃至数数擯出せられん」
安樂行品に云く「一切世間怨多くして信じ難し」と、此等は經文には候へ
ども何世にかかるべしともしられず、過去の不輕菩薩・覺德比丘なんどこそ

身にあたりてよみまいらせて候いけるとみへはんべれ、げんざい現在には正像二千年

はさてをきぬ、まっほう末法に入つては此の日本国には當時は日蓮一人みへ候か、昔

あくおう

おんとき

の悪王の御時多くの聖僧の難に値い候いけるには又所従・眷属等・弟子檀那

せいそう

なん

あ

しよじゅう

けんぞく

でし

だんな

等いくぞばくか・なげき候いけんと今をもちてをしはかり候、今日蓮・法華經

いまにちれん

ほけきよう

一部よみて候一句一偈に猶受記をかほれり何に況や一部をやと、いよいよた

いっくいちげ

なお

いか

のもし、但おほけなく国土までもこそをもひて候へども我と用いられぬ世な

こくど

もち

れば力及ばず、しげきゆへにとどめ候い了んぬ。

およ

おわ

ぶんえい

かのとひつじ

文永八年辛未十月五日

にちれんかおう

日蓮花押

さえもののじょう

大田左衛門尉殿

すゑのうら

蘇谷入道殿

しほ

金原法橋御房

ごしよ

ぶんえい

一五一 大田殿許御書 文永十二年正月 五十四歳御作

1002p

新春の御慶賀自他幸甚幸甚。

しもそもぞくたい
しもそもぞくたい

抑俗諦・真諦の中には勝負を以て詮と為し世間出世とも甲乙を以て先と

為すか、而るに諸経・諸宗の勝劣は三国の聖人共に之を存し両朝の群賢

同じく之を知るか、法華經と大日經と天台宗と真言宗との勝劣は月支

日本未だ之を弁ぜず西天東土にも明らめざる物か、所詮天台・伝教の如き

聖人・公場に於て是非を決せず明帝桓武の如き国主之を聞かざる故か、

いわゆるぜんむいさんぞう
所謂善無畏三蔵等は法華經と大日經とは理同事勝等と慈覚・智証等も此の義

を存するか、弘法大師は法華經を華嚴經より下す等此等の二義共に經文に

非ず同じく自義を存するか將た又慈覚・智証等表を作つて之を奏す申すに

随つて勅宣有り、聞くが如くんば真言・止観両教の宗をば同じく醍醐と号し

俱に深秘と称す乃至譬えば猶人の両目・鳥の雙翼の如き者なり等云云、又重

誠の勅宣有り、聞くが如くんば山上の僧等専ら先師の義に違して偏執の心

を成ず殆んど以つて余風を扇揚し旧業を興隆することを顧みず等云云、余生
れて末の初に居し学諸賢の終りを慕く慈覚・智証の正義の上に勅宣方方之れ
有り疑い有るべからず一言をも出さず然りと雖も円仁・円珍の両
大師・先師・伝教大師の正義を劫略して勅宣を申し下すの疑い之れ有る
上・仏誠遁れ難し、随つて又亡国の因縁・謗法の源初之れに始まるか、故に
世の謗を憚らず用不用を知らず身命を捨てて之を申すなり。
疑つて云く善無畏・金剛智・不空の三三蔵・弘法・慈覚・智証の三大師
・二經に相對して勝劣を判ずるの時・或は理同事勝・或は華嚴經より下る等
云云、随つて又聖賢の鳳文之れ有り、諸徳之を用いて年久し此の外に汝一義
を存して諸人を迷惑し剩さえ天下の耳目を驚かす豈増上慢の者に非ずや
如何、答えて曰く汝等が不審尤最もなり如意論師の世親菩薩を炳誠せる言は
是なり、彼の状に云く、党援の衆と大義を競うこと無く群迷の中に正論を弁ず

ること無かれと言い畢つて死す」云云、御不審之れに当るか、然りと雖も仏

・世尊は法華經を演説するに一經の内に二度の流通之れ有り重ねて一經を

説いて法華經を流通す、涅槃經に云く「若し善比丘あつて法を壞る者を見て

置いて呵責し駈遣し挙処せずんば当に知るべし是の人は佛法の中の怨なり」

等云云、善無畏・金剛智の両三藏・慈覺・智証の二大師・大日の權經を以つ

て法華の実經を破壊せり。

而るに日蓮世を恐て之を言わずんば仏敵と為らんか、随つて章安大師末代

の學者を諫曉して云く「佛法を懷亂するは佛法の中の怨なり慈無くして詐わ

り親しむは是れ彼の人の怨なり能く糾治する者は即ち是れ彼が親なり」等云

云、余は此の釈を見て肝に染むるが故に身命を捨てて之を糾明するなり、

提婆菩薩は付法藏の第十四・師子尊者は二十五に当る・或は命を失い・或は

頭を刎らる等是なり、疑つて云く經經の自讃は諸經常の習いなり、

いわゆるこんこうみょうきよう
 所謂 金光明経 に云く、諸経の王に密厳経の一切経中の勝に蘇悉地経に云く
 「三部の中に於て此の経を王と為す」法華経に云く「是れ諸経の王」等云云、
 したが 随つて四依の菩薩・両国の三蔵も是くの如し如何、答えて曰く 大国・小国
 だいおう
 ・大王・小王・大家・小家・尊主・高貴・各各分齊有り然りと雖も 国国の
 ばんみん みなだいおう
 万民・皆大王と号し同じく天子と称す詮を以つて之を論ぜば梵王を大王と
 な ほけきよう
 為し法華経を以て天子と称するなり、求めて云く其の証如何、答えて曰く
 こんこうみょうきよう
 金光明経 の是 諸経之王の文は梵釈の諸経に相對し密厳経の一切経中勝
 つぎのかみ じゅうち
 の文は次上に十地経・華嚴経・勝鬘経等を挙げて彼彼の経経に相對して
 いっさいきよう
 一切経の中に勝ると云云、蘇悉地経の文は現文之れを見るに三部の中に於て
 な
 王と為す等云云、蘇悉地経は大日経・金剛頂経に相對して王と云云、而る
 ぜんむい ある
 に善無畏等・或は理同事勝・或は華嚴経より下ると等云云、此れ等の僻文は
 ほたるび にちがつ
 螢火を日月に同じ大海を江河に入るるか。

うたがい 疑つて云く 経経の 勝劣之れを論じて何か為ん、答えて曰く法華經の第

七に云く「能く是の經典を受持する者有れば亦復是くの如し一切衆生の中

に於て亦為第一なり」と等云云、此の經の藥王品に十喻を挙げて已今当の一切經

に超過すと云云、第八の譬兼ねて上の文に有り所詮仏の意の如くならば經の

勝劣を詮ずるのみに非ず法華經の行者は一切の諸人に勝れたるの由之れを

説く、大日經等の行者は諸山・衆星・江河・諸民なり、法華經の行者は

須弥山・日月・大海等なり、而るに今の世は法華經を輕蔑すること土の如し

民の如し真言の僻人等を尊崇して国師と為ること金の如し王の如し之に依つ

て増上慢の者・国中に充滿す青天瞋を為し黄地天を致す涓聚りて塹

を破るが如く民の愁い積りて国を亡す等是なり、問うて曰く内外の諸釈の中

に是くの如きの例之れ有りや、答え

て曰く史臣吳兢が太宗に上つる表に云く「竊かに惟れば太宗・文武皇帝の政

化・曠古より之れ求むるに未だ是くの如くの盛なる者有らず唐堯・虞舜・
夏禹・殷湯・周の文武・漢の文景と雖も皆未だ逮ばざる処なり「云云、今・
此の表を見れば太宗を慢ぜる王と云う可きか政道の至妙先聖に超えて讃ずる
所なり、章安大師・天台を讃めて云く、「天竺の大論尚其の類に非ず真丹の
人師何ぞ劣く語るに及ばん此れ誇耀に非ず法相の然らしむるのみ」等云云、
從義法師重ねて讃めて云く、「竜樹・天親未だ天台には若かず」伝教大師自讃
して云く、「天台法華宗の諸宗に勝ることは所依の經に拠るが故に自讃毀他
ならず庶くば有智の君子・經を尋ねて宗を定めよ」云云、又云く「能く法華
を持つ者は亦衆生の中の第一なり已に仏説に拠る豈自讃ならんや」云云、今
愚見を以つて之を勘うるに善無畏・弘法・慈覚・智証等は皆仏意に違うのみ
に非ず・或は法の盗人・或は伝教大師に逆える僻人なり、故に・或は閻魔王
の責を蒙り・或は墓墳無く・或は事を入定に寄せ・或は度度・大火・大兵

に値^あえり権^{ごん}者は辱^{はじ}を死骸^{はじ}に与^あえざる処^{ところ}の本文^いに違^いするか、疑^{うた}つて云^{いわ}く六宗^{ろくしゅう}の如^{ごと}く真言^{しんこん}の一宗^{いっしゅう}も天台^{てんだい}に落^おたる状^{じょう}之れ有^ありや、答^{こた}う記^きの十^{じゅう}の末^{まつ}に之^{これ}を載^のせたり、随^{したが}つて伝^{でん}教^{ぎょう}大師^{だいし}依憑^{いひよう}集^{しゅう}を造^{つく}つて之^{これ}を集^{まな}む眼^{まなこ}有^あらん者は開^{ひら}いて之^{これ}を見よ、冀^{ねが}哉^{わし}末代^{まつだい}の学者^{がくしや}妙樂^{みょうらく}・伝^{でん}教^{ぎょう}の聖言^{しやうごん}に随^{したが}つて善無畏^{ぜんむい}・慈覺^{じかく}の凡言^{ぼんごん}を用^{もち}ゆること勿^{なか}れ、予^もが門家^{もんか}等^ら深^{ふか}く此^この由^{よし}を存^{ぞん}ぜよ、今^{こん}生^{じやう}に人^{ひと}を恐^{おそ}れて後生^{ごしやう}に惡果^{あくぐわ}を招^{まね}くこと勿^{なか}れ、恐^{おそ}恐^{おそ}謹言^{きんごん}。

正月廿四日

にちれんかおう
日蓮花押

大田金吾入道殿

一五二 太田殿女房御返事

建治元年 五十四歳御作於身延

八月分^{やつきぶん}の八木^{やつき}一石^{いっしやく}給^{たま}候^{こう}い^い了^わんぬ、即^{そく}身^{しん}成^{じやう}仏^{ぶつ}と申^{もう}す法門^{ほうもん}は諸大乗^{しよだいじやうきやうなら}經^{きやう}並^{へい}びに大日^{だい}經^{きやう}等^らの經文^{きやうもん}に分^{ぶん}明^{みん}に候^{こう}ぞ、爾^{しか}ればとて彼^かの經經^{きやうきやう}の人人^{ひとびと}の即^{そく}身^{しん}成^{じやう}仏^{ぶつ}と申^{もう}すは二^{ふた}の増上^{ぞうじやう}慢^{まん}に墮^おちて必^{かなら}ず無間地獄^{むげんじごく}へ入^いり候^{こう}なり、記^きの九^くに云^いく然^{しか}し

て二の上慢じょうまんじんせん深淺無きにあらず如おもと謂すうは乃すなわち大無慙むざんの人と成る「等云云、諸しょだいじょうきよう ぼんのうそくぼだい しようじそくねはん そくしんじようぶつ ほうもん

大乘經の煩惱即菩提・生死即涅槃の即身成仏の法門はいみじくをそたかき

やうなれども此これはあえて即身成仏そくしんじようぶつの法門ほうもんにはあらず、其その心は二乗にじようと申もうす

者は鹿苑ろくおんにして見思けんじを断きじて・いまだ塵沙じんじや・無明むみようをば断だんぜざる者が我すでは已すでに

煩惱ぼんのうを尽きしたり無余むよに入りて灰身滅智けしんめつちの者となれり、灰身そくしんなれば即身そくしんにあらず滅智めつちなれば成仏じようぶつの義ぎなし、されば凡夫ぼんぶは煩惱ぼんのう業くもあり苦果くかの依身しようじそくねはんも失うしなう事こと

なければ煩惱ぼんのう業くを種しゆとして報身ほうしん・応身おうじんともなりなん、苦果くかあれば生死しようじそくねはん即涅槃じくねはん

とて法身ほつしん如来にやうらいともなりなんと二乗にじようをこそ彈呵だんかせさせ給たまいしか、さればとて煩惱ぼんのう

・業さんじん・苦が三身の種しゆとはなり候きこはず、今法華經ほけきようにして有余よよ・無余むよの二乗にじようが無な

き煩惱ぼんのう・業さんじん・苦くをとり出して即身成仏そくしんじようぶつと説とき給たまう時にじよう二乗にじようの即身成仏そくしんじようぶつするの

みならず凡夫ぼんぶも即身成仏そくしんじようぶつするなり此この法門ほうもんをだにもくはしく案あんじほどかせ

たま けこん しんこん ひとびと そくしんじようぶつ もう えきよう

給たまわば華嚴けこん・真言等しんこんの人人ひとびとの即身成仏そくしんじようぶつと申もうし候きこは依經えきように文ぶんは候きこへども其その義ぎ

はあえてなき事なり僻事ひがことの起り此これなり。

弘法こうぼう・慈覚じかく・智証等ちしようは此この法門ほうもんに迷惑めいわくせる人なりとみ候いか、何いかに況そや其この已下いか

の古徳せんとく・先徳等せんとくは言ことに足らず、但天台てんだいの第四十六の座主ざす東陽の忠尋ちゆうじんと申もうす

人ひとこそ此この法門ほうもんはすこしあやぶまれて候事こうじは候へ、然しかれども天台てんだいの座主ざす慈覚じかく

の末すえをうくる人なれば・いつわりをろかにて・さてはてぬるか、其その上・

にほんこく

日本国にほんこくに生なまを受くる人はいかでか心にはをもうとも言ことに出でし候べき、しかれ

ども釈迦しゃか・多宝たぼう・十方じゅうぼうの諸仏しよぶつ・地涌じゆ・竜樹菩薩りゅうじゆぼさつ・天台てんだい・妙樂みょうらく・伝教大師でんぎようだいし

そくしんじようぶつ

は即身成仏そくしんじようぶつは法華經ほけきように限ると・をばしめされて候ぞ、我が弟子等でしは此この事を

・をもひ出にせさせ給たまえ。

みようほうれんげきよう

妙法蓮華經みようほうれんげきようの五字ごじの中に諸論師しよろんし・諸人師しよにんしの釈しやくまちまちに候へども皆みな諸經しよきよう

のい見みを出いでず、但りゅうじゆぼさつ竜樹菩薩だいろんの大論だいろんと申もうす論ろんに「譬たとえば大藥師やくしの能よく毒どくを以もつて

藥なと為なすが如ごとし」と申もうす釈しやくこそ此この一字いちを心へさせ給たまいたりけるかと見へて

候へ、毒と申すは苦集の二諦・生死の因果は毒の中の毒にて候ぞかし、此の毒を生起即涅槃・煩惱即菩提となし候を妙の極とは申しけるなり、良薬と申すは毒の變じて藥となりけるを良薬とは申し候いけり、此の竜樹菩薩は大論と申す文の一百の卷に華嚴・般若等は妙にあらず法華經こそ妙にて候へと申す釈なり、此の大論は竜樹菩薩の論羅什三蔵と申す人の漢土へわたして候なり、天台大師は此の法門を御らむあつて南北をばせめさせ給いて候ぞ、しかかんどうなかごろにほんごうにんいごひとびとあやまりしゅったい而るを漢土唐の中・日本弘仁已後の人人の出来し候いける事は唐の第九代・宗皇帝の御宇・不空三蔵と申す人の天竺より渡して候論あり菩提心論と申す、此の論は竜樹の論となづけて候、此の論に云く「唯真言法の中にのみ即身成仏する故に是れ三摩地の法を説く諸教の中に於て闕て書せず」と申す文あり、此の釈にばかされて弘法・慈覚・智証等の法門はさんざんの事にては候なり、但し大論は竜樹の論たる事は自他あらそう事なし、

菩提心論は竜樹の論・不空の論と申すあらそい有り、此れはいかにも候へさ
てをき候ぬ、但不審なる事は竜樹の心ならば即身成仏は法華經に限るべし文
と申し道理きわまれり、菩提心論が竜樹の論とは申すとも大論にそむいて
真言の即身成仏を立つる上唯の一字は強と見へて候、何の經文に依りて唯
の一字をば置いて法華經をば破し候いけるぞ証文尋ぬべし、竜樹菩薩の
十住毘婆娑論に云く「經に依らざる法門をば黒論」と云云自語相違あるべか
らず、大論の一百に云く「而も法華等の阿羅漢の授決作仏・乃至譬えば大藥師
の能く毒を以て藥と為すが如し」等云云、此の釈こそ即身成仏の道理はかか
れて候へ、但菩提心論と大論とは同じ竜樹大聖の論にて候が水火の異をばい
かんせんと見候に此れは竜樹の異説にはあらず訳者の所為なり、羅什は舌や
けず不空は舌やけぬ、妄語は・やけ実語は・やけぬ事顯然なり、月支より漢土
へ經論わたす人・一百七十六人なり其の中に羅什一人計りこそ教主釈尊の

きようもん

經文に私の言入れぬ人にては候へ、一百七十五人中・羅什より先後・一百

六十四人は羅什の智をもつて知り候べし、羅什来らせ給いて前後・一百六十

四人がも頭れ新訳の十一人がも頭れ又こざかしくなりて候も羅什の

故なり、此れ私の義にはあらず感通伝に云く「絶後光前」と云云、前を光ら

すと申すは後漢より後秦までの訳者、後を絶すと申すは羅什已後・善無畏・

金剛智・不空等も羅什の智をうけてすこしこざかしく候なり、感通伝に云く

「已下の諸人並びに皆俟つ事」されば此の菩提心論の唯の文字は設い竜樹の

論なりとも不空の私の言なり、何に況や次下に「諸教の中に於て闕いて書せ

ず」とかかれて候・存外のあやまりなり。

即身成仏の手法たる法華經をば指をいて・あとかたもなき真言に

即身成仏を立て剩え唯の一字を・をかるる条・天下第一の僻見なり此れ

偏に修羅根性の法門なり、天台智者大師の文句の九に寿量品の心を釈して

云く「い仏・三世に於て等しく三身有り諸教の中に於て之を秘して伝えず」と
かかれて候、此れこそ即身成仏の明文にては候へ、不空三蔵此の釈を消さん
が為ために事を竜樹に依せて「唯真言の法の中にのみ即身成仏するが故に是の
三摩地の法を説く諸教の中に於て闕おひいて書せず」とかかれて候なり、されば
此の論の次下に即身成仏をかかれて候が・あへて即身成仏にはあらず生身
得忍に似て候、此の人は即身成仏は・めづらしき法門とはきかれて候へども
即身成仏の義はあへてうかがわぬ人人なり、いかにも候へば二乗成仏・
久遠実成を説き給う経にあるべき事なり、天台大師の「於諸教中秘之不伝」
の釈は千且千且恐恐。

外典三千余卷は政当の相違せるに依つて代は濁ると明す、内典五千・七千
余卷は仏法の僻見びやくけんに依つて代濁るべしとあかされて候、今の代は外典にも
相違し内典にも違背せるかのゆへにこの大科一國に起りて已に亡國とならむ

とし候か、不便不便。

七月二日

にちれんかおう
日蓮花押

にようほうこへんじ
太田殿女房御返事

にゆうどうごへんじ
一五三 太田入道殿御返事

がんねん
建治元年十一月 五十四歳御作

1009p

きさつこれ

はいけん

なげ

よろこ

ゆいまきつきよう

貴札之を開いて拝見す、御痛みの事一たびは歎き二たびは悦びぬ、維摩詰經

いわ

そ

ちようじやゆいまきつみずか

い

ゆか

や

そ

に云く「爾の時に長者維摩詰自ら念ずらく寝ねて牀に疾む云云、爾の時に仏

もんじゆしり

なんじゆいまきつ

ぎようけい

やまい

だいはんきよう

・文殊師利に告げたまわく、汝維摩詰に行詣して疾を問え云云、大涅槃經

いわ

そ

によういなし

やまいあ

げん

うきよう

ふ

に云く「爾の時に如来乃至身に疾有るを現じ、右脇にして臥したもう彼の病

こ

ほけきよう

いわ

少病少悩云云、止觀の第八に云く「若し毘耶

人の如くす云云、法華經に云く「少病少悩云云、止觀の第八に云く「若し毘耶

えんが

やまい

つ

ないしにやらい

よ

に偃臥し疾に託いて教を興す、乃至如来滅に寄せて常を談じ病に因つて力を

おこ

いんねん

おこ

いんねん

いんねん

いんねん

いんねん

いんねん

いんねん

いんねん

説く云云、又云く「病の起る因縁を明すに六有り、一には四大順ならざる故に

病む・二には飲食節ならざる故に病む・三には坐禪調わざる故に病む・四には鬼便りを得る・五には魔の所為・六には業の起るが故に病む」云云、だいねはんきよう大涅槃經に云く「世に三人の其の病治し難き有り・一には大乘を誇ず・二には五逆罪・三には一闡提是くの如き三病は・世の中の極重なり」云云、又云く「今世に惡業成就し乃至必ず地獄なるべし乃至三宝を供養するが故に地獄に墮せずして現世に報を受く所謂頭と目と背との痛み」等云云、止觀に云く「若し重罪有つて乃至人中に軽く償うと此れは是れ業が謝せんと欲する故に病むなり」云云、竜樹菩薩の大論に云く「問うて云く若し爾れば華嚴經・乃至般若波羅蜜は秘密の法に非ず而も法華は秘密なり等、乃至譬えば大藥師の能く毒を変じて藥と為すが如し」云云、天台此の論を承けて云く「譬えば良医の能く毒を変じて藥と為すが如く乃至今經の得記は即ち是れ毒を変じて藥と為すなり」云云、故に論に云く「余經は秘密に非ず法華を秘密と為すなり」

云云、止観に云く、法華能く治す復称して妙と為す云云、妙樂云く、治し難きを能く治す所以に妙と称す云云、大經に云く、爾の時に王舎大城の阿闍世王其の性弊惡にして乃至父を害し已つて心に悔熱を生ず乃至心悔熱するが故に偏体瘡を生ず其の瘡臭穢にして附近すべからず、爾の時に其の母韋提希と字く種種の藥を以て而も為に之を傳く其の瘡遂に増して降損有ること無し、王即ち母に白す是くの如きの瘡は心よりして生ず四大より起るに非ず若し衆生能く治する者有りと云わば是の処有ること無けん云云、爾の時に世尊・大悲導師・阿闍世王のために月愛三昧に入りたもう三昧に入り已つて大光明を放つ其の光り清涼にして往いて王の身を照すに身の瘡即ち愈えぬ云云、平等大慧・妙法蓮華經の第七に云く、此の經は則ち為れ閻浮提の人の病の良藥なり若し人病有らんに是の經を聞くことを得ば病即ち消滅して不老不死ならん云云。

已上・上の諸文を引いて惟に御病を勘うるに六病を出でず其の中の五病は
且らく之を置く第六の業病最も治し難し、將た又業病に輕き有り重き有りて
多少定まらず就中・法華誹誘の業病最第一なり、神農・黃帝・華佗・扁鵲
も手を拱き持水・流水・耆婆・維摩も口を閉ず、但し釈尊一仏の妙經の
良藥に限つて之を治す、法華經に云く上の如し、大涅槃經に法華經を指して
云く「若し是の正法を毀誘するも能く自ら改悔し還りて正法に歸すること
有れば乃至此の正法を除いて更に救護すること無し是の故に正法に還歸す
べし」云云、荊溪大師の云く「大經に自ら法華を指して極と為す」云云、又云く
「人の地に倒れて還つて地に從りて起つが如し故に正の謗を以て邪の墮を接
す」云云、世親菩薩は本小乗の論師なり五竺の大乗を止めんが為に五百部
の小乗論を造る後に無著菩薩に値い奉りて忽に邪見を翻えし一時・此の罪
を滅せんが為に著に向つて舌を切らんと欲す、著止めて云く汝其の舌を以

て大乘だいじょうを讃歎せよと、親忽たちまちに五百部だいじょうの大乗論を造つて小乗しょうじょうを破失はしつす、又

一の願みろくを制立せり我一生の間しょうじょう小乗しょうじょうを舌の上に置かじと、然しかして後罪滅つみして

弥勒みろくの天に生ず、馬鳴菩薩めみょうぼさつは東印度いんどの人、付法蔵ふほうぞうの第十三に列れり本外道の

長たりし時勒比丘びくと内外ないげの邪正じゃせいを論ずるに其その心言下に解けて重科じゅうかを遮しゃせん

が為ために自ら頭みずかを刎はねんと探す所謂いわゆる我・我に敵して墮獄だごくせしむ、勒比丘びく・諫め

とてとど止めて云く汝頭いわを切るななじこつべこと勿れ其その頭こつべと口とを以て大乘だいじょうを讃歎さんたんせよと、

鳴急みょうに起信論を造つて外小を破失せり月氏がつしの大乗だいじょうの初なり、嘉祥寺かじょうの吉蔵きちぞう

大師だいしは漢土だいち第一さんろんしゅうの名匠・三論宗がんその元祖なり呉会に独歩し慢幢まんどう最も高し

天台大師てんだいだいしに対して已今当の文を諍あらそい立処たちどころに邪執じゃしゅうを翻破はんぱし謗人ぼうじん・謗法ぼうぽうの重罪じゅうざい

を滅ためせんが為ために百余人ひやくにんの高徳こうとくを相語かたらい智者大師ちしゃだいしを屈請くつじょうして身を肉橋にくきょうと

為なし頭こつべに両足りょうそくを承うく、七年の間・薪たきぎを採り水を汲み講を廃し衆を散じ慢幢まんどう

を倒ほけきさんが為ため法華經ほけきょうを誦じゆせず、大師だいしの滅後めつご隨帝おうつけいに往詣そうそくし足きようしゅうを擗きし涙なみだを

流して別れを告げ古鏡を觀見して自影を慎辱す業病を滅せんと欲して上の
如く懺悔す、夫れ以みれば一乗の妙經は三聖の金言・已今当の明珠諸經
の項に居す、經に云く、諸經の中に於て最も其の上に在り又云く、法華最第一
なり」伝教大師の云く、「仏立宗」云云。

予随分・大・金・地等の詣の真言の經を勸えたるに敢えて此の文の会通の
明文無し但畏・智・空・法・覺・証等の曲会に見えたり是に知んぬ釈尊・
大日の本意は限つて法華の最上に在るなり、而るに本朝真言の元祖たる法
・覺・証等の三大師入唐の時・畏・智・空等の三三蔵の誑惑を果・全等に
相承して帰朝し了んぬ、法華・真言弘通の時三説超過の一乗の明月を隠し
て真言兩界の螢火を顕し剩さえ法華經を罵詈して曰く戲論なり無明の辺域な
り、自害の謬に曰く大日經は戲論なり無明の辺域なり本師既に曲れり末葉
豈直ならんや源濁れば流清からず等是れ之を謂うか、之に依つて日本久し

く闇夜やみよと為なり扶桑終ふそうついに他國たこくの霜からに枯ほれんと欲ほす。

抑おさ貴き辺へんは嫡ちやく嫡ちやくの末流まつりゆうの一分いちぶんに非あらずと雖いえども將はた又檀那だんなの所しよ從じゆうなり身みは

邪家しやに処しよして年久とししく心こころは邪師じしに染そみて月重げつじゆうなる設たい大山だいせんは頽くすれ設たい大海たいかいは

乾かくとも此つみの罪つみは消がえ難がたきか、然しかりと維しゆくえんも宿縁もよおの催もよおす所ところ又今こんじゆう生せいに慈悲じひの薰くんず

所存しよぞんの外ひんどうに貧道ちんどうに値遇ちぐうして改悔かいげを發起ゆえする故ゆえに未み來らいの苦くを償つぐなうも現在げんざいに輕

瘡しゆづげん出現しゆづげんせるか、彼じやの闇王じやおうの身瘡みづかさは五逆誹法ごぎやくひぽうの二罪ざいの招まねく所ところなり、仏ぶつ・月愛げつあい三

妹いに入そつて其その身みを照てらしたまえば惡瘡あくそう忽たちまちに消くえ三七日さんじつの短寿たんじゆうを延のべて四十年しじゅうねん

の宝算ほうさんを保おこしち發はては又千人ちゆうじんの羅漢らかんを屈くつじゆう請いして一代いちだいの金言きんげんを書あき顯あらわし、正像しやうざう

未みに流布りゅうふせり、此ぜんもんの禪門ぜんもんの惡瘡あくそうは但たゞ謗法ぼうぽうの一科とがなり、所持しよじの妙法みやうぽうは月愛げつあいに超過ちやうか

す、宝輕瘡ほうけいそうを愈いして長寿ちやうじゆうを招まねかざらんや、此ことばの語ことば徵しるし無なくんば聲こゑを發はして

一切いっさい世間せけん眼がんは大妄語だいもうごの人ひと・一乗妙經いちじやうみやうきやうは綺語きごの典てんなり・名なを惜おししみ給たまわば

世尊せそん驗けんを顯あらわし・誓ちかを恐おそれ給たまわば諸もろの賢聖けんせい來まり護まもり給たまえと叫喚きやうかんしたまへと

爾^しか云う書は言を尽さず言は心を尽さず事事見参の時を期^こせん、
恐^{きよう}恐^{きよう}。

十一月三日

にちれんかおう
日蓮花押

太田入道殿御返事
にゅうだう ごとへんじ

一五四 乗明聖人御返事
しょうにんごへんじ

建治三年四月五十六歳御作 与大田乗明 1012p

そうしゅう

かまくら

せいぶ

つか

そうら

おわ

相州の鎌倉より青鳧二結甲州身延の嶺に送り遣^{つか}わされ候^{そうら}い^{おわ}了んぬ、昔

こんじゆこ

金珠女は金錢一文を木像の薄^{はく}と為^なし九十一劫金色の身と為^なりき其^その夫の金師

かしよう

みらい

こうみようによらいこれ

ほつし

なら

は今の迦葉・未来の光明如来是なり、今の乗明法師・妙日並びに妻女は銅錢

ほけきよう

くよう

こ

でし

二千枚を法華經に供養す彼は仏なり此れは經なり經は師なり仏は弟子なり、

ねはんぎよう

いわ

しよぶつ

いわゆる

ないしかくのゆえ

しよぶつぎようけいくよう

涅槃經に云く、諸仏の師とする所は所謂法なり乃至是の故に諸仏恭敬供養す

ほけきよう

いわ

も

また

しつぽう

さんぜんだいせんせかい

と、法華經の第七に云く「若し復人有つて七宝を以て三千大千世界に満てて

およ

ぼさつ

ひやくしぶつ

らかん

くよう

こ

くどく

仏及び大菩薩・辟支仏・阿羅漢を供養せし、是の人の得る所の功德は此の

法華經の乃至一四句偈を受持する其の福の最も多きに如かず、夫れ劣る仏を
供養する尚九十一劫に金色の身と為りぬ勝れたる経を供養する施主・一生に
仏位に入らざらんや、但真言・禅宗・念佛者等の謗法の供養を除き去るべし、
譬えば修羅を崇重しながら帝釈を帰敬するが如きのみ、
恐恐謹言。

卯月十二日

日蓮花押

乗明聖人御返事

一五五 大田殿女房 建治三年十一月

五十六歳御作 与大田入道女房 於身延 1013p

柿のあをうらの小袖わた十両に及んで候か、此の大地の下は二の地獄あり
一には熱地獄すみを・をこし野に火をつけせうまうの火鉄のゆのごとし、
罪人のやくる事は大火に紙をなげ大火になくづをなぐるがごとし、この地獄
へはやきとりと火をかけてかたきをせめ物をねたみて胸をこがす女人の墮つ

る地獄なり、二には寒地獄此の地獄に八あり、涅槃經に云く「八種の寒氷地獄
あり所謂阿波波地獄・阿地獄・阿羅羅地獄・阿婆婆地獄・優鉢羅地獄・
波頭摩地獄・拘物頭地獄・芬陀利地獄」云云、此の八大かん地獄は・或はか
んに・せめられたるこえ・或は身のいろ等にて候、此の国のすわの御いけ・或
は越中のたて山のかへし加賀の白山のれいのとりのはねをとぢられ、やもめ
をうなのすそのひゆる、ほろろの雪に・せめられたるをもてしろしめすべし、
かに・せめられて・をとがいのわなめく等を阿波波・阿・阿羅羅等と
申すかに・せめられて身のくれないにたるを紅蓮・大紅蓮等と申すなり、
いかなる人の此の地獄にをつるぞと申せば此の世にて人の衣服をぬすみとり
父母・師匠等のさむげなるを・みまいらせて我はあつくあたたかにして昼夜
をすこす人人の墮つる地獄なり。

六道の中に天道と申すは其の所に生ずるより衣服ととのをりて生るとこ

ろなり、人道の中にも商那和修鮮白比丘尼等は悲母の胎内より衣服ととのを
りて生れ給へり、是れはたうとき人人に衣服をあたへたるのみならず父母・
主君・三宝にきよくあつき衣をまいらせたる人なり、商那和修と申せし人は
裸形なりし辟支仏に衣をまいらせて世世・生生に衣服身に随ふ、曇弥と申
せし女人は仏にきんばら衣をまいらせて一切衆生喜見仏となり給う、今
ほけきよう
法華經に衣をまいらせ給う女人あり後生に・はちかんど獄の苦をまぬかれさ
せ給うのみならず、今生には大難をはらひ其の功德のあまりを男女のきんだ
ち・きぬにきぬをかさね・いろにいろをかさね給うべし、
あなかしこあなかしこ
穴賢穴賢。

建治三年丁丑十一月十八日 日蓮在御判

一五六 大田左衛門尉御返事 弘安元年四月 五十七歳御作 1014p

当月十八日の御状、同じき二十三日の午の剋計りに到来、
臆拝見仕り候ひ

おわん 畢ぬ、御状の如く御布施・鳥目十貫文・太刀・五明一本・焼香二十両給ひ候、
そもそももっぱ

抑専ら御状に云く某今年は五十七に罷り成り候へば大厄の年かと覚え候、

なにやらんして正月の下旬の比より卯月の此の比に至り候まで身心に苦勞多

く出来候、本より人身を受くる者は必ず身心に諸病相續して五体に苦勞ある

べしと申しながら更に云云。

此の事最第一の歎きの事なり、十二因縁と申す法門あり、意は我等が身は

諸苦を以て体と為す、されば先世に業を造る故に諸苦を受け、先世の集・煩惱

が諸苦を招き集め候、過去の二因・現在の五果・現在の三因・未来の両果とて

三世次第して一切の苦果を感じるなり、在世の二乗が此等の諸苦を失はんと

て、空理に沈み灰身滅智して、菩薩の勤行精進の志を忘れ、空理を証得せ

ん事を真極と思ふなり、仏・方等の時・此等の心地を彈呵し給ひしなり、然

るに生を此の三界に受けたる者苦を離るる者あらんや、羅漢の応供すら猶此

くの如し、況や底下の凡夫をや、さてこそいそぎ生死を・離るべしと勧め申し候へ。

此等体の法門はさて置きぬ、御辺は今年は大厄と云云、昔伏羲の御宇に、黄河と申す河より亀と申す魚・八卦と申す文を甲に負て浮出たり、時の人・此の文を取り挙げて見れば、人の生年より老年の終りまで厄の様を明したり、厄年の人の危き事は、少水に住む魚を鴟鵂などが伺ひ、灯の辺に住める夏の虫の火中に入らんとするが如くあやうし、鬼神ややもすれば此の人の神を伺ひなやまさんとす、神内と申す時は諸の神・身に在り万事心に叶ふ、神外と申す時は諸の神・識の家を出でて万事を見聞するなり、当年は御辺は神外と申して諸神他国へ遊行すれば慎んで除災得樂を祈り給ふべし、又木性の人にて渡らせ給へば、今年は大厄なりとも春夏の程は何事か渡らせ給ふべき、至門性経に云く、「木は金に遇て抑揚し、火は水を得て光滅し、土は

木に値て時に瘦せ、金は火に入て消え失せ、水は土に遇て行かず」等云云。

指して引き申すべき経文にはあらざれども、予が法門は四悉檀を心に懸け

て申すならば、強ちに成仏の理に違はざれば、且らく世間普通の義を用ゆべ

きか、然るに法華經と申す御經は身心の諸病の良藥なり、されば經に云く「此

の經は則ち為閻浮提の人の病の良藥なり、若し人病有らんには是の經を聞く

ことを得ば、病即消滅して不老不死ならん」等云云、又云く「現世は安穩に

して、後生には善処ならん」等云云、又云く「諸余の怨敵、皆悉く摧滅せん」

等云云、取分奉る御守り方便品・寿量品、同じくは一部書て進らせ度候へど

も、當時は去り難き隙ども入る事候へば略して二品奉り候、相構へ相構へて

御身を離さず重ねつつみて御所持有るべき者なり、此の方便品と申すは迹門

の肝心なり、此の品には仏・十如実相の法門を説て十界の衆生の成仏を

明し給へば、舍利弗等は此れを聞て無明の惑を

断じ真因の位に叶ふのみならず、未来華光如来と成て、成仏の覚月を離垢世界の暁の空に詠ぜり、十界の衆生の成仏の始めは是なり、当時の念仏者・真言師の人人・成仏は我が依經に限れりと深く執するは、此等の法門を習学せずして、未顕真実の經に説く所の名字計りなる授記を執する故なり。

貴辺は日来は此等の法門に迷ひ給ひしかども、日蓮が法門を聞て、賢者なれば本執を忽に翻し給て、法華經を持ち給ふのみならず、結句は身命よりも此の經を大事と思食す事・不思議が中の不思議なり、是れは偏に今の事に非ず、過去の宿縁開發せるにこそ、かくは思食すらめ、有り難し有り難し、次に寿量品と申すは本門の肝心なり、又此の品は一部の肝心、一代聖教の肝心のみならず、三世の諸仏の説法の儀式の主要なり、教主釈尊、寿量品の一念三千の法門を証得し給ふ事は、三世の諸仏と内証等しきが故なり、但し此の法門は釈尊一仏の己証のみに非ず諸仏も亦然なり、我等衆生の無始

ろくどうしょうじ ちんぼつ
已来六道生死の浪に沈没せしが、今教主釈尊きょうしゅしゃくそんの所説しよせつの法華經ほふけきやうに値あひ奉る事は、乃往過去に此の寿量品じゆりやうぼんの久遠実成くおんじつじやうの一念三千いちねんさんぜんを聴聞ちやうもんせし故なり、有り難なんき法門ほうもんなり。

けこん しんごん がんそ ほうぞう ちやうかん
華嚴・真言の元祖・法蔵・澄觀・善無畏・金剛智・不空等が、釈尊しゃくそん・一代聖教いちだいしやうきやう
かんじん じゆりやうぼん いちねんさんぜん ほうもん
の肝心なる寿量品の一念三千の法門を盗み取て、本より自の依經えきやうに説かざる
けこんきやう だいにちきやう いちねんさんぜん
華嚴經・大日經に一念三千有りと云て取り入るる程の盗人ぬすびとにばかされて、末学まつがく
深く此の見を執す、墓無し墓無し、結句けっこは真言しんごんの人師にんしの云く「争て醍醐だいごを盗
て、各自宗じしゆうに名く」云云、又云く「法華經の二乗作仏・久遠実成は無明の辺
だいにちきやう
域、大日經に説く所の法門ほうもんを明の分位」等云云、華嚴の人師にんし云く「法華經に
いねんさんぜん ほうもん しよう けこんきやう ほうもん こんぼん いちねんさんぜん
説く所の一念三千の法門は枝葉、華嚴經の法門は根本の一念三千なり」云云、
これあとかた
是跡形も無き僻見なり、真言しんごん・華嚴經けこんきやうに一念三千を説きたらばこそ、一念三千
いねんさんぜん
と云ふ名目をばつかはめ、おかしおかし、龜毛兎角きもうとかくの法門ほうもんなり。

まさ くおんじつじょう
正しく久遠実成の一念三千の法門は前四味並に法華經の迹門十四品まで
秘させ給て有りしが、本門正宗に至て寿量品に説き顯し給へり、此の
いちねんさんぜん ほうしゅ
一念三千の宝珠をば妙法五字の金剛不壞の袋に入れて、末代貧窮の我等衆生
の為に残し置かせ給ひしなり、正法・像法に出でさせ給ひし論師・人師の中
に此の大事を知らず、唯竜樹・天親こそ心の底に知らせ給ひしかども色にも
出ださせ給はず、天台大師は玄・文・止觀に秘せんと思召ししかども、末代の
しかん
為にや止觀十章第七正觀の章に至て粗書かせ給ひたりしかども、薄葉に釈を
設けてさて止み給ひぬ、但理觀の一分を示して事の三千をば斟酌し給ふ。
てんだいだいし しやつけ
彼の天台大師は迹化の衆なり、此の日蓮は本化の一分なれば盛に本門の事
ひろ
の分を弘むべし、然に是くの如き大事の義理の籠らせ給ふ御經を書いて進らせ
いよいよ
候へば弥信を取らせ給ふべし、勸発品に云く、「当に起て遠く迎へて、当に
かんぼつほん
仏を敬ふが如くすべし」等云云、安樂行品に云く、「諸天昼夜に、常に法の
あんらくぎょうほん
あんにくぎょうほん
しよてん

ためのゆゑ
為の故に、而も之を衛護す、乃至天の諸の童子、以て給使を為さん」等云云、
譬喩品に云く、「其の中の衆生は、悉く是れ吾が子なり」等云云、法華經の持者
は教主 釈尊の御子なれば、争か梵天・帝釈・日月・衆星も昼夜朝暮に守ら
せ給はざるべきや、厄の年災難を払はん秘法には法華經に過ぎず、たのもし
きかな、たのもしきかな。

さては鎌倉に候ひし時は細細申し承はり候ひしかども、今は遠国に居住候
に依て面謁を期する事更になし、されば心中に含みたる事も使者玉章にあら
ざれば申すに及ばず、歎かし歎かし、当年の大厄をば日蓮に任せ給へ、釈迦・
多宝・十方分身の諸仏の法華經の御約束の実不実は是れにて量るべきなり、
又又申すべく候、

弘安元年 戊寅 四月二十三日

日蓮花押

太田左衛門尉殿御返事 さえもんのだう　ごへんじ

一五七

大田殿女房御返事 だいでん　にようぼうごへんじ

1018p

八木一石付十合 ていれは　かんぱつ 者 大旱魃の代に、かはける物に水をほどこしては、大竜王 りゆうおう
と生れて雨をふらして人天をやしなう、にんてんうえたる代に、食をほどこせる人は
こくおう国王と生れて其の国ゆたかなり、過去かこの世に金色と申す大王ましましき其の
国をば波羅奈国と申す、十二年が間、旱魃かんぱつゆきて人民じんみんうえ死ぬ事おびただし。
宅中しにんじゅうまんには死人充滿し、道路には骸骨がいこつ
充滿じゅうまんせり、其の時、そのとき　だいおう　いっさいしゅじょう大王・一切衆生をあはれみて、おおくの蔵くらをひらきて
施をほどこし給ひき、蔵の中の財つきて唯一日の御供のみのこりて候ひし、
じゅうまん衆僧をあつめて供養をなし、王と后と衆僧しゅうそうと万民ばんみんと皆みなうえ死なんとせし程
に、天より・雨のごとくふりて大国一時たいこくいちじに富貴せりと、金色王経にとかれて
候、此れも又かくのごとし此の供養によりて現世げんせには福人となり、後生ごしやうには

靈山淨土へまいらせ給ふべし。

恐恐謹言。

九月二十四日

日蓮

花押

大田入道殿女房御返事

一五八 慈覚大師事 じかくだいし

弘安三年正月 五十九歳御作与大田入道 こうあん についでい

於身延 1014 p

驚眼三貫・絹の袈裟一帖給い候ぜに けさ たまい おわい了んぬ、法門の事は秋元太郎 兵衛尉殿 ほうもん ひょうえのじよう

の御返事に少少注して候・御覽有るべく候、なによりも受け難き人身・値こへんじい

難き仏法に値がた ぶつぽう あいて候に五尺の身に一尺の面あり其の面の中三寸の眼二つあ

り、一歳より六十に及んで多くの物を見る中に悦よろこばしき事は法華最第一の

経文なり、あさましき事は慈覚大師の金剛頂經の頂きようもん じかくだいし こんごうちようきよう いただきの字を釈しゃくして云く、言

う所の頂いただきとは諸の大乗の法の中に於て最勝もろもろだいじよう おい さいしようにして無過上なる故に頂かじよう ゆえを

以て之れに名づく乃至人の身の頂最も為勝るるが如こし、乃至法華に云く ないし ほっけ いわ

是法住法位と今正しく此の秘密の理を顕説ぜほうじゆつほうい まさ ひみつ けんせつす、故に金剛頂と云うなり云云、 ゆえ こんごうちよう

又云く「金剛は宝の中の宝なるが如く此の経も亦爾なり諸の経法の中に最いわ こんごう こと為 またしか もろもろきようほう

第一にして三世の如来の髻だいいち さんぜ にょらい もとどりの中の宝なる故に「等云云、此の釈の心は しやく

ほつけさいだいいち きょうもん

法華第一の經文を奪い取りて金剛頂經に付くるのみならず、如人之身頂

さいい しやく ほけきょう こうへ

最為勝の釈の心は法華經の頭を切りて真言經の頂とせり、此れ即ち鶴の頸

かわず

を切つて蝦の頸に付けけるか真言の蟻も死にぬ法華經の鶴の御頸も切れぬ

こ

と見え候、此れこそ人身うけたる眼の不思議にては候へ、三千年に一度花開

うどん

くなる優曇花は転輪聖王此れを見る。

くきょうえんまん

究竟円満の仏にならざらんより外は法華經の御敵は見しらさんなり、一乗

いちじょう

のかたき夢のごとく勘へ出して候、慈覺大師の御はかはいづれのところの有

もう

りと申す事きこへず候、世間に云う御頭は出羽の国・立石寺に有り云云、い

こつへ

かにも此の事は頭と身とは別の所に有るか、明雲座主は義仲に頸を切られた

てんだいざす

り、天台座主を見候へば伝教大師はさてをきまいらせ候いぬ、第一義真・第

だいいちぎしん

えんちよう

二円澄・此の兩人は法華經を正とし真言を傍とせり、第三の座主・慈覺大師

ほけきょう

ぼう

ざす

じかくだいし

しんこん

は真言を正とし法華經を傍とせり、其の已後代代の座主は相論にて思い定む

ほけきょう

ぼう

そ い こ

ざす

そうろん

ることな
る事無し、第五十五並びに五十七の二代は明雲大僧正座主なり、此の座主は

安元三年五月日院勘を蒙りて伊豆の国へ配流、山僧・大津にて奪い取りて後

じしよう
治承三年十一月に座主となりて源の右將軍頼朝を調伏せし程に寿永二年十

一月十九日義仲に打たれさせ給う、此の人・生けると死ぬと二度大難に値え

り、生の難は仏法の定例・聖賢の御繁盛の花なり死の後の恥辱は悪人・愚人

・誹謗正法の人招くわざわいなり、所謂大慢ばら門・須利等なり。

粗此れを勘えたるに明雲より一向に真言の座主となりて後・今三十余代一

百余年が間・一向・真言の座主にて法華經の所領を奪えるなり、しかれば

此等の人人は釈迦・多宝・十方の諸仏の大怨敵・梵釈・日月・四天・

天照太神・正八幡大菩薩の御讎敵なりと見えて候ぞ、我が弟子等・此の旨を

存じて法門を案じ給うべし、
恐恐。

正月二十七日 日蓮花押

太田入道殿御返事

一五九 三大秘法稟承事

弘安四年四月 六十歳御作

与大田金吾

1021p

そ ほかきよう じんりきほん いわ 要を以て之を言は如来の一切の所有の法
夫れ法華經の第七神力品に云く、
によらい いっさい じさい じんりき によらい いっさい ひよう
如来の一切の自在の神力・如来の一切の秘要の蔵・如来の一切の甚深の事
みな おい せんじけんせつ
・皆此經に於て宣示顯説す」等云云、釈に云く「經中の要説の要・四事に在
り」等云云、問う所説の要言の法とは何物ぞや、答て云く夫れ釈尊初成道
し みさんきようないしほかきよう こうかいさんけんいつ りやくかいごんけんのん
より四味三教乃至法華經の広開三顯一の席を立ちて略開近顯遠を説かせ給い
ゆじゅつぽん たまい じつそつじょうとく そのかみしゆぎよう たまい ところ じゆりようほん
し涌出品まで秘せさせ給いし実相証得の当初修行し給いし処の寿量品の
ほんぞん だいもく ごじ きようしゆしやくそん ひほう さんぜ
本尊と戒壇と題目の五字なり、教主釈尊此の秘法をば三世に隠れ無き普賢
もんじゆ ゆず たま そ 以下をや、されば此の秘法を説かせ給いし
・文殊等にも譲り給はず況や其の以下をや、
しみさんきよう ほけきよう しゃくもん ひほう
儀式は四味三教並に法華經の迹門十四品に異なりき、所居の土は寂光本有

の国土なり能居の教主は本有無作の三身なり所化以て同体なり、かかる砌
なれば久遠称揚の本眷属上行等の四菩薩を寂光の大地の底よりはるばる
と召し出して付属し給う、道暹律師云く、「法是れ久成の法なるに由る故に久成
の人に付す」等云云、問て云く其の所属の法門仏の滅後に於ては何れの時に
弘通し給う可きか、答て云く経の第七葉王品に云く、「後の五百歳の中に閻浮提
に広宣流布して断絶せしむること無けん」等云云、謹んで经文を拝見し奉る
に仏の滅後正像二千年過ぎて第五の五百歳・鬪諍堅固・白法隱没の時云
云、問て云く夫れ諸仏の慈悲は天月の如し機縁の水澄めば利生の影を普く万機
の水に移し給べき処に正像末の三時の中に末法に限ると説き給わば教主
釈尊の慈悲に於て偏頗あるに似たり如何、答う諸仏の和光・利物の月影は九
法界の闇を照すと雖も謗法一闡提の濁水には影を移さず正法一千年の機の前
には唯小乘・權大乘相叶へり、像法一千年には法華經の迹門・機感相應

せり、末法の始の五百年には法華經の本門前後十三品を置きて只壽量品の
品を弘通すべき時なり機法相應せり。

今・此の本門壽量の一品は像法の後の五百歳・機尚堪えず況や始めの五百

年をや、何に況や正法の機は迹門尚日浅し増して本門をや、末法に入て爾前

・迹門は全く出離生死の法にあらず、但専ら本門壽量の一品に限りて出離

生死の要法なり、是を以て思うに諸仏の化導に於て全く偏頗無し等云云、問

う仏の滅後正像末の三時に於て本化迹化の各各の付属分明なり但壽量の一

品に限りて末法濁惡の衆生の為なりといへる經文未だ分明ならず慥に經

の現文を聞かんと欲す如何、答う汝強ちに之を問う聞て後堅く信を取る可き

なり、所謂壽量品に云く「是の好き良薬を今留めて此に在く汝取て服す

可し差じと憂つる勿れ」等云云。

問て云く壽量品専ら末法惡世に限る經文顯然なる上は私に難勢を加う

べか 可らず然りと雖も三大秘法其の体如何、答て云く予が己心の大事之に如かず
なんじ 汝が志 無二なれば少し之を云わん 寿量品に建立する所の本尊は五百
じんてん 塵点の当初より以来此土有縁深厚本有無作三身の教主 釈尊是れなり、
じゅりようぼん 寿量品に云く、「如来秘密神通之力」等云云、疏の九に云く、「一身即三身なる
な 身を名けて秘と為し三身即一身なるを名けて密と為す又昔より説かざる所を名
な けて秘と為し唯仏のみ自ら知るを名けて密と為す仏・三世に於て等しく三身
しきよう 有り諸経の中に於て之を秘して伝えず」等云云、題目とは二の意有り所謂
じょうぼう 正像と末法となり、正法には天親菩薩・竜樹菩薩・題目を唱えさせ給いし
じきよう かども自行ばかりにしてさて止め、像法には南岳・天台等亦南無妙法蓮華經
とな となと唱え給いて自行の爲にして広く他の爲に説かず是れ理行の題目なり、末法
じきよう に入て今日連が唱る所の題目は前代に異り自行化他に亘りて南無妙法蓮華經
じきよう なり名体宗用教の五重玄の五字なり、戒壇とは王法佛法に冥じ佛法王法に合

して王臣一同に本門の三秘密の法を持ちて有徳王・覺徳比丘の其の乃往を
まづぼうじよくあく　みらい　ちよくせん　みきょうしよ　もう　くだ　りようぜんじようど
末法濁悪の未来に移さん時勅宣並に御教書を申し下して靈山浄土に似たら
ん最勝の地を尋ねて戒壇を建立す可き者か時を待つ可きのみ事の戒法と
申すは是なり、三国並に一閻浮提の人・懺悔滅罪の戒法のみならず大梵天王
・帝釈等も来下して給うべき戒壇なり、此の戒法立ちて後・延暦寺の戒壇
は迹門の理戒なれば益あるまじき処に、叡山に座主始まつて第三・第四の
慈覺・智証存の外に本師・伝教・義真に背きて理同事勝の狂言を本として我
が山の戒法をあなづり戯論とわらいし故に、存の外に延暦寺の戒・清浄無
染の中道の妙戒なりしが徒に土泥となりぬる事云つても余りあり歎きても
何かはせん、彼の摩黎山の瓦礫の土となり梅檀林の荊棘となるにも過ぎたる
なるべし、夫れ一代聖教の邪正偏円を弁えたらん学者の人をして今の延暦寺
の戒壇を　ましむべきや、此の法門は義理を案じて義をつまびらかにせよ、

此の三大秘法は二千余年の当初・地涌千界の上首として日蓮慥かに教主
大覺世尊より口決相承せしなり、今日蓮が所行は靈鷲山の稟承に芥爾
計りの相違なき色も替らぬ寿命品の事の三大事なり。

問う一念三千の正しき証文如何、答う次に申し申す可し此に於て二種有り、

方便品に云く「諸法実相・所謂諸法・如是相・乃至・欲令衆生開仏知見」

等云云、底下の凡夫・理性所具の一念三千か、寿命品に云く「然我実成仏已来

・無量無辺と等云云、大覺世尊・久遠実成の当初証得の一念三千なり、今日蓮

が時に感じて此の法門広宣流布するなり予年来己心に秘すと雖も此の法門を

書き付て留め置ずんば門家の遺弟等定めて無慈悲の讒言を加う可し、其の後

は何と悔ゆとも叶うまじきと存ずる間・貴辺に對し書き送り候、一見の後・

秘して他見有る可からず口外も詮無し、法華經を諸仏出世の一大事と説かせ

給いて候は此の三大秘法を含めたる經にて渡らせ給えばなり、秘す可し秘す

べ
可し。

こうあん

弘安四年卯月八日

にちれんかおう
日蓮花押

一六〇

そやにゆうどう
曾谷入道殿御書

ぶんえい

文永十一年 五十三歳御作 於身延

1024p

じかいほんぎゃくなん

たほうしんびつ

なんすで

おわ

これ

之を以て思うに、

多く他方

自界叛逆難・

他方侵逼の難既に合い候い畢んぬ、

之を以て思うに、

多く他方

おんぞく

の怨賊有つて国内を侵掠し人民諸の苦悩を受け土地に所樂の処有ること無

とち しらく ところあ

無

けん」と申す経文合い候いぬと覚え候、当時吉岐・対馬の土民の如くになり

もう きようもん

候はんずるなり、是れ偏に仏法の邪見なるによる仏法の邪見と申すは真言宗

とうじいき

つしま どもん

こと

なり

そうら

候はんずるなり、

ひとえ ぶつぽう

じゃけん

ぶつぽう

じゃけん

もう

しんこんしゅう

と法華宗との違目なり、

いもく

ぜんしゅう ねんぶつしゅう

とを責め候しは此の事を申し顕さん

もう あらわ

なり

ほうけしゅう

いもく

ぜんしゅう ねんぶつしゅう

とを責め候しは此の事を申し顕さん

もう あらわ

なり

料なり漢土には善無畏・

かんど ぜんむい

こんこうち

ふくうさんぞう

おあわく

てんだいほつけしゅう

しんこん

大日経に盗み入れて還つて法華経の肝心と天台大師の徳とを隠せし故に漢土

だいにちきよう

かんじん

てんだいだいし

ゆえ

かんど

減するなり、

にほんこく

じかくだいし

だいにちきよう

こんこうちようきよう

そしちちきよう

ちんごこつ

日本国は慈覚大師が大日経・金剛頂経・蘇悉地経を鎮護国家

にほんこく

じかくだいし

だいにちきよう

こんこうちようきよう

そしちちきよう

ちんごこつ

減するなり、

日本国は慈覚大師が大日経・金剛頂経・蘇悉地経を鎮護国家

にほんこく

じかくだいし

だいにちきよう

こんこうちようきよう

そしちちきよう

ちんごこつ

減するなり、

日本国は慈覚大師が大日経・金剛頂経・蘇悉地経を鎮護国家

の三部と取つて伝でんぎようだいし教大師の鎮護国家を破せしより叡山えいざんに悪義あくぎ・出来しゅつたいして
終ついに王法おうほう尽つきにき、此この悪義あくぎ・鎌倉かまくらに下つて又日本国にほんこくを亡もうすべし弘法大師こうぼうだいしの
終じやぎに王法おうほう尽つきにき、此この悪義あくぎ・鎌倉かまくらに下つて又日本国にほんこくを亡もうすべし弘法大師こうぼうだいしの
邪義じゃぎは中なか中なか顯然けんねんなれば人もたばらかされぬ者もあり、慈覚大師じかくだいしの法華經ほけきよう・
大日經だいにくきようの理同事勝りどうじしようの釈ちじんすでは智人ちじんすで既に許ゆるしぬ愚者ぐしゃい争いかでか信ぜざるべき慈覚大師じかくだいしは
法華經ほけきようと大日經だいにくきようとの勝劣しょうれつを祈請きしようせしに箭やを以て日を射ると見しは此の事な
るべし、是これは慈覚大師じかくだいしの心中しんちゆうに修羅しゆらの入ほけきようつて法華經だいにくきようの大日輪だいにくりんを射るにあら
ずや、此この法門ほうもんは当世とうせい叡山えいざん其この外日本国にほんこくの人用もちゆべきや、若もし此この事じつじ・実事じつじ
ならば日蓮にちれん豈須あにしゆみせん弥山みせんを投なる者にあらずや、我が弟子でしは用もちゆべきや如何いかん最後さいごな
れば申もうすなり恨きようみ給きようべからず、恐恐きようきよう謹言きんげん。

十一月二十日

にちれんかおう
日蓮花押

そやにちうじう
曾谷入道殿

そやにちうじう
曾谷入道殿御返事

ほうべん

じがけ

方便品の長行書進せ候先に進せ候し自我偈に相副て読みたまうべし、此の

もんじ

みなこととしょうしんみょうかく

みほとけ

しか

われら

にくげん

もんじ

經の文字は皆悉く生身妙覺の御仏なり然れども我等は肉眼なれば文字と見

るなり、

がき

こうが

てんにん

かんろ

見る水と見る

天人は甘露と見る

水は一

なれども果報に随つて別別なり、此の經の文字は盲眼の者は之を見ず、肉眼

かほう

したが

もんじ

めくらめ

これ

にくげん

の者は文字と見る二乗は虚空と見る菩薩は無量の法門と見る、仏は一一の文字

もんじ

にじょう

こくう

ぼさつ

むりょう

ほうもん

これ

もんじ

を金色の釈尊と御覽あるべきなり即持仏身とは是なり、されども僻見の

しゃくそん

ぎようじや

た

わた

たま

は

たてまつ

ただ

かま

かま

行者は加様に目出度く渡らせ給うを破し奉るなり、唯相構えて相構えて異念

ぎようじや

なく

いっしん

りようばんじょうど

こ

無く一心に

靈山浄土を

期せらるべし、

心の師とは

なるとも

心を師と

せざれと

は六波羅蜜經の文ぞかし、委細は見參の時を期し候、恐恐謹言。

ろくはらみつぎよう

いさい

きようきようきんげん

文永十二年三月 日 日蓮花押

ぶんえい

にちれんかおう

曾谷入道殿

そやにちれんかおう

曾谷入道殿

そやにちれんかおう

ごしよ

一六二 曾谷入道殿許御書

そ おもんみればじゆうびよう
夫れ以れば重病を療治するには良薬を構築し逆謗を救助するには要法に

は如かず、所謂時を論ずれば正像末教を論ずれば小大・偏円・権実・顕密・

国を論ずれば中辺の両国・機を論ずれば已逆と未逆と已謗と未謗と師を論ず

れば凡師と聖師と二乗と菩薩と他方と此土と迹化と本化となり、故に四依の

菩薩等滅後に出現し仏の付属に随つて妄りに經法を演説したまわず、所詮

無智の者未だ大法を謗ぜざるには忽ちに大法を与えず悪人爲る上已に実大を

謗ずる者には強て之を説く可し、法華經第二の巻に仏・舍利弗に対して云く

「無智の人の中にして此の經を説くこと莫れ」又第四の巻に藥王菩薩等の八万

の大地に告げたまわく、「此の經は是れ諸仏秘要の藏なり分布して妄りに人に

授与す可からず」云云、文の心は無智の者の而も未だ正法を謗ぜざるには

左右無く此の經を説くこと莫れ、法華經第七の巻不輕品に云く、「乃至遠く四衆

を見ても亦復故に往いて「等云云、又云く」「四衆の中に瞋恚を生じ心不淨なる者有り悪口罵詈して言く是の無智の比丘何れの所従り来りてか」等云云、又云く「・或は杖木瓦石を以て之を打擲す」等云云、第二第四の巻の經文と第七の巻の經文と天地水火せり。

問うて曰く一經二說何れの義に就いて此の經を弘通すべき、答えて云く私に會通すべからず靈山の聴衆為る天台大師並びに妙樂大師等処処に多くの釈有り先ず一兩の文を出さん、文句の十に云く「問うて曰く釈迦は出世して脚して説かず今は此れ何の意ぞ造次にして説くは何ぞや答えて曰く本已に善有るには釈迦小を以て之を將護し本未だ善有らざるには不輕・大を以て之を強毒す」等云云、釈の心は寂滅・鹿野・大宝・白鷺等の前四味の小大・権実の諸經四教八教の所被の機縁・彼等が過去を尋ね見れば久遠大通の時に於て純円の種を下せしかども諸衆一乘經を謗ぜしかば三五の塵点を

経歴きようりやく すらりしかと雖も下せし所の下種げしゆ・純熟じゆんじゆくの故に時至いたつて自ら繫珠けいじゆを顕あらわす
但四十余年の間過去に已に結縁けちえんの者も猶なほ謗あの義有ある可べきの故に且ゆえらく権小しほの
諸經しよきようを演説えんぜつして根機こんきを練らしむ。

問いわうて曰けこんく華嚴の時・別円の大菩薩乃至觀經等べつえん ぼさつ ないしかんきようの諸の凡夫の得道とくどうは如何いかん、
答いわえて曰かれらく彼等の衆は時を以て之を論ろんずれば其の經の得道とくどうに似たれども実を
以て之を勸これ かんがうるに三五下種の輩げしゆ やからなり、問いわうて曰そく其の証しやうご掘如何いかん、答いわえて曰いく
法華經第五の卷涌出品ゆじゆつぽんに云く「是の諸の衆生は世世このかたより已來常いに我が化を受
く乃至此の諸の衆生は始め我が身を見・我が所説しよせつを聞すなわいて即ち皆信受みなしんじゆして
如来にょらいの慧ちに入りもろもろしゆじようにき」等云云、天台てんだい釈しやくして云く「衆生久遠しゆじようくおん」等云云、妙樂大師みやうらくだいし
の云く「脱いは現げんに在りと雖も具に本種いを騰あぐ」又云く「故に知んぬ今日の逗会とうえ
は昔じやうじゆく成熟きするの機おもむに赴く」等云云、經釈きやうしやくけんねん 顯然こくしゆの上は私の料簡りやうけんを待たず例
せば王女と下女と天子の種子てんし しゆしを下さざれば国主こくしゆと為らざるが如し。

問うて曰く大日經等の得道の者は如何、答えて曰く種種の異義有りと雖も
繁きが故に之を載せず但し所詮彼れ彼れの經經に種熟脱を説かざれば還つ
て灰断に同じ化に始終無きの經なり、而るに真言師等の所談の即身成仏は
譬えば窮人の妄りに帝王と号して自ら誅滅を取るが如し王莽・趙高の輩外
に求む可からず今の真言家なり、此等に因つて論ぜば仏の滅後に於て三時
有、正像二千余年には猶下種の者有り例せば在世四十余年の如し根機を知ら
ずんば左右無く実經を与う可からず、今は既に末法に入つて在世の結縁の者
は漸漸に衰微して権実の二機皆悉く尽きぬ彼の不輕菩薩末世に出現して毒鼓
を撃たしむるの時なり、而るに今時の学者時機に迷惑して・或は小乗を弘通
し・或は権大乘を授与し・或は一乗を演説すれども題目の五字を以て下種
と為す可きの由来を知らざるか、殊に真言宗の学者迷惑を懷いて三部經に
依憑し単に會二破二の義を宣ぶ猶三一相對を説かず即身頓悟の遺跡を削り

草木成仏は名をも聞かざるのみ、而るに善無畏・金剛智・不空等の僧侶・
月氏より漢土に來臨せし時本国に於て未だ存せざる天台の大法盛に此の国に
流布せしむるの間・自愛所持の經弘め難きに依り一行阿闍梨を語い得て天台
の智慧を盗み取り大日經等に摂入して天竺より有るの由之を偽る、然るに
震旦一国の王臣等並びに日本国の弘法・慈覺の両大師之を弁えずして信を加
う已下の諸學は言うに足らず、但漢土・日本の中に伝教大師一人之を推した
まえり、然れども未だ分明ならず所詮善無畏三蔵・閻魔王の責を蒙りて此の
過罪を悔い不空三蔵の還つて天竺に渡つて真言を捨てて漢土に來臨し天台の
戒壇を建立して両界の中央の本尊に法華經を置きし是なり。

問うて曰く今時の真言宗の學者等何ぞ此の義を存せざるや、答えて曰く眉
は近けれども見えず自の禍を知らずとは是の謂か、嘉祥大師は三論宗を捨て
て天台の弟子と爲る今の末學等之を知らず、法蔵・澄觀華嚴宗を置いて智者

に歸す彼の宗の學者之を存せず、玄奘三蔵・慈恩大師は五性の邪義を廢して
一乗の法に移る法相の學者堅く之を諍う。

問うて曰く其の証如何、答えて曰く・或は心を移して身を移さず・或は身

を移して心を移さず・或は身心共に移し・或は身心共に移さず其の証文は別

紙に之を出す可し此の消息の詮に非ざれば之を出さず、仏滅後に三時有り、

所謂正法一千年・前の五百年には迦葉・阿難・商那和修・末田地・脇比丘等

一向に小乗の藥を以て衆生の輕病を対治す四阿含經・十誦・八十誦等の諸

律と相續解脱經等の三蔵を弘通して後には律宗・俱舍宗・成実宗と号する

是なり、後の五百年には馬鳴菩薩・竜樹菩薩・提婆菩薩・無著菩薩・天親

菩薩等の諸の大論師初には諸の小聖の弘めし所の小乗經之を通達し後には

一一に彼の義を破失し了つて諸の大乗經を弘通す是れ又中藥を以て衆生の

中病を対治す所謂華嚴經・般若經・大日經・深密經等・三輪宗・法相宗・

しんこんだらに
真言陀羅尼・禅法等なり。

問うて曰く迦葉・阿難等の諸の小聖何ぞ大乘經を弘めざるや、答えて曰く

一には自身堪えざるが故に二には所被の機無きが故に三には仏より譲り与え

られざるが故に四には時来らざるが故なり、問うて曰く竜樹・天親等何ぞ

一乗經を弘めざるや、答えて曰く四つの義有り先の如し、問うて曰く諸の

真言師の云く、仏の滅後八百年に相当つて竜猛菩薩・月氏に出現して釈尊

の顕經たる華嚴・法華等を馬鳴菩薩等に相伝し大日の密經をば自ら南天の

鉄塔を開拓し面り大日如来と金剛薩とに對して之を口決す、竜猛菩薩に二

人の弟子有り提婆菩薩には釈迦の顕教を伝え竜智菩薩には大日の密教を

授く竜智菩薩は阿羅苑に隱居して人に伝えず其の間に提婆菩薩の伝うる所の

顕教は先づ漢土に渡る其の後数年を経歴して竜智菩薩の伝うる所の秘密の

教を善無畏・金剛智・不空漢土に渡す」等云云此の義如何、答えて曰く一切

の眞言師しんごんしかくはくのごと又天台・華嚴等の諸家しよも一同に之これを信ず、抑おそ竜猛りゆうもう已前いぜんには月氏国がっしの中には大日だいにちの三部經さんぶきやう無しと云うか釈迦しゃかよりの外に大日如来世だいにちによらいに出現しゅつげんして三部の經を説くと云うか、顯

を提婆だいばに伝え密を竜智さずに授くる証文しょうもん何れの經論きやうろんに出でたるぞ、此の大妄語もうごは提婆だいばの欺誑罪ぎかうざいにも過ぎ瞿伽利すくぎやりの誑言おうげんにも超ゆ漢土かんど・日本の王位にほんの尽き兩朝つの僧侶そうりよの謗法ほうぽうと為るの由來專ゆらいもっぱら斯あれに在らずや、然しかれば則すなわち彼の震旦しんたん既に北ため蕃ための為に破られ此の日域にちいきも亦西戎またさいじやうの為に侵ためされんと欲ほす此等これらは且しばらく之これを置く。

像法ぞうぽうに入つて一千年・月氏がっしの佛法ぶつぽう・漢土かんどに渡來するの間・前四百年には南しよし北しよしの諸師いぎらんぎく・異義蘭菊いぎらんぎくにして東西の佛法ぶつぽう未だ定まらず、四百年の後・五百年のそ前ちゆうげん其なんがくの間てんだい・一百年の間に南岳かんど・天台等漢土しゅつげんに出現ほほほつけして粗法華じつぎの実義ぐせんを弘宣したまう然しかるにえんね而じやう円慧おい・円定じやうに於ては国師いえどたりと雖も円頓えんどんの戒場いま未だ之これを建立こんりゆうせ

ず故に国を挙つて戒師と仰がず、六百年の已後法相宗西天より来れり太宗
皇帝之を用ゆる故に天台法華宗に帰依するの人漸く薄し、茲に就いて隙を得
て則天皇后の御宇に先に破られし華嚴亦起つて天台宗に勝れたるの由之を
称す、太宗より第八代・玄宗皇帝の御宇に真言始めて月氏より来れり所謂開元
四年には善無畏三蔵の大日経・蘇悉地経・開元八年には金剛智・不空の両
三蔵の金剛頂経此くの如く三経を天竺より漢土に持ち来り、天台の釈を見聞
して智発して釈を作つて大日経と法華経とを一經と為し其の上印・真言を
加えて密教と号し之に勝るの由、結句權教を以て実教を下す漢土の学者・
此の事を知らず。

像法の末・八百年に相当つて伝教大師・和国に託生して華嚴宗等の六宗
の邪義を糾明するのみに非ずしかのみならず南岳・天台も未だ弘めたまわざ
る円頓戒壇を叡山に建立す、日本一州の学者一人も残らず大師の門弟と為る、

但天台と真言との勝劣に於ては誑惑と知つて而も分明ならず、所詮末法に贈りたもつか此等は傍論為るの故に且らく之を置く、吾が師・伝教大師三國に未だ弘まらざるの円頓の大戒壇を叡山に建立したもう此れ偏に上薬を持ち用いて衆生の重病を治せんと為る是なり。

今末法に入つて二百二十余年五濁強盛にして三災頻りに起り衆見の二濁國中に充滿し逆謗の二輩四海に散在す、専ら一闡提の輩を仰いで棟梁と恃怙謗法の者を尊重して国師と為す、孔丘の孝經之を提げて父母の頭を打ち釈尊の法華經を口に誦しながら教主に違背す・不孝国は此の国なり勝母の閻他境に求めじ、故に青天・眼を瞋らして此の国を睨み黄地は憤りを含んで大地を震う、去る正嘉元年の大地動・文永元年の大彗星・此等の天災は仏滅後二千二百二十余年の間・月氏・漢土・日本の内に未だ出現せざる所の大難なり、彼の弗舍密多羅王の五天の寺塔を焼失し漢土の会昌天子の九国の

そくに げんぞく ちょうか
僧尼を還俗せしめしに超過すること百千倍なり大謗法の輩國中に充滿し
いてん はびこ
一天に弥るに依つて起る所の天災なり、大般涅槃經に云く「末法に入つて
ふこうほうぼう だいぢみじん こと
不孝謗法の者大地微塵の如し」意、法滅尽經に「法滅尽の時は狗犬の僧尼・
ごうがしや こと
恒河沙の如し」等云云意、今親子此の国を見聞するに人毎に此の二の悪有り
これら やから いか
此等の大悪の輩は何なる秘術を以て之を扶救せん、大覺世尊仏眼を以つて
まっぽう かんち
末法を鑒知し此の逆・謗の二罪を対治せしめんが為に一大秘法を留め置きた
いわるほけきようほんもんくじよう しゃくそん ほうじようせかい たほうぶつ ひやくゆじゆん
もう、所謂法華經本門久成の釈尊・宝淨世界の多宝仏・高さ五百由旬広さ
ちゆじゆん ほうとう
二百五十由旬の大宝塔の中に於て二仏座を並べしこと宛も日月の如く十方
ふんじん しょうぶつ ひやくゆじゆん
分身の諸仏は高さ五百由旬の宝樹の下に五由旬の師子の座を並べ敷き衆星
こと れつぎ
の如く列座したもう、四百万億那由佗の大地に三仏二会に充滿したものの儀
けこんじゃくじよう けぞうせかい すぐ しんこん じゆうまん
式は華嚴寂 場の華蔵世界にも勝れ真言兩界の千二百余尊にも超えたり一切
せけん まなこ たいえ おい なんくい あ ほけきよう るつう もろもろ
世間の眼なり、此の大会に於て六難九易を挙げて法華經を流通せんと諸の大

菩薩に諫曉せしむ、金色世界の文殊師利・兜史多宮の弥勒菩薩・宝浄世界の
智積菩薩・補陀落山の觀世音菩薩等・頭陀第一の大迦葉・智慧第一の舍利弗
等・三千世界を統領する無量の梵天・須弥の頂に居住する無辺の帝釈・
一四天下を照耀せる阿僧祇の日月・十方の仏法を護持する恒沙の四天王・
大地微塵の諸の竜王等我にも我にも此の経を付嘱せられよと競い望みしかど
も世尊都て之を許したまわず、爾の時に下方の大地より未見今見の四大菩薩
を召し出したもう、所謂上行菩薩・無辺行菩薩・淨行菩薩・安立行菩薩
なり、此の大菩薩各各六万恒河沙の眷属を具足す形貌威儀言を以て宣べ難く
心を以て量るべからず、初成道の法慧・功德林・金剛幢・金剛藏等の四菩薩
各各十恒河沙の眷属を具足し仏会を莊嚴せしも大集經の欲・色二界の中間
大宝坊に於て來臨せし十方の諸大菩薩乃至大日經の八葉の中の四大菩薩も
金剛頂經の三十七尊の中の十六大菩薩等も此の四大菩薩に比すれば猶

帝たいしゃく釈えんこうと猿猴えんこうと華山くわざんと妙高めうこうとの如ごとし、弥勒菩薩みろくぼさつ・衆しゆの疑うたがいを挙あげて云いわく「乃いまし一人ひとりをも識しらず」等云云、天台大師てんだいだいし云いわく「寂じやく場くじようより已降このかた今座いまざより已往いおう十方じふぱうの大士だいし来会らいえ絶ええず限べる可べからずと雖いえども我われ補処ふしよの智力ちりよくを以もつて悉ことごとく知しる而しかも此この衆しゆに於おては一人ひとりをも識しらず」等云云、妙楽めうらく云いわく「今いま見るに皆みな識しらざる所以ゆゑんは乃至な智人ないしちじんは起おを知しり蛇へびは自みづから蛇へびを識しる」等云云、天台又また云いわく「雨あめの猛たけきを見て竜りゆうの大だいなるを知しり華けの盛さかなるを見て池いけの深ふかきを知る」云云、例たとへせば漢王かんわうの四將ししやうの張良ちやうりやう・樊はん・陳平ちんへい・周勃しうはつの四人しにんを商山しやうざんの四皓しこう・綺里きりき枳き・角里先生かくりせんしやう・東園公かうこん・夏黄公かこうこう等の四賢しけんに比ひするが如ごとし天地雲泥てんちうんでいなり、四皓しこうが為ため体頭たいとうには白雪はくせつを頂いたき額かきには四海しかいの波なみを疊かさみ眉まゆには半月はんげつを移うつし腰こしには多羅枝たらしを張けり惠帝けいていの左右さうに侍しやうして世よを治さめられたる事こと・堯ぎやう・舜しゆんの古ふるを移うつし一天安穩いつてんあんなりし事こと・神農しんなんの昔むかしにも異いならず、此この四大菩薩はふさつも亦復また是かくの如ごとし法華ほつけの会かいに出現しゆつげんし三仏さんぶつを莊嚴そうごんし謗人ぼうじんの慢幢まんどうを倒たふすこと大風たいふうの小樹しょうじゆの枝えを吹ふ

くが如く衆会の敬心を致すこと諸天の帝釈に従うが如く提婆が仏を打ちしも
舌を出して掌を合せ瞿伽梨が無実を構えしも地に臥して失を悔ゆ、文殊等
の大聖は身を慙ぢて言を出さず舍利弗等の小聖は智を失して頭を低る、爾の
時に大覺世尊・寿命品を演説し然して後に十神力を示現して四大菩薩に付属
したもう、其の所属の法は何物ぞや、法華經の中にも広を捨て略を取り略を
捨てて要を取る所謂妙法蓮華經の五字・名・体・宗・用・教の五重玄なり、
例せば九苞淵が相馬の法には玄黄を略して駿逸を取り史陶林が講經の法には
細科を捨て元意を取るが如し等、此の四大菩薩は釈尊・成道の始、寂滅道場
の砌にも来らず如来入滅の終りに拔提河の辺にも至らずしかのみならず
靈山八年の間に進んでは迹門・序正の儀式に文殊・弥勒等の發起影向の諸
聖衆にも列ならず、退いては本門・流通の座席に觀音・妙音等の発誓弘經の
諸大士にも交わらず、但此の一大秘法を持して本処に隱居するの後・仏の

滅後正像二千年の間に於て未だ一度も出現せず、所詮・仏専ら末法の時に限つて此等の大士に付属せし故なり、法華經の分別功德品に云く「惡世末法の時能く是の經を持つ者」云云、涅槃經に云く「譬えば七子の父母平等ならざるに非ず然も病者に於て心則ち偏に重きが如し」云云、法華經の藥王品に云く「此の經は則ち為れ閻浮提の人の病の良藥なり」云云、七子の中に上の六子は且らく之を置く第七の病子は一闍提の人・五逆謗法の者・末代惡世の日本國の一切衆生なり、正法一千年の前五百年には一切の聲聞涅槃了んぬ、後の五百年には他方來の菩薩・大体本土に還り向い了んぬ、像法に入つての一千年には文殊・觀音・藥王・彌勒等・南岳・天台と誕生し傳大士・行基・伝教等と示現して衆生を利益す。

今末法に入つて此等の諸大士も皆本処に隱居しぬ、其の外・閻浮守護の天神・地祇も・或は他方に去り・或は此の土に住すれども惡國を守護せず・或は

ほうみ な 法味を嘗めざれば守護の力無し、例せば法身の居士に非ざれば三惡道に入ら
れざるが如し大苦忍び難きが故なり、而るに地涌千界の大菩薩・一には
しゃばせかい 娑婆世界に住すること多塵劫なり二には釈尊に随つて久遠より已來初發心の
でし 弟子なり三には娑婆世界の衆生の最初下種の菩薩なり、是くの如き等の宿縁
ほうべん しょうだいぼさつ ちようか の方便・諸大菩薩に超過せり。

問うて曰く其の証拠如何、法華第五涌出品に云く「爾の時に他方の国土よ
もろもろ 諸の來れる菩薩摩訶薩の八恒河沙の数に過ぎたる乃至爾の時に仏諸の菩薩
まかさつ 摩訶薩衆に告げたまわく・止みね善男子汝等が此の經を護持せんことを須い
じ」等云云、天台云く「他方は此の土結縁の事浅し宣授せんと欲すと雖も必
ず巨益無し」云云、妙樂云く「尚偏に他方の菩薩に付せず豈独り身子のみな
らんや」云云、又云く「告八万大士とは乃至今の下の文に下方を召すが如く尚
けんぞく 本眷屬を待つ驗し余は未だ堪えざることを」云云、經釈の心は迦葉舍利弗

等の一切いっさいの聲聞しょうもん・文殊もんじゆ・藥王やくおう・觀音かんのん・弥勒みろく等の迹化しゃつけ・他方たほうの諸大士しよだいは末世しよだいの
弘經くきように堪たえずと云いなり、經きやうに云いく「我が娑婆世界しやばせかいに自ら六万恒河沙ごうがしや等の
菩薩摩訶薩ぼさつまかさつ有り一の菩薩ぼさつに各六万恒河沙ごうがしやの眷属けんぞく有り是この諸人等しよにん能よく我が
滅後めつごに於おいて護持ごじし誦誦どくじゆし廣く此この經きやうを説とかん、仏是これを説ときたもう時とき・娑婆世界しやばせかい
の三千大千さんぜんの国土こくど・地皆震裂みなして其その中うちより無量千万億むりようせんまんの菩薩摩訶薩ぼさつまかさつ有り
同時どうじに涌出ゆじゆつせり、乃至是ないしこの菩薩衆ぼさつしゆうの中に四どうしたり導師だうし有り一いっをば上行じやうぎやうと名なけ
二にをば無辺行むへんぎやうと名なけ三さんをば淨行じやうぎやうと名なけ四しをば安立行あんりちうぎやうと名なく其その衆しゆうの中に
於おいて最も為な上首唱導じやうしやうだうの師しなり」等云云てんだい云云こ、是これ我が弟子でし心しんに我が
法ひふを弘ひろむべし」云云みやうちく云云こ、子父しふの法ひふを弘ひろむ」云云だうせん道暹だうせん云云こ、「付属ふぞくとは
此ただの經きやうは唯ただ下方涌出ゆじゆつの菩薩ぼさつに付ゆえす何しかが故こに爾しかる法こ是これ久成くじやうの法ひふなるに由よるが
故ゆえに久成くじやうの人に付ゆえす」等云云これら云云こ、此等この大菩薩末法ぼさつまつぽうの衆生しゆじやうを利益りやくしたもうこと猶なお
魚ういの水すいに練れんれ鳥ちうの天てんに自在じざいなるが如ごとし、濁惡じよくあくの衆生しゆじやう此この大士だいしに遇ぐつて仏種ぶつしゆ

を殖すいつること例せば水精すいしやうの月に向つて水を生じ孔雀くじゃくの雷いかずちの声を聞いて懷妊かいにんするが如ごとし、天台てんだい云く「猶なほ百川の海に潮すべきが如ごとし縁ひかに牽れて応生するも亦復また是くこのの如ごとし」云云。

慧日大聖尊仏眼を以て兼ねて之を鑒かんみたもう故に諸の大聖を捨棄しゃきし此の四聖を召し出して要法を伝え末法の弘通を定むるなり、問うて曰く要法ようほうの經文如何、答えて曰く口伝を以て之を伝えん釈尊然後正像二千年の衆生しゆじやうの爲に宝塔より出でて虚空に住立し右の手を以て文殊・觀音・梵帝・日月にちがつの爲に四天等の頂いただきを摩なでて是くかくの如く三反して法華經の要ほけきよりの外ほかの広略二門こうりやく並びに前後の一代の一切經を此等の大士に付属ふぞくす正像二千年の機きの爲なり、其の後涅槃經の会に至つて重ねて法華經並びに前四味の諸經を説いて文殊等もんじゆの諸大菩薩に授与したもう、此等は拾の遺属なり。

爰を以て滅後の弘經に於ても仏の所属に随つて弘法の限り有り然れば則ち

かしょう 迦葉・阿難等は一向に小乗經を弘通して大乘經を申べず、竜樹・無著
こんだいじようきよう 等は権大乘經を申べて一乘經を弘通せず、設い之を申べしかども纔かに
これ 以て之を指示し・或は迹門の一分のみ之を宣べて全く化道の始終を談ぜず、
なんかく てんたい 南岳・天台等は觀音・藥王等の化身と為て小大権実・迹本二門・化道の始終
してい おんこん 師弟の遠近等悉く之を宣べ其の上に已今当の三説を立てて一代超過の由を
てんじく 判ぜること天竺の諸論にも勝れ真丹の衆釈にも過ぎたり旧訳・新訳の三蔵
あた も宛かも此の師には及ばず、顯密二道の元祖も敵対に非ず、然りと雖も広略
な いま 之を以て本と為して未だ肝要に能わす・自身之を存すと雖も敢て他伝に及ばず
こ ひとえ 此れ偏に付属を重んぜしが故なり、伝教大師は仏の滅後・一千八百年・
ぞうほう 像法の末に相当つて日本国に生れて小乗・大乘・一乗の諸戒一一に之を
ぶんべつ 分別し 梵網・瓔珞の別受戒を以て小乗の二百五十戒を破失し又法華・
ふげん 普賢の円頓の大王の戒を以て諸大乘經の臣民の戒を責め下す、此の大戒は

りようぜん
靈山八年を除いて一閻浮提の内に未だ有らざる所の大戒場を叡山に建立す、
しかはつしゅう
然る間八宗共に偏執を倒し一國を挙げて弟子と爲る、觀勒の流の三論・
じようじつ
成実道昭の渡せる法相・俱舍良弁の伝うる所の華嚴宗・鑒真和尚の渡す所
りつしゅう
の律宗・弘法大師の門弟等誰か円頓の大戒を持たざらん此の義に違背するは
ぎやくろ
逆路の人なり、此の戒を信仰するは伝教大師の門徒なり日本一州・円機純一
おんこん
・朝野遠近・同帰一乘とは是の謂か、此の外は漢土の三論宗の吉蔵大師並び
いちじよう
に一百余人・法相宗の慈恩大師・華嚴宗の法蔵・澄觀・真言宗の善無畏・
ほんそつしゅう
金剛智・不空・慧果日本の弘法・慈覺等の三蔵の諸師は四依の大士に非ざる
ふくう
暗師なり愚人なり、經に於ては大小・権実の旨を弁えず顯・密兩道の趣を知
けいかにほん
らず論に於ては通申と別申とを糾さず申と不申とを曉めず、然りと雖も彼の
つうしん
宗宗の末学等・此の諸師を崇敬して之を聖人と号し之を國師と尊ぶ今先ず一
まつかく
を挙げんに万を察せよ。

弘法大師の十住心論・秘藏宝鑰・二教論等に云く、此くの如き乗乘自乗に名を得れども後に望めば戲論と作る」又云く「無明の辺域」又云く「震旦の大師等諍つて醍醐を盗み各自宗に名く」等云云、釈の心は法華の大法を華嚴と大日経とに對して・戲論の法と蔑り無明の辺域と下し・剩え震旦一國の諸師を盗人と罵る、此れ等の謗法・謗人は慈恩得一の三乘真實・一乘方便の誑言にも超過し善導・法然が千中無一・捨閑閑拋の過言にも雲泥せるなり、六波羅蜜經をば唐の末に不空三藏・月氏より之を渡す後漢より唐の始めに至るまで未だ此の經有らず南三北七の碩德未だ此の經を見ず三論・天台・法相・華嚴の大師誰人が彼の經の醍醐を盗まんや、又彼の經の中に法華經は醍醐に非ずというの文之有りや不や、而るに日本國の東寺の門人等堅く之を信じて種種に僻見を起し非より非を増し・暗より暗に入る不便の次第なり。彼の門家の伝法院の本願たる正覺の舍利講式に云く「尊高なる者は不二

摩訶衍の仏・驢牛の三身は車を扶くこと能ず秘奥なる者は両部曼陀羅の教
・顯乗の四法の人は履をも取るに能えず云云、三論・天台・法相・華嚴等
の元祖等を真言の師に相對するに牛飼にも及ばず力者にも足らずと書ける筆
なり、乞ひ願わくは彼の門徒等心在らん人は之を案ぜよ大惡口に非ずや大謗法
に非ずや、所詮此等の誑言は弘法大師の望後作戲論の惡口より起るか、教主
釈尊・多宝・十方の諸仏は法華經を以て已今當の諸説に相對して皆是眞實
と定め然る後世尊は靈山に隱居し多宝諸仏は各本土に還りたまひぬ、三仏を
除くの外誰か之を破失せん。

就中弘法所覽の眞言經の中に三説を悔い還すの文之有りや不や、弘法既に
之を出さず末学の智如何せん而るに弘法大師一人のみ法華經を華嚴・大日の
二經に相對して戲論盜人と爲す所詮釈尊・多宝・十方の諸仏を以て盜人と
稱するか末学等眼を閉じて之を案ぜよ。

問うて曰く昔より已来未だ曾て此くの如きの謗言を聞かず何ぞ上古清代の貴僧に違背して寧ろ当今濁世の愚侶を帰仰せんや、答えて曰く汝が言う所の如くば愚人は定んで理運なりと思わんか然れども此等は皆人の偽言に因つて如来の金言を知らざるなり、大覺世尊・涅槃經に滅後を警めて言く「善男子我が所説に於て若し疑を生ずる者は尚受くべからず」云云、然るに仏尚我が所説なりと雖も不審有らば之を叙用せざれとなり、今予を諸師に比べて謗難を加う、然りと雖も敢て私曲を構えず専ら釈尊の遺誡に順つて諸人の謬釈を糾すものなり。

夫れ齊の始めより梁の末に至るまで二百余年の間・南北の碩徳・光宅・智誕等の二百余人涅槃經の「我等悉名邪見之人」の文を引いて法華經を以て邪見之經と定め一國の僧尼並びに王臣等を迷惑せしむ、陳隋の比智者大師これを糾明せし時始めて南北の僻見を破り了んぬ、唐の始めに太宗の御宇に

基法師・勝鬘經の「若如来随彼所欲而方便説・即是大乘無有二乘」の文を
引いて一乘方便・三乘眞実の義を立つ此の邪義・震旦に流布するのみに
あらず、日本の得一が称徳天皇の御時盛んに非義を談ず、爰に伝教大師悉く彼
の邪見を破し了んぬ、後鳥羽院の御代に源空・法然・観無量寿經の読誦大乘
の一句を以て法華經を摂入し、還つて称名念仏に対すれば雑行方便なれ
ば捨閉閣抛せよ」等云云。

然りと雖も五十余年の間・南都・北京・五畿・七道の諸寺・諸山の衆僧等
・此の悪義を破ること能はざりき予が難破分明爲るの間・一国の諸人忽ち彼
の選択集を捨て了んぬ根露るれば枝枯れ源乾けば流竭くとは蓋し此の謂
なるか、加之ならず唐の半玄宗皇帝の御代に善無畏・不空等大日經の
住心品の如実一道心の一句に於て法華經を摂入し返つて権經と下す、日本
の弘法大師は六波羅蜜經の五藏の中に第四の熟蘇味の般若波羅蜜藏に於て

ほけきよう　ねはんぎよう　しようにゆう　だらにぞう　そうたい　だいご
法華經・涅槃經等を撰入し第五の陀羅尼藏に相對して争つて醍醐を盗む等
云云、此等の禍咎は日本一州の内・四百余年・今に未だ之を糾明せし人あら
ず予が所存の難勢　く　一國に滿つ必ず彼の邪義を破られんか此等は且らく
之を止む。

かしよう　あなん　りゆうじゆ　てんじん　てんだい　でんぎよう　しやだいしようにん　しか　いま
迦葉・阿難等・竜樹・天親等・天台・伝教等の諸大聖人知つて而も未だ
弘宣せざる所の肝要の秘法は法華經の文赫赫たり論釈等に載せざること明明
なり生知は自ら知るべし賢人は明師に値遇して之を信ぜよ罪根深重の輩は
邪推を以て人を輕しめ之を信ぜず且く耳に停め本意に付かば之を喻さん、
だいしつきよう　だいかくせそん　ぼさつ　かた　いわ　めつこ　おい
大集經の五十一に大覺世尊・月蔵菩薩に語つて云く「我が滅後に於て五百年
の中は解脱堅固・次の五百年は禪定堅固、一千年次の五百年は読誦多聞堅固・
次の五百年は多造塔寺堅固、二千年次の五百年は我が法の中に於て鬪諍言訟し
て白法隱没せん」等云云、今末法に入つて二百二十余年・我法中鬪諍言訟

・白法隱没の時に相当れり、法華經の第七藥王品に教主 釈尊・多宝仏と共に宿王華菩薩に語つて云く「我が滅度の後・後の五百歳の中に広宣流布して閻浮提に於て断絶して惡魔・魔民諸の天竜・夜叉・鳩槃荼等に其の便を得せしむこと無けん」大集經の文を以て之を案ずるに前四箇度の五百年は仏の記文の如く既に符合せしめ了んぬ、第五の五百歳的一件事豈唐捐ならん、随つて当世の体為る大日本国と大蒙古国と鬪諍合戦す第五の五百に相当れるか、彼の大集經の文を以て此の法華經の文を惟うに後・五百歳中広宣流布・於閻浮提の鳳詔・豈扶桑国に非ずや、弥勒菩薩の瑜伽論に云く「東方に小国有り其の中に唯大乘の種姓のみ有り」云云、慈氏菩薩・仏の滅後九百年に相当つて無著菩薩の請に赴いて中印度に來下して瑜伽論を演説す、是れ・或は権機に随い・或は付属に順い・或は時に依つて權經を弘通す、然りと雖も法華經の涌出品の時・地涌の菩薩を見て近成を疑うの間・仏・請に赴いて

じゆりようばん えんぜつ ぶんべつくだく
寿命品を演説し分別功德品に至つて地涌の菩薩を勧奨して云く「悪世末法
の時能く是の経を持たん者」と、弥勒菩薩自身の付属に非ざれば之を弘めず
と雖も親り靈山会上に於て悪世末法時の金言を聴聞せし故に瑜伽論を説く
の時末法に日本国に於て地涌の菩薩・法華經の肝心を流布せしむ可きの由・
兼ねて之を示すなり、肇公の翻經の記に云く「大師須梨耶蘇摩左の手に
法華經を持し右の手に鳩摩羅什の頂を摩で授与して云く仏・日西に入つて
遺耀將に東に及ばんとす此の經典東北に縁有り汝慎んで伝弘せよ」云云、
予此の記の文を拝見して両眼滝の如く一身悦びをくす、「此の經典東北
に縁有りニ云云西天の月支国は未申の方・東方の日本国は丑寅の方なり、天竺
に於て東北に縁有りとは豈日本国に非ずや、遵式の筆に云く「始め西より伝
う猶月の生ずるが如し今復東より返る猶日の昇るが如し」ニ云云、正像二千年
には西より東に流る暮月の西空より始まるが如し末法五百年には東より西に

入る朝日の東天より出ずるに似たり、根本大師の記に云く、「代を語れば則ち
像の終り末の初・地を尋ぬれば唐の東・羯の西・人を原ぬれば則ち五濁の生
・鬪諍の時なり、經に云く猶多怨嫉・況滅度後と此の言良に以有るが故に」
云云、又云く、「正像稍過ぎ已つて末法太だ近きに有り法華一乘の機・今
正しく是れ其の時なり何を以て知る事を得ん安樂行品に云く末世法滅の時な
り」云云此の釈は語美しく心隠れたり、読まん人之を解し難きか、伝教大師
の語は我が時に似て心は末法を樂いたもうなり、大師出現の時は仏の滅後
・一千八百余年なり、大集經の文を以て之を勸うるに大師存生の時は第四
の多造塔寺堅固の時に相當る全く第五鬪諍堅固の時に非ず、而るに余処の釈
に末法太有近の言は有り定めて知んぬ鬪諍堅固の筆は我が時を指すに非ざる
なり。

予倩事の情を案ずるに大師藥王菩薩として靈山會上に侍して仏・

じようぎようぼさつしゅつげん
上行菩薩 出現の時を兼ねて之を記したもう故に粗之を喩すか、而るに予地涌
いちぶん あら
の一分に非ざれども兼ねて此の事を知る故に地涌の居士に前立ちて粗五字を
せいおうほ せんそう せいちょう
示す例せば西王母の先相には青鳥・客人の来るには 鵲の如し、此の大法
ぐつう
を弘通せしむるの法には必ず一代の聖教を安置し八宗の章疏を習学すべ
しか すなわ しよじ しようきよう
し然れば則ち予所持の聖教 多多之有り、然りと雖も両度の御勘気・衆度の
だいなん
大難の時は・或は一卷・二巻散失し・或は一字・二字脱落し・或は魚魯の
あやまり ある
謬・或は一部二部損朽す、若し黙止して一期を過ぐるの後には弟子等定ん
びようらんしゅつたい
で謬乱 出来の基なり、爰を以つて愚身老耄已前に之を 糾調 せんと欲す、
し か
而るに風聞の如くんば貴辺並びに大田金吾殿・越中の御所領の内並びに近辺
あまた しようきよう
の寺に数多の聖教 あり等云云、兩人共に大檀那為り所願を成ぜしめたま
ねはんぎよう
え、涅槃經に云く「内には智慧の弟子有つて甚深の義を解り外には 清淨の
い わ ちえ でし じんじん さと しようじよう
檀越有つて仏法久住せん」云云、天台大師は毛喜等を相語らい伝教大師は
だんのつ ぶつ ぽうくじゆう てんだいだいし もうき かた でんぎようだいし

くにみちひろよ
国道弘世等を恃怙む云云。

仁王經に云く

千里の内をして七難起らざらしむ」云云、法華經に云く

百由旬の内に諸の衰患無からしむ」云云、

國主正法を弘通すれば必ず此

の徳を備う臣民等・此の法を守護せんに豈家内の大難を払わざらんや、又

法華經の第八に云く

所願虚しからず亦現世に於て其の福報を得ん」又云く

「当に今世に於て現の果報を得べし」云云、又云く「此の人は現世に白癩の

病いを得ん」又云く「頭破れて七分と作らん」又第二卷に云く「經を讀誦し書持

すること有らん者を見て輕賤憎嫉して結恨を懷かん乃至其の人命終して

阿鼻獄に入らん」云云、第五の卷に云く「若し人惡み罵らば口則ち閉塞せん」

云云、伝教大師の云く「讚する者は福を安明に積み謗する者は罪を無間に

開く」等云云、安明とは須弥山の名なり、無間とは阿鼻の別名なり、國主持者

を誹謗せば位を失ひ臣民行者を毀訾すれば身を喪す一國を挙りて用いざれば

定めて自反他逼出来せしむべきなり、又上品の行者は大の七難中品の行者は二十九難の内・下品の行者は無量の難の随一なり、又大の七難に於て七人有り第一は日月の難なり第一の内に又五の大難有り所謂日月度を失し時節反逆し・或は赤日出で・或は黒日出で二三四五の日出ず・或は日蝕して光無く・或は日輪一重二三四五重輪現ぜん、又経に云く、「二の月並び出でん」と、今・此の国土に有らざるは二の日・二の月等の大難なり余の難は大體之有り、今・此の龜鏡を以て日本国を浮べ見るに必ず法華經の大行者有るか、既に之を謗る者に大罰有り之を信ずる者何ぞ大福無からん。

今兩人微力を励まし予が願に力を副え仏の金言を試みよ經文の如く之を行ぜんに徴無くんば釈尊正直の經文多宝証明の誠言・十方分身の諸仏の舌相・有言無実と為らんか、提婆の大妄語に過ぎ瞿伽利の大誑言に超えたらん日月地に落ち大地反覆し天を仰いで声を発し地に臥して胸を押う殷の湯王

の玉体を薪たきぎに積み戒日大王だいおうの竜顔りゅうがんを火に入れしも今・此の時に当るか、若しも
此の書を見聞けんもんして宿習しゆくじゅう有らば其その心を発得はつとくすべし、使者に此の書を持たし
め早早北国に差し遣し金吾殿きんごの返報を取りて速速是非を聞かしめよ、此の願
若し成もぜば崑崙山こんろんの玉鮮あざやかに求めずして蔵おさに収まり大海たいかいの宝珠招ほうしゅまねかざるに
掌たなこころに在らん、恐惶謹言きようこうきんげん。

下春十日

にちれんかおう
日蓮花押

そや じゆうじつ
曾谷入道殿

大田金吾殿

一六三 法蓮抄

建治元年がんねん 五十四歳御作 与曾谷法蓮日礼そや

1040p

そ
夫れおも以みれば法華經第四の法師品ほうしほんに云く、若し悪人あくにん有つて不善の心を以て一劫いつこう
おもんおもんみればほけきよう
おい げん ぶつぜん おい
の中に於て現に仏前に於て常に仏を毀罵きめせん其その罪尚輕し若し人・一つの

悪言あくげんを以もつて在家ざいけ・出家しゅつけの法華經ほけきょうを讀誦どくじゆする者を毀きしせん其その罪つみ甚なほだ重おもし」
等云みょうらくだいしいわ、妙樂大師しやうがくだいし云しかく、然しかも此この經きやうもんの功高こうかうく理絶りてつえたるに約やくして此この説せつを作なす
ことを得よきようる余經よきようは然しからず」等云しやうもん、此この經文きやうもんの心こころは一劫いつこうとは人壽にんじゆう八万歳はちまんあ
りしより百年ひゃくねんに一歳いっさいをすて千年せんねんに十歳じゅうさいをすつ此この如ごとく次第しだいに減へずる程ほどに
人壽にんじゆう十歳じゅうさいになりぬ、此この十歳じゅうさいの時ときは當時とうじの八十はちじゅうの翁おきなのごとし、又人壽にんじゆう十歳じゅうさい
より百年ひゃくねんありて十一歳じゅういちさいとなり又百年ひゃくねんありて十二歳じゅうにしさいとなり乃至なほ一千年いっせんねんあらば二
十歳じゅうさいとなるべし乃至なほ八万歳はちまんとなる、此この一減いっけん一増いっさうを一劫いつこうとは申もうすなり、又種しゆじゆ種じゆ
の劫いつこうありといへども且しかばく此この劫いつこうを以もつて申もうすべし、此この一劫いつこうが間かん・身口意しんくういの三
業さんごふより事ことおこりて仏ぶつをにくみたてまつる者ものあるべし例たとせば提婆達多だいばだつたがごとし、
仏ぶつは淨飯王じやうはんの太子たいし・提婆達多だいばだつたは斛飯王こくはんの子こなり、兄弟きやうだいの子息しそくなる間かん・仏ぶつの
御ごいとこにてををはせしかども今いまも昔むかしも聖人しやうにんも凡夫ぼんぷも人ひとの中なかつをたがへること
女人にょにんよりして起おこりたる第一だいいちのあだにてはんべるなり、釈迦しやか如來にょらいは悉達しつた太子たいしと

して・をはしし時提婆達多も同じ太子なり、耶輸大臣に女あり耶輸多羅女となづく五天竺第一の美女・四海名譽の天女なり、悉達と提婆と共に後にせん事をあらそひ給ひし故に中あしくならせ給ひぬ、後に悉達は出家して仏とならせ給ひ提婆達多・又須陀比丘を師として出家し給ひぬ、仏は二百五十戒を持ち三千の威儀をととのへ給ひしかば諸の天人これを渴仰し四衆これを恭敬す、提婆達多を人たとまざりしかば・いかにしてか世間の名譽・仏にすぎんと・はげみしほどにとかう案じいだして仏にすぎて世間にたとまれぬべき事五つあり、四分律に云く一には糞掃衣・二には常乞食・三には一座食・四には常露座・五には塩及び五味を受けず等云云、仏は人の施す衣をうけさせ給う提婆達多は糞掃衣、仏は人の施す食をうけ給う提婆は只常乞食、仏は一日に一二三反も食せさせ給ひ提婆は只一座食、仏は塚間・樹下にも処し給ひ提婆は日中常露座なり、

仏は便宜びんぎにはしを復または五味を服し給たまい提婆だいばはしを等を服せず、かうありしか
ば世間せけん・提婆だいばの仏にすぐれたる事・雲泥うんでいなり、かくのごとくして仏を失うしいた
てまつらんとうかがひし程に頻婆舎羅王は仏の檀那だんななり日に五百輛の車を
数年が間・一度もかかさずおくりて仏・並びに御弟子等を供養くようし奉たてまつる、これ
をそねみ・とらんがために未生怨太子をかたらいて父・頻婆舎羅王を殺させ
我は仏を殺さんとして・或あるは石をもつて仏を打ちたてまつるは身業しんごうなり、仏
は誑惑おあわくの者と罵詈めりせしは口業くごうなり、内心ないしんより宿世すくせの怨あたをもひしは意業いごうなり
三業相応そうおうの大惡此れにはすぐべからず、此の提婆達多だいばだつたほどの大惡人あくにん・三業相応そうおう
して一中劫が間・釈迦しゃか仏を罵詈めり・打杖ちようじようし嫉妬しつとし候はん大罪たいざいはいくらほどか
重しげく候べきや、此の大地だいちは厚さは十六万八千由旬ゆじゆんなりされば四大海の水をも
九山の土石をも三千の草木をも一切衆生をも頂戴ちやうだいして候へども落ちもせず
・かたぶかず破われずして候ぞかし、しかれども提婆達多が身は既すでに五尺の人身じんしん

なりわづかに三逆罪に及びしかば大地破れて地獄に入りぬ、此の穴・天竺に
いまだ候・玄奘三蔵・漢土より月支に修行して此れをみる西域と申す文に
載せられたり、而るに法華經の末代の行者を心にも・をもはず色にもそねま
ず只たわふれてのりて候が上の提婆達多がごとく三業相應して一中劫仏を
罵詈し奉るにすぎて候ととかれて候、何に況や当世の人の提婆達多がごとく
三業相應しての大悪心をもつて多年が間・法華經の行者を罵詈・毀辱・嫉妬
・打擲・讒死・歿死に当てんをや。

問うて云く末代の法華經の行者を怨める者は何なる地獄に墮つるや、答え
て云く法華經の第二に云く、「經を讀誦し書持すること有らん者を見て輕賤
憎嫉して結恨を懷かん乃至其の人命終して阿鼻獄に入らん一劫を具足して
劫尽きなば復死し展轉して無數劫に至らんと等云云、此の大地の下・五百由旬
を過ぎて炎魔王宮あり、その炎魔王宮より下・一千五百由旬が間に八大地獄

並びになら一百三十六の地獄じごくあり、其その中に一百二十八の地獄じごくは輕罪つみの者の住処じゅうしょ・
八大地獄だいいごくは重罪じゅうざいの者の住処じゅうしょなり、八大地獄だいいごくの中に七大地獄だいいごくは十惡じゅうあくの者の
住処じゅうしょなり、第八の無間地獄むげんじごくは五逆ごぎやくと不孝ふこうと誹謗ひぼうとの三人の住処じゅうしょなり、今
法華經ほけきょうの末代まつだいの行者ぎょうじやを戲論けろんにも罵詈めり・誹謗ひぼうせん人人ひとびとはおつべしと説き給たまへる
文ふみなり、法華經ほけきょうの第四法師品ほうしほんに云く、「人有いつて仏道を求めて一劫いつこくの中に於おいて
乃至持經者たんびを歎美そせんは其その福復彼またかしこに過ぎん」等云云、妙樂大師みょうらくだいし云く、「若もし
悩乱のうらんする者は頭いづへ七分わに破れ供養する有らん者は福十号ふくじゅうごうに過すぐ」等云云、
夫それ人中にんちゆうには轉輪聖王てんりんじやうおう・第一だいいちなり此の輪王出現りんのうしゆつげんし給たまふべき前相ぜんさうとして大海たいかい
の中に優曇華うどんげと申もうす大木お生おいて華このみさき実こなる、金輪王出現りんのうしゆつげんして四天の山海してん
を平たいらになす大地だいちは縣わたの如ごとくやはらかに大海たいかいは甘露かんろの如ごとくあまく大山は金山・
草木そうもくは七宝しつぽうなり、此の輪王須臾りんのうしゆゆの間に四天下してんげをめぐる、されば天も守護しゆごし鬼神きじん
も来きつてつかへ竜王りゆうおうも時に随したがつて雨をふらす、劣夫れつぷなんども・これに従したがひ

たてま しゆゆ してんげ
奉れば須臾に四天下をめぐる、是れ偏に転輪王の十善の感得せる大果報なり、
びしゃもん
毘沙門等の四大天王は又これには似るべくもなき四天下の自在の大王なり、
たいしゃく とうりてん
帝釈は 利天の主・第六天の魔王は欲界の頂に居して三界を領す、此れは
じようばん じゅうぜんかい むしゃ だいぜん
上品の十善戒・無遮の大善の所感なり、大梵天王は三界の天尊・色界の頂
こ まおう たいしゃく
に居して魔王・帝釈をしたがへ三千大千界を手になぎる、有漏の禅定を
しゅぎよう
修行せる上に慈・悲・喜・捨の四無量心を修行せる人なり、声聞と申して
しゃりほつ かしよう
舍利弗・迦葉等は二百五十戒・無漏の禅定の上に苦・空・無常・無我の觀を
さんがい けんじ だんじん すいか じざい ゆえ ほんのう たいしゃく
こらし三界の見思を断尽し水火に自在なり故に梵王と帝釈とを眷属とせり、
えんかく しようもん に
縁覚は声聞に似るべくもなき人なり仏と出世をあらそふ人なり、昔獵師あり
き飢えたる世に利と申す辟支仏にひえの飯を一盃供養し奉りて彼の獵師九
いっこう にんちゆうてんじよう ちようじや こんじよう あなりつ もう てんげんだいいち
十一劫が間人中天上の長者と生る、今生には阿那律と申す天眼第一の
おんでし こ みようらくだいししゃく いわ ひえはんかろ いえど しよう およ
御弟子なり、此れを妙樂大師釈して云く「稗飯輕しと雖も所有を尽し及び田

勝るを以ての故に勝る報を得る」等云云、釈の心はひえの飯は輕しといへども貴き辟支仏を供養する故にかかる大果報に度度生るところこそ書かれて候へ、又菩薩と申すは文殊・弥勒等なり、此の大菩薩等は彼の辟支仏に似るべからざる大人なり、仏は四十二品の無明と申す闇を破る妙覺の仏なり、八月十五夜の満月のごとし、此の菩薩等は四十一品の無明をつくして等覺の山の頂にのぼり十四夜の月のごとし、仏と申すは上の諸人には百千万億倍すぐれさせ給へる大人なり、仏には必ず三十二相あり其の相と申すは梵音声・無見頂相肉相・白毫相・乃至・千輻輪相等なり、此の三十二相の中の一相をば百福を以て成じ給へり、百福と申すは仮令大医ありて日本国・漢土・五天竺十六の大国・五百の中国・十千の小国・乃至・一閻浮提・四天下・六欲天・乃至・三千大千世界の一切衆生の眼の盲たるを本の如く一時に開けたらんほどの大功徳を一つの福として此の福・百をかさねて候はんを以て三

十二相の中の一相を成ぜり、されば此の一相の功德は三千大千世界の草木の
数よりも多く四天下の雨の足よりもすぎたり、設い壞劫の時・僧 陀と申す
たいふう
大風ありて須弥山を吹き抜いて色究竟天にあげて・かへつて微塵となす大風
なり、然れども仏の御身の一毛をば動かさず仏の御胸に大火あり平等大慧・
こうみよう
大智光明・火坑三昧と云う、涅槃の時は此の大火を胸より出して一身を焼き
給いしかば六欲・四海の天神・竜衆等・仏を惜み奉る故にあつまりて大雨を
くだ さんぜん だいち
下し三千の大地を水となし須弥は流るといへども此の大火はきへず、仏には
かかる大徳ましますゆへに阿闍世王は十六大国の悪人を集め一四天下の外道
をかたらひ提婆を師として無量の悪人を放ちて仏弟子をのりうち殺害せしの
みならず、賢王にてとがもなかりし父の大王を一尺の釘をもつて七処までう
ちつけ、はつけにし生母をば王のかんざしをきり刀を頭にあてし重罪のつ
もりに悪瘡七処に出でき、三七日を経て三月の七日に大地破れて無間地獄に

墮おちて一劫いつくうを経ふべかりしかども仏ぶつの所に詣もつで惡瘡あくそうゆるのみならず無間地獄むげんじごく
の大苦だいこをまぬかれ四十年しゅみゃうじゅんの壽命じゆみょう延びたりき、又耆婆ぎば大臣だいじんも御ごつかひなりしか
ば炎えんの中に入いつて瞻婆長者せんばちやうじやが子こを取り出だしたりき、之これを以もつて之これを思おもうに一度ひとたび
も仏ぶつを供養くやうし奉たてまつる人ひとはいかなる惡人あくにん・女人にょにんなりとも成仏得道じやうぶつとくどう疑うたが無し、提婆だいば
には三十相さんじうさうあり二相にさうかけたり所謂いわゆる白毫びやくごうと千輻輪せんぷくりんとなり、仏ぶつに二相にさう劣りたりし
かば弟子等でし輕かろく思おもいぬべしとて螢火ほたるびをあつめて眉間みけんにつけて白毫びやくごうと云いひ千
輻輪せんぷくりんには鍛冶たんぎに菊形きくぎやうをつくらせて足あしに付けて行くほどに足焼あしやて大事だいじになり
結句けつこ死しせんとせしかば仏ぶつに申もうす、仏御手ぶつみでを以もつてなで給たまいしかば苦痛くつうさりき、
ここにて改悔かいげあるべきかと思おもひしにさはなくして瞿曇くどうが習くすしふ醫師いしはこざかし
かりけり又術あにて有あるなど云いひしなり、かかる敵あにも仏ぶつは怨あだをなし給たまはず何いかに
況いはや仏ぶつを一度ひとたびも信たてまつじ奉たてまつる者ものをば争いでか捨て給たまうべきや。

かかる仏ぶつなれば木像ぼざう・画像がざうにうつし奉たてまつるに優填大王うでんだいおうの木像ぼざうは歩あゆみをなし摩騰まととう

の画像は一切経を説き給ふ、是れ程に貴き教主釈尊を一時・二時ならず一日・二日ならず一劫が間掌を合せ両眼を仏の御顔にあて頭を低て他事を捨て頭の火を消さんと欲するが如く渴して水を・をもひ飢えて食を思うがごとく間無く供養し奉る功德よりも戲論に一言継母の継子をほむるが如く心ざしなくとも末代の法華經の行者を讃め供養せん功德は彼の三業相應の信心に一劫が間・生身の仏を供養し奉るには百千万億倍すぐべしと説き給いて候、これを妙樂大師は福過十号とは書れて候なり、十号と申すは仏の十の御名なり十号を供養せんよりも末代の法華經の行者を供養せん功德は勝るとかかれたり、妙樂大師は法華經の一切経に勝れたる事を二十あつむる其の一なり、已上・上の二つの法門は仏説にては候へども心えられぬ事なり争か仏を供養し奉るよりも凡夫を供養するがまさるべきや、而れども是を妄語と云はんとすれば釈迦如来の金言を疑い多宝仏の証明を輕しめ十方諸仏の舌相

をやぶるになりぬべし、若し爾らば現身に阿鼻地獄に墮つべし、巖石にのぼりて・あら馬を走らするが如し心肝しづかならず、又信ぜば妙覺の仏にもなりぬべし如何してか今度・法華經に信心をとるべき信なくして此の經を行ぜんは手なくして宝山に入り足なくして千里の道を企つるが如し、但し近き現証を引いて遠き信を取るべし仏の御歳八十の正月一日・法華經を説きおはらせ給て御物語あり、「阿難・弥勒・迦葉・我世に出でし事は法華經を説かんながためなり我既に本懷をとげぬ今は世にありて詮なし今三月ありて二月十五日に涅槃すべし」云云、一切内外の人人疑をなせしかども仏語むなしからざればついに二月十五日に御涅槃ありき、されば仏の金言は実なりけるかと少し信心はとられて候、又仏記し給ふ「我滅度の後・一百年と申さんに阿育大王と申す王出現して一閻浮提三分の一が主となりて八万四千の塔を立て我が舍利を供養すべし」云云、人疑い申さんほどに案の如くに出現して

候いき是よりしてこそ信心しんじんをばとりて候いつれ、又云く「我滅後めつごに四百年と
申もうさんに迦忒色迦王かにしかと申もうす大王あるべし五百の阿羅漢あらかんを集めて婆沙論ばしゃろんを造る
べし」と是又仏記ぶつきのごとなりき、是等これらをもつてこそ仏の記文きもんは信ぜられて
候へ、若もし上に掌かみぶる所の二の法門ほうもん・妄語もうごならば此の一経いつきようは皆妄語みなもうごなるべし、
寿量品じゆりようほんに我は過去五百塵点劫かここひやくじんでんこつのそのかみの仏なりと説き給たまう我等われらは凡夫ほんぶなり
過ぎにし方は生れてより已来このかたすらなをおぼへず況や一生二生をや況や
五百塵点劫ごひやくじんでんこつの事をば争いかでか信しずべきや、又舍利弗等しゃりほつに記して云く「汝未来世なんじみらいせに
於おいて無量無辺不可思議劫むりようむへんふかしぎを過ぎ及至まさ当に作仏さぶつすることを得うべし号げを華光如来けこうにょらい
と曰いわんニ云、又又摩訶迦葉まかしょうに記して云く、未来世みらいせに於おいて乃至最後の身ないしさいごに於おいて
仏なると成なる為なることを得ん名けて光明如来くわうみょうにょらいと曰いわんニ云、此等の経文これらは又未来みらい
の事なれば我等凡夫われらほんぶは信しずべしとおぼえず、されば過去未来かこみらいを知らざらん
凡夫ほんぶは此の経は信しじがたし又修行しゆきようしても何の詮これかあるべき是を以て之を思これう

に現在に眼前の証拠あらんずる人・此の経を説かん時は信ずる人もありやせん。

今法蓮上人の送り給える諷誦の状に云く、「慈父幽靈第十三年の忌辰に相当り一乗・妙法蓮華經五部を転読し奉る」等云云、夫れ教主釈尊をば大覺世尊と号したてまつる、世尊と申す尊の一字を高と申す高と申す一字は又孝と訓ずるなり、一切の孝養の人の中に第一の孝養の人なれば世尊と号し奉る、釈迦如来の御身は金色にして三十二相を備へ給ふ、彼の三十二相の中にむげんちようそつ とう 無見頂相と申すは仏は丈六の御身なれども竹杖外道も其の御長をはからず梵天も其の頂を見ず故に無見頂相と申す是れ孝養第一の大人なればかかる相を備へまします、孝経と申すに二あり一には外典の孔子と申せし聖人の書に孝経あり、二には内典今の法華經是なり、内外異なれども其意は是れ同じ、釈尊塵点劫の間修行して仏にならんとはげみしは何事ぞ孝養の事なり、

然るに六道・四生^{ろくどう ししゅう}の一切衆生^{いっさいしゅじょう}は皆父母^{みなふぼ}なり孝養^{こうよう}おへざりしかば仏にならせ給は^{たま}ず、今法華經^{ほけきょう}と申^{もう}すは一切衆生^{いっさいしゅじょう}を仏になす秘術^{ひじゆつ}まします御經^{いゐゆる}なり、所謂^{いゐゆる}地獄^{じごく}の一人・餓鬼^{がき}の一人・乃至^{ないし}・九界^{くかい}の一人を仏になせば一切衆生^{いっさいしゅじょう}・皆^{みな}仏になるべきことはり顕^{あらわ}る、譬^{たと}えば竹の節^{たて}を一つ破^{わり}ぬれば余の節亦破^{またやぶ}るるが如^{ごと}し、困^{もう}碁^ごと申^{もう}すあそびにしちようと云^いふ事あり一の石死^{いっさい}しぬれば多^{おほく}の石死^{いっさい}ぬ、法華經^{ほけきょう}も又此^こくの如^{ごと}し金^{きん}と申^{もう}すものは本草^{もくそう}を失^{うしな}う用^{よう}を備^いへ水^{みづ}は一切^{いっさい}の火^ひをけす徳^{とく}あり、法華經^{ほけきょう}も又一切衆生^{いっさいしゅじょう}を仏になす用^{よう}おはします、六道^{ろくだう}・四生^{ししゅう}の衆生^{しゅじょう}に男女^{なんよ}あり此^この男女^{なんよ}は皆我^{みなわれ}等^らが先^{せん}生^{しやう}の父母^{ふぼ}なり、一人ももれば仏になるべからず故^{ゆゑ}に二乗^{にじやう}をば不知恩^{ふちおん}の者と定^よめて永不成^{ようふじやう}仏^{ぶつ}と説^{たま}かせ給^{たま}う孝養^{こうよう}の心^{こころ}あまねからざる故^{ゆゑ}なり、仏は法華經^{ほけきょう}をさとらせ給^{たま}いて六道^{ろくだう}・四生^{ししゅう}の父母^{ふぼ}孝養^{こうよう}の功徳^{くどく}を身に備^たへ給^{たま}へり、此^この仏^{ぶつ}の御功徳^{くどく}をば法華經^{ほけきょう}を信^{しん}ずる人にゆづり給^{たま}う、例^{たと}せば悲母^{ひも}の食^{くら}う物^{もの}の乳^ちとなりて赤子^{しやくし}を養^{やしな}うが如^{ごと}し、「今^{いま}・此^この三界^{さんがい}は・皆^{みな}是^これ

我が有なり・其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり」等云云、教主釈尊は此の功德を法華經の文字となして一切衆生の口になめさせ給う、赤子の水火をわきまへず毒藥を知らざれども乳を含めば身命をつぐが如し、阿含經を習う事は舍利弗等の如くならざれども華嚴經をさとる事解脱月等の如くならざれども乃至一代聖教を胸に浮べたる事文殊の如くならざれども一字・一句をも之を聞きし人・仏にならざるはなし、彼の五千の上慢は聞きてさとらず不信の人なり、然れども謗ぜざりしかば三月を経て仏になりనికి「若しは信じ若しは信ぜざれば即ち不動国に生ぜん」と涅槃經に説かるるは此の人の事なり、法華經は不信の者すら謗ぜざれば聞きつるが不思議にて仏になるなり、所謂七步蛇に食れたる人一步乃至七歩をすぎず毒の用の不思議にて八歩をすごさぬなり、又胎内の子の七日の如し必ず七日の内に転じて余の形となる八日をすごさず、今の法蓮上人も又此くの如し教主釈尊の御功德・御身に入

りかはらせ給いぬ、法蓮上人の御身は過去聖靈の御容貌を残しおかれたるなり、たとへば種の苗となり華の菓となるが如し其華は落ちて菓はあり種はかくれて苗は現に見ゆ、法蓮上人の御功德は過去聖靈の御財なり、松さかふれば柏よろこぶ芝かるれば蘭なく情なき草木すら此くの如し何に況や情あらんをや又父子の契をや。

彼の諷誦に云く「慈父閉眼の朝より第十三年の忌辰に至るまで釈迦如来の御前に於て自ら自我偈一卷を誦し奉りて聖靈に回向す」等云云、当時・日本国の人、仏法を信じたるやうには見へて候へども古いまだ仏法のわたらざりし時は仏と申す事も法と申す事も知らず候しを守屋と上宮太子と合戦の後・信ずる人もあり又信ぜざるもあり、漢土も此くの如し摩騰・漢土に入つて後・道士と諍論あり道士まけしかば始て信ずる人もありしかども不信の人多し、されば烏竜と申せし能書は手跡の上手なりしかば人之を用ゆ、然れ

ども仏經ぶきように於おいてはいかなる依怙たのみありしかども書かず最後臨終さいごりんじゆうの時・子息遺しそく遺いりゆうを召まして云いわく汝なんじ我が家に生れて芸能ごうぎをつぐ我が孝養こようには仏經ぶきようを書くべからず殊ことに法華經ほけきようを書く事なかれ、我が本師ほんしの老子ろうしは天尊てんそんなり天に二つの日なし而しかるにに彼の經けいに唯我一人ゆいがいちにんと説だくきくわい第一だいいちなり、若もし遺言ゆいごんを違たがへて書く程ならば忽たちまちに惡靈あくれいとなりて命を断つべしと云つて舌八つにさけて頭七分に破われ五根より血を吐いて死し畢おわんぬ、されども其その子善惡ぜんあくを弁わけざれば我が父の謗法ぼうぼうのゆへに惡相現げんじて阿鼻地獄あびじごくに墮おちたりともしらず遺言ゆいごんにまかせて仏經ぶきようを書く事なし況や口に誦ずする事あらんをや、かく過すぎ行く程に時の王を司馬氏しばしと号たてまつし奉ぶつじる御仏事のありしに書写しよしゃの經あるべしとて漢土第一かんどだいいちの能書たすを尋ねらるるに遺いりゆう遺いりゆうに定まりぬ、召まして仰おおせ付けらるるに再三辞退申せしかば力及およばずして他筆たひつにて一部の經を書かせられけるが、帝王心ていおうしんよからず尚遺いりゆう遺いりゆうを召まして仰おおせに云いわく汝親なんじの遺言ゆいごんとて朕が經を書かざる事其その謂無いわれしと雖も且いえどく之を

免だず但題目計りは書くべしと三度勅定あり、遺いりゆう竜猶辞退申もうす大王竜顔心よか
らずして云いわく天地尚王の進退しんたいなり、然しからば汝なんじが親は即すなわち我が家人にあらずや、
私をもつて公事くじを軽かんずる事あるべからず、題目計りは書くべし若もし然しからず
んば、仏事ぶつじの庭なりといへども速すみやに汝なんじが頭こうべを刎はぬべしとありければ題目計り
書けり、所謂妙法蓮華經卷第一・乃至卷第八等云云、其その暮たそがれに私宅に歸り
て歎なげいて云いわく我親の遺言ゆいごんを背そむき王勅術なき故に仏經を書きて不孝ふこうの者となり
ぬ天神てんじんも地祇ちぎも定んで瞋いかり不孝ふこうの者とおぼすらんとて寝いねる、夜の夢の中に大
光明出現こうみょうしゅつげんせり朝日の照てらすかと思へば天人てんにん・一人庭上に立ち給たまへり又無量むりようの
眷属けんぞくあり、此てんにんの天人の頂上ちようじようの虚空こくうに仏・六十四仏まします、遺いりゆう竜・合掌がつしようし
て問いわうて云いく如何いかなる天人てんにんぞや、答こえて云いく我は是れ汝なんじが父の烏竜おりゆうなり仏法ぶつぽう
を謗ほうぜし故ゆえに舌八しやつにさけ五根より血を出し頭こうべ七分に破われて無間地獄むげんじごくに墮おち
ぬ、彼の臨終りんじゆうの大苦をこそ堪忍かんにんすべしともおぼへざりしに無間むげんの苦は尚百千な

億倍なり、人間にんげんにして鈍刀にぶかをもて爪をはなち鋸のこぎりをもて頸をきられ炭火の

上を歩あゆばせ棘いばらにこめられなんとせし人の苦を此の苦にたとへばかずならず、

如何いかんしてか我が子に告げんと思ひしかどもかなはず、臨終りんじゆうの時・汝なんじを誠いましめて

仏經ぶきようを書くことなかれと遺言ゆいごんせし事のくやしさを申もうすばかりなし、後悔こうかい先にた

たず我が身を恨み舌をせめしかども・かひなかりしに昨日あしたの朝より法華經ほけきようの

始の妙の一字・無間地獄むげんじごくのかなへの上に飛び来つて變じて金色の釈迦しゃか仏とな

る、此の仏三十二相を具し面貌めんみよう満月の如ごとし、大音声おんじようを出して説といて云いわく「仮

令法界あまなくに遍おもく善を断ちたる諸の衆生もろもろも一たび法華經を聞きかば決定けつじようして菩提ぼだい

を成じようぜん」云云、此の文字もんじの中より大雨降だいうりて無間地獄むげんじごくの炎をけす閻魔王えんまおうは

冠かんむりをかたぶけて敬うやまひ獄卒ごくそつは杖をすてて立てり、一切いっさいの罪人ざいにんはいかなる事ぞ

とあはてたり、又法の一字来これり前の如ごとし又蓮・又華・又經・此かくの如ごとし六

十四字来こつて六十四仏となりぬ、無間地獄むげんじごくに仏・六十四体ましませば日月にちがつの

十四字来こつて六十四仏となりぬ、無間地獄むげんじごくに仏・六十四体ましませば日月にちがつの

六十四そらが天に出たるごとし、天より甘露かんろをくだして罪人ざいにんに与ふ、抑おさ此等これらの大善だいぜんは何なる事ことぞと罪人ざいにん等・仏に問い奉りたてまつしかば六十四の仏の答こたへに云く我等われらが金色の身みは栴檀せんた・宝山さんよりも出現しゅつげんせず是は無間地獄むげんじごくにある烏竜おりゅうが子の遺竜いりゅうが書ける法華經八卷の題目だいもくの八八・六十四の文字もんじなり、彼の遺竜いりゅうが手は烏竜おりゅうが生める処ところの身分もんじなり、書ける文字は烏竜おりゅうが書くにてあるなりと説き給たまひいかば無間地獄の罪人等むげんじごく ざいにんは我等われらも娑婆しゃばにありし時は子つまもあり婦けんぞくもあり眷属けんぞくもありき、いかに・と

ぶらはぬやらん又訪へども善根ぜんこんの用の弱くして来らぬやらんと歎なげけども歎なげけども甲斐かいなし、・或あるは一日・二日・一年・二年・半劫はんこく・一劫いつこくになりぬるにかかぜんちしきる善知識ぜんちしきにあひ奉たてまつつて助けられぬるとて我等われらも眷属けんぞくとなりて 利天とつりてんにのぼるか、先なんじず汝なんじをおがまんとて来るなりとかたりしかば、夢の中にうれしさ身にあまりぬ、別れて後又いつの世にか見んと思ひし親のすがたをも見奉りたてまつ仏を

も拝し奉りぬ、六十四仏の物語に云く我等は別の主なし汝は我等が檀那
り、今日よりは汝を親と守護すべし汝・をこたる事なかれ、一期の後は必
ず来つて都率の内院へ導くべしと御約束ありしかば遺竜ことに畏みて誓いて
云く今日以後外典の文字を書く可からず等云云、彼の世親菩薩が小乗經を
誦せじと誓い日蓮が弥陀念仏を申さじと願せしがごとし、さて夢さめて此の
由を王に申す、大王の勅宣に云く此の仏事已に成じぬ此の由を願文に書き
奉れとありしかば勅宣の如くにし、さてこそ漢土・日本国は法華經にはなら
せ給いけれ、此の状は漢土の法華伝記に候。

是は書写の功德なり、五種法師の中には書写は最下の功德なり、何に況や
読誦なんと申すは無量無辺の功德なり、今の施主十三年の間・毎朝読誦せら
るる自我偈の功德は唯仏与仏・乃能究尽なるべし、夫れ法華經は一代聖教
の骨髓なり自我偈は二十八品のたましひなり、三世の諸仏は寿量品を命とし

じゅつぽう ぼさつ じがげ がんもく
十方の菩薩も自我偈を眼目とす、自我偈の功德をば私に申すべからず次下に
ぶんべつとく
分別功德品に載せられたり、此の自我偈を聴聞して仏になりたる人人の数を
あげて候には小千・大千・三千世界の微塵の数をこそあげて候へ、其の上
やくおうぼんいか とくどう じがげ よざん
薬王品已下の六品得道のもの自我偈の余残なり、涅槃經四十卷の中に集りて
候いし五十二類にも自我偈の功德をこそ仏は重ねて説かせ給いしか、されば
じやくめつぽうじょう じゅつぽうせかい じんじゆ ぼさつ てんにん
初め寂滅道場に十方世界微塵数の大菩薩・天人等・雲の如くに集りて候い
だいしつ だいぼん じよ だいにちきよう こんごうちようきよう
し大集・大品の諸聖も大日經・金剛頂經等の千二百余尊も過去に法華經の
じがげ ちようもん ひとびと しんりき
自我偈を聴聞してありし人人、信力よはくして三五の塵点を経しかども今度
しやかぶつ あ たてまつ ほけきよう くとく
釈迦仏に値い奉りて法華經の功德すむ故に靈山をまたずして爾前の經經
を縁として得道なると見えたり。

じゅつぽうせかい じよぶつ じがげ
されば十方世界の諸仏は自我偈を師として仏にならせ給う世界の人の父母
こと ほけきよう じゆりようぼん じよぶつ
の如し、今法華經・寿量品を持つ人は諸仏の命を續ぐ人なり、我が得道なり

し経を持つ人を捨て給う仏あるべしや、若し此れを捨て給はば仏還つて我が
身を捨て給うなるべし、これを以て思うに田村利仁などの様なる兵を三千
人生みたらん女人あるべし、此の女人を敵とせん人は此の三千人の將軍をか
たきに・うくるにあらずや、法華經の自我偈を持つ人を敵とせんは三世の諸仏
を敵とするになるべし、今の法華經の文字は皆生身の仏なり我等は肉眼なれ
ば文字と見るなり、たとへば餓鬼は恒河を火と見る・人は水と見・天人は甘露
と見る、水は一なれども果報にしたがつて見るところ各別なり、此の法華經
の文字は盲目の者は之を見ず肉眼は黒色と見る二乗は虚空と見・菩薩は種種
の色と見・仏種・純熟せる人は仏と見奉る、されば經文に云く「若し能く
持つこと有るは即ち仏身を持つなり」等云云、天台の云く「稽首妙法蓮華經
一帙・八軸・四七品・六万九千三八四・一一文・是真仏・真仏説法利
衆生」等と書かれて候。

之を以て之を案ずるに法蓮法師は毎朝口より金色の文字を出現す此の文字
の数は五百十字なり、一一の文字變じて日輪となり日輪變じて釈迦如来とな
り大光明を放って大地をつきとをし三惡道・無間・大城を照し乃至
東西南北・上方に向つては非想・非非想へものぼりいかなる處にも過去
聖靈のおはすらん處まで尋ね行き給いて彼の聖靈に語り給うらん、我を
ば誰とか思食す我は是れ汝が子息・法蓮が毎朝誦する所の法華經の自我偈の
文字なり、此の文字は汝が眼とならん耳とならん足とならん手とならんと
こそねんごろに語らせ給うらめ、其の時・過去聖靈は我が子息・法蓮は子
にはあらず善知識なりとて娑婆世界に向つておがませ給うらん、是こそ実の
孝養にては候なれ。

そもそもほけきよう

抑法華經を持つと申すは經は一なれども持つ事は時に随つて色色なるべ

し、或は身肉をさひて師に供養して仏になる時もあり、又身を牀として師に

くよう
供養し又身を薪となし、又此の經のために杖木をかほり又精進し又持戒し

かみ
上の如くすれども仏にならぬ時もあり時に依つて不定なるべし、されば

てんだいだいし
天台大師は適時而已と書かれ、章安大師は「取捨得宜不可一向」等云云。

問うて云く何なる時か身肉を供養し何なる時か持戒なるべき、答えて云く

ちしゃ
智者と申すは此くの如き時を知りて法華經を弘通するが第一の秘事なり、た

とへば渴者は水こそ用うる事なれ弓箭兵 杖はよしなし、裸なる者は衣を求

む水は用なし一をもつて万を察すべし、大鬼神ありて法華經を弘通せば身を

ふせ
布施すべし余の衣食は詮なし、惡王あつて法華經を失わば身命をほろぼすと

も随うべからず、持戒精進の大僧等・法華經を弘通するやうにて而も失うな

らば是を知つて責むべし、法華經に云く「我身命を愛せず但だ無上道を惜し

む」云云、涅槃經に云く「寧ろ身命を喪うとも終に王の所説の言教を匿さ

ざれ」等云云、章安大師の云く「寧喪身命不匿教とは身は軽く法は重し身

を死して法を弘む」等云云。

然るに今日蓮は外見の如くば日本第一の僻人なり我が朝六十六箇国・二の

せんまん

ししゅう

じょうげばんにん

あた

びやくにん

にほんこく

わた

島の百千万億の四衆・上下万人に怨まる、仏法・日本国に渡つて七百余年い

これほど

ほけきょう

ゆえ

しよにん

にく

がっし

かんど

まだ是程に法華經の故に諸人に悪まれたる者なし、月氏・漢土にもありとも

えんぶだい

だいいち

びやくにん

ぞかし

かか

きこえず又あるべしともおぼへず、されば一閻浮提第一の僻人ぞかし、かか

かみ

いっちよう

ばんみん

あざけり

かえり

しんるい

まなこ

るものなれば上には一朝の威を恐れ下には万民の嘲を顧みて親類もとぶら

もつ

およ

しゅつせ

せけん

こおも

しよにん

まなこ

はず外人は申すに及ばず出世の恩のみならず世間の恩を蒙りし人も諸人の眼

を

ふさ

が

た

め

な

す

事

を恐れて口をふさがんためにや心に思はねども・そしるよしをなす、数度事

ごかんき

ごおも

とが

ゆきかうひとびと

中

にあひ兩度御勘氣を蒙りしかば我が身の失に当るのみならず、行通人人の中

ある

ごかんき

ある

しよりよう

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

にも・或は御勘氣・或は所領をめされ・或は御内を出され・或は父母・兄弟

に

捨て

らる

さ

れば

付

き

し

人

も

捨

てはてぬ今又付く人もなし、殊に今度の

ごかんき

しざい

し

が

思

は

れ

け

ん

佐

渡

の国につかはされしかば

彼の国へ趣く者は死は多く生は稀なり、からくして行きつきたりしかば殺害
謀叛の者よりも猶重く思はれたり、鎌倉を出でしより日に強敵かさなるが
如し、ありとある人は念仏の持者なり、野を行き山を行くにもそばひらの草木
の風に随つてそよめく声も、かたきの我を責むるかとおぼゆ、やうやく国に
も付きぬ北国の習なれば冬は殊に風はげしく雪ふかし衣薄く食ともし、根を
移されし橘の自然にからたちとなりけるも身の上につみしられたり、栖には
・おばな・かるかや・おひしげれる野中の三昧ばらにおちやぶれたる草堂の
上は雨もり壁は風もたまらぬ傍に昼夜・耳に聞く者はまくらにさゆる風の音、
朝に眼に遮る者は遠近の路を埋む雪なり、現身に餓鬼道を経・寒地獄に墮ち
ぬ、彼の蘇武が十九年の間・胡国に留められて雪を食し李陵が巖窟に入つて
六年養をきてすごしけるも我が身の上なりき。

今適御勘気ゆりたれども鎌倉中にも且くも身をやどし迹を・とどむべき

ところ

処なければ・かかる山中の石のはさま松の下に身を隠し心を静むれども大地を食とし草木を著ざらんより外は食もなく衣も絶えぬる処にいかなる御心ねにて・かく・かきわけて御訪のあるやらん、知らず過去の我が父母の御神の御身に入りかはらせ給うか、又知らず大覺世尊の御めぐみにやあるらん涙こそ・おさへがたく候へ。

問うて云く抑正嘉の大地震・文永の大彗星を見て自他の叛逆・我が朝に法華經を失う故としらせ給うゆへ如何、答えて云く此の二の天災・地天は外典三千余巻にも載せられず三墳・五典・史記等に記する処の大長星・大地震は・或は一尺二尺・一丈二丈・五丈六丈なりいまだ一天には見へず地震も又是くの如し、内典を以て之を勘うるに仏御入滅已後はかかる大瑞出来せず、月支には弗沙密多羅王の五天の仏法を亡し十六大国の寺塔を焼き払い僧尼の頭をはねし時も・かかる瑞はなし、漢土には会昌天子の寺院・四千六

百余所をとどめ僧尼・二十六万五百人を還俗せさせし時も出現せず、我が朝
には欽明の御宇に仏法渡りて守屋・仏法に敵せしにも清盛法師・七大寺を焼
き失い山僧等・園城寺を焼亡せしにも出現せざる大慧星なり。

当に知るべし是よりも大事なる事の一閻浮提の内に出現すべきなりと勘え
て立正安国論を造りて最明寺入道殿に奉る、彼の状に云く詮此の大瑞は他国
より此の国をほろぼすべき先兆なり、禅宗・念仏宗等が法華経を失う故な
り、彼の法師原が頸をきりて鎌倉ゆめの浜にすてずば国正に亡ぶべし等云云、
其の後文永の大慧星の時は又手ににぎりて之を知る、去文永八年九月十二日
の御勘気の時重ねて申して云く予は日本国の棟梁なり我を失うは
国を失うなるべしと今は用いまじけれども後のためにとて申しにき、又去年
の四月八日に平左衛門尉に对面の時蒙古国は何比かよせ候べきと問うに、答
えて云く経文は月日をささず但し天眼のいかり頻りなり今年をばすぐべ

からずと申したりき、是等は如何にして知るべしと人疑うべし予不肖の身なれども法華經を弘通する行者を王臣人民之を怨む間・法華經の座にて守護せんと誓をなせる地神いかりをなして身をふるひ天神身より光を出して此の国をおどす、いかに諫むれども用いざれば結局は人の身に入つて自界叛逆せしめ他国より責むべし。

問うて云く此の事何たる証拠あるや、答う經に云く「悪人を愛敬し善人を治罰するに由るが故に星宿及び風雨皆時を以て行わず」等云云、夫れ天地は国の明鏡なり今・此の国に天災地天あり知るべし国主に失ありと云う事を鏡にうかべたれば之を諍うべからず国主・小禍のある時は天鏡に小災見ゆ今のたいさい大災は当に知るべし大禍ありと云う事を、仁王經には小難は無量なり中難は二十九・大難は七とあり此の經をば一には仁王と名づけ二には天地鏡と名づく、此の国主を天地鏡に移して見るに明白なり、又此の經文に云く「聖人

去らん時は七難ひちなん必ず起るおこ」等云云、当に知るべし此の国に大聖人しょうにん有り、又知るべし彼の聖人しょうにんを国主こくしゅ信ぜずと云う事を。

問うて云く先代せんたいに仏寺を失ひし時何ぞ此の瑞なきや、答えて云く瑞は失のとが輕重けいちようによりて大小あり此の度の瑞は怪むあやしむべし、一度二度にあらず一返二

返にあらず年月ねんげつをふるままに弥盛いよいよなり、之を以て之を察すべし先代せんたいの失とが返に過ぎたる国主こくしゅに失あり、国主の身にて万民を殺し又万臣を殺し又父母を

殺す失とがよりも聖人しょうにんを怨む事あだ・彼に過ぐる事を、今・日本国の王臣おうしん並びに万民ばんみんには月氏がつし・漢土かんと総じて一閻浮提えんぶだいに仏滅後ぶつめつ・二千二百二十余年の間いまだなき

大科だいか・人ごとにあるなり、譬たとえば十方世界じゅうぽうせかいの五逆ごぎやくの者を一処いっしょに集めたるが如し、此の国の一切いっさいの僧は皆みな・提婆だいば・瞿伽利くぎやりが魂を移し国主こくしゅは阿闍世王あじゃせ・

波瑠璃王はるりの化身けしんなり、一切いっさいの臣民しんみんは兩行大臣うぎようだいじん・月称大臣がつしやうだいじん・刹陀耆利等せつたきりの悪人あくにん

をあつめて日本国の民となせり、古は二人・三人・逆罪不孝ふこうの者ありしかば

こそ其その人の在所ざいしょは大地だいちも破われて入りぬれ、今は

此この国こくにに充満じゅうまんせる故ゆえに日本国にほんこくの大地だいち・一時いちじにわれ無間むげんに墮おち入おらざらん外ほかは

一人ひとり・二人ふたりの住所しよじょの墮おつべきやうなし、例たとせば老人ろうじんの一二しらがの白毛しらげをば抜はけど

も老耄ろうもうの時ときは皆白毛みなしらげなれば何を分わけて抜き捨すつべき只ただひとたび一度そりすつに剃そ捨する如ごとくなり、

問いうて云いわく汝なんじが義ぎの如ごときは我が法華經ほけきようの行者ぎやうじやなるを用もちいざるが故ゆえに天変てんべん

地天等ちちやうありと、法華經ほけきよう第八はちに云いく「頭破こつべれて七分しちぶんと作つくらん」と、第五ごに云いく

「若もし人ひと惡にくみ罵ののれば口則くすなわち閉塞へいそくす」等云なく、如何なんぞ數年すうねんが間ま・罵ののとも怨あだとも

其その義ぎなきや、答こたう反詰はんきつして云いく不輕菩薩ふぎようぼさつを毀きし罵のの詈めし打擲ちやうちやくせし人は口閉こうへい

頭破だうはありけるか如何いかん、問しう然しかれば經文きやうもんに相違そうゐする事こと如何いかん、答こたう法華經ほけきようを怨あだむ

人に二人ふたりあり、一人ひとりは先生せんしやうに善根ぜんこんありて今生こんじやうに縁えんを求めて菩提心ぼだいしんを發おこして

仏ぶつになるべき者は・或あるは口閉くふぢ・或あるは頭破だうはる、一人ひとりは先生せんしやうに謗人ぼうじんなり今生こんじやう

にも謗ぼうじ生生じやうじやうに無間地獄むげんじこくの業じやうじゆを成就じやうじゆせる者ものあり是こゝはのれども口則くすなわち閉塞へいそくせ

ず、譬^{たと}えば獄^{ごく}に入^いつて死罪^{しざい}に定^{さだ}まる者は獄^{ごく}の中^{なか}にて何^{いか}なる僻事^{ひがこと}あれども死罪^{しざい}を行^いうま^までにて別^{べつ}の失^{とが}なし、ゆりぬべき者は獄^{ごく}中^{ちゆう}にて僻事^{ひがこと}あれば・これをいましむるが如^{ごと}し、問^とうて云^いく此^この事^じ第一^{だいいち}の大事^{だいじ}なり委細^{いさい}に承^うけ^けたるべし、答^{こた}えて云^いく涅槃^{ねはん}經^{ぎやう}に云^いく法華^{ほふけ}經^{ぎやう}に云^いく云云^{いんいん}。

日蓮^{にちれん} 花押^{かおう}

一六四 曾谷^{そや}殿御返事^{ごへんじ}

建治二年五十五歳御作 1055p

夫^それ法華^{ほふけ}經^{ぎやう}第一^{だいいち}方便^{ほうはん}品^{ひん}に云^いく「諸^{しよ}仏^{ぶつ}の智慧^{ちえ}は甚深^{じんじん}無量^{むりやう}なり」云云^{いんいん}、釈^いに云^いく境^{きやう}淵^{えん}無^む辺^{へん}なる故^{ゆえ}に甚深^{じんじん}と云^いい智^ち水^{すい}測^{そく}り難^{がた}き故^{ゆえ}に無量^{むりやう}と云^いう」と、抑^{そも}此^この經^{きやう}釈^{しやく}の心^{こころ}は仏^{ぶつ}になる道^{みち}は豈^{あに}境智^{きやうち}の二法^{にぽう}にあらずや、されば境^{きやう}と云^いうは万法^{ばんぽう}の体^{たい}を云^いい智^ちと云^いうは自体^{じたい}顕照^{けんしやう}の姿^{すがた}を云^いうなり、而^{しか}るに境^{きやう}の淵^{ふち}ほとりなく・ふかき時は智慧^{ちえ}の水^{みづ}ながるる事^{こと}つがなし、此^この境智^{きやうち}合^あしめれば即身^{そくしん}成^{じやう}仏^{ぶつ}するなり、法華^{ほふけ}以^い前の經^{きやう}は境智^{きやうち}・各^{かく}別^{べつ}にして而^{しか}も權教^{こんきやう}方便^{ほうはん}なるが故^{ゆえ}に成^{じやう}仏^{ぶつ}せ

ず、今法華經ほけきょうにして境智きょうち一如なる間・開示悟入かいじこにゆうの四仏知見しぶつちけんをさとりて成仏じょうぶつするなり、此の内証ないしょうに声聞しょうもん・辟支仏ひやくしぶつ更に及およばざるところを次下つぎしもに一切声聞いっさいしょうもん・ひやくしぶつしよふのうち
辟支仏所不能知と説かるるなり、此の境智きょうちの二法は何物なにもものぞ但南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうの五字ごじなり、此の五字ごじを地涌じゆの大士を召し出して結要付屬けつようふぞくせしめ給う是これを本化付屬ほんげふぞくの法門ほうもんとは云うなり。
しか じょうぎようぼさつ まつぼう
然るに上行菩薩等・末法の始の五百年に出生しゅつじしうして此の境智きょうちの二法たる五字ごじを弘めさせ給うべしと見えたり 經文赫赫きやうもんかくかくたり明明めいめいたり誰か是これを論ぜん、日蓮にちれん
ひろ
は其その人にも非ず又御使おんつかいにもあらざれども先序分ますじよぶんにあらあら弘め候なり、
すで じょうぎようぼさつ しゃかにらい みようほう ちすい
既に上行菩薩・釈迦如来より妙法の智水を受けて末代惡世の枯槁の衆生しゆじように
流れかよはし給う是れ智慧の義なり、釈尊しゃくそんより上行菩薩じょうぎようぼさつへ譲り与へ給う然る
に日蓮又日本国にちれん にほんこくにして此の法門ほうもんを弘む、又是には総別の二義あり総別の二義そうべつ
少しも相そむけば成仏思じょうぶつもよらず輪廻生死りんねしやうじのもといたらん、例せば大通仏だいづうの

第十六の釈迦如来に下種せし今日の声聞は全く弥陀・薬師に遇て成仏せず
たと 譬えば大海の水を家内へくみ来らんには家内の者皆縁をふるべきなり、然れ
ども汲み来るところの大海の一滴を闇きて又他方の大海の水を求めん事は大
僻案なり大愚癡なり、法華經の大海の智慧の水を受けたる根源の師を忘れて
よそ 余へ心をうつさば必ず輪廻生死のわざはいなるべし、但し師なりとも誤あ
る者をば捨つべし又捨てざる義も有るべし世間・仏法の道理によるべきなり、
末世の僧等は仏法の道理をば・しらずして我慢に著して師をいやしみ檀那を
へつらふなり、但正直にして少欲知足たらん僧こそ真実の僧なるべけれ、文句
の一に云く「既に未だ眞を發さざれば第一義天に慙じ諸の聖人に愧ず即是れ
うしゅう 有羞の僧なり觀慧若し發するは即真実の僧なり」云云、涅槃經に云く「若し
ぜんびく 善比丘あつて法を壞る者を見て置いて呵責し駈遣し挙処せずんば当に知るべ
し是の人は仏法の中の怨なり、若し能く駈遣し呵責し挙処せんは是れ我が

でしそ 弟子其の聲聞なり「云云、此の文の中に見壞法者の見と置不呵責の置とを
能く能く心腑に染む可きなり、法華經の敵を見ながら置いてせめずんば師檀
ともに無間地獄は疑いなかるべし、南岳大師の云く「諸の悪人と俱に地獄
に墮ちん」云云、謗法

を責めずして成仏を願はば火の中に水を求め水の中に火を尋ぬるが如くなる
べしはかなし・はかなし、何に法華經を信じ給うとも謗法あらば必ず地獄に
をつべし、うるし千ばいに蟹の足一つ入れたらんが如し、毒氣深入・矢本心
故は是なり、經に云く「在在諸の仏土に常に師と俱に生ぜん」又云く「若し法師
に親近せば速かに菩薩の道を得ん是の師に随順して学せば恒沙の仏を見たて
まつることを得ん」釈に云く「本此の仏に従つて初めて道心を発し亦此の仏
に従つて不退地に住す」又云く「初め此の仏・菩薩に従つて結縁し還此の仏
菩薩に於て成就す」云云、返す返すも本從たがへずして成仏せしめ給うべ

し、しやくそん 釈尊は一切衆生の本従の師にて而も主親の徳を備へ給う、たま 此法門を
にちれんもうゆえ 日蓮申す故に忠言耳に逆う道理なるが故に流罪せられ命にも及びしなり、
しかれ 然どもいまだこりず侯・法華経は種の如く仏はうへての如く衆生は田の如く
なり、も 若し此等の義をたがへさせ給はば日蓮も後生は助け申すまじく侯、
きようきようきんげん 恐恐 謹言。

建治二年丙子八月三日

曾谷殿

日蓮花押

一六五 曾谷入道殿御返事

1057p

みようほうれんげきよう 妙法蓮華經一部一卷小字經、御供養のために御布施に小袖・二重・鷲目十
貫・並に扇百本、もんく 文句の一に云く、「如是とは所聞の法体を挙ぐ」と、記の一に
云く、「若し超八の如是に非ずんば安ぞ此の經の所聞と為さん」云云、けこんきよう 華嚴經
の題に云く、「大方広仏・華嚴經、如是我聞」云云、「摩訶般若波羅蜜經・

によげがもん
如是我聞」云云、大日經の題に云く「大毘盧遮那・神變加持經・如是我聞」
云云、一切經の如是は何なる如是ぞやと尋ぬれば、上の題目を指して如是と
は申すなり、仏、何の經にても・とかせ給ひし其の所詮の理をさして題目と
はせさせ給ひしを、阿難・文殊・金剛手等・滅後に結集し給ひし時、題目をう
ちをいて、如是我聞と申せしなり、一經の内の肝心は題目におさまれり、例
せば天竺と申す国あり、九万里・七十箇国なり、然れども其中の人畜・草木
・山河・大地・皆月氏と申す二字の内にれきれきたり、譬へば一四天下の内
に四洲あり、其の中の一切の万物は月に移て、すこしもかくる事なし、經
も又是くの如く、其の經の中の法門は其の經の題目の中にあり、阿含經の題目
は一經の所詮・無常の理をおさめたり、外道の經の題目のあうの二字にすぐ
れたる事百千万倍なり、九十五種の外道・阿含經の題目を聞てみな邪執を
倒し、無常の正路におもむきぬ、般若經の題目を聞ては体空・但中・不但中

の法門ほうもんをさとり、華嚴經けこんきょうの題目だいもくを聞く人は但中たんちゅう・不但中たんだんちゅうのさとりあり、
大日經だいにくきょう・方等ほうとう・般若經はんんにゃきょうの題目だいもくを聞く人は・或あるは析空しゃくくう・或あるは体空たいくう・或あるは但
空ある・或あるは不但空たんだんちゅう・或あるは但中たんちゅう・不但中たんだんちゅうの理りをばさとれども、いまだ
十界互具じゅうかいごぐ・百界千如ひゃつかいせんによ・三千世間の妙覺みょうかくの功德くどくをばきかず、その詮せんを説とくかざれ
ば、法華經ほけきょうより外りそくは理即りそくの凡夫ぼんぶなり、彼の經經きょうぎょうの仏ぼさつ・菩薩ぼさつはいまだ法華經ほけきょう
の名字みょうじそく即いに及いかばず、何いかに況だいもくや題目だいもくをも唱なへざれば觀行即かんぎょうそくにいたるべしや、故ゆゑ
に妙樂大師みょうらくだいしの記きに云いく、「若し超八にやぜの如是にやぜに非はずんば、安いずくんんぞ此の經しよもんの所聞しよもん
と為なさん」云云、彼彼の諸經しよききょうの題目だいもくは八教はつききょうの内うちなり、網目もうもくの如ごとし、此の經
の題目だいもくは八教はつききょうの網目もうもくに超こえて大綱たいこうと申もうす物ものなり、今妙法蓮華經みょうほうれんげきょうと申もうす人ひと人ひと
はその心こころをしらざれども、法華經ほけききょうの心こころをつるのみならず、一代いちだいの大綱たいこうを覺さとりり
給たまへり、例たとせば一、二、三歳の太子位たいしにつき給たまひぬれば、国くには我が所領しりょうなり、
摂政せつせい関白かんぱく已下いは我が所従しよじゅうなりとは、しらせ給たまはねども、なにも此の太子たいしの

物なり、譬たとへば小兒しょうには分別ぶんべつの心なけれども、悲母ひもの乳を口にのみぬれば自然

に生長するを、趙高しやうこうが様に心おこれる臣下しんかありて、太子たいしをあなづれば身をほ

ろばす、諸経しよきやう・諸宗しよしゆうの学者等がくしや、法華經ほけきやうの題目だいもくばかりを唱ふる太子たいしをあなづ

りて、趙高しよこうが如くして無間地獄むげんじこくに墮おつるなり、又法華經ほけきやうの行者ぎやうじやの、心もしら

ず題目だいもく計りを唱ふるが、諸宗しよしゆうの智者ちしやにおどされて退心たいしんをおこすは、こがこいと

申せし太子たいしが趙高しやうこうにおどされ・ころされしが如し。

なむなむみみようようほうほうれんれんげげききようよう　もつ　南無妙法蓮華經なんぶみょうほうれんげきようと申すは一代いちだいの肝心かんじんたるのみならず、法華經ほけきやうの心なり、体

なり、所詮がっしなり、かかるいみじき法門ほうもんなれども仏滅後ぶつめつ・二千二百二十余年ふたにふたひゃくにじゅうにじゅうねんの

間・月氏がっしに付法蔵ふほうぞうの二十四人くわじゅうににん弘通くわつうし給はず、漢土かんどの天台てんだい・妙樂みやうらくも流布るふし給は

ず、日本国にほんこくには聖徳太子しやうとくたいし・伝教大師でんきやうだいしも宣説せんせつし給はず、されば和法師わほっしが申すは

僻事しよにんうたがいにてこそ有るらめと諸人しよにんうたがい疑ぎて信ぜず、是れ又第一だいいちの道理どうりなり、譬たとへば

昭君しやうくんなんどを、あやしの兵つわものなんどがおかしたてまつるを・みな人よも・さ

はあらしと思へり、大臣公卿なんどの様なる天台・伝教の弘通なからん法華經

の肝心・南無妙法蓮華經を、和法師程のものがいかで唱ふべしと云云、汝等

是を知るや・鳥と申す鳥は無下のげす鳥なれども、驚の知らざる年中の

きつきよう

吉凶を知れり、蛇と申す虫は竜象に及ばずとも、七日の間の洪水を知るぞ

たと　りゆうじゆてんだい

かし、設い竜樹天台の知り給はざる法門なりとも

きようもん　けんねん

經文顯然ならばなにをか疑はせ給ふべき、日蓮をいやしみて南無

みようほうれんげきよう

妙法蓮華經と唱へさせ給はぬは、小児が乳をうたがふて・なめず病人が医師

うたがい

を疑て薬を服せざるが如し、竜樹・天親等は是を知り給へども、時なく機

くつう

なければ弘通し給はざるか、余人は又しらずして宣伝せざるか、仏法は時に

き

より機によりて弘まる事なれば、云ふにかひなき日蓮が時にこそあたりて候

らめ。

所詮妙法蓮華經の五字をば當時の人人は名と計りと思へり、さにては候は
ず・体なり・体とは心にて候、章安云く、「蓋し序王は經の玄意を叙し、玄意
は文の心を述す」云云、此の釈の心は妙法蓮華經と申すは文にあらず、義
にあらず、一經の心なりと釈せられて候、されば題目をはなれて法華經の心
を尋ぬる者は、をはなれて肝をたづねし・はかなき龜なり、山林をすてて
菓を大海の辺にもとめし 猴なり、はかなし・はかなし。

建治三年丁丑霜月二十八日

日蓮花押

曾谷次郎入道殿

一六六 曾谷殿御返事 弘安二年八月 五十八歳御作 1059p

焼米二俵給畢ぬ、米は少と思食し候へども人の寿命を継ぐ者にて候、命を
ば三千大千世界にても買はぬ物にて候と仏は説かせ給へり、米は命を継ぐ物
なり譬えば米は油の如く命は燈の如し、法華經は燈の如く行者は油の

こと だんな
如し檀那は油の如く行者は燈の如し、一切の百味の中には乳味と申して牛
ちちだいいち ねはんぎよう
の乳第一なり、涅槃經の七に云く「猶諸味の中に乳最も為れ第一なるが如し」
にゆうみ
云云、乳味をせんずれば酪味となる酪味をせんずれば乃至醍醐味となる醍醐味
は五味の中の第一なり、法門を以て五味にたとへば儒家の三千・外道の
じゅうはちだいきよう
十八大經は衆味の如し、阿含經は醍醐味なり、阿含經は乳味の如く觀經等
いっさい ほうとうぶ
の一切の方等部の經は酪味の如し、一切の般若經は生蘇味・華嚴經は熟蘇味
むりようぎきよう ぼけきよう ねはんぎよう
・無量義經と法華經と涅槃經とは醍醐のごとし又涅槃經は醍醐のごとし
ほけきよう
法華經は五味の主の如し、妙樂大師云く「若し教旨を論ずれば法華は唯開權
顯遠を以つて教の正主と為す独り妙の名を得る意此に在り」云云、又云く
ゆえ ぼっけ こ だいい しょうしゅ
「故に知んぬ法華は為れ醍醐の正主」等云云、此の釈は正く法華經は五味の
中にはあらず此の釈の心は五味は壽命をやしなふ壽命は五味の主なり、
てんだいしゅう
天台宗には二の意あり一には華嚴・方等・般若・涅槃・法華は同じく醍醐味

なり、此の釈しゃくの心は爾前にぜんと法華ほっけとを相似そうじせるにたり世間せけんの学者等がくしゃ・此の筋のみを知りて法華經ほっけきようは五味の主もつと申もうす法門ほうもんに迷惑めいわくせるゆへに諸宗しよしゆうにたばらかさるるなり、開未開かいみかい・異ことなれども同じく円えんなりと云云是は迹門しゃくもんの心なり、
諸經しよきようは五味法華經ほっけきようは五味の主もつと申もうす法門ほうもんは本門ほんもんの法門ほうもんなり、此の法門ほうもんは天台てんだい
・妙樂粗書みようらくほぼかせ給たまひい候へども分明ふんみようならざる間がくしゃ・学者の存知しやうすくなし、此の
釈しゃくに若論教旨にやくろんきようしとかかれて候は法華經ほっけきようの題目だいまくを教旨ぎようしとはかかれて候、開權かいこんと
申もうすは五字ごじの中の華の一字なり顯遠とかかれて候は五字ごじの中の蓮の一字なり
どくとくみようみよう
獨得妙名どくとくみようとかかれて候は妙の一字なり、意在いざい於此とかかれて候は法華經ほっけきようを
いちだい
一代の意もつと申もうすは題目だいまくなりとかかれて候ぞ、此これを以て知んぬべし法華經ほっけきようの
だいまく
題目だいまくは一切經いっさいきようの神たましい・一切經いっさいきようの眼目がんもくなり、大日經等だいにちきようの一切經いっさいきようをば法華經ほっけきよう
にてこそ開眼供養かいげんくようすべき処ところに大日經等だいにちきようを以て一切いっさいの木画もくえの仏かいてんを開眼かいげんし候へ
にほんこく
ば日本國にほんこくの一切いっさいの寺塔じとうの佛像等形ぶつぞうは仏ぶつに似れども心は仏ぶつにあらず九界しゆじやうの衆生しゆじやう

の心なり、愚癡ぐちの者を智者ちしやとすることはより始まり、国のついへのみ入て
祈ほけきとならず還かへりて仏變じて魔となり鬼となり国主こくしゅ乃至万民をわづらはす是なり、
今法華經の行者ぎやうじやと檀那だんなとの出来する故に百獸ひやくしの師子王をいとひ草木の寒風そうもく
をおそるるが如し、是は且しかくをく法華經は何故なにゆえぞ諸經しよきやうに勝れて一切衆生の
ためためもち
為に用いる事なるぞと申すに譬えば草木は大地を母とし虚空を父とし甘雨かんうを
食とし風を魂とし日月をめのめにちがつとして生長し華さき菓なるが如く、一切衆生
は実相じつそうを大地とし無相むそうを虚空とし一乗いちじやうを甘雨とし已今当第一の言を大風とし
定慧力莊嚴を日月として妙覺みやうかくの功德を生長し大慈大悲の華さかせ安樂あんらく仏果の
菓このみなつて一切衆生を養ひ給ふ、一切衆生又食するによりて寿命じゆみやうを持つ、
食に多数あり土を食し水を食し火を食し風を食する衆生もあり、求羅ぐらと申す
虫は風を食す・うぐろもちと申す虫は土を食す、人の皮肉こつすい・骨髓等を食する
鬼神きじんもあり、尿糞等を食する鬼神きじんもあり、寿命じゆみやうを食する鬼神きじんもあり、声を食

する鬼神きじんもあり、石を食するいをくろがねを食するばくもあり、地神・天神てんじん

・竜神・日月・帝釈・大梵王・二乗・菩薩・仏は仏法をなめて身とし魂と

し給ふ、例せば乃往過去に輪陀王と申す大王ましき一閻浮提の主なり賢王けんおう

なり、此の王はなに物をか供御とし給うと申せば白馬の鳴声いなくこえをきこしめし

て身も生長し身心しんしんも安穩あんのんにしてよをたまち給う、れいせば蝦蟇かえると申す虫の母

のなく声を聞いて生長するがごとし、秋のはぎのしかの鳴くに華のさくがご

とし、象牙草のいかづちの声にはらみ柘榴じやくろうの石にあふてさかうるがごとし、

されば此の王・白馬はくばを・をほくあつめて・かはせ給ふ、又此の白馬はくばは白鳥を

みてなく馬なれば、をほくの白鳥をあつめ給いしかば我が身の安穩あんのんなるのみ

ならず百官・万乗もさかへ天下てんかも風雨ふうう・時にしたがひ他国たこくもかうべをかたぶ

けて・すねんすごし給うにまつり事のさをいにやはむべりけん又宿業によつ

て果報かほうや尽つきけん・千万せんまんの白鳥いちじ一時にうせしかば又無量むりようの白馬はくばもなく事やみ

だいおう はくば

ぬ、大王は白馬の声をきかざりしゆへに華のしばめるがごとく月のしよくす

るがごとく、御身おんみの色かはり力よはく六根ろっこんもうもうとしてぼれたるがごとく

ありしかば、きさきももうもうしくならせ給たまひい百官万乗もいかんがせんとな

げき、天もくもり地もふるひ大風たいふうかんぱちしけかちやくびように人の死する

事肉はつか骨はかはらとみへしかば他国たこくよりも・をそひ来れり、此の時大王だいおう

いかんがせんと・なげき給たまひいしほどに・せんする所は仏神ぶっしんにいのるには・し

くべからず、此の国に・もとより外道げどうをほく国国をふさげり、又仏法ぶつぽうという

物を・をほくあがめをきて国の大事だいじとす、いづれにてもあれ白鳥をいだして

白馬はくばをなかせん法をあがむべし、まづ外道げどうの法にをほせつけて数日をこなは

せけれども白鳥一疋もいでこず白馬はくばもなく事なし、此の時外道げどうのいのりを・

とどめて仏教ぶつぎょうにをほせつけられけり、其の時馬鳴菩薩そのときめみょうぼさつと申す小僧こそう一人あり・

めしいだされければ此の僧たまたの給たまはく國中に外道げどうの邪法じゃほうをとどめて仏法ぶつぽうを弘通くつう

し給^{たま}うべくば馬をなかせん事やすしといふ、勅宣^{ちよくせん}に云^{いわ}くをほせのごとくなるべしと、其^{そのとき}の時に馬鳴菩薩^{めみょうぼさつ}・三世十方^{さんぜじゅうつぽう}の仏にきしやうし申せしかば・たちまちに白鳥^{しゅつたい}出来^{はくば}せり、白馬は白鳥を見て一こへなきけり、大王^{だいおう}・馬の声を一こへ・きこしめして眼^{まなこ}を開き給^{たま}い白鳥二ひき乃至百千^{ないし}いできたりければ百千の白馬一時に悦^{よろこ}びなきけり、大王の御^{だいおう}いろ・なをること日^ひしよくの・ほんにふくするがごとし、身の力・心のはかり事・先^{せん}先には百千万^{せんまん}ばいこへたり、きさきも・よろこび大臣^{だいじん}・公卿^{くぎよう}いさみて万民^{ばんみん}もたな心をあはせ他^た国^{こく}も・かうべをかたづけたりとみへて候。

今のよも又是^{また}にたがうべからず、天神七代^{てんじん}・地神五代^{ちじんごだい}・已上十二代^{じじゅうにだい}は成劫^{じょうくわつ}のごとし・先世^{せんぜ}のかいりきと福力^{ふくりき}によつて今生^{こんじょう}のはげみなければも国もおさまり人の寿命^{じゆみよう}も長し、人王のよとなりて二十九代があひだは先世^{せんぜ}のかいりきも・すこしよはく今生^{こんじょう}のまつり事もはかなかりしかば国にやうやく三災^{さんさい}・

ひぢなん
七難をこりはじめたり、なを・かんどより三皇・五帝の世を・をさむべきふ

みわたりしかば其をもつて神をあがめて国の災難をしづむ、人王第三十代欽明

天王の世となりて国には先世のかいふくうすく悪心がうじやうの物をほく

出来て善心をろかに悪心は・かしこし、外典のをしへはあさしつみをもき

ゆへに外典すてられ内典になりしなり、れいせばもりやは日本の天神七代・

地神五代が間の百八十神をあがめたてまつりて仏教をひろめずして・もとの

外典となさんといのりき、聖徳太子は教主釈尊を御本尊として法華経・

一切経をもんしよとして両方のせうぶありしに・ついには神はまけ仏はかた

せ給いて神国はじめて仏国となりぬ、天竺漢土の例のごとし、今此三界・

皆是我有の経文あらはれさせ給うべき

序なり、欽明より桓武にいたるまで二十よ代・二百六十余年が間・仏を大王

とし神を臣として世を・をさめ給いしに仏教はすぐれ神はをとりたりしかど

も未だよをさまる事なし。

いかなる事にやとうたがはりし程に桓武の御宇に伝教大師と申す聖人
出来して勘えて云く神はまけ仏はかたせ給いぬ、仏は大王・神は臣かなれば
上下あひついで・れいぎただしければ國中をさまるべしと・をもふに国のし
づかならざる事ふしんなるゆへに一切経をかんがへて候へば道理にて候ける
ぞ、仏教に・をほきなるとがありけり、一切経の中に法華経と申す大王を
はします、ついで華嚴経・小品経・深密経・阿含経等はあるいは臣の位ある
いはさふらのくらい・あるいはたみの位なりけるを・或は般若経は法華経
にはすぐれたり三論宗・或は深密経は法華経にすぐれたり法相宗・或は
華嚴経は法華経にすぐれたり華嚴宗・或は律宗は諸宗の母なりなど申し
て一人として法華経の行者なし、世間に法華経を讀誦するは還つてをこつき
うしなうなり、「之に依つて天もいかり守護の善神も力よはし」云云、所謂

「法華經を・ほむといえども返つて法華の心をこるす」等云云、南都・七大寺

十五大寺・日本国中の諸寺・諸山の諸僧等・此のことばを・ききて・をほき

にいかり天竺の太天・漢土の道士・我が国に出来せり所謂最澄と申す小

法師是なり、せんする所は行きあはむずる処にてかしらをわれ・かたをきれ

・をとせうてのれと申せしかども桓武天皇と申す賢王たづね・あきらめて

六宗はひが事なりけりとして初めてひへい山をこんりうして天台法華宗とさだ

めをかせ円頓の戒を建立し給うのみならず、七大寺・十五大寺の六宗の上

に法華宗をそへをかる、せんする所六宗を法華經の方便となされしなり、れ

いせば神の仏にまけて門まほりとなりしがごとし、日本国も又かくのごと

し法華最第一の經文初めて此の国に顕れ給ひ能竊為一人・説法華經の如來の

使初めて此の国に入り給いぬ、桓武・平城・嵯峨の三代二十余年が間は日本

一州・皆法華經の行者なり、しかれば梅檀には伊蘭釈尊には提婆のごとく

でんぎようだいし どうじ こうぼうだいし もう しやうにんしゆつげん
伝教大師と同時に弘法大師と申す 聖人出現せり、漢土にわたりて大日經

・真言宗をならい日本国にわたりてありしかども伝教大師の御存生の御時
しんこんしゆつ にほんこく でんぎようだいし ぞんしやう おんとき

はいたう法華經に大日經すぐれたりといふ事はいはざりけるが、伝教大師
ほけきやう だいにちきやう でんぎようだいし

去ぬる弘仁十三年六月四日にかくれさせ給いてのちひまをえたりとや・をも
い こうにん たい

ひけん、弘法大師去ぬる弘仁十四年正月十九日に真言第一・華嚴第二・法華
こうぼうだいし い こうにん しんこんだい いち けこん ほつ

第三・法華經は戲論の法・無明の辺域・天台宗等は盗人なりなんと申す書ど
ほけきやう けろん むみやう へんいき てんだいしゆう ぬすびと もう

もをつくりて、嵯峨の皇帝を申しかすめたてまつりて七宗に真言宗を申し
さが こうてい もう しんこんしゆう

はえて七宗を方便とし真言宗は真実なりと申し立て畢んぬ。
ほうへん しんごんしゆう しんじつ もう おわ

其の後・日本一州の人ごとに真言宗になりし上其の後又伝教大師の
そ にほん じんごんしゆう しんごんしゆう ぞ でんぎようだいし

御弟子慈覚と申す人漢土にわたりて天台・真言の二宗の奥義をきはめて帰朝
おんでしじかく もう かんど てんだい しんごん きちやう

す、此の人金剛頂經・蘇悉地經の二部の疏をつくりて前唐院と申す寺を叡山
こんこうちやうきやう そしつちきやう じよ ぜんとういん もう えいざん

に申し立て畢んぬ、此れには大日經第一法華經第二其の中に弘法のごとくな
もう おわ こ だいにちきやうだい いちほけきやう そ こうぼう

る過言かごんかずうべからず、せむぜむにせうせう申し畢おわんぬ、智証大師ちしょうだいし又此だいしの大師
のあとをついでをんじやう寺くつうに弘通せり、たうじ寺とて国のわざはいとみゆ
る寺これ是なり、叡山えいざんの三千人さんぜんは慈覺じかく・智証ちしょうをはせずば真言しんこんすぐれたりと申すを
ばもちいぬ人もありなん、円仁大師えんにんだいしに一切いっさいの諸人しよにんくちをふさがれ心をたばら
かされてことばをいだす人なし、王臣おうしんの御きえも又伝教でんぎょう・弘法こうぼうにも超過ちようかして
みへ候へばえい山七寺にほん日本一州一同に法華經ほけきょうは大日經だいにちきょうにをとりと云云、
法華經ほけきょうの弘通くつうの寺寺しんこんごとに真言しんこんひろまりて法華經ほけきょうのかしらとなれり、かくの
ごとくして・すでに四百余年になり候いぬ、やうやく此じゃけんの邪見じゃけんぞうじやうし
て八十一乃至五ないしの五王すでにうせぬ仏法ぶつぽううせしかば王法おうほうすでにつき畢おわんぬ。
あまつさへ禅宗ぜんしゅうと申す大邪法じゃほう念仏ねんぶつ宗しゅうと申す小邪法じゃほう真言しんこんと申す大惡法だいくほう此この
惡宗てんしょうはなをならべて一國にさかんなり、天照太神てんしょうだいじんはたましいをうしなつてう
ぢごをまほらず八幡大菩薩はちまんだいぼさつは威力いりよくよはくして國しゆこを守護しゆごせずけつくは他國たこくの物

とならむとす、日蓮此のよしを見るゆへに仏法中怨・俱墮地獄等のせめをお

それて粗国主にしめせども、かれらが邪義にたばらかされて信じ給う事なし

還つて大怨敵となり給いぬ法華經をうしなふ人中に充滿せりと申せども人

しる事なければただぐちのとがばかりにてある事今は又法華經の行者出来

せり日本国の人人癡の上にいかりを・をこす邪法をあいし正法をにくむ、

三毒がうじやうなる一国いかでか安穩なるべき、壊劫の時は大の三災をこる、

いはゆる火災水災風災なり、又滅劫の時は小の三災をこる、ゆはゆる飢渴疫病

合戦なり、飢渴は大貪よりをこりやくびやうはぐちよりをこり合戦は瞋恚よ

りをこる、今・日本国の人人四十九億九万四千八百二十八人の男女人人こと

なれども同じく一の三毒なり、所謂南無妙法蓮華經を境としてをこれる三毒

なれば人ごとに釈迦・多宝・十方の諸仏を一時にのりせめ流しうしなうな

り、是れ即ち小の三災の序なり。

しかるに日蓮にちれんが一いちるいいかなる過去かこの宿しゆくしうにや法華經ほけきようの題目だいもくのだんとなり給たまうらん、是これをもつてをばしめせ今梵天ほんてん・帝釈たいしゃく・日月にちがつ・四天してん・天照太神てんしょうだいじんはちまんだいぼさつにほんこくさんぜん・八幡大菩薩日本国の三千一百三十二社の大小のじんぎは過去かこの輪陀王りんだおうのごとし、白馬はくばは日蓮にちれんなり白鳥は我らが一門いちもんなり白馬のなくは我等われらが南無妙法蓮華經みょうほうれんげきようのこえなり、此の声をきかせ給たまう梵天ほんてん・帝釈たいしゃく・日月にちがつ・四天してん等いかでか色をましひかりをさかんになし給たまはざるべき、いかでか我等われらを守護しゆごし給たまはざるべきとつよづよと・をばしめすべし。

そもそもきへん

い

抑貴辺おきへんの去いぬる三月の御仏事に驚目其の数有ぶつじ がもくそりしかば今年一百よ人の人

を山中にやしなひて十二時の法華經をよましめ談義して候ほけきようぞ、此これらは末代まつだい

あくせ

悪世には一えんぶだい第一だいいちの仏事ぶつじにてこそ候へ、いくそばくか過去かこの聖靈しょうりよう

もうれしくをばすらん、釈尊しゃくそんは孝養こうようの人を世尊せそんとなづけ給たまへり貴辺きへんあに世尊せそん

にあらずや、故大進阿闍梨あじやりの事なげかしく候へども此これ又法華經ほけきようの流布るふの

しゅつたい

出来すべきいんえんにてや候らんと・をぼしめすべし、事事命ながらへば

そのときも

其の時申すべし。

こうあん

つちのとう

にちれんかおう

弘安二年己卯八月十七日 日蓮花押

そや

ごへんじ

曾谷道宗御返事

一六七

曾谷二郎入道殿御返事

1065p

いぬ

去る七月十九日の消息、同三十日到来す、世間の事は且らく之を置く、専

ぶつぼう

ら仏法に逆ふこと法華經の第二に云く「其人命終入阿鼻獄」等云云、問て云

ほけきよう

ごにんみよつじゆうにゆうあびごく

く、其の人とは、何等の人を指すや、答て云く、次上に云く「唯我一人・能為

まも

救護・雖復教詔・而不信受」と、又云く「若人不信」と、又云く「・或復

きようちよく

しんじゆ

にやくにんふしん

ある

顰蹙」と、又云く「見有読誦書持經者・輕賤憎嫉・而懷結恨」と、又第五に

どくじゆ

じきよう

しやうぎふしん

云く「生疑不信者・即当墮惡道」と、第八に云く「若有人輕毀之言・汝狂人

そく

だ

にやくう

耳・空作是行終無所獲」等云云、「其人」とは、此れ等の人人を指すなり、

ひとびと

てんだいだいし

にほんこく

でんぎようだいし

彼の震旦国の天台大師は、南北十師等を指すなり、此の日本国の伝教大師は、

ろくしゅう

ひとびと

六宗の人人と定めたるなり、今日蓮は弘法・慈覚・智証等の三大師、並に三階

ぜんどう

・道綽・善導等を指して其の人と云ふなり、入阿鼻獄とは、涅槃經第十九に云

ねはんぎよう

く、「仮使ひとり独り是の獄に墮ち、其の身長大にして八万由延なり、其の中

ひと

こ

お

にゆうあびこく

ゆじゆん

間に満して空しき処無し、其の身周匝して種種の苦を受く設ひ多人有て、

へんまん

ところ

しゅうそう

しゆじゆ

たと

身亦満すとも相い妨碍せず、同三十六に云く「沈没して阿鼻地獄に在て、

へんまん

ぼうげ

ちんぼつ

あびじこく

受くる所の身形・縦広八万四千由旬ならん」等云云、普賢經に云く「方等經

ふげん

ほうとう

を謗する是の大惡報惡道に墮つべきこと暴雨にも過ぎ必定して当に阿鼻地獄

こ

だ

ばうう

す

あびじこく

に墮つべし」等とは、阿鼻獄に入る文なり。

お

あびこく

にちれん

日蓮云く、夫れ日本国は、道は七、国は六十八箇国、郡は六百四、郷は一

にほんこく

さんぜん

万余、長さは三千五百八十七里、人数は四十五億八万九千六百五十九人、或

にんずう

ある

は云く四十九億九万四千八百二十八人なり、寺は一万一千三十七所、社は三千

さんぜん

一百三十二社なり、今法華經の「入阿鼻獄」とは、此れ等の人人を指すなり、

問て云く、衆生に於て悪人善人の二類有り、生処も又善惡の二道有るべし、

何ぞ日本国の一切衆生、一同に入阿鼻獄の者と定むるや、答て云く、人数多

しと雖も業を造ることは是れ一なり、故に同じく阿鼻獄と定むるなり。

疑て云く日本国の一切衆生の中に・或は善人・或は悪人あり善人とは

五戒・十戒、乃至二百五十戒等なり、悪人とは、殺生・偷盜、乃至五逆・十惡

等是なり、何ぞ一業と云ふや、答て云く、夫れ小善・小惡は異なりと雖も、

法華經の誹謗に於ては、善人悪人・智者愚者、俱に妨げ之れ無し、是の故に同

じく入阿鼻獄と云ふなり、問て云く、何を以てか日本国の一切衆生を、一同

に法華誹謗の者と言ふや、答て云く、日本国の一切衆生衆多なりと雖も四十

五億八万九千六百五十九人に過ぎず、此等の人人貴賤上下の勝劣有りと雖も

是くの如きの人人の憑む所は唯三大師に在り師とする所三大師を離る事無し

余よざん残ざんの者有りと雖も信行・善導等の家を出ずべからざるなり、問て云く三大師だいしとは誰人だれびとぞや、答て曰く、弘法・慈覚・智証の三大師なり、疑て云く此の三大師だいしは何なる重科有るに依て、日本国の一切衆生於經文の其の人の内に入るや、答て云く、此の三大師は大小乘持戒の人、面には八万の威儀を備へ、或はある三千等之を具す、顯密兼学の智者なり、然れば則ち、日本国四百余年の間、上一人より下万民に至るまで、之を仰ぐこと日月の如く、之を尊むこと世尊せそんの如し、猶徳の高きこと須弥にも超え、智恵の深きことは蒼海にも過ぎたるが如し但恨むらくは法華經を大日真言經に相對して勝劣を判ずる時は・或はある戲論の法と云ひ・或は第二第三と云ひ、・或は教主を無明の辺域と名け・或はある行者ぎやうじやをば盗人と名く彼の大莊嚴仏の末の六百四万億那由他の四衆の如き、各各の業因異りと雖も、師の苦岸等の四人と俱に同じく無間地獄に入りぬ、又師子音王仏の末法の無量無辺の弟子等の中にも貴賤の異有りと雖も同じく

勝意が弟子と為るが故に一同に阿鼻大城に墮ちぬ今日日本国亦復是くの如し。

去る延暦弘仁年中、伝教大師六宗の弟子檀那等を呵責する語に云く、其

の師の墮つる所弟子亦墮つ、弟子の墮つる所檀越亦墮つ、金口の明説慎まざ

るべけんや、慎まざるべけんや等云云、疑て云く、汝が分齊何を以て三大師

を破するや、答て云く、予は敢て彼の三大師を破せざるなり、問て云く、汝

が上の義は如何、答て云く、月氏より漢土本朝に渡る所の経論は五千七十

余卷なり、予粗之を見るに、弘法・慈覚・智証に於ては、世間の科は且く之を

置く、仏法に入ては、謗法第一の人人と申すなり、大乘を誹謗する者は、箭

を射るより早く地獄に墮すとは如来の金言なり、将又謗法罪の深重は弘法・

慈覚等一同定め給ひ畢ぬ、人の語は且く之を置く、釈迦・多宝の二仏の金言虚

妄ならずんば、弘法・慈覚・智証に於ては定めて無間・大城に入らん、十方

分身の諸仏の舌墮落せずんば、日本国中の四十五億八万九千六百五十九人の

いっさいしゅじょう

一切衆生は、彼の苦岸等の弟子檀那等の如く阿鼻地獄に墮て熱鉄の上に於て

あお

仰ぎ臥して九百万億歳伏臥して九百万億歳・左脇に臥して九百万億歳・右脇

に臥して九百万億歳、是くの如く熱鉄の上に在て三千六百万億歳なり、然し

て後、此の阿鼻より転じて他方に生れて大地獄に在て、無数百千万億那由他

歳大苦悩を受けん、彼は小乗經を以て權大乘を破せしも、罪を受くるこ

と是くの如し、況や今三大師は末顯真實の經を以て、三世の仏陀の本懷の説

を破するのみに非ず、剩さえ一切衆生成仏の道を失ふ、深重の罪は、過・現

・未來の諸仏も、争か之を窮むべけんや、争か之を救ふべけんや。

法華經の第四に云く、「已説今説當説而於其中此法華經最為難信難解」、又

云く、「最在其上」、並に「藥王十喻」等云云、他經に於ては、華嚴・方等・般若

・深密・大雲・密嚴・金光明經等の諸教の中に、經經の勝劣之を説くと雖

も、或は小乗經に對して此の經を第一と曰ひ、或は真俗二諦に對して

ちゅうどう 中道を第一と曰ひ、

だいいち

ある しんこん

だいいち

中道を第一と曰ひ、或は印真言等を説くを以て第一と為す、此等の説有り

と雖も、全く已今当の第一に非ざるなり、然るに末の論師人師等、謬執の

年積り、門徒又繁多なり。

ここに

にちれん

えきよう

いよいよ

いだい

ぜひ

きゆうめい

爰に日蓮彼の依経に無きの由を責むる間・

弥よ

瞋恚を懷て是非を糾明

せず唯大妄語を構へて国主・

こくしゅ

おつわく

にちれん

日蓮を損ぜんと欲す、衆千の難

を蒙らしむるのみに非ず兩度の流罪 剩へ

るさいあまつさ

頸の座に及ぶ是なり、此等の大難

これ

だいな

しの 難き事不輕の杖木にも過ぎ、

ふぎよう

將又勸持の刀杖にも越えたり、

又法師品の

ほうしほん

如きは「末代に法華經を弘通せん者は、

まつだい ほけきよう ぐつう

如来の使なり此の人を輕賤するの輩

にようい

の罪は、教主 釈尊を一 中劫蔑如するに過ぎたり」等云、

きようしゅ しゃくそん

べつじよ

す

等云、今日 日本国には

いまほんこく

提婆達多・大慢婆羅門等が如く無間地獄に墮すべき罪人、

だいばだつた だいまん

むげんじこく

さいにん

国中三千五百八十七

さんぜん

里の間に、満つる所の四十五億八万九千六百五十九人の衆生之れ有り彼の

だいば だいまん

じゅうざい

にほんこく

此の日本国四十五億八万九千六百五十九人に

提婆・大慢等の無極の重罪を、此の日本国四十五億八万九千六百五十九人に

對せば、輕罪中の輕罪なり問ふ其の理如何答ふ彼等は、惡人為りと雖も全く

法華を誹謗する者には非ざるなり又提婆達多是恒河第二の人にして第二に

いっせんたい

いまほんこく

一闡提なり今日日本国四十五億八万九千六百五十九人は皆恒河第一の罪人なり、

だいば

さんぎやくざ

にほんこく

みな

だいいち

ざいにん

ひとびと

じゅうざい

然れば則ち提婆が三逆罪は輕毛の如し日本国の上に挙ぐる所の人人の重罪は

ぼんしゃく

にほんこく

猶大石の如し定めて梵釈も日本国を捨て同生同名も国中の人を離れ、

てんしょうだいじん

はちまんだいぼさつ

天照太神・八幡大菩薩も争か此の国を守護せん。

しゅご

去る治承等の八十一・二・三・四・五代の五人の大王と頼朝・義時と此の国を御諍ひ

てんし

ようしゅん

こんちよう

しよつぷ

ごと

てんし

しよりとち

あらそ

有て天子と民との合戦なり猶鷹・駿と金鳥との勝負の如くなれば、天子頼朝

けつじよう

だいおう

等に勝たんこと必定なり、決定なり、然りと雖も五人の大王は負け畢ぬ、兎、

しし

師子王に勝ちしなり、負くるのみに非ず、剩へ・或は蒼海に沈み、或は島島

ほうほう

に放たれ、誹謗法華未だ年歳を積まざる時、猶以て是くの如し、今度は彼に似る

わさわ

そのゆえ

べからず、彼は但国中の災い許りなり、其の故は粗之を見るに、蒙古の牒状

もうこ

已前に、去る正嘉・文永等の大地震・大彗星の告げに依て、再三之を奏すと雖も、国主敢て信用無し、然るに日蓮が勘文粗仏意に叶ふかの故に、此の合戦既に興盛なり、此の国の人人今生には一同に修羅道に墮し、後生には皆阿鼻大城に入らん事、疑ひ無き者なり。

爰に貴辺と日蓮とは師檀の一分なり、然りと雖も、有漏の依身は国主に随ふが故に、此の難に値はんと欲するか、感涙押へ難し、何れの代にか対面を遂げんや、唯一心に靈山浄土を期せらるべきか、設ひ身は此の難に値ふとも、心は仏心に同じ、今生は修羅道に交はるとも、後生は必ず仏国に居せん、
きようきようきんげん
恐恐 謹言。

弘安四年閏七月一日

日蓮 花押

曾谷二郎入道殿御返事

一六八 秋元殿御返事

文永八年正月 五十歳御作 1070p

於安房保田

御文おんぶん委あづかく承うけたまり候そうらい畢おわんぬ、御文おんぶんに云いわく末法まつぼうの始はつ・五百年ごひゃくねんには・いかなる法

を弘ひろむべしと思おもひまいらせ候そうらしに聖人しょうにんの仰たのめ承うけたまり候そうらいに法華經ほけきやうの題目だいもくに限かつて

弘ひろむべき山やま・聴聞ちやうもん申もうして御弟子おんでしの一分いちぶんに定さだまり候そうら、殊ことに五節供ごせつぐはいかなる

由來ゆらい・何いかなる所表しよへう・何を以もつて正意しやういとして・まつり候そうらべく候そうらや云云そ、夫れ此の

事ことは日蓮にちれん委あづかしく知しる事ことなし、然しかりと雖いえども粗意そご得えて候そうら、根本大師こんぽんだいしの御相承ごそうじやうあり

げに候そうら、総しんじて真言しんごん・天台てんだい兩宗りやうしゆの習しうなり、委くわくは曾谷そや殿でんへ申つ候そうら次つぎでの御時おんときは

御談合だんごうあるべきか、先まづず五節供ごせつぐの次第しだいを案あんずるに妙法蓮華經みやうほつれんげきやうの五字ごじの次第しだいの

祭まつりなり、正月しやうげつは妙の一字いちじのまつり天照太神てんしやうだいにじんを歳としの神かみとす、三月さんげつ三日さんにちは法の一

字じのまつりなり辰しんを以もつて神かみとす、五月ごげつ五日ごにちは蓮の一字いちじのまつりなり午うを以もつて

神かみとす、七月しちげつ七日ごにちは華の一字いちじの祭まつりなり申しんを以もつて神かみとす、九月くげつ九日くにちは經の一字

のまつり戌しゆを以もつて神かみとす、此こくの如ごとく心得こころえ得えて南無妙法蓮華經なむみやうほつれんげきやうと唱となへさせ給たまへ

げんせあんのおん　ごしょうぜんしょうたがい
現世安穩・後生善処　疑なかるべし、法華經の行者をば一切の諸天・不退に
しゅご　きょうもんふんみょう
守護すべき經文分明なり、經の第五に云く、「諸天昼夜に常に法の為の故に
しか　これ　えいご　もろもろどうじ　な　とうじょう
而も之を衛護す」云云、又云く「天の諸の童子以て給使を為し刀杖も加えず
毒も害する能わず」云云、諸天とは梵天・帝釈・日月・四大天王等なり、法
とは法華經なり、童子とは七曜・二十八宿・摩利支天等なり、「臨兵闘者
かいじんれつざいぜん　とうじょう
皆陳列在前」是又「刀杖不加」の四字なり、此等は隨分の相伝なり能く能く
案じ給うべし、第六に云く「一切世間の治生産業は皆実相と相違背せず」云
云、五節供の時も唯南無妙法蓮華經と唱へて悉地成就せしめ給へ、委細は
又又申す可く候。

ほけきょう　まつぼう
次に法華經は末法の始め五百年に弘まり給ふべきと聽聞仕り御弟子となる
おあ　しだん　さんぜ　ちぎ　しゅじゅくだつ
と仰せ候事、師檀となる事は三世の契り種熟脱の三益別に人を求めんや、「在
もろもろ　とも　も　ほっし　しんこん　すみや　ぼだい
在諸の仏土常に師と俱に生れん若し法師に親近せば速かに菩提の道を得ん、

是の師に随順して学ばば恒沙の仏を見奉る事を得ん」との金言違ふべきや、
提婆品に云ふ「所生の処常に此の経を聞くしの人にはあに貴辺にあらずや、
其の故は次上に「未来世中・若有善男子・善女人」と見えたり、善男子とは
法華経を持つ俗の事なり 信心をいたし給うべし、信心をいたし給うべし、
恐恐 謹言。

正月十一日

日蓮花押

秋元殿御返事

保国 安房のほた 保田 より出す

一六九 秋元御書

弘安三年一月 五十九歳御作 於身延 1071p

筒御器一具付三十並に蓋付六十送り給ひ候い畢んぬ、御器と申すはうつは
ものと読み候、大地くぼければ水たまる青天浄ければ月澄めり、月出でぬれ
ば水浄し雨降れば草木昌へたり、器は大地のくぼきが如し水たまるは池に水

の
入るが如し、
月の影を浮ぶるは法華經の我等が身に入らせ給うが如し、器
に四の失あり一には覆と申してうつぶけるなり又はくつがへす又は蓋をおほ
ふなり、二には漏と申して水もるなり、三にはと申してけがれたるなり水
淨けれども糞の入りたる器の水をば用ゆる事なし、四には雑なり・飯に・或
は糞・或は石・或は沙・或は土なんどを雑へぬれば人食ふ事なし、器は我等
が身心を表す、我等が心は器の如し口も器・耳も器なり、法華經と申すは仏
の智慧の法水を我等が心に入れぬれば・或は打ち返し・或は耳に聞かじと
さう
左右の手を二つの耳に覆ひ・或は口に唱へじと吐き出しぬ、譬えば器を覆す
るが如し、・或は少し信ずる様なれども又惡縁に値うて信心うすくなり・或は
打ち捨て・或は信ずる日はあれども捨つる月もあり是は水の漏が如し、・或は
ほけきよう
法華經を行ずる人の一口は南無妙法蓮華經一口は南無阿弥陀仏なんど申すは
飯に糞を雑へ沙石を入れたるが如し、法華經の文に「但大乘經典を受持す

ることを樂ねがうて乃ない至し余よ經きようの一いち偈げをも受けざれ等これと説せくは是これなり、世せ間けんの学がく匠しやう
は法ほ華け經きように余よ行ぎようを雜まじえても苦くるしからずと思おもへり、日に蓮ちもさこそ思おもい候こうへども
ききようもん
經き文ぶんは爾しからず、譬たとえば后だいの大王おうの種しゆ子を妊しめるが又また民たみとつげば王おう種しゆと民種しゆ
と雜かりて天てんの加か護ごと氏神しの守護しゆごとに捨そてられ其その国破やぶる縁えんとなる、父二人
ででき
出来きれば王わうにもあらず民たみにもあらず人非にん人びにんなり、法華經ほけきようの大事だいじと申もうすは是これな
り、種熟脱しゆじゆくだつの法門ほうもん法華經ほけきようの肝心かんじんなり、三世十方さんぜじゆつぽうの仏ぶつは必ず妙法蓮華經みやうほうれんげきようの五字ごじ
を種たとして仏ぶつになり給たまへり、南無阿弥陀仏なむあみだぶつは仏種ぶつしゆにはあらず真言五戒等しんごんごかいも種
ならず、能よく能よく此この事ことを習ならひ給たまへし是これは雜ざなり、此この覆も・漏う・・・雜ざの四
の失とがを離はなれて候器こうきをば完器かんきと申もうして・またき器きなり、塹ほりつつみ漏もらざれば
水失みづる事ことなし、信心しんじんのこころ全ぜんければ平等大慧びやうどうだいゑの智水ちすい乾かわく事ことなし、今・此この
筒おんの御器うつつわは固かく

厚うく候上こうじ・漆淨ほけきく候こうへば法華經ほけきようの御信力しんりきの堅固けんこなる事ことを顕あらわし給たまうか、

びしゃもんでん

毘沙門天は仏に四つの鉢を進らせて四天下第一の福天と云はれ給ふ、浄徳夫人

うんらいおんのうぶつ

はちまん

は雲雷音王仏に八万四千の鉢を供養し進らせて妙音菩薩と成り給ふ、今

ほけきよう

つつこき

さら

まい

いかで

たま

法華經に筒御器三十蓋六十進らせて争か仏に成らせ給はざるべき。

そもそものにほんこく

もう

抑 日本国と申すは十の名あり扶桑・野馬台・水穂・秋津洲等なり、別し

さんぜん

ふじよう

ある

ある

ては六十六箇国島二つ長さ三千余里広さは不定なり、或は百里・或は五百里

ごき しちだう

さんぜん

さんぜん

等、五畿・七道・郡は五百八十六・郷は三千七百二十九・田の代は上田一万

ないし

はちまん

にんずう

はちまん

一千一百二十町・乃至八十八万五千五百六十七町・人数は四十九億八万九千

じんじゃ

さんぜん

六百五十八人なり、神社は三千一百三十二・社寺は一万一千三十七所・男は

そ

十九億九万四千八百二十八人・女は二十九億九万四千八百三十人なり、其の

ただにちれんだいいち

なにごと

だいいち

なんよ

にく

だいいち

男の中に只日蓮第一の者なり、何事の第一とならば男女に悪まれたる第一の

そのゆえにほんこく

そ

なむ

あみだぶつ

者なり、其の故は日本国に国多く人多しと云へども其の心一同に南無阿弥陀仏

あみだぶつ

ほんぞん

きら

さいほう

たといほけきよう

を口ずさみとす、阿弥陀仏を本尊とし九方を嫌いて西方を願う、設い法華經

を行ずる人も真言を行ふ人も、戒を持つ者も智者も愚人も余行を傍として念仏
を正とし罪を消さん 謀は名号なり、故に・或は六万・八万・四十八万返
・或は十返・百返・千返なり、而るを日蓮一人・阿弥陀仏は無間の業・禅宗
は天魔の所為・真言は亡国の惡法・律宗・持斎等は国賊なりと申す故に
上一人より下万民に至るまで父母の敵宿世の敵謀叛夜討強盜よりも・或畏れ
・或は瞋り・或は詈り・或は打つ、是を する者には所領を与へ是を讃むる者
をば其の内を出だし・或は過料を引かせ殺害したる者をば褒美なんどせらる
る上兩度まで御勘氣を蒙れり、当世第一の不思議の者たるのみならず人王九
十代仏法渡りては七百余年なれども・かかる不思議の者なし、日蓮は文永の
大彗星の如し日本国に昔より無き天変なり、日蓮は正嘉の大地震の如し秋津
洲に始めての地天なり、日本国に代始まりてより已に謀叛の者二十六人・第一
は大山の王子・第二は大石の山丸・乃至第二十五人は頼朝第二十六人は義時

なり、二十四人は朝は責められ奉り獄門に首を懸けられ山野に骸を曝す、
二人は王位を傾むけ奉り國中を手に拳る王法既に尽きぬ、此等の人人も日蓮
が万人に悪まるるに過ぎず、其の由を尋ねれば法華經には最第一の文あり、
然るを弘法大師は法華最第三・慈覺大師は法華最第二・智証大師は慈覺の
如し、今叡山・東寺・園城寺の諸僧・法華經に向いては法華最第一と読めど
も其の義をば第二・第三と読むなり、公家と武家とは子細は知るしめさねど
も御歸依の高僧等皆此の義なれば師檀一同の義なり、其の外禅宗は教外別伝
と云云・法華經を蔑如する言なり、念仏宗は千中無一・未有一人得者と申す
心は法華經を念仏に対して挙げて失ふ義なり、律宗は小乘なり正法の時
すら仏免し給う事なし況や末法に是を行じて国主を誑惑し奉るをや、妲己・
妹喜・褒似の三女が三王を誑らかして代を失いしが如し、かかる惡法国に流布
して法華經を失う故に安德・尊成等の大王・天照太神・正八幡に捨てられ

給^{たま}いて・或^{ある}は海に沈み・或^{ある}は島に放たれ給^{たま}い相伝^{そうでん}の所従^{しよじゆう}等に傾けられ給^{たま}いし
は天に捨てられさせ給^{たま}う故^{ゆゑ}ぞかし、法華^{ほけき}經の御敵^{ごてき}を御歸依^{ごきえ}有りしかども是^{これ}を
知る人なければ其^その失^{とが}を知る事もなし、「知人は起を知り蛇^{じゃ}は自^{みづか}ら蛇^{じゃ}を識^しる」
とは是^{これ}なり。

にちれん 日蓮は智人に非ざれども蛇は竜の心を知り烏の世の吉凶を計るが如し、此
の事計りを勘へ得て候なり、此の事を申すならば須臾に矢に当るべし申さず
ば又大阿鼻地獄に墮つべし。

法華經を習うには三の義あり一には謗人、勝意比丘・苦岸比丘・無垢論師
・大慢婆羅門等が如し、彼等は三衣を身に纏い一鉢を眼に当てて二百五十戒
を堅く持ちて而も大乘の讎敵と成りて無間・大城に墮ちにき、今・日本国
の弘法・慈覺・智証等は持戒は彼等が如く智慧は又彼比丘に異ならず、但
大日經・真言第一・法華經第二・第三と申す事百千に一つも日蓮が申す様な
らば無間・大城にやおはすらん、此の事は申すも恐れあり増して書き付くる
までは如何と思ひ候へども法華經最第一と説かれて候に是を二三等と読まん
人を聞いて人を恐れ国を恐れて申さずば即是彼怨と申して一切衆生の大怨敵
なるべき由・經と釈とにのせられて候へば申し候なり、人を恐れず世を憚か

らず云う事がふあいしんみょうたんしやくむじょうどう我不愛身命もつ但惜無上道これと申すは是なり、不輕菩薩ふぎようぼさつの惡口杖石あつくも
他事たじに非ずあら世間せけんを恐れざるに非ずあら唯法華經ただほけきょうの責めねんころの苦なればなり、例せば
祐成・時宗が大将殿の陣の内を簡えらばざりしは敵の恋しく恥はじの悲しかりし故ぞ
かし、此これは謗人ほうじんなり。

謗家もうと申すは都すて一期の間ほけきょう・法華經を謗せず昼夜十二時に行ずれども謗家
に生れぬれば必ず無間地獄むげんじごくに墮おつ、例せば勝意比丘しょういびく・苦岸比丘くがんびくの家に生まれ
て・或あるは弟子でしとなり・或あるは檀那だんなと成りし者共が心ならず無間地獄むげんじごくに墮おちたる
是なり、譬たとえば義盛が方の者・軍をせし者はさて置きぬ腹の内に有りし子も
産を待たれず母の腹を裂かれしが如ごとし、今日蓮いまにちれんが申す弘法こうぼう・慈覺じかく・智証ちしょうの三
大師だいしの法華經ほけきょうを正しく無明むみょうの辺域へんいき・虚妄こもうの法と書かれて候は若もし法華經ほけきょうの文
実いならば叡山えいざん・東寺とうじ・園城寺おんじょうじ七な大寺だいにしち日本にほん一万一千三十七所の寺寺の僧いは如何
が候そつらはんずらん、先例せんれいの如ごとくならば無間むげん・大城だいにしやう疑無うたがいし、是これは謗家なり。

謗国と申すは謗法の者・其の国に住すれば其の一国・皆無間・大城になる
なり、大海へは一切の水集り其の国は一切の禍集まる、譬えば山に草木の滋き
が如し、三災月月に重なり七難日日に来る、飢渴発れば其の国餓鬼道と変じ
疫病重なれば其の国地獄道となる軍起れば其の国修羅道と変ず、父母・兄弟
姉妹をば簡ず妻とし夫と憑めば其の国畜生道となる、死して三惡道に墮つ
るにはあらず現身に其の国四惡道と変ずるなり、此れを謗国と申す。
例せば大莊嚴仏の末法師子音王仏の濁世の人人の如し、又報恩經に説かれ
て候が如くんば過去せる父母・兄弟姉妹一切の人死せるを食し又生たるを食
す、今・日本国亦復是くの如し真言師・禅宗持斎等人を食する者・国中に
充滿せり、是偏に真言の邪法より事起れり、竜象房が人を食いしは万が一
顕れたるなり、彼に習いて人の肉を・或は猪鹿に交へ・或は魚鳥に切り雑へ
・或はたたき加へ・或はすしとして売る、食する者数を知らず皆天に捨てら

れ守護しゅごの善神ぜんじんに放されたるが故なり、結句けつくは此の国・他国たこくより責められ自国
とし打ちして此の国變じて無間地獄むげんじごくと成るべし、日蓮にちれん此の大なる失とがを兼かねて見
し故ゆえに与同罪よどうざいの失とがを脱まぬかれんが為め仏の呵責かしやくを思おもふ故に知恩報恩ちおんほうおんの為め国の恩
を報はぜんと思おもいて国主並こくしゅに一切衆生いっさいしゅじょうに告げ知らしめしなり。

不殺生戒ふさつしようかいと申もうすは一切いっさいの諸戒しよの中の第一だいいちなり、五戒ごかいの初めにも不殺生戒ふさつしようかい八

戒・十戒・二百五十戒・五百戒・梵網ぼんもつぎょうの十重じゅうづきん禁戒・華嚴けこんの十無尽戒・

瓔珞經ようらくきやうの十戒等の初めには皆不殺生戒みなふさつしようかいなり、儒家じゆけの三千さんぜんの禁の中にも大辟たいへきこ

そ第一だいいちにて候へ、其の故そのゆえは「満三千界・無有直身命しんみょう」と申もうして三千世界さんぜんせかいに

満ちんぼうつる珍宝ちんぼうなれども命なに替かる事はなし、蟻子ありを殺ころす者尚な地獄ちごくに墮おつ況あや魚鳥

等をや青草なおいこくを切る者猶な地獄ちごくに墮おつ況あや死骸しがいを切る者をや、是かくのことくの如ごとき重戒ちゆうかいな

れども法華經ほけきやうの敵たひに成なりれば此これを害がいするは第一だいいちの功德くどくと説とき給たまふなり、況あや

供養くやうを展のぶ可べけんや、故ゆえに仙予國王せんよこくおうは五百人の法師ほうしを殺ころし覺徳比丘かくとくびくは無量むりやうの

ほうぼう

あそかだいおう

じゅうまん

げどう

たまい

これらの

誹法の者を殺し

阿育大王は

十万八千の外道を殺し給いき、

此等の

こくおう

國王比丘等は

閻浮第一の賢王持戒第一の智者なり、

仙予國王は

釈迦仏覺徳比丘

かしょうぶつあそかだいおう

は迦葉仏阿育大王は得道の仁なり、

今・日本國も

又是くの如し持戒・破戒・

無戒王臣万民を論ぜず一同に法華經誹謗の國なり、

設い身の皮をはぎて法華經

を書き奉り肉を積んで供養し給うとも必ず國も滅び身も地獄に墮ち給うべき

大なる科あり、唯真言宗・念仏宗・

たてまつ

ただしんごんしゅう

ねんぶつしゅう

ぜんしゅうじさい

いまし

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

たてまつ

ただしんごんしゅう

ねんぶつしゅう

ぜんしゅうじさい

いまし

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

たてまつ

ただしんごんしゅう

ねんぶつしゅう

ぜんしゅうじさい

いまし

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

たてまつ

ただしんごんしゅう

ねんぶつしゅう

ぜんしゅうじさい

いまし

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

たてまつ

ただしんごんしゅう

ねんぶつしゅう

ぜんしゅうじさい

いまし

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

たてまつ

ただしんごんしゅう

ねんぶつしゅう

ぜんしゅうじさい

いまし

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

たてまつ

ただしんごんしゅう

ねんぶつしゅう

ぜんしゅうじさい

いまし

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

たてまつ

ただしんごんしゅう

ねんぶつしゅう

ぜんしゅうじさい

いまし

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

たてまつ

ただしんごんしゅう

ねんぶつしゅう

ぜんしゅうじさい

いまし

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

たてまつ

ただしんごんしゅう

ねんぶつしゅう

ぜんしゅうじさい

いまし

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

たてまつ

ただしんごんしゅう

ねんぶつしゅう

ぜんしゅうじさい

いまし

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

たてまつ

ただしんごんしゅう

ねんぶつしゅう

ぜんしゅうじさい

いまし

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

たてまつ

ただしんごんしゅう

ねんぶつしゅう

ぜんしゅうじさい

いまし

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

たてまつ

ただしんごんしゅう

ねんぶつしゅう

ぜんしゅうじさい

いまし

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

たてまつ

ただしんごんしゅう

ねんぶつしゅう

ぜんしゅうじさい

いまし

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

たてまつ

ただしんごんしゅう

ねんぶつしゅう

ぜんしゅうじさい

いまし

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

たてまつ

ただしんごんしゅう

ねんぶつしゅう

ぜんしゅうじさい

いまし

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

たてまつ

ただしんごんしゅう

ねんぶつしゅう

ぜんしゅうじさい

いまし

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

つくりて既に無間地獄に墮つべかりしが法華經を読む事を打ち捨てて天台大師に仕えしかば地獄の苦を脱れ給いき、今法華宗の人人も又是くの如し、比叡山は法華經の御住所日本国は一乗の御所領なり、而るを慈覺大師は法華經の座主を奪い取りて真言の座主となし三千の大衆も又其の所従と成りぬ、弘法大師は法華宗の檀那にて御坐ます嵯峨の天皇を奪い取りて内裏を真言宗の寺と成せり、安徳天皇は明雲座主を師として頼朝の朝臣を調伏せさせ給いし程に、右大將殿に罰せらるるのみならず安徳は西海に沈み明雲は義仲に殺され給いき、尊成王は天台座主・慈円僧正東寺御室並に四十一人の高僧等を請下し奉り内裏に大壇を立てて義時右京の権の大夫殿を調伏せし程に、七日と申せし六月十四日に洛陽破れて王は隱岐の国・或は佐渡の島に遷され座主御室は・或は責められ・或は思い死に死に給いき、世間の人人・此の根源を知る事なし此れ偏に法華經・大日經の勝劣に迷える故なり、今も又

にほんこくだいもうこく

じょうぶく

うけたま

日本国大蒙古国の責を得て彼の不吉の法を以て御調伏を行わると承わる又
日記分明なり、此の事を知らん人争か歎かざるべき。

われらひぼうしゅうほう

いかでなげ

あ

たとい

のが

悲いかな我等誹謗正法の国に生れて大苦に値はん事よ、設い謗身は脱ると

とがいかん

とが

まぬか

ふほ・きょうだい

云うとも謗家謗国の失如何せん、謗家の失を脱れんと思はば父母・兄弟等に

かた

あるに

ある

まぬか

とが

此の事を語り申せ、或は悪まるるか、或は信ぜさせまいらするか、謗国の失

まぬか

こくしゅ

かんぎよう

たてまつ

しざい

るざい

い

を脱れんと思はば国主を諫曉し奉りて死罪か流罪かに行わるべきなり、

がふあいしんみょうたんしやくむじょうだつ

じつぽつ

しやく

これ

我不愛身命但惜無上道と説かれ身軽法重・死身弘法と釈せられし是なり、

かこおんのんこう

いだ

過去遠遠劫より今に仏に成らざりける事は加様の事に恐れて云い出さざりけ

る故なり、

みらい

またかくのごと

いまにちれん

今日蓮が身に当りてつみ知られて

候、設い此の事を知る弟子等の中にも当世の責のおそろしさと申し露の身の

たとい

でし

とうせ

もう

つゆ

消え難きに依りて・或は落ち・或は心計りは信じ・或はとかうす、御経の文

がた

よ

ある

ある

ほか

ある

に難信難解と説かれて候が身に当つて貴く覚え候ぞ、謗ずる人は大地微塵の

なんしんなんげ

おほ

ぼう

だいちみじん

に難信難解と説かれて候が身に当つて貴く覚え候ぞ、謗ずる人は大地微塵の

こと
如し信ずる人は爪上の土の如し、
謗ずる人は大海進む人は一。

てんだい
天台山に竜門と申す所あり其の滝百丈なり、春の始めに魚集りて此の滝へ

登るに百千に一つも登る魚は竜と成る、此の滝の早き事矢にも過ぎ電光にも

過ぎたり、登りがたき上に春の始めに此の滝に漁父集りて魚を取る網を懸くる

事百千重・或は射て取り・或は酌んで取る、鷲・鴟梟虎狼・犬・狐集りて昼

夜に取りふなり十年・二十年に一つも竜となる魚なし、例せば凡下の者の

昇殿を望み下女が后と成らんとするが如し、法華經を信ずる事此にも過ぎて

候と思食せ、常に仏禁しめて言う何なる持戒智慧高く御坐して一切經並に

法華經を進退せる人なりとも法華經の敵を見て責め罵り国主にも申さず人を

恐れて黙止するならば必ず無間・大城に墮つべし、譬えば我は謀叛を發さね

ども謀叛の者を知りて国主にも申さねば与同罪は彼の謀叛の者の如し、南岳

大師の云く「法華經の讎を見て呵責せざる者は謗法の者なり無間地獄の上に

墮^おちん」と、見て申^{もう}さぬ大智者^{ちしや}は無間^{むげん}の底に墮^おちて彼の地獄^{じごく}の有らん限りは出^いずべからず、日蓮^{にちれん}此^この禁^{いまし}めを恐^{おそ}るる故^{ゆゑ}に國中^{くに}を責^せめて候程^{こうりやう}に一度^{ひとたび}ならず流罪^{るざい}・死罪^{しざい}に及^{およ}びぬ、今は罪^{つみ}も消え過^{まぬか}も脱^{だつ}れなんと思^{おも}ひて鎌倉^{かまくら}を去^さりて此^この山に入^いつて七年^{しちねん}なり。

ていたらくにほんこく

此^この山の為^{ため}に体日本^{ていにっぽん}の國中^{くに}には七道^{しちどう}あり七道^{しちどう}の内に東海道^{とうかいどう}十五箇国^{じふごこく}、其^その内

はきり

はきり

もう

いぬい

に甲州^{かうしゅう}・飯野^{いひの}・御牧^{ごまき}・波木井^{なみい}の三箇郷^{さんかきやう}の内波木井^{なみい}と申^{もう}す、此^この郷^{きやう}の内戌亥^{いぬい}の

みやま

たかとり

方^{かた}に入りて二十余里^{にじゅうよりの}の深山^{みやま}あり、北^{きた}は身延山^{みえんざん}・南^{みなみ}は鷹取山^{たかとり}・西^{にし}は七面山^{しちめんざん}・東^{ひがし}

てんし

こと

めぐ

は天子山^{てんしざん}なり、板^{いた}を四枚^{よっぺい}つい立^たてたるが如^{ごと}し、此^この外^{ほか}を回^{めぐ}りて四^{よっ}つの河^があり

はきり

北^{きた}より南^{みなみ}へ富士河^{ふじがは}・西^{にし}より東^{ひがし}へ早河^{はやがは}此^これは後^{あと}なり、前^{まえ}に西^{にし}より東^{ひがし}へ波木井河^{なみいがは}

てんじく

じゆぶ

ところ

の内^{うち}に一つ^{ひとつ}の滝^{たき}あり身延河^{みえんがは}と名^なけたり、中天竺^{てんてんじく}の鷲峰山^{じゆぶざん}を此^この処^{ところ}へ移^{うつ}せるか

はたまかんど

てんだい

おほ

将^{しょう}又^{また}漢土^{かんど}の天台山^{てんだいざん}の来^きれるかと覺^{おぼ}ゆ、此^この四山四河^{しよざんしよが}の中に手^ての広^{ひろ}さ程^{ほど}の平^{ひら}か

ところ

ここ

あんしつ

てんう

まぬか

なる処^{ところ}あり、爰^{こゝ}に庵室^{あんしつ}を結^{むす}んで天雨^{てんう}を脱^{だつ}れ木^きの皮^{かわ}をはぎて四壁^{しへき}とし、自死^{じし}の

鹿の皮を衣とし、春は蕨を折りて身を養ひ秋は果を拾いて命を支へ候つる程に、
去年十一月より雪降り積て改年の正月今に絶る事なし、庵室は七尺・雪
は一丈・四壁は氷を壁とし軒のつららは道場莊嚴の瓔珞の玉に似たり、内
には雪を米と積む、本より人も来らぬ上雪深くして道塞がり問う人もなき処
なれば現在に八寒地獄の業を身につくのへり、生きながら仏には成らずして
又寒苦鳥と申す鳥にも相似たり、頭は剃る事なければうづらの如し、衣は氷
にとどられて鶯鴛の羽を氷の結べるが如し、かかる処へは古へ昵びし人も
問わず弟子等にも捨てられて候いつるに此の御器を給いて雪を盛りて飯と
観じ水を飲んでこんずと思う、志のゆく所・思い遣らせ給へ又又申すべく
候、
惶恐 謹言。

こうあん

弘安三年正月二十七日

にちれんかおう
日蓮花押

秋元太郎兵衛殿御返事
ごへんじ

一七〇 兄弟抄

文永十二年四月 五十四歳御作 1079p

与池上兄弟 於身延

そ 夫れ法華經と申すは八万法蔵の肝心十二部經の骨髓なり、三世の諸仏は此
の經を師として正覺を成じ十方の仏陀は一乘を眼目として衆生を引導し
給ふ、今現に經蔵に入つて此れを見るに後漢の永平より唐の末に至るまで渡
れる所の一切經論に二本あり、所謂旧訳の經は五千四十八卷なり、新訳の經
は七千三百九十九卷なり、彼の一切經は皆各各分に随つて我第一なりとな
のれり、然而法華經と彼の經經とを引き合せて之を見るに勝劣天地なり
高下雲泥なり、彼の經經は衆星の如く法華經は月の如し彼の經經は燈炬
・星月の如く法華經は大日輪の如し此れは總なり。

別して經文に入つて此れを見奉れば二十の大事あり、第一第二の大事は
三千塵点劫五百塵点劫と申す二つの法門なり、其三千塵点と申すは第三の卷

けじょうゆほん 化城喩品と申す処に出でて候、此の三千大千世界を抹して塵となし東方に向

つて千の三千大千世界を過ぎて一塵を下し又千の三千大千世界を過ぎて一塵

を下し此くの如く三千大千世界の塵を下はてぬ、さてかえつて下せる

三千大千世界と下さざる三千大千世界をともしおしふさねて又塵となし、此

の諸の塵をもてならべをきて一塵を一劫として経尽しては、又始め又始めか

くのごとく上の諸塵の尽し経たるを三千塵点とは申すなり、今三周の声聞と

申して舍利弗・迦葉・阿難・羅云など申す人人は過去遠遠劫・三千塵点劫

のそのかみ大通智勝仏と申せし仏の第十六の王子にてをはせし菩薩ましまし

き、かの菩薩より法華経を習いけるが悪縁にすかされて法華経を捨つる心つ

きにけり、かくして・或は華嚴経へをち・或は般若経へをち・或は大集経

へをち・或は涅槃経へをち・或は大日経・或は深密経・或は觀経等へをち

・或は阿含・小乗経へをちなどしけるほどに次第に墮ちゆきて後には

人天にんてんの善根ぜんこん・後に惡にをちぬ、かくのごとく墮おちゆく程に三千塵点劫さんぜんじんてんこうが間、
たぶんむげんじこく
多分は無間地獄少分は七大地獄たまたまには一百余の地獄じこくまれには餓鬼がき・
ちくしょうしゅら
畜生・修羅しゅらなどに生れ大塵点劫じんでんなんどを経て人天にんてんには生れ候けり。

されば法華經の第二の卷に云く「常に地獄じこくに処しよすること園觀おんかんに遊ぶが如くごと
あくとつ
余の惡道に在ること己が舍宅しゃたくの如し」等云云、十惡をつくる人は等活黑繩とうかつくじょう
もつ
なんど申す地獄に墮おちて五百生・或は一千歳を経、五逆ごぎやくをつくれる人は
むげんじこく
無間地獄に墮おちて一中劫を経て後は又かへりて生ず、いかなる事にや候らん
ほけきよう
法華經をすつる人はすつる時はさしも父母ふぼを殺すなんどのやうにをびただし
くはみへ候はねども無間地獄むげんじこくに墮おちては多劫を経候、設父母ふぼを一人・二人
ばんにん
十人・百人・千人・万人・十万人・百万人・億万人なんど殺して候ともいか
さんぜんじんてんこう
んが三千塵点劫をば經候べき、一仏・二仏・十仏・百仏・千仏・万仏・乃至ないし
へそつろう
・億万仏を殺したりともいかなが五百塵点劫をば經候べき、しかるに法華經ほけきよう
ごひやくじんてんこう

をすて候いけるつみによりて三周の^{しやうもん}声聞が三千塵点劫を経^{さんぜんじんてんこう}諸大菩薩の^{しやだいぼさつ}
^{こひやくじんてんこう}五百塵点劫を経候けることをびただしくをばへ候、せんするところは・をも
^{こくう}つて虚空を打てばくふしいたからず石を打てばくふしいたし、悪人を殺すは罪^{あくにん}
あさし善人を殺すは罪^{ぜんにん}ふかし・或は他人を殺すはをもつて泥を打つがごと
し父母を殺すはをもつて石を打つがごとし、鹿をほつる犬は頭^{こつべ}われず師子^{しし}
を吠る犬は腸^{はらわた}くさる日月をのむ修羅は頭七分にわれ仏を打ちし提婆は大地^{だいば}
われて入りにき、所対^{しやたい}によりて罪の^{つみ}輕重はありけるなり。
さればこの法華經は一切の諸^{ほけきやう}仏の^{いっさい}眼目教主^{しよぶつ}釈尊の^{がんもくきやうしゆしやくそん}本師^{ほんし}なり、一字一点も
すつる人あれば千万の父母を殺せる罪にもすぎ十方の^{じゅうほう}仏の身より血を出す罪^{つみ}
にもこへて候けるゆへに三五の塵点^{じんてん}をば経候けるなり此の法華經はさてをき
たてまつりぬ又此の経を経のごとくにとく人に値^あつことは難^{かたき}にて候、設^{たとひ}い一
眼の龜の浮木^{うきぎ}には値^あうとも・はちすのいとをもつて須弥山^{しゆみせん}をば虚空^{こくう}にかくと

も法華經ほけきょうを経のごとく説く人にあひがたし。

されば慈恩大師じおんだいしと申せし人は玄奘三蔵げんじょうさんぞうの御弟子太宗皇帝おんでしたいそうこうていの御師おんしなり、梵漢

を空いつさいきょうにうかべ一切經を胸にたたへ仏舍利しゃりを筆のさきより雨ふらし牙より光を放

ち給たまいし聖人しょうにんなり、時の人も日月にちがつのごとく恭敬きやうけいし後の人も眼目がんもくとこそ渴仰かつこう

せしかども伝教大師でんきやうだいしこれをせめ給たまうには雖讚法華經・還死法華心等云云、言

は彼の人の心には法華經ほけきょうをほむとをもへども理のさすところは法華經ほけきょうをころ

す人になりぬ、善無畏三蔵ぜんむいさんぞうは月支国がっしうぢやうな国の国王こくおうなり、位をすて出家しゅっけ

して天竺てんじく五十余の国を修行しゆぎやうして顕密二道をきわめ、後には漢土かんどにわたりて

玄宗皇帝げんそうこうていの御師おんしとなる、尸那日本しなにほんの真言師しんごんし誰か此人のながれにあらざる、か

かる・たうとき人なれども一時いちじに頓死とんしして閻魔えんまのせめにあはせ給たまう、いかな

りける・ゆへとも人しらず。

日蓮にちれんこ此れをかんがへたるに本は法華經ほけきょうの行者ぎやうじやなりしが大日經だいにちきょうを見て

法華經にまされりといふしゆへなり、されば舍利弗・目連等が三五の塵点を
経しことは十悪・五逆の罪にもあらず謀反・八虐の失にてもあらず、但
悪知識に値うて法華經の信心をやぶりて權經にうつりしゆへなり、天台大師
釈して云く「若し悪友に値えば則ち本心を失う」云云、本心と申すは法華經
を信ずる心なり、失うと申すは法華經の信心を引きかへて余經へうつる心な
り、されば經文に云く「然と良薬而不肯服」等云云、天台の云く「其の心を失う
者は良薬を与つと雖も而かも肯て服せず生死に流浪し他國に逃逝す」云云。
されば法華經を信ずる人のをそるべきものは賊人・強盜・夜打ち虎狼師子
等よりも当時の蒙古のせめよりも法華經の行者をなやます人人なり、此の
世界は第六天の魔王の所領なり一切衆生は無始已來彼の魔王の眷屬なり、
六道の中に二十五有と申するをかまへて一切衆生を入るのみならず妻子
と申すほだしをうち父母・主君と申すあみをそらにはり貪・瞋・癡の酒をの

の魔王・或は妻子の身に入つて親や夫をたばらかし・或は国王の身に入つて
法華經の行者を・をどし・或は父母の身に入つて孝養の子をせむる事あり、
悉達太子は位を捨てんとし給ひしかば羅 羅はらまれてをはしませしを淨飯
王此の子生れて後出家し給えといさめられしかば魔が子を・をさへて六年な
り、舍利弗は昔禅多羅仏と申せし仏の末世に菩薩の行を立てて六十劫を経た
りき、既に四十劫ちかづきしかば百劫にてあるべかりしを第六天の魔王・菩薩
の行の成ぜん事をあぶなしと思ひけん、婆羅門となりて眼を乞ひしかば
相違なくとらせたりしかども其より退する心出来て舍利弗は無量劫が間・
無間地獄に堕ちたりしぞかし、大莊嚴仏の末の六百八十億の檀那等は苦岸等
の四比丘にたばらかされて普事比丘を怨みてこそ大地微塵劫が間・無間地獄
を経しぞかし、師子音王仏の末の男女等は勝意比丘と申せし持戒の僧をたの
みて喜根比丘を笑つてこそ無量劫が間地獄に堕ちつれ。

今又日蓮が弟子・檀那等は此にあたり、法華經には「如来の現在にすら
猶怨嫉多し況や滅度の後をや」又云く「一切世間怨多くして信じ難し」涅槃經
に云く「横に死殃に羅り呵嘖・罵辱・鞭杖・閉繫・飢餓・困苦・是くの如き
等の現世の輕報を受けて地獄に墮ちず」等云云、般泥・經に云く「衣服不足
にして飲食・疎なり財を求めるに利あらず貧賤の家及び邪見の家に生れ・或
いは王難及び余の種種の人間の苦報に遭う現世に輕く受くるは斯れ護法の
功德力に由る故なり」等云云、文の心は我等過去に正法を行じける者にあだ
をなしてありけるが今かへりて信受すれば過去に人を障る罪にて未来に
大地獄に墮つべきが、今生に正法を行ずる功德強盛なれば未来の大苦をま
ねぎこして少苦に値うなり、この經文に過去の誹謗によりてやうやうの果報
をつくるなかに・或は貧家に生れ・或は邪見の家に生れ・或は王難に値う等
云云、この中に邪見の家と申すは誹謗正法の家なり王難等と申すは惡王に生

れあうなり、此二つの大難は各各の身に當つてをばへつべし、過去の謗法の罪
を滅せんとて邪見の父母に・せめられさせ給う、又法華經の行者をあだむ
国主にあへり經文明明たり經文赫赫たり、我身は過去に謗法の者なりける
事疑い給うことなかれ、此れを疑つて現世の輕苦忍びがたくて慈父のせ
めに隨いて存外に法華經をすつるよしあるならば我身地獄に墮つるのみなら
ず悲母も慈父も大阿鼻地獄に墮ちてともにかなしまん事疑いなかるべし、
大道心と申すはこれなり。

各各隨分に法華經を信ぜられつるゆへに過去の重罪をせめいだし給いて
候、たとへばくろがねをよくよくきたへばきずのあらわるるがごとし、石は
やけばはいとなる金は・やけば真金となる、此の度こそ・まことの御信用は
・あらわれて法華經の十羅刹も守護せさせ給うべきにて候らめ、雪山童子の
前に現ぜし羅刹は帝釈なり尸毘王のはとは毘沙門天ぞかし、十羅刹・心み

給^{たま}わんがために父母^{ふぼ}の身に入らせ給^{たま}いてせめ給^{たま}うこともや・あるらん、それ
につけても、心あさからん事は後悔^{こうかい}あるべし、又前車のくつがへすは後車の
いましめぞかし、今の世には・なにとなくとも道心^{どうしん}をこりぬべし、此の世の
ありさま厭^{いと}うともよも厭^{いと}われじ日本^{にほん}の人人^{ひとびと}定んで大苦に値^あいぬと見へて候
眼前^{がんぜん}の事ぞかし、文永九年二月の十一日にさかななりし華の大風^{たいふう}にをるが
・ごとく清絹^{すずし}の大火^{だいか}に・やかるるがごとくなりしに・世をいとう人のいかで
かなかるらん文永十一年の十月ゆきつしまのものども一時^{いちじ}に死人^{しにん}となりし事
は・いかに人の上とを・をぼすか当時^{とうじ}も・かのうてに向かいたる人人^{ひとびと}のなげ
き老たるをやをさなき子わかき妻めづらしかりし・すみかうちすてて・よし
なき海をまほり雲の・みうればはたかと疑^{うたが}い・つりぶねの・みゆれば兵船
かと肝心^{かんじん}をけす、日に一二度山えのぼり夜に三四度馬にくらを・をく、現身^{げんしん}
に修羅道^{しゅらどう}をかんぜり、各各のせめられさせ給^{たま}う事も詮^{せん}するところは国主^{こくしゅ}の

ほけきよう
法華經のかたきとなれるゆへなり、国主のかたきとなる事は持齋等・念仏・
しんこんし
真言師等が謗法よりをこれり、今度ねうしくらして法華經の御利生心みさせ
たま
給へ、日蓮も又強盛に天に申し上げ候なり、いよいよ・をづる心ねすがた・
にちれん
をはすべからず、定んで女人は心よはくをはすれば・ござたちは心ひるがへ
りてやははすらん、がうじやうに・はがみをして・たゆむ心なかれ、例せば
にちれん
日蓮が平左衛門の尉がもとにて・うちふるまいいゐしがごとく・すこしもを
さえもん
づる心なかれ、わだが子となりしもの・わかさのかみが子となりし・將門貞
つうじゅう
当が郎從等となりし者、仏になる道には・あらねども・はぢを・をもへば命
なら
をしまぬ習いなり、なにと・なくとも一度の死は一定なり、いろばしあしく
ひとたび
て人に・わらはれさせ給うなよ。
たま

あまりにをぼつかなく候へば大事のものがたり一つ申す、白ひ叔せいと申
だいじ
せし者は胡竹国の王の二人の太子なり、父の王弟の叔せいに位をゆづり給い
たいし
たまい

き、父して後叔せい位につかざりき、白ひが云く位につき給え叔せいが云く
兄位を継ぎ給え白ひが云くいかに親の遺言をばたがへ給うぞと申せしかば親
の遺言はさる事なれどもいかんが兄を・をきては位には即くべきと辞退せし
かば、二人共に父母の国をすてて他国へわたりぬ、周の文王につかへしほど
に文王殷の紂王に打たれしかば武王百箇日が内にいくさを・をこしき、白ひ
叔せいは武王の馬の口にとりつきていさめて云く・をやのしして後三箇年が
内にいくさを・をこすはあに不孝にあらずや、武王いかりて白ひ叔せいを打
たんとせしかば大公望せいして打たせざりき、二人は此の王をうとみてすや
うと申す山にかくれゐてわらびを・をりて命をつぎしかば、麻子と申す者ゆ
きあひて云くいかに・これには・をはするぞ二人上件の事をかたりしかば
麻子が云くさるにては・わらびは王の物にあらずや、二人せめられて爾の時
よりわらびをくわず、天は賢人をすて給わぬならひなれば天白鹿と現じて乳

をもつて二人をやしなひき、白鹿去つて後に叔せいが云く此の白鹿の乳をのむだにもうましまして肉をくわんといぬしかば白ひせいししかども天これをききて来らず、二人うへて死ににき、一生が間賢なりし人も一言に身をほろぼすにや、各各も御心の内はしらず候へば・をぼつかなしをぼつかなし。

釈迦如来は太子にてをはせし時父の淨飯王太子を・をしみたてまつりて出家をゆるし給はず、四門に二千人のつわものをすへてまほらせ給ひしかども、終にをやの御心をたがへて家をいでさせ給いき、一切は・をやに随うべきにてこそ候へども仏になる道は随わぬが孝養の本にて候か、されば心地観經には孝養の本をとかせ給うには棄恩入無為真實報恩者等云云、言はまことの道に入るには父母の心に随わずして家を出て仏になるがまことの恩をほうずるにてはあるなり、世間の法にも父母の謀反などを・をこすには随わぬが孝養とみへて候ぞかし、孝經と申す經に見へて候、天台大師も法華經の

三昧さんまいに入らせ給たまいてをはせし時は父母ふぼ左右さうのひざに住して仏道ぶつどうをさえんとし給たまいしなり、此これは天魔てんまの父母ふぼのかたちをげんじてさつるなり。

白はくひすくせいが因縁いんねんはさきにかき候こうぬ、又また第一だいいちの因縁いんねんあり、日本国にほんこくの人王

第十六代に王をはしき応神天王もうと申もうす今の八幡大菩薩はちまんたいぼさつこれなりこの王の御子

二人まします嫡子いとこのみこをば仁徳・次男つぎは宇治王子天王みこ・次男つぎの宇治の王子みこに位

をゆづり給たまいき、王ほうぎよならせ給たまいて後・宇治の王子みこの云いわく兄位いろえにつき

給たまうべし、兄いわの云いわく、いかに・をやの御ゆづりをばもちゐさせ給たまわぬぞ、か

くのごとくたがいにくむじて、三箇年さんかんねんが間位に王をはせざりき、万民ばんみんのなげ

きいづばかりなし天下てんかのさいにてありしほどに、宇治の王子みこ云いわく我われいきてあ

るゆへにあに位に即すなはち給たまわずといつて死させ給たまいにき、仁徳これをなげかせ

給たまいて又またふししづませ給たまいしかば、宇治の王子みこいきかへりて・やうやうに・

をほせをかせ給たまいて・又またひきいらせ給たまいぬ、さて仁徳・位につかせ給たまいたり

しかば国をだやかなる上しんら・はくさひ・かうらいも日本国にほんこくにしたがひて
・ねんぐを八十そうそなへけると・こそみへて候

へ。

賢王けんおうのなかにも兄弟きょうだいをだやかならぬれいも・あるぞかし・いかなるちぎり

にて兄弟きょうだいかくはをはするぞ浄蔵・浄眼の二人の太子たいしの生れかはりてをはする

やくおう

か薬王薬上の二人か、大夫志殿たゆうのさかんのの御をやの御勘気ごかんきはうけ給たまわりしか

どもひやうへの志殿さかんのの事は今度このたびはよもあには・つかせ給たまはじさるにてはい

たゆうのさかんの

よいよ大夫志殿たゆうのさかんののをやの御不審ふしんはをぼるげにてはゆりじなんどもをもつて候へ

ばこのわらわの申し候もつはまことにてや候らん、御同心もつと申し候へば・あまり

べち おんふみ

の・ふしぎさに別の御文おんぶんをまいらせ候、未来みらいまでのものがたり・なに事がこ

れにすぎ候べき。

さいいき もつ

西域さいいきと申す文にかきて候は月氏がっしに婆羅はらなつしこく斯国せろくりん・施鹿林せろくりんと申すところの一の

隱士あり仙の法を成じょうぜんとをもう、すでに瓦礫がりがくを変じて宝となし人畜じんちくの形をかえけれどもいまだ風雲にのつて仙宮にはあそばざりけり、此の事を成じょうせんがために一の烈士をかたらひ長刀をもたせて壇の隅に立てて息をかくし言をたつ、よひよりあしたにいたるまで・ものいはずば仙の法・成じょうずべし、仙を求める隱士は壇の中に坐して手に長刀をとつて口に神呪じんしゅをずうす約束やくそくして云いわく設たとひ死なんとする事ありとも物言いう事なかれ烈士云いく死するとも物いはず、此この如ごとくして既すでに夜中を過すぎて夜まさにあけんとする時、如何いかんが思いいけん烈士大おおに声こゑをあげて呼よはる、既すでに仙の法成なぜず、隱士烈士に言いつて云いく何いかに約束やくそくをばたがふるぞ口惜くちおししき事なりと云いう、烈士歎なげいて云いく少し眠いつてありつれば昔しゆじんし仕しへし主人自しゆじんみずから来きりて責せめつれども師の恩厚おんこうければ忍しので物いはず、彼の主人怒しゆじんつて頸けいをはねんと云いう、然しかるに而又またものいはず、遂すなはちに頸けいを切りつ中陰ちゆういんに趣おもむく我が屍しかばねを見れば惜おしく歎なげかし然しかるに而物いはず、遂すなはちに南印度いんどの婆羅門ばらもんの家に

生れぬ入胎出胎しゅつたいするに大苦忍しのびがたし然而息されどを出さず、又物いはず已すでに冠者
となりて妻をとつぎぬ、又親死ぬ又子をまうけたり、かなしくもありよろこ
ばしくもあれども物いはず此かくの如ごとくして年六十有五になりぬ、我が妻かた
りて云いわく汝なんじ若し物いはず汝なんじがいとをしみの子を殺さんと云う、時に我思
はく我已すでに年衰おとろえへぬ此の子を若もし殺されなば又子をまうけがたしと思いつ
る程に声をおこすと・をもへばをどろきぬと云いいければ、師が云いわく力及およばず
我も汝なんじも魔にたばらかされぬ終ついに此の事成せいぜずと云いいければ、烈士大おおに歎なげき
けり我心わがこころよはくして師の仙法を成せいぜずと云いいければ、隱士が云いわく我が失とがなり
兼かねて誠いましめざりける事と悔くゆ、然しかれども烈士師の恩を報はぜざりける事を歎なげき
て遂に思ひ死にししぬとかかれて候、仙の法と申もうすは漢土かんどには儒家じゅけより出いで
月氏がっしには外道げどうの法の一分いちぶんなり、云うにかひ無むき仏教ぶつぎょうの小乗しょうじょう・阿含經あこんぎょうにも
及およばず況つつべつえんや通別円つうべつえんをや況ほけきょうや法華經ほけきょうに及およべしや、かかる浅き事だにも成じょうぜん

とすれば四魔競て成じかたし、何に況や法華經の極理南無妙法蓮華經の七字を始めて持たん日本國の弘通の始ならん人の弟子・檀那とならん人人の大難の来らん事をば言をもつて尽し難し心をもつてをしはかるべしや。

されば天台大師の摩訶止觀と申す文は天台一期の大事一代聖教の肝心ぞ

かし、仏法漢土に渡つて五百余年・南北の十師・智は日月に齊く徳は四海に

響きしかどもいまだ一代聖教の浅深・勝劣・前後・次第には迷惑してこ

そ候いしが、智者大師再び仏教をあきらめさせ給うのみならず、妙法蓮華經

の五字の蔵の中より一念三千の如意宝珠を取り出して三国の一切衆生に普く

与へ給へり、此の法門は漢土に始るのみならず月氏の論師までも明し給はぬ

事なり、然れば章安大師の釈に云く「止觀の明静なる前代に未だ聞かず」云

云、又云く「天竺の大論尚其の類に非ず」等云云、其の上摩訶止觀の第五の

卷の一念三千は今一重立ち入たる法門ぞかし、此の法門を申すには必ず魔

出来すべし魔競はずは正法と知るべからず、第五の巻に云く「行解既に勤めぬれば三障四魔紛然として競い起る乃至随う可らず畏る可らず之に随えば將に人をして惡道に向わしむ之を畏れば正法を修することを妨ぐ」等云云、此の釈は日蓮が身に當るのみならず門家の明鏡なり謹んで習い伝えて未來の資糧とせよ。此の釈に三障と申すは煩惱障・業障・報障なり、煩惱障と申すは貪・瞋・癡等によりて障礙出来すべし、業障と申すは妻子等によりて障礙出来すべし、報障と申すは国主父母等によりて障礙出来すべし、又四魔の中に天子魔と申すも是くの如し今・日本国に我も止觀を得たり我も止觀を得たりと云う人人誰か三障四魔競へる人あるや、之に随えば將に人をして惡道に向わしむと申すは只三惡道のみならず人天九界を皆惡道とかけり、されば法華經を除きて華嚴・阿含・方等・般若・涅槃・大日經等なり、天台宗を除きて余の七宗の人人は人を惡道に向わしむる獄卒なり、天台宗

の人人ひとびとの中にも法華經ほけきょうを信ずるやうにて人を爾前にぜんへやるは惡道あくどうに人をつかはす獄卒ごくそつなり。

今二人ひとびとの人人は隱士りようげんと烈士ごとしのごとし一もかけなば成じようずべからず、譬たとえば鳥の二つの羽人りようげんの両眼ごとしの如し、又二人の御前おんまえ達は此の人人ひとびとの檀那だんなぞかし女人にょにんとなる事は物したがに随つかつて物を随つかえる身なり夫たのしくば妻もさかふべし夫盗人ぬすびとならば妻も盗人ぬすびとなるべし、是これ偏ひとえに今生計こんじようばかりの事にはあらず世世生生に影と身と華と果と根と葉との如ごとくにておはするぞかし、木にすむ虫は木をはむ水にある魚は水をくらふ芝かるれば蘭なく松さかうれば柏よろこぶ、草木そうもくすら是かくのごとくの如し、比翼もつと申もつす鳥は身は一つにて頭いづへ二つあり二つの口より入る物一身を養ふ、ひほくと申もつす魚は一目づつある故ゆえに一生が間はなる事なし、夫と妻とは是かくのごとくの如し此の法門ほうもんのゆへには設たとひ夫に害せらるるとも悔くゆる事なかれ、一同して夫の心をいさめば童女りゆうによが跡あとをつぎ末代まつだい惡世あくせの女人にょにんの成仏じようぶつの

てほん
手本と成り給うべし、此くの如くおはさば設ひいかなる事ありとも日蓮が二
聖・二天・十羅刹釈迦・多宝に申して順次生に仏になしたてまつるべし、心
の師とはなるとも心を師とせざれとは六波羅蜜經の文なり。

たと
設ひ・いかなる・わづらはしき事ありとも夢になして只法華經の事のみさ
ただほけきよう

はぐらせ給うべし、中にも日蓮が法門は古へこそ信じかたかりしが今は前
たま
にちれん
ほうもん

いひをきし事既にあひぬればよしなく謗ぜし人人も悔る心あるべし、設ひこ
すで
ほう
ひとびと
くゆ
たと

れより後に信ずる男女ありとも各各にはかへ思ふべからず、始は信じてあり
なんよ

しかども世間のをそろしさにすつる人人かずをしらず、其の中に返つて本よ
せけん
ひとびと
そ

り謗ずる人人よりも強盛にそしる人人又あまたあり、在世にも善星比丘等
ほう
ひとびと
こつじよう
ざいせ
ぜんしやう
びく

は始は信じてありしかども後にすつるのみならず返つて仏をはうじ奉りしゆ
たてまつ

へに仏も叶い給はず無間地獄にをちにき、此の御文は別してひやうへの志殿
かな
たま
むげんじごく
おんふみ
さかんの

へまいらせ候、又太夫志殿の女房兵衛志殿の女房によくよく申しきかせ
さかんの
にようほう
さかんの
にようほう
もう

させ給うべしきかせさせ給うべし南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經。

ぶんえい
文永十二年四月十六日

にちれん
日蓮 花押 かおう

一七一 兵衛志殿御返事
さかんだのこへんじ

建治元年八月五十四歳御作 於身延 1089p
がんねん

がもく

むさし

そうら おわ

1089p

てんのう

鷺目二貫文・武蔵房円日を使にて給ひ俟い畢んぬ、人王三十六代・皇極天皇

によん

そのときいるか おみ

もう

と申せし王は女人にてをはしき、其の時入鹿の臣と申す者あり、あまり・お

ごりの・ものぐるわしさに王位を・うばはんと・ふるまいしを、天皇王子等

てんのう みこ

不思議とはをばせしかども・いかにも力及ばざりしほどに、大兄の王子・輕

おおえ

みこ かる

の王子等なげかせ給いて中臣の鎌子と申せし臣に申しあわせさせ給いしかば、

みこ

たまい なかとみ

かまこ

おみ もう

たまい

臣申さく・いかにも人力はかなうべしとは・みへ候はず、馬子が例をひきて

おみもう

きようしゅしやくそん おんちから

そうら

教主釈尊の御力ならずば叶がたしと申せしかば・さらばとて釈尊を造り

きようしゅしやくそん おんちから

しやくそん つく

奉りて・いのりしかば入鹿ほどなく打れにき、此の中臣の鎌子と申す人は後

たてまつ

いるか

なかとみ

かまこ

もう

には姓をかへて藤原ふじわらの鎌足かまたりと申し内大臣だいじんになり大職冠もうと申す人・今の一人
の御先祖なり、此の釈迦しゃかぶつ仏ぶつは今の興福寺こうふくの本尊ほんぞんなり、されば王の王たるも
釈迦しゃかぶつ仏おみ・臣おみたるも釈迦しゃかぶつ仏しんこく・神国ぶつこくの仏国ぶつこくとなりし事もえもんのたいう殿おんふみ
御文おんふみと引き合せて心へさせ給たまへ、今代きんだいの他国たこくにうばわれんとする事・釈尊しゃくそんを
・いるがせにする故なり神の力も及ぶべからずと申もうすはこれなり、各各は二
人は・すでにとこそ人はみしかども・かくいみじくみへさせ給たまうは・ひとえ
に釈迦しゃかぶつ仏ほけきよう・法華經おんちからの御力ごりきなりと・をばすらむ、又此これにもをもひ候ごしよう、後生ごしようの
たのもしさ申もうすばかりなし、此これより後ごも・いかなる事ありとも・すこしも
たゆむ事弛なかれ、いよいよ・はりあげてせむべし、設たとひ命いのちに及ぶとも・すこ
しも・ひるむ事なかれ、あなかしこ・あなかしこ、
恐きよう恐きよう謹言きんげん。

八月二十一日

にちれんかおう
日蓮花押

兵衛志殿御返事
さかんどのごへんじ

一七二 兵衛志殿御返事 さかんどのごへんじ

建治元年十一月 がんねん 五十四歳御作 於身延

1090P

かたがたのものふ二人を・もつて・をくりたびて侯、その心ざし弁殿の御
ふみに申すげに侯、さてはなによりも御ために第一の大事を申し候なり、正法
・像法の時は世もいまだをとろへず 聖人・賢人も・つづき生れ侯き天も人を
まほり給いき、末法になり侯へば人のとんよく 貪欲 やうやくすぎ侯て主
と臣と親と子と兄と弟と 諍論ひまなし、まして他人は申すに及ばず、これに
・よりて天も・その国をすつれば三災・七難乃至一二三四五六七の日いでて
草木かれうせ小大河もつき大地はすみのごとく・をこり大海はあぶらのごと
くになり・けつくは無間地獄より炎いでて上梵天まで火災・充滿すべし、こ
れていの事いんとて・やうやく世間はをとへ侯なり、皆人のをもひて侯は
父には子したがひ臣は君にかなひ弟子は師にゐすべからずと云云、かしこき

人もいやしき者もしれる事なり、しかれども貪欲・瞋恚・愚癡と申すさけに
えいて主に敵し親をかるしめ師をあなづるつねにみへて侯、但師と主と親と
に払いてあしき事をば諫ば孝養となる事はさきの御ふみにかきつけて侯いし
かばつねに御らむあるべし。

ただこのたびゑもんの志、どのかさねて親のかんだうあり・とのの御前に
これにて申せしがごとく一定かんだうあるべし・ひやうへの志殿をぼつかな
しごせんかまへて御心へあるべしと申して供しなり今度はとのは一定をち
給いぬと・をぼうるなりをち給はんをいかにと申す事はゆめゆめ侯はず但
地獄にて日蓮をうらみ給う事なかれしり候まじきなり千年のかるかやも一時
にはひとなる百年の功も一言にやぶれ候は法のことわりなり、さえもんの
大夫殿は今度・法華經のかたきに・なりさだまり給うとみへて侯、えもんの
たいうの志殿は今度・法華經の行者になり侯はんずらん、とのは現前の計

なれば親につき給はんずらむ、ものぐるわしき人人はこれをほめ候べし、宗盛
が親父入道の悪事に随いてしのわらにて頸を切られし重盛が随わずして先に
死せしいづれか親の孝人なる、法華經のかたきになる親に随いて一乗の行者
なる兄をすてば親の孝養となりなんや、せんするところひとすぢにをもひ切
つて兄と同じく仏道をなり給へ、親父は妙莊嚴王のごとし兄弟は淨蔵・淨
眼なるべし、昔と今はかわるとも法華經のことわりは・たがうべからず・当時
も武蔵の入道そこばくの所領所従等をすてて遁世あり、ましてわどのばら
がわづかの事をへつらひて心うすくて悪道に堕ちて日蓮をうらみさせ給うな、
かへすがへす今度とは墮べしと・をばうるなり。

此の程心ざしありつるが・ひきかへて悪道に堕ち給はん事がふびんなれば
申すなり、百に一つ千に一つも日蓮が義につかんと・をばさば親に向つてい
い切り給へ親なれば・いかにも順いまいらせ候べきが法華經の御かたきにな

り給へば・つきまいらせては不孝の身となりぬべく候へば・すてまいらせて
兄につき候なり、兄をすてられ候わば兄と一同と・をばすべしと申し切り
給へ、すこしも・をそるる心なけれ・過去遠遠劫より法華經を信ぜしかども
仏にならぬ事これなり、しをのひると・みつと月の出づると・いると・夏と
秋と冬と春とのさかひには必ず相違する事あり凡夫の仏になる又かくのごと
し、必ず三障四魔と申す障いできたれば賢者はよろこび愚者は退くこれなり、
此の事は・わざとも申し又びんぎにと・をもひつるに御使ありがたし、墮ち
給うならば・よもこの御使は・あらじと・をもひ候へば・もしやと申すな
り。

仏になり候事は此の須弥山にはりをたてて彼の須弥山より熊をはなちて、
そのいと・すぐにわたりて・はりのあなに入るよりもかたし、いわうや・
さかさまに大風のふきむかへたらんは・いよいよかたき事ぞかし、經に云く

「億億万劫より不可議に至る時に乃ち是の法華經を聞くことを得・億億万劫より不可議に至る諸仏・世尊時に是の經を説きたもう・是の故に行者・仏滅後に於て是くの如きの經を開いて疑惑を生ずること勿れ」等云云、此の經文は法華經二十八品の中に・ことにめづらし、序じ仰より法師品にいたるまでとかくいかになんてんししゅうはちぶそ等覺已下の人天・四衆・八部・其のかずありしかども仏は但釈迦如来一仏なり重くてかるきへんもあり、宝塔品より囑累品にいたるまでの十二品は殊に重きが中の重きなり、其の故は釈迦仏の御前に多宝の宝郡部現せり月の前に日の出でたるがごとし、又十方の諸仏は樹下に御はします十方世界の草木の上に火をともせるがごとし、此の御前にてせんせられたる文なり。

涅槃經に云く「昔無數無量劫より来た常に苦惱を受く、一一の衆生一劫の中に積む所の骨は王舎城の毘富羅山の如く飲む所の乳汁は四海の水の如く身より出す所の血は四海の水より多く父母・兄弟・妻子・眷属の命終に

くきゆう
哭泣して出す所の目涙は四大海より多く、地の草木を尽くして四寸の籌と
な
為し以て父母を数うも亦尽くすこと能わじ」云云、此の経文は仏最後に雙林
の本に臥てかたり給いし御言なりもつとも心をとどむべし、無量劫より已来
生ところの父母は十方世界の大地の草木を四寸に切りてあてかそうとも・た
るべからずと申す経文なり、此等の父母にはあひしかども法華経にはいまだ
・あわず、されば父母はまうけやすし法華経はあひがたし、今度あひやすき
父母のことばを・そむきて・あひがたき法華経のともに・はなれずば我が身
・仏になるのみならず・そむきしをやをもみちびきなん、例せば悉達太子は
浄飯王の嫡子なり国をもゆづり位にもつけんと・をばして・すでに御位につ
けまいらせたりしを御心をやぶりて夜中城をにげ出でさせ給いしかば不孝の
者なりと・うらみさせ給いしかども仏にならせ給うては・まづ浄飯王・
まやふじん
麻耶夫人をこそ・みちびかせ給いしか。をやという・をやの世をすてて仏に

なれと申す・をやは一人もなきなり、これは・とによせ・かくによせて・
わど和殿のばらを持齋・念仏者等が・つくり・をとさんために・をやを・すすめ
をとすなり、両火房は百万反の念仏をすすめて人人の内をせきて法華經のた
ねを・たたんと・はかるときくなり、極樂寺殿はいみじかりし人ぞかし、念仏
者等にたばらかされて日蓮を怨ませ給いしかば我が身といい其の一門皆ほろ
びさせ給う・ただいまは・へちこの守殿一人計りなり、両火房を御信用ある
人はいみじきと御らむあるか、なごへの一門の善光寺・長樂寺・大仏殿立て
させ給いて其の一門のならせ給う事をみよ、又守殿は日本国の主にてをはす
るが、一閻浮提のごとくなる・かたきをへさせ給へり。

わどせんまんのを見をすてて・あにがあとを・ゆづられたりとも千万年のさかへ・か
たかるべし、しらず又わづかの程にや・いかんが・このよならんずらん、よ
くよくをもひ切つて一向に後世をたのまるべし、かう申すとも・いたづらの

ふみなるべしと・をもへば、かくも・ものうけれども・のちのをもひでに・
しるし申すなり、もう 恐恐 謹言 きょうきょうきんげん

十一月二十日

兵衛志殿御返事 さかんだのこへんじ

日蓮花押 にちれんかおう

先度仏器まいらせさせ給ひ候しが、此度此の尼御前大事の御馬にのせさせ

給て候由承はり候、法にすぎて候・御志かな・これは殿はさる事にて、女房

のはからひか、昔儒童菩薩と申せし菩薩は、五茎の蓮華を五百の金錢を以て

・かいとり、定光菩薩を七日七夜供養し給ひき、女人あり、瞿夷となづく、

二茎の蓮華を以て自ら供養して云く、凡夫にてあらん時は世世・生生・夫婦

とならん、仏にならん時は同時に仏になるべし・此のちかひくちずして、九

十一劫の間・夫婦となる、結句、儒童菩薩は今の釈迦仏・昔の瞿夷は今の

耶輸多羅女・今法華經の勸持品にして具足千万光相如来是なり、悉達太子

檀特山に入り給しには、金泥駒・帝釈の化身、摩騰迦・竺法蘭の經を漢土に渡

せしには十羅刹・化して白馬となり給ふ、此馬も法華經の道なれば百二十年

御さかへの後・靈山淨土へ乗り給ふべき御馬なり、
恐恐謹言。

建治三年丁丑三月二日

にちれんかおう
日蓮花押

兵衛志殿 女房

さかんだのによぼう

一七四

兵衛志殿御書

さかんだのこしよ

1095p

久しくうけ給わり候はねばよくおぼつかなく候、何よりもあはれにふしぎ

たま

なる事は大夫志殿と殿との御事不思議に候、常さまには世末になり候へば

たゆつのさかんだの

おんことふしぎ

しょうにん

けんじん
みな

聖人・賢人も皆かくれただざんじむねいじんわざんきよくりの者のみこそ国

じゅうまん

には充滿すべきと見へて候へば、

たとえ

喩えば水すくなくなれば池さはがしく風

ふけば大海しづかならず、

たいかい

代の末になり候へばかんばち・えきれい大雨大風

だいうたいふう

ふきかさなり候へば広き心もせばくなり道心ある人も邪見になるとこそ見へ

じゃけん

て候へ、されば他人はさてをきぬ父母と夫妻と兄弟と諍う事れつと・しか

たにん

ふぼ

きようだい

あらせ

と・ねこと・ねずみと・たかと・きじとの如しと見へて候、良觀等の天魔の

りようかん

てんま

法師らが親父左衛門の大夫殿をすかし、わどのばら二人を失はんとせしに、

ほっし

さえもん

たゆうどの

殿の御心賢くして日蓮にちれんがいさめを御もちゐ有りしゆへに二のわの車をたすけ

二の足の人をになへるが如くごと二の羽のとぶが如くごと日月の一切衆生いちつさいしじゅじょうを助くるが

ごときょうだい兄弟おんちからの御力にて親父を法華經ほけきょうに入れまいらせさせ給たまいぬる御計らい

偏ひとえに貴辺きへんの御身おんみにあり、又真實しんじつの經の御ことはりを代末になりて仏法ぶつぽうあなが

ちにみだれば大聖人しやうにん・世に出ずべしと見へて候、喻たとえへば松のしもの後に木

の王と見へ菊は草の後に仙草と見へて候、代のおさまれるには賢人けんじん見えず代

の乱みだれたるにこそ聖人しやうにん愚人あほうは顕あらわれ候へ、あはれ平の左衛門殿さがみ殿の日蓮にちれん

をだに用もちいられて候いしかば、すぎにし蒙古国もうこの朝使のくびはよも切せまい

らせ候はじ、くやしくおはすらなん。

人王八十一代安徳天皇と申す大王は天台の座主明雲等の真言師等数百人が

たらひて源みなもとの右將軍頼朝を調伏じょうふくせしかば還著げんちゃく於本人とて明雲は義仲に切ら

れぬ安徳天皇は西海に沈み給たまう、人王八十二三四隱岐の法皇・阿波の院・佐渡

れぬ安徳天皇は西海に沈み給たまう、人王八十二三四隱岐の法皇・阿波の院・佐渡

の院・当今・已上四人・座主・慈円僧正・御室・三井等の四十余人の高僧等
をもて平の將軍義時を調伏し給う程に又還著於本人とて上の四王島島に放
たれ給いき、此の大悪法は弘法・慈覚・智証の三大師・法華經最第一の釈尊
の金言を破りて法華最第二・最第三・大日經最第一と読み給ひし僻見を
御信用有りて今生には国と身とをほろぼし後生には無間地獄に墮ち給ひぬ、
今度は又此の調伏三度なり、今・我が弟子等死したらん人人は仏眼をもて
是を見給うらん、命つれなくて生たらん眼に見よ、国主等は他国へ責めわた
され調伏の人人は・或は狂死・或は他国・或は山林にかくるべし、教主
釈尊の御使を二度までこうぢをわたし弟子等をろうに入れ・或は殺し・或
は害し・或は所国をおひし故に其の科必ず其の国国民の身に一一にかかる
べし、或は又白癩・黒癩・諸悪重病の人人おほかるべし、我が弟子等・
此の由を存ぜさせ給へ、

恐恐謹言。

九月九日

にちれんかおう
日蓮花押

此の文は別しては兵衛の志殿へ、総じては我が一門の人人御覽有るべし、
他人に聞かせ給うな。

一七五 兵衛志殿 女房御返事

1097P

銅の御器二給ひ畢んぬ、釈迦仏三十の御年・仏になり始てをはし候時・牧牛
女と申せし女人・乳のかいをにて仏にまいらせんとし候し程にいれて・まい
らすべき器なし、毘沙門天王等の四天王・四鉢を仏にまいらせたりし、其の
鉢をうちかさねて・かいをまいらせしに仏にはならせ給う、其の鉢後には人
も・もらざりしかども常に飯のみちしなり後に馬鳴菩薩と申せし菩薩・伝へ
て金銭三貫にほうじたりしなり、今御器二を千里にをくり釈迦仏にまいらせ
給へば、かの福のごとくなるべし、委しくは申さず候。

建治三年丁丑十一月七日

にちれんかおう
日蓮花押

兵衛志殿 女房御返事

さかんだのようほうごへんじ

一七六

兵衛志殿御返事

さかんだのこへんじ

弘安元年

こうあんがねん

1097p

みそをけ一給ひ畢ぬ。はらのけ(下痢)は左衛門どのの御薬になをりて候。

さえもん

又このみそ(味噌)をなめて、いよいよこちなをり候ぬ。あわれあわれ今年

御つつがなき事をこそ、法華経に申し上げまいらせ候へ。恐恐謹言。

ほけきよう

きようきようきんげん

弘安元年六月二十六日

こうあんがねん

日蓮

にちれん

花押

かおう

兵衛志殿御返事

さかんだのこへんじ

一七七

兵衛志殿御返事

さかんだのこへんじ

弘安元年十一月五十七歳御作

こうあんがねん

於身延

1098p

銭六貫文の内より貫次郎分白厚綿小袖一領四季にわたりて財を三宝に供養し給う

さんほう

たま

いづれも・いづれも・功德にならざるはなし、但し時に随いて勝劣・浅深わ

くどく

ただ

したが

しうれつ

せんじん

かれて候、うへたる人には衣をあたへたるよりも食をあたへて候は・います
こし功德くどくまさるこごへたる人には食をあたへて候よりも衣は又まさる春夏しゅんかに
小袖をあたへて候よりも秋冬しゅうふにあたへぬれば又功德一倍なり、これをもつて
一切いっさいはしりぬべし、ただし此の事にをいては四季を論ぜず日月をたださず
に・こめ・かたびら・きぬこそで・日日月月にひまなし、例せば
びんばし頻婆沙羅王やらわうの教主釈尊に日日に五百輛の車を・をくり阿育大王あそかだいおうの十
億の沙金を鶏頭魔寺にせせしがごとし、大小だいしょうことなれども志こころは彼かしこにも・
すぐれたり。

其その上今年しんあいは子細候、ふゆと申もつすふゆいづれのふゆかさむからざる、なつ
と申もつすなついづれのなつかあつからざる、ただし今年しんあいは余国はいかんが候ら
んこのはきぬは法にすぎてかんじ候、ふるき・をきなどにも・とひ候へば八
十九十一百になる者の物ものがたり語り候はすべて・いにしへ・これほどさむき事候は

ず、此のあんじちより四方しほうの山の外十町二十町人かよう事候はねばしり候は
ず、きんぺん一町のほどはゆき一丈二丈五尺等なり、このうるう十月卅日ゆ
きすこしふりて候しがやがてきへ候ぬ、この月の十一日たつの時より十四日
まで大雪ふりて候しに両三日へだててすこし雨ふりてゆきかたくなる事金剛こんこう
のごとし・いまにきゆる事なし、ひるも・よるも・さむくつめたく候事法に
すぎて候、さけはこをりて石のごとく、あぶらは金にいたり、なべかまは小
し水あればこおりてわれかんいよいよかさなり候へば、きものうすく・食と
もしくして・さしいづるものもなし。

坊ははんさくにてかぜゆきたまらず・しきものはなし、木はさしいづるも
のもなければ・火もたかず、ふるきあかつきなんどして候こそで一なんどき
たるものは其身のいろ紅蓮ぐれんだいぐれん大紅蓮のごとし、こへははは地獄じごくにことな
らず、手足かんじてきれさけ人死ぬことがぎりなし、俗のひげをみれば・や

うらくをかけたなり、僧のはなをみればすつらぬきかけて候、かかるふし
ぎ候はず候に去年の十二月の卅日より・はらのけの候しが春夏やむことなし、
あきすぎて十月のころ大事になりて候しがすこして平愈つかまつりて候へど
も・ややもすればをこり候に、兄弟二人のふたつの小袖わた四十両をきて候
が、なつのかたびらのやうにかろく候ぞ・ましてわたうすく・ただぬのもの
ばかりのもの・をもひやらせ給へ、此の二のこそでなくば・今年はこごへし
に候なん。

其上兄弟と申し右近の尉の事と申し食もあいついて候、人はなき時は四十
人ある時は六十人、いかにせき候へどもこれにある人人のあにとて出来し
舎弟とてさしいでしきゐ候ぬれば・かかはやさにかにとも申しへず・心に
はずかに、あじむすびて小法師と我が身計り御経よみまいらせんとこそ
存じて候に、かかるわづらはしき事候はず、又としあけ候わばいづくへもに

げんと存じ候ぞ、かかるわづらわしき事候はず又又申すべく候。

なによりも・えもんの大夫志と・とのとの御事ちちの御中と申し上のをば

へと申し面にあらずば申しつくしがたし、
恐恐謹言。

十一月廿九日

日蓮 花押

兵衛志殿

一七八 孝子御書

1100p

御親父御逝去の由・風聞真にてや候らん、貴辺と大夫志の御事は代末法に

入つて生を辺土にうけ法華の大法を御信用候へば悪鬼定めて国主と父母等の

御身に入りかわり怨をなさん事疑なかるべきところに、案にたがふ事なく

親父より度度の御かんだうをかうほらせ給ひしかども兄弟ともに浄蔵・浄眼

の後身か将た又薬王薬上の御計らいかのゆへに事に事ゆへなく親父に御か

んきをゆりさせ給いて前にたてまいらせし御孝養心に任せさせ給いぬるはあ

に孝子こうしにあらずや、定めて天よりも悦よろこびをあたへ法華經十羅刹ほけきょうじゆうらせつも御納受のうじゆあるべし。

其の上貴辺きへんの御事おんことは心の内に感じをもつ事候、此の法門經のごとくひろまり候よろこわば御悦もつび申すべし、穴賢あなかしこあなかしこきようだい兄弟おんちゆうふの御中不和おんちゆうふにわたらせ給たまふべからず不和ふわにわたらせ給たまふべからず、大夫志殿たゆうのさかんどの御文おんふみにくわしくかきて候きこしめすべし、恐恐きようきようきんげん謹言。

弘安二年二月二十一日

日蓮にちれん 花押かおう

一七九 兩人御中御書おんちゆうごしよ

弘安二年 五十八歳御作 於身延 1101p

大國阿闍梨たいこくあじやりえもんのたいう志殿等さかんどに申すもつ、故大進阿闍梨の坊は各各の御計あらいに有るべきかと存じ候に今に人も住せずなど候なるはいかなる事ぞ、ゆづり状のなくばこそ人人ひとびとも計らい候はめ、くはしくつけ給たまわり候へばべん

あじやりの阿闍梨にゆづられて候よしうけ給わり候き、又いぎあるべしとも・をぼへず候、それに御用いなきは別の子細べちしさいの候か其の子細そしさいなくば大国阿闍梨大夫殿の御計らいとして弁の阿闍梨の坊へこぼちわたさせ給たまい候へ心けんなる人候へばいかんがとこそ・をもい候らめ、弁の阿闍梨の坊をすりしてひろくもらずば諸人しよにんの御ために御たからにてこそ候はんずらむめ、ふゆはせうまうしげし、もしやけなばそむと申し人もうもわらいなん、このふみついて両三日が内に事切て各各御返事給ごへんじひ候はん、恐恐きょうきょう謹言。

十月廿日

にちれん
日蓮
かおう
花押

両人御中
おんちゆう

ゆづり状をたがうべからず

一八〇 右衛門太夫殿御返事
ごへんじ

1102P

そもそも

抑久しく申し承らず候の処に御文到来候い畢んぬ、殊にあをきうらの

小袖一ぼうし一をび一すぢ鷺目一貫文くり一籠たしかにつけとりまいらせ候、

とうこん まっぼう

当今は末法の始の五百年に当りて候、かかる時刻に上行菩薩御出現あつて

なむ みようほうれんげきよう

ごじ

にほんこく

いつさいしゅじよう

じよくぎようぼさつ

しゅつげん

きようもん

南無妙法蓮華經の五字を日本国の一切衆生にさづけ給うべきよし經文

ふんみよう

るさい

しざい

あきら

にちれん

じよくぎようぼさつ

おんつかい

分明なり、又流罪・死罪に行わるべきよし明かなり、日蓮は上行菩薩の御使

にも似たり此の法門を弘むる故に、神力品に云く、日月の光明の能く諸の

ゆつみよう

ほうもん

ひろ

ゆえ

じんりきぼん

いわ

にちがつ

こつみよう

よ

もろもろ

幽冥が除くが如く斯の人・世間に行じて能く衆生の闇を滅す」等云云、此

きようもん

しにんぎようせけん

せけん

よ

しゅじよう

もろもろ

の經文に斯人行世間の五の文字の中の人の文字をば誰とか思し食す、

じようぎようぼさつ

さいたん

おほ

いわ

めつど

おい

上行菩薩の再誕の人なるべしと覚えたり、經に云く「我が滅度の後に於て

まさこ

じゆじ

こ

ぶつどう

おい

けつじよう

うたがいあ

疑有ること無けん」

応に斯の經を受持すべし是の人・仏道に於て決定して疑有ること無けん」

きへん

じようぎようぼさつ

けぎ

たすくる人なるべし。

云云、貴辺も上行菩薩の化儀をたすくる人なるべし。

こうあん

つちのとつ

にちれんかおう

弘安二年己卯十二月三日

日蓮花押

右衛門太夫殿御返事 ごへんじ

一八一 たゆうのさかんだのこへんじ 大夫志殿御返事

弘安三年 こうあん 五十九歳御作

1103p

小袖一つ直垂三具同じく腰三具等云云、小袖は七貫直垂並びに腰は十貫已
上十七貫文に当れり、夫れ以れば天台大師の御位を章安大師顕して云く、「止観
の第一に序文を引いて云く安禅として化す、位五品に居したまへ
り、故に経に云く四百万億那由佗の国の人に施すに一一に皆七宝を与え又化
して六通を得しむるすら初随喜の人に如ざること百千万倍せり況や五品を
や、文に云く即如来の使なり如来の所遣として如来の事を行ず」等云云、
伝教大師・天台大師を釈して云く、「今吾が天台大師は法華経を説き法華経を
釈し群に特秀し唐に独歩す」云云、又云く、「明かに知んぬ如来の使なり讃むる
者は福を安明に積み誇る者は罪を無間に開く」と云云、是の如きは且らく之を
置く、滅後・一日より正像二千余年の間・仏の御使二十四人なり、所謂第一

は大迦葉・第二は阿難・第三は末田地・第四は商那和修・第五は多・第六

は提多迦・第七は弥遮迦・第八は仏駄難提・第九は仏駄密多・第十は脇比丘

・第十一は富那奢・第十二は馬鳴・第十三は毘羅・第十四は竜樹・第十五は

提婆・第十六は羅・第十七は僧・難提・第十八は僧・耶奢・第十九は

鳩摩羅駄・第二十は闇夜那・第二十一は盤駄・第二十二は摩奴羅・第二十三

は鶴勒夜奢・第二十四は師子尊者、此の二十四人は金口の記する所の付法蔵經

に載す、但し小乗・権大乘經の御使なりいまだ法華經の御使にはあら

ず、三論宗の云く「道朗吉蔵は仏の使なり」法相宗の云く「玄奘慈恩は仏

の使なり」華嚴宗の云く「法蔵・澄観は仏の使なり」真言宗の云く「善無畏

・金剛智・不空慧果弘法等は仏の使なり」

日蓮之を勘えて云く全く仏の使に非ず全く大小乗の使にも非ず、之を供養

せば災を招き之を謗せば福を至さん、問う汝の自義か答えて云く設い自義

為りと雖も有文有義ならば何の科あらん、然りと雖も釈有り伝教大師云く、誰か福を捨て罪を慕う者あらんや」云云、福を捨てるとは天台大師を捨てたる人なり、罪を慕うとは上に挙ぐる所の法相・三論・華嚴・真言の元祖等なり、彼の諸師を捨て一向に天台大師を供養する人の其の福を今申すべし、三千大千世界と申すは東西南北一須弥山六欲梵天を一四天下となづく、百億の須弥山四州等を小千と云う、小千の千を中千と云う、中千の千を大千と申す、此の三千大千世界を一にして四百万億那由佗国の六道の衆生を八十年やしなひ法華經より外の已今当の一切經を一一の衆生に読誦せさせて三明六通の阿羅漢・辟支仏等覺の菩薩となせる一人の檀那と、世間出世の財を一分も施さぬ人の法華經計りを一字・一句一偈持つ人と相對して功德を論ずるに、法華經の行者の功德勝れたる事百千万億倍なり、天台大師此れに勝れたる事五倍なり、かかる人を供養すれば福を須弥山につみ給うなりと伝教大師こと

はらせ給ひて候、此の由を女房には申させ給へ、
恐れ謹言。

大夫志殿御返事 花押
たゆのさかんどのごへんじ かおう

一八二 兵衛志殿御返事
さかんどのごへんじ

1104p

青鳧五貫文送り給び了んぬ、
唱え奉る南無妙法蓮華經一返の事、
恐れ。

六月十八日

日蓮 花押
にちれん かおう

兵衛志殿御返事
さかんどのごへんじ

一八三 大夫志殿御返事 弘安四年十二月六十歳御作 1105p
たゆのさかんどのごへんじ こうあん

聖人一つ味文字一をけ生和布一こ聖人と味文字はさてをき候いぬ生和
しょうにん みもじ なまわかめ しょうにん もんじ

布は始めてにて候、将又病の由聞かせ給いて不日に此の物して御使をもつて
はたまた ふじつ おんつかい

脚力につかわされて候事心ざし大海よりふかく善根は大地よりも厚し、かう
たいかい ぜんこん だいち

じんかうじん、
恐恐。

十二月十一日日蓮花押
にちれんかおう

たゆのさかんどのごへんじ
大夫志殿御返事

一八四 八幡宮造営事

弘安四年五月六十歳御作

1105p

此の法門申し候事すでに廿九年なり、日日の論義月月の難兩度の流罪に身つかれ心いたみ候いし故にや此の七八年間に衰病をこり候いつれどもなのめにて候いつるが、今年は正月より其の気分出来して既に一期をわりになりぬべし、其の上齡既に六十にみちぬ、たとひ十に一今年はすぎ候とも一二をば・いかでかすぎ候べき、忠言は耳に逆い良薬は口に苦しとは先賢の言なりやせ病の者は命をきらう佞人は諫を用いずと申すなり、此の程は上下の人人の御返事申す事なし心もものつく手もたゆき故なり、しかりと申せども此の事大事なれば苦を忍んで申すものうしとおぼすらん一篇きこしめすべし、村上天皇の前中書王の書を投げ給いしがごとくなることなかれ。

さては八幡宮の御造営につきて一定さむそうや有らんずらむと疑いまい

らせ候なり、をやと云ひ我が身と申し二代が間きみにめしつかはれ奉りてあ
くまで御恩のみなり、設一事相違すともなむのあらみかあるべき、わがみ賢人
ならば設上よりつかまつるべきよし仰せ下さるるとも一往はなに事につけて
も辞退すべき事ぞかし、幸に讒臣等がことを左右によせば悦んでこそあるべ
きに望まるる事一の失なり、此れはさてをきぬ五戒を先生に持ちて今生に
人身を得たり、されば云うに甲斐なき者なれども国主等謂なく失にあつれば
守護の天いかりをなし給う況や命をうばわるる事は天の放ち給うなり、いわ
うや日本国四十五億八万九千六百五十九人の男女をば四
十五億八万九千六百五十九の天まほり給うらん、然るに他国よりせめ来る大難
は脱るべしとも見え候はぬは、四十五億八万九千六百五十九人の人人の天に
も捨てられ給う上六欲四禅梵釈・日月・四天等にも放たれまいらせ給うにこ
そ候いぬれ、然るに日本国の国主等八幡大菩薩をあがめ奉りなばなに事のあ

るべきと思はるるが、八幡は又自力叶いがたければ宝殿を焼きてかくれさせ給うか、然るに自の大科をばかへりみず宝殿を造りてまほらせまいらせむとおもへり。

日本国の四十五億八万九千六百五十九人の一切衆生が釈迦・多宝・十方分身の諸仏・地涌と娑婆と他方との諸大士十方世界の梵釈・日月・四天に捨てられまひらせん分齊の事ならばはづかなる日本国の小神天照太神・八幡大菩薩の力及び給うべしや、其の時八幡宮はつくりたりとも此の国・他国にやぶらればくぼきところにちりたまりひききところに水あつまると、日本国の上一人より下万民にいたるまでさたせむ事は兼て又知れり、八幡大菩薩は本地は阿弥陀ほとけにまします、衛門の大夫は念仏・無間地獄と申す阿弥陀仏をば火に入れ水に入れ其の堂をやきはらひ念仏者のくびを切れと申す者なり、かかる者の弟子・檀那と成りて候が八幡宮を造りて候へども八幡大菩薩用い

させ給はぬゆへに此の国はせめらるるなりと申さむ時はいかがすべき、然る

に天かねて此の事をしろしめすゆへに御造営の大ばんしやうをはづされたる

にやあるらむ 神宮寺の事のはづるも天の御計いか。

其の故は去ぬる文永十一年四月十二日に大風ふきて其の年の他国よりおそ

ひ来るべき前相なり風は是れ天地の使なりまつり事あらければ風あらしと

申すは是なり、又今年四月廿八日を迎えて此の風ふき来る、而るに四月廿六

日は八幡のむね上と承はる、三日の内の大風は疑なかるべし、蒙古の使者

の貴辺が八幡宮を造りて此の風ふきたらむに人わらひさたせざるべしや。

返す返す穩便にして・あだみうらむる気色なくて身をやつし下人をもぐせ

ずよき馬にもならず、のこぎりかなづち手にもちこしにつけてつねにえめる

すがたてにておわすべし、此の事一事もたがへさせ給うならば今生に

は身をほろぼし後生には悪道に堕ち給うべし、返す返す法華經うらみさせ給う

事なかれ、
恐恐。きょうきょう

五月廿六日

在御判

たゆうのさかんの

大夫志殿

さかんの

兵衛志殿

さかんのにようほうごへんじ

一八五

兵衛志殿 女房御返事

1108p

さかんのにようほう

たまい

兵衛志殿 女房絹片裏給い候、此の御心は法華經の御宝前に申し上げて候、

ほけきよう

ほうぜん

もう

まこととはをばへ候はねども此の御房たちの申し候は御子どもはなしよにせ

ごほう

もう

けんふつふつとをはすると申され候こそなげかしく候へどもさりともと・を

もう

ばしめし候へ、
恐恐。きょうきょう

十一月廿五日

にちれん
日蓮

在御判

さかんのにようほうごへんじ

兵衛志殿 女房御返事

さかんのごへんじ

一八六

兵衛志殿御返事

1108p

我が法華經ほけきょうも本・迹わこう和合して利益りやくを無量むりようにあらはす、各各二人又かくのごとし二人同心して大御所・守殿・法華堂ほつけ・八幡等はちまんつくりまいらせ給たまうならば此これは法華經ほけきょうの御利生りしょうとをもわせ給たまわざるべき、二人・一同の儀は車の二つのわの如ごとし鳥の二つの羽のごとし、設たといさいしい妻子等の中なのたがわせ給たまうとも二人の御中おんちゆうふわ不和なるべからず、恐れ候へども

日蓮にちれんをたいとしとをもひあわせ給たまへ、もし中不和ふわにならせ給たまうならば二人の冥加みょうがいかながあるべかるらめと思しめせ、あなかしこ・あなかしこ、各各みわきかたきもたせ給たまいたる人人ひとびとなり、内より論出来しゅつたいれば鷸蚌いつぱうの相拒あいひしぐも漁夫となのをそれ有あるべし、南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと御唱とえつつしむべしつつしむべし、
恐恐きょうきょう。

十一月十二日

にちれん
日蓮在御判

ひやうえの志殿御返事
さかんどのごへんじ

懷胎のよし承り候い畢んぬ、それについては符の事仰せ候、日蓮相承の中

より撰み出して候・能く能く信心あるべく候、たとへば秘薬なりとも毒を入

れぬれば薬の用すくなし、つるぎなれども・わるびれ「臆病」たる人のため

には何かせん、就中夫婦共に法華の持者なり法華經流布あるべきたねをつぐ

所の玉の子出で生れん目出度覚え候ぞ、色心二法をつぐ人なり争か・をそな

はり候べき、とくとくこそ・うまれ候はむずれ、此の薬をのませ給はば疑

いなかるべきなり、闇なれども灯入りぬれば明かなり濁水にも月入りぬれば

すめり、明かなる事・日月にすぎんや淨き事蓮華にまさるべきや、法華經は

日月と蓮華となり故に妙法蓮華經と名く、日蓮又日月と蓮華との如くなり、

信心の水すまば利生の月・必ず応を垂れ守護し給うべし、とくとくうまれ候

べし法華經に云く「如是妙法」又云く「安樂産福子」云云、口伝相承の事

は此の弁公にくはしく申しふくめて侯・則・如来にょらいの使なるべし返す返すも
信心しんじん侯べし。

てんしょうだいじん

天照大神は玉を・そさのをのみことにさづけて玉ことの如くの子をまふけたり、

然しかる間・日の神・我が子となづけたり、さてこそ正哉吾勝とは名けたれ、日蓮にちれん

うまるべき種をさづけて侯へば争か我が子にとるべき、「有一宝珠ほうしゅ価直三千」

等、「無上宝聚不求自得・釈迦如来皆是吾子」等云云、日蓮にちれんあに此の義にかは

るべきや、幸なり幸なりめでたしめでたし・又又申すべく侯、あなかしこ・

あなかしこ。

文永八年五月七日

ぶんえい

四条金吾殿女房御返事

しじょうきんご にようぼうごへんじ

一八八 月満御前御書

つきまるごぜんごしょ

文永八年五月 五十歳御作

ぶんえい

1110p

日蓮花押

にちれんかおう

若童生れさせ給いし由承り候目出たく覚へ候、殊に今日は八日にて候、彼

わかたらべ

たまひ

たまわ

おほ

こと

れと云い此れと云い所願しをの指すが如く春の野に華の開けるが如し、然ればいそぎいそぎ名をつけ奉る月満御前と申すべし、其の上此の国の主はちまんだいばさつ八幡大菩薩は卯月八日に生まれさせ給ふ娑婆世界の教主釈尊も又卯月八日に御誕生なりき、今の童女又月は替れども八日に生まれ給ふ釈尊八幡のうまれ替りとや申さん、日蓮は凡夫なれば能くは知らず是れ併しながら日蓮が符を進らせし故なり、さこそ父母も悦び給うらん、殊に御祝として餅酒鳥目一貫文送り給ひ候い畢んぬ是また御本尊十羅刹に申し上げて候、今日の仏生れさせまします時に三十二の不思議あり此の事周書の異記と云う文にしるし置けり。

釈迦仏は誕生し給いて七歩し口を自ら開いて「天上・天下唯我独尊・三界皆苦我当度之」の十六字を唱へ給ふ、今の月満御前は生まれ給いてうぶごゑに南無妙法蓮華經と唱へ給ふか、法華經に云く「諸法実相」天台の云く「声

為仏事^{ぶつじ}」等云云、日蓮^{にちれん}又かくの如^{ごと}く推^すし奉^{いたてまつ}る、譬^{たと}えば雷^{いかずち}の音耳^{おみみ}しいの為^{ため}に
聞^{きこ}く事なく日月^{にちがつ}の光^{ひかり}り目^めくらの為^{ため}に見^みる事なし、定^{じやう}めて十羅刹女^{じゅうらせつによ}は寄^より合^あう
てうぶ水をなで養^{たま}ひ給^{たま}うらんあらめでたやあらめでたや御悦^{よろこ}び推量^{もう}申^{もう}し候^{こう}、
念頃^{じゅうらせつによ}に十羅刹女^{じゅうらせつによ}天照太神等^{あまのひかり}にも申^{もう}して候^{こう}、あまりの事に候間^{くわし}委^{まか}すは申^{もう}さず、
是^かより重^{おも}ねて申^{もう}すべく候^{こう}、
穴賢^{あなかしこあなかしこ}穴賢^{あなかしこ}。

日蓮花押^{にちれんかおう}

一八九

四条金吾殿御書^{しじょうきんごごしよ}

文永八年七月 五十歳御作^{ぶんえい}

1111p

雪のごとく白^いく候^い白米一斗古酒のごとく候^い油一筒御布施一貫文、態^{わざわ}使者^{しや}
を以^もて盆料送^{たま}り給^{たま}い候^{こう}、殊^{こと}に御文^{おんぶん}の趣^{かた}有^あ難^{がた}くあはれに覚^{おぼ}え候^{こう}。

抑^{おさ}孟蘭盆^{もつらんぼん}と申^{もう}すは源目連尊者^{げんもくれんそんじや}の母^{はは}青提女^{しょうだいによ}と申^{もう}す人慳貪^{けんどん}の業^{ごふ}によりて五

百生^{ひやくしやう}・餓鬼道^{がきだう}にをち給^{たま}いて候^{こう}を目連救^{もくれんきう}ひしより事起^{ことおこ}りて候^{こう}、然^{しか}りと雖^{いえど}も仏

にはなさず其の故は我が身いまだ法華經の行者ならざる故に母をも仏になす
事なし、靈山八箇年の座席にして法華經を持ち南無妙法蓮華經と唱えて
多摩羅跋耆檀香仏となり給い此の時母も仏になり給う、又施餓鬼の事仰せ候、
法華經第三に云く、「如從飢国來忽遇大王膳」云云、此の文は中根の四大声聞
・醍醐の珍膳をおとにもきかざりしが今經に來つて始めて醍醐の味をあくま
でになめて昔しうへたる心を忽にやめし事を説き給う文なり、若し爾らば
餓鬼供養の時は此の文を誦して南無妙法蓮華經と唱えてとぶらひ給うべく
候。

総じて餓鬼にをいて三十六種類相わかれて候、其の中に身餓鬼と申すは
目と口となき餓鬼にて候、是は何なる修因ぞと申すに此の世にて夜討強盜な
どをなして候によりて候、食吐餓鬼と申すは人の口よりはき出す物を食し候
是も修因上の如し、又人の食をうばふに依り候、食水餓鬼と云うは父母孝養

のために手向る水などを呑む餓鬼なり、有財餓鬼と申すは馬のひずめの水
のむがきなり是は今生にて財を・をしみ食をかくす故なり、無財がきと申す
は生れてより以来飲食の名をもきかざるがきなり、食法がきと申すは出家と
なりて仏法を弘むる人・我は法を説けば人尊敬するなんと思ひて名聞名利の
心を以て人にすぐれんと思つて今生をわたり衆生をたすけず父母をすくふ
べき心もなき人を食法がきとて法をくらふがきと申すなり、当世の僧を見る
に人に・かくして我、一人ばかり供養をつくる人もあり是は狗犬の僧と涅槃經
に見えたり、是は未来には牛頭と云う鬼となるべし、又人にしらせて供養を
うくるとも欲心に住して人に施す事なき人もあり是は未来には馬頭と云う鬼
となり候、又在家の人人も我が父母地獄・餓鬼・畜生におちて苦患をつくる
をばとぶらはずして我は衣服飲食にあきみち牛馬眷属充滿して我が心に任せ
てたのしむ人をば・いかに父母のうらやましく恨み給うらん、僧の中にも父

母師匠ししやうの命日をとぶらふ人はまれなり、定めて天の日月地の地神にちがついかりいき

どをり給たまいて不孝ふこうの者とおもは

せ給たまうらん形は人にして畜生ちくしやうのごとし人頭鹿にんずろくとも申もうすべきなり、日蓮にちれん此の
業障ごうしやうをけしはてて未来みらいは靈山淨土りやうぜんじやうどにまいるべしとおもへば種種しゆじゆの大難雨だいにんの

ごとくふり雲のごとくにわき候へども法華經ほけきやうの御故なれば苦をも苦ともおも

はず、かかる日蓮にちれんが弟子でし・檀那だんなとなり給たまう人人殊ひとびとことに今月十二日の妙法みやうほうしやうりやう 聖靈

は法華經ほけきやうの行者ぎやうじやなり日蓮にちれんが檀那だんななりいかでか餓鬼道がきにおち給たまうべきや、定め

て釈迦しゃか・多宝仏たぼうぶつ・十方じゆつぱうの諸仏しよぶつの御宝前ごぼうぜんにまします、是こそ四条金吾殿しじやうきんごの母

よ母よと同心こんしんに頭こづへをなで悦よろこびほめ給たまうらめ、あはれいみじき子を我はもちた

りと釈迦しゃか仏ぶつとかたらせ給たまうらん、法華經ほけきやうに云く「若もし善男子ぜんなんし・善女人ぜんによにん有あつて

妙法華經みやうほけきやうの提婆達多品だいばだつたを聞いて淨心じやうしんに信敬ぎやくして疑惑ぎわくを生ぜざらん者は地獄じじく・

餓鬼がき・畜生ちくしやうに墮おちずして十方じゆつぱうの仏前ぶつぜんに生なぜん、所生しよしやうの処ところには常に此の經

を聞かん、若し人天の中に生れば勝妙の樂を受け、若し仏前に在らば蓮華

より化生せん」と云云、此の經文に善女人と見へたり妙法聖靈の事にあ

らずんば誰が事にやあらん、又云く、「此の經は持つこと難し若し暫も持つ者

は我即ち歡喜す諸仏も亦然なり是の如きの人は諸仏の歎めたもつ所」と云云、

日蓮讚歎したてまつる事はもののかずならず、諸仏所歎と見えたり、あらた

のもしやあらたのもしやと信心をふかくとり給うべし信心をふかくとり給う

べし、南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經、恐恐謹言。

七月十二日 日蓮 花押 四條金吾殿御返事

一九〇 四條金吾殿御消息 1113p

度度の御音信申しつくしがたく候、さてもさても去る十二日の難のとき貴辺

たつのくちまでつれさせ給い、しかのみならず腹を切らんと仰せられし事こ

そ不思議とも申すばかりなけれ、日蓮過去に妻子所領眷属等の故に身命を

捨てし所いくそばくかありけむ、・或は山にすて海にすて・或は河・或はいそ
等路のほとりか、然れども法華經のゆへ題目の難にあらざれば捨てし身も
蒙る難等も成仏のためならず、成仏のためならざれば捨てし海河も仏土に
もあらざるか。

このたび 法華經の行者として流罪・死罪に及ぶ、流罪は伊東死罪はたつのく

今度・

ち相州のたつのくちこそ日蓮が命を捨てたる処なれ仏土におとるべしや、

そのゆえ

其の故は・すでに法華經の故なるがゆへなり、經に云く「十方仏土中唯有

いちじょう

一乘法」と此の意なるべきか、此の經文に一乘法と説き給うは法華經の事

なり、

十方仏土の中には法華經より外は全くなきなり除仏方便説と見えたり、

も

若し然らば日蓮が難にあう所ごとに仏土なるべきか、娑婆世界の中には

にほんこくにほんこく

日本国日本国の中には相模の国相模の国の中には片瀬片瀬の中には竜口に

にちれん

日蓮が命をとどめをく事は法華經の御故なれば寂光土ともいふべきか、神力品

に云く「若於林中若於園中若山谷曠野是中乃至而般涅槃」とは是か。

かかる日蓮にともなひて法華經の行者として腹を切らんと給う事かの

弘演が腹をさいて主の懿公がきもを入れたるよりも百千万倍すぐれたる事な

り、日蓮靈山にまいりてまづ四条金吾こそ法華經の御故に日蓮とをなじく腹

切らんと申し候なりと申し上げ候べきぞ、又かまくらどのの仰せとて内内佐渡

の国へつかはすべき由承り候、三光天子の中に月天子は光物とあらはれ竜口

の頸をたすけ、明星天子は四五日已前に下りて日蓮に見参し給ふ、いま日天子

ばかりのこり給ふ定めて守護あるべきかと・たのもしたのもし、法師品に云く

「則遣变化人為之作衛護」疑あるべからず、安樂行品に云く「刀杖不加」

普門品に云く「刀尋段段壞」此等の經文よも虚事にては候はじ、強盛の信力

こそありがたく候へ、恐恐謹言。

文永八年九月二十一日

日蓮 花押

しじょうきんい
四条金吾殿

一九一 同生同名御書 ごしよ

ぶんえい
文永九年四月 五十一歳御作

此の御文は藤四郎殿の女房と常によりあひて御覽あるべく候。
おんふみ

おおやみ

にちりん

によにん

によにん

ほけきよう

にちりん

によにん

によにん

によにん

によにん

によにん

によにん

によにん

によにん

母をしらず母は幼子をわすれず、釈迦仏は母のごとし女人は幼子のごとし、

二人たがひに思へば・すべてはなれず一人は思へども一人思はざれば

あるときはあひ・あるときはあわず、仏は・をもふものの・ごとし女人は・

をもはざるものの・ごとし、我等・仏を・をもはば・いかでか釈迦仏見え給は

ざるべき、石を珠といへども珠とならず珠を石といへども石とならず、権經

の当世の念仏等は石のごとし、念仏は法華經ぞと申すとも法華經等にあらず、

又法華經をそしるとも珠の石とならざるのごとし。

昔唐国に徽宗皇帝と申せし悪王あり、道士と申すものにすかされて仏像・

きようかん

経巻きようかんをうしなひ僧尼そうにを皆還俗みなげんそくせしめしに一人として還俗げんそくせざるものなかり

き、其その中に法道ほうどう三蔵さんそうと申せし人こそ勅宣ちよくせんをおそれずして面かおにかなをやかれ

て江南と申せし処ところへ流されて候いしが、今の世の禅宗ぜんしゅうと申す道士どうしの法門ほうもんの

やうなる悪法あくほうを御信用ごしんようある世に生れて、日蓮にちれんが大難だいにんに値あうことは法道ほうどうに似た

り、おのおの・わずかの御身おんみと生れて鎌倉かまくらにゐながら人目ひとめをも・はばかりず

命いのちをも・おしまず法華經ほけきようを御信用ごしんようある事ただ事とも・おぼえず、但おしはか

るに濁水じやくすいに玉を入れぬれば水のすむがごとし、しらざる事を・よき人に・お

しえられて其そのままに信用しんようせば道理どうりに・きこゆるがごとし、釈迦しゃか仏ぶつ・普賢菩薩ふげんぼさつ

・薬王菩薩やくおうぼさつ（やくおうぼさつ）・宿王華菩薩ほくおうぼさつ等の各各の御心中しんちゆうに入り給たまへる

か、法華經ほけきようの文ぶんに閻浮提えんぶだいに此の経を信ぜん人は普賢菩薩ふげんぼさつの御力おんちからなりと申もうす

是これなるべし、女人にょにんは・たとへば藤のごとし・をとこは松のごとし須臾しゆゆも・は

なれぬれば立ちあがる事なし。

はかばかしき下人もなきに・かかる乱れたる世に此のとのを・つかはされ
たる心ざし大地よりも・あつし地神定めてしりぬらん・虚空よりも・たかし
梵天・帝釈もしらせ給いぬらん、人の身には同生同名と申す二のつかひを天
生るの時よりつけさせ給いて影の身にしたがつごとく須臾もはなれず、大罪
・小罪・大功徳・小功徳すこしも・おとさずかはる・かはる天にのぼて申し
候と仏説き給う、此の事ははや天も・しろしめしぬらん、たのもしし・たの
もしし。

四月 日

にちれんかおう
日蓮花押

しじょうきんご にょうぼうごへんじ
四条金吾殿女房御返事

しじょうきんご ごへんじ
一九二 四条金吾殿御返事

ぶんえい
文永九年五月五十一歳 御作

1116p

にちれん しよなん
日蓮が諸難について御とぶらひ今に・はじめざる 志 ありがたく候、

法華經の行者として・かかる大難にあひ候は・くやくおもひ候はず、いか
ほど生をうけ死にあひ候とも是ほどの果報の生死は候はじ、又三悪・四趣に
こそ候いつらめ、今は生死切断し仏果をうべき身となれば・よろこばしく候。
天台・伝教等は迹門の理の一念三千の法門を弘め給うすら・なを怨嫉の
難にあひ給いぬ、日本にしては伝教より義真・円澄・慈覚等・相伝して弘
め給ふ、第十八代の座主・慈悲大師なり御弟子あまたあり、其の中に檀那・
慧心僧賀・禅喻等と申して四人まします、法門又二つに分れたり、檀那僧正
は教を伝ふ、慧心僧都は觀をまなぶ、されば教と觀とは日月のごとし教はあ
さく觀はふかし、されば檀那の法門は・ひろくして・あさし、悪心の法門は
・せばくして・ふかし。

今日蓮が弘通する法門は・せばきやうなれども・はなはだふかし、其の故
は彼の天台・伝教等の所弘の法よりは一重立入りたる故なり、本門寿量品

の三大事とは是なり、南無妙法蓮華經の七字ばかりを修行すればせべきが
如し、されども三世の諸仏の師範・十方薩埵の導師・一切衆生・皆成仏道
の指南にてましますなれば・ふかきなり、經に云く「諸仏智慧・甚深無量」
云云、此の經文に諸仏とは十方三世の一切の諸仏・真言宗の大日如来・
淨土宗の阿彌陀・乃至諸宗・諸經の仏・菩薩・過去・未來・現在の總諸仏
・現在の釈迦如来等を諸仏と説き挙げて次に智慧といへ
り、此の智慧とは・なにもものぞ諸法実相・十如果成の法体なり、其の法体と
は又なにもものぞ南無妙法蓮華經是なり、釈に云く「実相の深理・本有の
妙法蓮華經」といへり、其の諸法実相と云うも釈迦・多宝の二仏とならうな
り、諸法をば多宝に約し実相をば釈迦に約す、是れ又境智の二法なり多宝は
境なり釈迦は智なり、境智而二にして・しかも境智不二の内証なり、此等は
ゆゆしき大事の法門なり煩惱即菩提・生死即涅槃と云うもこれなり、まさし

く男女なんによ交まじ会かいのとき南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと・となふるところを煩惱ぼんのう即すく菩提ぼだい・生死しやうじそく即すく涅槃ねはんと云いなり、生死しやうじの当とう体たい不生ふしょう不滅ふめつとさとりより外そとに生死しやうじ即すく涅槃ねはんはなきなり、普賢ふげん經きやうに云いく、「煩惱ぼんのうを断だんぜず五欲ごよくを離はなれず諸根しよこんを淨きよむることを得えて諸罪しよざいを滅除めつじよす」止觀しかんに云いく、「無明度勞むみやうは即是そくぜ菩滿しやうじ生死しよくは即すく涅槃ねはんなり」寿量品じゆりやうほんに云いく「毎みづかに自ら是この念なを作なす、何を以もつてか衆生しゆじやうをして無上道むじやうどうに入り、速すみに仏身ぶつしんを成就じやうじゆすることを得えせしめん」と方便品ほうべんに云いく、「世間の相常住せけんじやうじやうなり」等は此の意いなるべし、此かくの如ごとく法体ほつたいと云いうも全く余あには非あらずただ南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうの事ことなり、かかる・いみじくたうとき法華經ほけきやうを過去かこにて勃はつこのしたに・をきたてまつり・或あるはあなづりくちひそみ、・或あるは信あじ奉ほうらず、・或あるは法華經ほけきやうの法門ほうもんをならうて一人ひとりをも教化きやうけし法命あをつぐ人を悪心あくしんをもつて・とによせ・かくによせ・おこつきわらひ、・或あるは後生ごしやうのつとめなれども即すく今生こんじやうかなひがたければ・しばらく・さしをけなんと無量むりやうにいひうとめ謗ほうぜしによつて今生こんじやう

に日蓮種種の大難にあうなり。
にちれんしゆじゆ だいにん

しよきよう

諸経の頂上たる御経を鵬たてまつきくをき奉る故によりて現社に又人に紆げんげられ用い

られざるなり、譬ひ喩ゆ品ほんに「人にしたしみつくとも人山がいれて不便とおもふ

べからず」と説ときたり、然るに血月ほけき辺きよう法華經の行者ぎようじやとなり結句大難にもあひ

日蓮をもたすけ給たまう事こと、法師品ほうしほんの文に「造化四衆・比丘比丘びくびく優婆塞うばそく優婆襲うば

と説とき給ふ此の中の優婆塞とは貴辺きへんの事にあらずんば・たれをかささむ、す

でに法を聞いて信受しんじゆして逆はざればなり不思議ふしぎや不思議ふしぎや、若もし然しからば日蓮にちれん

・法華經の法師なる事うたがい疑ぎなきか、則すなわち如来にょらいにもにたるらん行如来事をも行

ずるにならん。

たほう たつちゆう

多宝塔中にして二仏・並坐の時・上行菩薩じようぎようぼさつに譲ゆずり給たまいし題目だいもくの五字ごじを

にちれんほほ

日蓮粗もつひろめ申すなり、此これ即すなわち上行菩薩じようぎようぼさつの御使おんつかいいか、貴辺きへん又日蓮にちれんにした

ほけきよう ぎようじや

がひて法華經の行者しよにんとして諸人しよにんにかたり給たまふ是れ豈流通あにるつうにあらずや、法華經ほけきよう

の信心しんじんを・とをし給たまへ・火をきるに・やすみぬれば火をえず、強盛じやうじやうの大信力しんりき

をいだして法華宗ほつけしゆうの四条金吾しじやうきんこ・四条金吾しじやうきんこと鎌倉中かまくらの上下万人じやうげばんにん・乃至日本国ないしにほんこくの

いっさいしじやう

一切衆生の口くちにうたはれ給たまへ、あしき名さへ流す況やよき名をや何いかに況や

ほけきやう

法華経ゆへの名をや、女房にようぼうにも此この由よしを云ひふくめて日月にちがつ・両眼りやうげん・さうの

つばさと調とのひ給たまへ、

日月にちがつあらば冥途めいどあるべきや両眼りやうげんあらば三仏さんぶつの顔貌はいけん拝見はいけん

うたがい

疑うたがいなし、さうのつばさあらば寂光じやくかうの宝刹ほうせつへ飛とばん事こと・須臾しゆゆ刹那せつななるべし、

委くわしくは又又の申のべく候きまつ、恐惶きやう謹言きんげん。

五月二日

にちれんかおう
日蓮花押

しじやうきんこ
四条金吾殿御返事

しじやうきんこ
一九三 四条金吾殿御返事 ぶんえい
文永九年九月 五十一歳御作 1118p

そ
夫れ齊せいの桓公かんこうと申せし王・紫をこのみて服給たまいき、楚その莊王しやうわうと言いし王は

女の腰こしのふとき事を・にくみしかば一切の遊女腰うでめこしをほそからせんがために餓

死しけるものおほし、しかれば一人の好む事をば我が心にあはざれど

も万民ばんみん随したがいしなり、たとへば大風たいふうの草木そうもくをなびかし大海たいかいの衆流しゅうりゅうをひくが如ごとし、

風にしたがはざる草木そうもくは・をれうせざるべしや、小河大海たいかいにおさまらずばい

づれのところにおさまるべきや、国王こくおうと申もうす事は先生せんしやうに万人ばんにんにすぐ

れて大戒だいかいを持ち天地たも及び諸神てんちおよゆるし給たまいぬ、其の大戒だいかいの功德くどくをもちて其その住

むべき国土こくどを定む、二人・三人等を王とせず地王・天王海王山王等さんのおう悉ことごとく来臨らいりん

してこの人をまほる、いかにいはんや其その国中しよその諸民しよそ其だいおうを背そむくべしや、

此この王はたとひ惡逆あくぎやくを犯すとも一二三度等さうには左右だいおうを罰せず、

但諸天等しよてんの御心かなに叶いわざるは一往いちおうは天変地天等てんべんちちやうをもちてこれをいさむ、事過

分しよてんすれば諸天神等しよてんぜんじん其その国土こくどを捨離しやりし給たまう、若もしは此だいおうの大王たいおうの戒力けいりきつき期来ごきた

つて国土こくどのほろぶる事もあり、又逆罪つみ多くにかさまれば隣国りんこくに破らるる事も

あり、善惡ぜんあくに付て国は必ず王したがが随したがうものなるべし。

世間せけん此こくの如ごとし仏法ぶつぽうも又然しかなり、仏陀ぶつだすでに仏法ぶつぽうを王法たうに付し給たまうしかれ
ばたとひ聖人しょうにん・賢人けんじんなる智者ちしやなれども王にしたがはざれば仏法ぶつぽう流布るふせず、
・或あるは後には流布るふすれども始めには必ず大難だいにん来る、迦貳志加王めつこは仏の滅後めつこ四
百余年の王なり健陀羅国けんだらを掌たなごころのうちににぎれり、五百の阿羅漢あらかんを歸依きえして
婆沙論ばしゃろん二百巻をつくらしむ、國中総て小乗しょうじやうなり其の国に大乘だいじやう弘ひろめがたかり
き、発舍密多羅王はつしゃみつたらおうは五天竺てんじくを随ぶつぽうへて仏法ぶつぽうを失うしなひ衆僧しゆしやうの頸をきる、誰の智者ちしやも
叶かなわず。

太宗たいそうは賢王けんおうなり玄奘三蔵げんじやうさんざうを師として法相宗はうそうしやうを持たもち給たまいき誰の臣下しんかかそむ
きし、此この法相宗はうそうしやうは大乗だいじやうなれども五性各別かくべつと申もうして仏教中ぶつきやうのおほきなるわ
ざはひと見えたり、なを外道げどうの邪法じゃほうにもすぎ悪法あくほうなり、月支がっし・震旦しんたん・日本三にほん
国共こにゆるさず、終ついに日本国にほんこくにして伝教大師でんきやうだいしの御手みてにかかりて此の邪法止じやほうとどめ
畢おわんぬ、大なるわざはひなれども太宗たいそうこれを信仰しんこうし給たまいしかば誰の人かこれ

をそむきし。

しんこんしゅう

もう

だいにちきよう

こんこうちよう

そしつちきよう

だいにち

真言宗と申すは大日経・金剛頂教・蘇悉地経によるこれを大日の三部と

げんそうこうてい

おんとき

ぜんむいさんそう

こんこうちきさんそうてんじく

げんそう

号す、玄宗皇帝の御時・善無畏三蔵・金剛智三蔵天竺より将ち来れり、玄宗

そんなちよう

たまた

てんだい

けこんしゅう

ほつそう

さんろん

すぐ

これを尊重し給う事天台・華嚴宗等にもこへたり、法相・三論にも勝れて

おほ

め

ゆえ

かんど

だいにちきよう

ほけきよう

まさ

勝る

おもひ

日本国当世にい

思し食すが故に漢土は総て大日経は法華経に勝ると・おもひ日本国当世にい

てんだいしゅう

しんこんしゅう

たまた

だいにちきよう

ほけきよう

まさ

勝る

日本国当世にい

たるまで天台宗は真言宗に劣るなりとおもふ、彼の宗を学する東寺・天台

てんだいしゅう

しんこんしゅう

たまた

だいにちきよう

ほけきよう

まさ

勝る

日本国当世にい

の高僧等慢過慢をおこす、但し大日経と法華経とこれをならべて偏党を捨て

こつそう

まんかまん

ただ

だいにちきよう

ほけきよう

まさ

勝る

日本国当世にい

是を見れば大日経は螢火の如く法華経は明月の如く真言宗は衆星の如く

これ

だいにちきよう

ほたるび

こと

ほけきよう

まさ

勝る

日本国当世にい

天台宗は日輪の如し、偏執の者の云く汝未だ真言宗の深義を習いきはめ

てんだいしゅう

にちりん

こと

へんしゅう

いわ

なんじいま

しんこんしゅう

じんぎ

なら

ずして彼の無尽の科を申す、但し真言宗漢土に渡つて六百余年日本に弘まり

むじん

とが

もう

ただ

しんこんしゅう

かんど

わた

にほん

ひろ

て四百余年此の間の人師の難答あらあらこれをしれり、伝教大師一人・此の

ほうもん

こんげん

たま

しかる

とうせ

にほんこくだいいち

とがこれ

勝る

日本国当世にい

勝る

日本国当世にい

法門の根源をわきまへ給う、しかるに当世・日本国第一の科是なり、勝を以

て劣と思ひ劣を以て勝と思ふの故に大蒙古国を調伏する時・還つて襲われんと欲す是なり。

華嚴宗と申すは法蔵法師が所立の宗なり、則天皇後の御帰依ありしにより

諸宗肩をならべがたかりき、しかれば王の威勢によりて宗の勝劣はありけり法に依つて勝劣なきやうなり。

たとひ深義を得たる論師・人師なりといふとも王法には勝がたきゆへにた

またま勝んとせし仁は大難にあへり、所謂師子尊者は檀弥羅王のために頸を

刎ねらる、提婆菩薩は外道のために殺害せらる、竺の道生は蘇山に流され

法道三蔵は面に火印をされて江南に放たれたり、而るに日蓮は法華經の行者

にもあらず又僧侶の数にもいらず。

然り而して世の人に随て阿弥陀仏の名号を持ちしほどに阿弥陀仏の化身と

ひびかせ給う善道和尚の云く「十即十生・百即百生乃至千中無一」と、

勢せい至し菩ぼ薩さつの化け身しんとあをたまがれ給ほうう法ぽう然ねん上しやう人にん・此この釈りを料りやう簡けんして云いく「末まつ代だいに

念ねん仏ぶつの外ほかの法ほ華け經きやう等とうを雜ねんふる念ねん仏ぶつにおいてせん千ち中ちゆう無む一いつ一向いつこうに念ねん仏ぶつせばじゆう十しゆ即そく

じゆつしやう

十じゆ生しやうと云い云い、日に本ほん国こくの有う智ち・無む智ち仰あいあいで此この義ぎを信しんじて今いまに五ご十じゆ余に年ねん一

人うも疑たがを加くへず、唯ただ日に蓮ちんの諸しよ人にんにかはる所あは阿あ弥み陀だ仏ぶつの本ほん願がんには「唯ただ五ご逆

と誹ひ謗ぼう正しやう法ぽうとをくとちかひ、法ほ華け經きやうには「若もし人にん信しんぜずして此この經きやうを毀き謗ぼう

せば則すなち一切いっさい世せ間けんの仏ぶつ種しゆを断なず、乃な至い其その人にん命めい終しゆうして阿あ鼻び獄ごくに入いらん」と

説こかれたり、此ぜんれ善ぜん導どう・法ほう然ねん謗ぼう法ぽうの者ものなればたのむところの阿あ弥み陀だ仏ぶつにすて

られをはんぬ、余よ仏ぶつ余よ經きやうにおいてな我がと抛なげちぬる上うへは救たい給たまうべきに及およばず、

法ほ華け經きやうの文ぶんの如ごときは無む間げん地じ獄ごく・疑うたがひがいなしと云い云い、而しかを日に本ほん国こくはをしなべて

彼かれ等らが弟で子したるあひだ此だいの大だい難なんまぬかれがたし。

無む尽じんの秘ひ計けいをめぐらして日に蓮ちんをあだむ是これなり先しよ先なんの諸しよ難なんはさておき候いぬ、

去年こ年ぞ九こ月が十かん二き日に御ご勘かん氣きをかほりて其その夜よのうこちに頭こをはねらるべきにてあり

しがいかなる事にやよりけん彼の夜は延びて此の国に來りていま

まで候に世間にもすてられ仏法にもすてられ天もとぶらはれず二途にかけた

るすてものなら、而るを何なる御志にてこれまで御使をつかはし御身に

は一期の大事たる悲母の御追善第三年の御供養を送りつかはされたる兩三日

はうつつともおぼへず、彼の法勝寺の修行がいはをが嶋にて・としごろつか

ひける童にあひたりし心地なり、胡国の夷陽公といひしもの漢土にいけどら

れて北より南へ出けるに飛びまひける雁を見てなげきけんもこれにはしかじ

とおぼへたり。

但し法華經に云く「若し善男子・善女人・我が滅度の後に能く竊かに一人

の爲にも法華經の乃至一句を説かん、当に知るべし是の人は則ち如来の使如来

の所遣として如来の事を行ずるなり」等云云、法華經を一字・一句も唱え又

人にも語り申さんものは教主釈尊の御使なり、然れば日蓮賤身なれども

きようしゅしゃくそん ちよくせん ちようだい
教主 釈尊の勅宣を頂戴して此の国に来れり、此れを一言もそしらん人
は罪を無間に開き一字・一句も供養せん人は無数の仏を供養するにも・すぎ
たりと見えたり。

きようしゅしゃくそん いちだい きようしゅいつさいしゅじよう どうし
教主 釈尊は一代の教主一切衆生の導師なり、八万法蔵は皆金言十二部

みなしんじつ むりよう いらいたも たまい もうご しよせん いっさいきようこれ
経は皆眞実なり、無量億劫より以来持ち給いし不妄語戒の所詮は一切経是な

り、いづれも疑 うべきにあらず、但是は總相なり別してたづぬれば如来の

きんく しゅつたい しようじよう だいじよう けんみつてんきよう じつきよう
金口より出来して小乗・大乘・顕密権経・実経是あり、今この法華経

は「正直捨方便等乃至世尊法久後・要当説眞実」と説き給う事なれば誰の人

か疑 うべきなれども多宝如来証明を加へ諸仏舌を梵天に付け給う、され

ば此の御経は一部なれども三部なり一句なれども三句なり一字なれども三字

なり、此の法華経の一字の功德は釈迦・多宝・十方の諸仏の御功德を一字に

おさめ給う、たとへば如意宝珠の如し一珠も百珠も同じき事なり一珠も無量

の宝を雨す百珠も又無尽の宝あり、たとへば百草を抹りて一丸乃至百丸となせり一丸も百丸も共に病を治する事これをなじ、譬へば大海の一・も衆流を備へ一海も万流の味をもてるが如し。

妙法蓮華經と申すは總名なり二十八品と申すは別名なり、月支と申すは

天竺の總名なり別しては五天竺是なり、日本と申すは總名なり別しては六十

六州これあり、如意宝珠と申すは釈迦仏の御舍利なり竜王に・これを給いて

頂上に頂戴して帝釈是を持ちて宝をふらす、仏の身骨の如意宝珠となれ

るは無量劫来持つ所の大戒身に薰じて骨にそみ一切衆生をたすける珠となる

なり、たとへば犬の牙の虎の骨にとく魚の骨の・の氣に消ゆるが如し、乃至

師子の筋を琴の絃にかけてこれを弾けば余の一切の獸の筋の絃皆きらざるに

やぶる、仏の説法をば師子吼と申す乃至法華經は師子吼の第一なり。

仏には三十二相そなはり給う一一の相皆百福莊嚴なり、肉髻白毫なんと

申すは菓このみの如し因位いんいの華の功德等と成つて三十二相を備え給う、乃至ないし
むけんちようそうもう無見頂相と申すは釈迦しゃかの御身は丈六じようろくなり竹杖外道は釈尊しゃくそんの御長をはから
ず御頂を見奉らんとせしに御頂を見たてまつらず、応持菩薩おほさつも御頂を見たて
まつらず、大梵天王だいぼんてんのうも御頂をば見たてまつらず、これは・いかなるゆへぞと
たづねれば父母ふぼ・師匠主君を頂いただきを地につけて恭敬きやうけいし奉りしゆへに此の相を
感得かんとくせり。

乃至梵音声ないしぼんおんじようと申すは仏もうの第一だいいちの相なり、小王大王たいおうてんりんおう轉輪王等・此の相を一分いちぶん
備へたるゆへに此の王の一言に国も破れ国も治まるなり、宣旨と申すは
梵音声ぼんおんじようの一分なり、万民ばんみんの万言一王の一言に及ばず、則ち三墳・五典すなわさんぶんなど
申すは小王の御言なり、此の小国しょうこくを治め乃至大梵天王だいぼんてんのう三界の衆生を随しゆじようふる
事仏の大梵天王・帝釈等をしたがへ給う事たまもこの梵音声ぼんおんじようなり、此等これらの
梵音声ぼんおんじよう一切経と成つて一切衆生を利益す、其の中に法華経は釈迦如来の書

き顕あらわして此の御音こえを文字もんじと成し給たまう仏の御心もんじはこの文字もんじに備もれり、たとへば種子しゆしと苗と草と稻とはかはれども心はたがはず。

釈迦しゃか仏と法華經ほけきようの文字もんじとはかはれども心は一つなり、然しかれば法華經ほけきようの文字もんじははいけんを拜見はいけんせさせ給たまうは生身しょうしんの釈迦しゃか如来にょらいにあひ進まいらせたりとおぼしめすべし、此の志こころざし 佐渡の国までおくりつかはされたる事すでに釈迦しゃか仏知しし食あわし畢おわんぬ、
實じつに孝養こうようの詮きんなり、恐恐きょうきょう謹言きんげん。

文永九年 月 日

日蓮にちれん在御判

四条三郎殿御返事

一九四 經王御前御書

文永九年五十一歳 御作 1123p

種種しゆしゆ御送り物給ひ候い畢おわんぬ、法華經ほけきよう第八・妙莊嚴みょうそうごん王品おうひんと申もうすには妙莊嚴王みょうそうごん・淨徳夫人じやうとくふじんと申もうす後は淨蔵・淨眼じやうがんと申もうす太子たいしに導みちびかれ給たまうと説たまかれて候、
經王御前きやうおうごぜんを儲もさせ給たまいて候へば現世げんせには跡あとをつぐべき孝子こうしなり後生ごしやうには又

導^{みちび}かれて仏にならせ給^{たま}うべし、今の代は濁^{じよく}世と申^{もう}して乱^{みだ}れて候^さなり、其の上
・眼前^{がんぜん}に世の中乱^{みだ}れて見え候^さへば皆^{みな}人今^{こん}生^{じよう}には弓^{きゆう} 箭^{うせん}の難^{なん}に値^あいて修羅^{しゆら}道^{どう}に
おち後^ご生^{じよう}には惡道^{あくどう}疑^{うたが}いなし。

而^{しか}に法華^{ほけき}經を信^{ひと}ずる人^{びと}こそ仏には成^なるべしと見え候^さへ、御覽^みある様^{よう}にか
かる事^し出来^{しゅ}すべしと見^みへて候^さ、故^{ゆえ}に昼夜^{しゅう}に人^にに申^{もう}し聞^きかせ候^さいしを用^{もち}いらる
事^{こと}こそなくとも科^{とが}に行^いはるる事^{こと}は謂^{いわ}れなき事^{こと}なれども、古^{ふる}も今^{いま}も人^{ひと}の損^{そん}ぜ
んとては善言^{ぜんげん}を用^{もち}いぬ習^{なら}いなければ終^{つい}には用^{もち}いられず世の中亡^{むし}びんとするなり、
是^これ偏^{ひとえ}に法華^{ほけき}經・釈迦^{しゃか}仏^{ぶつ}の御使^{おんつかい}いを責^せむる故^{ゆえ}に梵天^{ぼんてん}・帝釈^{たいしゃく}・日月^{にちがつ}・四天^{してん}等
の責^こめを蒙^{こうむ}つて候^さなり、又^{また}世は亡^{むし}び候^さとも日本^{にほん}国^{こく}は南無^{なむ}妙法^{みょうほう}蓮華^{れんげ}經^{きよう}とは人
ごと^{こと}に唱^{とな}え候^{さう}はんずるにて候^さぞ、如何^{いかん}に申^{もう}さじと思^{おも}うとも毀^こらん人^{ひと}には弥^いよ
申^{もう}し聞^きかすべし、命^{いのち}生^なきて御坐^おば御覽^み有^あるべし、又^{また}いかに唱^{とな}うとも日蓮^{にちれん}に怨^{あだ}
をなせし人^{ひと}人は必^{かならず}ず無間^{むげん}地獄^{じごく}に墮^おちて無量^{むりやう}劫^{こく}の後^{のち}に日蓮^{にちれん}の弟^{でし}子^こと成^なつて成^{じやう}仏^{ぶつ}

す^べ可^きし、恐^き恐^き謹^き言^き。

四^し条^{じょう}金^{きん}吾^ご殿^{へん}御^じ返^じ事

日^に蓮^{ちれん}

花^か押^{おう}

一九五 經王殿御返事 文永十年八月 五十二歳御作 1124p

其の後御おとづれきかまほしく候いつるところに・わざと人を・をくり給候、又なによりも重宝たるあし山海を尋ねるとも日蓮が身には時に当たりて大切に候。

夫について經王御前のこと・二六時中に日月天に祈り申し候、先日せんじつのまほり暫時も身を・はなさずたま給へ、其の本尊は正法・像法・二時には習へる人だにもなし・ましてかき願あらわし奉る事たえたり、獅子王は前三後・一と申してありの子を取らんとするにも又たけきものを取らんとする時も・いきをひを出す事は・ただをなじき事なり、日蓮守護たる処の御本尊を・したため参らせ候事も獅子王に・をとるべからず、經に云く「獅子奮迅之力」とは是なり、此の曼荼羅能く能く信ぜさせ給ふべし、南無妙法蓮華經は獅子吼の如し、いかなる病さわりをなすべきや、鬼子母神・十羅刹如・法華經の題目を持つ

ものを守護すべしと見えたり、幸いは愛染の如く福は毘沙門の如くなるべし、
いかなる処にて遊びたはふるとも・つつがあるべからず遊行して畏れ無きこ
と獅子王の如くなるべし、十羅刹如の中にも皇諦女の守護ふかかるべきなり、
但し御信心によるべし、つるぎなんども・すすまざる人のためには用る事な
し、法華經の劍は信心のけなげなる人こそ用る事なれ鬼に・かなぼうたるべ
し、日蓮がたましひをすみにそめながして・かきて候ぞ信じさせ給へ、仏の
御意は法華經なり日蓮がたましひは南無妙法蓮華經に・すぎたるはなし、
妙樂云く「顯本遠寿を以て其の命と為す」と釈し給う。

經王御前には、わざはひも轉じて幸いとなるべし、あひかまへて御信心出し
此の御本尊に祈念せしめ給へ、何事か成就せざるべき、「充滿其願・如
清涼池・現世安穩・後生善處」疑なからん、又申し候当国の大難ゆり候は
ばいそぎ・いそぎ鎌倉へ上り見参いたすべし、法華經の功力を思ひやり候へ

ば不老不死・目前にあり、ただ歎く所は露命計りな天たすけ給へと強盛に
申し候、浄徳夫人・竜女の跡をつがせ給へ、南無妙法蓮華經・南無
妙法蓮華經、あなかしこ、あなかしこ

八月十五日

日蓮花押

経王殿御返事

一九六

呵責謗法滅罪抄

文永十年

五十二歳御作

1125p

御文委く承り候、

法華經の御ゆへに

已前に伊豆の国に

流され候いしもかう

申せば謙ぬ口と人はおぼすべけれども心ばかりは悦ば入つて候いき、無始よ

り已来法華經の御ゆへに

実にても虚事にても

科に

当るならば

争か・かか

るつたなき凡夫とは生れ候べき、

一端は・わびしき様なれども

法華經の御為

なればうれしと思ひ候いしに少し先生の罪は消えぬらんと思しかども無始よ

り已来の十悪・四重六重八重十重五無間誹謗正法一闍提の種種の重罪大山

より高くたいかい大海より深くこそ候らめ、五逆罪ごぎゃくざいと申すは一逆を造る猶なおいっこうむげん一劫無間の果を感じず。

一劫と申すは人壽八萬歳より百年に一を減し是くの如く乃至十歳に成りぬ、又十歳より百年に一を加うれば次第に増して八萬歳になるを一劫と申す、親を殺す者・此程の無間地獄に墮ちて隙もなく大苦を受くるなり、法華經誹謗の者は心には思はざれども色にも嫉み戯れにも・る程ならば經にて無けれども法華經に名を寄たる人を輕しめぬれば上の一劫を重ねて無數劫無間地獄に墮ち候と見えて候、不輕菩薩を罵打し人は始こそさありしかども後には信伏隨從して不輕菩薩を仰ぎ尊ぶ事諸天の帝釈を敬ひ我等が日月を畏るるが如くせしかども始めりし大重罪消えかねて千劫大阿鼻地獄に入つて二百億劫三宝に捨てられ奉りたりき。

親を殺して、止利の無間地獄に墮つ。又、父を殺して、止利の阿鼻陀地獄に墮つ。又、母を殺して、止利の阿鼻陀地獄に墮つ。又、兄弟を殺して、止利の阿鼻陀地獄に墮つ。又、姉妹を殺して、止利の阿鼻陀地獄に墮つ。又、妻子を殺して、止利の阿鼻陀地獄に墮つ。又、父母兄弟姉妹妻子を殺して、止利の阿鼻陀地獄に墮つ。又、一切の衆生を殺して、止利の阿鼻陀地獄に墮つ。

干法韋然一名を害かるる車しめむねに上の一去る重才一
無妻去無閑地猶一

隨從して不轉菩薩を仰ぎ尊ぶ事諸天の帝彩を苟て我等が日月を畏るる力

却三宝に捨てられ奉いたしき

五逆を病に文すれは五逆は霍舌の如し。して急に事を切る。説法に

びやくらい
白癩病の如し始は緩に後漸漸に大事なり、謗法の者は多くは無間地獄に生じ
少しは六道に生を受く、人間に生ずる時は貧窮・下賤等・白癩病等と見えた
り、日蓮は法華經の明鏡をもつて自身に引き向かへたるに都てくもりなし、
過去の謗法の我が身にある事疑いなし此の罪を今生に消さずば未来争か
地獄の苦をば免るべき、過去遠遠の重罪をば何にしてか皆集めて今生に
消滅して未来の大苦を免れんと勘えしに当世・時に當つて謗法の人人国に
充滿せり、其の上国主既に第一の誹謗の人たり、此の時・此の重罪を消さ
ずば何の時を可期すべき、日蓮が小身を日本国に打ち覆つてののしらは無量
無辺の邪法の四衆等無量無辺の口を以て一時に・るべし、爾の時に国主は謗法
の僧等が方人として日蓮を怨み・或は頸を刎ね・或は流罪に行ふべし、度
度かかる事、出来せば無量劫の重罪一生の内に消なんと謀てたる大術・少
も違ふ事なくかかる身となれば所願も満足なるべし。

然れども凡夫なれば動すれば悔ゆる心有りぬべし、日蓮だにも是くのごとく侍るに前後も弁へざる女人などの各仏法を見ほどかせ給わぬが何程か日蓮に付いてくやしとおぼすらんと心苦しかりしに、案に相違して日蓮よりも強盛の御志どもありと聞へ候は偏に只事にあらず、教主釈尊の各の御心に入り替らせ給うかと思へば感涙押え難し、妙楽大師の釈に云く記七「故に知んぬ末代一時も聞くことを得聞き已つて信を生ずる事宿種なるべし」等云云、又云く弘二「運像末に在つて此の真文を囑る宿に妙因を殖うるに非ざれば実に値い難しと為す」等云云。

妙法蓮華經の五字をば四十余年此れを秘し給ふのみにあらず迹門十四品に猶是を抑へさせ給ひ寿命品にして本果本因の蓮華の二字を説き顕し給ふ、此の五字をば仏・文殊・普賢・弥勒・薬王等にも付属せさせ給はず、地涌の上行菩薩・無辺行菩薩・淨行菩薩・安立行菩薩等を寂光の大地より召

し出して此れを付属し給ふ、儀式ただ事ならず宝浄世界の多宝如来大地より
七宝の塔に乗じて涌现せさせ給ふ、三千大千世界の外に四百万億那由他の国土
を浄め高さ五百由旬の宝樹を尽一箭道に殖え並べて宝樹一本の下に五由旬の
師子の座を敷き並べ十方分身の仏尽く来り坐し給ふ、又釈迦如来は垢衣を
脱で宝塔を開き多宝如来に並び給ふ、譬えば青天に日月の並べるが如し帝釈
と頂生王との善法堂に在すが如し、此の界の文殊等他方の観音等十方の虚空
に雲集せる事星の虚空に充滿するが如し、此の時・此の土には華嚴經の七
処・八会十方世界の台上の盧舍那仏の弟子法慧・功德林・金剛幢・金剛蔵等
の十方刹土塵点数の大菩薩雲集せり、方等的大宝坊雲集の仏・菩薩般若經
の千仏・須菩提・帝釈等・大日經の八葉九尊の四仏四菩薩金剛頂經の三
十七尊等涅槃經の俱尸那城へ集会せさせ給ひし十方法界の仏・菩薩をば文殊
・弥勒等互に見知りて御物語り是有りしかば此等の大菩薩は出仕に物狎れた

り見え候、今・此の四菩薩出でさせ給うて後釈迦如来には九代の本師三世の仏の御母にておはする文殊師利菩薩も一生補処と・ののしらせ給うふ弥勒等も此の菩薩に値いぬれば物とも見えさせ給はず、譬えば山かつが月卿に交り猴が師子の座に列るが如し、此の人人を召して妙法蓮華經の五字を付属せさせ給いき、付属も只ならず十神力を現じ給ふ、釈迦は広長舌を色界の頂に付け給へば諸仏も亦復是くの如く四百万億那由佗の国土の虚空に諸仏の御舌赤虹を百千万億並べたるが如く充滿せしかばおびただしかりし事なり、かくのごとく不思議の十神力を現じて結要付属と申して法華經の肝心を抜き出して四菩薩に譲り、我が滅後に十方の衆生に与へよと慇懃に付属して其の後又一つの神力を現じて文殊等の自界他方の菩薩・二乗・天人・竜神等にはいつきようないしいちだいしようきよう一經乃至一代聖教をば付属せられしなり、本より影の身に随つて候様にかせ給ひたりし迦葉舍利弗等にも此の五字を譲り給はず此れはさてをきぬ、

もんじゅ　みろく　いかに　おし　たま　きりよう　きた　たま　かたがたふしん
文殊・弥勒等には争か惜み給うべき器量なくとも嫌ひ給うべからず、方方不審
なるを・或は他方の菩薩は此の土に縁少しと嫌ひ、或は此の土の菩薩なれど
も娑婆世界に結縁の日浅し、或は我が弟子なれども初発心の弟子にあらずと
嫌はれさせ給う程に、四十余年並びに迹門十四品の間は一人も初発心の
御弟子なし、此の四菩薩こそ五百塵点劫より已来教主 釈尊の御弟子として
初発心より又他仏につかずして二門をもふまざる人人なりと見えて候、天台
の云く「但下方の發誓を見る」等云云、又云く「是れ我が弟子なり心に我が
法を弘むべし」等云云、妙樂の云く「子父の法を弘む」等云云、道暹云く「法
是れ久成の法なるに由るが故に久成の人に付す」等云云、此の妙法蓮華經の
五字をば此の四人に譲られ候。

しか　めつこ　しょうほう　ぞうほう　まつほう
而るに仏の滅後・正法一千年・像法一千年・末法に入つて二百二十余年が
間・月氏・漢土・日本一閻浮提の内に未だ一度も出でさせ給はざるは何なる

事にて有るらん、正くも譲らせ給はざりし文殊師利菩薩は仏の滅後四百五十
 年まで此の土におはして大乘經を弘めさせ給ひ、其の後も香山・清涼山よ
 り度度來つて大僧等と成つて法を弘め、藥王菩薩は天台大師となり觀世音は
 南岳大師と成り、彌勒菩薩は傳大士となれり、迦葉・阿難等は仏の滅後二十
 年四十年法を弘め給ふ、嫡子として譲られさせ給へる人の未だ見えさせ給は
 ず、二千二百余年が間・教主釈尊の絵像・木像を賢王・聖主は本尊とす、
 然れども但小乗・大乘・華嚴・涅槃・觀經・法華經の迹門普賢經等の仏
 ・真言・大日經等の仏宝塔品の釈迦・多宝等をば書けどもいまだ寿命品の
 釈尊は山寺精舎にましまさず何なる事とも量りがたし、釈迦如来は後・五
 百歳と記し給ひ正像二千年をば法華經流布の時とは仰せられず、天台大師は
 後の五百歳遠く妙道に沾わんと未來に譲り、傳教大師は、正像稍過ぎ已つ
 て末法太だ近きに有り、等と書き給いて、像法の末は未だ法華經流布の時な

らずと我と時を嫌ひ給ふ、さればをしはかるに地涌千界の大菩薩は釈迦・多宝
じゅつぽう しよぶつ ゆず やくそく むなし もくし たま

・十方の諸仏の御譲り御約束を空く黙止てはてさせ給うべきか。
げてん けんじん もう

外典の賢人すら時を待つ郭公と申す畜鳥は卯月五月に限る、此の大菩薩も
まっぽう げんじん

末法に出ずべしと見えて候、いかんと候べきぞ瑞相と申す事は内典・外典に
付いて必ず有るべき事の先に現ずるを云うなり、蜘蛛かかつて喜事来り 鵲
あ まるつと もう しようじ しるし げん いか だいじ かさぎ

鳴いて客人来ると申して小事すら験先に現ず何に況や大事をや、されば
ほけきようじよぼん いちだいちようか だいずい ゆじゅつぽん こ に

法華経序品の六瑞は一代超過の大瑞なり、涌出品は又此れには似るべくもな
き大瑞なり、故に天台の云く「雨の猛きを見ては竜の大きな事を知り華の
だいずい ゆえ てんだい いわ たけ

盛なるを見ては池の深き事を知る」と書かれて候、妙楽云く「智人は起を知
じゃ みずか じゃ いまにちれん これ お ちじん いちぶん

り蛇は自ら蛇を知る」と云云、今日蓮も之を推して智人の一分とならん、
いぬ しょうかがんねん ひのとも

去る正嘉元年「太歳丁巳」八月二十三日戌亥の刻の大地震と、文永元年甲子
いぬ しょうかがんねん ひのとも

七月四日の大彗星、此等は仏滅後・二千二百余年の間未だ出現せざる大瑞な
すいせい これら ぶつめつ いま しゅつげん だいずい

り、此の大菩薩ほさつの此の大法だいほうを持ちて出現しゅつげんし給たまつべき先瑞なるか、尺の池には丈の浪たらず驢吟ろごずるに風鳴らず、日本国の政事まつりごとみだ乱れ万民ばんみん歎なげくに依よつては此の大瑞だいずいげん現げんじがたし、誰か知らん法華經ほけきょうの滅不滅めつふめつの大瑞だいずいなりと。

二千余年の間・悪王あくおうの万人ばんにんに・らるる謀叛むはんの者の誰人だれびとにあだまるる等日蓮にちれん

が失とがもなきに高きにも下きにも罵詈き毀辱に刀杖瓦礫等くとうじょうがりやくひまなき事二十余年な

り、唯事ただにはあらず過去かこの不輕菩薩ふぎようぼさつの威音王いおんおう仏の末に多年の間・罵詈めり

せられしに相似そうじたり、而も仏彼の例を引いて云く我が滅後めつごの末法まっぽうにも然しかるべ

し等と記せられて候に近くは日本遠くは漢土等かんどにも法華經ほけきょうの故ゆえにかかる事有

りとは未だ聞いまだかず人は悪にくんで是これを云はず、我と是これを云はば自讃じさんに似たり、云

わすば仏語ぶつごを空むなしくなく過とがあり、身を輕んじて法を重んずるは賢人けんじんにて候なれ

ば申もうす、日蓮にちれんは彼のふぎようぼさつ不輕菩薩に似たり、国王こくおうの父母ふぼを殺すも民ちちははが考妣こうはを害す

るも上下じょうげ異なれども一因むげんなれば無間むげんにおつ、日蓮にちれんと不輕菩薩ふぎようぼさつとは位じょうげの上下じょうげは

あれども同業なれば彼の不輕菩薩成仏し給はば日蓮が仏果疑うべきや、彼は二百五十戒の上慢の比丘に罵られたり、日蓮は持戒第一の良觀に讒訴せられたり、彼は帰依せしかども千劫阿鼻獄におつ、此れは未だ渴仰せず知らず無數劫をや経んずらん不便なり不便なり。

疑つて云く正嘉の大地震等の事は去る文応元年太歲庚申七月十六日宿屋の入道に付けて故最明寺入道殿へ奉る所の勘文立正安國論には法然が選択

に付いて日本國の佛法を失ふ故に天地瞋をなし自界叛逆難と他國侵遍難起こるべしと勘へたり、此には法華經の流布すべき瑞なりと申す先後の相違之有る

か如何、答えて云く汝能く之を問えり、法華經の第四に云く「而も此の經は

如来現在すら猶怨嫉多し況や滅度の後をや」等云云、同第七に況滅度後を重ね

て説いて云く「我が滅度の後・後の五百歳の中に閻浮提に広宣流布せん」等

云云、仏滅後の多怨は後・五百歳に妙法蓮華經の流布せん時と見えて候、

つぎしも
次ぎ下に又云く「悪魔・魔民・諸天竜・夜叉・鳩槃荼」等云云、行満座主

伝教大師を見て云く、聖語朽ちず今・此の人に遇えり我れ披閱する所の法門

・日本国の阿闍梨に授与す等云云、今も又是くの如し末法の始に妙法蓮華經

の五字を流布して日本国の一切衆生が仏の下種を懷妊すべき時なり、例せば

下女が王種を懷妊すれば諸女瞋りをなすが如し、下賤の者に王頂の珠を授与

せんに大難来らざるべしや、一切世間

・多怨難信の經文是なり、涅槃經に云く「聖人に難を致せば他国より其の

国を襲う」と云云、仁王經も亦復是くの如し取意、日蓮をせめて弥よ天地四方

より大災雨の如くふり泉の如くわき浪の如く寄せ来るべし、国の大蝗虫

たる諸僧等近臣等が日蓮を讒訴する弥よ盛ならば大難倍来るべし、帝釈を

射る修羅は箭還つて己が眼にたち阿那婆達多竜を犯さんとする金翅鳥は自ら

火を出して自身をやく、法華經を持つ行者は帝釈・阿那婆達多竜に劣るべ

きや、章安大師だいいしの云く「仏法ぶつぽうを壊乱えらんするは仏法ぶつぽうの中の怨あだなり慈なく無くして詐いつわ
り親すなわむは則こち是れ彼あだが怨あだなり」等云云、又云く「彼ためが為ために悪すなわを除こくは則こち是れ
彼あだが親すなわなり」等云云。

にほんこく いっさいしゅじょう ほうねん しゃへいかくほう ぜんしゅう きょうげべつてん おうげん たぶら
日本国にほんこくの一切衆生いっさいしゅじょうは法然ほうねんが捨しゃ閉へい閣かく抛ほうと禪宗ぜんしゅうが教外別伝きょうげべつてんとの誑言おうげんに誑たぶらかさ
れて一人ひとりもなく無間むげん・大城だいじょうに墮おつべしと勘かんへて国主こくしゅ・万民ばんみんを憚はばからず大
音声おんじょうを出でして二十余年にじゅうねんが間まよばはりつるは竜逢りゅうほうと比干ひかんとの直臣ちくしんにも劣くせるべ
きや、大悲だいひ千手せんじゅ觀音くわんおんの一時いちじに無間地獄むげんじごくの衆生しゅじょうを取り出いだすに似にたるか、火ひの中
の数子ふぼを父母いちじが一時いちじに取り出いださんと思おもふに手少てせうなければ慈悲じひ前後ぜんご有あるに似にた
り、故ゆえに千手万手せんじゅばんじゅ億手いじゆある父母ふぼにて在あり、爾前にぜんの經經きやうきやうは一手いっしゅ・二手にしゅ等
に似にたり法華經ほけきやうは一切衆生いっさいしゅじょうを化みして皆みな仏道ぶつどうに入いらしむこと無む数手むすうの菩提ぼだい是これな
り、日蓮にちれんは法華經ほけきやう並びに章安しやうあんの釈しやくの如ごとくならば日本国にほんこくの一切衆生いっさいしゅじょうの慈悲じひ
父母ふぼなり、天あま高たかけれども耳みみとければ聞きこかせ給たまつらん地厚ちこうけれども眼まなこ早はやければ

御覽あるらん天地既に知し食しぬ、又一切衆生の父母を罵詈するなり父母を
るさい
流罪するなり、此の国此の両三年が間の乱政は先代にもきかず法に過ぎてこ
そ候へ。

抑 悲母の孝養の事仰せ遣され候感涙押へ難し、昔元重等の五童は五郡の

異性の他人なり兄弟の契りをなして互に相背かざりしかば財三千を重ねた

り、我等親と云う者なしと歎きて途中に老女を儲けて母と崇めて一分も心に

違はずして二十四年なり、母忽に病に沈んで物いはず、五子天に仰いで云く

我等孝養の感無くして母もの云わざる病あり、願くは天孝の心を受け給はば

此の母に物いはせ給へと申す、其の時に母五子に語つて云く我は本是れ大原

の陽猛と云うものの女なり、同郡の張文堅に嫁す文堅死にき、我に一人の児

あり名をば烏遺と云いき彼が七歳の時乱に値うて行く処をしらず、汝等五

子に養はれて二十四年此の事を語らず、我が子は胸に七星の文あり右の足の

下に黒子ありと語り畢つて死す、五子葬をなす途中にして国令の行くにあひぬ、彼の人物記する囊を落せり此の五童が取れるになして禁め置かれたり、令来つて問うて云く汝等は何くの者ぞ、五童答えて云く上に言えるが如し、爾の時に令上よりまろび下て天に仰ぎ地に泣く、五人の縄をゆるして我が座に引き上せて物語りして云く我は是れ烏遺なり、汝等是我が親を養いけるなり此の二十四年の間多くの楽みに値へども非母の事をのみ思い出でて楽しみも楽しみならず、乃至大王の見参に入れて五県の主と成せりき、他人集つて他の親を養ふに是くの如し、何に況や同父同母の舎弟妹女等がいういうたるを顧みば天も争か御納受なからんや。

淨蔵・淨眼は法華經をもつて邪見の慈父を導びき、提婆達多は仏の御敵四十余年の経經にて捨てられ臨終悪くして大地破れて無間地獄に行きしかども法華經にて召し還して天王如来と記せらる、阿闍世王は父を殺せども仏

・涅槃の時・法華經を聞いて阿鼻の大苦を免れき。

例せば此の佐渡の国は畜生の如くなり又法然が弟子充滿せり、鎌倉に日蓮

を惡みしより百千万億倍にて候、一日も寿あるべしとも見えねども各御志

ある故に今まで寿を支へたり、是を以て計るに法華經をば釈迦・多宝・十方

の諸仏大菩薩供養恭敬せさせ給へば此の仏・菩薩は各各の慈父慈母に日日夜

夜十二時にこそ告げさせ給はめ、当時主の御おぼえのいみじくおはするも

慈父慈母の加護にや有るらん、兄弟も兄弟とおぼすべからず只子とおぼせ、

子なりとも梟鳥と申す鳥は母を食ふ破鏡と申す獸の父を食わんとうかがふ、

わが子四郎は父母を養ふ子なれども悪くばなにかせん、他人なれどもかたら

ひぬれば命にも替るぞかし、舎弟等を子とせられたらば今生の方人・人目

申す計りなし、妹等を女と念はばなどか孝養せられざるべき、是へ流されし

には一人も訪う人もあらじとこそおぼせしかども同行七八人よりは少からず、

上下じょうげのくわても各の御計おんみひなくばいかげせん、是これ偏ひとえに法華經ほけきょうの文字もんじの各の御身おんみに入り替かわらせ給たまいて御助おほけあるとこそ覚おぼゆれ。

何いかなる世みだの乱れにも各各をば法華經ほけきょう十羅刹じゅうしやくしやく助たけ給たまへと湿ぬれる木より火を出

し乾かわける土より水を儲もけんが如ごとく強盛かうじやうに申もうすなり、事しげ繁しげければとどめ候。

四条金吾殿御返事しじようきんご ごへんじ

日蓮花押にちれんかおう

一九七 主君耳入此法門免与同罪事しゅくん ほつもん よどうざい

文永十一年九月 五十三歳御作 与四条金吾 1132p

錢二貫文給び畢おわんぬ。

有情うじやうの第一だいいちの財たからは命にすぎず此これを奪うつ者は必ず三途さんずに墮おつ、然しかれば輪王りんおう

は十善じゆぜんの始はつには不殺生ふさつしやうぶつ仏ぶつの始しやうには小乗經じやうじやうきやうの始はつには五戒ごかい其その始しやうには不殺生ふせつしやう、大乘だいじやう

梵網經ぼんもうきやうの十重じゆうきん禁きんの始はつには不殺生ふせつしやう、法華經ほけきやうの寿量品じゆりやうぼんは釈迦如来しやくかにらいの不殺生戒ふさつしやうかいの

功德くどくに當あたつて候品けうひんぞかし、されば殺生せつしやうをなす者は三世さんぜの諸仏しよぶつにすてられ六欲

天も是これを守る事なし、此の由は世間の学者も知れり日蓮もあらあ得意得て候、
但し殺生ただししょうに子細しさいあり彼の殺さるる者の失とがに軽重けいちゆうあり、我が父母ふぼ・主君我しゅくんが
師匠ししょうを殺せる者をかへりて害せば同じつみなれども重罪じゅうざいかへりて軽罪けいざいとなる
べし、此れ世間の学者せけん がくしゃ知れる処ところなり、但し法華經の御かたきをば大慈大悲の
菩薩も供養くようすれば必ず無間地獄に墮おつ、五逆の罪人も彼を怨あだとすれば必ず人天
に生を受く、仙予国王有徳国王は五百無量の法華經のかたきを打ちて今は
釈迦仏しゃかぶつとなり給たまう、其の御弟子迦葉・阿難舍利弗・目連等の無量の眷属は彼
の時に先を懸かけ陣をやぶり・或は殺し・或は害し・或は随喜ずいきせし人人ひとびとなり、
覺徳比丘かくとくびくは迦葉仏かしようぶつなり、彼の時に此の大王を勧すすめて法華經のかたきをば父母
宿世叛逆すくせの者の如くせし大慈大悲の法華經の行者なり。

今の世は彼の世に当れり、国主日蓮が申す事を用ゆるならば彼がごとくな
るべきに用いざる上もちかへりて彼がかたうどとなり一国こぞりて日蓮をにちれんかへり

てせむ、上かみいちにん一人より下万民ばんみんにいたるまで皆五逆みなごぎやくに過ぎたる謗法ほうぼうの人となりぬ、
されば各各も彼が方ぞかし、心は日蓮にちれんに同意どういなれども身は別なれば与同罪よどうざいの
がれがたきの御事おんことに候に主君しゅくんに此の法門ほうもんを耳にふれさせ進せけるこそありが
たく候へ、今は御用もちいなくもあれ殿の御失は脱とがれ給まぬかひぬ、此れより後には口
をつつみておはすべし、又天も一定殿をば守らせ給たまうらん、此れよりも申もうす
なり。

かまへてかまへて御用心ようしん候べし、いよいよにくむ人人ひとびとねらひ候らん、御さ
かもり夜は一向いっこうに止め給たまへ、只女房ただにようぼうと酒うち飲んでなにの御不足ふそくあるべき、
他人たにんのひるの御さかもりおこたるべからず、酒を離れて・ねらうひま
有あるべからず、返す返す、恐恐きょうきょう謹言きんげん。

九月二十六日

日蓮にちれん 花押かおう

左衛門尉殿御返事
さえもんのかみ へんじ

一九八

四條金吾殿女房御返事
しじょうきんご にようぼうごへんじ

ぶんえい 文永十二年正月 五十四歳御作 1134p

しよせんにほんこく

いつさいしゅじょう

じゃほうしんこんし

所詮日本国の一切衆生の目をぬき神をまどはかす邪法真言師にはすぎず是

しは

じゅうゆ

いつさいきよう

しやうれつ

たま

は且らく之を置く、十喻は一切経と法華経との勝劣を説かせ給うと見え

じゅうゆ

いつさいきよう

きようじや

ほけきよう

きようじや

れども仏の御心はさには候はず、一切経の行者と法華経の行者とを・なら

ほけきよう

きようじや

にちがつ

しききよう

きようじや

しゅうせいとうこ

べて法華経の行者は日月等のごとし諸経の行者は衆星燈炬のごとしと

もう

申す事を詮と思し食され候、なにを・もつてこれをするとならば第八の譬の

だいじ

いわゆる

きようもん

いわ

じゅじ

きようてん

またによぜ

下に最大事の文あり、所謂此の経文に云く「有能受持是經典者亦復如是於

いつさいしゅじょう

またこれだい

一切衆生中亦為第一等云云、此の二十二字は一經第一の肝心なり一切衆生

がんもく

ほけきよう

きようじや

にちがつ

ぼんのう

いつきようだいいち

かんじん

いつさいしゅじょう

の眼目なり、文の心は法華経の行者は日月大梵王仏のごとし、大日経の行者

しゅうせい

こうかほんぶ

きようもん

は衆星・江河凡夫のごとしとかれて候経文なり、されば此の世の中の

なんよそうに

ほけきよう

たま

いつさいしゅじょう

男女僧尼は嫌うべからず法華経を持たせ給う人は一切衆生のしうとこそ仏は

御らん候らめ、梵王・帝釈は・あをがせ給うらめと・うれしさ申すばかりなし、又この經文を昼夜に案じ朝夕により候へば常の法華經の行者にては候はぬにはんべり、是經典者とて者の文字はひととよみ候へば此の世の中の比丘・比丘尼うば塞うばいの中に法華經を信じまいらせ候人人かと思えまいらせ候へばさにては候はず、次下の經文に此の者の文字を仏かさねてとかせ給うて候には若有女人ととかれて候、日蓮・法華經より外は一切經をみ候には女人とはなりたくも候はず、或經には女人をば地獄の使と定められ・或經には大蛇ととかれ・或經にはまがれ木のごとし・或經には仏種をいれる者とこそとかれて候へ、仏法ならず外典にも榮啓期と申せし者の三樂をうたひし中に無女樂と申して天地の中女人と生れざる事を一の樂とこそたてられて候へ、わざわひは三女よりをこれりと定められて候に、此の法華經計りに此の經を持つ女人は一切の女人にすぎたるのみならず一切の男子にこえたりとみ

えて候、所詮一切しよせんいつさいの人にそしられて候よりも女人にょにんの御ためにはいとをしと・
をもはしき男にふびんと・をもはれたらんにはすぎじ、一切いつさいの人はにくまば
にくめ、釈迦しゃかぶつ・多宝たほうぶつ・十方じゅつぽうの諸しよ仏ぶつ・乃至梵王ないしほんのう・帝釈たいしやく・日月にちがつ等らにだにも
ふびんと・をもはれまいらせなばなにかくるしかるべき、法華經ほけきやうにだにもほ
められたてまつりなばなにかくるしかるべき。

今三十三の御やくとて御布施ふせ送りたびて候へば釈迦しゃかぶつ・法華經ほけきやう日天にちてんの御ま
へに申し上もうて候、又人の身には左右さうのかたあり、このかたに二つの神をはし
ます一をば同名二をば同生もうと申す、此の二つの神は梵天ぼんでん・帝釈たいしやく・日月にちがつの人を
まほらせんがために母の腹の内に入りしより・このかた一生をわるまで影の
ごとく眼まなこのごとくつき随したがいて候が、人の惡をつくり善をなしなむどし候をば
つゆちりばかりものこさず天にうたへまいらせ候なるぞ。

華嚴經けこんきやうの文にて候を止觀しかんの第八に天台大師てんだいだいしよませ給たまへり、但し信心ただしんじんのよは

きものをば法華經ほけきょうを持つ女人にょにんなれどもすつるとみえて候、例せば大將軍しょうぐんよは
ければしたがうものもかひなし、弓よはければ絃いとゆるし・風ゆるけ
れば波ちぬさきは自然じねんの道理どうりなり、而しかるにさえもん殿は俗の中日本にほんにはかた
をならぶべき者もなき法華經ほけきょうの信者なり、是にあひつれさせ給たまいぬるは日本にほん
第一だいいちの女人にょにんなり、法華經ほけきょうの御ためには竜女りゅうにょとこそ仏はをぼしめされ
候らめ、女と申もうす文字もんじをばかかるとよみ候、藤の松にかかり女の男にかかる
も今は左衛門殿を師とせさせ給たまいて法華經へみちびかれさせ給たまい候へ。
又三十三のやくは転じて三十三のさいはひとならせ給たまうべし、七難即滅ひちなんそくめつ・
七福即生ひちふくそくしょうとは是これなり、年は・わかうなり福はかさなり候べし、あなかしこ・
あなかしこ。

五月二十七日

にちれんかおう
日蓮花押

しじょうきんご
四条金吾殿 女房御返事

一九九 四條金吾殿御返事 しじょうきんご ごへんじ

文永十二年三月 ぶんえい 五十四歳御作 一一三六頁

此經難持の事、しきょうなんじ 抑弁阿闍梨が申し候は、そもそも あじやり もう 貴辺のかたらせ給ふ様に持つら
ん者は現世安穩・後生善処と承つて・げんせあんのん ごしやうぜんしよ すでに去年より今日まで・かたの如く
信心をいたし申し候処に、しんじん もう ところ さにては無くして大難雨の如く来り候と云云、真
にてや候らん、又弁公がいつはりにて候やらん、いかさま・よきついでに不審
をはらし奉らん、たてまつ ほけきやう 法華經の文に難信難解と説き給ふは是なり、なんしんなんげ と たま 此の經をきき
うる人は多し、まことに聞き受くる如くに大難来れども憶持不忘の人は希な
るなり、受くるは・やすく持つはかたし・さる間・成仏は持つにあり、此の
經を持たん人は難に値うべしと心得て持つなり、なん あ にくるえ 即為疾得・無上仏道は疑
なし、三世の諸仏の大事たる南無妙法蓮華經を念ずるを持とは云うなり、さんぜ しよぶつ だいじ なむみょうほうれんげきやう
に云く「護持仏所屬」といへり、天台大師の云く「信力の故に受け念力の故に
いわ ごじぶつしよ てんだいだいし いわ しんりき ゆえ

持つ「云云、又云く、此の経は持ち難し若し暫くも持つ者は我即ち歡喜す諸仏も亦然なり」云云、火にたきぎを加える時はさかなり、大風吹けば求羅は倍增するなり、松は万年のよはひを持つ故に枝を・まげらる、法華經の行者は火と求羅との如し薪と風とは大難の如し、法華經の行者は久遠長寿の如来なり、修行の枝をきられ・まげられん事疑なかるべし、此れより後は此經難持の四字を暫時もわすれず案じ給うべし、○ 恐恐。

ぶんえい きのとい
文永十二年乙亥三月六日

にちれんかおう
日蓮花押

しじょうきんご
四条金吾殿

二〇〇 おうしやじょう
王舎城事

がんねん
建治元年四月 五十四歳御作 与四条金吾

1137p

錢一貫五百文給ひ候い畢んぬ、焼亡の事委く承つて候事悦び入つて候、大火の事は仁王經の七難の中の第三の火難・法華經の七難の中には第一の一の火

難なり、夫れ虚空をば劍にてきることなし水をば火焼くことなし、聖人・賢人
・福人・智者をば火やくことなし、例せば月氏に王舎城と申す大城は在家
・九億万家なり、七度まで大火をこりてやけほろびき、万比なげきて逃亡せ
んとせしに大王なげかせ給う事がぎりなし、其の時賢人ありて云く七難の大火
と申す事は聖人のさり王の福の付くる時をこり候なり、然るに此の大火・
万民をば・やくといえとも内裏には火ちがつくことなし、知んぬ王のとが・
にはあらず万民の失なりされば万民の家を王舎と号せば火神・名にをそれて
やくべからずと申せしかば、さるへんもとて王舎城とそなづけられしかば・
それより火災とどまりぬ、されば大果報の人をば大火はやかざるなり。
これは国王已にやけぬ知んぬ日本国の果報のつくるしるしなり、然りに此の
国は大謗法の僧等が強盛にいのりをなして日蓮を降伏せんとする故に弥弥わ
ざはひ来るにや、其の上名と申す事は体を顕し候に両火房と申す謗法の聖人

・鎌倉中の上下の師なり、一火は身に留まりて極楽寺焼て地獄寺となりぬ、

又一火は鎌倉にじゃなちて御所やけ候ぬ、又一火は現世の国をやきぬる上に

にほんこく

してい

むげんじごく

あび

げんせ

せんびよう

ぐち

日本国の師弟ともに無間地獄にはちて阿鼻の炎にもえ候べき先表なり、愚癡

ほっし

ちえ

もう

もち

これてい

ふびんふびん

の法師等が智慧ある者の申す事を用い候はぬは是体に候なり、不便不便、先

おんふみ

先御文まいらせ候しなり。

御馬のがいて候へば又ともびきしてくり毛なる馬をこそまうけて候へ、あ

はれ・あはれ見せまいらせ候はばや、名越の事は是にこそ多くの子細どもを

そひ

なこえ

しさい

ば甲えて候へ、ある人の・ゆきあひて理具の法門自讃しけるを・さむざむに

ほうもんじさん

せめて候けると承り候。

たまわ

又女房の御いのりの事・法華経をば疑ひまいらせ候はねども御信心やよ

にようほう

ほけきよう

うたがい

そうち

しんじん

はくわたらせ給はんずらん、如法に信じたる様なる人人も実にはさもなき事

たま

ひとびと

とも是にて見て候、それにも知しめされて候、まして女人の御心・風をば・

にょにん

つなぐとも・とりがたし、御いのりの叶い候はざらんは弓のつよくしてつる
よはく・太刀つるぎにて・つかう人の臆病なるやうにて候べし、あへて
法華經の御とがにては候べからず、よくよく念仏と持齋とを我もすて人をも
力のあらん程はせかせ給へ、譬へば左衛門殿の人ににくまるるがごとしとこ
まごまと御物語り候へ、いかに法華經を御信用ありとも法華經のかたきを・
とわりほどには・よもおぼさじとなり、一切の事は父母にそむき国王にした
がはざれば不孝の者にして天のせめをかうふる、ただし法華經のかたきに・
なりぬれば父母・国主の事をも用ひざるが孝養ともなり国の恩を報ずるにて
侯。

されば日蓮は此の經文を見候しかば父母手をすりてせいせしかども師にて
侯し人かんだうせしかども・鎌倉殿の御勘気を二度まで・かほり・すでに顚
となりしかども・ついにをそれずして候へば、今は日本国の人人も道理かと

申すへんも・あるやらん、日本国に国主・父母・師匠の申す事を用いずして
ついに天のたすけをかほる人は日蓮より外は出しがたくや候はんずらん、是
より後も御覧あれ日蓮をそしる法師原が日本国を祈らば弥弥国亡ぶべし、結句
せめの重からん時・上一人より下万民まで・もとどりをわかつやつことなり
はぞをくうためしあるべし、後生はさてをきぬ今生に法華經の敵となりし人
をば梵天・帝釈・日月・四天・罰し給いて皆人に・みこりさせ給へと申しつ
けて候、日蓮・法華經の行者にてあるなしは是れにて御覧あるべし、かう申
せば国主等は此の法師のをどすと思へるか、あへてにくみては申さず大慈大悲
の力・無間地獄の大苦を今生にけさしめんとなり、章安大師云く「彼が為に
悪を除くは即ち是れ彼が親なり」等云云、かう申すは国主の父母・一切衆生
の師匠なり、事事多く候へども留候ぬ、又麦の白米一だはしかみ送り給ひ
候い畢んぬ。

建治元年乙亥卯月十二日 がんねんきのとい

四条金吾殿御返事 しじょうきんご ごへんじ

二〇一 四条金吾殿御返事 しじょうきんご ごへんじ

1139p

態と御使喜び入つて侯、又柑子五十・鷺目五貫文給び侯い畢んぬ、各各御 わざ おんつかい こうじ がもく

供養と云云、又御文の中に云く去る十六日に有る僧と寄合うて侯時・諸法実相 くよう おんぶん いわ いぬ あ

の法門を申し合いたりと云云、今経は出世の本懐・一切衆生・皆成仏道の ほうもん もう こんきよう しゅつせ ほんかい いっさいしゅじよう かいじようぶつどう

根元と申すも只此の諸法実相の四字より外は全くなきなり、されば伝教大師 もと ただ しよほうじつそう でんぎようだいし

は万里の波濤をしのぎ給いて相伝します此の文なり、一句万了の一言と ばんり はとう たまい そうでん いうく

は是なり、当世・天台宗の開会の法門を申すも此の経文を悪く意得て邪義 これ とうせ てんだいしゅう かいえ ほうもん もう きようもん こころう じゃぎ

を云い出し候ぞ、只此の経を持ちて南無妙法蓮華經と唱えて正直捨方便・ い ただ たも なむ みようほうれんげきよう とな しやうじきしやほうべん

但説無上道と信ずるを諸法実相の開会の法門とは申すなり、其の故は釈迦仏 たんせつむじやうどう しよほうじつそう かいえ ほうもん もう そのゆえ しゃかぶつ

・多宝如来・十方三世の諸仏を証人とし奉り候なり、相構えてかくの如く たほうによらい じゆつぽうさんぜ しょうぶつ たてまつ かま ごとく

心得させ給いて諸法実相の四の文字を時時あぢわへ給うべし・良薬に毒をま
じうる事有るべきや・うしほの中より河の水を取り出す事ありや、月は夜に
出・日は昼出で給う此の事争ふべきや、此れより後には加様に意得給いて御
問答あるべし、但し細細は論難し給うべからず、猶も申さばそれがしの師に
て侯日蓮房に御法門侯へとうち咲うて打ち返し打ち返し仰せ給うべく侯。
法門を書きつる間・御供養の志は申さず供、有り難し有り難し委くは
是よりねんごろに申すべく侯。

建治元年乙亥七月二十二日 日蓮花押
がんねんきのとい にちれんかおう

四条中務三郎左衛門尉殿御返事
さえもののじよう ごへんじ

二〇二 瑞相御書 建治元年 五十四歳御作 1140p
ずいそうごしよ がんねん

与四条金吾
しじようきんご

夫れ天変は衆人をおどろかし地天は諸人をうごかす、仏・法華経をとかん
そ てんべん しゅうじん ちよう しょにん ほけきよう

とし給^{たま}う時五瑞六瑞をげんじ給^{たま}う、其^その中に地動瑞^{ちどうずい}と申^{もつ}すは大地六種^{だいちしんどう}に震動^{しんどう}す六種^{もつ}と申^{もつ}すは天台大師文句^{てんだいだいしもんく}の三^{さん}に釈^{しゃく}して云^{いわ}く「東涌西没^{とうゆせいぼつ}とは東方^{とうほう}は青・肝^{かん}を主^{まなこ}どる肝^{かん}は眼^{がん}を主^{まなこ}どる西方^{さいほう}は白肺^{はくはい}を主^{まなこ}どる肺^{はい}は鼻^びを主^{まなこ}どる此^これ眼根^{がんこん}の功徳^{くどく}生^{なま}じて鼻根^{びこん}の煩惱^{ぼんのう}互^{たがい}に滅^{めつ}するを表^{ひょう}するなり鼻根^{びこん}の功徳^{くどく}生^{なま}じて眼^{がん}の中の煩惱^{ぼんのう}互^{たがい}に滅^{めつ}す余方^{しよほう}の涌没^{うもつ}して余根^{しよこん}の生滅^{しょうめつ}を表^{ひょう}するも亦復^{また}」云云、妙樂大師之^{みょうらくだいしこれ}を承^うけて云^{いわ}く「表根^{ひょうこん}と言^{いう}は眼鼻^{がんび}已^{すで}に東西^{とうせい}を表^{ひょう}す耳舌^{じしや}理^りとして南北^{なんぼく}に対^{たい}す中央^{ちゆうわう}は心^{しん}なり四方^{しほう}は身^みなり身四根^{しよこん}を具^ぐす心^{しん}く四^よを縁^{ゆゑ}す故^{ゆゑ}に心^{しん}を以^{もつ}て身^みに対^{たい}して涌没^{うもつ}を為^なす」云云、夫十方^{ふじふほう}は依報^{えほう}なり衆生^{しゆじやう}は正報^{しやうほう}なり譬^{たと}へば依報^{えほう}は影^{えい}のごとし正報^{しやうほう}は体^{たい}のごとし身^みなくば影^{えい}なし正報^{しやうほう}なくば依報^{えほう}なし又正報^{しやうほう}をば依報^{えほう}をもつて此^これをつくる、眼根^{がんこん}をば東方^{とうほう}をもつてこれをつくる、舌^{しや}は南方鼻^{なんほうび}は西方耳^{さいほうじ}は北方身^{しほうみ}は四方心^{しほうしん}は中央等^{しちゆうとう}これを・もつて・しんぬべし、かるがゆへに衆生^{しゆじやう}の五根^{ごこん}やぶれんとせば四方中央^{しほうしちゆうわう}をどろうべし・されば国土^{こくど}やぶれんと

するしるしには・まづ山くづれ草木かれ江河つくるしるしあり人の眼耳等驚
そうすれば天変あり人の心をうごかせば地動す・抑何の経経にか六種動こ
れなき一切経を仏とかせ給いしみなこれあり、しかれども仏・法華経をとか
せ給はんとて六種震動ありしかば衆も・ことにおどろき弥勒菩薩も疑い
文殊師利菩薩もこたへしは諸経よりも瑞も大に久しくありしかば疑も大に
決しがたかりしなり、故に妙楽の云く「何れの大乗経にか集衆放光雨花動
地あらざらん但大疑を生ずること無し」等云云、此の釈の心はいかなる経経
にも序は候へども此れほど大なるはなしとなり・されば天台大師の云く「世
人以蜘蛛掛れば喜び来り・鵲鳴けば行人至ると小すら尚徴有り大焉ぞ瑞無か
らん近きを以て遠きを表す」等云云。

夫一代四十余年が間なかりし大瑞を現じて法華経の迹門をとかせ給いぬ、
其の上本門と申すは又爾前の経経の瑞に迹門を対するよりも大なる大瑞な

り、大宝塔ほうとうの地よりをどりいでし地涌千界大地よりならび出でし大震動しんどうは大風たいふう
の大海たいかいを吹けば大山のごとくなる大波のあしのはのごとくなる小船のをひほ
につくがごとくなりしなり、されば序品じよほんの瑞をば弥勒みろくは文殊もんじゆに問い涌出品ゆじゆつほん
大瑞だいずいをば慈氏じしは仏に問いたてまつるこれを妙樂みょうらく釈しゃくして云く
「迹事もんじゆは浅近文殊に寄すべし久本は裁り難し故に唯仏に託す」云云迹門しやくもんのこ
とは仏説とき給たまはざりしかども文殊もんじゆほぼこれをしれり、本門ほんもんの事は妙徳みょうとくすこし
もはからず、此の大瑞だいずいは在世ざいせの事にて候、仏神力品じんりきほんにいたつて十神力じんりき
を現げんず此これは又さきの二瑞にはにるべくもなき神力じんりきなり、序品じよほんの放光ほうこうは東方とうほう
万八千土じんりきほん、神力品じんりきほんの大放光ほうこうは十方世界じゅうほうせかい、序品じよほんの地動じどうは但三千界神力品さんぜんかいじんりきほんの大地だいち
動は諸仏しよぶつの世界地せかい皆六種みなに震動しんどうす、此の瑞も又かくのごとし、此の神力品じんりきほん
の大瑞だいずいは仏の滅後正像二千年すぎて末法まつぽうに入つて法華經ほけきやうの肝要かんようのひろまらせ
給たまうべき大瑞だいずいなり、經文きやうもんに云く、「仏の滅度めつどの後に能く是の經を持つを以ての

ゆえ しょうぶつみなかんき
故に諸仏皆歡喜して無量の神力を現ず」等云云、又云く「惡世末法の時」等云云。

うたがい

疑つて云く夫れ瑞は吉凶につけて・或は一時・二時・或は一日・二日

ある

・或は一年・二年・或は七年十二年か・如何ぞ二千余年已後の瑞あるべきや、

いわ

答えて云く周の昭王の瑞は一千十五年に始めてあえり、訖利季王の夢は二万

二千年に始めてあいぬ、豈二千余年の事の前にあらはるるを疑うべきや、

いわ

問うて云く在世よりも滅後の瑞大なる如何、答えて云く大地の動ずる事は人

ろっこん

の六根の動くによる、人の六根の動きの大小によつて大地の六種も高下あり、

ろっこん

爾前の経経には一切衆生煩惱をやぶるやうなれども実にはやぶらず、今

ほけきよう

法華経は元品の無明をやぶるゆへに大動あり、末代は又在世よりも惡人多多

なり、

かるがゆへに在世の瑞にも・すぐれてあるべきよしを示現し給う。

疑うたがいつて云いわく証文しょうもん如何いかにん、答こたえて云いわく而しかも此この経けいは如來にょらいの現在げんざいすら猶なほ怨嫉おんしつ

多おほし況めつどや滅度めつどの後のちをや等ら云云、去いぬる正嘉文永しょうかぶんえいの大地震だいちじん大天変てんべんは天神七代てんじんしちだい・

地神五代ちじんごだい

はさてをきぬ、人王九代二千余年が間にほんこく・日本国にいまだなき天変てんべん

地天ちようなり、

人の悦よろこび多おほ多おほなれば天てんに吉瑞きずいをあらはし地に帝釈ていしゃくの動うごあり、人の

悪心あくしん盛さかなれば天てんに凶変きうへん地に凶天きうてん出来しゅつす、

瞋恚しんにの大小だいしやうに随したがいて天変てんべんの大小だいしやうあ

り地天ちようも又またかくのごとし、

今いま・日本国にほんこく上一かみい人にんより下万民ばんみんにいたるまで大悪心あくしん

の衆生しゆじやうじゆまん充滿じゆまんせり、

此この悪心あくしんの根本こんぽんは日蓮にちれんによりて起おこれるところなり、守護しゆご

国界こくがい経けいと申もうす経けいあり

法華経ほふけきやういこ以後いごの経けいなり阿闍世王あじゃせおうぶつ仏ぶつにまいりて云いわく我国わがくにに大

早魃さいふ・大風たいふう・大水たいすい飢饉ききん疫病えきびやう年ねんに起おこる上他国たこくより我われが国くにをせむ、

而しかるに仏ぶつの出現しゆつげんし給たまへる国くになりいかと問といまいらせ候さうしかば仏ぶつ答こたえて云いわく善よきき哉かな

善よきき哉かな大王だいおう能よく此この問とをなせり、

汝なんじには多おほくの逆罪ぎやくつみあり其その中に父ちちを殺ころし

提婆だいばを師しとして我われを害がいせしむ、

この二罪ふたつみ大おほなる故ゆゑかかる大難だいにん来きることかくの

ごとく無量なり、其の中に我が滅後に末法に入つて提婆がやうなる僧国中に
じゅうまん しょうほう
充滿せば正法の僧一人あるべし、彼の悪僧等正法の人を流罪・死罪に行い
ないしばんみん おか ほうほう しゆし じゅうまん
て王の後乃至万民の女を犯して謗法者の種子の国に充滿せば国中に種種の
だいなん たこく ねんぶつ
大難をこり後には他国に・せめらるべしとかれて候、今の世の念佛者かく
のごとく候上・真言師等が大慢提婆達多に百千万億倍すぎて候、真言宗の
しんこん もう だいまんだいばだつた せんまん しんこんしゅう
不思議あらあら申すべし、胎蔵界の八葉の九尊を画にかきて其の上にのぼり
ふしぎ もつ たいぞう はちよう
て諸仏の御面をふみて灌頂と申す事を行うなり、父母の面をふみ天子の頂
しよぶつ かんちよう もつ ふぼ てんし いただき
をふむがごとくなる者・国中に充滿して上下の師となれり、いかでか国ほろ
じゅうまん じょうげ
びざるべき。

此の事余が一大事の法門なり又又申すべし、さきにすこしかきて候、いた
いちだいじ ほうもん もつ
う人におほせあるべからず、びんごとの心ざし一度二度ならねば・いかにと
ひとたび
も。

いっさいしゅじょう しじょうきんご
 一切衆生・南無妙法蓮華經と唱うるより外の遊樂なきなり經に云く

しゅじょう なむ みょうほうれんげきょう
 衆生所遊樂」云云、この文あに自受法樂にあらずや、衆生のうちに貴殿

たまた えんぶだい
 もれ給うべきや、所とは一閻浮提なり日本国は閻浮提の内なり、遊樂とは我等

しきしんえしやう いちねんさんぜん
 が色心依正ともに一念三千・自受用身の仏にあらずや、法華經を持ち奉るよ

げんせあんのん
 り外に遊樂はなし現世安穩・後生善処とは是なり、ただ世間の留難来るとも

けんじん
 ・とりあへ給うべからず、賢人・聖人も此の事はもがれず、ただ女房と酒

なむ みょうほうれんげきやう
 うちのみて南無妙法蓮華經と・となへ給へ、苦をば苦とさとり樂をば樂とひ

なむ みょうほうれんげきやう
 らき苦樂ともに思い合わせて南無妙法蓮華經とうちとなへゐさせ給へ、これ

じじゅほうらく
 あに自受法樂にあらずや、いよいよ強盛の信力をいたし給へ、

恐恐 謹言

建治二年丙子 六月二十七日

日蓮

四條金吾殿御返事 しじょうきんご ごへんじ

二〇四 四條金吾釈迦仏供養事 しじょうきんごしやかぶつ くやう

建治二年七月 五十五歳御作

1144p

御日記につぎの中に釈迦しやかぶつ仏の木像一体等云云、開眼かいげんの事普賢經ふげんに云く、「此の
大乘經典だいじようきんは諸仏しよぶつの宝藏ほうぞうなり十方三世じゆつぽうさんぜの諸仏しよぶつの眼目がんもくなり」等云云、又云く、「此
の方等經ほうとうは是れ諸仏しよぶつの眼まなこなり諸仏しよぶつ是に因よつて五眼ごを具ぐすることを得たもう」
云云、此の經の中に得具五眼とくぐごがんとは一には肉眼にくげん二には天眼てんげん三には慧眼えげん四には法眼ほうげん
五には仏眼ぶつげんなり、此の五眼ごがんをば法華經ほけきやうを持つ者は自然じねんに相具あいぐし候たと、譬たとへば王
位じにつく人は自然じねんに國くにのしたがつがごとし、大海たいかいの主となる者の自然じねんに魚を
得るに似たり、華嚴けこん・阿含あこん・方等ほうとう・般若はんにな・大日經だいにちきやう等には五眼ごがんの名はありとい
へども其その義ぎなし、今の法華經ほけきやうには名もあり義ぎも備そなわりて候たと、設たとひ名はなけ
れども必ず其その義ぎあり。

三身の事、普賢經に云く、「仏三種の身は方等より生ず是の大法印は涅槃海
を印す此くの如き海中より能く三種の仏の清淨の身を生ず此の三種の身は
人天の福田にして応供の中の最なり」云云、三身とは一には法身如来・二に
は報身如来・三には応身如来なり、此の三身如来をば一切の諸仏必ずあひぐ
す譬へば月の体は法身月の光は報身・月の影は応身にたとふ、一の月に三の
ことわりあり一仏に三身の徳まします、この五眼三身の法門は法華經より外
には全く候はず、故に天台大師の云く「仏・三世に於て等しく三身有り諸教
の中に於て之を秘して伝えず」云云、此の釈の中に於諸教中とかかれて候は
華嚴・方等・般若のみならず法華經より外の一切經なり、秘之不伝とかかれ
て候は法華經の寿量品より外の一切經には教主釈尊秘めて説き給はずと
なり。

されば画像・木像の仏の開眼供養は法華經・天台宗にかぎるべし、其の上

いちねんさんぜん 一念三千の法門と申すは三種の世間よりをこれり、三種の世間と申すは一に
しゅじょうせけん は衆生世間二には五陰世間三には国土世間なり、前の二は且らく之を置く、
こくどせけん 第三の国土世間と申すは草木世間なり、草木世間と申すは五色の糸のぐは草木
なり画像これより起る、木と申すは木像是より出来す、此の画木に魂魄と申す
神を入るる事は法華經の力なり天台大師のさとりなり、此の法門は衆生にて
そくしんじょうぶつ 申せば即身成仏といはれ画木にて申せば草木成仏と申すなり、止觀の明靜
ぜんだい なる前代いまだきかずとかかれて候と無情仏性・惑耳驚心等とのべられて候
これ は是なり、此の法門は前代になき上・後代にも又あるべからず、設ひ出来せ
ほうもん ば此の法門を偷盜せるなるべし、然るに天台以後二百余年の後・善無畏・
こんこうち 金剛智・不空等・大日經に眞言宗と申す宗をかまへて仏説の大日經等には
ほうきよう なかりしを法華經・天台の釈を盗み入れて眞言宗の肝心とし、しかも事を
てんじく 天竺によせて漢土・日本の末学を誑惑せしかば皆人・此の事を知らず一同に

信伏しんぷくして今に五百余年なり、然しかる間・真言宗しんこんしゅう已前いぜんの木画もくえの像は靈驗れいけん・殊勝しゆしょうなり真言しんこん已後いごの寺塔じとうは利生りしょううすし、事多ゆえき故くわしに委くわく注しさず。

此の仏こそ生身しょうしんの仏にて・おはしまし候へ、優填大王うでんだいおうの木像よくけんおうと影顯王えうけんおうの木像いちばんと一分もたがうべからず、梵・帝・日月にちがつ・四天等してん必定しやうたうして影の身に随したがうが如ごとく貴辺きへんをばまほらせ給たまうべし是これ一。

御日記にっきに云いく毎年四月八日より七月十五日まで九旬が間・大日天子だいにちてんしに仕えさせ給たまふ事、大日天子だいにちてんしと申もうすは宮殿七宝しうぼうなり其その大きさは八百十六里五十一由旬ゆじゆんなり、其その中に大日天子居だいにちてんしこし給たまふ、勝無勝と申もうして二人の後さうあり左右さうには七曜九曜しちようきゅうようつらなり前には摩利支天女ましあめまします七宝しうぼうの車を八匹の駿馬しゆんめにかけて四天下してんげを一日一夜にめぐり四州の衆生しゆじやうの眼目がんもくと成たまり給たまう、他の仏・菩薩天子ぼさつてんし等は利生りしょうのいみじくまします事・耳に・これをきくとも愚眼ぐがんに未だ見えず、是これは疑うたがいうべきにあらず眼前がんぜんの利生りしょうなり教主きやうしゆ釈尊しやくそんにましまさずば争いかでか

かくのごと

是くの如くあらたなる事候べき、一乗いちじょうの妙経みょうきょうの力にあらずんば争いかでか眼前がんぜんの

奇異をば現べす可ふき不思議ふしぎに思いかでひ候、争いかでか此の天の御恩ごおんをば報くずべきと・もと

め候に仏法ぶつぽう以前の人人ひとびとも心ある人は皆みな・或あるは礼拝らいはいをまいらせ・或あるは供養くようを

もつ

申し皆みなしるしあり、又逆をなす人は皆みなばつあり、今内典ないてんを以てかんがへて候

こんこうみようきよう

に金光明経いわに云く、「日天子及以月天子是の経を聞くが故に精氣充実す」等

さいしゅうおうきよう

云云、最勝王経いわに云く、「此の経王の力に由よつて流暉四天下を遶る」等云云、

まさ

当に知るべし日月天の四天下をめぐり給たまうは仏法の力なり彼の金光明経こんこうみようきよう・

さいしゅうおうきよう

最勝王経は法華経の方便なり勝劣を論ずれば乳と醍醐だいごと金と宝珠ほうしゅとの

こと

如し、劣なる経を食しまして尚四天下をめぐり給たまう、何に況や法華経の

だいご

醍醐の甘味を嘗なめさせ給たまはんをや、故に法華経の序品には普香天子てんしとつらなり

まします、法師品ほうしほんには阿耨多羅三藐三菩提あのおくたらさんみやくさんぼだいと記せられさせ給たまう火持如来にょらいこれ是な

そ

り、其の上慈父じふよりあひつたはりて二代我が身となりてとしひさし争いかでかすて

させたまひ候べき、其の上日蓮も又此

の天を待みてたてまつり日本国にたてあひて数年なり、既に日蓮かちぬべき心地す利生のあらたなる事・外にもとむべきにあらず、是より外に御日記たうとさ申す計りなけれども紙上に尽し難し。

なによりも日蓮が心にたつとき事候、父母御孝養の事度度の御文に候上に

今日の御文なんだ更にとどまらず、我が父母地獄にやおはすらんとなげかせ

給う事のあわれさよ、仏の弟子の御中に目尊者と申しけるは父をばきつせ

ん師子と申し母をば青提女と申しけるが餓鬼道におちさせ給いけるを凡夫に

てをはしける時は、しらせ給わざりければなげきもなかりける程に、仏の

御弟子とならせ給いて後阿羅漢となりて天眼をもつて御らんあり

ければ餓鬼道におはしけり、是を御らんありて飲食をまいらせしかば炎とな

りていよいよ苦をましさせまいらせ給いしかば、いそぎはしりかへり仏に此

の由よしを申もうさせ給たまいしぞかし、爾その時の御心をおもひやらせ給たまへ、今貴辺きへんは凡夫ぼんぶなり肉眼にくげんなれば御らんなければどももしもさもあらばとなげかせ給たまうこは孝養こうようの一分いちぶんなり梵天ぼんてん・帝釈たいしゃく・日月にちがつ・四天してんも定めてあはれとおぼさんか、華嚴經けこんきやうに云いわく、恩を知らざる者は多く横死おうしに遭あう等云云、觀仏相海經かんぶつそうかいきやうに云いわく、是れ阿鼻あびの因しよんなり」等云云、今既すでに孝養こうようの志しつ あつし定めて天も納受のうじゆあらんか是二。

御消息しようそくの中に申もうしあはさせ給たまう事ことくはしく事の心を案ずるにあるべからぬ事なり、日蓮にちれんをば日本国にほんこくの人あだむ是はひとへにさがみどののあだませ給たまうにて候こうゆへなき御政ごせいりごとなれどもいまだ此の事にあはざりし時よりかかる事あるべしと知りしかば今更いかなる事ありとも人をあだむ心あるべからずとをもち候こうへば、此の心のいのりとなりて候こうやらんそこばくのなんを・のがれて候こう、いまは事なきやうになりて候こう、日蓮にちれんがさどの国にてもかつえしなず又これまで山中ほけきやうにして法華經ほけきやうをよみまいらせ候こうはたれかたすけんひとへにと

のの御たすけなり又殿の御たすけはなにゆへぞとたづねれば入道殿にんどうだんの御故ぞかし、あらわにはしろしめさねども定めて御いのりともなるらんかうあるならばかへりて又とのの御いのりとなるべし父母ふぼの孝養こうようも又彼の人の御恩ごおんぞかし、かかる人の御内いかんを如何いかんなる事有あればとてすてさせ給たまつべきやかれより度たび度たびすてられんずらんはいかがすべき又いかなる命になる事なりともすてまいらせ給たまつべからず、上にひきぬる経文きょうもんに不知恩ふちおんの者は横死おうし有と見えぬ孝養こうようの者は又横死おうし有ある可べからず、鵲もつと申す鳥の食する鉄くろがねはとくれども腹の中の子はとけず、石を食する魚あり又腹の中の子はしなず、梅檀めんだんの木は火に焼けず淨居じゆの火は水に消へず仏おんみの御身おんみをば三十二人の力士・火をつけしかどもやけず、仏おんみの御身おんみよりいでし火は三界さんがいの竜神りゅうじん雨をふらして消しかどもきえず、殿は日蓮にちれんが功德くどくをたすけたる人なり悪人あくにんにやぶらるる事かたし、もしやの事あらば先生せんしやうに法華經ほけきやうの行者ぎやうじやをあだみたりけるが今生こんじやうにむくふなるべし、此の事

如何なる山いかんの中海の上にてものがれがたし、不ふ輕ぎ菩薩ぼさつの杖じょう木もくの責せも目め尊そん者じゃの竹ちく杖じょうに殺ころされしも是これなり、なにしにか歎なげかせ給たまうべき。

但ただし横なん難なんをば忍しのにはしかじと見みへて候こう此このの文ぶん御ご覽らんありて後のちはけつして百ひゃく日にち

が間まをぼろげならでは・どうれい並たにんに他人たにんと我われが宅たくならで夜よ中の御ごさかもりあるべからず主しゅの召めいさん時ときは昼ひるならばいそぎ参まゐらせ給たまうべし、夜よならば三さん度どまでは頓とん病びょうの由よしを申もうさせ給たまいて三さん度どにすぎば下した人にん又また他人たにんをかたらひてつじを見みせなんどして御ご出しゅ仕しあるべし、かうつつしませ給たまはんほどにむこの人もよせなんどし候こうはば人の心こころ又またさきにひきかへ候こうべし、かたきをう

つ心こころとどまるべしと申もうさせ給たまう事ことは御ごあやまちありとも左さ右うなく御ご内うちを出いでさせ給たまうべからず、まして・なからんにはなにとも人ひと申まをせくるしかるべからず、おもひのままに入い道どうにもなりておはせばさきさきならばくるし

からず、又また身みにも心こころにもあはぬ事ことあまた出しゅ来らいせばなかなか悪あく縁えん度た度た来きるべし、

このごろは女は尼になりて人をはかり男は入道にゆうどうになりて大悪をつくるなり、
ゆめゆめあるべからぬ事なり、身に病なくともやいとを一二箇所やいて病の
由あるべし、さわぐ事ありともしばらく人をもつて見せをほせさせ給へ。たま

事ゆえ事ほうもんくはしくはかきつくしがたし、此の故に法門もかき候はず、御經の事
 はすずしくなり候いてかいてまいらせ候はん、恐きょう恐きょう謹言。

建治二年丙子七月十五日

日蓮 にちれん
花押 かおう

しじょうきんご ごへんじ
四條金吾殿御返事

二〇五
四條金吾殿御返事 しじょうきんごごへんじ

1148p

正法をひろむる事は必ず智人によるべし、故に釈尊は一切経をとかせ

給たまいて 小乗しょうじょう經きやうをば 阿難あなん大乗だいじやう經きやうをば 文殊もんじゆ師し利り法ほけ華き經きやうの肝かん要ようをば 一切いっさいの

しょうもん 声聞・もんじゅ 文殊等の一切の菩薩をいっさい くらひてぼさつ 上行菩薩をじょうぎょうぼさつ めして授けさせたまい 給いき、

設たといしうほういたも正法ちしやを持だんなてるいかで智ひろ者しかありしやかぶつともしやかぶつ檀那しやかぶつなくしやかぶつくんしやかぶつばしやかぶつ争しやかぶつかしやかぶつ弘しやかぶつまるしやかぶつべきしやかぶつ然しやかぶつればしやかぶつ釈しやかぶつ迦しやかぶつ仏しやかぶつの

檀那^{だんな}は梵王^{ぼんのう}帝釈^{しゃく}の二人なりこれは一人ながら天^{だんな}の檀那^{だんな}なり、仏は六道^{ろくどう}の中に
は人天人^{にんてんにんてん}天^{てん}の中には人に出^いでさせ給^{たま}う人には三千^{さんぜん}世界の中央^{せうかい}・五天竺^{てんじく}・五
天竺^{てんじく}の中には摩竭^{まが}堤国^{ていこく}に出^いでさせ給^{たま}いて候^{まち}しに、彼の国^{こく}の王^{わう}を檀那^{だんな}とさだむ
べき処^{ところ}に彼の国^{こく}の阿闍世王^{あじゃせ}は悪人^{あくにん}なり、聖人^{しょうにん}は悪王^{あくおう}に生れあふ事^{だいいち}第一^{だいいち}の怨^{あだ}
にて候^{まち}しぞかし、阿闍世王^{あじゃせ}は賢王^{けんおう}なりし父^{ちち}をころす、又うちそふわざはひと
堤婆達多^{だつた}を師^しとせり、達多^{だつた}は三逆罪^{さんぎやくざい}をつくる上仏^{おんみ}の御身^{おんみ}より血^ちを出^でしたり
し者^{もの}ぞかし、不孝^{ふこう}の悪王^{あくおう}と謗法^{ぼうぼう}の師^しとよりあひて候^{まち}しかば人間^{にんげん}に二のわざは
ひにて候^{まち}しなり、一年・二年ならず数十年^{しうじゅうねん}が間^ま・仏にあだを・なしまいらせ
仏^{おん}の御弟子^{おんでし}を殺^{ころ}せし事数^{ことず}をしらず、かかりしかば天^{てん}いかりをなして天変^{てんへん}しき
りなり、地神^{ぢしん}いかりを・なして地天^{ちてん}申^{もう}すに及^{およ}ばず、月月^{おとつき}に悪風^{あくふう}年年^{ねんねん}に飢饉^{ききん}疫癘^{えきれい}
来^きりて万民^{ばんみん}ほとんどつきなんとせし上^{しほう}、四方^{しほう}の国^{こく}より阿闍世王^{あじゃせ}を責^せむ、既^{すで}に
危^{あや}く成^{なり}りて候^{まち}し程^{ほど}に阿闍世王^{あじゃせ}・或^{ある}は夢^{ゆめ}のつげにより・或^{ある}は耆婆^{ぎば}がすすめによ

り・或は心にあやしむ事ありて提婆達多をばうち捨て仏の御前にまいりてや
うやうにたいほう申せしかば身の病忽にいゑ・他方のいくさも留まり国土
安穩になるのみならず三月の七日に御崩御なるべかりしが命をのべて四十年
なり、千人の阿羅漢をあつめて一切経ことには法華経をかきをかせ給いき、
今・我等がたのむところの法華経は阿闍世王のあたへさせ給う御恩なり。
是はさてをきぬ仏の阿闍世王にかたらせ給いし事を日蓮申すならば日本国
の人は今つくれる事どもと申さんずらんなれども我が弟子・檀那なればかた
りたてまつる、仏言わく我が滅後末法に入つて又調達がやうなる・たうとく
五法を行ずる者・国土に充滿して悪王をかたらせて但一人あらん智者を・或
はのり・或はうち・或は流罪・或は死に及ぼさん時昔にも・すぐれてあらん
天変地天・大風・飢饉・疫癘・年年にありて他国より責べしと説かれて候、
守護経と申す経の第十の巻の心なり。

とうじ
当時の世にすこしもたがはず、然るに日蓮は此の一分にあたれり日蓮をた
すけんと志す人少ありといへども・或は心ざしうすし・或は心ざしは
・あつけれども身がうごせずやうにをはするに御辺は其の一分なり・心
ざし人にすぐれてをはする上わづかの身命をささうるも又御故なり、天もさ
だめてしろしめし地もしらせ給いぬらん殿いかなる事にもあはせ給うならば
ひとへに日蓮がいのをちを天のたたせ給うなるべし、人の命は山海・空市まぬ
かれがたき事と定めて候へども又定業亦能転の経文もあり又天台の御釈にも
定業をのぶる釈もあり、前に申せしやうに蒙古国のよするまでつつしませ給う
なるべし、主の御返事をば申させ給うべし身に病ありては叶いがたき上世間
すでにかうと見え候それがしが身は時によりて憶病はいかんが候はんずらん、
只今の心は・いかなる事も出来候はば入道殿の御前にして命をすてんと存
じ候、若しやの事候ならば越後よりはせ上らんははるかなる上不定なるべし、

たとひ所領しよりょうをめさるるなりとも今年はきみをはなれまいらせ候べからず。

是より外はいかに仰せ蒙おほるともをそれまいらせ候べからず、是よりだいじも大事

なる事は日蓮にちれんの御房ごぼうの御事おんことと過去かこに候父母ふぼの事なりとののしらせ給たまへ、すて

られまいらせ候とも命はまいらせ候べし後世ごしやうは日蓮にちれんの御房ごぼうにまかせまいらせ

候と高声にうちなのり居させ給たまへ。

建治二年丙子九月六日

ひのえね

にちれんかおう
日蓮花押

四条金吾殿
しじようきんご

二〇六 四条金吾殿御返事
しじようきんごごへんじ

1150p

はるかに申し承り候はざりつればいぶせく候いつるにかたがたの物と申し

御つかいと申しよろこび入つて候又まほりまいらせ候、所領しよりょうの間の御事は上

よりの御文おんぶんならびに御消息しやうしき引き合せて見候い畢おわんぬ、此の事は御文おんぶんなきさき

にすいして候、上には最大だいじ事とおぼしめされて候へども御きんずの人人ひとびとのざ

んそうにてあまりに所領しりょうをきらい上をかるしめたてまつり候、ぢうあうの人こそを・をく候にかくまで候へば且しばらく御恩ごおんをば・おさへさせ給たまうべくや候もうらんと申しぬらんとすいして候なりそれにつけては御心えあるべし御用意よういあるべし、我が身と申しもうをやるいしんと申しもうかたがた御内に不便ふびんといはれまいらせて候大恩の主なる上にちれんすぎにし日蓮が御かんきの時・日本にほん一同にくむ事なれば弟子等でしも・或あるは所領しりょうを・ををかたよりめされしかば又方方かたがたの人人ひとびとも・或あるは御内をいだし・或あるは所領しりょうをおいなんどせしに其その御内になに事もなかりしは御身おんみにはゆゆしき大恩と見へ候。

このうへはたとひ一分いちぶんの御恩ごおんなくともうらみまいらせ給たまうべき主にはあらず、それにかさねたる御恩ごおんを申し所領しりょうをきらはせ給たまう事御とがにあらずや、賢人けんじんは八風と申しもうて八のかぜにをかされぬを賢人けんじんと申しもうなり、利衰おとろえ・毀・誉・称・譏・苦楽なり、をを心は利あるによるこばずをとろうるになげかず

等の事なり、此の八風にをかされぬ人をば必ず天はまほらせ給^{たま}うなりしかるをひりに主をうらみなんどし候へば・いかに申せども天まほり給^{たま}う事なし、訴訟を申せど叶^{かな}いぬべき事もあり、申^{もう}さぬに叶^{かな}うべきを申せば叶^{かな}わぬ事も候、夜めぐりの殿原の訴訟は申^{もう}すは叶^{かな}いぬべきよしをかんがへて候しにあながちになげかれし上日蓮^{にちれん}がゆへに・めされて候へば・いかでか不便^{ふびん}に候はざるべき、ただし訴訟だにも申^{もう}し給^{たま}はずばいのりてみ候^{そつひ}はんと申せしかば、さうけ給^{たま}わり候いぬと約束^{やくそく}ありて又をりかみをしきりにかき人^{ひと}訴訟ろんなんどありと申せし時に此の訴訟よも叶^{かな}わじとをもひ候いしがいままでのびて候。

だいがくどのゑもんのたいうどのの事どもは申^{もう}すままにて候あいだいのり叶^{かな}いたるやうにみえて候、はきりどのの事は法門^{ほうもん}の御信用^{ごしんよう}あるやうに候へども此の訴訟は申^{もう}すままには御用^{もち}いなかりしかばいかんがと存じて候

いしほどにさりとてはと申^{もう}して候いしゆへにや候けんすこししるし候か、こ

れにをもうほどなかりしゆへに又をもうほどなし、だんなと師とをもひあわぬいのりは水の上に火をたくがごとし、又だんなと師とをもひあひ

て候へども大法だいほうを小法をもつてをかしてとしひさしき人人ひとびとの御いのりは叶かない候はぬ上、我が身もだんなもほろび候なり。

天台てんだいの座主ざす明雲と申せし人は第五十代の座主ざすなり、去ぬる安元二年五月に

院いん勘かんをかほりて伊豆国へ配流はいりゅう・山僧大津よりうばいかへす、しかれども又か

へりて座主ざすとなりぬ又すぎにし壽永二年十一月に義仲に・からめとられし上

頸うちきられぬ是はながされ頸きらるをとがとは申もうさず賢人けんじん・聖人しょうにんも・か

かる事候たまた、但し源みなもと氏の頼朝よりともと平家の清盛きよもりとの合戦の起りし時清盛が一類二

十余人起請きしょうをかき連判をして願を立てて平家の氏寺えいざんと叡山えいざんをたのむべし三千

人は父母ふぼのごとし山のなげきは我等われらがなげき山の悦よろこびは我等われらがよろこびと

申もうして、近江の国・二十四郡いっしゅうぐんを一向によせて候しかば、大衆たいしゅうと座主ざすと一同に

内には真言しんこんの大法だいほうをつくし外には悪僧あくそうどもをもつて源氏げんじをいさせしかども義

仲じょうぶくが郎等らうどうひぐちと申せしをのこ義仲とただ五六人計はかり叡山えいざん中堂ちゅうどうにはせのぼり

調伏じょうふくの壇の上にありしを引き出してなわをつけ西ざかを大石をまるばすやう

に引き下くだして頸くをうち切りたりき、かかる事あれども日本にほんの人人ひとびと真言しんこんをうと

む事なし又たづぬる事もなし去いぬる承久三年辛巳じょうきゅう五六七の三箇月が間・京

夷の合戦ありき、時に日本国第一にほんこくだいいちの秘法ひほうどもをつくして叡山えいざん・東寺とうじ・七大寺ななだいじ

・園城寺等おんじょうじ・天照太神てんしょうたいじん・正八幡しょうはちまん・山王等に一一に御いのりありき、其その中

に日本第一にほんだいいちの僧四十一人なり所謂いわゆる前の座主ざす・慈円大僧正じえん そうじよう・東寺とうじ・御室おむろ・

三井寺みいでらの常住じょうじゅう院の僧正等そうじようは度度たびたび・義時よしときを調伏じょうふくありし上、御室おむろは紫宸殿ししんでんに

して六月八日より御調伏じょうふくありしに、七日と申せしに同じく十四日に・いくさ

にまけ勢多迦おむろが頸くきられ御室おむろをもひ死に死しぬ、かかる事候へども真言しんこんはい

かなるとがとも・あやしむる人候はず、をよそ真言しんこんの大法だいほうをつくす事明雲第

ひとたび見えん
一度慈円第二度^{にほんこく}に日本国の王法ほるび候い畢^{おわ}んぬ、今度^{このたび}第三度になり候、当時^{とうじ}
の蒙古調伏^{もうこじょうふく}此れなり、かかる事も候ぞ此^これは秘事^{ひじ}なり人にいはずして心に存
知^{たま}せさせ給へ。

されば此の事御訴訟なくて又うらむる事なく御内をばいはず我かまくらに
うちいてさきざきよりも出仕とをきやうにてときどきさいでておはするな
らば叶^{かな}う事も候なん、あながちにわるびれてみへさせ給^{たま}うべからず、よくと
名聞^{みょうもん}瞋との。

二〇七 頼基陳状^{よりもと} 建治三年六月 五十六歳御御作 1153p

い 去ぬる六月二十三日の御下文^{くだしづみ}・島田の左衛門入道殿^{さえもん にゆうどう}・山城の民部入道殿^{やましろう みんぶにゆうどう}
・両人の御承^{たまわ}りとして同二十五日謹^{つつし}んで拝見^{はいけん}仕り候い畢^{おわ}んぬ、右仰^{おお}せ下^{くだ}しの
状^{いわ}に云^{りゅうそうていほう}く竜象御房の御説法^{せつぽう}の所に参^{せつぽう}られ候いける次第^{しだい}をほかた穩便^{おんべん}ならざる
由^{けんもん}、見聞^{あまねくいつぱう}の人遍^{あまねくいつぱう}く一方ならず同口^{もう}に申し合^あひ候事驚^{おどろ}き入^いつて候、徒党^その仁其^その

数兵ひょうじょう 杖たいを帶たいして出入しゅうにゅうすと云いふ。

此この条跡形あとかたも無なき虚言そごことなり、所詮誰人しよせんだれびとの申し入れ候もうけるやらん御哀憐いれんを蒙こゝむり

て召めし合あせられ実否じつぴを糾明きゆうめいされ候もうはば然しかるべき事ことにて候候、凡およそ此この事ことの根源こんげん

は去いぬる六月九日にちれんしやうにん蓮聖人おんでしの御弟子よりもと三位公頼基きんじつが宿所しゆくしよに來きり申もうして云いふ近日きんじつ

竜象房りゆうざうと申もうす僧京きやうと都とより下くだりて大仏だいぶつの門かどの西桑さいそうか谷やに止住とどして日夜にちやに説法せっぽう仕

るが申もうして云いふ現当げんとうの為ため仏法ぶつぽうに御不審ふしん存ぞんぜむ人ひとは來きりて問答もんどう申もうす可べき旨説法むねせっぽう

せしむる間かん、鎌倉中かまくらの上下じやうげ釈尊しやくそんの如ごとく貴たてまつび奉ほうるしかれども問答もんどうに及およぶ人ひとなし

と風聞ふうもんし候候、彼かへ行き向むかひて問答もんどうを遂ついげ一切衆生いっさいしゆじやうの後生ごしやうの不審ふしんをはらし候候は

むと思おもひ候候、聞きき給たまはぬかと申もうされしかども折節おりふし官仕みやうしに隙いとま無なく候候いし程ほどに

思おもひ立たず候候いしかども、法門ほふもんの事ことと承たまわりてたびたび罷まかり向むかひて候候えども頼基よりもと

は俗家しやくかの分ぶんにて候候い一言いだも出でさず候候し上あは悪口あくぐちに及およばざる事こと嚴察げんさつ足たりる可べく候候。

ここに竜象房説法りゆうざうせっぽうの中なに申もうして云いふ此この見聞満座けんもんまんざの御中おんちゆうに御不審ふしんの法門ほふもん

あらば仰せらる可くと申されし処に、日蓮房の弟子三位公問うて云く生を受
けしより死をまぬかるまじきことはり始めてをどろくべきに候はねども、こ
とさら当時・日本国の災に死亡する者数を知らず眼前の無常人毎に思ひし
らずと云ふ事なし、然る所に京都より上人・御下りあつて人人の不審をは
らし給うよし承りて参りて候つれども御説法の最中骨無くも候なばと存じ候し
処に問うべき事有らむ人は各各憚らず問い給へと候し間悦び入り候、先づ
不審に候事は末法に生を受けて辺土のいやしき身に候へども中国の仏法幸に
此の国にわたれり是非信受す可き処に経は五千・七千数多なり、然而一仏の
説なれば所詮は一經にてこそ候らむに華嚴・真言乃至八宗浄土・禅とて十
宗まで分れてをはします、此れ等の宗宗も門はことなりとも所詮は一かと
推する処に、弘法大師は我が朝の真言の元祖・法華経は華嚴経・大日經に
相對すれば門の異なるのみならず其の理は戲論の法無明の辺域なり、又法華宗

てんだいだいし

だいご

の天台大師等は諍盜醍醐等云云、

ほうそうしゅう

法相宗

がんそじおんだいしいわ

の元祖慈恩大師云く、「法華経は方便

ほうへん

じんみつ

深密経は眞実無性有情永不成仏」云云、

けこんしゅう

華嚴宗の澄

ちようかんいわ

観云く、「華嚴経は本教

けこんきよう

ほけきよう

法華経は末教・或は華嚴は頓頓法華は漸頓」等云云、三論宗の嘉祥大師の云く

ある

けこん

とんとんほつ

げん

とん

さんろんしゅう

かじようだいし

の云く

い

わ

「諸大乘経の中には般若教第一」云云、

しやだいじようきよう

はん

にや

だい

いち

じようどしゅう

ぜんとうわじようい

わ

「十即十生・百即百生・法華経等は千中無一」云云、

ひやくそくひやくし

ほう

けき

せん

ちゅう

むいつ

つ

「法華経を念仏に對して捨閉閣拋・或は行者は群賊」等云云、

しやへいかくほう

ある

ぎようじや

ぐんぞく

せんしゅう

い

わ

「教外別伝・不立文字」云云、

きようげべつでん

ふりゆうもんじ

きようしゅう

は

法華経をば

せ

そん

「教主釈尊は法華経をば世尊の法は久しくし

きようしゅう

は

法華経をば

せ

そん

の法は

く

後に要當に眞実を説きたもうべし、

まさ

しんじつ

と

たほうぶつ

みようほけき

き

よう

分身の諸仏は舌相梵天に至るとこそ見えて候に弘法大師は法華経をば戲論の

ふんじん

しよぶつ

ぜつそうほんてん

いた

こうぼうだいし

ほけき

し

法と書かれたり、

しやくそん

たほう

じゅつぽう

しよ

かいぜしんじつ

と説かれて候、

い

づ

れをか信じ候べき、

ぜんとうわじ

ほうねんし

し

ほけき

せん

ちゅう

「善導和尚・法然上人は法華経をば千中無一・捨閉閣拋・

ぜんとうわじ

ほうねんし

し

ほけき

せん

ちゅう

むいつ

釈尊・多宝・十方分身の諸仏は一として成仏せずと云う事無し皆仏道を

しやくそん

たほう

じゅつぽう

しよぶつ

い

つ

わ

を

しやくそん

たほう

じゅつぽう

しよ

かいぜしんじつ

と説かれて候、

い

づ

れをか信じ候べき、

ぜんとうわじ

ほうねんし

し

ほけき

せん

ちゅう

「善導和尚・法然上人は法華経をば千中無一・捨閉閣拋・

ぜんとうわじ

ほうねんし

し

ほけき

せん

ちゅう

むいつ

釈尊・多宝・十方分身の諸仏は一として成仏せずと云う事無し皆仏道を

しやくそん

たほう

じゅつぽう

しよぶつ

い

つ

わ

を

しやくそん

たほう

じゅつぽう

しよぶつ

い

つ

わ

を

しやくそん

たほう

じゅつぽう

しよぶつ

い

つ

わ

を

しやくそん

たほう

じゅつぽう

しよぶつ

い

つ

わ

成じやうずと云云、三仏と導わじやう和尚しやうにん然上人すいかとは水火うんでいなり雲泥いすれなり何れをか信じ候いすれべき
何れをか捨て候なかんずくべき就中あお彼の導然そうかんきやう兩人の仰あおぐ所の雙觀經ほうぞうびくの法藏比丘ほうぞうびくの四十
八願の中に第十八願に云いわく、「設たといい我れ仏を得るとも唯ただこぎやく五逆ひばうしやうほうと誹謗ひとびと正法しやうほうとを除
く」と云云、たとひ弥陀みだの本願ほんがん實みだにして往生おうじやうすべくとも、正法しやうほうを誹謗ひばうせむ人
は弥陀みだ仏の往生おうじやうには除たてまつかれ奉るべきか又法華經ほけきやうの二の卷には「若もし人信ぜざ
れば其その人命終みやうじゆうして阿鼻獄あびごくに入らんと云云、念仏宗ねんぶつしゆうに詮とする導然だうぜんの兩
人は經文きやうもん實ならば阿鼻大城あびだいじやうをまぬかれ給たまふべしや、彼の上人しやうにんの地獄じごくに墮おち
給たまわせば末學弟子まつがくでし・檀那だんな等自然じねんに惡道あくどうに墮おちん事うたがひ疑うたがひいなるべし、此等これらこ
そ不審ふしんに候へ上人しやうにんは如何いかんと問たまい給はれしかば。
竜上人りゆうにん答いて云いわく上古じやうこの賢哲達けんてつをば、いかでか疑うたがひい奉るべき、竜象等りゆうざうが
如ごとくなる凡僧等あおは仰あおいで信じ奉り候と答たてまつえ給しを、をし返して此の仰あおせこそ
智ち者しやの仰あおせとも覺おほえず候へ、誰人だれびとか時の代にあをがる人師等にんしをば疑うたがひい候

べき、但し涅槃經に仏最後の御遺言として「法に依つて人に依らざれ」と見えて候、人師にあやまりあらば經に依れと仏は説かれて候、御辺はよもあやまりましまさじと申され候、御房の私の語と仏の金言と比には三位は如来の金言に付きまいらせむと思ひ候なりと申されしを。

象上人は人師にあやまり多しと候は・いづれの人師に候ぞと問はれしか

ば、上に申しつる所の弘法大師・法然上人等の義に候はずやと答え給ひ候し

かば象上人は嗚呼叶い候まじ我が朝の人師の事は忝くも問答仕るまじく

候、満座の聴衆皆皆其の流にて御座す鬱憤も出来せば定めてみだりがはし

き事候なむ恐れあり恐れありと申されし処に、三位房の云く人師のあやまり

誰ぞと候へば経論に背く人師達をいだし候し憚あり・かなふまじと仰せ候

にこそ進退きはまりて覚え候へ、法門と申すは人を憚り世を恐れて仏の説き

給うが如く經文の実義を申さざらんは愚者の至極なり、智者上人とは覚え

給はず惡法世に弘まりて人惡道に墮ち国土滅すべしと見へ候はむに法師の身
として争かいさめず候べき、然れば則ち法華經には、「我身命を愛まず」涅槃經
には「寧ろ身命を喪つとも」等云云、実の聖人にてをせば何が身命を惜
みて世にも人にも恐れ給うべき、外典の中にも竜蓬と云いし者、比干と申せ
し賢人は頸をはねられ胸をさかれしかども夏の桀・殷の紂をばいさめてこそ
賢人の名をば流し候しか、内典には不輕菩薩は杖木をかほり師子尊者は頭
をはねられ竺の道生は蘇山にながされ法道三蔵は面に火印を・さされて江南
にはなたれしかども正法を弘めてこそ聖人の名をば得候しかと難ぜられ候
しかば。

竜上人の云くさる人は末代にはありがたし我我は世をはばかり人を恐るる
者にて候、さやうに仰せらるる人とてもことばの如くにはよもをはしまし候
はじと候しかば。

此の御房は争か人の心をば知り給うべき某こそ當時・日本国に聞え給う
にちれんしょうにん でし それがし しょうにん まつだい
日蓮聖人の弟子として候へ、 某が師匠の聖人は末代の僧にて御坐候へど
とうせ
も当世の大名僧の如く望んで請用もせず人をも はず聊か異なる悪名もた
ただ しょうこん ぜんしゅう じょうとしゅう あくほう ほうほう しょうそう
たず只此の国に真言・禅宗・浄土宗等の悪法並に謗法の諸僧満ち満ちて
かみいちにん たてまつ ばんみん いた ごきえ ゆえ ほけきようきようしゅしやくそん
上一人をはじめ奉りて下万民に至るまで御歸依ある故に法華經教主釈尊の
おんてき げんせ てんじんちぎ たこく ちしょう
大怨敵と成りて現世には天神地祇にすてられ他国のせめにあひ、後生には
あびだいじょう お たま きようもん たい
阿鼻大城に墮ち給うべき由・經文にまかせて立て給いし程に此の事申さば
大なるあだあるべし申さずんば仏のせめのがれがたし、いはゆる涅槃經に
「若し善比丘あつて法を壊る者を見て置いて呵責し驅遣し拳処せずんば当に
あくとつ お ぶんぼう あだ しんみよう いぬ けんちよう
知るべし是の人は仏法の中の怨なり」等と云云、世に恐れて申さずんば我が
身惡道に墮つべきと御覽じて身命をすてて去る 建長年中より今年建治三年
いた
に至るまで二十余年が間あえてをこたる事なし、然れば私の難は数を知らず

國王こくおうの勘氣かんきは兩度およに及びき、三位も文永八年九月十二日の勘氣かんきの時ときは供奉くわんぷの一人にて有りしかば同罪つみに行はれて頸くびをはねらるべきにてありしは身命しんみょうを惜おしむものにて候かと申もうされしかば。

竜象房口りゅうざうぐちを閉て色いろを変え候しかば此この御房申ごぼうもうされしは是程これほどの御智慧ちえにては

人の不審ふしんをはらすべき由よしの仰おおせ無用むように候けり苦岸比丘勝意比丘等くがんびくしょういびくは我われれ正法しょうぼう

を知りて人をたすくべき由存ぞんぜられて候しかども我が身みも弟子でし・檀那だんな等も

無間地獄むげんじごくに墮おち候き、御法門ごぼうもんの分齊ぶんざいにてそこばくの人を救はむと説とき給たまうが

如ごとくならば師檀しだん共に無間地獄むげんじごくにや墮おち給はんずらむ今日けふより後は此かくの如ごとき

御説法ごせっぽうは御はからひあるべし、加様かようには申もうすまじく候へども惡法あくぼうを以て人を

地獄じごくにをとさん邪師じゃしをみながら責め頭あたまはさずば返へんつて仏法ぶつぼうの中の怨あだなるべし

と仏の御いましめ・のがれがたき上じやうもん聴聞じやうもんの上下じやうげ皆惡道みなあくどうにをち給はん事ふびん不便ふびんに

覺おほえ候へば此かくの如ごとく申もうし候なり、智者ちしやと申もうすは国のあやうきをいさめ人の

邪見を申しとどむるこそ智者にては候なれ、是はいかなるひが事ありとも世
の恐しければ・いさめじと申されむ上は力及ばず、某は文殊の智慧も富楼那
の弁説も詮候はずとて立たれ候しかば、諸人歡喜をなし掌を合せ今暫く御
法門候へかしと留め申されしかどもやがて歸り給い了んぬ、此の外は別の子細
候はず且つは御推察あるべし法華經を信じ參らせて仏道を願ひ候はむ者の
争か法門の時惡行を企て惡口を宗とし候べき、しかしながら御ぎやうさく
有る可く候其上日蓮聖人の弟子となのりぬる上罷り歸りても御前に参りて
法門問答の様かたり申し候き、又た其の辺に賴基しらぬもの候はず只賴基を
そねみ候人のつくり事にて候にや早早召し合せられん時其の隠れ有る可らず
候。

又仰せ下さるる状に云く極樂寺の長老は世尊の出世と仰ぎ奉ると此の条難
かむの次第に覚え候、其の故は日蓮聖人は御經にとかれてましますごとくば

くじょうによらい おんつかいじょうぎょうぼさつ すいやくほつけほんもん ぎょうじや
久成如来の御使 上行菩薩の垂迹法華本門の行者 五五百歳の大導師にて御
しょうにん
座候聖人を頸をはねらるべき由の申し状を書きて殺罪に申し行はれ候しが、
いかが候けむ死罪を止て佐渡の島まで遠流せられ候しは良觀上人の所行に
しざい さど おんる りょうかんしょうにん しぎょう
候はずや其の訴状は別紙に之れ有り、抑生草をだに伐るべからずと六斎日
そ そじょう そもそも
せっぽう たま ほつけしょうほう ひろ つみ べ ぬもう
夜説法に給われながら法華正法を弘むる僧を断罪に行わる可き旨申し立てら
じこそうい いかん あにてんま
るるは自語相違に候はずや如何此僧豈天魔の入れる僧に候はずや、但し此の
りょうかん せっぽう いわ にほんこく いっさいしゅじょう みなじさい
事の起は良觀房常の説法に云く日本国の一切衆生を皆持斎になして八斎戒
を持たせて国中の殺生天下の酒を止めむとする処に日蓮房が謗法に障えら
せつしょうてんか とくろ にちれん ほうほう ささ
れて此の願叶い難き由歎き給い候間・日蓮聖人・此の由を聞き給いていかが
かな がた なげ たまい にちれんしょうにん よし たまい
して彼が誑惑の大慢心をたをして無間地獄の大苦をたすけむと仰せありしか
おおわく だいまん むげんじこく おお
ば、頼基等は此の仰せ法華經の御方人大慈悲の仰せにては候へども当時・
よりもと おお ほけきょう かとうど じひ おお とうじ
日本国別して武家領食の世きらざる人にてをはしますをたやすく仰せある事
にほんこく ぶけ

いかかと弟子共同口に恐れ申し候し程に、去る文永八年太歳辛未六月十八日
大旱魃の時・彼の御房祈雨の法を行いて万民をたすけんと申し付け候由日蓮
聖人聞き給いて此体は小事なれども此の次でに日蓮が法験を万人に知らせば
やと仰せありて、良観房の所へつかはすに云く七日の内にふらし給はば日蓮
が念仏・無間と申す法門すてて良観上人の弟子と成りて二百五十戒持つべ
し、雨ふらぬほどならば彼の御房の持戒げなるが大誑惑なるは顯然なるべし、
上代も祈雨に付て勝負を決したる例これ多し、所謂護命と伝教大師と・守敏
と弘法なり、仍て良観房の所へ周防房・入沢の入道と申す念仏者を遣わす
御房と入道は良観が弟子又念仏者なりいまに日蓮が法門を用うる事なし
是を以て勝負とせむ、七日の内に雨降るならば本の八斎戒・念仏を以て往生
すべしと思ふべし、又雨らずば一向に法華經になるべしといはれしかば是等
悦びて極楽寺の良観房に此の由を申し候けり、良観房悦びないて七日の内

に雨ふらすべき由にて弟子百二十余人頭より煙を出し声を天にひびかし・或
は念仏・或は請雨經・或は法華經・或は八齋戒を説きて種種に祈請す、四五
日まで雨の氣無ければたましみを失いて多宝寺の弟子等數百人呼び集めて力
を尽し祈りたるに七日の内に露ばかりも雨降らず其の時・日蓮聖人使を遣す
事三度に及ぶ、いかに泉式部と云いし姪女・能因法師と申せし破戒の僧・狂
言綺語の三十一字を以て忽にふらせし雨を持戒持律の良觀房は法華・真言の
義理を極め慈悲第一と聞へ給う上人の數百人の衆徒を率いて七日の間にいか
にふらし給はぬやらむ、是を以て思ひ給へ一丈の堀を越えざる者二丈三丈の
堀を越えてんややすき雨をだにふらし給はず況やかたき往生成仏をや、然れ
ば今よりは日蓮怨み給う邪見をば是を以て翻えし給へ後生をそろしくをば
し給はば約束のままにいそぎ来り給へ、雨ふらす法と仏になる道をしへ奉ら
む七日の内に雨こそふらし給はざらめ、旱魃弥興盛に八風ますます吹き重

りて民のなげき^{いよいよ}弥弥深し、すみやかに其^そのいのりやめ給^{たま}へと第七日の申^{さるのとき}の時
使者ありのままに申^{もう}す処^{ところ}に良觀房は涙を流す弟子・檀那^{だんな}同じく声をおしま
ず口惜^{くちおし}しがる日蓮御勘氣を蒙^{こおむ}る時・此の事御尋ね有^{たす}りしかば有りのままに
申し給^{たま}いき、然^{しか}れば良觀房・身の上の恥^{はじ}を思はば跡^{あと}をくらまして山林^{さんりん}にもま
じはり約束のままに日蓮が弟子ともなりたらば道心の少^{せう}にても・あるべきに
さはなくして無^む尽^{じん}の讒言^{ざんげん}を構^{かま}えて殺罪^{つみ}に申し行はむとせしは貴^{たう}き僧^{そう}かと日蓮^{にちれん}
聖人^{しょうにん}かたり給^{たま}いき又賴基^{よりもと}も見聞^{けんもん}き候^{こう}き、他事^{たじ}に於^{おい}てはかけはくも主君^{しゅくん}の御事^{おんこと}
畏^{おそ}れ入り候へども此の事はいかに思^{おも}い候とも・いかでかと思はれ候べき。

仰^{おほ}せ下^{くだ}しの状^{いわ}に云^いく竜象房^{りゅうざうぼう}・極樂寺^{ごくらくじ}の長老^{ちやうろう}見參^{けんさん}の後^{のち}は釈迦^{しゃか}・弥陀^{みた}とあを
ぎ奉^{たてまつ}ると云云、此の条又恐れ入り候、彼の竜象房は洛中^{りやうしやう}にして人の骨肉を
朝夕^{ちやうしやく}の食物とする由露頭^{ろけん}せしむるの間、山門^{さんもん}の衆徒蜂起^{しゅうとほうき}して世末代^{まつだい}に及^{およ}びて
悪鬼国^{あくきこく}中に出現^{しゅつげん}せり、山王^{さんおう}の御力^{おんちから}を以て対治^{たいじ}を加えむとて住所^{しよしう}を焼失^{しやうしつ}し

其の身を誅罰せむとする処に自然に逃失し行方を知らざる処にたまたま鎌倉の中に又人の肉を食の間情ある人恐怖せしめて候に仏・菩薩と仰せ給う事所従の身として争か主君の御あやまりをいさめ申さず候べき、御内のをとなしき人人いかにこそ存じ候へ。

同じき下し状に云く是非につけて主親の所存には相随わんこそ仏神の冥にせけんも世間の礼にも手本と云云、此の事最第一の大事にて候へば私の申し状恐れ入り候間本文を引くべく候、孝経に云く「子以て父に争わずんばあるべからず臣以て君に争わずんばあるべからず」、鄭玄曰く「君父不義有らんに臣子諫めざるは則ち亡国破家の道なり」新序に曰く「主の暴を諫めざれば忠臣に非ざるなり、死を畏れて言わざるは勇士に非ざるなり」、伝教大師云く「凡そ不誼に当つては則ち子以て父に争わずんばあるべからず臣以て君に争わずんばあるべからず当に知るべし君臣父子師弟以て師に争わずんばあるべからず」文、

ほけきよう
法華經に云く「我れ身命を愛まず但無上道を惜む」文、涅槃經に云く「譬え

ば王の使の善能談論し方便に巧にして命を他國に奉ずるに寧ろ身命を喪つと

も終に王の所説の言教を匿さざるが如し智者も亦爾り」文、章安大師云く

「寧ろ身命を喪つとも教を匿さざれとは身は軽く法は重し身を死して法を弘

む」文、又云く「佛法を壊乱するは佛法の中の怨なり慈無くして詐り親むは

則ち是れ彼が怨なり能く糾治する者は彼の為めに惡を除く則ち是れ彼が親な

り」文、賴基をば傍輩こそ無礼なりと思はれ候らめども世の事にをき候ては

是非父母・主君の仰せに随い参らせ候べし。

其にとて重恩の主の惡法の者にたばらかされましまして惡道に墮ち給はむ

をなげくばかりなり、阿闍世王は提婆六師を師として教主・釈尊を敵とせし

かば摩竭提國・皆佛教の敵となりて闍王の眷屬・五十八万人・仏弟子を敵と

する中に耆婆大臣計り仏の弟子なり、大王は上の賴基を思し食すが如く仏弟子

たる事を御心よからず思し食ししかども最後には六大臣の邪義をすてて耆婆
が正法にこそつかせ給い候しが其の如く御最後をば頼基や救い参らせ候はん
ずらむ此の如く申さしめ候へば阿闍世は五逆罪の者なり彼に對するかと思し
食しぬべし、恐れにては候へども彼には百千万倍の重罪にて御座すべしと
御經の文には顯然に見えさせ給いて候、所謂「今・此の三界は皆是れ我有な
り」其中の衆生は悉く是れ吾子なり「文文の如くば教主釈尊は日本国の一切
衆生の父母なり師匠なり主君なり阿弥陀仏は此の三の義まします、而るに
三徳の仏を闇いて他仏を昼夜朝夕に称名し六万八万の名号を唱えましま
すあに不孝の御所作にわたらせ給はずや、弥陀の願も釈迦如来の説かせ給い
しかども終にくひ返し給いて唯我一人と定め給いぬ、其の後は全く二人・三
人と見え候はず、随つて人にも父母二人なし何の經に弥陀は此の国の父何れ
の論に母たる旨・見へて候觀經等の念仏の法門は法華經を説かせ給はむ為の

・しばらくの・しつらひなり、塔くまむ為の足代の如し、而るを仏法なれば
始終あるべしと思う人・大僻案なり、塔立てて後・足代を責ぶほどのはかな
き者なり、又日よりも星は明と申す者なるべし、此の人を經に説いて云く
「復教詔すと雖も而も信受せず其の人命終して阿鼻獄に入らん」、当世・
日本国の一切衆生の釈迦仏を抛つて阿弥陀仏を念じ法華經を抛つて觀經等
を信ずる人・或は此くの如き謗法の者を供養せむ俗男・俗女等・存外に五逆
七逆・八虐の罪を・をかせる者を智者と謁仰する諸の大名僧並びに国主等な
り、如是展転至無數劫とは是なり、此の如き僻事をなまじみに承りて候間次
を以て申せしめ候、宮仕をつかまつる者上下ありと申せども分分に随つて
主君を重んぜざるは候はず、上の御ため現世後生あしくわたらせ給うべき事
を秘かにも承りて候はむに傍輩・世に憚りて申し上ざらむは与同罪にこそ候
まじきか。

随したがつて頼基よリモとは父子二代・命を君に・まいらせたる事けんねん顯然なり・故親父中務某故

君の御勘気ごかんきかふらせ給たまいける時・数百人の御内の臣等心かはりし候けるに中

務一人・最後さいごの御供奉して伊豆の国まで参りて候き、頼基よリモとは去る文永十一年ぶんえい

二月十二日の鎌倉の合戦の時、折節伊豆の国に候しかば十日の申の時に承りさるのとき

唯ただ一人・筥根山はこねを一時に馳いせ越えて御前に自害すべき八人の内に候き、自然じねん

に世しづまり候しかば今に君も安穩あんのんにこそわたらせ給たまい候へ、爾来大事小事じ

に付けて御心やすき者にこそ思い含まれて候頼基よリモとが今更何いかにつけて疎縁そえんに思

いまいらせ候べき、後生ごしょうまでも随従ずいじゅうしまいらせて頼基成仏よりもとじょうぶつし候はば君をも

すくひまいらせ君成仏ごしょうぶつしましまさば頼基よリモとも・たすけられ・まいらせむとこそ

存じ候へ。

其それに付ひて諸僧しよそうの説法せつぽうを聴聞ちやうもん仕りて何れか成仏いすれの法じょうぶつとうかがひ候処ところに

日蓮聖人の御房は三界の主一切衆生の父母釈迦如来の御使上行菩薩にて

御坐候ける事の法華經に説かれてましましけるを信じまいらせたるに候、今

こそ真言宗と申す悪法・日本国に渡りて四百余年去る延暦二十四年に伝教

大師・日本国にわたし給いたりしかども此の国にあしかりなむと思し食し候

間宗の字をゆるさず天台法華宗の方便となし給い畢んぬ、其の後・伝教

大師御入滅の次をうかがひて弘法大師・伝教に偏執して宗の字を加えしか

ども叡山は用うる事なかりしほどに慈覚・智証短才にして二人の身は当山に

居ながら心は東寺の弘法に同意するかの故に我が大師には背いて始めて叡山

に真言宗を立てぬ日本亡国の起り是なり、爾来三百余年・或は真言勝れ法華

勝れ一同なむと諍論・事き

れざりしかば王法も左右なく尽きざりき、人王七十七代後白河法皇の御宇に

天台の座主明雲一向に真言の座主になりしかば明雲は義仲にころされぬ頭破

作七分是なり、第八十二代隠岐の法皇の御時禅宗・念仏宗出来つて真言の

だいあくほう
大悪法に加えて国土に流布せしかば、天照太神・正八幡の百王百代の御誓
こくど
やぶれて王法すでに尽きぬ、関東の権の大夫義時に天照太神・正八幡の
つ
かんとう
おんはから
御計いとして国務をつけ給い畢んぬ、爰に彼の三の悪法・関東に落ち下りて
たまい
おわ
よしとき
てんしょうだいじん
あくほう
かんとう

ぞんがい　ごきえ　存外に御帰依あり、故に梵釈・二天・日月・四天いかりを成し先代未有の
てんべん　ちよう　天変地天を以ていさむれども用い給はざれば鄰国に仰せ付けて法華經誹謗の
ちばつ　たま　人を治罰し給う間、天照太神・正八幡も力及び給はず、日蓮聖人・一人・
しろしめ　此の事を知し食せり、此くの如き嚴重の法華經にてをはして候間、主君をも
ゆえ　導きまいらせむと存じ候故に・無量の
しょうじ　小事をわすれて今に仕われまいらせ候、頼基を讒言申す仁は君の御為不忠の
まか　者に候はずや、御内を罷り出て候はば君たちまちに無間地獄に墮ちさせ給う
よりもと　べし、さては頼基・仏に成り候ても甲斐なしとなげき存じ候。

そもそも　抑彼の小乗　戒は富楼那と申せし大阿羅漢諸天の為に二百五十戒を説き
じようみようこじ　候しを・浄名居士たんじて云く「穢食を以て宝器に置くこと無れ」等云云、
あうくつ　まら　もうんじゆ　かしやく　あ　あもんぜい　だいじよう　鷲崛摩羅は文殊を呵責し・嗚呼蚊蚋の行は大乗空の理を知らずと、又小乗
もんじゆ　とが　によらい　ひ　ゆ　これ　たま　戒をば文殊は十七の失を出だし如来は八種の譬喩を以て是をそしり給うに驢

乳と説き蝦蟆に譬えられたり、此れ

等をば鑒真の末弟子は伝教大師をば悪口の人とこそ嵯峨天皇には奏し申し候

しかども經文なれば力及び候はず、南都の奏状やぶれて叡山の大戒壇立ち

候し上は、すでに捨てられ候し小乗に候はずや、頼基が良觀房を蚊蚋蝦蟆

の法師なりと申すとも經文分明に候はば御とがめあるべからず。

剩へ起請に及ぶべき由仰せを蒙むるの条存外に歎き入て候、頼基不法時病

にて起請を書き候程ならば君忽に法華經の御罰を蒙らせ給うべし、良觀房が

讒訴に依りて釈迦如来の御使日蓮聖人を流罪し奉りしかば聖人の申し給い

しが如く百日が内に合戦出来して若干の武者滅亡せし中に、名越の公達横死

にあはせ給いぬ、是れ偏に良觀

房が失ひ奉りたるに候はずや、今又竜象良觀が心に用意せさせ給いて頼基

に起請を書かしめ御座さば君又其の罪に当らせ給はざるべしや、此くの如き

道理^{どうり}を知らざる故か、又君をあだし奉らむと思ふ故か、頼基^{よりもと}に事を寄せて大事^{だいじ}を出さむとたばかり候人等御尋ねあつて召し合わせらるべく候、恐惶^{きようこう}謹言^{きんげん}。

建治三年丁丑六月二十五日

四条中務尉頼基^{よりもと}

・請文

二〇八 四条金吾殿御返事^{しじょうきんごごへんじ}

1163P

去月二十五日の御文・同月の二十七日の酉^{とり}の時に来りて候、仰せ下さるる

状と又起請^{きしょう}かくまじきよしの御せいじやうとを見候へば優曇華^{うどんげ}のさきたるを

みるか赤梅檀^{せんだ}のふたばになるをえたるか、めづらしかうばし、三明六通^{さんみょうろくつう}を得

給^{たま}う上法華經^{ほけきよう}にて初地^{しよじ}・初住^{しよじゅう}にのぼらせ給^{たま}へる証果^{しょうか}の大阿羅漢^{あらかん}得無生忍^{むじょうにん}の

菩薩^{ぼさつ}なりし舍利弗^{しゃりほつ}・目連^{もくれん}・迦葉^{かしょう}

等だにも娑婆世界^{しゃばせかい}の末法^{まつぽう}に法華經^{ほけきよう}を弘通^{くつう}せん事の大難^{だいなん}こらへかねければかな

ふまじき由辞退候いき、まして三惑未断^{さんかくみだん}の末代^{まつだい}の凡夫^{ぼんぷ}が争^{いかで}か此經^{ぎようじや}の行者^{ぎやうじや}とな

るべき、たといにちれん 設たい日蓮一人は杖じょう木瓦石惡口王難なんをも忍しのぶとも妻子さいしを帯おせる無智むちの

俗いかにかななどは争いか叶かなうべき、中なか信しんぜざらんはよかりなんすへとをらずしばし

ならば人に・わらはれ

なんと不便ふびんにをもひ候あいしに、度度たびたびの難なん二箇度ごの御勸ご氣きに心こざしをあらはし

給たまうだにも不思議ふしぎなるに、かく・おどさるるに二所の所領しりょうをすてて法華經ほけきょうを

信しんじとをすべしと御起請きしょう候事こといかにも申もうす計はかりなし、普賢ふげん・文殊もんじゆ等らなを末代まつだい

はいかんがと仏思みよし食くして妙法蓮華經みよほうれんげきょうの五字ごじをば地涌千界じゆせんがいの上首じょうしゆ 上行等じょうぎ

の四人おほにこそ仰おほせつけられて

候ただへ只事ただの心こころを案あんずるに日蓮にちれんが道みちをたすけんと上行菩薩じょうぎぼうさつ貴辺きへんの御身おんみに入りか

はらせ給たまへるか又また教主きょうしゆ釈尊しゃくそんの御計おんはからいか、彼の御内ひとびとの人人ひとひとうちはびこつて

良觀りよく竜象りゆうじやうが計はかりひにてやぢやうあるらん、起請きしょうをかかせ給たまいなば・いよいよ

かつばらをごりてかたがたにふれ申もうさば鎌倉かまくらの内に日蓮にちれんが弟子等でし一人もなく

せめうしなひなん、凡夫ぼんぷのならひ

身の上ははからひがたし、これをよくよくしるを賢人けんじん・聖人しょうにんとは申すもうなり、

遠きをばしばらくをかせ給へたま、近きは武蔵むさしのかう殿両所をすてて入道にゅうどうになり

結局は多くの所領しよりょう男女なんによのきうだち御ぜん等をすてて御遁世とんせいと承うけたまわる、との

子なしたのもしき兄弟きょうだいなしわづかの二所の所領しよりょうなり、一生はゆめの上明日

をこそせういかなる乞食こつじきにはなるとも法華經ほけきょうにきずをつけ給たまうべからず、され

ば同くはなげきたるけしきなくて此の状に・かきたるが・

ごとくすこしもへつらはず振舞仰せあるべし、中中へつらふならば・あしかりなん、設たとひ所領しよりょうをめされ追い出し給たまうとも十羅刹女の御計おんはからにてぞあるらむとふかくたのませ給たまうべし。

にちれん

日蓮はながされずしてかまくらにだにも・ありしかば・有りし・いくさに一定打ち殺されなん、此これも又御内にてはあしかりぬべければ釈迦しゃかぶつ仏の御計おんはからにてやあるらむ、陳状もつは申して候へども又それに僧は候へども・あまりのおぼつかなさに三位房をつかはすべく候にいまだ所労きらきらしく候はず候へば同事に此の御房ごぼうをまい

らせ候、だいがくの三郎殿かたきの太郎殿かとき殿かにいとまに随したがいてかかせてあげさせ給たまうべし、これはあげなば事きれなむいたういそがずとも内内うちをしたため・又ほかの・かつばらにも・あまねく・さはがせて・さしいだしたらば・若や此の文かまくら内にもひろうし上へもまいる事もやあるら

ん、わざはひの幸はこれなり。

ほけきよう おんこと
法華經の御事は已前に申しふりぬ、しかれども小事こそ善よりはをこて候

へ、大事になりぬれば必ず大なる・さはぎが大なる幸となるなり、此の陳状

人ごとにみるならば彼等がはぢあらわるべし、只一口に申し給へ我とは御内

を出て所領をあぐべからず、上よりめされいださむは法華經の御布施幸と思

うべしとののしらせ給へ、

かへすがへす奉行人にへつらうけしきなかれ、此の所領は上より給たるには

あらず、大事の御所勞を法華經の藥をもつてたすけまいらせて給て候所領な

れば召すならば御所勞こそ又かへり候はむずれ、爾時は頼基に御たいじやう

候とも用ひまいらせ候まじく候とうちあてにくさうげにてかへるべし。

あなかしこ・あなかしこ御よりあひあるべからず、よるは用心きびしく夜

廻の殿原かたらいて用ひ常にはよりあはるべし今度御内をだにもいだされず

ば十に九は内のものねらひなむかまへてきたなきしにすべからず。

ひのとし

建治三年丁丑七月

にちれんかおう

日蓮花押

しじょうきんご

四条金吾殿御返事

ごへんじ

二〇九

四糸金吾殿御返事 しじょうきんごごへんじ

建治三年

五十六歳御作

1165p

おんふみ

御文あらあらうけ給わりて長き夜のあけとをき道をかへりたるがごとし、

そ ぶつぼう もう

夫れ仏法と申すは勝負をさきとし、王法と申すは賞罰を本とせり、故に仏を

ば世雄と号し王をば自在となづけたり、中にも天竺をば月氏という我国をば

にほん もう えんぶたい はちまん

日本と申す一閻浮提八万の国の中に大なる国は天竺小なる国は日本なり、名

のめでたきは印度第二・扶桑 いんど ふそう

だいいち ぶつぼう

第一なり、仏法は月の国より始めて日の国にとどまるべし、月は西より出で

東に向ひ日は東より西へ行く事天然のことはり、磁石と鉄と雷と象華と

のごとし、誰か此のことはりをやぶらん。

此の国に仏法わたりし由來をたづぬれば天神七代・地神五代すぎて人王の

代となりて第一神武天皇乃至第三十代欽明天皇と申せし王をはしき、位につ

かせ給いて三十二年治世し給いしに第十三年壬申十月十三日辛酉に此の国

より西に百済国と申す州あり日本国の大王の御知行の国なり、其の国の大王

・聖明王と申せし國王あり、年貢

を日本国にまいらせしついでに金銅の釈迦仏・並に一切經・法師・尼等をわ

たしたりしかば天皇大に喜びて群臣に仰せて西蕃の仏をあがめ奉るべしやい

なや、蘇我の大臣いなめの宿禰と申せし人の云く西蕃の諸国みな此れを礼す

とよあきやまとあに独り背やと申す、物部の大むらじをこし中臣のかまこ

等奏して曰く我が国家・天下

に君たる人はつねに天地しやそく百八十神を春夏秋冬に・さいはいするを事

とす、しかるを今更あらためて西蕃の神を拜せばおそくは我が国の神いか

りをなさんと云云、爾その時に天皇てんのうわかちがたくして勅宣ちよくせんす、此の事を
只ただ心みに蘇我そがの大臣だいじんにつけて一人にあがめさすべし、他人たにんもち用いる事なかれ、
蘇我そがの大臣おとどうけ取りて大に悦よろこび給たまいて此の釈迦しゃかぶつ仏を我が居住のおはたと申もうす
ところに入まいらせて安置あんちせり、物部の大連おおむらじ・不思議ふしぎなりとて・いきどを

りし程に日本国に大疫病おこりて死せる者大半に及ぶすでに国民尽きぬべかりしかば、物部の大連・隙を得て此の仏を失うべきよし申せしかば勅宣なる、早く他国の仏法を棄つべし云云、物部の大連御使として仏をば取りて炭をもつてをこしつちをもつて打ちくだき仏殿をば火をかけてやきはらひそうに僧尼をばむちをくわう、其のとき

天に雲なくして大風ふき雨ふり、内裏天火にやけあがつて大王並に物部の大連蘇我の臣三人共に疫病あり・きるがごとくやくがごとし、大連は終に寿絶えぬ蘇我与王とはからくして蘇生す、而れども仏法を用ゆることなくして十九年すぎぬ。

第三十一代の敏達天皇は欽明第二の太子治十四年なり左右の両臣は一は物部の大連が子にて弓削の守屋父のあとをついで大連に任ず蘇我の宿禰の子は蘇我の馬子と云云、此の王の御代に聖德太子生給へり用明の御子・敏達

をいなり御年二歳の二月東に向つて無名の指を開いて南無仏と唱へ給へば御
舎利掌にあり、是れ日本国の

釈迦念仏の始めなり、太子八歳なりしに八歳の太子云く、「西国の聖人

釈迦牟尼仏の遺像末世に之を尊めば則ち禍を銷し福を蒙る之を蔑れば則ち災

を招き寿を縮む」等云云、大連物部の弓削宿禰の守屋等いかりて云く、「蘇我

は勅宣を背きて他国の神を礼す」等云云、又疫病未だ息まず人民すでにた

えぬべし、弓削守屋又此れを間奏す云云、勅宣に云く、「蘇我の馬子仏法を興行

す宜く仏法を卻ぞくべし」等云云、此に守屋中臣の臣勝海大連等両臣

と、寺に向つて堂塔を切たうし仏像をやきやぶり、寺には火をはなち僧尼の

袈裟をはぎ笞をもつてせむ・又天皇並に守屋馬子等疫病す、其の言に云く、焼

くがごとしきるがごとし又瘡をこるはうそうといふ、馬子歎いて云く、尚三宝

を仰がん」と勅宣に云く、「汝独り行え但し余人を断てよ」等云云、馬子欣

悦し精舎しょうじゃを造りてつく

三宝さんぼうを崇あがめめぬ。

てんのう

ほうぎよ

天皇は終八月十五日崩御云云、此の年は太子たいしは十四なり第三十二代用明天皇ようめいてんのう

きんめい

たいし

の治二年欽明の太子・聖徳

たいし

太子の父なり、治二年 丁未 四月に天皇疫病あり、皇勅して云く「三宝に

ひのとひつじ

てんのうえきびよう

みかど

いわ さんぼう

帰せんと欲す」云云、蘇我の大臣詔に随う可しとて遂に法師を引いて内裏に

ほ

そが

だいじん

したがべ

ほっし

だいり

入る豊国の法師是なり、物部の守屋大連等大に瞋り横に睨んで云く天皇を厭

ほっしこれ

もりやおおむらじ

おおい

いか よこしま

いわ

てんのう

魅すと終に皇隠れさせ給う五月に物部の守屋が一族渋河の家にひきこもり多

つい

みかど

たま

もりや

勢をあつめぬ、太子と馬子と押

たいし

し寄せてたたかう、五月・六月・七月の間に四箇度・合戦す、三度は太子ま

たいし

け給う第四度めに太子願を立てて云く「釈迦如来の御舍利の塔を立て四天王

たま

たいし

いわ

しゃかによらい

しゃり

してんのう

寺を建立せん」と・馬子願て云く「百濟より渡す所の釈迦仏を寺を立てて

こんりゅう

いわ

くだら

わた

しゃかぶつ

崇重すべし」と云云、弓削なのつて云く「此れは我が放つ矢にはあらず我が

すうちよう

いわ

こ

先祖崇重の府都の大明神の放ち給ふ矢な

すうちよう

ふと

だいみょうじん

たま

り」と、此の矢はるかに飛んで太子の鎧に中る、太子なる「此は我が放つ

たいし

よろい

たいし

矢にはあらず四天王の放ち給う矢なり」とて迹見の赤袴と申す舎人にいさせ

してんのう

たま

もう

給へば矢はるかに飛んで守屋が胸に中りぬ、はだのかはかつをちあひて頸を
とる、此の合戦は用明崩御崇峻未だ位に即き給わざる其の中間なり。

第三十三・崇峻天皇位につき給う、太子は四天王寺を建立す此れ釈迦如来

の御舍利なり、馬子は元興寺と申す寺を建立して百済国よりわたりて候いし

教主釈尊を崇重す、今の代に世間第一の不思議は善光寺の阿弥陀如来とい

う誑惑これなり、又釈迦仏にあだをなせしゆへに三代の天皇並に物部の一族

むなしくなりしなり又太子・教主釈尊の像一体つくらせ給いて元興寺に居

せしむ今の橘寺の御本尊これなり、此れこそ日本国に釈迦仏つく

りしはじめなれ。

漢土には後漢の第二の明帝永平七年に金神の夢に見て博士蔡・王遵等の

十八人を月氏につかはして仏法を尋ねさせ給いしかば中天竺の聖人摩騰迦・

竺法蘭と申せし二人の聖人を同永平十年丁卯の歳迎へ取りて崇重ありしか

ば、漢土^{かんど}にて本より皇の御いのりせし儒家道家の人人^{にんずう}数千人・此の事をそね
みて・うつたへしかば、同永平十四年正月十五日に召し合せられしかば漢土^{かんど}
の道士^{どうし}悦びをなして唐土^{もろこし}の神百霊を本尊^{ほんぞん}としてありき、二人の聖人^{しやうにん}

は仏の御舎利しやりと釈迦しゃか仏の画像と五部の經を本尊ほんぞんと恃怙たのみ給たまう、道士どうしは本より
王の前にして習ならいたりし仙經せんきやう・三墳さんぶん・五典ごてん・二聖にせい・三王の書を薪たきぎにつみこめ
てやきしかば古はやけざりしがはいとなりぬ、先には水にうかびしが水に沈
みぬ、鬼神きじんを呼しも来らず、あまりのはづかしさに 善信ちよぜんしん・費叔才ひしゆくさいなど申
せし道士どうし等はおもひ死にししぬ、
二人の聖人しょうにんの説法せつぽうありしかば舎利しやりは天に登りて光を放ちて日輪にちりんみゆる事な
し、画像しやがぶつの釈迦しゃか仏は眉間みけんより光を放ち給たまう、呂慧通等りよくいつうの六百余人の道士どうしは歸伏きふく
して出家しゅつけす、三十日が間に十寺立ちぬ、されば釈迦しゃか仏は賞罰しやかぶつただしき仏なり、上
に挙あぐる三代の帝みかど・並に二人の臣下しんか・釈迦しゃか如来の敵とならせ給たまいて今生こんじやうは
むなしむなし後生ごしやうは惡道あくどうに墮おちぬ。

今の代も又これに・かはるべからず、漢土かんどの道士どうし信費等日本にほんの守屋等もりやは漢土かんど
にほんにほんの大小の神祇だいしやうじんぎを信用しんようして教主きやうしゆしやくそん釈尊しやくそんの御敵となりしかば神は仏に随したがい

たてまつぎようじや
奉り行者は皆ほろびぬ、今の代も此くの如く上に挙ぐる所の百済国の仏は
きようしゆしやくそん
教主釈尊なり、名を阿弥陀仏と云つて日本国をたばらかして釈尊を他仏に
かへたり、神と仏と仏と仏との差別

こそあれども釈尊をすつる心はただ一なり、されば今の代の滅せん事又疑
いなるべし、是は未だ申さざる法門なり秘す可し秘す可し、又吾一門の人人
の中にも信心もうすく日蓮が申す事を背き給はば蘇我が如くなるべし、其の故
は仏法・日本に立ちし事は蘇我の宿禰と馬子との父子二人の故ぞかし、釈迦
によらい しゆつせ ほんのう たいしやくく
如来の出世の時の梵王・帝釈の

如くにてこそあらまじなれども、物部と守屋とを失いし故に只一門になりて
位もあがり国をも知行し一門も繁昌せし故に高挙をなして崇峻天皇を失いた
てまつり王子を多く殺し結局は太子の御子二十三人を馬子がまご入鹿の臣下
うしない
失ひまいらせし故に、皇極天皇は中臣の鎌子が計いとして教主釈尊を造り

奉りてあながちに申せしかば入鹿の臣並に父等の一族一時に滅びぬ。
たてまつ こ いるか おみ いちじ

此れをもつて御推察あるべし、又我が此の一門の中にも申しとをらせ給は
ひとびと とが いちもん もつ たま しょうぼうの とぼう
ざらん人人は・かへりて失あるべし、日蓮をうらみさせ給うな少輔房能登房
等を御覧あるべし、かまへてかまへて此の間はよの事なりとも御起請か
きしょう

かせ給^{たま}うべからず火はをびただしき様なれども暫^{しばし}くあればしめる水はのろき
様なれども左右^{さう}なく失^{うしな}いがたし、御辺は腹あしき人なれば火の燃るがごとし
一定人にすかされなん、又主のうらうらと言和^{やわら}かにすかせ給^{たま}うならば火に
水をかけたる様に御わたりありぬと覚^{おぼ}ゆ、きたはぬかねはさかんなる火に入
るればとくとけ候、氷^{こおり}を

ゆに入るがごとし、剣なんどは火^{たいか}に入るれども暫^{しばら}くはとけず是きたへる故
なり、まへにかう申^{もう}すはきたうなるべし仏法^{ぶつぽう}と申^{もう}すは道理^{どうり}なり道理^{どうり}と申^{もう}すは
主に勝つ物なりいかにいとをしはなれじと思うめなれども死しぬればかひな
しいかに所領^{しよりやう}を・をしと・をばすとも死しては他人^{たにん}の物、すでにさかへて
年久しすこしも惜^{おし}む事なかれ、又さきざき申^{もう}すがごとくさきざきよりも百千万^{せんまん}
億倍御用心^{よっしん}あるべし。

にちれん
日蓮は少^こより今生^{こんじやう}のいのりなし只仏^{ただ}にならんとをもふ計^{ばか}りなり、されども

殿の御事をばひまなく法華經・釈迦仏・日天に申すなり其の故は法華經の命を継ぐ人なればと思うなり。
あなかしこあなかしこ
六賢六賢 あらかるべからず吾が家に・あらず

んば人に寄合事なかれ、又夜廻の殿原はひとりもたのもしき事はなけれども
法華經の故に屋敷を取られた

る人人なり、常はむつばせ給うべし、又夜の用心の為と申しかたがた殿の守

りとなるべし、吾方の人人をば少少の事をばみずきかずあるべしさて又法門

などを聞ばやと仰せ候はんに悦んで見え給うべからず、いかんが候はんず

らん、御弟子共に申してこそ見候はめとやわやわとあるべしいかにもうれし

さにいろに顕われなんと

覚え聞かんと思う心だにも付かせ給うならば火をつけてもすがごとく天より

雨の下るがごとく万事をすてられんずるなり。

又今度いかなる便も出来せばしたため候し陳状を上げらるべし、大事の文

なればひとさはぎはかならずあるべし、
穴あな賢かしこ穴あな賢かしこ。

四し条じょう金きん吾ご殿てん

日に蓮ちれん花か押おう

一一一〇

四条金吾殿御返事

1170p

ほけきよう

そうたい

しやくもん

なおいじようしよくかく

むね

ゆえ

法華經本・迹相對して論ずるに迹門は尚始成正覺の旨を明す故にいまだ

るなん

ほんもん

るなん

しか

いえど

だいもく

ごじ

そうたい

留難かかれり、本門はかかる留難を去りたり然りと雖も題目の五字に相對す

まっぽう

き

しんじついつさいしゆじようしきしん

るなん

る時は末法の機にかなはざる法なり、真実一切衆生色心の留難を止むる秘術

ただなむみようほうれんげきよう

は唯南無妙法蓮華經なり。

しじようきんご

ごへんじ

四条金吾殿御返事

にちれん
日蓮

一一一

崇峻天皇御書

建治三年九月 五十六歳御作 与

しじようきんご

四条金吾

1170p

白小袖一領錢一ゆひ又富木殿の御文のみなによりもかきなしまひじきひ

るひじきやうやうの物うけ取りしなじな御使おんつかいにたび候いぬ、さてはなによりも上の御いたはりなげき入つて候、たとひ上は御信用ごしんようなき様に

候へどもとの其その内に・をはして其その御恩ごおんのかげにて法華經ほけきようをやしなひまいらせ給たまひい候へば偏ひとえに上の御祈とぞな

り候らん、大木の下もとの小木大河の辺の草は正ただしく其その雨にあたらず其その水をえずといへども露つゆをつたへ・いきを

えて・さかうる事に候。

此これもかくのごとし、阿闍世王あじゃせは仏の御かたきなれども其その内にありし

耆婆大臣ぎばだいじんに志こころありて常に供養くやうありしかば其その功大王だいおうに帰すとこそ見へて

候へ、仏法ぶつぽうの中に内薫外護ないくんげごと申す大なる大事だいじありて宗論しゆろんにて候、法華經ほけきようには

「我なんじ深く汝等うやもを敬うやまう」涅槃經ねはんきようには「一切衆生いっさいしゆじよう悉く仏性ぶつしやう有あり」馬鳴菩薩めみやうぼさつの起

信論しんろんには「真如しんによの法常に薰習くんじゆうするを

以ての故に妄心ゆゑ即滅して法身もつしん顕現す」弥勒菩薩みろくぼさつの瑜伽論には見えたり、かく
れたる事のあらはれたる徳となり候なり、されば御内の人人ひとびとには天魔てんまついて
前より此の事を知りて殿の此の法門ほうもんを供養するをささえんがために今度の大
妄語もうごをば造り出だしたりしを御信心しんじん深ければ十羅刹じゅうらせつたすけ奉らんがために此
の病はをこれるか、上は我がか

たきとはをぼさねども一たんかれらが申す事もちを用い給いぬるによりて御しよ
らうの大事だいじになりて・ながしらせ給たまつか、彼等かれらが柱とたのむ竜象りゅうざうすでにたう
れぬ、和讒わざんせし人も又其その病にをかされぬ、良観りょうかんは又一重だいの大科だいかの者なれば
大事だいじに値あうて大事だいじをひきをこして・いかにもなり候そつちはんずらん、よもただは
候はじ。

此れにつけても殿おんの御身みもあぶなく思いまいらせ候ぞ、一定かたきにねら
はれさせ給たまいなんすぐろくの石は二つ並びぬればかけられず車の輪は二あれ

ば道にかたぶかず、敵も二人ある者をばいぶせがり候ぞ、いかにとがありとも弟どもしばらも且くも身をはなちたま給うな、殿は一定腹あしき相かをあらわに顕れたり、いかに大事だいじと思へども腹あ

しき者をば天は守らせ給たまはぬと知らせ給へ殿の人にあだまれてをはさたといば設い仏にはなり給うとも彼等かれらが悦よろこびと云う、此れよりの歎なげきと申し口惜くちおししかるべし、彼等かれらがいかにもせんとはげみつるに、古よりも上に引き付けられまいらせてをはすれば外ほかのすがたはしづまりたる様にあれども内の胸はもふる計ばかりにや有らん、常には

彼等かれらに見へぬ様にて古よりも家のこを敬つやまひきうだちまいらせ給たまいてをはさんには上かみの召しありとも且しばらく・つつしむべし、入道にぎひ殿いかにもならせ給たまはば彼の人人ひとびとはまどひ者になるべきをばかへりみず、物をばへぬ心に・とののいよいよ来るを見ては一定ほのを・を胸にたきいきをさかさまにつくらん、若もし

きうだちきり者の女房^{にようばう}たち・い

かに上の御そろうはと問^もい申^{もう}されば、いかなる人^{ひと}にても候^{こう}へ・膝^{ひざ}をかがめて
手を合せ^{それがし}某^{それがし}が力の及^{およ}ぶべき御所^{ごしょ}旁^{わう}には候^{こう}はず候^{こう}をいかに辞退^{じたい}申^{もう}せどもただ
と仰^{おお}せ候^{こう}へば御内^{ごうち}の者^{もの}にて候^{こう}間^{かん}かくて候^{こう}とてびむをもかかずひたたれこはか
らず、さはやかなる小袖^{こそで}色^{いろ}ある物^{もの}なんどもきずして且^{しば}くねうじて御覽^{ごらん}あれ。

返す返す御心への上なれども末代まつだいのありさまを仏の説かせ給たまいて候には
濁世じよくせには聖人しょうにんも居こしがたし大火だいかの中の石いしの如ごとし、且しばくはこらふるやうなれど
も終ついにはやけくだけで灰となる、賢人けんじんも五常ごじやうは口に説ときて身には振舞ふるまいいがた
しと見へて候ぞ、かうの座をば去れと申もうすぞかし、そこばくの人の殿を造つくり
落さんとしつるにをとされず
してはやかちぬる身が穩便おんびんならずして造つくり落されなば世間せけんに申もうすこぎこひで
の船こぼれ又食の後に湯の無きが如ごとし、上よりへやを給たまいて居こしてをはせば
其処ことなにては何事無くとも日ぐれ暁など入り返りなどに定めて・ね
らうらん、又我が家の妻戸の脇・持仏堂・家の内の板敷いたじきの下か・天井な
んどをば、あながちに心えて振舞ふるまいい給たまへ、今度このたびはさきよりも彼等かれらはたばかり賢か
るらん、いかに申もうすとも鎌倉かまくらのえがら夜廻りの殿原にはすぎじ、いかに
心にあはぬ事有りともし・かたらひ給たまへ。

よしつね
義経はいかにも平家へいけをばせめおとしがたかりしかども・成良しげよしをかたらひて

平家へいけをほろぼし、大将殿は・おさだを親のかたきと・をばせしかども平家へいけを

落さざりしには頸を切り給たまはず、況や此の四人は遠くは法華経ほけきようのゆへ近くは

日蓮にちれんがゆへに命を懸かけたるやしきを上へ召されたり、日蓮にちれんと法華経ほけきようとを信ず

る人人ひとびとをば前前さきさき彼の人人ひとびといかなる事ありともかへりみ給たまうべし、其の上殿の

家へ此の人人ひとびと常にかようならばかたきはよる行きあはじと・をぢ

るべし、させる親のかたきならねば頭あらわれてとはよも思はじ、かくれん者は

是れ程この兵士はなきなり、常にむつばせ給たまへ、殿は腹悪き人にてよも用ひさ

せ給たまはじ、若もしさるならば日蓮にちれんが祈りの力及およびがたし、竜象りゅうざうと殿の兄とは殿

の御ためにはあしかりつる人ぞかし天の御計おんはからいに殿の御心の如ごとくなるぞかし

いかに天の御心そむに背かんとは

・をばするぞ設たといい千万よろずの財たからをみちたりとも上にすてられまいらせ給たまいては何

の詮があるべき已すでに上にはをやの様に思はれまいらせ水の器に随したがうが如ごとくこ
うしの母を思ひ老者の杖をたのむが如ごとく主のものを思食おほしめされたるは法華經の
御たすけにあらずや、あらうらやましやとこそ御内の人人ひとひとは思はるるらめと
くとか此の四人かたらひて

にちれん
日蓮にきかせ給へさるならば強盛に天に申すべし、又殿の故御父御母の御事
さえもん
も左衛門の尉があまりに歎き候ぞと天にも申し入れて候なり、定めて釈迦仏
おんまえ しさい
の御前に子細候らん。

返す返す今に忘れぬ事は頸切れんとせし時殿はともして馬の口に付きてな
きかなしみ給いしをばいかなる世にか忘れなん、設い殿の罪ふかくして地獄
たま
に入り給はば日蓮をいかに仏になれと釈迦仏こしらへさせ給うとも用ひまい
にちれん
らせ候べからず同じく地獄なるべし、日蓮と殿と共に地獄に入るならば釈迦仏
ほけきょう
・法華経も地獄にこそ・を

はしまさずらめ、暗に月の入るがごとく湯に水を入れるがごとく氷に火をた
くがごとく日輪にやみをなぐるが如くこそ候はんずれ、若しすこしも此の事
にちりん
をたがへさせ給うならば日蓮うらみさせ給うな。
たま

せけん
此の世間の疫病はとののまうすがごとく年帰りなば上へあがりぬと・をば
えきびょう

え候ぞ、十羅刹じゅうらせつの御計おんはからいか今且しばらく世に・をはして物を御覽あれかし、又世間せけん

のすぎえぬやうばし歎なげいて人に聞かせ給たまうな、若もしさるならば賢人けんじんに

ははづれたる事なり、若もしさるならば妻子さいしがあとにとどまりてはぢを云うと

は思はねども、男のわかれのおしさに他人たにんに向いて我が夫のはぢをみなかた

るなり、此これ偏ひとえにかれが失とがにはあらず我がふるまひのあしかりつる

故なり。

人身じんしんは受けがたし爪の上の土人身じんしんは持ちがたし草の上の露つゆ、百二十まで持たもち

て名を・くたして死せんよりは生きて一日なりとも名をあげん事こそ大切な

れ、中務三郎左衛門尉さえもんは主の御ためにも仏法ぶつぽうの御ためにも世間せけんの心

ねもよかりけりよかりけりと鎌倉かまくらの人人ひとびとの口にうたはれ給たまへ、穴賢あなかしこ穴賢あなかしこ、

蔵くらの財たからよりも身の財たからすぐれたり身の財たからより心の財たから第一だいいちなり、此おんふみの御文を

御覽あらんよりは心の財たからつませ給たまうべし。

第一秘蔵の物語あり書きてまいらせん、日本始りて国王二人人に殺され
給う、其の一人は崇峻天皇なり、此の王は欽明天皇の御太子聖徳太子の伯父
なり、人王第三十三代の皇にてをはせしが聖徳太子を召して勅宣下さ

る、汝^{なんじ}は聖智の者と聞く朕^{ちん}を相してまいらせよと云云、太子^{たいし}三度まで辞退^{もう}申^ささせ給^{たま}いしかども頻^{ちよくせん}の勅宣^{ちよくせん}なれば止みがたくして敬^たいて相^あしまいらせ給^{たま}う、君^{きみ}は人に殺^{ころ}され給^{たま}うべき相^あしますと、王^{みけしき}の御氣色^{みけしき}かはらせ給^{たま}いて・なにと云^いう証^{しょうこ}拠^こを以^{もつ}て此の事を信^{しん}ずべき、太子^{たいし}申^{まう}させ給^{たま}はく御眼^{みがん}に赤^{あか}き筋^{すぢ}とをりて候^{こう}人^{ひと}にあだまるる相^{あひま}なり、皇帝^{みかど}

勅^{ちよくせん}宣^{かき}を重ねて下^{くだ}しいかにしてか此^{なん}の難^{まぬか}を脱^{だつ}れん、太子^{たいし}の云^{いわ}く免^{のがれ}脱^{だつ}がたし但^{ただ}し五^ご常^{じょう}と申^{もう}すつはものあり此^これを身^みに離^{はな}し給^{たま}わすば害^{まぬか}を脱^{だつ}れ給^{たま}はん、此^このつはもの^{もの}をば内^{ないてん}典^{てん}には忍^{はら}波羅蜜^{みつ}と申^{もう}して六^{ろく}波羅蜜^{はらみつ}の其^その一^{ひと}なりと云云、且^{しばら}くは此^これを持^もち給^{たま}いてを^をはせしがや^やもすれば腹^{はら}あしき王^{わう}にて是^{これ}を破^{やぶ}らせ給^{たま}いき、・或^{ある}時^{とき}人^{ひと}・猪^{いの}の子^こをまいらせたり

しかばこ^こうがい^{がい}をぬきて猪^{いの}の子^この眼^{まなこ}をづぶづぶとささせ給^{たま}いていつかにくしと思^{おも}うやつをかくせんと仰^{おほ}せありしかば、太子^{たいし}其^{その}の座^ざにを^をはせしが、あらあ

さましや・あさましや・君は一定人にあだまれ給いなん、此の御言は身を害

する剣なりとて太子多くの財を取り寄せて御前に此の言を聞きし者に御ひき

で物ありしかども、有人蘇我

おとど

の大臣・馬子と申せし人に語りしかば馬子我が事なりとて東漢直駒・

あたいいわい

もう

直磐井と申す者の子をかたらひて王を害しまいらせつ、されば王位の身なれ

ども思う事をばたやすく申さぬぞ、孔子と申せし賢人は九思一言とてこの

ひとたびもう

たびおもひて一度申す、周公旦と申せし人は沐する時は三度握り食する時

しゅうこうたん

ゆあみ

は三度はき給いき、たしかにきこしめせ我ばし恨みさせ給うな仏法と申すは

たま

たま

ぶつぽう

もう

是にて候ぞ。

いちだい

かんじん

ほけきようほけきよう

しゆぎよう

かんじん

ふぎよう

一代の肝心は法華經法華經の修行の肝心は不輕品にて候なり、不輕菩薩の

人を敬いしは・いかなる事ぞ教主釈尊の出世の本懷は人の振舞にて候ける

きようしゆしやくそん

しゆつせ

ほんかい

ふるまい

ぞ、
六賢六賢、賢きを人と云いはかなきを畜といふ。

あなかしこあなかしこ

建治三年丁丑九月十一日

ひのとうし

さえもんのじょう

ごへんじ

四條左衛門尉殿御返事

日蓮

にちれん

花押

かおう

1175p

鷹取 たかとり

のたけ身延のたけなないたがれのたけいいだにと申し、木のもとかや

のねいわの上土の上いかにたづね候へどもをひて候ところなし、されば海に

あらざればわかめなし山にあらざればくさびらなし、法華經 ほけきょうにあらざれば仏

になる道なかりけるかこれはさてをき候いぬ、なによりも承り たまわてすずしく候

事は・いくばくの

御にくまれの人の御出仕に人かずにめしぐせられさせ給 たまいて、一日・二日な

らず御ひまもなきよし・うれしさ申 もうすばかりなし、えもんのたいうのをやに

立ちあひて上の御一言にてかへりてゆりたると殿のすねんが間のにくまれ

去年こぞのふゆはかうとききしにかへりて日日の御出仕の御ともいかなる事ぞ、

ひとへに天の御計おんはからい法華經ほけきょうの

おんちから

御力おんちからにあらずや、其その上えんきよう円教房えんきようの来りて候いしが申し候は、えまの四郎殿

の御出仕に御とものさふらい二十四・五其その中にしうはさてをきたてまつり

ぬ、ぬしのせいといひかをたましひむま下人までも中務のさえもんのじやう

だいいち

第一だいいちなり、あはれをとこやをとこやとかまくらわらはべはつじちにて申しあ

ひて候しとかたり候。

これにつけてもあまりにあやしく候、孔子こうしは九思一言周公旦しゅうこうたんは浴あゆみする時

は三度にぎり食する時は三度はかせ給たまう、古いにしえの賢人けんじんなり今の人のかがみなり、

されば今度このたびはことに身をつつしませ給たまうべし、よるはいかなる事ありとも一

人そとへ出いでさせ給たまうべからず、たとひ上の御めし有りとまづ下人をこそ

へつかわして、なひなひ一定

をききさだめてはらまきをきてはちまきし、先後左右せんごさうに人をたてて出仕し御所のかたわらに・心よせの・やかたか又我がやかたかにぬぎをきてまいらせ給たまうべし、家へかへらんにはさきに人を入れてとのわきはしのしたむまやしりたかどの一切いっさいくらきところをみせて入るべし。せうまうには我が家よりも人の家よりもあれ・た

からを・をしみてあわてて火をけすところへづつとよるべからず、まして走り出る事なかれ、出仕より主の御ともして御かへりの時はみかどより馬よりをりて、いとまのさしあうよしはうくわんに申して・いそぎかへるべ

し、上のを・をせなりともよに入りて御ともして御所にひさしかるべからず、かへらむには第一^{だいいち}心にふかきえうじんあるべし、ここをばかならずかたきのうかがうところなり。

人のさけたばんと申すともあやしみてあるひは言をいだしあるひは用いる^{もち}ことなかれ、又御をとどもには常はふびんのよしあるべし、つねにゆせにざうりのあたいなんと心あるべし、もしやの事のあらむには・かたきはゆるさじ、我がためにいのちをうしなはんずる者ぞかしと・をぼして、とがありともせうせうの失^{とが}をば・しら

ぬやうにてあるべし、又女るひはいかなる失^{とが}ありとも一向^{いっせい}に御けうくんまで

も・あるべからず、ましていさかうことなかれ、涅槃經ねはんぎょうに云く「罪極つみて重し
と雖いえども女人にょにんに及ぼさず」等云、文の心はいかなる失とがありとも女のとがを・
をこなはざれ、此これ賢人けんじんなり此これ仏弟子ぶつでしなりと申もうす文なり、此の文は阿闍世あじゃせ
王父を殺すのみならず母をあやま

たむとせし時耆婆ぎば月光がっこうの両臣おみがいさめたる經文きょうもんなり、我が母心ぐるしくをも
ひて臨終りんじゅうまでも心にかけし・いもうとどもなければ失とがをめんじて不便ふびんという
ならば母の心やすみて孝養じょうようとなるべしとふかくおぼすべし、他人たにんをも不便ふびんと
いうぞかしいわうやをととどもをや、もしやの事ことの有あるには一所にていか
にもなるべし、此等これらこそ

とどまりゐてなげかんずればをもひでにとふかくをばすべし、かやう申もうすは
他事たじはさてをきぬ、雙六すしろうくは二ある石はかけらず、鳥の一の羽にてとぶことな
し、將門さだたふがやうなりしいふしやうも一人は叶かなわず、されば舍弟等しゃていを

子とも郎等ともうちたのみてをはせば、もしや法華經ほけきようもひろまらせ給たまいて世
にもあらせ給たまわば

いっぽう一方のかたうどたるべし。

すでにきやうのだいり院のごそかまぐらの御所並に御うしろみの御所一年
が内に二度正月と十二月とに

やけ候いぬ、これ只事にはあらず謗法の真言師等を御師とたのませ給う上か
れら法華經をあだみ候ゆへに天のせめ法華經十羅刹の御いさめあるなり、か
へりて大ざんげあるならばたすかるへんもあらんずらん、いたう天
の此の国を・をしませ給うゆへに大なる御いさめあるか、すでに他国が此の
国をうちまきて国主国民を失はん上仏神の寺社百千万がほろびんずるを天眼
をもつて見下して・なげかせ給うなり、又法華經の御名をいういうたるもの
どもの唱うるを誹謗正法の者どもがをどし候を天のにくませ給う故なり。
あなかしこ・あなかしこ、今年かしこくして物を御らんぜよ、山海・空市
まぬかるところあらばゆきて今年はずぎぬべし、阿私陀仙人が仏の生れ給い
しを見て、いのちを・をしみがごとしをしみがごとし、
恐恐謹言。

正月二十五日

にちれんかおう
日蓮花押

さえもののじょう
中務左衛門尉殿

いよいよかない候べし、いかにわなくともきかぬやうにてをはすべし、此の事をみ候に申すやうにだにふれまわせ給うならばなをも所領もかさなり人のをばへもいできたり候べしと・をばへ候、さきざき申し候いし

やうに陰徳あれば陽報ありと申して、皆人は主にうたへ主もいかなぞをばせしかどもわどのの正直の心に主の後生をたすけたてまつらむとをもう心がうじやうにしてすれんをすすればかかるりしやうにもあづからせ給うぞ

かし此は物のはしなり大果報は又来るべしとおぼしめせ、又此の法門の一行いかなる本意なき事ありとも・みずきかずいわずしてむつばせ給へ、大人にはいのりなしまいらせ候べし、上に申す事私の事にはあらず外典三千・内典五千の肝心の心をぬきて・かきて候、あなかしこ・あなかしこ 恐恐 謹言。

卯月二十三日

にちれん
日蓮在御判

ごへんじ
御返事

一一一四

中務左衛門尉殿御返事
さえもんのじよう
ごへんじ

こうあんがんねん
弘安元年六月 五

十七歳御作 1178p

そ
夫れ人に二病あり、一には身の病所謂地大百一水・大百一火・大百一風・

大百一已上四百四病・此の病は治水・流水・耆婆・偏鵲等の方薬をもつて

こ
此れを治す、二には心の病所謂三毒・乃至八万四千の病なり、仏に有らざれ

ば二天三仙も治しがたし何に況や神農・黄帝の力及ぶべしや、又心の病に重

せんじん
重の浅深分れたり
ろくどう
六道の凡夫の三毒・八万
ほんぶ
さんどく
はちまん

四千の心の病をば小乗しょうじょうの三蔵俱舎さんぞうぐしゃ・成実じょうじつ・律宗りつしゅうの仏こ此れを治す大乘だいじょうの華嚴けこん・般若はんにか・大日經等だいにちきようの經經ききょうをそしりて起る三毒さんどく八万の病をば小乗しょうじょうをもつて此れを治すればかへりては增長ぞうぢょうすれども平愈へいゆ全くなし、大乘だいじょうをもつて此れを治すべし、又諸大乘しよだいじょうききょう經ききょうの行者ぎやうじやの法華經ほけききょうを背そむきて起る三毒さんどく八万の病をば華嚴けこん・般若はんにか・大日經だいにちきよう・真言三論等しんこんさんろんをもつて此れを治すればいよいよ增長ぞうぢょうす、譬たとへば木石等ぼくせきより出いでたる火は水をもつて消しやすし水より起る火は水をかくればいよいよ熾盛しじょうに炎上りて高くあがる、今の日本国にほんこく去年の疫病えきびやうは四百四病にあらざれば華陀かた偏鵲へんじやくが治およも及およばず小乗しょうじょう・權大乘ごんだいじきようの八万四千の病にもあらざれば諸宗しよしゅうの人人ひとびとのいのりも叶はずかへりて增長ぞうぢょうするか、設たといい今年ことしは・とどまるとも年年に止とどめたからむか、いかにも最後さいごに大事だいじ出来しゅつして後定ごていまる事も候そうらはんずらむ、法華經ほけききょうに云いく「若もし医道いどうを修しゆして方まさに順したがつて病を治せば更

に他の疾を増し・或は復死を至さん而も復増劇せん」涅槃經に云く「爾の時に王舎大城の阿闍世王。偏体に瘡を生じ乃至是くの如き創は心に從て生ず、

四大より起るに非ず、若し衆生能く

治する者有りと言はば是の処有ること無けん」云云、妙樂の云く「智人は

起を知り蛇は自ら蛇を識る」云云、此の疫病は阿闍世王の瘡の如し彼の仏

に非ずんば治し難し此の法華に非ずんば除き難し、將又日蓮下痢去年十二

月卅日事起り今年六月三日四日日に度をまし月月に倍增す定業かと存ずる

処に貴辺の良藥を服してより已来

日日月月に減じて今百分の一となれり、しらず教主釈尊の入りかわりまい

らせて日蓮をたすけ給うか、地涌の菩薩の妙法蓮華經の良藥をさづけ給え

るかと疑い候なり、くはしくは筑後房申すべく候。又追つて申すきくせ

んは今月二十五日戌の時来りて候・種種の物かずへつくしがたし、ときどの

のかたびらの申し給もうわるべし、又女房にようぼうの御を・をちの御事おんことなげき入つて候
よし申し給もうふべし、恐きようきよう恐。

六月廿六日

日蓮にちれん花押かおう

中務佐衛門尉殿御返事ごへんじ

一一五

四糸金吾殿御返事

弘安元年九月 五十七歳 御作

1180p

錢一貫文給いて頼基がまいらせ候とて法華經の御宝前に申し上げて候、定
めて遠くは教主釈尊・並に多宝・十方の諸仏・近くは日月の宮殿にわたら
せ給うも御照覧候ぬらん、さては人のよに・すぐれんとするをば賢人・聖人
と・をばしき人人も皆そねみ・ねたむ事に候、いわうや常の人をや、漢皇の
王昭君をば三千のきさき是をそねみ帝釈
の九十九億那由佗のきさきは 戸迦をねたむ、前の中書王をば・をのの宮の
大臣是をねたむ、北野の天神をば時平の大臣是をざんそうして流し奉る、此等
をもて・をばしめせ、入道殿の御内は広かりし内なれども・せばく

ならせ給たまいきうだちは多くわたらせ給たまう、内のとしごろの人人ひとびと・あまたわたらせ給たまへば池の水すくなくなれば魚さわがしく秋風立てば鳥こずえをあらそう様に侯事そうじに侯そうじへば、いくそばくそ御内の人人ひとびとそねみ侯そうじらんに度度の仰おほせをかへし・よりよりの御心にたがはせ給たまへばいくそばくのざんげんこそ候そうじらんに、度度の御所領しよりようをかへして今又所領給しよりようたまはらせ給たまうと云云、此れ程この不思議ふしぎは候そうじはず此れ偏ひとえに陰徳あれば陽報ありとは此これなり。

我が主ほけきように法華經を信じさせまいらせんと・をばしめす御心のふかき故か、あじゃせ阿闍世王あだは仏の御怨みよなりしが耆婆大臣ぎばだいじんの御すすめによつて法華經を御信ほけきようじありて代たもを持ち給たまう、妙莊嚴王みようそうじんは二子の御すすめによつて邪見じゃけんを・ひるがへし給たまう、此れ又しかるべし貴辺きへんの御すすめによつて今は御心も・やわらがせ給たまいてや候そうじらん・此れ偏ひとえに貴辺きへんの法華ほつけ

經の御信心しんじんのふかき故なり、根ふかければ枝さかへ源遠みなもととおければ流長もうしと申し

て一切いっさいの経は根あさく流ちかく法華ほけきよう経は根ふかく頂いただきとをし、末代まつだい・悪世あくせまでも・つきず・さかうべしと天台てんだいだいし大師あそばし給たまへり、此の法門ほうもんにつきし人あまた候いしかども・をほやけかたくしの大難だいなん・度度たびたび重なり候いしかば一年・二年こそつき候いしが後後みなには皆

・或はをち・或はかへり矢をいる、・或は身はをちねども心をち・或は心は・
をちねども身はをちぬ。

釈迦しゃかぶつ仏は淨飯王じょうばんの嫡子・一閻浮提えんぶだいを知行ちぎようする事・八万四千二百一十の大王だいおう

なり・一閻浮提えんぶだいの諸王しよ・頭こづへをかたぶけん上・御内に召しつかいし人十萬億じゅうまん

人なりしかども十九の御年・淨飯王宮じょうばんおうぐうを出でさせ給たまいて檀特山だんどくせんに入りて十二

年、此の間御みともの人五人なり、所謂拘鄰いわゆるくりんとあびと跌提ばつだいと十力迦葉かしようと拘利太子くりたいし

となり、此の五人も六年と申せしに二人は去りぬ残りの三人も後の六年にす

て奉りたてまつて去んぬ、但一人残り給たまつてこそ仏にはならせ給たまいしか、法華經ほけきようは

又此これにもすぎて人はじがたかるべし難信難解なんしんなんげこ此れなり、又仏の在位よりも

末法まつぽうは大難だいなんかさなるべし、此これをこらへん行者は我が功德くどくには・すぐれたる

事・一劫いつくわうとこそ説かれて候へ、仏滅度後ぶつめつご・二千二百三十余年になり候に月氏がっし

・一千余年が間・仏法ぶつぽうを弘通くつうせる人・伝記でんきにのせて・かくれなし、漢土かんど一千

年・日本七百年・又目錄にのせて候（そつち）いし

かども仏のごとく大難（だいなん）に値（あ）える人人少（ひとびと）し、我も聖人（しやうにん）・我も門人（もんじん）とは申せども

きようめつごき 況滅度後の記文（きもん）に値（あ）える人・一人も候はず、竜樹菩薩（りゆうじゆぼさつ）・天台（てんだい）・伝教（でんぎよう）こそ仏法（ぶつぽう）

だいなん 大難（だいなん）に値（あ）える人人（ひとびと）にては候へども此等（これら）も仏説（ぶつせつ）には及ぶ事なし、此れ即代（こそく）の

あがり法華經（ほけきよう）の時に生れ候はせ給（たま）はざる故なり。

今は時すでに後・五百歳・末法の始なり、日には五月十五日・月には八月

十五夜に似たり、天台（てんだい）・伝教（でんぎよう）は先に生れ給（たま）へり今より後は又のちぐへなり、

だいじん 大陣（だいじん）すでに破（わ）れぬ余党（よとう）は物のかずならず、今こそ仏の記（しる）しをき給（たま）いし後・五

百歳・末法の初（まつぼうのはじめ）・況滅度後の時に当りて候（そつち）へば仏語（ぶつご）むなしからずば一閻浮提（えんぶだい）

の内に定（まつぼうのはじめ）のて聖人（しやうにん）出現（しやうげん）して候らん、聖人（しやうにん）の出（い）ずるしには一閻浮提（えんぶだい）第一（だいいち）

の合戦（あひびたい）をこるべしと説かれて候にすでに合戦も起りて候にすでに聖人（しやうにん）や一

閻浮提（えんぶだい）の内に（い）出でさせ給（たま）いて候らん、きりん出（い）でしかば孔子（こうし）を聖人（しやうにん）としる鯉

社なつて聖人^{しょうにん}出で給う事^{たま}疑^{うたがい}なし、仏には

梅檀^{せんだ}の木をひて聖人^{しょうにん}とし、老子^{ろうし}は二五の文を結んで聖人^{しょうにん}とし、末代^{まつだい}の

法華經^{ほけきょう}の聖人^{しょうにん}をば何を用つてかしるべき、經^{きやう}に云^いく、「能説此經^{のうじしきやう}・能持此經^{のうじしきやう}の

人^{にん}・則^{すなは}ち如来^{にょらい}の使なり」八卷・一卷・一品・一偈^{いちげ}の人^{にん}・乃至^{ないしだいもく}題目^{とくめい}を唱^{とな}うる人

・如来^{にょらい}の

使なり、始中終しちゆうじゆうすてずして大難だいなを・とをす人・如来にょらいの使なり。

日蓮にちれんが心は全く如来にょらいの使にはあらず凡夫ぼんぷなる故なり、但し三類さんるいの大怨敵おんてきに

あだまれて二度の流難なんに値あへば如来にょらいの御使おんつかいに似たり、心は三毒さんどくふかく一身

凡夫ぼんぷにて侯そうらへども口に南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと申せば如来にょらいの使に似たり、過去かこを

尋たずねれば不輕菩薩ぶきやうぼさつに似たり、現在げんざいを・とぶらうに加刀とうじやう杖瓦そうわにたがう事なし、

未来みらいは当詣道場とうけいどうじやう疑たがいなからんか、

これをやしなはせ給たまう人人ひとびとは豈浄土あにじやうどに同居するの人にあらずや、事多しと申

せどもとどめ侯心をもて計たまらせ給たまうべし。

ちこのそらうよくなりたり悦よろこび侯ぞ、又大進阿闍梨あじゃりの死去しきよの事・末代まつだいのぎ

ば・いかでか此これにすぐべきと皆人みな・舌しなをふり候なり、さにて候いけるやら

ん、三位房あたらが事さう四郎ふけいふけいが事・此の事は宛も符契符契もつと申しあひて候、日蓮にちれん

が死生もちをば・まかせまいらせて侯、全く他のくすしをば用もちいまじく侯なり。

こうあんがんねん

弘安元年戌寅九月十五日

しじょうきんこ

四条金吾殿

にちれんかおう

日蓮花押

鷺目がもく一貫文給たまい候おわい畢おわんぬ、御所領上しりょうより給たまわらせ給たまいて候たまなる事まこと
とも覚おぼへず候夢かとあまりに不思議ふしぎに覚おぼへ候、御返事ごへんじなんどもいかやうに申もうす
べしとも覚おぼへず候、其そのの故ゆえはとのの御身おんみは日蓮にちれんが法門ほうもんの御ゆへに日本国並にほんこくに
かまくら中御内の人人ひとびときうだちまでうけずふしぎにをはれて候へば其その御
内にをはせむだにも不思

議ごに候に御恩ごおんをかうほらせ給たまへばうちかへし又うちかへしせさせ給たまへばいか
ばかり同れいどももふしぎとをもひ上もあまりなりと・をぼすらむ、されば
このたびはいかんが有あるべかるらんとうたがひ思おもひ候おもつる上・御内の数十人
の人人ひとびとうつたへて候へばさればこそいかにもかなひがたかるべし、あまりな

る事なりと疑候うたがいいつる上・

兄弟きょうだいにもすてられてをはするにかかる御をん面目申めんもくもうすばかりなし、かの処ところ

はとのをかの三倍とあそばして候上さどの国のもののこれに候がよくよく

其の処そこをしりて候もうが申し候は三箇郷の内にいかだと申もうすは第一だいいちの処ところなり、

でんばた

田畠はすくなく候へどもとくははかりなしと申もうし候ぞ、一所はみねんぐ千貫

一所は三百貫と云云、かかる

ところ

処なりと承はる、なにとなくともどうれいといひしたしき人人ひとびとと申もうすては

てられてわらひよろこびつるにとのをかにをとりて候処ところなりとも御下くだし文は

給たく候つるぞかしまして三倍の処ところなりと候、いかにわろくともわろきよし

人にも又上へも申もうさせ給たまうべからず候、よきところ・よきところと申もうし給たまは

ば又かさねて給たまはらせ給たまう

ところ

べし、わろき処・徳分なしなむど候はば天にも人にも・すてられ給たまい候はむ

ずるに候ぞ、御心へあるべし。

阿闍世王^{あじゃせ}は賢人^{けんじん}なりしが父をころせしかば即時^{そくじ}に天にもすてられ大地^{だいち}もや

ぶれて入りぬべかりしかども・殺されし父の王一日に五百りやう五百りやう

数年が間・仏を供養^{くよう}しまいらせたりし功德^{くどく}と後に法華經^{ほけきよう}の檀那^{だんな}となる

くどく
べき功德によりて天もすてがたし地もわれずついに地獄じごくにをちずして仏にな
り給たまいき、たまい、とのも又かくのごとし・兄弟きょうだいにもすてられ同れいにもあだまれき
うだちにもそばめられ日本国にほんこくの人にもにくまれ給たまいつれども、去いぬる文永八
年の九月十二日の子丑うしの時・日蓮にちれんが御勘ごかん氣をかほりし時馬の口にとりつきて
鎌倉かまくらを出いでてさがみのえちに

御ともありしが、一閻浮提第一えんぶだい だいいちの法華經ほけきょうの御かたうどにて有りしかば梵天ぼんでん・
帝釈たいしゃくもすてかねさせ給たまへるか、仏にならせ給たまはん事もかくのごとし、いかな
る大科だいかありとも法華經ほけきょうをそむかせ給たまはず候たいし、御ともの御ほうごうに
て仏にならせ給たまうべし、例せば有徳国王うとくこくおうの覺徳比丘かくとくびくの命にかはりて釈迦しゃか仏と
ならせ給たまいしがごとし、法華經ほけきょうはいのりとはなり候たいけるぞ。

あなかしこ・あなかしこ、いよいよ道心堅固どうしんけんこにして今度このたび仏になり給たまへ、御
一門いちもんの御房ごぼうたち又俗人等ごんじょうにも・かかるうれしき事候たはず、かう申せば今生こんじょうの

よくと・をばすか、それも凡夫ほんぶにて候へばさも候べき上慾うえをも・はなれずし
て仏になり候ける道の候けるぞ、普賢ふげん經に法華經の肝心かんじんを説きて候「煩惱ぼんのうを
断だんぜず五欲を離れず」等云云、天台てんだい
大師だいしの摩訶止觀まかしかんに云く「煩惱即菩提・生死即涅槃」等云云、竜樹りゅうじゆ菩薩ぼさつの大論だいろん
に法華經の一代いちだいにすぐれて・いみじきやうを釈しゃくして云く、譬たとえば大藥師やくしの能く
毒を變じて藥なと為すが如ごとし」等云云、「小藥師やくしは藥を以て病を治す大医は大毒
をもつて大重病じゅうびやうを治す」等云云。

弘安元 戊寅 年十月 日
こうあん つちのえとら

四条金吾殿御返事
しじょうきんご ごへんじ

日蓮花押
にちれんかおう

一一一七

四糸金吾殿御返事 しじょうきんごごへんじ

弘安元年十月 こうあんがねん

五十七歳御作

1185p

今月二十二日信濃より贈られ候いし物の日記 につぎ 銭三貫文・白米能米俵一・

餅五十枚・酒大筒一・小筒一・串柿五把・柘榴十、 じゃくろ 夫れ王は民を食とし民は

王を食とす衣は寒温をふせぎ食は身命 しんみょう をたすく、 たとえ 譬ば油の火を継ぎ水の魚

を助くるが如し、 ごと 鳥は人の害せん事を恐れて木末に巢くふ、 しか 然れども食のた

めに地にをりてわなにかかる、魚は淵 ふち の

底に住みて浅き事を悲しみて穴を水の底に掘りてすめども餌にばかされて鉤
をのむ、 おんじき 飲食と衣薬とに過ぎ す たる人の宝や候べき。

而 しか に日蓮 にちれん は他人 たにん にことなる上山林 さんりん の栖就 なかんずく 中 な 今年 えきれい は疫癘 けち 飢渴 しゅんか に春夏 すこ は過越

し秋冬は又前にも過ぎたり、又身に当りて所勞大事になりて候つるをかたが
の御薬と申し小袖彼のしなじなの御治法にやうやう驗し候て今所勞平愈し本
よりもいさぎよくなりて候、弥勒菩薩の瑜伽論竜樹菩薩の大論を見候へば定
業の者は薬變じて毒と

なる法華經は毒變じて薬となると見えて候、日蓮不肖の身に法華經を弘めん

とし候へば天魔競ひて食をうばはんとするかと思ひて歎かず候いつるに今度

の命たすかり候は偏に釈迦仏の貴辺の身に入り替らせ給いて御たすけ候か。

是はさてをきぬ、今度の御返りは神を失いて歎き候いつるに事故なく鎌倉

に御歸り候事悦びいくそばくぞ、余りの覺束なさに鎌倉より来る者ごとに問

い候いつれば・或人は湯本にて行き合せ給うと云い・或人はこうづにと・或

人は鎌倉にと申し候いしにこそ心落居て候へ、是より後はおぼろげならずば

御渡りあるべからず大事の御事候はば御使にて承わり候べし、返す返す今度

の道は・あまりに・おぼつかなく候いつるなり、
敵と申もつす者は・わすれさせ

てねらふものなり、是より後に若やの御旅には御馬をおしましませ給ふべからず、よき馬にのらせ給へ、又供の者どもせんにあひぬべからんもの又どうまるもちあげぬべからん御馬にのり給うべし、摩訶止觀第八に云く弘決第八に云く「必ず心の固きに仮つて神の守り則ち強し」云云、神の護ると申すも人の心つよきによるとみえて候、法華經はよきつるぎなれどもつかう人によりて物をきり候か。

されば末法に此の經をひろめん人人舍利弗と迦葉と觀音と妙音と文殊と薬王と此等程の人やは候べき、二乗は見思を断じて六道を出でて候菩薩は四十一品の無明を断じて十四夜の月の如し、然れども此等の人人には・ゆづり給はずして地涌の菩薩に譲り給へり、されば能く能く心をきたはせ給うにや、李広將軍と申せし・つはもの

は虎に母を食れて虎に似たる石を射しかば其の矢羽ぶくらまでせめぬ、後に

石と見ては立つ事なし、後には石虎將軍と申しき、貴辺も又かくのごとく敵
はねらふらめども法華經の御信心強盛なれば大難も・かねて消え候か、是に
つけても能く能く御信心あるべし、委く紙には尽しがたし、恐恐謹言。

こうあんがなんつちのえとち

弘安元年 戊寅 後十月二十二日

日蓮花押

四条左衛門殿御返事

一一一八 日眼女造立釈迦仏供養事 しやかぶつ くよう 弘安二年二月 こうあん 五十八歳

御作

1187p

御守書てまいらせ候三界さんがいの主 教主釈尊あるじきようしやくそん 一体三寸さんすんの木像造立の檀那だんな日眼女

・御供養くようの御布施ふせ前に二貫今一貫云云。

法華經ほけきようの寿量品じゆりようほんに云く、或は己身ある こしんを説き、或は他身あるを説く、等云云、東方とうほう

の善徳仏・中央の大日如来だいにちによらい・十方じゅうぽうの諸仏しよぶつ・過去かこの七仏さんぜ・三世しよぶつの諸仏・

上行菩薩等じょうぎやうぼさつ・文殊師利もんじゆしり・舍利弗等しゃりほつ・大梵天王だいぼんてんのう・第六天だいろくてんの魔王まおう・釈提桓因王しやくだいかにん

・日天にってん・月天がつてん・

明星天・北斗七星・二十八宿・五星七星・八万四千はちまんの無量の諸星むりよう・阿修羅王しよせい あしゆら

・天神てんじん・地神・山神・海神・宅神・里神・一切世間いっさいせけんの国国の主とある人何れいすれ

か教主釈尊きようしやくそんならざる天照太神てんしょうだいじん・八幡大菩薩はちまんたいぼさつも其その本地ほんちは教主釈尊きようしやくそんなり、

例せば釈尊しゃくそんは天の一月諸仏しよぶつ・菩薩等ぼさつは万水ばんすいに浮べる影なり、釈尊しゃくそん一体を造立する人は十方世界の諸仏しよぶつを作り奉る人なり、譬たとえば頭こつへをふればかみゆるぐ心はたらけば身みうごく、大風吹けば草木そうもくしづかならず大地だいちうごけば大海たいかいさはがし、教主きようしゅ釈尊しゃくそんをうごかし奉たてまればゆるがぬ草木そうもくやあるべきさわがぬ水やあるべき。

今日けふの日眼女は三十七のやくと云云、やくと申もうすは譬たとえばさいにはかどますにはすみ人にはつきふし方まさには四維よすみの如ごとし、風は方よりふけばよはく角より吹けばつよし病は肉より起れば治しやすし節より起れば治しがたし、家にはかきなれば盗人ぬすびといる人にはとがあれば敵便てきべんをうく、やくと申もうすはふしぶしの如ごとし、家にかきなく人に

科とがあるがごとし、よきひやうしを以てまほらすれば盗人ぬすびとをからめとる、ふしの病をかめて治すれば命ながし、今教主きようしゅ釈尊しゃくそんを造立し奉たてまれば下女たいしが太子たいしを

うめるが如しこと國王尚此こくおうなの女を敬うやまひ給たまふ何いかに況や大臣だいじん已下いをや、大梵天王だいぼんてんのう・
釈提桓因王しゃくだいかんにん・日月等にちがつ・此この女人にょにんを守り給たまふ況や大小だいしょうの神祇じんぎをや、昔優填大王うでんだいおう・
釈迦しゃか・仏ぶつを造立たてまつし奉りしかば大梵天王だいぼんてんのう・日月等にちがつ・木像くようを礼しに参り給たまいしか
ば木像説いわいて云く「我くを供養くようせんよりは優填大王うでんだいおうを供養くようすべし」等云云、影堅ようげん
王わうの画像しやくそんの釈尊しゃくそんを書き奉りしも又是かくの如し、法華經ほけきように云く「若もし人・仏
の為ゆえの故に諸もろもろの形像ぎやうざうを建立こんりゅうす是かくくの

こと しよにん 如き諸人等皆已に仏道を成じき云云、文の心は一切の女人釈迦仏を造り奉れ
げんさい ば現在には日日・月月の大小の難を払ひ後生には必ず仏になるべしと申す文
なり。

そもそもによにん

いちだい

きようぎよう

抑 女人は一代五千・七千余巻の経に仏にならずときらはれます、

ほけきよう

によにん

てんだいちしゃだいし

いわ

但法華経ばかりに女人・仏になると説かれて候、天台智者大師の釈に云く「女

しゃく

いっさいきよう

によにん

つぎしも

いわ

に記せず」等云云、釈の心は一切経には女人・仏にならずと云云、次下に云く

こんきよう

みなしる

ほけきよう

りゅうにょ

てんだい

「今経は皆記す」と云云、今の法華経にこそ竜女仏になれりと云云、天台

ちしゃだいし

ほとけめつど

かんど

い

智者大師と申せし人は仏滅度の後・一千五百年に漢土と申す国に出でさせ

たまひ

ほけきよう

ほか

給いて一切経を十五返まで御覧あそばして候いしが法華経より外の経には

によにん

みょうらくだいし

いわ

いちだい

女人・仏にならずと云云、妙楽大師と申せし人の釈に云く「一代に絶えたる

しゃく

いっさいきよう

ほうもん

ほけきよう

もう

所なり」等云云、釈の心は一切経にたえたる法門なり、法華経と申すは星の

しゅみせん

たいかい

こと

こ

中の月ぞかし人の中の王ぞかし山の中の須弥山水の中の大海の如し、是れ程

いみじき御経に女人・仏になると説かれぬれば一切経に嫌はれたるになにか
くるしかるべき、譬えば盗人・

夜打・強盗・乞食・渴体にきはれたらんと国の大王に讃られたらんと何れ

かうれしかるべき、日本国と申すは女人の国と申す国なり、天照太神と申せ

し女神のつきいだし給える島なり、此の日本には男十九億九万四千八百二十

八人女は二十九億九万四千八百三十人なり、此の男女は皆・念佛者にて候ぞ皆

・念佛なるが故に阿弥陀仏を本尊

とす現世の祈りも又是くの如し、設い釈迦仏をつくりかけども阿弥陀仏の浄土

へゆかんと思いて本意の様には思ひ候はぬぞ、中中つくりかかぬにはをとり

候なり。

今日眼女は今生の祈りのやうなれども教主釈尊をつくりまいらせ給ひ候

へば後生も疑なし、二十九億九万四千八百三十人の女人の中の第一なりと

おぼしめすべし、委くわくは又もう又申もうすべく候、恐き恐よう謹き言んげん。

弘安二年己卯こうあん つちのと二月二日

花押かおう

日眼女御返事ごへんじ

日蓮にちれん

二一九

聖人御難事 しょうにん なん

弘安二年十月五十八歳御作 こうあん 与門人等 もんじん

1189p

い 去ぬる 建長五年 けんちよう 癸丑 みづのえ 四月二十八日に安房の国・長狭郡の内東条の郷今は郡

なり、天照太神の御くりや右大將家の立て始め給いし日本第二のみくりや今 てんしょうだいじん うだいしょうけ たまい にほん

は日本第一なり、此の郡の内清澄寺と申す寺の諸仏坊の持仏堂の南面にして にほんだいいち きよすみでら もつ しばつ

午の時に此の法門申しはじめて今に二十七年弘安二年「太歳己卯」なり、仏 ほつもんもつ こつあん つちのとう

は四十余年天台大師は三十余年・ よんじゅうよねんでんだいだいし

伝教大師は二十余年に出世の本懷を遂げ給う、其中の大難申す計りなし先 でんぎようだいし しゅつせ ほんかい と たま ごちゆう だいなんもつ ばか

に申すがごとし、余は二十七年なり其の間の大難は各各かつしろしめせり。 もつ ほけきよう いわ しか によらい げんざい なおおんしつ

法華經に云く「而も此の經は如来の現在にすら猶怨嫉多し、況や滅度の後 しやかによらい だいなん そ

をや」云云、釈迦如来の大難はかずをしらず、其の中に馬の麦をもつて九十 めつど

日・小指の出仏身血・大石の頂いただきにかかりし、善生比丘等びくの八人が身は仏の

御弟子・心は外道にともないて昼夜十二時に仏の短ひまをねらいし、無量の釈子むりよう

の波瑠璃王に殺されし・無量の弟子等

が悪象にふまれし阿闍世王の大難をなせし等、此等は如来現在の小難なんなり、

況滅度後の大難は竜樹・天親・天台・伝教いまだ値い給はず法華經の行者

ならずといわば・いかでか行者にてをはせざるべき、又行者といはんとす

れば仏のごとく身より血をあやされず、何に況や仏に過ぎたる大難なし經文きようもん

むなしきがごとし、仏説すでに大

虚妄となりぬ。

而るに日蓮二十七年が間弘長元年こつちようがんねん辛酉五月十二日には伊豆の国へ流罪、

文永元年ぶんえい十一月十一日頭こつへにきずをかほり左の手を打ちをらる、同文永八年

辛未九月十二日佐渡の国へ配流又頭の座に望む其の外に弟子を殺され切ら

れ追出くわれう等かずをしらず仏の大難だいなんには及ぶか勝すぐれたるか其は知らず、
竜樹・天親・天台・伝教りゆうじゆ てんじん てんだい でんぎようは余に肩を

並べがたし、日蓮末法にちれんまつぽうに出いでずば仏は大妄語もうごの人多宝たほう・十方じゅうぽうの諸仏しよぶつは大虚妄こもう

の証しょうみょう明あきらなり、仏滅後ぶつめつ・二千二百三十余年が間かん・一閻浮提えんぶだいの内に仏の御言みことばを

助けたる人但日蓮一人にちれんなり、過去かこ・現在げんざいの末法の法華經まつぽうの行者ほけきやうを輕賤ぎやうじやする

おうしんばんみん

王臣万民始めは事なきやうにて終ついにほろびざるは候はず、日蓮又かくのごと

し、始めはしるしなきやうなれども今二十七年が間かん、法華經守護ほけきやうしゆごの梵釈ぼんしゃく・日月にちがつ

・四天等してんさのみ守護しゆごせずば仏前ぶつぜんの御誓むげんむなしくて無間むげん・大城だいじやうに墮おつべしと・

お

そろしく想う間今は各各はげむらむ、大田の親昌ちかまさ・長崎次郎兵衛あみの尉時綱あみ・

大進房ほけきやうが落馬等えきびやうは法華經ほけきやうの罰そつばちのあらわるるか、罰べつばちは総罰けんばち・別罰みようばち・顯罰けんばち・冥罰みようばち

・四候にほんこく、日本国えきびやうの大疫病えきびやうと大けかちとどううちと他国たこくよりせめらるるは総あみば

ちなり、やくびやうは冥みよう罰ばちなり、大田等げんばちは現罰げんばちなり別べつばちなり、各各師子王しし

の心を取り出していかに人をどすと

もをつる事なかれ、師子王は百獸にをぢず師子の子又かくのごとし、彼等は
野干のほうるなり日蓮が一門は師子の吼るなり、故最明寺殿の日蓮をゆるし
しと此の殿の許ししは禍なかりけるを人のざんげんと知りて許ししなり、今
はいかに人申すとも聞きほどこかずしては人のざんげんは用い給うべからず、
設い大鬼神のつける人なりと
も日蓮をば梵釈・日月・四天等・天照太神・八幡の守護し給うゆへにばつ
しがたかるべしと存じ給うべし、月月・日日につより給へすこしもたゆむ心
あらば魔たよりをうべし。

我等凡夫のつたなさは経論に有る事と遠き事はおそる心なし、一定とし
て平等も城等もいかりて此の一門をさんざんとなす事も出来せば眼をひさ
いで観念せよ、当時の人人のつくしへかさされんずらむ、又ゆく人・又か
しこに向える人人を我が身にひきあてよ、当時までは此の一門に此のなげき

なし、彼等^{かれら}はげんはかくのごとし殺されば又地獄^{じごく}へゆくべし、我等^{われら}現^{げん}には此
の大難^{だいなん}に値^あうとも後生^{ごしょう}は仏になりなん、設^{たと}えば灸治^{やいと}のごとし当^{とう}時^じはいたけれ
ども後の薬なればいたくていたからず。

彼のあつわらの愚癡^{ぐち}の者どもいゝはげましてをどす事なかれ、彼等^{かれら}にはた
だ一えんにおもい切れ・よからん

は不思議ふしぎわるからんは一定と・をもへ、ひだるしとをもわば餓鬼がき道を・をしへよ、さむしといわば八じゅうかん地獄じごくを・をしへよ、をそろししといわばたかにあへるきじねこにあえるねずみを他人たにんとをもう事なかれ、此これはこまごまとかき候事はかくとしどし月月・日日に申もうして候へどもなごへの尼せう房のと房三位房なんどのやうに候、をくびやう物をぼへずよくふかくうたがい多き者どもはぬれるうるしに水をかけそらをきりたるやうに候ぞ。

三位房が事は大不思議ふしぎの事ども候いしかどもとのばらのをいには智慧ちえある者をそねませ給たまうかと・ぐちの人をもいなんとをもちて物も申もうさで候いしが、はらぐろとなりて大難だいなんにもあたりて候ぞ、なかなかさんざんと・だにも申せしかばたすかるへんもや候いなん、あまりにふしぎさに申もうさざりしなり、又かく申せばおこ人どもは死もうの事を仰おおせ候と申もうすべし、鏡のために申もうす又此の事は彼等かれらの人人も内内はおぢおそれ候らむと・おぼへ候ぞ。

人のさわげばとてひやうじなんと此の一門いちもんにせられこば此れへかきつけてた
び候へ、きようきようきんげん恐恐謹言。

十月一日

にちれんかおう
日蓮花押

ひとびとおんちゆう
人人御中

さぶらうざへもん殿のもとにとどめらるべし。

一一一〇

四糸金吾殿御返事

弘安二年十月 五十八歳御

作

1192p

先度強敵いっせきととりあひについて御文給いき委くわく見まいらせ候、さても・さても・敵人てきじんにねらはれさ給たまいしか、前前の用心ようじんといひ又けなげといひ又法華經ほけきやうの信心しんじんつよき故ゆえに難なんなく存命せさせ給たまい目出たし目出たし、夫それ運うんきはまりぬれば兵法もいらす・果報かほうつきぬれば所従しよじゆうもしたがはず、所詮しよせん運うんものこり果報かほうもひかゆる故なり、ことに法華經ほけきやうの行者ぎやうじやをば諸天しよてん・善神ぜんじん・守護しゆごすべきよし属累品ぞくるいばんにして誓状せいじやうをたて給たまい・一切いっさいの守護神しゆごしん・諸天しよてんの中にも我等われらが眼まなこに見しへて守護しゆごし給たまうはうは日月天にちがつてんなり争いかでか言ことをとらざるべき、ことに・ことに日天にってんの前に摩利支天ぼりしてんします。日天にってん・法華經ほけきやうの行者ぎやうじやを守護しゆごし給たまはんはんに所従しよじゆう

の摩利支天尊たまたすで給うべしや、序品じよほんの時・名月天子ながつてんし・普光天子てんし・宝光天子てんし・
四大天王しやうだいてんわう与其眷属けんぞく・万天子てんし俱れつざと列座れつざし給ふ、まりし天は三万天子てんしの内なるべ
し、もし内になくば地獄じじくにこそおはしまさんずれ、今度このたびの大事だいじは此の天のま
ほりに非あらずや、彼の天は剣形きへんを貴辺きへんにあたへ此へ下りぬ、此の日蓮にちれんは首題しゆだいの
五字ごじ

を汝なんじこそさづく、法華經受持ほけきやうじゆじのものを守護しゆごせん事うたがひ疑うたがひあるべからず、まりし天
も法華經ほけきやうを持ちて一切衆生いっさいしゆじやうをたすけ給う、「臨兵闘者皆陣列在前みながいぜん」の文も
法華經ほけきやうより出でたり、「若説俗間經書治世語言資生業等皆順正法そつかんきやうしよちせいごげんしせい」とは是な
り、これに・つけても・いよいよ強盛かうじやうに大信力しんりきをいだし給へ、我が運命うんめいつき
て諸天守護しよてんしゆごなしとすらむる事あるべ

からず。

將門しやうもんは・つわものの名どとり兵法へいぽうの大事だいじをきはめたり、されども王命わうめいには

まけぬ、はんくわひ・ちやうりやうもよしなし・ただ心こそ大切なれ、いかに日蓮にちれんのり申もうすとも不信ふしんならばぬれたる・ほくちに・火をうちかくるが・ごとくなるべし、はげみをなして強盛じやうじやうに信力をいだし給たまうべし、すぎし存命不思議ふしぎとおもわせ給たまへなにの兵法よ

りも法事経の兵法をもちひ給うべし、たま「諸余怨敵・皆悉摧滅」の金言きんげんむなしかるべからず、兵法剣形の大事だいじも此の妙法みょうほうより出でたり、ふかく信心しんじんをとり給へ、あへて臆病おくびょうにては叶かなうべからず候、きょうきようきんげん恐恐謹言。

十月二十三日 日蓮花押 にちれんかおう

四条金吾殿御返事 しじょうきんご ごへんじ

一一二 四条金吾殿御返事 しじょうきんご ごへんじ

弘安三年十月五十九歳御作 こうあん

1193p

殿岡より米送り給ひ候、今年七月・孟蘭盆供の僧膳にして候、自恣じしの僧・りょうぜん靈山の聴衆・ちようしゅう仏陀・ぶつだ神明も納受随喜し給うらん、しんみよう尽きせぬ志・のうじゆずいき連連の御訪とむらい言を以て尽くしがたし。

何となくとも殿の事は後生菩提ごしようぼだい疑うたがいなし、何事なにことよりも文永八年ぶんえいの御勘氣ごかんきの

時すで既に相模さがみの国竜の口にて頸切られんとせし時にも殿は馬の口に付いて足歩かち

はだし

赤足にて泣き悲み給たまひいし事實にならば腹きらんとさどの氣色なりしをば・いつの

世にか思い忘るべき、そのみならず佐渡さどの島に放たれ北海の雪の下に埋もも

れ北山の嶺の山下風に命助かる

べしとも・をばへず、年来ともどちの同朋にも捨てられ故郷へ歸らん事は大海たいかいの底の

ちびきの石の思ひしてさすがに凡夫ぼんぶなれば古郷の人人ひとびとも恋しきに在俗ざいぞくの官仕みやずかえ

ひま

隙なき身に此の経を信ずる事こそ稀有なるに山河さんがを凌しのぎ蒼海へを経て遙はるかに尋ね

来り給たまひいし志こころざし香城くたに骨を砕くだき雪嶺ひとびとに身を投げし人人いにも争いかでか劣り給たまうべ

き、又我が身はこれ程に浮なんび難か

りしがいかなりける事にてや同十一年の春の比敕免しやめんせられて鎌倉かまくらに歸り上り

けむ、情事の情を案ずるに今は我身わがみに過あやまちあらじ、・或あるは命いのちに及およばんとし弘長こうちやう

には伊豆の国文永には佐渡の島諫曉再三に及べば留難重畳せり、仏法中怨
の誠責をも身にははや免れぬらん。

然るに今山林に世を遁れ道を進まんと思ひしに人人の語様なりしかども
かたがた 存する旨ありしに依りて当国・当山に入りて已に七年の春秋を送る、
又身の智分をば且らく置きぬ法華經の方人として難を忍び疵を蒙る事は漢土
てんだいだいし 天台大師にも越え日域の伝教大師にも勝れたり、是は時の然らしむる故な
り、我が身法華經の行者ならば靈山の教主釈迦浄世界の多宝如来・
じゅつぽうふんじん 十方分身の諸仏本化の大士迹化の大菩薩梵釈竜神十羅刹女も定めて
此の砌におはしますらん、水あれば魚すむ林あれば鳥来る蓬萊山には玉多く
まり 摩黎山には梅檀生ず麗水の山には金あり、今・此の所も此くの如し仏・菩薩
の住み給う功德聚の砌なり、多くの月日を送り読誦し奉る所の法華經の功德
こくう は虚空にも余りぬべし、然るを毎年度度の御参詣には無始の罪障も定めて
こんじょう 今生一生に消滅すべきか、弥はげむべしはげむべし。

十月八日

日蓮 花押
にちれん かおう

四
条
中
務
三
郎
左
衛
門
殿
御
返
事

さ
え
も
ん
ご
へ
ん
じ

一一一一

四條金吾許御文 しじょうきんご おんふみ

弘安三年十二月 五十九歳御 こうあん

作 与四條金吾女房 しじょうきんごにようぼう

1195p

白小袖一つ・縣十兩慥に給候い畢んぬ、歳もかたぶき候又処は山の中風は
げしく庵室はかこの目の如し、うちしく物は草の葉きたる物はかみぎぬ身の
ひゆる事は石の如し、食物は氷の如くに候へば此の御小袖給候て頓て
身をあたたまらんと・をもへども明年の一日とかかれて候へば迦葉尊者の・
足山にこもりて慈尊の出世・五十六億七千万歳をまたるるもかくやひさしか
るらん。

これはさてをき候ぬ、しるぢの四郎がかたり申し候・御前の御法門の事う
け給わり候こそ・よに・すずしく覚え候へ、此の御引出物に大事の法門一つ
け給わり候こそ・よに・すずしく覚え候へ、此の御引出物に大事の法門一つ

かき付けてまいらせ候、八幡大菩薩をば世間の智者愚者大体は阿弥陀仏の化身

と申し候ぞ、其れもゆへなきにあらず中古の義に・或は八幡の御託宣とて

阿弥陀仏と申しける事少少候、

此れはをのをの心の念仏者にて候故にあかき石を金と思いくひせをうさぎと

見るが如し、其れ實には釈迦仏にて・おはしまし候ぞ、其の故は大隅の国に

石体の銘と申す事あり、一つの石われて二つになる、一つの石には八幡と申す

二字あり、一つの石の銘には「昔靈鷲山に於て妙法蓮華經を説き今正宮の

中に在りて大菩薩と示現す」云云、

是れ釈迦仏と申す第一の証文なり、此れよりもことにまさしき事候、此の

八幡大菩薩は日本国人王第十四代・仲哀天皇は父なり、第十五代神功皇后は

母なり、第十六代応神天皇は今の八幡大菩薩是なり、父の仲哀天皇は天照太神

の仰せにて新羅國を責めんが為に渡り給ひしが新羅の大王に調伏せられ給ひ

て仲哀天皇てんのうははかたにて

崩御ほうぎよありしかば、きさきの神功皇后しんこうこうごうは此の太子たいしを御懷妊かいにんありながらわたらせ

給たまいしが、王の敵をうたんとて数万騎のせいをあい具しらして新羅国しらぎへ渡り給たまい

しに、浪の上船の内にて王子御誕生みこの氣いきいでき見え給たまう、其の時そのとき

神功皇后ははらの内の王子にかたり給ふ、汝は王子か女子か王子ならばたしかに聞き給へ、我は君の父仲哀天皇の敵を打たんが為に新羅国へ渡るなり、我が身は女の身なれば汝を大将とたのむべし、君日本国の主となり給うべきならば今度生れ給はずして軍の間腹の内にて数万騎の大将となりて父の敵を打たせ給へ、是を用ひ給はずして只今生れ給うほどならば海へ入れ奉らんずるなり、我を恨みに思い給うなど有りければ、王子・本の如く
胎内にをさまり給いけり、其の時石のをびを以て胎をひやし新羅国へ渡り給い新羅国を打ちしたがへて還つて豊前の国うさの宮につき給いここにて王子誕生あり、懐胎の後三年六月三日と申す甲寅の年四月八日に生れさせ給う是を応神天皇と号し奉る、御年八十と申す壬申の年二月十五日にかくれさせ給ふ、男山の主・我が朝の守護神正体めづらしからずして靈驗新たにおはします今の八幡大菩薩是なり。

又釈迦如来は住劫第九の減・人寿百歳の時浄飯王を父とし摩耶夫人を母

として中天竺伽毘羅衛国らんびに蘭と申す処にて甲寅の年四月八日に生れ

させ給いぬ、八十年を経て東天竺俱尸那城跋提河の辺にて二月十五日壬申

にかくれさせ給いぬ、今の八幡大菩薩も又是くの如し、月氏と日本と父母は

かわれども四月八日と甲寅と

二月十五日と壬申とはかわる事なし、仏滅度の後・二千二百二十余年が間

・月氏・漢土・日本・一閻浮提の内に聖人・賢人と生るる人をば皆釈迦如来

の化身とこそ申せども・かかる不思議は未だ見聞せず。

かかる不思議の候上八幡大菩薩の御誓いは月氏にては法華經を説いて

正直捨方便とならせ給い、日本国にしては正直の頂にやどらんと誓い

給ふ、而るに去ぬる十一月十四日の子の時に御宝殿をやいて天にのぼらせ給い

ぬる故をかんがへ候に此の神は正直の人の頂にやどらんと誓へるに正直

の人の頂いただきの候はねば居きよ処しよなき故ゆえに

栖たまりなくして天てんにのぼり給たまいけるなり、

日本にほん国の第一だいいちの不思議ふしぎには釈迦しやくか如来にょらいの

国しやくかに生うれて此この仏ぶつをすてて一切衆生いっさいしゆじやう・

皆みな一同いどうに阿弥陀仏あみだぶつにつけり、有縁うえんの

釈迦しやくかをばすて奉たてまつり無縁むえんの阿弥陀仏あみだぶつをあをぎたてまつりぬ、其その上親父

しゃかぶつ にゆうめつ 釈迦仏の入滅の日をば阿弥陀仏につけ又誕生の日をば薬師になしぬ、八幡大

ぼさつ あがむ 菩薩をば崇るやうなれども又本地を阿弥陀仏になしぬ、本地垂迹を捨つる

上に此の事を申す人をばかたきとする故に力及ばせ給はずして此の神は天に

のぼり給いぬるか、但し月は影を水にうかぶる濁れる水には栖ことなし、木

の上草の葉なれども澄める露には移る事なれば・かならず国主ならずとも

正直の人のかうべにはやどり給うなるべし。

しか ひやくおう 然れば百王の頂に・やどらんと誓い給いしかども人王八十一代・安德

てんのう おき 天皇・二代隠岐の法皇・三代阿波・四代佐渡・五代東一条等の五人の国王の

いただき 頂にはすみ給はず、諂曲の人の頂なる故なり、頼朝と義時とは臣下なれ

そ いただき ども其の頂にはやどり給ふ正直なる故か、此れを以て思うに法華經の人人

しょうじき 是正直の法につき給ふ故に釈迦仏・猶是をまほり給ふ、況や垂迹の八幡大

ぼさついかで これ 菩薩争か是をまほり給はざるべき、淨き水なれども濁りぬれば月やどる事な

し、糞水なれどもすめば影を惜み給はず、濁水は清けれども月やどらず糞水はきたなければどもすめば影を・をしまず、

濁水は智者ちしや学がく匠しやうの持戒じかいなるが法華經ほけきやうに背そむくが如ごとし、糞水は愚人ぐにんの無戒むかいなるが

とんよく

しんにこうじやう

ほけきやうばか

あ

貪欲こんよくふかく瞋恚しんにこうじやう強盛きやうせいなれども法華經ほけきやう計りはかりを無二無三むにむさんに信じまいらせて有あるが

ごと

ねはんぎやう

もつ

ほけきやう

とくどう

こうろふかくつ

もつ

如ごとし、涅槃經ねはんぎやうと申もつす經きやうには法華經ほけきやうの得道とくどうの者を列はねて候こうに 螻蛄ろうこと申もつして

糞虫ふんちゆうを挙げあげさせ給たまふ、竜樹菩薩りゆうじゆぼさつは法華經ほけきやうの不思議ふしぎを書き給たまうに 虫ちゆうと申もつし

て糞虫ふんちゆうを仏ぶつになす等とう云云うんぐん、又

ねはんぎやう

ほけきやう

涅槃經ねはんぎやうに法華經ほけきやうにして仏ぶつになるまじき人をあげられて候こうには「一闍提いつせんだいの人の

あらかん

ごと

ぼさつ

ごと

これら

阿羅漢あらかんの如ごとく、大菩薩だいぼさつの如ごとき」等とう云云うんぐん、此等これらは濁水だくすいは淨じやうけれども月の影かげを移うつ

す事ことなしと見みえて候こう、されば八幡大菩薩はちまんたいぼさつは不正しやうじき直ちやうをにくみて天てんにのぼり給たまう

ほけきやう

ぎやうじや

いかでそ

たま

いちもん

とも、法華經ほけきやうの行者ぎやうじやを見ては争いか其その影かげをばをしみ給たまうべき、我が一門いちもんは深ふか

く此この心を信しんぜさせ給たまうべし、八幡大菩薩はちまんたいぼさつは此こにわたらせ給たまうなり、疑うたがひい

給^{たま}う事なかれ 疑^{うたがい}い給^{たま}う事なかれ、
恐^{きょう}恐^{きょう}謹^{きんげん}言^{げん}。

十二月十六日

花押^{かおう}

四^し条^{じょう}金^{きん}吾^ご殿^{でん}女^{にょ}房^{ぼう}御^ご返^{へん}事^じ

日蓮^{にちれん}

一一二二三

四条金吾殿御返事 しじょうきんごごへんじ

弘安五年正月六十一歳御作 こうあんごうあんないそくご

1198p

満月まんげつのごとくなるもちぬ二十かんろのごとくなる・せいす一つ・給候たひそうらい
畢おわんぬ、春のはじめの御悦よろこびは月のみつるがごとく・しをのさすがごとく・
草のかこむが如ごとく・雨のふるが如ごとくと思し食すべし。

そもそも

抑八日は各各の御父・釈迦しゃかぶつ仏の生れさせ給たまい候し日なり、彼の日に三十
二のふしぎあり・一には一切いっさいの草木そうもくに花さき・みなる・二には大地だいちより一切いっさい
の宝わきいづ・三には一切いっさいのでんばたに雨ふらずして水わきいづ・四には夜
変

じてひるの如ごとし・五には三千世界さんぜんせかいに欺かきのこゑなし、是かくの如ごとく吉瑞の相の

みにて候し、是より已来^{このかた}今にいたるまで二千二百三十余年が間・吉事には八日をつかひ給^{たま}い候なり。

然^{しか}るに日本^{にほん}国・皆釈迦^{みなしや}仏を捨てさせ給^{たま}いて候に・いかなる過^か去^この善^{ぜん}根^{こん}にてや・法華^{ほけ}經^{きやう}と釈迦^{しや}仏^{かぶつ}とを御^お信^{しん}心^{じん}ありて・各各あつまらせ給^{たま}いて八日をくやう申^{もう}させ給^{たま}うのみならず・山中^{やま}の日蓮^{にちれん}に華かうを・をくらせ候やらん、たうとし・たうとし、恐^{きやう}恐^{きやう}。

正月七日

日蓮^{にちれん}花押^{かおう}

人人^{ひとびと}御返^{ごへん}事^じ

一二二四

月水御書ごしよ

ぶんえいがんねん
文永元年四月四十三歳御作

199p

伝え承はる御消息しようそくの状いわに云く法華經ほけきようを日ごとに一品づつ二十八日が間に一部八巻・二十八品・或は一卷・或は一品・一偈・一句二字・或は題目だいもくばかりを南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようと只一遍ただいっぺんとなへ・或は又一期の間あるいちよくにただ一遍唱いつぺんとなうるを聞いて隨喜ずいきし・或は又隨喜する声を聞あるい

て隨喜ずいきし・是体これていに五十展転ごじゆうてんでんして末になりなば志こころみもうすくなり隨喜ずいきの心の弱

き事・二三歳の幼稚の者のはかなきが如く・牛馬なんどの前後を弁へざるが
如くなりとも、他經を学する人の利根にして智恵かしこく・舍利弗・目連・
文殊・弥勒の如くなる人の諸經を胸の内にかべて御坐まさん人人の御功德
よりも勝れたる事・百千万億倍なるべきよ

し・經文並に天台・妙樂の六十巻の中に見え侍り、されば經文には「仏の

智慧を以て多少を籌量すとも其の辺を得ず」と説かれて仏の御智慧すら此

の人の功德をば・しろしめさず、仏の智慧のありがたさは此の三千大千世界

に七日・若しは二七日など・ふる雨の数をだにも・しろしめして御坐候な

るが只法華經の一字を唱えたる人の功德

をのみ知しめさずと見えたり、何に況や我等逆罪の凡夫の此の功德をしり候い

なんや、然りと云えども如来滅後二千二百余年に及んで五濁さかりになりて

年久し事にふれて善なる事ありがたし、設ひ善を作人も一の善に十の悪を

造り重ねて結句は小善につけて大悪を造り心には大善を修したりと云ふ
慢心を起す世となれり、然るに如来

の世に出でさせ給いて侯し国よりしては二十万里の山海をへだてて東によれ
る日域辺土の小嶋に生まれ・五障の雲厚うして三従の・きづなに・つながれ
給へる女人なんどの御身として法華経を御信用侯は・ありがたしなんど・

とも申すに限りなく侯、凡そ一代聖教を扱き見て顕密二道を究め給へる様

な・る智者学匠だにも・近來は法華經を捨て念仏を申し侯に何なる御宿善

ありてか此の法華經を一偈・一句もあそばす御身と生れさせ給いけん。

されば此の御消息を拝し侯へば優曇華を見たる眼よりもめづらしく一眼の

龜の浮木の穴に値へるよりも乏き事かなと・心ばかりは有がたき御事に思い

まいらせ侯間、一言・一点も隨喜の言を加えて善根の余慶にもやと・はげみ

侯へども只恐らくは雲の月をかくし塵の鏡をくもらすが如く短く拙き言にて

殊勝にめでたき御功德を申し隠しくもらす事にや侯らんといたみ思ひ侯ばか

りなり、然りと云えども貴命もだす黙止 べきにあらず一滴を江海に加へ

火を日月にそへて水をまし光を添ふると思し食すべし、先法華經と申すは

八卷・一卷・一品・一偈・一句・乃至・題目を唱ふるも功德は同じ事と思し

食すべし、譬えば大海の水は一滴なれども無量の江河の水を納めたり、如意

宝妹は一粒なれども万宝をふらす、百千万億の滴珠も又これ同じ法華経は一

字も一の滴珠の如し、乃至万億の字も

又万億の滴珠の如し、諸経・諸仏の一字一名号は江河の一滴の永山海の一

石の如し、一滴に無量の水を備えず一石に無数の石の徳をそなへもたず、

若し然らば此の法華経は何れの品にても御坐しませ只御信用の御坐さん品こ

そ・めづらしくは候へ。

総じて如来の聖教は何れも妄語の御坐すとは承り候はねども・再び仏教

を勘えたるに如来の金言の中にも大小・権実・顕蜜など申す事・经文よ

り事起りて候、随つて論師・人師の釈義にあらあら見えたり、詮を放つて申さ

ば釈尊の五十余年の諸教の中に先四十余年の説教は猶うたがはしく候ぞか

し、仏、自ら無量義経に「四十余年未だ真実

を顕さず」と申す经文まのあたり説かせ給へる故なり、法華経に於ては仏、

みずか　い　　もんじ　　しょうじき　　ほうべん
自ら一句の文字を「正直に方便を捨てて但だ無上道を説く」と定めさせ給い
ぬ、そ其の上・多宝仏・大地より涌出でさせ給いて「妙法華經・皆是眞実」と
しょうみょう証明を加へ十方の諸仏・皆法華經の座にあつまりて舌を出して法華經の
もんじ文字は一字なりとも妄語なるまじきよし

助成をそへ給へり、譬えば大王と后と長者等の一味同心に約束をなせるが
こと、もし法華經の一字をも唱えん男女等・十惡・五逆・四重等の無量の
じゅうりゅう
重業に引かれて惡道におつるならば日月は東より出でさせ給はぬ事ありと
だいぢ はんぶく
も・大地は反覆する事ありとも・大海の潮はみちひぬ事ありとも、破た
る石は合うとも江河の水は大海に入らず
ほけきよう
とも・法華經を信じたる女人の世間の罪に引かれて惡道に墮つる事はあるべ
からず、若し法華經を信じたる女人・物をねたむ故・腹のあしきゆへ・食欲
も ほけきよう
の深きゆへななどに引れて惡道に墮つるならば・釈迦如来・多宝仏・十方の
じょうぶつ むりょうにうづ
諸仏・無量曠劫より・このかた持ち来り給へる不妄語戒忽に破れて調達が
こおうない すく くぎやうり もうこ こ
虚誑罪にも勝れ瞿伽利が大妄語にも超えたらん争か・しかるべきや。

ほけきよう
法華經を持つ人・惡しく有りがたし、但し一生が間二惡をも犯さず・五戒
じゅうぜんかい
・八戒・十戒・十善戒・二百五十戒・五百戒・無量の戒を持ち・一切經を

そらに浮べ・一切の諸仏・菩薩を供養し無量の善根をつませ給うとも、

法華經計りを御信用なく又御信用はありとも諸經・諸仏にも並べて思し食し

・又並べて思し食さずとも他の善根をば隙なく行じ

て時時・法華經を行じ・法華經を用ひざる謗法の念仏者なんども語らひを

なし、法華經を末代の機に叶はずと申す者を科とも思し食さずば・一期の間

・行じさせ給う処の無量の善根も忽にうせ・並に法華經の御功德も且く隠れ

させ給いて、阿鼻大城に墮ちさせ給はん事・雨の空にとどまらざるが如く・

峰の石の谷へころぶが如しと思し食すべし、十惡・五逆を造れる者なれども

法華經に背く事なければ往生成仏は疑なき事に侍り、一切經をたもち

諸仏・菩薩を信じたる持戒の人なれども法華經を用る事無ければ惡道に墮つ

る事疑なしと見えたり。

予が愚見をもつて近來の世間を見るに多くは在家・出家・誹謗の者のみあ

り、^{ただ}但し御不審^{ふしん}の事・法華經^{ほけきよう}は何れ^{いずれ}の品も先に申^{もう}しつる様に愚^{おろ}かならねども
殊^{こと}に二十八品の中に勝^{すぐ}れて・めでたきは方便品^{ほうべん}と寿量品^{じゆりようぼん}にて侍^{はべ}り、余品^{みな}は皆
枝葉^{しよう}にて候^{なり}、されば常^{じょう}の御所作^{しよさ}には方便品^{ほうべん}の長行^{じちやうぎやう}と寿量品^{じゆりようぼん}の長行^{じちやうぎやう}とを
習^{なら}い読^{たま}ませ給^いひ候^{そうら}へ、又別に書き出

しても・あそばし候べく候、余の二十六品は身に影の随ひ玉に財の備わるが
如し、じゆりようばん 寿量品・ほうべん 方便品をよみ候へば自然に余品はよみ候はねども備はり候な
り、やくおうばん 薬王品・だいば 提婆品は女人の成仏往生を説かれて候品にては候へども提婆
品は方便品の枝葉・ほうべん 薬王品は方便品と寿量品の枝葉にて候、されば常には此
の方便品・じゆりようばん 寿量品の二品をあそばし候て余の品をば時時・御いとまの・ひま
に・あそばすべく候。

又御消息の状に云く日ごとに三度づつ七つの文字を拝しまいらせ候事と、
なむいちじょう 南無一乗妙具と一万遍申し候事とをば日ごとにし候が、例の事に成つて候程
は御経をばよみまいらせ候はず、はい 拝しまいらせ候事も一乗妙典と申し候事
も・そらにし候は苦しかるまじくや候らん、それも例の事の日数の程は叶う
まじくや候らん、いく日ばかりに

て・よみまいらせ候はんずる等と云云、此の段は一切の女人ごとの御不審に

常にたまひ間おんことせ給はべい侯御事にて侍り、又古いにしえへも女人によんの御不審ふしんに付いて申もつしたる人も
多く候へども一代いちだいしゅうきよう聖教しんきやうにさして説とこかれたる処ところのなきかの故ゆえに証文しょうもん分明ふんみように
出したる人もおはせず、日蓮粗にちれんほししゅうきよう聖教しんきやうを見侯しゆにくにも酒肉ごしん・五辛いんじ・婬事いんじなどの
様ふじように不浄ふんみようを分明ふんみように月日をさして禁いましめたる

様に月水をいみたる経論きようろんを未だ勘いまへず侯なり、在世ざいせの時多く盛さかんの女人によん・尼
になり仏法ぶつぽうを行ぜしかども月水の時もつと申して嫌きらはれたる事なし、是これをもつて
推おし量はべり侍るに月水もつと申す物は外より来れる不浄ふじようにもあらず、只女人ただによんのくせ
癖しよつじ かたわ生死しよじの種を継つぐべき理にや、又長病ながわづらいの様なる物なり例せば屎尿しによう
などは人の身より出れども能よく浄くなしぬれば別にいみもなし是体これていに侍るはべ
事か。

されば印度いんど・戸那しななどにも・いたくいむよしも聞えず、但ただし日本国にほんこくは神国しんこく
なり此の国の習として仏ぼさつ・菩薩すいじやくの垂迹ふしぎ不思議きようろんに経論きようろんにあひにぬ事も多く

侍るに・是をそむけば現に当罰あり、委細に経論を勘へ見るに仏法の中に随
方毘尼と申す戒の法門は是に当れり、此の戒の心はいたう事かけざる事をば
少少仏教にたがふとも其の国の風俗に違うべからざるよし仏一の戒を説き
給へり、此の由を知ざる智者共神は鬼神なれば敬ふべからずなんと申す

強義^{いっぎ}を申^{もつ}して多くの檀那^{だんな}を損^こずる事ありと見えて候^{もち}なり、若^もし然^{しか}らば此の国
の明神^{みょうじん}・多分^{たぶん}は此の月水をいませ給^{たま}へり、生を此の国にうけん人人^{ひとびと}は大^{おお}に
忌^いみ給^{たま}うべきか、但^{ただ}し女人^{にょにん}の日の所作^{しよさ}は苦^くしかるべからずと覺^{おほ}え候^{もち}か、元^{もと}よ
り法華經^{ほけきやう}を信^{しん}ぜざる様^{やう}なる人人^{ひとびと}が經をいかにしても云^いいうとめんと思^{おも}うが・
さすがに・ただちに經を捨てよとは

云^いいえずして、身の不淨^{ふじやう}などにつけて法華經^{ほけきやう}を遠^{とほ}ざからしめんと思^{おも}う程^{ほど}に、
又不淨^{ふじやう}の時^{とき}・此^これを行^おずれば經を愚^{おろ}かにしまいらする・なんと・おどして罪^{つみ}
を得^えさせ候^{もち}なり、此の事をば一切^{いっさい}御心得^{ごこころえ}候^{もち}て月水の御時^{おんとき}は七日^{なぬか}までも其^その氣^{いき}
の有^あらん程^{ほど}は御經^{ごぎやう}をば・よませ給^{たま}はずして暗^{くら}に南無妙法蓮華經^{なむめうほうれんげきやう}と唱^{とな}えさせ
給^{たま}い候^{もち}へ、礼^{らい}拜^{はい}をも經にむかはせ

給^{たま}はずして拜^{はい}せさせ給^{たま}うべし、又不慮^{りんじゆう}に臨終^{りんじゆう}などの近^きづき候^{もち}はんには魚鳥^{ぎよてう}
なんどを服^{ふく}せさせ給^{たま}うても候^{もち}へ、よみぬべくば經をもよみ及^{およ}び南無^{なむ}

妙法蓮華經みょうほうれんげきょうとも唱となえさせ給たまい候いべし、又月水なんどは申もうすに及び候およそつらはず又
南無なむ一乘いちじょう妙具とと唱となえさせ給たまう事こと是これ同じ事はべには侍はべれども天親菩薩てんじんぼさつ・
天台大師等てんだいだいにしの唱となえさせ給たまい候いしが如ごとく・只南無妙法蓮華經ただなむみょうほうれんげきょうと唱となえさせ給たまうべ
きか、是これ子細しさいありてかくの如ごとくは申もうし候いなり、
六賢あなかしこあなかしこ六賢はべ。

文永元年甲子四月十七日

日蓮にちれん 花押かおう

大学三郎殿御内御報

一二二五 大学三郎殿御書ごしよ

建治元年七月がんねん 五十四歳御作

1203p

外道げどうには天・人・畜さんぜんどうの三善道あかを明あかし鬼道うむの有無む之を論じこくじて地獄道そは其の
沙汰さた無し、小乗經しょうじょうきょうには六道ろくどうの因果いんがを明あかして四聖ししやうの因果いんが以ふんみやうて分明ぶんめいならず、

俱舎・成実・律の三宗はしょうじょうきよう小乗經に依憑してえひよう但六道を明すろくどう是なり、三論宗
はてんだいしゆういぜん天台宗已前にてんじく天竺より之を渡すこれ八界を立ててじゆうかい十界を明さず、あか法相宗は又
てんじく天竺の宗なりてんだいいこ天台已後にとう唐の太宗の世に之を渡これ

す、又八界を立つ大乘だいじょうな為りと雖も五性各別いえどを立て無性有情むしやうじやうは永く成仏じやうぶつせず
と之これを立つ殆んど外道げどうの法に似たり自他宗じたの歎なげきなり、華嚴宗けこんしやう・真言宗しんこんしやうの兩
宗てんだいいごは天台これあ已後に之有り、華嚴宗けこんしやうは唐の則天皇后そくてんこうこうの御宇ぎやうに之を立つ、真言宗しんこんしやう
は玄宗げんそうの時善無畏三藏ぜんむいさんぞう之を渡す但し天竺ただに真言宗しんこんしやうの名これな之無し無畏三藏さんぞう・
大日經だいにちきやうを以て宗と為すの故に猥りに天竺の宗と称するか、此の二宗共に十界
を立つ但し天台宗ただ てんだいしやういご已後なり智者大師の巧智を偷盜ちしやだいし こうち ちゆうとうして自身じしんの才能さいのうと
号するか。

ぶつせつ 仏説ごとの如く之を勘かんうれば法華經ほけきやうの外華嚴經けこんきやう・大集經だいしつきやう・般若經はんにやきやう・大日經だいにちきやう・
深密經じんみつ等の諸經しよきやうは但小衍相對しやうえんそうたいなり但法華經計ほけきやうばかりに限いつて已今当を以て眷属けんぞく
の修多羅しゆたらと為す、然りと雖も天台いえど已前の諸師法華經等しよしほけきやうの一切いっさいの大乗經だいじやうきやうを
しやうえんそうたい 小衍相對しやうえんそうたいを以て之を釈しゃくす、王臣おうしんの差別さべつ無く上下じやうげ之を混ぶつす仏法ぶつぽう未だ顕あらわれず愚癡ぐち
とがこれあ 天台てんだい已後に諸宗しよしやうしやうえんそうたい小衍相對きやうぎやうの經經きやうぎやうを以て權實相對こんじつそうたい之を定きんじつむ、
の失之有とがこれあり、天台てんだい已後に諸宗しよしやうしやうえんそうたい小衍相對きやうぎやうの經經きやうぎやうを以て權實相對こんじつそうたい之を定きんじつむ、

天台の智之を盗めり、日月に背いて灯・に向い丘塚を華恒に比する是なり、

仏は十八界修羅は十九界天台は四智真言は五智天台は九識十識真言は十識十

一識而るを天台の学者之に誑惑

せられ悉く実義なりと思ひ、「法華経は釈尊の所説にて民の万言の如く

大日経は天子の鳳文にて王の一言の如し」等云云、善無畏三蔵事を天竺に寄

せ法華経と大日経と理同事勝と立つ是れ一の謬言なり、日蓮は論師・人師の

添言を捨てて専ら経文を勘うるに大日経一部六巻並びに供養法の巻・一卷

・三十一品之を見聞するに声聞乗と縁覚乗と大乘の菩薩と仏乗の四乗之を

説く、其の中の大乘の菩薩乗とは三蔵教の三祇の菩薩乗なり仏乗は実大乘

な

り法華経に及ばざるの上華嚴・般若にも劣り但だ阿含と方等との二経なり、

大日経の極理は未だ天台の別教・通教の極理にも及ばざるなり。

弘法大師延暦二十三年に入唐し大同二年に帰朝す、三箇年の間慧果和尚に
値いて真言の秘教を学習し帰朝の後十住心二教論之を注して世間に流布す、
釈迦牟尼仏・並びに大日經二仏の所説の勝劣之を定む、第一大日經・

第二・華嚴經・第三法華經・浅きより深きに至る義なり華嚴經・法華經に

まさ

勝るとは南北の二義を取るなり又華嚴宗の義なり、南北並びに弘法大師は

むりようぎきよう

ほけききよう

ねはんぎきよう

ぐにん

すで ふんみきよう

けこんききよう

無量義經・法華經・涅槃經の三經を見ざる愚人なり、

ほけききよう

ねはんぎきよう

ぐにん

すで ふんみきよう

けこんききよう

むりようぎきよう

しょうれつこれ

なん

何ぞ聖言を捨てて南北の凡謬に付かんや、

近き

無量義經との勝劣之を説く、

なん

何ぞ聖言を捨てて南北の凡謬に付かんや、近き

を以て遠きを察するに將た又大日經と法華經との勝劣之を知らず、

は

だいにちききよう

ほけききよう

しょうれつこれ

だいにちききよう

には四十余年の文之無く又已今当の言之を削る二乗作仏・久遠実成之無し、

大日經

よんじゅうねん

これなく

いこんとう

これ

にじようさぶつ

くおんじつじようこれなし

法華經と大日經との勝劣之を論ぜば民と王と石と珠との勝劣高下是なり、

ほけききよう

だいにちききよう

しょうれつこれ

たまた

しょうれつこうげこれ

しか あんねんわじようほぼこれ あらわ しか いえど た けこんききよう ほけききよう しょうれつ これ

而るに安然和尚粗之を顯す然りと雖も但だ華嚴經と法華經との勝劣は之を

あきら

あきら

ほつ け

だいにちききよう

しょうれつ

闇うして闇と漆との如くな

り、

慈覚大師は本伝 教大師に稟くと雖も本を捨て末に付き入唐の間・真言家の

ひとびと

おあわく

だいにちききよう

ほつ け

りどうじしきよう

賢きに似たれど

じかくだいし

でんぎききようだいし

う いえど

にゅうとう

しんごん

人人に誑惑せらるるの間又大日經と法華と理同事勝と云云、賢きに似たれど

慈覚大師は本伝 教大師に稟くと雖も本を捨て末に付き入唐の間・真言家の

ひとびと おあわく だいにちききよう ほつ け りどうじしきよう 賢きに似たれど

も但ただ善ぜん無畏むゐの僻見びやくけんを出いでざるのみ。

而しかに日蓮にちれん末代まつだいに居こし粗はほ此この義ぎを疑うたがう遠とほきを尊うみ近ききを賤いやしみ死しせるを上う

げ生はけるを下したす、故ゆゑに当世とうせの学者等がくしゃ之これを用もちいず、設たい堅いく三歸さんかい五戒ごかい・十善戒じゅうぜんかい

・二百五十戒・五百戒十無尽戒等の諸戒しよを持たもてる比丘びく・比丘尼等びくにも愚癡ぐちの失とが

に依よつて小乗經しょうじょうきょうを大乘經だいじょうきょうと謂おもい権大乘經こんだいじょうきょうを實大乘經じつだいじょうきょうなりと執しゆする等

の謬義みようぎしゆつたい出來みす、大妄語もつご大殺生せつしやう大偷盜等ちゆうとうの大逆罪つまの者ぐにんなり、愚人これは之これを知ら

ずして智者ちしやと尊たむ、設たい世間せいけんの諸戒しよ之これを破やぶる者やぶなりとも堅だいしやうく大小ごんじつ・權實等ごんじつの

經わきまを弁せけんえば世間の破戒はかいは佛法ぶつぽうの持戒じかいなり、涅槃經ねはんぎやうに云いく「戒かいに於おいて緩かんなる者

を名なけて緩かんと為なさず乘おいに於かんて緩かんなる者すなわを乃すなわち名かんけて緩かんと為なす」等云云ほけきやう、法華經ほけきやう

に云いく「是これを持戒じかいと名なく」等云云なす、重おもき故ゆゑに之これを留とどむ、事事じし靈山りやうぜんを期こすす、

恐きよう恐きよう謹言きんげん。

七月二日

日蓮にちれん 花押かおう

一二二六

星名五郎太郎殿御返事こへんじ

文永四年十二月ぶんえい

四

十六歳御作

1206p

漢の明夜夢しょうにんしより迦竺二人の聖人初めて長安のとぼそに臨のぞみしより以来いらい
唐の神武皇帝こうていに至るまで天竺の仏法震旦てんじくに流布ぶつぽうしんたんし、梁の代に百済国の聖明王るぶ
より我が朝の人王三十代欽明きんめいの御宇に仏法初めて伝ぎようふ、其それより已来一切このかたいつさいの
経論諸宗皆日域きようらんしよしゅうみなにちいきにみてり、幸なるかな生を末法まつぽうに受くるといへども靈山りようぜんの
きき耳に入り身は辺土に居せりといへども大河の流れ掌たなごころに汲めり、但ただし
委くわしく尋ね見れば仏法ぶつぽうに於て大小・権実前後のおもむきあり、若もし
此の義に迷まよいいぬれば邪見じゃけんに住して仏法を習ふといへども還かえつて十惡じゅうあくを犯おかし
五逆ごぎやくを作る罪つよりつみも甚はなはだしきなり、爰ここをを以て世いとを厭いとひ道を願はん人先ず此の

義を存ずべし、例せば彼の苦岸比丘等の如し、故に大經に云く「若し邪見なる事有らんに命終の時正に阿鼻獄に墮つべし」と云へり。

問う何を以てか邪見の失を知らん予不肖の身たりといへども随分後世を問う何を以てか邪見の失を知らん予不肖の身たりといへども随分後世を

畏れ仏法を求めんと思ふ、願くは此の義を知らん、若し邪見に住せばひるが

へして正見におもむかん、答う凡眼を以て定むべきにあらず浅智を以て明む

べきにあらず、經文を以て眼とし仏智を以て先とせん、但恐くは若し此の

義を明さは定めていかりをなし

憤りを含まん事を、さもあらばあれ仏勅を重んぜんにはしかず、其れ世

人は皆遠きを貴み近きをいやしむ但愚者の行ひなり、其れ若し非ならば遠と

も破すべし其れ若し理ならば近とも捨つべからず、人貴むとも非ならば何ぞ

今用いん、伝え聞く彼の南三・北七の十流の学者威徳ことに勝れて天下に

尊重せられし事既に五百余年まで有り

しかも陳隋^{ちんすい}二代の比天台大師^{てんだいだいし}是^{これ}を見て邪義^{じゃぎ}なりと破^はす、天下^{てんか}に此の事を聞
いて大^{おほ}きに是^{これ}をにくむ、然^{しか}りといへども陳王隋帝^{けんおう}の賢王^{けんおう}たるに依^{よつて}て彼の諸宗^{しよしゅう}
^{てんだい}に天台を召し決せられ、邪正^{じゃせい}をあきらめて前五百年の邪義^{じゃぎ}を改^{あらた}め

みなことごとだし
皆悉く大師に帰す。

又我が朝の叡山の根本大師は南都北京の碩學と論じて仏法の邪正をただす

事・皆經文をさきとせり、今当世の道俗貴賤皆人をあがめて法を用いず心を

師として經によらず、之に依て・或は念仏權教を以て大乘妙典をなげすて

・或は真言の邪義を以て一実の正法を謗す、是等の類豈大乘誹謗のやから

に非ずや、若し經文の如くならば争か那落の苦みを受けざらんや、之に依て

其の流をくむ人もかくの如くなるべし、疑つて云く念仏・真言は是れ

・或は權・或は邪義又行者・或は邪見・或は謗法なりと此の事甚だ以て

不審なり、其の故は弘法大師は是れ金剛薩・の化現第三地の菩薩なり、真言

は是れ最極甚深の秘密なり、又善導和尚は西土の教主弥陀如来の化身なり、

法然上人は大勢至菩薩の化身なりかくの如きの上人を豈に邪見の人と云う

べきや、答えて云く此の事本より私の語を以

て是これを難なんずべからず經文きやうもんを先として是これをただすべきなり、真言しんこんの教は最極の
秘密ひみつなりと云うは三部經さんぶきやうの中に於て蘇悉地經そしつちきやうを以て王とすと見えたり、全
くもるもるによらい諸しよの如來らいの法ほふの中に於て第一だいいちなりと云う事を見ず、凡およそ仏法ぶつぽうと云うは善惡ぜんあくの
人をえらばず皆みな仏ぶつになすを以て最第一さいだいいちに定むべし、是これ程の理りをば何いかなる人
なりとも知るべきことなり、若もし

此この義ぎに依よらば經と經とを合せて是これを×すべし、今法華經ほふきやうには二乗成仏にじやうじやうぶつあり
真言經しんこんには之これ無なしあまつさへ・あながちに是これをきらへり、法華經ほふきやうには女人にょにん
成仏じやうぶつ之これ有あり真言經しんこんにはすべて是これなし、法華經ほふきやうには惡人あくにんの成仏じやうぶつ之これ有あり真言經しんこん
には全ぜんくなし、何を以てか法華經ほふきやうに勝すぐれたりと云うべき、又も若そし其その瑞相ずいそうを
論ろんぜば法華ほふけには六瑞ろくずいあり、所謂いわゆる

雨華地動うげちどうし白毫相びやくかうしやうの光り上は有頂きわを極め下は阿鼻獄あびごくを照てらせる是これなり、又多寶たほう
の塔だいち大地だいちより出でて分身ふんじんの諸しよ佛ぶつ・十方じゆつぱうより來る、しかのみならず上行じやうぎやう等の

菩薩ぼさつの六万恒沙りゅうじや五万四万三万乃至ないし一恒沙半恒沙等大地だいちよりわきいでし事此の
威儀いぎ不思議ふしぎを論ぜば何を以て真言しんこん・法華ほっけにまされりと云わん、此等これらの事委くわしく
のぶるにいとまあらず・はづかに大海たいかいの一滴いだを出す。

ここ ぼだいしんろん
爰に菩提心論と云う一卷の文あり竜猛菩薩の造と号す、此の書に云く「唯

真言法の中に即身成仏す故に是れ三摩地の法を説く諸教の中に於て闕いて

書るさず」と云えり、此の語は大に不審なるに依て經文に就てこれを見る

に即身成仏の語は有れども即身成仏の人全くなし、たとひありとも法華經

の中に即身成仏あらば諸教の中にをい

てかいて而もかかずと云うべからず此の事甚だ以て不可なり、但し此の書

は全く竜猛の作にあらず委き旨は別に有るべし、設ひ竜猛菩薩の造なりと

もあやまりなり、故に大論に一代をのぶる肝要として「般若は秘密にあらず

二乗作仏なし法華は是秘密なり二乗作仏あり」と云えり、又云く「二乗作仏

あるは是秘密二乗作仏なきは是顯教」と云えり、若し菩提心論の語の如く

ならば別しては竜樹の大論にそむき総じては諸仏出世の本意・一大事の

因縁をやぶるにあらずや、今竜樹・天親等は皆釈尊の説教を弘めんが為に

世に出ず、付法藏二十四人の其の一なり何ぞ此くの如き妄説をなさんや、彼の眞言は是れ般若經にも劣れり何に況や法華に並べんや、爾るに弘法の秘蔵宝鑰に眞言に一代を撰ずるとして法華を第三番に下し、あまつさへ戲論なりと云えり、謹んで法華經を披きたるに諸の如來の所説の中に第一なりと云えり、又已今當の三説に勝れたりと見えたり、又藥王の十喻の中に法華を大海にたとへ日輪にたとへ須彌山にたとへたり、若し此の義に依らば深き事何ぞ海にすぎん・明かなる事何ぞ日輪に勝れん高き事何ぞ須彌山に越ゆる事有らん、喩を以て知んぬべし何を以てか法華に勝れたりと云はんや、大日經等に全く此の義なし但己が見に任せて永く仏意に背く、妙樂大師曰く「請う眼有らん者は委悉に之を尋ねよ」と云へり、法華經を指て華嚴に劣れりと云うは豈眼ぬけたるものにあらざるや、又大經に云く「若し仏の正法を誹謗する者あらん正に其の舌を

断べし」と、
嗚呼誹謗の舌は世世に於て物云うことなく邪見の眼は生生にぬ
けて見ることに無らん加之らず「若し人信ぜずして此の経を毀謗せば乃至
其の人命終えて阿鼻獄に入らん」の文の如くならば定めて無間・大城に
堕ちて無量億劫のくるしみを受けん、善導・法然も是に例して知んぬべし、

誰か智慧有らん人・此の謗法の流を汲んで共に阿鼻の焰にやかれん、行者
能く畏るべし此れは是れ大邪見の輩なり、所以に如来誠諦の金言を按ずる
に云く「我が正法をやぶらん事は譬えば獵師の身に袈裟をかけたるが如し、
或は須陀・斯那含阿那含阿羅漢・辟支仏及び仏の色身を現じて我が正法を
壊らん」といへり。

今・此の善導・法然等は種種の威を現じて愚癡の道俗をたぶらかし如来の
正法を滅す、就中彼の真言等の流れ偏に現在を以て旨とす、所謂畜類を本尊
として男女の愛法を祈り莊園等の望をいのる、是くの如き少分のしるしを以
て奇特とす、若し是を以て勝れたりといはば彼の月氏の外道等にはすぎじ、
彼の阿竭多仙人は十二年の間・恒河の水を耳にただへたりき、又耆菟仙人の
四大海を一日の中にすひほし、留外道は八百年の間石となる豈是

にすぎたらんや、又瞿曇仙人が十二年の程釈身と成り説法せし、弘法が刹那

の程にびる毘盧舍那さなの身と成りし、其その威徳を論ぜば如何いかん、若し彼の变化へんかのしるしを信ぜば即ち外道を信ずべし当まさに知るべし彼れ威徳ありといへども猶阿鼻の炎をまぬがれず、況やはづかの变化へんかにをいてをや況や大乘誹謗にをいてをや、是一切衆生の悪知識いっさいしゅじょう　あくちしき

なり近付くべからず畏る可し畏る可し、仏の曰く「悪象等に於ては畏る心

なかれ悪知識に於ては畏る心あくちしき　おい　おそをなせ、何を以ての故に悪象は但身をやぶり

意をやぶらず悪知識は二共にやぶる故に、此の悪象等は但一身をやぶる悪知識あくちしき　あくちしき　ゆえ　あくぞう

は無量の身無量の意をやぶる、悪象等は但不浄の臭き身をやぶる悪知識むりょう　むりょう　あくぞう　ふじょう　あくちしき

浄身及び浄心をやぶる、悪象は但肉身をやぶる悪知識は法身をやぶる、悪象じょうしん　お　じょうしん　あくぞう　あくちしき　ほっしん　あくぞう

の為にころされては三悪に至らず悪知識の為に殺されたるはため　さんあく　いた　あくちしき　ため

必ず三悪に至る、此の悪象は但身の為のあだなり、悪知識は善法の為にあださんあく　いた　あくぞう　あくちしき　ため

なり」と、故に畏る可きは大毒蛇悪鬼神よりも弘法善導・法然等の流の悪知識ゆえ　お　そ　べ　どくじゃ　きじん　こうぼうぜんどう　ほうねん　あくちしき

を畏^{おそ}るべし、略^{りやく}して邪見^{じゃけん}の失^{とが}を明^あすこと畢^{おわ}んぬ。

此の使^{つか}あまりに急^{いそ}ぎ候^{こう}ほどにとりあへぬさまにかたはしばかりを申^{もう}し候^{こう}、

此の後又便宜^{びんぎ}に委^{くわ}し経^き釈^{ようしゃく}を見調^{けん}べてかくべく候^{こう}、
あなかしこあなかしこ穴^{あな}賢^{けん}穴^{あな}賢^{けん}、外^{ぐわい}見^{けん}あるべ

からず候^{こう}若^わ命^{めい}つれなく候^{こう}はば仰^{おお}せの如^{ごと}く明年^{めいねん}の秋^{あき}下^{した}り候^{こう}て且^{かつ}つ申^{もう}すべ

く候、
恐恐。
きょうきょう

十二月五日

日蓮花押
にちれんかおう

星名五郎太郎殿御返事
ごへんじ

一二二七

大豆御書
ごしよ

文永七年十月四十九歳御作
ぶんえい

121

OP

大豆一石かしこまつて拝領し畢んぬ法華經の御宝前に申し上候、一・の水
たいかい
を大海になげぬれば三災にも失せず一華を五淨によせぬれば劫火にもしばま
ほけきよう
ず、一豆を法華經になげぬれば法界みな蓮なり、
ほっかい
恐惶謹言。
きょうこうきんげん

十月二十三日

日蓮花押
にちれんかおう

御所御返事
ごへんじ

一一二八

じゆりようぼん とくいしよく
寿量品得意抄

ぶんえい
文永八年四月 五十歳御作

1210p

きようしやくそんじゆりようぼん と

教主 釈尊 寿量品を説き給うに爾前・迹門のきをあげて云く一切世間

てんにんおよ

あしゆら

みな

しゃかむにぶつ

しゃくし

の天人及び阿修羅は皆今の釈迦牟尼仏は釈氏の宮を出でて伽耶城を去ること

どうじよう

遠からず道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提を得たりと謂えり云云、此の文

あのかたらさんみやくさんぼだい

おも

云云、此の文

の意は初め華嚴經より終り法華經安樂行品に至るまで一切の仏の御弟子大

けこんきよう

ほけきようあんらくきようぼん

いっさい

おんでし

ぼさつ

とく

しんちゆう

菩薩等の知る処の思いの心中をあげ

にぜん

たり、爾前の經に二つの失あり、一には「行布を存する故に仍未だ権を開せ

そん

ゆえ

いま

権を開せ

もう

しゃくもんほうべん

こ

いちねんさんぜんかいこんけんじつにじようさぶつ

ほうもん

ず」と申して迹門方便品の十如是の一念三千開權顯実二乗作仏の法門を説か

ざる過なり、二には「始成しじょうを言う故ゆえに尙未なおいまだ迹を發はわず」と申もうして

くおんじつじょう 久遠実成の じゆりようばん 寿量品を説かざる過なり、此の二つの大法は一代 だいほう いちだいしよくきよう 聖教の こんごつ 綱骨
いつさいきよう 一切経の心髓なり、 しゃくもん 迹門には二乗作仏を説いて四十余年の二つの失一つを とが
脱したり、 しか 然りと雖も未だ さいだ 寿量品を説かざれば実の いちねんさんぜん 一念三千もあらはれず
にじようさぶつ 二乗作仏も定まらず、水にやどる月の如く根無し草の浪の上に浮べるに異な
らず、 又云く「 然るに善男子・ 我実に成仏してより已来無量無辺百千万億
なゆた 那由佗劫」等云云、此の文の心は華嚴経の始成正覚と申して始て仏になると
と 説き

たま あこんきよう 給ふ阿含経の しょうどう どう 初成道 じようみようきよう 浄名経の しばぶつじゆだいしつきよう 始坐仏樹大集経の だいにちきよう 始十六年大日経の
がしやくざんじようにんのうきよう 我昔坐道場 仁王経の二十九年、 むりようききよう 無量義経の とうじようほけきようほうへん 我先道場法華経方便品の がいざ 我始坐
どうじよう どうじよう 道場等を一言に大虚妄なりと打破る文なり、 やぶ 本門 ほんもんじゆりようばん 寿量品に至って始成正覚
しじようしよくかく 始成正覚
やぶるれば四教の果やぶれ四教の果やぶれぬれば四教の因やぶれぬ、 因とは
しめきようでし 修行弟子の位なり、 爾前・ 迹門の因果を
にぜん しまくもん いんが

打破ほんもんつて本門じゅつかいいんの十界因果じゅつかいをときあらはす是これ則すなわち本因ほんいん・本果ほんがの法門ほうもんなり、九

界むしも無始ぶつがいの仏界ぶつがいに具むしし仏界むしも無始むしの九界じゅつかいこくにそなへて実じゅつかいせんの十界互具ひやつかいせん・百界千如

いちねんさんぜん

・一念三千けこんきようなるべし、かうしてかへてみるときは華嚴經るしやなの台上盧舍那あこんきよう・阿含經

じようろく

しゃかほうとう

はんにやこんこうみようきよう

あみだ

だいにちきよう

こんぶつ

の丈六じようろくの小釈迦方等しゃかほうとう・般若はんにや・金光明經こんこうみようきよう・阿弥陀經あみだ・大日經等だいにちきようの權仏等こんぶつは此

じゆりようほん

の壽量品じゆりようほんの仏てんげつの天月てんげつのしばらくかげを

だいしよう

大小だいしようのうつはものに浮べ給たまうを、諸宗しよしゆうの智者学ちしやがくしゆう匠等じしゆうは近くは自宗じしゆうにまどひ

ほけきよう

じゆりようほん

遠くは法華經ほけきようの壽量品じゆりようほんを知らず水中の月に実月のおもひをなして・或あるは入あつ

て取らんと・おもひ・或あるは繩あるをつけてつなぎとどめんとす、此これを天台大師てんだいだいし

しゃく

いわ

てんげつ

し

釈しゃくして云いわく「天月てんげつを識しらずして但池月しやくを觀かんず」と、心しんは、爾前にぜん・迹門しゃくもんに執着

する者はその月をしらずして但池しやくの

月しやくをのぞみ見るが如ごとくなりと釈しゃくせられたり、又僧祇律の文に五百の×山より

出いでて水にやどれる月をみて入つてとらんとしけるが實じつには無き水月なれば

月とられずして水に落ち入つて×は死にけり、×とは今の提婆達多・六群比丘
等なりとあかし給へり。たま

いっさいきよう一切経の中に此の寿量品じゅうりょうぼんましまさずは天に日月無く国に大王だいおうなく山海に
玉なく人にたましゐ無からんがごとし、されば寿量品じゅうりょうぼんなくしては一切経いっさいきようい
たづらごとなるべし、根無き草はひさしからず・みなもとなき河は遠から

ず親無き子は人にいやしまる、所詮^{しよせん}寿量品^{じゆりやうほん}の肝心^{かんじん}南無妙法蓮華經^{なむみょうほうれんげきやう}こそ十方^{じゆつぽう}
さんぜ ^{しよぶつ}
三世の諸仏の母にて御坐^{おわ}し候へ、恐恐^{きようきよう}謹言^{きんげん}。

四月十七日

日蓮^{にちれん}

花押^{かおう}

一二二九

五人土籠御書^{ごしよ}

文永^{ぶんえい}八年十月 五十歳御作 於

さがみえち
相模依智作

与日朗・日心・坂部入道^{さかべうだう}・伊沢入道^{いざうだう}

・得業寺

五人御中参^{おんちゆう}

日蓮^{にちれん}

せんあくてご房をばつけさせ給^{たま}へ、又^{また}しらづめ^{四郎奴}が一人あらんするがふび

んに候へば申す。^{もつ}

今月七日さどの国へまかるなり、各各は法華經一部づつあそばして候へば

我が身並びに父母・兄弟・存亡等に回向しまし申し候らん、今夜のかんずる

につけていよいよ我が身より心くるしさ申すばかりなし、ろつをいで

させ給いなば明年のはるかならずきたり給えみみへまいらすべし、せうどの

の但一人あるやつをつけよかしとをもう心心なしとをもう人・一人もなければ

ばしぬまで各各御はぢなり。

又大進阿闍梨はこれにさたすべき事かたがたあり、又をのの御身の上

をもみはてせんが・れうにとどめをくなり、くはしくは申し候わんずらん、

恐恐謹言。^{きょうきょうきんげん}

十月三日

日蓮花押
^{にちれんかおう}

五人御中
^{おんちゆう}

日蓮にちれんは明日・佐渡さどの国へまかるなり、今夜のさむきに付けても・ろうのうちうちのありさま思いやられて・いたはしくこそ侯そうへ、あはれ殿ほけきようは法華經一部を色心二法共しきしんにあそばしたる御身おんみなれば・父母ふぼ・六親ろくしん・一切衆生いつさいしゆじようをも・たすけ給たまうべき御身おんみなり、法華經ほけきようを余人のよみ候は口はかり・ことばはかりは・よめども心はよまず・心はよめども身によまず、色心二法共しきしんにあそばされたるこそ貴そつく侯ひへ、天諸童子しよどうじ・以為給使きゆうじ・刀杖とうじやう不加毒不能害そつと説かれて侯ひへば別べちの事はあるべからず、籠かこをばし出いでさせ給たまい候はば・とくとく・きたり給たまへ、見たてまつり見えたてまつらん、きようきようきんげん恐恐謹言。

ぶんえい かのとひつじ
文永八年辛未十月九日
にちれんかおう
日蓮花押

筑後殿

一一三二

しょうにんごしよ
日妙聖人御書

ぶんえい
文永九年五月 五十一歳

1

213p

かこ きょうほうほんじ もつ
御作過去に樂法梵志と申す者ありき、十二年の間・多くの国をめぐりて如来
きょうほう
の教法を求む、時に総て仏法僧の三宝一つもなし、此の梵志の意は渴して水
をもとめ飢えて食をもとむるがごとく仏法を尋ね給いき、時に婆羅門あり求
めて云く我れ しょうきょう いちげ たも も
聖教を一偈持てり若し実に仏法を願はば当にあたふべし、梵
志 かわ
答えて云くしかなり、婆羅門の云く実に 志 あらば皮をはいで紙とし・骨

をくだいて筆とし・髓をくだいて墨とし・血をいだして水として書かんと云

はば仏の偈げを説かん、時に此の・梵志悦よろこびをなして彼が申もうすごとくして皮を
はいで乾ほして紙とし乃至一言をもたがへず、時に婆羅門・忽然として失ぬ、
此の梵志・天にあふぎ・地にふす、仏陀此れを感じて下「万より涌ゆ出て・説
て云くいわ「如法は応まさに修行すべし非法は行ひずべからず今世若もしは後世・法を行
ずる者は安穩あんなり」等云云、此の梵志・須臾しゆに仏になる・此れは二十字なり、
昔釈迦菩薩・転輪王たりし時しき「夫生輒死此滅為樂いらく」の八字を尊たび給たまう故ゆえに
身

をかへて千燈にともすして此の八字を供養くようし給たまい人をすすめて石壁・要路に
・かきつけて見る人をして菩提心ぼだいしんをおこさしむ、此の光明くわうみょう・とう利天いたに至る
天の帝釈たいしやく並びに諸天しよてんの燈となり給たまいき。

昔釈迦菩薩・仏法を求め給たまいき、癩人らいにんあり此の人にむかつて我れ正法しやうほうを
持たてり其その字・二十なり我が癩病をさすりいだきねぶり日に兩三斤の肉をあ

たへば説くべしと云う、彼が申すごとくして二十字を得て仏になり給う、所謂
「如来は涅槃を・を証し永く生死を断じ給う、若し至心に・聴くこと有らば
当に無量の樂を得べし」等云云。

昔雪山童子と申す人ありき、雪山と申す山にして外道の法を通達せしかど

も・いまだ仏法をきかず、時に大鬼神ありき説いて云く「諸行無常是生滅

法」等云云、只八字計りを説いて後をとかず時に雪山童子・此の八字を得て

悦きはまなけれども半なる如意珠を得たるがごとく華さき菓ならざるに・に

たり、残の八字を。きかんと申す、

時に大鬼神の云、我れ数日が間・飢えて正念乱るゆへに後の八字をときがた

し食をあたへよと云う、童子問うて云く何をか食与る、鬼答えて云く我は人

のあたたかなる血肉なり、我れ飛行自在にして須臾の間に四天下を回つて尋ぬ

れどもあたたかなる血肉得がし、人をば天守り給う故に失なければ殺害する

事かたし等云云、童子^{どうじ}

の云く我が身を布施^{ふせ}として彼の八字を習い伝えんと云云、鬼神^{きじん}の云く智慧^{ちえ}甚^{はなはだ}
だ賢し我をや・すかさずらん、童子^{どうじ}答えて云く瓦礫^{がりやく}に金銀^{きんぎん}をかへんに是^{これ}を
かえぎるべしや我れ徒^{いたずら}に此の山にして・死しなば鴟梟^{しきよう}虎狼^{こうろう}に食はれて一分^{いちぶん}の
功德^{くどく}なかるべし、後の八字にかえなば糞を飯にかふるがごとし、鬼^いの云く我

いまだ信ぜず、童子^{どうじ}の云く証人^{いわ}

あり過去の仏も・たて給いし大梵天王・釈提桓因・日月・四天も証人にたち
給うべし、此の鬼神後の偈をとかと申す、童子身にきたる鹿の皮を・ぬい

で座にしき踞跪合掌して此の座につき給へと請す、大鬼神・此の座につい

て説て云く、「生滅滅已・寂滅為樂」等云云、此の偈を習ひ学して若しは木

・若しは石等に書き付けて身を大鬼神の□になげいれ給う、彼の童子は今の

釈尊 彼の鬼神は今の帝釈なり。

薬王菩薩は・法華經の御前に臂を七万二千歳が間ともし給い、不輕菩薩は

多年が間・二十四字の故に無量無辺の四衆に罵詈・毀辱・杖木・瓦石・而

打擲之せられ給いき、所謂二十四字と申すは「我深く汝等を敬う敢て輕慢

せず所以は好ん汝等皆菩薩の道を行じて当に作仏することを得べし」等云云、

かの不輕菩薩は今の教主 釈尊なり、昔の須頭檀王は妙法蓮華經の五字の

為に千歳が間・阿私仙人にせめつかはれ身を床となさせて給いて今の釈尊と

なり給う。たま

然るに妙法蓮華經は八卷なり・八巻を読めば十六巻を読むなるべし、釈迦しやか

たほう

・多宝の二仏の經なる故へ、十六巻は無量無辺の卷軸なり、十方の諸仏じゆつぽうの

しょうみょう

証明ある故に一字は二字なり釈迦・多宝の二仏の字なる故へ・一字は無量むりよう

じゆつぽう

の字なり十方の諸仏の証明の御經なる故に、譬えば如意宝珠の玉は一珠な

ないしむりよう

れども二珠乃至無量珠の財をふらすこと・

ほけきよう

これをなじ・法華經の文字は一字は一の宝・無量の字は無量の宝珠なり、妙

しやか

の一字は二つの舌まします釈迦・多宝の御舌なり、この二仏の御舌は八葉の

れんげ

蓮華なり、この重なる蓮華の上に宝珠あり妙の一字なり。

たま

此妙の珠は昔釈迦如来の檀波羅密と申して身をうえたる虎にかひし功德・

はと

鳩にかひし功德・尸羅波羅密と申して須陀摩王として・そらごとせざりし

くどく

功德等、忍辱仙人として・歌梨王に身をまかせし功德・能施太子・尚闍梨仙人

にんにくせん

かり

くどく

のうせたいし

しょうじやりせん

等の六度の功德くどくを妙の一字にをさめ給たまいて末代まつだい惡世あくせの我等われ衆生しゅじょうに一善いちぜんも修しゆせざれども六度ろくど万行まんぎやうを満足まんぞくする功德くどくをあたえ給たまう、今此こん三界さんがい・皆是かい我有げがう・其中ごちゆう衆生しゅじょう・悉是しつぜ吾子ごしこれなり、我等われ具縛ぐばくの凡夫ぼんぷ忽たちに教主きゆうしやく釈尊しやくそんと功德くどくひとし彼

くどく ぜんたい
の功德を全体受け取る故なり、経に云く、如我等無為等云々、法華經を心得る
ものは釈尊と斉等なりと申す文なり、譬えば父母和合して子をうむ子の身は
ぜんたい ぜんたい ぼ
全体父母の身なり誰か是を争そうべき、牛王の子は牛王なりいま獅子王とな
らず、獅子王の子は獅子王となる・いまだ人王・天王よならず、今法華經の
行者は其中衆生悉是吾子と申して教主釈尊の御子なり教主釈尊のごと
く法王とならん事・難かるべからず、但し不孝の者は父母の跡をつがず
堯王には丹朱と云う太子あり舜王には商均と申す王子あり、二人共に不孝
の者なれば父の王にすてられて現身に民となる、重華と禹とは共に民の子な
り・孝養の心ふかりしかば堯舜の二王・召して位をゆづり給いき、民の
身・忽ち玉体にならせ給いき、民の現身に王となると凡夫の忽に仏となると
同じ事なるべし、一念三千の肝心と申すはこれなり、なをいかにとしてか此
くどく
功德をばうべきぞ、樂法梵志・雪山童子等のごとく皮をはぐべきか・身をな

ぐ

べきか臂ひじをやくべきか等云、章安大師だいいわ云く、「取捨宜しゅしゃよろしきを得て一向いっこうにすべ

からず」等これなり、正法しょうほうを修しゅうして仏になる行は時によるべし、日本国にほんこくに

紙なくば皮をはぐべし、日本国にほんこくに法華經ほけきょうなくて知れる鬼神きじん一人出来しゅつたいせば身を

なぐべし、日本国にほんこくに油なくば臂ひじをも・とすべし、あつき紙・国に充満じゅうまんせり

皮を・はいで・なにかせん、然しかるに玄奘げんじょうは西天さいてんに法を求めて十七年・十万じゅうまん

里にいたれり、伝でん教御人唐但二年でんぎょう とう にんなり波濤はとう三千里をへだてたり。

此等これらは男子こなんなり・上古じょうこなり・賢人けんじんなり・聖人しょうにんなり・いまだきかず女人にょにんの

仏法ぶつぽうをもとめて千里せんりの路をわけし事を竜女りゅうにょが即身成仏そくしんじょうぶつも摩訶まか波闍はじゃ波提はだい

比丘尼びくにの記べつにあづかりしも、しらず権化ごんげにやありけん、又在世ざいせの事なり、

男子・女人にょにん其の性本より別れたり・火はあたたかに・水はつめたし海人あまは魚

をとるに・たくみなり・山人やまかつは鹿をとるに・かしこし、女人にょにんは物をそねむに

・かしこしとこそ経文きょうもんには・あかされて候へそうら、いまだきかず仏法ぶつぽうに・かしこ
しとは、女人にょにん

の心を清風に譬たとえたり風はつなぐとも・とりがたきは女人にょにんの心なり、女人にょにんの
心をば水に氤ぐがくに譬たとえたり、水面には文字もんじとどまらざるゆへなり、女人にょにんを
ばおう人にたとへたり、・或時あるは実なり・或時あるは虚なり、女人にょにんをば河に譬たとえ

たり・一切いっさいまがられる・ゆへなり、而しかるに法華經は・正直捨方便等・
皆かいぜしんじつ是真實等・質直意柔・軟等・柔和質直者等と申もうして正直しょうじきなる事・弓の弦の
はれるがごとく・墨のなはを・うつがごとくなる者の信じまいらする御經な
り、糞せんだを梅檀もうと申もうすとも梅檀の香なし、妄語もうごの者を不妄語もうごと申もうすとも不妄語
にはあらず、一切經いっさいきやうは皆みな仏の金口きんくの説・不妄語もうご
の御言みことばなり、然しかれども法華經ほけきやうに對し・まいらすれば妄語もうごのごとし・椅語いごのご
とし・惡口あつくのごとし・兩舌のごとし、此の御經こそ實語じつごの中の實語じつごにて候へ、
實語じつごの御經をば・正直しょうじきの者心得こころえ、候なり、今實語じつごの女人にょにん・にて・おはすか當まさに
知るべし須弥山しゆみせんを戴いたきて大海たいかいをわたる人をば見るとも此の女人にょにんをば見るべか
らず、砂をむして飯となす人を

ば見るとも此の女人にょにんをば見るべからず、當まさに知るべし釈迦しゃか・多寶たほう・十方じゅうぽう
分身ぶんじんの諸しよ仏ぶつ・上行じやうぎやう・無む邊行等の大菩薩ぼさつ・大梵天王だいぼんてんのう・帝釈たいしゃく・四王等しおう・此女人にょにん

をば影の身に・そうがごとく・まほり給^{たま}うらん、日本第一^{にほんだいいち}の法華經^{ほけきょう}の行者^{ぎょうじゃ}の
女人^{にょにん}なり、故^{ゆえ}に名を一つつけたてまつりて不^ふ輕^ぎ菩薩^{ぼさつ}の義になぞらへん・日妙^{しつめう}
しょうにん

聖人等云云。

そうしゅうがまくら

相州鎌倉より北国佐渡の国・其^その中間^{ちゅうげん}二千余里に及べり、山海はるかに

・へだて山は蛾蛾^{がが}・海は濤濤^{とうとう}・風雨^{ふうう}・時にしたがふ事なし、山賊^{さんぞく}・海賊克満^{かいぞく}

せり、宿宿とまり・とまり・民の心・虎のごとし・犬のごとし、現身^{げんしん}に三惡道^{さんあくどう}

の苦をふるか、其^その上^{とう}当世^{とうせ}は世乱れ去年より謀叛^{むはん}の者・国に充満^{じゅうまん}し今年二月

十一日合戦、其^それより今五月のすゑ・いまだ世間安穩^{せけんあんのん}ならず、而^{しか}れども一の

幼子あり・あづくべき父も・たのもしからず・離別^{りべつ}すでに久し。

かた・がた筆も及ばず心弁^{わきま}へがたければとどめ畢^{おわ}んぬ。

ぶんえい

みずのえさる

文永九年太歳壬 申五月二十五日

日蓮^{にちれん}

花押^{かおう}

日
妙
聖しょうにん
人

外典げてんの者と仏弟子ぶつでしを合せしかば・氷こおりの日に・とくるが如くごと・火の水に滅する
が如くごと・まくるのみならず・なにともなき者となりしなり、又仏經ぶきよう漸くわた
り来りし程にぶきよう仏經の中に又勝劣しょうれつ・浅深せんじん俟まついけり、所謂いわゆる小乗經しょうじょうきよう・大乘經だいじょうきよう
・顯經けんきよう・密經みつきよう・權經こんきよう・実經じつきようなり、譬たとえば一切いっさいの石
は金に対すれば一切いっさいの金に劣れども・又金の中にも重重あり、一切いっさいの人間の
金は閻浮檀金えんぶには及びおよ侯そうはず、閻浮檀金えんぶは梵天ぼんてんの金には及およばざるがごとく、
一切いっさい經は金の如くごとなれども又勝劣しょうれつ・浅深せんじんあるなり、小乗經しょうじょうきようと申もうす經は
世間の小船せけんのごとく・わづかに人の二人・三人等は来すれども百千人は乗せ
ず、設たとひ二人・三人等は来すれども此岸しがんにつけて彼岸ひがんへは行きがたし、又す
こしの物をば入るれども大なる物をば入れがたし、大乘だいじょうと申もうすは大船なり人
も十・二十人も来る上・大なる物をも・つみ・鎌倉かまくらより・つくしみちの国へ
もいたる。

実經じつきようと申もうすは又彼の大船の大乗經だいじようきようには・にるべくもなし、大なる珍寶ちんぼうを

も・つみ百千人のりて・かうらいなんどへも・わたりぬべし、一乗法華經いちじようほけきようと

申もうす經も又是かくの如ごとし、提婆達多だいばだつたと申もうすは閻浮第一えんぶだいいちの大惡人あくにんなれども法華經ほけきよう

にして天王如来てんのうによらいとなりぬ、又阿闍世王あじゃせと申もうせしは父をころせし惡王あくおうなれども

法華經ほけきようの座つらなに列いちげりて一偈いっく・一句けちえんの結縁

衆となりぬ、竜女と申せし蛇体の女人は法華經を文殊師利菩薩説き給ひしかば仏になりぬ、其の上仏説には悪世末法と時をささせ給いて末代の男女に、をくらせ給ひぬ、此れこそ唐船の如くにて侯・一乗經にてはおはしませ、されば一切經は外典に対すれば石と金との如し、又一切の大乗經・所謂華嚴經・大日經・觀經・阿弥陀經・般若經等の諸の經經を法華經に対すれば螢火と日月と華山と蟻塚との如し、經に勝劣あるのみならず大日經の一切の眞言

師と法華經の行者とを合すれば水に火をあはせ露と風とを合するが如し、犬は師子をほうれば腸くさる・修羅は日輪を射奉れば頭七分に破る、一切の眞言師は犬と修羅との如く・法華經の行者は日輪と師子との如し、泳は日輪の出でざる時は堅き事金の如し、火は水のなき時はあつき事・鉄をやけるが如し、然れども夏の日にあひぬれ

ば堅泳のとけやすさ・あつき火の水にあひて・きへやすさ、一切いっさいの真言師しんごんしは
気色のたうとげさ・智慧ちえのかしこげさ・日輪にちりんをみざる者の堅き泳をたのみ・
水をみざる者の火をたのめるが如しごと。

当世とうせの人人ひとびとの蒙古国もうこをみざりし時のおごりは御覽ありしやうに・かぎりも
なかりしぞかし、去年こぞの十月よりは・一人も・おごる者なし、きこしめしし
・やうに日蓮にちれん一人計りばかこそ申せしが・よせてだに・きたる程ならば面をあは
する人も・あるべからず、但さるの犬を・をそれ・かゑるの蛇じゃを・をそるる
が如ごとくなるべし、是れ偏ひとえに釈伽仏の御使おんつかいい
たる法華經ほけきやうの行者ぎやうじやを・一切いっさいの真言師しんごんし・念仏者ねんぶつ・律僧等りつそうに・にくませて我と損
じ、ことさらに天のにくまれを・かほれる国なる故ゆえに皆人みな・臆病おくびやうになれるな
り、譬たとえば火が水をおそれ・木が金をおぢ・雉きじが鷹たかをみて魂を失うしなひ・ねずみ
が猫に・せめらるるが如しごと、一人も・たすかる者あるべからず、其の時そのときは・

いかがせさせ給うべき、軍には大將軍を魂とす大將軍をくしぬれば歩兵
臆病なり。
おくびよう

女人は夫を魂とす・夫なければ女人魂なし、此の世に夫ある女人すら世の
中渡りがたふみえて侯に、魂もなくして世を渡らせ給うが・魂ある女人にも
すぐれて心中かひがひしくおはする上・神にも心を入れ仏をもあがめさせ
しんちゆう

給へば人に勝れておはする女人なり、鎌倉に候いし時は念仏者等はさてをき
侯いぬ、法華經を信ずる人人は志あるも・なきも知られ候はざりしかども
・御勘氣を・かほりて佐渡の鳥まで流されしかば問い訪う人もなかりしに・
女人の御身として・かたがた御志ありし上・我と来り給いし事うつつなら
ざる不思議なり、其の上いまの事つで又申すばかりなし、定めて神も・まほ
らせ給ひ十羅刹も御あはれみましますらん、法華經は女人の御ためには暗き
に・と

もしび・海に船・おそろしき所には・まほりと・なるべきよし・ちかはせ
給へり、羅什三蔵は法華經を渡し給いしかば毘沙門天王は無量の兵士をして
葱嶺を送りしなり、道昭法師・野中にして法華經をよみしかば無量の虎来り
て守護しき、此れも又彼には・かはるべからず、地には三十六祇・天には二
十八宿まほらせ給う上・人には必ず二つの天・影の如くにそひて候、所謂一

をば同生天と云い二をば同名天と申す左右の肩にそひて人を守護すれば、失
な

き者をば天もあやまつ事なし・況や善人におひてをや、されば妙楽大師のた
まはく、「必ず心の固きに仮りて神の守り則ち強し」等云云、人の心かたけれ
ば神のまほり必ずつよしとこそ候へ、是は御ために申すぞ古への御心ざし
申す計りなし・其よりも今一重強盛に御志あるべし、其の時は弥弥
十羅刹女の御まほりも・つよかるべしと・おぼ

すべし、例には他を引くべからず、日蓮をば日本国の上一人より下万民に至る
まで一人もなくあやまとんと・せしかども・今までかうのて候事は一人なれ
ども心のつよき故なるべしと・おぼすべし、一つ船に乗りぬれば船頭のはか
り事わるければ一同に船中の諸人損じ・又身つよき人も心かひなければ多く
の能も無用なり、日本国には・か

しこき^{ひとひと}人人はあるらめども大将のはかり事つたなければ・かひなし、壹岐^{いき}・
対馬^{つしま}・九ヶ国のつはもの並に男女^{なんよ}多く・或^{ある}はころされ・或^{ある}はとらはれ・或^{ある}は
海に入り・或^{ある}はがけよりおちしもの・いくせんまんと云う事なし、又今度^{このたび}よ
せなば先には・にるべくも・あるべからず、京と鎌倉^{かまくら}とは但^い壹岐^{いき}・対馬^{つしま}の如^{ごと}く
なるべし、前にしたくして・いづくへも・にげさせ給^{たま}へ、其^{その}の時は苦^くし日蓮^{にちれん}
を見^みじ聞^きかじと申^{まを}せし人人^{ひとひと}も掌^{たなこころ}をあはせ法華經^{ほけきょう}を信^{しん}ずべし、念仏^{ねんぶつ}者^{もの}・禅宗^{ぜんしゅう}
までも

なむ みようほうれんげきよう
南無妙法蓮華經と申すべし、抑おさ法華經をよくよく信したらん男女なんよをば肩に
・になひ背そむに・おうべきよし經文きようもんに見えて侯上こうじやう・くまらゑん三蔵さんぞうと申せし人
をば木像しゃがの釈迦しやかをわせ給たまいて侯そうらいしぞかし、日蓮にちれんが頭こうべには大覺世尊だいかくせそんかはらせ
給たまいぬ昔いたと今と一同なり、各各にちれんは日蓮だんが檀那いかになり争いかでか仏にならせ給たまはざるべ
き。

いかなる男おとこをせさせ給たまうとも法華經ほけきようのかたきならば随したがひ給たまうべからず、いよ
いよ強盛じやうじやうの御志ごしあるべし、冰こおりは水より出いでたれども水よりもすさまじ、
青き事は藍いより出いでたれども・かさぬれば藍よりも色まさる、同じ法華經ほけきように
ては・をはすれども志しをかさぬれば・他人たにんよりも色まさり利生りしやうも・あるべ
きなり、木は火にやかるれども梅檀せんだの木
は、やけず、火は水にけさるれども仏ねはんの涅槃ねはんの火はきえず、華は風にちれど
も淨居じやうぎの華は・しばまず・水は大旱魃かんぱつに失れども黄河に入りぬれば失せず、

檀だん彌み羅ら王わうと申まうせし惡あく王おうは月がつ氏しの僧そうの類るいを切きりしに・とがなかりしかども・
師し子し尊そん者じゃの頸けいを切きりし時とき・刀たうと手てと共いに一時いちじに落おちにき、弗み沙つ密た多ら羅おう王わうは
雞けい頭とう摩ま寺じを焼やし時とき・十二じふに神かみの棒ぼうにかぶかべわ

られにき、今いま・日本にほん国こくの人人ひとびとは法ほ華け經きようの・かたきと・なりて身みを亡なぼし国くにを
亡なぼしぬるなり、かう申まうせば日に蓮ちんが自じ訟そうなりと心こころえぬ人ひとは申まうすなり、さには
・あらず是これを云いわずば法ほ華け經きようの行ぎ者ようじにはあらず、又また云いふ事ことの後のちにあへばこそ
人ひとも信しんずれ、かうただ・かきをきなばこそ未み来らいの人ひとは智ちありけりとは・しり
候そうらはんずれ、又また身み輕けい法ぽう重じゆう・死し身み弘かう法ぽうと

のべて候まうば身みは輕けいければ人ひとは打うちちはり惡にくむとも法ぽうは重じゆうければ必かならず弘ひろまるべし、
法ほ華け經きよう弘ひろまるならば死しかばね還かえつて重しげくなるべし、かばね重しげくなるならば此
のかばねは利り生しょうあるべし、利り生しょうあるならば今いまの八はち幡まん大だい菩ぼ薩さつと・いははるるや
うに・いはうべし、其その時ときは日に蓮ちんを供く養ようせる男なん女よは武ぶ内ない・若わ宮みやなんどのやう

にあがめらるべしと・おぼしめ

せ、抑そもそも一人の盲目をあけて侯もうもくはん功德そうちすら申くどくすばかりなし、況もうや日本にほん国の

いっさいしゅじょう

まなこ

一切衆生の眼をあけて侯

はん功德をや、

何いかに況や一閻浮提・

四天下の人の

眼のしゐたるを・あけて侯

はん功德をや、

まなこ

眼まなこのしゐたるを・あけて侯そうちはんをや、法華經ほけきようの第四いに云いわく、「仏滅度ほとけめつどの後に

能よそく其その義ぎを解げせんは是諸もろもろの天人てんにん・世間せけん之眼まなこなり」等云云、法華經ほけきようを持つ人

は一切世間の天人の眼なりと説かれて

侯、日本国にほんこくの人の日蓮にちれんをあだみ侯そうらは一切世間いっさいせけんの天人てんにんの眼まなこをくじる人なり、さ

れば天てんもいかり日日にちに天変てんぺんあり地ちもいかり月月げつに地天ちてんかさなる、天てんの帝釈たいしやくは

野干やかんを敬やうやういて法はふを習しやくいしかば今きんの教主きやうしゆ釈尊しやくそんとなり給たまい・雪山童子せつせんどうじは鬼きを師し

とせしかば今きんの三界さんがいの主しゆとなる、大聖だいしやう・上人しやうにんは形かたちを摘とみて法はふを捨すてざりけり、

今日蓮けふれんおろかなりとも野干やかんと鬼き

とに劣おとせるべからず、当世とうせの人ひといみじくとも帝釈たいしやく・雪山童子せつせんどうじに勝まさるべからず、

日蓮にちれんが身みの賤せんきについて巧言ぎやうげんを捨すてて侯故ゆゑに国既すでに亡なびんとする・かなしさ

よ、又日蓮にちれんを不便ふびんと申しぬる弟子でしどもをも・たすけがたからん事ことこそ・なげ

かしくは覚え侯おぼへ。

いかなる事ことも出来しゆつ侯はば是こゝへ御ごわたりあるべし見奉みまつらん・山中やまなかにて共にう

え死しにし侯そうらはん、又乙御前おとこぜんこそおとなしくなりて侯はらめ、いかにさかしく侯

らん、又又申もうすべし。

- 2566 -

八月四日

日蓮にちれん

花押かおう

乙御前へおとごぜん

一一三三

乙御前母御書おとごぜん ごしよ

1222p

をとごぜんのはは

いまは法華經ほけきょうをしらせ給たまいて仏ぼつにならせ給たまうべき女人にょにんなり、かへすがへす

ふみものぐさき者ものなれども・たびたび申もうす、又御房ごぼうたちをも・ふびんにあた

らせ給たまうとうけ給たまわる・申もうすばかりなし。

なによりも女房にようぼうのみとしてこれまで来りて候いし事・これまで・ながされ

候いける事は・さる事にて御心おんこころざしの・あらわるべきにや・ありけんと・あ

りがたくのみをばへ候、釈迦^{しやか}如来^{にょらい}の御弟子^{おんでし}あまた・をわしし・なかに十大弟子^{でし}

とて十人ましまししがなかに目・連尊者そんじやと申せし人は神通第一じんつうだいいちにててをはしき、
四天下してんげと申して日月のめぐり給うところをかみすぢ一すぢきらざるにめぐり
給たまいき、これは・いかなるゆへぞと・たづねれば・せんしやうに千里ありし
ところをかよいて仏法を聴聞ぶつぼう ちようもんせしゆへなり、又天台大師の御弟子に章安と申
せし人は万里ばんりをわけて法華經ほけきよう
をきかせ給へり、伝たま教大師は二千里せんりをすぎて止觀しかんをならい玄奘三蔵は二十
万里ばんりをゆきて般若經はんによきようを得給へり、道のとをきに心ざしのあらわるるにやかれ
は皆男子みななり権化ごんげの人のしわざなり、今御身おんみは女人にょにんなりごんじちはしりがた
し・いかなる宿善しゆくぜんにてやをはすらん、昔女人にょにんすいをとをしのびてこそ・或ある
千里せんりをもたづね・石となり・木となり・鳥となり・蛇じゃとなれる事もあり。

十一月三日

日蓮にちれん在御判

をとこぜんののはは

をとごぜんが・いかに尼となり候いつらん、法華經にみやづかわせ候ほう
こうをば・をとごぜんの尼は・のちさいわいなり候に○○○。

一二三四

べんどの
辨殿御消息

ぶんえい
文永九年七月 五十一歳御作

1223p

ふしん
不審有らば諍論無く書き付けて一日進らしむべし。

この書は随分の秘書なり、已前の学文の時もいまだ存ぜられざる事粗之を
載す、他人の御聴聞なからん已前

に御存知有るべし、総じてはこれよりぐしていたらん人にはよりて法門御
聴聞有るべし互に師弟と為らんか、
恐恐謹言。

七月二十六日

日蓮花押

辨殿・大進阿闍梨御房・三位殿

一二三五

辨殿尼御前御書

文永十年九月 五十二歳御作 与日

昭母妙一

1224p

しげければとどむ、
辨殿に申す大師講を・をこなうべし・
大師とてまいら
せて候、
三郎左衛門尉殿に候、
御文のなかに涅槃經の後分二卷・
文句五の
本末・授決集の抄の上卷等・
御隨身あるべし。

貞当は十二年にやぶれぬ・将門は八年にかたふきぬ、第六天の魔王・十軍

のいくさを・をこして法華經の行者と生死海の海中にして同居穢土を・と

られじ・うばはんと・あらそう、日蓮其の身にあひあたりて大兵を・をこし

て二十余年なり、日蓮一度もしりぞく心なし、しかりと・いえども弟子等・

檀那等の中に臆病のもの大体・或はをち・或は

退転の心あり、尼ごぜんの一文不通の小心に・いままで・しりぞかせ給わぬ

事申すばかりなし、其の上自身のつかうべきところに下人を一人つけられて

候事定めて釈迦・多宝・十方分身の諸仏も御知見あるか、恐恐謹言

九月十九日

日蓮 花押

辨殿尼御前に申させ給へ

一二三六

辨殿御消息 べんどのしゅうそく

建治二年七月

五十五歳御作

与日

昭

1225p

たきわうをばいゑふくべきよし候けるとてまかるべきよし申し候へばつか
わし候、ゑもんのたいうどののかへせにの事は大進の阿闍梨あじゃりのふみに候らん。

一 十郎入道殿じゅうにょうだうだうの御けさ悦よろこび入つて候よしかたらせ給たまえ。

一 さぶらうざゑもんのの・このほど人をつかわして候しが、をほせ給たまい
し事あまりに・かへすがへすをばつかなく候よし、わざと御わたりありて・
きこしめして・かきつかはし候べし、又さゑもんのにもかくと候へ、かわ
のべどの等の四人の事はるかにうけ給たまはり候はずおぼつかなし、かの辺にな
に事が候らん一一に・かきつか

はせ、^{たびたび}度度この^{ひとひと}人人の事はことに^{いちだいじ}一大事と天をせめまいらせ候なり、さだめ
て^{ごしょう}後生はさてをきぬ^{こんじょう}今生にしるしあるべく候と存すべきよししたたかにかた
らせ^{たま}給へ、伊東の八郎ざゑもん今はしなののかみはげんに、しに

たりしをいのりいけて^{ねんぶつ}念佛者等になるまじきよし明性房にをくりたりしが
へりて^{ねんぶつ}念佛者・^{しんこんし}真言師になりて^{むげんじごく}無間地獄に^だ墮ぬ、のと房はげんに身かたで候
しが^{せけん}世間のをそろしさと^{もう}申しよくと^{もう}申し^{にちれん}日蓮をすつるのみならず・
かたきとなり候ぬ、せう房もかくの^{こと}如し。

おのおのは^{ずいぶん}随分の^{にちれん}日蓮がかたうとなり、しかるをなづきをくだきていのる
にいままでしるしのなきは・こ

の中に心のひるがへる人の^あ有ると・をばへ候ぞ、をもちあわぬ人をいのるは
水の上に火をたき空にいゑを・つく

るなり、此の^{よし}由を四人にかたらせ^{たま}給うべし、むこり国の事のあうをもつてお

ぼしめせ、日蓮にちれんが失とがにはあらず、ちくご房三位そつ等をばいとまあらばいそ
ぎ来るべし大事だいじの法門申ほうもんもうすべしとかたらせ給たまえ、十住毘婆沙等じゅうじゅう びばしやの

要文を大帖ようぶん だいじょうにて候と真言しんごんの表のせうそくの裏にさど房のかきて候と・そうじて・せせと・かきつけて候ものの・かるき・とりてたび候へ、紙なくして一紙に多く要事を申もうすなり。

七月二十一日

にちれんかおう
日蓮花押

辨殿べんどの

一三三七

やげんた
ごへんじ
弥源太殿御返事

1226p

抑おさ日蓮にほんだいいちは日本第一の僻人びやくにんなり、其の故は皆人みなの父母ふぼよりもたかく主君しゅくんよりも大事だいじにおもはれ候ところの阿弥陀仏だいに大日如来薬師等を御信用ある故ゆえに、三災・七難先代さんさい ひちなんせんだいにこえ天変地天等昔にもすぎたりと申もうす故ゆえに・結句けっくは今生こんじょうには身をほろぼし国をそこない後生ごしょうには大阿鼻地獄に墮おち給たまうべしと、一日片時かたとき

もたゆむ事なく・よ

ばわりし故ゆえにかかる大難だいにんにあへり、譬たとえば夏の虫の火にとびくばりねずみが

ねこのまへに出いでたるが如ごとし、是あに我が身を知つて用心ようじんせざる畜生ちくしやうの如ごとく

にあらずや、身命しんみやうを事失うしなふ・併しかしながら心より出ずれば僻人びやくにんなり、但ただし石

は玉をふくむ故ゆえにくだかれ鹿は皮肉ゆえの故に殺され魚はあぢはひある故ゆえにとら

るすいは羽ゆえある故にやぶらる・女人にょにんはみめかたちよければ必ずねたまる此の

意なるべきか、日蓮にちれんは法華經ほけきやうの行者ぎやうじやなる故に三種ゆえの強敵かうてきあつて種種しゆじゆの大難だいにんに

あへり然しかるにかかる者の弟子でし・檀那だんなとならせ給たまう事不思議ふしぎなり定めて子細しさい候

らん相構かまえて能能御信心しんじん候

て靈山淨土りやうぜんじやうどへまいり給たまへ。

又御祈きとう のために御太刀同く刀あはせて二つ送り給たまはて候、此の太刀はし

かるべきかぢ作り候かと覺おぼへ候、あまくに・或あるは鬼きり・或あるはやつるぎ異朝いちやう

にはかむしやうばくやが劍に争いかでかことなるべきや此これを法華經ほけきようにま

いらせ給う、殿の御もちの時は悪の刀今・仏前へまいりぬれば善の刀なるべし、譬えば鬼の道心をおこしたらんが如し、あら不思議や不思議や、後生に
は此の刀をつえとたのみ給うべし、法華経は三世の諸仏発心のつえにて候ぞ
かし、但し日蓮をつえはしらともたのみ給うべし、けはしき山あしき道つえ
を・つきぬれば・たをれず、

殊に手をひかれぬればまるぶ事なし、南無妙法蓮華経は死出の山にてはつえ

はしらとなり給へ、釈迦仏・多宝仏・上行等の四菩薩は手を取り給うべし

日蓮さきに立ち候はば御迎にまいり候事もやらんずらん、又さきに行かせ

給はば日蓮必ず閻魔法王にも委く申すべく候、此の事少しもそら事あるべか

らず、日蓮・法華経の文の如くな

らば通塞の案内者なり、只一心に信心おはして靈山を期し給へ、ぜにと云う

ものは用にしたがつて変ずるなり、法華経も亦復是くの如し、やみには燈と

なり渡りには舟となり・或は水ともなり・或は火ともなり給うなり、若し然らば法華經は現世安穩・後生善処の御經なり。

其上日蓮は日本国の中には安州のものなり総じて彼国は天照太神のすみそ

め給いし国なりといへりかしこにして日本国をさぐり出し給ふあはの国御く

りやなりしかも此国の一切衆生の慈父悲母なりかかるいみじき国な

れば定んで故ぞ候らんいかなる宿習にてや候らん日蓮又彼国に生れたり

第一の果報なるなり此消息の詮にあらざれば委しくはかかず但おしはかり

給うべし。

能く能く諸天にいのり申べし、信心にあかなくして所願を成就し給へ女房

にも・よく・よく・かたらせ給へ、恐恐謹言。

二月二十一日

日蓮

花押

弥源太殿御返事^{やげんたごへんじ}

一二三八

弥源太入道殿御返事

1228p

別の事候まじ憑^{たの}み奉^{たてまつ}り候上は最後^{さいご}はかうと思し食^くし候へ、河野边^{にゆうどう}の入道殿
のこひしく候に漸^{ようや}く後^ごれ進^{まい}らせて其^そのかたみと見^みまいらせ候^{そうら}はん、さるにて
も候へば如何^{いかん}が空^くしかるべきやさこそ覺^{おぼ}え候へ。

但^{ただ}し当世^{とうせ}は我^{われ}も法華經^{ほけきよう}をしりたりと人毎^{ひとごと}に申^{もう}し候、時に法華經^{ほけきよう}の行者^{ぎようじや}はあ
また候、但^{ただ}し法華經^{ほけきよう}と申^{もう}す經^{きやう}は転子病^{てんしやびやう}と申^{もう}す病^{びやう}の様^{よう}に候、転子^{てんし}と申^{もう}すは親^{おや}の
様^{よう}なる子は少^{すく}く候へども此^この病^{びやう}は必^{かならず}ず伝^{でん}わり候なり、例^{れい}せば犬^{いぬ}の子^こは母^{はは}の吠^{へい}
を伝^{でん}へ、の子^こは母^{はは}の用^{もち}を伝^{でん}えて鼠^{ねずみ}を取^とる、日本国^{にほんこく}は六十六箇国^{ろくじゅうろくにこく}・嶋^{しま}二^{ふた}つ、其^その

中に仏^{ぶつ}の御寺^{ごうじ}は一^{いち}万^{まん}一^{いち}千^{せん}三^{さん}十^{じゅう}
七^{しち}所^{ところ}其^その内に僧尼^{そうに}・或^{ある}は三^{さん}千^{せん}・或^{ある}は一^{いち}万^{まん}・或^{ある}は一^{いち}千^{せん}一^{いち}百^{ひゃく}・或^{ある}は十^{じゅう}人^{にん}・或^{ある}は一^{いち}

人候へども其の源は弘法大師・慈覺大師・智証大師・此の三大師の御弟子にて候、山の座主・東寺・御室・七大寺の檢校、園城寺の長吏・伊豆・箱根・日光・慈光等の寺寺の別当等も皆此の三大師の嫡嫡なり、此の人人は三大師の如く読むべし、其れ此の三大師・法華經と

一切經との勝劣を読み候しには弘法大師は法華經最第三と慈覺・智証は法華經最第二・或は戲論などこそ読み候いしか今又是くの如し。

但し日蓮が眼には僻目にてや候らん、法華經最第一皆是眞実と釈迦仏・多宝仏・十方の諸仏は説いて証明せさせ給へり此の三大師には水火の相違にて候、其の末を受くる人人彼の跡を繼で彼の所領の田畠を我が物とせさせ給いぬれば何に争はせ給うとも三大師の僻事ならば此の科遁れがたくやおはすらんと見え候へども・日蓮は怯弱

の者にて候へばかく申す事をも人・御用いなし、されば今・日本国の人人の

我も我も経を読むといへども申^{もう}す事^{もち}用^{もち}ゆべしとも覚^{おぼ}えず候。

是はさて置き候ぬ御音信も候はねば何にと思いて候つるに御使うれしく
候、御所勞の御平愈の由うれしく候うれしく候、尚仰せを蒙る可く候 恐恐
謹言。
きんげん

九月十七日

日蓮 花押
にちれん かおう

弥源太入道殿御返事
やげんたにゆうどう ごへんじ

一三三九 弥源太入道殿御消息
やげんたにゆうどう しようそく

1229p

一日の御歸路をぼつかなく候つる処に御使悦び入つて候、御用事の御事
共は伯耆殿の御文に書かせて候、然るに道隆の死して身の舍利となる由の事、
是は何とも人知らず用いまじく候へば兎角申して詮は候はず、但し仏の以前
おんふみ し か どうりゅう しやり ただ いぜん
もち とこうもう

に九十五種きゅうじゅうごしゅの外道げどうありき各各是これを信じて仏に成ると申す、又皆人みなも一同に思
いて候し程に仏世いに出でさせ給たまい

て九十五種きゅうじゅうごしゅは皆地獄みなじごくに墮おちたりと説かせ給たまいしかば五天竺てんじくの国王こくおう・大臣等だいじんは

仏は所詮しよせんなき人なりと申す、又外道の弟子どもも我が師の上を云れて悪心あくしんを

かき候、竹杖外道ちくじょうげどうと申す外道の目連尊者もくれんそんじやを殺せし事これ是なり、苦得外道くとくげどうと申せ

し者を仏記しるして云く七日の内に死して食吐鬼じきどきと成るべしと説かせ給たまいしかば

外道瞋げどういかりをなす、七日の内に

食吐鬼じきどきと成りたりしかば其それを押し隠かくして得道とくどうの人の御舍利買しゃりつべしと云いいき、

其より外に不思議ふしぎなる事数を知らず。

但し道隆ただとうりゅうが事は見ぬ事にて候へば如何様いかんに候やらん、但し弘通ただくつうするところ

の説法せつぽうは共に本権教こんけんきょうより起りて候しを今は教外別伝きょうげべつでんと申して物にくるひて我

と外道の法と云うか、其の上建長寺けんちやうじは現に眼前げんに見へて候、日本国にほんこくの山寺の

敵とも謂いいつべき様なれども事を御威ぎよゐによせぬれば皆人みな恐れて云わず、是は
今生こんじょうを重しげくして後生ごしょうは軽かろくす

る故なりされば現身げんしんに彼の寺の故ゆえに亡国ぼつこくすべき事当りぬ、日蓮にちれんは度度たびたび知つて
にほんこく どうぞく
日本国の道俗とがの科を申せば是は今生こんじょうの禍後生ごしょうの福なり、但しただ道隆どうりゅうの振舞ふるまいは
にほんこく どうぞく
日本国の道俗どうぞく知りて候へども上を畏おそれてこそ尊み申せ又内心ないしんは皆みなうとみて候
らん、仏法ぶつぽうの邪正じゃせいこそ愚人ぐにんなれば知らずとも世間せけんの事は眼前がんぜんなれば知りぬら
ん、又一もちは用もちいずとも人の骨
の舍利しゃりと成る事は易やすく知れ候事にて候、仏の舍利しゃりは火にやけず水にぬれず金剛こんごう
のかなづちにて・うてども摧くだけず、一くだきして見よかしあらやすしあらや
すし、建長寺けんちようじは所領しりょうを取られてまどひたる男どもの入道うだいに成りて四十五
六十などの時走り入りて候が用こは之なく無く道隆だうりゅうがかげにしてすぎぬるな
り、云かうに甲斐かいなく死ぬ
れば不思議ふしぎにて候をかくして暫しばらくもすぎぎ。
ふしぎ

又は日蓮房にちれんが存知ほうもんの法門ほうもんを人に疎ほろませんとこそたばかりて候らめ、あまり

の事どもなれば誑惑^{おおわく}顕^{あら}われなんとす、但^{ただ}しばらくねうじて御覽^{ごらん}ぜよ、根露^{あらわ}れ

ぬれば枝かれ源^{みなもと}渴^{ことごと}けば流^{もつ}尽^きくると申^{もう}す事あり、恐^{きよう}恐^{きよう}謹^{きん}言^{げん}。

こつあんがねんつちのえとら

弘安元年 戊寅 八月十一日

日蓮^{にちれん}

かおう

花押

やげんたにゆうどう

弥源太入道殿

二四〇 さじき女房御返事 によぼうごへんじ

建治元年五十四歳御作 がんねん

1231p

女人は水のごとし・うつは物にしたがう・女人は矢のごとし・弓につかは によん もの によん によん 番

さる・女人はふねのごとし・かちのまかするによるべし、しかるに女人は 舟 によん 楫 によん

をとこ・ぬす人なれば女人ぬす人となる・をとこ王なれば女人きさきとなる 夫 盗 によん によん 后

・をとこ善人なれば女人・仏になる、今生のみならず後生も・をとこによる ぜんにん によん こんじょう ごじょう

なり、しかるに兵衛のさゑもんだのは法華經の行者なり、たとひ・いかなる 左衛門殿 ほけきょう ぎょうじや

事ありとも・をとこのめなれば法華經の女人とこそ仏は・しろしめされて供 妻 ほけきょう によん

らんに・又我とこころををこして法華經の御ために御かたびらをくりたびて 心 発 ほけきょう 帷 贈

侯。

法華經の行者に二人あり・聖人は皮をはいで文字をうつす・凡夫は・た ほけきょう ぎょうじや しやうにん 剥 もんじ ほんぶ

だ・ひとつきて候かたびら・などを法華經の行者に供養すれば皮をはぐうち 一 領 ほけきょう ぎょうじや くよう

に仏を収さめさせ給たまうなり、此の人のかたびらは法華經の六万九千三百八十四の文字の仏にまいらせさせ給たまいぬれば・六万九千三百八十四のかたびらなり、又六万九千三百八十四の仏・一一・六万九千三百八十四の文字なれば・此のかたびらも又かくのごとし、たとへばはるの野の千里ばかりに・くさのみちて候そつちはんに・すこしの豆ばかりの火を・くさ・ひとつにはなちたればいちじ・一時に無量無辺の火となる、此のかたびらも又かくのごとし、ひとつのかたびら・なれども法華經の一切の文字の仏にたてまつるべし。
この功德は父母・祖父母・乃至無辺の衆生にも・をよぼしてん、まして・わが・いと最愛をしと・をもふ・をとこは申もつすに及およばずと、おぼしめすべし、おぼしめすべし。

五月二十五日

日蓮 にちれん
花押 かおう

さじき女房御返事 にようぼうこへんじ

二四一 棧敷女房御返事 にようぼうごへんじ

建治四年二月五十七歳御作

1232p

白かたびら布一給い畢んぬ、法華經を供養申しまいらせ候に十種くやうと
たまい おわ ほけきよう くよう もう
申す十のやう候、其のなかに衣服と申し候はなににても候へ、僧のき候物を
もう そ えぶく もう
くやうし候、其の因縁をとかれて候には過去に十萬億の仏をくやうせる人・
ほけきよう
法華經に近づきまいらせ候とこそとかれて候へ、あらあら申すべく候へども、
きようきようきんげん
身にいたはる事候間こまやかならず候、恐恐謹言。

二月十七日

日蓮 にちれん
花押 かおう

さじきの女房御返事 にようぼうごへんじ

二四二 善無畏抄 ぜんむい

建治元年五十四歳御作 がねん

1232p

善無畏三歳は月氏烏菴奈国の仏種王の太子なり、七歳にして位に即き給う
ぜんむい がっし ぶっしゆ たいし たま

十三にして国をこのかみ兄ゆずに譲り出家遁世し五天竺てんじくを修行して五乗の道を極め三学きわを兼ね給いき、達磨掬多だるまきくたと申す聖人しやうにんに値あい奉りて真言たてまつの諸印契しんこん一時に頓受しよいんけいいちじし即日かんちやうに御灌頂にんてんなし人天の師と定まり給いき、足山けいそくに入りては迦葉尊者かしやうそんじやの髪を剃り王城そに於て雨を祈り給いたまいしかば觀音日輪かんのんにちりんの中より出て水瓶すいびやうを以て水を灌ぎ、北天竺てんじくの金粟王こんぞくの塔の下にして仏法ぶつぽうを祈請きしやうせしかば文殊師利菩薩大日經もんじゆしりほさつだいになちきやうの胎藏たいぞうの曼荼羅まんだらを現して授け給う、其の後開元四年丙辰かいげん ひのえたつ かんどに漢土わたくしに渡る玄宗皇帝げんそうこうてい之を尊むこと日月にちがうの如し、又大旱魃かんばつあり皇帝勅宣こうていちよくせんを下す、三蔵一鉢さんぞういちぱつに水を入れ暫く加持しばら かじし給いしに水の中に指許さかりの物有り變じて竜

と成る其の色赤色なり、白氣立ち昇り鉢より竜出でて虚空に昇り忽に雨を
降す、此の如くいみじき人なれども一時に頓死して有りき、蘇生りて語つて
云く我死する時獄卒来りて鉄の繩七筋付け鉄の杖を以て散散にさいなみ
閻魔宮に到りにき、八万聖教一字・一句も覚えず唯法華經の題名許り忘れ
ざりき題名を思いしに鉄の繩少し許ぬ息続いて高声に唱えて云く今此三界
・皆是我有其中衆生悉是吾子而今此処・多諸患難唯我一人能為救護等云云、
七つの鉄の繩切れ砕け十方に散す閻魔冠を傾けて南庭に下り向い給いき、
今度は命尽きずとて歸されたるなりと語り給いき、今日蓮不審して云く
善無畏三蔵は先生に十善の戒力あり五百の仏陀に仕えたり、今生には捨て
難き王位をつばきを捨てるが如く之を捨て幼少十三にして出家し給い、月支
国を廻りて諸宗を習い極め天の感を蒙り化道
の心深くして震旦国に渡りて真言の大法を弘めたり、一印一真言を結び誦す

れば過去・現在の無量の罪滅しぬらん何の科に依りて閻魔の責をば蒙り給いけるやらん不審極り無し、善無畏三蔵真言の力を以て閻魔の責を脱れずば天竺震旦日本等の諸国の真言師地獄の苦を脱る可きや、委細に此の事を勸えたるに此の三蔵は世間の軽罪

さんぞう せけん つみ

は身に御せず諸宗並びに真言の力にて滅しぬらん、此の責は別の故無し

ほけきょうひぼう つみ だいにちきょう ぎしやく

法華経誹謗の罪なり、大日経の義釈を見るに此の経は是れ法王の秘宝妄りに

ひせん しゃかしゅつせ よんじゅうよなん しゃりほつおんこん しょう よ まさ

卑賤の人に示さず、釈迦出世の四十余年に舍利弗慇懃の三請に因つて方に

ため みょうほうれんげ こと こ みょうほうれんげ

為に略して妙法蓮華の義を説くが如し、今・此の本地の身又是れ妙法蓮華

さいしんひしょ ゆえ じゅりようばん いわ

最深秘処なり、故に寿量品に云く「常に靈鷲

およ もろもろじゅうしよ ないし じょうど しか ことごと

山及び余の諸の住処に在り、乃至我が浄土は毀れざるに而も衆は焼き尽くと

見る」と、即ち此の宗瑜伽の意なるのみ、又「補処の菩薩の慇懃三請に因つ

まさ ため これ しゃく だいにちきょう ほんしゃく

て方に為に之を説く」等云云、此の釈の心は大日経に本迹二門・開三

顯一・開近顯遠かいこんけんのんの法門ほうもん有り、法華經ほけきようの本・迹二門ことの如し、此この法門ほうもんは法華經ほけきようと同じけれども此この大日經だいにちきように印しんこんと真言しんこんと相加わりて三密相応そつおうせり、法華經ほけきようは但意密許いみつばかりにて身口しんくの二密闕かけたれば法華經ほけきようをば略説りやくせつと云いい大日經だいにちきようをば広説くわうせつと申もうす可べきなりと書かれたり、此この法門ほうもん第一だいいちの謗法あやまほうの根本こんぽんなり、此この文ぶんに二つのあやまり有り、又義釈ぎしゃくに云いわく

「此の経横に一切の仏教を統ぶ」等云云、大日経は当分随他意の経なるをあやま

りて随自意跨節の経と思えり、かたがた・りたるを實義と思し食す故に閻魔えんま

の責をば蒙りたりしか智者にて御座せし故に此の謗法を悔い還えして法華経ほけきよう

に翻りし故に此の責を免がるか、天台大師釈して云く、法華は衆経を總括そうかつ

す乃至輕慢止まざれば舌口中くちゆう

に爛る」等云云、妙樂大師云く、「已今当の妙此に於て固く迷えり舌爛止まぜつらん

ざるは猶華報と為す、謗法の罪苦長劫に流る」等云云、天台・妙樂の心はみようらく

法華経に勝れたる経有りと云はむ人は無間地獄に墮つ可しと書かれたりお

善無畏三蔵は法華経と大日経とは理は同じけれども事の印・真言は勝れたりすく

と書かれたり、然るに二人の中に一人は必し

悪道に墮つ可しと・をばふる処に天台の釈は経文に分明なり、善無畏の釈ぜんむい

は経文に其証拠見え、其の上閻魔王の責の時・我が内証の肝心と思食すおほしめ

だいにちきよう さんぶきよう

大日経等の三部経の内の文を誦せず、法華経の文を誦して此の責を免れぬ、

うたがいないく

ほけきよう しんこんまさ

疑無く法華経に真言勝ると思う

あやま

ひるがえ

を翻したるなり其の上善無畏三蔵の

おんでしふくうさんぞう

ほけきよう

ぎき

だいにちきよう

御弟子不空三蔵の法華経の儀軌には大日経

こんごうちきよう

だいにち

さう

ほけきよう たほうぶつ

だいにち

・金剛頂経の両部の大日をば左右に立て法華経多宝仏をば不二の大日と定

だいにち

さう

ごと

めて両部の大日をば左右の巨下の如くせり。

でんぎようだいし えんりやく

にゅうとうれいかんじ

じゆんぎようわじよう

しんこん

ひほう

伝教大師は延暦二十三年の御入唐靈感寺の順 晁和尚に真言三部の秘法

ぶつるうじ

ぎようまんざす

てんだいしかんほうしゆ

う

けんみつにどう

おうし

きわ

を伝う、仏滝寺の行満座主に天台止観宝珠を請け取り顕密二道の奥旨を極め

たま

けこん

さんろん

ほうそうりつしゅう

ひとびと

じしゅうがまん

へんしゅう

給いたる人、華嚴・三論・法相律宗の人人の自宗我慢の辺執を倒して

てんだいだいし

きにゆう

よし

たま

えびよう

しゅこ

しゅうく

もう

天台大師に帰入せる由を書かせ給いて候、依憑・集守護章・秀句なむと申す

ぜんむい

こんごうち

ふくう

てんだいしゅう

きにゆう

ちしゃだいし

ほんし

あお

書の中に善無畏・金剛智・不空等は天台宗に帰入して智者大師を本師と仰く

由のせられたり、各各思えらく宗を立つる法は自宗をほめて他宗を嫌うは常

の習

なりと思えり、法然ほうねんなむどは又此例を引きて曇鸞どんらんの難易道なんいどう・綽しよくの聖道しょうどう・淨土じやうど
善導ぜんどうが正しょう・雜ざう一行みようもくの名目なめくを引きて天台てんだい・真言等しんごんの大法だいほうを念ねん・仏ぶつの方便ほうべんと成なせり、
此等これらは牛跡あとに大海たいかいを入れ、果くわの額がくを州しゅうに打うつ者ものなり、世間せけんの法はふには下剋上げこくじやう・背そむ
上かみ向むかひ下しもは国土こくど亡ぼう乱らんの因縁いんねんなり、仏法ぶつぽうには權小ごんしょうの經經きやうぎやうを本ほんとして実經じつぎやうをあ
なづる、大謗法ほうほうの因縁いんねんなり、恐おそる可べし、恐おそる

べ
可し。

かじょう

嘉祥寺の吉蔵大師は三論宗の元祖・或時は一代聖教を五時に分け・或時

は二蔵と判ぜり、然りと雖も竜樹菩薩の造の百論・中論十二門論大論を尊ん

はんにやきよう

えびよう

たま

てんだいだいし

へんしゅう

す

たま

ちしやだいし

で般若経を依憑と定め給い、天台大師を辺執して過ぎ給いし程に智者大師

ほんもうきよう

じよ

たま

てんだいだいし

へんしゅう

す

たま

ちしやだいし

の梵網等の疏を見て少し心とけやうやう近づきて法門を聴聞せし程に

けつく

でし

はんにやきようなら

ほけきよう

こう

いた

結句は一百余人の弟子を捨て般若経並びに法華経をも講ぜず七年に至つて

てんだいだいし

たま

こうそつ

こうそつ

にくきよう

と書か

れたり、天台大師高坐に登り給えば寄りて肩を足に備え路を行き給えば負

てんだいだいし

たま

きちそうだいし

きちそうだいし

ほうぼう

へんしゅう

と書か

たり、天台大師高坐に登り給えば寄りて肩を足に備え路を行き給えば負

たてまつたま

たま

きちそうだいし

きちそうだいし

ほうぼう

へんしゅう

と書か

奉り給うて堀を越え給いき、吉蔵大師程の人だにも謗法を恐れてかくこそ仕

たま

し

しんこんさんろん

ほうそつ

ひとびと

へんしゅう

と書か

え給いしか、然るを真言三論・法相等の宗宗の人人今末末に成りて辺執せさ

たま

じこうじとくか

せ給うは

じこうじとくか

なるべし。

今世に浄土宗・禅宗など申す宗宗は天台宗にをとされし真言・華嚴

今世に浄土宗・禅宗など申す宗宗は天台宗にをとされし真言・華嚴

等に及ぶ可からず、依経既に楞伽經・觀經等なり此等の經經は仏の出世

の本意にも非ず一時一会の小經なり一代聖教を判ずるに及ばず、而も彼の

經經を依経として一代の聖教を聖道・淨土・難行・易行・雜行・

正行に分ち教外別伝なむどののしる、譬えば民が王をしえたげ小河の大海

を納むるが如し、かかる謗法の人師どもを信じて後生を願う人人は無間地獄

脱る可きや、然れば当世の愚者は仏には釈迦牟尼仏を本尊と定めぬれば自然

に不孝の罪脱がれ法華經を信じぬれば不慮に謗法の科を脱れたり。

其の上女人は五障三従と申して世間出世に嫌われ一代の聖教に捨てられ

畢んぬ、唯法華經計りにこそ竜女が仏に成り諸の尼の記は・さづけられて

候ぬれば一切の女人は此の經を捨てさせ給いては何の經をか持たせ給うべき、

天台大師は震旦国の人・仏滅後・一千五百余年に仏の御使として世に出でさ

せ給いき、法華經に三十卷の文を注し給い文句と申す文の第七の卷には「他經

には但男に記して女に記せず」等云云、男子も余経にては仏に成らざれども
且らく与えて其をば許してむ、女人に於ては一向諸経に於ては叶う可からず
と書かれて候、縦令千万の経経に女人成る可しと許され為りと雖も法華経
に嫌われなば何の憑か有る可きや。

教主 釈尊我が諸経四十余年の経経を末顕真実と悔い返し涅槃経等をば

当説と嫌い給い無量義経をば今説と定め置き、三説に秀でたる法華経に「正直

に方便を捨て但無上道を説く世尊の法は久しくして後要当に真実を説くべ

しと釈尊宣べ給いしかば、宝浄世界の多宝仏は大地より出でさせ給いて真実

なる由の証明を加え、十方分身

の諸仏広長舌を梵天に付け給う、十方世界微塵数の諸仏の舌相は不妄語戒

の力に酬いて八葉の赤蓮華に生出させ給いき、一仏・二仏三仏・乃至十仏・

百仏・千万億仏の四百万億那由他の世界に充滿せる仏の御舌を以て定め置き

たま

によにんじょうぶつ

給える女人成仏の義なり、

謗法無くして此の経を持つ女人は

によにん

じゅつぼうこくう

虚空に

じゅうまん

充滿せる慳貪・嫉妬・瞋恚・十悪・五逆なりとも草木の露の大風にあえる

けんどん

しつと

しんに

じゅうあく

じゅうあく

じぎやく

そつもく

つゆ

たいふう

ほけきようほうぼう

つみ

なる可し三冬の氷の夏の日に滅するが如し、但滅し難き者は法華経謗法の罪

べ

こおり

ごと

がた

つみ

なり、譬えば三千大千世界の草木を薪と為すとも須弥山は一分も損じ難し、

たと

さんぜんだいせんせかい

そつもく

たきぎ

な

しゅみせん

いちぶん

がた

縱令七つの日出でて百千日照すとも大海の中をばかわかしがたし、設い八万

い

たいかい

たといはちまん

しようにきよう

だいぢみじん

とうば

だいしやうじよう

かいぎよう

じゅつぼうせかい

しゅじよう

聖教を読み大地微塵の塔婆を立て 大小乗の戒行を尽し 十方世界の衆生

だいぢみじん

とうば

だいしやうじよう

かいぎよう

じゅつぼうせかい

しゅじよう

を一子の如くに為すとも法華経謗法の罪はきゆべからず、我等過去・現在・

ごと

な

ほけきようほうぼう

つみ

われらかこ

げんざい

みらい

さんぜ

ろくどう

ひとえ

ほけきようほう

ひとえ

つみ

未来の三世の間に仏に成らずして六道の苦を受くるは偏に法華経謗法の罪な

さんぜ

ろくどう

ひとえ

ほけきようほう

ひとえ

つみ

るべし、女人と生れて百悪身に備ふるも根本此の経誹謗の罪より起れり。

によにん

こんぽん

ひほう

つみ

あれば

あ

な

な

な

な

な

な

な

な

な

な

な

な

な

な

然者此の経に値い奉らむ女人は皮をはいで紙と為し血を切りて墨と為し骨

あ

な

な

な

な

な

な

な

な

な

な

な

な

な

な

を折りて筆と為し血の涙を硯の水と為して書き奉ると雖も飽く期あるべから

な

な

な

な

な

な

な

な

な

な

な

な

な

な

な

ず、何に況や衣服・金銀・牛馬・田畠等の布施を以て供養せむは・ものの

いか

えぶく

きんぎん

ぎゅうば

でんばた

ふせ

くよう

くよう

くよう

くよう

くよう

くよう

くよう

くよう

くよう

か
ず
に
て
か
ず
な
ら
ず
。

一四三

妙密上人御消息

建治二年三月 五十五歳御作

与 谷妙密

1237p

せいふ 青鳧五貫文給い候い畢んぬ、夫れ五戒の始は不殺生戒六波羅蜜の始は
だんはらみつ 檀波羅蜜なり、十善戒・二百五十戒・十重禁戒等の一切の諸戒の始めは皆
ふさつしょうかい 不殺生戒なり、上大聖より下蚊虻に至るまで命を財とせざるはなし、これを
だいち 奪へば又第一の重罪なり、如来世に出で給いては生をあわれむを本とす、生
せじき をあわれむしるしには命を奪はず施食
しゅう を修するが第一の戒にて候なり、人に食を施すに三の功德あり・一には命を
だいち づぎ・二には色をまし・三には力を授く、命をつぐは人中天上に生れては
かほう 長命の果報を得仏に成りては法身如来と顕れ其の身虚空と等し、力を授く

る故に人中天上に生れては威徳の人と成りて眷属多し、仏に成りては報身
如来と顕れて蓮華の台に居し八月十五夜の月の晴天に出でたるが如し、色を
ます故に人中天上に生れては三十二相を具足して端正なる事華の如く、仏
に成りては応身如来と顕れて釈迦仏の如くなるべし、夫れ須弥山の始を尋ぬ
れば一塵なり大海の初は一露な

り一を重ぬれば二となり二を重ぬれば三乃至十百千万億阿僧祇の母は唯一な
るべし。

されば日本国には仏法の始まりし事は天神七代・地神五代の後人王百代
其の初めの王をば神武天皇と申す、神武より第三十代に当りて欽明天皇の御宇
に百済国より経並びに教主釈尊の御影僧尼等を渡す、用明天皇の太子の
上宮と申せし人、仏法を読み初め法華経を漢土よりとりよせさせ給いて疏を
作りて弘めさせ給いき、それより後人王三十七代孝徳天皇の御宇に観勒僧正

と申す人新羅国より三論宗・成実宗を渡す、同じき御代に道昭と申す
僧漢土より法相宗・俱舎宗を渡す、同じき御代に審祥大徳・華嚴宗を渡す、
第四十四代・元正天皇の御宇に天竺の上人・大日経を渡す、第四十五代・
聖武天皇の御宇に鑑真和尚と申せし人漢土より日本国に律宗を渡せし・

ついでに天台宗の玄義・文句・円頓止觀・淨名疏等を渡す、然れども真言宗と法華宗との二宗を・ばいまだ弘め給はず、人王第五十代桓武天皇の御代にさいちようもうこそうでんぎようだいし最澄と申す小僧あり後には伝教大師と号す、此の人入唐已前に真言宗とてんだいしゅうしようじよ天台宗の二宗の章疏を十五年が間・但一人見置き給いき、後に延暦二十三年七月に漢土に渡り・かへる年の六月にほんちようかんどわた年七月に漢土に渡り・かへる年の六月に本朝に著かせ給いて、天台・真言の二宗を七大寺の碩学数十人に授けさせ給いき、其の後于今四百年なり、総じて日本国に仏法渡りて于今七百余年なり、或は弥陀の名号・或は大日の名号・或は釈迦の名号等をば一切衆生に勧め給へる人人はおはすれども、いまだ法華經の題目・南無妙法蓮華經と唱へよと勧めたる人なし、日本国に限らず月氏等にも仏滅後・一千年の間・迦葉・阿難・馬鳴・竜樹・無著・天親等の大論師・佛法を五天竺に弘通せしかども・漢土に仏法渡りて数百年の間・

まとう

摩騰・迦竺・法蘭・羅什三藏・南岳・天台・妙樂等・或は疏を作り・或は經

を釈せしかどもいまだ法華經の題目をば弥陀の名号の如く勧められず、唯

自身一人計り唱へ・或は經を講ずる時・講師計り唱る事あり、然るに八宗・

九宗等其の義まちまちなれども多分は弥陀の名号次には觀音の名号次には

釈迦仏の名号・次

には大日・藥師等の名号をば唱へ給へる高祖先徳等はおはすれども何なる故

有りてか一代諸教の肝心たる法華經の題目をば唱へざりけん、其の故を能く

能く尋ね習い給ふべし、譬えば大医の一切の病の根源藥の浅深は弁へたれど

も故なく大事の藥をつかふ事なく病に隨ふが如し。

されば仏の滅後正像二千年の間は煩惱の病・輕かりければ一代第一の

良藥の妙法蓮華經の五字をば勧めざりけるか、今末法に入りぬ人毎に重病

有り阿弥陀・大日・釈迦等の輕藥にては治し難し、又月はいみじけれども秋

にあらざれば光を惜む・花は目出けれども春にあらざれば・さかず、一切・
時による事なり、されば正像二千年の間は題目

の流布の時に当らざるか、又仏教を弘るは仏の御使なり随つて仏の弟子の

譲りを得る事各別なり、正法千年に出でし論師像法千年に出づる人師等は多

くは小乗・権大乘・法華經の・或は迹門・或は枝葉を譲られし人人なり、

いまだ本門の肝心たる題目を譲られし上行菩薩世に出現し給はず、此の人
まづぼうしゅうつげん
末法に出現して妙法蓮華經の五字を一閻浮提の中・国ごと人ごとに弘むべ
し、例せば當時・日本国に弥陀の名号の流布しつるが如くなるべきか。

然るに日蓮は何の宗の元祖にもあらず又末葉にもあらず持戒・破戒にも
しかにちれんいずれがんとそ
闕て無戒の僧有智・無智にもはづれたる牛羊の如くなる者なり、何にしてか
もつむかいうちむち
申し初めけん上行菩薩の出現して弘めさせ給うべき妙法蓮華經の五字を
さきだちじょうぎようぼうさつしゅうつげんひろたま
先立てねごとの様に心にもあらず南無妙法蓮華經と申し初て候し程に唱うる
者なり、所詮よき事にや候らん・しよせん

又悪き事にや侍るらん我もしらず人もわきまへがたきか、但し法華經を開い
はいたてまつはるくかんのんぶげん
て拝し奉るに此の經をば等覺の菩薩文殊・弥勒觀音普賢までも輒く一句一偈
をも持つ人なし、「唯仏与仏」と説き給へり、されば華嚴經は最初の頓説円満
の經なれども法慧等の四菩薩に説かせ給ふ、般若經は又華嚴經程こそなけれ
ほうえぼさつたまはんにやきようけこんきよう

とも当分は最上の経とつぶん さいじょうぞ

かし、然しかれども須菩提しゆぼだいこれを説く、但法華經計りこそ三身円満ほけきようばか さんじんえんまんの釈迦しゃかの金口きんく

の妙説にては候なれ、されば普賢ふげん・文殊もんじゆなりとも輒たやすく一句一偈いっくいちげをも説かせ給たまう

べからず、何いかに況や末代まつだいの凡夫我等ぼんぶわれらしゆじよう衆生は一字・二字なりとも自身じしんには持たもち

がたし、諸宗しよしゅうの元祖等がんそ・法華經ほけきようを読み奉れば各各其の弟子等そでしは我が師は

法華經ほけきようの心を得給たまへりと思へり、然しかれ

ども詮を論ずれば慈恩大師じおんだいしは深密經唯識論じんみつ ゆいしきろんを師として法華經ほけきようをよみ、嘉祥大師かじようだいし

は般若經中論はんによきようを師として法華經ほけきようをよむ、杜順法蔵等とじゆんほうぞうは華嚴經けこんきようじゅうじゅうびしやもんろん十住毘婆沙論とじゆんほうぞう

を師として法華經ほけきようをよみ、善無畏ぜんむい・金剛智こんごうち・不空等ふくうは大日經だいにちきようを師として

法華經ほけきようをよむ、此等これらの人人ひとびとは各法華經ほけきようをよめりと思へども未だいま一句一偈いっくいちげもよ

める人にはあらず、詮を論ずれ

ば伝でん教大師きやうだいしことはりて云いわく「法華經ほけきようを讃さんすと雖も還いえどつて法華ほつの心けを死す」云

云、例せば外道げどうは仏經ぶきようをよめども外道げどうと同じ・蝙蝠へんぷくが昼を夜と見るが如ごとし、
又赤き面おもての者は白き鏡も赤しと思ひ太刀に顔をうつせるもの円かなる面をほ
そながしと思ふに似たり。

今日蓮いまにちれんは然しからず已い今当こんとうの經文きようもんを深くまほり一經いつきようの肝心かんじんたる題目だいもくを我も唱
へ人にも勸すすむ、麻の中の蓬よもぎ・墨すみうてる

木の自体は正しやうじき直ならざれども自然に直じねんくなるが如ごとし、經のままに唱となうればま
がれる心なし、当まさに知るべし仏の御心の我等が身に入らせ給たまはずば唱へがた
きか、又それ他人の弘たにんめさせ給たまふ仏法は皆師より習ならひ伝へ給たまへり、例せば鎌倉
の御家人等の御知行所領の地頭・或あるは一町二町なれども皆故大将家の御恩な
り、何いかに況や百町・千町・
一國・二國を知行する人人をや、賢人けんじんと申もうすはよき師より伝へたる人聖人しやうじんにんと
申もうすは師無なくくして我と覚さとれる人なり、仏滅後・月氏がっし・漢土かんど・日本國にほんこくに二人の
聖人しやうじんにんあり所謂天台・伝教の二人なり、此の二人をば聖人しやうじんにんとも云うべし又
賢人けんじんとも云うべし、天台大師は南岳なんがくに伝えたり是は賢人けんじんなり、道場どうじやうにして
自解じげ仏乗ぶつじやうし給たまいぬ又聖人しやうじんにんなり、伝教
大師は道邃どうすい・行滿しはんに止觀えんどんと円頓だいかいの大戒を伝へたりこれは賢人けんじんなり、入唐にゆうとう已前いぜん
に日本國にほんこくにして真言しんこん・止觀しかんの二宗を師なくしてさときわり極め、天台宗の智慧ちえを

以て六宗・七宗に勝れたりと心得給いしは是れ聖人なり、然れば外典に云く

「生れながらにして之を知る者は上なりの名なり、学んで之を知る者は次なり

次とは賢人の名なり」内典に云く

「我が行師の保無し」等云云、夫れ教主釈尊は娑婆世界第一の聖人なり、

天台・伝教の二人は聖賢に通ずべし、馬鳴・竜樹・無著・天親等・老子・

孔子等は・或は小乗・或は権大乘・或は外典の聖賢なり、法華經の聖賢に

は非ず。

今日蓮は聖にも賢にも非ず持戒にも無戒にも有智にも無智も当らず、然れ

ども法華經の題目の流布すべき後・五百歳二千二百二十余年の時に生れて近

くは日本国遠くは月氏・漢土の諸宗の人人唱へ始めざる先に・南無

妙法蓮華經と高声によばはりて二十余年をふる間・或は罵られ打たれ・或は

疵をかうほり・或は流罪に二度死罪に一度

定められぬ、其その外ほかの大難数だいなんをしらず・譬たとへば大湯に大豆ひたを漬し小水に大魚
の有あるが如ごとし、経いわに云く「而しかも此の経は如来にょらいの現在げんざいにすら猶なお怨嫉おんしつ多し況や滅度めつど
の後をや」又云く「一切世間怨多いっさいせけんあだおおくして信じ難がたし」又云く「諸もろの無智もろむち
の人有りて悪口罵詈あつくめりす」・或あるは云く「刀杖瓦石とうじようがしやくを加え・或あるは数数擯出しばしばひんずいせらる」
等云云、此等これらの经文きようもんは日蓮にちれん・日本国にほんこくに生ぜずんば但仏の御言みことばのみ有りて其その
義空ぎくうしかるべし、譬たとへば花さき菓このみみならず雷いかずちなりて雨ふらざらんが如ごとし

、きんげんむなし 仏の金言空くして正直しょうじきの御経に大妄語もうごを雑まじへたるなるべし、此等これらを以て思

ふに恐くは天台・伝教てんだい だんぎょうの聖人しょうにんにも及ぶべし又老子・孔子らうし こうしをも下くだしぬべし、

にほんこく

日本国の中に但一人南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと唱えたり、これは須弥山しゅみせんの始いちじんの一塵

たいかい

大海の始の一露なり、二人・三人・十人・百人・一国・二国・六十六箇国・

すで

已に島二にも及びぬらん、今は謗ぼうぜし人人ひとびと

も唱へ給たまうらん、又上一人かみいちにんより下万民ばんみんに至るまで法華經ほけきょうの神力品じんりきぼんの如く一同ごと

なむみょうほうれんげきょう

に南無妙法蓮華經と唱へ給ふ事もやあらんずらん、木はしづかならんと思へ

ども風やまず春を留んと思へども夏となる、

日本国にほんこくの人人ひとびとは法華經ほけきょうは尊とけ

にちれん

れども日蓮房にちれんが悪ければ南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうとは唱えまじとことはり給ふとも今

ひとたび

一度も二度も大蒙古国だいもうこくより

い きつしま

押し寄せて壹岐对馬い きつしまの様に男をば打ち死し女をば押し取り京鎌倉かまくらに打ち入り

こくしゅなら

て国主並びに大臣百官等だいじんを搦め取り牛馬ぎゅうばの前に・けたて・つよく責めん時は

いかで なむ ほうれんげきよう
争か南無妙法蓮華經と唱へざるべき、法華經の第五の巻をもつて日蓮

が面を数箇度打ちたりしは日蓮は何とも思はずうれしくぞ侍りし、不輕品の

如く身を責め勸持品の如く身に當つて責し責し。

但し法華經の行者を悪人に打たせじと仏前にして起請をかきたりし梵王・

帝釈・日月・四天等いかに口惜かるらん、現身にも天罰をあたらざる事は

小事ならざれば始中終をくくりて其の身を亡すのみならず議せらるるか、あ

へて日蓮が失にあらず謗法の法師等をたすけんが為に彼等が大禍を自身に招

きよせさせ給うか。

此等を以て思ふに便宜ごとの青鳧五連の御志は日本国の法華經の題目を

弘めさせ給ふ人に当れり、国中の諸人・一人・二人・乃至千万億の人・題目

を唱うるならば存外に功德身にあつまらせ給うべし、其の功德は大海の露を

あつめ須弥山の微塵をつむが如し、殊に十羅刹女は法華經の題目を守護せん

と誓^{たま}わせ給^{たま}う、此^{すい}を推^{すい}するに妙密

しょうにんなら

上人^{しょうにん}並^びびに女房^{にようぼう}をば母の一子を思^{こと}ふが如^{ごと}く、牛^{みよつ}の尾を愛^{いと}するが如^{ごと}く昼夜に

まほらせ給^{たま}うらん、たのもし^{たのもし}たのもし、事多^{こと}しといへども委^{くわし}く申^{もう}すにいとま

あらず、女房^{にようぼう}にも委^{くわし}く申^{もう}し給^{たま}へ此は諂^{へつら}へる言にはあらず、金はやけば弥^{いよいよ}

色まさり剣はとげば弥利いよいよくなる法華經ほけきょうの功德くどくはほむれば弥功いよいよくどく徳まさる、二

十八品は正まさき事は・わずかなり讃ほむる言こそ多く候へと思食おほしめすべし。

閏三月五日

日蓮 花押
にちれん かおう

くわがやつ

しょうにんごへんじ

谷妙密上人御返事

一四四

道妙禅門御書「四種祈御書」
ぜんもんごしよ きとうごしよ

1242p

御親父祈きとうの事承り候間、仏前ぶつぜんにて祈念きねん申すべく候、祈きとうに於ては、顕祈

顯応・顕祈冥応・冥祈冥応・冥祈顯応の祈きとう有りかんようと雖も、只肝要かんようは、此の經の信心しんじん

を致いたし給ひ候はば、現當げんとうの所願しょうがん満足有るべく候、法華第三に云く、「魔ま及び魔民まみん

有りと雖、皆みな佛法ぶつぽうを護まもる、第七に云く、「病即消滅そくしょうめつして不老不死ふろうふしならん」と

の金言きんげん之を疑うたがいふべからず、妙一あまこぜん尼御前当山参詣さんけい有難なんく候、卷物一卷之を進まい

らせ候、披見有るべく候、南無なむ妙法蓮華經。

建治二年丙子八月十日

日蓮 花押

道妙禅門

二四五

日女御前御返事

建治三年八月 五十六歳御作

1243p

御本尊供養の御為に驚目五貫・白米一駄・菓子其の数送り給ひ俟い畢ん

御本尊ごほんぞん供養くようの御為ために驚目がもく五貫・白米一駄・菓子其その数送り給ひ俟い畢ん

ぬ、抑此の御本尊は在位五十年の中には八年・八年の間にも涌出品より

ぞくるいほん

属累品しよるいほんまでに八品はちぽんに顕れ給うなり、さて滅後めつごには正法しょうぼう・像法ざうぼう・末法まつぼうの中には

正像二千年には・いまだ本門の本尊と申す名だにもなし、何に況や顕れ給は

しよらうじゆん

正像しょうざう二千年にせんには・いまだ本門ほんもんの本尊ほんぞんと申す名なだにもなし、何いかに況あらわや顕れ給は

んをや又顕すべき人なし、天台・妙楽・伝教等は内にはかんがみ給へども

あらわ

天台てんだい・妙楽みょうらく・伝教でんぎょう等は内うちにはかんがみ給へども

故こそあるらめ言には出だし給はず、彼の顔淵が聞きし事・意にはさると

たま

故ここそあるらめ言ことには出だし給はず、彼の顔淵がんえんが聞きし事・意いにはさると

いへども、言に出していはざるが如し、然るに仏滅後・二千年過ぎて末法の

こと

いへども、言ことに出していはざるが如し、然るに仏滅後ぶつめつご・二千年過ぎて末法まつぼうの

始の五百年に出現せさせ給ふべき山経文赫赫たり明明たり・天台・妙楽等

しゆつげん

たま

始はじめの五百年ごひゃくねんに出現しゆつげんせさせ給ふべき山経文赫赫きやうもんかくかくたり明明めいめいたり・天台・妙楽等

始の五百年に出現せさせ給ふべき山経文赫赫たり明明たり・天台・妙楽等

の解積分 明なり。

ここに日蓮いかなる不思議にてや候らん 竜樹・天親等・天台・妙楽等だに

も顕し給はざる大曼荼羅を・末法二百余年の比はじめて法華弘通のはたじる

しとして顕し奉るなり、是全く日蓮が自作にあらず多宝塔中の大牟尼世尊

分身の諸仏すりかたぎたる本尊なり、されば首題の五字は中央にかかり・四

大天王は宝塔の四方に坐し・釈迦・多宝・

本化の四菩薩肩を並べ普賢・文殊等・舍利弗・日蓮等坐を屈し・日天・月天

・第六天の魔王・竜王・阿修羅・其の外不動・愛染は南北の二方に陣を取り

・悪逆の達多・愚癡の竜女一座をはり・三千世界の人の寿命を奪ふ悪鬼た

る鬼子母神・十羅刹女等・加之・日本の守護神たる天照太神・八幡大

菩薩・天神七代・地神五代の大神・総じて大小の神祇等・体の神つらなる・

其の余の用の神豈もるべきや、宝塔品に云く「諸の大衆を接して皆虚空に在

り」云云、此等これらの仏・菩薩・大聖等・総じて序品じよほん列坐の二界八番の雜衆等一人もほんぬれず、此この御本尊ごほんぞんの中に住し給たまい妙法みょうほう五字の光明あきらかにてらされて本有ほんぬの尊形そんぎようとなる是これをを本尊ほんぞんとは申もうすなり。

經に云く「諸法実相」是なり、妙樂云く「実相は必ず諸法・諸法は必ず十如

ないしじゅつかい

乃至十界は必ず身土」云云、又云く「実相の深理本有の妙法蓮華經」等と

でんぎようだいしいわ

いちねんさんぜんそくじじゅゆうしん

じじゅゆうしん

云云、伝教大師云く「一念三千即自受用身・自受用身とは出尊形の仏」文、

ゆえ

みぞう

まんだら

たてまつ

ぶつめつ

此の故に未曾有の大曼荼羅とは名付け奉るなり、仏滅後・二千二百二十余年

ごほんぞん

しゅつげん

たま

には此の御本尊いまだ出現し給はずと云う事なり。

ごほんぞん

くよう

たてまつたま

にょにん

げんざい

さいわい

ごしやう

かかる御本尊を供養し奉り給ふ女人・現在には幸をまねぎ後生には此の

ごほんぞん

さうぜんご

ごほんぞん

くよう

たてまつたま

にょにん

げんざい

さいわい

ごしやう

御本尊左右前後に立ちそひて闇に燈の如く険難の処に強力を得たるが如く・

彼こへまはり此へより・日女御前をかこみ・まほり給うべきなり、

にちによごぜん

かこみ

まほり

たまた

給う

べき

なり

相構え相構えてとわりを我が家へよせたくもなき様に誘法の者をせかせ給う

あいこまえそうこまえ

ごほんぞん

ごほんぞん

ごほんぞん

ごほんぞん

ごほんぞん

ごほんぞん

ごほんぞん

ごほんぞん

べし、悪知識を捨てて善友に親近せよとは是なり。

あくちしき

ぜんゆう

しんこん

これ

なり

なり

なり

なり

なり

此の御本尊全く余所に求る事なかれ・只我れ等衆生の法華經を打ちて南無

ごほんぞん

よそ

ごほんぞん

ごほんぞん

ごほんぞん

ごほんぞん

ごほんぞん

ごほんぞん

ごほんぞん

妙法蓮華經と唱うる胸中の肉団におはしますなり、是を九識心王責如の都

みようほうれんげきやう

とな

きやうちゆう

にくだん

これ

なり

なり

なり

なり

なり

妙法蓮華經と唱うる胸中の肉団におはしますなり、是を九識心王責如の都

とは申すなり、もう十界具足とは十界じゅつかい一界もかけず一界にあるなり、之に依つて曼荼羅とは申すなり、まんだら曼荼羅と云うは天竺てんじくの名なり此には輪円具足ともくそくくどくじゆ功德聚とも名くるなり、此の御本尊も只信心の二字にをさまれり以信得入といしんとくにゆうは是なり。これ

日蓮が弟子・檀那等・正直捨方便・不受余經一偈と無二に信ずる故によつにちれんでしだんなしやうじきしやほうべんふじゆよきよういちげゆえて・此の御本尊の宝塔の中へ入るべきなり・たのもし・たのもし、如何にもごほんぞんほうとういかに後生をたしなみ給ふべし・たしなみ給ふべし、六賢・南無妙法蓮華經とげかごしようたまたたまたなむみやうほうれんげきようり叫へて仏になるべき事尤も大切なり、信心の厚薄によるべきなり仏法の根本しんじんこうはくぶつほうこんぽんは信を以て源とす、されば止觀の四に云く「仏法は海の如し唯信のみ能く入る」と、弘決の四に云く「仏法は海の如し唯信のみ能く入るとは孔丘の言くけついわぶつほうごとただよこうきゆう尚信を首と為す況や仏法の深理をや信無くして寧ろ入らんや、故に華嚴に信なほはじめなぶつほうじんりなくむしゆえけこんを道の元・功德の母と為す」等、又止の一に云く「何が円の法を開き日の信くどくないわ

を起し円の行を立て円の位に住せん」弘の^く一に^{いわ}云く「円信と二うは理

に放つて信を起す信を行の本と為す^な」云云、外典に云く^い「漢王位の説を信ぜしかば河上の波忽ちに冰り李広父^{たちま}」

の^{あた}を思いしかば草中の石羽を飲む^{こおり}」と云えり、所詮^{しよせん}・天台^{てんだい}・妙楽^{みょうらく}の積分^{ふんみ}明^み

に信を以て本とせり、彼の漢王も疑はず^{うたが}して大臣^{だいじん}のことばを信ぜしかば立波^{たちなみ}

こほり行くぞかし、石に矢のたつ是れ又父のかたきと思ひし至信の故なり、

何^{いか}に況や仏法^{ぶつぽう}においてをや、法華經^{ほけきやう}を受け持ちて南無妙法蓮華經^{なむみょうほうれんげきやう}と唱^{とな}うる即^{そく}

五種^{ごしゆ}の修行^{しゆぎやう}を具足するなり、比^{ぐそく}の事伝^{でんぎやう}教大師^{かうだいし}入朽^{にちけん}して道邃^{どうすい}和尚^{いわう}に値^あい奉^{たてまつ}り

て五種^{ごしゆ}頓修^{とんしゆ}の妙行^{めうぎやう}と云^うつ事を相伝^{さうでん}し給^{たま}ふなり、日蓮^{にちれん}が弟子^{でし}・檀那^{だんな}の肝要^{かんよう}是^こよ

り外に求る事なかれ、神力品^{じんりきほん}に云^いく、委^{くわ}くは又又申^{もう}す可^かく狭^{あなかしこ}、穴賢^{あなかしこ}穴賢^{あなかしこ}。

建治三年八月二十三日

日蓮^{にちれん} 花押^{かおう}

にちによごぜんごへんじ
日女御前御返事

二四六

にちによごぜんごへんじ
日女御前御返事

こうあんがんねん
弘安元年六月

五十七歳御作

1245p

御布施七貫文送り給ひ畢んぬ、属累品の御心は仏・虚空に立ち給いて四百

万億那由他の世界にむさしののすすきのごとく富士山の木のごとくぞくぞく

とひざをつめよせて頭を地につけ身をまげ掌をあはせあせを流し、つゆ

しげくおはせし上行菩薩等・文殊等・大梵天王・帝釈・日月・四天王・

竜王・十羅刹女等に法華経をゆづらん

がために、三度まで頂をなでさせ給ふ、譬えば悲母の一子が頂のかみを

なづるがごとし、爾の時に上行乃至・日月等忝き仰せを蒙りて法華経を

末代に弘通せんとちかひ給いしなり、薬王品と申すは昔喜見菩薩と申せし菩薩

・日月・浄明德仏に法華経を習わせ給いて其の師の恩と申し法華経のたうと

さと申しかん^{もう}にたへかねて万^{よろず}の重宝^{もつ}を尽くさせ給^{たま}いしかどもなを心ゆかずして身に油をぬりて千二百歳の間・当時^{とうじ}の油にとうしみをに入れてたく

がごとく身をたいて仏を供養し後に七万二千歳が間ひぢをともしびとしてた
きつくし法華經を御供養候き。

されば今法華經を後・五百歳の女人供養せば其の功德を一分ものこさずゆ
づるべし、譬えば長者の一子に一切の財宝をゆづるがごとし、妙音品と申す
は東方の淨華宿王智仏の国に妙音菩薩と申せし菩薩あり、昔の雲雷音王仏の
御代に妙莊嚴王の后淨徳夫人なり、昔法華經を供養して今妙音菩薩となれ
り、釈迦如来の娑婆世界にして法華經を説き給ふにまいりて約束申して末代
の女人の法華經を持ち給うをまもるべしと云云。觀音品と申すは又普門品と
名く、始は觀世音菩薩を持ち奉る人の功德を説きて候、此を觀音品と名づく
後には觀音の持ち給へる法華經を持つ人の功德をとけり此を普門品と名く、
陀羅尼品と申すは二聖・二天・十羅刹女の法華經の行者を守護す
べき様を説きけり、二聖と申すは藥王と勇施となり、二天と申すは毘沙門と

持国天となり十羅刹女と申すは十人の大鬼神女四天下の一切の鬼神の母なり
又十羅刹女の母あり鬼子母神是なり、鬼のならひとして人を食す、

人に三十六物あり所謂糞と尿と唾と肉と血と皮と骨と五蔵と六腑と髪と毛

と氣と命等なり、而るに下品の鬼神は糞等を食し中品の鬼神は骨等を食す

上品の鬼神は精氣を食す、此の十羅刹女は上品の鬼神として精氣を食す

疫病の大鬼神なり、鬼神に二あり一には善鬼二には悪鬼なり、善鬼は法華經

の怨を食す悪鬼は法華經の行者を

食す、今・日本国の去年今年の大疫病は何とか心うべき此を答ふべき様は一

には善鬼なり梵王・帝釈・日月・四天の許されありて法華經の怨を食す、二

には悪鬼が第六天の魔王のすすめによりて法華經を修行する人を食す、善鬼

が法華經の怨を食ふことは官兵の朝敵を罰するがごとし、悪鬼が法華經の

行者を食ふは強盜夜討等が官兵を殺

すがごとし、例せば日本国に仏法の渡りてありし時・仏法の敵たりし物部の
おおむらしもりや えきびよう
大連守屋等も疫病をやみき蘇我・宿禰の馬子等もやみき、欽明・敏達用明
こくおう
の三代の国王は心には仏法釈迦如来を信じまいらせ給いてありしかども外に
てんしょうだいじんくまのさん
は国の礼にまかせて天照太神熊野山等を仰ぎまいらせさせ給ひしかども仏と
法との信はうすく神の信はあ

つかりしかば強きにひかれて三代の国王・疫病疱瘡にして崩御ならせ給いき、此をもて上の二鬼をも今の代の世間の人人の疫病をも日蓮が方のやみしぬをも心うべし、されば身をすてて信ぜん人人は・やまぬへんも・あるべし・
又やむともたすかるへんも・あるべし、又大悪鬼に値いなば命を奪はるる人も・あるべし、例せば畠山重忠は日本第一の大力の大將なりしかども多勢には終にほろびぬ。

又日本国の一切の真言師の悪霊となれりと並に禅宗・念佛者等が日蓮をあだまんがために国中に入り乱れたり、又梵釈・日月十羅刹の眷属日本国に乱入せり、両方互に責めとらんとはげむなり、而るに十羅刹女は総じて法華經の行者を守護すべしと誓はせ給いて候へば一切の法華經を持つ人人をば守護せさせ給つらんと思ひ候

に法華經ほけきようを持つ人人ひとびとも・或あるは大日經だいにちきようはまされりなど申もうして真言師しんごんしが法華經ほけきようを

どくじゆ

読誦どくじゆし候は・かへりてそしるにて候なり、又余の宗宗も此を以て押し計るべ

し、又法華經ほけきようをば經のごとく持つ人人ひとびとも法華經ほけきようの行者ぎやうじやを・或あるは貪とん・瞋じん・癡ち

より・或あるは世間せけんの事により・或あるはしなじなのふるまひによつて憎む人あり、

此は法華經ほけきようを信ずれども信ずる功德くどくな

しかへりて罰をかほるなり、例せば父母ふぼなどには謀反等より外は子息等しそくの

身として此こゝに背そむけば不孝ふこうなり、父が我がいとをしきめをとり母が我がいとを

しきおとこを奪うばふとも子の身として一分も違はば現世げんせには天に捨てられ

後生ごしようには必ず阿鼻地獄あびじごくに墮おつる業なり、何に況や父母ふぼにまされる賢王けんおうに背そむか

んをや、何に況や父母國王ふぼこくおうに百千万億倍せんまんまされる世間の師をや、何に況や出

世間せけんの師をや、何に況や法華經ほけきようの御師おんしをや。

黄河は千年に一度すむといへり聖人は千年に一度出ひとたびいずるなり、仏は無量劫むりようこく

に一度出世し給ふ、彼には値うといへども法華經には値いがたし、設ひ法華經に値い奉るとも末代の凡夫法華經の行者には値いがたし、何ぞなれば末代の法華經の行者は法華經を説ざる華嚴・阿含・方等・般若・大日經等の千二百余尊よりも末代に法華經を説く行者は勝れて候なるを、妙樂大師釈して云く、「供養すること有る者は福十号に過ぎ若し悩乱する者は頭七分に破れ

ん」云云、今・日本国の者去年今年の疫病と去正嘉の疫病とは人王始まり
て九十余代に並なき疫病なり、聖人の国にあるをあだむゆへと見えたり、
師子を吼る犬は腸切れ日月をのむ修羅は頭の破れ候なるはこれなり、日本国
の一切衆生すでに三分が二はやみぬ又半分は死しぬ今一分は身はやまざれど
も心はやみぬ、又頭も頭にも冥
にも破ぬらん、罰に四あり総罰・別罰・冥罰・頭罰なり、聖人をあだめは
総罰一国にわたる又・四天下・又六欲・四禅にわたる、賢人をあだめは但敵人
等なり、今・日本国の疫病は総罰なり定めて聖人の国にあるをあだむか、
山は玉をいだけば草木かれず国に聖人あれば其の国やぶれず、山の草木のか
れぬは玉のある故とも愚者はしらず、国のやぶるるは聖人をあだむ故とも
愚人は弁へざるか。

設ひ日月の光ありとも盲目のために用ゆる事なし、設ひ声ありとも耳しひ

のためになにの用があるべき、日本国にほんこくの一切衆生いっさいしゅじょうは盲目もつもくと耳みみしひのごとし、
此この一切いっさいの眼まなこと耳みみとをくじりて一切いっさいの眼まなこをあけ一切いっさいの耳みみに物をきかせんは
いか程くどくの功德くどくかあるべき、誰たれの人ひとか此この功德くどくをば計はかるべき、設たとひ父母子ふぼをう
みて眼耳げんに有ありとも物を教しゆる師し
なくば畜生ちくしょうの眼耳げんににてこそあらましか、日本国にほんこくの一切衆生いっさいしゅじょうは十方じゅうつぱうの中には
さいほう いっぽういっさい
西方さいほうの一方一切いっさいの仏ぶつの中には阿弥陀仏あみたぶつ・一切いっさいの行ぎやうの中には弥陀みだの名号みょうごう此この三
を本もととして余行よぎやうをば兼かねたる人もあり一向いっこうなる人もありしに、某それがしい去さぬる
けんちよう
建長五年けんちようより今いまに至いたるまで二十余年いちだいいしゅうぎやうの間・遠とほくは一代いちだい聖教しやうきやうの勝劣しやうれつ先後せんご
せんじん
浅深せんじんを立て近くは弥陀念仏みだねんぶつと法華經ほけきやうの題目だいもくとの高下こうげを立て申もうす程ほどに上一人かみいちにんよ
り下万民ばんみんに至いたるまで此この事ことを用もちひず、或あるは師師ししに問とひ・或あるは主主しゅしゅに訴うへ・或
ほうはい
は傍輩ほうはいにかたり・或あるは我が身みの妻子さいし・眷属けんぞくに申もうす程ほどに、国くに・郡ぐん・郷きやう・郷きやう・
村むら・寺てら・社しゃに沙汰さたある程ほどに、人ひとごとに日蓮にちれんが名なを知しり法華經ほけきやうを念仏ねんぶつに

対して念仏ねんぶつのいみじきほけき法華經ようの叶しよひがたき事にん諸人のいみじき様・日蓮にちれんわろ
き様を

申もうす程に上もあだみ下も悪む日本にくむにほん一同ほけきに法華經ようと行者ぎようじゃとの大怨敵おんてきとなりぬ、
かう申せば日本にほんの人人ひとびと並に日蓮にちれんが方の中にも物におばえぬ者は人に信ぜら
れんとあらぬ事を云うと思へり、此は仏法ぶつぽうの道理どうりを信じたる男女なんよ

に知らせんれうに申す、もつ 各各の心にまかせ給うべし。たま

妙莊嚴王品と申すは殊に女人の御ために用る事なり、妻が夫をすすめたる

品なり、まつだい 末代に及びても女房の男をすすめんは名こそかわりたりとも功德は

但淨徳夫人のごとし、いはうや此は女房も男も共に御信用あり・鳥の二の羽

そなはり車の二つの輪かかれり何事か成ぜざるべき、天あり地あり日あり月

あり日てり雨ふる功德の草木花さき菓なるべし。

次に勸発品と申すは釈迦仏の御弟子の中に僧はあまたありしかども迦葉・

阿難左右におはしき王の左右の臣の如し、此は小乗經の仏なり、又普賢・

文殊と申すは一切の菩薩多しといへども教主釈尊の左右の臣なり、而るに

一代超過の法華經八箇年が間十方の諸仏・菩薩等大地微塵よりも多く集まり

候しに左右の臣たる普賢菩薩のお

はせざりしは不思議なりし事なり、而れども妙莊嚴王品をとかれてさておは

りぬべかりしに東方宝威徳浄王仏の国より万億の伎楽を奏し無数の八部衆を
引率して・おくればせして参らせ給いしかば、仏の御きそくや・あし

からんずらんと思ひし故にや色かへて末代に法華經の行者を守護すべきやう
を・ねんごろに申し上られしかば、仏も法華經を閻浮に流布せんことことに
ねんごろなるべきと申すにやめでさせ給いけん、返つて上の上位よりもこと
にねんごろに仏ほめさせ給へり。

かかる法華經を末代の女人・二十八品を品品ごと^{くよう}に供養せばやとおぼしめ
す但事にはあらず、宝塔品の御時は多宝如来釈迦如来・十方の諸仏・一切の
菩薩あつまらせ給いぬ、此の宝塔品はいづれのところにか只今ましますらん
とかんがへ候へば、日女御前の御胸の間・八葉の心蓮華の内におはしますと
日蓮は見まいらせて候、例せば

蓮のみに蓮華の有るがごとく、后の御腹に太子を懷妊せるがごとし、十善を

持^{たも}てる人^{たいし}太子^しと生^なんとし^てて后^{きさき}の御腹^{もんじ}にましませば諸^{しよてん}天^{しゆ}此^ごを守護^{ゆえ}す故^{たいし}に太^し子^しを
ば天^{てん}子^しと号^{ごう}す、法^{ほけ}華^き經^{よう}・二^に十^{じゅう}八^{はち}品^{ひん}の文^{もん}字^じ・六^{りく}万^{まん}九^{きゅう}千^{せん}三^{さん}百^{ひゃく}八^{はち}十^{じゅう}四^し字^じ・一^{いち}一^{いち}の

もんじ
文字は字ごとに太子のごとし字毎に仏の御種子なり、闇の中に影あり人・此をみず虚空に鳥の飛跡あり人・此をみず・大海に魚の道あり人これをみず月の中に四天下の人物一もかけず人・此をみず、而りといへども天眼は此をみる。

にちによげん おんみ ないしん ほうとうぼん
日女御前の御身の内心に宝塔品まします凡夫は見ずといへども釈迦・多宝じゅつぼう しょうぶつ
・十方の諸仏は御らんあり、日蓮又此をすいすあらたうとしたうとし、周の

文王は老たる者をやしなひていくさに勝ち、其の末・三十七代・八百年の間すゑすゑはひが事ありしかども根本の功によりてさかへさせ給ふ、阿闍世王は大悪人たりしかども父びんばさら王の仏を数年やしなひまいらせし故に九十年の間位を持ち給いき、当世も又かくの如く法華經の御かたきに成りて候代なれば須臾も持つべしとはみえねども・故権の大夫殿武蔵の前司入道殿の御まつりごと・いみじくて暫く安穩なるか、其も始終は法華經の敵と成り

なば^{かな}叶うまじきにや。

此の人人の御僻案^{ひとびと　びやくあん}には念仏者等^{ねんぶつ}は法華經^{ほけきよう}にちいんなり日蓮^{にちれん}は念仏^{ねんぶつ}の敵な

り、我等^{われら}は何れをも信じたりと云云^{いすれ}、日蓮^{にちれん}つめて云^{いわ}く代に大禍なくば古にす

ぎたる疫病^{えきびよう}・飢饉^{ききん}・大兵乱^{ひようらん}はいかに、召も決せずして法華經^{ほけきよう}の行者^{ぎようじや}を二度

まで大科^{だいか}に行ひしはいかに・不便^{ふびん}・不便^{ふびん}、而るに女人の御身^{おんみ}として法華經^{ほけきよう}の

御命^{ごめい}をつがせ給うは釈迦^{しゃか}・多宝^{たほう}・十方^{じゅうぽう}の諸仏^{しよぶつ}の御父母^{ふぼ}の御命^{ごめい}をつがせ給うな

り此の功德^{くどく}をもてる人・一閻浮提^{えんぶだい}に有るべしや、恐恐^{きようきよう}謹言^{きんげん}。

六月二十五日日蓮花押^{にちれんかおう}

日女御前御返事^{にちによこぜんごへんじ}

一二四七

出家功德御書

弘安二年五月

五十八歳御作

1251p

このころ
近日誰やらん承りて申し候は内内還俗の心中出来候由・風聞候ひけるは
じつじ
実事にてや候らん虚事にてや候らん心元なく候間・一筆啓せしめ候、凡父母
の家を出でて僧となる事は必ず父母を助くる道にて候なり、出家功德経に云く
「高き三十三天に百千の塔婆を立つるよりも一日出家の功德は勝れたり」と、
されば其の身は無智無行にも

あれかみをそり袈裟をかくる形には天魔も恐をなすと見えたり、大集経に
い
云く「頭を剃り袈裟を著くれば持戒及び毀戒も天人供養す可し則ち仏を供養
するに為りぬ」云云、又一經の文に有人海辺をとをる一人の餓鬼あつて喜び

踊り、其の謂れを尋ねれば我が七世の孫今日出家になれり其の功德にひかれて出離生死せん事喜ばしきなり

と答へたり、されば出家と成る事は我が身助かるのみならず親をも助け上無量の父母まで助かる功德あり、されば人身をつくること難く人身をうけても出家と成ること尤も難し、然るに悪縁にあふて還俗の念起る事浅ましき

次第なり金を捨てて石をとり薬を捨てて毒をとるが如し、我が身惡道に墮つるのみならず六親眷属をも惡道に引かん事不便の至極なり。

其の上在家の世を渡る辛勞一方ならずやがて必ず後悔あるべし、只親のなされたる如く道をちがへず出家にてあるべし、道を違へずば十羅刹女の御守

り堅かるべし、道をちがへたる者をば神も捨てさせ給へる理りにて候なり、大勢至經に云く「衆生五の失有り必ず惡道に墮ちん一には出家還俗の失な

り、又云く「出家の還俗は其の失

五逆ごぎやくに過すぎたり、五逆罪ごぎやくざいと申もうすは父を殺し母を殺し仏を打ち奉たてまつりなどする
大なる失とがを五聚いつつあつめて五逆罪ごぎやくざいと云いふなり、されば此この五逆罪ごぎやくざいの人は一中劫の間
無間地獄むげんじごくに墮おちて浮うぶ事なしと見えたり。

然るに今宿善薰発して出家せる人の還俗の心付きて落つるならば彼の
五逆罪の人よりも罪深くして大地獄に墮つべしと申す経文なり、能く能く此
の文を御覽じて思案あるべし、我が身は天よりもふらず地よりも出でず父母
の肉身を分たる身なり、我が身を損ずるは父母の身を損ずるなり、此の道理
を弁へて親の命に随ふを孝行と云う
親の命に背くを不孝と申すなり、所詮心は兎も角も起れ身をば教の如く一期
出家にてあらば自ら冥加も有るべし、此の理に背きて還俗せば仏天の御罰を
蒙り現世には浅ましくなりはて後生には三惡道に墮ちぬべし、能く能く思案
あるべし、身は無智無行にもあれ形出家にてあらば里にも喜び某も祝著た
るべし、況や能き僧にて候はんをや、委細の趣・後音を期し候。

弘安二年五月日

日蓮

花押

二四八

妙一尼御前消息

1252p

妙一尼御前 あまごぜん

そ夫れ天に月なく日なくば草木そうもくいかでか生ずべき、人に父母ふぼあり一人もかけば
こども子息等そだちがたし、そ其の上過去かこ

しよりりようの聖靈は・或は病子あり・或は女子あり、とどめをく母もかいがいしから
ず、たれにいゐあつけてか冥途めいどにをもむき給たまいけん。

だいかくせそん大覚世尊・御捏盤の時なげいてのたまはく・我涅槃ねはんすべし但心にかかる事
は阿闍世王のみ、迦葉童子菩薩・仏に申さく仏は平等びやうたうの慈悲じひなり一切衆生いっさいしゆじやう
のためにいのちを惜おしみ給たまうべし、いかにかきわけて阿笹吾人と・をほせある
やらんと問いまいらせしかば、そ其の御返事ごへんじに云く「たと譬えば一人にして七子有

り是^この七子の中に一子病に遇え

り、父母の心平等ならざるには非ず、然れども病子に於ては心則ち偏に重きが如し」等云云、天台摩訶止観に此の經文を釈して云く「譬えば七子の父母平等ならざるには非ず然れども病者に於ては心則ち偏に重きが如し」等云云・とこそ仏は答えさせ給ひしか、文の心は人にはあまたの子あれども父母の心は病する子にありとなり、仏の御ためには一切衆生は皆子なり其の中罪ふかくして世間の父母をころし仏經のかたきとなる者は病子のごとし、しかるに阿闍世王は摩竭提国の主なり・我が大檀那たりし頻婆舍羅王をころし我がてきとなりしかば天もすてて日月に变いで地も頂かじとふるひ・万民みな佛法にそむき・他国より摩竭国をせむ、此等は偏に惡人・提婆達多を師とせるゆへなり、結句は今日より惡瘡身に出て三月の七日・無間地獄に墮つべし、これがかなしければ我涅槃せんこと心にかかるというなり、我

あじゃせ
阿闍世王をすくひなば一切の罪人・阿闍世王のごとしと・なげかせ給いき。

しかるに 聖霊 は・或は病子あり・或は女子あり・われすてて冥途にゆき

なばかれたる朽木のやうなるとしより尼が一人とどまり此の子どもをいかに

心ぐるしかるらんと・なげかれぬらんとおぼゆ、かの心の・かたがたには又

は日蓮が事・心にかからせ給いけん、仏語むなしからざれば法華経ひろまら

せ給うべし、それについては此の御房は

いかなる事もありて・いみじくならせ給うべしとおぼしつらんに、いうかい

なく・ながし失しかば・いかにや・いかにや法華経十羅刹はとこそ・をもは

れけんに、いままでだにも・ながらえ給いたりしかば日蓮がゆりて候いし時

いかに悦ばせ給はん。

又いゐし事むなしからずして・大蒙古国もよせて国土もあやをしげになり

て候へば・いかに悦び給はん、これは凡夫の心なり、法華経を信ずる人は冬

のごとし冬は必ず春となる、いまだ昔よりきかず・みず冬の秋とかへれる事を、いまだきかず法華經ほけきょうを信ずる人の凡夫ぼんぷとなる事を、經文きょうもんには「若有開法者無二小成仏じょうぶつ」とかれて候。

故聖靈しょうりょうは法華經に命をすてて・をはしき、わづかの身命しんみょうをささえしところを法華經のゆへにめされしは命をす

つるにあらずや、彼の雪山童子の半偈のために身をすて薬王菩薩の臂をやき
給たまいしは彼は聖人しょうにんなり火に水を入るがごとし、此これは凡夫ほんぶなり紙を火に入
るがごとし・此これをもつて案ずるに聖霊しょうりょうは此の功德あり、大月輪の中
か大日輪の中か天鏡をもつて妻子の身を浮べて十二時に御らんあるらん、
ただいにちりん
たといさいし ほんぶ
設い妻子は凡夫なれば此れをみずきかず、譬たとへば耳しぬたる者の雷いかずちの声を
きかず目つぶれたる者の日輪にちりんを見ざるがごとし、御疑おんうたがいあるべからず定めて
御まほりとならせ給たまうらん・其の上さこそ御わたりあるらめ。
力あらばとひまひらせんと・をもつところに衣を一つ給ぶでう存外ぞんがいの次第しだい
なり、法華經はいみじき御經にてをはすれば・もし今生こんじょうにいきある身ともな
り候そうじいなば尼ごぜんのの生きてをわしませ、んあれ、をさなききんだち等をば
かへり見たてまつるべし。

さどの国と申しこれと申し下人・一人つけられて候そうちは・いつの世にかわす

れ侯^{きんげん}べき、たてまつり侯^{きんげん}べし、
謹言^{きんげん}。
南無^{なむ}妙法蓮華^{みょうほうれんげき}經・南無^{なむ}妙法蓮華^{みょうほうれんげき}經・恐^{きょう}恐^{きょう}

五月 日

日蓮^{にちれん}

花押^{かおう}

妙一尼御前^{あまごぜん}

二四九

妙一尼御前御返事

弘安三年五月

五十九歳御作

1255p

夫信心しんじんと申もうすは別にこれなく候、妻のをとこをおしむが如ごとくをとこの妻に

命をすつるが如ごとく、親の子をすてざるが如ごとく子の母にはなれざるが如ごとくに、

法華經・釈迦・多宝・十方の諸仏・菩薩・諸天善神等に信を入れ奉たてまつりて南無

妙法蓮華經と唱へたてまつるを信心しんじんとは申し候なり、しかのみならず

正直捨方便・不受余經一偈の經文を女のかがみをすてざるが如ごとく男の刀を

さすが如ごとく、すこしもすつる心なく案じ給たまうべく候、あなかしこ・あなかし

こ。

五月十八日

日蓮花押

妙一尼御前御返事

にちれんかおう

あまこぜんごへんじ

二五〇

妙一女御返事こへんじ

弘安三年七月こうあん

五十九歳御作

1255p

問うて云く、いわ日本国に六宗・七宗八宗有り何れの宗に即身成仏そくしんじょうぶつを立つる

や、答えて云くいわ伝でん教大師の意は唯法華經ただほけきょうに限り弘法大師の意は唯真言ただしんこんに限れ

り、問うて云くいわ其の証拠如何、答えて云くいわ伝でん教大師の秀句しゅうくに云く「当に知るまさ

べし他宗所依の經には都て即身入無し一分即入すと雖も八地已上に推してお

凡夫身ほんぶを許さずゆる天台法華宗のみ具つぎさに

即入の義有り」云云、又云くいわ能化所化俱に歴劫無し妙法經力即身成仏す

等云云、又云くいわ当に知るべし此の文に成仏じょうぶつする所の人を問うて此の經の威勢いせい

を顯あらわすなり」と等云云、此の釈しゃくの心は即身成仏そくしんじょうぶつは唯法華經ただほけきょうに限るなり。

問うて云く弘法大師こうぼうだいしの証拠しょうこ如何いかに、答えて云く弘法大師こうぼうだいしの二教論にけうろんに云く

「菩提心論ぼだいしんろんに云く唯真言法ただしんこんの中に即身成仏そくしんじょうぶつする故は是れ三摩地さんまじの法を説くな

諸教しよきょうの中に於て闕あひいて書さず、諭いして曰く此の論このろんは竜樹大聖りゆうじゅだいせいの所造千部しよぞうせんぶ

の

論の中に秘藏肝心の論なり此の中に諸教と謂うは他受用身及び变化身等の
所説の法諸の顕教なり、是れ三摩地の法を説くとは自性法身の所説秘密真言
の三摩地の行是なり金剛頂十万頌の経等と謂う是なり」

問うて云く此の両大師所立の義水火なり何れを信ぜんや、答えて云く此の
二大師は俱に大聖なり同年に入唐して兩人同じく真言の密教を伝受す、

伝教大師の両界の師は順 曉和尚・弘法大師の両界の師は慧果和尚・順 曉

・慧果の二人俱に不空の御弟子なり、不空三蔵の大日如来六代の御弟子なり、
相伝と申し本身といひ世間の重んずる

事日月のごとし、左右の臣にことならず末学の膚にうけて是非しがたし、定

めて悪名天下に充滿し大難を其の身に招くか然りと雖も試に難じて両義の
是非を糾明せん、問うて云く弘法大師の即身成仏は真言に限ること何れの

経文何れの論文ぞや、答えて云く弘法大師は竜樹菩薩の菩提心論に依るな

り、問うて云く其の証拠如何、答えて

云く弘法大師の二教論に菩提心論を引いて云く「唯真言法の中のみ乃至諸教

の中に於て闕いて書さず」云云、問うて云く經文有りや、答えて云く弘法大師

の即身成仏義に云く「六大無礙にして常に瑜伽なり四種の曼荼各離れず三密

加持すれば速疾に顕る重重にして帝網の如くなるを即身と名く、法然として

薩般若を具足す心王心数剎塵

に過たり各五智無際智を具す円鏡力の故に実の覺智なり」等云云、疑つて

云く此の釈は何れの經文に依るや、答えて云く金剛頂經大日經等に依る、

求めて云く其の經文如何、答えて云く弘法大師其の証文を出して云く「此

の三昧を修する者は現に仏菩提を証す」文、又云く「此の身を捨てずして

神境通を逮得し大空位に遊歩して身秘密を成す」文、又云く「我本より不生

なるを覺る」文、又云く「諸法は本より不生なり」云云。

難^{なん}じて云^いく此^{これ}等の經^{きやうもん}文^{ぶん}は大^{だい}日^{にち}經^{きやうもん}・金剛頂^{こんこうぢやうきやう}經^{きやうもん}の文^{ぶん}なり、然^{しか}りと雖^{いえど}も經^{きやうもん}文^{ぶん}

は・或^{ある}は大^{だい}日^{にち}如^に來^にの成^{しょう}正^{かく}覺^{かく}の文^{ぶん}・或^{ある}は眞^{しん}言^{こん}の行^{ぎやう}者^{じや}の現^{げん}身^{しん}に五^ご通^{つう}を得^えるの文^{ぶん}

・或^{ある}は十^{じゅう}回^{かい}向^{かう}の菩^ぼ薩^{さつ}の現^{げん}身^{しん}に歡^{かん}喜^き地^ぢを証^{しょう}得^{とく}する文^{ぶん}にして猶^{なほ}生^{しょう}身^{しん}得^{とく}忍^{にん}に非^{あら}ず

何^{いか}に況^{そく}や即^{そく}身^{しん}成^{じやう}仏^{ぶつ}をや、但^{ただ}し菩^ぼ提^{だい}心^{しん}論^{ろん}は一^{いち}には經^{きやうもん}に非^{あら}ず論^{ろん}を本^{ほん}とせば

背^{はい}上^{じやう}向^{かう}の科^け・依^え法^{ぽう}不^ふ依^え人^{にん}の仏^{ぶつ}説^{せつ}に相^{そう}違^いす。

東^{とう}寺^じの眞^{しん}言^{こん}師^し日^{にち}蓮^{れん}を惡^{あく}口^{こう}して云^いく汝^{なんじ}は凡^{ぼん}夫^ぶなり弘^{こう}法^{ぽう}大^{だい}師^しは三^{さん}地^ぢの菩^ぼ薩^{さつ}な

り、汝^{なんじ}未^みだ生^{しょう}身^{しん}得^{とく}忍^{にん}に非^{あら}ず弘^{こう}法^{ぽう}大^{だい}師^しは帝^{てい}の眼^{がん}前^{ぜん}に即^{そく}身^{しん}成^{じやう}仏^{ぶつ}を現^{げん}ず、汝^{なんじ}

未^{いま}だ勅^{ちやく}宣^{せん}を承^うけざれば大^{だい}師^しにあら^らず日^{にち}本^{ほん}國^{こく}の師^しにあら^らず等^{とう}云^い云^い是^{こゝ}一^{いち}、慈^じ覺^{かく}

大^{だい}師^しは傳^{でん}教^{ぎやう}・義^ぎ眞^{しん}の御^{おん}弟^{でし}子^し智^ち証^{しやう}大^{だい}師^しは義^ぎ眞^{しん}・慈^じ覺^{かく}の御^{おん}弟^{でし}子^し安^{あん}然^{ねん}和^わ尚^{じやう}は安^{あん}慧^え

和^わ尚^{じやう}の御^{おん}弟^{でし}子^しなり、此^{こゝ}の三^{さん}人^{にん}の云^いく法^{ほつ}華^け天^{てん}台^{だい}宗^{しゆう}は理^り秘^ひ密^{みつ}の即^{そく}身^{しん}成^{じやう}仏^{ぶつ}眞^{しん}言^{こん}宗^{しゆう}

は事^じ理^り俱^く密^{みつ}の即^{そく}身^{しん}成^{じやう}仏^{ぶつ}と云^い云^い、傳^{でん}教^{ぎやう}・弘^{こう}法^{ぽう}の兩^{りやう}大^{だい}師^し何^{なん}れもをろかならねど

も聖^{しょう}人^{にん}は偏^{へん}頗^ぽなきゆへに慈^じ覺^{かく}・智^ち証^{しやう}安^{あん}然^{ねん}の三^{さん}師^しは傳^{でん}教^{ぎやう}の山^{さん}に栖^すむといへど

も其その義ぎは弘法東寺こうぼうとうじの心なり、随したがつて日本国にほんこく・

四百余年いぎは異義いぎなし汝不肖なんじふしょうの身としていかんが此この惡義あくぎを存ぞんずるや是二、答こたえて云いく惡口あくくをはき惡心あくしんを・をこさば汝なんじにをいては此この義ぎ申もうすまじ、正義せいぎを聞きかんと申もうさば申もうすべし、但ただし汝等なんじがやうなる者は物をいはずば・つまりぬとをもうべし、いふべし惡心あくしんを・をこさんよりも惡口あくくをなさんよりもきらきらとして候きようもん經文きやうもんを出でして・汝なんじが信しんじまいらせたる弘法大師こうぼうだいしの義ぎをたすけよ、惡口あくく惡心あくしんをもてをもうに經文きやうもんにそくしんじようぶつは即身成仏そくしんじようぶつ無なきか、但ただし慈覺じかく・智証安然等ちしようあんねんの事ことは此これ又また覺証かくしようの兩大師だいいし・日本にほんにして教大師だいしを信しんずといへども、漢土かんとにわたりて有ありし時とき・元政げんじよう・法全等ほっぜんの義ぎを信しんじて心こころには教大師だいしの義ぎをすて、身みは其その山やまに住すすれどもいつわりてありしなり。

問とうて云いく汝なんじが此この義ぎはいかにしてをもちいだしけるぞや、答こたえて云いく

でんぎようだいし

伝教大師の釈に云く、「当に知るべし此の文は成仏する所の人を問うて此の

経の威勢を顯すなり」

とかかれて候は、上の提婆品の我於海中の經文をか

きのせてあそばして候、

釈の心はいかに人申すとも即身成仏の人なくば用ゆ

べからずと・かかせ給へり、

いかにも純円一実の經にあらざれば即身成仏は

あるまじき道理あり、

大日經・金剛頂經等の真言經には其の人なし又・

きようもん

經文

を見るに兼・但・対・帶の旨分明なり、

二乗成仏なし久遠実成あとをけづ

る、慈覺・智証は善無畏・金剛智・不空三蔵の釈にたばらかされて・をはす

るか、此の人人は賢人・聖人とは・

をもへども遠きを貴んで近きをあなづる

人なり、彼の三部經に印と真言とあるにばかされて大事の即身成仏の道をわ

すれたる人人なり、然るを當時・叡山の

ひとびと ほかきょう すぐしんじょうぶつ
人人・法華經の 即身成仏のやうを申すやうなれども慈覺大師安然等の
すぐしんじょうぶつ
即身成仏の義なり、彼の人人の 即身成仏は有名無実の 即身成仏なり其の義
もつぱ だんぎようだいし
専ら伝 教大師の義に相違せり、教大師は分段の身を捨てても捨てずしても
ほかきょう すぐしんじょうぶつ かくだいし
法華經の心にては 即身成仏なり、覺大師の義は分段の身をすつれば 即身成仏
にあらずと・をもはれたるがあへて 即身成仏の義をしらざる 人人なり。

いわ じかくだいし だんぎようだいし あ たてまつ なら そうでん なんじ
求めて云く慈覺大師は伝 教大師に値い奉りて習い相伝せり汝は四百余年
ねんき いかん いわ
の年紀をへだてたり如何、答えて云く師の口より伝うる人必ずあやまりなく
後にたづねあきらめたる人をろそかならば經文をすてて四依の菩薩につくべ
きか、父母の譲り状をすてて口伝を用ゆべきか、伝 教大師の御釈無用なり
じかくだいし くだんしんじつ
慈覺大師の口伝真実なるべき

だんぎようだいし しゅうく もつ おんふみ いっさいきよう
か、伝 教大師の秀句と申す御文に一切經になき事を十いだされて候に第八
すぐしんじょうぶつ けどう つぎしも まな
に即身成仏化導勝とかかれて次下に「当に知るべし此の文成仏する所の人

を問うて此の經の威勢いせいを顯あらわすなり、乃至ないしまさ当に知るべし他宗所依の經には都すて
即身入無しそくしん等云云、此の釈を背そむきて覺大師の事理俱密の大日經の即身成仏
を用もちゆべきか。

求めて云くいわ教大師の釈の中に菩提心論の唯ただの字を用いざる釈有りや不いなや、

答えて云くいわ秀句に云く「能化所化俱に歴劫無く妙法経力即身成仏す」等云

云、此の釈は菩提心論の唯の字を用いずと見へて候、問うて云く菩提心論を

用いざるは竜樹を用いざるか答えて云く但恐くは訳者の曲会私情の心なり、

疑うたがいつて云くいわ訳者を用いざれば法華

經の羅什をも用ゆ可からざるか、答えて云く羅什には現証あり不空には現証

なし、問うて云くいわ其の証如何、答えて云く舌の焼けざる証なり具には聞くべ

し、求めて云くいわ覺証等は此の事を知らざるか、答えて云く此の兩人は無畏等

の三蔵を信ずる故に伝さんぞう教大師の正義を用いざるか、此れ則ち人を信じて法を

すてたる人^{ひと}なり。

問^いうて云^いく日本^{にほん}国^{こく}にいまだ覺^{かく}証^{しやう}然^{ぜん}等^{とう}を破^はしたる人^{ひと}をきかず如何^{いかん}、答^{こた}えて

云^いく弘^{こう}法^{ぼう}大^{だい}師^しの門^{もん}家^かは覺^{かく}証^{しやう}を用^{もち}ゆべしや覺^{かく}証^{しやう}の門^{もん}家^かは弘^{こう}法^{ぼう}大^{だい}師^しを用^{もち}ゆべし

や。

問うて云く両方の義相違すといへども汝が義のごとく水火ならず誹謗

しようほう

正法とはいわず如何、答えて云く誹謗正法とは其の相貌如何外道が仏教

しょうじょう

をそしり小乗が大乗をそしり・権大乘が実大乘を下し実大乘が権大乘

せん

に力をあわせ詮ずるところは勝を劣という法にそむくがゆへに謗法とは申す

こうほうだいし

か、弘法大師の大日経を法華経・華嚴経に勝れたりと申す証文ありや、

ほけきよう

法華経には華嚴経・大日経等を下す文分明なり、所謂已今当等なり、弘法

いえど

尊しと雖も

しゃか

釈迦・多宝・十方分身の諸仏に背く大科免れ難し事を権門に寄せて日蓮を・

じゅうほうぶんじん

をどさんより但正しき文を出だせ、汝等は人をかたうどとせり日蓮は日月・

たいしゃく

帝釈・梵王をかたうどとせん、日月・天眼を開いて御覧あるべし、将又日月

ほんのう

の宮殿には法華経と大日経と華嚴経とをはすとけうしあわせて御覧候へ、

こうほう

弘法・慈覚・智証安然の義と日蓮が義と

じかく

ちしょうあんねん

にちれん

は何れがすぐれて候、日蓮いちれんが義もし百千に一つも道理に叶かないて候はば・いかにたすけさせ給たまはぬぞ彼の人人ひとびとの御義もし邪義じゃぎならば・いかに日本国にほんこくの一切いっさい衆生しゅじょうの無眼の報ほうをへ候はそうらんをば不便ふびんとはをばせ候はぬぞ。

日蓮いちれんが二度の流罪結句るざいけつくは頸おのに及びしは釈迦しゃか・多宝たほう・十方じゅうぽうの諸仏しよぶつの御頸おのを切らんとする人ぞかし日月いちがつは一人にてをはせども四天下の一切衆生しつてんげ いっさいしゅじょうの眼まなこなり、日月いちがつは仏法ぶつぽうをなめて威光勢力いこうせいりよくを増し給たまうと見へて候、仏法ぶつぽうのあぢわいをたがうる人は日月いちがつの御力おんちからをうばう人・一切衆生いっさいしゅじょうの敵なり、いかに日月いちがつは光を放ちて彼等かれらが頂ちやうをてらし寿命じゅみょうと衣食いしょくとをあたへてやしなひ給たまうぞ、彼の三大師だいしの御弟子等おんでしが法華經ほけきやうを誹謗ひぼうするは偏ひとえに日月いちがつの御心おんこころを入れさせ給たまいて謗ぼうぜさせ給たまうか、其その義ぎなくして日蓮いちれんがひが事ことならば日天にってんもしめし彼等かれらにもめしあはせ其その理りにまけてありとも其その心こころひるがへらずば天寿てんじうをもめしとれかし。

其^その義はなくしてただ理^{りふじん}不尽^にに彼等^{かれら}にさるの子を犬にあづけねづみの子を

・にたぶやうにうちあづけて・さんざんにせめさせ給^{たま}いて彼等^{かれら}を罰^たし給^{たま}はぬ

事^に心へられず、日^{にち}蓮^{れん}は日月^{にちがつ}の御^{おん}ためにはをそらくは大事^{だいじ}の御^{おん}かたきなり、

教主^{きようしゅ}釈尊^{しやくそん}の御^{おん}前にてかならずうたへ申^{もう}すべし、其^{その}の時^{とき}うらみさせ給^{たま}うなよ、

日月^{にちがつ}にあらずとも地神^{おんまえ}も海神^{にちがつ}

もきかれよ日本にほんの守護神しゅごしんもきかるべし、あへて日蓮にちれんが曲意こくいはなきなり、いそ

ぎいそぎ御計ごけいらいあるべし、ちちせさせ給たまいて日蓮にちれんをうらみさせ給たまうなよ、

なむみようほうれんげきよう

なむみようほうれんげきよう

きようきよう

南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經、
恐おそ恐おそ。

七月十四日

日蓮にちれん 花押かおう

妙一女御返事ごへんじ

一二五一 妙一女御返事ごへんじ

弘安三年十月 五十九歳御作ごうあん

1260p

いぬ ふずき

去る七月中旬しんごんの比、真言・法華ほつけの即身成仏そくしんじょうぶつの法門ほうもん・大体だいたい註し進まいらせ候そ、其の

ほけきよう

そくしんじょうぶつ

もち

とうせ

ひとびと

後は一定法華經の即身成仏を御用もちい候らん、さなく候ては当世とうせの人人の得意ひとびと

とくどう

そくしんじょうぶつ

ふしん

せんじつ

まい

ほうもんよ

候無得道の即身成仏なるべし不審ふしんなり、先日書きて進まいらせ候いし法門能く心

を留めて御覽あるべし、其の上即身成仏と申す法門は世流布の学者は皆
いちだいじ 大事とたしなみ申す事にて候ぞ、就中予が門弟は万事をさしをきて此の一
事に心を留む可きなり。

けんちよう

建長五年より今弘安三年に至るまで二十七年の間在在処処にして申し宣べ

ほうもんはんだ

たる法門繁多なりといへども所詮は只此の一途なり、世間の学者の中に真言

そくしんじようぶつ

家に立てたる即身成仏は釈尊所説の四味三教に接入したる大日経等の

さんぶきよう

三部経に別教の菩薩の授職灌頂を至極の即身成仏等と思う、是は七位の

えこう

中の十回向の菩薩の歡喜地を証得せる

えんきよう

体為なり、全く円教の即身成仏の法門にあらず、仮令經文にあるよしを

かんき しようてく

るとも歡喜行証得の上に得たるところの功德を沙汰する分齊にてあるなり、

こ じゅうち

是れ十地の菩薩の因分の所行にして十地等覺は果分を知らず、円教の心

そく

を以て奪つていへば六即の中の名字觀行の一念に同じ、与えて云う時は

観行かんぎよう即じの事理じり和融わじうにして理慧りゑ相応そうおうの観行かんぎように及およばず、・或あるは菩提ぼだい心論しんろんの文ぶんによ
り・或あるは大日だい経にちぎようの三部さんぶの文ぶんによれども即身そくしん成仏じやうぶつにこそあらざらめ生身しやうしん得忍とくにん
に

だにも云いよせざる法門なり。

されば世間の人人は菩提心論の唯真言法中の文に落されて即身成仏は

真言宗に限ると思へり、之に依つて正しく即身成仏を説き給いたる法華經

をば戲論等云云、止觀五に云く「設し世を厭う者も下劣の乗を翫んで枝葉

に攀附す狗作務に狎れ猴を敬いて帝釈と為し瓦礫を崇めて是れ明珠とす

此の黒闇の人豈道を論ず可けんや」等云云、此の意なるべし、歎かわしきか

な華嚴・真言法相の学者・徒に・いとまをついやし即身成仏の法門をたつる

事よ、

夫れ先ず法華經の即身成仏の法門は童女を証拠とすべし、提婆品に云く

「須臾の頃に於て便ち正覺を成ず」等云云乃至「變じて男子と成る」と、

又云く「即ち南方無垢世界に往く」云云、伝教大師云く「能化の童女も歴劫

の

なく しよけ 所化の衆生 しゅじよう も亦歴劫無し能化所化俱に歴劫無し妙法經力即身成仏
す ほけきよう 等云云、又法華經の即身成仏に二種あり迹門は理具の即身成仏本門は
事 そくしんじようぶつ の即身成仏なり、今本門の即身成仏は当位即妙本有不改と断ずるなれば
肉身を其 そ のまま本有無作の三身如来と云える是 これ なり、此の法門は一代諸教の
中 これなもんく に之無し文句に云く「諸教の中に於て之を秘して伝えず」等云云。
又法華經の弘 ほけきよう まらせ給 たま うべき時に二度有り所謂在世と末法となり、修行に
又二意有り仏世は純円一実・滅後末法の今の時は一向本門の弘 じゆんえんいちじつ まらせ給 めつごまつぽう うべ
き時なり、迹門 しゃくもん の弘 ひろ まらせ給 たま うべき時は已に過ぎて二百余年になり、天台・
伝教 でんぎよう こそ其の能弘 そ の人にてましまし候 のうく いしかどもそれもはや入滅 にゆうめつ し給 たま いぬ、
日蓮 にちれん は今時を得たり豈 あに 此の所嘱の本門 ほんもん を弘 ひろ めざらんや、本・迹二門は機 き も法
も時も遙 はるか に各別 かくべつ なり。

問 いわ いて云く日蓮計 にちれんばか り此の事を知るや、答 こたへ えて云く「天親・竜樹内鑑冷然」

等云云、天台大師云く「後の五百歳遠く妙道に沾わん」伝教大師云く「正像稍過ぎ已つて末法ただ近きに有り法華一乗の機今正しく是れ其の時なり、何を以て知ることを得んや、安樂行品に云く末世法滅の時」云云、此等の論師・人師末法鬪諍堅固の時・地涌出現

し給いてたま本門ほんもんの肝心かんじんたる南無妙法蓮華經なむめいようほうれんげきようの弘ひろまらせ給たまうべき時を知りて恋さ
せ給いてたま是かくの如ごとき釈しやくを設たけさせ給たまいぬ、尚なお尚そくしんじようぶつ即身成仏しやくもんとは迹門しやくもんは能入しゆるいじゆの
門ほんもん本門ほんもんは即身成仏そくしんじようぶつの所詮しよせんの实義じつぎなり、迹門しやくもんにして得道とくどうせる人ひと人ひと・種類しるいじゆ種・
相対種そうたいの成仏じようぶつ・何れも其その実義じつぎは本門ほんもん寿量品じゆりようぼんに限れば常かんねんにかく觀念たし給たまへ
正觀しやうくわんなるべし。

然しかるにさばかりの上代ひとびとの人ひと人ひとだにも即身成仏そくしんじようぶつには取り煩たはせ給たまいしに、
女にょ人の身みとして度たび度たび此ことの如ごとく法門ほうもんを尋たずねさせ給たまう事ことは偏ひとえに只事ただにあらず、
教き主ようしゆくそんおんみ釈尊御身きようしゆくそんおんみに入り替かわらせ給たまうにや竜女りゆうにょが跡あとを継たぎ給たまうか・又き曇弥女ようどんみの
二に度ど来きれるか、知おんらず御身みは忽たちまちに五障ごしやうの雲晴じやうこうれて寂光かくげつの覺月ながを詠ため給たまうべし、
委細いさいは又もう又また申もうす可べく候。

弘安三年十月五日

日蓮 花押

妙一 女御返事

一二五二

日藏尼御前御返事

弘安三年十一月

五十九歳御

作

1262p

こうあん

弘安三年十一月八日、尼日藏の立て申す立願の願書並びに御布施の銭一貫

文又たふかたびら一つ法華經の御宝前並びに日月天に申し上げ候い畢んぬ、

其の上は私に計り申すに及ばず候叶ひ叶はぬは御信心により候べし全く日蓮

がとがにあらず、水すめば月うつる風ふけば木ゆるぐごとくみな御心は水

のごとし信のよは

きはにごるがごとし、信心のいさぎよきはすめるがごとし、木は道理のご

とし風のゆるがすは經文をよむがごとしと・をぼしめせ、
恐

十一月二十九日

日蓮

花押 かおう

日嚴尼御前御返事 あまごぜんごへんじ

一五三

おうにちによ
王日女殿御返事

こうあん
弘安三年

五十九歳御作

1263p

弁房べんのぼうの便宜びんぎに三百文このたび今度二百文給ひ畢おわんぬ、仏は真に尊くして物によらず、

昔どうじの得勝童子いさいは沙もちいの餅を仏に供養くようし奉りて阿育大王たてまつと生れて一閻浮提えんぶだいの主

たりき、貧女ひんによの我がかしらをおろして油と成せしが須弥山しゅみせんを吹きぬきし風も

此の火をけさず、されば此の二三がもくの鷲目にほんこくは日本国を知る人の国を寄せ七宝しっぽうの

塔とうりてんを 利天とうりてんにくみあげたらん

にもすぐるべし、法華經ほけきようの一字は大地だいちの如し万物ごとを出生しゅっしょうす、一字は大海たいかいの

如ごとし衆流しゅうりゅうを納おさむ一字は日月にちがつの如ごとし四天下してんげを照てらす、此の一字変じて仏となる、

稲なえ變じて苗なえとなる・苗變じて草となる草變じて米となる・米變じて人となる

・人変じて仏となる女人にょにん変じて妙の一字となる妙の一字変じて台上の釈迦しやか仏
となるべし、南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經、恐恐謹言。

おおにちどの

王日殿

にちれん かおう

日蓮 花押

一二五四

御輿振御書ごしよ

文永元年三月

四十三歳御作

与

三位公日行

1264p

おんふみなら

御文並びに御輿振の日記給ひ候いぬ悦び入つて候、中堂炎上の事其の義に

さんもんはめつ

候か山門破滅の期其の節に候か、此等も其の故無きに非ず天竺には祇園精舎

かんど

・頭摩寺・漢土には天台山・正像二千年の内に以て滅尽せり、今末法に当つ

にほんこくばか

て日本国計りに叡山有り三千界の中の但此の処のみ有るか、定めて悪魔一跡

とど

に嫉を留むるか、小乗権教の輩も之を妬むか、随つて禅僧・律僧・念仏

おうしん

者・王臣に之を訴へ三千人の大衆は我が山・破滅の根源とも知らず師檀共

はこく

破国・破仏の因縁に迷えり、但恃む所は妙法蓮華經第七の巻の後・五百歳

えんぶだい

・於閻浮提・広宣流布の文か、又伝教大師の「正像稍過ぎ已つて末法太だ

近きに有り法華一乗の機ほっけいちじょう今正しく是れ其の時なり」の釈なり、滅するは生ぜ
んが為下るは登らんが為なり、山門みの繁昌さんもんはんじょうの為に是くの如き留難るなんを起すか、事
紙面に尽し難しがた早早見参を期すこす、謹言きんげん。

三月一日

日蓮にちれん
花押かおう

ごへんじ
御返事

一二五五

法門申さるべき様の事

文永六年

四十八歳御作

与三位公日行

1265p

ほうもんもう

法門申さるべきやう、

せんちゃく

選択をばうちをきて先ず

ほけきやう

法華經の第二の巻の

こんしさんがい

今此三界の文を開いて

しゃくそん

釈尊は我等が

親父なり等定め了るべし、

いずれ

何の仏か我等

ふぼ

が父母にてはをはします、

げてんさんぜん

外典三千余巻にも忠孝の二字こそせんにて候なれ

忠は又孝の家より出ずとこそ申し候なれ、

もう

されば外典は

げてん

ないてん

の初門此の心は

じよもん

ないてん

ないてん

内典にたがわず候か、人に尊卑・上

下はありといえども親を孝するにはすぎずと定められたるか、

しゃくそん

釈尊は我等が

ふぼ

父母なり

いちだい

一代の聖教

ふぼ

は父母の子を教えたる教経なるべし、

そ

其の中に天上

りゅうくうてんじく

竜宮天竺などには無量無辺の御経ましますなれども、

むりやうむへん

漢土・日本には・わ

かんど

にほん

わ

づかに五千・七千余卷なり、此等の経經の次第勝劣等は私には弁えがたう候、而るに論師大師先徳には末代の人

の智慧こへがたければ彼の人人の料簡を用ゆべきかのところに、華嚴宗の五

教四教法相・三論の三時二蔵・或は三転法輪世尊法久後・要当説眞実の文は

又法華經より出て候金口の明説なり、仏説すでに大に分れて二途なり、譬

へば世間の父母の議の前判後判のごとし、はた又世間の前判後判は如来の

金言をまなびたるか、孝不孝の根本は前判後判の用不用より事をこれり、か

う立て申すならば人人さもやと・をばしめしたらん時申すべし。

抑浄土の三部經等の諸宗の依經は当分四十余年の内なり、世尊は我等が

慈父として未顕眞実ぞと定めさせ給ふ御心はかの四十余年の経經に付けと

をばしめし候か、又説眞実の言にうつれと・をばしめし候か、心あらん人人

・御賢察候べきかとしばらくあぢわひてよも仏程の親父の一切衆生を一子と

・をばしめすが眞実なる事をすて

未顕眞実みけんしんじつの不実ふじつなる事に付けとはをばしめさじ、さて法華經ほけきやうにうつり候そうらはん

は四十余年よんじゆうよねんの經經きやうきやうをすてて遷り候うつべきか、はた又かの經經きやうきやう並ならびに南無なむ

阿彌陀仏等あみだぶつをばすてずして遷り候うつべきかとおぼしきところに凡夫ぼんぷの私の・

はからいぜひにつけてをそれあるべし、仏と申す親父の仰を仰ぐべしとまつ

ところに仏定めて云く「正直捨方便」等云云、方便と申すは無量義經に未顕

眞實と申す上に以方便力と申す方便なり、以方便力の方便の内に浄土三部經

等の四十余年の一切經は一字一点も漏るべからざるか、されば四十余年の

經經をすてて法華經に入らざら

ん人人は世間の孝不孝はしらず仏法の中には第一の不孝の者なるべし、故に

第二譬喩品に云く「今此三界乃至雖復教詔而不信受」等云云、四十余年の

經經をすてずして法華經に並べて行ぜん人人は主師親の三人のをほせを

用いざる人人なり。

教と申すは師親のをしへ詔と申すは主上の詔勅なるべし、仏は閻浮第一の

賢王・聖師・賢父なり、されば四十余年の經經につきて法華經へうつらず、

又うつれる人人も彼の經經をすてて・うつらざるは三徳備えたる親父の仰

もち
を用いざる人天地の中に住むべき者にはあらず、この不孝ふこうの人の住処じゅうしょを経の

つぎしも

次下に定めて云く「若人不信乃至其人命終入阿鼻獄」等云云、設たいほけきよう

そしらずともうつり付ざらん人人・不孝ふこうの失疑とがうたがいなかるべし、不孝ふこうの者

は又惡道疑あくどうたがいなし故に仏は入阿鼻獄と定め給たまいぬ、何に況や爾前にぜんの經經きようぎように

執心しゅうしんを固ほくけきようなして法華經へ遷うつらざるのみならず、善導ぜんどうが千中無一せんちゅうむいつ・法然ほうねんが捨閉しゃへい

かくほつ
闍拋せうたうとかけるは・あに阿鼻地獄あびじごくを脱るべしや、其その所化しよけ並びに檀那だんなは又申もうす

に及およばず、雖復教詔而不信受と申すは孝に二つあり世間の孝の孝不孝は外典ふこう げてん

の人人ひとびとこれをしりぬべし、内典ないてんの孝

不孝ふこうは設たといろんし
實教じつぎようを弁わきまえざる權教ごんぎようの論師ろんしの流を受けたる末の

論師ろんしなんどは後生ごしょうしりがたき事なるべし、何いかに況や末末むつむつの人人ひとびとをや。

ねはんぎよう
涅槃經ねはんぎようの三十四さんじゅうに云く「人身じんしんを受けん事は爪上そうじょうの土・三惡道さんあくどうに墮おちん事は

じゅつぽうせかい
十方世界じゅつぽうせかいの土・四重しじゅう・五逆ごぎやく・乃至涅槃經ないしねはんぎようを謗ぼうずる事は十方世界じゅつぽうせかいの土四重しじゅう

十方世界じゅつぽうせかいの土・四重しじゅう・五逆ごぎやく・乃至涅槃經ないしねはんぎようを謗ぼうずる事は十方世界じゅつぽうせかいの土四重しじゅう

五逆ごぎやく乃至涅槃經ねはんぎょうを信ずる事は爪の上の土つめのうへのつち「なんとととかれて候、末代まつだいには五逆ごぎやくの者と謗法ぼうぼうの者は十方世界じゅうぽうせかいの土のごとしとみへぬ、されども当時とうじ五逆罪ごぎやくざいつくる者は爪の上の土・つくらざる者は

じゅつぽうせかい

十方世界の土と説かれ候へば經文そらごととなるやうにみへ候をくはしくか

んがへみ候へば不孝の者を五逆罪の者とは申し候か、又相似の五逆と申す事

も候、さるならば前王の正法・実法を弘めさせ給えと候を今の王の権法・

そうじ

相似の法を尊んで天子本命の道場たる正法の御寺の御歸依うすくして、権法

じゃほう

・邪法の寺の国に多くいできたれ

るは、愚者の眼

ぐしや

まなこ

ぶつぽうはんじょう

ぶつてんちしや

まなこ

しやうほう

寺やうやくうせ候へば一には不孝なるべし賢なる父母の氏寺をすつるゆへ二

には謗法なるべし、

も

若ししからば日本国当世は国一同に不孝謗法の国な

ふこうほうぽう

るべし、此の国は釈迦如来の御所領仏の左右臣下たる大梵天王・第六天の

まおう

たま

たいかい

大海の死骸をとどめざるがごとく宝山の曲林をいとうが

だいろくてん

ごとく此の国の謗法をかへんとおぼすかと勘え申すなりと申せ。

この上捨てられて候四十余年の経経

きようきよう

の今に候はいかになんと俗の難せば

なん

返詰して申すべし、塔をくむあししろは塔くみあげては切りすつるなりなん
ど申すべし、此の譬は玄義の第二の文に、「今の外教若し起れば方便の教絶す」
と申す釈の心なり、妙と申すは絶という事絶と申す事は此の経起れば已前の
経経を断止ると申す事なる

べし、正直捨方便の捨の文字の心・又嘉祥の日出ぬるに星かくるの心なるべ
し、但し爾前の経経は塔のあししろなれば切りすつるとも・又塔をすりせ
ん時は用ゆべし又切りすつべし、三世の諸仏の説法の儀式かくのごとし。

又俗の難に云く慈覚大師の常行堂等の難これをば答うべし、内典の人・
外典をよむ得道のためにはあらず才学のためか、山寺の小児の俱舎の頌をよ
む得道のためか、伝教慈覚は八宗を極め給へり一切経をよみ給う、これみ
な法華経を詮と心へ給はん梯磴なるべし。

又俗の難に云く何にさらば御房は念仏をば申し給はぬ、答えて云く伝教

だいし
大師は二百五十戒をすて給たまいぬ時にあたりて法華ほっけえんどん円頓の戒にまぎれしゆへな
り、とうせ当世は諸宗しよしゅうの行多けれども時にあたりて念仏ねんぶつをもてなして法華ほけきょう經を謗ほうず
るゆえに金石迷まよいいやすければ唱となえ候はず、例せば仏・十二年が間・常樂我淨じょうらくがじょう
の名をいみ給たまいき、げてん外典にも寒食

のまつりに火をいみあかき物をいむ、不孝ふこうの国と申もつす国をば孝養じょうようの人はとを
らず、此等これらの義なるべし、いくたびも選択せんちやくをばいろへずして先ずかうたつべ
し。

又御持仏堂にて法門ほうもん申したりしが面目めんもくなんどかかれて候事かへすがへす
不思議ふしぎに・をばへ候、そのゆへは僧となりぬ其その上一閻浮提えんぶだいにありがたき法門ほうもん
なるべし、設たい等覺とうかくの菩薩ぼさつなりともなにとかをもうべき、まして梵天ぼんてん・帝釈たいしやく
等は我等われらが親父釈迦如来しやくかにょらいの御所領しよりやうをあづかりて正法しやうほうの僧をやしなうべき者
につけられて候、毘沙門びしゃもん等は四天してん

下の主此等これらが門まほり又四州の王等は毘沙門天びしゃもんてんが所従しよじゆうなるべし、其その上・
日本秋津嶋にほんあきつしまは四州しよのうの輪王りんおうの所従しよじゆうにも及およばず・但嶋おさの長なるべし、長なおさんどに
つかへん者どもに召されたり上なんどかく上・面目めんもくなんど申もつすは・旁かたがた
せんずるところ日蓮にちれんをいやしみてかけるか、総にちれんじて日蓮にちれんが弟子でしは京にのぼり

ぬれば始は・わすれぬやうにて後には天魔てんまつきて物にくるうせう房ごがごとし、
わ御房ごぼうもそれていになりて天のにくまれかほるな。

のぼりていくばくもなきに実名をかうるでう物くるわし、定めてことばつ
き音なんども京なめりになりたるらん、ねずみがかわほりになりたるやうに
鳥にもあらずねずみにもあらず・田舎法師いなかほしにもあらず京法師みやこほしにもにず・せう
房がやうになりぬと・をぼゆ、言をば但いなかことばにてあるべしなかなか
・あしきやうにて有あるなり、尊成たかなりとかけるは隠岐おきの法皇ほうこうの御実名かかたがた
不思議ふしぎなるべし。

かつ・しられて候やうに当世とうせの高僧真言こうそうしんごん・天台等てんだいの人人ひとびとの御いのりは叶かなう
まじきよし、前前ぜんぜんに申し候上もう・今年鎌倉かまくらの真言師等しんごんしは去年こぞより変成男子しんごんしの法
をこなはる、隆弁じたんなどは自歎じたんする事かぎりなし、七八百余人しんごんしの真言師とうじ・東寺
・天台てんだいの大法秘法だいほうひほう尽して行ぜしがついにむなしくなりぬ、
・禅宗ぜんしゅう・律僧等りつそう又一

同に行いしかどもかなはず、日蓮にちれん

が叶かなうまじと申もうすとして不思議ふしぎなりなんどをどし候いしかども皆みなむなしくなりぬ、小事しょうじたる今生こんじょうの御いのりの叶はぬを用つてしるべし大事だいじたる後生ごしょう叶かなうべしや。

真言宗しんこんしゅうの漢土かんどに弘ひろまる始てんだいは天台いちねんさんぜんの一念三千いんねんさんぜんを盗ぬすみ取とつて真言しんこんの教相きょうそうと定さだ

めて理りの本ほんとし枝葉しやうたる印しんこん・真言しんこんを宗しんこんと立て宗しんこんとして天台宗てんだいしゅうを立て下くだす条じょう

謗法ほうぼうの根源こんげんたるか、又また華嚴けこん・法相ほうそう・三論さんろんも天台宗てんだいしゅう日本にほんになかりし時ときは謗法ほうぼうと

もしられざりしが伝でんぎよう教大師だいいしえんしゅう円宗えんがうを勘かんえいだし給たまひいて後ご謗法ほうぼうの宗しんこんともしられ

たりしなり、当世真言等とうせしんこんの七宗しちしうの

者ものしかしながら謗法ほうぼうなれば大事だいじのいのり叶かなうべしとも・をばへず、天台宗てんだいしゅうの

人人ひとびとは我が宗しんこんは正ただなれども邪よこしまなる他宗たしゅうと同おなずれば我が宗しんこんの正ただをもしらぬ者ものな

るべし、譬たとへば東あづまに迷まよひう者ものは対当たいとうの西にしに迷まよひい東西まよひに迷まよひうゆへに十方じゅうぽうに

迷まよひうなるべし。

外道げどうの法ほうと申もうすは本内道もとないどうより出いでて候しか、而しかれども外道げどうの法ほうをもつて内道ないどうの

敵てきとなるなり、諸宗しよしゅうは法華經ほけきようよりいで天台宗てんだいしゅうを才学しかとして而しかも天台宗てんだいしゅうを

失うしなうなるべし、天台宗てんだいしゅうの人人ひとびとは我が宗しんこんは実義じつぎとも知らざるゆへに我が宗しんこんのほ

ろび我が身のかろくなるをばしらずして他宗たしゅうを助けて我が宗を失うしなつなるべし、

ほつけしゅう 法華宗ほけきょうの人が法華經だいちくの題目なむ南無妙法蓮華經みょうほうれんげきょうとはとなえずして南無阿弥陀仏なむあみだぶつと

常となに唱ほけきょうえば法華經うしなを失うしなつ者なるべし、例せば外道げどうは三宝さんぼうを立つ其その

中に仏宝ぶつぼうと申もうすは南無摩醯修羅天なむまけいしゆらと唱となえしかば仏弟子ぶつでしは翻邪ほんじゃの三歸さんぎと申もうして

南無釈迦牟尼仏なむしゃかむにぶつと申もうせしなり、此これをもつて内外ないげのしるしとす、南無阿弥陀仏なむあみだぶつ

とは浄土宗じょうどしゅうの依經えきようの題目だいちくなり、心には法華經ほけきょうの行者ぎようじゃと存ぞんすとも南無阿弥陀仏なむあみだぶつ

と申もうさば傍輩ほうはいは念佛者ねんぶつとしりぬ、法華經ほけきょうをすてたる人とをもうべし、叡山えいざんの

三千人さんぜんは此この旨むねを弁わきまえずして王法わうぽうにもすてられ叡山えいざんをもほろぼさんとするゆ

へに自然じねんに三宝さんぼうに申もうす事かな叶たまわず等もうと申し給たまうべし。

人不審ふしんして云いわく天台てんだい・妙樂みょうらく・伝教でんぎよう等の御釈みに我がやうに法華經ほけきよう並びに

一切經いっさいきようを心えざらん者は惡道あくどうに墮おつべしと申もうす釈しやくやあると申もうさば、玄げんの三

籤せんの三及び已今当等およ いこんとうをいだし給たまうべし、伝教大師でんぎようだいし六宗ろくしゅうの学者がくしゃ・日本国にほんこくの十

籤せんの三及び已今当等およ いこんとうをいだし給たまうべし、伝教大師でんぎようだいし六宗ろくしゅうの学者がくしゃ・日本国にほんこくの十

四人を呵して云く、「顕戒論の下に云く昔齊朝の光統を聞き今は本朝の六統
を見る、実なるかな法華の何況や」等云云、華嚴・真言・法相・三論の四宗
を呵して云く、依憑集に云く新來の真言家は即ち筆受の相承を泯ぼし、旧到
の華嚴家

すなわ 是則ち影響の軌模を隠す。沈空の三論宗は彈訶の屈恥を忘れ称心の醉を

覆う、著有の法相宗は僕陽の帰依を非し青竜の判經を撥う」等云云、天台

・妙楽・伝教等は真言等の七宗の人人は設け戒定はまつたくとも謗法のゆ

へに悪道脱るべからずと定められたり、何に況や禅宗・浄土宗等は勿論な

るべし、されば止観は偏に達磨をこそはして

候めれ、而るに当世の天台宗の人人は諸宗に得道をゆるすのみならず諸宗

の行をうばい取つて我が行とする事いかに、当世の人人ことに真言宗を不審

せんか立て申すべきやう、日本国は八宗あり真言宗大に分れて二流あり

所謂東寺・天台なるべし、法相・三論・華嚴・東寺の真言等は大乘宗設い

定慧は大乘なれども東大寺の小乗戒を持つ

ゆへに戒は小乗なるべし、退大取小の者小乗宗なるべし、叡山の真言宗

は天台円頓の戒をうく全真言宗の戒なし、されば天台宗の円頓戒にをち

たる真言宗なり等申すべし、而るに座主等の高僧名を天台宗にかりて一向

・真言宗 によて法華經をさぐるゆへに・叡山皆謗法になりて御いのりにする

しなきか。

問うて云く天台法華宗にたいして真言宗の名をけづらるる証文如何、答

えて云く学生式に云く「天台法華宗年分学生式一首年分度者の人

柏原先帝天台法華宗 伝法者に加えらる凡そ法華宗天台の年分は弘仁九年より叡山に住せしめて一十二年

山門を出さず兩業を修學せしめん、凡そ止觀業の者。凡そ遮那業の者」等云

云、顯戒論縁起の上に云く「新法華宗を加えんことを請う表一首、沙門最澄

。華嚴宗に二人天台法華宗に二人」等云云、又云く「天台の業に二人一人摩訶止觀

を讀ましむ」此等は天台宗の内に真言宗をば入れて候こそ候めれ、嘉祥元年六

月十五日の格に云く「右入唐廻て請益す伝灯法師位円仁の表に、伏し

て天台宗の本朝に伝わることを尋ぬれば。延暦廿四

年。廿五年^{ひとりてんだい}特天台の年分度者二人を賜^{たま}う一人は真言の業を習^{なら}わし一人は止觀^{しかん}の業を学^{しか}す。然^{すなわ}れば則^{てんだいしゅう}ち天台宗の止觀^{しかん}と真言^{しんごん}との両業は是^これ桓武天皇の崇建^{かんむてんのう}する所^{えいざん}等云云、叡山^{てんだいしゅう}にをいては天台宗にたいしては真言宗^{しんごんしゅう}の名をけづりてんだいしゅう天台宗を骨とし真言^{しんごん}をば肉となせるか。

而るに末代に及びて天台・真言・両宗中あしうなりて骨と肉と分け座主は一向に真言となる骨なき者のごとし・大衆は多分天台宗なり肉なきもののごとし、仏法に諍いあるゆへに世間の相論も出来して叡山静ならず朝下にわづらい多し、此等の大事を内内は存すべし、此の法門はいまだをしえざりきよくよく存知すべし。

又念仏宗は法華經を背いて浄土の三部經につくゆへに阿弥陀仏を正として釈迦仏をあなづる、真言師・大日をせんとをもつゆへに釈迦如来をあなづる、戒にをいては大小殊なれども釈尊を本とす余仏は証明なるべし、諸宗殊なりとも釈迦を仰ぐべきか、師子の中の虫師子をくらつ、仏教をば外道はやぶりがたし内道の内に事いできた

りて仏道を失うべし仏の遺言なり、仏道の内には小乗をもつて大乘を失い権大乘をもつて実大乘を失うべし、此等は又外道のごとし、又小乗・

ごんたいじよう
権大乘よりは実大乘 法華經の人人がかへりて法華經をば失はんが大事にて
候べ

し、仏法の滅不滅は叡山にあるべし、叡山の仏法滅せるかのゆえに異国我が

朝をほろぼさんとす、叡山の正法の失するゆえに大天魔日本国に出来して

法然・大日等が身に入り、此等が身を橋として王臣等の御身にうつり住み

、かへりて叡山三千人に入るゆえに師檀中不和にして御祈しるしなし、御

祈請しるしなければ三千の大衆等檀那にすてはてられぬ。

又王臣等・天台・真言の学者に問うて云く念仏・禅宗等の極理は天台・

真言とは一つかとはせ給へば、名は天台真言にかりて其の心も弁えぬ高僧

天魔にぬかれて答えて云く、禅宗の極理は天台・真言の極理なり・弥陀念仏

は法華經の肝心なりなんと答え申すなり、而るを念仏者・禅宗等のやつばら

には天魔乗りうつりて当世の天台真言の

僧よりも智慧ちえかしこきゆえに全くしからず、禅ははるかに天台・真言しんこんに超え
たる極理ごくりなり、或あるは云く「諸教しよきやうは理深我等衆生は解微りじんわれらしゆじやうなり、機教相違きそういせり
とくど
得道あるべからず」なんと申すゆへに、天台・真言等の学者・王臣等・檀那だんな皆
奪いとられて御歸依ごきえなければ現身げんしんに餓鬼道がきに堕ちて友の肉をはみ・仏神ぶつしんにい
かりをなし檀那だんなをすそし年々に災

を起し・或は我が生身の本尊たる大講堂の教主釈尊をやきはらい・或は
生身の弥勒菩薩をほろぼす、進んでは教主釈尊の怨敵となり退いては当来
弥勒の出世を過たんとくるい候か、この大罪は経論にいまだとかれず、又此
の大罪は叡山三千人の失にあらず公家・武家の失となるべし。

日本一州上下万人・一人もなく謗法なれば大梵天王帝桓並びに天照大神等
隣国の聖人に仰せつけられて謗法をためさんとせらるるか、例せば国民たり

し清盛入道王法をかたぶけたてまつり結句は山王・大仏殿をやきはらいしか
ば天照大神正八幡山王等よりきせさせ給いて源の頼義が末の頼朝に仰せ

下して平家をほろぼされて
国土安穩なりき、今一国挙りて仏神の敵となれり、我が国に此の国を領すべ
き人なきかのゆへに大蒙古国は起るとみへたり、例せば震旦高麗等は天竺に
ついでに仏国なるべし、彼の国国禅宗・念仏宗になりて蒙古にほろぼされ

ぬ、日本国は彼の二国の弟子なり二国のほろぼされんにあに此の国安穩なる

べしや、国をたすけ家を・をもは

人々はいそぎ禅念がともがらを經文のごとくいましめらるべきか、經文

のごとくならば仏神・日本国にまします、かれを請しまいらせんと術はお

ぼろげならでは叶いがたし、先ず世間の上下万人云く八幡大菩薩は正直の

頂にやどり給い別のすみかなし等云、世間に正直の人なければ大菩薩の

すみかまします、又仏法の中に法華經計りこそ正直の御經にてはおはしま

せ、法華經の行者なければ大菩薩の御すみか・おはせざるか。

但し日本国には日蓮一人計りこそ世間出世正直の者にては候へ、其の故は

故最明寺入道に向つて禅宗は天魔のそいなるべしのちに勘文もつてこれを

つげしらしむ、日本国の皆人無間地獄に墮つべし、これほど有る事を正直に

申すものは先代にもありがたくこそ、これをもつて推察あるべしそれより

外ほかの小事しょうじ曲まがぐべしや、又また聖人しょうにんは言

をかいちぶんざらずと申もうす、又またいまだ顯あらわれざる後あとをしるを聖人しょうにんと申もうすか、日蓮にちれんは聖人しょうにん
の一分いちぶんにあたり、此この法門ほうもんのゆへに二十余所にじゅうよをわれ結句けつこ流罪りゅうざいに及び身みに多
くのきずをかほり弟子でしをあまた殺ころさせたり、比干ひかんにもこえ伍ごしそ

にもをとらず、提婆菩薩だいばぼさつの外道げどうに殺され師子尊者ししそんじゃの檀弥利王だんみりおうに頸をはねられしにもをとるべきか、もししからば八幡大菩薩はちまんたいぼさつは日蓮にちれんが頂いただきをはなれさせ給たまいはいづれの人の頂いただきにかすみ給たまはん、日蓮にちれんを此の国こちに用いずばいかんがすべきとなげかれ候なりと申せ、又日蓮房にちれんの申し候もう・仏菩薩ぼさつ並びに諸大善神しよだいぜんじんをかへしまいらせん事は別べちの術すべなし、禪宗ぜんしゆう・念仏宗ねんぶつしゆうの寺寺を一つもなく失うしない其の僧らをいましめ叡山えいざんの講堂かうどうをつくり靈山りようぜんの釈迦牟尼仏しゃかむにぶつの御魂みたまを請しょうし入れたてまつらざらん外しよは諸神しよもかへり給たまうべからず、諸仏しよぶつも此の国こちを扶たすけ給たまはん事はかたしと申せ。

一二五六 十章抄

文永八年五月ぶんえい 五十歳御作 与三位公日

華嚴宗と申す宗は華嚴經の円と法華經の円とは一なり而れども法華經の円
は華嚴の円の枝末と云云、法相・三論も又又かくのごとし、天台宗彼の義に
同せば別宗と立てなにかせん、例せば法華・涅槃は一つ円なり先後に依つて
涅槃尚をとるとさだむ、爾前の円・法華の円を一とならば先後によりて法華豈
劣らざらんや、詮ずるところ・
この邪義のをこり此妙彼妙・円実不異・円頓義齊・前三為 等の釈にばかさ
れて起る義なり、止観と申すも円頓止観の証文には華嚴經の文をひきて候ぞ、
又二の卷の四修三昧は多分は念仏と見へて候なり、源濁れば流清からずと
申して爾前の円と法華經の円と一つと申す者が止観を人によませ候えば但
念仏者のごとくにて候なり、但止観
は迹門より出たり本門より出たり本・迹に亘ると申す三つの義いにしえより
これあり、これは且くこれを・をく、故に知る一部の文共に円乗開権の妙觀

を成すと申して止觀一部は法華經の開會の上に建立せる文なり、爾前
の經經をひき乃至外典を用いて候も爾前・外典の心にはあらず、文をばか
れども義をばけづりすてたるなり、「境は昔に寄ると雖も智は必ず円に依る」
と申して文殊問方等請觀音等の諸經を引いて四種を立つれども心は必ず

ほけきよう
法華經なり「諸文を散引して一代の文体を該れども正意は唯二經に歸す」と
申す・これなり。

止觀に十章あり大意・釈名・体相・撰法・偏円・方便・正觀・果報・起教

・旨歸なり、前六重は修多羅に依ると申して大意より方便までの六重は先四

巻に限る、これは妙解迹門の心をのべたり、今妙解に依つて以て正行を立

つと申すは第七の正觀・十境・十乗の觀法本門の心なり、一念三千此れより

はじまる、一念三千と申す事は迹門にすらな

を許されず何に況や爾前に分たへたる事なり、一念三千の出処は略開三の十

如実相なれども義分は本門に限る・爾前は迹門の依義判文迹門は本門の依

義判文なり、但真實の依文判義は本門に限るべし、されば円の行まちまちな

り沙をかすへ大海をみるなを円の行なり、何に況や爾前の經をよみ弥陀等の

諸仏の名号を唱つるをや。

但ただこれらは時じ時の行ゆきなるべし、真しん實じつに円えんの行ゆきに順したがじて常に口くちずさみにすべ
き事ことは南なん無む妙みょう法ほう蓮れん華げ經きょうなり、心しんに存ぞんすべき事ことは一いち念ねん三さん千せんの觀かん法ぼうなり、これは
智ち者しゃの行ぎょう解げなり日に本ほん國こくの在ざい家けの者ものには但ただ一いつ向こうに南なん無む妙みょう法ほう蓮れん華げ經きょうととな

へさすべし、名なは必ず体たいにいたる德とくあり、法ほ華け經きょうに十じゅう七しち種しゆの名なありこれ通つう名めい

なり別べつ名めいは三さん世ぜの諸しよ仏ぶつ皆みな南なん無む妙みょう法ほう蓮れん華げ經きょうとつけさせ給たまいしなり、阿あ弥み陀だ・

釈しゃ迦か等たうの諸しよ仏ぶつも因いん位いの時ときは必ず止し觀くわんなりき口くちずさみは必ず南なん無む妙みょう法ほう蓮れん華げ經きょうな

り、此これ等らをしらざる天てん台だい・真しん言ごん等たうの念ねん仏ぶつ者もの口くちずさみには一いつ向こうに南なん無む阿あ弥み陀だ仏ぶつ

と申もうすあひだ在ざい家けの者ものは一いつ向こうに

念おもうやう天てん台だい・真しん言ごん等たうは念ねん仏ぶつにてありけり、又また善ぜん導どう・法ほう然ねんが一いち門もんはすなわち

天てん台だい・真しん言ごんの人人ひとびとも實じしゆに自じ宗しゆが叶かないがたければ念ねん仏ぶつを申もうすなり、わづらわし

くかれを学まなせんよりは法ほ華け經きょうをよまんよりは一いつ向こうに念ねん仏ぶつを申もうして淨じやう土どにし

て法ほ華け經きょうをもさとるべしと申もうす、此この義ぎ日に本ほん國こくに充じゆう満まんせし故ゆえに天てん台だい・真しん言ごんの

学者在家の人人にすてられて六十余州の山寺はうせはてぬるなり。
がくしゃざいけ　ひとひと

九十六種の外道は仏慧比丘の威儀よりをこり、日本国の謗法は爾前の円と
くわっけ　げどう　ぶつてびく　いぎ　にほんこく　ほうぼう　にぜん

法華の円と一つという義の盛なりしよりこれはじまれり、あわれなるかなや、
ほうけ　げどう　じょうらくがじょう

外道は常楽我浄と立てしかば仏世にいでまさせ給いては苦・空・無常・
げどう　じょうらくがじょう　たまひ

わが 無我と・とかせ給いき、二乗は空觀に著して大乘にすすまざりしかば仏誡め
て云く五逆は仏のたね塵勞の 疇は如来の種二乗の善法は永不成と嫌わせ
給いき、常樂我淨の義こそ外道はあしかりしかども名はよかりしぞかし、
而れども仏名をいみ給いき、惡だに仏の種となるましてぜんはとこそをぼう
れども仏二乗に向いては惡をば許して善をばいましめ給いき。
とうせ 當世の念仏は法華經を國に失う念仏なり、設いぜんたりとも義分あたれり
というとも先ず名をいむべし、其の故は仏法は國に隨うべし、天竺には一向
小乗一向大乘 大小兼學の國ありわかれたり、震旦亦復是くのこと
日本國は一向大乘の國大乘の中の一乗の國なり、華嚴・法相・三論等の諸
大乘すら猶相応せず何に況や小乗の三宗をや、而るに當世にはやる念仏宗
と禪宗とは源方等部より事をこれり法相・三論・華嚴の見をい
南無阿彌陀仏は爾前にかぎる、法華經にをいては往生の行にあらず開會の後

・仏因ぶつゐんとなるべし、南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょう

は四十余年よんじゅうよねんにわたらず但法華八箇年ほっけはちかねんにかぎる、南無阿弥陀仏なむあみだぶつに開會かいえせられず

法華經ほけきょうは能開もうかい・念仏ねんぶつは所開しよかいなり、法華經ほけきょうの行者ぎやうじやは一期いちよこ南無阿弥陀仏なむあみだぶつと申さず

とも南無阿弥陀仏なむあみだぶつ・並びに十方じゅうぽうの諸仏しよぶつの功德くどくを備えたり、譬たとえば如意宝珠にょいほうじゆの

如ごとし金銀等きんぎんの財たからを備えたり、念仏ねんぶつは一期いちよこ申すとも法華經ほけきょうの功德くどくをぐすべから

ず、譬たとへば金銀等きんぎんの如意宝珠にょいほうじゆをかねざるがごとし、譬たとへば三千大世界さんぜんせかいに積み

たる金銀等きんぎんの財たからも一つの如意宝珠にょいほうじゆをばかうべからず、設たとい開會かいえをさ

とれる念仏ねんぶつなりとも猶体内なうの権おほなり体内おほの實いに及いかばず、何いかに況とうや当世かいえに開會

を心得こころえたる智者ちしやも少ちなくこそをはすらめ、設たといさる人ちしやありとも弟子でし・眷属けんぞく・

所従しよじゆなんどはいかんがあるべかるらん、愚者ぐしやは智者ちしやの念仏ねんぶつを申もうし給たまうをみて

は念仏者ねんぶつとぞ見候ほけきょうらん、法華經ぎやうじやの行者ぎやうじやとはよも候もうはじ、又南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょう

と申もうす人をばいかなる愚者ぐしやも法華經ほけきょうの行者ぎやうじやとぞ申もうし候そうらはんずらん、当世とうせに

父母ふぼを殺す人よりも謀反を・をこす人よりも天台てんだい・真言しんこんの学者がくしゃと云はれ
て善公ぜんこうが礼讃れいさんをうたひ然公ねんぶつが念仏ねんぶつをさえづる人人ひとびとは・をそろしく候なり。

この文を止観しかんよみあげさせ給たまいて後ふみのざの人にひろめてわたらせ給たまうべし、止観しかんよみあげさせ給たまはばすみやかに御わたり候へ。

沙汰さたの事は本より日蓮にちれんが道理どうりだにもつよくば事切れん事かたしと存じて候いしが人ごとに問注もんちゅうは法門ほうもんにはにずいみじうしたりと申し候もうなるときに事切るべしとも・をぼへ候はず、少弼殿しょうもつより平三郎左衛門さえもんのもとに・わたりて候とぞうけ給たまわり候、この事のび候わば問注もんちゅうはよきと御心得ごころえ候へ、又いつにてもよも切れぬ事は候はじ、又切れずば日蓮にちれんが道理どうりとこそ人人ひとびとはをもち候もちはんずらめ、くるしく候はず候、当時とうじはことに天台てんだい・真言等しんごんの人人ひとびとの多く来て候なり、事多き故ゆえに留め候とどい了おんぬ。

一二五七

教行証御書きょうぎょうしやうごしょ

ぶんえい
文永十二年三月五十四歳御作

与

三位房日進於身延

1276p

夫れ正像一千年に小乗・権大乘を持依して其の功を入れて修行せしか

ば大体其の益有り、然りと雖も彼れ彼れの経経を修行せし人人は自依の

経経にして益を得ると思へども法華経を以て其の意を探れば一分の益なし、

所以は何ん仏の在世にして法華経に結縁せしが其の機の熟否に依り円機

純熟の者は在世にして仏に成れり、根機微劣の

者は正法に退転して権大乘経の浄名・思益・觀經・仁王般若経等にし

て其の証果を取れること在世の如し、されば正法には教行証の三つ俱に

兼備せり、像法には教行のみ有つて証無し、今末法に入りては教のみ有つ

て行証無く

在世結縁の者一人も無し権実の二機悉く失せり、此の時は濁悪たる当世の逆

謗の二人に初めて本門の肝心寿量品の南無妙法蓮華経を以て下種と為す

「^こ是の^{りようやく}好き良薬を^{とど}今留めて^{ここ}此に^{おく}在く^{なんじ}汝取つて^べ服す可し^{うれ}差えじと憂る^{なか}勿れ」
とは^{これ}是なり、^{むかし}乃往^{かこ}過去の^{いおんおうぶつ}威音王^{ぞうほう}仏の^{さんほう}像法に^{さんほう}三宝を^{ふぎ}知る者一人も^{きようしゆと}無かりしに
^{ふぎ}不^{きようしゆと}輕菩薩^{ふぎ}出現して^{きようしゆと}教主^{たま}説き置き^{たま}給い

し二十四字を一切衆生に向つて唱えしめしがごとし、彼の二十四字を聞きし

者は一人も無く亦不輕大士に値つて益を得たり、是れ則ち前の聞法を下種と

せし故なり、今も亦是くの如し、彼は像法此れは濁惡の末法・彼は初隨喜の

行者此れは名字の凡夫彼は二十四字の下種此れは唯五字なり、得道の時節異

なりと雖も成仏の所詮は全体是れ同じかるべし。

問うて云く上に挙ぐる所の正像末法の教行証各別なり何ぞ妙樂大師は

「末法の初冥利無きにあらず且く大教の流行すべき時に拠る」と釈し給うや

如何、答えて云く得意に云く正像に益を得し人人は顯益なるべし在世結縁の

熟せる故に、今末法には初めて下種す冥益なるべし已に小乗・権大乘爾前

・迹門の教行証に似るべくもなし現に証果の者之無し、妙樂の釈の

如くんば、冥益なれば人は是を知らず見ざるなり。

問うて云く末法に限りて冥益と知る經文之有りや、答えて云く法華經第

七葉王品に云く、「此の経は則ち為閻浮提の人の病の良薬なり若し人病有らんに是の経を聞くことを得ば病即ち消滅して不老不死ならん」等云云、妙樂大師云く、「然も後の五百は且く一往に従う末法の初冥利無きにあらず且く大教の流行す可き時に拠るが故に五百と云う」等云云。

問うて云く汝が引く所の経文釈は末法の初五百に限ると聞きたり

権大乘経等の修行の時節は尚末法万年と云へり如何、答えて曰く前釈已に

且従一往と云へり再往は末法万年の流行なるべし、天台大師上の経文を

釈して云く、「但当時大利益を獲るのみに非ず後の五百歳遠く妙道に沾わん」

等云云、是れ末法万年を指せる経釈に非ずや、

法華経第六分別功德品に云く、「惡世末法の時能く是の経を持てる者」と

安樂行品に云く末法の中に於て是の経を説かんと欲す等云云此等は皆末法

万年と云う経文なり、彼れ彼れの経経の説は四十余年未顕真實なり・或は

けつじゅう

結集者の意に拠るか依用し難し、拙いかな諸宗の学者・法華經の下種を忘

じんてん

れ三五塵点の昔を知らず純円の妙經を捨てて亦生死の苦海に沈まん事よ、

えんきじゆんじゆく

円機純熟の国に生を受けて徒に無間・大城に還らんこと不便とも申す許り

こんろん

無し、崑崙山に入りし者の一の玉をも取らずして貧国に帰り梅檀林に入つて

せんぶく

瞻蔔を踏まずして瓦礫の本国に歸る者に異なら

がりやく

いわ

ず、第三の巻に云く「飢国より来りて忽ち大王の膳に遇うが如し」第六に云く

けこく

たちま だいおう

ごと

いわ

「我が此の土は安穩○我が浄土は

あんのん

じょうど

こわ

毀れず」等云云。

いわ

状に云く難問に云く爾前当分の得道等云云、涅槃經第三に「善男子

いわ

にぜんとうぶん

とくどう

ねはんぎよう

ぜんなんし

おうとうじゅうじゆう

応当修習「の文を立つ可し之を受けて弘決第三に「所謂久遠必無大者」と会し

べ

これ

くけつ

しよくいこんひつむ

え

にぜん

て、爾前の諸經にして得道せし者は久遠の初業に依るなるべし」と云つて一分

とくどう

くおん

よ

いちぶん

これむき

の益之無き事を治定して、其の後滅後の弘經に於ても亦復是くの如く正像の

そ

めつこ

ぐきよう

おい

またかくのごと

しやうぞう

とくやくしょうか
得益証果の人は在世ざいせの結縁けちえんに依よるなる

べし等云云、又彼が何度も爾前にぜんの得道とくどうを云はば無量義經むりょうぎきょうに四十余年よんじゅううねんの經經ききょう

を仏・我れと未顕真実みけんしんじつと説き給たまへば・我等われらが如ごとき名字みょうじの凡夫ぼんぶは仏説ぶつせつに依よりて

こそ成仏じょうぶつを期こすすべく候へ人師にんしの言語ごんごは無用むようなり、涅槃經ねはんききょうには依法不依人えほうふえと説

かれて大おおに制せられて候へばなんと立てて未顕真実みけんしんじつと打ち捨て打ち捨て

ししょうじきしやほうべん
正直捨方便・世尊法久後せそんほうくごなんどの經釈ききょうしゃくをば秘さうして左右さう無く出いだすべからず。

又難問なんもんに云く得道いわの所詮とくどうは爾前しよせんも法華經にぜんもこれ同じ、其そのの故ゆえは觀經かんききょうの

往生おうじよう・或あるは其その外こと・例れいの如ごとし等云云と立つ可べし、又未顕真実みけんしんじつ其そのの外たんに但似たんに仮

名字等云云と、又同時どうじの經ありと云はば法師品ほうしほんの已今当いこんとうの説をもつて会えす可べき

なり、玄義げんぎの三籤さんせんの三の文ぶんを出いだす可べし、經釈ききょうしゃく能よく能よく料簡りょうけんして秘べす可べし。

一狀いざうに云く真言宗しんごんしゅう云云等、答こたつ彼が立つる所ところの如ごとき弘法大師こうぼうだいしの戲論無明けろんむみょうの

辺域へんいき何れの經文ききょうもんに依よるやと云つて・彼の依經えききょうを引かば云うべし大日如來だいにちによらいは

三世さんぜの諸仏しよぶつの中には何れいづれぞやと云つて・善無畏ぜんむい三蔵さんそう・金剛智等こんこうちの偽りをば
汝なんじは知れるやと云つて其その後・一行筆受ひつじゆの相承そうじようを立つ可べし、大日経だいにちきようには
一念三千跡いちねんさんぜんあとを削れり漢土かんどにして偽りしなり、就中なかん僻見ずくびやっけん有り毘廬ちようじようの頂上ちようじようを
踏む証文しやうもんは三世さんぜの諸仏しよぶつの所説しよせつに之有これありや、其その後・彼云いわく等云云、立つ可べし

だいまんばらもん 大慢婆羅門が高座の足等云云、彼れ此れ是くの如き次第何なる經文論文にこれを出すやと等云云、其の外常に教へし如く問答對論あるべし、設ひ何なる宗なりとも真言宗の法門を云はば真言の僻見を責む可く候。

次に念仏の曇鸞法師の難行・易行道綽が聖道・淨土善導が難行・正行
法然が捨閉閣拋の文、此等の本經・本論を尋ぬべし、經に於て權實の二經有ること例の如し、論に於ても又通別の二論有り、黑白の二論有ること深く習うべし、彼の依經の淨土三部經の中に是くの如き等の所説ありや、又人毎に念仏・阿弥陀等之を讃す又前の如し、

所詮和漢両国の念仏宗法華經を難行なると捨閉閣拋する本經・本論を尋ぬべし、若し慥なる經文なくんば是くの如く權經より實經を謗するの過罪、法華經の譬喩品の如くば阿鼻大城に墮落して展轉無數劫を経歴し給はんずらん、彼の宗の僻謬を本として此の三世諸仏の皆是真實の証文を

捨つる其の罪実と諸人に評判せさすべし、心有

らん人誰か実否を決せざらんや、而して後に彼の宗の人師を強に破すべし、

いつきよう

くいぜ

しやうれつ

一經の株を見て万經の勝劣を知らざる事未練なる者かな、其の上・我と見

あき

しやくそんなら

たほうぶんじん

しよぶつ

たま

きようもんほけきようばか

明らめずとも釈尊並びに多宝分身の諸仏の定判し給へる經文法華經許り

かいぜしんじつ

しんじつ

みけんしんじつ

いけんしんじつ

ひが

まなこ

きゆうよう

しよけん

皆是真實なるを不真實・未顕真實を已顕真實と僻める眼は牛羊の所見にも

おと

ほうしほん

いこんとう

むりようぎきよう

りやうこつしぎきようみけんしんじついか

劣れる者なるべし、法師品の已今当・無量義經の歷劫修行未顕真實何なる

事ぞや五十余年の諸經の勝劣ぞかし、諸經の勝劣は成仏の有無なり、慈覺

ちしやう

・智証

りどうじしやう

まなこ

ぜんどう

ほうねん

よぎようひき

ぜんしゆう

きようげべつてん

しよけん

の理同事勝の眼・善導・法然の余行非機の目・禪宗が教外別伝の所見は東

がんもく

ぎゆうよう

へんぶく

西動転の眼目・南北不弁の妄見なり、牛羊よりも劣り蝙蝠鳥にも異ならず、

えほうふえ

きようもんきぼう

いかん

たま

あっき

依法不依人の經文毀謗此經の文をば如何に恐れさせ給はざるや、惡鬼入其身

むみよう

たま

して無明の惡酒に酔ひ沈み給うらん。

一切いっさいは現証げんしょうには如しかず善無畏ぜんむい・一行ななが横難横死なんおうし弘法こうぼう・慈覚じかくが死去しきよの有様・
實げに正法しょうほうの行者ぎやうじや是かくの如あくに有るべく候や、觀かん仏相ぶつそう海經かいきやう等の諸經しよきやう並びに
竜樹りゆうじゆ菩薩ぼさつの論文ろんぶん如何いかんが候や、一行ぜん禪師ぜんじの筆受ひつじゆの妄語もうこ・善無畏ぜんむいのたばかり・
弘法こうぼうの戲論けろん慈覺じかくの理同事勝りどうじしやう・曇鸞どんらん道綽どうしゆくが余行よきやう非機ひき・是かくの如かくき人人ひとびとの所見しよけんは
權經こんきやう權宗こんしゆの虚妄こもうの仏法ぶつぽうの習ならいにてや候らん、

それほどに浦山敷もなき死去にて候ぞやと和らかに又強く両眼を細めに見・
顔貌に色を調へて閑に言上すべし。

状に云く彼此の経経得益の数を挙ぐ等云云、是れ不足に候と先ず陳ぶべ

し、其の後汝等が宗宗の依経に三仏の証誠之有りや未だ聞かず、よも多宝

分身は御来り候はじ、此の仏は法華経に来り給いし間・一仏二言はやはか御坐

候べきと次に六難九易何なる経の文に之有りや、若し仏滅後の人人の偽経は

知らず、釈尊の実説五十年の説法の内には一字・一句も有るべからず候なん

ど立つ可し、五百塵点の顕本之有りや三千塵点の結縁説法ありや・一念

信解・五十展転の功德何なる経文に説き給へるや、彼の余経には一二三乃至

十功德すら之無し五十展転まではよも説き給い候はじ、余経には一二の塵数

を挙げず何に況や五百三千をや、二乗の成・不成竜畜下賤の即身成仏今

の経に限れり、華嚴・般若等の諸大乘経に之有りや、二乗作仏は始めて今経

に在り、よも天台大師程の明哲の弘法・慈覚の如き無文無義の偽りはおはし
たまはじと我等は覚え候、又悪人の提婆天道国の成道法華經に並びて何なる經
にか之有りや、然りと雖も万の難を闇いて何なる經にか十法界の開会等草木
成仏之有りや、天台・妙楽の無非
中道惑耳驚心の釈は慈覚・智証の理同事勝の異見に之を類す可く候や、已に
天台等は三国伝灯の人師・普賢開發の聖師・天真・発明の権者なり、豈經論
になき事を偽り釈し給はんや、彼れ彼れの經經に何なる一大事か之有るや、
此の經には二十の大事あり就中五百塵点顕本の寿量に何なる事を説き給へ
るとか人人は思召し候、我等が如き凡夫無始已來生死の苦底に沈輪して仏道
の彼岸を夢にも知らざりし衆生界を・無作本覺の三身と成し實に一念三千
の極理を説くなんと浅深を立つべし、但し公場ならば然るべし私に問註すべ
からず、慥に此の法門は汝等が如き者は人毎に座毎に日毎に談ずべくんば

さんぜしよぶつ
三世諸仏の御罰を蒙るべきなり、日蓮已証なりと常に申せし是なり、大日
經に之有りや、浄土三部經の成仏已来凡歷十劫之に類す可きや、なんと前後
の文乱れず一一に会す可し、其の後又云うべし、諸人は推量も候へ是くのと
くいみじき御經にて候へばこそ多宝遠来して証誠を加え分身来集し

て三仏の御舌を梵天に付け不虛妄とは、しらせ給いしか、地涌千界出現して
じよくあくまつだい とうせ ふぞく みようほうれんげきよう
濁悪末代の当世に別付属の妙法蓮華經を一閻浮提の一切衆生に取り次ぎ
たま 給うべき仏の勅使なれば、八十万億の諸大菩薩をば止善男子と嫌はせ給しか
等云云、又彼の邪宗の者どもの習いとして強に証文を尋ぬる事之有り、
ゆじゅつぽんなら もんく ぜんさんごさん いだ にちれん もんか
涌出品並びに文句の九・記の九の前三後三の釈を出すべし、但日蓮が門家の
だいじ 大事之に如かず。

又諸宗の人・大論の自法愛染の文を問難とせば、大論の立所を尋ねて後執
しよしきう だいろん あいぜん なん たてば たず
権謗実の過罪をば竜樹は存知無く候いけるか、「余經は秘密に非ず法華是れ
ひみつ おお ひによ やくし なく りゅうじゆ ばか じようぶつ しゆし く
秘密」と仰せられ、譬如大薬師と此の經計り成仏の種子と定めて又悔い返し
て、「自法愛染・不免墮惡道」と仰せられ候べきか、さで有らば仏語には
あいぜん だあくどう おお ほけきよう じつこ おおい いはい ぶつこ
「正直捨方便・不受余經一偈」なんと法華經の実語には大に違背せり、よも
しじうじきしやほうべん ふじゆよきよういちげ ほけきよう じつこ おおい いはい
さにては候はじ、若し末法の当世時剋相应せる法華經を謗じたる弘法曇鸞な
も まつほう とうせじこくそうおう ほけきよう ほうじ こうほうどんらん

んどを付法蔵の論師釈尊の御記文にわたらせ給う菩薩なれば鑒知してや記せられたる論文なるらん、覺束無しなんとあざむくべし、御辺や不免墮惡道の末学なるらん痛敷候、未来無數劫の人数にてや有るらんと立つ可し。

又律宗の良觀が云く法光寺殿へ訴状を奉る其の状に云く、忍性年来歎い

て云く当世・日蓮法師と云える者世に在り齋戒は墮獄す云云、所詮何なる

経論に之有りや是一、又云く当世・日本国上下誰か念仏せざらん念仏は無間

の業と云云、是れ何なる経文ぞや慥なる証文を日蓮房に對して之を聞かん

是二、総じて是体の爾前得道の有無の法門六箇条云云、然るに推知するに極樂

寺良觀が已前の如く日蓮に相値うて宗論有る可きの由る事有らば目安を

上げて極樂寺に對して申すべし、某の師にて候者は去る文永八年に御勘氣

を蒙り佐州へ遷され給うて後・同じき文永

十一年正月の比御免許を蒙り鎌倉に歸る、其の後平金吾に對して様様の次第

申し含ませ給たまいて甲斐かいの国の深山みやまに閉籠こもらせ給たまいて後は、何いかなる主上女院おのの
御意みこころたりと云えども山の内うちを出いで諸宗しよしゆうの学者がくしやに法門ほうもんあるべからざる由仰おほせ
候しかたが、随そつて其その弟子でしに若輩わくはいのものにて候へども師しの日蓮にちれんの法門ほうもん九牛きううが一毛いちもうを
も学まなび及およばず候といへども

法華經に付いて不審有り^{ふしん}と仰せらるる人わたらせ給はば存じ候^{たまた}なんと云つて、
其^その後は随問而答の法門申す可^べし、又前六箇条一一の難門^{なん}・兼兼申せしが
如^{ごと}く日蓮が弟子等^{にちれん}は臆病^{おくびょう}にては叶^{かな}うべからず、彼れ彼れの經經^{きようきよう}と法華經と
勝劣^{しょうれつ}・浅深成仏不成^{せんじんじやうぶつ}を判ぜん時^{じやうぶつ}・爾前^{にぜん}・迹門^{しやくもん}の釈尊^{しやくそん}なりとも物の数な
らず何^{いか}に況や其^その以下の等覺の菩薩をや、まして權宗^{ごんしゅう}の者どもをや、法華經^{ほけきよう}
と申^{もつ}す大梵王^{ぼんのう}の位にて民とも下^{くだ}し鬼畜^{くた}な^もんと下^{くだ}しても其^その過有らんやと意
を得^{しゆつらん}て宗論^{しゆつらん}すべし。

又彼の律宗^{りつしゅう}の者どもが破戒^{はかい}なる事山川^{さんせん}の類^{くず}るるよりも尚無戒^{なむかい}なり、成仏^{じやうぶつ}
までは思もよらず人天^{にんてん}の生を受くべしや、妙樂大師云く「若^もし一戒^{いっかい}を持てば
人中^{にんちゆう}に生ずることを得^も若^もし一戒^{いっかい}を破^われば還^{かえり}て三途に墮^だす」と、其^その外齋法經^{しやうほうねんきよう}
正法念經^{しやうほうねんきよう}等の制法阿含經^{あこんきよう}等の大小乘^{だいしやうじよう}經の齋法齋戒今程^{りつしゅう}の律宗^{りつしゅう}忍性^{にんじやう}が一党^{いったい}
誰^{いっかい}か一戒^{いっかい}を持^{たも}てる還墮^だ三途^{うたがい}は疑^{うたがい}無^もし、若^もしは無間地獄^{むげんじごく}にや落ちんずらん不^ふ便^{びん}

なんと立てて宝塔品の持戒行者と是をしるべし、其の後良有

つて此の法華經の本門の肝心妙法蓮華經は三世の諸仏の万行万善の功德を

集めて五字と為せり、此の五字の内に豈万戒の功德を納めざらんや、但し此

の具足の妙戒は一度持つて後行者破らんとすれど破れず是を金剛宝器戒と

や申しけんなんと立つ可し、三世の諸仏は此の戒を持つて法身・報身・応身

なんと何れも無始無終の仏に成ら

せ給う、此れを「諸教の中に於て之を秘して伝へず」とは天台大師は書き給へ

り、今末法当世の有智・無智・在家・出家上下万人・此の妙法蓮華經を持つ

て説の如く修行せんに豈仏果を得ざらんや、さてこそ決定無有疑とは

滅後濁悪の法華經の行者を定判せさせ給へり、三仏の定判に漏れたる権宗

の人人は決定して無間なるべし、是くの如くいみじき戒なれば爾前・迹門

の諸戒は今一分の功德なし、功德無からんに一日の齋戒も無用なり。

但此の本門ほんもんの戒ひろを弘ひろまらせ給たまはんには必ず前代末聞ぜんだいみもんの大瑞だいずいあるべし、所謂いわゆる

しょうか
正嘉しょうかの地動文永ぶんえいの長星こゑ是これなるべし、抑そも当世そうせいの人人ひと何なにの宗宗しゅうしゅうにか本門ほんもんの本尊ほんそん

戒壇かいだん等ぐつうを弘通くつうせる、仏滅後ぶつめつ・一千二百二十余年ふつめつに一人も候はうはず、日本人王にほん・

三十代欽明天皇きんめいてんのうの御宇ぎように仏法渡ぶつぼうわたつて今いまに七百余年前代末聞ぜんだいみもんの大法だいほう此この国くにに

流布るふして月氏がっし・漢土かんど・一閭浮提えんぶだいの内うちの一切衆生いっさいしゅじよう・仏ぶつに成なりるべき事ことこそ有あり難なん

けれ有あり難なんけれ、又また已前いぜんの重末法まっぼうには教行証きようぎぎょうしようの三さんつ俱ともに備そなわれり例れいせば

しょうぼう
正法しょうぼう

の如ごとし等云云じゆ、。に地涌ほさつじようぎぎょうの大菩薩だいぼさつ上行けつちよう出だでさせ給たまいぬ結要けつちようの大法だいほう亦弘またひろまら

せ給たまうべし、日本にほん・漢土かんど・万国いっさいしゅじようの一切衆生いっさいしゅじようは金輪聖王しんりんせいおうの出現しゅつげんの先兆しんせうの優曇華うどんげ

に値あえるなるべし、在世四十二年ざいせい並びに法華經ほけきようの迹門しやくもん十四品しじふひんに之これを秘ひして説せつ

かせ給たまはざりし大法本門だいほうほんもん正宗しやうしんに至いたつて説とき顯あらわし給たまうのみ。

良觀房りようかんが義ぎに云いく彼の良觀りようかんが日蓮遠國にちれんえんごくへ下向げこうと聞きく時は諸人しよにんに向むかつて急いそ

ぎ急ぎ鎌倉へ上れかし為に宗論を遂げて諸人の不審を晴さんなど自讃毀他
する由其の聞え候、此等も戒法にてや有らん強ち尋ぬ可し、又日蓮鎌倉に罷
上る時は門戸を閉じて内へ入るべからずと之を制法し・或は風氣なんと虚病
して罷り過ぎぬ、某は日蓮に非ず
其の弟子にて候ま少し言のなまり法門の才覚は乱れがはしくとも・律宗国
賊替るべからずと云うべし、公場にして理運の法門申し候へばとて雑言・
強言・自讃気なる体・人目に見すべからず浅・しき事なるべし、弥身口意
を調え謹んで主人に向うべし主人に向うべし。

三月二十一日

三位阿闍梨御房へ之を遣はす

日蓮 花押

二五八

諸人御返事しよにんごへんじ

1284p

三月十九日の和風並びに飛鳥同じく二十一日戌の時到来す、日蓮一生の間

きしうなら

しよがんたちま じょうじゆ

はたまた

とうらい

にちれん

の祈請並びに所願忽ちに成就せしむるか、将又五百歳の仏記宛かも符契の

こと

しよせんしんこん ぜんしゅう

ほうぼう

しよにん

ぜひ

ぶつきあた

ふけい

如し、所詮真言・禅宗等の謗法の諸人等を召し合せ是非を決せしめば日本国

にちれん

でし

でし

しゅうけ

な

にほんこく

一同に日蓮が弟子・檀那と為り、我が弟子等の出家は主上・上皇の師と為ら

ざいけ

さう しんか つら

はたまた

えんぶだい みな

ほうもん

あお

こうじんこうじん

ん在家は左右の臣下に列ならん、将又一閻浮提皆此の法門を仰がん、幸甚幸甚。

こうあんがんねん

弘安元年三月二十一日

日蓮 花押

諸人御返事しよにんごへんじ

二五九

小蒙古御書もうこごしよ

1284p

もうこ

小蒙古の人・大日本国に寄せ来るの事、我が門弟並びに檀那等の中に若し

たにん

はたまたみずか こんこ

他人に向い将又自ら言語に及ぶ可からず、若し此の旨に違背せば門弟を離す

べき等の由存知せる所なり、此の旨を以て人人に示す可く候なり。

むね

ひとびと

こうあん

弘安四年太歳 辛巳 六月十六日

かのとみ

花押 かつう

ひとびとおんちゅう

人人御中

二六〇

さだしげ殿御返事ごへんじ

1285p

さきざきに申しつるがごとし、世間の学者・仏法を学問して智恵を明めて
我も我もと・おもひぬ、一生のうちにむなしくなりて・ゆめのごとくに申し
つれども唯一大事を知らずよくよく心得させ給うべし、あなかしこ・あなか
し。

十二月二十日

日蓮にちれん

在御判

さだしげ殿御返事ごへんじ

二六一

霖雨御書こしよ

1285p

山中のながきあめつれづれ申すばかり候はず、えんどうかしこまりて給い

候いし、ことに・よろこぶよし玄性房申しあげさせ給い候へ、

恐恐。
きようきよう

五月廿二日

ごへんじ
御返事

日蓮
にちれん

在御判

二六二

玄性房御返事ごへんじ

1286p

いやげんだ入道にゅうどうのなげき候いしかばむかはきと玄性御房ごぼうこのよしをかみへ

申もうさせ給たまい候へ、恐恐きょうきょう。

七月十八日

日蓮にちれん 花押かおう

玄性御房ごぼう

二六三

智妙房御返事ちみょうぼうごへんじ

弘安三年十二月こうあん 五十九歳御作

1286p

鷺目がもく一貫送り給たまいて法華經ほけきょうの御宝前ほうぜんに申もうし上げ了おんぬ。

なによりも故右大將家の御廟と故権太夫殿の御墓とのやけて候由承わりて
なげき候へば又八幡大菩薩並びに若宮のやけさせ給う事いかんが人のなげき
候らむ。

世間の人人は八幡大菩薩をば阿弥陀仏の化身と申ぞ、それも中古の人人の
御言なればさもや、但し大隅の正八幡の石の銘には一方には八幡と申す二字
一方には昔靈鷲山に在つて妙法蓮華經を説き今正宮の中に在つて大菩薩と
示現す等云云、月氏にては釈尊と顯れて法華經を説き給い日本国にしては
八幡大菩薩と示現して正直の二
字を誓いに立て給う、教主釈尊は住劫第九の滅・人壽百歳の時四月八日
甲寅の日中天竺に生れ給い・八十年を経て二月十五日壬申の日御入滅な
り給う、八幡大菩薩は日本国第十六代応神天皇四月八日甲寅の日生れさせ
給いて御年八十の二月の十五日壬申に隠れさせ給う、釈迦仏の化身と申す

事はたれの人かあらずいをなすべき、

しかるに今・日本国にほんこくの四十五億八万九千六百五十九人はちまんの一切衆生いっさいしゆじょう・善導ぜんどう・

慧心えしん・永觀ようかん・法然等ほうねんの大神魔てんまにたばらかされて・釈尊しゃくそんをなげすてて阿弥陀仏あみだぶつ

を本尊ほんぞんとす、あまりの物のくるわしさに十五日を奪い取つて阿弥陀仏あみだぶつの日と

なす八日をまぎらかして薬師やくし・仏の日と云云、あまりにをやをにくまんとて

八幡大菩薩はちまんたいぼさつをば阿弥陀仏あみだぶつの化身けしんと云

云、大菩薩ぼさつをもてなすやうなれども八幡はちまんの御かたきなり、知らずわざでも・

あるべきに日蓮にちれん此の二十八年が間ま・今此三界こんさんがいの文を引いて此の迷まよひをしめせば

信ぜずはさでこそ有あるべきに・いつき・つころし・つながしつ・おうゆへに

八幡大菩薩ぼさつ・宅たくをやいてこそ天てんへはのぼり給たまひいぬらめ日蓮にちれんがかんがへて候し

立正安国論りっしょうあんこくろん此れなり、あわれ他国たこくよりせめ来りてたかのきじをとるやうに・

ねこのねずみをかむやうに・せめられん時、あまや女房にようぼうどもの・あわて

候そうらはんずらむ、日蓮にちれんが一いちるいを二十八年が間せめ候いしむくいに・或あるはいこ

ろし・切りころし・或あるはいけどり・或あるは他方たほうへわたされ・宗盛むねもりがなわつきて
さらされしやうに・すせんまんの人人ひとびとのなわつきてせめられんふびんさよ、
しかれども日本にほん国こくの一切衆生いっさいしゅじょうは皆五逆罪みなごぎやくざいの者なれば・かくせめられんをば天よすこ
も悦よろこび仏もゆるし給たまはじ、あわれあわれはぢみぬさきに阿闍世王あじゃせの提婆だいばを・
いましめしやうに・真言師しんごんし・念仏者ねんぶつ・禅宗ぜんしゅうの者どもをいましめて・すこし・
つみをゆるくせさせ給たまえかし、あらをかし・あらふびん・ふびん・わわくの
やつばらの智者ちしやげなれば・まこととて・もてなして事にあはんふびんさよ、
恐恐きょうきょう謹言きんげん。

十二月十八日

日蓮にちれん

花押かおう

ちめう房御返事ごへんじ

二六四

十住毘婆娑論尋出御書

1288p

昨日武蔵前司殿むさしの使ねんぶつとして念仏者等召相せられて候いしなり、又十郎の使そうらにて候はんずるか、十住毘婆娑論じゅうじゅうびばしやろんを内内見る可べき事候、万事ばんじを抛なげうちて尋たずね出だし給たまい候え。

十月十四日

日蓮にちれん在御判

武蔵公御房

十住毘婆娑論十四卷じゅうじゅうびばしやろん捧上せしむ、今一卷は求め失せ候なり、御要いご以後は早返たまし給たまわる可べく候、愚身ぐしんも必ず必ず参り候いて承うけたまわる可べく候、昨日きようの論談五十展ろんだんごじゅうてんでん転ずの随喜誠ずいきに以て有難かたく候、又袴品賜たまわる可べし、穴賢あなかしこあなかしこ、恐恐きようきよう。

十月十一日

判

にちれんあじやりこぼう
日蓮阿闍梨御房

一六五

むさし
武蔵殿御消息

1288p

じようろん
撰論三卷は給候へども じせ
釈論等の各疏候はざるあひだ事ゆかず候、をなじ
くは給い候いてみあわすべく候、見参の事いつにてか候べき、仰をかほり
候はん。

八講はいつにて候やらん。

七月十七日

日蓮にちれん在

御判

武蔵殿御房
むさし ごぼう

一二六六

破良觀等御書

1289p

りようかん 良觀・道隆・悲願聖人等が極樂寺・建長寺・寿福寺・普門寺等を立てて
えいざん えんどんだいかい 叡山の円頓大戒を蔑如するが如し、此れは第一には破僧罪なり二には仏の御身
べつじよ へより血を出だす、今の念佛者等が教主釈尊の御入滅の二月十五日を・をさ
ねんぶつ きようしゆしゃくそん にゆうめつ へとり・阿弥陀仏の日とさだめ仏生日の八日をば薬師・仏の日といふ、一切
あみだぶつ しんごんし だいにちによらい きようしゆしゃくそん の真言師が大日如来をたのみて教主釈尊

は無明に迷える仏・我等が履とりにも及ばず結句は灌頂して釈迦仏の頭を
ふむ、ぜんしゅう 禅宗の法師等は教外別伝とののしりて一切経をば・ほんぐには・を
とり我等は仏に超過せりと云云、此は南印度の大慢ばら門がながれ出仏身血
の

一分なり、第三に蓮花比丘尼を打ちころす・これ仏の養母にして阿羅漢なり、
此れは阿闍世王の提婆達多をすてて仏につき給いし時いかりをなして大火・
をやししかば・はらをすへかねて此の尼のゆきあひ候たりしを打ち殺

せしなり、今の念仏者等が念仏と禅と律と真言とをせめられて・のぶるかた
わなし、結句は檀那等をあひかたらひて日蓮が弟子を殺させ・予が頭等にき
ずをつけ・ざんそうをなして二度まで流罪・あわせて頸をきらせんと・くわ
だて・弟子等数十人をろうに申し入るのみならず、かまくら内に火をつけ
て日蓮が弟子の所為なりとふれまわして一人もなく失わんとせしが如し。

しか 而るに提婆達多が三逆罪は仏の御身より血をいだせども爾禪の仏・久遠
じつじょう 実成の釈迦にはあらず、殺羅漢も爾前の羅漢法華經の行者にはあらず、
はわごうそう 破和合僧も爾前小乗の戒なり法華円頓の大戒の僧にもあらず、大地われて
むげんじこく 無間地獄に入りしかども法華經の三逆ならざればいたうも深くあらざりける
か のゆへに・提婆は法華經にして天王如来とならせ給う、今の真言師・念仏
者・禪・律等の人人・並に此れを御歸依ある天子並びに將軍家・日本国の上
ばんにん 下万人は法華經の強敵となる上一乗の行者の大怨敵となりぬ、されば設い
いっさいきよう 一切經を覺り十方の仏に歸依し一国の堂塔を建立し一切衆生に慈悲を・
をこすとも・衆流大海に入りかんみとなり衆鳥・須弥山に近ずきて同色と
なるがごとく、一切の大善變じて大惡となり七福かへりて七難をこり現在眼前
たこく には他国のせめきびしく・自身は兵にやぶられ妻子は敵にとられて後生に
むげん は無間・大城に墮つべし。

此れをもんてをもうに故弥四郎殿は設い大罪なりとも提婆が逆にはすく
べからず、何に況や小罪なり法華經を信ぜし人なれば無二不成仏疑なき
ものなり。

疑て云く今の真言師等を無間地獄と候は心へられぬ事なり、今の真言は
もとうほうだいし でんぎようだいし じかくだいし ちしようだいし
源弘法大師・伝教大師・慈覚大師・智証大師・此の四大師のながれなり、此
の人人地獄に墮ち給はずば今の真言師いかで墮ち候べき、答えて云く地獄は
ひとびとじじく お たま
一百三十六あり一百三十五の地獄へは墮つる人雨のごとし其の因やすきゆへ
なり、一の無間・大城へは墮つる人

かたし五逆罪を造る人まれなるゆへなり、又仏前には五逆なし但殺父殺母の
二逆計りあり、又二逆の中にも仏前の殺父殺母は決定として無間地獄へは
墮ちがたし畜生の二逆のごとし、而るに今・日本国の人人は又一百三十五の
地獄へはゆきがたし、日本国の人人形はことなれども同じく法華經誹謗の輩

なり、にほんこくこと日本国異なれども同じくほっけひぼう法華誹謗の者となる事はもとでんぎよう源伝教よりほか外の三

だいし大師の義より事をこれり。

問うていわ云くだいし三大師の義如何、いかん答えていわ云くこうぼう弘法等のだいし三大師は其の義ことなれ

ども同じくほけきようひぼう法華経誹謗は一同なり、いわゆるぜんむいさんぞう所謂善無畏三蔵・こんこうちさんぞう金剛智三蔵・ふくうさんぞう不空三蔵

ほけきようひぼうの法華経誹謗の邪義なり。

問うて云く三大師だいしの地獄じごくへ墮おつる証拠しょうこ如何、答えて云く善無畏三蔵ぜんむいさんそうは漢土かんど

にほんこく

・日本国の真言宗しんこんしゅうの元祖がんそなり彼の人すでに頓死とんしして閻魔えんまのせめにあへり、

そ

其のせめに値あう事は他の失とがならず法華經ほけきょうは大日經だいにちきょうに劣ると立てしゆへなり、

しか

而しかを此とがの失を知らずして其その義をひろめたる慈覺じかく・智証地獄ちしょうじごくを脱のがるべしや、

ただぜんむいさんそう

但し善無畏三蔵えんまの閻魔のせめにあ

づかりし故をだにもたづねあきらめば此の事自然じねんに顯あらわれぬべし・善無畏三蔵ぜんむいさんそう

くろがね

の鉄くろがねの縄な七すぢつきたる事はだいにちきょう大日經じよの疏しよに我とかかれて候上にほんだいこ・日本醍醐にほんだいこの

えんま

閻魔堂えんま・相州鎌倉そうしゅうかまくらの閻魔堂えんまにあらわせり、此これをもつて慈覺じかく・智証等ちしょうの失とがを

ば知るべし。

問うて云く法華經いほけきょうと大日だいにちの三部經さんぶきょうの勝劣しょうれつは經文きょうもん如何、答えて曰く法華經いほけきょう

しよきょう

には諸經しよきょうの中に於おいて最も其その上に在りと説かれて此ほけきょうの法華經いっさいきょうは一切經いっさいきょうの

ちやうじょう

頂上ちやうじょうの法なりと云云、大日經七卷だいにちきょう・金剛頂經三卷こんごうちやうきょう・蘇悉地經三卷そしつちきょう・已上

十三卷の内法華經に勝ると申す經文は一句一偈もこれなし、但蘇悉地經計り

にぞ三部の中に於て此の經を王と為すと申

す文候、此れは大日の三部經の中の王なり全く一代の諸經の中の大王にはあ

らず、例せば本朝の王を大王といふ・此れは日本国の内の大王なり・全く

漢土・月支の諸王に勝れたる大王にはあらず、法華經は一代の一切經の中の

王たるのみならず三世十方の一切の諸仏の所説の中の大王なり、例せば

大梵天王のごときんば諸の小王・轉輪王・

四天王釈王魔王等の一切の王に勝れたる大王なり、金剛頂經と申すは

眞言教の頂王・最勝王經と申すは外道・天仙等の經の中の大王・全く

一切經の中の頂王にはあらず、法華經は一切經の頂上の宝珠なり、論師

・人師をすてて専ら經文をくらべば・かくのごとし、而るを天台宗・出来

の後・月氏よりわたれる經論並に天竺漢土にして立て

たる宗宗の元祖等・修羅心をさしはさめるかのゆへに・或は経論にわたくし
の言をまじへて事を仏説によせ・或は事を月氏の経によせなどして私の筆
をそへ仏説のよしを称す、善無畏三蔵等は法華經と大日經との勝劣を定む
るに理同事勝と云云、此れは仏意にはあらず、仏説のごとくならば大日經等
は四十余年の内・四十余年の内

にも華嚴・般若等には及ぶべくもなし、但阿含・小乘經にすこしいさてた

る經なり、而るを慈覺大師等は此の義を弁えずして善無畏三蔵を重くをも

ゆへに理同事勝の義を實義とをもえり、弘法大師は又此等には・にるべくも

なき僻人なり、所謂法華經は大日經に劣るのみならず華嚴經等にもをとれ

り等云云、而を此の邪義を人に信

ぜさせんために・或は大日如来より写瓶せりといふ・或は我まのあたり

靈山にしてきけりといふ・或は師の慧果和尚の我をほめし・或は三鈷をなげ

たりなんと申し種種の誑言をかまへたり、愚な者は今信をとる、又天台の

真言師は

慈覺大師を本とせり、叡山の三千人もこれを信ずる上墮つて代代の賢王の御

世に勅宣を下す、其の勅宣のせんは法華經と大日經とは同醍醐・譬へば鳥

の両翼・人の左右の眼等云云、今の世の一切の真言師は此の義をすぎず、此等

は螢火を日月に越ゆとをもひ 蚯蚓を花山より高しという義なり、其の上一切

の真言師は灌頂となづけて釈迦

仏を直ちにかきてしまんだらとなづけて弟子の足にふませ、或は法華經の

仏は無明に迷える仏・人の中のいぞのごとし真言師が履とりにも及ばずなん

どふみにつくれり、今の真言師は此の文を本疏となづけて日日・夜夜に

談義して公家・武家のいのりと・がうしてを・をくの所領を知行し檀那をた

ばらかす、事の心を案ずるに彼の大慢ばら門がごとく無垢論師にことならず、

此等は現身に阿鼻の大火を招くべき人人なれども強敵のなければ・さてすぐ

るか、而りといへども其のしるし眼前にみへたり、慈覺と智証との門家等・

鬪諍ひまなく・弘法と聖覺が末孫

が本寺と伝法院・叡山と園城との相論は修羅と修羅と猿と犬とのごとし、

此等は慈覺の夢想に日をいるとみ・弘法の現身妄語のすへか、仏末代を記し

て云くいわ謗法ほうぼうの者は大地微塵だいちみじんよりも多く正法しょうぼうの者は爪上そうじょうの土よりすくなかるべし、ぶつこ仏語まことなるかなや今・日本国にほんこくかの記にあたれり。

予はかつしろしめされて候がごとくう幼少じうせうの時より学文に心をかけし上・大こくう虚空蔵菩薩ぼさつの御宝前に願を立て日本第一にほんだいいちの智者ちしやとなし給へ、たま十二のとしより此の願を立て其その所願しよがんに子細しさいあり今くはしく・のせがたし、其その後先ず

浄土宗・禅宗をきく・其の後叡山・蘭城・高野・京中・田舎等処処に

修行して自他宗の法門をならひしかども我が身の不審はれがたき上・本より

の願に諸宗何れの宗なりとも偏党執心あるべからず・いづれも仏説に証拠

分明に道理現前ならんを用ゆべし・論師・訳者・人師等にはよるべからず

専ら經文を詮とせん、又法門によりては設い王のせめ

なりともはばかるべからず何に況や其の已下の人をや、父母・師兄等の教訓

なりとも用ゆべからず、人の信不信はしらずありのままに申すべしと誓状を

立てしゆへに三論宗の嘉祥華嚴宗の澄觀法相宗の慈恩等をば天台

・妙樂・伝教等は無間地獄とせめたれども真言宗の善無畏三蔵弘法大師

慈覺・智証等の僻見は・いまだ・せむる人なし、善無畏不空等の真言宗を

すてて天台による事は妙樂大師の記の十の後序並に伝教大師の依憑集にの

せられたれどもいまだくはしからざればにや慈覺・智証の謬は出来せるか

と強盛にせむるなり。

かく申す程に年卅二・建長五年の春の比より念仏宗と禅宗と等をせめは

じめて後に真言宗等をせむるほどに・念仏者等始にはあなづる、日蓮いかに

・かしこくとも明円房・公胤僧上・顕真座主等には・すぐべからず、彼の

人人だにもはじめは法然上人をなんぜしが後にみな堕ちて・或は上人の

弟子となり・或は門家となる、日蓮は・かれがこ

とし我つめん我つめんとはやりし程に・いにしへの人人は但法然をなんじて

善導道・綽等をせめず、又経の権実をいわざりしかばこそ念仏者はをこりけれ、

今日蓮は善導・法然等をば無間地獄につきをとして専ら浄土の三部

経を法華経に・をしあはせて・せむるゆへに、螢火に日月・江河に大海のや

うなる上念仏は仏のしばらくの戲論の法実に・これをもつて生死を・はなれ

んとをもわば大石を船に造り大海をわたり・大山をになて嶮難を越ゆるがこ

としと難なんぜしかば面おもてをむかうる念仏ねんぶつ者なし。

後には天台宗てんだいしゅうの人人ひとびとを・かたらひて・どしうちにせんとせしかども・それ

もかなはず、天台宗てんだいしゅうの人人ひとびとも・せめられしかば在家ざいけ・出家しゅっけの心ある人人ひとびと・少

念仏ねんぶつと禅宗ぜんしゅうとをすつ、念仏者ねんぶつ・禅宗ぜんしゅう・律僧等りつそう我が智力かな叶わざるゆへに

諸宗しよしゅうに

入りあるきて種種しゅじゆの讒奏ざんそうをなす、在家ざいけの人人ひとびとは不審ふしんあるゆへに各各それぞれの持僧ちそう等

・或あるは真言師しんごんし・或あるは念仏者ねんぶつ・或あるはふるき天台宗てんだいしゆう・或あるは禅宗ぜんしゆう・或あるは律僧等りつそうを

わきにはさみて・或あるは日蓮にちれんが住处じゆうしよに向い・或あるはかしこへよぶ、而しかれども一言

二言にはすぎず迦旃延かせんねんが外道げどうをせめしがごとく徳慧菩薩とくえぼさつが摩沓婆まこつをつめしが

ごとくせめしゆへに其その力ちから及およばず、人は智ちか

しき者ものすくなきかのゆへに結句けっくは念仏者等ねんぶつをばつめさせてかなはぬところ

には大名だいめいしてものをばへぬ侍さむらいどものたのしくて先後せんごも弁わえぬ在家ざいけの徳人等とくじん

挙あげ日蓮にちれんをあだするほどに・或あるは私ひそかに狼藉ろうぜきをいたして日蓮にちれんが・かたの者を打

ち・或あるは所ところを・をひ・或あるは地ちをたて・或あるはかんだうをなす事ことかずをしらず、

上に奏そうすれども人の主しゅとなる人は・さす

が戒力かいりきといふ福田ふくでんと申し子細しさいあるべきかともひて左右さうなく失とがもなされざり

しかば・きりものども・よりあひてまちうど等をかたらひて数万ばんにん人の者ものをも

つて夜中にをしよせ失わんとせしほどに・十羅刹じゅうしやくの御計らいにてやあ

りけんにちれんそ日蓮其なんの難まぬかを脱れしかば・両国りょうこくの吏・心をあわせたる事なれば殺され

ぬを・とがにして伊豆の国へながされぬ、最明寺さいみょうじ殿計りこそ子細しさいあるかとを
もわれていそぎゆるされぬ。

さりし程に最明寺入道殿さいみょうじにゅうだうだん隠れさせ給たまいしかば・いかにも此の事あしくなり

なんず、いそぎかくるべき世なりとは・をもひしかどもこれにつけても法華經ほけきょう

のかたうど・つよくせば一定事いで来るならば身命しんみょうを・すつるにてこそあら

めと思ひ切りしかば讒奏ざんそうの人人ひとびといよいよ・かずをしらず、上下万人じょうげばんにん・皆父母みなふぼ

のかたきとわりをみるがごとし、不輕菩薩ぶきやうぼさつの威音王いおんおう仏ぶつのすへにすこしもたが

う事なし。

一二六七

檀越某御返事

弘安元年四月五十七歳御作

1294p

御文^{おんふみ}うけ給^{たま}わ良^おい^わ了^おんぬ、日蓮^{にちれん}流^る罪^{ざい}して先^か先^さにわざわいども重^{かさなり}て侯^{こう}に又

なにと申^{もう}す事^{こと}か侯^{こう}べきとは・をも

へども人のそんぜんとし侯には不可思議の事の侯へば・さが侯はんずらむ、
もしその義侯わば用いて侯はんには百千万億倍のさいわいなり、今度ぞ三度
になり侯、法華経も・よも日蓮をば・ゆるき行者とはをばせじ、釈迦・多宝
・十方の諸仏・地涌千界の御利生・今度みはて侯はん、あわれ・あわれ・さ
る事の侯へかし、雪山童子の跡を・をひ
不輕菩薩の身になり侯はん、いたづらに・やくびやうにや・をかされ侯はん
ずらむ、をいじににや死に侯はんずらむあらあさましあさまし、願くは法華経
のゆへに国主にあだまれて今度・生死をはなれ侯わばや、天照太神・正八幡
・日月・帝釈・梵天等の仏前の御ちかい今度心み侯わばや、事事さてをき
侯いぬ、各各の御身の事は此れより申し
はからうべし、さで・をはするこそ法華経を十二時に行ぜさせ給うにては侯
らめ、あなかしこ・あなかしこ、御みやづかいを法華経と・をばしめせ、

「いっさいせけん一切世間の治生産業は皆実相と相違背せず」とは此れなり、かへす・かへす御文の心こそ・をもうられ候へ、そうち恐恐謹厳。きょうきょう

にちれんかおう

四月十一日

日蓮花押

御衣布並に単衣布給候たびそうらい了おわぬ、抑そもそも食は命をつぎ衣は身をかくす、食を

有情に施すものは長寿ちようじゆの報をまねぎ人の食を奪うものは短命の報をうく、衣

を人にほどこさぬ者は世世存生ぞんじやうに裸形らぎやうの報をかんず、六道ろくどくの中に人道いなか已下は

皆形裸みなにして生る天は随生衣ずいしやうえなり、其その中の鹿等は無衣にして生るのみならず、人の衣を・ぬすみしゆ

へに身の皮を人に・はがれて盗し衣をつぐのうほうをえたり、人の中にも

鮮白せんびやく比丘びくには生ぜし時・衣を被て生れぬ、仏法ぶつぽうの中にも裸形らぎやうにして法を行ず

る道なし、故ゆえに釈尊しゃくそんは摩訶大母比丘尼まかびくにの衣を得て正覺しやうかくをなり給たまいき、諸もろの

比丘びくには三衣さんねをゆるされき、鈍根どんこんの比丘びくは衣食いしよくととのわざれば阿羅漢果あらかんを証

せずと・みへて候、殊に法華經には

柔和忍辱衣にんにくと申もうして衣をこそ本として候へ、又法華經の行者ぎょうじやをば衣をもつて
覆おあせ給たまうと申もうすもねんごろなるぎ

なり。

日蓮にちれんは無戒むかいの比丘びく・邪見じゃけんの者なり故ゆえに天これをにくませ給たまいて食衣ともし

き身にて候、しかりといえども法華經を口くちに誦じゆし・とき・とき・これをとく、

譬たとへば大おほの珠たまを含みいらんよりせんだんを生ずるがごとし、いらんをすて

て・せんだん・まいらせ候・形ちぎようをかくして珠たまを授けたてまつる、天台大師てんだいだいし

云いわく「他經たきようは但男しるに記して女に記せず」等云云、法華經にあらざれば女人成仏にょにんじやうぶつ

は許ゆるされざるか、具足千万光相如来と申もうすは摩訶まか大比丘尼びくにのことなり、此れ

等もつてをしはかり候に女人にょにんの成仏じやうぶつは法華經により候べきか、要當說真實ようとうせつしんじつは

教き主よう釈尊しやくそんの金言きんげん・皆是真實かいぜしんじつ是多宝仏たほうぶつの証明しやうみよう・舌相至梵天ぜつそう ほんてんは諸仏しよぶつの誓狀せいじやうな

り、にちがつ日月は地に落つべしや須弥山しゅみせんはくづるべしや・大海たいかいの潮は増減ぞうげんせざるべしや大地だいちは翻覆ほんぷくすべしや、此の御衣の功德くどくは法華經ほけきょうにとかれて候、但心をもつて・をもひやらせ給たまい候へ、言にはのべがたし。

二六九

慧日天照御書

1297p

もつて一閻浮提えんぶだいの者の眼まなこを抉えくるべきか、
釈迦しやくか仏ぶつの御名みなをば幼稚ようちにては日種
という、長大いみようの後の異名えにちをば慧日えにちという、此の国にほんを日本にほんという主てんしやうをば天照と
申もうす。

二七〇

釈迦御所領御書

1297p

「是これ我が有うなり其その中ちゆうの衆生しゆうじやうは悉しつじつく是れ吾子わがこなり」等云云、この文のご
とくならばこの三界さんがいは皆釈迦みなしやくかによらい如来の御所領しりやうなり、
寿量品じゆりやうぼんに云く「我常じやうに此
の娑婆世界しやばせかいに在り」等云云、この文のごとくならば乃至過去五百塵点劫ないしかこごひやくじんでんこうより

・このかた此の娑婆世界は釈迦菩薩の御進退の国土なり、其の上仏の滅後・
一百年に阿育大王と申す王をはしき此の南閼浮提を三度まで僧に付属し給い
き、又此の南閼浮提の内の大日本国をば戸那国の南岳大師・此の国の上宮
太子と生れてこの国の王となり給いき、しかれば聖徳太子已後の諸王は皆
南岳大師の末葉なり、桓武天王已下の諸王は又山王。

一二七一 大果報御書

1298p

者どもをば少少はをひいだし・或^{ある}はきしやうかかせて・はうにすぎて候い
つるが・七月末八月の始に所領^{しよりよう}かわり一万余束の作毛をさへ・かられて山や
にまとひ候ゆへに・日蓮^{にちれん}なを・ばうじつるゆへかと・ののしり候上・御かへ
り

の後七月十五日より上下^{じょうげ}いしはいと申^{もつ}す虫ふりて国大体^{だいたい}三分のうへそんじ候
いぬ、をほかた人のいくべしともみへず候、これまで候をもいたたせ給^{たま}う上
なに事もをもひ候へども・かさねての御心^{おんこころ}ざしはうにもすぎ候か。

なによりもおぼつがなく候いづる事はとののかみの御気色^{みけしき}いかんがと・を
ぼつがなく候いづるに・なに事もなき事^{もの}申すばかりなし。

かうらいむこの事うけ給わり候ぬ、なにとなくとも釈迦如来法華經を失い
候いつる上は大果報ならば三年はよもとをもひ候いつるにいくさけかちつづ
き候いぬ、国はいかにも候へ法華經のひろまらん事疑なかるべし。

御母への御事經をよみ候事に申し候なり、此の御使いそぎ候へば・くはし
く申さず候、恐恐。

一二七二

除病御書

1298p

其の上日蓮の身並びに弟子又過去謗法の重罪未だ尽きざるの上現在多年の
間謗法の者と為り亦謗法の国に生る、当時信心深からざらんか豈之を脱れん
や、但し貴辺此の病を受くるの理・或人之を告ぐ予日夜朝暮に法華經に申し
上げ朝暮に青天に訴う除病の由今日之を聞く喜悅何事か之に過ぎん、事事見

参を期^こせん、
恐^{きよう}恐^{きよう}。

さんろんしゅう

ぶんべつ

しやうもん

もつもく

しゅじやう

あ

三論宗も分別ならざる証文をもつて立てたりしかば・盲目の衆生に値う

おおわく

ちしゃ

あ

じゃぎあらわ

こ

そくねあらわ

から

て誑惑せしかども・明眼の智者に値うて邪義顕れぬ、此れ即根露るれば枝枯

みなもと

ながれつ

じねん

どうり

ねんぶつしゅう

ぜんしゅう

しんごん

そ

こんぼんびようこ

れ源 乾けば流竭く自然の道理なり、念仏宗・禅宗と真言とは其の根本謬

を

おおわく

も

そ

こんげんあらわ

たといにちれん

本とし誑惑を源とせり、其の根源顕れなば設い日蓮はいやしくとも天のはか

だいほうるふ

ふ

あくほう

しんじつ

うたがい

らひ大法流布の時来るならば・彼の悪法やぶれて此の眞実の法立つ事疑な

かるべし。

あくほう

なんじ

にちれん

すでに此の悪法消えんとするは汝知るやいなや、日蓮をいやしみて・さん

ざんとするほどにするほどに。

二七四

南無御書

1299p

堂塔どうとうつくらず布施ふせまいらせずらん、をしき物は命ばかりなり、これを法華經ほけきょうにまいらせんとをもし、三世さんぜの仏は皆凡夫みなぼんぶにてをはせし時命を法華經ほけきょうにまいらせて仏になり給たまう、此の故ゆえに一切いっさいの仏の始には南無と申す南無と申すは月氏がっしの語・此の土にては歸命きみょうと申すなり、歸命きみょうと申すは天台てんだいの釈いわに云く「命を以ことばて自ら歸みずかす」等云云、命を法華經ほけきょうにまいらせて仏にはならせ給たまう、日蓮今度にちれんこのたび命を法華經ほけきょうにまいらせて。

二七五

題目功德御書

1300p

くどく
功德は先の功德にたくらぶれば・前の功德は爪上の土のごとし、法華經の
くどく
題目の功德十方の土のごとし、先の功德は一の水のごとし・題目の功德は
たいもく
大海のごとし、先の功德は瓦礫のごとし・過日の功德は金銀のごとし、先の
くどく
功德は螢火のごとし・題目の功德は日月のごとしと申す經文なり。

二七六

大悪大善御書

1300p

だいじ
大事には小瑞なし、大悪をきれば大善きたる、すでに大謗法・国にあり大
しょうほう
正法必ずひろまるべし、各各なにをかなげかせ給うべき、迦葉尊者にあらず
たま

とも・まいをも・まいぬべし、しやりほつ舍利弗にあらねども・立つてをどりぬべし、
じょうぎようぼさつ上行菩薩の大地だいちよりいで給たまいしには・をどりてこそいで給たまいしか、ふげんぼさつ普賢菩薩
の来るには大地だいちを六種にうごかせり、事多しといへども・しげきゆへにとど
む、又文申もうすすべし。

二七七

来臨曇華御書らいりんどんげごしょ

1300p

追もうつて申もうす、御器の事は越後□□房申もうし候べし、御心おんこころざしふかき由・内房うつぶさ
へ申もうさせ給たまい候へ。

春の始の御悦びよろこび自他申し籠め候い畢おわんぬ、抑そも去年の来臨は曇華どんげの如ごとし、
将はた又夢か幻か疑うたがいいまだ晴れず候処に。

二七八

常樂我淨御書

1301p

出いでさせ給たまいて諸大乘しよだいじやうきやう経をかんがへ出し十方じゆつぽうの淨土じやうどを立て一切いっさいの諸法しよぽうは
常樂我淨と云云、其の時・五天竺てんじくの十六の大国・五百の中国・十千の小国しやうこく
・無量の粟散国の諸の小乗經むりやうむへんの無量無辺の寺寺の衆僧一同に蜂のごとく
蜂起ほうき

し・蟻のごとく緊集し・雷いかずちのごとくなりわたり、一時いちじに緊集して頭こしらへをあわ
せて・なげいて云く仏在世にこそ五大の外道は我等が本師・教主きやうしゆしやくそん釈尊とわ

・あらしいが・仏は一人なり・外道げどうは多勢なりしかども・外道げどうはありのごとし・

仏は竜のごとく・師子王ししのごとくましませしかばこそせめかたせ給たまいぬ、此れはそれには・にるべくもなし、馬鳴めみは一人なれども・我等われらは多人なれども・代末すへになれば・悪はつよく善はゆわし、仏の在世ざいせの外道げどうと仏法ぶつぽうとは水火すいなり。

二七九

帰伏正法御書きふくしやうぽうごしよ

1301p

上かみ一人下万民ばんみん一同に帰伏きふくする正法しやうぽうなり始めて勝劣しやうれつを立てて慈覚じかく・智証ちしやう・弘法こうぼうそむかんとをほせある。べかりしと・をばすか強敵じやうてきを仏法ぶつぽうの中にあらそ

い出来しゅつたいすべきたね国のみだるべきせんてうなりいかなる聖人しよつにんの御ことばなりとももち用ゆべからず各各日遮をいやしみて。真言宗しんこんしゆつと法華經宗ほけきようと叡山末寺えいざんまつじ
蘭城おんじようなら。奈良

・或あるはくびをきり・或あるはながさればととかれて此このの法門ほうもんを涅槃ねはん經ぎょう守護しゆご經等
ほけきよう　るつう
の法華經ほけきようの流通りつうの御經ぎぎょうにときをかせ給たまいて候まちは此このの国くにをば梵王ぼんのう・帝釈たいしゃくに仏ぶつを
ほせつけてよりせめさせ給たまうべしととかれて候まちされば此このの国くには法華經ほけきようの大
おんてき　げんせ　むげんじこく
怨敵おんてきなれば現世げんせに無間地獄むげんじこくの大苦たいくすこし心こころみさせ給たまうか教主きようしゅ釈尊しゃくそんの日蓮にちれんが
かたうどをしてつみしらせ給たまうにやよもさるならば天照太神てんしやうだいじん・正八幡等しやうはちまんは
此このの国くにのかたうどにはなり給たまはじ日蓮房にちれんのかたきなりすずにてなをわかし
そつり
候まちはんとぞはやり候まちらむいのらばいよいよあしかりなんあしかりなん、
きようきようきんげん
恐恐きようきんげん謹言きんげん。

二月十三日

日蓮にちれん在御判

ごへんじ
御返事

二八一

いしよくごしよ
衣食御書

1302p

あまごぜん
尼御前へ参る

がもく
驚目一貫給い畢んぬ、
たまい
おわ

ぶ、ころもは・さむさをふせぎあつさ

をさえ・はぢをかくす、人にものをせする人は人のいろをまし・ちからをそ
えいのちをつぐなり。

二八二

釈迦如来御書

1303p

釈迦如来は正しく法華經に「惡世末法の時能く是の經を持つ者」等云云、

善導云く千中無一等云云、

いづれを信ずべしや、又云く日蓮がみる程の經論

を善導・法然上人は御覽なかりけるかと申すか、

若しこの難のごとくならば

・昔の人の謬をば後の人のいかにあらわすべからざるか。

二八三

破信墮惡御書

1303p

かたきはを・をく・かたきはつよく、かたうどは・こわくして・しまけ候

へば惡心を・をこして・かへつて法華經の信心をも・やぶり惡道にをち候な

り、あしきところをば・ついしさりてあるべし、釈迦仏は三十二相そなわつ

て身は金色面は満月のごとし、しかれども・或は惡人はすみとみる・或は惡人

ははいとみる・或は惡人はかたきとみる。

二八四

阿仏房御書

御文おんぶん委あく披見ひけんいたし候あい了おんぬ、

抑おさ宝塔ほうとうの御供養くようの物・銭一貫文・白

米こめ・しなじなこめをくり物たしかに・うけとり候あい了おんぬ、此この趣おもむき御本尊・法

華經けにも・ねんごろに申し上げ候みこころ・御心みこころやすくおぼしめし候へ。

一御文いちごもんに云いく多宝如来たほうにょらい・涌現ゆげんの宝塔ほうとう・何事なにことを表あらわし給たまうやと云云、此この法門ほうもん

ゆゆしき大事だいじなり宝塔ほうとうを・ことわるに天台大師文句てんだいだいもんぐの八はに釈しゃくし給たまいし時・

証前しょうぜん起後きごの二重ふたうづの宝塔ほうとうあり、証前しょうぜんは迹門しやくもん・起後きごは本門ほんもんなり或あるは又閉塔へいとうは

迹門しやくもん・開塔かいとうは本門ほんもん・是これ即すなわち境智きやうちの二法ふたぽうなりしげきゆへに・これををく、

所詮しよせん・三周しやうもんの声聞しやうもん・法華經ほけきやうに来て己心こしんの宝塔ほうとうを見ると云いう事ことなり、今日蓮いまにちれんが

弟子檀那でしだんな又又かくのごとし、末法まつぽうに入はいつて法華經ほけきやうを持つ男女なんによの・すがたより

外ほかには宝塔ほうとうなきなり、若もし然しかれば貴賤きせん上下じやうげをえらばず南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと・

となづるものは我が身み又多宝如来たほうにょらいなり、妙法蓮華經みょうほうれんげきやうより外ほか

に宝塔ほうとうなきなり、法華經ほけきやうの題目だいもく・宝塔ほうとうなり宝塔ほうとう又南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうなり。

しよにん

ちすいかふうくう

だいもく
ごじ

今阿仏上人の一身は地水火風空の五大なり、此の五大は題目の五字なり、

しか

あぶつぼう

ほうとう

ほうとう

あぶつぼう

ほか

さいかくむやく

然れば阿仏房さながら宝塔・宝塔さながら阿仏房・此れより外の才覚無益な

もん

しん

かい

じよう

しん

しゃ

ざん

しつぼう

ほうとう

り、聞・信・戒・定・進・捨・慚の七宝を以てかざりたる宝塔なり、

たほうによらい

ほうとう

くよう

たま

たま

たま

たま

たま

たま

たま

たま

たま

たま

多宝如来の宝塔を供養し給うかとおもへばさにては候はず我が身を供養し給

さんじんそくい

ほんかく

によらい

たま

なむ

みょうほう

れんげきよう

たま

たま

たま

たま

たま

う我が身又三身即一の本覚の如来なり、かく信し給いて南無妙法蓮華經と

とな

たま

ほうとう

じゅうしよ

い

わ

ほけきよう

こと

有

有

有

有

有

有

有

唱え給へ、ここさながら宝塔の住処なり、経に云く「法華經を説くこと有

とこ

ほうとう

じゅうしよ

い

わ

ほけきよう

こと

有

有

有

有

有

有

有

有

らん処は我が此の宝塔其の前に涌現す」とはこれなり、あまりにありがたく

とこ

ほうとう

ゆげん

とは

これ

なり、

あまり

に

ありが

たく

有

有

有

有

候へば宝塔をかきあらはし・まいらせ候ぞ、子にあらずんば・ゆづる事なか

しんじんじつじょう

あら

まい

らせ

候ぞ、

子に

あらず

んば・

ゆづる

事な

か

有

有

有

れ信心強盛の者に非ずんば見する事なかれ、出世の本懐とはこれなり。

あぶつぼう

どうし

もう

しゅっせ

ほんかい

とは

これ

なり。

有

有

有

有

有

有

阿仏房しかしながら北国の導師とも申しつべし、浄行菩薩うまれかわり

たま

にちれん

たま

ふしぎ

ふしぎ

ふしぎ

おん

ご

志

を

ば

有

有

有

有

給いてや日蓮を御とふらい給うか不思議なり不思議なり、此の御志をば

にちれん

じようぎよう

ほさつ

ふしぎ

ふしぎ

ふしぎ

おん

ご

志

を

ば

有

有

有

有

日蓮はしらず上行菩薩の御出現の力にまかせたてまつり候ぞ、別の故はあ

にちれん

じようぎよう

ほさつ

ふしぎ

ふしぎ

ふしぎ

おん

ご

志

を

ば

有

有

有

有

るべからず・あるべからず、宝塔ほうとうをば夫婦ひそかにをがませ給へ、委くわくは

又もつ又申すべく候、恐恐きようきよう謹言きんげん。

ぶんえい みずのえさる

文永九年壬申 三月十三日

にちれん かおう
日蓮 花押

あぶつほうしようにんもと

阿仏房上人所へ

一一八五 妙法曼陀羅供養事

ぶんえい
文永十年 五十二歳御作

与千日尼 1305p

みようほうれんげきよう

ごほんぞんくよう

妙法蓮華經の御本尊供養候いぬ、此の曼陀羅は文字は五字七字にて候へど

さんぜ しょうぶつ おんしいつさい によにん じょうぶつ

も三世の諸仏の御師一切の女人の成仏の印文なり、冥途にはともしびとなり

りようめ にちがつ こと

死出の山にては良馬となり・天には日月の如し地には須弥山の如し・生死海

じょうぶつとくへん

の船なり成仏得道の導師なり。

だいまんだら ぶつめつ

此の大曼陀羅は仏滅後・二千二百二十余年の間・一閻浮提の内には未だひ

えんぶだい

いま

ろまらせ給はず、病によりて藥あり輕病には凡藥をほどこし重病には仙藥

をあたうべし、仏滅後より今までは二千二百二十余年の間は人の煩惱と罪業

の病輕かりしかば智者と申す医師たちつづき出でさせ給いて病に随つて藥を

あたえ給いき、所謂俱舍宗・成実

宗・律宗・法相宗・三論宗・真言宗・華嚴宗・天台宗・淨土宗・禅宗

等なり、彼の宗宗に一一に藥あり、所謂華嚴の六相十玄・三論の八不中道・

法相の唯識觀・律宗の二百五十戒・淨土宗の弥陀の名号・禅宗の見性

成仏・真言宗の五輪觀・天台宗の一念三千等なり。

今の世は既に末法にのぞみて諸宗の機にあらざる上、日本国一同に一闡提

大謗法の者となる、又物に譬うれば父母を殺す罪謀叛ををこせる科・出仏身血

等の重罪等にも過ぎたり、三千大千世界の一切衆生の人の眼をぬける罪よ

りも深く十方世界の堂塔を焼きはらへるよりも超えたる大罪を一人して作れ

る程の衆生しゅじょう日本国にほんこくに充満じゅうまんせり、されば天は日日まなこに眼をいからして日本国にほんこくを
にらめ、地神いかは忿なりを作して時時に身をふるうなり、然しかるに我が朝の一切衆生いっさいしゅじょう
は皆みな我が身に科とがなしと思ひ必ず往生おうじょうすべし成仏じょうぶつをとげんと思へり、赫赫かくかくた
る日輪にちりんをも目無き者は

見ず知らず、譬たとえばたいこの如ごとくなる地震をもねぶれる者の心にはおぼえず、
日本国にほんこくの一切衆生いっさいしゅじょうも是かくの如ごとし女人にょにんよりも男子とがの科とがはを・をく男子とがよりも尼
のとは重じかいし尼ちしやよりも僧とがの科とがはを・をく破戒はかいの僧とがよりも持戒じかいの法師ほっしのとは
重じかいし、持戒ちしやの僧とがよりも智者ちしやの科とがはをもかるべし、此等これらは癪病びやくびの中の白癪病びやくび
白癪病びやくびの中の大白癪病びやくびなり。

末代まつだいの一切衆生いっさいしゅじょうはいかなる大医りょうやくいかなる良薬りょうやくを以てか治べす可べきとかんが
へ候だいにちによらいへば大日如来ちけんの智拳ならの印だいにち並びに大日の真言しんこん・阿弥陀如来あみたによらいの四十八願しゆじゅうはちじよ・
薬師如来やくしによらいの十二大願・衆病しゅびょう悉除しつじよの誓も此の薬には及ぶべからず、つやつや

病消滅せざる上いよいよ倍增すべし、此等の末法の時のために教主釈尊・

多宝如来・十方分身の諸仏を集めさせ

給うて一の仙薬をとどめ給へり所謂妙法蓮華經の五の文字なり、此の文字を

ば法慧・功德林・金剛薩・普賢・文殊・藥王・觀音等にもあつらへさせ給は

ず、何に況や迦葉舍利弗等をや、上行菩薩等と申して四人の大菩薩まします、

此の菩薩は釈迦如来・五百塵点劫より・このかた御弟子とならせ給いて一念

も仏を・わすれず・まします大菩薩

を召し出して授けさせ給へり、されば此の良薬を持たん女人等をば此の四人

の大菩薩・前後左右に立そひて・此の女人たたせ給へば此の大菩薩も立たせ

給ふ乃至此の女人・道を行く時は此の菩薩も道を行き給ふ、譬へば・かげ

と身と水と魚と声とひびきと月と光との如し、此の四大菩薩南無妙法蓮華經

と唱えたてまつる女人をはなるるならば釈迦・多宝・十方分身の諸仏の

御勘ごかん氣きを此この菩ぼ薩さつの身こゝむに蒙たらせ給たまうべし、
妄語もうごのものたるべしと・をばしめすべし、
提婆だいばよりも罪つみ深く瞿迦利くじあよりも大
妙法蓮華經・南無なむ妙法蓮華經。
妙法蓮華經・南無なむ妙法蓮華經。

日蓮花押
にちれんかおう

二八六

あぶつぼうあまごぜんごへんじ
阿仏房尼御前御返事

がんねん
建治元年九月三日 五十四

歳御作 与千日尼 1307p

おんふみ いわ ほうぼう せんじんけいちよう おい さいほう いかん
御文に云く謗法の浅深輕重に於ては罪報如何なりや云云、夫れ法華經の意
いっさいしゆじよう かいじようぶつどう
は一切衆生・皆成仏道の御經なり、然りといへども信ずる者は成仏をとぐ
ほう むげん だいじよう お も
謗ずる者は無間・大城に墮つ、「若し人信ぜずして斯の經を毀謗せば即ち
いっさいせけん ぶつしゆ だん ないしそ みようじゅう あびごく
一切世間の仏種を断ぜん、乃至其の人命終して阿鼻獄に入らん」とは是な
ほうぼう せんじんけいちよう ほかきよう たも しきしんそうおう
り、謗法の者にも浅深輕重の異あり、法華經を持ち信ずれども誠に色心相應
のうじしきよう ぎようじや これら けに ほうぼう
の信者能持此經の行者はまれなり、此等の人は介爾ばかりの謗法はあれど
じんじゅう つみ しんじん
も深重の罪を受くる事はなし、信心はつよく謗法はよはき故なり、大水を以
て小火をけすが如し、涅槃經に云く、「若し善比丘法を壞る者を見て置いて呵責
こと ねはんきよう いわ も ぜんびく やぶ かしやく

し驅遣し拳処こんしよせずんば当まさに知るべし、是この人は仏法中の怨あだなり、若もし能よく驅遣し呵責かしやくし拳処こしよせば是れ我が弟子真でしの声聞しやうもんなり」云云、此の經文に・せめられ奉りて日蓮は種種たてまつの大難にちれんに値うといへども仏法中怨しゆじゆのいましめを免まぬれんために申すなり。

但し謗法に至ただつて浅深ほうほうあるべし、偽り愚かにしてせめざる時も・あるべし、

真言・天台宗等は法華誹謗の者いたう呵責しんごんすべし、然れども大智慧てんだいしゆつの者なら

では日蓮が弘通の法門分別しがたし、然る間まづまづ・さしをく事あるなり

立正安国論にちしやうあんこくろんの如し、いふと・いはざるとの重罪免れ難し、云つて罪のまぬ

がるべきを見ながら聞きながら置い

ていましめざる事眼耳げんにの二徳忽に破れて大無慈悲たちまちなり、章安の云く「慈無なく

して詐いつわり親むは即ち是れ彼が怨すなわなり」等云々、重罪消滅じゆうざいしやうめつしがたし弥利益いよいよやく

の心尤も然る可きなり、輕罪もつとしの者をばせむる時も・あるべし・又せめずして

をくも候べし、自然じねんになをる辺あるべしせめて自他じたの罪つみを脱まぬれてさてゆるす
べし、其そのの故ゆえは一向いっこう謗法ぼうほうになればまされる大重罪じゅうぐんざいを受くるなり、彼かれが為ために悪
を除けば即すなわち是これ彼が親なりとは是これなり。

にぢれん
日蓮が弟子・檀那の中にも多く此くの如き事共候、さだめて尼御前もきこ

しめして候らん、一谷の入道の事日蓮が檀那と内には候へども外は念仏者に

て候ぞ後生はいかんとすべき、然れども法華經十卷渡して候いしなり。

いよいよしんじん
弥信心を上げみ給うべし、仏法の道理を人に語らむ者をば男女僧尼必ず

にくむべし、よしくまばにくめ法華經・釈迦仏天台・妙樂・伝教章安等

きんげん
の金言に身をまかすべし、如説修行の人とは是れなり、法華經に云く「恐れ

の世に於て能く須臾も説く」云云、惡世末法の時三毒強盛の惡人等集りて候

しょうほう
時正法を暫時も信じ持ちたらん者をば天人供養あるべしと云う經文なり。

此の度大願を立て後生を願はせ給へ少しも謗法不信のところが候はば無間・

だいじょうたがい
大城疑いなかるべし、譬ば海上を船にのるに船おるそかにあらざれども

あか入りぬれば必ず船中の人人・一時に死するなり、なはて堅固なれども蟻

ついで
の穴あれば必ず終に湛へたる水のたまらざるが如し、謗法不信のあかを取り

信心しんじんのなはてをかたむべきなり、浅あき

罪つみならば我よりゆるして功德くどくを得さすべし、重おもきあやまちならば信心しんじんをはげ

まして消滅しょうめつさすべし、尼御前あまごぜんの御身おんみとして謗法ほうぼうの罪つみの浅深せんじんけい輕重ちやうじやうの義をと

せ給たまう事ことにありがたき女人にょにんにておはすなり、童女りゆうによにあにをとるべ

きや、「我大乘だいじやうの教ひらを聞きいて苦くの衆生しゆじやうを度脱どたつせん」とは是これなり、「其その義趣ぎしゆ

を問こうは是すなわれ則がたち難なしと為なす」と云いつて法華經ほけきやうの義理ぎりを問きう人は・かたしと

説いかれて候かま、相構かまえて相構かまえて力ちからあらん程ほどは謗法ほうぼうをばせめさせ給たまうべし、日蓮にちれん

が義ぎを助たけ給たまう事こと・不思議ふしぎに覺おぼえ候かたぞ不思議ふしぎに覺おぼえ候かたぞ、
六賢あなかしこあなかしこ六賢あなかしこ。

九月三日

日蓮にちれん 花押かおう

阿仏房尼御前御返事あぶつぼうあまごぜんごへんじ

二八七

千日尼御前御返事

弘安元年七月二十八日 五十

七歳御作 与阿仏房尼 1309p

弘安元年太歳 戊寅 七月六日佐渡の国より千日尼と申す人、同じく日本国
甲州・波木井郷の身延山と申す深山へ同じき夫の阿仏房を使として送り給う
御文に云く、女人の罪障はいかがと存じ候へども御法門に法華経は女人の
成仏をさきとするぞと候いしを万事はたのみまいらせ候いて等云云。

夫れ法華経と申し候・御経は誰れ仏の説き給いて候ぞとをもひ候へば此の
日本国より西漢土より又西・流沙・葱嶺と申すよりは又はるか西・月氏と
申す国に浄飯王と申しける大王の太子・十九の年・位をすてさせ給いて檀ど
く山と申す山に入り御出家三十にして仏とならせ給い身は金色と変じ神は

三世をかみさせ給う、すぎにし

事来るべき事かがみにかけさせ給いておはせし仏の五十余年が間・一代・
一切の経経を説きおかせ給う、此の一切の経経 仏の滅後・一千年が間月氏

国にやうやくひろまり候いしかどもいまだ漢土・日本国等へは来り候はず、
ぶつめつど

仏滅度後・一千十五年と申せしに漢土へ仏法渡りはじめて候いしかども又い

まだ法華経は・わたり給はず。

仏法漢土にわたりて二百余年に及んで月氏と漢土との中間に龜茲国と申す

国あり、彼の国の内に鳩摩羅えん三蔵と申せし人の御弟子に鳩摩羅什と申せ

し人彼の国より月氏に入り・須利耶蘇磨三蔵と申せし人に此の法華経

をさづかり給いき、其の経を授けし時の御語に云く此の法華経は東北の国に

縁ふかしと云云、此の御語を持ちて月氏より東方漢土へは・わたし給いしな

り。

漢土かんとには仏法ぶつぽうわたりて二百余年しんのう後秦王ぎょうの御宇わたに渡りて候いき、日本国にほんこくには

人王第三十代欽明天皇きんめいてんのうの御宇治十三年みよしろしめす・壬申みすのえさる十月十三日辛酉とりの日・此れよ

り西くだら・百済国もうと申す国より聖明皇にほんこく・日本国ぶつぽうに仏法こをわたす、此れは漢土かんとに仏法ぶつぽう

わたりて四百年ぶつめつ・仏滅後そ・一千四百余年ほけきようなり、其の中にも法華經ほけきようはまし

しかども人王第三十二代ようめいてんのう・用明天皇たいししょうとくたいしの太子聖德太子と申せし人・漢土かんとへ使を

・つかわして法華經ほけきようを・とりよせまいらせて日本国にほんこくに弘通くつうし給いきたまい、それよ

り・このかた七百余年ぶつめつとしなり、仏滅度後ぶつめつとしすでに二千二百三十余年たになり候上・

月氏がっし・漢土かんと・日本にほんの山山やま・河河が・海海うみ・里

里さと・遠くへだたり人人ひとびと・心心こころ・国国くに・各各おの／＼・別別わか／＼にして語ことばかわりしなこ

れば、いかでか仏法の御心をば我等凡夫われらぼんぶは弁え候べき、ただ經經きようぎようの文字もんじを

引き合せてこそ知るべきに一切經いっさいきようはやうやうに候へども法華經ほけきようと申す御經もうは

八卷はつまします流通りつうに普賢經序文ふげんじよぶんの無量義經むりようぎきよう各一卷おの／＼已上いじやう此の御經ごきようを開き見まい

らせ候へば明かなる鏡をもつて

我が面を見るがごとし、日出でて草木の色を弁えるにいたり、序品の無量義經

を見まいらせ候へば「四十余年未だ眞實を顕わさず」と申す經文あり、

法華經の第一の卷方便品の始めに「世尊の法は久しき後に要らず当に眞實を

説きたもうべし」と申す經文あり、第四の卷の宝塔品には「妙法華經・

皆是眞實」と申す明文あり、第七

の卷には「舌相梵天に至る」と申す經文赫赫たり、其の外は此の經より外の

さきのちならべる經經をば星に譬へ江河に譬へ・小王に譬へ・小山に譬へ

たり、法華經をば月に譬へ・日に譬へ・大海・大山・大王等に譬へ給へり、

此の語は私の言には有らず皆如来の金言なり十方の諸仏の御評定の御言な

り、一切の菩薩・二乗梵天・帝釈今の天に懸りて明鏡のごとくにまします、

日月も見給いき聞き給いき其の日月の御語も此の經にのせられて候、月氏・

漢土・日本国かんど にほんこくのふるき神たちも皆みな其の座につらなり給たまいし神神なり、

天照太神・八幡大菩薩・熊野・すずか等の
てんしょうだいじん はちまんだいぼさつ にほんこく

日本国の神神もあらそひ給たまうべからず、此の経文きょうもんは一切経いっさいきょうに勝すぐれたり地走

る者の王ししたり師子王ししのごとし・空飛ぶ者の王ししたり鷲のごとし、南無阿弥陀仏なむあみだぶつ

経等はきじのごとし兔のごとし鷲につかまれては涙をながし・師子ししに・せめ

られては腸はらわたをたつ、念仏者ねんぶつ・律僧りつそう・禅僧ぜんそう・真言師等しんごんし又かくのごとし、

法華経ほけきょうの行者ぎやうに値あいぬれば・いろを失うしない魂たまをけすなり。

かかるいみじき法華經ほけきょうと申もうす御經はいかなる法門ほうもんぞと申せば、一の卷方便ほうべん品よりうちはじめて菩薩ぼさつ・二乗凡夫皆にじょうほんぶみな仏になり給たまうやうをとかれて候へどもいまだ其そのしるしなし、設たとえば始めたる客人きやくじんが相貌そうみょううるわしくして心もいさぎよくよく口もきいて候へばいう事うたがい疑うたがいなけれどもさきも見ぬ人なればいまだあらわれたる事なけ

れば語ことばのみにては信じがたきぞかし、其そのの時語ことばにまかせて大なる事度度たびたびあり候へばさては後の事もたのもしなんど申すぞかし、一切いっさい信じて信ぜられざりしを第五の卷に即身成仏そくしんじょうぶつと申もうす一經第一の肝心かんじんあり、譬たとへばくろき物を白いくなす事漆うるしを雪となし不浄ふじょうを清浄しょうじょうになす事・濁水に如意珠にょいじゆを入れたるがごとし、竜女りゅうにょと申せし小蛇くちなわを現身げんしん

に仏になしてましましき、此の時こそ一切いっさいの男子の仏になる事をば疑うたがいう者は候はざりしか、されば此の經は女人成仏にょにんじょうぶつを手本てほんとしてとかれたりと申もうす、

されば日本国に法華經の正義を弘通し始めましませし叡山の根本伝教大師の
此の事を釈し給うには「能化所化俱に歴劫無し妙法經力即身成仏す」等、
漢土の天台智者大師・法華經の正義

をよみはじめ給いしには、他經は但男に記して女に記せず乃至今經は皆記す
等云云、此れは一代聖教の中には法華經第一法華經の中には女人成仏第一
なりとことわらせ給うにや、されば日本の一切の女人は法華經より外の
一切經には女人成仏せずと嫌うとも法華經にだにも女人成仏ゆるされなば
なにかくるしかるべき。

しかるに日蓮はうけがたくして人身をうけ値いがたくして仏法に値い奉る、
一切の仏法の中に法華經に値いまいらせて候、其の恩徳を・をもへば父母の
恩国主の恩一切衆生の恩なり、父母の恩の中に慈父をば天に譬へ悲母をば
大地に譬へたりいづれもわけがたし、其の中にも悲母の大恩ことにほうじが

たし、此れを報こぜんと・をもう

に外典げてんの三墳さんぶん・五典ごてん孝經等こうきやうにて報ぜんと・をもへば現在げんざいをやしないで後世ごしやう

をたすけがたし、身をやしない魂ないてんをたすけず内典ぶつぽうの仏法に入りて五千・七千

余巻しやうじやうの小乗だいじやう・大乘にょにんじやうぶつは女人成仏おんほうかたければ悲母ひもの恩報おんほうじがたし・小乗しやうじやうは

女人成仏にょにんじやうぶつ一向いっかうに許ゆるされず、大乘だいじやうきやう経きやうは・或あるは成仏じやうぶつ・或あるは往生おうじやうを許ゆるしたるや

うなれども仏かりごとの仮言じつじにて実事ほけきやうなし、但法華經

ばかばか計りこそ女人成仏悲母の恩を報ずる実の報恩經にて候へと見候いしかば悲母ひも

の恩を報ぜんために此の經の題目を一切の女人に唱えさせんと願す、其れにそ

にほんこくいっさいによにんかんどぜんどうにほんえしんようかんほうねん

日本国の一切の女人は漢土の善導日本の慧心永觀・法然等にすかされて詮と

なむなむみようほうれんげきよう

すべきに南無妙法蓮華經をば一国の一切の女人・一人も唱うることなし、但

なむあみだぶつ

南無阿弥陀仏と一日に一返

せんまん

・十返・百千万億反・乃至三万・十万反・一生が間・昼夜十二時に又他事なたじ

どうしんけんご

し、道心堅固なる女人も又悪人なる女人も弥陀念仏を本とせり、わづかに

ほけきよう

法華經をこととするやうなる女人も月まつまでのてずさびをもわしき男のひ

まに心ならず心ざしなき男にあうがごとし。

されば日本国の一切の女人・法華經の御心に叶うは一人もなし、我が悲母ひも

にほんこく

にほんこくいっさいによにんほけきようの御心に叶うは一人もなし、我が悲母

ほけきよう

に詮とすべき法華經をば唱えずして弥陀に心をかけば法華經は本ならねばた

たま

すけ給うべからず、弥陀念仏は女人たすくるの法にあらず必ず地獄に墮ち給うたま

べし、いかんがせんとなげきし程に我が悲母をたすけんがために弥陀念仏は
むげんじこく
無間地獄の業なり・五逆
ごぎやく

にはあらざれども五逆にすぎたり、父母を殺す人は其の肉身をばやぶれども

ふぼ ごしやう むげんじこく にはんこく によん ほけきやう

父母を後生に無間地獄には入れず、今・日本国の女人は必ず法華經にて仏に

なるべきを・たばらかして一向に南無阿弥陀仏になしぬ、悪ならざればすか

されぬ、仏になる種ならざれば仏にはならず弥陀念仏の小善をもつて法華經

だいぜん うしな しやうぜん ねんぶつ みだねんぶつ しやうぜん ほけきやう

の大善を失う小善の念仏は大悪の五逆にすぎたり、譬へば承平の將門は関東

八箇国をうたへ天喜の貞任は奥州をうちとどめし民を王へ通せざりしかば

ちやうてき さだとう おつしやう これら ごぎやく

朝敵となりてついにほろぼされぬ、此等は五逆にすぎたる謀反なり。

今・日本国の仏法も又かくのごとし色かわれる謀反なり、法華經は大王

だいにちきやうかんむりやうじゆきやうしんこんしゆつじやうとしゆつ ぜんしゆつ りつそつ だいおう

大日經觀無量壽經 真言宗 浄土宗・禅宗・律僧等は彼れ彼れの小經によて

ほけきやう おんてき にはん いっさい によん

法華經の大怨敵となりぬるを日本の一切の女人等は我が心のをろかなるをば

知らずして我をたすくる日蓮をかたきとをもひて大怨敵たる念仏者・禅・律
・真言師等を善知識とあやまてり、たすけんとする日蓮かへりて大怨敵とを
もわるるゆへに女人こそりて国主に讒言して伊豆の国へながせし上・

又佐渡さどの国へながされぬ。

ここに日蓮にちれん願ねんつて云いわく日蓮にちれんは全あやまくなし設たとい僻事ひがごとなりとも日本国にほんこくの一切いっさいの

女人にょにんを扶たすけんと願ねんせる志しはすてがたかるべし、何いかに況ほけきや法華經ほうけきのままに

申もうす、而しかを一切いっさいの女人にょにん等・信あぜずばさでこそ有あるべきに・かへりて日蓮にちれんを

うたする、日蓮にちれんが僻事ひがごとか釈迦しゃか・多宝たほう・十方じゅつぱうの諸仏しよぶつ・菩薩ぼさつ・二乗にじよう梵釈ばんしやく・四天してん

等たまたいかに計たまたらい給たまうぞ、日蓮僻事にちれんひがごとな

らば其その義ぎを示たまし給たまへ、ことには日月天にちがつは眼前がんぜんの境界きようかいなり、又仏前ぶつぜんにしてき

かせ給たまえる上法華經ほけきの行者ぎようじやをあだまんものをば「頭破こつぺれて七分ななぶんと作わらん」

等と誓ちかわせ給たまいて候まちへばいかなが候まちべきと日蓮強盛にちれんかうじようにせめまいらせ候まちゆへに

天あま此この国を罰えきすゆへに此この疫病えきびよう出現しゆつげんせり、他国たこくより此この国を天あまをほせつけ

て責せめらるべきに・両方りやうほうの人あ

また死ぬべきに天あまの御計ごけいらいとしてまづ民を滅めつぼして人の手足を切るがごと

くして大事だいじの合戦なくして・此の国の王臣等おうしんをせめかたづけて法華經ほけきょうの御敵を滅しょうほうぼして正法しょうほうを弘通くつうせんとなり。

而しかるに日蓮にちれん・佐渡さどの国へ流されたりしかば彼の国の守護等しゅごは国主こくしゅの御計ら

いに随したがいて日蓮にちれんをあだむ・万民ばんみんは其その命に随したがう、念佛者ねんぶつ・禅ぜん・律りつ・真言師等しんこんし

は鎌倉かまくらよりも・いかにもして此これへわたらぬやう計もうると申しつかわし・極楽ごくらく

寺りょうかんの良觀房等むさしは武蔵むさしの前司殿みきよつしよの私の御教書もうを申して弟子でしに持たせて日蓮にちれんをあ

だみなんとせしかば・いかにも命た

すかるべきやうはなかりしに天の御計じとうらいはさてをきぬ、地頭じとう・地頭じとう・念佛ねんぶつ

者ねんぶつ・念佛者等にちれん・日蓮あんしつが庵室あふつぼうに昼夜に立ちそいてかよう人も・あるをまどわさ

んとせめしに阿仏房あふつぼうに・ひつを・しおわせ夜中に度度たびたび・御わたりありし事い

つの世にか・わすらむ、只悲母ただひもの佐渡さどの国に生れかわりて有あるか。

漢土かんとに沛公はいこうと申せし人王の相有りとて秦の始皇ちよくせんの勅宣くだを下して云いわく沛公打はいこう

ちて・まいらせん者には不次の賞を行うべし、沛公^{はいこう}は里の中には隠れがたくして山に入りて七日・二七日^{ふたしちじつ}など有^あるなり、其^{その}の時命^{とき}すでに・をわりぬべかりしに沛公^{はいこう}の妻女呂公^{りょこう}と申せし人こそ山中を尋^{たず}ねて時時命^{よりより}をたすけしが彼は妻なればなさけすてがたし、此^これ

は後世^{しごう}を・をばせずばなにしかかくはおはすべき、又其^{その}の故^{ゆえ}に・或^{ある}は所^{ところ}を

・をい・或^{ある}はくわれうをひき・或^{ある}は宅^{たく}をとられなんどせしについにとをらせ

給^{たま}いぬ、法華經^{ほけきやう}には過去^{かこ}に十萬億^{じゆふ}の仏^{ぶつ}を供養^{くやう}せる人こそ今生^{こんじやう}には退^{たい}せぬとわ

みへて候^{こう}へ、されば十萬億^{じゆふ}供養^{くやう}の女人^{にょにん}なり、其^{その}の上^{うへ}・人^{まなこ}は見る眼^{まなこ}の前^{まへ}には心

ざし有^ありと・もさしはなれぬれば・心

はわすれずともさでこそ候^いに去^いぬる文永^{ぶんえい}十一年より今年弘安元年までは・す

でに五箇年^{ごかん}が間^ま・此^この山中^{さんちゆう}に候^{さど}に佐渡^{さど}の国^{くに}より三度^{さんど}まで夫^そをつかはす、いく

らほどの御心^{おんこころ}ざしぞ大地^{だいち}よりもあつく大海^{たいかい}よりもふかき御心^{おんこころ}ざしぞかし、

釈迦^{しゃか}如来^{にょらい}は我^{われ}が薩^{さつ}王子^{おうじ}たりし時^{とき}うへたる虎^こに身^みをかいし功德^{くどく}尸毘^{しひ}王^{おう}とあり

し時鳩^{はと}のために身^みをかへし功德^{くどく}をば我^{われ}が末^{すえ}の代^よかくのごとく法華經^{ほけきやう}を信^{しん}ぜん

人にゆづらむとこそ多宝^{たほう}・十方^{じゆつぱう}の仏^{ぶつ}の御前^{おんまえ}にては申^{もう}させ給^{たま}いしか。

其^{その}の上^{うへ}・御消息^{ごしうそく}に云^いく尼^にが父^{ちち}の十三年は来^きる八月十一日又云^いくぜに一貫^{いっくわん}も

ん等云云、あまりの御心おんこころざしの切に候へばありえて御はしますに随したがいて法華經ほけきよう

十巻をくりまいらせ候、日蓮にちれんがこいしくをはせん時は学乗房によませて御ち

やうもんあるべし、此の御經をしるしとして後生ごしょうには御たづねあるべし、

そもそもこそぞ

抑 去年今年のありさまは・いか

にかならせ給たまいぬらむと・をぼつかなさに法華經ほけきようにねんごろに申もうし候いつれ

どもいまだいぶかしく候いつるに七月二十七日の申さるのとき阿仏房あぶつぼうを見つけて

尼にごぜんはいかにこう入道殿にゅうだうだんはいかにとまづといて候いつればいまだやま

ず、こう入道殿にゅうだうだんは同道にて候いつるがわせは・すでにちかづきぬこわなしい

かんがせんとて・かへ

られ候いつるとかたり候いし時こそ盲目もうもくの者の眼まなこのあきたる死たまし給たまえる父母ふぼ

の閻魔宮えんまより御をとづれの・夢あの内に有るをゆめにて悦ぶがごとし、あわれ

あわれふしぎなる事ことかな、此れもかまくらも此の方の者は此の病にて死ぬる

人はすくなく候、同じ船にて候へばいづれもたすかるべしと・をぼへず候
いつるに・ふねやぶれて・

たすけぶねに値^あえるか、又竜神^{りゅうじん}のたすけにて事なく岸へつけるかとこそ
不思議^{ふしぎ}がり候へ。

さわの入道^{にゅうどう}の事なげくよし尼^にごぜんへ申^{もう}したへさえ給^{たま}え、ただし入道^{にゅうどう}
の事は申^{もう}し切り候いしかば・をもち合

せ給^{たま}うらむ、いかに念仏^{ねんぶつ}堂ありとも阿弥陀^{あみた}仏は法華^{ほけき}經のかたきをばたすけ給^{たま}う
べからず、かえりて阿弥陀^{あみた}仏の御かたきなり後生^{しじょう}惡道に墮^おちてくいられ候ら
む事あさまし。

ただし入道^{にゅうどう}の堂のらうにていのちをたびたびたすけられたりし事こそいか
にすべしとも・をばへ候はね、学乗房をもつてはかにつねづね法華^{ほけき}經をよま
せ給^{たま}えとかたらせ給^{たま}え、それも叶^{かな}うべしとはをばえず、さても尼のいかにた
よりなかるらむとなげくと申しつたへさせ給^{たま}い候へ、又又^{もう}申すべし。

七月二十八日

日蓮^{にちれん} 花押^{かおう}

佐渡^{さど}国府阿仏房尼御前^{あぶつぼうあまごぜん}

二八八

千日尼御前御返事

弘安元年十月十九日

五十七

歳御作

与阿仏房尼

1315

せいふ

青鳧一貫文・干飯一斗・種種の物給い候い了んぬ、仏に土の餅を供養せし

とくしょうどうじ

あそかだいおう

徳勝童子は阿育大王と生れたり、仏に漿を・まひらせし老女は辟支仏と生れ

ほけきよう

じゅつぽうさんぜ

しよぶつ

じゅつぽう

もう

とうほう

たり、法華経は十方三世の諸仏の御帥なり、十方の仏と申すは東方善徳仏

なんぼうむうとく

なんぼうせんた

なんぼう

さいほうむりよう

・東南方無憂徳仏・南方栴檀徳仏・西南方宝施仏・西方無量明仏・西北方華

とうほう

さんじよう

じようほうじつじゆうとく

めいとく

徳仏・北方相徳仏・東北方三乗行仏・上方広衆徳仏・下方明徳仏なり、

さんぜ

もう

かこ

げんざい

みらい

せいしゆく

三世の仏と申すは過去・莊嚴劫の千仏・現在・賢劫の千仏・未来・星宿劫の

ないしけごんきよう

ほけきよう

だいしよう

ごんじつ

けんみつ

しよきよう

つらな

千仏・乃至華嚴経・法華経・涅槃経等の大小・権実・顕密の諸経に列り

たま

いっさい

しよぶつ

じゅつぽうせかい

ぼさつ

みなこととほけきよう

つらな

給へる一切の諸仏・尽十方世界の微塵数の菩薩等も・皆悉く法華経の妙の一

しゆつしよう

たま

し給へり、

ゆえ

ほけきよう

けつきよう

ふげん

いわ

字より出生し給へり、故に法華経の結経たる普賢経に云く「仏三種の身は

ほうとう 方等より生ず」等云云、
 ほうとう 方等とは月氏の語・漢土には大乘と翻ず・大乘と
 もう 申すは法華經の名なり、
 あこんきよう 阿含經は外道の經に対すれば大乘經、華嚴・般若
 だいじようきよう 大日經等は阿含經に対すれば大乘經、法華經に対すれば小乗經なり、
 ほけきよう 法華經に勝れたる經なき故に一

だいじょうきよう
大乘経なり、例せば南閻浮提・八万四千の国国の王王は其の国国にては大王
と云う・転輪聖王に対すれば小王と申す、乃至六欲・四神の王王は大小に
破る、色界の頂の大梵天王独り大王にして小の文字をつくる事なきが如し、
仏は子なり法華経は父性なり、譬えば一人の父母に千子有りて一人の父母を
讃歎すれば千子悦びをなす、一人の父母を供養すれば千子を供養するになり
ぬ。

ほけきよう
又法華経を供養する人は十方の仏・菩薩を供養する功德と同じきなり、
じゅつぽう
十方の諸仏は妙の一字より生じ給へる故なり、譬えば一の師子に百子あり・
もろもろきんじゅう
彼の百子諸の禽獸に犯さるるに・一の師子王吼れば百子力を得て諸の禽獸
みなこうへ
皆頭七分にわる、法華経は師子王の如し一切の獸の頂きとす、法華経の師子
王を持つ女人は一切の地獄・餓鬼・畜生
にょにん いっさい じごく がき ちくしゅう
等の百獸に恐るる事なし、譬えば女人の一生の間の御罪は諸の乾草の如し
たと にょにん つみ もろもろかれくさ ごと

法華經ほけきょうの妙みょうの一字いちじは小火しょうかの如ごとし、小火しょうかを衆草しゅうそうにつきぬれば衆草しゅうそう焼け亡なぶるのみならず大木たいぼく大石たいせき照焼てりやけ失なせぬ、妙みょうの一字いちじの智火ちか以もつて此こくの如ごとし諸罪しよざい消ゆるのみならず衆罪しゅうざいかへりて功德くどくとなる毒藥どくやく變かじて甘露かんろとなる是これなり、譬たとえば黒漆くろしに白物おしろいを入いれぬれば白色はくしきとなる、女人にょにんの御罪つみは漆うるしの如ごとし南無なむ妙法蓮華經みょうほうれんげきょうの文字もんじは白物おしろいの如ごとし人は臨終りんじゅうの時地獄じごくに墮おつる者は黒色くろしきとなる上そ其その身重みじかき事こと・千引ちびきの石いしの如ごとし善人ぜんにんは設たひ七尺八尺しちしゃくはつしゃくの女人にょにんなれども色黒しきくろき者ものなれども臨終りんじゅうに色變しきかじて白色はくしきとなる又輕かろき事こと・鷲毛じうもうの如ごとし軟ななる事こと・兜羅たうら縣わたの如ごとし。

佐渡さどの国くにより此この国くにまでは山海さんかいを隔へてて千里せんりに及び侯およに女人にょにんの御身おんみとして法華經ほけきょうを志ししましますによりて年年ねんねんに夫おんつかいを御使ごしとして御訪ごむらいあり定さだめて法華經ほけきょう・釈迦しゃか・多宝たほう・十方じゅうつぱうの諸仏しよぶつ・其その御心ごしんをしらしめすらん、譬たとえば天月てんげつは四万由旬ゆじゆんなれども大地だいちの池いけには須臾しゆゆに影浮えいうび雷門らいもんの鼓こは千万里ばんり遠とほけれども

打ちては須臾しゅゆに聞ゆ、御身おんみは佐渡さどの国にをはせども心は此の国に來れり、仏
に成る道も此かくの如ごとし、我等われらは穢土えどに候そうちへども心は靈山りょうぜんに住べし、御面を見
てはなにかせん心こそ大切に候そうちへ、いつかいつか釈迦しゃか仏ぶつのをはします靈山りょうぜん会
上にまひりあひ候そうちはん、南無妙法蓮華經

・南無妙法蓮華經、なむほうれんげきょう 恐恐謹言。きょうきょうきんげん

弘安元年後十月十九日
こうあんがんねん

日蓮 花押
にちれん かおう

千日尼御前御返事
あまごぜんごへんじ

二八九 阿仏房御返事
あぶつぼうごへんじ

1317p

御状の旨・委細承り候むね いさい たまわ そつらいたんぬ、大覺世尊説だいかくせそんいて曰いわく「生老病死・
生住異滅」等云云、既すでに生を受けて齡六旬よわいに及ぶ老又疑うたがいい無し只残ただる所
は病死の二句なるのみ、然しかるに正月より今月六月一日に至り連連此の病息やむ
こと無し死ぬる事疑うたがいい無き者か、經に云く「生滅滅已・寂滅為樂」云云、

今は毒身を棄^すてて後に金身を受ければ豈^{あに}欺^{あざむ}くべけんや。

建治三年丁丑ひのとうし六月三日

阿仏房あぶつぼう

日蓮にちれん 花押かおう

二九〇

千日尼御返事こへんじ

弘安三年七月二日こうあん

五十九歳御作

与阿仏房尼あぶつぼう

1318p

追伸、絹の染袈裟けさ一つまいらせ候、豊後房に申し候もうべし既に法門ほうもん・日本国
にひろまりて候、北陸道をば豊後房なびくべきに学生かなならでは叶かなうべか
らず・九月十五日いぜん已前に・いそぎいそぎまいるべし、こつ入道殿にゅうだうだんの尼ご
ぜんぜんの事なげき入つて候、又こいしこいしと申しつたへさせ給たまへ、かず
の聖教しょうきょうをば日記にっきのごとくたんば房にいそぎいそぎつかわすべし、山伏
房をばこれより申もうすにしたがいてこれへは・わたすべし、山伏げんの現げんにあ
たまれ候事悦よろこび入つて候。

鷺目がもく一貫五百文のりわかめほしいしなじなの物給おひ候わい了おんぬ、法華經ほけきやうの

御宝前に申し上げて候、法華經に云く「若し法を聞く者有らば一として成仏
せざることを無し」云云、文字は十字にて候へども法華經を一句よみまいらせ
候へば釈迦如来の一代聖教をのこりなく読むにて候なるぞ、故に妙樂大師
の云く「若し法華を弘むるは凡そ

一義を消するも皆一代を混じて其の始末を窮めよ」等云云、始と申すは華嚴經

・末と申すは涅槃經・華嚴經と申すは仏最初成道の時法慧・功德林等の大

菩薩・解脱月菩薩と申す菩薩の請に趣いて仏前にてとかれて候、其の經

は天竺・竜宮城・兜率天等は知らず日本国にわたりて候は六十卷・八十卷

・四十卷候、末と申すは大涅槃經・此れも月氏・竜宮等は知らず我が朝には

四十卷・三十六卷・六卷・二卷等なり、此れより外の阿含經・方等經・

般若經等は五千・七千余卷なり、此れ等の經經は見ず・きかず候へども但

法華經の一字・一句よみ候へば彼れ彼れの經經を一字

もをとさずよむにて候なるぞ、譬^{たと}へば月氏^{がつし}日本^{にほん}と申^{もう}すは二字・二字に五天竺^{てんじく}
十六^{たいこく}の大国・五百^{ちゆうこく}の中国・十千^{しやうこく}の小国・無量^{むりやう}の粟散^{ぞくさん}国^{こく}の大地^{だいち}大山^{おほやま}草木^{そうもく}人畜^{じんちく}
等をさまれるがごとし、譬^{たと}へば鏡^{かがみ}は・わづかに一寸・二寸・三寸^{さんずん}・四寸・五
寸と候へども一尺・五尺の人をもつかべ一丈・二丈・十丈・百丈の大山をも
うつすがごとし。

きょうもん

されば此の経文をよみて見候へば此の経をきく人は一人もかけず仏になる

もつ

と申す文なり、九界・六道の一切衆生各各心心かわれり、譬へば二人・三人

ないし

・乃至百千人候へども一尺の面の内しちににたる人・一人もなし、心のにざ

ろくどう

るゆへに面にもにず、まして二人十人六道九界の衆生の心いかんがかわりて候

しゅじょう

らむ、されば花をあいし・月

をあいしすきをこのみにがきをこのみちいさきをあいし大なるをあいしいろ

いろなり、善をこのみ悪をこのみしなじなり、かくのごとく・いろいろに

ほけきょう

候へども法華經に入りぬれば唯一人の身一人の心なり、譬へば衆河の大海に

ただ

たと

たいかい

入りて同一の鹹味なるがごとく衆鳥の須弥山に近ずきて一色なるがごとし、

だいば

提婆が三逆も羅羅が

らこら

しゅうちょう
しゅみせん

二百五十戒も同じく仏になりぬ、妙莊嚴王の邪見も舍利弗が正見も同じく

みょうそうこん

じゃけん

しゃりほつ

せいけん

じゅき

授記をかをほれり、此れ即ち無二不成仏のゆへぞかし、四十余年の内の阿弥陀

こ

すなわ

むいつふじょうぶつ

よんじゅうよねん

あみだ

経等には舍利弗しゃりほつが七日の百万反大善根ぜんこんをとかれしかども未顕真実みけんしんじつときらわれ
しかば七日ゆをわかつて大海たいかいになげたるがごとし、
無生忍むしようにんを得しかども正直捨方便しやうじきしやほうへん
提希いたいけが觀經かんきやうをよみて

とすてられしかば法華經を信ぜずば返つて本の女人にょにんなり、大善だいぜんを用うる事な
し法華經に値あわざればなにかせん、大惡なげをも歎ことなく事無いちじやうかれ一乘しゆぎやうを修行せば
提婆だいばが跡あとをもつぎなん、此等これらは皆無みなむ一不成いっふじやうぶつ仏の經文きやうもんのむなしからざるゆへ
ぞかし。

されば故阿仏房あぶつぽうの聖靈しやうりやうは今いづくにかをはすらんと人は疑うたがひうとも
法華經の明鏡めいきやうをもつて其その影をつかべて候へば靈鷲山りやうじゆせんの山の中に多宝仏たほつぷつ
宝塔ほうとうの内に東むきにをはすと日蓮にちれんは見まいらせて候、若もし此の事そらごとに
て候わば日蓮にちれんがひがめにては候はず、釈迦如来しやかにらいの世尊せそん法久後ほうくこ・要當說真実やうとうせつしんじつの
御舌たほうぶつも多宝仏みやうほけきやうの妙法華經かいぜしんじつ・皆是真実ぜつそうの舌相

も四百万億那由佗なゆたの国土こくどにあさのごとくいねのごとく星のごとく竹のごとく
ぞくぞくとすきまもなく列つらなつてをはしましし諸仏如来しよぶつにょらいの一仏いちぶつもかけ給たまはず、
広長舌こうちやうぜつを大梵王宮おうへうに指し付けてをはせし御舌ごぜつどものくぢらの死にてくされた
るがごとく・いわしのよりあつまりて・くされたるがごとく・皆みな一時いちじにくち
くされて十方世界じゅっぱうせかいの

諸仏如来大妄語の罪にをとされて寂光の浄土の金るり大地はたとわれて提婆
がごとく無間・大城にかつぱと入り法蓮香比丘尼がごとく身より大妄語の
猛火ばといでて実報華王の花のその一時に灰燼の地となるべし、いかでかさ
る事は候べき、故阿仏房一人を寂光の浄土に入れ給はずば諸仏は大苦に墮ち
給うべし、ただ・をいて
物を見よただをいて物を見よ、仏のまことそら事は此れにて見奉るべし、さ
てはをとこははしらのごとし女はなかわのごとし、をとこは足のごとし女人
は身のごとし、をとこは羽のごとし女はみのごとし、羽とみと・べちべちに
なりなばなにをもつてかとぶべき、はしらたうれなばなかは地に墮ちなん、
いへにをとこなければ

人のたましゐなきがごとし、くうじをたれにかいゐあわせん、よき物をばた
れにかやしなうべき、一月二日たがいしをだにもをばつかなくをもちしに、

ここの三月の二十一日にわかれにしがこそもまちくらせどまみゆる事なし、
今年もすでに七つきになりぬ、たといわれこそ来らずともいかにをとづれは
なかるらん、ちり

し花も又さきぬおちし菓いのみも又なりぬ、春の風もかわらず秋のけしきもここの
ごとし、いかにこの一事のみ・かわりゆきて本のごとくなかるらむ、月は入
りて又いでぬ雲はきへて又来る、この人人ひとびとの出でてかへらぬ事」

そ天もうらめしく地もなげかしく候へ、さこそをぼすらめいそぎいそぎほけきよう法華經
をらうれうとたのみまいらせ給たまいて、りやうぜん浄土じよとへまいらせ給たまいてみま
いらせさせ給たまうべし。

抑そも子はかたきと申もうす經文きやうもんもあり「世人子ための為に衆の罪つみを造る」の文なり、
抑くまたか

・驚おどろと申もうすとりはをやは慈悲じひをもつて養へば子は・かへりて食とす
きやうちよう

梟きやうちよう鳥もうと申もうすとりは生まれては必ず母をくらう、畜生ちくしやうかくのごとし、人の中

に

もはるり王は心もゆかぬ父の位を奪い取る、阿闍世王は父を殺せり、安祿山は養母をころし安慶緒と申す人は父の安祿山を殺す安慶緒は又史師明に殺されぬ史師明は史朝義と申す子に又ころされぬ、此れは敵と申すもことわりなり、善星比丘と申すは教主釈尊の御子なり、苦得外道をかたらいて度度父の仏を殺し奉らんとす、又

子^{たから}は財^{もう}と申^{きようもん}す経文^{きんぶん}もはんべり所以^{ゆえん}に経文^{きんぶん}に云^{いわ}く「其^その男女^{なんによ}追^{もつ}つて福^{しゆう}を修^{しゆ}すれば大光明^{だいこうみゆう}有^あつて地獄^{じごく}を照^{てら}し其^その父母^{ふぼ}に信心^{しんじん}を顕^{あらわ}さしむ」と等^{もう}と申^{もつ}す、設^{たと}い仏説^{ぶつせつ}ならずとも眼^{まなこ}の前^{まへ}に見^みえて候^{こう}。

てんじく

こくおう

だいおう

天竺^{てんじく}に安足国王^{あんそくこわう}と申^{まう}せし大王^{だいおう}は・あまりに馬^{うま}をこのみて・かいしほどに・後^{あと}には・かいなれて鈍馬^{どんば}を竜馬^{りゆうば}となすのみならず・牛^{うし}を馬^{うま}ともなす・結句^{けつこ}は人を馬^{うま}と・なしてのり給^{たま}いき、其^その国^{くに}の人^{ひと}あまりになげきしかば知らぬ国^{くに}の人^{ひと}を馬^{うま}となす、他国^{たこく}の商人^{しょうじん}のゆきたりしかば薬^{くすり}をかいて・馬^{うま}となして御^ごまやうに・つなぎつけぬ、なにと・なけれども

我が国^{くに}はこいしき上妻子^{さうし}ことにこいしくしのびがたかりしかどもゆるす事^{こと}なかりしかばかへる事^{こと}なし、又^{また}かへりたりともこのすがたにては由^{よし}なかるべし、ただ朝夕^{ちやうせき}にはなげきのみにしてありし程^{ほど}に・一人^{ひとり}ありし

子父^{しふ}のまちどきすぎしかば人にや殺^{ころ}されたるらむ又病^{やま}にや沈^{しず}むらむ子の身^みと

していかでか父をたづねざるべきといでたちければ母なげくらく男も他国たこくよりかへらず一人の子もすててゆきなば我いかんがせんと・な

げきしかども子ちちのあまりにこいしかりしかば安足国たすへ尋ねゆきぬ、ある小屋にやどりて候しかば家の主申もうすやうあらふびんやわどのはをさなき物なり而もしかみめかたち人にすぐれたり、我に一人の子ありしが他国たこくに

ゆきてしにやしけん又いかにてやあるらむ、我が子の事を・をもへばわどのをみてめもあてられず、いかにと申せば此の国は大なるなげき有り、此の国だいうの大王あまり馬をこのませ給たまいて不思議の草を用もちい給たまへり、一葉せば

き草をくわすれば人馬となる、葉の広き草をくわすれば馬人となる、近くも

他国たこくの商人の有たりしを・この草をくわせて馬となして第一だいいちの御まやに秘蔵ひそうし

てつながれたりと申もうす、此の男これをきいてさては我が父は馬と成りてけりとをもちて返つて問そう其の馬は毛はいかにとといければ家の主答えて云いわく栗

毛なる馬の肩白く・

ぶちたりと申す、此の物此の事をききてとかうはからいて王宮に近づき葉の
広き草をぬすみとりて・我が父の馬になりたりしに食せしかば本のごとく人
となりぬ、其の国の大王不思議なるおもひをなして孝養の者なりと

て父を子にあづけ給へり、其れよりついに人を馬となす事はとどめられぬ。

子ならずば・いかでか尋ねゆくべき、目連尊者は母の餓鬼の苦をすくひ浄

蔵・浄眼は父の邪見を・ひるがいます、此れよき子の親の財となるゆへぞかし、

而るに故阿仏聖靈は日本国・北海の島のいびすのみなりしかども後生を・

をそれて出家して後生を願ひしが此の人・日蓮に値いて法華經を持ち去年の

春仏になりぬ、戸陀山の野干は仏法に

値いて生をいとひ死を願いて帝釈と生れたり、阿仏・上人は濁世の身を厭

いて仏になり給いぬ、其の子藤九郎守綱は此の跡をつぎて一向法華經の行者

となりて去年は七月二日・父の舍利を頸に懸け、一千里の山海を経て甲州・

波木井身延山に登りて法華經の道場に此れをおさめ、今年は又七月一日身延

山に登りて慈父のはかを拝見す、子にすぎたる財なし子にすぎたる財なし

南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經。

七月二日

あぶつぼう
故阿仏房尼御返事
ごへんじ

にちれんかおう
日蓮花押

二九一

国府入道殿御返事^{くにふりだうどのごへんじ}

文永十二年^{ぶんえい}

五十四歳御作

1323p

あまのりのかみぶくろ二つわかめ十でうこものかみぶくろ一つたこひと
しら。

人の御心は定めなきものなればうつる心さだめなし、さどの国に候いし時^{とき}

御信用ありしだにもふしぎに・をばへ候いしに、これまで入道殿をつかわさ^{しんぎやう}

れし御心ざし又国もへだたり年月もかさなり候へばたゆむ御心もやとうたが^{おんこころざし}

い候にいよいよいろをあらわしこうをつませ給う事但一生二生の事にはあら^{ねんげつ}

ざるか、此の法華経は^{ほけきやう}

信じがたければ仏人の子となり父母となり女となりなんどしてこそ信ぜさせ^{ふぼ}

たま
給うなれ、しかるに御子もをはず但をやばかりなり、其中衆生悉是吾子の

きようもん

経文のごとくならば教主釈尊は入道殿尼御前の慈父ぞかし、日蓮は又御

にゆうどう あまごぜん じふ にちれん

子にてあるべかりけるが、しばらく日本国の人をたすけんと中国に候か、

しゆくぜん

宿善たうとく候、又蒙古国の日本にみ

もうこ

にほん

だれ入る時はこれへ御わたりあるべし、又子息なき人なれば御としのすへに

しそく

はこれへと・をぼしめすべし、いづくも定めなし、仏になる事こそつゐのす

みかにては候いしとをもひ切らせ給うべし、
たまたま
恐れ。

きようきん

卯月十二日

にちれん
日蓮

かおう
花押

にぎひつう
ごへんじ
こう入道殿御返事

二九二

国府尼御前御書

建治元年

五十四歳御作

1324p

阿仏御房ごぼうの尼ごぜんよりぜに三百文、同心なれば此の文を二人して人に
よませてきこしめせ。

単衣さど一領佐渡さどの国より甲斐かいの国波木井はきりの郷みやまの内の深山みやままで送り給候たひそつらい了おわぬ、
法華經ほけきよう第四法師品ほうしほんに云く「人有いつて仏道ぶつどうを求めて一劫いつこうの中に於おいて合掌がつしようし
て我が前に在あつて無数の偈げを以もつて讃ほめん、是この讃ほ仏よに由ゆるが故ゆえに無量の功德むりよう
を得くどくん、持經者じきようを歎美たんびせんは其その福復ふくた彼かに過かぎん」等云云、文の心は釈尊しゃくそん
ほどの仏そつを三業相応さんごうして

一中劫くどくが間くねんごろに供養くようし奉たてまつるよりも末代まつだい惡世あくせの世ほに法華經ほけきようの行者ぎようじやを供養くよう
せん功德くどくはすぐれたりと・とかれて候、まことしからぬ事にては候へども仏

の金言きんげんにて候へば疑うたがいうべきにあらず、其の上妙樂大師みょうらくだいしと申す人・此の

經文きょうもんを重ねてやわらげて云く「若し毀謗きぼうせん者は頭七分こうふに破れ若し供養くやうせ

ん者は福十号ふくじゅうごうに過ぎん」等云云、釈しゃくの心は末代の法華經ほけきょうの行者ぎやうじゃを供養くやうする

は十号じゅうごうを具足ぐそくします如来にょらいを供養くやうしたてまつるにも其の功德そくどくすぎたり、又

濁世じよくせに法華經ほけきょうの行者ぎやうじゃあらんを留難るなんをなさん人は頭七分こふふにわるべしと云云。

夫れ日蓮そは日本第一にちれんのゑせものなり、其の故そのゆえは天神七代てんじんはさておきぬ、

地神五代ちじんごだいも又はかりがたし、人王じんおう始まりて神武より今に至るまで九十代欽明きんめい

天王より七百余年せけんが間世間げんにつけ仏法ぶつぽうによりても日蓮にちれんほど・あまなく人にあ

だまれたるものは候はじ、守屋もりやが寺塔じとうをやき清盛入道きよもりにむすひだうが東大寺興福寺とうだいじこうふくを失せ

し彼等かれらが一類いちるいは彼がにくま

ず、将門貞たうが朝敵ちようてきと成りし伝教大師でんぎようだいしの七寺にあだまれし彼等かれらもいまだ

日本一州にほんの比丘びく・比丘尼びくに・優婆塞うばそく・優婆夷うばいの四衆ししゅうにはにくまれず、日蓮にちれんは

ふぼ・きょうだいししゅう
父母・兄弟師匠同法上一人下万民一人ももれず父母のかたきのこと

く謀反強盗にも・すぐれて人ごとにあだをなすなり、されば・或時は数百人
にのられ・或時は数千人に取りこめられて刀杖の大難にあう、所ををはれ
国を出さる・結句は国主より御勘気二度一度は伊豆の国今度は佐渡の嶋

なり、されば身命しんみょうをつぐべきかつてもなし形体を隠すべき藤の衣もたず、
北海の嶋にはなたれしかば彼の国の道俗どうぞくは相州そうしゅうの男女なんよよりもあだをなしき、
野中に捨てられて雪にはだへをまじえくさをつみて命をささえたりき、彼の
蘇夫こしくが胡国ここくに十九年雪を食くらうて世をわたりし、李呂が北海に六ヶ年がんくつ
に・せめられし・我は身にてしらぬ、これはひとえに我が身には失たがなし
にほんこく
日本国をたすけんとをもひしゆへなり。

しかるに尼なりごぜん並びならに入道にゅうだう殿は彼の国に有ある時は人めを・をそれて夜中
に食を・をくり、・或あるる時は国のせめをもはからず身にもかわらんとせし
人人ひとひとなり、さればつらかりし国なれどもそりたるかみをうしろへひかれ・す
すむあしもかへりしぞかし、いかなる過去かこのえんにてやありけんとおぼつか
なかりしに・又いつしか・これま

でさしも大事だいじなるわが夫を御つかいにてつかはされて候、ゆめかまぼろしか

尼ごぜんの御すがたをば・みまいらせ候はねども心をばこれにとどめをぼへ
候へ、日蓮にちれんをこいしくをはしせば常に出いずる日ゆうべに・いづる月を・をが
ませ給たまえ、いつとなく日月にちがつにかげをつかぶる身なり、又後生ごしょうには靈山淨土りょうぜんじょうどに
まいりあひまひらせん、南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやう。

六月十六日

日蓮にちれん
花押かおう

さどの国のこのの尼御前あまごぜん

二九三

一谷入道御書

建治元年五月八日 五十四歳御作

与一谷入道いもひつだう日学女房にようぼう

1326p

去る弘長元年いぬ こうちようがんねん太歳辛酉五月十二日に御勘氣を蒙つて伊豆の国伊東の郷と云

う処ところに流罪るさいせられたりき、兵衛の介頼朝よりとものながされてありし処ところなり、さあ

りしかども程なく無く同三年太歳癸亥二月二十二日に召し返されぬ、又文永八年ぶんえい太歳辛

未九月十二日重かさねて御勘氣を蒙りしが忽たちまちに頸を刎らるべきにてありけるが

子細しさいありけるかの故ゆえに・しばらく

のびて北国佐渡さどの嶋ちぎようを知行むさしする武蔵むさしの前司ちぎよう預りて其の内の者そどもの沙汰さたとし

て彼の嶋に行き付いてありしが・彼の島の者いんがども因果いんがの理わきまえをも弁わきまえへぬあらゑ

びすなればあらくあたりし事は申もうす計はかりなし、然しかれども一分いちぶんも恨うらむる

心なし、其の故そのゆえは日本国にほんこくの主として少しも道理どうりを知りぬべき相模殿さがみだにも国

をたすけんと云う者を子細しさいも聞ほどかず理不尽りふじんに死罪しざいにあてがう事なれば・
況ましてや其の末の者どもその事はよきもたのまれずあしきもにくからず。

此ほうもんの法門もうを申し始めしより命をば法華經ほけきょうに奉たてまつり名をば十方世界じゅうほうせかいの諸仏しよぶつの
浄土じょうどにながすべしと思もうい儲けしなり、弘演こうえんと云いいし者は主衛きみえいの懿公いこうの肝を取
りて我が腹さを割おさいて納めて死よじょうにき、予讓いと云いいし者は主の知伯はじが恥はじをすすが
んがために劒を吞んで死せしぞかし、是は但わづかの世間せけんの恩を報ぜんがた
めぞかし。

況むりょういつや無量劫このかたろくどうより已来六道ゐてんに流轉るてんして仏にならざりし事は法華經の御ために
身を惜おしみ命を捨てざる故ぞかし、されば喜見菩薩きけんぼさつと申せし菩薩ぼさつは千二百歳の
間・身を焼にちがつじょうみょうとくぶついて日月くよう・浄明徳仏たてまつそを供養くようし、七万二千歳せんさいの間臂ひじを焼ほけきよういて法華經
を供養くようし奉たてまつそる其の人は薬王菩薩やくおうぼさつぞかし、不輕菩薩ふぎようぼさつは法華經の御ために多劫ふぎようぼさつの
間・罵詈毀辱めりきにく・杖じょうもくがしやく・木瓦石じょうもくがしやくに・せめられき、今の釈迦仏しゃかぶつにあらずや、されば仏

になる道は時により品品に替つて行ずべきにや、今の世には法華經ほけきようは・さる
事にておはすれども時によりて事ことなるなれば山林さんりんに交わりて読誦どくじゆすとも
はたまた將又里に住して演説えんぜつすとも・持戒じかいにして行ずとも臂ひじを焼いて供養くようすとも仏に
はなるべからず、日本国にほんこくは仏法盛なるやうなれども仏法ぶつぽうについて

不思議あり人^{これ}是^をを知らず、譬^{たと}えば虫の火に入り鳥の蛇^{じや}の口に入るが如^{ごと}し
しんこんしけこんしゅうほつそう　さんるんぜんしゅう　りつしゅう　ひとびと
真言師華嚴宗法相・三論禪宗・浄土宗・律宗等の人人は我も法を得たり我
しょうじ　も生死を離れたる人とは思へども立始めし本師等依經の心をも弁えず、但我
が心の思い付いて有りしままに其^その經を取り立てんと思へる墓無き心計りに
ほけきよう　そむ　ぶつ　い　も
て法華經に背けば又仏意にも
かな
叶わざる事をば知らずして弘め行く程に国主・万民是を信じぬ又他国へ渡り
ひろ　こくしゅ　ばんみんこれ　たこく　わた
又年久しく成りぬ、末学^{まつがく}の者共本師^{ほんし}の誤^{あやまり}をば知らずして弘め習ひし人人を
ちしや　みなもと
も智者とは思へり、源濁りぬれば流浄からず身曲りぬれば影直^{なほ}から
しんこん　がんそぜんむい　すで　じこく　お
ず、真言の元祖善無畏等は既に地獄に堕ちぬべかりしが、或は改悔して地獄
まぬか　を免れたる者もあり、或は唯依經を弘めて法華經の讚歎をもせざれば生死は
ある　ただえきよう　ひろ　ほけきよう　さんたん
離れねども惡道に堕ちざる人もあり、而^{しか}るを末末の者・此の事を知らずして
しよにん　あくとつ　お
諸人・一同に信をなしぬ、譬^{たと}えば破たる船に乗つて大海に浮び酒に酔る者の
たいかい

火の中に臥せるが如し。

にちれんこれ

日蓮是を見し故に忽に菩提心を發して此の事を申し始めしなり、世間の

ひとびといかもう

人人何に申すとも信ずる事はあるべからず、還つて流罪・死罪せらるべしと

かね

は兼て知つてありしかども今の日本国は法華經に背き釈迦仏を捨つる故に

ごしよう

後生は必ず無間・大城に墮ちん事はさておきぬ今生にも必ず大難に値うべ

いわゆるたこく

し、所謂他国より責め來つて上一人より

ばんみん

下万民に至るまで一同の歎きあるべし、譬えば千人の兄弟が一人の親を殺し

つみ

たらんに此の罪を千に分ては受くべからず、一一に皆無間・大城に墮ちて同

いっこう

じく一劫を経べし、此の国も又是くの如し、娑婆世界は五百塵点劫より

このかたきようしゅしやくそん

已來教主釈尊の御所領なり、大地虚空山海草木一分も他仏の有ならず、又

いっさいしゅじょう

一切衆生は釈尊の御子なり、

たと

譬えば成劫の始め一人の梵王下つて六道の衆生をば生て候ぞかし、梵王の

一切衆生の親たるが如く・釈迦仏も又一切衆生の親なり、又此の国の一切衆生のためには教主釈尊は明師にておはするぞかし、父母を知るも師の恩なり黒白を弁うも釈尊の恩なり、而るを天魔の身に入つて候善導・法然など申すに付いて・国土に阿弥陀堂を造り・或は一郡・一郷・一村等に阿弥陀堂を造り・或は百姓万民の宅のことに阿弥陀堂を造り・或は宅宅・人人ごと

に阿弥陀仏あみだぶつを書造りつく・或は人あるごとに口口に・或は高声あるに唱へ・或は一万遍

・或は六万遍あるなど唱うるに・少しも智慧ちえある者はいよいよこれをすすむ、

譬たとへば火にかれたる草をくわへ水に風を合せたるに似たり、此の国の人人ひとびとは

一人もなく教主きようしゅ釈尊しやくそんの御弟子おんでし御民みんぞかし、而るに阿弥陀等あみだの他仏たぶつを一仏いちぶつも

つくらずかかず念仏ねんぶつも申さず・ある

者は悪人あくにんなれども釈迦仏しやくかぶつを捨て奉る色たてまつは未だ顕いまれず、一向いっこうに阿弥陀仏あみだぶつを念ず

る人人ひとびとは既に釈尊しやくそん仏ぶつを捨て奉る色たてまつ顯然けんねんなり、彼の人人ひとびとの墓はかな無き念仏ねんぶつを申す者もう

は悪人あくにんにてあるぞかし、父母ふぼにもあらず主君しゅくん・師匠ししやうにてもおはせぬ仏ぶつをばい

とをしき妻の様にもてなし、現げんに国主こくしゅ父母ふぼ明師めいしたる釈迦仏しやくかぶつを捨て乳母にちがふの如く

なる法華經ほけきやうをば口にも誦じゆし奉らず是れ豈不孝あにふこうの者にあらずや、此の不孝ふこうの人人ひとびと

・一人・二人・百人・千人ならず一国・二国ならず上一人かみいちにんより

下万民ばんみんに至るまで日本国にほんこく・皆みなこぞりて一人もなく三逆罪さんぎやくざいの者なり、されば日月にちがふ

は色を變じて此れをにらめ・大地も瞋りてをどりあがり大彗星天にはびこり
大火国に充滿すれども僻事ありともおもはず、我等は念仏にひまなし其の上
念仏堂を造り阿弥陀仏を持ち奉るなんと自讃するなり、是は賢き様にて墓無
し、譬えば若き夫妻等が夫は女を愛し女は夫をいとおしむ程に父母のゆくへ
をしらず、父母は衣薄けれども我はねや熱し、父母は食せ
ざれども我は腹に飽きぬ、是は第一の不孝なれども彼等は失ともしらず、況
や母に背く妻父にさかへる夫・逆重罪にあらずや、阿弥陀仏は十萬億のあな
たに有つて此の娑婆世界には一分も縁なし、なにと云うとも故もなきなり、
馬に牛を合せ犬に をかたらひたるが如し。

但日蓮一人計り此の事を知りぬ、命を惜みて云はずば国恩を報ぜぬ上・
教主釈尊の御敵となるべし、是を恐れずして有のままに申すならば死罪と
なるべし、設ひ死罪は免るとも流罪は疑なかるべしとは兼て知つて・あり

し

かども仏の恩重きが故ゆえに人をはばかり申もうしぬ、案にたがはず兩度まで流されて候いし中に・文永九年ぶんえいの夏の比佐渡さどの国石田の郷一谷と云いいし処ところに有りしに・預りたる名主等は公と云ひ私と云ひ父母ふぼの敵よりも宿世すくせ

の敵よりも悪げにありしに宿むかしの入道にぎひつうと云ひ妻と云ひつかう者と云ひ始はおぢ
をそれしかども先世せんぜの事にやありけん、内内・不便ふびんと思ふ心付きぬ、預りよ
りあづかる食は少し付ける弟子でしは多くありしに僅の飯の二口三口
ありしを・或あるはおしきに分け・或あるは手に入て食しに宅主内内心あつて外には
をそる様なれども内には不便ふびんげにありし事何いすれの世にかわすれん、我を生み
ておはせし父母ふぼよりも当時は大事だいじとこそ思いしか、何いかなる恩おも・はげむべ
しまして約束やくそくせし事たがうべしや。

然しかれども入道にぎひつうの心は後世ごせいを深く思いてある者なれば久しく念仏ねんぶつを申しつも
りぬ、其その上阿弥陀堂あみだだうを造り田畠でんぱたも其その仏の物なり、地頭じとうも又をそろしなん
ど思いて直ちに法華經ほけきやうにはならず、是は彼の身には第一だいいちの道理どうりぞかし、然しかれ
ども又無間むげん・大城だいじやうは疑無うたがいし、設たとひ是より法華經ほけきやうを遣つかわしたりとも世間せけんもをそ
ろしければ念仏ねんぶつすつべからずな

んど思はば、火に水を合せたるが如し、こと謗法ほうぼうの大水たいすい・法華經ほけきようを信ずる小火を
けさん事うたがい疑うたがいなかるべし、入道にゅうどう・地獄じごくに墮おつるならば還かえつて日蓮にちれんが失とがになる
べし、如何いかんんがせん如何いかんんがせんと思いわづらひて今まで法華經ほけきようを渡わたし奉ら
ず、渡わたし進すすせんが為ためにまうけまいらせて有りつる法華經ほけきようをば鎌倉かまくらの焼亡しょうぼうに取
り失うしなひ参まゐせて候由申す、もう旁かたがたにゆうどう入道にゅうどう
の法華經ほけきようの縁ゆかりはなかりけり、約束やくそく申しける我が心こころも不思議ふしぎなり、又我またとは・
すすまざりしを鎌倉かまくらの尼あまの還かえりの用途ようどに歎なげきし故ゆゑに口入くちゅう有りし事なげかし、
本錢もとせんに利分りぶんを添そへえて返かへさんとすれば又弟子でしが云いわく御約束やくそく違ちがひなんと
申す、もう旁かたがたにたいきわま進退極しんたいきくりて候へども人の思おもはん様ようは狂惑きやうかくの様なるべし、力ちから及およばず
して法華經ほけきようを一部十卷いちぶじゅうくわん・渡わたし奉たてまつる、入道にゅうどうよりもうばにてありし者ものは内内心ないしんよ
せなりしかば是これを持もち給たまへ。

日蓮にちれんが申もうす事は愚おろかなる者の申もうす事なれば用もちひず、されども去いぬる文永ぶんえい十一年

太歳
甲戌十月に蒙古国より筑紫によせて有りしに對馬の者かためて有りしに・
そうそうまのじょう
宗総馬尉 逃ければ百姓等は男をば・或は殺し・或は生取にし・女をば・或
は取り集めて手をとをして船に結い付け・或は生け取にす・一人も助かる者
なし、壹岐によせても又是くの如し、船おしよ

せて有りけるには奉行入道・豊前前司は逃げて落ちぬ、松浦党は数百人打た

れ・或は生け取にせられしかば寄せたりける浦浦の百姓ども壹岐対馬の

如し、又今度は如何が有るらん彼の国の百千万億の兵・日本国を引回らし

て寄せて有るならば如何に成るべきぞ、北の手は先ず佐渡の島に付いて地頭

守護をば須臾に打ち殺し百姓等は北山

へにげん程に・或は殺され・或は生け取られ・或は山にして死ぬべし、抑

是れ程の事は如何として起るべきぞと推すべし、前に申しつるが如く此の国

の者は一人もなく三逆罪の者なり、是は梵王・帝釈・日月・四天の彼の蒙古

国の大王の身に入らせ給いて責め給うなり。

日蓮は愚なれども釈迦仏の御使法華經の行者なりとなりの候を用いざら

んだにも不思議なるべし、其の失に依つて国破れなんとす、況や・或は国

を追ひ・或は引はり・或は打擲し・或は流罪し・或は弟子を殺し・或は

所領しよりようを取る、現げんの父母ふぼの使つかをかくせん人人ひとびとよかるべしや、日蓮にちれんは日本にほん国こくの人人ひとびとの父母ふぼぞかし・主君しゅくんぞかし・明師めいしぞかし・是これを背そむん事ことよ、念佛ねんぶつを申もうさん人人ひとびとは無間むげん地獄じごくに墮おちん事こと決定けつじようなるべし、たのもしたのもし。

そもそももうこ

抑おさ蒙古もんこ国こくより責せめん時ときは如何いかんがせさせ給たまうべき、此この法華ほけき經きやうをいただき

頸けいにかけさせ給たまいて北山きたさんへ登のぼらせ給たまうとも年ねん比ひ念佛ねんぶつ者ものを養やしなひ念佛ねんぶつを申もうして、

しゃかぶつ

ほけきよう

釈迦しゃか仏ぶつ・法華ほけき經きやうの御敵ごてきとならせ給たまいて有ありし事ことは久くしし、又また若もし命いのちともなる

ほけきよう

ならば法華ほけき經きやうばし恨にくみさせ給たまうなよ、又また閻魔えんま王宮おうきゆうにしては何なんとか仰おほせあるべ

き、おこがましき事こととはおぼすと

も其そのの時ときは日蓮にちれんが檀那だんななりとこそ仰おほせあらんずらめ、又是またはさてをきぬ、此

ほけきよう

の法華ほけき經きやうをば学乗がくじやう房ぼうに常に開ひらかせ給たまうべし、人ひと如何いかんに云いうとも念佛ねんぶつ者もの・

しんこんしじさい

真言しんこん師し持齋ぢしさいなんどにばし開ひらかせ給たまうべからず、又また日蓮にちれんが弟子でしとなのるとも

にちれん

日蓮にちれんが判はんを持もちざらん者ものをば御用ごもちいあるべからず、
恐おそ恐おそ謹言きんげん。

五月八日にちれんか蓮花押あう

一谷入道にゅうだう女房にようぼう

二九四 中興入道消息

弘安二年十一月三十日

五十八歳御

作 与中興入道 女房

1331p

鷺目一貫文送り給い候い了んぬ妙法蓮華經の御宝前に申し上げ候い了ん

ぬ、抑日本国と申す国は須弥山よりは南一閻浮提の内縦広七千由旬なり、

其の内に八万四千の国あり、所謂五天竺十六の大国五百の中国・十千の

小国無量の粟散国微塵の島島あり、此等の国国は皆大海の中にありたとへば

池にこのはのちれるが如し、

此の日本国は大海の中の小島なりしほみては見へずひればすこしみゆるかの

程にて候いしを神のつき出させ給いて後人王のはじめ神武天皇と申せし大王

をはしましき、それより・このかた三十余代は仏と経と僧とは・まし

まさずただ人と神とばかりなり、仏法をはしまさねば地獄もしらず、浄土も

ねがはず、父母・兄弟ふぼ・きょうだいのわかれありしかどもいかなるらん、ただ露つゆのき

ゆるやうに日月にちがつのかくれさせ給たまうやうにうちをもいてありけるが・然しかる

に人王第三十代欽明天皇きんめいてんのうと申もうす大王だいおうの御宇ぎように此の国より戊亥いぬいの角に当りて

百済国くだらと申もうす国あり、彼の国よりせいめい王と申せし王金銅しやかぶつの釈迦しやかぶつ仏と此の

仏の説かせ給たまへる一切いっさいきよう経きやうと申もうすふみと此をよむ僧そうをわたしてありし

かば仏もうと申もうす物もいきたる物にもあらず、経きやうと申もうす物も外典げてんの文にもにず、

僧もうと申もうす物も物はいへども道理どうりもきこへず形なまよも男女なんよにもにざりしかばかたが

たあやしみをどろきて左右さうの大臣だいじん大王だいおうの御前おんまえにしてとかうせんぎ僉議きんぎ

ありしかども多分たぶんはもちうまじきにてありしかば、仏はすてられ僧そうはいまし

められて候いしほどに・用明天皇ようめいてんのうの御子しやうとくたいし聖徳太子しやうとくたいしと申せし人びだつの二年二

月十五日東に向いて南無釈迦牟尼なむしやかむにぶつ仏となと唱となえて御舎利しやりを御手みてより出し給たまいて同

六年に法華經ほけきようを讀誦どくじゆし給たまふ、それより・このかた七百余年王は六十余代に及

ぶまでやうやくぶつぽう仏法ひろま

り候いて日本にほん六十六箇国・二つの島にいたらぬ国もなし、 国・郡・郷

・里・村村に堂塔どうたうと申し寺もつと申しぶつぽう仏法の住所すでに十七万一千三十七所

なり、日月にちがつの如くごとあきらかなるちしや智者代代にぶつぽう仏法をひろめしゅうせい衆星のごとく・かが

やくけんじん国に充滿せり、かの人人は自行には・或は真言を行じ・或は
はんには 般若・或は仁王・或は阿弥陀仏の名号・或は観音・或は地藏・或は三千仏
ある 或は法華經読誦しをるとは申せども無智の道俗をすすむるにはただ南無
あみだぶつ 阿弥陀仏と申すべし、譬えば女人の幼子をまうけたるに・或はほり・或はか
ある わ・或はひとりなるには母よ母よと申せば・
ききつけぬればかならず他事をすてたすくる習なり、阿弥陀仏も又是くの如
われら し我等は幼子なり阿弥陀仏は母なり地獄のあな餓鬼のほりなどにをち入り
なむ ぬれば南無阿弥陀仏と申せば音と響きとの如く必ず来りてすくひ給うなりと
いっさい 一切の智人ども教へ給いしかば我が日本国かく申しならはして年ひさしくな
ちじん り候。

しか 然るに日蓮は中国都の者にもあらず辺国の將軍等の子息にもあらず遠国
にちれん の者民が子にて候いしかば・日本国七百余年に一人もいまだ唱へまいらせ候
ちゆうごく
にほんこく

はぬ南無妙法蓮華經と唱え候のみならず、皆人の父母のごとく日月の如く
主君の如くわたりに船の如く渴して水のごとくうえて飯の如く思いて候南無
阿弥陀仏を無間地獄の業なりと申し候ゆへに食に石をたひたる様にがんせき
に馬のはねたるやうに渡りに大風の吹き来たるやうに・じゆ

らくに大火のつきたるやうに俄にかたきのよせたるやうにとわりのきさきにな
るやうに・をどろき・そねみ・ねたみ・候ゆへに去ぬる建長五年四月二十
八日より今弘安二年十一月まで二十七年が間退転なく申しつより候事月のみ
つるがごとく・しほのさすがごとく・はじめは日蓮只一人・唱へ候いしほど
に、見る人値う人聞く人・耳を

ふさぎ眼をいからかし・口をひそめ・手をにぎり・はをかみ・父母・兄弟・
師匠ぜんうも・かたきとなる、後には所の地頭・領家かたきとなる後には一
国さはぎ後には万民をどろくほどに、・或は人の口まねをして南無

妙法蓮華經みょうほうれんげきょうとなへ・或あるは惡口あつくのためになへ・或あるは信にずるに似て唱へ・或ある

はそしるに似て唱へなんとする程に、すでに日本にほんこく国

十分いちぶんが一分いっこうは一向む南無妙法蓮華經みょうほうれんげきょうのこりの九分あるは・或あるは兩方ある・或はうたがひ

・或あるは一向いっこう念仏ねんぶつ者なる者は父母ふぼのかたき主君しゅくんのかたき宿世すくせのかたきのやうに

ののしる、村主郷主こくしゅ主等は謀叛むほんの者のごとくあだまれたり、かく

の如く申す程に大海の浮木の風に随いて定めなきが如く輕毛の虚空にのぼりて上下するが如く日本国を・をはれあるく程に、・或時はうたれ・或時はいましめられ・或時は疵をかほふり・或時は遠流・或時は弟子をころされ・或時はうちをはなれなんどする程に、去ぬる文永八年九月十二日には御かんきをかほりて北国佐渡の島にうつされて候いしなり、世間には一分のとがもなかりし身なれども故最明寺入道殿極樂寺入道殿を地獄に堕ちたりと申す法師なれば謀叛の者にもすぎたりとて相州・鎌倉・竜口と申す処にて頸を切らんとし候いしが科は大科なれども法華經の行者なれば左右なくうしなひなばいかながとやをもはれけん、又遠国の島にすてをきたるならば・

いかにもなれかし。

上ににくまれたる上万民も父母のかたきのやうにおもひたれば道にても又

国にても若しはころすか若しはかつえしぬるかにならんずらんとあてがはれ
て有りしに、ほけきょう法華經・じゅうじせつ十羅刹の御めぐみにやありけん、ある或は天とがなきよし
を御らんずらんにやありけん、島にてあだむ者は多かりしかども中興の次郎
にゅうじゅう入道と申せし老人あり

き、彼の人は年ふりたる上心かしこく身もたのしくて国の人にも人と・をも
はれたりし人の此の御房はゆへある人にやと申しけるかのゆへに子息等もい
たうもにくまず、其の已下の者どもたいし彼等の人人の下人にてありしかば
内内あやまつ事もなく唯上の御計いのままにてありし程に、水は濁れども又
すみ月は雲かくせども・

又はることはりなれば、とが科なき事すであらわれていゐし事もむなしから
ざりけるかのゆへに、御一門・いちもん諸大名はゆるすべからざるよし申されけれど
さがみのかみも相模守殿の御計らひばかりにてついにゆりて候いてのぼりぬ、ただし日蓮
にちれん

は日本^{にほん}国^{こく}には第一^{だいいち}の忠^{ちゅう}の者^{もの}なり肩^{かた}をならぶる人^{ひと}は先代^{せんだい}にも・あるべからず後^ご代^{だい}にも・あるべしとも覚え^{おぼ}えず。

其^{その}の故^{ゆえ}は去^いぬる正嘉^{しょうか}年中^なの大地震^{だいちしん}文永^{ぶんえい}元年^{がんねん}の大長星^{だいちしん}の時^{とき}内外^{ないげ}の智人^{ちじん}其^{その}の故^{ゆえ}をうらなひしかども・なにのゆ

へ・いかなる事の出来しゅつたいすべしと申もつす事をしらざりしに、日蓮一切経蔵にちれんいつさいきょうに入りて勘かんがへたるに真言・禅宗・念仏律等の権小の人人をもつて法華経をほけきょうかろしめたてまつる故に梵天・帝釈の御とがめにて西なる国に仰おおせ付けて日本国にほんこくをせむべしとかんがへて、故最明寺入道殿にまいらせ候いき、此の事を諸道しよの者、をこつきわらひし程に・九箇年いすぎて去ぶんえいぬる文永五年に大蒙古国より日本国を・をそうべきよし牒状ちようじようわたりぬ、此の事のおふ故に念仏者・真言師等あだみて失はんとせしなり、例かんどせば漢土に玄宗皇帝と申せし御門の御后みかどに上陽人と申せし美人あり、天下てんか第一の美人にてありしかば楊貴妃と申もつすきさきの御らんじて此の人王へまいるならば我がをばへをとりなんとて宣旨せんじなりと申もつしかすめて、父母・兄弟をば・或はながし・或は殺し上・陽人ふほ・きようだいをばろうに入れて四十年までせめたりしなり、此これもそれにて候、日蓮にちれんが

かんもん

勘文あらわれて大蒙古国を調伏し日本国かつならば此の法師は日本第一の僧

となりなん、我等が威徳をとろうべしと思つかのゆへに讒言をなすをばしろ

しめさずして、彼等がことばを用い

て国を亡さんとせらるるなり、例せば二世王は趙高が讒言によりて李斯を

失ひかへりて趙高が為に身をほろぼされ、延喜の御門はしへいのをとどの

讒言によりて菅丞相を失いて地獄におち給いぬ、此れも又かくの如し、

法華經のかたきたる真言師・禅宗・律僧・持斎・念佛者等が申す事を御用い

ありて日蓮をあだみ給うゆへに、日蓮

はいやしけれども所持の法華經を釈迦・多宝・十方の諸仏・梵天・帝釈・

日月・四天・竜神・天照太神・八幡大菩薩・人の眼をおしむがごとく諸天

の帝釈をうやまうがごとく母の子を愛するがごとくまほりおもんじ給うゆへ

に、法華經の行者をあだむ人を罰し給う事父母のかたきよりも朝敵よりも

重く大科しげ だいかに行ひ給うなり。

然るに貴辺しか ぎへんは故次郎入道殿の御子にて・をはするなり御前は又よめなり・

いみじく心かしこかりし人の子とよめとにをはすればや、故入道殿こぜん にようだうのあとを

つぎ国主も御用いなき法華經こくしゅ もち ほけきようを御用いあるのみならず法華經ほけきよう ぎやうじやの行者をやしな

はせ給いてとしどしに千里たまい せんりの道をおくりむかへ去ぬる幼子のむすめ御前こぜんの十

三年に丈六じゅうろくのそとばを

たてて其の面に南無妙法蓮華經の七字を顕してをはしませば、北風吹けば南海のいろくづ其の風にあたりて大海の苦をはなれ東風きたれば西山の鳥鹿・其の風を身にふれて畜生道をまぬかれて都率の内院に生れん、況や・かのそとばに隨喜をなし手をふれ眼に見まいらせ候人類をや、過去の父母も彼のそとばの功德によりて天の日月
の如く淨土をてらし孝養の人並びに妻子は現世には寿を百二十年持ちて後生には父母とともに靈山淨土にまいり給はん事水すめば月うつりつづみをうてばひびきのあるがごとしと・をばしめし候へ等云、此れより後後の御そとばにも法華經の題目を顕し給へ。

弘安二年己卯十一月卅日

身延山

日蓮

花押

中興入道殿女房

二九五

是日尼御書

1335p

さどの国より此の甲州まで入道にゅうどうの来りたりしかば・あらふしぎとをもひし
に又今年来りなつみ水くみたきぎこりだん王の阿志仙人あしにんにつかへしがごとく
して一月に及びぬる不思議ふしぎさよ、ふでをもちてつくしがたし、これひ
とへに又尼ぎみの御功德くどくなるべし、又御本尊ごほんぞん一ふくかきてまいらせ候、
浄土じょうどにては・かならずゆきあひ・たてまつるべし、
恐恐きょうきょう謹言きんげん。

靈山りょうぜん

卯月十二日

日蓮にちれん

尼是日

二九六

遠藤左衛門尉御書

1336p

にちれん
日蓮此の度赦免を被むり鎌倉へ登るにて候、
しやめん
如我昔所願今者已満足此の年
に当るか、遠藤殿御育み無くんば命永らう可しや亦赦免にも預かる可しや、
なく
またしやめん
にちれんいちだい
日蓮一代の行功は偏に左衛門殿等遊し候処なり、
ぎようく ひとえ さえもん
とこ
を為し刀杖も加えず毒も害すること能はずと候得ば有難き御経なるかな、
な とつじよう
がた
えもん
然ば左衛門殿は梵天釈天の御使にてましますか、
ぼんてん
りようぜん
けいやく
みらい
参せ候、一流は未来え持せ給え靈山に於て日蓮日蓮と呼び給え、
たまた
よ
そのとき
むか
にちれん
に罷り出ず可く候、
まか
なお
かまくら
もう
猶又鎌倉より申し進す可く候なり。

ぶんえい
文永十一年甲戌三月十二日

にちれん
日蓮

さえもん
遠藤左衛門尉殿

二九七

生死一大事血脈抄

ぶんえい
文永九年二月十一日五十一歳

御作 与最蓮房日淨 さいれんぼう
1336p

日蓮記之

御状委細披見せしめ候い畢んぬ、夫れ生死一大事血脈とは所謂
いさい ひけん そ しょうじいちだいじ けちみやく
妙法蓮華經是なり、其の故は釈迦・多宝の二仏宝塔の中にして上行菩薩に
みょうほうれんげきょうこれ そのゆえ しゃか たほう ぼつとう じやうぎやうぼさつ
譲り給いて此の妙法蓮華經の五字過去遠遠劫より已来寸時も離れざる血脈
ゆず たまい みょうほうれんげきょう ごじか こおんのんこう このかた けちみやく
なり、妙は死法は生なり此の生死の二法が十界の当体なり又此れを当体蓮華
しょうじ じゅうかい とうたい こ とうたいれんげ
とも云うなり、天台云く「当に知るべし依正の因果は悉く是れ蓮華の法なり」
てんだい云く まさに えしょう いんが ことごとこ れんげ
と云云此の釈に依正と云うは生死なり生死之有れば因果又蓮華の法なる事明
えしょう しょうじ しょうじこれあ いんが れんげ
けし、伝教大師云く「生死の二法は一心の妙用・有無の二道は本覺の真徳」
でんぎやうだいしいわ しょうじ いっしん みやうゆう うむ にどう ほんがく

と文、
天地・
陰陽・
日月・
五星・
地獄・
乃至
仏果・

しやうじ

生死の二法に非ずと云うことなし、是くの如く生死も唯妙法蓮華經の生死な

り、天台の止觀に云く、「起は是れ法性の起・滅は是れ法性の滅」云云、釈迦

たほう

・多宝の二仏も生死の二法なり、然れば久遠実成の釈尊と皆成仏道の

ほけきよう われらしめじよう

法華經と我等衆生との三つ全く差別無しと解りて妙法蓮華經と唱え奉る処

しやうじいちだいじ けちみやく

を生死一大事の血脈とは云うなり、此の事

にちれん

但日蓮が弟子・檀那等の肝要なり法華經を持つとは是なり、所詮臨終只今に

さと

ありと解りて信心を致して南無妙法蓮華經と唱うる人を「是人命終為千仏

くふ だあくしゆ

授手令不恐怖不墮惡趣」と説かれて候、悦ばしい哉一仏・二仏に非ず百仏二

あち

百仏に非ず千仏まで来迎し手を取り給はん事歡喜の感涙押え難し、法華不信

こにんみようじゆうにゆうあびこく

の者は「其人命終入阿鼻獄」と説かれたれば定めて獄卒迎えに来つて手をや

そうら

取り候はんずらん浅 浅、十王は裁断し俱生神は呵責せんか。

いまにちれん

今日蓮が弟子・檀那等・南無妙法蓮華經と唱えん程の者は千仏の手を授け

たま 給はん事譬えは 夕顔の手を出す如くと思し食せ、過去に法華經の結縁
こつじょう 強盛なる故に現在に此の經を受持す、未来に仏果を成就せん事疑有るべ
か

らず、過去の生死現在の生死未来の生死三世の生死に法華經を離れ切れざる
ほつ けちみやくそうじょう 法華の血脈相承とは云うなり、謗法不信の者は「即断一切世間・仏種」
として仏に成るべき種子を断絶するが故に生死一大事の血脈之無きなり。

総じて日蓮が弟子・檀那等自他彼此の心なく水魚の思を成して異体同心に
なむ みようほうれんげきよう 南無妙法蓮華經と唱え奉る處を生死一大事の血脈とは云うなり、然も
いまにちれん ぐつう 日蓮が弘通する處の所詮是なり、若し然らば広宣流布の大願も叶うべき者
今日蓮が弘通する處の所詮是なり、若し然らば広宣流布の大願も叶うべき者

か、剩れ日蓮が弟子の中に異体異心の者之有れば例せば城者として城を破る
あまつさにちれん かし 日蓮が弘通する處の所詮是なり、若し然らば広宣流布の大願も叶うべき者
が如し、日本国の一切衆生に法華經を信ぜしめて仏に成る血脈を継がしめ
こと にほんこく いっさいしゆじょう 日本国の一切衆生に法華經を信ぜしめて仏に成る血脈を継がしめ
んとするに還つて日蓮を種種の難に合せ結句此の島まで流罪す、而るに貴辺
かえ にちれん しゆじゆ なん 日本国の一切衆生に法華經を信ぜしめて仏に成る血脈を継がしめ

にちれん 日蓮に随順し又難に値い給う事心中思い遣られて痛しく候ぞ、金は大火に
ずいじゆん たいすい も焼けず大水にも漂わず朽ちず 鉄は水火共に堪えず賢人は金の如く愚人は
くろがね ごと こと きのへんあに くらがね すいか た けんじん ごと ぐにん
鉄の如し貴辺豈真金に非ずや法華經の金を持つ故か、經に云く「衆山の中
しゆみせんこれだい ほけきよう またかくのごと いわ 火も焼くこと能わず
に須弥山為第一此の法華經も亦復是くの如し」又云く「

水も漂わすこと能わ

ず「云云、過去の宿縁追ひ来つて今度日蓮が弟子と成り給うか釈迦・多宝こそ御存知候らめ、」在在諸仏土常与師俱生「よも虚事候はじ。」

こと

しやうじいちだいじ

けちみやくそうじやう

たす せんだい

そうじこ

殊に生死一大事の血脈相承の御尋ね先代未聞の事なり貴貴、此の文に委悉

なり能く能く心得させ給へ、只南無妙法蓮華經・釈迦・多宝上行菩薩血脈

よよ

こころえ

たま

ただなむ みやうほうれんげきやう

しゃか

たほうじやうぎやうぼさつちきみやく

そうじやう しゆぎやう たま

な

くえ

もつ

な

もつ

相承と修行し給へ、火は焼照を以て行と為し水は垢穢を浄るを以て行と為し

ちり

もつ

な

じんちく

そうもく

ため

もつ

な

もつ

風は塵埃を払ふを以て行と為し又人畜・草木の為に魂となるを以て行と為し

だいち

もつ

な

じんちく

そうもく

ため

もつ

な

もつ

大地は草木を生ずるを以て行と

な

うるお

もつ

な

みやうほうれんげきやう

ごじ

かくのこと

ほんげじゆ

な

ゆ

為し天は潤すを以て行と為す妙法蓮華經の五字も又是くの如し本化地涌の

りやくこれ

じやうぎやうぼさつまつ

ぼつ

ほうもん

ひろ

ため

しゆつげんこ

あ

利益是なり、上行菩薩末法今の時・此の法門を弘めんが為に御出現之れ有る

べき由・經文には見え候へども如何が候やらん、上行菩薩出現すとやせん

きやうもん

いかに

じやうぎやうぼさつしゆつげん

しゆつげん

とやせん

しゆつげん

しゆつげん

しゆつげん

出現せすとやせん、日蓮先ず粗弘め候なり、相構え相構えて強盛の大信力

しゆつげん

にちれん

ほほひろ

あいこまえ

そうかまえ

こうじやう

しんりき

を致して南無妙法蓮華經臨終正念と祈念し給へ、生死一大事の血脈此れ

いた

なむ

ほうれんげきやうりんじゆうしやうねん

きねん

たま

しやうじいちだいじ

けちみやくこ

より外に全く求むることなかれ、
煩悩即菩提・生死即涅槃とは是なり、信心
けちみやくなく
の血脈無くんば法華經を持つとも無益なり、
委細の旨又又申す可く候、
恐恐謹言。
きようきようきんげん

ぶんえい みずのえさる

文永九年壬申二月十一日桑門

にちれん
日蓮

かおう
花押

さいれんぼうしようにんごへんじ

最蓮房上人御返事

二九八

そうもくじようぶつぐけつ
草木成仏口決

ぶんえい
文永九年二月二十日 五十一歳御

さいれんぼう
作 与最蓮房日浄 2338p

問うて云く草木成仏とは有情非情の中何れぞや、
答えて云く草木成仏と
ひじよう じようぶつ
は非情の成仏なり、
問うて云く情非情共に今經に於て成仏するや、
答えて
いわ そうもくじようぶつ うじようひじよう いすれ
いわ そうもくじようぶつ

云く爾なり、問うて云く証文如何、答えて云く妙法蓮華經是なり・妙法と
は有情の成仏なり蓮華とは非情の成仏なり、有情は生の成仏非情は死の
成仏生死の成仏と云うが有情非情の成仏

の事なり、そのゆえ其の故は我等衆生死する時塔婆を立て開眼供養するは死の成仏じようぶつ

にして草木成仏なり、そつもくじようぶつ止観の一に云く、「一色一香中道に非ざるあらこと無し」

妙樂云く、「然かも亦共に色香中道を許す無情仏性・惑耳驚心す」此の一色

とは五色の中には何れの色ぞや、青黄赤せきびやく白黒の五色を一色と釈せり一とは

法性なり、ほつしよう爰を以て妙樂は色香中道

と釈せり、しゃく天台大師も無非中道といへり、一色一香の一は三相對の一には

非ざるなり、あら中道法性をさして一と云うなり、所詮・十界・三千・依正等

をそなへずと云う事なし、此の色香は草木成仏なり是れ即ち蓮華の成仏な

り、色香と蓮華とは言はかはれども草木成仏の事なり、口決に云く、「草にも

木にも成る仏なり」云云、此の意

は草木にも成り給へる寿量品の釈尊なり、經に云く、「如来秘密神通之力」

云云、法界は釈迦如来の御身に非ずと云う事なし、理の顯本は死を表す妙法

と顕る・事の顕本は生を表す蓮華と顕る、理の顕本は死にて有情をつかさど

る事の顕本は生にして非情をつかさどる、我等衆生のために依怙・依託なる

は非情の蓮華がなりたるなり・我等

衆生の言語・音声・生の位には妙法が有情となりぬるなり、我等一身の上

には有情非情具足せり、爪と髪とは非情なりきるにもいたまず其の外は有情

なれば切るにもいたみくるしむなり、一身所具の有情非情なり此の有情非情

十如是の因果の二法を具足せり、衆生世間・五陰世間・国土世間・此の三

世間・有情非情なり。

一念三千の法門をふりすぎたてたるは大曼荼羅なり、当世の習いそこな

いの学者ゆめにもしらざる法門なり、天台・妙楽・伝教内にはかがみさせ

給へどもひろめ給はず、一色一香とののしり惑耳驚心とささやき給いて・

妙法蓮華と云うべきを円頓止観とかへさせ給いき、されば草木成仏は死人の

成仏じようぶつなり、此等これらの法門ほうもんは知る人すくなきなり、所詮しよせん妙法蓮華みょうほうれんげをしらざる故ゆえに
迷まようところの法門ほうもんなり、敢あえてて忘失もうしつする事なかれ、恐恐きようきよう謹言きんげん。

二月二十日

日蓮にちれん 花押かおう

最蓮房御返事さいれんぼうごへんじ

夕ざりは相構え相構えて御入り候へ、得受職人功德法門委細申し候はん。
あいかまえそうかまえ とくじゆしよくにんくどくほうもんいさいもう そうら

御礼の旨委細承り候い畢んぬ、都よりの種種の物慥かに給ひ候い畢んぬ、鎌倉
むねいさいたまわ おわ しゆじゆ たしか おわ かまくら
に候いし時こそ常にかかる物は

見候いつれ此の島に流罪せられし後は未だ見ず候、是れ体の物は辺土の小島
るざい いま こ
にてはよによに目出度き事に

思ひ候。

御状に云く去る二月の始より御弟子となり帰伏仕り候上は自今以後は人数
いわ いぬ おんでし いちぶん おんでし きふく いご ひとかず
ならず候とも御弟子の一分と思し食され候はば恐悦に相存ず可く候云云、経
しよぶつ
の文には「在在諸仏の土に常に師と俱に生れん」とも・或は「若し法師に親近
とも ある も ほっし しんこん

せば速かに菩薩の道を得ん是の師に随順して学せば恒沙の仏を見たてまつる
ことを得ん」とも云へり、釈

には、「本此の仏に従つて初めて道心を発し亦此の仏に従つて不退地に住せん」
とも、或は云く、「初此の仏・菩薩に従つて結縁し還つて此の仏・菩薩に
於て成就す」とも云えり、此の経釈を案ずるに過去無量劫より已来師弟の
契約

有りしか、我等末法濁世に於て生を南閻浮提大日本国にうけ忝くも諸仏出世
の本懐たる南無妙法蓮華経を口に唱へ心に信じ身に持ち手に翫ぶ事・是れ
偏に過去の宿習なるか。

予日本の体を見るに第六天の魔王智者の身に入りて正師を邪師となし善師
を悪師となす、経に「悪鬼入其身」とは是なり、日蓮智者に非ずと雖も第六天
の魔王我が身に入らんとするに兼ての用心深ければ身によせつけず、故に天魔

力およ及およばずして・王臣おうしんを始はじとして良觀りようかん等の愚癡ぐちの法師ほっし原はらに取とり付ついて日蓮にちれんを
だむなり、然しかるに今時は師おに於おて正師しょうし・邪師じゃし・善師ぜんし・惡師あくしの不同ふどうある事を知
つて邪惡じゃあくの師おんりを遠離えんりし正善しんごんの師しんごんに親近しんこんすべきなり、設たとい徳とい

は四海しかいに齊ひとしく智慧ちえは日月にちがつに同くとも法華經ほけきょうを誹謗ひぼうするの師あかしをば惡師あくし邪師じゃしと知

つて是しんこんに親近しんこんすべからざる者あるなり、或る經いわに云く「若し誹謗ひぼうの者もには共住す

べからず若もし親近しんこんし共住せば即ち阿鼻獄あびごくに趣おもむかん」と禁め給いましう是これなり、いか

に我が身しょうじきは正直しやうじきにして世間出世せけんしゅつせの賢人けんじんの名をとらんと存あくにんずれども惡人しんこんに親近

すれば自然じねんに十度に二度・三度

其その教したがもつに随つひ以て行くほどに終あくにんに惡人あくにんになるなり、釈いに云く「若もし人本惡無

きも惡人あくにんに親近しんこんすれば後必あくにんず惡人と成あくみり惡名あまね天下あまねに遍あまねからん」云云、所詮しよせん

其その邪惡じゃあくの師ほつけとは今の世ほつけの法華誹謗ほつしの法師ねはんぎなり、涅槃經ねはんぎに云く「菩薩ぼさつ惡象あくそう等

に於おいては心くふに恐怖くふすること無あくちかれ惡智識あくちしきに於おいては怖畏ふいの心を生あくそうぜよ、惡象あくそうの

為ために殺さんしゅされては三趣いたに至いたら

ず、惡友あくゆうの為ために殺さんしゅさるれば必さんしゅず三趣いたに至いたらん、法華經ほけきに云く「惡世あくせの中の比丘びく

は邪智じゃちにして心諂曲てんこく」等云云、先先もう申し候こと如ぜんく善無畏こんごう・金剛智達磨だるま・慧可え善導かぜん

・法然東寺の弘法園城寺の智証山門の慈覺閑東の良觀等の諸師は今の
しょうねんと同じ こうほうおんじょうじ ちしょうさんもん じかくかんとう りようかん しょうし
しょうじきしゃほうべん きんげん
正捨方便の金言を読み候には正直捨実教但説方便教と読み・或は於
しょうきよう もつともそのかみにあり きようもん しょうじき じつきようたんせつほうべん ある
諸経中最在其上の経文をば於諸経中最在其下と・或は法華最第一の
きようもん ほっけ ほうけ
経文をば法華最第二・第三等と読む、故に此等の法師原を邪惡の師と申し候
なり。

さて正善の師と申すは釈尊の金言の如く・諸経は方便法華は眞実と正直
に読むを申す可く候なり、華嚴の七十七の入法界品之を見る可し云云、法華經
に云く「善知識は是れ大因縁なり所謂化導して仏を見たてまつり阿耨菩提を
おこ せんちしき こ いんねん いわゆるけどう あのかぼだい
發することを得せしむ」等云云、仏説の如きは正直に四味三教・小乗・
こんだいじょう ほうべん しょうきよう ねんぶつ しんこん しょうゆうなら しょうえ
權大乘の方便の諸経・念仏・眞言・禪・律等の諸宗並びに所依の經を捨て
ゆいいいちだいじんねん みようほうれんげきよう
但唯以一大事因縁の妙法蓮華經を説く師を正師善師とは申す可きなり、然る

に

にちれんまっぼつのはじめ
日蓮末法の初の五百年に生を日域に受け如来の記文の如く三類の強敵を蒙り
しゅじゅ さいなん あ しんみょう おし
種種の災難に相値つて身命を惜まずして南無妙法蓮華經と唱え候は正師か
じゃし よくよく しゅい あ
邪師か能能御思惟之有る可く候。

あ しょしゅう ひとびと ほけきょう ほけきょう しゅぎょう
上に挙ぐる所の諸宗の人人は我こそ法華經の意を得て法華經を修行する
者よと名乗り候へども・予が如く弘長
こと こと こと

には伊豆の国に流され・文永には佐渡嶋に流され・或は竜口の頸の座等・此の外種種の難数を知らず、經文の如くならば予は正師なり善師なり・諸宗の学者は悉く邪師なり悪師なりと覺し食し候へ、此の外善惡二師を分別する經論の文等是れ広く候へども兼て御存知の上は申すに及ばず候。

只今の御文に自今以後は日比の邪師を捨て偏に正師と憑むとの仰せは不審に覺へ候、我等が本師・釈迦如来法華經を説かんが為に出世ましませしには他方の仏・菩薩等來臨影響して釈尊の行化を助け給う、されば釈迦・多宝・十方の諸仏等の御使として來つて化を日域に示し給うにもやあるらん、經に云く「我於余國遣化人・為其集聽法衆亦遣化隨順不逆」此の經文に比丘と申すは貴辺の事なり、其の故は聞法信受隨順不逆眼前なり争か之を疑い奉るべきや、設い又在在諸仏土常与師俱生の人なりとも三周の聲聞の如く下種の後に退大取小して五道・六道に沈輪し給いしが成仏の期來至し

て順次に得脱せしむべきゆへにや、念仏・真言等の邪法・邪師を捨てて日蓮が弟子となり給うらん有り難き事なり。

何れの辺に付いても予が如く諸宗の謗法を責め彼等をして捨邪帰正せしめ

給いて順次に三仏座を並べたもう常寂光土に詣りて釈迦・多宝の御宝前に

於て我等無始より已來師弟の契約有りけるか無かりけるか又釈尊の御使と

して来つて化し給へるかさぞと仰せを蒙つてこそ我が心にも知られ候はんず

れ、何様にも・はげませ給へ・はげませ給へ。

何となくとも貴辺に去る二月の比より大事の法門を教へ奉りぬ、結句は卯

月八日・夜半・寅の時に妙法の本円戒を以て受職灌頂せしめ奉る者なり、

此の受職を得るの人争か現在なりとも妙覚の仏を成ぜざらん、若し今生

妙覚ならば後生豈等覚等の因分ならんや、実に無始曠劫の契約常与師俱生の

理ならば日蓮今度成仏せんに貴辺豈相離れて悪趣に墮在したもう可きや、

如来にょらいの記文きもん仏意ぶつゐの辺へに於おては世・出世しゅっせに就ついて更に妄語もうご無し、然しかるに

法華經には「我が滅度の後に於て応に斯の經を受持すべし、是の人・仏道に
於て決定して疑有ること無けん」・或は「速為疾得・無上仏道」等云云、
此の記文虚くして我等が成仏今度虚言ならば・諸仏の御舌もきれ・多宝の塔
も破れ落ち二仏・並座は無間地獄の熱鉄の牀となり方実寂の三土は地餓畜の
三道と變じ候べし、争か・さる事候べきやあらたのもしやたのもしや是くの如
く思いつづけ候へば我等は流人なれども身心共にうれしく候なり。
大事の法門をば昼夜に沙汰し成仏の理をば時時刻刻にあぢはう、是くの如
く過ぎ行き候へば年月を送れども久からず過ぐる時刻も程あらず、例せば釈迦
・多宝の二仏塔中に並座して法華の妙理をうなづき合い給いし時・五十小劫
仏の神力の故に諸の大衆をして半日の如しと謂わしむと云いしが如くなり、
劫初より以来父母・主君等
の御勘氣を蒙り遠国の島に流罪せらるるの人・我等が如く悦び身に余りたる

者よもあらじ、されば我等が居住して一乗を修行せんの処は何れの処に
ても候へ常寂光の都為るべし、我等が弟子・檀那とならん人は一步を行か
ずして天竺の靈山を見本有の寂光土へ昼夜に往復し給ふ事うれしとも申す
計り無し申す計り無し。

余りにうれしく候へば契約一つ申し候はん、貴辺の御勘気疾疾許させ給い
て都へ御上り候はば・日蓮も鎌倉殿はゆるさじとの給ひ候とも諸天等に申し
て鎌倉に帰り京都へ音信申す可く候、又日蓮先立つてゆり候いて鎌倉へ帰り
候はば貴辺をも天に申して古京へ歸し奉る可く候、恐恐謹言。

四月十三日

日蓮

花押

最蓮房御返事

三〇〇

祈きと抄う

文永九年ぶんえい 五十一歳御作

本朝沙門ほんちようしゃもん

日蓮にちれん

撰

1344p

問うて云くいわ華嚴宗・法相宗・三論宗ほうそうしゅう小乗さんろんしゅうの三宗しょうじょう真言宗しんこんしゅう・天台宗てんだいしゅうの祈

をなさんにいづれかしるしあるべきや、答て云くいわ仏説なればいづれも一往はいちおう

祈となるべし、但法華經をもつていのらむ祈は必ず祈となるべし、問うて

云くいわ其の所以は如何、答えて云くいわ二乗は大地微塵劫を経て先四味の經を行ずへ

とも成仏すべからず、法華經は須臾の間しゆゆ

此れを聞いて仏になれり、若爾らば舍利弗迦葉等の千二百萬二千総じて一切いっさい

の二乗界の仏は必ず法華經の行者の祈をかなふべし、又行者の苦にもかわ

るべし、故に信解品に云くゆえ「世尊は大恩まします希有の事を以て憐愍教化れんみんきやうけ

して我等を利益し給う無量億劫にも誰れか能く報ずる者あらん、手足をもて
供給し頭頂をもつて礼敬し一切をもつて供養すとも皆報ずること能わず、若し
は以て頂戴し両肩に荷負して恒沙劫に於て心を尽して恭敬し、又美膳無量
の宝衣及び諸の臥具種種の湯藥を以てし牛頭栴檀及び諸の珍宝以つて塔廟を
起て宝衣を地に布き斯くの如

き等の事もつて供養すること恒沙劫に於てすとも亦報ずること能わじ」等云
云、此の經文は四大声聞が譬喩品を聴聞して仏になるべき由を心得て、仏
と法華經の恩の報じがたき事を説けり、されば二乗の御為には此の經を行ず
る者をば父母よりも愛子よりも両眼よりも身命よりも大事にこそおぼしめ
すらめ、舍利弗・目連等の諸大声聞
は一代聖教いづれも讚歎せん行者をすておぼす事は有るべからずとは思へ
ども爾前の諸經は・すこし・うらみおぼす事も有らん「於仏法中已如敗種」

な^{ふみように}んとしたたかにいましめられ給^{たま}いし故なり、今の華光如来・名相如来・
普明如来な^{ふみように}んどならせ給^{たま}いたる事は・おもはざる外^{ほか}の幸なり、例せば崑崙山^{こんろん}
のくづれて宝の山に入りたる心地^{しんじ}してこそおはしぬらめ、されば領解^{りようげ}の文に
云^{いわ}く「無上宝珠不求自得等」云云。

されば一切いっさいの二乗界法華經にじょうほけきょうの行者ぎやうじゃをまほり給たまはん事は疑うたがいあるべからず、

ちくしょう

あやしの畜生ちくしょうなんども恩をば報ずる事に候もくぞかし、かりと申す鳥あり必ず母

の死なんとする時孝をなす、狐は塚あとを跡にせず畜生ちくしょう猶此なほくの如ごとし況や人類を

や、されば王寿おうじゅと云いひし者・道を行きしにうえつかれたりしに、路の辺に梅

の樹あり其その実多し寿とりて食し

てうへやみぬ、我れ此の梅の実を食して氣力をます其その恩を報ぜずんば・あ

るべからずと申もつして衣をぬぎて梅に懸かけてさりぬ、王尹おういんと云いひし者は道を行

くに水に渴しぬ、河をすぐるに水を飲んで錢を河に入れて是これを水の直あたえと

す、竜は必ず袈裟けさを懸かけたる僧を守る、仏より袈裟けさを給りゅうべつじやうて竜宮城の愛子に

懸かけさせて金翅鳥こんじちやうの難なんをまぬがる故なり、金翅鳥こんじちやうは必ず父母孝養ふぼこじやうの者を守

る、竜は須弥山しゆみせんを動かして金翅鳥こんじちやうの愛子あいしを食す、金翅鳥こんじちやうは仏の教によつて

父母ふぼの孝養こじやうをなす者僧しゆみのとるさんばを須弥しゆみの頂いただきにをきて竜の難なんをまぬかる

る故なり、天は必ず戒たもを持ち善しゅうを修しゅうする者を守る、人間界にんげんに戒たもを持たず善しゅうを修しゅうする者なければ人間界にんげんの人死して多く修羅道しゅらどうに生ず、修羅多勢しゅらなればをごりをなして必ず天を・をかす、人間界にんげんに戒たもを持ちて善しゅうを修しゅうするの者多ければ人死して必ず天に生ず、天多ければ修羅しゅらをそれをなして天を・をかさず、故ゆえに戒たもを持ち善しゅうを修しゅうする者をば天必ず之これを守る、何いかに況や二乗にじようは六凡かいとくより戒すくも勝ちえれ智慧賢ひとびとき人人すくなり、いかでか我が成仏じやうぶつを遂とげたらん法華經ほけきやうを行せん人をば捨すつべきや。

又一切いっさいの菩薩ぼさつ並びに凡夫ぼんぷは仏ぶつにならんがために、四十余年よんじゅうよねんの經經きやうきやうを無量劫むりやうこくが間行かんぎやうぜしかども仏ぶつに成なりる事ことなかりき、而しかるを法華經ほけきやうを行なじて仏ぶつと成なりつて今いま十方世界じふじやうせかいにおはします仏ぶつ・仏ぶつの三十二相さんじにさう・八十種好しちじゆくわうをそなへさせ給たまひて九界くかいの衆生しゆじやうにあをがれて、月つきを星めいの回めぐれるがごとく須弥山しゆみせんを八山はつさんの回めぐるが如ごとく、日輪にちりんを四州ししじやうの衆生しゆじやうの仰あおぐが如ごとく輪王りんおう

を万民ばんみんの仰あおぐが如ごとく、仰あおがれさせ給たまうは法華經ほけきようの恩徳おんとくにあらずや、されば仏
は法華經ほけきように誡いましめて云いわく「須すべらく復またた舍利しゃりを安やすんずることをもちいざれ」涅槃經ねはんきよう
に云いわく「諸仏しよぶつの師しとする所い所謂わゆる法はなり是かくの故ゆえに如來にょらい恭敬きやうけい供養くようす」等云云、
法華經ほけきようには我舍利しゃりを法華經ほけきように並なぶべからず、涅槃經ねはんきようには諸仏しよぶつは法華經ほけきようを恭敬きやうけい
供養くようすべしと説たませ給たまへり、仏此

の法華經をさとりて仏に成りしかも人に説き聞かせ給はずば仏種をたたせ

給ふ失あり、此の故に釈迦如来は此の娑婆世界に出でて説かんとせさせ給い

しを、元品の無明と申す第六天の魔王が一切衆生の身に入つて、仏をあだみ

て説かせまいらせじとせしなり、所謂波瑠璃王の五百人の釈子を殺し、鳶崛

摩羅が仏を追、提婆が大石を放・

旃遮婆羅門女が鉢を腹にふせて仏の御子と云いし、婆羅門城には仏を入れ奉る

者は五百兩の金をひきき、されば道にはうばらをたて井には糞を入れ門には

さかむきをひけり食には毒を入れし、皆是れ仏をにくむ故に、華色

比丘尼を殺し、目連は竹杖外道に殺され、迦留陀夷は馬糞に埋れし皆仏をあ

だみし故なり、而れども仏さまさまの難をまぬかれて御年七十二歳、仏法を

説き始められて四十二年と申せしに中天竺王舎城の丑寅・耆闍崛山

と申す山にして、法華經を説き始められて八年まで説かせ給いて、東天竺

くしなじょうばつだいが

俱戸那城跋提河の辺にして御年八十と申せし、二月十五日の夜半に御涅槃に

入らせ給いき、而りといへども御悟りをば法華經と説きをかせ給へば・此の

もんじ

そくしやかによらい

みたま

經の文字は即釈迦如来の御魂なり、一一の文字は仏の御魂なれば此の經を行

もんじ

しゃかによらい

みたま

ぜん人をば釈迦如来・我が御眼の如くまほり給うべし、人の身に影のそへる

もんじ

しゃかによらい

みたま

がごとくそはせ給うらん、いかでか祈とならせ給はざるべき。

いっさい

ぼさつ

けこんきよう

よんじゅうよねん

たま

たま

たま

たま

たま

一切の菩薩は又始め華嚴經より四十余年の間・仏にならんと願ひ給ひしか

もんじ

そくしやかによらい

みたま

どもかなはずして、法華經の方便品の略開三頭一の時「仏を求むる諸の菩薩

はちまん

もろもろ

てんりんじょうおう

いた

がつしょう

もつ

ぐそく

もつ

ぐそく

ぐそく

大数八万有り、又諸の万億国の転輪聖王の至れる合掌して敬心を以て具足

もんじ

そくしやかによらい

みたま

の道を聞かんと欲す」と願ひしが、広開三頭一を聞いて「菩薩是の法を聞ひ

もんじ

そくしやかによらい

みたま

て疑網皆已に断ちぬ」と説かせ給ひ

もんじ

そくしやかによらい

みたま

ぬ、其の後自界他方の菩薩雲の如く集り星の如く列り給いき、宝塔品の時十方

しよぶつ

むへん

ぼさつ

ぐそく

たま

もんじゆ

むりよう

ぼさつ

ぐそく

ぐそく

の諸仏各各無辺の菩薩を具足して集り給いき、文殊は海より無量の菩薩を具足

し、又八十万億那由佗の諸菩薩又過八恒河沙の菩薩・地涌千界

の菩薩・分別功德品の六百八十万億那由佗恒河沙の菩薩・又千倍の菩薩・復

一世界の微塵数の菩薩・復三千大千世界の微塵数の菩薩・復二千中国土の微

塵数の菩薩・復小千国土の微塵数の菩薩・復四天下の微塵数の菩薩・三

四天下二四天下・一四天下の微塵数の菩薩・復八世界微塵数の衆生・藥王品

の八万四千の菩薩・妙音品の八万四千の菩薩・又四万二千の天子普門品の

八万四千・陀羅尼品の六万八千人・妙莊嚴王品の八万四千人・勸発品の

恒河沙等の菩薩三千大千世界微塵数等の菩薩此れ等の菩薩を委く数へば十方

世界の微塵の如し、十方世界の草木の如し、十方世界の星の如し、十方世界

の雨の如し、此等は皆法華經にして仏にならせ給いて、此の三千大千世界の

地上・

地下虚空の中にまします、迦葉尊者は 足山にあり、文殊師利は清涼山にあ

り、じぞうぼさつ地藏菩薩は伽羅陀山からだせんにあり、かんのん觀音は補陀落山ふだらくさんにあり、みろくぼさつ弥勒菩薩は兜率天とそつてん

に、なんだ難陀等の無量の竜むりょう王阿修羅王りゅうおうあしゅらは海底海畔たいしやくにあり、とうりてん帝釈は利天ほんのうに梵王にちがつ

は有頂天まけいしゅらに・魔醯修羅まけいしゅらは第六の佗化天してんのうに・四天王しゅみは須弥の腰にちがつに・日月・衆星しゅうせい

は我等われらが眼まなこに見みへて頂上ちようじようを照てらし給たまふ、

江神・河神・山神等も皆みな法華經ほけきようの会上しよそんの諸尊しよそんなり。

仏ほけきよう・法華經ほけきようをとかせ給たまひて年数ねんすう二千二百余年にんげんなり、人間にんげんこそ寿も短ゆえき故ゆえに

仏ほけきようをも見奉みたまり候人てんじようも待まちらぬ、天上てんじようは日数は永く寿も長ければ併ともながら仏ほけきようをお

がみ法華經ほけきようを聴聞ちようもんせる天人てんにんかぎり多くおはするなり人間にんげんの五十年しおは四王・天しお

の一日一夜こなり、此これ一日一夜こをはじめとして三十日は一月十二月は一年に

して五百歳しおなり、されば人間にんげんの二

千二百余年しおは四王・天しおの四十四日にちがつならなり、されば日月にちがつなら並びに毘沙門天王びしゃもんてんのうは仏に

おくれたてまつりて・四十四日いいまだ二月にたらず、帝釈たいしやく・梵天ぼんてんなどは仏

におくれ奉りて一月一時にもすぎず、わづかの間に・いかでか仏前の御誓並び
に自身成仏の御經の恩をばわすれて、法華經の行者をば捨てさせ給うべき
ななど思いつらぬれば・たのもし

き事なり、されば法華經の行者の祈る祈は響の音に應ずるがごとし影の体
にそえるがごとし、すめる水に月のうつるがごとし方諸の水をまねくがごと
し磁石の鉄をすうがごとし琥珀の塵をとるがごとし、あきらかなる鏡の物
の色をうかぶるがごとし世間の法には我がおもはざる事も父母・主君・師匠
妻子をろかならぬ友なんどの申す事は恥ある者は意にはあはざれども名利を
もうしなひ、寿ともなる事も侍るぞかし、何に況や我が心から

をこりぬる事は、父母・主君・師匠などの制止を加うれどもなす事あり。

さればはんよきと云いし賢人は我頸を切つてだにこそけいかと申せし人に

は与へき、季札と申せし人は約束の剣を徐の君が塚の上に懸けたりき、而る

に靈山会上にして即身成仏せし童女は小乗經には五障の雲厚く三從の

きづな強しと嫌はれ、四十余年の諸大乘經には・或は歷劫修行にたへず

と捨てられ、或は初發心時・便成正覺の言

も有名無実なりしかば女人成仏もゆるさざりしに設い人間天上の女人なり

とも成仏の道には望なかりしに・童畜下賤の身たるに女人とだに生れ年さへ

・いまだ・たけずわづかに八歳なりき、かたがた思ひもよらざりしに文殊の

教化によりて海中にして法師提婆の中間わづかに宝塔品を説かれし時刻に

仏になりたりし事は・ありがたき

事なり、一代超過の法華經の御力にあらずば・いかでかかくは候べき、され

ば妙樂は「行浅功深以顯經力」とこそ書かせ給へ、竜女は我が仏になれる

経なれば仏の御諫なくともいかでか法華經の行者を捨てさせ給うべき、され

ば自讚歎仏の偈には「我大乘の教を闡いて苦の衆生を度脱せん」等とこそ

・すすませさせ給いしか、竜女の

誓は其の所従の「非口所宣非心所測」の一切の竜畜の誓なり娑竭羅竜王は

竜畜の身なれども子を念う志深かりしかば大海第一の宝如意宝珠をもむす

めにとらせて即身成仏の御布施にせさせつれ此の珠は直三千大千世界にか

ふる珠なり。

提婆達多は師子類王には孫釈迦如来には伯父たりし斛飯王の御子阿難尊者

の舎兄なり、善聞長者のむすめの腹なり、転輪聖王の御一門南閼浮提には

賤しからざる人なり、在家にましましし時は夫妻となるべきやすたら女を

悉達太子に押し取られ宿世の敵と思ひしに、出家の後に人天大会の集まりた

りし時・仏に汝なんじは癡人ちじん・唾つばきを食へる者とのられし上名聞利養深かりし人な
れば仏の人にもてなされしをそねみて我が身には五法を行じて仏よりも尊みげ
になし鉄くろがねをのして千輻輪ぶくりんにつけ螢火ほたるびを集めて白毫びやくこうとなし・六万宝蔵ほうぞう・八万
宝蔵ほうぞうを胸に浮べ、象頭山に戒場

を立て多くの仏弟子をさそひとり、爪に毒を塗り仏の御足にぬらむと企て
蓮華比丘尼を打殺し・大石を放て仏の御指をあやまちぬ、具に三逆を犯し結句
は五天竺の悪人を集め仏・並びに御弟子檀那等にあだをなす程に、頻婆娑羅王
は仏の第一の御檀那なり、一日に五百輛の車を送り日々に仏・並びに御弟子
を供養し奉りき、提婆そねむ心
深くして阿闍世太子を語いて父を終に一尺の釘七つをもつてはりつけになし
奉りき、終に王舎城の北門の大地破れて阿鼻大城に墜ちにき、三千大千世界
の人・一人も是を見ざる事なかりき、されば大地微塵劫は過ぐとも無間大城
をば出づべからずとこそ思ひ候に法華經にして天王如来とならせ給いけるに
こそ不思議に尊けれ、提婆達多・
仏になり給はば語らはれし所の無量の悪人、一業所感なれば皆無間地獄の苦
ははなれぬらん、是れ偏に法華經の恩徳なり、されば提婆達多並びに所従の

無量の眷属は法華經の行者の室宅にこそ住せ給うらめと・たのもし。

諸の大地微塵の如くなる諸菩薩は等覺の位までせめて元品の無明計りもち

て侍るが釈迦如来に値い奉る元品の大石をわらんと思ふに、教主釈尊

四十余年が間は「因分可説果分不可説」と申して妙覺の功德を説き顯し給は

ず、されば妙覺の位に登る人・一人もなかりき本意なかりし事なり、而るに

靈山八年が間に「唯一仏乘名為果分」と説き顯し給いしかば諸の菩薩皆妙覺

の位に上りて釈迦如来と悟り等しく須弥山の頂に登つて四方を見る

が如く長夜に日輪の出でたらんが如くあかなくならせ給いたりしかば仏の

仰せ無くとも法華經を弘めじ・又行者に替らじとはおぼしめすべからず、さ

れば「我不愛身命但惜無上道・不惜身命当広説此經」等とこそ誓ひ給いし

か。

其の上慈父の釈迦仏悲母の多宝仏慈悲の父母等同じく助証の十方の諸仏一

座に列らせ給いて、月と月とを集めたるが如く日と日とを並べたるが如くま
しましし時、「諸の大衆に告ぐ我が滅度の後誰か能く此の経を護持し誦誦せ
んものなる、今・仏前に於て自ら誓言を説け」と三度まで諫させ給いしに、
八方・四百万億那由佗の国土

に充満せさせ給いし諸大菩薩身を曲低頭合掌し俱に同時に声をあげて、世尊
の勅の如く当に具さに奉行したてまつるべし」と三度まで・声を惜まず・よ
ばわりしかば、いかでか法華經の行者には・かわらせ給はざるべき、はんよ
きと云いしものけいかに頭を取せきさつと云いしもの徐の君が塚に刀をかけ
し、約束を違へじがためな
り、此れ等は震旦辺土のえびすの如くなるものどもだにも友の約束に命をも
亡ぼし身に代へて思ふ刀をも塚に懸くるぞかし、まして諸大菩薩は本より大悲
代受苦の誓ひ深し仏の御諫なしともいかでか法華經の行者を捨て
給うべき、其の上・我が成仏の経たる上仏慇懃に諫め給いしかば仏前の御誓
丁寧なり行者を助け給う事疑う
べからず。

仏は人天の主・一切衆生の父母なり而も開導の師なり、父母なれども賤き

父母ふぼは主君しゅくんの義ぎをかねず、主君しゅくんなれども父母ふぼならざればおそろしき辺もあり、
父母ふぼ・主君しゅくんなれども師匠ししやうなる事はなし諸仏しよぶつは又世尊せそんにてましまして主君しゅくんにて
はましませども娑婆世界しやばせかいに出いでさせ給たまはざれば師匠ししやうにあらず・又「其中衆生うちゆうしゆじやう
しつぜこし
悉是吾子しつぜこし」とも名乗らせ給たまは

ず釈迦しやくか仏ぶつ独主しゆししん師親ししんの三義さんぎをかね給たまへり、しかれども四十余年よんじゅうよねんの間は提婆達多だいばだつた
を罵給ののしひ諸もろの声聞しやうもんをそしり菩薩ぼさつの果分の法門ほつもんを惜み給おししかば、仏なれどもよ
りよりは天魔てんま・破旬はじゆんばしの我等われらをなやますかの疑うたがひ・人には・いはざ
れども心の中には思いしなり、此の心は四十余年よんじゅうよねんより法華經ほけきやうの始まで失せず、
而しかを靈山りやうぜん八年の間に宝塔虚空ほうとうこくうに現げんじ二仏にちがつ・日月にちがつの如く並び・諸仏大地しよぶつだいちに
列つらなり大山をあつめたるがごとく、地涌千界じゆせんがいの菩薩虚空ぼさつこくうに星ほつその如く列つらなり給たまいて、
諸仏しよぶつの果分の功德くどくを吐き給たまいしかば宝蔵ほうざうをかたぶけて貧人ひんじんにあたうるがごと
く崑崙山こんろんのくづれたる

ににたりき、諸人・此の玉をのみ拾うが如く此の八箇年が間珍しく貴き事心に
髓にもと・をとりしかば・諸菩薩・身命も惜まず言をはぐくまず誓をなせし
程に・属累品にして釈迦如来宝塔を出でさせ給いてとびらを押したたて給いし
かば諸仏は国国へ返り給ひき、諸の菩薩等も諸仏に随ひ奉りて返らせ給ひぬ。

やうやう心ばそくなりし程に「きやくし 卻後三月当般涅槃」と唱えさせ給たまいし事こそ心ばそく耳をどろかしかりしかば諸菩薩・二乘人天等ことごとく法華經をちようもん 聴聞して仏の恩徳心肝にそみて、身命をも法華經の御ために投て仏に見せまいらせんと思ひしに仏の仰の如く若し涅槃せさせ給たまはば・いかに・あさましからんと胸さはぎして・ありし程

に仏の御年満八十と申せし二月十五日の寅卯の時・東天竺・舍衛国・くしなじょう 俱尸那城・ばつだい 跌提河の辺にして仏御入滅なるべき由の御音上は有頂横にはさんぜんだいせんかい 三千大千界までひびきたりしこそ目もくれ心もきえはてぬれ、五天竺・十六の大

国五百の中国十千の小国無量の粟散国等の衆生一人も衣食を調へず上下をちゅうい きはらず、牛馬・狼狗・鷺・等の五十二類の一類の数大地微塵をもつぎゅうば くしぬべし況や五十二類をや、此の類皆華香衣食をそなへて最後の

供養くようとあてがひき、一切衆生の宝の橋おれなんとす一切衆生の眼ぬけなん
とす一切衆生の父母・主君・師匠死なんとすなんと申すこえひびきしかば身
の毛のいよ立のみならず涙を流す、なんだをながすのみならず頭をたたき胸
を・をさへ音も惜まず叫びしかば血の涙血のあせ俱尸那城に大雨よりもしげ
くふり大河よりも多く流れたりき、是れ偏ひとえに法華經にして仏になりしかば
仏の恩の報ずる事かたかりしなり。

かかるなげきの庭にても法華經の敵をば舌をきるべきよし座につらなるま
じきよしののしり侍りき、迦葉童子菩薩は法華經の敵の国には霜雹そうばくとなるべ
しと誓たまい給たまいき、爾の時・仏は臥よりをきてよろこばせ給たまいて善哉善哉と
讃ほめ給たまいき、諸菩薩は仏の御心を推して法華經の敵をうたんと申さば、しば
らくもいき給たまいなんと思いて一一の誓はなせしなり、されば諸菩薩・諸天人
等は法華經の敵の出来せよかし仏前の御誓はたして釈迦尊並びに多宝仏諸仏

如来にょらいにもげに仏前ぶつぜんにして誓ちかいしが如ごとく、法華經ほけきょうの御ごためには名なをも身命しんみょうをも惜おしまざりけりと思はれまいらせんとこそおぼすらめ。

いかに申もうす事はをそきやらん、大地だいちはささばはづるるとも虚空こくうをつなぐ者
はありとも潮のみちひぬ事はある

とも日は西より出づるとも法華經ほけきようの行者ぎようじやの祈りのかなはぬ事はあるべからず、法華經ほけきようの行者ぎようじやを諸もろもろの菩薩ぼさつ・人天八部等にんてんはちぶ二聖じゆつらせつ・二天じゆつらせつ・十羅刹等じゆつらせつ・千に一も来つてまほり給たまはぬ事侍はべらば、上しやは釈迦諸仏かしよぶつをあなづり奉り下たてまつは九界をたばらかす失とがあり、行者ぎようじやは必ず不実ふじつなりとも智慧ちえはをろかなりとも身ふじようは不浄ふじようなりとも戒徳かいとくは備へずとも・南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようと申もうさば必ず守護しゆごし給たまうべし、袋たまききたなしとて金を捨る事なけれ伊蘭いらんをにくまば栴檀せんたあるべからず、谷ふじようの池ふじようを不浄ふじようなりと嫌きらはば蓮きんぎを取らざるべし、行者ぎようじやを嫌きらい給たまはば誓ちかを破り給たまいなん、正像しやうざう既に過ぎぬれば持戒じかいは市ちしやの中の虎りんかくの如ごとし智者ちしやは麟角りんかくよりもまれ希まれならん、月を待つまでは灯たのむを憑ほうしゆべし宝珠ほうしゆのなき処ところには金銀きんぎんも宝きんぎんなり、白鳥りしやうの恩をば黒鳥せいそうに報ずべし聖僧せいそうの恩をば凡僧はんそうに報ずべし、とくとく利生りしやうをさづけ給たまへと強盛きやうせいに申もうすならば・いかでか祈りのかなはざるべき。

問いうて云いく上いにかかせ給たまふ道理どうり・文証もんしやうを拜見はいけんするにまことに日月にちがつの天に・

おはしますならば大地だいちに草木そうもくのおふるならば、昼夜こくどの国土こくどにあるならば大地だいちだにも反覆はんぷくせずば大海たいかいのしほだにもみちひるならば、法華經ほけきょうを信ぜん人現世げんせのいのり後生ごしょうの善処ぜんじょは疑うたがいいなるべし、然りしかと雖も此いへどの二十余年が間の天台てんだい・真言等しんこんの名匠だいじ・多く大事だいじのいのり

をなすにはかばかしくいみじきのりありともみえず、尚外典なおけてんの者どもよりもつたなきやうにうちをばへて見ゆるなり、恐らくは經文きやうもんのそらことなるか行者ぎやうじやのをこなひのをろかなるか・時機じきのかなはざるかと、うたがはれて後生ごしょうもいかんと・をばう。

それは・さてをきぬ御房ごぼうは山僧おんでしの御弟子おんでしとうけ給たまはる父つみの罪つみは子にかかり師つみの罪でしは弟子でしにかかるとうけ給たまはる、叡山えいざんの僧徒おんじやうさんもんの蘭城山門どうつやうぶつぞうきやうかんの堂塔どうたつ仏像ぶつぞう經卷きやうかん数千万せんまんをやきはらはせ給たまうが、ことにおそろしく世間せけんの人人ひとびともさわぎうとみあへるはいかに前にも少少このたびうけ給たまはり候ぬれども今度このたびくわしくききひらき

候^{そうら}はん、但^{ただ}し不^ふ審^{しん}なることはかかる悪僧どもなれば三^{さん}宝^{ぼう}の御意^{みこころ}にもかなはず
天^{てん}地^ちにもうけられ給^{たま}はずして、祈りも叶はざるやらん

と・をばへ候はいかに、答て云くせんぜんも少少申しぬれども今度又あらあら申すべし、日本国にをいては此の事大切なり、これをしらざる故に多くの人口に罪業をつくる、先づ山門はじまりし事は此の国に仏法渡つて二百余年、桓武天皇の御宇に伝教大師立て始め給いしなり、当時の京都は昔聖徳太子王氣ありと相し給いしかども・

てんだいしゅう

わた

たまひ

たま

じょうぶうたいし

いわ

天台宗の渡らん時を待ち給いし間都をたて給はず、又上宮太子の記に云く

「我が滅後二百余年に仏法・

たま

かんむてんのう

日本に弘まる可し・

云云、

伝教大師延暦年中

に叡山を立て給ふ桓武天皇は平の京都をたて給いき、

太子の記文たがはざる

故なり、されば山門と王家とは松と栢とのごとし、蘭と芝とにいたり、松か

るれば必ず栢かれらんしほめば又しばしばむ、王法の栄へは山の悦び王位の

衰へは山の歎きと見えしに既に世・

関東に移りし事なにとか思食しけん。

秘法四十一人の行者・

承久三年辛巳四月十九日・

京夷乱れし時

関東

おとろえ

ひほう

ぎょうじや

じょうきゅう

かのとみ

みだ

かんとう

調伏じょうふくの爲めおき隱岐ほつこうの法皇せんじの宣旨よに依つて始めて行はれ御修法十五壇ひほうの秘法、

一字金輪法天台座主慈円僧正伴僧十二四天王法成興寺の宮僧正僧伴八口広瀬殿不動明王法成宝僧正伴僧八口花山院禪門の御沙汰

威徳法七条院の御沙汰転輪聖王法成賢僧正伴僧八口同院の御沙汰十壇大威徳法いとく

尊僧伴僧六口覺朝僧正俊性法印永信法印蒙円法印猷円僧都慈賢僧正賢乘僧都仙尊僧都行遍僧都実覚法眼已上十人如意輪法妙高院僧正伴僧八口毘沙門法びしゃもん

僧六口資質常住院僧正三井伴の御沙汰御本尊一日之を造らせらる調伏じょうふくの行儀ぎようぎは如法愛染王法あいぜん

威徳法仁和寺御室の行法五月三日之れを始めて紫宸殿に於て二七日之を修せらる僧正ぶつげん金剛童子法人法大政僧正三已上十五壇あいぜんの法あいぜん了れり、五月十五日伊賀太郎判官光季不動法僧八口皆僧綱大

京にして討たれ、同十九日鎌倉かまくらに聞え、同二十一日大勢軍兵上ると聞えしか

ば残る所の法六月八日之れこを行ひ始めらる、尊星王法賞朝太元法蔵有僧都五壇法

僧都大政僧正永信法印全尊毘沙門僧都しゆこきようほう行遍僧都守護經法御室之行はせらる我朝二度之行むさしを行う五月二十一日武蔵こうごのの守殿むさしが海道より上洛

しかいげんじ甲斐源氏

し甲斐源氏

は山道を上る式部殿は北陸道を上り給う、六月五日大津をかたむる手甲斐源氏

に破られ畢んぬ、同六月十三日十四日宇治橋の合戦・同十四日に京方破られ

畢んぬ、同十五日に武蔵守殿六条へ入り給ふ諸人入り畢んぬ、七月十一日に

本院は隠岐の国へ流され給ひ中院は阿波の国へ流され給ひ第三院は佐渡の国

へ流され給ふ、殿上人七人誅殺せられ畢んぬ、かかる大悪法年を経て漸漸に

関東に落ち下りて諸堂の別当・供僧となり連連と之を行つ、

本より教法の邪正勝劣をば知食さず、只三宝をば・あがむべき事と・ばか

り・おぼしめす故に自然として是を用ひきたれり、関東の国国のみならず叡山

・東寺・園城寺の座主・別当・皆関東の御計と成りぬる故に彼の法の檀那と

成り給いぬるなり。

問て云く真言の教を強に邪教と云う心如何、答えて云く弘法大師云く第一

大日經第二・華嚴經第三法華經と能能此の次第を案ずべし、仏は何なる經に

か此の三部の經の勝劣を説き判じ給へるや、若し第一大日經第二・華嚴經

第三法華經と説き給へる經あるならば尤も然るべし、其の義なくんば甚だ

以て依用し難し、法華經に云く「藥王今汝に告ぐ我所説の諸經而かも此の

經の中に於て法華最も第一なり」云云、仏正く諸教を挙げて其の中に

於いて法華第一と説き給ふ、仏の説法と弘法大師の筆とは水火の相違なり

尋ね究むべき事なり、此筆を数百年が間凡僧高僧是を學し貴賤上下是を信じ

て大日經は一切經の中に第一とあがめける事仏意に叶はず、心あらん人は

能く能く思い定むべきなり、若し仏意に相叶はぬ筆ならば信ずとも豈成仏す

べきや、又是を以て国土を祈ら

んに当に不祥を起さざるべきや、又云く「震旦の人師等諍て醍醐を盗む」云

云、文の意は天台大師等真言教の醍醐を盗んで法華經の醍醐と名け給へる事

は、此の筆最第一の勝事なり、法華經を醍醐と名け給へる事は、天台大師・

ねはんぎよう
涅槃經の文を勘かんへて一切いっさい經の中には法華經ほけきようを醍醐だいごと名なくと判たまじ給たまへり、
しんこんきよう
真言教の天竺てんじくより唐土もろこしへ渡わたる事は天台出世てんだいしゅっせの以後いご二百余年なり、されば二百
余年わたくの後に渡わたるべき真言しんこんの醍醐だいごを盗ぬすみて法華經ほけきようの醍醐だいごと名なけ給たまひけ

るか此の事不審なり不審なり、真言未だ渡らざる以前の二百余年の人人を盗人
とかき給へる事証拠何れぞや、弘法大師の筆をや信すべき、涅槃經に法華經
を醍醐と説けるをや信すべき、若し天台大師盗人ならば涅槃經の文をば云何
がこころうべき、さては涅槃經の文真実にして弘法の筆邪義ならば邪義の教
を信ぜん人人は云何、只弘法大師の筆と仏の説法と勘へ合せて正義を信じ侍る
べしと申す計りなり。

疑て云く大日經は大日如来の説法なり若し爾らば釈尊の説法を以て
大日如来の教法を打ちたる事都て道理に相叶はず如何、答えて云く大日如来
は何なる人を父母として何なる国に出で大日經を説き給けるやらん、もし
父母なくして出世し給うならば釈尊入滅以後、慈尊出世以前、五十六億七
千万歳が中間に仏出でて説法すべしと云う事何なる經文ぞや、若し証拠な
くんば誰人か信すべきや、かかる僻事をのみ構へ申す間邪教とは申すなり、

其の迷謬^{めいびよう}尽しがたし、纔^{わずか}か一二を出すなり、
加之^{しかのみならずなら}並びに禅宗・念仏等を
是^{これ}を用る、此^これ等の法は皆未^{みな}顕^{けん}真^{しん}実^{じつ}の権^{ごん}教^{きょう}不成^{じょうぶつ}仏^{ぶつ}の法^{わふ}無^む間^{かん}地^じ獄^{ごく}の業^{ごふ}なり、
彼の行人又^{ほつぼう}謗^{わう}法^{ぼう}の者^{しや}なり争^{いか}でか御^ぎ祈^{とう} 叶^{いた}ふべきや、然^{しか}るに国^{こく}主^{しゆ}と成^なり給^{たま}ふ事^{こと}
は過去^{かこ}に正^{しょう}法^{ほう}を持^{たも}ち仏^{ぶつ}に仕^しふるに依^よつて大^{だい}小^{しょう}の王^{わう}皆^{みな}梵^{ぼんのう}王^{わう}・帝^{たい}釈^{しゃく}・日^{にち}月^{がつ}・
四^{してん}天^{てん}等の御^ぎ計^{けい}ひとして郡^{ぐん}郷^{こう}を領^{りやう}し給^{たま}へり、所^い謂^{わう}經^{きやう}に云^いく、「我^{われ}今^{いま}五^ご眼^{がん}をもて
明^{あきら}かに三^{さん}世^{せい}を見るに一切^{いっさい}の国^{こく}王^{わう}皆^{みな}過^こ去^こ世^{せい}に五^ご百^{ひやく}の仏^{ぶつ}に侍^{しやう}するに由^よつて帝^{てい}王^{わう}主^{しゆ}と
為^なるこ

とを得^えたり」等^し云^い云^い、然^{しか}るに法^{ほふ}華^け經^{きやう}を背^{そむ}きて真^{しん}言^{ごん}・禅^{ぜん}・念^{ねん}仏^{ぶつ}等の邪^{じゃ}師^しに付^つい
て諸^{もろ}の善^{ぜん}根^{こん}を修^{しゆ}せらるるとも、敢^{あえて}て仏^{ぶつ}意^いに叶^あはず神^{しん}慮^{りょ}にも違^いする者^{もの}なり能^よく
能^よく案^{あん}あるべきなり、人^{にん}間^{げん}に生^{なま}を得^える事^{こと}都^すて希^{まれ}なり適^{たまたま}生^{なま}を受け^うけて法^{はふ}の邪^{じゃ}正^{せい}
を極^{きわ}めて未^み来^{らい}の成^{じやう}仏^{ぶつ}を期^ごせざらん事^{こと}返^{へん}返^{へん}本^{ほん}意^いに非^{あら}ざる者^{もの}なり、又^{また}慈^じ覺^{かく}大^{だい}師^し・
御^に入^い唐^{たう}以^い後^ご・本^{ほん}師^し・伝^{でん}教^{きやう}大^{だい}師^しに背^{そむ}か

せ給^{たま}いて叡^{えい}山^{ざん}に真^{しん}言^{ごん}を弘^{ひろ}めんが為^{ため}に御^き祈^し請^{よう}ありしに・日^にを射^{ちり}るに日^に輪^{りん}動^{どう}転^{てん}す
と云^いう夢^む想^{そう}を御^ご覧^{らん}じて、四^し百^{ひゃく}余^よ年^{ねん}の間^ま諸^{しよ}人^{にん}是^{これ}を吉^{きち}夢^むと思^{おも}へり、日^に本^{ほん}国^{こく}は殊^{こと}に
忌^いむべき夢^むなり、殷^{いん}の紂^{ちゆう}王^{わう}・日^に輪^{りん}を的^{てき}にして射^{ちり}るに依^よつて身^み亡^{わう}びたり、此^この
御^ご夢^む想^{そう}は権^{ごん}化^げの事^{こと}なりとも能^よく能^よく思^し惟^{ゆい}あるべきか、仍^よつて九^く牛^{ぎう}の一^{いち}毛^{もう}註^{しる}す
る所^{ところ}件^{けん}の如^{ごと}し。

三〇一

祈經送状

文永十年正月 五十二歳御作 与

さいれんぼう
最蓮房日淨

1356p

御礼の旨委細承はり候畢んぬ、兼ては又末法に入つて法華經を持ち候者は
さんるい じうてき こおむ そうら
三類の強敵を蒙り候はん事は面拜の時大概申し候畢んぬ、仏の金言にて候上
ふしん いた
は不審を致すべからず候か、然らば則日蓮も此の法華經を信じ奉り候て後は
ある じうへ きず こおむ ある
・或は頭に疵を蒙り・或は打たれ・或は追はれ・或は頸の座に臨み・或は
るさい
流罪せられ候し程に結句は此の嶋まで遠流せられ候ぬ。

いかに じうへい
何なる重罪の者も現在計りこそ罪科せられ候へ、日蓮は三世の大難に値い
候ぬと存し候、其の故は現在の難は今の如し、過去の難は当世の諸人等が
もう じうへ
申す如くば、如来在世の善星俱伽利等の大悪人が重罪の余習を失せずして
によらい めつこ
如来の滅後に生れて是くの如く仏法に敵をなすと申し候是なり、次に未来の難

を申し候はば当世の諸人の部類等謗じ候はん様は此の日蓮房は存在の時は
種種の大難にあひ死門に趣むくの時は自身を自ら食して死る上は

定めて大阿鼻地獄に墜在して無辺の苦を受くるらんと申し候はんずるなり、

古より已来世間出世の罪科の人・貴賤上下持戒毀戒凡聖に付けて多く候へど

も但其は現在計りにてこそ候に日蓮は現在に申すに及ばす過去・未来に至る

まで三世の大難を蒙り候はん事は只偏に法華經の故にて候なり、日蓮が三世

の大難を以て法華經の三世の御利益を覺し食され候へ、過去久遠劫より已来

未来永劫まで妙法蓮華經の三世の御利益尽くすべからず候な

り、日蓮が法華經の方人を少分仕り候だにも加様の大難に遭い候、まして釈尊

の世世番番の法華經の御方人を思い遣りまいらせ候に道理申す計りなくこそ

候へ、されば勸持品の説相は暫時も廃せず殊更殊更貴く覚え候。

一御山籠の御志しの事、凡そ末法折伏の行に背くと雖も病者にて御座

候上天下てんかの災国土こくどの難強盛なんかうじょうに候はん時・我が身につみ知り候はざらんより外
はいかに申し候とも国主こくしゅ信ぜられまじく候へば日蓮にちれん尚なお籠居こまゐりの志こころ候、

まして御分の御事はさこそ候はんずらめ、おんこと そつち たといせんく 仮使山谷に籠居候とも御病も平癒へいゆして便宜も吉候はば身命を捨て弘通せしめ給ふべし。びんぎ しんみょう ぐつう たま

一 仰せを蒙りて候末法の行者・息災延命の祈の事、別紙に一巻註し進まいらせ候、毎日一返闕如無く読誦せらるべく候、日蓮も信じ始め候し日より毎日まいにち此れ等の勘文を誦し候て仏天に祈誓し候によりて、種種の大難に遇うと雖もいえど法華經の功力釈尊の金言深重なる故に今まで相違無くて候なり、其れに付そいても法華經の行者は信心に退転無く身に詐親無く・一切法華經に其の身をそ任せて金言の如く修行せば慥に後生は申すに及ばず今生も息災延命にしてまか きんげん こと しゅぎよう たしかごしよう もう およ こんじよう勝妙の大果報を得広宣流布大願をも成就す可きなり。しょうみょう かほう こうせんる ぶ じょうじゆ べ

一 御狀に十七出家の後は妻子を帯せず肉を食せず等云云、權教を信ぜし大ごんきよう謗法の時の事は何なる持戒の行人と申し候とも、法華經に背く謗法罪の故にほうぼう いか じかい もう ほうぼう つみ ゆえ正法の破戒の大俗よりも百千万倍劣り候なり、彼の謗法の比丘は持戒なりしょうぼう しかい ひやくせんまんばい ひ ほうぼう びく じかい

と雖も無間に墜す、正法の大俗は破戒なりと雖も成仏疑い無き故なり、

但今の御身は念仏等の権教を捨てて正法に歸し給う故に誠に持戒の中の

清淨の聖人なり、尤も比丘と成つては権宗の人すら尚然る可し況や正法

の行人をや、仮使権宗の時の妻子なりとも・かかる大難は遇はん時は振捨て

正法を弘通すべきの処に地体よりの聖人尤も吉し尤も吉し、相構え相構え

向後も夫妻等の寄来とも遠離して一身に障礙無く国中の謗法をせめて釈尊

の化儀を資む奉る可き者なり、猶猶向後は此の一巻の書を誦して仏天に祈誓

し御弘通有る可く候但此の書は弘通の志有らん人に取つての事なり、此の

経の行者なればとて器用に能はざる者には左右無く之を授与すべからず候

か、六賢六賢、恐恐謹言。

文永十年癸酉正月二十八日

日蓮 花押

最蓮房御返事

三〇二

諸法実相抄

文永十年五月

五十二歳御作

与

さいれんほう

にちれんこれしる

最蓮房日淨

日蓮之を記す

1358p

問うて云く法華經の第一方便品に云く「諸法実相乃至本末究竟等」云云、
此の經文の意如何、答えて云く下地獄より上仏界までの十界の依正の当体
悉く一法ものこさず妙法蓮華經のすがたなりと云ふ經文なり依報あるなら
ば必ず正報住すべし、釈に云く「依報・正報常に妙經を宣ぶ」等云云、
又云く「実相は必ず諸法・諸法は必ず十如・十如は必ず十界・十界は必ず
身土」、又云く「阿鼻の依正は全く極聖の自心に処し、毘盧の身土は凡下の一念
を

こ
逾えず」云云、此等の釈義分明なり誰か疑網を生ぜんや、されば法界のすが

た妙法蓮華經の五字にかはる事なし、
釈迦・多宝の二仏と云うも妙法等の
五字より用の利益を施し給ふ時事相に二仏と顕れて宝塔の中にしてうなづき
合ひ給ふ、かくの如き等の法門日蓮を除きては申し出す人・一人も・あるべ
からず、天台・妙楽・伝教等は心に

は知り給へども言に出し給ふまではなし胸の中にしてくらし給へり、其れも
道理なり、付嘱なきが故に・時のいまだいたらざる故に・仏の久遠の弟子に
あらざる故に、地涌の菩薩の中の上首唱導・上行・無辺行等の菩薩より
外は、末法の始の五百年に出現して法体の妙法蓮華經の五字を弘め給うの
みならず、宝塔の中の二仏・並座の儀式を

作り顕すべき人なし、是れ即本門寿命品の事の一念三千の法門なるが故なり、
されば釈迦・多宝の二仏と云うも用の仏なり、妙法蓮華經こそ本仏にては御
座候へ、經に云く、如来秘密神通之力、是なり、如来秘密は体の三身にして本仏

なり、神通じんつう之力は用の三身さんじんにして迹仏しやくぶつぞかし、凡夫ほんぶは体の三身さんじんにして本仏ほんぶつぞかし、仏は用の三身さんじんにし

て迹仏しやくぶつなり、然しかれば釈迦しやくか仏は我れ等衆生しゅじょうのためには主師親しゅししんの三徳さんとくを備へ給たまうと思ひしに、さにては候はず返つて仏に三徳さんとくをかふらせ奉たてまつるは凡夫ほんぶなり、其そのの故ゆえは如来にょらいと云いうは天台てんだいの釈しやくに「如来にょらいとは十方三世じゅうっぽうさんぜの諸仏しよぶつ・二仏・三仏・

ほんぶつしやくぶつ

本仏迹仏の通号なり」と判じ給へり、此の釈に本仏と云うは凡夫なり迹仏

と云ふは仏なり、然れども迷悟の不同にして生仏異なるに依つて俱体俱用の

さんじん

三身と云ふ事をば衆生しらざるなり、さてこそ諸法と十界を挙げて実相と

は説かれて候へ、実相と云うは妙法蓮華經の異名なり諸法は妙法蓮華經と

云う事なり、地獄は地獄のすが

たを見せたるが実の相なり、餓鬼と変ぜば地獄の実のすがたには非ず、仏は

仏のすがた凡夫は凡夫のすがた、万法の当体のすがたが妙法蓮華經の当体な

りと云ふ事を諸法実相とは申すなり、天台云く「実相の深理本有の

妙法蓮華經」と云云、此の釈の意は実相の名言は迹門に主づけ本有の

妙法蓮華經と云うは本門の上の法門なり、此の釈能く能く心中に案じさせ

給へ候へ。

にちれんまっぽう

日蓮末法に生れて上行菩薩の弘め給うべき所の妙法を先立て粗ひろめ、

つくりあらはし給うべき本門寿量品の古仏たる釈迦仏迹門宝塔品の時涌出
し給う多宝仏涌出品の時出現し給ふ地涌の菩薩等を先作り顕はし奉る事、予
が分齊にはいみじき事なり、日蓮をこそにくむとも内証にはいかが及ばん、
さればかかる日蓮を此の嶋

まで遠流しける罪無量劫にもきへぬべしとも覺へず、譬喩品に云く「若し
其の罪を説かば劫を窮むるも尽きず」とは是なり、又日蓮を供養し又日蓮が
弟子・檀那となり給う事、其の功德をば仏の智慧にてもはかり尽し給うべか
らず、経に云く「仏の智慧を以て籌量するも多少其の辺を得ず」と云へり、
地涌の菩薩のさきがけ日蓮一人な
り、地涌の菩薩の数にもや入りなまし、若し日蓮地涌の菩薩の数に入らば豈
に日蓮が弟子・檀那地涌の流類に非ずや、経に云く「能く竊かに一人の爲め
に法華經の乃至一句を説かば当に知るべし是の人は則ち如来の使・如来の

所遣しよけんとして如来にょらいの事を行ずるなり」と、豈あにに別人との事を説き給たまうならんや、

されば余りに人の我をほむる時は

如何様いかようにもなりたき意しゅったいの出来し候なり、是ほむる処ところの言よりをこり候ぞか

し、末法まつぽうに生れて法華經ほけきようを弘めん行者ひろは、三類さんるいの敵人てきじん有つて流罪るざい・死罪しざいに及およば

ん、然しかれどもたえて弘めん者をば衣もつを以て釈迦しゃか仏ぶつをほひ給たまうべきぞ、諸天しよてん

は供養くやうをいたすべきぞ・かたにかけせなかにをふべきぞ・大善根ぜんこんの者にてあ

るぞ・一切衆生いっさいしゆじやうのためには大導師どうしにてあるべしと・釈迦しやくか仏ぶつ・多宝たほう仏ぶつ・十方じゆつぱう

の諸仏しよぶつ・菩薩ぼさつ・天神てんじん七代ちじんごだい・地神ちじん五代の神神・鬼子母神きしもじん・十羅刹女じゆうらせつにょ・四大天王

・梵天ぼんてん・梵天ぼんてん・

帝釈たいしやく・閻魔法王えんまほうおう・水神みづかみ・風神ふうかみ・山神さんかみ・海神かいじん・大日如来だいにちにょらい・普賢ふげん・文殊もんじゆ・日月等にちがつ

の諸尊しよそんたちにほめられ奉る間たてまつ、無量むりやうの大難だいなんをも堪忍かんにんして候なり、ほめられぬ

れば我が身の損ずるをもかへりみず、そしられぬる時は又我が身のやぶるる

をもしらず、ふるまふ事は凡夫ぼんぶのことはざなり。

いかにも今度信心このたびしんじんをいたして法華經ほけきやうの行者ぎやうじやにてとをり、日蓮にぢれんが一門いちもんとなり

とをし給たまうべし、日蓮にぢれんと同意どういならば地涌じゆの菩薩ぼさつたらんか、地涌じゆの菩薩ぼさつにさだ

まりなば釈尊しやくそん久遠くおんの弟子でしたる事ことあに疑うたがはんや、經きやうに云いく「我久遠くおんより来このかた

是等これらの衆きやうけを教化こゑす」とは是これなり、末法まつぽうにして妙法蓮華經みやうほうれんげきやうの五字ごじを弘ひろめん者は

男なんよ女なんよはきらふべからず、皆みな地ぢ涌ゆ

の菩薩ぼさつの出現しゅつげんに非あらずんば唱なへがたき題目だいもくなり、日蓮にちれん一人ははじめは南無なむ

妙法蓮華經みょうほうれんげきやう

と唱なへしが、二人・三人百人と次第しだいに唱なへつたふるなり、未来みらいも

又またしかるべし、是じあに地涌ぢゆの義ぎに非あらずや、剩あまつさへ広宣流布こうせんるふの時は日本にほん一同に

なむ妙法蓮華經みょうほうれんげきやう

と唱なへん事は大地だいちを的まととするなるべし、ともかくも法華經ほけきやうに

名をたて身をまかせ給たまうべし、釈迦しゃか仏ぶつ

・多宝たほう仏ぶつ・十方じゅうぼうの諸しよ仏ぶつ・菩薩ぼさつ・虚空こくうにして二仏にぶつうなづき合あひ、定めさせ給たまい

しは別べちの事ことには非あらず、唯ただひとへに末法まつぽうの令法久住りやうきうじゆうの故ゆゑなり、既すでに多宝たほう仏ぶつは半

座ざを分わけて釈迦しゃか如来にょらいに奉たてまつり給たまいし時とき、妙法蓮華經みょうほうれんげきやうの旛はたをさし顯あらわし、釈迦しゃか・多宝たほう

の二仏にぶつ大将だいしやうとしてさだめ給たまいし事ことあにいつはりなるべきや、併しかしなら我等われら衆生しゆじやう

を仏ぶつになさんとの御談合だんごうなり。

にちれんそ

日蓮にちれんは其そのの座ざには住すし候こうはねども經文きやうもんを見候みにすこしもくもりなし、又

其の座にもやありけん凡夫なれば過去をしらず、現在は見へて法華經の行者
なり又未來は決定として當詣道場なるべし、過去をも是を以て推する
に虚空会にもやありつらん、三世各別あるべからず、此くの如く思ひつづけ
て候へば流人なれども喜悦はかりなしうれしきにもなみだつらきにもなみだ
なり涙は善惡に通ずるものなり彼の千人の阿羅漢の事を思ひい

でて涙をながし、ながしながら文殊師利菩薩は妙法蓮華經と唱へさせ給へば、
千人の阿羅漢あらかんの中の阿難尊者は・なきながら如是我聞と答え給う、余の九百
九十人はなくなみだを硯の水として、又如是我聞の上に妙法蓮華經とかき
つけしなり、今日蓮もかくの如し、かかる身となるも妙法蓮華經の五字七字
を弘むる故なり、釈迦仏・多宝仏
・未来・日本国の一切衆生のためにとどめをき給ふ処の妙法蓮華經なり
と、かくの如く我も聞きし故ぞかし、現在の大難を思いつづくるにもなみだ、
未来の成仏を思つて喜ぶにもなみだせきあへず、鳥と虫とはなけどもなみだ
をちず、日蓮は・なかねども・なみだひまなし、此のなみだ世間の事には非ず
但偏に法華經の故なり、若しか
らば甘露のなみだとも云つべし、涅槃經には父母・兄弟・妻子・眷属にはか
れて流すところの涙は四大海の水よりもを・をしといへども、仏法のために

は一滴をもこぼさずと見えたり、法華經の行者となる事は過去の宿習なり、
同じ草木なれども仏とつくらるるは宿縁なるべし、
又宿業なるべし。

此文には日蓮が大事の法門どもかきて候ぞ、よくよく見ほどこせ給へ意得
させ給うべし、一閻浮提第一の御本尊を信じさせ給へ、あひかまへてあひか
まへて信心つよく候て三仏の守護をかうむらせ給うべし、
行学の二道をはげ
み候べし、
行学たへなば仏法はあるべからず、
我もいたし人をも教化候へ、
行学は信心よりをこるべく候、
力あらば一文一句なりともかたらせ給うべし、
南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經、
恐恐謹言。

五月十七日

日蓮 花押

追申候、日蓮が相承の法門等前前かき進らせ候き、
ことに此の文には大事

の事どもしるしてまいらせ候ぞ不思議なる契約なるか、六万恒沙の上首
上行等の四菩薩の变化か、さだめてゆへあらん、総じて日蓮が身に当て
の法門わたしまいらせ候ぞ、日蓮もしや六万恒沙の地涌の菩薩の眷属にも
やあるらん、南無妙法蓮華經と唱へて日本国の男女をみちびかんとおもへ
ばなり、經に云く一名上行乃至唱導之師とは説かれ候はぬ

か、まことに宿縁しゆくえんのをふところ予が弟子でしとなり給うたま、此の文あひかまへて
秘し給へたま、日蓮にちれんが己証こしょうの法門ほうもん等かきつけて候ぞ、とどめ畢おわんぬ。
さいれんぼうごへんじ
最蓮房御返事

三〇三 十八円満抄えんまん

日蓮にちれん之これを記しるす

1362p

問うて云くいわ十八円満えんまんの法門ほうもんの出处いかな如何、答えて云く源蓮いわの一字より起れる
なり、問うて云くいわ此の事所釈しよしゃくに之を見たりや、答えて云くいわ伝でん教大師ぎやうだいしの
修禅寺相伝しゆぜんじそうでんの日記にっきに之在り此法門ほうもんは当世天台宗とうせてんだいしゆうの奥義おくぎなり秘すべし秘すべ
し。

問うて云くいわ十八円満えんまんの名目みようもく如何、答えて云くいわ一に理性円満りしやうえんまん・二に修行円満しゆぎやうえんまん
・三に化用円満えんまん・四に果海円満えんまん・五に相即円満そうそくえんまん・六に諸教円満しよきやうえんまん・七に一念いちねん

えんまん

円満・八に事理円満・九に功德円満・十に諸位円満・十一に種子円満・十二

に権実円満・十三に諸相円満・十四に俗諦円満・十五に内外円満・十六に

かんじんえんまん

じゃくしやうえんまん

ふしぎえんまん

已。

観心円満・十七に寂照円満・十八に不思議円満上。

問うて云く意如何、答えて云く此の事伝教大師の釈に云く次に蓮の五重玄

とは蓮をば華因成果の義に名く、蓮の名は十八円満の故に蓮と名く、一に

りしやうえんまんいわ

ことごとしんによほつしやう

理性円満謂く万法悉く真如法性の実理に帰す実性の理に万法円満す故に理性

を指して蓮と為す、二に修行円満謂く有相無相の二行を修して万行円満す

ゆえ しゆぎやう

な

えんまんいわ

しんしよ

しよほう

この因

故に修行を蓮と為す、三に化用円満謂く心性の本理に諸法の因分有り此の因

よ

けた

ぐ

ゆえ

なす

えんまん

しよほう

たず

分に由つて化他の用を具す故に蓮と名く、四に果海円満とは諸法の自性を尋ね

ことごと

むさ

さんじん

むさ

さんじん

あらざ

ゆえ

て悉く本性を捨て無作の三身を成す法として無作の三身に非ること無し故に

なす

そつそくえんまんいわ

ぼんのう

じしやう

ぼだい

ゆえ

蓮と

蓮と名く、五に相即円満謂く煩惱の自性全く菩提にして一体不二の故に蓮と

な

しよきやうえんまん

しよぶつ

ないしやう

しよきやう

ぐそく

けつげん

なき

為す、六に諸教円満とは諸仏の内証の本蓮に諸教を具足して更に闕減なき

が故に、七に一念円満謂く根塵相對して一念の心起るに三千世間を具するが
故に、八に事理円満とは

一法の当体而二不二にして闕減無く具足するが故に、九に功德円満謂く
妙法蓮華經に万行の功德を具して三力の勝能有るが故に、十に諸位円満と
は但だ一心を点ずるに六即円満なるが故に、十一に種子円満とは一切衆生の
心性に本より成仏の種子を具す權教は種子円満無きが故に皆成仏道の旨を
説かず故に蓮の義無し、十二に權実円満謂く法華実証の時は実に即して而かも
權權に即して而かも実權実相即して闕減無き故に円満の法にして既に
三身を具するが故に諸仏常に法を演説す、十三に諸相円満謂く一一の相の中
に皆八相を具して一切の諸法常に八相を唱う、十四に俗諦円満謂く十界・百
界乃至三千の本性常住不滅なり本位を動せず当体即理の故に、十五に内外
円満謂く非情の外器に内の六情を具す有情数の中に亦非情を具す、余教は
内外円満を説かざるが故に草木成仏

すること能わす草木非成仏の故に亦蓮と名けず十六に觀心円満とは六塵六作

常に心相を觀ず更に余義に非るが故に、十七に寂 照円満とは文に云く法性
寂然なるを止と名く寂にして而かも常に照すを觀と名くと、十八に不思議
円満謂く細しく諸法の自性を尋ねるに非有非無にして諸の情量を絶して亦
三千三觀並びに寂 照等の相無く大分の深義本来不思議なるが故に名けて蓮
と爲るなり、此の十八円満の義を以て委く經意を案ずるに今經の勝能並に
觀心の本義良とに蓮の義に由る、二乘惡人草木等の成仏・並びに久遠塵点等
は蓮の徳を離れては余義有ること無し、座主の伝に云く玄師の正決を尋ねる
に十九円満を以て蓮と名く所謂当体円満を加う、当体円満とは当体の
蓮華なり謂く諸法自性 清淨 にして染濁を離るるを本より蓮と名く、一經の
説に依るに一切衆生の心の間に八葉の蓮華有り男子は上に向い女人は下に向
う、成仏の期に至れば設い女人なりと雖も心の間の蓮華速かに還りて上に向
う、然るに今の蓮仏意に在るの時は本性 清淨 当体の蓮と成る若し機情に就い

ては此の蓮華譬喩の蓮と成る。

次に蓮の体とは体に於て多種有り、一には徳体の蓮謂く本性の三諦を蓮の体と為す、二には本性の蓮体三千の諸法本より已来当体不動なるを蓮の体と為す、三には果海真善の体一切諸法は本是れ三身にして寂光土に住す設い一法なりと雖も三身を離れざる故に三身の果を以て蓮の体と為す、四には大分真如の体謂く不變隨縁の二種の真如を並びに証分の真如と名く本・迹寂照等の相を分たず諸法の自性不可思議なるを蓮の体と為す。

次に蓮の宗とは果海の上の因果なり、和尚の云く六即の次位は妙法蓮華經の五字の中には正しく蓮の字に在り蓮門の五重玄の中には正しく蓮の字より起る、所以何ん理即は本性と名く本性の真如理性円満の故に理即を蓮と名け果海本性の解行証の位に住するを果海の次位と名く、智者大師自解仏乘の内証を以て明に經旨を見給うに

蓮の義に於て六即の次位を建立し給えり故に文に云く此の六即の義は一家より起れりと、然るに始覺の理に依て在纏真如を指して理即と為し妙覺の証理を出纏真如と名く、正く出纏の為に諸の万行を修するが故に法性の理の上の因果なり故に亦蓮の宗と名く蓮に六の勝能有り一には自性清淨にして泥濁に染まず理即、一には華・台・実の三種具足して減すること無し名字即諸法即是れ三諦と解了するが故に、三には初め種子より実を成ずるに至るまで華・台・実の三種相續して断ぜず觀行即念念相續して修し廢するなき故に、四には華葉の中に在つて未熟の実眞の実に似たり相似即、五には花開き蓮現れんげんず分眞即、六には花落ちて蓮成れんじょうず究竟即、此の義を以ての故に六即の深義は源蓮の字より出でたり。

次に蓮の用とは六即円満の徳に由つて常に化用を施すが故に。

次に蓮の教とは本有の三身果海の蓮性に住して常に淨法を説き八相成道し

四句成利す、和尚云く証道の八相は無作三身の故に四句の成道は蓮教の処

に在り只無作三身を指して本覺の蓮と為す、此の本蓮に住して常に八相を唱

へ常に四句の成道を作す故なり已上、修禪寺相伝の日記之をみるに

妙法蓮華經の五字に於て各各五重玄なりの如し余は之を略す、日蓮案じて云く此の

相伝の義の如くんば万法の根源、一心三觀・一念三千三諦・六即・境智の円融

・本迹の所詮源蓮の一字より起る者なり云云。

問うて云く総説の五重玄とは如何、答えて云く総説の五重玄とは

妙法蓮華經の五字即五重玄なり、妙は名・

法は体蓮は宗華は用經は教なり、又總説の五重玄に二種有り一には仏意の

五重玄二には機情の五重玄なり。

ぶつゝい こじゅうげん しよぶつ ないしやう

仏意の五重玄とは諸仏の内証に五眼の体を具する即ち妙法蓮華經の五

なり、仏眼は妙・法眼は法・慧眼は蓮・天眼は華・肉眼は經なり、妙は不思議

に名く故に真空 冥寂は仏眼なり、法は分別に名く法眼は仮なり分別の形な

り、慧眼は空なり果の体は蓮なり、華は用なる故に天眼と名く神通化用なり、

經は破迷の義に在り迷を以て所対

と為す故に肉眼と名く、仏智の内証に五眼を具する即ち五字なり五字又

五重玄なり故に仏智の五重玄と名く、亦五眼即五智なり、法界体性智は仏眼

大円鏡智は法眼平等性智は慧眼妙觀察智は天眼成所作智は肉眼なり、問う一

家には五智を立つるや、答う既に九識を立つ故に五智を立つべし、前の五識

は成所作智第六識は妙觀察智第七識は平等性智第八識は大円鏡智第九識は

ほつかいたいしょうち
法界体性智なり。

次に機情ききょうの五重ごじゅうげん玄げんとは機きの為ために説く所の妙法蓮華經みょうほうれんげきょうは即ち是れ機情ききょうの五重ごじゅうげん玄げんなり首題しゅだいの五字ごじに付いて五重ごじゅうの一心三觀いつしんさんかん有り、伝いに云く、

妙 不思議ふしぎの一心三觀いつしんさんかん 天真独朗てんしんどくろうの故ゆえに不思議ふしぎなり。

法 円融えんゆうの一心三觀いつしんさんかん 理性円融りしやうえんゆうなり総じて九箇くを成す。

蓮 得意いっしんさんかんの一心三觀いつしんさんかん 果位くわいなり。

華 複疎ふくその一心三觀いつしんさんかん 本覺ほんかくの修行しゆぎやうなり。

經 易解いげの一心三觀いつしんさんかん 教談きやうだんなり。

玄文げんもんの第二だいじに此この五重ごじゅうを挙ぐ文ぶんに随したがつて解すべし、不思議ふしぎの一心三觀いつしんさんかんとは智者ちしや己証こしやうの法体理非造作ほつたいりひぞうさくの本有ほんぬの分ぶんなり三諦さんたいの名相みやうそう無なき中に於おいて強しいて

名相みやうそうを以もつて説くを不思議ふしぎと名く、円融えんゆうとは理性法界りしやうほうかいの処ところに本もとより已来このかた三諦さんたい

の理有りがいり互えんゆうに円融えんゆうして九箇くと成る、得意ふしぎとは不思議ふしぎと円融えんゆうとの三觀さんかんは凡心さんかんの

及ぶ所に非^{あら}ず但^ただ聖智の自^じ受^じ用^{ゆう}

の徳を以て量知すべき故に得意と名く、複疎とは無作の三諦は一切法に遍して本性常住なり理性の円融に同じからず故に複疎と名く、易解とは三諦円融等の義知り難き故に且らく次第に附して其の義を分別す故に易解と名く、此れを附文の五重と名く、次に本意に依て亦五重の三観有り、一に三観一心の機、

二に一心三観の機、

三に住果還の一心三観上の機有りて知識の一切の法は皆是れ仏法なりと説く

を聞いて真理を開す入真已後觀を極めんが為に一心三観を修す、四に為果行

因の一心三観謂く果位究竟の妙果を聞いて此の果を得んが為に種種の三観を

修す、五に付法の一心三観五時八教等の種種の教門を聞いて此の教義を以て

心に入れて觀を修す故に付法と名く、山家の云く言なり亦立行相を授く三千三觀

の妙行を修し解行の精微に由つて深く自証門に入る我汝が

証相を領するに法性寂然なるを止と名け寂にして常に照すを觀と名くと。

問うて云く天真独朗の止観の時一念三千・一心三観の義を立つるや、答えて云く両師の伝不同なり、座主の云く天真独朗とは一念三千の観是なり、山家師の云く一念三千而も指南と為す一念三千とは一心より三千を生ずるにも非ず一心に三千を具するにも非ず並立にも非ず次第にも非ず故に理非造作となす、和尚の云く天真独朗に於ても亦多種有り乃至迹中に明す所の不變真如も亦天真なり、但し大師本意の天真独朗とは三千三観の相を亡し一心一念の義を絶す此の時は解無く行無し 教行証 の三箇の次第を経るの時行門に於て一念三千の観を建立す、

故に十章の第七の処に於て始めて観法を明す是れ因果階級の意なり、大師内証の伝の中に第三の止観には伝転の義無しと云云、故に知んぬ証分の止観には別法を伝えざることを、今止観の始終に録する所の諸事は皆是れ 教行の所撰にして実証の分に非ず、開元符州の玄師相伝に云く言を以て之を伝う

る時は行証ぎょうしやう 共に教と成り心を以て之をもつ観ずる時は教証は行の体と成る証を
以て之をもつ伝うる時はこれ教行亦不可思議きやうぎやうまたふかしぎなりと、後学此の語ことばに意を留めて更に
忘失もうしつすること勿れ宛なかかあたも此の宗の本意立教の元旨むねなり和尚の貞元わじやうのじやうげん本義源みなもと
此れより出でたるなり。

問うて云くいわ天真独朗てんしんどくろうの法滅後ほうめつごに於て何れの時いすれか流布るふせしむべきや、答えて云くい像法ぞうほうに於て弘通くわつうすべきなり、問うて云くい末法まつぽうに於て流布るふの法の名目みょうもく如何、答えて云くい日蓮にちれんの己心相承こしんそうじょうの秘法ひほう此の答に顕あらわすべきなり所謂南無い妙法蓮華經みょうほうれんげきやう是なり、問うて云くい証文しょうもん如何、答えて云くい神力品じんりきほんに云く「爾の時・仏・上行等の菩薩ぼさつに告げたまわく要を以て之を言わば乃至宣示顯説す」云云、天台大師云く「爾時・仏告上行の下は第三結要付属なり」又云く「經中のようせつ要説要は四事に在り総じて一經を結するに唯四ならくのみ其の枢柄すうへいを撮つてこれいを授与す」問うて云く今の文は上行菩薩等に授与するの文なり汝何んが故ぞ己心相承こしんそうじょうの秘法ひほうと云うや、答えて云くい上行菩薩じやうぎやうぼさつの弘通くわつうし給うべき秘法ひほうを日蓮にちれん先き立つて之を弘ひろむ身に当るの意に非ずや上行菩薩じやうぎやうぼさつの代官いちばんの一分なり、所詮末法に入つて天真独朗てんしんどくろうの法

門むやく無益むやくなり助行もくには用ゆべきなり 正行しやうぎやうには唯南無妙法蓮華經ただなむほうれんげきやうなり、伝教でんぎやう

大師だいし云く「天台大師てんだいだいしは釈迦しゃかに信順しんじゆんして法華宗ほつけしやうを助けて震旦しんたんに敷揚ふやうし叡山えいざんの一

家てんだいは天台そうじやうに相承ほつけしやうして法華宗にほんを助けて日本ぐつやうに弘通ぐつやうす」今日蓮いまにちれんは塔中たつちやう相承そうじやうの

南無妙法蓮華經なむほうれんげきやうの七字まっぽうを末法まつぽうの時・日本国にほんこくに弘通ぐつやうす是れ豈時国相応あにの仏法ぶつぽうに

非あらずや、末法まつぽうに入てんしんつて天真独朗どくろうの法を

弘ひろめて正行しやうぎやうと為なさん者は必ず無間むげん・大城だいじやうに墜おちんこと疑うたがい無し、貴辺きへん年来

の權宗ごんしやうを捨てて日蓮にちれんが弟子でしと成り給たまう真実しんじつ・時国相応そうおつの智人ちじんなり総じて予が

弟子等でしは我が如ごとく正理しやうぎやうを修行しゆぎやうし給たまえ智者学ちしやがくしやう匠たの身なと為なりても地獄じごくに墜おちて

何なんの詮あか有しよせんるべき所詮ねんねん時時念念なむほうれんげきやうに南無妙法蓮華經となと唱となうべし。

上にあ挙あぐる所の法門ほうもんは御存知ごぞんじなりと雖も書き進まいらせ候いなり、十八円満えんまん等の

法門ほうもん能よく能よく案たまじ給たまうべし並びに当体蓮華なの相承そうじやう等日蓮にちれんが己証こしやうの法門ほうもん等前さきさき

に書き進まいらせしが如ごとく委くわしくは修禪寺相伝日記しゆぜんじそうでんにっきの如ごとし天台宗てんだいしやうの奥義す之に過すぐべ

からざるか、一心三觀・一念三千の極理は妙法蓮華經の一言を出でず敢て
忘失すること勿れ敢て忘失すること

と勿れ、伝教大師云く、和尚慈悲有つて一心三觀を一言に伝う、玄旨伝に云く

「一言の妙旨なり一教の玄義なり」と云云、壽量品に云く、毎に自らは念

を作す何を以てか衆生をして無上道に入り速に仏身を成就することを得せ

しめん」と云云、毎自作是念の念とは一念三千生仏本有の一念なり、秘す可し

秘す可し、恐恐謹言。

弘安三年十一月三日

日蓮

花押

最蓮房に之を送る

三〇四

六郎恒長御消息しよつそく

ぶんえいがんねん

文永元年九月

四十三歳御作

与南部六郎恒長

於安房あわ

1368p

しよせんねんぶつ　むげんじこく
所詮念仏を無間地獄と云う義に二つ有り、

一には念仏者を無間地獄とは

にほんこく

いっさいねんぶつ

がんそほうねんしようにん

せんちやくしゅう

じょうど

日本国・一切念仏衆の元祖法然上人の選択集に浄土三部を除いてより以外

いちだいしうきよういわる

ほけきよう

だいにちきよう

はんにゃきよう

いっさいだいしよう

一代聖教所謂・法華經・大日經・大般若經等・一切大小の經を書き上げ

しゃへいかくほう

て捨閉閣抛等云云、之に付いて上人龜鏡と挙げられし処の浄土三部經の其の

しよつにんききう

ところ

じようどさんぶきよう

そ

そうかんきよう

あみだぶつ

いんい

ほうぞうびく

いわ

ただごぎやく

ひほう

中に、雙觀經・阿弥陀仏の因位・法蔵比丘の四十八願に云く唯五逆と誹謗

じよじりほう

正法とを除くと云云、

ほうねんしようにん

ないし

法然上人も乃至十念の中には入れ給ふといえども、

ほけきよう

法華經の門を閉じよと書かれ候へば阿弥陀仏の本願に漏れたる人に非ずや、

そ　でしそ

だんな

またもつ

か

こと

ほけきよう

も

其の弟子其の檀那等も亦以て此くの如し、法華經の文には若し人信ぜずして、

ないしそ

みようじゆう

あびこく

乃至其の人命終して阿鼻獄に入らんと云云、

あみだぶつ

ほんがん

ほけきよう

阿弥陀仏の本願と法華經の文

と眞実しんじつ

ならば法然上人ほうねんしやうにんは無間地獄むげんじごくに墮おちたる人に非あらずや、一切いっさいの經しやうそつの性相しやうそつに定め
て云いわく師墮おつれば弟子墮でしおつ弟子墮でしおつれば檀那墮だんなおつと云云、譬たとえば謀叛むはんの者の
郎從等らうじやうどうの如ごとし、御不審有ふしんらば選せん択ちやくを披見ひけんあるべし是こ一。

二には念仏ねんぶつを無間地獄むげんじごくとは法華經ほけきやうの序分じよぶん・無量義經むりやうぎきやうに云いわく、方便ほうべんの力を以もつて
四十年しよじふねんには未いまだ眞實しんじつを顯あらわさず、云云、次下つぎしもの文ぶんに云いわく、無量無辺むりやうむへんを過すぐると
も乃至終ないしつひに無上菩提むじやうぼだいを成じやうずることを得うじ、云云、仏初成道しよじやうだうの時ときより白鷺池びやくろちの
辺いたに至いたるまで年紀ねんきをあげ四十余年よんじゅうよねんと指そして其その中うちの一切いっさい經きやうを掌あぐる中に大部たいぶ
の經きやう四部そ・其その四部しよの中うちに次に方等ほうとう十二部經じふにぶきやうを説こくと云云、是これ念仏者ねんぶつの
御信用候ごしんしやうこう三部經さんぶきやうなり、此これを掌あげて眞實しんじつに非あらずと云云、次に法華經ほけきやう

に云く「世尊せそんの法は久しくして後要のちかならずまさ 当に眞実しんじつを説くべし」とは念仏ねんぶつ等の不
眞実しんじつに対し南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようを眞実しんじつと申す文なり、次下つぎしもに云く「仏は自ら大乘みずかだいじよう
に住したまへり乃至若し小乘しょうじようを以て化すること乃至一人に於てせば我即すなわち
慳貪けんどんに墮だす此の事は為て不可ふかなり」云云、此の文の意は法華經を仏・胸むねに秘
しをさめて觀經・念仏等の四十余年かんきようねんぶつよんじゅうよねん
の經計ぼかりを人人に授けて法華經を説かずして默止もくしするならば我は慳貪けんどんの者な
り三惡道に墮だすべしと云う文なり、仏すら尚唯念仏なあただねんぶつを行じて一生をすごし
法華經に移らざる時は地獄じごくに墮だすべしと云云、況や末代まつだいの凡夫一向ほんぶいっこうに南無
阿彌陀仏と申して一生をすごし法華經に移つて南無妙法蓮華經と唱えとなざる者
三惡道を免まぬらるべきや、第二の卷に云く今此三界等と云云、此の文は日本国にほんこく六
十六箇国嶋二つの大地だいちは教主きようしゆしやくそん釈尊の本領しやばもつなり娑婆か以て此くの如く全ごとく
阿彌陀の領に非ず、其中衆生あみだ悉是吾子と云云、日本国にほんこくの四十九億九万四千八

百二十八人の男女各父母有りといへども其の詮を尋ぬれば教主釈尊の御子
なり、三千余社の大小の神祇も釈尊の御子息なり全く阿弥陀仏の子に非ざる
なり。 文永元年甲子九月 日

にちれん かおう
日蓮 花押

南部六郎恒長殿

三〇五 波木井三郎殿御返事

ぶんえい
文永十年八月 五十二歳御

作 与南部六郎三郎 1369p

かまくら
鎌倉に筑後房弁阿闍梨大進阿闍梨と申す小僧等之有り之を召して御尊び
有る可し御談義有る可し大事の法門等粗ぼ申す、彼等は日本に未だ流布せざ

大法だいほう少これ之いまを有したず随たがつて御學問注るし申もうす可べきなり。

鳥跡てがみ飛はび来きれり不審ふしんの晴はること疾風はやての重雲おもくもを巻まいて明月めいげつに向むかうが如ごとし、但ただし

此この法門ほうもん当世とうせいの人上下じんじやうげを論ろんぜず信心しんじんを取り難がたし其そのの故ゆえは仏法ぶつぽうを修行しゆぎやうするは

げんせあんのん こそうぜんしよ
現世安穩・後生善処等と云云、而しかに日蓮法師にちれんほうし法華經ほけきやうの行者ぎやうじやと称しょうすと雖いえども

るなん まさ ぶつゐ かな
留難多し当に知るべし仏意に叶わざるか等云云、但ただし此この邪難先業じやなんせんごうの由ごかんき御勘氣

を蒙こもるの後始めて驚おどろく可べきに非あらず、其そのの故ゆえは法華經ほけきやうの文を見聞けんもんするに末法まつぽうに

入いつて教くわうの如ごとく法華經ほけきやうを修行しゆぎやうする者は留難多かる可べきの由きやうもん・經文

赫赫かくかくたり眼まなこ有あらん者は之これを見るか、所謂いわゆる法華經ほけきやうの第四いに云いく「如來にやらいの現在げんざいに

すら猶なほ怨嫉多し況めつどや滅度めつどの後をや」又五いつの卷さいに云いく「一切世間いっさいせん怨多あだくして信

じ難がたし」等云云又云いく「諸もろの無智むちの人の惡口罵詈あくくめり等とうじやうがりやくし刀杖瓦礫とうじやうがりやくを加くわうる有あら

ん」等云云、又云いく「惡世あくせの中の比丘びく」等云云、又云いく「・或あるは阿蘭若あれんにやに納衣のうえ

にして空閑くうげんに在る有らん乃至白衣ないしびやくえ

- 2967 -

の与に法を説いて世に恭敬せらるること六通の羅漢の如くならん」等云云、

又云く「常に大衆の中に在つて我等を毀らんと欲する故に国王・大臣波羅門

居士及び余の比丘衆に向つて誹謗して我が悪を説かん」等云云、又云く

「悪鬼其の身に入つて我を罵詈毀辱せん」等云云、又云く「数数擯出せらる」

等云云、大涅槃經に云く「一闍提

羅漢の像を作し空閑の処に住し方等大乘經典を誹謗すること有るを諸の

凡夫人見已つて皆眞の阿羅漢なり

是れ大菩薩なりと謂わん」等云云、又云く「正法滅して後・像法の中に於て

当に比丘有るべし持律に似像して少しく經を誦誦し飲食を貪嗜し其の身を

長養し乃至袈裟を服すと雖も猶獵師の細めに視て徐に行くが如く猫の鼠を

伺ふが如し」等云云、又般泥・經に云く「阿羅漢に似たる一闍提有り、乃至」

等云云、予此の明鏡を捧げ持つて日本国に引き向けて之を浮べたるに一分も

陰れ無し惑有阿蘭若・納衣在空閑とは何人ぞや為世所恭敬如六通羅漢とは又

何人ぞや、諸凡夫見已・皆謂真阿羅漢・是大菩薩とは此れ又誰ぞや、持律少

読誦經とは又如何、是の經文

の如く仏・仏眼を以て末法の始を照見したまい当世に當つて此等の人人無く

んば世尊の謬乱なり、此の本・迹二門と雙林の常住と誰人か之を信用せん

今日蓮仏語の眞實を顯さんが為日本に配當して此の經を讀誦するに・或有

阿蘭若住於空処等と云うは、建長寺・寿福寺・極樂寺建仁寺東福寺等の日本国

の禪・律念仏等の寺寺なり、是等の

魔寺は比叡山等の法華天台等の仏寺を破せん為に出来するなり、納衣持律等

とは当世の五・七・九の袈裟を着たる持齋等なり、為世所恭敬是大菩薩とは

道隆・良觀・聖一等なり、世と云うは当世の国主等なり、有諸無智人諸凡夫

人等とは日本国中の上下万人なり、日蓮凡夫たる故に仏教を信ぜず但し此の

事に於ては水火の如く手に当てて之を知れり、但し法華經の行者有らば惡口

・罵詈・刀杖・擯出等せらる可し云云、此の經文を以て世間に配當するに

一人も之れ無し誰を以てか法華經の行者と為さん敵人は有りと雖も法華經の

持者は無し、譬えば東有つて西無く天有つて地無きが如し仏語妄説と成るを

如何、予自讃に似たりと雖も之を勘え出して仏語を扶持す所謂日蓮法師是な

り、其の上仏・不輕品に自身の過去の現証を引いて云く爾の時に一りの菩薩

有り常不輕と名く等云云、又云く惡口罵詈等せらる、又云く・或は杖・木瓦石

を以て之を打擲す等云云、釈尊我が因位の所行を引き載せて末法の始を

きんれい 勸励したもう 不^ふ輕^ぎ菩薩^{ぼさつ}既に法華^{ほけき}經^{きやう}の爲^{ため}に杖^{じやう}木^{もく}を蒙^{こおむ}りて忽^{たちまち}に妙覺^{みやうかく}の極位^{きよくい}に登^{のぼ}らせたまいぬ、日蓮^{にちれん}此^この經^{きやう}の故^{ゆゑ}に現身^{げんしん}に刀杖^{とうじやう}を被^{おほ}むり二度遠流^{おんる}に當^{あた}る當來^{とうらい}の妙果^{めうくわ}之^{これ}を疑^{うたがい}う可^べしや、如來^{にょらい}の滅後^{めつご}に四依^{しえ}の大士正像^{だいししやうざう}に出世^{しゅっせ}して此^この經^{きやう}を弘通^{くわうつう}したもうの時にすら猶留難^{なうるなん}多し、所謂^{いわゆる}付法藏^{ふぽうざう}第二十^{ふたじ}の提婆菩薩^{だいばぼさつ}第二十五^{だいいばぼさつ}の師子尊者^{ししそんじや}等^{ある}・或^{ある}は命^{いのち}を断^たたれ頸^{けい}を刎^はらる、第八^{はち}の仏駄密多^{ぶつだみつた}第十三^{じふさん}の竜樹^{りゆうじゆ}菩薩^{ぼさつ}等^はは赤^{さか}き旛^{ふたも}を捧^{ささ}げ持^たちて七年十二^{しちねんじふに}年王^{ねんわう}の門前^{かどまへ}に立^たてり、竺^{じく}竺^{どう}の道生^{どうしやう}は蘇山^{そざん}に流^{なが}され法祖^{ほつそ}は害^{がい}を加^かえられ法道三藏^{ほつどうさんざう}は面^{おも}に火印^{かやき}を捺^なされ、慧遠法師^{ゑいぜん}は呵責^{かしかく}せられ天台大師^{てんだいだいし}は南北^{なんぼく}の十師^{じふし}に對^{たい}當^{とう}し、伝教大師^{でんぎやうだいし}は六宗^{ろくしゆ}の邪見^{じゃけん}を破^はす、此等^{これら}は皆王^{みな}の賢愚^{けんぐ}に當^{あた}るに依^よつて用取有^{ようしゆ}るのみ敢^{あえて}て仏意^{ぶつゐ}に叶^{かな}わざるに非^{あら}ず正像^{しやうざう}猶^{なほ}以^{もつ}て是^{かく}の如^{ごと}し何^{いか}に況^{まづ}や末法^{まつぽう}に及^{およ}ぶにおいてをや、既^{すで}に法華經^{ほけきやう}の爲^{ため}に御勸氣^{ごかんき}を蒙^{かぶ}れば幸^{さい}の中^{なかつ}の幸^{さい}なり瓦礫^{がりやく}を以^{もつ}て金銀^{きんぎん}に易^かゆるとは是^{これ}なり、但^{ただ}し歎^{なげ}くらくは仁王經^{にんのうきやう}に云^いく「聖人^{しやうにん}去^ひる時^{とき}七難^{しちなん}必^{かならず}ず起^{おこ}る」等云^{おこ}云^{おこ}、七難^{しちなん}とは所謂^{いわゆる}大旱魃^{かんばつ}

・大兵乱等是なり、最勝王経に云く「悪人を愛敬し善人を治罰するに由るが故に星宿及び風雨皆時を以て行われず」等云云、愛悪人とは誰人ぞや上に挙ぐる所の諸人なり治罰善人とは誰人ぞや上に挙ぐる所の数数見擯出

の者なり、せいしゆく 星宿とは此の二十余年の天変地天等てんぺんちよう是なり、これ 經文の如くならば

日蓮を流罪するは国土滅亡の先兆なり、こくと 其の上・御勘氣已前に其の由之をこれ

勘え出す所謂立正安國論是なり誰か之を疑わん之を以て歎と為す、ただ 但し仏滅ぶつめつ

後・今に二千二百二十二年なり、しょうほう 正法一千年には竜樹・天親等・仏の御使おんつかい

と為て法を弘む然りと雖も但小・権もつ

の二教を弘通して実大乘をば未だ之を弘通せず像法に入つて五百年にぐつう

天台大師・漢土に出現して南北の邪義を破失して正義を立てたもう、いわゆる 所謂きようもん

教門の五時觀門の一念三千是なり、かんもん 国を挙げて小釈迦と号す、しか 然りと雖も円いへん

定・円慧に於ては之を弘宣して円戒は未だ之を弘めず、いへん 仏滅後・一千八百年ぶつめつ

に入りて日本の伝教大師世に出現して欽明しんめい

より已来二百余年の間六宗の邪義之を破失す、その 其の上天台の未だ弘めたまわこのかた

ざる円頓戒之を弘宣したもう所謂叡山円頓の大戒是なり、ただ 但し仏滅後・二千えんどん

余年三朝の間数万の寺々之有り、然りと雖も本門の教主の寺塔地涌千界の菩薩の別に授与したもう所の妙法蓮華經の五字未だ之を弘通せず弘むべしと

云う經文は有つて国土には無し時

機の未だ至らざる故か、仏記して云く、「我が滅度の後・後の五百歳の中に

広宣流布し閻浮提に於いて断絶せしむること無けん」等云云、天台記して云く

「このごひやくさいの後の五百歳遠く妙道に沾わん」等云云、伝教大師記して云く、「正像

稍過ぎ已つて末法太だ近きに有り法華一乗の機今正しく是れ其の時なり」等

云云、此れ等の經釈は末法の始を指し示すなり、外道記して云く、「我が滅後

・一百年に當つて仏世に出でたもう」と云云、儒家に記して云く、「一千年

の後・仏法漢土に渡る」等云云、是くの如き凡人の記文すら尚以て符契の如し

況や伝教天台をや何に況や釈迦・多宝の金口の明記をや、当に知るべし残る

所の本門の教主妙法の五字一閻浮提到に流布せんこと疑無き者か、但し

にちれんほつし　たびたびこれ
日蓮法師に度度之を聞きける人々猶此の大難に値つての後之を捨つるか、貴辺
は之を聞きたもうこと一兩度・一時

・二時か然りと雖も未だ捨てたまわす御信心の由之を聞く偏えに今生の事に
非じ、妙樂大師の云く「故に知んぬ未代一時聞くことを得聞き已つて信を生
ずること宿種なるべし」等云云、又云く「運像末に居し此の真文を矚る

みょういん

妙因を植えたるに非ざるよりは実に遇い難しと為す」等云云、法華經に云く

「過去に十萬億の仏を供養せん人人間に生れて此の法華を信ぜん」又涅槃經

に云く「熙連一恒供養の人・此の惡世に生れて此の經を信ぜん」等云云取意、

阿闍世王は父を殺害し母を禁固せし惡人なり、然りと雖も涅槃經の座に来つ

て法華經を聴聞せしかば現世の

あくそつ

あら

じゅみょう

けつく

しよじゅう

惡瘡を治するのみに非ず四十年の壽命を延引したまい結局は無根初住の

仏記を得たり、提婆達多是閻浮第一の一闍提の人・一代聖教に捨て置かれ

しかども此の經に値い奉りて天王如来の記を授与せらる彼を以て之を

推するに末代の惡人等の成仏不成仏は罪の輕重に依らず但此經の信不信に

任す可きのみ、而るに貴辺は武士の家の

仁昼夜殺生の惡人なり、家を捨てずして此所に至つて何なる術を以てか

三惡道を脱る可きか、能く能く思案有る可きか、法華經の心は当位即妙・

ふかいほんい もつ 不改本位と申して罪業を捨てずして仏道を成ずるなり、天台の云く「他経は但善に記して悪に記せず今経は皆記す」等云云、妙楽の云く「唯円教の意は逆即是順なり自余の三教は逆順定まる

ゆえ が故に」等云云、爾前分分の得道有無の事之を記す可しと雖も名目を知る人これに之を申すなり、然りと雖も大体之を教る弟子之れ有り此の輩等を召して粗之を聞くべし、其の時之を記し申す可し、恐恐謹言。

ぶんえい 文永十年太歳癸酉八月三日

にちれん かおう 日蓮 花押

かいのくに ごへんじ 甲斐国南部六郎三郎殿御返事

三〇六 南部六郎殿御書

1374P

しし 眠れる師子に手を付けざれば瞋らず流にさを・を立てざれば浪立たず謗法を呵嘖せざれば留難なし、若善比丘見壞法者置不呵嘖の置の字を・をそれず

んば今は吉し後を御らんぜよ無間地獄疑無し、故に南岳大師の四安樂行に
云く「若し菩薩有りて悪人を將護して治罰すること能わず、其れをして悪を
長ぜしめ善人を悩亂し正法を敗壞せば此の人は実に菩薩に非ず、外には詐侮
を現じ常に是の言を作さん、我は忍辱を行ずと、其の人命終して諸の悪人
と共に地獄に墮ちなん」云云、十輪經に云く「若し誹謗の者ならば共住すべ
からず亦親近せざれ、若し親近し共住せば即ち阿鼻地獄に趣かん」云云、梅檀
の林に入りぬればたをらざるに其身に薰ず誹謗の者に親近すれば所修
の善根悉く滅して俱に地獄に墮落せん、故に弘決の四に云く「若し人本惡無
けれども悪人に親近すれば後に必ず悪人と成りて惡名天下に遍し」凡そ謗法
に内外あり國家の二是なり、外とは日本六十六ヶ國の謗法是なり、内とは王
城九重の謗是なり、此の内外を禁制せずんば宗廟社稷の神に捨てられて必
ず國家亡ぶべし、如何と云うに宗廟

とは国王こくおうの神を崇あがむ社とは地の神たましいなり禊ごこくとは五穀ごこくの総名五穀ごこくの神たましいなり、此の
両ほうの神法味に飢えて国を捨て給たまう故ゆえに国土こくどすで既に日日すいげん衰減ぐけつせり、故ゆえに弘決いかわに云く
「地こころ広くして尽く敬べす可べからず封ふじて社なと為なす禊ごこくとは謂いわく五穀ごこく
の総名そくごこくにして即五穀たましいの神ゆえなり」故ゆえに天子てんしの居こする所には宗廟そうびようを左にし社しやりよく禊ごこく
を右にし四時・五行を布つらき列ゆえぬ故ゆえに国の亡なぶるを以もつて社しやりよく禊ごこくを失うしなふと為なす、
故ゆえに山家大師だいしは「国ほつぼつに謗法あの声有あるによつて万民ばんみん数を減へじ家けに讃教つとの勤つとめあ
れば七難ひちなん必かならず退散たいさんせん」と、故ゆえに分分ないげあの内外有あるべし。

五月十六日

日蓮にちれん在

御判 南部六郎殿

三〇七 地引御書ごしよ

弘安四年十一月 六十歳御作こうあん

与南部

六郎 1375p

坊は十間四面しめんにまたひさしさしてつくりあげ二十四日に大師講並びならに延年
心のごとくつかまつりて二十四日の戌亥いぬいの時御所にすゑして三十余人をもつ
て一日経いちにちきょうつかきまいらせ並びならに申酉さるとりの刻に御供養くようすこしも事ゆへなし、坊は地
ひき山づくりし候いしに山に二十四日一日もかた時も雨ふる事なし、十一月
ついたちの日せうばう

つくり馬やつくる八日は大坊のはしらだて九日十日ふき候あわい了んぬ、しかる
に七日は大雨だいう八日九日十日はくもりてしかもあたたかなる事春の終りのこと
し、十一日より十四日までは大雨だいうふり大雪下りて今に里にきへ

ず、山は一丈二丈雪こほりてかたき事かねのごとし、二十三日四日は又そら

はれてさむからず人のまいる事洛中かまぐらのまぢの申西さるとりの時のごとし、さだめて子細しさいあるべきか。

次郎殿等の御きうだちをやのをほせと申し我が心にいれてをはします事なればわれと地をひきはしらたて、とうひやうえむまの入道にゅうどう三郎兵衛尉等ひょうえのじょう已下いかの人人ひとびと・一人もそらくのぎなし、坊はかまぐらにては一千貫にても大事だいじとこそ申し候へ。

ただし一日経いちにちきようは供養くようしさて候、其そのの故は御所念ごしねんの叶かなわせ給たまひて候ならば供養くようしはて候はん、なにと申もうして候とも御きねんかなはず言のみ有りて実なく華くわさいてこのみなからんか、いまも御らんぜよ此の事叶このたびはずば今度

・法華經ほけきょうにては仏になるまじきかと存ぞんじ候はん、叶かないて候はば二人よりあひまいらせて供養くようしはてまいらせ候はん、神たましいならはすはねぎからと申もうす、此の事叶ほけきょうはずば法華經信ほけきょうじてなにかせん、事事又又申もうすべく候恐恐きようきよう。

十一月廿五日

南部六郎殿

にちれんかおう
日蓮花押

三〇八

波木井殿御報 はきり

弘安五年九月 こうあん 六十一歳御作

1376p

畏^{かしこ}み申し候、^{もう}みちのほどべち事候はでいけがみまでつきて候、^{もう}みちの間山
と申しかわと申しそ^{もう}こばく^{だいじ}大事にて候いけるをきうだちにす^{まも}護せられまいら
せ候いて難^{なん}もなくこれまでつきて候事をそれ入り候ながら悦^{よろこ}び存し候、さて
はやがてかへりまいり候^{そうじ}はんずる道にて候へども所らうのみにて候へば不^ふぢ
やうなる事も候^{そうじ}はんずらん。

さりながらも日^{にほんこく}日本国にそ^{もう}こばくもてあつかうて候みを九年まで御きえ候い
ぬ^{おんこころみ}御心ざし申すばかりなく候へばいづくにて死に候ともはかをばみのぶさ
わにせさせ候べく候。

又くりかけの御馬はあまりをもしろくをばへ候程にいつまでもうしなふま
じく候、ひたちのゆへひかせ候はんと思ひ候がもし人にもぞとられ候はん、
又そのほかいたはしくをばへばゆよりかへり候はんほど・かつさ^{上総}の

もばら殿のもとにあづけをきたてまつるべく候にしらぬとねりをつけて候て
は・をぼつかなくをばへ候、まかりかへり候はんまで此のとねりをつけをき
候はん^{そつら}とぞんじ候、そのやうを御ぞんぢのために申し候、
恐恐^{きょうきょう}謹言^{きんげん}。

九月十九日 ^{にちれん} 日蓮

^{しんじやう}進上 ^{はき}波木井殿 御報

所らうのあひだはんぎやうをくはへず候事恐れ入り候。

三〇九 大井莊司入道御書

建治二年

五十五歳御作

1377p

柿三本酢一桶・くぐたち・土筆給い候い畢んぬ、唐土に天台山と云う山に
竜門と申して百丈の滝あり、此の滝の麓に春の初より登らんとて多くの魚
集れり、千万に一も登ることを得れば竜となる、魚・竜と成らんと願うこと
民の昇殿を望むが如く貧なるものの財を求むるが如し、仏に成ることも亦
此くの如し彼の滝は百丈早き事合張

の天より箭を射徹すより早し、此の滝へ魚登らんとすれば人集りて羅網をか
け釣をたれ弓を以て射る左右の辺に間なし、空には・鷺鷥烏夜は虎・狼・狐
・狸・何にとなく集りて食い噬む、仏になるをも是を以て知りぬべし、有情

りんね しやうじろくどう
輪廻生死六道と申して我等が天竺に於て師子と生れ漢土・日本に於て虎狼
やかん
野干と生れ天には ・ 鷲・地に

は鹿蛇と生れしこと数をしらず、 ・ 或は鷹の前の雉・ の前の鼠と生れ、生

ながら頭をつつき・ ししむらをかまれしこと数をしらず、一劫が間の身の骨

は須弥山より高く大地よりも厚かるべし、惜き身なれども云うに甲斐なく奪

われてこそ候いけれ、然れば今度・法華經の為に身を捨て命をも奪われ奉れ

ば無量無数劫の間の思ひ出なるべしと思ひ切り給うべし、六賢六賢、又又

申すべし、 恐恐謹言。

建治二年丙子 日蓮花押

大井莊司入道殿

柑子こうじ一籠かこ・種種しゆじゆの物送り給候、法華經第七卷藥王品に云く衆星の中に

がつてんしもつともこれだいいち

ほけきよう

またかくのごと

せんまん

もろもろきようほう

月天子最も為第一なり此の法華經も亦復是くの如し、千万億種の諸の經法の

おい

もつともこれしうめい

こくう

ある

ある

中に於て最も為照明なり云云、文の意は虚空の星は・或は半里・或は一里

ある

ある

まんげつ

ある

ある

・或は八里・或は十六里なり、天の満月輪は八百里にてをはします、華嚴經

ある

はんにやきよう

ほうとう

ねはんぎよう

けこんきよう

六十卷・・或は八十卷・般若經六百卷・方等經六十卷・涅槃經四十卷・三十

だいにちきよう

こんこうちきよう

そしつちきようかんきよう

あみだ

むりようむへん

しよきよう

六卷・大日經・金剛頂經・蘇悉地經觀經・阿弥陀經等の無量無辺の諸經

こと

ほけきよう

こと

きようもん

こ

りゆうじゆぼさつ

は星の如し、法華經は月の如しと説かれて候經文なり、此れは竜樹菩薩

むちやくぼさつ

てんだいだいしぜんむいさんそう

ろんし

にんし

きようしゆしやくそん

無著菩薩・天台大師善無畏三蔵等の論師・人師の言にもあらず、教主釈尊

きんげん

たと

てんし

こと

ほけきよう

やくおうぼん

いわ

よ

きようてん

の金言なり譬へば天子の一言の如し、又法華經の藥王品に云く能く是の經典

を受持じゆじすること有らん者も亦復また是かくの如ごとし一切衆生いっさいしゆじやうの中に於おいて亦また為これだ第一等云
云、文の意は法華經ほけきやうを持つ人は男ならば何いかなる田夫にても候へ、三界さんがいの主た
る大梵天王だいぼんてんのう・釈提桓因しゃくだいかんにん・四大天王てんりんじやうおうないし・転輪聖王かんど乃至にほん・漢土こくしゆ・日本の国主等に
も勝すぐれたり、何いかに況や日本国にほんこくの大臣だいじん・公卿源平きやうやうの侍さむらい・百姓等ひやくせいに勝すぐれたる事
ももう申およすに及にばず、女人にょにんならば女戸迦きやうしか・吉祥天女きちじやう・漢ふじんの李夫人・楊貴妃等の
無量無辺むりやうむへんの一切いっさいの女人にょにんに勝すぐれたりと説かれて候、案ずるに經文きやうもんの如ごとく申もうさん
とすればをびただしき様なり人もちゐん事もかたし、此これを信ぜじと思へば
如来にょらいの金言きんげんを疑うたがいふ失は經文明きやうもんめいかに阿鼻地獄あびじこくの業あと見へぬ、進退しんたいわづらひ有
り何がせん、此このの法門ほつもんを教主きやうしゆしやくそん釈尊よんじゆうよねんは四十余年むねが間まは
の内にのにかくさせ給たまう、
さりとはとて御年七十二と申せしに南閻浮提えんぶだいの中天竺王てんじくおうしやじやう舍城たの
丑寅ぎしやくつせん耆闍崛山たまいにして説かせ給たまいき、今にほんこく・日本国にほんこくには仏御入滅にゆうめつ一千四百余年
と申せしに来りぬ、夫より今七百余年なり、先き一千四百余年が間は日本国にほんこく

の^{こくおう}人國王・大臣^{だいじん}乃至^{ないし}万民^{ばんみん}一人も此の事を知らず。

今・此の法華經ほけきょうわたらせ給たまへども・或は念仏ねんぶつを申し・或は眞言しんこんにいとまを
入れぜんしゅうじさい禅宗持齋もちしななど申し・或は法華經ほけきょうを読む人は有あるりしかども南無なむ
妙法蓮華經みょうほうれんげきょうと唱となうる人は日本国にほんこくに一人も無し、日蓮にちれん始めて建長五年けんちようの夏の
始より二十余年ただが間唯一人とうじ当時の人の念仏ねんぶつを申しもうすやうに唱となうれば人ごとに
是れを笑けつくひ結句けつくはのりうち切り流し頸くちをはねんと
せらるること一日・二日・一月・二年ならざればこらふべしと
もをばえ候はねども、此の經の文を見候へば檀王だんおうと申せし王は千歳せんさいが間阿私あし
仙人せんじんに責めつかはれ身を牀ゆかとなし給たまふ、不輕菩薩ふぎようぼさつと申せし僧は多年が間・
あつくめりとつじようがりやく杖瓦礫こおむを蒙り、薬王菩薩やくおうぼさつと申せし菩薩は千二百年が間・身
悪口罵詈せんさいせられ刀杖瓦礫こを焼たまき給たまふ、此れを見はんべるに何いかなる責め有りと
をやり七万二千歳とどひぢを焼たまき給たまふ、此れを見はんべるに何いかなる責め有りと
いかでかさてせき留とどむべきと思ふ心に今まで退轉たいてん候はず。

然しかるに在家ざいけの御身おんみとして皆人みなにくみ候に、而しかもいまだ見参に入り候はぬに

何と思し食して御信用あるやらん、是れ偏に過去の宿植なるべし、来生に必ず仏に成らせ給うべき期の来りてもよをすこころなるべし、其の上経文には鬼神の身に入る者は此の経を信ぜず釈迦仏の御魂の入りかはれる人は此の経を信ずと見へて候へば・水に

月の影の入りぬれば水の清むがごとく御心の水に教主釈尊の月の影の入り給ふかと・たのもしく覺へ候、法華經の第四法師品に云く、「人有つて仏道を求めて一劫の中に於て合掌して我が前に在つて無数の偈を以て讃めん、是の讃仏に由るが故に無量の功德を得ん、持經者を歎美せんは其の福復た彼れに過ぎん」等云云、文の意は一劫が間教主釈尊を供養し奉るよりも末代の浅智なる法華經の行者の上下万人にあだまれて餓死すべき比丘等を供養せん功德は勝るべしとの經文なり。

一劫と申すは八万里なんと候はん青めの石をやすりを以て無量劫が間する

ともつきまじきを、梵天^{ぼんてん}三銖の衣と申^{もつ}してきはめてほそくうつくしきあまの
羽衣^{たから}を以て三年に一度^{もつ}下てなづるになでつくしたるを一劫^{いつしやう}と申^{もつ}す、此の間無量^{むりやう}
の財^{くどく}を以て供養^{くよう}しまいらせんよりも濁世^{じよくせ}の法華經^{ほけきやう}の行者^{ぎやうじや}を供養^{くよう}したらん
功德^{くどく}はまさるべきと申^{もつ}す文なり

此の事信じがたき事なれども法華經はこれていにをびただしく、ことごと
しき事どもあまた侍べり、又信ぜじと思へば多宝仏は証明を加へ教主釈尊
は正直の金言となのらせ給ふ、諸仏は広長舌を梵天につけ給いぬ、父のゆ
づりに母の状をそゑて賢王の宣旨を下し給うが如し、三つ是一同なり誰か是れ
を疑はん、されば是れを疑いし
無垢論師は舌五つに破れ高法師は舌ただれ三階禪師は現身に大蛇となる徳一
は舌八つにさけにき、其れのみならず此の法華經並に行者を用ひずして身を
そんじ家をうしない国をほろぼす人人・月支・震旦に其の数をしらず、第一
には日天朝に東に出で給うに大光明を放ち天眼を開きて南閻浮提を見給うに
法華經の行者あれば心に歡喜し
行者をにくむ国あれば天眼をいからして其の国をにらみ給い、始終用いずし
て国の人にくめば其の故と無くいくさをこり他国より其の国を破るべしと見

えて候。

とくしょうどうじ

昔し徳勝童子と申せしをさなき者は土の餅を釈迦仏に供養し奉りて阿育

だいおう

えんぶだい

大王と生れて閻浮提の主と成りて結句は仏になる、今の施主の菓子等を以つ

ほけきよう

くよう

けっく

じゅうらせつによ

よろこ

ことごと

て法華經を供養します、何かに十羅刹女等も悦び給らん、悉く尽しがた

く候、南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經。

なむみょうほうれんげきよう

なむみょうほうれんげきよう

二月十七日

にちれんかおう

日蓮花押

松野殿御返事

ごへんじ

鷺目がもくひとゆい一結白米一駄白小袖一送り給畢ぬ、抑おむすもも此の山と申すは南は野山漫

漫として百余里に及べり、北は身延山高く峙そばだちて白根が嶽しらねにつづき西には七

面と申す山峨峨ががとして白雪絶えず、人の住家すみか一字もなし、適たまたま問いくる物と

ては梢を伝ふこすえ猴なれば少みづも留まる事なく還かえるさ急ぐ恨みなる哉、東は富

土河漲りて流沙みぎの浪に異ならず、かかる所なれば訪う人も希まれなるに加様に

度度音信せさせ給ふ事不思議たびたびおとずれの中の不思議なり。

実相寺の学徒日源は日蓮じっそうじに帰伏にちれんして所領きふくを捨て弟子・檀那しよりように放され御座て

我身わがみだにも置き処ところなき由承り候に日蓮たまわを訪い衆僧にちれんを哀みさせ給う事誠とむらの

道心どうしんなり聖人しょうにんなり、已すでに彼の人は無雙の学生ぞかし然しかるに名聞みょうもん名利みんりを捨て

それがしでし
て某が弟子と成りて我が身には我不愛身命の修行を致し仏の御恩を報ぜん
と面面までも教化申し此くの如く供養

等まで捧げしめ給う事不思議なり、末世には狗犬の僧尼は恒沙の如しと仏は

説かせ給いて候なり、文の意は末世の僧比丘尼は名聞名利に著し上には袈裟

衣を著たれば形は僧比丘尼に似たれども内心には邪見の剣を提げて我

が出入する檀那の所へ余の僧尼をよせじと無量の讒言を致す、余の僧尼を寄

せずして檀那を惜まん事譬えば犬が前に人の家に至て物を得て食ふが、後に

犬の来るを見ていがみほへ食合が如くなるべしと云う心なり、是くの如きの

僧尼は皆皆惡道に墮すべきなり、此学徒日源は学生なれば此の文をや見させ

給いけん、殊の外に僧衆を訪ひ顧み給う事誠に有り難く覚え候。

御文に云く此の経を持ち申して後退転なく十如是自我偈を読み奉り題目を

唱へ申し候なり、但し聖人の唱えさせ給う題目の功德と我れ等が唱へ申す

題目の功德と何程の多少候べきやと云云、更に勝劣あるべからず候、其の

故は愚者の持ちたる金も智者の持ちたる金も愚者の然せる火も智者の然せる火も其の差別なきなり、但し此の經の心に背いて唱へば其の差別有るべきなり、此の經の修行に重重のしなあり其大概を申せば記の五に云く
「惡の数を明かすことをば今の文には説不説と云ふのみ」、有る人此れを分つて云く、「先きに惡因を列ね次ぎに惡果を列ぬ惡の因に十四あり・一に慢・二に懈怠・三に計我・四に淺識・五に著欲・六に不解・七に不信・八に顰蹙・九に疑惑・十に誹謗・十一に輕善・十二に憎善・十三に嫉善・十四に恨善なり」此の十四誹謗は在家・出家に亘るべし恐る可し恐る可し、過去の不輕菩薩は一切衆生に仏性あり法華經を持たば必ず成仏すべし、彼れを輕んじては仏を輕んずるになるべしとて禮拜の行をば立てさせ給いしなり、法華經を持たざる者をさへ若し持ちやせんずらん

仏性ありとてかくの如く禮拜し給う何に況や持てる在家・出家の者をや、此

の經の四の卷には「若しは在家にてもあれ出家にてもあれ、法華經を持ち説く者を一言にても毀る事あらば其の罪多き事、釈迦仏を一劫の間直ちに毀り奉る罪には勝れたり」と見へたり、或は「若実若不実」とも説かれたり、之れを以つて之れを思ふに忘れても法華經を持つ者をば互に毀るべからざるか、其故は法華經を持つ者は必ず皆仏なり仏を毀りては罪を得るなり。加様に心得て唱うる題目の功德は釈尊の御功德と等しかるべし、釈に云く阿鼻の依正は全く極聖の自身に処し毘盧の身土は凡下の一念を逾えず云云、十四誹謗の心は文に任せて推量あるべし、加様に法門を御尋ね候事誠に後世を願はせ給う人か能く是の法を聴く者は斯の人亦復難しとて此經は正き仏の御使世に出でずんば仏の御本意の如く説く事難き上、此の經のいはれを問ひ尋ねて不審を明らめ能く信ずる者難かるべしと見えて候、何に賤者なりとも少し我れより勝れて智慧ある人には此の經のいはれを問ひ尋ね

たま
給うべし、然るに悪世の衆生は我慢・偏執名聞名利に著して彼れが弟子と
成るべきか彼れに物を習はば人にや賤く思はれんずらんと、不断惡念に住し
て惡道に墮すべしと見えて候、法師品には「人有りて八十億劫の間無量の宝
を尽して仏を供養し奉らん功德

よりも法華經ほけきょうを説かん僧くわうを供養くわうして後に須臾しゆゆの間も此の經の法門ほうもんを聴聞ちやうもんする
事あらば我れ大なる利益功徳りやくくどくを得べしと悦ぶべし」と見えたり、無智むちの者は
此の經を説く者に使れて功徳くどくをうべし、何なる鬼畜いかなりとも法華經ほけきょうの一偈いちげ・
一句いっくをも説かん者をば「当に起ちて遠く迎えて当に仏を敬うやまうが如くすべし」
の道理どうりなれば仏の如く互に敬たがいうべし、例せば宝塔品ほうとうぼんの時の釈迦しゃか・多宝たほうの如く
なるべし。

此の三位房げれつは下劣げれつの者なれども少分ほけきょうも法華經ほうもんの法門ほうもんを申もうす者なれば仏の
如く敬ごいて法門ほうもんを御尋たずねあるべし、依法えほう不依人ふえ此れを思ふべし、されば昔ひと独り
の人有りて雪山せつせんと申もうす山に住み給き其の名を雪山童子せつせんどうじと云う、蕨わらびをおり菓このみ
を拾たいて命をつぎ鹿の皮きものを著物きものとこしらへ肌をかくし閑に道を行じ給たまいき、
此の雪山童子せつせんどうじおもはれけるは倩つひつひ

世間せけんを觀みずるに生死無常しやうじむじやうの理なれば生ずる者は必ず死す、されば憂世うきよの中の

あだはかなき事たとえ 譬たとえば電光の如く朝露の日向ひて消るに似たり、風の前の

ともしび

灯あかりの消へやすく芭蕉はしやうの葉の破やすきに異ならず、人皆此みなの無常むじやうを遁のがれず

ついひとたび ころせん

終に一度は黄泉の旅に趣くべし、然しかれば冥途めいどの旅を思うに闇闇としてくらけ

にちがつ せいしゆく

れば日月・星宿の光もなく、せ

ともしび

めて灯燭とてともす火だにもなし、かかる闇くらき道に又ともなふ人もなし、娑婆しゃば

しんるいききうだい

にある時は親類兄弟・妻子・眷属集りて父は慈みの志こころぬ 高く母は悲しみの

かいうどうけつ

情深く、夫婦は海老同穴の契りとして大海たいかいにあるえびは同じ畜生ちくしやうながら夫妻ち

いつしよ

ぎり細かに、一生一処いつしよにともなひて離れ去る事なきが如く・鴛鴦えんおうの衾ふすまの下に

たわむれ

枕を並べて遊び戯る中なれども・彼

めいど

の冥途めいどの旅には伴なふ事なし、冥冥として独り行く誰か来りて是非を訪はん

ある ふじやう

や、或は老少不定の境なれば老いたるは先立若きは留まる是れは順次の道理どうり

なげ

なり歎きの中にもせめて思いなくさむ方も有りぬべし、老いたるは留まり若き

は先立つされば恨の至^{いた}つて恨めしきは幼くして親に先立つ子、嘆きの至^{いた}つて
歎^{なげ}かしきは老いて子を先立

つる親なり、是^{かくのこと}くの如く生死無常老少不定の境あだにはかなき世の中に但昼

夜に今生^{こんじょう}の貯^{たくわえ}をのみ思ひ朝夕^{ちようせき}に現在^{げんざい}の業をのみなして、仏をも敬はず法

をも信ぜず無行無智にして徒^{いたず}らに明^{あか}し暮^くして、閻魔^{えんま}の庁庭に引き迎へ

られん時は何を以つてか資糧として三界の長途を行き、何を以て船筏として
生死の曠海を渡りて実報・寂光の仏土に至らんやと思ひ、迷へば夢覺れば
寤しかじ夢の憂世を捨てて寤の覺りを求めんにはと思惟し、彼の山に籠り
て觀念の牀の上に妄想顛倒の塵を払ひ偏に仏法を求め給う所に。

帝 釈遙に天より見下し給いて思し食さるる様は、魚の子は多けれども魚と

なるは少なく菴羅樹の花は多くさけども菓になるは少なし、人も又此くの

如し菩提心を発す人は多けれども退せずして実の道に入る者は少し、都て凡夫

の菩提心は多く悪縁にたばらかされ事にふれて移りやすき物なり、鎧を著た

る兵者は多けれども戦に恐れ

をなさざるは少なきが如し、此の人の意を行て試みばやと思いて帝釈鬼神

の形を現じ童子の側に立ち給う、其の時・仏世にましまさざれば雪山童子

普く大乘経を求むるに聞くことあたはず、時に諸行無常是生滅法と云う

音ほのかに聞ゆ、童子驚き四方を見給うに人もなし但鬼神近付て立ちたり、

其の形けはしくをそろしくて頭のか

みは災の如く口の齒は劍の如く目を瞋らして雪山童子をまほり奉る、此れを

見るにも恐れず偏に仏法を聞かん事を喜び怪しむ事なし、譬えば母を離れ

たるこつしほのかに母の音を聞きつるが如し、此事誰か誦しつるぞ・いまだ

残の語あらんとて普ねく尋ね求るに更に人もなければ、若しも此の語は鬼神

の説きつるかと思へどもよも・さ

もあらじと思ひ彼の身は罪報の鬼神の形なり此の偈は仏の説き給へる語な

り、かかる賤き鬼神の口より出づべからずとは思へども、亦殊に人もなければ

ば若し此の語汝が説きつるかと思へば、鬼神答て云う我れに物な云いそ食

せずして日数を経ぬれば飢え疲れて正念を覚え、既にあだごと云いつるな

らん我うつける意にて云へば知る事

もあらしと答ふ、童子の云く我れは此の半偈を聞きつる事半なる月を見るが
如く半なる玉を得るに似たり、慥に汝が語なり願くは残れる偈を説き給へ
とのたまふ、鬼神の云く汝は本より悟あれば聞かずとも恨は有るべからず吾
は今飢に責められたれば物を云うべき力なし都て我に向いて物ないそと云
う、童子猶物を食ては説かんやと

問う、鬼神きじん答て食ては説きてんと云う、童子悦どうじよろこびてさて何物をか食とするぞ

と問へば、鬼神きじんの云く汝更なんじに問うべからず此れを聞きては必ず恐を成さん、

またなんじ

亦汝が求むべき物にもあらずと云へば童子猶責めて問い給はく其の物をとだ

にも云はば心みにも求めんと給えば鬼神きじんの云く我れ但人の和やわらかなる肉を

食し人のあたたかなる血を飲

そら

む、空を飛び普あまねく求れども人をば各守り給う仏神ぶつしんましませば心に任せて殺

しがたし、仏神ぶつしんの捨て給う衆生しゅじょうを殺して食するなりと云う、其時そのとき・雪山童子せっせんどうじ

の思い給はく我れ法の為ために身を捨て此の偈げを聞き畢おわらんと置いて、汝が食物なんじ

ここに有り外に求むべきにあらず、我が身いまだ死せず其の肉あたたかなり

我が身いまだ寒ひえず其の血あたたか

ならん、願くは残の偈げを説き給へ此の身を汝に与えんと云う、時に鬼神大に

瞋いて云く誰か汝が語をなんじ実とは憑たのむべき、聞いて後には誰をか証人として糾たださ

んと云う、雪山童子の云く此の身は終に死すべし徒に死せん命を法の為に投

げばきたなくけがらはしき身を捨てて後生は必ず覺りを開き仏となり清妙な

る身を受くべし、土器を捨て

て宝器に替るが如くなるべし、梵天・帝釈・四大天王十方の諸仏・菩薩を皆

証人とせん我れ更に偽るべからずとの給えり、其の時鬼神少し和で若し汝が

云う処実ならば偈を説かんと云う其の時雪山童子大に悦んで身に著たる鹿の

皮を脱いで法座に敷頭を地に付け掌を合せ跪き、但願くは我が為に残の偈

を説き給へと云うて至心に深く敬

い給ふ、さて法座に登り鬼神偈を説いて云く生滅滅已・寂滅為楽と此の時

雪山童子是を聞き悦び貴み給う事限なく後生までも忘れじと度々誦して深く

其の心にそめ、悦ばしき処はこれ仏の説き給へるにも異ならず歎かわ敷き処

は我れ一人のみ聞きて人の為に伝へざらん事をと深く思いて石の上・壁の面

・路の辺ほとりの諸木しよごとに此の偈げを書き

付け願いくは後おわに来らん人必ず此の文を見其その義理ぎりをさと実の道に入れと
云いい畢おわつて、即そく高き木に登りて鬼神きじんの前に落ち給たまへり、いまだ地いたに至らざる
に鬼神きじん俄きじんに帝たい釈しゃくの形と成りて雪山童子せつせんどうじの其身を受取りて平かなる所にすえ
奉りたてまつて恭敬きやうけい礼拝らいはいして云いく我われ暫しばらく如来にょらいの聖教しやうきやうを惜おしみて試ほに菩薩ぼさつの心を悩なやし
奉たてまつるなり、願ねがは此の罪つみを許ゆるして後世ごしやう

には必ず救ひ給へと云ふ、一切の天人又来りて善哉善哉實に是れ菩薩なりと
讚め給ふ、半偈の爲めに身を投げて十二劫生死の罪を滅し給へり此の事涅槃經
に見えたり、然れば雪山童子の古を思へば半偈の爲に猶命を捨て給ふ
、何に況や此の經の一品・一卷を聴聞せん恩徳をや何を以てか此れを報ぜん、
尤も後生を願はんには彼の雪山童子の如くこそあらまほしくは候へ、誠に我
が身貧にして布施すべき宝なくば我が身命を捨て仏法を得べき便あらば
身命を捨てて仏法を学すべし。

とても此の身は徒に山野の土と成るべし惜みても何かせん惜むとも惜みと
ぐべからず・人久しといえども百年には過ず其の間の事は但一睡の夢ぞかし、
受けがたき人身を得て適ま出家せる者も・仏法を学し謗法の者を責めずして
徒らに遊戲雑談のみして明し暮さん者は法師の皮を著たる畜生なり、法師の
名を借りて世を渡り身を養う

といへども法師ほっしとなる義は一もなし法師ほっしと云う名字みょうじをぬすめる盗人ぬすびとなり、恥はづべし恐るべし、迹門しやくもんには、我身命しんみょうを愛せず但た無上道むじょうどうを惜おししむ」ととき本門ほんもんには「自ら身命みずか しんみょうを惜おしまず」ととき涅槃經ねはんぎょうには「身は軽く法は重し身を死して法を弘ひろむ」と見えたり、本・迹両門涅槃經共に身命しんみょうを捨てて法を弘ひろむべしと見えたり、此等の禁を背く重罪じゅうざいは目には見えざれども積りて地獄じごくに墮おつる事譬たとえば寒熱かんねつの姿形すがたかたちもなく眼まなこには見えざれども、冬は寒来りて草木そうもくじんちく人畜じんちくをせめ夏は熱来りて人畜じんちくを熱悩ねつなうせしむるが如くなるべし。

然るに在家の御身しか ざいけ おんみは但余念よねんなく南無妙法蓮華經なむ みょうほうれんげきょうと御唱となえありて僧をも供養くようし給たまうが肝心かんじんにて候なり、それも經文きょうもんの如くならば隨力演説えんぜつも有あるべきか、世の中ものうからん時も今生こんじょうの苦さへかなしし、況や来世らいせの苦をやと思し食しても南無妙法蓮華經なむ みょうほうれんげきょうと唱よるこへ、悦よろこばしからん時も今生こんじょうの悦よろこびは夢の中の夢りょうぜんじょうご

・靈山淨土の悦よるこびこそ実の悦よるこびなれ

と思し食し合せて又南無妙法蓮華經と唱へ、退転なく修行して最後臨終の時を待つて御覽ぜよ、妙覺の山に走り登つて四方をきつと見るならばあら面白や法界寂光土にして瑠璃を以つて地とし金の繩を以つて八の道を界

へり、天より四種の花ふり虚空に音楽聞えて、諸仏・菩薩は常樂我淨の風に
そよめき娛樂・快樂し給うぞや、我れ等も其の数に列なりて遊戲し樂むべき
事はや近づけり、信心弱くしてはかかる目出たき所に行くべからず行くべか
らず、不審の事をば尚尚承はるべく候、
六賢六賢。

建治二年丙子十二月九日

にちれん かおう
日蓮 花押

ごへんじ
松野殿御返事

三二二 松野殿御消息

1387p

昔乃往過去の古へ珊瑚提嵐国と申す国あり彼の国に大王あり無諍念王と申し
き、彼の王に千の王子あり又彼の王の第一の大臣を宝海梵志と申す・彼の梵

志に子あり法蔵と申す、彼の無諍念王の千の太子は穢土を捨てて浄土を取り
給ふ、其の故は此の娑婆世界は何なる所と申せば十方の国土に父母を殺し
正法を誹謗し聖人を殺せる者彼の

国より此の娑婆世界へ追い入れられて候、例せば此の日本国の人大科有
者の獄に入れらるるが如し、我が力に叶はざれば哀愍せずして捨て給ふ、宝
海梵志一人請け取りて娑婆世界の人の師と成り給ふ、宝海梵志の願に云く我
未来世の穢惡土の中に当に作仏することを得べし、即ち十方浄土より擯出せ
る衆生を集めて我れ当に之れを
度すべしと誓ひ給ひき、無諍念王と申すは阿弥陀仏なり、其の千の太子は今
の觀音・勢至普賢・文殊等なり、其の宝海梵志と申すは今の釈迦如来なり、
此の娑婆世界の一切衆生は十方の諸仏に抜き捨てられしを釈迦一人計りし
て扶けさせ給うを唯我一人と申すなり。

松野殿

日蓮にちれん

花押かおう

鷲目がもく一貫文・油一升・衣一・筆十管給たまい候、今に始めぬ御志もつ申し尽しがた

く候へば法華經ほけきょう・釈迦しゃか仏ぶつに任せ奉たてまつり候。

先立もつより申し候、但在家ざいけの御身おんみは余念よねんもなく日夜朝夕ちようせき・南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやう

と唱となえ候さいごりんじゅうて最後臨終さいごりんじゅうの時を見させ給たまへ、妙覺みょうかくの山に走り登り四方しほうを御覽ごらんぜ

よ、法界ほっかいは寂光土じやくこうどにして瑠璃るりを以て地とし・金繩こがねなわを以て八の道をさかひ、天

よ

り四種こくうの花ふり虚空こくうに音樂聞え、諸仏しよぶつ・菩薩ぼさつは皆常樂我淨みなじょうらくがじやうの風にそよめき

給たまへば・我れ等そも必ず其その数つらに列ならん、法華經ほけきやうはかかる・いみじき御經に

て・をはしまいらせ候、委細いさいはいそぎ候間申もつさず候、恐恐きようきよう謹言きんげん。

建治三年丁丑九月九日

にちれんかおう
日蓮花押

ごへんじ
松野殿御返事

もう もくれん
追て申し候目連樹十両計り給はり候べく候

三二四 松野殿御返事

1388p

しゅじゆ たまい おわん
種種の物送り給い候畢ぬ山中のすまゐ思遣せ給うて雪の中ふみ分けて御
とむら こころざし ほけきようじゆうらせつ しろしめ
訪い候事御志 定めて法華経十羅刹も知し食し候らんさては涅槃経に云く
とどま
「人命の停らざることは山水にも過ぎたり今日存すと雖も明日保ち難し」摩耶
いわ たと せんだら
経に云く「譬えば旃陀羅の羊を駈て屠家に至るが如く人命も亦是くのごとく
ほけきよう いわ
歩死地に近く」法華経に云く「三界は安きこと無し猶火宅の如し衆苦充滿し

て^{はなはだ}甚^だ怖^{ふい}畏^いすべし」等云云、此^これ等の^の經^き文^{ようもん}は我^{われ}等^らが慈^じ父^ふ・大^{だい}覺^{かく}世^せ尊^{そん}・末^{まつ}代^{だい}

の凡夫ぼんぷをいさめ給たまい、いとけなき子どもをさし驚おどろかし給たまへる経文きやうもんなり、然しかり
と雖いへども須臾しゆゆも驚おどろく心なく刹那せつなも道心どうしんを發おこさず、野辺に捨てられなば一夜の中
にはだかになるべき身をかざらんがために、いとまを入れ衣かを重かさねんとはげ
む、命終みやうじゆうりなば三日の内に水と成りて流れ塵ちりと成りて地にまじはり煙と成
りて天にのぼりあともみえずなる

べき身を養はんとて多くの財たからをたくはふ、此のことはりは事ふり候ぬ但ただし
とつせ
当世の体こそ哀れに候へ、日本国数年の間打ち続きけかちゆきて衣食いしょくたへ畜
るひをば食いつくし結句けっく人をくらう者出来しゅつたいして・或あるは死人しにん・或あるは小児しょうに・或あるは
病人等の肉を裂取さきとりて魚鹿等に加へて売りしかば人これ是を買いくへり此の国存の
外に大惡鬼あつきとなれり、又去年こぞの春より

今年こねんの二月中旬まで疫病国えきびやうに充満じゆうまんす、十家に五家・百家に五十家皆みなやみ死
し・或あるは身はやまねども心は大苦に値あへりやむ者よりも怖し、たまたま生残

たれども・或は影の如くそいし子もなく、眼の如く面をならべし夫婦もなく・
天地の如く憑し父母もをはせず生きても何にかせん・心あらん人人争か世を
厭はざらん、三界無安とは仏説き給て候へども法に過ぎて見え候。

然るに予は凡夫にて候へども・かかるべき事を仏兼て説きをかせ給いて候

を国王に申しきかせ進らせ候ぬ、其れにつけて御用は無くして、弥怨をなせ

しかば力及ばず此の国既に謗法と成りぬ、法華經の敵に成り候へば三世十方

の仏神の敵と成れり、御心にも推せさせ給い候へ日蓮何なる大科有りと

法華經の行者なるべし、南無阿弥陀仏

と申さば何なる大科有りと、も念仏者にて無しとは申しがたし、南無

妙法蓮華經と我が口にも唱へ候故に罵られ打ちはられ流され命に及びしかど

も、勧め申せば法華經の行者ならずや、法華經には行者を怨む者は阿鼻地獄

の人と定む、四の巻には仏を一中劫罵るよりも末代の法華經の行者を悪む罪

深しと説かれたり、七の巻には行者ぎやうじやを

軽かるしめし人ひと人ひと千劫せんこう阿鼻あび地獄じごくに入ると説き給たまへり、五の巻には我が末世まっぽう末法に

入ほけきようつて法華經ぎやうじやの行者ぎやうじや有るべし、其そのの時其ときの国こくに持戒じかい・破戒はかい等の無量むりやう無辺むへんの僧

等集こくしゆりて国主ざんげんに讒言ざんげんして流うしなし失うしなふべしと説かれたり、然しかるにかかる經

文かたがた符合し候畢おわんぬ未来みらいに仏そつらに成り候はん事うたがい疑いなく覚え候おぼ、委細いさい
は見参の時申すべし。もつ

つちのえとら

建治四年 戊寅 二月十三日

日蓮にちれん

かおう

花押

ごへんじ

松野殿御返事

三一五

松野殿御返事ごへんじ

1390p

にちがつ日月は地におち須弥山しゅみせんはくづるとも、彼の女人にょにん・仏に成らせ給わん事うたがい疑い
いなし、あらたのもしや・たのもしや。

干飯一斗・古酒一筒・ちまき・あうざし・たかなかたがたな方かたがたの物送り給たまいて候たま

草にさける花・木の皮を香として仏に奉る人 靈鷲山へ参らざるはなし、況
や民のほねをくだける白米・人の血をしぼれるが如くなるふるさを仏・
法華經にまいらせ給へる女人の成仏得道疑うべしや。

五月一日

日蓮

かおう

花押

みょうほう ごへんじ

妙法尼御返事

三一六

松野殿後家尼御前御返事

1390p

法華經第五の卷安樂行品に云く文殊師利此法華經は無量の国の中に於て
乃至名字をも聞くことを得べからず云云、此の文の心は我等衆生の三界六道
に輪回せし事は・或は天に生れ・或は人に生れ・或は地獄に生れ・或は餓鬼

に生れちくしょう畜生むりょうに生れ無量の国に生をうけて無辺むへんの苦しみをうけて・たのしみに
あひしかどもひとたび一度も法華經ほけきょうの国には生ぜず、

たまたま生れたりといへども南無妙法蓮華經と唱へず、となふる事はゆめに

もなし人の申すをも聞かず、仏のたとへを説かせ給うに一眼の亀の浮木の穴

に値いがたきにたとへ給うなり、心は大海の中に八万由旬の底に亀と申す大

魚あり、手足もなくひれもなし腹のあつき事はくるがねのやけるがごとし、

せなかのこうのさむき事は雪山にいたり、此の魚の昼夜朝暮のねがひ時時刻

剋の口ずさみには腹をひやしこうをあたたためんと思ふ、赤梅檀

と申す木をば聖木と名つく人の中の聖人なり、余の一切の木をば凡木と申す

愚人の如し、此の梅檀の木は此の魚の腹をひやす木なり、あはれ此の木にの

ぼりて腹をば穴に入れてひやしこうをば天の日にあてあたためばやと申すな

り、自然のことはりとして千年に一度出る亀なり、しかれども此の木に値事

かたし、大海は広し亀はちい

さし浮木はまれなり、たとひよのうききにはあへども梅檀にはあはず、あへ

ども龜の腹をえりはめたる様に・がい分に相応そうおうしたる浮木うきぎの穴にあひがたし
我が身をち入りなばこうをもあたためがたし誰か又とりあぐべき、又穴せば
くして腹を穴に入れえずんば波にあらひをとされて大海たいかいにしづみなむ、たと
ひ不思議ふしぎとして栴檀せんだの浮木うきぎ

の穴にたまたま行きあへども我一眼のひがめる故ゆえに浮木西にながるれば東と
見る故ゆえにいそいでのとらんとおよげば弥弥いよいよとをさかる、東に流るを西と
見る南北も又此かくの如ごとし云云、浮木うきぎには・とをさかれども近づく事はなし、
是の如く無量無辺劫にも一眼の龜の浮木うきぎの穴にあひがたき事を仏説とき給たまへり、
此の喩をとりて法華經ほけきょうにあ

ひがたきに譬たとふ、設たひあへどもとなへがたき題目だいもくの妙法みょうほうの穴にあひがたき事
を心うべきなり、大海たいかいをば生死しやうじの苦海なり龜をば我等衆生われらしゆじやうにたとへたり、手
足のなきをば善根ぜんこんの我等われらが身にそなはらざるにたとへ、腹のあつきをば我等われら

が瞋^{しん}恚^にの八熱地獄^{じごく}にたとへ背^{そむ}のこうのさむきをば貧欲^{はちかんじごく}の八寒地獄^{じごく}にたとへ千^ち年^{ねん}大海^{たいかい}の底にあるをば我等^{われら}が三惡道^{さんあくどう}

に墮^おちて浮^うびがたきにたとへ、千年^{ひとたび}に一度^{いちど}浮^うぶをば三惡道^{さんあくどう}より無量劫^{むりょうこつ}に一度^{ひとたび}
人間^{にんげん}に生^なれて釈迦^{しゃか}仏^{ぶつ}の出世^{しゅっせ}にあひがたきにたとへ、余^あの松木^{しょうき}ひの木^{うきぎ}の浮木^{うきぎ}に
はあひやすく栴檀^{せんだん}にはあひがたし、一切^{いっさい}経^{きやう}には値^あいやしく法華^{ほけ}經^{きやう}

にはあひがたきに譬^{たと}へたり、たとひ梅檀^{せんた}には値^あうとも相応^{そうおう}したる穴^{あな}にあひが
たきに喩^{たと}うるなり、設^{たと}ひ法華經^{ほけきょう}には値^あうとも肝心^{かんじん}たる南無妙法蓮華經^{なむみょうほうれんげきょう}の五字^{ごじ}
をとなへがたきにあひたてまつる事^{こと}のかたきにたとつ、東^{とう}を西^{せい}と見^み・

北^{きた}を南^{なん}と見る事^{こと}をば我^{われ}れ等衆生^{しじょう}かしこがほに智慧^{ちえ}有^ある由^{よし}をして勝^{しょう}を劣^{りく}と思^{おも}ひ
劣^{りく}を勝^{しょう}と思^{おも}ふ、得^{とく}益^{やく}なき法^{はふ}をば得^{とく}益^{やく}あると見る機^きにかなはざる法^{はふ}をば機^きにか
なう法^{はふ}と云^いふ、真言^{しんごん}は勝^{すぐ}れ法華經^{ほけきょう}は劣^{しんごん}り真言^{しんごん}は機^きにかなひ法華經^{ほけきょう}は機^きに叶^は
ずと見る是^{これ}なり。

されば思^{おも}いよらせ給^{たま}へ仏^{ぶつ}・月氏^{がつし}国^{こく}に出^いでさせ給^{たま}いて一^{いち}代^{だい}聖教^{しょうきょう}を説^{せつ}かせ
給^{たま}いに四^し十^じ三^{さん}年^{ねん}と申^{まを}せしに始^はめて法華經^{ほけきょう}を説^{せつ}かせ給^{たま}ふ、八^{はち}箇^か年^{ねん}が程^{ほど}・一^{いつ}切^{せつ}
の御弟子^{おんでし}皆^{みな}如意宝珠^{にょいほうじゆ}のごとくなる法華經^{ほけきょう}を持^もち候^{こう}き、然^{しか}れども日^に本^{ほん}国^{こく}と天竺^{てんじく}
とは二十万^{ばんり}里^りの山海^{さんかい}をへだてて候^{こう}しかば法華經^{ほけきょう}の名^な字^じをだに聞^{きこ}くことなかり
き、釈尊^{しゃくそん}御^に入^{にゅう}滅^{めつ}ならせ給^{たま}いて一^{いち}千^{せん}二^に百^{ひゃく}余^よ年^{ねん}と申^{まを}せしに漢土^{かんと}へ渡^{わた}し給^{たま}ふ、い

まだ日本国へは渡らず、仏滅後・一千五百余年と申すに日本国の第三十代・
欽明天皇と申せし御門の御時百済国より始めて仏法渡る、又上宮太子と申せ
し人唐土より始めて仏法渡させ給いて其れより以来今に七百余年の間・
一切経並に法華経はひろまらせ給いて、上一人より下万人に至るまで心あら
む人は法華経を一部・或は一卷・或は一品持ちて・或は父母の孝養とす、さ
れば我等も法華経を持つと思ふ、しかれ
ども未だ口に南無妙法蓮華経とは唱へず信じたるに似て信ぜざるが如し、
譬えば一眼の亀のあひがたき梅檀の聖木にはあいたれどもいまだ亀の腹を穴
に入れざるが如し、入れざればよしなし須臾に大海にしづみなん、我が朝七
百余年の間・此の法華経弘まらせ給いて・或は読む人・或は説く人・或は
供養せる人・或は持つ人稲麻竹葦よりも多
し、然れどもいまだ阿弥陀の名号を唱うるが如く南無妙法蓮華経とすすむ

る人もなく唱となうる人もなし、一切いっさいの経・一切いっさいの仏ぶつの名号みょうごうを唱となうるは凡木ぼんぼくにあ
うがごとし、未いまだ梅檀せんだならざれば腹はらをひやさず日天にってんならざれば甲かをもあたた
めず、但目めをこやし心を悦よろこばしめて実みなし華はなさいて菓このみなく言ことのみ有りてしわ
ざなし。

但にちれん日蓮一人ばかり日本にほんこく国に始めて是これを唱へまいらする事、去いぬる建長五年

の夏のころより今に二十余年の間・昼夜朝暮に南無妙法蓮華經と是これを唱となうる

事は一人なり、念仏ねんぶつ申す人は千万せんまんなり、予は無縁むえんの者なり念仏ねんぶつの方人かとうどは有縁うえん

なり高貴しかなり、然れども師子ししの声には一切いっさいの獸けもの・声うしなを失ふ虎の影には犬恐る、

日天東にってんに出でぬれば万星の光

は跡形あとかたもなし、法華經ほけきようのなき所にこそ弥陀念仏みだねんぶつはいみじかりしかども南無なむ

妙法蓮華經みよほうれんげきようの声・出来しゅつたいしては師子ししと犬にちりんと星との光くらべのごとし、

譬たとえば鷹たかと雉きじとの・ひとしからざるがごとし、故ゆえに四衆ししゆうとりどりにそねみ上下じやうげ

同くにくむ讒人ざんにん国くにに充滿じゅうまんして奸人けんじん士しに多し故ゆえに劣を取りて勝をにくむ、譬たとえ

ば犬すくは勝すくれたり師子ししをば劣おとれり星

をば勝すくれ日輪にちりんをば劣おとるとそしるが如ごとし然しかる間邪見じゃけんの悪名あくみやうせじよう世上るふに流布るふし・やや

もすれば讒訴ざんそし・或あるは罵詈めりせられ・或あるは刀杖とうじやうの難なんをかふる・或あるは度度流罪たびたびるざいに

あたる、五の巻の経文にすこしもたがはず、さればなむだ左右の眼にうか
び悦びよろこ一身にあまれり。

ここに衣は身をかくしがたく食は命をささへがたし、例せば蘇武が胡国に
ありしに雪を食として命をたもつ、伯夷は首陽山にすみし蕨をわらびをりて身を
たすく父母にあらざれば誰か問うべき三寶の御助にあらずんば・いかでか一
日片時も持つべき末だ見参にも入らず候人のかやうに度度・御をとづれの・
はんべるは・いかなる事にや・あやしくこそ候へ、法華經の第四の巻には
釈迦仏・凡夫の身にいりかはらせ給いて法華經の行者をば供養すべきよしを
説かれて候、釈迦仏の御身に入らせ給い候か又過去の善根のもよをし、竜女
と申す女人は法華經にて仏に成りて候へば末代に此の經を持ちまいらせん
女人をまほらせ給うべきよし誓わせ給いし、其の御ゆかりにて候か、貴し貴し。

弘安二年己卯三月二十六日

日蓮 にちれん

花押 かおう

松野殿後家尼御前御返事 ごけあまごぜんごへんじ

麦一箱いゑのいも一籠^{もう}うり一籠^{また}旁^{かたがた}の物六月三日に給候しを今まで御返事^{ごへんじ}

申^{もう}し候はざりし事恐れ入つて候、此の身延の沢と申^{もう}す処^{ところ}は甲斐^{かい}の国の飯井野

御牧波木井の三箇郷の内波木井の郷の戌亥^{いぬい}の隅にあたりて候、北には身延の嶽^{たけ}

天をいただき南には鷹取^{たかとり}が嶽雲につづき東には天子^{てんし}の嶽日とたけをなじ西に

は又峨峨^{がが}として大山

つづきてしらねの嶽^{たけ}にわたれり、のなく音天^{こえ}に響^{ひびき}き蝉のさゑづり地にみ

てり、天竺^{てんじく}の靈山^{りょうぜん}此の処^{ところ}に来れり唐土^{もろこし}の天台^{てんだい}山親^{まのあた}りここに見る、我が身は

釈迦^{しゃかぶつ}仏にあらず天台大師^{てんだいだいし}にてはなけれども、まかるまかる昼夜に法華經^{ほけきょう}をよ

み朝暮^{ちようぼ}に摩訶止觀^{まかしかん}を談^{だん}ずれば靈山^{りょうぜんじようど}浄土にも相似^{そうじ}たり・天台山^{てんだい}にも異ならず。

但有待の依身なれば著ざれば風身にしみ食ざれば命持ちがたし、灯に油をつがず火に薪を加へざるが如し命いかでかつぐべきやらん、命続がたく・つぐべき力絶えては、或は一日乃至・五日既に法華經読誦の音も絶えぬべし止觀のまどの前には草しげりなん、かくの如く候にいかにして思い寄せ給いぬらん、兎は經行の者を供養せしかば天帝哀みをなして月の中にをかせ給いぬ・今天を仰ぎ見るに月の中に兎あり。

されば女人の御身として・かかる濁世末代に法華經を供養しましませば、
 梵王も天眼を以て御覽じ帝釈は掌を合わせてをがませ給ひ地神は御足を
 いただきて喜び釈迦仏は靈山より御手をのべて御頂をなでさせ給うらん、
 南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經、

弘安二年己卯六月二十日

日蓮 にちれん
花押 かおう

松野殿女房御返事にようぼうこへんじ

白米一斗・芋一駄・梨子一籠・名荷・はじかみ・枝大豆・ゑびね 旁の物

給ひ候ぬ、濁れる水には月住まず枯たる木には鳥なし、心なき女人の身には

仏住み給はず、法華經を持つ女人は澄める水の如し釈迦仏の月宿らせ給う、

譬へば女人の懷み始めたるには吾身には覺えねども、月漸く重なり日も屡過ぐ

れば初にはさかと疑ひ後には一定と思

ふ、心ある女人はをのこころをんなをも知るなり法華經の法門も亦かくの如し、

南無妙法蓮華經と心に信じぬれば心を宿として釈迦仏懷まれ給う、始はしら

ねども漸く月重なれば心の仏夢に見え悦こばしき心漸く出来し候べ

し、法門多しといへども止め候、法華經は初は信ずる様なれども後遂る事か

たし、^{たと}譬へば水の風にうごき花の色の露^{つゆ}に移るが如^{ごと}し、何として今までは持
たせ給^{たま}うぞ是・偏へに前生の功力の上・釈迦^{しゃかぶつ}仏の護^{まも}り給^{たま}うか、たのもしした
のもしし、委^{くわし}くは甲斐^{かい}殿申^{もつ}すべし。

九月一日

日蓮^{にちれん}

花押^{かおう}

松野殿女房御返事^{にやうぼうごへんじ}

三一九

松野尼御前御返事

1396p

にほんこく

日本国の人にはにくまれ候ぬ、みちふみわくる人も候はぬにをもうらせ

たまひ おんこころざし

給いての御心ざし、石の中の火のごとし火の中の蓮のごとし、ありがたしあ

りがたし、
きみづきゅう
恐恐。

正月二十一日

にちれん
日蓮

在御判%

松の尼御前御返事
あまごぜんごへんじ

三二〇

浄蔵浄眼御消息

しやうそく

1396p

きごめの俵一・瓜籠一・根芋品品の物給い候畢んぬ、
うりこひとつ
たまい
おわ
楽徳と名付けける

ちよつじや

長者に身を入れて我が身も妻も子も夜も昼も責め遣はれける者が、余りに責められ堪えがたさに隠れて他国に行きて其の国の大王に官仕へける程に・きりものに成りて関白と成りぬ、後に其の国を力として我が本の主の国を打ち取りぬ、其の時本の主・此の関白を

見て大に怖れ前に悪く当りぬるを悔ひかへして官仕へ様様の財を引きける、

前に負けぬる物の事は思ひもよらず今は只命のいきん事をはげむ、法華経も

又斯の如く法華経は東方の薬師・仏の主・南方・西方・北方・上下の一切の

仏の主なり、釈迦仏等の仏の法華経の文字を敬ひ給ふことは民の王を恐れ星

の月を敬ふが如し、然るに我等衆生は

第六天の魔王の相伝の者地獄・餓鬼・畜生等に押し籠められて気もつかず

朝夕獄卒を付けて責むる程に、兎角して法華経に懸り付きぬれば釈迦仏等の

十方の仏の御子とせさせ給へば、梵王・帝釈だにも恐れて寄り付かず何に

況や第六天の魔王をや、魔王は前には主なりしかども今は敬ひ畏れて、あし

うせば法華經十方の諸仏の御見参にあしうや入らんずらんと恐れ畏て供養を

なすなり、何にしても六道の一切衆生をば法華經へ・つけじと・はげむ

なり、然るに何なる事にや・をはすらん皆人の憎み候日蓮を不便とおぼして、

かく遙遙と山中へ種種の物送りたび候事一度二度ならず、ただことにあらず

偏へに釈迦仏の入り替らせ給へるか、又をくれさせ給ひける御君達の御仏に

ならせ給いて父母を導かんために御心に入り替らせ給へるか。

妙莊嚴王と申せし王は悪王なりしかども御太子淨蔵・淨眼の導かせ給いし

かば父母二人共に法華經を御信用有りて仏にならせ給いしぞかし、是もさに

てや候らんあやしく覚え候、甲斐公が語りしは常の人よりもみめ形も勝れて

候し上・心も直くて智慧賢く、何事に付けてもゆゆしかりし人の疾はかなく

成りし事の哀れさよと思ひ候

しが、又倩思へば此の子なき故に母も道心者となり父も後世者に成りて候
は只とも覚え候はぬに、又皆人の惡み候法華經に付かせ給へば偏へに是なき
人の二人の御身に添うて勧め進らせられ候にやと申せしが・さもやと覚え
候、前前は只荒増の事かと思ひて候へば是程御志の深く候ひける事は始め
て知りて候、又若しやの事候はばくらき闇に月の出づるが如く妙法蓮華經の
五字・月と露れさせ給うべし、其の月の中には釈迦仏・十方の諸仏・乃至前
に立たせ給ひし御子息の露れさせ給ふべしと思ひ召せ、委くは又又申すべし、
恐恐謹言。

七月七日

日蓮

花押

今月飛來の雁書がんしょに云く此この十月三日母にて候もの十三年に相当あひあたれり錢二十

貫文等云云、夫外典三千余卷げてんさんぜんには忠孝の二字を骨とし内典五千余卷ないてんには孝養こうよう

を眼まなことせり、不孝ふこうの者をば日月にちがつも光を・をしみ地神も瞋ちをなすと見へて候、

・或経あるに云く六道いわの一切衆生ろくだう・仏前ぶつぜんに参り集りたりしに仏彼れ等が身の上の

事を一一に問い給たまいし中に仏地神に汝大地より重きものありやと問い給たまいし

かは地神敬もうんで申もうさく大地だいちより重き物候と申もうす、仏いの曰いわくいかに地神

偏頗へんげをば申もうすぞ此この三千大千世界さんぜんだいせんせかいの建立こんりゆうは皆大地みなだいちの上にそなわれり、所謂いわゆる

須弥山しゆみせんの高さは十六万八千由旬ゆじゆん横は三百三十六万里ばんりなり大海たいかいは縦横じゅうおう八万四千

由旬ゆじゆんなり、其その外ほかの一切衆生いっさいしゆじよう・草木等そうもくは皆大地みなだいちの上にそなわれり、此これを持たもて

るが大地だいちより重き物有らんと問い給たまいしかば、地神答いて云く仏は知食しろうしめしな

がら人に知らせんとて問い給うたま

か、我地神となること二十九劫なり其の間・大地を頂戴ちやうだいして候に頸も腰も痛

むことなし、虚空を東西南北へ馳走するにも重きこと候はず、但不孝の者の

すみ候所そつうじゆんが身にあまりて重く候なり、頸もいたく腰もおれぬべく膝もたゆ

く足もひかれず眼もくれ魂もぬけべく候、あわれ此の人の住所の大地をば・

なげすてばやと思ふ心たびたび出来しゅつたい

し候へば不孝の者の住所は常に大地ゆり候なり、されば教主釈尊きやうじゆしゃくそんの御いと

こ提婆達多と申せし人は閻浮提第一の上えんぶだい だいいち じやうろう すぐう臍王種姓なり、然れども不孝の人な

れば我等彼の下われらの大地を持つことなくして大地破れて無間地獄に入り給いきだいち わ むげんじごく たまい

我れ等が力及ばざる故にて候と、かくの如く地神こまごまと仏に申し上げ候およ ゆえ

しかば仏はげにもげにもと合点させ給いきがてん たまい、又仏歎いて云く我が滅後の

衆生の不孝ならん事・提婆にも過ぎ瞿伽利にも超えたるべし等云云取意、
しゅじよう ふこう だいは す くぎやり こ

ねはんぎよう まっだいあくせ ふこう
涅槃經に末代惡世に不孝の者は大地微塵よりも多く孝養の者は爪上の土よりもすくなからんと云云。

いまにちれん
今日蓮案じて云く此の經文は殊にさもやと・をばへ候、父母の御恩は今初めて事あらたに申すべきには候はねども母の御恩の事殊に心肝に染みて貴くをばへ候、飛鳥の子をやしなひ地を走る獸の子に・せめられ候事・目もあてられず魂もきえぬべくをばへ候、其につきても母の御恩忘れがたし、胎内に九月の間の苦み腹は鼓をはれるが如く頸は針をさげたるが如し、氣は出づるより外に入る事なく色は枯れたる草の如し、臥ば腹もさけぬべし坐すれ

ば五体やすからず、かくの如くして産も既に近づきて腰はやぶれてきれぬべく
まなこ眼はぬけて天に昇るか・をばゆ、かかる敵をうみ落しなば大地にもふみ
つけ腹をもさきて捨つべきぞかし、さはなくして我が苦を忍びて急ぎいただき
あげて血をねぶり不浄をすすぎて胸にかきつけ懐きかかへて三箇年が間慇懃
ふじょうに養ふ、母の乳をのむ事・一百

八十斛三升五合なり、此乳のあたひは一合なりとも三千大千世界にかへぬべ
し、されば乳一升のあたひを・へて候へば米に当れば一万一千八百五十斛五
升稲には二万一千七百束に余り布には三千三百七十段なり、何に況や一百八
十斛三升五合のあたひをや、他人の物は銭の一文米一合なりとも盗みぬれば
ろうのすもりとなり候ぞか

し、而るを親は十人の子をば養へども子は一人の母を養ふことなし、あたた
しかかなる夫をば懐きて臥せどもここへたる母の足をあたたむる女房はなし、

ぎつこくえん こんちよう
給孤独園の金鳥は子の為に火に入り・ 戸迦夫人は夫の為に父を殺す、仏

いわ ふば
の云く父母は常に子を念へども子は父母を念はず等云云、影現王の云く父は

おも
子を念ふといえども子は父を念はず等是れなり、 設ひ又今生には父母に孝養

こしよう
をいたす様なれども後生のゆくへまで問う人はなし母の生てをはせしには心

ひとたび
には思はねども一月に一度一年に一度は問いしかども死し給いてより後は初

ないし
七日より二七日乃至・第三年ま

こと
では人目の事なれば形の如く問い訪ひ候へども、十三年四千余日が間の程は

かたとき
かきたえ問う人はなし、生てをはせし時は一日片時のわかれをば千万日とこ

いかん
そ思はれしかども十三年四千余日の程はつやつやをとづれなし如何にきかま

げてん とうきよう
ほしくましますらん夫外典の孝経には唯今生の孝のみを・をしへて後生の

なげ
ゆくへをしらず身の病をいやして心の歎きをやめざるが如し内典五千余巻に

にんてん にじよう
は人天・二乗の道に入れていまだ仏道へ引導する事なし。

夫目連尊者もくれんそんじやの父をば吉占師子きつせんし・母をば青提女しょうだいによと申せしなり、母死して後
餓鬼道がきに墮ちたり、しかれども凡夫ほんぷの間は知る事なし、証果しょうかの二乗にじょうとなりて
天眼てんげんを開きて見しかば母餓鬼道がきに墮ちたりき、あらあさましやといふ計りばかも
なし、餓鬼道がきに行きて飯をまいらせしかば纔わずかに口に入るかと見えしが飯變じ
て炎となり・口はかなへの如く飯ごと

は炭をおこせるが如し、身は灯炬の如くもえあがりしかば神通を現じて水を
出だして消す処に・水変じて炎となり 弥火炎のごとくも爰あがる、目連
自力には叶はざる間・仏の御前に走り参り申してありしかば、十方の聖僧を
供養し其の生飯を取りて纔に母の餓鬼道の苦をば救い給へる計りなり釈迦仏
は御誕生の後・七日と申せしに母の

摩耶夫人にをくれまいらせましき、凡夫にてわたらせ給へば母の生処を
知しめすことなし、三十の御年に仏にならせ給いて父浄飯王を現身に教化し
て証果の羅漢となし給ふ、母の御ためには 利天に昇り給いて摩耶経を説き
給いて父母を阿羅漢となしまいらせ給いぬ、此れ等をば爾前の経経の人人
は孝養の二乗孝養の仏とこそ思

い候へども、立ち還つて見候へば不孝の声聞不孝の仏なり、目連尊者程の
聖人が母を成仏の道に入れ給はず、釈迦仏程の大聖の父母を二乗の道に入

奉^{たてまつ}りて永^{よう}不^ふ成^{じやう}仏^{ぶつ}の歎^{なげ}きを深くなさせまいらせ給^{たま}いしをば・孝^{こう}養^{よう}とや申^{もう}す、
べき不^ふ孝^{こう}とや云^いうべき、而^{しか}に浄^{じやう}名^み居士^{じゆ}目^み連^{れん}を毀^{くわ}て云^いく六^{ろく}師^し外^{がい}道^{どう}が弟^で子^しな
り等^じ云^い云^い、仏^{ぶつ}自^じ身^{しん}を責^せめて云^いく我^{われ}則^{すなわ}ち
慳^{けん}貪^{どん}に墮^おちなん此^この事^{こと}は為^さだめて不可^{ふか}なり等^じ云^い云^い、然^{しか}らば目^め連^{れん}は知^しらざれば科^{とが}
浅^あくもやあるらん、仏^{ぶつ}は法^ほ華^け經^{きやう}を知^しろしめしながら生^{なま}てをはする父^{ちち}に惜^{おし}み・
死^ししてまします母^{はは}に再^{また}び値^あい奉^{たてまつ}りて説^{たま}かせ給^{たま}はざりしかば大^{だい}慳^{けん}貪^{どん}の人^{ひと}をばこ
れより外^{ぐわい}に尋^{たず}ぬべからず。

つらつら事^{こと}の心^{こころ}を案^{あん}ずるに仏^{ぶつ}は二^に百^{ひやく}五十^ご戒^{かい}をも破^{やぶ}り十^{じゆ}重^{じゆ}禁^{きん}戒^{かい}をも犯^{おか}し給^{たま}う
者^{もの}なり、仏^{ぶつ}・法^ほ華^け經^{きやう}を説^{たま}かせ給^{たま}はずば十^{じゆ}方^{ぽう}の一切^{いっさい}衆^{しゆ}生^{じやう}を不^ふ孝^{こう}に墮^だし給^{たま}ふ大^{だい}科^{かい}
まぬかれがたし、故^{ゆゑ}に天^{てん}台^{だい}大^{だい}師^し・此^この事^{こと}を宣^のべて云^いく「過^{すなわ}則^{すなわ}ち仏^{ぶつ}に属^{ぞく}す」云^い
云^い、有^{ある}人^{ひと}云^いく是^これ十^{じゆ}方^{ぽう}三^{さん}世^{せい}の御^{おん}本^{ほん}誓^{げい}に違^{いは}背^{はい}し衆^{しゆ}生^{じやう}を欺^あ誑^{じやう}すること有^あるなり
等^じ云^い云^い、夫^ふ四^し十^{じゆ}余^い年^{ねん}の大小^{だいしやう}・顕^{けん}密^{みつ}の

いっさいきよう
一切経並に真言・華嚴・三論・法相・俱舍・成実・律淨土・禪宗等の仏・
菩薩・二乗・梵釈・日月及び元祖等は法華經に随ふ事なくば何なる孝養をな
すとも我則墮慳貪の科脱るべからず、故に仏本願に趣いて法華經を説き給い
き、而るに法華經の御座には父母ましまさざりしかば親の生れてまします方便
土と申す国へ贈り給て候なり、其の御言

に云く「しかも彼の土に於いて仏の智慧を求めて是の経を聞くことを得ん」
等云云、此の経文は智者ならん人人は心をとどむべし、教主釈尊の父母の
御ために説かせ給いて候経文なり、此の法門は唯天台大師と申せし人計りこ
そ知りてをはし候ひけれ、其の外の諸宗の人人知らざる事なり、日蓮が心中
に第一と思ふ法門なり。

父母に御孝養の意あらん人人は法華経を贈り給べし、教主釈尊の父母の
御孝養には法華経を贈り給いて候、日蓮が母存生しておはせしに仰せ候し事
をもあまりにそむきまいらせて候しかば、今をくれまいらせて候が・あなが
ちにくやしく覚へて候へば一代聖教をへて母の孝養を仕らんと存じ候間、
母の御訪い申させ給う人人をば

我が身の様に思ひまいらせ候へば、あまりにうれしく思ひまいらせ候間あら
あらかきつけて申し候なり、定めて過去聖霊も忽に六道の垢穢を離れて

りようぜんじょうど

靈山浄土へ御参り候らん、

ほうもん

ちしき

あ

たま

たびたび

たま

此の法門を知識に値わせ給いて度度きかせ給うべ

にほんこく

し、日本国に知る人すくなき法門にて候ぞ、くはしくは又又申すべく候、

きようきようきんげん

恐恐謹言。

十月二十一日

にちれん
日蓮

かおう

花押

おわりぎようぶさえもんのじよう

にきうほうてへんじ

尾張刑部左衛門尉殿女房御返事

三三二一

こしよ
春麦御書

1401p

にようほう

さんけい

女房御参詣こそゆめとも・うつつとも・ありがたく候しか、心ざしいちの

もう

とうじ

はせ申す、当時の御いもふゆのたかうなのごとしあになつのゆきにことなら

む。春麦一俵・芋一籠^{かこ}・笋^{たかな}二丸^{たまい}給^{おわ}い畢^{おわ}んぬ。

五月廿八日

先ほけきよう法華經につけて御不審ふしんをたてて其趣を御尋たずね候事ことありがたき大善根ぜんこんにて
候、須弥山しゅみせんを他方たほうの世界せかいへつづてになぐる人よりも・三千大千世界さんぜんだいせんせかいをまりの
如ごとくにけあぐる人よりも無量の余の經典きよつてんを受け持たもちて人に説とききかせ聴聞ちようもん
の道俗どうぞくに六神通じんつうをえせしめんよりも、末法まつぽうのけふこのごろ法華經の一句一偈いっくいちげ
のいはれをも尋たずね問う人はありが
たし、此の趣しやくを釈たまい給いて人の御不審ふしんをはらさすべき僧もありがたかるべし
と、法華經ほけきようの四の卷宝塔品ほうとうぼんと申す処ところに六難九易なんくいうと申して大事だいじの法門ほうもん候、今・
此の御不審ふしんは六の難がたき事の内なり、爰こゝに知んぬ若もし御持たもちあらば即身成仏そくしんじようぶつの
人なるべし、此の法華經ほけきようには我等われらが身をば法身如来ほうしんにょらい・我等われらが心をば報身如来ほうしんにょらい

・我等われらがふるまひをば応身おうじん如来によらいと

説かれて候へば、此の経の一句一偈いっくいちげを持ち信ずる人は皆みな此の功德くどくをそなへ候、
南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと申すは是れ一句一偈いっくいちげにて候、然れども同じ一句の中にも
肝心かんじんにて候、南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱となうる計りにて仏になるべしやと、此の御
不審所詮ふしんしよせんに候一部いっぶの肝要かんよう八軸はちしうの骨髓こつずいにて候。

人の身の五尺六尺のたましひも一尺の面かおにあらはれ・一尺のかほのたまし
ひも一寸の眼まなこの内におさまり候、又日本にほんと申す二の文字もんじに六十六箇国じんちくの人畜じんちく
・田畠でんぱた・上下じやうげ・貴賤きせん・七珍万宝しちしんばんぼう・一もかくる事候はず収おさめて候、其そのごとく
南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうの題目だいもくの内には一部八卷・二十八品・六万九千三百八十四の
文字もんじ・一字ももれず・かけずおさめて

候、されば経には題目だいもくたり仏には眼まなこたりと楽天ものべられて候、記の八に略
して経題きやうだいを挙あぐるに玄はるかに一部を収おさむと妙楽みやうらくも釈しゃくしおはしまし候、心は略し

て經の名計りを挙ぐるに一部を収むと申す文なり、一切の事につけて所詮・
肝要と申す事あり、法華經一部の肝心は南無妙法蓮華經の題目にて候、朝夕
御唱え候はば正く法華經一部を真読

にあそばすにて候、二返とな唱うるは二部ないし乃至・百返は百部・千返は千部・加様

に不退ふたいに御唱え候はば不退ふたいに法華經を讀む人にて候べく候、天台てんだいの六十卷と

申す文には此のやうを釈しゃくせられて候、かかる持ちたもちやすく行じやすき法にて候

を末代惡世の一切衆生のために説ときをかせ給いて候、經文きやうもんに云く「於末法

中於後末世法欲滅時受持讀誦・惡世

末法時・能持是經者後・五百歲中広宣流布」と、此れ等の文の心は当時末法

の代には法華經を持ち信ほけきやうずべきよしを説かれて候、かかる明文めいぶんを学がくしあやま

りて日本にほん・漢土かんど・天竺てんじくの謗法ほうぼうの学匠達がくしやう・皆みな・念佛者ねんぶつ・真言しんごん・禅・律しやうじやうの小乘

・權教ごんきやうには

随したがい行じて法華經ほけきやうを捨てはて候ぬ、仏法ぶつぼうにまどへるをばしろしめされず、形

まことしげなれば云う事も疑うたがいひあらじと計ばかり御信用候間、をもはざるに

法華經の敵・釈迦しゃか仏の怨あだとならせ給たまいて今生こんじやうには祈しやる所願しょがんも虚むしく命なもみじ

かく後生には無間・大城をすみかとすべしと正しく經文に見えて候。

さて此の經の題目は習い読む事なくして大なる善根にて候、悪人も女人も

畜生も地獄の衆生も十界ともに即身成仏と説かれて候は、水の底なる石

に火のあるが如く百千万年くらき所にも燈を入れぬればあかくなる、世間の

あだなるものすら尚加様に不思議あり、何に況や仏法の妙なる御法の御力を

や、我等衆生・悪業・煩惱・生死・果縛の

身が、正・了・縁の三仏性の因によりて即・法・報・応の三身と顕われん事

疑ひなかるべし、妙法経力即身成仏と伝教大師も釈せられて候、心は

法華經の力にてはくちなはの竜女も即身成仏したりと申す事なり御疑候

べからず委くは見参に入り候て申すべく候と申させ給へ。

弘安元年 戊寅 七月三日

花押

日蓮

にちれん

かおう

花押

日蓮

にちれん

かおう

妙法尼御前御返事

みょうほうあまごぜんこへんじ

三三四

妙法尼御前御返事

1404p

御消息しょうそくにいわく・

めうほうれんくゑきやうを・よるひるとなへまいらせ、す
でにちかくなりて二声かうしやうとなへ、乃至ないしいきて候し時よりもなを・
いろもしろく・かたちもそむせずと云云。

法華經ほけきょうにいわく・

如是相乃至本末究竟等によぜそうないしほんまつくきよう

云云、大論だいろんにいわく・臨終りんじゅうの時・色

黒き者は地獄じごくに墮おつ・

等云云、守護經しゅごきょうにいわく・

地獄じごくに墮おつるに十五の相・餓鬼がき

に八種の相・畜生ちくしょうに五種の相ごしゆ・

等云云、天台大師てんだいだいしの摩訶止觀まかしかんにいわく・

身の黒

色じこくは地獄じごくの陰えんに譬たとつ・

等云云、夫それ以もみれば日蓮にちれん幼少ようしょうの時より

仏法ぶつぽうを学び候し

が念願ねんがんすらく人の寿命じゆみようは無常むじようなり、

出る氣いきは入る氣いきを待つ事なし風の前の露つゆ

尚たと譬たとえに

あらず、かしこきもはかなきも老いたるも若わかきも定め無き習ならいなり、

されば先臨終ますりんじゅうの事ことを習ならつて

後に他事たじを習ならつべし

と思ひて、一代いちだい聖教しょうきょうの論師ろんし

・人師にんしの書しよ釈しゃく あらあらかながへあつめて此めいきようを明鏡めいきようとして、一切いっさいの諸人しよにんの死しする時ときと並ならに臨終りんじゆうの後のちとに引き向むかえてみ候まうへばすこしもくもりなし、此の人このひとは地獄じごくに墮おち給たまう乃な至いた人天にんてんとはみへて候まうを、世間せけんの人人ひとびと・或ある師匠ししやう父母等ふぼの臨終りんじゆうの相さうをかくして西方浄土さいほうじやうどおうじやう往生おうじやうと

のみ申もうし候まう、悲かないかな師匠ししやうは惡道あくどうに墮おちて多くの苦くるしみみ・しのびがたければ、弟子でしはとどまりゐて師しの臨終りんじゆうをさんだんし地獄じごくの苦くるしみを増長ぞうちやうせしむる、譬たとへば・つみふかき者を口くちをふさいで・きうもんし・はれ物の口くちをあけずしてやま

するがごとし。

しかるに今の御消息しようそくに云いく・いきて候まうし時ときよりも・なを・いろしろく・かたちもそむせずと云いふ、天台てんだいの云いく白白はくはくは天てんに譬たとふ、大論だいろんに云いく、「赤白端正せきびやくなる者は天上てんじやうを得る」云いふ、天台大師てんだいだいし・御臨終りんじゆうの記きに云いく色白いろしろし、玄奘三蔵げんじやうさんざう

御臨終りんじゆうを記しるして云いわく色白いろしろし、一代いちだい聖教しやうきやうを定みむる名目みょうもくに云いわく「黒業くくごうは六道ろくどうにとどまり白業しやくごうは四聖ししやうとなる」此等これらの文証もんしやうと現証げんしやうをもんてかんがへて候に、此の人このひとは天てんに生はぜるか、はた又また法華經ほけきやうの名号みやうごうを臨終りんじゆうに二反にはんとなうと云云、
法華經ほけきやう

の第七の巻に云く「我滅度の後に於て応に此の經を受持すべし、是の人・仏道
に於て決定して疑有ること無けん」云云、一代の聖教いづれもいづれも
をろかなる事は候はず、皆我等が親父大聖教主釈尊の金言なり皆眞実なり
皆実語なり、其の中にをいて又小乗・大乘・顯教・密教・權大乘・
実大乘あいわかれて候、仏説と申すは二天・三仙・
外道・道士の経經にたいし候へば此等は妄語仏説は実語にて候、此の実語
の中に妄語あり実語あり綺語もあり惡口もあり、其の中に法華經は実語の中
の実語なり眞実の中の眞実なり、眞言宗と華嚴宗と三論と法相と俱舍・成実
と律宗と念仏宗と禅宗等は実語の中の妄語より立て出だせる宗宗なり、
法華宗は此れ等の宗宗には・にるべ
くもなき実語なり、法華經の実語なるのみならず一代妄語の経經すら法華經
の大海に入りぬれば法華經の御力に・せめられて実語となり候、いわうや

ほけきょう だいもく
法華經の題目をや、白粉の力は漆を變じて雪のごとく白くなす・須弥山に近
づく衆色は皆金色なり、法華經の名号を持つ人は一生・乃至・過去遠遠劫の
黒業の漆變じて白業の大善となる、いわうや無始の善根皆變じて金色となり
候なり。

しかれば故 聖靈 最後 臨終に南無妙法蓮華經と・となへさせ給いしかば、

一生乃至無始の悪業變じて仏の種となり給う、煩惱即菩提・生死即涅槃

即身成仏と申す法門なり、かかる人のえんの夫婦にならせ給へば又女人成仏

も疑なかるべし、若し此の事虚事ならば釈迦・多宝・十方分身の諸仏は

妄語の人・大妄語の人・悪人なり、一切衆生

をたばらかして地獄におとす人なるべし、提婆達多是寂光淨土の主となり

教主 釈尊は阿鼻大城のほのをにむせび給うべし、日月は地に落ち大地はく

つがへり河は逆に流れ須弥山はくだけをつべし、日蓮が妄語にはあらず

じゅっぼうさんぜ
十方三世の諸仏の妄語なりいかでか其の義候べきところをばへ候へ、委くは
見参の時申すべく候。

七月十四日

にちれんかおう
日蓮花押

みょうぼうあまごぜんもう
妙法尼御前申させ給へ

三二五

妙法比丘尼御返事

1406P

御文に云くたふかたびら一つあによめにて候女房のつたうと云云、又おは

りの次郎兵衛殿六月二十二日に死なせ給うと云云。

付法蔵經と申す經は仏・我が滅後に我が法を弘むべきやうを説かせ給いて

候、其の中に我が滅後・正法一千年が間次第に使をつかはすべし、第一は

迦葉尊者二十年第二は阿難尊者二十年第三は商那和修二十年乃至第二十三は

師子尊者なりと云云、其の第三の商那和修と申す人の御事を仏の説かせ給い

て候やうは、商那和修と申すは衣

の名なり、此の人生れし時衣をきて生れて候いき不思議なりし事なり、六道

の中に地獄道より人道に至るまでは何なる人も始はあかはだかにて候に天道

こそ衣をきて生れ候へ、たとひ何なる賢人・聖人も人に生るるならひは皆あ

かはだかなり、一生補処の菩薩すら尚はだかにて生れ給へり何かに況や其の外をや、然るに此の人は商那衣と

もう

申すいみじき衣にまとはれて生れさせ給いしが、此の衣は血もつかずけがる

事もなし、譬えば池に蓮のをひをしの羽の水にぬれざるが如し、此の人次第

に生長ありしかば又此の衣次第に広く長くなる、冬はあつく夏はうすく春は

青く秋は白くなり候し程に長者にてをはせしかば何事もともしからず、後に

は仏の記しをき給いし事た

がふ事なし、故に阿難尊者の御弟子とならせ給いて御出家ありしかば此の衣

変じて五条七条九条等の御袈裟となり候き、かかる不思議の候し故を仏の説

かせ給いしやうは、乃往過去・阿僧祇劫の当初・此の人は商人にて有り

しが、五百人の商人と共に大海に船を浮べてあきなひをせし程に海辺に重病

の者あり、しかれども辟支仏と申して貴人なり、先業にてや有りけん、病に

かかりて身やつれ心をぼれ不浄ふじょうにまとはれてをはせしを、此の商人あきひとあは

れみ奉りてねんごろに看病して生しまいらせ、不浄をすすぎすてて布の

しょうなえ

商那衣をきせまいらせてありしかば、此聖人悦びて願して云く汝我を助け

はじ

て身の恥を隠せり此の衣を今生後生の衣とせんとてやがて涅槃に入り給い

き、此の功德によりて過去・無量劫の間・人中天上に生れ生るる度ごとに、

此の衣・身に随いて離るる事なし、乃至

こんじよう

今生に釈迦如来の滅後第三の付嘱をうけて商那和修と申す聖人となり、

まところこく

摩突羅国の優留茶山と申す山に大伽藍を立てて無量の衆生を教化して仏法を

ぐつう

弘通し給いし事二十年なり、所詮商那和修比丘の一切のたのしみ不思議は皆

たまい

彼の衣より出生せりとこそ説かれて候へ。

しか

而るに日蓮は南閻浮提日本国と申す国の者なり、此の国は仏の世に出でさ

にちれん

せ給いし国よりは東に当りて二十万余里の外遥なる海中の小島なり、而るに

たまい

仏御入滅ありては既に二千二百二十七年なり、月氏・漢土の人の此の国の

にゆうめつ

すで

がっし

かんど

ひとびと

おつしゅう

人人を見候へば此の国の人の伊豆の大島奥州の東のえぞなどを見るやうに
こそ候らめ、而るに日蓮は日本国安房の国と申す国に生れて候しが、民の家

より出でて頭をそり袈裟をきたり、此の度いかにもして仏種をもうへ

しやうじ

生死を離るる身とならんと置いて候し程に、皆人の願わせ給う事なれば

あみだぶつ

阿弥陀仏をたのみ奉り幼少より名号を唱え候し程に、いささかの事ありて、

此の事を疑いし故に一の願をおこす、日本国に渡れる処の仏経並に菩薩の

にんし

論と人師の釈を習い見候はばや、又俱舎宗・成実宗・律宗・法相宗・

さんろんしゅう

三論宗・華嚴宗・真言宗法華天台宗と申す宗と

もあまた有りときく上に、禅宗・浄土宗と申す宗も候なり、此等の宗宗枝葉

をばこまかに習はずとも所詮肝要を知る身とならばやと思ひし故に、随分に

はしりまはり十二・十六の年より三十二に至るまで二十余年が間、鎌倉・

京・叡山・園城寺・高野・天王寺等の国国・寺寺あらあら習い回り候し程に

えいざん

おんじやうじ

ならめく

・一の不思議あり、我れ等が・はかなき

心に推するに仏法は唯一味なるべし、いづれもいづれも・心に入れて習ひ願

はば生死を離るべしとこそ思いて候に、仏法の中に入りて悪しく習い候ぬれ

ば謗法と申す大なる穴に墮ち入つて、十悪・五逆と申して日日・夜夜に

殺生偷盜邪淫妄語等をおかす人よりも五逆罪と申して父母等を殺す悪人よりも、比丘・比丘尼となりて身には二百五十戒をかたく持ち心には八万法蔵をうかべて候やうなる、智者聖人の一生が間に一悪をもつくらず人には仏のやうにをもはれ、我が身も又さながらに惡道にはよも墮ちじと思ふ程に、十悪・五逆の罪人よりも・つよく

地獄に墮ちて阿鼻大城を栖として永く地獄をいでぬ事の候けるぞ、譬えば人ありて世にあらんがために国主につかへ奉る程に、させるあやまちはなければども我心のたらぬ上・身にあやしきふるまひかさなるを、猶我身にも失ありともしらず又傍輩も不思議ともをもはざるに后等の御事によりてあやまつ事はなけれども自然にふるまひあしく王などに不思議に見へまいらせぬれば、謀反の者よりも其の失重し、此の身とがにかけりぬれば父母・兄弟・所従なんども又かるからざる失にをこなはるる事あり。

謗法と申す罪をば我れもしらず人も失とも思はず但仏法をならへば貴しと
のみ思いて候程に此の人も又此の人にしたがふ弟子・檀那等も無間地獄に
墮つる事あり、所謂勝意比丘・苦岸比丘などと申せし僧は二百五十戒をかた
く持ち三千の威儀を一もかけずありし人なれども、無間・大城に墮ちて出づ
る期見へず、又彼の比丘に近づきて弟子となり檀那となる人存の外に大地
微塵の数よりも多く地獄に墮ちて師と・ともに苦を受けしぞかし、此の人後世
のために衆善を修せしより外は又心なかりしかども・かかる不祥にあひて候
しぞかし。

かかる事を見候しゆへにあらあら経論を勘へ候へば、日本国の当世こそ其
に似て候へ、代末になり候へば世間のまつり事のあらきにつけても世の中あ
やうかるべき上、此の日本国は他国にもにず仏法弘まりて国をさまるべきか
と思いて候へば、中中・仏法弘まりて世もいたく衰へ人も多く悪道に墮つ

べしと見へて候、其の故は日本国は

月氏・漢土よりも堂塔等の多き中に大体は阿弥陀堂なり、其の上家ごとに

阿弥陀仏を木像に造り画像に書き人毎に六万八万等の念仏を申す、又他方を

抛うちて西方を願う愚者の眼にも貴しと見え候上、一切の智人も皆い

みじき事なりとほめさせ給う。たま

又人王五十代桓武天皇の御宇に弘法大師と申す聖人・此の国に生れて、

漢土より真言宗と申すめずらしき法を習い伝へ平城嵯峨淳和等の王の御師と

なりて東寺・高野と申す寺を建立し、又慈覚大師・智証大師と申す聖人同

じく此宗を習い伝えて叡山・園城寺に弘通せしかば日本国の山寺一同に此の

法を伝へ今に真言を行ひ鈴をふりて公家・武家の御祈をし候、所謂二階堂・

大御堂・若宮等の別当等是れなり、是れは古も御たのみある上当世の国主等

家には柱天には日月河には橋海には船の如く御たのみあり。

禅宗と申すは又当世の持斎等を建長寺等にあげめさせ給うて父母よりも重

んじ神よりも御たのみあり、されば一切の諸人頭をかたづけ手をあさふ、か

かる世にいかなればにや候らん、天変と申して彗星長く東西に渡り地天と申し

て大地をくつがへすこと大海の船を大風の時・大波のくつがへすに似たり、

たいふう

そつもく

ききん

えきびょう

かんばつ

大風吹いて草木をからし飢饉も年年にゆき疫病月月におこり大旱魃ゆきて河

でんばた

みな

か

ごと

さんさい

ひちなん

池・田畠・皆かはきぬ、此くの如く三災・七難・数十年起りて民半分

ある

ふ

ある

きようだい

ある

さいし

なげ

に減じ残りは・或は父母・或は兄弟・或は妻子にわかれて歎く声・秋の虫に

そつもく

ことならず、家家のちりうする事冬の草木の雪に・せめられたるに似たり、

きようろん

い

ほけきよう

もう

ぼつじ

是は・いかなる事ぞと経論を引き見候へば仏の言く法華経と申す経を謗し我

もち

れを用いざる国あらばかかる事あるべしと、仏の記しをかせ給いて候・御言

みことば

にすこしもたがひ候はず。

にちれんうたがい

いわ

にほん

ほけきよう

しゃかぶつ

ぼつ

うたがい

疑ふ、

又た

日蓮疑て云く日本には誰か法華経と釈迦仏をば謗すべきと疑ふ、又た

ぼつ

まさか謗する者は少少ありとも信ずる者こそ多くあるらめと存じ候、爰に此

にほんこく

あみだ

ねんぶつ

もう

そ

こんぽん

たず

どうしゆく

の日本国に人ごとに阿弥陀堂をつくり念仏を申す、其の根本を尋ねれば道緯

ぜん

ぜんどうわじよう

ほうねんしようにん

もう

い

こ

じようだいしゆう

禅師・善導和尚・法然上人と申す三人の言より出でて候、是れは浄土宗の

こんぽん

しよにん

おんし

ねんぶつ

根本今の諸人の御師なり、此の三人の念仏

を弘ひろめさせ給たまいし時にのたまはく未み有つ一人得者・千中無一・捨閉閣抛等云云、
いふところは阿弥陀仏あみだぶつをたのみ奉たてまつらん人は一切いっさいの経・一切いっさいの仏・一切いっさいの神を
すてて但阿弥陀仏・南無阿弥陀仏と申もうすべし、其その上ことに法華經ほけきようと

しゃかぶつ
釈迦仏を捨てまいらせよとすすめしかばやすきままに案もなくばらばらと付

き候ぬ、一人付き始めしかば万人・皆付き候いぬ、万人付きしかば上は国主こくしゅ

・中は大いじん臣・下は万民一人も残る事なし、さる程に此の国存の外に釈迦しゃかぶつ仏・

ほけきよう
法華經の御敵人となりぬ。

其故は「今此三界は皆是れ我が有なり其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり

しか
而も今此処は諸の患難多し唯我れ一人のみ能く救護を為す」と説いて、此の

にほんこく
日本国の一切衆生のためには釈迦しゃかぶつ仏は主なり師なり親なり、天神七代・

ちじんこだい
地神五代・人王九十代の神と王とすら猶釈迦なかしやかぶつ仏の所従なり、何かに況や其の

神と王との眷属等をや、今・日本国の

だいちさん
だいちさんがたいかいそうもく
大地山河大海草木等は皆釈尊たからの御財ぞかし、全く一分も薬師やくし仏・阿弥陀あみだぶつ仏

たぶつ
等の他仏の物にはあらず、又日本国の天神・地神・九十余代の国主並に万民ばんみん

ぎゆうば
牛馬・生いきと生る生ある者は皆教主釈尊みなきようしゆしやくそんの一子なり、又日本国の天神・地神

・諸王・万民等の天地・水火・父母・主君・男女・妻子・黒白等を弁え給う
は皆教主釈尊・御教の師なり、全く薬師・阿弥陀

等の御教にはあらず、されば此の仏は我等がためには大地よりも厚く虚空よ

りも広く天よりも高き御恩まします仏ぞかし、かかる仏なれば王臣万民俱に

人ごとに父母よりも重んじ神よりもあがめ奉るべし、かくだにも候はば何な

る大科有りと天も守護して・よもすて給はじ・地もいかり給うべからず。

然るに上一人より下万人に至るまで阿弥陀堂を立て阿弥陀仏を本尊とて

なす故に天地の御いかりあるかと見え候、譬えば此の国の者が漢土・高麗等

の諸国の王に心よせなりとも、此の国の王に背き候なば其の身はたもちがた

かるべし、今・日本国の一切衆生も是くの如し、西方の国主阿弥陀仏には心

よせなれども我国主釈迦仏に背き

奉る故に此の国の守護神いかり給うかと愚案に勘へ候、而るを此の国の人人

阿^あ弥^み陀^だ仏^{ぶつ}を・或^{ある}は金^{きん}・或^{ある}は銀^{ぎん}・或^{ある}は銅^{どう}・或^{ある}は木^{もく}画^え等^らに 志^{こころざし} を 尽^つくし 仏^{ぶつ}事^じをな
し、法^ほ華^け經^{きやう}と 釈^{しゃ}迦^か仏^{ぶつ}をば・或^{ある}は墨^{すみ}画^え・或^{ある}は木^{もく}像^{ざう}にはくをひかず・或^{ある}は草^{そう}堂^{だう}に
造^{つく}りなんどす、例^{れい}せば他^た人^{にん}をば 志^{こころざし} を 重^{かさ}ね 妻^{さい}子^しをばもてなして 父^ふ母^ぼにおろか
なるが如^{ごと}し。

又真言宗と申す宗は上一人より下万民に至るまで此れを仰ぐ事日月の如し、此れを重んずる事珍宝の如し、此の宗の義に云く大日経には法華経は二重三重の劣なり、釈迦仏は大日如来の眷属なりなんと申す此の事は弘法・慈覚・智証の仰せられし故に今四百余年に叡山・東寺・園城・日本国の智人・一同の義なり。

又禅宗と申す宗は真実の正法は教外別伝なり法華経等の経経は教内なり、譬えば月をさす指・渡りの後の船・彼岸に到りて・なにかせん月を見ては指は用事ならず等云云、彼の人人謗法ともをはず習い伝えたるままに存の外に申すなり、然れども此の言は釈迦仏をあなづり法華経を失ひ奉る因縁となりて、此の国の人人・皆一同に五逆罪にすぎたる大罪を犯しながら而も罪ともしらず。

此大科・次第につもりて人王八十二代・隠岐の法皇と申せし王並びに佐渡

の院等は我が相伝そうでんの家人にも及およばざりし、相州鎌倉そうしゅうかまくらの義時よしときと申せし人に代を取られさせ給たまいしのみならず・島島にはなたれて歎なげかせ給たまいしが・終ついには彼の島島にして隠れさせ給たまいぬ、神かみひは悪靈あくりょうとなりて地獄じごくに墮おち候いぬ、其の召仕はれし大臣だいじん已下いげは・或あるは頭こづへをはねられ・或あるは水火に入り・其の妻子等は・或あるは思い死に死に・或あるは民の妻となりて今五十余年・其外ほかの子孫は民のごとし、是れ偏こに真言ひとえしんごんと念仏ねんぶつ等をもてなして法華經ほけきょう・釈迦しやか仏の大怨敵おんてきとなりし故ゆゑに天照太神てんしやうだいじん・正八幡等しやうはちまんの天神てんじん・地祇ちぎ・十方じゆつぽうの三宝さんぽうにすてられ奉りて、現身げんしんには我が所従等しよじゆうに・せめられ後生ごしやうには地獄じごくに墮おち候ぬ。

而しかるに又代東よあずまにうつりて年をふるままに彼の国主を失うしないし、真言宗等しんごんしゆうの人人ひとびと・鎌倉かまくらに下り相州そうしゅうの足下そくげにくぐり入りてやうやうにたばかり故ゆゑに・本もとは上臈じやうろうなればとてすかされて鎌倉かまくらの諸堂しよだうの別当べつだうとなせり、又念仏者ねんぶつをば善知識ぜんちしき

とたのみて大仏・長樂寺・極樂寺等とあがめ、
禪宗をば寿福寺・建長寺等と

あがめをく、
隠岐の法皇の果報の尽き

給いし失より百千万億倍すぎたる大科鎌倉に出来せり、
かかる大科ある故に

天照太神・正八幡等の天神・地祇・釈迦・多宝・十方の諸仏・一同に大に

とがめさせ給う故に、
隣国に聖人有りて万国の兵のあつめたる大王に仰せ付

け

て、日本国の王臣万民を一同に罰せんとたくませ給うを、日蓮かねて経論を
以て勸へ候いし程に、此れを有りのままに申さば国主もいかり、万民も用ひ
ざる上、念仏者・禅宗・律僧・真言師等定めて忿りをなして・あだを存じ
王臣等に讒奏して我が身に大難おこりて、弟子乃至檀那までも少しも日蓮に
心よせなる人あらば科になし、我が身もあやうく命にも及ばんずらん、いか
が案もなく申し出すべきとやすらひし程に、外典の賢人の中にも世の
ほろぶべき事を知りながら申さぬは諛臣とて・へつらへる者不知恩の人なり、
されば賢なりし竜逢比干なんと申せし賢人は、頸をきられ胸をさかれしかど
も国の大事なる事をばはばからず申し候いき、仏法の中には仏いま
しめて云く法華經のかたきを見て世をはばかり恐れて申さずば、釈迦仏の御
敵いかなる智人・善人なりとも必ず無間地獄に墮つべし、譬へば父母を人の
殺さんとせんを・子の身として父母にしらせず、王をあやまち奉らんとする

人のあらむを、しんか臣下の身として知りながら代をおそれて申さざらんが・こと
しなんと禁られて候。

されば仏の御使たりし提婆菩薩は外道に殺され、師子尊者は檀弥羅王に頭おんつかい だいばぼさつ げどう ししそんじゃ だんみら こうべ

をはねられ、竺の道生は蘇山へ流され、法道は面になやきをあてられき、此等じくのどうしやう そざん ほうどう かお これら

は皆仏法を重んじ王法を恐れざりし故ぞかし、されば賢王の時は仏法をつよみなぶつぼう

く立つれば王両方を聞あきらめて勝れ給う智者を師とせしかば国も安穩なり、すぐ たま ちしや あんのん

所謂陳・隋の大王・桓武・いわゆる だいおう かんむ

嵯峨等は天台智者大師を南北の学者に召し合せ、最澄和尚を南都の十四人にさが てんだいちしやだいし かくしや さいちやうわじやう なんと

対論せさせて論じかち給いしかば寺をたてて正法を弘通しき、大族王・たいろん ためい しょうほう ぐつう だいぞくおう

優陀延王・武宗・欽宗・欽明・用明・或は鬼神・外道を崇重し・或は道士をうだえんおう ぶそう きんそう きんめい ようめい ある きじん げどう すうちやう ある どうし

帰依し・或はきえ ある

神を崇めし故に、釈迦仏の大怨敵となりて身を亡ぼし世も安穩ならず、其の時あがめ ゆえ しゃかぶつ おんてき あんのん そのとき

は聖人^{しょうにん}たりし僧侶^{そうりょ}大難^{だいにん}にあへり、今・日本国^{にほんこく}すでに大謗法^{ほうぼう}の国となりて他国^{たこく}にやぶらるべしと見えたり。

此^これを知りながら申^{もう}さずば縦^{たと}ひ現在^{げんざい}は安穩^{あんのん}なりとも後生^{ごしょう}には無間^{むげん}・大城^{だいじょう}に墮^おつべし、後生^{ごしょう}を恐れて申^{もう}すならば流罪^{るざい}・死罪^{しざい}は一定なりと思ひ定めて去^いぬる文応^{ぶんおう}の比故^{さいみょうじに}最明寺^{ゆうめいじ}入道殿^{にゅうだうでん}に申^{もう}し上げぬ、されども用^{もち}い給^{たま}う事なかりしか

ば、念仏者等・此の由を聞きて上下の諸人をかたらひ打ち殺さんとせし程に
かなはざりしかば、長時武蔵の守殿は極樂寺殿の御子なりし故に親の御心を
知りて理不尽に伊豆の国へ流し給いぬ、されば極樂寺殿と長時と彼の入門は皆
ほろぶるを各御覧あるべし、其の後何程もなくして召し返されて後又経文の
如く弥よ申しつよる、又去ぬる

文永八年九月十二日に佐渡の国へ流さる、日蓮御勘氣の時申せしが如くどし
うちはじまりぬ、それを恐るるかの故に又召し返されて候、しかれども用ゆる
事なければ万民も弥弥悪心盛んなり。

縦ひ命を期として申したりとも国主用いずば国やぶれん事疑なし、つみ
しらせて後用いずば我が失にはあらずと思いて、去ぬる文永十一年五月十二
日相州鎌倉を出でて六月十七日より此の深山に居住して門一町を出でず既に

五箇年をへたり。

本は房州の者にて候いしが地頭東条左衛門尉景信と申せしもの極樂寺殿・

さえもん^{にゆうとう}

藤次左衛門入道・一切の念佛者にかたらはれて度度の問註ありて・結句は合

いっさい^{ねんぶつ}

たびたび

けっく

いへんく

とうじょう

戦起りて候上・極樂寺殿の御方人理をまげられしかば東条の郡ふせがれて入

かたむね

ふほ

こくしゅ

ごかんき

る事なし、父母の墓を見ずして数年なり、又国主より御勘氣二度なり、第二

おんる

度は外には遠流と聞こへしかども内

には頸を切るべしとて、鎌倉竜の口と申す処に九月十二日の丑の時に頸の座

かまくら

もう

ところ

に引きすへられて候いき、いかがして候いけん月の如くにをはせし物江の島

ごと

より飛び出でて使の頭へかかり候いしかば、使おそれてきらず、と

い

いへん

かうせし程に子細どもあまたありて其の夜の頸はのがれぬ、又佐渡の国にて

しさい

そ

さど

きらんとせし程に日蓮が申せしが如く鎌倉にどうち始まりぬ、使はしり下

にちれん

かまくら

りて頸をきらず結句はゆるされぬ、今は此の山に独りすみ候。

けっく

ひと

さど

佐渡の国にありし時は里より遙にへだたれる野と山との中間につかはらと

はるか

ちゅうげん

申す御三昧所あり、彼処に一間四面の堂あり、そらはいたまあわず四壁はやぶれたり・雨はそとの如し雪は内に積もる、仏はおはせず筵置は一枚もなし、然れども我が根本より持ちまいらせて候・教主釈尊を立てまいらせ法華經を手ににぎり蓑をき笠をさ

して居たりしかども、人もみへず食もあたへずして四箇年なり、彼の蘇武そぶが胡国ここくにとめられて十九年が間まひ養をき雪を食としてありしが如し。

今又此山に五箇年あり、北は身延山と申して天にはしだて・南は・たかとりと申して鷄足山の如し、西はなないたがれと申して鉄門に似たり・東は天子がたけと申して富士の御山にたいしたり、四の山は屏風の如し、北に大河あり早河と名づく早き事・箭をいるが如し、南に河あり波木井河と名づく大石を木の葉の如く流す、東には富士

河北より南へ流れたりせんのはこをつくが如し内に滝あり身延の滝と申す白布を天より引くが如し此の内に狭小の地あり日蓮が庵室なり深山なれば昼も日を見奉らず夜も月を詠むる事なし峯にははかうの かまびすしく谷には波の下る音鼓を打つがごとし地にはしかざれども大石多く山には瓦礫より外には物もなし国主はにくみ給ふ

ばんみん

万民はとぶらはず冬は雪道を塞ぎ夏は草をひしげり鹿の遠音うらめしく蝉の

鳴く声かまびすし訪う人なければ命もつぎがたしはだへをかくす衣も候はざ

りつるにかかる衣を・をくらせ給えるこそいかにも申すばかりなく候へ。

見し人聞きし人だにもあはれとも申さず、年比なれし弟子つかへし下人だ

にも皆にげ失とぶらはざるに聞きもせず見もせぬ人の御志哀なり、偏に

是れ別れし我が父母の生れかはらせ給いけるか、十羅刹の人の見に入りかは

りて思いよらせ給うか、唐の代宗皇帝の代に蓬子將軍と申せし人の御子・

李如暹將軍と申せし人勅定を蒙りて

北の胡地を責めし程に、我が勢数十万騎は打ち取られ胡国に生け取られて四

十年漸くへし程に、妻をかたらひ子をまうけたり、胡地の習い生取をば皮の

衣を服せ毛帯をかけさせて候が、只正月一日計り唐の衣冠をゆるす、一

年ごとに漢土を恋いて肝をきり涙をながす、而る程に唐の軍おこりて唐の兵

胡地をせめし時ひまをえて胡地の妻子さいしをふりすてて・にげしかば、唐とうの兵は
胡地の・えびすとて捕へて頸をきらんとせし程に、とかうして徳宗皇帝とくそうてい

にまいらせてありしかば、いかに申せども聞も・ほどこせ給はずして・南の
国・呉越と申す方へ流されぬ、李如暹りじよせん歎なげいて云く進ては涼原の本郷ふるさとを見るこ
とを得ず退ては胡地の妻子に逢ふことを得ず云云、此の心は胡地の妻子さいしをも
すて又唐もうこしの古き栖すみかをも見ず・あらぬ国に流されたりと歎なげくなり、我が身に
は大忠ありしかども・かかる歎なげきあり。

日蓮にちれんも又此かくの如ごとし日本国を助けばやと思つ心に依りて申し出す程に、我
が生れし国をもせかれ又流されし国をも離れぬ、すでに此の深山みやまにこもりて
候が彼の李如暹りじよせんに似て候なり、但し本郷にも流されし処ところにも妻子さいしなけ
れば歎なげく事はよもあらじ、唯父母ただふぼのはかとなれし人人ひとびとのいかが・なるらんと
・をばつかなしとも申す計りもうなし、但うれしき事は武士ぶしの習ひ君の御為ために宇
治勢多わたを渡し前を・かけなんどして・ありし人は、たとひ身は死すれども名
を後代に挙げ候ぞかし、日蓮にちれんは法華經ほけきようのゆへに度度所をおはれ戦をし身に手

をおひ弟子等でしを殺され兩度まで遠流せられ既に頸に及べり、是れ偏に法華經の御為なり、法華經の中に仏説かせ給はく我が滅度の後・後の五百歳・

二千二百余年すぎて此の經閻浮提に流布せん時、天魔の人の身に入りかはり

て此の經を弘めさせじとて、たまたま信ずる者をば・或はのり打ち所をうつ

し・或はころしなんどすべし、其の時先さきをしてあらん者は三世十方の仏

を供養する功德を得べし、我れ又因位の難行・苦行の功德を譲るべしと説か

せ給う取意。

されば過去の不輕菩薩は法華經を弘通し給いしに、比丘・比丘尼等の智慧

かしこく二百五十戒を持てる大僧ども集まりて優婆塞・優婆夷をかたらひて

不輕菩薩をのり打ちせしかども、退轉の心なく弘めさせ給いしかば終には仏

となり給う、昔の不輕菩薩は今の釈迦仏なり、それをそねみ打ちなんどせし

大僧どもは千劫阿鼻地獄に墮ち

ぬ、彼の人人ひとびとは觀經かんきょう・阿彌陀經あみだ等の数千の經きょう・一切いっさいの仏名ぶつな・阿彌陀念仏あみだねんぶつを
申もうし法華經ほけきょうを昼夜に讀みしかども、實じつの法華經ほけきょうの行者ぎょうじゃをあだみしかば法華經ほけきょう
・念仏ねんぶつ・戒等かいとうも助け給たまはず千劫阿鼻地獄せんごうあびじごくに墮おちぬ、彼の比丘等びくは始はじには不輕ふぎょう
菩薩ぼさつをあだみしかども後ごには心を・ひるがへして、身を不輕菩薩ふぎょうぼさつに仕つかうる事
やつこの主しゅに隨したがうがごとく有ありしかども

無間地獄をまぬかれず、今又日蓮にあだをせさせ給う日本国の人人も此くの如し、此は彼には似るべくもなし彼は罵り打ちしかども国主の流罪はなし杖木瓦石はありしかども疵をかほり頸までには及ばず、是は悪口杖木は二十余年が間・ひまなし疵をかほり流罪・頸に及ぶ、弟子等は・或は所領を召され・或はろうに入れ・或は遠流し・或は其の内を出だし・或は田畠を奪ひなんどする事・夜打・強盜・海賊・山賊・謀叛等の者よりもはげしく行はる、此れ又偏に
真言・念佛者・禅宗等の大僧等の訴なり、されば彼の人人の御失は大地よりも厚ければ此の大地は大風に大海に船を浮べるが如く動転す、天は八万四千の星暉をなし昼夜に天変ひまなし、其の上日月大に變多し仏滅後既に二千二百二十七年になり候に大族王が五天の寺をやき十六の大国の僧の頸を切り武宗皇帝の漢土の寺を失ひ佛像

をくだき、日本国の守屋が釈迦仏の金銅の像を炭火を以てやき僧尼を打ちせ

めては還俗せさせし時も是れ程の彗星大地震はいまだなし、彼には百千万倍

過ぎて候大悪にてこそ候いぬれ、彼は王一人の悪心大臣以下は心より起る事

なし、又権仏と権経との敵なり僧も法華経の行者にはあらず、是は一向に

法華経の敵・王・一人のみなら

ず一国の智人並びに万民等の心より起れる大悪心なり、譬えば女人物をねた

めば胸の内に大火もゆる故に、身変じて赤く身の毛さかさまにたち五体ふる

ひ面に炎あがりかほは朱をさしたるが如し眼まろになりてねこの眼のねづ

みを見るが如し、手わななきてかしわの葉を風の吹くに似たりかたはらの人

是を見れば大鬼神に異ならず。

日本国の国主諸僧比丘比丘尼等も又是くの如し、たのむところの弥陀念仏

をば日蓮が無間地獄の業と云うを聞き真言は亡国の法と云うを聞き持斎は

天魔てんまの所為そいと云うを聞いて念珠ねんじゆをくりながら齒をくひちがへ鈴をふるにくび
をどりたり戒たもを持ちながら悪心あくしんをいだく極樂寺ごくらくの生仏りようかんしょうにんの良觀りやうくわん聖人折紙せいじんせしをさ
さかみげて上けんちようじへ訴どうりゆうしうにんへ建長寺の道隆聖人は輿ぶぎように乗りて奉行人ほうぎやうじんにひざまづく諸もろもろの五
百戒あまごぜんの尼御前等あまごぜんははくをつかひてでんそうをなす、是これ偏ひとえに法華經ほけきやうを讀みて
よまぜんどうず聞ほうねんいてきかせんちゆうむいつず善導ぜんどう・法然こうぼうが千中無じかくだるま一みなと弘法けろん・慈覺達磨等みなの皆是戲論
教外別伝きやうがいべつでんのあまきふる酒にえはせ給たまひい

てさかぐるひにておはするなり、法華^{ほつ}最^け第一^{さい}の経文^{きようもん}を見ながら大^{だい}日^{にち}経^{きよう}は
ほけきよう^{ほけきよう} ^{すく}法華^{ほつ}經^けに勝^{せん}れたり^{しゅう} 禪宗^{ざんしゅう}は最^{さい}上^{じよう}の法^{りつ}なり^{しゅう} 律宗^{りつしゅう}こそ貴^{ねん}けれ^{ぶつ}念^{ねん}仏^{ぶつ}こそ我^{われ}等^らが分^わに
はかなひたれと申^{もう}すは酒^{しゅ}に酔^える人^ににあらずや星^{せい}を見て月^{げつ}にすぐれたり石^{いし}を
見て金^{きん}にまされり東^{とう}を見て西^{せい}と云^いい天^{てん}を地^ちと申^{もう}す物^{もの}ぐるひを本^{ほん}として月^{げつ}と金^{きん}
は星^{せい}と石^{いし}とは勝^{すく}れたり東^{とう}は東^{とう}天^{てん}は天^{てん}なんど有^ありのままだに申^{もう}す者^{もの}をばあだま
せ給^{たま}はば勢^{せい}の多^たきに付^たくべきか只^{ただ}物^{もの}ぐるひの多^たく集^あまれるなり、されば此^{これ}等^ら
を本^{ほん}とせし云^いうにかひなき男^{なん}女^{にょ}の皆^{みな}地^じ獄^{ごく}に墮^おちん事^{こと}こそあはれに候^{ねはん}へ涅槃^{ぎやう}經^{きん}
には仏^と説^{たま}き給^{たま}はく末^{まつ}法^{ぽう}に入^いつて法^{ほけ}華^き經^{きよう}を謗^{ぼう}じて地^じ獄^{ごく}に墮^おちる者^{もの}は大^{だい}地^ち微^み塵^{じん}よ
りも多^たく信^{しん}じて仏^{ぶつ}になる者^{もの}は爪^{つま}の上^{のうへ}の土^{つち}よりも少^{せう}しと説^{せつ}かれたり此^これを以^{もつ}つ
て計^{けい}らせ給^{たま}うべし日本^{にほん}國^{こく}の諸^{しよ}人^{にん}は爪^{つま}の上^{のうへ}の土^{つち}日^{にち}蓮^{れん}一^{いつ}人^{にん}は十^{じゅう}方^{ぽう}の微^み塵^{じん}にて候^たべ
きか、然^{しか}るに何^{いか}なる宿^{しゆく}習^{じゆ}にてをばすれば御^ご衣^いをば送^{そう}らせ給^{たま}うぞ爪^{つま}の上^{のうへ}の土^{つち}
の数^{かず}に入^いらんとおぼすか又^{また}涅槃^{ねはん}經^{きん}に云^いく「大^{だい}地^ちの上^{のうへ}に針^{はり}を立てて

たいふう

大風の吹かん時大梵天より糸を下さんに糸のはしすぐに下りて針の穴に入る

事はありとも、末代まつだいに法華經ほけきょうの行者ぎょうじやにはあひがたし、法華經ほけきょうに云く、大海たいかいの

さんぜん

ひとたび

底に龜あり三千年に一度海上にあがる梅檀せんだの浮木うきぎの穴にゆきあひてやすむべ

し而るしかに此の龜一目なるが而も僻目ひがめにて西の物を東と見東の物を西と見るな

まつだいあくせ

ほけきょう

り、末代惡世に生れて法華經並

なむみょうほうれんげきょう

びに南無妙法蓮華經の穴に身を入るる男女なんよにたとへ給たまへり何なる過去かこの縁に

てをはすれば此の人をとふらんと思食おほしめす御心はつかせ給たまいけるやらん、法華經ほけきょう

を見まいらせ候へば釈迦しゃかぶつ仏その其の人の御身おんみに入らせ給たまいて、かかる心はつく

べしと説かれて候譬たとへばなにも思はぬ人の酒をのみてえいぬればあらぬ心

しゅつたい

出来り人に物をとらせばや・なんと思しゅつたいう心出来る、此これは一生慳貪けんどんにして

がきお

餓鬼がきおに墮つべきを其の人の酒の縁に菩薩ぼさつの入りかはらせ給たまうなり、濁水

たま

に珠たまを入れぬれば水すみ月に向いまいらせぬれば人の心あこがる、画にかけ

る鬼には心なけれどもおそろし、とわりを画にかけば我が夫をばとらねども
・そねまし、錦のしとねに蛇じゃをおれるは服せんとも思はず、身のあつきにあ
たたかなる風いとはし、人の心も此かくの如ごとし、法華經ほけきょうの方へ御心をよせさせ
給たまうは女人にょにんの御身おんみなれども竜女りゆうにょ

が御身おんみに入らせ給たまうか。

さては又尾張おわりの次郎兵衛尉ひょうえのじょう殿おんことの御事見参にちれんに入りて候いし人なり、日蓮は

此このの法門ほうもんを申し候へば他人たにんにはにず多くの人に見て候へどもいとをしと申もうす

人は千人に一人もありがたし、彼かのの人はよも心よせには思はれたらじなれども、自体人がらくにくげなるふりなく・よろづの人に・なさけあらんと思ひし人なれば、心の中は・うけずこそ・

をぼしつらめども、見参みさんの時はいつはりをろかにて有りし人なり、又女房にようぼうの

信じたるよしありしかば実まこととは思おもひ候はざりしかども、又いたう法華經ほけきょうに背そむく

事はよもをはせじなればたのもしきへんも候、されども法華經ほけきょうを失うしなふ念仏ねんぶつ・

並びならに念仏者ねんぶつを信じ我が身たぶんも多分たぶんは念仏者ねんぶつにてをはせしかば後生ごしょうはいかがと

・をぼつかなし、譬たとえば国主こくしゅは

みやづかへのねんごろなるには恩のあるもあり又なきもあり、少しもをろか

なる事候へばとがになる事 疑^{うたがい}なし、法華經も又此^こくの如^{ごと}し、いかに信ずるやうなれども法華經の御かたきにも知れ知らざれ、まじはりぬれば無間地獄^{むげんじごく}は疑^{うたがい}なし。

是はさてをき候ぬ、彼の女房^{にようぼう}の御歎^{なげ}いかかと・をしはかるに・あはれなり、

たとへば・ふじのはなのさかななるが松にかかりて思ふ事もなきに松のにはかにたふれ、つたのかきにかかれるが・かきの破^われたるが如^{ごと}くに・をぼすらん、内へ入れば主なし・やぶれたる家の柱なきが如^{ごと}し、客人来れども外に出^いでて・あひしらうべき人もなし、夜

のくらきには・ねやすさまじく・はかをみれば・しるしはあれども声もきこへず、又思ひやる死出の山・三途の河をば誰とか越え給^{たま}うらん只独^{ただひと}り歎^{なげ}き給^{たま}うらん、とどめをきし御前^{ごぜん}たち・いかに我をば・ひとりやるらん、さはちぎらざりとや歎^{なげ}かせ給^{たま}うらん、かたがた秋の夜の・ふけゆくままに冬の嵐の・を

とづるる声につけても弥いよいよ弥いよいよ御な歎なげき重おもり候まちらん、
南な無む妙みょう法ほう蓮れん華げ経きょう・南な無む

みょうほうれんげきょう

妙法蓮華経。

こうあんがんねんつちのえとら

弘安元年 戊寅 九月六日

にちれん かおう

日蓮 花押

明衣ゆかたびら一つ給たまび生にょにんんぬ、女人おんにんの御身おんみ・男にもをくれ親類しんるいをも・はなれ二人

ある・むすめもはかばかりたよす便たよりなき上・法門ほうもんの故ゆえに人にも・あだまれ

させ給たまふ女人にょにん、さながら不輕菩薩ふぎようぼさつの如ごとし、仏の御姨母おば・摩訶波闍波提比丘尼まかはじゃはだいびくに

は女人にょにんぞかし、而しかるに阿羅漢あらかんとならせ給たまいて声聞しやうもんの御名みなを得させ給たまひ

永不成仏ようふじようぶつの道に入らせ給たまいしかば、女人にょにんの姿をかへ・きさきの位を捨てて仏

の御すすめを敬うやまひ、四十余年よんじゆつよねんが程・五百戒たもを持ちて昼は道路にたたずみ・夜

は

樹下に坐してして後生うしやうをねがひしに、成仏じやうぶつの道を許ゆるされずして永不成仏ようふじようぶつのうきな

を流させ給たまいし、くちをしかりし事ぞかし、女人にょにんなれば過去遠遠劫かこおんのんこうの間有ある

に付けても無きに付けても・あだなを立てし、はづかしく口惜くちおしかりしぞかし、

其その身をいとひて形をやつし尼と成りて狭へば・かかる・なげきは離れぬと

こそ思ひしに、相違そういして二乗にじようと

なり永不成仏と聞きしは・いかばかり・あさましくをわせしに、法華經ほけきようにし

三世さんぜの諸仏しよぶつの御勸氣ごかんきを許され、一切衆生喜見仏いっさいしゆじようきけんぶつと成らせ給たまいしは・いくら

程か・うれしく悦よろこばしくをはしけん、さるにては法華經ほけきようの御為と申もうすには何いかな

る事有りとそむも背かせ給　うまじきぞかし、其に仏の言のたまわく大音声おんじようを以もつて普あまねく

四衆ししゆうに告つげたまわく誰よれか能よく此の

袈婆国土しゃばこくどに於おいて広く妙法華經みようほけきようを説みかん等云云、我も我もと思しよぶつうに諸仏しよぶつの恩を

報あまこぜんぜんと思はん尼御前女人達なにごと、何事しのをも忍めつこびて我が滅後めつこに此の袈婆世界しゃばせかいにし

て法華經ほけきようを弘ひろむべしと三箇度まで・いさめさせ給たまいしに、御用ごようひなくして他方たほう

の国土こくどに於おいて広く此の經を宣のべべんと申もうさせ給たまいしは能よく能よく不得心こころえの尼ぞか

し、幾いくくか仏ぶつ悪あくしと・をばしけん、されば仏ぶつはそばむきて八十万億邪由佗の諸しよ菩薩ぼさつをこそ・つくづくと御覽ごらんぜしか。

にょにん

じょうぶつ

されば女人は由なき道には名を折り命を捨つれども成仏の道はよはかりけるやと・をばへ候に、今末代悪世の女人と生れさせ給いて・かかるものをばえぬ島のえびすにのられ打たれ責られねび法華經を弘めさせ給う彼の比丘尼には雲泥勝れてありと仏は靈山にて御覽あるらん、彼の比丘尼の御名を一切衆生喜見仏と申すは別の事にあ

しゅじょうきけんぶつ

もう

べち

みょうほうあまこぜん

かこ

げんざい

じゅうぜん

しし

なり

十善を持つ人の名なり名は・かはれども師子の座は一也、此の名も・かはるべからず、彼の仏の御言をさがへす尼だにも一切衆生喜見仏となづけらる、是は仏の言をたがへず此の袈婆世界まで名を失ひ命をすつる尼なり、彼は養母として捨て給はず是は他人

たま

たにん

たま

へんげ

いか

しちちゅうしゅじょう

として捨てさせ給はば偏頗の仏なり、争でかさる事は候べき、況や其中衆生悉是吾子の經文の如くならば今の尼は女子なり彼の尼は養母なり、養母を捨

しつぜこし

きょうもん

こと

てずして女子を捨つる仏の御意やあるべき、此の道理を深く御存知あるべし、
しげければ・とどめ侯い畢んぬ。

みようほうあまごぜん

妙法尼御前

にちれんかおう
日蓮花押

三二七

内房女房御返事

にやうほうごへんじ

1420p

内房よりの御消息に云く八月九日父にてさふらひし人の百箇日に相当りて

しやうそく

あいあた

さふらふ、御布施料に十貫まいらせ候乃至あなかしこ・あなかしこ、御願文

ふせ

ないし

がんもん

の状に云く「読誦し奉る妙法蓮華經一部読誦し奉る方便寿量品三十巻読誦

いわ

どくじゆ

たてまつみようほうれんげきよう

どくじゆ

たてまつほうべんじゆりようほん

どくじゆ

し奉る自我偈三百巻唱え奉る妙法蓮華經の題名五万返」云云同状に云く「伏

たてまつ

じがげ

とな

たてまつみようほうれんげきよう

だいめい

いわ

して惟れば先考の幽霊生存の時弟子遙に千里の山河を凌ぎ親子妙法の題名を

おもんみ

でしはるかせんり

さんが

しの

まのあたみようほう

だいめい

受け然^しる^か後三十日を経^へずして永く一生の終りを告^ぐぐ」等云云、

又云く「嗚呼閻浮の露庭に白骨仮りに塵土と成るとも靈山の界上に亡魂・定
んで覺蕊を開かん」又云く「弘安三年女弟子大中臣氏敬白す」等云云。

夫れ以れば一乗・妙法蓮華經は月氏國にては一由旬の城に積み日本國に

ては唯八卷なり、然るに現世後生を祈る人・或は八卷・或は一巻・或は方便

壽量・或は自我偈等を誦誦し讚歎して所願を遂げ給ふ先例之多し此は且らく

之を置く、唱へ奉る妙法蓮華經の題名五万返と云云、此の一段を宣べんと思

いて先例を尋ぬるに其の例少なし、或は一返二返唱へて利生を蒙る人粗こ

れ有るか、いまだ五万返の類を聞かず、但し一切の諸法に亘りて名字あり其の

名字皆其の體徳を顯はせし事なり、例せば石虎將軍と申すは石の虎を射徹し

たりしかば石虎將軍と申す、的立の大臣と申すは鉄的を射とをしたりしかば

的立の大臣と名く、是皆名に徳を顯はせば今妙法蓮華經と申し候は一部八卷

・二十八品の功徳を五字の内に収め候、譬へば如意宝珠の玉に万の宝を収め

たるが如し、一塵に三千を尽す法門是なり、南無と申す字は敬う心なり随う

心なり、故に阿難尊者は一切經の如是の二字の上に南無等云云、

なんがくだいしいわ なむ みようほうれんげきよう

南岳大師云く南無妙法蓮華經云云、天台大師云く稽首南無妙法蓮華經云云、

あなんそんじや こくはんのう たいし きようしゆしゃくそん おんでし しゃくそん にゆうめつ

阿難尊者は斛飯王の太子・教主釈尊の御弟子なり、釈尊御入滅の後六十

日を過ぎて迦葉等の一千人・文殊等の八万人・大閼講堂にして集会し給いて

仏の別を悲しみ給ふ上、我等は多年の間・随逐するすら六十日の間の御別を

悲しむ、百年千年乃至末法は一切衆生

は何をか仏の御形見とせん、六師外道と申すは八百年以前に二天・三仙等の

説き置きたる四韋陀・十八大經を以てこそ師の名残とは伝へて候へ、いざ

さらば我等五十年が間・一切の聲聞・大菩薩の聞き持ちたる 經經を書き置

き

て未来の衆生の眼目とせんと僉議して、阿難尊者を高座に登せて仏を仰ぐ

き

き

き

き

き

き

き

き

き

き

ごと
如く、下座にして文殊師利菩薩・南無妙法蓮華經と唱へたりしかば、阿難
尊者此れを承^うけ取りて如是^{によ}が聞^{もん}と答^{こた}ふ、九百九十九人の大阿羅漢^{あらかん}等は筆を染
めて書き留^{とど}め給^{たま}いぬ、一部八卷・二十八品の功德^{くどく}は此の五^ご字^じに収^{おさ}めて候^{こう}へば
こそ文殊師利菩薩^{もんじゆしりぼさつ}かくは唱^なへさせ給^{たま}う

らめ、阿難尊者あなんそんじゃ又さぞかしとは答え給たまうらめ、又万二千のしょうもんはちまん声聞八万の大菩薩ぼさつ

二界八番のざうしゅう雜衆も有りし事なれば合点せらるらめ、天台智者大師てんだいちしやだいしと申もうす聖人しょうにん

・妙法蓮華經のみょうほうれんげきよう五字をごじ玄義げんぎ十卷・一千丁に書き給たまいて候、其の心は華嚴經はけこんきよう

八十卷・六十卷・四十卷・阿含經あこんきよう數百卷・大集方等だいしつほうとう數十卷・大品般若だいほんはんによ四十卷

・六百卷・涅槃經ねはんぎよう四十卷・三十六卷、乃至月氏ないしがっし・竜宮りゆうぐう・天上てんじよう・十方世界じゅうほうせかいの

大地微塵の一切經は妙法蓮華經の經の一字の所しよじゆう從なり、妙樂大師重みようらくだいしかさねて

十卷造る

をしゃくせん釈籤と名けたり、天台以後てんだいいごに渡りたる漢土の一切經しよきよう新訳の諸經は皆みな

法華經の眷属けんぞくなり云云、日本の伝にほん教大師重でんぎようだいしかさねて新訳の經經しんやくの中の大日經きようぎよう

等の真言しんこんの經を皆法華經の眷属けんぞくと定められ候い畢おわんぬ、但し弘法ただ・慈覺こうぼう・智証じかく

等は此の義に水すいか火なり此の義後ほほに粗書たときたり、譬たとへば五畿ごき・七道しちどう・六十六箇

国・二つの島・其その中の郡と莊と村と田と

畠ぎゆうばと人と牛馬きんぎんと金銀等は皆日本みなにほんこく国の三字の内に備りて一つも闕そなわくる事なし、

又王もつと申すは三の字を横よこしまに書いて一の字を豎たてさまに立てたり、横の三の字は

天・地・人なり、豎の一文字は王もんじなり、須弥山しゆみせんと申す山もうの大地だいちをつきとをし

て傾かざるが如ごとし、天・地・人を貫きて少しも傾かざるを王とは名けたり、

王に二つあり一には小王なり人王

天王これ是なり二には大王だいおうなり大梵天王だいぼんてんのう是なり、日本にほんこく国は大王だいおうの如ごとし国国の受領

等は小王なり、華嚴經けこんきよう・阿含經あこんきよう・方等經ほうとうきよう・般若經はんんにやきよう・大日經だいにちきよう・涅槃經ねはんきよう等の

已今当の一切經は小王なり、譬たとへば日本にほんこく中の国王受領等の如ごとし、法華經ほけきようは

大王だいおうなり天子てんしの如ごとし、然しかれば華嚴宗けこんしゅう・真言宗しんごんしゅう等の諸宗しよしゅうの人人ひとびとは国主こくしゅの内の

所しよ従等じゆどうなり、国国の民の身として天子てんしの徳を奪ひ取るは下剋上げこくじやう背上はいじやう向上じやうじやう下破げこくじやうはいじやうじやう

上下乱等じやうじやうらんどうこれなり、設たといにかに世間せけんを治めんと思ふ志しありとも国も乱れ人

も亡

びぬべし、譬^{たと}へば木の根を動さんに枝葉^{しやう}静なるべからず大海^{たいかい}の波あらからんに船おだやかなるべきや、華嚴宗^{けこんしゅう}・真言宗^{しんこんしゅう}・念仏宗^{ねんぶつしゅう}律僧^{りつそう}・禅僧等我が身^みじかいしようじき^{ちえ}持戒正直に智慧いみじく尊しといへども、其^その身既^みに下剋上^{げこくじやう}の家に生れて法華經^{ほけきやう}の大怨敵^{おんてき}となりぬ、阿鼻^{あび}大城^{だいじやう}を脱るべきや、例せば九十五種^{きゆうじゆうごしゆ}の外道^{げどう}の内には正^{しやうじき}直有智^ちの人多しといへども、一^{いつ}天三仙^{てんさん}の邪法^{じゃほう}を承^うけしかば終^{つい}には悪道^{あくどう}を脱^{のが}るる事なし。

然るに今の世の南無阿弥陀仏と申す人人、南無妙法蓮華經と申す人を・或
は笑ひ・或はあざむく、此れは世間の譬に稗の稻をいとひ家主の田苗を憎む
是なり、是国将なき時の盗人なり日の出でざる時のなり、夜打強盜の科
めなきが如く地中の自在なるが如し、南無妙法蓮華經と申す国将と日輪とに
あはば大火の水に消へ 猴が犬に値うなるべし、当時南無阿弥陀仏の人人
南無妙法蓮華經の御声の聞えぬれば、・或は色を失ひ・或は眼を瞶らし・或
は魂

を滅し・或は五体をふるふ、伝教大師云く日出れば星隠れ巧を見て拙きを知
る、竜樹菩薩云く謬辞失い易く邪義扶け難し、徳慧菩薩云く面に死喪の色有
り言に哀怨の声を含む、法歳云く昔の義虎今は伏鹿なり等云云、此等の意を
以て知ぬべし、妙法蓮華經の徳あらあら申し開くべし、毒藥変じて藥となる
妙法蓮華經の五字は悪変じて善と

なる、玉泉と申す泉は石を玉となす此の五字は凡夫を仏となす、されば過去
の慈父尊靈は存生に南無妙法蓮華經と唱へしかば即身成仏の人なり、石變
じて玉と成るが如し孝養の至極と申し候なり、故に法華經に云く「此の我が
二りの子已に仏事を作しぬ」又云く「此の二りの子は是我が善知識なり」等
云云。

乃往過去の世に一の大王あり名を輪陀と申す、此の王は白馬の鳴くを聞き
て色もいつくしく力も強く供御を進らせざれども食にあき給ふ他国の敵も胃
を脱き掌を合す、又此の白馬鳴く事は白鳥を見て鳴きけり、然るに大王の
政や悪しかりけん又過去の悪業や感じけん、白鳥皆失せて一羽もなかりし
かは白馬鳴く事なし、白馬鳴か

ざりければ大王の色も変じ力も衰へ身もかじけ謀も薄くなりし故に国既に
乱れぬ、他国よりも兵者せめ来らんに何とかせんに歎きし程に、大王の勅宣

に云く^{いわ}国には外道^{げどう}多し皆^{みな}我が^き帰依^えし奉^{たてまつ}る仏法^{ぶつぽう}も亦^{また}かくの如^{ごと}し、然^{しか}るに外道^{げどう}と
仏法^{ぶつぽう}と中惡^{なかあく}し何^{いか}にしても白馬^{はくば}を鳴^なかせん方^{はう}を信^{しん}じて一方^{いつぽう}を我が^{わが}国^{くに}に失^{うしな}ふべし
と云云^{と云云}、爾^その時^{とき}に一切^{いっさい}の外道^{げどう}集^ありて

白鳥^{はくちょう}を現^{げん}じて白馬^{はくば}を鳴^なかせんとせしかども白鳥^{はくちょう}現^{げん}ずる事^{こと}なし、昔^{むかし}は雲^{うみ}を出^だだ
し霧^{きり}をふらし風^{かぜ}を吹^ふかせ波^{なみ}をたて身^みの上に火^ひを出^だだし水^{みづ}を現^{げん}じ人^{ひと}を馬^{うま}となし
馬^{うま}を人^{ひと}となし一切^{いっさい}自在^{じざい}なりしかども、如何^{いかん}がしけん白鳥^{はくちょう}を現^{げん}ずる事^{こと}なし

かりき、爾その時に馬鳴菩薩めみょうぼさつと申もうす仏子ぶつしあり十方じゅつぱうの諸仏しよぶつに祈願きがんせしかば白鳥はくばう則すなはち
出いで来りて白馬はくば則すなはち鳴けり、大王だいおう此こを聞食きこしめし色しきも少し出いで来り力ちからも付きはたへ
もあざやかなり、又白鳥又白鳥と千ちの白鳥しゅつげん出現しゅつげんして千ちの白馬はくば一時いちじに鷄にわとりの時
をつくる様に鳴きしかば、大王だいおう此この声を聞食きこしめし色しきは日輪にちりんの如ごとし膚くは月つきの如ごとし
力ちからは那羅延ならえんの如ごとし謀ぼんのうは梵王ぼんのうの如ごとし、爾その時に綸言汗りんげんの如ごとく出いでて返かへらざれば
一切いっさいの外道等げどう其その寺を仏寺となしぬ。

今・日本国亦かくの如ごとし、此の国は始めは神代しんたいなり漸ようやく代の末になる程に
人の意曲とんじんちり貪瞋癡し・強盛きやうじやうなれば神の智浅ちしんく威いも力も少し、氏子共ししこをも守護しゆごし
がたかりしかば漸ようやく仏法ぶつぽうと申もうす大法だいぽうを取り渡わたして人の意いたちも直ただちに神も威勢強いせいか
りし程に、仏法ぶつぽうに付き謬あやまり多く出来しゅつせし故ゆゑに国あやうかりしかば、伝教大師でんぎやうだいし
・漢土かんとに渡りて日本にほんと漢土かんとと月氏がっし
との聖教しやうきやうを勸かんがへ合せて、おろかなるをば捨て賢けんきをば取り偏頗へんげもなく勸かんがへ

給いて、法華經の三部を鎮護國家の三部と定め置きて候しを、弘法大師・
慈覺大師・智証大師と申せし聖人等、或は漢土に事を寄せ・或は月氏に事
を寄せて法華經を・或は第三・第二・或は戲論・或は無明の辺域等と押
し下し給いて、法華經を真言の三部と成さしめて候
いし程に、代漸く下剋上し此の邪義既に一国に弘まる、人多く惡道に落ちて
神の威も漸く滅し氏子をも守護しがたき故に八十一乃至八十五の五主は・或
は西海に沈み・或は四海に捨てられ今生には大鬼となり後生は無間地獄に落
ち給いぬ、然りといえども此の事知れる人なければ改る事なし、今日蓮此の
事をあらあら知る故に國の恩を報ぜんとするに日蓮を怨み給ふ。
此等はさて置きぬ氏女の慈父は輪陀王の如し氏女は馬鳴菩薩の如し、白鳥は
法華經の如し白馬は日蓮が如し・南無妙法蓮華經は白馬の鳴くが如し、大王
の聞食して色も盛んに力も強きは、過去の慈父が氏女の南無妙法蓮華經の御

音を聞食して仏に成せ給ふが如し。
きこしめ たま こと

弘安三年八月十四日
こうあん

日蓮花押
にちれんかおう

白米一斗・荷みようがの子・はじかみ一つと送り給ひ候い畢おわんぬ。

仏には春の花秋の紅葉・夏の清水・冬の雪を進まいらせて候人人皆仏に成らせ

給ふ、況や上二人は寿命じゅみょうを持たせ給ひ下万民は珠たまよりも重しげくし候稻米を

法華經にまいらせ給う人争か仏に成らざるべき、其の上世間せけんに人の大事とす

る事は主君しゅくんと父母ふぼとの仰せなり、父母の仰せを背そむけば不孝の罪に墮おちて天に

捨てられ、国主こくしゅの仰せを用いざれば違勅いちよくの者と成りて命をめさる、されば我等

は過去遠遠劫より菩提ぼだいをねがひしに、或は国をすて・或は妻子さいしをすて・或は

身をすてなんどして、後生菩提ごしょうぼだいをねがひし程にすでに仏になり近づきし時は、

一乗・妙法蓮華經と申す御經に値あいまいらせ候いし時は、第六天の魔王まおうと

申す三界の主をはします、すでに此のものの仏にならんとするに二の失あり、

一には此のものを三界を出ずるならば我が所従の義をはなれなん、二には此の

もの仏になるならば此のもの

が父母・兄弟等も又娑婆世界を引き越しなん、いかがせんとて身を種種に分

けて・或は父母につき・或は国主につき・或は貴き僧となり、或は悪を

勧め・或はおどし・或はすかし、或は高僧・或は大僧・或は智者・或は持斎

等に成りて・或は華嚴・或は阿含・或は念仏・或は真言等を以て法華經にす

すめかへて・仏になさじとたばかり候なり、法華經第五

の巻には末法に入りては大鬼神第一には国王・大臣・万民の身に入りて

法華經の行者を・或は罵り・或は打ち切りて、それに叶はずんば無量無辺の

僧と現じて一切經を引いてすかすべし、それに叶はずんば二百五十戒・三千

の威儀を備へたる大僧と成りて国主をすかし国母をたばらかして、或はなが

し・或^{ある}はころしなんどすべしと説かれて候。

又七の卷の不^ふ輕^ぎ品^{ひん}・又四の卷の法師品^{ほうしほん}・或^{ある}は又二の卷の譬^ひ喩^ゆ品^{ひん}・或^{ある}は
涅槃^{ねはん}經^{ぎょう}四十卷^{しゅう}・或^{ある}は守護^{しゆご}經^{ぎょう}等に委^い細^{さい}に見^みへて候^{こう}が、当時^{とうじ}の世間^{せけん}に少^{せう}しもたが
ひ候^ひはぬ上^{するが}、駿河^{するが}の国賀島^{こくがしま}の莊^{しょう}は殊^{こと}に目の前に身^みにあたらせ給^{たま}いて覺^{おほ}へさせ
給^{たま}い候^いらん、他^た事^じには似^に候^{こう}はず、父^ふ母^ぼ国主^{こくしゅ}等の法華^{ほけきやう}經^{ぎょう}を御^ご制^{せい}止^し候^{こう}を用^{もち}い候^いは
ねば還^{かえ}つて父^ふ母^ぼの孝^{こう}養^{よう}とな^{なり}り国主^{こくしゅ}の祈^{こくしゅ}りと^{なり}候^{こう}ぞ、其^その上^{うへ}・日本^{にほん}国^{こく}はいみ
じき国^{こく}にて候^{こう}神^{しん}を敬^{うやま}ひ^{あが}むる国^{こく}なり、而^{しか}れども日蓮^{にちれん}が法華^{ほけきやう}經^{ぎょう}を弘^{くつ}通^{つう}
し候^{こう}を上^{かみ}一人^{いちにん}より下^げ万民^{ばんみん}に至^{いた}るまで御^ごあだみ候^{こう}故^{ゆえ}に、一^{いっ}切^{さい}の神^{しん}を敬^{うやま}ひ一^{いっ}切^{さい}の
仏^{ぶつ}を御^ご供^く養^{よう}候^{こう}へども其^その功^く徳^{とく}還^{かえ}つて大^{だい}惡^{あく}とな^{なり}り、やいと還^{かえ}つて惡^{あく}瘡^{そう}となる
が如^{ごと}く藥^{かえ}の還^{かえ}つて毒^{どく}となるが如^{ごと}し、一^{いっ}切^{さい}の仏^{ぶつ}神^{しん}等^{たまた}に祈^{たま}り給^{たま}ふ御^ご祈^{かえ}りは還^{かえ}つて科^{とが}
と成^すりて此^この国^{こく}既^{すで}に他^た国^{こく}の財^{たから}と成^{なり}り候^{こう}、又大^{ひと}なる人^{ひと}人^{ひと}皆^{みな}平^{へい}家^けの亡^{おわ}びしが様^{よう}に
百^{せん}千^{まん}万^{まん}億^{いっ}す^{せん}ぎて御^ご歎^{なげ}きたるべきよし、兼^{かね}てより人^{ひと}人^{ひと}に申^{もう}し聞^{きこ}せ候^{こう}畢^{おわ}んぬ、又
法華^{ほけきやう}經^{ぎょう}をあだむ人^{ひと}の科^{とが}にあたる分^{ぶん}齊^{ざい}をもつて還^{かえ}つて功^く徳^{とく}となる

分齊ぶんざいをも知らせ給たまうべし、例せば父母ふぼを殺す人は何なる大善根ぜんこんをなせども天
是これを受け給たまう事なし、又法華經ほけきょうのかたきとなる人をば父母ふぼなれども殺しぬれ
ば大罪たいざい還かえつて大善根ぜんこんとなり候、設たといじゆつぼうさんぜしよぶつの諸仏おんてきの怨敵おんてきなれども法華經ほけきょうの
一句いっくを信じぬれば諸仏しよぶつ捨て給たまう事なし、是これを以て推もつせさせ給たまへ、御使おんつかいいそぎ
候へば委くわしくは申もうさず候、又又申もうすべく候、恐恐きようきよう謹言きんげん。

八月二十二日

日蓮にちれん

花押かおう

こめ
牙一俵やいごめうりなすび等・仏前にささげ申し上候畢んぬ。

うらぼん もう

孟蘭盆と申し候事は仏の御弟子の中に目連尊者と申して、舍利弗にならび

ちえ だいいち

じんつうだいいち

もう しゅみせん

にちがつ

だいおう

さう

おみ

て智慧第一・神通第一と申して須弥山に日月のならび大王に左右の臣のごと

くにをはせし人なり、此の人の父をば吉懺師子と申し母をば青提女と申す、

そ けんどん

とが

がき

お

もくれんそんじゃ

もう

しょうだいによ

もう

其の母の慳貪の科によつて餓鬼道に堕ちて候しを目連尊者のすくい給うより

そ けんどん

とが

がき

お

もくれんそんじゃ

もう

しょうだいによ

もう

事をこりて候、其の因縁は母は餓鬼道に堕ちてなげき候けれども目連は凡夫

そ けんどん

とが

がき

お

もくれんそんじゃ

もう

しょうだいによ

もう

なれば知ることなし、幼少にして外道の家に入り四ゐ陀・十八大経

もう げどう

いっさいきよう

ようしょう

げどう

しだい

そ

じゅうはちだいきよう

もう

と申す外道の一切経をならいつくせども・いまだ其の母の生所をしらず、

そ げどう

いっさいきよう

ようしょう

げどう

しだい

そ

じゅうはちだいきよう

もう

其の後十三のとし舍利弗とともに釈迦仏にまいりて御弟子となり、見惑をだ

そ げどう

いっさいきよう

ようしょう

げどう

しだい

そ

じゅうはちだいきよう

もう

んじて初果しょかの聖人しょうにんとなり修惑しゆつを断じて阿羅漢あらかんとなりて三明をそなへ六通ろくつうを
へ給たまへり、天眼てんげんをひらいて、三千大千世界さんぜんだいせんせかいを明鏡めいきやうのかげのごとく御らむあり
しかば、大地だいちをみとおし三悪道さんあくどうを見る

事こと氷の下に候魚を朝日にむかいて我等われらがとをしみるがごとし、其その中に餓鬼がき
道どうと申もうすところに我が母あり、のむ事なし食くらうことなし、皮はきんてうをむ
しれるがごとく骨はまるき石をならべたるがごとし、頭こつへはまりのごとく頸は
いとのごとし腹は大海たいかいのごとし、口をはり手を合せて物をこへる形は・うへ
たるひるの人のかを・かけるが

ごとし、先生せんしやうの子をみて、なかとするすがた・うへたるかたちたとへを・
とるに及およばず、いかんがかなしかりけん。

法勝寺ほつしやうじの修行舜觀しゆんくわんが・いわうの嶋にながされてはだかにてかみくびつきに
うちをい・やせをとろへて海へんにやすらいてもくづをとりてこしにまき魚

を・
一
みつけて右の手にとり口にかみける時、
本つかいしわらわの

たづねゆきて見し時と、目連尊者もくれんそんじやが母を見しといづれかをろかなるべきかれ
はいますこしかなしさわまさりけん。

目連尊者もくれんそんじやはあまりのかなしさに大神通じんつうをげんじ給ひ・はん飯をまいらせたり
しかば、母よろこびて右の手にははん飯をにぎり左の手にては・はん飯をかくし
て口にをし入れ給たまいしかば、いかんがしたりけんはん飯変じて火となり・

やがてもへあがり、とうしびをあつめて火をつけたるがごとくぱともへあが
り、母の身のごことやけ候しを目連見もくれん たい給いて、あまりあわてさわぎ大神通じんつう
を現げんじて大なる水をかけ候しかば、其その水たきぎとなりていよいよ母の身の
やけ候し事こそあはれには候しが、其そのの時目連もくれんみずからの神通じんつうかなわざりし
かははしりかへり須臾しゆゆに仏

にまいりてなげき申せしやうは、我が身は外道げどうの家に生れて候しが仏おんの御弟子でし
になりて阿羅漢あらかんの身をへて、三界さんがいの生をはなれ三明六通さんみょうろくつうの羅漢らかんとはなりて候

へども、乳母の大苦をすくはんとし候にかへりて大苦にあわせて候は、心う
しとなげき候しかば、仏け説いて云く汝が母はつみふかし汝一人が力及ぶ
べからず、又何の人なりと

てんじん

も天神・地神邪魔外道道士四天王・帝釈梵王の力も及ぶべからず、七月十五

じゅつぽう

せいそう

日に十方の聖僧をあつめて百味をんじきをととのへて母のくをはすくうべし

もくれん

おお

と云云、目連仏の仰せのごとく行いしかば其の母は餓鬼道一劫の苦を脱れ給い

うらぼん

もう

きと、孟蘭盆経と申す経にとかれて候、其によつて滅後末代の人人は七月十

めつごまつだい

ひとびと

五日に此の法を行い候なり、此は常のごとし。

にちれん

いわ

もくれんそんじや

日蓮案じて云く目連尊者と申せし人は十界の中に声聞道の人・二百五十

さんぜん

いぎ

戒をかたく持つ事石のごとし、三千の威儀を備えてかけざる事は十五夜の月

ちえ

のごとし、智慧は日にたり神通は須弥山を十四さうまき大山をうごかせし

じんつう

しゆみせん

人ぞかし、かかる聖人だにも重報の乳母の恩ほうじがたし、あまさへほうぜ

しやうにん

んとせしかば大苦をまし給い^{たまひ}

き、いまの僧等の二百五十戒は名計^{ばか}りにて事をかいによせて人をたばらかし
一分^{いちぶん}の神通^{じんつう}もなし、大石の天にのぼらんとせんがごとし、智慧^{ちえ}は牛にるいし
羊にことならず、設^{たとひ}い千万人^{ばんにん}をあつめたりとも父母^{ふぼ}の一苦すくうべし

や、せんするところは目連尊者もくれんそんじゃが乳母の苦をすくわざりし事は、小乗しょうじょうの法

を信じて二百五十戒もつ じさいと申す持齋じさいにてありしゆへぞかし、されば浄名經じようみょうきやうと

申す經には浄名居士じようみょうこじと申す男目連房もくれんをせめて云く汝いわ なんじを供養くようする者は三惡道さんあくどう

に墮おつ云云、文の心は二百五十戒のたうとき目連尊者もくれんそんじゃをくやうせん人は三惡道さんあくどう

に墮おつべしと云云、此又ただ目連一人もくれん

がきくみみにはあらず、一切いっさいの聲聞しょうもん乃至末代の持齋等じさいがきくみみなり、此の

浄名經じようみょうきやうと申すは法華經ほけきやうの御ためには数十番の末への郎從ろうじゆつにて候、詮せんする

ところは目連尊者もくれんそんじゃが自身じしんのいまだ仏ぶつにならざるゆへぞかし、自身じしん仏ぶつにならず

しては父母ふぼをだにもすくいがたし・いわうや他人たにんをや。

しかるに目連尊者もくれんそんじゃと申す人は法華經ほけきやうと申す經きやうにて正直捨方便しょうじきしやほうべんとて、小乗しょうじょう

の二百五十戒立ちどころになげすて南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと申せしかば、やがて

仏ぶつになりて名号みやうごうをば多摩羅跋耨檀香たまらばせんたんこうぶつ仏ぶつと申す、此の時こそ父母ふぼも仏ぶつになり

給へ、故に法華經に云く我が願既に満ち衆の望も亦足る云云、目連が色身は父母の遺体なり目連が色身仏になりしかば父母の身も又仏になりぬ。

例せば日本国八十一代の安徳天皇と申せし王の御宇に平氏の大將安芸の守

清盛と申せし人をはしき、度度の合戦に国敵をほろぼして上太政大臣まで官

位をきわめ当今はまことなり、一門は雲客月卿につらなり、日本六十六国島

二を掌の内にかいにぎりて候いしが、人を順うこと大風の草木をなびかし

たる・やうにて候しほどに、心を

ごり身あがり結句は神仏をあなづりて神人と諸僧を手に・にぎらむとせしほ

どに、山僧と七寺との諸僧のかたきとなりて、結句は去る治承四年十二月二

十二日に七寺の内の東大寺・興福寺の両寺を焼きはらいてありしかば其の大

重罪・入道の身にかかりて・かへるとし養和元年潤二月四日身はすみのご

とく面は火のごとくすみのをこれる

がやうにて結句^{けっく}は炎身より出^いでてあつちじにに死^しににき、其^その大重罪^{じゅうざい}をば二
男宗盛^{むねもり}にゆづりしかば西海に沈^{しず}むとみへしかども東天に浮^うび出^いでて、右大将
よりとも頼朝^{よりとも}の御前^{おんまえ}に縄をつけて・ひきすへて候き、三男知盛^{とももり}は海に入りて魚の

糞となりぬ、四男重衡しげひらは其の身に縄をつけて京かまくらを引かれて結句けつくなら

ななだいじ

七大寺にわたされて、十万人の大衆ばんにん等我等が仏のかたきなりとて一刀づつ・

きざみぬ、悪の中の大悪は我が身に其その苦をうくるのみならず子と孫と末へ

七代までもかかり候けるなり、善の中の大善だいぜんも又又かくのごとし、目蓮尊者そんじゃ

ほけきよう

が法華經を信じまいらせし大善だいぜん

は我が身仏になるのみならず父母仏になり給うたま、上七代下七代上無量生下無量むりよう

生の父母等存外に仏となり給うたま、乃至・子息・夫妻・所従・檀那・無量のむりよう

しゅじよう

衆生・三惡道をはなるるのみならず皆初住・妙覺の仏となりぬ、故にゆえ

ほけきよう

法華經の第三に云く「願くは此の功德を以て普く一切に及ぼし我等と衆生と

みな

皆共に仏道を成ぜん」云云。

されば此等をもつて思うに貴女は治部殿と申す孫を僧にてもち給へりたま、此

むかい

僧は無戒なり無智なり二百五十戒一戒も持つことなし三千の威義一も持たず、

智慧^{ちえ}は牛馬^{ぎゅうば}にるいし威儀^{いぎ}は猿猴^{ましら}にて候へども、あをぐところは釈迦^{しゃか}仏^{ぶつ}ずる法^{ほけき}は法華^{ほうけ}經^{きやう}なり、例^{れい}せば・の珠^{たま}をにぎり竜^{りやう}の舍利^{せり}を戴^{たい}くがごとし、藤^ふは松^{そう}にかかりて千尋^{せんじん}をよぢ鶴^つは

羽^{たの}を恃^{たの}みて万里^{ばんり}をかける此^こは自身^{じしん}の力^{ちから}にはあらず、治部^{ちぶ}房^{ぼう}も又^{また}かくのごとし、我が身^みは藤^ふのごとくなれども法華^{ほけき}經^{きやう}の松^{しょう}にかかりて妙覺^{みやうかく}の山^{さん}にものぼりな

ん、一乗^{いちじやう}の羽^うをたのみて寂光^{じやくかう}の空^{くう}にもかけりぬべし、此^この羽^うをもつて父母^{ふぼ}・祖父^{そふ}・祖母^{そぼ}乃至^{ないし}七代^{しちだい}の末^{すえ}までもとぶらうべき僧^{そう}なり、あわれ・いみじき御^ごたからは・もたせ給^{たま}いてをはします女人^{にょにん}かな、彼の竜女^{りゆうにょ}は珠^{たま}をささげて仏^{ぶつ}となり給^{たま}ふ、此^こ女人^{にょにん}は孫^{まご}を法華^{ほけき}經^{きやう}の行者^{ぎやうじや}となして・みちびかれさせ給^{たま}うべし、事事^{じじ}そうそうにて候^{もう}へば・くはしくは申^{もう}さず、又^{また}申^{もう}すべく候^{もう}、恐^{きやう}恐^{きやう}。

七月十三日 日蓮^{にちれん}花押^{かおう}

治部^{ちぶ}殿^{だん}うばこそぜん御返^{ごへん}事^じ

三三〇

浄蓮房御書

建治元年六月

五十四歳御作

1431P

細美帷 かたびら 一つ送り給ひ候い畢んぬ、善導和尚と申す人は漢土に臨 りんし と申す

国の人なり、幼少 ようしょう の時・密州と申す国の明勝 めいしょう と申す人を師とせしが・彼の

僧は法華經 ほけきょう と浄名經 じようみきょう を尊重 そんぢゆう して我も読誦 どくじゆ し人をもすすめしかば善導 ぜんどう に

此 こ れを教ゆ、善導 ぜんどう 此 こ れを習いて師 し の如く行ぜし程 ほど に過去 かこ の宿習 しゆくじゆつ にや有りけ

ん、案じて云 いわ く仏法 ぶつぽう には無量の行 ぎやう あり機 き に随 したが いて皆利益 みなりやく あり・教 ならい いみじと・

いへども機 き にあたらずれば虚 き きがごとし、されば我 われ 法華經 ほけきょう を行 ぎやう ずるは我 われ が機 き

に叶 あ はずは・い あ かんが有 あ るべかるらん、教 きやう には依 よ るべからずと思 おも いて一切 いっさい 經 きやう

蔵 りやうげん に入り両眼 りやうげん を閉 ふ ぢて經 きやう をとる觀無量壽經 かんむりやうじゆきやう を得 え たり、披見 ひけん すれば此 こ の經 きやう に

云く、未来世の煩惱の賊に害せらるる者の為清淨の業を説く等云云、華嚴經

は二乗のため法華經・涅槃經等は五乘に・わたれども・たいしは聖人のため

なり、末法の我等が為なる經は

ただかんきよう

唯觀經にかぎれり、釈尊最後の遺言には涅槃經にはすぐべからず、彼の經

しゅじよう

には七種の衆生を列ねたり、第一は入水則没の一闍提人なり生死の水に入り

このかた

しより已来いまに出でず譬へば大石を大海に投入たるがごとし、身重くして

浮ぶことを習はず常に海底に有り此れを常没と名く、第二をば出已復没と

もうたと

申す譬へば身に力有りともしも浮ぶこ

とをならはされは出で已つて復入りぬ此れは第一の一闍提の人には有らねど

いっせんだい

も一闍提のごとし又常没と名く、第三は出已不没と申す・生死の河を出でて

より・このかた没することなし、此れは舍利弗等の声聞なり、第四は出已即

住第五は觀方・第六は浅処・第七は到彼岸等なり、第四・第五・第六・第七

住第五は觀方・第六は浅処・第七は到彼岸等なり、第四・第五・第六・第七

住第五は觀方・第六は浅処・第七は到彼岸等なり、第四・第五・第六・第七

住第五は觀方・第六は浅処・第七は到彼岸等なり、第四・第五・第六・第七

は縁覚・菩薩なり、釈迦如来世に出でさ

せ給いて一代五時の経経を説き給いて第三・已上の人人を救い給い畢んぬ、

第一は捨てさせ給いぬ、法蔵比丘阿弥陀仏此れをうけとつて・四十八願を

発して迎えとらせ給う、十方三世の仏と釈迦仏とは第三已上の一切衆生

を救い給う、あみだ網仏は第一第二を迎えとらせ給う、而るに今末代の凡夫は
第一第二に相当れり、而るを淨影大師・天台大師等の他宗の人師は此の事を
弁えずして九品の淨土に聖人も生ると思へり、りが中のりなり、一向
末代の凡夫の中に上三品は遇大始めて大乘に値える凡夫、中の三品は遇小始
めて小乗に値へる凡夫、下の三品は遇惡一生造惡無間非法の荒凡夫、臨終
の時・始めて上の七種の衆生を弁えたる智人に行きあひて岸の上の經經を
うちすてて水に溺るるの機を救はせ給う、觀經の下品下生の大惡業に南無
阿彌陀仏を授けたり、されば我れ一切經を見るに法華經等は末代の機には
千中無一なり、第一第二の我等衆生は第三已上の機の為に説かれて候、法華經
等を末代に修行すれば身は苦しんで益なしと申して善導和尚は立所に法華經
を抛げすてて觀經を行ぜしかば三昧發得して阿彌陀仏に見參して重ねて此の
法門を渡し給う四帖の疏是なり、導の云く「然るに諸仏の大悲は

苦なる者に於て心偏に常没の衆生を愍念す是を以て勸めて浄土に歸せしむ
亦水に溺るる人の如く急に須く偏に救うべし岸上の者何ぞ用いて済うことを
為さんと云云、又云く、「深心と言へるは即ち是れ深信の心なり、亦二種有
り、一には決定して自身は現に是れ罪惡生死の凡夫なり曠劫より已來常に没
し常に流轉して出離の縁有ること
無しと深信す」又云く、「二には決定して彼の阿弥陀仏の四十八願は衆生を
摂受したもつこと疑無く慮り無く彼の願力に乗ずれば定めて往生を得る
と深信す」云云、此の釈の心は上にかき顕して候・浄土宗の肝心と申すは此れ
なり、我等末代の凡夫は涅槃經の第一・第二なり、さる時に釈迦仏の教には
出離の縁有ること無し、法蔵比丘の本願にては「定得往生と知るを三心の
中の深心とは申すなり」等云云、此又導和尚の私儀には非ず、綽禪師と
申せし人の涅槃經を二十四反かうぜしが曇鸞法師の碑の文を見て立所に

涅槃經ねはんぎょうを捨てて觀經かんきょうに遷うつりて後此こうもんの法門ほうもんを導うには教しえて候らなり、鸞法師らんほつしと申まをせし人は齊せいの代しろの人ひとなり漢土かんどにては時ときに独歩どくぽの人ひとなり、初はつには四論しろんと涅槃經ねはんぎょうとををかうぜしほだが菩提流支ぼだいりゅうしと申もうす三蔵さんぞうに値あいて四論しろんと涅槃經ねはんを捨て觀經かんきょうに遷うつりておうじょう往生おうじょうをとげし人ひとなり、三代さんだいが間ま

伝え候法門なり、漢土・日本には八宗を習う智人も正法すでに過ぎて像法に入りしかば・かしこき人人は皆自宗を捨てて浄土の念仏に遷りし事此なり、日本国のいろはは天台山の慧心の往生要集此なり、三論の永観が十因・往生講の式・此等は皆此の法門をうかがい得たる人人なり、法然上人も亦爾なり云云。

日蓮云く此の義を存ずる人人等も但恒河の第一第二は一向浄土の機と云云、此れ此の法門の肝要か、日蓮・涅槃經の三十二と三十六を開き見るに第一は誹謗正法の一闡提常没の大魚と名けたり、第二は又常没其の第二の人を出ださば提婆達多・瞿伽梨・善星等なり、此れは誹謗五逆の人人なり、詮する所第一第二は謗法と五逆なり、法蔵比丘の「設い我仏を得んに十方衆生至心に信樂して我が国に生れんと欲し乃至十念して若し生ぜずんば正覺を取らじ唯五逆と誹謗正法とを除く」云云、此の願の如きんば法蔵比丘は恒河

だいいち

の第一第二を捨てはててこそ候いぬれ、導和尚の如くならば末代の凡夫

あみだぶつ

ほんがん

せんちゅうむいっ

ほけきよう

けつきよう

ふげん

ごぎやく

ひほう

阿弥陀仏の本願には千中無一なり、

ほうけき

けつぎ

たるとく

ごぎやく

ひほう

阿弥陀仏の本願には千中無一なり、

しょうほう

いちじよう

き

たまい

まつだい

ほんぶ

ため

ほけきよう

じゆつそく

正法は一乗の機と定め給いたり、

き

たまい

まつだい

ほんぶ

ため

ほけきよう

じゆつそく

じゆつしょう

ひやくそくひやくしょう

ぜんどうわじよう

十生・百即 百生なり、

もつ

善導和尚が

ぜんどうわじよう

義に付いて申す詮は私案にはあらず

あみだぶつ

むじよう

あみだぶつ

むじよう

あみだぶつ

むじよう

あみだぶつ

むじよう

阿弥陀仏は無上念王たりし時娑婆世界は

あみだぶつ

むじよう

あみだぶつ

むじよう

すで

たまい

しゃかによらい

あみだぶつ

むじよう

あみだぶつ

むじよう

あみだぶつ

已にすて給いぬ、

たまい

しゃかによらい

あみだぶつ

むじよう

あみだぶつ

むじよう

あみだぶつ

の浄土には誹謗正法と五逆と一闡提とをば迎うべからずと

ひほうしょうほう

ごぎやく

いつせんだい

あみだぶつ

むじよう

あみだぶつ

むじよう

の仏誓い給いき、

たまい

宝海梵志の願に云く、

いわ

すなわ

じゆつほうじようど

ひんずい

しゅじよう

あみだぶつ

て我当に之を度すべし」云云、

たまい

宝海梵志の願に云く、

いわ

すなわ

じゆつほうじようど

ひんずい

しゅじよう

あみだぶつ

唯我一人の経文は堅きやうに候へども

たまい

宝海梵志の願に云く、

いわ

すなわ

じゆつほうじようど

ひんずい

しゅじよう

あみだぶつ

阿弥陀仏等の諸仏・我と娑婆世界を捨てしかば

あみだぶつ

しよぶつ

あみだぶつ

あみだぶつ

あみだぶつ

あみだぶつ

あみだぶつ

あみだぶつ

教主釈尊・唯我一人と誓つ

あみだぶつ

あみだぶつ

あみだぶつ

あみだぶつ

あみだぶつ

あみだぶつ

あみだぶつ

あみだぶつ

等云云。

あみだぶつ

あみだぶつ

あみだぶつ

あみだぶつ

あみだぶつ

あみだぶつ

あみだぶつ

あみだぶつ

ただわれひとり

きようもん

あみだぶつ

あみだぶつ

あみだぶつ

あみだぶつ

あみだぶつ

あみだぶつ

あみだぶつ

唯我一人の経文は堅きやうに候へども

きようもん

あみだぶつ

あみだぶつ

あみだぶつ

あみだぶつ

あみだぶつ

あみだぶつ

あみだぶつ

阿弥陀仏等の諸仏・我と娑婆世界を捨てしかば

あみだぶつ

あみだぶつ

あみだぶつ

あみだぶつ

あみだぶつ

あみだぶつ

あみだぶつ

あみだぶつ

教主釈尊・唯我一人と誓つ

あみだぶつ

あみだぶつ

あみだぶつ

あみだぶつ

あみだぶつ

あみだぶつ

あみだぶつ

あみだぶつ

等云云。

あみだぶつ

あみだぶつ

あみだぶつ

あみだぶつ

あみだぶつ

あみだぶつ

あみだぶつ

あみだぶつ

て・すでに娑婆世界に出で給いぬる上はなにをか疑い候べき・鸞・綽・導
・心・觀・然等の六人の人人は智者なり日蓮は愚者なり非学生なり、但し上
の六人は何れの国の人ぞ三界の外の人か六道の外の人衆か、阿弥陀仏に値
奉りて出家受戒して沙門となりたる僧か、今の人人は將門・純友・清盛・義朝
等には種性

も及ばず威徳も足らず、心のがうさは申すばかりなけれども朝敵となりぬれ

ば其の人ならざる人人も将門か純友かと舌にうちからみて申せども・彼の

子孫等も・とがめず、義朝なんと申すは故右大将家の慈父なり、子を敬いま

いらせば父をこそ敬いまいらせ候べきに・いかなる人人も義朝為朝なんと

申すぞ、此れ則王法の重く逆臣の罪

のむくゐなり、上の六人も又かくのごとし、釈迦如来世に出でさせ給いて一代

の聖教を説きをかせ給う、五十年の説法を我と集めて浅深勝劣虚妄真実を

定めて四十余年は未だ真実を顕さず已今当第一等と説かせ給いしかば多宝・

十方の仏真実なりと加判せさせ給いて定めをかれて候を・彼の六人は未顕

真実の觀經に依りて皆是れ真実

の法華經を第一第二の悪人の為にはあらずと申さば・今の人人は彼にすかさ

れて数年を経たるゆへに・将門・純友等が所従等彼を用いざりし百姓等を

・或は切り・或は打ちなんどせしがごとし、彼をおそれて従いし男女は官軍に・せめられて彼の人人と一時に水火のせめに値いしなり。

今・日本国の一切の諸仏・菩薩・一切の經を信ずるやうなれども・心は彼

の六人の心なり身は又彼の六人の家人なり、彼の將門等は官軍の向はざりし

時は大將の所従知行の地且らく安穩なりしやうなりしかども違勅の責め近づ

きしかば、所は修羅道となり男子は厨者の魚をほふるがごとし、炎に入り水

に入りしなり、今・日本国も又かく

のごとし、彼の六人が僻見に依つて今生には守護の善神に放されて三災・

七難の国となり後生には一業所感の衆生なれば阿鼻大城の炎に入るべし、

法華經の第五の巻に末代の法華經の強敵を伝記し置き給えるは如六通羅漢と

云云、上の六人は尊貴なること六通を現ずる羅漢の如し。

然るに淨蓮上人の親父は彼等の人人の御檀那なり、仏教実ならば無間・

大城だいじょう 疑うたがい いなし、又君の心を演のぶるは臣おみ・親の苦をやすむるは子なり、目
尊者そんじゃは悲母ひもの餓鬼がきの苦を救い浄蔵・浄眼は慈父じふの邪見じゃけんを翻ひるがえりし給たまいき、父母ふぼ
の遺体いたいは子この色心しきしんなり、浄蓮上人じょうにんの法華經ほけきょうを持ち給たまう御功德くどくは慈父じふの御力おんちから
なり、提婆達多だいばだつたは阿鼻地獄あびじごくに墮おちしかども

てんのうによらい
天王如来の記を送り給たまいき彼は仏だいと提婆たいと同性一家なる故なり、此これは又慈父じ
なり子息しなり、浄蓮上人じょうにんの所持しよじの法華經ほけきやういかでか彼の故しよつりやう聖靈しょうりやうの功德くどくとなら
ざるべき、事多しと申せども止め畢とどんぬ三反人さんぺんに・よませて・きこしめせ、
きようきようきんげん
恐恐 謹言。

六月二十七日

日蓮にちれん

かおう

花押

返す返すするがの人人ひとびとみな同じ御心もつと申させ給たまい候へ。

三三三

新池殿御消息しんちそう

弘安二年五月こうあん

五十八歳

御作

1435p

八木三石送り給たまい候、今一乗いちじやう・妙法蓮華經みやうほうれんげきやうの御宝前ほうぜんに備へ奉たてまつりて南無なむ

妙法蓮華經と只一遍唱えまいらせ候い畢んぬ、いとをしみの御子を靈山淨土
へ決定無有疑と送りまいらせんがためなり。

そそもいんが

抑因果のことはりは華と果との如し、千里の野の枯れたる草に螢火の如く

なる火を一つ付けぬれば須臾に一草・二草・十・百・千万草につきわたりて

もゆれば十町・二十町の草木・一時にやけつきぬ、竜は一の水を手に入れ

て天に昇りぬれば三千世界に雨をふらし候、小善なれども法華經に供養しま

いらせ給いぬれば功德此くの如し、

ぶつめつ

仏滅後・一百年と申せしに月氏国に阿育大王と申せし王ましましき・一

閻浮提・八万四千の国を四分が一御知行ありき、

竜王をしたがへ鬼神を召し

仕はせ給う、六万の羅漢を師として八万四千の石塔を立て十萬億の金を仏に

供養し奉らんと誓はせ給いき、かかる大王にてをはせし其の因位の功德をた

づぬればただ土の餅一・釈迦仏に供養

し奉りし故ぞかし、釈迦^{しゃか}仏^{ぶつ}の伯父^{こくはんのう}に斛飯王^{もつ}と申す王をはします、彼の王に太子^{たいし}
あり阿那律^{あなりつ}となづく此^この太子^{たいし}生れ給^{たま}いしに御器^{ごき}一つ持^たち出^いでたり、彼の御器
に飯あり食すれば又出^いでき又出^いでき終^{つい}に飯つくる事なし、故^{ゆえ}にかの

太子たいしのをさな名をば如意にょいとなづけたり、法華經ほけきょうにて仏に成り給ふ普明如来たまたふみょうにょらいはなり、此の太子たいしの因位いんいを尋ねればうへたる世にひえの飯を辟支仏ひやくしぶつと申す僧に供養くようせし故ぞかし、辟支仏ひやくしぶつを供養する功德くどくすら此かくの如し、況や法華經ほけきょうの行者ぎょうじやを供養くようせん功德は無量無辺の仏を供養し進まいらする功德にも勝れて候なり。

そもそものにちれん にほんこく

抑日蓮は日本国の者なり、此の国は南閻浮提七千由旬の内に八万四千の

国あり・十六の大国・五百の中国・十千の小国・無量の粟散国あり、其その

中に月氏国と申す国は大国なり、彼の国に五天竺てんじくあり、其れより東海の中に

小島あり日本国是なり、中天竺てんじくよりは十万余里の東なり、

仏教は仏滅度後

正法一千年が間は天竺にとどまりて余国

にわたらず、正法一千年の末像法に入つて一十五年と申せしに漢土かんどへ渡る、

漢土に三百年すぎて百済国に渡る、百済国に一百年已上一千四百十五年と申

せしに・人王三十代・欽明天皇の御代に日本国に始めて釈迦仏の金銅の像

と一切経は渡りて候いき、今七百余年に及び候、其の間・一切経は五千余
卷・或は七千余卷なり、宗は八宗・九宗・十宗なり、国は六十六箇国・二つ
の島・神は三千余社・仏は一万余寺なり、男女よりも僧尼は半分に及べり、
佛法の繁昌は漢土にも勝れ天竺にもまされり。

但し佛法に入つて諍論あり、浄土宗の人人は阿弥陀仏を本尊とし・真言
の人人は大日如来を本尊とす・禅宗の人人は経と仏とをば闇いて達磨を本尊
とす、余宗の人人は念仏者・真言等に随へられ何れともなければども・つよき
に随ひ多分に押されて阿弥陀仏を本尊とせり、現在の主師親たる釈迦仏を闇き
て他人たる阿弥陀仏の十万億の他

国へにげ行くべきよしをねがはせ給ひ候、阿弥陀仏は親ならず主ならず師な
らず、されば一経の内・虚言の四十八願を立て給ひたりしを愚なる人人実
と思ひて物狂はしく金拍子をたたきおどりはねて念仏を申し親の国をば

いとひ出^いでぬ、来迎^{むいこう}せんと約束^{やくそく}せし阿弥陀^{あみだぶつ}仏^{ぶつ}の約束^{やくそく}の人は来らず中有^{ちゅうう}のたび
の空^{まよ}に迷^{まよ}いて謗法^{ほうぼう}の業^{ごう}にひかれて三悪道^{さんあくどう}と申^{もう}す獄屋^{ごく}へおもむけば・獄卒^{ごくそつ}・
阿防^{あぼう}・羅刹^{らせつ}悦^{よろこ}びをなし・とらへからめてさひなむ事限^{こと}りなし、これをあらあ

きようもん

まか

にほんこく

なんよ

ら經文に任せてかたり申せば日本國の男女四十九億九万四千八百二十八人ま
しますそれがしが某一人を不思議なる者に思いて余の四十九億九万四千八百二十七

みな

人は皆敵と成りて、主師親のしゅししん 釈尊しゃくそんをもちひぬだに不思議なるに、かへりて・或

ある

はのり・或はうち・或は処ところを追ひ・或は讒言ざんげんして流罪るざいし死罪しざいに行はるれば、

ある

貧なる者は富めるをへつらひ賤いやしき者は貴かうきを仰あおぎ無勢は多勢にしたがう事な

たまたまほけきよう

れば、適たまたま法華經を信ずる様なる人人も世間せけんをはばかり人を恐れて多分たぶん

じごく

は地獄じごくへ墮おつる事不便ふびんなり、但し日蓮ただが愚眼にちれんにてやあるらん又宿習ぐがんにてや

ほけきようさいだいいちいこんとう

候らん法華經最第一已今当說難信難解唯我一人能為救護と説かれて候文は

によらい

如来きんげんの金言あえてなり敢て私の言にはあらず、当世とうせの人は人師にんしの言を如来によらいの金言きんげんと

あるほけきよう

打ち思ひ・或法華經に肩を並べて齊ひとしと思ひ・或は勝あるれたり・或は劣すぐるなれ

き

ども機きにかなへりと思へり、し

によらい

しうきよう

ずいたいずいじい

もう

たと

かるに如来の聖教しうきように隨他意隨自意と申す事あり、譬たとえば子の心に親したがの隨したがう

をば随ず他いた意いと申もうす親おやの心こころに子この随したがうをば随ず自じ意いと申もうす、諸しよ經きやうは随ず他いた意いなり仏ぶつ・一切いつさい衆しゆ生じやうの心こころに随したがひ給たまふ故ゆゑに、法ほ華け經きやうは随ず自じ意いなり一切いつさい衆しゆ生じやうを仏ぶつの心こころに随したがへたり、諸しよ經きやうは仏ぶつ説せつなれども是これを信しんずれば衆しゆ生じやうの心こころにて永とこく仏ぶつにならず、法ほ華け經きやうは仏ぶつ説せつなり仏ぶつ智ちなり一字一点

も是これを深ふかく信しんずれば我われが身み即すなはち仏ぶつとなる、譬たとえば白しろ紙しを墨すみに染そむれば黒くろくなり

うゑし

こと

しゆじやう

黒くろ漆しつに白しろき物ものを入いるれば白しろくなるが如ごとし毒どく藥やく變かじて藥やくとなり衆しゆ生じやう變かじて仏ぶつ

となる故ゆゑに妙めう法ほうと申もうす、然しかるに今いまの人人ひとびとは高たかきも賤いやしきも現げん在ざいの父ふたる釈しゃ迦か仏ぶつ

をばかろしめて他人たにんの縁えんなき阿あ弥み陀だ・大だい日にち等を重おもんじ奉たてまつるは是これ不ふ孝こうの失とがに

あらずや是これ謗ほう法ぼうの人ひとにあらず

や、と申まをせば日に本ほん國こくの人ひと・一ひと同どうに怨あだませ給たまうなり、其それもことはりなりまが

れる木きはすなをなる繩しなをにくみいつはれる者ものはただしき政せいりごとをば心こころにあ

はず思おもうなり。

我が朝人王九十一代いちだいの間に謀叛むほんの人人ひとびとは二十六人なり、所謂いわず大山の王子みこ・大石の丸ななし・乃至将門なにしすみとも悪左府等なり、此等これらの人人ひとびとは吉野とつ河の山林さんりんにこもり筑紫つくし・鎮西の海中かいちゆうに隠るれば・島島のえびす浦浦のもののふどもうたんとす、然れどもそれは貴き聖人とうと・山山・寺寺・社の法師ほうし・尼女人にょにんはいたう敵にちれんと思ふ事なし、日蓮をば

上下じょうげの男女なんよ・尼ひ・法師ほっし貴きき聖人しょうにんなんと伝ひとびとはるる人人ことは殊ことに敵てきとなり候こう、
其そのの故ゆえはいづれも後生ごしょうをば願かんへども男女なんよよりは僧尼そうにこそ願かんふ由よしはみえ候こうへ、
彼等かれらは往生おうじょうはさてをきぬ今生こんじょうの世よをわたるなかだちとなる故ゆゑなり、智者ちしや
聖人しょうにん又また我好我勝わががたりと申し本師もんしの跡あとと申し・所領しりょうと申し・名聞みょうもん利養りようを重しげく
して・まめやかに道心どうしんは軽かるし、仏法ぶつぽうはひがさま
に心得こころえて愚癡ぐちの人ひとなり、謗法ぼうぼうの人ひとなりと言ことをも惜おしまず人ひとをも憚はばからず、当知ちやうち是こゝろえ
人ひと、仏法ぶつぽう中怨ちゅうおんの金言きんげんを恐おそれて我是せそん世尊せそん使処衆無所畏しそんと云いう文ぶんに任まかせていたく
せむる間かん・未得みとく謂い為得がまん・我慢がまん心しん充満じゅうまんの人人ひとびと争いかにくみ嫉やうまざらんや。
されば日蓮にちれん程てんじん天神てんじん七代ちしちだい・地神ちじん五代ごだい・人王じんおう九十くじゅう余代よだいにいまだ此これ程ほけき法華經ぼうけきの
故ゆゑに三類さんるいの敵人てきじんにあだまれたる者ものなきなり、かかる上下じょうげ万人ばんにん・一同いつどうのにくま
れ者ものにて候こうに此これまで御渡りわた候こういし事ことおぼろげの縁ゆかりにはあらず宿世すくせの父母ふぼか
昔きやうだいの兄弟きやうだいにて・おはしける故ゆゑに思おもひ付つかせ給たまつか、又過去かこに法華經ほけきの縁ゆかり深く

して今度このたび仏にならせ給たまうべきたねの熟せるかの故ゆえに在俗ざいぞくの身として世間せけんひまなき人の公事くじのひまに思い出ださせ給たまいけるやらん。

其その上遠江の国より甲州波木井はきりの郷身延山へは道三百余里に及べり、宿宿

のいぶせさ嶺に昇れば日月にちがつをいただき・谷へ下れば穴へ入るかと覚おぼゆ、河の

水は矢を射るが如ごとく早し大石ながれて人馬むかひ難がたし、船あやうくして紙を

水にひたせるが如ごとく、男は山かつ女は山母ごもの如し、道は縄ごの如くほそく・木

は草くさの如くしげし、かかる所へ

尋たずね入らせ給たまいて候事・何いかなる宿習しゆくじゅうなるらん、釈迦しゃかぶつ仏は御手みてを引き帝釈たいしゃくは

馬ばとなり梵王ぼんのうは身に随したがひ日月にちがつは眼まなことなりかはらせ給たまいて入らせ給たまいけるに

や、ありがたしありがたし、事多しと申せども此の程風おこりて身苦しく候

間留とどめ候い畢おわんぬ。

弘安二年己卯五月二日

日蓮にちれん

花押 か
おう

新池殿御返事 ご
へん
じ

うれしきかな末法流布に生れあへる我等かなしきかな今度此の経を信ぜざる人々、抑人界に生を受くるもの誰か無常を免れん、さあらんに取つては何ぞ後世のつとめをいたさざらんや、倩世間の体を観ずれば人皆口には此の経を信じ手には経巻をにぎるといへども経の心にそむく間惡道を免れ難し、譬えば人に皆五臓あり一臓も損ずれば其の臓より病出て来て余の臓を破り終に命を失うが如し、爰を以て伝教大師は「法華経を讃すと雖も還つて法華の心を死す」等云云、文の心は法華経を持ち読み奉り讃むれども法華の心に背きぬれば還つて釈尊・十方の諸仏を殺すに成りぬと申す意な

り、終に世間の惡業衆罪は須弥の如くなれども此の經にあひ奉りぬれば・
諸罪は霜露の如くに法華經の日輪に値い奉りて消ゆべし、然れども此の經の
十四謗法の中に一も二もをかしめれば

其の罪消えがたし、所以は何ん一大三千界のあらゆる有情を殺したりとも
争か一仏を殺す罪に及ばんや、法華の心に背きぬれば十方の仏の命を失ふ罪
なり、此のをきてに背くを謗法の者とは申すなり、地獄おそるべし炎を以て
家とす、餓鬼悲むべし飢渴にうへて子を食ふ、修羅は鬪諍なり畜生は殘害
とて互に殺しあふ、紅蓮地獄と申す

はくれなゐのはちすとよむ、其の故は余りに寒につめられてここむ問せなか
われて肉の出でたるが紅の蓮に似たるなり、況や大紅蓮をや、かかる惡所に
ゆけば王位將軍も物ならず獄卒の呵責にあへる姿は猿をまはすに異ならず、
此の時は争か名聞名利・我慢偏執有るべきや。

思食すべし法華經をしれる僧を不思議の志にて一度も供養しなば惡道に
行くべからず、何に況や十度・二十度乃至・五年・十年・一期生の間供養せ
る功德をば仏の智慧にても知りがたし、此の經の行者を一度供養する功德は
釈迦仏を直ちに八十億劫が間無量の宝を尽して供養せる功德に百千万億勝れ
たりと仏は説かせ給いて候、此の經にあひ奉りぬれば悦び身に余り左右の眼
に淚浮びて釈尊の御恩報じ尽しがたし、かやうに此の山まで度度の御供養は
法華經並に釈迦尊の御恩を報じ給うに成るべく候、彌はげませ給うべし懈る
ことなかれ、皆人の此の經を信じ始むる時は信心有る様に見え候が中程は信心
もよはく僧をも恭敬せず供養をもなさず自慢して惡見をな
す、これ恐るべし恐るべし、始より終りまで彌信心をいたすべしさなくし
て後悔やあらんずらん、譬えば鎌倉より京へは十二日の道なり、それを十一
日余り歩をはこびて今日に成りて歩をさしをきては何として都の月をば

詠め候べき、何としても此の經の心をしれる僧に近づきいよいよ 弥法どつりの道理を聴聞ちようもん
して信心しんじんの歩を運ぶべし。

噫す過ぎし方の程なきを以て知んぬ我等われらが命今幾程もなき事を春の朝に花をな
がめし時ともなひ遊びし人は花と共に無常むじようの嵐に散りはてて名のみ残りて
其その人はなし花は散りぬといへども又こん春もひら発くべしされども消えにし人
は亦またいかならん世にか来るべき秋の暮に月を詠めし時戯れむつびし人も月と
共に有為ういの雲に入りて後面影ばかり身にそひて物いふことなし月は西山にしやまに入
るといへども亦またこん秋も詠むべし然れどもかくれし人は今いづくに

か住みぬらんおぼつかなし無常むじようの虎のなく音は耳にちかづくといへども聞い
て驚くことなし屠所とじよの羊の今幾日か無常むじようの道を歩まん雪山せつせんの寒苦鳥は寒苦に
・せめられて夜明なば栖つくらんと鳴くといへども日出いでぬれば朝日のあた
たかなるに眠り忘れて又栖をつくらずして一生むなし虚く鳴くことを一切衆生も

亦復またかくのごと是じくの如ごとくし地獄おに墮おちて炎えんに

むせぶ時は願このたびにんげんくは今度人間にんげんに生しよれて諸事しよじを闇くらひて三宝さんぼうを供養くようし後世ごしやう菩提ぼだいをた

すからんと願にんげんへどもたまたま人間にんげんに來る時は名聞みやうもん名利みやうりの風ふうはげしく仏道ぶつどう

しゆぎよう

修行しゆぎようの灯とうは消えやすし、無益むやくの事ことには財宝たからをつくすにおしからず、仏法僧ぶつぼう

にすこしの供養くようをなすには是これをものうく思ふ事ことこれただことにあらず、地獄じごく

の使つかのきをふものなり寸善尺魔もうと申もうすは是これなり、其その上うへ此この国こくは謗法ぼうぼうの土つちな

れば守護しゆごの善神ぜんじんは法味ほうみにうへて社やしろをすて天あまに上あがり給たまへば社やしろには惡鬼あくき入いり

かはりて多くの人を導く、仏陀化をやめて寂光土へ帰り給へば堂塔寺社は徒に魔縁の栖と成りぬ、国の費民の歎きにていらかを並べたる計りなり、是れ私の言にあらず経文にこれあり習ふべし。

諸仏も諸神も謗法の供養をば全く請け取り給はず況や人間としてこれをうくべきや、春日大明神の御託宣に云く飯に銅の炎をば食すとも心穢れたる人の物をうけじ、座に銅の焰には坐すとも心汚れたる人の家にはいたらじ、草の廊・萱の軒にはいたるべしと云へり、縦令千日のしめを引くとも不信の所には至らじ、重服深厚の家なりとも有信の所には至るべし云云、是くの如く善神は此の謗法の国をばなげきて天に上らせ給いて候、心けがれたると申すは法華經を持たざる人の事なり、此の經の五の巻に見えたり、謗法の供養をば銅焰とこそおほせられたれ、神だにも是くの如し況や我等凡夫としてほむらをば食すべしや、人の子として我が親を殺したらんものの我に物をえさせ

んに是これを取るべきや、いかなる智者聖人ちしやしうにんも無間地獄むげんじごくを遁のがるべからず、又それにも近づくべからず

与よ同罪どうざい恐るべし恐るべし。

釈尊しゃくそんは一切いっさいの諸仏しよぶつ・一切いっさいの諸神人天大会しよにんてんたいえい一切衆生の父いっさいしゆじうなり主しよなり師しなり、

此しの釈尊しゃくそんを殺ころしたらんに争いかでか諸天善神等しよてんぜんじんうれしく思食おほしめすべき、今・此の国の

一切いっさいの諸人しよにんは皆釈尊みなしゃくそんの御敵みなりなり、在家ざいけの俗男ぞくなん・俗女等ぞくじよよりも邪智心じゃちしんの法師ほふしは

らは殊ほかの外ほかの御敵みなりなり、智慧ちえに於おいても正智しやちあり邪智じゃちあり智慧ちえありとも其その邪義じゃぎ

には随したがふべからず、貴僧きそう・高僧かうそう

には依よるべからず、賤いやしき者ものなりとも此の経きやうもんの謂いわれを知りたらんものをば生身しやうしん

の如来にょらいのごとくに礼拝供養らいはいくやうすべし是れ经文きやうもんなり、されば伝でんぎ教大師きやうだいしは無智破戒むちはいかい

の男女等なんよも此の経を信しんぜん者は小乘しやうじやう二百五十戒にひゃくごじふごの僧そうの上に座席ざせきに居すえよ末座まつざ

すべからず況や大乘だいじやう此の経の僧をやとあそばされたり、今生身こんじやうの如来にょらいの如く

にみえたる極樂寺の良觀房りようかんより

も此の經を信じたる男女なんよは座席ざせきを高く居することこそ候へ、彼の二百五十戒の

りようかん

良觀房も日蓮にちれんに会いぬれば腹をたて眼まなこをいからす是ただごとにはあらず、

ちしや

智者の身に魔の入りかはればなり、譬たとえば本性よき人なれども酒に酔い

ぬればあしき心出来し人の為にあしきが如し、
仏は法華以前の迦葉・舍利弗
・目連等をば是を供養せん者は三惡道に墮つべし、
彼が心は犬野干の心には
劣れりと説き給いて候なり、
彼の四大声聞等は二百五十戒を持つことは金剛
の如し・三千の威儀具足する事は十五夜の月の如くなりしかども・
法華經を
持たざる時は是くの如く仰せられたり、
何に況やそれに劣れる今時の者共を
や。

建長寺・円覺寺の僧共の作法戒文を破る事は大山の頽れたるが如く・
威儀
の放埒なることは猿に似たり、
是を供養して後世を助からんと思ふは・
はかなし・
はかなし、
守護の善神此の国を捨つる事疑あることなし、
昔釈尊の
御前にして諸天善神・菩薩・声聞・異口同音に誓をたてさせ給いて若し
法華經の御敵の国あらば・
或は六月に霜霰と成りて国を飢饉せさせんと
申し、
或は小虫と成りて五穀をはみ失はんと申し、
或は旱魃をなさん・
或

は大水と成り

て田園をながさんと申し、・或は大風と成りて人民を吹き殺さんと申し、・或

は悪鬼と成りてなやまさんと面面に申させ給ふ、今の八幡大菩薩も其の座に

おはせしなり争か靈山の起請の破るるをおそれ給はざらん、起請を破らせ

給はば無間地獄は疑なき者なり恐れ給うべし恐れ給うべし、今までは正く

仏の御使出世して此の経を弘めず国主もあながちに御敵にはならせ給はず但

いづれも貴しとのみ思ふ計りなり。

今某仏の御使として此の経を弘むるに依りて上一人より下万民に至るま

で皆謗法と成り畢んぬ、今までは此の国の者ども法華経の御敵にはなさじと

一子のあひにくの如く捨てかねて・おはせども・靈山の起請のおそろしさに

社を焼き払いて天に上らせ給いぬ、さはあれども身命をおしまぬ法華経の

行者あれば其の頭には住むべし、天照太神・八幡大菩薩・天に上らせ給は

ば其^その余^{しよ}の諸^{いか}神^{とど}争^たか社^{おほしめ}に留^りるべき、縦^たひ捨^りてじと思^{おほしめ}食^りすとも靈^り山^{よう}のやくそ
くのままに某^{それがしかしやく}呵^た責^とし奉^らば一日^{いちにち}もやはか・おはすべき、譬^{たと}えば盜^{ぬす}人^{びと}の候^{とき}に
知^しれぬ時^{とき}は・かしこやここに住^すみ候^{とき}へども能^よく案^{あん}内^{ない}知^しりたる者^{もの}の是^こそ盜^{ぬす}人^{びと}
とののしりどめけば・おもはぬ外^{そと}に栖^すみか^かを去^さるが如^{ごと}く、某^{それがし}にささへられて社^{しゃ}
を

ば捨て給ふ、然るに此の国思いの外に悪鬼神の住家となれり哀なり哀なり。

又一代聖教を弘むる人多くおはせども是れ程の大事の法門をば伝教天台

もいまだ仰せられず、其も道理なり末法の始の五百年に上行菩薩の出世あつ

て弘め給ふべき法門なるが故なり、相構へていかにしても此の度此の経を能く

信じて命終の時千仏の迎いに預り靈山浄土に走りまいり自受法樂すべし、

信心弱くして成仏ののびん時・

某をうらみさせ給ふな、譬えば病者に良薬を与ふるに毒を好んでくひぬれ

ば其の病愈えがたき時・我がとがとは思はず還つて医師を恨むるが如くなる

べし、此の経の信心と申すは少しも私なく経文の如くに人の言を用ひず法華

一部に背く事無ければ仏に成り候ぞ、仏に成り候事は別の様は候はず、南無

妙法蓮華經と他事なく唱へ申して

候へば天然と三十二相・八十種好を備うるなり、如我等無異と申して釈尊程

の仏にやすやすと成り候なり、たと譬えば鳥の卵は始は水なり其の水の中より誰
か・なすとも・なけれども觜よ目よとかさ齧り出来て虚空こくうにかけるが如し、我
等も無明むみょうの卵にして・あさましき身なれども南無妙法蓮華經の唱への母にあ
たためられ・まいらせて三十二相の觜出でて八十種好の鎧毛生そろひて実相
真如しんにょの虚空こくうにかけるべし、爰を以て經に云く「一切衆生は無明の卵に処して
智慧ちえの口ばしなし、仏母の鳥は分段同居の古栖すみかに返りて無明の卵をたたき破
りて・一切衆生の鳥をすだてて法性真如の大虚にとばしむ」と説けり取意。
有解無信げなとて法門ほうもんをば解りて信心しんじんなき者は更に成仏じょうぶつすべからず、有信無解
とて解はなくとも信心しんじんあるものは成仏じょうぶつすべし、皆此の經の意なり私の言には
あらずされば一の巻には「信を以て入ることを得・己が智分に非ず」とて
智慧第一ちえ だいいちの舍利弗しゃりほつも但此の經を受け持ち信心強盛しんじんこうじょうにして仏になれり己が智慧
にて仏にならずと説き給へり、と

舍利弗しやりほつだにも智慧ちえにては仏にならず、況や我等衆生われらしゆじょう少分の法門ほうもんを心得たりとも信心しんじんなくば仏にならんことおぼつかなし、末代まつだいの衆生しゆじょうは法門ほうもんを少分こころえ僧をあなづり法をいるかせにして惡道あくどうにおつべしと説き給たまへり、法を

こころえたる・しるしには僧を敬うやまひ法をあがめ仏を供養くやうすべし、今は仏ましまさず解悟の智識を仏と敬ふべし争いかでか徳分なからんや、後世ごしやうを願はん者は名利名聞みよりみようもんを捨てて何に賤いかしき者なりとも法華經ほけきやうを説かん僧を生身しやうしんの如来にやらいのごとく如くに敬ふべし、是れ正まさしく經文きやうもんなり。

今時の禅宗ぜんしゆづは大段仁義礼智信の五常ごじやうに背けり、有智うちの高徳こうとくをおそれ老いたるを敬うやまひ幼きを愛するは内外典ないげてんの法なり、然るを彼の僧家の者を見れば昨日うけ・今日まで田夫野人にして黒白くくびやくを知らざる者も・かちんの直綴ちくじやくをだにも著つればうち慢まんじて天台てんだい・真言しんこんの有智高徳うちこうとくの人をあなづり礼をもせず其その上に居らんと思ふなり、是れ傍若無人こにして畜生ちくしやうに劣れり、爰ここを以て伝教大師でんぎやうだいしの御釈いわに云く川獺祭魚いかわのこころざし・林鳥父祖りんとうの食を通ず鳩鵲きゆうじやく三枝さんしの礼あり行雁連こうがんづらを乱みだらず・羔羊踞こうやうすくまりて乳を飲む・賤いやしき畜生ちくしやうすら礼を知ることかくのこと是くの如し、何ぞ人倫なんじんりんに於おいて其の礼なからんやとあそばされたり取意かれら、彼等が法まよひに迷

ふ事道理なり、人倫にしてだにも知らず是れ天魔破旬のふるまひにあらずや。

是等の法門を能く能く明らめて一部八巻・廿八品を頭にいただき懈らず行ひ

給へ、又某を恋しくおはせん時は日々に日を拝ませ給へ・某は日に一度

・天の日に影をうつす者にて候、此の僧によませまひらせて聴聞あるべし、

此の僧を解悟の智識と憑み給いてつねに法門御たづね候べし、聞かずんば

争か迷闇の雲を払はん足なくして争か千里の道を行かんや、返す返す此の書

をつねによませて御聴聞あるべし、事事面の次を期し候間・委細には申し述

べず候、
六賢六賢、

弘安三年二月 日

日蓮 御判

新池殿

三三三三

船守弥三郎許御書

弘長元年六月四十歳御作

1445p

わざと使を以てちまきさけほしひさんせうかみしなじな給侯い畢んぬ、又
つかひ申され侯は御かくさせ給へと申し上げ侯へと日蓮心得申べく侯、日蓮
いぬ さつき 去る五月十二日流罪の時その津につきて供しに・いまだ名をもききをよびま
いらせず侯ところに・船よりあがりくるしみ侯いきところに・ねんごろにあ
たらせ給い侯し事は・いかなる宿習なるらん、過去に法華經の行者にて・
わたらせ給へるが今末法にふなもりの弥三郎と生れかわりて日蓮をあ
われみ給うか、たとひ男は・さも・あるべきに女房の身として食をあたへ
洗足てうづ其の外さも事ねんごろなる事・日蓮はしらず不思議とも申すばか

りなし、ことに三十日あまりありて内心ないしんに法華經ほけきようを信じ日蓮にちれんを供養くようし給たまう事
いかなる事のよしなるや、かかる地頭じとう・万民ばんみん・日蓮にちれんをにくみねだむ事・鎌倉かまくら
よりもすぎたり、みるものは目をひき・

きく人はあだむ、ことに五月さつきのころなれば米もとぼしかるらんに日蓮にちれんを内
にて・はぐくみ給たまいしことは日蓮にちれんが父母ふぼの伊豆の伊東かわなと云うところに
生れかわり給たまうか、法華經ほけきよう第四に云く、及清信士女供養しにくよう於法師ほっしと云云、法華經ほけきよう
を行ぜん者をば諸天善神等しよてんぜんじん・或はをとことなり・或は女あるとなり形をかへさま
ざまに供養くようしてたすくべしと云う經文きやうもんなり、弥三郎殿夫婦やさぶろうの士女しにょと生れて
日蓮法師にちれんほっしを供養くようする事疑うたがいなし。

さきにまいらせし文につぶさにかきて供きようし間・今はくはしからず、ことに
当地頭ちとうの病惱びやうなうについて祈せし申もうすべきよし仰せ供きようし間・案にあつかひて侯、
然れども一分信仰いちぶんしんこうの心を日蓮にちれんに出し給たまへば法華經ほけきようへせせうとこそをもひ候へ、

此の時じゅうらせつは十羅刹女じゅうしやくにょもいかでか力をああわせ給たまはざるべきと思そうい候らいて・法華經ほけきやう
・釈迦しやくか・多宝たぼう・十方じゅうぽうの諸仏しよぶつ・並てんに天照しやう・八幡はちまん・大小だいしやうの神紙等もに申もうして候、
定めて評議ありてぞ・しるしをばあらはし給たまはん、よも日蓮にちれんをば捨てさせ給たまは

じ、いたきとかゆきとの如くあてがわせ給はんと・をもひ候いしについに病

悩なをり・海中かいちゆういろくづの中より出現しゆつげんの仏体を日蓮にちれんにたまわる事・此れ病

悩のゆへなり、さだめて十羅刹女のせめなり、此の功德くどくも夫婦二人の功德と

なるべし、我等衆生われらしじゆうむし無始より・このかた生死海の中にありしが・法華經の

行者ぎやうじやとなりて無始色心むししきしん・本是理性ほんぜりしやう・

妙窮妙智みやうち・金剛不滅こんごうふめつの仏身ぶつしんとならん事あにかの仏にかわるべきや、過去久遠かこくおん

五百塵点じんてんのそのかみ唯我一人の教主釈尊きやうしゆしゃくそんとは我等衆生の事なり、法華經の

一念三千いちねんさんぜんの法門ほうもん・常住じやうじゆう此説法のふるまいなり、かかるたうとき法華經と

釈尊しゃくそんにてをはせども凡夫ぼんぶはしる事なし。

寿量品じゆうりやうぼんに云く「顛倒てんどうの衆生しゆじゆうをして近しと雖も和も見えざらしむ」とはこ

れなり、迷悟めいごの不同ふどうは沙羅さらの四見ごことの如し、一念三千いちねんさんぜんの仏もつと申すは法界ほつかいの成仏じやうぶつ

と云う事にて候ぞ。

せうせんとうじ

雪山童子のまへにきたりし鬼神は帝釈の variation なり、戸毘王の所へにげ入り

はと びしゆかつまてん

鳩は毘首羯摩天ぞかし、班足王城へ入りし普明王は教主釈尊にてましま

にくげん

す、肉眼はしらず仏眼は此れをみる、虚空と大海とには魚鳥の飛行するあと

これら きようもん

あり此等は経文にみえたり、木像即金色なり金色即木像なり、あぬるだが金

兎

しにん

そく

掌

そく

阿ぬ樓駄

これら

はうさぎとなり死人となる、釈摩男がたなごころにはいさごも金となる、此等

しぎ

は思議すべからず、凡夫即仏なり・仏即凡夫なり・一念三千我実成仏これな

ほんぶそく

そくほんぶ

いちねんさんぜんがじつじようぶつ

これら

り。

きようしゆだいかくせそん

しからば夫婦二人は教主大覺世尊の生れかわり給いて日蓮をたすけ給う

そじゆ

か、伊東とかわなのみちのほどはちかく候へども心はとをし・後のためにふ

たま

みをまいらせ候ぞ、人にかたらずして心付させ給へ・すこしも人しるならば

なむ みようほうれんげきよう

御ためあしかりぬべし、むねのうちにをきてかたり給う事なれ・あなかしこ

たま

なむ みようほうれんげきよう

・あなかしこ、南無妙法蓮華経。

弘長元年六月二十七日^{こうちょうがんねん}

船守弥三郎殿許へ之を遣わす^{やさぶろう これつか}

日蓮花押^{にちれんかおう}

夫れ味に六種あり・一には淡・二には鹹・三には辛・四には酸・五には甘六には苦なり、百味の飴膳を調ふといへども一つの鹹の味なければ大王の膳とならず、山海の珍物も鹹なければ気味なし、大海に八の不思議あり、一には漸漸に転深し・二には深くして底を得難し三には同じ一鹹の味なり・四には湖限りを過ぎず・五には種種の宝蔵有り・六には大身の衆生中に在つて居住す・七には死屍を宿めず・八には万流大雨之を収めて不増不減なり、漸漸に転探しとは法華経は凡夫無解より聖人有解に至るまで皆仏道を成ずるに譬うるなり、深くして底を得難しとは法華経は唯仏与仏の境界にして等覺已下は極むることなきが故なり、同じ一鹹の味なりとは諸河に鹹なきは諸教

に得道なきに譬ふ、諸河の水・大海に入つて鹹となるは諸教の機類・法華經に入つて仏道を成ずるに譬ふ、潮限り
を過ぎずとは妙法を持つ入牢る身命を和するとも不退転を得るに譬ふ、種種の宝蔵有りとは諸仏・菩薩の万行方善・諸波羅蜜の功德・妙法に納まるに譬ふ、大身の衆生所居の住处とは仏・菩薩・大智慧あるが故に大身衆生と名く大身・大心・大莊嚴・大調伏・大説法・大勢・大神通・大慈・大悲・おのづから法華經より生ずるが故なり、死屍を
宿めずとは永く謗法一闡提を離るるが故なり、不増不減とは法華の意は一切衆生の仏性同一性なるが故なり、蔓草漬たる桶の中の鹹は大海の鹹に随つて満干ぬ、禁獄を被る法華の持者は桶びようの中の鹹の如く・火宅を出で給へる釈迦如来は大海の鹹の如し、法華の持者を禁むるは釈迦如来を禁むるなり、梵釈・四天も如何頂き給わざらん、十羅刹女の頭破七分の誓ひ

此の時に非あらずんば何いすれの時か果し給たまふべき、頻びん婆ば娑し羅ら王わうを禁きん獄ごくせし阿あ世じ早やく
鋭身あくそに大かん惡とく瘡そうを感得しき、法ほ華っけの持じ者しゃを禁きん獄ごくする人・何なんぞ現げん身しんに惡あく瘡そうを感あぜ
ざらんや。

にちれんかおう
日蓮花押

三三五

椎地四郎殿御書

弘長元年四月

四十歳御作

1448p

せんじつ おんものがたり

先日御物語の事について彼の人の方へ相尋ね候いし処・仰せ候いしが

ごと

如く少しもちがはず候いき、これにつけても・いよいよ・はげまして法華經

くどく

の功德を得給つべし、師曠が耳・離婁が眼のやうに聞見させ給へ、末法には

ほけきよう

法華經の行者必ず出来すべし、但し大難来りなば強盛の信心弥悦びをな

ほけきよう

すべし、火に薪をくわへんにさかんなる事なかるべしや、大海へ衆流入る・

たきぎ

されども大海は河の水を返す事ありや、法華大海の行者に諸河の水は大難の

ごと

如く入れども・かへす事とがむる事なし、諸河の水入る事なくば大海あるべ

だいなん

からず、大難なくば法華經の行者にはあらじ、天台の云く「衆流海に入り薪

ほけきよう

火を熾さかんにす」と云云、法華經ほけきょうの法門ほうもんを一文一句いつくなりとも人に・かたらん

は過去かこの宿縁しゆくえんふかしとおぼしめすべし、經きやうに云く、亦また不開しやうほう正法しやうほう如是にやぜ人難度なん」

と云云、此の文の意は正法しやうほうとは法華經ほけきょうなり、此の經をきかざる人は度しがた

しと云う文なり、法師品ほうしほんには若是善男子・善女人・乃至則ないし・如来使にやらいと説かせ

給たまいて僧も俗も尼も女も一句いつくをも人にかたらん人は如来の使と見えたり、貴辺きへん

すでに俗なり善男子ぜんなんしの人なるべし、

此の經を一文一句いつくなりとも聴聞ちやうもんして神にそめん人は生死しやうじの大海たいかいを渡るべき船わた

なるべし、妙樂大師みやうらくだい云く、一句も神に染ぬれば成ひがく彼岸たすを資しゆいく、思惟しゆい・修習しゆしゆう

永じうく舟航しゆうかうに用たり」と云云、生死しやうじの大海たいかいを渡らんことは妙法蓮華經みやうほうれんげきやうの船に

あらずんば・かなふべからず。

抑そも法華經ほけきやうの如渡得船によとくせんの船もつと申す事は・教主大覺世尊きやうしゆだいかくせそん・巧智無辺こうちむへんの番匠ばんしやう

として四味八教はつきやうの材木を取り集め・正直捨權しやうじきしやこんとけづりなして邪正じやしやう一如いちによとき

り合せ・醍醐だいごいちじつ一実いちじつのくぎを丁と・うつて生死しょうじの大海たいかいへ・をしうかべ・中道ちゅうどう
一実いちじつのほばしらに界かい如三千さんぜんの帆をあげて・諸法しよほう実相じつそうのおひでをえて・
以信得入いしんとくにゅうの一切衆生いっさいしゆじょうを取りのせて・釈迦如来しゃかにょらいはかぢを

取り・多宝如来はつなでを取り給へば・上行等の四菩薩は函蓋相応して・
きりきりとこぎ給う所の船を如渡得船の船とは申すなり、是にのるべき者は
にちれんでし檀那等なり、能く能く信じさせ給へ、四条金吾殿に見参候はば
日蓮が弟子・檀那等なり、能く能く信じさせ給へ、四條金吾殿に見参候はば
よくよく語り給い候へ、委くは又又申すべく候、恐恐謹言。

四月二十八日

にちれんかおう
日蓮花押

しいじしろう
椎地四郎殿え

三三六

やさぶろう
弥三郎殿御返事

建治三年 五十六歳御作

1

449p

は無智の俗にて候へども承わり候いしに貴く思ひ進らせ候いしは法華の
はむち
第二の巻に今此三界とかや申す文にて候なり、此の文の意は今・此の日本国
こんしさんがい
もう
うけたま
まい
ほっけ
にほんこく

は釈迦しゃかぶつ仏の御領なり、天照太神てんしょうたいじん・八幡大菩薩はちまんたいぼさつ・神武天皇等てんのうの一切いっさいの神・国主こくしゅ
並に万民ばんみんまでも釈迦しゃかぶつ仏の御所領しよりょうの内なる上此の仏は我等衆生われらしゅじょうに三の故ましま
御坐す大恩の仏なり、一には国主こくしゅなり・二には師匠ししょうなり・三には親父なり、
此の三徳を備へ給う事たまは十方の仏の中に唯釈迦ただしゃかぶつ仏計りなり、されば今の日本にほん
国いっさいしゅじょうの一切衆生たといしゃかぶつは設たい釈迦い仏に・ねんごろに仕ふる事とうじ當時の阿弥陀あみだぶつ仏の如くす
とも又他たが仏を並べて同じ様にもてなし進まいらせば大なる失とがなり、譬たとえば我が主
の而も智者しか　ちしやにて御坐ましまさんを他国たこくの王に思ひ替えて・日本国にほんこくにすみながら漢土かんど
高麗こまの王を重んじて・日本国にほんこくの王におろそかならんをば・此の国の大王だいおういみ
じと申もうす者ならんや、況や日本国にほんこく
の諸僧しよそうは一人もなく釈迦しゃかによらい如来の御弟子おんでしとして頭こつへをそり衣きを著たり、阿弥陀あみだぶつ仏
の弟子でしにはあらぬぞかし、然るに釈迦しゃか堂法華堂画像ほつけ・木像法華經ぞうほう一部も持たもち
候はぬ僧共さんとくが・三徳全く備はり給たまへる釈迦しゃかぶつ仏をば閣おきて・一徳もなき

阿^あ弥^み陀^だ仏^{ぶつ}を国^ここぞりて郷^{きやう}・村^{むら}・家^けごとに人の数^{かず}よりも多く立てならべ
阿^あ弥^み陀^だ仏^{ぶつ}の名^な号^{ごう}を一向^{いっけう}に申^{もう}して一日^{いちにち}に六万^{りくまん}・

八万^{はちまん}な^なん^んど^どす、
打ち^{うち}見^みて
候^{そうろうところ}所^{ところ}は
あ^あら^ら貴^きや^や貴^きや^やと^と見^みへ^へ候^{こう}へ^へども・
法^{ほけきよう}華^{きよう}経^{けい}を

以て見進らせ候へば中中日日に十悪を造る悪人よりは過重きは善人なり、

悪人あくにんは何れの仏いづれにも・よりまいらせ候はねば思おもひ替かる辺へもなし、若もし又善人ぜんにん

とも成らば法華經に付き進まいらする事もや有ありなん、日本国の人人は何いかにも

阿彌陀仏より釈迦仏・念仏よりも法華經を重くしたしく心よせに思い進らせ

ぬる事難かるべし、されば此の人人は善人に似て悪人なり、悪人の中には

一えんぶだい だいいち閻浮提第一ほうぼうの大謗法の者せんだい大闡提の人なり、
しやかぶつ釈迦仏・此の人をばほけきよう法華經の二

の巻に「其その人命みょうじゆう終しうして阿鼻あびごく獄ごくに入いらん」と定めさせ給たまへり、されば今の

日本国の諸僧等は提婆達多・瞿伽梨尊者にも過ぎたる大悪人なり、又在家の

人人は此等を貴み供養し給う故に此の国眼前に無間地獄と變じて諸人現身に

大飢渴大疫病先代になき大苦を受

くる上他国より責めらるべし、
此れは偏に梵天・帝釈・日月等の御はからひ

ひとえ ぼんてん
たいしゃく
にちがつ

なり、かかる事をば日本国にほんこくには但日蓮一人計り知につて始は云うべきか云うま
じきかとうらおもひけれども・さりとは何いかにすべき、一切衆生の父母ふぼたる
上仏おほの仰おほせを背そむくべきか、我が身こそ何様いかようにも・ならめと思いいて云い出せし
かば二十余年・所をおはれ弟子でし

等を殺され・我が身も疵きずを蒙こおむり・二度まで流され結句けっくは頸切られんとす、
是れ偏ひとえに日本国にほんこくの一切衆生の大苦にあはんを兼かねて知りて歎なげき候なり、されば
心あらん人人ひとびとは我等われらが為ためにと思食すべし、若もし恩を知り心有こころある人人ひとびとは二当ら
ん杖には一は替かわるべき事ぞかし、さこそ無なからめ還かえつて怨あだをなしなんと・
せらるる事は心得こころえず候、又在家の人

人の能よくも聞きほどこずして・或あるは所を追ひ・或あるは弟子等を怨あだまるる心えぬ
さよ、設たといい知らずとも誤あやまりて現げんの親を敵てきぞと思ひたがへて詈のり・或あるは打ち殺
したらんは何いかに科とがを免まぬるべき、此の人人ひとびとは我があらぎをば知らずして日蓮にちれんが

あらぎの様に思へり、たと譬えば物ねたみする女の眼まなこを瞋いからかして・とわりをに
らむれば己おのが気色のうとましきをば知ら

ずして還かえつてとわりの眼まなこおそろしと云うが如ごとし、此等これらの事は偏ひとえに国主こくしゅの御

尋たずねなき故なり、又何いかなれば御尋たずねなきぞと申もうすに此の国の人人ひとびと余り科とが多く

して一定今生こんじょうには他国たこくに責められ後生ごしょうには無間地獄むげんじごくに墮おつべき悪業あくごう

の定まりたるが故なりと、きようもんれきれき經文歴歴と候いしかば信じ進まいらせて候、此の事は

各各たといわれら設ごとい我等が如くなる云うにかひなき者共を責めおどし・或あるは所を追わせ

給たまい候ともよも終ついには只ただは候はじ、此の御房の御心をば設たといてんしうだいじんい天照太神・

しようはちまん

正八幡もよも随へさせ給ひ候はじ、まして凡夫ほんぶをや、されば度度の大事にも

おくする心なく弥いよいよ強盛じやうじやうに御坐すと承り候と加様のすぢに申もうし給たまうべし。

さて其その法師物申ほっしさば取り返してさて申もうしつる事は僻事かと返して釈迦しゃかぶつ仏

は親なり・師なり・主なり・と申もうす文・法華經には候かと問うて有りと申もうさ

ばさて阿弥陀仏あみだぶつは御房の親・主・師と申もうす經文は候かと責めて・無しと云わ

んずるか又有りと云はんずるか若もしさる經文きやうもん有りと申もうさば御房の父は二人か

と責め給たまへ、又無しといはば・さては御房は親をば捨てて何いかに他人たにんをもてな

すぞと責め給たまへ、其その上法華經ほけきやうは他經たきやうには似させ給たまはねばこそとて四十

余年等の文を引かるべし、即往安樂の文にかからば・さて此これには先ずつま

り給へる事は承伏かと責めてそれもとて又申すべし、構へて構へて所領を惜
み妻子を顧りみ又人を憑みて・あやぶむ事無かれ但偏に思い切るべし、今年
の世間を鏡とせよ若干の人の死ぬるに今まで生きて有りつるは此の事にあは
ん為なりけり、此れこそ宇治川を渡せし所よ是こそ勢多を渡せし所よ・名を
揚るか名をくだすかなり、人身は受け難く法華経は信じ難しとは是なり、釈迦
・多宝・十方の仏・来集して我が身に入りかはり我を助け給へと観念せさ
せ給うべし、地頭のもとに召さるる事あらば先は此の趣を能く能く申さるべ
く候、
恐恐謹言。

建治三年丁丑八月四日

日蓮花押

弥三郎殿御返事

三三七

新田殿御書

1452p

使ひ御志じゆんねこ 限り無き者か、経は法華経・顯密第一の大法なり、仏は釈迦仏しゃかぶつ

しよぶつだいいち

・諸仏第一の上仏なり、行者は法華経の行者に相似たり、三事既に相應せ

だんな

り檀那の一願必ず成就せんか、恐恐謹言。

五月二十九日

日蓮在御判にちれん

新田殿御返事にった ごへんじ

並に女房の御方にようぼう

三三八

実相寺御書

建治四年正月十六日

五十七歳御作

1452p

新春の御札の中に云くいわ駿河するがの国実相寺じつそうじの住侶尾張阿闍梨じゅうりよおわりあじゃりと申もうす者・玄義げんぎ四
の巻に涅槃經ねはんぎょうを引ひいて、小乗しょうじょうを以もつて大乘だいじょうを破はし大乘だいじょうを以もつて小乗しょうじょうを破はす
るは、盲目もうもくの因しやくなりと釈もうせる由申しやくし候もつなるは実もつにて候はやらん不審ふしんに候。
反詰はんきつして云いわく小乗しょうじょうを以もつて大乘だいじょうを破はし大乘だいじょうを以もつて小乗しょうじょうを破はする者盲目もうもく
とならば弘法大師こうぼうだいし・慈覺大師じかくだいし・智証大師等ちしょうだいしはされば盲目もうもくとなり給たまいたりける
か、善無畏ぜんむい・金剛智こんごうち・不空等ふくうは盲目もうもくと成たまり給たまうとの給たまうかとつめよ、玄義げんぎの
四いに云いわく「問はう法華ほっけに・を開ひいて・皆妙みなに入る涅槃何ねはんいずれの意いぞ更に次第しだいの五行
を明あすや、答こたう法華ほっけは仏世ぶつぜの人の為ために権はを破はして実じつに入れ復また・有あること無なく
教意整足せいそくせり、涅槃ねはんは末代まつだいの凡夫ぼんぶの見思けんじの病重しげく一実いちじつを定執しやうしゆして方便ほうべんを誹謗ひぼう

し甘露かんろを服すと雖いえども事に即そくして真なる能あたわず命を傷つけて早夭するが為の
故に戒定慧けいじようえを扶たすけて大涅槃ねはんを顕あらわす、法華の意を得れば涅槃ねはんに於おいて次第しだいの行を
もち用もちいざるなり」釈籤しゃくせんの四に云く「次の料簡りようけんの中・扶戒定慧ふかいじようえと言うは
事戒事定前三教じかいじじょうぜんさんきようの慧並びに事法たすを扶たすくるが為の故なり具には止観つぶさしかんの対治助開たいじ
の中に説くが如し、今時の行者ぎようじや・或は一向に理を尚ぶときは則ち己れ聖に
均ひとしと謂おもい及び実およを執しゆうして権を謗ぼうず、或は一向に事を尚ぶときは則ち功を
高こう位い

に推ゆずり及び実およを謗ぼうじじて権を許ゆるす、既に末代まつだいに処しよして聖旨むねを思おもはず其れ誰か斯この
二の失とがに墮だせざらん、法華の意を得れば則ち初後俱ともに頓とんなり、請こうう心を揣はかり臆おく
を撫なで自ら浮沈みずかを曉さとれと等云云、此の釈に迷惑めいわくする者か、此の釈の所詮は・或
は一向尚理いっこうなほとは達磨宗だるまに等しきなり、及び執実しつじつ謗權ぼうけんとは華嚴宗けこんしゆう・真言宗しんこんしゆうなり、
或は一向尚事いっこうなほとは淨土宗じよつだじゆう・律宗りつしゆうなり、及び謗実ぼうしゆじ許權しゆうけんとは法相宗ほふそうしゆうなり。

そ 夫れ法華經の妙の一字に二義有り一は相待妙・を破して妙を顯す二は
ぜつたいみよう そ
絶待妙・を開して妙を顯す、爾前の諸經並びに法華已後の諸經は破 顯
いちぶんこれ
妙の一分之を説くと雖も・開 顯妙は全く之無し、爾るに諸經に依憑する
にんし
人師・彼れ彼れの經經に於て破顯の二妙を存し・或は天台の智慧を盗み
ある
・或は民の家に天下を行うのみ、設い開を存すと雖も破の義免れ難きか、
いか
何に況や上に挙ぐる所の一向執權・或は一向執実等の者をや、而るに彼の
あじやり みずからのとが かえり
阿闍梨等は自 科を顧みざる者にして嫉妬するの間・自眼を回轉して大山を
眩ると觀るか、先ず実を以て權を破し權執を絶して実に入るは釈迦・多宝・
じゅつぽう しよぶつ
十方の諸仏の常儀なり、実を以て權を破する者を盲目と為せば釈尊は盲目
ないしてんだい でんぎよう もうもく にんし
の人が乃至天台・伝教は盲目の人師なるか如何、笑う可し返す返す。

四十九院等の事、彼の別当等は無智の者たる間・日蓮に向かつて之を恐る
あた な いよいよ かねら じゃほう べ
小田一房等怨を為すか 弥彼等が邪法滅す可き先兆なり、根露るれば枝枯れ
ねあらわ から

みなもと

源 竭れば流れ尽くと云う本文虚しからざるか、弘法・慈覚・智証三大師の

ほけきようひぼう だいか

法華経誹謗の大科四百余年の間隠せる根露れ枝枯る、今日蓮之を糾明せり拘

とどげどう

留外道が石と為つて数百年、陳那菩薩に責められ石即ち水と為る、尼が立

めみようこれ

てし塔は馬鳴之を頹す、臥せる師子に手を触れば瞋りを為す等是なり。

建治四年正月十六日

するが じっそうじ

ごぼうごへんじ

駿河国実相寺豊前公御房御返事

三三九

石本日仲聖人御返事

しよにんにいへんじ

1454p

どうじ

同時に二仏に亘るか將た又一方は妄語なるか、

わた

は

いっぼう

もうこ

近来念佛者天下を誑惑する

てんか

おおわく

日蓮花押

にちれんかおう

か、早早御存知有る可きか。ごぞんじあべ

そもそもしゅんめ

抑駿馬一足追い遣わさる事そんがい存外の次第しだいか事事見参の時ごすを期す、

恐恐きょうきょう

きんげん
謹言。

九月二十日

にちれん
日蓮在御判

しやうにんごへんじ
石本日仲聖人御返事

今月十五日酉時御文同じき十七日酉時到来す、彼等御勘氣を蒙るの時・南無
 妙法蓮華經・南無妙法蓮華經と唱え奉ると云云、偏に只事に非ず定めて平
 金吾の身に十羅刹入り易りて法華經の行者を試みたもうか、例せば雪山童子
 ・尸毘王等の如し將た又悪鬼其の身に入る者か、釈迦・多宝・十方の諸仏・
 梵帝等・五五百歳の法華經の行者を守護す可きの御誓は是なり、大論に云く
 能く毒を変じて藥と為す、天台云く毒を変じて藥と為す云云、妙の字虚しか
 らずんば定めて須臾に賞罰有らんか。

伯耆房等深く此の旨を存じて問注を遂ぐ可し、平金吾に申す可き様は文永
 の御勘氣の時聖人の仰せ忘れ給うか、其の殃未だ畢らず重ねて十羅刹の罰を

招き取るか、最後に申し付けよ、さいごもつ 恐恐。きょうきょう

十月十七日戌時

日蓮にちれん 在

御判

しょうにん ごへんじ
聖人等御返事

この事のぶるならば此方このかたにはとがなしとみな人申もつすべし、又大進房が落馬あらわるべし、あらわれば人人ひとびとことにおづべし、天の御計らいなり、各にはおづる事なかれ、つよりもてゆかば定めて子細しさいいできぬとおぼふるなり、このたび 今度の使にはあわぢ房を遣つかすべし。

三四一 伯耆殿等御返事

弘安二年十月十二日

五十八

歳御作

1456p

だいたい 大体此の趣を以て書き上ぐ可きか、但し熱原の百姓等安堵せしめば日秀等別に問注有る可からざるか、大進房・弥藤次入道等の狼藉の事に至つてはみなもと源は行智の勧めに依りて殺害刃傷する所なり、若し又起請文に及ぶ可き云云の事之を申さば全く書く可からず、其の故は人に殺害刃傷せられたる上・重ねて起請文を書き失を守るは古今未會有の沙汰なり、其の上行智の所行・書かしむる如くならば身を容るる処なく行う可きの罪・方無きか、
あなかしこあなかしこ 穴賢六賢、此の旨を存じ問注の時・強強と之を申さば定めて上聞に及ぶ可きか、又行智・証人立て申さば彼等の人人行智と同意して百姓等が田畠数十疇

り取る由・之これを申せ、若し又証文しやうもんを出さば謀書いだの由之これを申せ、事事証人の
起請文きしやうぶんを用ゆべからず、但し現証ただげんしやうの殺害刃傷さつがいじんじやう而已のみ、若し其もの義そに背く者そむは
にちれん もんか あら にちれん もんか あら
日蓮の門家に非ず日蓮の門家に非ず候、
恐恐きようきよう。

こうあん

弘安二年十月十二日

にちれん
日蓮 在御判

伯耆殿

日秀

日弁等 下

三四二

高橋殿御返事 ごへんじ

建治元年七月 がんねん

五十四歳御作

1457p

瓜か一籠かこささげひげこえだまめねいもかうのうり給ひ候い畢おわんぬ、付法蔵經ふほうぞうきやう

と申もうす經にはいさこのもちゐを仏に供養くやうしまいらせしわらは百年申もうすしに一

閻浮提えんぶだいの四分が一の王となる所謂阿育大王これなり、法華經ほけきやうの法師品ほうしほんには而

於一劫中いつこくちゆうと申もうして一劫が間・釈迦仏しやくかぶつを種種しゆじゆに供養くやうせる人の功德くどくと・末代まつだいの

法華經ほけきやうの行者ぎやうじやを須臾しゆゆも供養くやうせる

功德くどくと・たくらべ候に其福復彼に過またかしこぐと申もうして法華經ほけきやうの行者ぎやうじやを供養くやうする功德くどく

すぐれたり、これを妙樂大師みやうらくだいし釈しやくして云いわく「供養くやうすること有らん者は福十号ふくじゅうごう

に過すぐ」と云云、されば仏くふつを供養くやうする功德くどくよりも・すぐれて候なれば仏くふつにな

らせ給はん事たま疑うたがいいなし。

其その上女人よにんの御身おんみとして尼にとならせ給たまいて候まうなり・いよいよ申もつすに及およばず

但ただしさだめて念仏者ねんぶつにてやをはすらん、たうじの念仏者ねんぶつ・持じ斎さいは国くにをほろぼ

し他国たこくの難なんをまねくものにて候まう、日本国にほんこくの人人ひとびとは一人もなく日蓮にちれんがかたきと

なり候まういぬ、梵王ぼんのう・帝釈たいしゃく・日月いちがつ・四天してんのせめをかほりて・たうじのゆきつし

まのやうになり候まうはんずるに・いか

がせさせ給たまうべきいかがせさせ給たまうべき、なによりも入道にゅうだう殿どのの御所ごしょ勞ろうなげき

入いつて候まう、しばらくいきさせ給たまいて法華經ほけきようを謗ぼうずる世よの中御覽ごらんあれと候まうへ、

日本国にほんこくの人人ひとびとは大体だいたいはいけどりにせられ候まうはんずるなり、日蓮にちれんを二度にどまでな

がし法華經ほけきようの五ごの巻まきをもてかうべを打ち候まういしは・こり候まうはんずらむ。

七月二十六日

日蓮にちれん

花押かおう

御返事^{ごへんじ}

三四三 高橋入道殿御返事

建治元年七月 五十四歳御

作 1458p

進上 しんじょう 高橋入道殿御返事 たけはしにゅうだうごへんじ

日蓮 にちれん

我等が慈父・大覺世尊は人壽百歳の時・中天竺に出現しましまして一切

衆生のために一代聖教をとき給う、仏在世の一切衆生は過去の宿習有

つて仏に縁あつかりしかば・すでに得道成りぬ、我が滅後の衆生をば・いか

んがせんと・なげき給いしかば八万聖教を文字となして・一代聖教の中

に小乗經をば迦葉尊者にゆづり・大乘經並びに法華經涅槃等をば

文殊師利菩薩にゆづり給う、但八万聖教の肝心・法華經の眼目たる

妙法蓮華經の五字をば迦葉・阿難にもゆづり給はず、又文殊・普賢・觀音・

みろく じぞう りゆうじゆ
弥勒・地蔵・竜樹等の大菩薩にもさづけ給はず、此等の大菩薩等の・のぞみ申
せしかども仏ゆるし給はず、大地の底より上行菩薩と申せし老人を召し
して・多宝仏・十方の諸仏の御前にして釈迦如来・七宝の塔中にして
妙法蓮華經の五字を上行菩薩にゆづり給う。
そのゆえ めつこ いっさいしゆじよう みな びようどう ふびん
其の故は我が滅後の一切衆生は皆我が子なりいづれも平等に不便にをも
なり、しかれども医師の習い病に随いて薬をさづくる事なれば・我が滅後・
五百年が間は迦葉・阿難等に 小乗經の薬をもつて一切衆生にあたへよ、
次の五百年が間は文殊師利菩薩・弥勒菩薩・竜樹菩薩・天親菩薩に華嚴經・
大日經・般若經等の薬を一切衆生にさづけ
だい にちぎよう はん に やきよう
よ、我が滅後・一千年すぎて像法の時には薬王菩薩・觀世音菩薩等・法華經
だい もく
の題目を除いて余の法門の薬を一切衆生にさづけよ、末法に入りなば迦葉・
あなん もんじゆ みろく ぼさつ やくおう かん のん まつ ぼつ
阿難等・文殊・弥勒菩薩等・薬王・觀音等のゆづられしところの 小乗經・

だいじょう
大乘

経・並びになら法華経は文字ほけきょう もんじはありとも衆生しゅじょうの病の薬とはなるべからず、所謂いわゆる病は重し薬はあさし、共の時じょうぎょう上行菩薩出現じょうぎょう ぼさつ しゅつげんして妙法蓮華経みょうほうれんげきょうの五字ごじを一閻浮提えんぶだいの一切衆生いっさいしゅじょうにさづべし、共の時じょうぎょう一切衆生いっさいしゅじょう・此の菩薩ぼさつをかたきとせん、

所謂しゆいさるのいぬをみたるがごとく・鬼神きじんの人をあだむがごとく・過去かこの不軽ふぎよう
菩薩ぼさつの一切衆生いつさいしゆじようにのりあだまれしのみならず杖じようもく木瓦礫かりやくに・せめられしがこ
とく覺徳比丘かくとくびくが殺害さつがいに及およばれしがごとくなるべし。

其そののときは迦葉かしよう・阿難あなん等も・或あるは靈山りようぜんにかくれ恒河ごうがに没みろくし・弥勒もんじゆ・文殊等も
・或あるは都率とそつの内院ないえんに入り・或あるは香山しょうざんに入らせ給たまひ、觀世音菩薩くわんぜおんぼさつは西方さいほうにかへ
り・普賢菩薩ふげんぼさつは東方とうほうにかへらせ給たまひ、諸經しよきようは行ずる人ありとも守護しゆごの人な
ければ利生りしようあるべからず、諸仏しよぶつの名号みやうごうは唱となうるものありとも天神てんじんこれをかこ
すべからず、但しただ小牛せうぎうの母ははをはなれ金鳥きじのたかにあえるがごとくなるべし、
其そのの時十方世界じふぱうせかいの大鬼神だいきじん・一閻浮提えんぶだいに充滿じゆうまんして四衆ししゆうの身に入つて・或あるは
父母ふぼ

をがいし・或あるは兄弟等きやうだいを失うしなはん、殊ことに國中ちくちやの智者じちやげなる持戒じがいげなる僧尼そうにの心
に此きの鬼神きじん入いつて国主こくしゆ並びに臣下しんかをたばらかさん、此この時じやうぎよう上行菩薩じやうぎようぼさつの御ごかび

をほけきかほりて法華經の題目だいまくなむみょうほうれんげき南無妙法蓮華經の五字ごじ計りを一切衆生にさづけば

・彼の四衆等・並びに大僧等・此の人をあだむ事ふ父母のかたき宿世のかたき

ちようてきおんてき

朝敵怨敵のごとくあだむべし、其の時

大なる天変あるべし、所謂日月蝕し大なる彗星天にわたり大地震動して水上

の輪のごとくなるべし、其の後は自界叛逆難と申して国主・兄弟・並びに国

中の大人をうちころし・後には他国侵逼難と申して郷国より・せめられて

・或はいけどりとなり・或は自殺をし国中の上下・万民・皆大苦に値うべし、

此れひとへに上行菩薩のかびをかをほり

て法華經の題目をひろむる者を・・或はのり・或はうちはり・或は流罪し

・或は命をたちなんどするゆへに・仏前にちかひをなせし梵天・帝釈・日月

・四天等の法華經の座にて誓状を立てて法華經の行者をあだまん人をば

父母のかたきよりもなをつよくいましむべしと・ちかうゆへなりとみへて侯

に、今日蓮日本国に生れて一切経並びに法華經の

めいきよう

明鏡をもて・日本国の一切衆生の面に引向たるに寸分もたがはぬ上・仏の

しる

記し給いし天変あり地天あり、定んで此の国・亡国となるべしとかねてしり

しかば・これを国主に申すならば国土安穩なるべくも・たづねあきらむべし、

亡国となるべきならば・よも用いじ、用いぬ程ならば日蓮は流罪・死罪とな

るべしとしりて候いしかども・仏いまし

めて云く此の事を知りながら身命を・をしみて一切衆生にかたらずば我が敵たるのみならず一切衆生の怨敵なり、必ず阿鼻大城に墮つべしと記し給へり。

此に日蓮進退わづらひて此の事を申すならば我が身いかにもなるべし我が

身はさてをきぬ父母・兄弟並びに千万人の中にも一人も随うものは国主・

万民にあだまるべし、彼等あだまるるならば仏法はいまだわきまへず人のせ

めはたへがたし、仏法を行ずるは安穩なるべしとこそをもうに・此の法を持

つによつて大難出来するはしんぬ此の

法を邪法なりと誹誘して惡道に墮つべし、此れも不便なり又此れを申さずは

仏誓に違する上・一切衆生の怨敵なり大阿鼻地獄疑いなし、いかんがせん

とをもひしかども・をもひ切つて申し出しぬ、申し始めし上は又ひきさす

べきにもあらざれば・いよいよつより申せしかば、仏の記文のごとく国主も

あだみ万民ばんみんもせめき、あだをなせしかば天もいかりて日月いちがつに大變あり大せい
せいも出現しゅつげんしぬ大地だいちもふりかえしぬべくなりぬ、どううちもはじまり他た国こくよ
りもせめるなり、仏きもんの記文きもんすこしもたがわず・日蓮にちれんが法華經ほけきょうの行者ぎょうじやなる事も
疑うたがはず。

但ただし去年こぞかまくらより此このところへにげ入り候そうらいし時・道みちにて候そうらへば各各
にも申もうすべく候もういしかども申もうす事もなし、又先度ごへんじの御返事もうも申し候そうらはぬ事は
べちの子細しさいも候もうはず、なに事にか各各なんがをば・へだてまいらせ候もうべき、あだを
なす念仏者ねんぶつ・禅宗ぜんしゅう・頁言師等なりをも並びに国主等こくしゅをもたすけんがためにこそ申
せ、かれ等のあだをなすは・いよ

いよ不便ふびんにこそ候へ、まして一日も我がかたとて心よせなる人人ひとびとはいかでか
をろかなるべき世間せけんのをそろしさに妻子さいしある人人ひとびとのとをざかるをば・ことに
悦よろこぶ身なり、日蓮にちれんに付てたすけやりたるかたわなき上・わづかの所領しよりょうをも召

さるるならば子細しさいもしらぬ妻子さいし・所従等しよじゆうがいかになげかんずらんと心ぐるし。

而も去年しかこその二月に御勘氣ごかんきをゆりて三月の十三日に佐渡さどの国を立ち同月の二十六日にかまくらに入る、同四月の入日平左衛門尉さえもんのじようにあひたりし時・やうやうの事ども・とひし中に蒙古国もうこは・いつよすべきと申せしかば、今年よす

べし、それにとて日蓮にちれんはなして日本国にほんこくにたすくべき者一人もなし、たすから

んともひしたうならば日本国にほんこくの念仏者ねんぶつと禅ぜんと律僧等りつそうが頸けいを切つてゆいのは

まにかくべし、それも今はすぎぬ・但しただ皆人みなのをもひて侯そうらは日蓮にちれんをば念仏師ねんぶつ

と禅ぜんと律りつをそしるとをもひて侯そうら、これは物のかずにてかずならず・真言宗しんこんしゅうと

申もうす宗そうがうるわしき日本国にほんこくの

大なる呪咀あくほうの悪法こくほうなり、弘法大師こうぼうだいしと慈覚大師じかくだいし・此の事にまどひて此の国ほろぼを亡ほろさ

んとするなり、設たといい二年三年にやぶるべき国なりとも真言師しんごんしにいのらする程ほど

ならば一年半年に此のくに・せめらるべしと申もうしきかせて侯そうらいき。

たすけんがために申もうすを此程あだまる事なれば・ゆりて候そうらいし時さどの

国より・いかなる山中海辺にもまぎれ入るべかりしかども・此の事をいま

一度平左衛門ひとたびに申もうしきかせて日本国にほんこくにせめのこされん衆生しゅじょうをたすけんがため

にのぼりて候もういき、又申もうしきかせ侯そうらいし後は・かまくらに有あるべきならねば

足にまかせていでしほどに便宜びんぎにて候いしかば設たい各各は・いとせ給たまうとも今一度はみたてまつらんと千度をもひしかども・心に心をたたかいて

すぎ候いき、そのゆへはするがの国は守殿しゅでんの御領ごりやうことにふじなんどは後家尼
ごぜんの内うちの人人ひとびと多し、故最明寺殿さいみやうじ・極楽寺殿ごくらくのかたきといきどをらせ給たまう
なればききつけられれば各各の御なげきなるべしと・おもひし心計ばかりなり、い
まにいたるまでも不便ふびんにをもひまいらせ候そうへば御返事ごへんじまでも申もうさず候いき、
この御房ごぼうたちのゆきすりにも・あなかしこ・あなかしこ・ふじかじまのへん
へ立ちよるべからずと申せども・いかが候らんと・をばつかなし。

ただし真言しんごんの事ぞ御不審ふしんにわたらせ給たまい候らん、いかにと法門ほうもんは申もうすとも
御心へあらん事かたし但眼前がんぜんの事をもつて知ししめせ、隱岐おきの法皇ほうこうは人王入十

二代・神武よりは二千余年・天照太押入てんしやうりかわらせ給たまいて人王とならせ
給たまう、いかなる者かてきすべき上欽明きんめいより隱岐おきの法皇ほうこうにいたるまで漢土かんど・百濟くだら

・新羅・高麗よりわたり来る大法秘法を

叡山・東寺・園城・七寺並びに日本国にあがめをかれて候、此れは皆国を

守護し国主をまほらんためなり、隠岐の法皇世をかまくらにとられたる事を

口をしと・をぼして叡山・東寺等の高僧等をかたらひて義時が命をめしと

れと行ぜしなり、此の事一年・二年ならず数年調伏せしに・権の大夫殿はゆめゆめしろしめさざりしかば一法も行じ給はず・又行ずとも叶うべしとおぼへずありしに・天子いくさにまけさせ給いて隱岐の国へつかはされさせ給う、日本国の王となる人は天照太神の御魂の入りかわらせ給う王なり、先生の十善戒の力といひ・いかでか国中

の万民の中にはかたぶくべき、設いとがありともつみあるをやをとがなき子のあだむにてこそ候いぬらめ、たとい親に重罪ありとも子の身としてとがに行はんに天うけ給うべしや、しかるに隱岐の法皇のはじにあはせ給いしはいかなる大禍ぞ・此れひとへに法華經の怨敵たる日本国の真言師をかたらはせ給いしゆへなり。

一切の真言師は灌頂と申して釈迦仏等を八葉の蓮華にかきて此れを足にふみて秘事とするなり、かかる不思議の者ども諸山・諸寺の別当とおおぎても

てなすゆへに・たみの手にわたりて現身げんしんにはぢにあひぬ、此の大惡法だいあくほう又かま
くらに下つて御一門いちもんをすかし日本國にほんこくをほろぼさんとするなり、此の事最大事だいいじ
なりしかば弟子等でしにもかたらず・

只ただいっはり・をろかにて念仏ねんぶつと禪等計りぜんとうけりをそしりてきかせしなり、今は又用いもち
られぬ事なれば身命しんみょうもおします弟子どもにも申もうすなり、かう申せば・いよいよ
御不審ふしんあるべし、日蓮にちれんいかにいみじく尊くとも慈覺じかく・弘法こうぼうにすぐるべきか、
この疑うたがいすべてはるべからず・いかにとかすべき。

但しただ皆人みなはにくみ侯にすこしも御信用ごしんようのありし上・此これまでも御たづねの
侯は只今生計りそつらの御事おんことにはよも侯はじ定めて過去かこのゆへか、御所勞だいいじの大事に
ならせ給たまひて侯なる事あさましく侯、但しただつつるぎはかたきのため薬は病いの
ため、阿闍世王あじゃせは父をころし仏の敵となれり、惡瘡身あくそうに出いで後に仏に歸伏きふくし
ほけきようほけきよう法華經たもを持ちしかば惡瘡あくそうも平癒へいゆし

寿をも四十年のべたりき、而も法華經は閻浮捏人病之良藥とこそとかれて
侯へ、閻浮の内の人病の身なり法華經の藥あり、三事すでに相應しぬ一身
いかでかたすからざるべき、但し御疑のわたり侯はんをば力をよばず、
南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經。

かくじょうほう
覺乗房は・わき房に^{たびたび}度度よませてきこしめせ・きこしめせ。

七月十二日

しんじょう
進上 高橋六郎兵衛入道殿 ^{ごへんじ}御返事

にちれん かおう
日蓮 花押

三四四

異体同心事 ^{いたいどうしん}

1463p

白小袖一つあつわたの小袖は・わき房のびんぎに^{がもく}驚目一貫並びに^{なら}うけ給わ^{たま}
る、は・わき房さど房等の事あつわらの者どもの^{おんこころざしいたいどうしん}御心ざし異体同心なれば
^{ばんじ}万事を成し同体異心なれば^{どうたいいしん}諸事叶う事なしと^{もう}申す事は^{げてんさんぜん}外典三千余巻に^{どうたいいしん}定りて
候、^{いんのちゅう}殷の紂王は七十万騎なれども同体異心なればいくさにまけぬ、^{どうたいいしん}周の武王
は八百人なれども^{いたいどうしん}異体同心なればかちぬ、一人の心なれども二つの心あれば

其の心たがいて成ずる事なし、百人・千人なれども一つ心なれば必ず事

を成ず、にほんこく日本国の人人は多人なれども体同異心なれば諸事成ぜん事かたし、

にちれんにちれん いちちるいいちちるい いたいどうしんいたいどうしん

日蓮が一類は異体同心なれば人人すくなく候へども大事を成じて一定法華經

ひろまりなんと覺へ候、悪は多けれども一善にかつ事なし、譬へば多くの火

あつまれども一水にはきゑぬ、此の一門も又かくのごとし。其の上貴辺は

多年としつもりて奉公法華經にあつくをはする上

このたび

今度はいかにも・すぐれて

御心ざし見えさせ給うよし人人も申し候、又かれらも申し候、一一に承りて

おんこころざし たま ひとびと もう たまわ

日天にも大神にも申し上げて候ぞ。

御文はいそぎ御返事申すべく候ひつれどもたしかなるびんぎ候はでいまま

で申し候はず、べんあさがびんぎあまりそうそうにてかきあへず候いき、

さては各各としのころいかんがと・をばしつる、もつこの事すでにちかづき

て候か、我が国のほろびん事はあさましかれども、これだにもそら事になる

ならば日本^{にほんこく}の人人^{ひとひと}
いよいよ

ほけきよう
法華經を謗して万人無間地獄に墮つべし、かれだにもつよるならば国はほろ
ぼとも謗法はうすくなりなん、譬へば灸治をしてやまいをいやし針治にて人
をなをすがごとし、當時はなげくとも後は悦びなり、日蓮は法華經の御使
にほんこく　ひとびと　だいぞくおう　えんぶだい　うしな　もうち　せっせん
い日本国の人人は大族王の一閻浮提の仏法を失いしがごとし、蒙古国は雪山
の下王のごとし天の御使として法華經の行者をあだむ人人を罰せらるるか、
げんしん　かいげ　あじやせ　びやくらい
又現身に改悔を・をこしてあるならば阿闍世王の仏に歸して白癩をやめ四
十年の寿をのべ無根の信と申す位にのぼりて現身に無生忍をえたりしがごと
し、きょうきようきんげん
恐恐謹言。

八月六日

にちれん
日蓮

かおう
花押

三四五

六郎次郎殿御返事ごへんじ

建治三年三月

五

十六歳御作

1464p

白米三斗油一筒給ひ畢おわんぬいまにはじめぬ御心ざし申おんこころざしもうしつくしがたく候

にちれん よろこ

日蓮が悦び候のみならず釈迦仏定めて御悦よろこび候らん、我則歡喜諸仏亦然これは是な

り、明日三位房をつかはすべく候、その時委細申いさいもうすべく候、恐恐きょうきょう。

ひのとうし

建治三年丁丑三月十九日

日蓮 花押かおう

六郎次郎殿

次郎兵衛殿

三四六

減劫御書じくしよ

1465p

減劫もうと申すは人の心の内に候、貪・瞋・癡の三毒とん・じん・ちさんどくが次第しだいに強盛じやうじやうになりもてゆくほどに次第しだいに人のいのちもつづまりせいもちいさくなりもつてまかるなり、漢土かんど・日本国にほんこくは仏法ぶつぽう已前いぜんには三皇・五帝三聖等さんこう・ごていの外經をもつて民の心をととのへてよをば治めしほどに次第しだいに人の心はよきことは・はかなく・わるき事は・かしこくなりしかば・

外經の智あさきゆへに悪のふかき失とがをいましめがたし、外經をもつて世をさまらざりしゆへに・やうやく仏經ぶつきやうをわたして世間せけんを・をさめしかば世をだやかなりき、此これはひとへに仏教ぶつきやうのかしこきによつて人民じんみんの心こころをくはしくあかせるなり、当時とうじの外典げてんと申すは本の外經の心にはあらず、仏法ぶつぽうのわたりし時

は外經と仏經とあらそいしかど

もやうやく外經まけて王と民と用いざりしかば・外經のもの内經の所從となりて立ちあうことなくありしほどに外經の人人内經の心をぬきて智慧をまし外經に入れて候を・をろかなる王は外典のかしこきかともつ。

又人の心やうやく善の智慧は・はかなく惡の智慧かしこくなりしかば仏經

の中にも 小乘經の智慧世間を・をさむるに代をさまることなし、其の時

大乘經をひろめて代を・をさめしかば・すこし代をさまりぬ、其の後

大乘經の智慧及ばざりしかば一乘經の智慧をとりいだして代を・をさめし

かは・すこししばらく代をさまりぬ、今の代は外經も 小乘經も大乘經も

一乘法華經等もかなわぬよとなれり、ゆえいかなとなれば衆生の貪・瞋・癡

の心のかしこきこ

と大覺世尊の大善にかしこきがごとし、譬へば犬は鼻のかしこき事人にすぎ

たり、又鼻の禽きんじゆう獸をかぐことは大聖の鼻通にもをとらず、ふくろうがみみの
かしこきとびの眼まなこのかしこき・すずめの舌のかるき・りうの身のかしこき皆みな
かしこき人にも・すぐれて候、そのやうに末代まつだい濁世じよくせの心の貪欲とんよく・瞋恚しんに・愚癡ぐち
のかしこさは・いかなる賢人けんじん・聖人しょうにん

も治めがたき事なり、其の故は貪欲をば仏不淨觀の藥をもて治し瞋恚をば慈悲
觀をもて治し愚癡をば十二因縁觀をもてこそ治し給うに・いまは此の法門を
とひて人を・をととして貪欲・瞋恚・愚癡をますなり、譬へば火をば水をもつ
てけす・悪をば善をもつて打つ・しかるにかへりて水より出ぬる火をば水を
かくればあぶらになりていよいよ大火となるなり。

今末代惡世に世間の惡より出世の法門につきて大惡出生せり、これをば
・しらずして今の人人・善根をすすればいよいよ代のほろぶる事出来せり、
今の代の天台・真言等の諸宗の僧等をやしなうは・外は善根とこそ見ゆれど
も内は十惡・五逆にもすぎたる大惡なり、しかれば代のをさまらん事は大覺
世尊の智慧のごとくなる智人・世に有り

て仙予国王のごとくなる賢王とよりあひて・一向に善根をとどめ大惡をもつ
て八宗の智人とをもうものを・或はせめ・或はながし・或はせをとどめ・或

は頭こつへをはねてこそ代はすこし・をさまるべきにて候へ。

法華經ほけきょうの第一だいいちの巻の「諸法実相しよほうじつそう乃至唯仏ないしたたと仏すなわよと乃すなわよち能く究尽たまたし給う」とと

かれて候はこれなり、本末究竟ほんまつくきょうと申すは本とは惡のね善の根・末と申すは惡

のをわり善の終りぞかし、善惡ぜんあくの根本枝葉こんぽんしやうをさときわり極めたるを仏とは申すな

り、天台てんだいいわ云く「夫れ一心そ いっしんに十法界ほっかいを具す」等云云、章安いわ云く「仏尚なおこ此れを大事だいじ

と為なす易解いげを得べきなり」妙樂みょうりやく云く

「乃至終窮究竟ないししゅうくきょうの極説ほけきょうなり」等云云、法華經ほけきょうに云く「皆実相みなじつそうと相違背そういそむせず」

等云云、天台てんだいこれ之を承うけて云く「一切世間の治生産業いっさいせけん ちせいさんぎやうは皆実相みなじつそうと相違背そういそむせず」

等云云、智者ちしやとは世間せけんの法より外に仏法ぶつぽうを行なず、世間の治世せけん ちせいの法を能く能く

心へて候を智者ちしやとは申もうすなり、殷いんの代の濁りて民のわづらいしを大公望たいこうぼうしゆつせ出世

して殷いんのちゆうの紂しゆうが頸けいを切りて民の

なげきをやめ、二世王にせいおうが民の口くちににがかりし張良ちやうりやう出いでて代を・をさめ民の口

をあまくせし、此等^{これら}は仏法^{ぶつぽう}已前^{いぜん}なれども教主^{きようしゅ}釈尊^{しゃくそん}の御使^{おんつかい}として民をたすけ
しなり、外経^{ひとびと}の人人^{ひとひと}は・しらざりしかども彼等^{かれら}の人人^{ひとひと}の智慧^{ちえ}は内心^{ないしん}には仏法^{ぶつぽう}
の智慧^{ちえ}をさしはさみたりしなり。

今の代には正嘉しょうかの大地震文永だいにしんぶんえいの大せひせひの時智慧ちえかしこき国主こくしゅあらましかば日蓮にちれんをば用もちいつべかりしなり、それこそなからめ文永九年ぶんえいのどしうち・十一年の蒙古もうこのせめの時は周の文王の大公望たいこうぼうをむかへしがごとく・殷の高丁王の傳悦ふえつを七里より請しやうせしがごとくすべかりしぞかし、日月にちがつは生盲いきめくらの者に財たからにあらず賢人けんじんをば愚王ぐおうのにくむとはこれなり、しげきゆへにしるさず、ほけきほけきよう法華經の御心と申すはこれてひの事にて候・外ほかのことと・をばすべからず、大悪は大善だいぜんの来るべき瑞相ずいそうなり、一閻浮提えんぶだいうちみだすならば閻浮提内えんぶだい広令流布るふはよも疑うたがいい候はじ。

此の大進阿闍梨あじゃりを故六郎入道殿ごろうにゅうだうの御はかへつかわし候、むかし・この法門ほうもんを聞いて候人人ひとびとには関東かんとうの内ならば我とゆきて其そのはかに自我じがけ偈ぎよみ候はんそうちと存じて候、しかれども当時とうじのありさまは日蓮にちれんかしこへゆくならば其その日に一國にきこへ又かまくらまでもさわぎ候そうちはんか、心ざしある人なりともゆき

たらんところの人人^{ひとびと}めを・をそれ

ぬべし、いままでとぶらい候はねば 聖靈^{しょうりょう} いかにかひしくを・はすらんと・

をもへば・あるやうもありなん、そのほど・まづ弟子^{でし}をつかわして御はかに

自我^{じがげ}偈^ぎをよませまいらせしなり、其^その由御心へ候へ、 恐^{きょうきよう}恐^ふ。

三四七

高橋殿御返事^{ごへんじ}

1467p

米穀も又又かくの如^{ごと}し、同じ米穀なれども謗法^{ぼうほう}の者をやしなうは仏種^{ぶつしゆ}をた

つ命^{いのち}をついで弥弥強盛^{いよいよかうじやう}の敵人^{てきじん}となる、又命^{いのち}をたすけて終^{つい}に法華經^{ほけきやう}を引き入る

べき故^{ゆゑ}か、又法華^{ほっけ}の行者^{ぎやうじや}をやしなうは慈悲^{じひ}の中の大慈悲^{じひ}の米穀なるべし、

一切衆生^{いっさいしゆじやう}を利益^{りやく}するなればなり、故^{ゆゑ}に仏舍利^{しやり}變じて米と成るとは是^{これ}なるべし、

かかる今時分人^{こんじぶん}をこれまでつかはし給^{たま}う事^{こと}うれしさ申^{もう}すばかりなし、釈迦^{しやか}仏^{ぶつ}

・地涌^{じゆ}の菩薩^{ぼさつ}御身^{おんみ}に入りかはらせ給^{たま}うか。

其^その国^{ぶつぽう}の仏^{きへん}法^{きへん}は貴^い辺^ちにまかせたてまつり候^ぞ、仏^{ぶつ}種^{しゆ}は縁^{えん}に従^{したが}つて起^{おこ}る是^{かく}の故^{のゆえ}
に一^{いち}乗^{じやう}を説^{とく}くなるべし、又^{また}治^ち部^ぶ房^{ぼう}・下^{しも}野^の房^{ぼう}等^ら来^きり候^は・ばいそぎいそぎつか
はすべく候、松^{まつ}野^の殿^{でん}にも見^み参^{さん}候^はば・くはしくかたらせ給^{たま}へ。

二四八

三三蔵祈雨事

建治元年六月五十四歳御作 与

にしやまにゆうどう
西山入道

1468p

そ 夫れ木をうえ候には大風吹き候へどもつよきすけをかひぬればたうれず、

お 本より生いて候木なれども根の弱きはたうれぬ、甲斐無き者なれどもたすく

る者強ければたうれず、すこし健の者も独なれば悪しきみちにはたうれぬ、

さんぜんだいせんせかい 又三千大千世界のなかには舍利弗迦葉尊者をのぞいては仏よにいで給はずば

さんあくぶつ 一人もなく三悪道に墮つ

べかりしが、仏をたのみまいらせし強縁によりて一切衆生はをほく仏になり

あじゃせ しなり、まして阿闍世王・あうくつまらなんと申せし悪人どもはいかにもか

あびじこく なうまじくて必ず阿鼻地獄に墮つべかりしかども・教主釈尊と申す大人に

たまひ ゆきあはせ給いてこそ仏にはならせ給いしか、されば仏になるみちは善知識

にはすぎず、わが智慧ちえなに

にかせん、ただあつきつめたきばかりの智慧ちえだにも候ならば善知識ぜんちしきたいせちなり、而しかるに善知識ぜんちしきに値あう事が第一だいいちのかたき事なり、されば仏ぜんちしきは善知識ぜんちしきに値あう事をば一眼うきぎのかめの浮木うきぎに入り・梵天ぼんてんよりいとを下おろして大地だいちのはりのめに入るにたとへ給たまへり、而しかるに末代まつだい悪世あくせには悪知識あくちしきは大地だいち微塵みじんよりもをほく善知識ぜんちしきは爪上そつじょうの土つちよりもすくなし、

ふだらくさん かんぜおんぼさつ ぜんざいどうじ ぜんちしきべつえん

補陀落山の觀世音菩薩は善財童子の善知識別円二教を・をしへて・いまだ

じゅんえん

純円じゅんえんならず、常啼菩薩じょうたいぼさつは身みをうて善知識ぜんちしきをもとめしに曇無竭菩薩どんむかつぼさつにあへり、

つうべつえん

通別円つうべつえんの三教をならひて法華經ほけきょうを・をしへず、舍利弗しゃりほつは金師きんしが善知識ぜんちしき・九十

日と申せしかば闍提せんたいの人となしたりき、ふるなは一夏いちげの説法せつぽうに大乘だいじょうの機きを小

人となす、大聖ほけきょうすら法華經ほけきょうをゆるされ

しょうか

ず証果しょうかのらん機きをしらず、末代まつだい悪世あくせの学者等がくしゃをば此をもつてすひしぬべし、

天を地といひ東を西といひ・火を水とをしへ星は月にすぐれたり、ありづかは須弥山しゆみせんにこへたり、なんと申す人人ひとびとを信じて候はん人人ひとびとは・ならはざらん悪人あくにんにはるかをとてをしかりぬべし。

にちれんぶつぼう

日蓮仏法をこころみるに道理と証文とにはすぎず、又道理証文よりも

げんしやう

現証にはすぎず、而るに去る文永五年の比・東には俘囚えびすをこり西には蒙古もうこよ

にちれん

りせめつかひつきぬ、日蓮案じて云く仏法を信ぜざればなり定めて調伏じやうぶくをこ

じやうぶく

なはれずらん、調伏は又真言宗しんごんしやうにてぞあらんずらん、月支・漢土・日本・

しばらがっし

三箇国の間に且く月支はをく、漢土・日本の二国は真言宗しんごんしやうにやぶらるべし、

ぜんむいさんそう

かんど

善無畏三蔵・漢土に亘りてありし時は唐の玄宗の時なり、大旱魃ありしに祈雨きう

の法

だいりう

を・をほせつけられて候しに・大雨ふらせて上一人より下万民にいたるまで

おおいよろこ

しゆゆ

たいふう

こくど

大に悦びし程に須臾ありて大風吹き来りて国土をふきやぶりしかば・けをさ

めてありしなり、又其の世に金剛智三蔵こんごうちさんぞうわたる、又雨の御いのりありしかば
七日が内に大雨だいう下り上のごとく悦よろこんでありし程に、前代未聞ぜんだいみもんの大風吹たいふうきしか
ば・真言宗しんこんしゅうは・をそろしき悪法あくほうなり

とて月支がっしへをわれしが・とかうしてとどまりぬ、又同じ御世に不空三蔵ふくうさんぞう・雨
をいのりし程三日が内に大雨おおあめ下る悦さきのごとし、又大風吹たいふうきてさき二度よ
りも・をびただし数十日とどまらず、不可思議ふかしぎの事にてありしなり、此は
日本国の智者愚者一人もしらぬ事なり、しらんと・をもはば日蓮にちれんが生きてあ
る時くはしくたづねならへ、日本国にほんこくに

は天長元年がんねん二月に大旱魃かんばつあり、弘法大師こうぼうだいしも神泉苑しんせんおんにして祈雨きうあるべきにてあ
りし程に守敏しゅびんと申せし人すすんで云いわく「弘法は下臈げろうなり我は上臈じょうろうなり・まづ
をほせを・かほるべし」と申もうす、こうに随したがいて守敏しゅびんをこなう、七日と申もうすに
は大雨だいう下りしかども京中計ばかりにて田舎いなかにふらず、弘法こうぼうにをほせつけられてあ

りしかば七日にふらず二七日に

ふらず三七日にふらざりしかば、天子我といのりて雨をふらせ給いき、而る

とうじ もんじん

を東寺の門人等我が師の雨とがうす、くわしくは日記をひきて習うべし、

てんかだいいち

天下第一のわうわくのあるなり、これより外に弘仁九年の春のえきれい又三

こうにん

古なげたる事に不可思議の誑惑あり口伝すべし。

ふかしぎ おおわく

くでん

てんだいだいし

かんぱつ

ほけきょう

しゅゆ

おうしん

天台大師は陳の世に大旱魃あり法華經をよみて・須臾に雨下り王臣かうべ

ばんみん

をかたづけ万民たなごころをあはせたり、しかも大雨にもあらず風もふかず

かんう

だいし

おんまえ

だいり

甘雨にてありしかば、陳王大師の御前に・をはしまして内裏へかへらんこと

たまい

をわすれ給いき、此の時三度の礼拝はありしなり。

去る弘仁九年の春・大旱魃ありき・嵯峨の天王真綱と申す臣下をもつて冬
嗣のとり申されしかば・法華經・金光明經・仁王經をもつて伝教大師
祈雨ありき、三日と申せし日ほそきくもほそきあめしづしづと下りしかば天子
あまりによるこばせ給いて、日本第一のかたことたりし大乘の戒壇はゆるさ
れしなり、伝教大師の御師・護命と申せし聖人は南都第一の僧なり、四十
人の御弟子あいぐして仁王經をもつて祈雨ありしが五日と申せしに雨下り
ぬ、

五日はいみじき事なれども三日にはをとりて而も雨あらかりしかばまけにな
らせ給いぬ、此れをもつて弘法の雨をばすひせさせ給うべし、かく法華經は
めでたく真言はをろかに候に日本のほろぶべきにや一向・真言にてあるなり、
隠岐の法王の事をもつてをもつに真言をもつて蒙古とえぞとをでうぶくせば
日本国やまけんずらんと・すひせしゆへに此の事いのちをすてて・いみて・

みんとをもひしなり、いゐし時はでしらせいせしかども・いまは

あひぬれば心よかるべきにや、漢土・日本の智者・五百余年の間・一人もし

らぬ事をかんがへて候なり、善無畏・金剛智・不空等の祈雨に雨は下りて

しか

たいふう

而も大風のそひ候は・いかに心へさせ給うべき、外道の法なれども・いう

どうし

あめふ

ぶつぽう

しやうじやう

にかひなき道士の法にも雨下る事あり、まして仏法は小乗なりとも法のご

とく行うならば・いかでか雨下らざるべき、

だいにちぎやう

けこん

はんにや

あじん

いわうや大日経は華嚴・般若にこそをよばねども阿含にはすこしまさりて候

ぞかし、いかでか・いのらんに雨下らざるべき・されば雨は下りて候へども

たいふう

ひがこと

大風のそいぬるは大なる僻事のかの法の中にまじわれるなるべし、弘法大師

ふら

てんし

もう

の三七日に雨下らずして候を天子の雨を我が雨と申すは又・善無畏等よりも

おあい

とが

大にまさる失のあるなり。

だいいち

もうこ

こうほうだいし

じひつ

いわ

こうにん

第一の大妄語には弘法大師の自筆に云く、「弘仁九年の春疫れいをいのりて

ありしかば夜中に日^いでたり」と云云、かかるそらごとをいう人なり、此の事は日蓮^{にちれん}が門家第一^{もんかだいいち}の秘事^{ひじ}なり本文をとりつめていうべし、仏法^{ぶつぽう}はさてをきぬ上にかきぬる事^{てんかだいいち}天下第一^{だいじ}の大事なり、つてに・をほせあるべからず御心^{おんこころ}ざしのいたりて候へばをどろかしまいらせ候、日蓮^{にちれん}をばいかんがあるべかるらんと・をぼつかなしと・をぼしめすべきゆへに・かかる事ども候、むこり

国だにも・つよくせめ候わば今生にもひろまる事も候いなん、あまりにはげしくあたりし人人は・くゆるへんもや・あらんずらん。

外道と申すは仏前・八百年よりはじまりて、はじめは二天三仙にてありし

が・やうやく・わかれて九十五種なり、其の中に多くの智者神通のもの・あ

りしかども一人も生死をはなれず、又歸依せし人人も善につけ悪につけて皆

三悪道に堕ち候いしを・仏出世せさせ給いてありしかば、九十五種の外道十

六大国の王臣諸民をかたらひて

・或はのり・或はうち・或は弟子・或はだんな等無量無辺ころせしかども仏

たゆむ心なし、我此の法門を諸人にをどされているやむほどならば一切衆生

地獄に墮つべしとつよくなげかせ給いしゆへに・退する心なし、この外道と

申すは先仏の経經を見て・よみそこないて候いしより事をこれり。

今も又かくのごとし、日本の法門多しといへども源は八宗・九宗・十宗よ

りをこれり、十宗のなかに華嚴等の宗宗はさてをきぬ、真言と天台との勝劣に弘法・慈覚・智証のまどひしによりて日本国の人人・今生には他国にもせめられ後生にも悪道に墮つるなり、漢土のほろび又悪道に墮つる事も善無畏・金剛智・不空のあやまりよりはじまれり、又天台宗の人人も慈覚・智証よりは後は・かの人人の智慧にせかれて天台宗のごとくならず、されば・さのみやはあるべき。

いわうや日蓮はかれにすぐべきとわが弟子等をばせども・仏の記文にはたがはず、末法に入つて仏法をばうじ無間地獄に墮つべきものは大地微塵よりも多く、正法をへたらん人は爪上の土よりも・すくなしと涅槃經にはとかれ、法華經には設い須弥山をなぐるものはありとも・我が末法に法華經を経のごとくにとく者ありがたしと

記しをかせ給へり、大集經・金光明經・仁王經・守護經はちなひをん經

・最勝王経等に末法に入つて正法を行ぜんと出来せば邪法のもの王臣等にうたへて・あらんほどに彼の王臣等・他人が・ことばにつひて一人の正法
のものを

・或^{ある}はのり・或^{ある}はせめ・或^{ある}はながし・或^{ある}はころさば梵^{ぼん}王^{のう}・帝^{たい}釈^{しやく}・無^む量^{りよう}の諸^{しよ}天^{てん}
・天神^{てんじん}・地神^{ぢじん}等^らりんごくの賢^{けん}王^{おう}の身^みに入りかはりてその国^{くに}をほろぼすべしと
記^{しる}し給^{たま}へり、今^{いま}の世^よは似^にて候^{こう}者^{もの}かな。

そもそも

抑^{おさ}各^{かく}各^{かく}はいかなる宿^{しゆく}善^{ぜん}にて日^に蓮^{ちれん}をば訪^たはせ給^{たま}へるぞ、能^よく能^よく過^か去^こを御^ご

尋^{たず}ね有^あらばなにと無^{なく}くとも此^{この}度^{たび}生^{しょう}死^じは離^はれさせ給^{たま}うべし、すりはむどくは三

箇^そ年^{ねん}に十四^{じし}字^じを暗^{くら}にせざりしかども仏^{ぶつ}に成^{なり}りぬ提^{だい}婆^ばは六^{りく}万^{まん}蔵^{ざう}を暗^{くら}にして無^む間^{げん}

に堕^おちぬ是^これ偏^{ひとえ}に末^{まつ}代^{だい}の今^{いま}の世^よを表^{あらわ}するなり、敢^{あえて}て人^{ひと}の上^{うへ}と思^{おも}ひ食^くすべから

ず事^{しげ}繁^ふければ止^{とど}め置^おき候^{こう}い畢^{おわ}んぬ、抑^{そも}当^{とう}時^じの忽^{こつ}忽^{こつ}に御^ご志^し申^{まう}す計^{けい}り候^{こう}はね

ば大^{だい}事^じの事^{こと}あらあらをどろかしまひらせ候^{こう}、ささげ青^{せい}大^{だい}豆^{とう}給^{たま}い候^{こう}いぬ。

六月二十二日

日^に蓮^{ちれん}

かおう

花^{はな}押^{おし}

にしやま

西山殿御返

三四九

蒙古使御書

建治元年五十四歳御作

与西山

高橋入道

1472p

かまくら

鎌倉より事故なく御下りの由承り候いてうれしさ申す計りなし、又蒙古の

はね

人の頸を刎られ候事承り候日本国の敵にて候念仏・真言・禅・律等の法師は

たまわ

にほんこく

ねんぶつ

しんごん

ぼっし

とが

切られずして科なき蒙古の使の頸を刎られ候ける事こそ不便に候へ子細を知

もうこ

はね

ふびん

しさい

かんが

ざる人は勘へあてて候をおごりて云うと思ふべし此の二十余年の間私には昼

ひそか

でし

夜に弟子等に歎き申し公には度度申せ

なげ

もう

おおやけ

たびたび

これ

し事はなり一切の大事の中に国の亡びるが第一の大事にて候なり最勝王經

いっさい

だいい

だいいち

だいい

さいしゅうおうきよう

いわ

に云く「害の中の極めて重きは国位を失うに過ぎたること無し」等云云、文

きわ

こくゐ

うしな

す

いっさい

こくおう

まつりごと

たこく

の心は一切の悪の中に国王と成りて政悪くして我が国を他国に破らるるが

あしき

こんこうみようきよう

いわ

あくにん

あいぎよう

ぜんにん

ちばつ

第一の悪にて候と説れて候又金光明經に云く「悪人を愛敬し善人を治罰

だいいち

こんこうみようきよう

いわ

あくにん

あいぎよう

ぜんにん

ちばつ

するに^{ゆえ}よるが故に乃^{ない}至^{した}他^{ほう}方^{おん}の怨^{おん}賊^{ぞく}来^くりて

国人喪^{そう}乱^{らん}に遇^う」等云云、文の心は国王^{こくおう}と成^なりて悪^{あく}人^{にん}を愛^{あい}し善^{ぜん}人^{にん}を科^{とが}にあつ

れば必^そず其^その国^{たこく}・他^た国^{こく}に破^{やぶ}らるると云^いう文^{ぶん}なり、法^ほ華^け經^{きやう}第^{だい}五^ごに云^いく、世^よに恭^{きやう}敬^{けい}

せらるるを^う為^なること六^{ろく}通^{つう}の羅^{らかん}漢^{かん}の如^{ごと}くならん」等云云、文の心は法^ほ華^け經^{きやう}

の敵の相貌そうみょうを説きて候に・二百五十戒を堅く持ち迦葉舍利弗たもかしようしやりほつの如くなる人ことを
・国主こくしゅこれを尊みて法華經ほけきやうの行者ぎやうじやを失なはむとするなりと説れて候ぞ。

夫れ大事だいじの法門ほうもんと申すは別に候はず、時に当て我が為め国の為め大事だいじなる

事を少しも勘かんへたがへざるが智者ちしやにては候なり、仏のいみじきと申すは過去かこ

を勘かんへ未来みらいをしり、三世さんぜを知しめすに過ぎて候・御智慧ちえはなし、設たとい仏にあ

らねども竜樹りゆうじゆ・天親てんじん・天台てんだい・伝でん教ぎやうなど申せし聖人しようにん・賢人けんじん等は仏程こそ・

なかりしかども・三世さんぜの事を粗知ほしらしめされて

候しかば名をも未来みらいまで流されて候き、所詮しよせん・万法は己心こしんに収まりて一塵いちじんも

かけず九山・八海も我が身に備わりて日月にちがつ・衆星しゆうせいも己心こしんにあり、然りといへしか

ども盲目もうもくの者の鏡に影を浮べるに見えず・嬰兒えいじの水火すいかを怖れざるが如し、こと

外典げてんの外道内典げどうないてんの小乗しょうじやう・権大乘等こんだいじやうは皆己心みなこしんの法を片端片端説きて候なり、かたはしかたはしと

然りといへども法華經ほけきやうの如く説かず、然れば經經きやうきやうに勝劣しょうれつあり人人ひとひとにも聖賢せいけん

分れて候ぞ、法門ほうもん多た多たなれば止とどめ候あい畢おんぬ。

鎌倉かまくらより御下くだりそうその御隙すきに使者申もうす計ばかりなし、其その上種しゅじゅ種の物送り

給候事悦よろこび入いつて候、日本にほんは皆人みなの歎なげき候に日蓮にちれんが一類いちるいこそ歎なげきの中に悦よろこび

候へ、国くにに候へば蒙古もうこの責まめかはよも脱だれ候はじなれども・国くにのために賣うられ候

いし事は天しんも知しめして候へば後生ごしょうは必ずたすかりなんと悦よろこび候に・御辺ごへんこ

そ今生こんじょうに蒙古もうこの恩ごんむを蒙たらせ給たまい

て候へ、此このの事起おこらずば最明寺殿さいめいじどうの十三年に当たいらせ給たまいては御かりは所領しりょうに

ては申もうす計ばかりなし、北条六郎殿ほけつじろうのやうに筑紫つくしにや御坐あわさん、是は各各おの／＼の御心

のさからせ給たまうて候なり、人ひとの科とがをあてるにはあらず、又一またには法華經ほけきょうの御

故ゆゑにたすからせ給たまいて候いぬるか・ゆゆしき御僻事ひがごとなり、是程これほどの御悦よろこびまい

りても悦よろこびまいらせ度たく候へども人聞ひときこつつましく候いてとどめ候あい畢おんぬ。

乃時

日蓮にちれん

花押 かおう

西山殿御返事 にしやまごへんじ

三五〇

西山殿御返事にしやまごへんじ

建治二年 五十五歳御作

1

474p

青鳧せいふ五貫文たまい給たまい候おわい畢おわんぬ、夫それ雪いた至いたつて白しろければそむるにそめられず。
漆うるし至いたつてくろければしろくなる事ことなし、此これよりうつりやすきは人の心なり、
善ぜん惡あくにそめられ候おわ、真言しんごん・禅ぜん・念仏ねんぶつ宗等しゅうとうの邪惡じゃあくの者にそめられぬれば必ず
地獄じごくにをつ、法華經ほけきょうにそめられ奉たてまれば必ず仏ぶつになる、經きょうに云いく「諸法しよぽう実相じつそう」
云云い、又云いく「若人にやくにん不信ふしん乃ない至し入阿鼻獄にゅうあびごく」云云い、いかにも御信心しんじんをば雪漆うるしの
とくに御もち有あるべく候おわ、恐恐きょうきょう。

建治二年丙子

ひのえね

日蓮にちれん

花押かおう

にしやま ごとへんじ
西山殿御返事

三五一

宝輕法重事

こうあん
弘安二年五月

五十八歳御作 与

にしやまにゆうごう
西山入道

1474p

たかんな

第 百本又二十本追給い畢んぬ、妙法蓮華經第七に云く「も 若し復人有つて

しっぽう もつ

さんぜんだいせんせかい

七宝を以て三千大千世界に満てて仏及び大菩薩・辟支仏・阿羅漢に供養せん、

こ

くどく

ほけきよう

ないし

くげ

じゆじ

そ

是の人の所得の功德も此の法華經の乃至一四句偈を受持する其の福の最も多

きには如かじ

もんく

しっぽう

ししよく

たてまつ

いちげ

し

と云うは法は是れ聖の師なり能生能養能成能栄法に過ぎたるは莫し故に人は

こ

のうしよく

す

な

ゆえ

軽く法は重きなり」云云、記の十に云く「父母必ず四の護を以て子を護る

ごと

ほっしん

よ

な

しじゆうすいちく

な

ごつ

か

が如し、今発心は法に由るを生と為し始終随逐するを養と為し極果を満ぜし

むるを成と為し能く法界に應ずるを榮と為す、四つ同じからずと雖も法を以て
本と為す」云云、經並に天台・妙樂の心は一切衆生を供養せんと

阿羅漢あらかんを供養くようせんと乃至ないし一切いっさいの仏を尽つくして七宝しつぼうの財たからを三千大千世界さんぜんだいせんせかいにもりみて供養くようせんよりは・法華經ほけきようを一偈いちげ・或あるは受持じゆじし・或あるは護持ごじせんはすぐれたりと云云い經きやうに云いく・此この法華經ほけきようの乃至ないし一四句偈くげを受持じゆじする其その福の最も多きには如しかず・天台てんだい云いく・人ひとは輕かろく法ほふは重おもきなり・妙樂みょうらく云いく・四よつ同おなじからずと雖いえども法ほふを以もつて本もとと為なす・云云いっさいしゆじよう・九界くかいの一切衆生いっさいしゆじようを仏そつたいに相對こして此これをはかるに一切衆生いっさいしゆじようのふくは一毛いちもうのかろく・仏ほとんの御ごふくは梵天三昧ぼんてんしまいの衣しゆのかろきがごとし・法華經ほけきようの一字いちじの御ごふくの重おもき事ことは大地だいちのをもきがごとし・人ひと輕かろしと申もうすは仏ほとんを人ひとと申もうす法重ほふしと申もうすは法華經ほけきようなり夫それ法華ほつ已前いぜんの諸經しよきよう並しよに諸論しよろんは仏ほとんの功德くどくをほめて

候ほ仏ふのごとし・此この法華經ほけきようは經きやうの功德くどくをほめたり仏ふの父母ふぼのごとし・華嚴經けこんきよう
・大日經等だいにちきようの法華經ほけきように劣ほる事ことは一毛いちもうと大山だいちと三昧さんまいと大地だいちとのごとし・乃至ないし

ほけきよう　さいか　ぎようじゃ　けこん　しんこん　さいじよう
法華經の最下の行者と華嚴・真言の最上の僧とくらぶれば帝釈と　猴と
しし　しょうれつ　しか
師子と兎との勝負なり、而るをたみが王とののしればかならず命となる、
しよきよう　ぎようじゃ　ほけきよう　ぎようじゃ　すく
諸經の行者が法華經の行者に勝れたりと申せば必ず国もほろび地獄へ入り
候なり。

但かたきのなき時はいつわりをろかにて候、譬へば將門・貞任も貞盛・頼
義がなかりし時は・国をしり妻子安穩なり云云、敵なき時はつゆも空へのぼ
り雨も地に下り逆風の時は雨も空へあがり日出の時はつゆも地にをちぬ、さ
れば華嚴等の六宗は伝教なかりし時はつゆのごとし真言も又かくのごとし、
こつてきしゆつげん　ほけきよう
強敵出現して法華經をもつて・

つよくせむるならば叡山の座主・東寺の小室等も日輪に露のあへるがごとし
と・をばしめすべし、法華經は仏滅後・二千二百余年にいまだ經のごとく説き
きわめてひろむる人なし、天台・伝教もしろしめさざるにはあらず・時も来
てんだい　でんぎよう

らずき機もなかりしかば・かききわめずして・をわらせ給たまへり、日蓮にちれんが弟子でしとならむ人ひと人は・やすくしりぬべし。

一えんぶだい閻浮提ほけきようの内に法華經じゆりようぼんの寿量品しやかぶつの釈迦仏きようそつの形像を・かきつくれる堂塔どうとういまだ候はず、いかでか・あらわれさせ給たまわざるべき、しげければとどめ候。

たけのこは百二十本法華經は二千余年にあらわれ候ぬ、布施はかるけれども志重き故なり、いじやう當時はくわんのうと申し大宮づくりと申しかたがた民のいとまなし、おんこころざし御心ざしふかければ法もあらわれ候にや、きようきようきんげん恐恐謹言。

五月十一日

日蓮にちれん

花押かおう

西山殿御返事にしやま ごへんじ

三五一 西山殿御返事にしやま ごへんじ

弘安四年こうあん 六十歳御作

467p

あまざけ一をけ・やまのいも・ところせうせう給了んぬ、おわ梵網經と申す經には一紙・一草と申してかみ一枚くさひとつ大論と申するんにはつちのもちえんぶだいゐを仏にくやうせるもの閻浮提の王となるよしを・とかれて候。

これは・それには・にるべくもなし・そのうへをとこにもすぎわかれ・たのむかたもなきあまのするがの国西山にしやまと申すところより甲斐国かいのくにのはきみの山の中にをくられたり、人にすてられたるひじりの寒さに・せめられて・いかに心ぐるしかるらんとをもひやらせ給たまいて・をくられたるか、父母ふぼにをくれしより・このかた・かかるねんごろの

事にあひて候事こそ候はね、せめての御心おんこころざしに給たまうかとおぼえてなみだも

かきあへ候はぬぞ、日蓮にちれんは・わるき者にて候へども法華経ほけきょうは・いかでか・お

ろそかにおわすべき、ふくろはくさけれども・つつめる金はきよし・池はき

たなければどもはちすしやうじやうなり、日蓮にちれんは日本第一にほんだいいちのえせものなり、

法華経ほけきょうは一切経いっさいきょうにすぐれ給たまへる経な

り、心あらん人金をとらんとおぼさばふくろをすつる事なかれ、蓮をあひせば池をにくむ事なかれ、わるくて仏になりたらば法華経ほけきょうの力あらはるべし、

よつて臨終りんじゅう わるくば法華經ほけきょう の名をりなん、さるにては日蓮にちれん は・わるくてもわ
るかるべしわるかるべし、
恐恐きょうきょう 謹言きんげん。

月 日 御 返 事

三五三

西山殿御返事 にしやまごへんじ

1477p

としごろ後生をばしめして御心ざしをはすれば名計り申し候、同行どもに
あらあらしめすべし、やすき事なれば智慧の入る事にあらず智慧の入る
事にあらず、恐恐。

一月廿三日

日蓮 にちれん 在御判

西山殿御返事 にしやまごへんじ

三五四

妙心尼御前御返事 みょうしんあまごぜんごへんじ

建治元年八月 がねん 五十四歳

御作 1477p

すずの御志 ごし 送り給ひ候い了んぬ、おさなき人の御ために御まほりさづけ

まいらせ候、この御まほりは法華經ほけきようのうちのかんじん一切經いっさいきようのげんもくにて候、たとへば天には日月にちがつ・地には大王だいおう・人には心・たからの中には如意宝珠にょいほうじゆの・たまいえにははしらのやうなる事にて候。

このまんだらを身にたまちぬれば王を武士ぶしのまほるがごとく子を・をやのあいするがごとくいをの水をたのむがごとく草木そうもくのあめをねがうごとく・とりの木をたのむがごとく・一切いっさいの仏神等ぶつしんのあつまり・まほり昼夜に・かげのごとく・まほらせ給たまう法にて候、よくよく御信用ごしんようあるべし、あなかしこ・あなかしこ、きようきようきんげん恐恐謹言。

八月二十五日

日蓮にちれん
花押かおう

みようしんあまごぜんこへんじ
妙心尼御前御返事

三五五

窪尼御前御返事

弘安元年五月

五十七歳御作

1478p

ちまき は たかな
粽五把・ 箒十本・ 千日ひとつつ 給い畢んぬ、いつもの事に候へども・な

がめふりてなつの日ながし、山はふかく・みちしげければ・ふみわくる人も候はぬに・ほととぎすにつけての御ひとこへありがたし・ありがたし。

さてはあつわらの事こんどをもつて・をぼしめせ・さきもそら事なり、かうのとは人のいゐしに・つけて・くはしくも・たづねずして此の御房をながしける事あさましと・をぼしてゆるさせ給いてのちは・させるとがもな

てはいかんが・又あだせらるべき、すへの人人の法華經の心にはあだめども

・うへにそしらは・いかんがと・をもひて・事にかづけて人をあだむほどに
・かへりてさきざきのそら事のあらわれ候ぞ、これはそらみげうそと申す事
はみぬさきよりすいして候、さどの国にてもそらみげうそを三度までつくり
て候しぞ、これにつけても上と国と

の御ためあはれなり、木のしたなるむしの木をくらひたうし・師子ししの中のむ
しの師子ししを食らいうしなふやうに守殿じうでんの御をんにてすぐる人人ひとびとが守殿じうでんの御威ぎゐ
をかりて一切いっさいの人人ひとびとを・をどし・なやまし・わづらはし候うへ、上の仰せと
て法華經ほけきやうを失うしないて国もやぶれ主をも失うしなうて返つて各々が身をほろぼさんあさ
ましさよ、日蓮にちれんはいやしけれども

経は梵天ぼんてん・帝釈たいしやく・日月にちがつ・四天してん・天照太神てんしやうだいじん・八幡大菩薩はちまんだいぼさつのまほらせ給たまう御經
なれば・法華經ほけきやうのかたをあだむ人人ひとびとは・劍をのみ火を手ににぎるなるべし、
これにつけても・いよいよ御信用ごしんようのまさらせ給たまう事、たうとく候ぞたうとく

候ぞ。

五月三日

花押かおう

窪尼御返事ごへんじ

日蓮にちれん

三五六

窪尼御前御返事

弘安元年六月

五十七歳御作

1479p

すずの御供養送り給くよういたま了おんぬ、大風たいふうの草をなびかしいかづちの人を・をど

ろかすやうに候、よの中にいかにいままで御しんようの候いけるふしぎさよ、

ねふかければはかれず・いづみに玉あれば水たえずと申もすやうに・御信心しんじんの

ねのふかく・いさぎよき玉の心のうちに・わたらせ給たまうか、たうとしたうと

し、恐おそ恐おそ。

六月二十七日

日蓮にちれん

花押かおう

くぼの尼御前御返事
あまこぜんごへんじ

三五七

妙心尼御前御返事

弘安元年八月

五十七歳御作

1479p

あわしかき二簞なすび一こ給い候い了んぬ、入道殿の御所労の事、唐土に
黄帝・扁鵲と申せしくすしあり天竺に持水耆婆と申せしくすしあり、これら
はその世のたから末代のくすしの師なり、仏と申せし人はこれには

にるべくもなきいみじきくすしなり、この仏・不死の薬をとかせ給へり・今
の妙法蓮華經の五字是なり、しかも・この五字をば閻浮提人病之良薬とこ
そとかれて候へ。

入道殿は閻浮提の内日本国の人なり、しかも身に病をうけられて候病之
良薬の經文顯然なり、其の上蓮華經は第一の薬なり、はるり王と申せし悪
王仏のしたしき女人五百余人を殺して候いしに・仏阿難を靈山につかはして

青蓮華^{せいれんげ}をとりよせて身にふれさせ給^{たま}いしかば・よみかへりて七日ありて
とうりてん

利天に生れにき、蓮華^{れんげ}と申^{もう}す花はかか

るいみじき徳ある花にて候へば仏妙法^{みょうほう}にたとへ給^{たま}へり、又人の死ぬる事は・

やまひにはよらず・当時^{とうじ}のゆきつしまのものどもは病なけれども・みなみな

むこ人に一時^{いちじ}に・うちころされぬ・病あれば死ぬべしといふ事^{ふじょう}不定なり、又

このやまひは仏の御はからひか・そのゆへは 浄名経・涅槃経には病ある人

・仏になるべきよしとかれて候、病によりて道心はをこり候なり、又一切の

病の中には五逆罪と一闍提と謗法をこそおもき病とは仏はいたませ給へ今の

日本

国の人は一人もなく極大重病 あり所謂大謗法の重病 なり今の禅宗・

念仏宗・律宗真言師なりこれらはあまりに病おもきゆへに我が身にもおぼ

へず人もしらぬ病なりこの病のこうずるゆへに四海のつわものただいま来り

なば王臣万民みなしづみなんこれをいきてみ候はんまなここそあたあたしく

候へ。

入道殿は今生にはいたく法華経を御信用ありとは見え候はねども・過去

の宿習のゆへの・もよをしによりて・このなが病にしづみ日日夜夜に道心

ひまなし、今生につくりをかせ給ひし小罪は・すでにきへ候いぬらん、謗法

の大悪は又法華經に歸しぬるゆへに・きへさせ給うべしただいまに靈山にま
いらせ給いなば日いでて十方をみるが・

ごとくうれしく、とくしにぬるものかなとうちよろこび給い候はんずらん、
ちゆうう

中有の道にいかなる事もいできたり候はば日蓮がでしなりとなのらせ給へ、
にちれん

わずかの日本国なれどもさがみ殿のうちのものと申すをば・さうなく
にほんこく

おそるる事候、日蓮は日本第一のふたうの法師ただし法華經を信じ候事は一
にちれん にほんだいいち

閻浮提第一の聖人なり、其の名は十方の浄土にきこえぬ、定めて天地もし
えんぶだい だいいち しやうにん そ じゅうほう じょうど てんち

りぬらん・日蓮が弟子となのらせ給はば・いかなる悪鬼なりともよもしらぬ
にちれん でし たま あつき

よしは申さじとおぼすべし、さては度度の御心ざし申すばかりなし、
もつ たびたび おんこころざしもつ きようきよう

謹言。
きんげん

さるは木をたのむ魚は水をたのむ・女人はおとこをたのむ・わかれのを
にょにん
しきゆへにかみをそり・そでをすみにそめぬ、いかでか十方の仏もあは
じゅうほう

れませ給はざるべき、
法華經もすてさせ給うべきとたのませ給え・たの
ませ給え。

八月十六日

妙心尼御前御返事

日蓮
花押

三五八

窪尼御前御返事

弘安二年五月

五十八歳

御作

1481p

御供養^{くよう}の物数のままに慥^{たしか}に給^{たま}い候^{まい}、当時^{とうじ}は五月の比おひにて民のいとまなし其^その上宮^{じょうぐう}の造営にて候なり、かかる暇なき時・山中の有り様思ひやらせ給^{たま}いて送りたびて候事御志殊^{こと}にふかし。

あそかだいおう

阿育大王と申せし王はこの天の日のめぐらせ給^{たま}う一閻浮提^{えんぶだい}を大体^{だいたい}しろしめされ候いし王なり、此の王は昔德勝^{とくしょう}とて五になる童^{どう}にて候いしが釈迦^{しゃか}仏^{ぶつ}にすななもちみをまいらせたりしゆへにかかる大王^{だいおう}と生れさせ給^{たま}う、此の童はさしも心ざしなしたわふれなるやうにてこそ候いしかども仏のめでたくをはすればわづかの事も・ものとなり

て・かかる・めでたき事候、まして法華經ほけきょうは仏にまさらせ給たまう事星と月とと
もしびと日とのごとし、又御心おんこころざしも・すぐれて候。

されば故人道にゅうだい殿も仏にならせ給たまうべし、又一人をはする・ひめ御前ごぜんも・い
のちもながく・さひわひもありて・さる人の・むすめなりと・きこえさせ
給たまうべし、当時とうじもおさなけれども母をかけてすごす女人にょにんなれば父の後世ごしやうをも
たすくべし。

から国にせいしと申せし女人にょにんは・わかなを山につみて・をひたるは・わを
やしなひき、天あはれみて越王えわうと申もうす大王だいおうのかりせさせ給たまいしが・みつけて
きさきとなりనికి、これも又かくのごとし・をやを・やしなふ女人にょにんなれば天
もまほらせ給たまうらん仏もあはれみ候らん、一切いっさいの善根ぜんこんの中に孝養父母こうようふぼは第一だいいち
にて候なれば・まして法華經ほけきょうにてをはす、金のうつわものに・きよき水を入
れたるがごとく・すこしももるべからず候、めでたし・めでたし、
きようきやうきんげん
恐恐謹言。

五月四日

にちれん かおう
日蓮 花押

くぼの尼御前御返事
あまごぜんごへんじ

このなかの御くやうのものは・ところところ略して法門を書写し畢んぬ。
ほうもん しよしゃ おわ

三五九

みようしん あまごぜんごへんじ
妙心尼御前御返事

こうあん
弘安二年十一月 五十八歳御作

1482p

御そうぜんれう送り給い^{たま}了^あんぬ、すでに故入道^{こぎやうだい}殿のかくる日にて・おは
しけるか、とかうまぎれ候いけるほどに・うちわすれて候いけるなり、よも
それには・わすれ給^{たま}はじ。

そぶ
蘇武と申せし男は漢王の御使^{おんつかい}に胡国^{ここく}と申す国に入りて十九年めもおとこを

はなれ・おともわする事なし、あまりのこひしさに・おとこの衣を秋こ
とにきぬたのうへにて・うちけるが・おもひやとをりて・ゆきにけん・おと
このみにきこへたり、ちんしといいしものは・めおとこ・はなれけるに・
かがみをわりて・ひとつづつ・とりにけり、わする時はとりとび去りけり、
さうしといぬしものは・おとこをこひてはかにいたりて木となりぬ、相思樹そうしじゅ
と申すもうはこの木なり、大唐だいたうへわたるにしがの明神みょうじんと申すもう神をはす・おとこの
もろこしへ・ゆきしをこひて神となれり・しまのすがたおうなになり、ま
つらさよひめといふ是これなり、いにしへより・いまにいたるまでをやこのわか
れ主従のわかれ・いづれかつらからざる、されども・おとこをんなのわかれ
ほど・たとげなかりけるはなし、過去かこ遠遠より女の身となりしが・このおと
こ娑婆しやば最後のぜんちしきなりけり。

ちりしはな・をちしこのみも・さきむすぶ・いかに二人の・返らざるらむ。

こぞもつくことしもつらき・月日かな・おもひはいつも・はれぬものゆへ。

ほけきよう だいもく
法華經の題目をとなへまいらせてまいらせ候。

十一月二日

にちれん かおう
日蓮 花押

みようしんあまごぜんごへんじ
妙心尼御前御返事

三六〇

あまごぜんごへんじ
窪尼御前御返事

こうあん
弘安二年十二月 五十八歳御作

1483p

十字五十まい・くしがき一れん・あめをけ一・送り給たまいお了わぬ、御心おんこころざし
さきざきかきつくしてふでもつひゆびもたたため、三千大千世界さんぜんだいせんせかいに七日ふる雨
のかずは・かずへつくしてん、十方世界じゅうぽうせかいの大地だいちのちりは知る人もありなん、

ほけきよう
法華經の一字供養の功德は知りがたしとこそ仏は・とかせ給いて候へ、此れ
をもつて御心へあるべし、
きようきようきんげん
恐恐謹言。

十二月二十七日

にちれん かおう
日蓮 花押

くぼの尼御前御返事
あまごぜんごへんじ

三六一
みようしん あまごぜんごへんじ
妙心尼御前御返事

こうあん
弘安三年五月 五十九歳御作

1483p

たまい
すずのもの給いて候、たうじはのう時にて人のいとまなき時・かやうに・
くさぐさのものども・をくり給いて候事いかにも申すばかりなく候、これ

もひとへに故入道殿にせうだいの御わかれの・しのびがたきに後世しごうの御ためにてこそ候
らんめ、ねんごろにごせをとぶらはせ給たまい候へば・いくそばく・うれしくお
はしますらん、とふ人もなき草むら

に露しげきやうにて・さばせかいにとどめをきしをさなきものなどのゆく
へきかまほし。

あの蘇武が胡国に十九年ふるさとの妻と子とのこひしさに雁の足につけし
ふみ、安部の中麻呂が漢土にて日本へかへされざりし時・東にいでし月をみ
てかのかすがの月よと・ながめしも身にあたりてこそ・おはすらめ。

しかるに法華經の題目をつねは・となへさせ給へば此の妙の文じ御つかひ
に变ぜさせ給い・或は文殊師利菩薩・或は普賢菩薩・或は上行菩薩・或は
不輕菩薩等とならせ給うなり、譬えばちんしがかがみのとりの・つねにつげ
しがこ

とく蘇武がめのきぬたのこえのきこえしがごとくさばせかいの事を冥途につ
げさせ給うらん、又妙の文字は花のこのみとなるがごとく半月の満月となる
がごとく変じて仏とならせ給う文字なり。

されば経に云く「能く此の経を持つは則ち仏身を持つなり」と、天台大師の云く「一文文是れ真仏なり」等云云、妙の文字は三十二相・八十種好円備せさせ給う釈迦如来にて・おはしますを我等が眼つたなくして文字とは・みまいらせ候なり、譬へばはちすの子の池の中に生いて候がやうに候はちすの候をとしよりて候人は眼くらくし

てみず、よるはかげの候をやみにみざるがごとし、されども此の妙の字は仏にて・おはし候なり、又此の妙の文字は月なり日なり星なりかがみなり衣なり食なり花なり大地なり大海なり、一切の功德を合せて妙の文字とならせ給う、又は如意宝珠のたまなり、かくのごとくしらせ給うべし、くはしくは又又申すべし。

五月四日

日

連花押

かおう

はわき殿^も申^うさせ給^{たま}へ

三六一

窪尼御前御返事

弘安三年六月

五十九歳御作

1485p

仏の御弟子おんでしの中にあなりちと申せし人はこくぼん王の御子いえにたからを

みてて・おはしき、のちに仏の御でしとなりては天眼第一てんげんだいいちのあなりちとて

さんぜんだいせんせかい

三千大千世界を御覧ありし人、法華經の座にては普明如来ふみようにらいとならせ給うたま、そ

のさきのよの事をたづぬればひえのはんを辟支仏ひやくしぶつと申す仏の弟子にくやうせでし

しゆへなり、いまの比丘尼びくにはあわのわさごめ山中にをくりて法華經にくやう

しまいらせ給うたま、いかでか仏にならせ給はざるべき、恐恐きようきよう謹言きんげん。

六月二十七日

日蓮 花押

にちれん

かおう

くぼの尼御前御返事 あまごぜんごへんじ

三六三

窪尼御前御返事 あまごぜんごへんじ

弘安四年十二月 こうあん 六十歳御作

1485p

しなじなのものをくり給て候。

善根ぜんこんと申もうすは大なるによらず又ちいさきにもよらず・国により人により時

により・やうやうにかわりて候、譬たとへばくそをほしてつきくだきふるいてせ

んだんの木につくり又女人にんてん天女・仏につくりまいらせて候へども火をつけて

やき候へばべちの香なくそくさし、そのやうに・ものをころし・ぬすみを

してそのはつを・をとりて功德善根くどくぜんこんをして候へども・かへりて悪となる。

すだつちようじや

須達長者と申せし人は月氏第一の長者がっしだいいち ちようじやぎをん精舎しよつじやをつくりて仏を入れま

いらせたりしかども彼の寺焼けてあとなし、この長者ちようじやもといをを・ころして

あきなへて長者ちようじやとなりしゆへに・この寺つゐにうせにき、今の人人ひとびとの善根ぜんこんも

又かくのごとく大なるやうなれども・あるひは・いくさをして所領しりようを給・或ある

はゆへなく民をわづらはして・たからをまうけて善根ぜんこんをなす、此等これらは大なる

仏事ぶつじとみゆれども仏にもならざる上其その人人ひとびとあともなくなる事なり。

又人をも・わづらはさず我が心もなをしく我とはげみて善根ぜんこんをして候も仏

にならぬ事もあり、いはくよきたねをあしき田にうえぬれば・たねだにもな

き上かへりて損となる、まことの心なれども供養くじやうせらるる人だにも・あしけ

れば功德くどくとならず、かへりて惡道あくどうにおつる事候。

此これは日蓮にちれんを御くやうは候はず法華經ほけきようの御くやうなれば釈迦しゃかぶつ仏・多宝たほうぶつ仏・

十方じゆつぱうの諸仏しよぶつに此の功德くどくはまかせまいらせ候、抑そもそも今年の事は申しふりて候上

とうじ
當時はとしのさむき事生れて已来いまだおぼへ候わず、ゆきなんどのふりつ

もりて候事おびただし、心ざしある人もとぶらひがたし、御をとづれをぼろ

おんこころざし
げの御心ざしにあらざるか、
きょうきようきんげん
恐恐謹言。

十二月二十七日

にちれん
日蓮

かおう
花押

あまごぜんごへんじ
くぼの尼御前御返事

ごぼうごへんじ
三六四 三沢御房御返事 ぶんえい
文永十二年 五十四歳御作 与三

さど
沢小次郎 1468p

さど
佐渡の国の行者数多此の所まで下向ゆへに今の法門説き聞かせ候えば未来
ぶっしゅ
までの仏種になる事はれ皆釈尊の法恩ありがたし、
みなしやくそん
越後にて此の歌詠じ候ゆ

へ書き送り候なり。

おのづから・よこしまに降雨はあらし風こそ夜の・をうつらめ。

二十一日

三六五

三沢抄

建治四年二月 五十七歳御作 与三

沢小次郎

1487p

かへすがへす・するがの人人ひとびとみな同じ御心と申もつさせ給たまひい候そうらへ。

こつじ

柑子こつじ一百・こぶ・のり・をご等の生の物はるばると・わざわざ山中へを

くり給たまひいて候、ならびに・うつぶさの尼ごぜんの御こそで一給たまひい候そうらい了あわぬ。

ぬ。

さては・かたがたのをほせくはしくみほどき候。

そもそもぶっぼう

抑おさ仏法をがくする者は大地微塵だいちみじんよりをほけれども・まことに仏になる人

は爪の上の土よりも・すくなしと・大覚だいかく世尊せそん・涅槃經ねはんぎょうにたしかに・とかせ給たまひい

て候にちれんいしを、日蓮にちれんみまいらせ候て・いかなれば・かくわ・かたかるらむと・かん

がへ候いしほどに・げにも・さならむとをもつ事候、仏法をばくすれども

・或は我が心のをろかなるにより・或はたとひ智慧は・かしこき・やうなれ

ども師によりて我が心のまがるをしらず、仏教をなをしくならひうる事かた

し、たとひ明師並に実経に値い奉りて正法をへたる人なれども生死をいで

仏にならむとする時には・かならず影の身にそつがごとく・雨に雲のあるが

ごとく・三障四魔と申して七の大事出現す、設ひ・からくして六は・すぐれ

ども第七にやぶられぬれば仏になる事かたし、其の六は且くをく第七の大難

は天子魔と申す物なり、設い末代の凡夫・一代聖教の御心をさとり・摩訶

止観と申す大事の御文の心を心えて仏になるべきになり候いぬれば・第六天

の

魔王・此の事を見て驚きて云く、あらあさましや此の者・此の国に跡を止な

らば・かれが我が身の生死をいづるかは・さてをきぬ・又人を導くべし、又

此の国土こくどを・をさへとりて我が土を浄土じょうどとなす、いかんがせんとて欲・色・
無色の三界さんがいの一切いっさいの眷属けんぞくをもよをし仰おおせ下くだして云いく、各各おの／＼のうのうに随したがつ
て・かの行者ぎょうじやをなやましてみよ・そ

れに・かなわずば・かれが弟子^{でし}だんな並に国土^{こくど}の人の心の内に入りかわりて
・あるひはいさめ・或^{ある}はをどしてみよ・それに叶はずば我みづから・うちく
だりて国主^{こくしゅ}の身心^{しんしん}に入りかわりて・をどして見むに・いかでか・とどめざる
べきとせんぎし候なり。

にちれん

日蓮^{にちれん}さきより・かかるべしと・みほどき候いて末代^{まつだい}の凡夫^{ぼんぷ}の今生^{こんじょう}に仏にな
る事^{だいじ}は大事^{だいじ}にて候いけり釈迦^{しゃか}仏^{ぶつ}の仏にならせ給^{たまひ}いし事を経^{きよう}経^{ぎよう}にあまたとか
れて候に第六^{だいろくてん}天^{てん}の魔王^{まおう}の・いたしける大難^{だいなん}いかに忍^{しの}ぶべしとも・みへ候は
ず候、提婆^{だいば}達^{だつ}多^た・阿闍^{あじゃ}世^せ王^{わう}の悪事^{あくじ}は・ひとへに第六^{だいろくてん}天^{てん}の魔王^{まおう}のたばかりとこ
そみて候へ、まして如来^{にょらい}現^{げん}在^{ざい}・猶^{ゆた}多^た怨^{おん}嫉^{しつ}・況^{きやう}滅^{めつ}度^ど後^ごと申^{もう}して大覺^{だいかく}世^せ尊^{そん}の御時^{おんとき}
の御難^{なん}だにも凡夫^{ぼんぷ}の身^み・日蓮^{にちれん}にかやうなる者は片時^{かたとき}一日^{いちにち}も忍^{しの}びがたかるべし、
まして五十余年^{まっだい}が間の種種^{しゆじゆ}の大難^{だいなん}をや、まして末代^{まつだい}には此等^{これら}は百千万億倍^{せんまん}す
ぐべく候なる大難^{だいなん}をば・いかでか忍^{しの}び候べきと心に存^{ぞん}して候いしほどに・

聖人は未萌を知ると申して三世の中に未来の事を知るを・まことの聖人は申すなり、而るに日蓮は聖人にあらざれども日本国の今の代にあたりて・

此の国亡亡たるべき事をかねて知りて

侯いしに・此れこそ仏のとかせ給いて候・況滅度後の経文にあたりて侯へ、

此れを申しいだすならば仏の指させ給いて候未来の法華經の行者なり、知り

て而かも申さずば世世・生生の問・をうしことどもり生ん上・教主釈尊の

大怨敵其の国の国主の大讎敵・他人にあらず、後生は又無間・大城の人・

此れなりとかんがへみて・・或は衣食に・せめられ・或は父母・兄弟・師匠

・同行にもいさめられ・或は国主・万民にも・をどされしに・すこしもひる

む心あるならば一度に

申し出ださじと・としごろひごろ心をいましめ侯いしが・抑過去遠遠劫よ

り定めて法華經にも値い奉り菩提心もをこしけん、なれども設い一難二難に

は忍しのびけれども大難だいなん次第しだいにつづき来りければ退たいしけるにや、今度このたびいかなる大難だいなん
にも退たいせぬ心ならば申もうし出いだすべしとて申もうし出して候そうらいしかば・経文きょうもんにたがわ
ず此たの度度たびたびの大難だいなんにはあいて候そうらいしぞかし。

今は一こうなり・いかなる大難だいなんにも・こらへてんと我が身に当あたてて心みて
候へば・不審ふしんなきゆへに此の山林さんりんには栖すみ候なり、各各は又たとい・すてさ
せ給たまうとも一日かたときも我が身命しんみょうをたすけし人人ひとびとなれば・いかでか他人たにんに
はにさせ給たまうべき、本より我、一人いかにもなるべし・我いかにしなるとも
心に退転たいてんなくして仏になるならば・

とのばらをば導きたてまつらむとやくそく申もうして候いき、各各は日蓮にちれんほども
仏法ぶつぽうをば知らせ給たまわざる上俗なり、所領しりょうあり・妻子さいしあり・所従しよじゅうあり・いかに
も叶かないがたかるべし、只ただいつわりをろかにて・をはせかしと申もうし候そうらいき・こそ
侯そうらへけれ、なに事につけてか・すてまいらせ候べき・ゆめゆめをろかのぎ侯
べからず。

又法門ほうもんの事はさどの国へながされ候そうらいし已前いぜんの法門ほうもんは・ただ仏にげんの爾前にぜんの經
と・をばしめせ、此の国の国主我が代こくしゅをも・たもつべくば真言師しんこんし等にも召し

合せ給はんずらむ、爾の時まことの大事をば申すべし、弟子等にもなひなひ申すならばひろうしてかれらしりなんず、さらば・よもあわじと・をもひて各各にも申さざりしなり。

而るに去る文永八年九月十二日の夜たつの口にて頸をはねられんとせし時

より・のちふびんなり、我につきたりし者どもにまことの事をいわざりけるとをもつて・さどの国より弟子どもに内内申す法門あり、此れは仏より後迦葉・阿難・竜樹・天親・天台・妙楽・伝教・義真等の大論師・大人師は知りてしかも御心の中に秘せさせ給いし、口

より外には出し給はず、其の故は仏制して云く「我が滅後・末法に入らずば此の大法いふべからず」と・ありしゆへなり、日蓮は其の御使にはあらざれども其の時剋にあたる上・存外に此の法門をさとりぬれば・聖人の出でさせ給うまでまづ序分にあらあら申すなり、而るに此の法門出現せば正法・

ぞうほう ろんし にんし
像法に論師・人師の申せし法門は皆日出で

て後の星の光・巧匠たくみの後に拙を知るなるべし、此の時しよには正像しやうぞうの寺堂ぶつぞうの仏像

・僧等の靈驗れいけんは皆みなきへうせて但此だいの大法ほうのみ一閻浮提えんぶだいに流布るふすべしとみへて

候、各各はかかる法門ほうもんにちぎり有ある人なれば・たのもしと・をぼすべし。

又うつぶさの御事おんことは御としよらせ給たまいて御わたりありしいたわしくをもひ

まいらせ候そつひいしかども・うぢがみへ

まいりてあるついでと候しかば・けさんに入るならば・定めてつみふかかるべし、其そのの故は神は所しよ従じゆなり法華經は主君しゆくんなり・所しよ従じゆのついでに主君しゆくんへの・けさんは世間せけんにも・をそれ候、其の上尼の御身おんみになり給たまひては・まづ仏をさきとすべし、かたがたの御とがありしかばけさんせず候、此の又尼ごぜん一人にはかぎらず、其その外ほかの人人ひとびとも・しもべのゆのついでと申もつず者をあまた・をひかへして候、尼ごぜんは・をやのごとくの御としなり、御なげきいたわしく候そういしかども此の義をしらせまいらせんためなり。

又とのは・をとしかのけさんの後そらごとにてや候そういけん御そらうと申せしかば・人をつかわして・きかと申せしに・此の御房ごぼうたちの申せしはそれはさる事に候そうへども・人をつかわしたらば・いぶせくやをもはれ候そうはんずらんと申せしかば・世間せけんのならひは・さもやあるらむ、げんに御心おんこころざしまめ

なる上・御所^{おんつかい}勞ならば御使^{おんつかい}も有りなんと・をもひしかども・御使^{おんつかい}もなかりしかば・いつわりをろかにて・をばつかなく候^{そうじ}いづる上無常^{むじょう}は常のならひなれ

ども・こそことしは世間^{せけん}はうにすぎて・みみへまいらすべしとも・をばへず、こひしくこそ候^{そうじ}いづるに御をとづれあるうれしとも申^{もう}す計^{ばか}りなし、尼^にごぜんにも・このよしをつぶつぶとかたり申^{もう}させ給^{たまひ}い候^{そうじ}へ、法門^{ほうもん}の事こまごまと・かきつへ申^{もう}すべく候^{そうじ}へども事ひさしくなり候^{そうじ}へばとどめ候。

ただし禅宗^{ぜんしゅう}と念佛宗^{ねんぶつしゅう}と律宗^{りっしゅう}等の事は少少前^{しょうしょうぜん}にも申^{もう}して候、真言宗^{しんごんしゅう}がこ
とに此の国とたうどとをば・ほろぼして候ぞ、善無畏^{ぜんむい}三蔵^{さんぞう}・金剛智^{こんごうち}三蔵^{さんぞう}・不空^{ふくう}
三蔵^{さんぞう}・弘法大師^{こうぼうだいし}・慈覺大師^{じかくだいし}・智証大師^{ちしょうだいし}・此の六人が大日^{だいにち}の三部經^{さんぶきょう}と法華經^{ほけきょう}との
優劣^{めいれく}に迷惑^{めいわく}せしのみならず、三三蔵^{さんぞう}・事をば天竺^{てんじく}によせて両界^{りやうがい}をつくりいだ
し狂惑^{きやうかく}しけるを・三大師^{だいたいし}うちぬかれて

にほん 日本へならひわたし国主並に万民につたへ、漢土の玄宗皇帝も代をほろぼし

にほんこく

・日本国もやうやくをとろへて八幡大菩薩の百王のちかいもやぶれて・八十

おき

ほうおう

あすま

二代隠岐の法王・代を東にとられ給いしは・ひとへに三大師の大僧等がいの

りしゆへに還著於本人して侯、

かんとう

あくほうあくにん

たいじ

関東は此の悪法悪人を対治せしゆへに十八代

ひやくおう

をつぎて百王にて侯べく侯いつる

を、又かの悪法の者どもを御帰依有るゆへに一国には主なければ・梵釈・
あくほう ごきえあ ほんしやく
にちがつ 日月・四天の御計いとして他国にをほせつけて・をどして御らむあり、又
してん おんはから たこく
ほけきよう 法華經の行者をつかわして御いさめあるを・あやめずして・彼の法師等ほっしに心
ぎようじや
をあわせて世間出世の政道をやぶり、法にすぎて法華經の御かたきにならせ
せけんしゅつせ
給う、すでに時すぎぬれば此の国やぶれなんとす。
たま

やくびやうは・すでにいくさにせんふせわまたしるしなり、あさまし・あ
さまし。

二月二十三日 にちれん 日蓮 かおう 花押

みさわどの

三六六

十字御書 こじよ

1491p

十字一百まい・かしひとこ給たまいおわぬ、正月の一日は日のはじめ月の始めとしのはじめ春の始め此これをもてなす人は月の西より東をさしてみつがごとく日の東より西へわたりてあきらかなるがごとく・とくもまさり人にもあいせられ候なり。

そもそもそじく

抑おさ地獄じごくと仏とはいづれの所に候ぞとたづね候へば・或あるは地の下と申もつす

きよきううもん

経文きやうもんもあり・或あるは西方等と申もつす経も候、しかれども委細いさいにたづね候へば我等われら

が五尺の身の内に候とみへて候、さもやをばへ候事は我等われらが心の内に父をあなづり母を・をろかにする人は地獄じごく其その人の心の内に候、譬たとへば蓮のたねの

中に花と菓このみとのみゆるがごとし、仏と

もつ

申もつす事も我等われらの心の内に・をはします・譬たとへば石の中に火あり珠たまの中に財たからの

あるがごとし、我等凡夫われらほんぶはまつげのちかきと虚空こくうのとをきとは見候事なし、

我等^{われら}が心の内に仏はをはしましけるを知り候はざりけるぞ、ただし疑^{うたがい}ある

事は我等は父母の精血變じて人となりて候へば三毒の根本婬欲の源なり、
いかでか仏は・わたらせ給うべきと疑い候へども又うちかへしうちかへし
案じ候へば其のゆわれもやと・をばへ候、蓮はきよきもの泥よりいでたり、
せんだんはかうばしき物大地よりをいたり、さくらはをもしろき物・木の中
よりさきいづ、やうきひは見めよきもの下女のはらよりむまれたり、月は山
よりいでて山をてらす、わざわいは口より出でて身をやぶる・さいわいは心
よりいでて我をかざる。

今正月の始に法華經をくやうしまいらせんと・をばしめす御心は・木より
花のさき・池より蓮のつぼみ・雪山のせんだんのひらけ・月の始めて出るな
るべし、今・日本国の法華經をかたきとしてわざわいを千里の外よりまねき
よせぬ、此れをもつてをもうに今又法華經を信ずる人は・さいわいを万里の
外よりあつむべし、影は体より生ずるもの法華經をかたきとする人の国は体

に・かげのそうがごとく・わざわざ来るべし、法華經ほけきようを信ずる人は・せんだ
んに・かをばしさのそなえたるがごとし、又又もう申し候べし。

正月五日

日蓮にちれん

在御判

をもんすどのの女房御返事にようぼうこへんじ

三六七 南条兵衛七郎殿御書 文永元年十二月 四十三歳御

作 与南条兵衛七郎 1493p

御所^{たまわ}勞の由承り候はまことにてや候らん、世間^{せけん}の定なき事は病なき人も留^{とどま}りがたき事に候へば・まして病あらん人は申^{もう}すにおよばず・但心あらん人は後世^{ごしやう}をこそ思いさだむべきにて候へ、又後世^{ごしやう}を思い定めん事は私^{ひそか}にはかなひがたく候、一切衆生の本師^{いつさいしゆじやう}にてまします釈尊^{しゃくそん}の教こそ本にはなり候べけれ。
しかるに仏の教へ又まちまちなり人の心の不定^{ふじやう}なる故か。

しかれども釈尊^{しゃくそん}の説教五十年にはすぎず、さき四十余年^{よんじゅうよねん}の間の法門^{ほうもん}にけこんきよう
華嚴經には心仏及衆生・是三無差別・阿含經には苦・空・無常・無我^{むじやう}
だいしききよう
大集經には染淨融通・大品經には混同無二・雙觀經・觀經・阿彌陀經等^{あみだ}
おうじやういづくらく
には往生極樂、此等の説教は皆正法・像法・末法の一切衆生をすくはん

がためにこそとかかはべりけんめ、しかれども仏いかながおぼしけん無量義經むりようぎきょう

に「方便ほうべんの力を以て四十余年よんじゅうよねんには未だ眞実しんじつを顕あらわさず」と説かれて先四十余年よんじゅうよねん

おつじよういくわく

いつさいききょう

の往生極樂等の一切經は親の先判のごとく・くひかへされて「無量無辺むりようむへん

ふかしぎ

あそぎこう

す

ついで

むじようぼだい

じよう

不可思議・阿僧祇劫を過ぐるとも終に無上菩提を成ずることを得ず」といふ

たまい

ほけききょう

ほうべん

かさ

しろうじき

ほうべん

むじよう

きらせ給いて法華經の方便品に重ねて、正直に方便を捨て但無上の道を説く、

と説かせ給へり、
たま

ほうべん

方便をすてよとかれてはべるは四十余年の念仏等をすてよとかれて候、

よんじゅうよねん

ねんぶつ

かうたしかにくひかへして実義を定むるには「世尊せそんの法は久くして後要のちかならず

まさ

しんじつ

当に眞実を説くべし」といひ「久しく斯この要を黙もくして務いそいで速すみかに説かず」

等と定められしかば、

たほうぶつ

だいぢ

多宝仏は大地よりわきいでさせ給いてこの事眞実しんじつなり

しゅうじょう

と証 誠をくわへ、十方じゅうほうの諸仏しよぶつは八方まさに

「いつぢちちうぜつそつ

ほうてん

たま

あつまりて

広長舌相を大梵天宮につけさせ給ふ、一処三會二界八番の衆生しゆじょう

一人もなくこれをみ候いき、此等これらの文をみ候に仏教ぶつぎょうを信ぜぬ悪人外道あくにんげどうはさて
おき候いぬ、仏教ぶつぎょうの中に入り候ても爾前にぜん・権教ごんぎょう・念仏等ねんぶつを厚く信じて十遍
・百遍・千遍・一万乃至ないし・六万等を一日にはげみて十年・二十年のあひだに
も南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと一遍いつぺんだにも

申さぬ人人は先判に付いて後判をもちぬ者にては候まじきか、此等は仏説を信じたりげには我身も人も思いたりげに候へども仏説の如くならば不孝の者なり。

故に法華經の第二に云く、「今・此の三界は皆是れ我が有なり其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり而も今・此の処は諸の患難多し唯我一人のみ能く救護を為す復教詔すと雖も而も信受せず」等云云、此の文の心は釈迦如来は我等衆生には親なり師なり主なり、我等衆生のためには阿弥陀仏薬師・仏等は主にてはましませども親と師とには・ましまさず、ひとり三徳をかねて恩ふかき仏は釈迦一仏にかぎりたてまつる、親も親にこそよれ釈尊ほどの親

・師

も師にこそよれ主も主にこそよれ釈尊ほどの師主はありがたくこそはべれ、この親と師と主との仰せをそむかんもの天神・地祇にすてられたてまつらざ

らんや、不孝第一ふこうだいいちの者ものなり故ゆえに雖復またきようちよく教詔しんじゆ而不信受等しんじゆと説かれたり、たとひ
爾前にぜんの經につかせ給たまいて百千万億劫せんまん行ぜさせ給たまうとも法華經ほけきようを一遍いつべんも南無なむ
妙法蓮華經みようほうれんげきようと申もうさせ給たまはずば、不孝ふこうの人たる故ゆえに三世十方さんぜじゆつぱうの聖衆しやうしゆうにもす
てられ天神てんじん・地祇ちぎにもあだまれ給たまはんか是一いち。

たとひ五逆ごぎやく・十惡じゆあく無量の惡をつくれる人も根だにも利なれば得道とくどうなる事こ
れあり、提婆達多だいばだつた・鳶崛摩羅等おつくつまらこれなり、たとひ根鈍なれども罪つみなければ得道とくどう
なる事これあり須利槃特等しゆりはんどく是なり、我等衆生われらしゆじやうは根の鈍なる事すりはんどくに
もすぎ物のいろかたちをわきまへざる事羊目のごとし、貪とん・瞋じん・癡ちきわめて
あつく十惡じゆあくは日日にちじつにをかし五逆ごぎやく
をばおかさざれども五逆ごぎやくに似たる罪つみ又日日にちじつにおかす、又十惡じゆあく・五逆ごぎやくにすぎた
る謗法ほうほうは人毎ひとごとにこれあり、させる語ことばを以て法華經ほけきようを謗ほうずる人はすくなけれど
も人ごとに法華經ほけきようをばもちゐず、又もちゐたるやうなれども念仏等ねんぶつのやうに

は信心しんじんふかからず、信心しんじんふかきものも法華經ほけきょうのかたきをばせめず、いかなる
大善だいぜんをつくり法華經ほけきょうを千

万部読み書しよしゃ写し一念三千いちねんさんぜんの觀道を得たる人なりとも法華經ほけきょうの敵をだにもせめ

ざれば得道とくどうありがたし、たとへば朝につかふる人の十年二十年の奉公あれど

も君の敵をしりながら奏もせず私ひそかにもあだまずば奉公みな皆みなうせて還かえつ

てとがに行はれんが如し、当世の人人は謗法の者としろしめすべし是二。

仏入滅の次の日より千年をば正法と申して持戒の人多く得道の人これあり。

正法千年の後は像法千年なり破戒の者は多く得道すくなし、像法千年の

後は末法万年なり持戒もなし破戒もなし無戒の者のみ国に充滿せん、而も

濁世と申してみだれたる世なり、清世と申してすめる世には直繩のまがれる

木をけづらすやうに非をすて是を用うるなり、正像より五濁やうやういで

きたりて末法になり候へば五濁さかりにすぎて、大風の大波を起し

て岸を打つのみならず又波と波とをうつなり、見濁と申すは正・像やうやう

すぎぬれば、わづかの邪法の一つをつたへて無量の正法をやぶり世間の罪に

て悪道におつるものよりも仏法を以て悪道に墮つるもの多しとみへはんべり。

しかるに当世は正・像二千年すぎて末法に入つて二百余年、見濁さかりに

して悪よりも善根にて多く悪道に墮つべき時刻なり 悪は愚癡の人も悪とし

ればしたがはぬ辺もあり火を水を以てけすが如し、善は但善と思ふほどに
小善しょうぜんに付いて大惡おこの起る事をしらず、所以ゆえんに伝教でんぎょう・慈覺じかく等の聖跡あとあり・す
たれあばるれども念仏堂ねんぶつにあらずと

いひてすてをきて・そのかたはらにあたらしく念仏堂ねんぶつをつくり彼の寄進ぎしんの

田畠でんぱたをとりて念仏堂ねんぶつによす、此等これらは像法決疑經ぞうほうけつぎきょうの文ことの如くならば功德くどくすくな

しとみへはべり、これらをもつてしるべし善なれども大善だいぜんをやぶる小善しょうぜんは

惡道あくどうに墮おつるなるべし、今の世まっほつは末法まっぽうのはじめなり、小乘經しょうじょうききょうの機き・

権大乘經こんだいじようききょうの機き・皆みなうせはてて唯ただ実大乘經じだいじようききょうの

機きのみあり、小船せうせんには大石おおいしをのせず惡人愚者あくにんぐしやは大石おおいしのごとし、小乘經しょうじょうききょう並に

権大乘經こんだいじようききょう・念仏等ねんぶつは小船せうせんなり、大惡瘡あくそうの湯治等たうぢは病やま・大なれば小治せうぢおよび

ず、末代濁世まつだいじよくせの我等われらには念仏等ねんぶつはたとへば冬田ふゆでを作るが如ごとし時があはざるな

り是三知。

国をしるべし国に随したがつて人の心不定ふじようなり、たとへば江南の橘たちばなの淮北わいほくにうつされてからたちとなる、心なき

そうもく

草木すらところによる、まして心あらんもの何ぞ所によらざらん、されば

げんじょうさんぞう

さいいき

もう

てんじく

しる

ふこう

玄奘三蔵の西域と申す文に天竺の国を多く記したるに国の習として不孝な

る国もあり孝の心ある国もあり瞋恚のさかなる国もあり愚癡の多き国もある

いこう

しょうじょう

いこうだいじょう

だいしょうけんがく

り、一向に小乗を用る国もあり一向大乘を用る国もあり大小兼学する国

はべ

いこう

せつしょう

いこう

ちゅうとう

もありと見へ侍り、又一向に殺生の国一向に偷盗の国又穀の多き国又粟等

ふじょう

そもそにほんこく

抑日本国はいかなる教を習つてか生死

を離るべき国ぞと勘えたるに法華經に云く「如来の滅後に於て閻浮提の内に

るふ

かんが

ほけきょう

いわ

にやらい

めつこ

おい

えんぶだい

えんぶだい

広く流布せしめ断絶せざらしむ」等云云、此の文の心は法華經は南閻浮提の

うえん

みろくぼさつ

いわ

とうほう

しょうこく

た

き

のみ有

り」等云云、此の論の文の如きは閻浮提の内にも東の小国に大乘經の機あ

このろん

こと

えんぶだい

しょうこく

だいじょうきょう

き

あり

るか、肇公の記に云く「茲の典

ちやうこう

いわ

こ

えんぶだい

き

あり

き

あり

あり

あり

は東北の小国に有縁なり」等云云、法華經は東北の国に縁ありとかかれたり、

とうほく

しょうこく

うえん

ほけきょう

とうほく

あり

あり

あり

あり

安然和尚あんねんわじょうの云いわく、我が日本国にほんこく・皆大乘みなだいじょうを信しんず」等云云、慧心えしんの一乗要決いちじょうようけつに云いわく

「日本一州にほん・円機純一えんきじゆんいつ」等云云、釈迦如来しゃかにょらい・弥勒菩薩みろくぼさつ・須梨耶蘇摩三蔵しゆりやそまんぞう・

羅什三蔵らじゆさんぞう・僧肇法師そうひつほうし・安然和尚あんねんわじょう・慧心えしんの先徳等せんとくの心ならば日本国にほんこくは純に

法華經ほけきやうの機きなり、一句一偈いっくいちげなりとも行ぜば必ず得道とくどうなるべし有縁うえんの法はふなるが

故ゆゑなり、たとへばくろかねを磁石じしやくのすうが如ごとし方諸もろもろの水みづをまねくにいたり、

念仏ねんぶつ

等の余善よぜんは無縁むえんの国くになり磁石じしやくのかねをすわず方諸もろもろの水みづをまねかざるが如ごとし、

故ゆゑに安然あんねんの釈しゃくに云いわく「如実乘もじじつじやうに非あらずんば恐おそらくは自他じたを欺あざむかん」等云云、此

の釈しゃくの心こころは日本国にほんこくの人に法華經ほけきやうにてなき法はふをさずくるもの我が身みをもあざむ

き人ひとをもあざむく者と見えたり、されば法はふは必ず国くにをかんがみて弘ひろむべし、

彼の国くにによりし法はふなれば必ず此この国くににもよかるべしとは思おもつべからず

又また仏法ぶつぽう流布ふの国くににおいても前後ぜんごを勘かんうべし、仏法ぶつぽうを弘ひろむる習ならい必ずさきに弘ひろ

是四しよ。

めける法の様を知るべきなり、例せば病人に薬をあたふるにはさきに服したる薬の様を知るべし、薬と薬とがゆき合いてあらそひをなし人をそんずる事あり、ぶつぼう仏法とぶつぼう仏法とがゆき合いてあらそひをなして人を損ずる事のあるなり、げどうさきに外道の法ひろ弘まれる

ぶつぼう

国ならば仏法をもつて・これをやぶるべし、仏の印度にいでて外道をやぶり

・まとうか・ぢくほうらんの震旦に來つて道士をせめ上宮太子・和国に生れ

もりや

て守屋をきりしが如し、ぶつぎよう 仏教においてもしやうじやう 小乗の弘まれる国をば大乗經を

もつてやぶるべし、むちやくぼさつ 無著菩薩の世親のせじん 小乗をやぶりしが如し、ごんたいじやう 權大乘の弘ま

じつだいじやう

れる国をば実大乘をもつて・これを

やぶるべし、てんだいちしゃだいし 天台智者大師の南三・北七をやぶりしが如し、しか 而るに日本国は

てんだい しんごん

天台・真言の二宗のひろまりて今に四百余歳、びく 比丘・比丘尼・うばそく・う

ししゆう

ばひの四衆・皆法華經の機と定りぬ、ぜんにん 善人・悪人・有智・無智・皆五十展轉

くどく

の功德をそなふ、たとへばこんろん 崑崙山に石なく蓬萊山に毒なきが如し、しか 而るを此

ほうねん

の五十余年に法然といふ大謗法の者いでき

いっさいしゆじやう

たりて、一切衆生をすかして珠に似たる石をもつて珠を投させ石をとらせた

しかん

るなり、止觀の五に云く、瓦礫を賣んで明珠なりと申すは是なり、一切衆生

石をにぎりて珠とおもふ、念仏を申して法華經をすてたる是なり、此の事をば申せば還つてはらをたち法華經の行者をのりて・ことに無間の業をますなり是五。

但とのはこのぎをきこしめして念仏をすて法華經にならせ給いてはべりしが、定めてかへりて念仏者にぞならせ給いてはべるらん、法華經をすてて念仏者とならせ給はんは峯の石の谷へころび空の雨の地におつると・おぼせ大阿鼻地獄疑なし、大通結縁の者の三千塵点劫を久遠下種の者の五百塵点をへし事、大悪知識にあいて法華

經をすてて念仏等の權教にうつりし故なり、一家の人人念仏者にてましましげに候いしかばさだめて念仏をぞすすめまいらせ給い候らん、我が信じたる事なればそれも道理にては候へども悪魔の法然が一類にたばらかさ

れたる人人なりとおぼして大信心を起し御用いあるべからず、大悪魔は貴き

僧となり父母・兄弟等につきて人の後世をば障るなり、いかに申すとも法華經をすてよとたばかりげに候はんをば御用いあるべからず、まづ御きやうさくあるべし。

念仏實に往生すべき証文つよくば此の十二年が間念仏者無間地獄と申すをばいかなるところへ申しいだして

もつめずして候べきか、よくよくゆはき事なり、法然・善導等が・かきをき

て候ほどの法門は日蓮らは十七八の時よりしりて候いき、このごろの人の申す

もこれにすぎず、結句は法門はかなわずしてよせてたたかひにし候なり、念仏

者は数千万かたうど多く候なり、日蓮は唯一人かたうどは一人もこれなし、

今までもいきて候はふかしぎ

なり、今年も十一月十一日安房の国・東条の松原と申す大路にして、申酉の

時数百人の念仏等にまちかけられて候いて、日蓮は唯一人十人ばかりものの

要にあふものは・わづかに三四人なり、いるやはふるあめのごとし・うつた

ちはいなづまのごとし、弟子一人は当座にうちとられ二人は大事のてにて候、

自身もきられ打たれ結句

にて候いし程に、いかが候いけんうちもらされていままでいきてはべり、い

よいよ法華經こそ信心まさり候へ、第四の巻に云く、而も此の經は如来の現在

すなら猶お怨ん嫉し多つし況めや滅つ度の後をや」第五の巻に云いく「一切世間怨多いく

して信がじ難たし」等云云、日本国にほんこくに法華經ほけきようよみ学まなする人これ多おほし、人の妻をね

らひぬすみ等にて打はらるる人は多おほけれども法華經ほけきようの故ゆゑにあやまたるる人は

一人もなし、されば日本国にほんこくの持經者じきようはいまだ此こゝの經文きようもんにはあわせ給たまはず唯ただ

日蓮一人こそよみはべれ我不愛身命がふあいしんみよう・但惜たんしやく無上道むじやうどう是なりされば日蓮にちれんは日本にほん

第一だいいちの法華經ほけきようの行者ぎようじやなり。

もしさきにたたせ給たまはば梵天ぼんてん・帝釈たいしやく・四大天王えんまだいおう・閻魔大王等もんまだいおうにも申もうさせ

給たまうべし、日本第一にほんだいいちの法華經ほけきようの行者ぎようじや日蓮房でしの弟子でしなりとなのらせ給たまへ、よも

はうしんなき事は候はじ、但一度ひとたびは念仏ねんぶつ一度ひとたびは法華經ほけきようとなへつ・二心ましま

し人の聞にはばかりなんと・だにも候はばよも日蓮にちれんが弟子でしと申もうすとも御用ゐ

候はじ後にうらみさせ給たまうな、

但し又法華經は今生のいのりともなり候なれば・もしやとして・いきさせ

給^{たま}い候はば・あはれ・とくとく見参^{もつ}してみづから申しひらかばや、語^{ことば}はふみ

につくさず・ふみは心をつくしがたく候へばとどめ候いぬ、恐^{きよう}恐^{きよう}謹^{きんげん}言^{げん}。

ぶんえいがんねん

文永元年十二月十三日

にちれん
日蓮

かおう

花押

なんでうの七郎殿

三六八

やくおうほんときいしょう
薬王品得意抄

ぶんえい
文永二年

四十四歳御作

与上野

時光妻

1499p

やくおうほん たいい
此の薬王品の大意とは此の薬王品は第七の八巻・二十八品の中には第二十

三の品なり、此の第一巻に序品方便品の二品有り序品は二十八品の序なり、

ほうべん にんきぼん いた
方便品より人記品に至るまで八品は正には二乗作仏を明し傍には菩薩・凡夫

さぶつ あきら
の作仏を明かす、法師宝塔提婆勸持安樂の五品は上の八品を末代の凡夫の

しゅぎよう
修行す可き様を説くなり、又涌出品

じゅりようほん ついで
は寿量品の序なり、分別功德品より十二品は正には寿量品を末代の凡夫の

べ かたわら
行ず可き様を傍には方便品等の八品を修行す可き様を説くなり、然れば此の

やくおうほん ほうべん なら
薬王品は方便品等の八品並びに寿量品を修行す可き様を説きし品なり。

たとえ
此の品に十の譬有り、第一大海の譬、先ず第一の譬を粗申す可し、此の

南閻浮提えんぶだいに二千五百の河あり、西俱耶尼さいくやにに五千の河あり総じて此の四天下してんげに

二万五千九百の河あり、或あるは四十里乃至百里ないし・一里・一町・一尋等の河之有これあ

り、然しかりと雖いへども此の諸河しよは総じて深浅じんせんの事大海たいかいに及およばず、法華ほつけいぜん已前の華嚴經けこんきやう

・阿含經あこんきやう・方等經ほうとう・般若經はんになきやう・深密經じんみつ・

阿彌陀經あみだ・涅槃經ねはんぎやう・大日經だいにちきやう・金剛頂經こんごうちやうきやう・蘇悉地經そしつちきやう・密嚴經みつこんきやう等の釈迦しゃか如来にらい

の所説しよせつの一切經いつさいきやう・大日如来だいにちにらいの所説しよせつの一切經いつさいきやう・阿彌陀如来あみだにらいの所説しよせつの一切經いつさいきやう・

薬師如来やくしにらいの所説しよせつの一切經いつさいきやう過去かこ・現在げんざい・未来三世みらいさんぜの諸仏しよぶつ所説しよせつの一切經いつさいきやうの中に

法華經ほけきやう第一だいいちなり、譬たとえば諸經しよきやうは大河たか・中河ちか・小河等こがらうの如ごとし法華經ほけきやうは大海たいかいの

如ごとし等と説とくくなり、河すくに勝たれたる大海たいかいに十の徳とく有あり、

一いちに大海たいかいは漸次ぜんじに深しし河かは爾しかからず、二にに大海たいかいは死屍ししを留とどめず河かは爾しからず、

三さんに大海たいかいは本みよの名字うしなを失しかう河かは爾しからず、四しに大海たいかいは一味いちみなり河かは爾しからず、五ご

に大海たいかいは宝等有たり河かは爾しからず、六ろくに大海たいかいは極きわめて深しし河かは爾しからず、七しちに大海たいかい

は広大無量なり河は爾らず、八に大海は大身の衆生等有り河は爾らず、九に
大海は潮の増減有り河は爾らず、十に大海は大雨・大河を受けて盈溢無し河
は爾らず。

此の法華經には十の徳有り諸經には十の失有り、此の經は漸次深多にして
五十展転なり諸經には猶一も無し

な い し こ じ ゅ う て ん で ん

た い か い し ゃ き よ う

況や二三四乃至五十展転をや河は深けれども大海の浅きに及ばず諸経は一字

い つ く

・一句・十念等を以て十悪・五逆等の悪機を損すと雖も未だ一字・一句の

す い き こ じ ゅ う て ん で ん

お よ

こ の け の 大 海 に 死 屍 を 留 め ず と は 法 華 經 に

た い か い し し と ど

ほ け き よ う

隨喜五十展転には及ばざるなり、此の經の大海に死屍を留めずとは法華經に

そ む ほ う ぼう

こ ぐ ぜん

な

い え ど な お こ れ

い か あ く に ん

ほ う ぼう

背く謗法の者は極善の人為りと雖も猶之を捨つ何に況や悪人なる上謗法を

な

た と い し き よ う

ほ う

い え ど ほ け き よ う

そ む

ぶ つ だ う

じ ょ う

為さん者をや、設け諸経を謗すと雖も法華經に背かざれば必ず仏道を成ず、

た と い い つ さ い き よ う

い え ど ほ け き よ う

そ む

あ び だ い じ よ う

お

な い し

設け一切経を信ずと雖も法華經に背かば必ず阿鼻大城に墮つ、乃至第八に

た い か い

し ゃ き よ う

た い か い

ま か つ だ い ぎ

し ゃ き よ う こ れ あ

は大海は自身の衆生あり等と云うは大海には摩竭大魚等自身の衆生之有り、

む げ ん じ こ ぐ

も つ

じ ゅ う じ つ は ち ま ん ゆ じ ゅ ん

無間地獄と申すは縦広八万由旬な

し ゃ き こ

む げ ん じ こ ぐ

お

じ ゅ う ま ん

じ ゅ じ こ

し ゃ き よ う

り五逆の者無間地獄に墮ちては一人にて必ず充滿す、此の地獄の衆生は五逆

し ゃ き こ

む げ ん じ こ ぐ

お

じ ゅ う ま ん

じ ゅ じ こ

し ゃ き よ う

の者大身の衆生なり、諸経の小河・大河の中には摩竭大魚之無し法華經の

た い か い

こ れ あ

し ゃ き こ

ぶ つ だ う

こ

し ゃ き よ う

こ れ な

し ゃ き よ う

こ れ あ

大海には之有り、五逆の者・仏道を成す是れ實には諸経に之無し諸経に之有

い え ど

み け ん し ん じ つ

ゆ え

い ち だ い し ょ う き よ う

そ ら ん ぜ て ん だ い ち し ゃ だ い し

りと云うと雖も實には未顕真實なり、故に一代聖教を諳し天台智者大師の

釈に云く他経は但菩薩に記して二乗に記せず乃至但善に記して惡に記せず、
今經は皆記す等云云、余は且く之を略す。

第二には山に譬う、十宝山等とは、山の中には須弥山第一なり、十宝山と

は一には雪山・二には香山・三には軻梨羅山・四には仙聖山・五には

由乾陀山・六には馬耳山・七には尼民陀羅山・八には斫伽羅山・九には

宿慧山・十には須弥山なり、先の九山とは諸經・諸山の如し、但し一一に財

あり須弥山は衆財を具して其の財に勝れたり、例せば世間の金の閻浮檀金に

及ばざるが如し、華嚴經の法界唯心般若の十八空・大日經の五相成身・觀經

の往生より法華經の即身成仏勝れたるなり、須弥山は金色なり、一切の

牛馬人天衆鳥等・此の山に依れば必ず本色を失つて金色なり余山は爾らず

一切の諸經は法華經に依れば本の色を失う例せば黒色の物の日月の光に値え

ば色を失うが如し諸經の往生成仏等の色は法華經に値えば必ず其の義を

うしな
失う。

第三には月に譬^{たと}う衆星^{しゅうせい}は・或^{ある}は半里^{ある}・或^{ある}は一里^{ある}・或^{ある}は八里^{ある}・或^{ある}は十六里^{ある}に
は過^すぎず、月^{しゅう}は八百余里^{しゅうせい}なり衆星^{しゅうせい}は光^{くわう}有^{いう}りと雖^{いえど}も月^{およ}に及^{およ}ばず、設^{たと}い百千万億^{せんまん}
乃至^{ないし}一四天下^{してんげ}・三千大千^{さんぜん}・十方世界^{じゅうぼうせかい}の衆星^{しゅうせい}之^{これ}を集^{しゅう}むとも一の月^{およ}の光^{くわう}に及^{およ}ば
ず、何^{いか}に況^{いは}や一の星月^{せいげつ}の光^{くわう}に及^{およ}ぶ可^べきや、華嚴^{けこん}經^{ぎやう}・阿含^{あこん}經^{ぎやう}・方等^{ほうとう}・般若^{はんにや}・
涅槃^{ねはん}經^{ぎやう}・大日^{だい}經^{にちぎやう}・觀^{くわん}經^{ぎやう}等^{とう}の一切^{いっさい}の經^{ぎやう}之^{これ}を集^{しゅう}むとも法華^{ほけ}經^{ぎやう}の一^お字^じに及^{およ}ばじ、
一切^{いっさい}衆生^{しゅうじやう}の心中^{しんちゆう}の見思^{けんじ}・塵沙^{じんじゃ}・無明^{むみやう}の三惑^{さんかく}並^{じゆう}に十惡^{じゅうあく}・五逆^{ごぎやく}等^{とう}の業^{やみ}は暗夜^{やみよ}の
ごとし華嚴^{けこん}經^{ぎやう}等^{とう}の一切^{いっさい}經^{ぎやう}は闇夜^{やみよ}の星^{せい}のごとし法華^{ほけ}經^{ぎやう}は闇夜^{やみよ}の月^{げつ}のごとし
法華^{ほけ}經^{ぎやう}を信^{しん}ずれども深^{しん}く信^{しん}ぜざる者^{しや}は半月^{やみよ}の闇夜^{やみよ}を照^{てら}すが如^{ごと}し深^{しん}く信^{しん}ずる者^{しや}
は満月^{まんげつ}の闇夜^{やみよ}を照^{てら}すが如^{ごと}し月^{げつ}無^なくして但^あ星^{せい}のみ有^ある夜^やには強^{きやう}力の者^{しや}かたまし
き者^{しや}などとは行^{ぎやう}歩^ぽすと

いへども老骨^{らうこつ}の者^{しや}女人^{にょにん}なむどは行^{ぎやう}歩^ぽに叶^{かな}わず、満月^{まんげつ}の時^{とき}は女人^{にょにん}老骨^{らうこつ}なむども、

・或は遊宴のため・或は人に値わんが如き行歩自在なり、諸経には菩薩大根性の凡夫は設い得道なるとも二乗凡夫悪人・女人・乃至末代の老骨の懈怠・無戒の人人は往生成仏不定なり、法華経は爾らず、二乗悪人・女人等猶仏に成る何に況や菩薩・大根性の凡夫

をや、又月はよいよりも暁は光まさり春夏よりも秋冬は光あり、法華経は

正像二千年よりも末法には殊に利生有る可きなり、問うて云く証文如何答

えて云く道理顯然なり、其の上次ぎ下の文に云く「我が滅度の後・後の五百歳

の中に広宣流布して閻浮提に於て断絶せしむること無し」等云云、此の経文

に二千年の後南閻浮提に広宣

流布すべし・とかれて候は・第三の月の譬の意なり、此の意を根本伝教

大師釈して云く「正像稍過ぎ已て末法太だ近きに有り法華一乗の機今

正しくは是れ其の時なり」等云云、正法千年も像法千年も法華経の利益諸経

に之れ勝る可し然りと雖も月の光の春夏の正像二千年・末法の秋冬に至つて光の勝るが如し。

第四に日の譬は星の中に月の出でたるは星の光には月の光は勝るとも未だ

星の光を消さず、日中には星の光消ゆるのみに非ず又月の光も奪いて光を

失う、爾前は星の如く法華經の迹門は月の如し寿量品は日の如し、寿量品

の時は迹門の月末だ及ばず何に況や爾前の星をや、夜は星の時・月の時も

衆務を作さず、夜曉て必ず衆務を作す、

爾前・迹門にして猶生死を離れ難し本門寿量品に至つて必ず生死を離る

可し、余の六譬之を略す、此の外に又多くの譬此の品に有り、其の中に渡り

に船を得たるが如しと此の譬の意は生死の大海には爾前の経は・或は筏・或

は小船

なり、生死しやうじの此岸しがんより生死しやうじの彼岸ひがんには付くと雖も生死しやうじの大海たいかいを渡り極楽ごくらくの彼岸ひがんにはとつきがたし、例せば世間の小船等が筑紫より坂東に至り鎌倉よりいの嶋しづめなどへとつけども唐土へ至らず唐船は必ず日本国より震旦国に至る

るに障さわり無きなり又云く、「貧きに宝を得たるが如し」等云云、爾前にぜんの国は貧国ひんくになり爾前にぜんの人は餓鬼がきなり法華経は宝の山なり人は富人なり。

問うて云く爾前は貧国といふ経文如何答えて云く授記品に云く「飢えたる

国より来つて忽ちに大王の膳に遇へるが如く」等云云、女人の往生成仏の

段は経文に云く「若し如来の滅後・後の五百歳の中に若し女人有つて是の

經典を聞いて説の如く修行せば此に於て命終して即ち安樂世界阿弥陀仏

の菩薩・大衆に囲遶せられて住する処に往いて蓮華の中宝座の上に生じ」

等云云。

問うて曰く此の経・此の品に殊に女人の往生を説く何の故か有るや、答え

て曰くいわ仏意測り難し此の義決し難きか但し一の料簡を加えば女人は衆罪のい根本破国の源なり、故に内典・外典に多く之を禁しむ其の中に外典をい

以て之を論ずれば三従あり三従と申すは三したがつと云ふなり、一には幼にい

しては父母に従う嫁して夫に従う老いて子に従う此の三障有りて世間・自在い

ならず、内典を以て之を論ずれば五障有り五障とは一には六道輪回の間男子い

の如く大梵天王と作らず二には帝釈と作らず三には魔王と作らず四にはい

転輪聖王と作らず五には常に六道に留まりて三界を出でて仏に成らずい

超日月三昧經の文なり、銀色女經に云く「三世の諸仏の眼は大地に墮落すとも法界の諸のい

女人は永く成仏の期無し」等云云、但し凡夫すら賢王聖人は妄語せずはんい

よきといふし者はけいかに頸をあたいきさつと申せし人は徐君が塚に剣をかい

けたりきこれ約束を違えず妄語無き故なり何に況や声聞・菩薩・仏をや、仏い

は昔凡夫にてましましし時小乗經を習い給いし時五戒を受け始め給いきい

五戒ごかいの中の第四もうちよの不妄語ふもうごの戒かいを固たもく持たち給たまいき財たからを奪たわれ命いのちをほろぼされし
時ときも此この戒かいをやぶらず大乗だいじようきよう經きやうを習ならひ給たまいし時とき又また十重じゆうきん禁戒きんかいを持もち其その十重じゆうきん
禁戒きんかいの中の

第四の^{もうご}不妄語戒^{たも}を持ち給^{たまい}いき、此の戒を堅く持ちて無量劫之を破りたまわす
終に此の戒力に依て^{よつて}仏身を成じ三十二相の中に^{いじつしやうげじりやう}広長舌相を得たまえり、此の
舌^つうすくひろくながくして・或は^{ある}面に^{かお}を・をい・或は^{ある}髮際にいたり・或は^{ある}
梵天にいたる舌の上に五の画あり印文のごとし其の舌の色は赤銅のごとし舌^{ぼんてん}
の下に二の珠あり甘露を涌出す此れ不妄語戒の徳の至す所なり、仏・此の舌^{もつ}
を以て三世の諸仏の御眼は大地に落つとも法界の女人は仏になるべからずと
説か

れしかば一切の女人は何なる世にも仏には成らせ給うまじきところぞ覺えて候^{いっさい}
へ、さるにては女人の御身も受けさせ給いては設ひ后三公の位にそなはりて^{いよにん}
も何かはすべき善根仏事をなしてもよしなしとこそ覺え候へ、而るを此の^{ぜんこんぶつじ}
法華經の藥王品に女人の往生をゆるされ候ぬる事又不思議に候、彼の經の^{ほけきよう}
妄語か此の經の妄語かいかにも一方^{やくおうぼん}
^{いっほう}

は妄語もうごたるべきか、若し又一方妄語もうごならば一仏いちぶつに二言あり信じ難がたし但しただ
むりようぎきよう よんじゅうよねん
無量義經の四十余年には未だ真実しんじつを顕あらわさず涅槃經の如来にょらいには虚妄こもうの言無しと
いへども しゅじょうこもう
雖も若し衆生虚妄の説に因よると知しめすの文を以て之を思えば仏は女人にょにんは
おうじようじようぶつ
往生成仏すべからずと説かせ給たまいけるは妄語と聞えたり、妙法華經の文に
せそん
世尊の法は久くして後に要かならず当に真実しんじつ
を説くべし妙法華經乃至皆是真実しんじつと申す文を以て之を思うに女人にょにんの往生おうじよう
じようぶつけつじよう
成仏決定と説かるる法華經の文は実語不妄語戒と見えたり、世間の賢人けんじんも
但一人ある子が不思議ふしぎなる時・或は失ある時は永く子な為るべからざるの理・
きしよう
起請を書き・或は誓言せいごんを立ると雖も 命終めいしゅうの時に臨めば之を許ゆるす、然りしかと
いへども けんじん あら
雖も賢人に非ずと云わず又妄語もうごせる者とも云わず仏も亦是くのこと 爾前にぜん
よんじゅうよねん ほさつ とくどうほんぶ とくどうぜんにん とくどう
四十余年が間は菩薩の得道凡夫の得道善人男子等の得道をば許ゆるすやうなれど
も、

にじょうあくにん　によにん
二乗悪人・女人などの得道とくどう此れをば許ゆるさず・或あるは又許ゆるすににたる事もあり、
いまだ定めがたかりしを仏の説教せつきょう・四十二年すでに過ぎて八年が間・摩謁提
おうしやじょう　ぎしやくつせん　もう
国王舎城・耆闍崛山と申す山にして法華經を説かせ給たまうとおぼせし時先づ
むりようぎきよう　もう
無量義經と申す經を説かせ給たまふ無量義經の文に云く四十余年云云。

月　　日

にちれん
日蓮

かおう
花押

三六九 上野殿後家尼御返事 うえのとのごへんじ

文永十一年七月 五十三歳 ぶんえい

御作 1504p

御供養くようの物種種給畢しゅじゆんぬ、抑おほも上野殿死去そもそもの後はをとづれ冥途めいどより候や
らんきかまほしくをばへ候、ただしあるべしとも・をばへず、もし夢にあら
ずんばすがたをみる事よもあらじ、まぼろしにあらずんばみみえ給たまう事いか
が候そひはん、さだめて靈山淨土りやうじやうじゆんづにてさばの事をばちうやにきき御覽じ候らむ、
妻子等さいしは肉眼にくげんなればみさせ・
きかせ給たまう事なしついには一所と・をばしめせ、生生世世しやうじやうじやうの間ちぎりし夫は
大海たいかいのいさごのかずよりもを・をくこそをはしまし候いけん、今度このたびのちぎり
こそまことのちぎりのをとこよ、そのゆへはをとこのすすめによりて

法華經ほけきようの行者ぎやうじやとならせ給たまへば仏ぶつとをがませ給たまうべし、いきてをはしき時は生

の仏ぶつ今は死しの仏生死しやうじともに仏ぶつなり、即身成仏そくしんじやうぶつと申もうす大事だいじの法門ほうもんこれなり、

法華經ほけきようの第四よに云いく、「若もし能よく持もつこと有あれば即すなわち仏身ぶつしんを持もつなり」云云。

夫それ浄土じやうどと云いうも地獄じじくと云いうも外ぐわいには候あはずただ我等われらがむねの間にあり、

これをさとるを仏ぶつといふ・これにまよふを凡夫ぼんぶと云いふ、これをさとるは法華經ほけきよう

なり、もししからば法華經ほけきようをたもちたてまつるものは地獄じじく即そく寂光じやくかうとさとり候

ぞ、たとひ無量億歳むりやうゑいのあひだ權教ごんきやうを修行しゆぎやうすとも、法華經ほけきようをはなるるならば

ただいつも地獄じじくなるべし、

此この事こと日蓮にちれんが申もうすにはあらず釈迦しゃか・多宝たほう・十方分身じゆつぱうふんじんの諸仏しよぶつの定めをき

給たまいしなり、されば權教ごんきやうを修行しゆぎやうする人は火かにやくるもの又火かの中なへいり、

水みづにしづむものをふちのそこへ入いるがごとし、法華經ほけきようをたもたざる人は火

と水みづとの中にいたるがごとし、法華經ほけきよう誹謗ひぼうの悪知識あくちしきたる法然ほうねん・弘法こうぼう等をたの

み阿^あ弥^み陀^だ經^だ・大^{だい}日^に經^き等^{とう}を信^{しん}じ給^{たま}うはなを火より火の中水より水のそこへ入る
がごとし、いかでか苦^く患^{かん}をまぬかるべきや、等^{とう}活^{かつ}・黒^{こく}繩^{じょう}・無^む間^{げん}地^じ獄^{ごく}の火^か坑^{きよう}・

紅蓮・大紅蓮の氷の底に入りしづみ給はん事疑なかるべし、法華經の第二に云く「其の人命終して阿鼻獄に入り是くの如く展転して無数劫に至らん」云云。

故聖靈は此の苦をまぬかれ給い・すでに法華經の行者たる日蓮が檀那り、經に云く「設い大火に入るも火も焼くこと能わず、若し大水に漂わされ為も其の名号を称れば即ち浅き処を得ん」又云く「火も焼くこと能わず水も漂すこと能わず」云云、あらたのもしや・たのもしや、詮するところ地獄を外にもとめ獄卒の鉄杖阿防羅刹のかし

やくのこゑ別にこれなし、此の法門ゆゆしき大事なれども、尼にたいしまいらせておしへまいらせん、例せば童女にたいして文殊菩薩は即身成仏の秘法をと給いしがごとし、これをきかせ給いて後はいよいよ信心をいた

させ給へ、法華經の法門をきくにつけて・なをなを信心を上げむを・まこと

の道心者とは申すなり、天台云く「從藍而青」云云、此の釈の心はあいは葉
のときよりも・なをそむれば・いよいよあをし、法華經はあいのごとし修行
のふかきは・いよいよあをきがごとし。

地獄と云う二字をばつちをほるとよめり、人の死する時つちをほらぬもの
候べきか、これを地獄と云う、死人をやく火は無間の火炎なり、妻子・眷属
の死人の前後にあらそひゆくは獄卒阿防羅刹なり、妻子等のかなしみなくは
獄卒のこゑなり、二尺五寸の杖は鉄杖なり馬は馬頭・牛は牛頭なり、穴は無間
・大城八万四千のかまは八万

四千の塵勞門家をきりいづるは死出の山・孝子の河のほとりにたたずむは三
途の愛河なり、別に求むる事はかなしはかなし、此の法華經をたまちたてま
つる人は此れをうちかへし・地獄は寂光土・火焰は報身如来の智火・死人は
法身如来火坑は大慈悲為室の応身如来、又つえは妙法実相のつえ、三途の愛

河は生死しょうじそくねはん即涅槃たいかいの大海・死出の山

は煩惱ぼんのうそくぼだい即菩提こころえの重山なり、かく御心得たまさせ給へ・即身成仏そくしんじょうぶつとも開仏知見かいぶつちけんとも

これをさともうり・これをひらくを申すなり、提婆達多だいばだつたは阿鼻獄あびごくを寂光極樂じゃくこうごくらくとひ

らき、竜女りゅうによが即身成仏そくしんじょうぶつもこれより外は候はず、逆即是順ぎやくそくぜじゆんの法華經ほけきやうなれば

なりこれ妙の一字の功德なり。

竜樹菩薩の云く「譬えば大薬師の能く毒を変じて薬と為すが如し」云云、

みようらくだいしいわ

妙楽大師云く「豈伽耶を離れて別に常寂を求めん寂光の外別に娑婆有る

じやうじやうく
じやうじやう
しゃばあ

に非ず」云云、又云く「実相は必ず諸法・諸法は必ず十如・十如は必ず十界

あら
じゆっかい

・十界は必ず身土なり」云云、法華經に云く「諸法実相乃至本末究竟等」云

しんど
ほけきやう
いわ
しよほうじつそくないしほんまつきやう

云、寿量品に云く「我実に成仏してよ

じゆりやうばん
いわ
じよぶつ

り已来無量無辺なり」等云云、此の經文に我と申すは十界なり十界本有の

このかたむりやうむへん
きやうもん
もつ
じゆっかいほんぬ

仏なれば浄土に住するなり、方便品に云く「是の法は法位に住して世間の相

じにじに
じよん
ほうへん
いわ
こ
ほうい
せけん

常住なり」云云、世間のならひとして三世常恒の相なればなげくべきにあ

じよじにじよ
せけん
さんぜじよじにじよ

らずをどろくべきにあらず、相の一字は八相なり八相も生死の二字をいはず、

しやうじ

かくさとるを法華經の行者の即身

ほけきやう
ぎやうじや
そくしん

成仏と申すなり、故聖靈は此の經の行者なれば即身成仏疑いなし、さ

じよぶつ
もつ
しやうりやう
ぎやうじや
そくしんじよぶつうたがい

のみなげき給^{たま}うべからず、又なげき給^{たま}うべきが凡^{ほん}夫^ぶのことわりなり、ただし
聖^{しょう}人^{にん}の上にもこれあるなり、釈^{しゃ}迦^か仏^{ぶつ}御^に入^{にゅう}滅^{めつ}のとき諸^{しよ}大^{だい}弟^で子^し等のさとりにな
げき凡^{ほん}夫^ぶのふるまひを示^{たま}し給^{たま}うか。

いかにもいかにも追^{つい}善^{ぜん}供^く養^{よう}を心のをよぶほどはげみ給^{たま}うべし、古徳のこと
ばにも心^{しん}地^じを九^{しゅう}識^しにもち修^{しゆ}行^{ぎやう}をば六^{りく}識^しにせよとをしへ給^{たま}うことわりにもや候
らん、此の文には日^{にち}蓮^{れん}が秘^ひ藏^{ざう}の法^{ほう}門^{もん}かきて候ぞ、秘^ひしさせ給^{たま}へ秘^ひしさせ給^{たま}へ、
あなかしこ・あなかしこ。

七月十一日

日^{にち}蓮^{れん} 花^か押^{おう}

上野殿後家尼御前御返事
うえのとのごけあまごぜんごへんじ

三七〇

上野殿御返事 うえのとのごへんじ

文永十一年七月 ぶんえい 五十三歳御作

1507p

驚目十連 がもくとつる・かわのり二帖・しやうかう二十束・給候い畢んぬかまくらにて たひそうら おわ

かりそめの御事 おんこととこそ・をもひまいらせ候いしに、をもひわすれさせ給わざ たま

りける事申すばかりなし、こうへ 故上野殿のだにもをはせしかばつねに申しうけ もう

給わり たまなんとなげきをもひ候いつるに、をんか 御遺愛たみに御みをわかくして・と

どめをかれけるか・すがたのたがわせ給わぬに、御心さひにられける事い

ばかりなし、法華経 ほけきょうにて仏にならせ給いて候 たまとつけ給わりて、御はか

にまいりて候いしなり、又この御心 おんこころざしもつざし申すばかりなし、今年 おんこころざしもつのけかちには

じめたる山中に木のもとに・このはうちしきたるやうなる・すみか・をもひ

やらせ給え、このほどよみ候。御経の一分をことのへ廻向えこうしまいらし候、あ

われ人はよき子はもつべかりけるものかなと、なみだかきあえずこそ候いし、

みようそつこん

ふたりこ

妙莊嚴王は二子にみちびかる、かの王は悪人あくにんなり、こうへのどのは善人ぜんにんなり、

かれにはにるべくもなし、南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經。
なむ みようほうれんげきよう

七月二十六日

にちれん

かおう

日蓮 花押

ごへんじ

御返事

人にあながちにかたらせ給たまうべからず、若わかき殿が候へば申もつすべし。

三七一

上野殿御返事

文永十一年十一月

五十三歳御作

与南条七郎次郎

1508p

しょうにん

聖人二管・柑子一籠・

こんにやく

十枚・薯蕷一籠・

やまのうも

ご

牛房一束・種種の物送り給

しゅじゅ

び候。

得勝・無勝の二童子は

どうじ

仏に沙の餅を供養したてまつりて

くよう

閻浮提三分が一の

えんぶだい

主となる所謂阿育大王これなり、

いわゆるあそかだいおう

じゅぶつぼさつ

いつくき

れんげ

くよう

供養した

てまつりて仏となる今の教主釈尊これなり、

きようしゅしやくそん

法華經の第四に云く「人有つ

ほけきよう

てまつりて

いわ

て仏道を求めて一劫の中に於て合掌して我が前に在つて無数の偈を以て讃め

ぶつだう

いつくじう

おい がっしょう

あ

在つて無数の偈を以て讃め

げ

もつ

ほ

ん、是の讃仏に由るが故に無量の功德を得ん、

こ

よ

ゆえ

むりよう

くどく

じきよう

たんび

そ

また

彼れに過ぎん」等云、文の心は仏を一中劫が間供養したてまつる

す

え

ゆえ

むりよう

くどく

じきよう

たんび

そ

また

まつだいあくせ

ほけきよう

ぎようじや

くよう

くどく

より、末代悪世の中に人のあながちににくむ法華經の行者を供養する功德は

すぐれたりと・とかせ給う、たれの人のかかるひが事をばおほせらるるぞと

うたがい

きようしゆしやくそん

疑いおもひ候へば教主釈尊の我とおほせられて候なり、疑はんとも信ぜ

んとも御心にまかせまいらする、仏の御舌は・或は面に覆ひ・或は

さんぜんだいせんせかい

おお

ある しきくきようてん

たま

ある

かあ

おお

ある

三千大千世界に覆ひ・或は色究竟天までに付け給う

かこおんのんこつ

もうじ

ある

過去遠遠劫より・このかた一言も妄語のましまさざるゆへなり、されば・或

いわ

しゆみせん

だいぢ

もうじ

經に云く「須弥山はくづるるとも・大地をばうちかへすとも仏には妄語なし」

ととかれたり、日は西よりいづとも大海の潮はみちひずとも・仏の御言はあ

そ

ほけきよう

たきよう

みことば

やまりなしとかや、其の上此の法華經は他經にも・すぐれさせ給へば・多宝仏

しやうみよう

しよぶつ

ほんてん

たま

もうじ

も証明し諸仏も舌を梵天につけ給う、一字一点も妄語は候まじきにや。

そ

其の上殿はをさなくをはしき、故親父は武士なりしかどもあなかちに法華經

たま

りんじゆうしやうねん

たま

そ

あと

を尊み給ひしかば・臨終正念なりけるよしうけ給わりき、其の親の跡をつ

がせ給^{たま}いて又此の経を御信用あれば・故^{しよ}聖^{うり}靈^{よう} いか^{ひと}に草のかげにても喜^{ひと}びお
ぼすらん、あわれいきてを^りはせば・いか^よにうれしかるべき、此の経を持つ^{ひと}人
は他人^{たにん}なれども同じ^り靈^{よう}山^{ぜん}へまいり

あはせ給^{たま}うなり、いかにいはんや故^{しやうりやう}聖靈も殿も同じく法華經を信じさせ給^{たま}へば同じところに生れさせ給^{たま}うべし、いかなれば他人^{たにん}は五六十までも親と同じしらがなる人もあり、我がわかき身に親にはやくをくれて教訓^{きやうくん}をもうけ給^{たま}はらざるらんと御心のうちをしはかるこそなみだもとまり候はね。

そもそものにちれん

にほんこく

抑^{おさ}日蓮は日本国をたすけんとふかくおもへども・日本国の上下万人・一

にほんこく

じやうげばんにん

同に国のほろぶべきゆへにや用^{もち}いられざる上^{たひたび}度^{たびたび}あだをなさるれば力をよば

さんりん

ず山林にまじはり候いぬ、大蒙古国よりよせて候と申せば、申せし事を御用^{もち}い

だいもうこく

あらば・いかになんど・あはれなり、皆人^{みな}の当時^{とうじ}のいきつしまのやうになら

たま

せ給^{たま}はん事おもひやり候へば・なみだもとまらず。

ねんぶつしゅう

もう

ぼうこく

あくほう

念仏宗と申すは亡国の悪法なり、このいくさには大^{だいたい}体^{たい}人^{ひと}人^{びと}の自害^{じがい}をし

そうら

候はんずるなり、善導^{ぜんどう}と申す愚癡^{もろち}の法師^{ほうし}がひろめはじめて自害^{じがい}をして候ゆへ

ねんぶつ

に念仏をよくよく申せば自害^{じがい}の心出来^{しゅつたい}し候ぞ。

ぜんしゅう　もう　とうじ　じさいほつし　てんま　しよい
禪宗と申し当時の持齋法師等は天魔の所為なり、
きょうげべつでん　もう
教外別伝と申して神も仏
もなしなると申すものくるはしき悪法なり。
あくほう

しんこんしゅう　もう　げれつ　おおわく　ほけきょう　まさ
真言宗と申す宗は本は下劣の經にて候いしを誑惑して法華經にも勝るなん

もう　ひとびと　だいしそつじょう　にほんこく　だいたいじゅうまん
ど申して多くの人人・大師僧正などになりて日本国に大体充滿して

かみいちにん　こうべ　だいいち　じゃじ
上一人より頭をかたづけたり、これが第一の邪事に候を昔より今にいたるま

で知る人なし、但伝でんぎようだいし教大師と申せし人こそしりて候いしかども・くはしくも

おほせられず、さては日蓮にちれんほぼこの事

をしれり、後白河ちやくわの法皇ほうこうの太政たいていの入道にゅうどうに・せめられ給たまいし、隠岐おきの法王ほうおうのか

まくらにまけさせ給たまいし事ことみな真言しんこん悪法あくほうのゆへなり、漢土かんとにこの法ほうわたりて

げんそうこうてい　あくほう　とうじ
玄宗皇帝げんそうこうていほろびさせ給たまう、この悪法あくほうがまくらに下つて当時とうじがまくらにはやる

そうじょうほういん　これ　ひとびと　じょうふく
僧正そうじょうほういん法印等これは是なり、これらの人人ひとびとこのいくさを調伏じょうふくせば百日ひゃくじつたたかふべ

きは十日じふにちにつづまり・十日じふにちのいくさは一日いちにちに・せめらるべし。

今始めて申すに^{もつ}あらず二十余年が間音もをしま^{こえ}ずよばはり候いぬるなり、
あなかしこ・あなかしこ、この御文は^{おんふみ}大事の事どもかきて候、よくよく人に
よませてきこしめせ、人もそしり候へものともおもはぬ法師等^{ほっし}なり、
^{きようきよう}恐恐
^{きんげん}謹言。

^{ぶんえい}文永十一年太歳甲^{きのえいぬ}戌十一月十一日

^{にちれん}日蓮^{かおう}花押

南条七郎次郎殿御返事^{ごへんじ}

三七二 春の祝御書^{ごしよ}

1510p

春のいわいわすでに事ふり候いぬ、さては故^{なん}なん^条でうどのはひさしき事に

は候はざりしかども・よろず事にふれて・なつかしき心ありしかば・をろかならずをもひしに・よわひ盛さかんなりしに・はかなかりし事わかれかなしかりしかばわざとかまくらよりうちくだかり御はかをば見候いぬ、それよりのちはするがのびんにはと・をもひし

にこのたびくだしには人にしのびてこれへきたりしかばにしやまの入道にゅうどう殿にもしられ候はざりし上は力をよばずとをりて候いしが心にかかりて候その心をとげんがために此の御房ごぼうは正月の内につかわして御はかにて自我じが偈一卷よませんとをもひてまいらせ候、御とのの御かたみもなしなんとなげきて候へば・とのをとどめをかれ

ける事よろこび入つて候、故殿は木のもと・くさむらのかげ・かよう人もなし、仏法ぶつぽうをも聴聞ちやうもんせんず・いかにつれづれなるらん、をもひやり候へばなんだもとどまらず、とのの法華經ほけきやうの行者ぎやうじやうちぐして御はかにむかわせ給たまつには、

いかにうれしかるらんいかによれしかるらん。

三七三

上野殿御返事うえのとのごへんじ

建治元年五月がねねん 五十四歳御作

与

上野次郎時光

1511p

さつきの二日にいものかしらいしのやうにほされて候を一駄、ふじのうへのよりみのぶの山へをくり給たまいて候。

仏の御弟子おんでしにあなりちと申せし人は天眼第一てんげんだいいちのあなりちとて十人の御弟子おんでし

のその一迦葉舍利弗かしようしやりほつ・目連阿難もくれんあなんにかたをならべし人なり、この人のゆらひを

たづねみれば・師子しし・王きようおうと申せし国王こくおうの第二みこの王子みこに・こくばん王と申せし

人の御子しやかによらい釈迦如来のいとこにて・おはしましき、この人の御名みな三つ候、一に

は無貧・二には如意にょい・三にはむれう

と申すもつ一一にふしぎの事候、昔うえたるよにりだそんじやと申せしたうとき

辟支仏ありき、うえたるよに七日ときもならざりけるが山里にれうしの御器

に入れて候いけるひえのはんをこひてならせ給う、このゆへにこのれうし現在

には長者となりのち九十一劫が間人中天上にたのしみをうけて今最後にこ

くぼん王の太子と

むまれさせ給う、金のこぎにはんとこしなへにたえせずあらかんとならせ

給う、御眼に三千大千世界を一時に御らんありていみじくをはせしが法華經

第四の巻にして普明如来と成るべきよし仏に仰せをかほらせ給いき、

妙楽大師・此の事を釈して云く「稗飯輕しと雖も所有を尽し、及び田勝るる

を以ての故に故に勝報を得る」と云云、釈の心かろきひえのはんなれども此れ

よりほかには・もたざりしを・たうとき人のうえておはせしに・まいらせて

ありしゆへに・かかるめでたき人となれりと云云。

此の身のぶのさわは石なんどはおほく候されども・かかるものなし、その

上夏のころなれば民のいとまも候はじ、又御造営と申しさこそ候らんに山里
の事を・をもひやらせ給^{たま}いて・をくりたびて候、所詮^{しよせん}は・わがをやのわかれ

をしさに父の御ために釈迦^{しやかぶつ}・法華^{ほけきやう}經へまいらせ給^{たま}うにや孝養^{こやう}の御心か、さ
る事なくば梵王^{ぼんのう}・帝釈^{たいしやく}・日月^{いちがつ}・四天^{してん}その人の家をすみかとせんとちかはせ
給^{たま}いて候はいふにかひなきものなれども約束^{やくそく}と申^{もう}す事はたがへぬ事にて候に、
さりともこの人人^{ひとびと}はいかでか仏前^{ぶつぜん}の御約束^{やくそく}をばたがへさせ給^{たま}い候べき、もし
此の事まことになり候はば・

わが大事^{だいじ}とおもはん人人^{ひとびと}のせいし候、又おほきなる難^{なん}来^きるべし、その時すで
に此の事かなうべきにやとおぼしめしていよいよ強盛^{かうじやう}なるべし、さるほどな
らば聖靈^{しょうりやう}・仏になり給^{たま}うべし、成^なり給^{たま}うならば来^きりてまほり給^{たま}うべし、
其の時一切は心にまかせんずるなり、かへす・がへす人のせいしあらば心に
うれしくおぼすべし、恐^{きやう}恐^{きやう}謹言^{きんげん}。

五月三日

にちれん かおう
日蓮 花押

うえのとのごへんじ
上野殿御返事

三七四

うえのとのごへんじ
上野殿御返事

建治元年七月

五十四歳御作

1512p

むぎひとひとつ・かわのり五条・はじめ六十給了^{おわ}んぬ、いつもの御事^{おんこと}に候へばをどろかれずめづらしからぬやうにうちをばへて候はぼむぶの心なり、せけんそうそうなる上を・をみやつくられさせ給^{たま}へば百姓^{ひやくせい}と申し我が内の者と申しけかちと申し^{もつ}ものつくりと申し^{もつ}いくそばくいとまなく御わたりにて候らむに山のなかの・すまゐ

さこそと思ひやらせ給^{たま}いて鳥のかい子をやしなふが如く^{ごと}灯に油をそふるがごとく・かれたる草に雨のふるが如く^{ごと}・うへたる子に乳をあたふるが如く^{ごと}法華經の御命をつがせ給^{たま}う事三世^{さんぜ}の諸仏^{しよぶつ}を供養^{くよう}し給^{たま}へるにてあるなり、十方^{じゆつぽう}

の衆生の眼しゅじょう まなこを開く功德くどくにて候べし、尊しとも申す計りなし、あなかしこ・
あなかしこきょうきょうきんげん 恐恐謹言。

七月十二日 にちれんかおう 日蓮花押 しんじょう 進上

うえのとのごへんじ
上野殿御返事

三三七五

上野殿御書

建治元年八月

五十四歳御作 与

なんじょうときみつ

南条時光

1513p

態わざと御使おんつかいい有難かたく候そ、夫れについては屋形造の由目出度たくこそ候へ、何か

参り候いて移徙申し候はばや、一つ棟札むなふだの事承り候書き候いて此の伯耆公に

進せ候。

此の経文きょうもんは須達長者祇園精舎すだつちようじゃぎおんしやうじやをつく、然るに何なる因縁いんねんにやよりけん

すだつちようじや

須達長者七度まで火災にあひ候時・長者ちようじや・此の由を仏に問い奉るたてまつ、仏答えて

のたまわなんじ

けんそくとんよく

曰く汝が眷属貪欲深き故ゆえに此の火災の難起るなり、長者申さくさいいかん

して此の火災の難をふせぎ申すべきや、

なん

仏の給はく辰巳の方より瑞相ずいそうあるべ

し汝精進して彼の方に向へ、

なんじしやうじん

まさあなた

彼方

より光ささは鬼神きじん三人来りて云わん、南海に鳥あり鳴忿めいふんと名なく此の鳥の住処じゅうしょに火災なし、又此の鳥一つの文を唱となうべし、其の文に云く、「聖主天中天迦陵せいしゅ頻伽声哀愍衆生者我等今敬礼」云云、此の文を唱へんには必ず三十万

里が内には火災をこらじと此の三人の鬼神かくの如く告ぐべきなり云云、須達すだつ

・仏おおの仰せことの如くせしかば少しもちがはず候いき、其の後火災なきと見えて

候、これに依りて滅後・末代にいたるまで此の經文きやうもんを書きて火災をやめ候、

今以てかくの如くなるべく候、返す返す信じ給うべき經文きやうもんなり、是は法華經ほけきやう

の第三の卷化城喻品に説かれて候、委くわしくは此の御房に申し含めて候、

きやうきようきんげん
恐恐 謹言。

八月十八日

にちれん
日蓮

かおう
花押

うえのとのごへんじ
上野殿御返事

三七六

単衣抄

建治元年八月 五十四歳御作

1

514p

単衣一領送り給たまい候あい畢おんぬ。

棄老国には老者をすて日本国には今法華經の行者ほけきやうぎやうじやをすつ、抑そもそも此の国開闢かいびやく

より天神七代てんじん・地神五代ちじんごだい人王百代あり、神武より已後いご九十年代きんめい欽明より仏法始ぶつぽう

まりて六十代七百余年に及べり、其の中に父母ふぼを殺す者朝敵ちやうてきとなる者山賊さんぞく

海賊かいぞく数を知らざれどもいまだきかず法華經の故に日蓮程人に悪にくまれたる者は

なし、・或あるは王に悪にくまれたれども民には悪にくまれず、・或あるは僧は悪めば俗はもれ、

男は悪めば女はもれ、・或あるは愚人は悪めば智人ちじんはもれたり、

此れは王こよりは民男女なんよよりは僧尼そうにくにん愚人ちじんよりは智人ちじん悪にくむ悪人あくにんよりは善人ぜんにん悪にくむ、

前代未聞ぜんだいまもんの身なり後代にも有あるべしともおぼえず、故ゆえに生年三十二より今年

五十四に至るまで二十余年の間・或は寺を追ひ出され・或は処をおわれ・或は親類を煩はされ・或は夜打ちにあひ・或は合戦にあひ・或は悪口数をしらず・或は打たれ・或は手を負う・或は弟子を殺され・或は頸を切られんとし・或は流罪兩度に及べり、二十余年が間・一時片時も心安き事なし、頼朝の七年の合戦もひまやありけん、頼義が十二年の鬭争も争か是にはすぐべき。

法華經の第四に云く「如来の現在にすら猶怨嫉多し」等云云、第五に云く「一切世間怨多くして信じ難し」等云云、天台大師も恐らくはいまだ此の經文をばよみ給はず、一切世間皆信受せし故なり、伝教大師も及び給うべからず況滅度後の經文に符合せざるが故に、日蓮日本國に出現せずば如来の金言も虚くなり多宝の証 明も・なに

かせん十方の諸仏の御語も妄語となりなん、仏滅後・二千二百二十余年月氏

・漢土かんど にほん・日本にほんに一切世間いっさいせけん・多怨難信たおんなんしんの人なし、日蓮にちれんなくば仏語ぶつご既に絶えなん、
かかる身なれば蘇武そぶが如く雪を食として命を継ぎ・李陵りりようが如く簣みのをきて世を
すごす、山林さんりんに交つて果なき時は空むなしくして両三日を過すぐ鹿の皮破わりぬれば裸に
して三四月に及べり、かかる者

をば何としてか哀とおぼしけん、未だ見参にも入らぬ人の膚を隠す衣を送り
給候こそ何とも存じがたく候へ、此の帷をきて仏前に詣でて法華經を読み
奉り候いなば・御經の文字は六万九千三百八十四字・一の文字は皆金色の
仏なり、衣は一つなれども六万九千三百八十四仏に一一にきせまいらせ給へ
るなり、されば此の衣を給て候わば

夫妻二人ともに此の仏御尋ね坐して我が檀那なりと守らせ給うらん、今生
には祈りとなり・財となり・御臨終の時は月となり・日となり・道となり
・橋となり・父となり・母となり・牛馬となり・輿となり・車となり・蓮華
となり・山となり二人を靈山浄土へ迎え取りまいらせ給うべし、南無
妙法蓮華經・南無妙法蓮華經。

建治元年乙亥八月 日

日蓮 花押

此の文は藤四郎殿にようぼう女房と常により合いて御覽あるべく候。

三七七

上野殿母尼御前御返事うえのとの あまござんごへんじ

1515

p

母尼ぼにござんにはことに法華經ほけきようの御信心しんじんのふかくましまし候なる事よろこ悦び候と
申もうさせ給候へ。

止觀しかん第五の事正月一日辰の時こ此れをよみはじめ候、明年は世間せけん忽忽なるべ
きよし皆人申みな もうすあひだ一向後生こうじのために十五日まで止觀しかんを談ぜんとし候が、
文あまた候はず候・御計らい候べきか、白米一斗御志じゆんぱくごし申しつくしがたう候、
鎌倉かまくらは世間せけんかつして候、僧はあまたをはします過去かこの餓鬼道がきだうの苦をばつくの
わせ候ひぬるか。

法門ほうもんの事、日本国にほんこくに人ごとに信ぜさせんと願して候いしが願や成熟じょうじゅくせん

とし候らん、とうじ もうこ 当時は蒙古の勘文によりて世間やわらぎて候なり子細ありぬと
見へ候、本より信じたる人ひと人はことに悦ぶげに候か、きょうきょう 恐恐。

十二月二十二日

日蓮にちれん

花押かおう

うえのとの あまごぜんごへんじ
上野殿母尼御前御返事

三七八

神国王御書こくおうごしよ

1516p

そ おもんみればにほんこく また
夫れ以れば日本国を亦水穂の国と云い亦野馬台又秋津島又扶桑等云云、六
十六ヶ国二つの島已上・六十八ヶ国・東西三千余里・南北は不定なり、此の
国に五畿・七道あり・五畿と申すは山城・大和・河内・和泉・摂津等なり、
七道と申すは東海道十五箇国・東山道八箇国・北陸道七箇国・山陰道八ヶ国
・山陽道八ヶ国・南海道六ヶ国・西海道十一ヶ国・亦鎮西と云い・又太宰府
と云云、已上此れは国なり、国主をたづぬれば神世十二代は天神七代・
地神五代なり、天神七代の第一は国常立尊乃至・第七は伊奘諾尊男なり、
伊奘册尊妻なり、地神五代の第一は天照太神・伊勢太神宮日の神是なりいざ
なぎいざなみの御女なり、乃至第五は彦波瀲武
草葺不合尊・此の神は第

四のひこほの

御子なり母は竜の女なり、已上ちじんごだい地神五代・已上十二代は神世なり、人王はかみよ大体だいたい

百代なるべきか其その第一だいいちの王は神武天皇此れはひこなきさの御子なり、乃至ないし

第十四は仲哀天皇てんのう父はちまんだいばさつ八幡御はちまんだいばさつ第十五は神功皇后しんこうこうご母はちまんだいばさつなり・第十六は応神

天皇にして仲哀と神功の御子今の八幡大菩薩なり、乃至第二十九代は宣化天皇てんのう

なり、此の時までは月支漢土にはがっしかんど仏法ぶつぽうありしかども日本国にはにほんこくいまだわたら

ず。

第三十代は欽明天皇此の皇は第二十七代の継体の御敵子なり治三十二年、

此の皇の治十三年壬申十月十三日辛酉百済国の聖明皇金銅の釈迦しゃかぶつ仏わたを渡し奉る、

今・日本国にほんこくの上下万人じょうげばんにん・一同に阿弥陀仏あみだぶつと申す此れなり、其その表の文に云くいわ臣おみ

聞く万法の中にはぶつぽう仏法最善し世間の道にもせけん仏法最上なり天皇陛下てんのう下亦修行またしゆぎようあ

るべし、故に敬つてゆえ仏像ぶつぞう經教きやうきやう法師ほうしを捧げて使に附してふ貢獻くおんす宜くよろし信行ある

べき者なり已上、然りといへども欽明・敏達・用明の三代・三十余年は崇め
給う事なし、其の間の事さまざまなりといへども其の時の天変地天は今の代
にこそにて候へども・今は亦其の

代にはにるべくもなき変天なり、第三十三代崇峻天皇の御宇より仏法我が朝

あがめ

に崇められて・第三十四代推古天皇の御宇に盛にひろまりき、此の時三論宗

じょうじつ

と成実宗と申す宗始めて渡りて候いき、此の三論宗は月氏にても漢土にて

にほん

だいいじょう

わた

ゆえ

もう

も、日本にても大乘宗の始なり、故に宗の母とも宗の父とも申す、人王三十

てんのう

ぎょう

ぜんしゅう

六代・皇極天皇の御宇に禪宗わた

ぎょう

ほうそうしゅう

る、人王四十代・天武の御宇に法相宗わたる、人王四十四代元正天皇の御宇

だいにちきょう

しやうむてんのう

ぎょう

けこんしゅう

ぐつう

たま

に大日経わたる、人王四十五代に聖武天皇の御宇に華嚴宗を弘通せさせ給う、

こうけんてんのう

ぎょう

りっしゅう

ほっけしゅう

ぐつう

ただ

人王四十六代・孝謙天皇の御宇に律宗と法華宗わたる、しかりといへども唯

りっしゅうばか

ひろ

てんだいほっけしゅう

ぐつう

律宗計りを弘めて天台法華宗は弘通なし。

さいちょう

もう

しやうにん

ほっけしゅう

ぐしやしゅう

人王第五十代に最澄と申す聖人あり、法華宗を我と見出して俱舎宗・

じょうじつ

りっしゅう

ほうそうしゅう

さんろんしゅう

けこんしゅう

ろくしゅう

をせめをとし給うのみ

たま

成実宗・律宗・法相宗・三論宗・華嚴宗等の六宗をせめをとし給うのみ

かんど

だいにち

もう

ぎょう

かんど

ならず、漢土に大日宗と申す宗有りとしろしめせり、同じき御宇に漢土にわ

たりて四宗をならいわたし給う、所謂法華宗・真言宗・禅宗 大乘の律宗なり、しかりといへども法華宗と律宗とをば弘通あ

りて禅宗をば弘め給はず、真言宗をば宗の字をけづり七大寺等の諸僧に

灌頂を許し給う、然れども世間の人人は・いかなるという事をしらず、当時

の人人の云く此の人は漢土にて法華宗をば委細にならいて真言宗をばくはし

くも知ろし食し給はざりけるかとすいし申すなり。

同じき御宇に空海と申す人漢土にわたりて真言宗をならう、しかりといへ

どもいまだ此の御代には帰朝なし、人王第五十一代に平城天皇の御宇に帰朝

あり、五十二代嵯峨の天皇の御宇に弘仁十四年癸卯正月十九日に・真言宗の

住処東寺を給いて護国教王院とがうす、伝教大師御入滅の一年の後なり。

人王五十四代・仁明天皇の御宇に円仁和尚・漢土にわたりて重ねて法華・

真言の二宗をならいわたす、人王五十五代・文德天皇の御宇に仁寿と斉衡と

に金剛頂經こんこうちやうきやうの疏じよ・蘇悉地經そしつちきやうの疏じよ・已上十四卷つくを造りて大日經だいにちきやうの義ぎ釈しゃくに並べ
て真言宗しんこんしゆつの三部さんぶとがうし、比叡山ひえいざんの内に總持院そうじいんを建立こんりゆうし真言宗しんこんしゆつを弘通くつうする
事此の時なり、叡山えいざんに真言宗しんこんしゆつを許ゆるされし

かは座主^{ざす}両方を兼ねたり、しかれども法華宗をば月のごとく真言宗をば日のごとしといひしかば、諸人^{しよにん}等は真言宗^{しんこんしゅう}はすこし勝れたりと・をもへけり、しかれども座主^{ざす}は両方を兼ねて兼学^{けんがく}し給いけり大衆^{たいしゅう}も又かくのごとし。

同じき御宇^{ぎょう}に円珍和尚^{えんちんわじょう}と申す人・御入唐漢土^{にゅうとうかんど}にして法華・真言の両宗をな

らう、同じき御宇^{ぎょう}に天安二年に帰朝す、此の人は本朝^{ほんちよう}にしては叡山第一^{えいざんだいいち}の座主

・義真第二^{ぎしん}の座主円澄^{ぎすえんちよう}・別当光定第三^{べつとうみつただ}の座主円仁^{ぎすえんにん}等に法華・真言

の両宗をならいきわめ給^{たま}うのみならず又東寺^{とうじ}の真言をも習い給へり、其の後^そ

に漢土^{かんど}にわたりて法華・真言^{しんこん}の両宗をみがき給^{たま}う今の三井寺^{みいでら}の法華・真言^{しんこん}の

元祖智証大師^{がんそちしょうだいし}此れなり、已上四大師^{だいし}なり。

総じて日本国^{にほんこく}には真言宗^{しんこんしゅう}に又八家あり、東寺^{とうじ}に五家・弘法大師^{こうぼうだいし}を本とす・

天台^{てんだい}に三家・慈覚大師^{じかくだいし}を本とす。

人王八十一代^{いちちだい}をば安徳天皇^{てんのう}と申す父は高倉院^{たかくらいん}の長子・母は太政入道^{たいうどう}の女

建礼門院なり、此の王は元暦元年乙巳三月二十四日八島にして海中に崩じ給たまい
き、此の王は源ノ頼朝將軍に・せめられて海中のいろくづの食となり
給たまう、人王八十二代は隱岐の法王と申す高倉の第三の王子・文治元年丙午御
即位、八十三代には阿波の院隱岐の法皇の長子建仁二年に位を継ぎ給たまう、八
十四代には佐渡の院・隱岐の法皇の第二の王子・承久三年辛巳二月二十六
日に王位につき給たまう、同じき七月に佐渡の島にうつされ給たまう、此の二・三・
四の三王は父子なり鎌倉の右大将の家人・義時に・せめられさせ給へるなり。
此に日蓮大いに疑つて云く仏と申すは三界の国主・大梵王・第六天の
魔王・帝釈・日月・四天・転輪聖王・諸王の師なり主なり親なり、三界の諸
王は皆は此の釈迦仏より分ち給いて諸国の総領・別領等の主となし給へり、
故に梵釈等は此の仏を・或は木像・或は画像等にあがめ給たまう、須臾も相背か
ば梵王の高台もくづれ帝釈の喜見もやぶれ輪王も

かほり落ち給^{たま}うべし、神と申^{もう}すは又国^{こく}の国主^{しゅ}等の崩去^{いた}し給^{たま}えるを生身^{しょうしん}のご
とくあがめ給^{たま}う、此^これ又国^{こく}王^{おう}・国人^{こくにん}のための父母^{ふぼ}なり・主君^{しゅくん}なり・師匠^{ししやう}なり
・片時^{かたとき}もそむかば国安隱^{あんいん}なるべからず、此^これを崇^{あが}むれば国^{こく}は三災^{さんさい}を消し七難^{ひちなん}

を払い人は病なく長寿を持ち後生には人天と三乗と仏となり給うべし。

しかるに我が日本国は一閻浮提の内・月氏・漢土にも・すぐれ八万の国に

も超えたる国ぞかし、其の故は月氏の仏法は西域等に載せられて候但だ七十

余国なり其の余は皆外道の国なり、漢土の寺は十万八千四十所なり、我が朝

の山寺は十七万一千三十七所なり、此の国は月氏・漢土に対すれば日本国に

伊豆の大島を對せるがごとし、寺をかずうれば漢土・月氏のも雲泥すぎたり、

かれは又大乗の国小乗の国大乘も権大乘の国なり、此れは寺ごとに

八宗・十宗をならい家家宅宅に大乘を讀誦す、彼の月氏・漢土等は仏法を

用ゆる人は千人に一人なり、此の日本国は外道一人もなし、其の上神は又

第一天照太神第二八幡大菩薩第三は山王等の三千余社、昼夜に我が国をまほ

り朝夕に国家を見そなわし給う、其の上天照太神は内侍所と申す明鏡にか

げをうかべ内裏にあがめられ給い

はちまんだいぼさつ 八幡大菩薩は宝殿をすてて主上の頂を栖とし給つと申す、仏の加護と申し
神の守護と申しいかなれば彼の安德と隠岐と阿波佐渡等の王は相伝の所従等
に・せめられて・或は殺され・或は島に放れ・或は鬼となり・或は大地獄に
は堕ち給いしぞ、日本国の叡山七寺東寺・園城等の十七万一千三十七所の山
山寺寺に・いささかの御仏事を行うに
みなてんちようちきゅう みなてんちようちきゅう
は皆天長地久玉体安穩とこそ・いのり給い候へ、其の上八幡大菩薩は殊に天
王守護の大願あり、人王第四十八代に高野天皇の玉体に入り給いて云く、我
が国家開闢より以来臣を以て君と為すこと未だ有らざる事なり、天之日嗣必
ず皇緒を立つ等云云、又太神行教に付して云く我に百王守護の誓い有り等
云云。

されば神武天皇より已来百王にいたるまではいかなる事有りとも玉体はつ
つがあるべからず・王位を傾くる者も有るべからず、一生補処の菩薩は中天

なし・聖人しょうにんは横死おうしせずと申もつす、いかにとして彼れ彼の四王しおうは王位を・をいとされ国をうばはるるのみならず・命を海にすて身を島島に入れ給たまいけるや
らむ、天照太神てんしょうだいじんは玉体に入りかわり給たまはざりけるか・八幡大菩薩はちまんたいぼさつの百王ひやくおうの
誓はいかにとなりぬるぞ、其その上安徳天皇てんのうの御宇ぎょうには明雲めいぐんの座主ざす・御師おんしとな

り太上入道並びに一門怠状を捧げて云く、「彼の興福寺を以て藤氏の氏寺と
為し春日の社を以て藤氏の氏神と為すが如く、延暦寺を以て平氏の氏寺と号
し日吉の社を以て平氏の氏神と号す」云云、叡山には明雲座主を始めと
して三千人の大衆五檀の大法を行い、大臣以下は家家に尊勝陀羅尼不動明王
を供養し・諸寺・諸山には奉幣し大法秘法を尽くさずという事なし。

又承久の合戦の御時は天台の座主・慈円仁和寺の御室三井等の高僧等を
相催して・日本国にわたれる所の大法秘法残りなく行われ給う、所謂承久

三年辛巳四月十九日に十五檀の法を行わる、天台の座主は一字金輪法等五月
二日は仁和寺の御室如法愛染明王法を紫宸殿にて行い給う、又六月八日御室
守護經法を行い給う、已上四

十一人の高僧十五壇の大法此の法を行う事は日本に第二度なり、権の大夫殿
は此の事を知り給う事なければ御調伏も行い給はず、又いかに行い給うとも

彼の法ひとびと法彼の人人にはすぐべからず、仏法ぶつぽうの御力おんちからと申し王法おうの威力いりよくと申し彼は国主こくしゅなり三界さんがいの諸王しよ守護しゆごし給う、此これは日本国にほんこくの民なりわづかに小鬼こゑぞまほりけん代代の所従しよじゆじ・重

重たうの家人おういなり、譬もちへば王威おういを用いて民をせめば鷹たかの雉きじをとり・のねずみを食じやい蛇じやのかへるをのみ師子王ししの兎を殺すにてこそ有あるべけれ、なにしにかかるがろしく天神地祇てんじんちぎには申もつすべき、仏・菩薩ぼさつをばをどろかし奉たてまつるべき、師子王ししが兎をとらむには精進しじゆじんすべきか、たかがきじを食んにはいのり有あるべしや、いかにいのらずとも大王だいおうの身

として民を失わんには大水たいすいの小火たいふうをけし大風たいふうの小雲たいすいを巻まくにてこそ有あるべけれ、其その上だい大火だいに枯木からを加くうるがごとく大河だいに大雨だいを下くだすがごとく・王法おうの力ちからに大法だいほうを行おこなひ合あせて頼朝よりともと義時よしときとの本命ほんめいと元神おんじんとをば梵王ぼんのうと帝釈たいしやく等に抜き取とらせ給たまう、譬たとへば古酒こしうに酔えいる者のごとし・蛇じゃの蝦かえるの魂たまを奪ううがごとし・

よりとも よしとき
頼朝と義時との御魂・御名・御姓を

ばかきつけて諸尊諸神等の御足の下にふませまいせていのりしかば・いかに
もこらうべしともみへざりしに・いかにとして一年・一月も延びずして・わ
づか二日一日にはほろび給いけるやらむ、
仏法を流布の国主とならむ人人

は能く能く御案ありて後生をも定め御いのりも有るべきか。

而るに日蓮此の事を疑いしゆへに幼少の比より随分に顕密二道・並びに

諸宗の一切の経を・

或は人にならない・或は我れと開見し勘へ見て候へば故の

候いけるぞ、我が面を見る事は明鏡によるべし国土の盛衰を計ることは仏鏡

にはすぐべからず、仁王経・金光明経・最勝王経・守護経・涅槃経・

ほけきよう

法華経等の諸大乘経を開き見奉り候に・仏法に付

きて国も盛へ人の寿も長く又仏法に付いて国もほろび人の寿も短かかるべし

とみへて候、譬へば水は能く船をたすけ水は能く船をやぶる、五穀は人をや

しない人を損ず、小波小風は大船を損ずる事かたし大波・大風には小船

をやぶれやすし、王法の曲るは小波小風のごとし大国と大人をば失いがたし、

仏法の失あるは大風・大波の小船をやぶるがごとし国のやぶる事疑いな

し、仏記に云く我滅するの後末代には悪法・悪人の国をほろぼし仏法を失に

は失すべからず譬へば三千大千世界の草木を薪として須弥山をやくにやけず
劫火の時須弥山の根より大豆計りの火出でて須弥山やくが如く・我が法も又
此くの如し悪人・外道・天魔・波旬・五通等にはやぶられず、仏の
ごとく六通の羅漢のごとく三衣を皮のごとく身に紆い・一鉢を両眼にあてた
らむ持戒の僧等と・大風の草木をなびかすがごとくなる高僧等我が正法を
失うべし、其の時梵釈・日月・四天いかりをなし其の国に大天変・大地天等
を發していさめむにいさめられずば其の国の内に七難を・をこし父母・兄弟
王臣万民等互に大怨敵となり梟鳥が母を食い破鏡が父をがいするがごとく
自国をやぶらせて結句他国より其の国をせめさすべしとみへて候。
今日蓮・一代聖教の明鏡をもつて日本国を浮べ見候に・此の鏡に浮んで
候人人は国敵・仏敵たる事疑いなし、一代聖教の中に法華經は明鏡の中
の神鏡なり、銅鏡等は人の形をばうかぶれども・いまだ心をばうかべず、

法華經は人^{ほけきよう}

の形を浮ぶるのみならず・心をも浮べ給^{たま}へり、心を浮ぶるのみならず・先業^{せんごう}をも未来^{みらい}をも鑒^{かん}み給^{たま}う事くもりなし、法華經^{ほけきよう}の第七の巻を見候^{みけう}へば「如来^{にょらい}の滅^{めつ}後^ごにおいて仏^{ぶつ}の所説^{しよせつ}の經^{きやう}の因縁^{いんねん}及び次第^{しだい}を知り義^ぎに随^{したが}つて実^{じつ}の如^{ごと}く説^{せつ}か

ん、日月の光明にちがつ こうみょうの能く諸の幽冥よろもろゆうみょうを除くが如く斯の人・世間せけんに行じて能く

しゅじょう

衆生の闇を滅す」等云、文の心は此の法華經を一字も一句も説く人は必ず

いちだいしうきよう

せんじん

しだい

よ

よ

わきま

ほけきよう

いっく

いっく

いっく

いっく

一代聖教の浅深と次第とを能く能く弁えたらむ人の説くべき事に候、譬へ

みそひともし

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

ば暦の三百六十日をかながうるに一日も相違せば万日俱に反逆すべし、

みそひともし

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

三十一字を連ねたる一句・一字も相違せば

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

三十一字共に歌にて有るべからず、謂る一經を讀誦すとも始め寂滅道場

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

より終り雙林最後にいたるまで次第と浅深とに迷惑せば其の人は我が身に

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

五逆を作らずして無間地獄に入り此れを帰依せん檀那も阿鼻大城に墮つべし

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

何に況や智人・一人・出現して一代聖教の浅深勝劣を弁えん時・元祖が

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

迷惑を相伝せる諸僧等・或は国師となり・或は

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

諸家の師となりなんどせる人人・自のきずが顕るる上人にかろしめられん事

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

をなげきて、上に挙ぐる一人の智人を・或は国主に訴へ・或は万人にそしら

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

いっく

せん、其の時・守護の天神等の国をやぶらん事は芭蕉の葉を大風のさき小舟を大波のやぶらむがごとしと見へて候。

無量義経は始め寂滅道場より終り般若経にいたるまでの一切経を・或

は名を挙げ・或は年紀を限りて未顕真実と定めぬ、涅槃経と申すは仏最後の

御物語に初め初成道より五十年の諸教の御物語四十余年をば無量義経の

ごとく邪見の経と定め法華経をば我が主君と号し給う、中に法華経ましまし

て已今当の勅宣を下し給いしかば・多宝

・十方の諸仏加判ありて各各本土にかへり給いしを・月氏の付法蔵の二十四

人は但小乗・権大乘を弘通して法華経の実義を宣べ給う事なし、譬へば

日本国の行基菩薩と鑒真和尚との法華経の義を知り給いて弘通なかりしがこ

とし、漢土の南北の十師は内にも仏法の勝劣を弁えず外にも浅深に迷惑せり、

又三論宗の吉蔵・華嚴宗の澄観・

法相宗ほうそうしゅうの慈恩じおん・此れ等この人人ひとびとは内にも迷まよい外にも知らざりしかども・道心どうしん
堅固けんこの人人ひとびとなれば名聞みょうもんをすてて天台てんだいの義に付きにき、知らずされば此の人人ひとびと
は懺悔ざんげの力に依りて生死しょうじやはなれけむ、將はた又また謗法ぼうぼうの罪つみは重しげく懺悔ざんげの力は弱
くして阿闍世王あじやせ無垢論師等むくろんしのごとく地獄じごくにや墮おちにけん。

ぜんむいさんぞう　こんこうちさんぞう　ふくうさんぞう　さんぞう　いっさい　しんこんし　もう
善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵等の三三蔵は一切の真言師の申すは

だいにちにやら

大日如来より五代六代の人人即身成仏の根本なり等云云、日蓮勸えて云く

ほうぬすみ

がんそ

ぬすびと

こんぼん

こんぼん

ひとびと

がっし

だいにちきよう

いわ

法偷の元祖なり盗人の根本なり、此れ等の人人は月氏よりは

こんぼん

ひとびと

がっし

だいにちきよう

こんこう

金剛

ちようきよう

そしつちきよう

もたら

きようきよう

けこんきよう

はんにやきよう

ねはんぎよう

ねはんぎよう

ねはんぎよう

ねはんぎよう

金剛

頂経

蘇悉地経等を齎し来る、此の

経経

は華嚴経

般若経

涅槃経等に

および

ほけきよう

げれつ

きようきよう

けこんきよう

はんにやきよう

きようもん

かかく

かかく

かかく

明

及ばざる上・法華経に対すれば七重の下劣なり、

経文に見へて

赫赫たり

明

明

たり、

しか

かんど

てんだいだいし

しかん

てんだいだいし

しかん

てんだいだいし

しかん

てんだいだいし

明

まよ

わして

こ

およ

くつう

くつう

くつう

すぐ

すぐ

すぐ

すぐ

明

もつこ

がんぜん

がんぜん

がんぜん

がんぜん

がんぜん

がんぜん

がんぜん

がんぜん

がんぜん

妄語

眼前なり、

い

かん

が

せん

と

案

ぜ

し

程

給う、

い

わ

ゆる

だ

い

に

ち

き

よう

明

所謂

大日経

の

三十一品

を

法華経

二十八品

並に

無量義経

に

腹

合

せ

に

合

せ

に

合

せ

に

合

明

三密

の中

の

意

密

を

ば

法華経

に

同

じ

なり

大日経

は

広

なり

・

已

に

も

入

れ

ず

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

今にも入れず当にもはづれぬ、法華經をかたうどとして三説の難を脱れ結句

は印と真言とを用いて法華經を打ち落して真言宗を立てて侯、譬へば三女が

きさき

后と成りて三王を喪せしがごとし、法華經の流通の涅槃經の第九に我れ滅し

あくびく

て後の惡比丘等我が正法を滅すべし、譬へば女人のごとしと記し給いけるは

これ

是なり、されば善無畏三蔵は

えんまおう

閻魔王に・せめられて鉄の繩七脉つけられてからくして蘇りたれども又死

こくひんいん

する時は黒皮隱隠として骨甚だ露焉と申して無間地獄の前相・其の死骨に

あらわ

顯れ給いぬ、人死して後色の黒きは地獄に墮つとは一代聖教に定むる所な

こんこうち

り、金剛智・不空等も又此れをもつて知んぬべし、此の人人は改悔は有りと

けんそうこうてい

見へて候へども強盛の懺悔のなかりけるか、今の真言師は又あへて知る事な

げんそうこうてい

し、玄宗皇帝の御代の喪いし事も不審はれて候。

にほんこく

日本国は又弘法・慈覚・智証此の謗法を習い伝えて自身も知るしめさず人

は又をもひもよらず、且くは法華宗の人人・相論有りしかども終には天台宗
やうやく衰えて・叡山五十五代の座主・明雲・人王八十一代の安徳天皇より
已来は叡山一向に真言宗となりぬ、第六十一代の座主顯真權僧正は天台座主
の名を得て真言宗に遷るのみならず、然る後・法華・真言をすてて一向謗法
の法然が弟子となりぬ、承久調伏の上衆・慈円僧正は第六十二代並びに

五・九・七十一代いちだいの四代よだいの座主ざす隱岐おきの法皇ほうこうの御師おんしなり、此等これらの人人ひとびとは善無畏ぜんむいさんぞう 金剛智三蔵こんこうちさんぞう・不空三蔵ふくうさんぞう・慈覺じかく・智証等ちしょうの真言しんごんをば器しはかわれども一の智水ちすいなり、其その上天台宗てんだいしゅうの座主ざすの名を盗ぬすみて法華經ほけきょうの御領ちぎょうを知行しぎょうして・三千さんぜんの頭こづへとなり一國いっこくの法の師あおと仰おほがれて大日經だいにちきょうを本もととして七重しちじやうくだれる真言しんごんを用もちいて八重勝はちじやうれりと・をもへるは・天てんを地ちとをもい民たみを王わうとあやまち石いしを珠たまとあやまつのみならず珠たまを石いしという人ひとなり、教主きやうしゆ釈尊しやくそん・多宝仏たぼうぶつ・十方じゆつぱうの諸仏しよぶつの御怨敵おんてきたるのみならず一切衆生いっさいしゆじやうの眼目がんもくを奪うばい取り三善道さんぜんどうの門かどを開ひらけ三惡道さんあくどうの道みちを開ひらけ、梵釈ぼんしやく・日月にちがつ・四天等してんの諸天善神しよてんぜんじんいかでか此この人ひとを罰ばつせさせ給たまはざらむ、いかでか此この人ひとの仰おほぐ檀那だんなをば守護しゆごし給たまうべき、天照太神てんしやうだいじんの内侍所ないじどころも八幡大菩薩はちまんだいぼさつの百王ひやくおう守護しゆごの御みちかたいも・いかでか叶たまはせ給たまうべき。

余よ・此このの由よしを且またつ知しりしより已來このかた・一分いちぶんの慈悲じひに催うながされて粗随分ほぼずいぶんの弟子でしに

あらあら申せし程に次第に増長して国主まで聞えぬ、国主は理を親とし非を敵とすべき人にてをはすべきかいかがりたりけん諸人の讒言を・をさめて一人の余をすて給う、彼の天台大師は南北の諸人あだみしかども陳隋二代の帝重んじ給いしかば諸人の怨も

うすかりき、此の伝教大師は南都・七大寺讒言せしかども桓武・平城・嵯峨

の三皇用い給いしかば怨敵もおかしがたし、今日蓮は日本国十七万一千三十

七所の諸僧等のあだするのみならず国主用い給わざれば万民あだをなす事

父母の敵にも超え宿世のかたきにも・すぐれたり、結句は二度の遠流一度の

頭に及ぶ、彼の大莊嚴仏の末法の

四比丘並に六百八十万億那由他の諸人が普事比丘一人をあだみしにも超へ

師子音王仏の末の勝意比丘・無量の弟子等が喜根比丘をせめしにも勝れり、

覚徳比丘がせめられし不輕菩薩が杖木をかをほりしも・限りあれば此れには

よもすぎじとぞをばへ候。

も 若し百千にも一つ日蓮・法華經の行者にて候ならば日本國の諸人後生の

むげんじごく 無間地獄はしばらくをく、現身には國を失ひ他國に取られん事彼の徽宗・欽宗

のごとく優陀延王・訖利多王等に申せしがごとくならん、又其の外は・或は

其の身は白癩黒癩・或は諸惡重病 疑いなるべきかもし其の義なくば又

日蓮・法華經の行者にあらじ此の身現身には白癩黒癩等の諸惡重病を受

け取り後生には提婆瞿伽利等がごとく無間・大城に墮つべし日月を射奉る

修羅は其の矢還つて我が眼に立ち師子王を吼る狗犬は我が腹をやぶる釈子を

殺せし波琉璃王は水中の大火に入り仏の御身より血を出だせし提婆達多是

現身に阿鼻の炎を感じり金銅の釈尊をやきし守屋は四天王の矢にあたり

東大寺興福寺を焼きし清盛入道は現身に其身もつる病をうけにき彼等は皆

大事なれども日蓮が事に合すれば小事なり小事すら猶しるしあり大事いかで

か現罰げんばちなからむ。

悦よろこばしいかな経文きやうもんに任まかせて五五百歳ごひゃくせん広宣流布くわんせんるふをまつ悲かないかな鬪とう争じやう堅固けんこの

時に当あつて此この国修羅道しゆらどうとなるべし、清盛入道きよもりに入うどうと頼朝よりともとは源平の両家本より

狗犬くけんと猿猴えんこうとのごとし、少人・少福の頼朝よりともをあだせしゆへに宿敵しゆくてきたる入道にやうどうの

一門いちもんほろびし上科なき主上の西海に沈み給たまいし事は不便ふびんの事なり、此これは

教主きやうしゆ釈尊しやくそん・多宝たほう・十方じゆつぱうの諸仏しよぶつの

御使おんつかいとして世間せけんには一分いちぶんの失とがなき者を一国しよこくにんの諸人しよにんにあだますのみならず両

度の流罪るざいに当あたりて日中に鎌倉かまくらの小路をわたす事朝敵ちやうてきのごとし、其その外小菴そがうに

は釈尊しやくそんを本尊ほんぞんとし一切いっさい経を安置あんちしたりし其その室を刎はねこぼちて・仏像ぶつぞう経巻きやうかん

を諸人しよにんにふまするのみならず糞泥ふんねいにふみ入れ日蓮にちれんが懐かい中ちゆうに法華經ほけきやうを入れま

いらせて候いいしを・とりいだして頭こづかをさんざんに打ちさいなむ、此この事如何いかん

なる宿意しゆくぎもなし当座とうざの科とがもなし、ただ法華經ほけきやうを弘通くわうつうする計ばかりの大科だいかなり。

にちれん
日蓮天に向つて声をあげて申さく法華經の序品を拝見し奉れば梵釈と日月
してん
と四天と竜王と阿修羅と二界八番の衆と無量の国土の諸神と集会し給いたり
ま
し時已今当に第一の説を聞きし時・我とも雪山童子の如く身を供養し藥王
ぼさつ
菩薩の如く臂をも・やかんとをもししに、教主釈尊・多宝・十方の諸仏の
おんまえ
御前にして今・仏前に於て自ら誓言を説けと諫曉し給いしかば・幸に順風を
せそん
得て世尊の勅の如く当に具さに奉行すべしと二処三会の衆・一同に大音声をおんじやう

日蓮天に向つて声をあげて申さく法華經の序品を拝見し奉れば梵釈と日月

と四天と竜王と阿修羅と二界八番の衆と無量の国土の諸神と集會し給いたり

し時已今^{まさ}に第一^{だいいち}の説を聞きし時・我とも雪山童子^{せっせんどうじ}の如く^{ごと}身を供養^{くよう}し薬王^{やくおう}

菩薩ぼさつの如ごとく臂ひじをも・やかんとをもいしに、
教主きょうしゅ釈尊しやくそん・多宝たほう・十方じゅうぽうの諸仏しよぶつの

御前にして今・仏前に於て自ら誓言を説けと諫曉し給いしかば・幸に順風を

得て世尊の勅の如く當に具さに奉行すべしと二処三会の衆・一同に大音声おんじょうを

放ちて誓い給いしは・いかんが有るべき、唯仏前にては是くの如く申して多宝
じゅつぼう しょうぶつ ほんど
・十方の諸仏は本土にかへり給う、釈尊は御入滅ならせ給いて・ほど久く
まつだい ほけきよう ぎようじや ほんしやく ちちがつ
なりぬれば・末代辺国に法華經の行者有りとも梵釈・日月等・御誓いをう
しゅご たま にちれん いったん
ちわすれて守護し給う事なくば日蓮がためには一旦のなげきなり、無始已来
たか じゃ ねこ
・鷹の前のきじ・蛇の前のかへる・の前のねずみ・犬の前のさると有りし
ほさつ しょうてん
時もありき、ゆめの代なれば仏・菩薩・諸天にすかされ・まいらせたりける
者にてこそ候はめ。

なによりも・なげかしき事は梵と帝と日月と四天等の南無妙法蓮華經の
ほけきよう ぎようじや だいなん あ げんしん かほう っ
法華經の行者の大難に値をすてさせ給いて現身に天の果報も尽きて花の大風
に散るがごとく雨の空より下ることく其の人命終入阿鼻獄と無間・大城に
お たま
墮ち給はん事こそあはれにはをばへ候へ、設い彼の人人は三世十方の諸仏を
かたうどとして知らぬよしのべ申し

たま 給うとも日蓮は其の人人には強きかたきなり、若し仏の返願をはずせば梵釈

・ 日月・ 四天をば無間・ 大城には必ずつけたてまつるべし、日蓮が眼をそ

ろしくば・ いそぎいそぎ仏前の誓いをばはたし給へ、日蓮が口、〇。

又むぎひとひつ驚目両貫・ わかめ・ かちめ・ みな一俵給い畢んぬ、干い

・ やきごめ・ 各各一かうぶくる給い畢んぬ、一一の御志はかきつくす

べしと申せども法門巨多に候へば留め畢んぬ、他門にきかせ給うなよ大事

の事どもかきて候なり。

三七九 上野殿御消息

建治元年 五十四歳御作 与南条時光

1526p

三世の諸仏の世に出でさせ給いても皆皆四恩を報ぜよと説き・ 三皇・ 五帝

・孔子^{こうし}・老子^{らうし}・顔回^{がんかい}等の古^{いにしえ}の賢人^{けんじん}は四徳^{しとく}を修^{しゆ}せよとなり、四徳とは一^{いち}には父母^{ふぼ}に孝^{こう}あるべし・二^にには主^{しゅ}に忠^{ちゆう}あるべし・三^{さん}には友^{ゆう}に合^あうて礼^{れい}あるべし・四^しに

は劣おとれるに逢じつて慈悲あれとなり、一に父母ふぼに孝あれとはたとひ親はものに
覺おほえずとも悪さまなる事を云うとも聊いささかかも腹も立てず誤あやまりる顔を見せず親の
云う事に一分いちぶんも違たがへず親によき物を与へんと思ひてせめてする事なくば一日
に二三度えみて向へとなり、二に主に合あつて忠あるべしとは・いささかも主
にうつしめたなき心ある

べからず、たとひ我が身は失うしなはるとも主にはかまへてよかれと思ふべし、
かくれての信あればあらはれての徳あるなりと云云、三には友にあふて礼あ
れとは友達の一日に十度・二十度来れる人なりとも千里・二千里・来れる人
の如ごとく思ふて礼儀いささか・をろかに思ふべからず、四に劣おとれる者に慈悲じひあ
れとは我より劣りたらん人を

ば我が子の如ごとく思ひて一切いっさいあはれみ慈悲あるべし、此これを四徳と云うなり、
かくのごとふるまい振舞うを賢人けんじんとも聖人しょうにんとも云うべし、此の四の事あれば余の事に

はよからなどもよき者なり、かくのこと是くの如く四の得を振舞ふ人は外典三千巻をよ
まねども読みたる人となれり。

一にぶっきょう仏教の四恩とは一にはふぼ父母の恩を報ぜよ・二にはこくしゅ国主の恩を報ぜよ・

三には一切衆生の恩を報ぜよ・四にはさんぼう三宝の恩を報ぜよ、一にふぼ父母の恩を報

ぜよとはふぼ父母の赤白せきびやく一・たい和合して我が身となる、母の胎内に宿る事・二百

七十日・九月の間・三十七度死るほどの苦みあり、うみおと生落す時たへがたしと思

ひ念ずる息・頂つなより出づる煙りぼんてん梵天に

至る、さてうみおと生落されて乳をのむ事一百八十余石・三年が間はふぼ父母の膝に遊び

人となりてぶつきょう仏教を信ずれば先づ此の父と母との恩を報ずべし、父の恩の高き

事須弥山・猶しゆみせんひきし・母の恩の深き事大海還つて浅し、相構かまえてふぼ父母の恩を

報ずべし、二にこくしゅ国主の恩を報ぜよとは・生れて已来・衣食いしょくのたぐひより初め

て・みなこ皆是れこくしゅ国主の恩を得てある者な

れば現世安穩・後生善処と祈り奉るべし、三に一切衆生の恩を報ぜよとは、

されば昔は一切の男は父なり・女は母なり・然る間・生生世世に皆恩ある

しめじょう

みな

さんぼう

みな

衆生なれば皆仏になれと思ふべきなり、四に三宝の恩を報ぜとは・最初成道

けこんきよう

たず

だいじよう

ほうしんによらい

にじよう

の華嚴經を尋ねれば経も大乘・仏も報身如来にて坐ます間・二乗等は昼の

ふくろう

梟・夜の鷹の如くして・かれを聞くとい

たか

ごと

へども耳しる・目しるの如し、然る間・四恩を報すべきかと思ふに女人をきはれたる間・母の恩報じがたし、次に仏阿含・小乗經を説き給ひし事・十二年・是こそ小乗なれば我等が機にしたがふべきかと思へば・男は五戒・女は十戒・法師は二百五十戒・尼は五百戒を持ちて三千の威儀を具すべしと説きたれば末代の我等かなふべしとも・

おぼえねば母の恩報じがたし、況や此の經にもきらはれたり、方等・般若・四十余年の經經に皆女人をきらはれたり、但天女成仏經・觀經等にすこし女人の得道の經文有りといへども・但名のみ有つて実なきなり、其の上未顕真実の經なれば如何が有りけん、四十余年の經經に皆女人を嫌われたり、又最後に説き給ひたる涅槃經にも女人を

嫌はれたり、何れか四恩を報する經有りと尋ぬれば法華經こそ女人成仏する經なれば、八歳の童女・成仏し・仏の姨母・曇弥女・耶輸陀羅比丘尼記

記にあづかりぬ、されば我等が母は但女人の体にてこそ候へ・畜生にもあらず蛇身にもあらず・八歳の童女だにも仏になる、如何ぞ此の經の力にて我が母の仏にならざるべき、されば法華經を持つ人は父と母との恩を報ずるなり、我が心には報ずると思はねども此の經の力にて報ずるなり。

然る間・釈迦・多宝等の十方無量の仏・上行・地涌等の菩薩も普賢・文殊等の迹化の大神も舍利弗等の諸大声聞も・大梵天王・日月等の明主諸天も・八部王も・十羅刹女等も・日本国中の大小の諸神も・総じて此の法華經を強く信じまいらせて余念なく一筋に信仰する者をば影の身にそふが如く守らせ給ひ候なり、相構て相構て心を翻へさず・一筋に信じ給ふならば・現世安穩・後生善処なるべし、恐恐謹言。

にちれんかおう
日蓮花押

うえのとの
上野殿

三八〇

南条殿御返事ごへんじ

建治二年正月 五十五歳御作

与南条七郎次郎

1529p

はるのはじめの御つかひじ自他申たもうしこめまいらせ候、さては給たまはるところの
すずの物の事、もちぬ・七十まい・さけひとつ・いもいちだ・河のりひと
かみぶくろ・だいこんふたつ・やまのいも七ほん等なり、なんごろの御心おんこころざし
は・しなじなのものに・あらはれ候いぬ。

法華經ほけきょうの第八の巻いわに云く、「所願しょうがん虚むしからず亦現世またげんせに於おいて其の福報そを得ん」
又云く「当まさに現世げんせに於おいて現の果報かほうを得べし」等云云、天台大師てんだいだいし云く「天子てんしの
一言虚むしからず」又云く「法王虚ほうおうむしからず」等云云、賢王けんおうとなりぬれば・た
とひ身をほろばせどもそら事せず、いわうや釈迦如来しゃかにょらいは普明王ふみょうとおはせし時

ははんぞく王のたてへ入らせ給いたまひ

き不妄語戒もつじを持たせ給いしゆへなり、かり王とおはせし時は実語少人・大妄語もつじ

入地獄じじくとこそおほせありしか、いわうや法華經ほけきようと申すは仏・我と要當說眞實ようとうせつしんじつ

となのらせ給いし上・多宝仏たほうぶつ・十方の諸仏じゅうぼうあつまらせ給いて日月・衆星しゅうせいの

ならばせ給たまうがごとくに候いしざせきなり、法華經ほけきようにそら事あるならばなに

事をか人信くようすべき、かかる御經に一華一香をも供養する人は過去かこに十萬億の

仏を供養する人なり、又釈迦如来しゃかにょらいの末法まっぽうに世のみだれたらん時・王臣おうしん・万民ばんみん

・心を一にして一人の法華經ほけきようの行者ぎょうじやをあだまん時・此の行者ぎょうじやかんぱちの小

水に魚のすみ・万人ばんにんにかこまれたる鹿のごとくならん時、一人ありて・とぶ

らはん人は生身しょうしんの教主きょうしゅ釈尊しゃくそんを一劫いつじやうが間・三業相応さんごうそうおうして供養くようしまいらせたら

んよりなを功德くどくすぐるべきよし・如来にょらいの金言きんげん・分明ぶんみようなり、日は赫赫かくかくたり月は

明明めいめいたり・法華經ほけきようの文字もんじはかくかく・めいめいたり・めいめい・かくかくた

り、あきらかなる鏡にかを・をうかべ、すめる水に月のうかべるがごとし。

しかるに亦また於現世げんせ得其福報ちよくせんの勅宣・当於現世得現果報げんせ げんかほうの鳳詔ほうしゅう・南条の七

郎次郎殿にかぎりて・むなしかるべしや、日は西よりいづる世月は地よりな

る時なりとも・仏の言むなしからじとこそ定めさせ給たまいしか、これをもつて

・おもうに慈父過去じふかこの聖靈しょうりょうは教主きようしゅ釈尊しゃくそんの御前おんまえにわたらせ給たまい・だんなは

又現世げんせに大果報かほうをまねかん事うたがい疑あるべからず、かうじんかうじん。

建治二年正月十九日

日蓮にちれん花押かおう

三八一

南条殿御返事ごへんじ

南条殿御返事ごへんじ 建治二年三月 五十五

歳御作

1530p

いものかしら・河のり又わさび・一一・人人ひとびとの御志ごし承うけたまわり候いぬ、鳥のか

いこをやしなひ・牛の子を牛のねぶるが如ごとし、夫それ衣は身をつつみ・食は命

をつぐ、されば法華經ほけきょうを山中にして読みまいらせ候人を・ねんごろに・やし

なはせ給たまふは、釈迦しゃか仏ぶつをやしなひまいらせ・法華經ほけきょうの命をつぐにあらずや、

妙莊嚴王みょうそうじやうは三聖を山中にやしなひて・

沙羅樹王しゃらじゆ・仏となり、檀王だんおうは阿私仙人あしせんじんを供養くようして釈迦しゃか仏ぶつとならせ給たまふ、され

ば必ずよみかかねども・よみかく人を供養くようすれば仏になる事うたがひ疑ひなかりけ

り、經に云いく「是この人・仏道ぶつどうに於おて決定けつじやうして疑うたがひ有ること無けん」南無なむ

妙法蓮華經みょうほうれんげきやう、南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやう。

建治二年三月十八日

にちれん かおう
日蓮 花押

謹上 きんじょう 南条殿御返事 ごへんじ

橘三郎殿・太郎大夫殿・一紙に云云恐れ入り候、返す返すははき殿読み聞

かせまいらせ給へ。たま

三八二

南条殿御返事ごへんじ

建治二年三月

五十五歳御作

1531p

かたびら一つ・しをいちだ・あぶら五そう・給ひ候あわ了んぬ、ころもはか
んをふせぎ又ねつをふせぐ・みをかくし・みをかざる、法華經ほけきようの第七やくわ
うぼんに云いく「如裸者得衣」等云云、心ははだかなるものの・ころもをへた
るがごとし、もんの心はうれしき事をとかれて候。

ふほうぞうの人のなかに商那和衆もうと申す人あり衣をきてむまれさせ給たまう、
これは先生せんしやうに仏法ぶつぽうにころもを・くやうせし人なり、されば法華經ほけきように云いく「柔
和忍辱衣」等云云、こんろん山には石なしみのぶのたけにはしをなし、石な
きところには・たまよりも・いしすぐれたり、しをなきところには・しを・

こめにも・すぐれて候、国王こくおうのたから

は左右さうの大臣だいじんなり左右さうの大臣だいじんをば塩梅あんばいと申もうす、みそしを・なければよわたり

がたし左右さうの臣おみなければ国をさまらず、あぶらと申もうすは涅槃經ねはんぎょうに云く風のな

かに・あぶらなし・あぶらのなかに・かぜなし・風をぢする第一だいいちのくすりな

り、かたがたのものをくり給たまいて候・御心おんこころざしのあらわれて候事申もうすばかり

なし、せんするところは・こなんでうどのの法華經ほけきょうの御しんようのふかかり

し事のあらわるるか、王の心ざしをば臣おみのべ・をやの心ざしをば子の申もうしの

ぶるとはこれなり、あわれことのの・うれしと・をばすらん。

つくしにを・をはしの太郎と申しける大名ありけり、大將どのの御かんき

を・かほりて・かまくらゆひのはまつちのろうにこめられて十二年めしはじ

しめられしときつくしをうちいでしに・ごぜんにむかひて申せしは・ゆみや

とるみとなりてきみの御かんきを・かほらんことは・なげきならず、又ごぜ

んに・をさなくよりなれしかいまはなれん事いうばかりなし、これはさてを
きぬ、なんしにても・によしにても一人なき事なげきなり、ただしくわいに
ん

のよし・かたらせ給^{たま}う・をうなごにてやあらんずらん・をのここにてや
候^{そうら}はんずらん、ゆくへをみざらん事くちおし、又かれが人となりて・ちちと
いうものも・なからんなげき・いかがせんと・をもへども・力^{およ}及ばずとてい
でにき。

かくて月ひすぐ・れことゆへなく生れにき・をのここにてありけり、七歳
のとし・やまでらにのぼせてありければ・ともだちなりけるちごども・をや
なしとわらひけり、いへにかへりて・ははにちちをたづねけり、ははのぶる
かたなくしてなくより外^{ほか}のことなし、此のちご申^{もう}す天なくしては雨ふらず地
なくしてはくさをいず、たとい母

ありとも・ちちなくばひととなるべからず、いかに父のありどころをば・か
くし給^{たま}うぞとせめしかば・母せめられて云うわちごをさなければ申^{もう}さぬなり
・ありやうはかうなり、此のちごなくなく申^{もう}すやう・さてちちのかたみはな

きかと申せしかば、これありとて・ををはしのせんその日記につき　ならびにはら

の内なる子に・ゆづれる自筆じひつの状なり、

いよいよをやこひしくてなくより外ほかの事なし、さて・いかがせんといゐしかば・これより郎なんぢ従したがあまた・ともせしかども・御かんきをかほりければ・みначりうせぬ、そののちは・いきてや又しにてや・をとづる人なしと・かたりければ・ふしころび・なきて・いさむるをも・もちぬざりけり。

はいわく・をのをやまでらにのぼする事は・をやのけうやうのためなり、仏に花をもまいらせよ・経をも一卷いっけんよみて孝養けうようとすべしと申せしかば・いそぎ寺にのぼりて・いえへかへる心なし、昼夜ほけきに法華経ようめをよみしかば・よみわたりけるのみならず・そらに・をばへてありけり、さて十二のとし出家しゅっけをせずして・かみをつつみ・とかくしてつくしをにげいでて・かまくらと申すところへたづねいりぬ。

はちまん おんまえ
八幡の御前にまいりて・ふしをがみ申しけるは・八幡大菩薩は日本第十六
ほんち りょうぜんじょうど ほけきょう
の王・本地は靈山浄土に法華經をとかせ給いし教主釈尊なり、衆生のね
がいをみて給わんがために神とあらわれさせ給う、今わがねがいみてさせ給え
たま たま たま たま

、をやは生きて候か・しにて候かと申して・いぬの時より法華經をはじめて
・とらの時まで・よみければ・なにとなき・をさなきこへはうでんに・ひ
びきわたり・こころすごかりければ・まいりてありける人人も・かへらん事
をわすれにき、皆人いちのやうに・あつまりてみければ・をさなき人にて法師
ともをばえず・をうなにてもなかりけり。

をりしも・きやうのにゐどの御さんけいありけり、人めをしのばせ給いて
まいり給いたりけれども御經のたうとき事つねにも・すぐれたりければはつ
るまで御聴聞ありけりさてかへらせ給いて・おはしけるがあまりなごりをし
さに人をつけてをきて大將殿へかかる事ありと申させ給いければめして持仏
堂にして御經よませまいらせ給いけり。

さて次の日又御聴聞ありければ西のみかど人さわぎけり、いかなる事ぞと
ききしかば・今日はめしうどの・くびきらると・ののしりけり、あわれ・

わがをやは・いままで有^あるべしとは・をもわねども・さすが人のくびをきらると申せば我が身のなげきとをもひて・なみだぐみたりけり、大将殿あやしと・ごらんじて・わちごはいかなるも

のぞ・ありのままに申せとありしかば・上くだんの事・――に申しけり、をさふらひにありける大名・小名・みすの内みな・そでをしほりけり、大将殿・かぢわらをめして・をほせありけるは・大はしの太郎という・めしうど・まいらせよとありしかば・只^{ただ}今くびきらんとて・ゆいのはまへ・つかわし候いぬ、いまはきりてや候らんと申せしかば・このちご御まへなりけれども・ふしころびなきけり、を・をせのありけるは・かぢわらわれと・はしりて・いまだ切らずばぐしてまいれとありしかば・いそぎいそぎゆいのはまへはせゆく、いまだいたらぬに・よばわりければすでに頸切らんとて刀をぬきたりけるときなりけり。

さてかじわらを・をはしの太郎をなわつけながらぐしてまいりて・をを
はにひきすへたりければ・大将殿こ

のちごに・とらせよとありしかば・ちごはしりをりて・なわをときけり、大はしの太郎は・わが子ともしらず・いかなる事ゆへに・たすかるともしらざりけり、さて大將殿又めして・このちごに・やうやうの御ふせたびて・ををはしの太郎をたぶのみならず、本領をも安堵ありけり。

大將殿をほせありけるは法華經の御事は昔よりさる事とわききつたへたれども・丸は身にあたりて二つのゆへあり、一には故親父の御くびを大上入道に切られてあさましとも・いうばかりなかりしに、いかなる神・仏にか申すべきと・おもいしに走湯山の妙法尼より法華經をよみつたへ千部と申せし時、たかをのもんがく房をやのくび

をもて来りて・みせたりし上・かたきを打つのみならず・日本国の武士の大將を給いてあり、これひとへに法華經の御利生なり、二つには・このちごが・をやをたすけぬる事不思議なり、大橋の太郎というやつは頼朝きくわいな

りとをもつたとい勅宣なりとも・かへし申して・くびをきりてん、あまりの
にくさにこそ十二年まで・土のろくに

は入れてありつるに・かかる不思議あり、されば法華經と申す事はありがた
き事なり、頼朝は武士の大將にて多くのつみを・つもりてあれども法華經を
信じまいらせて候へば・さりともと・こそをもへと・なみだぐみ給いけり。

おんこころざし

今の御心ざしみ候へば故なんでうどのは・ただ子なれば・いとをしとわ・
をぼしめしけるらめども・かく法華經をもて我がけうやうをすべしとは・よ
もをぼしたらじ、たとひつみありて・いかなるところに・おはすとも・この
御けうやうの心ざしをば・えんまほうわう・ぼんでん・たひしやく・までも
・しろしめしぬらん、釈迦仏・法華經もいかでか・すてさせ給うべき、かの
ちこのちちのなわを・ときしと・この御心ざし・かれにたがわず、これはな

みだをもちて・かきて候なり。

又むくりのおこれるよし・これにはいまだうけ給たまわらず、これを申せば日蓮にちれん
房はむくり国のわたるといへば・よろこぶと申もつす・これゆわれなき事なり、
かかる事あるべしと申せしかば・あだがたきと人ごとにせめしが・経文きょうもんかぎ
り

あれば来るなり・いかにも・かなうまじき事なり、失^{とが}もなくして国を
たすけんと申せし者を用い^{もち}こそあらざらめ、又法華經の第五の巻をもつて日蓮^{にちれん}
がおもてをうちしなり、梵天^{ぼんでん}・帝釈^{たいしやく}・是^{これ}を御覽ありき、鎌倉^{かまくら}の八幡大菩薩も
見させ給^{たま}いき、いかにも今は叶^{かな}うまじき世にて候へば・かかる山中にも入り
ぬるなり、各各も不便^{ふびん}とは思へ

ども助けがたくやあらんずらん、よるひる法華經に申し候なり、御信用の上^{ごしんよう}
にも力もをします申^{もう}させ給^{たま}え、あえてこれよりの心ざしのゆわきにはあらず、
各各の御信心^{しんじん}のあつくうすきにて候べし、たいしは日本国^{にほんこく}のよき人人^{ひとびと}は一定^{きようきようきんげん}
いけどりにぞなり候^{そうら}はんずらん、あらあさましや・あさましや、恐^{きよう}恐^{きよう}謹言^{きんげん}。

後三月二十四日

にちれんかおう
日蓮花押

南条殿御返事
ごへんじ

三八三 九郎太郎殿御返事ごへんじ

建治二年九月 五十五歳御

作 1535p

いゑの芋一駄・送り給ひ候、こんろん山と申す山には玉のみ有りて石なし、
石ともしければ玉をもつて石をかう、はうれいひんと申す浦には木草なし・
いをもつて薪たきぎをかう、鼻に病ある者はせんだん香・用にあらず、眼なき者
は明なる鏡なにかせん。

此の身延の沢と申す処ところは甲斐国かいのくに・波木井の郷の内の深山みやまなり、西には七面
のかれと申す・たけあり・東は天子てんしのたけ・南は鷹取たかとりのたけ・北は身延のた
け・四山の中に深き谷あり・はこのそこのごとし、峯にははこさの音こえか
まびすし、谷にはたいかいの石多し。

然れどもするがのいものやうに候石は一も候はず、いものめづらしき事しかく

らき夜のもしびにもすぎ・かはけ

る時の水にもすぎて候ひき、いかに・めづらしからずとは・あそばされて候
ぞ、されば其には多く候か・あらこひしあらこひし、法華經・釈迦仏にゆづ
りまいらせ候いぬ、定めて仏は御志いじむねをおさめ給うなれば御悦よろこび候らん、
りようぜんじようど
靈山淨土へまひらせ給たまいたらん時・御尋たずねあるべし、恐恐謹言。
きようきようきんげん

建治二年丙子九月十五日
ひのえね

日蓮花押
にちれんかおう

九郎太郎殿御返事
ごへんじ

三八四 本尊供養御書
ほんぞん くよう ごしよ

建治二年十二月 五十五歳御作

与南条平七郎 1536p

法華經御本尊御供養の御僧膳料の米一駄・蹲鴟いへのいも一駄・送り給ひ候い畢おわん
ほけきようごほんぞん くよう
ぬ、法華經の文字は六万九千三百八十四字・一一の文字は我等が目には黒き
ほけきよう もんじ
文字と見え候へども仏の御眼には一一に皆御仏なり、譬たとえば金粟王と申せし
もんじ

こくおう

国王は沙を金となし・釈摩男と申せし人は石を珠と成し給ふ、玉泉に入りぬる木は瑠璃と成る・大海に入りぬる

みなしおばゆ しゅみせん

水は皆鹹し、須弥山に近づく鳥は金色となるなり、阿伽陀薬は毒を薬となす、

ほけきよう

ふしぎ

かくのごと

ほんぶ

たま

かぶら

うずら

法華經の不思議も又是くの如し凡夫を仏に成し給ふ、蕪は鶉となり・山の

ほけきよう

ふしぎ

かくのごと

ほんぶ

たま

かぶら

うずら

芋はうなぎとなる・世間の不思議以て是くの如し。

いか

ほけきよう

おんちから

さい

たいかい

たいかい

たいかい

たいかい

水・身を去

何に況や法華經の御力をや、犀の角を身に帶すれば大海に入るに水・身を去

事五尺、

せんた

もう

香を身にぬれば

たいか

大火に入るに

焼くこと

無し、

法華經

持ちまいらせぬれば

たも

はちかんじごく

八寒地獄の水にもぬれず

八熱地獄の大火にも焼けず、

法華經の第七に云く「

火も焼くこと

能わず水も漂すこと

能わず」等云云、事

多しと申せども

年せまり

御使

急ぎ候へば

筆を留候い

畢んぬ。

おわ

事

法華經の第七に云く「

火も焼くこと

能わず水も漂すこと

能わず」等云云、事

多しと申せども

年せまり

御使

急ぎ候へば

筆を留候い

畢んぬ。

おわ

事

多しと申せども

年せまり

御使

急ぎ候へば

筆を留候い

畢んぬ。

おわ

事

多しと申せども

年せまり

御使

急ぎ候へば

筆を留候い

畢んぬ。

おわ

事

多しと申せども

年せまり

御使

急ぎ候へば

筆を留候い

畢んぬ。

おわ

事

多しと申せども

年せまり

御使

急ぎ候へば

筆を留候い

畢んぬ。

おわ

事

多しと申せども

年せまり

御使

急ぎ候へば

筆を留候い

畢んぬ。

おわ

事

多しと申せども

年せまり

御使

急ぎ候へば

南条平七郎殿御返事

建治二年丙子十二月 日

日蓮花押

三八五

上野殿御返事うえのとのごへんじ

建治三年五月 五十六歳御

作 1537p

五月十四日にいものかしら一駄・わざとおくりたびて候、とうじ当時のいもは人のいとまと申しもつ珠のごとしくすりのごとし、さてはおほせつかはされて候事うけ給たまわり候いぬ。

尹吉甫と申せし人は・ただ一人子あり・伯奇はくきと申す、もつをやも賢なり・子もかしこし・いかなる人かこの中をば申しもつたがふべきと・おもひしかども・継母けいぼよりより・よりうたへしに用いもちざりしほどに・継母けいぼすねんが間・やうやうのたばかりを・なせし中に、蜂と申すもつむしを我がふところに入れて・いそぎいそぎ伯奇はくきにとらせて・しかも父にみせ・われをけそうすると申しもつなして

・うしなはんとせしなり。

びんばさら王と申せし王は賢王けんおうなる上仏の御だんなの中に閻浮第一えんぶだいなり、

しかもこの王は摩竭提国まかたこくの王なり、仏は又此の国にして法華經ほけきょうを・とかんと

おぼししに・王と仏と一同なれば一定法華經ほけきょうとかれなんとみへて候しに、

提婆達多だいばだつたと申せし人・いかんがして此の事をやぶらんと・おもひしに・すべ

て・たよりなかりしかば・とかうはかり

しほどに・頻婆沙羅王びんばしゃらの太子阿闍世王たいしあじゃせをとしごとくかくかたらひて・やうや

く心をと・をやと子とのなかを申したもうがへて・阿闍世王あじゃせをすかし父の

頻婆沙羅王びんばしゃらをころさせ・阿闍世王あじゃせと心を一にし提婆だいばと阿闍世王あじゃせと一味いちみとなり

しかば・五天竺てんじくの外道げどう・悪人あくにん・雲かすみのごとくあつまり・国をたび・たか

らをほどこし・心をやわらげすかししかば・一

国の王すでに仏の大怨敵おんてきとなる、欲界よっかい・第六天だいろくてんの魔王まおう・無量の眷属けんぞくを具足ぐそくし

てうち下り、まかだこく摩竭提国の提婆・あじやせ阿闍世・だいじん六大臣等の身に入りかはりしかば・
形は人なれども力は第六天だいろくてんの力なり、大風たいふうの草木そうもくをなびかすよりも・大風たいふうの
たいかい大海の波をたつるよりも・大地震だいじしんの大地だいちをうごかすよりも・大火だいかの連宅をや
くよりも・さはがしくをぢわななきし事

なり。

さればはるり王と申せし王は阿闍世王あじゃせにかたらはれ釈迦仏しやかぶつの御身おんみしたしき

にんずう

人数百人切りころす、阿闍世王あじゃせは醉象を放ちて弟子でしを無量無辺むりようむへんふみころさせ

つ、或あるは道に兵士をすへ、或あるは井に糞を入れ、或あるは女人にょにんをかたらひて、そ

ら事いひつけて仏弟子ぶつでしをころす、舍利弗しゃりほつ・目連もくれんが事にあひ・かるだいが馬の

くそにうづまれし、仏はせめられて一夏いちげ

九十日・馬のむぎをまいりしこれなり、世間せけんの人のおもはく・悪人あくにんには仏の

おんちから

御力ごりきもかなはざりけるにやと思ひて信じたりし人人ひとびとも音をのみて・もの申さもう

まなこ

ず眼まなこをとちてものを・みる事なし、ただ舌をふり手をかきし計りばかなり、

けつく

結句けつくは提婆達多だいばだつた・釈迦如来しやかによらいの養母・蓮華比丘尼れんげびくにを打ちころし・仏の御身おんみより

血を出せし上・誰の人か・かたうどになるべき、かくやうやうになりての上

ほけきよう

・いかがしたりけん法華経ほけきようをとかせ給いぬ、此この法華経ほけきように云く、而しかも此の経

によらい

げんざい

なおおんしつ

めつど

は如来の現在にすら猶怨嫉多し況や滅度の後をや」と云云、文の心は我が現在いましして候だにも此の經の御かたきかくのごとし、いかにいわうや末代まつだいに法華經ほけきやう

を一字一点もとき信ぜん人をやと説かれて候なり、此れをもつておもひ候へ

ほけきやう

たまひ

ば仏・法華經をとかせ給いて今にいたるまでは二千二百二十余年になり候へ

ほけきやう

どもいまだ法華經を仏のごと

くよみたる人は候はぬか、大難だいなんをもちてこそ・法華經ほけきやうしりたる人とは申すべ

ほけきやう

もう

てんだいだいし

でんぎやうだいし

ほけきやう

ぎやうじや

とほ

とほ

とほ

とほ

とほ

とほ

きに、天台大師・伝教大師こそ法華經の行者とは・みへて候しかども在世ざいせ

だいなん

なんざん

ほくひち

なんと

ななだいじ

なん

こくしゆ

いまだ

国主

ご

ご

ご

のごとくの大難なし、ただ南三・北七・南都・七大寺の小難なり、いまだ国主

ばんみん

にぎらず

一

国

悪口

をはかず、

滅後

に

法華經

を

信ぜん

人

は

在世の大難よりもすぐべく候なるに同じほどの難だにも来らず

ざいせ

だいなん

に

同じ

ほどの

難

だ

に

来

ら

ず

を

信

ぜ

ん人は在世の大難よりもすぐべく候なるに同じほどの難だにも来らず

いか

に

況

や

すぐ

れた

る

大難

多難

を

や。

何

に

況

や

す

ぐ

れたる大難多難をや。

たいふう

竜

ぎん

ず

れば

雲

を

こ

る

野

兎

の

う

そぶけば大風ふく・竜ぎんずれば雲をこる・野兎のうそぶき驢馬ろのい

はうるに・風ふかず雲をこる事なし、愚者ぐしやが法華經ほけきようをよみ賢者けんじやが義だんを談ずる
時は国もさわかず事もざいせをこらず、聖人しょうにん出現しゅつげんして仏のごとく法華經ほけきようを談ぜん
時・一国もさわぎ在世ざいせにすぎたる大難だいなんをこるべしとみえて候、今日蓮いまにちれんは賢人けんじん
にもあらず・まして聖人しょうにんは・おもひも

よらず天下第一てんかだいいちの僻人びやくにんにて候が・但經文計りにはあひて候やうなれば大難だいにん

来り候へば父母ふぼのいきかへらせ給たまいて候よりもにくきものことにあふより

も・うれしく候なり、愚者ぐしゃにて而も仏しかに聖人しょうにんとおもはれまいらせて候はん事そうら

こそ・うれしき事にて候へ、智者ちしやたる上二百五十戒かたくたもちて万民ばんみんには

諸天しよてんの帝たい釈しやくをつやまふよりも・う

やまはれて・釈迦しゃか仏ぶつ・法華經ほけきように不思議ふしぎなり提婆だいばがごとしと・おもはれまいら

せなば・人目はよきやうなれども後生ごしやうはおそろし・おそろし。

さるにては殿ほけきようは法華經ほけきようの行者ぎやうじやにさせ給たまへりと・うけ給たまはれば・もつての

ほかに人のしたしきも・うときも日蓮房にちれんを信じては・よもまどいなん・上の

御氣色みけしきもあしかりなんと・かたうどなるやうにて御けうくむ候なれば・賢人けんじん

ま

でも人のたばかりは・おそろしき事なれば・一定法華經ほけきようすて給たまいなん、なか

なかな色みへでありせば・よかりなん、大魔のつきたる者どもは一人をけうく
んしをとしつればそれをひつかけにして多くの人をせめをとすなり。

にちれん

でし

もう

日蓮が弟子にせう房と申し・のと房といゐ・なごえの尼なんど申せし物ど

もは・よくふかく・心をくびやうに・愚癡ぐちにして・而も智者しかとなのりし・や

つばらなりしかば・事のをこりし時・たよりをえて・おほくの人を・おとせ

しなり、殿もせめをとされさせ給うたまならば・するがにせうせう信ずるやうな

る者も・又信ぜんと・おもふらん人人も皆みな

ほけきよう

法華經をすつべし、さればこの甲斐かいの国にも少少信ぜんと申す人々候へども

・おぼろげならでは入れまいらせ候はぬにて候、なかなかしき人の信ずるや

うにて・なめりて候へば人の信心しんじんをも・やぶりて候なり。

ただをかせ給へ・梵天ぼんてん・帝釈たいしゃく等の御計として、

たまた

にほんこく

いちじ

日本国・一時に信ずる事あ

るべし。爾時そのとき・我も本より信じたり信じたりと申す人こそおほくをはせずら

んとおぼえ候。御信用ごしんようあつくをはするならば・人ためにあらず我が故父の御
ため・人は我がをやの後世ごしやうには・かはるべからず・子なれば我こそ故をやの
後世ごしやうをばとぶらふべけれ、郷一郷・知るならば半郷は父のため半郷は妻子さいし・
眷属けんぞくをやしなふべし、我が命は事出いできたらば上に・まいらせ候べしと・ひ
とへ

におもひきりて何事なにことにつけても・言をやわらげて法華經ほけきょうの信を・うすくなさんずる・やうを・たばかり人出来しゅつたいせば我が信心しんじんを・こころむるかとおぼして各各これを御けうくんあるは・うれしき事なり、ただし御身おんみのけうくんせさせ給たまへ、上の御信用ごしんようなき事は・これにもしりて候を上をもつて・おどさせ給たまうこそかしく候へ、参りてけうくん申もうさんと・おもひ候つるに・うわてうたれまいらせて候、閻魔王えんまおうに我が身と・いとをしとおぼす御めと・子とを・ひつぱられん時は・時光に手をやすらせ給たまい候そうらはんずらんと・にくげに・うちいひて・おはすべし。

にいた殿の事まことにてや候らん、をきつの事きこへて候、殿もびんき候はば其その義にて候べし、かまへておほきならん人申もうしいだしたるらんはあはれ法華經ほけきょうのよきかたきよ、優曇華うどんげか盲龜うきぎの浮木うきぎかと・おぼしめして・したたかに御返事ごへんじあるべし。

上野殿御返事うえのとのごへんじ

三八六

南条殿御返事ごへんじ

1541p

白麦一俵・小白麦一俵・河のり五でふ・送り給び了おわぬ。

仏おんでしの御弟子あなりつそんじやに阿那律尊者と申せし人は・をさなくしての御名みなをば如意によいと

申もうす、如意によいと申もうすは心のおもひのたからをふらししゆへなり、このよしを仏

にとひまいらせ給たまいしかば・昔うえたるよに縁覚えんかくと申もうす聖人しやうにんをひゑのはんを

もつて供養くやうしまいらせしゆへと答えさせ給たまう。

迦葉尊者かしょうそんじやと申せし人は仏についても閻浮提第一えんぶだい だいいちの僧なり、俗にてをはせし

時ちは長者ちやうじにて・からを六十そのくらに金を百四十こくづつ入れさせ給たまう、そ

れより外ほかのたから申もうすばかりなし、この人のせんじやうの御事おんことを仏にと

ひまいらせさせ給たまいしかば・むかしうえたるよにむぎのはんを一ぱひ供養くやうし

たりしゆへに・利天とうりてんに干反生れて今釈迦仏しゃかぶつに値あいまいらせ僧の中の第一だいいちと

ならせ給たまい法華經ほけきょうにて光明こうみょう如来にょらいと名をさづけられさせ給たまうと天台大師てんだいだいし・文句もんくの第一だいいちにしるされて候。

かれをもつて此これをあんずるに迦葉尊者かしようそんじやの麦のはんは・いみじくて光明こうみょうによらいい如来にょらいとならせ給たまう、今のだんなの白麦はいやしくて仏にならず候べきか、在世ざいせ

の月は今も月・在世ざいせの花は今も花・むかしの功德くどくは今の功德くどくなり、その上かみいちにん一人より下万民ばんみんまでに・にくまれて山中にうえしにゆべき法華經ほけきょうの行者ぎやうじや

り、これをふびんと・をぼして山河さんが

をこえわたり・をりくたびて候・御心おんこころざしは麦にはあらず金こがねなり・金こがねには

あらず法華經ほけきょうの文字もんじなり、我等われらが眼まなこにはむぎなり・十らせつには此のむぎを

ば仏のたねとこそ御らん候らめ、阿那律あなりつがひ糸のはんはへんじてうさぎとな
る、

うさぎ・へんじて死人しにんとなる・死人しにんへんじて金こがねとなる・指をぬきてうりしか

ば又いできたりぬ、王のせめのありし時は死人^{しにん}となる、かくのごとく・つき
ずして九十一劫^{いっこう}なり、釈まなんと申せし人の石をとりしかば金^{こがね}となりき、

金ぞく王は・いさごを金となし給いき。

今のむぎは法華經のもんじなり、又は女人の御ためには・かがみとなり・

身のかざりとなるべし、男のためには・よろひとなり・かぶとなるべし、

しゅごしん

守護神となりて弓箭の第一の名をとるべし、南無妙法蓮華經・南無

みょうほうれんげきょう

きょうきょうきんげん

妙法蓮華經、恐恐謹言。

このよの中は・いみじかりし時は何事があるべきと見えしかども・当時

はことにあぶなげに・みえ候ぞ、いかなる事ありともなげかせ給うべか

らず、ふつと・おもひきりてそりやうなんども・たがふ事あらば・いよ

いよ悦びとこそおもひて・うちうそぶきて・これへわたらせ給へ、所地

しらぬ人もあまりにすぎ候ぞ、当時つくしへ・むかひて・なげく人人は

・いかばかりとか・おぼす、これは皆日蓮を・かみのあなづらせ給いし

ゆへなり。

七月二日

日蓮にちれん

花押かおう

南条殿御返事ごへんじ

三八七

庵室修復書あんしつ

建治三年 五十六歳御作

1

542p

去文ぶんえい永十一年六月十七日に・この山のなかに・きをうちきりて・かりそめ

にあじちをつくりて候いしが・やうやく四年がほど・はしらくちかきかべを

ち候へども・なをす事なくて・よるひを・とぼさねども月のひかりにて

聖教せいぎょうをよみまいらせ・われと御経をまきまいらせ候はねども・風をのづか

ら・ふきかへし・まいらせ候いしが、今年は十二

のはしらしほう四方にかふべをなげ・四方しほうのかべは・一そにたうれぬ、うだいたも

ちがたければ・月はすめ雨はとどまれとはげみ候いつるほどに・人ぶなくして・がくしやうどもをせめ・食なくして・ゆきをもちて命をたすけて候ところ・さきに・うへのどのよりいも二駄これ一だは・たまにもすぎ。

三八八

大白牛車書だいびやくこしゃ

建治三年十二月十七日 五十六歳御作

与南条七郎次郎 1543p

そ 夫れ法華經第二の卷に云く、此の宝乘に乗り直ちに道場に至る」と云云、

にちれん けんちよう

日蓮は建長五年四月二十八日初めて此の大白牛車の一乘法華の相伝を申し

顯はせり、而るに諸宗の人師等・雲霞の如くよせ来り候、中にも真言・浄土

ぜんしゅう

・禅宗等・蜂の如く起りせめたたかふ、日蓮大白牛車の牛の角最第一なりと

もう

申してたたかふ、両の角は本・迹二門

こと にじようさぶつ くおんじつじようこれ こうほうだいし ほつけさいだいいち

の如く二乗作仏・久遠実成是なり、すでに弘法大師は法華最第一の角を最第

いちねんさんぜん

三となをし・一念三千・久遠実成・即身成仏は法華に限れり・是をも真言

の經にありとなをせり、かかる謗法の族を責めんとするに返つて 弥怨をな

し候、たと譬えは角を・なをさんとて牛をころしたるが如ごとくなりぬべく候ひしか
ども・いかでさは候べき。

そもそも

もう

みょうほうれんげきよう

さんがい

抑此の車と申すは本・迹二門の輪を妙法蓮華經の牛にかけ、三界の火宅

しょうじ

しょうじ

しんじん

を生しょうじ死しょうじ・生死とぐるり・ぐるりとまはり候ところの車なり、ただ信心しんじんのくさ

しんぎ

たまい

りようぜんじようど

たま

しんのう

びに志しのあぶらをささせ給たまいて靈山淨土へまいり給たまうべし、又心王しんのうは牛

ごと

しょうじ

ごと

でんぎようだいしいわ

しょうじ

いっしん

みょうゆう

の如ごとし・生死しょうじは両の輪の如ごとし、伝でん教大師ぎようだいし云く「生死しょうじの二法にぽうは一心いっしんの妙用みょうゆう・

うむ

にどう

ほんかく

てんだいいわ

ただこ

ないし

こ

有無うむの二道にどうは本覺ほんかくの真徳しんとくなり」云云、天台てんだい云く「十如じゅうにょは只是ただこれ乃至ないし今境こんきやうは是これ

よくよく

たま

なむみょうほうれんげきよう

なむみょうほうれんげきよう

体」と云云、此の文釈ぶんしゃく能案のうあんじ給たまうべし、南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經。

十二月十七日

日蓮にちれん

花押かおう

三八九

上野殿御返事

建治四年二月二十五日

五十七歳御

作 与南条七郎次郎 1544p

蹲いへのいも鴟がっし・くしがき・焼米・栗・たかなな・すづつ給び候あわい了んぬ。

月氏あそかだいおうに阿育大王もうと申す王をはしき、一閻浮提えんぶだい四分の一を・たなごころにに

ぎり・竜王りゅうおうをしたがへて雨を心にまかせ・鬼神きじんをめしつかひ給たまいき、始は

悪王あくおうなりしかども後には仏法ぶつぽうに歸し・六万人ぼんにんの僧を日くよう日に供養し・八万四千

の石の塔をたて給たまう、此の大王だいおうの過去かこをたづねれば仏の在世ざいせに徳勝童子とくしょうどうじ・無

勝童子どうじとて二人のをさなき人あり、土

の餅を仏くように供養たまし給いて一百年の内に大王だいおうと生れたり、仏はいみじしといへ

ども法華經ほけきようにたいしまいらせ候へば・螢火ほたるびと日月にちがつとの勝劣しょうれつ・天と地との高下こうげ

なり、仏くようを供養して・かかる功德くどくあり・いわうや法華經ほけきようをや、土のもちゐ

を・まいらせて・かかる不思議ありいわうやすずのくだ物をや、かれはけ
ちならず・いまはうへたる国なり、此をもつて・をもふに釈迦仏・多宝仏・
十羅刹女いかでかまほらせ給はざるべき。

そもそも

ほけきよう

ある

ある

抑今の時・法華經を信ずる人あり・或は火のごとく信ずる人もあり・或
は水のごとく信ずる人もあり、聴聞する時は・もへたつばかりをもへども・
とをざかりぬれば・すつる心あり、水のごとくと申すは・いつも・たいせず
信ずるなり、此れはいかなる時も・つねは・たいせずとわせ給えば水のごと
く信ぜさせ給へるかたうとし・たうとし。

たま

こ

ちようもん

もう

たま

まことやらむ・いえの内に・わづらひの候なるは・よも鬼神のそゐには候
はじ、十らせち女の信心のぶんざいを御心みぞ候らむ、まことの鬼神ならば
法華經の行者をなやまして・かうべをわらんとをもふ鬼神の候べきか、又
釈迦仏・法華經の御そら事の候べきかと・ふかくをばしめし候へ、

ほけきよう

ぎようじや

きじん

きじん

しゃかぶつ

ほけきよう

きようきよう

恐恐

謹言。
きんげん

二月廿五日

花押
かおう

御返事
ごへんじ

日蓮
にちれん

三九〇

上野殿御返事 うえのとのごへんじ

弘安元年 こうあんがねん

四月一日

五十七歳御作

与南条七郎次郎

1545p

白米一斗・いも一駄・こんにやく五枚・わざと送り給ひ候い畢おわぬ、なによりも石河の兵衛入道にゅうどう殿のひめ御前ごぜんの度度御ふみをつかはしたりしが、三月の十四五やげにて候しやらむ御ふみありき、この世の中をみ候に病なき人も・こねんななどをすぐべしともみへ候はぬ上・もとより病ものにて候が・すでにきうになりて候さいごの御ふみなりと・かかれて候いしが、されば・つゐに・はかなくならせ給たまいぬるか。

りんじゅう

なむあみだぶつもう

臨終に南無阿弥陀仏と申しあはせて候人は・仏の金言きんげんなれば一定の往生おうじょう

とこそ人も我も存じ候へ、しかれども・いかなる事にてや候いけん、仏のく

ひかへさせ給いて未顕眞実・正直捨方便と・とかせ給いて候が・あさましく
候ぞ、此れを日蓮が申し候へばそら事うわのそらなりと日本国にはいかられ
候、此れのみならず仏の小乗經には十方
に仏なし一切衆生に仏性なしと・とかれて候へども・大乘經には十方に
仏します一切衆生に仏性ありと・とかれて候へば・たれか小乗經を
用い候べき皆大乘經をこそ信じ候へ、此れのみならず・ふしぎのちがひめ
ども候ぞ
かし、法華經は釈迦仏・已今当の經經を皆くひかえしうちやぶりて・此の
經のみ眞実なりと・とかせ給いて候いしかば御弟子等用ゆる事なし、爾の時
・多宝仏・証明をくわへ十方の諸仏・舌を梵天につけ給いき、さて多宝仏
はとびらをたて十方の諸仏は本土に・かへらせ給いて後は・いかなる經經
ありて法華經を釈迦仏やぶらせ給うとも・他人

わゑになりて・やぶりがたし、しかれば法華經ほけきよう已後の經經きようぎよう・普賢經ふげん・涅槃經ねはんぎよう
等には法華經ほけきようをば・ほむる事はあれどもそしる事なし、而しかるを真言宗しんこんしゅうの
善無畏等ぜんむい・禪宗ぜんしゅうの祖師等そし・此れをやぶれり、日本国にほんこく・皆此みなの事を信じぬ、例
せば將門さだとう・貞任さだとうなどに・かたらはれし人人ひとびとのごとし、日本国にほんこくすでに釈迦しゃか・
多宝たほう・十方じゅうぽうの仏の大怨敵おんてきとなりて数年になり

候へば・やうやく・やぶれゆくほどに・又かう申す者を御あだみあり、わざはひにわざはひのならべるゆへに・此の国土こくどすでに天のせめをかほり候そうらはずぞ。

此の人は先世せんぜの宿業か・いかなる事ぞ、臨終りんじゅうに南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱えさ

せ給たまひいける事は・一眼のかめの浮木うきぎの穴に入り・天より下いとの大地だいちのはり

の穴に入るがごとし、あらふしぎふしぎ、又念仏ねんぶつは無間地獄むげんじごくに墮おつると申もうす

事をば經文きやうもんに文明なるをば・しらずして皆人みな・日蓮にちれんが口より出いでたりとおも

へり、天はまつげのごとしと申もうすはこれなり、虚空こくうの遠きと・まつげの近き

と人みなみる事なきなり、此の尼御前あまごぜんは日蓮にちれんが法門ほうもんだにひが事に候はば・

よも臨終りんじゅうには正念しやうねんには住し候はじ。

又日蓮にちれんが弟子等でしの中に・なかなか法門ほうもんしりたりげに候人人ひとびとはあしく候げに

候、南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと申もうすは法華經ほけきやうの中の肝心かんじん・人の中の神のごとし、此これ

にものを・ならぶれば・きさきのならべて二王をおとことし、乃至ないしきさきの

大臣おみ已下いかになひなひとつぐがごとし、わぎはひのみなもととなり、正法しょうほう・像法ぞうほう

には此の法門ほうもんをひろめず余経よきょうを

失うしなわじがためなり、今末法まっぽうに入りぬりば余経よきょうも法華経ほけきょうもせんなし、但南無なむ

妙法蓮華経みょうほうれんげきょうなるべし、かう申し出だして候も・わたくしの計はかりにはあらず、釈迦しゃか

・多宝たほう・十方じゅうほうの諸仏しよぶつ・地涌千界じゆせんがいの御計ごけいなり、此の南無妙法蓮華経なむみょうほうれんげきょうに余事よじを

まじへば・ゆゆしきひが事ことなり、日出いでぬれば・とほしびせんなし・雨あめのふ

るに露つゆなにのせんかあるべき、嬰兒えいじに乳ちちより外ほかのものをやしなうべきか、良薬りょうやく

に又薬またくすりを加えぬる事ことなし。

此この女人にょにんは・なにとなければども自然じねんに義ぎにあたりてし・ををせるなり、た

うとし・たうとし、恐恐きょうきょう謹言きんげん。

こうあんがんねん

弘安元年四月一日

にちれん
日蓮

花押 か
おう

上野殿御返事 う
えのとのごへんじ

三九一 南条殿女房御返事

弘安元年五月二十四日 五十七歳

御作 与南条七郎次郎女房 1547p

八木二俵送り給ひ候い畢んぬ、^{おわ} 度度の御志^{たびたび こころざしもう} 申し尽し難く候。

夫れ水は寒積れば氷と為る^{つも な}・雪は年累つて水精と為る^{すいしやう な}・悪積れば地獄とな

る^{つも}・善積れば仏となる^{によにん}・女人は嫉妬かさなれば毒蛇となる^{どくじや}。法華経供養の功德^{ほけきやうくふう くどく}

かさならば・あに竜女^{りゆうにょ}があとを・つがざらん、山といひ・河といひ・馬とい

ひ・下人といひ・かたがた・かんなのところに・度度の御志^{たびたび こころざしもう} 申すばかり

なし。

御所勞の人の臨終正念^{りんじゆうしやうねん}・靈山淨土疑^{りやうぜんじやうどうたがい} なかるべし・疑^{うたがい} なかるべし。

五月二十四日

日蓮^{にちれん}

三九二

種種物御消息 しゅじゅ しゅうそく

弘安元年七月七日 こうあんがんねん

五十七歳御作

与南条平七郎

しなしなのものをくり給びて法華經にまいらせて候。
ほけきょう

そもそものにほんこく

抑日本国の人を皆やしないで候よりも父母一人やしないで候は功德まさ
みな

にほんこく

り候、日本国の皆人をころして候は七大地獄に堕ち候、父母をころせる人は
みな

むげんじこく

もう

お

第八の無間地獄と申す地獄に堕ち候、人ありて父母をころし釈迦仏の御身よ
お

むげんじこく

ふぼ

お

りちをいだして候人は父母をころすつみにては無間地獄に堕ちず、仏の御身
むげんじこく

むげんじこく

よりちをいだすつみにて無間地獄

に墮おち候なり、又十惡じゅうあく・五逆ごぎやくをつくり十方じゅうっぽう・三世さんぜの仏の身より・ちをい
せる人の法華經ほけきょうの御かたきとなれるは・十惡じゅうあく・五逆ごぎやく・十方じゅうっぽうの仏の御身おんみより
・ちをいだせるつみにては阿鼻地獄あびじごくへは入る事なし・ただ法華經ほけきょう不信ふしんの大罪たいざい
により

て無間地獄へは堕ち候なり、又十悪・五逆を日につくり・十方の諸仏を
月月にはうずる人と・十悪・五逆を日につくらず十方の諸仏を月月には
うぜず候人・此の二人は善悪はるかにかわりて候へども・法華經一字一点も
あひそむきぬれば・かならず・おなじやうに無間地獄へ入り候なり。

しかればいまの代の海人・山人・日に魚鹿等をころし・源家平家等の兵
士等のとしどしに合戦をなす人人は・父母をころさねば・よも無間地獄には
入り候はじ、便宜候はば法華經を信じて・たまたま仏になる人も候らん、今
てんだい ざす とうじ おむろ ななだいじ けんぎよう おんじようじ ちようり しんごんし なら
の天台の座主・東寺・御室・七大寺の検校・園城寺の長吏等の真言師・並び
に禅宗・念佛者・律宗等は眼前には法華經
ぜんしゅう ねんぶつ りっしゅう がんぜん ほけきよう

を信じよむにたれども・其の根本をたづぬれば弘法大師・慈覚大師・智証
だいし ぜんどう ほうねん だし みなもと
大師・善導・法然等が弟子なり、源にこりぬれば流きよからず・天くもれ
ば地くらし、父母謀反をおこせば妻子ほろぶ・山くづるれば草木たふるなら
ふ ぼ さいし そふもく

ひなれば・日本にほん六十六ヶ国の比丘・比丘尼等の善人等・皆無間地獄に墮おつべきなり、されば今の代に地獄に墮おつるものは悪人よりも善人・善人よりも僧尼そうに・僧尼よりも・持戒じかいにて智慧ちえかしき人人の阿鼻地獄へは墮おち候なり。

此の法門は当世・日本国に一人もしりて候人なし、ただ日蓮一人計りにて候へば・此れを知こつて申さずば・日蓮・無間地獄に墮おちて・うかぶ期なかるべし、譬たとへば謀反のものを・しりながら国主へ申さぬとがあり、申せばかたき雨のごとし風のごとし・むほんのものとのごとし・海賊・山賊のものとのごとし、かたがた・しのびがたき事なり、例せ

ば观音王仏の末の不軽菩薩のごとし歡喜仏のすえの覚徳比丘のごとし、天台てんだいのごとし・伝教のごとし、又かの人人よりも・かたきすぎたり、かの人人は諸人にくまれたりしかども・いまだ国主にはあだまれず、これは諸人よりは国主にあだまるる事父母のかたきよりも・すぎたるをみよ。

かかるふしぎの者をふびんとて御くやう候は・日蓮にぢれんが過去かこの父母ふぼか又先世せんぜ
の宿習しゆくじゆうか・おぼろげの事にはあらじ、某それがしの上雨ふりかぜふき人のせいす
るにこそ心させしはあらわれ候へ、此これも又かくのごとし、ただなる時だに

も・するがとかいとのかかひは山たかく河ふかく石おほくみちせばし、いわ
うやたうじは・あめはしのをたてて三月におよびかわはまさりて九十日、や
まくづれ・みちふさがり人も・かよはずかつてもたえて・いのちかうにて候
いつるに・このすずのものの給たまいて法華經ほけきょうの御うえをもつぎ釈迦しゃかぶつ仏の御いのち
をも・たすけまいらせ給たまいぬ、御功德くどくただをしはからせ給たまうべし、くはしく
は又もう又申すべし、恐きょう恐きょう。 七月七

日蓮花押
にちれんかおう

三九三

時光御返事
ごへんじ

弘安元年七月八日 五十七歳御作
こうあんがんねん

与南条時光
なんじょうときみつ

1549p

むぎのしろきこめ一駄はじかみ送り給おわび畢おわんぬ。

こくぼ^{斛飯王}んわうの太子^{たいし}あなりちと申^{もう}す人は家にましましし時は俗性^{がっし}は月氏^{がっし}国

の本主^{ほんしゅ}てんりん聖王^{せいおう}のすえ師子^{しし}けう王^{おう}のまご浄飯王^{じょうはんおう}のおひ・こくぼん王^{くわう}には

太子^{たいし}なり、天下^{てんか}にいやしからざる上・家中には一日の間・一万・二千人の人

出入^{しゅつにゅう}す、六千人はたからをかりき六千人は・かへりなす、かかる富人^{ふじん}にてお

はする上天眼^{てんげんだいいち}第一^{だいいち}の人・法華^{ほけきよう}経^{きやう}にては普明^{ふみやう}如来^{にょらい}となるべきよし仏記^{ぶつぎ}し給^{たま}う。

これは過去^{かこ}の行^{ぎやう}は・いかなる大善^{だいぜん}ぞとたづぬるに・むかしれうしあり山の

けだものを取りて・すぎけるが又ひえをつくり食とするほどに飢えたる世な

ればものもなし、ただ・ひえのはん一ありけるを・くひければ・りだ^{もう}と申^{もう}す

辟支^{ひやくし}仏^{ぶつ}の聖人^{しょうにん}来たりて云^{いわ}く我七日の間食なし汝^{なんじ}が食者^{しょくしや}えさせよとこわせ

給^{たま}いしかば・きたなき俗のこきに入れて・

けがしはじめて候^{もう}と申しければ・ただえさせよ今食せずば死ぬべしと云う、

おそれながら・まいらせつ、此の聖人^{しょうにん}まいり給^{たま}いしがただひえ一つびを・と

りのこして・れうしにかへし給たまいき、ひえへんじていのことなる、いのこ

變じて金こがねとなる金こがね變じて死人しにんとなる死人しにん變じて又金人こがねとなる指をぬいて売れば本のごとし、かくのごとく九十一劫くじゅういちじやく長者やに生れ今はあなりちと申もうして仏おんでしの御弟子なり、わづかの・ひえなれども飢えたる国に智者ちしやの御いのちをつぐゆへに・めでたきほうをう。

かしようそんじや

迦葉尊者と申せし人は仏おんでしの御弟子の中には第一だいいちにたとき人なり、此の人の

家をたづねれば摩かだい国の尼くりだ長者ちやうじやの子なり、宅にたたみ千でうあり

一でうはあつさ七尺下品げぼんのたたみは金千兩なり、からすき九百九十九・一の

からすきは金千兩、金三百四十石入れたるくら六十・かかる大長者ちやうじやなり、め

は又身は金色にして十六里をて

にほんこく

そとおりひめ

かんど

らす、日本国の衣通姫にもすぎ漢土かんどのりふじんにもこえたり、此の夫婦道心どうしん

おこ

おんでし

ほけきよう

こうみようによらい

たま

を發して仏の御弟子となれり、法華經にては光明如来こうみようによらいといはれさせ給う、此

ひとびと

かこ

ひやくしがつ

くよう

の二人の人人の過去をたづねれば麦飯を辟支仏ひやくしがつに供養せしゆへに迦葉尊者と

生れ、金のぜに一枚を仏師にあつらへて毘婆尸仏の像の御はくにひきし貧人
は此の人のめとなれり。

今日蓮は聖人いまにちれん　しょうにんにはあらざれども法華經ほけきょうに御名みなをたてり、国主こくしゅにくまりて

我が身をせく上弟子でしかよう人をも・或あるはのり・或あるはうち・或あるは所領しよりようをとり

・或あるはところをおふ、かかる国主こくしゅの内にある人人ひとびとなれば・たとひ心ざしある

らん人人ひとびともとふ事なし、此の事事ことごとふりぬ、なかにも今年は疫病えきびようと申し飢渴けかちと

申しとひくる人人ひとびともすくなし、たとひ

やまひなくとも飢えて死なん事うたがひなかるべきに麦の御とぶらい金こがねにも

すぎ珠たまにもこえたり、彼のりだがひゑは變じて金人となる、此の時光ときが麦何なんぞ

變じて法華經ほけきょうの文字もんじとならざらん、此の法華經ほけきょうの文字もんじは釈迦しゃか仏ぶつとなり給たまい時

光ひかりが故親父さうの左右さうの御羽みうとなりて靈山りょうぜん淨土じょうどへとび給たまへかけり給たまへ、かへりて

時光ときが身をおほひ・はぐくみ給たまへ、
恐恐きょうきょう謹言きんげん。

弘安元年七月八日

花押

上野殿御返事

日蓮

三九四

うえのとのごへんじ
上野殿御返事

こうあんがんねん
弘安元年九月十九日 五十七歳御作

なんじょうときみつ
与南条時光

1551p

塩一駄はじかみ送り給ひ候。

こがね

にほんこく

金多くして日本国の沙のごとくならば誰か・たからとして・はこのそこに

おさむべき、餅多くして一閭えんぶだい浮提の大地のごとくならば誰か米の恩を・おも

くせん。

今年は五月より日々に雨ふり・ことに七月より大雨だいうひまなし、このところ

は山中なる上・南は波木井・河北は早河東は富士河・西は深山みやまなれば長雨・

大雨だいう・時時・日々につづく間・山さけて谷をうづみ・石ながれて道をふせぐ

・河たけくして船わたらず、富人なくして五穀ごこくともし商人あきひとなくして人あつま

る事なし、七月なんどは・しほ一升を・

ぜに百しほ五合を麦一斗にかへ候しが今はぜんたい・しほなし、何を以てか
・かうべき、みそも・たえぬ、小児のちをしのぶがごとし。

かかるところに・このしほを一駄給びて候・御志・大地よりもあつく

虚空よりもひろし、予が言は力及ぶべからずただ法華經と釈迦仏とに・ゆづ

りまいらせ候、事多しと申せども紙上には・つくしがたし、
恐恐謹言。

弘安元年九月十九日

花押

上野殿御返事

日蓮

三九五

なんじょうときみつ

与南条時光

うえのとのごへんじ
上野殿御返事

こうあながんねん
弘安元年十月十二日 五十七歳御作

1552p

いゑのいも一駄・かうじ一こ・ぜに六百のかわり御ざのむしろ十枚給び
畢おわんぬ。

去今年は大えき此の国にをこりて人の死ぬ事たいふう大風に木のたうれ大雪に草の
おるるがごとし一人ものこるべしともみへず候いき、しかれども又今年の寒
温時にしたがひて五穀ごこくは田畠でんばたにみち草木そうもくはやさんにおひふさがりて堯ぎょうしゆん 舜の
代のごとく成劫じやうけつのはじめかとみへて候いしほどに八月九月の大雨だいうたいふう大風に日本にほん
一同不熟ふじゆくゆきてのこれる

ばんみん
万民冬をすごしがたし、
い
去ぬる寛喜・正嘉しやうかにもこえ来らん三災さんさいにも・おとら

ざるか、じかいほんぎやく自界叛逆してぞく盜賊国にじゆうまん充満し他界きそいて合戦に心をつひやす、民

の心不孝にしてふこう父母を見る事他人のたにんごとくそうに僧尼はじゃけん邪見にしてくけん狗犬とえんこう猴

のあへるがごとし、じひ慈悲なければ天も此の国をまほらずじゃけん邪見なればさんぼう三宝にも

すてられたり、又えきびよう疫病もしばらくはやみてみえしかどもきじん鬼神かへり入るかの

ゆへに北国もとうごく東国も西国も南国も一同にやみなげくよしきこへ候、かかるよ

にいかなるしゆくぜん宿善にかほけきよう法華經のぎようじや行者をやしなわせたま給う事ありがたく候ありが

たく候、もつ事事見参の時申すべし、きようきようきんげん恐恐謹言。

こうあんがんねん弘安元年後十月十二日

にちれん日蓮

かおう花押

うえのとのごへんじ上野殿御返事

三九六 九郎太郎殿御返事ごへんじ

弘安元年こうあんがねん十一月一日 五十七

歳御作 与南条九郎太郎 1553p

これにつけてもこうえのどのの事こそをもひいでられ候へ。

いも一駄・くり・やきごめ・はじかみ給ひ候いぬさてはふかき山にはいも
つくる人もなし・くりもならず・はじかみもをひず・ましてやきごめみへ候
はず、たとえくりなりたりともさるのこずへからず、いえのいもはつくる人
なし・たとえつくりたりとも・人にくみてたび候はず、いかにしてか・かか
るたかき山へは・きたり候べき。

それ山をみ候へば・たかきよりしだいにしもえくだれり、うみをみ候へば
・あそきより・しだいにふかし、代をみ候へば三十年・二十年・五年・四三

二一・次第しだいにをとろへたり、人の心もかくのごとし、これはよのすへになり候へば山には・まがれるきのみとどまり・のには・ひききくさのみをひたり、よには・かしき人はすくなく・はかなきものはをほし、牛馬ぎゅうばのちちをしらず兎羊の母をわきまえざるがごとし。

仏御入滅にゆうめつありては二千二百二十余年なり代すへになりて智人次第ちじんしだいにかくれて山のくだれるがごとく・くさのひききにいたり、念佛ねんぶつを申しかいをたもちなんどする人は・ををけれども法華經ほけきようをたのむ人すくなし、星は多けれども大海たいかいをてらさず草は多けれども大内の柱とはならず、念佛ねんぶつは多けれども仏と成る道にはあらず戒たもは持て

ども浄土じょうどへまひる種とは成らず、但南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようの七字のみこそ仏になる種には候へ、此これを申せば人はそねみて用ひざりしを故上野殿信うえのどのじ給たまいによりて仏に成らせ給たまいぬ、各各そは其の末にて此の御志ごしをとげ給たまうか、竜馬

につぎぬる・だには千里せんりをとぶ、松にかかれるつたは千尋せんじんをよづと申もうすは是
か、各各主の御心なり、つちのもちゐを仏に供養くようせし人は王となりき、法華經ほけきよう
は仏にまさらせ給たまう法なれば供養くようせさせ給たまいて、いかでか今生こんじようにも

利生りしょうにあづかり後生ごしょうにも仏にならせ給たまはざるべき、その上みひんにして・げにんなし、山河さんがわづらひあり、たとひ心ざしありともあらはしがたきに・いまいろをあらわさせ給たまうにしりぬ、をぼろげならぬ事なり、さだめて法華經ほけきょうの十羅刹じゅうらせつまほらせ給たまいぬらんと・たのもしくこそ候へ、事つくしがたし、
恐恐きょうきょう謹言きんげん。

弘安元年十一月一日
こうあんがんねん にちれん かおう

日蓮 花押
にちれん かおう

九郎太郎殿御返事
ごへんじ

三九七 上野殿御返事
うえのとのごへんじ

弘安二年一月三日 五十八歳御作
こうあん

1554p

餅九十枚・やまのいも五十本・わざと御便を以つて正月三日羊の時に駿河^{するが}

の国・富士郡上野郷より甲州は波木井の郷身延山のほらへ・おくりたびて條。

夫れ海辺には木を財^{たから}とし山中には塩を財^{たから}とす、旱魃には水を財^{たから}とし闇中^{あんちゆう}

には灯を財^{たから}とし・女人は夫を財^{たから}とし夫は女人を命^{にょにん}とし、王は民を親^{たから}としは

民は食を天とす、此の両三箇年は日本国の中に大疫起りて人半分減じて候か、

去年の七月より大なるけかちにて里市とをき無縁^{むえん}の者と山中の僧等は命存じ

しがたし、其の上日蓮は法華経誹謗の国に生れて威音王仏の末法の不輕菩薩^{ふぎようぼさつ}

の如し、將又歡喜增益仏の末の覺悟比丘^{かくこびく}の如し、王もにくみ民もあだむ

・衣もうすく食もとぼし・布衣はにしききの如し・草葉をば甘露^{かんろ}と思ふ、其の

上去年の十一月より雪つもりて山里路たえぬ、年返れども鳥の声ならでは・

をとづる人なし、友にあらずばたれか問うべきと心ばそくて過し候に

元三の内に十字九十枚・満月の如し、心中もあきらかに生死^{しやうじ}のやみもはれぬ

べし、あはれなり・あはれなり、こうへどのをこそ・いろあるをとこと人は
申せし・其^その御子なればくれないの、こきよしをつたへ給^{たま}えるか、あいよ

りもあをく・水よりもつめたき氷かなと・ありがたし・ありがたし、
恐恐きょうきょう
謹言。きんげん

正月三日

うえのとのごへんじ
上野殿御返事

三九八

うえのとのごへんじ
上野殿御返事

こうあん
弘安二年四月二十日 五十八歳御

作 1555p

そもそもにちれん
抑日蓮・種種の大難の中には竜口の頸の座と東条の難にはすぎず、

そのゆえしよなん
其の故は諸難の中には命をすつる程の大難はなきなり、
或はのりせめ・或は

ところ
処をおわれ無実を云いつけられ・或は面をうたれしなどは物のかずならず、

しきしん
されば色心の二法よりをこりてそしられたる者は日本国の中には日蓮一人な

り、ただしありとも法華經ほけきようの故ゆえに

はあらし、さてもさても・わすれざる事はせうぼうが法華經ほけきようの第五の巻を取
りて日蓮にちれんがつらをうちし事は三毒さんどくよりをこる処ところのちやうちやくなり。

天竺てんじくに嫉妬しっとの女人あり男をにくむ故ゆえに家内の物をことごとく打ちやぶり、

其その上にあまりの腹立にや・すがた・けしきかわり眼まなこは日月の光のごとくか

がやきくちは炎をはくがごとし・すがたは青鬼赤鬼のごとくにて年来男のよ

み奉たてまつる法華經ほけきようの第五の巻をとり両の足にてさむざむにふみける、其その後命つ

きて地獄じごくにをつ両の足

ばかり地獄じごくにいらす獄卒鉄杖ごくそつをもつてうてどもいらす、是は法華經ほけきようをふみし

逆縁ぎやくえんの功德くどくによる、いま日蓮にちれんをにくむ故ゆえにせうぼうが第五の巻を取りて予が

をもてを・うつ是も逆縁ぎやくえんとなるべきか、彼は天竺てんじく此れは日本にほん・かれは女人にょにんこ

れはをとこ・かれは両のあし・これは両の手・彼は嫉妬しっとの故此これは法華經ほけきようの

御故なり、されども法華經第五の巻は・をなじきなり、彼の女人のあし地獄
に入らざらん此の両の手・無間に入るべきや、ただし彼は男をに

くみて法華經をば・にくまず、此れは法華經と日蓮とを・にくむれば一身無間むげんに入るべし、經に云く「そ其の人命終みょうじゆうして阿鼻獄に入らん」と云々、手ばかり無間に入るまじとは見へず不便なり不便なり、ついには日蓮にあひて仏果ぶつがをうべきか不輕菩薩の上慢ふぎようぼさつ じようまんの四衆のごとし。

そ夫れ第五の卷は一經第一の肝心かんじんなり竜女が即身成仏あきらかなり、提婆だいば

はこころの成仏をあらはし竜女は身の成仏をあらはす、一代いちだいに分絶たる

法門ほうもんなり、さてこそ伝でん教大師は法華經の一切經に超過して勝れたる事を十すぐ

あつめ給いたる中に即身成仏化導勝とは此の事なり、此の法門ほうもんは天台宗の

最要にして即身成仏義と申して文句もんくの

義科なり真言しんこん・天台てんだいの両宗の相論なり、竜女が成仏も法華經の功力なり、

文殊師利菩薩は唯常宣說妙法華經とこそかたらせ給へ、唯常ただの二字は八字の

中の肝要なり、菩提心論の唯真言法中の唯の字と・今の唯の字と・いづれ

を本とすべきや、彼の唯の字はをそらくはあやまりなり、無量義經に云く

「四十余年未だ眞實を顕さず」、法華經に云く「世尊の法は久しくして後に要

當に眞實を説きたもうべし」、多宝仏は皆是眞實とて法華經にかぎりて

即身成仏ありとさだめ給へり、爾前經にいかように成仏ありともとけ權宗

の人人・無量にいひくるふとも・ただほろく千にうち一つなるべし、法華

折伏・破權門理とはこれなり、尤もいみじく秘奥なる法門なり。

又天台の学者・慈覺より・このかた玄・文・止の三大部の文をとか・くれ

うけんし義理をかまうとも去年のこよみ昨日の食のごとし・けうの用になら

ず、末法の始の五百年に法華經の題目をはなれて成仏ありといふ人は・仏説

なりとも用ゆべからず、何に況や人師の義をや、爰に日蓮思ふやう提婆品を

案ずるに提婆は釈迦如来の昔の師な

り、昔の師は今の弟子なり今の弟子はむかしの師なり、古今能所不二にして

ほけきよう 法華經の深意をあらわす、されば悪逆の達多には慈悲の釈迦如来師となり
ぐち りゆうによ 愚癡の竜女には智慧の文殊師となり・文殊・釈迦如来にも日蓮をとり奉るべ
にほんこく からざるか、日本国の男は提婆がごとく女は竜女にあひにたり、逆順とも
じようぶつ じす に成仏を期すべきなり是れ提婆品
こ だいば

の意なり。

次に勸持品に八十万億那由他の菩薩の異口同音の二十行の偈は日蓮一人よ

めり、誰か出でて日本国唐土天竺・三国にして仏の滅後によみたる人やある、

又我よみたりと・なるべき人なし又あるべしとも覺へず、及加刀杖の刀杖

の二字の中に・もし杖の字にあう人はあるべし刀の字に・あひたる人をきか

ず、不輕菩薩は杖 木瓦石

と見たれば杖の字に・あひぬ刀の難はきかず、天台・妙樂・伝教等は

刀杖不加と見たれば是又かけたり、日蓮は刀杖の二字ともに・あひぬ、

剩へ刀の難は前に申すがごとく東条の松原と竜口となり、一度も・あう人

なきなり日蓮は二度あひぬ、杖の難には・すでにせうばうにつらをうたれし

かども第五の巻をもつてうつ、うつ杖も第五の巻

うたるべしと云う經文も五の巻・不思議なる未来記の經文なり、されば・

せうばうに日蓮にぢれん数十人の中にしてうたれし時の心中しんちゆうには法華經ほけきようの故とは・をもへども・いまだ凡夫ぼんぷなればうたてかりける間・つえをも・うばひ・ちからあるならば・ふみをりすつべきことぞかし、然れども・つえは法華經ほけきようの五の巻にてまします。

いまをもひ・いでたる事あり、子を思ふ故ゆえにや・をやつぎの木の弓をもつて学文せざりし子にをしへたり、然る間しか・此の子うたてかりしは父にくかりしは・つぎの木の弓、されども終ついには修学増進しゅうがくして自身得脱じしんとくたつをきわめ・又人利益りやくする身となり、立ち還かえつて見れば・つぎの木をもつて我をうちし故なり、此の子そとばに此の木をつく

り父の供養くやうのためにたててむけりと見へたり、日蓮にぢれんも又かくの如ごとくあるべきか、日蓮仏果にぢれんぶつをえむに争いかでかせうばうが恩をすつべきや、何に況いかや法華經ほけきようの御恩ごおんの杖をや、かくの如ごとく思ひつづけ候へば感涙かんるいをさへがたし。

又涌出品は日蓮ゆじゅつぽん にちれんがためには・すこしよしみある品なり、其の故は上行菩薩そのゆえ じようぎようぼさつ
等の末法まつぽう しゅつげんに出現なむして南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようの五字ごじを弘ひろむべしと見へたり、しかる
に先日蓮一人出来にちれん しゅつたいす六万恒沙ろくまんじやうしやの菩薩ぼさつより・さだめて忠賞ちゆうじやうをかほるべしと思へ
ば・たのもしき事なり、とにかくほけきように法華經に身をまかせ信しんぜさせ給たまへ、殿一
人にかぎるべからず信心しんじんをすすめ

給たまいて過去かこの父母等ふぼをすくわせ給たまへ。

にちれん

日蓮生れし時より・いまに一日片時も・こころやすき事はなし、此この法華經ほけきよう

だいもく

の題目を弘ひろめんと思おもうばかりなり、相かまへて相かまへて自他じたの生死しやうじはしら

りんじゅう

ねども御臨終ごりんじゅうのきざみ生死しやうじの中間ちゆうげんに日蓮にちれんかならず・むかいにまいり候こうべし、

さんぜ

三世さんぜの諸仏しよぶつの成道じやうどうはなうしのをわり・とらのきざみの成道じやうどうなり、仏法ぶつぽう

じゅうしよ

住处きもん・鬼門まどの方に三國さんごくともにたつなり此等これらは相承そうじやうの法門ほうもんなるべし委くわくは又

もつ

申まうすべく候、恐恐きようきよう謹言きんげん。

かつへて食をねがひ渴して水をしたうがごとく恋いて人を見たきがごと

く病にくすりをしたのむがごとく、みめかたちよき人・べにしろいものを

つくるがごとく法華經ほけきようには信心しんじんをいたさせ給たまへ、さなくしては後悔こうかいある

べし、ニ云云。

こうあん

つちのとつ

弘安二年己卯卯月二十日

にちれん
日蓮

かおう
花押

うえのとのごへんじ
上野殿御返事

三九九 上野殿御返事 うえのとのごへんじ

弘安二年 こうあん 五十八歳御作

15

59p

鷺目一貫・しほ一たわら蹲いへのいも鴟一俵・はじかみ少々使者をもつて送り給ひ
おわ 畢んぬ、あつきには水を財とす・さむきには火を財とす・けかちには米を
たから 財とす、いくさには兵ひょうじょう杖を財とす・海には船を財とす・山には馬をたか
らとす・武蔵下総むさししもふさに石を財とす、此の山中にはいえのいも・海のしほを財
とし候ぞ、竹の子木の子等候へどもしほなければそのあぢわひつちのごとし、
こがね 又金と申すもの国王も財たからとし民も財たからとす、たとへば米のごとし一切衆生
のいのちなり。

ぜに又かくのごとし、漢土もんこしに銅山と申す山あり彼の山よりいでて候ぜにな

れば一文もみな三千里の海をわたりて来るものなり、万人・皆たまとおもへ
り、此れを法華經にまいらせさせ給う、釈まなんと申せし人のたな心には石
変じて珠となる金ぞく王は沙を金となせり、法華經は草木を仏となし給う
わうや心あらん人をや、法華經は焼種の二乗を仏となし給ういわうや生種
人をや、法華經は一闡提を仏となし給ういわうや信ずるものをや、事事つく
しがたく候、又又申すべし、恐恐謹言。

八月八日

にちれんかおう
日蓮花押

うえのとのこへんじ
上野殿御返事

四〇〇

上野殿御返事うえのとのごへんじ

弘安二年こうあん

五十八歳御作

1

560p

唐土もうこしに竜門もうと申すたきありたかき事十丈・水の下ることがつひやうが・や

をいをとすよりもはやし、このたきにを・をくのふなあつまりて・のぼらむ

と申すもう、ふなと申すもういをののぼりぬれば・りうとなり候、百に一・千に一・

万に一・十年二十年に一・ものぼる事なし、ある或ははやきせにかへり・ある或はは

したか・とび・ふくろうにくらわれ、ある或は十丁のたきの左右さうに漁人ども・つ

らなりゐて・ある或はあみあみをかけ・ある或はくみとり・ある或はいてとるものもあり、い

をの・りう

となる事かくのごとし。

日本国にほんこくの武士ぶしの中に源平二家と申してもう門守もんまほりの犬二足候、二家ともに王を守

りたてまつる事やまかつが八月十五夜のみねより・いづるを・あいするがごとし、でんじやうの・なんによの・あそぶをみては月と星との・ひかりをあわせたるを木の上にて・さるのあいするがごとし、かかる身にてはあれども・いかんがして我等^{われら}でんじやう

の・まじわりをなさんと・ねがいし程に平氏の中に貞盛^{さだもり}と申せし者將門を打ちてありしかども昇でんをゆるされず、其^その子正盛又かなわず其^その子忠盛が時・始めて昇でんをゆるさる、其^その後清盛^{きよもり}・重盛等でんじやうにあそぶのみならず、月をうみ日をいだくみとなりనికి、仏になるみち・これにをとるべからず、いを・をの竜門をのぼり・地下の者の・でんじやうへ・まいるがごとし。

身子^{しんし}と申せし人は仏にならむとて六十劫が間^ま・菩薩^{ぼさつ}の行をみてしかども・こらへかねて二乗^{にじよう}の道に入りనికి、大通結縁^{だいつうけちえん}の者は三千塵点劫久遠下種^{さんぜんじんてんこうくおんげしゆ}の人

の五百塵点劫生死にしづみし此等は法華經を行ぜし程に第六天の魔王・国主
等の身に入りて・とかうわづらわせしかば・たいしてすてしゆへに・そこば
くの劫に六道には・めぐりしぞかし。

かれは人の上とこそ・みしかども今は我等がみにかかれり、願くは我が弟子
等・大願ををこせ、去年去去年のやくびやうに死にし人人の・かずにも入ら
ず、又当時・蒙古のせめに・まぬかるべしともみへず、とにかくに死は一定
なり、其の時のなげきは・たうじのごとし、をなじくは・かりにも法華經の
ゆへに命をすてよ、つゆを大海にあつらへ・ちりを大地にうづむと・をもへ、
法華經の第三に云く「願くは此の功德を以て普く一切に及ぼし我等と衆生と
皆共に仏道を成ぜん」云云、恐恐謹言。

十一月六日

日蓮

花押

上野賢人殿御返事

此れはあつわらの事の・ありがたさに申す御返事な

り。

白米一だをくり給び了おわぬ。

いっさい

一切の事は時による事に候か、春は花・秋は月と申もうす事も時なり、仏も世

にいでさせ給たまいし事は法華經ほけきょうのためにて候いしかども・四十余年よんじゅうよねんはとかせ

給たまはず、其そのの故ゆえを経文きやうもんにとかれて候には説時未至故等せつじみしこと云云、なつあつわた

のこそで冬かたびらをたびて候はうれしき事なれども・ふゆのこそで・なつのかたびらには・すぎず・うへて候時のこがね・かつせる時のこれ・うはうれしき事なれども・はんと水とにはすぎず、仏に土をまいらせて候人・仏となり玉をまいらせて地獄じごくへゆくと申もうすことこれか。

にちれん にほんこく

日蓮は日本国に生れてわわくせず・ぬすみせず・かたがたのとなし、末代まつだい

の法師^{ほっし}には・とがうすき身なれども・文をこのむ王に武のすてられ・いろを
このむ人に正^{しょうじき}直物のにくまるるがごとく・念仏^{ねんぶつ}と禅^{しん}と真言^{しんごん}と律とを信ずる代
に値^あうて法華經^{ほけきよう}を・ひろむれば王臣^{おみ}・万民^{ばんみん}にくまれて・結句^{けっく}は山中に候へ
ば天いかんが計^{たま}らわせ給^{たま}うらむ、五尺のゆきふりて本よりも・かよわぬ山道
ふさがり・といくる人もなし、衣もうすくて・かんふせぎがたし・食たへて
命

すでに・をはりなんとす、かかるきざみに・いのちさまたげの御とぶらひ・
かつはよろこびかつはなけかし、一度^{ひとたび}にをもひ切つて・うへしなんと・あん
じ切つて候いつるに・わづかの・ともしびに・あぶらを入そへられたるがご
とし、あわれあわれたうとく・めでたき御心かな、釈迦^{しゃかぶつ}仏^{ぶつ}・法華經^{ほけきよう}定めて御
計^{たま}らい給^{たま}はんか、恐^{きようきようきんげん}恐^{きんげん}謹言^{きんげん}。

弘安二年十二月廿七日

日蓮^{にちれん} 花押^{かおう}

うえのとのごへんじ
上野殿御返事

うえのとのごへんじ
四〇二 上野殿御返事

1562p

十字六十枚・清酒一筒・薯蕷五十本・柑子二十・串柿一連・送り給ひ候い
あわ ほけきよう
畢んぬ、法華經の御宝前にかざり進らせ候、春の始め三日種種の物・法華經
ほうぜん ささ
の御宝前に捧げ候い畢んぬ。 あわ

花は開いて果となり月は出でて必ずみち燈は油をさせば光を増し草木は雨
ふればさかう人は善根をなせば必ずさかう、其の上元三の御志元一にも超
へ、十字の餅・満月の如し、事事又又申すべく候。

こうあん
弘安三年庚辰正月十一日

にちれん
日蓮
かおう
花押

上野殿
うえのとの

故上野殿・御忌日の僧・料米一たはら・たしかに給ひ候い畢んぬ、御仏に
供しまいらせて自我偈一卷よみまいらせ候べし。

孝養と申すは・まづ不孝を知りて孝をしるべし、不孝と申すは酉夢と云う
者父を打ちしかば天雷身をさく班婦と申せし者・母をのりしかば毒蛇来りて
のみき、阿闍世王・父をころせしかば白癩病の人となりき、波瑠璃王は親
をころせしかば河上に火出でて現身に無間にをちにき、他人をころしたるに
は・いまだかくの如く例なし。

不孝をもつて思ふに孝養の功德のおほきなる事も・しられたり、外典三千
余卷は他事なし・ただ父母の孝養ばかりなり、しかれども現世をやしなひて

後生をたすけず、父母の恩のおもき事は大海のごとし現世をやしなひ後生を
たすけざれば・一・のごとし、内典五千余卷又他事なし・ただ孝養の功德
をとけるなり、しかれども如来四十

余年の説教は孝養にたれども・その説いまだあらはれず孝が中の不孝なる
べし、目連尊者の母の餓鬼道の苦をすくひしは・わづかに人天の苦をすくひ
て・いまだ成仏のみちにはいれず、釈迦如来は御年三十の時・父浄飯王に
法を説いて第四果をえせしめ給へり、母の摩耶夫人をば御年三十八の時・
阿羅漢果をえせしめ給へり、此等は孝養

ににたれども還つて仏に不孝のとがあり、わづかに六道をば・はなれしめた
れども父母をば永不成仏の道に入れ給へり、譬へば太子を凡下の者となし王
女を匹夫に・あはせたるが如し、されば仏説いて云く「我則ち慳貪に墮せん
此の事は為て不可なり」云云、仏は父母に甘露をおしみて麦飯を与へたる人

・清酒をおしみて濁酒をのま

せたる不孝第一の人なり、波瑠璃王のごとく現身に無間・大城におち阿闍世

王の如く即身に白癩病をも・つぎぬべかりしが、四十二年と申せしに法華經

を説き給いて「是の人滅度の想を生じて涅槃に入ると雖も而も彼の土に於て

仏の智慧を求めて是の經を聞くことを得ん」と、父母の御孝養のため法華經

を説き給いしかば、宝淨世界の

多宝仏も実の孝養の仏なりと・ほめ給い・十方の諸仏もあつまりて一切諸仏

の中には孝養第一の仏なりと定め奉りき。

これをもつて案ずるに日本国の人は皆不孝の仁ぞかし、涅槃經の文に不孝

の者は大地微塵よりも多しと説き給へり、されば天の日月八万四千の星・各

いかりをなし眼をいからかして日本国をにらめ給ふ、今の陰陽師の天変・

頻りなりと奏し申す是なり、地天・日日に起りて大海の上の小船をうかべた

るが如し、今の日本国の小児は魄をうしなひ・女人は血をはく是なり。

貴^き辺^{へん}は日^に本^{ほん}国^{こく}・第^{だい}一^{いち}の孝^{こう}養^{よう}の人^{ひと}なり・梵^{ぼん}天^{てん}・帝^{たい}釈^{しやく}をり下^さりて左^さ右^うの羽^うとな
り四^し方^{ほう}の地^ち神^{しん}は足^{あし}をいただいて父^ふ母^ぼとあをぎ給^{たま}うらん、事^{こと}多^{おほ}しと・いへども
とどめ候^{あわ}い畢^きんぬ、恐^き恐^う謹^{きん}言^{げん}。

弘^{こう}安^{あん}三^{さん}年^{ねん}三^{さん}月^{げつ}八^{はち}日^{にち}

日^に蓮^{ちれん}

花^{はな} 押^{おし}

進^{しん}上^{じょう} 上^う野^え殿^{どの}御^ご返^{へん}事^じ

四^し〇^〇四^し 上^う野^え殿^{どの}御^ご返^{へん}事^じ

弘^{こう}安^{あん}三^{さん}年^{ねん}七^{しち}月^{げつ}二^に日^{にち} 五^ご十^{じゅう}九^く歳^{さい}御^ご作^{さく}

1565p

去^いぬる六^{ろく}月^{げつ}十^{じゅう}五^ご日^{にち}のけさん悦^{よろこ}び入^いつて候^{こう}、さては・かうぬし等^らが事^{こと}いまま

でかかへをかせ給^{たま}いて候事ありがたくをばへ候、ただし・ないないは法華^{ほけき}經^{よう}をあたませ給^{たま}うにては候へども・うへには・たの事によせて事かづけ・にく

まるるかのゆへに・あつわらのものに事をよせて・かしこ・ここをもせかれ
候こそ候いめれ、さればとて上に事をよせて・せかれ候はんそつらに御もちゐ候は
ずは物をばへぬ人に・ならせ給たまうべしをかせ給たまいて・あしかりぬべきやうに
て候わば・しばらく・かうぬし等をば・これへとをほせ候べしめこなんどは
それに候とも・よも御たづねは候

はじ、事のしづまるまで・それに・をかせ給たまいて候わば・よろしく候いなん
と・をばへ候。

よのなか上につけ下によ・せてなげきこそををく候へ、よにある人ひと人をば
・よになき人ひと人は・きじの・たかをみ・がきの毘沙門びしゃもんをたのしむがごとく候
へども・たかは・わしにつかまれ、びしやもんは・すらに・せめらる、その
やうに当時とうじ・日本にほん国のたのしき人ひと人は蒙古もうこ国の事をききては・ひつじの虎の
声を聞くがごとし、また筑紫つくしへおもむきて・

いとをしきめを・はなれ子をみぬは皮をはぎ肉をやぶるが・ごとくにこそ候
らめ、いわうや・かの国より・おしよせなば蛇じゃの口のかえる・はうちやうし
がまないたに・をける・こゐふなのごとくこそおもはれ候らめ、今生こんじょうはさて
をきぬ命きえなば一百三十六の地獄じごくに墮おちて無量劫むりょうこくふべし、我等われらは法華経ほけきょうを
たのみまいらせて候へば・あさきふちに魚のすむが天くもりて雨のふらんと
するを魚のよろこぶがごとし。

しばらくの苦こそ候とも・ついには・たのしかるべし、国王こくおう一人の太子たいしの
ごとし・いかでか位につかざらんと・おぼしめし候へ、きょうきょうきんげん 恐恐謹言。

弘安三年七月二日こうあん

日蓮にちれん 花押かおう

上野殿御返事うえのとのごへんじ

人にしらせずして、ひそかにをほせ候べし。

四〇五

上野殿御返事うえのとのごへんじ

1566p

女子は門をひらく男子は家をつぐ日本国にほんこくを知つても子なくは誰にか・つが
すべき、財たからを大千にみてても子なくば誰にかゆづるべき、されば外典げてんさんぜん三千余
巻には子ある人を長者ちやうじやといふ、内典ないてん五千余巻には子なき人を貧人ひんじんといふ、女
子一人・男子一人・たとへば天には日月にちがつのごとく地には東西にかたどれり、
鳥の二つのはね車の二つのわなり、さればこの男子をば日若御前ごぜんと申もうさせ
給たまへ、くはしくは又又申もうすべし。

弘安三年八月二十六日
にちれんかおう

日蓮花押

上野殿御返事
うえのとのごへんじ

四〇六

南条殿御返事ごへんじ

1566p

はくまいひとふくろいも一だ給おび了わんぬ、抑そもそも故こなんでうのせらうごらう
どの事、いままでは・ゆめかゆめか・まぼろしか・まぼろしかとうたがい
て・そらごととのみをもひて候へば・此の御ふみにも・あそばされて候、さ
ては、まことかまことかとはじめて・うたがいいできたりて候。

四〇七

上野殿御書

1567p

大海たいかいの一たいは五味のあぢわい江河こうかの一たいは一つの葉なり、大海たいかいの一たいは万

種の瓦のごとし、南無阿弥陀仏なむあみだぶつは一河の一たい・南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうは大海たいかいの一たい

・阿弥陀經あみだは小河こがの一てい・法華經ほけきょうの一乗いちじょうは大海たいかいの一てい、故五郎殿ごごろうだんの十六

年が間の罪つみは江河こうかの一てい、須臾しゅゆの間の南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうは大海たいかいの一ていのご

とし、夫それ以もつれば華はなはつばみさいて菓このみなる、をやは死にて子になわる、こ

れ次第しだいなり。

四〇八

上野殿御書

1567p

南条七郎五郎殿しきよ おんことの御死去しきよの御事おんこと、人は生れて死するならいとは智者ちしやも愚者ぐしや

も上下一じょうげ一同に知りて候へば始めてなげくべしをどろくべしとわをばへぬよし

我も存じ人にもをしへ候へども時にあたりて・ゆめか・まぼろしか・いまだ
わきまへがたく候、まして母のいかんがなげかれ候らむ、父母ふぼにも兄弟きょうだいにも
をくれはてて・いとをしきをとこ

に・すぎわかれたりしかども・子ども・あまたをはしませば心なぐさみてこ
そ・をはしつらむ、いとをしき・てここ・しかもをのここみめかたちも人に
すぐれ心も・かいがいしくみへしかば・よその人人ひとびとも・すずしくこそみ候い
しに・あやなく・つぼめる花の風にしばみ・満つる月の・にわかとがに失たるが
ごとくこそをばすらめ、まこととも・をばへ候はねば・かきつくるそらも・
をばへ候はず、又又申もうすべし、恐恐きょうきょう謹言。

弘安三年九月六日

日蓮にちれん

花押かおう

上野殿御返事
うえのとのごへんじ

追申、此の六月十五日に見奉り候いしに・あはれ肝ある者かな男や男やと見候いしに・又見候はざらん事こそかなしくは候へ、さは候へども釈迦しゃかぶつ仏ほけきよう・法華經に身を入れて候いしかば臨終りんじゆう・目出たく候いけり、心は父君と一所に靈山淨土に参りて手を取り頭こづえを合せてこそ悦よろこばれ候らめ、あはれなり・あはれなり。

四〇九

上野殿母御前御返事

1568p

南条故七郎五郎殿の四十九日御菩提ぼだいのために送り給う物たまの日記につぎの事、鷲目がもく両ゆひ・白米一駄・芋一駄・すりだうふ・こんにやく・柿一籠・ゆ五十等云ぼだい云御菩提の御ために法華經一部・自我偈数度・題目百千返唱だいまくへ奉り候い畢おわんぬ。抑おさ法華經と申す御經は一代聖教いちだいしやうきやうには似るべくもなき御經にて而かも唯仏ゆいぶつ与仏と説かれて仏と仏とのみこそ・しろしめされて等覺とうかく已下乃至凡夫かないしほんぶは

叶はぬ事に候へ。

さればりゅうじゆぼさつ竜樹菩薩の大論にはだいろん仏已下はただ信じて仏になるべしと見えて候、

ほけきよう

ほうしほん

いわ

やくおう

なんじ

しよせつ

しよきよう

しか

法華經の第四法師品に云く「薬王今汝に告ぐ我が所説の諸經あり而も此の

おい

ほつけ

だいいち

えん

ご

わん

の

くわん

の

ふつ

の

ふつ

經の中に於て法華最も第一なり」等云云、第五の卷に云く「文殊師利此の法華經

しよぶつによらい

ひみつ

しよきよう

えん

の

くわん

の

ふつ

の

ふつ

の

ふつ

は諸仏如来の秘密の蔵なり諸經の中に於て最も其の上に在り」等云云、第七

い

わ

の

ふつ

の

くわん

の

ふつ

の

ふつ

の

ふつ

の卷に云く「此の法華經も亦

またかくのこと

しよきよう

えん

の

くわん

の

ふつ

の

ふつ

の

ふつ

の

復是くの如し諸經の中に於て最も其の上たり」又云く「最も照明たり最も

その

えん

の

くわん

の

ふつ

の

ふつ

の

ふつ

の

ふつ

其の尊たり」等云云、此等の經文私の義にあらず仏の誠言にて候へば定めて

これら

きよつもん

の

えん

の

くわん

の

ふつ

の

ふつ

の

ふつ

よもあやまりは候はじ、民が家に生れたる者我は侍に齊しなんと申せ

ひと

の

ふつ

の

くわん

の

ふつ

の

ふつ

の

ふつ

の

ば必ずとが来るまして我れ国王に齊しまして勝れたりなんと申せば我が身の

くわん

の

ふつ

の

くわん

の

ふつ

の

ふつ

の

ふつ

の

とがとなるのみならず父母と申し妻子と云ひ必ず損ずる事大火の宅を焼き大

ふ

ぼ

と

う

し

と

う

し

と

う

し

と

木の倒るる時・小木等の損ずるが如し。

ぶつきよう
仏教も又かくの如く華嚴・阿含・方等・般若・大日經・阿弥陀經等に
よひとびと
依る人人の我が信じたるままに勝劣も弁へずして我が阿弥陀經等は法華經と
さいとう
齊等なり將た又勝れたりなんと申せば其の類の人人は我が經をほめられ・
うれしと思へども還つてとがとなりて師も弟子も檀那も惡道に墮つること
や
箭を射るが如し、但し法華經の一切經

に勝れりと申して候は・くるしからず還つて大功德となり候、経文の如くなるが故なり。

此の法華経の始に無量義経と申す経おはします、譬えば大王の行幸の御時
・將軍前陣して狼籍をしづむるが如し、其の無量義経に云く「四十余年には
未だ真実を顕さず」等云、此れは將軍が大王に敵する者を大弓を以て
射はらひ又太刀を以て切りすつるが如し、華嚴経を読む華嚴宗阿含経の律僧
等觀経の念仏者等・大日経の真言師等の者共が法華経にしたがはぬをせめ
なびかす利剣の勅宣なり、譬えば貞任を義家が責め清盛を頼朝の打ち失せし
が如し、無量義経の四十余年の文は不動明王の劍索愛染明王の弓箭なり。
故南条五郎殿の死出の山三途の河を越し給わん時・煩惱の山賊・罪業の
海賊を静めて事故なく靈山淨土へ参らせ給うべき御供の兵者は無量義経の
四十余年・未顕真実の文ぞかし。

ほけきようだいいち

法華經第一の巻・方便品に云く「世尊の法は久くして後要らず当に眞実を

と

説きたもうべし」又云く「正直に方便を捨てて但無上道を説く」云云、第五

いわ

ただけいちゆう

みようじゆ

いわ

ひと

ちようじよう

に此の一珠有り」又云く

の巻に云く「唯髻中の明珠」又云く「独り王の頂上に此の一珠有り」又云く

いわ

ただけいちゆう

みようじゆ

いわ

ひと

ちようじよう

に此の一珠有り」又云く

「彼の強力の王の久しく護れる明珠を今乃ち之を与うるが如し」等云云、文

にほんこく

いっさいきよう

の心は日本国に一切経わたれり七千三

いっさいきよう

いっさいきよう

百九十九巻なり彼れ彼れの経経は皆法華經の眷属なり、例せば日本国の男女

きようきよう

みなほけきよう

けんぞく

にほんこく

なんよ

の数・四十九億九万四千八百二十八人候へども皆一人の国王の家人たるが

いっさいきよう

いっさいきよう

いっさいきよう

いっさいきよう

いっさいきよう

いっさいきよう

いっさいきよう

如し、一切経の心は愚癡の女人などの唯一時に心うべきやうは・たとへ

こと

いっさいきよう

いっさいきよう

いっさいきよう

いっさいきよう

いっさいきよう

いっさいきよう

いっさいきよう

だいとう

ば大塔をくみ候には先ず材木より外に足代と申して多くの小木を集め一丈二

ばか

いっさいきよう

いっさいきよう

いっさいきよう

いっさいきよう

いっさいきよう

いっさいきよう

いっさいきよう

だいとう

丈計りゆひあげ候なり、かくゆひあげて材木を以て大塔をくみあげ候いつれ

ばか

いっさいきよう

いっさいきよう

いっさいきよう

いっさいきよう

いっさいきよう

いっさいきよう

いっさいきよう

あししろ

ば返つて足代を切り捨て大塔は候なり、足代と申すは一切経なり大塔と申す

あししろ

あししろ

あししろ

あししろ

あししろ

あししろ

あししろ

ほけきよう

いっさいきよう

いっさいきよう

いっさいきよう

いっさいきよう

いっさいきよう

いっさいきよう

いっさいきよう

は法華經なり、仏・一切経を説き給ひし事は法華經を説かせ給はんための

ほけきよう

いっさいきよう

いっさいきよう

いっさいきよう

いっさいきよう

いっさいきよう

いっさいきよう

いっさいきよう

あししろ
足代なり、しょうじきしゃほうべん正直捨方便と申してほうきよう法華經を信ずる人は阿弥陀經等の南無なむ
あみだぶつだいにちきよう阿弥陀仏大日經等の真言宗阿含經等の律宗の二百五十戒等を切りすて抛ちなげう
ほけきようてのち法華經をば持ち候なり、大塔をくまんがためには足代大切なれども大塔だいとう
をくみあげぬれば足代を切り落あししろ

すなり、正直捨方便しょうじきしゃほうべんと申もつす文の心これ是なり、足代あししろより塔しゅつたいは出来しゅつたいして候へども

塔あししろを捨てて足代あししろを・をがむ人なし、今の世の道心者等どうしんしゃ一向いっこうに南無阿弥陀仏なむあみだぶつと

となとな唱なむえて一生をすごし南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと一返も唱へぬ人人は大塔だいとうをすてて足代あししろ

を・をがむ人ひとびとなり、世間せけんにかしこくはかなき人と申もつすは是これなり。

故七郎五郎殿は当世とうせの日本国の人人ひとびとには・にさせ給たまはず、をさなき心なれ

ども賢き父の跡あとをおひ御年いまだ・はたちにも及およばぬ人が、南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょう

と唱となえさせ給たまいて仏にならせ給いぬ無む一不成いつふじょうぶつ仏これは是なり、乞ひい願もわくは悲母ひも

我が子を恋おほしめしく思食たまし給いなば南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと唱となえさせ給たまいて・故南条殿

・故五郎殿と一所に生れんと願は

せ給たまへ、一つ種は一つ種・別の種は別の種べち・同じ妙法蓮華經の種を心に・は

らませ給たまいなば同じ妙法蓮華經みょうほうれんげきょうの国へ生れさせ給たまつべし、三人面をならべさ

せ給たまはん時御悦ときごえつびいかが・うれしくおぼしめすべきや。

そもそも

ほけきよう

はいけん

によらいすなわため

これをおお

抑此の法華經を開いて拝見仕り候へば「如来則ち為に衣を以て之を覆い

たほうげんざい　しよぶつ　ごねん

たもう又他方現在の諸仏の護念する所と為らんと等云、經文の心は東西南北

なら　さんぜんだいせんせかい

・八方・並びに三千大千世界の外・四百万億那由佗の国土に十方の諸仏ぞく

じゅうまん

ぞくと充滿せさせ給う、天には星の如く地には稻麻のやうに並居させ給ひ、

ほけきよう

ぎようじゃ　しゅこ

たま

法華經の行者を守護せさせ給ふ

たと

だいおう　たいし　もろもろおみ

しゅこ

してんのう

いちるい

事、譬えば大王の太子を諸の臣下の守護するが如し、但四天王・一類のまほ

たま

り給はん事の・かたじけなく候に、一切の四天王・一切の星宿・一切の日月

たいしやく

ほんてん

しゅこ

たま

いっさい

してんのう

いっさい

せいしゆく

いっさい

にちがつ

・帝釈・梵天等の守護せさせ給うに足るべき事なり、其の上・一切の二乗・

いっさい

一切

ぼさつ

とそつ

みろくぼさつ

じぞう

ふだらくさん

かんぜおん

の菩薩・兜率・内院の弥勒菩薩・迦羅陀山の地藏・補陀落山の觀世音・

せいりようざん

もんじゅしりぼさつ

けんぞく　ぐそく

ほけきよう

ぎようじゃ

しゅこ

清涼山の文殊師利菩薩等・各各眷属を具足して法華經の行者を守護せさせ

たま

給うに足るべき事に候に又かたじけなくも釈迦・多宝・十方の諸仏のてづか

らみづから来り給たまいて昼夜十二時に守らせ給たまはん事のかたじけなさ申もうす計ばかりなし。

かかるめでたき御経を故五郎殿は御信用ごしんようありて仏にならせ給たまいて今日は四十九日にならせ給たまへば一切いっさいの諸仏しよぶつ霊山浄土に集まらせ給たまいて・或あるは手にすへ・或あるは頂いただきをなで・或あるはいだき・或あるは悦よろこび月の始めて出いでたるが如ごとく・

花の始めてさけるが如くごといかに愛しまいらせ給たまうらん、抑そもそいかなれば三世

じゅつぽう

しよぶつ

ほけきよう

たま

かんが

どうり

・十方の諸仏はあながちに此の法華經をば守らせ給ふと勘かんへて候どうりへば道理に

ほけきよう

もう

さんぜじゅつぽう

しよぶつ

ふぼ

て候けるぞ法華經と申すは三世十方の諸仏の父母なり・めのとなり・主にて

ほけきよう

もう

もう

こえ

ましましけるぞや、かえると申す虫は母の音を食とす母の声を聞かざれば生

ほけきよう

もう

長する事なし、からぐらと申す

ほけきよう

もう

虫は風を食とす風吹かざれば生長せず、魚は水をたのみ鳥は木をすみかとす

また

ごと

ほけきよう

たま

たま

仏も亦かくの如く法華經を命とし・食とし・すみかとし給たまうなり、魚は水に

また

たま

たま

たま

たま

すむ仏は此の經にすみ給たまう鳥は木にすむ仏は此の經にすみ給たまう月は水にやど

また

たま

たま

たま

たま

る仏は此の經にやどり給たまう、此の經なき国には仏まします事なしと御心得ごころえあ

また

たま

たま

たま

たま

るべく候。

りんだおう

古昔輪陀王と申せし王をはしき南閻浮提の主なり、此の王はなにをか供御

たまい

たす

たまい

たまい

たまい

はくば

とし給たまいいしと尋たすぬれば白鳥のいなくを聞いて食とし給たまいう、此の王は白馬はくばの

いかなければ年も若く^{もし}なり色も盛ん^{さか}に魂もいさぎよく力もつよく又政事^{まつりごと}も明ら^{あき}かなり、故に其^{ゆえそ}の国には白馬^{はくば}を多くあつめ飼^たいしなり、譬^{たと}えば魏王と申せし

王の鶴を多くあつめ・徳宗^{とくそう}

皇帝^{こうてい}のほたるを愛せしが如し^{ごと}、白馬^{はくば}のいなく事は又白鳥の鳴きし故なり、

されば又白鳥を多く集めしなり、或時^{ある}如何^{いかん}しけん白鳥^{みな}皆うせて白馬^{はくば}いなか

ざりしかば、大王^{だいおう}供御たえて盛^{さか}んなる花の露^{つゆ}にしほれしが如^{ごと}く満月^{まんげつ}の雲にお

ほはれたるが如し^{ごと}、此の王^{すで}既にかくれさせ給^{たま}はんとせしかば、后^{きさき}・太子^{たいし}・大臣^{だいじん}

・一國^{みな}・皆母^{みな}に別れたる子の

如^{ごと}く皆色^{みな}をうしなひて涙を袖におびたり如何^{いかん}せん如何^{いかん}せん、其^その国に外道^{げどう}多

し当時^{とうじ}の禪宗^{ぜんしゅう}・念仏者^{ねんぶつ}・真言師^{しんごんし}・律僧等^{りつそう}の如し^{ごと}、又仏の弟子^{でし}も有り当時^{とうじ}の

法華宗^{ほつけしゅう}の人人^{ひとひと}の如し^{ごと}、中惡き事水火なり胡と越とに似たり、大王^{だいおう}勅宣^{ちよくせん}を下^{くだ}し

て云^{いわ}く、一切^{いっさい}の外道^{げどう}・此の馬をいなかせば仏教^{ぶつぎょう}を失^{うしな}いて一向^{いっこう}に外道^{げどう}を信ぜ

ん事・諸天しよてんの帝たい釈しゃくを敬うやもうが如ごとく

ならん、仏弟子ぶつでし此の馬をいなかせば一切いっさいの外道げどうの頸けいを切り其その所をうばひ

取りて仏弟子ぶつでしにつくべしと云云、外道げどうも色をうしなひ仏弟子ぶつでしも歎なげきあへり、

而しかれども・さてはつべき事ならねば外道げどうは先に七日を行ひき、白鳥も来らず

白馬はくばもいなかず、後七日を仏弟子ぶつでしに渡わたして祈いのらせしに馬鳴めみょうと申もうす小僧こそう一人

あり、諸仏しよぶつの御本尊ごほんぞんとし給たまう

ほけきよう

法華經を以て七日祈りしかば白鳥壇上に飛び来る、此の鳥一声鳴きしかば・

一馬・一声いなく、大王は馬の声を聞いて病の牀よりをき給う、后より始

しよにん

めみよう

だいおう

らいはい

ゆか

たま

きさき

ないし

きさき

ないし

ないし

めて諸人・馬鳴に向いて礼拝をなす、白鳥・一・二・三乃至・十・百・千・

しゅつたい

じゅうまん

はくば

はいおう

はいおう

はいおう

はいおう

はいおう

はいおう

はいおう

はいおう

はいおう

出来して国中に充滿せり、白馬しきりに・いなき一馬・二馬・乃至百・

はくば

だいおう

こえ

こえ

こえ

こえ

こえ

こえ

こえ

こえ

こえ

千の白馬いなきしかば大王此の音を聞こ

めんみよう

ばか

ごと

あき

まつりごと

まつりごと

まつりごと

まつりごと

まつりごと

まつりごと

まつりごと

し食し面貌は三十計り心は日の如く明らかに政正直なりしかば、天より

かんろ

ばんみん

むりよう

たまい

たまい

たまい

たまい

たまい

たまい

たまい

たまい

たまい

甘露ふり下り、勅風・万民をなびかして無量・百歳代を治め給いき。

こと

たほうぶつ

もう

たま

たま

たま

たま

たま

たま

たま

たま

仏も又かくの如く多宝仏と申す仏は此の經にあひ給はざれば御入滅・此の

しゅつげん

たま

しゃかぶつ

じゅつぼう

しよぶつ

また

また

また

また

また

また

經をよむ代には出現し給う、釈迦仏・十方の諸仏も亦復かくの如し、かか

ふしぎ

ふしぎ

ふしぎ

ふしぎ

ふしぎ

ふしぎ

ふしぎ

ふしぎ

ふしぎ

ふしぎ

ふしぎ

不思議の徳まします經なれば・此の經を持つ人をば・いかでか天照太神・

はちまんだいばさつ

ばさつ

たま

たま

たま

たま

たま

たま

たま

たま

たま

八幡大菩薩富士千眼大菩薩すてさせ給うべきと・たのもしき事なり、又此の

しんじ

しんじ

しんじ

しんじ

しんじ

しんじ

しんじ

しんじ

しんじ

しんじ

しんじ

經にあだをなす国をば・いかに正直

に祈り候へども必ず其の国に七難起りて他国に破られて亡国となり候事大海
の中の大船の大風に値うが如く・大旱魃の草木を枯らすが如しと・をぼしめ
せ、当時・日本国のいかなる・いのり候とも日蓮が一門法華經の行者を
あなづらせ給へばさまさまの御いのり叶はずして大蒙古国に・せめられて・
すでに・ほろびんとするが如し、今も御覽ぜただかくては候まじきぞ是れ
ほけきよう
法華經をあだませ給う故と御信用あるべし。

そもそも

抑故五郎殿かくれ給いて既に四十九日なり、無常はつねの習いなれども

此の事うち聞く人すら猶忍びがたし、況や母となり妻となる人をや心の中を
しはかられて候、人の子には幼きもあり長きもありみにくきもありかたわな
るも・ある物をすら思いに・なるべかりけるにや、をのこごたる上よろづに
・たらひなさけあり、故上野殿には壮なりし時をくれて歎き浅からざりしに
此の子を懷妊せずば火にも入り水にも入らんと申ししに此の子すでに平安な

りしかば誰にあつらへて身をも・なぐべきと思うて、此に心をなぐさめて此の十四五年はすぎぬ、いかにいかにとすべき、二人のをのここにこそ・になわれめと・たのもしく思ひ候いつるに・今年九月五日・月を雲

にかくされ花を風にふかせて・ゆめか・ゆめならざるか・あわれひさしきゆめかなと・なげきをり候へば・うつつににて・すでに四十九日はせすぎぬ、まことならばいかんがせん、さける花はちらずしてつぼめる花のかれたる、をいたる母はとどまりてわかきこは・さりぬ、なさけなかりける無常むじようかな無常むじようかな。

かかるなさけなき国をば・いとい・すてさせ給たまいて故五郎殿の御信用ごしんようありほけきようし法華經につかせ給たまいて常住じようじゆう不壊ふえのりやう山浄土じようどへとくまいらせ給たまうちはりやうぜんにまします母は娑婆しやばにとどまれり、二人の中間ちゆうげんに・をはします故五郎殿の心こそ・をもひやられて・あわれに・をばへ候へ、事多しと申せどもとどめ候おわい畢きんぬ、恐恐きようきよう謹言きんげん。

十月二十四日

日蓮 花押
にちれん かおう

上野殿母尼御前御返事
うえのどの あまごぜんごへんじ

四一〇

南条殿御返事

1573p

しらよね

なら

いものかしら

牙二石並びに

鴉

一だ・故五郎殿百ヶ

日等云云、

法華經の第七に云く、

いわ

「せんるこうかしやすい

川流江河諸水の中に海これ第一なり此の法華經も亦復是くの如し」等云云、

ほけきよう

またかくのごと

い

此の經は法華經をば大海に譬へられて候、

たいかい

大海と申すは・ふかき事八万四千

たいかい

もう

はちまん

ゆじゆん

由旬広きこと又かくのごとし、

たいかい

此の大海の中にはなににのすみ有りと申し

もう

候へば阿修羅王・凡夫にてをは

あしゆら

ほんぶ

せし時不妄語戒を持ちて・まなこをぬかれ・かわをはがれ・ししむらをやぶ

もうし

たも

られ血をすはれ骨かれ子を殺され・めをうばわれなんどせしかども無量劫が

むりょうじゆう

間・一度もそら事なくして其の功に依りて仏となり給いて候が無一不成仏と

そ

よ

たまい

むいつふじようぶつ

申して南無妙法蓮華經を只一度申せる人・一人として仏にならざるはなしと

もう

なむみようほうれんげきよう

ただひとたび

たまい

むいつふじようぶつ

・とかせ給いて候、

たまい

しゃかいちぶつ

おあ

うたがい

疑うべきにあらざるに十方の

じゅうぽう

仏の御前^{おんまえ}にて・なにのゆへにか・そら事をばせさせ給^{たま}うべき、
其^その上^{しや}釈迦^{かぶつ}仏
と十方^{じゅうぽう}の仏と同時^{どうじ}に舌を大梵^{ぼんてん}天に。

四二一

上野殿御返事

1574p

驚目一貫文送り給がもくいたたまい了おんぬ、御心ざしの候へば申おんこころざしし候もうぞ・よくふかき御房ごぼうとおぼしめす事なかれ。

仏にやすやすとなる事の候ぞ・をしへまいらせ候そつらはん、人のものを・をしふると申もうすは車のおもけれども油をぬりてまわり・ふねを水にうかべてゆきやすきやうにをしへ候なり、仏になりやすき事は別べちのやう候はず、旱魃かんぱつにかわけるものに水をあたへ寒氷かんびょうにここへたるものに火をあたふるがごとし、又二つなき物を人にあたへ命のたゆるに人のせにあふがごとし。

金色王と申せし王は其その国に十二年の大旱魃かんぱつあつて万民飢え死ぬる事かずをしらず、河には死人しにんをはしとし陸にはがいこつをつかとせり、其そのの時・金色大王だいおう・大菩提心ぼだいしんを・をこしておほきに施をほどこし給たまいき、せすべき物み

なつきて蔵の内にただ米五升ばかりのこれり、大王の一日の御くごなりと臣下

申せしかば大王五升の米をとり出だして一切の飢えたるものに・或は一りう

・二りう・或は三りう・四りうなど・あまなくあたへさせ給いてのち

天に向わせ給いて朕は一切衆生のけかちの苦に・かはりて・うえじに候ぞと

・こえをあげて・よばはらせ給いしかば天きこしめして甘呂の雨を須臾に

下し給いき、この雨を身にふれ・かをにかりし人・皆食にあきみちて一国

の万民・せちなほに命よみかへりて候いけり。

月氏国にす達長者と申せし者は七度貧になり七度長者となりて候いしが

最後の貧の時は万民皆にげうせ死にをはりて・ただ・めおとこ二人にて候い

し時・五升の米あり五日のかつてとあて候いし時・迦葉・舍利弗・阿難

羅・羅・釈迦仏の五人・次第に入らせ給いて五升の米をこひとらせ給いき、

其の日より五天竺第一の長者となりて祇園精舎をばつくりて候ぞ、これを

もつてよろづを心へさせ給へ。^{たま}

貴^き辺^{へん}は・すでに法華^{ほけきよう}經^{ぎようじや}の行者^{ぎやうじや}に似^たさせ給^{たま}へる事さるの人に似^たもちゐの月に
似^たたるがごとし、あつはらのものどもの・かくをしませ給^{たま}へる事は承平^{じやうへい}の將^{しやう}
門^{かど}・天喜^{てんき}の貞当^{さだその}のやうに此^この国^{くに}のものどもは・おもひて候^{こう}ぞ、これひとへに
法華^{ほけきよう}經^{ぎよう}に命^{いのち}をすつるがゆへなり、まつたく主君^{しゅくん}にそむく人^{ひと}とは天御覽^{てんみらん}あらじ、
其^その上^{うへ}わづかの小郷^{せうきやう}に・をほくの公事^{くじ}せめあてられて・わが身^みは・のるべき
馬^{うま}なし・妻子^{さいし}はひきかくべき衣^いなし。

かかる身^みなれども法華^{ほけきよう}經^{ぎよう}の行者^{ぎやうじや}の山中^{やまのちゆう}の雪^{ゆき}に・せめられ食^たともしかるらん
と・おもひやらせ給^{たま}いて・ぜに一貫^{いちくわん}をくらせ給^{たま}へるは・貧女^{ひんによ}がめおとこ二人^{ふたり}
して一つの衣^いをきたりしを乞食^{こじき}にあたへ・りだが合子^{がし}の中^{ちゆう}なりし・ひえを
辟支^{ひやくし}仏^{ぶつ}に・あたへたりしがごとし、たうとし・たうとし、くはしくは又^{また}又^{また}申^{もう}す
べく候^{こう}、恐^{きよう}恐^{きよう}謹言^{きんげん}。

弘安^{こうあん}三年十二月二十七日

にちれん
日蓮 花押 かおう

うえのとのこへんじ
上野殿御返事

四二二 上野尼御前御返事 あまごぜんごへんじ

1573

p

しょうにん
聖人ひとつつ・ひさげ十か・十字百・あめひとをけ二升か柑子ひとこ串柿
十くし・ならびにおくり候い了んぬ春のはじめ御喜び花のごとくひらけ月の
ごとくみたせ給うべきよしつけ給わり了んぬ。
たま

そもそも

おんごと
抑故五らうどのの御事こそ・をもいいでられて候へ、ちりし花もさかん

とす・かれしくさもねぐみぬ、故五郎殿もいかでか・かへらせ給はざるべき、
たま

むじょう

あわれ無常の花と・くさとのやうならば人丸にはあらずとも花のもと・は
なれじ、いはうるこまにあらずとも・草のもとをばよもさらじ。

きようもん

経文には子をばかたきととかれて候、それもゆわれ候か梟ふくろうと申もうすとりは

母をくらう破鏡はけいと申もうすけだものは父をがいす、あんろく山と申せし人は師史

明と申もうす子にころされぬ、義朝よしともと申せしつはものは為義ためよしと申もうすちちを

ころす、子はかたきと申す経文ゆわれて候、又子は財と申す経文あり、
妙壯嚴王は一期の後無間・大城と申す地獄へ堕ちさせ給うべかりしが浄蔵
と申せし太子にすくわれて大地獄の苦をまぬがれさせ給うのみならず娑羅樹
王仏と申す仏とならせ給う、生提女と申せし女人は慳貪のとがによつて餓鬼
道に堕ちて候いしが目連と申す子にたすけられて餓鬼道を出で候いぬ、され
ば子を財と申す経文たがう事なし。

故五郎殿はとし十六歳・心ね・みめかたち人にすぐれて候いし上男のう
そなわりて万人にほめられ候いしのみならず、をやの心に随うこと水のうつ
わものに・したがい・かげの身に・したがうがごとし、いへにては・はしら
とたのみ道にては・つへとをもちき、はこのたからも・この子のため・つか
う所従もこれがため、我しなば・に

なわれて・のぼへゆきなんのちの・あとをもちをく事なしとふかくをばしめ

したりしに・いやなくさきにたちぬれば・いかにや・いかにや・ゆめか
・まぼろしか・さめなん・さめなんと・をもへどもさめずして・としも又か
へりぬ、いつとまつべしとも・をぼへず、ゆきあうべき・ところだにも申し
をきたらば・はねなくとも天へものぼりなん、ふねなくとも・もろこしへも
・わたりなん、大地のそこに・ありときかば・いかでか地をもほらざるべき
と・をぼしめすらむ。

やすやすとあわせ給うべき事候、釈迦仏を御使として・りやうぜん浄土へ
まいりあわせ給へ、若有聞法者無一不成仏と申して大地はささば・はづると
も日月は地に堕ち給うとも・しをはみちひぬ世はありとも花はなつにならず
とも南無妙法蓮華經と申す女人の・をもう子にあわずという事はなしととか
れて候ぞ、いそぎいそぎつとめさせ給へつとめさせ給へ、
恐恐謹言。

正月十三日

日蓮
にちれん

花押 かおう

上野 あまごぜん 尼前御返事 ごへんじ

四一三 上野殿御返事うえのとのごへんじ

1577p

蹲いへのいも鴟一俵給び了おわぬ。

又かうぬしのもとに候・御乳塩一疋なら並びに口付一人候、さては故五郎殿の事は・そのなげきふりずとおもへども御けさんははるかなるやうにこそおぼえ候へ、なをもなをも法華經ほけきようをあだむ事はたえつとも見え候はねば・これよりのちも・いかなる事か候はんそつちずらめども・いままでこらへさせ給たまへる事まことしからず候、仏の説いての給たまはく火に入りて・やけぬ者はありとも大水たすいに入りてぬれぬものはありとも大山は空そらへ・とぶとも大海たいかいは天へあがるとも末代まつだい悪世あくせに入れば須臾しゆゆの間も法華經ほけきようは信じがたき事にて候ぞ。

徽宗皇帝は漢土かんどの主きそうこうていじ蒙古国もうこに・からめとられさせ給たまいぬ、隠岐おきの法王ほうおうは

にほんこく

ごんのたゆう

たま

たま

日本国のあるじ右京の権大夫殿に・せめられさせ給いて島にてはてさせ給い

ほけきよう

そくしん

たま

ぬ、法華經のゆへにてだにも・あるならば即身に仏にもならせ給いなん、わ

ほけきよう

づかの事には身をやぶり命をすつれども、法華經の御ゆへに・あやしのが

に・あたらんとおもふ人は候はぬぞ、身にて心みさせ給い候いぬらん、たう

たま

とし・たうとし、
きようきようきんげん
恐恐 謹言。

こうあん

弘安四年三月十八日

にちれんかおう

日蓮花押

うえのとのごへんじ

上野殿御返事

四一四

南条殿御返事ごへんじ

1578p

御使おんつかいの申し候もうを承り候たまわ、是この所勞難儀なんぎのよし聞え候、いそぎ療治りょうじをいたされ候さんけいあいて御參詣有るべく候。

塩一駄大豆一俵とつさか一袋酒一筒給び候、上野の国より御帰宅候後は未だ見参に入らず候、牀敷存じ候いし処ところに品品の物ども取り副そえ候おとずれいて御音信に預り候事申し尽し難き御志こころざしにて候。

今申せば事新しきに相似て候へども徳勝童子は仏に土の餅を奉りて阿育あそか大王だいおうと生れて南閻浮提えんぶだいを大体知行すだいたいちぎようと承り候たまわ、土の餅は物ならねども仏のいみじく渡らせ給へばわた・かくいみじき報たまいを得たり、然るに釈迦しやくか仏は我わを無量むりようの珍宝ちんぽうを以て億劫もつの間・供養くようせんよりは末代まつだいの法華經ほけきようの行者ぎようじやを一日なりとも

供養せん功德は百千万億倍・過ぐべしとこそ説かせ給いて候に、法華經の行者を心に入れて数年供養し給う事有り難き御志かな、金言の如くんば定めて後生は靈山淨土に生れ給うべしいみじき果報なるかな。

其の上此の処は人倫を離れたる山中なり、東西南北を去りて里もなし、か

かる・いと心細き幽窟なれども教主釈尊の一大事の秘法を靈鷲山にして

相伝し、日蓮が肉団の胸中に秘して隠し持てり、されば日蓮が胸の間は

諸仏入定の処なり、舌の上は轉法輪の所・喉は誕生の処・口中は正覺

の砌なるべし、かかる不思議なる法華經の行者の住処なれば・いかでか

靈山淨土に劣るべき、法妙なるが故に人貴し・人貴きが故に所尊しと申すは

是なり、神力品

に云く、若しは林の中に於ても若しは樹の下に於ても若しは僧坊に於ても乃至

而般涅槃したもう」と云云、此の砌に望まん輩は無始の罪障忽に消滅し

三業の悪転あくてんじて三徳さんとくを成じょうぜん、彼その中天竺てんじくの無熱池むねっちに臨のぞみし悩者のうしやが心中しんちゆうの熱氣そを除愈じゆうまんして其その願じゅうまんを充滿じゅうまんする事清涼池しょうりやうぢの如ごとしとうそぶきしも彼れ此れ異こなりといへども、其その意いかは争いでか

替^{かわ}るべき。

彼の^{がっし}月^{りょうじゅうせん}氏の^{ほんちよう}靈鷲山^{りやうじゆせん}は本朝^{ほんちよう}此^{この}の身延^{しんえん}の嶺^のなり、参詣^{さんけいはる}遙^{はる}かに中絶^{ちゆうぜつ}せり急急^{ききく}に

来臨^{らいりん}を企^くつべし、

是^{この}にて待^{まち}ち入^いつて候^{こう}べし、哀^{もつ}哀^{もつ}申^{もう}しつくしがたき御^ご志^しか

な御^ご志^しかな。

弘安^{こうあん}四年九月十一日

南条^{ごへんじ}殿御返事

日蓮^{にちれん}花押^{かおう}

四一五

上野^{うえの}殿御返事^{のとのごへんじ}

1579p

いゑのいも一駄^い・ごばう一つと・大根^{だいこん}六本、いもは石^{いし}のごとし・ごばうは
大牛^{だいきう}の角^{かく}のごとし大根^{だいこん}は大仏堂^{だいぶつどう}の^{だいぶつどう}大^{だい}くぎのごとしあぢわひは利天^{りてん}の甘露^{かんろ}の

ごとし、石を金にかうる国もあり土をこめにうるところもあり、千金の金をもてる者もうえてしぬ、一飯をつとにつつめる者に・これをとり、経に云く「うえたるよには・よねたつとし」と云云、一切の事は国により時による事なり、仏法は此の道理をわきまうべきにて候、又又申すべし、恐恐謹言。

ぶつぽう

どうり

もう

きようきようきんげん

こうあん

弘安四年九月廿日

にちれんかおう

日蓮花押

うえのとのごへんじ

上野殿御返事

四一六

上野尼御前御返事

1580p

しらよね

牙一駄四斗定あらひいも一俵・送り給びて南無妙法蓮華經と唱へまいら

なむみょうほうれんげきょう

せ候い了んぬ。

おわ

みょうほうれんげきょう

妙法蓮華經と申すは蓮に譬えられて候、天上には摩訶曼陀羅華・人間に

もう

たと

てんじょう

まかまんだらけ

にんげん

は桜の花・此等はめでたき花なれども此れ等の花をば法華經の譬には仏取り

これら

こ

ほけきょう

たとえ

たま

給う事なし、一切の花の中に取分けて此の花を法華經に譬へさせ給う事は

いっさい

ほけきょう

たと

たま

そのゆえ

其の故候なり、或は前花後菓と申して花は前に菓は後なり・或は前菓後花

ある

このみ

もう

このみ

ある

もう

と申して菓は前に花は後なり、或は一花

このみ

ある

ある

多菓・或は多花一菓・或は無花有菓と品品に候へども蓮華と申す花は菓と花

ある

れんげ

もう

このみ

どうじ

と同時に、一切經の功德は先に善根を作して後に仏とは成ると説くかかる

いっさいきょう

くどく

ぜんこん

な

ゆえ

故に不定なり、法華經と申すは手に取れば其の手やがて仏に成り口に唱ふれ

ふじょう

ほけきょう

もう

そ

ば其その口くち即すく仏ぶつなり、譬たとえば天月てんげつの東の山の端はに出いずれば其そのの時とき即すく水みづに影かげの浮うかぶが如ごとく音おととひびきとの同時どうじなるが如ごとく、故ゆゑに經きやうに云いく「若もし法ほふを聞きくこ
と有あらん者は一いつとして成じやうぶつ仏ぶつせざること無し」云云、文の心は此の經きやうを持もつ人
は百人は百人ながら千人は千人ながら一人もかけず仏ぶつに成なると申もす文なり。

そもそも

しやうそく

あまごぜん

おんちち

さえもんにようどう

きじつ

抑おさ御消息ごしやうそくを見候みへば尼御前あまごぜんの慈父おんちち・故松野六郎左衛門入道きじつ殿どのの忌日きじつと

しそく

しか

ほけきやう

あら

ほつぼう

云云、子息多ければ孝養こつやうまちまちなり、然しかれども必ず法華經ほふけきやうに非あらざれば謗法ほつぼう

等云云、釈迦しやか仏ぶつの金口きんくちの説いわに云く「世尊せそんの法ほふは久くしくして後要かゝらずまさに真実しんじつ

と

を説ときたもうべし」と、多宝たほふの証しやうみやう明いに云く、妙法蓮華經みやうほつれんげきやうは皆みな是これ真実しんじつなり

じゅつぼう

しよぶつ

い

いた

云云

これよりひつじさるの方に

と十方じふぱうの諸仏しよぶつの誓いに云く舌相ぜつさう梵天ぼんてんに至いたる云云、

たいかい

大海たいかいをわたりて国くにあり漢土かんどと名なく、彼の国くにには・或あるは仏ぶつを信しんじて神かみを用もちいぬ

ある

もち

ある

にほんこく

さこそ

人もあり・或あるは神かみを信しんじて仏ぶつを用もちいぬ人もあり・或あるは日本国にほんこくも始はは・さこそ

しか

おりゆう

もう

かんのだいいち

例せば

候さういしか、然しかるに彼の国くにに烏菟おりゆうと申もす手書てしよありき漢土かんど第一だいいちの手てなり、例れいせば

日本^{にほん}国^{こく}の道風・行成等の如^{ごと}し、此の人、仏法^{ぶつぽう}をいみて経をかかじと申^{もう}す願

を立てたり、此の人・死期来りて重病をうけ臨終にをよんで子に遺言して云く汝は我が子なり・その跡絶ずして又我よりも勝れたる手跡なり、たとひいかなる悪縁ありとも法華經をかくべからずと云云、然して後・五根より血の出ずる事・泉の涌くが如し・舌八つにさけ身くだけで十方にわかれぬ、然れども一類の人人も三惡道を知らざれば地獄に墮つる先相ともしらず。
其の子をば遺竜と申す又漢土第一の手跡なり、親の跡を追うて法華經を書かじと云う願を立てたり、其の時大王おはします司馬氏 仏法を信じ殊にかじと云う願を立てたり、其の時大王おはします司馬氏 仏法を信じ殊に法華經をあふぎ給いしが同じくは我が国の中に手跡第一の者に此の經を書かせて持經とせんとて遺竜を召す、竜申さく父の遺言あり是れ計りは免し給へと云云、大王父の遺言と申す故に他の手跡を召して一經をうつし畢んぬ、然りといへ共御心に叶い給はざりしかば又遺竜を召して言はく

汝親の遺言と申せば朕まげて經を写させず但八卷の題目計りを勅に随うべし

と云云、返す返す辞し申すに王瞋りて云く汝が父と云うも我が臣なり親の
ふこう 不孝を恐れて題目を書かずば違勅の科ありと勅定度度重かりしかば・不孝は
だいもく たる事なれども当座の責を・のがれがたかりしかば法華經の外題を書きて王
とうざ へ上げ宅に歸りて父のはかに向いて血の涙を流して申す様は天子の責重きに
ささ よつて亡き父の遺言をたがへて既に法華經の外題を書きぬ。

ふこう 不孝の責免れがたしと歎きて三日の間・墓を離れず食を断ち既に命に及ぶ、
まぬか

もう 三日と申す寅の時に已に絶死し畢つて夢の如し、虚空を見れば天人・一人お
すで はします帝釈を絵にかきたるが如し無量の眷属・天地に充滿せり、爰に竜
たいしやく 問うて云く何なる人ぞ答えて云く汝知らずや我は是れ父の烏竜なり、我人間
いか けてん にありし時・外典を執し仏法を
しゅうぶつぽう

こと かたきとし、殊に法華經に敵をなしまいらせし故に無間に墮つ、日日に舌を
ほけきよう ぬかるる事・数百度・或は死し・或は生き天に仰き地に伏してなげけども
ある ある

かな
叶う事なし、人間へ告げんと思へども便りなし、
なんじ
汝我が子として遺言なりと
申せしかば其の言災と成つて身を責め・剣と成つて天より雨り下る、
なんじ
汝が
ふこうきわま
不孝極り無かりしかども我が遺言を違へ
ゆいこん
たが

ざりし故に自業自得果うらみがたかりし所に金色の仏一むげんじこく体無間地獄しゅつげんに出現し

てたとい仮使遍法界断善諸衆生一もんぼう聞法華經決定成菩提と云云、此の仏・無間地獄むげんじこく

に入り給たまいしかば大水を大火になげたるが如ごとし、少し苦みやみぬる処ところに我ががつしやう

合掌して仏に問たてまつい奉りて何なる仏ぞと申せば・仏答えて我は是れ汝が子息こなんじしそく

遺いりゆう竜が只今書くところの法華經の題目六十四字の内の妙の一字なりと言ふ、

八卷の題目は八八六十四の仏・六十四の満月まんげつと成り給へば・無間むげん

地獄じごくの大閻即大明となりし上・無間地獄は当位即妙・不改本位と申して

常寂光じやうじやうくわうの都と成りぬ、我及び罪人およざいにんとは皆蓮の上の仏と成りて只今都率の内ただとそつ

院へ上り参り候が先ず汝なんじに告ぐるなりと云云、遺竜いりゆうが云く、我が手にて書き

けり争いかでか君たすかり給たまうべき、而も我が心よりかくに非あらず・いかに・いか

にと申せば、父答えて云いわく汝なんじはか

なし汝なんじが手は我が手なり汝なんじが身は我が身なり汝なんじが書きし字は我が書きし字

なり、汝^{なんじ}心に信ぜざれども手に書く故^{ゆえ}に既に・たすかりぬ、譬^{たと}えば小児^{しょうに}の火を放つに心にあらざれども物を焼くが如^{ごと}し、法華經^{ほけきょう}も亦^{また}かくの如^{ごと}し存外^{ぞんがい}に信を成せば必ず仏になる、又^そ其の義を知りて謗^{ぼう}ずる事無^{ことな}かれ、但^{ただ}し在家^{ざいけ}の事なれば・いひしこと故^{ことさらに}大罪^{だいざい}なれども懺悔^{ざんげ}しやすしと云、此の事を大王^{だいおう}に申^{もう}す、大王^{だいおう}の言^{いわ}く我が願^{すで}既^{すで}にしるし有りとて遺^{いりゆう}竜^{いらい}弥^い朝恩^{しやうおん}を蒙^{こむ}り国又こぞつて此の御經^{ごきやう}を仰^{あお}ぎ奉^{たてまつ}る。

然^{しか}るに故五郎殿^{ごごろうだん}と入道殿^{にゅうだうだん}とは尼御前^{あまごぜん}の父なり子なり、尼御前^{あまごぜん}は彼^かの入道^{にゅうだう}殿^{だん}のむすめなり、今こそ入道殿^{にゅうだうだん}は都率^{とそつ}の内院^{ないえん}へ参^{まゐ}り給^{たま}うらめ、此^この由^{よし}をは・わきどのよみきかせまいらせ給^{たま}うべし、事^{こと}そうそうにてくはしく申^{もう}さず候。

きようきようきんげん
恐^{おそ}恐^{おそ}謹^{きん}言^{げん}

十一月十五日

にちれん
日蓮

かおう
花押

あまごぜんごへんじ
上野尼御前御返事

四一七

上野殿母御前御返事うえのとははごぜんごへんじ

1583p

乃米一だ・聖人しょうにん一つつ・二十ひさげか・かつかう・ひとかうぶくろおくり
給おひ候わい了んぬ。

このところの・やう・せんぜんに申しふり候いぬ、さては去いぬる文永十ぶんえい一
年六月十七日この山に入り候いて今年十二月八日にいたるまで此の山・
出いずる事一步も候はずただし八年が間やせやまいと申しともしと申しともしどし
に身ゆわく・心をばれ候いつるほどに、今年は春より此のやまい・をこりて
秋あきすぎ・冬にいたるまで日日にをとろへ・

夜夜にまさり候いつるが・この十余日は・すでに食も・ほとをととどまりて
候上・ゆきはかさなり・かんはせめ候、

身のひゆる事石のごとし胸のつめたき事氷のごとし、しかるに・このさけは
たたかに・さしわかして、かつかうを・はたと・くい切りて一度のみて候へ
ば火を胸に・たくがごとし、ゆに入るにいたり、あせに・あかあらい・しづ
くに足をすすぐ、此の御志^{いひめこころ}は・いかんがせんと・うれしくをもひ候ところ
に両眼^{りょうげん}よりひとつのなんだをうかべて候。

まことやまことや去年^{こぞ}の九月五日こ五郎殿のかくれにしはいかになりける
と胸うちさわぎて・ゆびををりかずへ候へばすでに二ヶ年十六月四百余日に
すぎ候が、それには母なれば御をとづれや候らむ、いかに・きかせ給^{たま}はぬや
らむ、ふりし雪も又ふれり・ちりし花も又さきて候いき、無常^{むじょう}ばかり・また
も・かへりきこへ候はざりけ

るか、あらうらめし・あらうらめし余所^{よそ}にても・よきくわんざかな・よきく
わんざかな玉のやうなる男かな男かないくせ・をやのうれしく・をぼすらむ

と見候いしに、満月まんげつに雲のかかれるが・はれずして山へ入り・さかんなる花
のあやなく・かぜのちらせるがごとしと・あさましくこそをばへ候へ。

にちれん

日蓮は所らうのゆへに人人の御文の御返事も申さず候いつるがこの事はあ

まりに・なげかしく候へば・ふでをとりて候ぞ、これも・よもひさしくもこ

のよに候はじ、一定五郎殿にいきあいぬと・をばへ候、母よりさきにけさん

し候わば母のなげき申しつたへ候はん、事事又又申すべし、
恐恐謹言。

きようきようきんげん

十二月八日

にちれん
日蓮

花押
かおう

上野殿母御前御返事
うえのとははごぜんごへんじ

四一八

大白牛車御消息
だいびやくこしや

1584p

そもそもほけきよう

びやくし

もう

ほけきよう

ぎようじや

抑法華經の太白牛車と申すは我も人も法華經の行者の乗るべき車にて候

なり、彼の車をば法華經の譬喩品と申すに懇に説かせ給いて供、但し彼の御

らじゅう

ゆえくわ

と

たま

てんじく

ほんほん

經は羅什・存略の故に委しくは説き給はず、天竺の梵品には車の莊り物・其の

外・聞信戒定進捨懺の七宝まで委しく説き給ひて候を日蓮あらあら披見ひけんに

及び侯、先ず此の車と申すは縦たて広ひろ五百由旬ゆじゆんの車にして金の輪りんを入れ・銀ぎんの棟むなぎ

をあげ・金の縄なづなを以て八方へつり縄なづなをつけ・三十七重さんじちゆうのきだはし

をば銀を以てみがきたて八万四千の宝の鈴しずを車の四面しめんに懸かけられたり、三百

六十ながれの・くれなひの錦にしきの旗はたを玉たまのさほにかけながし、四万二千の欄干らんかん

には四天王してんのうの番をつけ、又蜜みつの内には六万九千三百人十余体の仏ぼつ・菩薩ぼさつ・

宝蓮華ほうれんげに坐たまし給へり、帝釈たいしゃくは諸もろの眷属もんねんぞくを引きつれ給ひて千二百の音楽おんがくを奏そうし、

梵王ぼんのうは天蓋てんがいを指さし懸かけ・地神ぢしんは山

河だいち・大地びようどうを平等たうとうに成たまし給ふ、故ゆゑに法性ほつしやうの空そらに自在じざいにとびゆく事をこそ・

大白牛車だいびやくこしゃとは申すなれ、我より後に来り給はん人人ひとびとは此の車にめされて靈山りやうぜん

へ御出いで有あるべく侯、日蓮にちれんも同じ事に乗りて御迎むかひいにまかり向ふべく供、

南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經。

日蓮 にちれん

花押 かおう

四一九 春初御消息はるぞう

1585p

ははき殿かきて候事よろこびいりて候。

春の初の御悦よろこび木に花のさくがごとく山に草の生い出でするがごとしと我も人

も悦よろこび入つて候、さては御送り物の日記にっき 八木一俵・白塩一俵・十字三十枚

・いも一俵・給おわび候い畢おわんぬ。

深山みやまの中に白雪・三日の間に庭は一丈につもり谷はみねとなり・みねは天

にはしかけたり、鳥鹿あんしつは庵室に入り樵牧は山にさしいらす、衣はうすし食は

たえたり夜はかんく鳥にことならず、昼は里へいでんとおもふ心ひまなし、

すでに読経どつきようのこえもたえ観念かんねんの心もうすし、今生退転こんじょうたいてんして未来みらい三五を経ん

事をなげき候いつるところに此の御とぶらひに命いきて又もや見参に入り

候そうちはんずらんと・うれしく候。

過去の仏は凡夫にて・おはしまし候いし時五濁乱漫の世にかかる飢えたる
法華經の行者をやしなひて仏にはならせ給うぞとみえて候へば法華經まこと
ならば此の功德によりて過去の慈父は成仏疑なし。

故五郎殿も今は靈山淨土にまいりあはせ給いて故殿に御かうべをなでられ

させ給うべしと・おもひやり候へば涙かきあへられず、
恐恐謹言。

正月二十日 日蓮花押

上野殿御返事

申す事恐れ入つて候、返返ははき殿一一によみきかせまいらせ候へ。

四二〇 法華証明抄

法華經の行者

日蓮

花押

1586p

まつだいあくせ ほけきよう
末代悪世に法華經を經のごとく信じまいらせ候者をば法華經の御鏡にはい
かんがうかべさせ給うと拝見つかまつり候へば、過去に十萬億の仏を供養せ
る人なりとたしかに釈迦仏の金口の御口より出でさせ給いて候を・一仏なれ
ば末代の凡夫はうたがいや・せんずらんとて、此より東方にはるかか
ぎさせ給いて・おはします宝浄世界の多宝仏わざわざと行幸ならせ給いて
釈迦仏にをり向いまいらせて妙法華經・皆是眞実と証 明せさせ給い候いき、
此の上はなにの不審が残るべき・なれども・なをなを末代の凡夫は・をぼつ
かなしと・をぼしめしや有りけん、十方の諸仏を召しあつめさせ給いて

広長舌相こうちやうぜうさうと申もうして無量劫むりやうけつより・このかた永くそらごとなきひろくながく大なる御舌しゆみせんを須弥山しゆみせんのごとく虚空こくうに立てならべ給たまいし事は・をびただしかりし事なり、かう候まつだいへば末代ばんぶの凡夫ぼんぷの身として法華經ほけきやうの一字・二字を信じまいらせ候じゅうぼうへば十方じゅうぼうの仏の御舌じゅうぼうを持つ物ぞかし、いかなる過去かこの宿習しゆくじゆうにて・かかる身とは

生よろこるらむと悦よろこびまいらせ候・上の經文きやうもんは過去かこに十萬億の仏にあいまいらせて供養くやうをなしまいらせて候いける者が法華經計りほけきやうばかをば用もちいまいらせず候いけれども仏くやうの功德莫大くどくばくだいなりければ謗法ぼうほうの罪つみに依よりて貧賤ひんせんの身とは生れて候へども又此の經を信ずる人となれりと見こへて候、此これをば天台てんだいの御釈いに云く「人の地に倒れて還かえつて地より起こつが如ごとし」等云云、地にたうれたる人は・かへりて地よりをく、法華經謗法ほけきやうぼうほうの人は三惡並さんあくならびに人天にんてんの地には・たうれ候へどもかへりて法華經ほけきやうの御手みてにかかりて仏になるとことわられて候。

しかるにこの上野の七郎次郎は末代まつだいの凡夫武士ぼんぶぶしの家に生れて悪人あくにんとは申すもう
べけれども心は善人ぜんにんなり、其そのの故ゆえ

は日蓮にちれんが法門ほうもんをば上かみ一人より下した万民ばんみんまで信じ給たまはざる上たまたま信ずる人あ

れば・或あるは所領しよりよう・或あるは田畠等でんぱたにわづらひをなし結句けっくは命に及ひとびとぶ人人ひとびともあり信

じがたき上・はは故上野は信じまいらせ候いぬ、又此の者敵子となりて人も

すすめぬに心中しんちゆうより信じまいらせて上下万人じやうげばんにんにあるいは・いさめ・或あるはをど

し候いつるに・ついに捨つる心なくて

候へばすでに仏になるべしと見へ候へば天魔てんま・外道げどうが病をつけてをどさんと

心み候か、命はかぎりある事なり・すこしも・をどろく事なかれ、又鬼神きじんめ

らめ此の人をなやますは剣をさかさまにのむか又大火たいかをいだくか、三世十方さんぜじゅうぽう

の仏の大怨敵おんてきとなるか、あなかしこ・あなかしこ、此の人のやまいを忽たちまちにな

をして・かへりてまほりとなりて鬼道の大苦をぬくべきか、其その義なくして

現在げんざいには頭破ずはし七分ちふんの科とがに行われ後生ごしやうには大無間地獄むげんじごくに墮おつべきか、永くど

めよ・とどめよ、日蓮にちれんが言をいやしみて後悔こうかいあるべし・後悔こうかいあるべし。

弘安五年二月廿八日

下伯耆房

四二一 薙三枚御書こしよ

1587p

薙三枚・生和布一籠かこ・給たまいあ了わんぬ。

そもそも

抑 三月一日より四日にいたるまでの御あそびに心なぐさみて・やせやま
いもなをり虎とるばかりをばへ候上此の御わかめ給びて師子ししにのりぬべくを
ばへ候。

さては財たからはところにより人によつてかわりて候、此の身延の山には石は多

けれども餅なし、こけは多けれどもうちしく物候はず、木の皮をはいでしき
物とす・むしろいかでか財たからとならざるべき。

億耳居士こじと申せし長者ちやうじやは足のうらに・けのをいて候いし者なり、ありきのところ・いへの内は申すにをよばず・わたを四寸しきて・ふみし人なり、これは・いかなる事ぞと申せば先世せんぜに・たうとき僧に・くまのかわをしかせしゆへとみへて候。

いわうや日本にほん国は月氏がっしより十万よりをへだてて候辺国なる上・へびすの島いんが・因果いんがのことはりも弁わきまえまじき上・末法まつぽうになり候いぬ、仏法ぶつぽうをば信ぶつぽうずるやうにてそしる国なり、しかるに法華經ほけきようの御ゆへに名をたたせ給たまう上・御むしるを法華經ほけきようにまいらせ給たまい候いぬれば。

四二二 芋一駄御書こしよ

1588p

いも一駄はじかみ五十ぱをくりたびて候。

このみのぶのやまと申し候は・にしはしらねのたけ・つねにゆきをみる、
ひんがしにはてんしのたけ・つねにひをみる、きたはみのぶのたけ・みなみ
はたかとのたけ四山のあひ・はこのそこのごとし、いぬゐのすみより・か
はながれて・たつみのすみにむかう・かかるいみじきところみねには・せひ
のこへ・たには・さるのさけび木は・あしのごとし・くさは・あめににた
り、しかれども・かかるいもはみへ候はず、はじかみはをひず、いしにて
少しまもりやわらかなり、くさににて・くさよりもあぢあり。
あげ候いぬれば御心ざしはさだめて釈迦仏しろしめしぬらん、
恐れ謹言。

法華經に申し
ほけきよう　もう
きようきようきんげん

八月十四日

にちれん
日蓮在御

判

ごへんじ
御返事

閻浮提中飢餓

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□ 劫起等云云、人王三十代

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

ずして三代仏罰にあたる

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

の阿弥陀仏云云、

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

す、日蓮にあだをなす人は惣て日蓮を犯す、

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

「経を讀誦し書持すること有らん者を見て輕賤憎嫉して結恨を懷かん」等云

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

云、又云く「多病

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

を修し方に順て病を

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

治せば更に他の疾を増し・或は復死を致す」又云く「若し自ら病有らん人に

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

の救療すること無くなく設たい良薬を服すとも而も復増劇せん」等云云、弘法大師
は後に望んで戯論けろんと作す、東寺の一門上御室より下一切の東寺の門家は法華經
を戯論けろんと云云、叡山の座主並びに三千の大衆えいざん □日本国・山寺一同の云く □
だいになきよう
□ □大日經等云云、智証大師の云く法華尚及ばず等云云、園城の長吏並び
まつりゆう
に一国の末流等の云く法華經は真言經に及ばずと云云、此の三師を用ゆる
こくしゆつ
国主終に法皇尽了んぬ、明雲座主の義仲に殺されし、承久に御室思い死に
ほうごう おわ ざす じようきゆう おむろ
せし是なり。
これ

願くは我が弟子等は師子王の子となりて群狐に笑わるる事なかれ、過去
でし しし
おんのんこう このかたにちれん
遠遠劫より已来日蓮がごとく身命しんみょうをすてて強敵の科を顕せ・師子は値いがた
かるべし、国主の責め・なををそろし・いわうや閻魔えんまのせめをや、日本国の
こくしゆ
せめは水のごとし・ぬるるを・をそるる事なかれ、閻魔えんまのせめは火のごとし
せめは水のごとし・ぬるるを・をそるる事なかれ、閻魔えんまのせめは火のごとし
だいいねはんきよう
・裸にして入ると・をもへ、大涅槃經の文の心は仏法を信じて今度生死をは
ぶつぼう このたびしうじ

なるる人のすこし心のゆるなるをすすめむがために疫病^{えきびょう}を仏のあたへ給^{たま}うは
げます心なり・すすむる心なり。

にちれん

ほんぶ

てんげん

さんぜ

日蓮は凡夫なり天眼なければ一紙をもみとをすことなし、宿命なければ三世を知ることなし、而れども此の経文のごとく日蓮は肉眼なれども天眼宿命□

にほんこく

ぶつげん

るふ

はつしゅう

じゃせいかんど

がっし

□□日本国七百余歳の仏眼の流布せしやう、八宗・十宗の邪正漢土・月氏の

ろんし

にんし

しょうれつ

はちまん

はつしゅう

じゃせいかんど

がっし

論師・人師の勝劣八万十二の仏経の旨趣をあらすいちし□□・我が朝の

ぼうこく

こ

こ

ぶきよう

ししゆ

こ

みなほけきよう

亡国となるべき事先に此れをかんがへて宛も符契のごとし、此れ皆法華経の

おんちから

しか

こくしゆ

をさめて

あだをなせしかば、

ほんぶ

御力なり、而るを国主は讒臣等が凶言を・をさめてあだをなせしかば、凡夫

どうり

こ

こ

たびたび

な

なれば道理なりとをもつて退する心なかりしかども度度あだをな。

四二四

衆生身心御書

1590p

しゆじよう

しんしん

たま

そ

しゆじよう

衆生の身心をとかせ給う其の衆生の心にのぞむとて・とかせ給へば人の

しゆじよう

説なれども衆生の心をいはず、かるがゆへに随他意の経となづけたり、譬へ

たと

ばさけもこのまぬをやのきわめてさけをこのむいとをしき子あり、かつはい
とをしみ・かつは心をとらんがために・かれにさけをすすめんがために・
父母ふぼも酒をこのむよしをするなり、しかるをはかなき子は父母ふぼも酒をこのみ
給たまうと・をもへり。

提謂經と申もうす經は人天にんてんの事をとけり、阿含經と申もうす經は二乗にじようの事とかせ

給たまう、華嚴經と申もうす經は菩薩ぼさつのことなり、方等ほうとう・般若經等はんによきようは・或は阿含經・

提謂經ににたり、・或は華嚴經ある けこんきようにもにたり、此れ等の經經こ きようきようは末代の凡夫まつだい ほんぶこれ

をよみ候へば仏の御心に叶かなうらんとは行者ぎやうじやは・をもへども・くはしく・これ

をろむずれば己おのが心をよむなり、己おのが心は

本よりつたなき心なれば・はかばかしき事なし、法華經ほけきようと申もうすは随意ずいじいと申もうし

て仏の御心をとかせ給たまう、仏の御心はよき心なるゆへに・たとい・しらざる

人も此の經をよみたてまつれば利益りやくはかりなし、麻の中りやくのよもぎ・つつの中

のくちなは・よき人にむつぶもの・なにとなければ心も・ふるまひも言も
・なをしくなるなり、ほけきょう法華経もかく

のごとし・なにとなけれども・この経を信じぬる人をば仏のよき物と・をば
すなり、此の法華經ほけきょうにをひて又機きにより時により国によりひろむる人により
・やうやうにかわりて候をば等覺とうかくの菩薩ぼさつまでも・このあわひをば・しらせ
給たまわずとみへて候、まして末代まつだいの凡夫ぼんぷは・いかでか・ちからひを・ををせ候
べき。

しかれども人のつかひに三人あり、一人はきわめてこざかしき、一人はは
かなくもなし又こざかしからず、一人はきわめて・はかなくたしかなる、此
の三人に第一だいいちはあやまちなし、第二は第一だいいちほどこそ・なけれども・すこしこ
ざかしきゆへに主の御ことばに私の言をそうるゆへに第一だいいちのわるきつかいと
なる、第三はきわめて・はかなく

あるゆへに私の言をまじへず・きわめて正直しやうじきなるゆへに主の言ばを・たがへ
ず、第二よりもよき事にて候あやまつて第一だいいちにも・すぐれて候なり、第一だいいちを

ば月支がつしの四依しえにたとつ、第二だいにをば漢土かんどの人師にんしにたとつ、第三だいにをば末代まつだいの凡夫ぼんぷの中に愚癡ぐちにして正直しやうじきなる物にたとつ。

仏ぶつ在世ざいせはしばらく此これを・をく仏の御入滅にゆうめつの次の日より一千年をば正法しやうほう

と申もうす、この正法しやうほう一千年を二つにわかつ、前の五百年が間はしやうじやうきやう小乗經しやうじやうきやう ひろ

まらせ給たまう、ひろめし人人ひとびとは迦葉かしやう・阿難あなん等なり、後の五百年は馬鳴めみやう・竜樹りゆうじゆ・

無著むぢやく・天親てんじん等 権大乘經こんだいじやうきやうを弘通ぐつうせさせ給たまう、法華經ほけきやうをば・かたはし計ばかりかけ

る論師ろんしもあり、又つやつや申もうしいださぬ人もあり、正法しやうほう一千年より後の論師ろんし

の中には少分ぶつせつを仏説ぶつせつににたれども多分たぶんをあやまりあり、あやまりなくして而しかも

たらざるは迦葉馬鳴かしやうめみやう・阿難あなん・竜樹りゆうじゆ・無著むぢやく・天親てんじん等なり、像法ぞうほうに入り一千年・

漢土かんどに仏法ぶつほうわたりしかば始めは儒家じゆけと相論そうろんせしゆへにいとまなきかのゆへに

仏教ぶつきやうの内の大小だいしやう・権実こんじつの沙汰さたなし、やうやく仏法ぶつほう流布るふせし上・月支がつしより・

かさねがさね仏法ぶつほうわたり来るほどに・前の人人ひとびとは・かしこきやうなれども後

にわたる経論きょうろんをもつて・みれば・はかなき事も出来しゅったいす、又はかなくをもひ
し人ひと人もかしこくみゆる事もありき、結句けっくは十流じゅうりゅうになりて千万せんまんの義ありしか
ば愚者ぐしゃはいづれに・つくべしともみへず、智者ちしやとをばしき人は辺へん執しゅうかぎりな
し、而れしかども最極は一同の義あり・

いわゆるいちだいいち
所謂一代第一は華嚴經・第二は涅槃經・第三は法華經此の義は上一人より下
ばんみん
万民にいたるまで異義なし、大聖とあうぎし法雲法師・智蔵法師等の十師の
義一同なりしゆへなり。

しか ぞうほう
而るを像法の中の陳隋の代に智と申す小僧あり後には智者大師とがうす、

ほうもん
法門多しといへども詮するところ法華・涅槃華嚴經の勝劣の一つ計りなり、

ほうし いわ ぶつぼう
智・法師云く仏法さかさまなり云云、陳主此の事をたださんがために南北の

えこう そつじょう えこう そつず
十師の最頂たる恵 僧上・恵光僧都・恵栄法蔵法師等の百有余人を召し合わ

ほけきょう
せられし時・法華經の中には

しよきょう
「諸經の中に於て最も其の上に在り」等云云、又云く「已今当説最為難信難解」

むりょうぎきょう いわ ま かはんや けこんかいこう
等云云、已とは無量義經に云く「摩訶般若・華嚴海空」等云云、当とは涅槃經

いわ はんや ねはん
に云く「般若はら蜜より大涅槃を出だす」等云云、此の經文は華嚴經・涅槃經

ほけきょうまさ かくかく えつう
には法華經勝ると見ゆる事赫赫たり明明たり御会通あるべしと・せめしかば、

・或は口をとぢ・或は悪口をはき・或は色をへんじなんど・せしかども、陳主
立つて三^{はい}拜し百官^{たなごころ} 掌^{およ} をあわせしかば力及ばずまけにき。

一代の中には第一法華經にてありしほどに像法の後の五百に新訳の經論
重ねてわたる大宗皇帝の貞觀三年に玄奘と申す人あり月支に入りて十七年

・五天の仏法を習いきわめて貞觀十九年に漢土へわたりしが・深密經・瑜伽
論・唯識論・法相宗をわたす、玄奘云く「月支に宗宗多しといへども此の

宗・第一なり」太宗皇帝は又漢土第一の賢王なり玄奘を師とす、此の宗の所詮
に云く「・或は三乘方便・一乘真實」・或は一乘方便・三乘真實・又云く

「五性は各別なり決定性と無性の有情は永く仏に成らず」等と云云、此の義
は天台宗と水火なり而も天台大師と章安大師は御入滅なりぬ其の已下の

人人は人非人なり・すでに天台宗破れてみへしなり。

其の後則天皇皇后の御世に華嚴宗立つ前に天台大師に・せめられし六十卷の

華嚴經けこんきょうをば・さしをきて後に日照三蔵さんぞうのわたせる新訳しんやくの華嚴經八十卷をもつて立てたり、此の宗のせんにいわく華嚴經は根本法輪こんぽんほうりん・法華經は枝末法輪しまつほうりん等云云、則天皇后そくてんこうごうは尼にてをてんだいしゅうはせしが内外典に・こざかしき人なり、慢心まんしんたかくして天台宗をさげをばしてあり

しなり、法相ほつそうといひ華嚴宗けこんしゅうといひ二重ふたへきに法華經ほつきやうかくれさせ給たまふ。

其その後玄宗皇帝げんそうこうていの御宇ぎやうに月支がつしより善無畏三藏ぜんむいさんそう・金剛智三藏こんこうちさんそう・不空三藏ふくうさんそう・

大日經だいにちきやう・金剛頂經こんこうちやうきやう・蘇悉地經そしつちきやうと申もうす三經をわたす、此の三人は人がらとい

ふ法門ほつもんといひ前前の漢土さんどの法師にんしには対すべくもなき人人ひとびとなり、而も前になか

りし印しんこんと真言しんこんとをわたすゆへに仏法ぶつぽうは已前いぜんには此の国になかりけりと・をば

せしなり、此の人人ひとびとの云いわく天台宗てんだいしゅうは華嚴けこん・法相ほつそう・三論さんろんには勝すぐれたり・しかれ

ども此の真言經しんじんには及およばずと云云そ、其の後妙樂大師みやうらくだいしは天台大師てんだいだいしのせめ給たまはざ

る法相宗ほつそうしゅう・華嚴宗けこんしゅう・真言宗しんこんしゅうをせめ給たまいて候たいへども天台大師てんだいだいしのごとく公場こうじやうに

てせめ給たまはざれば・ただ闇夜やみよのにしきのごとし、法華經ほつきやうになき印しんこんと真言しんこんと現前げんぜん

なるゆへに皆人みな・一同しんこんに真言しんこんまさりにて有りしなり。

像法ぞうぽうの中に日本国にほんこくに仏法ぶつぽうわたり所謂いわずるきんめいてんのう欽明天皇きんめいてんのうの六年ろくねんなり、欽明きんめいより桓武かんむに

いたるまで二百余年が間は三論さんろん・成実じやうじつ・法相ほつそう・俱舍ぐしゃ・華嚴律けこんの六宗ろくしゅう弘通くわうつうせ

いたるまで二百余年が間は三論・成実・法相・俱舍・華嚴律の六宗弘通せ

り、真言宗は人王四十四代・元正天皇の御宇にわたる、天台宗は人王第四

十五代聖武天王の御宇にわたる、しかれどもひろまる事なし、桓武の御代に

さいちようほつし
最澄法師・後には伝教大師とがうす、

入唐已前に六宗を習いきわむる上・十五年が間・天台・真言の二宗を山に

こもり給いて御覧ありき、入唐已前に天台宗をもつて六宗をせめしかば

七大寺皆せめられて最澄の弟子となりぬ、六宗の義やぶれぬ、後延暦廿三

年に御入唐・同じき廿四年御帰朝・天台・真言の宗を日本国にひろめたり、

但し勝劣の事は内心に此れを存じて人に向つてとかざるか。

同代に空海という人あり後には弘法大師とがうす、延暦廿三年に御入唐

・大同三年御帰朝但真言の一宗を習いわたす、此の人の義に云く法華経は尚

華嚴経に及ばず何に況や真言にをひてをや。

伝教大師の御弟子に円仁という人あり後に慈覚大師とがうす、去ぬる承和

五年の御入唐・同十四年に御帰朝・十年が間・真言・天台の二宗をかくす、
日本国にて伝教大師・義真・円澄に天台・真言の二宗を習いきわめたる

上・漢土にわたりて十年が間・八箇の大徳にあひて真言を習い宗叡・志遠等に値い給いて天台宗を習う、日本に帰朝して云く天台宗と真言宗とは同じく醍醐なり俱に深秘なり等云云、宣旨を申して・これにそう。

其の後円珍と申す人あり後には智証大師とがうす、入唐已前には義真和尚

の御弟子なり、日本国にして義真・円澄・円仁等の人人に天台・真言の二宗

習いきわめたり、其の上去ぬる仁嘉三年に御入唐同貞觀元年に御帰朝七年

が間・天台・真言の二宗を法全良・等の人人に習いきわむ、天台・真言の二

宗の勝劣は鏡をかけたなり、後代に一定

あらそひありなん定むべしと云つて天台・真言の二宗は譬へば人の両の目・

鳥の二の翼のごとし、此の外異義を存ぜん人人をば祖師・伝教大師にそむく

人なり山に住むべからずと宣旨を申しそへて弘通せさせ給いき・されば漢土

・日本に智者多しといへども此の義をやぶる人はあるべからず、此の義まこ

とならば習う人人は必ず仏にならせ給いぬらん、あがめさせ給う国王等は必ず世安穩になりぬらんと・をばゆ。

但し予が愚案は人に申せども、御もちあるべからざる上・身のあだとなるべし、又きかせ給う弟子・檀那も安穩なるべからずとをもひし上其の義又たがわず、但此の事は一定仏意には叶わでもや・あるらんと・をばへ候、ほけきよう法華經一部八卷・二十八品には此の經に勝れたる經をせば此の法華經は十方の仏あつまりて大妄語をあつめさせ給えるなるべし、随つて華嚴・涅槃・般若・大日經・深密等の經經を見るに「諸經の中に於て最も其の上に在り」の明文をやぶりたる文なし、随つて善無畏等玄奘等弘法・慈覺・智証等種種のたくみあれども法華經を大日經に対してやぶりたる經文はいだし給わず、但印・真言計りの有無をゆへとせるなるべし、数百卷のふみをつくり

漢土・日本に往復して無尽のたばかりをなし宣旨を申しそへて人を・をどさ
れんよりは経文分明ならばたれか疑をなすべき、つゆつもりて河となる
河つもりて大海となる塵つもりて山となる山かさなりて須弥山となれり小事
つもりて大事となる何に況や此の事は最も大事なり、疏をつくられるにも
両方の道理・文証をつくさるべ

かりけるか、又宣旨も両方を尋ね極めて分明の証文をかきのせていましめあるべかりけるか。

已今当の経文は仏すらやぶりがたし何に況や論師・人師・国王の威徳をもつて・やぶるべしや、已今当の経文をば梵王・帝釈・日月・四天等聴聞して各各の宮殿にかきとどめて・をはするなり、まことに已今当の経文を知らぬ人の有る時は先の人人の邪義は・ひろまりて失なきやうにては・ありとも・此の経文を・つよく立て退転せざる

こわ物出来しなば大事出来すべし、いやしみて・或はのり・或は打ち・或はながし・或は命をたたんほどに・梵王・帝釈・日月・四天をこりあひて此の行者のかたうどを・せんほどに・存外に天のせめ来りて民もほろび国もやぶれんか、法華經の行者はいやしけれども守護する天こわし、例せば修羅が日月をのめば頭七分にわる犬は師子をほゆれば・はらわたくさる、今予みる

に日本国かくのごとし、又此れを供養せん人人は法華經供養の功德あるべし、
伝教大師釈して云く、「讃めん者は福を安明に積み謗せん者は罪を無間に開
かん」等云云。

ひへのはんを辟支仏に供養せし人は宝明如来となり・つちのもちゐを仏に
供養せしかば閻浮提の王となれり、設いこうをいたせども・まことならぬ事
を供養すれば大悪とは・なれども善とならず、設い心をろかに・すこしきの
物なれども・まことの人に供養すれば・こう大なり、何に況や心ざしありて
・まことの法を供養せん人人をや。

其の上当世は世みだれて民の力よわし、いとまなき時なれども心ざしのゆ
くところ山中の法華經へ・まうそうか・たかなををくらせ給う福田によき
たねを下させ給うか、なみだもとどまらず。

四二五

白米一俵御書ごしよ

1596p

白米一俵・けいもひとたわら・こふのりひとかご・御つかいを・もつて
わざわざをくられて候。

人にも二つの財たからあり一には衣二には食なり経に云く「有情は食に依つて住

す」と云云文の心は生ある者は衣と食によつて世にすむと申す心なり、魚は

水にすむ水を宝とす木は地の上にをいて候・地を財たからとす、人は食によつて生

あり食を財たからとす、いのちと申す物は一切の財たからの中に第一の財たからなり、遍満へんまん

三千界無有直身命しんみょうととかれて

三千大千世界にみてて候財たからも・いのちには・かへぬ事に候なり、されば・い

のちは・ともしびのごとし食はあぶらのごとし、あぶらつくれば・ともしび

きへぬ食なければ・いのちたへぬ、一切いっさいのかみ・仏をうやまいたてまつる・
始の句には南無なむと申もうす文字を・をき候なり、南無なむと申もうすは・いかなる事ぞと
申もうすに・南無なむと申もうすは天竺てんじくのことばにて
候、漢土かんど・日本にほんには歸命きみょうと申もうす歸命きみょうと申もうすは我が命を仏に奉たてまつると申もうす事なり、
我が身には分に随したがいて妻子さいし・眷属けんぞく・所領しりょう・金銀等きんぎんをもてる人人ひとびともあり又財たから
なき人人ひとびともあり、財たからあるも財なきも命と申もうす財にすぎて候財は候はず、
さればいにしへの聖人しやうにん・賢人けんじんと申もうすは命を仏にまいらせて仏にはなり候な
り。

いわゆる雪山童子せつせんどうじと申せし人は身を鬼にまかせて八字をならへり、薬王菩薩やくおうぼさつ
と申せし人は臂ひじをやいて法華經ほけきやうに奉たてまつる、我が朝にも聖徳太子しやうとくたいしと申せし人は手
のかわをはいで法華經ほけきやうをかき奉たてまつり、天智天皇てんのうと申せし国王は無名指こくおうと申もうすゆ
びをたいて釈迦仏しゃかぶつに奉たてまつる、比れ等は賢人けんじん・聖人の事なれば我等われらは叶かないがたき

事にて候。

ただし仏になり候事は凡夫は志ざしと申す文字を心へて仏になり候なり、
志ざしと申すはなに事ぞと委細にかんがへて候へば観心の法門なり、
観心の法門と申すはなに事ぞとたづね候へばただ一つきて候衣を法華經に

まいらせ候が身のかわをわぐにて候ぞ、うへたるよに・これはなしては・け
うの命をつぐべき物もなきに・ただひとつ候これうを仏にまいらせ候が身命
を仏にまいらせ候にて候ぞ、これは薬王のひぢをやき雪山童子の身を鬼にた
びて候にも・あいをとらぬ功德にて候へば聖人の御ためには事供やう凡夫の
ためには理くやう止観の第七の

かんじん

観心の檀ばら蜜と申す法門なり、まことの・みちは世間の事法にて候、

こんごうみょうぎよう

金光明経には「若し深く世法を識らば即ち是れ仏法なり」ととかれ涅槃経

いっさいせけん

には「一切世間の外道の経書は皆是れ仏説にして外道の説に非ず」と仰せら

みょうらくだいし

れて候を妙楽大師は法華経の第六の巻の「一切世間の治生産業は皆実相と

いはい

相違背せず」との经文に引き合せて

心をあらわされて候には彼れ彼れの二経は深心の経経

なれども彼の経経

ほけきよう

はいまだ心あさくして法華経に及ばざれば世間の法を仏法に依せてしらせて

候、法華經はしからず・やがて世間の法が仏法の全体と釈せられて候。

爾前の經の心心は、心より万法を生ず、譬へば心は大地のごとし草木は万

法のごとしと申す、法華經はしからず心すなはち大地・大地即草木なり、爾前

の經經の心は心のすむは月のごとし心のきよきは花のごとし、法華經はし

からず月こそ心よ花こそ心よと申す法門なり。

此れをもつてしろしめせ、白米は白米にはあらずすなはち命なり。

美食を・をさめぬ人なれば力をよばず山林にまじわり候いぬ、されども凡夫

なればかんも忍びがたく熱をもふせぎがたし、食ともし表。目が万里の一食

・忍びがたく・思子孔が十旬・九飯堪ゆべきにあらず、読經の音も絶えぬべ

し觀心の心をろそかなり。

しかるに・たまたまの御とぶらいただ事にはあらず、教主釈尊の御すす

めか將又過去宿習の御催か、方方紙上に尽し難し、恐恐謹言。

四二六

食物三徳御書 さんとくごしょ

1598p

かゆへに大^{たい}國^{こく}の王は民を・をやとし民は食を天とすとかかれたり、食には三
の徳あり、一には命をつぎ二にはいろをまし三には力をそう、人に物をほど
こせば我が身のたすけとなる、譬^{たと}へば人のために火をともしせば我がまへあき
らかなるがごとし、悪をつくるものを・やしなへば命をますゆへに氣^{いき}ながし、
色をますゆへに眼^{まなこ}にひかりあり、力をますゆへに・あしはやく・てきく、か
るがゆへに食をあたへたる人かへりて・いろもなく氣^{いき}もゆわく力もなきほう
をうるなり。

一切^{いっさい}経^{きょう}と申^{もう}すは紙^しの上に文字^{もんじ}をのせたり、譬^{たと}へば虚空^{こくう}に星月^{せいげつ}のつらなり
大地^{だいち}に草木^{そうもく}の生ぜるがごとし、この文字^{もんじ}は釈迦^{しゃか}如来^{にょらい}の氣^{いき}にも候^{もち}なり、氣^{いき}と申^{もう}す

は生氣なり・この生氣に二あり、一には九界。

四二七 一定証伏御書ごしよ

1598p

一定と証伏せられ候いしかば其その後の智人ちじんかずをしらず候へども今に四百歳が間さで候なり、かるがゆへに今に日本にほん國の寺く・一万余三千余の社さんぜん・四十九億九万四千八百二十八人の一切衆生いっさいしゅじょう・皆みな彼の三大師だいしの御弟子おんでしとなりて法華ほつけ最さい第一だいの經文きやうもん最第二最第三とをととされて候なり、されども始とがは失なきやうにて候へども・つゆつもりて大海たいかいとなり・ちりつもりて大山となる。

四二八

初穂御書ごしよ

1599p

石たま給いて御はつをたるよし、法華經ほけきようの御宝前ほうぜんへ申し上げて候かしこまり申す
よし、けさんに入らせ給たまい候へ、恐恐きようきよう謹言。

十月二十一日

日蓮にちれん 在

御判

御所御返事ごへんじ

四二九

五大の許御書ごしよ

1599p

□ □ りげなくなに事もかくの事 □ 不沙汰さたあるか。す御尋たずねあるべし、
或は前後ぜんごし・或は落經あるにても候はず。 □ ものくるわしきとはこれなり法門ほうもん
もかしこきやうにて候へばわるかるべし。

追申

五大のもとへは三伊房も申もうして候・他所に於いて之これを聞かしめ将又事に
依より子細しさいあ有るべきか、伯耆阿闍梨事は但我祖なるやうなるべし、設たとひ件くだんの人
見参いへ為そと雖も其の義を存じて候へ。

四三〇

いちだいじごしょ
一 大事御書

1599p

あなかちに申もうさせ給たまへ、日蓮にちれんが身のうえの一大事いちだいじなり、あなかしこ・あな
かしこ。

五月十三日

にちれん
日蓮在御判

四三二

身延相承書

「総付嘱書」

1600p

にちれんいちよう

こうぼう

日蓮一期の弘法、

白蓮阿闍梨日興に之を付嘱す、

本門弘通の大導師たるべ

きなり、

国主此の法を立てらるれば富士山に本門寺の戒壇を建立せらるべき

こくしゆ

なり、

時を待つべきのみ、事の戒法と云うは是なり、

就中我が門弟等・此の

状を守るべきなり。

弘安五年壬午九月 日

日蓮在御判血脈の次第

にちれんにつ

こつあん

かいほう

これ

なかんずく

もんてい

しだい

にちれん

けちみやく

しだい

にちれん

けちみやく

しだい

にちれん

けちみやく

しだい

日蓮日興

四三二

池上相承書

「別付嘱書」

1600p

しゃくそん

釈尊・

五十年の説法、

白蓮阿闍梨日興に相承す、

身延山久遠寺の別当た

釈尊・

五十年の説法、

白蓮阿闍梨日興に相承す、

身延山久遠寺の別当た

釈尊・

五十年の説法、

るべきなり、背く在家・出家どもの輩は非法の衆たるべきなり。

二うあん

弘安五年壬午十月十三日

州池上

日蓮^{にちれん}

在御判

武

先ず日蓮聖人の本意は法華本門に於ては曾つて異義有るべからざるの処、
 其の整足の弟子等忽に異趣を起して法門改変す況や末学等に於ては面面相
 を生ぜり、故に日興の門葉に於ては此の旨を守つて一同に興行せしむべきの
 状仍つて之を録す。

一、聖人・御在生の時弟子六人を定むる事、弘安五年十月 日 之を定む

一 日昭 弁阿闍梨

二 日朗 大国阿闍梨

三 日興 白蓮阿闍梨

四 日向 佐渡阿闍梨

五 日頂 伊予阿闍梨 あじゃり

六 日持 蓮華阿闍梨 れんげあじゃり

此の六人の内五人と日興一人と和合せざる由緒条条の事。

一、五人・一同に云く、日蓮聖人の法門は天台宗なり、仍つて公所に捧ぐる状に云く天台沙門と云云、又云く先師日蓮聖人天台の余流を汲むと云云、又云く桓武聖代の古風を扇いで伝教大師の余流を汲み法華宗を弘めんと欲す云云。

日興が云く、彼の天台・伝教所弘の法華は迹門なり今日蓮聖人の弘宣し給う法華は本門なり、此の旨具に状に載せ畢んぬ、此の相違に依つて五人と日興と堅く以て義絶し畢んぬ。

一、五人・一同に云く、諸の神社は現当を祈らんが為なり仍つて伊勢太神宮と二所と熊野と在在所所に参詣を企て精誠を致し二世の所望を願う。

日興一人云く、謗法の国をば天神・地祇並びに其の国を守護するの善神捨離して留らず、故に悪鬼神其の国土に乱入して災難を致す云云、此の相違に依つて義絶し畢んぬ。

一、五人・一同に云く、如法經を勤行し之を書写し供養す仍つて在在所に法華三昧又は一日經を行ず。

日興が云く、此くの如き行儀は是れ末法の修行に非ず、又謗法の代には行ずべからず、之に依つて日興と五人と堅く以て不和なり。

一、五人・一同に云く、聖人の法門は天台宗なり仍つて比叡山に於て出家授戒し畢んぬ。

日興が云く、彼の比叡山の戒は是は迹門なり像法所持の戒なり、日蓮聖人の受戒は法華本門の戒なり今末法所持の正戒なり、之に依つて日興と五人と義絶し畢んぬ。

已前の条条大綱此くの如し此の外巨細具に注し難きなり。

一、甲斐の国・波木井郷・身延山の麓に聖人の御廟あり而るに日興彼の御廟に通ぜざる子細は彼の御廟の地頭南部六道入道法名日円は日興最初発心の弟子なり、此の因縁に依つて聖人・御在所九箇年の間帰依し奉る滅後其の年月義絶する条条の事。

釈迦如来を造立供養して本尊と為し奉るべしは一。

次に聖人・御在所九箇年の間・停止せらるる神社参詣其の年に之を始む二
所三島に参詣を致せり是二。

次に一門の勧進と号して南部の郷内のフクシの塔を供養奉加之有り是

三。

次に一門いちもん仏事ぶつじの助成すけせいと号なづして九品くほん念仏ねんぶつの道場どうじょう一字いち之これを造立そうたてし莊嚴そうごんせり、
甲斐かい国のくに其そこの処ところなり是四。

已上四箇条よっしほうの謗法きやうくわんを教訓きょうくんするに日向こゝれ之ゆゑを許ゆるすと云云、此の義ぎに依よつて去いぬる
其その年月ねんげつ・彼はきりの波木井なまきい入道にゅうどうの子孫しそんと永もつく以してて師弟しだいの義絶ぎぜつし畢おわんぬ、よつて
御廟ごびやうに相通こひようぜざるなり。

一、聖人しやうじんの御例ごれいに順したがひ日興にっこう六人りくじんの弟子でしを定さだむる事。

一 日目

二 日華

三 日秀

聖人しやうじんに常随じやうずい給仕きゆうしす

四 日禅

五 日仙

六 日乗 聖人に値い奉らず。

已上の五人は詮ずるに聖人給仕の輩なり、一味和合して異義有るべからざるの旨・議定する所なり。

一、聖人・御影像の事。

・或は五人と云い・或は在家と云い絵像・木像に図し奉る事在所所に其の数を知らず而るに面面不同なり。

爰に日興が云く、御影を図する所詮は後代に知らしめん為なり是に付け非に付け有りの儘に図し奉る可きなり、之に依つて日興門徒の在家・出家の輩聖人を見奉る仁等一同に評議して其の年月図し奉る所なり、全体異らずと雖も大概麁相に之を図す仍つて裏に書き付けを成すなり、但し彼の面の図像

一も相似ざる中に去る正和

二年日順図絵の本有り、相似の分なけれども自余の像よりも少し面影有り、
而る間後輩に彼此是非を弁ぜしめんが為裏書に不似と付け置く。

一、聖人御書の事 付けたり十一ヶ条

彼の五人・一同の義に云く、聖人・御作の御書釈は之無き者なり、縦令
少少之有りと雖も・或は在家の人の為に仮字を以て仏法の因縁を粗之を示し、
若は俗男・俗女の一毫の供養を捧ぐる消息の返札に施主分を書いて愚癡の者
を引撰したまえり、而るに日興、聖人の御書と号して之を談じ之を読む、
是れ先師の恥辱を顕す云々、故に諸方に散在する処の御筆を・或はスキ力工
シに成し・或は火に焼き畢んぬ。

此くの如く先師の跡を破滅する故に具に之を註して後代の亀鏡と為すな
り。

一、立正安国論一卷。

此れに兩本有り一本は文応元年の御作是れ最明寺殿宝光寺殿へ奏上の本なり、一本は弘安年中身延山に於て先本に文言を添えたもつ、而して別の旨趣無し只建治の広本と云う。

一、開目抄一卷、今開して上下と為す。佐土国の御作四条金吾頼基に賜う、

日興所持の本は第二転なり、未だ正本を以て之を校えず。

一、報恩抄一卷、今開して上下と為す。身延山に於て本師道善房 聖靈

の為に作り清澄寺に送る日向が許に在りと聞く、日興所持の本は第二転なり、未だ正本を以て之を校えず。

一、撰時抄一卷、今開して上中下と為す。

するが にしやま 駿河国西山由井某 それがし に賜る、正本日興 にっけい に上中二卷之れ在り 此中に面目 下卷に於いては日昭 もと が許に之在り。

一、下山抄一卷。 しもやま

甲斐 かい の国・下山郷 しもやまごう の兵庫五郎光基の氏寺・平泉寺の住僧因幡房日永追

出 いだ ざる時の述作なり、直 ただち に御自筆 じひつ を以て遣 もつ ざる、正本の在所を知らず。

かんじんのほんぞんしょう

一、観心本尊抄一卷。

一、取要抄一卷。

一、四信五品抄一卷。 ごぼん 「法門不審 ほうもんふしん の条条申 もう すに付いての御返事 ごへんじ なり仍 よ つて彼

の進状 これ を奥に之を書く。」

已上の三卷は因幡国富城荘の本主今は常住 じょうじゅう 下総 しもふさのくに 国五郎入道 ごろうだう 日常に賜わ

る、正本は彼の在所に在り。

一、本尊問答抄一卷。 ほんぞんもんどう

一、唱題目抄一卷。だいもく

此の書最初さいしよの御書文応年中常途天台宗じやうとてんだいしゆの義分ぎぶんを以て且もつく爾前しばらにぜん・法華ほっけの相違そういを註し給たまう、仍よつて文言義理共ぎりに爾しかなり。

一、御筆抄ほっけほんもんに法華本門ほっけほんもんの四字しじを加くわう、故ゆえに御書ごしよに之無これなしと雖いえども日興にっこう今義きに従したがつて之これを置おく、先例せんれい無あらきに非あらざるか。

一、本尊ほんぞんの事四箇条

一、五人一同いっわに云いく、本尊ほんぞんに於おいては釈迦如来しゃかにょらいを崇あがめめ奉たてまつべ
たり、随したがつて弟子でし・檀那等だんなの中なにも造立供養くようの御書ごしよ之これ在ありと云云、而しかる間
・盛さかんに堂舎たうかを造つくり、或あるは一躰あんちを安置あんちし、或あるは普賢ふげん・文殊もんじゆを脇士きやうじとす、仍よつて

しょうにん
聖人御筆の本尊ほんぞんに於ては彼の仏像ぶつぞうの後面かに懸け奉りたてまつ又は堂舎の廊これに之を捨て置く。

しょうにん
日興にっこうが云く、
しょうにん
聖人御立の法門ほうもんに於ては全く絵像・木像の仏・菩薩ぼさつを以て
ほんぞん
本尊と為さず、
ただごしょ
唯御書の意に任せて妙法蓮華經の五字を以て本尊ほんぞんと為す可し
すなわ
と即ち御自筆の本尊ほんぞん是なり

ごと
一、上の如く一同に此の本尊ほんぞんを忽緒し奉るの間・或は曼荼羅なりと云つて
しにん
死人を覆うて葬る輩やからも有り、
ある
或は又沽却する族やからも有り、
か
此くの如く輕賤
する間・多分たぶんは以て失せ畢おわんぬ。

にっこう
日興にっこうが云く、
ごほんぞん
此の御筆の御本尊は是れ一閻浮提えんぶだいに未だ流布せず正像しょうぞう末に
いま
未だ弘通せざる本尊ほんぞんなり、
しか
然れば則ち日興門徒の所持の輩やからに於ては左右無く
しそん
子孫にも譲り弟子等にも付嘱すべからず、
ふぞく
同一所に安置し奉り六人・一同に

守護し奉る可し、是れ偏に広宣流布の時本化国主御尋有らん期まで深く敬重し奉る可し。

一、日興弟子分の本尊に於ては一一皆書き付け奉る事・誠に凡筆を以て直に聖筆を黷す事最も其の恐れ有りと雖も・或は親には強盛の信心を以て之を賜うと雖も子孫等之を捨て、或は師には常随給仕の功に酬いて之を授与すと雖も弟子等之を捨て、之に依つて・或は以て交易し・或は以て他の為に盜まる、此くの如きの類い其れ数多なり故に所賜の本主の交名を書き付くるは後代の高名の為なり。

一、御筆の本尊を以て形木に彫み不信の輩に授与して輕賤する由諸方に其の聞え有り所謂日向日頂日春等なり。

日興の弟子分に於ては在家・出家の中に・或は身命を捨て・或は疵を被り若は又在所を追放せられ一分信心の有る輩に忝くも書写し奉り之を授与す

る者なり。

本尊^{ほんそん}人数^{にんすう}等又^{また}追放^{ついほう}人等、
頸^{くび}切^きられ、
死^しを致^{いた}す人等。

一、本門寺を建つ可き在所の事。

五人一同に云く、彼の天台・伝教は存生に之を用いらるの間・直に寺塔を立てたもう、所謂大唐の天台山本朝の比叡山是なり而るに彼の本門寺に於ては先師何の国何の所とも之を定め置かれずと。

爰に日興云く、凡そ勝地を撰んで伽藍を建立するは仏法の通例なり、然れすべき由・奏聞し畢んぬ、仍つて広宣流布の時至り国主此の法門を用いらるの時は必ず富士山に立てらるべきなり。

一、王城の事。

右、王城に於ては殊に勝地を撰ぶ可きなり、就中仏法は王法と本源躰一なり居処随つて相離るべからざるか、仍つて南都・七大寺・北京比叡山・先蹤

之同じ後代改まらず、然れば駿河の国富士山は広博の地なり一には扶桑国なり二には四神相応の勝地なり、尤も本門寺と王城と一所なるべき由且は往古の佳例なり且は日蓮大聖人の本願の所なり。

一、日興集むる所の証文の事。

御書の中に引用せらるる若は経論書釈の文若は内外典籍伝の文等、或は大綱随義転用し、或は粗意を取つて述用し給えり、之に依つて日興散引の諸文典籍等を集めて次第に証拠を勘校す、其の功未だ終らず且らく集むる所なり。

一 内外論の要文上下二卷開目抄の意に依つて之を撰ぶ。

卷。

一本・迹弘經要文上 中 下三卷撰時抄の意に依つて之を撰ぶ。

一 漢土の天台・妙樂邪法を対治して正法を弘通する証文一卷。

一 日本にほんの伝教大師南都の邪宗でんぎようだいしなんとを破失して法華じゃしゅうの正法はしつを弘通ほっけする証文しょうもん一

已上七卷之を集めて未だ再治せず。

一、奏聞狀の事。

一 先師聖人文永五年申狀一通。 一同八年申狀一通。

一 日興其の年より申狀一通。

一 漢土かんどの仏法ぶつぽう先ずもつ以て沙汰さたの次第しだい之をこれ図す一通。

一 本朝ほんちよう佛法ぶつぽう先ずもつ以て沙汰さたの次第しだい之をこれ図す一通。

一 三時弘經ぐきようの次第しだい並びに本門ほんもん寺を建つ可き事。

一先師せんしの書しょ釈しゃく要文ようぶん一通。

一、追加八箇条。

きんねんいらいにっこうしよりゆう

近年以来日興所立の義を盗み取り己おのが義なと為す輩出来やからしゅったいする由緒条条ゆいちよの

事。

につちよう

一、寂仙房日澄おの始めて盗み取つて己おのが義なと為す彼の日澄につちようは民部阿闍梨みんぶあじゃりの

弟子でしなり、仍よつて甲斐国下山郷かいのくにしもやまごうの地頭左衛門四郎光長じとうさえもんは聖人しやうにんの御弟子おんでしなり御

遷化みんぶあじゃりの後民部阿闍梨を師なと為す僧帰依なり、而しかるに去いぬる永仁年中・新堂を

遷化の後民部阿闍梨を師と為す僧なり、而るに去る永仁年中・新堂を

造立し一駄仏を安置するの刻み、日興が許に來臨して所立の義を難ず、聞き
已つて自義と為し候処に正安二年民部阿闍梨彼の新堂並びに一駄仏を開眼
供養す、爰に日澄本師民部阿闍梨と永く義絶せしめ日興に帰伏して弟子と
為る、此の仁盗み取つて自義と為すと雖も後改悔歸伏の者なり、

一、去る永仁年中越後国に摩訶一と云う者有り天台宗の学匠なり日興が義
を盗み取つて盛んに越後国に弘通するの由之を聞く。

一、去る正安年中以来浄法房天目と云う者有り聖人に値い奉る日興が義を
盗み取り鎌倉に於て之を弘通す、又祖師の添加を蔑如す。

一、弁阿闍梨の弟子少輔房日高去る嘉元年中以来・日興が義を盗み取つて
下総の国に於て盛んに弘通す。一、伊予阿闍梨の下総国真間の堂は一駄仏
なり、而るに去る年月日興が義を盗み取つて四脇士を副う彼の菩薩の像は宝

冠形なり。

一、民部阿闍梨も同く四脇士を造り副う、彼の菩薩像は比丘形にして納衣のうえを著す、又近年以来諸神に詣ずる事を留むるの由聞くなり。

一、甲斐国に肥前房日伝と云う者有り、寂日房向じふはむかい背の弟子なり日興が義を盗み取つて甲斐国に於て盛んに此の義を弘通す是れ又四脇士を造り副う彼の菩薩の像は身皆金色剃髮の比丘形なり、又神詣を留むるの由之を聞く。

一、諸方に聖人の御書之を読む由の事。此の書札の抄別状有り之を見る

べし。

四三四

五人所破抄 しよは

1610p

そ おもんみればしよぶつけんえん
夫れ以れば諸仏懸遠の難きことは譬を曇華に仮り妙法値遇の縁は比を

うきぎ るい じんじゆ
浮木に類す、塵数三五の施化に猶漏れて正像二千の弘経も稍過ぎ已んぬ、

とつじようけんこ じようかいとも ゆる
鬪諍堅固の今は乗戒俱に緩うして人には弊惡の機のみ多し何の依憑しきこ

たといないげ さんぎ だいしようくんじゆつ
と有らんや、設い内外兼包の智は三祇に積み大小薰習の行は百劫を満つと

き せいとつ そ また なん
も時と機とを弁ぜず本と迹とに迷倒せば其れも亦信じ難からん。

ここ せんししようにんまのあた まつぼう な いえど むじよう
爰に先師聖人親り大聖の付を受けて末法の主為りと雖も、早く無常の相を

えんじやく きにゆつ こじ しょうけい ため ゆいてい
表して円寂に歸入するの刻五字を紹繼するが為に六人の遺弟を定めたもつ。

にじう
日昭と日朗と日興と日向と日頂と日持と已上六人なり。

ぶけ ささ いわ いまくげ
五人武家に捧ぐる状に云く未だ公家に奏せず。

てんだい しゃもん 天台の沙門日昭謹んで言上す。

せんしにちれん かたじけな せんしにちれん ほつけ 先師日蓮は忝くも法華の行者と為て専ら仏果の直道を顕し天台の余流を

酌み地慮の研精を尽すと云々。

いわ 又云く、日昭不肖の身為りと雖も兵火永息の為副将安全の為に法華の道場

かま を構え、長日の勤行を致し奉る、已に冥冥の志 有り豈昭昭の感無からんや

詮を取る。

てんだい しゃもん 天台沙門日朗謹んで言上す。

せんしにちれん によらい 先師日蓮は如来の本意に任せ先判の権経を闇いて後判の実教を弘通せし

むるに、最要未だ上聞に達せず愁鬱を懷いて空しく多年の星霜を送る玉を含

みて寂に入るが如く逝去せしめ畢んぬ、然して日朗忝くも彼の一乗妙典を

そうでん とこしなえこつ 相伝して鎮に 国家を祈り奉る 詮を取る。

てんだい ほつけしゅう 天台法華宗の沙門日向日頂謹んで言上す。

桓武聖代かんむせいだいの古風あおを扇あおぎ伝でん教大師きょうだいしの余流よりゅうを汲りっみ立正安国論りっしょうあんこくろんに准じゆんじて法華ほっけ

一乗いちじやうを崇あがめめられんことを請こつうの状つうし。右謹つしんで旧規かうきを検かんえたるに祖師そし・

伝教大師でんきやうだいしは延暦年中えんりやくに始めて叡山えいざんに登り法華宗ほっけしやうを弘通くつうしたもう云云。

又云いわく法華ほっけの道場どうじやうに擬こらして天長地久てんぢやうぢきやうを祈り今に断絶だんぜつすること無し詮せんを取る。

日興公家にっこうくげに奏そうし武家ぶけに訴いわえて云く。

日蓮聖人にちれんしやうにんは忝かたじけなくも上行菩薩じやうぎやうぼさつの再誕さいたんにして本門弘經ほんもんくぎやうの大権だいけんなり、所謂いわゆる大覚だいかく

世尊せそん未来の時機みらいじきを鑒かんみたまい世を三時に分ぶんち法しを四依しえに付つして以来いらい、正法千しやうぽうせん

年の内うちには迦葉かしよう・阿難等あなんの聖者せいじゃ先さきず小ひろを弘ひろめて大を略りやくす竜樹りやうじゆ・天親等てんじんの論師ろんし

は次に小を破やぶりて大を立つ、像法千年ざうぽうせんの間異域すなわには則すなわち陳隋兩主ちんずいの明時めいじに智者ちしや

は十師じしの邪義じゃぎを破やぶる、本朝ほんちやうには亦桓武天皇またかんむてんのうの聖代せいだいに伝教でんきやうは六宗ろくしゆの僻論びやくろんを

改まむ、今末法まっぽうに入まつては上行じやうぎやう出世しゆつせの境本門流布ほんもんるふの時ときなり正像しやうざう已すに過ぎぬ

何なんぞ爾前にぜん・迹門しやくもんを以もつて強しいて御歸依ごきえ有ある可べけんや、就中天台なかつてんだい・伝教でんきやうは像法ざうぽう

の時に當つて演説し日蓮聖人は末法の代を迎えて恢弘す、彼は薬王の後身
此れは上行の再誕なり經文に載する所・解釈炳焉たる者なり。

凡そ一代教籍の濫觴は法華の中道を解かんが為三國伝持の流布は蓋そ真実
の本門を先とせざらんや、若し瓦礫を貴んで珠玉を棄て燭影を捧げて日光を
睥せば只風俗の迷妄に趁いて世尊の化導を謗するに似るか、華の中に優曇有
り木の中に栴檀有り凡慮覃び難し併ながら冥鑑に任す云云、本と迹と既に水火
を隔て時と機と亦天地の如し、何ぞ地涌の菩薩を指して苟も天台の末弟と称
せんや。

次に祈国の段亦以て不審なり、所以は何ん文永免許の古先師素意の分
既に以て顕れ畢んぬ、何ぞ僭聖道門の怨敵に交り坐して鎮に天長地久の御
願を祈らんや、況や三災弥起り一分も徴し無し啻に祖師の本懷に違する

のみにあらず還つて己身の面目を失うの謂いか。

又五人一同に云く凡そ倭漢兩朝の章疏を披いて本・迹二門の元意を探るに判教は玄文に尽し弘通は残る所無し、何ぞ天台一宗の外に胸臆の異義を構えんや、拙いかな尊高の台嶺を徧して辺鄙の富山を崇み、明静の止觀を闇いて飯字の消息を執する、誠に是れ愚癡を一身に招き耻辱を先師に及ぼす者か、僻案の至りなり甚だ以て然るべからず、若し聖人の製作と号し後代に伝えんと欲せば宜く卑賤の倭言を改め漢字を用ゆべし云云。

日興が云く、夫れ竜樹・天親は即ち四依の居士にして円頓一実の中道を申ぶと雖も而も權を以て面と為し實を隠して裏に用ゆ、天台・伝教は亦五品の行位にして専ら本・迹二門の不同を分ち而も迹を弘め衆を救い本を残して末に譲る、内鑒は然りと雖も外は時宜に適うかの故に・或は知らざるの相を示し・或は知つて而も未だ闡揚せず、然るに今本・迹兩經共に天台の弘通

と称するの条は経文に違背し解釈は拠を失う、所以は宝塔三箇の鳳詔に驚

き勸持二万の勅答を挙げて此土の弘経を申ぶと雖も迹化の菩薩に許さず、過

八恒沙の競望を止めて不須汝等護持此經と示し地涌千界の菩薩を召して如来

・一切所有の法を授く、迹化他方の極位すら尚劫数の塵点に暗し止善男子の

金言に豈幽微の実本を許さんや、本門五字の肝要は上行菩薩の付嘱なり誰か

胸臆なりと称せんや委細文の如し経を開いて見るべし。

次に天台大師経文を消したもうに、「如来之を止むるに凡そ三義有り汝等

各各自ら己が住有り若し此の土に住すれば彼の利益を廃せん、又他方は此土

に結縁の事浅し宣授せんと欲すと雖も必ず巨益無からん、又若し之を許さば

則ち下を召すことを得ず下若し来らずんば迹も破することを得ず遠も顕すこ

とを得ず是を三義と為す、如来之を止めて下方を召して来らずに亦三義有り、

是れ我が弟子心に我が法を弘むべし、縁深厚なるを以て能く此土に遍して

益やくし分身ふんじんの土へんに遍へんして益やくし他方たほうの土へんに遍へんして益やくし、又また開近かいこん顯遠けんのんすることを得、
是かくのゆえの故ゆえに彼とどを止とどめて下めを召めすなり」文、又また云いく、「爾前にぜん仏告ぶつこう上行じょうぎょうの下こ是れ第
三に結要けつちよう付嘱ふぞく」と云々、伝教でんぎよう大師だいしは本門ほんもんを慕もいて、「正像しょうざう稍過しやうぎ已おつ

末法太だ近きに有り法華一乗の機今正しく是れ其の時なり「文、又云く」代
を語れば則ち像の終り末の初め地を原ぬれば則ち唐の東・羯の西・人を尋ぬ
れば則ち五濁の生・鬪諍の時・經に云く猶多怨嫉・況滅度後と此の言良に
以有るなり」云云。

加之大論の中に「法華は是れ秘密なれば諸の菩薩に付す」と宣ぶ、今の
下文に下方を召すが如く尚本眷属を待つ驗けし余は未だ堪えず、輔正記に
云く、付嘱を明せば此の經をば唯下方涌出の菩薩に付す、何を以ての故に爾る、
法是れ久成の法なるに由るが故に久成の人に付す」論釈一に非ず繁を恐れて之を
略す。

観音・薬王は既に迹化に居す南岳・天台誰人の後身ぞや、正像過ぎて二千
年末だ上行の出現を聞かず末法も亦二百余廻なれば本門流布の時節なり
何ぞ一部の総釈を以て猥に三時の弘經を難ぜんや、次に日本と云うは惣名な

り亦また本朝ほんちようを扶桑国ふそうこくと云う富士は郡の号即ち大日蓮華山だいびやくれんげさんしやうと称す、爰こゝに知んぬ
先師せんし自然じねんの名号みやうごうと妙法蓮華みやうほうれんげの経題きやうだいと山州さんしゅう共に相応そうおうす弘通くわつう此の地に在り、遠
く異朝いちちようの天台山てんだいを訪えば台星しやうせいの所居だいしなり大師だいし・彼の深洞じんどうを卜うして迹門しやくもんを
建立こんりゆうす、近く我が国だいにちの大日山たすを尋ぬれば日天にってんの能住のうじゆうなり聖人しやうにん・此の高峰しやうびを
撰ほんもんんで本門ひるを弘ほめんと欲えんぶす、閻浮だいいち第一えんぶの富山ふさんなればなり五人争いかでか辺鄙へんぴと下
さんや。

次に上行菩薩じやうぎやうぼつは本極法身微妙深遠ほんしんみみやうしんえんにして寂光じやくくわうに居こすと雖も未了いえどの者の
為ために事を以て理もつを顕あらわし地より涌出ゆじゆつしたまいて以来いらい付ほんもんを本門うに承うけ時まつを末法まつぽうに
待まちち生を我朝わしに降かし訓なを仮字かじに示しす、祖師そしの鑒機失き無なくくんば遺弟ゆいていの改かい転てん定め
て恐れ有これららんか、此等よの所勘しに依よつて浅智たがいの仰信ゆうしんを致いたすのみ、抑そも梵漢ふんの両
字ふそうと扶桑ふそうの一点ふとは時に依より機きに随したがつて互たがいに優劣ゆうれつ無なしと雖も倩いえど上聖つらつらじやうしやう被下い
の善巧ぜんきやうを思せんきやううに殆たんにんど天竺震旦てんじくしんたんの方便ほうべんに超こえたり、何なんぞ倭国わこくの風俗ふうふくを蔑こ如こし

て必ずしも漢家の水露^{つゆ}を崇重^{すうちよう}せん、但し^{ただ}西天^{さいてん}の仏法東漸^{ぶつぽうとうぜん}の時・既に梵音^{ぼんのん}を翻
じて倭漢^{わかん}に伝うるが如く^{ごと}本朝^{ほんちよう}の聖語^{ことば}も広宣^{こうせん}の日は亦^{また}仮字^{かなじ}を訳して梵震に通
ず^べ可^べし、遠沾^{えんせん}の翻訳は諍論^{じようろん}に及ばず雅意^{およ}の改変は独^{ひと}り悲哀^{ひあい}を懷^{いだ}く者な

り。

又五人一同に云く、先師所持の釈尊は忝くも弘長配流の昔之を刻み、
弘安歸寂の日も隨身せり何ぞ輒く言うに及ばんや云云。

日興が云く、諸仏の莊嚴同じと雖も印契に依つて異を弁ず如来の本・迹は
測り難し眷属を以て之を知る、所以に小乗三蔵の教主は迦葉・阿難を脇士
と爲し伽耶始成の迹仏は普賢・文殊左右に在り、此の外の一跡の形像豈頭陀
の応身に非ずや、凡そ円頓の学者は広く大綱を存して綱目を事とせず倩
聖人出世の本懷を尋ねれば源と権実已過

の化導を改め上行所伝の乗戒を弘めんが爲なり、図する所の本尊は亦正像
二千の間・一閻浮提の内未曾有の大漫荼羅なり、今に當つては迹化の教主
既に益無し況や婆和の拙仏をや、次に隨身所持の俗難は只是れ継子

一旦の寵愛月を待つ片時の螢光か、執する者尚強いて帰依を致さんと欲せば

すべからば四菩薩を加うべし敢て一仏を用ゆること勿れ云云。

又五人一同に云く、富士の立義の体為らく密に法門の異類に擬するのみに
あまつさ べつと すで もつ うしな だれびと これ
匪ず剩え神無の別途を構う、既に以て道を失う誰人か之を信ぜんや。

日興が云く、我が朝は是れ神明和光の塵佗陀利生の境なり、然りと雖も今
にっこう いわ しんみよう ちりぶつ だりしよう しか いえど

末法に入つて二百余年御帰依の法は爾前・迹門なり誹謗の国を棄捨するの条
まっぽう ごきえ にぜん しゃくもん ひぼう きしゃ

は経論の明文にして先師の勸うる所なり、何ぞ善神聖人の誓願に背き新に
きようろん めいぶん せんし かんが なん ぜんじんしようにん せいがん そむ

悪鬼乱入の社壇に詣でんや、但し本門流宣の代、垂迹還住の時は尤も上下
あつきらんにゆつ ただ ほんもん すいじゃくげんじゅう もっとじようげ

を撰んで鎮守を定む可し云云。

又五人一同に云く、如法・一日の両経は共に以て法華の真文なり、書写
いっわ りようきようつ もつ ほっけ しんもん しょしゃ

・読誦に於ても相違有るべからず云云。 日興が云く、如法・一日の両経
どくじゆ おい そういあ にっこう いわ りようきようつ

は法華の真文為りと雖も正像転時の往古・平等摂受の修行なり、今末法
ほっけ しんもんない えいど しょうてん びやうてんしやうじゆ しゆきよう まっぽう

の代を迎えて折伏の相を論ずれば一部読誦を専とせず但五字の題目を唱え
むか しゃくぶく ひとく べいご だいもく とな

三類の強敵を受くと雖も諸師の邪義を責む可き者か、此れ則ち勸持不輕の明文上行弘通の現証なり、何ぞ必ずしも折伏の時・摂受の行を修すべけんや、但し四悉の廃立・二門の取捨宜く時機を守るべし敢て偏執すること勿れ云云。

又五人の立義既に二途に分れ戒門に於て持破を論ず云云。

日興が云く、夫れ波羅提木叉の用否 行住 四威儀の所作平嶮の時機に随い持破に凡聖有り、爾前・迹門の尸羅を論ずれば一向に制禁す可し、法華本門の大戒に於ては何ぞ又依用せざらんや。

但し本門の戒躰委細の經釈 面を以て決す可し云云。

身延の群徒猥に疑難して云く、富士の重科は専ら当所の離散に有り、縦い地頭非例を致すとも先師の遺跡を忍ぶ可し既に御墓に参詣せず争か向背の過罪を遁れんや云云。

日興にっくうが云いく、此この段顛倒てんどうの至極しごくなり言語ごんごに及およばずと雖いえども未聞やからの族おほに仰おほせて
毒鼓どくこの縁えんを結むすばん、夫それ身延興隆しんじやうりやうの元由しやうにんは聖人しやうにん・御座おんざの尊貴そんきに依より地頭じとう発心はつしん
の根源こんげんは日興教化にっくうきやうけの力用ちからもちに非あらずや、然しかるを今下種結縁げしゆけちえんの最初さいしよを忘わすれて劣謂れつゐ勝見しやうけん
の僻案びやくあんを起おこし師弟していうむ有無いうむの新義しんぎを構かまえ理非りひ顯然けんねんの諍論じやうろんを致いたす、誠こに是これ葉はを
取そつて其その根こんを乾くかし流りゆうを酌しやくんで未いまだ源みなもとを知らしざる故ゆゑか、何いかに況しかくや慈覺じかく・智証ちしやう
は即そくてんぎやう伝教入室でんきやうしつの付弟ふいでい・叡山住持えいざんじゆうぢの祖匠そしやうなり、若宮八幡はちまんは亦また百王鎮護ひやくおうちんごの大神おほい
日域朝廷にちいきの本主ほんしなり、然しかりと雖いえども明神みやうじんは仏前ぶつぜんに於おいて謗国捨離しやうりの願ねんを立て先聖せんしやう
は慈覺じかくを指さして本師違背ほんしゐはいの仁にんと称しょうす、若もし御廟ごびやうを守るを正ただと為なさば円仁えんにん所破しよは
の段すこぶ頗こうる高祖こうその誤謬あやまりなり、非例いたを致いたして過なくくんば其その国こく・棄捨きしやの誓ちかい都と
べて垂迹すいじゃくの不覺ふかくか、料はかり知しんぬ惡鬼外道あくぎげどうの災なを作なし宗廟社稷そうびやうしやしよくの処ところを辞しす
善神聖人ぜんじんしやうにんの居すは即すなわち正しやうじ直じき正法しやうほうの頂いたなり、抑そも身延一沢しんじやういちさく之余流いまだ未ほつだ法水ほつすい
清濁けいさくを分わかたず強しいて御廟ごびやうの参否さんひを論ろんぜば汝等なんじ將まさに碎身くたの舍利しやりを信しんぜんとす

何^{なん}ぞ法^ほ華^けの持^じ者^{しや}と号^{ごう}せんや、迷^{まよ}暗^{あん}尤^いも甚^しし之^{これ}に准^{じゆん}じて知^しる可^べし伝^{でん}え聞^{もん}く
天^{てん}台^{だい}大^{だい}師^しに三^{さん}千^{せん}余^ごの弟^で子^し有^あり章^{しやう}安^{あん}朗^{らう}然^{ぜん}と^{して}独^{ひと}り之^{これ}を達^{たつ}す、伝^{でん}教^{きやう}大^{だい}師^しは三^{さん}千^{せん}
侶^{しゆ}の衆^{しゆ}徒^とを安^{やす}く義^ぎ真^{しん}以^い後^ごは其^それ無^なきが如^{ごと}し、今^{いま}日^{にち}蓮^{れん}聖^{しょう}人^{にん}は万^{まん}年^{ねん}救^く護^ごの爲^{ため}に

六人の上首じょうしゅを定しかむ然いりと雖いも法門ほうもん既すに二途に分れ門徒もんた亦また一准いちじゆんならず、宿習しゆくじゆう

の至しり正師しょうしに遇いうと雖いも伝持でんじの人自他じた并がじ難がし、能よく是この法を聴きく者・此の

人亦復難またがたしと此の言も若おし墮おちなば将来悲べむ可べし、經文きやうもんと解げ釈しゃくと宛あたかも符契ふけいの

如ごとし迹化しゃつけの悲歎ひたん猶な此おくの如ごとし本門ほんもんの墜だ墮つい寧むろ愁さえざらんや、案立あんたつ若もし先師せんしに

違たがわば一身もの短慮も尤も恐もれ有もり言もつ所亦また仏意ぶつゐに叶かなわば五人みようぎの謬義みようぎ甚はだ憂うれう

可べし取捨しゅしゃ正見せいけんに任ます思惟しゆいして宜よろしく解とくすべし云云。

此の外支流いぎ異義かまを構てんえ諂曲てんこく稍あ多またなり、其その中に天目てんめの云いわく、已前いぜんの六人

の談みなもつは皆ち以ちようて嘲ちよう哂ちようすべきの義ぎなり但ただし富山ふさん宜よろしと雖いも亦過失また有とがり迹門しゃくもんを

破はし乍ながら方便品ほうべんを讀よむこと既すでに自語相違じごそういせり信受しんじゆすべきに足らず、若もし所破しよは

の為と云みわば弥陀經みだをも誦じゆすべけんや云云。

日興にっこうが云いわく、聖人しょうにんの炳誠へいかいの如ごとくんば沙汰さたの限あらりに非いえずと雖いも慢幢まんどうを倒たさん

が為ために粗ほ一端ほを示しさん、先まず本・迹その相違そういは汝慥なんじたしかに自発おこするや去いぬる

□ □ □ □ □

正安二年の比天目当所に来て問答を遂ぐるの刻み日興が立義・一一証伏し畢ん

ぬ、若し正見を存せば尤も帰敬を成すべきの処に還つて方便読誦の難を致す

誠にはれ無慚無愧の甚しきなり、夫れ狂言綺語の歌仙を取つて自作に備う

る卿相すら尚短才の耻辱と為す、況や終窮究竟の本門を盗み己が徳と称する

逆人争か無間の大苦を免れんや、照覧冥に在り慎まずんばあるべからず。

次に方便品の疑難に至つては汝未だ法門の立破を弁ぜず恣に祖師の

添加を蔑如す重科一に非ず罪業上の如し、若し知らんと欲せば以前の如く富

山に詣で尤も習学の為宮仕を致す可きなり、抑彼等が為に教訓するに

非ず正見に任せて二義を立つ、一には所破の為二には文証を借るなり、初に

所破の為とは純一無雑の序分には且く権乗の得果を挙げ廢迹顯本の寿量に

は猶伽耶の近情を明す、此れを以て之を思うに方便称読の元意は只是れ牒破

の一段なり、若し所破の為と云わば念仏をも申す可きか等の愚難は誠に四重

の興廢こうはいに迷まよい未だ三時の弘經くぎようを知らず重ちようじよう疊たがひの狂難なん嗚呼ああの至極しごくなり、夫れ
諸宗しよしゆう破失はしつの基もとは天台てんだい・伝教でんぎようの助言すけごんにして全く先聖せんしやうの正意しやういに非あらず何ぞ所破しよは
の爲ために読よま

ざるべけんや、きようしやく經釈めいきようすでの明鏡にちがつ既に日月ことの如し天目あんじゃやうんの暗者おお邪雲おほに覆おほわるる故なり、次に迹もんしようの文証もんしようを借りて本じつそうの実相じつそうを顯あらわすなり、此等これらの深義じんぎは聖人しやうにんの高意こういにして浅智せんちの覃あぶ所に非あらず正機しやうきには將まさに之これを伝つべし云云。

嘉曆三戊辰年七月草案す

日順

四三五

日興遺誠置文

1617p

そ夫れ以おもみれば末法まつぼう弘通くわうつうの恵日くわいは極惡ごくあく謗法ぼうほうの闇くらを照てらし久遠くおん寿量じゆりやうの妙風みやうふうは伽耶がや始成しじやうの権門こんもんを吹ふき払はらう、於戲あ仏法ぶつぽうに値あうこと希まれにして喻たとえを曇華どんげの萼はなしにか飯うきぎり類うきぎを浮木うきぎの穴あなに比ひせん、尚なお以おもて足たりらざる者ものか、爰こゝに我等われ宿縁しゆくえん深厚じんこうなるに

よ
依つて幸に此の經に遇い奉ることを得、随つて後学の爲に条目を筆端に染む
る事、偏に広宣流布の金言を仰がんが爲なり。

一、富士の立義聊も先師の御弘通に違せざる事。

一、五人の立義一先師の御弘通に違する事。

一、御書何れも偽書に擬し当門流を毀謗せん者之有る可し、若し加様の悪侶
出来せば親近す可からざる事。

一、偽書を造つて御書と号し本迹一致の修行を致す者は師子身中の虫と
心得可き事。

一、謗法を呵責せずして遊戲雑談の化儀並に外書歌道を好む可からざる事。

一、檀那の社参物詣を禁ず可し、何に況や其の器にして一見と称して謗法を
致せる悪鬼乱入の寺社に詣ず可けんや、返す返すも口惜しき次第なり、

是れ全く己義に非ず經文御抄等に任す云云。

一、器用の弟子に於ては師匠の諸事を許し、
閣下御抄以下の諸聖教を教す可き事。

一、學問未練にして名聞名利の大衆は予が末流に叶う可からざる事。

一、予が後代の徒衆等権実を弁えざる間は父母・師匠の恩を振り捨て出離証道の為に本寺に詣で学文す可き事。

一、義道の落居無くして天台の学文す可からざる事。

一、当門流に於ては御書を心肝に染め極理を師伝して若し間有らば台家を聞く可き事。

一、論議講説等を好み自余を交ゆ可からざる事。

一、未だ広宣流布せざる間は身命を捨て随力弘通を致す可き事。

一、身軽法重の行者に於ては下劣の法師為りと雖も当如敬仏の道理に任せて信敬を致す可き事。

一、弘通の法師に於ては下輩為りと雖も老僧の思を為す可き事。

一、下劣の者為りと雖も我より智勝れたる者をば仰いで師匠とす可き事。

一、時の貫首な為りと雖もいえど仏法ぶつぽうに相違そういして己義こぎを構かまえば之これを用べう可べからざる事。
一、衆議な為りと雖もいえど仏法ぶつぽうに相違そうい有らば貫首これ之くだくを推べく可べき事。

一、衣の墨黒くすべからざる事。

一、直綴じきとつを着べす可べからざる事。

一、謗法ほうぽうと同座べす可べからず与よ同罪どうざいを恐べる可べき事。

一、謗法ほうぽうの供養くようを請うく可べからざる事。

一、刀杖等とうじょうに於おいてはぶつぽうしゅこ仏法守護ための為これに之ゆるを許ゆるす。

但し出仕だだの時節じせつは帶べす可べからざるか、若もし其それ大衆等たいしゅうに於おいては之これを許ゆるす可べきかの事。

一、若輩な為りと雖もいえど高位こういの檀那だんな自まり末座まつざ

に居べる可べからざる事

一、先師せんしの如ごとく予けが化儀けぎも聖僧せいそう為なる可べし、但ただし時の貫首ある・或しは習学しゅうがくの仁おいに於おいて

は設たといいいたん一旦の・犯有りと雖いえども衆徒に差置しゅとく可べき事。

一、巧ぎょう於難問おつなん答もんの行者ぎょうじやに於おいては先師せんしの如ごとく賞しょう翫がんす可べき事。

右の条目じょうもく大略か此ことくの如ごとし、万年救護まんねんくごの為ために二十六箇条を置おく後代の学侶

敢あえてて疑惑ぎわくを生なずる事勿なかれ、此の内一箇条おに於おいても犯なす者は日興にっこうが末流まつりゅうに

有ある可べからず、仍よつて定さだむる所の条条件くだんの如ごとし。

元弘三年癸酉正月十三日
げんく

日興にっこう判

全文字数 〃 一二三万〇八三三文字